
わだつみの向こう ―明石艦物語―

工藤傳一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わだつみの向こう — 明石艦物語 —

【Nコード】

N2882G

【作者名】

工藤傳一

【あらすじ】

太平洋戦争時、実在した工作艦明石を舞台に、乗組員の一人である森忠と明石を始めとした艦魂達の生き様を史実に基づいて綴る。

世界に名を知らしめる大日本帝国海軍と、その中核であった大小さまざまな艦艇達。

どんな事に笑い、
どのような悲しみに涙し、

如何にして生きて、

そして何故、死ななければならなかったのか。

一介の船バカ男が綴る、帝国海軍士官と明石艦の5年に及んだ生涯の物語。

第一話 「晴天の出会い」 (前書き)

こんにちは。工藤傳一です。

動く海軍工廠と呼ばれた工作艦「明石」。

なかなか光の当たらないこの補助艦艇にて物語を展開しようと思ひます。

元長門艦通信科員だった近しい親戚のお話が聞けた幸運を生かし、艦魂の物語と史実が上手く絡み合っていくように頑張ります。

※ちなみに親戚には残念ながら艦魂が見えなかったそうです。

『ニイタカヤマノボレ 一二〇八』を受信したばかりですが早くも

辞めときゃよかったかなあ (つゞ)

と思っている作者と明石艦物語をどうぞよろしく願ひします。

第一話 「晴天の出会い」

昭和14年9月1日。

蟬の声が少し賑やかさを失いつつあった、瀬戸内海の一角に位置する呉海軍工廠。

晴天の下に堂々たる姿で帝国海軍艦艇が停泊するその様は、それだけで周辺国に対しての抑止力ともなる事を実感できる力強さを感じる。訓練から戻ったばかりなのだろうか、数隻の戦艦が煙突から濛々と黒煙を巻き上げている。わだつみの竜とはまさにこの事だ。

海面には小さな曳船や内火艇が、巨大な戦艦や空母の合間を縫うようにせわしなく動いている。

そのうちの内火艇一隻が向かう棧橋。

眼前に広がる呉の波間の勇壮な光景を、小さく笑いながら見つめる青年が一人いた。綺麗に刈られた坊主頭が帽子を被っていても解る。もみあげや襟足にいたるまで小綺麗に剃られたその顔には紳士を重んじる帝国海軍軍人の典型を見て取れ、細身の体つきが168センチの身長に比して彼の背丈を大きく見せる。しわが目立たない濃紺の第一種軍装がビシッとときまった青年。

ふいに彼は迫ってくる内火艇の艇員に軽く手を上げた。

青年の前まで内火艇が近寄って行き足を止めると同時に、二人の艇員の内の一人在棧橋の上に飛び出してくる。水兵服を着た艇員は青年より背が少し高いが顔にはまだ幼さが残っており、放たれた声にも若さ溢れる色合いが滲み出ていた。

『待たせて申し訳ありません！ 森少尉！』

踵を揃えた敬礼をし、大きな声で詫びる艇員だが彼の口元は緩んでいる。その正面では、森と呼ばれた青年がゆっくりと答礼しながら

ら笑顔を見せた。

『氣にするな。勝手に早く来ただけだ。』

『はい！』

艇員が手を下ろしたのを確認し、森は小さく手招きをした。彼のその動きに合わせ、艇員の水兵は無警戒で走り寄る。二人は同じ帝国海軍軍人の肩書きでは階級の差で大きな違いがあり服装にもそれは表れているのだが、お互いに同じ親から血を分けて貰って生を受けた間柄であるのだった。

『母さんからだ、後で食えよ。マサ。』

『おお、忠兄貴^{ただし}。ありがとう。』

二人の兄弟はそう言いながら笑いあう。

やがてマサは兄からもらった紙包みを大事そうに抱えながら、内火艇に残っているもう一人の艇員に合図を送った。潮に流されて少し栈橋から離れてしまった内火艇がエンジンを吹かし、再び栈橋へと近寄ってくる。程よく栈橋へと内火艇が近づいた頃合いを見計らって一足飛びに飛び乗る忠とマサに、操縦していた艇員が敬礼する。忠は小さく敬礼を返してやると、士官である自分が座る場所を指すみどり色で縁取りされた敷物が置かれる座席へと座り込んだ。

『兄貴、少尉になってから会うのは初めてだなあ。』

『おう、マサも二水になったんだな。親父が喜んでたぞ。』

マサは片手を忠の座る座席の背もたれに添え、久々に会った兄の顔を見下ろしている。彼にしても久しぶりの再会は嬉しいらしく、日焼けして真っ黒な顔に白く輝く歯を覗かせて声を放つ。

『一水にはなり損ねたけどな。』

マサはそう言うのと不敵な笑顔になった。だが忠はそんな彼の表情に思わず笑い出す。弟の笑顔の裏に、実に彼らしい理由があるという事を薄々感じ取ったからだ。

『はは。素行不良でも起こしたか？ 大方、先任でもぶっ飛ばしたんだろう？』

『おうよ。いくら先任だつっても他人のおかず取り上げんだぜ？』
『金剛艦こんごうや山城艦やましろうだったら殺されてんぞ？ 軍隊なんだから少しは自重ってモンをしろよな。』

『冗談じゃねえよ！ よりによって焼き鮭を取りやがって……。』
『はっはっは。』

好物と鼻っ柱の強かったところがまったく変わってない弟に忠は大笑いした。操縦する艇員も二人のやりとりになんとなく耳を傾けていたらしく、口元を抑えて肩を小刻みに上下させながら笑っている。昔から事ある毎に喧嘩しては遊びまわってきた弟の事であるから、忠には容易に彼の艦内における立場が想像できた。喧嘩沙汰で艦内でも有名人だろう、と。

小気味良い内火艇のエンジン音と工廠のあちこちから時折聞こえる重機の音を聞きながら、彼らが乗る内火艇はある艦に向かっていた。

艦舷が少し高めのその艦は形としては天龍型てんりゅう二等巡洋艦に似ている。艦の長さも同じくらいだ。だが天龍型でもなければ、帝国海軍に配備されているどの二等巡洋艦でもない。大きな砲等や射出機も無い代わりに甲板の上で林立する5基の起重機、こんな艦はある意味では三段甲板の空母よりも目立つ。

内火艇の窓から近づいてくるその艦を見つめていた忠は、その珍

しい艦影をよく脳裏に焼きつけながら口を開いた。

『あれが、明石艦^{あかし}か。』

しばらくして艦中央のラッタルに接舷する形で内火艇は行き足を止める。

今日より自分が勤務する艦はこれかと浮き立つ思いにつられてラッタルを上がり、明石艦の最上甲板に出た忠。そこに広がっていた明石艦の有様に、彼は改めてこの艦が帝国海軍の中核を成す艦艇達の中にあつては珍しい”工作艦”という艦種である事を実感する。彼の正面に当たる艦橋後部から中央にかけての甲板上では資材の搬入扉が開いており、その中では工作機械と工作科員達が機械音を発して作業をしていた。ちょうど自分の真下に見えているのは鋳物工作をする所だろうか、カンカンと叩く音を発して鍋を作っているのが見える。彼の視界で確認できる物の他には、鍛錬器や旋盤、ドリルなども置いてあった。

『兄貴・・・、失礼しました！』

言いかけて慌てたマサの声に忠は振り返った。

『少尉、艦橋に特務艦長がおりますので案内します。』
『おお、頼む。すまん。』

忠が詫びたのはマサに気を使わせた事への謝罪だった。
海軍では歓迎会や宴会ですら準公務と認識し、勤務中は親類縁者

の関係は無く生活の全てにおいて階級と付随する礼儀が適用される。実の兄弟とは言え、人前では二等水兵と少尉の関係でなければならぬ。内火艇では少しハメを外したが、実質的な職場に相当する艦に乗り組んだらそうはいかないのだ。

故に弟に面倒は掛けまいと、忠は二言返事でマサに続いた。

忠が艦橋に案内されると、縦にも横にも大きい体の中年の男性が忠に近づいてくる。細い糸目の彼はマサに続いて入ってきた忠を見るや、目をつむるような笑顔で彼を迎えてくれた。やがて忠は自身の身体にある全ての間接に力を込め、直立不動の敬礼の姿勢を伴って艦内ではただ一人であろう大佐の襟章を軍装に着けた彼に着任の挨拶をする。

『帝国海軍少尉、森忠^{もりただし}。昭和14年9月1日をもちまして明石艦乗組み砲術士少尉を命ぜられ、ただいま着任至しました。願います。』

『はい、ご苦労。特務艦長の堀田^{ほった}大佐だ。願います。』

堀田特務艦長はニコニコと手を差し出し握手を求めた。その声は少ししゃがれたような感のある声だが、そこがまたなんとなく海の男という感じを醸し出している。忠はその声が漁師だった自身の祖父と似ている事からそう思った。少し頭をさげて握手に応じる忠だが、堀田特務艦長はそんな彼の肩に手を伸ばしながら気さくな声をかけてくれる。

『ここは金剛艦じゃないんだ。もっと碎けて良いぞ。』

『は・・・、はい。ありがとうございます。』

堀田は忠の肩をバシバシと叩きながら笑っている。しかし体格から想像される通り、彼の手の力は相当強い。肩に残る鈍痛に、忠は思わず笑みを湛えていたその表情をちょっとだけ歪めた。

『はははは、コイツが砲術長だ。仲良くしてくれよ。』

続けざまに声を放つ堀田が首を振った方向には、大尉の襟章をつけた口髭の男がいた。180センチはあろうかという長身にも関わらず髭をちよいちよいと撫でている仕草がなんとも愛嬌がある。歳は30代半ばくらいか、階級に比して歳を食っている感じがするがベテランの雰囲気は滲み出ている。それまで彼は何か書類を読んでいたが、堀田に呼ばれてふと顔を上げた。そして顔を上げた先に見知らぬ若い少尉を見て、艦橋内での今の状況が解ったらしい。真顔から笑顔に変わると同時に口髭がひょこひょこ動く。本当に愛嬌のある人だった。

『おう、やっと来たか。砲術長の青木あおきだ。願います。』

野太くて低い声だが、口調がとても柔らかい。口を動かす速度が遅く、のほほんとした感じの青木の声は大型船の警笛にも聞こえる。しかし彼が口にした砲術長の一言によって忠は眼前の人物が自分の直属の上司になる事を察し、不動の姿勢をそのままにして声を返す。

『はい。願います。』

『おう。・・・あ、そういえば機銃の森は弟らしいな。』

艦橋入り口の扉の横で立っていたマサは今しがた声を放った青木の視線に気づき、兄と同じく直立不動の姿勢をとる。そんな中で忠は青木に声を返し、同じ森姓を頂くその水兵と自身の間柄を上司に教える。

『はい、森正志もり まさし二水は自分の下の弟です。』

忠の言葉に過剰なくらい頷く青木。いくら明石艦の兵装が連装高角砲と連装機銃が各二基のみと軽装とはいえ、こんな人が砲術長で大丈夫なのかと忠はちょっと不安を抱いてしまう。ただそんな忠の憂いなど青木は何処吹く風で、返ってきた言葉にまたぞろ何度も頷きながら言った。

『そうか、そうか。これで少しは森二水も大人しくなるか。』

やっぱりな。

青木の言葉に忠は先程の弟の立場予想が的中した事を悟り、思わず脳裏でそう呟く。予想通り、マサは艦内幹部においてもその名を知られる大問題児であった。

『ご迷惑をお掛けしております……。』

深々と頭を下げる忠に青木は腰に手を当てて笑う。手がかかっているのは忠の予想通りであったが、上司としては青木はそれほど彼を嫌っている訳ではないらしい。

『元気な証拠だ。まあ、過ぎるのも問題だな。弟も任せるぞ。』

引きつった笑顔で青木に応じる忠。横目でマサを見ると、気まずそうな顔でプイッと横を向いた。

その後、幹部連中との顔合わせが終わった忠はマサの案内で厠、かわやガントリーム、士官次室、酒保等の場所を教えてもらっていた。二等水兵としてこの明石艦が完成した頃より乗り組んできたマサは、さ

すぐに艦全体の構造を把握している。軍属や民間の工員が乗組員の半分を占める明石艦は居住区がちょっと複雑で、忠にとっては覚えるのが一苦勞だった。

それからしばらく経った頃の事。

砲術士として配属された忠は、艦橋上に配置された砲術科の担当部署の一つである測距儀に一人向かっていた。本当ならマサに案内してもらおう所だが、彼の所属班独自の機銃の操作訓練と重なってしまったのだ。

だが先程まで居た艦橋の上に測距儀はあるのだから、いくら今日初めて艦へとやって来た忠であってもそんなに迷う事もない。艦橋後部のラッタルを駆け上がるとすぐに測距儀内部にたどり着いた。装備されているのは4・5メートルの大きさの測距儀だからかその中は少し狭い。そしてまだ要員が配備されていないのか、そこに配置の人員は一人もいなかった。もっともこの明石間は竣工から2ヶ月しか経っていないのだし、元々この艦は戦闘を重視した艦でもない。配備が遅れているだけだろう、と忠は一人納得して測距儀内部を見回してみる。

その内にふと忠が天井を見上げると、そこには測距儀の天井へと続くハッチがあった。以前、鳥海艦ちようかいに見習い士官として乗り組んだ時に同じ測距儀を何度か操作した事もあった忠は、慣れた手つきでそのでハッチを開けてみる。

艦橋の上にある為、ハッチを開いた先に広がった景色は見晴らしがとても良い。所々に雲を浮かべる青空の下、空の色を濃く映す一面の波間には帝国海軍の大小様々な艦艇がズラリと並んで錨を降ろしている。栈橋から見た勇壮な景色と同一の筈だが、ここからでは違う感じ彼には見える。そして視界の下側に入る明石艦の艦首は、忠にこの連合艦隊の一員になったのだという実感を確かな物として

くれた。

『くあっ……、あゝ……！』

忠は両手を高く伸ばして、大きく息を吸い込んだ。

兵学校の同期達の中には戦艦や空母等の大型艦に配備されて行った奴等もいるが、自分も立派なその端くれだ。

そう思うと心が躍る。忠の表情は自然と笑顔になっていた。

『ふふふ……。』

その時突然、自分の物ではない誰かの笑い声を忠の耳が捉えた。

それはなんと女性の笑い声で、例えば工作艦といえども帝国海軍の艦に女性が乗っている訳が無いと即座に声の異常の程に気付いた忠は、すぐさま声が聞こえた後ろを振り向く。

『え！？』

そこには同じ濃紺の第一種軍装を纏った18か19歳くらいの外見の女性が脚を片方に折って座っていた。整った顔立ちと少し釣り上がった目、結構な美人だった。髪は後ろで一本に縛り、風に揺られてフラフラと靡なびいている。彼女は振り向いた忠の視線に驚いていた。

『……こ、こんにちは。』

『何だ貴様！？』等と男相手だったら言えそうな物だが、男の園である海軍艦艇の中にうら若い女性がいるという状況の異常さが忠

にそれを許さない。混乱する中、忠としては頭に浮かんだ精一杯の言葉を発してみた。だが彼に返ってきた言葉はなんとも予想外な内容であった。

『あれ・・・？ 見えるの・・・？』

忠はもっと混乱した。挨拶に対して質問が返ってくる事も珍しいが、その内容が”見えるか否か”という物である。

『見えるのって―。』

『あ、声も聞こえるんだ・・・？』

やっとの事で出た忠の返事も途中で遮る、彼女の再度の質問。その内容は”声が聞こえるか否か”。

どうも目の前にいるこの女性は変だ。

そんな言葉を脳裏に過ぎらせた忠は、ようやく得体の知れない男相手には言えるであろう一言目を口にしてみる。

『何だき―。』

『私達が見える人ってホントにいるんだあ・・・。』

優しい笑顔でまたも忠の声を封じる彼女。忠には残念ながら苦手なタイプの女性だったが、こうもまた自分の言葉を遮断して発言される事で逆に彼は少しだけ冷静になれた。

向こうから何か言わせてこっちが答えるようにしよう。

そう決めた彼は一度呼吸を整えてから、彼女が発してくるであろ

う声を待ってみる事にする。

『襟章は・・・、少尉さんかぁ。もしかして砲術士で配備されてきた？』

『あ、ああ。今日着任して艦内を見回ってるところだけど・・・。』
『そうなんだ。よろしくね。』

やっと会話が成立した事に小さく安堵する忠。よくしゃべる女性だが、物言いは乱暴でも度が過ぎた賑やかさが有る訳でもない。落ち着いた感じとふわふわとした雰囲気だから、決して会話をする事に関しては困難はなかった。やがて気を取り直し、彼は口を開く。

『あ、あの。オレは森忠少尉。君は？』

彼女は忠の質問を聞くと視線を彼から洋上の艦船群にゆっくり移した。遠い目で艦船をみながら微笑んでおり、何か忠の質問を聞いていない様な素振りにも見て取れる。だがその女性は一呼吸をおくと声を返し、自身が何者であるかを語り始めた。

『森さんは艦魂って知ってる・・・？』

『かんこん？ ああ・・・、艦船に宿る命とかって奴だよね？ 兵学校の時、教官がー。』

刹那、忠は言葉を詰まらせた。海軍兵学校で恩師から聞いた伝承。艦船に宿る命は艦魂と呼ばれ、希にそれを見る事ができる人間がいるという。その姿は船籍に応じた服装の女性であるとの事だった。そしてその記憶が蘇ると同時に、彼は目の前に彼女の正体に一つの可能性を閃く。驚きの表情を隠さぬまま、忠は瞬きも忘れる程に彼女の顔を見つめて声を発した。

『君はもしかして・・・！？』

『私は明石。この艦の艦魂だよ。』

雲一つ無い青空に溶け込むかのような笑顔で、彼女は忠を見つめ返す。

奇跡のような出来事にただ驚く忠と、まるでそんな彼をあざ笑っているかのように微笑む明石。

ここから5年に及ぶ二人の物語が始まった。

それは、決して果たされなかった志の物語。

それは、決して叶わなかった夢の物語。

それは、決して結ばれる事の無かった愛の物語。

それは、決して伝えられる事の無かった物語。

そしてその日、1939年9月1日。

二人がいる日本から遙か西方の欧州では、独ソ不可侵条約を締結したドイツがポーランドに侵攻。

ここに人類史上最大の戦争、第二次世界大戦が勃発したのだった。

第一話 「晴天の出会い」(後書き)

◆拙作の拝読にあたりまして◆

拙作では史実の人物を出す場合もちろん御座いまして、小生なりになるべく人柄や言行は忠実に再現していく所存ですが、今回登場の明石艦乗組員を始めとするそのほとんどは、当時の乗組員達の氏名を示す資料が無い為に小生の創作した人物達で御座います。

ただ艦長格の方々にあってはそこそこに調べる事ができますので、判明した限りで実在の人物を登場させて頂こうと考えております。拝読に当たって実在、及び創作の人物が混ざり合う形となりますが、何卒ご了承の程をよろしくお願い致します。

2011年1月14日 明石艦物語作者／工藤 傳一

第二話 「青年と艦魂」

『おいしいね。』

雲ひとつ無い青空と連合艦隊の艦船群が停泊する絶景に包まれ、
”明石の基準”で半分に折った羊羹ようかんの塊を明石はまるでりんごを丸かじりするかのように頬張っている。それなりに大きい羊羹の塊を詰め込む胃袋は細身の彼女の体のどこにあるのだろうかと疑問におもいつつ、忠は今更ながら別腹という言葉を深く理解する。

そして綺麗な女性の姿でもさすが帝国海軍艦船の艦魂、なんとも豪快な食方を明石はする。噛み過ぎじゃないかと忠が疑ってしまうほどに、頬を膨らませてもぐもぐと笑顔で食べている。おかげさまで母が持たせてくれた忠の分の羊羹はタバコの箱くらいしか残っていない。だが彼女はおいしい一時を与えてくれた忠にすっかり馴染んで、その言葉遣いも無理の無い柔らかい物になっていた。

『あ、甘い物の匂いがする！』等と彼女が口にして気づかなければ黙ってるつもりだった忠は、小さくため息をする。だが彼は決して不機嫌ではない。測距儀の上に這い出た彼女の隣に腰を下ろし、不運にも母から貰った羊羹を笑顔という武器で篡奪さんだつされてしまったが、すっかりご機嫌の彼女は艦魂の存在と概要を説明してくれた。
子供の頃から世間一般の男の子の一人として淡い憧れを抱いた帝国海軍の軍艦にも命があり、自分だけはそれを五感で認識できる。そんな夢のような現実が忠を喜ばせた。

故に小さく残った忠の羊羹も、心なしか実家で食べた時よりも旨い。自然と彼の口元が緩んだ。

『そっか、人間と話すのは初めてなのか。』

忠の言葉に明石は心底うれしそうに『うん!』と大きくうなづく。時折、指についた羊羹の汁をベロベロとなめる仕草がとても可愛い。18〜19歳くらいの見た目を持ち、スラリと長身の彼女だが子供のような仕草と物言いが印象的だ。

『森さん、出身はどこ?』

すっかり彼に安心している明石が放った言葉は、とてもありきたりな質問。だが人間の社会では社交辞令のように飛び交うその言葉も、彼女の表情は心の底から忠という人部うを知りたいと願う気概が溢れている。澄んだ瞳で忠の目を見つめながら彼女は彼の答えを待っているが、そこそこ美人な彼女の視線に太刀打ち出来る程、忠は強くなかった。カッコつけるフリをして視線を彼女から眼前の絶景に移す。

『青森だよ、雪と魚ぐらいしかない田舎さ。』

『雪かあ、見た事ないなあ。』

いつの間にか食べつくした羊羹の紙を丁寧に折りながら明石は言った。おいしい一時が終わってしまったからか、彼女の言葉はさつきよりもほんの少し少し寂しそうに聞こえる。

『明石は、出身は佐世保になるのかい?』

『うん。2年くらいはいたんだけど、雪は降らなかったなあ。』

『その内、大湊^{おおみなと}辺りにも寄航するんじゃないかな。その時見れるかもね。』

忠はチラッと彼女の横顔を見た。小声で『やった。』と^{やい}呟きながら彼女は笑顔で背中を反って空を仰いでいる。するとちょうど彼女の首元に流れた忠の瞳には少尉の襟章が見えた。艦魂社会では何を

持って任官するのだろうか。忠は疑問を抱きながらも、その階級が自身を同じであった事から少しだけ彼女に親しみを感じる。

『なんだ明石も少尉なんだ？』

忠に首元を見つめられている事に気づいた彼女は、頬を赤くして慌てて反った上半身を丸めた。

『ほ、補助艦艇だから……。な、長門さんが一番偉いんだよ！』

膝を抱いて丸くなりながら彼女は眼前の海原に浮かぶ艦船群を指差そうとした。だが、そこにお目当ての艦がない。

『あ、あれ・・・？ えっと・・・。』

明石はそんな言葉を上げながら、壁に字でも書くように人差し指を動かしている。彼女の困った顔を忠は初めて見た。

『あはは。長門艦今日は和歌山沖だよ。新しい司令長官を迎えにね。』

昨日、同期と飲みに行つて良かったと忠は一人で安堵する。

他愛無い酒の席での話が、奇しくも彼女の疑問に対しての回答になったのだから無理も無い。今度また飲みに行かねばなるまいと仲間達に感謝しつつ、忠は艦船群を眺めたままで明石に言った。だが返ってきた彼の声に、明石は自分の未熟な立場を思い知ってちよつと気を落としてしまったらしい。

『あ……。ご、ごめんなさい。私まだ連合艦隊には正式に所属してないから……。艦隊の行動とか良くわかんなくて……。』

彼女は恥ずかしさの余り顔を真っ赤にして忠から艦尾に視線を流し、それに気づいた忠も振り返る。帝国海軍艦船の証たる軍艦旗が、二人の視線の先にある明石艦艦尾の旗竿にはなかった。

『予定では11月だよ、編入は。』

忠としては大した事ではなかったが、明石に目を移すと今にも泣きそうな目をしていた。一丁前に砲術士少尉として来た忠と、階級だけでなんの肩書きも無い自分を比べて不甲斐なさを感じてしまったのだろうか。初対面の時の勢いはどこへやら、怒られて落ち込むような女の子がそこにいた。小さく背中を丸める明石に、忠はなんとかその場を繕おうと口を開く。

『大丈夫だよ。明石は最新鋭の専門工作艦なんだよ？ 長門艦や陸奥艦ですら出来ない事が明石にはできるんだよ。今はしっかり働けるように訓練に励んで、焦らず編入される時を待てばいいさ。一緒に頑張ろう。な？』

最後の一言をつい勢いで言ってしまった忠は少し焦った。さっき出会ったばかりの女性に掛ける言葉ではない。しまったと忠は慌てるがそれが行動に出る前に、明石はその言葉に救われたかのように顔を上げる。落ちずに瞳の縁に溜まっていた涙が、笑顔になった事でホロリと彼女の頬を流れていく。

『ありがとう、森さん……。』

少し震えるように発した明石の声は小さかったが、周りの波音や重機の音にかき消される事無く忠の耳に届いた。満面の笑みの彼女に忠は自分の失言の影響が無い事を確認し、一人胸を撫で下ろす。

年下の女性相手に一人慌てた自分が、彼には少し情けなく思えた。
ちよつとした自己嫌悪に襲われる忠を他所に、明石はニツコリと
笑い体育座りのまま前後に体をゆらゆらと揺らしていた。

『森く、いるか？』

カンカンとラッタルを上げる音と、野太く伸びのある声が測距儀
の中から聞こえてきた。声の主にすぐ見当がついた忠はすぐさま返
事をしながら、測距儀の中へと降りてみる。すると忠の予想は当た
っていた。

『大尉。』

敬礼しようとした忠に、青木は笑顔につられて上下する髭と同じ
テンポで手を左右に振った。

『敬礼はいい。今日はとりあえず部屋でこの辺の書類を読んどけ。
後、今日は夕食に続いてそのままお前の歓迎会だからな。』

そう笑いながらポンと忠に手渡された書類は結構分厚い。艦内の
諸規則や砲術士少尉の業務内容関連の書類だ。その量に少し忠の笑
顔が引きつる。

『は、はい。』

新人である忠のそんな表情を青木は予想していたのか、笑いなが
らラッタルを戻っていった。何か台風でも過ぎ去ったかのような雰
囲気に、忠は手元を視線を落として眺めてみる。そこにあるのは台
風の傷跡ともとれる書類の束。『あゝあ・・・。』と心の中で口に

する忠の後ろから、明石の視線とケラケラという感じの笑い声が聞こえる。

『一緒に頑張ろうね、森さん。』

明石にも忠の心の内は解ったらしく、お返しとばかりにさつき自分にかけてられた言葉を彼女はわざとらしく言った。そんな明石に苦笑いするしかない忠。

『ははは、そうだな。』

忠は精一杯の歪んだ笑顔を明石に向けた。

『あ、天窓閉めるね。』

『うん。』

そう返事すると彼女は天窓から測距儀の中に降りてきた。手を空けるために座席に置いた忠の書類の束を、明石はツンツンとつついてはニヤニヤしている。もっとも忠はそれを気に留めず、天窓をパタンと一思いに閉めた。

『はい。』

彼が天窓を閉め終えた所で、明石は書類の束を憎たらしい笑顔で両手で差し出してくる。少し口を尖らせてそれを小脇に抱え、忠はラッタルを折り始める。そしてラッタルを降りた先、艦橋後ろの広い場に出た所で忠は歩みを止め、ふと後ろを振り返った。

そこにはニコニコと笑顔を湛えた明石がいた。彼女は表情をそのままに、忠の視線に首を傾げる。

『うん？』

どうしたの？と言う様な顔だ。悪気が全く無く、人を疑う事など露知らぬ無垢な笑顔で忠の目をじっと見入る明石。部屋に戻って大尉の指示通りの業務をしようとしている忠は、この時、そんな自分の後ろに追隨してくる明石に非常に素朴な疑問を抱いたので聞いてみる事にした。

『うんと……。なんでついてー。』

『早くお部屋戻らないと。夕食まで書類読み終えなきゃいけないんでしょ？ 初日なのに大変だよねぇ。』

『いや、だから、なんでついてー。』

『あ、でもボヤボヤしてたら青木さんに怒られるよ？ 結構怖いんだよ、青木さん。』

また無視かよ。

そう脳裏で呟きながら、忠は額に手を当ててため息をつく。決してこの女性が嫌いな訳じゃないが、こういうマイペースで出鼻を挫く話し方をされるのが忠は苦手だった。でも彼女の仰る通り、こんなトコでブラブラして怒られる気など彼には毛頭無い。とりあえず自分の身に危険がないと思われる彼女への疑問は封印する事に決め、二度目のため息と同時に正面に向き直った忠。だがその背中を明石は後ろからグイグイと押し始めながら、忠の行動を急かす言葉を放つ。

『5分前の精神！急ぐ、急ぐ！』

なんでこんな所まで来て、兵学校みたいな事を言われなきゃならんのだ。

そんな事を思いながら、忠は背中から伝わる力に身を任せて歩き出した。

最新鋭の艦である明石艦は、こういう所で役得がある。

マサに案内された時は荷物を置いただけで彼には部屋をじっくり観察する暇が無かったが、改めて見てみるとその部屋は隅々に至るまでピカピカだ。備え付けの机や棚、ベッドや壁には埃一つ着いていない。壁や天井のほのかな塗料の匂いさえまだ残ってる。

本来なら忠のような下級将校は、艦内各科長に当たる士官のように個室を与えられる身分ではない。士官室士官と正確には呼ばれるのだが、これに対して忠の様な幹部ながらも若輩である者達は3人部屋か2人部屋での士官次室での生活となり、次室士官という呼称で艦内でも明確に区別される物である。

だが僅かしか配属されていない明石艦艦内の士官の一人である事と、水平甲板型の艦体を持つ事からそこそこに居住性の良い明石艦の艦内事情も功を奏し、彼にはとっても狭いながらも個室が用意されており、その事もまた忠の部屋に対する印象をより良い物へと変えていく。800人近い乗組員数を誇る明石艦なのだが、その内の士官とされる階級の乗組員は僅かに15人しかいない。彼はまだ新米の少尉ながらも、その数少ない士官の一人なのである。

『さすがにピカピカだなあ。』

『へーん、気に入ってくれた？』

小奇麗な部屋に感動して、忠は彼女の事をすっかり忘れてた。ゆっくり背後へと振り向いていく忠だが、明石は対称的に至って普通そうにして部屋備え付けである椅子に腰掛け微笑んでいる。

とりあえず部屋に入った状態なら大尉の目は届かないだろうと彼は判断し、かねてからの懸案を解決する事にした。明石に身体を向けなおすと腰に手を当て、忠は彼女に顔を近づけるように僅かに腰を折って声を上げる。

『なあ、明石。』

『うん？　なあに？』

艦橋からこの部屋に来るまで悩み続けた忠の心など、気にも留めていない彼女。首をかくんと傾けて、きよとした顔で忠の声の続きを待っている。

『なんで、ここにいるの？』

忠の質問に明石は眉間に緩くしわを寄せて口を尖らせた。同時に右手の指先を頬に当てて、彼女は忠の質問に返す言葉を悩んでいる。

『うーん、まだ艦魂の説明が足りなかったかな？艦魂はこの艦と一心同体だからこの艦の中ならー。』

『いや、そうじゃない。』

質問の意味が伝わっていないと判断した忠は、初めて彼女の会話を封じて発言する。

『ここオレの部屋だよ？なんでオレの部屋にまでついて来るの？』
『うつ・・・。』

忠の言葉に明石は驚いた顔をした後、肩をすくめて丸くなり俯いてしまった。

明らかに衝撃を受けて言葉を詰まらせた彼女の姿に、忠は自分の

言い方が少しキツイ言い方だったとすぐ気付く。

『あ、ごめー。』

『わ、私ここにいます、じゃ、邪魔・・・？』

顔を床に向けたまま、明石は言った。帽子のつばで忠には彼女の表情が見えなかったが、彼女の声に込められた気持ち伝わってくる。

『その、まだ私って他の艦魂とあんまり話す機会ないんだ・・・。艦隊編入もされてないし・・・。森さんとは会ったばかりだけど普通に話せるし、もっと話したかったから勝手に来ちゃったんだけど・・・。迷惑だよね・・・。』

『いや、迷惑じゃないよ！ごめん、そんなつもりじゃなかった・・・！』

忠の慌てたその弁明に、明石は少しだけ顔を上げた。忠からは明石の口元辺りが見えるのみだが、不安げな表情をしているのが彼女の桜色の唇から解る。忠は消える間際のロウソクのような彼女の落ち込み様を払拭するために、少しでも声色を上げて違う話題を振ってみた。

『・・・あ、明石はいつも艦の中のどこにいるんだい？自分の部屋とかあるの？』

『うん・・・。でも乗り組む人が増えてきちゃって、私が使え部屋はもう無いんだ。最近は通路の隅っことかな・・・。』

『あ、そうなんだ・・・。』

相も変わらず明石の口から返ってくる弾みの無い声に、何か彼女の身の上がとても不憫に忠は思えた。明石が人並み以上に話す事が

好きな性格であるという事は、忠も既になんとなくだが解っている。だがそんな明石にとって、他の艦魂とあまり話せない立場と供に居場所すらも転々としなければならなかったこの2ヶ月間と、その中で味わってきた彼女の心の寂しさや辛さはどれ程の物だったろうか。ある意味では心が飢えているのかもしれないと忠は考え、それまで抱いていた彼女に対する考えを改める。

『それなら、少しここに居なよ。』

測距儀の上であの笑顔を見せられた忠には、すっかり消沈している不憫な彼女をこれ以上見れなかった。

例え一時でも彼女の心が和らぐならそれで良い、根は心優しい彼のそんな想いを込めた言葉に明石は顔を上げる。

『ほんと・・・？』

『うん。オレみたいなのが話し相手でいいなら・・・。』

おもむろに差し出した忠の右手を明石は両手で掴むと、うつむいて自分の額につけた。忠は驚いて一瞬手を引こうかと思ったが、そのままにしてやる。きつと何気ないこんな小さな触れ合いが、彼女は欲しかったんだろう。豊かな表情と、時折見せるマイペースなおしゃべりが特徴の明石。そんな彼女だけに、この2ヶ月間は寂しさとの闘いだったのではないだろうか。忠は微かな彼女の泣き声と供に、右手に冷たく濡れた物がしとしとと伝わるのを感じた。

『一緒に頑張るんだろ？ 泣くなよ、明石。』

『ふふ……。森さんが言ったセリフなのに。』

『あはは、そうだったけ？』

微笑む忠に明石はゆっくり顔を上げる。赤くなった目と涙で汚れ

た頬を擦りながら、頼りなくも優しい笑顔で忠を見つめた。

『せっかくの美人が台無しだよ。ほら顔拭いて。』

『うん・・・！』

忠の差し出したハンカチで明石は顔を拭いた。時々ハンカチの隙間から見える頬を少し赤くした彼女の笑顔に、忠も不思議と心が安らぐ。

やがて部屋を支配していた気まずい雰囲気も晴れ、彼は一安心してベッドに腰を下ろし、書類の束を解き始めた。

やれやれ、こいつの読破と明石のおしゃべりの相手か。こりゃ大変だ。

忠はそう思いつつも小さく微笑み、静かにため息をした。

『お仕事開始？』

明石はようやく涙が収まったのか、椅子から立ち上がって言った。

『ああ。夕食までやっつけるさ。』

忠の言葉に小さく明石は頷く。

『お茶でよかったら飲む？』

そう言って彼女が机の上で手をを2、3回左右に何かを撫でるように動かすと白い光がふわっと光り、湯気が上がるきゅうすと湯呑が出現する。この白い光を伴った不思議な能力に関しては、既に忠は測距儀の上で明石と話していた際におしえてもらっていた。何も

無い所に突然物体が出てくるといふなんとも奇妙奇天烈なお話だが、それが明石にとっては自分に対する精一杯のお礼とすぐ気づいて笑顔返してやる。

明石が淹れてくれたお茶のおかげか、なんとか夕食開始までに忠は書類を一読する事に成功。自分の事だからか、意外にも明石は書類の内容を説明してくれた。知的な雰囲気あまり感じられない明石だが、自身の分身として艦の隅々まで知っている彼女の講義に忠は助けられる。

ここには何の設備がある、この通路は常に人通りが多い、ここは物品の搬入の際に混雑して通れない時があるなど、艦の中身と日常をよく知っている明石の言葉は、これからそこで働く事になる忠が職場を理解する上で大いに参考になるのであった。

『ありがとな。』

忠のお礼の言葉に、優しく笑った明石。

だが明石の小講義が終わってすぐ、夕食の案内をしにマサが部屋を訪ねてきた。部屋を覗き込んで忠を呼ぶマサの視線は忠にしか向いていない。やはり見えてないのかと忠は改めて艦魂の見える事を実感し、ちょっとした優越感を覚える。そのまま部屋に残る明石に軽く手を上げて挨拶し、彼は弾むような足取りで夕飯へと向かっていった。

部屋で一旦別れた二人だったが、明石は歓迎会が始まる頃になって夕食と歓迎会の会場である士官食堂に忠を追ってひょっこりと現れた。触れ合いに飢えている彼女の心を思い出し、忠は自分の横に小さく手招きして明石を呼んでやる。

『きちちゃった。』と言いながら軍帽をとり、忠の横に座りながら笑う明石。首の後ろで結った明石の髪は、サラサラと彼女の背中を流れている。これから始まる宴会を楽しみにしているのか、明石は一人でニヤニヤと微笑んでいる。だが彼女を素通りして忠への配膳を行うマサに明石は背を丸め、目を伏せ気味にして口をへの字にした。忠はみかねて自分の前にあった皿やお碗を少し寄せて明石と自分の間に置いてやった。明石はそんな忠に大きく瞳を開いて微笑むと、お碗の中の肴を一つまみして口に運ぶ。

よく食う奴だ。

食欲旺盛で女の子らしさが薄れる彼女の豪快な食べ方に、忠は胸の中でそう呟きながら笑った。

『よし、それでは今から――』

年寄りとは誰もがあういう物なのか。少しくどい感じの堀田特務艦長の初めの挨拶を皮切りに、男達の宴が始まった。あちこちから乾杯を求められる忠。乾杯する都度、叱咤激励される忠はなかなか一杯目に口をつけれない。しかも主役がまだ一滴も飲んでいないにも関わらず、早くもコップを空にしている堀田艦長の号令が飛ぶ。

『第一撃、青木！ 軍艦行進曲！ よゝい、・・・てゝ！』
『『『 護るも、攻むるも黒鉄のゝ！ 』』』

堀田特務艦長の声で立ち上がった青木大尉は脚を大きく開き、帽子を握った右腕をブンブンと振って音頭をとった。180センチを超える大男の青木大尉による迫力ある音頭と、低音が効いた声につられ食堂内の全員が歌いだした。手拍子の嵐の中、暴れるように腕を振る青木大尉は、のほほんとした昼間の彼からは想像がつかなかったがとても歌が上手かった。明石もさすがにこの歌は知っているのか、両手で手拍子を打ちながら体を左右に揺らして歌っている。

『カルピスとおいしい物が食べれるんだよね!』と、賑やかな雰囲気が始まった宴会にすっかり上機嫌な明石だったが、帝国海軍の酒の場をナメていた彼女は、上半身裸になって歌いだした男達の姿に顔を真っ赤にして膝を抱える。酒を飲んで騒ぐ事がそこそこ好きな忠は、艦長の計らいで給仕としてその場にいたマサと共に手拍子を打ちながら大声で歌う。忠にしか見えていないが、明石は彼の隣にちょこんと座り、眼前の裸の男達を見ては赤面してうつむき、忠が用意してくれたカルピスや小料理を目に残る光景を振り払うように口に運ぶ。茹ダコのように真っ赤な明石の顔を、忠はチラッと横目で見てみる。コイツ可愛いじゃないかと彼は思ったが、もう酒が回ったかと素直な自分の気持ちに心の中で言い訳をした。

そして忠はそんな彼女を見かねて、お酒を勧めてみる事にした。彼としては歳若い彼女にお酒を飲ませるのは気が引けたが、せっかくの賑やかな場もこれでは楽しめないだろうと思い、物は試しだと勧めたのだった。ちびちびと日本酒を飲む明石は相変わらず赤面しているが、酔ったのか裸の男達に対する気後れが少し無くなったようだ。顔を上げて次々に歌われる軍歌を体を揺らして歌っている。揺れる彼女は時折、隣の忠に肩をぶつけるが気にもせずに歌い続ける。楽しんでるな、良かった。ガラス細工のように綺麗な歌声と心のそこから喜んでいる明石の表情を、横から見て忠はそう静かにつぶやいた。

『この歌かあ!』

そう言いながら明石はへたり込むように座っていた体勢から姿勢を直し、宴会のシメとして全員で歌った「月月火水木金金」を叫ぶように歌い始める。あんな海の男なのか?という疑問は下らないので、忠は敢えて言わなかった。それでも、まだレコード化されていない曲なのに明石がよく知ってる事に、生まれたばかりとは言えさすが帝国海軍艦魂だと忠は一人感心する。しかし歌い終わったと同時に、明石はふらふらとしながら赤面の笑顔を忠に向けて一言。

『疲れた。寝る!』

そう言っただけでその場にひっくり返ってしまった。気味が悪いくらいニヤニヤした寝顔で、忠が揺さぶっても面倒くさがって起きようとならない。既に食堂の男達は腰を上げ、後片付けと寝床へと戻り始める者達に分かれている。忠はそんな光景を視界にいれつつも、周りの者達にその仕草を気取られないよう注意しながら明石の肩を揺するが、明石は彼の心遣いと手を煩わしそうに振り払った。

はあ、世話のかかる奴。

そう思いつつ、忠は人に見られないようそそくさと明石をおぶって自分の部屋に向かった。

少し休ませてやるか。これじゃ歩いたが最後、海に転落するかもしれない。酔いが冷めてから帰らせよう。

あれだけ飲んで食ったにも関わらず、細身の明石の体はとても軽い。背中から伝わるほのかな彼女の体温と耳元で聞こえる息遣いが、明石が艦の命であり人外の者である艦魂だという事を忠から少し忘

れさせる。

一応は3年以上に及んだ海軍兵学校で鍛えぬいた丈夫な身体を持つ忠は、一般的な女性と同じくらい体重である明石をおぶってもバテるような事はなく、ほんの少しも乱れていない呼吸としっかりとした足取りで自身の部屋まで辿り着いた。

だが部屋の扉を開けた先に、忠は予想外の光景を目にして思わず声を上げる。

『な、なにこれ？』

自分の部屋の扉を開けて驚く人間とはどれ程いるだろうか。そこにはベッドとは別に、床にもう一つの布団が敷いてある。忠はその時、ちよつと酔いによって停滞する思考回路の果てに、士官食堂に行つた自分を時間を置いて明石が追つてきた事をふと思ひ出した。

『私、下でいいよ。』

立ち尽くして思考を整理する忠を他所に、ご機嫌でそう言つて酒臭い息を出しながら忠の背中からずり落ちた明石は、四つん這いで床に敷かれた布団に潜り込んだ。

もちろん忠は酔いを忘れて、自身の部屋にて眠ろうとする明石に声を張り上げる。

『ちょ、ちよつと待っ—！』

『う—ん？』

唸るように声を放つた明石は既に目が半開きだ。掛け布団の中でモゾモゾと動くとその中から上着がヒョイツと弾き出される。昼間の綺麗で繊細な彼女が、今は酔っ払つたオッサンのような行動をとっている。なんという女だ。

『おいおい、ここに居ても良いって言ったけど、寝るのはマズイだろ?』

『なんで?』

『なんでって、いくら艦魂でも明石は女の子―。』

『疲れた。寝る!』

『いや、寝るって―!』

『ヤだ!寝る!』

『だ、だから、ここはオレの部屋―!』

『おやすみ…。』

『人の話を最後まで聞け―!―!―!―!―!』

『す―…、す―…。』

人生22年目にして掴んだ夢の艦隊勤務、なんでこんな事になってしまったんだ。不憫に彼女を想ってやったオレが馬鹿だったのか? やっぱこういう女、苦手だ。

一日の疲れとマイペースを極めた手に負えない女性と收拾不能の事態、忠は両手で頭を抑えてベッドに崩れ落ちた。

『もうやだ、オレ…。』

彼が幼い頃から憧れた海の男の艦隊勤務はこうして初日を終えた。同時に彼の「気ままな男所帯」という夢も終わった。

明石艦の中ではその夜、夢破れて枕を濡らす青年の声が波音のように静かに響いたという。

第三話 「忠の歌」

白々と夜の闇から色合いが引いていく早朝。

まだ重さが残る^{まぶた}瞼を擦りながら、忠は^{ただし}早朝の最上甲板を艦尾から艦橋に向かって歩いていった。

工作スペースを得るために水平甲板で幅広に建造された明石艦^{あかし}は歩きやすい。艦の中からは目覚めを促すラッパに応えるように起床し、一日の始まりを迎える乗組員達の声と生活の音が僅かに聞こえてくる。さすがに起床してすぐ艦の外に出る人はいないのか、70人以上乗っている明石艦なのだがそこにいるのは忠だけだった。

歯を磨き、伸び始めた髭を剃った顔に当たる潮風はサッパリしていて気持ちが良い。目を東に向ければ、瀬戸内の島々の間から朱色をした朝日の光がキラキラと辺りを包んでくる。空の所々に小さく浮かぶ雲に遮られたその光はさながら十六条旭日旗だ。思わず合掌して目を閉じ、立派に海軍少尉になった今の自分を迎えてくれる朝日に彼は心の中で感謝した。

だが忠はすぐに眉間にしわを寄せ、大きくため息をして口を開く。

『願わくばもう少しマトモな海軍生活を送らせてください……。』

忠が明石艦に乗り組んで既に二週間程が経つ。

『あゝさゝだ、夜明けさだ！』と毎朝、多少の迷惑など屁とも思っていないブツ飛んだ同居人に布団を剥ぎ取られて叩き起こされるという自分の境遇を、忠は無意識に声に出して訴えた。そんな事を知ってか知らずか、旭が変わらぬ優しい光で輝いている。神々しいその光景に忠は大きく息を吸い込んで胸を張ると、ちよつと不憫にも思える自身の境遇を励まそうとする。

頑張れ、オレ。

そう言い聞かせて、忠は艦内に戻った。

7時の朝食までのちょっとした時間。新兵さん以外はこの時間は貴重な午前中の自由時間だ。

部屋に戻った忠はベッドに腰掛け、自前で持ってきた本を読んでいた。忠の正面の床では制服の上着に蒸気アイロンをせっせとかける明石がいる。

綺麗好きという点ではこの二人はウマが合った。アイロンとアイロン台は明石が毎朝、艦長室から失敬してくる。堀田特務艦長はズボラな人でたまにしかアイロンをかけないのだ。実際のアイロンかけは忠と明石の当番制でその日の当番が二人分をやる事に決めており、今日は明石が当番だった。その上で決して乱暴な性分では無い明石のアイロンかけはとても丁寧な仕事だったりする。

事実、今まさに『できたよ。』と忠に手渡してきた彼の制服はしっかりとヤマが折られ、しわが一本もない。

『お、ありがとう。』

『ふふ〜ん。』

お礼を口にする忠に、どうだ見たかと言わんばかりに胸を張って微笑む明石。

こういう所は可愛いんだけどなあ。

光るモノを持っているが全体的に難のある彼女の性格を、この二週間でそこそこに知る事ができている忠は少し引きつった笑みを返

す。だがここに至って忠はアイロンを夢中でかけている彼女を見て、ふとコイツはなかなかいいお嫁さんになるのではないかと思った。

献身的で朗らかな人当たりで美人だよな。

だが一日の始まりに毎回あんな起こされ方をしてはたまらんわい。基本的に人の話聞かないし。

そこまで考えた所で、忠による明石の嫁像考察は終了。結論、ならない。

小さな懸案を解決した忠は上着を着ると再び本を読み始めた。

『砲術士！ 食事用意よろし！』

『おう！ 今行く！』

部屋の扉の向こうから響く正式に忠の従兵に任命されたマサの声に、すっかり艦内の生活にも慣れた忠はすぐさま返事をする。やがて開けた扉の向こうで笑みを交える仲の良い男兄弟の姿に、姉妹のいない明石は少し羨む視線を向けながらも、部屋を出る忠に手を振って見送った。

『おはようございます。』

『おう。』

士官食堂での忠は、直属の上司である青木大尉の向かいの席が自席だった。

大柄な体格を持つ青木はどっかと腰を下ろして朝食を食べている。米粒がついた口髭が上下する青木の顔は、食事の雰囲気明るくさ

せるのに十分だ。帝国海軍広しと言えども、艦隊勤務の中で数少ない楽しみの一つである食事を無言で二倍三倍と楽しくさせる事ができる人物はなかなかいない。毎朝それを特等席で堪能できる事に忠は感謝し、自然と作られる笑顔で朝食へと箸をつけた。

すると青木は部下である忠に、今後の予定を含んだ話題を振る。

『森、明日からの訓練航海で砲術科も航行中の操砲訓練をする事が決まったぞ。』

『お、やっと出番ですね。』

『ああ。二水戦の駆逐艦の霞艦^{かすみ}、それから姉妹艦^{あられ}の霞艦との合同訓練だそうだ。』

『あゝ、新設される駆逐隊ですか？』

『そうだ、向こうも訓練航海を兼ねてる。ウチと同じで、今年に入って竣工したばかりだからな。』

何気ない上司との朝のやりとりであったが、耳にした内容に忠はちょっとだけ胸の内を明るくした。忠としては初の訓練航海でもあり、明石艦としても初めての本格的な砲術科の訓練である。砲術士として配属された彼の腕が試される初めての機会なのだ。

よおし、やったるか。

そんな言葉を脳裏に過ぎらせた彼の肩に、自然と力が入る。

『相手が駆逐艦でも関係ねえ。二水戦の鼻を明かしてやるぞ。』

『はい！』

若い部下の血気盛んな感じが良く伝わる忠の返事に、青木は白い歯を見せて笑った。

その後、主砲発令所にてお仕事に励む忠の前に明石が現れたのは、8時の課業開始からしばらく経ってからだった。朝食に続いて明日の訓練航海での砲術科に関わる業務内容の打ち合わせを砲術長の青木としていた忠は、主配置の発令所で教練要領の確認をしていた。一端の士官である忠はまだ艦内幹部としては若いが、いつまでも新人でいる事などできない。明石艦に備えられる二基の主砲を指揮するこの発令所は、忠の持ち場であると同時に彼が責任者でもある。故に忠はぶつぶつと独り言をつぶやきながら要領書と各種計器や艦内電話、伝声管に指差し点検を行なって、明日の訓練にて失態を演じぬように注意深く業務の確認をしているのであった。そして真面目に励む忠の姿を目にした明石は、小さく微笑んで彼へと声をかける。

『砲術士。お仕事の進捗は如何？』

忠が気づいて声がした方を見ると、踵を揃えた敬礼をしながらもイタズラ好きの少年のように笑う明石がいた。艦魂にも仕事はちゃんとあるとは彼女の言い分だが、どう見ても暇だから邪魔しに来たという感じにしか忠には見えない。自分の事を役職で呼んだ先程の彼女の言葉も、忠が抱いたそんな思いを明確にする。

『馬鹿にして。これでも――。』

『努力に憾み^{うら}勿かりしか！』

『あのね、今やってる最中――。』

『不精^{わた}に亘^{わた}る勿かりしか！』

『……』

いつもの様に忠の声を遮るようにして声を放つ明石。だがそんな彼女の声に対して、忠は最近では沈黙する事で対処できる事を学んでいた。しばらく忠は口を閉じたまま明石の方を眺めていたが、その沈黙に堪えきれない彼女はすぐさま先程までとは違う話題で声を放つ。

『あゝ、朝ご飯、おかわりしとけばよかったなあ。お腹減った。』

『……お前、五省全部覚えてー。』

『腹が減っては戦ができないよお。なんかない？』

アンタ、そもそも戦闘艦じゃないだろ。

豆鉄砲みたいな高角砲しかないのに第一戦隊にでも入るつもりなのか？

そつと心の中で明石の言葉にツツコミを入れ、額に手を当てて大きくため息をつく忠。ところがこんな会話のやり取りでもしばらく一緒に生活していると全く怒りは沸いてこない。むしろ最近笑顔で我が道を行く彼女の姿が、忠には微笑ましく思えるというのだから慣れとは怖いものだ。本人は気づいていないが、額を覆った手を下げると忠の表情はどこか居心地の良さそうな笑顔になっていた。

『あ、良いお知らせがあるよ。』

『ほ？』

忠の言葉に敬礼をそのままに首を傾げる明石。直立不動の姿勢を維持していた明石の身体は、糸が切れた操り人形のようにになる。

『明日の訓練航海だけど、二水戦の霞艦と霰艦との合同だってさ。』

『ホント！？ やった！』

彼女は拳を握り、チョンと小さく跳び上がって喜んでいる。仮とは言えやっと自分の旗竿に軍艦旗を掲げれる事に喜んでいるのか。それとも彼女自身、初となる他艦との合同訓練に喜んでいるのか。少し高い所にある発令所の窓に明石は駆け寄ると、つま先立ちになって舷窓越しに広がる呉の波間を見回す。

『うんと、あさしお朝潮型だから……。あ、あれだよ、霞と霰！』

忠は明石の傍まで歩み寄るとその隣に立ち、彼女が指差す舷窓の向こうを眺めた。

呉の潮風と今日も天高く昇った陽の光に包まれて、帝国海軍最新鋭の一等駆逐艦2隻がそこに浮かんでいる。周りに巡洋艦や戦艦がいる呉の波間では小さく見えてしまうが、帝国海軍自慢の水雷戦の中核として存在するのが彼女達だ。そしてその中でも二人が眺める2隻は最新鋭の駆逐艦である。

力強い2隻の姿を瞳に映して感心する忠だが、その横で悲哀が少し滲んだ表情の明石が口を開く。

『いいなあ……。』

そう呟いた明石の視線は2隻の艦尾に向かっていた。そこには少し強めの瀬戸内の風に靡く軍艦旗がある。さすがに帝国海軍最新鋭の駆逐艦、竣工と同時に2隻とも連合艦隊に編入されているのだ。もっともそれは未だに帝国海軍には正式に編入されていない自分の事を明石に思い知らせるのには十分であり、彼女の表情からは笑みが少しだけ欠けてしまう。そしてそれに気づいた忠は、優しくゆっくりした口調で明石に声をかけた。

『焦らない。』

『・・・うん。』

明石は忠の言葉に、無念さが僅かに残った笑みで頷いた。

するとその時、ふわっと白い光が窓に反射した事に二人は気づく。

あれ、今のって？

白く淡い光に心辺りがある忠は自身のすぐ隣に立っている明石を見るが、彼女も忠と同じ様な表情で忠の顔を見ている。私じゃないよ？と明石が思っているのが忠にもすぐ解った。

『あの・・・、明石少尉でしょうか・・・？』

刹那、明石より少し幼く高い女性の声が後ろから聞こえた。二人が振り返るとそこには水兵の軍装を身に纏った、短髪の少女が驚いた表情で肩を張って立っていた。彼女の格好は忠や明石と同じ濃紺の色合いを持つ第一種軍装と呼ばれる物だが、その開襟の上着には大きなジョンベラがぶら下がっている。ひじりの無い独特の形にペンネントを巻いた水兵軍帽を被り、その下にある顔は日に焼けたような浅黒い肌に大きな丸い目を光らせている。僅かに強張った様な表情を浮かべている少女だが、そんな彼女を明石は自分の仲間であるとすぐに察した。故に明石は彼女の心に張りつめる緊張の糸を解すかの如く、口元を緩めて彼女へと声を返してやる。

『そうですけど・・・？』

『だ、第18駆逐隊の霞二水です！ 明日の合同訓練航海にあたって、ご挨拶に来ました！』

肩に力の入った素人っぽい敬礼でそう言う少女。

歳は明石よりすこし下くらいで背も明石より低い外見を持ち、元気に日に焼けた様な麻色の肌を真っ白な水兵服の隙間から覗かせている。帝国海軍が誇る水雷戦闘の申し子である駆逐艦の艦魂と言うにはちよつと相応しくない、くりつと丸い目の可愛い水兵さんだった。

そういえば明石以外の艦魂は初めて見るな。

そんな言葉を脳裏で呟く忠を横に、明石は名を名乗ってくれた霞に対して一歩進み出て声を返す。

『ああ、霞艦の艦魂さんですね？お世話になります、明石です。』

珍しく自分を訪ねてくる艦魂に明石は満面の笑みで敬礼する。どういう基準なのか解らないが、人間と同じく帝国海軍の艦魂もまた階級を頂いている物らしく、明石はその襟に少尉の襟章をつけている。身につけている服も忠と同じ士官用の第一種軍装で、水兵の格好をしている霞に続いて敬礼する明石の姿はお互いの軍装だけを見ればそれ程変な光景ではない。

今更ながら明石が士官である事を確認した忠なのだが、そんな明石が士官たる者としての人格を持っていない事を憂い、つつい額に手を当ててため息をついてしまう。

人の話は聞かない、酒癖も悪い、ゴーイングマイウェイな性格。こんな変な人が士官でいいのか、帝国海軍の艦魂達よ。

口にこそ出さないが、忠はそう心の内でつぶやいて未来の艦魂社会を憂いだ。

その一方、当の明石のなんとも優しいで朗らかな人当たりは、上官と向き合う事で霞の心に生まれていた緊張の色を段々と滲ませて

いく。まだちょっと硬さの残る物言いを伴いながら、霞は明石に対して声を上げる。

『あ、ありがとうございます。』

『ちょうど霞さんの事を話してたんですよ。』

『は・・・？』

呆けた返事をした霞は手を下ろすのも忘れて視線を明石から横に流し、そこにつっ立っている忠と目を合わせる。だが霞にとって、彼と目が合う事自体が理解不能でならない。なぜなら彼女を含めた艦の命たる者達の中には、そこに乗組んでいる人間達の瞳には自分達の姿が映らない常識があったからだった。

そして驚きを隠せない霞に反し、忠は初めて目にした駆逐艦の艦魂の姿に色々と考えを巡らせていた。まだまだ下手な敬礼をする霞だが、その言葉遣いは上官への接し方において彼女が気を使っている感じがよく表れている。他人に対しての気遣いなど屁とも思っていない同居人と暮らしている手前、彼にはそんな霞の姿がどこか微笑ましかった。

ウチの相方に比べれば随分マトモそうだな。

そう思った忠の口元が緩む。だが霞としては、人間である彼が先程から自分の姿を妙にその視界に捉えている事に困惑していた。やがて霞は混乱と紙一重の騒がしい状態となっているその思考の中で、この人間が自分達の常識を覆している可能性にふと気付く。

『あ、明石少尉……。こ、この方は艦魂が見えるんですか……？』

『そうですよ。砲術士の森さんて言うんですよ。』

『あ、オレは森忠少尉。よろしく。』

『は、はい……。』

なにか緊張感がヒシヒシと伝わる霞の態度。可愛らしさも放たれる霞の姿に忠は笑みを向けるが、いくらなんでも明石に敬礼してかrazuと右手を下ろさないのは辛そうに見える。まして微妙に霞の右腕は、先程からプルプルと震え出してきた。見かねて忠は声をかける。

『手を下ろしていいよ。無理しないで。』

『す、すいません……。艦魂が見える人間さんは初めてなので……。』

そうか、彼女も明石と同じくらいに若い艦だもんな。

艦魂達の常識なぞ露と知らない忠は、霞の表情に充満していた緊張の色の原因がそこだった事を察して安堵した。実はその内心ではオレ、そんなに自分の顔は酷い顔してるか?」と思い始めていた忠なのだが、ここに至って彼の自身の容姿に関する憂いは救われる。艦魂だろうがなんだろうが、女子にドン引きされるような容姿を持つてしまうのは世間一般的な男子の一人である忠には辛い事この上ない。顔に出さぬように、しかしそれはそれは真剣に憂いでいた彼の懸案だが、ようやくここに解決を見たのだった。良かった、良かった。

『う~~~~ん……。』

そんな中、明石は突如として呻き声をあげながら口元に手を当てて眉をひそめる。そしてその明石の急な行動に霞は自分がなにか粗相を犯したと思ったのか、板バネのように体を伸ばして直立した。定まらない視線でうつむき、冷や汗をかいている。

しかし明石は相変わらずの表情で、やがて気をつけする霞の周りをゆっくりとした足取りで歩き始めた。

『明石、どうしー。』

『えいっ!!』

忠の声が響く中、霞の背後までまわった明石は小さく振りかぶったかと思うと、そこにあった霞の小さなお尻に平手打ちをした。霞のお尻からはパチンと乾いた感じの音が鳴り響き、彼女はいきなりお尻を襲って来た鈍痛に思わず悲鳴を上げる。

『ふわぁ!』

背後からの奇襲というなんとも理不尽かつ卑怯な明石の攻撃に、霞は前のめりに膝から崩れる。

驚きながらも忠は慌てて倒れる彼女をなんとか受け止めた。あまりの急な出来事に、霞は四つん這いの姿勢でお尻を押さえながら呆然と明石を見上げる。

『お、おい! なにしてー!』

『ごめんね。私、もう少し仲良くお話したいんだ。ごめんね。』

明石はしゃがみこんで崩れた霞に、顔の前で両手を合わせて謝った。彼女は何度も謝りの言葉を発しながらも少し歪んだ笑みで霞に頭を下げている。

そして忠は明石のその言葉に、彼女が霞に対してさっきから秘めていた想いを理解して少しだけその表情が緩ませた。そう、彼女に上下関係や敬語なんて似合わない。せっかく縁あって知り合った同じ艦魂と彼女はそんな俗世的な付き合いなんかしたくないのだ。天真爛漫にしてちよつと非常識な行動をもとてしまう明石だが、そ

の実は彼女なりになんとか霞と仲良くなろうと必死になっているのである。彼女の心の奥底には常に、誰とも話せず、誰にも相手されない寂しさを知っている悲鳴にも似た叫びがある。明石と初めて会った日に彼女が見せた涙の事もあり、忠はそんな明石の胸の内を手取る様に理解する事ができた。

もともと明石はそんな忠の自分に対する理解に感謝する事も無ければ、お礼を言う事も無い。寝起きすらも供にしている彼にすっかり気を許しているが故に、明石はいとも簡単に彼を新たな友人を得る為の犠牲にしようとする。

『ごめんねえ。痛かったらその人ぶっていいから許してね。』

『お、おい！ オレ何にもして――！』

『目の前に倒れてる水兵を見捨てるの！？ 一言一行いゝさぎよく――！』

『誰のせいだよ！？ お前が叩いたから――！』

『海軍精神、ただ一献だあゝ！』

霞には平謝りしていた明石だが、忠に対してはケラケラと笑いながらまた訳の解らない発言をする。

なんで助けたオレがお前への報復を受けにゃなんのだ。

口喧嘩では負けるつもりが無い忠なのだが、いつも彼女はその土俵にすら上がってこない。結局、いつも通りにため息をして良い様に明石に笑われる忠だった。

『あは、あっはっはっ！』

そしてその二人の夫婦漫才さながらのやりとりに、霞は口に手を当てて大笑いする。初めて見せた大きく口を開けて笑う霞の表情に、

明石は満面の笑みで応えた。どこか安堵した感じがある明石の表情に、忠もまたつられて微笑みを浮かべる。

よかったな、明石。

目の前で誕生した友情を、忠は心から祝福してやった。

時間は流れて夕食後。

明日の準備に憂いを無くし、新たな友人も増えた今日の忠の足どりは軽い。酒保でお菓子と飲み物を買うのはいつもの事。その買っていく量にすっかり甘い物好きと艦内では有名になっていた忠だが、その九割は明石が平らげてしまうと言うのが真相だったりする。甘納豆や羊羹、甘栗、最近始めた煙草とお酒、ジュース、仕事用の鉛筆2本と竹の定規を自前の紙袋に詰め込んで忠は自室へと向かった。

『来た~~~~~!』

『森さん、お邪魔してます!』

すっかり仲良くなっている明石と霞。部屋には宴会でもしているような独特の空気が流れている。上機嫌な明石は扉を開けた忠を見るや、両手を挙げて走り寄る。

『袋の中身をだせ~~~~!』

『おいはぎか、お前は。ほら。』

忠は自分の分を少しとってから紙袋を明石に手渡した。

『霞が来てると思ったよ。少し多く買ってきた。』

『有難うございます。森さん。』

『さっすが森さん!』

忠は買ってきた鉛筆や定規を机にしまい、椅子にどっかと腰掛けて小さな煙草盆をたぐり寄せる。明石と霞は帽子を置き、ベッドに腰掛けて紙袋の中身を分け合っている。気を利かせてラムネを2本買った事に、忠は自身の判断が正しかった事を悟って安堵した。

『明石さん森さん、聞いてよお。』

霞はすっかり心を開いてくれたようで、自分が所属する予定の戦隊の長である二等巡洋艦神通艦^{じんつう}の艦魂の愚痴を言い始めた。新兵である霞と妹の霞に対して厳しい訓練を毎日課すのだそうで、今日は不幸にも妹の霞は夕食後に神通に拉致されてシゴかれているらしい。艦魂同士の付き合いと言えども人間のそれと同じ様な苦労がある事を考えながら、忠はクイツと日本酒を勧めながら煙草をふかす。

『明石さんは工作艦だから、私達にしたらずめ軍医さんだよね?』

『あはは、軍医さんかあ。』

『私が負傷したらきつと助けてね!』

『どうかなあ、ヤブ医者かもよお?』

『え〜〜!』

笑いあう明石と霞。

なるほど、艦魂にしたら修理は治療になるわけだ。

忠は一人会話の内容の妥当性に頷く。しかし、明石の最後の一言が余りにも想像に難くないのは困り物である。

『明石さんは全然偉ぶらないよねえ。いい人だなあ。』

そう言って明石の腕にもたれかかる霞と、笑顔でその霞の頭を撫でてあげる明石。こうしてみると本物の姉妹のようだ。微笑ましい光景だが、それを誰よりも喜んでいるのは当の明石ではなからうか。

『あはは。そうかなあ、普通だと思うんだけど。』

あんたが普通というタイプの人種ならお釈迦様が半裸の変態に見えてくるわいと、罰当たりなツツコミを心の中でもしながらも、話に花を咲かせる二人に忠は笑った。

そんな調子で和やかな会話が部屋の中をしばらく賑やかにする。

艦魂である明石にとっては同じ仲間である霞は忠とは違う話し易さがあったのか、明石は次々と言葉をまくし立てて霞とのやりとりに花を咲かせて行く。元来がおしゃべり好きな明石にとっては、何よりの欲求のはけ口となった。

するとその時、それまで明石にのみ向けられていた霞の声が、今度は忠に向けて放たれた。

『ねえねえ、森さんはどうして明石さんトコに乗る事になったんですか？』

明石に抱きつきながら、大きい瞳を輝かせて忠を見つめる霞。

『そういえば聞いた事無いなあ。ねえ、なんで？』

明石も甘納豆の包みを片手に、時折包みの中から甘納豆を一握りしては口に放り込みながら忠の回答を待っている。

この人、なぜ毎日この調子で食って細身の体型を維持できるんだろう。うらやましい胃袋だ。

そんなちょつとした雑念を湧かせるも、すぐにそれを振り払って忠は霞の質問に答え初めた。

『オレはそう命令されただけさ。大体はハンモックナンバーで艦種が決まるんだよ。成績がいい人程、大型の軍艦の傾向が強いかな。』
『それで配属が特務艦ですかあ。じゃあ、お勉強は苦手だったんですか？』

『なんだとお！ 馬鹿にしてるでしょ！？』

「馬鹿が集まる特務艦」とも取れるその言葉を聞いて霞に飛びかかった明石は、霞の奥襟から彼女の背中に手を滑り込ませてくすぐり始めた。悲鳴をあげて笑う霞は必死に弁明する。

『ひ、ひい！ ごめ、ごめーん！！』

ラムネの瓶と甘納豆の包みで両手が塞がっている霞はそれに抵抗できずに辛そうだ。だが明石も本気で怒っている訳ではない、ただじゃれていただけなのだ。そしてそんな相方の胸の内を察していた忠は、明石のお仕置きを軽く笑いながら続きを話し始める。

『ははは。まあ、間違っちゃいないよ。成績は下から数えた方が早かったかな……。』

少しうつむいて頭を掻きながら忠は苦笑いした。その脳裏には懐かしいながらも、ちょっと思い出すのが辛いという彼の兵学校生徒時代の記憶が蘇ってくる。

田舎ではそこその優等生ぶりを輝かせていた忠だったが、全国各地から集う夢見る少年達の中で、彼は自分が井の中の蛙だという事を身をもって教えられた。「男の中の男」を自負する4000名の志願者から選ばれた220人の一人であっても、それまで田舎でお山の大将をそれとなく自慢としていた自分の身の程は全国から集まった文武両道の少年達の中ではその輝きも失せてしまい、決して仲間内から外されていた訳でも何でも無いが彼は多少の劣等感を持って兵学校の生活を過ごしたのだった。現実という物を初めて味わいながらも、同じ釜の飯を食いながら同期の仲間と供に頑張った兵学校第66期としての3年9ヶ月の時間は彼のほろ苦い青春でもある。

『子供の頃から田舎が嫌でさ。外に出たい一心で兵学校に入ったんだ。元々、軍艦が好きだったしね。』

『やっぱり、戦艦とかに乗りたかった？』

『うんにゃ、そういう訳でもないよ。ただ親不孝したかっただけさ。』

明石の問いに笑みを伴って忠は応えているがその声色も笑みの曇り具合も些か自嘲気味で、どこことなく歯切れの悪い物言いをする忠の珍しい姿に明石は強く興味を引き付けられる。

『でも子供の頃に憧れた船とかあったんでしょ？』

『まあね。伯父さんが海軍だったからってのもあるけど。』

『今は？ 私に乗れて・・・、楽しい？』

『ああ、随分と奇妙な海軍生活だけど。』

『そっかぁ。』

なんとまあベラベラと話した物だ、と忠は我に帰ってうつむいたまま額に手を当てて目を閉じた。見習い士官の時に酒は鍛えた筈なのだが、酔いが回った事に忠は自分を少し情けなく思う。

『普通の海軍生活がよかった？』

だが少し間を空けた後、明石が口を開いた。ふと彼が顔を上げると、明石は寂しそうな笑みで静かに忠を見つめていた。そして忠はふと、今日はいつもとは違う会話がお互いの間に成り立っている事に気づく。

『今日は珍しく人の話、聞くんだな？』

『ふふ……。初めて聞いた。森さんの事……。』

『あはは。そうだった？』

忠の笑みにつられるように明石も微笑んだ。大切な探し物が見つかったというような、優しい笑顔だった。

『あ、あの……。自分は艦にもどりますね……。』

明石の横で顔を赤くして慌てている霞を二人はすっかり忘れていた。

『あ、ごめん。つまらない身の上話だったね。』

苦笑いしてその場を繕う忠の言葉が終わる前に彼女は立ち上がり、ベッドの上から水兵帽をとって被った。

『いいえ、楽しかったですよ！』

そう言いながら霞は服のしわを直し、軽く手で服を叩いて服についたお菓子のカスを振り落とす。キツと表情に力を入れて、霞は踵を合わせて直立不動の敬礼をとった。

『もう、遅いので戻ります。明日の訓練航海、頑張りましょう。』

明石と忠も立ち上がって帽子を被り答礼をする。

『ああ、またいつでも遊びに来てくれ。』

『今日は楽しかったよ、霞。明日は頑張ろうね。』

忠と明石の言葉に霞の表情が緩んだ。無垢な笑顔でそれに答える。

『はい、有難うございました。では。』

言い終わって敬礼していた腕を下げると同時に彼女の体を白い光が淡く包み、炎が消えるようにスッと消えた。

『はあ、軍医さんかあ。明日の訓練、ちゃんと――』

『今日は気分が良いな。』

珍しく突拍子の無い言葉を発する忠に明石は少し驚いた。忠はベツドに腰掛けて目を閉じている。どうしたのかな？と明石が隣に座り込んで忠の顔を覗き込むと同時に、忠は目を閉じたまま微笑み、ゆっくり歌を歌い始めた。

火筒の響き遠ざかる
跡には虫も声たてず

吹きたつ風はなまぐさく
くれない染めし草の色

わきて凄きは敵味方
帽子飛び去り袖ちぎれ
斃れし人の顔色は
野辺の草葉にさもにたり

やがて十字の旗を立て
天幕をさして荷いゆく
天幕に待つは日の本の
仁と愛とに富む婦人

真白に細き手をのべて
流るる血しお洗い去り
まくや繙帯白妙の
衣の袖はあけにそみ

味方の兵の上のみか
言も通わぬあだ迄も
いとねんごろに看護する
心のいろは赤十字

あないさましや文明の
母という名を負い持ちて
いとねんごろに看護する
こころの色は赤十字

『・・・いい歌だね。』

『軍医なんて言われて、少し尻込みしただろ？』

完璧に自分の心の内を見透かしている忠に明石は言葉を詰まらせた。だが彼の歌声はとても優しく、その歌はこれからの自分を励ますように聞こえた。なにより初めて忠の歌を聞いた。それも自分だけに対して歌を歌ってくれた。なんともいえない温かい物が胸の中に宿るのを感じる明石は頬を赤く染めてうつむいた。

『疲れた。寝る！』

どこかで聞いたセリフを吐いて、忠はそのまま後ろに上半身を倒し布団に潜り込んだ。明石は忠の背中を少し見てため息をつく、右手から白い光を床に放った。いつもの自分の布団が光につつまれて出現する。

今日はこの人に引っ張られたな。たまにはいいかな。

そう思って微笑みながら寢床に入った。結った髪を解き、上着を椅子にかけて扉の脇のスイッチに右手をかざす明石。

電気を消す間際、ベッドに横になる忠に小さく声をかけて明石は消灯した。

『ありがとう。森さん。』

第四話 「いつもの相方」

昭和14年9月18日、朝。

第18駆逐隊の霞艦かすみと妹の霰艦あられ、そして明石艦あかしの3隻は、澄み渡った青空の下に呉軍港を出航した。明石艦としては初の他艦との合同訓練航海が始まったのである。向かう訓練海域は土佐湾沖合い。ピカピカの最新鋭艦3隻が単縦陣で波を掻き分けて進む姿は、栄えある連合艦隊の未来を明るくさせるのに充分だ。隊列は先頭が霞艦で中央に霰艦、最後尾が明石艦。進路は南西、最初に目指すは瀬戸内の玄関ぶんせきこと豊後水道。

『俯角手輪良し!』

『・・・うん、よし。』

『電動機良し!』

『・・・良し。』

『旋回盤良し!』

『・・・良し。』

『砲身外觀良し!』

『待て。・・・うん、良し。』

太陽が東寄りから真南に見え始める頃の明石艦艦尾にある二番主

砲。

7人の水兵が艦載砲としては中型サイズであるその連装砲のあちこちより声を上げる。それを聞いて返事をしながら確認する忠は、手に持ったバインダーに挟まれた一覽表の項目一つ一つに鉛筆を走らせていた。

その様子は艦載砲の定期的な点検の姿である。

真面目な性格で一端の士官になれた事で覇氣を漲みなぎらせている忠は兵員達の声に返事をしつつも、必ず最後は自分の目で項目に記される点検箇所を確かめる。

実は砲の点検その物は本来は砲台長が提出するものだが、二番主砲の砲台長は昨日の晩に工廠内で不慮の事故に遭遇し、怪我を負って入院してしまった。その伴い、急な欠員に小口こぐち一等水兵を砲台長代理として明石艦は訓練航海に望む事になったのだが、小口は不慣れな砲の点検を満足に遂行できる自身が無いらしく、砲術科員で構成される分隊の幹部である忠に相談を持ちかける。その結果、新米士官ながらも砲点検の経験があった忠は部下の悩みを解決する為、点検の代行をしてやっているのであった。

『左右鎖栓よし！ 砲術士、二番主砲異常なし！』

忠の前で敬礼してそう言ったのは、その小口一水。その背後では、他の6人の水兵達が一斉に駆け寄って整列する。対して一覽表の下の欄までサラサラと書き込んだ忠は、一度小さく頷いてから顔を上げた。

『・・・よし、異常認めず。ご苦労だったな。』

柔らかな敬礼をしながら口にした忠の労いの言葉に、彼の前に横一列で並んだ7人の水兵達の表情が崩れる。

『砲術士、本当に申し訳ありません。』

その列の中から一步進み出て、少し頭をさげて謝る小口。だが忠は笑顔で小口の肩に手を乗せて冗談も込めた声を返し、小口の胸の中に渦巻いていた緊張を解いてやった。

『気にすんなよ。それに不備が有ったらオレが髭親父に怒られるかな。』

『『』 はははは。』』』

忠の言葉にどっと笑いの渦が起こる。彼の口から出た「髭親父」とは砲術長である青木大尉の愛称で、愛嬌あるその人柄により艦内の兵員達からはそう呼ばれて親まれているのだ。

『ははは。よし、いいぞ。解散、別れ。』

やがて笑い声の余韻を楽しみながら発した忠の言葉に、水兵たちはぞろぞろと艦内に戻っていった。

静かな波と風の音に包まれる中、一人その場に残される忠。

少し強めの潮風に帽子を一度被り直した忠は、ふと右舷側に見える陸地の景色を見た。風と同じ方向に景色は流れていく。ザンザンと足元から聞こえてくる機関音、時折風に揺られて顔に掛かってくる煙突からの煙、そして艦尾に颯爽と摩く軍艦旗。^{なび}

明石艦が海原を駆けているのだ。

その実感に忠の心は踊った。艦前後にある空に向かって聳え立つ^{そび}マストが、心なしか彼には戦国時代の騎馬武者が背に挿す旗指物に

も見えてくる。

そしてその少し向こう。定位置に降ろした状態の後部起重機の辺りに張った1本の索に、工作科の水兵がふんどしを何枚も掛けているのが見えた。新入りの水兵さんの大事なお仕事である洗濯物を干して乾かそうとする光景であるが、やがてその水兵は籠一杯に溜まっていた洗濯物を掛け終わるや、どっかとその場に腰を下ろして辺りにキョロキョロと警戒の視線を配り始めた。

これは洗濯後の見張りである。

士官の忠には心配無用なのだが、艦艇における生活の中で洗濯物を干す時は必ず泥棒用に見張りを立てるものである。人のふんどしなんか履きたくないと思うのは忠に限らずとも物が豊富にあった、今からおよそ10年程前の頃だけであり、支那事変で疲弊した経済により物が不足しがちな今の日本、まして艦艇の中という閉鎖せきしされた環境では不心得者が必ず出るのである。栄えある陛下の赤子である帝国海軍には、当然のように泥棒はいない事になっている。故にもし盗まれたとしてもそれを盗難品として認知する者は海軍にはいない。それは立派な紛失品として類別され、なおかつ陛下よりの下賜された支給品を紛失するという事は、不敬罪と同様に帝国軍人にはあってはならない事である。つまり盗んだ方よりも盗まれた方が悪いのであり、だからこそ艦内生活では盗まれないようにと見張りをたてるのだ。

風に靡く何枚ものふんどしの下、水兵がつまらなそうに座り込んで空を眺めている。

勇壮に進む明石艦に鯉のぼりのように靡くふんどし。変な光景だ。

まだ午前の課業中だが、忠はのんびりとその光景に気を休める。明石艦の砲術科において幹部である彼の立場を鑑みると、真昼間か

らこんな過ごし方をしているのは些か問題有りな様にも見える。だが意外にも忠の明石艦における日常に限らず、艦艇所属の砲術科と呼ばれる帝国海軍の一つの部署は大概がこんな感じであった。

戦闘の花形的部署である砲術科だが、ドンパチが無い時は意外と暇な部署でもあったりする。何も明石艦に限った話ではない。日常的な業務と言えば配線室や電気室、弾薬庫と砲に測距儀と、それらに付随する設備の点検、清掃、整備がほとんどだ。時には片付いている書類の山を崩し、また整頓しななんて事もある。忠も含めてちよつと偉い肩書きの人なら、訓練内容や運用に関する懸案の打ち合わせと事務仕事が少々あるくらい。激しい訓練で知られる帝国海軍だが、その実は彼らにとって砲塔をグルグル回すだけだった。

だが忠を初めとして、今の帝国海軍にはこれが普通感覚であった。欧州でのドイツによるポーランド侵攻の情報にざわめくのは一部の潮氣の抜けた陸^{おか}の上層部の連中だけで、艦隊勤務の者達は至って気にもしていないのが実情だった。

ただそれに反して日本国内においては昭和12年から始まった支那事変に終わりが見えず、出征していく人も近頃はぐんと増えていた。奇しくもこの日、かねてから国会で審議されていた疲弊する日本国内経済に対する政策として「賃金統制令」、「価格統制令」が成立したが、そんな世間の喧騒も晴天の下の瀬戸内の潮風が忘れさせる。それは兵だけでなく、佐官や将官クラスの人達のほとんども同じであった。

両手を左右に広げて大きく伸びをした後に主配置の発令所へと向かう忠の姿は、何かそんな帝国海軍の実情を体言している様ですらある。

後年、軍部が政治に影響力を発揮する当時であって、「寡黙であり過ぎた海軍」と揶揄される事になるこの海軍氣質が既にこの時には手遅れな程に蔓延していたが、それが結果として彼らに襲い掛かって来るのはもうちょっと先の話であった。

その後、しばらくして本来の仕事場である発令所の片隅にある机に座った忠は、机の一角に詰まれている提出されてきた書類の山に手をつけた。内容の大半は砲術科各部署での点検報告、整頓記録、訓練成績等である。これを一元化して砲術長に提出するのも、砲術士少尉の普段の大事なお仕事だ。体が資本と思われる軍隊生活だが、意外にも下士官以上はデスクワークの方が多し。最近は一丁前に肩が凝るという感覚を覚えるようになった忠。

オレ、歳とったのかな。

脳裏をかすめるそんな言葉に苦笑いしながら忠は仕事に掛かった。いつも賑やかな相方は昨日仲良くなった霞と供に、霞の妹で昨日は来れなかった霞に会いに行っている。仮とはいえ自らの旗竿に翻った軍艦旗に朝からはしゃいでいた明石。上機嫌に耳元で騒ぐ彼女に微妙に酒が残る忠は困っていたが、いなくなってみると寂しいものだ。発令所に木霊するのは艦首にて切り裂かれた波の音と、伝声管から聞こえてくる艦橋での会話の声だけである。

『はあゝ……。』

やれやれ、今ほど仕事がかどる瞬間は無いと言うのに気が乗ら

ないとは困ったもんだ。

自然に出たため息に忠は一度鉛筆を書類の上に置いた。座ったまま帽子をとって肩を2、3度鳴らした忠は、胸の中で自分を励ます声を放ちながら再び鉛筆を走らせ始める。

しっかりしろよ、オレ。

その頃、明石は隊列の先頭の艦、霞艦の艦首旗竿の下にいた。彼女は旗竿につかまって迫ってくる豊後水道の最狭部、豊予海峡ほうよを眺めている。

潮流が早く海峡幅が14キロしかないこの狭水道は、文字通り連合艦隊艦艇の登竜門である。幅14キロと言ってもここは海軍艦艇以外の民間船や連絡船、漁船等が頻繁に出入りしているので、衝突回避の事も考えると実際はもっと狭い事になる。だがここを艦隊を組んで楽々と通過出来る程の操艦技術がなければ、連合艦隊の一員とは認められない。

世界最強を自負する帝国海軍、その自信も解ると言う物だ。

『き、緊張するなあ。』

明石の後ろで霞がオロオロしながら口を開いた。嫌な寒気を感じているのか、暖を取るように手を擦り合わせている霞は見るからに落ち着きが無い。するとそんな霞の肩に妹の手が触れる。

『霞姉さんは大丈夫やて。真ん中のウチが一番よう行きひんよ?』

微笑みながらそう言ったのは、柔らかくゆっくりとした京都訛りの言葉を話す少女。霞の妹の霞である。霞よりちよっとだけ背は高く、小さい顔に少し垂れた役者のような切れ長の目、そしておっぱ頭という彼女のいでたちは市松人形のようなだ。朝潮型駆逐艦十姉妹の末の妹として京都の舞鶴まいづる工廠にて生まれた彼女だが、姉の霞より2日早く進水しているからか背格好や仕草は霞よりも大人っぽい。

『あたた……。神通じんつうさんはやっぱり怖い人やなあ……。』

霞はおでこの大きな絆創膏を抑えて苦笑いをしている。聞くところによると昨夜、この姉妹の上司に当たる神通に精神注入棒で思いつきぶっ叩かれたらしい。

『大丈夫？ 霞？』

『明石さんのおかげでだいぶ楽になったぞす。』

霞の言葉に明石は振り返って微笑みながら、二人の下に歩み寄る。また、初対面と言えどもおでこにタンコブをつくって出迎えた霞に仰天し、その場で絆創膏での処置を霞に施したのは明石だった。

『私が11月に編入されたら、神通さんと掛け合ってあげるよ。一応は少尉だし。』

『ありがと、明石さん。でもヒドイよねえ、神通さんは。決定はしてるけど私達まだ正式に二水戦に所属してないんだよ？ それなのに平気で殴るなんて！』

明石の言葉に感謝しつつも、霞は額を抑える霞の背に手を当てながら険しい顔をしている。

『ウチがトロくて、言われた事をようできひんだけや。怖いお人や

けど、神通さんを悪い人のように言うたらあかんで。明石さん、ウチ等は大丈夫どす。おおきに。』

霰は痛む額を抑えながらも霞をなだめている。だが一応は少尉の襟章を着けている明石の提案をはっきりと遠慮する霰には、どこか一本芯が通った強さのような物がある事を明石は感じた。

『うん。そっか。』

そんな霰の心の内を思い、明石はそれ以上何も言わなかった。霰の健気な心遣いを踏みにじりたくないからだ。結果を出せないながらも、彼女もまた必死に帝国海軍駆逐艦という運命と戦っているのである。明石が孤独と戦ったように。

『あー!!』

そんな中、突然、霞が艦首の先っぽへと走り出し、旗竿につかまって大海原の左右に視線を振って何やら呟き始める。

『ヨーソロー・・・、ヨーソロー・・・。』

小声で呟きながらも霞は艦首の周りをキョロキョロと見回し、明石と霰は何事かと霞の後ろまで近づいて行く。だが二人が声をかける前に、霞は拳を握って喜びの感情も混じった声を上げた。

『や、やった! ドンピシャ!』

一人で拳を握って喜ぶ霞であるが、それを背後より見ていた明石

と霰にもその意味がすぐに解った。霰が目をやる艦首の前方の直線上には、民間の船舶や漁船はいない。視界に入る船舶は全て、進行方向がその線から外れている。はるかに水平線まで続く海の道を、隊列の先頭を駆る霞艦は見事に探し当てたのだ。

続いて喜ぶ霞を横に、今度は霰は艦首右舷から後ろを見る。

彼女の分身である霞艦は前後の僚艦との距離を保つ事が求められる為にとても繊細な機関の操作が要求されるのだが、当の霰は笑顔のまま自分の分身をじっと眺めている。

『ウチの乗組員さんはみんな頑張り屋さんです。きっとようやくってくれはるわ。』

霰の隣に立ち明石もそれを眺めた。彼女の言う通り、艦尾方向に見える霞艦はそのシルエットの大きさを変える事無く海峡を通過している。そして自分の分身である明石艦も霞艦の後ろに両舷がはみ出て見えている。艦幅20メートルと一等巡洋艦並に横幅のある明石艦なら当然でもあるが、それでもきつと自分の分身も無事に通過できる。

そう信じて明石もまた微笑み、やがてその願い通りに明石艦は豊予海峡を突破してみせるのだった。

それからしばらく経った頃、明石艦の発令所には二人の兄弟の会話が木霊していた。

『はああ・・・。』

『兄貴、しょうがねえよ。瀬戸内と太平洋じゃ気候が違えんだから。』

発令所の窓から忠とマサは外を見ている。時間は1740、窓の外は朱色の夕暮れではなく銀色の雲が立ち込める雨模様だった。午後の訓練として実弾射撃を控えていた明石艦だったが、昼過ぎから振り出した雨により延期となってしまったのである。忠としては晴れの瀬戸内で点検をやったばかりだと言うのに、まさか太平洋側で雨になり中止とは残念でならない。航海科や機関科は雨天と夜間での操艦訓練だと張り切っているが、対して砲術科は完全にお払い箱になってしまった。明石艦の目玉、工作科ですら航海中の動揺下での懸案抽出と出張っているのに、せっかく青木大尉と詰めた訓練計画も明日に延期となってしまう事は忠には無念でならない。

『森、もういいぞ。今日はあがりだ。』

『はい。あがります』

艦橋から繋がる伝声管から当の青木大尉の声が流れる。どこか寂しげに聞こえる上司の声に忠も頭を掻いてうつむいた。

『砲術士、お疲れ様です。これより配置につきます。後は自分がやりますのでお休みになってください。』

当直士官の藤木^{ふじぎ}特務少尉が発令所に入ってきた。彼は階級こそ忠より下だが、年齢は忠よりも遥かに年上で経験も豊富な人材である。忠と入れ替わりで砲術士代理から測的班指揮官になった人であり、明石艦の竣工後の初めての主砲試射で彼は測距を担当し、たった2回の修正で命中判定を得たつわものだ。

『・・・あ、ご苦労さま。聞いたとおり訓練は中止です。他は特に無し。なんかあれば起こして下さい。』

『了解です。元気だしてください。明日また頑張りましたよ。』

『はい……。じゃ、頼みます。』

引継ぎを終えて軽く敬礼を交わした後、忠は食堂に向かった。

航海科と工作科は訓練を続行している。その為か、該当の士官がいない士官食堂は閑散としていた。『給仕、水!』といつもは怒号のような声が飛び交う夕飯時の士官食堂なのに、今は数人の士官が黙々と食事についているに過ぎない。給仕についている水兵は水差しを抱えながらも仕事が無くて暇そうだ。

『お疲れ様です。』

『おう。』

既に食事を取っている向かいの席の青木大尉に軽く挨拶をしながら忠は席に着いた。今日の夕食として並ぶ旬のサンマが放つ香ばしい香りにも、忠の顔をはどこか浮かない。やがて箸をつけながらも骨の多さに少し苛立つ忠。

『どうした? 今日元気がないな?』

青木大尉は忠のそんな表情にすこし驚いている。相変わらず米粒がついた口髭を上下させ、口に夕飯を含みながら発する青木大尉の声はいつも以上に低い。

『はは……。そうですか?』

『弟と喧嘩でもしたか?』

『いえ、してませんよ。』

『そうか。いつもの調子じゃなさそうだが。』

『あはは・・・。』

そう言いながらも、青木大尉は皿やお椀を既に空にしている。次いでゆっくりコップの水を飲み干すと、彼は食器類を持って立ち上がりながら口を開いた。

『ま、明日までには調子を取り戻してくれよ。じゃあな。』

青木大尉の言葉に、なにか気が乗らないでいる自分に忠は気づいた。訓練が延期になったからだけではない。どうしたと言うのだろうかと自問自答しつつ、忠は食事を終えて去っていく上司の背中にお辞儀をする。そしてふと手元に落とした視線はほとんど量が減っていない忠の分の食事を捉えるのだが、その瞬間に忠の薄れかかっていた食欲は完全に立ち消えてしまった。

カチャンッ

端を皿の上に放り投げ、忠は夕飯を少し残して席を立つ。疲れただけだろう、そう思いつつも同時に年寄り臭い事を思った自分にあきれながら忠は部屋に戻った。

なにか気分転換になるような事があれば良いが、航行中の艦にそんな物がある筈もない。忠は時折グラリと揺れる艦の動きに合わせて肩を壁にぶつけながらも、部屋への道を歩く。

こんな日はさっさと寝るか。

そう思って開け慣れた部屋の扉を忠は開いた。

『遅くくい!』
『……』

そうだコイツが居たんだっとな。

いつも一緒にいる相方の明石を忠はすっかり忘れていた。明石は扉を開けてすぐ左側にある机の椅子に腰掛けて、頬を焼いた餅のようにぷっくりと膨らませている。

『森さん、お疲れ様です!』

昨日知り合った霞もベッドに腰掛けている。部屋の電灯に負けな
い明るい笑顔は彼女の得意技だ。その横に水兵服を着たおかつぱ頭
の見慣れない少女が座っているが、この面子から忠もすぐに彼女の
正体を察してみせ、やがてその少女が放つ自己紹介の声で自分の予
想が正しかった事を知る。

『お初です。ウチは霞艦の艦魂の霞と言います。よろしゅうお願い
します。』

ふわっと立ち上がって敬礼する霞は霞の妹の筈だが、姉よりも落
ち着いた感じの線の細い少女だった。これまた可愛い水兵さんであ
る事に、忠の表情が綻ぶ。

『あゝ、やっぱり霞艦の艦魂か。オレは――』
『待て――!!』

突然の海軍式号令、声を発したのは明石だ。曇った表情のまま忠
の身体をジロジロと見回す彼女。

『・・・お菓子は？』
『あ・・・！』

いつもの事ながらすっかり忘れてた忠。思わず出た声を聞き逃さなかった明石はニヤリと笑い立ち上がった。

『酒保開けの号令に接し、森忠少尉は直ちに出撃！』

『ごめん、忘れてた。でも行く前に一応、霰に挨拶させー。』

『本日、天気雨天なれども酒保に影響なし！』

『あ、いや、挨拶をー。』

『霞二水！ 拔錨！』

『あっははは！ 了解！』

霞がお腹を抑えて笑いながらも、さっき閉めたばかりの扉を開ける。忠は冷や汗を掻きながらも自分の両肩に触れた明石の手に気づく。振り返った忠の顔を明石がいつもの笑みで覗き込んだ。細身ながらも長身の明石は結構力が強い事を思い出す忠だったが、それに気づいた忠が何かしようという選択肢はどれも既に時を逸していた。

『いつてらっしゃい、森さん！』

霞がそう言い終わる前に忠は明石に押されて走り出した。後ろから聞こえるのは遠くなる霞の笑い声と、耳元で聞こえる明石のいつもの訳の解らない発言のみ。

『いざ、鎌倉ー！』

『お、おい、危ねえって！ どわあー！』

こちらに向かって通路を全力疾走してくる忠に、酒保から帰る途中の青木大尉は気づいた。艦の動揺でバランスを崩したのかと青木大尉は思ったが、それにしても奇妙な光景である。

『おう、森。どうし……。』

『あ、砲術長！　どうも……。うわあ！！』

発艦する空母艦載機のように走り去っていく忠に、目を丸くして呆然とする青木。

『……。変な奴だな。』

そう言って口髭を指先で撫でながら、驚いた表情で忠が走り去った方向をしばらく眺めていた青木大尉だったが、すれ違う一瞬だけ見えた部下の表情を思い出して微笑んだ。

『はっはっは。ま、いつもの元気がでたみたいだな。探し物でも見つかったのか？』

いつもどおりの部下の姿に、明日の訓練が上手くいく事を確信した青木は再び歩き出した。

その夜も忠の部屋からは、賑やかな艦魂達の声が響いた。

第五話 「夏の思い出」

暖かい風がそよそよと明石艦あかしの発令所を通り抜ける。

夏の暑さも最近は薄らぎ始めていたのに今日は暑い。青い海と空に囲まれる昼下がり、忠ただしは発令所でいつもの書類仕事に励んでいた。少し額に掻いた汗を右手の甲で拭く。暑さが少し籠る発令所は若干蒸し風呂の様相を呈しつつあり、室内に居るとじとじと汗が沸いてくる程であるがそれに反して忠は機嫌が良い。

晴れた天氣に意気揚々と射撃訓練に望んだ午前の課業。その中で実施された明石艦の実弾射撃の成績は修正3度にしての命中判定だった。水平線にも近い波間で粉々に吹き飛ぶ標的ブイに、思わず砲術科全員が万歳を歓呼する。その瞬間は砲術士として射撃教練に携わった彼には忘れられない瞬間である。それは高角砲の水平射撃で成し遂げた事であり、対艦用の砲を装備する僚艦かすみの霞艦あられともう1隻の僚艦である霞艦と同等の成績だった。

『よくやった！ 今日はこちらふく飲ませてやる！ オレのおごりだ！』

自分の部屋に日本酒を何本もしまっている堀田特務艦長の心底嬉しそうな声がまだ耳に残っている忠。その顔も充実感と安堵の念で綻ぶほころという物。自然と書類に記される今日の忠の忠の文字の筆圧も高くなる程で、特務艦長から直々にお褒めの言葉を貰った青木砲術長も嬉しそうだった。伝声管から聞こえてきた青木大尉のあの嬉しそうな咆哮。負けて当然と思われていた駆逐艦にだって、明石艦の砲撃は負けていない。砲術科の快挙に他の科の兵員達も沸きあがり、明石艦の士気は大いに上がっていた。

そしてこの時、訓練の全過程を終えた霞艦、霞艦、明石艦は呉へ

の帰途についた所だった。

『森くさん！』

ニヤニヤしている忠に、発令所の右舷側入り口から声をかけてきたのは霞だった。彼女はパタパタと水兵帽で顔を扇ぎながら発令所に足を踏み入れてくる。陽に焼けたようなその麻色の顔に大粒の汗を掻いているが、持ち前の笑顔でそれをキラキラと輝かせていた。とても元気の良い笑顔をする少女である。

『やあ、霞。どうしたんだ？』

『あ、成績よかったからって天狗になってますね？ ヒドイなあ。』

『

あつはっは、解った？』

『んもう、顔に書いてありますよお。悔しいなあ。』

霞は少し口を尖らせた笑顔で忠の机の脇まで来ると、手近な壁にもたれて座り込んだ。腰を下ろしたと襟元を開け、片手に持った水兵帽で扇いで風を送っている。『ふう〜。』と小さくため息をしながら汗にまみれて涼む霞には運動好きの活発な女性の典型のような雰囲気も見えて取れ、忠の記憶の中では少し焼けた小麦色の肌が彼女ほど似合う女性はいない程である。人懐っこいその人柄も忠の胸に親近感を容易に湧かせ、彼は椅子に腰掛けたまま顔だけ霞に向けて声を掛ける。

『あれ、霞は？』

『呼んできましたよ。駆逐艦は狭いんで明石さんところ行こうって。』

忠の問いに答える霞が声を放ちながら顔を右舷入り口に向けると、時間を置かずしてそこに白く淡い光が現れた。太陽の光が眩しい今日は光ったかどうかかわかりにくいながらも、淡い光が消え始めると同時に色白のおかつぱ頭といういでたちの霞がふわっと舞い降りる様にして光の中から姿を見せる。

次いで礼儀正しい霞は忠を見るや、なんとも綺麗な笑顔で右手を額に添えながら口を開いた。

『あ、森さん、はばかりさんどす。霞姉さんに誘われて来はったんどすけど、だんないどすやろか？』

『やあ、霞。オレは大丈夫だよ。ゆっくりしてくと良い。』

『おおきに。』

軽い敬礼を返して霞を楽にしてやる忠。

水兵服にコテコテの京都弁、まるで市松人形の様な髪型と糸目の顔という特徴的な人柄を持つ霞。鼻から息を抜いて放つような独特の発音は少し真面目さを欠く様な印象もあるが、そんな声に反して紡ぎ出される言葉とそのいでたちにはほのかな優雅さが溢れている。

オレが津軽弁を言うのと田舎者丸出しなのに、何故彼女はこんなにも雅みやびに見えるんだ？

そんな言葉を脳裏に過ぎらせて少し理不尽である事に僅かに苦笑を浮かべつつ、忠は挨拶を終えて姉妹でのやりとりを始めた霞と霞をしばし眺めてみた。

『んもう、霞姉さんたらそないな所にちょちょこばってやすけないし。』

『暑いし疲れるんだよお。森さんも楽にして良いって言ってくれてるし。』

呆れた顔をした妹の霞が、座り込んでくつろぐ姉の霞に声をかけている。こうして見てみると体格や仕草が大人っぽい霞と、まだ顔立ちにもやんちゃさが残る霞ではどっちが姉なのか良く解らない。おかしい姉妹であるそんな二人のやり取りに忠は微笑む。

その内に妹からの苦言から上手く逃れようとしていた霞は、室内にこの艦の主である人物が見当たらない事に気付き、これ幸いと思いつつ。いながら忠にその事を尋ねてみる事にした。

『そういえば、明石さんはどこですか？』

『あゝ、暇だから散歩すー。』

霞に声を返そうとした忠だが、それを遮るように甲板を駆ける足音が響いてきた。700人以上の乗組員がいる明石艦だが、足音のタイミングが誰かさんに似ている事から忠はすぐに音の主に見当がつく。そしてその考察は当たっていた。

『はあ、はあ・・・！ あ、あれ・・・、霞と霞もきてたんだ・・・？ はあ、はあ・・・！』

走ってきたからか、汗だくで大きく肩で息をする明石。大きく上体をかがめ、帽子が握られた両手を膝につけて乱れた呼吸を整えている。ただ自分の分身の中だというのに血相を変えたような明石のその姿の理由は忠も含めた室内の全員は察する事が出来ず、挨拶もそこそこに霞が早速その事を声に変え始めた。

『こんにちは、明石さん。あの・・・、どないしはったんどすか？』

霰の問いに一瞬笑みを返すも、明石はすぐにまたうつむいて呼吸を整える。どうやら全力疾走であつたらしく、一向に落ち着かない吐息に胸を押さえる明石に、その様子を不思議に思う忠は目を丸くして言った。

『どうした、明石?』

忠の問いに未だ苦しそうにする明石であつたが、乱れた息と流れる汗の中で彼女は笑顔を作つて声を返す。

『艦尾・・・、はあ、はあ・・・! 艦尾で面白い事やってる・・・!』

呼吸を落ち着かせた明石と霞、霰、そして忠の4人は発令所を出て最上甲板を艦尾に向かって見る事にしたが、甲板上を歩いている途中に艦橋を過ぎた辺りの所で甲板中央の工作室天蓋が開いている事に気づいた。

普段近づくかない工作科の持ち場は忠にとっては珍しい。軽い気持ちで忠は歩きながら上からひょいっと覗き込んでみるのだが、その際に彼は火花を散らす切断機の横に見知った顔をみつけてしまう。忠はその人物に思わず声をかけた。

『マサ!?!』

『おお、あに……。失礼、砲術士!』

『いや、お前そんなトコで何してんだよ?』

『砲術長のおつかいですよ。工作科に頼んで鋳^{もり}を作ってもらってんです。』

『砲術長？ も、鋳・・・？』

その言葉を受け、マサの横にいる工作科の下士官に目を移した忠。その下士官は長い資材用の鉄製の棒を切断機に斜めに当てて先端を尖らせていた。鉄粉が放つ独特の匂いが鼻に触れ、ギイイ！と切り裂くような鉄の摩擦音が耳を襲う。

『艦尾に行けば解りますよ。』

『ぷくくく！ あははは！』

工作機械による喧騒の中で放たれた忠の疑問を解決してやろうと企図するマサの言葉だったが、忠の後ろにいた明石はその声を聞くとや口に手を当てて大笑いし始める。マサの言葉と明石の態度にさっぱり要領が得られない忠は、疑問符を浮かべる頭を左右に捻りながらもとりあえず艦尾に向かって再び歩みを進めてみる事にした。

やがて4人は艦尾の第二主砲辺りまで来る。

見れば艦尾端の旗竿の下に多くの乗組員が集まっており、その顔ぶれは士官、水兵とも関係ないようで、忠が覚えている限りでは艦内での所属の科もバラバラのようである。

なんの騒ぎだろう、誰か転落でもしたのか？

『なんだ、あの騒ぎは？』

『いいから、いいから！』

はしゃぐ明石に背を押されて忠は旗竿に向かい、霞と霰も顔を見

合わせながらそれに続いた。

そのまま忠が人ごみを退けて旗竿の下に出ると、青木大尉が艦尾から海を眺めてあぐらをかいて座っている。手には長い鉄の棒を持ち、その先に着いたワイヤーは遙か艦尾の向こうの海に向かっていた。

これはもしやと上司の様子にある程度の予想をつけつつ、忠は目を丸くしてその上司に声を掛けてみる事にする。

『あ、青木砲術長？ な、何してるんですか？』

『おう、森か。今集中してるんだ！ 話は後にしろ！』

普段は気の良い青木が珍しく眉間にしわを寄せて邪険にしてくる。そしてその青木の言葉に、彼の隣で胡坐を掻いている工作長の小笠原大尉と主計長の川島中尉が腹を抱えて笑い出した。同時に周りの連中も大笑いしている。

『はっはっは、よお、砲術士。今はコイツに話しかけるな、また切られちまうからな！』

『青木大尉。そろそろあきらめませんか？ 夕食からおかずが消えちゃいますよお？』

小笠原と川島のひやかしのような言葉に青木は視線をそのままに小さく舌打ちをした。口髭がピクピクしてしまふ青木大尉の怒った表情は怖い顔になっていても、忠に限らずなんだか笑えてしまふ。

だがその最中、静かな笑い声が折り重なる空気を切り裂くが如く青木は叫び、手にした鉄の棒を強く振り回し始めながら立ち上がる。

『き、きた！！！！！』

見れば鉄製の竿の先が僅かにしなり、波の揺らめきのような規律

正しい間隔と関係無くビクビクと動いている。竿の先から伸びていた糸がピンと張り、次第に左右に振られ始めて行った。

それと同時に青木の周りからは、詰掛けた乗組員達のどよめきと歓声が湧き上がる。

『砲術長！ 今度こそ頼みますよ！！』

『青木！ 慎重にな！』

『おい、今、跳んだぞ！ カジキマグロだ！！』

『砲術長！ 行けええ！』

だがそんな歓声もどこ吹く風で、青木大尉は真剣そのもの。『くそお！ 逃がさねえぞお！』等と、持ち前の野太い声で怒号をあげながら竿を引っ張っている。糸をかなり長く取ってあるのか、青木大尉はしまいには竿をかなぐり捨てて糸を引っ張り始めた。

風に揺れる帝国海軍の象徴の軍艦旗のすぐそばに展開される、糸をグイグイと引っ張る青木大尉の勇姿。口髭の大男が子供のようにムキになって釣りをしている。それを見た忠は周りの野次馬と供に、上司への応援も忘れて腹の底から笑ってしまった。

男達の笑い声が木霊する中、同じくその光景を目にしていた明石達3人もその場にひっくり返ってお腹を抱えている。

『お、おかしどす・・・！ あっはははは！』

『あははは！ カッコイイでしょ、私のトコの砲術長！？』

『へははは！！！！ お、お、お腹痛い！ 死ぬ！』

バチン！

刹那、切り裂くような金属音が響いたかと思うと青木はもんどりうって後ろに倒れた。どよめきを放ちつつも倒れた青木に駆け寄る兵員もいる中、野次馬の誰かが言った一言に熱中覚めやらない青木

大尉は今度は烈火の如く怒り出す。

『あ、また切れた！』

『岡崎！^{おかざき} お前、今、俺の足踏んだだろ！ お前のせいだ！！』

そう叫んで逃げる岡崎二水を追い駆けだす青木大尉。士官に睨まれる水兵さんとはなんとも分の悪い光景ではあったが、彼等二人を除いた全員はそんな事も忘れて再び抱腹して笑い出す。なんとも可笑げに、岡崎二水は第二主砲を過ぎた辺りで青木大尉に捕まり、大きな身体つきを生かした腕力を胸座に集められて襟を締め上げられている。

氣を利かせた小笠原大尉に宥められてすぐに水兵を解放し、再びさつきまで格闘していた場所へと戻ってきた青木大尉だがその機嫌はそうやらまだ直っていないようだ。胡坐を掻いて旗竿の下に陣取りつつ、彼は床をガン！と一発小突く。

『はっはっは！ 青木、どうするよ？』

その様子で笑いが止まらない小笠原の言葉に、一度大きく眉間にしわを寄せた青木は懷から財布を取り出した。次いで財布に突っ込んで引き抜いた彼の手には、なんと二十円札が握られている。突如として出てきたその紙幣に忠が声を失う中、青木は小笠原の胡坐の中にお札を投げつけて叫ぶ。

『くっそお！ ほらよ！』

『懲りねえなあ、はっはっは！』

『鶏肉はもう最後ですからね？』

青木大尉はどうやら釣り針とエサを自費で買って釣りをしているらしい。ちなみに少尉である忠の年俸は850円であるから、その

額と割合を比べてみると考えると物凄い金の掛かった道楽である。だが忠は驚きながらも、すっかり金銭感覚が麻痺している上司にまたも笑いを隠せない。

やがて青木大尉の放り投げた二十円札を懷にしまうと、小笠原大尉は小さな工具箱から大きめの釣り針を差し出した。糸を巻き上げる青木大尉が眼もくれずにそれを奪い取る。相当本気になっているらしい。

『いくら余りの資材で作ったモンだからって、これ以上はやれんかな！ はっはっは！』

『わかってら！ 川島、エサよこせ！』

『はいはい、どうぞ。』

川島中尉はすっかり呆れているのかと思いきや目が笑っている。

そんな川島中尉が力なく差し出した鶏肉を勢い良く奪い取る青木大尉。彼は巻き上げた糸に手際よく針を括り付け、今日の夕飯になるはずであった鶏肉の塊を釣り針に通す。すると周りの野次馬から声があがった。

『おおおお！ まだやるらしいぞ！？』

『さすが砲術長！ いいぞ！』

『あゝはっはは！ やめとけてって青木！』

『うるせえ！ どおorraあ！！』

野次馬の歓声に全く耳をかさない青木大尉は、針が仕込まれた鶏肉を遙か艦尾の向こうに広がる波間の中へと投げ入れた。今は熱中してちよつと乱暴な言葉遣いの青木大尉だが、彼の普段の気の良さを知っている忠は小さく笑いながら人ごみの外に出る。

『お、森少尉！ 砲術長は釣れましたか？』

人ごみを抜けた先で忠はちょうど工作科より戻ってきたマサと行き会った。マサの右手には2メートルはあろうかという鉗が握られており、ご丁寧にも鉗にはしっかりと返しの形状まで与えられている。さすがは帝国海軍の最新鋭工作艦である明石艦、こんな工作はあつという間である。

『ははは、いや、まだだよ。』

『ですよね。やれやれ。』

小さくため息をしながら、マサは人ごみの中に分け入っていった。一方、弟と別れた忠は、人だかりの少し後ろに位置する第二主砲の波除けを背に座り込んで笑っていた明石達の所まで歩いて行き、歓声と笑い声が渦巻く光景を遠めに見る形で明石の隣へと腰を下ろす。

『や、やや子みたいどすな、あの大尉さん！ あっはははは！』

どうやら一連の青木大尉の一大釣り劇場は、霰の笑いのツボに的中したらしい。物腰の柔らかい落ち着いた少女であるにも関わらず、今は青木大尉を指差して酷く顔を歪めながら抱腹している。ただ笑うと霰に良く似ている霰を忠は無言で認め、雰囲気や物腰が似ていなくともやはり実の姉妹なのだと彼女達の持つ姉妹像に感心した。その横では明石も口元に手を当てて笑みを浮かべており、いつも見慣れた自身の分身に乗組む者の意外な一面を知って喜びの声を上げる。

『ふふふ、青木砲術長も可愛い所あるなあ。』

『はは、困った人だ。こりゃ夕飯は雑炊かもな。』

『へははははは！ でも面白いですねえ！ いいなあ、明石さん所は！』

十台後半の外見を持つ霞が若々しい声で高笑いする中、忠はふと空を見上げた。大きく真っ白な雲がふわふわと流れている。西の空に傾き始めた太陽だがまだサンサンと眩しい光を放ち、海の波がそれを反射させる。なんとのどかなんだろう。晴れた日の昼下がりの海のご真ん中、人間ではないが女の子3人に囲まれて笑っているこんな一時も悪くないと忠は思いながら、少し笑いつかれた事もあるって小さく欠伸をする。

『きたあああ!!!』

その時、青木大尉の2度目の咆哮に続いて艦尾の人混みにはどよめきが起こる。もつとも忠やその隣で笑う明石達は、あの調子では残念ながら結果は同じだろうと思って別段青木の様子を強く意識する事など無い。遠めにも再び竿を投げ捨てて糸を引っ張る青木大尉の姿は、さっきまで見ていた姿と何も変わっていなかった。

『おい、なんだ!?!』

ところがそんな中、青木の周りに居る野次馬が次第に騒ぎ出した。よく見ると青木大尉がしかめっ面で糸を引っ張っているのを忠は認めるが、何故だか竿の先から延びた糸は中々戻ってこない。ここに来てようやく忠と明石達も青木の様子がおかしい事に気付き、各自がその表情から笑みを薄くして行く。

『なんだろ? ちょっと見てきます!』

そんな中、好奇心旺盛な霞が立ち上がって野次馬のところまで走り寄って行き、明石と忠は顔を見合わせながらもひたすら頑張る青木の顔を見て再び笑みも混じった声を交わす。

『鯨くじらでもかかったのかな？』

『あははは！ 見て、青木大尉の顔！！』

『く、く、苦しどすう！ ぐ、ぐ、軍艦旗の下で・・・！ あっははは！！！！』

忠の疑問を他所に、明石と霰は再び始まった青木大尉の勇姿劇に大笑いしている。だが依然として野次馬からはざわめく声しか聞こえてこない。こんな状況ならさっきのように笑いの渦になっても良いような物であり、現に遠目から見ているだけの明石と霰は例に漏れず大爆笑している。だがこの時、青木大尉を中心とする明石艦乗組員達の輪では、その眼前にとんでもない代物の姿を捉えていた。

『お、おいあれ見ろ！！！！』

何やら野次馬の一人の血相を変えた声が忠や明石の耳に届くのと同時に、乗組員の輪の中からは霞が転びそうになりながら走って出てくる。霞は顔に先程まであった笑顔を浮かべてはおらずく、なにか恐ろしいものでも見たような青褪めた表情を浮かべていた。次いで彼女が叫んだ言葉に、忠と明石は仰天して驚きの音色も混じった声を返す。

『も、も、森さん！ 鱻ふかですよ、鱻ふか！！』

『な、何だって！？』

『うそお！？』

『ふ、ふ、鱻が釣れてきはった・・・！ あっはははは！』
『霰、笑ってる場合じゃないって！！』

種類によっては人間をも食べる事もある鱈の名に忠は危険を感じ、霰と霞のそんな幾分場違いな感じもする会話を尻目に上司である青木の元に駆け寄った。

青木大尉は顔を真っ赤にして肩に巻いた糸を少しづつ手繰り寄せている。目を海に移せば、航跡で白く泡立つ艦尾の波間によっきと生えた黒いヒレが右往左往していた。それも結構デカイ。

『あ、青木大尉！ 危ないです！ 鱈ですよ！？』

『わかってるわ！ ぐっ、・・・この野郎！』

『っ、釣る気ですか・・・？』

『当たり前だ！ 鱈は美味いんだぞ！』

『・・・』

青木大尉の言葉に一瞬、忠と明石達、そして野次馬達の全員が言葉を失った。だが誰とも無く発した息を噴出す音に、そこにいた全員が声を発する。

『『『 わーっはははは！！』』』

爆笑。つい今しがたまで上司の命の危機を憂いで居た忠も、逆に鱈を食ってやろうというその意気込みは予想だにせず、一人頑張る青木の目を忘れて他の乗組員達と同様にその場にうずくまるような格好で笑う。そこから少し離れた第二主砲の辺りでは霰が四つん這いになって顔を下に向け、デッキを片手で叩きながら抱腹してピクピクと震えている。彼女にとっては縁起でもない言い方だが、文字通りの轟沈のようだ。

『うあっはっは！ よおし、青木！ 手伝うぞ！』

『砲術長を援護しろ！ かかれえ！』

『だゝははは、おし、森二水！ その銚を持って来い！』

孤軍奮闘する青木大尉の勇姿に野次馬達も動き出した。彼らは青木大尉の前後に立って笑いがまだ治まらないながらも一緒になってワイヤーを引っ張り始める。普段から訓練している軍人達の動きは素早くて確で、しかもその役割分担における各自の取り組みもまた無駄が一切無い。青木大尉と一緒に糸を引く者、鉋を構える者、どこからか内火艇用のロープを持ち出す者、双眼鏡を取り出してよっきと海面に生えた背ビレの動きを測定し始める者など、打ち合わせなど何もしていないのにテキパキと自分の役割を決めて動いている。

そんな中、糸を引っ張る連中が少しづつ下がり始めた。同時に測定に携わる水兵が叫ぶ。

『目標、距離30メートル！ 艦尾右舷、210度！』

『おい、お前ら！ 右だ！』

『測的ー！！ 目標はー！？』

『目標、艦尾右舷そのまま！ ヨーソーー！！』

『砲術長の苦労を無駄にするな！ そおれ！』

『『』・・・そおれ！・・・そおれ！』』』

海の男達の声が響く。いや、なんという連携だ。可笑しくて笑いが止まらない忠だったが、彼の後ろにはもっと重症な人がいた。

『さ、さ、最新鋭の工作艦が漁船になりはった！ あゝはっははははー！！！』

清楚可憐だった霞の面影はもう無い。そこにいるのは涙を流しながら抱腹絶倒する酷い顔をした少女だった。あまりの可笑しさに明石に対してちよっと失礼な発言をしてしまっている霞だが、明石も霞もそれを気にせず一緒になって大笑いしている。その内に明石も

眼前で繰り広げられる「男達の戦い」に胸が躍り、なんとか自分もお手伝いをしようと決心して霞に声をかける。

『あははは！ よおし、私の艦のスゴさを見せてやる！ 霞二水、我に続け！』

『へはは！ ま、待って明石さん！』

笑いながらそう言うと、二人は苦しむ霰をその場に放置して後部の揚艇用起重機に向かって走っていった。

『・・・砲術士！ おい、森！』

時を同じくして忠は自分の名を呼ぶ声に気付いて甲板上の一角へと振り向くと、その方向にある艦尾右では銚を持ったマサと川島中尉が手招きしていた。やる気なさげに青木に協力していた川島中尉もこの状況を目にしてようやく燃え上がる気持ちを胸に灯したらしい。すぐさま駆け寄って行く忠には彼の覇気が籠った声がかけられる。

『主計長！ なにか！？』

『お前ら兄弟で銚をぶち込め！ 一人じゃこれは投げられねえからよ！』

マサが手に持った銚は資材用の鉄材をそのまま尖らせただけの物で非常に重いらしく、マサは持っているだけでやっとだった。忠も片手で持ったが、その手に持った瞬間腕を沈めるかのように重さが押し掛かってくる。

ただ川島もこの銚の重さについてはよく承知しており、若干の不安を抱える忠とマサに上手く銚の重さを生かした扱い方を教えてやる。

『大丈夫だ、投擲するわけじゃない！ 舷側の真下にきたら真っ逆様に落としてやれ！』

川島中尉はそう言いながら、今度は銚の刃先とは逆の端に内火艇用のロープを結び付け始める。失敗してもこれならまた引き上げて再挑戦できるのであり、それを察した忠は川島という先輩の落ち着いた考察と行動に深く感心する。艦内の士官でも忠とは割りと歳が近い川島であるが、さすがに主計長という幹部の役職を頂いているだけある。なんとも頼れる兄貴像で、忠は高ぶる気持ちを少し和らげる。

するとその時、忠がいる甲板の一角にはいよいよ決戦の時が迫ってきた事を知らせる水兵達の声が響いてきた。

『おい！ きたぞお！』

『で、デカイ・・・！』

その声を受けた忠とマサ、川島中尉は手すりから身を乗り出して舷側の下を覗き込む。

そこにある艦尾右舷の水面では、歪な形の頭をした巨大な鱯が水しぶきを立てて暴れていた。白い腹と真っ黒な背を交互に甲板上の乗組員達に見せながら暴れる獲物は、体長およそ2メートルはあるうかという大物だった。

その内にたまたま眼下で暴れる鱯の種類を知っていた川島が口を開く。

『ありゃ、シュモクザメだな。よおし、お前ら頼んだぞ！』

『は、はい！ 森三水！ いくぞ！』

『りよ、了解！』

忠はマサと共に艦舷から半身を出し、鉈を縦に構えて狙いを定めた。

『頼むぞ〜森〜!』

そんな声が湧き上がり、思わず生唾を飲み込む忠。鱧は疲れ始めたのか動きが次第に遅くなり始めた。

これならいける。

『せ〜のお!! そおら!!!』

忠の合図に合わせてマサも鉈を上を持ち上げ、眼下の鱧を目掛けて真一文字に投げつけた。鉈は二人の手を滑り落ちるや重力と自重によって速度を上げ、鱧の黒い背中へへと急降下。ズブリと鈍い音を放ち、鱧の背のと真ん中に突き刺さった。

しかしながら刺さった瞬間に再び暴れだす鱧。最後の悪あがきか、糸を引く男達も引っ張り返され始めた。例え軍艦旗を翻している艦艇であっても躊躇せずに必死に暴れた鱧だったが、鉈の一撃が効いたのか段々と身体をくねらせる頻度と量が減っていき、やがて動かなくなった。

『お、気が利く奴が居るな!! これで引き上げるぞ! ロープ持つて来い!!!』

そうしてちょうど鱧が動きをやめた頃、電動機特有の低い機械音が艦尾甲板に木霊するのと同時に川島中尉が顔をあげて言った。忠も見上げると後部にある舟艇用起重機が右旋回して右舷側へと傾き始めていく。次いで起重機の根元にてはしゃぐ明石と霞を瞳に映し、川島の言う気の利く奴が彼女達だった事を知って忠は微笑む。

『ばんざーい！』

誰かが口にしたその言葉に、獲物を捕らえる目をしていた男達が再び笑顔になった。眼下で力尽きた巨大な鱈にワイヤーが幾重にも巻きつけられ、起重機によって甲板上から見下ろす事無く目に映す事ができる頃になって彼等は皆一様に万歳を絶叫し、その喜びを爆発させる。

「「ばんざーい！　ばんざーい！」」

嵐のような歓喜の声と拍手に囲まれた青木大尉は、両手の拳を天に突き上げて咆哮した。

『うおおおおおお！！！！！』

青木大尉の顔はとても嬉しそうな、少年のような笑顔だった。赤みを帯び始めていた空の光が男達的笑顔を輝かせた。

その日の夜の就寝時間を少し過ぎた頃、忠は部屋の机で事務仕事の続きをしていた。少し酒が回っている為か、字を見るのが辛い。

少々の倦怠感と疲労を紛らわせるべく鉛筆を書類の上に放り投げ、忠は背を反って眠気を帯び始めてきた目を擦る。そして彼はふと机から部屋中央の床に目を移す。

床に敷かれた明石の布団には明石と霞、霞が寄り添って眠っている。いい夢でも見てるのか、3人とも微笑むような寝顔だ。酒を飲んで歌いまくった後のこの3人、特に明石をここまで連れてくるの

は一苦勞だった。だがそんな苦勞も、この寝顔と、ついさっきまで続いていた今日という日の思い出が忠の脳裏から忘れさせた。

戦の後のメシは格別だった。

男達の科や階級を超えた連携で見事に成った戦果に、今日は特務艦長も飛び入り参加しての夕飯兼大宴会となったのだ。主計科総出での艦解体と調理によって作られた艦料理の山が、士官食堂と兵下士官達の食膳を沸かせる。連合艦隊司令長官の昼食にも負けないその量と味に男達は舌を唸らせ、一際喉に染みる深い味わいの酒をぐんぐんと進める。

こんなドンチャン騒ぎの中ではふわふわと浮いては消える料理や、一人で口しゃべる忠に気づく者等いない。その事を念頭に入れ、忠は明石達3人を同行して夕食に向かった。

『うまあい！ 鱻ってこんなにお酒と合うの！？』

赤い顔で上機嫌にはしゃぐ明石。時折、料理を持ってきた忠の腕を引っ張って勧めてくる。その上で一切れでも食べないと明石は機嫌を斜めに折り曲げ始め、腕を強引に引っ張る力をさらに一層増すのだった。今日は好きなだけ飲めと言った自分に、少し後悔しながらも微笑む忠。

『霞、鱻の天ぷらは食べた？ 結構いけるよ。』

『あ、ホンマやな。鱻はお揚げさんでもおいしいなあ。』

初めて食べる鱻に舌鼓を打つ霞と、笑い死ぬ一步手前で回復した霞。霞はすっかり清楚で物腰の柔らかいいつもの彼女に戻っている

が、忠の脳裏からは昼間の彼女の姿が忘れられない。思い出しては隠れるようにして笑いだす忠だったが、目が合った瞬間に突如として笑われた霰は当然の様に怒り出す。

『くっ、ぷははは・・・！』

『な、なんでウチの顔見て笑いはるんどすか、森さん！？』

『へははは！ 今日のアンタの顔、傑作だった！』

『あっはははは！ 霰はおもしろかったね！ 今度釣りする時あったらまた呼ぶからね！』

明らかに小馬鹿にした明石と霞の言葉に霰はショックを受けたように声を上げて泣き出し、泣き止ませる為という理由を付けられて今度は忠があれやこれや芸をするという羽目になった。『ここは森さんが・・・。』という明石の言葉に乗った自分が馬鹿だったと彼が気づいた頃にはもう遅く、明石にあれやこれやとからかわれて霞と霰に大笑いされる忠という、いつもの光景になっていた。

思い出すと少し憎たらしくなってくるが、当の3人はすやすやと微笑んで眠っている。

ま、いいか。

毎度毎度、そう思って妥協する自分の弱点に呆れる忠だが、治す気も毛頭なかった。

普段、忠以外の人間と関わる事のできないこの3人にとって、今日は忘れられない思い出になるだろう。文字通り、みんなで協力し

て笑い合った今日という日。もし支那事変に続いてさらに戦火が激しくなれば、このように笑い合っている日など来ないだろう。彼女達に架せられた運命は戦う事なのだ。

そう考えた時、忠はふと彼女達が仮にその運命の中で隣り合わせとなっている散る事態に際したらと思った。

こんなに良い奴らが死ぬ？

一人一人の寝顔を眺めていた忠の表情から笑みは消えていた。

オレは失いたくない。オレは絶対そんなの嫌だからな。

目を細めた表情のまま忠は顔を机に戻し、後ろから耳に入ってくる静かな寝息を振り切るように再び鉛筆を走らせ始める。

一人決意を決めて励む忠の横顔を、月の光だけが優しく舷窓から覗き込んでいた。

同時刻、呉海軍工廠。

そんな月のある艦上から腕組みをして見上げる女性が一人いた。士官用の第一種軍装に中尉の襟章をつけ、後ろで小さく結った髪とキツと釣り上がった鋭い目が特徴の彼女は、月夜に照らされる艦艇群に視線を流す。微かな風の音と波音が静かに支配する中、切り裂くように放たれた彼女の声が呉海軍工廠の波間に響き渡っていく。

『ふん、18 駆か……。たかが特務艦如きに遅れをとる様だった

ら、タダではおかん。』

静かに憤りの混じった言葉を放つや、彼女は艦の中に消えていく。その足音が消えると、彼女がそれまで立っていた甲板とその向こうに広がる夜の海面は再び、微かな風の音と波の音、そして月の光に支配され始めて行った。

第六話 「誇り・前編」

昭和14年9月23日。

訓練航海を終えて少し経つ明石艦は、呉海軍工廠にて本来の主任務である各種工作活動の訓練を開始した。本来の想定としては明石艦に被修理艦が横付けするのだが、今回は栈橋に接岸しての艦内工作設備を扱う工作科を主な対象とした訓練であった。

各種部品図や青写真も陸の工廠から送られてくるらしく、実際の製造や加工を呉工廠の作業指導を受けながら明石艦で受け持つのだ。訓練航海に続いて、今回も該当の科にとってはかなり実戦的な訓練である。

簡単な工場区画は戦艦等の大型艦にも2区画ぐらいあるが、冶金、鍛冶、木具、銅加工、溶接、電気等、明石艦の工場区画は艦内だけで17区画もある。今回は試験運用程度だが青写真室も装備している明石艦は補修部品や加工部品の複写図面を大量に保管しており、簡単な設計業務すらこなせるようになっていた。装備されている設備も精度の良いドイツ製の設備を有しており、中には工廠にすらも設置されていないという高価な物も含んだ工作機械の数は100台を超える。「各種工作活動を設計工程の段階から高精度に行える」という明石艦の能力は、一個工廠に匹敵するといっても過言ではない。

前部煙突である工場用煙突からもくもくと煙が上がり、艦内の工作機械や起重機の稼動音が蟬の声のように響く中、忠は発令所での

んびりと小さな煙草盆を片手に煙草を吹かしていた。物資搬送等がない限り砲術科の出番は今回は無い。三々五々の休憩時間でのんびりと出来る時間帯なのであるが、何となくなく宙に浮かぶ煙草の煙が寂しく見える。あまりの暇さにいつもの書類整理をしたが、元々整理済みの所を整理したのですぐ終わってしまった。

そして椅子に腰掛けて呆けた顔で煙草を吹かす忠の横には、同じく椅子に腰掛けて現役の先輩である朝日艦あさひの報告書を読みふける明石の姿があった。報告書は工廠から派遣された作業指導官が持ってきた物で、艦長室にあった物を明石が失敬してきた物である。

天真爛漫な性格の明石だが意外にも勉強熱心であり、時折『うん。』と唸り声をあげながら報告書を穴を開ける程に読んでいる。

また、明石から見れば同じ工作艦としての先輩にあたる朝日艦は支那事変勃発の年である昭和12年に工作設備を設けて類別された工作艦であるが、実は艦魂としても現在の帝国海軍に属する艦魂達から見ると大先輩にあたる。

元々は敷島型戦艦しきしまの2番艦としてイギリスで建造された朝日艦は、日露戦争にて黄海海戦、日本海海戦という大海戦に主力として参戦。第一次世界大戦時もウラジオストク方面への作戦に戦隊旗艦として参加。その後は練習特務艦等の任務を経て昭和12年に工作艦に艦種を変更。工作艦への装備改装が終わったその日に出港するという慌しさで、現在は上海を拠点に活動しているのだ。

やがて微かに眉間にしわを寄せて報告書を読む明石に、微笑みと明るいい声色を持って忠は声をかける。

『どうだ？　なんとかなりそうか？』

忠の声に明石は歪んだ笑みを返す。彼女は顔を隠すように近づけていた報告書を降ろし、続けて頭の上に乗せていた軍帽を取って机

の上に置いた。

『あはは……。うん……。結構、大変そうなんだね。修理日誌の日付がほとんど毎日になってる。』

机の上には同じ内容と思われる報告書がさらに2冊置いてある。

次いで明石が手に持つ報告書の題名の下には「第一巻」の文字があり、読破の道はまだまだ長そうだという事を忠はよく理解する。

『ははは、がんばれよ。』

『んもー、冷やかしてー。』

頬を小さく膨らませて報告書に目を戻す明石。普段見る事のできない彼女の真剣な顔は忠にとっては新鮮だった。自然と忠も笑い出し、口に咥えた煙草から幾分派手に煙上げつつ口を開く。

『はっはっは。まあ、明石は工作艦としての性能は朝日艦より上じゃないか。朝日艦より色んな事ができるんだし、そんなに気張るなよ。』

『そうでもないんだな。』

忠の明るい語りはからかうつもり等は微塵も無く、むしろ明石の実力を褒めて余裕を持たせてやろうする勢いの物であったが、声を受け取る当の明石は報告書から視線を動かさずに答えた。その上で意外にして意味深な彼女の言葉に、忠は身を乗り出してその真相を問い始める。

『うん？ どういう事？』

『工作艦って言っても所詮はお船だもん。作れる物は大きさの面でも限りがあるし、私に有る起重機けんかりようの最大懸架量は23トンだから重

い物だって扱えないし。』

『ほう……。』

『それにドックに入れる訳でもないから、艦底の塗装や清掃とかのお船にとっての基本的な整備だってできないんだから。』

『……。』

『艦載砲の内筒交換とかの基本整備も無理だし。やれる事なんて言ったら小さい部品の補修か、穴の開いた所に鉄板張り付けるぐらいなんだよ?』

ページをさらさらとめくりながら、明石は至って平然とした顔でそう言った。だがそんな彼女の何気ない素振りに、忠は驚きを隠せない。いつも漂々としていて思うがままの言動が多い彼女だが、その言葉にも示されている様に自分の能力をかなり正確に把握しているからである。初めて会った時から1ヵ月と経っていないのに、忠には少し大人になったように明石が見える。

彼の手に挟まれた煙草から灰の塊がポトリと落ちるが、忠はそれに気づかず明石の顔をじーっと眺めていた。

『うん? な、なあに……。?』

すると忠の視線に明石は気づく。いつも一緒にいる彼だが、逸らさぬ視線でまじまじと見つめられるのは慣れていない。真正面から受け止めづらい照れるような感情も湧き始めた明石は、ちよつと恥ずかしそうに頬を赤くして視線を忠から逸らす。

しかし忠が彼女に対する驚きの声を放つと明石の表情は元に戻り、その率直にして裏を返すと幾分失礼な物言いをお返しばかりにやりわり責め立て始める。

『あ・・・、いや。あゝ、結構考えてるんだね?』

『ヒドイなあ、何にも考えてないと思ってたの?』

アンタその割りに行動が突発的だよ。

一方の忠は明石の反撃の言葉を受けて即座に思いついた言葉を脳裏で呟くも、明石が眉を少し吊り上げているので敢えて口にしなかった。明石は本気で怒っている訳ではないが、こういう時に笑ってごまかすのが忠にとっては関の山である。

『あはは、ごめん、ごめん。ちょっと意外だったから。』

『ふふふ、まあ、いつまでも新米じゃいられないからね。』

そう言って報告書に目線を戻した明石の横顔を忠は再び眺めた。性格は相変わらずだが、その顔つきは段々と海軍軍人らしい顔つきになってきている。その事に自分から明石が少し遠くなったような感覚を覚え、忠は複雑な心境で微笑んだ。

するとその時、忠と明石の二人はパツと部屋に淡く白い光が反射した事に気づく。

『うつ・・・、ひぐっ・・・。』

二人が気づくと同時に、発令所の右舷入り口から今度は何者かのすすり泣く声が聞こえてくる。明石と忠は泣き声が聞こえてくる方にふと視線を向けるが、そこには霰と見知らぬ士官用の第一種軍装を着た女性に支えられて発令所に入ってくる霞あられがいた。霞はうつむ

いたまま、両手で目から溢れ出る涙を拭きながら泣いている。

『ど、どうした？ 霞？』

『も、森さん……。明石さん……。』

うつむきながら泣く霞は泣きながら口を開いたかと思うと、入り口に近かった忠に走りよって抱きついた。

『もう……。もう、私どうしたらいいか解んないよお……。！
ああ……。うあああん！』

霞は忠の右腕に抱きつくなり大声で泣き出した。忠は自分の腕に泣きつく霞の顔に驚いた。霞の右頬は真っ赤に腫れ上がり、首元には青いアザが2箇所程できている。

『ど、どうしたんだ霞！ 霞！！』

忠は霞の肩をさすって事の次第を聞こうとするが、霞は忠の腕に顔を伏せて赤ん坊のように大声で泣く。明石も椅子から立ち上がって霞の元に駆け寄るが、霞は泣いたままでも何も答えなかった。しかし忠にも明石にも、霞の顔がただの怪我ではない事がすぐ解った。そして二人が顔を見合わせると、付き添ってきた霰が震える声で口を開く。

『明石さん、森さん、おやかまっさんでかんにんどす……。』

『あ、霰、これどうしー。』

『……。』

明石の言葉が途切れた事に気づいて、忠は顔を霰に向ける。霰は申し訳なさそうな顔をしながらも、目の縁に涙を溜めている。そし

て霰の頬も赤く腫れ上がっており、唇を切ったのか口元から血が一筋流れていた。

『霰！ お前まで・・・、どうしたんだよ！』

『ごめんなさい、いきなり駆け込んで。とりあえず治療してあげてくれませんか、明石さん。』

忠が言い終えると同時に、それまで黙っていた二人に付き添ってきた士官服の女性が声を上げる。

ハスキーで低めな声に釣り目の顔で、美しく真っ直ぐな黒髪を首の付け根辺りで揃えている。見た目は20代後半くらいで、明石や霰よりも遥かに大人の女性だった。忠と同じ第一種軍装を身に纏い、その襟には中尉の襟章をつけている。だが彼女の正体は気になるが、まずはこの二人を治療する方が先決だと判断した忠は、すぐさま明石に向かって声を発した。

『明石、部屋に連れて行こう！』

『う、うん、！』

『ちょっと染みるけど我慢してね・・・。』

『はい・・・。うう・・・！』

忠の部屋の中、明石は霰の前にしゃがみ込み、彼女の口にヨードチンキを染み込ませたガーゼを当てていた。霰の顔が険しい顔になり、目の縁に溜まっていた涙がホロリと頬を流れる。

ベッドに腰掛けて激痛に耐える霞の横では、頬に大きく絆創膏を張った霞が忠の腕に顔を埋めて泣いていた。大分落ち着いてきたのか、今は発令所の時のような大声ではなく静かにむせび泣いている。

『まだ痛むか、霞？』

忠の問いに霞は嗚咽しながらも小さく頷いた。あんなに元気な笑顔ができる霞がこんなに泣くとは想像できず、忠には霞の姿があまりにも痛ましかった。

『そうか、うん。無理しないでいいからな。』

忠の言葉に先程と同じように小さく頷くと、霞は忠の腕を掴んだ手にぎゅっと力を入れる。

『本当にごめんなさい。』

すると士官服の女性が頭を下げて口を開いた。ゆっくりと綺麗なお辞儀をする彼女の身振りに、忠は敵意を感じない。その事に少し安堵しつつ、彼は霞から彼女に視線を移した。

『君もやっぱり艦魂かい？』

『はい。私は帝国海軍二等巡洋艦の那珂なかと言います。』

『そうか、那珂艦の……。あ、オレは明石艦砲術士の森忠もりただし少尉。』

『やはり森さんでしたか。森さんと明石さんの事は霞と霞から聞いています。可愛がってもらってるそうで……。』

『ああ、それより……。この二人、一体どうし……。』

『那珂さんて、言いましたよね？』

忠が言い終える前に、明石はしゃがみこんで霰の治療をしつつ、那珂に背を向けたまま声を発した。そして忠はその声に驚いた。いつもの優しく無邪気な明石の声ではない、刃物のように研ぎ澄まされた怒りが込められた声だった。明石と向き合っている霰はその声の変化に気づいて目を開くと同時に、怯えた表情で僅かに後ろへ仰け反り始める。

『二人の傷、明らかに誰かに殴られた痕ですよ？ この二人と那珂さん……』

ゆっくり立ち上がりながら静かにつぶやく明石。

『神通さんじゃないんですか！？ 貴方の姉の神通さんの仕業じゃないんですか！？』

明石は振り向くと同時に那珂の襟に手を伸ばして締め上げた。女性にしては長身の明石に締め上げられた那珂の体が浮きかかる。那珂は苦しそうにしながらも答えた。

『ぐう……。ご、ご存知でしたか……。』

『や、やめるんだ！ 明石！！』

興奮する明石を忠が抑えて那珂から遠ざける。だが明石は忠に抑えられながらも那珂に向かおうとする。その表情には忠にすら別人と思わせる程の怒りが込められていた。

『あなた、中尉かなんか知らないけど、なんでそんな涼しい顔でここにいるの！？ あなたの姉妹がやったんでしょ！？ それを、土下座の一つもせずに！！』

『明石!! 落ち着け!!』

『あ、明石さん!! 那珂中尉は違うんです!!』

『明石さん、待って!』

怒りが収まらない明石に、涙を浮かべていた霞と霰も慌てて止めに入った。普段は綺麗な笑顔と無邪気な物言いの明石が、今は鬼のような形相をしている事に忠は驚きを隠せない。彼女のそれは友人を傷つけられた事に対する憤りなのだろうが、霞と霰をここまで連れて来てくれた那珂を責めるのはお門違いである。言えは納得するのも知らないものの、ここまで見境がつかなくなる程の怒りとその豹変ぶりに忠はただ驚くばかりだった。

『・・・!』

すると突然、明石の体から力が抜け、その表情からは怒りの色がサッと引いていく。忠は視線を明石の顔から、明石の目線の先に移した。

するとそこには正座して深々と腰を折り、額を床に擦りつける様にして土下座する那珂の姿があった。

『この通りです……。どうか、お話を聞いてくれませんか?』

『・・・。』

那珂は決して頭を上げようとしなかった。この部屋の中でも最も階級が上である彼女が、水兵である霞と霰が見る前でも恥も体面も無く土下座している。明石はその光景を眉間にしわをよせながらも呆然と見ていた。

しばらくの間、部屋の中を静寂が支配した。

忠と明石、そして那珂は明石艦の艦首旗竿にの辺りに来ていた。霞と霰は休ませたいし、何より彼女達の前で一連の事態の真相を言うのも酷だという那珂の言葉に、忠は暴力を振るうような感じを見受けられない。

そんな中、忠は思うところがあって明石の背中を軽く叩いた。

『明石……』

忠の表情から彼が何を言おうとしたか明石は解った。それは明石も考えていた事だった。明石は少しの間、目を閉じてうつむくと、手を後ろに組んで艦首から海を眺める那珂に近づいて先程の自分の非礼を詫びた。

『すみませんでした……。中尉……。』

そう言って頭を下げる明石に忠は優しく微笑む。彼女の事は相方の彼はよく知ってる。さっきはちょっと興奮してしまっただけで、本当は笑顔が似合う優しく朗らかで、偶にぶっ飛んだ行動を起こしてしまうとっても良い奴なのだ、と。

頭をさげたまま那珂の許しを待つ明石に、忠は自分の中の彼女への理解が間違いではなかった事を確信して安堵した。

そして同時に、忠は帝国海軍軍人の常識である紳士らしさを明石に通させた。

「そこから遊んでる姉さん達ではない、君は帝国海軍の艦魂なんだろう？」

艦首に向かう途中に発した忠の言葉に、明石は素直に納得したのだった。

『いいえ、お怒りはごもつともですよね。』

那珂は振り返って明石の肩に手を乗せた。明石が恐る恐る顔をあげると、那珂は優しく笑みを見せてくれる。

『中尉……』

『ふふ。那珂でいいのよ、明石。それに敬語も必要ないわ、私もあんまり使い慣れてないから。』

『ありがとう、那珂さん……。』

風に揺られて那珂の軍帽からはみ出た部分の髪が靡く。釣り目で軍人らしさが滲み出ている顔の那珂だが、笑うとまるで自分の母のように包み込んでくるような優しさを感じる。それは明石も同じく感じたのではなからうか。那珂は海に視線を流すと、少し寂しそうな顔をして話し始めた。

『明石が言ったとおり、あの子達の傷は神通姉さんの仕業よ。先だつての訓練航海で、砲撃訓練の成績が貴女と同等だったのが癪に触ったのね。』

『どうして私と同等ではいけないんですか？』

『第18駆逐隊であるあの子達は、神通姉さんが旗艦を務める第二水雷戦隊に配属が決まってるわ。そして神通姉さんは、二水戦旗艦という事にとっても誇りを持ってるの……。』

潮風にのってゆつくりと流れてくる那珂の声を耳にし、忠も声を上げて会話に参加する。艦魂社会の内々的なお話であるのかもしれないが、そこに語られた様子は人間達の日常と何一つ変わらないもの。故に忠もこれまでの培ってきた経験と知識を基に、お互いが挑む懸案の解決策を模索し始めた。

『花の二水戦、かい・・・？』

『そうよ、森さん。二水戦は帝国海軍がワシントン海軍軍縮条約を受ける以前から編み出していた水雷戦術において、その中核を成す事になっている最も精強な水雷戦隊。その戦力たるあの子達が、戦闘を主目的としない特務艦である貴女と同等の成績では困ると言う事よ。』

『・・・』

那珂のハッキリとした物言いに、明石は僅かに口を尖らせる。だが那珂にあっては明石を怒らせようとした訳でもなく、そこに明石がついつい抱いてしまった感情もよく解っていた。

『ごめんなさいね、失礼なのは充分承知してる。でも現実的にあの子達は常に最前線で戦う事が求められる立場。そこらの駆逐艦が束になっても敵わない位でないと務まらないのよ・・・。そういう意味では神通姉さんの理解は正しいわ・・・。』

『でも那珂さん、二人のあの傷を見たでしょ？あれは教育的な指導を超えてるよ。』

『その通りよ、明石。あの子達だけじゃない、第8駆逐隊の子達も同じような目にあってる。いつも私が止めるんだけど、その都度、神通姉さんの行動には驚かされるわ。失敗や成績不良で一度でも怒ると、まるで二度と立てなくするかの様に部下を痛めつけるの・・・』

。』
『こう言っては悪いが、人間でいう犯罪者心理なんじゃないのか・
・？』

忠の言葉は那珂にとっては実の姉妹を侮蔑するような言葉だが、その事に関して彼女は怒るような事はせず、むしろ彼に向かって笑みを浮かべて声を返す。

『ふふ。ちょっと違うわ、森さん。神通姉さんは部下を死なせたくないだけなの。妹の私には解る。他人の何倍も部下を失う事に臆病になっているのよ。それが神通姉さんを凶暴な性格にしまったのね。足腰立たないくらいに叩きのめしてしまえば、二水戦にはいられなくなるから・・・。』

『どうして、そんな事をするんですか・・・？』
『・・・。』

無言のまま那珂は空を見上げた。晴れの空を雲が流れていく光景が、僅かに細くした那珂の瞳に映る。

『自分を、そして部下を心から信頼できないからよ・・・。』
『信頼できない・・・？自分も・・・？』

明石の言葉に那珂はゆっくり頷くと、目を閉じて口を開いた。

『昔、殺してしまったのよ。部下と乗組員と自分の艦長をね・・・。自分の不注意で・・・。』

那珂が言い終わると同時に、強めの突風がふいた。大きい風の音と風が海面を叩く音が木霊する。そしてその風で舞い上がった那珂の髪、その向こうには涙を流す那珂の悲しげな顔があった。

『那珂。お前、こんな所にいたのか。』

突然聞こえてきたその声は背筋がゾッと凍る程に冷たく、張り詰めた糸のように繊細で、甲高い声だった。

声がしたのは3人の後ろにある第一主砲の横、その方向に振り向くと士官服に軍刀を持った女性が立っていた。明石よりもほんの少し背が高く、女性にしては体格がいい。釣り上がった日本刀のような目、短い髪を小さく首の後ろに結った髪型。そして顔立ちが那珂とよく似ている。歳も同じくらいで、襟章は中尉だ。薄々、彼女の正体を感じた忠と明石だったが、那珂の発した言葉はそれを確信に変える。

『神通姉さん……。』

神通はゆっくり那珂に向かって歩きながら言った。

『大方、あの馬鹿供がここに逃げ込んだんだろう？』

『……。』

『ふん。』

神通はそう言って俯く那珂に呆れ、視線を明石へと移した。軍帽からはみ出た神通の長い前髪が風に揺られて流れ、その奥にある神通の目はまるで凶暴な狼のようであった。今にも飛び掛って来そうなその雰囲気は人間でも滅多にいない。その風貌から忠は直感的に

危険だと感じた。忠の首筋に冷や汗がダラダラと滲み出る。

だが神通は忠ではなく、明石の方に向かって歩み寄って声をかけた。

『貴様が明石か？』

『……』

『立場をわきまえろ、将校相当官。貴様、皇軍をナメてるのか？』
『……』

明石は決して怯えている訳でもなく、決して笑う訳でもなく、ただ黙って神通の目を見つめていた。何も言わず無表情で見つめてくる明石に顔をしかめる神通。突き刺すような眼光を放ちながら、彼女は続ける。

『ふん、所詮は特務艦の艦魂か。まあ、いい。霞と霰を連れて行く。』

そう言っ明石の横を通り過ぎようとした神通だったが、その身体に明石は腕を絡ませた。突然の彼女の行動を受けて上目遣いで明石を睨みつける神通に、明石は無表情のまま声を返す。

『今の貴方には、あの二人は渡せません。』

明石がそう言った刹那、鈍い音を立てて明石の顔に神通の肘が突き刺さった。神通の肘の一撃によって仰け反る明石の顔に、神通は肘を放った腕とは逆の腕で今度は拳を打ち込む。明石の頭から帽子が落ち、顔から鮮血が飛んだ。

『神通姉さん！！！』

『明石！！！！』

その光景に咄嗟にその場を飛び出す忠と那珂。だが神通を含めた3人は、目を見開いて身体の動きが止まった。明石は倒れずに両脚で堪えると、右手を大きく振りかぶって神通の顔面に拳を刺し返したのである。

顔から鈍い衝撃音を放った神通は、後ろに2、3歩仰け反るとどつと尻餅をついた。呆然として床を見つめ、違和感を覚えた顔に手を触れる。そこに曲がった鼻から滴る自分の血を認め、神通の表情はみるみる変わっていく。そして咆哮した。

『貴様ああああ！ 殺してやる！！ 殺してやる！！』

檻から放たれた野獣のように飛び掛ろうとする神通を、那珂が必死の形相で後ろから抑える。明石は駆け寄る忠に目もくれずに、右手で口から滴る血を拭いながら神通を睨みつけていた。

『はなせええ、那珂ああ！！ ううらああああ！！』

見開いた目で大きく口を開けて龍の如き咆哮をする神通と、黙ってそれを睨みつける明石。これが生涯の友となる明石、神通、那珂、忠の初めての出会いだった。

第七話 「誇り・後編」

『大丈夫か、明石・・・？』

最上甲板から部屋に戻った明石は、忠に唇の止血をされていた。

痛みが残る顔で明石は自分の薬箱をいつもの淡い光で出現させたが、自分で自分を治療する事など滅多に無い。ましてあの神通に思いつき二度も顔を殴られた明石は、神通と那珂が消えた後から足取りがフラフラだった。見かねて忠が治療してやっているのである。

整った綺麗な顔立ちの明石の顔を鼻が触れそうになるくらいに近くで見るのは忠にとって初めてだが、青くなった彼女の頬とパツクリと切れて鮮血を流す彼女の唇がそんな事を彼から忘れさせる。神通の奇声のような咆哮がまだ耳に残っている忠はその記憶を振り切るように、明石の唇にガーゼを押し当てた。

軍刀を抜いて飛び掛ろうとする神通に一步も引こうとしない明石だったが、那珂が機転を利かせてその場を脱した。那珂が神通を抑え込んだまま、白い光を放って一緒に消えてくれた事に感謝せねばなるまい。

霞と霞は事の仔細を聞いて仰天し、ベッドの隅で抱き合ってすすり泣いていた。

忠は明石の唇に手を当てたまま、俯いて嗚咽する霞と霞に声を発する。

『二人とも今日はとりあえずここに泊まっていくんだ。あの状態では戻ってから何をされるか解ったもんじゃない・・・。』

『・・・。』

『うう・・・。ふ・・・、ふえええああ・・・！』

忠の言葉に霞は小さく頷いたが、霞はその言葉にまたも泣き出した。彼女達にとって恐怖の代名詞であろう神通を、『殺してやる！！』と言わせる程に怒らせてしまったのである。これから先、会おうものなら忠の言葉どおり何をされるか解った物ではない。その前途に掛かる不安に、霞はただ泣くしかなかった。部屋に響く霞の泣き声に、忠は小さくため息をつく。

まったく、エライ事になってしまった。

『ねえ、森さん……。』

明石は少し俯いて虚ろな目で忠の胸元を眺めながら、静かに口を開いた。忠が押し当てていたガーゼに彼女は自分の手を添える。出血は止まりつつあるが、彼女が手に持ったガーゼは元の白色が探せない程、既に真っ赤に染まっていた。

『……。なんだ、明石？』

『……。神通さんの目、見た？』

明石はそう言う而降ろしていた視線を忠の瞳に向けた。明石は時折傷む頬の口元を動かしながらも、極めて冷静な表情を浮かべている。

『あ、ああ……。その……。、ご立腹なようだったな……。』

忠は必死に神通の目の感想に値する言葉を探したが見つからなかった。下手に現実味を煽る言葉を出せば、霞と霞の怯えに拍車をかけるだけだ。そう思いながら横目で二人を見ると、嗚咽して霞の胸に沈む霞と、そんな霞の頭に頬を当てて声を出さずに涙を流す霞の

姿が彼の目に入った。理不尽ながらもどうにもできない状況に涙する姉妹の姿は、忠にとっては言葉にできない。

『・・・私に殴りかかった時、神通さんは今にも泣きそうな顔だった。』

『え・・・？』

明石はゆっくり首を傾げ、再び忠の胸元辺りに視線を降ろした。忠は二人から明石に視線を戻したが、サラッと流れた明石の横髪が彼女の表情を隠す。

『・・・叫んだ時もそうだった。まるで海に落ちて溺れて、必死にもがいてるみたいに見えた・・・。』

正直な所、忠には明石の言う神通の様子がまったく感じられなかった。今にも獲物を飲み込まんとする蛇のように大きく口を開けて咆哮し、狂気を帯びて見開いた目をしていた神通の姿は思い出すだけでも背筋が凍る。忠はそんな感覚に耐えながらも、足元の水の入ったバケツから手ぬぐいを取り出して明石の頬に当ててやった。冷える頬に気が緩んだのか、明石は肩から力を抜いて目を閉じて言った。

『なんでだろう・・・、あ・・・。』

自らの手で持っていたガーゼが彼女の手からポトッと落ちた。血を吸って丸く固まったガーゼが床を転がる。唇に血を少しづつ滲み出しながらも、明石はその様子を呆然と眺めていた。微かな霞の泣き声が響く部屋の中、床に転がったガーゼは舷窓からフラフラと揺れて差し込んでくる朱色の光に照らされ、綺麗な赤色でぼつんと輝

いていた。

『砲術士！ 食事用意よろし！』

『お、おう！ 今行く！』

扉の向こうで発せられたマサの言葉に忠は返事をした。

『じゃあ、ちょっとメシ食ってくるよ。』

『うん……。』

明石は依然として床に転がったガーゼを眺めている。忠はベッドの上の二人にも視線を配った。霞の泣き声も少しは静かになってきた。そしてそんな霞を抱きつつ、霞は忠の視線に弱々しいながらも小さく微笑んでこくりと頷いた。

『明石、ちょっとの間だけ二人を頼むな……。』

『うん……。』

ボーっとして俯く明石に心配が拭えない忠だったが、どうする事もできない。特に泣くわけでも怒るわけでもなく平静な明石を背に、忠は部屋を出て士官食堂に向かった。どうしたらいい物か、そう考えながら歩く忠の足取りは重かった。

陽が沈み、濃い青紫色に空が変わったその日の夜は満月だった。

数多くの艦艇が停泊する呉海軍工廠全体を青白い光が無機質に照らす。そしてその光に照らされた4本煙突の神通艦の艦首、背中合わせに前後を向いた単装砲の横には倒れ込む那珂の姿があった。

『がつ・・・！　くうう・・・！』

苦しむ声を上げて那珂はお腹を抑えてうずくまる。苦痛に歪む那珂の顔、腫れ上がった左の目は潰れ、両の頬が赤く腫れている。その苦痛に耐えてうずくまる那珂の襟に彼女の物ではない手が伸びると、その手の主は那珂を起こして手近にある砲塔の側壁へと襟を締めつけたまま叩き付けた。

『だああらあ！！』

聞きなれた声と重い金属音、そして背中に受ける強い衝撃に苦しみながらも那珂は目を開く。そこには実の姉、神通の荒ぶる獅子のような顔が有った。

その最中、那珂は竣工してすぐの頃、初めて会った姉の顔を思い出す。荒い言葉遣いながらも面倒見が良く、いつも自分の手を引いてくれた姉。

あんなに優しくかった神通姉さん。

それが今、目の前にいるその姉は当時の面影が全く無い変わり果てた顔をしている。

こんなにも見開いた瞳を持つ人であったか？

こんなにも牙のような歯を持つ人であったか？

こんなにも獣のような吐息をする人であったか？

狂気を帯びた姉の顔に那珂の潰れた瞳から涙がこぼれ、襟を掴んだ神通の手に落ちて砕けた。

『ぐ……、ぎ……。じ、神通、姉さん……。』

『ふざけやがってえ!!!!!!』

『がはっ!!!!!!』

腹に放たれた神通の膝ひざにより、那珂の口から胃液が吐き出される。そのまま力が抜けて崩れ落ちそうになる那珂の体だったが、神通は両の手に力を込めて再度壁に縫い付けて荒げた声を再び投げつけた。

『お前もあの場にいただろうが、それとももう忘れたか!? ああん!?』

『じ、神通、姉さん……。でも、これじゃ……。いつまで経っても……。』

沈み行く勢いの声で答える那珂。腹部の奥より全身へと響き渡っていく鈍痛で、その言葉も途切れ途切れとなった代物だった。だが実の妹のそんな姿も神通の表情から凶暴さすらも滲んだ怒りの色合いを失せさせる事は無く、次の言葉を紡ぎ出そうとする那珂に身体には、またしても姉による衝撃が与えられた。

『あの時、何人死んだと思ってんだ! おらあっ!!!!!!』

『あぐっ!!!!!!』

腹に撃たれた神通の拳に那珂の口から再度胃液が吐き出される。腹部への衝撃で止まる呼吸に那珂は咽た。

『がはっ……。!!!!!! げふっ……。!!!!!!』

『やり直しなんか無えんだ!!　こんの馬鹿が!!!』

もう何度目になるかも解らない振りかぶった神通の拳に、ただ本能に従って目を閉じる那加。だがその拳は振られてこなかった。

やがて恐る恐る目を開ける那珂は、神通の後ろから彼女の腕を掴んだ人物を見つける。月明かりに照らされる瀬戸内の波間を背に、カーテンの流れを思わせる月明かりを顔に浴びせたその人物は呟く様に静かに声を放つ。

『やめなさいよ。』

月の光が一段と明るく照らされ、ハッキリと見え始めたその人物は明石。昼間の一件にて最悪の出会い方をした彼女の姿に驚く那珂だったが、那珂は瞬時にその際の相手が目と鼻の先いる姉だった事を思い出して目線を神通に移す。すると明石に視界に認めた神通の顔には既に獐猛どうもうな爬虫類のような表情が宿り始めており、咄嗟に那珂が声を放とうとするよりも早く、神通は咆哮して明石に襲い掛かった。

『ぐるああああ!!』

神通は明石の首を鷲掴みにすると那珂の身体と入れ替える形で砲塔側壁に叩きつけ、その顔をめがけて怒りに任せた拳を振り下ろす。耳障りの悪い衝撃音が明石の顔から発せられ、神通の拳にはそれに伴うようにして細かな血の粒子がこびりついていった。

『おらあっ!!』

『あ、明石・・・!　じ、神通姉さん・・・!　やめて!!』

必死に姉の行為を止めさせるべく声を放つも身体に残る激痛に那

珂は立ち上がる事ができず、その場に突っ伏して届かぬ神通への声を繰り返し発していた。その眼前では明石の血の止まりかけた唇がまたパツクリと開き、首に食い込んだ神通の爪によって皮は細く切り裂かれ、腫れた頬が破れてかさぶたの下から漏れ出した血が舞う。だが当の明石は何度も顔を襲う神通の拳に耐えつつ、激痛と衝撃によって激しく揺れる視界の中でじつと神通の目を見ていた。

ああ、やっぱり。

初めて会った時から感じていた神通の心の内。なんとなくといった感覚的な物であったが、この時、明石は間近に見た神通の表情で確信を持った。同時に明石は噛んだ奥歯に力を入れ、それまで沈黙していた両腕を動かす。

『だらあああー！』

神通が明石に対する4度目の拳を振り下ろそうと振りかぶった瞬間、人が変わったように神通を睨み返した明石は神通の襟を掴み返し、彼女の鼻めがけて自身のおでこを突き刺す。すると何かが折れる鈍い音が響き、真正面から衝撃を食らった神通は大きく後ろに仰け反る。

『がっ・・・！！』

続けて明石は咄嗟に首から手を離れた神通の顔をめがけ、さらに右手の拳を叩き込んだ。そのおかげで一層の勢いを増して後ろに仰け反って倒れる神通。彼女の鼻からはおびただしい量の血がポタポタと滴りだす。

『く・・・！　こ、この、ガキがああ・・・！』

自分の血を目に映す事で興奮が増したのか、神通は鬼の形相に作ったしわをさらに深くしてそう言い放ちながら立ち上がるうとする。だがそこに響いた明石の言葉に、彼女の身体の動きが止まる。

『なにが、二水戦よ……。』

『ああ……。？』

『なにが、旗艦よ！』

『く、貴様……。！』

『貴女、誇りを盾にしてただ自分から逃げてるだけじゃない！』

突如として浴びせられた明石の言葉は、神通の胸の内にて燃え盛る炎に油となって突き刺さる。ただその炎は怒りという感情のみで構成されてはおらず、明石の言葉を受けて強くなった火勢は胸に宿す神通の抗いの気持ちをうっすらと表しているのだった。

『なに……。！？』

『そんなに自分の恥をさらしたくないの！？ 実の妹をこんなにまでして二水戦の旗艦をしたいの！？』

『黙れ、黙れええ！』

再び叫んで立ち上がった神通は明石に跳びかかり、その顔めがけて拳を打ち込む。頬に刺さる神通の拳は明石の顔から鮮血を飛び散らせるが、明石は倒れずに神通の顔に向かって自身もまた拳を打ち返す。

殴りあう二人に那珂の叫びも既に届かない事は明白だったが、その刹那、那珂はそこに不思議な光景を見た。明石が無言で殴るたびに神通は後ろに仰け反るのに対し、明石は殴られても一歩もその場から動かなかった。そして神通の瞳の縁に僅かに、僅かにだが光る物が溜まっていた。

あの事件以来、ずっと見た事が無かった神通の涙。

那珂はその光景に、二人を止めることをやめる。

やがて明石の拳を受けた神通が大きく仰け反り、かろうじて後ろに伸ばした脚で倒れるのを防いだ。

『あぐあっ!!』

明石の拳に神通は立ったままだったが殴り返そうと脚を前に出した所で、突然膝からガクンと崩れた。痛みに歪む神通の顔のあちこちから血がとめどなく落ちていく。肩を大きく上下させて息をする神通を、明石は同じ様に肩で息をしながらも決して衰えぬ闘争心を瞳に浮かばせて睨みつける。

ふいに明石は、片膝について苦痛に耐える神通から真横に視線を流した。那珂が倒れる砲塔側面の端に、神通が昼間に持っていた軍刀が立掛けられている。すると明石は何を思ったかおもむろにその軍刀に近寄って鞘から中身を抜く。美しい刀身が満月の光に照らされてキラキラと光った。

『あ、明石・・・!!』

『はあ、はあ、き、貴様・・・!!』

いよいよ凶器まで持ち出すかと瞬時に脳裏に過ぎらせた那珂と神通の声を無視して軍刀を眺める明石だったが、彼女は身体の向きを神通の方へと向けはせず、そのまま砲塔側壁に向かって軍刀を手にした腕を上段に振りかぶった。神通がその光景に咄嗟に叫ぶ。

『や、やめろ! やめろおお!!』

『はあ、はあ、・・・こんな物!!』

刹那、叫びながら明石が思いっきり砲塔側壁へと振り下ろした軍刀は、鉄の塊である側壁に切りつけた瞬間、気味が悪いくらい綺麗な音を発して真っ二つに折れた。長い余韻を放ちながらその場に転がる軍刀の片割れが月明かりに輝き、僅かな沈黙がその場に立ち込める。

『はあ、はあ、はあ・・・。』

床に転がった刀身の片割れを眺める明石だったが、神通に目線に移して驚いた。

『ああ、うあ・・・、あ、ううあああ!!』

叫んで飛び掛った神通は驚く顔の明石に拳を振り下ろしたが、既にその腕には力が込められていない。そして飛び掛ってきた神通の顔からは、大粒の涙が流れている。神通は明石の前で両膝から崩れながらも、明石の胸に力の抜けた拳を何度も振り下ろして泣き叫んだ。

明石はそんな神通の顔をじっと眺める。今の今まで獣のように凶暴だった神通はまるでそれが別人であると主張するかの様に、今は子供の様にぼろぼろと涙を流し、大声を上げて泣いているのだった。

『畜生、畜生・・・!!』

憎いのか悲しいのか、その色合いに判別がつかない声色で響く神通の声。否、それは明石の耳にも那珂の耳にも、ずっとずっと昔から発してきた神通なりの悲鳴のように聞こえる。

『畜生、あああ・・・、お、お前にわかるか!? 目の前で部下を

殺した私の心が!？」

『……』

『私のスクリーンに巻き込まれてバラバラになった乗組員の姿が!？」』

見栄も体面も無く絶叫する神通は、次第に明石の前で膝から崩れ落ちていく。その真相を明石はまだ知らないが、きっと辛い経験を得た故にこうなったのだろうと察する。

『責任を感じて自殺した私の艦長の事がお前にわかるかあ!？ うう、……畜生!！』

『……』

『畜生、畜生……。私が、私がもつとしっかりしておけば……。あ、あああ……。』

神通はまるで明石の脚にすがりつく様な姿勢にまで崩れ落ち、やがて四つん這いになって嗚咽に苦しむ声を発した。初めて自分の事を話して号泣する神通の背に、表情を変えぬまままで明石はそっと手を触れる。

『言ってくれなきゃ、わかんないよ……。』

『あ、あ、ああ……。う、うあああ!』

神通は咆哮して大声で泣いた。月夜に響く神通のその咆哮は、海に呑み込まれて行く悲しき龍の断末魔だんまつまの様に、明石には聞こえた。

『よし、と。これで大丈夫だよ。』

優しく月明かりに照らされる神通艦艦首では明石に治療される那珂と、その那珂に治療を施す絆創膏だらけの顔の明石、そして二人から少し離れたところに同じく絆創膏だらけの顔をした神通が座り込んでいた。神通は両膝を抱えながら、折られた軍刀を横において俯いている。

『クソ、真っ二つにしゃがって……。』

その内に神通の静かに発せられた言葉に、那珂への治療を続ける明石は苦笑いで応える。

『ごめ〜ん、大事な物だったんだね。』

『ふん……。』

明石の言葉に神通は静かにそう返すと、膝に顔を埋めるようにして丸くなった。明るい月の光と瀬戸内の風によって作られた波音が、彼女達のいる甲板を包んでいく。

その後にしばしの沈黙を置き、神通は目を閉じて口を開き始めた。放たれる声によって月明かりの波間に紡ぎだされて行く物は、狂気に染まった人柄を持つ彼女の理由。神通という艦魂の全においてきつかけとなった、彼女の過去の物語であった。

『……あれは昭和2年の8月24日だった。私と那珂は連合艦隊の主要艦艇と共に、島根県みほわんの美保湾沖合いでの訓練に参加していた……。』

ふと自分の過去を語り出す神通の声。それに気付いた明石が顔を向ける中、神通は視線を波間に向けたまま続けた。

『あの頃、ワシントン軍縮条約もまだ記憶に新しかった帝国海軍は？訓練に制限無し？の掛け声に必死になってな。前の年からの度重なる猛訓練で、当時の帝国海軍の艦魂達は随分疲れていた。当然私もな。』

『。。。』

『そんな中での美保湾での訓練は、月明かりの無い曇り空の中での大規模夜間演習だった。攻撃軍第5戦隊、第2小隊として参加していた私と那珂、それに配下の駆逐艦達は、防御軍出動から30分経った2200に出動した。出動から5分程で、攻撃前進が下命されたよ。』

神通は自分の過去を流れるような勢いで語るものの、その顔はさつきから一度たりとて明石の方へと向けられてくる事は無い。ただ神通の丸くなった背に浮かび上がる独特の雰囲気は明石への拒否を示すものではなく、明石自身もそれを何となく感じ取って積極的に神通へと語りかけてみる事にした。

『神通さんが旗艦だったの・・・？』

『・・・小隊のな。あの頃の私や那珂は、竣工から2年程しか経ってない新鋭艦だった。疲れてるのは皆同じ。だから私達は新顔だら、防御軍の戦艦部隊をやっつけてやろうって躍起になってた。出動から1時間程で北にいる敵と接触した私達は、防御軍所属の二等巡である龍田たつたさんから照射砲撃された。如何せん形勢が不利だった私達の部隊は北東から北北東に変針したが、すぐに伊勢さんや日向さんから二度目の照射砲撃を受けた。』

その場には波の音と神通の声だけが響く。凜とした声を持つ神通

の語りは指揮官としての才を耳にする者に良く伝え、二水戦旗艦への誇りが強いという那珂の言葉を明石に良く理解させる。しかしその声は、やがて段々と震えが混じる様になっていった。

『・・・私達の部隊は速力を生かして後ろに回りこむ為に、針路を北北東から南東に変針した。後続の部隊にも知らせるために私は舷灯をつけて急旋回したんだが、後ろに那珂がいた事を確認していたから舷灯の点灯は2分程で終えた。防御軍に行動を教えるような物だったからな・・・』

ふと言い終える間際の神通の語尾が少し含みを抱いている事に明石は気付き、妹の那珂もまた姉の感情が変化し始めた事を敏感に感じ取る。むしろ姉が感情を歪めた真相を那珂は当事者の一人として知っている手前、彼女は記憶の向こうに眼前の姉と同じ光景を微妙に写しており、やがて神通が放つ言葉によってその光景の持つ輪郭は次第に明確な物へと変化して行くのだった。

『神通姉さん・・・』

『それがケチのつけ始めだった・・・。さらに後ろの転針が終わっていなかった第27駆逐隊は、私からの探照灯信号で防御軍の存在とその方位以外、他の部隊の行動なんか何一つ知らされて無くてな。とりあえずは敵の位置方位に向かって急行しようとして、北東に向かって全速航行を始めたんだ。』

『北東って・・・』

『ああ・・・、大転針した私の正面に27駆は向かってしまったんだよ・・・』

僅かに呼吸を整える神通だが、彼女がそれと同時に服の袖を握った手に一層の力を込めた事を明石は見逃さなかった。それは震えだしてしまう手を、なんとか抑えようとする神通なりの抵抗。しかし

無常にも彼女の企図は成功しておらず、その唇から漏れてくるのは震えの振れ幅がさらに増した声である。

『私はその時、どうやって防御軍を仕留めるかしか考えていなかった。ちょうど艦長である水城さんみづしろとも、意見が合ったからな……』

『意見が合った……？』

その言葉に思わず明石は声を上げ、それまで続いていた神通の語りを遮る。だが明石のそれは無理も無く、艦魂と人間が意見を合わせるという神通の言葉が明石には簡単に理解できなかった。なぜなら艦に宿る命である艦魂がその実は自分の意思では舵一つ切る事ができない存在である事を知っているからで、実際に操る人間達に対して基本的な自分の思う所を伝える事もできない。艦魂とは人間の瞳には映らず、その声も耳に拾われる事はない存在なのであり、忠の様に艦魂と触れ合える人間とはかなり特異な存在なのである。

そんな事から「意見が合った」という神通の言葉に明石は首を捻っていたのだが、当の神通は顎の辺りを膝に埋めたまま口を開き、明石のその疑問に対しての明快な答えを打ち付けた。

『……お前の所のあの若造と同じだ。艦魂が見える人だったんだ……』

『えっ……！』

『まだ生まれて間もなかった私に、水城さんはとても優しくしてくれた。冗談好きの良く笑うオッサンだったよ。いつも？オレの事は父さんと呼べ！？なんて言ってたな……。今思えば、私はその事で調子に乗ってたんだな。艦魂としての覚悟も経験も持たないくせに……』

初めて耳にした事実であると同時に、この神通が自身と同じ境遇

の中にいた事に明石は驚きを隠せない。その上でかつての自身の未熟さを蔑む神通に明石はなんと声をかけて良いか解らず、空返事にも近いような声を返すのが関の山だった。

『そう、だったんだ……。』

『ふん……。旋回中になって、私は右舷から高速で接近する27駆に気づいた。無灯火だったアイツ等に気づいた時には、既に距離が400メートルくらいしかなかった。私は慌てて両舷の舷灯を点灯して、取り舵で回避したんだ。』

神通の語りの合間にある吐息がほのかに荒くなり始め、静かな瀬戸内の潮風に乱れを与え始める。声の音色にもその吐息は影響を与えており、黙って耳を澄ます明石の後ろでは、那珂が何事かを姉の声色で思い出したのか静かに咽び泣き始めた。

『……。無我夢中だった。でもそこで警戒すべきさらに後続の艦を、私は全く見ていなかった。回避したのは先頭の菱^{ひし}で、その後ろに追隨していた蔵^{くら}に気づいた時には、……。もう遅かった。後進も転舵も間に合わず、私は蔵の左舷中央艦尾寄りに突っ込み……。蔵はそこから真っ二つになって沈んだ……。』

『う、うう、う……。』

『那珂さん……。』

神通が言い終えると同時に、少し離れた所で座り込んでいた那珂は両手で頭を抱えながら俯き、悲しげな声で涙を流し始めた。妹の鳴き声に神通も瞼を伏せ、震えが増すのと同時に規律を失い始める声で続ける。

『その時、蔵の艦体から上がった炎を確認した那珂は取り舵を切って後進をかけたが、その後ろから現れた葦^{あし}に真横から衝突したんだ。

葦も艦尾を切断されたが、幸い沈みはしなかった……。」

そう言い終えるや神通はゆっくり自分の右手を眺めた。口に手を押さえてむせび泣く那珂を気にしつつも、明石は神通に顔を向ける。神通は視線を右手に向けたまま、やがて目を細めてゆっくりと口を開く。

『……衝突して燃える蕨艦の艦橋に、私は蕨を見つけた……。皮一枚で繋がっただけの脇腹から出た、水溜りのようになった血と肉と、臓物の中に倒れて……、瞬きもせずに乾いた瞳で私を見てた……。』

『……。』

『訓練は即刻中止。60隻以上がひしめいていたあの海域は大混乱だったよ。救助作業も視界が利かなくてな、蕨乗組員の犠牲者の内の何人かは、救助作業中に私の艦のスクリューに巻き込まれて死んだんだ……。』

惨いという言葉以外が見つかからない神通の語る過去。ありありと瞼の裏に蘇るその光景が堪えた那珂は腰を折り曲げ、甲板に突っ伏すような姿勢で涙を流す。同じ船の命として明石もまたその悲惨さをひしひしと感じる最中、神通は意図せず握った拳を小刻みに震わせつつも、自身に纏わる真実を伝える声を絶やす事はなかった。

『そんな事が……。』

『さすがに私も、その光景には気が狂いそうになったよ……。でも水城さんが、必死になって励ましてくれた。救助作業の指揮と、他の艦との連絡でそれどころじゃないのにな……。』

神通は少し顔を上げるが、絆創膏を張ったその頬には涙が流れている。ぎゅっと唇と膝を抱えた手に力を入れて彼女は続けた。

『私は艦首が大破して航行不能。演習に参加してた戦艦の金剛さんこんごうさんに曳航されて最寄の舞鶴軍港まいづるに戻り、そこで修理を受ける事になった。だがしばらく経って9月に入ったすぐの頃、水城さんは？事故現場における責任者？とかぬかされて、海軍省の馬鹿供から軍法会議で責任を追及された。事故直後の査問委員会は、責任は問わないと言ってたクセにな・・・。』

何度も出てくる神通と供に過ごした一人の人間の名。しかしその名に付属して放たれる神通の言葉を聞く限り、どうやら彼女と同じく彼もまた辛い道を歩む事になってしまったらしい。そしてその事を意識した途端、明石は殴り合っている最中に神通が放った言葉を思い出す。その要点を声に出して確認しようとした明石には、神通の悲しみの色合いのみで染められた悲痛な声が返ってくる。

『も、もしかして、さっき言ってた自殺した艦長って・・・。』

『水城さんは本当に優しい人だった・・・。艦魂の私にも乗組員にも家族のように愛情を注いでくれた。きっとあいう人が、人間が呼ぶ？父さん？なんだろうな・・・。でもそんなあの人だからこそ、事故の責任を、つ、強く感じすぎ、た・・・。う、うう、う・・・。』

神通は嗚咽しながらも、顔を上げたまま唇を噛み締めて堪えていた。艦魂が見える人間と関わったという神通の気持ち、同じく忠という人間と過ごしている明石には痛いほどに解る。

『そして、は、判決がでる前日の12月26日・・・。水城さんは、うう、自宅で首を切って、じ、自決、したんだ・・・。』

『う、神通、姉さん、うう・・・。』
『・・・。』

ぼろぼろと頬を伝う神通の涙に、当時を知る那珂も、そして彼女の気持ちを身にしみて感じる明石も、ただ静かに涙した。

神通は涙を拭おうともせず、ただ唇を噛んで押し殺そうとする。その行動こそが、神通の今までの心の内をあらわしているように明石には見えた。込み上げる涙を必死に押し殺し、眼前の月に光に湿った瞳を輝かせながら神通はさらに言った。

『・・・修理が終って時間もしばらく経った頃、私は二水戦旗艦になった。花の二水戦旗艦は嬉しかったけど、私の失態から出た皆の犠牲を踏み台にしたような思いだった・・・』

『・・・』

『だから、私は決めた・・・。水城さんや、蕨や、死んだ乗組員の犠牲を無駄にしないと・・・。同じ過ちを絶対に繰り返さないと・・・。どんな手を使っても・・・。』

膝を抱く腕に神通は顔を埋める。その横で明石は頬を流れる涙を拭うと、ゆっくり立ち上がって空に輝く満月を見上げた。美しく輝く青白い月の光が、今だけは少し憎たらしく彼女の瞳に映る。そしてその光りに包まれて丸くなっている神通の背中に、彼女がただの暴力的で我がままな輩では無い事を悟り明石は口元を緩めた。

『私ね、あなたの思った事は正しい事だと思うんだ・・・。そんな思い、誰だっと思ってたくないし、繰り返されてもいけない・・・。』

『・・・』

『でもそれって伝えるべき事であって、押し付ける事じゃないと思う・・・。』

明石の言葉に神通は無言で俯いた顔を少しあげた。月の光を反射する水面の光が神通の心を洗っていく。

『伝えるべき事……。』

『うん……。あなたはとても辛い経験をしたけど、そこから生まれた教訓も持つてる。それはあなたの意地や悲しみに左右されるのは、いけないと思うんだ……。』

『……。』

『あなたはそんな経験をしたからこそ特別だと思う……。それならあなたは全てを捨てて、精一杯、二水戦旗艦という職を真つ当するべきなんじゃないかな……。？』

明石の言葉を聞きながら神通は月を見上げた。眩しい程に空に輝く月に、神通は目を背けるようにして横にあった軍刀に手を伸ばす。霞む瞳で見つめるその軍刀に、神通は古い記憶を脳裏に浮かばせる。そしてそこに纏わる思い出が神通の頭を一通り駆け巡ると同時に、ふと顔を上げた神通は軍刀を月夜の海に投げた。空中で回りながら鞘から抜けた半身の軍刀はキラキラと光り、やがて静かな水音を立てて青白く輝く水面に呑み込まれていった。

『じ、神通姉さん……。その軍刀、水城さんの……。！』

咄嗟に発した那珂の声に、明石は神通を見た。神通は顔を上げて、軍刀が沈んだ水面を小さく笑みを浮かべて眺めていた。

『ふん……。もう、いらん……。いらんさ……。』

神通はそう言うと、那珂と同じ方向にいた明石に顔を向ける。すると那珂の目には、優しかった昔の姉の笑顔が映った。神通姉さんが帰ってきた、その想いに那珂は声を出さずに、再び涙を流す。

『ふん。変な奴だな、お前は……。』
『ふふふ。そうかなあ。』

神通の笑みに明石も応えた。神通にはもう狂気を纏った感じも、剥き出しの敵意も無い。優しく微笑む神通の笑みは青白い月の輝きに照らされ、絆創膏だらけにも関わらずとても綺麗な笑顔だった。

『なんで、お前はあんなに強いんだ……。？』

神通は再び海に視線を戻して声を発する。小さく笑いながらも、それは少し羨みの色が混じった声だった。明石は神通の問いに、小さくため息をしてから答えた。

『二水戦旗艦のあなたと、似たような物をもってるからかな……。』

『え……。？』

振り返る神通に、明石は少し首を傾げて微笑むと声を返す。

『私は帝国海軍工作艦明石だから……。そして軍医さんのつもりだから……。』

『……。私はそれを？盾？にしていたから、負けたのか……。』
『……。私も思いつき殴ったからなあ。』

月夜に静かに響いた明石の再度の応答の言葉は、それまでの重苦しい会話の雰囲気を瞬時に明るくさせる。するとそれは声を放つ二人の心へと即座に波及し、時を置かずして神通と明石は笑い合った。

『ふははは、お前と喧嘩しては命がいくつ有っても足りんな。』
『ふふふ、私も死ぬかと思ったよ。』

笑いながら明石は、座り込む神通に近づき手を差し出した。甲に青くアザができた明石の手、神通は同じく傷だらけになった自分の手を出して立ち上がった。明石は立ち上がった神通にニッコリ笑って口を開く。

『二人は、明日帰すよ。』

『ああ。安心してくれ。昔はもう全部捨てた。ありがとな、明石。』

交わった二人の傷だらけに手には優しくて、それでいて力強い信頼の念が込められていた。那珂は月の明かりに包まれる二人のその姿を脳裏に焼き付け、二人の間に新たに生まれた感情を心の底から祝福して微笑む。やがて那珂が悟ったその感情を示すように、明石の言葉に対して神通が答える。

『神通さん、これからも――』

『神通でかまわん。敬語もいらん。・・・お前とは旨い酒が飲めそうだ。』

神通もまた満面の笑みで言った。彼女は交わった手を離すと、座り込んで微笑んでいた妹に歩み寄ってしゃがみこんだ。

『那珂、ごめんな。本当にごめんな・・・』

『神通姉さん・・・』

那珂の頬に手を触れて謝る神通に、那珂は抱きついた。二人は明石より見た目も実年齢も10歳以上も年上だが、明石には不思議と幼い姉妹が再会を喜んで抱き合っている様に見える。神通も那珂も、優しい笑みを浮かべながら涙を流して抱き合っていた。

3人を月が静かに照らす。遙か昔からさし続けた青白く優しい光りは、その夜もただ黙って辺りを包んでいた。

第八話 「輝く色」

昭和14年10月1日。

西の水平線へと陽が落ち、青白い月の輝きが目立ち始める呉海軍工廠。

軍港内のある棧橋に横付けし、昨日に続いて行なわれた工作訓練を終えた明石艦^{あかし}。

忠^{ただし}の部屋では床に座って図上演習中の神通^{じんつう}、霞^{かすみ}、霰^{あられ}の三人と、それをベッドの上から見守る明石、那珂^{なか}の姿が有った。

兵棋として使う小指程の艦艇模型を霞と霰は正座して小刻みに動かし、その都度それぞれが頭を捻りながら紙に行動項目を書き出している。この兵棋に使っている艦艇模型は木彫りで、神通に相談された明石が艦内の木具工場に忍び込み、廃材を失敬して彫刻刀を片手に自作した物だ。

その一方、真剣に紙に鉛筆を走らせる二人の向かいに座る神通はベッドにもたれて脚を崩し、片手で持った物指しで肩をトントンと叩きながらその二人を眺めている。ベテランにして怖い上司でもある神通の厳しい視線に、霞も霰も取り組む表情は必死の色合いが濃い。

『・・・時間だ。』

やがて響いた神通の声に霞と霰が気まずそうな顔で鉛筆を置き、行動項目を書き込んだそれぞれの紙を神通に差し出す。神通は表情を変えずに相変わらず肩を物指しで叩きながら二人の提出した紙を手にとって読み始め、霞と霰は冷や汗を掻きながら定まらない視点で床を眺めて肩を張って正座している。

だが紙を読み始めてからしばらくすると、視線を髪に向けたまま

で神通が口を開いた。

『おい、霞……。』

『は、はい……。！』

『お前、襲撃目標に接近する際にどう近づくって？』

『は、はい……。え、えっと、目標の艦首に自分の艦首を向けて航行し、最短時間で……。』

『この馬鹿が……！』

『ひっ……。！』

神通の怒号と振りかぶった腕に、霞とその隣に座る霞の身体がビクンと震える。二人の身体はこの後に続いて問答無用で襲ってくる神通の拳をつい昨日まで何度も体験しており、反射的に二人は歯を食いしばって目を閉じる。

パシッ！

『お……。？』

思いつきりぶん殴られると思っていた霞は、額に受けた予想外に弱い衝撃にゆっくり目を開ける。そこには神通の手から伸びた竹製の物指しが、自らの額に乗る光景があった。その光景に硬直したままキョトンとする霞と霞に、神通は鋭い目つきで睨みつけながらも腕を戻していく。やがて再び物指しで肩を叩き始めると同時に、神通は手にした書類に視線を流して声を放つ。

『真正面の針路をとれば敵にしたら阻止はしやすい。阻止砲撃の調整は俯仰角だけで済むからな。そんな事もわからんのか？』

『あ、す、すいません……。！』

『こういう状況下での接近は敵を2時、もしくは10時方向に捉え

て接近するんだ。敵の砲撃調整を混乱させ、艦を真横に向けない事による投影面積、即ち命中率の低減。そしてこちらの雷撃体制への移行を同時に狙える。』

『は、はい……。』

ビクビクしながら俯いて返事する霞だが神通は彼女をそれ以上叱ろうとはせず、頭を掻いてため息をつきながら続ける。その声の内容は霞に対する叱咤ではなく、神通自身がその肌身越しに体験して得た教訓であった。

『まったく、私と同じ回答をしておって……。』

『は、はい……。？』

神通は首を傾げて頭を掻き、少しだけ眉をしかめながら霞に向けて語り始める。

『……。昔、前任の二水戦旗艦である鬼怒^{きぬ}さんに、私も同じ回答をして怒られた。』

『せ、戦隊長が、怒られた……。？』

『ふん。当時は私も馬鹿だったという事だ。その後の演習でも自論を通した挙句、大恥を掻いた……。』

初めて耳にする上司の過去、それも尊大で暴力的な姿勢を特徴とするこの人の事を鑑みると、かつての失態を惜しげも無く伝えてくれる上司の今の言葉が霞にはなんだか嘘のように思えてならない。無論、神通としてもド恥ずかしいかつての自分を引き合いに出す事に抵抗が無かった訳ではないが、それ以上に今日の彼女にはなんとか眼前の新兵に教育を授けようという使命感にも似た意識が満ち満ちていた。

『二水戦の者は同じ恥を二回も搔かいてはいかんど、霞。今言った事をよく覚えて、次に生かせ。』

『え？あ、は、はい……。』

優しい言葉をかけながらも頭を搔いて恥ずかしさを誤魔化す神通の仕草に、明石と那珂は顔を見合わせて小さく笑った。神通はその二人の様子に気づいていたが、特に憤りの表情を浮かべる事も無く到って無視して紙をめくり、今度はその紙に筆を走らせたもう一人の部下、霞へと声を放ち始める。

『霞……。』

『は、はい……。』

『お前、一体何時になったら攻撃行動をとるんだ？』

『あ、はい……。あの、その、先頭の艦が旋回を終えはった所で、針路を変更して……。』

『馬鹿者が！』

激しい剣幕で放たれた神通の怒号により霞もまた身を硬直して目を閉じたが、振り下ろされた物指しの衝撃に拍子抜けする。だが頭に物指しを乗つけられつつも、飛んできたお叱りの言葉に慌てた霞はすぐさま謝罪の声を返す。

『う、す、すみませー。』

『解ってる。お前は先行する艦との安全距離を取ろうとしたんだろう？』

すると霞の謝罪はその相手である上司の言葉で遮られるのだが、その際に放たれた言葉は奇しくも紙に書いた内容における霞の考えを極めて端的に捉えた物で、霞は二重の驚きを得てうわ言に近い音色の声で応じた。

『え……。あ、はい……。』

『判断は正しいがその為に隊形を崩すな。さらに後続の艦がいた場合どうするつもりだ？ この距離の強襲ならどうせ敵にはもう発見されてる。こういう場合は発光信号や無電を有効に使って連絡を取り合え。』

『あう、す、すみません……。』

是正された内容なるほどと理解する霞だが、何分にもそれを口にした上司の顔と声に対してまだまだ恐れという感情が燦^{くすく}っている有様である。そんな中でなんとか彼女の口から紡ぎ出された言葉はまたしても謝罪の言葉であったが、神通もまた先程の霞と同じ様にかつての自分の事を話題に上らせて霞への教育にしようとするのだった。

『ふん。だが夜間における艦隊運動に対し、僚艦同士での衝突を真っ先に懸念したその判断は正しい。仲間内で衝突など一番やってはいかん。二水戦からは絶対に衝突事故等は起こさせん。私のようにはなるな。解ったな？』

『……。』

『返事をせんか、馬鹿者！』

『あう、は、はい……。すみません……。』

呆けた顔で聞いていた霞の額に、再度物指しが振り落とされた。だが神通は物指しを持ち直すとすぐに顔から怒りの色を消し、霞と霞の行動に対しての講評を続ける。霞と霞は戸惑いながらも、神通の声に耳を傾けた。

そしてその光景を神通の背後から目にしていた那珂と明石も、どちらからという事も無くその光景に口元を緩める。

明石と殴り合った翌日、神通は部下全員に全てを話して土下座して謝った。神通は見栄も対面も意地も、そして悲しみも、その全てを捨てた。そして自分の持つ経験と知識の全てを使って、二水戦艦として部下を教育していく事を心に決めたのだ。言葉遣いは荒いが神通の講評は、何故いけないのか？どうすればいいのか？を的確に射抜く丁寧な説明であり、生まれたばかりの霞と霰は自分の至らなかつた点を難なく理解する事ができる。二人が対面する神通の顔には、もう獣のような表情は無い。そこにあるのは冷静沈着にして経験豊富な、そして花の二水戦の誇りと実力を全力で伝授しようとする立派な指揮官の顔だった。

後年、この神通に率いられた第二水雷戦隊は日本が敗北への道を転がり始めた時期にあって、ソロモン方面で攻勢に出た連合軍艦隊を恐怖のどん底に叩き落すのであった。

そんな中、重苦しい金属音を伴って扉を開けたのは部屋の主の忠だった。いつもの通り、紙袋にお菓子や飲み物を詰め込んでのお帰りである。

『よ、やってるね。』

狭い部屋に絆創膏や包帯姿の女性が5人もいる光景は不思議だ。

何だこりゃ？と思わず微笑む忠は、扉を閉めて机に紙袋を降ろす。さっそくその中身を机に出しながら、彼は口を開いた。

『差し入れだ。みんな、食べてよ。』

『あ、すいません森さん。今、教育中で――。』

忠の優しい言葉に感謝の念が耐えなかったが、那珂は思い切って遠慮した。せつかく姉が昔の優しさを取り戻し、しばらく振り見る部下への教育を止めたくなかったからである。だが意外な人物が、那珂の言葉を遮った。

『かまわん、課業時間外だ。それに私も、先任から教練を受けた時は同じ事を考えたもんだ。さあ、二人とも楽にしてご馳走になれ。』

そう言って霞と霰に薄っすらと口元を緩めた表情を向ける神通の肩に、明石が手を触れて声を掛ける。

『へえー、神通もそう思ったことあるんだあ？』

『ああ、早く終わらないかって時計をチラチラ見てたもんだ。なあ、那珂？』

『ふふふ、そうだったね。』

笑い合う上司達に、霞と霰もまたはにかみながらも笑みを浮かべる。

この面子で笑い合えるとはなんと幸せなんだろう。

眼前の様子からそんな思いを抱いた忠も、自然とその顔に笑みを作った。

人数が人数だけに忠の調達した物品の消費は早く、机の上からお菓子があれよあれよという間に消えていく。もちろんお菓子の山の一角を鷺掴みで持って行ったのは明石。那珂と神通はお酒を飲んでゐるが静かな飲み方で、助かったと忠は安堵する。実は明石が酒を飲むと声を張り上げて騒ぐので、同居人である彼はゆっくりと眠る事が出来ないのだ。

しかしその和気藹々とした雰囲気にも、忠にはちよつとした疑問が有った。何食わぬ顔で部屋の木霊する彼女達の会話に耳を傾け、ふと話し声が一段落した所で彼は思い切って声を上げる。

『なあ、神通。一つ聞いていいか？』

『ん？なんだ、森？』

神通はベッドに腰掛けて、持参した陶器の碗でお酒を飲んでゐる。突然の忠の声を受けてもその表情を変えず、組んだ長い脚をブラブラと動かしながら彼の声を待っていた。

『なんで、オレの部屋で兵棋演習してるんだ？』

忠の問いに、碗を口に当ててクイツと一口飲む神通。やがて彼女は小さくため息をしつつも笑みを浮かべて、一言。

『酒と菓子が調達できるからだ。』

アンタら艦魂は、他人の財布をなんだと思ってるんだ？

そんな言葉を脳裏に浮かべながらも、決してそれを口に出す度胸の無い忠は苦笑いして俯く。だが神通は彼のその態度を大いに笑いながら言った。

『ふははは。どうせ航海手当や訓練手当で儲けてるだろ？このぐらいいいじゃないか。』

『そうだ、そうだ〜！』

『いつもおおきに、森さん。』

神通の言葉に乗っかる明石と霰。

そういうセリフは自費で飲み食いしてから言ってくれ。

悲痛な忠の思いだが、言って彼女達を怒らせると後が怖い。故に忠は愛想笑いして誤魔化すしかなかった。

『・・・う〜ん？』

突如、神通はそう声を上げると椅子に腰掛ける忠の前に近寄り、その顔をマジマジと覗きこんだ。ほろ酔いしているのか、神通の両頬がほのかに赤い。ついこの間は鬼の形相だった神通だが、今の彼の瞳に映る彼女は中々に美人なお姉さんだ。忠はそんな神通の視線に耐えれず、ちよつと顔を背けながら弱々しく声を返す。

『な、なんだい・・・？』

『へえ〜、こうやって見ると割と良い男だな。』

『ええ！？』

その瞬間、まるで時間が止まったかのように部屋の空気が凍りついた。神通の口からそんな言葉が出るとは実の妹の那珂ですら想像できなかったらしく、彼女は口に碗をつけたまま硬直している。だ

が神通はそんな空気も露知らぬ顔で、今度は足元に座る部下達に向かって顔を向けた。

『おい、霞。お前、明石との訓練航海での射撃成績は五分って言うてたな?』

『え? ええ、まあ・・・。』

『ふうん、じゃあ腕もよさそうだな。どうだ私の艦にこないか?』

『ちょ、ちよっと、神通、何言ってるのよ!?』

神通がそこまで言うと、ベッドの端でその声を耳に入れた明石が慌てて忠と神通の間に割り込んだ。少し眉を吊り上げて口を尖らせた表情の明石だが、対する神通はすっ呆けた顔で首を傾げる。

『・・・私の艦は単装砲塔が艦首から艦尾まで7基もあるんだ、分火指揮なんかする時の為にも、腕の良い砲術士が欲しいんだよ。くれ、明石。』

『ダメに決まってるじゃない!!』

『・・・、ふうん、そうか。』

眉を吊り上げる明石によって拒否され、神通は渋々ベッドへと戻って行く。その間、明石はチラッと忠の顔を見たが、忠が視線を向けるとまた視線を逸らした。ベッドに腰掛けた神通はその右手に再び碗を持ち、那珂から酒を注いで貰っている。

部屋の中を奇妙な静寂が支配し、ちよっただけ陰悪になってしまった感のある空気が辺りに立ち込める。そしてそんな部屋の雰囲気は何とか解そうと、明石の足元で脚を崩す霞が声を発した。

『せ、戦隊長。あの、森さんは明石さんにとっては大事な人だから・・・。』

『まあ、そうだろうな。私も水城さんは大事だった。』

『そ、そうですよ……』

『でも、私にとっては父みたいな人だったが、この二人は親子には見えんぞ？』

『神通！！』

『怒るなよ、明石。かといって親密な仲な訳でもないんだろ？森には黙って私の所に喧嘩しに来たぐらいだし……』

『なんだって……？』

『……！！』

『じ、神通姉さん、失礼でしょう！？』

那珂の言葉にも、神通は首を傾げて酒を飲む。

だが実は神通の言った事と同じ疑問が、忠にも有った。神通と衝撃的な出会いをしたあの日、忠が夕食から戻ると部屋には泣き疲れて眠る霞と霰しかいなかったのだ。明石の行方を聞いても解らないという二人の言葉を受け、忠は艦内のあちこちを見回ったのだが彼女の姿は無かった。やがてすっかり消灯時間を過ぎた頃になって、当の明石は顔の傷を増やしてひょこりと帰ってきたのである。『もう大丈夫だよ。』と上機嫌で言う明石だったが、忠が訳を聞いても彼女は教えようとしなかった。翌日の朝になって神通が現れ、いきなり頭を下げてきたので忠は何がなんだか解らずに許して今に至るのだ。

そしてもう一つの疑問を忠は持った。

そういえばオレと明石ってなんなんだ？

そう忠も考えた刹那、明石は部屋の扉を勢い良く開けて飛び出していた。そして目の前を横切る明石の横顔に、彼は目の辺りで光る物を一瞬認めていた。

『明石……。』

力無く呟く忠を他所に、神通は俯いて目をつむりながらも、不思議と笑みを浮かべて酒をゆっくり飲んでゐる。だが自分の言葉で状況を変えたことに対してあまりにも無関心な神通に、妹的那珂は神通の肩を擦って問い質す。

『神通姉さん！！なんであんなー！』

『ふん。森、追いかけてやれ……。』

神通は静かながらも力の籠った声で、呆ける忠に諭すように話しかけた。そして彼女の口から放たれる言葉は、ゆっくりと忠の気持ち揺らし始める。

『え……。？』

『お前は明石の事、どうでもいいのか……。？』

『他の艦への転属なんて、士官じゃ珍しい事じゃないだろ。お前、そうになった時どうするんだ……。？』

忠はその言葉に意を決して部屋を出て行った。しんと静まり返った部屋に、神通が酒を注ぐ音が木霊する。那珂はそんな神通の行動に少し思い当たった事があった。姉の顔を覗きこむ様にして背を丸め、那珂はその事を確かめる。

『神通姉さん……。わざとあんな事を……。？』

すると神通はそれまで閉じていた瞼を持ち上げ、那珂に視線を流して寂びそうに微笑んだ。

『あの二人には別れという物を味わって欲しくない……。その為

には二人でよく理解しあう事が必要なんだよ……。』

明石は艦首の旗竿の下で膝を抱いて海を眺めていた。

月夜に響く波の音、そして水平線の所々に光る艦船の灯火がどこか寂しい。細い目でそれを見ていた明石は後ろに走り寄る足音に気づいたが、その主に見当がついた彼女はそのまま海の向こうから視線を逸らさない。

『明石……。』

『……。』

忠の声に明石は膝を抱く腕に力を入れて縮こまった。首の後ろで結った明石の髪が、水に浮かぶ根無し草のようにフラフラと風に揺られる。そんな彼女の後姿を目にしながらも、忠は脳裏に抱いていた彼女への疑問を投げつけてみる事にした。

『なあ、どうして神通の所に行った事、話してくれなかったんだ？』

『……。森さんに言えば、止めたでしょ？』

『当たり前だろ。』

『……。』

『まったく、あんなに傷だらけになって……。』

『……。ふ、ふふふ。』

忠のトーンの低い真面目な声がそこには響いていたが、明石はそんな彼の言葉を受けて、肩を震わせていきなり笑い出した。

『・・・？』

『心配してくれた？』

立ち上がりながら明石はそう言うと、呆ける忠に顔を向けて笑みを返す。明石のその笑みを忠は不思議に思っ眉をしかめるが、明石はそんな彼の表情を無視して背を向け、夜空を見上げて話し始めた。

『私ね、佐世保から呉に回航されてくる時にね、大きな客船とすれ違ったことあるんだ。』

『客船？』

『うん、名前はわかんないんだけど。でもとっても大きくて、白と黒の塗装で綺麗なお船だったなあ。』

『・・・』

突然と明石が語り始める自分の過去。それが自分の疑問に対してどう結びつくのかが忠には理解できなかったが、今まで知らなかった明石の過去を彼は素直に知りたいと願う。口を噤んで脚を崩す忠を背に、明石は続けた。

『でね、たぶんそのお船の艦魂だと思うんだけど、舳先に綺麗な和服を着た女の子が乗ってたんだ。私に気づいてお辞儀してくれてね、私もお辞儀をかえしたんだ。』

『・・・』

『その時思っただ。なんで私はこんな地味な色をしてるんだろう？なんで私はあんな綺麗な服じゃなくて、黒一色の軍服なんだろう？って・・・』

『明石・・・』

『指をくわえてそのお船見ながら、呉に入っただ。でもね、そこ

には私と同じ色の艦魂が一杯いたから、そんなに気にはしなかったんだ……。でも違ったんだ。みんな同じ服を着てるけど戦闘艦でしょ、工作艦って私一人だけだった。だから誰も話しかけてくれなかった。辛かったなあ、みんな強そうな大砲や魚雷を持ってるのに、私の艦って起重機ばかりなんだもん……。』

初めて知った明石のちょっと昔の記憶。だがそれに微笑ましい感じは覚えられず、むしろ自身と仲間の違いをまざまざと見せ付けられたという明石を、忠はとても可哀想に思う。だが哀れみの視線を向ける彼に反して、明石はどこと無く明るい声で続けた。

『なんで私はこんな姿で生まれたんだろう？って思った……。』

明石は手を後ろで組んで、夜空を眺めたままだった。だが忠の瞳に映る寂しそうなその背中とは裏腹に、夜空が照らす明石の顔では口元が緩んでいた。

『いつつもそう思いながら測距儀の上からみんなを眺めてた。そんな時、森さんが測距儀の上に出てきたんだよ？』

『あ、ああ。あの時か……。』

『森さん、そこで私に言ってくれたよね？長門さんや赤城さんにも出来ない様な事が私にはできるって……。』

『あはは、そうだー。』

『嬉しかったなあ。とっっても……。』

『……。』

『それから森さんとちょっと過ごして、こんなにも私って良い艦なんだって思うようになったんだ……。』

そこまで言ったところで、明石は身体を艦首から忠に向ける。改めて忠に見せた彼女の笑みは、忠が浮かべていた哀れみの表情を失

わせるほどに幻想的で綺麗な笑み。思わず息を飲む忠だが、明石は構わず続ける。

『私ね、それが全て他の艦魂にだって、胸を張って自慢できる事だと思ってる……。そして森さんが言ってくれた工作艦としての私も、霞が言ってくれた軍医としての私も……。』

『……。』
『私ね、神通さんの一件で霞と霰が泣きついてきた時、それを神通さんに否定されたような気がしたんだ……。』

『那珂さんの話を聞いてから、余計そう思った……。だから、私一人で行ったんだ。』

『明石なりの誇り、か……。』

『どうかなあ、そんな大きな事は考えてなかったよ。でも……。』
『でも……。？』

『……。絶対に、譲りたくはなかった。私にそれを教えてくれた森さんや、霞や、霰や、乗組員の皆の事だったから……。』

いつの間にか明石が立派な帝国海軍艦魂になっていた事を、忠は彼女の言葉から理解する。彼の目の前にいるのは、れっきとした帝国海軍工作艦明石の艦魂だった。己の在り方に誇りを持ち、それを身分や恐怖で左右させなかった明石の決意。それを強く胸に秘めたからこそ、彼女は神通とすらも殴り合えたのだった。

そしてそんな明石の心情を察すると同時に、途端に忠は同じ様な想いを持っていない自分がなんだか恥ずかしくなる。

『なんか、ごめんな。明石。』

突然の忠の言葉に、明石は僅かに瞳を見開いて彼の顔をみつめる。忠は苦笑いして頭を掻きながら、自身の想う所を正直に言った。

『正直、今までそんなに今の自分の立場を誇れるように思ってた……』

『ふふふ、今は？』

『オレ、この艦の砲術士になれて良かった。誇り高い工作艦明石乗組みだからな、胸張ってこれからがんばるよ。』

明石はその言葉に安堵したかのように胸を撫で下ろし、空に煌々と輝く月に負けない美しい笑顔で微笑んで、艦首に向かってゆっくり歩き始めた。その緩んだ口元から漏れる笑い声に忠もやっと笑みを浮かべる事が出来たが、明石の笑い声はすぐさま治まる。

『ふふふ、そっかぁ。―あれ？』

『ん？どした？』

『あはは、あそこ見て。』

明石が笑って指差したのは、艦首のすぐ下にある栈橋の倉庫群の隅だった。見れば2人組の水兵と5人組の水兵が対峙して、何やら大声で言い争いをしている。

『テメエ等、明石艦の水兵だろうが！？軍艦の水兵に、肩ぶつけないで詫びの一つもねえのかよ！？』

『こちらら軍艦伊勢乗り組みだぞ！？テメエ等みてえな特務艦と一緒にしてんじゃねえよ！！』

『上等だこの野郎！！明石魂を見せてやらあ！！！！』

聞き知った声でそう叫んだ2人組の内の一人は、5人組の水兵と取っ組み合いの喧嘩を始めた。忠はその光景にため息をして額を抑えた。なぜなら明石艦内において、渦中のその人物を誰よりも知っているのが自分であったからである。

『はああ……。やってやがる、あの馬鹿……。5対2で……』

『明石魂か……。ふふふ。』

弟の鉄砲玉ぶりに呆れる忠を他所に、明石はその言葉に微笑んだ。

『こらあ、お前等!! 何やってんだ!?!』

そう叫んで諍いを止めようと、艦中央に掛けられたラッタルに走っていく忠。その背中を見つめる明石だが、自身の乗組員による殴り合いを前にしつつも、その顔に浮かべた笑みを絶やす事はない。

明石は嬉しかった。

みんな、明石艦乗組みに誇りを持ってる。

脳裏に浮かんだ言葉に、明石は口元を緩めて夜空を見上げた。そこに在るのはキラキラと無数に輝く星達。

大小や色の違いこそあれど、光りを放たぬ星は無い。自分の光る色は何色なんだろう？

そんな思いで見上げた満天の星空は、宝石のように綺麗だった。

第九話 「型破りな中將」

10月の終わりともなると暑さはすっかり消えてくる。だが雪国出身の忠には、少し寒いくらいがちょうど良い気温だった。昨夜通り過ぎて行った台風の影響か、昼下がりでと言うのに今日の空は灰色の雲に覆われている。雨こそ降らないが、時折強めに吹く風が穏やかな瀬戸内の水面をざわつかせる。

やれやれ、過ごし易いのにこんな天気か。

そう思いながら忠は曇天の空から正面にある機銃に目を移した。

艦橋右舷の1番機銃にて、忠は抜き打ちの状態確認をしていた。

これも砲術士たる彼のお仕事のウチの一つである。機銃や主砲、測距儀等の普段の点検や清掃は配置の人員がする物であるが、報告として伝えられるのは書面ばかりである。時にはこうして管理する立場の者がでばってこっそり確認するのだ。汚れや異常の有無を、瞳に力を込めて細かいところまでしっかりと確認する。

いざ戦闘になってしまった時、明石艦^{あかし}を實力を以って守るのは明石艦砲術科の責務であり、使命である。不作動、誤作動等があつては艦の防御は疎かになってしまう。故に当然のように、忠の目にも力が入った。

いつもなら明石も彼の隣で手伝ったりしているのだが、ついさっき彼女は艦内に戻っていった。その理由は、堀田艦長が艦を降りて行く光景を二人で見たからだ。堀田艦長は上陸日だったらしく、艦橋から出てきたところで勤務中だった忠に声を掛けて行った。『風呂屋に、床屋に、食い物屋だ!』と嬉しそうに笑ってラッタルに向かう堀田艦長の顔に羨ましい限りの忠だったが、堀田艦長の歩く姿に明石はニヤリと笑うと、頭の上に両手を振りかざして白く淡い光

りを放った。その手の中に出てきたのは石鹼とタオルが入った風呂桶。

やがて明石は『お風呂〜！』と言い放って一目散に走り去っていった。もちろん男の裸体で溢れかえる士官用浴室や兵員用浴室で風呂に浸かる様な真似は彼女には出来ない。明石は常に堀田艦長の目を盗んで、一人でのんびり入れる艦長用浴室を使っているのである。それも節水を厳しく課せられる艦体勤務において、彼女は毎日風呂に入っている。忠のような士官ですら風呂も洗濯も1週間に1回程しか出来ない事を考えれば贅沢な事である。

いくら自分の艦とは言え、とんでもない奴だ。

ついさっきまでの記憶とそこに纏わる相方の行動を思い出し、忠は少し口を尖らせながら機銃の確認を続けた。鈍い光を放つ銃身、手垢が綺麗にふき取られた手輪、銃座の隅に置かれたバケツと雑巾など、確認する物はどれもこれもすっかり整頓されている。『おし。』と小さく呟いて立ち上がった忠の表情は明るかった。

その時、ふと聞こえてきた電動機特有の低い音に気づいて艦尾の方に視線を向けると、艦中央にある起重機が稼動しているのが見えた。けたたましい機械音が発せられる艦内の工作区画と比べると、ゆっくりと静かに動く起重機はのんびりしていて落ち着く。

天蓋が開いた工作区画から巻き上げられた起重機のワイヤーには、水密扉が3枚程ぶらさがっている。やがて最上甲板と棧橋の下にて声を上げる作業員達に誘導されて、空に浮かぶ雲のようにゆっくりと空中を渡る水密扉に、忠は自身が乗組んだ艦の特別さを思い知る。

明石艦工作科の苦労の結晶であるそれらの品は小さな部品だが、そこから簡単に調達できるような物では決して無い。いざ戦争になった時、小さな部品の損傷を理由に各々の艦が前線を離れるようでは、艦隊として、引いては帝国海軍として十分な戦力が維持できないのだ。そして現在、日本領とされる南洋の島々、即ちトラックや

パラオ、サイパン等の泊地には大きな工廠が無く、沢山の修理資材の備蓄と修理用工作機械、そして何よりそれらを扱う専門的な技術を持った人員を調達、配置する事は一個艦隊を編成する事よりも難しい。華々しい連合艦隊の艦艇達からは想像もつかない程に地味で見栄えのしない後方支援体制であるが、決して昨日の明日で設定できるような物ではないのだ。

そんな中、現地に在って小規模な修理に参加するこの明石艦は、それなりに海軍からは期待されている。よく見ると棧橋の下では、将校の格好をした数名の男達が作業を見守っている。やがて彼等が降ろされてきた水密扉を触りながら頷いている所を忠は認め、どうやら水密扉の仕上がりは上々らしい事を彼は悟った。

竣工から既に2ヶ月近く訓練漬けだった明石艦だが、その時間も無駄ではなかったのだ。

『ん・・・？』

その時、忠は起重機がある辺りの甲板の右舷側に奇妙な格好をした人物を見つけた。

忠と同じ黒の第一種軍装を着ているが、その人物は上着の前を開いて白いシャツが見えていてしかも軍帽を被っていない。そして上着と共に風に揺られてバサバサと靡く、黒くて腰までであろうかという長い髪。その人物は天蓋の手摺に寄りかかってじっと艦内を覗き込んでいるが、周りの水兵や作業員達はその目立つ風貌の人物をまるで無視している。

あの人はもしかや？

そう思いながら、忠はその人物に近づいていった。

『や、やあ。』

忠が歩み寄っても全く気づかない様子のその人物は、声を発した忠に靡く長い髪を抑えて顔を向けた。

長い脚にスラッとした体格、小さな顔で身長は明石と同じ位だが、神通や那珂のように20代半ばから後半ぐらいの顔立ちの綺麗な女性だった。声を掛けられた事に少し驚いている表情の彼女から、忠はなんとなく彼女の正体に察しがつく。少しだけ警戒するような彼女の眼差しを軟らかくする為、笑みを浮かべて忠は言った。

『艦魂さん、だよね・・・？』

『あら、見えるんだ？』

それは落ち着いた感じのしゃべり方だが、明石と同じように少し男っぽい言葉遣いで彼女は答えた。一見すると綺麗なお姉さんだが、帝国海軍軍人にしては服装があまりにも型破りすぎる。

これはきつとまた、相方に負けず劣らずのじゃじゃ馬に違いない。

そのおかしな格好の女性に、忠は自身の相方の厄介な面を重ねてしまうが、別に彼は眼前の女性に好感を抱かなかった訳ではない。明石よりも遥かに大人びた顔立ちを持つ彼女はハキハキとした物言いなながらも声が明るく、なんとも朗らかで優しい表情をしている。男兄弟の長男として育ってきた忠にとって、そんな彼女の放つ雰囲気はどこか姉という言葉を意識させており、初対面にも関わらずに彼の口を硬直させるような事は無かったのである。

『あゝ、もしかして森クンかな？』

『え？オレの事、知ってるの？』

突然自分の名を出された事に忠は驚く。彼の記憶にある艦魂と人間の知り合いにおいて、こんなぶっ飛んだ格好をした人物は全く心当たりがないのだ。

首を捻る忠を小さく鼻で笑った彼女は、美しい笑みを作って彼に正対した。

『うん、那珂から聞いてるよ。神通の事で迷惑かけちゃったみたいだね。』

『え？あ、ああ……。』

笑顔で頷く彼女は、どうやら那珂と神通の姉妹とも顔見知りらしい。そして3姉妹である那珂や神通の事を思い出した忠は、この女性の名前に関して心当たりが頭に浮かんた。だが忠の瞳に映るその女性はその割りには神通や那珂と顔が似ておらず、彼の放つ声にはどこか明るさが欠けている。

『あゝ、もしかして川内艦^{せんたい}の艦魂かな？』

『ううん、違うよ。まあ、アタシはあの二人の上司かな。』

『あ、そうなんだ……。』

予想が外れて呆ける忠を横目に、彼女は再び天蓋を開けた艦内に顔を向けた。機械音が響いてくる天蓋下では、新たな鉄板や金属管がワイヤーに束ねられて起重機に運ばれるのを待っている。彼女はそれを優しい笑みで眺めながら、視線をそのままにして忠に対しての声を放つ。

『あれ、アタシの部品なんだ。昨日、台風きたじゃない？アタシ、柱島にいたんだけど、ブイが艦首とぶつかっちゃってさあ。』

どうやら先程の水密扉を初めとした明石艦から運び出されている部品は、彼女が艦魂として宿る艦船の物らしい。その事を理解する忠を横に、起重機の旋回する様子を彼女は手摺に捕まって静かに見ている。

自分の部品が作られる現場を見ろという感覚はどういう物なんだろう？

忠には解らない感覚だが、彼女は相変わらず天蓋下を眺めて優しく微笑んでおり、とりあえじは悪い気分を湧かせてはいない事を彼は理解する。そして彼のそんな考えを証明するかのように、彼女は小さく何度か頷きながら言った。

『いやゝ、こうやってアタシ達の部品で作られてるんだねゝ。』

彼女の声は感謝の念と、珍しい光景を見た驚きが混じった声だった。少し強めの風が吹いて彼女の長い髪が軍艦旗のように靡くが、その隙間から覗く彼女の表情はやはり笑み。子供っぽさが色濃い明石の笑みと比べると、彼女のその笑みは大人の女性の魅力が備わっており、思わず忠も見とれてしまう程に美しかった。

『はは、初めて見たかい？』

忠は彼女のそばの手摺に寄りかかって言った。元来、彼は女性に対する接し方に関しては経験深いとは言えない方だが、先程から彼女の口から漏れてくる重苦しい感じの欠片もないその話し方は、いつの間にか忠の心のどこかにあった警戒心を薄れさせていた。

『うん。こうやって見ると、結構手間暇かかってるんだねえ。いつ

も用意された物を取り付けるだけだから解んなかったなあ。明石艦で部品製造をするって聞いたから見に来たんだけど、来てよかったよ。』

奇妙な格好の彼女の言葉だが、自分が乗組んでいる艦を褒められるというのは嬉しいものだ。彼女は神通や那珂の上司に当たらしうが言葉遣いは二人よりもかなり崩れており、その身嗜みもあいまって遊び人のようだ。恐らく階級も立場も自分や那珂、神通とそれ程離れている訳ではないだろう、と思った忠の口元も自然と緩む。忠には何よりそのしゃべり方がとても話しやすかった。

『あはは、そうか。』

『あ。そうだ森クン、明石はどこか知らない？まだ会ってないんだ。』

『あゝ、明石は風呂に行ってるよ。』

『あ、そうなんだあ？』

残念そうな感じを声に忍ばせながらも、彼女は忠に笑みを向ける。この時、その話しやすい人柄と神通や那珂の上司であるという彼女に、忠は相方の破天荒な性格を直してもらえないかとふと思った。

いくら明石でも、あの神通の上司にあたるという彼女の言葉になら従うに違いない。

そんな言葉を脳裏に過ぎらせながら、忠は隣にいる女性に向かって口を開いた。

『そうだ、明石に君から言ってやってくれないか？明石の奴、毎日風呂にはいるんだよ。これじゃ節水を掲げ……。』

『あはは、森クンはまだ若いなあ。アタシ達はこれでも女の子なん

だよ？女の子って身嗜みには特に気を使うのよ。まだまだ修行不足だねえ。』

帰ってきた意外な返事に忠は驚く。もちろん明石を憎く思っている訳ではない忠であるが、艦内における節水を憂いだ彼の考えその物は決して間違っていない。米を研ぐ際の水ですら海水を使用している艦船生活にあつて、飲料に耐える真水というのは宝石並みに貴重なのである。少尉に任官したばかりの新米士官である忠だが、その水を大切にするという考え方は兵学校にて徹底的に叩き込まれており、遠く東南アジアまでに及んだ練習航海ではその事を肌身を通して思い知っているのだ。

ついでに人間の女性では無い事も指摘しようとした忠だったが、それを言って連合艦隊の全ての艦魂達とドンパチする事を恐れて口を噤んだ。特に神通辺りを怒らせては本気で殺されかねない。

それ以上声を返せない事から不満げに口を尖らせて笑みを歪める忠だが、彼女は怒った様子も無く、苦笑いする忠に優しく微笑んだ。そのどこか明石にも似た彼女の雰囲気、忠はすぐに気を取り直して声をかけた。

『ねえ、君のその服どうしたんだい？ボタン取れちゃったの？』

『うん？ああ、これえ？』

彼女は忠の問いにそんな声を返しながら、上着の縁を持って開いてみせた。明石とは随分違い、シャツの上からでも解る丰满な胸を持った彼女の体つきがあらわになる。忠は赤くなった自身の顔を悟られまいと、彼女から艦内に視線の先を変えた。胸の高鳴りが収まらないながらも会話を途切れさせないように、忠は必死に声を発する。

『あ、ああ。その、なんていうか、随分と楽な格好だね？』

『やゝ、よく言われるよ。でもちゃんと着るのメンドくてさあ。』

そのぶっ飛んだ回答を笑いながら口にし、頭を掻いて返事する彼女。『貴様それでも帝国海軍軍人か! ?』等と怒号が響いてもおかしくない回答だが、それに対して何か言えるほど今の忠は冷静ではなかった。脳裏に残る彼女の胸を振り払おうと、引きつった笑顔を返す事が今の彼には精一杯である。

『あ、あはは・・・。』

こんなにも情けない男だったか、オレは？

不甲斐ない自身の姿を指す、そんな言葉が脳裏に浮かんだ忠は小さくため息をした。

『あ、いた。森さゝん。』

艦橋から響いてくるその言葉に忠は顔を向けた。

その声の主は、湿った髪と少し湯気を纏った体の明石だった。顔もほんのりと赤くていかにも風呂上りという感じが伝わってくる。明石は少し冷たい外気に涼んでいるのか、心地良さそうに笑いながら忠の所に向かって歩いてきた。

『あ・・・れ?』

歩み寄ってくる明石だったが、やがて忠の後ろに立つ女性を目に

して不思議そうな顔をしている。

『ああ、明石。』

『あ、君が明石かあ。こんにちは。』

忠の言葉に続いて彼女も声を発した。彼女の言葉から察するに明石とは初対面らしいが、明石は忠の袖をちよいと引っ張り、口元を忠の耳に近づけて小さな声で言った。

『森さん。だ、誰、この人？』

『さあ、神通や那珂の上司らしいぞ。』

『じゃあ、第二艦隊の人かな？でもスゴイ格好してるね。』

さすがに彼女の軍人らしくない格好には、明石ですらも疑問を持ったらしい。だがそんな事を知ってか知らずか、こそこそと小さい声で会話する二人を瞳に移した彼女は口元に手を当てて笑った。

『あはは。そっかあ。名前まだ言ってなかったっけ。』

その声に顔を向ける明石と忠をクスクスと笑いながら、彼女は寄りかかっていた手摺から舷側に少し歩いて海の向こうを指差した。

『私の艦、あれだよ。』

その指先の向こうにあった艦影に仰天し、忠も明石も目を丸くして思わず声を上げた。

『ええええええ！！』

『う、うそお……。』

彼女の指差した方角に停泊する艦。

均整の取れた前後2基づつの連装砲塔、忠も子供の頃に良く描いたS字煙突がまとめられた単一の煙突、連合艦隊司令長官座上进行す高々と後部マストに掲げられた中将旗、世界最大を誇る41センチの巨砲。それは間違い無く、帝国海軍連合艦隊の旗艦であった。

『き、君が・・・！？』

『へへーん、驚いた？』

忠の言葉に、彼女は長い髪を耳元にかけてながら笑って声を返す。そして今まで髪に遮られて見えなかった彼女の襟章がキラリと光った。上下の線に挟まれる二つの輝く星、それは帝国海軍中將を示す襟章だ。だらしな性格好に無帽で、しかも片方の脚に体重をかけてだらりとしたまま、彼女は右手を頭にちょこつとつけて敬礼してみた。白い歯を見せてケラケラと笑う彼女は、呆然とする明石と忠の顔を楽しむようにして明るい声を放つ。それと同時に薄くなった雲の切れ目からは、彼女に向かって陽の光りが差し込んだ。

『あははは、帝国海軍連合艦隊旗艦の長門ながとだよん。よろしくう。』

それは明石が正式に連合艦隊編入を迎える11月を目前にした、ぶっ飛んだ出会いだった。

第九話 「型破りな中將」 (後書き)

明石艦の誕生編である第一章はこれで終わりです。
次回からは正式に連合艦隊付属として編入された明石艦のお話となります。

長門を初めとした上位の軍艦達も出てきますので、これからも明石艦物語をどうかよろしくお願いします。

霞『せ、戦隊長、お連れしました!』

神通『うむ。』

忠『ふう、やっと読者様にも作者を紹介できるな。』

明石『私達の事は解ってもらえてると思うけど、作者は自分の事あんまり書いてないからね。』

神通『ふん、あんな稚拙な文章で伝わる物か。』

那珂『じ、神通姉さん。一応、生みの親なんですから……。』

神通『ふん、私は大いに不満だ。』

霞『あ、あの……。』

霞『霞姉さん、どないしはったんどすか? はよ出してあげてくださいな。』

霞『そ、それが、その……。』

神通『さっさとせんか! まったく……。』

霞『は、はい! で、では……。』

、(; 旦)ノ

明石『・・・何この人?』

那珂『これが、作者……。?』

忠『はぁ~~~~……。』

そ、そんな顔するなよ、(; ' Д)ノ

神通『帰れ、ねらーが!!』

ね、ねらーってΣ (。Д。111)

霞『だから出したくなかったのに……。』

霰『これはがっかりどすなあ……。』

みんなヒドイお、(; ' Д)ノ

忠『しかもVIPPERかよ……。』

、(; ' Д)ノ

那珂『と、とりあえず自己紹介を。ね、作者さん?』

那珂は良い子ね(つД)

うみゅ、自分が作者だお、(ー、)ノ

バキ!!!!

痛いお、神通(つД)

神通『帰れ!!』

明石『まあまあ、神通、話だけでも聞いてあげようよ。』

神通『こんな作者いらん!』

霞『せ、戦隊長く……。』

那珂『え、えくと、そうだ作者さん!』

なんだい?(つД)

那珂『そ、そうだな。あ、こういう小説書くくらいだから軍艦は詳しいんですね?』

ま、まあそれなりには、(; 丱)ノ

那珂『え、えっと好きな艦はなんですか?』

忠『いきなりオレがカヤの外になる質問だな。』

明石『いじけないの、森さん。もちろん私達が乗ってる艦にきまつてるじゃない。』

神通『ふん、好き好んで出すくらいだ。どうせ私だろう。』

霞『わ、私かなあ・・・?』

霰『きつとウチどすわ。』

那珂『聞いた本人だけど私であって欲しいな・・・。どうなんですか、作者さん?』

そらもちろん・・・、(ー、)ノ

一同『・・・。』

扶桑に決まってるお、(ー、)ノ

バキ! ドガ! ガン!

な、なにをする、みんな!? Σ (。 丱 111)

神通『やっぱり帰れ!!!!』

明石『なんでヒロインや主人公と関係ない艦なのよ!!』

忠『しかも登場してねえし・・・。』

扶桑良いじゃないか、扶桑、(; 丱)ノ

霞『な、なんで扶桑さんなんですか・・・？』

あのくびれた艦橋がグラマーな女性のようにでたまらんお（＊、
＊）

霞『ブサ専なんだ・・・？』

なにい！？、（ Δ ）ノ

明石『森さん、もう私ヤダ。この作品での・・・。』

忠『オレに言うなよ・・・。』

神通『お世辞にもあの艦橋を褒める奴がいるとは驚きだ・・・。』
霞『まだ、ウチのほうが美しい艦どす。』

那珂『べ、弁護のしようがない・・・。あはは・・・。』

ダダダダダ！！

あ、扶桑だ！（ $\cdot$ ・ ω ・、）

明石『やば！森さん逃げよう！』

忠『よし！二水戦、後はまかせた！』

神通『じよ、冗談ではない！二水戦は退却だ！』

霞『ひ、ひえ〜〜！』

霞『こ、これはアカンどす！きゃ〜〜！』

那珂『す、すいません作者さん！わ、私もこれで・・・！』

え！？Σ（ $\cdot$ 。 Δ 。111）

ヒュウウウウウウウ〜・・・

ま、待ってよおゝε||||、(；
ちゃんちゃん 丌)
ノ

そんな感じでかんばってます。

第一〇話 「明石艦、連合艦隊編入」 (前書き)

こんにちは。

工藤傳一です。

第二章は明石艦の連合艦隊正式編入から内地活動時代を書きます。
舞台も呉から日本各地に広がる予定です。

第一章では割と否定的な事ばかり書きましたが、とりあえず水に浮ける所と資材さえありやなんとか活動できちゃう明石艦をやっぱり
凄い艦だったんですね。

では、これからも明石艦物語をどうかよろしくお願いいたします。

第一〇話 「明石艦、連合艦隊編入」

昭和14年11月。

この月は連合艦隊にとって人事、編成が抜本的に見直された忙しい時期だった。新たに配属される人員に新たな配属先に旅立っていく人員、編入されてくる艦船に退役していく艦船。出会いと別れが一杯あった時期、それは明石艦^{あかし}とて例外ではなかった。

月初めの11月1日。

忠^{ただし}が配属された先での初めての特務艦長であった、堀田幸一大佐^{ほった こういち}が明石艦を離れる事になった。呉鎮守府幕僚への転出という。前日の送別会では、『笑って送ってくれ。』と言っていた堀田特務艦長だったが、ラッタルを降りる際に目の縁に涙を湛えていた。明石艦初代艦長であった堀田特務艦長の人柄はまさに親父その物で、見送りの為に整列した水兵にも泣く者が相次いだ。豪快に酒を飲んで歌を歌う堀田特務艦長の背中、ラッタルを降りて遠くなっていく彼のその背中に、忠も感極まって目が熱くなった。

そして入れ替わりで第二代明石艦特務艦長に就任したのは、宮里秀徳大佐^{みやうとく}であった。宮里特務艦長は小太りのクリツと丸い目をした人で、香取型練習巡洋艦の香取艦^{かとり}、鹿島艦^{かしま}の艤装委員長から転出されてきた。階級の割りにとても腰の低い礼儀正しい人で、『よし、思いっきりやってみなさい。』と言うのが口癖だった。決して気難しい人ではないのだが、口数が少ないこの人は鹿児島出身であるからか、どこことなく写真で見た東郷元帥^{とうこう げんすい}にも似ているような気がする。

艦内幹部では砲術科においては変更は無し。忠は少尉に任官したばかりなのだから当たり前である。

大きな変更といえば、工作科が工作部へと昇格した。といっても部隊番号を持たない工作部で、明石艦工作部という名で呼ばれる事になる。小笠原工作長が階級と職制をそのまま引継ぎ、配置が艦橋から艦内工作区画へと変更された。

また、主計長の川島中尉がめでたく大尉に任官となった。

彼に逆らう事が出来る理由がまた一つ減った事に、一部の幹部達からは小さな声でブーイングが聞こえる。帝国ホテルでの実習をした事も有るという川島大尉は自ら士官用烹炊所に足を運んで腕を振るう事が多々あり、彼が作る洋食は絶品で他の艦からも評判が良いところが優男の外見に似合わず、配膳の時間になると彼は炊飯釜の前に仁王立ちして、気に入らない部署の士官の碗に釜の中から麦ばかりよそって渡すという陰湿な性格の持ち主だった。一度、副長附として威張り散らす遠藤中尉と取っ組み合いの大喧嘩をした際、川島大尉は麦ばかりのご飯に具の入ってない味噌汁を3日連続で食わせ、たまらなくなった遠藤中尉が泣いて詫びるという事件を起こした事もある。

明石艦に限らず軍艦内ではこういう事は日常茶飯時であり、当時の軍艦の中では特務艦長と主計長だけにはおべっかを使う事は当たり前だった。しかし陰湿だが根は正義感の強い川島大尉のこのささやかなお仕置きは、艦内でのイジメ等の徹底的な駆逐に大きく貢献していたりもする。

そして少し経った11月15日、それは明石艦にとって待ちに待

った日であった。

竣工から2ヶ月、ついに明石艦が連合艦隊に正式に編入される式が挙行されるのである。

晴天の下の明石艦艦尾には宮里特務艦長を初めとした明石艦幹部に加え、山本五十六司令長官、福留繁参謀長を初めとした連合艦隊上層幕僚も臨席しており、明石艦に掛かる期待の大きさが見て取れる。普段はお目にはかかれない上級幕僚の面々に、青木大尉の後ろに並ぶ忠も緊張した面持ちだった。

粛々と進められる編入式だが、前に進み出た水兵達が手に持つ物に、その場に居合わせる全員の顔が明るくなる。真新しい十六条の旭日旗、それは正式な明石艦の軍艦旗である。忠の隣に立つ明石の表情も、まるで頭上にて光を放つ太陽の様に輝く。ついに明石艦の艦尾旗竿に帝国海軍艦艇の証、軍艦旗が翻るのである。

『軍艦旗揚げ方！ 揚げ！』

宮里特務艦長の号令と供に、旗竿の下の水兵達が掲揚を始めた。その場に居る全員がその光景に直立不動で敬礼する。

軍楽隊が奏でる荘厳な君が代が響く中、軍艦旗がスルスルと旗竿に昇っていく。明石艦と同じ工作艦は改装を経た物なら数隻あるが、明石艦は設計時どころか予算の成立に至る時点で既に工作艦と類別されていた専門のお船である。

これから始まる明石艦の任務は、どれもこれも明石艦でなければ遂行できない任務。オレ達しかやる事ができない。

その思いに明石艦乗組員達の表情が引き締まった。

旗が旗竿のてっぺんに位置すると同時に、瀬戸内の風が翻ったばかりの軍艦旗を靡かせる。艦尾の乾舷にも白い平仮名で艦名が書か

れた。誇らしげに宙に舞う軍艦旗に、明石と忠は顔を合わせて微笑んだ。

滞り無く編入式を終えた山本長官率いる幕僚達は、宮里特務艦長の案内で艦内に入って行った。この艦への期待の現われなのか、幕僚達は笑顔で雑談しながら艦内見学と洒落込むらしい。『あれが山本司令長官かあ。』とあちこちから囁くように小さな声が上がって、辺りは少しざわつく。お偉方が居なくなった事にその場の緊張の糸が切れたのか、整列した乗組員達は姿勢を崩し、仲間内で集まってこれからの艦隊勤務にかかる意気込みを語り合っている。

やがてしばらく続いていたその光景に副長が解散を命じ、乗組員達は自分の配置へと帰っていった。騒がしかった艦尾は再び波音と、海鳥の鳴き声と、工廠のあちこちから発せられる機械音に包まれる。

清しい気持ちの忠は快晴の空に深呼吸してふと明石を見たが、彼女は何故か少し俯いて寂しそうな笑みをしていた。先程は笑みを向けてきたのにと不思議に思い、忠は口を開いた。

『どうした、明石？ そんな顔して？』

『うん……。どうして艦魂って皆には見えないのかなあって……。』

『え……。？』

いつもの事だが突拍子の無い彼女の言葉。だが笑みを伴ういつものそれとは違い、今の明石はとても残念そうな顔をしていた。

『みんな、私が見えれば、もうちょつと祝って貰えたりとかできるのに……。』

『……霞や霰達かすみ あられがきつと今日はきてくれるさ。』

『うん……。嬉しいんだけど、なんか連合艦隊の一員になったって実感が思ったより湧かなくて……。』

明石はそう言うとき小さく舌を出して苦笑いしてみせた。

『仕方ないよね、工作艦なんだし。これから頑張るしかないよね。』
『あはは。元気出してよ。その分はオレが祝ってあげるよ。食い物くらいしか用意できないけど。』

落ち込む一歩手前の明石の心を忠は読み取っていたが、彼は敢えて笑って声を返してやった。この世界にはどうにもならない事というのは必ず有る。それをくどくどと説教するのも、一緒に落ち込むのも忠は嫌だった。

明石に似合うのは笑顔。だったらせめて笑わせてやりたい。

それが忠なりの思いやりであり、優しさだった。もっとも彼の申し出に明石はコロっと落ち込んだ気持ちに翻ってしまっただけ、なんとも無垢な笑みを浮かべるとまたぞろ忠に無理難題をふっかけ始める。

『ふふふ。じゃあ、大福とお寿司が食べたい！』

『おいおい、ありがとうぐらい――。』

『あと天ぷらも食べたい！』

元気になってくれた事を喜びつつも、その代償に片手を上げてアレコレとまた食い物に関する注文をつけてくる明石に、思わず忠の

表情が軽く厳しい物へと変わる。次いでその心情を吐露しかけた刹那、明石は海軍士官たる彼の揚げ足をとるかのような事を言い始めた。

『つたくもう、元気付けてやるとすぐー。』

『言行に恥づる勿かりしか！』

『あ、きったね。こんな所で五省使いやがって！』

『あははは、森さんが言ったんだよ！　ちゃんと買ってきてね！』

明石はいつもの綺麗な笑顔に戻って忠をからかった。

やれやれ、出費がかさむなあ。

そう思いながらも忠は明石に笑みが戻った事に安堵した。

笑いながら彼は、工廠近くの寿司屋やお菓子屋の場所を記憶から探し始める。ふと見上げた晴天に輝く太陽が、不思議と忠には『がんばれ。』と言って励ましてくれているように見えた。

『さあ、戻ろっか。明石。』

『うん。』

静かに靡く軍艦旗から顔を返して歩き出した二人だったが、突然辺りを包んだ眩い白い光りに立ち止まった。太陽を直視したような閃光に、思わず目を閉じる明石と忠。やがて光がやんだ事に気づき、白い残像がまだ残る目をうつすらと開ける。

『よっ！』

二人の前にはそう言って白い歯を見せ、ニコニコと笑みを湛える長門^{ながと}がいた。いつもはだらしない格好の長門だが、今日はちゃんと制服を着て帽子まで被っている。しかし中身までは変わらないらしく、連合艦隊旗艦にして中将の立場である彼女は近所のオバチャンのように片手を上げて挨拶をした。

『な、長門さん？』

『やゝ、ついに明石にも軍艦旗が翻ったねゝ。良かった、良かった。』

長門は心底嬉しそうにそう言って忠と明石の肩に手を触れた。長門の眩しい笑みに忠と明石は口元を緩めたが、長門の後ろから発せられた声がそれを遮った。

『姉さん、公務中よ。少しは遠慮してよ。』

声の主は長門とよく似た顔つきの女性だった。黒髪の長髪である長門に対し、彼女は少し赤みかかったクセ毛の短髪である。『ごめんなさいね。』と困った顔で忠と明石に小さく謝る彼女に、二人は姉とは違った礼儀正しい彼女の性格が読み取れた。

そして長門と同じ中将の襟章を身につけ、長門を姉さんと呼んだ事から忠と明石は彼女の正体を知る。彼女は長門型戦艦二番艦である陸奥艦^{むつ}の艦魂である。

『んもゝ、カタイの好きじゃないのにゝ。』

陸奥の言葉に少し俯いて口を尖らせながら渋々と後ろに下がる長

門だったが、スッと顔上げると引き締めた表情で明石をみつめてきた。初めて見る長門の凛々しい顔には雄大でどこまでも続く水平線のような静かさと、外洋の波のうねりを思わせる力強さが感じられる。そんな長門の顔に明石と忠は無意識に姿勢を正す。二人のその変化を眼にした長門は、小さく笑って声を上げる。

『明石少尉、本日から貴官は連合艦隊付属として正式に編入されました。堅忍不拔の精神を持ち、常に努力を惜しまず、帝国海軍工作艦たる体面を重んじ、全力を賭して職務に励みなさい。おめでとう。』

『はい！』

明石はその言葉に大きな声で返事をして敬礼をした。釣られて敬礼した忠に、長門は小さく頷く。するとどこからともなく女性の声で号令が掛けられた。

『明石少尉に敬礼！ 捧げ、銃！』

号令と同時にあちこちから響く金属音に明石と忠が辺りを見回すと、そこには士官服、水兵服の艦魂達が一斉に敬礼をする姿があった。明石の左側では神通、那珂、そして霞、霰が微笑んで敬礼していた。

『陸奥。』

『はい。』

長門の声に陸奥は小さな木箱を開けて長門に渡した。長門はその中身をとって明石の前に差し出し、明石は視界に認めたそれが何であるのかをすぐに理解する。それは人間の世界では軍医少尉を示す、赤線の入った少尉の襟章だった。

『そ、それは……。』

初めて目にする特別な襟章に言葉を失う明石だが、長門は笑みを崩さぬまま歩み寄って、自らの手で襟章を明石の両襟に結わえ付けながら言った。

『明石、君は私達の中で唯一の専門の軍医さん。ここにいる艦魂達はアタシを含めて、誰一人として明石のように傷を癒す事はできない。でも明石は……、神通とさえ渡り合えた明石だけは絶対に上手く出来るよ。前線での戦闘はアタシ達がやる。でもアタシ達の命は、明石に預けるよ。アタシ達は仲間である明石を信じてるからね。』

『うう……。は、はい……。』

優しく微笑んで口にした長門の言葉に、明石は笑おうとしながらも涙で頬を濡らしていた。そしてその明石の涙を流しながらの笑顔に、忠は彼女の胸に抱いた気持ちを悟って微笑む。

明石はずっと、工作艦である自分が戦闘艦である彼女達と違う事に悩んでいた。連合艦隊の一員とは思えない自分の姿に、劣等感すら持っていたと言っても良いだろう。しかし彼女はいま、連合艦隊の長である長門に仲間という言葉で歓迎され、皆の前で自分の存在を讃えられたのである。これ程嬉しい事はないだろう。

『ほうら、森クン。こういうのは男の子のお仕事だよ。』

長門はそう言って、明石と忠の肩に手を触れて向かい合わせた。涙を拭きながら笑みを浮かべる明石に、突然の出番で戸惑う忠は必死に明石を励まそうと声を発する。

『あ、明石……、その、泣くなよ。』

『う、うん……。』

『かゝゝ、もゝゝ、若いんだからゝ！こうする……の！！』

長門は埒が明かない忠に言葉を荒げて忠と明石の背に手を添えると、グイっと力をいれて二人の身体を重ねた。周りの艦魂達から黄色い歓声が響く。

すぐ近くにある相手の顔に、忠も明石も頬を赤くして固まってしまった。2ヶ月も一緒に暮らしてきたのに、こんな距離で相手の顔を見るのはお互い初めてだった。目を潤ませながらも見つめてくる明石だが既にその涙は止まっており、泣き止んだ明石を認めた忠は少しだけ落ち着ける事が出来た。

『あ、あはは……。良かったな、明石……。』

『……。う、うん！やったよ、私！軍医少尉だよ！』

『おわあっ！』

明石は再度涙を流しつつも、それを振り払うように忠の背に腕を回して抱きついた。勢い良く抱きつく明石に忠は体制を少し崩したが、明石はお構い無しに忠の胸に顔を埋めてニッコリ笑う。だが明石のその晴れた空のような笑顔に、忠もまた微笑んで明石の両肩に手を乗せて抱き寄せた。

『あははは、ホントに良かったな。』

『連合艦隊だよ！私も連合艦隊だよ！』

抱きあって笑いあう忠と明石。周りの艦魂達が黄色い歓声をとばして二人を見つめる中、この人が口を開く。

『ふん。見てはおれんわ……。』

隣に立っていた那珂は、その声を放った神通の顔をそっと覗きこむ。神通は目を閉じて頭を掻きながらも、優しく笑っていた。霞と霰もそれに気づき、顔を見合わせて声を出さずに笑いあう。嬉々としたその光景に長門は頷くと、手をパンパンと叩いて声を上げた。

『よし、みんな！ 夕食までに各戦隊で明石のご祝儀を用意してくるのよ！ 今日明石の編入祝いね！ 別れ！』

『『『 はい！』』』

長門の声を受けた艦魂達は返事をする、一斉に白い光りを放って消えていった。と言っても全員ではないようで、数名の艦魂はその場に残ったままだった。明石は残った艦魂達に笑みを向けて忠から少し離れる。その場に残っているのは神通、那珂、霞、霰、そして長門だった。みんな明石とは親しい間柄の者達で彼女の編入を祝う為であろうと忠は予測するのだが、不思議な事に彼女達は忠の方を見てなんとも優しく微笑んでいる。

『森クン、よくやった！ それでこそ男の子！』

ドンと長門が忠の背中を叩いて言った。ほぼ長門が強行させたという表現が正しいのだが、忠も長門もそれを気にしていなかった。

明石が心のそこから喜んでくれた、それでいいじゃないか。

忠も長門も全く同じ言葉を脳裏によぎらせて笑った。

『森さん今日はカッコイ〜！』

霞が歩み寄って白い歯を見せて微笑む。しかしその言葉には少し引っかけかりが有り、忠はその事を彼女に問いたです。

『あはは、今日”は”ってなんだよ?』

『ふはは、いいトコあるじゃないか。明石に胸を貸して、さらにご馳走までオゴってくれるんだろ?』

『あはは・・・、え!?』

ふと響いてきた神通の言葉に忠は凍りついた。先程そう言ったのは明石と二人でいる時だった筈だし、そもそも明石のみに対して言ったつもりである忠。だが彼はこの時初めて、彼女達が不自然にニヤけている事に気づいた。

『き、聞いてたの!?』

慌てる忠だったが、それは彼が一瞬にして予想した通りの状況だった。無常にも彼女達の言葉が続く。

『森さん、大福は多めに買ってきて欲しいです。ウチ大福好きやさかい。』

『ちょ、ちょっと待っ—!』

『ふふふ。森さん、量が多いわよ。直ちに出撃の要有りと認む。』

『那珂、冗談だろ!? 今、勤務中—!』

『あははは、半径30キロぐらいならすぐだよ! アタシの主砲の強装射撃で送ってあげる!』

『勘弁してくれよ! お、おい明石、お前もなんとか言え—!』

忠の声が終る前に、明石は再び忠の胸に飛び込んできた。

『あ、明石・・・?』

目を閉じて忠の胸に頬を埋めて一呼吸した後、彼女はスッと顔を上げて笑顔で言い放った。

『あんみつも追加!』

数分後、まるで発射管から圧搾空気で打ち出される魚雷のようにラッタルを降り、艦から飛び出して行く忠の姿があった。乙女達の笑い声が響く中、それを切り裂くような咆哮が工廠内に木霊する。

『お前等、みんな嫌いだー!!』

そんな光景を風に揺られる明石艦の軍艦旗が静かに見守っていた。

第一一話 「とある日の二水戦」

昭和14年11月19日。

呉海軍工廠では艦隊の末端に及ぶまでの大規模編成見直しに、艦艇からも乗組員達からも騒々しさがまだ消えていなかった。

この数年で連合艦隊の艦艇数が一気に増えた為であるが、これには大きな理由があった。

この当時、友鶴事件^{ともづる}、第4艦隊事件に発覚した海軍艦艇の設計的、または強度的な問題の対応をした艦が、改装を終えて続々と第一線に戻ってきていたのだ。艦の復元力、艦体強度そのものの向上、第一次大戦での教訓を生かした防御力向上等の対策をとった各艦は新造時との性能に開きが出てしまい、新たなスペックを基に適性に応じた配属を通達され始めたのである。

それは明石^{あかし}の親友でもある神通率^{じんつう}いる第二水雷戦隊でも同様であった。

11月15日、第二水雷戦隊は第25駆逐隊を改めた第8駆逐隊^{かすみ}と、霞艦^{あられ}、霰艦^{あられ}、そして次世代型駆逐艦^{かげろう}の陽炎艦を加えた第18駆逐隊を正式に編入した。

第8駆逐隊は朝潮艦^{あさしお}、大潮艦^{おおしお}、満潮艦^{みちしお}、荒潮艦^{あらしお}の4隻で編成されており、彼女達は霞と霰の実の姉達にあたる。神通の想いを汲むかのように、二水戦には当時の最新鋭駆逐艦が配備されたのである。

と言っても裏を返せば、彼女達は素晴らしい才能を持った雛鳥でしかない。あくまで新兵の領域から外れない部下達に、当然のように教育する立場の神通は身を引き締めてそれに当たった。

神通は普段の礼儀、口の聞き方等を特に熱心に教育する事で艦魂達の間でも少し有名だった。古き良き海軍軍人らしさを重んじる彼女は拳で顔を殴るような事はしなくなったが、その教育姿勢、風紀

の厳しさや内容の濃さは連合艦隊の艦魂達に伝え広がり、一部の者達には「私立神通学校」とも呼ばれている。

そして明石との一件以来、文字通り人が変わった神通は元々容姿端麗だった事もあり、水兵に相当する駆逐艦や水雷艇の艦魂達からの人気がうなぎ登りだった。そんな彼女に仕える部下達も、経験豊富な頼れる上司に尊敬の念を持ち始めていた。

兄と弟、父と息子、上司と部下、先輩と後輩等、その上下関係を大切にする日本型組織はそれを生活に徹底させる事が特徴である。それは艦魂であつても変わらない物だった。

これは、そんな中での二水戦でのお話である。

朝、それはこの世に生きる物の全てが一日の始まりを迎える瞬間である。眩い光りを放って東の空に顔を覗かせる太陽は、あらゆる物に反射して眠りにつく者達に目覚めを促す。それは鳥、木々、海、人間、そして艦魂も変わらない。

新兵さんの一日は長い。

舷窓から一直線に差し込む光りが、布団に横たわる霞の顔にあた
る。

まるで手を引いて立ち上がらせるかのように優しい光りだが、その光りは瞼越しにでも伝わってくる程に明るい。

『う、うーん……。ふああ……。』

眩しい舷窓からの光に、霞は重い瞼をゆっくりと上げた。同時に彼女の口からはあくびがでる。

もう朝かあ……。

そんな言葉を脳裏に浮かばせながらも、霰は横になった上半身を起こした。片手で目を擦りながらも、いつもと変わらぬ自分の部屋を見回す。艦首の倉庫になっている霰の部屋は航行時は凄まじい波音を響かせるが、停泊時はまるで子守唄のように静かな波音が聞こえる部屋だった。

その波音に耳を撫でられて目を擦る霰の手が止まると同時に、彼女は再び上半身を曲げて眠りそうになるが慌てて背筋を伸ばした。いつもは寝巻き姿で寝るのに今日は水兵服のままで寝ていた事に、霰はハツとした。

『そうや、今日はウチが当番やな……。』

そう霰が呟くと同時に、いつもと変わらぬラッパの音が鳴り響いた。艦全体に響く5時半ちょうどの起床ラッパに続き、艦のあちこちから乗組員達のものである物音が木霊しだす。

そんな中、霰は布団をひょいっと丸め、あちこちにはねた髪の毛を手で撫でて身嗜みを整えた。枕元に置いてあった水兵帽を被り、丸めた布団を淡い光りで包んで消すと、彼女自身も身体に白い光りをまとってその場から姿を消した。

霰はある艦内の予備倉庫と立て札が掛けられた水密扉の前で気がつけした。

別にこの扉が彼女にとって有り難い物な訳ではない。この扉の向

こうにいる人を待っているのである。何かの合図で出て来る訳ではないが、その人物は元々時間に正確なので霰は心の準備をして扉を見つめた。

そろそろの筈やな。

霰がそう思うと同時に、彼女の目の前では扉がゆっくりと開いた。

『……』

『戦隊長、おはようございます。』
『ん……』

出てきたのは鬼の戦隊長、神通であった。明石との一件以来、暴力を振るう事はなくなつた彼女だが厳しいのは相変わらずで、怒鳴ると大の男である忠ですら震え上がってしまう程だ。しかしそんな彼女ですらも、寝起きという物は辛い物らしい。寝巻き姿の神通はいつもはキリツと釣り上がった目をうつすらと開き、解いた髪が所々でピヨンと跳ね上がっている。指先で瞼を擦る神通は霰の挨拶に小さく唸って返事をする、洗面所の方に向かってふらふらと歩いて行った。

それを微笑んで見送る霰だったが、既に彼女の今日のお仕事は始まっている。

すぐさま神通の部屋に入った霰は、まだ暖かさが残るベッドの布団を綺麗に直した。髪の毛や埃を見つけると丁寧に払い、枕や掛け布団を畳んでベッドの端に掛ける。やがて霰はベッドの端にしゃがみこむと、小さな身体に力を入れてベッドを壁に折り畳むために持ち上げようとした。バネ仕掛けの折り畳み機構になっているベッドは、小柄で非力な霰の力では最初の内はビクともしない。

『くうくう……!』

しかめっ面でベッドを持ち上げようと力を入れる霰に、ベッドは僅かに浮いたかと思つた刹那、バネの力で勢い良く壁に折り畳まれる。そして鈍い音が響いた。

ガン!

『あう……!』

毎度の事ながら、勢い良く壁に折り畳まれるベッドにつられた霰はベッドの裏側の鉄製の枠に脛すねをぶつけた。激痛に歪んだ顔で、霰は再度しゃがみこんで脛を両手で押さえる。

なんでいつも自分は同じ失敗を繰り返してしまうのだろうか?

痛みに耐えながらもそう思う霰は、自分のトロい性格に激痛の責任を求めて少し自己嫌悪になる。撫でる度に段々と引いていく痛みに、霰は脚を引きずりながらもなんとか立ち上がる。まだまだ痛みは引かないし自分が恨めしい霰であるが、まだまだ彼女には仕事があるのだ。

霰は部屋の隅に立て掛けられた箒ほうきとちりとりを手に取り、時折脛に走る小さい痛みに顔をしかめながらも甲板掃除を始めた。神通は決して物を散らかしたりする性分ではないが、生活の跡はちゃんとある。狭い部屋の半分程も掃くと、箒の端には埃やゴミが溜まってきた。それをちりとりですくった霰は、ベッドの脇に置かれたごみ箱に捨てる。テキパキと掃除をこなす霰だが、彼女の表情はまだ安心できていない。

霰は元の場所に箒とちりとりを戻すが、今度は机の整理を始める。普段は教える側の神通も、人の目につかない所で苦勞している。その証拠たる書類や小難しい名前の本が散乱する机に、霰は手を伸

ばしていく。散らばった本を机の端に戻し、書きかけの書類やその上に無造作に投げ出された鉛筆を机と垂直に置いてやる。霰はその時、椅子の上に本が置かれている事に気づいた。手に取った際に見えた本の題名は「上手な人の使い方」。

見なかった事にしてあげよう。

そんな言葉を脳裏で呟いて机の端に本を寄せた霰の顔は、持ち前の優しさが輝かせる明るい笑みだった。

そして霰がちょうど本に戻したところで、神通は洗面から帰ってきた。

少し眠気が覚めたのか、いつものクールな顔になって帰ってきた神通は無言で部屋の扉を閉めると、備え付けのクローゼットの前に歩きながら服を脱ぎ始める。すかさず霰は彼女の後ろに駆け寄って、その着替えを手伝い始めた。

怖くて力も強い神通だが、あらわになった彼女の雪のように白い肌と、女性らしい美しい体のラインに霰は仕事を忘れて見とれた。

『わあゝ……。あ、すみません……。！』
『……。？』

思わず声をだした霰を神通はチラッと振り返った。霰は慌てて謝り、神通の寝巻きを手を持つ。部下のその奇妙な行動に神通は不思議そうな顔をしていたが、すぐに気を取り直して目の前のクローゼットから制服を取り出して着替えを続行した。霰もまた渡された神通の寝巻きを大雑把に畳んで腕に掛け、着替えの手伝いを続ける。もともと甲冑かっちゅうを着るような訳ではないので、上着を羽織らせるくらいが霰の仕事だ。

上着に袖を通した神通は、クローゼットの扉の裏に掛けられた撚^{りほも}紐に手を伸ばした。紐は白、赤、黒等と色違いの物が数本掛けてあり、神通はそこから白の撚り紐をとって髪を首の後ろで結ぶ。那珂に聞いたところによると、神通はその日の気分で紐の色を変えているらしい。

女の子らしい可愛い所もちゃんとあるじゃないか。

そんな言葉が脳裏に浮かんだ霰は、悟られないように小さく笑った。

やがて着替えと髪を結び終えた神通は振り返って、霰の腕から脱いだ寝巻きを手にとって椅子に歩み寄る。そして霰は寝巻きを手渡すと同時に口を開いた。

『食食用意、かかります。』
『ん。』

短く返事をして椅子に腰掛ける神通を背に、霰は部屋を出て士官用烹炊^{ほうすいじょ}所へと向かった。

神通艦に限らず、艦には必ず神通^{かみだな}がある物である。大小はあれど、艦魂が見えずとも乗組員達は船に感謝の念を表し、そこに航海の無事や訓練の成功を祈願する物である。日本人らしい独自の文化である。

それに伴って神通艦では昔の艦長に艦魂が見える人がいた事から、艦長専門の割烹が艦用として食事を用意して神棚にお供えするのが

伝統になっていた。故に代々の艦長お抱えのコックを務める割烹は既に神棚に朝食を載せた盆を置き、テーブルの上に艦の主仕える従兵が取りに来るであろう運搬函うんぱんはこを用意して洗い物にかかっている。

転じてカチャカチャと食器が水の中でぶつかり合う音を立てて背を向ける割烹を、霰は烹炊所の入り口からひよこつと顔を出して眺めていた。いきなりふわふわと浮いて動き回る運搬函を見たら騒ぎになるから、霰としてはバレないように運び出さなければならぬ。彼女は忍び足で烹炊所に入った。

実はこの割烹は室内に何者かが入ってきた気配に既に感づいている。彼は既に20年近いキャリアを持つベテラン割烹さんで、コソコソと背後で動き回る霰に背を向けたまま微笑んでいた。しかしそんな彼の心情など露知らない霰は、冷や汗を掻きつつ運搬櫃に神棚の碗や皿を移している。お願いだから気づかないでと胸の中で繰り返しながら霰はせっせと食事を詰め込むが、ありがたい事に運搬函には既に霰の分も入っており、彼女はそれが背を向けた気の良い割烹さんの心遣いだと知らない。

今日はツイてる。

そう思って運搬函の蓋を閉め、霰はテーブルの上に置かれた水の入っているやかんを触れると、白い光りをその身に纏って上司の部屋へと戻った。

艦魂の特徴である白い光りを使った能力は、便利なのだがとにかく疲れる。

神通の部屋に着くや、膝から力が抜けそうになるが唇を緩く噛んで霰は耐えた。彼女達的能力なら食べ物や飲み物も出現させる事ができるが、それはあまり体力の回復にはならない。やはり人間達が

食べる物と同じ物を食べるほうが、艦魂であっても体力の回復には効果的なのだ。いつも明石が大量のお菓子を平らげる理由はここにあったりする。

一方、部屋の主である神通は机に向かって椅子に座り、頬杖をついて小難しい名前の本を呼んでいた。その背後にて霰は運搬函とやかんをその場に降ろすと、さっそく神通の分の食事を盆に用意し始める。

今日は味噌汁がこぼれていない。

そんな小さな仕事の成功に、霰は小さく微笑んで碗や皿を盆に並べた。今日の朝食のおかず、旬のサヨリの塩焼きが香ばしい香りを部屋に充満させる。

『ふむ、サヨリか。』

振り返らずともおいしそうな香りから逃れられなかったのか、神通は少し嬉しそうに言った。

『はい、おいしそうです。』

『ん。』

上司に声を返しながらも、霰は食事用意のシメにかかった。兵の食事よりも2皿多い盆に、やかんの水を汲んだ小さい碗を添えて完成。霰はお盆をそっと持ち上げて、神通が向かう机の脇から歩み寄って声を上げる。

『食事用意、良ろし。』

『ん。』

神通はそう返事すると手に持っていた本を閉じずに逆さまにして机の隅に置き、霰の手から盆を受け取った。立ち上る湯気と匂いに、さしもの神通もその口元がほんの少しだけ緩む。

霰はそれを見届けると、神通の後ろの床に座って自分の食事の準備を始めた。神通よりお皿の数は少ないが、おかずは同じサヨリの塩焼き。皿から大きくはみ出るサヨリに、霰の口の中には唾液が溢れた。

しかしそんなおいしそうな光景にも、霰の笑みはすぐに歪みを伴った苦笑へと変わる。

その表情のまま小さく溜め息をした後、霰はご飯の入った茶碗にサヨリを解して乗せると、さらにその上から味噌汁をかけた。具沢山、汁沢山で重くなった茶碗を一度持ち直した霰は、箸で手繰り寄せる様にしてそれを一気に口へと流し込む。ジュルジュルと音を立ててがつつく霰の姿は品が悪いが、神通はその部下の姿を横目でチラリと認めて一瞬だけ微笑むと、再び机に顔を戻して読書しながらの食事を続けた。

これには理由があって、そも霰は食事の行儀が悪い訳でも、食意地が悪い訳でも決して無い。彼女にはゆつくりと食事をする時間の余裕が無いのである。なぜなら食事が終わった後の後片付けも、今日の霰のお仕事だからである。

京都生まれで味覚も薄味派な霰には、濃い口の味噌汁にサヨリの塩が溶けた汁は食べにくい事この上なく、時折呼吸を整えては目をつむって碗の中身を口に運ぶ。また、食事中であっても霰の仕事はある。

コトツ・・・

前触れ無く神通が食事する机から聞こえてきた小さな音に、霰はすぐさま箸と碗をその場に置き、代わりにやかんを持って机へと駆け寄る。彼女の予想通り、神通の水の入っていた小さな茶碗が空に

なっていた。もぐもぐと口の中で噛みながら水を注ぐ霰だが、神通はその帝国海軍軍人らしからぬ部下の姿に苦笑いして口を開いた。

『・・・馬鹿者、帝国海軍軍人が食いながら歩き回るな。』

その言葉にギクリと身体を硬直させた霰は、申し訳なさそうに俯きながら口の中の物を飲み込んだ。少し咳き込みながら霰はやかんを戻す。

『しゅ、ゴクン・・・、すみません・・・。』
『・・・ふん。』

呆れたように神通はそう言うのと、再び水を湛えた碗を口に運んだ。ゆっくりと水を飲みながら、神通はビクビクとして俯く霰に向けて片手を下に振る。その合図に霰はひょこつと頭を下げると元の場所に戻り、再び猫飯ねこまんまとなった碗を口に近づけてジュルジュルと音を出し始めた。

例え艦魂であっても新兵さんの生活は万事が万事、こんなにも大変なのである。これに加えて普段の業務では慣れていない事もあって、当然上司にどやされる。何をするにしてもトロくて要領の悪い霰は特に怒られる。上司に粗相の無いように気も使う。一日三回の食事は毎回、後片付けと給仕を掛け持ちしなければならないので、ゆっくりと味わって食べる事もできない。さらには服や下着の洗濯だって受け持たなければならぬし、上司と部下達との間を色々な面で繋ぐパイプ役としての立場もあるのだ。

ほっと一息つけるのは夕飯が終わったくらいの7時から9時の消灯

時間までの間くらいである。しかしこんな辛い生活の中で身を鍛える事で、新兵は従順にして忠実な、そして逞しい兵隊となっていく。またそれを影からそっと支えるのは、上司たる者の大切なお仕事だ。部下全員に分け隔てなく思いやりを注ぎ、一人一人の内面的な懸案に常に注意を払う上司のお仕事も、新兵と同じくらい大変なのだ。

時は流れて、夕暮れから夜に変わる時間の神通艦。神通の部屋に入って扉を閉めた霰は、相も変わらず机に向かっている上司に向かって口を開いた。

『後片付け終わりました、戦隊長。』

『ん〜。』

神通は上着を背もたれにかけた椅子に座り、書類に鉛筆を走らせながら霰に返事をした。霰はその返事に自身の長い一日が終わりに近づきつつある事を悟って、少しほっとしながら声を返した。

『戦隊長、後はよろしですか？』

霰のその言葉に神通は鉛筆を止めつつも、書類から視線を逸らさずに固まった。少しの間沈黙が続いた後、神通は突如として立ち上がる。

『あゝ、身体を解してくれるか？肩が凝った。』

神通はそう言うと言肩に手を当てて首を左右にゆっくり曲げながら、

壁に折り畳まれたベッドを床に降ろした。その取り扱いに霰は大変に苦労したベッドであるが、170センチを超える大きな身体を持つている神通にはそれは造作も無い。ベッドはいとも簡単に壁から引き降ろされ、バネと金属の衝撃音を辺りに放つ。

『あ、はい・・・！』

霰が返事をした頃には、既にうつ伏せになってベッドに横になっている神通。霰はベッドに駆け寄ると靴を脱いでベッドに上がり、神通の背中や肩に手を伸ばして揉み始めた。長身で力も強い神通だが、触れた彼女の身体は驚くほどに柔らかい。神通の首に見ることの出来る雪のような白い肌、そしてその意外な手の感触に霰は素直に驚いた。

『うわぁ・・・。』

『んゝ、なんだ・・・？』

肩に込められる霰の力に心地良いのか、神通は目を閉じて力の抜けた声で言った。霰はその言葉に慌て、疎かになった手の動きに再び力を入れる。

『す、すみません・・・。なんでもないです。』

『気になる・・・、ああゝ・・・、言ってみろ・・・。』

上司の声に気まづくなった霰は俯き、視点を神通の背中と顔にチラチラと行き来させながら答えた。

『せ、戦隊長、き、綺麗な肌です・・・。』

『んん・・・、そうかあ？』

馬鹿者が！いつもの怒号が帰ってくると覚悟していた霰は、意外な神通の言葉にきょとんとした顔でその顔を覗きこむ。神通は目を閉じたまま、それはそれは気持ち良さそうに微笑んでいた。

『は、はい。雪みたいどす・・・、あ、あはは・・・。』

『ふん・・・。お前も、綺麗な肌をしてるじゃないか。』

『ウ、ウチはそんな・・・。ウチには良い所なんかー。』

『ある・・・。』

神通は霰の言葉を遮るようにそう言った。

神通の優しくも切り裂くような言葉に、霰は呆けた表情で思わず手を止める。神通はゆっくり瞳を開きながらも、視線は真っ直ぐ壁に向けて浮かべた微笑みを崩していなかった。

『・・・お前は誰よりも他人の気持ちを考える。誰よりも他人の事を考える。それは誰でも出来ることじゃない。』

新入りの姉達やの陽炎に比べて、霰は何をしても上手くできない部下だった。常に先に行く姉や後輩の後ろで、舌を出して残念そうに苦笑いする霰。だが神通はそんな霰が、芯の通った強い意地を持った性格だという事を見抜いていた。いつもおくびにも出さずに笑っている霰だが、その実は自分の不甲斐なさに常に自分を傷つけている。しかしそれを理解したからこそ、神通はそんな霰を二水戦から放り出す気などは毛頭無かった。

『・・・お前はトロいし失敗も多い。でもそれで良い、良いんだ。

お前はお前だろう、霞や朝潮の真似なぞでいい。』

『は、はい・・・。』

『・・・ただ、泣きたい時はおもいつきり泣け。それと手が止まってるぞ。』

『うつ・・・、は、はい・・・！』

霰は溢れる涙を拭いて笑みを浮かべて、再び神通の身体に触れた手に力を入れた。

必死に涙が神通に落ちないように顔を擦って笑おうとする霰を、この時神通はとても不憫ふびんに思った。霞や明石のように、辛い時や悲しい時に大声で泣いて抱きつける事ができるのならどれだけ楽だろう。

だが霰はそののほほんとした性格とは裏腹に、常に自分を苦しませる道を選択しようとする。耐えられるだけの強さもなく、抗うだけの力も無いくせに、きつと迷惑になってしまうと考えて、どんな時でも自分を放って他人を優先的に思いやる霰の長所であり、短所であった。そして、強すぎる意地で自分を苦しませるその性格は、表われ方こそ違えど自分と良く似ていると神通は思ったのだった。

やがてそれとなく横目で見た霰の顔に、神通はある事を決めた。

『・・・お前には従兵として、しばらく私の身体を揉んでもらう。・・・辛いだろうが命令だ。』

『はい・・・！ウチ、頑張るぞす・・・！』

神通の言葉に霰は嬉し涙を流して返事をした。この人は私の事を解ってくれる。ひたすら頑張ろう、この人の為にも。想いが籠った霰の手が神通の身体から疲れを取り除いた。

そして霰と同時に神通も決意した。

鬼と呼ばれ、かつては泣いて怯える部下の顔ですら、平気で何度も殴っていた神通の言葉。その言葉にすら霰は決して甘えようとはせず、ただ笑って目前の仕事に励むばかりだった。もちろん霰が悪い訳ではない、彼女の心の内を変えるのは他ならぬ自分の役目だ。

いつか霰が抱きついて大声をあげて泣く事が出来る、そんな背中

を持った上司になろう。

上司の立場を頂く神通なりの、大きな決心だった。

今この時も、支那事変はまだ終わっていない。

だが神通と霰のように小さいながらも暖かいドラマが生まれる余裕が、まだこの当時は帝国海軍にはあった。事実、ある程度の戦力を派遣していながらも、実働部隊のほとんどに及ぶ大規模な編成替えを実践できていたのである。

聖戦と呼ばれた支那事変に邁進する日本。だが実は既にこの頃から、国内の疲弊は目立ち始めていた。過去に日露戦争前における臥薪嘗胆んしやうたんの生活があったからか、国民はその国内の状態を憂う事は少なかった。

『お国の為に戦う兵隊さん万歳。銃後の私達もお国の為に尽くしましょう。欲しがりません、勝つまでは。』

そんな言葉を上げて派手な出征見送りが盛んに行われた時代。そして月が進んだ12月に白米禁止令が実施され、家庭の食卓からは白米の碗が一斉に消えた。

何年も戦争状態を維持できる国力は日本には無い。

元来、日本は貧乏な国である事は誰もが知っていた筈だった。だがこの頃から日本はそれを忘れ、背伸びをし始めた。身の程を忘れ、協調主義が薄れていく日本。あたかも余裕があると錯覚してそれが醒めた時、彼らは大日本帝国とそこに有った幸せの全てを失う事と

なる。

既に始まっている終焉を迎える秒読み。しかし、それに気づく者はまだ誰もいなかった。

第二二話 「出動命令下る／其の一」 (前書き)

こんにちは、工藤傳一です。

明石艦の初出動を綴るお話を今回から始めますが、これは作者の創作です。

史実では明石艦は12月初めまで呉で待機した後に、第二艦隊全艦と共に大分の佐伯湾にて艦隊訓練に参加しております。

また、初の艦艇修理は記録を見るに宮城県における潜水艦への補修支援のようです。

以上、ここから数話は史実とは違う物語になりますのでご了承ください。

第二二話 「出動命令下る／其の一」

昭和14年11月22日。

工作部の訓練が終わった明石艦は静かだった。

柱島に泊地を変えた明石艦には工廠の機械音は届かず、辺りにはただ静かな波音だけが木霊している。同じく強弱をつけた艦を叩く波音が響く艦内通路、そこには紙袋を持った忠とその後ただしに続く明石あかしが部屋へと戻る姿があった。

部屋の扉を閉めた明石は、さっそく忠が机に置いた紙袋に走り寄る。

『お菓子〜!』

先に自分の分を取ろうとした忠の手を押しわけ、明石は袋の中身を適当に一握りしてベッドに飛び乗った。楽しい一時を迎えて嬉しそうにはしゃぐ明石だが、忠は少し眉をしかめて彼女に声をかける。

『溢すなよ、明石。こないだは散々だったぞ。』

『大丈夫、大丈夫〜。』

そう言ってベッドに甘納豆を落としたアンタのおかげで、オレは砲術長から雷を落とされたんじゃない。

胸の奥で小さくそう叫びながら、少し不機嫌そうに溜め息をして忠は椅子に腰掛ける。

実は先日の巡検にて、あろう事か忠の布団からは甘納豆が2、3粒出てきてしまったのだ。当然、この報告は艦内幹部へと上がり、直接の上司の砲術長から忠はこっあいきょう酷く怒られてしまう。いくら愛嬌

ある青木大尉あおきでも、長身の髭面の男に怒鳴られるのはやはり怖い。
忠は帽子を机に置いて脳裏に蘇る恐怖を消し去るように頭を掻く。
頭から叱られた辛さを思い出して口をへの字にして俯く忠だが、明
石はそんな彼を気にも留めずにバリバリと音を立てて煎餅せんべいを頬張っ
ている。

『あ、ラムネとって〜。』

『はいはい……。』

無邪気な相方の声を受けた忠は、紙袋からラムネの瓶を引き抜い
て明石に差し出した。

毎度毎度、彼女のおかげで火の粉を被る事が忠は多いのだが、不
思議と彼女相手に説教する気にも怒る気にもならない。無邪気な明
石の笑顔にやれやれと思って苦笑いするのが常だった。

一方、明石はラムネを受け取りながらも、ラムネと一緒に何かを
取り出した忠の手に視線を留める。忠が手にしていたそれは、1通
の郵便ハガキだった。

ただ艦魂である明石は、ハガキという物を使った事がないからそ
の重要性がいまいちピンとこない。煎餅を口に挟んだまま首を傾げ
る明石だったが、忠がそのハガキを送るであろう相手にだけはふと
見当がついた。机の上のお菓子や瓶をスツと端に寄せて鉛筆を走ら
せ始める忠に、明石は煎餅を飲み込んで口を開く。

『森さんの両親にだすの？』

明石の言葉に、忠はハガキを眺めたまま鉛筆を休ませずに答えた。

『ああ、出航も決まったからな。一応、知らせておくんだよ。』

何気ない会話の中で忠が口にした出航という言葉は、明石は今日

の昼間の出来事を思い出して微笑む。

午後の課業時、明石艦の艦内には「総員艦首最上甲板」の号令がかかった。

体操や各種訓練でも普通は「総員最上甲板」等とは号令はかからないので、乗組員達はその集められる目的を各々が疑問に思っておりあえずは整列。所々に雲を散らした晴天の下、艦首旗竿に靡く日章旗を前に不思議な面持ちで整列した乗組員達に、日章旗を背負うように正対した宮里特務艦長の声が発せられた。

『本日、連合艦隊司令部より命令が発せられました。まず11月15日付けの編入に際し、若干変更が加えられます。明石艦は正式には連合艦隊司令部直属から、第二艦隊付属として編入される事になりました。』

宮里艦長の声が響くと同時に、その正面に整列する乗組員達からはどよめきが発せられる。

帝国海軍では連合艦隊司令長官が陸奥艦や長門艦に代表される第一艦隊を直率するのが慣例であり、実際に前線で暴れまわる事は決戦時以外では想定されていない。そんな第一艦隊に変わって縦横無尽に常に最前線を暴れまわるのが、特務艦長の言葉にあった第二艦隊。明石艦がこれより加わる艦隊なのである。

司令長官である古賀峯一中将の下、11月15日の大規模編成見直しで第二艦隊は第四戦隊（一等巡洋艦 高雄艦、愛宕艦）、第七戦隊（二等巡洋艦 鈴谷艦、熊野艦）、第八戦隊（二等巡洋艦 利根艦、筑摩艦）、第三潜水戦隊（軽巡 五十鈴艦、第11潜水隊、

第12潜水隊、第20潜水隊）、第二航空戦隊（空母 飛龍艦、蒼龍艦、第23駆逐隊）、そして神通率いる第二水雷戦隊と供に、神通の妹の那珂を旗艦として新編された第四水雷戦隊をもって編成されていた。

言わずもがな、帝国海軍連合艦隊が日露戦役の時代より誇る超エリート艦隊であり、配備されている艦も新鋭艦揃い。特に飛龍艦や筑摩艦は今年になって出来たばかりのバリバリの最新鋭艦である。第二艦隊は艦隊決戦に先立って快速を生かした雷撃戦を主軸として行動し、敵艦隊に対する偵察と夜間強襲を担当するという、帝国海軍の中では最も攻撃的な性格を持つ艦隊である。ちなみにその一番槍を務めるのが、神通の第二水雷戦隊なのだ。

『や、やった！ みんなと同じ第二艦隊だ！』

忠の横では、彼にしか聞こえない声で明石が跳び上がって喜んだ。長門以外、顔見知りの艦魂のほとんどが第二艦隊に所属しているのだから無理も無い。嬉しそうに忠の袖を掴んで飛び跳ねる明石に、忠もまた歯を見せてニツコリ笑った。あんな凄い艦隊の一員になれるのか、そう思うと胸が躍る。そして整列した乗組員達の顔にも、驚きと同時に笑みが表われる。栄えある連合艦隊第二艦隊の一員となる事は、軍人冥利に尽きると言う物なのだ。

やがて宮里艦長は部下達の緩む顔に小さく頷いて、説明を続ける。

『次に我が明石艦は、これより柱島泊地に移動して出航準備。二日後の11月24日0910をもって、青森県の大湊要港部おおみなとに向けて出発します。到着の後、先日の波浪で損傷した現地の第一駆逐隊の補修任務を行います。我が艦初の正式な実働任務です。各員、よくそれを心得て、各自の職に全力をつくしてください。以上。』

その声に全員が身を引き締めながらも、顔に覇気をみなぎらせた。編入から僅か一週間。工作艦明石にとっては初の正式な出動命令である。決して当該地には敵性の艦艇がいる訳ではないから、忠がいる砲術科にとっては普段と同じ日常が続くだけである。だがそれでも突然に発せられた命令とその行き先が故郷である事に、忠は驚きを隠せなかった。

口を小さく開けて呆ける忠の横では、明石が両腕を曲げて力を込めながらも笑顔で身を震わせていた。

『いよゝゝし！ 頑張るぞおゝ！』

明石にとって、こんなにも早く実動任務を迎える事は嬉しかった。敵と撃ち合いをする事は明石艦の目的では無く、損傷した味方艦への修理補修を行う事が明石艦の最大の目的である。そういう意味では明石艦にとって今回の任務は本物の実戦と同義なのであった。編入から立て続けに起こる幸せに、明石は有頂天となる。

『なに、ニヤニヤしてるんだ？』

顔を向けて笑う忠の声に、昼間の記憶を辿っていた明石は我に帰った。でもそんな自分を誤魔化す気等、明石には無い。瞳が潰れる程にニツコリと笑って明石は声を返す。

『第二艦隊所属になって、おまけに初めての任務だよ。私、しばらくは出動なんて無いと思ってたもん。』

明石はそう言うようかんと羊羹の包みを開けて、その塊を丸かじりした。
羊羹を口に含んでほっぺを膨らませながらこれでもかと嚙んで飲み込む人等、忠は明石以外に見たことが無い。自分の首の半分程もある羊羹の塊をペロリと平らげる明石に、彼は微笑んでハガキに視線を戻しながら言った。

『ははは、そうだな。頑張らないとな。』

『ふふ。それに森さんの故郷も見られるし。』

人間とは不思議である。

忠は何も無い田舎を嫌って兵学校に進んだ過去があるのだが、それでも生まれ育った土地に他人が興味を持つてくれるというのは何故か嬉しい。自分の事を褒めれたような感覚に、忠は鉛筆を置いて上半身を反らし、両手を天井に向けて伸ばした。

『はは、まあ、大湊からは遠いんだけどね。』

『え、そうなんだ？ 残念〜。』

明石は少し肩を落として右手に持ったラムネの瓶に視線を移し、瓶を左右に小さく振った。炭酸が泡立つ音と、ビー玉が奏でる風鈴のような音が寂しく部屋に響く。コロコロと転がる瓶の中のビー玉を眺めながら、苦笑いする明石は頬杖をついてその残念さを声に乗せる。

『見てみたかったのになあ。』

『あはは、オレの実家は山の方なんだよ。』

忠はそう言うと、彼の分のラムネの瓶の蓋に手を当てて軽く机に叩きつけた。内部で蓋をしていたビー玉から開放される炭酸によっ

て、一気に噴出すラムネ。忠はすぐに瓶に口をつけて溢さないように一飲みする。吹き上がる最初の一口は炭酸がよく効いて喉がチクリと痛むが、その飲み心地はとても爽快である。サワサワと瓶から発する炭酸の音を聞きながら、忠は大きく息を吐いた。

『ぷはあゝ。うまいな。』

唇に残った甘い後味を舌でペロっと拭き取る忠。明石はそんな彼の行動に笑いながらも、ふとした疑問を持った。

『ねえねえ、森さん。』

『うん？』

『森さん、大湊に着いたら帰休上陸するの？』

艦隊勤務という物は辛い。

娯楽が無いばかりか、日常ではいつでも出来る事ができない。風呂も毎日入れないし、屋根状の物が無いから洗濯物だって天気が晴れていなければ乾かす事ができない。軍艦では廁かわやの数はいくつか少ないから、朝や夕方はどんなに苦しくても順番待ちが当たり前。そんな艦隊勤務での楽しみは食事と、寄港地での上陸くらいしかないのだ。

明石艦の場合は基本的には寄港地に到着してから修理補修任務を行うので、在泊の時間が一般的な帝国海軍艦艇に比べると長い。故に一般的な海軍艦艇よりも長い期間での上陸が貰える。

だが忠は明石と一緒に暮らしてきた中で、泊りがけで上陸する事などほとんどなかった。たまに風呂や買い物で日帰りの上陸をするぐらいで、そもそも入湯の為に下艦をする者はそれほど多くはない。大体は下宿や旅籠に宿をとってゆっくりと娯楽を楽しむのが帝国海軍軍人の日常である。だが忠の場合はいつも部屋で一日中寝てるか、急に思い立ったように大掃除をしだすのが休日の過ごし方であった。

けれどそんな忠でも故郷に帰りたいたいと思わない訳が無い。

そう考えた時、相方が消えるかもしれない数日間が明石には少し怖くなった。もつとも彼女はそんな事を表情には出さない。お菓子を口に詰め込んでその甘さに口元を緩ませて心の内を悟られないよう誤魔化していた。

複雑な心境の明石だったが、そんな彼女に気づかない忠は甘納豆の包みをゆつくりと開きながら明石の問いに答えた。

『うんにゃ、一応艦内幹部だからな。オレの分も含めてマサに行つて貰おうと思ってるよ。』

『うん、そっか。』

忠の言葉に憂いが晴れた明石は、笑みを隠すように膝を抱いて丸くなった。うずくまって小さく笑う明石に、忠は小さく溜め息をすると再び鉛筆を手にとってハガキに向かった。

『もし青森港に寄れるなら名物のおでんを買ってきてやるよ。この時期、あそこで売られてるおでんはうまいぞ。』

『やった〜。』

静かに喜びを口にして明石は、膝を抱えたままベッドに横になる。机に向かって鉛筆を走らせる忠の横顔を、明石はしばらくみつめていた。

『森さん、那珂です。お邪魔してもよろしいですか？』

金属製の水密扉を叩く重いノック音が響くのと同時に、扉の向こ

うからは那珂の声が聞こえた。その声に忠は返事をしようとしたが、それよりも早く明石がベッドから飛び起きて扉に駆け寄り、那珂を部屋へと招き入れた。

『那珂。いらっしやい。』

『明石、森さん、こんばんわ。』

『やあ、那珂。こんばんわ。』

忠が顔を知っている艦魂の中で最も礼儀正しいのが、この那珂という艦魂だった。那珂は柔らかい物腰でふわっとお辞儀をしてから扉を閉めると、綺麗な笑みを浮かべながらベッドに歩み寄って腰掛ける。その隣に机からさらにお菓子を驚掴みした明石がちよこんと座り、那珂にお菓子を手渡した。その笑みをもっと明石の心遣いに感謝の意を示しながら、那珂は受け取ると座ったまま再度頭を下げて今度は忠に礼を言った。

『森さん、いつもすまないわね。』

『ああ、それより一人かい？』

忠の質問に、那珂は笑みを浮かべてお菓子の紙包みを開きながら口を開いた。

『一昨日から二水戦は全艦が大分の佐伯湾で訓練してるわ。神通姉さんたら、やっと駆逐隊が揃ったって張り切っちゃって……。』

『あははは。』

那珂の言葉に神通が張り切って部下をシゴク姿を想像し、忠は思わず笑った。那珂もクスクスと笑って、紙包みの中の甘納豆を上品に一粒づつ摘んで口に運ぶ。那珂の隣で明石も笑みを溢した。

『ねえ、那珂も四水戦旗艦になったんだよね?』

『ええ、第6駆逐隊と第7駆逐隊が一応は指揮下よ。どちらもまだ3隻編成だけど。』

那珂は笑みを崩さずケロつとした顔で応えた。その表情からは、姉と同じ立場になった事に尻込みをしているように見えない。また、明石や霞達と比べてかなり大人な女性の外見である那珂だが、姉とは違い大人しくトゲのない性格の為、決して戦上手な感じにも見えない。そんな事から、少し心配な思いを抱いた忠が声を発した。

『大丈夫そうかい? 新編されたばかりでも、一応は第二艦隊の水雷戦部隊なんだろう?』

『ふふふ、大丈夫よ。』

そう言ってお菓子を頬張って、ただニコニコと笑う那珂。水雷戦に関しては専門外である忠は小さく笑みを返すものの、それ以上何も言わなかった。そもそも那珂はこれでも艦齢が15年近いベテランで、上海方面への出動経験もある。そんな彼女に新兵同然の忠がおせっかいを焼くのは失礼という物だ。『そうか。』と笑顔で言つて忠は那珂から目をそらすと、入れ替わりに今度は明石がおいしそうに甘納豆を口に運んで微笑む那珂に切り出した。

『那珂、私も第二艦隊になったよ! 一緒だよ!』

明石の言葉に那珂は驚き、甘納豆を口に運んでいた手の動きが止まった。どうやら今日付けの編成替え等の話は、まだ彼女の耳には入ってなかったらしい。

『あら、そうなの? これからは同じ艦隊の同僚ね。』

『しかも、出動がかかったんだよ!』

『まあ。良かったわね、明石。』

そう言うと那珂は優しく微笑んで、隣にて顔を近づける明石の肩に手を乗せた。

『任地はどこ？』

『大湊要港部だよ。』

『大湊？』

何気なく帰ってきた明石の声に、那珂は少し眉をひそめて明石へと顔を向ける。僅かに変わった那珂の声色に忠も気づいて、ハガキから那珂に視線を流した。突然、表情を変えた那珂に明石は戸惑いを隠せなく、少し震えた声で彼女は口を開く。

『う、うん……。どうしたの……。？』

那珂は口に手を当てて歪んだ笑みをしながら、明石の質問に答えた。

『ええ、あそこは北方海域における漁業権益保護の最前線なのよ。』

那珂の言う事に忠は思い当たる事があった。

それは彼の祖父が漁師を営んでいた事と関係する。明治の頃より北海道から千島近海にかけた海域ではロシアによる日本の漁船の拿捕、臨検、抑留が頻発しており、当地の漁業民達はいつもそうした危険と隣りあわせて生活を立ててきた。ロシアの艦艇は時には銃撃してくる事もあり、忠が幼い頃にも穴だらけになった漁船や日本人の死体が海岸に流れ着く事が何度かあった。もちろん政府も黙っていた訳ではなく、明治のかなり早い時期から大湊に根拠地となる海

軍管轄の基地や部隊を設置して漁業権益の確保に全力を注いできた。今回の明石艦が修理補修を行う第一駆逐隊はこの大湊に大正年間からあって、既に20年近くも漁業権益の保護に努めてきた殊勲の部隊である。

そしてそんな状況の青森で幼い時から育ってきた忠は、優男の外見に反して超がつく程のロシア人嫌いでもあった。

『ああ、ロシア露助の事か。』

珍しく怒った様な声でそう呟く忠に、那珂はクスッと笑って口を開いた。

『そうよ。長門さんから聞いたんだけど、夏ごろにまた満蒙まんもうで国境紛争があったらしいのよ。だからあの辺をウロついているソ連の艦艇も気が立ってるかも知れないわ。遭遇したら攻撃してくる可能性も考えられる。』

『ええ！？ そうなの！？』

那珂の言葉に明石は驚く。明石は第一駆逐隊への修理補修の事しか考えておらず、その海域がどんな海域なのかを全く知らなかったからだ。今まで余裕ある瀬戸内の波に揺られて過ごしてきた明石にしたら、砲弾が飛び交う海域に行けと言われる様な物である。明石はこの時初めて、自分の任務が決して楽な物でない事を実感した。さすがの明石もお菓子を口に運ぶ手が止まる。だが衝撃を受けて泣きそうな顔になる明石に、那珂はその心を慰めるように優しく笑って明石の頭を撫でた。

『まあ、最近は大人しいみたいだから大丈夫だと思うけどね。』
『う、うん……。』

俯いて肩を落とす明石だったが、そんな明石に机の上で煙草に火をつけた忠が思いも寄らぬ声を掛けた。

『心配するなよ、明石。もし露助が仕掛けてきたらオレが主砲でぶっ飛ばしてやるよ。』

不敵に笑いながら忠は言った。明石は初めて見る忠の怒りが滲んだ笑みに少し戸惑ったが、また一つ発見した彼の一面と頼もしい言葉に口元が緩んだ。静かな怒りに任せた忠の言葉だが、明石の憂いを吹き飛ばすには充分な言葉だった。

『うん。お願いね。』

『おう。』

笑いながらも力強い忠の返事に、明石は頬を少し赤くして俯いて笑った。那珂はそんな二人のやり取りを静かに笑って見守っていた。

この子には森さんがいれば大丈夫ね。

そう思って那珂は明石の肩から乗せていた手を戻す。

『ふふふ、森さんにも嫌いな物ってあるのね？』

再びお菓子を口に運びながら、那珂は言った。彼女の声に忠は煙草をひと吹かしして、大きく口を開いて煙を吐く。その煙は綺麗な円の形をなして、部屋の宙をフワフワと流れた。

『あははは、胡瓜きゅうりと露助は嫌いなんだよ。』

子供のような好き嫌いを口にした忠の言葉に、明石も那珂もその

可笑しさに声を上げて笑みをこぼす。

少し静まりかけていた部屋の空気は明るくなり、その夜は遅くまで忠の部屋から笑い声が響いていた。

昭和14年11月24日、午前9時10分。天気晴れ。

同じ泊地の長門艦の艦首にて帽子を振る長門と陸奥に見送られ、明石艦は単艦で柱島泊地を出発。瀬戸内を西に向かって豊後水道を目指した。豊後水道を抜けた後は四国と本州に沿って北上し、途中寄航はせずに一気に大湊要港部まで太平洋を突っ走る。6日間におよぶ往路が始まった。

発令所でいつもの通り、のんびりと椅子に腰掛けて書類仕事をこなす忠。横では張り切る明石が自前の薬箱の中身を整理していた。軍医として誇りを強めた明石は薬箱の蓋の裏に貼り付けた紙をとって、床に並べた箱の中身と紙を見比べながら時折鉛筆で書き込んでいる。どうやら紙には、常に箱の中身の薬やガーゼといった医療道具類の数量を記載しているらしい。明石の薬箱はかなりの大きさで、明石艦の主砲の薬莢がすっぽりと納まりそうな程もある木製の取っ手のついた薬箱であった。木具工場からくすねてきたペンキを使って蓋に描かれた赤十字のマークが目を引く。

明石曰く、中身の薬や医療装具はいつもの白い光りで出せるそうだが、それはとても体力がいる事らしい。その上で普段から瞬間移動したりと、生活の中で人間以上に消耗の早い艦魂の体力は中々回復がはかどらない。日常の生活で小さい物を一つ一つ出現させてはこうして薬箱に収めておき、いざそれを使う時は治療に集中する物なのだそうである。

ごく普通の人間である忠にはピンとこないが、真面目な顔で葉瓶を数える明石の顔に彼は小さく笑って仕事に戻った。

すがすが清^{すがすが}しい晴れ空の瀬戸内だが、今日は少し強めの寒い風がヒュウヒュウと発令所を駆け抜けていた。

午後に入って明石艦は前方から接近する、とある艦隊とすれ違った。四本煙突の珍しい艦に率いられて、一糸乱れぬ単縦陣で航行するその艦隊の隻数は7隻。艦橋から繋がる伝声管から響いてきた声が、発令所で仕事をする明石と忠にその正体を教える。

『右舷前方、第二水雷戦隊です。』

『二水戦か、訓練から帰ったところかな。』

伝声管から聞こえるその会話に、忠と明石は笑みを合わせると艦橋右舷の最上甲板に位置する一番機銃にでた。艦首前方の海面を見ると、そこには神通艦を先頭に堂々7隻で瀬戸内の海面を突き進む二水戦の姿があった。神通艦の艦橋やマストに掲げられた信号旗がハッキリと見え始める距離になって、明石が大きく手を振って叫ぶ。

『お~~~~い、神通~~~~!』

明石が見つめる先、神通艦の艦首旗竿の下に、腕を組んで真っ直ぐ針路を眺めて仁王立ちする神通の姿があった。神通は直前まで気づかなかったようで、明石の声が届いたのかこちらに顔を振ると、小さく笑みを浮かべて肩の高さで片手を左右に振って応える。

艦魂としての神通が自分の艦と一緒にいる姿を、忠はこの時初めて見た。

明石艦のようにディーゼル機関を持った艦が出始めた昨今であつて、神通艦の一風変わった形はよく目立つ。

神通が属する川内型二等巡洋艦は、高価な重油の消費を抑える為に安価な石炭を燃料として使う事を従来の巡洋艦よりもさらに推進された艦型であり、特徴的な4本煙突の外観の理由もそこにある。重油等の燃料の産出が皆無である日本の事情をよく反映している艦であり、連合艦隊所属艦艇の中でも最もお財布に優しい艦型とも言える。一本煙突にまとめられた長門艦や扶桑艦等に比べれば古めかしい形だが、艦橋直後にある一段高い煙突から一際高く上がる真っ黒な石炭燃焼による排煙がとても勇壮に忠には見えた。

後年、この二つの異なる動力機関を持つ形式はハイブリッドという言葉で呼ばれ、人々の生活を大きく助ける事になる。

通過していく神通に続くのは、隸下の駆逐艦達。その先頭の艦の艦中央に、二人は大きく書かれた『カスミ』の文字が見て取れた。艦上を見渡す明石と忠は、艦尾の砲塔の上で座り込む数人の黒い水兵服姿の少女達をみつける。すぐさま明石は顔の前に手を添えて叫んだ。

『霞かすみ！ おあられい、霞あられ！』

『あ！ 明石ささ！ 森ささ！』

何人かで固まって座り込んでいた少女達の中に、立ち上がって飛び跳ねながら帽子を振って叫ぶ者が一人。いつも元気で快活な元氣娘、霞だ。すっかり忠と明石に懐いた霞は、最近は何談も言うようになった。

『カケオチですかか！？』

『うるささい！』

霞の冷やかしに、少し頬を赤くしながらも明石は笑って声を返した。

二人のやり取りに霞の周りの少女達は黄色い歓声を上げ、座ったまま一斉にこちらを振り返る。その中からまた一人立ち上がった少女がいる。足を揃えて綺麗な笑顔で手を振るその少女は霞だ。忠と明石の予想通り、霞の周りにいる少女達は同じ二水戦の駆逐艦の艦魂達だったのである。

あれが二水戦の面子かと一人状況を把握して頷く忠に、ご機嫌な霞の冷やかしが飛ばされる。

『森さ〜くん、たまには強引にいかないと〜〜!』

『馬鹿野郎〜! さっさと行っちゃまえ〜!』

艦橋の乗組員達の目も忘れて思わず返した忠の叫びに、霞とその周りにいる少女達が大笑いした。忠と明石にとっては気を取り乱しそうになる冗談だが、笑い合う少女達はそれでも気さくに手を振ってくれ、二人も手を振って応えた。

通過した後も見えなくなるまで笑って手を振る霞達に、明石と忠は微笑んだ。

楽しそうにやってるな、良かった。

同じ言葉を脳裏に浮かばせた二人は顔を合わせ、小さく笑いあった。

『やれやれ、元気な奴らだ。』

『ふふふ、帰ったら神通に怒ってもらおっかな。』

『はははは。』

そんな会話をのこして二人は発令所に戻り、そこにはまた波の音だけが響き渡った。

それからしばらくして明石艦は豊後水道を通過、一路針路を東に向けて太平洋を駆けた。

第一三話 「出動命令下る／其の二」

青森県大間崎沖^{おほまざき}、雪景色に彩られた白銀の下北半島^{しもきた}を左舷に望んで、明石艦は津軽海峡^{つがる}から平館海峡^{つがる}を目指して南下していた。

早い潮流に吹きすさぶ風、決して自然とは優しい物では無い事を人々に伝えるには充分な光景がそこに広がる。排水量約1万トン、艦幅20メートル、武装が少なく低重心な上に6メートルと一等巡洋艦並みの喫水を持つ明石艦は、基本的には揺れが穏やかで乗り心地は良い艦である。だがそんな明石艦ですらも川に流れる木の葉のようにフラフラと揺れる程の高い波が、彼等が軍艦旗を進めた海にはうねっていた。

そんな中、明石艦の前方では、信号警笛を鳴らしながら明石艦よりもまだ小型な艦艇が荒波^{なみかぜ}を掻き分けていた。この海域の生き字引、第一駆逐隊の駆逐艦、波風艦^{なみかぜ}である。大正11年生まれで排水量1500トンにも満たない波風艦だが、単艦で津軽海峡入り口に当たる尻屋崎^{しりやき}まで出迎えに来るといふ豪胆な艦だった。『我、誘導ス。』の無電を明石艦に送るや先頭に立って道案内をかってくれたのである。時折、艦首や艦尾が海面から浮き上がる程に波に揺られる波風艦だが、それでもそびえる波の壁を次々に切り裂いて前へ前へと力強く進んでいく。竣工から一貫してこの海域で国民の生活を守ってきた誇りが、その姿からは滲み出ていた。

忠^{ただし}は発令所の舷窓から、波風艦と供に映る久しぶりの故郷の海を眺めていた。銀色の空とどす黒い海という、白黒だけで構成された世界が窓の外には広がっている。

発令所の窓から覗く明石艦の艦首は、舞い上がった水飛沫が流れ落ちる前に凍ってしまう為に、真っ白な氷で覆われている。艦を叩く波音はまるで艦砲の一斉射のような音で、時折乗組員達の会話を遮ってしまう程。そして暖房が装備されていない明石艦に容赦なく襲い掛かる最大の敵、寒さ。

ちっとも自分の帰郷を歓迎しているように見えないその光景だが、忠は小さく笑みを浮かべた。ふいに彼の口から白い息が僅かに吐き出される。

相変わらずだな。

そんな言葉が脳裏に過ぎり、変わらぬ故郷の健在ぶりが忠の心に刻まれる。

『ちょ、ちょっと森さん！なに自分の世界に入ってるのよ！』
『ん？』

背後から響いてきたその声に忠は振り向く。そこには外套がいでうをこれでもかと重ね着して、両手で身体を擦りながら震える明石あかしがいた。スラリとした細身の彼女の身体つきを、二枚も重ね着した外套が完全に隠している。余程寒さが堪えたのか、明石は歯をガチガチと鳴らし、頭巾ずきんを被った顔の両頬をリンゴの様に真っ赤に染めていた。小刻みに白い息を吐きながら、彼女は発令所の机の脇に座り込んで身を丸めている。

そして明石は今にも泣きそうな顔で、眉をしかめて忠を見ていた。

『こ、こんなに寒いと思わなかった……。』
『あははは。』

日本ではずっと南に当たる佐世保させばで生まれ、温暖で穏やかな瀬戸内海ですつと暮らしてきた明石には無理も無い。雪国の寒さは身を切るようだと言ふ。彼女は今それを、文字通り骨身に染みて感じていた。だがこの世の物とは思えないそんな気候にも平然とする忠に、明石はまるで珍しい生き物を見たかのような目を向けて口を開く。

『さ、寒くないの・・・？』

『いやあ、寒いよ。』

『・・・そ、それだけ？』

『ははは、まあ、何処でも冬は寒いモンじゃないか。』

忠は決して寒くない訳ではない。また、決して寒いのが好きな訳でもない。ただそれを口にした所でどうにもならないという事を、雪国出身者独特の本能で知っているのである。少し肩を上げて寒さを堪えながらも、忠は微笑んでみせた。だがそんな相方の表情に、明石はガクツと首を垂れて俯く。

『も、もうやだぁ・・・。』

咽び泣く様な明石の声だったが、あまりの寒さに涙もでないらしい。ガチガチと歯を鳴らしてただ縮こまる明石に、忠は苦笑いするしかなかった。

『軍医さんも楽じゃないってこった。ははは。』

『ううう・・・。』

この後、忠が泣く寸前の明石を励ます光景は大湊に到着するまで続いた。

1609、大湊^{おおみなと}要港部到着。

陸奥湾^{むつ}に入って波は穏やかになったが、風はまだ強い。工作部で製造された物品を陸揚げするつもりだった明石艦は、大湊要港部で最も大きい栈橋に接岸した。だがこの時期は日が暮れるのが早く、既に辺りは薄暗くなり始めている。おまけに天候も悪いので要港部と艦長が折衝し、今日はとりあえず修理補修の打ち合わせまでとしておき、実作業は明日からという事になった。

それでも本州最北端の地まで来てくれた味方の最新鋭艦に感謝する要港部は、運搬食として大量のコロッケを差し入れてくれ、極寒に耐えながらもその日の夕飯は格別だった。箸で切り開くとホクホクと湯気が上がるコロッケは、乗組員達の凍える身体を僅かにだが温めてくれる。素朴でほんのりと甘いじゃがいもの味と香り、口の中に良い意味で後味を残さないさっぱりとした感じがたまらない。主計長の川島大尉^{かわしま}も絶賛する程のコロッケだったが、乗組員全員に均等に分け与えてしまった為に少し余ってしまった。その事から、士官食堂の隅で川島大尉が一人頭を抱えて口を開く。

『困ったなあ、ハンパな量で余っちゃった。』

川島大尉の視線の先には小さな紙袋に包まれたコロッケ。これでも士官食堂の中で適当に振り分けてみた結果なのだが、残念ながらそれが災いした。なぜなら全員が満腹になった為、余ったコロッケの行く胃袋が無くなってしまったのだ。しかしせっかくの要港部のご好意を残飯にするのは気が引けてしまうという物。かと言って冷めてしまったコロッケなど美味くはない。特にこういう気候の所ではなおさらである。

そんな懸案に頭を捻る者達が列を成す士官食堂の中で、その内の一人である忠は爪楊枝で齒を掻きながらふと舷窓の外を見た。下の縁に雪を溜めた舷窓の外では、真横に流れる雪と女性の悲鳴のような激しい風の音が発せられている。

『困ったな、酒保で売るか？』

『それも気が引けー。』

青木大尉あおきの声に答える川島大尉の言葉が、突如として詰まった。

どうしたんだ？

それとなく二人のやりとりを耳にしていた忠は、そんな言葉を脳裏で呟いて窓から視線を戻す。すると士官食堂にいる者達の視線が一斉に忠に注がれていた。彼は事態が飲み込めず、辺りを見回す。

『・・・？』

『おお、森もりがいたな！』

忠の向かいの席に腰を下ろしていた青木大尉は、そう言いながらパンと手を打って微笑む。その言葉に賛同しだす士官食堂の面々に忠は固まった。そして川島大尉が笑みで口を開く。

『よおし、森！ お前、今日は酒保での物品支給は禁止だ！』

『え・・・？』

『代わりコイツをやる！』

その数分後、ほのかなジャガイモの香りを発する紙袋を抱えて食堂から戻った忠は、自分の部屋の扉を開けた。

艦内で一番の酒保のお得意さまである忠は有名だったが、おかげで余りのコロッケは全て忠に渡されたのだ。いつも大量のお菓子や飲み物を買っていく酒保での買い物に代わって押し付けられた紙袋の中身だが、忠はそんなに気にはしていない。考えてみれば、これを部屋に持って帰れば喜ぶ人が彼の下には一人いたのだ。脳裏に浮かぶ相手の笑顔に鼻歌交じりで部屋に入った忠だったが、そこには彼女の姿がなかった。

『あれ？』

そう言いながら後ろ手に扉を閉めて部屋を見回す忠は、何やらベツドで不自然に盛り上がる布団を見つけた。小刻みに震える布団とガチガチと齒を打ち鳴らす音に、忠はその正体を悟って微笑んで声を掛ける。

『明石く、なにやってんだ。』

『寒い……。』

そう言っ明石は布団から頭半分をひょこっとだしてきた。

『お菓子を出せ！』といつもは山賊のように夕食から戻った忠に走り寄る彼女なのだが、今日ばかりは完璧に寒さによって参っているらしい。目から上の部分を布団から出した彼女の頭には外套の頭巾が覆いかぶさっていて、忠からは目だし帽を被っているように見える。それはまるで絵に描いたような山賊のような格好にも関わらず、当の明石は布団から決して出ようとしてこない。

忠は帽子を机に置くと、紙袋を持ってベツドに歩み寄って腰を下

ろした。彼の手に抱かれた紙袋に明石は視線を向けるも、それ以上の行動を頑として起そうとしない。すっかり元気が抜けてしまっている彼女に、忠は口元を緩ませて袋に手を入れながら声を掛ける。

『今日は良い収穫があつたぞ。ほら。』

忠は紙袋の中からコロッケを一個取って、明石の顔の前に差し出した。いつものお菓子ではなく、今日はちゃんとした食品である。基本的に食いしん坊の明石はスンスンと鼻を鳴らして湯気を放つコロッケの匂いを嗅ぐと、ゆっくり手を出して忠の手からコロッケを受け取った。でも手を出したらやっぱり寒かったのだろうか、明石はコロッケを持った手と一緒に半分だけ出していた頭も布団の中に引っ込める。そしてそれと同時に忠が部屋に入ってから断続的に続いていたガチガチという音が消え、布団の中からはがふがふとコロッケを貪り食う音が響き始めた。

『あゝあ……。ちゃんと後で布団を掃除しろよ?』

呆れながらそう言う忠だが、言い終える前に布団から明石の手だけがひよこっと出てきた。

なんと行儀の悪い奴だ。

そう思いながらも無邪気さが消え失せて縮こまる今の明石が、忠にはたまらなく可愛かった。もうちょっと見ていたいなと思いつつ出てきた彼女の手にコロッケを置いてやると、その手はまたすぐに布団に引っ込んでがふがふと音が聞こえ始める。

『はっはははは!』

少し寒さが和らいだのか、明石は布団から顔をゆっくり出して大笑いする忠を睨む。だがそれを無視するように紙袋をベッドに置いて忠は机の椅子に座り、煙草を口にくわえて火をつけた。ベッドの上では明石が『うう……。』と唸りながら、紙袋からコロッケを手にとって頬張っている。

やれやれ、困った奴だ。

そう思いながら、忠は食後の一服についた。

刹那、扉を叩く音が部屋の中に響いてきた。こんな寒い中、せっかく体温で暖まり始めた部屋の空気を入れ替えたくないと思う忠は扉を開けようとはせず、上半身を反って声を上げる。

『はいよ、誰可？』

『……………』

忠の声に対する返事はなかったが、耳を澄ますと扉の前からヒソヒソと話す声が聞こえてきた。

『や、やっぱり違うんじゃない……。？』

『でも、女の人の声がしてたって。』

扉の向こうから微かに響いてきたのは、女性の話し声だった。軍艦内に響く女性の声という状況に、忠はその会話の主に見当がついた。そしてその声に対して彼と同じ事を考えた明石も、ようやく布

団から出てベッドに腰掛けて扉を眺める。一度明石と顔を見合わせ
てから、忠は椅子から立ち上がった。扉を開いた。

『あ……。』

そこには突然開いた扉とそこに立つ忠に、表情も身体も固まる二
人の女性がいた。

氷が所々にこびりついた黒い外套を着ている彼女達だが、頭に乗
せた帽子は水兵帽だ。背は小さく、見た目の歳は20代半ばで神通
や那珂と同じくらいに見える。

艦魂も歳をとるという事を知っている忠には、彼女達の正体がな
んとなく解った。

『あゝ、第一駆逐隊の艦魂かな？』

『あ、え、え？』

二人は忠の言葉に戸惑っている。これまた説明するのが面倒くさ
い思いながらも、忠は笑みを向けて扉の脇に身体を寄せた。

『オレ、見えるんだよ。まあ、とにかく入って。寒いから。』

『あ、は、はい……。』

戸惑う彼女達を部屋に招きいれてやると、忠はゆっくり扉を閉め
た。

『息、吸ってみて。』

『すうう……。』

『どう？痛い？』

『は、はい、少し……。』

ベッドに腰掛けた女性の外套の隙間から手を入れて、明石は耳につけた聴診器に耳を澄ました。先程までは寒さに怯える子供のように布団に丸まっていた明石だが、今は真剣な顔でその女性の診療に当たっている。

寒い部屋は相変わらずだが、部屋に入っすぐに振舞ったコロツケで二人の訪問者も少し身体が暖まったようだ。やがて椅子に座って診療の状態を眺めている忠の横から、付き添ってきた方の女性が声をかけてきた。診療を受けている女性にくらべて彼女は顔色が良く、その声にも元気があった。

『助かりました。お腹減ってて死にそうだったんです。』

そう言って彼女は頭をさげた。彼女の外套の外側についた氷が、パラパラと音を立てて足元に落ちる。彼女が艦の外から来たことは明白だった。

『いや、いいよ。あ、オレは明石艦砲術士の森少尉。よろしく。』

『あ、私は波風艦^{なみかぜ}の艦魂です。よろしくお願いします。』

帽子をとって頭を下げる彼女、横に分けた長い前髪と短い後ろ髪が特徴的だ。彼女の前髪はサラサラと流れるような綺麗な髪だが、毛先がパキッと凍っていてまったく揺れない。紙に穴を開けられるんじゃないかと思うくらいに尖った髪だが、それを気にしている様子も無い彼女には雪国に随分慣れた感じを受ける。

そして忠は彼女の慣れという物からくる勇姿を、昼間に発令所の舷窓からしっかりと見ていた。

『そうか、君が波風かぁ。昼間は案内してくれてありがとな。』

優しく微笑む忠に、波風もつられて表情を緩めた。ハキハキとした活舌の言いしゃべり方で、その雰囲気はどこか霞かすみにも似た元気な女性だった。

『とんでもない。あ、あっちは妹の沼風ぬまかせです。』

診療を受けるもう一人に、波風は顔と手を向けて言った。

沼風は波風の口にした言葉と名前から想像した通りその姉妹らしく、顔つきが波風と良く似ている。顔の輪郭に沿うようなまん丸の短髪で、後ろから見るとおむすびのようだ。だが痛みが酷いのか、険しい表情が彼女の顔からは消えていない。それでも波風の声に気づいた沼風は、弱々しい声ながらも返事をしようとしてくれた。

『あ、ど、どうも……。うつ……。！』

『あ、しゃべらないでね。』

『は、はい……。』

沼風は口を開きながらも苦痛に顔を歪め、さらに明石に止められた事もあって口を閉じた。どうやら腹部か腰に痛みがあるらしく、時折服の中で身体に触れる明石の手に眉をしかめている。

しばらく静かな空気の中で明石は診療していたが、ふいに溜め息交じりで声を発すると手を戻し、その耳に当てていた聴診器を取り外した。外套の上から腰の辺りをゆっくり擦って、沼風は明石の顔を眺める。それに気づいた明石は少し眉をしかめた笑みを向けて、沼風に診療の結果を教えてやった。

『肋骨を繋ぐ軟骨がズレちゃったみたいだね……。』

『そ、そうなんですか？あ、痛っ・・・！』

生々しい明石の診療結果だが、それを耳にした忠にとっては、彼女達が艦魂であると考えたとでも不自然に思える。そんな事から首を捻る忠だったが、それに気付いた明石は苦笑いしながら声を上げた。

『竜骨まではいってないと思うけど。たぶん、波浪で船体の肋材が曲がったんじゃないかな。』

明石の説明は忠の疑問を見事に解決する。

なるほど、人間で言えば肋骨を痛めたような物か。

そう思いながらも的確な診断と説明をする相方に、忠は深く感心する。先程までは布団から出てこない子供のようだった彼女であるが、患者を前にした瞬間、明石の目の色は変わった。

後に「動く海軍工廠」と呼ばれる事になる明石は、この頃よりその片鱗を見せ始めていたのだった。

一方、忠に発した明石の言葉に、沼風は思い当たる事があったらしい。痛みに耐えながらも小さく何度か頷いて、彼女は呟いた。

『そうか、それで左舷の外板があんなにへこんだんだ・・・。』

『たぶんね。ちょっと痛みの退きが遅いのは、ビタミン不足だと思う。人間の食べ物、しっかり食べた方がいいよ。』

そう言うと明石は沼風の頬に手を当てて優しく微笑んだ。沼風は伏せ目がちにしながらも、明石の暖かい手に顔をもたれる。同時に忠の横でそれを見ていた波風は腰に手を当てて小さく溜め息をする

と、沼風に歩み寄って声を掛けた。

『だから、言ったじゃない。ちゃんと食べなさいって。』

『の、乗組員みんなに悪いよ……。今年是不作だって言ってたし……。最近はお店での値段も上がったって……。』

『いちいちそんなの気にしてたら艦魂なんてやってられないでしょ！』

『で、でも……。この前、大雪で列車が止まったって……。食品が手に入らないって、乗組員のみんなが……。』

二人の会話に、明石も忠も沼風の病状の原因を突き止めた。

どうやら沼風は艦内で乗組員の会話を聞き、人間と同じ食べ物を摂取する事を遠慮していたらしい。

事実、この時期の雪国では汽車が豪雪で止まってしまう事がよくあった。実際に忠も幼少の頃、立ち往生した汽車を大雪の中から発掘する作業を何度も見た事があったのだ。健気に乗組員の事を思い、自らの身体を壊してしまっていたいけな沼風。

ウチの相方に比べるとなんて立派なんだ。

そんな気遣いなど屁とも思っていない自分の相方と沼風を心の中で比較してしまった忠の目には、うつすらと涙が滲み出る。静かに涙する忠の姿に明石は笑って、沼風と波風に自分の相方自慢をしはじめた。その涙の理由を彼女はちっとも解っていない。

『ふふふ、いい人でしょ？』

艦魂の為に涙する人間を目にし、波風も沼風も優しく笑ってくれた。

アンタはこの子に比べりゃヒドイもんだ。

そう胸の中で呟きながらも、忠は机に置かれた紙包みからコロツケを取り出して沼風に差し出した。

『食べなよ、ほら。』

『でもこれ、お二人の分では・・・？』

『オレ達はもう食ったよ。ほら。』

この期に及んでもまだ遠慮する沼風に、忠は彼女の手を掴んでコロツケを手渡した。やはり腹が減っていたらしく、彼女は礼も言わずに堪えきれなくなった食欲を開放した。忠の言葉を受けてすぐに、両手で持ったコロツケを彼女は勢い良く自らの口へと押し込め始める。沼風の足元には、ボロボロと食べカスが落ちていく。小さな口にリスのようにコロツケを詰め込む彼女の膝に、忠は笑みを崩さぬままコロツケの袋を置いてやった。

『こ、こら、沼風！お礼ぐらい――！』

『いや、いいんだ波風。腹一杯食わせてやってくれ。』

行儀の悪い妹に怒る波風だったが、忠はそれを制した。

沼風は伏せ目がちで大人しそうな外見だが、今は餓鬼のようにコロツケをがつついている。おいしさに表情をゆるませる事も無く、重い物でも持ち上げるかのように目を閉じて力の籠めた顔の沼風。その沼風の表情に、忠は艦魂たる者の存在の仕方を改めて理解する。例え艦魂であっても、不健康であればそれは艦そのものに影響が出てくる。フレームの歪みで済んだ沼風の損傷も、下手をしたら艦の沈没に繋がっていたかもしれない。今回の沼風艦の損傷は、それだけ大事な自分の健康に注意を払わなかった彼女に問題がある。だが忠も明石も、そして波風もそれを深く追求するつもりなど無い。

なぜなら沼風には悪気は無く、ただ乗組員達から笑みを奪いたくなかっただけなのだ。

相方と同じ事を考えていた明石は優しく微笑んで、夢中で食べる沼風の頭を優しくゆっくり撫でた。

『沼風はいい子だね。とりあえず、修理してる内は夕飯が終わってから私の所に来てね。』

『通院、て事ですか？』

『一回の食事じゃ回復しないよ、何日か続けて食べないとね。私の所は、毎日食べ物が手に入るから。』

波風の問いに笑ってそう答えた明石は、言い終わると同時に忠に視線を流す。なんとも綺麗な笑顔でニッコリと笑みを向ける明石に、忠は明日から始まるであろう出費の激しい毎日を想像して溜め息した。

『・・・やっぱ、オレが買うのー。』

『苦しむ水兵を助ける為よ、森さん！』

『・・・苦しむ少尉はどうすればー。』

『日本帝国軍人の、鑑を人に示したる。』
『・・・・・・・・』

やんわり断ろうとする忠に、明石はあてつけがましく「広瀬中佐」を歌う。諦めの溜め息と共に、額に手を当てて俯く忠。

やれやれ、またかよ。

遠慮する二人の姉妹と『いいの、いいの。』と制する明石のやりとりが、彼の正面にて展開される。

なんでウチの相方はこんないい子に育たなかったんだ。

そんな事を思った刹那、その日二度目となる忠の涙がその頬に流れていった。

第一四話 「出動命令下る／其の三」

昭和14年12月3日。

おおみなと

大湊に錨を下ろして3日目の朝を迎える明石艦^{あかし}。その日は師走の大湊には珍しく、朝から澄み渡った青空が広がっていた。もちろん雪化粧の陸地と少し黒っぽい海は変わらないのだが、寒さに研ぎ澄まされたような空気はピンと張り詰めた緊張感のような物があって、辺りの景色をとっても莊嚴に目に映す。

寒いながらも恵まれた天候の下、明石艦の艦尾最上甲板で雪かきをする乗組員達の中には忠^{ただし}の姿があった。

『ふう。』

雪かきダンプを縦に立てて、忠は頬の汗を拭って一呼吸した。朝一でやり始めた最上甲板の雪かきは、零下の気温でも汗が噴出す程の重労働である。艦尾の烹炊室^{ぼうすいしつ}前に立つ忠の周りでは、砲術科科員総出での雪かきが行われている。課業開始から3時間かけての雪かきは、明石艦の右舷の最上甲板をなんとか雪から覗かせるまでになった。そして雪が無くなった甲板では、工作部員達の汗が光っている。彼らの顔は右舷に横付けされた艦に向かっており、電動機特有の低い音を発して旋回する起重機もまた、彼らの顔が向く右舷に向かって次々と物資を運搬していた。

明石艦右舷には、艦左舷中央に真新しい外板と甲板を取り付けつつある被修理艦の沼風艦^{ぬまかせ}が浮かぶ。3日前に横付けした時は乾舷の上側の外板が長さ30メートルにも渡ってひん曲がっていた沼風艦

だが、要港部と明石艦工作部の努力によって修理は完了に近づきつつあった。リベットやボルトを止める為の機械の音や、溶接によるバチバチと火花を散らす音が艦上を賑わせる。被損傷艦を横付けした初の明石艦による修理補修支援は順調だった。

『おう、森……。はあ、はあ……。』

艦中央に繰り広げられる工作部の活躍を見ていた忠に、後ろから声を掛けたのは砲術長の青木大尉^{あおき}だった。慣れない雪との戦いに汗だくで肩で息をする青木大尉は身体が温まりすぎたのか、吐く息が白い程の気温にも関わらず外套の前を開けて羽織るように袖を通して
いるだけである。

『どうしました、青木大尉？』

『小休止だ……。はあ、はあ……。』

『解りました。小休止！みんな、少し休もう！』

まだ午前の課業だというのに、忠の声に返す砲術科員達の返事は弱々しかった。朝から1mも積もった雪を右舷だけとは言え、艦首から艦尾に至って片付けたのだから無理も無い。青森の雪は水分が多く含まれた重い雪であり、この地の雪かきは慣れた忠でも一汗掻く程。だが砲術科員の内の半分程は雪の少ない西国出身者で占められており、その内の一人である青木大尉は甲板に横にしたダンプの上に腰掛けて呼吸を整えている。彼を横にした忠は自分の肩を手でトントンと叩きながら、青木大尉に声をかけた。

『結構、大変でしょう？』

『よ、よくこんな事、毎日やって暮らせるな……。はあ、はあ……。』

『はっははは、まあ慣れですよ。』

片目を閉じて顔を歪ませる青木大尉は、帽子をとってパタパタと顔を扇いだ。青木大尉の頭からあがる湯気が彼の疲労の度合いを教えてくれる。そんな上司の姿に笑みを作りながらも、忠はふと艦の左舷に目を移す。

起重機や工作部の物資搬入口の辺りを念入りに雪かきした為、まだ左舷側の雪かきは終わっていない。つまりこの重労働はやっと半分が終わったところなのだ。

先は長いな。

そう思って滴る汗を拭う忠。

『ご苦労さんです。青木大尉、差し入れですよ。』

その時、湯飲みが乗った盆をもった川島大尉が、烹炊所から部下の主計科員を伴って出てきた。その言葉どおり、ささやかな差し入を配る主計科員達に雪かきで疲れた皆がとびつく。騒がしい光景を背にした川島大尉は忠と青木大尉の下へ歩み寄ると、湯飲みをそれぞれに手渡して笑みを向けてくれる。

『おお、悪いな川島……。ぷはあ……。』
『とんでもない。森、ほれ。』

数えて27歳の川島大尉は見た目も性格も実に爽やかなお兄さんで、乗組員達からの信望は厚い。いつもは濃い目に入れる彼のお茶なのに、今は味が薄い。だが後味が残らないさっぱりとしたお茶は喉を通りやすく、疲れた身体でグイッと飲むのに向いている。このような器用な心遣いが、彼の艦内での人気を支えているのだ。

『ああ、旨いですよ。』

『ははは、森はさすがに慣れてるな。大して疲れるようには見えな
いぞ?』

腰に手を当てて優しく笑う川島大尉は歳が近い事もあって、忠は彼を兄のように慕っていた。毎日のように酒保で食い物を買っていく忠は、限度額や注文量の規則で違反を犯す事が多々ある。だが主計長である彼の鼻根で見逃して貰っている事も、忠が彼を慕う一因であった。

すると笑顔で会話する二人の横で、すっかり疲労困憊している青木大尉が力の抜けた声で口を開いた。

『はあゝ……。主計科も手伝ってくれんか、川島……。?』

『あはは。昼飯抜きでいいなら手伝いますよ?』

『はっははは、勘弁してくださいよ。』

寒空の下、滴る汗に疲れを覚えつつも彼らは笑いあった。

砲術科の全力を挙げた除雪によって、明石艦が白い雪化粧からい

つもの軍艦色に姿を変えたのは、既に陽が西に傾いた頃だった。そして砲術科のお仕事である除雪が終了すると同時に、明石艦のお仕事である沼風艦の修理修復も完了した。

明石艦工作部と要港部側との共同作業は、艦内部の構造計算までこなしたという。沼風艦左舷への修理補修で変化した重量や重心を適正にする為に修理内容が反対舷への修理補修まで及んだらしく、この規模の修理は本来は入渠しての切った張ったの大修理が必要な物だった。幸い損傷箇所が乾舷の上側に留まっていた事から、明石艦による接舷修理で対応可能だったらしい。また、この構造計算や重量配分に明石艦の青写真室が大いに活躍した事は言うまでも無い。損傷箇所が運良く最上甲板付近だった事が功を奏したのだが、それでも船体の骨組みから直してしまうという明石艦の能力に要港部の人々は脱帽する。そして最新鋭工作艦の本領を早くも発揮したと、宮里艦長も表情を綻ばせていた。極寒の地での明石艦の修理に、大正生まれの沼風艦はこうして再び荒波を駆るに足る逞しい艦体を取り戻したのである。

その夜、忠の部屋では明石と沼風が忠の帰りを待っていた。

沼風は明石の付きっきりの治療と3日間におよぶ食事療養と工作部の頑張りで、すっかり身体の調子もよくなったらしい。赤みを帯びた顔色と痛みに邪魔される事の無い笑みを浮かべる沼風に、当の明石も微笑んで話をしていた。

『大変なんだねえ、第一駆逐隊って。』

『ふふふ、でもやりがいがありますよ。波風も張り切っていました。』

波風艦は先日、北千島の幌筵島ほろむしろに向かって大湊を出航していった。

荒れ狂う極寒の海が依然として牙を向けている中なのだが、大湊要港部には機関が故障した大型漁船からの救援無電が届いたのである。救助命令には幌筵島にて分派行動中の彼女達の姉である野風艦のかぜと妹の神風艦かみかぜが対応したのだが、修理不能との事から野風艦が青森港まで漁船を曳航する事になった。幌筵島近海の海域は本土から遠い事もあって、事故やソ連艦艇への対応が迅速にできない。その為に日常から当該海域で行動する必要がある、野風艦の代役として波風艦が神風艦の元に向かう事となったのだ。

そして『では、行って来ます！。』と元気に笑って荒れ狂う極限の海へ消えていった波風の顔を、明石は強く脳裏に焼き付けていた。大湊にくるまで、今まで平然と自分が突き進んで来た海がこれ程恐ろしい物だと明石は思った事が無かった。強い風、激しい波、視界を遮る吹雪、容赦のない寒さ。だがそんな海域で必死に身体を張って国民の生命と財産を守る彼女達に、明石は深く感銘を受けていた。敵と撃ち合う事無く課せられた使命を遂行するその姿が、工作艦である自分と良く似ているからだった。

ちなみに明石と沼風はすっかり仲良しになっているが沼風は年代的には長門と同世代であり、その年齢差は10歳以上と明石よりも遥かに年上である。だが背が小さく童顔の容姿を持つ沼風は、明石にとってはとても話し易い人物だった。

『ねえ、沼風。辛い時ってないの？』

明石の問いに、沼風は膝の上に置いた自分の帽子を撫でて微笑みながら声を返す。

『ありますよ、この時期は特に。』

『でしょう？私、この海は苦手だなあ。寒いし……。』

自分で口にした言葉に明石は寒気を覚え、両手で外套の上から身体を擦った。部屋の中だというのに吐く息が白くなる程の気温の低さ。外套の頭巾を下ろしていた為にあらわになった明石の耳は、りんごの様に真っ赤に染まっていた。

だが沼風は凍える明石のそんな姿を瞳に映し、口に手を当ててクスクスと笑った。

『ふふふ。でもちゃんと良い事もあるんですよ。』

『良い事・・・？』

身を丸めて寒さに震えながら、明石は沼風に視線を移す。明石の声を受けた沼風は少しだけ俯いて、両手を口の前で合わせて息をゆっくり吐きかけながら微笑んで言った。

『明石さん。私達、帝国海軍艦艇の使命ってなんだと思いますか？』

『え・・・？』

突拍子の無い沼風の言葉に、明石は言葉を失った。沼風はそんな明石の様子を笑っているが、その答えはすぐに明石の頭に浮かんできた。明石は驚きを少し表情に残しながらも、沼風の問いに回答する。

『そ、それは、戦う事じゃないの・・・？』

『ふふ・・・。』

沼風は明石の言葉に小さく笑い声を出し、ゆっくり顔を左右に振った。呆ける明石を横に、口から吐き出される白い息がそのまま音になったかの様な声で、沼風はゆっくりと静かに話し始める。

『私達、帝国海軍艦艇の使命は、日章旗が翻る土地とそこに住む国

民を守る事。戦う事はその為の手段でしかないんですよ。』

『しゅだん……。』

『そうです。私達は海軍の為に、旭日旗の為にある訳ではないんです。私達は日本の為、日章旗の為にのみあるんです。』

明石は沼風のその言葉に、少しだけ心をざわつかせた。せっかく先月に靡いたばかりの自分の軍艦旗を、沼風の放った言葉は否定したように感じたからだだった。まして帝国海軍の誇りと伝統を金科玉条じょうとして日夜励んでいる仲間達を、明石は呉でずっと見てきた。時に争い、時に笑い合いながら、旭日の旗の下に海原を駆ける仲間達と乗組員。だが沼風はそれを守る事は、帝国海軍艦艇の使命ではないのだと言う。

では、身に纏まとった魚雷や砲塔は何の為にあるのか？

『で、でも、それじゃあー。』

少し身を乗り出して声を上げようとした明石だったが、自分が言い出そうとした言葉にふと彼女は疑問を抱いて動きを止める。

軍艦たれば戦う事は大切な役目。だがそれを工作艦である自分が、長く駆逐艦として生きてきた沼風に言っただけの良い事なのか？

そう胸の中で呟いた明石は眉をしかめて俯いてしまうが、沼風はそんな明石の肩にそっと優しく手を乗せて口を開いた。

『明石さんは良い人ですね……。』

『え……。？』

思わず顔を上げる明石に、沼風は優しく微笑んで続ける。

『反論しようとして、迷ったんですね？』
『・・・うん。』

明石が返事をするや、沼風は彼女の手をゆっくりと握った。優しく擦る沼風の手に、冷え切った明石の手が段々と温まっていく。

『言いたい事は何となく解ります。でも私はこの海域に配属されて、「ありがとう」って言ってくれる国民の皆様に会える度に実感できるんです。私達、帝国海軍艦艇とは何の為にあるのかを。そしてきつとそれは、呉や横須賀の鎮守府で暮らしてたら味わう事が出来ない、とっても素晴らしい体験だと思うんです。』
『・・・。』

優しく語りかけてくる沼風の声だが、明石の心の内にはまだ釈然としないもやもやとした物があつた。今も訓練に必死に励んでいるであろう仲間達だが、誰一人として戦う事が使命ではないと言い切るような者はそこにいないと明石は考えているのだ。

大砲も魚雷も無い艦等、ただの客船と同じではないか。

そう思う明石だったのだが、長くこの地に在って行動してきた沼風の言葉には、友人である神通や那珂とは比べ物にならない程の説得力があるのも事実だった。

明石の手を擦る沼風の手。綺麗な明石の手に比べて、沼風の手は傷だらけでゴツゴツとした見るからに船乗りの手である。だが包み込むように伝わってくる沼風の手の手もりが、明石の心の内をさらに揺らした。彼女には沼風が間違っているとは思えないが、かと言って呉にいる仲間たちが間違っているとは思えないのだった。

しかし声を発せずに俯いて悩む明石の姿を、その苦悩の発端であ

る言葉を放った沼風は至って綺麗な微笑で眺めていた。

部屋にはしばらくその光景が続いたが、やがて部屋の前に近づいてきた足音に気付き、二人はその顔を扉に向けた。

『ただいま。』

そう言いながら扉を開けたのは、部屋の主の忠であった。例によって忠の腕には、主計科で買ってきたお菓子の詰まった紙袋が抱かれている。

『あ、おかえり……。森さん……。』

『ん？』

いつもは部屋を空けると同時に飛び掛ってくる明石だが、今日はちょっと困ったような笑みで静かにそう口にするだけであった。記憶にあるいつもの行動をとらない彼女を目にし、忠は不思議そうな顔をして机に紙袋を置く。するとその時、沼風が小さな声で明石の耳元に口を近づけて囁いた。

『迷う事は悪い事ではないですよ。明石さんならいつか答えを見つける事ができます。』

沼風の声は温もりを与えてくれた手と同様に、明石にとっては震えるその心を撫でてくれるかのような優しい物だった。やがて明石

はそんな沼風の声に、少しだけ乱れた心の内を静める。

『う、うん。頑張ってみるよ。』

『なに？なんの話？』

椅子に腰掛けて脚を組んだ忠は、二人の会話に興味深深といった目でお菓子を一足先に頬張りながら声をかける。だが珍しくカヤの外になっている忠に、明石は笑みを浮かべて言葉を返した。

『ふふーん、こっちの話！』

『はいはい、そうですか。』

小さく口を尖らせて苦笑いする忠に、明石と沼風は顔を合わせてクスクスと笑いあう。二人で話した事は難しい事にして、艦魂ならではの悩みでもある。沼風の言う通り、その答えを見つけるには長い時間が必要だろうと明石は理解する。そしてせっかくの楽しい一時を忠も巻き込んでしんみりとさせるのは明石も沼風も嫌であり、そんな思いを二人はお互いの表情から読み取ったのであった。

『ほら。』

一方、ふて腐れながらも忠は自分の分を取った紙袋を明石に手渡し、同時に彼は相方に伝える良いお知らせを記憶から蘇らせ、再び屈託の無い笑みを浮かべて口を開く。

『そうだ、明日からの予定が決まったよ。明日は沼風にした修理の点検と確認だつてさ。』

明石は波風と紙袋の中身を分け、さっそく手に取ったあん玉をひよいっと口に投げ込みながら忠の言葉に声を返す。

『ふうん。じゃ、しばらくは停泊するんだ?』

『うんにゃ、明後日には沼風の試験航海も兼ねて青森港にむかって移動するそうだよ。ついでに汽車が止まって、手に入らなかった資材やらの補給もするんだってさ。』

そう言いながらも何時に無く嬉しそうな忠の笑みに、頬を上下させる明石はふと気づいた。普段はゆっくりとお菓子を食べる忠なのだが、今日は甘納豆の袋を口に近づけてザラザラと中身を口に流し込んでいる。襟元に降りかかってしまった砂糖の粒をはらう彼だが、まったくそれを煩わしいとは思っていない様でニコニコと笑顔を湛えているのである。

やがて沼風もその事に気づいて声を発した。

『どうしたんですか、森さん? ふふ、ニヤニヤして。』

『あははは。実はなんと、青森港に着いたら5日間の休養錨泊なんだってさ。』

『おお! なら森さん、おでん買って来てね!。』

『げ。覚えてたのかよ。』

残念そうに苦笑いする忠に、明石と沼風も声を上げて笑った。

笑いあう3人を、縁に雪を積もらせた舷窓から月がひっそりと見守っている。

晴れた夜でも艦の外は氷点下を下回る気温だったが、話に花を咲かせる3人からは寒さという言葉が少しの間だけ消えていた。

前日の点検にて修理箇所が確認された沼風艦に先導され、明石艦は大湊要港部を出港した。

出港前、課業開始を発令所で迎えた忠と明石は、艦内放送にて所
属の第二艦隊の動向を知る事が出来た。佐伯湾にて艦隊訓練に励ん
でいた第二艦隊は、12月19日をもって佐伯湾から、九州南部の
有明湾に集結地点を変更。さらに艦隊訓練を続行するとの事であつ
た。付属とは言え、明石艦もそろそろ艦隊に合流して、大事な合同
訓練に参加しなければならぬ。だから青森港での補給、休養が済
んだら、明石艦はすぐに有明湾に向かつて旅立つ事になる。つまり
大湊の景色とも、しばらくのお別れになるのである。

『ありがとう。さようなら。』

249

向こうに霞んでいく雪化粧の大湊は、とても美しく乗組員達の瞳に映るのであった。

『明石、そろそろ艦内に入ろうか。』

『ほーい。』

発令所の扉を開けて言った忠の声に、明石は少し寂しげに返事をして艦内に入った。肩や頭巾に少し積もった雪を払いながら部屋に入った明石だが、ふと何やら机に腰掛けてニヤニヤしている忠に気付く。相変わらず吐く息が白くなってしまいう発令所の中だが、忠は軽快に手を動かして書類に鉛筆を走らせている。

『どうしたの、森さん？ 嬉しそうにして？』

『あははは、解った？』

明石の声に笑って答えた忠は鉛筆を置くと、机の引き出しを開けて中から双眼鏡を取り出した。

少尉に任官した祝いに両親から贈られたというその双眼鏡を忠はとても大事にしており、普段の生活で使った所を明石は見た事が無い。綺麗好きな彼は、大事な物を汚してしまう事を極端に嫌っているからだ。だが忠は取り出したその双眼鏡を、これから使う為の準備とでも言わんばかりに布巾で丁寧に磨き始める。その珍しい光景に、明石は忠の隣に歩み寄って口を開いた。

『なあに？ それ使うの？』

『見えるかも知れないんだよ、オレの生まれたところが……。』

『え？ でも、前に大湊からは遠いって……。』

『大湊からはね、青森からは割りと近いんだよ。』

優しく微笑んで言った忠の言葉に、明石も明るく笑みを浮かべた。

また一つ相方の事が知れるというのが、明石にとっては何よりも嬉しい事だった。寒さを忘れてはしゃぐ明石は、忠の腕をグイグイと引っ張って声をあげる。

『ホント！？今日は見れる！？』

『あはは、どうかなあ、晴れてれば見えると思うけど。まあ、5日間も在泊してれば晴れる日もあるんじゃないかな。』

『そっか。晴れないかなあ・・・。』

荒れた天候が多いこの地の気候を少し憎らしく思っけて口をへの字に曲げる明石だったが、上機嫌の忠はそんな彼女に気づかず、双眼鏡を磨きながら歌を歌いだした。

静かな発令所の中に、波の音を伴奏に従えた忠の歌声が木霊する。

勇む笛の音、急ぐ人

汽車は着きけり青森に

昔は陸路二十日道

今は鉄道一昼夜

酒を飲んで歌を歌う事は明石も忠もいつもの事であるが、明石はその歌を今まで聞いた事が無かった。一応は帝国海軍艦魂である彼女は軍歌ならある程度知っているが初めて耳にした歌い易く小気味良いテンポの曲調とその歌詞に、明石は興味を湧かせて忠の肩を擦り始める。

『ねね、今の歌、なんて歌！？』

『そっか、軍歌じゃないから明石は知らないか。』

忠は明石に顔を向けて笑みを浮かべてそう言った。明石は物事に興味を示すと目を大きく見開いて、子供のような目をしてくる。忠はそんな明石の顔がとても好きなのだが、同時に行動まで幼児退行してしまう彼女の性分を察して苦笑いした。忠の予想通り、明石は忠の肩を両手で掴むとグラグラと忠の身体を揺さぶって叫んだ。

『なんて歌〜〜！？』

『て、鉄道唱歌だよ。日本各地の鉄道の駅を歌ってる歌だよ。そういえば詞を作った人は軍歌も作ってたな。』

『鉄道唱歌かあ。ふう〜ん。』

歌の正体が解った明石は嬉しそうに笑い、その横ではやっと身体を揺さぶられる事から開放された忠は安堵して小さく溜め息をする。だがそんな忠を無視して、明石はコロツと表情を変えて口に手を当てて何か考え事を始める。鉄道や駅等といった物に馴染みが薄い明石にはその歌がいまいち理解できなかったが、やがて似た様な歌を思い出してパンと手を叩いて声を発した。

『あゝ、そっか！日本海軍みたいな歌なんだ？』

『あ、そうだな。日本海軍の作詞もした人だよ。』

『へえええ〜。』

新たな発見に綺麗な笑顔で頷く明石に、忠は笑って彼女から双眼鏡に視線を戻した。再び流れる忠の歌声に、明石は身体を小さく左右に振って耳を澄ます。自分の故郷の歌を微笑んで歌う忠を、明石はちよつとだけ羨ましそうな瞳で見つめていた。

津軽^{つがる}の瀬戸を中^{はこ}にして
函館までは二十四里

行き交う船の煙にも
国の栄えは知られけり

音も無く降る雪と忠の歌声に包まれ、明石艦は青森港に向かつて
波静かな陸奥湾^{むつ}を駆けた。

第一五話 「出動命令下る／其の四」

昭和14年12月5日、1400。

雪と民間船の賑やかな汽笛が響く中、明石艦と沼風艦は青森港に到着した。

日露戦争後の明治39年に開港された青森港は、明治41年から北海道の函館とを結ぶ青函連絡船せいかんの出発港として栄えてきた日本国内でも重要な港である。鉄道の面においても福島県から日本海側を走る奥羽本線おうう、東京駅から太平洋側を走る東北本線の終着駅でもあり、この鉄道貨車をそのまま船に載せて函館まで運送する青函連絡船は本州と北海道を結ぶ大日本帝国交通網の大動脈であった。

また最近になって青森市郊外の油川あぶらかわには民間の飛行場も作られ、人と物資の流通の面においては東北随一の大都市である仙台市をも凌ぐ地が、この青森港を有する青森市なのである。さらに市内には八甲田山雪中行軍で有名な陸軍歩兵第5連隊も駐屯しており、軍人向けの商業と流通も青森市の発展には一役買っている。典型的な農業第一を主とした田舎である青森県だが、青森港と周辺の市街地だけはこうした立地条件から商業が著しく発展した所だった。

季節を通して人の賑わいが溢れる青森港だが、明石艦は残念ながら沼風艦のように栈橋への接岸ではなく沖合いでの錨泊びようはくとなった。港の水深が充分ではないからである。

数年前には港内で民間船の座礁が相次いだ事もあって、宮里特務艦長も大事を取って沖合いでの停泊としたのだ。

上陸が大変な沖合いでの停泊だが、工作艦である明石艦の設備がまたもここで生きる事になった。資材輸送用の運貨艇うんかていが上陸用舟艇

へと早代わりしたのである。もちろんちゃんとした内火艇うちびていも明石艦にはあるが、それは艦長や艦内幹部用である。そもそも内火艇は何十人も人を乗せれる様には作られていないから、乗組員の大半を占める水兵や下士官はちよつとした上陸でも手漕ぎのカッターで上陸するのが艦隊勤務においては常なのである。だがそんな艦隊勤務にあつて身体を張ってボート漕ぎをせずに上陸できる事は、水兵達にとって嬉しい事だった。

ここで物資の搬入と5日間の休養を取る事になった明石艦の最上甲板では、上陸を楽しもうとする多くの乗組員達が上陸用舟艇を待っていた。基本的に暇な部署である砲術科の乗組員達の顔ぶれが目立つ中、そこには忠とマサの姿もあつた。

『弘前ひろさきまでの汽車、あるかな？』

『まあ、大丈夫だろう。夜行までまだ時間はあるし。』

艦側の手摺に捕まって、忠と弟のマサは港から戻ってくる運貨艇を眺めていた。タンタンと子気味良く響く運貨艇のエンジン音が、次第に二人の胸の内に生まれ育った地へ再びその足を着けれる喜びを湧かせ、彼等はその表情を明るくする。特にマサにとっては久しぶりの帰郷であつた。

『兄貴、ホントに帰らないのか？』

『しょうがねえよ。それでも砲術士少尉だからな。』

『ふーん、偉くなるのも辛いモンだな。』

忠はまだ若いがれっきとした明石艦幹部であり、乗組んでいる1

5名の士官の内の一人である。いくら休養停泊でも長く艦を離れる事は出来ないのだ。そんな兄の境遇にマサは少し口を尖らせて同情したが、忠は表情を変えずに近づいてくる運貨艇を見つめている。やっと帰郷が叶う弟に、それを幹旋できた忠は兄としてそれを喜んでいたのだ。

というのも、水兵であるマサは海軍に入ってからずっと実家に帰っていない。その上で実はマサは海軍志願兵となる少し前に、この青森県にある実家から岡山県にある同じ森姓の親戚の家へと養子に行っている身であった。故に実の父と母の顔を既に5年以上も見えない弟をなんとかこの機会に実家に帰してやりたいと忠は思い、巡航先での帰省が認て貰えるか砲術長の青木大尉に相談してみた。青木大尉は日頃から真面目に働く忠の願いを聞き入れてくれ、特務艦長の許可も得て巡航先でのマサの単身帰省を許可してくれた。

故に快く忠のお願いを二言返事で許可してくれた青木大尉の笑みに、忠は感謝の念が絶えなかった。

やがて上司への感謝の念を募らせる忠の耳に響くエンジン音が大きくなってくると共に、降ろされた舷門の下から声が飛ぶ。

『乗船よろし。』

その声を受けて甲板に集まっていた乗組員達はラッタルに向かって一列に並び始め、忠とマサもそれに習った。甲板将校の前に一人一人並んで、上陸許可証と持ち物を確認されてから運貨艇へと続くラッタルを駆け下りていく。士官の身分の者は特に細かく見られないが、水兵の特に新入りの部類はここであれやこれやと文句をつけられる。しかし薄暗くなり始めて気温もどんどん低くなってくる中、進まない行列に痺れを切らした機関長附の柴田しばた機関中尉はその事に

怒号を発した。

『さっさと進めろ、バカヤロー！ 寒さでゴム兜が凍っちゃもうじゃねえか！！』

豪快な性格と荒い言葉遣いで恐れられる柴田機関中尉の怒号に甲板将校が気まずそうな顔で小さく頭を下げるが、その場にいた彼以外の乗組員達は柴田の放った言葉に声を上げて大笑いした。

同じ様に抱腹して笑うマサと忠だったが、忠は突如としてその腕をグイグイと引っ張られる。笑いが治まらない忠の腕を引っ張るのは明石だった。忠達が大笑いする元凶にして初めて聞くその言葉を知識として覚えようと、明石は目を大きく見開いて声を上げる。

『森さん、森さん。ごむかぶとってなあに？』

すっかり彼女の存在を忘れて笑っていた忠だったが、彼女と目が合った瞬間、引きつった笑みとなった。慌てながらも咳払いを一度して表情を正し、顔を正面に向けると小さな声で言葉を返す。

『げふんっ・・・！ こ、子供は知らんでいいの・・・。』

『なによ！？ ケチ〜！！』

子供扱いされて怒った明石は頬を膨らませて忠を睨みつけると、プイッとそっぽを向いて艦橋の壁に寄りかかっていた沼風の元へ戻っていった。彼女は首の後ろで結った髪をブンブンと揺らして、肩をいからせて歩いていく。明らかにご立腹である明石の背中に、忠は小さく溜め息をして指先で頬を掻いた。

『なんか言ったか？ 兄貴？』

『ん？ あ、いや、なんでもない。』

一人で呟いた忠を不審に思つて、マサは忠の顔を覗きこんできた。
艦魂が見えるってのは辛いなあ。

そう思いながらも忠はマサに返事をする、進みだした行列に従つて進んだ。

『ねえねえ、沼風。ごむかぶとって何かな？』
『ふふふ。さあ、なんででしょうねえ。』

その背後から響いてくる忠にしか聞こえない会話。気味が悪いくらい綺麗な声で返事をした沼風は、どうやらその正体を知っているらしい。そう思うと忠は少し沼風と目が合わせ辛くなった。

やれやれ、なんでこんな気苦労をせねばならんのだ。

艦魂が見る事が出来る自分の境遇を忠は少し呪つて、僅かに重くなった足取りで運貨艇に乗り込んだ。

やがて再びエンジン音のテンポを早くして、忠達を乗せた運貨艇は動き出す。

遠くなつていく運貨艇の中では、これから始まるシャバの一時を楽しみに語り合う乗組員の会話が響く。風呂に行く者、食い物屋をはしごする者、下宿先を手配して知り合いとあう者。そして柴田機関中尉が行こうとしている色町に行く者。やっと思楽にありつける彼らの声は嬉しそうでマサもその空気に微笑んでいたが、忠は離れていく明石艦から聞こえてくる彼にしか聞こえない声に目を閉じて頭を抱える。

夕飯時になつてさっきの言葉を聞いてこなければいいが……。

そう思いながら、忠は大きく溜め息をした。

『おで〜ん！ 忘れないでね〜ん！』

『はあああ〜・・・あ。』

ちなみに忠が憂うその言葉、「ゴム兜」とは許可証と供に上陸時に必ず確認される物の一つで、海軍で支給される避妊具ひにんぐの商品名である。徴兵検査ですらいちモツを握って病気の有無を確認したという皇軍の、隠れた病気対策だった。

やがて上陸した忠とマサは久しぶりの故郷の大地を踏みしめながら歩き、バス乗り場の前で止まって向き合った。

道端の人々が放つ方言で訛なまった声での会話が、二人の心に懐かしさを込み上げさせる。

『へば、わあこれで。親父とお袋さ、よろしぐな。』

『おう、悪いな兄貴。へば。』

『おう、へばな。』

かつては当たり前の様に話していた言葉、津軽弁つがるべん。田舎者と思われたくない事と日常での会話で困る事から封印していた方言だったが、故郷の空気がそれを忠とマサの意識から完全に忘れさせた。分厚く積もった雪の上、ズブズブと雪が潰れる音を響かせて向かってくるバスを横目に二人は別れる。背後から聞こえる遠くなっていくバスのエンジン音に、忠は名残惜しい気持ちを少し抱きながらも振り返らずに歩いていく。ふわふわと舞い落ちる雪の向こうの海にポ

ツリと浮かぶ今の自分の居場所が、ふと顔を上げた忠の目に映った。

仕方が無い、オレは帝国海軍少尉なんだ。

そう言い聞かせて、忠は棧橋の近くの市街地に向かった。

赤い提灯ちようちんが既に点き始めた小さな通り、そこには寒さが強まる夕暮れ時にも関わらず、人々の笑い声と歌声が静かに響き渡っていた。そこかしこから響く暖かい声と美味しそうな匂いが、歩く忠の表情を自然と明るくさせる。それは通りを歩く人々も同じであった。忠と同じように食い物屋、酒屋を物色する人々は地元民らしい、地味な服を着た人から、旅の途中らしいお洒落な帽子にコート姿の人等、よりどりみどりである。

忠はそんな中、お店の看板や提灯に視線を配って歩いていた。とある文字を探す彼だったが、しばらく歩いてその文字が書いてある提灯をかけた屋台をみつけて歩み寄って行く。

「おでん 持ち帰り可」

そう書かれた小さな提灯を下げる屋台は、リヤカーを改造した小さな屋台であった。

『こんばんわ。』

『あら、海軍さんでねが。いらっしやいませ〜。』

屋台の奥で鍋の具を箸で突付いていたのは年老いたお爺さん。白く長い眉毛と人の良さそうな笑顔、そして自分と同じ訛りで語尾を

伸ばす独特の物言いが忠の顔を緩ませる。

『持ち帰り、4人前で。』

そう言って店内の具の名と値段が書かれた札を一通り見回すと、忠は数回小さく頷いて続けた。

『そうだなあ、具は八つぐらい適当に見繕みつくろってください。あ、大根と卵は必須で。』

『はい、解りました。』

店主のお爺さんが鍋をかき混ぜると同時に、昆布ダシの効いたつゆの良い匂いが忠の鼻をくすぐった。

うまそうだな、はやく食べたい物だ。

忠の口の中に唾液が溢れてくる。寒い寒い北国は地元民の一人でもあった忠であつてもその身体を容赦無く襲い、外套の上からでもお構い無しに彼の身体から体温を強奪して行く。縮こまる様に肩を震わせて立つ忠は眼前で湯気と汁の香りをもくもくと吹き上げる鍋をただひたすらにじっと眺め、客人だろうと地元民だろうと見境無く襲う故郷の寒さに耐えた。

だがこの時、カタカタと僅かに震える忠の背中には、甲高く澄んだ色合いの女の子の声が掛けられて来た。

『かいぐんさん、たすけてくれてありがとう。』
『うん？』

突然聞こえてきた声に、忠は声がした足元へと顔を向ける。
見れば足元には6歳くらいのおかっぱ頭の女の子がニッコリと笑

って、忠を見上げている。寒さから頬を真っ赤にしながらも、元気に笑ってお辞儀するその子に忠はしゃがみこんで目線を合わせた。

『お嬢ちゃん、ありがとうってー。』

『あ、こら千代！^{ちよ} 海軍さん、すいません……。お仕事中に……。』

忠が言い終える前に、奥で食事をしていたその子の母親らしき女性走り寄ってきた。咄嗟に我が子を抱き寄せて彼女は謝るが、忠は優しく笑みを浮かべて声を返す。

『いいえ、ただおでんを買いに來ただけですから。大丈夫ですよ。』

『いえ、ほんと申し訳ない……。』

『あははは……。』

母親は何度も頭を下げているが、その少女は相変わらずニコリと笑って忠を見つめてくる。忠はそんな彼女の表情と先程放った言葉に疑問を持っていたので、それを聞いてみることにした。

『お嬢ちゃん、どうしてお礼を言ってくれたの？』

『かいぐんさんが、たすけてくれたから。』

『助けてくれた？』

首を傾げる忠に、少女の母親がまたまた頭を下げて声を発する。

『すいません。私達は先日、函館からくる連絡船に乗っていたんですが、出航から2時間くらいして船の機関が故障したそうで止まっ
てしまったんです。』

『そ、それは大変でしたね……。』

『はい、電気は消えて、船はグラグラと揺られて本当に怖い思いを』

しました。この子も泣いて泣いて――。』

『でもかいぐんさんがたすけてくれたよ。』

そう言って母親の言葉を遮った少女の頭を、その母親は優しく撫でて笑みを浮かべた。

『ふふ。この子の言う通りです。そんな私達の船を助ける為に海軍さんのお船が来てくれたんです。まるで谷のようにうねる波の中、海軍さんのお船の乗組員の方達はわざわざ甲板にでてロープを渡して、私達のお船を青森まで引っ張って行ってくださりました。』

『そうだったんですか……。いや、ご無事で良かったですね。』

『いいえ、本当に有難うございました。』

『かいぐんさんたすけてくれてありがとう。』

親子は深々と頭を下げて、再度お礼を言った。忠は母親に小さく会釈をすると、今度は少女に顔を向けて声をかける。

『無事でよかったね。お礼言ってくれてありがとうね。お嬢ちゃん、偉いよ。』

忠の言葉に少女は白い歯を見せてニッコリと笑った。もちろん明石艦がこの親子を守った訳ではなく、恐らく第一駆逐隊の活躍であろう事を忠は悟る。だが長々とそれを話して、せっかくお礼を言ってくれたこの少女の気持ちを無碍にするのも可愛そうだと忠は思い、敢えてそのお礼を受け取ったのだった。

『海軍さん、お待ちどうさまです。』

店主のお爺さんの声に屋台に目を戻すと、おでんが入っているであろう湯気を上げた小さな桶おけが4つ積んであった。ご丁寧に新聞紙

で包み、紐で縛^{ひも}って持ち運べるようにしてくれたお爺さんの好意に感謝しつつ、お代を忠は支払う。

『ありがとう、ご主人。桶は明日、持ってきますよ。』
『ありがとうございます。』

二個づつ縛られた桶を両手に持った忠は、横にいる親子に視線を流してお辞儀をした。

『では、自分はこれで。』

『はい、有難うございました。』

『かいぐんさんありがとう。さようなら。』

『はい、さようなら。』

そう言って別れを告げた忠は、明石艦に戻る道を歩き始めた。

だがその道中、忠は不思議な気持ちだった。

呉での海軍生活で忠は『助けてくれて有難う。』と一般人から言われた事はなかった。呉の人々はいつも万歳を連呼して小さな日章旗を振ってくれる。上陸した先でも当地の人々より掛けられてくる言葉は『いつもごくろうさま。』だった。もちろんそれが忠には嬉しくない物な訳ではないし、彼らが感謝していないとも彼は思っていない。だが、忠の脳裏からはあの少女の笑みが離れなかった。そして胸を張って彼女に『どういたしまして。』と言えなかった自分を、この時彼は少し恨めしく思っていた。

日本の為、そう言って頑張る人達は沢山いるし、自分もその一人である。だがあの笑みを護る為だ、と言う人とはいるのだろうか？
オレ達、帝国海軍が守らなければいけないのは、あの少女の笑みなのではないのか？

それとも国を護るという事は、あの笑みを忘れてただ眼前の理想

を追い求めて励むという事なのか？

忠はふと立ち止まって、暗い銀色となった空を見上げた。

相も変わらずに宙を舞い落ちてくる雪。その一つ一つがあのだとしたら、帝国海軍はそれを全て地に着けずに受け止める事が出来るだろうか？

そう思って見上げる空は、ただ雪を宙に放つばかりで何も答えてくれなかった。

『遅いなく、森さん。』

『もうすぐ帰ってきますよ。』

明石は部屋のベッドの上で舷窓から、降りしきる雪とそれを吸い込んでいく海を眺めていた。まるで食事の合図であるラッパの様に鳴る明石のお腹の音に、ベッドに腰掛けた沼風がクスクスと笑う。ただでさえ寒い上に空腹である明石は全身から力を抜き、パタッとベッドに倒れた。活力が抜けた表情で彼女は口を開く。

『お腹減った〜。。。』

『森さんはご出身は青森なんですよね？もしかしたらお知り合いとお会いになってお話なさってるんじゃないんですか？』

あくまでも可能性を挙げた沼風の言葉だったが、明石はベッドに

横になったまま眉をしかめて口を僅かに尖らせる。

それって私よりも優先しなきゃいけない事なの？

そんな言葉が脳裏を過ぎり、明石はベッドの布団を緩く握った。そして沼風はその明石の行動に気づき、気まずそうに苦笑いして声を発する。

『あ、でも、きっともうすぐですよ……。』
『うん……。』

その時、明石の声を遮るように扉を開ける音がした。沼風はその音に安堵して笑みを浮かべ、明石は布団を握ったまま扉に視線を移す。

『やゝ、ごめん、ごめん。見つからない様にここまで来るのが大変でさ。ごめんな、お腹減っただろ？』

そう言って部屋に入ってきたのは忠だった。忠の言葉に明石も沼風も遅れた理由を悟った。

帝国海軍では艦内への物の持ち込みは基本的に禁止なのである。もちろんお目溢しをしてくれる上官がいたりする物なのだが、全員が全員そうと言う訳ではない。ましてある程度階級が高い忠が水兵や下士官に見つかって注意されたとなれば、所属の砲術科は艦内でお笑い物となる。だから彼は見つからない様に来る必要があったのだ。

『予備弾代わりに4つ買つという良かったよ、舷門のトコで番兵してる奴に捕まっちゃってさ。一個あげて見逃してもらったんだ。』

忠は苦勞話をしながらも、優しく微笑んで縛った紐や新聞紙を解き始める。中からでてきた小さな桶を一つずつ取り出して机に並べていく忠はベッドで横になる明石に向かって、時折『ごめん。』と言って小さく頭をさげてくる。

相方が自分の為に危ない橋を渡ってここまで来てくれた事に明石は表情を緩めたが、何故だか同時にヘコヘコと頭を下げて笑う忠を無性に困らせたくなった。故に明石はベッドに横になったまま、布団をバンバンと叩いて嬉しそうな声で無理難題を叫ぶ。

『寒いぞー！腹減ったぞー！一步も動けないぞー！』

『無茶言うなよ。その代わりちゃんと買ってきたぞ、おでん。』

苦笑いする忠が小さな桶の蓋を開けると、まるで全速航行時の排煙のように桶から湯気が上がった。そして部屋の中を支配していく香ばしい匂いに、明石は飛び起きて忠のもとに駆け寄っていく。

『おー、串に刺さってるんだあ。早く箸とってよう！』

『一步も動けないんじゃないのかよ。お、あった。箸だ、ほら。』

暖かなおでんが詰め込まれた桶と箸を受け取った明石は両手で大事そうにそれを抱えると、ベッドに腰掛けて膝の上に桶を置き、箸を進めた。味の染み込んだこげ茶色の大根を頬張ってニッコリ微笑む明石に、沼風は口に手を当てて静かに笑みを作る。

まだ色気より食い気か。

まだまだ若い艦魂である明石の姿をよく理解しながら、沼風は心の中で頑張れと呟いた。

やがて沼風にも忠は桶を渡したが、その横で一足先に舌鼓を打つ

明石は桶の中に発見した奇妙な物体を指して忠にそれを問う。

『森さん、この黄色いのはなに？』

『生姜味噌だよ、珍しいだろ？連絡船を待つ間に食って暖をとれるように、生姜味噌をつけて食べるんだよ。』

『へええ、面白いなあ。あ、貝も入ってる。』

『つぶ貝だよ。オレはこれが好きでー。』

暖かいおでんと忠の解説に、3人は箸を進めた。濃い味付けのおでんだが身体が温まった事もあるって、3人は机の下にあったお酒を取り出して飲み始めた。呉を発ってから忠と明石は寒さでとても酒を飲もうと思えなかったので、今日は久しぶりのお酒である。

舌に残る濃い後味と心に残る答えが見つけられていない疑問を、忠の目に映る二人の笑顔と酒がスツと流していく。その日の酒の味わいは格別だった。

第一六話 「出勤命令下る／其の五」

昭和14年12月9日。

曇り空と降雪というなんとも雪国らしい二択の天気の中、明石艦^{あかし}の発令所では連日腹に流し込むおでんとお酒に、少し二日酔い気味の忠^{ただし}が机に向かっていた。

軽い頭痛に彼の仕事は捗らない。まだ午前の課業中だと言うのに、彼のそれは今日何度目になるだろうか。机の上に鉛筆を放り投げ、椅子に浅く座り直ると背を大きく反って忠は天井を眺めた。

いつもは心地良い波音が今はうるさく、いつもは揺り籠^{かご}の様な艦の動揺が今日は邪魔だ。うつろな目で天井を見上げるが、視点を合わすのも今の彼には面倒くさい。

『大丈夫？』

『・・・・・・・・』

そして何故、この人はあれだけ酒をかつくらってケロっとしているのだ？

視界に広がった顔を覗きこんでくる明石の顔に、忠は小さく溜め息をして素朴な疑問を抱いく。だが思考回路が停滞気味な忠はすぐに疑問を忘れ、今度はすっかり酒では明石に勝てなくなった自分に不甲斐なさを感じた。見習い士官時代の鳥海艦^{ちようかい}では所属が酒豪ばかりで毎日のように酒を飲んでいたので、彼は自分の事をそこそ酒に強い男だと思っていた。ところが彼の小さな自信をいとも簡単に打ち碎いた明石は、いつもの綺麗な笑顔で顔を覗きこんでくる。忠には心なしかその笑顔が、自分を小馬鹿にしてあざ笑っているように見える。

だがそれもすぐにどうでも良くなった。顔を向けながらも無言で視点を合わせてこない忠に、明石は腰に両手を当てて胸を張って威張るような声をかける。

『飲み過ぎだよ。自分の限界はちゃんと知っておかないとダメよ。』
『・・・・・・・・』

アンタに言われとうないわい。

そう思いながらもまたすぐにも良くなった忠は、うつすらと口と目を開けて天井を眺め続ける。すっかり腑抜け^{ふぬ}となった相手の姿に、明石は優しく笑ってこれからの彼の飲酒に関しては自分が管理しようと心に決めるのだった。いつもの事ながら、彼女は相手の心の内をちつとも解っていない

曇り空から雪がひらひらとまた降り始めた昼過ぎ。

『食欲が無い・・・・』と今日は数える程しか発せられない忠の声を受け、彼の分の昼飯を心置きなく平らげてやった明石は機嫌が良かった。少し膨れたお腹^{ふく}を撫でて、彼女は発令所で忠の机にある書類を読み漁っている。その手に握る砲術科の各種記録簿は、彼女にとっては自分の身体の一部の状態を知る事が出来る重要な情報源だ。めくるページに記される項目は、ほとんどが「異常無し」。時折、その中に「要修理」、「要交換」という文字を見つけては備考の欄に目を落とすが、さすがに明石艦。日数を置かずして、「対応済み」の文字が記載されている。

自らの身体の健康と治癒能力の高さに、明石は小さく笑って頷き

ながらページをめくっていった。

『明石さん、こんにちは。』

そんな中、明るい声で挨拶しながら発令所に入ってきたのは沼風ぬまかぜだった。艦の外を少し歩いてきたのか、彼女は外套がいうの肩や頭巾を手で払って積もった雪を振り落としている。慣れた物で沼風は寒さや雪に対してすらも笑みを浮かべている。童顔の沼風のその笑顔は、野辺のお地藏様のようだ。

『あ、沼風。こんにちは。』

明石は椅子に腰掛けたまま、彼女に顔を向ける。少し寒さに慣れてきた明石にとっても、視界に入るお互いに吐く白い息や沼風の身体から落ちる雪は既に苦ではなかった。

笑って自分を迎えてくれる明石に沼風は歩み寄ったが、ふといつも隣にいる彼女の相方の姿が見えない事に気づいた。発令所の中をキョロキョロと見回しながら、沼風はその事を声に乗せる。

『あら？森さんはお仕事ですか？』

『森さんはお風呂。二日酔い覚ますのにはちょうどいいよ。』

明石の言葉に沼風は、昨日の記憶を辿ってクスクスと笑った。

『ふふふ、機嫌が良さそうでしたね。昨日の森さんは。』

『あははは、そうだねえ。』

明石も沼風の言葉に、昨夜の彼の姿を思い出して笑い出す。

昨日の夜、最近では珍しく忠が酒保からお酒を買ってきた。

いつもは甘いお菓子ばかりの明石の食事も、青森に着いてからは毎日おでんになっていた。寒さに耐える日々では、連日のように味の濃いおでんを食っても飽きない。その日の夜も忠の部屋では当然のように箸と酒が進む明石、沼風の姿があったが、その日は忠も機嫌が良かった。彼の弟のマサが帰省を終えて、明石艦に帰ってきたのである。やっと両親と会わせてやることが出来たという達成感と弟の幸せに、彼もその日は明石に負けないくらいの勢いで酒を進めた。また、マサが実家から持ち帰った忠の思い出の品に、忠は喜びを抑えられなかったのであった。

その品とは、彼が子供の頃に良く吹いていたというハモニカだった。もちろんそれを知ったこの人は騒ぎたてる。

『ねえ、吹いて！吹いてみてよ！』

明石は椅子に腰掛けた忠の腕にを掴み、まるでそれを邪魔するように忠の身体を揺さぶる。間近で彼女のその口から発せられる酒臭い息に忠は顔をしかめるものの、上機嫌で酔った忠はそれを特には気に留めず、赤みを帯びた顔で笑って明石に言った。

『ははは。よおし、いいぞ。』

そう言って忠はハモニカの端を両手で持って口に当てると、息を吹きかけたハモニカを左右にゆっくり動かして曲を奏で始めた。滅多に聞ける事の無い楽器の音に目を輝かせる明石と、目を閉じて静かに聞き入る沼風。和音ハモニカの綺麗で重複する音に感動する二人だったが、忠は突然吹くのを止めた。

『うゝゝん・・・。』

少し口を曲げて首を捻る忠に、明石が不思議に思って顔を覗きこむ。忠は酒の入ったお碗を口につけ、クイッと一飲みした所で明石と目を合わせた。彼は彼女の顔に何かが閃いたらしい。表情をまた明るくさせて、間近にあった明石の肩に手を乗せて言った。

『そうだ、明石。鉄道唱歌、覚えたか？』

沼風はその声に、自分の隣に無造作に横たわっていた本に視線を移す。この宴が始まるまで明石が読んでいたその本は、つい先日忠が上陸した先の本屋で買ってきた物である。本の題名は「鉄道唱歌・第一集 東海道編」。

『とゝう！』

いくら歌手であっても、第一集だけで66番まである鉄道唱歌を覚える事は至難の業である。故に明石は忠の言葉を聞くやベッドに一飛びで飛び乗ると、本をめくって忠に笑みを向けた。彼女の行動に微笑んで、再び口にハモニカを近づけながら忠は口を開く。

『先に歌ってよ。合わせるから。5番くらいまでやってみようか。』

どんな音が奏でられるんだろう。

そんな言葉が脳裏をかすめる沼風が期待の色を表情に浮かべて見守る中、明石は鈴を転がしたような綺麗な声で歌い始めた。

『汽ゝ笛一斉、新橋をゝ。はや我が汽車はゝ・・・。』

明石の歌声が響いて少し経ってから、忠はハモニカでの伴奏をはじめめる。軽快なリズムで奏でられる和音が、明石の綺麗な歌声に花を添える。ついさっき忠がハモニカだけで奏でた曲とは違い、部屋に響きだした今の音は暖かささえ伝わってくる程だ。沼風は心地良く耳に入ってくる明石の歌声と忠のハモニカに、目を閉じて少し身体を揺らして聞き入った。

『窓よりちかく品川の。』

明石の歌声も弾む。初めて伴奏を伴って歌う事が、彼女の心を湧きかえらせた。まして数ヶ月近く一緒に暮らしてきた二人の息が合わない訳が無い。時折、本の歌詞から忠に視線を流すと、お互いの視線が合った。思ったより上手くいっている事を喜んでいるのか、忠はハモニカを吹きながらも笑みで口元を揺るめる。思わず明石も笑みを溢し、歌う声の音階が一段上がる。何よりも初めて相方と一つの事を成し遂げる事が、明石には嬉しかった。

『みくなど見くれば百船の、煙はそくらを焦がすまで。』

5番目の歌詞を明石が歌い終わると同時に、忠は即興で高い音を出して束の間の演奏に幕を引いた。

『素晴らしいです。良い物が聞けましたあ。』

そう言いながら沼風が胸の前で両手を合わせて拍手する。忠と明石もお互いの頑張りに拍手した。

『ひい、ひい。酔ったのかな、息苦しいや。』

忠は肩で息をして滲み出てきた疲労に片目を閉じ、僅かに歪めた

笑みを浮かべる。彼はかなり顔が赤くなっているにも関わらず、乾いた喉を潤すために再び酒を勢い良く流し込んだ。

『はあゝ、今日は酒がうまいな。』

いつも以上のハイペースな飲酒をする忠を明石は心配して見ていたが、酒を飲み終わると気持ち良さそうな笑みを見せる彼に安堵する。彼女は自分の歌声が何倍も輝く事と人間である忠と一緒にになって演奏する事が楽しくて仕方なく、少しだけ彼の身体を心配しながらも無理を承知でお願いをした。

『森さん！私、もうちょつと歌いたい！』

本を持ったまま、両手を顔の前で合わせる明石。手の横から片目を覗かせて微笑む彼女に、すっかり酒が回った忠は大きく頷いてハモニカを持ち直して楽しそうに声を上げる。

『よおし、横須賀までいくぞお！』

『やたゝ！』

拳を握って喜ぶ明石が本を開くと同時に、忠はまた音を響かせた。

『横須賀行きは乗り換えとゝ、呼ばれて降るる大船のゝ。』

『あははは。結局、岡崎まで行っちゃったんだよねえ。』

昨夜の宴会を思い出し、口に手を当てて明石は笑った。目を回し

て忠が椅子から転げ落ちなければしばらく続いていたであろう、昨日の二人の演奏。もう少し続けていたかった一時だったが、ちょっと相方に無理をさせてしまった事に明石は少し罪悪感を感じた。ほんの少し眉をしかめた笑みで頭を掻く明石に、敏感な沼風はすぐに彼女の心の内を悟り、優しい言葉をかける。

『とっても楽しかったですよ。森さんも本当に楽しそうでしたね。』
『あはは、そうだね！』

沼風の言葉に、明石の顔には再び明るい笑みが戻った。寒いながらも穏やかな風が吹き抜ける中、二人は笑い合った。

その時、どこからか汽笛の音が響いてきた。

青森港は民間船の往来が激しいので珍しい事ではないが、音は随分近いところから聞こえてきた。ふと明石が音の聞こえたほうに顔を向けるが、そこに有るのは壁だけだ。しかし明石に反して沼風には驚く様子は無く、汽笛にニツコリと笑うと明石の手を取った。

『明石さん、見てみますか？』

『え？ な、なにを？』

唐突に言い出した沼風の言葉に、明石は状況を飲み込めずに呆けた顔をする。だが沼風は優しく明石の腕を引いて彼女を立ち上げらせ、微笑んだ顔を少し傾けて言った。

『ふふふ。私達の護る物ですよ。』

沼風のその言葉に、明石は大湊で抱いた疑問が脳裏に浮かんた。まだ答えが掴めない沼風の言葉によって浮かんたその疑問は、「帝国海軍の艦艇は何の為にあるのか？」という物であった。

歩き出す沼風に引かれ始める明石だが、彼女は抵抗する事無く沼風に従って歩き出した。

所々に氷が張った艦首に出た沼風と明石。雪が止んだ銀色の雲を背景にしてウミネコが空を飛んでいく中、明石艦の艦首の向こうには自分よりも大きな漁船を曳航^{えいこう}して往き足をとめる沼風艦と良く似た駆逐艦の姿が在った。距離は明石艦から100mも無く、向こうの艦の機関の音がここまで聞こえてくる。

『あれってー。』

ボオオオオオオオオオオ!

『うあっ!』

口を開きかけた明石を遮るように、目の前の駆逐艦から汽笛が発せられた。あまりの音の大きさに思わず明石は身をかがめる。しかし沼風は驚いた様子も無く、縮こまる明石の腕にそっと手を触れて彼女を立ち上がらせた。

『あ、ここにいたのか。』

その刹那、艦首を向いていた二人は背後から聞こえてきた声に振り向いた。二人の後ろから声を掛けたのは風呂上りの忠だった。

『あ、森さん。』

耳鳴りがまだ残る明石だったが、少しだけ元気が戻った忠の姿にその表情を明るくする。風呂で汗を掻いて酒が少し抜けたのか、青白かった忠の顔色に少し赤みが戻っている。まだ湿った髪の毛に湯気が漂う肌の忠に、沼風は小さく笑ってお辞儀をした。

『こんにちは、森さん。』

『やあ、沼風。あの艦はなんだい？』

『ふふふ。』

沼風は忠の質問に小さく笑って、明石艦の艦首舳先に顔を向けた。沼風が見つめる艦首に明石と忠も視線を送る。

するとそこには白く淡い光りを集まり始め、やがて光の中からは沼風と顔つきも格好も良く似た少女が現れた。ハネたクセ毛が水兵帽の両脇から逆立っており、鼻の上に絆創膏を張っている彼女。大人しそうな沼風とは逆に悪戯好きの少年のような印象があるが、背が小さくて沼風と良く似た童顔の顔つきであった。彼女は長旅をしてきたのか、その外套や帽子のあちこちには氷がこびり付いている。その内に少し疲れたような溜め息をしながらも、彼女は沼風に元氣良く声を掛けた。

『ふいい。いよう、沼風。』

『野風姉さん、ご苦勞様。』

沼風の言葉を聞く前に、忠も明石も彼女の正体を探り当てていた。彼女は沼風と同じ第一駆逐隊所属にして、その実の姉に当たる野風艦の艦魂である。野風は歯を見せてニカッと笑うと、呆ける明石と忠に歩み寄って敬礼した。

『ども。第一駆逐隊の野風です。お二人の事は波風から聞いております。沼風の修理、有難うございました。姉として礼を言います。』

スパッと手を額に当てて敬礼する野風。きびきびとした彼女の敬礼に、外套の付いた氷がパリパリと音を立てて崩れ落ちた。白い息

が顔を隠すように舞い上がるが、彼女はそれを意にも返さずにハキハキと口を開く。寒いという言葉を知らない様な元気な野風に、明石は被っていた頭巾ずきんを下げてサッと腕を上げて答礼した。

『いいえ、とんでもない。』

快活で好感が持てる野風に、明石は微笑んだ。忠も小さく敬礼してやると、野風は腕を下ろして沼風に身体を向けなおし両手で沼風の身体のあちこちをを触りながら話し始める。

『大丈夫みたいだね。神風かみかぜも心配してたよ。』

『明石さんのおかげだね。それより野風姉さんは大丈夫だった？』

沼風の言葉を聞くや、野風は胸を張って腕を組む。自信満々に少し顎を上げて答えた。

『当然。露助ロスケの砲艦がいやがったけど、主砲を二、三発ぶっ放して追い払ってやったさ。』

『鼻の絆創膏はどうしたの？』

『ああ、曳航する時にワイヤーやロープを引っ掛ける場所がなくてね。4番砲に引っ掛けたらもげちゃったんだよ。』

そう言って野風が指差した野風艦の艦尾を、明石や沼風と供に忠も眺めた。

沼風艦の艦型を察するに、野風艦の艦尾にも付いていたであろう主砲が一基無くなっている。良く見ると曳航の為のロープやワイヤーが引っ掛けられているのは、艦後部の最上甲板にある構造物や魚雷発射管である。魚雷発射艦はまだ付いているがつけ根からグニャッと曲がっており、中に詰まった魚雷は空を向いてしまっている。艦尾旗竿もロープやワイヤーに当たって根元からボッキリと折れて

しまったのであろう、帝国海軍艦艇の証たる軍艦旗が野風艦には無かった。

そしてそんな野風艦が曳航してきた漁船は大型の工船のようで、ゆうに2000トンはあるような大きな船だった。小さな身体の野風だが、その身体の中には38500馬力の機関を装備している。自分の倍程の重さの艦を引っ張ることが出来る底力と、自らの身体を傷つけてまで任務を遂行した野風に忠と明石は感心した。

ちなみに彼女達の姉妹の一人である島風艦^{しまかせ}は、全力航試で40ノット以上の速度を記録した帝国海軍一の韋駄天艦^{いだてん}であった。

やがてその場には響いた幾分音階が高いその汽笛は、明石艦の艦尾から聞こえた。

野風艦に比べて弱々しい汽笛を響かせ、港の交通船が明石艦の横を通って野風艦の後ろの漁船に近寄って行く。どうやら漁船を引き渡すらしい、野風艦の甲板ではワイヤーやロープを取り外す乗組員達の姿が見える。それを確認した野風は両手を天に向かって伸ばした。

『くあああ~~~~・・・！終わったあ~~~~。』

『ご苦労様。大変だったね。』

『うん、超腹減った！』

沼風の劳いの言葉に、野風は腕を高々と伸ばしたまま答える。元気な野風は喪失した自分の主砲や艦尾旗竿をなんとも思っていないらしい。無邪気に会話する野風と沼風だったが、忠はその事に思う所が有り、それを確かめるべく静かに話しかけた。

『なあ、野風。』

『うい？なんですか？』

『あ、その、なんていうか、残念な気持ちとかないのかい？』

『はい？』

『しゅ、主砲がもげちゃったんでしょ？その、戦闘艦には辛い事じゃないのかい？』

忠は砲術科である事もあって、主砲の喪失というのは一大事である事を感じていた。工作艦である明石艦ならまだしも、野風艦は古い型とは言えれっきとした駆逐艦である。艦隊の槍先である彼女達にとって主砲と魚雷の兵装は、その主命を果たす上において必須の物なのではないのか？

だが忠のそんな疑問にも野風は首を傾げ、空を見上げて頬を掻いている。

『うーん、特に気にしてませんねえ。目的も達成できたですしい。』

『いや、でも露助の砲艦とイザコザがあったんだろ？そんな時に主砲がないと交戦できないんじゃないのかい？』

『うーん。その時は体当たりでもするしかないかなあ。あははは！』

頭の後ろで手を組んで無垢な笑顔を見せる野風。

だがその言葉に明石は仰天して声を上げた。もしそんな事したら旧式な艦体の野風艦がどうなるか。想像するに難くない結果を脳裏に過ぎらせた明石には、その軍医としての立場も手伝って聞き逃せない言葉だった。

『そ、それじゃ野風が死んじゃうかもしれないじゃない！』

『ま、まあやりたくはないですけど……。』

語気を強めた明石の声に、野風は苦笑いして答えた。

『ならもっと自分を大切に――！』

『うーん、でも、その為に身体張れるのって私達だけじゃないですか？』

明石の声を遮った野風の言葉に、明石と忠は言葉を失った。そして沈黙する二人の姿を沼風はただニコニコと笑って眺めていた。

野風の無邪気な笑い声と、野風艦の後ろから聞こえてくる汽笛がその場を流れていく。

野風は特に何か考え込んだ訳でも、特に何か飾^{かざ}った言葉を発したわけではない。恐らくは頭に浮かんだ言葉をそのまま口にしたであろう、野風のその言葉。

だがそれは明石と忠が抱いていた疑問を風の前の塵のように吹き飛ばした。氷がこびり付いた外套に身を包む野風と、数日前まで苦痛に顔を歪めていた沼風。彼女達のその姿こそが国を護るという事の代償を良く現していた。

「国を護る」、それは聞こえの良さから誰もが安易に口にする。

だが決してそれは念仏のように唱えていれば実行できる様な生易しい物ではない。極寒の海で繰り広げられる漁船の救助も、国民の生命と財産を護るという意味では立派なお仕事であるが、戦艦として建造された野風や沼風の本来の運用方法とはかけ離れた仕事であり、華々しく戦場を駆け回る事に比べればとても地味な姿である。だがその為に自らの身を切る事が出来る艦は駆逐艦だの戦艦だのといった区別無く、帝国海軍の艦艇において他にいないではないか。国の為、国民の為にある砲であり、魚雷であり、艦体なのだ。決して海軍の体裁^{ていさい}や、自分の安全を保障する為の物ではない。

それを胸の秘めて日夜励み、体当たりという言葉を平然と口にしながら白い歯を見せて笑う野風と、その隣で黙って微笑んでいる沼風。

この二人とその姉妹達で構成される第一駆逐隊は既に20年近くこの大湊にあって、文字通り国を護る事に命を懸けてきたのだ。自

らに強い犠牲を覚悟の上で、ずっと生きてきた彼女達。それを知る人々とはどれだけいるだろう。呉の艦魂達ですら彼女達のことを知っている者は少ない。

汽笛をあげた交通船にゆっくりと曳航されていく漁船に、その場にいる4人は一斉にその視線を流す。所々に錆びが目立ち、傷だらけの甲板の上に船員達が並んで大きく手を振ってくれている。

『ありがとう〜!!』

『海軍さん、ありがとう〜!!』

『おかげで生きて帰れた〜! ありがとう〜!!』

そこにあった笑顔。たかが一隻の漁船の船員達の顔だが、野風が助けに行かなければ凍りつくような寒さの海に消えていたであろう。漁船一隻の為に連合艦隊を出撃させると聞けば、誰もが首を傾げるに違いない。だが野風は傷だらけになりながらも国防に努める者たる強い意志を曲げず、あの笑顔を両手から溢さずにここまで持ち帰った。

その事実と脳裏に蘇る市街地での少女の笑みが、忠の心に答えを打ちつけた。

世界最強を自負する帝国海軍、だが自分達は忘れてはいけない事がある。帝国海軍はあの笑顔の為に存在するのであり、その為にどんな代償をも覚悟して生きなければならない。命すら掛ける覚悟を持って励む事はその当然の使命、そしてそれが帝国海軍じゃないか。

そう思った忠は、野風に向き直って踵を揃えて敬礼した。自分よりも階級の高い忠が先に敬礼した事に、野風は驚いて少し仰け反る。

『わ! な、なんですか! ?』

『・・・目が覚めたんだ、野風。』
『うい？』

さっぱり状況がわからない野風はどうすればいいのか解らず、明石や沼風にキヨロキヨロと視線を送った。沼風はそんな姉の視線にも、ただクスクスと笑うばかり。

そして焦る野風に忠が口を開こうとした時、明石が一步前に進み出た。彼女は笑顔で沼風に小さく頷くと、キリッと表情を整えて敬礼する。

『手段の一つって言ってたね・・・。』

明石の声に沼風はゆっくりと答礼しながら答える。野風と違い、滑らかな物言いの沼風の言葉は、再び辺りに響きだした波の音のようだ。

『はい。あれもその使い方の内の一つですよ。』

『帝国海軍だもんね・・・。』

『ふふふ。はい。』

外套に水兵帽、そしてニコニコと大人しく笑う沼風には凄みという物が無い。背も低く童顔である彼女の敬礼は、子供が兵隊の真似事をしている様な感じさえする。まるで覇気が無い沼風だが、その表情の向こうには自分の生きる道の何たるかを悟った皇軍兵士の覚悟が在った。

お互いに笑みを浮かべて敬礼する沼風と明石に、すっかり状況の把握が不可能になってしまった野風が声を掛ける。

『え、えっと、なんかあったの？』

忠はなんとなくだが、明石と沼風の会話に見当がついていた。恐らく明石も自分と似た疑問を抱いていたに違いない。そして彼女もまた、野風と沼風と彼女達が救った物をその目で見て、こもごもの答えを得たのではないだろうか。

新米と言えば明石も忠も同じあり、帝国海軍の本分を先輩から教えられた事に、二人は少しだけ大人びた顔つきになった。

一際大きく明石艦の横から聞こえてきた汽笛が、その4人の意識を一点に集める。見ればそこには降り積もる雪に溶け込むかのように、沼風艦がゆっくりと航行していた。栈橋に接岸していた沼風艦がその場に居ることに、明石と忠はある事を思い当てて沼風に顔を向ける。

沼風は二人の心の内が読めたのか、少し寂しそうな笑みを向けて口を開いた。

『これより私達は^{おおみなと}大湊に戻ります。明石さん、森さん、ここでお別れです。』

沼風はそう言うと、明石に歩み寄ってその手を取った。緩く握ってくれる沼風の手を、明石も両手で握り返す。

『うん、そっか。』

明石はそう言った後の言葉が続かなかった。別れを惜しんで泣いた訳ではないが、色んな事を教えてくれた沼風に感謝の念が絶えない。もっと色々な事を話したかったし、もっとお礼を言いたい。そう思う明石だったが、手を伝わるお互いの肌の温もりが全てを伝えていた。同じ帝国海軍の艦魂同士、二人には言葉なぞいらなかった。

『そうか。野風、沼風、また会おうな。』

忠の声に沼風は明石から彼の顔に視線を流した。この雪のように淡くて綺麗な笑顔ともしばらくのお別れか、そう思うと忠も少し寂しかった。

『はい。きつとまた会えます。』

『あ、は、はい！』

静かな声で返事する沼風と、何が何だか解らないがとりあえず返事をした野風。だが自然とそこにいる4人の顔には笑みがこぼれる。そして沼風の言葉を、明石と忠は大きく頷いて信じた。

いつかきつとまた会える、その時はまた手を取り合って笑おう。

雪がふわふわと舞い落ちる明石艦の艦首で、4人は再会を約束して別れた。

昭和14年12月10日、0530。

いつもの起床ラッパに忠の部屋では、床の布団ですやすやと眠っていた明石が飛び起きた。寝巻き姿のまま、彼女の毎朝の日課である相方起こしがはじまる。

『あゝさゝだ、夜明けだゝ！！』

大声で歌いながらベッドの布団をむんずと掴んで剥ぎ取る明石。

時には布団ごとベッドから転げ落ちる相方の顔は、いつも朝から何故か浮かない顔である。少しは感謝して欲しいなあ、と全く自分の責任を感じていない明石は、その日も勢い良く布団を剥ぎ取った。常日頃から叩き起こされる忠にしたら迷惑極まりない話である。だが、布団をどかしたそこには忠の姿は無かった。

『あれえ？』

初めての状況に明石は掛け布団を確認した。布団の裏にも彼の姿は無く、手にした掛け布団に残った温もりは少し消えかけている。どうやら先に起きて部屋を出て行ったらしい。

珍しい事もあるものだ、と明石は小さく溜め息して肩から力を抜いた。だが自分の心遣いを見殺しにして行動した相方に、明石はなんだか無性に腹が立ってきた。不機嫌に口をへの字にすると、大急ぎで着替え始める明石。文句の一つでも言ってやろうと心に決めた明石は、着替えの終わりにギュツと後ろ髪を首の後ろで縛ると部屋を飛び出して行った。

乗組員達の往来が始まった艦内通路には、彼等には聞こえない明石の叫びが木霊する。

『悪い子はいねが~~~~!!』

快晴で迎えた旅立ちの日の朝、忠は前部マストの上にある探照灯台で両手に持った双眼鏡を覗き込んでいた。そこは艦橋の上の測距儀の天井よりも遥かに高いところで、明石艦の中で最も見晴らしのいい所だった。

双眼鏡の向こうにうつすらと見える光景。それを一目見たかった

忠の口元が緩む。だがすぐに彼は溜め息をして双眼鏡を下ろすと、その眉をしかめた。白く吐き出された忠の息が、ふわふわと舞い上がって空気に溶けていく。

その脳裏に浮かんだのは、終わりが見えない支那事変の事。

上陸した市街地のあちこちで忠は疲弊した国内の状況を目の当たりにしていた。汽車もバスも昔はもっと頻繁に行き来していたし、店に並べられる商品も昔はもっと品揃えが豊富にあった。彼が市街地で見たものは、明らかに減った人々の生活の跡と、変わらぬ降り積もった雪と、明らかに増えた陸軍省や海軍省のポスターだった。軍事の色合いが強くなってきた国内と供に、最近はもう一つ気がかりな事がある。

那珂^{なか}が言っていた満蒙^{まんもう}でのソ連との国境紛争、そして7月にアメリカより通告された貿易条約の破棄。支那事変、いやそれ以前の満州国成立時から日本の対中政策に反対していたアメリカは、去る7月26日に日米通商航海条約の破棄を言い渡してきたのだ。それはアメリカが日本との貿易において輸出禁止にできる品目を自由に決定できるという内容で、貿易が完全停止しないまでも立派な経済制裁であった。

加えて昭和11年の防共協定より促進されてきたドイツとの友好関係は、欧州での時勢とあいまってアメリカやイギリスとの対決姿勢を鮮明にし始めていた。

勝つか負けるか、どっちが正義でどっちが悪なのか忠には解らない。だが支那事変の上にこれらの国と戦う事になれば、日本はどうなるのだろうか？そしてそこにある、あの自分の故郷はどうなってしまうのだろうか？

少し赤みを残した青空に照らされる故郷の光景に、忠は考えるのを止めた。考える事が出来ない、それに考えたくも無かったからだ。再び双眼鏡で覗く霞がかった故郷に、忠はしばらくは見る事が出

来ないであろうという事だけを思って、心の中で静かに別れを告げた。

さらば兔追うさおいし岩木山いわきさんの緑よ。

さらば小鮒こぶな釣りし一岩木川の清流よ。

親父、お袋、あの景色のどこにいるんだ？

そんな言葉を心の中で呟いた刹那、忠の頬に一筋の涙がながれた。仕事での立場を理由に帰郷しなかった事を、この時彼は深く後悔したのだった。

『も、森さん・・・？』

一人感傷に浸る忠の後ろで声をかけたのは明石だった。やっと見つけた相方を後ろから引叩こうしていた明石だったが、その相方の頬に涙が滴っていた事に気づいて咄嗟に声を掛けたのである。

しかし忠は明石の声に気づいてすぐに、既に見られているその涙を袖で拭った。

『なんだ、明石。起きたのか？』

忠は明石に顔を向けずに言った。だが僅かに泣き声が混じった忠の声に、明石は忠の腕を掴んで顔を覗きこむ。

『どうしたの？どこか痛いのか？』

『いや・・・。そんなじゃないよ。』

『ちゃんと言ってよ。変な病気だったら――。』

言い掛ける明石に、忠は首にかけた双眼鏡を差し出した。心配してくれる明石の顔に忠は自分の心の内を読まれていない事を悟って

安堵しながら、いつもと変わらない彼女の顔に忠は微笑んで声を発した。

『見てみるか？オレの生まれた所。』

『お、どこどこ！？』

明石は奪い取るように忠の手から双眼鏡を取って辺りを見回した。キョロキョロと双眼鏡を振り回す明石に、忠は彼女の後ろに立って両肩に手を乗せて身体の向きを変えてやる。

『山が見えるか？』

『あ、富士山！？富士山がある！！』

『あははは、岩木山だよ。富士山に似てるから別名は津軽富士つがるふじって言つてな。オレの実家はあの山の麓にあるんだよ。』

『へええ、あの山なんだあ。』

明石は双眼鏡越しにその山を見ながら、先程の忠の涙の理由を理解した。

誰しも故郷という物は愛しい物である、それは忠とて例外では無かったのだ。青森港にて過ごした5日間、連日の様におでんやお酒を飲んで一緒にいてくれた事に明石は少し罪悪感が込み上げてくる。

謝った方が良いかな？

そう思って双眼鏡を下ろそうとした時、後ろから忠の歌声が聞こえてきた。僅かに咽び泣く様な声が混じった歌声は、忠の無言のお願いを明石に伝えてくる。

彼は案外と意地っ張りなのである。泣いている顔を明石には見て欲しくないのだ。

その心情を理解しながらも全てを曝さらけ出してくれない相方に、明

石は少しだけ苦笑いしながら彼の生まれ故郷を眺め続けてあげた。

汽車乗り換えて弘前ひろきに

遊ぶも旅の楽しみよ

店に並ぶは津軽塗つがるぬり

空に立てるは津軽富士

寂しそうに鉄道唱歌を歌う忠とその歌声を聴きながら景色を眺める明石は、こうして青森に別れを告げた。

同日、0900。

明石艦は抜錨はき、津軽海峡を太平洋に抜けた。目指すは第二艦隊集結地である九州の有明湾ありあけ。寒空に軍艦旗を靡かせて、快晴の空の下
の波間を明石艦は駆ける。

初の出動命令を終えて、明石艦の乗組員達は錬度を高めた。そして忠と明石も大きく成長したもだった。

微かな陸地を右舷に望み、南の海に突き進んでいく明石艦のシルエットは少しだけ大きくなっていた。

第一六話 「出動命令下る／其の五」 (後書き)

北方海域編は今回で終わりです。

正確な明石艦の行動歴とは少し横道にズレた話になりましたが、お読みになってくれた皆様有難うございました。

次回より、再び正確な明石艦の行動記録に基づいたお話を展開していきます。

これからも明石艦物語をどうかよろしくお願いいたします。

第一七話 「変な艦長」

昭和14年12月18日、1433。

晴天の空の端に積乱雲が立ち込める中、明石艦は九州南部の大隈^{おおすみ}半島の東岸、有明湾^{ありあけ}（現・志布志湾^{しぶし}）沖合いにあった。

雪降る青森からきた明石艦乗組員達には、九州の気候は暑く感じる。^{ただし}

忠と明石は発令所の外に出て服の袖を捲り上げ、沖合いで繰り広げられる第二艦隊の訓練風景を眺めていた。

風はそこそこあるのに艦は太陽に照らされて熱を帯びており、立っているだけでも暑い。

『ふう……。』

雪国体質である忠は寒さには強いが、暑さには弱い。手拭いで顔を拭きながら、ちよつと疲れた様に溜め息をする。

一方、明石は佐世保生まれだからか、少しこの気候には慣れているらしい。帽子を床に置いて涼しい顔をしている彼女は、胡坐^{あぐら}をかいて横に置いた何か奇妙な機械のダイヤルをイジっている。それはいつもの白い光りで出現させた黒い箱状の機械で、その姿は艦隊連絡用の90式無線電話機に似ている。

そしてその機械からケーブルで繋がったヘッドフォンを耳に当てて、時折大声で笑う明石。

『なあなあ、それなんだよ？』

肩をつんつんと突付いてそう言うと、明石は得意気な顔をしてヘッドフォンを首に掛け、胸を張って答えた。

『ふふ〜ん。艦魂だってちゃんど連絡は取り合うんだよ。もちろん私もね!』

『という事は、それ無線電話の機械なのか?』

『そうだよ。便利だけどもの凄く疲れるから滅多に使わないけどね。』

『ふう〜ん。』

『おっ・・・!』

会話の途中で微かにヘッドフォンから聞こえてきた雑音に、明石は無線機に身体を向けて再びダイヤルを捻り始めた。小刻みに動かす彼女の手とダイヤルに合わせて、ダイヤルの右側にある目盛りの針が左右にフラフラと動いている。無線電話機なのに空中線やアンテナと繋がっていないのは不思議だが、それを言ってはそもそも彼女が存在その物が不思議以外の何者でもない。だがすっかり艦魂という存在に慣れた忠には、さして疑問は湧かなかった。艦魂だもんな、そう考えれば素直に理解できてしまうのだった。

『きゃはははは!』

ダイヤルの調整が終わったのか、身体を無線機から海の向こうの第二艦隊に向けて膝を抱える明石。何回か小さく声を漏らした後、再び大声で笑った。やがて腹を抱えて脚をバタバタと振る彼女を瞳に入れた忠は、一体ヘッドフォンからは何が聞こえているんだろうと明石の姿に興味を抱き始める。

『おい明石、オレにも――。』

『あゝはっはっは！』
『・・・・・・・・』

彼女に無視されるのはいつもの事である。もっとも有無を言わせないように言葉を遮るのではなく、今は単純にヘッドフォンをしているから忠の声が聞こえていないだけだ。だが珍しい物を前にして大人しくしていられる程、忠は我慢強い性格ではない。ましてそれを楽しんでいるのがいつも一緒にいる相方であれば、遠慮という心遣いも薄らぐ物である。

忠は明石の頭の上にそつと手を伸ばすと、ヘッドフォンの金具をつまんで上に引っこ抜いた。スルリと抜けるように頭から離れるヘッドフォンに、明石は眉を吊り上げて忠の腕を掴んで叫ぶ。

『あ！！ かえせ！！！！』

突然ヘッドフォンを強奪された明石は、それを取り返そうと両腕を伸ばす。だが忠はおむろに伸ばした右手を彼女の顔にあてがった。虚しく空を切る明石の手を横目に、左手に持ち替えたヘッドフォンを忠は耳に当てた。

『こんの馬鹿があ！！！！』

聞こえてきたのは甲高い声の怒号で、その勢いに思わず忠の首が傾く。ふと見た海の方この第二艦隊では、4本煙突の二等巡洋艦が指揮下の駆逐隊を率いて雷撃運動をしている。忠も一度聞いたことのある声にあの艦影、ヘッドフォンから聞こえてきた声の主が神通である事を彼は悟った。

『誰がそんな旋回を教えた、あさしお 朝潮！！ もっと鋭く曲がらんかあ！！！！』

『ひい！ は、はいい！』

朝潮とよばれた少女の声が聞こえると同時に、海の方こうでは神通艦に続く駆逐隊の先頭艦が急旋回しはじめた。艦中央の乾舷に記された艦名はちよつと遠くで見えづらいが、どうやらそれが朝潮艦らしい事を忠は察する。そしてふと今の光景に、彼は記憶の片隅にある艦魂という者の特徴を思い出した。

以前聞いた明石の話に寄ると、実際は艦魂の意思では船を動かす事は出来ないという。だが、舵の効き具合、砲の微細な角度の誤差等、微妙な加減は艦魂の身体や精神の具合に左右されるというのだ。

目の前で繰り広げられる光景は、その話を忠に良く理解させた。

やれやれ、相当シゴかれてるな。

張り切る神通の声と怒鳴られる彼女の部下の悲鳴に、そんな言葉を脳裏に過ぎらせて忠は笑った。

『あはははは・・・あ！』

つい隣にいた明石を忘れてしまった忠の隙を見逃さず、彼女はヘッドフォンを忠の頭から引っこ抜いた。

『かえせえ！！』

両手でヘッドフォンを持ったまま、明石は怒った顔を向けてくる。ぶつくりと頬を膨らませて忠を睨みながら、明石は再びヘッドフォンを頭から被って耳に当てた。

『そんなに怒るなよ。ちよつとくらい、いいじゃん。』

『これ長く使えないの！ 疲れるからダメ！！』
『はいはい。解った、解った。』

明石は頬を膨らませたまま、ヘッドフォンを両手で耳に押し付けて取られないように警戒している。楽しめる事を分かとうとしてくれないのは、明石にしては珍しい。

彼女の言葉通り、無線電話を使う事は余程体力のいる事なのだろう。

そう思う忠は納得しながらも、彼女の体力の回復に大きく貢献している自分を差し置く明石に、少し口を尖らせた。

暇そうに第二艦隊の訓練を眺める二人だが、別に仕事をサボっている訳ではない。艦隊訓練では泊地に入るのも順番や位置がちゃんと決まっている為、二人を乗せた明石艦は第二艦隊が訓練を終了して泊地に向かうのを待っているのである。午後の課業中という半端な時間に到着したのが原因だった。

同日、1832。

第二艦隊で埋め尽くされた有明湾に、月の光りが差し込む。所狭しと密集した所属艦はそれぞれの持てる錨を全て投錨して、肩を寄せ合う様に静かに波間に浮かんでいた。

30隻近い大艦隊の錨泊ともなれば、いつもの片方の錨を下ろしただけの単錨泊たんびようはくでは潮に流れた艦体が他の艦と衝突する危険がある。また、軍港ではない有明湾には、艦位保持用の繫留けいりゅうブイも無い。こ

のような時は両方の錨を下ろした双錨泊そつびようはくとし、さらに艦尾の小錨をおろして艦の動きを完全に安定させる物である。

明石艦も例に漏れず艦首の両舷と艦尾から錨を下ろしている為、その日の明石艦の中は艦上である事を忘れる程に動揺が少なかった。

『砲術士、今日はまた多く買っていきますね？』

『ん？ああ、ちよつと腹減っててね。』

酒保番の主計兵からかけられた声に、忠は苦笑いして返事をする。主計兵の言葉通り忠の買い物はいつも以上にその量が多く、彼の紙袋に品物が入りきらないという事態になった。やむなく彼はお酒の瓶を紐ひもで縛って、片手で吊るして持っていく事にする。手に余るほどの品物の量は彼の部屋に集う仲間達の笑顔の量に比例するが、同じくそれに比例して少ないであろう自身の月給を忠は憂いて溜め息をした。

仕方ないよな、久しぶりにみんなと会うんだし。今日は我慢するか。

「今日は」と言いつつ、毎度のようにそう自分に言い聞かせる忠。片手に吊るした酒の瓶が意外に重いのか、身体を傾けながら部屋に向かつて彼は歩き始めるものの、その足取りはどこか軽やかだった。

そして予想通り、忠の部屋には勝手知ったる仲間達が押しかけていた。

忠の部屋は決して広い部屋ではない。入り口の両脇にはクローゼットと机、少し間を空けてベッドがあり、床に明石の布団を敷くと足の踏み場が無い程の狭さである。その狭さの中、定位置であるベツドの上には明石と、神通、那珂^{なか}が陣取っており、下っ端の霞^{あか}（かすみ）と一霰^{いちせん}は床に座布団を敷いて座っていた。

机の椅子だけが忠の定位置であるのだが、部屋の主が彼である事を考えると理不尽極まりない話である。

彼が経に戻った頃には女子5人は既に話の花を咲かせており、お互いの近況を伝え合っていた。忠が持ち帰ったお菓子やお酒などの飲み物が、みんなの話し声の音階と勢いを一段階あげる。

『森さん、見て見て!!』

机でスルメを口に挟み込んでいた忠に、霞が肘を突き出して声をあげた。ちょうど忠の足元の辺りで元気に笑う霞。そしてそんな姉につられる様に、霞^{あられ}も肘を突き出してきた。

『うん?』

よく見ると彼女達の臂章^{ひしょう}が目に入った。赤い刺繍で施された模様は、錨の上に星が一つ。その臂章の意味を瞬時に読み取った忠は、優しく微笑んで二人を祝福する。

『おお、二人とも一水になったのか。おめでとう。』

『へっへん。もう新米じゃないですよ!』

『森さん、似合っとなどですか?』

『あははは、よく似合ってるぞ。霰。』

忠は背を丸めて二人の肩に手を乗せた。麻色の肌に白い歯を見せて笑う霞と、細い糸目で人形のように笑う霰。少し見ない内に、二人の肩幅が少しだけ広くなった様に忠には見える。今日の昼間にも見られた様に、鬼の戦隊長である神通に毎日の様にシゴかれてきた二人。その苦労もようやく報われて来たのだろうと忠は納得し、二人に負けないくらいに明るい笑みを返してやる。

満面の笑みをそれぞれに向ける3人。しかしふとそこに神通の声
が切り込んできた。

『ふん、馬鹿者が。私から見れば、一水も二水も変わらん。一水になつたといつて私の扱いは変わらんぞ。』

『『はい。』』

人間の世界でもこういう風に部下を素直に褒めてくれない上司と
いうのはよく居る。もっとも不敵に笑いながら言葉を発した神通の
心の内は霞と霰も含めて、ここにいる者全員がそれなりに理解して
いる。神通は一言『気を抜くな。』と言いたいのだが、それを言え
ない不器用な人なのだ。それを解っている霞と霰は何食わぬ顔で返
事をした後、舌を出して苦笑いしながらお互いの顔を見合っていた。

『森さん、大湊での任務は順調でしたか？』
おおみなと

ベッドの端でニコニコと笑みを浮かべながら、那珂が口を開いた。
姉の神通とは間逆の低くハスキーな声の那珂は、性格や物腰も姉
とは間逆である。ベッドに腰掛けてふてぶてしく脚を組んで鋭い眼
光を伴いながら酒を飲む神通の横で、那珂は自愛心溢れる笑顔に崩
した正座で、草原に咲く一輪の花のように座っていた。相変わらず
上品に甘納豆を一粒ずつ摘んでは口に運ぶ彼女。顔つきだけは神通

と似ているが、歳相応に落ち着いたなんとも綺麗な女性である。

そんな那珂に対して忠は、女性像という点においては明石以上に好感を持っていた。自然に忠の表情は緩み、声も弾む。

『ああ、何事も無かったよ。お土産でも買ってくれば良かったね。』

『とんでもないですよ。あ、でも土産話はちよつと聞きたいですね。』

『土産話かあ、とりあえず明石が寒さに参って困ったかなあ。あははは。』

『まあ、ふふふ。』

那珂の笑みに忠の口がつい軽くなる。笑い合う二人だったが、その会話を快く聞けない明石は口を尖らせる。那珂とは神通を挟んでベッドの反対側にうつ伏せで寝転がる明石は、頬杖について忠を一睨みしながら言った。

『なによ、話のネタにして……。』

『あはは、ごめん、ごめん。』

『……………』

不機嫌な事この上ないという態度の明石に忠はいつもの苦笑いで誤魔化そうとしたが、明石は目が合うとプイッとそっぽを向いて酒の入った碗を口につけた。

やれやれ、マズったな。

そう思って頭を掻く忠とそっぽを向いたままの明石に、神通が溜め息をして声を上げる。

『なんだ、つまらん。少しは距離が縮まったと思ったんだが……。』

『・・・・・・・・』

神通の声にも明石は無反応である。どうやら彼女は本格的にへそを曲げたらしい。

そんなに話のネタにされたのが嫌だったのだろうかと考えると、ちよつと暗くなった部屋の空気の責任が自分にあるように忠は思えてきた。心なしか今の彼には、自分に対して向けられてくる霞の視線が胸に刺さるように感じる。なんとかせねばと思うものの、普段から笑って誤魔化すクセを振りかざす忠には選択肢は一つしか思い浮かばなかった。

『あはは、距離って・・・・あはは――。』

『新婚旅行みたいなモノだろう。まったく。』

『お、おい！　んな訳無いだろ！』

『冗談だ。顔を真っ赤にして怒鳴るとは、まだまだ子供だな。』

『う・・・・・・・・』

言葉を詰まらせる忠に、神通はニヤニヤしながら酒を一飲みした。足元では霞と霰が口に手を当てて笑い声を押し殺している。見た目の上でも年上の神通に上手く踊らされて子供扱いされた事に、忠は口をへの字にして机の上にある酒の入ったお碗に手を伸ばした。

クソ、からかいやがって。

そう思いながらも一人で慌てて、未だに赤さが残る自分の顔に気づく忠は肩を落とした。不甲斐ない自分とからかわれた怒りから来るもどかしさを振り切るように、忠はお碗を口につける。

『あ、そう言えば神通姉さん。』

『うん、なんだ？』

『新しい艦長さんはどんな感じなの？艦魂が見えるんでしょう？』

那珂の問いかけに、忠は驚いて神通を見た。

実は自分以外に艦魂が見える人間と、忠は関わった事が無い。そういう人種は珍しい部類とは彼女達の言葉だが、自分と同じ境遇を持った人間には興味が湧くという物だ。

むすつとしていた明石も興味が湧いたらしく、目を輝かせて神通の顔を覗きむ。

そして何より、神通は過去にも艦長を務めていた人に艦魂が見える人間がいた事がある。竣工間もない神通に優しく接してくれた良人だったそうだが、美保ヶ関事件で余りにも悲劇的な別れをしてしまった事が彼女の心に深い傷をつけていた事は、ここにいる誰もが知っている事実である。

だが数少ない艦魂と触れ合う事が出来る人間をまたしても艦長に迎えられるというのは、彼女にとってはとても幸運であろう。

今度こそ仲睦まじく人間と一緒に生きていつて欲しい。

そう思いながら忠は神通の顔を覗いたが、彼女は彼の予想とは反して片方の眉をピクピクと動かして顔をしかめている。

『あのジジイか……。』

神通の明らかに憎しみが籠った声に、霞と霰は気まずそうに引きつった笑みを浮かべている。何か一癖ある人物らしく、那珂に注がれた酒を神通はヤケを起したかのように勢い良く飲んだ。

同じ戦隊所属の彼女達なら知ってるかなと考えた忠は、足元に座る霞の方をつつくと背を丸めて彼女に顔を近づけ、そっと自分の口

元に手を当てて静かな声で尋ねた。

『・・・霞、どうしたんだ？変な人なのか？』

霞は相変わらず口元を引きつらせながらも苦笑いすると、神通がこちらを見ていない事を確認して忠に静かに声を返した。

『・・・戦隊長、お尻触られたんですよ。もう毎日、後ろからデレデレと鼻の下伸ばして見て来るんですからあ。』
『・・・え、ホントかよ？それ？』

ヒソヒソと話す二人の会話だったが、さして広くも無い忠の部屋では小声で話しても意味が無い。当然、その声は神通の耳にも届いていた。

『霞い！！』

『ひうつ・・・！』

眉を吊り上げた神通の怒鳴り声に、霞はビクンと身体を震わせた後に硬直する。鬼の上司を怒らせてしまった事を察した霞は、顔を下に向けて両目を瞑って肩を震わせた。神通は上目遣いで日本刀の様に研ぎ澄まされた視線で睨んでくる。怯える霞を黙らせた後、話し相手であった忠にも神通は眼光を向けてきた。

今にも蛙に飛び掛ろうとする蛇のような彼女の目。

いや、怖ええ。

一瞬にして神通の視線に突き刺され、忠は床に顔を向けた。この世には知らない方が身の為という事もある。そんな事を忠は身に染みて感じながら、霞と同じように顔を歪めて縮こまる。

『ねえねえ、神通く。その人ってどういう人？私や森さんみたいに新人さんなの？』

そんな中、少し酒に酔って頬を赤くした明石は、わざとらしく無邪気な声をあげて神通の袖を引っ張った。神通は明石の顔に目を向けると、怒りを醒ますように溜め息をする。やがて再び酒を飲んで目を閉じる神通の顔からは、怒りの色がサーと引いていく。

『……ふん。』

お尻を触られたとは一言も発しない事に、忠は明石が助け舟を出してくれたという事を悟って安堵した。同時に神通も少し落ち着いたのか、脚を組みなおすと布団の上にあった紙包みからスルメを口に運んで話し始めた。

『まあ、どっちかと言えばベテランだな。駆逐艦や掃海艇の勤務で随分過ごして来たらしい。その証拠に指示や命令は現場主義で的確だった。判断も迅速だから、展開の速い水雷戦闘には向いてる方だな。』

『ふうん。』

『まあ、良かったじゃない。神通姉さん。』

明石の声に続いた那珂は、機嫌が治った神通の肩に手を乗せて微笑む。だがそんな那珂の笑みにも、神通は呆れた表情を崩さぬままに俯くと頭を掻いた。サラサラと流れる長い前髪の奥に、神通の面白くなさそうな事この上ないといった顔がある。

それが先程の霞の言葉かと明石は察し、少し意地悪そうに笑う。

『ふん。だが霞の言った通りのスケベジジイでな。まったく、あれ

で帝国海軍軍人か・・・。』

愚痴り始めた神通は吐き捨てるように言った。だが酒が効き始めてきた明石は神通の脚に顔を乗せ、彼女の顔を覗きこみながら声を返す。

『にひひひ。神通の事が気に入ってるんじゃないのお？』

『馬鹿者が。』

ゴンッ！

『ぐえっ・・・！』

面白可笑しく神通をからかう明石の頭に、神通の軽いげんこつが振り落とされる。170センチを超える身長を持つ神通のげんこつは、軽いといっても調子に乗った明石を黙らせるのに充分だった。明石は両手で頭を抑えて、激痛に涙を浮かべている。痛そうな事この上ないが、明石のその姿を見て神通と明石以外の者達は笑った。明石とて怒って報復に出るような真似はせず、涙目で神通を見返す程度である。

彼女にとって心許せる友は神通だけなのだ。お互いに殴りあった彼女達は、その心の内を一点の曇りもなく読み取れる。明石にとつてはずっと年上で艦型も違う神通だが、じゃれあうその姿はまるで本当の姉妹のようでもある。

そして笑い声が木霊する部屋の中、それまで静かに話を聞いて笑っていた霞が口を開いた。

『でも、あの木村^{きむら}さんて方は、誰にでもあういう風に声をかけるようどすなあ。』

意味深な彼女の言葉に、隣で笑っていた霞が不思議に思って声を

掛ける。

『え？霰、何か言われたの？』

霰は身体を曲げて霰の顔を覗きこみ、口に甘栗をヒョイツと投げ込んで霰の声に耳を傾ける。霰はちよつと困った様な顔をしながらも、歪んだ笑みを浮かべて口元を指先で撫でながら言った。

『あはは、「一緒にお風呂入ろう。」って言われたわあ。』

『うわあ、アンタも大変だねえ。』

神通の従兵として勤務する霰は神通艦への出入りが自分と比べると多いのは当たり前だが、おかげでそんな苦労も多いのかと思つて霰は苦笑いを伴つて同情の言葉を返す。二人の会話に忠もクスクスと笑つていたが、突如としてベッドから発せられる強烈な殺気に3人の表情が凍りついた。視線をベッドに向けようとした時、神通の不機嫌さがよく伝わる低い唸り声が響きだす。

『あんのジジイイイ~~~~・・・!!』

地鳴りが聞こえてきそうな神通の顔。強く噛んだ彼女の歯から、啜っていたスルメがブチつと音を響かせて床に落ちた。再び怒りの光りを帯びた瞳になった神通だったが、懲りない明石がまたしても彼女をからかった。先程のそれと同じ様に、神通の脚に顔を乗せて一言。

『にししし、大変だねえ。神通が入ってあげれば？』

『明石い！貴様、もう勘弁ならん！！！！』

完全にキレた神通は脚の上にあった明石の顔に手を伸ばすと、両

手でおもいつき彼女の頬をつねって横に引っ張った。食い込んだ神通の爪と手加減無しで引っ張られる頬に、明石は激痛を走らせて大声で泣き始める。

「い、
いだい、
いだいい
いゝゝゝ
!!!!!!」

『もう一度言ってみろ、おらあ……!!!!』

泣いて詫びる明石だが、怒らせる相手をどう考えても間違えてゐる。『まあまあ。』と宥める那珂にも、神通は明石の頬から決して手を離そうとしない。その間もずっと両頬を広げられて大粒の涙を流す明石の顔。

なんとまあ醜いツラだ。

懲らしめられる相方の酷い顔に、忠は笑いながら酒を一口飲んだ。

那珂の必死の救助作業によりやっとの事で神通の攻撃から開放された明石だが、その頬には神通の爪によってつけられた赤い痕が真横に走っていた。幾重にも水平につめ痕が残った彼女の顔は、まるで猫のようだ。もちろんその顔は全員に笑われ、明石是那珂の胸に顔を埋めてすすり泣く。

やれやれ、馬鹿な奴だ。

相方に呆れながらも噂の神通艦艦長に興味が湧いた忠は、明石の顔を申し訳なさそうに笑う霰に向かって声を掛けた。

『なあ、霰。その人、名前は？』

『はい、木村昌福大佐きむらまさふとみです。12月5日に転任してきはったんです。

『へえ』。

この木村昌福大佐が忠や明石にとって数少ない人間の共通の知人となっていく事を、まだ二人は知らなかった。

そして後年、この木村大佐と忠の足元で大笑いする霞は、帝国海軍による水上戦闘での最後の勝利を飾るという数奇な運命を辿るのであった。

第一八話 「楽しい競技会／前編」

再会を期した宴会が終わった翌日の朝、明石艦あかしの中にホイッスルと供に号令が響き渡る。

『軍艦旗揚げ方、5分前！ 総衛兵礼式整列！』

この号令を持ち場で聞かない海軍軍人はいない。艦長から水兵に至るまでそれは同じで、これに遅れるとこつ酷く怒鳴られた後に櫓の棒で思いつきりぶたれる事になる。帝国海軍は時間に正確に行動する為、常に5分前の精神で行動するのだ。

既に発令所で待機している忠は、ただし発令所の中の数少ない舷窓を雑巾で拭いていた。磨くたびに透き通るような空と海を映してくれる窓が、綺麗好きの忠のやる気を湧かせる。忠の顔より少し大きいくらの舷窓だが、彼は大きく身体を使って力を込めて拭いた。時折キラリと光って瞼を閉じさせる窓枠の反射光が、やんちゃな子供のように思えてくる。埃一つ無くなった舷窓を認めた忠は腰に両手を当てて口元を緩ませ、隣の舷窓で同じ様に雑巾掛けをする相手へと声を掛けた。

『明石、そっちは終わったかい？』

『うん、ちょうど終わった所。』

隣の舷窓に向かって雑巾を握った手を動かしていた明石は、忠の声にニツコリ笑って答えた。昨日の神通のつめ痕がまだ薄く残って

いる彼女の両頬。赤い絵の具で悪戯描きでもしたような彼女の顔は、絵本に出てくる猫のようだ。これはこれで可愛いのだが、その事に触れると明石は間違はなくヘソを曲げてしまうのは想像に難くない。故に忠は何も言わずに、明石に笑顔を返してやった。

『そっか。』

忠の声で二人は笑みを合わせると、それぞれが手に持っていた雑巾を畳んで机の上に置き、艦尾方向に向けて姿勢を正した。

『軍艦旗揚げ方々！ 揚げ！』

やがて響きだしたその号令と共に、明石艦と近くに錨泊する他の艦からは一斉にラッパでの君が代が鳴り始め、第二艦隊が停泊する有明湾全体に響いた。

なんと荘厳な音であろう。

忠は敬礼をしながら、チラッと舷窓より波間に浮かぶ他の艦艇に視線を移す。他の艦艇もほぼ同じように、艦尾旗竿にて軍艦旗が掲揚されているのが見える。きつと明石艦の艦尾でも、同じように軍艦旗がこの澄み渡った青空に翻っているに違いない。忠の敬礼する手にも力が入る。

『そんなに硬くならないでも。今日は日曜だよ？』

君が代と供に敬礼が終わるや、明石は帽子を取って頭を掻きながら言った。

『あはは、そうだな。』

明石の声に忠は肩から力を抜くと姿勢を崩して、手近にあった椅子に寄りかかった。

そう、本日は日曜なのである。

「月月火水木金金」の詩で有名な帝国海軍だが、本当にそうなのではない。実際は月曜午前が教育日課、月曜午後からは金曜午後までは訓練日課、土曜日が整備日課に割り当てられており、日曜は基本的に日課は無い。希に訓練や整備での実績が悪いとか、戦隊対抗の競技会がある時なんかは別科が有ったりするぐらいである。

全身綿のように疲れきった兵隊では、いつ何時戦闘が起こっても迅速に対処する事が出来ない。兵隊にとっては休養も大切な時間なのであり、一流の海軍である帝国海軍も当時からその事を良く解っていたのだ。

椅子に寄りかかった忠はそのままの姿勢で一呼吸してから、机に置いていた雑巾を所定の位置へ戻す。そして気を楽にした忠を見て安堵した明石は、椅子に座って今日の予定を考え始めた。

遠瀬の有明湾では上陸は望めない。ましていつも部屋でゴロゴロすることが多い相手の休日を、彼女は何度も見てきた。明石にとっては美味しい食べ物もろくに手に入らない日曜はつまらない事この上ないが、つい先日長旅を終えたばかりの彼女の身体にはまだ疲労が残っている。明石は少し重い自分の肩に手を乗せ、肩を回しながら口を開いた。

『ああ、今日は私も寝ようかなあ。』

『あははは、それも良いんじゃないか。』

実は忠も彼女の元気がちよっぴり無い事に気づいていた。日本列島を縦断する程の距離を航海してきたのであるから無理も無いし、

いくら艦魂でも疲れない訳が無い。そう考えた忠は明石の言葉を優しく肯定してやった。

『お、いたか。』

その時、発令所の右舷側入り口から女性の声が響いた。昨日聞いたばかりの声なので、その声の主が神通しんつうである事を二人はすぐに悟ったが、今日の彼女のその格好に二人は驚く。いつもは第一種軍装に身を包んで軍帽を深めに被っている神通なのだが、今日はなんと淡い真珠色の柔道着を着ている。どこから調達したのか真新しい竹刀を肩に乗せて小刻みに動かす彼女は、刃先のように垂れた長い前髪と鋭利な釣り目も手伝ってまるで道場の師範のようだ。

珍しい神通の姿に忠は思わず声を掛ける。

『じ、神通。なんだその格好・・・？』

『うん？ 見れば解るだろう、柔道着だ。』

不思議そうな顔で発した忠の問いかけに、神通は至って平然とした顔で答える。何をそんなに驚いているんだといった表情で、彼女は首を傾げながら声を返した。

『人間も別科で柔道はやるだろうか？』

『それは、艦魂もやるって事か・・・？』

『そうだ。』

どうやら艦隊勤務の乗組員が武技教練として行う柔道や剣道を、彼女達も行っているらしい。

明石の言う艦魂の身体的、精神的具合が艦の微細な性能に影響してくる事を考えれば、身体の強健さを高めるのは人間以上に艦魂では重要なのである。

しかし丈夫な身体にするには身体を鍛える事が一番というのは人間だからこそ成り立つ話で、そもそも艦魂である彼女達が丈夫な身体を得る為にはその艦体に鉄材を張らない内はどうにもならないのではないのか？

イマイチその理屈が理解できない忠は『ふう〜ん。』と相槌を打ちながらも、顎に手を添えて首を捻る。

だが艦魂への疑問に考え事をする忠を横に、明石は珍しい自分以外の艦魂の生活に触れた事で目を輝かせていた。身体に溜まっている疲労も気にならなくなった彼女は、弾む声で神通に話しかける。

『いいなあ、私、戦隊とかに所属してないから知らなかったよ。相手もないし。』

『ふはは、そうだろうな。だから呼びに来た。どうせ暇だろう？』
『うん、暇〜！』

明石は笑顔でそう言うと、すぐに神通の腕に飛び付く。喜ぶ明石の肩に手を乗せて神通もまた優しく笑った。今日は寝ようかなと言っていた明石だが、親友の心遣いに彼女の顔からは少し疲労の色が消えている。

ここで艦魂に関しての疑問をぶつけて立ち話してもつまらないな。

そう思った忠は考えるのをやめて、笑みを作って二人に言った。

『あはは。楽しんできな、明石。』

『あー、森。お前にも来て欲しい。』

『え？』

怖いという言葉の代名詞的存在である神通だが、そんな彼女にお誘いを受けるとは忠も予想外だった。神通の言葉に対して一言だけ

声を上げて呆ける忠だが、神通はそのまま続ける。

『審判が必要なんだよ。今日は戦隊対抗の訓練でな。試合もやるんだが、審判をどっちかの戦隊から出す訳にもいかんだろ。』

神通の要請を引き受けた忠と明石は、彼女の身体から発した白い光りで神通艦の艦尾に来た。

一瞬だけ地から脚が離れた感覚に忠は慌てたが、それが動作に出る前にすぐまた脚が地に着いた。見慣れない甲板にでたと思って顔を上げると、そこは長い機雷軌道2本が両舷に施設されている二等巡洋艦独特の構造の艦尾。普段から明石という艦魂を間近で見ながら生活してきた忠にとって、そこが神通艦であると理解するのにはそれほど時間はかからなかった。

機雷軌道の間には体育用のマットが二枚ほど敷かれており、両横の機雷軌道には神通と同じ柔道着姿の少女達が座ってきゅきゅと声を上げて話している。そして右舷側の少女達の中に、忠と明石は見知った顔を見つけた。すぐさま明石は彼女達に歩み寄りながら声をかける。

『おお、霞かすみ、霞あられ。』

『あ、明石さん！』

今日も元氣な霞がすかさず立ち上がって明石に抱きつく。明石にとって神通が姉なら、霞は妹のような物だ。おはようの挨拶もなく、わーわーと声を上げて抱合う彼女達。その横から礼儀正しく挨拶する霞が、ちよつと浮いて見えるというのは困り物だ。

『あ、森さん、おはようございます。』

左舷側の少女達の中から歩み寄って、深々とお辞儀をしながら挨拶してきたのは那珂^{なか}だった。彼女もまた例に漏れずに柔道着を着ている。小奇麗に肩の高さで揃えた髪と美しいその笑顔、彼女には申し訳ないが柔道着姿がこれ程似合わない女性もそうはいない。もっともそれ程までに那珂の女性としての品格が高いという事の裏返しでもある。

そんな那珂の姿に自然と笑顔になれた忠は、彼女に向かって笑みを浮かべると挨拶を返した。

『おはよう、那珂。』

『那珂、少し練習させるか？』

忠の声に続いて神通が声を放つ。心地良さそうな笑みの神通だが、その人柄と肩に乗せられた竹刀が物凄く怖い。それはどうやら部下である駆逐艦の艦魂達も感じているらしく、はしゃいでる明石と霞、霰以外の艦魂は少し怯えるような表情をして横目でチラチラと神通をみている。

那珂の部下であろう左舷側の艦魂達も同じ面持ちだが、実の妹である那珂はそんな神通は慣れっこだった。笑みを崩さずに、彼女は神通の問いに答える。

『そうね。身体が温まってからじゃないと怪我しちゃうし。』

『よし、決まりだ。お前達、しばらくは自由練習だ。よく身体を動かしとけ。』

『『『はい！』』』

神通の声を受けて両舷に座っていた少女達は一斉に立ち上がり、

体操や乱取りを始める。那珂はその光景を見ると再度忠にお辞儀をして、自分達の部下を監督するべく左舷側へと戻っていく。

忠はゆっくりと歩いて行く那珂の後姿を見て、薄々感づいていた疑問を神通に確かめた。

『神通。』

『ん？　なんだ、森？』

『やっぱ今日の対抗戦隊ってのは、那珂の四水戦かい？』

『ああ、そうだ。左舷側にいる奴等は、那珂が指揮する6駆（第6駆逐隊）と7駆（第7駆逐隊）の連中だ。』

『へえ、じゃあ、姉妹対決だな？』

『ふん。負けてやるつもりは無いがな。』

『ははは。』

不敵に笑って竹刀を床に立てる神通。ちょっと怖い彼女だが、言葉の端々に厳しさと頼りがいのある上司の風格がある。そよそよと吹き抜けていく風が神通の柔道着と前髪を揺らし、良い顔つきをするようになった神通の表情を忠は自身の瞳に映す。最初に出会った時とはすっかり変わった神通の横顔に、忠は微笑んだ。

そして少しの間、練習に励む艦魂達を眺めていると、左舷側から少女が一人走り寄ってきた。

霞や霰よりは少し歳が上らしく子供っぽさが消えかけている顔立ちの少女で、短い髪を頭の右側に寄せて小さく結んでいる。彼女は神通の視線を邪魔せぬように脇に立ってお辞儀をしながら口を開いた。

『神通中尉、お久しぶりです！　6駆、7駆を代表して挨拶に参りました！』

小柄な身体の彼女だが物凄く声が大きい。忠は一瞬、信号ラッパが鳴ったのかと勘違いする程であった。神通もすぐ近くで発せられたその声に、少し首を傾げて苦笑いしている。だが彼女は怒る様子もなく、右手の小指で耳をほじりながらその少女に顔を向けた。

『相変わらず声がデカいな、雷。』

『はい！ 有難うございます！』

雷と呼ばれた少女。

第6駆逐隊所属、吹雪型駆逐艦の23番艦である雷艦の艦魂である。元気が良くハキハキとした物言いで、律儀にも神通に口を開くたびにサッとお辞儀する。カクカクと姿勢を止めるその動作は、どこか主君に仕える侍のようだ。

『褒めとらんわ。まあ、元気そうで何よりだ。』

『はい！』

雷の返事に少し俯いた神通はふと顔を上げると、左舷側の艦魂達を眺めた。だが視線を向けた先で僅かに眉をしかめる神通の表情を、忠は見逃さなかった。目を細めて小さく溜め息をした後、神通は静かな声で呟く様に言った。

『電も元気そうだな。』

『はい！ 元気にやっております！』

『そうか。』

神通は一度だけ頷くと、雷の肩に手を乗せて優しく微笑んだ。雷はビシッと全身に力を入れて、身体を硬直させる。神通の笑顔に表情を明るくさせながらも、雷は直立不動の体勢を崩さなかった。

『今日は胸を借りるぞ。』

『はい！ よろしくお願いします！ では！』
『ん。』

軽く手を振る神通に対し、雷はキビキビとお辞儀をして握った両手を脇に添えた。その姿勢のままクルリと回れ右で背を向けると、小走りで左舷の仲間達の下へ帰っていった。わざとらしきすら感じられる雷の物腰に、神通と忠は小さく笑ってしまう。走るテンポと同じ間隔で、雷の右に結ったちよんまげの様な髪が揺れる。可愛らしさどこか昔臭い侍気質が同居する少女だった。

後年、この雷艦の名は後に戦う事になったイギリス兵によって伝えられ、祖国日本には戦後60余年を経てからその栄光が知られる事になる。だがその時代を見届ける事ができる者は、不幸にもこの場にはいなかった。

『あはは。おもしろい子だな？』
『ふん。変な奴だ。』

忠は神通に視線を流して声を上げたが、神通は笑みを隠すようにすこし俯いて声を返した。彼女の機嫌は良さそうだが、どうにもこういう所を他人に見せるのを嫌う傾向にある。

まあ神通らしさという点ではこの方が似合っているかもしれない。

そう思いながらも忠は、雷と彼女の会話にふと抱いた疑問を彼女にぶつけた。

『雷や電は知り合いなのか？』

『ふはは。知り合いも何も、あいつ等全員、元二水戦所属だ。』

忠が予想していた答えは当たっていた。だが彼はもう一つ、何か神通が胸に秘めている事があるのを感じていた。『ふうん』と小さく呟いて腕を組んで姿勢を崩すと、おもむろに顔を上げて空を眺める。羨ましいくらいにゆっくりとした動きで、青空を雲が流れている。

忠は視線を空に向けたまま、半歩だけ神通に寄って口を開いた。

『電って子は、何かやったのかい・・・？』

そう言った忠だったが、彼は神通の返事は期待してなかった。ズケズケと他人の事を聞くというのは人間でも艦魂でもあまり好まないだろうし、まして神通の様に自分を余り出さないような性分の人にはなおさらだと思ったからだ。

だが神通は忠の横顔をチラッと見た後、床に立っていた竹刀を再び手に持って肩をトントンと叩きながら声を返した。

『ふん。私と同じだ。あいつも不注意で衝突事故を起した。』

『え・・・。』

忠は期待していなかった神通の声とその内容に、驚きを隠せなかった。空から彼女に視線を流すと、神通は目を閉じて俯いていた。脳裏に蘇る悔やみきれない記憶が、神通の表情を曇らせていく。マズイ事を聞いてしまったと思い、忠は慌てて彼女に詫びた。

『あ、ごめん。立ち入った事だったね・・・。』

『いや・・・。私よりも電の方が辛さ。自分の姉を殺してしまったんだから・・・。』

『な、なんだと・・・!?!?』

『^{みゆき}深雪と言ったかな・・・。当時は那珂が二水戦の旗艦でな、私はよくは知らんのだ。』

神通は苦笑いしながらも寂しそうな目で、左舷に陣取った艦魂達を見つめた。彼女の視線の先では、手を叩きながら笑顔で部下達を教育する那珂の姿がある。普段はおっとりとして笑みを絶やさない那珂だが、彼女の心にはどれだけの傷があるのだろうか。忠は考える。そしてそんな那珂に反して、同じ^{みほがせき}美保ヶ関事件で心に傷を負った神通の変貌振りは周知の事である。

似ているようで似ていない姉妹。そんな事を考えながら、忠は神通に再び視線を戻した。神通は忠の表情からその考えている事が少し読み取れたのか、どこか自嘲気味に口元を緩めて言った。

『ふん。那珂はその時、ただ電を抱きしめてやっていたな。私は馬鹿だったから、あいつ等に八つ当たりするのが関の山だった・・・。』

『そっか・・・。』

自分の失態と艦魂達の中の話語ってくれる神通。

その事に忠は彼女が明石と同じように、自分にも気を許してくれていると感じて微笑んだ。短い忠の返事に、神通もまたどこか嬉しそうに小さく笑って髪を掻き揚げる。

彼女は心に溜め込んだ事を那珂とは違って、しまい込む事ができないらしい。いつもげんこつやきつい物言いである彼女の言動は、常に誰かにその事を解って貰いたいという彼女の弱さの裏返しであり、忠はそれを悟られぬように理解した。

ほんの少しだけ神通の心が覗けた事に忠は微笑んで、マットの上で身体を動かす艦魂達を眺める。一人一人に色んな悩みがあり、一人一人に違った笑みがある。そんな当たり前の事を彼女達に感じた

忠は、今までよりも少しだけ艦魂が身近に感じる事が出来たのだった。

『元気が足りんぞ、神通！』

突然聞こえてきた少ししゃがれた低い男の声と、隣に居る事で忠にはよく聞こえた神通の身体を叩く音。

声のする方に目をやると、忠とは神通を挟んで反対側にいつの間にか髭を生やした小太りの男が立っていた。忠と同じ濃紺の第一種軍装に、大佐の襟章を身に着けている。細い糸目の顔だが、とにかくそこで目立つのは鼻の下に伸ばした髭。油で固めた今時では珍しい立派なカイゼル髭で、顔の輪郭から尖った髭先がはみ出ている。

神通も同じように驚いた表情をして彼に顔を向けるが、すぐにその顔には怒りの色がほとばしり始めた。よく見ると彼が神通を叩く為に伸ばした手は、あろう事か神通のお尻にあったのだ。彼は『わっはっは。』と豪快に笑っているが、神通の額には小刻みに脈動する血管が浮き出ている。強く噛んだ歯の隙間から漏れてくる神通の吐息。一瞬だけその場が沈黙したと思った刹那、神通はその男性に飛び掛った。

『ジ、ジジイーッ・・・！』

咆哮した神通は肩に乗せた竹刀を彼めがけて上段から振り下ろした。艦魂の彼女が怒ったからなのか、男に回避された竹刀が甲板にぶち当たると共に、艦がほんの数秒だが上下に震え出す。まるで荒天時の航海でもしているかのような艦の動揺に、逃げようとした彼

はその場に尻餅をついた。

『ぐお!?』

お尻に走った激痛に彼は目を瞑って顔をしかめているが、その目を開く前に彼の頭には神通の竹刀が思いっきり振り落とされる。

『ぐあ!!』

悲鳴を上げて横たわり頭を抑えるこの人。まだ彼は名を名乗っていないが、神通がジジイと呼んだ事で忠は彼の正体が解った。昨日の宴会で話題に上った神通艦艦長の木村昌福大佐、その人である。

木村大佐は頭に大きなタンコブを作って悶えているが、それも当然の光景であると忠は思う。なぜなら昨日の明石と同様に、彼は怒らせる相手を間違えているからだ。マットの上で身体を動かしていた明石や那珂、そして部下達が表情を凍りつかせる中、完全に頭に血が昇った神通はうずくまる木村大佐の背中に竹刀を打ち下ろし始める。

『こおの変態があああ!!』

『ぐあ!! お、おい、やめろ!! どわっ!!』

必死に背中への攻撃に耐えて助命を懇願する木村大佐だが、それは無理という物だ。一度逆鱗に触れたが最後、生半可な仕打ちで神通が冷静を取り戻す筈が無い。彼の悲鳴は空しく響くばかりで、それを掻き消す様に咆哮している神通は鬼の形相で竹刀を何度も振り落としている。

『せ、せ、戦隊長! ど、どうかお気をお沈めに……!』

そんな中、そう叫んで神通の後ろから腕を回して抑えようとするのは霰だった。必死になってすっかりご乱心の上司を抑えようとする霰だが、身体が小さく非力な彼女では完全にご立腹の神通をとめることは出来ない。咄嗟に霰は叫ぶ。

『な、那珂中尉……!!』

あまりの出来事に口を開けたまま呆けていた那珂だったが、霰の声で我に戻ると神通に駆け寄ってその背後から羽交い絞めにした。那珂が背中から、霰が正面から抱きつく事でようやく神通の動きも抑えられるが、まだ彼女の怒りは治まっていない。久々に龍のような顔つきになった神通は咆哮した。

『離せえ、貴様らあ……!! うがああ……!!』

『じ、神通姉さん! 落ち着くのよ……!!』

大きく開いた神通の口の中には一瞬牙が生えているかの如く、ギリと光った犬歯が見える。怖いどころの話ではない、さっきまで一緒に話していた事が嘘の様に忠には思えた。大きく見開いた神通の瞳に久々の恐怖を覚え、忠は胸の中で震える声を上げる。

これはエライ事になってしまった……!

『あだだ……!!』

しかし悶え苦しむ木村大佐の悲鳴に、忠もやっと我に帰った。神通が完全に霰と那珂に制圧されている事を確認して、忠は甲板に倒れる木村大佐に駆け寄る。しゃがみこんで覗いた木村大佐の顔、痛みで苦しんで眉をしかめているが、豪胆にも恐怖に慄いた感じは無い。

『だ、大丈夫ですか、木村大佐？』

『ああ、大丈夫だ……。ぐ……。』

あれだけ神通に滅多打ちにされたというのに、木村大佐はそう言う
うと腰を抑えながら立ち上がった。しわが目立ち始めた40代後半
の顔の彼だが、随分と丈夫な身体をしているようだ。片手で腰を抑
えながらも、もう片方の手でズレた軍帽を被りなおす木村大佐。首
を2、3度左右に捻ってコキコキと音を鳴らすと、もう既に彼の顔
からは苦しむような表情が消えている。小さく溜め息をすると、彼
は自慢の髭を指先で撫でながら笑みを浮かべて言った。

『気合を入れてやっというのに、困った奴だな。』

『なにが気合だ！！ このクソジジイ！！！！』

『ヒドイ言い様だなあ。』

髭をキリツと直して、怒りの色が消えない神通に苦笑いする木村
大佐。

そりゃいきなり尻を触ったら誰でも怒るわい。

そう忠は心の中で呟きながらも、神通相手にこうもひょうきんに
立ち振る舞える木村大佐の態度を目の当たりにして、自然と口元を
揺るませた。

『あゝ、お前さんは森少尉だね？ 霰から聞いたよ。』

木村大佐は服のしわを直しながら、今度は忠にその笑みを向けて
きた。愉快なお人であるが彼の階級は大佐であり、下級将校である
忠が友達感覚で会話をして良い様なお人ではない。故に忠は踵を揃

えて気をつけをすると、直立不動の敬礼をして声を返した。

『はい。自分は明石艦乗組砲術士少尉、森忠少尉です。願います。』
『おう、神通艦艦長の木村だ。願います。』

木村大佐は軽い敬礼をして忠に応えた。

青木大尉と同じようにヒョコヒョコと動く髭が愛嬌を感じさせるが、彼の敬礼の角度はとても絶妙な角度である。

狭い艦内でぶつからないようにと海軍の敬礼は一般のそれに比べて腕を立てることが特徴であるが、その角度というのは実際に艦に乗組んで身体で覚える物である。神通が昨日の夜に言っていた通り、海の男として歩んできた彼の経歴を忠はその敬礼から読み取る。

木村大佐の見事な敬礼に見入っていた忠だったが、木村大佐は敬礼の手を下ろすと同時に、おもむろに忠に近寄って肩を組んできた。やがて驚く彼の耳には、木村大佐のちよつと静かに放つ声が響いてくる。

『おい、ところで、明石ってのはどの娘だ？』

耳元で呟いた木村大佐の声に、忠は右舷に陣取った二水戦の面々に混じっている明石を指差した。忠と木村大佐を他の艦魂達と同様に遠目から眺めていた明石は、突然忠によって指差された事を不思議に思い首をカクンと捻る。そして忠の指先に彼女を見つけた木村大佐は、とんでもない事を言い放った。

『お！ あの娘か！ 可愛いな！！』
『な、なんですっ——！？』

忠が言い終える前に、木村大佐は明石がいる二水戦の面々がたむろする右舷に向かって走り出した。事の一部始終を遠巻きながらも

見ていた明石と周りの少女達は、走り寄る木村大佐に悲鳴を上げて逃げ出す。

『明石、ちょっとこっちに来なさい!』

『う、うわあああ!』

『きゃー! 変態が来たー!』

『に、逃げろお!!』

一目散に艦首に向かって走り出す艦魂達と、それを追い駆けていく木村大佐。歳相応にという言葉を感じさせないファンキーな彼の言動に、忠は腹を抱えて笑った。

なんと面白いオッサンではないか。

そんな言葉を脳裏に浮かべて笑う忠だったが、その頭に竹刀が振り落とされようとしている事に彼は気づかなかった。

『あいてっ!!!!』

『笑つとる場合か、この馬鹿が!!!!!!』

木村大佐の突拍子の無い行動を受けて、那珂も霰も神通から手を離してしまったらしい。痛み之苦しむ忠を無視するかのように、二人とも木村大佐と逃げる仲間達が走り去った艦首の方を口を開けたまま呆けた顔で見ていた。完全にその場を乱された事に神通は顔から火が出る程に怒って、その場に立ち尽くしていた那珂と霰のお尻を蹴飛ばして叫ぶ。

『さっさと追わんかああ!!!!!!』

『は、はいー!』

とりあえずこの騒ぎを治めなければならぬと考えた二人は、艦首に向かって走り出した。神通は竹刀を一度床に振り落とすと、二人の後を追って走って行く。

あゝあ、なんでこんな事になってしまったんだ。

すっかり機嫌が悪くなってしまった神通と頭に残る痛みに、忠は俯いて泣きたい衝動を抑えながら呟いた。

『こりゃあ、エライ事になったな・・・。』

『おい、森・・・。』

顔を上げると走っていた筈の神通が顔を覗きこんでいた。もちろんお怒りの表情なのは言うまでも無い。

『お前、何やってんだ？ 走れよ。』

『はぁ・・・？』

『馬鹿者が！』

ドガッ！

『ひい！！』

思いつきり尻を蹴飛ばされた忠もまた、神通から逃げるように走り出した。

今日は休みの筈だった。いつもの部屋でゴロゴロする日が、今日もある筈だった。ところが今、彼は竹刀を振り回す怖い人に追われ、同時に変態のオッサンの魔の手から必死に逃げているであろう相方を追って走っている。

ドコで間違っただ？　なんでこんな事になったんだ？

そんな思いが巡る忠だったが、立ち止まる事は許されない。いつしか涙目になって走る自分を忠は嘆いた。

『何やってんだ、オレは・・・。』

その日、再び柔道の訓練が開始されたのは昼を過ぎてからであった。

第一九話 「楽しい競技会／後編」

時間は1143。

正味3時間をかけて繰り広げられた鬼ごっこは、木村大佐と追われる艦魂達が力尽きてその場に倒れ込む事で終わった。艦尾のマトの周辺で肩で息をしながらへたる艦魂達。霞も明石も汗だくで座り込んでいた。

例外なく忠も、ただしマトの正面に大の字になっている。

自問自答しながらも怖いお人になら追われ続けた彼の疲労は、これまでの海軍生活で経験したどんな訓練よりも辛かった。あまりよろしくない事だが、忠は服の胸元のボタンを外して前を開くと、帽子を手にとって顔を扇ぐ。

『ぜはあ、ぜはあ・・・』とその場にいる者の殆どが疲労の吐息を発する中、彼の隣では唯一平気な顔をした神通に木村大佐がガミガミと怒られている。時折響き渡る、神通が振り下ろす竹刀の音と木村大佐の悲鳴。だがそれを止める役の霞も神通の妹である那珂も、走り疲れてマトの上に横になっていた。忠にすらも既に木村大佐を助けようという余裕は無かった。

もう勝手にやってくれ。

そんな言葉が彼の脳裏を通り過ぎていく。甲板に大の字になっている忠の瞳には、変わらずに青空を流れていく雲が映る。風によって流れる雲、朝見たときには羨ましく思えたその光景も、今の彼には少し可哀想に思えていた。

大変だな、いつも追われているお前は。

そう思いながら、しばらく忠は空を眺めていた。

その時、艦全体に昼食を促すラッパが響いた。周辺に停泊する艦からも一斉に同じ譜のラッパが鳴り出し、その場にいた者の全てにとある時間を伝えていく。

やがてその場を圧するラッパの音を認めた神通は、足元で悶える木村大佐から顔を上げた。どうやら怒りに任せた興奮状態から我に帰ったようで、彼女は周辺に倒れ込んでいる仲間達を見回して状況を把握している。予定していた柔道の訓練が出来なかった事を再度認識して、神通は呼吸を整えながら目を閉じて舌打ちをした。

『ちっ・・・！』

やっとの事で身体に力が入るようになった忠は上半身を起した。空腹を知らせる腹の音が鳴り、彼は自分のお腹を押さえながら、横で不機嫌そうに目を閉じて俯いている神通に向かって声を発した。

『はあ……。神通、一旦艦に戻って昼を食って来ていいかい？』

『ふん……。仕方あるまい、午後から始めるか。』

艦魂である瞬間移動の能力が忠には使えないので、彼は相方の明石に視線を流す。

鬼ごっこの鬼に追われた張本人である明石は、マットの右舷側で倒れた霞に折り重なるようにうつ伏せで横になっている。呼吸が苦しいのか、彼女は大きく開けた口から舌を出して荒い息をしていた。

あれではとても自分の艦まで帰れるような体力は残ってはいまい。

どうした物かと考える忠だがふと聞こえてきた物音に神通の方を見ると、木村大佐が滅多打ちにされた背中を押さえながら立ち上がった。『おう、あだ……。』と顔をしかめながらも、立ち上がって少しするとその表情は普段のそれに戻ってしまう。

なんとタフな人だ。

『神通、帰らせる事は無いぞ。』

『ん？』

木村大佐の言葉に神通は怒り半分、興味半分といった複雑な顔で振り返った。

『昼飯は全員分用意してある。昨日、霰から聞いたからな。主計長に頼んで、房業教育食として用意させておいた。森少尉、お前も遠慮せず食っていけ。』

木村大佐は白い歯を見せて、笑顔でそう言った。主計科員その物の教育として作られる食事を方便として主計長を説得したらしく、わざわざ彼はここにいる艦魂達の昼食を用意してくれたのと言う。さっきまで明石を追い回していた木村大佐だが、ひょうきんながらも何か優しい親父のような感じを放っている。

そして神通は曲がった事は嫌いだ、逆にこのような心遣い無し碍にする事も嫌いな性分だった。彼女はふて腐れながらも、彼とは目を合わせずに小さい声で礼を口にする。

『……。ふん。それはすまん……。』

さすがに神通は長く生きていない。短気な人だが子供のように意地を張らず、素直に木村大佐へ礼を言った事に忠と木村大佐は小さ

く笑った。

そんな二人に少しイラっとしつつ、神通は頭を掻きながら倒れ込む部下に声をかける。

『お前等、昼飯は私のトコで用意してある。とりあえず食え。おい、霰。ジジイと昼飯を取って来い。』

『は、はい……。』

霰は神通の声に力なく返事をするとおぼつかない足取りで立ち上がり、忠達がいる所まで歩いてきた。

外見的に運動が得意そうではない霰は汗びっしょりで、まだまだ呼吸が荒い。それでも一言半句の文句も言わずに、神通の命を実行しようとする辺りはさすがだ。霰は木村大佐の前までくると、姿勢を正して言った。

『ひい、ひい……。木村大佐、お手伝いさせて頂きます。』

霰は神通ほどに彼を毛嫌いしているようではない事を忠は察するが、元々人形のように清楚で可憐な彼女には人を疑う事など知らないといった感じさえする。

汗を袖で拭きながら綺麗な笑みを向ける霰に、木村大佐は彼女の頭を撫でて笑った。

『よし、じゃ、行くか。』

『はい。』

二人は笑顔を向け合うと、艦内に向かって歩いていった。

面と向かって霰のように笑い合うことが出来ない神通は、二人の背中を少し口を尖らせながら眺めていた。

しばらくして霰と木村大佐はおにぎりを満載した台車と、大きな運搬函うんぱんはこを4個程かかえて戻ってきた。

おにぎりは細かく刻んだワカメを混ぜて握られた物で、磯の香りがヘトヘトに疲れた艦魂達の食欲をかき立てる。さらには運搬函の中身は肉じゃがで、人間の食事として見てもこれは中々に豪華である。体力の回復が急務な神通以外の艦魂達は、おいしい食事をご馳走してくれる木村大佐に口々にお礼を言った。

鼻を高くした木村大佐は『わっはっは。』と大声で笑っているが、一瞬にして部下の心を掌握してしまった彼に神通は不満げな表情を浮かべていた。

マツトを囲むように座ってみんなで食べる食事は、おいしい一時を与えられた艦魂達の会話で花を咲かせる。

忠の右横には寄り添うように明石が座っておにぎりを頬張っているが、彼女はまだ微妙に木村大佐に信用が置いてないらしい。忠の体から顔を半分だけ覗かせて、たまに彼の左横に座る木村大佐に警戒の目を向けている。もっとも平気でお尻を触ろうとする彼に追い駆けられた彼女の不幸を考えるに、それは決して無理の無い事である。木村大佐は明石の視線に気づくと髭をピンと立てて笑みを送るが、明石はそれに気づくとヒョコッと忠の身体に隠れた。

木村大佐の向こうでは神通が霰の給仕を受けて、黙々とおにぎりや肉じゃがを口に運んでいる。塩の聞いたおにぎりが疲れた身体に再び活力を漲らせる。神通もその味に満足しているのか、どこことなく明るい表情をしている。どうやら彼女の怒りは完全に静まったらしい。

その一方で霰は神通の碗にやかんで水を注ぐと、隣の木村大佐の

脇にしゃがみこんで口を開いた。

『木村大佐、飲みはるどすか？』

『お。すまんなあ、霰。』

木村大佐が掲げたお碗に霰はやかんを傾けた。お碗に流れ込んでいく水の音が、二人の間に響き渡る。木村大佐は、一生懸命にやかんを傾けて水の入り具合を見つめる霰の横顔を眺めて思わず声を上げる。

『霰は良い子だなあ。どうだ、オジサンの家にお嫁に来ないか？』

『ぶっ！ ごぼっ、ごぼっ・・・！』

木村大佐の言葉に、神通は飲みかけていた水を噴出して咳き込んだ。

歳の割りになんとまあ、若さが目立つお人だ。

そう思った忠は口に手を当てて笑う。彼の横では明石と霞が顔を合わせて、悲鳴にも似た呻き声を上げながら木村大佐と霰に視線を送っている。

しかし当の霰は落ち着いたもので、楽しそうに笑いながら木村大佐に声を発した。

『うふふ。木村大佐は、もうお子さんもいはるんやないどすか？』

『わはは。でも、おじさんは霰みたいな子が好きだなあ。』

『ふふ、おおきに。』

霰は見た目は明石よりも年下で、女学生のような顔つきをしている。それでもこのように、やんわりと木村大佐の会話に受け答えで

きる、ちょっと大人びた接し方を持っていた。むしろ隣で咳き込みながら会話する二人を睨みつける神通の方が子供に見えてくる。おかしい光景である。

故に忠の他にも那珂等、艦魂の内の何人かはその光景に笑っていた。

『森少尉、お前もそう思うだろ？嫁にするならこういう子が良いよなあ。』

木村大佐は霰の頭を優しく撫でながら、忠に顔を向けてそう言った。

本人の前で『君みたいな子がお嫁なら。』等とは言いにくいものである。だがまだ幼い容姿と良く懐いてくれるいつもの彼女は忠にとっては妹のような存在であり、そんな意識を持って常に接したきた事もある。彼はさほど深くは考えずに声を返した。

『そうだな。霰みたいな子ならいいなあ。』

そう言って笑みを霰に向けると、霰は頬を少し赤くしながらも愛くるしい笑みで小さくお辞儀を返した。

上官である木村大佐の言葉を否定するのはちょっと気が引けるので、愛想返事程度に返した忠の言葉だったが、別に彼は嘘を言ったつもりは無い。忠は那珂や霰のような、大人しくて綺麗な女性に好感を持つ人間だったのだ。

少なくともウチの相手よりはマシだな。

そんな思いから声を発した忠だったが、その直後、彼の背中には激痛が走った。

『いてっ・・・!』

振り返ると不機嫌な事この上ないといった表情の明石が、彼の背中に手を伸ばしている。僅かに口を尖らせて横目でじーっと視線を向けてくる明石。と言っても勝手知ったる相手である彼女に、忠は恐れを抱く事はなかった。むしろ嬉しい嫉妬心を抱いてくれた彼女に、忠は悪戯っぽく笑って顔を近づける。

『へへへ。やきもちですか?』

『ふん!』

まるで神通のようにそんな声を上げると、明石はプイっとそっぽを向いた。

可愛い所あるよなあと忠は微笑んだが、その会話を明石の向こうで密かに聞いていた霞が小さく口を動かしてこちらを睨みつけてくる。彼女が『馬鹿。』と口走っているのが、忠にはすぐ読み取れた。

『怒るなよ、明石い。』

そう言って忠は明石の肩に手を乗せようとしたが、彼女は空中でその手を払うとムスっとしながら膝を抱いた。

『触らないで!』

またしてもヘソを曲げてしまったらしい。やれやれ、困った奴だ。

明石が怒っているのは完全に自分のせいという事は忠にも解っていたが、そんな彼女に愛おしさを覚えた彼はそれを忘れて笑った。

その後、1300の課業開始を迎えるまで、彼の手を尽くした明石のご機嫌取りが展開された。昨日の夜のように、神通や那珂が助

け舟を出してくれる事は無い。明石の後ろを追い駆けて声を掛けては罵られ、時には脛を蹴られる忠。他の艦魂や木村大佐に指を指されて笑われる中、ようやく彼女がまともに口を利いてくれたのは、課業始め5分前の号令がかかった辺りだった。

そして神通の『別科始め。』の号令から10分ほど打ち合わせをした後、待ちに待った戦隊対抗体育教練が始まった。

神通の要請通りに忠は主審となり、副審として木村大佐が就いてくれる事になった。二人とも兵学校の武技教練で柔道は経験しているから、その判断はバッチリである。明石はただの野次馬かと思いきや、怪我人が出た場合の治療員をかってでた。伊達に赤線の階級賞を付けていない彼女が治療員を勤める事に、艦魂達は憂い無く全力を尽くせると意気込みを新たにす。

人間の世界でもそうだが、師団対抗、中隊対抗、学年対抗と言った具合に競争意識をもたせて競い合う事は、その結果と過程において高い効果をもたらす。古くは豊臣秀吉が用いたこの競争意識だが、同時にそこには部隊や集団の意地や誇りが上乘せされる物でもある。そして早くもそれを証明するかの様な光景が、忠の眼前には広がっていた。

神通や那珂を除けばその場に居る艦魂達は年齢が十代そこそこの少女達ばかりであるが、さすがに帝国海軍の艦魂達である。マツトを挟んで両舷に整列すると、どちらからとも無く殺気にも近い威圧感が発せられたのだ。

特に那珂が率いる四水戦の面子のそれは凄まじい。忠が昼食の際に明石へと聞いた所によると、艦魂の身体能力は艦自体の性能とは

全く関係ないそうで、やはり人間と同じように長い時間、質の高い訓練をすれば身につく物なのだそうだ。つまり生を受けて間もない朝潮型や陽炎型で構成される二水戦の面子よりも、竣工から暫く経っている吹雪型で構成される四水戦の面子の方が艦魂としての実力は上になるのである。神通が雷に対して『胸を借りる。』と下手に出ていた理由もここにあったのだ。

お互いに一斉に礼をすると、二水戦も四水戦も戦隊長を中心にして円陣を組む。その様子はさながら夏の中等学校野球大会のようだ。

『頑張りました。』

いつもの笑顔で声をあげる那珂。彼女が率いる四水戦は下馬評でも有利であるし、その部下は猛者揃いである。余裕すら感じさせる四水戦の面々の表情は、忠から見る限りでは非常に明るかった。

それに反して二水戦は予想通りと言うべきか、目を閉じる神通の前でビクビクと怯える少女達という光景になっていた。忠はその光景を瞳に入れ、彼女達の心情も忘れて思わず笑いが込み上げてしまう。それもその筈、二水戦の戦隊長は「鬼の神通」である。元来荒い言葉遣いで暴力的なこの人が、『負けてもいいや。』などと考える筈が無い。部下以上にこの人が一番張り切っているのだった。やがて一列に並んだ少女達が生唾を飲んで見守る中、神通はゆっくり瞳を開いた。闘志を溢れさせる彼女の目が、部下の少女達の身動きを封じる。

『いいか、お前等。』

神通は部下一人一人の顔に視線を流しながら口を開いた。

『私達は栄えある帝国海軍二水戦だ。相手が四水戦だろうが、一戦

隊だろうが、求められのは勝利だけだ。必ず勝つぞ。』

神通はそう言うとし表情を柔らかくして、腕を組んで姿勢を崩した。楽にした彼女の姿に、部下達の表情からも少し力が抜ける。

『今日はあれこれと言わん。自分の思う通りに戦ってみろ。いいな。』

『『『はい！』』』

今まで忘れていたかのように、部下達は大きな声で返事をした。若々しさが溢れる彼女達の声が辺りの波と風の音を遮る。四水戦の面々もその声にちよつと身を引いている。不敵に笑う神通の顔と彼女から闘志を与えられた部下達の姿に、忠と明石は笑みをあわせた。

これは面白い戦いになるだろう。

そんな思いに忠は大きく頷いた。

ところがここで空気の読めない人が余計な事を言ってしまう。

『負けた戦隊は全員、おじさんの晩酌の相手をしてもらうからなあ！
だうはっはっは！』

『黙れ、ジジイ！！！！』

腰に手を当てて大笑いする木村大佐。神通がすかさず罵声を浴びせるが、彼の言葉を耳にしまった双方の艦魂達からはすぐに悲鳴が上がる。午前中の鬼ごっこがまだ記憶に新しい彼女達には無理も無い。とりあえず自分は目標から外れた、と安堵して胸を撫で下ろすのは明石だけだった。

『よし、今日はいっぱい酒を飲んじゃうぞ！』

上機嫌で両腕をブンブンと振る木村大佐の顔は青空に負けぬ笑みで、固められた髭が再びピンと跳ね上がる。副審なのにやたら元気一杯な彼を見て、お互いの艦魂達はさらに気合を入れて必勝を期した。

勝負は両戦隊の選抜した選手を戦わせて、最終勝利数の多いほうを勝者とする。先鋒、次鋒、中堅、大将の順で戦い、大将以外は時間制限ありの引き分けも可。

大将が戦隊長である事を考えれば二水戦に有利な感じに見えるが、那珂は至って平然と笑っている。

なにか策でもあるのか？

那珂を不思議に思いながらも、忠は両手を上げて声を上げた。

『両戦隊、先鋒前へ。』

忠の掛け声によって二水戦と四水戦からは、少女が一人づつ立ち上がってマットの上に足を踏み入れた。二水戦側の先鋒は彼女達の中で最も背の低い艦魂で、顔つきも14、5歳といったところである。小さな鉢巻を締めて引き締まった表情をしているが、まだまだ幼さが抜けていない彼女は帝国海軍最新鋭駆逐艦かげろうの陽炎艦の艦魂である。

対して四水戦から出てきたのは明石のようにスラっと長身の体格の少女で、歳も明石とどっこいと言ったところか。彼女の後ろから発せられる歓声を聞く限り、彼女は響艦ひびきの艦魂らしい。

『お互いに礼！』

双方とも緊張はしていない様で、淡々とお辞儀をすると軽く腕を上げて構えた。

二人の動作を見て忠は木村大佐に視線を送る。木村大佐も準備は大丈夫らしい。というよりも早く始めて晩酌させてくれとでも言いたげに、白い歯を見せて時計を握った手を振っている。

その姿に苦笑いして小さく溜め息をした後、忠は片手を上下に振って試合を始めさせた。

『始め!』

勝負は白熱した。陽炎が開幕一番で響の腰に飛び込み後ろへ倒し込んだが、響もただでは倒れてくれない。咄嗟に体を捻って背中を守り、有効判定へと持ち込んだ。小さい身体を生かした駆逐艦の艦魂らしい陽炎の奇襲だったが、一度それを見せてしまった事で響は対策をすぐに立てて対抗する。両腕を目一杯伸ばして体格の差を生かした組み合いを行おうとしたのである。こうなっては体格の差がある陽炎には辛い。消極的になった事でやむなく指導を課した忠の判定に、陽炎は覚悟を決めて響の懷に飛び込んだ。だが両足を開いて構えた響に勢いを止められて、最後は払い腰で派手に投げつけられて一本を取られた。

礼を終えた後、今にも泣き出しそうな顔でみんなの元へとぼとぼと帰る陽炎だったが、神通は陽炎の肩に手を乗せると労いの言葉をかけてやった。

『よくやった。お前らしい戦いをした結果だ、恥じる事はない。』

これが那珂の言葉であったなら、陽炎は一言返事をして座っていないに違いない。声を上げて流す彼女の涙は、鬼の戦隊長である神通がかけてくれた優しい言葉にこそ溢れた涙であった。神通は陽炎の肩から頭に手を移して少し撫でると、彼女を霰に託した。申し訳な

さそうに泣く陽炎を霰や仲間の艦魂達が励ます姿は、陽炎にはすまないが忠としては何か微笑ましい。

がんばれ。

そう心の中で呟いた忠は一度深呼吸をして笑みを直すと、さっそく次の試合は始めた。

『両戦隊、次鋒前へ。』

忠の声に双方から声援と共に送り出されたのは、二水戦側は満潮艦、四水戦側は潮艦の艦魂であった。満潮は先程の陽炎の意志を継ぐかのように彼女の鉢巻を腕に巻きつけ、長い髪を器用に折り曲げて後頭部で結っている。対する潮は勇ましい駆逐艦の艦魂にしては意外な容姿の丸眼鏡をかけた女の子で、眼鏡を外すとグリグリと目を擦って進み出た。戦う前から少し充血した感じの潮の目だが、指の骨を鳴らすと同時にその目には闘志が宿る。満潮もすかさず顔を何度か手で叩いて気合を入れた。

『お互いに礼！・・・始め！』

先鋒戦と違って体格が同じくらいである二人の戦いは先程の速度的な展開ではなく、慎重に相手の袖や襟を掴もうとする所から始まった。円を書くように相手の周りを歩きながら、袖を取ろうと腕を伸ばしたり、逆に相手の伸ばした腕を払ったりと小競り合いが続いていく緊張感のある戦いであった。

両者は中々勝負のきっかけが掴めずに時間だけが過ぎていく。やがて緒戦に続いて忠が再び指導をかけようと腕を上げた瞬間、潮が強引に踏み出して満潮の腕を掴んだ。静まりかけていた声援が再び賑やかになる。満潮も腕を上げかけた忠の動作を認めており、ここ

が勝負と決意したのか自らも腕を伸ばしてがっちり組み合った。両者とも頭を下げてお互いの足元辺りを見ながら上半身を揺さぶっての攻防を巡らす。

長い戦いに二人の吐息が大きくなってきたが、その状況を打破したのは満潮だった。踏ん張ろうと前に出た潮の隙を見逃さず、彼女は潮の内股から足を入れて跳ね上げた。『ああっ!!』と思わず四水戦の面々から悲鳴にも似た声上がるが、満潮の内股も完全ではなかった。跳ね上げて少しすると彼女の足は潮の足から解けてしまい、潮はかろうじて倒れ込む際に体を捻り込めたのだ。

ドスンと倒れ込む音に、木村大佐と忠は声を上げる。

『技有り!』

二人の判定に満潮が悔しそうにマットを軽く叩き、潮は小さく溜め息をして安堵した。

再び立ち上がって再開させると、潮はまたも強引に満潮に飛び掛る。時間もかなり経ったおり、このままでは判定負けになってしまうから彼女としては当然の行動だった。前に出てきた潮に対して、袖を取られながらも満潮は両足に力を入れて耐える。

また一進一退の組み合いかと誰もが予想したが、潮はその裏の裏を読んでいた。膝をカクンと折り曲げて満潮の脚の間に潜り込むように背中を床につけると、片足で満潮を支えて後ろに投げ飛ばした。派手で人気の高い巴投げである。咄嗟の出来事だったからか、満潮は即座に体を捻ったが肩からマットに落ちてしまう。柔道では危険な倒れ方である。

忠の横で葉箱片手に座り込んでいた明石も、満潮の倒れ方を見て僅かに腰を上げた。

『技有り! 待て!』

一度試合を止めて忠は満潮に駆け寄った。潮も少し心配そうに倒れ込んだ満潮を見ていたが、満潮は前転でもするかのようにコロんと立ち上がると腕を回して忠に声を発する。

『ふう……。大丈夫です、森さん。』

笑みこそすがに向けてこないが、満潮は別段痛い訳でもないらしい。彼女は元の位置まで戻りながら、ちょっと解けた後ろ髪を結び直している。その姿に潮も安心したのか、呼吸を正しながら仕切り位置まで戻った。そんな二人に明石もまた胸を撫で下ろし、再び忠の横に腰を下ろす。忠も小さく安堵の溜め息をすると、腕を上下に振って叫んだ。

『始め!』

再開の合図と共に二人はお互いが再び同点となった事を意識して、勝負はまた慎重に袖の取り合いをする所からとなった。満潮が勝てばまだまだ二水戦は望みが繋げる事が出来る。また、潮が勝てば四水戦にとっては王手をかける事になる。

負けられない。

その思いに必死に攻撃の糸口を探す二人だったが、彼女達はもう一つの可能性を忘れていた。

刹那、木村大佐がサッと腕を上げた事に忠は二人を制する。

『そこまで! 両者同点につき、引き分け。』

『『あ……。!』』

二人はどうやら時間という物を完全に忘れていたらしい。忠の声

を聞くや、二人とも同じく苦い顔をしている。お互いの陣営からも落胆の聲が響き渡るが、戦隊としての勝負はまだついていない。満潮と潮は礼をして握手するとお互いの健闘を称え、それぞれの仲間達の下へ戻っていった。両陣営からは同様に『惜しい。』と労いと悔いが入り混じった声が聞こえてくる。だが食い入る名勝負を見れた事は、お互いの戦隊の士気を大いに高めた。

気を取り直して、忠は次の試合に進める。

『両戦隊、中堅前へ。』

歓声が一際賑やかになった四水戦だが、出てきたのは午前中に神通に挨拶に来た少女、雷で^{いかづち}あった。『よっしゃ！』と大きな声で気合を入れ、腰の帯をキュッと結ぶ彼女。背は小さいが中堅を任せられるくらいだから、きっと四戦隊の中でも腕前は相当に良いのだろうと忠は考える。つま先をマットに何度か突き立ててマットの感触を確認している辺りはさすがに吹雪型駆逐艦の艦魂であり、伊達に長く艦魂をやってきた訳ではない雷の凄さを忠は改めて思い知った。その内にふと二水戦へと視線を流した忠は、そこにいた人物を確認して目を疑った。

マットの端っこで両腕を伸ばして準備しているのは、忠と明石も見慣れた麻色の肌に元気が溢れた顔の少女。

『とおりゃあ！』

掛け声を放って前転宙返りでマットに進み出てきた彼女は、なんとあの霞である。背が小さいながらも運動神経が良さそうな彼女だが、忠と明石は大声を上げて彼女が泣きついてきた記憶がまだ新しい。妹の霞はしっかり者の風格があるが、霞に関しては笑うのも泣くのも元気な赤ん坊といったイメージが強かった。あんなに神通に

怯えて泣いていた霞が、今や二水戦の中堅として戦いの場に立っている。その事に忠は暫く見てないうちに彼女が随分と成長したらしい事を悟る。先輩艦魂を前に全く動じた様子も無い霞に、忠も明石も驚くばかりだった。

『お互いに礼。』

マツトの上で相対した二人の表情は、それまでの4人には無かった自信が漲っていた。僅かに口元を緩ませる二人、両陣営からもこれまで以上の声援が飛ぶ。そしてこれもまた今日は初めてだが、どちらの艦魂達の声援にも同じ様な言葉が含まれている。

『雷、勝てるよ!』

『霞、勝てるから自信を持って!』

どうやら二人とも戦隊の中では、全員にその実力を認められている存在らしい。

チラッと忠は霞に視線を送ったが、霞は白い歯を見せていつもの笑顔を向けるだけである。まあ見ててよ、とでも言わんばかりの彼女のその顔に小さな心配を抱きつつも、忠は腕を上げて声を発した。

『始め!』

その瞬間、その場にいた全員が絶句する。

忠の手が振り下ろされた直後、なんと霞の姿が消えたのだ。それは彼女を目の前に捕らえていた雷も同じだった。

確かに今、目の前にいたはず。

そう心の中で呟いた刹那、彼女の目の前に霞の顔が現れた。先程

の陽炎と同じように、低い体勢で一気に距離を詰めてきたのであるが、その動きの速さが尋常ではない。咄嗟に右脚を前に出して踏ん張ろうとする雷だったが、神通はその光景を見て口元を緩めた。

『勝ったな。』

神通がそう呟くと同時に霞は雷の脚の間から右足をグンと大きく伸ばし、雷の後ろに残っていた左足を踵で一払いした。大内狩りである。雷の胸元に顔を埋めるようにして前に突進する霞によって雷は体重が後ろに掛かり、さらに支えていた足を刈られて仰け反るように倒れた。

マットに倒れ込む雷の音が、空気を切り裂くように甲板の上に響き渡る。

試合開始から僅か数秒、あっという間の早業だった。

『一本！　それまでえ！！』

まるで芸術品ともとれる霞の技に、木村大佐も迷うことなく手下ろす。文句なしで高らかに下された一本判定は、両戦隊のどよめきと歓声を一気に集めた。

『じゃあぁーっ！！！！』

歓声の渦の中、霞は片手を高らかに天に突き立て叫び、空に輝く太陽を弾き飛ばす程に笑って喜びを爆発させる。青空の下、麻色の肌に白い歯を輝かせて笑うその姿は、霞には良く似合う姿だった。

彼女に倒された雷もその見事な技に脱帽したようで、悔いのような表情は見せない。お互いに礼を済ますと、二人は共に満足したような表情でそれぞれの仲間達の元に戻って行った。

二水戦では本日初めての勝者誕生を受けて、所属の艦魂達が飛び

上がって喜んでいる。最終戦を残してついに王手をかけた二水戦の士気は、ここに来て大いに上がる。鬼の戦隊長から貰ったお褒めの言葉で、霞は拳を震えるほどに握って喜びを噛み締めていた。

『申し訳ありません、戦隊長！』

四水戦では自慢の中堅が敗れた事を受けて、少しでも空気が暗くなっていた。残念そうにしながらもいつもの大声で失態を詫びる雷だったが、彼女の上司はそれを怒るような事はしなかった。

『敵が強かったわね……。』

『はい！』

那珂は彼女の顔にタオルをあてがって、汗を拭き取ってやりながら言った。根が真面目な雷は顔にタオルがかかったまま、表情を変えずに声を返す。そして那珂は彼女に笑みを向けると同時に、ゆっくりとその場に立ち上がった。いつもは優しくニコニコと笑っている那珂の顔に、まるでその日の風が乗り移ったかのように静かに闘志が纏われて行く。

『大丈夫。私が勝てばいいだけだから。』

普段の面持ちを捨て始めた彼女の声に、部下達が顔色を変えていく。

一方、二水戦でも神通が立ち上がって身体を動かし始めた。その長い手足を伸ばしたり縮めたりして、屈伸運動をする神通。その姿を認めた忠は今から始まるであろう白熱した大将戦を予測し、早く見てみたいという気持ちに抗いきれなくなって声を発した。

『両戦隊、大将前へ！』

一際力が籠った忠の声で、神通は袖や襟、帯を直しながら歩み出た。キツと一点のみを見つめる彼女の瞳とその表情は、実に頼りがいがあるという物である。

これなら二水戦の艦魂達も安心して応援できるだろう。

そう思って忠は二水戦の面子へと視線を移したが、彼女達の視線は神通の少し向こうに焦点を合わせて凍りついていた。『ん・・・？』と呟いて四水戦の方を振り返った忠は言葉を失った。

肩で揃えられた綺麗な黒髪を頭のとっぺんで結んだ那珂が、四水戦の艦魂達に声援を送られて歩み出てくる。初めて見せる彼女の真剣な顔は結った髪も手伝って、あろう事か姉の神通と瓜二つだったのだ。元々顔立ちが似ているこの姉妹だが、性格がまるっきり違うので普段一緒にいる忠や明石も二人の違いがすぐ解る。時には姉妹という関係すらも忘れさせる事も多い彼女達だが、そこに有ったのは刃物のような瞳を同じようにギラギラと輝かせた二人だった。

そして神通は久々に見せた那珂のその表情に、ニヤリと口元を緩めて声を上げる。

『那珂、手加減はせんぞ。』

『ふふ。その方が姉さんの為よ・・・。』

その人柄からは想像も出来ない、那珂の挑発ともとれる言葉が神通には返された。

風に揺られる前髪が神通の顔の前を揺れる。やがて再び彼女の顔があらわになった時、そこには今にも獲物に飛び掛ろうとする肉食獣のような神通の顔があった。しかし那珂もまたそんな姉を、同じ視線で睨み返した。

その場に殺気にも似た空気が立ち込める。顎を引いて上目遣いに睨みつける神通と、逆に顎を出して見下すように睨み付ける那珂。

忠と明石も彼女のその表情には驚いたが、彼女の背に映る四水戦の艦魂達の姿を見てその裏に秘めた彼女の心意気を悟った。いつも優しいお姉さんである那珂も、いまや神通と同じ水雷戦隊旗艦を頂く立派な指揮官である。四水戦の少女達にとっては彼女こそが唯一絶対の上官であり、そんな立場を頂く者が相手が姉や二水戦だからといって負けて良い訳が無いのだ。姉と同じく、そしてそっと胸に秘めるような那珂の四水戦戦隊長としての誇りと意地が、彼女の表情には表れていた。

知らぬ間に霞も、霰も、そして那珂も大きく成長していたのだ。

『お互いに礼!』

二人は互いに視線を相手から逸らさずに小さく頭を下げる。

そしてその動作が終るや、ほぼ同時にゆっくりとした動作で身構える神通と那珂。両陣営の声援も二人の気迫に押され、声を押し殺して固唾を吞んだ。しんと静まり返り、波音だけが優しく響く中、忠は意を決して試合を始めた。

『始め!』

忠の合図を聞くや、神通は軽い足取りでダンスでも踊るかのように足を動かして那珂の様子を窺った。逆に那珂は両腕を肩より少し高いくらいの高さで前に伸ばして、動き回る神通を正面に捉えようとする。神通は小刻みステップを刻んで素早い動きをとるのに対し、那珂は対照的に大きく横に足を開いてゆっくりとした動きでそれを追うのであった。やがて動き回る神通は時折、那珂の腕を取ろうと手を伸ばすが、腕を伸ばした那珂の懷までには中々入り込めない。

そして開幕から少し時間が経った頃、神通は思い切って前に踏み出した。しなやかな神通の脚がマットを蹴ると同時に、銃剣道の突きのように半身で距離を詰める。那珂は腕の下に潜り込んできた神通の奥襟を握ったが、同時に少し踏み込んでいた彼女の左足を神通は見逃さなかった。

『せやっ！』

短い掛け声を放って神通是那珂の左足を払った。空手の蹴りのような神通の出足払いを受けて那珂は姿勢を崩すが、今日の彼女はそんなに簡単には倒れない。那珂は肩膝を突きながらも体を捻ると、神通の奥襟と共に袖を掴んで背負い投げを繰り出す。

彼女の気合とその闘争心は充分であるが、相手の神通だってそう簡単にはやられる訳が無い。神通是那珂の動きを読んで彼女の背後から脇に体勢を流すと、上から体重をかけて押し潰した。当然どちらの技も成立していないから二人はそのまま寝技へと移行するが、すぐに身を丸めた那珂に神通は攻めあぐねる。

『待て！ 元の位置へ！』

寝技というものは地味で見栄えが良くないが、その攻防にはとても体力を消耗する物である。完全に本気になって戦う二人にはなおさらで、忠の合図に立ち上がった二人は肩で息をしており、その顔には既に大量の汗が滲み出ている。

お互い乱れた柔道着を直し、腰の帯を強く締めるとどちらからという事も無く身構えた。

ここで思わぬ苦戦を強いられる神通を見て、彼女の部下である二水戦の艦魂達が声を上げる。

『せ、戦隊長、頑張ってください!』

『うるさい、黙れ!』

神通は集中しているその状態を邪魔されなくなかったらしく、部下の声援を邪険に封じる。せっかく振り絞った声を叱られてしまい、声を発した少女はしょんぼりと落ち込んだ。そしてこれまでひょうきんに笑っていた木村大佐は、その神通と部下のやりとりを眉をひそめて眺めていた。片手で髭の先を摘みながら、彼は何か考え事をする。

だが神通はそんな木村大佐に気づかずに、呼吸を整えながら忠に言った。

『ふう……。森、早く始めんか。』

神通の催促を受けて、忠は試合を再開させる。

一進一退の攻防が続く中、二人は試合が始まって四度目の組み合いとなった。疲労とお互いの実力が解ってきた彼女達に余裕はない。お互いの額をぶつけるようにして頭をつけ、相手の足元辺りに視線を落としてその出方を窺っている。ポタポタと二人の足元に、お互いの汗が流れ落ちる。

緊張感という言葉だけがその場を支配する中、おもむろに木村大佐は横になって言った。

『うーん、お酌だけじゃつまらんなあ。』

すっ呆けた彼の声に、彼以外の者が眉をしかめる。当然、彼の目の前で死闘を繰り広げる神通と那珂も例外ではない。神通は那珂から少し目を逸らして、疲れに歪んだ表情で言った。

『はあ、はあ……。く、黙れ、ジジイが……。!』

疲労困憊ながらも怒りを込めて発した神通の声だが、木村大佐はお構い無しに続ける。

『よし、負けた方はみんなでおじさんと一緒に寝る事にしよう！うむ、それが良い！』

どんどん酷さを増す木村大佐の敗戦に対する罰ゲーム。別に彼にそれを決める権利は無いのだが、その言葉を聞いた両陣営の艦魂達から悲鳴が上がった。

『い、いやあー！ー！ー！ー！』

『嫌だあ！ 戦隊長、お願いだから勝ってえええ！』

可哀想に、泣き出す者も出始めた。忠にしたら木村大佐の言動は面白い事この上ないが、当事者である彼女達の気苦労を察すると気の毒である。故に自身の顔を隠すように手を当てて、悟られないように笑う忠。彼の隣では、先程自分を追い駆けてきた木村大佐の発言に悪寒を感じて鳥肌を立てた明石が、ブルブルと肩を震わせている。

『はあ、はあ……。こ、こ、この……。ジジイがあ……。！』

またしても発せられる勝手気ままな木村大佐の言葉に、神通は強引に那珂の懷に飛び込んで胸を合わせた。

さっさと終わらせて、コイツをぶん殴ってやる。

そう思った神通だったが何も考えずに咄嗟にとった彼女の行動は、柔道の攻防としては致命的な愚作だった。脚を絡ませても那珂は倒

れず、むしろ重心が上がって体重が後ろにかかった神通の体勢に那珂は身体を横にズラし、神通の両脚を後ろから伸ばした脚で払った。
しまった！

脳裏にそんな言葉を過ぎらせ神通だったが、彼女が気づいた時にはもう床に背中がついていた。彼女の上に覆い被さる様に倒れ込んだ那珂の顔から、覇気が消えて喜びを称えた笑みが現れている。神通は状況を予想しながらも、否定したいという希望を抱いて忠の顔を見る。だが彼は無常にも、神通の希望を打ち砕く言葉を発した。

『一本！ それまで！』

その瞬間、神通の脳裏にこれまでの競技会の結果が横切った。負けが1、引き分け1、勝ち1の同点で迎えた自らの大將戦。そして今、二水戦には2敗目が記され、四水戦には2勝目が記される。

それは即ち、二水戦の負けを示していたのだった。

その事を理解した刹那、神通は怒りを覚えて立ち上がった。

集中していた時にコイツに邪魔された。邪魔さえなければ負けていなかったのに。

その渦巻いた怒りに駆られ、神通は力がまだ入らない拳で木村大佐に殴りかかった。彼女の咄嗟の行動に、那珂や忠が叫ぶ。

『このクソジジイがああ……！！！！』

『お、おい、神通！！』

『神通姉さん!!』

しかし全く動じていない木村大佐は、神通の行動に身体を起して胡坐をかくとスツと片腕を上げた。彼の上げた手はパシッ!と小気味の良い音を放って、神通が振り下ろした腕を掴む。

『ぐ。。。』

那珂との戦いで消耗した体力で脚に力が入らない彼女は、腕を取られると彼の前に崩れた。荒い呼吸に耐えながら怒りに任せて木村大佐を睨みつける神通だったが、彼女の見た彼の顔には初めて彼から向けられた怒りの目が有った。眉を吊り上げて火山が噴火したかのような木村大佐の目の色に、神通はビクンと震えて声を失う。

『馬鹿モン! 部下を放り出して戦う指揮官がいるか!』

『あ。。。』

彼が怒っているのは先程の自分と部下のやりとりだと神通はすぐ解った。落ち着かない息と軽蔑していた彼の怒りに言葉を失う彼女だったが、そんな神通に向かって木村大佐はそう怒鳴ると手を上げた。

乾いた音と頬に感じる痛みと熱さ。その感覚を覚えた頬を押さえて呆然とする神通に、木村大佐は口を開いた。

『お前は指揮官だろうか? 格好つけてそれを投げるな! 部下が泣いてたら一緒に泣いて、一緒に笑ってやれ。一緒に負けを悔やんで、一緒に勝ちを喜べ。勝ちばかり追っかけて部下を粗末にするな!』

『。。。』

神通は俯いて唇を噛み締めながら、彼の怒鳴り声を黙って聞いていた。

『返事はどうした！？』

そう怒鳴られてまでも神通の頬に木村大佐の平手打ちが叩き込まれる。

静まり返るその場には、木村大佐の怒鳴り声と神通の頬が打たれる乾いた音だけが何度も響いた。だがそんな中で二人を見つめていた忠は、腕を組んでそれを見守っていた。

部下の目の前でこうも叱責されては、二水戦旗艦としては赤っ恥もい所である。それでも神通は一言も返さず、泣きもせず、ただ黙って木村大佐に怒られるばかり。もちろん木村大佐の言っている事は間違いではない。むしろ長い間、駆逐艦や掃海艇、特務艦の艦長を歴任してきた彼は、肌身を通してそれを良く知っているのだ。故に彼の声に大きな説得力を感じたのは、なにも忠だけではなかった。

そして彼の人となり、その光景をその場にいた者全員の目に不思議な様子で映した。胡坐をかいて怒鳴りつけ、時には手を上げる木村大佐とただ俯いて怒られる神通。それはまるで……。

『ねえ、森さん……。』

『なんだ、明石……。』

『なんかあの二人、……親子みたいだね。』

『ははは、そうだな。』

その夜、神通は木村大佐が勝手に決めた罰ゲームを律儀にも受けたという。さすがに一緒に寝るようなことは無かったそうだが、その晩はずっと説教され続けたとの事だ。

その話を切り出しても神通は『ふん。』といつもの口癖を吐き捨てて立ち去って行ったが、霰の話によると次の日から少しだけ部下の相談に乗ってあげるようになったという。そして最近は「二水戦」という言葉よりも、「私達」という言葉を好んで使うらしい。ほんの些細な事だが、彼女は指揮官としての大事な何かを彼から授かったようだ。父のような彼から。

第二〇話 「忙しい1月」

昭和15年1月1日、明石艦^{あかし}は第二艦隊の戦技訓練に参加しながら、有明湾にて新たな年を迎えた。

質素儉約が叫ばれて久しい日本であって、この年は大変なお祭りであった。その年は押しも押したる皇紀2600年。ただ一系の大君がこの日いずる国を治めて2600年目の節目の年という。

終わりの見えない支那事変に疲れが出てきた日本であったが、国民はそれを忘れてこの大いなる一年を祝った。国家を挙げてこの大祝賀ムードは国の機関が5年も前から委員会を発足させて準備され、「聖戦にただ邁進！」等の標語をあちこちに掲げているにも関わらず、皇室ゆかりの神社への参拝は割引券を配ってまで奨励するという盛大さだった。この年は刑務所に服役していた罪人^{かちどき}には特別恩赦が下され、隅田川には支那事変の勝利を祈って「勝鬨橋」が架橋される等、全国どこへ行っても「めでたい、めでたい」の言葉が飛び交い、僅か一週間前の12月25日に木炭の配給が実施された事が嘘のように思える程であった。

明石艦においては軍艦旗掲揚の後に総員最上甲板整列の号令が発せられ、宮里艦長^{みやざと}による訓示が言い渡された。ちょうど元旦が月曜日にあたる事もあり、艦長の訓示がそのまま教育日課となった。友好国ドイツと芬国^{フィンランド}に攻め込んだソ連等に代表される欧州の情勢が語られ、改めて世界の混乱する様を乗組員達は認識する。

『皇紀2600年の四方^{しほう}の節を祝い、遥かに皇居に向かい、万歳を

三唱します!』

宮里艦長は訓示のシメとしてその声をあげると、北東の空に向かって身体の向きを変えた。乗組員達も彼に倣って、北東の方角に身体を向ける。太陽が斜めから光りを放ち、その光りをキラキラと輝かせる波間の向こう。乗組員達の視線がそこへ集まると同時に、宮里艦長の声が響いた。

『天皇陛下、バンザ〜イ!!』
『『『バンザ〜イ!』』』

男達の万歳が明石艦から辺りに響き渡る。

空を舞うウミネコも同じように祝ってくれているのであろうか、万歳と叫ぶと同時にウミネコの鳴き声が発せられた。ゆっくりと翼を羽ばたかせて艦の上空を舞うウミネコに微笑む忠^{ただし}だったが、彼の身体はドンと隣から衝撃を受ける。振り向いた先では明石がニッコリと笑って、両の手を天に向かって広げている。乗組員と共に大声で万歳を叫ぶ彼女もまた、大いなる陛下への翼賛^{よくさん}を心に誓っていた。菊花紋章こそ彼女には無いが、他の艦魂と同様に彼女もまた栄えある陛下の御船の中の一隻なのである。明石は忠に腕をぶつけた事を気にも留めずに、万歳を三唱した。

さすがに元旦である今日は、訓示が終わったあとは乗組員全員がお休みとなった。昼飯として振舞われたお雑煮^{ぞうじ}だけが、洋上の彼等に正月気分を与えてくれる。

各科では配置において艦への祝いとして酒と雑煮一碗が供えられ、砲術科においても前部と後部の主砲へ盆に載せたお酒と雑煮をお供

えした。機関科では艦のディーゼル機関に、航海科では舵輪と方位盤、工作科では工作区画の中央といった具合で、乗組員全員が艦と自分の持ち場に祝いの品をお供えしてやった。

今年もよろしく願います。

そんな言葉を放って艦と供に祝う彼等に、明石の機嫌は良かった。『私にくれたんだよ!』と言って、あちこちに供えられた品を失敬しようとする彼女。まあ彼女の認識はなんとなく正しいと理解しながらも、お供えした彼らの気持ちを無碍にしくなかつた忠はそれを止める。

首根っこを掴まれて部屋まで強制連行された明石は指をくわえてイジていたが、見かねた忠が川島主計長に頼み込んで貰ってきた雑煮とラムネで彼女の機嫌は治った。

チヨロチヨロと水が流れる音が、ベッドの上で横になって本を読む忠の耳に入ってくる。視線を音がした机に向けると、明石は空になった碗に汁櫃から雑煮をよそっている。彼の記憶が正しければ、それは4回目のおかわりになっている筈である。唇を舌で舐め回しながら、おたまを碗に運ぶ彼女は嬉しそうにニコニコと笑っている。

『うまいか?』

『うん、うめえ!』

明石は返事をしながらもお碗の雑煮を勢い良く口に流し込んでいく。細身の彼女のお腹は横から見ると忠の手のひらを広げたくらいの幅しかないが、常に5人前はあろうかという量の食い物を入れる胃袋は彼女の身体の何処にあるのだろうかと彼は素朴な疑問を抱く。そして知り合ってから以来、全く体型が変わらないという不思議。

いくら艦魂であってもそんな彼女に忠の疑問は絶える事が無いの

だが、それはそれは嬉しそうに食べる明石の表情がいつもそれを忠から忘れさせた。

まったく、おかしな奴だ。

毎度のように脳裏に浮かぶその言葉を、忠はいつもの様に心の中で呟いて微笑み、視線を彼女から本に戻した。

こうしてゴロゴロとしながら二人は休日を楽しんだ。

翌日の1月2日、有明湾の志布志漁港しぶしに上陸用の栈橋を作るとの事で、明石艦より工作部の連中が志布志漁港へと派遣された。

有明湾は第二艦隊に限らず、連合艦隊の各艦隊が訓練をする重要な湾で、佐世保と呉に近い事から使用頻度は高い。それに伴って艦隊乗組員達の休養の為の上陸用栈橋が必要であり、工作艦である明石艦の能力がまたも発揮される事となったのである。もっとも当の乗組員達にとっては洋上の泊地から8キロもカッターを漕いでの上陸であり、寂れた漁村である志布志漁港では遊べる所は無かったようであるが。

砲術科も資材を運貨艇うんかていに搭載する作業を支援する事になり、忠は甲板での運搬作業監督者として携わっていた。

周辺に停泊する艦はまだ正月休みを続けており、甲板でせつせと励む明石艦乗組員達の姿をのんびりと眺めているようである。そんな他所の艦を羨ましげに思いながら、忠も仕事に精を出した。運貨艇に積み込んだ資材の種類と量を、さらさらと手に持ったバインダーに貼り付けた用紙に記入していく。

久々に響く工作区画からのけたたましい機械音と、工作区画が稼動している事を示す前部煙突からの煙。起重機が艦内で加工された

棧橋の資材を、次から次へと忙しなく運貨艇に運び込む。これを管理、統制するのも結構大変なお仕事である。

明石艦の早過ぎる仕事始めにより、棧橋は次の日の1月3日に完成。漁港の人々は海軍さん御用達の地とされたと大喜びで、運貨艇が満載になるほどの大量のお酒や獲れたての魚介類をお礼として頂いた。

それを見た明石はしばらく続くであろう海鮮料理三昧の日々を想像して大はしゃぎだったが、ハッキリ言ってこの人は何にもしていない。

1月7日、第二艦隊は訓練地を高知県南西部にある宿毛湾すくもに変更して出発。同日夕刻には到着して、全艦が錨を下ろした。

宿毛湾は豊後水道の入り口に当たる部分にあり、小さな漁村ではあったが珊瑚の産地として有名である。豊富な海の幸も有名でありながら温暖な気候を利用した柑橘類の栽培も盛んであり、明石艦が訪れた時期はちょうど特産品であるジャボンの収穫時期だった。おかげで洋食の心得が有る川島主計長は珍しい柑橘類を目にした事で上機嫌となり、上陸した当地で食材探しに夢中になった。また宿毛湾は泊地から南方に進むとすぐに果てしなく続く太平洋に出る事ができ、大艦隊での艦隊運動訓練が思う存分できるという立地条件も備わっていた。さらに漁村の民家では自宅の風呂を上陸してきた海軍軍人向けに有料で使用させてくれ、忠も久々に思う存分お湯を使つての垢落としが出来た事に満足する。

また本海域に到着してすぐに、二水戦指揮下の第18駆逐隊に陽炎型2番艦ろうの不知火艦しらぬいが合流。第18駆逐隊は朝潮型2隻、陽炎型かげ

2隻の4隻で編成され、名実共に帝国海軍最新鋭の駆逐隊となった。
合流した日の夜、神通が珍しく上機嫌だったのは言うまでも無い。

到着から2日後の1月9日からは、第二艦隊所属が全参加しての大規模な艦隊訓練が太平洋上で始められた。

明石艦は重巡並みの比較的大きな艦影を持っている為、仮装戦艦や仮装空母の役割で訓練に参加する事になった。本日は攻防一体となった実戦的な訓練で、明石艦は第二航空戦隊の空母飛龍艦、蒼龍艦と第八戦隊の重巡、利根艦と筑摩艦、そして那珂艦が率いる第四水雷戦隊と艦隊を組んで行動し、それを襲撃してくる別働隊を迎撃するという内容だ。

戦闘艦とこれほどの規模で艦隊を組むのは明石艦としても初めての事である。特に航海科や機関科にとっては『所詮は特務艦か。』と言われない様な操艦をせねばならないとあって、該当の乗組員達には気合が入っていた。

そしてそれは発令所で配置に就いている忠もそれは同じだった。明石艦の訓練で行なえる発砲は空砲であるが、今日の明石艦は仮装戦艦としての立ち振る舞いが求められている。阻止砲撃を八戦隊や四水戦と合同で的確に行う事が必要で、射撃における当日修正はひとえに砲術士としての彼の能力が物を言うのである。

砲術科の面々も緊張の面持ちである。発令所の中の兵員達もちょっと落ち着かない感じで、各々の位置に立って待機しており、その中の一人である忠も指を小刻みに動かしながら煙草を吸っていた。壁に寄りかかっているのだが、今の彼には心なしか艦の動揺が大きく感じる。

彼の横では明石が座り込んで、またいつもの無線電話機を出現させてダイヤルをグルグルと回している。まだ上手く周波数が合わないのだろうか、彼女はヘッドフォンを耳に押さえつけながら首を捻っていた。やがてふいに顔を上げた彼女と忠は目が合った。忠は発令所の中にいる他の兵員達に気づかれないように、無言で明石に片手を差し出す。

オレにも聞かせてくれよ。

そんなメッセージが籠った彼の動作だったが、明石は憎たらしい笑顔であかんべを返した。彼女の返答は予想してあったので、忠は苦笑いをしながら溜め息をしてすぐに諦める。

なんとケチな奴だ。

ちょうど煙草の火が口元に近づきつつあったので忠は机の上の灰皿に煙草を押し付けて火を消すと、ポッケから発令所の壁に埋め込まれた金庫の鍵を取り出した。発令所の中にいた兵員達は忠の動作と取り出された鍵に気づき、一斉に配置の椅子や受話器の前に向かって配置に就く。そんな仲間達を尻目に忠は金庫の扉に歩み寄ると重い金属音を響かせて金庫を開き、赤い一冊の本を取り出した。「射表」と呼称されるその本は軍極秘である。

これは当日修正に用いる様々な数値を対数表のように纏めた物で、砲術士である彼のお仕事は航海科から伝えられる風速や大気密度等のデータを基に、この射表から修正の数値をみつけては計算してその時の環境に応じた修正を指示する事である。算盤すらない発令所の中、忠はこの複雑な修正値を暗算、時には紙に書いて計算して導き出さなければならぬ。数字に弱い人には一日とて務まらない、

大変なお仕事であった。

普段は優男で頼りない感じがする彼も、この射表を片手にした時だけは軍人の顔になる。彼の計算が一秒遅れると、その分だけ主砲の射撃が遅れる。彼の計算が一度でも間違えられると、どんなに的確な測距がされても弾は当たらない。若干22歳の若者だが、彼はその責任と立場をよく理解していた。

相方が時折見せるその勇ましい顔が好きだった明石は、彼に気づかれないように横目でこっそりと盗み見て微笑む。

発令所の真ん中に位置する約1メートル四方の箱型の装置、八九式高射射撃盤改二。手輪と各種メーターがあちこちについたイカツイ外見のこの機械が、忠の思い描く射撃を実践する。発砲操作をする銃把もこの装置についており、これを指揮するのは発令所所長を兼務する忠の役目である。

己が責務を彼はいつもの通り、目を閉じて深呼吸する事によって受け止めた。

今日も一丁やったるか。

そんな思いをそっと胸に秘めた忠は、舷窓から流れていく景色を見つめた。

『四水戦旗艦より信号。艦隊右舷前方、敵艦隊！』

艦橋と繋がっている伝声管から聞こえてき声に、発令所の兵員達が身構える。伝声管の前に歩み寄った忠だが、彼を待たずに砲術長の声が矢継ぎ早に伝声管から響いた。

『主砲打ち方用意！』

それきたと砲術科の兵員達の動きがあわただしくなる。艦橋上の測距儀が電動音を発して旋回し、それまで座り込んでいた主砲操作の兵員達も各々の配置につく。

明石艦は増速を始め、前方で哨戒隊列で航行する四水戦と二航戦の間やや右寄りに遷移して陣取る。八戦隊がさらに右寄りに陣取って8基の主砲を右舷に旋回させた。ちょうど二航戦を艦隊中央に置き、その右翼に壁を作るような格好となったのだ。

そんな中、忠は修正を指示しながらの合間を縫って舷窓から右舷を覗く。見れば水平線の向こうから、四戦隊、七戦隊の砲撃支援の下に真一文字で突進してくる神通艦の姿があった。盛大に煙突からどす黒い煙を上げて、30ノット以上の高速で魚雷のように接近してくる。ちょうど明石艦を正面に捉えているらしく、神通艦に単縦陣で続く指揮下の駆逐隊の艦影が神通艦の排煙と一回り大きい艦影で隠されていた。

『おーおー、きやがったな。』

そう呟く忠の後ろからは、明石の笑い声が響いてくる。また神通のべらんめえが聞こえているのであろうか、明石は緊張感の無い顔で抱腹して笑っていた。

するとそれまで明石艦の遙か前方に位置していた四水戦が、一個駆逐隊を率いて針路を右舷に変更した。どうやら突撃躍進中の二水戦に対して阻止行動に出るらしく、那珂艦を先頭に駆逐艦3隻が突進してくる二水戦の側面へと回り込んで行った。

忙しなく声が飛ぶ明石艦発令所も、ようやく落ち着きが出始めてきた。砲側、測的供に既に右舷に旋回を終えている。忠の当日修正

と砲術長の指示待ちとなっているのである。しかし机に座って紙に方程式を書いて計算する忠の耳には、聞きたくない航海科からの報告が入ってきた。

『風向、北北東！ 風速3！ 高度49、気温2度、気圧そのまま！』
『ちっ！』

前回の報告と内容が変わった事に、忠は舌打ちをして方程式に書き入れた数字を塗りつぶした。どうやらラジオゾンデがようやく計測を始めたらしい。紙に書いた方程式をそのままに数字だけ変更して続行しようとするも、何が何だか解らなくなってしまったので忠は再度始めから計算しなおした。射表を一枚一枚めくる動作が、その度に彼を苛つかせる。力が入った彼の手に、何度か鉛筆の芯が折れたが、とにかく今は時間が大事と怒るのも忘れて彼は計算を詰めて行った。

ミミズのようになった彼の書いた方程式だが、その答えはしっかりと導き出されていた。忠は机から立ち上がると叫び、号令員達はその声に耳を傾ける。

『当日修正！ 左、寄せ1！ 下げ1！』

彼の言葉を受けて射撃盤配置の人員は装置を修正し、号令員達は各々の伝声管や艦内電話の前で彼の言葉を復唱した。やっと終わったと忠は小さく溜め息をしたが、すぐにそれに対応した事を示す号令員達の言葉が返ってくる。再び発令所の中には男達の叫び声が木霊した。明石もヘッドフォンを僅かに耳からズラして、その声に耳を澄ます。

『1番主砲、修正良し！』

『方位盤良し!』

『2番主砲、修正良し!』

忠は最後の言葉を聞くと、艦橋に繋がる伝声管の前に走り寄って叫んだ。

『主砲、修正良し!!』

すぐに伝声管からは、砲術長の野太い声での返事が返ってきた。

『一斉打方! てえー!!』

『一斉打方! 発砲ー!』

砲術長の指示を受けて、すぐさま忠は振り返って叫んだ。彼の言葉が発せられて数秒後、壁一枚を挟んだ艦首から閃光と射撃音と衝撃が押し寄せてくる。

明石艦の主砲は高角砲であり艦載砲としては小さいが、その口径は陸軍であれば重砲に匹敵する。発射音に続く排莢音が響く中、忠は再び舷窓から外の様子を眺めた。

例えば空砲といえども実弾とはなんら変わらない砲声を伴った明石艦と八戦隊の射撃が始められたその時、艦隊外郭の八戦隊と二水戦との距離は2万メートルをきっていた。

神通艦艦橋の天蓋では自分に向けて発砲してくる目標に、眉一つ動かさずに睨みつけたままの神通が腕を組んで立っていた。彼女の耳にも明石と同じようにヘッドフォンが掛けられており、胸元には

首から提げた紐でぶら下がったラッパ状のマイクロフォンがある。どちらも彼女の足元にある、黒い箱状の機械からケーブルで繋がっている。

やがて神通は自身の艦尾に、一度視線を流す。4本煙突から盛大に巻き上がる排煙で部下達の姿は見えないが、彼女はその漆黒の煙の向こうに彼女達が追隨している事を信じていた。これまでの猛訓練についてきた彼女達がついて来れないわけが無い。

手塩に掛けて育ててきた部下なのだから。

そう思って神通は再び正面に顔を向けなおすと、足元から聞こえてくる艦橋の声に耳を澄ました。

『木村艦長、煙幕展開用意はいいな？』

『はい、いつでも。』

『よし、襲撃開始。各隊に通達！』

『主砲打方始め！ 煙幕展開！』

木村大佐に指示を飛ばしているのは二水戦司令官の五藤存知少将である。勇猛果敢な彼の指揮は神通も気に入っており、その声を聞いた彼女は小さく笑う。そして側面に視線を送って四水戦との距離が遠いと認識した彼女は左手で胸の下にぶら下がっていたマイクロフォンを持ち、指揮下の艦魂達に向けて声を発した。

『これより煙幕を展開する。お前達は現状の速度と針路を維持してそのまま突っ込め。煙幕を抜けた所は目標のすぐ近くだ、どてっ腹に魚雷を突き刺してやれ。』

『『『はい！』』』

部下達の返事と同時に艦首の砲が射撃を始め、彼女の背後にある

煙突から濛々と黒煙が噴出され始める。神通は黒煙を眺めながらも、艦橋より響いてくる五藤少将の声に再びニヤリと微笑んだ。なぜなら彼が発した言葉が、神通の思い描く水雷戦運動と完全に合致していたからである。

『私が八戦隊を引き付ける。お前達は煙幕を抜けたら、取り舵で目標の艦隊後方へ向かって進め。反航体勢で目標とすれ違うはずだ。外すなよ。』

彼女の言葉に部下達が返した返事は、迷いが無く自信が溢れた頼もしい声だった。その声に彼女は軽く拳を握り、この襲撃が成功する事を確信した。神通は右手をさっと前に突き出して、艦橋から聞こえてくる五藤少将の言葉と同じ言葉を叫ぶ。

『二水戦、突撃！！ 蹴散らせええ！！！！』

『敵一番艦、左舷に旋回！ 八戦隊、面舵で敵背後に回りこみます！』

艦橋からの声を耳に入れた忠は、手近な舷窓から外の様子を見た。そこには神通艦が濛々と黒煙を靡かせて、艦隊の外側を這うように航行している。

反航して背後に回り込むつもりか？

そう思ったのは忠だけではなかった。伝声管から砲術長の指示が聞こえてくる。

『主砲打方待て！ 面舵で転舵するから、転舵が終わったら再開するぞ！』

高速で八戦隊に追跡される神通艦は明石艦とは反航して行くが、真横を向けていると魚雷攻撃される為に明石艦と二航戦は揃って面舵で転舵を始めた。一等巡洋艦二隻を相手に大立ち回りを演じる神通艦を眺めていた忠は、その艦の艦魂である神通が今頃は動きを読まれて怒っているだろうと思って口元を緩める。

ところがそんな彼の袖を明石がグイグイと引っ張って叫んだ。

『も、森さん！ 罨だよ！』

『なに・・・？』

呆けた声で彼女に言葉を返した忠だったが、彼女の警告は既に遅かった。艦橋から繋がる伝声管からは、明石の言葉を現実として瞳に映してしまった乗組員達の悲鳴混じりの声が響いてくる。

『うわ！ しよ・・・、正面に敵駆逐艦――！！！！』

明石艦や二航戦は神通艦の雷撃を警戒して面舵で転舵したのだが、それは艦首を神通艦が残した煙幕の壁に向けさせていた。グングンと近づいてくる煙幕の壁との距離は1万メートル程しかない。

しかしそこから突如として現れたのは、彼女が率いる二水戦の駆逐艦8隻。高速で煙幕を突破してくるその様子は、まるでどす黒い雨雲から発せられる雷のようだ。35ノットはあろうかという速度で疾走しながらもその隊列は一糸乱れぬ単縦陣で、それ自体が生き物のようですらある。

そして反航体勢で駆け抜けていく駆逐艦は、明石艦とすれ違う際に訓練用魚雷を一斉発射した。

『くっそ！ やられた！』

宮里艦長の悔しさが滲んだ怒号が響くが無理もない。諸外国の駆逐艦と比較して圧倒的に魚雷の射線が多い帝国海軍駆逐艦から、至近距離で狙われたのである。回避など不可能だった。

また明石のヘッドフォンからも、目の前で魚雷を発射していく駆逐艦の声が聞こえていた。

『あ、明石さん見つけ！！』

『か、霞！？』

『あっはは！ もらったああ！』

霞の声と共に猛スピードで白い雷跡が接近してくる。

狼狽する明石は忠の袖を引っ張って騒ぎ立てるが、二人にはどうしようもない。深めの深度で突き進むように作られた訓練用魚雷は、明石艦の艦底を憎たらしい程に颯爽に通り過ぎていった。それは満点の命中判定であった。

艦のあちこちから一斉に悲鳴があがる明石艦を尻目に、二水戦の駆逐艦達は明石艦後方に位置した二航戦にも自慢の魚雷を発射。悔しがる明石をあざ笑うかのように、彼女のヘッドフォンからは駆逐隊の歓声が響いていた。

『『ばんざあーい！！ ばんざあーい！！』』

余りにも綺麗な戦闘を行った二水戦に、忠は悔しさを通り越して脱帽していた。さすがに神通が率いる部隊である。雷撃された際に明石艦は一発の応射もできず、一方的に叩きのめされた。

その日の訓練の結果は酷い物で、攻撃側の損害は八戦隊と渡り合

った神通艦の大破判定のみ。防御側は空母2隻、仮装戦艦1隻が撃沈判定という惨めな物だった。

故に夜になっていつものように忠の部屋で行われた宴会では、鼻を高くした神通が上機嫌で酒を飲んでいた。忠と那珂は一言、『残念。』と言ってそれ程気にはしなかったが、明石はかなり悔しかったらしい。神通はベッドの中央に腰掛けて床に座った霞と霰あられを褒めているが、その横から明石があれやこれやとイチヤモンをつけていた。

『囧なんて卑怯だ〜!』

『馬鹿者が。卑怯もへったくれもあるか。』

『なによ! 神通はカヤの外で大破判定だったクセにいい!』

『なんとでも言え、撃沈判定め。』

『むきいいいい!』

奇声を発した明石は神通の服を掴んで、左右にグラグラと彼女の身体を揺らす。神通は意にも返さずにお酒を静かに飲んでいる。となりで瓶ごと口に運んで自棄になって酒を飲んでいる明石が、なにか哀れに見えてくるという物だ。

無謀にも神通と論戦をしようとする相方に呆れながらも、その日、忠は改めて帝国海軍2水戦の実力を思い知った。

その後も第二艦隊の宿毛湾での訓練は熾烈を極めたが、おかげで新鋭艦が多い第二艦隊の錬度はみるみる内に上昇していった。太平洋上で繰り広げられた大規模訓練は2週間程で終わり、第二艦隊は休養の為に別府湾べつぽうへと向かった。

第二一話 「先輩と後輩」

昭和15年1月19日。

第二艦隊は休養の為、宿毛湾すくもから豊後水道を北上。大分県別府湾べっふにその錨を下ろした。

別府湾は古く室町の時代から開かれた港で、この地に覇を唱えた梟雄・大友氏おおともが南蛮貿易の港として指定している。鎖国という時代もあったが、日本国内としては珍しい国際色豊かな歴史を持つ港湾であった。

海軍の要港部等がある訳ではないが、大型艦船でも難なく停泊できる余裕ある水深と広さを持つこの湾も、有明湾ありあけと同様に帝国海軍の使用頻度は高かった。

この別府湾を西から望む別府市は温泉が全国的に知られており、南から望む大分市は先に述べた大友氏の城下町として栄えた事から鎮西の中でも比較的大きな都市である。それに伴った商業、観光業が発展している事は、艦隊乗組員達の休養には持ってこいだった。

また昭和9年に佐伯町さえき（現・佐伯市）に大分県初の海軍基地として佐伯海軍航空隊が置かれたのを皮切りに、昭和13年には大分市に、そして昨年には別府市の北、宇佐郡うさ（現・宇佐市）に呉鎮守府隷下として練習飛行隊の基地が置かれ、連合艦隊にとっては航空兵力との密接に連携した訓練が可能で立地条件を持っていた。各国の船舶が頻繁に出入りする東京湾を凌いで、この地は帝国海軍がもっとも御用達とする訓練地である。

さっそく第二艦隊の各艦でも半舷上陸が出され、乗組員達は宿毛湾での訓練での疲れを癒そうと続々と艦を降りていった。

雲ひとつ無い晴れ空の下、神通艦の艦橋天蓋の上では時間を持て余した神通と那珂、そして明石が横になって、暖かな日の光りをのんびりと浴びていた。

仲良し3人で集まれば楽しい会話が響く。と思いきや、今日の明石は荒れていた。頭の後ろに両手を当てて仰向けで寝転がる神通だが、その身体を隣に座った明石がグラグラと揺さぶって声を上げる。

『不公平だあ！』

『しょうがないだろう？ 上陸の引率は幹部がやる物だ。森の仕事の内の一つだろうが。』

『やってらんねえ！』

『ふん、まったく……。』

呆れ顔で視線を送る神通だが、明石は頬を膨らませたままだった。横になった神通を挟んで、明石の向かいに脚を崩して座る那珂はいつものようにクスクスと笑っている。湯気が上がる湯のみを口に運びながら、那珂はご立腹の明石に声を放つ。

『私達は人間と違って、陸地に脚をつけれないのが不便なのよねえ。』

『不公平だあ！』

『ふふふ。でも森さんならすぐ帰ってくるんじゃないの？』

那珂の問いかけに明石は俯くと、低い声で唸るように声を返した。

『一泊するんだって……。宇佐に行くって言ってた……。』

『あら、飛行場にでも行くのかしら？』

『宇佐神宮だよ、きつと……。昨日、鉄道唱歌歌ってたもん……。』

宇佐神宮は日本書紀にもその名が出てくる事で有名であり、皇紀2600年を祝う今年は神武天皇の縁があるこの宇佐神宮を訪れようという人が多かった。故に忠もせつただしかくだからと上陸先で脚を伸ばそうとしただけの話なのだが、それはそれは楽しそうにして下艦していった彼の姿が明石には面白くなかった。自分で放った言葉で昨夜の記憶を辿ってしまった明石は、再び顔を上げると怒りを込めた声を上げる。

『やってらんねえ！』

言い終えると明石は再び頬を膨らませながらも泣きそうな目をする。神通は彼女のその表情に小さく笑いながらも、ポカポカと注がれる陽の光りに大きくあくびをした。瞳の縁に溜まった涙を指先で拭きつつ、神通は口を開く。

『今日はジジイも上陸でいないんだ。せつかなんだから、静かに過ごさせてくれ。それにたまには森にも羽を伸ばさせてやれよ、明石。』

文字通り寝食を共にしている忠と明石だがその生活の実態は神通の言葉通り、忠が明石に合わせていると言った方が正しいし、当の明石にしてもそのつもりであつた。もちろん嫌な顔をしながらも毎度のように自分のわがままを聞いてくれる彼に、明石は心から感謝している。だがそれでも彼女は、正直な自分の気持ちを抑えられなかった。

それはいくら言ってもどうにもならないという事も、それが自分の一方的なわがままであるという事も解っている。ただそれを一緒に共有できないという事が、そして自分と相方の存在が違うという現実が、彼女の胸の中からモヤモヤとした行き場の無い怒りを込み

上げさせるのだった。

『ふこーへーだあ!!』

『お前なあ、そういうの嫌われるぞ?』

『やってらんねえ!』

『ふん。』

今日はエラく不機嫌だな。

そんな言葉を脳裏に浮かべながらも、神通は珍しく相方に関しての愚痴を言う明石を小さく笑った。

これはきつと帰ってきた相方は、彼女の無理難題を吹っ掛けられる意地悪を受けるに違いない。その姿が目には浮かぶ程に予想できる二人に、神通も那珂も込み上げる笑いを抑える事が出来ずに笑った。

昭和15年1月21日、第二艦隊は別府湾での休養を終えて抜錨。^{はつびよう}3日後の1月25日、帝国海軍4鎮守府^{ちんじゆふ}の内の一つ、横須賀へと到着した。呉に継ぐ規模の一大軍港である横須賀は、多種多様な術科学校が置かれる海軍の教育の聖地である。汽車で北に行った東京・築地には未来の海軍を背負って立つ者を育てる海軍大学校もある。そして昨今の世界の軍事面では飛躍的な進歩を遂げている兵器である航空機の生産、補修、研究を束ねる組織、海軍航空技術廠が設置されている。これは呉にすらない、横須賀鎮守府の特徴である。

また、呉海軍工廠、^{ひろ}広海軍工廠、^{まいづる}舞鶴海軍工廠と同様に実験研究の部署が置かれている横須賀海軍工廠では、光学、機雷、電池や機関といった部門の実験と研究を行っており、帝国海軍の科学力、技

術力の最先端を日夜探求している所でもある。

さらに国内でも有数の造船の地でもあり、少し離れた横浜船渠せんきよは
那珂の生まれ故郷でもあった。

横須賀到着から二日後の1月27日。

ここまで給油だけ受けてきた明石艦は横須賀工廠の造機部の前の
栈橋に接岸し、各種資材の補給を受けた。入港してすぐの搬入作業
は面倒だったが、カッターで漕いでの上陸にならなかった事に乗組
員達は喜ぶ。

測距儀そつきよぎの上に座り込んだ明石は、甲板でせつせと搬入作業に携わ
る忠を眺めていた。今日は少し曇り空で、有明湾や別府湾に比べて
北にある横須賀はまだ少し寒い。外套がいとうの襟を引き締める彼女の口か
らは、白くなった息が舞い上がる。やっぱり寒いのは苦手だと自分
の弱さを感じながらも、今回は外泊しないという昨夜の相方の言葉
を思い出す明石は口元を緩める。幕末からの造船都市である横須賀
は、別府湾と同じく国際色豊かな港湾で、付近にはおいしい食い物
屋が沢山ある。それはつまり、おいしい食べ物に彩られた今日の夜
を明石に保証する物であったのだ。

今日は何が食べれるかな？

わくわくしてくる明石は、その気持ちを乗せて歌を歌った。

汽車より逗子を眺めつつ
早や横須賀に着きにけり
見よやドックに集まりし

我が軍艦の壮大を

酒を飲んで忠と供に良く歌う鉄道唱歌。横須賀の歌詞は彼女達、帝国海軍艦艇が謳われている。明石にとっては忠や神通艦の木村大佐ぐらいしか触れ合いが無い人間達ではあるが、その歌詞は彼女と人間の距離を少しだけ近づけてくれた。自然と湧き上がる喜びに、明石は鼻歌で鉄道唱歌の曲を奏でる。

『あつ、明石。ちょっといいかしら？』

『うん？ あれ、那珂？』

上機嫌の明石に背後から声を掛けてきたのは那珂だった。いつもはおしとやかにニコニコとしている彼女だが、今日はちょっと困ったような表情をしている。疲れたような溜め息をしながら、那珂は明石の腕を取って言った。

『ごめんなさいね。ちょっと神通姉さんの所に来てもらえない？』

『神通？ うん、良いけど・・・。』

何か急ぎの用らしく、那珂はそわそわとしながら明石を立たせるとすぐに白い光りを放って消える。こうして明石と那珂は、洋上で錨泊する神通艦へと向かった。

『神通姉さん、入るわよ？』

扉を数回ノックして那珂がそう言うと、その扉は中から開かれた。

開いたの扉の後ろには霞の姿があり、明石は軽く手を上げて挨拶をする。しかし霞も那珂と同様に、困ったように引きつった笑みを浮かべてお辞儀してきたのだった。

その事にさっぱり要領が得られない明石は、首を捻って部屋に入る。

部屋の扉のすぐ脇にある机と椅子。その椅子には部屋の主である神通が、何やら厳しい目で腕組みをして座っている。そして彼女の視線の先にある床の上には霞と供に初めて見る水兵服の少女が俯いて正座していた。口を尖らせて不満げな表情の二人だが、どちらも顔には引っ掻き傷や青いアザが出来ている。

軍医としての自覚が強い明石は、怪我を見ると放っておけない。神通への挨拶も忘れて、彼女は二人に駆け寄ってしゃがみこんだ。

『ちょ、ちよつと霞！ 大丈夫！？』

『・・・はい。』

明石が顔を覗き込むと、霞は視線を合わせずに口をツンと尖らせて答えた。彼女の頬には爪で引っ掻かれた細い傷跡が数本走っている。それほど痛そうにしていないう事に明石は小さく溜め息をして、今度は霞の隣に座る少女に声を掛けた。

『あなたも大丈夫？』

『・・・大丈夫ですよ。』

ぶっきらぼうに少女は言った。霞や霞等、駆逐艦の艦魂は爽やかで人懐っこい所を持っている事が多いのだが、この少女はあからさまな敵意を放つ殺伐とした感じを持っていた。大きく波打ったクセ毛を肩につく位の長さで無造作に伸ばし、右目の上から両脇に分けるといふ随分とお洒落な髪型をしている。霞と同じ小柄な体格で、同じように16歳ぐらいの幼い顔立ち。顔に比して大きい瞳をして

いるが、クリツとした丸い目の霞とは違い、那珂や神通のように鋭い釣り目を持っていた。

彼女の頬もまた赤く腫れあがっており、それが誰かに殴られたからというのは一目瞭然だった。

そして部屋の中に居る人物の中で、こういう事案において前科がある者が一人いた。その事を思い出した明石は咄嗟に立ち上がり、椅子に腕組みをして腰を下ろす神通に詰め寄りながら声を荒げる。

『神通!! またやったでしょ!!』

患者を前にしても怒りに駆られた時は見境無く怒鳴ってしまう明石だったが、一度それを見た事のある霞が彼女の身体に抱きついて止める。

『ま、待ってください、明石さん!! せ、戦隊長ではないんです!!』

長身の明石の胸に顔を埋めるようにして静止する霞の声に、明石は振り上げていた手から力を抜いた。同時に彼女の顔からは、怒りの色が波のように静かに引いていく。

『え? あれ、そうなの...?』

明石はそう言う胸の中で息をつく霞から、正面に捉えていた神通に視線を向けた。呆けた顔の明石を、神通は失敬などとも言わんばかりに眉をしかめて睨みつけている。

『.....』

『あ、あはは.....ごめ〜ん.....』

『・・・ふん。馬鹿者が。』

気まずそうに苦笑いして謝罪した明石だったが、神通のいつもの静かな罵声を受けて部屋の隅に引っ込んだ。登場してすぐに犯した失態に落ち込む明石は、しょんぼりとしながら那珂の隣で床に座り込む。

やがて一人暗くなって膝を抱いて丸くなる明石を他所に、神通は目の前で正座する二人を睨みつけながら声を発した。

『お前等、何を揉めてたんだ？』

神通の言葉が部屋の中に静かに響き渡る。どうやら二人の顔の傷は、取っ組み合いの喧嘩をした事の結果であるらしい。先程の自分の予想がまるっきりの外れであった事を思い知り、『あちゃ・・・』と声を上げて明石は顔を歪めて頭を掻いた。

一方、神通の前で正座する二人は彼女の問いかけを耳にしてお互いを睨みつけた。人当たりの良い霞にしては珍しく、憎しみが籠った目を向けている。明石はそんな霞の姿に事の真相を悟る事が出来ず、首をカクンと傾けた。ほんの数秒だけ沈黙が部屋を支配したが、霞は神通に向き直って口を開いた。

『コイツが私の話を聞かないですよ！ 戦隊長に言われた教育を始めよう。』

『ふざけんじゃねえよ！ この女がいきなり殴りかかって来たんですよ！』

その言葉に霞が正座から片膝をついて腰を上げる。その動作を見逃さなかった隣の少女も、その腰を僅かに浮かせた。互いに目を見開いて睨み合う中、霞が口を開いて口論が始まる。

『アンタの口の利き方が悪いんだよ！ 私は一水^{いっすい}でアンタは二水^{にすい}じゃない！』

『なにが一水だ、バカ！ アタイ達はアンタ達みたいな出来損ないの駆逐艦じゃない！ 雷装も速度も航続距離もアタイ達の方が優れてる！ 自分より劣るような奴に、誰が頭なんか下げるかってんだ！』

『生まれたのは私が先なんだよ！ それにアンタは一回も訓練に参加した事の無い新兵でしょ！！』

『そんなにお山の大将になりたいかよ！？ まるで猿みたいだな！』
『なにを、この野郎！』

聞き手の神通や他の者を無視して、完全に頭に血が昇った二人は取っ組み合いの喧嘩を始めた。運動が得意な霞の身体能力は先の柔道の競技会で、ここに居る者全員が目の当たりにしている。当然のように喧嘩だって強い筈だが、相手の少女も言葉遣いから感じ取れるように鼻っ柱が強いらしい。霞相手に臆する事も無く、顔を殴られてすぐに彼女も殴り返した。

齒の一本でも折ってやる。

そんな勢いでボカスカと音を響かせて殴りあう二人だったが、やがてその顔を大きな影が覆った。ふとその事に気付いた二人が視線を横に向けると、そこでは立ち上がって額に血管を浮かせた神通が鋭い眼光を伴って見下ろしていた。その眼光にビクンと震える二人だが、もう遅い。すぐさま神通のげんこつが二人の頭に叩き落された。

『この馬鹿がああ！！！！』

頭に受けた激痛に悶え苦しむ二人はとりあえず顔の治療を明石に施され、『頭を冷やせ。』との神通の命令で自分の艦へと帰って行った。

犬猿の仲となってしまうている二人の少女が去った神通の部屋では、壁から下ろしたベッドに寝転んでいる神通と、その身体を揉む霰。そして壁に寄りかかって腕組みをする那珂と、椅子の背もたれを正面にして座り、頬杖をつく明石の4人がいた。

当然、彼女達の話し込む話題は二人の事である。そもそも霞の隣にいた少女の正体を知らない明石は、神通にそれを尋ねた。神通はちよつと疲れたような溜め息をしてそれに答える。

『アイツは私達の二水戦に今日付けで新しく編成された第16駆逐隊の一隻、陽炎型八番艦の雪風だ。』

『雪風……』

『ああ、霰と同じ第18駆逐隊の陽炎や不知火しらぬいの実の妹だ。確かお前と同じ、佐世保生まれだったはずだ。』

『ふうん……。』

明石はそう言うのと頭から帽子を取って机の上に置き、両腕を背もたれの上に横に寝かせてその上に顎を乗せるようにして身を丸めた。その体勢のまま少し考え込んだ後、明石は真剣な顔で両手で神通の身体に力を込める霰に視線を流して口を開いた。

『ねえ、霰。陽炎や不知火もあんな感じなの？私、キョーダイがないから良く解らないんだ。』

霰は明石に向けて小さく笑みを向けた。何気ない明石の言葉だが、

姉妹艦という物が一般的な艦魂社会では基本的に姉妹がいない者はいない。そういう観点から考えると、明石は天涯孤独の身だった。当たり前のように姉妹がいる自分の境遇に感謝しつつも、それが無い明石に霰は少しだけ同情する。もともと明石はそれを気にしているようでない。霰は表情に出ようとする同情の色を掻き消す為に、敢えて笑みを作ったのだった。

『いいえ、陽炎も不知火も良い子です。雪風と同じく配属された黒潮くろしおって子も、あないに難儀なんぎな性格ではないんですよ。』

霰に続いて那珂も声を発する。

『いくら姉妹でも、性格は人それぞれよ。私と神通姉さんも全然似てないでしょう？』

『なんで私を引き合いに出す？私はあるじゃじゃ馬ではないわ。』

目を閉じて背中に伝わる霰の手に力を抜きながらも、神通は不満げに言った。彼女の言葉に言った本人以外の3人が小さく笑う。

『ふふふ。例えよ、神通姉さん。』

『ふん……。』

口に手を当てて咳き込むように笑いながら那珂は答えたが、神通は笑い声を無視するかのように目を閉じたまま枕に顔を埋める。やがて笑い声が治まりかけると、明石は再び神通に尋ねた。

『ねえねえ、どうして霞と組ませたの？』

『新兵教練だよ。雪風も黒潮も竣工と同時に駆逐隊を編成、配属されたからな。』

『あゝ、さっき霞が教育がどうか言ってたね。』

『ああ、特に雪風は新兵ながら司令駆逐艦となる身でな。それで同じように新兵ながらも司令駆逐艦をこなして来た霞を付けて、専属教育をさせようとしたんだ。それに霞の第18駆逐隊は朝潮型あさしおの霞と霰、陽炎型の陽炎と不知火の4隻編成だろ？陽炎型の扱いというか、その辺を霞は良く解ってると思ったんだ。あ、霰、もう少し上だ。』

神通はそう言いながら、自分の首の付け根辺りを右手の指先でトントンと軽く叩いた。それを見た霰は、伸ばした手を神通が示した部位に動かして返事をする。ところがその返事の仕方が不味かったらしい、神通の静かなお叱りが彼女に飛んだ。

『あ、はいはいー。』

『ハイは一回だ。馬鹿者。』

『あう……。す、すみません……。』

『ふん。』

この些細な言葉遣いにすらも徹底的に教育する所が、神通の教育方針の特徴である。私立神通学校のとっても厳しい校則なのだ。ヘコヘコと頭を下げながら神通の背に手を伸ばす霰の姿に明石と那珂は微笑みながらも、そこに湧いた一つの疑問を明石は声に変えて発した。

『うーくん、神通……。』

『ん？　なんだ？』

『雪風の霞に対する口の利き方って怒らないの？』

その疑問は那珂も、そして霰も同様に抱いていたらしい。明石の声が発せられてすぐに二人は神通の表情を覗き込んだ。だが神通はゆっくり目を開くと、ちよつと眉をしかませて微笑んでみせた。彼

女はその表情のまま大きく一度溜め息をついてから口を開く。

『それだと雪風だけを怒る事になる。そして逆に雪風が言った事を怒るのであれば、アイツが言った駆逐艦としての優劣はどうする？あの言葉は決して間違いではないし、仮にそれを当の霞の前で言ってみろ。霞や霰、そして朝潮型で構成される第8駆逐隊の士気を急激に下げる事になる。指揮官としては愚作だ。』

『なるほどお……。』

先の先まで冷静に状況を深読みしている神通に、那珂も明石も大きく頷いて感心した。さすがに「花の二水戦」の旗艦を頂く艦魂である。言葉遣いも気性も荒いが、彼女は連合艦隊旗艦の長門が認める程の人物なのであった。

そして今の話聞いた霰が少し落ち込んでしまった事に、顔を見ずとも神通はその背中に伝わる力の加減で解った。だが彼女には焦る様子もその必要も無い。神通は再び目を閉じて静かに声を上げ、落ち込む部下に自分の腹を割った意見を教えてやった。

『安心しろ、霰。私は数字が書かれた書類で、艦の性能を決め付けるつもりはない。私達艦魂の頑張りようで、その艦は能力を何倍も出す事が出来る物なんだ。赤城さんや加賀さんを見ろ。艦齢は古いが、新顔の飛龍や蒼龍に対しても互角以上の性能を持っているじゃないか。自分が型落ちになった事に落ち込む必要はない。いいな？』
『は……はいっ！』

神通の言葉で霰の表情は再び明るくなる。語りかけている間、神通はずっと目を閉じていたが、従兵として常に傍らにおいて来た霰の声にその心配がなくなった事を感じて小さく笑った。那珂と明石もまた、そのやりとりに笑みを合わせる。やがて背中を揉む霰の力が戻った手に、神通は少しだけ安堵の色が混じった溜め息をして再

び眉をしかめた。

『あゝあ、どうした物かな……。』

暫くの間、4人は『うゝん……。』と唸り声を上げて天井を仰いでいたが、唐突に部屋の中には扉をノックする音が響いてきた。重い金属音が勢い良く鳴る中、その向こうから聞こえてきた声に明石がビクンと身体を震わせる。

『おい、明石が来てるんだろ！？　ここを開けろ、神通！！』

野太くちよつとしゃがれた声。その声が嫌と言うほどに強烈に記憶にこびり付いている明石は、すぐに声の主が木村大佐である事に気づいた。一気に顔が青ざめる明石はベッドの脇に跳び移ると、膝を抱いてブルブルと震えながら縮こまる。こんな言い方をすれば当人は怒るだろうが、すかさず彼の相方である神通が怒号を上げる。

『なにしに来了、ジジイ！？』

『明石が来てるんだろ！？　さっき霰から聞いたぞ！！』

どうやら霞と雪風を甲板まで送っていった際に、霰は木村大佐に今日の来客を教えてしまったらしい。神通にギロリと睨まれて苦笑いする霰だが、彼女のその頭に明石の平手打ちが叩き込まれる。

『あうっ……。』

『何で教えたのよ！！』

『だ、だって……。』

頭を叩かれて涙目になる霰だが、身の危険を感じている明石は彼女以上に涙目になっている。そしてそんな二人を背にした神通は、再び扉に向かって叫んだ。

『今、取り込み中なんだ！ 帰れ！』

『取り込み中！？ どうした明石、何か悩み事か！？ 恋の悩みか！？ それなら悩む事は無いぞ！！ 明石にはおじさんがいるじゃないかあ！！』

『い、いやああああ！！』

彼には随分と気に入られているようだが可哀想に、明石は木村大佐の言葉に声を上げて泣き出した。当然、神通はプンスカと怒って竹刀を出現させ、彼のお望み通り扉を開けるとその勢いで彼を滅多打ちにした。毎度のように逃げ出す木村大佐を追い掛け回そうとする神通を、霰が小さな身体で必死に抱きついて止める。

日頃からこのように神通の周りの騒ぎを必死で止める霰だが、その都度とばかりを食らう彼女の境遇は不幸という他無い。今日も明石や神通を必死に制止してんやわんやの一日。終いには神通に『お前のせいだ！』と頭に乗せた水兵帽が吹き飛ぶ程に霰はこっ酷く怒鳴られ、そのお尻を竹刀で思いっきりぶっ叩かれるという憂き目にあった。

一気に騒がしくなった部屋の中、忠と同じ感覚でそれを見る事が出来る那珂だけが、一人口元を抑えて笑っていた。

結局この日、霞と雪風の仲を取り持つ良い算段は思いつかなかった。

第二一話 「先輩と後輩」 (後書き)

G Wという事で少しの間、帰省の為に更新を休止いたします。読者皆様には何卒ご理解の上、ご了承くださいますようお願い致します。

第三話 「恋敵という好敵手」

『ふう〜ん、艦魂にもそういうのあるんだなあ。』

その日の夜、大福やきなこ餅等のお菓子を持って艦に戻った忠に、あかし かすみ ゆきかぜ明石は霞と雪風の一件を相談した。その言葉通り艦魂同士いさかの諍いである事から人間である彼に相談して巻き込むのはちょっと気が引けたが、勝手知ったる相方の顔を見た明石からはそんな考えは消えていた。

彼女はいつものようにベッドの上に寝転がり、飲み込みづらい和菓子ラムネで喉に流し込んだ。爽快な喉の通りと和菓子特有の柔らかい甘さが舌の上に残る。良い気分である事この上ないが、二人の仲を考えると明石のその笑みも少しだけ消えてしまう。

一方、椅子に腰掛けてお菓子を頬張る忠は、普段の自分の生活から解決策を模索していた。

というのも、彼は明石艦砲術科で構成される分隊の幹部である事がその理由である。当然、分隊長は砲術長の青木大尉だが、その補佐を彼は行っていたのだ。民間人も含めて明石艦には700人以上の人間が乗組んでおり、そこには多種多様な人間関係がある。もちろん良い奴もいれば悪い奴も居るし、彼はおくびにも出さないが好きな奴もいれば嫌いな奴だっている。彼はそんな中で、分隊内の揉め事等の面倒を見る事が間々有った。大半は明石艦きつての問題児である弟のマサの懸案が多いが、組織の一員としての経験が浅い明石よりはあれこれと策が思いつくのである。

きなこ餅をゆっくり噛みながら、忠は天井に視線を向けて口を開いた。

『なにか一緒にやらせてみるのはどうかな?』

『う〜〜ん、一緒になって教育しようとした結果があれだよ?』

『ああ、そつか。ダメかあ。』

第一案は速攻でボツとなった。あまり深く考えずに出したありがちな案であったが、お互いの複雑な関係には効果が無い。残念。

忠は肩を少し下げて、机の上からラムネの瓶を掴んで一口飲んだ。チクチクと喉を刺す炭酸の刺激が、今日はどことなく痛みのように感じる。

『ふうむ……』と頭を捻る彼に、明石もまた両手で頬杖をついて天井を眺めた。煌々と光る電灯の光りがどこか虚しい。

『どっちかを悪者にしちゃって怒るのは簡単なんだけど、それはちよつと悪いよねえ。神通じんつうも嫌がってたし。』

『うーん、そうだなあ。』

これ程二人の会話が弾まないのも珍しい。忠は僅かに眉をしかめて机に頬杖をついた。

どうにか二人を仲直りさせる方策はないものか。

彼の脳裏に浮かぶのはその言葉だけで、その内容は皆目思いつかなかった。力の無い溜め息が忠の口から漏れる。

だがそんな彼の姿も明石にはどこか微笑ましかった。普段、こうして二人で一つの事についてあれやこれやと頭を捻る事はあまりない。彼女にとってのそれは貴重な時間であり、答えが出ないながらもこうしてあーだこーだと話し合う一時は楽しかった。

『お、そうだ。』

せっかく必死に考えてくれている忠に悟られないようにと明石は俯いて笑みを隠していたが、突然忠がどこか明るい声を発したので

顔を上げた。

『なあに？ なにか、思いついた？』

『うんにゃ。でもこういう事を相談できる人に、心当たりがあるじゃないか。』

ニコニコと笑う忠だが、明石にはその人物が全く思い当たらない。先程とは逆に今度は彼女がその表情を歪める。

誰かいたっけ？

唇に指を添えて天井を見上げながら、明石は思いつく名前をあてずっぽうに挙げた。

『うーん、みやび宮里艦長？』

『まさか。ぺえぺえのオレには艦長に相談出来る程の度胸は無いよ。』

『じゃあ、あおき青木さん？』

『ハズレ。それに艦内の人間で艦魂が見える人はオレだけだよ？ 雪風や霞の事を伝えるのは無理だよ。』

焦らしてばかりで答えを教えてくれない忠に、明石はちよつとだけ口先を尖らせて声を返す。

『勿体つけずに教えてよお。だあれ？』

その声に忠はなにか明石を哀れむような瞳で見つめてきた。明石は益々訳が解らなくなつて首を捻る。

『ははは。艦魂が見える人間で、オレより人生経験豊富な人が一人

いるじゃない。』

楽しそうに笑う忠だが明石はその言葉を受け、やっとの事である人物の記憶に辿り着いた。彼はその人に対して特に気後れを持っていないようだが、明石にしてはとんでもない話であった。今日も勝手に恋仲にされそうになったその記憶が、明石の身体に悪寒を発生させる。首からつま先にかけてゾワゾワと伝わっていく震えに彼女は身体を擦りながら、引きつった表情で声をあげる。

『も、もしかして、木村さん・・・？』

『うん、あの人に相談するのが一番良いんじゃないかな。明日はちようど非番直だから行ってみようよ。』

月夜の横須賀に浮かぶ明石艦。静かな波音と人の暮らしを示す街の灯りが支配する中、その艦から彼女の慟哭どうこくが響いたのは言うまでも無い。

翌日、朝の顔出しと業務の引継ぎを済ませた忠は明石に連れられ、沖合びようはくいに錨泊する神通艦に向かった。

『と、言う事なんですよ。』

『ふむ、あの二人がねえ。』

神通に頼んで彼女の部屋に集合した忠と明石、そして部屋の主である神通に艦長の木村大佐。部屋に入っただけで明石に抱きつこう

とする木村大佐だったが、さも予想していたかのように神通が一睨みすると大人しくなった。今も彼女は机に腰掛けて、椅子に座る木村大佐に時折殺気だった瞳を向けている。

これではどっちが年下なのか解らない。おかしなコンビであった。神通の厚意により彼女のベッドに腰掛けた忠の後ろには、彼の肩に手を乗せて半分だけ顔を覗かせる明石がいた。朝一番から木村大佐の餌食になりそうになった彼女は、ビクビクと震えて忠の背中に身体を隠している。

だが当の木村大佐は忠の相談を受けるや、急に真面目な表情になって自慢の髭を撫でて考え込んでくれている。意外にも真面目な人だった。

『木村大佐、どうです？ 何か良い方法ってないですかね？』

忠の声を受けた木村大佐は、右の髭、左の髭と交互に髭先を指で摘んで形を整えながら、すぐ脇の机に足を組んで座った神通に視線を向けた。神通も彼のその視線に気づいて顔を向ける。

『うーん、神通よ、今まではどうだったんだ？ 型式が違う艦での編成は、二水戦じゃ珍しい事じゃないだろう？』

『まあ、そうだが……。ただ、あれだけ険悪になる奴等は初めてだ。』

神通は木村大佐の言葉を聞き、頭を掻きながら目を閉じて言った。それは誇り高い二水戦の内輪揉め。故に他所の艦魂どころか人間である忠や木村大佐にそれを相談する今という瞬間は、彼女の二水戦の長としてのプライドに少しだけ傷をつける。だがそれを無碍にする事も彼女はまた良しとしなかった。微塵も敬う事が出来ない木村大佐であるが、懸命になってこうして頭を捻ってくれている。目の前のその事実が神通には少しだけ嬉しかったのだ。

その事から彼女の機嫌は特に悪くはなく、時折組んだ長い脚をブラブラと動かす。

『いっそトコトン争わせてみるか？』

なるほど、押してダメなら引いてみるか。

木村大佐の柔軟な発想に、忠は軽く手を叩いて大きく頷く。明石も忠の肩からやっと顔の全部を覗かせた。だがそれとは逆に、神通は唇に手を当てて難しい顔をしながら声を上げる。

『ううむ……。それだとどっちかに優劣をつける事にならないか？ 霞辺りは負けたら泣き出すぞ。』

せっかくの木村大佐の提案だが、神通はそこに抱いた懸念を率直に述べる。その言葉はただひたすら部下を氣遣う物で、鬼として認知される彼女にしては優しさが滲み出た言葉であった。木村大佐もその声と同じ事を考えたのか、ちよつと苦笑いしながら彼女に声を返す。

『ははは、そうだな。決着がつかないままの状態を、維持できれば良いんだがな……。』

『ああ、あの二人は個々においては優れた素質がある。お互いに刺激あっていけば、良い兵隊になると思うんだがな。』

神通と木村大佐はそう話すと、揃って顎に手を当てて首を捻った。『うーん……。』と唸って難しい事を考える二人の表情は心なしか似ており、それはまるで血の繋がった親子の様である。普段の二人の関係を考えると、可笑しくなくらいによく似た姿だった。忠と明石は二人に気づかれない様に笑みをあわせたが、すぐにどちらから

という事もなく溜め息を發して答えが出ない霞と雪風の懸案を憂いだ。

『戦隊長、武技教練用意よろし！』

その時、鈍い金属音のノックに続いて扉の向こうから霞あられの声が聞こえてきた。本人にしたら氣張って出している声なのであろうが、京訛り独特の鼻から息を抜いたような発音である彼女の声はどこか緊張感がなくてすぐ解る。

霞の言葉から察するに、どうやらこの間の競技会のように所属艦魂を集めての武技教練を行うらしい。やがて部下の声を耳にした神通は机から降りて床に脚をつけると、すぐさま声を返した。

『うむ、解った。今行く。』

神通は溜め息をしながらもその表情に力を入れ、少し丸い感じになつていた瞳をキツと尖らせる。長いまつ毛と鋭いつり目といういつもの鬼の二水戦戦隊長の顔に戻った神通は、今日もまたどこか怖い雰囲気その身に纏わせ始めた。

そして普段の仲間達の生活を良く知らない明石は、その神通の顔に表情を明るくさせて声を掛ける。

『ねえ、今日も柔道？』

『いや、柔道じゃない。今日は銃剣術だ。』

何気ない二人の会話に出てきた銃剣術という言葉。海軍でも相撲や柔道、剣道と並んで銃剣術はよく行われる武技である。今年、すなわち昭和15年の内に銃剣術は銃剣道と名称を変えるが、それはこの後の事である。

そして忠はその言葉を耳にしたと同時にある事が心の内に湧き、艦魂が行うという銃剣術に強い興味を抱いた。

『へえ、神通。オレ、見ていつでも良いかい？』

空は今日もまたどんよりとした曇り空で雨こそ降っていないが、時折吹く冷たい風が神通艦の艦尾甲板にある軍艦旗を寂しく靡かせる。

そこには白い中袖の運動衣に運動靴、軍袴という所謂体操服に身を包んだ二水戦所属の艦魂達が集まっていた。忠も兵学校時代に同じ格好で青春の汗を流した事を思い出し、懐かしみながらも少し年老いた事を感じて苦笑いする。

彼女達の周りには各々の防具、剣道用の面、木銃などが置いてあり、その長さや造りも人間が使う物と大差が無いようだ。小柄な彼女達では少し身に余る大きさであるが、実力の程はどうであろうか。戦隊長の神通が来た事で姿勢を正す彼女達だが、後ろの方ではそれを忘れて睨み合うあの二人が居る。天に広がる曇り空から雷でも発せられそうな勢いさえ感じるその険悪な空気が、整列した少女達の顔を引きつらせていた。咄嗟に霰が声を掛けようとしたが、彼女よりも上司の拳の方が速かった。

それが艦魂だからなのか、理屈はわからないが物凄く鈍い音が二回鳴ると、霞と雪風は昨日と同じように頭を押さえながらその場に崩れる。警告無しで振り落とされた神通のげんこつとその瞳が、霞と雪風の戦意を一旦終息させる。激痛に顔を歪めながらも怯える表情の二人に、神通は口を開いた。

『さつさと並ばんか、馬鹿者。仲間を待たせるな。』

そういうと神通はサツと身を翻し、整列している少女達の前に向かって歩きだす。相変わらず怖い人だと同じ言葉を脳裏に浮かべた忠と明石は苦笑いしながらその光景を見ていたが、木村大佐は神通の台詞に笑顔で大きく頷いていた。なぜなら怒った理由はいつぞやの柔道の試合の時の様に神通の気分に対しての物ではなく、「仲間」に關係する事だったからである。

完全に牙を折られた霞と雪風の泣き声の滲んだ返事だけが、空しくその場に響いた。

最近は人数も増えてきた二水戦では、武技教練に際して相手に困ることは無い。今日の神通はいつもの第一種軍装のままで、武技教練の監督だけをするようだ。もっともこの人なら銃剣術の腕前がなくても、拳骨一つで相当強いので問題は無いだろう。

座り込んだ少女達が見守る中、数人の少女達が交代で甲板中央に出てきて神通の掛け声と共に突きを繰り返している。

『まえ、まえ、あと。』

上司の掛け声に、木銃を構えた少女達が半身で前後に素早く動く。彼女達はさすがに帝国海軍艦魂だけあって、幼い顔立ちの女の子ながらもその動作はキビキビとしていて女性特有の滑らかさが微塵も無い。動作の端々で時間が止まるかのように動きを止める少女達の動きは、忠や木村大佐から見てもなかなか様になっていた。

『まえ、あと、まえ、まえ。突けえっ！』

『『『でやあ！！』』』

銃剣術の攻撃動作である「突き」が繰り返される。不釣り合いな程

に身体より大きい木銃を突き出す彼女達だが、その剣先（※タンポとも呼ばれる）は良く体重が乗っており、風切り音すら聞こえて来そうな程の速さだった。そして剣先の白い部分が空中でピタッと静止している。それはまるで砲塔から生える長い砲身のようなのだ。

『おお、かっこいい。』

甲板の脇で座り込む忠の横では、明石がその勇姿に感動している。彼女は銃剣術なる物を初めて見たらしく、興味が湧いた今の彼女からはさらにその隣に座る木村大佐への警戒心が無くなっていった。明石が至って普通に彼と会話できている事が、忠にとっては大いに平和を感じる事が出来る。

『よし、明石。おじさんが教えてやろうか。これでも兵学校と水雷学校じゃ、そこそこ強かったんだぞ。』

『え。木村さん、できるのお？』

笑いあう二人に忠も微笑みながらも、彼は目の前で汗を流す少女達をマジマジと眺めていた。実は彼も銃剣術に関しては多少の心得があり、口には出さないながらも心の内では一人一人の動きに講評をつけているのだ。

だが大の男がニヤニヤしながら少女をみつめる、という構図は捉え様によっては危険だ。

座り込む少女達の中でも、彼の気味の悪い表情に静かにどよめきが起こりつつあった。一同に眉をしかめる少女達の中、雪風は初めて見る彼の事を姉に尋ねる。

『陽炎姉さん。誰だよ、あの男？』

『明石さん所の砲術士さんだって。』

『へえ。』

雪風が不思議そうな顔をして視線を向けるのにも気付かず忠は少女達を食い入るように眺めていたが、その顔を横から木銃がコツンと突付いた。

『いてっ・・・!』

『あはは、変態めえ。』

木銃の持ち主は霞だった。

小麦色の肌に白い歯を光らせるその笑顔が、今日は顔を覗かせていない太陽の代わりようだ。悪ガキのように悪戯っぽく笑う霞に敵意は無いが、その言葉は忠としてはちよつと心外だった。故に彼は苦笑いしながら、隣に座り込んであざ笑う霞に声を返す。

『変態ってなんだよ。』

『あはは。ニヤニヤしながら女の子見てたら変態じゃないですか。』

『銃剣術を見てたんだよ。オレも少しやってたからさ。』

『森さんが？ うっそっ！?』

『あはは、ホントだって。』

ちよつと失礼な物言いの彼女だが、忠にとっては歳の離れた妹のような物でその言動に腹が立つ様なことは無かった。むしろ明石に比べて元気のいい彼女の笑顔は、忠の心から疲れを癒すには充分な程である。喧嘩の渦中の人物である事を忘れ、忠は霞に笑みを返した。

すると霞はケラケラと笑って立ち上がり、壁に掛けた木銃を手に取ると忠に手渡してきた。ちよつと驚いた表情の彼を無視するかのように霞は笑うと、その右手に白い光りでもう一本の木銃を出現させて声を上げる。

『よし、森さん勝負!!』

そう言うとな彼女は壁から甲板中央に向かって、後ろ向きで歩き出した。やがて数歩下がった後、霞は不敵に笑いながら木銃を交互に持ち替えて腕をグルグルと回し始める。

勝手にやっていい物かと忠は神通に顔を向けたが、彼女は小さく口だけで笑って頷いた。その動作で神通の許可を読み取った忠は、腕捲りをしつつ帽子を座っていた所に置いて甲板中央に進み出た。

人間と艦魂の競技は彼女達にしても珍しかったらしく、辺りで汗を流した少女達も脇にどいて二人の様子を見守ろうとする。明石や木村大佐、神通までもが固唾を飲んでいる中、霞は涼しい顔をして面と防具を身につけていく。

その霞の表情に、先の競技会での彼女の身体能力を忠はふと思いつ出した。軽く腰を下げた状態から一瞬にして相手に詰め寄るそのスピード。バネのようにしなやかで、それでいて体勢を安定させる強靱さをも併せ持つ彼女の細い脚。銃剣術で用いる突きに最も必要な物を霞が持っている事に、忠はこの時になってやっと感じた。可愛い顔つきながらも面の奥で不気味に光る彼女の大きな瞳が、彼に相手の強さをヒシヒシと伝える。

だが忠には恐れ等という感情は湧いてこなかった。面白いじゃないか、そんな思いを抱く余裕すら彼にはある。普段は笑って物事を誤魔化す頼りない青年だが、銃剣術に関しては彼はそれほどまでに自信があったのだ。明石が出してくれた防具と面を纏い、甲板中央にお互いが進み出ると辺りの少女達が歓声を上げる。当然、霞への応援が大半である。また、常に明石や神通に振り回されてきた忠という人間を、彼女達もまた遠巻きにこれまで見てきた。だから彼に対してはどこか悲観的な立場からの歓声が飛んでくる。

『森少尉、止めといった方が良いですよ!』

鼻で笑う忠だが彼の背後からも、明石の隣に来て座った神通との会話が響いてくる。

『おい、明石。森は大丈夫なのか？霞は弱くはないぞ？』

『さあ。森さんが武技やるのを見るのって、初めてなんだよねえ。』

『おじさんもたまに見てるが、霞は強いぞ。森で相手になるかどうか・・・』

『私もジジイと同感だ。』

二人に悪気は無いのは解っているが、明石は相方について好き勝手に言われた事に少しムツとした。ただ彼を心配してくれているだけなのだが、自然と明石の唇が尖っていつてしまう。

そんな背後からの会話に少し苛立ちつつも、忠は木銃を構えた。膝から力を抜き、僅かに腰を落として剣先を霞の喉の高さで向ける。その構えから神通と木村大佐は、彼の銃剣術がかなり洗練されたものだとして驚きを隠せない。

『ほう・・・』

『おお、あれなら砲術学校でもいけそうだな。』

神通に続いて声を発する木村大佐だが、二人ともその表情からは忠に対する哀れみが消えている。銃剣術の事は何一つ解らない明石は二人の表情の変化に首を捻りながら、甲板中央で構える相方に視線を戻した。

霞も構えてお互いの剣先が相手に向けられると、忠にしては珍しい言葉がその口から発せられた。

『おし。どっからでもかかってこい。』

目の前に居るのはいつも冴えないお兄さんだが、今は面をつけているからかその声も別人のように感じる。その事から少し驚いた彼女だったが、根っからの熱血な性格が霞の闘志に火をつけた。

おもしろいじゃん。

そう頭の中で呟くと彼女は忠に突きかかった。

『いきます！ てえい！』

霞は勢い良く甲板を蹴って突きを繰り出す。忠の左胸を目掛けて伸びてくる霞の剣先だったが、乾いた櫓の木独特の音を放って忠は払った。刹那、忠は半身の状態から、前に出していた左足で霞の腹を蹴った。

『・・・むっ！』

霞は小さく唸るように声を上げると、すぐさま後ろに跳び退く。流れるような忠の攻防一体となった動きに、周りの艦魂達から一同にどよめきがあがる。その柔軟な動きに神通も目を見張っていたが、その袖を明石が引っ張って話しかけた。

『神通、蹴りっていいの？ 剣道ではダメでしょ？』

『いや、あれが本来の銃剣術さ。木銃を振り回すだけで相手は倒せない。銃剣術ってのは銃剣を用いて相手を制圧する武術なんだよ。』

日本の銃剣術は西洋式の銃剣術を基に古来からある日本の槍術を組み合わせた物で、特徴はその突き技にある。銃剣術と聞くと、銃

床を相手の頭部に向かって叩きつける絵を思い浮かべる人も多いが、日本式の銃剣術は西洋人のように体格が大きくない日本人の体型を考慮して作られている為に多用される事はない。その代わりに左手の中で木銃を滑らせて勢いのある突きを繰り出す事が認められている。その為に銃剣術も少し前までは「銃槍」と呼んでいたし、銃剣を用いた格闘術と言うよりは刺突術と言った方が正しいくらいであった。

もっとも神通の言う通り、その本質は如何に勝つかではなく、如何に相手を戦闘不能の状態に陥らせるかである。故に銃剣術の技の中には蹴りの他にも、投げ技のように相手を倒し込む技、脚に銃剣を引っ掛けて転ばせる技、中には腕に引っ掛けて間接を極める技もある。明治の初期に導入されて以来、全国各地で相次いだ幕末の内戦、日清と日露等の戦争体験、そして当時の銃の性能上からそこで発生した幾多の白兵戦での前例が、それに磨きを掛けた事は言うまでも無い。

ちなみに陸軍でも海軍でも上等兵の階級になる者は一時間早起きしてこの銃剣術の猛特訓を課せられるという程に、皇軍では使用頻度の高い格式ある格闘術だった。

神通の説明に明石は成る程と納得しながらも、そんな物騒な格闘術を相方が用いている事が不思議でならなかった。普段はナヨナヨとして物事を笑って誤魔化す青年なのに、今日の彼は実戦慣れした陸軍の歩兵のようである。

驚きの視線を向ける明石を他所に、忠は跳び退いた霞を追ってすぐさま前に進み出て距離を詰めた。摺り足で前に出ながらもその剣先や彼の頭の高さが常に一定である事に、神通と木村大佐は同じ様な思いを巡らせて眉を潜ませる。

こいつ、只者じゃない。

二人が脳裏に浮かべた言葉。それを彼が証明するのに時間はかからなかった。

霞は腹に受けた衝撃に僅かに体勢を崩していたが、ふと視線を上げた所でピタリと自分に追隨してきた忠を認めて驚く。牽制の為に咄嗟に剣先を伸ばすが、忠はそれを払うとがら空きの彼女の右胸の辺りに突きを繰り出した。ドンと鈍い音が響くと同時に、霞の体が後ろに吹き飛ぶ。霞は1メートル程吹き飛んだ後に、大きく尻餅をついた。

『ぐっへ・・・！』

苦痛に顔を歪めながらも目を開くと、そこには今しがた自分の胸をえぐった剣先があった。木銃から伸びる腕の先、面の奥で忠がニヤリと小さく笑う。諦めを知らない霞はもう一度木銃を握った自らの手に力を込めるが、その場に響いた木村大佐の声に勝敗を悟った。

『霞、そこまでだ！もう死んでるぞ、だっははは！』

ちよつと口をへの字にしながらも霞は素直に負けを認めて、差し出してきた忠の手を取って立ち上がる。いつもの健やかな笑い声を上げながら面を取ってあらわになる忠の表情に、霞も面を取って悔しさを滲ませた歪んだ笑みを返した。

『くっそ・・・。なんだよお、森さん強いじゃん。』

『へっへっへ。これでも海兵66期じゃ、四天王だったんだぜ。』

忠は自慢げにそう言ったが、ちよつと格好つけ過ぎたかなと俯いて頭を掻いた。

実は勉強であまり優秀でなかった彼の唯一の自慢が銃剣術だった。220人の卒業生がいた66期の中でも屈指の銃剣術の使い手だった。

た事は、彼の兵学校時代の数少ない甘い思い出である。

照れ笑いする忠だったが、周りの少女達は一様に尊敬の念を込めた視線を送っていた。『かっこいい……』と、溜め息交じりで聞こえてくる彼女達の言葉。人間ではないにしろ、女子からの視線を釘付けにできた事は忠も素直に嬉しい。だがそんな彼女達と目を合わせる事にちよつと気が引けた彼は、木銃を自身の両肩に真横に掲げて顔を空の方向に向ける。もっとも彼は心の中では、先程彼女達から押されかけた烙印を払拭できた事に安堵して胸を撫で下ろした。

とりあえず変態の疑惑は解けたらしい、良かった良かった。

『へえ、やるじゃないか。』

『森さん、すごい！』

そう言つて神通と明石が歩み寄ってきた。小走りで近づいてきた明石は、忠の肩に手を乗せてニコニコと笑みを向けてくる。

喜んでいると言うよりはどこか嬉しそうなその表情だが、そんなにオレの銃剣術を見れたのが嬉しかったのだろうか？

忠は明石の笑顔にちよつと疑問を抱いたが、整った顔立ちである彼女の綺麗な笑みがそんな事を忘れさせる。そして彼女の隣にいる神通もまた、普段から短気で怒りっぽい彼女にしては随分と柔らかい笑顔を向けてくる。鬼の戦隊長である彼女に褒められるのは、忠としても光栄な事だった。やがて始まった神通との会話が弾む事も彼には新鮮で、つついその話に花が咲く。

『兵学校ではそこまで教える物なのか？』

『うんにゃ。オレのは祖父さんからの叩き込みでね。おかげで銃剣術は、当日修正より自信があるくらいだよ。あははは。』

『ふははは。気に入った。』

何時に無く上機嫌な神通はそう言うと、木村大佐に顔を向けて声を上げる。

『おい、ジジイ。森をウチの砲術士で引っこ抜こう。私達の武技教練の教班長にちょうどいい。』

『おお、そうだな！』

いつもの様子など露知らぬと言った風にして、変な所で意気投合する二人。人の気も知らずに好き勝手言うその様は困り物である。そしてその会話に眉を吊り上げた明石は、神通の腕を掴むと彼女の身体をグラグラと揺さぶった。

『神通、ダメ！！ 絶対ダメ！！』

『あゝ、解った解った。揺らすな。』

冗談のつもりだったのか神通は珍しく苦笑いして明石に視線を送っているが、明石は頬を風船のように膨らませて怒鳴りつけている。どちらの反応も忠には嬉しいのだが、この後になって明石の機嫌を戻す苦勞を引き受けなければならない自らの前途を想像して軽く溜め息をついた。

『も、森さん、もっかい勝負！』

霞の声を受けて喧騒を背後に彼女に向き直ると、彼女は大きな目を輝かせて忠の顔を覗きこんできた。小麦色をした彼女の肌である

が、心なしか頬がうつすら赤みを帯びているように見える。早く再戦したくてウズウズしているのか、小脇に抱えた面を小刻みに動かしていた。

『おっし、やるか。』

敢闘精神旺盛ながらも彼女のその愛くるしい表情が可愛く思えた忠は、彼女の頭に手を乗せて言った。霞はちよつと顎を引いて目を瞑りながらも、ニツと歯を見せて笑う。するとすぐに元気な彼女らしい返事が返ってくる。

『うす！・・・うわあっ！！』

突然、霞は後ろから受けた衝撃で前のめりに崩れると、忠の脇を通り抜けた所で顔を甲板にぶつける様に派手に転んだ。そして霞が消えた忠の目の前には、霞のお尻があったであろう高さに脚を伸ばす少女が立っている。先程神通に怒られた霞の喧嘩相手であった彼女は、脚を下ろすと手を後ろで組みながら忠に笑みを向けてきた。大きい瞳ながらも釣り目だからか、神通や那珂の笑顔とちよつと似ている。

『あ、どうもス。ア、アタイ、雪風ッス。』

その波打った長めのクセ毛は、幼い顔立ちの彼女にほんのりと色っぽさを与えている。なにか飲み屋の姉さんの言葉遣いもあるが、頬を赤くしてちよつとモジモジしているこの雪風もまた忠からすると可愛い物であった。霞との睨み合いを見ていた忠はその差にちよつと驚きつつも、わざわざ自己紹介してくれた彼女に笑みをみせてやる。

『雪風か。オレは明石艦の森忠少尉。よろしくな。』

忠の笑顔で少し気が緩んだのか、雪風は定まらない視線で口元を緩めると右手に木銃を出現させた。

『森さん。アタイに銃剣術を教えて欲しいんスけど、良いスカ?』

彼女は髪型に常に気を使っているらしく、そう言いながらも頭のあちこちに手を当てて髪形を整えている。

お洒落に気を使うのは女性なら当然か。

艦魂であるという彼女のことを考えながらも、忠は雪風のその動作にとっても人間臭くて近しい感覚を覚える。それは悪い意味ではなく、むしろ彼にしたら親しみやすい感じさえあった。そんな雪風に、自然と浮かんでくる笑顔で忠は声を返す。

『おし、じゃあ構えは――。』

『とおりゃあ!!!!!!』

その刹那、彼の声を遮るように叫んだ霞が、雪風の肩に跳び蹴りを打ち込んだ。

『いってえ!』

雪風は二、三步仰け反って尻餅をついたが、すぐさま立ち上がって霞を睨みつける。右手に持っていた木銃を甲板に投げつけると、雪風は眉を吊り上げて叫ぶ。もっとも蹴りを放って戻ってきた霞も雪風と同じくご立腹の表情だった。あんなに可愛さが溢れていた二人の顔も、今では天敵と遭遇した動物のような顔になっている。そ

してすぐに口論が始まった。

『邪魔すんな、猿!!』

『アンタが邪魔してきたんでしょ!!』

『森さんに銃剣術を教えてもらおうとしただけだ、バカ! 猿じや棒も使えねえだろうが、引っ込んでろ!!』

『なにを、この野郎!!!』

次の瞬間、霞が飛び掛った。

ボカスカと殴りあう二人は忠が止めても、一向に喧嘩を止めようとしなない。彼はなんとか喧嘩を止めようと二人の間に身体を割り込ませてみるも、どちらからと言う事も無く忠のお尻に蹴りが飛んできて弾き出されてしまった。甲板に倒れ込んでお互いの頬を引っ掻いたり、髪を引っ張り合う二人。完全に目の前の敵しか見ていない。

これは上司に止めて頂くしか手は無いな。

そんな思いで神通に顔を向ける忠だったが、彼女はまだ明石によってガミガミと怒鳴られていた。適当に返事をしながらも神通は耳を小指でほじり、時折その小指を口の前に運んでは息を吹きかけている。怒らせると面倒な明石にかかつては神通ですらも手が無いように、忠が雪風と霞を指差して視線を送っても溜め息をして俯くばかりだった。

仕方が無いので忠は霞に助けを求めた。

『霞、止めるぞ!』

『はい! みんな、二人を止めるんや!』

唯一の味方である霞の指示の下、二水戦所属駆逐隊の総力を挙げて雪風と霞を引き離す。随分と怒っているようで、二人はお互いに

引き離される間際でもお互いの腹や顔を狙って足を伸ばそうとする。

やれやれ、困った奴らだ。

喧騒の中で今日も一人、徒勞の溜め息をつく忠。

そして唯一、その光景を遠巻きに観察していた木村大佐は髭を撫でながら考えを巡らす。

森を肴にあの二人はお互いに競い合えるのではないか？

ふと浮かんだその策にだが、木村大佐はニツコリと笑って大きく頷いた。

うむ、これは森に一肌脱いでもらわねばなるまい。

当の忠の気持ちなど他所に、一人満足そうに笑う木村大佐。迷惑極まりない話であった。

第二三話 「涙と缶詰と雪風」

昭和15年1月16日。

第37代内閣総理大臣として、海軍大将の米内光政よない みつまさが陛下より組閣の大命を拝した。

前々回の内閣である平沼内閣ひらぬまでの海相時代、彼は現在の連合艦隊司令長官である山本中将と供にファシズムと号した独伊政府との提携に猛反対した事で知られる。しかし既に世論においては独国の人氣が高く、独国との同調を拒否し続けてきた彼に対する国民の目は冷やかだった。

そして昭和15年1月26日。

この日をもって昨年より米国政府より通告された日米通商航海条約がついに失効となった。石油輸入量の90%を依存する相手国に対して、日本は無条約状態という事態に陥った。この事で米国との貿易が一切禁止になった訳ではないが、国際政治の社会においてその状態が如何に異常であったかを彼らが思い知る時、そこに用意されていたのは行き先が一つの線路だけであった。

ここに米国の日本に対する経済制裁が始まったのである。

昭和15年1月31日。

第二艦隊は横須賀海軍工廠から、千葉県館山湾たてやまに泊地を変更。同日には館山沖に全艦が錨を下ろした。

房総半島南端に位置する館山市は昨年に市制が施行されたばかりの真新しい都市であるが、その地は幕末より帝都防衛の砦として機能してきた。東京湾の入り口に当たるこの地は帝都防衛における前

哨陣地のような物であり、付近には明治の頃に築かれた砲台が無数にある。その中でも古い物では、それ以前の黒船が来寇した際に築かれた物まであるという。

またこの地にある館山海軍航空隊の基地は、日本で5番目に設置された歴史のある航空基地であった。

館山基地の大きな特徴はその飛行場の立地条件である。大正12年の関東大震災で隆起して誕生した浅瀬を埋め立てる事によって造成された本基地は、湾内である為に波が静かで水上機の運用が可能なる事、海岸から突き出した敷地の為に一般人の目に触れにくい事、そして旧航空廠や海軍施設が集中する横須賀に近い事等から最新鋭機や試作機を存分に運用できる数少ない航空基地なのである。また大型の機体でも使用可能な程に滑走路には余裕があり、渡洋爆撃とようばくげきの言葉で有名になった中攻、すなわち九六式陸上攻撃機はここを開発の舞台とした。

さらには翌年、横須賀に次いで海軍砲術学校が置かれる予定の地もここであり、市街地には基地職員や生徒目当ての下宿、食い物屋、遊郭や飲み屋等が軒を連ね、鎮守府が置かれる地と並べても遜色のない立派な海軍都市でもあった。

泊地ただしに向かう途中、忠は早速その館山ならではの光景を目にする事になる。

明石あかしと供に覗く、発令所の舷窓の向こう。そこに広がった海面には、帝国海軍最新鋭空母の飛龍艦ひりゅうかんと蒼龍艦そうりゅうかんが全速力で航行していた。中型空母と識別されるこの2艦は排水量こそ2万トンを下回るほどではないが、長門艦ながととほぼ同じ長さの艦が駆逐艦並みの30ノット以上の速度で疾走するというその姿はとても勇壮だ。舳先で切り裂かれた波飛沫が、吹流しのように両艦の乾舷に靡いている。マス

トに掲げられた軍艦旗はのりで固めたかのように綺麗な長方形を維持しており、甲板で発生しているであろうその風圧がどれ程の物であるかを物語っていた。

『あ、きた！』

そう言って明石が指差した空の一角には、館山基地から飛び立った九六式艦戦9機と昨年12月に正式採用されたばかりの最新鋭機である九九式艦爆3機が飛んでいた。銀色の同体に真っ赤な尾翼という塗装の機体は、青空にキラキラとその身を輝かせている。その姿はまるで清流の中を泳ぐメダカのようなのだ。

彼等は揃って3機ずつの編隊を組んで二航戦の上を何度か通過して目標を確認すると、今度は編隊を解いて高度を下げ、単機となって飛龍艦、蒼龍艦の艦尾に向かって近づいていった。

忠と明石、そして明石艦乗組員達の大半もその光景に目を輝かせる。滅多に見れない艦載機の空母への着艦行動である。おまけに空母、艦載機とも最新鋭。彼等がわくわくするのも当たり前だった。

小刻みに点灯する発光信号で誘導を受けながら、飛龍艦と蒼龍艦に着艦していく友軍機。フラフラと翼を左右に緩く振りながら、まるで小鳥が木の枝先にとまるようにゆっくりと2艦の甲板に舞い降りていく。竣工して間もない飛龍艦の方に、多くが着艦していった。

『飛龍には、あれが初めての自分の艦載機だよ。喜んでるだろうなあ。』

そう呟いた明石は飛龍艦を優しげな笑みで眺めていた。彼女が口にした人物と忠は会った事が無いのだが、もちろん目の前のあの艦にも艦魂は居る筈である。彼は遠退いて行く二航戦からすぐ隣にいる明石に顔を向けて声を返した。

『飛龍や蒼龍はどういう人なんだい？ やっぱ階級は高いのかい？』
『うん、二人とも階級は、一応私と違って兵科の士官だよ。でも私とは同期だけどね。』

言い終えた明石は忠に顔を向けた。少しだけ歪めたその笑みに、なにか彼女が含んだ物があるらしい事を相方の彼はすぐに悟る。すると明石は片手で頭の後ろを掻きながら続けた。

『えへへ。ホントは愛宕少将あたごのトコで会った事しかないから、そんなにお話した事は無いんだ。まだ若いけど、会った感じは二人とも明るくて良い人だったよ。』

決して親しい間柄ではないそうだが、彼女が「良い人」と認識したのならばきっとその通りなのだろう。忠もまた明石に笑みを返して、その話をしばらく続けた。

ちなみに明石が言った愛宕少将とは、第二艦隊の旗艦である第四戦隊所属の重巡・愛宕艦の艦魂の事である。

愛宕とその姉に当たる高雄たかおは常設で歴史もある第二艦隊の旗艦を竣工時から確約されており、数ある巡洋艦達の中でも艦魂の階級相場に対して飛び抜けて高い階級を頂いている。故に二人の階級は、連合艦隊旗艦の長門とは1階級しか違っていない。もつとも肩書きだけではなく支那事変への実戦参加は勿論、時にはその旗艦設備を充実させた機能をもって、皇陛下をもご乗艦させるといふ輝かしい経歴も彼女達は持っていた。その立身出世物語は艦魂社会でも有名であり、神通じんつうや那珂なかを含めた下級将校に当たる巡洋艦艦魂の中では金剛型戦艦と供に憧れと尊敬の的であった。

『蒼龍と飛龍はやっぱり姉妹なのかい？』
『うん。でも、ぜんぜん似てないんだよ。』

『ん？ 似てないの？』

忠の問いに、明石は二人のその姿を思い出してクスクスと笑い出す。かすみ あられ霞と霰、神通と那珂のように性格は違っても体型や顔つきが良く似ているというのが、忠がこれまで見てきた艦魂たる者達の姉妹像であった。だが眼前で海面を駆けていく飛龍と蒼龍は、その限りではないのだという。

『ふふ、なんでだろうね。艦影が違うからかな？』

ひょいっと明石が指差す舷窓の向こう、忠もまじまじとそこにある2艦をよく眺めて見た。普段余り空母という物を見た事が無かった彼だったが、この時初めて両艦の違いが解った。蒼龍艦は船首の甲板が一段低く艦橋が右現前方にあるのに対し、飛龍艦は一段高い船首甲板と左舷中央に艦橋があるのである。先に建造された蒼龍に対しての不具合解消と、帝国海軍独自の新機軸を盛り込んで飛龍艦が建造された事による物であった。

なるほど、確かに形が違う。

忠は明石の言った事に納得して大きく頷く。その姉妹の姿は見れないまでも、彼は艦魂の複雑な存在の仕方の一端をよく理解した。

2月1日、館山湾での仮泊から一夜明けた。

忠は今日も元気に発令所に顔を出すと、あおき青木砲術長より今後の予定を聞かされた。

青木大尉によると第二艦隊はこの地より南の太平洋上で訓練する

と思いきや、ここで艦載機全ての補修と整備を行うだけらしい。3日には抜錨し、皇紀2600年の祝賀行事に参加する為に大阪へ向かうとの事であった。

第二艦隊の艦載機という物は空母搭載の機体だけではなく、各戦隊と水雷戦隊の巡洋艦が持っている水上機も含まれる。そして湾内にある館山海軍飛行場には水上機の受け入れ用にスロープ状になった部分が設けられており、波の静かな館山湾の恩恵もあって該当の水上機達は水上滑走のみで整備に向かっていた。特に第八戦隊の利根艦と筑摩艦は搭載機数が多く、海面に下ろした所属の水上機が
とね
ちくま
一列で飛行場に向かっていく姿は鴨の親子のようだ。

だが鴨は鴨でも、その水上機達は鴨の皮を被った鷹でもある。九五式水上偵察機という名を持ち、偵察機ながらも支那戦線では敵戦闘機と渡り合って撃墜した記録もあるという世界に誇る飛行性能を持っていた。

その勇壮ながらも今日の青空を流れる雲のようにのんびりとした光景を、忠は発令所で煙草を吹かしながら眺めている。艦隊訓練が無く、艦載機の無い明石艦にとっては久々の暇な一時である。泊地に着く度に明石艦には各艦から要修理品の持ち込みが行われるが、つい昨日まで横須賀海軍工廠に停泊していた為か、今日はどこからも修理依頼は入ってこなかった。

商売をした事が無い忠だが、開店休業状態という言葉を一人納得くむ咥えていた煙草を指で挟み、机の灰皿の上で一度揺らした。しかしポトリと落ちる灰の塊は、灰皿からそれて机の上に落ちてしまった。

やれやれ、見られたらまた明石に怒られる。

そう思いながら灰皿を机の端に寄せ、彼は机の上に落ちた灰の塊を手で払う。塵になって宙を落ちていく灰は、発令所に流れ込んでくる風に乗って入り口から抜けていった。そしてふと脳裏に浮かん

だその言葉に、忠は艦魂のお仕事とやらに向かった彼女がもうすぐ戻ってくるであろう事を予感した。

明石曰く、月初めの日は第二艦隊所属の各戦隊長が一同に会して、月毎の打ち合わせを行っているのだという。もちろん自分で艦を動かす事の出来ない彼女達ではあるが、艦隊各艦での異常の有無、訓練の成績、他の艦隊から伝えられる現状等、かなり広い範囲にまで議題が及ぶ本格的な大会議であるらしい。艦隊旗艦設備が整った第四戦隊の高雄艦で会議は行われ、豪華な内装が施された艦隊司令部用会議室を使用するとあって、当の出席者達は堅苦しい会議の参加であっても満更でも無いというのが実情だそうである。明石が朝からはしゃいで服や髪型をイジっていた事に、彼はそれをよく理解した。ちなみに旗艦である愛宕艦を使用しないのは、そこに本物の第二艦隊司令部があるからであるそうだ。

『ただいま。』

発令所入り口から呆けて飛行場を眺めていた忠は、反対側の入り口から響いてきた相方の言葉で振り返った。明石は存分に豪華な造りの会議室を堪能できたのか、満足そうに微笑んで発令所に入ってくる。忠の『おかえり。』の言葉を聞きながら、彼女は忠の机にある椅子に腰掛けた。だが木製の椅子のその座り心地があまりにも先程まで座っていた椅子と違うらしい。笑みを崩さないまでも、ちょっと口を尖らせて明石は声を上げ始めた。

『んも。もっと良い椅子を使おうよ、森さん。』

『ははは、高雄艦や愛宕艦じゃないんだ。これで充分ー。』

『椅子は大事だよ？座り方一つで体の姿勢も決まるし、背骨にクセ

がついて立ち方まで変わっちゃうんだから。』

『そんな、大袈裟ー。』

『森さーくん、なってからじゃ遅いんだよ？ それに、もしそうなたら誰が治すと思ってるの？』

アンタが治すと言っても言うのか？

いくら軍医の艦魂とは言え、普通の人間は身体に異常が出たら病院に行くに決まっとうが。

激しく間違っていて、それでいて彼の意見など眼中に無い明石の言葉にいつも通りにツツコミをいれる忠だが、決して彼は不機嫌になった訳ではない。早い物で知り合って半年近くにもなる彼には、そんな明石とのちよつとズレた問答は日常茶飯事である。当の明石にしても、目を閉じて溜め息をする彼をケラケラと笑うのが常だった。

暫くそんな調子での会話を続けて今日の会議の内容を明石から聞いていた忠だったが、ふと白い光りが発令所の入り口の向こうで光ったのを認めた。すっかり馴染んだその光り。ところがいま目の前にあるその光りは、なにやらいつもよりも発光の仕方が激しい。太陽のようにギラギラと光り、やがて淡い感じが無いその光りが治まると、そこには第二艦隊の犬と猿として名が知れた二人が姿を現した。

『『ああ！！』』

その姿を現すなり二人はお互いの顔を見て眉をしかめた。他人の家に来た感覚も目の前に居るその主への挨拶も忘れ、二人の罵りあいが始まる。

『猿！！ なにしにきた、てめえ！』
『アンタこそ、何しに來たのよ！ 雪風^{ゆきかぜ}！！』

血氣盛んを地で行く霞と雪風の声。

どうにもこの二人は反りが合わないらしい。一度、獲物を捕らえたら逃さないその集中力や発揮の仕方、訪れてきた際のタイミング等はこんなにも良く似ているのだが困ったものだ。

お互いに『ガルルル！』と鼻息を荒くする二人だが、額に手を当てていた忠が止めに行こうとして灰皿に煙草を押し付けている間に、明石が椅子から立ち上がって歩み寄って行った。ガシッと二人の首根っこを掴んできた彼女の顔に二人は気づくと、冷や汗を流し始めて大人しくなる。その明石の表情は忠からは見えないが、荒れていた頃の神通と真正面から喧嘩できた唯一の存在として艦魂の間で名を上げたという彼女の顔はどれ程のものであったろうか。怯える二人の顔にそれを読み取りながらも、忠の耳には明石のちょっと怖さが滲み出た声が響いてきた。

『こおら。誰のウチに来て騒いでるのかな？』
『す、すいませえん……。』

明石は二人の首根っこを掴んだまま振り返る。まるで親猫に噛まれて連れられる子猫のように二人は肩をすくませて、明石によって忠の前まで召しだされた。明石の表情は友人が訪ねてきてくれた事に喜んでいいのかニコニコと綺麗な笑みを浮かべているが、今の二人にはその笑みが事の他怖いようで定まらない視線を床のあちこちに配っていた。

明石もちょっとは歳をとったのか少しお姉さんの顔つきになってきた事を、その光景から忠はなんとなく感じ取る。

やがて首を離されて床に座り込んだ二人の額に、歯を見せて笑いながらデコピンを放つ明石。その姿は家庭的なお姉さんと言うより

は、一端の優しい上官の姿であった。

『明石さん、ウチの親方より怖いッスよ……。』

涙目の雪風の声に明石は大声で笑った。もちろん、雪風の言う親方とは神通の事である。

『あははは！ 私も、いつかは戦隊長になれるかな！』

工作艦のアンタには一生なれんわい。

明石の言葉に忠は顔をしかめたが、二人はその笑い声にやっと安心したように表情から力を抜いた。神通のようにげんこつが飛んでこないのは最初から二人も解っていたが、何と言ってもその神通を殴り倒した彼女である。怒った明石に怯えてしまうのも無理は無かったが、その人柄をつぶさに見てきた霞と雪風は笑顔を取り戻す。

『二人とも、今日はどうしたんだ？』

『ふふふ、怪我してるようには見えないね。』

忠の言葉に続いて明石も声を発した。彼女の言葉通り、軍医の明石を訪ねた割りにしては二人とも元気そうである。登場した瞬間に喧嘩できるのならば、どこか具合が悪いといった事も無いであろうという物だ。

机に寄りかかった明石が首を傾けて見つめる中、まず最初に声を上げたのは霞だった。彼女はズボンの両ポケットから何か銀色に光る薄い円筒状の物を取り出すと、顔を上げて小麦色の顔に白く輝く歯を見せて笑った。

『今日の夜は、戦隊長達も久々に遊びに行くって言ってたんです。』

んで、いつも森さんにお金払わすのは気が引けるんで、今日は食べ物ちょっただけ調達してきたんですよ。』

そう言って忠に差し出して来た物、それは缶詰だった。ラベルに書かれた見慣れた文字が、それが人間が食べている物と同じ代物である事を彼に伝える。『へえ〜。』と声を上げて何気なく霞の手を下から持ち、その手に乗せられた缶詰を見入る忠。霞は頬を赤くしながらも、嬉しそうに笑っていた。人間の食べ物をひょこっと持って現れた彼女であるが、そもこれはどこで手に入れたのかとふと疑問が湧いた忠。すぐさま彼はその問いを霞に投げた。

『これどうしたんだい？』

言い終えて視線を缶詰から霞の顔に向けると、霞は歪んだ笑みをして俯いた。顔をちよっと下に向けながらも、チラチラと床と忠の顔を交互に視線を配っている。

『あ、今日、私の艦で糧食積み込みやってたんです。それで、その・・・甲板に上げられた箱からヒョイっと・・・。』
『こら。』

忠は霞の額に人差し指を当てて軽く押した。仰け反る首を戻す霞はまさか怒られるとは思っていなかったらしい、軽く目を見開いて口をうっすらと開けていた。

『士官のオレが銀バイを見つけて、よくやったなんて言うんでも思ったのか？』

その言葉に霞は肩をすくませて俯いた。
もっとも忠は彼女をしょんぼりとさせようとは決して意図してい

る訳ではなく、せっかく持ってきた彼女の贈り物を無碍にするのは彼にしても本当は辛い事である。だが信賞必罰しんしょうひつばつをハッキリとさせるのが軍隊であり、そも彼女は乗組員達が食べるべき物を失敬してきただ。そのような行動に関してはダメな物はダメだとハッキリと言わなければならないし、士官である彼にとってはなおの事であった。

一方、明石はそのやりとりを壁に寄り掛かって笑みを崩さずに見守っていた。相方が本気で怒ってる訳ではないし、彼にしてもその言葉は不本意である事を理解していたからだ。霞から忠に視線を流すと、彼もまた明石に視線を流して目が合った。忠は小さく笑って頭を掻くと、霞の僅かに震える肩にそっと手を乗せる。その事から恐る恐る顔を上げて忠の表情を覗き込む霞に、忠は笑みを見せると優しい声色で話しかけた。

『これは拾ったんだろ？ 運が良かったな、霞。』

『……え？』

『一人で食べるのが勿体無いから、くれたんだよな。ありがとな、嬉しいよ。』

彼の言葉に疑問を持ちながらもそう言って頭を撫でてくれる彼の手の温もりが霞の心を癒し、同時にその言葉の意味をなんとなく彼女に伝えてくる。そういう事にしておこうよ、忠の心の声が霞には不思議と聞こえた。

やがて霞の表情に再び明るさが戻っていくのを確認した忠は大きく頷きながら彼女の手から缶詰を一つ取り、明石に向けて嬉しそうな声を発する。

『鯨の大和煮だぞ、明石。今日はみんなで酒でも飲むか。』

明石もまた大きく頷くと、ちよつとわざとらしく嬉しそうに口を

開く。

『やった！ 霞、今日は朝まで付き合ってね！』

『は、はい！』

二人が笑みをあわせる中、忠は手に持った缶詰を見ながら今日の宴を想像してちよつと苦笑いする。

甘い味付けのこの鯨の大和煮は二人も好んで良く食べ、その都度にお酒を飲んで歌を歌うのが相場であった。それに加えて今日は親友の神通が来るし、彼女が来るという事は従兵の霰と妹の那珂も来ると言う事である。当然、その場の雰囲気によって酒が進んだ明石が覚えたての歌をあれやこれやと歌う事は間違いない。そしてその際に伴奏に狩り出されるのは、ハモニカ奏者の彼の運命である。明石の言葉通り、朝まで続くであろうドンチャン騒ぎが彼の目にはありありと浮かんでくるのであった。

いつの間にか顔を下げて頭を掻いていた忠は、ふともう一人の来訪者の事を思い出して顔を上げる。

霞と明石が手を取り合ってきゃっきゃと騒ぐ隣で、その来訪者である雪風はなにか気まずそうな顔で口を尖らせてそっぽを向いている。少しだけ目の縁に涙を湛えた彼女の瞳が気に掛かり、忠は雪風に顔を近づけて声を掛けた。

『雪風。お前はどうしたんだ？』

『・・・・・・・・』

忠の声に雪風はチラッと一度だけ視線を彼の顔に向けたが、すぐさま顔の向いている方に戻した。泣きそうでありながらも物凄く不機嫌そうに口を尖らせている雪風。よく解らないその心の内が忠には気になった。そして初めて明石艦を訪れた彼女の用件も、彼の興

味を湧かせる。

どうしたと言うのであろうか？

そんな思いに忠は再び声を掛けた。

『どうした？　なんか悩み事でもあるのか？』

『……んっ……。』

返事と言うよりは嗚咽に近い彼女の声。霞と明石も視線を向ける中、雪風は後ろで手を組んだまま顔を壁に向けたままだった。

ずっと黙り込んだままの雪風であるが、ふと忠はそんな彼女が背後に回している両腕が何やら不自然に動いている事に気づく。恐らくそれを彼女に言っても黙ったままであろうと考えた忠は椅子から立ち上がると、彼女の正面に歩み寄って目線を合わせる様にしてしやがみこんだ。相変わらずそっぽを向いたままの雪風であったが、忠が両腕にそっと触れるとその表情を隠すように今度は俯いてしまう。しかし忠は雪風のその仕草に、その手に何かが握られている事、そしてそれが何であるかを薄々読み取った。

『出してみなよ。』

静かにその声を掛けて雪風の腕の前にゆっくり引き寄せると、雪風は抵抗すること無くお尻の辺りに置いていた自らの手を忠の前に差し出した。その手の中には霞と同じ銀色に輝く缶詰が握られている。霞が驚く横で、忠は雪風が目の縁に溜めたものがこぼれ落ちない様に静かに語りかけた。

『拾った、のかな？』

『……。』

大人しくなっている雪風だが、それを嘘と思わせるかの様に首を素早く横に振る。

『銀バイしてきたのか？』

『・・・・・・。』

少し沈黙が流れた後、雪風はゆっくりと頷いた。その刹那、波打った長い前髪で隠れた彼女の顔から、目の縁にあった物がほろりと落ちて床に碎けた。そうさせないように気を遣ったつもりであった忠だったが、残念ながらそれは失敗に終わった。無念さを滲ませて苦笑いしながらも、その涙の理由を彼は雪風に尋ねる。

『どうして、泣くんだい？』

『・・・・猿に、先越された・・・・。』

どうやら雪風は一番に贈り物を渡したかったらしい。相手が普段からいがみ合う霞を相手にして二番に甘んじてしまった事は雪風としては我慢ならず、ましてその品が同じだったとくれば彼女のその無念さはわからんでもない。些細な事だが、そこに賭ける強いプライドが雪風には有った。

なんと言う負けず嫌いだ。

そんな事を思いながらも雪風のその心遣いを無碍にしたくなかった忠は、彼女の手から缶詰を一つとって声を上げる。

『そっか、拾ったのか。二人とも、ツイてるな。今日は雪風も来いよ。狭い部屋だけど、みんなで宴会ー。』

『ち、ちきしょー・・・・。うあああ・・・・。』

忠の言葉が終わる前に、あれ程までに気の強かった雪風は声をあげて泣き出した。霞に向けたそれと全く同じである彼の言葉とその優しさが、彼女に「負け」の二文字をハッキリと伝えたからだった。忠は泣きじゃくる雪風の頭を撫で、残酷に彼女のプライドを砕いてしまった事を詫びる。

『ごめんな。なんにも考えずに、声掛けちゃって……。ごめんな……。』

『あああ……。ああ……。』

だがその言葉すらも、雪風にとっては悔しさを倍増させる言葉以外の何者でもなかった。もちろん彼が悪い訳ではないし、恨んでいる訳でもない。ただ、負けたことが悔しかった。それは運が悪かっただけの話かもしれない。

帝国最新鋭の陽炎型駆逐艦^{かげろう}、竣工時から九三式酸素魚雷を装備した史上初の艦型で、それまでの駆逐艦の問題点を全て克服した帝国海軍駆逐艦の決定版。その端くれの誇りと意地が強かった雪風にとって、如何なる理由であっても旧型の駆逐艦に負ける事は許せなかった。たとえそれがどんな勝負であったとしてもである。

その小さな身体に襲い来る負けの二文字に抗うには、ただ泣くしか雪風には選択肢がなかった。

女性を泣かせる事が男にとってどれ程に不名誉であるかは忠にも解っているのだが、その心情を慰める言葉をかけても今の雪風にはつらいだけであろう事も彼には解っていた。幼い外見と小さな身体の雪風に霞や霰のように妹のような感覚を覚えている忠は、そっと雪風の顔を自分の肩の辺りに埋めてやった。これが明石や神通のように大人びた外見を持つ艦魂であれば出来なかったであろう。

忠は雪風の心遣いとそこに賭けた想いに心から感謝し、静かに声

をかけた。

『小豆の缶詰か。人間と同じだな、小豆や鯨の大和煮は人気がある。』

『うあああ……。』

『今日は雪風も来るんだぞ。一緒にこの缶詰、食おうな。』

彼のその言葉は嬉しかったが、雪風の涙は止まらなかった。貸してくれた肩も、掛けてくれた言葉も、それらの基になっている彼の優しさも、全てが悔しかった。

後年、日本海軍一の幸運艦と呼ばれ、同時に死神に憑かれた艦とも呼ばれる事になる雪風の、淡い青春の一時だった。

指をくわえてその光景を眺める霞の横で、明石は相方の優しさと雪風の意地に微笑みながらもその相方が自分には見せた事の無い表情を雪風に見せている事を認め、唇の端を強く歯で噛んでいた。彼女には霞と雪風がどんな想いを胸に、ここを訪れたのかは解っていた。そして同時に、彼女達のその思いを疎ましく思う自分にも気づいた。焦るような感覚は湧いてこない。むしろ『ふくん、そうなんだ。』と平然と理解できてしまう自分が、なんだか明石には少し腹立たしかった。

その夜、明石の予告通りに大宴会が举行された。
ところがすっかり距離が縮まった雪風と忠がくつつく姿に、神通

が声を荒げる。『ウチの部下に手を出すとは、良い度胸だ!』と、理不尽にも竹刀で滅多打ちにされる忠は気の毒という他は無い。その事情を説明しようにも、雪風の意地を思い知った彼の口は重くなってしまう。結局は那珂や明石が宥め、座る位置を変更する事でようやく彼は解放された。ちなみにこの時、霞が一人冷ややかに笑っていた事を知る者はいない。

昭和15年2月3日、第二艦隊は館山湾を出航。太平洋を日本列島に沿って南下し、皇紀2600年の祝賀行事が開かれる大阪に向かった。

第二四話 「神戸と紀元節」

2月3日の出航時、館山^{たてやま}は大粒の雨と霰が降り注ぐ荒れに荒れた天気だった。台風の暴風雨にモロに入ったような豪風と横殴りとなった霰混じりの雨が、第二艦隊の各艦を機銃弾のように襲う。どす黒い雲が立ち込めて薄っすらとしか見えない、舷窓の向こうの水平線。まるで飛驒^{ひだ}山脈のように峰が連なっているかのような、海面から生える波の山と谷。

だが第二艦隊は2月11日の皇紀2600年紀元節の祝賀行事を迎える為に、この荒波狂う太平洋の海原に繰り出していった。太平洋のうねりは高く、猛烈な風に巻き上がる波浪が第二艦隊各艦の上甲板を手荒く洗う。後にこの地獄を体験した者が語るには、「これ程の時化にあった事、海軍生活において無し。」と記す程の酷い天候であった。

もちろんこの天候によって新兵が多い艦では重度の船酔いに襲われる者が続出した。乗組員の半分以上は軍属の民間人である明石艦もその例に漏れず、艦内各部での厠^{かわや}では胃の中の物を吐き出す者が相次ぎ、ぐったりとした青い顔色の乗組員達で厠前の廊下は占領される。せっかく作ってくれた夕飯も今日は料理が残されたままの皿が烹炊所には多く返却されてしまい、川島主計長^{かわしま}も残念そうな顔をしていた。

そして忠^{ただし}の部屋にもそんな乗組員と同じ苦しみを味わう、でもそれがとっても不自然な困った奴が一人いた。

『大丈夫か、明石^{あかし}?』

『ううう……』

四つん這いで忠に背中を擦られ明石は彼が用意したバケツに向かつて顔を垂れ、電動機のような唸り声をその口から漏らす。それを介抱^{かいほう}している忠なのだが、いくら相方でも女性の身体をベタベタと触る事には慣れていない。最初の内はちょっと気が引けていた彼女だったが、バケツの中に溜まった彼女の胃袋の中身がそんな事を忘れさせた。

青ざめた顔に虚ろな目で苦しみの唸り声を発する明石艦の艦魂、明石。

艦魂とは艦艇に宿る精霊のような物らしいが、その艦魂が船酔いに悩まされている。なんとも馬鹿げた話である。18か19歳くらいの整った綺麗な顔立ちと細くてスラッとした身体つきを持ち、見てくれは結構良い明石ではあるが、そんな彼女に対して今の彼からは女性としても艦魂としても尊敬の念が消え失せていた。

アンタ、本当に艦魂なのか？

そんな言葉さえ脳裏を過ぎて行き、やがて呆れた彼の溜め息が発せられる。すると明石はその溜め息に少しムツとして顔を上げた。青ざめて力が籠^{こも}らないながらも眉を僅かに吊り上げて口を開きかけた明石だったが、すぐに腹の奥から込み上げてくる吐き気に襲われて顔をバケツに戻した。

『ううええ……!』

一際大きくなった彼女の唸り声と共に、バケツの底から耳障りの悪い音が響いてくる。

ダメだ、コイツ・・・。

彼女と知り合って、何度そう思った事であろう。忠は心の底から明石に呆れながらも、苦しむ彼女の背中を擦る手に少し力を入れてやった。温もりが消えかけているその背中を暖めるように、彼はその日は一晩中、明石の背中を擦ってやるのだった。

昭和15年2月8日、第二艦隊は大阪湾に到着。

今やロンドン、ニューヨーク、ハンブルクと並ぶ世界4大海運都市との誉れも高い、神戸市沖に錨を下ろす事になった。この神戸市は昨年には東京、大阪、名古屋に続き、人口が100万人を突破した国内屈指の大都市である。呉に近かった事からそこに在泊していた艦艇も何隻か来ているようで、一際大きな長門艦と陸奥艦、伊勢艦で構成される第一戦隊が神戸港に投錨していた。あれ程の大型艦が棧橋に停泊している、それはこの地の水深に相当の余裕があることを意味する。

第二艦隊は官立神戸高等商船学校沖に投錨した。新鋭艦の多い第二艦隊は一般人の目に付かぬように、との配慮だったらしい。

神戸高等商船学校は、大正20年に東京高等商船学校に続いて、帝国で2番目に官立高等商船学校として昇格した由緒ある商船学校である。その前身は川崎造船所の創立者とそのご令息が設立した私立川崎商船学校であり、その生徒は全て海軍予備生徒とし有事の際の予備士官となる責務が課せられていた。

それは川崎造船所その物が軍艦建造を請け負って来た事ともあながち無関係ではなく、同造船所には日本初の民間造船所による戦艦建造計画として榛名艦の建造を請け負った事から始まる輝かしい歴

史がある。そして榛名艦建造時、三菱長崎造船所で同時に建造された霧島艦きりしまとの間で勃発した激しい建造競争は海軍でも有名であり、その際に機関試運転の不備によって川崎造船所側は建造計画が遅延。それが響いて三菱長崎造船所の霧島艦が先に進水してしまい、責任をとって自刃したという篠田造機しのだ工作部長の悲劇は神戸川崎造船所の名とその想いを天下に知らしめた。

そんな事から海軍からの覚えがめでたい川崎造船所と関連する神戸高等商船学校付近は海軍関係の仕事を引き受ける人々が多く住んでおり、防諜の面でも呉海軍工廠と同じ環境にあるとあって新鋭艦の多い第二艦隊の泊地としては最高の条件だったのだ。

ちなみに忠や明石に近しいところでは、この神戸川崎造船所は神通つうの生まれ故郷である。

泊地に到着して明石艦が投錨するとすぐに、艦隊各艦から要修理品を載せた内火艇やカッターが艦の周りに蟻のように群がってきた。先日の大時化でどの艦も軽微な損傷を被ったようで、修理品の大半は各艦の艦橋外側に設置されている双眼鏡、機銃や高角砲の照準機器関連であった。中には旗竿がひん曲がってしまった艦もあった。

上陸を期待していた明石艦乗組員達だったが、海軍工廠ではない当地での修理補修は明石艦が受け持つしかない。その為に今日は朝から乗組員総出での工作部支援を行う事となった。忠が所属する砲術科では、物品搬送の作業全般と機銃の各備品を対象とした軽修理、それらの清掃が当てられた。

穏やかな陽の光りが降り注ぎ、呉と似た暖かい風が流れていくと

いう至って過ぎやすい今日の艦首甲板。艦首旗を掲げた旗竿から第一主砲までの間に天幕を拡張し、直射日光を避けながらの地味な作業。だが普段のこうした努力が、帝国海軍連合艦隊の戦力維持に繋がっているのだ。その想いを胸に秘めた砲術科の面子は、ウエスや洗帚頭せんそうとうを片手に分解した機銃の各備品を念入りに整備する。

工作部で保管してある交換用のレンズを高角砲の照準用望遠鏡に取り付ける忠は、やっと一つ目の望遠鏡の修理が終わった所だった。海に落とす訳には行かない高価なレンズを取り扱う為、彼はいつもの持ち場である発令所の中で作業をしていた。ピンセットで持ったレンズが、彼の手につられてカタカタと震える。忠は極めて真剣な表情を浮かべながら片目を閉じてレンズを入れる溝を睨み、そーっとレンズを近づけてゆく。レンズの先端が溝に嵌った事でちよつと気を緩める忠だったが、ホツと一息つくと同時にレンズはポロッと外れて胡坐あぐらをかけた彼の足の上に落ちた。

『はああああゝ……。』

落胆の溜め息が意識しなくても彼の口から発せられる。自分があまり手先が器用ではない事を、彼は俯うつむいて悔やんだ。忠のそれは望遠鏡を相手に格闘し始めて、既に10回以上も繰り返されている。膝ひざの辺りで太陽の光を受けて輝くレンズは、まるでそんな彼をケラケラとあざ笑っているようだった。

『ちつくしよ……。』

頭を荒く二、三度搔いて忠はそう呟くと、再びピンセットでレンズを挟んで望遠鏡の溝に向かって慎重に、だがまたもカタカタと手を震わせながら近づけてゆく。

その様子を振り返って微笑む明石は、すぐに顔を正面の患者に向けた。彼女が腰掛ける椅子とは向かい合う位置に置かれた椅子、そこには艦魂による行列の先頭の人が腰掛ける。

朝から始まった第二艦隊所属艦魂の健康診断、それは軍医少尉の明石のお仕事である。

主力の各戦隊や二航戦の空母の艦魂達は階級が高く、身体そのものが丈夫であった事もあって既にその診断は終わっていた。むしろ第四艦隊事件や友鶴^{ともづる}事件等での影響が大きい、駆逐艦の艦魂達が明石には気になっていた。館山沖での猛烈な時化を潜り抜けてきたからである。あれだけの大時化の海を衝突事故を起すことなく突破して来れた第二艦隊所属艦の艦魂達に彼女は感心していたが、神戸に到着してからのいきなりの要修理部品の山に驚いた明石はすぐさま全員の診断を第二艦隊旗艦の愛宕^{あたご}に要請した。艦隊の中で唯一人、赤線の入った階級章をつけている彼女の意見具申を受け、愛宕はそれを了承。その結果が今の光景である。

机に体を捻ってサラサラと診断表に鉛筆を走らせる明石。記入の終わった診断表を脇に寄せ、新しい診断表を用意しながら彼女は声を上げた。

『次の人々、お名前はあ？』

『二水戦、神通だ。』

『およ？　なんだ、神通かあ。』

『ふん。』

明石はそう言って机から椅子に座る神通に笑顔を向けた。神通も僅^{わず}かに微笑むと、いつもの短い口癖を静かに放つ。ふてぶてしく脚

を組む彼女からは、どこか具合が悪いという雰囲気みじんが微塵も感じられない。

やがて明石は微笑んだまま神通から再び机に体を捻り、診断表の上の項目から順に鉛筆を走らせる。

『上着のお腹の辺り、開けておいてね。』

そう言いながら軽やかに鉛筆を走らせる明石。神通は明石の声に従い、濃紺の第一種軍装のボタンを腹の辺りから外した。問診を始めようとするも、勝手知ったる神通のそれは聞かなくても明石には解る。明石は呟つぶやくように声を発し、診断表の項目に記入し始めた。

『お酒は、・・・飲む。煙草は、・・・吸わない、と。今まで、大きな怪我は――』

声を詰まらせた明石の表情が固まり、手に持っていた鉛筆の動きが止まった。彼女の言葉の最後の方で神通も寂しそうな瞳をして眉をひそめる。その内に自然と二人の曇った表情を湛えた顔は俯いてしまう。

美保みほがせきケ 関事件。

二人の脳裏に浮かんだ言葉。

神通は目を閉じながらも瞼まぶたの裏に昨日のように鮮明に浮かび上がってくる情景と、それに纏まとわる無念さに耐えていた。同時に明石も視線を動かさずともそんな神通の表情に気づき、すぐにその心を撫でてやるように明るいながらも静かな声をかける。

『ごめん、した事あったね・・・。』

『ふん・・・。』

短くて無愛想な神通の返事だったが、その声色には彼女なりの感謝の念が込められていた。二人にしか解らない会話がそこにはしっかりと成り立っている。そして二人の表情からは曇りが消えていく。ちよつと気まずい空気をその場に発生させてしまった事に明石は僅かに笑みを歪めると、すぐに鉛筆を再び動かし始めた。

『入渠修理歴、有り、と……。』

言い終えて鉛筆を机に置いた明石は、向かいの神通に身体を向け直す。彼女と一瞬だけ笑みを合わせると、明石は神通の服の開いた所から手を入れて触診を始めた。軍医としてそこそこ経験を積んできた明石は慎重に神通の身体のあちこちを触れて異常の有無を確かめながらも、同時に声を掛けて問診の続きを行える程になっていた。神通の後ろで列を作る彼女の部下達はその達者な診断に感心していた。

『最近の身体の調子はどう？』

『いつも通りだ。特に変わった所はない。』

『睡眠はしっかり取れてる？忙しいからって、寝る時間、削ったりしてない？』

『いや、最近はそうでもない。』

淡々と進められる明石の触診と、神通との会話。

その時、明石の後ろで苦悶する青年がまたもやピンセットで挟んだ物を落とし、『あああ……！』と悲痛な声を上げる。その光景に神通と明石はクスクスと笑い、二人の間に張り詰めていた軍医と患者としての空気は取り払われた。笑いを堪えながらも触診と問診を続ける明石に、その空気を堪能するかのようにに神通は声を返す。

『なにか悩み事とかはない？ 気苦労は身体に毒だよ。』

『今、帝国海軍一のヤブ医者に診断されている。これじゃ診断結果が気になって、夜も眠れん。』

『ふふふ。なにおく。』

神通の憎まれ口を受けて、僅かに引きつった笑みをして明石は触診を続けた。

彼女が冗談を言う時は、余程機嫌がいい時である。それを知っている明石は嬉しそうに笑っていたが、ちよどその時に触れた神通の脇腹でその手を止めた。明石は何度か手に伝わる感触を確かめて、顔を床に向けて俯く。

これには神通もさすがに驚いて表情を変え、前髪で隠れた明石の顔を覗き込んで声を掛ける。

『ど、どうした、明石・・・？』

珍しくうろたえた声を上げる神通に、彼女の後ろで列を作って並んでいる部下達も視線を集める。そして神通の声を受けてゆっくりと顔を上げた明石はニヤリと歯を見せて笑うと、先程の復讐とばかりに彼女に言い放った。

『にしし！ ちょっと太ったでしょ！？』

『『『えええええ！』『』『』』

神通の背後にいた少女達が驚きの余りに声を上げる。細かい作業に四苦八苦しながらも、それとなくそのやりとりを耳に入れていた忠もつられて顔を上げた。

体重は自己管理の成績表とも言われる。いつも怖くて厳しくて鬼の二水戦戦隊長の異名をとる神通がまさかの自己管理失敗など考えられない事であり、その場にいる神通と明石以外の全員が驚愕した

のだ。

明石は『ざまあ見ろ！』とでも言いた気にケラケラと笑っていたが、その姿を見て忠は額に手を当ててうな垂れた。いくら仲が良いと言っても、怒らせる相手を完全に間違えているからだ。そして突如としてその場に立ち込める強烈な殺気を察知し、相方の無茶振りに彼は呆れ果てた。

馬鹿だろ、アンタ・・・。

彼がそう思った瞬間、予想された神通の怒号が響き渡った。

『ここ、こ、この馬鹿がああああ！！！！』

彼女の咆哮と同時に、ガツン！！と鈍い音が発せられる。

『ぐげえっ！！！！』

聞き慣れた声の悲鳴も彼の予想通りであった。忠は恐る恐る片目を開けて、悲鳴がした方に視線をゆっくり流す。そこには椅子から転げ落ちて頭を押さえながら悶絶する明石と、恥ずかしさの余り赤面しながらも眉間にしわを寄せて床に転がる馬鹿を見下ろす神通が立っていた。長い神通の前髪の付け根の辺り、そこには小刻みに脈動する血管が浮き出ている。完全にご立腹のようだ。『ふん！』と吐き捨てるように言々と、神通はクルッと踵を返して発令所の出口へと歩いてゆく。肩を張って立ち去ろうとするその後姿が、彼女の心境をよく物語っていた。

そして神通が振り返った先では、驚きの表情でその退治劇を見ていた少女達が、神通が振り返ると同時に目を合わせないように顔を各々の思った方に向けた。帝国海軍でも有名な癩癩かんしゃく持ちの上司から逃れようと、物凄く白々しい声での会話が響き始める。

『あ、あれ！？ 今日って何曜日だっけ・・・！？』

『ば、馬鹿だなあ！ 昨日、カレー食べたでしょ・・・！』

『み、みてよ！ あ、あんなところにカモメ・・・！』

涙ぐましい少女達の努力である。神通が横を通り過ぎる度に、そこにいた少女はビクンと身体を震わせていた。伊達に彼女達も二水戦で頑張ってきた訳ではない、この手の危機回避能力は上司のおかげで天下一品である。唯一人を除いて・・・。

『・・・・・・・・・・』

口に手を当ててキョロキョロと視線を振る霰^{あられ}。

彼女もまたどうにかして切り抜けようと考えを巡らせていたのだが、生来トロい性格の彼女には結局策が思いつかない。とりあえず神通とは目を合わせないように視線をちょっと低くしていたが、明石が放った言葉が彼女には気になり始めて仕方が無い。無意識に霰は横を通り過ぎようとする神通のお腹をまじまじと眺めており、当の本人がそれに気づいて立ち止まってもその視線を逸らさなかった。周りの仲間達はそれに気づいてざわめくが、自らがとぼちりを受ける事を考えると差し伸べる手も引っ込んでしまう。

『・・・・・・・・あ。』

やっとの事で我に戻った霰だったが視線を上げた先に有った上司の顔に、霰の首筋には冷や汗がダラダラと浮かぶ。謝ろうにも余りの恐怖に霰の身体は動かない。もっとも動いたところで、それは無駄な努力である。言わずもがな、もう遅かった。

『あう、あ……。す……。す、すみまー。』
『おらああああ！！！』

霰の頭にげんこつが振り落とされた。咄嗟に目を瞑る仲間の少女達と忠の耳には、鉄の塊を思いっきり蹴り飛ばしたような重い衝撃音と可哀想な事この上ない少女の悲鳴が届いた。

『はうつ……。！！！！』

ベッコリとへこんだ水兵帽と共に、霰はその場に崩れ落ちた。
ああなってしまった神通は那珂なかですらとめることは出来ない。むしろ霰を成敗した後、さっさと立ち去ってくれた今日は運が良い。神通が白い光りを放って消えた事を確認し、残された少女達は大きなタンコブを作って目を回す明石と霰を介抱しにかかる。余程の力が込められたげんこつだったらしい、二人が意識を取り戻すのはその後しばらく経ってからだった。

騒がしい一日で、忠の仕事はちつとも捗はかどらなかった。

2月11日、この日は皇紀2600年の紀元節である。前日に第二艦隊乗組員達は一斉上陸し、軍用列車を使って奈良県の橿原かしはら神宮に移動。神武天皇じんむが即位したまさにその地で盛大な祝奉式典が行われ、これに参加する事となったのだ。この日は橿原神宮だけではなく全国津々浦々の神社という神社では同じように式典が執り行われ、その数は11万箇所以上にも及ぶという。

明石艦では宮里艦長が上陸隊を直卒、幹部連中も科長格は全て出払った。しかしだからと言って艦を無人にするという事は無い。居

残り組みは必ずいるもので、その殆どは経験が浅い新顔の務めとされる。その中には当直将校を命じられた忠の姿も有った。

士官食堂の前の通路。

艦内で最も広い通路となっているそこには、艦内神社にお神酒や甘いお菓子を載せた碗を備える忠とそれを手伝う明石の姿が有った。今日は艦内には50名程の乗組員達がいるだけで、普段は乗組員達の往来が最も激しいこの場所も静かなものだった。響くのは二人の会話と、お供え物を置く時に発せられる物音だけである。

食堂から持ち出した椅子を踏み台代わりにして、忠は通路隔壁の一番上に設けられた神棚に手を伸ばしている。決して大きくない明石艦の艦内神社であるが、ささやかに紀元節を祝おうとする二人の表情は明るい。踏み台の下にいた明石は小さなお皿に羊羹を2切れ乗せて、やがてその皿を忠に差し出した。

『これで最後。どう、乗りそう？』

『うん、大丈夫そうだ。よっ、と。』

忠は皿を受け取ると神棚の最前列にお皿を置いた。周りにはお神酒の入った杯、甘納豆や甘栗等が入った碗、工作部に頼まれて置いてやった小さなハンマー等がひしめき合っている。随分とごちゃごちゃとした神棚になってしまったが明石はつま先立ちで神棚を覗き込み、その豪華な様に喜んでいた。

椅子から降りた忠は廊下の端に椅子をどかすと、捲くっていた袖を戻して姿勢を正す。二度腰を折って深々と頭を下げ、拍手を二回打つ。乾いた音が艦内通路に響き、賑やかな神棚を少しだけ荘厳に見せた。参拝の仕方がわからない明石は彼の動作を見よう見まねで真似する。顔の前で手を合わせる忠に続き、彼女も手を合わせて目を閉じる。

今日より2600年の昔、我らが天皇家の祖が誕生した。その遥

かな時の流れと今も続くその御稜威に、二人は心を正した。

これからもどうか我らに、幸と栄光をお与えください。

そんな言葉を脳裏に浮かべた二人は、手を下ろすとお互いに笑みを合わせる。

今日は艦内に殆ど人はいない。それは明石と部屋以外で行動する上で、忠が彼女に対して気づかれないようにと努力する必要があると言う事だ。また、艦内での最高責任者が今日は忠である。当然の様に日課は無く、好き勝手に放題の一日なのだ。そんな今日という日が二人の話し声を弾ませるのは、当然と言えば当然であった。

『さて、もどるか。』

『今日は上陸しないの？ 神戸って美味しい物、いっぱいありそうだよ？』

『できるわけないだろ。今日は一日、艦の中にいなきゃダメなの。』

『うえー、つまんね！』

『しょうがないだろう。まったく……。』

ブーブーと文句を言う明石いつもの通り彼女の無理難題の相手をする忠だったが、二人の表情は明るかった。

軽い足取りと弾むおしゃべりで発令所に戻る二人だったが、着いたそこには意外な人物が待っていた。

『おいっすー。』

忠の机の上に脚を組んで、ふんぞり返ったその人物。軍帽の無い頭から伸びた腰まである長い黒髪と、ボタンを全て外して羽織るように袖を通した第一種軍装。そして服の開いた隙間から覗く、その人物の分身についたバルジのように張り出した胸。片手を上げてひ

らひらと手を振る彼女の顔に、明石はびっくりして声をあげた。

『長門さん！』

『二人とも、久しぶりだねえ。元気だった？』

ニコニコと美しい笑顔で迎えてくれた長門は、駆け寄った明石を抱きしめた。帝国海軍艦魂の総大将でありながらも、これ程親近感が持てる程に朗らかな人柄がこの長門の特徴である。

忠にとっても明石にとっても暫く振りの再会だが、明石と同じマイペースな性格の彼女はもうひとつの特徴の方もちっとも変わっていない。

『どうしたんですか、長門さん？ いきなり現れたから、ビックリしましたよ。』

『やゝ、紀元節の式典がメンドくさくってさ。ちょうど愛宕も来るから一戦隊の艦で合同でやろうって話になったんだけど、メンドいから陸奥に任せて逃げてきた！ あはははは！』

『おいおい、良いのかい？』

『あの子達、みんなカタいんだもん。つまんないのよお。』

なんたるアバウト。

長い髪で隠れているが、この長門の襟には中將の襟章が輝いている。そしてその立場は連合艦隊旗艦でもある程の大人物なのであるが、公務だろうがなんだろうがすぐに投げ出して逃げ回るのがこの長門という艦魂だった。

彼女もまた明石と同じように長身だが、細身の明石や神通とは違って肩幅が広い。顔が小さい事もあるのだろうが、決して太ってはいない体型ながらも彼女にはどっしりとした存在感が備わっている。見た目は神通や那珂と同じくらい大人の女性であるが中身は不自

然なくらい子供っぽさがある長門は、明石を胸の中で抱きながら忠に手を差し出してきた。5本の指を反るように広げて長門は口を開く。

『森^{もり}クン。アタシ、腹減った！　なんかない？』

声は違うが、その態度と言葉遣いはまるで明石とそっくりである。長門の問いを受けた忠は何も無い両手を肩の高さで広げてみせ、苦笑いして声を返した。

『なんもないよ。オレは今日はお留守番なんだ。』

『うは！　つゝまんね！』

『あははは！　つゝまんね！』

長門はそう言うのと無邪気な笑みを浮かべる。そのハッキリとした物言いを耳に入れ、明石も彼女の真似をするかのように同じ言葉を発した。

やれやれ、手のかかる人がまた一人増えたぞ。

笑みを歪めて頭を掻く忠だったが、久々の再会とどこか相方と似た雰囲気を持つ長門の声は彼の気持ちを不機嫌にはしなかった。

サンサンと入り口から差し込む陽の光りが当たる床に腰を下ろし、忠は煙草に火をつけながら長門と明石の会話に耳を澄ます。お互いの近況から始まった会話だったが自分に乗組んでいる連合艦隊司令部の情報等を長門は教えてくれ、どれこれも初耳な事ばかりであった。明石と忠は目を輝かせてその話に耳を傾けた。意外にも博識な長門は冬戦争や昨年実施された海南島占領作戦、支那戦線の状況から果ては新型の艦船の話題等、その話の内容の幅はとてつもなく広い。一度、話の途中で『その知識の情報源はなんなのか？』と忠は質

問したが、帰ってきたのは彼女らしい返答。

『山本長官がお風呂入ってる隙に、長官室に忍び込んで書類を漁ったのよ！ あはははは！』

女性としても人物としても艦魂としても、帝国海軍随一の変な人であった。

この日は、昼間は逃亡中の長門によるおもしろ話で笑い、夜には長門を加えた明石と愉快な仲間達の大宴会が催された。留守番を任されて盛大な式典に参加できなかった忠だったが、彼の皇紀2600年度紀元節は楽しいの一言に尽きる一日だった。

その夜は人間と、戦艦、巡洋艦、駆逐艦、特務艦の艦魂が入り乱れて騒ぐという、希に見る変化に富んだ夜だった。

第二五話 「長門の心遣い」

昭和15年2月13日、第二艦隊は大阪湾を抜錨。次なる泊地、鹿児島県の有明湾ありあけに向かって旅立つ事となった。

紀元節で賑やかだった神戸とも、いよいよお別れである。12日、13日は各地での式典が終わったからなのか、第二艦隊が在泊する泊地を望める岸壁や浜には多くの見物人の姿が有った。大都会の神戸らしく、その人の数も1000人は下らない。第二艦隊乗組員達と共に、各艦の艦魂達も舳先に立って帽を振る。その姿を見れる者はいなくとも、見物人が振る日の丸が彼女達にとってはそれに応えてくれていると思わせるのには充分だった。

明石艦あかしは第二艦隊とは別行動となり、第一戦隊に随伴くして呉へ帰る事となった。呉にて資材補給を行い、すぐ近くの広海軍工廠ひろで各種工作機器の積み込みを行うとの事であった。

帝国海軍初の専門工作艦である明石艦は海軍上層部の期待も大きい。今回の呉寄航は工作資材の補修だけでは無く、ここまで第二艦隊と共に行ってきた冬季艦隊訓練の過程で出た運用上の懸案や問題点を一度抽出する意味合いもあるのだ。このようにじっくりと時間をかけて運用の形態を見極めようとする海軍上層部、以外にも彼等は修理補修という物に関しては並み以上の理解を示しているのだった。

明石には最も親しい友人達とも束の間のお別れとなる。軽く手を上げて『また後で。』とそっけなく別れた明石だったが、自分を残

して続々と出航していく仲間達の後姿を眺めるその瞳は、やはりどこか寂しそうだった。

それでも夜には相方が調達したおいしい食べ物と、またも公務を放り出して遊びに来た長門ながとに彼女の寂しさも吹き飛んだ。

『うまあい。タコって、初めて食べたあ。』

『さっすが、森もりクン。良く手に入れた！ 偉い！』

明石と長門は厚紙で出来た箱から、狐色をした丸い物を爪楊枝つまようじで刺して口に運んでいた。

湯気の上がるそれにはタコが入っており、紀元節の2月11日に留守番をしていた忠ただしに青木砲術長あおきがご褒美として買ってきてくれた物だった。常に酒保で物品を買い占める彼の胃袋を念頭に入れ、青木砲術長はご丁寧にも3箱も買ってきてくれたのである。もちろん、その真相は彼の相方が黒幕である。

定位置である部屋の隅の椅子に腰掛け、そのお土産を食べる忠の表情も明るい。それは彼もこの時初めて食べた物で、ホクホクと暖かさを保つそれは冷えた身体をウチから温めてくれる。濃い口のソースのせいで大味ではあるが、元来塩辛い物が大好きな根っからの青森県人である彼にとってはとってもおいしい食べ物であった。その美味に彼の口元が緩み、やがて発せられる声も軽やかに弾んだ。

『たこ焼きって言うんだってさ。つい最近出来た料理らしいぞ。』
『タコうめえ〜！』

ベッドに腰掛ける明石もその味は大変気に入ったらしく、モグモグと頬を動かしている。

その隣には唇を舌でペロリと拭く長門が、同じく膝の上に置いた

箱からたこ焼きを口に運んでいた。時々明石と笑みを合わせては舌鼓を打つ彼女だがその格好はやはり部屋の中でも目立つという物で、忠はふと部屋を訪ねてきた際の長門の言動を思い出す。

『メンドくせ!』と部屋に入るなり叫んだ彼女は、羽織るように袖だけ通していた第一種軍装の上着をヒョイッとベッドの上に投げ捨て、同時にすぐさま中に着込んだ白い長袖のシャツの裾をズボンから引っこ抜き、胸元や袖のボタンを全て外してしまったのだ。今に至っていつもの気の良いお姉さんになりきった長門のその姿は、とても海軍軍人だと思えない。

忠が色々と思いを巡らす中、手に付いたソースをベロベロお嘗め回しながら長門は口を開く。

『アタシも、初めて食べた。長生きってする物ね。』
『あははは!』

その年寄り臭い発言に明石は笑っている。忠も部屋の空氣に合わせて笑みを見せてやるが、普段余り話した事が無い長門の生い立ちを考えるとその発言もそこそこ納得できた。

長門型は帝国海軍最新鋭の戦艦であるが、その建造時期は大正年間であり艦齢も既に竣工から19年近い艦なのである。もっとも他の戦艦と同様に数次に渡る近代化改装を受けており、その性能は欧米の同クラスの戦艦と比べても決して遜色は無い。長門型の性能は410ミリの主砲を主とする攻撃力、それに耐えられるだけの防御力、そして扶桑型、伊勢型でも発揮し得なかった速力を持ち、同時にそれらがバランスよく備わっている事が大きな特徴である。元々高速戦艦として建造された長門艦はその公試運転で計画速力を上回る速力を記録しており、この世に誕生した当時は戦艦としては世界最速でもあった。

長門艦とは文字通り、日本の造船技術の優秀さを世界に示した艦

なのである。

それらを鑑^{かんが}みると、世界最強を自負する帝国海軍の旗艦を拝命するのは彼女の当然の宿命だった。だが忠は黙って頷いてその事に納得しながらも、その分身である長門がこれ程までに変わった性格の持ち主という事には首を捻^{ひね}ってしまう。

一方、当の長門は忠のその行動に気づき、彼の考えている事がなんとなく解った。今日も忠が用意したラムネを一口飲むと、彼女は少しだけ背を丸めて忠に話しかける。

『森クーン。なによ、その顔は。』

瓶^{びん}のくびれた所を指で挟み、振り子のようにフラフラと左右に振りながら長門は言った。ちよつと眉を曲げているその表情には怒っているような感じはない。忠は少し苦笑いを浮かべて口を開こうとしたが、かがんだ事によって開いた彼女のシャツの襟元^{えりもと}に視線が行ってしまい慌てて机の方に身体を向ける。脳裏に残る長門の胸のふくよかさが良く解る光景を振り切るように、彼はちよつと上ずった声でそれに答えた。

『いや、ほら。今日も逃げてきたんでしょ・・・？ 連合艦隊旗艦
って、お仕事とか大変じゃないのかい？』

『そうだけど、アタシ、お仕事って嫌いなよねえ。遊んで暮らせる生活ってないかなあ？ あはは！』

ねえよ。

高らかに笑い声を上げる長門に隣の明石も大笑いしているが、忠は一言そう心の中で呟くと額に手を当てた。まるで社会不適合者みたいな発言をする彼女が、子供の頃より懂れてきた長門艦の艦魂と

は彼には思えなかった。それでも別に忠は長門が嫌いになった訳では決して無い。漂々^{ひょうひょう}として常に驚く発言をする彼女に、彼はとても人間臭さを覚えたからだった。気の良いお姉さん、人間の世界でもいるそんな彼女の女性像が忠にはなんとも親しみやすいのだった。

『やる時、やれば良いのよ。いつつも気張ってたら、いざって時に力だせないじゃん?』

最後のたこ焼きを頬張りながら、長門は紙の箱を丁寧に畳んでそう言った。もっともらしい彼女の言葉だが、忠には彼女の言う「やる時」の顔が想像できない。その疑問をいつものように笑みを作り笑って誤魔化す彼だったが、長門の隣にいた明石が彼女の腕に触れてその事を尋ねた。だがそれは忠のように長門の言葉に疑問を抱いたのではなく、単純に豊富な経験を持つ彼女の経歴に興味を抱いているだけだ。

『ねえ、長門さん。』

『うん?』

『長門さんが本気になるくらいの時って、今まで有ったんですか?』

『もちろん有ったよ。ううーん、そうねえ・・・。』

長門は足元に有ったごみ箱にたこ焼きの箱を投げ入れると、脚を組んで僅かに背を反らした。天井に視線を向けて唸る長門、どうやら何度か身に覚えがあるらしい。ふいに笑みを作って天井から明石に顔を戻した長門は、すこし炭酸が抜けかけたラムネを一口飲んで言った。

『覚えてるのは、関東大震災の頃かな。あの時は焦ったなあ。』

その記憶が懐かしいのか、長門はそう言うと言を閉じて微笑んだ。

そして彼女の放った言葉を聞いた忠は、幼少時の当時の記憶と共に兵学校時代に教官から聞いた長門艦における一つの逸話を思い出す。『おお、もしかして……。』と呟く忠だが、唯一その頃の記憶を持ち合わせていない明石は目を大きく輝かせて忠に顔を向けた。

『なにになに？』

『あら。森クン、もしかして知ってるのん？』

長門はどこか嬉しそうにそう言うと、忠もまた笑みを浮かべてそれに答えた。帝国海軍でも有名な逸話である事に、その一員である事から忠の声が無意識に弾む。

『ああ、大連沖から帰ってきた時の話でしょ？兵学校の教官が、よく話してくれたんだよ。』

忠の口にした大連の言葉を聞いて、長門も彼の言う事が自分の言おうとしていた事と合致しているのを悟った。彼女から見ればまだまだ若い忠であるが、人間である彼でも自慢の逸話を知っている事が彼女には嬉しい。腕組みをして『ふふーん。』と胸を張る長門だが、早くその話題を聞きたい明石は忠にせがんだ。

『早く教えてよ、森さん！』

自分だけが二人の記憶を悟る事が出来ない明石は、頬を膨らませて忠に叫ぶ。ヘソを曲げた彼女の取り扱いにいつも苦勞している彼は、すぐに明石にも笑みを向けてそれを教えてやった。

『関東大震災が起きた頃、長門艦は大連沖で訓練してたんだ。猛訓練の最中、地震発生の報を受けた長門艦を初めとした各艦は、救援物資を積み込むと全速力で本土に向かったんだよ。』

『ふんふん。んで？』

長門は心の奥から込み上げてくる感情を抑えきれず、忠の声が一息つくとも慢げに顎をちよつと出して口を開いた。

『救助物資の積み込みや状況整理で、本当は出航までにはちよつと時間がかかったのよ。だから乗組員も私達も、とにかく急げや急げで突っ走ってさ。その時に、公試で出した記録よりも速い速度を出せてみたいなんだよね、アタシ。』

長門の言葉の最後の方にとある疑問を抱いた忠は、少し身を乗り出して長門に顔を近づけて声を上げる。

『あれ？ 覚えてなかったの？』

その言葉に長門はちよつと笑みを歪めると、頭の後ろを掻きながら言った。

『あはははは。あの頃はアタシもまだ若かったのよねえ。1秒でも早く本土に行かなきゃって、他の事なんか考えてなかったの。後で聞いたら、その時に27ノットは出てたって言われたのよ。』

『うわあゝ、すっごおい！』

明石は二、三度拍手すると、今度は長門の腕に倒れ込むようにして抱まった。笑みを返してくる長門に明石もまた笑みを返す。自分の自慢話に素直に驚きと尊敬を表す明石が、長門には可愛くて仕方なかった。明石の頭を優しく撫でながら、長門は嬉々とした声を発する。

『あははは！ やれば出来る子よ、アタシ！ やんないだけよ！』

長門のその言葉はいつもの忠ならツツコミを入れているところだが、その逸話の真相が解明されないまま改装され、今は25ノットしか出せなくなってしまうた長門艦の事を考えて彼は沈黙した。そして以前明石が言っていた「艦魂の健康状態が艦の微細な性能を左右する」という話を思い出した彼は、長年解明されてこなかったその謎に一つの答えを推測する。

長門艦程の巨艦が1ノット速度を上げる事、それは並大抵の努力ではできない。艦全体の設計から重量比、果ては機関出力に至るまでの大改装をしなければ、それは非常に難しい事である。当時の長門艦には速度向上の為の改装はされていないし、むしろ当時の最新設計を取り入れて建造された長門艦には事後投入する技術だって無かった筈なのだ。

公試速度記録が改竄されているという可能性もあるが、その原因となったのは他ならぬ長門艦の艦魂である彼女の仕業だったのではないか？

そう考えた忠には、明石を抱いてひょうきんに笑う長門の姿にとつもない力を秘めている女性である事を感じずにはいられなかった。そして「やる時にやればいい。」という長門の言葉が、決して嘘でもない訳でも無い事を彼はよく理解する。そこにいるのはあれこれと上手い事を言って逃げ回る面倒臭がり屋な女性ではなく、しっかりとした実力を持って帝国海軍艦魂の頂点に立つれっきとした連合艦隊旗艦の艦魂なのであった。

『どうだ、スゲエだろう！ あははは！』

腰に手を当てて胸を張って笑う長門をその隣から明石が拍手して崇めるその光景も、決して行き過ぎた光景ではない。本人の言葉通

り、長門とはそれだけスゴイ艦魂なのである。忠も素直にそれを認め、ニツコリと微笑んで拍手を送ってやった。

『私も頑張ったら、もうちょっと速度が速く出せるようになるかな？』

明石はそう言うと、今度はその笑みを忠に向けてきた。長門の逸話に余程の感動を得たらしく、明石はキラキラと無垢なその瞳を輝かせ、颯爽と海を駆ける自分の分身を想像して遠い目をしている。

『ははは。明石の頑張りようだな。』

中々に難しい事であろうとは予想しながらも、忠は敢えて笑って明石に声を掛けた。なにより前例を作った人が、まさにそこにいるのである。忠の想像通りにそれは大変に難しい事なのだが、長門と同じ艦魂である明石には決して不可能な事ではないのだ。

『いよおし、頑張るぞお！』と拳を握って決意を新たにする明石に、やがて長門は再び彼女の頭を撫でながら、そこにあった努力以外の要素を静かな声で伝える。

『もちろん頑張りようよ。でも私が速度を出せたのは、普段から必死になって整備してくれた乗組員や、工廠の人達の努力の賜物よ、明石。』

優しい声で話しかけた長門だが、明石はその声に目を丸くして彼女に顔を向ける。煙草に火を点けようとしていた忠も、長門の少し真面目さが籠った声に手の動きが止まった。

二人の視線を集める中、長門はサラサラと流れてくる髪を肩の後ろに流して続ける。

『もちろん、明石にも速度をもっと速く出せる事は不可能じゃないよ。そしてそれは、明石の友達じんつうの神通や、那珂なかなんかに出来る事。でもその為に整備や修理をしてあげられるのは、明石しかないの。だから明石には、みんなが期待してるのよ。』

長門の語りを受けて、明石も自分が何者であるかを悟って大きく頷いた。帝国海軍唯一の工作専門艦である明石艦、その存在と意義を長門は解り易く教えてやったのだ。すなわち彼女が頑張らなくてはいけないのは速度を出す為ではなく、常日頃からの仲間に対する整備補修を実施してあげる為なのであった。

明石はちよつと残念そうに笑みを歪めたが、その長門の心遣いと自分にしか出来ない仕事がある事を今一度認識して大きく頷く。

『はゝい。軍医として頑張ります。』

『うん、頑張ってね、明石。』

笑みを向け合う二人。決して老けた顔をしてる長門ではないが、その笑顔と風格は優しい上司その物であった。実質的には今の明石の直属の上司は第二艦隊旗艦の愛宕あたごであるが、明石の顔に浮かんだ笑みもまた上司に物事を教えられて感謝する部下の顔その物であった。

やがて長門は明石の頭から手を離して彼女の肩に触れるが、突然この時にふと何かを思い出したように声を上げた。

『あ！ 言うの忘れてた！！』

『はい？ な、なんですか？』

『む？』

驚きと興味を示した忠と明石の表情を向けられた長門は、ポンと手を軽く叩いて明石に言った。

『今回の呉への寄航。資材の補給だけじゃないんだよ、明石。』
『なにかあるんですか？』

長門は不思議そうな顔で見つめてくる明石に小さく笑うと、今度はその顔を忠に向けて続けた。

『森クンは知ってるよね。明石艦の今後の予定は？』

突然の質問に忠は慌てながらも、夕食の時に青木砲術長から聞いた明石艦の予定を思い出した。顎に手を添えて記憶を辿り、長門から視線を僅かにそらしたまま彼は答える。

『えっと、今日中には呉着だろ……。それで2月25日呉発で、2月29日に沖縄なかぐすくの中城湾で第二艦隊と合流する筈だったなあ……』

『そ。でも資材搭載だけで、10日近くも在泊すると思う？』

『あ、確かに……。』

彼女の口にした疑問が忠と明石にもすぐに浮かんでくる。首を捻る二人に笑みを向け、長門はクスクスと笑いながら明石の肩に再び手を置いて声を上げた。

『明石。第二艦隊は今、有明湾で猛訓練中よ。利根とねや筑摩ちくまを除いて、第二艦隊の士官の子達は実戦経験も豊富で、きつと腕をメキメキと上げるだろうね。神通や那珂と友達になってる明石には、それはよく解るよね？』

『ん……。はい……。』

明石の顔から笑みが消え、その唇の隙間からは少し力が無い返事

が発せられる。その心の内は長門だけでなく、忠も良く解っていた。

忠と明石の近しい間柄である二水戦。そこには圧倒的な上司としての威圧感を持つ神通と、その神通の事を良く理解して仕える霞かすみや霰あられ、雪風等を初めとした若い部下達がいる。まだまだ経験不足ながらもその部下達は経験豊富で厳しい上司である神通に教えを請い、その実力は日に日に上達しつつある。あんなに泣き虫だった霞が今や二水戦の最精鋭駆逐艦となっている事実は、いつぞやの柔道の競技会で二人とも見ていた。その霞の成長は、上司である神通が手取り足取りでしっかり教育したからに他ならない。人間だろうが艦魂だろうが成長における最大の要素は、しっかり丁寧に物事を教えてくれる師匠がいるかどうかなのである。

自分には師匠がない、工作艦として建造されたのは私だけ。

脳裏に浮かぶ言葉が、明石の心の奥底に眠る孤独感を揺り動かす。良くも悪くも工作艦という存在は、彼女唯一人なのだ。口を僅かに尖らせて伏せ目がちに俯く明石だったが、長門は明石の頬に手を当てて顔を上げさせるとニッコリと綺麗な笑みをを見せてやった。

やがてまるで部屋の中で泣く子を家の外での遊びに誘うかのよう
に、彼女は声を弾ませて明石に話しかける。

『だ、か、ら。明石にも経験豊富なお師匠様、紹介してあげる事にしたの。まあアタシにとっても師匠なんだけどね。あははは。』

『ほ、本当ですか！？』

『嘘じゃないよお。その為に在泊日程をイジったんだもん。』

『長門さ〜ん！　ありがとうございます〜！』

明石は再度笑みを浮かべると勢い良く長門の腕に抱きついた。連

合艦隊旗艦の言葉である、それが嘘であるわけが無い。明石にとっては竣工以来、初めての教育を授けてくれる人に出会えるのだ。

新たな自分の成長と出会いに心を躍らせる明石だが、そのやりとりを耳にしていた忠には明石の特殊な立場を共にする艦魂という存在が全く思い当たらない。

腕を組んでその事を考えていた忠は、長門に向けてふいにその疑問を投げ掛ける。

『なあ、長門。艦魂じゃ軍医って珍しいんじゃないのかい？明石以外にもいるの？』

『いるわよお。ついこないだ上海から帰ってきたばかりの、超が付く程に経験が豊富な先輩が一人ね。』

長門が口にした地名を聞いて、明石と忠にはその艦名が脳裏に浮かんだ。

軍歌「日本海軍」にもその名を謳われ、日露戦争で主力として戦った英雄艦。2年前に工作設備を装備し、上海を拠点に活動してきたその艦は先程長門が言った「戦艦としての彼女の師匠」という言葉おおみなとを二人に納得させる。その活動記録を読んだ事が、大湊での第一駆逐隊の修理にどれ程役立った事だろう。

明石は部屋の電灯をかき消すほどに表情を明るくさせて、脳裏に浮かんだ人物の名を長門に確認した。

『朝日あさひさんですか！？』

『ご名答〜！ 朝日さん、先週帰ってきたのよ。11月の編成替えで、艦内の工作部が陸上施設に移ったんだって。今回はほんの一週間ちょっとだけど、きつと明石の成長に繋がると思うよ。大きくなって、第二艦隊のみんなを驚かせてあげてね！』

『やった〜〜！』

明石はベッドに腰掛けたまま、文字通り跳び上がって喜んだ。彼

女が掴んだ腕の主である長門もそれに抗う事はせず、一緒になつてわーわーと声を上げて飛び跳ねる。

新たな自分の可能性と出会いを喜ぶ相方に、忠はフツと小さく笑った。

よかったな、明石。

もちろんそれを心から相方を祝福する忠だったのだが、先程から長門が口にした文言がどうにも彼には気がかりだった。これまでの艦魂の暮らし振りから見てもその文言が示す内容が彼には思いつかない。笑みを絶やさないようにしながらも、忠はその疑問をぶつけてみる事にした。

『長門、一個だけ、聞いてもいいかな？』

『うん？ なんじゃらほい？』

『さっき、在泊日程イジったって言ったよね・・・？』

『おうよ！』

『それって艦魂の文書か何かなのかい？ 艦の日程は連合艦隊司令部の命令書で決まる筈でしょ？ 艦魂が書いた書類って誰にも見えな
いし、効力も無いんじゃないのかい？』

『その通り。だから本物の命令書をイジったの！ アタシって天才だよね！』

『・・・・・・。』

言いかけて忠は止めた。

それが天下の帝国海軍においてどれ程に重大であるかを悟りつつ、逆にそれを平気でやってのけたこの長門が途端に怖くなったからである。それは何かに怯える恐怖ではない。相方を超える余りにも無茶な事をしてケロっとしている長門のお気楽さに、彼は今後の帝国海軍がどうなってしまうかを憂いだのであった。額に手を当てて溜

め息をつく彼だったが、聞きたくないその真相を長門は高らかに笑い声を伴ってぶちまける。

『山本長官はお風呂が長いから助かったよ！ 机に置いてあった万年筆も使いやすかったし。もうビックリするくらいにサラサラと書けたのよ！ あはははは！』

『わーい！ さっすが長門さーん！』

長門の言葉に明石は両手を上げて褒め称え、二人して大きな声で幸せそうに大笑いしている。その光景と部屋に響く笑い声が、忠の理想の「正しい物が通る海軍」という帝国海軍像を打ち砕いていく。気の毒な事この上ないが、笑い合う二人は彼の心情をはちっとも解っていない。

ダメだ、こいつら……。早くナントカしないと……。

手に負えない性格では完全に師弟関係になっている二人の笑い声、綺麗なその声が忠には辛かった。彼が幼い頃から抱いてきた帝国海軍像が、積み木のお城のように音を立てて崩れてゆく。彼が幼い頃から憧れてきた長門艦の気高き姿が、水で滲んでいく水彩画のように霞んでいく。

『よおし、飲み直しだあ！』

『おー！！』

まだ、やるんですか？

その夜、忠には人間の仲間達と供に飲むお酒が少し恋しかった。

第二五話 「長門の心遣い」 (後書き)

長門艦のエピソードとして有名な、関東大震災の逸話ですが、公表値よりも速かった事だけが有名になってますが、この時公試よりも速い速度がでていたそうです。

この事は長門艦の艦内でも語り継がれ、その誇りが「いっそ長門で首吊るか」と謳われた程の厳しさの原点であつたらしいです。

作者親戚(元長門艦通信科所属)は当時は乗組んでいませんでしたが、このお話は月曜の教育日課や善行章をつけた先輩からもよく聞かされていたそうです。

しかし、今もって謎の多いこの逸話の速度。レイテ沖でも最大戦速の大和艦と並走していた、との逸話もある長門艦は実際、何ノット出せたんでしょうね？ 新たな資料の発見が待たれます。

第二六話 「碧眼の師」

第一戦隊に伴われた明石艦^{あかし}は月明かりが照らす中、母港でもある呉軍港^{くれ}に到着。普段は潜水艦^{ひろ}棧橋となつてゐる電気部前の棧橋へ接岸した。広工^{ひろ}廠にて製作された新たな工作機械は列車で輸送されており、各種工作用資材と共にここで積み込む事となつた。しかし搬入作業は翌日とされ、真夜中の重労働にならずに明日の朝に一度の搬入作業で済む事に乗組員達は喜ぶ。

接岸した翌日、明石艦乗組員達による搬入作業が開始され、甲板でいつもの通り指揮を取る忠^{ただし}は長門^{ながと}に連れられて行く明石を見送つた。

忠は二人が消えた先、明石艦が接岸した所から少し南西側を眺める。製鋼部庁舎群前にあたるその棧橋には、帝国海軍の歴戦艦^{あさひ}、朝日艦がその身を浮かべていた。

まるで天を貫かんとばかりに甲板からそびえ立つ前後のマスト、今では見ることが無くなつたラム状艦首、時代を感じさせる簡素な上部構造物と艦尾のスタンウオーク。そして「先週帰つて来たばかり」という長門の言葉を良く理解させてくれる、船体に施された雪のように真つ白な塗装。

主砲こそ既に取り払われてしまつてゐるが、かつて対馬沖で露助の侵略に天誅を下した帝国海軍敷島型戦艦^{しきしま}二番艦の堂々たる姿がそこにはあつた。その身を水に浮かべて既に41年の朝日艦は見る者

にそれをよく解らせてくれる程の古めかしい形をしており、大正12年の練習特務艦改装工事にて缶を減らしている為に煙突が中央にぽつんと一つ立っているだけなのであるが、前後のマストと撤去された主砲によって均整が取れたその姿はとても美しい艦でもあった。姉妹揃って英国生まれの朝日艦は旭日旗こそ掲げているが、その形は英国艦船独特の優雅さと気品が備わっており、「貴婦人」の言葉が良く似合う艦である。

『砲術士！ デリック、動きますよー！？』
『お、おう！ いいぞ！』

特徴的な朝日艦の姿に目を奪われていた忠は甲板の上に木霊する乗組員達の声に我に帰り、朝日艦に背を向けて自分の仕事に勤め始めた。バインダーを片手にせっせと甲板と棧橋の間を行き来し、その都度兵員に指示を与える彼だったが、同じくせっせと励んでいるであろう相手の顔がふと脳裏に浮かび、彼の口元は自然と緩んだ。

ちゃんとやってるかな、アイツ・・・。

瀬戸内特有の澄み渡った午前中の青空の下、そんな言葉を心の奥で呟いて微笑む忠を乗組員達が不思議そうに眺めていた。

一方、長門に案内されて朝日艦を訪れた明石は、不気味なほどにギラギラと光る木製ドアの前に立っていた。ニスが塗られてなんと

も良い色合いの光りを放つそのドアは、そのドアノブもまた人間の
手垢がこびり付いて黒ずんだ鈍い金色に光っている。どれ程に使い
込まれて来たか、すなわちこの艦の艦魂がどれ程までに経験を積ん
できているかを、説明が無くともそのドアだけで明石は読み取った。
そしてドアの上部にあるプレートには、「長官室」の文字。高雄艦
等でも同じプレートが張られたドアを通った事もある明石だが、そ
の荘厳さが放たれるドアと僅かに黒光りするプレートの年季は、高
雄艦の比ではなかった。

今から自分がこのドアを潜るのかと考えた明石は緊張の余り、今
朝方アイロン掛けしたばかりの服の袖や裾を手で直した。もちろん、
そこにしわは一本も無い。それでもあらかた服を直した明石は、気
づいて良かったと胸を撫で下ろす。

そして彼女の横には、同じく服をそそくさといじる長門の姿が有
った。だが明石のように緊張を解す為に彼女は服を直している訳で
はない。普段から正装を嫌う長門は、第一種軍装をちゃんと着ると
いう事に慣れていないのである。

『んもー、なんでこんなにメンドい服にしちゃうかなあ・・・』

長門はそう呟きながら、口を尖らせて服のホックを掛けていく。
海軍軍人なら当たり前の事が、彼女に限ってはそうではなかった。

「常識なぞクソ食らえ」、これが長門の座右の銘であった。しかし
隣で悪戦苦闘するぶっ飛んだお姉さんに明石は緊張の糸を少し緩め
る事ができ、ホッと小さく息を放つと微笑を浮かべる。

その内によりやく明石と同じ格好になった長門は、小脇に挟んで
いた軍帽を掴むと頭の上に乗せた。軍帽からはみ出る長い髪を少し
撫でながら、彼女は明石に向かって声を掛けた。

『ふう。んでは、行ってみよっか。』

『はい！』

嬉しさと気合が込められた明石の返事に長門は笑みを返すと、鈍く輝くドアをノックして声を張り上げた。重苦しくも乾いた音を放つドアの音は木管楽器の様でもある。

『軍医中将！ 長門です！』

明石は長門の声が響くと同時にパツと背筋を伸ばし、身体の両横に下ろした手を指先まで伸ばした。わきあいあい和気藹藹とした艦魂社会において、長門ほどの人物が相手を階級で呼ぶ事おおごとは大事である。ましてその階級が自分と同じ赤線が伴う物である事も、明石にとっては大事であった。

ところが部屋の中からは返事が返ってこない。思わず長門に顔を向けた明石だったが、長門は彼女には顔を向けずに首を捻るとドアに左耳を当てて中の様子を探った。耳をつけてすぐに長門は目をパツチリと開いて微笑むと、ドアノブに手をかけて明石に声をかける。

『あ、いるじゃん。入るよ、明石。』

長門はそう言うと、明石の返事を待たずにドアを開けた。次の瞬間、ドアの向こうに広がった景色に明石は目を輝かせて思わず声を上げる。

『うわあああ~~~~・・・。』

床一面に敷かれた真っ赤なカーペットは、踏み入れた足が沈む様。壁に有る窓枠は宝石のように輝き、部屋の中に置かれた椅子やテーブルは鈍い光を放ちながらも絵画の様な木目を映し出している。

目に映る豪華な室内に、明石の思考は一瞬停止してしまう。足元を揺らす艦の動揺だけが、明石にそこを艦内の一室である事を忘れ

させなかった。

そして目に映るその光景に合うように、明石の耳には綺麗な鼻歌が潮風に乗って微かに響いてきた。

『たん、たーたん、たん……』

落ち着いた少し低めの、でも鈴を転がしたように綺麗で滑舌の良いその声。明石を背に部屋の奥のテーブルまで歩み寄った長門は、その声が流れてくる部屋の両横の壁に有ったドアに向かって指を差した。それを認めた明石は部屋の椅子や天井に視線を配りながら、その扉に向かってゆっくり近寄っていく。やがて彼女が扉の前に足を進めた辺りで、それまで聞こえていた鼻歌がちゃんとした歌声に変わった。思わず歩みを止めた明石の耳に、まるで彼女を包み込むかのように歌声が流れてくる。

トンネル
隧道つきて頭わるる
よこすかみなと
横須賀港の深みどり
うしお
潮に浮かぶ城郭は
かぐわ
名も香しき敷島艦

明石も良く知るその歌。そしてその歌が示すものは、帝国海軍艦魂の全員が憧れる自分だけの歌を持った艦型。歌声の最後の歌詞において歌声の主を悟った明石は、意を決して目の前に有った扉を開いた。

扉を開いたそこは艦尾。狭い空中に浮いた甲板と、腰より少し高いくらいの装飾が入った手摺が有った。スタンウオークだ。

甲板と手摺はぐるっと艦尾を囲むように設置されており、その突端にはまるで室内にあった椅子の様に赤茶色に輝く髪を靡かせた女性^{なび}が、僅かにその身を屈めてそっと手摺に寄りかかっている。

やがて風に揺られたドアが重い音を立てると、その女性は振り返

った。

『あら、貴方が明石かしら？』

日本人離れした彫りの深く、高い鼻とその日の空をそのまま映したような青い瞳。今まで知り合った仲間達とは違い、彼女の口元や目尻に僅かにしわが入っている。そしてカールのかかった琥珀のような色合いを持つ、胸の高さくらいまで伸びた独特の髪。背丈は明石と殆ど変わらないが、長門よりも遥かに年上でその年齢は40代くらいか。

その容姿に驚いて立ち尽くす明石に、彼女は優しく微笑んで明石に歩み寄った。彼女の口元にあるホクロがゆっくり動き、完璧な西洋人の顔からは想像も出来ない程に流暢な日本語が呆けた明石に放たれる。

『軍医少尉……。そう、やっぱり明石ね？』

西洋人らしい肩幅の広い大きな身の丈を僅かに折り曲げ、明石の襟元をマジマジと見つめてその女性は言った。

彼女の襟元にある階級章を目に入れて完全に固まってしまった明石は、敬礼も返事もできずに口を僅かに開いたまま立ち尽くす。するとその後ろの開いたドアからは長門がひよこつと顔だけ覗かせ、頭に乗せていた軍帽を片手で少し上げて口を開いた。

『あ、やっつぱりいましたね？』

『あら、長門。何時来たの？』

笑みを合わせる二人。ふと肩に触れてきた長門の手に、明石は我に戻って後ろに立つ長門と視線を合わせた。

『ほら、挨拶して。』

長門はそう言うとも明石の固まった右腕を掴み、手を額の辺りに添えさせてやった。明石はその姿勢が敬礼になっている事に気付き、長門の言葉に従わんとして震える声を上げる。

『て、帝国海軍工作艦のあ、明石です・・・！　ん、ね、願います・・・！』

緊張という言葉をよく理解させる明石の声と表情に、目の前にいる女性はクスッと小さく笑って明石の頭を優しく撫で、その視線をふと長門に向けた。

『元気が良いわね。お嬢さんだと思ったけど、土方どかたなの？　この娘？』

『緊張してるだけです。んも、アタシには全っ然そういう態度とらないのにい。もうちょっとアタシにも尊敬の念を持ってくれたって良いじゃん、明石い。』

不満げに長門は明石の頭をツンツンと突付く。カクンと首を傾けたままの明石に目の前の女性は大きな青い瞳を細めると、ゆっくり右手を持ち上げて額に添える。ふんわりと風のような動作ながらも、その敬礼は明石が出会ってきた人々の中で最も綺麗な敬礼だった。小さな溜め息をして、彼女は明石に自らの名を名乗った。

『帝国海軍工作艦、朝日です。願います。』

3人はスタンウオークから室内に戻り、部屋の中央にある向かい合ったソファ―に腰を下ろした。腰を下ろすと同時に倒れてしまうような感覚を覚える程に、柔らかくて底が深い椅子。緊張の余り固まった身体でその椅子に腰掛けた明石は思わず悲鳴をあげてしまい、その様子を二人の上司に大笑いされた。頬を赤くして頭を掻く明石だったが、朝日が掛けてくれた優しい言葉と用意してくれた紅茶にやっと気を緩める事が出来た。

『まあ、艦魂が見える人と一緒に暮らしてるの？ 良かったわね。』
『は、はい！』

向かい合う朝日に明石は嬉しそうに返事をした。明石の隣に腰を下ろして彼女の経歴を簡単に説明した長門は、自慢の相方を素直に認められて口元を緩める明石に微笑みを向ける。

落ち着きという言葉がそのまま音になったような朝日の声は、偉大なる先輩を前にした長門の気もまた緩めてくれる。まだちょっと俯いてまともに朝日と目を合わせられない明石を気遣い、長門は椅子の肘掛けに身体を流すように乗せ、今度は明石に朝日の経歴を説明した。

『言わなくても知ってると思うけど、朝日さんは敷島型戦艦の二番艦だよ。日露戦争では、いま私が所属してる第一戦隊に所属してて、ロシアの艦隊をコテンパンにしちゃったのよ。も、スゴイのなんの！』

同じ戦艦の艦魂である長門にとって、帝国海軍がその名を世界に轟かせた日本海海戦は眩しすぎる程の栄光だった。敵の軍艦を沈めるための最大の駒たる意地と誇りが長門にもあり、未だに敵艦と砲

火を交えた事がない彼女は、その羨ましさを言葉の端々に散りばめる。工作艦である明石には正直、その心の内がピンと来なかったが、まるで自分の事のように朝日を褒め称える長門の笑顔に、それがどれ程までに凄い事であるかをなんとなく悟った。

だが当事者たる朝日は、落ち着いたもので、小さく笑うとティーカップをゆつくりと口に運んで一飲みする。昔を懐かしむ目でカップの中にある小さな湖面を眺めながら、舞い上がる湯気の向こうの長門に視線を移して、朝日は静かに声を上げた。

『ふふふ。昔話は止してよ、歳が気になるじゃない。それに対馬沖での合戦は、第二戦隊の島村^{しまむら}さんと磐手^{いわて}の手柄よ。』

舷窓から差し込む陽の光りを受けた朝日の笑み、その両脇にある赤茶色の髪がまるで気高き鷲の翼のように明石の目には映る。そして長門がすっかりこの朝日に心服してしまっている姿に、明石もは自然と口元が緩んでしまう。美しさと優しさを持った朝日の笑顔、明石はそれに眩しさを感じて逃れるようにふと長門へと視線を流した。ところが彼女はほんのついさっきまでとはうって変わり、今度は眉をしかませて舌を出している。

やっちまった・・・。

そんな長門の心の声が不思議そうな顔をする明石に伝わり、同時に、朝日は笑みを崩さぬまま長門に向かってゆつくりとした口調で語りかけ始めた。

『あの合戦での二戦隊の動きは、目的が何であるか、その為に取りえる手段は何かを常に考えて行動した島村さんの判断が決め手よ。ただ命令に従って私達、一戦隊の後ろについて来るだけじゃ、あの合戦での目的は達成できなかったわ。常日頃から、連合艦隊という

組織の中で、そういう考え方が出来るようにしっかりとした理解を得ていた組織の運営も見習うべきね。長門。貴方は今、連合艦隊の旗艦でしょ？ 私達の功績を伝えてくれるの良いいんだけど、ちゃんとそういう組織作りはしてるの？ いつも言ってるけど、過去を振り返る上で必要なのは輝かしい栄光や恥ずべき失敗ではなく、そこに繋がった試行錯誤の過程と結果よ。解ってる？』

西洋人らしく朝日は手の動きを交えて、長門に語りかけている。

長門は引きつった笑みで『はい……。』とどこか力が抜けた返事をする、その表情のまま明石にチラッと顔を向けてきた。

どうやら朝日という艦魂には、重度の説教癖があるらしい。

さすがの長門も尊敬する先輩にかかつては、それをはねつける事もできない。不自然にニヤけて頭の後ろを片手で掻き、力が抜けた返事をするのが関の山だった。二人のやりとりは形無しという言葉の良き理解した明石は、両手で口元を覆って悟られないように笑う。その最中にも朝日のお説教に苦戦する長門であったが隣でずっといつもの笑みを取り戻した明石に安堵し、悪いなと思いつつも彼女は得意技を発動する事を決めた。長門は頭を掻きながら朝日の背後に位置する壁の上にある時計を探し当て、突然に大きな声を上げる。

『んあ！　しまった！』

『―あら。どうしたの？』

『やゝ、すいませえん。これから陸奥^{むつ}と、各駆逐隊の訓練状況の整理やるもんで……。でへへへ……。』

『え！？』

明石は長門の放った言葉に驚き、つつい声を上げる。

連合艦隊きってのサボリの常習犯である彼女の生活を、明石はこれまで何度も見てきたからだ。つい昨夜だって溜まった仕事を陸奥

に咎められながらも、隙を突いて自分の艦から脱走してきた彼女である。その長門がこれから仕事がある等と言い出す事が、明石には信じられなかった。もちろん明石が予想した通り、それは嘘だ。

『なが・・・。わぷっ!!』

隣に座る長門に向かって顔を近づけて口を開こうとした明石だったが、長門はすぐさま明石の頭に有った軍帽に手を伸ばすと、軍帽の先端を摘んで下にズリ下ろして明石の顔を覆わせた。困惑する明石が顔に手を伸ばすも、長門は片手で顔を覆わせた軍帽を抑えつけている為に外れない。朝日がそんな二人の姿を不思議そうに見つめる中、長門は矢継ぎ早に声を発した。

『やゝ、勉強になりました!さゝっそく、陸奥にも伝えてきますよ!』

『あら、そう? 大変ねえ、全部の駆逐隊の整理なんて・・・。』

『これも仕事ですから! あははは!』

非常に白々しい声であるが、その声色に朝日は気づかないらしい。長門の横で何事か言わんとしてもがく明石を不思議に思いながらも、これから連合艦隊旗艦としての職務に励むという後輩に朝日は笑みを見せて別れを告げた。

『また、いつでも来なさい。長門。』

『はい、是非是非! んじゃ!!』

その言葉が明石の耳に届くと同時に、明石の顔に発生していた圧力が消えた。ポロツと落ちる軍帽によってやっと開けた目の前、だがそこには隣にいた筈の長門の姿が既に無い。

あ、いない！

そう思った瞬間、明石の後ろからはドアが閉められる音が響いてきた。あっという間の早業に、呆然とする明石。朝日は頬に手を当てて、僅かに首を捻って青い瞳を細めながら言った。

『あの娘はちよつとそそっかしいのが玉に傷なのよね。人の話はちゃんと聞く良い娘なんだけど……。』

いつも自分を訪ねてきてくれる長門が、如何にして来てくれているかを明石は思い知った。そして先輩相手に堂々と猫を被る長門という艦魂を、色んな意味で彼女は恐れた。

長門が逃げ去った後、二人はしばしの間沈黙して立ち尽くしていた。明石は自分をトカゲの尻尾として使った長門に対して、少しだけ尊敬の念を失う。溜め息をして自分の世代の艦魂のだらしなさを恥じる明石だったが、その明石の表情に朝日は笑い始めた。

『ふふふふ。今の子達って、本当に元気があるわね。』

そう言って再びソファに腰を下ろす朝日。明石も苦笑いを返して再び腰を下ろした。座ると同時に手の中に有った軍帽を被りなおした明石は、朝日が何故か目を細めて自分の顔を眺めている事に気づく。青き透き通った朝日の瞳は、晴れの日の静かな海原を映している様だ。

『この世という物は不思議ね……。名前が同じだと、心も身体も似る物なのかしら……。』

どこか懐かしむ様な表情でそう言う朝日だったが、明石には彼女の言っている事がまったく解らない。咄嗟に出た返事は、その事を朝日に伝えた。

『は、はい？』

『ふふふ……。そう、知らないのね……。』

朝日はテーブルの上に置いていたティーカップを手に持ち、遠い目をしながらも自分の言葉が含んだ事を明石に教えてあげた。

『日本に来てすぐの頃、私にも先輩が何人かいたのよ。同じイギリス生まれで一戦隊を組んでた富士さんや巡洋艦の艦魂達のリーダーだった浪速、初代の連合艦隊旗艦を務めた松島さんに、戦利艦として軍艦旗を掲げながらも清国生まれの誇りを捨てなかった鎮遠さんでも、その中で最も親しくしてくれたのは、四戦隊の明石だったわ。』

朝日が放った言葉に、明石は驚きを隠せなかった。

工作艦として建造され、現在の連合艦隊では唯一の工作専門艦は自分だけだと思っていたからである。当然、その名前も連合艦隊歴史上、自分だけにつけられた物だと彼女は思っていたのだ。

『あかし……。？』

呟くように出た明石の声だったが、朝日はその言葉を聞き逃さず、ニッコリと微笑むと頷いた。

『そう、貴女と同じ名前よ。当時は私が明石に教えられる立場だったのに、30年以上も経ったら今度は私が明石にあれこれと教えるなんて、本当に不思議……。ふふふ。』

朝日はティーカップを両手で持ち、ゆっくりと左右に傾けた。カップの中で揺らめく紅色の波に、彼女は昔を懐かしんで微笑んでいる。その波間に朝日が見た顔と同じ顔を持つ明石は、自身と同じ名を持つ者の存在を知った事で湧き出した感情を抑えきれず、テーブルの上に身を乗り出して声を上げた。

『も、もっと教えてください！ 先代の事を！』

初めて知った自分へと繋がる「明石」という名前の系譜。彼女には文字通り他人事ではなかったし、教えた側の朝日もそれで済ますつもりは無かった。その言葉を待っていたとでも言わんばかりに、朝日は口元のホクロを隠すように手を添えて話し始めた。

『明石は……。あ、ごめんなさい。貴女の先代は、正確には須磨^{すま}型防護巡洋艦の二番艦だったわ。私より一年前に横須賀で建造されて、異国生まれの私にこの国の海域の知識を色々と教えてくれたのよ。ふふふ、可笑しいわ。思い出してみたら、物言いも貴女とそっくりよ。』

別段褒められた訳ではなかったが、明石は朝日の言葉に表情を明るくする。

そして朝日が口にした「そっくり」という言葉が、先代が間違はなく自分とは他人ではない事を確信させた。仲間達のように姉妹がおらず人間のように子供が生まれるという概念が無い艦魂の彼女にとって、それはなによりも嬉しい事だったのである。

朝日の目の前にある明石の両頬に釣り上がった口元と子犬のような目、それが記憶に蘇る顔とまったく同じである事に彼女もまた笑い、手に持ったカップを口に近づけて一口飲んでから話を続けた。

『貴女の先代は、ロシアとの戦争の火蓋を切る事となった合戦、仁川沖海戦に参加してたわ。その戦いに参加してた艦魂の中で貴女の先代だけが、自決したロシア側の艦魂の様子を報告してくれたのよ。』

朝日はそれまで少し伏せるように俯かせていた顔を上げ、遠い目で天井を眺めた。

『変わった艦魂^{ひと}だったわ。貴女の先代は「その様子を絶対に全軍に伝えるべきだ」と、戦隊長の浪速^{なにわ}が止めるのも聞かずに報告してくれたのよ。もちろん、みんな訝^{いぶか}ったわ。“明石は阿呆だ。人間にも伝わらない事を記録してどうする。”、なんて言われながらも、あの艦魂^{ひと}は信念を曲げなかった。でもその後に、みんなが明石の言葉を思い知らされたわ……。』

そう言うと、これまで美しい笑みを浮かべてきた朝日の表情が曇った。それが辛い記憶によってもたらされたという事を、明石はすぐに悟る。

『貴女の先代は艦魂も人間も無く、生きる事と死ぬ事のなんたるかを説こうとしていたのね。私達がそれを思い知ったのは、旅順^{りょじゅん}付近で敵の機械水雷にかかって仲間が次々と死んだ後だったわ。そして私の妹の初瀬^{はつせ}も、その時に死んだわ……。』

朝日は言い終えると、天井を仰いでいた顔を明石に戻した。心配そうに覗き込んでくる明石に、小さく笑みを見せて朝日はさらに続

けた。

『目の前で自分の仲間や姉妹が倒れていく事に、あの時は全ての艦魂達が泣いたわ。装備と威勢だけで過ごしてきた私達には、仲間や姉妹を失う心構えが出来てなかったのよ。そしてその光景は、私には貴女の先代の言葉を蔑ろにした報いだと思えたのよ。そしてもう一度話を聞こうとした時は、当の明石も機械水雷にかかって重傷を負っていたわ。ふふふ、それでもあの艦魂は笑ったわ。やられたあ、なんて言って。』

朝日は腰を浮かせておもむろに手を伸ばし、明石の頬に触れた。自分へと繋がる「明石」の名を持つ先代の物語を黙って聞いていた明石の頬に、それを伝えんとする朝日の手の温もりが伝わってくる。朝日もまた手に伝わる明石の頬の温もりを確かめ、大きく一度頷くと口を開いた。

『貴女の先代は私と艦種は違うけど、私の大事な友達であり、唯一の師だったわ。大正の時代に入ってからシベリアでの作戦行動も一緒に行った。そして一緒になるその都度、命の大切さを教えられ、今の私、工作艦朝日があるのよ。』

『朝日さん……。』

『ふふふ、呼び方まで同じ……。』

余程の感慨深さを感じたのか、朝日はホロリと一筋の涙を流した。だがその表情には悲しみは無く、青い瞳を細めて笑っている。ちょっと戸惑う明石の手を、朝日はもう片方の手で握って言った。

『あんなに命という物に対する信念をもっていた明石が、こうして工作艦となって生まれ変わってここにいる。きっとあの艦魂も喜んでいるわ。私は貴女の先代には恩がある。その恩を返す為にも、私

の知っている事は全部教えるわ。だから立派な軍医になるのよ、明石。』

朝日の声と手の温もりは、明石にその想いをしっかりと伝えていた。朝日の想いと、自分と同じ名を持つ艦魂の物語。命を預かる軍医としての大事な物、命に対する信念。それをこの時、明石は確かに授かったのだ。そして彼女の心には、栄えある「明石」の名を持つ事への誇りが生まれた。

私はただの補助艦艇なんかじゃない。

私の名は明石、遥か昔から命の尊さを語った艦魂の名を継ぐ者。

胸の中でそう呟いた明石は、大きく頷いて朝日に声を返した

『はい!』

その日、彼女は軍医として、艦魂として、そして心の師としての唯一の師匠を得たのだった。

第二六話 「碧眼の師」 (後書き)

お嬢さん、ドカタ。

朝日の言葉としてでてくる以上の言葉ですが、これは海軍兵学校で用いられた隠語のような物です。

お嬢さんⅡ後輩に優しく当たる、どちらかと言えば大人しい感じの温和な人。

ドカタⅡ後輩に厳しく当たる、どちらかといえば気性の荒い暴力的な人。

実際にはお嬢さんクラスとかドカタクラスと使って、各期の総称として使用された様です。

また同じ理由で、真珠湾攻撃で「燃料が無くなったら、適当な目標に向かって反転降下。突入せよ」と訓示して、その言葉通りに自爆した蒼龍航空隊の飯田房太大尉のニックネームは「お嬢さん」でした。

第二七話 「大事な事は？」

翌日から朝日艦あさひにて、朝日による明石あかしの軍医としての教育が始まった。これまで朝日まが纏めてきた記録を片手に、明石はそれを自分のノートに真剣に書き写していく。どんな教育であろうと座学とは眠気や退屈との戦いであるが、明石に限ってはそんな事は無かった。ちょっとだけ眉をしかませて朝日の日誌とノートに視線を流し、時折頷いては鉛筆に力を入れる明石の表情は熱心という言葉が良く似合う。希に首を捻って鉛筆を止めては、朝日に向かってあれこれと質問を投げる明石。もちろん朝日はそれに対して懇切丁寧に回答を返し、明石の疑問を解決させてやった。

艦魂に対する医学とは言え、それは人間に対する物とそれほど変わらない。朝日は経験上、応急処置術を特に学ぶよう勧め、明石もそれに従った。

帝国海軍工作艦の主目的は平時においては各工廠での修理補修支援、有事の際は前線に進出しての応急修理であり、本格的な艦体の修理や改修を行う能力は持っていない。いざ損傷艦が出た場合は被修理艦に横付けして破孔を塞いだり、強度的に不安な所に鉄材を貼り付けて補強したりして、本格修理可能な港湾まで自力で航行できるようにしてあげる事が帝国海軍工作艦の運用方法である。人間で言えば、軍医というよりは衛生兵に近いというのが実情なのだ。

外傷に対する基本的な処置である止血に始まり、大湊おおみなとでの沼風ぬまかぜの

様に骨折や捻挫等に対する傷の処置、ついでに昨今の人間の軍医事情でも注目され始めた歯科医科学にも範囲は及んだ。

日本における歯科医科学自体は、明治の頃から既にあった。日露戦争では既に軍や艦内等に歯科医を配置したりしていたが、その実情は民間の医師に将校待遇を与えて治療に当たっていた。故に皇軍では、歯科医科を専門とする軍医の将校や下士官というのは未だに確立されてはいない。平時においては、それ程困ってはいなかったのである。

ところが支那事変が始まると顔面の負傷に伴う歯の治療等、歯科医科学の必要性が前線より叫ばれ、国内の歯科医の協会から嘆願書が提出された事もあって、今年、すなわち昭和15年になってついに歯科医科を専門とする軍医将校制度が帝国議会で可決されたのである。後の3月30日、陸軍に歯科医将校の身分が制定され、海軍では翌年より歯科医科士官の身分が制定される事になる。

そんな事から朝日としても歯科医科学は未知の領域であり、明石と供にこれから学んでいく事になった。朝日は若いとはちよつと言い難い外観ではあるが、組織における生涯学習制度という物は人間も艦魂も同じなのだ。

覚える事はお互いにまだまだあるが当の明石と朝日は全くの素人ではないので、その教育内容はそこそこ高度な内容で進められた。

また朝日の得意な分野である、漢方や薬草といった生薬しょうやくの教育も行われた。艦から足を離して行動する事ができない艦魂では原材料を調達する事が難しいが、明石には相方として人間の忠ただしがいる。朝

日はその事を念頭に入れて、明石に自慢の生薬メモを渡して教えてやった。

明石は初めて触れる生薬の知識に感動し、朝日が休憩を告げて紅茶を用意してくれたにも関わらず、一度もカップに触れもせずに生薬の本を熟読していた。

『うーうーん……。』

ソファに腰掛けて穴を開ける程に本を読みながら放つ明石の唸り声は、向かいで紅茶をゆっくりと飲んでいた朝日をつい笑わせてしまう。明石のその声と表情が、思い出の中にいた朝日の師匠とまったく同じだったからである。口に手を当てて静かに笑う朝日に、明石は本から視線を動かさずに声を掛けた。

『……。朝日さん。』

『ふふふ……。どうしたの、明石？』

『チンピ……。って読むんですか、これ？チンピってなんですか？』

『ああ、陳皮^{ちんぴ}ね。ミカンの皮の事よ。』

『へえ、そうなんですかあ。ミカンの皮、と……。』

珍しい呼び方ではあるが、明石はそれ程驚きもせずと頷きながらノートに鉛筆を走らせる。

およそ軍人の会話とは思えない二人のやりとりであるが、お互いに軍医という立場の二人は決してふざけ半分でやっている訳ではない。満足に帝国海軍艦艇を動かす為には、この二人を初めとした多くの特務艦の働きが必要不可欠なのである。まだまだ駆け出しの明石ではあるが、軍医という立場を頂いている上では新米である事を理由に患者の前で右往左往する気は彼女にはさらさら無い。

誇り高い「明石」の名を受け継いだ自分は、絶対に妥協なんかしない。

心の奥でそう叫んで小さく燃える明石の想いが、難解な医学知識への探究心を湧かせたのだった。

やがて朝日は紅茶を一口飲むと熱心に効能を書き写している明石に少し顔を近づけ、そこには書かれていない生薬の生成方法を教え始める。

『陳皮は一回煮た後にお水に浸し、乾燥させてから粉末にするのよ。さっき教えた石菖蒲いしあやめや朝鮮人参と似てるわね。でも間違えないでね、石菖蒲はお酒で浸す。朝鮮人参は煮た後、火で炙あぶってから乾燥させるのよ。』

『はーい。』

明石はノートから視線を逸らさずに返事をした。既にそのノートは半分程も書き込まれたであろうか。明石の鉛筆が握られた手、その小指の側面は真っ黒になっていた。常に忠の前ではマイペースな明石であるが、その反面、彼女の集中力は一度スイッチが入ると常人離れた物を発揮する。朝日に教えてもらった事を記すや、明石はすぐさまメモの次の項目に視線を移していく。

だがここで朝日は少し思うところがあって、明石のを止める事にした。突然に頬を触れた朝日の手と一緒に発せられた彼女の声に、明石は我に買って朝日の顔に向けて視線を上げる。

『明石、休憩をとりなさい。』

『あ、は、はーい……。』

すっかり熱中していた明石は、ちょっと苦笑いしながら鉛筆を置いた。テーブルの上に置かれた朝日が用意してくれたカップからは、

既に湯気が消えている。せつかくの師匠のご厚意を無碍^{むげ}にしてしまった事を明石はすまなく思つて、すっかりぬるくなつた紅茶を一飲みしてみる。

舌に伝わる味わいは問題ないが微妙な温度の紅茶は喉通りが悪く、いつもは鼻の中をくすぐる様に通り返けていく香りも今は薄い。思わず眉をしかませて舌をちょこつと出す明石に、朝日は微笑んで声をかけた。

『ふふふ、おいしい？』

『あはは・・・、もっと暖かい内に飲んでおけば良かったです・・・』

明石は顎を引いて歪めた表情で頭を搔く。彼女は上目遣いでチラチラと朝日の顔を窺うが、朝日は別に怒っている訳ではなかった。むしろ熱中すると周りが見えなくなる明石の性分が、またしても彼女の師匠と同じであつた事に口元を緩めている。

そして自分の思う所を認識したであろう明石を、朝日は彼女の放つた言葉から読み取つた。

『ふふふ。物事には機という物があるのよ、明石。』

『機・・・？ 機会とか機先とかの機ですか・・・？』

『そうよ。』

朝日はそう言うのと、両手で持ったティーカップをゆっくり静かに手の中で左右に傾け始めた。ユラユラと揺れるカップの波に小さく笑つた彼女は、明石に顔を戻さずに教えを授け始める。

『この紅茶もそうよ。香氣も味も、口に入れるまでに経た時間で良くも悪くもなるわ。そしてそれは、お仕事も同じよ。』

『う、すいません・・・。』

朝日が何を言わんとしているかを、明石はその言葉からなんとなく悟った。まして喉に残る後味の悪さが彼女にその事を一段とよく伝える。だがそれに対して一言で済ましてくれる程、朝日は大人しい人ではない。その事は昨日の長門ながとと彼女の会話で、既に明石も見ている。頬を指先で搔うづむいて俯く明石だったが、それにかまわずに朝日は話し始めた。

『機という物は、紅茶にも、お仕事にも、お勉強にも、そして治療にも同じ様に関わってくるわ。機を掴めば効果は最大に引き出され、逆に逸してしまえばどんなに強力な効果を持つ物であっても、それを發揮する事が出来なくなってしまうのよ。明石、軍医である私達が機を逸してしまう事、それは患者に対しての治療を失敗するという事よ。』

決して強い口調ではない朝日の声。優しく笑いながらゆっくりと語りかける彼女の姿からは、後輩をいじめようとか叱りとばそうという感じが伝わってこないし、朝日にしてもそのつもりは微塵も無かった。必死に知識を吸収しようと思つた余り、先輩からの注意を受ける明石。だが朝日もまた、次代を担うこの若者に自らの知識や経験を授けようと必死なのである。命を守る番人である軍医の立場を供にする二人、そこに賭けた熱い想いが生んだ光景だった。

だが一つだけ明石にとって不幸だったのは、彼女に語りかける偉大な先輩には、連合艦隊旗艦の艦魂ですら尻尾を巻いて逃げ出す程の重度の説教癖がある事だった。

冷や汗を浮かべて引きつった笑みをする明石だが、朝日は構わず次々と言葉をまくし立てる。けっして怒鳴る訳でも無く、ただニコニコと笑ってゆっくりとした口調で語りかけられては、反抗する気も明石からは失せてしまう。まして彼女の言っている事は間違いではなく、そも自分の失態からこうなってしまった事を痛感した明石

はただひたすらそのお説教に耳を傾けるしか無いのであった。

『負傷した艦魂達は命の危険に陥っている時だってあるわ。そんな状況下で軍医である私達が機を逸する事は、患者を殺す事と同義よ。だから私達には機を逸する事は絶対に許されないのよ。私達だけが仲間の命を守る最後の番人なの。解るわね？』

『は、はい！』

『うん、解ればいいのよ。ふふふ。』

大袈裟な感じで手を動かしながら長々と話し続けていた朝日だったが、素直にその言葉を聞いていた明石の返事を受けて、手に持っていたカップを静かにテーブルに置いて笑った。やっとの事で解放された明石も、胸に手を添えて安堵の溜め息をする。誰しもお説教を受けるといふのは気分が良い物ではない。長門のように逃げる訳にも行かなかった明石の安堵は当然といえば当然であるが、自分の為に必死になってくれている朝日の心情を悟り、やがて明石は感謝の念を抱いて微笑みを浮かべる。心なしか先程よりもさらにぬるくなった紅茶の味が、明石には美味しく感じた。

『あ、そうだわ。』

カップを置くと同時に鉛筆を握って視線を落としていた明石だったが、ふいに発せられた朝日の声に手を止めた。明石が顔をスッと上げると、朝日は両手を胸の前で合わせて口を開く。

『明石は呉での資材補給が終わったら、次はどここの作業地へ向かうの？』

その言葉に明石は朝日からちよつと視線をズラして、相方が教えてくれた行動予定を思い出す。

ちなみに作業地とは帝国海軍の訓練を行う海域の事で、以前に明石艦が訪れた有明湾ありあけや佐伯湾さへぎ、四国の宿毛湾すくも等の事を言う。

『たしかー・・・、沖縄って言っていました。なかすく湾、だったよ
うな・・・。』

明石は記憶の中でぼやけるちょっと珍しいその地名を思い出そうとする。琉球語を基にした特徴的な名前だったが、元々あまり方言や外国語には聡明ではない明石にはその地名が中々浮かんでこない。だが帝国海軍に永久就職してこの方40年以上にも及ぶ朝日は、明石が思い出そうとする地名に心当たりがあった。首を捻る明石をクスクスと笑いながら、朝日は胸の前で合わせていた両手を膝の上に下ろしてその地名を声に変える。

『ああ、中城湾なかぐすくね。』

『あ、はい、そうです。』

喉まで出掛かって出てこないその地名を的確に即答した朝日。今更ながら、明石は彼女のこれまでの経歴を思い出して尊敬の念を覚える。北はウラジオストクから南は台湾まで、帝国海軍の主力として常に駆けずり回ってきた朝日の豊富な経験を明石はよく思い知った。

一方、朝日は明石の表情が明るくなった事を喜ぶかのように、自慢の琥珀色の髪を撫でながら話を続ける。

『と、いう事は。その次は台湾か廈門アモイね。それなら教えておいた方が
良いわ。』

朝日はそう言うテーブルの上に手を伸ばして、明石の手元にある生薬の本のページをサラサラとめくった。突然の朝日の行動でち

よつと驚く明石を他所に、朝日は数ページ程めくったところでページの中段程にある項目へ手を動かして指差した。

『これよ。ゲンノシヨウコつていうんだけど、下痢止めに良く効く
のよ。廈門とかでは大陸のお水を補給するんだけど、日本人にはち
よつと合わないのよね。下痢に悩まされる水兵達も多かったから、
手に入れる事が出来るなら持って行くのよ。もし無かったら、現地
でも採れる筈だから探してみると良いわ。』

そう言つて朝日が指差す項目には「別名・イシャイラズ（医者要
らず）」の文字。軍医である明石をあざ笑うかのように、その草に
は彼女を失業の危機に陥らせる程の効力が備わっているらしい。そ
の滑稽な名前と師匠イチオシの効能に、生薬の面白さを覚えて明石
は小さく笑う。だがすぐにその笑みは消えていく。

というのも、艦魂というのは病気という物には実は無縁であるか
らだ。人の形をしているとは言え、彼女達艦魂の実際の身体は鉄の
塊である。体温が常温から5度高くても低くても死んでしまう人間
とは、その身体の頑丈さは比べ物にならない。だから朝日が教えて
くれた「水を飲んで腹を壊す」という事が、艦魂の明石にはそれ程
重要な事とは思えなかったのである。

どこと無く晴れない明石の表情を目に入れた朝日はそれを悟り、
明石の手元に伸ばしていた手を引っ込めると静かに言った。

『明石、貴女には艦魂が見える人間がいるのよね？』

『え？ あ、はい。』

『その人とは親しいのでしょうか？』

『はい、まあ……。』

『ふふふ。』

相方の話題を振った瞬間に明石の表情は変わる。多くを語らない

明石であつたが、ちよつと頬を赤くしてニヤける彼女の表情がその心の内を朝日に良く伝えた。これは珍しい事もある物だと朝日は心の中で呟き、大事な事を明石に教える為に気が引けながらもちよつと意地悪な質問を明石に投げてみた。

『貴女、目の前でその人が倒れてても、放って患者の治療にだけ専念するの？』

『う………』

朝日の質問を受けて明石は言葉を詰まらせた。先程脳裏を過ぎつた脆弱な人間の身体、それは彼女の相方とて例外ではないのだ。小さな小銃弾位ならへこみもしない明石の身体だが、相方にとっては致命傷を与えるには充分である。あまりにも儂い^{はかな}その存在の仕方は、明石に自分と相方との距離を感じさせるのには充分だった。だがふと視線を向けていた生薬の本と書き写した自分のノートに気づいた明石の表情には、再び決意の色が蘇ってくる。

だったら、私が守れば良い。

そんな事を思つた彼女の手がギュッと握られる。そして朝日も、明石のその拳と表情に青い瞳を細めた。力が籠った眼差しで顔を上げた明石は、朝日の質問に胸を張って声を返す。

『いいえ、助けます。』

『では、患者はどうするの？』

さらに返つて来た朝日の言葉に明石は一瞬だけ視線を下に落とすが、すぐにその視線を朝日に戻した。即答こそできなかったが、その語気の強さが朝日に明石の想いを伝える。

『どっちも助けます。』

明石の答えを受けた朝日は、大きく溜め息をしながら目を閉じて微笑む。

まだまだ未熟な身の上で艦魂と人間を同時に助けるといふ明石の言葉は、朝日からしたら身の程がまだ良く解っていない青二才の戯言でしかないが、彼女は別段それを咎めようとするつもりは無い。

それに、そもそも彼女は明石をいじめる為にこんな質問をした訳ではなかった。

この世という物は実に厳しい。朝日自身、40余年に及ぶ海軍生活で、どちらかを切り捨てなければならぬ事が幾度も有った。そして艦魂が見える人間と関わらずに生きてこれた彼女の経歴が、その時に非情な決断をした朝日の背中を押したのだった。

もちろんそれは間違っていない。むしろ艦魂が見える人間とは古来より限られており、朝日がしてきた決断は艦魂社会にとってはそも当然の事だった。

そしてそれは人間とて同じ事である。飼っている犬や猫を家族と言いつける人はいくらでもいるが、命の危機に際して自分と同じカタチの者や血の繋がった者を優先するのは当然であり、また同時にそれが独力でできうる事の限界でもある。この世に生を受けた全ての存在の当然の行為であり、それだけ生きるといふ事がどれ程までに厳しいかをこもごもが本能的に知っているからに他ならないのだ。

だが期待の新生である彼女の後輩は、幸か不幸か艦魂が見える人間と関わる生涯を送っている。それが艦魂である明石の決断に微妙な影を落とす事を、朝日は危惧していたのだ。

そんな中、朝日は明石の答えとその決意が本物である事を悟り、大きく頷いてみせる。正直、人間に対する感情にこれといって特別な物はないし、特別な感情を抱いた経験も無い。それでも朝日は今、

明石が目の前で抱いた決意と答えを納得した。

こうでありたい、こういう風にしていきたい。ささやかながらも、そんな理想と信念を抱けぬ人物が命を救えやしないという事を、彼女の師匠もまた言っていたからだった。

視線を逸らさずにいた明石に対して朝日は再びまぶた瞼を持ち上げて青い瞳を覗かせると、彼女もまた今しがた胸に抱いた事を率直に明石に伝えた。

『それでいいわ、明石。正直、その判断は正しいか間違っているかで言ったら、後者の方だと思うわ。でも、良いか悪いで言ったら、私は前者だと思うわ。ふふふ。そして、私もそうでありたいわ。』

朝日はこれまでに無く優しく微笑むと、何かを胸の中に抱き寄せるように右手を胸の前に置いた。

自分と同じように彼女もまた何かを思い、そこに彼女なりの決意を秘めたのではなからうか？

朝日のその姿に明石もまた瞳を細めると、自分の決意を認めてくれた事への感謝とその決意をしっかりと胸に刻み込むように大きな声で返事をした。

『はい！』

『その想いを大事にするのよ。そしてそれを抱いて生きた事を、その中で一緒に生きた仲間を後世に伝えなさい。なんと言われても良い、背中を指されて笑われても良い。大事な事は成否の判定ではなく、そこに込めた想いとそれに伴った試行錯誤の過程と結果よ。』

朝日の言葉に、明石は口元を緩めて大きく頷いた。自分の考えに理解を示してくれた帝国海軍の大御所、その事が単純に明石には嬉

しかった。出会って僅か二日しか経っていないのに、既に明石は師匠から一部の知識と誇り、自信、そして命の尊さをほんの僅かだが確かに授かっていたのだ。

確かな教育の手応えを感じて喜ぶ明石だったが、その視線の先にあった師匠の姿に彼女の表情が固まった。

『貴方には・・・、本当に、お、教えられてばかり、だわ・・・。』

そう言った朝日の頬を、舷窓から差し込む夕日が光らせた物が流れていく。指先で目尻をゆっくり拭う朝日だったが、とめどなく溢れてくるそれは彼女の努力に反して止まる事はなかった。

そして朝日が口にした言葉に、明石は先程自分を苦しめた彼女の癖の示す所を理解した。

彼女の相手に有無を言わせない程の説教癖。それは相手に対して諭す為の物ではなく、彼女の師匠から受け継いだ事を忘れない為の自分への戒めなのだと思石は考えた。

昨日、朝日が明石に話してくれた、師匠の言葉を蔑ろにした事によって失ってしまった妹と仲間達。長門の様に勝利で終わった日露戦争を奉る者はたくさんいるし、他ならぬ帝国海軍自体が目指している軍事思想は日本海海戦の再現をしようとする以外の何者でもない。そこにあった想いは伝えられず、そこにあった犠牲は忘れられ、今に残るのはその結果である勝利の美酒だけだった。

そしてそんな中で、朝日は必死にそれを忘れないように一人生きてきたのであった。次々と天寿を全うしていく仲間達をその青い瞳に映す度、そこに湧き上がった朝日の叫びは如何程のものであったか。例えそれが人間にはあまり信じられていない艦魂であったとしても、そこにあったのは必死に生きた命の物語であり、明石の目の前にいるのはそれを必死に伝える為に生きてきた気高く、尊敬すべき師匠であった。

『朝日さん。これ、どんな効能があるんですか？』

明石は師匠の涙する姿に優しく微笑むと、再び鉛筆を片手に生薬の本の項目を指差して言った。突発的に発せられた明石の問いだったが、その声色に明石の優しさが込められている事を朝日は強く感じる。「泣かないでください。これから、私も一緒に伝えます。」と、口には出さずとも心に響いてくる明石の心の声が、長年伝えられなかった朝日の心の苦しみを撫でるように和らげて行く。自然と治まりかけた涙を拭きながら、朝日は明石の指差す項目に顔を近づけて視線を向けた。

『ふふふ、ドクダミね。鎮痛と解熱作用があるから、風邪をひいた時には調度良いわ。煎じて飲むだけで済むから手間も掛からないし、炙って患部に塗れば虫刺されにも効くのよ。』

『はい。』

しばらく二人は視線を合わせずに、生薬の本とノートだけを眺めて会話していた。だが音という物に頼らずとも、二人はお互いの心の内が手に取るように解っていた。

この世に存在する全ての生ある存在は、一生をかけて育っていく。かつては顕微鏡でしか見る事が出来なかった祖先が、悠久の月日を経て今の自分に辿り着くその過程を振り返った時、そこに繰り広げられた生きるという壮絶な戦いとそこに掛けられた想いは、それを知ろうとした者に壮大な浪漫と今に生きる為に必要な先人達の試行錯誤を教えてくれる。

決してそこに存在するのが当然な訳ではない艦魂であるが、二人はそれをこの日、肌身を通して感じたのだった。

その日の夜、朝日艦から戻った明石は、いつもの様にお菓子と飲み物を調達してきた忠と日露戦争について語り合った。

戦後の育ちである一般人の忠がさも当然のように当時の最新兵器である機械水雷による戦果、すなわちロシア旅順艦隊旗艦のペトパウロフスク艦撃沈の栄光を誇らしげに語る中、明石がそれをぴしゃりと止める。

『解っていないなあ、森さん。良い？ 5月15日に八島艦やしまが触雷してから、12月13日の高砂艦まで、大小合わせて10隻も沈められたのよ？。おまけに八島艦が沈んだその日、吉野艦よしのと春日艦かすがが衝突して吉野艦が沈没してるんだから。その度に戦死者もでてるし、その犠牲の上にやっとの事でペトロパウロフスク艦をドカチンできたって事、覚えておかないとダメだよ。なんにもしないで勝手に沈んだんじゃないんだからねえ。』

『へえ……、そうなんだ……。あ、あはは。』

急に日露戦争時の海軍事情を熱弁する明石に忠は驚きながらも、その知識量と正確さが兵学校出身の自分を上回る事に笑みを引きつらせた。笑って誤魔化そうとする忠はその態度を取っておけば明石の機嫌が治まるとタカを括っていたが、今日の明石はそれでは勘弁してくれなかった。

そしてこの怒っているわけでも無く、ニコニコと笑いながらゆっくりとした口調で語りかける明石の口調が、言い返そうとした忠の戦意を急速に削いで行く。まして日付や艦名まで正確に言う明石の言葉に、忠は言い返す隙がない。

『艦魂だから言ってるんじゃないよ？ 森さんと同じ人間も、一杯死

んでるの。特にペトロパウロフスク艦は沈没までの時間が短かったから、司令長官のマカロフ長官本人すら一緒に戦死してるんだからね。機械水雷ってのはそれだけ怖い物なの。あ、森さん私が航海してる時、機雷警戒はしてくれてる？下手したら森さんも、弟のマサ君もみーんな揃って海の底になっちゃうんだからね。解ってる？』

師匠譲りの明石のお説教は、その夜遅くまで続けられた。

第二八話 「正直になってみた」

昭和15年2月17日。

ありあけ有明湾では連日の火の出るような猛訓練で疲れ果てた艦隊各艦が、肩を寄り添うように密集して錨泊していた。事故も無く各艦の損傷も無く、今日も無事に訓練が終わった事に安堵してその身を休める第二艦隊の各艦。

月明かりがひっそりと照らす各艦の甲板からは、時折部下に難癖をつけては尻を叩く閻裁判の刑の執行音が響く。おかげで尻には青いアザが消える事が無い水兵さんの艦隊勤務であるが、そのアザを艦隊マークとして認知し、逆にそれが無い者は風呂や洗濯を憚らなければならぬという世界的に見ても一風変わった雰囲気を持つ軍隊が帝国海軍であった。矛盾と理不尽以外の言葉が見当たらない閻裁判にもただひたすら我慢して耐える下級水兵達だが、こうして鍛えられた我慢強さが後の戦争で帝国海軍の底力を支える原動力となっていく。

そして上司からのイビリにも近いこうした仕打ちに、その心の内とは別に鍛えられていく部下、という構図は実は艦魂でも同じであった。

悲鳴と罵声と、櫓でできた精神注入棒が振り落とされる音が響く夜の有明湾。そして甲板で繰り広げられるその光景を遠目から見る限りは微塵も感じさせない程に、静かにその身を波間に浮かべる第二艦隊の各艦。

その中の1艦である神通艦じんつうの艦長室。

その部屋と隣接した艦長用浴室では、小難しい題名の本を読みながら湯船に浸かる神通の姿があった。いつもは首の後ろで小さく結った髪も今は解き、軍帽からしだれ桜のように伸びる長い前髪も今は後ろに向かって流している。あらわになった神通の額には大粒の汗が浮いており、湯船から舞い上がる湯気とは逆に汗は彼女の肌を伝って落ちていく。連日の訓練に彼女の身体にも疲労が溜まっているのだが、彼女の機嫌はそれに反して悪くはなかった。

最近では部下達の動きもだいぶ板についてきたし、訓練の成績だって良い。今日も今日とて艦隊司令部である第四戦隊が直卒していた防御軍を、二水戦はコテンパンに叩きのめしてしまったのである。お褒めの言葉を発しながらも眉をピクピクと動かして悔しさを滲ませていた愛宕あたごの顔を思い出し、神通は不覚にもニヤリと口元を緩めてしまう。

さらに嬉しい事にはつい先日、彼女の部下にまたまた新しい顔はつかぜが加わった。去る2月15日に、陽炎型駆逐艦の23番艦である初風はつかぜが、雪風率いる第16駆逐隊に合流したのだ。第二艦隊屈指の大所帯となってきた自分の部隊の事が、彼女の心をさらにくすぐった。

彼女の表情の動きにあわせて、額に浮かんだ汗がツートと伝っていく。神通は湯船から出して組んでいた足を組みなおし、本を掲げる腕とは反対の腕で顔の汗を拭った。吹き出る汗が目に入りそうになって少しだけ彼女をイラつかせるが、もくもくとあがる湯気と動作の度に浴室内に木霊する水音がそんな彼女を時間を置かずに宥める。汗だくで熱めの風呂に入って読書するのが最近ではすっかりマイブームになった神通。一度軽く肩を上下させて呼吸を整えると、彼女は再び平常心を取り戻して本に視線を戻した。

湯船の水面が静まっていくと同時に、今度はオルゴールのように天井やシャワーから落ちた水滴の音が響きだす。そして以前、明石に勧められて湯船に入れてみた蜜柑の皮が、なんともいえない甘酸っぱい香りを浴室内に充満させて神通の心をさらに和らげて行く。いつもは三角定規のように角ばった彼女の釣り目も、今は丸みの帯

びた優しい目になっていた。

これは良い。

そう脳裏で呟いた神通は、再びニヤリと微笑んで楽しい一時を堪能した。

一方、浴室の扉の向こうの艦長室では、神通の従兵の霰あられが浴室の扉の前に座り込んで、上司の着替えの用意と洗濯物となる物を折り畳んでいた。

帝国海軍の従兵の仕事は甘くはない。

当然、神通の着る服の洗濯だって彼女のお仕事だ。今日も昼の訓練では神通に大いにどやされて、お尻に竹刀の一撃を食らった霰。激しい訓練と怖い上司に、彼女も例に漏れずにヘトヘトに疲れている。汗でゴワゴワとした着心地になっている水兵服が、霰の疲労感をさらに倍増させる。役得として神通の次に湯船に浸かる事が出来るのは解っているが、さすがの霰にもその服の着心地が上司への不満を抱かせてしまう。

『お風呂入りたいわぁ……。早う、あがってくれやらんかいな……。』

ちょっと口を尖らせて呟く霰は、背後にある浴室へと繋がる扉に振り返って恨めしそうな視線を向ける。水滴の音が微かに響いてくるその扉は霰の心を少しだけざわつかせていく。だが彼女は決してのんびりと入浴している神通の人柄を疑っている訳ではない。

二水戦の隸下には3個駆逐隊があり、配備されている艦艇数は神通を除いて11隻。精強を誇るその部下達の中で、最も戦隊長を尊敬しているのがこの霰であった。最近では鬼の戦隊長である神通に、『でも』と切り出して意見する事が出来るようになった唯一の部下である霰。何事も波風を立てないように自分を押し殺す性格だった霰も、この頃はこうやって一丁前に文句の一つもでるようになった。それは紛れもなく神通の下で頑張ってきた成果であり、彼女自身もその事を理解して神通には人並み外れた強い尊敬の念を抱いていた。背後の浴室の扉から顔を戻し、小さく溜め息をして尖った口を戻した霰はすぐに休めていた手をまた動かし始めた。身体のすぐ脇に置いていた籠に洗い物を放り込み、真新しい着替えを畳んで扉の前にそっと添える。後は上司が上がってくるまで待つだけとなった霰は、床から立ち上がって小さな艦長室の中央にある机に歩み寄った。部屋の主は帝国海軍一の変わった性格の持ち主であるが、霰の目に映った机は良く整頓されている。すっきりと片付けられた机の上には、読みかけの戦隊日誌がポツンと開かれているだけであり、鉛筆すら転がっていない。その机の様子に上司の相方の隠れた真面目さを感じとり、微笑んだ霰は日誌のページをおもむろにめくっていった。仲間達の名前と供にあれこれと書かれる日常での出来事が、流し読みする霰の表情を少しだけ明るくさせる。

何か自分の事は書いてないかと興味を湧かせて目を通す霰だったが、やがて浴室とは別の扉から聞き慣れた声が近づいてくる事に気づく。霰が日誌から顔を上げてその扉に視線を向けると同時に扉は開かれ、そこに仲間と姉の姿を見た彼女は笑顔で二人を迎えた。

『あ、霞姉かすみさんに雪風ゆきかぜやないか。』

『おう、霰。ここにいてるって事は、やっぱり戦隊長はお風呂かあ。』
『よお、霰。』

そこにいたのは霰の実の姉である霞と、同じ戦隊所属の雪風であった。

犬猿の仲である二人だが、まあどういふ訳かこの二人は身体の波長が合うらしい。いつも口論の末に殴る蹴るの大喧嘩を始める霞と雪風だが、何かしようと思ひ立ったりした時の二人のタイミグは寸分の狂いも無い。大抵、霞が上司に声を掛けるときは雪風も一緒に声を発し、逆に雪風が前に進み出る時は霞も前に一緒に進み出る。艦型が全く違うこの二人なのだが、その行動パターンは双子の姉妹のように似ているのだった。

『二人ともどないん？』

ニツコリと糸目になって笑う霞がそう声を掛けると、両手に真っ赤な果物を抱えた霞が口を開いた。

『面会に行った私んトコの乗組員が、りんご貰ってきたんだ。だから炊炊所で余ってた分を、ちょっと失敬してきたんだよ。』

そう言って前に出した彼女の両腕には、涼しげな感じの真っ赤なりんごが抱えられていた。手毬のように大きく育ったりんごは室内の電灯の光りでピカピカと輝き、霞の口の中に唾液を湧かせる。思わず生唾を飲み込んだ霞だったが、彼女の目の前のりんごをどかすように今度は雪風が割り込んできた。その腕の中には常夏を感じさせる橙色の果物が抱かれており、ほのかに発する清涼感溢れる香りが霞の鼻をくすぐる。

『アタイんどこでも、蜜柑を貰ってきた乗組員がいてさ。ちょっとだけギってきたんだよ。猿のりんごなんかよりはウマイぞ。』

いつもの憎まれ口を吐きながらも、そう言った雪風はニツと片方

の口元を吊り上げて笑った。

霞とは仲が悪い事は言うまでも無いのだが、決して雪風は誰にでもそうではなかった。いつもちよっと口をへの字に曲げてぶっきらぼうな物言いをする雪風だが根は優しく素直であり、あさしお朝潮型の艦魂を格下と言い切る事はあってもそれを理由に蔑む様な事は無かった。口の利き方に関しては厳しい神通にはいつもその事でげんこつを貰っている彼女だが、その姉御肌でやんちゃな性格は決して仲間内では嫌われていない。霞にとっては元気のいい友達であり、雪風にとってもまた神通のそばで常に笑いながらも真面目に励む霞は大切な友人であった。

ただ一つ、霞を始めとした二水戦の艦魂達の悩みは、そんな雪風がどうしても気を許せない人物が同じ戦隊にいた事だった。笑みを交える雪風と霞だったが、先程の雪風の言葉に眉を吊り上げた霞が雪風の尻を蹴っ飛ばす。

『いって！』

『アンタの腐った蜜柑よか、だいぶマシだよ！』

『なにを、猿め！！』

見開いた瞳でお互いに睨み合う二人はどちらからという事も無く、それぞれの腕の中にあった銀バイしてきた品を霞に押し付けた。いきなりの物持ち役になってしまった霞は腕に山盛りに積まれたりんごと蜜柑を溢さぬ様にと、小さな悲鳴を上げて身をかがめる。だがそんな霞を無視して、手が自由になった雪風と霞は取っ組み合いの大喧嘩を始めた。お互いの髪を引っ張り、頬に爪を立てて掴み合う二人。

いつもこの喧嘩をげんこつで黙らせる神通は、今はお風呂に入っていて対処不可。身体を二人の間に入れて止めても、どちらからという事も無く止めようとする者のお尻に蹴りが飛んで来るのを、霞を含めた二水戦の所属の艦魂達はこれまで何度も見てきた。

霰は騒がしい二人を前にして小さく溜め息を放つと、とりあえず腕の中にあるりんごと蜜柑を背後に有った机の上に置いた。ボカスカと殴りあう音と醜^{みにく}い二人の怒号を背に、机の上で転がろうとするりんごを押さえる霰。さて、どうやって止めようかと、頭を捻る霰だったが、残念ながらトロい思考回路の持ち主である彼女には一向に策が閃いてこない。

右手の人差し指の先を唇に当てて、『うん……。』と声を発して天井を仰ぐ霰だったが、そこに助っ人が現れた。先程雪風と霞が入ってきた扉がまたしても思い金属音を響かせて開くと、そこにはこの部屋の主である木村大佐が目丸くして立ち尽くしていた。

「自分の部屋の扉を開けたら2人の少女が取っ組み合いの喧嘩をしてました。」等という経験がある人など、世界広しと言えどもどこにこのような物か。木村大佐は自慢の口髭を指先で撫でながら、頬に汗を浮かべて部屋に入った。取っ組み合う二人はそんな彼をチラッと横目で認めるも、すぐに目前にある憎き天敵の顔に視線を戻してドンパチを再開する。床で転がるその二人を視界の端に入れながら、木村大佐は壁に背を貼り付けるようにして横歩きで部屋の奥の机の前にいる霰の下へと歩み寄った。

『木村大佐、お邪魔しとるどす。』

『お、おう……。またやってんのか、こいつ等?』

二水戦所属の艦魂達と同様につぶさに二人のこれまでを見てきた木村大佐は、呆れ顔で二人を見下ろしながら霰に話しかけた。

スケベジジイの名で神通から蔑視^{べっし}される木村大佐だが、その人柄の良さは最近では駆逐隊の艦魂達から気に入られている。訓練の合間に神通艦の艦上で輪を作って休む少女達の中に彼は陽気な挨拶を伴って入って行く事が多々有り、当の少女達も彼を仲間外れにする

ような事はしなかった。顔を合わせる度に一緒に風呂に入ろうだの、部屋に来て酌をしてくれだのと言いつつ彼であるが、それを冗談と受け取る事が出来るようになった少女達からすれば、彼は楽しいオジサン以外の何者でもなかったのである。

ただ彼の性格に関しての困った所に、その冗談の矛先が神通にまで向いてしまうという所が有った。生真面目な神通は彼の言葉を冗談と受け取らず、すぐに自慢の竹刀を振り回して彼を追い掛け回す。そして帝国海軍でも随一の癩癪持ちである神通はすぐには怒りが治まらず、その怒りの捌け口は彼女の部下達になってしまうのだ。彼を退治した後は必ずと言って良い程ただでさえ厳しい神通の教育が恐怖を伴ったシゴキへと変わってしまい、その事が霰を含めた二水戦の駆逐艦の艦魂達における悩みの種だった。

元々相手に対して蔑むような接し方を知らない霰は、そんな木村大佐にちょっと眉をしかめながら微笑んでみせる。実の姉と仲間の諍いを見せてしまった事に対する恥ずかしさを覚える霰であったが、木村大佐は霰の心の内を悟って笑みを返してやった。

今更恥ずべき事なんかない。艦魂と人間であっても、同じ二水戦の仲間じゃないか。

同じ言葉を脳裏に浮かべた二人は、お互いに笑い合いながら会話を始める。

『今日はどうしたんだ、霰。おじさんになにか用か？』

木村大佐は腰に両手を当て、背中を軽く曲げて霰と視線の高さを合わせた。上下の唇よりもまだ厚さがある立派な彼のカイゼル髭が、霰にはまるで彼の口の形の様に見える。ピンと立った髭先は鼻の高さ程にまでそびえ立ち、彼が笑顔である事を充分過ぎる程に霰に伝

えた。

やがて霰もまた垂れた糸目を瞑るつむようにしてニツコリと笑い、木村大佐に向かって口を開く。

『はい。お風呂です。』

『な、なにに！？ 霰、ついに決心してくれたのか！？』

霰の声耳にするや、木村大佐はすぐに霰の両肩を横から掴んで言った。予期しなかった彼の行動に、霰は目を点にして引きつった声を返す。

『は、はい・・・？』

『そうか！ 一緒にお風呂入るか！ うん、いいぞ！』

木村大佐はそう声を上げるなり鼻の下を伸ばして、いかがわしい事この上ないといった感じの目を輝かせた。

そしてそれとなく二人のやりとりを耳にしていた霞と雪風は、お互いの顔に向かって叩き込もうとしていた数度目になる拳を止めるふと見た先には、木村大佐に両肩を掴まれて顔を近づけられている霰の姿があった。先程耳に響いてきた木村大佐の声と、獲物を捕らえたような木村大佐の腕。それを認めた霞と雪風は立ち上がると、すぐさま木村大佐に背後から飛びついて羽交い絞めにした。

『な、なにやってんですか、木村さん！！』

『オッサン、霰から手を離せよ！』

『のわっ！ お前達、何をする・・・！？』

雪風に両手の自由を奪われて霞に首を絞められる木村大佐は、霰から離されると2秒と経たないうちに床に組み伏せられた。戦隊内の柔道の武技教練においては常に1位を奪い合う雪風と霞にかかっ

ては、大の男である木村大佐も抵抗のしようが無い。大切な妹、仲間を守ろうと瞬時に憎しみを忘れて一致団結した二人の捕り物劇は、まるで映画の1シーンのように鮮やかだった。木村大佐を完全に制圧した二人は、お互いにキツと力の入った目を合わすと小さく頷く。二人の活躍により、お互いにとって大切な存在である霞の貞操の危機は救われた。良かった、良かった。

呆けた顔で一連の光景を見ていた霞は、そこに抱いた姉と友人の想いを無視するかのよう一度首を捻る。トロい性格の彼女には二人の危惧した未来が予想できなかったのだが、とりあえず先程木村大佐の言葉を受けて彼の勘違いを正す事にした。

『ウチやないどす。戦隊長がお風呂に入ってやはるんどす。』

『え？ あ、神通が風呂に入ってるのか。なんだ、そうか……。』

彼がそう言うと同時に、いかがわしさを纏っていた表情が彼の顔から消えていく。力なく頷く木村大佐を認めた霞と雪風は、彼の変化に安堵してそれぞれが掴んでいた手を離れた。蔑むような二人の視線を背に受けてゆっくり立ち上がる木村大佐。立ち上がって服のしわを正す彼と3人の少女達の耳に、浴室へと繋がる扉から霞が言った事を証明するかのような神通の入浴で放たれる水の音が響いてくる。

ほらね？と言わんばかりの顔で、霞は木村大佐に僅かに首を傾げて微笑んでみせた。彼の背後で両手を頭の後ろで組む霞と雪風も、同じような思いを込めて蔑むような視線をおくりながらも小さく口元を緩ませる。元より雪風と霞にも彼を神通のように完全にやつつけてしまう気など無く、やっと面白いおじさんに戻った事に喜んだのである。

ところがこの木村大佐という男は自分に対して非常に正直に生きる人であり、その場の空気など露知らぬといった感じで髭をピンと立てると再びいかがわしい目つきで浴室の扉に顔を向けて言い放った。

『おほ！ 神通、そこか！』

そう叫ぶなり彼はその人となりからは想像も出来ないほどの素早さで、浴室の扉に跳びつこうとする。だが当然の様に控えていた雪風と霞、そして霞までもが彼の身体に纏わりついてそれを止めた。

『あ、あかんや、木村大佐！！』

『うわあ！！！！ 勘弁してくださいよ、もお！！！！！！』
『ふざけんな、オッサン！！！！』

木村大佐の身体を全力で拘束する3人の表情には鬼気迫る物がある。だがそれも当然だ。彼女達の上司の危機である以前に、なにによりそれを許したらその上司に自分達が何をされるか解った物ではないからだ。

ただでさえ癩癪^{かんしゃく}持ちの上、霞と霞には荒れていた頃の神通の記憶もある。下手をしたら神通は彼女達の艦の火薬庫に入って放火しかねない人物であり、そうなればもちろん艦は轟沈する。すなわち艦魂である彼女達にとっては、死の制裁を食らってもおかしくないのである。必死の形相で止める彼女達の顔も、無理の無い事であった。

ところが木村大佐はそんな彼女達の憂う心など、文字通り眼中に無かった。彼の目の前にある扉、手を伸ばせばすぐに届くそのドアノブを開いた先には、彼が望む神通の入浴姿がある。日ごろから短気ですぐにげんこつを振り回す等、決して優しいとは言えない性格の神通だがみてくれはスラッと長身な美人のお姉さんである。正常な男子ならばその裸体を一度は拝んでみたいというのは決して口に

出せない夢と希望のような物だが、こと彼に至ってはそんな恥じらいも謙虚さも全く無い。そこに美人が入浴している、その事実だけが彼を浴室へと突貫させる衝動に駆らせた。なんとも困った人である。

『くっそお、頼む！ 離してくれえ!!』

両手両脚に海草の様に纏わりついた少女達を、なんとか振り払おうとする木村大佐。だが命の危機に発展するかもしれない彼の行動は、とても彼女達には容認できる物ではない。木村大佐と扉の前に割って入り、正面から彼の胴体にしがみついて止める霞はなんとしなくても彼の行動を阻止する為に、究極の自己犠牲を払うこと決めた。歯を強く噛んで木村大佐の胸に顔を埋めるようにして彼の身体を拘束していた霞は、少しだけ顔を上げて勇気を振り絞って声を上げる。

『ウ、ウチと一緒に風呂入ってあげまっしゃろから、ここは勘弁おくれやす・・・!!』

『何を言ってるのよ、霞!!』

『こら、オッサン!! いい加減にしろよお!!!!』

涙ぐましい霞の決意の言葉に霞と雪風は声を上げ、彼を掴んだ手にさらに力を込める。だが未知なる物への探究心に火がついた木村大佐には、霞の必死の願いも届かなかった。霞が押さえる右腕を必死にドアノブに伸ばそうとしながら、しかめっ面となった彼は声を返す。

『風呂に入ってるのは神通だぞ!? お前達みたいなチャチな身体の子じゃないんだ! 離してくれえ!!』

バキッ!!

木村大佐の背後にいた霞と雪風、そして正面から圧していた霞もが、彼女達の気苦労など鼻にもかけない彼の声を受けてその頭部目掛けて無言で同時に拳を放つ。せっかく勇気を振り絞って言ってみた霞もさっきまでの泣き出しそうですらあった表情から、今は眉を吊り上げて怒りの色を明確に出しながら木村大佐を睨みつけている。露骨なスケベ心と失敬な物言いの彼には、さしもの霞からも今だけは尊敬の念が消えうせた。

それでも一瞬だけ歪んだ表情をした木村大佐は苦痛に歪めた表情を持ち前のタフさで正すと、すぐにまたいかがわしい目つきに戻ってドアノブに手をかけようとする。だがこのままでは埒が明かない事を悟った彼は、彼女達に普段使っている餌をネタとして使う事を思いついた。

彼の名を出せば、この3人も沈黙してくれるに違いない。

そう考えた木村大佐は腕から力を僅かに抜いて、白い歯を見せて微笑みながら口を開いた。

『な、なあ、頼むよ……。こっそり覗^{のぞ}くだけだよ……。そうだ！ 上手くいったら、森^{もり}少尉をお前達の艦に出向かせてやる！』

もちろん神通艦艦長である彼に、明石艦乗組みの忠^{ただし}をどうこうできる権限は無い。佐官の最上級の立場にあるとはいえ、彼の権限は神通艦の艦内に限定されている。ハツタリである。

だが帝国海軍歴がまだまだ浅い3人にはその事が良く解らない。木村大佐が言い終えるとすぐに、そのハツタリに見事に騙される者が現れた。

『おい、オッサン！ マジか……！？』

雪風はそう言うと、木村大佐の左腕を掴んでいた手からゆっくり力を抜いた。まずは第一の関所を破った、と木村大佐は悟られないようににんまりするも、いつぞやの銃剣術の武技教練で忠に淡い憧れを抱く雪風はそんな彼の表情に気づかず、甘い一時の可能性を得て心を揺れ動かしてしまふ。何より忠は明石^{あかし}と常に一緒にいるし、明石の親友である上司をカヤの外にして彼と二人っきりとなれる事など、駆逐艦の艦魂である彼女達には滅多に無い。それを踏まえた上でその機会を作ってくれるという艦魂ではない木村大佐の言葉は、雪風の動揺を誘うのには充分だったのだ。

『おお、おじさんに任せなさい。良し、とりあえず雪風のトコには、今度行かせよう。』

いけしゃあしゃあと先程の「上手くいったら」という言葉を覆す事を口にする木村大佐だが、彼の言葉に雪風は『その話、忘れんなよ・・・?』とだらしくニヤけた表情で言うとその嘘には気づかずに彼の左腕から手を離れた。

仲間の裏切りを目の当たりにした霞と霰は、少しだけ自由を得た木村大佐の身体を抑える為、さらにその手に力を入れながら雪風を糾弾する。

『ア、アンタ、何言ってるのよ!?!』

『ゆ、雪風! 戦隊長をナメたらあかん!』

二人の声にも雪風はニヤけた表情のまま、僅かに頬を赤くして波打ったクセ毛の髪を撫でている。『フヒヒ・・・。』と危ない声で小さく笑う雪風だったが、その姿は木村大佐の作戦を大いに助ける事となった。

先程雪風を糾弾した霞だったが、よくよく考えるとこのまま木村大佐を抑えても、雪風には神通のげんこつと引き換えに忠と二人つきりになる時間が与えられてしまうであろう事を悟った。霞も忠には懂れを抱いてしまっているが、館山沖で雪風と彼が随分と距離を縮めた事を思い出した彼女は焦った。

ただでさえあの時の一件で忠のお互いに対する距離には差がついてしまっている。この上さらに差を引き離されては、もはや勝負にもならないかもしれない。

そんな事を思った霞は手に込めた力を緩め、それに気づいて視線を向けてくる木村大佐に少し震えるような声で言った。

『の、覗くだけですよね・・・？』

『か、霞姉さんまで、何を言うとの！？』

『もちろんだ！ バレないようにするさ！』

実の妹の必死の形相を無視するかのように、霞もまた木村大佐の言葉に頷くと掴んでいた手を離した。

こうなっては霞も分が悪い。

朝潮型駆逐艦十姉妹の末の妹である霞艦だが、その艦魂である霞の身の丈は150センチあるかないかの小柄な体格である。自分よりも体格の良い男性の木村大佐を止める事はできないし、当の木村大佐もその気になれば彼女を振り払う事など容易い。

だがさすがに彼もか弱い少女をぶっ飛ばすという行為を良しとはしなかった。既に妻も子供もいる木村大佐は、それぐらいの節度は守ろうとする理性もまた残っていたのである。しかしそこまで思いやる心があるものの、しっかり初期の目的を忘れていない木村大佐はそっと霞の肩に手を置いて話しかける。

もう一押しだ。

そんな彼の心の内は霞にも伝わり、彼の声が出る前から霞は首を左右に振っていた。

『霞、頼むよお。森少尉もちゃんと連れてってやるからさ、な？』
『あかんどす！！』

首を勢い良く振った霞は、言い終えると再び木村大佐の胸に顔を埋めた。彼の左右で不気味な笑い声を上げてニヤニヤしている姉と友人を、視線に入れないようにする為にわざとそうしたのだった。霞にとって忠は初めて話した若い人間の男性にして、いつもおいしい食べ物を用意してニコニコと接してくれる気の良なお兄さんであった。姉妹はいても兄弟がいけないという艦魂社会の一員である霞には、その言葉通り彼は兄のような存在である。

しかし普段は明石の傍らかたわに常にいるし、二人で話すことなど滅多に無い。木村大佐の提案は、そんな彼女の叶わぬであろうと諦めていた願いでもあった。ただ霞はそれを表に出す事も無ければ、口にする事も無い。それが誰かの迷惑に繋がる事を、極度に恐れているからである。

そしてこんな性格の霞の事は、木村大佐と実の姉の霞には良く解っていた。神通の恐ろしさがすっかり頭から抜け落ち、忠が訪ねてきたら何の話をしようか等と考えを巡らしていた霞は、そんな妹の心中を察して声を掛ける。

『霞え。森さんとゆっくりお話しとか、してみたくないの？』

腰を少しだけ折って顔を近づけてくる霞に対し、霞は顔を木村大佐の胸に埋めて両手で彼の胴体を抑え込んだまま声を返した。

『せ、戦隊長に怒られるわ!』

『バレなきゃ大丈夫だって。それに森さんも、霞の事は気に入ってるみたいじゃん? この間も、嫁にするなら霞が良いっていったしい。』

『う……。』

霞の言葉を受けた霞は短く呻き声を出すと、木村大佐の胸に正面から貼り付けていた顔を離れた。視線を足元と霞の向にむけて不規則に配りながら、木村大佐の腰の辺りを掴んでいた手からちよつとだけ力を抜く。霞にしても、その機会があるなら味わって見たいというのが正直な所なのである。しかし戦隊長を尊敬する気持ちもまた同じであり、霞や便乗して説得してくる雪風の言葉を受けても、霞からはすぐには迷いが消えなかった。

ところが霞が迷って力を抜いた隙に、木村大佐はついに制止を振り切ってドアノブに手を伸ばしてしまった。横を通り過ぎていった彼の背中に、未だに迷いが消えない霞は止める事も躊躇^{ためら}ってしまう。現れ方は違えど、自分に対して正直に行動する彼を霞は間違っているとは声を大にして言えない。なぜなら自分に正直に行動した事が、霞にはないからである。

すでに全てを忘れて見返りの前途を想像し、自分の世界に入ってしまったっている霞と雪風を視界に入れていた霞は事ここに至って意を決し、事の顛末を見届ける事を決めた。

もし上手くいけば、あれやこれやと相談に乗ってもらえるだろうか?

姉と仲間の例に漏れず、霞もまたそんな言葉を心の中で呟いて無意識に小さく口元を緩ませる。

だがそこにいた全員の願いは、自分勝手なわがまま以外の何者でもない。そしてそれがまかり通る程、世の中というのは甘くなかった。

木村大佐がドアノブに手を掛け、ゆっくりと開こうとした刹那、ドアは射撃する艦砲のような音を立てて内側から勢い良く開いた。その音に続いて開いたドアが木村大佐の頭を打ち付ける鈍い音が響き渡る。木村大佐は悲鳴を上げる間も無く、頭から軍帽がポトリと落ちると同時に目を回してその場にひっくり返った。

霰、霞そして雪風の3人は状況が理解できずに呆然としながらも、床で気絶する彼からドアの向こうに視線を移す。そこにあったのは、胸元のラインでバスタオルを巻きつけた神通の、日本刀のようにギラついた瞳を浮かべる顔だった。僅かに右足をつま先立ちさせて明らかにご立腹の表情で睨みつけてくる彼女に、3人は木村大佐を止めた時に憂慮した事態を再び思い出した。同時にサーッと3人の顔色は青くなり、首筋には冷や汗がダラダラと流れていく。

どうやら今までのやりとりは、全て神通の耳に入っていたらしい。

その事を思い知り、ついさっき誤った判断をしてしまった事を激しく後悔する3人だったが、残念ながらも遅い。

『・・・・・・・・』

神通が怒った時に見せる、顎を少し引いて上目遣いで睨みつけるクセ。それを嫌と言うほどに身体で教えられてきた彼女達は、もとにも神通の顔を見ることが出来ない。定まらない視線で俯く3人だったが、やがて霰は力の入らない脚をなんとか動かし、転びそうになりながらも床に置いていた神通の着替えに飛びついた。目に付く

埃を手でふき取って両手で上司の足元に向かって差し出す霰。

だがふと視線を神通に合わせてしまった所で、彼女の表情は引きつったまま凍りついた。

『せ、戦隊長……。あう……。あ、おき、お着替えー。』

『ゼンイン、ソコニナオレ……。』

まるで戦艦の主砲の旋回音のように低い声で神通は言った。その声にはもはや感情が籠っておらず、怖い上司である神通が完全に殺戮を目的とする機械に変貌してしまった事を3人に伝えるのは充分だった。霞と雪風は、床に腰を落として俯いている霰の両横に力の入らない足どりで歩み寄ると、へたり込むようにして座った。その間、彼女達は神通の顔を見ることは出来ない。あまりの恐怖にガチガチと歯を鳴らし、肩を震わせるながら神通の足元を視界の端に入れるのが関の山だった。

泣き顔の3人は激しく自分の誤った判断を心の中で自己批判していたが、残念ながらそれは状況を好転させてくれる事は無い。もう遅いのだ。

刹那、神通の怒号と共に彼女達の頭に怒りの鉄拳が振り下ろされた。

『こんの馬鹿がああ!!』

夕闇がその濃さを増し、煌々と輝く月が空の色を濃い青紫色に変化させる今日の夜空。キラキラと輝く星々と波間に照らされる中、

神通艦の艦尾旗竿の辺りには常人には見えぬ淡く白い光りが収束する。大きく輝いたかと思うと、すぐに弾けるようにして散乱していく白い光り。そしてその中から現れたのは、一升瓶を抱えた那珂^{なか}珂だった。

有明湾のある地ならではの芋焼酎を調達できた那珂の機嫌はすこぶる良い。

以前一度飲んだだけだが、その独特の濃厚な味わいと香りは那珂と神通を唸らせた。二人は酒癖こそ大人しいが、こと焼酎には目が無いという根っからの酒好きでもあった。お湯割りは序の口として、時にはお水で割った状態で数日放置してから飲むという通振りを発揮する程である。

さらに今日は七戦隊、そして姉が率いる二水戦と共同して防御軍を叩きのめした訓練の事も、那珂の機嫌を良くさせていた。静かな物腰の大人の女性像が色濃い那珂も、今はダンスを踊るかのような軽やかな足取りで甲板を歩いてく。

久々に今日は水雷談義とでもいこうか、と鼻歌混じりで早くも話題探しに夢中だった那珂だが、自分の分身と同じ位置にある艦尾主砲に奇妙な光景を目にして歩みを止めた。

そこには姉の部下である3人が、左腕を後ろで縛られて横一列で正座させられている。膝の前に水兵帽を置き、上着を胸が見えない程度に捲り上げて紐で結んでいる3人は、すすり泣きながら墨汁のついた筆を右手にしているという、なんとも奇妙な光景だった。

そして3人の横では、筆を剣先に縛り付けた竹刀を持つ姉の姿があった。

さっぱり状況がつかめない那珂は、床で正座する3人を横目でチラチラと見ながら姉に歩み寄って声を掛ける。

『じ、神通姉さん・・・？』

『おう、那珂か。』

幸か不幸かこの人と姉妹を組んで10年以上に及ぶ那珂は、姉の向けてきた顔と発せられた声に彼女が事の他ご立腹である事をすぐに察した。

どうやらこの3人は何かしでかしたらしい。

そう考えた那珂は両腕で抱いていた一升瓶を一度持ち直し、神通の顔色を窺うように顔を近づけて言った。

『こ、この子達、どうかしたの？』

『ふん……。この馬鹿供は、仲間を売った。』

『え……。？』

『武人としてあるまじき行為だ。だから腹を切らせている。』

神通是那珂に視線を移さず、床で俯いたまま涙を流す部下をギリと睨みつけたまま答えた。

ふと那珂は神通から視線を落とし、彼女の足元に近い位置で正座する霰を見る。

霰は大きなタンコブを頭の上に作り、捲り上げた服があらわにする霰のお腹にはぶつとい墨汁の線が真横に走っていた。霰の前に置かれた筆で書かれたにしては線が太すぎ、恐らくそれは何度もやり直しさせられたのであろう事を那珂は察する。そして霰は首の付け根にも真横に走る墨汁の線が走っている。神通によって介錯かいしゃくされたのであろう事は明白だった。

この光景が繰り広げられる理由が解らないが、神通の機嫌を含めると聞かない方が身の為だと判断した那珂は大きく溜め息をするのみだ。ただ昔なら即座に半殺しにしていた神通が怒り心頭であつてもこのように軽い罰で済まそうとしている事は、那珂には少しだけ

喜ばしかったりする。

そして実はこの光景、那珂も自分の艦内で何度も見てきており、それが帝国海軍において人間達が行う刑の一つである事を彼女は知っていた。

日本男児に伝わる責任の取り方、戦国の世から伝えられるそれは切腹に決まっている。もっとも陛下の赤子である同胞を、上司という立場と権限で本当に自刃させることは出来ない。だから墨を使って切腹させるのだ。

その内に霰を成敗した神通は、その隣で同じくタンコブを作って涙する雪風に歩み寄った。

視界に入った上司の足元に身体をビクンと震わせた雪風は、まだ縛られていない手で膝の前に置いていた筆を取る。筆先を腹に向けてるようにして筆を握った雪風、ごくりと生唾を飲み込んで決意を決めるとその筆を自らの腹に向けて突き立てた。冷やりとした墨汁の感触に目を瞑って耐える雪風。すぐに首筋にも同じ感触が襲ってくるはずだが、先に果てた霰の時と同じように神通はすぐには介錯をしてくれなかった。

『なんだそのツラは？もっと悔しそうなツラをしろ。やり直し、基い。』

『ぐすつ……。はい……。』

雪風はそう言うと言っていた筆を膝の前に置いている硯すずりにつけて墨汁をたっぷりと湿らせ、再び逆手に持って自らの腹に突き立てた。先程よりも表情に力を込め、強く歯を噛んで切腹してみせた雪風だったが、またもや神通は竹刀を振り落とそうとはしなかった。

『そんなに肩に力を入れてたら首を刎ねれん。切腹の仕方すら知らん

のか、馬鹿者が。やり直し、基い。』

3人はこんな調子で、難癖と恐怖に苦しみながら切腹の儀を続けさせられた。

那珂は心配そうにその光景を眺めるものの、彼女達の上司が下した判断である事を思っただけで口は出さなかった。なぜならこれこそが帝国海軍艦魂の世にも名高い私立神通学校の一端であり、違反した者は容赦の無い厳しい罰則を受ける事になるのだ。

だがその実、神通の教育を受けた者達にとかく優秀な者が多いのも事実である。那珂の隷下にいるすっかり型遅れになった吹雪型駆逐艦も、艦隊運動や襲撃運動では若い二水戦には決して負けていない。その土台を築いたのは、荒れていながらもしっかりと教えを授けてきた神通の功績が大きいのだ。足元で何度も腹を搔っ捌く少女達には申し訳ないが、那珂はその光景に無意識に微笑んでしまう。

頑張れ。

そう脳裏で短く呟くと同時に、最後の霞の首を刎ねた神通が話しかけてきた。

『那珂、いくぞ。』

神通は足元で墨まみれになった少女達には目もくれず、短くそう言うと言葉と立ち去ろうとする。それはつまり、許しがあるままでそのまま馬鹿面を晒せという、神通の無言の命令なのであった。

ちょっと可哀想に思う那珂だったが、上司の命令では仕方ない。俯いて咽び泣く3人に歪んだ笑みを向けると、那珂も神通の後を追って去っていった。

晒し首となった3人は、結局朝までそこに繋ぎとめられた。神通艦の甲板が見える艦からはその艦の艦魂達が双眼鏡片手に大笑いする声が響き、3人は翌日には「ハラキリ三人衆」という惨めなレッテルを貼られてしまった。特に霞は第18駆逐隊の、そして雪風は第16駆逐隊の司令駆逐艦であった為、両駆逐隊のメンツは丸潰れとなった。しばらくは四水戦や第8駆逐隊の面々から笑い者扱いされる二人であるが、霞にも不運な事があった。

お腹と首筋に伝わる墨汁の冷たさと、遠くの艦から聞こえてくる笑い声、頭のとっぺんにズキズキと残る激痛、そしてベトついた服の着心地。

雪風と霞が謝るものの、滅多に泣かない霞もこの時ばかりは声を上げて泣いた。結局この日、霞はお風呂に入ることが出来なかった。その場の流れに任せたとは言え、自分の気持ちを正直に出してみた彼女への、高い高い代償であった。

第二九話 「忘れられた診療」

昭和15年2月18日、0846。

軍艦旗の掲揚も終わり、毎日の診療も終わって一休みした後の課業開始。乗組員達が一斉に持ち場で上司から指示を受け、各々の務めに励む。今日も青空で迎えてくれた呉の朝は、彼らの顔に覇気を漲らせてくれる。

そんな朝の明石艦発令所では机に向かい始めた忠に、重い薬箱を両手で持ち上げた明石が声を掛けた所だった。

『じゃあ、行つて来るね。』

呉に着いてから毎日続けられてきた光景。

朝日の専門教育が既に実を結びつつあるのか、明石の顔からは以前にも増して子供っぽさが消えている。若干の疲労感を滲ませた表情で薬箱を持ち上げていた明石の顔がまだ記憶に新しい忠は、その成長を褒めるかのように笑みを向けた。

『おう。いつてらっしゃい。』

『うん。いつてきまあす。』

笑顔でそう言った明石は、言い終えると同時に白い光りをその身体へと纏い始めた。淡く優しい感じの光りは輝きを増し、眩しさに耐えかねて忠が目を細めると同時に彼女の身体ともろともに消える音も発せず起きる閃光と、細かい光りの玉が粉雪のように振り落ちて消えていくその余韻が、忠に彼女が艦魂である事を伝える。

朝日の教育は決して優しい物ではないらしく、夕方頃になって部屋に帰ってくる明石はいつも疲労の色を顔に浮かべている。だが最

近はあれを買って来いとかこれが食べたいとわがままを言う事も無く、部屋に入ってすぐに彼女は自分のノートを開いてその日の復習をするのだった。出会った頃なら今日のような別れ際にはなにそれを用意しておけと言っていた明石が、発令所で一人ポツンと机に向かう今の忠には少し懐かしい。

少しは骨が出てきたのかな？

そんな事を思っただ鉛筆を握り、目の前の机に走らせ始める忠。

最近は何か明石が自分とドンドン距離が離れていく感を彼は覚えていた。わがままな相方よりも一人前の軍医に近づく事。それは決して悪い事ではないが、どこか自分だけが置いていかれて行くような感覚が、忠には少しだけ寂しかった。なんだかんだ言いながら明石は日進月歩で成長しているが、忠自体はなにか成長したという感じがなからである。

こんなんで良いのか、オレ？

心の中でふとそう呟いた忠は無意識に昭和12年の大ヒット曲、同郷の星でもある淡谷のり子の「別れのブルース」を口ずさんでいた。

『窓を開けくればく、港がく見くえるく……。』

発令所を吹き抜けていく今日の風が、彼の視線が向けられる書類の端をひらひらと靡かせる。そしてその風が彼の歌声を乗せて通り抜けて行く、発令所の左舷入り口の向こう。擬装^{ぎそう}栈橋であるそこには、昨日試験航海から帰ってきたばかりの新品同様に光り輝く大型艦が横付けしていた。

莊嚴な雰囲気を持つドアも慣れてきた明石は、いつもの通りに中にいる部屋の主からの返事を耳にしてドアを開けた。

舷窓から傾きの激しい朝の陽の光が差し込む、軍艦にしてはちょっとノスタルジックな家具や絨毯じゅうたんがある部屋。そして部屋の中央に置かれた向かい合ったソファに、今日も腰掛けてゆっくりと紅茶を飲む朝日の姿を明石は認める。

『おはようございます。』

『おはよう、明石。』

綺麗に背筋を伸ばしてカップを口に近づける朝日は、静かに朝のティータイムを楽しんでいる。英国生まれだからなのかこの朝日はとにかく紅茶を飲む一時をなによりも大事にする人で、朝起きてすぐの一杯目に始まり、朝食後と午前中の休憩、昼食後と昼休みのシメ、午後の休憩と夕飯後、と一日になんと7回もティータイムを設けているのだった。もちろんそれは人間が飲む本物の紅茶であり、連合艦隊旗艦の長門ながとを使って司令部で飲まれている物を失敬してきて貰った物だ。

朝日の向かいの席に腰を下ろす明石だが、朝日はそんな彼女を放っておくかのように一人紅茶の香りを楽しむ。ここ数日の教育で白紙のページが少なくなってきたノートを明石は取り出すと、鉛筆と一緒にテーブルの上に用意していつでも勉強できる準備をするが、すっかり自分の世界に浸っている朝日は目を閉じて舞い上がる湯気に顔をゆっくりと左右に振る。

『ん〜、幸せだわあ。またこうやって、六甲山系ろっこうのお水を使った紅茶を味わえるなんて・・・。』

目を閉じたまま朝日は口元を緩めてそう言うと、手にしていたカップを口に運んで僅かに傾けた。今か今かと朝日の言葉を待っていた明石だったが、放たれた言葉にちよっと拍子抜けして肩から力が抜ける。

朝日は明石の眼前にいるにも関わらず、一人別世界にいるかのようになんとか喉を通る紅茶の余韻を味わっている。帝国海軍の5分前の精神は朝日の故郷である大英帝国にその源流が有るのだが、いつも彼女は紅茶の時間だけはギリギリ一杯まで使おうとする。おかげで教えを受ける側の明石は常に今のような手持ち無沙汰な時間を持たされてしまうのだが、それはそれは美味しそうに紅茶を飲む朝日の顔が彼女は好きでもあった。目尻や口元に少しでも浮かぶしわと絵に描いたように優しい朝日の微笑が、明石の表情も自然と笑顔にさせてしまう。

『大陸のお水は、やっぱり美味しくなかったんですか？』

『ふふふ、ちよっと硬いのよね。おかげで紅茶の香りも味も、満足できる所まで持っていくのは苦労したわ。』

明石の質問に朝日は背筋を曲げる事無く、僅かに顎あごを引いて味を噛みしめるかのようにして答えた。よほど帝国海軍が補給したお水が彼女の口に合う紅茶に貢献しているらしい。小さく朝日の表情を笑う明石に、朝日はちよっとその青い瞳を覗かせて口を開いた。

『帝国海軍が使ってくれている六甲山系のお水は、香気のしつかりした茶葉の良さが良く引き出されて助かるわ。こんなに良いお水と巡り合えるなんて、きつと英国にいたら味わえなかったでしょうね。』

朝日はそう言いながら、カップの底に溜まった最後の一口を名残惜しそうに喉に流し込んだ。鼻から抜けていく香気と喉に残る余韻をしばらく楽しんだ朝日は、小さく溜め息をしてカップをテーブルの上に置く。そしてカチャンと響くカップを置く音が、二人にとつての課業開始の合図でもあった。

カールの掛かった赤毛の髪を撫でながら朝日は声を発し、その声に明石は待ってましたと言わんばかりにニッコリと笑って返事をする。

『じゃあ、昨日の続きから始めようかしらね。』

『はい!』

今日も繰り広げられる、朝日の明石に対する医科学教育。左右の手の動きを交えて丁寧に物事を教える朝日と、一言一句聞き逃すまいとそれに耳を傾けてはノートに書き写していく明石。テーブルで舷窓からの光を受けてキラキラと輝くカップとスプーンが、そんな二人を静かに見守った。

ちなみに朝日が口にした水。

即ち呉軍港を母港とする艦艇が飲料水として補給する六甲山系の水は、後年、高級ミネラルウォーターとして人々の憧れを集める品物となっていく。それは東洋の小さな島国から湧き出た水だが、例えば戦争があった時代であっても人々の喉を潤していたのだった。

同日、1203。

昼食を終えた朝日と明石は1300の甲板諸掃除の号令がかかるまで、お互いソファに腰を下ろして休んでいた。開けっ放しにしたスタンウォークへと繋がる扉から少し暖かさを取り戻しつつある瀬戸内の風が、舷窓のカーテンをそよそよと靡かせながら部屋の中を通り過ぎていく。

そんな中、『休める時に、思いっきり休む物よ。』と朝日に言われている明石は、それではとソファに横になって昼寝としけこんでいた。いくら上司のお許しが有ったとしても、その目の前ですやすやと眠る明石はかなりの豪胆である。根が天真爛漫で無邪気なだけにお許しさえあれば少しばかり非常識な行動もとってしまう明石であるが、当の朝日はそれを咎める気などは無かった。

実弾が飛び交う上海で活動した経験もある彼女は、眠れる時には眠るという戦場の現実を肌身を通してよく知っていたからだ。眠いなら我慢しろ、等と部下を鍛える上官は人間にも艦魂にもいくらでもあるが、実際の戦場には見栄も体面も無く、寝不足のまま朦朧とした意識で歩いて甲板から落ちた水兵や、銃撃戦の最中に物陰に隠れた事に安堵して眠ってしまった所を手榴弾で吹き飛ばされた陸戦隊員等、睡眠に起因した惨状を彼女はその碧眼に何度も何度も映してきたのである。眠れる時間があるならその時に眠っておく。それが朝日が学んだ戦地における鉄則なのであり、そこに赴く事を使命とした艦魂にあっても決して他人事では無いと考えているのである。それに「休みの時間くらい自由にゆっくりしたい」というのは、誰しもが思う事。そこには海軍軍人も一般人も、艦魂も人間もないのだ。

まだこの時代には労働基準法等無いが、帝国海軍も午食（昼食）を含めてお昼には1時間15分の休憩を取っていた。もちろん新兵さんはあちこちの整理などを課せられて名前だけの昼休みになってしまうのだが、組織としてはちゃんと昼休みという休憩時間は設けていたのである。ちょっと偉い肩書きの者達はその自由な時間を思

うように使い、デッキビリヤードを楽しむ者や読みかけの本を読む者、逆に無警戒なその時間を狙って銀バイに走る者、そして明石のように昼寝をする者がほとんどであった。

明石と同じく昼休みを満喫する朝日は、銀縁のメガネをかけて英文で書かれた本を読んでいる。メガネ姿の朝日は日本人離れた顔立ちと落ち着きを極めた年齢もあって、まるでどこぞの大学の教授のようでもある。だがそんな麗しい朝日の姿にも、それとは背中合わせの視力の低下という老化現象が滲み出ている。

40代で視力に不安が出てくるというのは人間ではかなり早い。老けた老けたと馬鹿にされるであろうが、艦としての朝日艦は人間で言えば実はかなりの老兵なのである。

公試運転中に起した座礁事故を筆頭に、40余年に及ぶ海軍生活で彼女の分身は幾度もその身に傷を負ってきた。その都度、あちこちに補強処置をしてこれまで頑張ってきた朝日艦であるが、そもそもの艦体はオリジナルのままである。そこかしこにガタが開始めた分身と同じように、艦魂である朝日自身もその身体は老いが蝕み始めていたのだ。

最近はずを読むのにメガネが無いと不便になったし、肩も以前より凝りやすくなった。朝起きて伸びをしただけで筋を痛める事もあるし、歩く事すらもこの頃の彼女にとっては正直面倒だと思ってしまうようになっていた。

『はあ……』

深い溜め息をした朝日は、向かいでゴロンとソファに横になって眠る明石を眺めた。

元氣盛りの明石は大口を開け、長い脚を肘掛けにかけて眠っている。幸せそうな事この上ないという感じで微笑んで眠る明石の顔が、同じく昼寝をしていた師匠の記憶を朝日に蘇らせてしまう。脳裏に

その絵が浮かんだ瞬間、朝日は口に手を当てて笑った。彼女の記憶ではまさにそのソファで同じような顔で眠る自分の師匠、すなわち先代の明石の眠る姿があったからだ。帝国海軍が夫と例えるならば、朝日にとっては嫁入り道具である英国製のソファとテーブル。それを大層気に入って眠る師匠の記憶が朝日に蘇ってくるが、同時に目の前で眠る後輩の顔が彼女には少し憎らしくなった。30年以上前の記憶にある師匠と全く同じ顔を持つその後輩に、朝日は自分だけが年老いた事だけを明確にされてどこか嫉妬心のような物が出てしまうのだ。

年老いたのは私だけか。

そんな言葉を脳裏に浮かべると同時に、朝日はその因果を愛でる様に苦笑いした。どうしても明石を見ると昔の事ばかり思い出してしまう自分、その事が朝日に老いという物をさらに強く実感させる。生きている事の裏返しでもあり、同時に受け止め辛い現実でもあった。

一人感慨にふける朝日だったが、その刹那、彼女の部屋に通ずるドアをノックする音が何の前触れも無く響いた。重苦しくもどこか軽快な音が鳴ると同時に、ドアの向こうから声が発せられる。

『軍医中将。自分です。』

『ああ、入って。明石、起きるのよ。』

朝日はドアの向こうに声を返すと、目の前で眠る明石の肩を触れて揺すった。それ程深い眠りについてはいなかった明石は、目を擦りながらゆっくりと上半身を起こす。小さくあくびをした明石は肘掛けに乗せていた脚を床につけ、肩に手を乗せて腕をグルグルと回す。

やがてパチパチと力を込めた瞬きをすると、明石の表情からは早くも眠気が去った。

『むお……。あ、すいません、朝日さん。寝すぎちゃいました……。?』

『いいえ、まだ昼休み中よ。でも患者さんが来たのよ。実習として、明石が診療してあげなさい。』

そう言つて明石の後ろを指差す朝日。患者の言葉で顔色を変えた明石が振り返ると、そこには奇妙な格好をした女性が立っていた。

『やあ。』と気さくに声を掛けてきた彼女は、朝日や明石と同じ第一種軍装に身を包んでおり、その服装から彼女が同じ艦魂である事を明石は察する。だが明石の視線は小柄な体格の彼女の顔に釘付けとなった。その女性は顔を包帯でこれでもかと言わんばかりにグルグル巻きにしており、顔に比して大きめな目と低い鼻、口が包帯の隙間から見えているのみなのである。

その格好から余程の重傷を負っているのかと目の色を変える明石だったが、それにしてはその女性の放つ声は元氣の色が滲んでいた。片手を上げて瞳を細めながら歩み寄ってくるその姿からは、身体のどこかに痛々しい傷を負った怪我人であるという感じもしない。左手に持った軍刀も杖代わりにするようなことは無く、その頭部の有様に比して至って健康そうな彼女。

とりあえず明石は椅子の端に寄つて、ソファの空いた所にその人物を座らせた。まじまじと不思議そうな目で眺める明石だったが、その女性は優しい瞳を細めると小脇に抱えていた軍帽をテーブルの上に置く。するとその軍帽の横に、朝日が用意した紅茶のカップがスツと差し出される。

『その様子だと、それほど痛みはないようね?』

『ええ、おかげさまで。でも顔が痒くて、痒くて……。』

朝日の声からして、どうやらその包帯だらけの顔を持つ女性は顔見知りの仲らしい。軍刀をソファに立てかけると、その人物は朝日に軽い会釈をしながら顔のあちこちを掻き始めた。朝日は口に手を当ててクスクスと彼女を笑い、呆ける明石に視線を流して口を開く。

『明石、よく聞いて。彼女は1月31日に改装を終えたばかりなんだけど、ご覧の通り、艦魂の顔に影響が出る程の大改装だったのよ。一応、今日でこの包帯はとっても大丈夫な筈だから、包帯の除去と事後診断をしてあげなさい。解った？』

『あ、はい！』

突然の実習という事で上ずった声で返事をする明石。

だがそのやり取りを耳にしていたその隣に腰を下ろした話題の女性、明石が声を返すのと同時に目を輝かせて明石に顔を近づけてきた。包帯だらけで眉毛や頬の動きがわからない彼女の表情だが、優しそうな黒い瞳と明るい物言いは悪い人ではなさそうである。

『あああゝ、アナタが明石？聞いてるわよ、神通をぶん殴っちゃったんだってえ？』

彼女は笑いながらそう言ってきた。新参の自分の名前を覚えられていて嬉しいものの、その理由が今は親友となっている神通との大喧嘩であった事に明石は少し恥ずかしさを覚える。力ない笑い声で応じて頭を掻く明石だったが、隣の女性はそっと明石の肩に手を乗せて笑った。

『ははは、良い根性してるよお。金剛姉さんが珍しく褒めてたんだよ。』

『あら、金剛が褒めてたの？ふふふふ、そうなの。』

二人は満面の笑みで声を上げて笑うのだが、明石は二人が口にした「金剛」という言葉に仰天した。

それは帝国海軍戦艦において最も古参である戦艦の名前にして、人間の兵達が鬼や蛇と呼んで恐れる程の艦の名前なのである。帝国海軍で一番風紀が厳しいその艦は、実は明石の親友である神通の師匠でもあった。

そしてその名を姉さんと繋げて呼んだ事が、艦名は解らないまでも明石に彼女の正体をなんとなく伝える。その曖昧ながらも明石の脳裏に浮かんだ答えを証明するかの様に、朝日に顔を向けてケラケラと笑う彼女の襟には星一つが輝く少将の襟章が輝いていた。

いくら患者とは言え、軍医少尉である明石とは階級が比べ物にならないくらいに違う。明石は慌てて立ち上がって踵を揃え、指先まで伸ばした右手を額に添えた。

『て、帝国海軍工作艦、明石です！ け、敬礼もせずにはすみません！』
『ほく、元気があるねえ。』

直立不動の敬礼で固まった顔の明石に、その女性は包帯だらけの顔を向けた。彼女は包帯の上から頬の辺りを指先で何度か搔くと、律儀にも立ち上がって同じように踵を揃えて答礼する。

『自分は帝国海軍戦艦の比叡ひえい。願います。』
『ね、願います！』

彼女は金剛型戦艦二番艦の比叡艦の艦魂であった。

明石や朝日と比べると小柄な体格の比叡であるが、その実は朝日と同じ明治生まれの古強者である。明治44年生まれの比叡艦は日露戦争こそ参加していないが、竣工してすぐに青島方面での作戦行動に参加。その後も大陸沿岸の警備行動に従事してきた経験豊富な

艦である。だが竣工後18年を経た昭和4年にロンドン海軍軍縮条約で練習戦艦となった比叡艦は後部の第4砲塔を撤去し、アーマーは剥がされて機関も減らされる等、戦艦としてはかなり不遇な道を歩んだ苦勞人であった。

しかしここから彼女の栄華が極まった生涯が始まった。運命の女神はそんな彼女に微笑み、改装が容易で艦隊に所属していない事から年間スケジュールが組み易い練習戦艦という境遇が注目された彼女は、陛下を乗艦させる栄誉を独占する御召艦の道を与えられたのである。元々の彼女の名付け親も大正天皇であり、その艦生はまさに陛下と供に歩んだと言っても過言ではない。帝国海軍でも指折りの、花のある生涯を送る艦であった。

新参の明石には師匠と同様、そんな彼女は艦魂としての大先輩であり、おまけに師匠とは違って現役の戦艦である。その事から今まで挨拶もそこそこに隣で座っていた事に、明石は粗相を犯したと思つて焦った。だがそんな明石を比叡は怒る気は無かった。それよりも早急に対処して欲しい事があったからである。

『ねえ、早く包帯とつてくれない？ 痒くて死にそうなんだよお。』

比叡はそう言いながら、自分の顔のあちこちを両手で掻き^{むし}まわつた。朝日と比叡は歳の差は10歳程違うが、それでも明石から見ればかなり年上である。しかし彼女の声は意外な程に若く、その動作は歳の差を感じさせないくらいの可愛らしさがある。そんな比叡の姿が明石の警戒感を和らげるのには、それほど時間はかからなかった。上司や先輩といった感覚よりも、明石には友達としての感覚の方が強く芽生えたのだ。身体の硬直が薄らいだ明石はニツコリと微笑むと、爽やかに『はい。』と返事して比叡の顔に手を伸ばす。

念入りに巻かれた比叡の顔の包帯を、明石はゆっくり丁寧に巻き

取り始めた。

比叡は随分長い間この包帯を取っていないらしく、その事は朝日の口にした大改装の規模を明石にも深く理解させた。顔に戻りつつある爽快感に機嫌が良い比叡は、持ち前の大きな瞳を輝かせてその改装の事を二人に語り始める。

『もう参りましたよ。またちよこちよ改装するかと思ったら、外したアーマーや第4砲塔をまた付け直すんですもん。おまけに機関も総換装ですよ？なまった体を鍛えなおす時間くらい欲しかったです。』

『あら、じゃあ戦艦籍に復帰ね。良かったじゃない。』

『はい。一応2月1日付けで、予備艦から練習兼警備艦に格上げされました。まだちょっと本調子じゃないですけど、身体自体はとっても軽いです。』

比叡の語る近況に朝日は目を細めて耳を傾けていた。比叡にとっても朝日は先輩に当たるが長門よりもさらに年代が近いからか、その会話にはどこか遠慮するような感じは微塵もなかった。相変わらず顔が痒いのか、膝の上に置いた手をウズウズと落ち着き無く動かす比叡。その行動に明石は微笑んで、巻き取る包帯を自らの手に絡め取っていく。

『すぐに三戦隊に配属されるんじゃない？やっ和金剛達と同じ性能になったんでしょ？』

『だと良いですがねえ。』

そう言って腕を組む比叡。明石はそれと同時に、比叡の頭全体に巻かれた包帯の隙間から彼女の髪を目に映した。

手術明けだからなのか、比叡は女性ながらも髪が極端に短かった。それも5分刈り程度で揃えられた帝国海軍軍人らしい丸刈りであり、

長門のような腰までであろうかという長髪と比べるとその差がよく解る。その意外な様にちよつと驚く明石だったが、当の比叡もまた包帯がまだ少し巻かれた頭を撫でて悲しそうに声を上げた。

『あゝあ、また丸刈りから出直しかあ。』

口を尖らせて呟いた比叡を朝日は口に手を当ててクスクスと笑う。その表情の両横を流れ落ちるカールのかかった琥珀色の朝日の髪が比叡には羨ましくも有り、同時に憎らしくもあった。

『髪の毛伸ばすお薬ってないんですか？これじゃ笑ひ者ですよ。』
『そっちの方が治療し易いわ。むしろずっとその髪型にして欲しいくらいよ。ふふふふ。』

頬を膨らませる比叡を朝日は笑い、同時に明石もそのやりとりを笑みを溢した。若々しい声とその言動は、明石に比叡との歳の差をあまり感じさせない。僅かに涙を溜める彼女の大きな瞳が、その心の内を常によく伝えてくるのだ。長門よりも年上で朝日より年下である比叡。その歳はおそらく30代半ばと予想する明石には、その言動と年齢のギャップが可笑しくてたまらなかった。

口元を緩ませて包帯を巻き取る明石だったが、やがてあらわになった比叡のおでこは意外にも柔らかく色つやの良い肌であった。思わず比叡の額に手を触れる明石は、スベスベで程よく湿気を持ったその感触にビクリしてしまう。口にこそ出せないが、師匠の朝日とは肌の感じがまるで違うのだ。明石の突然の行為に比叡も何事かと自らの額を撫でてみた。

そしてそこに明石と同じ感触を味わった比叡は、大きな瞳を輝かせて声を上げる。

『おお！？ちよつと若返った！？』

『何言ってるのよ、艦橋の改装をただけじゃない。』
『艦橋の改装？』

朝日の言葉を受け、明石は止めていた手を再び動かして包帯を巻き取りながら首を捻った。

明石艦に限らず艦艇においてはその艦影の上部構造物の目玉とされる艦橋だが、その改装が艦魂に対してどういう影響を及ぼすのか明石にはイマイチ見当がつかないのだ。

だが比叡はすぐに顔を明石に向けて、その改装の詳細を教えてくださいました。

『金剛姉さん達と違って、私は下部艦橋甲板の一部とマストを残して、艦橋は全部取り払っちゃったんだよ。新しい方式の艦橋構造にするんだってさ。今流行の防空指揮所や遮風板に、主砲の射撃指揮装置も最新鋭の物を積んだし、艦橋後部や内部のラッタルも複線になったりしてるんだよ。艦橋横には高射機も付いたし、構造自体も大分スッキリしたかな。』

『け、結構、大掛かりだったんですね？』

比叡の説明を受けて、明石は大きく頷きながら包帯を巻き取って行く。

比叡艦の改装は彼女の言葉通り非常に規模の大きな改装工事であり、他にもバルジの追加や機銃の口径統一、試製段階の機銃射撃指揮設備の実験搭載、艦内機関の全てに及ぶ換装とレイアウトの変更、艦尾の延長、果ては射出機の装備等、その改装項目は戦艦としては異例の規模であり、ほぼ新造起工と言っても差し支えない程であった。

もちろん二年近くも呉で改装を受けた比叡艦のそれは延命処置等という消極的な物ではなく、現代の戦艦とも殴り合う事を視野に入れて施されたアグレッシブな改装項目は、彼女をその艦齢とは裏腹

に帝国海軍の中でも最速の戦艦として生まれ変わらせたのだった。

彼女が口にした大きく変更された艦橋構造も、第四艦隊事件や友鶴事件を受けて構造物軽量化と強度確保を狙って制定された「檣楼施設標準」に基づいて形成された物なのである。

そしてそれは、彼女達のいる製鋼部前の栈橋から偽装栈橋を挟んで向こう側にある造船ドックで、今まさに建造されている新型戦艦における艦橋の先行試験の意味も含まれているのだった。

だがこの時にその事を知っているのは、連合艦隊司令部の情報を垣間見る事の出来る長門だけである。

『おわっ！』

『あら・・・。』

巻き取った包帯を片手に固まる明石と、その眼前に現れた後輩の変わり果てた姿に目を点にする朝日。二人が驚愕の表情で視線を送る先には、明石とそれ程変わらない顔つきのうら若い乙女の顔があった。

端正な顔立ちと、丸みを帯びた顔に比しても大きな目。人間のような丸刈りの頭だけが、その女性を比叡だと二人に理解させた。

『な、なんですか・・・？』

当の比叡はやっと包帯から解放されたその顔を指先で掻きながら言った。

約二年振りに外気と触れる肌の爽快感が、不思議そうな目をする彼女の口元を無意識に緩ませてしまう。両手で頬を擦る比叡が視線を二人に配る中、朝日が無言のまま手鏡を出して比叡に手渡した。首をカクンと捻って眉をしかめる比叡は、それを受け取るとさっそく自分の顔に向ける。刹那、彼女は叫んだ。

『うつひよおー！！これ私！？』

啞然とする明石と朝日を他所に、比叡はまったくの別人とも言える自分の顔に驚きを隠せない。明石も朝日も、そして当の比叡もその分身の艦齡が既に25年を過ぎている事は知っている。艦魂であれば既に30代半ばであり、容姿は人間と大差ない事を含めると比叡のその10台後半ともとれる顔つきはまさに信じられない光景だった。

ここに、帝国海軍唯一の整形美人が誕生したのだった。

ついさっき自分の老いを感じて感傷に浸っていた朝日は、比叡が持ったあまりにも若々しい顔に声も出なかった。明石も包帯を持つた手を空中で浮かべたまま、口を半開きさせて比叡の顔をマジマジと眺める。下手をしたら自分よりも若い顔立ちである比叡。『これなら髪さえ伸びれば、私もまだまだイケる！』と隣で大はしゃぎの彼女が、朝日と明石の脳裏から事後診断の事を完璧に忘れさせた。

誰しも常に若くはありたいものであるが、艦魂であれ人間であれ、女性というのは特にその願望が強い物である。この日、比叡の事後診断を放り出した師弟はその足で連合艦隊旗艦の長門艦に押入ると、主である長門を捕まえて艦橋構造物の整備を訴えた。珍しく自分の艦を尋ねてくれた二人に長門は始めの内は笑顔を向けていたが、無理難題をふっかけられた挙句に大いにその職務についてお説教される憂き目にあってしまった。特に久々の迫力ある朝日のお説教は、ただでさえ大らかな性格の長門にはまるで破孔から次々と浸水してくる海水のようであった。

かくして次の日、長門は寝込んだ。

第三〇話 「沖縄の海」

昭和15年2月25日、朝。

呉での物資補給、及びその他諸々の用事を済ませた明石艦^{あかし}は舫^{もやい}を解いた。

12日間に及ぶ棧橋接岸を終えた明石艦だが、おかげで十分に陸地に脚をつけた生活を堪能できた乗組員達の表情は明るい。暫くの間お別れとなる呉の景色を惜しむ声はなりを潜め、むしろこれから始まる久しぶりの艦隊訓練を快く迎えるかのような、爽やかな笑い声が明石艦の最上甲板に木霊する。後部煙突からもくもくと煙を上げて、艦の周りに白波を立て始める明石艦。

今日も颯爽と軍艦旗^{ひるがえ}が翻る艦尾の甲板には、明石が珍しく一人で直立不動の敬礼をしていた。

『行って参ります。』

そう言つて敬礼する明石の向こうには、朝日艦^{あさひ}のスタンウォークで手を振る朝日の姿があった。陽の光りを帯びて一層赤みを帯びて輝く髪を風に揺らし、肩の高さでゆっくりと右手を振る朝日。彼女は小さく微笑むと、振っていた右手を立ててその指先を自分の額に添えた。

ディーゼル機関を主機関としている明石艦は、缶圧の上昇を待つ必要がない為に加速の反応がとても早い。ついさっき岸壁から離れて回頭を終えたばかりだというのに、後部の煙突から黒煙を一際高くあげるとグングンと前に進みだした。そしてそれに合わせる様に小さくなっていく師匠の姿を、明石は敬礼を返したまま眺め続けた。

この10日余りの在泊で、明石は実に多くの事を朝日から学んだ。医学の知識は元より、軍医としての心構え、物の考え方、艦魂独自の哲学にまで及んだ朝日の教育。時に長々とお説教を受けてしまう

事もあったが、その時間は第二艦隊に追隨しては決して味わう事の出来ない貴重な時間であった。

今こうして呉を旅立つ明石であるが、その姿からは特別何か自分が変わったという感覚は無い。背が伸びた訳でもなければ、腕が太くなった訳でもない。だが明石は自らの左腕の肘の辺りに手を当てて、その実感を確かに感じとる事ができた。彼女の左腕には、純白の麻生地に大きな赤十字を描いた腕章が付けられていた。赤線の入った階級章と共に、明石を軍医だと周囲に認知させる事の出来る物がまた一つ増えたのである。そしてその腕章には、明石と朝日の大事な想いと記憶が込められていた。

その腕章は朝日が密かに作ってくれた物で、帝国海軍艦魂における一人前の軍医の証であった。朝日はその権威を持たせる為に腕章を渡す日にわざわざ第一戦隊の3人を始めとする艦魂達に声を掛け、授与式に臨席させた上で明石に手渡してくれたのである。帝国海軍連合艦隊旗艦の長門ながとがそこにいた事で、その腕章は文字通り連合艦隊艦魂の長のお墨付きを得たのだった。ちなみに300隻を超える帝国海軍の艦魂において、赤十字の腕章を付けた者は朝日と明石しかない。

明石は手渡されると同時にそこに込められた意義の重さに尻込みしていたが、そんな教え子の腕に自らの手で腕章を付けていた朝日は静かに声をかけてやった。

『明石。これから貴女は、艦魂として、軍医として戦わなければな

らないわ。』

突然の朝日の言葉に明石はロクに返事も返せなかったが、朝日は明石の腕に視線を落としたまま、その碧眼を細くして語りかけを続ける。

『ウミネコが鳴いて空を飛ぶ事も、桜の花が春になって綺麗に咲き乱れる事も、漁師が魚や貝を獲ってその日の食卓に並べる事も、かつて私を含めた貴女の先輩達が世界最強のロシア海軍と砲火を交えた事も、全てがこの世との戦いなの。貴女はこれから一人の軍医の立場を頂く艦魂として、その戦いに参加するのよ。逃げる事は出来ない戦いだけどね。』

腕章を付け終えた朝日はやっと視線を明石の顔に向けた。少し強ばった感のある表情で見つめる明石に、朝日は少しだけ微笑を歪める。教え子が抱いているであろう不安を綺麗に払拭できる言葉が、中々脳裏にうかんでこなかったからだ。だが嘘や詭弁を用いてそれを行おうとする気も朝日には無く、彼女は自分の思う所をそのまま伝える事にした。

『艦魂も人間も無く、生きるという事はこの世との戦いなの。私たちは生きる為に人と戦い、海と戦い、時代と戦い、この世という存在から生きる糧を奪うしかない。それはふいに水面に浮いている事も無ければ、気まぐれに空から降ってくる事もない。戦いに勝って奪う以外、方法はないのよ。』

明石は僅かに唇を噛んでその言葉を腹の底に飲み込んだ。

何よりもその言葉が、戦いという物から無縁でありそうですらある人柄の師匠、朝日の口から出た物であったからだ。これまでに色んな物を映してきた師匠の青い瞳。そこには疑問や懸念を寄せ付け

ない、強い説得力があった。

キツと目に力を込める明石の肩に、朝日はゆっくりとした動作で両手を乗せると口を開く。

『明石が受け持つ戦線は、帝国海軍工作艦である明石艦の艦魂という名の戦線。そこは明石独りの力でなんとかするしかない。でも忘れないで。明石が必死に戦っている時、全ての戦線では同じように必死に戦っている者が必ずいる。その中には長門や比叡^{ひえい}、明石と親しい艦魂や人間の少尉さん、そして私がいるわ。決して明石独りだけが敵陣に孤立している訳ではないのよ。明石が苦しんでいる時は、誰かも苦しんでいる。みんな一生懸命に生きている事を忘れず、明石にしかできない戦いをしなくてはダメよ。』

『・・・はい。』

朝日の優しい語りを受け、明石はやっと声を返す事が出来た。

『もし戦い方が解らなくなった時は、いつでも私の所に来なさい。明石の代わりに戦う事はできないけど、戦う為の策を与える事はできるわ。解ったわね？』

『はい！』

明石は朝日の語りによって普段の落ち着きを取り戻し、同時に生きるという戦場に赴く心構えを得た。尊敬する師匠に敬礼を返した明石を朝日と臨席していた艦魂達が優しく見守り、同時に新たな戦友の誕生を心から喜んだ。

昨日の光景を思い出すと、明石はちょっとだけ寂しかった。もちろんこれが今生の別れになるとは思っていないし、まだまだ教えてもらいたい事が明石には山ほどある。気の済むまで朝日の教育を受けておきたかったというのが正直な明石の願いだが、それが今は叶わなかった事もまた、師匠が口にした戦いなのだと明石は悟った。

瀬戸内の暖かい潮風が、明石の首の後ろで結われた髪のを靡かせる。明石は手を下ろすと、小さく溜め息をして表情を明るくした。

始まったばかりの戦で逃げるようでは、必死に戦い方を教えてくれた師匠に申し訳が無い。

そう心の中で呟いた明石は遠のいていく呉軍港に背を向け、彼女の相方が今日も励んでいるであろう発令所に向かって歩き出した。

明石艦は豊後水道ぶんごすいを抜けると、種子島を左舷に見て南へ駆けた。

目指すは現在第二艦隊が訓練しているであろう作業地、沖縄県沖縄本島の中城湾なかくすく。これまで沿岸を遠めに見て航行した事しかない明石艦にとっては、初めての全方位が水平線という航海だった。

ポツンと単艦で、大海原というキャンパスに白い航跡で線を引いていく明石艦。

時間が経つほどに暖かくなっていく航海は乗組員達にささやかな旅行気分を与えてくれ、洗濯物として今日も起重機に翻ったふんどし群もどこか輝かしく彼等の瞳に映る。もっとも明石はその光景が事の他お気に召さないらしく、『品がない！』と頬を膨らませて忠ただしを困らせた。

後年、その航路を帝国海軍最後の水上艦隊が駆ける事になるとは、この時は誰も予想だにできなかった。

2月29日、照りつける日の光りに暑さすら覚える気候の中城湾に明石艦は到着。第二艦隊と数十日振りに合流した。

乗組員達には初めて沖縄に来た者も多く、本土とはまた違った沖縄の海や山の景色に目を奪われる。中城湾は沖縄本島に西側を、北の勝連半島と南の知念半島から連なった島々に東側を囲まれた湾であり、グルッと陸地に囲まれて投錨するその光景はどこか瀬戸内の呉軍港を彷彿とさせる。ただ湾内はそれ程水深が深くない為に、上陸の際の第二艦隊乗組員達はかなりの距離をカッターで漕いで行かなければならない。この時ばかりは運貨艇を搭載していた艦に配属されて良かったと、明石艦の乗組員達は喜んでいた。

沖縄はその歴史の上でも本土との関わりが少しばかり薄く、遠い海の果てにある事も有って東京や大阪にあるような大きな建物などは殆ど無い。だが帝国海軍にとっては、台湾や南支方面への中間地点にある事、有明湾と同じように広大な太平洋という絶好の訓練海域がすぐ近くにある事、一年中温暖な気候で綺麗なさんご礁や独自の食文化等が乗組員達の上陸に非常に貢献できる事等、中々に重要な作業地の一つであった。

沖合いにて第二艦隊に混じって停泊する明石艦。

その発令所入り口近くの甲板では、真っ白な第二種軍装に着替えた明石と忠が、双眼鏡片手に湾に面した漁港の風景を眺めていた。赤い瓦を葺いた屋根が連なった独特の形状の家々が映る双眼鏡に、明石が興味を示して目を輝かせる。

『赤い屋根の家かあ。珍しいね。』

手摺に身を乗り出している明石の背後では、双眼鏡を失った忠が壁に寄りかかって煙草を吹かしていた。元々は彼が自前の双眼鏡を片手に風景観察と洒落しゃれ込んでいたのだが、それを発見した明石は10秒も待たずに彼の手から双眼鏡を剥奪はくだつした。少しムツとした忠だったが、自分の様に上陸が出来ず、ただ沖合いから眺める事しか出来ない彼女の境遇を思っ何とも言わない事にする。

もつともその斜めに傾いた忠の機嫌は既に直っていて、あっちこっちに双眼鏡を向けて何かを発見する度に嬉しそうな声を上げる明石の後姿に彼は口元を自然と緩ませているのだった。手に持った灰皿に煙草を近づけて灰の塊を落とす忠だったが、突如としてその腕の袖を明石が掴んできた。双眼鏡を差し出しながら、頭上で輝く太陽の様な笑顔で明石は口を開いた。

『ねえねえ、こしまいぬ 狢犬があるよ。』

『狢犬？ ああ、たぶん――。』

忠はそう言いながら明石の手から双眼鏡を取り、それまで明石が見ていたであろう湾内の民家を望んだ。沖繩独特の家々。連なった赤い屋根の上には、神社等でよく見る狢犬に似た置物が置かれている。屋根の上にあるというのは珍しく、なにか戦国時代の城の鯨しやちほこのようにも思わせる。もつとも忠はその物体の正体には、ちよつとした心当たりがあった。

『やっぱりな。昨日ガントリーで聞いたんだけど、”シーサー”って言うらしいぞ。魔除けとかの意味合いが有るんだってさ。』

数少ない沖繩の知識を授ける忠だったが、すぐにその腕を明石がグイグイと引っ張った。早く双眼鏡を渡せ、という明石の無言の要求であるが、彼はそうなるに既に予想していたので抵抗すること無

く彼女に双眼鏡を手渡した。『おお、シーサー!』等と笑顔で双眼鏡を覗き込む明石であるが、忠はまたしても沖繩の景色をじっくりと堪能することが出来なかった。だが双眼鏡が無くとも彼の目には、赤い屋根の民家と白い砂浜、緑色に輝くさんご礁がしっかりと映り、本土には無い何とも鮮やかな色合いの景色を充分に楽しむ事ができた。

美しい風景を遠めに楽しんでた忠だったが、ふいに明石が双眼鏡を下ろして振り返ってきた。何か良い事を閃いたのか、明石は白い歯を見せて笑いながら言った。

『森さん、上陸するんでしょ?』

『ああ、3月27日まではここに停泊するからな。なにか食いたい物でもあるのかい?』

『よし! じゃ、シーサー買って来て!』

『は・・・? し、しーさー・・・?』

いつもは上陸と聞けば食い物の調達をお願いする明石だが、今日は食べ物以外の調達を口にした。初めての出来事である事に驚く忠だが明石はそんな彼の呆ける顔を小馬鹿にするかのように、口元に両手を当ててクスクスと笑っている。

『えへへ、舢先に飾って船首像にするんだよ! 名案でしょ!?』

自らの閃きを絶賛する明石だが、相方の忠はそのぶっ飛んだ発想に苦笑いを浮かべた。

アンタ、帝国海軍の艦魂だろ? 船首像の前に菊花紋章を欲しがれよな。

いつもの様に相方の訳の解らない発言に、そっとツツコミを入れ

る忠。しばらく先輩について修行してきたというのに、彼女の性格は相変わらずで、彼女より先に上陸先での買い物を口にしてしまった事を忠は少し後悔した。それでもはしゃぐ相方を眺める彼の表情は、少し歪んでいながらも笑顔からは変わらない。自分が知っているままの明石であった事を、彼はどこか安堵したのであった。

のんびりと沖縄の風景を楽しむ二人であるが、日曜日である今日はそれを咎める人もいない。それどころか温暖な気温に澄み渡った青空、そして緑色に輝く海を楽しめる沖縄に來たとあって、明石艦を含めた第二艦隊の各艦では乗組員達の膨らむ希望を後押しする号令がかかった。

『総員右舷最上甲板、遊泳用意。』

いつもは精悍で空気を切り裂くような号令も、今はどこか楽しそうな声になっている。号令と共に艦内のあちこちから乗組員達が駆け足で集まってくるが、彼らの表情も似たり寄ったりだった。各分隊長が集合をかける中、艦橋すぐ横のポートダビッドに青木大尉の姿を見つけた忠は、歩き出しながら明石に声を掛ける。

『お仕事だ。ちょっと行ってくるよ。』

これから始まる楽しい一時を想像して微笑む忠だが、竣工以来初めて掛かったその号令の意味が解らない明石は眉をしかめて首を捻った。同時に彼の笑顔の理由もよく解らないので、明石は彼の後に続きながらその事を聞いてみる事にした。

『ねえねえ、森さん。なに、ゆーえいって?』

『ははは。読んで字の如くだよ。有り体に言えば海水浴さ。』

『海水浴!?!』

普段は聞きなれない号令だが、兵員の健康や遊戯をもって士気の維持を図ろうとした帝国海軍は、時にはこうして遊泳の許可をする事があった。

海軍の兵員達は全国津々浦々の出身者が集まって一つの艦に乗組んでいる。その上で軍艦という船である事から、彼らが働く職場は常に移動して一定の場所に留まる事は中々無い。だが逆にそれは彼等にとってはまだ見ぬ地への旅行と紙一重であり、こうして沖繩の海を楽しむ事は普段の生活での鬱憤うつぶんを晴らすのには絶好の機会だった。嫌いな奴や、怖い上司等もこの時ばかりは一緒に笑い合って楽しむ仲間だ。

また艦内規則にも示されている通り、繫船桁けいせんこうを展開した後には装載艇をちゃんと下ろして足場を作り、非常時を想定して救命用の人員や救命索を用意する等、それを実施する艦の運営者達も細心の注意を払って行う本格的な物だった。

各分隊長の指示に従い、二言返事で遊泳準備に取り掛かる乗組員達。目の前にニンジンをぶら下げられた今の彼等は、その仕事の進めるのが早い事、早い事。まして工作艦である明石艦には片舷に使用できる起重機が4基もあり、号令が掛かってからあつという間に繫船桁や縄梯子、ラッタルを用意してしまった。これには各分隊長も、『いつもこれくらい早くやって欲しいモンだ。』と苦笑いするしかなかった。

まだ号令が掛かっていないにも関わらず、誰という事も無く服を脱いで猿股やふんどし一丁になった彼等。さしもの青木大尉も他の分隊長と同じく最早こうなつてが命令などいらないと悟り、後を忠に任して日陰に座り込んでしまった。忠は救助作業監督という事で第二種軍装のままだが、それはそれは楽しそうに笑う部下達の顔に笑みを溢しながら口を開く。

『体操始め!』

『『『はい!!』』』

返事が終わるとすぐに彼らは身体を動かして準備体操を始める。この準備体操すらも規則で決められているのだから、いかに帝国海軍がこの遊泳に重い意味を置いているか解るといふ物だ。思い思いに腰や腕を振る彼らを横目に、忠はバインダーに貼り付けた紙に遊泳に参加する部下全員の名前を書き込んでいった。行方不明になる者が出た時の為の対策である。点呼は既に分隊集合時にとってあるので、ここに書き込んだ名前の者は「遊泳止め」の号令が掛かった時に確認するのだ。

『遊泳始め。』

甲板に響いたその号令を耳にするや否や、裸の男達は歓声とも奇声とも取れる声を上げて、舷側の海面に下ろした繫船桁に降りて行った。本当は救助作業員が先に降りるのだが、最早事ここに至っては命令してもだれも聞かないであろうと忠は諦める。

すると腰に手を当てて静かになった甲板から海面を眺める忠に、明石が近づいてきて声を掛けた。

『森さんは泳がないの?　なんで救助作業に志願したの?』

明石は帽子を手にとってパタパタと顔を仰ぎながらそう言った。そしてせっかくの楽しい一時を堪能しようとしなない相方の態度に、彼女は首を捻っている。忠はその真相を知られたくなかったので、何食わぬ顔で声を返した。

『なんでって、誰かがやらなきゃいけない事だろ・・・?』

『ふう〜ん。』

彼の人柄を考えれば、その言葉は実にもっともらしい言葉だった。だが明石はそんな相方の表情の微妙な感じを読み取り、顎に手を当ててその裏にある理由を推測してみた。初めの内は解らなかったが、その内海軍軍人らしからぬ理由を閃いた明石はニヤリと片方の口元を緩ませて忠の顔を覗き込んだ。明石に気づきながらも一度視線を向けるとすぐにまた海面に戻した相方の行動に、明石はその真相を確信してぶちまける。

『は〜ん、泳げないんだ!?!』

『な、なんで解ったんだよ……。』

一瞬にして看破されてしまった事の真相に、忠は頭の後ろを掻いて明石に視線を流した。彼の予想通り、明石は忠を指差して大笑いしている。いつも真面目で仕事もできる忠だったが、そんな彼の弱みを見抜いた明石は可笑しい事この上なかった。相方の気も知らずに抱腹する明石だったが、忠は少し表情を曇らせて唸るように声を上げる。

『できないモンはできないんだよ……。大体、水に物を入れたら沈むのが当たり前だろ?』

『あははは! 浮く事もできないんだ!?! 文字通りカナヅチだ!!!』

『なんだよ、もう……。明石は浮けるのかよ……。?』
『浮いてるじゃん、今! あ〜はははは!』

明石はお腹を抑えて笑いながら自分の足元を指差した。その言葉に彼女が艦魂である事を思い出した忠は、完全に攻め口を失って口を尖らせる。彼女の分身は明石艦であり、泳げるのは無論の事、こ

れまで艦底を地に着けたこと等一度も無い。つまり艦魂にはカナヅチはいないと言う事なのだ。

すっかり牙を折られた忠は肩を落として右舷の繋船桁に繋がれたカッターへと降り、大笑いする明石からそそくさと逃れようとする。一応は海軍兵学校の卒業生である忠は全く泳げないという訳でないのだが、泳ぎに対しては確かに苦手意識を持っていた。そんな忠は中々上手く水泳ができない自分の境遇を「水に物を入れたら沈む」という極めて初歩的な物理事象に結び付けて反論の声をあげるも、そんな水に今まさに浮いている10000トン近い鉄の塊を分身に持つ相手にはその理屈も通用しない。故に忠がふて腐れたような顔で縄梯子を降りていく間も、明石はずっと乾舷の上から指を向けて笑っていた。

ちなみに翌日になると彼女は仲間内にその事を言触らし、彼は惨めにも第二艦隊の艦魂達から『カナヅチ士官』のレッテルを貼られてしまった。

なんと失敬な奴だ。

忠が大笑いされている間に早くも乗組員達の遊び心には火が点いており、禁止されているにも関わらずに海面から数メートルはある最上甲板から飛び込む猛者も現れ始めた。宴会と同様に、無礼講の言葉が飛び交い始めた遊泳。お尻に青いアザをつけた水兵達がここぞとばかりに先輩や上司に群がると、一斉に担ぎ上げて海へと放り込む。揺り籠の様に波に揺られるカッターの上でのんびり煙草を吹かしていた忠のすぐ近くには、普段部下達をパシリとしてコキ使っている弟が投げ落とされた。

『くそー！テメーらあ！』と叫んだマサは兄とは違って水泳の達人であり、綺麗な平泳ぎで繋船桁に上がってきた。軽く手を上げて挨拶するとすぐに彼は縄梯子を登っていき、その姿が見えなくなると

『キヤー。』という悲鳴と共に彼の部下達が投げ落とされてきた。高く舞い上がる水しぶきに忠の煙草が消えかかってしまうが、そんな小さな事で彼等の笑顔を奪いたくなかった忠は我慢した。まだ彼様ののんびりとカッターの上にいれるのはマシな方で、略装姿で甲板に居た川島主計長は「汚れても大丈夫な服装」という何とも理不尽な理由で服を着たまま海に放り込まれてしまった。ヘラヘラと笑いながら『やられたぜ。』と言って波間からカッターに上がったきた川島主計長だったが、その日の夕食で投げ落とした乗組員達には麦と具の無い味噌汁が出された事は言うまでも無い。

一方、久々の休日らしい日を過ごしたのは兵達だけではなく、忠の直属の上司である青木大尉は反対舷に糸を垂らして趣味の釣りを楽しんでいたりする。珍しい魚に一喜一憂する青木大尉はご機嫌で、今日のたくさん釣果は夜の宴会の肴として振舞われた。

その日の遊泳が余程に功を奏したのか、次の日から久々の明石艦到着との事で他の艦から要修理品を積み込んだ内火艇が集まる事になったのだが、すっかり楽しんだ乗組員達の士気は高く、要修理品の半数をその日の内に返却するという離れ業を見せる事になった。5年後には血で真っ赤に染まる沖縄の海。しかしこの時は彼等の身体と心を隅々まで癒してくれる、母の様に優しき海だった。

第三一話 「鮮やかな一日」

中城湾なかくすくに明石艦が錨を降ろして少し経った頃、明石艦あかしでは待ちに待った上陸が許可された。これまで沖合いから眺めるだけだった沖縄の大地に心を躍らせる乗組員達は、やっと巡って来た上陸日に大喜びである。

その珍しいながらも綺麗な沖縄の風景は、彼等と同様に忠ただしにもどこか晴れ晴れとした気分になさてくれる。もうすぐあの砂浜に立てるのか、と逸はやる気持ちを抑えてにんまりする忠だったが、その腕をグイグイと引っ張って明石がお土産をせがんだ。

『ちゃんと覚えた？ さーたーあんだあぎー、だよ！？』
『解った、解った。』

こうして作業地に着く度に強引にせがむ明石はいつもの事であるが、今日はちよつとその腕にも熱が入っている。少し面倒臭そうに声を返す忠だったが、明石は彼が運貨艇に乗り込むまでその名を何度口にして彼に覚えさせようとした。

というのも、昨夜いつものように忠の部屋に集まった仲良し達が一斉に口を揃えてその味を絶賛するお菓子があったからだ。サトウキビ栽培がさかんな沖縄らしく砂糖をたっぷり使ったそのお菓子は、外はパリッと歯応えがありつつも中はしっとりとしたカステラのような食感なのだそうで、口いっぱいに広がるその甘さがやみつきなのだそうである。基本的に甘いものに目が無い明石と忠を他所に、彼女達は一様にその味が残る記憶を辿ってウツトリしていた。普段は静かに酒を飲む神通じんつうや那珂なかですらも、その大人びた外見からは想像もつかない程に身体をしながらせて微笑んでいるという有様だった。そこまで言ったのならば持って来て欲しかったと思う忠と明

石であつたが、どうやらそのお菓子がカタチを留めているという誘惑に勝てる者はいなかったらしい。悪いなあと思いつつも、全員胃袋に流し込んでしまったとの事であつた。

『残念。』と一言呟いて笑う忠だったが、彼の相方はそうではなかつた。『それでも友達かあ!？』と食つて掛かつた明石は口を山のように尖らせ、忠の袖を掴んで上陸の際にそれを調達してくるよう要求したのである。

笑顔の乗組員でござつた返す運貨艇が細い煙突から煙を巻き上げ、グラリと揺れ始める足元にフラつく忠の耳には相方の怒号にも似た声が響いてくる。余程そのお菓子が食べたいらしい。軽く手を上げてその声に応える忠を、彼の近くに立っている乗組員達が不思議そうに眺めた。

10分程も白波を立てた運貨艇は、湾の中央部にある中城村なかぐすくそんの屋宜ぎ漁港の栈橋に接岸した。栈橋と言っても運貨艇が横付けすると漁船1艘すらも付ける場所が無くなる程の小さな栈橋で、乗組員全員が栈橋に移るのはかなりの時間が掛かる。

先にながって栈橋を抜けた忠は、続いて降りてくる砲術科の部下達を待った。そこは背の高い蘇鉄そてつの木が幾重にも伸びており、サンサンと注ぐ強い日差しに対して、その大きな葉っぱで日傘代わりとなつてくれている。風に揺られて万華鏡の様に注ぐ木漏れ日と、透き通った蒼さを持つ海。沖合いに停泊する第二艦隊の各艦は、艦体その物に熱を持って熱苦しい事この上無かつた。だが今はそんな艦が気の毒に思える程に、清涼で爽やかな気分を忠を含めた明石艦の

乗組員達に与えてくれる。

雪のように白い砂浜に打ち寄せる波音と、風に揺られて天上から響いてくる蘇鉄の葉の音に耳を撫でられていた忠は、やがてそこどこか懐かしさを覚えさせる楽器の音が混じってくる事に気づいた。見れば残橋を抜けた所にある木陰で覆われた広場に、胡坐をかいて三味線を弾く浅黒い肌の老人がいた。沖縄県人らしい濃い顔立ちながらも、しわくちゃの肌と長く白い眉毛を持つ老人。枯れた枝のような腕や脚を覗かせる、古ぼけて褪^あせた色の青いシャツと短いズボンを身につけ、目を閉じて三味線を弾く彼は、なにかずっと昔からその場でそうして生きてきたような感じさえする。草が生えていない獣道から外れた所で音を奏でているその姿は、どこか野辺のお地蔵様のようだ。

『砲術士。』

その老人を物珍しげに眺めていた忠に、彼の背後に既に集合した砲術科の面々の内の一人が声を掛けてきた。他の科の連中が列になってゾロゾロとその老人の前を通って行く中、忠は背後の部下達から視線を正面に戻すと声を上げた。

『自由散策。30分後に集合をかけるぞ。』

忠の言葉に彼らは返事をする、すぐに仲間内で集まって砂浜へと散った。わーわーと声を上げて浜遊びする者もいれば、木陰にひっそり返って昼寝する者等、各自の思うがままの時間を堪能しだす。忠は一度、腕時計を確認すると、三味線を引き続ける老人とは道を挟んで反対側の草地に座り込んだ。彼の耳には特徴的な沖縄独特の音階で奏でられる三味線の音が流れてくる。その音色ににわかに瞳を閉じて聞き入った彼だったが、老人もまたその視界の端にいて

いた。

見慣れない海軍の服に身を包んだ青年だが、吐息の音すらも押し殺すようにして静かに聞き入る彼を見て老人は微笑んだ。荒涼な大地に転がる岩の様に彫りの深い顔の老人は、笑顔になってもその顔の感じが消えない。だがその表情にはなんともいえない暖かさがあつた。

『海軍さん、どこから来た？』

しゃがれた声で少し忠には聞き取りにくい老人の声だったが、いかにも地元の者といったその風貌からは想像もつかない程の綺麗な標準語で彼は言った。背後にあった太い蘇鉄の木に背をもたれていた忠は少しだけ驚くものの、すぐにその表情を明るくさせて背を戻した。

『あ、どうも。自分は青森です。』

『そうかい。遠い所からよく来なさったなあ。』

三味線の音を途切らさせる事無く老人は言った。静かに答えてくれた忠の態度が嬉しかったのか、老人はその顔にさらにしわを歪ませた笑みを向けた。老人は二、三度手元に視線を落として絃の位置を確認すると、どこか遠い目をして忠の足元辺りを見つめながら言つた。

『わたしも昔は陸軍でしてね。あちこち行った物ですよ。』

やせ細った老人だが、その昔は陸軍軍人だったという。海軍軍人とは相容れない存在と思われるような陸軍だが、まだまだ潮気の薄い忠にはそんな考えは微塵も無かった。彼の故郷には、その地の人々によって編成される郷土部隊がいたからである。少しでも故郷のことを思い出す忠に、老人はさらに嬉しい言葉を放った。

『青森なら弘前ひろさき第八師団ですねえ。』

『あはは。はい。自分、弘前ですよ。』

『おお、そうですかあ。わたしは熊本第六師団ですよ。』

いかつい外見とは裏腹に、老人はニコニコとしながら声を返した。忠もその老人の笑顔と、手元から響いてくる三味線の音色に自然と表情が明るくなる。そして老人が口にした地名により、忠は何故この老人が流暢に標準語を話せるのか見当がついた。

『あゝ、それで訛なまりが無いんですね？』

ポッケから煙草を一本取り出し、口に挟みながら老人の答えを待っていた忠だったが、老人は少し俯いて苦笑いしする。ゆっくりと首を捻り、忠とは視線を合わせぬままで老人は言った。

『いやあ、身体で教えられましたよ。うちなー（沖縄）の言葉というのは馬鹿にされましてねえ。』

方言で苦しんだ過去を話す老人に、同じく国内でも屈指の難解な部類に入る方言、津軽弁を使う自分の境遇を忠は重ねた。江田島の地を踏んですぐの頃は、その珍しい言葉から彼は仲間と打ち解けるにはかなり時間が掛かった過去がある。根が真面目で銃剣道の腕前が強かった忠は仲間外れにされるような事は無かったが、その実はイジメに遭う危険と隣り合わせの幸運でもあった。

忠はその事を知らないが、事実、今彼の目の前にいる老人を含めた沖縄県民は、意図的に県内には連隊が置かれなかった事もあり、九州各県の連隊に分散配置されるのが常であった。そしてその特殊な方言によって、営内では多くの県民がイジメの恰好の標的とされたのである。

『あ、すいません……。』

忠は老人に辛い過去を話させてしまった事をすまなく思い、口に挿していた煙草を取ると大きく頭を下げて詫びた。だが老人は小さく笑いながら、子気味良く三味線を鳴らせて忠の頭を上げさせてやる。少し引きつった笑みを浮かべて老人の顔色を窺う忠だったが、当の老人は気にすること無く再び明るい声で話し始めた。

『はっはっは。まあ悪い事ばかりでは無かったですな。特に軍旗祭りには、楽しみで楽しみでねえ。』

『あゝ、自分も子供の頃は楽しみでした。自分は親戚の何人かが弘前の兵営に……。』

忠は老人の言葉にまたも故郷での思い出を脳裏に浮かべ、その記憶を辿っては懐かしい思い出を老人に語り始める。老人も同じように若りし頃の良い思い出を懐かしみ、それを惜しげも無く忠に語ってくれた。

陸軍談義に花を咲かせる二人。

海軍の制服を着る忠がその会話にのめり込むのはどこか変だが、当時の一般的な国民としてはその意識は決して変ではなかった。勤務地が常にあちこちになってしまいう海軍とは違い、陸軍は普段は衛戍地^{えいじ}にその身を構えており、部隊の中核たる兵や下士官に至る人員はその地から召集するのである。よって衛戍地付近の住民からは親近感を持たれ、当の衛戍部隊も地域密着型の衛戍運営を行っており、さらには人目が届きにくい海の沖合いで演習する海軍に対し、陸軍の定期的な演習は付近の刈入れの終わった田畑で行う事もしばしばで、住民からの意識的、物理的距離感^{えい}は海軍とは比べ物にならないくらいに近い存在であった。

ちなみに彼らが口にした軍旗祭とは衛戍地を一般人向けに解放し、普段は兵營の奥で厳重に保管されている軍旗を人々の目に触れさせるという陸軍独自のお祭りであった。忠も幼い頃には、兵2名に両脇を護衛され、誘導将校を伴って目の前を横切っていく軍旗を何度も目にしていた。当然、その後が続いて衛戍部隊による分列行進に幼心を沸き立たせ、普段は営門前で怖い顔で仁王立ちする兵隊さんが、信じられないくらい優しい顔で営む出店や仮装大会、喉自慢等の催し物は、忠を含めた地元民達がねぶたと同じくらい楽しみにする大きなお祭りであった。そして男の子達が漏れなく夢中になる、帝国陸軍装備品の展示。自分の身体よりも遥かに大きい銃器や野砲等に目を輝かせたのは忠も例外ではなく、少年達にとって陸軍とは文字通り、天に代わりて不義を討つ正義の味方なのであった。

後年、帝国の終焉と同時に栄えある帝国陸軍もその歴史に幕を閉じる事になるが、この軍旗祭と同様の微笑ましい光景は駐屯地祭と名前を変え、この時から70年以上が経っても変わらぬまま続けられる事になる。脈々と受け継がれる、良き伝統であった。

『砲術士。』

すっかり夢中になっていた忠は、彼の横に集まった部下達の声でやっと我に帰った。腕時計を見ると既に集合の時間を少し過ぎており、少し遊びつかれた部下達の表情もあって忠は腰を上げる。お尻の辺りを手で軽く払って土や葉っぱを払い落しながら、彼は未だに演奏が続いている老人に向かって声を発した。

『良いお話を聞きました。有難う御座います。』
『あっはっは、いいいえ。』

老人は座ったまま腰を折り曲げて頭を下げた。余程三味線が好きなのか老人は手を休める事無く、礼を返す忠にしわくちやの笑みを向ける。

そしてその手元から奏でられる音色に、故郷の津軽三味線を思い出していた忠。老人との他愛無い一時が終わってしまった事に少し名残惜しさを覚えながらも、忠は軽い動作で額に右手を添えた。『では。』と短く呟いて老人の前を横切っていく忠の背後からは、彼の後ろ髪を引くかのように三味線の音が流れ続けていた。

その後、忠が率いた砲術科の乗組員達は、砂浜から2キロ程離れた小高い丘陵に向かった。緑豊かな丘陵には石垣の土台や通路が立ち並ぶ中城城跡があり、馴染みの薄い沖縄の歴史に彼等は想いを馳せた。築城当時の建造物は既に無くなっているのだが、村役場として現役で使用されているという日本でも指折りの働き者のお城であった。役場の職員達は快く乗組員達を迎えてくれ、彼等は眺めの良い石垣の上に蓆を敷いて昼食の時間をとる事ができた。背の高い蘇鉄の木が生い茂っていた砂浜とは逆に、中城城跡がある丘陵には木々が殆ど無く、明石艦を始めとする第二艦隊の各艦がその身を浮かべる中城湾を一望しての昼食は、乗組員達の表情を明るくさせた。上陸の際に渡されるお弁当はおにぎり二個と一握りの沢庵という質素な物だったが、目の前一杯に広がる宝石の様に青い海は、そんな事を彼等の脳裏から拭い去った。

昼食後は中城村の中に限っての自由散策とし、乗組員達は思い思いの足の向くまま村内で遊んだ。まだ2月だというのに暖かい沖縄

では既に海で遊ぶ子供達もあり、村はずれの田圃ではなんと田植え作業の真っ最中であった。掛け声を放って畦道から投げ入れられる稲の束と、泥まみれ汗まみれになって足元に落ちてきた稲を植えていく百姓の人々。のどかなその風景は、またも忠に懐かしき故郷を思い出させてしまう。彼は込み上げてくる帰郷の二文字を振り切るように、田圃の光景に背を向けて村内へと戻った。

その後、村の中を歩き回ってようやく見つけたお店で、相方が催促したお菓子「サーターアンダーギー」を調達した忠。意外にもそれは油で揚げたお菓子で、たつぷりと使われた砂糖が揚げられた事によって放つ香ばしい香りは、どこかドーナツのようでもある。沖縄では庶民的なお菓子らしく、お店で品物を買う忠の横では、現地の子供達がワーワーと声を上げながら頬張っていた。子供達は珍しい軍服を着た青年をみて何事かを言っているが、強い沖縄弁での会話は忠には理解できなかった。それでも忠が笑みを見せてやると、彼らも白い歯を見せて笑みを返してくれ、店とは道を挟んで反対側に有った木から花をとってきてくれた。沖合いから眺めている限りは緑一色の沖縄だが、その花は春を思わせるような鮮やかな赤紫色の花で、子供達の口にするところによると「ムラサキシンカ」というらしい。相方へのお土産が一つ増えた事に喜ぶ忠。彼がお礼を言うと、子供達も「ありがとう!」といかにも真似てみたといった感じの発音でお礼を返してくれた。無邪気に走り去っていく子供達に微笑んだ忠は、腕時計を見て集合の時間が近づいている事を悟り、道端に生える美しい花達を観察しながら集合場所になっている栈橋に向かって歩き出した。

束の間の陸上散策を終えて艦に戻った乗組員達は、再び配置に戻

って各自の持ち場の整理整頓を開始する。常に清潔な状態を維持しようとする帝国海軍生活では最も多い掃除のお時間だが、その実は「やる事が無いから掃除でもさせておけ」というやつつけ気味なお仕事でもあったりする。隣で一緒に励む仲間と上陸の話をしながら整理済みの所を一度崩してまた整理する、という光景が明石艦艦内のあちこちで繰り広げられるが、なにも明石艦に限ったお話ではない。そしてそんな命令を発する身の者も、それとなく部下達から向けられる視線に抗う^{あらが}ように持ち場のお掃除と励むのが帝国海軍生活の日常である。

例外なく忠も発令所の壁や舷窓を雑巾で拭いていた。綺麗好きな彼にしてはその時間は特に苦痛でもなく、艦橋からの伝声管より響いてくる仲間のやる気の無い会話を耳に挟みながらも、雑巾を持ったその手には力が入る。雑巾に一度隠されて再び覗かせる綺麗な壁、その壁に無上の喜びを感じる忠は表情を明るくさせて大きく一度頷くと、再び大きく腕を振って雑巾掛けに勤しんだ。そして彼の背後にある机では、椅子に腰掛けて彼が調達してきたお菓子にさっそく舌鼓を打つ明石の姿があった。噂通りだった食感と口一杯に広がる砂糖の甘さが、明石の表情を明るくさせる。大の男の握り拳ほどもあるサーターアンダギーだが、明石はそれをペロリと口に押し込む。その様子をクスクスと笑う忠を横に、彼女は二、三回顎を上下させるとまるで蛇の様に一飲みしてしまう。

『んんん、うめええええ！』

砂糖のついた指先をベロベロと嘗めながら明石はそう言うと、すぐにまた机の上に置いたお菓子の山へと手を伸ばす。何がそんなに嬉しいのかと疑問に抱くほどにニコニコと笑ってお菓子を頬張る明石は、口にお菓子をヒョイッと投げ込むと机の脇に置いていた赤紫色の花を手にとった。忠がそつと見守る中、明石はその花を顔のす

ぐ近くに寄せて愛でているが、別に彼女は花を食べようとしているのではない。

艦魂である明石にとっては陸地は元より、艦の周りの海にすらも足を踏み入れる事はできない。人の手によって造られた彼女が触れ合える自然とは、その身を浮かべる海面と空を自在に飛んでいく鳥達、そして遠目にしか見る事のできない空と陸地の風景だけである。人間であれば誰でも見た事のある草や花は、彼女達にとっては双眼鏡で眺めるしかない、決して手の届かぬ存在なのである。

特に意識もせずに持ち帰った忠だったが、その花を大事そうに両手で持ち上げて慈しむ明石の表情に口元を緩めた。さっきまでとは別人のように今度は静かになって花を見つめ、時折指先で優しくそっと花びらを撫でる。『キレイだなあ。』と呟きながらマジマジと花を眺める明石が、気づかれないようにその姿を窺っている忠の視線をを釘付けにした。

可愛い所、あるんだけどなあ。

そんな言葉を彼が脳裏に浮かべたと同時に、明石は花をそっと机に戻すとまたも表情をコロっと変えてお菓子を口に投げ入れた。少しだけ荘厳さを漂わせていた明石だが、今はその雰囲気吹き飛ばしたかのように笑って頬を動かしている。その可笑しな人柄に忠は再び笑って、視線を前に戻した。

それから少し経った頃の事だった。

椅子に腰掛けて上陸した地の話をする忠と明石の耳に、艦内放送によるブザーが響いてきた。既に時間は1600。もう少しで夕飯のお時間であり、艦内のあちこちでは一日のシメである甲板掃除の準備をし始めている。そんな時間にかかった艦内放送は、明石艦乗組員にとっては珍しかった。

『総員傾注。八戦隊筑摩艦搭載の水上機が墜落したとの報有り。これより明石艦は泊地を変更、引上げ作業に従事せり。』

『明石艦、出航用意。』

スピーカーが静まると同時に、号令員の声が矢継ぎ早に発せられた。それを受けてすぐさま、明石艦の最上甲板は乗組員達の走る音が木霊しだす。まだ夕暮れにもなっていない沖縄の空は、乗組員達の時間の感覚を少しだけ狂わせた。『こんな時間から出航かよ。』という声がでてもおかしくは無いのだが、誰一人一言半句の文句も言わずに己のやるべき事に全力を注ぐ。それはまるで朝に作業地から旅立つ光景のようだ。

緊急の出航とあって、艦首旗を降ろさぬままで明石艦は抜錨。同時に宮里艦長の号令がかけられ、後部煙突から煙をもくもくと巻き上げた。『ふう。』とどこか力が抜けた溜め息を放って明石が椅子から腰を浮かせると同時に艦は前進を開始し、その艦首は静かな中城湾の水面を切り裂き始めた。

南北に広がった中城湾の地形に合わせて第二艦隊は停泊しており、明石艦が停泊していた南端から第八戦隊が停泊していた北端まで行くのは少しばかり時間が掛かった。各自の持ち場でザンザンと波を掻き分ける音を聞く乗組員達には、時間が経つと少しづつ艦内放送によって状況が伝えられた。

有難い事に、戦闘ではない事から砲術科は居住区にて待機となり、幹部以外は艦内にてしばしの休息となった。太陽が姿を隠そうとする沖縄本島と、その光りを艦首から被って影のみとなる第二艦隊の艦艇を横目に、明石艦は北上していた。

わびしい電灯の明かりに照らされた発令所では、一応は発令所責任者の忠が待機しており、少しづつ明るさを失い始めた湾内の光景を舷窓から眺めていた。昼間はあんなに綺麗だったさんご礁も、今は照らされる光りの量が足りないのか、海の色は瀬戸内の海の色と

それ程変わらない。ちょっと見慣れた感のある湾内の光景を目に映す忠、その横に明石が歩み寄ってきて口を開いた。

『とりあえず、死んだ人がいなかったのは良かったね。』

『うん、そうだな。』

先程の艦内放送によると、筑摩艦上から射出機にて飛び立とうとした水上機が射出時の衝撃に耐えられずに空中分解を起したのだという。砲術科である忠には飛行機の知識が薄く、帝国海軍にて広く運用されている水上機がそんな簡単に壊れて良い物か、との疑問が湧いてくる。艦砲で言えば、引き金を引く前に薬室内で爆発してしまうような物である。もちろんそんな事が無いよう、砲弾と火薬には工場からの出荷時にまで遡る記録簿が設定されており、現物が保管されている倉庫の鍵は砲術科のナンバー12である忠ですら持っていない。その事を考えると、危なっかしい運用方法のままで飛行機を用いる今の帝国海軍に忠はちょっと首を捻ってしまう。

釈然としない忠が明石に視線を送ると、明石もちょっと困ったように眉をしかめて微笑んでいた。

『神通や那珂が前に言ってたけど、こういうの結構よくあるんだって。射出機って火薬で動かしてるらしいんだけど、やりなおしができない上に、発動機の出力を上げる操作が上手くいかなかった時も落ちちゃうって言ってた……。』

明石はそう言うとは舷窓に背を向けて、力なく壁に寄りかかった。一日の終わり頃になっての急な出航に少し疲れたのか、彼女は目を閉じて首を垂れる。

『どうした？ 疲れたのか？』

忠がそう声を掛けると、明石は目を閉じたまま小さく笑った。右手を左腕の腕章に添えて、明石は小さく溜め息をすると答えた。

『そういう訳じゃないよ。でもなんだか、落ち着く時間がないなあって……』

さっきまであれだけ食つという何を言ってるんだ？と、忠は一瞬思ったが、彼女の分身が常日常からどれ程に第二艦隊に対して貢献しているかを思い出し、その考えを改めた。

明石艦は作業地に付く度に艦隊各艦からの修理品を一手に引き受け、母港の呉へ戻ったら戻ったで今度は工廠での作業の補助業務を託される。その為に造られた艦であり、その為に施された装備なのだが、当の明石艦にすれば毎日が実戦のような物である。今日の水上機の引き上げ作業も、懸架能力の高い起重機を持つ事が理由で明石艦に回ってきたお仕事であり、本来のお仕事ではない。明石艦の左舷に広がる、訓練を終えてその身を休める第二艦隊の艦艇達。だがその安息の影で、こうして地味なお仕事をひたすら遂行するのは、特務艦と類別される明石艦の宿命でもあった。

明石は決して不満がある訳ではないし、静かに左舷の向こうで休む仲間達を憎んでいる訳でもない。ただ、そのお仕事の量と質が仲間達とは余りにも違う事が、明石にはちよつとだけ寂しかった。

忠は明石の表情とそれに伴う心の内が読めなかったが、どんな理由があっても彼女のそんな表情は好きにはなれなかった。なにか彼女の機嫌を治せるネタはないかと部屋を見回した忠は、それを発見するや机に歩み寄っていった。相方が何も言ってくれない事に明石は、先程よりもさらに表情を曇らせて俯いた。別に忠を責めようという気は起きないが、なにか自分一人が苦しんでいるようで心が晴れなかった。師匠が以前に語ってくれた話がまだ記憶に新しい明石には、なおの事であった。

その時、ふと落としていた視界に相方の脚が映った明石は顔を上

げようとしたが、その頭を忠に両手で横から抑えられた。突然の彼の行動に驚く明石だが、忠は至って平然とした声で彼女の頭から帽子を取って言った。

『ほら、動くなよ。』

明石が言い返すのを待たずに、忠は彼女の頭の右耳の上辺りの髪に何かを挿した。その違和感に思わずその部位を触ろうとする明石だったが、忠は彼女の手を押さえると、今度は両肩に手を置いてクルッと身体の向きを変えた。

『うん、良く映^はえる。』

背後から聞こえてくる相方の声と同時に、明石は目の前にあった舷窓に映り込む自分の姿を瞳に映した。陽も落ちてやっと暗くなり、発令所内の電灯で映り込んだ明石の頭には赤紫色の花が挿されていた。黒と白の軍装しか持っていない明石にとっては、初めて身に纏った鮮やかな色であり、濃い青紫色の夜景にぼつりと浮かんで輝く赤紫色の花は、なにか一人苦しんだ自分の様に明石には思えた。

『花が似合うって事は良い事だぞ、明石。』

再び背後から聞こえてくる忠の言葉に、明石はやっと笑みを取り戻した。肩に伝わってくる、彼の手の温もりに明石は口元を緩めると、両手を腰に当てて胸を張った。

『ふふーん、とーぜん!』

決して二人の考えが理解し合えた訳でも、決して二人の心が通い合った訳でもない。だが明石は、忠という大事な相方の存在を、一

連の彼の行動を受けて改めて認識した。明石の師匠である朝日が言った言葉を、彼女は再び思い出す。代わりに戦う事はできなくとも、策を与える事はできる。師匠と共に、そんな芸当ができる心強い人物が明石にはもう一人いたのだ。二人の顔が映り込んだ舷窓、その舷窓越しに二人は笑みを合わせた。

その夜遅く、明石艦は筑摩艦搭載機の墜落地点に移動して投錨。翌日には引上げ作業に入った。羽布張りで2トン少ししかない九五式水偵の引き上げだったが、折れ曲がった翼が海底に突き刺さって中々作業が捗らない。ところがさすがは明石艦。小笠原工作長の指揮の元、なんと潜水服に身を包んだ工作科員が水中に潜って翼を切断するという方法で解決した。非常に珍しい水中溶接の技術を応用しているらしく、明石艦乗組員を始め、訓練に向かう為にその場を横切っていく第二艦隊の各艦からもその光景は視線を集めた。そしてその中の一隻、気さくな艦長が座上する神通艦じんつうからは、手旗信号でその手腕を褒め称える信号が送られてきた。

『貴官ノ能力ト普段ノ勤労、誠ニ天晴レ。我、中城ノ珊瑚礁ニ帝国海軍ノ技術ノ最先端ヲ見ルニ至リ。』

艦魂同士の仲に収まらず、明石艦の存在は第二艦隊内でも認められ始めていた。この日、明石艦の快挙を目にした第二艦隊の士気は高く、頭一つ拔きん出た訓練の成績に古賀長官は手を叩いて喜んだという。

第三話 「忠、魚雷に学ぶ」

3月10日、1921。

風はそれ程でもないが、その日は朝から大粒の雨が降っていた。

艦隊全艦が参加しての大戦技訓練を予定していた第二艦隊は天候不順を理由に訓練開始日を翌日へと延期し、その日は全ての艦では一日まるっと整備日課となった。特に大きな出来事もなく、まるで休日のように過ごせる一日であったが、それを快く思えない者も少なからずそこにはいる。

いつもの様に忠^{ただし}の部屋に集まった仲良し達だったが、その中で神通^{つう}は不満げな表情を浮かべていた。

せっかくの戦技演習をフイにしてしまった沖縄の天気が彼女の心を曇らせたのである。特に神通が率いる二水戦は隸下の駆逐艦が新参ばかりであり、貴重な訓練の時間が削られてしまった事は彼女にとって残念でならない。

もつとも神通はそれを余り表情に出そうとはしない。その理由は、考えがすぐに読み取られてしまう事が彼女の理想の上官像に当てはまらない事と、不機嫌な雰囲気をばら撒いてせっかくの楽しい一時を無駄にしたくなかったからである。

故に何食わぬ顔で部屋に響く仲間達の会話を耳に入れていた神通だったが、その内容はやはり頭には入っていなかった。

『どうしたの、神通？』

『うん・・・？』

ふと神通に声を掛けてきたのは、自身の隣で寝そべった明石^{あかし}だった。20センチはあろうかという羊羹^{ようかん}の塊を口に挿したまま、明石は隣で黙りこくった神通の顔を覗きこんでいた。暫くの間手元に視線を落としていた神通は、明石の問いかけに顔を上げる。

ベッドの中央に腰掛けている神通だが辺りに視線を流すと、寝そべって羊羹を貪り食う明石とは自分を挟んで反対方向にいる那珂^{なか}も首を捻って姉の顔を覗きこんでいた。正面の床に座った霞^{かすみ}と霰^{あられ}、雪風^{ゆきかぜ}は、キャツキャツと声を弾ませて部屋の隅で椅子に座る忠と話をしている。

呆けた顔で部屋の状況を把握する神通だったが、その腕を引っ張りながら明石が再び声を掛けた。

『どっか痛いのか?』

『いや……。そんな事はない。』

神通は明石に小さく笑みを見せると、明石に向かって右手を差し出した。すると明石はそれまで口に差し込んでいた羊羹の塊を噛み切り、神通にその羊羹を手渡した。明石の歯型がくつきりとできた羊羹だったが、神通は気にも留めずに口に運ぶ。歯が痛くなる程の羊羹の甘さに神通は口元緩ませ、それを横から見ている明石も微笑んだ。

二人は言葉をそれ程交わさずとも、お互いの事を気遣い、その気持ちに感謝を示す事ができる唯一無二の仲良しなのである。出会った頃にはその綺麗な顔にお互いの拳を打ち込んだ事など、今の二人には笑う事のできる昔話の一つにしか過ぎない。そして未だかつて得た事の無かった真の友の存在を喜ぶような姉の姿に、那珂もにっこりと微笑んでいた。

無言のまま笑みを湛えていた三人だったが、その内にそんな彼女

達を遮るように忠の声がその場に流れてきた。

『うゝゝん、神通。どうだ、これ？』

『ん？』

神通が視線を向けた先では、忠が何やら困ったような笑みでノー
ト大の紙切れを手にしていた。彼の隣には雪風が立っており、忠の
袖を掴んで何やらニヤニヤとしている。状況が解らずに首を捻る神
通を他所に、忠は雪風に視線を流して口を開く。

『ごめんな、雪風。オレは砲術が専門だから、水雷はよく解んない
んだ。』

『あはは！森さんにも解んない事ってあるんスねえ！』

どうやら紙に書かれた内容は雪風が書いた物らしく、彼女はその
内容の良し悪しを忠に尋ねたらしい。そして彼の言葉通り、専門外
である水雷の話に困った忠が神通にお鉢を回してきたのだった。

彼の判断は正しく、事実、二水戦の戦隊長という艦魂社会での立
場を頂いている神通はその生涯の殆どを水雷戦隊旗艦として過ごし、
実質的に指揮を取る司令官の五藤少将をも凌ぐ生粋の水雷オタクで
あった。雷撃運動や戦隊の襲撃運動は彼女の得意分野であり、連合
艦隊旗艦の長門^{ながと}をして「天才」と言わしめる程の持って生まれた才
が彼女には有った。忠や明石は知らないが、その豊富な知識と経験、
センス、そして並み以上の度胸の持ち主である神通は水雷戦術にお
いては強いこだわりを持っており、同じ第二夜戦隊を組んでいる七
戦隊の仲間達や、艦隊司令部直卒である四戦隊の上官達に向かつて
暴言を吐く事は日常茶飯事であった。時にはなんと艦隊旗艦の愛宕^{あたご}
にすらも食って掛かるという程である。

常にその姉を抑える役目の那珂は大変であったが、同じく水雷戦

隊旗艦を長く務めてきた彼女は姉の口にする事は決して間違いだと思っではない。そして、霞と霰、雪風を含めた神通の部下達は、怖いながらも自分達が所属する二水戦の理想の為には平気で上官と一戦交えてくれる上司、神通を深く尊敬していた。

『戦隊長、どうスカね・・・？』

雪風は忠の手から紙を取ると、ベッドで脚を組んでふんぞり返る神通の前まで歩み寄って紙を差し出してきた。さしものやんちゃ娘、雪風も神通の前では大人しい物で、両手でもった紙を差し出すと同時に深々と腰を折って頭を下げる。

神通は左手にお酒の入ったコップを、右手には明石から手渡された羊羹を持っており、手を空ける為に明石に向かって羊羹を差し出した。それに気づいた明石が口を大きく開けると、神通は羊羹をそのまま明石の口に差し込み、空いた右手で雪風の手にあった紙を取った。

『どれ。』

神通が書かれた内容に黙って視線を配り始めると、両横から那珂と明石も神通に顔を寄せてその紙を眺めた。神通期待の新人である雪風は、その性格とは裏腹に身体能力も知識も抜群に良い。俗に言う優等生である彼女の文には水雷における専門用語が沢山用いられており、それを理解できない明石は眉をしかめて首を捻る。少し間をおいて口を開いたのは、神通の斜め後ろから紙を読んでいた那珂だった。

『これ、雪風が考えたの？』

所属戦隊こそ違うが、雪風にとっては那珂も水雷戦隊という名の土俵を同じくしている上官である。まして自分の上司の実の妹にして、普段から暴れん坊の神通を止めてくれる那珂は雪風にとっても頼れるお人だ。雪風は背筋を伸ばし、両の手を腿の脇に置いて那珂に答えた。

『はい。アタイ達、陽炎型と実験搭載した6駆が積んでる新式魚雷の性能を持てれば、きっと行けると思うッス。』

『ふむ。遠距離からの雷撃、それも隊単位による開進射撃か・・・。』

『はい!』

自分の提案に対して真剣に考えを巡らしてくれる二人の上官に、雪風は表情を明るくさせて胸を張った。

盛り上がっている3人だが、部屋の端の椅子からそれを眺めている忠にはその内容が皆目解らない。そして雪風が口にした言葉が気になった忠は、足元でお菓子を頬張る姉妹にそれを聞いてみる事にした。

『なあ、新式魚雷ってなんだ？ 霞達には無いのか?』

後輩が目立っている事が気に食わないのか、霞はちょっと口を尖らせながらも笑みを向けて忠に答えた。

『正式には九三式魚雷って言うんですよ。雪風が言った通り駆逐艦ではまだ陽炎型と、那珂さんとこの第6駆逐隊にしか装備されてないんですよ。』

霞はそこまで言うと、手に持っていたラムネの瓶を口に近づけて

一飲みした。相当雪風が目立つ事が気に入らないらしく、飲み終えると今度は手元にあった甘栗を一粒取って、口の中にヒョイっと投げ入れた。眉をしかませて頬を動かす、珍しく不機嫌そうな霞。霞は姉のそんな表情に困ったのか、忠に向けて苦笑いを向けてきた。心優しい霞の事である。恐らくは許してやってくれという想いが籠った笑みなのだろうと忠は悟り、机の上から飴玉を一掴み取って、笑みと共に霞に手渡してやった。

『森さん、おおきに。』

両手で大事そうにしながら霞は飴玉を受け取ると、さっそく包み紙を外そうとする。戦闘艦の艦魂である事は忘れてしまう程に大人しい霞に、忠は少しだけ遠慮の気持ちが薄らぎ、隣でふて腐れている霞に変わって先程の話を彼女に聞いてみる事にした。

『なあ、霞。どんな魚雷なんだ？ 今までのとは何が違うんだ？』

『うーん……。ウチもよおは知らんどす。軍機らしおすな。あ、やて性能はちびつと聞いたどす。』

そういうと霞は顎に右手の人差し指を添え、天井に視線を向けて記憶を辿り始めた。僅かに眉をひそめながら、霞は記憶にある新式魚雷の性能を語り始めた。

『確かあ、大きさの寸法は大体同じで、雷速48ノットで射程は2万メートル。炸薬は……。490キロやったような……。』
『2万メートルだって……。！？』

一応は兵学校出身である忠は、当然の事ながら魚雷についての基礎知識はある。現に彼は霞や霞が搭載する一般的な魚雷の数値は大体は覚えているのだが、その事が霞の言葉を聞いた忠を驚かせた。

彼が知る一般的な魚雷は九〇式魚雷という名の物で、炸薬は400キロと霰の言う九三式魚雷とはそれ程大きく違う訳ではない。事実、魚雷自体の大きさも直径は同じ61センチで、長さも九三式の方が500ミリ長いだけである。ところが九〇式の射程は雷速45ノットで7千メートルであり、単純に九三式の駛走性能は九〇式の二倍。忠は鉄砲屋らしくそれを大砲に置き換えて考えてみるが、それにしても射程距離が弾速をそのままにして二倍になる等とは信じられないお話である。

呆けた顔で忠は噂の新式魚雷の構造を考えてみるが、その構造はまったく頭に浮かんでこない。今更ながら帝国海軍の技術力に感心しつつ、そのぶっ飛んだ数値の裏を忠は模索した。

忠が頭を捻っている最中、ようやく雪風の提案を読んでいた神通が声を発する。雪風はその提案に自信を持っており、上司から必ずやお褒めの言葉が返ってくるだろうと期待していた。ちよつと口元を緩ませて目を輝かせていた雪風だったが、神通は一度チラッと雪風に視線を流すとすぐさま紙に視線を戻し、ちよつと雲らせたような表情を浮かべながら口を開くのだった。

『距離1万メートル以上での斜進射法か、悪くは無いが……。ふむ……。』

僅かに首を捻ってそう言った神通に続き、神通の肩に顔を乗せるようにして眺めていた那珂も口を開いた。

『ううーん……。同航体勢だとしても、距離1万以上では命中させるのは至難の業ね。』

二人の上官から返って来た否定的な意見に、鼻っ柱の強い雪風は臆する事は無く、逆にちよつとムツとしたように僅かに口を尖らせ

て声を返した。

『それは訓練でどうにでもなるッスよ。それに九三式魚雷はゆくゆくは帝国海軍の雷装の標準になるっスから、水雷戦で用いられる戦術そのものがこうなる筈ッスよ。』

『だろうな……。』

神通は雪風の言葉に、どこか力が抜けたような声でそう言った。鬼の戦隊長に意見を肯定された雪風だったが、その新鮮味が希薄な声を受けてさらに口を鋭く尖らせる。明らかに不満げな表情を浮かべる雪風に、神通は何食わぬ表情のまま声を出した。

『別にこの戦術を間違いだと言ってるんじゃない。追尾斜進装置もあるから、恐らく将来はこういう戦い方になるだろう。一等巡の連中も装備し始めているしな。』

あくまで雪風の言葉を肯定する神通であったが、その表情が一向に晴れない事に雪風は声を上げる。だが神通はそんな雪風の言葉を遮るようにして声を被せてきた。

『じゃあ、なんでー。』

『遠距離攻撃という物は好かん。敵の損害が目で確認出来る程での近距離雷撃が望ましい。』

神通はそう言うと、眼前で不機嫌さを露骨に顔に出す雪風の肩に手を置く。彼女は相変わらず口をツンと尖らしたまま俯いているが、神通はそんな雪風に若い頃の自分を重ねて小さく笑った。雪風と同じくらいの年の頃、彼女もまたこうして先輩に意見をしてはヘソを曲げていたのである。右手に持った紙を靡かせながら、神通は雪風の顔を覗きこんで言った。

『これは貰っておく。雪風、お前の言っている事は間違いじゃない。だが私にも考えがあつてな。我慢してくれ。』

『・・・はい。』

ふて腐れながら雪風は返事をしたが、神通は彼女の態度を怒るつもりは無い。雪風は神通が一目置いている期待の新人であつて、今まさにその紙に書かれた彼女の意見に神通は深く感心しているからである。性能というしっかりした数字を用いて導き出した雪風の戦術は将来をも見越した物であり、神通がこれまで培ってきたノウハウを別にすれば、その内容是否の打ち所がないのであつた。

口下手な神通の言葉に納得できない雪風だったが、そんな上司の妹は雪風の心の内を完全に読み取っていた。ベッドの奥から神通の真横まで進み出てくると、那珂は雪風に慈愛心溢れる笑みを近づけて言った。

『雪風、言いたい事は解つてる。この戦術なら私達自身が損害を受ける機会を減らせるのよね。何より夜戦配備での初期配置の位置から直接雷撃をできるし、1万メートル以上の距離なら隠密発射の効果も期待できる。支援隊の雷装も勘定すれば、遠距離での射角構成雷数も凄い物になるでしょうね。』

姉と違って器用な心遣いができる那珂の優しい言葉に、雪風は僅かに顔を上げて表情から曇りを除いてゆく。那珂は一度大きく頷いてみせると、横目で隣にいる神通を見ながら続けた。

『神通姉さんもその事は知ってるの。でも、私達のお仕事は魚雷を撃つ事ではなく、魚雷を使って敵へ損害を与える事。その観点から言えば、敵の損害や命中の成否が確認しづらい遠距離射撃にはちゃんと解決しなきゃいけない懸案もある。特に夜戦では視界が利かな

いし、曇天の天候では視界が1万メートルをきる事だっているの。それに遠距離での雷撃には必然的に高い射撃管制能力が必要になってくるわ。敵との照準距離が遠いほど到達時間は長くなるからその分だけ敵にしても対処行動の猶予を与えるし、横衝撃での命中を目指す事自体もとっても難しくなっちゃう。』

那珂がそこまで言うと、雪風は頭の後ろを搔いて苦笑いした。

自らの案に自信を持っていた彼女だが、経験豊富な上官によって丁寧なそれを諭されると、根が素直な彼女はすぐに自分の至らない点を理解したのである。少しだけ険悪な空気が漂い始めていた部屋は、雪風の歪んだ笑みによって再び明るい雰囲気包まれ始める。部屋にいる者たち全員が自然と笑みを浮かべる中、それまで黙っていた神通が静かに雪風へ声をかけて一連のやりとりを総括した。

『この案は別段、変ではないんだ。ただ射法も含めた実施要領がまだまだ決まっていけない訳だから、今日明日で実践できる物でもないその内、人間側でもこれに似た戦術を採用すると思うから、しばらくは戦隊長預かりの案件とする。いいな、雪風？』

『はい！』

背筋を伸ばして大きく返事をした雪風に、神通は口元を僅かに吊り上げてニヤリと笑うと、手にしていた紙を丁寧に折り畳んでポケットにしまい込んだ。彼女の隣で明石と那珂がその光景に笑みを湛える中、雪風は上司のその行動を見届けると大きく腰を折って一礼し、部屋の隅でその光景に耳を傾けていた忠の足元に戻って腰を下ろした。

採用とはいかなかったが、自分が具申した意見を肯定された事に雪風の顔には笑みがこぼれる。霞はそんなやり手の後輩に嫉妬の目を向けていたが、同時に雪風のように新たな発想が湧かなかった自分がとつても悔しかった。悟られないように唇を噛む霞の肩を、唯一その心の内を悟る事の出来る霞が静かに触れていた。

そして足元でこもごもの想いを巡らす3人を他所に、忠は彼女達の博識さに驚いていた。彼がこれまで関わってきた神通や那珂、そしてその部下である少女達の姿は、怖い上司と怯える部下という光景でしか見た事が無かった。ところが今日は兵学校出身の忠がチンパンカンパンになってしまう程に、水雷についての高度なお話をしているのである。改めて彼女達が、栄えある帝国海軍の水雷戦部隊の艦魂である事を悟った忠。彼は顎に手を当ててゆっくり頷きながらも、興味が湧いた水雷の知識を彼女達から教授してもらおうと声を掛けた。実は彼のその行動の裏には、やがて来るであろうとある生活の為の予備知識を得ておきたい、という思惑が在ったのだが、それを明石を含めた彼女達が知るのもう少し先の話である。

『なあ、斜進ってなんだい？』

おもむろに上げた忠の声に答えたのは神通だった。砲術士官である忠の境遇をよく解っていた彼女は、いつものような憎まれ口を叩くことなく、懇切丁寧にその言葉を説明しだした。

『読んで字の如く、斜めの進路。つまり魚雷を発射した後の雷道の状態の一つだ。敵の航行状態やこちら側との速度差、偏差角を考慮して、任意の角度で雷道を左右に傾斜させる事が出来る。』

お酒が回ったのか、部下の成長が喜ばしいのか。珍しく口数の多

い神通であったが、魚雷に関しての知識が薄い忠は彼女の言った意味がイマイチよく解らない。僅かに首を捻ってその言葉の意味を考えた忠は、今まで知らなかった魚雷の知識の一つを想像して驚きの声を上げた。

『も、もしかして……。魚雷って曲がるの……。？』
『なんだ、そんな事も知らんのか。』

目を点にして驚く忠に、足元でそれを常識とする少女達3人がクスクスと笑った。『へええ〜。』とベッドの脇で声を上げる明石もその事を初めて知ったようだったが、理不尽にも神通や那珂もまた忠を視界の端に入れて小さく笑っている。逆になにやら自分の無学に恥ずかしさを覚えた忠は、頭の上から帽子を取って笑みを歪ませながら頭の後ろを掻いた。さてどう話した物かと、これからする彼への説明の仕方を考えた神通は、彼が専門とする砲術と同調を取って話を進めることを閃いた。実戦では部下達の突撃路啓開の役目を負う神通は、霞や霰、雪風に比べて遥かに強力な砲煩兵装ほうこんを持っており、その豊富な知識は砲術に関しても抜かりが無い。その豪放ではた迷惑な性格とは裏腹に、戦闘艦の艦魂としての彼女は文字通り「天才」なのである。

『森、公算射撃は知っているな？』

『ああ、もちろんだ。』

『その概要は？』

『目標の未来位置に向かって、弾着の散布界を移動させる。』

『そうだ。雷撃も同じだ。ただ砲弾と違って魚雷の速度は時速100キロも出ないから、いくら距離が近くても到達までにはそれなりに時間がかかる。だから公算射撃を用いる。それと発射管が直角に真横を向いた状態で使用する事も関係する。魚雷が海面に飛び込む

状態は、艦中心線に対して真横が一番安定しているんだよ。これが斜めにズレると不規則な進路になってしまう。それはお前がやる当日修正の諸条件と似たようなモンだ。』

神通は言い終えると、右手にあったコップを口に運んだ。彼女はゆっくりと酒を流し込むと、その余韻を楽しむかのように大きく息を吐いた。『さっすが戦隊長。』と丁寧な説明に拍手する部下達の声を耳に入れ、神通は床に目を向けたまま小さく微笑んだ。

忠は初めて知った魚雷の知識にただ頷くばかりであった。魚雷が曲がるどころか、発射管が真横を向けた状態でしか使用されないという事さえ彼は知らなかったのである。瞬きをも忘れる程に呆ける忠だったが、ここまで聞いた神通の説明で彼には一つの疑問が湧いた。

『なあ、神通。発射管の方向が規制されてるって事は、照準線を合わせるために艦を直接旋回させるしかないって事か？』

『あゝ、昔はそうやってた。だがそれは雷撃の準備行動を敵に教えてやるような物だ。そこで出てくるのが斜進射法。発射した魚雷が任意の方向に旋回するように、あらかじめ魚雷を調定しておくんだよ。これなら目標の姿勢に対して合わせる角度も少なくて済むし、爆発尖が確実に動作する有効撃角を作り出す事も容易い。もちろん命中させる為には緻密な射法計画を練る手間はあるが、目標の航行状態によっては無転舵での射撃なんかも可能だ。』

『じゃあ、右舷に発射して、艦尾を回って左舷に魚雷を撃つなんて事も・・・？』

『まあ、極論ではあるが可能だ。あ、確か潜水艦の雷撃では艦尾発射管の雷撃はそうする筈だったな。斜進を目一杯かけて、艦首方向にある散布帯の一番外側の射線を構成させるんだそうだ。』

忠は再び大きく頷いて息を呑んだ。今まで触れた事の無かった魚雷の知識と、それを懇切丁寧に教えてくれた神通のその頭の良さ。艦魂という存在は一般人からすれば幽霊や物の怪の類と同等の非現実的な物だが、そんな存在であってもさすがに帝国海軍の艦魂である。水雷に関しては基礎的な知識でしかないのだが、それを良く理解している神通の言葉に、忠は初めて艦魂という存在に尊敬の念を持つ事が出来た。

今までの彼にしたら、彼女達は財布の事情を屁とも思わずに食べ物要求して来る、困った連中ではなかった。良い様にかかわれて笑われる事はいつもの事だし、神通に限っては時には暴力を振るってくる事さえある。決してそうは思っていないが、俗世の言葉を借りれば疫病神その物である。だがそんな彼女達も使命を持ち、その為に必要な知識をちゃんと学んでいるのである。その事に少し感動した忠はその心に込み上げた想いを共有しようと、ベッドの脇にいる相方に顔を向けて声を発した。

『凄いなあ。おい、明石―。』

『くかー……。』

艦魂とは自分に与えられた使命を常に胸に秘め、その為に必要な知識を懸命に学ぶ、健気にして誇り高い者達である。たぶん……。そんな言葉を脳裏で呟いた忠は、約一名の例外を無視してその場にいた艦魂達に尊敬の眼差しを向けた。大口を開けてよだれを垂らす相方に呆れつつ、忠は神通とその仲間達と共に、その夜遅くまで水雷に関しての話題に花を咲かせた。多様な知識を学ぶ事が出来たその夜の宴会は、今まで彼女達と過ごしてきた忠にとっては数少ない楽しい一時だった。

第三話 「予感」

昭和15年3月27日。

昭^{あかし}和石艦を含めた第二艦隊は、長らく訓練に勤しんだ作業地であり中城湾^{なかぐすく}から錨を上げた。暖かい潮風が漂い、まるで子供が自由に書いた絵の様に鮮やかな沖縄の風景ともしばしのお別れとなる。

ほぼ1ヵ月間も留まると乗組員達の感慨も一塩であり、上陸時に仲良くなった沖縄の人々は漁船を出して第二艦隊各艦の周りを駆けて行く。小さな漁船の上に仁王立ちして日章旗を振り回してくれる者もあり、その豪快な別れの挨拶に乗組員達も精一杯に手を振って別れを惜しんだ。

さんご礁で美しい中城湾を西に向かって旅立っていく第二艦隊の軍艦旗は、彼等沖縄の人々の目にはどう映ったであろうか。

やがて第二艦隊は僅かの間だが南支方面行動となり、次なる泊地を大陸沿岸の厦門^{アモイ}に定めた。師匠の言葉が見事に的中していた事に、明石は改めて朝日の偉大さを実感する。

厦門は沖縄よりもさらに南の地であり、そこまでに要する3日間の航海は暑さとの戦いであった。だが大陸沿岸の航路は民間船の往来も激しく、颯爽と海原を進む大名行列のような第二艦隊は行き交う船舶の乗組員達の視線を釘付けにする。その中でも帝国船籍の船舶は第二艦隊の各艦に翻る軍艦旗を目にして歓喜し、わーわーと歓声を上げて甲板から手を振ってくれた。

3月30日、1637。

第二艦隊は廈門に到着し、廈門港に錨を下ろした。

入り江の多い廈門は波も静かで水深も深く、大型船舶が難なく停泊できる天然の良港で国際的にも古くからその名を知られた港湾都市である。

戦国時代に名を馳せた南蛮貿易の一大拠点でもあった廈門は、最近では東南アジアへの労働力提供の基地として機能する事によりその財力を維持しているのだという。さらに西洋資本も向けられているこの地は、ベトン製の岸壁や簡単な起重機も備えた中々に近代的な港湾都市である。

現在、この廈門は日本によって占領されているが、過去にもアヘン戦争でイギリスに占領された歴史がある。だがオランダ人と共に世界的にも優れた商売感覚を持つ支那人が住む地らしく、逆に開港するや大陸製の青磁や陶器、烏龍茶の輸出等を通して莫大な富を築くというアジアの偉業を具現化した地でもある。そして支那事変の勃発に伴って昭和13年に帝国海軍によって占領されるや、今度は帝国海軍向けの物品調達で一儲けしようとする逞しい都市であった。たぐま

4000年の歴史は伊達ではなく、支那人が調達してくる物品は品質も良く、それを受け取る側の第二艦隊の主計科員を大いに喜ばせた。他にも竹や木等の一般的な資材、軍服にまで及ぶ被服の製造や仕立、その長い歴史の中で築き上げてきた一大商業網を駆使して調達する名品珍品など、商売上手な支那人像をハッキリと伝えるのがこの廈門市であった。

また、他民族が混在する大陸では用いる言葉も様々という大陸独自の事情に対して、廈門では台湾人と同じ言葉を用いるという事からその領有先である日本に対しての感情がそれ程までに先鋭化して

いないという事も日本にとっては嬉しい事だった。

沖合いに錨泊する第二艦隊を他所に、明石艦は岸壁に接岸しての資材補給を行っていた。同じ土の上で今も繰り広げられる支那事変だが、廈門の港はそんな喧騒をあざ笑うかのように人々の往来が盛んであった。接岸するとすぐに現地の子供達が岸壁に集まり、どこからクスねてきたのか煙草やお茶の葉等を持ち寄って乗組員達に交換をせがんでくる。特に汚い服を着ている訳でもない子供達のそれは戯れなのだろうが、なけなしの缶詰やお菓子を乗組員達があげると『ワーっ』と元氣の良い声を上げて去っていった。

資材の出し入れは砲術科のお仕事であり、今日も忠は甲板にて搬入の指揮を取る。

ふと艦側から岸壁を見下ろすと、走り去っていく子供達に続いて現地の商人らしい男が何やら岸壁に下りた乗組員達に声を掛けていた。ニコニコと笑って独特の甲高い発音で放つ片言の日本語と民族服を着たその格好が、目にする者に彼が支那人である事を伝えてくる。ヘコヘコと何度も頭を下げる彼には敵意を感じないが、日本人とは違って終始胸を張ってお辞儀する彼にはなにか支那人独特の誇りを感じてならない。事実、彼のような支那人達の商売によって、シンガポールやスラバヤ、アンボン等といった東南アジアの都市は潤っているのである。

西洋列強に武力で抑えられようとも、彼らはそこに様々な糸口を見出して常に繁栄の道を探し当てているのだ。

忠は口元を緩めると口の前に手をかざし、岸壁で支那人と会話する部下に向かって声を張り上げた。

『小口！煙草があるかどうか聞いてくれ！』

頭上から響いた声で彼等は顔を上げると、その中で部下よりも速くその支那人の男が声を返してきた。小さく頭を下げながらも目を細くして微笑む彼の表情に、忠は煙草の有無を返事を聞く前になんとか察する。

『タバコ、有ルマス。ドノカズ、欲シイデスカ？』

彼の声を受けた忠は指を三本立てて見せ、さらに声を返した。同じ漢字を使う支那人は物分りが良く、すぐさま彼も指を三本立てると大きく頷く。一応は通じてるようだが、その内容を確認する意味で忠は再度声を上げる。

『箱だぞ？ 3箱な！』

そう言いながら手のひら大の箱を指で象ってやると、支那人の男は自分の胸から煙草の箱を取り出してみせた。これですね？といった感じで微笑むと、彼は再びお辞儀をして答える。

『夜ノ前。スグ、来マス。』

『おし、頼んだぞ！』

陽は既に傾きかけているが、彼の言葉は日が沈む前に来てみせるという意味だろう。ゆっくりと立ち去っていく男から忠は視線を流し、廈門市の街並みを遠めに眺めた。

占領から既に2年も経った廈門市は静かなもので、欧米や東南アジアに散った華僑からの投資に潤う街並みには花の香りすら漂う程である。あの空の向こう、遙かに続く陸路の向こうでは、今も日本人と支那人が互いの喉に刃を突きつけ合っている。自分もその刃の端くれなのだと思いつつも、平和と言う言葉を象徴したような廈門市街の光景を忠はしばし見つめ続けていた。

一方その頃、明石は廈門港の近辺に停泊する仲間の艦を訪れていた。豪華な造りの室内に通された明石だが、特にその部屋は彼女にとって目新しい部屋ではない。小奇麗なソファに木目の家具がならび、室内を縦に切り裂くように置かれた長机にはその艦体と同じように雪のような真っ白なテーブルクロスが掛けられている。

そしてその艦の主が部屋の奥のソファで姉の愛宕^{あたご}、高雄^{たかお}と一緒にあって久しぶりの姉妹での会話を楽しんでいる。若手ながら切れ者で時には戦艦すらも指揮下に置く事のある愛宕だが、彼女の妹は顔こそ似ているが姉とは違って陽気でおしゃべり好きな性格であった。その笑い声に明石と共に彼女の艦を訪れた第二艦隊所属の各戦隊長クラスである艦魂達も表情を緩め、久々の姉妹の会話を邪魔しないようにと部屋の隅で話し込んでいた。

彼女達がいる艦は、出迎える為に廈門沖で合流した第二遣支艦隊旗艦の鳥海艦^{ちようかい}である。第二遣支艦隊は支那事变勃発によって誕生した支那方面艦隊の隷下部隊であり、活動拠点は南支の広州市である。鳥海艦を旗艦にした第十五戦隊が水上兵力の基幹であり、他にも第三連合航空隊、広東^{カントン}と海南^{かいなん}、そして廈門に根拠地隊を持っている。戦力的には一個水雷戦隊程ではないが、既にこの地で任務について2年に及ぶベテラン揃いの艦隊であった。昨年の海南島占領作戦にも参加しており、豊富な実戦経験を持つ第二遣支艦隊は訓練漬けの第二艦隊とはその錬度は比べ物にならない。

そんな第二遣支艦隊の所属艦魂達を束ねるのが、第二艦隊旗艦の大役を仰せつかっている愛宕と高雄の妹である鳥海であった。

『愛宕姉さん、摩耶^{まや}姉さんはどうしてるの？』

『摩耶は2月1日付けで警備艦に格上げされたよ。横須賀で会ってきたけど、元気そうだった。』

『砲術学校の練習艦だからねえ。つまんなそうだったわあ。』

弾む声での会話を響かせて笑みをあわせる3人。

彼女達、高雄型四姉妹の艦魂は帝国海軍における艦魂達の中でも特に姉妹仲が良い事で有名だった。数年前までは4隻で第四戦隊を編成し、最新鋭の設備を目玉とする彼女達は昭和8年の特別大演習にも姉妹揃って参加。演習が終わってから行われた木更津沖での特別観艦式でも、天皇陛下を御乗艦させた御召艦^{ひえい}の比叡艦に続く供奉艦を姉妹で務めた。

その中でも切れ者揃いの姉を抑えて、陛下の前を進むという光栄を独占できる先導艦を務めたのがこの鳥海艦である。愛宕艦と高雄艦に施された改装は受けていないが、その実力は姉も認める優秀な指揮官なのであった。彼女達は神通^{じんつう}や那珂^{なか}よりも年下であり20代前半と若い外見ながらも、第二艦隊の総司令部という役目を約束された高雄型一等巡洋艦に相応しい天才肌の艦魂達である。

そしてこの鳥海艦では第二遣支艦隊として派遣された昨年より、内地での行動が多い部隊から見ると非常にユニークな艦内文化を育んでいた。笑い合うその姉妹を背に、長机の端を占領して集まっていた艦魂達は早速その文化を堪能している。

那珂と神通に挟まれるように席に着いていた明石は、目の前にある大きな紙面に目を輝かせて声を発した。

『へええ、艦長標語だって。おもしろい。』

明石が言葉を発すると同時に、那珂と神通も視線を向けた先に書かれている内容に目を通して声を上げる。

『ほう、物価高とな・・・？』

『上海で商社がストライキかあ。今じゃこういうのは見なくなったわね、神通姉さん。』

珍しく人間の世界での話題を口にする彼女達だが無理も無い。3人を含めた艦魂達が見つめるその紙面の端には大きな文字で「鳥海新聞」と書かれているのだった。

これは鳥海艦主計科にて発刊されている艦内新聞であり、鳥海艦が傍受した新聞電報を基に作成した物である。情報ソースから紙面化までが全て艦内で行われる為に、その速報性は実は民間の新聞社よりも早かったりする。書かれている内容は時事ネタは勿論の事、芸能人の去就等の芸能ネタ、首相の施政方針演説等の政治ネタから海軍内での出来事、果ては天気予報にまで及ぶ中々に本格的な新聞だった。祖国を離れて励む乗組員達の事を考えて創刊された物であり、優しさという言葉が良く滲み出た代物である。

鳥海艦艦内のネタに限った紙面スペースもあり、明石はそこにまでもや新しい発見をして目を輝かせる。それは普段から自分の艦内でも繰り広げられている内容だったが、その可笑しさを含ませた書き方に明石はニツコリと微笑んで口を開いた。

『ハエ取り戦線成績表だって！ホント、おもしろいなあ！』

明石がはしゃいで見つめる紙面に那珂も興味を持って視線を流す。ただ数字が書いているだけかと思っていた那珂は、その紙面に記された表形式のスペースを見てついつい笑みを溢した。

『あら、分隊毎に順位をつけてるのねえ。ふふ、撃墜数だって。』

他の艦魂達と同様に紙面のあちこちを指差して笑う明石と那珂。そしてそれは神通も例外ではなく、紙面の端に興味を誘う記事を見つけた彼女は身を乗り出してそれを目に入れた。

『下士官兵番付……。ほう、武技教練の相撲の番付か。』

その身を水に浮かべて既に17年の神通は見た目は20代後半の女性ながらも、ふんどし一丁となった男性の姿を見ても眉一つ動かさない。むしろ武技などでの競い合いが好きな性分である彼女は、最近では自分の乗組員達が興ずる相撲を見物する事が楽しみの内の一つであったりする。艦魂の生活で相撲はやらないが、その番付表から神通は部下達の武技教練における成績を一覧表にして、部下達に競争意識を持たせる事を閃いた。

これは良い物だ！

脳裏でそう呟いた神通は顎に手を当て、ニヤニヤと笑みを浮かべながらその番付表の書き方を熱心に記憶に焼き付けていた。だが鬼の戦隊長として恐れられる神通の笑みを受けて、その場にいた明石と那珂以外の艦魂達が背筋を凍らせたのは言うまでも無い。

やがて創刊からこれまで発刊された新聞を次々に読んでいた明石は、一面の右下に「一日一言」というスペースがある事に気づいた。そこには、軍医の彼女を良い意味で唸らせる言葉が書かれている。

「治す医者より、罹らぬ予防」

名言だった。

『おお。』と声を上げた明石は思わず両手を胸の前で合わせ、紙面の言葉に拍手を送りながら感動する。第二艦隊の戦隊長クラスの艦魂の中では最年少に近い明石であるが、ただ一人だけ赤線入りの階級章をつけている彼女の声はその場にいた者達の視線を集めるには充分である。神通や那珂も含めた全員が一樣に視線を向ける中、明石はスッと立ち上がると手を後ろで組み胸を張って声を上げた。

『治す医者より、罹らぬ予防。怪我はしない事に越した事はないんです。皆さん、普段の訓練でも怪我には充分注意してくださいね。』

明石の人柄と実力を知り始めた第二艦隊の艦魂達は、彼女の声を受けて笑みを浮かべて一斉に返事をする。それまで神通の不敵な笑みに恐怖を覚えていた彼女達だが、ハキハキとした物言いの明石の言葉は彼女達の心からそんな感情を一瞬で拭き取ってしまう。

ようやく明るくなった雰囲気にな堵した明石はそれを楽しみむかのように大きく一度頷くと、片方の口元を引きつらせてニヤリと笑って神通に顔を向けた。唐突にそんな表情を向けてきた友人に首を捻ってみせる神通だったが、明石はそんな彼女に指を指して口を開いた。

『特に神通！いつも霞達をぶっ叩いてるんだから、少しは気を使っ
ってよね！』

明石の言葉に神通はさも不機嫌そうに表情を曇らせると、いつもの短い返事を発してプイっとそっぽを向く。

『ふん。』

普段の生活態度を指摘されてふて腐れる姉に、明石の隣に座っていた那珂は口を押さえて笑った。そしてそんな那珂の笑みにつられ

るように、その場にいた艦魂達も神通を笑みを伴って眺める事ができた。

内心は笑われ者になってしまった事に腹を立てていた神通だが、仲間達が珍しく笑みを合わせる今と言う瞬間を無碍にしたくなかったので彼女は何も言わなかった。神通としてもこんな朗らかな一時を望んでいるのだが、口下手で不器用な自分の性格ではそれを上手く実現できない事を知っているのである。だが今では親友である明石がそこに気を回してあれやこれやと考えを巡らし、神通が思うところをすんなりと実現してくれる。不機嫌そうに口を尖らせたままの神通だったが、彼女の肩に手を乗せて優しく微笑んでいる明石に彼女は心の中で小さく感謝するのだった。

約一名を除いて笑いあう艦魂達だったが、その中の一人がおもむろに向けた視線の先に驚きを覚えて声をあげた。

『あ、おんなじだ。』

声を上げたのは明石とは長机を挟んで反対側の席に座る、明石と同じちよっと大人びた顔つきになり始めた10代後半の外見を持つ少女。小柄な体格でその顔つきには不釣り合いな第2種軍装を身に着けて少尉の襟章を持つ彼女は、明石と共に第二艦隊では新参の部類に入る第八戦隊の利根艦^{とね}の艦魂、利根であった。第二艦隊への所属時期、艦齡、階級など、明石とは随分と同じ境遇が重なっており、仲間内の中でも明石とは割と仲の良い艦魂である。

一人机の上にある紙面の一角を指差す利根に、すぐに明石は長机の上に身を乗り出すようにして顔を近づけた。

『利根、どうしたの?』

『あ、うん。ほら、ここだよ。』

明石の問いかけに笑みを見せた利根が指す紙面の一角には、「砲術士・高津戸^{たかつと}少尉、砲術学校普通科への入校における壮行会の案内」とあった。記事の内容に目を通す明石だが、利根は彼女がまだ記事の内容をちゃんと理解できていないにも関わらずに話を続ける。

『わたしのトコの砲術士の人も5月からは砲術学校なの。高等科だけど。』

利根は言い終えると少しだけ眉をひそめて寂しそうな表情を浮かべる。もちろんその理由は乗組員という大事な自分の仲間が、お仕事とはいえ自分の元から去っていく事にある。

帝国海軍では、士官以上における人事異動は1年を目安として頻繁に行われる。下士官兵上がりの特務少尉と呼ばれる身分の者は一つの艦に対して退役まで永久勤務する事もあるが、兵学校を出た者は転属の度に大型の艦、または偉い肩書きを持たされて配属され、将来的には艦長や長官等といった責任者格として海軍に勤めていくことになる。

それ自体は別に帝国海軍に限ったお話ではないのだが、当の艦魂達にとっては別れ以外の何者でもない。腕前の良い乗組員との別れを惜しむ事もあれば、その下手糞な腕前に文句を言いたくなる時だって彼女達にはある。何百人と乗組んでいれば名前を覚えるのも大変であるが、彼女達にとっての乗組員は文字通り血肉であると同時に、触れ合う事はできなくとも同じ物事に一喜一憂する大切な仲間でもあるのだ。

『そうか。大変だな、利根。お前のところは主砲塔が多いから、砲術士が抜けるのは辛いだろう？』

『ええ・・・。』

利根に声を掛けたのは、それとなくその会話を耳に入れていた神通だった。怖い性格でまかり通っている神通だが、その口から出てきた自分を心配してくれる声に利根の表情は明るくなる。

第八戦隊の利根艦や筑摩艦ちくま、そして神通率いる二水戦がコンビを組む第七戦隊の鈴谷艦すずやと熊野艦くまのはともに二等巡洋艦として計画された艦型であり、搭載主砲の口径やそれまでの系譜は違えども神通と同じ所謂軽巡洋艦である。

同じ河川の名前を持つ彼女達は神通や那珂にしては妹のような物であり、当の彼女達にとってもまた、神通はとっても怖いけど頼れるお姉さんだと思っていた。特に明石と出会ってから神通は人柄がまるっと変わり、相変わらずげんこつを振り回す所はあっても以前の様に鼻や歯を折る程までに殴りつけるような事はなくなった。4人とも演習の際には彼女にガミガミと怒鳴られる事は日常茶飯事であるが、それ自体も神通がなんとか教えを授けようとしているという事であると彼女達はちゃんと理解している。故に彼女達にとつての神通は、重巡らしく山の名前を頂いた愛宕や高雄以上に親しみを感じている人物であった。

ちなみに彼女達とその姉妹の中には、精悍な顔つきで寡黙な性格の神通に対して姉や先輩以上の好意を抱いている者もいたりする。

『那珂、八戦隊はお前のところと組んでるんだ。支援砲撃が甘くなつた事で襲撃の成績を落とす訳にもいかんから、後で利根や筑摩とはよく打ち合わせをしておけ。』

『ふふふ、はい。』

神通の声に、那珂はどこか姉を小馬鹿にしたような笑みを浮かべて返事をする。

つつい神通は指揮官的な物言いをしてしまうのだが、それは持つて生まれた彼女の指揮官としての才能の裏返しでもある。不器用な姉はそれを抑える事はできないが、その言葉の内容は「後輩の心配をフォローしてやれ」というなんとも優しさが染みた言葉であった。底抜けに怖い姉ではあるが、同時に底抜けに優しい心も持っているのである。

自分と良く似た顔立ちであるにも関わらず自愛心溢れる笑みを向けてくる那珂を、神通は羨ましく思いながらも、少しだけ悔しくてそれまで向けていた視線を那珂の顔から外した。

ちよつと複雑な心境の神通であったが、ふとその隣で頬に手を添えて眉をしかめていた明石に気づいた。なにやら難しいことを考えている事がすぐ解る明石の表情に、神通は少しだけ口元を緩めて声を掛ける。

『どうした、明石？』

神通がそう言うと、明石は浮かべた表情はそのままに、顔だけを向けて声を返してきた。

『ねえ、神通。砲術学校って、なあに・・・？』

鬼より怖い砲術学校と海軍内では有名であるのだが、それは人間の世界でのお話であり、海軍歴がまだまだ浅い明石にはその概要がトンとよく解らない。まして工作艦として生を受け、戦闘艦である仲間達のように砲術に重きを置いていない彼女の生い立ちには、あまり出てきた事のない言葉であった。

神通は即座にその事を悟ると、一呼吸置いてから明石に体ごと顔を向けて話し始めた。

『砲術学校ってのは帝国海軍の教育機関の内の一つだ。あゝ、兵学

校の事は知ってるな?』

その言葉に明石はもちろん頷いた。彼女が母港として滞在する呉軍港の目と鼻の先にある江田島に、海軍兵学校はあったからである。明石自身、何度も目にして来たし、その卒業生の一人である彼女の相方から何度もその名を聞いた事があった。

『うん、知ってる。』

『兵学校は指揮官としての初歩的な物事を教える学校。対して砲術学校とかの術科学校ってのは、その科に応じた専門教育を行う所だ。例え駆逐艦でも主砲塔の操作をする乗組員は下士官兵に至るまで、そのほとんどが砲術学校出の奴等だ。』

『ふう〜〜〜ん。』

どこかわざとらしい程の声で明石は頷くと、頬杖をついて天井を眺めた。自分から聞いておいて素っ気無い明石の態度に神通は少しだけムツとするが、その裏にあった明石の心の内を隣で聞いていた那珂は薄々感じ取っていた。

その経験上、那珂にも砲術学校という物は良く解っている。そしてその事が、那珂の心に一つの心配事を沸かせたのだった。明石に顔を向けて笑みを消した那珂は、その憂いを確かめるべく明石に尋ねた。

『明石、ちょっと良い?』

『うん? な、なあに・・・?』

『森さんて、少尉に任官してどのくらいなのかな?』

そこまで那珂が言うと、神通もまた明石の態度の裏にあった理由を瞬時に悟った。急に真面目な顔をした神通と那珂に挟まれる格好となった明石は、二人の表情に戸惑いながら記憶を辿ってその問い

に答える。

『う、うーんと……。まだ2年経ってはいないけど、それぐらいじゃないかな……。?』

『それは、そろそろって事じゃないか?』

明石が言い終えると間髪いれずに神通は言った。

やがて明石は神通の言葉と表情に、心の中で憂いだ事が現実となりつつある事を予感し始める。だが彼女はその憂いの詳細を考えようとはしなかった。親友だと思っている神通や那珂よりもずっとずっと長く一緒に過ごしてきた相方がいなくなる、それは明石にとって最も恐れる孤独との戦いである事を意味しているからだ。

だが神通は現実に関じる明石の目を力づくこじ開けるように、凜とした声で続けた。

『砲術学校の普通科は砲術科配属の少尉と中尉が対象だぞ? 推薦か志願で入校するモンだが、その目安は任官から2年くらいだ。ウチのジジイもそのくらいで水雷学校に入校してる。』

明石はその言葉を耳にいれるや、恐れていた事実をやっと真剣に考えだした。神通が口にした基準を相方は全て満たしている。まだ確信は無くとも、その事実だけが明石の心を激しく揺さぶった。

『そ、その砲術学校って、ど、どのくらい掛かるのかな……。?』

僅かに震えるような声でそう言った明石。するとその肩に那珂はそっと手を乗せ、あくまでも明石を労わりながらゆっくりとその答えを口にした。

『砲術学校普通科は砲術学校単体での教育が半年。そしてその後

水雷学校での教育が半年で、全部終わるのに一年間にかかる。どちらも必修なの。』

陽が落ちて薄暗くなり始めた頃、明石は自分の艦の通路を走っていた。

いつにも増して鬼気迫る表情で走る明石だったが無理も無かった。先程までに聞いた話を総合すると、彼女の相方は砲術学校への入校に伴って明石艦から降りる可能性が高い。そして仮にそうだとすれば、一年間という教育期間の内は今まで苦楽を共にしてきた相手とは会えない事になる。

そこまで考えた明石の脳裏には、誰にも話し掛けられる事無く過ぎた竣工直後の孤独と寂しさに染まった記憶が蘇ってくる。もちろん今の彼女にはたくさんの仲間がいるし、最近は教えを授けられる師匠だっってきた。でも彼は明石にとっては特別だった。今は師匠が教えてくれた「戦い」の言葉も、明石の心の中には少しとして蘇ってこない。彼女の心の中では、渦巻く憂いに対してはつきりと「嫌だ」という言葉が浮かんでいた。

『はあ・・・、はあ・・・、はあ・・・。』

明石は士官食堂の扉の前まで来た所で、その扉を睨みつけるように立ち尽くした。艦に戻ってすぐに向かった部屋に彼の姿は無かった。いるとすればここしかない、そんな思いで必死に明石は走ってきたのだ。

普段は彼以外の乗組員に姿が見えない自分との会話を聞かれない

ようにする忠。そんな彼は狭い士官食堂で明石が声を掛けても、ちよっと困った表情を浮かべて黙々と端を進めるのが常であった。逆にそれが面白くていつもあれやこれやとイタズラをしてきた自分の事が、今の明石には少し憎たらしくなってくる。もちろんこれから士官食堂に入って彼にその答えを迫っても、彼は同じように困ったような顔をしてくるに決まっている。だがそれも明石にはどうでも良い事だった。とにかく彼の口から事の真相を聞こうと、彼女は無我夢中だった。

一度大きく息を吞んでドアノブに手を掛けた明石。だが室内から響いてきた憎たらしい程に愉快的な男達の声とその内容に、明石の手はドアノブを握ったまま動かなかった。

『森より、砲術学校に行っちゃったら、もうあれだけの量の酒保での買い物はできねえぞ?』

『その上、厳しいぞ、あそこは。気をつけるんだぞ。』

『はい。有難うございます。』

『来月二十日の艦隊訓練終了に合わせての下艦になるか。寂しくなるなあ。』

『あははは、まったくだ。これで明石艦の士官は全員オッサンばかりになるな。』

『おいおい、オレまでオッサンかよ!? まだ27だぞ!?』

『『はっはっはっは。』』』

明石の手が動いた。

だがそれはドアノブを捻る為ではなく、ドアノブから手を離す為に動いたのだった。指先が離れると同時に明石は手を宙に浮かせたまま、震える足どりで後ろに下がって行く。その最中、明石の脳裏にたくさんの思い出とそこにあったそれぞれの想いが、空から降りしきる雪の様に流れていく。そこに言葉は無く、ただ絵が浮かんでくるのみ。そして壁に背が当たると同時に、その絵はスイッチを切

った電灯の様にフツと消えうせ、明石は力なくその場に座り込んだ。
鋼鉄でできた壁から背中に伝わってくる冷たさも、座り込むと同時に頭から落ちた軍帽も、目の前から響いてくる男達の声も、彼女は何も感じる事ができなかった。何事かを言わんとして開きかけた唇をそのままに、明石は呆然として扉を眺め続けていた。

第三三話 「予感」(後書き)

米問屋先生の影響から、日露戦争を最近は勉強しております。とりあえずやる気を沸かせる為に、二〇三高地を見たのですがやっぱり良い映画ですね。号泣してしまいました(つ、つ、)

資料発掘が進んだ現在では資料的価値はそんなに無いですが、そこに籠められたメッセージ的なものは素晴らしいですね。昭和8年から現役入営し、その後7年も従軍してシベリアの抑留も経験した小生の祖父が涙した、唯一の戦争映画でした。

第三四話 「すれ違い」

昭和15年4月2日。

束の間の南支行動を終えた第二艦隊は対岸の台湾へ移動。移動と言っても廈門から東に少し進んだ所に台湾はあり、感覚的には泊地の変更といった感じである。翌朝には台湾北部の港湾都市である基隆^{ルン}市へと到着した。

基隆市は台湾の中でも比較的大きな都市であり、内地にもっとも近い港湾都市であった事から帝国による台湾領有時にはここに台湾総督府が置かれた。設置から1ヶ月で総督府は内陸にある台北市に移されてしまったが、深い入り江の地勢をもつ基隆は港湾都市としてうってつけであり、領有化してすぐに日本は基隆一帯の港湾への拡張工事を行った。元々水深があまり深くなかった基隆はこの工事で大型船舶の接岸が可能なるまでに余裕を持ち、第二艦隊の各艦は久々にその身を岸壁に横付けする事ができた。馬公要港部管轄区である基隆には帝国海軍の出張所や連絡所が設けられており、海軍としての馴染みもそこそこにある都市である。

また台湾北部は内地に近くて住民も親日的な人々が多い事から、その台湾の玄関たるこの基隆市は日本人の移民が多い事も特徴的であった。当然それに伴って基隆市街には日本人向けの飲食店等がちらほらとあり、それは艦隊勤務の合間の休養に対しても一役買ってくれる。

初めての台湾への上陸とあって軽い足どりで艦内を歩く忠は、意気揚々と自分の部屋にある扉を開けた。上陸証に財布、その他必要

な物を取る為に部屋に戻った忠であつたが、彼はそこにせつせと薬箱に向かう相方の背中を見つける。

上陸先でのおいしい食べ物の調達はいつもの事。もうすっかり慣れっこである忠は机を漁りながらも笑みを作ると、床に腰を下ろして自前の薬箱の点検に勤しんでいる明石あかしに向かつて口を開いた。

『明石、これから上陸だ。まだ食べたい物とか聞いてなかったんだけど、なにが良い?』

口元を緩ませながらそう言った忠は、机の上にあつた財布を取ってポッケにしまい込んだ。机の上に散らばった本や書類を片付けながら相方の返事を待つ忠。だが当の明石は振り返る素振りもせず、どこかいつもの無邪気さが抜けた声で答えた。

『ん〜。いいよ、別に。森もりさんのお金、なくなっちゃうし。』

その声に忠は思わず紙を持ったままの手を止め、驚きを隠せない顔で相方の背中に視線を流す。それは彼女と知り合つて以来、初めての出来事であつた。いつもは聞く前からこれでもかと言わんばかりに言い聞かせようとする明石なのだが、今日は珍しくそんな行動を取らない。声を聞く限り機嫌が悪いようではないらしいが、ここ最近の明石の行動が忠にはとても気になった。

廈門を出発する辺りからどこか静かになった明石。忠はそんな彼女を心配し、隣まで歩み寄つてその表情を覗き込むようにしゃがみこんだ。

『明石、どうし〜。』

『あ、ごめ〜ん。今ちよつと数、数えてるんだ。後にして貰つて良い?』

いつもの通り忠の声を遮って口を開く明石。彼女はそう言いながら一度忠に苦笑いすると、すぐにまた手元の薬箱に向かって視線を戻した。会話する相手が困るほどに目を見つめてくる明石なのだが、こここの所は一切目を合わせようとしてこない。そしてその顔は特に頬を膨らませている訳でもなければ、口を尖らせているわけでもないのだ。そんな彼女の心の内を、相方である忠は悟る事ができなかった。

『そ、そうか……。』

ちよつと肩を落として呟くように忠がそう言うと、明石は手元に視線を向けたまま歪んだ笑みを作る。

『うん、ごめんねえ。』

一向に明石の心が見えてこないのは辛かったが、上陸の時間が迫っている事を思い出した忠は小さく溜め息を放って立ち上がった。その間、彼はずっと明石の横顔を眺めていたが、彼女は動じる事も無く黙々と薬箱の中の瓶やガーゼ等の数を紙に書き込んでいた。

やがてここまで相方の態度を心配してきた忠だったが、どうにも心を開こうとしてみえない明石に段々と腹が立ち始める。だが今ここでそれを彼女に問いたただす気も無ければ、そんな時間も彼には無かった。そっぽを向くように忠は体ごと顔の向きを扉に向けると、腕時計をチラチラと見ながら部屋を出て行った。

扉が閉まることを示す重い金属音が、シンと静まり返った部屋に響く。

明石はその音にも顔色を変える事無く、ただ黙って薬箱の中をいじくりまわす。そして、ふと彼女は紙に書いた数字に目線を流した。そこに書かれたのは彼女の口から出た言葉を否定するデタラメな数字ばかり。明石は最初から、数を数えてなどいなかった。

私は何をしてるんだろう・・・？

そんな言葉を脳裏に浮かべながら、明石は顔を少し上げて舷窓の向こうに広がる青空を眺めた。

基隆市街に繰り出した忠はさっそく市内での自由散策としけこんでいた。廈門と違って第二艦隊の全艦が岸壁や棧橋に横付けしているからか、市内には同じ帝国海軍の軍服を着た者がやたらと多い。棧橋から商店がならぶ路地を歩く忠だがそこですれ違う水兵のペンネントには聞きなれた艦の名前が入っており、どうやら明石艦だけでなく他の艦でも上陸日になっているという事を彼は悟った。

先程の明石の態度に腹を立ててしまった彼だが、決して彼女が悪い人柄ではない事からその考えを今は改めている。

今まで一緒に頑張ってきた明石と自分。それを態度一つで怒るようでは彼女の相方であると胸を張って言えないし、何よりあまりにも薄情という物であろう。怒る前にその理由がどこにあるのかを探って、彼女をいつもの調子に戻してやらなければならない。そして例え彼女が人外の者であっても、それができるのは自分だけだ。

歩きながらそんな事を考えていた忠は、自らの頭を冷やす意味合いも含めて風呂屋に行く事にした。上陸先で垢落としするのはいつもの事であるし、先程から彼が目にする基隆市内の看板は日本語で書かれた物もたくさんある。故に彼がお目当ての看板を探すまで、

それ程時間は掛からなかった。彼が目に入れた「風呂屋」とデカデカと書かれた看板の下、入り口に当たるそこには水兵達の行列がまだできていない。他の艦艇よりも先んじて上陸を許可してくれた宮里艦長に感謝しつつ、忠は風呂屋の暖簾を潜って行った。

真昼間から風呂屋にくる人々とは海軍関係くらいであろうか。脱衣所からして既にガランとしていて人気は無く、お湯が湯船から溢れるザバザバという音が空しく響いているだけであつた。呉では夜勤明けの工員等が結構いる為に風呂屋は一日中繁盛している物であるが、軍港ではなく内地からも離れた台湾ではそうではないらしい。もっともそれは忠にとっては喜ばしい事である。広い湯船を自分一人で独占できるし、尻に青いアザをつけた部下達から羨みとも恨めしいとも取れるような視線を向けられて入浴しなくても済むからだ。

憂う事のない忠は少し乱暴に服を脱ぐと、風呂屋に入る際に番台の主人から買った石鹸と手拭いを持って浴場へと入っていった。

腰掛と風呂桶を置いた際に放たれるのどかな音に耳を撫でられ、蛇口の前にどつかと腰を下ろした忠はさっそく桶に湯を溜め始める。いつもはコインと引き換えに洗面器3杯分のお湯でしか体を洗えないが、それなりに長く艦船勤務に勤しんできた彼の身体は今ではすっかりそれに慣れてしまっている。額の辺りから洗面器を傾け、チヨロチヨロと湯を少しずつ垂らしては頭や体を念入りに洗う。普通の人なら僅か洗面器3杯の湯では頭すら洗う事ができないが、それでも忠は器用に体を万遍なく洗ってしまうというのだから慣れとは恐ろしい物である。お金を払っているにも関わらず、日頃のクセが抜けない彼は一通り体を手拭いで擦ると、洗面器の最後の残り湯を頭から被って浮かび出た垢を落とした。

3日振りの垢落として彼は爽快感に浸ると、待ちに待った湯を満々と湛えた湯船に向かった。艦船勤務での風呂では決して味わえな

い真水のお湯が張られた湯船は、歩み寄る忠の表情を無意識に明るくさせていく。熱かろうがぬるかろうが海水のお湯が張られた湯船を、カルガモの親子の様になって突き進むいつもの入浴ではない。忠は湯加減を確かめる事も忘れて、湯船に身体を沈めていった。サラサラと身体を触れていくお湯に心躍らせると、彼は湯船の置くまで進んで壁に背をつけて腰を下ろす。

『くあぁ……』

思わず声を伴った溜め息が彼の口から放たれてしまうが、一般的な日本人では誰もこのような事はある。早くも彼の額には大粒の汗が滲んでくるが、それすらも今の彼には心地良い物であった。その心地良さに目を閉じて顔を上げた忠は、小さく鼻歌は歌いながら入浴を楽しんだ。

その身を湯船に沈めて10分程経っただろうか。湯気が立ち込めて視界が狭まる中、浴場の入り口が開く音が木霊してきた。それと同時に浴場に入ってきた人物は影ぐらいでしか忠には捉えられないが、丸い形の髪型を見るに同じ海軍軍人ではないかと忠は予想する。じんわりと温まり始めた身体をお湯の中で擦りながら、忠は顎を水面につける様にしてその人影を眺める。その人物は蛇口の前に座ると随分と念入りに顔を洗い、立ち上がって鼻歌を鳴らしながら湯船に歩み寄ってきた。その野太い声に聞き覚えがあった忠は、彼が近寄ってきた事で露になったその顔から正体を即座に察し、咄嗟に驚きが滲んだ声を上げた。

『あ、木村大佐!!』

『お? おお、森! お前か! ?』

偶然の出会いに驚いたのは忠だけではなかったらしい、木村大佐

は大股で湯船に入りながらも目を輝かせている。『わっはっは!』とその出会いを心の底から喜んでいるような笑い声を上げて、忠の横まで湯を掻き分けてくる木村大佐。中年とは思えない程に男らしい身体つきと、股間からブラブラと垂れ下がっている物を隠そうともしない彼に海の男の豪快さを覚えた忠は大笑いした。そして楽しそうに笑みを浮かべる若者を横に、木村大佐もどっかと腰を下ろして身体を沈めた。湯気が立ち上る水面が治まらない内から、木村大佐は油を落として力なく垂れた髭を撫でながら話しかけてくる。

『どうだ、最近の調子は? 明石とは上手くやってるか?』

木村大佐の何気ない語り掛けに、忠は何食わぬ顔で『はい。』と答えた。ヘラヘラと笑って見せるものの、別れ際の明石の素っ気無い態度が彼の脳裏に蘇り、口元を緩めていながらもその表情にはどこか晴れ晴れとした物が無かった。いくら考えてもその態度に納得できず、逆にその理不尽さがちよつと腹立たしくなってくる忠。そしてそんな忠の表情の変化に、彼の倍も長く生きてきた木村大佐はすぐに感づいた。

『どうした、森。明石と喧嘩でもしたのか?』

木村大佐の問いかけに忠はピクつと眉を動かしたが、その心の内を読まれないようにとすぐに笑みを浮かべて声を返す。

『いやあ、そんな事はないですよ。』

『ほむ、そおか。』

やんわりと木村大佐の質問を避けた忠だったが、彼の脳裏には妙に相方の事が浮かんでくる。

なぜあんなにも欲しがったお菓子をせがまなかったんだろう？
なぜいきなり自分の心遣いを断るようになったんだろう？
そしてなぜ、彼女は目を合わせてくれないんだろう？

考えても考えても忠にはその理由が解らない。

彼にしても別れが刻一刻と近づいている今、相方である明石とのそんな関係は不本意である事この上なかった。こんな状態じゃ話は切り出せないなと忠は思いながら、いつにも増して明石の事ばかり考えてしまう自分が何か情けなかった。

小さく溜め息をついた忠は、脳裏に浮かぶ事を忘れようと木村大佐と話すべく話のネタを探し出す。そして艦長格である彼が公衆浴場にいる事にさっそく素朴な疑問を見つけた。すくった湯を頬に擦り込むようにして顔を洗う木村大佐に、忠は笑みを向けて話しかける。

『そう言えば、木村大佐。艦長には艦長用の浴室があるんですよね？
なんでこんな所で風呂に入ってるんです？』

忠がそう言うと、木村大佐は困ったように苦笑いして頭の後ろを掻き始めた。

『それがなあ。神通じんつうが入らせてくれんのだ。』

『は？な、なんですかね？』

『先にワシが風呂に入るのが気に食わんらしい。まったく、わがままな奴だ。』

『はっははは。』

神通とはそこそ親しい忠は、その彼女らしい言動と愚痴る相方に大笑いした。二人揃うといつも時代劇さながらの退治劇を始める木村大佐と神通であるが、なんだかんだ言いながらもこの二人は良

いコンビであった。口を僅かに尖らせて口にした木村大佐の愚痴も、それはまるで年頃の娘に疎まれて悲しむ父親の様である。考えてみると蔑称として神通が口にする彼の呼び名「ジジイ」も、なにか嫌いな父を呼ぶ実の娘が放つ言葉のような気がしてならない。実に可笑しな二人であった。

そして腹を抱えて笑いながらも、忠にはそんな二人が今はとても羨ましかった。

しばらく木村大佐の愚痴を聞いては笑っていた忠だったが、そろそろあがろうと思って腰を上げると同時に木村大佐が声を掛けてきた。

『・・・森、明石を嫌わんでやれ。』

突如として放たれた言葉に、壁から背を離して進みだしていた忠は振り返った。そこにいる木村大佐は右手で首の付け根辺りを擦りながら、目を閉じて優しく微笑んでいた。心の中で憂いでいた忠の懸案を、木村大佐はその表情の変化だけで読み取っていたのである。忠と同じように人間だけでなく艦魂をも目に映すことができる木村大佐。そこに生じた艦魂である明石と人間である忠の諍い等は、なんとなくだが木村大佐には直ぐに察する事ができる。彼が持つ人並みはずれた観察力の成せる業であった。

『明石にはお前しかおらんのだ、森よ。あいつ等「艦魂」は、普通の連中からしたらオバケや幽霊みたいなモンだ。でもあいつ等も必死に生きてるんだよ。ワシ達と同じようにな。』

忠は木村大佐の語りかけに今の自分が憂う事への解決策があると直感し、身体を彼に向けなおして再び湯の中に身を沈めた。木村大佐は相変わらず目を閉じたまま、額や頬に滴る汗を手で拭って話を

続ける。

『あいつ等にも言いたい事や愚痴りたい事なんてのはあるんだ。時には苛立って八つ当たりをする事だってある。その時にあいつ等を信じてやれるのは、ワシやお前のような奴しかおらんとは思わんか？』

『・・・そうですね。』

『ワシはあいつ等が好きだ。ワシ達と同じように怒りながら、泣きながら、笑いながら、自分達に課せられた事に対して逃げもせず、精一杯生きようとする、あいつ等がな。』

数分後、風呂屋の暖簾を勢い良く靡かせて走り去る忠の姿があった。

向かうはお菓子や珍しい料理が売っている食い物屋。まだ肌から湯気が立ち上る忠は、走りながら右腕の手首に視線を向ける。上陸の終わりまでは既に1時間をきっている。だが成すべき事を改めて認識した彼の表情は明るい。大きく腕を振って走る忠は、風呂上りだというのに汗が滲むことを気にもしない。別れ際に彼女から受けた言葉をそのまま実行しようとしていた自分を責めることも忘れ、彼は食い物屋を求めて繁華街に向かって走っていった。

待ってるよ、明石。いつもの事だけど、ウマイ物をたらふく食わせてやる。

その言葉を忠が脳裏に浮かべると同時に、そこには美味しい食べ物、ホイホイと口に投げ込むいつもの明石の姿が浮かんでくる。白

い歯を見せて微笑んだまま、彼は財布を片手に握り締めて走った。

『ふい〜〜〜。。。』

まったく進めていなかった薬箱の点検をやったの事で終えた明石は、今度は正確な数字を書き込んだ紙を片手にして大きく溜め息をした。

師匠の朝日より授かった生薬の知識はありがたいが、おかげでそれらを含めた薬品類を管理する手間が最近ではグンと多くなってしまった。硬い鉄製の床に座り込んで数字をひたすら数えるというのは、人間であつても艦魂であつても結構な重労働である。やがて凝った肩に手を乗せて、明石は身体を大きく後ろに反らせた。コキコキと音を立てる背中に心地良さを覚える明石は、ふとその視線を正面にあるベッドの上にあつた舷窓に向ける。

真面目に仕事をし始めようとする前に見た時は透き通るような青い空がそこにはあつたのに、すでに舷窓の向こうには赤みを帯び始めた空が広がっていた。伸ばして腕をそのままにして舷窓の向こうを黙って見つめる明石。シーンとした部屋の中には艦体を静かに打つ波の音と、カモメの遠い鳴き声が響くのみ。あつという間に終わりを迎え始めた一日に儚さを覚え、明石は大きく溜め息をついた。

『ただいま。』

重苦しい金属音が響くと共に、明石の背には相方の声が響いてきた。明石は少しだけ顔を向けるも、彼の表情を見たくなかった彼女

は目を合わせようとはせず、流しかけた視線を再び舷窓の向こうに戻して声を返した。

『あ、おかえり。』

さっきと同じように視線を合わせてくれない相方だが、木村大佐の言葉を胸に秘めた忠はフツと小さく微笑むと、ドアを開けてすぐ右側にある机にいつものようにお菓子の入った紙袋を置いた。いつにも増して多めに買ってきたのか、紙袋は机に着くと同時にドサッと音を立てる。

その音を耳にした明石は咄嗟にその方向へ視線を流した。いらなと言ったにも関わらず調達してきた大量のお菓子と、笑みを浮かべてマジマジと瞳を見つめてくる忠。いつもなら感謝の念が込み上げてくるのに、今の明石には小馬鹿にされたような感じさえしてくる。全ては相方が何も言ってくれない事への腹立たしさであったのだが、当の相方である忠はそれを知らなかった。

まだ機嫌が治っていないようだがそれを解決してやるのも自分の務めと考える忠は、机の上の紙袋からとっておきの珍しいお菓子を取り出して明石に歩み寄った。それに気づいた明石はプイッと視線を正面に向けてしまったが、忠は構う事無く彼女の横まで歩み寄ると、しゃがみこんで右手に持ったお菓子を明石の顔に近づける。

『ほら、明石。アイスクリームだぞ、食べたこと無いだろ？』

明石はチラッと忠の手に視線を送るも、すぐにまたそっぽを向いて力の抜けた声で言った。

『いいって言ったじゃん。』

少し俯いている為に忠からは表情が見えないが、上陸前と同様に

明石は怒っているわけではないらしい。声色も特に怒りが籠っている訳ではないが、かといって嬉しそうな訳でもなかった。決して気が強い性格ではない忠は相方のその態度にまたしても弱気になってしまうが、なんとかその理由を聞こうと差し出した手をさらに明石に近づける。その度に明石が腹に何かを溜めている事も知らず、忠は再び笑みを作って彼女に話しかけた。

『どうしたんだよ？ほら、食べてよ・・・。』

明石はその声を受けて立ち上がると、部屋の脇に折り畳んだ自分の布団に向かって歩き出しながら声を返した。

『いいよ。気、使ってくれなくても。』

しゃがみこんでアイスクリームの箱を差し出していた忠を無視するかの様に明石は折り畳んだ布団に腰掛け、疲れたように溜め息をしながら額に手を当てて俯いた。

明らかに自分を避けようとしている相方の態度。忠には寂しい事この上なかったが、常に一緒に頑張ってきた相方のその態度を受けてまたしても次第に腹が立ってきた。最初の内に抱いていた相方の態度の理由探しも、事ここに至って忠の脳裏からは完全に消えてしまう。立ち上がってアイスクリームの箱を握った手に力を込めながら、彼は少しだけ語気を荒げて言った。

『なに怒ってるんだよ？言ってくれよ。』

怒りの色が出始めた忠のその声だが、それを耳にした明石もまた、溜まった鬱憤を抑える事が出来なくなった。

艦を降りるかもしれない、と相談すらしてくれないのは森さんじ

やない！

そう脳裏で呟いた彼女はキツと齒を強く噛んで立ち上がると忠に背を向け、布団に向かって指先から白い光りを放った。粉雪の様に淡くゆつくりとした光りの飛沫が布団を包んだかと思うとすぐに輝きは静まり、そこには布団はもう無かった。そしてツカツカと大股で歩き出した彼女は部屋のクローゼットの前まで行くと、今度は勢い良くクローゼットの扉を開けて中から自分の衣服を乱暴な動作で肩に掛けていく。

何も言わないながらも明石のその行動に、忠は彼女が部屋を出て行こうとしていると直感した。眉を吊り上げて見るからに怒っているの表情と、クローゼットの中を引っ掻き回す様に荒く衣服を引っ張り出す明石。その姿は忠が今までに見たことの無い明石の姿であり、彼女を止めようと思ひながらも声を掛けるのを忘れさせてしまう程であった。

やがて服を取り終えて明石が勢い良く閉めた扉の音が響き、忠はやっと我に帰った。明石は一切視線を忠には向けようとせず、彼に背を向け、今度は部屋の扉に向かって歩き出した。もちろん忠は咄嗟に腕を伸ばして、立ち去ろうとする明石の袖を握った。明石は歩みを止めてくれるものの、振り返ろうとはせずに顔を床に向けて僅かに俯いているだけである。

そして別れが迫っている忠には、どうしても今のうちに彼女に伝えておきたいことが在った。今まで世話になってきた彼女だからこそ、言い出せなかったその別れの事。忠にはその別れの可否を選ぶことはできたが、居心地の良い明石との日々に反して彼は可を選択していた。決してその日々が嫌になった訳でもなく、決してそれ是一時とは言え手放すことを喜んだ訳でもない。忠としても思う所があったの選択であった。

『なによ・・・？』

背を向けたまま、僅かに震えるような声で明石は言った。明石は少しだけ力を込めて腕を動かし、忠の手を振り払おうとするが彼は離そうとはしない。彼が喉まで出掛かっている事は、遅まきながらもどうしても、どうしても明石にだけは言っておかなければならない事だったからだ。きっとダメだと怒られるに決まっている、そう思いながらも覚悟を決めた忠は口を開く。

艦体に寄せる波の音も、常に足元の辺りから聞こえてくるボイラーの唸り声もその時ばかりはなりを潜め、静まり返った室内に二人の声だけが木霊した。

『明石、聞いてくれ・・・。』

『だからなによ・・・？』

『オレさ、・・・砲術学校に行く事にしたんだ。』

『勝手に行けばいいじゃない！』

それは忠が予想だにしていなかった言葉だった。思わず力が抜けた忠の手を振り切るようにして身を翻した明石は、キッと忠を睨みつけると叫ぶような声で言った。

『砲術学校でもなんでも勝手に行けばいい！学校行って、偉くなつて、戦艦の艦長でも司令長官でも勝手になればいい！』

『違う！そうじゃない、明石！』

明石が言わんとした言葉を、忠は同じように声を張り上げて否定した。事実、彼は偉くなろうとして砲術学校への道を選んだわけではないのだ。

そこには彼なりの想いが込められているのだが、怒りに任せた明石はその声に聞く耳を持つとはしなかった。その根底にある忠の

とある行動が、明石には嘘をつかれた様にしか感じなかったからだ。そして溜め込んでいたその事を、明石は抑えきれずに言い放つ。

『どうせ私は踏み台なんですよ！？だから何にも言わなかったんですよ！？』

明石の言葉が忠の胸に刺さる。忠としても、もっと以前からその事を打ち明ける事はできた。だが彼はそれができなかった。

『言おうと思ってたんだよ！でもそのまま言っても、明石が怒ると思っ——！』

『私が悪いんだ！？なら、なおのこと勝手にすればいいじゃない！！どうせ口うるさい我がままな奴だとは思ってないクセに、都合の良い時にはそのせいにするんですよ！？』

忠は何も言い返せなかった。もちろん明石が言う様な奴だと彼女の事を思っているからではない。でも彼女の言葉が全て間違っているかというところでもなく、現に彼が脳裏に浮かべていた口を噤^{つぐ}んでしまう理由はどれもこれも取り方によっては相手のせいになっている様な物ばかりだった。そこには相方への尊敬も信じようとする心遣いも無く、なにかにつけて自分を守ろうとする言い訳しかなかったのだ。

その事に忠は緩く唇を噛んで俯き、自らの保身のみに走った自分の弱さを責める。そしてそれを実感しながらも何も言い返してくれない忠の姿が明石の心に火をつけ、決して心の底から望んでいる訳ではない言葉を彼女に放たせてしまった。

『こんなつまらない特務艦なんか、さっさと降りればいい！！森さんなんか、大っ嫌いだ！！』

そう言つて明石は部屋の扉を開け、部屋を飛び出していった。

今まで一緒に過ごしてきた相方だったから、忠にはその言葉が辛かった。今まで一緒に笑い合ってきた彼女だったから、悲しみに満ちた怒りが忠には堪えた。自分の勝手な思い込みと独断で犯した事、それは彼女への裏切りだったのではないか。そこまで考えた忠は情けなさを通り越して、自分に、明石に、そして上手くいってくれないうこの世の全てに激しい憤りを覚える。既に解けかかって滴るアイスクリームの箱を強く握り、彼は叫んだ。

『あああああ!!!!!!!!!!』

怒りに任せた叫びと、壁に投げつけたアイスクリーム。息を荒げる忠は壁に飛び散った液体をそのままに、部屋の奥にあったベッドに崩れるようにして横になった。舷窓から目立ち始めた月の光りが差し込む中、怒りと悲しみと寂しさが入り混じるモヤモヤとした心に耐える忠。

そしてその日、明石は部屋には戻って来なかった。

第三五話 「有明の誓い」(前書き)

◆本話のご拝読にしましてのお願い。◆
読者皆様、いつも明石艦物語をご拝読くださり有難うございます。

今回はPCにてご拝読なされています読者の皆様に限り、お願いが
ございます。

ニコニコ動画のとある動画である下記のURLを別ウィンドウで開
いて頂き、リンク先の曲をバックグラウンドで流しながら本話のご
拝読にあたって欲しいのです。

第35話の執筆に当たっては下記URL先の動画、すなわちOne
Room(ジミーサムP)様の名曲

『From Y to Y』を執筆の時間は常にリピートでかけさ
せて頂きまして、今回のお話を象徴する曲とさせて頂いております。
ご拝読なされております読者皆様にあつては是非ともこの名曲を耳
にしながら、忠と明石の物語を楽しんで頂けるようお願いいたしま
す。

◆<http://www.nicovideo.jp/watch/sm6529016>◆

▼注意事項▼

ご拝読なされます、小説執筆者の皆様へ

この度の楽曲へのリンクはOneRoom(ジミーサムP)様より
特別のご許可を頂いて実現した物です。決して安易に他の動画や楽
曲作者への許可無しに小説でのリンクを張る様な事はしないよう、
深くお願い申し上げます。

2009年 7月3日 明石艦物語作者 工藤傳一

第三五話 「有明の誓い」

昭和15年4月10日、第二艦隊は基隆^{キールン}を出航。南支方面での日程を終えた第二艦隊は訓練を始めた地、九州南部の有明湾^{ありあけ}へと戻る事になった。そして4月20日を持って第二艦隊の冬季艦隊訓練は終了となり、艦隊各艦はそれぞれの母港に向かって帰る事になるのだ。長く内容の充実したこれまでの艦隊訓練は第二艦隊の錬度を大きく引き上げ、古賀^{こが}第二艦隊司令長官もその結果にはご満悦であった。

すっかり春の暖かさを含んだ潮風が吹き、ポカポカと過ごしやすい晴天の下を駆けていく第二艦隊。

その中の一隻である明石艦^{あかし}の発令所では、忠^{ただし}が毎日の日課である事務仕事に精を出していた。サラサラと流れるような動きで鉛筆が紙上を走り、空白の多い書類には、真面目さが良く伝わる角ばった文字が書き込まれていく。

もうすぐこの事務仕事ともお別れか。

そんな言葉を脳裏に浮かべながらも、決して手の動きを止めずに書類を片付けていく忠。艦艇乗組みの砲術士としてそれなりに経験を積んできた忠には造作も無いお仕事であり、机の脇に束で詰まれた書類は雪崩を打つかのように無くなっていく。ハッキリ言って、今日のお仕事は順調だった。

『はあゝ……』

だがそのお仕事の軽快な進捗も、今の忠の心を晴らしてはくれない。小さな溜め息を放っておもむろに室内を見回し、そこには自分一人しかいない事を改めて把握する忠。振り返ればいつもそこにあった明石の姿は無く、常に邪魔をするかのようにそこに響いていた声もこの一週間ほど彼は耳にしていない。相変わらず部屋には戻ってこないし、艦内をそれとなく歩き回って見ても忠には明石の姿を見つける事はできなかった。

その事を考えると忠の胸は釘を刺すかのように苦しくなってくるが、その気持ちを忠は先日覚えた怒りを思い出して打ち消す。自分に責があった事は解っているものの、それに対して余りにも耳をふさぐような相方の態度は、彼にとっては少しだけ理不尽に思えた。忠としても悩みながら、迷いながらとった行動だったし、そも彼は彼女を傷つけようとしたつもりは微塵もない。むしろ彼のその迷いは、相手が明石だったからこそ心に湧いた物であった。

だが明石はそんな彼に見切りをつけ、あの日、部屋を出て行った。そして「勝手にすればいい」と言い放って走り去った彼女の背中を、忠は追おうとはしなかった。自責の念よりも、やり場の無い怒りの方が彼の心には強く芽生えていたからである。

好き放題に言ったお前だって、オレの気持ちなんか知ろうともしてくれなかったじゃないか。

そんな言葉を脳裏で呟くと共に、無意識に入っていた彼の手の力に抗いきれず、走らせていた鉛筆の芯が乾いた音をたてて折れる。

『……』

無言のまま手の動きを止めて、紙の上に転がる芯の片割れを眺める忠。そんな小さなつまずきにも怒りが湧き上がる忠は口を尖らせて行くが、彼の胸の中では相方を憎みきれないもう一人の自分がいた。

あれだけ食う奴なのに、今のメシはどうしてるんだろう？

あんなにおしゃべり好きな奴なのに、今は誰と話してるんだろう？
今までオレを通して人間の洗濯機を使っていたのに、今は汚い服をそのまま着ているのかな？

『・・・ちッ。』

次々に浮かんでくる心配を、忠は再び怒りを呼び起こさせて打ち消した。

なんでオレがこんな思いをせねばならんだ。

そんな思いから吐き捨てるように彼は舌打ちをする。机の一角にあった煙草の箱に手を伸ばし、乱暴な動きで煙草を取り出すと、彼は箱を机に放り投げて口に挿した煙草に火をつけた。一度吸って大きく吐き出した息と、それに伴って彼の口から漏れる煙。発令所左右の入り口を通していく風に乗って、その煙は艦の外へと流れていく。その煙を目で追っていた忠は再び煙草を口に挿すと、仰け反っていた上半身を机にかぶせるようにして鉛筆に手を伸ばした。再び紙面の上を駆けていく鉛筆と、握った手から伸びた先にある忠の眉をしかめた顔。

勝手にするさ。

心のあちこちに湧いてくる想いに、忠は怒りのみで蓋をしてお仕

事を続けた。

4月15日、第二艦隊は有明湾に到着。

暫く振りの有明湾は以前訪れた時とは全く違う風景が広がっており、緑一色だった陸地にはまさに盛りを迎えた桜の木が花を咲かせていた。

春の色と言えば桜の色。そして富士山と共に、日本を象徴するその花。沖合いから眺める陸地は、桜色の絵の具で線を引いたかのようであった。今年初の桜を見れたと、第二艦隊の乗組員はこぞって喜びの声を上げた。

艦隊訓練終了の打ち上げを花見酒としよう。

そんな声が艦隊全艦から発せられた。

その日の夜、有明湾に寄り添うように停泊する各艦の内の一隻、神通艦じんつうの一室に明石の姿が在った。

『・・・・・・・・』

ベッドに腰掛ける神通は、その隣でバクバクと握り飯を頬張る明石を眺めていた。こうして餓鬼の様に食べる友人の姿はいつもの事

であるが、それは明石艦でしか見る事のできない光景の筈であった。
『美味しい美味しい。』と無邪気な声を明石が上げ、それを調達した彼女の相方が苦笑いしながらも見守っている事で成立していた友人の姿。知り合って以来初めての事に、神通は背後で肩を揉む霰あられと顔を見合わせる。霰は手を動かしながらも不思議そうな表情で首を捻った。もっともそれは神通と同じで霰の真似をするかのように首を捻ると、再び隣の明石に顔を向けなおした。

『おい、明石。』

『んん・・・？』

明石は何事も無かったような至って平然とした顔で神通に顔を向けてきた。ほっぺにご飯粒をつけて頬を動かす明石の表情はいつも通りといえそうだが、この時間にこんな場所でメシにありついている時点でおかしい。神通と霰はその事に既に気づいており、二人とも今の光景の裏にある理由をなんとなく感づいていた。

そして神通は脳裏に抱いたその理由を率直に明石にぶつけてみる事にした。再び視線を戻して握り飯を食べ始める明石を、神通はじっと見つめて静かに問いかける。

『森もりと喧嘩でもしたのか？』

『・・・。。。。』

明石はその声にチラッと神通に視線を流すも、すぐにまた視線を戻した。特に顔色を変えることも無く、無言のまま頬を上下させる明石だったが、そんな彼女の姿は質問の答えを充分な程に神通と霰に伝えた。そして神通は廈門での明石との会話を思い出し、その喧嘩の原因が彼女の相方が砲術学校へと旅立つ事にあるのだと直感する。霰は相変わらず首を捻っているが、それに反して神通は明石の言動を納得したかのように小さく何度か頷く。

やがて目を閉じて小さく溜め息をした神通は、右手に持っていた酒の入ったコップを口に近づけた。静かに酒を喉に流し込んだ神通は、目を閉じたまままで再び口を開く。

『いいのか、明石・・・？』

明石はその声にも頬の動きを止めなかったが、彼女の心は確かに揺れ動いていた。握り飯を口に入れてモグモグと動く明石の頬に、目からこぼれた物が電灯の光を受けて輝きながらゆっくりと落ちていく。そしてそれが頬の半分ほどにまで伝っていくと同時に、明石の呼吸が咽ぶように荒くなり始める。そんな明石の姿を横目でそっと見た神通は、彼女が憂う事の全てを察した。

きっと森に、本心ではない何かを言ってしまったに違いない。そして今頃になって後悔し始めたのだろう。

そこまで神通が考えると、それまで何も言わなかった明石は震える声で言った。

『どうせ、もう・・・、行くんだよ・・・。』

それは神通に対して言ったというよりも、まるで自分に言い聞かせるような声だった。明石は目から滴るものを拭おうともせず、ただ床を眺めるようにして顔を下げるだけである。前髪で隠れた彼女の目元から、溢れ出る物がポタポタと落ちて床に碎けていく。つついその姿に目を留めて手の動きを止めてしまった霰だったが神通はそんな霰を咎める事はせず、スッと立ち上がって明石に身体を向ける。

彼女には明石の考えている事が手に取るように解った。そしてそんな彼女が心の奥に秘める願いを実現する事を心に決め、明石に向

かって声を放った。

『立て、明石。森の所へ行くぞ。』
『・・・・・・・・・・』

明石は立とうとはしなかった。ただ俯いて涙を落とすのみの彼女に霰が手を触れようとするが、神通は霰と視線を合わせると首を振って止めた。

『嫌なんだろう？別れるのは。』

『・・・・・・・・勝手にしろって、もう、言っちゃったよ・・・・・・・・。う、ううつ・・・・・・・・。』

明石は両手で自分の頭を押さえ、嗚咽を伴った声で答えた。そしてその言葉に、先程予想した明石と忠の間に起きてしまった一件を神通は確信した。そして堰を切ったように涙を流す明石の姿は、決してそれが彼女としても望んでいた言葉ではなかった事を神通に伝える。

『・・・・・・・・か、勝手にすれば、いいんだ・・・・・・・・。勝手に、すればあ・・・・・・・・。あ、あうう・・・・・・・・。』

そう言いながら泣く明石に、神通は先程決めた事を尚更実現してやらねばと思い、明石の腕に手を触れて声を掛ける。

『嫌なんだろう？ほら、いくぞ。』

神通は言い終えると同時に、明石の腕を掴んで身体を部屋の入り口に向けて歩き出そうとした。恐らくは明石にしても思う事はたくさんある。だが一つだけハッキリしてるのは、明石には相方との別

れが嫌であるという事だった。でなければ、明石が泣く筈がないからである。

かつて父のように慕った者と悲劇的な別れをしてしまった神通には、そんな明石の心のうちが良く解った。いなくなってからその大切さに気付くのが世の常とさえ、後で後悔の涙を流す気持ちは辛い以外の何者でもない。神通はそんな思いを親友である明石にはして欲しくなかった。故に強引にでも明石をもう一度忠に会わせ、せめてお互いの気持ちを伝えさせてやろうと思ったのである。

だが明石の腕を引っ張ろうとした直後に、神通の腕には音もなく激痛が走った。咄嗟に神通が振り返ると、そこには自分の腕を掴んだ神通の腕に顔を近づけ、必死の形相で歯を突き立てている明石の姿があった。ボロボロと涙を流し、呻き声のような泣き声を上げながら神通の腕に噛み付く明石に、神通は拳を握って痛みに耐えながらその心情を再び悟った。

明石はとにかく悔しかった。何も言ってくれなかった忠の事も、それに対して距離を取ろうと考えた自分も、彼女自身が言い放ってしまった決定的な言葉も、そしてそれを悟って助けようとする友人の心遣いも、全てが明石には悔しかった。

神通が先程から口にする言葉は、脳裏に浮かばせないようにしながらも明石が心のどこかで思っている正直な気持ちであった。だがそれを表に出す事もできなければ、自分の口から放つ事も明石にはできなかったのである。

しかし神通は明石の心の内をよく理解しながらも、それをハッキリと間違っていると判断した。そして明石が噛み付いた腕に力を入れた神通は、もう片方の手で明石の襟を掴んで噛まれた腕を力任せに引っかくと、思いっきり振りかぶって明石の頬に打ち込んだ。

『あぐうつ!!!』

殴られた明石は神通の拳の動きに引っ付く様にして、ベッドの上から床に強く打ち付けられた。最近では滅多に見る事の無くなった神通の全力での殴打、ましてその相手が大の仲良しである明石であった事に、そつとベッドの脇から今まで見守っていた霰は仰天した。明石は痛みにもがき、殴られた彼女の頬は青く変色していく。そして床で悶え苦しむ明石の襟に神通は手を伸ばすと、両手で襟を掴んで明石を吊り上げた。脚に力が入らない状態で締め上げられる明石と、彼女の顔に向かって怒りをあらわにした鋭い目つきで睨みつける神通。

そんな光景に霰はベッドから身を乗り出すようにして、神通の身体に手を伸ばしながら咄嗟に声を放った。

『せ、戦隊長・・・！！な、なにを――！』

『黙れええ！！！！』

『うっ・・・！』

もう少しで神通の腕を掴もうとしていた霰の手は、久々に神通の狂気すらも漂わせた表情と声を受けて止まってしまった。恐怖に怯えて後ずさりする霰から視線を流した神通は、襟を掴んだ彼女の手を解こうとする明石に向かって荒げた声を浴びせる。

『お前、なんで森に正直な自分の気持ちを言わん！？』

『ぐうっ……。は……。離して、よ……。！』

『行くなと言えば良いだろう！？森の脚にしがみついて、行くなと頼めばいいだろうが！！』

頬を腫らした明石は、神通の言葉を受けて言葉を詰まらせた。それこそが自分がしなければいけないと考えていた行動の一つだったからだ。嫌なら止めれば良い、神通の言葉はもっともな事であった。だがそれでも明石は自分の気持ちを偽ろうとした。熱くなってきた

頬にも神通の声にも、明石の悔しさが治まらなかったのである。

『・・・だ、だって、も、・・・森さんが決めた、んだよ・・・。』

『ああん・・・？』

『私・・・、が、どうこう言っても・・・、も、森さんがー。』

そこまで明石が言った所で、神通は怒りに任せて再度明石の頬に拳を打ち込んだ。

『この馬鹿があ！！！！！！』

殴られた明石は仰け反る様にして壁に背を打ちつけ、重い金属音が部屋の中に木霊した。その光景に怯えきっていた霰も意を決し、跳びかかるようにして神通の身体にしがみつく。

『せ、戦隊長・・・！か、堪忍してやってください！』

腰の辺りに抱きついてくる霰に身体の自由を奪われる神通だったが、彼女は霰を無視するかのようにして目の前で倒れ込む明石に叫んだ。

『お前の気持ちを聞いてるんだ、馬鹿が！！いつもわがまま言ってる森を困らせてきたのはお前だろうが！？それを、こんな時ばかり森のせいにしやがって！！！！卑怯だと思わんのか！！！！？？？』

『・・・・・・・・・・。』

床でのた打ち回りって痛みにも耐えながらも神通の声を耳にした明石は、その言葉に自分の罪を明確に悟った。

基隆での夜、怒った明石は忠に対して、同じように彼を責める言葉を言い放ってしまった。怒りに任せて言い放った明石であったが、

記憶に蘇ってくるそんな自分の姿は神通が言う通り、自分の非を他所にして相方のみを責める卑怯な奴以外の何者でもなかった。その記憶が蘇ると同時に、明石の心は後悔の念で満たされていく。

なんであんな小さなことで怒ってしまったんだろう？

なんであんな言い方をしてしまったんだろう？

なんでいつもの様な接し方をできなかったんだろう？

そんな言葉が脳裏を過ぎった刹那、人前である事も、霰の前での士官としての体面も忘れ、明石は両手で頭を抱えて大粒の涙を流し、赤ん坊の様に大声を上げて泣いた。

『あああ・・・、うあああああ・・・！！！！』

憎しみをもって明石を殴り飛ばした訳ではない神通は、その姿に振り上げていた手を下ろす。そしてその事に安堵した霰が明石に駆け寄って行くのを認めながら、神通は舷窓の向こうの夜空に向かつて視線を流した。キラキラと煩わしい程に輝く星を目に入れ、彼女の身体からはそれまで震えるほどに籠められていた力が抜けていく。そして怒りが静まりつつある彼女の耳には、十数年前の自分と同じように泣き崩れる明石の声が届いてくる。

『どいつもこいつも……。馬鹿者が……。！』

昭和15年4月20日。

連合艦隊第二艦隊の冬季訓練は全過程を終了。前日には艦隊各艦にて訓練終了における打ち上げの飲み会が催され、翌日には各艦がそれぞれの母港に向かつての帰途につく事になった。選りすぐりの戦隊で編成されたこの第二艦隊の勇壮な姿も、次回の艦隊訓練である夏季艦隊訓練までは見納めとなる。

旅立ちの日を迎えた忠は、明石艦の最上甲板左舷中央部に立っていた。部屋にあった荷物をしまい込んだカバンと衣囊いのうを横に置く忠の顔を、その旅立つを祝うかのように輝く太陽の光りが照らしつけてくる。前日の打ち上げ兼送別会では同僚や諸先輩から励ましの言葉を頂いた彼であったが、その実はそれ程酒も箸も進まなかった。あまりはしゃぐ気持ちになれない彼は部屋に戻っての最後の夜も、同居人が消えた事で静かになった部屋に馴染めず、逆に中々寝付けないという有様だった。

『はぁ・・・。』

若干の疲労が混じった溜め息を放ち、忠は明石艦左舷の沖合いに停泊する駆逐艦群を眺める。艦首に大きく「8」と書いたその艦群は、母港横須賀へと旅立つ事に備えて煙突から一際大きな煙を靡かせている。そしてその艦群の内の一隻こそが、文字通り彼が新たな道へと船出する為の船その物であった。

黙ってその艦を眺めていた忠だったが、その背後から革靴特有の甲高い靴音が静かに響いてくる。他に乗組員が一杯いる事を知っている忠は気にも留めなかったが、その靴音の主は忠の横まで歩み寄ると静かに声をあげた。

『もう、行くのか・・・？』

声を受けた忠が顔を向けた先にいたのは神通だった。

いつもの様に軍帽を深めに被り、腕を組んでキツと海の向こうを眺める神通。その後ろには今にも泣きそうな顔をする霞、かすみ雪風ゆきかぜと供に、もう一人の部下らしき水兵服姿の少女が続いていた。彼女達に笑みを見せてやった忠は、再び視線を沖合いにある駆逐艦群に向ける。

『ああ・・・。』

『ふん・・・。』

神通はそれだけ言うと、後は何も言わずに忠と供に沖合いを眺めた。彼女とは相方と供にこれまで親睦を深めてきた仲である忠は、神通の何かを言いたげにしている表情を何となく読み取る。だがそれがきつと明石の事であると考えると、少しだけ忠の口も固くなってしまう。

どう切り出そうかと考えていた忠だったが、背後から走り寄ってくる靴音を耳に入れて再び背後に顔を向けた。

『ひい、ひい・・・。戦隊長・・・。』

肩で息をしながら声を発したのは霞だった。振り返った忠に汗だくになりながらもニツコリと笑って見せる霞は、同じく呼ばれて振り返った神通と視線を合わせると途端に笑みを掻き消して首を左右に振る。その霞の動作を認めた神通は、少し強めに歯を噛むと小さく舌打ちをした。

『あの馬鹿が・・・。』

そのやりとりを目にしていた忠は、神通が明石を連れて来てくれた事を察した。怖いお人ながらも世話になりっぱなしである神通には感謝の念が絶えないが、彼はちよつと口元を歪めた笑みを作つて神通に言った。

『いいよ、神通……。いいんだ……。』

『何が”いい”だ、馬鹿者が。』

煮え切らないその態度に神通はギロリと彼を睨みつけるが、忠は苦笑いしたまま俯いている。しかし二人揃つて同じように自分の気持ちを押し殺す事に、神通は声を荒げて叱責しようとする。どれ程までに別れという物が辛いかを知っている神通は、それを次代を担う若者には味あわせたくないかつたのだ。だが言いかける神通の声を、これで良いと諦めをつけようとする忠は遮つた。

『大体、男のお前が――！』

『オレが気持ちを正直に伝える事ができなかったから、明石は愛想を尽かしたんだよ……。』

『……。』

忠とて何も考えていなかった訳ではない。

明石がいらないこの二週間程、忠は今までの事を彼なりに整理しようとした。どうして明石が怒つたのか、いや、そも彼の態度を受けた彼女は彼の事をどう思ったのだろうか。静けさが支配する自分の部屋で考えを巡らした彼は、そこに一つの答えを見出した。そう、明石はきつと愛想を尽かしたのだ、と。

普段から笑つて彼女の言葉を誤魔化し、当の本人である彼もそれでなんとか済まそうとタカを括つて過ぎてきた。正直に思つた事を彼女に素直に言つた事など、これまで一度もない。無邪気な笑顔で話しかけてくれた明石に対して、自分のそれは裏切りという名の

罪だとさえ彼には思えた。そしてそんな事に彼が気付いたのは、相手の心を傷だらけにしまった後である。

許しを請う等という気持ちには彼はなれなかった。彼が罪に気付いた時、その心に浮かんできたのは「明石に対する償いをせねばならない」という思いであった。そしてその為に自分ができる事は、彼女の言葉通りに相手の前から姿を消すしかない。忠は結論付けたのである。

だが彼の言葉を後ろで耳に入れていた霰は、数日前の明石の姿にその気持ちを察し、忠の腕を引っ張るようにして声を上げた。

『明石さんは森さんに愛想なんか尽かしておらんどす！明石さんは――！』

『いいんだ、霰……。』

忠は霰の声を受けるも振り返らず、静かにそう言って霰の声を遮った。彼は手摺に寄りかかるようにして腰を折ると、細くした瞳で海の向こうを眺めながら話し始めた。

『……。オレさ、明石が軍医として大きくなっていくのが、凄く悔しかったんだ。オレだけ置いていかれてるような気がしてさ……。』

穏やかな有明湾の潮風の乗ってくるかのような忠の声。神通はその声を受けて眼前の海から彼の表情に視線を向け、不機嫌そうないつもの鋭い目つきで睨みつけるようにしながら彼の声に耳を傾けた。

『……。別れるのは正直辛いよ。だけど、このまま居心地の良い生き方をしてまで明石と暮らすのは嫌なんだ……。』

『だから砲術学校に……。？』

『うん、なんか不公平だろ・・・？オレがいつまでもペエペエでのん気に暮らして、明石だけが頑張るなんてさ・・・。そのクセ対等に接しようなんて、不公平でオレは嫌なんだよ・・・。』

神通はそこまで聞くと、再び海の方こうに視線を戻して大きく溜め息をした。彼の言葉は明石とは違って相手を責めるような言い方ではなく、彼の素直な気持ちを率直に口にした物であると神通は感じた。いつのものはナヨナヨとして優柔不断な彼だが、その胸の内には相方への気持ちから生まれる彼なりの誇りがあったのだ。だからと明石と過ごすような事を嫌い、もっと彼女と吊り合う様な人間となる事を決めたという彼の言葉に、神通はそれまで抱いていた考えをその場で改める。

『ふん・・・。お前も言う様になったな・・・。』

その声に忠は神通が何をしようとして自分に会いに来たのかを察し、僅かに口元を緩めて隣で海の方こうを眺める神通に視線を流した。

『オレを叱りにきたのかい・・・？』

忠がそう言うと、神通もフツと口元を緩めて声を返す。

『歯の一本でも折ってやろうと思っていた所だ。』

言い終えて笑みを合わせた二人は、静かに声を上げて笑った。

もつとも本当なら明石とこうやって別れたかった忠は、笑みを浮かべながらもその瞳には寂しさを滲ませる。胸の中で何度も「これでいい。」と言い聞かす忠であったが、そんな彼と神通のやりとりは納得のいかない霰は再び忠の腕をとって声を張り上げた。

『森さん！明石さんは泣いてはったどす！森さんだって泣きたいのとちゃうんどすか！？ホンマにそれでええんどすか！？』

霰は瞳の端に光るものを湛えながら、忠の顔を睨むようにしてそう言った。忠は霰の言葉に胸を詰まらせたがすぐさま歪んだ笑みを作って霰の肩に手を触れると、おもむろに顔を上げて青空を眺めた。今日もそよそよと風に流されて行く雲を瞳に映し、鼻で小さく笑った後に彼は言った。

『・・・それを明石に言える勇気がなかったから、こうなったんだよ。霰。自業自得だ・・・』

その場を少しの間だけ沈黙が支配し、潮風が音もなく駆け抜けていく中、彼らの耳には別れの合図ともとれる音が響いてきた。

ドッドッドド・・・

彼らの見つめる先。「8」のマーキングが施された駆逐艦から、一隻の内火艇が彼らの足元にある明石艦のラッタルに向かって近づいてくる。腕を組んだままでその内火艇を目に入れた神通は小さく溜め息をすると踵を返し、背後にいた部下の一人に声を放った。

『朝潮あさしお、道中は気をつけるんだぞ。6月には夏季艦隊訓練が始まるから、それまでしっかり休息をとれ。』

朝潮と呼ばれた少女は神通の前まで進み出ると、直立不動の敬礼をして声を返した。

『はい！』

元氣の良い返事をした朝潮は神通が軽く答礼をした事を認めると、体勢をそのままに忠に身体を向けて口を開いた。

『帰るついでで恐縮ですが、横須賀まで運ばせていただきます。森少尉。』

横須賀を母港とする朝潮艦と、彼女の姉妹で構成される第8駆逐隊。冬季艦隊訓練を終え、今まさに母港に向かって帰らんとする朝潮艦が、忠を横須賀まで運ぶ旅立ちの船であった。

『うん。願います。』

軽く敬礼を返して朝潮を解放してやる忠。

そして朝潮が楽な体勢に移ると同時に、彼の腕には霞と雪風が纏わりついてきた。優しく笑みを向ける忠であるが、二人は別れを惜しんで今にも泣きそうな顔でどちらからともなく声を上げる。

『森さん、頑張ってね！元氣に戻ってきてね・・・！うえええ・・・！』

『無事に戻ってきてくださいね！？ア、アタイも頑張るツスから、も、森さんも・・・！う、うあああ・・・！』

似たような言葉を同時に放って忠に泣きつく霞と雪風。二人の肩に触れて笑みを向ける忠に、兄の様に慕ってくれた彼女達との思い出が蘇ってくる。

思い起こせば、明石と忠にとって初めての共通の知人となった霞。いま隣で腕を組んでムスっとしている神通に殴られ、大粒の涙を流して泣きついてきた霞も、今では押しも押されぬ二水戦最強の駆逐

艦として成長した。忠が彼女の肩に手を触れるのは久しぶりだが、その肩の触れた心地は以前の様に華奢な彼女の身体つきを伝える事はない。麻色の肌に白く光るように齒を輝かせた、元気という言葉が良く似合った霞。

そしてそんな霞と犬猿の仲でありながらも、負けん気の強さと陽気で素直なおしゃべりでいつも笑顔にさせてくれた雪風。小豆の缶詰一個に掛けてくれた想いと、人一倍の負けず嫌いを見せてくれた事が忠にはまだ記憶に新しい。ぶっきらぼうな物言いと姉御肌な彼女だが、忠に艦魂たる者の姿を良く伝えた魚雷談義の火付け役になる程に、豊富な知識を併せ持った秀才でもある雪風。

蹴る殴るの大喧嘩を日常とする二人には忠も頭を悩ませたものだが、今となってはそれすらも彼女達との楽しい思い出であった。鼻水を垂らすほどに泣きじゃくる二人の肩を優しく叩きながら、彼は別れの言葉を口にする。

『霞、雪風、世話になったね。二人とも元気でやるんだぞ。それと喧嘩はするなよ……。』

嗚咽に苦しんで返事もできぬ二人の肩に触れた手を、忠はそっと伸ばして二人を自分の身体から離れた。両手で涙を拭う二人には悪いが、彼には別れを惜しむ実の妹達のように思えて笑みを増させてしまふ。

『森さん……。』

そしてふと視線をもう一人の妹に向けた時、彼女は小さく彼の名前を呼んだ。

人形の様な外観を持ちながらも、実の姉である霞よりもずっと大人びた所を持った霞。常に糸目の笑みを絶やさず、持ち前の朗らかな性格で接してくれた霞にも、忠には感謝の念が絶えない。風鈴を

鳴らしたような声で放つ独特の京訛りである霰の声は、無意識に彼の心を癒してくれた。ドジでトロい所からいつも神通に引っ叩かれているが、それでも一生懸命に従兵として仕える彼女は忠もずっと応援してきた。

霰は瞳の端に溜まった物を零れ落ちる前に袖で拭うと、スッと身体を伸ばして右手を額につけた。

『お達者で、きっと戻ってきておくれやす……。』

泣きこそしない霰であるが、彼女はその容姿とは裏腹にどこか他人の気持ちに対して敏感であった。何か別の事を言いたげにした感じで声を放った霰に、忠はその心の内を読まれている事を悟ってちよつと苦笑いしてしまう。

『うん。従兵、頑張るんだぞ。霰。』

『砲術士！来ましたよー！』

霰に敬礼を返し終えたと同時に、彼の足元のラッタルから部下の声が響いてきた。『おう。』と小さく返事を返した忠は、足元に置いてあったカバンと衣囊を手にして神通に顔を向ける。

至って平然とした表情で視線を向けてくる神通の顔は、元々が鋭い釣り目である為に美人ながらも正直ちよつと怖い。忠はその怖さを誤魔化すように笑みを作り、彼女に声をかけた。

『世話になったな、神通……。』
『ふん……。』

神通のいつも通りの短い返事に、あまりにも強烈だった彼女との出会いが忠の脳裏に蘇ってくる。本気で明石を殺そうとした彼女の、大口を開けた龍の様な表情と咆哮。それは忠も生きてきた中で初めて目にした、剥き出しの狂気その物であった。

だがそんな彼女も今となっては、この場にはいない明石の真の友人となっているだから世の中というのは不思議だ。癩癩持ちで暴れん坊な所には忠も何度泣きそうになった事か解らないが20代半ばと彼よりも年上である容姿をもった神通には、彼の言葉通り色んな事で世話になった。もっともおっかない風貌とそれに伴った成熟した人物像を持つこの人には、妹達のような別れの仕方はいるまいと忠は思い、衣囊を肩に背負うと同時に彼女の横を通り過ぎるようにして歩き出した。

『じゃあな……。』

真っ直ぐ視線を向けたままの神通の横顔に向けて、忠は軽くそう言って通り過ぎた。そして数歩進んだところで、彼の背後からは神通の声が響いてくる。

『あの馬鹿も、……後悔してるんだぞ……。？』

神通は振り返らずにそう呟き、それを耳に入れた忠も歩みを止めた。今までどうしてるか解らなかった相方の事を伝えてくれる、神通の言葉。そして相方と最も親しい友人である彼女の言葉によれば、そんな相方が同じように悔やんでいるのだという。だが忠はそれ以上のことを考えなかった。じわじわと胸の中に湧き出してくる想いを抑え、彼は神通と背を向け合ったままキッと唇を噛む。そして僅かに俯いた忠は、衣囊を掴んだ手をつ強く握って声を返した。

『・・・頼む・・・』
『ふん・・・』

いつもの短い口癖を放つ神通であつたが、その声を彼女の返事であると感じた忠はラッタルに向かつて歩き出した。神通が自分の願いを聞き入れてくれた事、そして彼女が伝えてくれた相方の様子が彼の瞳に光るものを湧かせ、内火艇に移ろうとする彼の足取りを早めた。なぜだか彼は、目の縁に溜まったそれを誰にも見て欲しくなつたのだ。

そして彼がラッタルを降りると同時に、神通は溜め息を残して明石艦の艦内に向かつて歩き出した。

自分の艦ではない為に決して歩き慣れている訳ではない神通だったが、彼女は一切の迷いも無く左舷中甲板にある小さな予備倉庫の扉の前まで来て歩みを止めた。その扉の向こうから僅かに物音がする事を確認した神通は、ゆっくりとした動作で胸の前で腕を組むと扉を背にしてに寄りかかった。しばしの間、沈黙を守っていた神通だったが、辛い事を友人へ伝える苦しみを断ち切るように、何食わぬ声で彼女は呟く。

『行つたぞ、明石・・・』

神通の声が響くと同時に部屋の中からはドタドタとけたたましい足音が響き、静まるとすぐに部屋の中にある舷窓が開く音が木霊してきた。そしてその先に、自分の艦から離れていく相方の背を目に入れたであろう友人の、悲しく儚げな泣き声が響き始めた。

『ああ、あああああ・・・！！うううああああ・・・！！！！』

神通はそんな中でも表情を一切崩さなかったが、決して他の人間には聞こえぬその泣き声の主の心が、彼女には痛いほどによく解っていた。そして危惧した事が現実になってしまった事に彼女は静かに憤りを覚え、その気持ちを乗せるかのようにして声を放った。

『だから、言ったんだ……。馬鹿者が……。』

言い終えてもなおその場で扉に寄りかかる神通。そしてそんな彼女の声を遮るように、その場には明石の泣き声が響き渡っていた。

部屋の中で床にしがみつく様にして泣く明石を、憎たらしい程に優しく照らす舷窓からの光り。そしてその舷窓の向こうにある朝潮艦は、煙突から一際高く煙を上げると艦首から白波を立て始めた。

狭い駆逐艦の艦内を回転数を上げた機関の音が支配し始める中、朝潮はお碗とお茶の入ったやかんを手にとって歩いていた。

珍しい客人にして艦魂が見える人間。まして妹達が世話になった人である彼には、このくらいのもてなしをせねば姉として申し訳がない。

そんな思いから客人の滞在する部屋の前まで来た朝潮だったが、彼女は部屋の前まで来た所で歩みを止めた。艦内に響き渡る重苦しい機関音に混じり、その部屋の中からは客人の嗚咽に苦しむ声が聞こえてきたからだった。

『ううああ……。うああああ……。!!!!!!』

遠退いて行く明石艦を映す舷窓にしがみつく様にして、忠は泣いていた。

彼には全て解っていた。神通に言った事は、結局は自分の強がりではなかった。霰に言った事は、結局は自分の気持ちの偽りでしかなかった。そして後悔しているという明石を神通から伝えられながらも、結局は格好つけようとして忠は彼女を手放したのであった。ただ涙を見せるのが嫌で、こうでありたい等という自分の理想を盾にして彼は明石から逃げただけであった。そして自分の気持ちを知りながらも、結局は自分からすらも逃げようとした事を今更ながら悟り、忠は後悔と懺悔の涙を流していたのだ。

いつも笑みを見せてくれた明石の事が忠の脳裏に溢れてくる。

彼女の優しさに甘えるようにして自分を誤魔化し、失う事への恐れから嘘までつき、さも当然の様にしてただそこに居座っていただけの自分に、彼は涙が零れ落ちる度に激しく憎みを募らせていく。

そんな自分を明石は一年間の間、記憶に留めていてくれるだろうか？

またあの笑みで迎えてくれるだろうか？

いや、また会えるのだろうか？

そんな言葉が溢れてくる胸に忠は苦しみ、失ったモノが余りにも大きかった事を改めて理解した。悔しさと憤りと無念が渦巻く心に、忠は舷窓を掴んだ手に力を込めて耐えながら泣き叫んだ。

『明石・・・、あかしい・・・、うぐうつ、あああ・・・！！！！』

有明湾に錨を下ろしたままの明石艦と、横須賀に向かって旅立っていく第8駆逐隊の4隻の駆逐艦群。その日の晴天をそのまま映したかのような海原を第8駆逐隊の朝潮艦は泡立つ真っ直ぐな航跡だけを残して駆けて行き、明石艦と朝潮艦はお互いの艦影を霞ませていった。

そしてお互いの艦で同じように泣き伏せる二人は、大声で泣きながら同じ事を心に誓っていた。

再会を期すまで続く、これからの時間の全て。その全てをただひたすらに悔いて過ごす事だけが、愛したヒトへの償いである、と。

昭和15年4月20日。
二人は別れた。

第三五話 「有明の誓い」 (後書き)

拙作にも関わらず、楽曲の提供を承諾していただいたOn e R o o m様。

この場をお借りしてお礼を申し上げます。
この度は本当に有難う御座いました。

明石艦物語 作者／工藤傳一

第三六話 「5月の夜」

昭和15年5月1日。

本年始まって以来、五回目の興亜奉公日を迎えたその日、第二艦隊の呉鎮守府籍の各艦は母港である呉軍港に帰って来た。すこし寂しい光景だった呉の波間に、再び戻ってきた精鋭達がその身を浮かべて湾内を圧する。

興亜奉公日であるその日は国民全員に生活の儉約と勤労奉仕が義務付けられており、呉工廠内にいる工員の数はいつにも増して多い。去る4月28日には米や味噌、塩にマッチ、木炭などの生活必需品が切符制となる事が閣議決定されたが、呉工廠で汗を流す人々は久々に堂々とその身を浮かべた城市群にそんな喧騒を忘れて目を輝かせた。

昨年の11月から半年たったこの日、連合艦隊ではまたしても大規模な編成替えが行われた。

明石艦が所属する第二艦隊には各戦隊の兵力増強が図られ、まずは妙高型一等巡洋艦の那智艦、羽黒艦の二隻で編成された第五戦隊を戦闘序列に加えた。新鋭の最上型で編成される第七戦隊に比べれば古さが目立つ妙高型ではあるが、逆にその分だけ第五戦隊の二艦は錬度で優れており、那珂艦が率いる四水戦と組んで第四夜戦隊を編成する事になった。

さらに第二艦隊司令部を置く第四戦隊には砲術学校の練習艦として過ごしてきた摩耶艦が合流し、第四戦隊は3隻編成となった。

続いて神通率いる二水戦とコンビを組む第七戦隊には、最上型二等巡洋艦の最上艦と三隈艦が合流。これで第七戦隊は最上型二等巡洋艦4姉妹の全員をもって編成され、第二艦隊で最も強力な砲撃力を備えた戦隊として生まれ変わった。ただ可哀想な事に第七戦隊の艦魂達が姉妹の再会を喜ぶのも束の間、強力な支援部隊を得た事で

気を引き締めた神通は更なる鬼教官として化けようと心に決めてしまい、翌日から彼女達は神通による超がつく程におっかない教育を受ける事になってしまった。気の毒という他は無い。

そしてさらに、那珂が率いていた四水戦からは第7駆逐隊が第一艦隊一水戦へ転属となった。これはすでに先月の頭より決まっていた話で南支方面行動であった為にこれまで四水戦と行動を供にしてきたのだが、艦隊訓練が終了した事をもってついに彼女達は誉れ高い第二艦隊から去る事になる。姉とは大違いで仏様のような物腰を持つ那珂は7駆の艦魂達からも大層慕われており、彼女は別れを惜しんで泣き出す部下達を励ましながらこれからも頑張るようにと声を掛けた。実は彼女達にとって那珂との別れはこれで二度目となるのだが、数年前の二水戦時代から何も変わらない那珂という優しい上官に7駆の面々の涙は止まる事はない。那珂としても辛かったが、指揮官たる者の対面を重んじて彼女は泣かずに部下達を見送り、その日の夜になって姉と一緒にお酒を進めた際に静かに泣いたのだった。

第二艦隊以外では明石^{あかし}とは近しい間柄である長門^{ながと}が率いる第一戦隊に、扶桑^{ふそう}型戦艦二番艦の山城^{やましろ}艦が合流。また長門^{ながと}が艦隊旗艦を務める第一艦隊には、支那方面で行動していた川内^{せんだい}艦を旗艦として新たに第三水雷戦隊が新編される事となった。そして長らく支那戦線に派遣されていたこの川内艦の艦魂、川内は神通と那珂の実の姉でもあった。

明石艦は呉に到着すると製鋼部庁舎群前にある栈橋に横付けし、資材や燃料等の補給を受けた。接岸してすぐに乗組員達は搬入作業

に精を出す事になってしまったが、彼らの表情はつとめて明るい。それもその筈、明石艦では乗組員全てに10日の休養上陸が許可されていたのだった。中でも出身地が呉に近い者には、帰休上陸として実家に帰ることも許されたのである。

閉鎖的な艦内での窮屈な生活、使いたい時に使えない水や廁かわや、風呂。それが海軍の当たり前であつたとしても、それを履行する乗組員達は一般人とはなんら変わらない人間達であり、帝国海軍軍人の肩書きだけでそんな生活をずっと続ける事など不可能だ。

故に今の明石艦上甲板では、乗組員達が長旅の疲れも感じさせぬ程の明るい声を上げて作業に当たつていた。

だが明るいその声が響く明石艦の艦尾の向こう。繋がつた同じ岸壁に今日も気高くその姿を浮かべる朝日艦あさひには、そんな乗組員達に反するように落ち込む人物がいた。

「広間の中に入り立てば、ただ宮殿の心地せり」と謳われた事がよく理解できる、朝日艦艦尾の長官室。真紅の絨毯と年季の入つた家具が置かれたその部屋には、主である朝日がいつものようにソファに腰掛けていた。

英国で生まれた際に持ってきた嫁入り道具の一つであるティーカップを持ち、香りを確かめながら朝日はカップに唇をつける。人間の世界にですら40年間も同じカップを使い続ける人は滅多にないが、今日も鼻をくすぐる湯気と供に舞い上がる香気を放つカップに朝日は僅かに口元を緩める。そして朝日はその表情のまま顔を上げ、テーブルを挟んで向かい側に座つた明石に視線を流した。

明石は朝日が出してくれた食べ物をがつついていた。

金物でできたお碗に甘い蜜と供に入ったそれはとても美味しいお菓子の様だが、赤十字の腕章をつけた朝日が用意した物らしく立派な薬膳料理であった。弾力のある白い寒天のようなそれは、朝日艦の主計科が上海での行動中に調理法を覚えて造ったのだそうで、杏仁豆腐というらしい。つるんとした喉通りと奥深い甘さが絶妙な食べ心地であるが、明石はいつもの様にはしゃいで食べる事はなかった。まだ少しだけ赤みを帯びた明石の目、その縁には僅かながら光る物が溜まっている。

そして眉をしかめ、無言でスプーンを口とお碗に交互に行き来させる明石に、明石の隣でそれを歪んだ笑みを浮かべて眺めていた長門が声を掛けた。

『あ、明石く……。元気出してよ、ね？』
『・・・・・・・・。』

そつと肩を触れて困ったような表情で放った長門の声に、明石は口に詰め物をするかの様にスプーンを運び、目を瞑って頬を上下させながら頷いた。

明石と忠^{ただし}が別れたらしい。

艦魂達の間でも有名だった二人のそんな噂は、呉にずっと停泊していた長門の耳にも届いていた。おしどり夫婦等と影で呼ばれ、長門自身も陸奥^{むつ}や伊勢^{いせ}などの仲間内にはそのように伝えてきた。かつて第一艦隊の隷下部隊である第一水雷戦隊、及び第三水雷戦隊の戦隊長として過ごし、長門の直属の部下を務めていた那珂から聞いた所によると、どうやら忠が砲術学校への入校を決意した事に端を発する大喧嘩があったらしい。直前になるまで言い出せなかったという忠の態度は長門が知る彼の優しさがよく滲み出た行動であり、そ

ここにあった忠の心情を長門は良く理解する事ができた。だが同時にそこへ苛立ちを募らせて彼に対して憤りを隠せなかった明石の心の内も、長門には良く理解する事ができた。そして二人して素直に自分の事を言えないままであつた事が、長門に二人の若さをよく伝えてくる。

ただ、端から見ていると微笑ましい二人が結果として別れてしまった事は、そんな長門としても素直に残念ではあつた。独りになつて呉に帰つて来た明石の泣き腫らした顔は可哀想の一言であつたし、持ち前の元気がすっかり無くなつてしまつた明石の姿は長門にはどこか痛々しく見える。

『ほ……、ほらあ、オトコなんて一杯いるしさあ……。あ、なんなら、他所の艦からアタシが目つけてる人を回そっか!？』

わざとらしく口元を吊り上げて長門は言った。

意気消沈してしまつている明石をなんとか元気付けようと必死な長門の事は、相変わらず杏仁豆腐を口に詰め込んでいる明石にも良く解っている。しかし、あくまで優しいお姉さんである長門に感謝の念は湧いてくるのだが、それ以上に明石には長門の言葉で蘇つてきてしまう相方の記憶が辛かつた。

この数日で痛いくらいに実感した、彼女の中にある忠の特別さ。彼の代わりになれる者などいないと心の中で呟くものの、そんな相方を突き放した自分の馬鹿さに明石は悔しさを覚えてしまう。そしてそれは明石の意識とは関係無しに、彼女の瞳の縁に溜まっていた物を溢れさせた。

『う……。う……。』

咽び泣く声が明石の口から漏れてくると同時に、ほろほろと彼女の頬を涙が零れ落ちていく。明石の横から必死に声を掛けていた長

門だったが、さしもしに泣き出してしまった明石にうろたえた。どうすれば良いか解らずに両手を宙で右往左往させる長門だったが、突然その場の空気を切り裂くように長門と明石の向かいから音が響いてきた。

カチャン

音が発せられたそこには、朝日の膝の前に辺りのテーブルでカップが置かれていた。普段は呼吸の物音すらも発しないかのように物静かな朝日の事を良く知っている長門は、先程耳に響いてきた音が意味する事を薄々悟りながら、恐る恐る視線をテーブルの上のカップから朝日の顔に向かって流していく。

『・・・・・・・・・・』

朝日は青い瞳を細め、眉をしかめて長門の目をじっと見つめていた。典型的なお嬢さんである朝日は相手を震え上がらせる様な迫力を伴って睨みつける事はないが、数々の修羅場を潜り抜けてきた先輩のそれは、長門にハッキリと朝日がご立腹である事を伝えるのに充分だった。

『あ、あはは……。さ、さーせん……。』

すまなそうに頭を掻いて縮こまってみる長門だったが、先輩のなにもおっかない視線と隣で涙する明石に挟まれて自分の失言を恥じた。そして何度か朝日と明石を交互にチラチラと視線を流した後、長門は明石にすぎるようにして抱きつき、今にも泣き出しそうな声で明石に声を掛ける。

『あ、明石く、ごめんねえ。お、お願いだから泣かないでよお……』

。』

明石は長門の声を受けて一応は頷いて見せたものの、溢れ出てくる涙が止まらなかった。両手を目に当てて拭っても涙は一向にやまず、膝の上に涙が落ちて碎ける度に明石の心は後悔の念で埋まっていた。

ただ一言、「行くな」と言えば良かった。

この数日の日課ともいえる程に明石はその言葉を心の中で叫んでみるも、最早それは後の祭りではない。そしてその事実から生まれて押し寄せてくる後悔と懺悔の念に耐える為に、明石はただ泣く事しかできなかった。

鼻水と涙によって水で濡らしたかのような教え子の顔を眺めていた朝日は、おもむろに立ち上がって明石の脇まで歩み寄ると彼女の隣に寄り添うようにして腰を下ろした。そっと明石の背中に手を触れてやる朝日だったが、明石は師匠の手の温もりを受けても涙が止まらない。

『そう……。』

朝日はそんな声を発しながら何度か頷くと、フツと口元を緩めて明石を包むようにして抱き寄せた。そして朝日の胸の中で嗚咽に苦しむ明石もまた、朝日の借してくれた胸で涙を拭うようにして顔を埋め、両手で朝日の身体に腕を回す。ぎゅっと力を入れて抱きつく明石の頭を朝日は優しく撫で、それまで誰も口にしなかった率直な言い方で明石の心を確認した。

『そう……。好きだったのね、その人の事……。』

『あ、あ・・・、ああああ・・・。』

明石は頷かなかったが、朝日の言葉を受けて声を一層大きくして泣いた。その行動こそが、朝日には彼女の精一杯の答えであると感じられずにいらなかった。

初めて明石と会って教育を実施した2月、朝日は一度だけ明石にちょっと意地悪な質問をしたことがあった。艦魂が見える人間と出会い、文字通り寝食を共にしているという明石。そしてそんな明石が艦魂社会における軍医として生きていく上で、人間と艦魂のどちらかを切り捨てなければならぬ時がある、と。その時、明石は「どちらも助ける」と即答した。朝日はその答えを悪いとは言わなかったし、彼女自身もそうは思わなかった。

だが朝日は、今の明石にその時の答えが明確に違うと確信した。明石にとってはその人間の少尉こそが大事であり、全てなのである。それは帝国海軍の艦魂としては致命的な間違いであり、実は明石と顔を合わせる前に噂を耳にした時、朝日はその事を叱ろうとさえ思っていた。長年、軍医として生きてきた朝日にとっては、艦魂が仲間達よりも人間の方に肩入れする、というのは到底許す事のできない由々しき事態であり、身の程を忘れた教え子は叩いてでも考え方を直させようとしていたのである。

ところが顔を合わせてしばらく経ち、こうして涙で頬を濡らす明石の表情を目にした朝日は、その考えに基づいた行動をとろうとはしなかった。

心の底から愛する男性を得て、その為に涙を流す。

それは艦魂や人間等というちっぽけな区切りではなく、この世に生きる全ての命が得る事のできる当たり前の姿なのではないだろうか。

女性として生を受けた明石が一人の男性を想う余りに泣き崩れるこの光景は、本当に間違いなのだろうか。

胸の中ですすり泣く明石を見つめる朝日の脳裏には、そんな疑問が湧いていた。それはとても難しい疑問であり、そも艦魂が見える人間の話は聞いた事があっても供に過ごした事が無い朝日にはその答えは到底出せない物だった。

だが一つだけ、朝日の心に湧いた物がある。それは今、自分の胸の中で泣く教え子と同じ顔を持つ朝日の師匠が教えてくれた「命に対する理想」であった。

朝日はそれを思い出すと同時に小さく微笑むと、目を閉じて明石の額に頬を添えるようにして語りかける。

『明石、その気持ちを大事にするのよ……。』

『……。う、う、あああ……。』

『きっとその人は戻ってくるわ。それまでその気持ちを忘れず、いつか戻ってきた時に思いっきりぶつけてあげるのよ。大丈夫。こうでありたいと強く願ってさえいれば、結果は必ずついてくるわ。今は泣いてもいいから、頑張るのよ、明石。』

長門が脇からそっと見守る中、朝日の胸に顔を埋めた明石は泣きながらその言葉に頷いた。朝日には艦魂が見える事のできる人間を身近にした教え子の境遇が気の毒な事この上なかったが、40余年の自分の生涯では一度たりとて味わう事のできなかった感情を持つ事のできた明石を少しだけ羨ましく思った。

頑張れ。

その言葉を何度も心の中で呟きながら、朝日はしばらくの間、明石の頭を撫でてやった。

陽が暮れて気温が下がり、月と星達が夜空に目立ち始める頃。

明石はこれまで近づこうとさえしなかった、かつての忠の部屋に戻ってきた。ゆっくりと扉を開けた先に広がった、生活の息吹がすっかり消えた部屋。あれだけ本が並べてあった机は綺麗に片付けられ、いつも相方が寝るまでは自分が占領していたベッドには既に布団は無く、鉄のフレームが有るのみ。僅かに口を開いたクローゼットは、その隙間から中には何も入っていない事を明石に伝えた。

入り口を入ってすぐ脇の壁にあるスイッチを慣れた手つきで押すと、部屋に一つの電灯がポツリと灯りをともしだす。こんなにも侘しい灯りであったかと感じながら、明石は後ろ手に扉を閉めた。明るくなった部屋の床は髪の毛一つ落ちておらず、それが明石の記憶から綺麗好きだった忠の事を引っ張り出そうとする。

どんな気持ちで彼は部屋の掃除をしたんだろう？

そんな事を考えながら部屋の中央まで歩いた明石は、ふとある事に気付いて足を止めて顔を上げた。まだ力が籠らない動きで左右を見回し、彼女は肩の高さで両腕を左右に伸ばす。どちらの指先も壁には遥かに届かないくらいに部屋の広さがある事を、明石はこの時初めて気付いた。部屋の主であるにも関わらず、押しかけた仲間達を横目にいつも部屋の隅にある椅子に腰掛けていた相方。その光景に彼女自身も狭い部屋だと何度も思っていたのに、主を失った今の部屋は本来の広さを明石に充分過ぎる程に伝えた。

なんとかそれを否定したかった明石はベッドに向かって淡く白い光りを放ち、そこに自分の布団を出現させてみるものの、目に映る光景は彼女が部屋から感じる感覚を少しも変化させてはくれなかつ

た。

『はああ・・・。』

大きく溜め息をつきながら明石はベッドの端に腰を下ろし、記憶に残っていた部屋の印象からは嘘の様に静まり返った部屋のあちこちに視線を配ってみた。

机から床に灰皿を落として自分の布団を灰まみれにした時、怒ったフリをしてヘコヘコと頭を下げる森さんを内心笑いながら怒鳴った事があったな。

扉の向こうから響いた「巡検」の言葉を受けて、私が着替えている事を忘れて思わず振り向いてしまった彼を変態と蔑んでやったりもしたな。

私が布団に落とした甘納豆がその後に見つかって青木大尉におもいきり雷を落とされた時は、今にも泣きそうな顔でしょんぼりとした彼を元気づけるのに苦労したっけ。

蘇ってくる忠との思い出が明石には辛く圧し掛かって来るが、この数日の間に泣き尽くした明石の目にはもう涙すらも湧いてこなかった。その記憶をお世辞にも今まで大事にしてきたとは言いがたい自分とその結果である部屋の光景に、明石の胸の中には罪悪感と自分への嫌悪感が積み重なっていく。ふと脳裏を過ぎっていく友人の口癖は、今の自分を良く表した言葉であった。

いつの間にか床を眺めるようにして俯いていた明石だったが、静まり返った部屋の中へ唐突に正面から響いてきた物音を受けて顔を上げる。そこには今しがた彼女の脳裏に浮かんだ言葉を口癖とする友人の、開いた扉の隙間から部屋の中を窺う姿があった。

『ふん……、ここだと思った。』
『神通……。』

長い前髪の奥、深めに被った軍帽の陰になったそこには、神通らしい鋭く尖った瞳がある。不機嫌そうに眉を僅かにしかめているが、それでも普段から仲の良い明石はそんな彼女が不機嫌なのではない事をすぐに感じ取る。少し大きめの紙袋を腕に抱えた神通は足で扉を閉めると、ゆっくりと明石の隣まで来てベッドに腰を下ろした。目元が前髪で隠れていながらも、紙袋から中身を取り出して差し出してきた神通の手に、明石は彼女なりの優しさが込められている事を認識する。

『食え。』

短い神通の言葉を受け、明石は彼女の手から差し出された握り飯を受け取った。ぶっきらぼうな物言いの神通だが、明石が握り飯を受け取ると同時に彼女は再び紙袋に手を突っ込み、今度は小さな水筒と金物の碗を取り出して水の用意を始めてくれる。いつもはこんな事は従兵である霰あられにやらせているが、元気の無い友人の為ならば黙々とそれをこなしてくれる所が神通にはあった。

忠という、人間が食べるのと同じ食べ物調達方法を失ってしまい、今日とて朝から何も食べていない明石は神通の優しさに深く感謝して握り飯にありつき、もぐもぐと大きく頬を動かして噛みながら呟くように礼を口にする。

『ありがとう……。』
『ふん。』

手元でカチャカチャと音を立てながら、神通は明石に視線を流さずに碗に水を注ぐ。そして充分に水を湛えた所で、碗を明石に差し

出した。

『ほれ。』

明石は欠けた握り飯を左手に持ち替え、開いた右手で神通の手から碗を受け取った。溢さない様にしてゆっくりと口に近づけ、明石は口の中に残った後味と握り飯を洗い流すようにして水を飲んだ。

碗の傾きを次第に増していく明石を横目に見ていた神通は蓋をした水筒を紙袋に戻して明石と自分の間に置くと、小さく溜め息をついて頭から軍帽を取った。僅かに背を反らしてふてぶてしく脚を組み、自分を挟んで明石とは逆の方に帽子を放る神通。改めて明石の顔を横から眺めてみるものの、明石の表情は涙こそ無い数日前の彼女のそれとは何も変わっていない様に神通には思える。

もちろんその原因は一端は明石にもあるのだが、一向に元気が戻らない友人の姿を見るのは神通は嫌だった。また、そこに懸けられた忠と明石のどちらの心をも知る彼女は、悲しい結末を迎えてしまった二人を決してその口癖の通りに馬鹿だと蔑んでいる訳でもない。お互いを嫌ったわけではなく、むしろ逆の想いを秘めてしまったが故に別れてしまった二人。当事者の片割れである明石を頭ごなしに叱った彼女だったが、その実、二人のその姿は神通にとってはなにか微笑ましい輝きを放っているように感じてならなかったのである。

そんな思いを隠しきれず口元を僅かにゆがめた神通は、どんよりと暗い空気を放つ明石に向かって静かに語りかける。

『気を落とすな、明石。森はお前の事を嫌いになった訳じゃない。』
『・・・・・・・・。』

『別れ際にな、森が言ってた。今のお前との関係が不公平だってな。』

明石はその言葉を受けて僅かに首を振って神通に顔を向けた。

忠と離れてしまった後、明石は彼がどうしているのかまったく知らない。部屋を飛び出してしまった後になって自分の言動を恥じた彼女は、どの顔を下げて彼と会えばいいとすら思っていたのだ。忠の心遣いなど怒りに任せて振り払ってしまったし、酷い言葉も投げつけた。絶対に自分を許してなどくれないだろうと思っていた明石だったのだが、それ故に別れ際に言ったという意味深な彼の言葉は明石には気になって仕方が無い。

僅かに頬の動きを遅くして顔を向けてきた明石を認め、神通は彼女から少しだけ視線を外してさらに続けた。

『森はあれでな。お前の成長を喜びながら、出会った頃とあんまり変わってない自分がお前には不釣り合いだと思ってたんだよ。アイツも男だ、見栄も体面も捨てて目の前の幸せに跳びつく様な真似はできない。だからお前との関係に関しては、自分の美学を突き通さなきゃ気が済まなかったんだよ。まったく馬鹿な奴らだな、男というのは。』

神通はそこまで言うのと視線を明石の方に戻した。明石は片方の頬を膨らませたまま、黙って神通の瞳を見つめてくる。そも艦齡的にはまだまだ幼く、女性ばかりの艦魂社会の一員でもある明石には、身体的な特徴以外での男女の違いという物がイマイチよく理解できていない。だが隣で冷静に分析した男性像を語る明石の友人は既に艦齡14年を迎える艦魂としての大先輩であり、その声には明石の脳裏にそこに対する疑問を沸かせないだけの強い説得力があった。そして神通は呆けて見つめてくる明石に優しく笑みを見せると、再び口を開いて声を放ち始める。

『本当に馬鹿だ。だがな・・・、海を眺めながら寂しそうな顔でそんな事を語ってくれた森が、私には無性に良い男に思えたぞ。』

『森さん……。』

いつもは抜き身の日本刀ように殺伐とした印象を与える神通の声だが、今の彼女の声は明石の冷え切って固まった心を溶かすように暖かく包み、明石は今まであまり意識しなかった男としての忠を心の中に映し始める。

『森は頭も良いし、砲術科員としての腕も良い。必ず良い成績を収めて、配転先希望を叶えられる待遇を勝ち取る筈だ。だからアイツは絶対戻ってくる、解るか？』

神通がそう言った後、お互いに間には少しの間沈黙が流れたが、それを遮ったのは小さくコクンと頷いた明石だった。

『……うん。』

小さい声での返事ではあったがほんの僅かだけ口元を緩めた明石の表情を受け、神通はそっと明石の肩に手を触れる。自分が女性であり忠が男性であると理解できた今、明石の心からは渦巻いていた暗い心が晴れ始めており、神通もまたそれを悟ったのだ。

『今は辛抱だ、明石。そしてアイツに対しての想いには誇りを持ってやれ、……森がそうしたようにな。それと森の気持ちも今なら解るだろう？ なんてお前に砲術学校に行くと言えなかったのか、いや、そもそもなんで砲術学校に行こうと思ったのか……。』

神通の問いかけの答えは明石にはしっかりと解っていた。

男性である彼なりにきつと同じ想いを持ち、同じ苦しみを味わったに違いない。

そう思った瞬間、明石の心は晴れた。そしてしばらく振りに彼女は、持ち前の綺麗な笑みを浮かべて神通に顔向ける事ができた。その笑みで彼女の返事を悟った神通は軽く明石の肩を叩くと、スッと立ち上がって言った。

『少し、元気になったみたいで安心した。そろそろ戻る。』
『うん。』

笑みを合わせた所で神通はベッドの端に置いてあった軍帽を手に取り、部屋に入って来た時と同じように深めに被ると明石に背を向けて扉に向かって歩き出す。初めて理解する事のできた相方の心の一端に明石は心の底から喜びながらも、それを教えてくれた神通に深い感謝の気持ちを抱いて咄嗟に声をかける。

『神通。』
『ん?』

歩みを止めた神通は背を向けたまま、首だけを捻って明石に視線を送る。

『ありがとう。』

明石は友人の心遣いに感謝してそう言った。だが神通はそんな明石を鼻で笑うと、ちょっとだけ眉をしかめながら明石に微笑んでみせた。その行動に明石が不思議に思って首を捻ると同時に、神通は静かに声を返した。

『ふん。礼なら森に言え。』
『・・・え?』

『アイツめ、お前を頼むと言いやがった。まったく、私に向かつて尻拭いを頼むんだからな。大した奴だ。』

いつもの様に憎まれ口を叩く神通。明石が感銘した心遣いを、彼女は尻拭いという少し下品な言葉で例える。だがそんな神通の言葉に、明石は腹を立てることは無かった。むしろ冗談を含んだような神通の台詞が意味する事を彼女の友人として良く知っている明石は、再び胸の奥から込み上げてくる感情を抑えきれずに声を漏らし始めた。

『ふふ・・・、ふふふふ。神通が尻拭いか。』

『ふっふっふ・・・。まったく、お前らと付き合っているとロクな事がない。』

明石のそれは友人の立場を滑稽に思った物だったのだろうか。それとも自分を苦しめていた暗い感情から解き放たれた喜びから出た物だったのか。そして神通のそれは自分の馬鹿さ加減を哀れんだ物だったのだろうか。それともやっといつもの自分に戻れた友人を祝福した物だったのだろうか。

何れにせよ、二人はお互いに込み上げてきた可笑しさを隠せず、大いに笑い合った。

桜が散り終わり、暖かさが暑さを伴い始める5月の夜の事だった。

第三七話 「五月雨と休日」

昭和15年5月10日、しとしとと小雨が降る呉海軍工廠。

冬季艦隊訓練が終わった帝国海軍は束の間の休息に浸っていた。各艦の乗組員達は呉の町へと出かけて行き、旅籠や下宿先にて信号ラッパに急かされる事の無い一日を送る。食べたい時に食べ、入りたい時に風呂へと向かい、駆けつけた親戚等から貰った差し入れを口にして表情を明るくする彼等には、あいにくの雨模様も特には気にはならなかった。

普段からコキ使われる水兵達にとっては、この時期だけが存分に娑婆を楽しむ事ができる日々である。そして逆にちよつと偉い肩書きを頂いている者は、こんな時でも相変わらず艦と共に波間に揺られる日々を過ごさねばならない。さしにも艦を無人にする事はできないから居残り組というのは必ず選抜され、自由気ままに一日を過ごす部下を洋上から眺めながらのお仕事をせねばならないのだ。物資の搬送搬入は勿論の事、長期に及んだ艦隊訓練のまとめと懸案の抽出、それに伴った対策の設定。艦への修理補修に関する港湾部側との打ち合わせや、同一戦隊内での幹部による会議など、デスクワークを主とする者達にとっては休みもクソもない日常であった。

同じように生活する艦魂の世界でも偉い肩書きの者達はやはり打ち合わせや会議等に勤しんでいたが、もっとも人間のように普段の厳しい艦隊勤務をそのまま履行する訳ではない。艦内における人口密度が極端に低下した事は、彼女達が主計科の倉庫等からあれやこ

れやと銀バイを働くにはもってこいであり、貴重な戦利品を持ち寄った彼女達の声はお仕事をしながらの物であっても極めて明るかった。

軍港内の一角に錨を下ろしていた那珂艦なかの一室では、主である那珂が将棋盤を挟んで向かい合う姉達の姿をにこにこ眺めていた。

『……ふうむ。』

横で仏様の様な笑顔を湛える那珂を他所に、神通じんつうは珍しく眉をしかませた困ったような表情で将棋盤をまじまじと眺めて唸り声をあげる。口を隠すかのようにして片手を添え、背を丸めて胡坐をかく神通。

そんな彼女に、向かいに腰を下ろした姉が声を掛けてきた。

『どうした、じんちゃん？ もう終わり？』

『……むう。』

少し眉を動かして唸る神通を、不敵な笑みを浮かべて眺めている女性。

前髪も含めたほとんどの髪を後ろに流し、あらわになったおでこの下には神通や那珂と良く似た鋭く釣り上がった目を持っている。那珂や神通と同じように濃紺の第一種軍装に身を包んでいる彼女だが、胸元の辺りのホックを外し、横を向けて頭に乗せた軍帽など、二人と違ってかなり不真面目な感じの身なりである。そして女性ながらも口に挿した煙草をブガブガと吹かしながら声を発したこの人物こそ、神通と那珂の実の姉せんだいの川内であった。帝国海軍でも指折りの暴れん坊である神通が、師匠の金剛以外に逆らう事のできない唯一の存在が彼女である。

鬼と恐れられる神通も姉に掛かつては形無しで、幼少時からの呼

び名で呼ばれた事に苛立ちを覚えながらも何も言い返せない。そして同じ様に将棋盤の上ですらも、彼女は姉に対して返す手を見極めかねていた。

『スウー・・・、なっちゃん。ダメだ、コイツ。てんで弱いもん。』

川内は大きく煙を吐きながら、将棋盤の横に座布団を下にして座る那珂に向かって面倒臭そうに言った。その声を受けた那珂は口を手を当てて小さく笑うが、ちっとも面白くない神通はそんな那珂に鋭い眼光を放って笑みを沈ませる。不機嫌な事この上ないといった表情で妹を睨みつけた神通は彼女が声を静めると同時に、口を大きくへの字に曲げて将棋盤に向き直って考えを巡らせ始める。

将棋盤の上では、防銀戦法を採る川内の陣営に大きく攻め入ろうとする神通の陣営、という光景が広がっており、帝国海軍水雷戦部隊の一番槍を務める実に神通らしい指し手で行われた将棋であった。

もっともそれは川内も同じ事で、彼女が今まで所属してきた第一艦隊隷下の第一水雷戦隊は、戦艦によって編成された第一戦隊等を護衛する事が主な役割である。那珂や神通もそれぞれ一年程はこの一水戦旗艦を務めているが、川内はそれを総計5年間にも渡ってにこなして来た艦魂であった。故に防御戦闘とは彼女の十八番であり、「突撃強襲」という言葉が大好きな神通とは物の考え方が正反對なのである。そして川内型二等巡洋艦3姉妹の長女である彼女には、基本的には内地で訓練漬けの日々を過ごしてきた妹達とは違って、数年間にも及んだ支那戦線派遣で得た豊富な実戦経験と誉れ高い戦果もある。

その戦果の中でも、特に帝国海軍が独自に見出した水上機の運用法。

すなわち水上機に防空戦闘能力を付与する試みは、この川内艦と支那方面艦隊旗艦の出雲艦から^{いずも}発進した艦載水上機が敵性爆撃機を

迎撃した事が大きなきっかけとなっているのだ。水上機に比べれば航空機としての制約が少ない陸上機を複葉のゲタ履き機が撃墜したという事実は、帝国海軍内はおろか国内の航空機産業にまで及ぶ大きな波紋を起こし、この年の9月になって海軍は十五試水上戦闘機という水上戦闘機開発計画を推進するに至るのだった。

後年、世界に類を見ない高性能を誇る水上機達を帝国海軍は次々に大空に向けて羽ばたかせる事になるが、その源流の一つはこの川内にあるのだ。そして、彼女が起した波紋から生まれた十五試水上戦闘機は後に強風という名で誕生し、やがてそれは紫電二一型という大輪の華として大空に翼を広げるまでに昇華して行くのであった。

姉の偉大さは良く理解しているし尊敬もしているのだが、生来鼻っ柱の強い性格の神通はそれでも負けるという事が嫌であった。相変わらず口をへの字に曲げながらも、神通は意を決して歩を川内の陣営に向かって突っ込ませる。川内の陣営の一直線になった歩の前に自陣の歩を置き、辺りが自陣の勢力圏内である事を確認して神通は駒から指を離した。

今考えうる手の中では、これが最も得策だ。

そんな言葉を脳裏で呟いた神通は、表情から曇りを消した。丸めていた背筋を伸ばして胸の前で腕を組むと、神通はキツと力を入れた眼差しで対面する姉に向かって顔を向ける。

『そら、姉貴の番だ。』

『ふう〜ん。さっすが、じんちゃん。』

自信満々に指した神通の手は、彼女が意図した通りに川内を唸らせるだけの実に良い攻め手だった。だが一筋縄では負けてはくれない妹が川内には嬉しく、将棋のほんの一手ながらも明確に妹の成長を伝えるその光景に口元を緩ませる。

やがて表情を明るくさせた川内は、それではと言わんばかりに自分の手を打つ。しかしそれはまたしても、自陣の防御体制の要である櫓の辺りでの一手だった。勿論、神通はそれを見逃さず、先程の歩の周りに自陣の駒を集中させて敵陣への突破口を確固たる物とする。この辺りは神通にしたらずめ戦隊の襲撃運動と似たような物であり、先ほどまでの様に次の一手を深く考えて指す事は無かった。

お互いの小気味良い駒の差し音が部屋の中に響いて行き、それを横からにこにここと微笑んで眺める那珂は久々の姉妹だんらの時間が得られた事を実感して心の底からそれを喜ぶ。末の妹である彼女には、久しぶりに妹達の顔を見る事が出来た川内の事も、久しぶりに夢中になって実力を競い合える姉を迎えた神通の事も良く解っていた。のんびりとした今の光景を目にする事ができた那珂は、それを楽しむかのようにして三つの湯飲みにお茶を用意し始める。主計科の倉庫から拝借してきた羊羹をお皿に盛り付け、そっと二人の姉の脇に差し出す那珂。

『ほれ。』

『あ・・・！』

だがそんな那珂の動きを止めるかのように、彼女の正面からは神通の小さな悲鳴が聞こえてきた。対照的な態度を取っている二人の姉に挟まれた将棋盤の上。そこには傘にかかって攻め寄せようとする神通側の飛車と角が、川内側の打った桂馬によって完璧に動きを封じられている光景があった。飛車角取りだ。

『むう……。』

すっかり読み違えていた川内の狙いを結果として知ってしまった神通。自分への苛立ちなのか、上手くいかない事への腹立たしさなのか。再び彼女は口を大きくへの字に曲げ、胡坐の上に頬杖をついて将棋盤を睨んでいる。猫の仕草を思わせる程に荒っぽい動作で首の辺りを片手で掻く神通の姿は、彼女が不機嫌な事この上ない事を那珂と川内に良く伝えた。

『スウ……。もうちょっと相手の出方に気をつけなさいよ。自分の意思を相手に強要するんだったら、相手の事が手に取るように解るぐらいじゃないとね。じゅんちゃん。んひひひひ！』

煙草の煙を盛大に撒き散らしながら、川内は妹の不機嫌な様子を笑った。彼女にしたら相変わらぬ鉄砲玉っぷりを見せつける神通のその姿は可笑しくてたまらず、幼い頃からちっとも変わらない妹のその表情が川内は大好きであった。

もともと神通にしたらとんでもないお話であり、何より彼女は川内が自分と呼ぶ際に使うその呼び名が大嫌いであった。隣でそれを平気な顔をして笑う那珂も、今の神通には腹立たしさを募らせていく一因でもある。残りも少なくなってきた川内の陣営から分捕った駒を落ち着き無く手のひらの中で動かし、段々と頬を膨らませていく神通は胸の奥から込み上げてくる怒りを吐き捨てるかのようにしていつもの短い口癖を放った。

『……。ふん。』

『ひひひ。勝ったら”じんちゃん”て呼ぶの止めてあげるよ、じゅんちゃん！』

『ちいっ……。』

決して意地の悪い人柄ではない姉の言葉であるが、それは今の神通にとっては悔しさを増幅させる物でしかない。なぜならこの神通の名称を賭けた将棋盤の上での戦いはこれまで通算32回も行われており、その戦績の内容は未だに彼女の名称が変わっていない事から察するに難しい事は無い。

那珂と川内が微笑んで見守る中、一人不機嫌な神通は再び唸り声を上げながら将棋盤を睨んで考えを巡らす時間を展開し始めた。

無論この日、神通に対する川内の呼び名が変わる事は無く、翌日になっても癩癩が治まらない彼女は部下の艦魂達に「八つ当たり」という名の厳しい教育を授けてやった。なんとも迷惑なお人である。

どんよりとした雲から放たれる小雨は、呉に在泊する全ての艦艇達を包む。

柱島泊地もそれは例外ではなく、少しだけ生活の息吹が消えかけた第一戦隊の4隻は寄り添うようにして錨を下ろしていた。一際大きなマストや艦橋、主砲塔を持つ彼女達も、今はどこか寒さに震えて身を擦り合わせるようにして耐える子猫達の様。

そしてその中の1隻である陸奥艦むつの司令部用大部屋に、明石あかしと親しい間柄の長門ながとはいた。

広い部屋には雪の様な純白のテーブルクロスを掛けた長机が置かれ、その端にはニスによって美しさを放つ木目を持つ椅子がいくつも並んでいる。部屋の壁に置かれた様々な大きさの棚や小物は銀縁の金具を伴った高級品ばかりで、舷窓にはお洒落な柄のカーテンも取り付けられている程だ。

そんな部屋の艦首側に当たる長机の一番端。そこには4人の艦魂が集まり、各々が長ったらしい文章が綴られた何枚かの紙を片手にしてなにやら小難しい話をしていた。

『陸兵が上陸する際の支援か。こんな戦いでボカチンはごめんだな。』

『実戦つてのはこういう物なんじゃない、山城さん？^{やましろ}白露戦争の時だって、初期の頃の戦闘は先輩達も支援に回ってるし。』

少し若さが消えつつある30代前半の外見を持つ二人は、そんな会話をしながら笑みを合わせる。少将の襟章を身に着け、髪型こそ違えど軍帽から綺麗な黒髪を垂らした彼女達は山城艦と伊勢艦^{いせ}の艦魂である。隣同士で席に着く二人はお互いの手にした紙のあちこちを指差して声を弾ませるが、長机を挟んでその向かいに座っていた二人と同じ第一種軍装を纏ったクセ毛の女性がおもむろに声を放つ。

『戦艦同士の撃ち合いも発生してますし、何より近代海軍同士の戦闘記録は非常に希です。ここから何か学べれば、それは帝国海軍にとっても大きな一步になる筈ですよ。』

笑みと供に明るい声をあげたのは、長門と良く似た顔を持つ陸奥であった。妹なのだから当然なのだが、なぜかサラサラと流れるような黒髪の長門に対して陸奥は大きく左に巻く強いクセ毛であり、髪の色も姉の艶のある黒色ではなく少し赤みを帯びた茶髪である。

重力など屁とも思っていないかのように耳の横で逆巻く髪を撫でながら、陸奥は二人と供に姉とは違った礼節を良く心得た物言いである。

『注目すべきは、4月9日に発生したナルヴィク沖での海戦ですね。英独供に巡洋戦艦同士での派手な撃ち合いをしています。』

『確かに、シレットとはしてらんないな。特に英国側の2隻の戦艦は私達と同じ世代の艦だ。最新鋭の独国戦艦2隻に対して、引き分けに持ち込んだんだから大健闘と言った所だな。』

『ふふふ。そうは言っても、38サンチと28サンチのルッキングだからねえ。やっぱ主砲はデカイのに越した事はないね、山城さん。』

『砲戦距離はどのくらいなんだい、陸奥？独国のシャルンホルストとやらは、速度性能においても英国側とはドッコイじゃないか。近づく前に命中弾を浴びても良さそうな物だが・・・。』

3人が弾ませる話題は、先月初めにドイツが行った北欧への侵攻に際して発生した海戦である。

去る4月9日、ドイツはスウェーデンとの鉄鉱資源を主とする海上交通路を確保する為に、デンマーク、ノルウェーの2国に対して侵攻作戦を行った。スウェーデン側の港は地理的要因から冬季には凍結してしまい、その間ドイツは貴重な鉄鋼資源を絶たれる事になってしま事とその背景にあった。既に英国とは交戦状態であるドイツはこの懸案を解決すべく行動を起したのだが、作戦海域であるノルウェー沿岸は北海を挟んで英国の目と鼻の先である事から、侵攻作戦発動と同時に妨害する英国海軍と攻める独国海軍は極寒のフィヨルドを背景にして本格的に衝突した。

数度に及んだ海戦の情報は、連合艦隊司令部をその身に宿した長門が手に入れてきた物であり、タイムリーとは言えないまでも帝国海軍にとっては貴重な実戦の情報であった。そしてそれを知った陸奥は早速その情報を分析し、せめて艦魂の社会でも横展開しようと考えた末に今の光景へと繋がっているのだ。

もったも長門にとってそれはつまらない日常の延長でしか無く、

戦艦の艦魂としての先輩筋に当たる伊勢と山城を前にしながらも、彼女はいつものように軍装のホックやボタンを全て外して羽織る様に上着を着ていた。三行以上の文章を目に入れると極度の倦怠感に襲われてしまうという困った性格の長門は、骨格を失ったかのように身体を流して机に頬杖をついている。読む気が失せた書類を靡かせる様にしてパラパラと流し読みし、彼女はその書類を自らの手元に落とすようにして机に置いた。

『姉さん、真面目にやってよ。』

『へへへ……』

陸奥は長門に眉をしかめて注意を促しながら、横目でチラチラと向かいに座った二人の先輩に視線を送る。戦艦の艦魂としては帝国海軍でもっとも若輩な陸奥のその態度は当然と言えば当然であったが、当の山城と伊勢はそんな陸奥に対して苦言を呈すつもりはない。また、長門という艦魂をこれまで一緒に見てきた二人は、横でしな垂れる彼女を怒る気にもならなかった。二人は笑みを合わせると、長門を放っておくかのようにして再び紙に視線を流して話し始める。

『4月12日の戦闘も中々に興味深いじゃないか。航空機による偵察と潜水艦への事前制圧を行った後に、戦艦が止めを刺しに行くと手荒くナイスだな。』

女性にしては低い声で、少し男っぽい物言いをする山城。帝国海軍艦魂の中でも彼女と姉の扶桑ふそうは最も背の高い艦魂であり、170センチ後半はあろうかという長身と日本人離れた広い肩幅が目を引き。痩せ型の体型である山城は、顔もどこかほっそりとした感じで頬骨がちよっと目立つ糸目の女性である。ほんの少しだけ目尻や口元にしわができてつつあるその顔と、先程から人間が使う海軍内での略語を端々に散りばめた彼女の言葉遣いはその海軍歴の長さを相

対した者に良く伝える。

そして似たような特徴を持った、山城の隣に座る伊勢。身の丈こそ普通であるが、彼女もまた同じように顔の所々に薄っすらと老いを滲ませており、その言葉もまた山城と同じように略語を用いている。耳を隠すくらいの短髪である伊勢は頬の上辺りで揺れていた前髪を掻き揚げて耳に掛けると、山城が目留めた部分とは違った所に興味が湧き、すぐにそれを声に乗せる。

『ドイツは潜水艦の雷撃で、そこそこの被害が出てるのね。ボカチンにならなかったとしても、陽が昇ってから航空機で止めを刺されてる事例もあるじゃん。』

それまで真面目な表情で先輩の言葉を聞いていた陸奥だったが、伊勢のその言葉を受けて僅かに眉を動かす。同時に彼女の脳裏の中には、最近になって気に障り始めた連合艦隊のとある事情があった。

それは彼女自身の生い立ちをもって形成された、陸奥の艦魂としての生き方に端を発する。

世界最大の410ミリの主砲を持つ陸奥艦は、帝国海軍がワシントン海軍軍縮条約において八方の手を尽くして誕生させた執念の艦だった。当時まだ未成だった事を理由に廃艦の危機に陥った陸奥艦を、帝国海軍はあの手この手を尽くしてなんとか完成状態にして産み落とす事に成功した。必要な各種試験を省き、擬装工事も見えない部分は後回し、終いには就役済みである事実を取材に訪れる外国人記者に裏付ける為に、まだその身を浮かべてすぐの陸奥艦には海軍病院から怪我人を担ぎこんで病室もしっかり機能している事を印象付けて就役へのリアリティを持たせた事もあった。腹を痛めた子は可愛い、というのは彼女の生みの親である海軍でも同じ事で、大変な難産の末に生まれた陸奥艦は海軍内では長門艦を凌ぐ人気があったのである。そして屈曲式煙突を装備していた時代に連合艦隊の

旗艦を務めた事も加わり、国民からの人気も実は長門艦より陸奥艦の方が高かった。

そんな陸奥艦の艦魂である陸奥は帝国への奉公の精神や忠誠心は人並みはずれた物があり、世界最大の主砲を持つ戦艦としての誇りも姉よりはずっと強く抱いている。帝国を象徴する軍艦である自信と帝国を護る為の最後の万人として、自分の双肩にこそ全てが掛かっていると感じて励んできた陸奥。

ところが昨年に連合艦隊司令長官に就任した山本中将は、普段から陸奥が今まで信じてきた事とは間逆の事を言って憚らなかった。先日の中将旗を翻す姉の甲板をブラブラと歩き回り、二人が見ている前で彼は主砲勤務の兵員達に向かってこう言い放った。

『君達、今に失業するぜ？これからの戦は、大砲をぶっ放してなんとかする様な戦にはならないよ。』

勿論、陸奥はこの言葉に憤慨した。

その主砲こそ帝国を護る最大の武器であるし、そもこの主砲を持っている帝国海軍の艦艇は自分と姉しかない。戦の将来を嘆くのなら、まずは条約を受けて廃艦にした妹や仲間達の復活こそ急務ではないか。仮想敵国の第一位を米国と決めて大正の時代を迎え、少ない兵力で如何にして大国である米国と戦うのかを模索しなければならぬ人間達が事もあるうに今度はいらないと言いつ出した事は、陸奥のプライドと今までの輝かしい栄光に泥水を被せる事と同義だった。

そしてそれをいくら訴えても、お気楽な彼女の姉はまるで聞こえていなかったかの様な態度を貫き、陸奥の声に真面目に耳を貸してはくれなかった。『難しくて、わかんない！』等と言いつながら立ち去る姉にして、現在の連合艦隊旗艦。こんな状態で続く日常が、陸奥の悩みの種であった。

『はあ……』

無意識に額に手を当てて陸奥は溜め息を放っていた。考えれば考えるほど、彼女の悩みは軽い頭痛となつて彼女に襲い掛かつてくる。置かれてゐる立場と言い、身内の事と言い、今の陸奥には分身の倉庫が満杯になるほどの悩み事が溢れていた。

そんな陸奥を横目でそれとなく認めていた長門は、伊勢に向かつて手を差し伸べながらおもむろに声を放った。

『伊勢え。ちつと借して。』

先輩に対して呼び捨てにする長門であるが、伊勢も隣の山城もそれに怒るような素振りは見せなかった。長く一緒に帝国海軍の戦艦として過ごしてきた二人は、だらしない格好で手を差し伸べてくる長門が実はどれ程に凄い艦魂であるかを知っているのである。対して常に姉のだらしなさを嘆く妹の陸奥であるが、それは彼女が長門とは余りにも距離的に近すぎる姉妹という関係である為に見えていないだけなのであった。

『これでいいの、長門？』

『うん、ちつと借してえ。』

そんな会話をしながら伊勢の差し出した手から紙を受け取る長門。相変わらず頬杖をついたまま、彼女はゴムでできたかのように腕をだらんだらんと動かして自らの顔の前に運んだ。そこに書かれた内容を流し読み程度にして一読すると、長門は疲れたような溜め息をしながら言った。

『陸奥う……。』

『え．．．？　な、なに姉さん．．．？』

突然の姉の語り掛けに困惑する陸奥は、力が抜けた声で長門に顔を向ける。長門は陸奥には視線を向けずに、どこか遠い目をして部屋奥を眺めながら続けた。

『3月の佐伯湾での戦技訓練。あの時の一戦隊の被命中判定って、いくつだったっけ？』

長門が放った言葉を受けて、陸奥はその酷い内容を記憶から蘇らせしまい、ふたたび軽い頭痛と戦いだした。目を閉じて額に手を添えてクルッと巻き癖のついた前髪を横に分けながら、陸奥は静かに、だが明らかに不満そうな声色で言った。

『中攻18機からの雷撃よね．．．。被雷判定は11発―。』

そこまで言った所で、陸奥は伊勢が先程までに口に使っていた航空機による戦果をその脳裏に過ぎらせた。そして同時に、長門があるう事か航空機による艦船攻撃での可能性に注目している事を察する。それは昨今になって海軍内でも実しやかに囁かれている航空主兵と呼ばれる考え方であり、海上戦闘における決定的な戦力は戦艦ではなく航空機であるというのが大筋であった。

その考えがどうしても好きになれない陸奥は、それを平然と口にした長門にキツと力の入った瞳を向けて憤りを伝えようとする。なぜならその考え方を推進する張本人は、彼女が気を許せない山本連合艦隊司令長官その人であったからだ。

『でも姉さん、実戦では厚い対空砲火が敵機の行動を抑制する筈よ！』

陸奥は僅かに椅子から腰を浮かして、身を乗り出すようにして語気を強めた声を長門に放つ。真面目ながらも直情的な性格の妹がそう言ってくる事を、長門はぼんやりとしながらも予測済みであった。故に彼女は妹の声を受けても別段驚くような仕草を見せず、姿勢と視線をそのままにして声を返した。

『それは敵の兵力にも寄るじゃない。それに、今のアタシ達が形成できる対空砲火が厚いか薄いかなんて、一体何を基準にして判断できるのよ？ 実戦じゃない訓練の際の兵力で判断するの？』
『・・・・・・・・』

陸奥は言葉を詰まらせた。

呆けたような表情で放たれた姉の言葉には、それを本気で憂慮している感じが微塵も伝わってこない。だがその内容自体は正論であり、陸奥は対空砲火の強弱に関する基準の知識を持ち合わせてはいなかった。唇を噛み締めて机の一角を睨みつける陸奥と、そんな妹を無視するかのように部屋の奥に視線を流している長門。

実はこの二人、どちらかといえば姉妹仲が悪い艦魂なのであった。

だがこういうちよつと陰悪な雰囲気を感じ取り、なおかつその場を取り繕うとしてくれるのが年上に値する者のお仕事でもある。二人を一瞬だけ鼻で笑った山城は、両手を胸に前で叩いて音を響かせながら声を発した。

『おしおし、二人の言い分は解った。議題として重要なのは、水上兵力における航空機に対して防御性だな。ただ長門が言った通り、それを判断、分析する為の基準となる要素が私達には決定的に不足してる。まだまだ英独のボカチン合戦は続くと思うから、これらの要素はこれからの欧州戦線での情報を基にして作っていこう。』

身の丈に合う凛々しくて大きな山城の声に、他の3人はこもごもの考えをめぐらせて頷いた。口を尖らせて席に着く陸奥と、肩から力を抜いて頭から軍帽を取る伊勢。

そんな光景と部屋の空気から重苦しい感じが消え失せた事を悟った長門は、山城が続けて言葉を放ってくるにも関わらず、手元にあった大きな世界地図をくるくると丸め始めた。

『長門、航空機の発展は著しい事は私も知ってる。大正9年の滑走台からの発艦実験を担当した時から、私はつぶさに航空機の進化を見てきたつもりだ。だが、まだまだ戦艦を始めとする水上戦力に対しての決定打にはならないんじゃないのか？ 航空機自体、天候にも左右されやすいー。』

山城がそこまで言うと同時に、長門は丸めた世界地図を右目の辺りに担ぎ上げた。突然の長門の行動に思わず声を止めてしまった山城であったが、長門はそれに気付いていない様な素振りで見つめた世界地図を覗き込んだ。そして片目を瞑って集中させた視界の先に発見した小さな感動を、わざとらしい程に無邪気な声で言葉に変えた。

『おおおお~~~~、世界が見える~~~~！』

『『はああ~~~~・・・・。』』』

三人の徒労という言葉覚えて上での溜め息が、部屋の中に響いていく。結局この日、英独海軍による海戦を題材とした研究、勉強は何一つ進展しなかった。

どこかのんびりとした時間を送る艦魂達ではあったが、彼女達に忍び寄る死神の足音はすぐそこにまで迫っている。

この日、昭和15年5月10日。

ドイツ軍は各種問題を抱えていた事から計画を見直した黄色作戦をついに発動。イリエコのトランペットを空に轟かせ、軍靴の衝撃で大地を揺らし、遙か西に向けて砲火を灯しながら、ハーケンクロイツの旗を頂く兵士達が隣国に向かって一斉に越境を始めた。

ここに、8ヶ月に及んだ”まやかし戦争”という名の沈黙を破り、4年3ヶ月に及ぶ西部戦線の火蓋が切って落とされたのであった。

第三七話 「五月雨と休日」 (後書き)

略語補足

- ・ シレっとした₂平然とした様子を表した言い方。 いけしやあしやあ。
- ・ ボカチン₂被弾してボカン、その後に沈没する様を略した言い方。
- ・ ルッキング₂お見合いの事。 転じて敵艦や艦隊同士が対峙する様を表した言い方。

当時の海軍軍人は、ルー○柴や現役の女子高生が腰を抜かす程におもしろい略語を使っていたようです。 男の世界なのでちよつと卑猥な言葉を指す物が多いですが、このような海軍独自の文化からは、なんとも人間らしい部分を垣間見れるような気がします。

ちなみに作者大爆笑の物がこちら。

- ・ ^{エムエムケイ}MMK₂モテモテ困っちゃう様子。 ローマ字表記にして、頭文字をとった状態から付けられたそうです (実話)

- ・ gg r k s (ググレ、カス) みたいですねw

ちゃんちゃん

第三八話 「艦魂として／前編」

昭和15年5月19日。

太陽が今日も東の空より顔を覗かせ、空の色から赤い色を失わせて綺麗な青に変えていく頃、明石^{あかし}艦艦内にいつもの号令が掛かる。

『総員起こし！ 釣り床納め！』

耳をつんざくような声がスピーカーより響き、布団に包まれていた明石の睡眠が覚めかけてすぐに、スピーカーからは一日の始まりを伝える起床のラッパが鳴り響く。そのラッパの音を掻き消すかのように艦内から兵員達の飛び起きる音が木霊する中、明石はゆっくりと横にしていた身体を起した。特に痒いわけでもないのに無意識に頭を掻きながら、大きなあくびを明石は放つ。

『んっ・・・、ふあああゝ・・・。』

顎が外れるかの様に大きなあくびだが、それと同時に冷めて重かった瞼に力が入るようになった明石は、左右の目を片手で交互に擦りながら部屋のあちこちに視線を配った。いつもの様に波に打たれる微かな音に包まれ、まるで槍を突き刺したように舷窓から伸びる陽の光りは、明石が起きた事で舞い上がった埃やチリをキラキラと輝かせている。何か変わった所を部屋に認めなかった明石は安堵するが、本当ならそこに居て欲しかった同居人を彼女は一瞬だけ思い出してしまう。

ちよっとだけボーっとしてしまう明石だが、けたたましく廊下を掛けていく乗組員達の足音が彼女を我に帰らせた。布団から引っこ抜いた両脚を床につけ、ゆるく唇を噛んで明石は立ち上がった。ち

よつとフラフラとしながらも部屋の片隅にあるクローゼットまで歩くと、明石はそれまで身を包んでいた寝巻きの帯を解いてクローゼットの奥で畳んであった第一種軍装に着替え始める。

最近、明石は思い出にすぎる事を止めた。海に泣いても涙は吸い込まれ、空に向かって叫んでみてもその声は返ってこない。自分の愚かさで耐え切れない寂しさが押し掛かって、そんな風に過ごしてきた数日で大いに苦しんだ明石だったが、友人に諭された事によって彼女は何かが吹っ切れた。

きっと彼は戻ってくる。きっと想いは同じ。思い出からくる今の辛さは、馬鹿だったこの間までの自分が払った高い授業料。

今日もその言葉を胸の奥で呟きながら明石は第一種軍装を身に纏うと、まだちょっと寝癖が残る頭に軍帽を乗せてクローゼットの扉を閉めた。いつもは首の後ろで束ねている長い髪を振り回すようにして明石はクローゼットに背を向け、椅子に掛けて干してあった手拭いを手に持つ。頭を左右に傾けて首の骨を鳴らしながら、明石は部屋の扉を開けて洗面へと向かった。

洗面所の端っこで、自分の姿を見る事のできない乗組員達に混ざるようにして明石は顔を洗う。この時間だけ蛇口から出てくる真水は艦内生活では貴重品であり、時には機関の余熱を用いて造水される事もある真水は、艦魂にしたら自らの血を使ってできた副産物のような物だ。もっとも排泄物という訳では決して無いので、明石はそんな不思議な事を考えながらも両手ですくった水を顔に擦り込ま

せ、僅かに残っていた眠気を完全に追い出した。

続けて明石は、酒保から失敬してきた人間も使う歯ブラシと歯磨き粉を使って口の中を泡立てていく。

最近になって師匠と供にお勉強し始めた所によると、歯という物は磨きすぎてもダメらしいとの事で、その辺の適量はどこなのだろうと考えながら、明石は口に突っ込んだ歯ブラシを上下左右に動かす。

横からは『染みるゝ。』等といった乗組員達の声が響いてくるが、お勉強した所によるとそれは虫歯等といった歯に関する病気らしい。基本的に病気とは無縁である艦魂にしてその端くれである明石は、隣で苦しむ乗組員達を鼻で笑いながら歯磨きに精を出した。

うがいと供に水で口の中から歯磨き粉を洗い流し、鏡に向かって口を開いてみる。今日も白い自分の歯は、無いと解っていないながらも確認しようとした明石に虫歯がない事を伝えた。八重歯なぞ一本もない自慢の歯並びの良さを確認し、小さく微笑みながら明石は歯ブラシに指を当てて洗う。

明石が手にする歯ブラシも歯磨き粉の容器も、元々は人間が作った物であるから実体が有るのだが、艦魂とは便利な物で白い光りで包んでやれば、それらは自分達と同じように人間の目には見えないようになる。以前明石がそれを忘れて銀バイした缶詰を持ち歩いた際、ふわふわと宙を飛んでいく缶詰を目撃した乗組員達によって幽霊騒ぎが起こった事があった。その失礼な物言いに明石は頬を膨らませながらも、いわくつきの艦とされて廃艦処分となりたくなかったので、それからは艦内の生活では色々と気を使っている。自分の分身であるにも関わらず、そこに気を使わなければならないのが艦魂の不便な所でもある。

洗面所に来た時と同じ様に白い光りを指先から放って歯ブラシと歯磨き粉を消し去った明石は、部屋へとは戻らずに烹炊室のある艦

尾へと向かっていった。

相方が居なくなってからという物、毎朝の朝食の確保は艦魂である明石のもっとも肝を冷やす瞬間である。

士官用の烹炊所の方が料理は幾分豪華なのだが、元来明石艦に組んでいる士官の数は決して多い訳ではないからそこに用意される食事の量もそんなに多くはなく、いくら頑張って銀バイしようとしても足りなくなるとすぐにバレてしまう。一度だけ明石はここから食事を拝借した事があったが、その時は付近にいた主計兵がつまみ食いしたとされて、川島主計長から酷くお説教されてしまったのである。可哀想にも平手打ちされる主計兵に自分の軽率な行動をすまなく思いながらも、餓死する訳にもいかない明石は根本的に作る量が多い兵と下士官用の烹炊所から食事を調達する事にしたのだ。

廊下の入り口から頭だけをひょこつと出して、烹炊所の中の様子を窺う明石。現実には彼女の姿は乗組員達からは見えないのでコソコソする必要もないのだが、乗組員の食事を奪うという事実からどうにも気が引けてしまう今の明石の脳裏には、その様な冷静な考えは浮かんでこない。

幸い食事を入れる運搬函は入り口すぐ脇の棚にたくさん収納されている為、明石はすぐさま手を伸ばし、触れると同時に白い光りを放って人間には見えない運搬函を用意する。有り難い事に今日の朝食はパンを主食とする洋食で、おかずは4枚のハムとキャベツとトマトのサラダ。それは皿の数も少ないし、スープを除けば少々手荒く扱っても散らばるようなお料理ではない事を示す。視線を流して各々の獲物の場所を頭に入れた明石は、意を決して烹炊所の中へと

突貫。

1分もしない内に明石は烹炊所の中を駆けずり回ると、何事も無かったように烹炊所から通路に出た。美味しそうな香りを放つ西洋風のスープは確保できず、次々と野菜を切っている主計兵の横からトマトを盗もうとして危うく指を叩つ切られる所だったが、仰け反って転んだ拍子に明石は調理台の下にあった自分の二の腕程もあるハムの塊を発見。棚からばた餅を地で行く勢いで、それを運搬函に押し込む事に明石は成功。無意識にその表情を明るくさせた。

蓋を押し退けてによつきとパンが生えた運搬函を片手に、意気揚々と通路を歩く明石は快晴の天気を舷窓の外に認める。穏やかに空を映す波間は風が弱い事を、雲一つ無い空は雨が降る可能性が限りなく低い事を明石に伝えた。

こんな日はお外で食べようか。

そんな言葉を脳裏で呟き、手に伝わる戦利品の重みがなお嬉しい明石は、弾むような足どりで艦橋天蓋の上へと向かった。

艦橋上部にある測距儀のハッチを開けると、そこには明石が予想したとおりの見渡す限りの青空が広がっていた。時折そよそよと頬を撫でていく涼しい風と、それに乗って空を気ままに散歩するカモメ達の泣き声が響く。まだ課業始めの号令がかかっていない海軍工廠とは静かな物で、天蓋の上に腰を下ろした明石を遮る物は眩し過ぎる程に輝く太陽のみだ。

もっとも明石はそれを邪険に思うことは無く、横に置いた運搬函の蓋を開けるとさっそくパンを口に運ぶ。ちよつと固めのパンであ

るがその分しつとりとした齒応えがあつて、食べ甲斐があるという物だ。すっかり上機嫌な彼女はまだ口の中にパンが残っているにも関わらず、本日の大戦果であるハムに手を伸ばした。箸やスプーン等といった食器の類を持つてくるのを忘れた事に気づくものの、明石は特に気にも留めずに素手で鷺掴みして運搬函から取り出す。口に合う大きさでは決して無いハムの塊であるが、なんの憂いもなしに明石はかじりついて強引に引きちぎる。

『お前なあ、もうちょつと上品に食えんのか？』

辺りに立ち込める風や波の音を遮る様にクチャクチャと音を立てて頬を動かしていた明石だったが、背後から響いてきた凜とした声に彼女は口を動かしながら振り返る。そこには呆れた様な表情で笑う神通じんつうが立っていた。今日も自分を気にして朝から顔を見せてくれた神通に、明石は口にパンを差し込みながら声を返す。

『むお、神通。』

『ふん、まったく……。』

軽く肩を上下させて溜め息をつく、神通は明石の横まで歩み寄って腰を下ろす。神通は今の明石の行儀の悪さに心底呆れてはいるが、決して彼女を嫌いな奴だと思つてはいない。

ここ最近では、相方との別れから立ち直りつつある明石。聞き飽きた程に耳に響いていた彼女の鳴咽に苦しむ声も、見飽きた程に目に映っていた涙で塗れた彼女の顔も、ここ数日の間はなりを潜めている。元来大人しい性格ではない明石が何となく齒切れの悪い返事をする事は、彼女の友人である神通には辛い事この上なかった。それでもこの頃は持ち前の明るさを取り戻し、今に至ってはちよつと非常識な食べ方をする明石の姿は神通の口元を自然に緩ませてしまふ。

恐らく受け取ると予想はしながらも、神通は片手にしていたおにぎりを明石に差し出して声を放った。

『随分と手に入れたようだな。これはいらんか？』

『ん、いるゝ！』

神通に声を返した明石はすぐさま神通の手に手を伸ばし、そこにあったおにぎりを分捕ると、ペロリと口に放り込む。嚙んだか嚙んでいないのか、口を膨らませて2、3回ほど頬を上下させると、明石は何事も無かったかのように喉を鳴らしておにぎりを飲み込んだ。一瞬にして心遣いを消化してしまう明石に神通は笑いを隠せず、便乗して笑う明石と一緒に声を上げた。

『ふっふっふ。』

『ふふふふ、何よ？なんで笑うのよ？』

『まだまだガキだと思ってな。』

『うええ？なんでえ？』

明石は僅かに眉をしかめて、神通に睨みを含んだ瞳を向ける。ぶっきらぼうな物言いながらも心優しい友人の事は理解している明石だが、神通の放った言葉にちよっとだけ鼻にかかった部分があったのは事実だった。

一方、神通はそんな明石の表情すらも可笑しく、いつもは日本刀の様な鋭さを持つ瞳を丸くして明石の顔を見つめる。20代半ばの外見を持つ神通は人間の世界ではまだまだ若い、艦魂としては既に十年以上も励んできたベテランであり、言わば万年中尉。昨年に就役したばかりのやっこ少尉である明石は、彼女から見ればまだまだ尻の青い新米艦魂なのである。

まだその事が良く理解できていない明石がちよっと口を尖らせる中、神通は艦魂としての大事な事を教えてやる事にした。

『お前には艦魂としての大事な物が欠けてる。私達はそこらにいる人間の女とは違うんだ。』

あくまで神通に悪気が無い事は解っている明石だが、その遠まわしな言い方と少し侮蔑の混じった神通の視線に苛立ちを隠せない。その鬱憤を込めたかの様に明石は力強く口に含んだパンを噛み、飲み込むと同時に神通に声を返す。

『なにそれ？ 勿体つけずに言ってよお。』
『ふん。』

明石の言葉を受けた神通は鼻で一度笑った後、片手をゆっくりと正面に向かって伸ばした。まるで目の前を通り抜けていく風の帯を撫でるかの様に指先を流し、その内にふと神通は明石に顔を向けて答える。

『・・・気品だよ。』
『きひんく？』

明石はその言葉の意味が良く解らず、パンをかじりながら首を捻る。元来、医学以外に聡明ではない明石であるし、艦魂としても新米である事からその必要性もいまいちピンと来ない。それにそれを口にした友人は普段からげんこつを振り回す典型的なドカタであり、お世辞にも品があるとは言えないからだ。明石は無意識に疑惑の視線を神通の足から頭へと流してしまい、それに気付いた神通は明らかにムツとした表情を向ける。彼女はスツと立ち上がると、その場で腕組みをして眼前に広がる海を眺めた。

『ふん。これが解らんのなら、お前はまだまだだ。そんな事では森^{もり}

が戻ってきたら泣くぞ?』

決して明石をいじめようとする気は無い神通の事は明石も知っており、容赦なく自分の未熟さを指摘されながらも、明石は腹を立てることは無かった。それどころか、どこか勝ち誇った表情を浮かべて海を眺める神通に明石はニヤリと口元を引きつらせて、先程から脳裏を過ぎる疑問を率直に神通に投げる。

『ふ〜ん。部下に八つ当たりするのが気品なんだ?』

『ば、馬鹿者が!』

ゴン!!

『いでッ・・・!』

それから暫く経った頃。

朝食を食べ終えた明石は、今日も師匠からの教育を受けるべく朝日艦さひの甲板に白い光りを纏って姿を現した。甲板に足が着くと同時に、彼女は頭にできたおおきなタンコブが発するズキズキとした痛みに襲われてその場にしゃがみこむ。タンコブを撫でながら涙目で痛みに耐える今の明石は、ちょっとだけ友人の事を憎らしく思う。いつもの事とは言え、冗談に対して返ってくる神通の答えは軽いと言えどもこれ程までに痛いげんこつ。

一体これのどこに気品があると言うのだ。

小さく『グスン。』と声を発して涙を飲み込みながら、明石は朝日艦の甲板を歩き出す。

だがその歩みはすぐに止まった。明石が顔を上げたそこには、課業始めの号令を受けたであろう朝日艦乗組員達の姿があるのだが、そこに広がっている光景は明石がかつて見た事が無い物だった。

乗組員達は白い煙管服に身を包んで、何か黒いレンガのような物を横付けしている栈橋から搬入している。ダビッドに吊るした網で次々と甲板にすくい上げる黒い物体は、同じく黒い粉塵を辺りに立ち込めさせており、煙管服の乗組員達はマスクまで着用している。明石も自身の艦で煙管服姿の乗組員達は見た事があるが、朝日艦の乗組員達の煙管服はその粉塵で地の色の白が解らなくなる程に真っ黒になっている。ただでさえ朝日艦自身も真っ白な塗装を施しているのに、艦の構造物は濛々と立ち込める黒い粉塵で汚れており、まるで太陽の色をそのまま反射した様な色合いであった甲板も今は真っ黒だ。

『ごっへ・・・、ごほ・・・！ んもう・・・。なによ、これえ！？』

包み込んでくる粉塵に咳き込みながら明石はそう言うと、その場から逃げるようにして朝日艦の艦内に駆け込み、艦尾にある師匠の部屋へと走り出した。

『お、おはようございます・・・ゴホ、ゴホッ・・・。』

『あら、明石。おはよう。』

今日も朝の紅茶を楽しみながらソファに腰掛けていた朝日は、粉塵まみれで咳き込む教え子に挨拶を返した。あまりの居心地の悪さ

に艦内を突っ走ってきた明石は肩で息をしながら、服や軍帽からほのかに舞い上がる黒い粉塵に咳がとまらない。鼻の中にまだ残る粉塵に苦しむ明石だが、朝日はその教え子の姿を目にすると、口元のホクロとしわを隠すように手を当てて笑い出した。

『ふふふふ。そう、載炭作業を初めて見たのね?』

どうやら朝日はその光景が意味する事を知っているらしく、いつもは開け放っているスタンウオークへと続く扉が閉まっている事に明石はそれを悟る。甲板での地獄絵図など露知らぬといった様にニコニコと微笑む朝日。そして明石は、そんな朝日が口にした言葉から先程見た黒いレンガ状の物体の正体に察しがついた。

『あ、あれが石炭って言うんですか・・・?』

『ふふ、そうよ。』

やっと咳が治まりかけてきた明石は、そんな自分を可笑しそうに笑う朝日に軽く会釈をして向かいのソファに腰を下ろした。朝から神通のげんこつを貰い、その次は石炭の粉塵に襲われるという自分の不運さを明石は少し恨めしく思う。横に置いた自前の薬箱からガーゼを取り出し、顔についた石炭の粉塵を拭い取る明石。だがふと彼女は、そこに石炭を搭載する光景があった事に対する率直な疑問を抱いた。石炭は燃料の一部である事は一応は知っている明石は、薄々その答えを予想しながらも、微笑みながら紅茶を飲む朝日に向かって声を発する。

『朝日さん・・・。』

『ん? なに、明石?』

『出航・・・、するんですか?』

朝日の顔色を窺うかのような明石の声だが、朝日は笑みを向けると口に添えていたカップをテーブルの上に置く。カップの中に湛えられた紅茶と同じような色の髪に手をやると、カールの掛かった髪を直す様にしてゆっくりと撫でながら言った。

『ええ。5月29日をもって、また上海方面での行動になるわ。これでも一応、上海方面根拠地隊の旗艦なのよ。』

朝日は少しだけ動揺する明石に、ただ静かに笑みを見せる。

艦齢既に41年に及ぶ朝日艦は、いくら工作艦といえどもかなりの老兵である。最新式のディーゼル機関を装備した明石艦と違って、その動力源が石炭である事は先刻明石も目にしたばかり。事実、工作艦への改装によって機関を減らされている朝日艦は、その老朽化も手伝って洋上で出せる最高速度は僅か7ノット程でしかない。しかし、それでも朝日は一言半句の文句も言わずに、帝国海軍から与えられた任務に励むのだという。

その立派な師匠の姿は、しばらくのお別れを惜しむ心を明石から完全に忘れさせ、逆にその分の空白を埋めるかの様に深い尊敬の念を湧かせる。そして明石は残り短い教育期間を憂い、更なる気合を入れて集中して取り組む事を決める。すぐさま表情を正すと、座ったまま深々と腰を折って朝日に言った。

『解りました。残り僅かの時間ですが、これからよろしくお願いします。朝日さん。』

『ふふふ。解ったわ。』

帝国海軍艦魂の重鎮である朝日は、そんな明石の心など手に取る様に解っていた。別れへの残念さを口にせず、逆に凜としたなんとも心地の良い声で今後の事を頼み込んでくる明石に、朝日はこれまでの教育の成果と確かな教え子の成長を確認する事ができた。今や

るべき事は何かを自分で考え、自分で決めた明石。朝日は心の底から嬉しそうに微笑み、大きく何度も頷きながら残り僅かな紅茶を口に運ぶ。唇に添えて大きくカップを傾けると、いつもの様に余韻を楽しむかの様な小さな息を吐く。そして朝日のその行動が、二人にとっての課業始めの合図であった。ほぼ白紙のページが無くなりかけているノートを用意した明石に向かって、朝日は静かに声を発した。

『じゃあ、始めようかしら。』

『はい!』

今日も順調に進む明石の軍医として教育。西洋人の外見を持つ朝日らしく手を大きめに動かして説明をすると、明石が大きく頷いて手にした鉛筆をノートに走らせる。これまで何度となく繰り返しされてきた光景であるが、すっかり二人の教育にも熱が籠り始めた頃になって、それを遮るように部屋のドアをノックする音が響いた。年季の入った木製のドアが叩かれて木管楽器のようなノック音が2度放たれると、続いて二人の良く知る人物の声がドアの向こうから響き出す。

『軍医中将。長門^{ながと}です。』

気の抜けた声で長門はそう言うと、部屋の主である朝日の返事も聞かずにドアを開けて部屋の中に入ってきた。ちよつと失礼ながらも、長門はあくまで可愛い後輩である為に、朝日はそれを咎めるような事はしない。むしろ特に用も無いのにこうして自分を訪ねて来

る事が、朝日にはとても嬉しい事だった。

『いらっしゃい。よく来たわね、長門。』

『長門さん、おはようございます！』

朝日と明石の挨拶に長門は笑みを浮かべつつ、今日も定位置である明石が座るソファまで歩み寄ると、明石の頭を悪戯をするかの様に荒っぽく撫でながら横に腰を下ろした。

『真面目にやってんのお、明石？』

『ちゃんとやってますよお、ほらあ。』

最近朝日に対しての遠慮も薄らいだのか、いつもの様に羽織るように上着を着た長門は明石の頭をクシャクシャと撫でながらそう言っていると、明石は長門の手に抵抗しながらもそれを喜ぶかの様に笑みを浮かべて、手元にあったノートを持ち上げて隣に座った長門に向ける。ぎっしりと字で埋まったノートは明石が真面目に勉強している事を長門に伝えるが、彼女はの事を既に知っていたので特に驚くような事は無い。長門にとっても、明石は気兼ねなく冗談を交えて会話する事ができる可愛い後輩なのである。

二人のじゃれあうその姿に朝日はにこにここと笑って視線を向けていたが、ふと彼女は長門がソファに腰を下ろした姿が気になり始めた。お気楽なお姉さんを地で行く長門は、明石とは逆側にある肘掛けに身体を大きく流して座っているが、それは長門にしたらいつもの姿である。実際に朝日の前でなくとも、長門は常にこのようにちよつとだらしない様な格好で椅子に座っている。しかし朝日には、その姿がいつもの事であるからこそ気になったのである。

顎に手を当てて首を捻りながらその事を考えた朝日は、それが意味する事を持ち前の経験から推察し、同時に長門に向かって声を発

する。

『長門、ちょっとこっちに來なさい。』

『はい？』

ふいに名を呼ばれた長門が小さく驚きの表情を向ける中、朝日は彼女の返事を待たずにソファから立ち上がる。頭に乘せた軍帽をソファの上に置きながら、朝日はソファの後ろまで歩いていくと、おもむろに手を床に向けて白く淡い光りを放った。その光りが粉雪の様に飛沫となって消え始めると、そこには床一面にしかれた^{むしろ}蕨がある。初めて見たその光景に明石も首を捻って視線を向けるが、朝日は何事も無かったかのようにして長門に手招きをする。

『さあ、こっちへ。横になりなさい。』

『な、なんですかあ・・・？』

偉大な先輩である朝日に呼ばれた長門はソファから立ち上がると、恐る恐る朝日の元へと歩み寄って行く。朝日は至って普段通りに微笑みを浮かべている物の、怒るととっても怖いお人である事を良く知っている長門は何をされるのかと気が気ではない。とりあえず抵抗するのは危険だと判断し、朝日に言われるがまま長門は筵の上に横になった。

『身体を真っ直ぐに伸ばして。ほら、膝も。あ、明石もよく見ておくのよ。』

『は、は～い！』

先輩二人が繰り広げる摩訶不思議な光景を呆けて眺めていた明石は、朝日の声を受けて手にしていた鉛筆をテーブルの上に置き、小走り朝日の隣へと近づいていく。筵の上では仰向けに寝た長門が

僅かに強張ったような顔で、落ち着きなく定まらない視線をあちこちに向けている。そんな中でも唯一人だけ微笑を失わない朝日は、明石が自らのすぐ隣まで来たことを確認すると、長門に向けて声を発した。

『長門、両腕を頭の上に向けて伸ばしなさい。そう、万歳をするみたいだね。』

『え？ あ、はいはい……。』

言われるがまま、長門は両手を頭の上に目一杯伸ばしてみる。

何やってんだアタシは？

そんな言葉を脳裏に浮かばせて自問自答する長門であったが、朝日はお構い無しに続けた。

『いいわ。次に両手の手のひらを合わせなさい。』

『こう……。ですか？』

『ええ、いいわ。じゃ、そのまま合わせた手のひらを離さずに、顔の前まで下ろしてみなさい。』

長門は朝日の言葉に従って腕を動かすが、動き終えたその姿は艦内神社に手を合わせて拝んでいるかの様な体勢だった。ぶっ飛んだお姉さんである長門を良く知っている明石は、その奇妙な体勢を彼女がとっている事に可笑しさを覚えて小さく笑う。

『ぷくくくく……。！』

『笑わないでよお、明石。アタシだって恥ずかしいんだから……。』

『ふふふふ。明石、ここからが大事なのよ。可笑しくてもしっかり

見ておきなさい。』

『あ、はい。』

明石にそう声を放った朝日は、長門の顔の横まで進んでしゃがみ込むと静かに声を掛ける。

『長門、指先を見てみなさい。』

『は、はい……。ありゃ？』

ふと放った長門の声と驚きを隠せないその表情。明石も笑みを消してその光景をよく見てみる。そこには長門の合掌した左右の手があるのだが、その指先は左手と右手では合っていない。どちらかといえば左手の指先の方が一段高くなっていて、当の長門も自分としては両手をピッタリと合わせていたつもりだったので驚いた。

そして朝日はその長門の合掌が意味する事が、先程ソファに腰掛けていた長門の姿から感じ取った事と完全に合致していると確信した。床で寝そべる長門に顔を向け、顔の両脇から垂れようとする琥珀色の髪を抑えながら、ゆっくりと朝日は口を開いた。

『朝日さん、どういう事ですか。これ？』

『ふふふ。長門、貴方の背骨、曲がってるのよ。』

『……。』

過ぎしやすい気温とすがすがしい青空の下、相も変わらず黒い粉塵をもくもくと巻き上げる載炭作業中の朝日艦。だがその時、そこで励む乗組員達には決して聞こえない連合艦隊旗艦の悲鳴が、その黒い粉塵の壁を吹き飛ばすかのように響いた。

第三九話 「艦魂として／後編」

朝日あさひの診断結果を受けた長門ながとは、深い赤色の絨毯じゅうたんの上にポツンと敷かれた枯れ草色の薙むしろの上で仰向けになったまま、呆然として天井を眺めていた。舷窓から差し込んでくる光りの束と、甲板から響いてくる朝日艦の乗組員達の足音がどこか虚しい。

誰しも自分の骨格が曲がっていると言われて平然とできる物ではない。まして「健康第一」という言葉にはそれなりに気を使って生きてきた長門にとっては、朝日の言葉はまさに晴天の霹靂へきれきだった。

大事な大事な自分の背骨は曲がっているらしい。

その言葉を脳裏に過ぎらせる長門は、少しの間だけ思考が停止してしまう。帝国海軍艦魂の中では最も医療に長けた朝日に言われたのだから、長門でなくとも抜け殻のような姿になってしまうのも無理はない。

だが朝日は、そんな長門に相も変わらず慈愛に満ちた綺麗な笑みを向けている。珍しくいつもの元気がなくなってしまった長門には明石あかしも心配そうな表情を向けているが、朝日に限っては決して後輩の身体を絶望的に憂いでいる訳ではない。異常が認められた後輩の身体に対して何をすれば良いのが、朝日の頭の中には既に明確に浮んでいるのだ。そっと呆ける長門の頬を撫でるようにして手を添え、朝日はゆっくりと口を開き始める。

『ふふふ。大丈夫よ、長門。別に竜骨キールが曲がっている訳ではないのよ。決して命の危機に陥っている訳でもないわ。それに艦魂も人間

もなく、大抵の人達は普段の生活が原因で背骨が曲がっている物よ。
』

耳元で囁くように発せられる朝日の声を受け、焦点を悟らせなかった長門の瞳には再び秩序と光りが戻り始める。狼狽を通り越して茫然自失とする先輩の姿は、横からそれを眺めていた明石にとっても痛々しかったが、長門はやっとの事で我に帰って朝日に向けて声を返す。

『ほ、ホントですか・・・？』

『ええ。大して痛くもないでしょう？ 案外、こういうのは多いものよ。でも曲がってるのなら直せば良いだけ。明石もよく覚えておきなさい。』

『あ。は、はい！』

すっかり空気に吞まれていた明石が動揺しながら返事をしたのを朝日は認めると、膝元で仰向けになっている長門に視線を流して続けた。

『じゃあ、向こうに身体を向けて横になりなさい。今度は身体を伸ばさないで、逆に全身から力を抜くのよ。長門。』

『は、は〜い・・・。』

朝日の言葉に従って、長門は彼女に背中を向ける。治療してやるという先輩の厚意には感謝の念が絶えないが、どうにも何をされるのかが予想できない事から長門は小さな恐怖を隠せない。治療の様子を見る為に自分を挟んで朝日とは逆側にしゃがみ込む明石に、長門はどうすれば良いのか解らないと言いたげに困った様な表情を向ける。もっともそれは明石にしても同じであり、元気付ける為にちよっと歪んだ笑みを返してやるのが明石には精一杯だった。

無言で会話する二人を他所に、朝日は長門の上になった肩とお尻の辺りに手を添える。ちよつと困惑する長門が首を捻つて視線を流してくるも、朝日はその視線に変わらぬ笑みを返す。

『大丈夫よ。ほら、向こうを向いて。力を抜くのよ。』

「はい。」

困ったように返事をしながら長門は顔の向きを戻し、再び正面にしゃがみ込んでいる明石に視線を流す。

すると朝日は長門の身体に触れていた両の手に力を込め、彼女の身体をグラグラと揺らし始める。力を抜けとの指示を履行していた長門の身体は、まるでゴムで出来ているかの様に前後に揺らされて行く。

明石はとりあえず長門の表情に苦痛の類が表れていない事を確認し、視線を上げて朝日の手の動きをまじまじと眺めてみた。よく見ると朝日は長門の肩を押す時にはお尻の辺りに添えた手から力を抜き、逆にお尻の辺りを押す際には肩に触れている手から力を抜いている。その交互に動く様が朝日のやろうとしている何かのミソである事を明石は薄々ながら感じ取り、先輩から教えを学ぶ後輩の顔つきになってその光景を目に入れていた。

そして長門の身体を揺らし始めてからしばらく経った頃になって、突如として朝日は力の入った声を上げると同時に、長門の身体に触れていた手の動きにも力を込めた。刹那、そこには何とも心地良い程に綺麗な骨の鳴る音が響く。

『はっ！』

バキリ！！！！

「わあああああああ！！！！！！」

その余りにも華麗でハッキリと聞こえてきた骨の音に、当の骨を

身体に宿している長門は悲鳴にも似た叫び声を上げ、甲板に打ち上げられて飛び跳ねる魚を思わせるかの様にして飛び起きた。さしもの連合艦隊旗艦である長門も余程ビックリしたらしく、ピョンッと飛び起きると同時に正面にいた明石に抱きつく。目を見開き、小さく肩を上下させて荒い呼吸をする長門。明石も初めて目にする長門の姿であったが、あれだけ盛大な音を響かせたにしては、長門の表情には苦痛の色がちつとも現れていない。寝たり起きたりでアチコチに刎ねた自慢の黒髪を直す事も忘れて必死に呼吸を整える長門だったが、その行為を行った朝日はさもそうなると思っていたかの様に笑い出した。

『あはは、みんなこうなるのよね。可笑しいわ。あははは。』

『あ、あ、朝日さん！ 殺す気ですか！？』

どうやら今までに朝日がこの処置を施した人物は全て、この長門と全く同じ行動を取ったらしい。だがそれも無理はないだろうと明石は思う。それ程までに、部屋に響いた骨の音は大きくてハッキリと聞き取れたのである。むしろそれを身体の中から聞いたであろう長門の感想は、如何ばかりであろうか。そしてその感想を示した言葉が、つい今しがた長門が途切れそうな息で朝日に向けて発した声である事を明石は悟る。明石の予想通り、長門は死ぬかと思ったのであった。

しかし、それでも朝日は長門の感想など意にも返さないと言わんばかりに、心底愉快そうに笑っていた。師匠のその笑みが出るといふ事は、長門の身体には危機が迫っている訳ではない事を明石はなんとなく予想するも、当の長門がブルブルと震えて涙目になっている事で心配が消えない。手に伝わってくる長門の震えを掻き消す様に、明石は長門の肩を両手で擦ってやる。興奮収まらぬ長門とそれを介抱する明石であるが、やっと笑いが治まりかけた朝日が声を掛ける。

『別に死にはしないわよ。ほら、背中痛くないでしょう？』

長門はその声を受けて、恐る恐る背中に自分の手を添えて撫でみる。まだ少し耳に残る骨の音に恐怖を覚えつつも、小さく捻って見た自分の背には痛みは全く無かった。

『た・・・、確かに・・・。』

『さあ、もう一度横になりなさい。今度は逆の体勢よ。』

『は、はい・・・。』

身体に異常が認められない事と先輩の屈託の無い笑顔に急かされ、長門は明石の身体に回していた腕を解いた。決して後輩に危害を加えようとしている訳ではない朝日の事は明石にも解っているが、先程の光景と長門の姿が瞼の裏に焼きついていて明石の頭からは、心配の二文字が完全には消えない。頭と足の位置を逆にして朝日に背を向ける長門の身体をそっと撫でつつも、明石は朝日の表情に視線を向ける。それに気付いた朝日はなんとも涼しげな笑みを返し、右手の人差し指を目の縁に添えた。「良く見ておけ」というメッセージである事に明石はすぐに気が付き、再び朝日の顔から手元の辺りに視線を流した。

その一方で、また同じ目に会わなければならない長門は、筵の上に横たわりながら今にも泣きそうな顔をしていた。腰までであろうかという長門の長い髪が、横たわった事で乱れて彼女の顔や首の辺りに無造作に垂れてくる。少し力が入らない指先でそれを肩の後ろに流して行く長門であったが、朝日はそれを手伝うようにして長門の頬に手の甲を添える。頬に伝わるその温もりに落ち着きを少しずつ取り戻していく長門。そしてそれを認めた朝日は、先程と同じように長門の肩とお尻の辺りに手を添えて口を開いた。

『これでおしまいよ、長門。しっかりしなさい。』

『は〜い……。』

『じゃ、いくわね。あ、力抜いてね。』

『は〜い……。』

長門の力が抜けた返事が響き終わると同時に、朝日は長門の身体をぐらぐらと少し荒っぽく揺らし始める。明石の予想通り、その動きはまたしても先程と同じで、肩を押すのとお尻を押すタイミングは交互であった。しばらくの間はこの様に患者の身体を揺らすらしいが、それは時間を気にしての物ではなく、骨格の捻れを読み取る事が目的であるのだと明石は悟る。それなりに軍医としての知識を身につけつつある明石は長門の事を気に留めながらも、その朝日の手の動きに軍医の卵としての視線を向けた。

そしてしばらくすると、二度目の綺麗な骨の音が長門の身体の奥から響いてきた。

『はあっ！』

バキン！！！！

『ふごおっ！！ お、おうお……。おおおっ……。！』

決して痛くは無いようだが、その感想は推して測る物がある。長門は飛び跳ねるような事こそなかったが、骨が鳴ると同時に身体を硬直させて大きく目を見開いていた。無意識に伸ばしたであろう左手は宙に浮かんだまま、小刻みに震えて彼女の驚きを表現する。

朝日は先程と同じようにその後輩の姿を笑いながら、長門の肩と腰を引き寄せて仰向けの体勢に寝かせた。背中に入った衝撃から来る驚きを隠せない長門であるが、朝日は強張った長門の頬を両手で抱えるように手を添え、まるでキスをするかの様に自らの顔を近づける。

『はい、これでおしまい。長門、私の声が聞こえるわね？』

『は、はは・・・、は・・・い。』

視界一杯に広がった朝日の笑みと囁くような声。その顔の両脇から垂れた琥珀色の髪が放つ独特の香りが、動転しつつあった長門の心を撫でる様に落ち着かせていく。硬直していた身体には普段のしなやかさが戻り、苦しかった呼吸が楽になっていく長門。

長門のそれは小さな変化であったが、軍医としての経験が深い朝日はそこから患者の沈静化を悟るのにそれ以上の変化を必要としなかった。朝日は長門の両腕に手を触れると、長門の動きを助けるようにして腕を頭の上の方に伸ばさせる。

『さあ、最初と同じように、万歳をするみたいに腕を伸ばしなさい。』

『はい・・・。』

どうやら仰向けで寝て、頭の上に手を伸ばす事で背骨の捻れが確認できるらしい事を明石は悟る。長門には申し訳ないが、貴重な臨床実験を垣間見る事ができた明石は、朝日の行動一つ一つに籠った意味を理解して大きく頷く。そして同時に、連合艦隊旗艦だろうが何だろうが朝日にかかつてはモルモットとして扱われる事をよく理解し、それとなく明石は師匠の前ではお行儀良くしようと心に誓った。

明石がそんな事を考えている内に、長門は朝日の助けを借りながら、伸ばした先で合掌した両手を顔の前まで下げていた。先程はそこにあった光景から自らの身体の異常を思い知らされた長門だったが、朝日とて長門をただイジめていた訳ではない。それを証明するような光景が長門の視界にはあり、彼女はその驚きから先程まで味わっていた恐怖をすっかり忘れて声を上げる。

『う、うつそおお〜！！！』

『おおお〜！』

『ふふふ、言ったでしょう？曲がってるなら直せばいいだけよ。』

長門の両手の指先は定規につき合わせたかの様に、ピッタリと揃っていた。恐らくはこういう結果になるだろうと予想はしていた明石も、さすがにそれを証明する光景を目に入れると新鮮な驚きが込み上げてくる。長門はもう一度だけ頭の上に手を伸ばし、拍手を打つかの様にして両手を合掌させると顔の前まで下ろしてみる。やはりそこにあっただのは、しっかりと両手の指先が揃って合掌された手だった。その光景に長門はやっと持ち前の笑みを取り戻し、便乗して微笑む明石と一緒に声上げる。

『すんげ〜え〜！！』

『ホントに治った！』

すっかり明るくなった二人を他所に、朝日は立ち上がってソファに向かって歩み寄っていく。久しぶりに力を入れた事で疲労を感じたのか、自らの肩に手を乗せて軽く揉みながら、朝日はソファに音も立てずに腰を下ろした。歓声にも近い声で騒ぐ明石と長門は朝日の後続き、対面する形で向かいのソファに座る。背骨の捻れを解消できてご満悦な長門が大声で笑う中、明石はその見事な治療法に興味を持って朝日に尋ねた。

『朝日さん、今のは外科医学になるんですか？』

『ふふふ、違うわ。手技療法の一つで、整胎術^{せいたい}って言うのよ。米国のカイロプラクティックと似たような物ね。』

早速、明石は朝日の言葉をノートに記していく。いくら軍医の知

識と技術を習得していると言っても、医療用の道具や薬剤を用意する事は艦魂としてはとても大変な事であり、明石が今朝の様に大量の食べ物や胃袋に流し込むのは、その用意にかなりの体力を消費しているからである。有限である医薬品の貴重さは文字通り自らの命と同義であるのだが、それを一切使わずに素手で治療を施せる朝日の技術は、明石にとってはとても魅力のある物であった。鉛筆を走らせるのもそこそこに、明石は向かいに座った朝日に膝を詰めるかの様に身体を近づけてさらに質問した。並々ならぬ興味を抱いた時に明石の顔に浮かぶ子犬のように輝く目を認め、朝日は嬉しそうに微笑んでそれに答える。

『うーん、何かの薬剤とかとの併用はあるんですか？』

『いいえ。私が用いる整胎術の元は、日本古来から伝わる柔術や柔道といった武道の中にある自己治療法にあるのよ。だから他の医薬品なんかとの併用はないわ。』

『じゅ、柔道、ですか・・・？ 朝日さんが？』

突然出てきた自分の乗組員達も行っている柔道の言葉に、明石は首を傾げてしまう。日本独自の武道の中に治療に関する技術があるとは神通から教えてもらった事がある明石だが、話だけで実物を見た事がなかったのも彼女は困惑した。ましてそれを施した朝日は清楚で物静かな大人の女性像を持っており、危なっかしい柔道を嗜んでいたとは明石には想像できない。高い鼻に彫りの深い顔、赤みがかった茶髪という完璧な西洋人の外見を持つ事も、明石の中では朝日と柔道の接点を結ぶ事を遮るのだった。

首を左右に捻ってその謎を考え込んでいた明石だったが、突如、彼女の隣にいた長門が明石の頭に手を乗せてきた。

『そっか、言ってなかったっけ。朝日さんはね、帝国海軍の中じゃ右に出る者が無い程の柔道の達人だったのよお？』

『うえええ!?!』

『ふふふふ。敷島姉さんしみしまも三笠みかさも、私には勝てなかったのよ。もちろん長門もね。』

初めて知った朝日の経歴に仰天する明石。彼女がこれまで見てきた朝日は絵に描いたような貴婦人であるが、その昔は並ぶ者の無い柔道の実力者だったのだという。争い事とは無縁である様な風貌と人柄を持ち、時には戦艦の艦魂である事をも忘れさせる程の朝日であるが、それをイマイチ信じる事ができない明石の耳には二人の会話が響いてきた。

『確か、13勝だったかしら?』

『えへへ、よく覚えてますね。あ、でも1回だけ引き分けた事が――』

『

『長門く、その事は言わない約束よお。』

『げっ……! し、失礼しました……。』

どうやら連合艦隊旗艦の長門ですらも、13度戦って一度も朝日には勝てなかったらしい。

細身の明石と違って長門は肩幅も広く、筋肉質とまではいかないが中々に体格の良い人物である。以前、那珂から聞いた所によると、金剛型こんごうと扶桑型ふそう、伊勢型いせという戦艦の艦魂達が束になっても敵わないくらい、長門は喧嘩が強いらしい。大らかな性格以外では頭も良く、整った綺麗な顔立ち、スラッと長い脚と共に女性らしい一言に尽きる見事な身体のラインを持ちながら、ついでに喧嘩も強い。やればできる子とは本人の弁だが、明石はその言葉を笑いながらも疑った事は無い。それぐらい凄い艦魂が、この長門なのである。

ところがそんな長門は、明石の師匠である朝日に対しては手も足も出なかったのだという。「上には上がいる」という言葉があるが、今の明石にとってはその言葉は朝日を表すのに的確とは思えない。

彼女の脳裏に浮かんだ朝日を表す言葉はただ一言、「別次元」であった。感動を通り越し、ただひたすらに引きつった笑みで朝日を眺める明石。いつもの様に咲き乱れる花のような笑みを浮かべる朝日の顔が、明石の胸の中に一際強い尊敬の念を湧かせていった。

ちなみに後から口を噤んだ引き分けの真相を長門に聞いた所、朝日が体格の良い長門と取っ組み合った拍子に腰痛を起してしまったとの事であった。明石はその可笑しさに笑っていたが、その内に記憶に残っている朝日の綺麗な笑みと朗らかな人柄がなんだか無性に怖くなった。故に彼女もまた、その話題を封印する事に決めた。考えれば考えるほど、朝日は怖いお人であった。

それからしばらく経ち、一通り朝日の説明を受けた明石がノートに書き綴った内容を整理していると、ふと朝日はある事に気付いて明石の身体の上から下へと視線を流す。細身の彼女に対して、隣に座る身体が大きい長門の方がよく目立つ為に今まで気付かなかったが、意識を集中させて明石の身体を眺めた朝日は長門と少し似た違和感の様な物を彼女の身体に認めた。

テーブルに置いたノートに身を被せる様にして、消しゴムを押し当てたり鉛筆を走らせたりしている明石。師匠の行動にも気付かずにはせつせと新たな知識を吸収しようと必死な彼女であったが、頭の上から響いてきた朝日の声に動きを止める。

『明石。』

『はい？』

『ちよっとその場に立ってみて。』

『え・・・、あ、はい。』

いきなりの師匠の言葉に何が何だか解らないまま、明石は手にしていた鉛筆をノートの上に置いてその場に立ってみせた。特にどこかに力を入れるわけでもなく、ただ普通に立った姿を見せる明石は、朝日が何かを含んだ様な視線で身体を這わせていく事にちよつと眉をしかめる。

そしてそれまで黙って教え子の身体のあちこちに視線を配っていた朝日は、やっとの事でそこに抱いた違和感の正体を知り、小さく俯き深い溜め息を放ってから声を上げる。

『ああ、そうなのね……。そうよね。今まで明石とは、この部屋でしか会った事が無いものね……。』

まるで独り言である朝日の言葉の意味は、明石にはトンとよく解らない。どこか自分の身体に変な所があったのかと明石は視線を向けてみるが、特にいつもと変わった所は無い。しいて言えば、非常に女性らしさが際立った胸のラインを持つ長門とは違って、何の障害も無く自分のつま先が見えてしまう事が鼻にかかるくらいだ。ちよつとした自己嫌悪に駆られながらも、落ち度らしい落ち度を認められなかった事に明石は眉をしかめて視線を朝日に戻す。

すると朝日はちよつと困ったような表情で口を開いた。

『貴方の背骨にも変なクセがついちやってるわ。きつと歩き方が悪いのね。』

『えええ！』

『あ、でも長門みたいに捻れてるのはちよつと違うのよ。ただ、ちよつと悪いクセがついてるの。』

長門とは少し違うのだと言われるものの、明石は朝日の言葉を受けて衝撃を隠せない。明石も長門と同じように健康には気を使って

過ぎてきたつもりだし、そも軍医の階級を頂く者が不健康であるというのは明石としても論外であると思っていた。だが彼女の師匠が言うには、そんな自分の身体にはクセという名の異常があるらしい。明石が驚くのも無理は無かった。

そして声も出せずに口を開けたまま立ち尽くしている明石の横からは、それを助長する長門の声が響いてくる。

『あゝゝゝ、言われてみれば確かに……。なんか……。猫背だよね、明石は。』

朝日の言葉をそれとなく耳に入れていた長門は明石の身体を真横から見ていたが、その事が明石の身体の異常を、軍医としては素人である長門ですらも見取れる程によく伝える。『えええ……。』と小さく呻き声を上げながら長門に言葉を返す明石。

だが朝日は、その理由が明石の生い立ちにある事をすぐに察した。そして同時にその考察は、明石の師匠としての朝日にある種の罪悪感をもたらす。故に朝日はすまなそうに両手を顔の前で合わせながら、その事を明石に教えてやる事にした。

『ごめんなさいね、明石。私の不注意だわ。』

『は……。はい？』

『私達艦魂は生まれてすぐに艦魂らしい「立ち振る舞い」という物を覚える物なのよ。普通は姉妹がお互いの姿勢や歩き方なんかを注意しあったり、師匠たるべき人から教えられて身に付けていくんだけど、明石には姉妹がいなかったのよね。』

『た、立ち振る舞い、ですか……。？』

『本当にごめんなさいね。いつもここで座つての教育ばかりだったから、今まですっかり忘れてたわ。』

平謝りする朝日の姿から、明石は長門の様に恐怖を伴った処置を

される可能性が無い事を予想し、ほんの少しだけ安堵して胸を撫でる。しかしこれまでの生活で初めて出てきた「立ち振る舞い」という言葉に、明石はその意味を理解する事ができなかった。こめかみに人差し指を添えて頭を捻る明石だったが、朝日はそんな彼女に論より証拠とばかりに実物を見せてあげる事にした。朝日は長門に向かって、手を上下させて合図を送りながら続ける。

『私達は人の形をしているけれども立派な船の命。そこに乗組んでいる人間達には見えなくとも、私達は命としての威厳と気品を持っていなければならないわ。しっかりとした心構えに博識さ、立ち方や歩き方に至るまでね。人間の言葉を借りれば、私達は一流の淑女^{レディ}でなければならないのよ。明石。』

朝日はそこまで言うと、明石から彼女の隣に座っていた長門に視線を流す。

『長門、艦魂らしい歩き方を見せてあげなさい。』

『は〜い!』

元氣の良い返事をした長門は立ち上がると、背後の奥にある部屋の扉の辺りまで歩いていった。

長門の後姿を目で追いながらも、「猫背」と断定されてしまった明石はちよつと落ち込んでしまう。ましてそれは艦魂であれば誰でも当たり前に身に付けている物、という朝日の言葉も、当の朝日にはそのつもりは無くとも明石にとっては辛い言葉であった。

他の艦魂には姉妹がいるのに自分にはいない、他の艦魂が当然の様に身に付けている事を自分だけは持ち合わせていない。

天涯孤独の身である明石には、そういう他人との違いを思い知らされる事が何にも増して悲しい事であった。

しかし朝日とて、明石をしょんぼりとさせる為にそんな事を言っ

たつもりは微塵も無い。曲がつてるなら直せばいいし、知らないなら教えてやれば良い。持っていないのなら与えてやれば良い。そんな思いを胸に秘めている朝日は、そっと明石の隣まで歩み寄って腰を下ろす。抱き寄せるかのようにして明石の肩に手を触れ、明石に優しさの籠った笑みをすぐ近くで見せると同時に彼女は言った。

『明石、今から長門が歩く様をよく見ておくのよ。』

『あ、はい……。』

不思議と師匠の笑顔と彼女の手から伝わってくる温もりは、いつも明石のへこたれそうになった心を撫でるかの様にして静めてくれる。なぜだか師匠がすぐそばに居る時、明石はとても居心地の良い感覚を覚えるのだった。包み込むように愛情を注ぎ、色々な事を教えてくれる朝日は、明石の心に「母」という言葉を何となく浮かべせる。そして明石もまた、そんな朝日の放つ雰囲気にも身を浸す様にして口元を緩めた。

『さあ、長門。歩いてみせなさい。』

笑みを取り戻した明石に朝日は安堵すると、扉の前で待っていた長門に向かって声を発した。明石が無意識に放っていた暗い雰囲気が消え失せ、師匠と二人で笑みをたたえている事に長門も同じ表情を浮かべると、大きく返事をして真紅の絨毯の上に足を踏み出す。

腰に右手を添えてお尻を左右に大きく振り、長い黒髪を左手で掻き揚げながら歩く長門。前に差し出した脚はピンと伸びて、第一種軍装の上からでも解る程の独特の流線を明石の目に焼き付ける。そして明石の目の前まで歩いてきた長門は身を翻すと、羽織るように着ていた上着の裾がふわっと舞い上がり、肩から腰に至るまでの長門のメリハリのついた身体つきがあらわになる。その女性らしさを爆発させた長門の姿に明石は目を大きく輝かせ、当の長門もまた自

分の美しさを誇るようにして澄ました笑みを浮かべる。

『か、かっこいい〜・・・。』

『ふふ〜ん、女はこれくらいじゃないとねん。』

すっかり先輩の美しさにはしゃぐ明石であったが、長門は言い終えてすぐに、その明石のすぐ隣に座った偉大な先輩が向けてくる視線に気付いて笑みを凍りつかせる。実に朝日らしい綺麗な笑みがそこにはあったが、それは彼女を師匠と長年崇めてきた長門には恐ろしい事この上ない代物であった。そしてすぐに口元を引きつらせたまま固まる長門に向けて、朝日はなんとも優しげな音色での声を放つ。

『誰がそんな歩き方を教えたの、長門？』

『でへへ〜・・・。す、すいますえ〜ん・・・。』

突然の長門の変化に戸惑う明石は、頭を掻いて苦笑いする長門と至って普通に微笑んでいる朝日に交互に視線を送る。すぐそこにある朝日の顔は先程からちっとも変わらない物であるが、長門は明らかに自分の至らぬ所を恥じている様に明石には見えた。どうやら朝日が意図していた歩き方ではなかったらしい。そんな言葉を明石が脳裏に過ぎらせると同時に、それを確信させる言葉を朝日は言った。

『明石、あういう歩き方は身体を壊すわ。真似しないでね。』

『は、はい。』

『長門。やり直し、もと基い。』

『はいはい〜・・・。』

長門は大きな身体を縮こまらせて、そそくさと扉の前まで戻って行った。先程までの美しさはどこへやら。ビクビクとしながら両手

を前にして背を丸めて歩いていく長門の姿に、すっかり悲しみを心の内から消した明石は正直な感想を口にする。

『うわっ、かっこわる。』

『う、うるさいなあ……。今度はちゃんとやるから見てなさー。』

『最初からちゃんとやるのよ、長門。ふふふ。』

『そ、そうですよね……！ あ、あははは……！』

物凄くわざとらしく笑った後に、長門は一呼吸置くと僅かに表情に力を込めて顔を上げた。不思議な事にその瞬間、スイッチが入ったかの様に長門の雰囲気は変わる。ピンと張り詰めた糸の様に緊張感があり、光りを放つような荘厳な空気を身に纏った長門。

明石がその変化に気付くと同時に、長門は再び足を踏み出し始めた。まるでマストの様に天に向かって伸びた背筋と、静かなながらも重みのある靴音を響かせて歩み寄ってくる長門は、明石の目には別人のように映る。偉大、厳か、悠然などといった小難しい言葉が脳裏に過ぎり始め、先程よりも遥かに綺麗な長門の歩く様に、明石は呼吸も忘れる程に静かに見入った。すぐそばまで歩み寄ってきた長門の顔には、お気楽なお姉さんの色がどこにもない。無言で視線を向ける明石であるが、長門はフツと小さく笑みを向けると、すぐに朝日に視線を流して呟くように言った。

『朝日さん、本を。』

その言葉を受けた朝日は、無言で長門にテーブルの上にあった本を手渡す。すると長門はそれを頭の上に乗せ、すぐそこで呆然として視線を送ってくる明石の頬に手を触れた。

最早神々しいまでの感覚すら覚える長門の姿に、明石は吐息以外

の一切の行動を取る事ができない。何気なく触れてきた長門の手も、その手を伝った先にある長門の表情も、どこかずっと続く水平線とそこにうねる波の様な感じを明石に与える。そして彼女は悟る。これが帝国海軍連合艦隊旗艦、長門艦艦魂の真の姿なのである、と。

長門は何も言わないまま明石の頬から手を離し、背を向けると同時に元の扉の前まで歩いていった。特にゆっくり歩いているわけでもないのに、長門の頭に乗った本は落ちる気配すらない。それをずっと目で追っていた明石に、横から朝日が囁くように声をかけてきた。

『あれが船の命である艦魂の歩く姿なのよ、明石。私達はその分身を人間に造られながらも、一般的にはその姿を信じられていない存在だけど、決してその事が私達の存在価値を下げる訳ではないの。必死にこの世を生きるという命としての在り方は、人間と私達は同じなのよ。だから人間には負けなくらいに気高く、誇りを持ち、品のある生き方をしなければならない。艦魂として、私達がこの世にあり続ける為にもね。』

朝日の言葉に明石は黙って耳を傾けていた。

これまで明石は、人間と艦魂という存在の違いをあまり考えないように過ごしてきた。唯一の工作専門艦として生を受けた明石は、生まれてしばらくの間は帝国海軍の中でも浮いた存在であり、その境遇から起きる苦しみを分かち合う姉妹も彼女にはいない。そんな中で運良く知り合った人間の相方だけが、明石の寂しさを和らげてくれる存在であった。だが一緒に過ごす中で、その存在の仕方が違う事を彼女は感じる時が多々有り、その度に明石は艦魂と人間の違いという物を少し疎ましく思っていた。人間らしいとか艦魂らしいという考え方は、明石にしたら相方と自分の間に明確な線を引くような感じがしてならず、自分が艦魂である事なるだけ意識しない

ようにして彼女は過ぎて来た。

だが瞼の裏に焼きついた長門の姿と今しがた受け取った師匠の言葉に、明石は考えを改める。

自分と相方は存在の仕方は違うが、この世に生きる命という点では違いなど元より無い。それなら人間は人間らしく、艦魂は艦魂らしく生きれば良い。それはお互いを違う存在として捉えるような物の見方をする事ではなく、お互いが精を尽くして共に生きようとする事。どちらかが身の程を忘れて相手に媚びるような態度をとるのは、共に生きる者同士として礼を失するのではないのか。空を飛ぶ鳥、海中を泳ぐ魚、いつも同じ場所にて風と踊る草花や木々。それらは人間達と共に生きる過程で、人間に迷惑をかけないようにとか、人間の生活に完全に同化した在り方とかで存在などしてはいない。利用できる所は徹底的に利用しつつも各々が多様な姿形を維持して生きている。狡猾とも言えるかも知れないそんな在り方は、自身の身の程をよく知った上で尚なんとか生きる場を共にしようとする試行錯誤の光景その物だった。

そこまで考えた明石は、この時、自分がそんな命としての当たり前の試行錯誤を怠けていたのかとふと感じると同時に、そっと顔を上げて扉の前で楽な体勢に戻って立っていた長門に視線を向ける。ついさっき長門が見せた姿は、朝日の声を聞いて感じ始めていた艦魂としての「気品」が溢れていた。たかが歩き方一つであるかもしれないが、いまの明石にとってはそれこそが今朝方友人から言われた事だったのではないかと思えてならない。そして何より、同じでありたかったという想いはあるものの、そんな「気品」を纏った自分の姿を相方が見たらどんな顔をするだろう、という想いが明石には強く込み上げてきた。

しばしの間、3人が居る部屋は沈黙によって支配されていたが、

その沈黙を破ったのは明石のキツと力の入った声だった。長門と朝日の笑みに包まれながら、強い決心をした明石の声が辺りに響き渡る。

『朝日さん。歩き方を習えば、猫背は治りますか？』

『ええ。普段の歩き方を変えれば、根本から治す事になるからね。』
『教えてください！ お願いします！』

残り僅かとなった朝日による明石の教育だが、この日から残りの日数を使って明石の猫背矯正が開始された。連日の歩き方の矯正に明石は四苦八苦し、毎日の様に襲ってくる全身の筋肉痛に苦しみながらも、彼女は決してその教育を投げ出そうとはしなかった。

今まで蔑ろにしてきた、艦魂としての大事な事をちゃんと身に付けよう。今も同じ空の下どこかで、人間として必死に頑張っているであろう相手に対して、艦魂として未熟なままの自分では不公平で嫌だ。

そんな言葉を必死に胸の中で唱えて励む明石だった。

第三九話 「艦魂として／後編」 （後書き）

◆注意事項◆

作中にて朝日が行った整体は、作者が以前に整体師の友人からして頂いた処置を参考にして書いた物ですが、素人がやると大変危険な事になります。

良い子の読者皆様にあっては、絶対に真似をしないよう深くお願い申し上げます。

第四〇話 「地獄の空から」

帝国海軍軍人の間ではつとに有名な詩でこういう物がある。

「鬼の金剛、地獄の山城、いつそ長門で首吊ろか。」

言うまでも無く金剛、山城、長門とは帝国海軍における主要な戦艦の名前であり、これに伊勢艦を加えた4隻は海軍軍人、とりわけ下士官兵の者達を腹の底から震え上がらせるだけの厳格な風紀が特徴であった。

根本的に海軍は国民からの距離感が遠い事もあり、下士官兵に当てられる一般人からすれば、海軍というのは内務班制度に代表される陸軍よりも幾分は楽だろうという見方をされていたので、この4隻に乗組みとなってしまった不幸な下士官兵達は、大いにその間違いを身体で教え込まれる事となる。

兵役法に従って徴兵を受けるのは帝国男子の勤めであるが、二十歳を迎えたばかりの若者が2年間も男の蘭で暮らさねばならないというのは苦痛以外の何者でもない。陛下と帝国へのご奉公という意識の下、晴れの日として紋付袴で徴兵検査に赴く事が常であったとしても、その内心は若い盛りの当人達にとっては複雑な物である。

帝国の青年達はその育ってきた過程において、身近に存在する陸軍軍人として現役を過ごした諸先輩方の話を耳にする機会が多かった。同じ皇軍である陸軍と海軍であるが、そもそもお船の数が戦力とみなされる海軍とは違い、陸軍は単純に人員の数がそのまま戦力とみなされる。故に徴兵による兵員の振り分けは陸軍の方が圧倒的に多く、ごく普通の国民一人を例に取れば、海軍経験者より陸軍経験者の方が身近には多い物である。そしてその事は、兵隊としての生活を味わった事が無い若者達に陸軍生活における色々な体験談を

よく伝えており、泣く子も黙る陸軍と認知する者は決して少なくは無かった。

歩いて歩いて歩いて、そこでやっと銃をぶっ放すという帝国陸軍の実情。それは支那事変が勃発してからは特によく伝えられ、その訓練や行軍の辛さに自殺者までがでるという事実も、決して表には出ないながらも国民の間では噂として耳にする者もそこそこにいた。特に行軍の辛さは折り紙付きで、座ると立てなくなるから立ったまままで休止するのは当たり前。歩いたまま眠る兵員もいて、休止の号令に気付かず歩き続けてしまう事も日常茶飯事。見上げると首が痛くなる程の急斜面を、一発5キロもある歩兵砲の砲弾を四発も担いで登って行くのもいつもの事。そして時には山地走破中に、眠ったまま歩いて崖から転落する者も出たというから悲劇である。

「暴支庸徴」^{ばうしようちよう}をスローガンに掲げて支那へと忠勇無双の兵を進めた日本であったが、その実は支那人による飽くなき抵抗にあつて戦局を泥沼化させてしまっているのが実情である。そしてそこに払われた犠牲は日本としても決して少なくは無かったのであり、その大半は上記の様に陸軍軍人に寄る所が大であったのだ。

そんな事から、中学校や師範学校卒業による優遇が無いごく普通の青年達には、「なんとなく陸軍よりは楽そう」との判断から海軍を志す者もそこそこにいた。もっとも徴兵検査後の配属を希望する様な事はできないし、志願で海軍に入ってしまうと陸軍なら2年で済む現役期間が5年と倍以上になってしまいうから、彼等にとつては頑張つて恐怖の2年を駆け抜けるか、我慢強く幾分は楽そうな5年を耐えるかは中々に難しい選択であった。

ただ一つだけ、海軍志願兵としての嬉しい役得として、兵種への志願希望ができるという事があった。一口に海軍志願兵と言っても、その中には水兵、飛行兵、整備兵、機関兵、工作兵、軍楽兵、衛生兵、主計兵、技術兵の9兵種があり、5年の苦しい生活でも飛行兵等になる事ができれば、まだまだ飛行機等という代物が程遠い意識

であった一般的な日本人であっても空を飛んで過ごす事だつてできた。それに整備兵や軍楽兵等の兵種であれば、前線でのドンパチに狩り出されるような心配も無い。

ここまで考えた青年達にとっては、「海軍の5年も悪くない」と思えてしまうのも無理は無い。そしてその考えの通りに志願した青年達は、周知の様にそれが間違いであつた事を身をもって教えられてしまうのだ。

「人も嫌がる海軍に、志願で入る馬鹿もいる。」

そんな言葉を彼等が知る頃には、既に潮氣と”海軍軍人らしさ”を徹底的に仕込まれた後である。

ところがそんな彼らが海軍生活中で最も恐れるたのは、海軍独特のスパルタ的な日常でも、詩にも謳われる帝国海軍の栄えある戦艦達でもなかった。

「軍紀風紀の風が吹く」の名文句と供にその名を轟かせ、海軍軍人の全てが恐れおののいたその場所こそ、忠が新たな生活を送ろうとした場所であつた。^{ただし}

彼等はこんな詩を詠んで、その地への恐れを表現した物である。

「鬼の長門か地獄の伊勢か、それより怖い砲術学校。」

横須賀の市街地を過ぎ、海兵団や航海学校等もある追浜地区の一角。有名なトンネルを潜った先に、晴れた大空を切り裂くようにして身を構えた営門がある。まるで蠟人形のように直立不動で静止す

る強面の衛兵の向こう、そこに身を構えた校舎が帝国海軍における砲術の聖地であった。

窓が並ぶ廊下に黒板の前に揃えられた机。どこからどうみても教室であるが、そこに腰掛けるのはハナを垂らした頬の赤い少年達ではない。第一種軍装を身に纏い、少尉や中尉の階級章をつけた青年達が20人近く座り、小難しい砲術における専門用語が記された黒板の横には竹刀を肩に乗せた強面の教員が仁王立ちする。教室内に張り詰めた空気は今にも切れそうな空中線の様で、誰一人声を発する者はいない。

そして部屋の一番後ろの席、同じ服装をした学生達の中に埋もれるようにして机にもたれる忠の姿があった。まだ朝なのにも関わらず、猛烈な睡魔に襲われて忠はあくびをしそうになるが、グツと顎に力を入れて飲み込むようにして堪える。手からこぼれ落ちそうになった鉛筆を持ち替え、教員にみつからないようにそっと頬をつねる。ヒリヒリとした痛みが少しの間だけ彼の頬に残り、重い瞼をなんとか持ち上げようとするものの、痛みがなくなるとまたしても睡魔が彼を邪魔しだす。

軍隊の学校で居眠りしそうになる等、言語道断。だが睡魔と闘っているのは忠だけではなく、教員以外の教室にいる者全員が同じように重い瞼を必死に上げようとしていた。士官である彼等は砲術学校入校と同時に海軍砲術学校学生という肩書きを頂いており、忠も含めたこの教室にいる者達是对空砲術を専行する対空班の学生達である。各々がそれぞれの職場でその腕を磨いてきたエリートであるが、そんな彼等に対して一端の士官らしい扱いをしてくれる程、この砲術学校という所は甘くなかった。

入校初日。通された教室で彼等はお互いの自己紹介や、同期との再開に表情を明るくさせていた。年の世代も近い事からすぐに打ち解けあう事ができたのは忠も同じで、『心機一転。これから頑張ろうぜ!』の声を上げる。ところが先任らしい初老の教官が教室に入ってくるなり、彼等はさっそく砲術学校の恐ろしさを知る事になった。

『なんだ貴様ら、さっきのふざけた顔と声は?それが軍艦で最も大事な砲術の任に就く者の顔か、ああん!?!?!?』

言い終えると同時に目の前の教官は右足を伸ばし、壁を突き破るかと思わせる程の勢いで教壇を蹴飛ばした。艦砲射撃の様な轟音を立てて壁際に転がる教壇と鬼の様な形相の教官を目の当たりにし、学生達は瞬きも忘れて息を飲む。そして全員が口を半開きにしてじわじわと恐怖を覚える中、彼等の後ろからはいつの間にかそこに立っていた他の教官達の怒号が響きだす。

『オメーら、砲術ナメてんだろうが!!!!!!』

『良いと思ってるのか、オイ!!!!!!』

『……ツザけてんじゃねえぞ、ガキ供!!!!!!』

次々と発せられる教官達の怒号に続き、壁や机、椅子といった手近にあった物を殴ったり蹴ったりする音が響いてくる。後ろの席についていた忠も、腕を乗せていた机を思いっきり蹴飛ばされて恐怖の二文字を胸の中に溢れさせる。まるでダルマ落としての様に机はぶっ飛ばされてしまい、忠は宙に浮いたままだった手を即座に膝の上に置いてみるものの、背後から突き刺すような教官達の荒い息遣いと怒鳴り声にはちっとも心が休まる事は無い。とりあえず目を合わせるのは危険と判断し、正面の教官のみに視線を向ける忠。

そうこうしている内に、正面で学生達を睨みつける教官が口を開いた。

『よく聞け、貴様ら。この砲術学校の学生になったからには、普段の生活たりとも容赦はせん。兵舎から出たら必ず駆け足、例え二人でもその馬鹿面を並べて移動するなら片方が必ず号令をかける。一度でもこれを破る奴がいたら連帯責任だ。二度と海軍に戻って来れねえ様にしてやるからな。解ったか!?』

勿論、その言葉に忠達は返事を返したのだが、上ずった甲高い声での返事であった事を覚えていた者は誰一人としていない。暖かさが増してきた5月だというのに彼等は背中に悪寒を覚え、足に力が入らないにも関わらず、不気味な程に身体が軽いという感覚に襲われていた。彼等は今日初めて会ったばかりにも関わらず、既にこの時には一様に同じ言葉を脳裏に走らせていた。

「これはエライ所に来てしまった・・・。」

砲術学校学生の一日は朝の「釣床納め」から大変だ。目が覚めて1分もしない内に『遅えんだよ!!』と怒鳴り散らしてはバンバンと壁や椅子を蹴飛ばす教官に急かされ、起きたばかりだというのに早くも学生達は額や首筋に冷や汗を滲ませる。必死になってそれを終わらせると今度は駆け足で兵舎の運動場に集合し、海軍体操の幕開けだ。体操と言っても腕の伸びや体の捻り具合等、とりわけ姿勢に関する事で怒号を受けるのは相変わらずで、汗びっしょりとなって学生達は身体を動かす。時にはこれに吟遊朗読のおまけがつき、

腹の底から声を出して平家物語等を朗読する事もある。

忠はこの時、何故に体操の号令をかける人物が帝国海軍では限定されているのかを納得。彼が思い知った通り、帝国海軍における体操の号令は砲術学校卒業生が当てられていたのだった。そんな事から『声が小さい!!』と怒鳴られる事は、砲術学校においてもっとも身近にある地雷の様な物で、これを受けた者は容赦なく竹刀や精神注入棒でぶん殴られる。故に彼等は毎朝、喉の奥が痛くなろうが、口の中に虫が飛んでこようが、大きく口を開けて腹から声を出す。

こんな調子で朝を迎え、疲労感が襲ってくる頃には学科のお勉強が始まるというのだから忠の睡魔との格闘も無理の無い事である。だがそれでも彼は眠る訳には行かない。勿論教官にドカーンとやられるのも怖いのだが、それ以上に忠が恐れるのはこの砲術学校の教育法その物である。口の中で舌を噛み、その痛みで眠気と戦いながら、彼は必死に教官の言葉と黒板に書かれた内容を頭に叩き込もうとする。普通ならノートに記してそれを元に復習するのが一般的な勉強であるが、残念ながら砲術学校は”普通”ではない。

まず教科書自体が帝国海軍における機密文書を表す赤い表紙でできており、明石艦乗組みの時に忠が扱っていた射表と同じ様に、普段は金庫に入れられて厳重に保管されているのだ。そして彼等がそれを記す事ができるノートも同じく赤い表紙で包まれており、授業の始まる直前に渡され、終わったら終わったですぐに取り上げられて、また金庫の中へと戻されてしまうのである。二宮金治郎の様に歩きながらも勉強する事ができないばかりか、授業以外では大事な知識が記されている教科書やノートを触れる事すらできないのである。

砲術学校の教育期間は半年程であるが、高等数学や砲術の専門用

語で構成される内容を頭に詰め込むには半年は短すぎる。それは学生達は元より教官達の方でもしっかり理解している様で、ご丁寧にも彼等が与えてくれる教育は次の段階へ進むのが異常に早い。『解らないので、もう一度教えてください。』等という言葉は口にしてはならない言葉であり、その授業を受けたという事がそのまま内容を習得したという事にされてしまうのだ。

一切の雑念と瞼にぶら下がっているかの様な眠気を振り払いながら、忠は眼前の黒板へと意識を集中させた。

基礎的な座学は勿論として、砲術学校では銃砲に至る物はほぼ全て、その使い方は徹底的に教えこまれる。高角砲や艦砲についての学ぶのは当たり前だが、それ以前に拳銃や小銃、軽機関銃についての教育も行われるのだ。実際に発砲して的に当てるのは眠気が吹き飛んで有り難いが、これらの教育はシメとして分解清掃を行わなければならない。再び襲ってくる眠気と疲労感に耐えながらやる分解清掃は集中力を維持するのが大変で、粗方綺麗になったと思って作業を終えると、すぐさま教官から見落としていた汚れを指摘されてしまう。そうになったら散々に怒鳴られながらやり直しに励み、その後には連帯責任として班員全員での腕立て等の懲罰を受けることになる。

そしてこの砲術学校における代名詞とも言える授業が、銃剣術の
武技教練である。

海兵66期では四天王として君臨し、その銃剣術の腕前には自信
があった忠。祖父から直伝された蹴り等を使った立ち回りはできな
くとも、彼は銃剣一本あれば兵学校の教官相手でも一本を取るだけ
の実力がある。不思議な物で、自分の得意な物が授業になると目が
冴えるという人はよくいる。無論、彼もその中の一人であったが、
”普通”ではない砲術学校がまたしても彼に対してその牙を向けて
くる。

忠は得意としている防御からの反撃を狙い、相手の剣先を逸らせ
てからがら空きの胸に突きを繰り出す。もつとも相手の教官だって
銃剣術に関しては達人の域に達しているから、いつぞやの霞かすみの様に
思いつきり突く事はできず、逆に反撃を警戒しながら彼はチョンと
小さく突きを繰り出した。決して突きを食らった教官はもんどりう
って倒れるような事は無いが、銃剣術の世界ではこれでれっきとし
た一本判定である。ところが、「砲術学校の銃剣術」は違った。

面の奥で得意げな表情を浮かべていた忠だったが、すぐさま周り
の教官達から罵声が飛んで来た。

『なんだその突きは!!??』

『馬鹿野郎!! それでも男か!!』

『この卑怯者が!』

本物の銃剣であれば既に心臓をえぐられているし、そも実戦で培
った銃剣術を祖父から仕込まれてきた忠はその声に戸惑いを隠せな
い。本当なら蹴りや目潰しだって有効であるくらいだ。ところがそ
んな忠の銃剣術論は間違いであり、砲術学校の銃剣術では相手を串
刺しにせんとばかりに力を込めて剣先を刺す様が「突き」なのだと

いう。

そんなぞんざいな・・・。

そんな言葉を脳裏に過ぎらせる忠だったが、次の瞬間彼の頭には教官の鉄拳が飛んでくる。面の上からでも痛い。そして鉄拳を放った教官は鬼の様な表情をしていて怖い。軽く頭を搔いて自分に向けて発せられる威圧感に怖気づく忠だったが、教官の怒号により再び構える事となった。

『さっさと構えろガキが！砲術学校の銃剣術を教えてやる！！』
『は、はい・・・！！』

勿論この後に繰り広げられたのは、自らの突きを認められずに一方的に教官から繰り出される突きによってぶっ飛ばされる忠、という光景であった。

砲術学校の一日は長く辛い。

今日も一日、怒鳴られるわ殴られるわの時間を嫌というほど体験し、兵舎に戻ってきた学生達には精気を帯びた瞳をする者は誰一人としていない。

巡検立会いを終えて部屋に戻った忠は、部屋を同じくする仲間への挨拶もそこそこに、上着を脱いでベルトを緩める。砲術学校に入ってからという物、今では服を着ているだけで身体を締め付けられているような感覚を覚えてしまう。以前の勤務先では部屋に戻ったからと言ってこんなだらしない格好をする事は無かったが、やっと

一日が終わったという喜びと安心感からくるその行動を忠は止める事ができない。二段ベッドの上の方で同じく疲労を顔に浮かばせてボンヤリとする仲間と同じく、忠は靴を脱ぎ捨ててベッドの上に大の字になる。するとスピーカーからは、貴重な憩いの時間を知らせる号令が掛かった。

『巡検終わり。煙草盆出せ。』

帝国海軍では陸上勤務だろうが艦隊勤務だろうが号令は一緒であり、地獄の様な砲術学校であつても酒保まで完備してある。廊下を甲板と呼び、甲板掃除の号令が掛かると学生や練習生総出での掃除が始まるが、その掛け声や掃除の仕方まで艦上の物と同じである。

艦隊勤務ではこの号令と供に缶詰の空き缶を再利用した灰皿を出し、煙草を吹かしながら色んな談義に花を咲かせる物である。忠も先月までは、なんだか可笑しな連中と一緒になつてお菓子を頬張り、酒やラムネをかつくらつては笑い話をした物である。だが疲れきつて綿のような感覚になった四肢を持つ今の彼には、仲間と供に酒を飲んで話をする気にはなれなかった。静かに過ごさせてくれと脳裏で唱える忠であるが、二段ベッドの上で横になる当の仲間も同じような思いであつた。

運悪く教官に気に入られた学生はこの時間ぐらいになると、遊郭街での”射撃訓練”にお供させられてしまいうらしいが、忠にはこれ以上の元氣は絞つても出る気がしなかった。

『はああ……。』

忠は深い溜め息を一度放つと身体を起こし、ベッドの脇にあつた小さな棚の引き出しを開けた。そこから引き抜いた彼の手には銀色に光る空き缶が握られており、彼は棚の上に置いてあつた煙草をもう片方の手で手繰り寄せながら、力の入らない脚を踏ん張って立ち

上がる。ベッドの横には見慣れてきた舷窓とは比較にならない程に大きな窓があり、彼はそこにフラフラとした足どりで近寄ると窓に手を伸ばして僅かに開けた。暖かさを帯びた夜風が頬を撫でる中、彼は窓枠に空き缶を置いて口に挿した煙草に火をつける。

だが疲労困憊の忠には僅かの間でも立っている事が辛い。何か腰掛ける物はないかと部屋の中に視線を配ってみるも、殺風景な部屋には椅子どころかそれに成り代わる物すらなかった。煙草の煙と供に小さく溜め息を放ち、探す事を諦めた忠は窓をさらに開けて窓枠に肘を置く。窓から外に身を乗り出すように寄りかかり、まるで自分を腹を抱えて笑っているかの様に煌々と輝く星達を眺めながら、忠は束の間の一服としけこんだ。

『スー……。』

口から吐かれた煙が立ち昇って行き、彼の見上げた視線の先にある憎らしい星々を霞ませていく。だがそれはほんの一瞬で、煙が四散するとすぐにまたキラキラと夜空に騒ぐ光りを彼の瞳に映し出す。そして、その憎らしい程に綺麗な光りは、忠の脳裏に同じような笑みをする相方の事を思い出させてしまう。

どうしてるかな、アイツ？

兵学校から始まった彼の海軍人生であるが、つい先月まで続いていた明石艦あかしでの思い出は彼の中では大きい物だった。つまらない意地を張ったばかりに手放したその思い出は、忠の心の中に相も変わらず自己嫌悪を募らせていく。だが不思議な事に、そこにいた相方の顔を思い出すと彼の心には違った想いが込み上げてくる。

殴られて怒られて。こんな格好悪い今の自分を見たら、アイツ何て言うかな？

再び煙草を一吹かしし、忠は口から白い煙をゆっくりと昇らせて行く。脳裏を過ぎった素朴な疑問は、自分の馬鹿さ加減を思い知らせる記憶の中核を成す人物の事であるのだが、彼はそんな事を忘れてひたすらにその答えに関して考えを巡らす。

根が素直なその人物の人物の人物を考慮すると、彼が自身で思った様に『格好悪い』と率直に言ってくる可能性が高い。まして明石艦では最も仲良く過ごしてきただけに、その人物は何の躊躇も無くそう言うってくるだろう。

ここまで考えた所で、彼はその姿を該当の人物には見せないようにする事を決めた。男性である彼の本能として、格好悪い自分を見せる事はなんとしても防ぐという結論に至ったのだ。そして辛いこの地獄の様な日々をなんとしてでも乗り切る事が、その防衛策の骨子である事を彼は悟った。

唇に迫りかけた煙草を灰皿とは名ばかりの空き缶に押し付け、忠はスツと空を見上げて決意を新たにする。

頑張らねば。

胸の中でそう一言呟いて、彼は窓を閉めた。窓の両脇にあったカーテンに手を伸ばし、勢い良く窓を覆わせる。そこには彼の背中の影だけが映っていたが、同時にその背中の主は再度胸の中で声をあげる。

好きな女に格好悪い所を見せるなど、論外だ。

こうして彼は再び、口を開けて待つ地獄の日々へと戻っていった。

第四一話 「夏季艦隊訓練開始」

昭和15年5月29日。

穏やかな晴れ模様の呉軍港^{くれ}では、舫^{ふね}いを解いて棧橋から離れていく朝日艦^{あさひ}の姿があった。

載炭作業によって文字通りの黒船になっていた朝日艦も、その後すぐに行われた清掃作業によって再び雪の様な純白のその身を波間に映す。それを担当した乗組員達の苦労はしのばれるものの、こうして新たな任務地へ向かわんとする歴戦艦の勇姿はそれを目にする者たちに威厳と誇りという物を良く伝え、乗組員達は自らの汗を伴った化粧直しの成果に胸を張った。

今日も工廠内のあちこちから響く重機の音に包まれ、まるで別れを惜しんでいるかの様に艦の上空で旋回するカモメの群れの直援を受けて、朝日艦は陸地を背にして艦首に白波を起こし始める。

かつては連合艦隊の旗艦も務めた事がある朝日艦であるが、既に世は彼女の生誕から41年を迎えている。昔の様に大勢の歓声と、草原に隙間無く咲いて風に揺られる花の様だった日章旗に見送られて出航する光景はそこには無く、その様子を目にした若い工員達にとってはただ旧式の特務艦が出かけていく様にしか思えない。

時代の流れとそこに生まれる寂しさ。常に冷静で優しげな笑みを浮かべる朝日も、その寂しさには少しだけ笑みを歪ませてしまう。彼女自身、何度もその身に傷を帯びながら戦い続け、妹の死を始めとした辛い思いも嫌と言うほどに味わいながらこれまで帝国海軍にご奉公してきた。その働きの末にある姿が今のような光景だというのは、朝日にとっては少々口惜しい感覚を覚えさせてしまう。

スタンウオークから少しずつ遠ざかる呉の風景を眺めながら、朝

日は小さく溜め息をした。視界に入る岸壁には手を振る人の姿は見えず、耳に届いてくるのは回転数を上げ始める自らの機関と足元から響いてくる波の音だけ。すぐそこにあった教え子の分身である明石艦も昨夜の内に泊地を変更しており、明石とのお別れもう済ませた朝日。しばしの別れを明石は惜しみ、再会を期すまでの分を今ここで一気に伝えと言わんばかりに彼女は朝日に抱きついてきた。そんな明石の事は朝日には嬉しかったし、今日ここで見送ってくれなかったとしても彼女を責めるつもりは無い。ただ、朝日の心にはほんの少しだけ、今の自分を恨めしく感じる気持ちが湧いていた。

諸行無常の響き有りとは、こういう事だろうか？

そんな言葉を自嘲気味に胸の奥で放った朝日。瀬戸内の潮風が彼女の朱い髪をフワフワと靡かせるが、その髪の隙間から覗く朝日の表情からはすぐに歪みが消える。

寂しい事この上ないが、これで良い。古い者がいつまでも幅を利かせて崇められるのは間違いであり、新たな時代に主役として生きるのは新たに命を授かった者達の当然の権利なのだ。そこには人間も艦魂も無く、命の在り方とはそういう物なのである。だから『こんなボロ船、いらねえよ。』と言われるぐらいが、年老いたお船にとってはちょうど良いのだ。そして命のバトンを次代に渡し、解体されて再び鉄屑へと戻っていくのが艦の在るべき姿であり、同時にそこで生涯を終えるのが艦魂の在るべき姿なのだ。その時期を自分で選ぶ事ができないのが残念ではあるが、妹の様に薄幸の生涯を送る者が多い艦魂の一員として、今もこうして生きる事ができる私はとても幸せだ。これ以上の贅沢などあるまい。

言い聞かせる様に胸の中で呟いたその言葉。それが朝日の出した答えであった。今日も青い空を瞳に映せる事、今日もカモメ達の囁

きを耳に入れる事ができる事、今日も仲間や後輩達と一喜一憂できる事、そしてなにより、今日もこの世を生きれる事。かつての栄光をすっかり失いつつある姿であっても、例えそれが格好悪い事であったとしても、考えを改めた朝日は心から今という瞬間を喜んだのである。いつもは老いという物を冷酷に伝えてくる41年の記憶も、今の朝日には可笑しく笑う事のできる物でしかない。彼女は僅かに笑い声を漏らしながら、今日も変わらずそこにあった呉の景色に別れを告げた。

『軍医中將に対し敬礼!! 捧げ、銃!!』

呉の街並みに朝日が手を振ろうと右手を肩の高さまで上げたところで、朝日の耳にはそこに響く全ての音を一刀両断するかのような精悍な声が届いてきた。すでに艦首に白波を立ててから10分は経過している。突然の声に朝日は何事かと思い、声が響いてきた右舷に顔を向ける。そこにはかつて朝日も掲げた事のある中將旗を高々と翻した長門艦ながとがその身を浮かべており、その艦首付近の甲板には後輩達が整列して直立不動の体勢で敬礼をする姿があった。

それは連合艦隊旗艦による絶対命令で集められた呉在泊の艦魂達が整列する姿であり、その中には明石もまた混じっていた。

普段は滅多に話す機会すらない中將や少將の襟章をつけた先輩艦魂達を後ろに連ね、純白の第二種軍装を珍しくちゃんと着た長門は軍刀を斜めにして朝日に敬礼をとる。長門の心遣いで彼女の隣で師匠を見送る事を許された明石だったのだが、右手を額に当てたまま横目でチラッと長門の表情を覗いてみる。そこにはまるで別人と思わせるような精悍な表情で朝日艦を見送る長門がいた。真一文字に結んだ唇と、少し眉をしかめるようにして正面に向けた彼女の眼差し。真っ直ぐに伸びた腕や脚、背中は剥製かと疑ってしまう程に微

動だにしない。それは明石が今まで見た事の無い長門の姿である。

「メンドい」という言葉をこよなく愛し、上着を羽織るように袖だけ通して着る姿は最早彼女のトレードマーク。挙句の果てには公務を嫌って、毎度の様に自分の艦から脱走してくるというぶっ飛んだお姉さんである長門。常にそんな彼女を見てきたのは、なにも明石だけではない。だがそこにいるのはまるで絵に描いたかの様な美しい帝国海軍艦魂の姿であり、長い黒髪は風に揺られてまるで彼女の背に翼を生やす様。時折軍刀が反射させる光は、それを目にした者には天に輝く太陽ではなく彼女の身体から放たれているのかと錯覚させる程である。

師匠の見送りが目的なのは明石も解っているのだが、そのあまりの見事な長門の姿に明石は思わず視線を釘付けにしてしまう。そしてその場にいた仲間達も、明石と同じような思いを込めて長門の姿を視界に入れていた。「やればできる子」どころの話ではない。今まさに彼女達の目の前をゆっくりと進んでいく大先輩を凌駕する程に、長門とは艦魂としての理想的な姿を持った艦魂なのである。同時にそこに込められた長門の想いを、明石を始めとしたその場に在る全員が悟る。朝日とは軍医という同じ立場で師弟の関係を持つ明石以上に、長門は誰よりも朝日という艦魂を心から尊敬していたのだった。

そして同じ様にその姿を目に入れた朝日もまた、軍医としての教え子である明石の事を気にかけてながら、そんな後輩の凛々しい姿に口元を緩める。41年に及ぶ彼女の帝国海軍生活において、この長門ほど艦魂という存在の理想を体現できる者はいなかった。美しくあると同時に力強さをも兼ね備えたその姿は、先輩として彼女を導いてきた朝日に対して、艦魂としては完全に自分を超えた存在となった事を明確に伝える。自分よりも強く、自分よりも美しい。しかし不思議な事に、それに対しての嫉妬や悔しさといった邪悪な物は

朝日の心にはまったく湧いてこない。朝日はただ、嬉しさからくる笑みを向けて肩の高さで手を振ってやった。

艦魂としてはあんなにも究極な姿を持つ者に、私は命のバトンを渡せた。私が教えた事の集大成として、彼女はあんなにも素晴らしき姿を持つに至った。あの長門の姿こそ、私が追い求めた艦魂として生きる者の理想の姿。

手を振って後輩達に別れを告げながら、朝日は嬉しそうに微笑む。そこには別れを惜しむとか、仲間達の心遣いで寂しさを紛らわそうとする様な朝日の姿は無い。41年に及んだ海軍生活の果てに辿り着いた今という瞬間。それは朝日に無上の喜びを与えると同時に、今はもう老朽艦となった自分の事を励ますようでもあった。

私の過ごしてきた41年は、決して無駄ではなかった。

私は、・・・間違っただけではなかった。

これまでの艦魂としての彼女の生き様。時に笑い、時に迷い、時に泣きながら駆け抜けてきた41年だが、そこで自身は舵取りを誤らなかった事を悟り、朝日は心の底から喜んだ。既に艦尾の方向に遠ざかり始める長門艦に向かって手を振りながら、彼女はその場を通り過ぎていく潮風に託すようにして小さく言葉を発する。

『ありがとう・・・。』

緑が濃くなった瀬戸内の島々を背に、暖かな日差しとカモメの直援を受けながら朝日艦は呉の海を旅立っていった。

昭和15年6月3日。

この日、しばしの間静かだった愛宕艦^{あたご}には、古賀^{こが}長官の久々の覇気が窺った声が響いた。そしてそれを待っていたかと言わんばかりに、呉の波間に身を浮かべていた艦艇群は続々と抜錨を開始する。

佐伯湾を作業地としての夏季艦隊訓練が始まるのであり、母港でのんびり錨を下ろしていた第二艦隊所属の全艦には佐伯湾を目標とした集結命令が発令されたのである。艦体への定期塗装も済ませた各艦はピカピカに輝き、前日までに済ませた物資搬送によって各艦の喫水線は赤い艦底を見せる事は無い。

例に漏れず明石艦も錨を揚げ、第二艦隊の単縦陣隊形の最後尾として随伴。

しばらくはなりを潜めていた彼女の軍医としての生活が再び始まった。

同6日、第二艦隊の内、呉在泊だった各艦は佐伯湾^{さくへい湾}に到着。横須賀や佐世保を母港とする所属の艦の到着を待ちながら、歴史豊かで海軍との縁も深い佐伯湾の光景を楽しむ。

豊予海峡を過ぎて南下した九州南東部沿岸にあたる佐伯湾は、戦国時代末期に建築された佐伯城の城下町として栄えてきた歴史のある土地だ。山がちな地形から必然的に農業が発達せず、石高も2万石とお世辞にも肥沃と言える土地ではないのだが、佐伯湾がもたらす豊富な海産物と、遠浅で波が静かな港としての好立地条件を生かし、小さな土地ながらも江戸時代には佐伯藩として歴史に名を残し

ている。特に海産物の恵みはつとに有名であり、「佐伯の殿様、浦で持つ。」と人々にはその名を知られてきた。

また、幕末において異国船への防備として砲台を設置された事を皮切りに国防の歴史を歩み始め、昭和9年には湾中央の女島に呉鎮守府隷下として佐伯海軍航空隊が置かれた地でもある。豊後水道哨戒を主任務とする為に水上機や偵察機を多く配備していたが、佐伯海軍航空隊の特色は、同じく東京湾防備を任務とする館山海軍航空隊と同様に爆撃機の部隊を配備していた事である。「東の館空、西の佐空」といえば海軍航空界でもその名は知れており、支那事変勃発に際しては所属の爆撃隊で臨時編成部隊として第21航空隊を組織。上海を拠点として活躍してきたという、輝かしい栄光を持った航空隊である。

そして2千名の基地職員を抱える航空基地の存在は、所在する佐伯町に軍人向けの商売と雇用をもたらしており、当地は九州でも指折りの軍都として栄えていた。

第二艦隊の各艦は、湾の奥側に当たる地点で大入島を北に望む様にして錨を下ろした。一ヶ月ぶりに集結した各艦が湾を圧する中、呉以外の地から馳せ参じてきた駆逐艦達が所属の戦隊へと合流する。

艦隊屈指の大家族である神通^{じんつう}の第二水雷戦隊には横須賀を母港としていた第8駆逐隊が戻り、那珂^{なか}が率いる第4水雷戦隊にも第6駆逐隊が戻ってきた。特に二水戦の第8駆逐隊は、呉を母港とする第18駆逐隊の霞^{かすみ}と霰^{あられ}の姉達で編成されている為、彼女達は久々の姉妹の再会を喜んだ。そしてその二水戦の主でもある神通にとっても、第8駆逐隊は普段から人間達と同じ様に「ボロハチ」と呼んで可愛がる部下であり、決して表情には出さないまでも彼女達が再び元気な顔を見せた事を喜ぶ。同じ様に那珂にあっても、自分を慕ってく

れる部下達とお互い元氣に顔を合わせた事を祝った。

また、部下のいない明石にあっても、この佐伯湾では嬉しい事があった。

陽に照らされた艦橋真横の甲板に整列する十数名の乗組員達。真っ白な半袖と長ズボンの作業衣に身を包み、頭には白い手拭いを巻いた彼等は、明石艦の乗組員達から選りすぐりの者を選抜して編成された特別救助短艇員。いわゆるボートクルーである。

これまで明石艦には編成されていなかったのだが、帝国海軍艦艇では各々で必ず編成されているのが彼等である。戦闘艦では兵科、機関科と別々に編成されるのが常であるボートクルーだが、明石艦の場合は兵科、機関科の合同編成で組織された。役割は読んで字の如く、海上に投げ出されたりした兵員を救助する事。大時化であろうが台風だろうが荒れ狂う波の上にカッターを進め、時には海に飛び込んで仲間を助ける事が任務である。その為に彼等には並以上の勇氣と水泳の技量が求められ、その構成がほとんど二等水兵の者達であったとしても、艦の中では善行章を着けた者の次に崇められるようになる。

荒海に飛び込んで仲間を救う、命知らずな奴ら。

そんなボートクルーの役割から明石は最初の内は彼等の事を心配していたが、選抜された兵達の中にかつての相方とよく似た顔を持つ人物を見つけ、その言葉を妙に納得する。

明石艦きつての喧嘩屋、森正志もりまさし二水。ただし忠の実の弟である。彼は兄と違って明石の姿を見る事はできないが、彼の従兵として仕えていた事から明石もその人物評はよく知っている。顔は似ているのに落ち着きのある兄とは違って、気性の荒い無鉄砲さが大きな特徴。これまた兄とは大違いで水泳が上手く、おまけに相手の人数を気にせず喧嘩を始める典型的な芋掘りである。だがその爽快な程の鉄砲

玉つぷりは、まさに命知らずなボートクルーにピッタリである。兄とは違って逞しくて頼りがいのあるその性格と、明石も沖縄で目にした彼の水泳の技量は明石艦でも有名であり、鼻っ柱が強いながらもお仕事での失敗をした事は一度もないのである。故に明石の心配はすぐさま消え失せ、『これなら大丈夫だろう。』の言葉と共に、気持ちを新たにする彼等を見て素直に喜んだ。

そしてなにより、また一つ仲間達と同じ物を持てた事も彼女には嬉しく、明石は編成初日からのカッター操艇訓練を日が傾くまで微笑んで見守る。作業地で時折行われる各艦対抗のカッターでの競技会是有名だが、参加する者達はみんなこのボートクルーである。今までは遠巻きに誰の所のボートクルーが優勝するかを眺めているだけだった明石だが、この日を持って彼女はその競技会に参加できる自らの駒を得たのだった。

6月8日。ようやく第二艦隊全艦の集結が完了。明日から始まる戦技訓練を前にして、第4戦隊の高雄艦^{たかお}にある使用されていない長官公室では所属艦魂による戦隊長会議が行われた。

戦隊に所属していない明石も軍医少尉としての立場で出席を促され、他の仲間達と共に豪華な造りの高雄艦長官公室の内装に表情を明るくさせる。座り心地の良い椅子に、真っ白なテーブルクロスが掛けられた長机。部屋の壁に沿うように置かれた棚はニスによって木目を輝かせ、テーブルの上には陶器製の灰皿まで置かれている。いずれも自分の艦では中々お目にかかれない代物で、さすがに艦隊旗艦は違々と明石はその豪華さを納得する。

その内に長官公室の扉が開かれ、それを合図として明石も含めた

席に着いていた艦魂達が一斉に立ち上がって両手を身体の横に添える。彼女達が視線を集中させる中、扉を開けた高雄に続いて第二艦隊を束ねる愛宕が入出してきた。彼女は明石よりも年上ではあるものの、長門や朝日といった先輩達と比べればずっと年代は彼女に近い。20代前半であるその外観は、明石の隣にいる神通や那珂よりもまだ若い。それでも愛宕には伸びた背筋と跳ねる様に歩く姿があり、明石が師匠の下で苦勞して身に付けようとした物をちゃんと持っている事を明石に伝える。未だに猫背が治りきっていない明石は、その愛宕の歩く様を羨みを持って眺めた。

愛宕が長机の上座に当たる部位まで歩き、身体の向きを部下達に合わせた所で、すぐ脇にいた摩耶まやが声を上げる。

『艦隊旗艦に敬礼。』

摩耶のそれは決して叫ぶような号令ではなかったが、耳にした他の艦魂達は一斉に右手の指先を額に添え、無帽の者は腰を折って頭を下げる。そして愛宕は室内の全員が敬礼をとった事を確認し、僅かに口元を緩めて自身の右手の指先を額に添えた。そのまま一人一人の表情を確認するかの様に視線を左から右へとゆっくりと流し、愛宕は手を下げながら呟くように言った。

『みんなご苦勞。休み中は各戦隊とも、何事も無かったようであった。』

『直れ。』

姉に続いて摩耶が号令を掛け、室内の全員を直立不動の体勢から解放する。愛宕は良くやったと褒める様にして号令を掛けた摩耶に向かって一度頷くと、頭に被っていた軍帽を取り、もう片方の手で部下達に着席を促しながら音も立てずに椅子へと腰掛ける。それを認めた明石達も、頭に乗せていた軍帽をテーブルの上に置きながら

席に着いた。

些か堅苦しい雰囲気^{はくきくしい}が部屋の中を包むが、会議の最初の話題は新たな仲間の紹介であった為に彼女達の表情は明るい。艦隊司令部を置く第4戦隊の摩耶^{はがや}、新たに戦闘序列に加わった第5戦隊の那智^{なち}と羽黒^{はぐろ}、第7戦隊の最上^{もがみ}と三隈^{みくま}が順を追って挨拶し、拍手と共に仲間達は迎えてやった。

特に第5戦隊は第4戦隊の愛宕達にとってはすぐ上の先輩達に辺る妙高型一等巡洋艦で編成されており、上海方面や華北方面において実戦経験を積んできたベテランである二人を指揮下に入った事は第二艦隊にとっても大きな喜びだった。また帝国海軍が最も重視する夜戦において、第5戦隊は第一水雷戦隊の支援部隊としてこれまで務めてきた経歴がある為、第二艦隊の水雷戦隊を率いる神通と那珂にとってはコンビを組む支援部隊が一つ多めに持てた事になる。それはつまり彼女達が敵艦隊に向かって突撃強襲に出る際、以前にも増して強力な砲撃支援が受けられるという事を意味する。故に神通と那珂は第5戦隊の加入を心から歓迎した。

続いて昨今の世界情勢ではまさに注目の的である欧州の情勢が、愛宕の口から伝えられる。

5月10日より始まったドイツ軍による西部侵攻は電光石火の勢いであり、開戦から4日でまずオランダが降伏。その前日には既にドイツ軍はフランスへの越境も開始しており、防備の薄い所を突いて急速にイギリス軍やフランス軍を包囲する戦線を構築。ジリジリと敵軍の勢力地域を圧迫し、その傍らでは28日になってベルギーを降伏させたという。

馴染みが無い陸戦での戦況ながらも、彼女達はドイツ軍のその機動力に驚きを隠せなかった。

次いでイギリス軍とフランス軍の撤退作戦が説明され、総数86

0隻に及ぶ艦船を用いた大作戦に彼女達は真剣に耳を傾ける。海上での作戦行動は例え地球の裏側での出来事であっても、艦魂である彼女達にとっては決して他人事ではないのだ。愛宕の言によると海上での戦闘ではイギリスやフランス側に損失があったようで、主に潜水艦による雷撃と爆撃によって兵員回収作業に当たっていた駆逐艦が被害にあったとの事であった。

艦体同士の撃ち合いが起きなかった事で、その話は特に紛糾する事もなくすんなりと終わってしまったが、そこにあった英独による熾烈な航空戦の結果とその効果を、彼女達は後年になって身をもつて知る事になる。

『Uボートやは帝国海軍の潜水艦に比べれば小さいらしいけど、結構頑張ってるじゃないか。』

至って気にも留める事無く軽い口調でそう言った愛宕も、その潜水艦の脅威を後年になって身を持って知る事になる。そしてそれを知った時、彼女は水漬く屍となるのであった。

そして今この時、明石の親友である神通と那珂にとっては大変重要な意味合いを持つ海戦が、この西武戦線が展開される地より遙かに北の海で繰り広げられていた。

第四二話 「背を合わせる物／其の一」

昭和15年6月16日、1318。

沖合いでの艦隊訓練の合間を縫っての休日。連日の火の出るような激しい訓練は、所属の各艦を操る屈強な男達の体力を容赦なく奪う。皆鍛え抜かれた精鋭であるが、始まったばかりの訓練でコキ使いすぎると怪我人を出す事になる。古賀長官は兵員の疲労回復等に気を遣ってくれる心優しいお人で、最初の訓練が終わってすぐに艦隊には上陸が許可された。

第二艦隊が錨泊する佐伯湾さへぎの目の前。そこには佐伯航空基地を軸に軍都として栄える佐伯町があり、料亭や旅籠、風呂屋に色町等がそれなりに軒を連ねている。故に乗組員達は疲れと鬱憤を晴らすために、意気揚々と艦を降りていった。

一方、人氣が若干薄くなった艦隊各艦は、湖面に浮かんで翼を休める鳥の如く、静かにその身を佐伯の波間に映していた。世界的にも非常に内容が濃い事で知られる帝国海軍の艦隊訓練は、そこにいる兵員達だけではなく艦魂達にとってもかなりの体力を消耗させる。

もっとも連合艦隊内でも日露戦争の時代から続く誉れ高い第二艦隊の名は彼女達にとっても大事な物であり、そこに配備されている艦艇は新参だろうが駆逐艦だろうが帝国海軍の中でも最強の存在でなければならぬと全員が胸に抱いるから、その厳しい訓練内容に不平を口にする事はあっても文句を口にする事は無い。長く第二水雷戦隊の旗艦を務めてきた神通じんつうが鬼となって部下を虐め鍛えるのも、ここに大きな理由があるのだ。

そしてそんな神通によって訓練を授かった部下達には、早速そのお尻に竹刀の一撃が叩き込まれている。決して神通が憎しみをもってそんな事をしている訳ではないという事は部下の艦魂達も重々承

知っているのだが、力も強くて普段からヤクザの親分みたいな表情をしている彼女にぶっ叩かれるのは心底肝を冷やす。手加減という言葉を知らない神通は時には一撃どころか十撃にまで及ぶ程に竹刀を振り下ろし、彼女達の中にはお尻に青いアザができている者だっている。おまけに癩癩持ちの上司は機嫌が悪いとそれがさらに酷くなり、理由の如何を問わずに体罰に走る事は日常茶飯事だ。

しかし当の神通とて、部下達をただ虐めようとするつもりは微塵も無い。すぐに手を上げてしまうのは不器用な彼女の性格の裏返しであり、彼女はただ部下達が帝国海軍艦艇の艦魂として生きていく上でその命を無駄に散らして欲しくないだけである。自らの未熟さと不注意から部下をその手で殺してしまい、さらには恩人である人間を自殺に追い込んでしまった過去を持つ神通。そんな彼女だからこそ、生まれて間もない彼女達には自分の様な思いをなんとしてでも味あわせたくは無かった。「私立神通学校」と仲間内からも揶揄される神通の教育姿勢であるが、その厳しさは彼女のただひたすらに部下を想う気持ちの裏返しなのだ。

故に人間達が休日を満たしている今日という日も、彼女の部下に対する教育は行われている。

湾内に横一列で並んで停泊する第二艦隊の各艦。その一角にて仲間と同じく錨を下ろす最上艦もがみの艦内に、教育の為の資料の束と丸めた世界地図を小脇に抱えた神通の姿があった。

神通は艦内の通路を歩きながら、背後からついてくるこの艦の主に顔を僅かに向けて声を発する。

『すまん、最上中尉。無理な願いを聞いてもらって。』

『あはは。何を仰いますか、神通中尉。』

神通の問いに明るい声で答えながら、最上は肩口から正面に垂らした長い髪を後ろに流す。サラサラと流れる綺麗な髪を靡かせ、同じく真っ白な第二種軍装を着た最上は神通の真横まで小走りで進み出て笑みを見せる。20代半ば過ぎの外見を持つ神通に対して、最上はまだまだ20代を迎えたばかりぐらいの若さが良く滲み出た顔つきをしているが、その階級は二人とも同じ中尉である。艦の大きさと艦隊での役割で階級が決まってしまう艦魂社会の決まり事とは言え、既に十年以上も帝国海軍に籍を置いている神通の境遇を含めると、つい数年前に誕生したこの最上が同じ階級を頂いている事は人間の感覚からすればいささか理不尽である。だが神通はその事を口に出す事も無ければ、それを心の底から憂うような事は無い。古来より艦魂とはそう言うものであるし、そもこの最上はそんな考えを持って当たらないと扱いに困るような人物ではなかったからだ。神通のその考えを証明するかのように、最上は口元を吊り上げながら神通に向かって小さく頭を下げる。

『それに中尉等と呼ばなくとも、最上でよろしいです。この最上、神通中尉は真の姉上まへと思っております故、頼み事が有りましたらなんなりと申し付けてください。』

『ふん。』

無愛想な返事を返すのはいつもの事であるが、隠しきれなかった笑みを伴ってその口癖を放つ神通は珍しい。

だがその恐怖を伴った教育方針と短気な性格から帝国海軍艦魂社会においては敵も多い神通にとって、同じ河川を由来とする名前を持ちながらなおかつ姉の様に自分を慕ってくれるこの最上という後輩の存在は素直に嬉しかった。

背も高く、鋭く釣りがった目を持ち、上官相手でも怒ると食って掛かるという度胸の持ち主である神通。そんな彼女であるから、

付き合うのも嫌だという顔をする者だつて中には居る。現にこの最上の妹達は神通を事その他恐れており、第二夜戦隊内の打ち合わせ以外では目を合わせようとしめない。もちろんその際に『この馬鹿が！』と頭ごなしに叱ってしまう神通にも問題はあるから、彼女の事を嫌いになつてしまうのも決して無理の無い事である。ところがこの最上は怒られたそばからビクビクと怯える妹達を背にして神通に歩み寄り、怒られた内容についての詳細を理解しようとあれやこれやと質問する事が多々あった。正直な所、あまり出来の良くない後輩なのだが、その誠実な姿勢と姉と慕ってくれる最上は神通にとつては可愛くて可愛くて仕方が無い。

ふと手を伸ばして最上の肩に手を触れようとするも、両手に抱えた教育用の資料が邪魔でできなかった事に神通はちよつと残念さを覚える。頭の一つでも撫でてやりたいぐらいだったが、無念にも神通の歩く先には既に目的のお部屋へと繋がる扉が見えていた。神通はその事に気付きながらも歩みを止めず、小さく苦笑いしながら顔を床に向ける。

まあいいさ、どうせ私には似合わない。

胸の奥でそう呟きながら、彼女は可愛い後輩に少しはにかんだ様な笑みを返して、自分のしたかった行動に諦めをつける。そしてそれに気付かない最上は通路の先に迫ってくる扉に顔を向け、扉を開けてやる為に小走りで神通の前に走っていった。ほんの僅かに左右に揺られる艦内であるが、最上は体勢を崩す事無く扉の前まで走り夜と、重い音を響かせながらその扉を開けて神通を待つ。やがて扉の前まで来たところで神通は歩みを止め、部屋の中で大人しく待っていた部下達を一瞬だけ確認してから、最上に向けて視線を流した。

『じゃあ、大部屋を借して貰うぞ。』

『はい、ごゆるりとお使いくください。何かありましたら、いつでも』

言いに来て下さいね。』

『ああ、すまん。』

屈託の無い最上の笑みから逃れるようにして、神通は扉を潜って部屋へと足を踏み入れる。同時にそれに気付いた霰あられが神通の元へと駆け寄り、彼女は上司が両手に抱える資料を受け取る。無言で神通はそれを渡していたが、彼女の背中からは扉を閉めながら放つ最上の優しい声が響いてきた。

『後でお茶をお持ちしますからね。では。』

『お、おい、最上。気を遣わなくてもー。』

神通がそう言いかけるも、振り返った先には重い音を立てて部屋に蓋をした扉があるだけであつた。

人の話を最後まで聞かんとは、なんという奴だ。

そんな風に怒りの言葉を脳裏に過ぎらせる神通だが、その影にある最上のひたすらな気遣いに彼女の腹立たしさはすぐになりを潜める。併せて神通は満面の笑みでお茶を用意して戻ってくる最上の姿を予想し、口元を緩めながら彼女は部屋の真ん中に置かれたテーブルの端に歩み寄った。

テーブルの周りには神通の部下である第8、第18、第16駆逐隊の艦魂達が立っており、神通のそばで資料をテーブルに並べてい

る霰以外は背筋を伸ばして気をつけをしている。少し薄暗い艦内にも関わらず、彼女達が着た白い水兵服が舷窓からの光りを反射して、部屋の中を淡くほのかに明るくしている。そして上司がくるのを待っていた彼女達の表情も、今の部屋と同じ様に消して暗いわけではない。

必死になって教えを授けてくれる神通の心は彼女達も理解しているし、何より今日の「私立神通学校」の日課は武技教練などの訓練日課ではなく、座学による教育日課である事も大きな理由だった。ヘトヘトになるまで走らされて柔道や銃剣術を身体で教え込まれるのが彼女達の常なのだが、人間達と同じ月曜日の午前に宛がわれている教育日課ではとりあえずは汗を掻く事も無い。普段から竹刀で追い回されている彼女達にとっては、それだけでも幸せなのであった。

『おし、始めるか。霰、これを広げろ。』

『はい。』

神通の一言を機に教育日課が始まる。彼女の指示を受けた霰は自分の身長と同じくらいの丸められた地図をテーブルに広げ、それを仲間達も手伝う。その光景を背に神通は部屋の端に立て掛けられていた黒板を引っ張り出し、資料片手になにやら小難しい言葉をサラサラと黒板に書き込んでいく。頭に乗せた帽子を使って丸くならうとする地図を押さえた部下達は、その上司の書き出す内容に視線と意識を集中させる。

小気味の言い音を伴ってチョークを黒板に走らせる神通は粗方書き終わった所で手を止め、頭に乗せていた軍帽を取って机に置おいた。黒板の端から端までびっしりと角ばった文字で埋めた彼女は、少し疲れた様に小さく溜め息をしてから顔を上げる。

『これから、つい先日欧州にて行われた英独の海戦について説明す

る。あゝ、今日は提出物はないから、みんな楽にして聞け。』

神通の思いがけない言葉に部下達は戸惑いを隠せないが、すぐにそれは安堵へと変わる。普段は座り方が悪いというだけでお尻に竹刀を叩き込む上司なのだが、この人は怖いだけで別段嘘をつくような人物ではないのだ。その事を従兵として良く知っている霰が笑みを浮かべると、彼女達も胸を撫で下ろして浅く椅子に座りなおる。緊張の糸が少し緩んだ彼女達の心情を乗せる小さな溜め息が部屋の中に幾重にも響き渡り、それが今度は神通の心をも和らげて行く。

最上と同じ様に、彼女達もまた神通にとっては可愛くて可愛くてたまらない部下なのであり、不器用な自分に毎度の様に気を引き締めて接してくれている事はとても嬉しかったのである。もっとも彼女は、そんな部下に対する自分の人当たりを変えるつもりは毛頭無い。上司とは怖いぐらいが調度良い、それが神通の理想の上司像であるのだ。

込み上げてくる感情を抑え、いつもの鋭い眼光を湛えた顔で神通は説明を始める。

『4月から始まったドイツによるノルウェーへの侵攻作戦は、皆も知っているだろう。ノルウェーは地理的に北海を挟んでドイツとは交戦状態である英国に近い。だからこれまでも何度か双方の艦隊の間で戦闘が発生しているんだが、今日はその中でもつい先日(の6月8日)に行われた海戦を考察しようと思う。この海戦にはまだ名前がついていないが、基本的には攻勢をかけるドイツ艦隊に対して守備を固める英国艦隊がそれを撃退しようとする、というのが簡単な両軍の構図だ。』

神通はそこまで語った所で声を静め、ふと顔を上げて部下達が囲んだテーブルの一角に視線を流す。彼女が予想した通り、そこには

上司の声に耳を傾けずにお互いを睨みつける霞と雪風の姿があった。どうやら早速の質問をしようと、二人はほぼ同時に手を上げてしまったらしい。その光景を黙って眺める神通の姿に仲間達が冷や汗を浮かべる中、二水戦名物の猿と犬の喧嘩が始まった。

『どうせ下らねえ質問するんだろうが！？ すっこんでろ！！』

『アンタこそ、解りきった質問して戦隊長の点数を稼ぐつもりでしようが！！ 雪風！！』

『なにを、猿め！！！！』

頭に血が昇った雪風が波打ったクセ毛を流して、隣の席に腰掛け、憎き天敵に跳びかかる。その天敵たる霞は雪風から伸びた手で頬を鷲掴みにされ、すぐに彼女の麻色の肌には爪で引っかかれた赤い傷が浮かび出る。だが二水戦の中で最も強い艦魂である彼女も、さすがにそれで参ってはくれない。すぐに霞は雪風の頭に手を伸ばし、自分とは違って長く伸ばした彼女の自慢の髪を掴んで思いつき引っ張る。そしてどちらからという事も無く、お互いの顔面に向かってビンタや拳を叩き込み始めた。『死ね！』等と10代後半の女の子という外見に似つかわしくない言葉を双方が発し、すっかり部屋の空気を無視して天敵を懲らしめようとする二人。

とぼっちりを受ける事を恐れて冷や汗を掻きながら見て見ぬ振りをするその仲間達だが、視線を二人から戻すとそこには完全にご立腹の怖い上司の顔がある為、彼女達は視線のやり場に困って部屋のあちこちにキョロキョロと顔を向ける。

そして神通は怒りを表情に纏わせながらも、毎度の様にこうして大喧嘩に明け暮れる二人に呆れて大きく溜め息をつく。『なんで隣に座らせるんだ。』と根本的な二人の取り扱いを誤った部下達に苦言を呈しながら、彼女は腰を上げてテーブルの陰に隠れる二人の下へと大股で歩み寄っていく。神通のそばで席に着いていた霞もまたオロオロとしながらその様子を見守るしかなく、床で転がりながら

取っ組み合っている姉と友人の愚かさを心の底から恥じる。その刹那、神通のいつもの怒号と重く鈍い衝撃音が彼女の耳に届いてきた。

『馬鹿者が!!!!!!』

怒号と供に神通のげんこつが二度振り下ろされ、けたたましく響いていた物音が静まると同時に、霞と雪風は猫の親子の様に神通によって首根っこを掴まれて黒板の前まで連行されてきた。お互いに大きなタンコブを頭のとっぺんに作り、いつもの様に上司の怖さを身を持って知った二人は瞳の端に涙を浮かべている。だが神通としても彼女達の事を思っただけの教育をしようとしていたのであり、それを邪魔されたのだから二人が泣こうが喚こうが彼女は簡単には許してくれない。黒板の前で掴まれていた首を解放された霞と雪風だったが、神通は相変わらず額に血管を浮き立たせ、鬼の様な表情で二人睨みつける。それが意味する事を普段の生活から十二分に知っているのに、天敵を相手にするとそれをすっかり忘れてしまう二人は歯を小刻みに噛み鳴らして肩を同じテンポで震わせる。だが残念ながら、もう遅い。

神通は怯える二人の内、まずは雪風にそのギラリと光る眼光を向ける。それに気付いて雪風がビクンと身体を大きく震わせるが、構わず神通は右手に淡く白い光りを纏わせて竹刀を出現させながら言った。

『犬!!! ケツ出せえ!!!!!!』

『ひっ……は、はい!!!!!!』

こんな状態の上司に逆らうのは危険と判断し、元よりそんな勇気の無い雪風は神通に背を向けて脚を肩幅と同じ間隔で開き、両手を肩より上に上げて前屈みの姿勢を取る。先輩に当たる霞を相手に喧嘩する程の鼻っ柱の強さを持つ雪風も、この神通にかかつては赤子

も同然である。「犬猿の仲」という言葉から付けられてしまったあだ名で呼ばれ、その呼び名が嫌いであったにしても彼女は何も言い返さず神通の言葉に従うのみだ。

裁きの一撃を受ける姿勢になった雪風を確認し、神通は大きく肩の上に竹刀を振りかぶる。そして刑の執行が始まった。神通の咆哮と同時に竹刀は振られ、その先にあった雪風の小さなお尻からは竹刀独特の甲高い音が発せられる。雪風は『ギャッ!!』と虫の悲鳴のような声を上げ、受身も取れずに顔から床に倒れ込んだ。未だに頭に残ったげんこつの痛みと、お尻から発せられる真新しい痛みに襲われ、雪風はうつ伏せで倒れたまま頭とお尻に片方ずつ手を当てて泣き始める。

そこにあるのは憎き天敵の牙を折られた姿であるのに、霞はその光景に安堵する事は無かった。あれ程までに自分に対して挑んでくる彼女の末路としては、今の雪風の姿は余りにも惨い姿であったからだ。そして何より、今から自分もその横で同じ様な姿をせねばならない事に、彼女の心の中は恐怖という感情が所狭しと駆け抜けているのだった。仲間内の中ではただ一人だけ日に焼けた様な浅黒い肌をもつ霞であるが、いまの彼女の顔からは血の気が退いている事が初対面の人でも解る。瞬きも忘れ、口を半開きにして雪風の変わり果てた姿を視界に入れていた霞。だが無常にも、彼女の耳には上司の声が響いてきた。

『猿!! ケツ出せえ!!!』

『は・・・、はい!!!!』

大嫌いな雪風から付けられたあだ名で呼ばれた事は霞としても心外であったが、今はそれに対して反論してはいけないと彼女は判断。雪風と同じ様にビクビクとしながら裁きの姿勢をとって、竹刀を構える上司にむかってお尻を突き出す。

すぐ上の姉である霞の危機に霰はハラハラとしながら、自身の少し伸びたおかつぱ頭の両脇に手を当てて事の次第を見守っていた。噴火する火山のように怒号を吐いて竹刀を振り下ろす神通だが、霰はその先に姉のお尻と悲鳴があっても上司の心を疑う事は無い。どんなにも怒っても昔の様に顔を蹴り上げるような事はしないし、なにより先程から彼女が二人をあだ名で呼ぶのは、単に神通がそんな今という瞬間を楽しんでいるからという事を従兵である霰は知っているのだ。

神通はとある戦国大名に憧れているのだが、その部下には「猿」、そして「犬」と呼ばれた部下がいたのだ。戦国において猿の呼び名を持つ者と言えば、関白にまで登り詰めた豊臣秀吉公。対して犬とは、槍一本で加賀百万石の祖となる大名まで出世した前田利家公の事であり、彼の幼名である「前田犬千代」から来たものである。そしてそんな二人を従えた主君。革命児の代名詞的存在として崇められる織田信長公その人こそ、神通が憧れと尊敬を持つ人間であった。故に彼女は霞と雪風を馬鹿にする為にあだ名で呼んでいるのではなく、犬猿の仲である二人の関係に乗っかって自身を信長公と重ねようとしているのである。まだまだ経験不足な部下達に誰も見えない所で悩む事も多い神通が、最近になって生活の中に編み出した唯一の娯楽のような物なのだ。ちなみに幸か不幸か、癩癪持ちという点では彼女は憧れの人物と良く似ている。

もっとも、だからと言って笑みを浮かべて尻をぶっ叩く様な真似を彼女はしない。片足を僅かに踏み鳴らして力いっぱい振る神通の竹刀が霞のお尻に叩き込まれると同時に、甲高い衝撃音と短い悲鳴を発して霞は床で悶え苦しむ雪風の上に折り重なるようにして倒れる。すぐさま部屋には二人の苦痛に歪んだ泣き声が木霊し始める。

お尻と頭を抑えてすすり泣く二人だが、仲間達の何人かはその見慣れた光景にクスクスと声を漏らして笑っていた。そして神通もそれ以上二人を痛めつけるつもりは無く、椅子に腰掛けて竹刀を肩に

乗せてトントンと弾ませ始める。まだ少し怒りが纏われた瞳を床で悶える二人に向けながら、神通は静かに声を発する。

『立て。』

全く引かないお尻と頭の痛みに苦しみながらも、すっかり牙を折られた二人はベソを掻きながら立ち上がる。仲間や姉妹が見ている前で懲罰を受けて泣いてしまった霞と雪風。二人とも所属する駆逐隊の司令駆逐艦を務めているのだが、今はそんな二人の面目など丸潰れだ。その犯人である神通の処置は厳しいの一言であるが、彼女は今回部下達に授ける実戦の教育が如何に大事かを知っていた為にその行動を起したのだ。さらにそれと似た逸話を持つ戦国時代の武将の事も神通は知っており、その事もまた彼女の二人に対する断固たる処置を後押しした。

ボロボロと流れる涙を袖で拭う二人に、神通は静かにその事を論ずる。

『戦の話はちゃんと聞かんか、馬鹿者が。かつて豊臣秀吉公の軍師だった竹中半兵衛は、戦の話をする際には我慢する小便を漏らしてでも聞けと息子に教えたくらいなんだぞ。それだけ戦の、特に実戦の話というのは、それを生業にする者にとっては大事な事なんだ。』

激痛と嗚咽に苦しむ二人とその仲間達は、神通の早速の教えを黙って肝に銘じる。実際に銃弾飛び交う支那戦線にて時を過ごし、不本意にも仲間の死という物をその目に焼き付けた過去を持つ神通。そんな彼女の言葉だったからこそ、霞と雪風を含めた部下達にはその教えが如何に大事な事を思い知る。戦と切っても切れない関係の帝国海軍艦魂である自分達は、どんなに小さな事でも戦に関わる物事には浮ついた気持ちで居てはいけない。それは志半ばで散るところか、下手をすれば大事な仲間や姉妹を殺す事にもなるのである。

霞も雪風も泣きながら、腹の底にその事を深く頂戴する。

『二水戦に属する者は、私の命令無く敵を殺す事は許さん。そして私の命令無く、殺される事も許さん。誰一人欠ける事無く勝つ事が私の戦だ。例えどんな事でも、それに反抗する事は許さん。私と供に戦い、私と供に死ねる者になれ。いいな?』

ぶっきらぼうで口下手な神通の言葉は殺伐としているが、その本心はそこにいる誰もが理解していた。

お前達が死ぬ時は私も死んでやる。だから勝手に死ぬ様な、未熟な輩にはなるな。

ただひたすらに部下の将来を気遣う神通のそんな想い。誰よりも部下には厳しい上司にして、誰よりも部下には情をかけている上司が、この神通なのである。

治まりかけてきた涙を拭きながら、神通の言葉に雪風と霞が返事をする。軍隊では聞き取りづらい返事など持った他で二人が放った声はまさにそれだったが、神通はそれを咎めるつもりは無い。根が素直で頭も良いこの二人が、自分の言いたかった事を十二分に理解した事を知っているからだ。肩に乗せていた竹刀を自らの座る椅子の横に数回突き立て、神通は無言で二人に座るように促す。決して神通は笑みを見せてはくれないが、自分のそばに座らせるといふ彼女の行為が、二人に向けられた上司の心遣いをそっと伝えてくれる。感謝の言葉も返せずにそこへ腰を下ろし、鼻水と涙を袖で拭う雪風と霞。その二人の仕草に神通は一瞬表情を解しかけるも、すぐさま唇に力を入れて至って平然とした面持ちを固持する。

それに気付いた霞が優しく見守る中、神通は竹刀を物指し代わりにして黒板のあちこちを指しながら、再び声を放ち始めて中断して

いた教育を再開した。

第四三話 「背を合わせる物／其の二」

黒板に向かつて竹刀を動かす神通じんつうの口から語られる、ノルウェー国での戦闘概要。

それを聞く部下達は黙ってその内容を頭に叩き込んでいくが、彼女達はノルウェーという国も知らなければ、そこにある海の特性も良く解っていない。何より異国の軍艦すら彼女達は見た事が無いのだ。その為に知識としては吸収できるものの、彼女達の脳裏にはそこにある絵という物が浮かんでこない。

ただ、資料に記載される数字を覚え、それを元に厳密な計算をして答えを導き出すのが勉強であるのだとすれば、今の彼女達の姿は決して間違っているのではない。何より、しっかりとした要素を用いて理論を組み立てるといえるのは、海軍の中堅層を支える者達が登竜門として過ごした兵学校での教育方針である。

だが教える側の神通は、その事に対してちょっと違った考え方を持っていた。彼女自身の目で見てきた支那戦線での実情と、惨たらしい姿となった蕨わらびの亡骸。それは軍隊という国家の組織らしく殉職や戦死等といった独特の言葉で表され、言葉だけを見ればどこか普通ではない荘厳な雰囲気を持たせる。だが彼女がそこで見た現実の光景は、そんな荘厳さなど欠片も無い物であった。目を背けたくなるような惨状と、重く肩に押し掛かって来る様な悲しみ。伊達に神通とて十年以上も帝国海軍の艦魂をやっている訳ではなく、例えば戦争を経験していなくとも、そこにはどんな光景があるのかを彼女なりに知っているのだ。

そして、その自身の思う所を部下達にもなんとか伝えようというのが、本日の教育日課においての神通が意図した物であった。

黒板に書かれた内容を粗方説明し終えた神通は、少ししゃべりつ

かれて呼吸を整える。眉一つ動かさないうで軽く喉の辺りを擦るだけの神通であったが、霰あられはそんな上司の行動に彼女の疲労と欲している物をすぐに悟る。霰はテーブルの上に手を伸ばし、わざわざ持参してそこに置いていた水筒と湯呑を手にとる。カラカラと金属音を響かせて水筒の蓋を開け、中に入っていた水を湯呑に注ぎ込む霰。突然の霰の行動を仲間達が不思議そうに見守る中、霰は水を湛えた湯呑を両手に抱えて席を立ち、溢さない様に注意しながらゆっくりと神通の前まで歩み寄った。

『戦隊長、どうぞ。』

『ん。』

神通は短い返事を放って霰の手から湯呑を受け取り、ゆっくりと中身の水を喉へと流す。霰の細かな気遣いに感謝しつつ、神通は空になった湯呑を手渡し、霰は小さく笑みを作ってそれを受け取る。神通は礼を口にしようとするも、それよりも早く霰は湯呑を片手にササッと自分の席へと戻ってしてしまったので、神通は開きかけていた口を閉じた。ひたむきに従兵の勤めを真っ当しようとする霰の姿勢に僅かに口元を緩めつつ、神通は再び黒板に向き直ってそこへ竹刀を指す。

『まあ、この様に駆逐艦の被害が多い事が、昨今のノルウェーでの海戦に関する大きな特徴だ。もっとも英独供に駆逐艦の運用方法は違うし、私達が行う水雷戦での運動もまるつきり違う。例えばイギリス側に関しては、駆逐艦群の旗艦に私のような二等巡洋艦を配していない。向こうでは一回り大きな嚮導きようどう駆逐艦という艦種を設定し、その指揮を取らせてるんだ。』

神通がそこまで言った所で、霰の隣の席に腰掛けていた二水戦所属駆逐艦の最年長者である朝潮あさしおが右手を上げた。そして同時に神通

へ向かって少し大きめの声を放つ。

『質問、よろしいですか？』

『なんだ、朝潮？』

神通の許可を受けた朝潮はその場に立ち上がって声を放ち、神通がそれに答える。

『嚮導駆逐艦の長所と短所を教えてください。』

『うむ。長所は隸下の駆逐艦と基本的な性能がほぼ同じ事による、運用面での制約が少ない所だ。艦の大きさもほぼ同じだから、今の私達のように二等巡洋艦で喫水も深い私に合わせて泊地を検討する事も無いし、補給する際の弾薬も隸下の駆逐艦と全く同じで済む。ついでにその運動性も似ているから、所属の駆逐隊での運動内規や操縦内規、舵角、機関の回転数、羅針儀といった設備の整合がとてもやり易い。だから緊急の出撃や隊の編成が、私達に比べれば抜群に早いんだ。』

神通の詳しい説明に部下達は深く頷き、初めて知った欧米での艦隊運用の知識をよく理解する。

もともと神通として欧米の艦隊による実戦を目にした事は無い。いま彼女が口にした言葉だって、自身が支那戦線派遣時に上海で見た英国艦隊の姿と書類として展開されてきた情報を元に独自に研究しただけである。だが指揮官の立場を頂く神通にあっては、部下の質問に対して『知らない』とか『解らない』等という返事をするつもりは微塵も無い。指揮官たる者は部下から尊敬されなくなったら終わり、その事を彼女は良く知っているのだ。従兵の霰が毎度の様に朝になって神通の部屋を片付ける際、特に散らかっているのは机である。そしてその真相は、指揮官として己を磨かんとする神通が夜遅くまで独り黙々と勉強しているからなのだ。霰を含めた部下達に

は決して見せない神通なりの誇りと責任を追及する姿であり、長門ながとをして「天才」と言わしめる所以でもある。

その理解をより深いものとするため、神通は横で正座している霞かすみに顔を向けてさらに声を放つ。

『猿。陽炎型二隻と朝潮型二隻で編成されている第18駆逐隊の司令駆逐艦であるお前なら、いま言った事の重要性が解るだろう。』

その声に霞が顔を上げる。神通の言葉通り、霞とその乗組員達が司令駆逐艦として頭を使うところは隸下にある艦船の微細な違いによる運用法の差異である。霞は自身の経験に思う所が沢山あり、それを声に出した。

『はい。特に機関の回転数は一桁に至るまで整合しておかないと、同じ速力区分で走っても隊列が乱れちゃいます。他にも増減速標準とか、目標速度への到達累計時間も合わせないとダメですね。この辺を陽炎や不知火しらぬいと合わせるのは、私んトコの艦長や司令も苦労していました。』

霞の答えは神通が期待していた通りの物であり、彼女はすぐそこにあつた霞の肩に手を乗せて苦勞を労う。神通は表情を崩さずに二度、霞の肩に手を弾ませただけであるが、霞にとっては怖い上司が自分を氣遣ってくれた事が嬉しかった。霞はやっとの事で笑みを浮かべ、神通もそれを認めて彼女から顔を逸らしながら口元を緩める。そして自身の心に深く傷をつけた事件の事を、霞の言った事の前例として惜しげもなく教えてやる。

『私が馬鹿をやらかした美保ヶ関事件は、皆も知っているだろう。あの事件の原因の一つは、直前まで第一艦隊一水戦に所属していた

第27駆逐隊を、何の事前整合も無しに私が所属していた第二艦隊5戦隊に組み入れた事なんだ。結果は皆の知る通りだ。』

それ以上神通は言わなかったが、部下達はその結果という物を知っている。その事の重大さを改めて認識する部下達を横目で確認し、神通は組んだ脚を組み変えたと朝潮への回答の続きを話し始める。

『次に短所だが、嚮導駆逐艦はその名の通り、艦の大元は小型快速が身上の駆逐艦だ。だから指揮を取る水雷戦部隊の司令中枢は、手狭で設備的な面での余裕が余り無い環境で指揮を取らざるを得ない。一応は大型の艦橋構造や通信設備といった司令部を収容する為の構造をしてはいるが、元々の艦の大きさに余裕が無いからやはり統一的な指揮能力には不足があるようだな。後は隷下の部隊の突撃路啓開を行う為の砲煩装備も無い。それとアーマーによる装甲も薄いから、被害に対しての脆弱性も無視できない。もう一つ言うなら、司令部が独自の策敵能力を有していない事も問題だ。私達とて充分ではないが、偵察用の水上機を私が持っているだろう？この有無は作戦行動に関しては大きいと思うぞ。ま、あちらさんの水雷戦隊は単独での運用は考えられていないんだろう。つまり水雷戦部隊の司令部とは言え、常に上級の艦隊司令部からの命令と支援がないとロクに接敵もできないという事だ。』

同じ駆逐艦たる部下達がその言葉に耳を傾けていた中、それまで黙って聞いていた雪風が黒板に向かって視線を流す。そしてそこにあった英独のこれまでの戦闘による結果を目にし、神通が語った嚮導駆逐艦なる物の短所を良く理解した。その内に雪風はそれまでの正座からあぐらに脚を崩し、腕組みをしながら大きな釣り目をしかませて声を発する。

『なるほど。確かにナルヴィク沖の第一合戦では、嚮導駆逐艦がや

られた側のその後の戦闘は酷い物っスね。』

しっかりと黒板に書かれた内容と同調した雪風の言葉に、神通は大きく頷いて声を返す。

『うむ、犬の言う通りだ。このナルヴィク沖での一次海戦では、イギリス側の先制によって司令部を乗せた艦を失ったドイツ側は一方的に被害を受けたが、逆にその後はドイツ側の増援による反撃でイギリス側の嚮導駆逐艦がやられた。双方共に指揮中枢を失って混乱してしまっただけだ。特にイギリス側では衝突事故まで起こっている。つくづく指示をとばす立場という物の大事さを、この海戦で私も思い知らされた。』

雪風はその言葉に大きく頷く。二水戦の長である神通には大事な事だが、同時にそれは第16駆逐隊の司令駆逐艦を勤める雪風にとっても重要な事なのだ。自身が不甲斐なく撃破されたなら、そこに従った姉妹や仲間達を殺す事になる。頂いているその立場を今更ながら理解して気を引き締める雪風。そして同じ立場の霞と朝潮も、神通と雪風の会話に決意を新たにしている。

また、霞を始めとした司令駆逐艦でない者達も、そこに響いたやりとりでそれぞれの思いを巡らせた。隊列に関しては「指揮官先頭」を金科玉条とする帝国海軍だが、当然それは指揮官が敵の猛攻に晒される危険性と背中合わせである。これまでその可能性とその後に連なる結果に対してはあまり考えてこなかった彼女達も、今はその危険性を肌身を通して良く理解し、各々が頂く指揮官をなんとかして護ろうと心に決める。

しかし神通が今日教えようとしている事とは、この異国の駆逐艦事情でもなければ指揮官の大切さでもなかった。新たな知識と決意を胸に秘める部下達を横に、神通は机の端に積み立てていた資料の

束に手を伸ばしながら口を開く。

『おし、みんな嚮導駆逐艦の事はもう解ったな？　今度は先日行われた海戦での戦闘記録だ。』

神通は机の資料の束をゴツゴツと掴むと、自らの膝の上に置いてその中から必要な物を見繕い始める。あらかじめ目星をつけていたので、神通はそれほど迷いながら資料を選別する事は無かった。

ガサガサと隣で音を立てる上司を眺めていた雪風だったが、ふと彼女の座る位置から神通を挟んで向こう側にある黒板に目をやる。そこには今日最初に上司が口にした6月8日に行われたという海戦の結果が書いてあった。そしてその簡単な内容を頭に入れた雪風には、上司がその海戦を自分達に説明しようとする事が疑問となっていく。黒板に書かれた内容は、それ程までに圧倒的な戦果なのであった。雪風は上司の邪魔にならぬよう、僅かに下から顔を覗きこむ様にして小さく声を上げる。

『戦隊長、ちょっと良いスカ？』

『ん？　なんだ？』

『黒板に6月8日の海戦の結果が書かれてるツスけど、こんな海戦、考察する必要も無いんじゃないスカ？』

雪風と神通に挟まれる形で座っていた霞は、その雪風の言葉に肝を冷やす。神通が無意味に教育をする筈が無い事を良く知っている彼女は、恐れ知らずに神通の意図を疑うような雪風の物言いで、当の神通が怒ってしまうと思ったからだ。

だが神通は雪風の言葉を受けても平然とした物で、眉一つ動かさずにせつせと書類の選別を続ける。確かに霞の思ったとおり、雪風の率直な物言いは少しばかり相手の気持ちを無視する風な所があるのだが、そこに悪気を込めていない雪風という部下を神通は良く知

っていたのだ。日本人気質を受け継ぐ帝国海軍の艦魂社会にあって雪風のように物事をハッキリと言うタイプは珍しいが、彼女はただ声を発する際に他人に対して遠慮しないだけなのである。

さらには雪風でなくともそんな疑問が部下から上がると言う事を、神通はこの教育を始める前から既に予想していた。故に彼女は手を休めずに、至って普通に声を返す。

『そうか？』

『だって、最新式の巡洋戦艦2隻に襲われたんスよ？ 空母1隻と旧式の駆逐艦2隻じゃ、勝負にもならないじゃないスか。戦闘詳報よりも、それ以前に敵に近づかれないような哨戒方法の方が重要だと思っくんスけど。』

歯に衣着せぬ物言いの雪風に、仲間達は神通がご立腹になってしまっているのではないかと冷や汗を滲ませる。もっとも雪風の言った事は決して間違いではなく、仲間の内の何人かと同じことを考えていた。

負けるべくして負けた戦いの過程に、自分達が学べる所などあるのだろうか？

そんな言葉を脳裏で呟く部下達だったが、神通は意にも返さずに選抜した資料をまとめている。むしろ彼女にはそんな考えに至る部下達に、眩いばかりの若さを感じて思わず口元を緩めてしまう。それを不思議そうに眺める部下達の視線が集まる中、「まだまだだな。」と胸の奥で呟いた神通は、選別した資料の束をすぐ隣に座り込む霞と雪風に向かって差し出した。

突然の上司の行動と差し出された資料の束に驚く二人だが、神通はその二人の顔を楽しむように小さく笑みを浮かべながら言った。

『猿、それと犬。二人で黒板にこの戦闘詳報を書け。』

さつき投げた疑問に対して神通は答えをくれなかったが、それを催促するまではさすがの雪風もしない。上司の命令とあれば遂行しない訳にはいかないからだ。もともと雪風はそれを天敵と一緒にやってやる事には大いに不満があり、霞もまた同じである。ほぼ同時に返事を放って立ち上がった二人は、ギロリとお互いの顔を睨みつけながら神通の手から資料を受け取って黒板へと進んでいく。

霞は二人のその様子から、絶対にどっちが黒板に書き込む役でどっちが資料を読み上げる役かという事で言い争い、再び蹴る殴るの大喧嘩が始まってしまふのではないかと予想して胸をざわつかせるが、同じくそれを予想する上司がその二人の考えをピシヤリと抑える。

『猿、資料を読み上げろ。犬、お前がそれを書け。さっさとやれ。』

その声に二人が振り返ると、そこには今しがたまで笑っていた神通が再び肩に竹刀を弾ませて怖い顔をしている姿があった。頭とお尻に食らった激痛が記憶に新しい二人は、口を尖らせながらもお互いの役割に沿って手を動かし始める。霞が資料の束の最初のページをめくって内容を確認し、雪風が黒板を一度綺麗にする為に書かれた内容を消し始め、それを合図として本日の神通の意図する所の教育が始まった。

陽が西に傾きかけた事を遮るどんよりとした曇り空に包まれた、少し黒い色をした海。時折現れる波頭もまた綺麗な白ではなく濁った灰色で、そこに広がる海は簡単な色のみで塗られたモノトーン絵画のようであった。まるで大型艦の機関音を思わせるかのように低く重苦しい音を放って駆け抜けていく風と、それに乗ってその場を過ぎっていく灰色の雲の群れ。命の息吹が何一つ見つけられない海が辺り一面、水平線まで続いていく。

だがそんな海の一角に、黒煙を巻き上げながら西に向かって進んでいく3隻の艦影が在った。

その中でも一際大きな艦影を持つ艦には艦首の遙か手前で途切れた全通飛行甲板があり、そこには10機の複葉機と8機の単発単葉機機が並んでいた。ワイヤーでその場に固定された航空機達が列を作って翼を休める景色が、広い甲板の果てまで並んでいる。その向こうにある飛行甲板の果てには断崖の絶壁を思わせるかのように遙か下に見下ろせる艦尾と海面があり、この空母の乾舷の高さを見る者に良く伝える。

そして目も眩むほどの程の高さから見下ろす艦尾の旗竿には、白地に赤抜き十字と供にユニオンジャックが描かれた旗が翻る。それはまさしく、数ある軍艦旗の中でも最も歴史と伝統の深い軍艦旗。すなわちイギリス海軍の軍艦旗、「ホワイト・エンサイン」であった。

遙か西の水平線に向かって荒波を掻き分ける3隻は、ドイツ軍の攻勢によりノルウェーから撤退する作戦、「アルファベット作戦」

に参加している栄えあるイギリス海軍の艦艇である。満載排水量26518トン、全長240メートルと戦艦並の大きな艦影を持つのは、航空母艦のグローリアス艦。そしてその前後を挟んで航行するのは、全長104・5メートル、満載排水量2012トンの駆逐艦、アカスタ艦とアーデント艦である。

その3隻の内、高い波を艦首から飛行甲板根元まで連なるスロープで切り裂きながら進むグローリアス艦の甲板の隅っこに、3隻の分身たる艦魂達は座り込んで話をしていた。甲板に繫止した航空機の翼の下に潜り込み、開け放たれた缶詰やガラス瓶を囲む3人の女性。

その中でも一人だけ黒い生地に金色に輝く八つのボタンという軍装に身を包む女性。上着の胸元から除く純白のシャツと襟、そしてそれを一刀両断するかのように襟から垂れていく黒いネクタイ。白と黒のツートンカラーの軍帽を被るその姿は、イギリス海軍の士官用軍装である。

そしてその士官用軍装に身を包む女性は、軍装のボタンの様に金色に輝くブロンドの髪を後頭部で丸めており、ヘアピンでそれを留めている。右の瞳は淡い緑色、左の瞳は淡い青色というオッドアイの持ち主であり、西洋人独特の彫りの深く高い鼻を持つその顔立ちからは既に若さが若干消え始めていて、人間で言えば30代前半といった所だ。軍帽から垂れる細かい前髪を風に揺らしながら笑う彼女は、この艦の艦魂、グローリアスである。横に向けて崩した脚で座るグローリアスは、目の前で同じ様にその場に座って笑みを浮かべる部下達に向かって声を発する。

『やっと本国に帰れるわね。アカスタもアーデントも、スカパフローについたら思いつきり休むのよ。』

グローリアスの声が向けられた先には、黒いジャケットとズボン

に青いジョンベラ（※水兵服独特の襟）を身に纏い、白い水兵軍帽を頭に乗せた女性が二人いた。その内の片方、軍帽からはみ出た逆巻きの赤く短いクセ毛と、頬に張った小さな絆創膏が特徴の女性が声を返す。

『うーん、だいいいですが。例のダンケルクでの作戦で、本国艦隊は手一杯ですからねえ。すぐに御呼ばれされそうな気がしますよお。』

缶詰の中身を乗せたスプーンを口に運び、もぐもぐと口を動かしながらだらしなくそう言ったのはグローリアス艦の前を進む護衛の駆逐艦、アカスタ艦の艦魂である。アカスタはその姉妹で構成されるA級駆逐艦の長女であり、隣に座るアーデントは彼女から数えて六番目の妹である。共に1929年生まれのアカスタとアーデントは20代前半の若々しい容姿を持ちながら、グローリアスとは違って西洋人らしからぬ小柄な体格の持ち主だ。アカスタはしゃべりながら口の中に含んでいた物を飲み込むが、ふいに口に指を突っ込んで歯に挟まっていた魚の小骨を抜く。

『んもう、アジは骨が多いなあ。』

女性らしさを微塵も気にしないアカスタの行動にグローリアスがクスクスと笑う中、アーデントは姉のみっともなさを嘆く。姉と同じく大きめな目を細くし、顔の横へと風によって靡く肩の高さまで伸びた黒髪を片手で押さえながら、アーデントは口を尖らせて言った。

『アカスタ、少しは遠慮してよね。すいません、グローリアスさん。』

『ふふふ。いいよ、いいよ。アーデントも楽しんで。』

姉のだらしなさを恥じるアーデントに、グロリアスは優しく笑みを向ける。アカスタは至って気にもせずに再びスプーンをアジの缶詰へと伸ばすが、生真面目なアーデントは姉の腕に手を触れて僅かに眉をしかませた表情を向ける。決して妹の事を嫌いな訳ではないのだが、アカスタはアーデントのそんな真面目さに付き合うのが時々面倒であったりする。何も言われていない内からふて腐れる様な表情を浮かべるアカスタに、アーデントは力の籠った声を放つ。

『アカスタ、いつも言ってるでしょ？ 私達、艦魂が気をつけないといけないー。』

『わ、解ってるってえ……。いつものあの言葉でしょ？ えーと・・。』

『誠実。』

『そう、誠実！ あとは・・。き、希望！ 希望でしょ！？ それと・・。』

『それと・・。？』

『うーんと・・。あ、そうだ、慈愛だよ、慈愛！ そら、ちゃんと覚えてるでしょ？』

自分よりも若い姉妹のやりとりを、グロリアスは笑みを浮かべたまま見守っていた。アカスタは長女であるにもかかわらず、今の二人の姿を目にする限りでは、どう見てもアーデントの方が姉といった感じだ。苦言ばかりの妹に心底困っているアカスタは、適当に返事をしながら缶詰の中身を再びスプーンですくって口に運ぼうとするも、その途中で汁を甲板に一滴垂らしてしまい、再びアーデントのお説教を受ける羽目となった。

ちなみにこのアカスタ。大日本帝国海軍の艦魂の中では随一の麗人である朝日とは、同郷の出身であるというのだから驚きである。

その時、アカスタとアーデントはふと、グローリアスが自分達とは焦点を合わせていない視線でこちらを眺めている事に気付いた。笑みも消えてただボーっと眺めてくる上官に、二人は顔を見合わせて首を傾げる。するとグローリアスは、囁くような小さな声で口を開いた。

『何かしら、あれ……。』

グローリアスの言葉を耳にした二人は、彼女が視線を向ける左舷の果てに顔を向ける。そこにはどんよりとした曇り空に包まれる水平線しかなく、アーデントはグローリアスの見ている物が何か解らなかった。だがアカスタは微かに何かを見つけたらしく、口にスプーンを挿したまま立ち上がる。だが甲板上で繫止される飛行機の翼の下にいた事を忘れていたアカスタは、立ち上がろうと腰を上げた瞬間、思いつきり頭を金属製の翼にぶつけた。

『あいてっ!!』

『アカスタ、大丈夫!?!』

『なんとも無いよ、お、いて……。』

咄嗟に心配の声を掛けてきたアーデントに歪んだ笑みで返事をしながら、アカスタは翼の下から這い出して立ち上がり、手を横にして両目の上に添える。姉の痛そうな姿とグローリアスの言葉に状況が飲み込めずアーデントは姉と上官に交互に視線を送っていたが、そこにあった静寂をアカスタの静かな問いかけが切り裂いていく。

『グローリアスさん・・・。』

『アカスタ、どう？何か解る？』

『煙・・・が見えるんですけど、アーク・ロイヤル大佐達が護衛している兵員輸送の船団って、とっくの昔に出航してますよね・・・？』

『ええ、私達が殿軍よ・・・。』

だがグローリアスの言葉とアカスタが煙を認める方角が南であった事に、その場にいる3人は同時にある一つの、そして最悪の可能性を脳裏に過ぎらせる。その可能性が示す絶望的な状況に声を失う3人であったが、無情にもその可能性が現実である事を示す人間達の声が3人がいる甲板に響いてきた。

『艦隊左舷、240度ー！！敵艦隊ー！！！！』

その現実とは人間である乗組員達にも彼女達が絶句する程の絶望感を同様にもたらしたのか、響いてきた乗組員の声は悲鳴にも似た叫び声だった。すぐさま兵員達が戦闘配置に就く為に、グローリアス艦の甲板を右に左に駆け出す。そしてそんな中で絶句したまま水平線の向こうを眺めていたアカスタとアーデントに、グローリアスが翼の下から這い出して立ち上がりながら明るさを掻き消した冷たい声をかける。

『戦闘配置。二人とも死力を尽くして奮闘するように。』

グローリアスの静かながらも決意が込められた声を受けて、二人の身体は今という状況が生んだ衝撃を受けた事によって発生していた硬直から解放される。同時に、これまで言えなかった分をぶちまける様にしてアカスタが叫び、アーデントもそれに続いた。

『くっそ!!なんでこんな所にクラウツが・・・!!!!』

『そんな・・・この辺にいたドイツの駆逐艦群は、既に全滅したって聞いてたのに・・・。』

それぞれに心に湧いた言葉を正直に放ってみるものの、どちらの声も恐怖を隠しきれない震えた声であった。拳を握って水平線の向こうを睨みつける二人だが、その背後から上官の怒号が響いてくる。

『さっさと持ち場につきなさい!!!』

怒りが籠った上官の言葉を受け、アカスタとアーデントがビクンと身体を震わせて振り返る。そこには先程までの優しい笑みが嘘かと思える、釣り上がった眉と瞳を湛えたグローリアスの顔であった。地中海からインド洋、そして4月にこの北海へと転戦してきた彼女には、豊富な実戦の経験から来る戦を知り尽くした軍人の顔が浮かび上がっている。その表情とグローリアスの身体全体から放たれる殺気にも近いオーラに、二人は尻餅をつきそうになるのを堪えるのが精一杯だった。どんなに意識しても膝に力が入らず、不気味なほどに身体が軽い。風に吹かれてしな垂れそうになるその身に力を込めながら、気をつけをしたアカスタは声を上げる。

『はい!艦に戻ります!!』

姉の豪放な性格を良く知っているアーデントも、今は彼女がその性格ゆえに叫んでいる訳ではない事を感じ取る。叫んでいなければ、今という現実から放たれてくる恐怖に耐え切れないのだ。震える手を額に添えるアカスタとアーデントに、グローリアスはゆっくりとした動作で答礼する。

『戻ったら無線電話を装備。指示あるまでそのままでいなさい、い

いわね・・・？』

『『はい！！！！』』

返事を認めてグローリアスが手を下げると同時に、二人は淡く白い光りを放ってその身を包み、前後を航行する自身の艦へと戻っていった。マストでの警戒をせず、甲板に陸上機を繋止している事から偵察機による哨戒行動が出来なかった事に、グローリアスは自分への今の状況に関する責任を求めて表情を険しくさせる。だがすぐに、それは今は必要ないことだと彼女は判断し、逆に今必要だと判断した行動を取る事を決める。飛行甲板の左舷の端に向かって走り、淡い光りを右手に放つグローリアス。甲板の端まで来るや、彼女は右手に出現させた双眼鏡を両の目の前に添える。そしてそこに見える微かな艦影を記憶に残るドイツの艦型から予測したグローリアスは、その艦がこの海で一番会いたくない者であった事を悟ってしまった。唇を強く噛みながら、険しい顔つきで彼女が呟く。

『なんて事なの・・・！！アーデントが言った通り、この辺の駆逐艦群は全て撃滅したから、増援がくる可能性は低くは無いと思っていただけ・・・。よりによって奴等なんて・・・！！！！！！』

双眼鏡を通してグローリアスが無念と怒りの視線を向ける方向。そこに身を構えていたのは「北海のジャック・ザ・リッパー」、「ノルウェー沖の死刑執行人」と仲間内では何度も噂になり、文字通り英国海軍艦魂達を恐怖のどん底に叩き落した死神。モノトーンの海に高々と掲げたハーケンクロイツの旗を靡かせ、今まさに獲物に向かって噛み付こうと真一文字に突撃してくるその艦こそ、全長235.4メートル、満載排水量38100トンの巨艦。28.3センチの3連装砲塔3基を備え、つい昨年に就役したばかりのドイツ海軍の最新鋭巡洋戦艦、シャルンホルスト艦であった。

第四四話 「背を合わせる物／其の三」

唇を噛み締めるグローリアスは両目の前に添えていた双眼鏡を下ろし、表情をそのままに身体を僅かに捻って背後に顔を向ける。そこ並ぶのは航空母艦たる彼女が載せているのに相応しい単発の航空機であるが、彼女はその光景に希望を見出す事はない。それは航空母艦で運用する為の機体ではなく、陸上基地での運用を目的とした機体なのだ。ノルウェー国から撤退する事に併せてつい昨日積み込んだばかりの航空機達を眺めながら、グローリアスは必死にこの危機的状况を潜り抜ける為の策を練り始める。

遙か南の水平線から突き進んでくる敵影を横目に、彼女は脳裏で敵味方お互いの条件を比較させていく。だがそれは彼女が表情を一段と曇らせると同時にあっけなく終わった。脳裏に浮かんだ不利な条件を確かめるように、グローリアスは自らの分身の中央にて艦橋と供にそびえる大きな煙突に目を向ける。縦長で艦に対して垂直に立つ煙突からは曇天の空に溶け込んで行くかのように黒煙が立ち上っているが、彼女が知る上ではその煙は十分な量ではない。

旧式巡洋艦からの改装空母である彼女だが、実は刻々と迫りつつあるシャルンホルスト艦と同等の30ノット以上の速度を出せる。ところが現在、グローリアス艦の18缶のボイラーの内稼動している物は12缶しかなかったのだ。風雲急を告げるドイツ軍による攻勢は英国海軍にも焦りを生んでおり、グローリアスを含めたノルウェー方面行動の艦隊各艦は、十分な補給も出来ないという無理な状態で作戦に臨まねばならなかった。そしてその事は燃料の節約という行動上の制約を架し、グローリアス艦が全ボイラー使用での行動が出来ないという今の状況への引き金となっていたのである。

今更ながらその事に尽き果てない後悔の念が湧くグローリアスであったが、すぐに彼女はその事に諦めをつけて左舷の海原に再び視

線を戻す。残りの6缶を全力発揮可能な状態にまでするには、どんなに急いでも1日はかかる。つまり彼女は12缶のボイラーのみでこの状況を切り抜けなければならないのであり、同時にそれは敵が自分達へ追いつくのは時間の問題である事を明確に彼女に伝える。

『まずいわね……。』

険しい表情を崩さぬままグローリアスはそう呟き、足元に光を放って黒い無線電話機を出現させる。何一つ希望が持てぬ今の状況が苦しめる胸に左手を当てながら、彼女は右手で無線電話機の上に置かれたヘッドフォンを握り、軍帽の上から自らの頭へと嵌め込む。相変わらず乗組員達の叫び声が木霊する甲板の上。彼女の耳にもそれはずっと流れていたが、右手に持ったマイクに向かって声を発するとすぐにグローリアスの耳には先程まで聞こえていた部下達の声が返ってきた。

『アカスタ、アーデント、聞こえてる？』

『ア、アカスタ、聞こえます。』

『アーデント、せ、戦闘用意よし。よ……。よく聞こえます。』

部下達の声から別れた時よりも少しだけ震えが消えている事にグローリアスは僅かに安堵の吐息を放つが、続けて放たれてきたアカスタの問い掛けによって彼女は表情を変える事ができなかった。悔しさを飲み込んでいる事を示す低く唸る様な声で、グローリアスはそれに答える。

『グローリアスさん、艦載機での支援は行えるんですか……。？』

『残念だけど、できないわ……。格納庫にある5機の雷撃機にしても、6缶のボイラーが運転休止中で速力が出せないから、風向きも考えると発艦させる為の十分な合成風力が得られそうにないの。』

。。
』

『そう……ですか……』

落胆を隠せないアカスタの声にグローリアスは心の中で何度も謝りながら、自らの身体全体に淡く白い光を纏わせて甲板から艦橋天蓋の上に当たる部分にその身を移した。甲板よりも幾分は見晴らしが良い艦橋天蓋に足を付けると同時に、彼女は足元から響いてくる艦橋内にいる乗組員達の声を耳にする。そしてすぐさまその内容を部下達へと教えてやった。

『いま緊急電を放ったわ。味方の増援が来るまで、なんとか私達だけでこの状況を凌ぐしかないよね。』

足元から響いてくる喧騒を他所に、グローリアスは胸に手を当てながら落ち着いた声を放つ。彼女の背後には缶圧が上がり始めた事を示す一層の黒煙が煙突より天に向かって昇ってゆく光景があるが、それでもまだ彼女が全力の速度は出せない事に変わりはない。グローリアス艦の背後からその光景を目にしていたアーデントは、恐怖感に今にも押し潰されそうな心を滲ませた声でマイクに向かって口を開く。

『グローリアスさん、て、敵の兵力は解らないんですか……？』

キツと左舷の海原に視線を向けながらその声を耳にしたグローリアスは、その声に一瞬の間だけ迷いを抱く。部下の士気を思うならば適当に誤魔化す事もまた一つの方法であったが、彼女は先程まで部下が話していた光景の記憶によって、彼女達に嘘を伝える事に抵抗を覚えてしまう。

アーデントとアカスタが艦魂として生きる上で大事な物と位置づけていた、騎士たる者の三大美德の一つ「誠実」。もしかしたらこ

ここで命を落とすかもしれない二人の部下の事を思った時、グローリアスは自分や彼女達が含めた英国海軍の全ての艦魂達が信じる、艦魂としての大事な事を自身もまた貫こうとこの時に決心する。自分達の命が失われるかもしれないからこそ、絶対的な危機に瀕している極限の状態である今だからこそ、彼女はそれが必要であると考えたのであった。

部下達の絶望にうちひしがれる姿を見たくない良心を苦しめながらも、グローリアスはマイクを口元に近付けて極めて冷静に声を放つ。

『・・・敵はドイツ軍のシャルンホルスト級巡洋戦艦。』
『・・・！！』

僅かに低い呻き声を放つアカスタとアーデント。その声はヘッドフォンを伝わってグローリアスの耳にもはっきりと聞こえていたが、彼女は構わず含んでいる事を言葉に変える。

『私がさっき見た時は一隻だけだったけど、これまでのドイツ軍との戦闘記録を踏まえると、単艦で行動している事は考えられない。まだ見えていないだけで、すぐ近くにもう一隻の姉妹艦がいる筈だわ。あ、待って・・・。』

そこまで言ったところで、グローリアスは足元から響いてくる艦橋の中での乗組員達のやりとりを耳を傾ける。すると一際大きな声で報告を行う水兵の声が彼女の耳にも届き、グローリアスは今しがた部下達に教えた敵戦力の可能性を確信した。噛んだ奥歯に力が入れつつも、彼女は再び口を開く。

『間違いない・・・。左舷に認めた艦が電波を放っているのを私の艦でも傍受したわ。きつと僚艦に通報したのね。敵は最低でもシャ』

ルンホルスト艦と、その姉妹艦であるグナイゼナウ艦よ。』

信じるままに行動するといえは聞こえは良いものの、今のグローリアスに限ってはそれを誇れるような気が微塵もしない。彼女が部下達に伝えた物は、より増した絶望感以外の何者でもなかったからだ。その証拠にアカスタもアーデントも言葉を失ってしまい、彼女の耳につけたヘッドフォンからは二人の吐息すらも聞こえてこない。しかしグローリアスの胸の奥には、小さいながらもまだ一縷の望みがあった。大英帝国海軍の艦魂として長く生きてきた彼女は、つい3ヶ月前の3月まで地中海やインド洋での作戦に従ってきた実戦経験があり、その経験上でいろんな戦い方を目にしてきた。さらに彼女は空母として改装される以前は巡洋艦として生きていた過去もあり、水上戦闘においてはまったくの素人ではない。グローリアスは眉をしかめて左舷を睥んだままだが、その脳裏にはこれから取るべき自分達の行動に関して一つの可能性を見出していた。

そして幸運な事に彼女の分身の指揮をとるヒューズ艦長もまた、その考えは同じだった。

今年の8月からの付き合いとなるヒューズ艦長の声が足元から響き始めると同時に、グローリアスは先程脳裏を過ぎらせた部下達の言葉を再び思い出す。如何なる時も捨ててはいけないそれを、彼女は足元から響く艦長の声が自身の考えと全く同じであった事によってなんとか見出した。

『アカスタ、アーデント、落ち着きなさい。』

接敵から既にかなりの時間が経っているが、そう言ったグローリアスの瞳に移る左舷の向こうの敵艦はまだまだ粒のようにしか見えず、敵の射程圏に入るまではまだ少しだけ余裕がある事を彼女に伝える。いつの間にか首筋に滲んでいた冷や汗を袖で拭いながら、グローリアスは一度呼吸を整えてから部下への語りかけを続ける。

『二人ともよく聞きなさい。確かに私達にとっては危険な事態だけど、敵と私達では戦闘においての目的が明確に違う。そこを上手く利用できれば、勝算はあるわ。』

それぞれの艦橋天蓋の上で文字通り声を失って呆然としていたアカスタとアーデントだったが、グローリアスの落ち着いた声は二人の心を撫でるかのようにその耳に届き、それまで凍りついていた二人の喉を解放する。その中でも3人の内で最も恐怖を募らせていたアーデントは、グローリアスのその落ち着きにすがる様な想いを込めて声を返す。

『勝算・・・？ か、勝てるんですか・・・？』

『アルファベット作戦における私達の任務は、奴等と戦う事ではないわ。私の甲板に積まれた航空機と、私達3人が無事にスカパフローまで辿り着く事よ。敵に遅滞行動を展開しつつ味方の支援が貰えれば、充分に勝算はある。そして敵には駆逐艦や巡洋艦の補助艦艇が無い。つまり敵からの砲撃回避のみに専念すれば良いだけ。運頼みの面もあるけど、上手く砲撃さえ凌げれば逃げ切れるわ。』

グローリアスの静かな声をヘッドフォンから耳に響かせていたアカスタとアーデントは、その声に撫でられるかのようにしてざわついていた心を静めていく。ヘッドフォンと耳の隙間から漏れてくる波と風の音に二人が気付くと同時に、それまで小刻みに震えていた二人の膝は動きを止める。しばらく振りに戻った自身の身体の重さをアカスタもアーデントも感じ取り、その事によって二人は自身が冷静さを取り戻しつつある事を自覚し始めた。今のアカスタとアーデントの目に映るのは先程よりも少し色合いが増した海と、その遥か向こうに小さく見える敵の艦。今まで直視できなかった敵の姿であるが、二人はそこに何の感情も湧かせなくなっていた。危機的な

状況という点では変化は無い今という瞬間だが、二人の心には小さいながらも「希望」という名の光りが灯り始めたのである。

その姿はグローリアスからは見えていないが、耳に添えたヘッドフォンの奥から響いてくる二人の心の変化を示す言葉に、彼女は部下達のそんな様子を窺い知る事が出来た。

『そ、そっか・・・、正面から撃ち合いをしなくてもいいんだ。大袈裟にターンして魚雷を撃つだけでも、敵にしたら回避行動を取らざるを得ないんだ・・・。おい、アーデント!』

『解ってるよ、アカスタ。私の艦長も水雷戦の用意を指示したよ。それと煙幕の用意もね。』

覇気が伴い始めた二人の声と自身が意図した事を理解してくれた事を示すそのやりとりにより、グローリアスは僅かに口元を引きつらせる。集団戦において最も大事な意思の統一。24年に及ぶ戦艦艦艇の艦魂として過ごしてきた経験から学んだそれを、戦闘が始まる前に実らせた事にグローリアスは安堵したのだった。

まず一つ敵に対しての武器を得た事を噛み締めながら、彼女は再び双眼鏡を両目の前に添えて敵の姿を窺う。そしてそこに認められた敵情の変化を、グローリアスは声色を変える事無く言った。その変化は、先程からグローリアスも予想していたからである。

『左舷の敵は増速して緩く取舵をきったわ。私達の針路を塞ぐつもりね。あっ・・・!』

グローリアスが小さく驚きの声を上げる中、彼女の足元から乗組員達の声が響く。矢継ぎ早に艦橋のあちこちから放たれる報告を天蓋の上に立っているグローリアスが耳にしたその時、ヘッドフォンの奥からは同じ様な言葉を放つ部下達の声が木霊してきた。

『アカスタ、もう一つの敵性艦を確認!』

『アーデント、こっちでも視認! 先頭の回頭した艦と艦影がほぼ同じ、やっぱり・・・!』

『ええ。どっちがどっちかまでは解らないけど、シャルンホルスト艦とグナイゼナウ艦で間違いないわ。』

部下の声に被せる様にしてそう言ったグローリアスが睨みつける左舷の向こう。そこには浅く取舵をとって側面を僅かに見せる艦の背後に、同じ艦影を持つ艦が濛々と排煙を昇らせて突撃してくる姿があった。

3人と時を同じくしてグローリアス艦のヒューズ艦長もそれを認めており、彼は兼ねてから考えていた取りえる策を実行に移すべく、護衛のアカスタ艦とアーデント艦に向かってとある行動の要請を行うよう命じる。その声を足元から聞いていたグローリアスは敵艦を睨みつけたまま、すぐに右手に握ったマイクを口に近づけて同じ内容を部下に伝えた。

『アカスタ、アーデント、煙幕展開用意。』

自身の声が続いて部下達の返事が彼女の耳に響いてくる。敵に先駆けて行動を開始した事はグローリアスの心に少しでも安堵の色を浮かべてくれるが、眼前の敵影は彼女のそれをすぐさま失わせた。まだまだ肉眼では粒の様にしか見えない敵影であるが、双眼鏡を通して見るその様子にグローリアスを始めた彼女の分身の乗組員達は思わず声を失う。

『来る・・・!』

やっとの事でそう呟いたグローリアスが視線を向ける海原。そこにあったのは相も変わらず艦首を海中に突っ込ませたように高くそ

びえる白波を伴って接近してくる敵艦2隻だが、取舵をきって艦の側面を晒した方の艦上にある砲塔は艦首と同じ方向を向いていない。その砲塔から生えている主砲は高々と仰角を与えられ、グローリアスの視線に対抗するかのようにして彼女を睨みつけていた。

アカスタとアーデントはグローリアスの呟きを受けて生唾を飲み込む音をマイクに響かせるが、グローリアスはその音を耳には入れていても頭には入れていない。

そして彼女達とその乗組員達は目測にして約26000メートルの向こうに、粒のような黒い艦影からパツと赤い炎が一瞬だけ放たれる光景を目に映す。刹那、唇を真一文字に結んで眉をひそめるグローリアスの足元からは、静寂を切り裂くようにして観測していた乗組員の叫び声が響いてきた。

『敵艦発砲ー！』

乗組員の声に続き、グローリアスもまた声を発して部下達への指揮を始める。

『取り舵をきっていま発砲した敵を一番艦、それに後続する艦を二番艦と仮定！』

グローリアスの言葉にアカスタとアーデントは了解の意を含んだ声を返したが、言い終えると同時に視線を向ける先から響いてきた轟音によってグローリアスはその声を聞き取る事は出来なかった。自身もその昔は放っていた発砲音というあの轟音。その事を悟ったグローリアスの耳には、続けて破裂したパイプから高圧蒸気が断続

的に漏れるのと似た音が届いてきた。それは彼女が生を受けて以来初めて耳にする音であったが、その音の正体もグローリアスには解っていた。耳を劈くその音を確かめるようにして、グローリアスは空に視線を向ける。聞こえ始めてからすぐに一段と大きくなったその音は段々と小さくなっていくが、その音はやむ気配がない。そしてふとグローリアスは敵のいる方向とは逆の右舷に顔を向ける。するとそこには数十メートルにも及ぼんとする水柱が突如としてそびえ立ち、すぐさまそこから生まれた爆音と爆風がグローリアス艦の右舷に襲い掛かった。

滝の様に降ってくる巻き上げられた海水を頭から被るグローリアスは、僅かに表情を歪めて頭に乗せた帽子が落ちないように手で押さえる。顔の横をすり抜けていく生暖かい風は彼女の濡れて重くなった前髪を強引に靡かせ、同時に真正面から彼女の顔へと海水の塊をぶつける。

全身ずぶ濡れになるグローリアスだが、彼女はそんな事を気にも留めずに再び敵のいる左舷に顔を戻した。

『1632。敵一番艦、試射開始。次は左舷手前よ。』

グローリアスが何事も無かったかのように落ち着いて声を発する最中、彼女の正面からはまたしても発砲音が響いてくる。そして再び特徴的な蒸気が漏れるような音が続くと同時に、グローリアス艦の左舷数百メートルの辺りには水柱が高々とそびえ立った。その直後には再び生暖かい風と轟音に包まれ、グローリアスは僅かに身を屈めてそれに耐える。二度も頭上から浴びる滝のような海水によって、彼女は上着所か靴の中まで濡れてしまうが、それでもグローリアスは表情を変えていなかった。敵が行おうとしている攻撃がまだ本格的な物ではない事を知っているからである。僅かに首を左右に振って水気を切り、治まり掛けた海水の山の向こうで霞んで見える2隻の敵艦を再び視界に捉えるグローリアス。その耳にはアカスタ

とアーデントが自分を心配する声が聞こえてきていたが、同時に敵の一番艦がその主砲の全門を同じ仰角に揃えている事を認めたグローリアスは、騒がしい部下達の声をかき消すかのようにして叫んだ。

『本射!! 来るわよ!!』

マイクを握った手に力を込めてそう叫ぶグローリアスの向こう。彼女が叫ぶと同時に、そこにあった一番艦は艦尾にある分も含めてグローリアスに向けていた3基9門の主砲を一斉に発砲し、その身を一瞬の赤い炎で包む。するとグローリアス艦の辺りは落雷でもしたかのような猛烈な爆音が響き、次いで幾重にも重なった漏れた高圧蒸気に似た音が木霊していく。だが先程とは違い、グローリアスを含めたその艦上にいる者達は、その独特の音が今度はほとんど静まらずに鳴り響いていく事に気付く。

そしてその音が鳴り止まぬまま、グローリアス艦の左舷中央部のすぐ近くには、水柱が連なった事によってできた海水の山脈が隆起した。

襲い来る轟音と海水の大滝、そして乗組員達の足元を揺らす激しい振動。低く短い呻き声を放って背後の壁に捕まりそれに耐えるグローリアスだったが、彼女はその水柱の位置が思いの外近かった事に顔をしかめたまま驚く。

『初弾でこれ・・・!? な、なんて正確な砲撃精度なの・・・!』

自分の艦の艦橋天蓋でその悲痛な上官の声を耳にしたアカスタは、

左舷で火を噴き始めた敵艦から背後を後続するグローリアス艦に視線を流した。グローリアス艦は先程の轟音と爆風が嘘だったかのように霧雨となって散っていく水柱の壁を左舷に伴いながら、うねった波に大きく上下に揺れられて続いてくる。自分よりも20倍も大きい上官の分身であるグローリアス艦だが、今のその姿は川を流されて行く木の葉の様にフラフラと波間に浮かんでいるようであった。アカスタは思わず握っていたマイクを口に近づけ、大きな声で上官の安否を問う。

『グローリアスさん!! 大丈夫ですか!?!』

声を放ったその間際にも、グローリアス艦の左舷近くには再び凄まじい爆音と熱風を伴って海水の壁が隆起する。その光景に最後尾として後続する妹も我慢ならなかったのか、アカスタの耳に添えたヘッドフォンからはアーデントの叫びが木霊してきた。

『グローリアスさん・・・!!!!!!』

二人の悲鳴にも似た声が響いているであろう上官だが、アカスタの耳に響ってきた上官の言葉はそれを制止する物であり、それはアーデントもまた耳にしていた。

『余計な事を口にするのはやめなさい!!!!!!』

グローリアスの一喝に僅かに身を震わせるアカスタであったが、彼女はそれによって上官のその身には何一つ損傷が無い事を悟り、顎の先端に滴る汗を袖で拭って荒い息を落ち着かせる事が出来た。そして自身が取るべき行動の用意がまだ終わっていない事に今度は腹立たしさを覚え、決してその声が届く乗組員がいない事が解っているにも関わらず、アカスタは足元にある自身の艦橋を睨みつけな

がら声を荒げる。

『くっそー！！ 煙幕の用意はまだかよ！！！！』

地団駄を踏んで彼女は怒りをあらわにするが、直情的なアカスタのその言葉を耳にしたグローリアスはそれをなだめる為に今度は静かな声で指示を伝える。激しい動揺に耐えながら声を発している事を示す苦しい上官の声を、未だに指示通りの行動ができていないアカスタとアーデントは歯を食いしばりながら耳にした。

『落ち着きなさい、アカスタ。ぐっ・・・、敵の射撃精度が思ったより良いわ・・・。お互いの間隔をもう少し開けてー。』

足元を睨みながらグローリアスの声を耳に入れていたアカスタだったが、上官の声が途切れると同時に、アカスタは視線をむけている足元が一瞬だけ背後から照らされるのを認めた。そして彼女はその奇妙な光景に怒りを忘れて一瞬だけ呆然となるが、すぐに背後から鉄が軋んだりぶつかり合ったりする音が混じった大音響が襲い始める。その爆音に思わずすくみ上がったアカスタの耳には、僅かに遅れてグローリアスの悲鳴が届いてきた。その声に気付いて後ろを振り返ったアカスタの瞳には、両舷に林立する水柱の中で、艦中央から黒煙とそこにあったであろう鉄材を勢い良く巻き上げられたグローリアス艦の姿があった。

『あ・・・、あがつ・・・。』

グローリアスは背後にあった隔壁に身体を打ち付けられ、崩れるようにしてそこに倒れていた。

身を突き刺すような激しい痛みで左脇腹を襲われ、彼女は苦しみながらも無意識に患部に手を伸ばす。彼女の手伝に伝わってきたのはそこら中に降り注いでくる海水ではない別な何かを示す、生暖かくドロドロとした液体の感触だった。同時にそこにあった自分の身体の一部が無くなっている事を彼女は悟り、自分が陥った状況を理解する。いつの間にか苦しくなっていた呼吸を嚙んだ奥歯に力を込めて整えようとするグローリアス。その横になった視界には、自分の身体の一部だったのであろう鉄の残骸が空を示す方向から無造作に落下してくる光景が広がっていた。

苦痛に呻き声を上げながらも、グローリアスは倒れている床の下から響いてくる被害報告によって自身の損傷の詳細を知る。その報告に対して折り返して指示を出すヒューズ艦長の声に、グローリアスは自身もまた指揮官である事を思い出し、目の前に転がっていたマイクを震える手で手繰り寄せて口に近づける。

『グ、グローリ・・・ス、ひ、被弾ッ・・・！』
『グローリアスさん！！！！』

部下の声を支えにするかの様にして、彼女は真っ赤な血と肉の切れ端がぶら下がる脇腹を押さえながら立ち上がる。いとも簡単に体重を逃す両の脚は当てにならず、グローリアスはマイクを握った腕を壁に引っ掛ける様にして立ち上がる。身体のどこかに力を込めるその都度放たれる、グローリアスの苦痛に歪んだ呻き声。それを耳にした部下達が必死に彼女の名前を呼んでくるが、グローリアスは立ち上がった事で目にした自身の分身の惨状を甲板に認め、部下達の声を無視して自身の状況を伝える。

『ひ、飛行甲板、貫通・・・！ 格納、庫で、炸裂！ はあはあっ・・・！ ボイラーケース・・・、グ、は、破損・・・！ き、機関出力・・・、低下ある、も、航行に、くあッ・・・、支障無し・・・！』

『1638！ グローリアス艦、機関出力低下あるも航行に支障なし！！ アカスタ、アーデント供に了解！！』

それ以上グローリアスの痛々しい声を聞く事が出来ず、アカスタは無礼を承知で強引に上官の言葉を遮った。そしてグローリアス艦の後ろを続くアーデントもまた、眼前の光景とそれまで響いてきた悲痛なグローリアスの声を受けて、上官に無理をさせまいと敵情の把握に努める。

グローリアスは部下の気遣いに感謝しつつも、気が抜けて崩れそうになった両脚に再び力を込めて甲板を見下ろす。黒煙を噴出す大穴を作った甲板ではその付近にあった積荷の航空機が燃えており、塗料の焼ける強烈な匂いが黒煙と共に甲板を支配していた。耳を澄まさずとも勝手に聞こえてくる絶え間ない連続した轟音と、その発信源である自身の周辺に林立する水柱。グローリアスはさらにその向こうに霞む敵影を捉えようとするものの、立っているのも辛い彼女にはそれを探す事が出来ない。だがそんな彼女を全力で助けようとする部下達の声によって、彼女は敵情を知る事が出来た。雑音混じりとなったヘッドフォンから漏れてくるアーデントの声に、グローリアスは強く歯を食いしばりながら耳を傾ける。

『敵一番艦、針路330度、29ノットで航行しながら斉射続行中！ 敵二番艦は針路同じで未だ増速中、但し一番艦より優速！！』
『グ、グローリアス、りよ、了解・・・！ んぐッ・・・！』

なんとか声を返すグローリアスであったが、彼女は那時、喉まで出掛かった事を口にするのを良しとせず、バツクリと切り裂かれ

た左の脇腹を押さえる手に力を込めて口を嚙んだ。

「煙幕展開急げ」

その言葉を口にすれば幾分は痛みも和らいだのかもしれないが、そんな事は百も承知であるアカスタとアーデントの心の内が彼女には無難に想像できたからである。そしてさらに彼女の脳裏を過ぎったのは、そんな二人が話していた艦魂として生きる上での大事な言葉の内の一つ。他人を見返り無く慈しむ事の出来る「慈愛」であった。何時如何なる時にも捨ててはならないとされるそれらの言葉を胸に秘め、グローリアスは苦しみと痛みに耐えながら彼女等と戦う事を心の中で自分に言い聞かせる。やがて彼女は歪んだ表情のまま顔を上げ、黒煙の隙間に見える曇天の空に向かって祈る。

Our Father which art in heaven,
Hallowed be thy name.
Thy kingdom come,
Thy will be done in earth, as
it is in heaven.
Give us this day our daily bread.
And forgive us our debts, as
we forgive our debtors.
And lead us not into temptation,
but deliver us from evil,
For thine is the kingdom, and
the power, and the glory, for
ever.
Amen.

(天にまします我らの父よ。願わくは御名^{みな}をあがめさせたまえ。
御国^{みくに}を来たらせたまえ。み心の天に成る如く地にもなさせたまえ。
我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯す者を我らが赦^{ゆる}
す如く我らの罪をも赦したまえ。我らを試みに遭わせず悪より救い
出したまえ。国と力と栄えとは限りなく汝のものなればなり。アー
メン。)

第四五話 「背を合わせる物／其の四」

林立する水柱の間隙を縫って駆け抜けるグロリアス艦。

艦中央から巻き上げた黒煙によって、前後に位置する護衛のアカスタ艦とアーデント艦が確認し辛い中、グロリアスは決して乗組員には見る事が出来ない己の血が飛び散った艦橋天蓋にて、壁に背を預けながらもなんとか立っていた。服の上から巻いた包帯の端を握った手に力を入れるグロリアスだが、それと同時に彼女の左の脇腹には激痛が走り、強く結んだ唇からは思わず声を上げてしまう。

『ううつ・・・！！！！』

再び崩れ落ちそうになる両の脚に力を込めて、グロリアスは痛みに耐える。血が滲んでベットリと肌にへばりつくズボンの左側大腿部の感触と、眼下に広がる大穴の開いた甲板の惨状に眉をしかめる彼女であったが、その廻りに巻かれた包帯の左脇腹は白いままであり、それが意味する事をグロリアスもまたふと気付いた。先程から痛みの震源地に当てている彼女の手には、被弾と供に覚えた生暖かくドロドロとした感触が伝わっていないのだ。そこにある痛みと熱さは相変わらずであるが、そっと押さえていた手を脇腹から離してその手のひらを顔に向けるグロリアス。彼女の瞳に映ったのは、被弾時よりも遥かに少ない自身の血が付着している手であった。

その光景にグロリアスの顔からは僅かに苦しみの色が消え、続いて足元から響いてくる乗組員達の声に彼女は自身の身体の変化をようやく認識する。

『中甲板の火災は消化に成功！ 併せて吸気口への煙の流入も防げました！』

『よし、艦長！ 缶圧が下がっていた2缶は復旧に成功！！』
『艦長了解！！』

その声を耳にしたグローリアスは、視線を向けていた左手を握って拳をつくる。両舷を包む水柱から発せられる轟音と爆風によるめきながら、彼女は右手に持っていたマイクを口元に近づけて部下に自身の状態を教えた。

『16、44・・・！ グ・・・、グローリアス。缶、復旧・・・！
！ そ、速度を・・・、艦隊速度に戻すわよ！！』

アーデントは上官の声を受けて、すぐ前方で水柱の森を駆け抜けるグローリアス艦に視線を流す。甲板中央から靡く煙が細くなり始めるのと逆行して、グローリアス艦は煙突から黒煙を一層多く昇らせ始めた。それと同時にグローリアス艦の艦尾に発生する白い水飛沫の勢いが増し、眼前の上官の分身は再び被弾前の速度で駆け始める。それに対して了解の意を示す姉の声がヘッドフォンから響き、アーデントもまた姉と同じ言葉を発する。

『アーデント、了解！！』

一方的に攻撃されている今という瞬間の危険性は何一つ変わらないが、グローリアスの苦しみながらも凜とした声はアーデントの心を落ち着かせる。彼女は飛び散った海水によって頬にくっついていた黒髪を指で流し、耳の上を通して引っ掛けた。巡洋戦艦の主砲弾を被弾しながらも弱音を吐かず、水柱が至近距離に次々と現れる海面をひた走る上官の姿。そしてそこに伴った、グローリアス艦の艦

尾にて降り注ぐ海水の雨によって濡れながらもなお健在であるホワイト・エンサインが、アーデントの茶色の瞳に映る。

アーデントの身体には既に震えは無く、被弾した上官への心配も少し薄らいだ。「まだ大丈夫。」と胸の中で呟いた彼女は一度小さく深呼吸してから、自身が別と感じていた敵情の変化を確認する為に左舷へと視線を戻す。

速度の増減によるトラブルが功を奏したのか、左舷にて一瞬の炎を纏うドイツ側の砲撃は幾らか精度が欠け始めた。艦のすぐ両脇に隆起していた弾着による水柱の群れは、段々とグローリアス艦から遠い所に出現し始めていく。その事を確信したアーデントの耳には、グローリアスもまたそれを確認した事を示す声が流れてくる。

『敵一番艦の射撃修正、うっ……、思うようにできて、ないわ・・。ア、アカスタ・・!!!』

『はい！ 1645！ アカスタ、ジグザグ航行を始めます!!!』

グローリアスとアカスタのやりとりと同時に、同じ内容の指示がヒューズ艦長からアカスタ艦の艦長へと伝達される。やがて隊列先頭を駆けるアカスタ艦は緩く舵をきって大きな蛇行運転を始め、グローリアス艦とアーデント艦がそれに続いた。針路を不規則にする事で敵の砲撃修正を混乱させようとする行動であり、それを示すようにアーデントの視界には、先程までは目前にあったグローリアス艦の至近距離で交叉していた弾着による水柱が左右両舷へズレると共に、今度は前後にもズレ出している光景が映り始めていた。

『よし……!』

思わずそう呟いたアーデントは、顔の前に右手を持ち上げて拳を作る。それさえ凌げれば希望はあると上官が口にした敵の砲撃が、いよいよここに来て散漫になってきたのである。グローリアス艦は

被弾によって損傷を受け、先程からヘッドフォンから聞こえてくるその分身たるグローリアスの声は苦しそうの一言であるが、状況は彼女達が願った通りに傾きつつあり、その事はアーデントの凍えるように硬直した心に幾分の余裕を与えてくれる。グローリアス艦の上空から降り注ぐ海水の雨を吸って重くなった水兵帽を一度被りなおし、アーデントは再び左舷の敵艦に向かって視線を向ける。だが彼女の瞳に敵影が映った矢先、そこには一番艦と同様に発砲炎で身を纏い始めた二番艦の姿があった。

『ひ、1646ー！！ 敵二番艦の一斉発砲を確認ー！！』

敵艦を観測していた乗組員の叫びを耳にしたグローリアスは歪めた表情のまま僅かに目を見開き、すぐさま左舷の敵影に目を凝らす。離れた所へと移動した水柱の山々はグローリアス艦からの視界を妨げる事は無く、グローリアスは報告にあった敵の二番艦を容易く見つける事が出来た。会敵から既に時間も大分経ち、お互いの艦隊の距離は14600メートルにまで近づいているが、件の一番艦くだんの低下し始めた砲撃精度と二番艦が一斉射をした事はグローリアスにとっては少しだけ脇腹の苦痛を忘れさせる。壁から背を離し、すぐ近くにあった手摺に右手を引っ掛けるようにしながら彼女は身を流すと、僅かに溜め息を放ってから声を発する。

『思った、通り、と、統制射撃……。い、一番艦の射撃、データを、つ、使ってるんだ、わ……。』

グローリアスは詰まる様な呼吸を楽にしようと胸元にてぶら下が

っていたネクタイを前に引っ張り、自らのダメージをほんの少しだけ和らげる。僅かに張り詰めた緊張感が彼女の瞳から薄れるが、そこには被弾時よりも多い18門の主砲でこちらを睨みつける敵艦隊の姿がある。

だが彼女の予想通り、ドイツ艦隊の二番艦は先に射撃していた一番艦の射撃データを受け取って試射を伴わずに攻撃していた。統制射撃と呼ばれる艦隊射撃法であるが、グローリアスは散漫になり始めた一番艦の射撃データを用いた二番艦の射撃精度は、今の一番艦のそれと同じ様にそれほど正確ではないと予想していた。そしてその事を示す弾着の水柱がグローリアスの目の前、即ちグローリアス艦左舷艦尾寄りの数百メートル付近にそびえ立つ。

一度乱れた射撃精度を再び修正するのは中々に難しい事であり、まして彼女達の艦隊は左右への蛇行を行って遠近、及び未来位置を悟らせないように航行し始めている。これを光学的な方法で正確に捉える事は、観測する者に余程の腕前が無いとまず成功しないのだ。

巡洋艦時代に自身もその事に歯がゆい思いをした経験が、空母となった今のグローリアスの危機を大いに助けてくれる。自分達よりも優速な敵との距離が縮まっている事は残念であるが、それも考えようによっては雷装を施した護衛の駆逐艦の反撃もし易いという事であり、グローリアスは遠距離からの射撃一辺倒になっていない今の戦況を腹の底から憂いでいる訳ではなかった。心のどこかで表に出ようとする弱気な自分を押し殺すように、脇腹を押さえた左手に力を入れて顔を歪ませるグローリアスだが、その耳には彼女の希望をさらに助長する部下達の声が届く。

『アカスタ！ 発煙薬品の調査はあと少し！！ 煙幕展開準備はもうすぐです！！』

『アーデント！ 機関異常燃焼の準備は後数分！！ 3缶の内、2缶は既に準備完了です！！』

その声にグローリアスはただ一言『了解。』とだけ返したが、その内心は目前まで迫った安堵に声を上げて跳び付きたいという衝動を必死で抑えていた。

ただでさえ精度の欠く砲撃に対して煙幕まで展開できれば、ドイツ艦隊は最早完全に命中弾を期待できない状況に陥る。例え巡洋戦艦と言えども隻数が僅かに2隻のドイツ艦隊は、それに対しての別なオプションがとれない。相手よりも少ない戦力で逃げの一手を決め込んだ艦隊をただっ広い大海原で捕捉するのは無理であり、なにより近づいてその行動を取ったなら4連装の魚雷発射管2基を搭載する駆逐艦に反撃される恐れがある。シャルンホルスト艦にしろグナイゼナウ艦にしろ、もし片方がまかり間違ってこの北海のど真ん中で航行不能にでもなったら、ドイツ側はその救援を行う為に無傷の僚艦を使用せねばならないので追撃は中止する他無い。支援の駆逐艦や巡洋艦を連れていない戦艦は、その実は遠距離から砲弾をぶち込む以外に戦い方は無いのである。

そして空母戦力を持たないドイツ艦隊は、目の前の獲物を追って深追いする事も出来ない。ドイツ艦隊にしたらいま駆けているこの海はついこの間まで敵の空母がうろついていた危険な海域であり、陸上での急速な戦線展開は支援の為に陸上航空戦力の充実が迫っているという状況を生んでいたのだ。

文字通り脇腹をえぐられたグローリアスは歪めた表情を落ち着かせる事が出来ないが、それでもここまで敵と自分達の戦闘条件を冷静に比較しており、彼女は結論として逃げ切れる可能性を明確に導き出していた。

あともう少し、もう少しだ。

必死にその言葉を胸の中で唱えながら、左舷にて轟音と発砲炎を幾度も放つ敵艦隊を睨みつけるグローリアス。荒い呼吸と激しい苦痛に襲われ、終いには吐き気まで催し始める彼女だが、今まさに手を伸ばせば届く距離にまで迫った生き残れる可能性を信じ、鋭く尖らせた色違いの両目を敵に向ける。そしてついに彼女の耳には、待ち望んだ部下達の声が届く。曇天の空の下、雑音混じりで響いてきたその声に、グローリアスは左舷の敵から自らの分身の前後にて波を掻き分ける部下達へと視線を流した。

『1656!! アカスタ、煙幕展開――!!』

『アーデント!! 煙幕展開始めます!!』

『グローリア、ス、了解……!!!!』

グローリアスは部下の行動に精一杯の大声を放って感謝の意を滲ませ、脇腹に当てていた左手を離した。天蓋端の手摺に両手で寄りかかる彼女の身体には前にも増した激痛が走るが、その瞳に映った部下達の姿に思わず口元を緩める。自身の分身である艦首舳先の向こうでは、その小さな艦体のどこから生まれたのかと疑ってしまう程の特大の黒色と白色をした煙の塊が吹き上げながら、彼女を隠す為に僅かに左舷へと針路を逸らして航行するアカスタ艦があった。そしてそれまで背後を駆けていたアーデント艦はアカスタ艦と同じく大きな煙を煙突と艦尾から上げながら、グローリアス艦の右舷を通って追い越して行く。姉と共に35ノットの快速を誇るアーデント艦は17ノットしか出せていないグローリアス艦を易々と抜き去り、アカスタ艦と同じ様にグローリアス艦の前方にて煙の壁を形成し始めた。空一面を覆う曇天をそのまま映したかのような煙幕の壁はまだ少し薄いものの、次第にグローリアス艦とドイツ艦隊との視界を遮り始める。左舷に霞んでいく敵艦を横目に、グローリアスは一度力なく俯いて溜め息を吐く。だがその表情には歪んでいながらも、憂いが限りなく薄くなった事に喜びを滲ませる笑みがあった。

そしてすぐに彼女は、艦橋天蓋から艦橋へと通じるラッタルへと足を引きずりながら歩き出す。見晴らしの良い天蓋は指揮を取る上では絶好の場所であるが、離れたと言えども倍加した敵の着弾で発せられる猛烈な音は、それまでグローリアスの足元から聞こえていた乗組員の声を遮り始めていたのだ。まして立つ事すらも辛いその身では、敵を長時間に渡って直視する事もまた苦しい。その為にグローリアスは乗組員達の声がすぐそこで聞き取れる艦橋内の片隅へと移動し、自らの乗組員達の報告を元に指揮を取ろうとしたのである。幸いにも恐れを忘れ始めたアーデントは目にする細かな敵情の変化をヘッドフォンの奥から声に乗せてくれており、グローリアスはその目で敵を確認する必要を薄くしてくれている。故に彼女は重い身体を引きずりながらも、その胸の中には絶望感など無かった。

ふいに走る脇腹からの激痛に思わず右手を患部に流し、それによってその手に握られていた無線電話機のマイクが滑り落ちて行き、右肩の上を通って繋がっていたケーブルが張る事によってグローリアスの腰の辺りで宙吊りになった。辺り一面から空気を伝わって流れてくる爆風に揺られ、まるで振り子の様に左右に揺れるマイク。被弾時にこびり付いた自身の血をラッパ状になったマイクの根元辺りにグローリアスは認めるが、その血は降り注ぐ海水によって洗い流されてマイクの先から薄く静かに滴っていた。そして口元からマイクが離れた事を理解した瞬間、彼女は安堵の息を吐きながら静かに呟いた。

『よ……し……』

グローリアスは僅かに隙間を作った唇を再び真一文字に結び、マイクをそのままにラッタルへと足を進める。その先からはアカスタやアーデントと同じ様に、恐怖に打ち勝って覇気の籠った声を放つ彼女の乗組員達がいた。そして艦橋の一番奥では、白い軍帽を逆に

被って羅針儀の前にて声を荒げるヒューズ艦長の背中がある。グローリアス艦の艦長として赴任して僅か10ヶ月の彼はそれ以前には潜水艦部隊を率いていた経歴があり、ノルウェーでの戦闘では慣れない航空母艦と航空機事情によって他の艦体や陸上の部隊からの評判は良くなかった。敵艦隊の察知が遅れたのも、見張り員を駆逐艦よりも背の高いグローリアス艦が配置していなかった事が原因であり、その大元は彼の命令一つである。だがグローリアスの色違いの両眼に映る今の彼の背中中、自分には勿体ない程に卓越した水上戦闘を行える優秀な指揮官の背中であつた。グローリアスはゆっくりとラッタルを降りながら、決して彼が耳にする事は無いと解っている自身の声を放とうとする。胸一杯に詰まった感謝の気持ちを伝えよう。

しかし神は、そんなグローリアスと彼女の部下達、そしてそこに居たユニオンジャックを掲げる全ての人間から視線を逸らした。

その時、グローリアスの耳には最早何度目かも数えていない程に聞き慣れた高圧蒸気の漏洩音に似た音が届いてきた。既にその音が繰り返される中で20分近くも過ぎしてきた彼女と乗組員達は最初の内は気にも留めなかったが、先程から繰り返される同じ音とはそれが違う事に気付く。音量が一際大きくなってからやがて段々と小さくなり、その最中に艦とは的外れな所に水柱の山脈がそびえ立つ事がしばらくの間は繰り返されていた光景。だが今その場に響く聞き慣れた音は、次第に大きくなるばかりで一向に小さくならない。そしてグローリアスとその乗組員達はただ一度だけその音を耳にしており、それに纏わった真新しく強烈な記憶を瞬時にこもごもの脳裏に過ぎらせる。

刹那、全員が脳裏に浮かべた絵が、その場に強烈な音と爆風を放

って広がった。

『1657！　アーデント、水雷戦準備良し！』

艦尾左舷寄りに黒煙の壁を作って走る姉の姿を視界に入れながら、自身の分身の艦橋天蓋上で大きな声で叫ぶアーデント。頬に滴る汗を拭い、艦隊の先頭を走る彼女は、自身が発する黒煙の壁と姉のそれが上手く上官を隠す様に小刻みに針路を変え、さらに敵艦の警戒とやる事が多い。どうやら敵はグローリアス艦のみに照準を絞っているらしく、前列を航行するアーデント艦とアカスタ艦の至近はまったく着弾の水柱は出現しない。さらに先程からグローリアス艦を囲むように発生していた水柱の山は、その付近から大きく離れた位置へと流れている。アーデントはそんな背後の情景に強張っていた表情を緩め、小さく溜め息をつく。もちろん安心はしておらず、ドイツ艦隊は砲撃精度を得るためかまだまだ距離を縮めようとしており、彼女はその姿を視界の端から外していない。

その光景を認めるアーデントの乗組員達の声が、彼女の足元から響いてくる。駆逐艦長の指示に従って水兵達が甲板を走り回り、アーデントはその様子を黙って見守る。艦中央と艦尾よりにある2基の4連装魚雷発射管の周りに集まった彼等は、一撃必殺の魚雷を取り扱う水雷科の者達。

隙あらばその横腹にぶち込んでやる。

水兵達と同じ思いを抱いて普段は丸い瞳をサーベルの様に尖らせ

るアーデントだったが、彼女はふとその視線を上げる。自分の分身の艦尾の向こうで白波を掻き分けるグローリアス艦がそこにはあったが、突如としてその付近に水柱が一つ、また一つと出現し始める。上官の分身はその衝撃にフラフラと揺れているがそこからは爆炎や鉄材が舞い上がる様子は無く、アーデントは特に表情を変える事も無かった。だが次の瞬間、何かが爆発する大きな音がアーデントが顔を向けるグローリアス艦から襲ってきた。何が起きたのか解らず僅かに見開いた瞳を向け続ける彼女だったが、爆発音が止む前に彼女の耳に着けたヘッドフォンからはその分身たる上官の悲鳴が響いてきた。

『あああああああ……！！！！！！！！』
『グ、グローリアスさん！？ どうし……―！』

返す言葉を言い切る前に、アーデントの唇は動きを止める。敵前であるにも関わらず呆然としてグローリアス艦に視線を向けた彼女の瞳には、その大きな煙突とセットになった事で自分達よりも遥かに大きく見えていた筈のグローリアス艦の艦橋が映る。そして見慣れたその上官の艦橋は煙突の手前ほどで食い千切られた様にえぐられており、灰色のペイントをしていた筈のそこには真っ赤な炎が一面に広がっていた。

さっきまでそこにあつた筈の乗組員達の声は嘘だったかのように静まり、天蓋すらも吹き飛ばされて吹き曝しとなった艦橋。持ち主を失った手や足が散乱し、壁には艦の付近にそびえ立つ幾重もの水柱をそのまま写した様な血の山が描かれている。折り重なった肉の

塊とその隙間から漏れる炎、そしてその下地は辺り一面に水溜りとなった血と床。この世の物とは思えぬ呻き声が小さく発せられては消えていく中、その艦橋の端では大河となって足元を流れる血をすすめるようにして突っ伏し、顔を押しえて慟哭するグローリアスの姿があった。

『あああああ・・・！！　　あああ・・・！！！！！！』

両手で押さえた彼女の顔の左側半分は、滴る血で雪の様に白い肌である事を隠す。頬骨の辺りから大きく裂けた傷とそこから生まれる強烈な苦痛に、グローリアスはただ叫ぶしか出来ない。やがて左側半分の顔を抑えた彼女の両手の指の隙間から、とめどなく流れる血と共に白いゼリー状の物質が細切れとなって落ちていく。落ちた先にある赤い川に飲まれてもそれは水面に浮かび、ゆっくりとその上を流れ始める。そしてその白い物体の一部には淡い緑色とは対を成していた筈の、淡く蒼い彼女の左の瞳の欠片があった。

だが痛みに耐えて閉じた右の瞳はそれを認める事はなく、グローリアスはただ顔を抑えて悲鳴を上げるだけだった。彼女の横に無造作に転がる頭部に装着していたヘッドフォンとマイクは、その悲鳴に包まれながら粉雪のように細かく白い光りを放ち始め、徐々にその輪郭を曖昧にしていく。

艦魂の能力として出現させたそれが、持ち主の意志に関係なく消える。それはグローリアスの体力が最早、それを維持する事すらも出来なくなっているという事を示していた。

艦の付近に発生する水柱から与えられた激しい動揺と、それに併せて揺れる血の湖面。その上で、グローリアスはただもがき、悲痛な叫びを上げる事しかできなかった。

『グローリアス艦が!!!!!!』

『おい!! 艦橋が燃えてるぞ!!!!!!』

足元から響いてくる乗組員達の声を入りながら、アーデントは拳を握ってただその光景を眺める。燃え盛る炎に包まれたグローリアス艦の艦橋は鉄製である事を疑わせるほどにズタズタに引き裂かれ、そこから下の構造物には真っ赤な滝が流れ落ちているのがアーデントの目にも映る。

『グローリアス、さん……。』

震える声でその分身たる上官の名を呼んでみるも、ヘッドフォンから返って来るのは同じ様に上官の名を呼ぶ姉の声だけだった。その艦首に立てた白波はまだ衰えていないものの、グローリアス艦が完全に戦闘不能の状態に陥った事はアーデントを含めたその光景を目にする者達全てにはっきりと伝わる。彼女達にとっては良い知らせである乗組員の声が足元から響いてきても、アーデントは歯を食いしばって俯くままであった。

『1658! 敵一番艦及び二番艦、発砲を中止した模様!!』

護衛の役目を果たせなかったアーデントは、瞳の端で光る物を必死に零れ落とさないようにしていた。催促など一切せずに自分達の煙幕を待っていてくれた上官の事が、彼女の胸に溢れるほどの悔いを湧かせていく。

もっと早く煙幕を展開できていれば、被弾しなかったはず……。

そんな言葉を胸の内で唱える度に、アーデントは誰かに責められている感覚を覚える。力の入った彼女の両の拳が震え、強く噛んだ歯の隙間から漏れてくる激しい後悔の滲んだ声。敵からの砲撃が止んだ事で波と風と自身の機関の音が響く中、アーデントは歪んだ表情のまま目を閉じて首を垂れる。水兵帽からしな垂れた前髪の向こう、アーデントの高い鼻の線が続くそこからは光る雫が一滴落ちた。

『旗^{きりふ}旒・・・信号・・・？』
『・・・？』

突如として聞こえてきたアカスタの声を受け、アーデントは顔を上げる。そこには被弾による損傷で黒煙を昇らせるグローリアス艦の変わらぬ姿があるが、破壊された艦橋の真後ろにてかろうじて残ったマストには高々と翻った色とりどりの小さな旗が翻っていた。さらに飛行甲板より一段下がった艦首の上甲板には、旗竿に向かって走る水兵の姿がある。アーデントはその様子を声を失って眺めていたが、やがて水兵が何枚かの旗を鋼索に付け替えてマストへと再び掲揚する光景を見て、彼女はまだ上官が命を落としていない事を悟る。

『グローリアス艦より信号！ 艦橋被弾、大破に伴い艦長戦死なるも、主計長指揮の操艦にて対応との事です！』

消えかけていた闘志の色を瞳に滲ませ始めるアーデントの耳に、乗組員による報告が響いてきた。同時に彼女は、自分を含めた艦魂として存在する者達の在り方を思い出す。進水と共に水面にその身を浮かべる時に生まれ、浮力を失った時に命の灯火を消すという艦魂の一生。それはアーデントに、眼前の艦の分身であるグローリアスが重傷を負いながらもまだ命の炎を灯らせ続けている事を教える。

『ア、アカスタ・・・!!』

『グローリアスさんは生きてるんだ!! アーデント、まだ終わってないよ!!!』

姉の言葉でアーデントは自身が抱いた可能性を確認し、彼女は頬に伝っていた物を荒く袖で拭う。力の籠った返事をすぐさまマイクに返し、アーデントは艦隊の先頭をかける者としての責務を続けて全うする事を心に決めた。彼女の左右に流した視界には、黒煙の壁を作り続けて疾走する姉と、燃え盛る艦橋を艦上に抱きながらも傾く事無く続いてくるグローリアス艦の姿が映る。被弾前とは全く味方の状況は変わっていない事を理解したアーデントは僅かにざわついていた心を鎮めるが、すぐさまそこにアカスタの報告が入ってくる。

『クッソー!! 敵艦隊、なお接近!!!!!!』

艦隊最左翼の位置を走るアカスタの声を受けて、アーデントは左舷に顔を向ける。するとそこには荒波を掻き分けて進み、先程よりも少しだけ大きく見える敵艦の姿がある。瞬間的な炎こそ纏ってはいないが、その主砲は相変わらず全門がこちらを睨みつけていた。

さらに距離を詰められてなおかつこちらよりも優速な敵艦隊は、アカスタとアーデントが形成する黒煙の壁の影響が無い所に占位するであろう。その事を予測して唇を噛むアーデントだったが、同じくその敵情を認めた彼女の駆逐艦長は一際覇気の籠った命令を発し、アーデントに対して今取るべき解決策を教える。

彼女は艦橋天蓋上の手摺まで歩み寄り、その上に両手を置いた。先程の駆逐艦長の言葉で僅かに恐怖の二文字を心の隅に発生させるも、上官の事を思いながら深く大きな深呼吸をする事で不思議とそれは打ち消される。

『アカスタ、そのまま煙幕展開を続けて……。』

突如聞こえてきた妹の声に、アカスタは驚いて艦首右舷寄りで航行するアーデント艦に目を向ける。その言葉の内容が何かを含んでいた事がすぐに想像できたし、なにより妹のその声には場違いな程の落ち着きが籠っていた。アカスタがそれを問おうと声を返す。

『何をする気、アーデント!?!』

『これ以上接近されると手の打ち様が無くなっちゃう。だから阻止行動に出る。』

『敵は巡洋戦艦よ!?! なに言ってる!?!』

『もうそれしか方法が無いのよ!?!』

『ぐっ……。!?!』

アカスタは言葉を詰まらせる。アーデントの言う通りで、今という事態への対策をアカスタは閃く事が出来ない。実質的な指揮を取ってきたグローリアス艦の艦長は戦死、頼みのグローリアスも先程から何度名前を呼んでも声が返ってこない。そんな中でアカスタが行き着く敵艦隊の接近に対する解決策は、戦闘可能な者が阻止行動に出る以外に方法はなかった。だがその相手は片方だけでも満載排水量38000トンと、自分よりも20倍はあろうかという程に大きい巨艦である。おまけにそのバケモノが2隻も口を開けて待ち構えている所へ満載排水量僅か2000トンという身体で突っ込むというのだから、アカスタの心配も無理の無い事であった。

軍人らしくとか英国淑女らしく等と、いつも理想を追い求めてそれを自分にも押し付けてくる妹のアーデント。時にはそれを疎ましく思った事さえもあるアカスタだが、この時ほど妹の身を案じた事は無かった。アーデントが口にした事が計算上では唯一の方策であったとしても、アカスタはなおも必死に思い止まるよう声を発しよ

うとする。だが彼女の言葉を待たず、眼前の妹の分身は煙幕の展開を終えると同時に急激に速度を上げ、大きく取舵をきって旋回を始める。

『グローリアスさんをお願い！・・・1701！！アーデント、阻止行動に出る！！』

『アーデント・・・！』

アカスタ艦の目の前を横切って、ドイツ艦隊へと突撃していくアーデント艦。その中でアカスタは妹の横顔を視界に入れて『戻れ。』と言うおうとするが、それに続いて視界を横切っていくアーデント艦のホワイト・エンサインを目にする。彼女達が誇りとして頂くその軍艦旗が翻る光景は、アカスタに自分が何者であるかを無言で伝える。

栄えある王室海軍の一員であるなら、ただ誠実に難事へ当たれ。

先輩から教えられたその言葉を脳裏に浮かべ、アカスタは強く唇を噛んで口を噤んだ。その口元の両横に伝っていく一筋の光りを輝かせながら、彼女は小さく呟く。

『アーデント・・・、頼む・・・！』

彼女達の頭上には煙幕がそのまま雲へと変わった様な曇天の空が広がっているが、敵を望む南西の空の彼方は雲が無く、赤く陽に焼かれ始めた空が顔を覗かせている。

そしてアカスタの湿った瞳には、夕日に染められて敵艦隊の鼻っ面に飛び込んでいくアーデント艦の軍艦旗が映る。涙で霞むその光景はアカスタにとっては、正直見たくは無い光景である。だが彼女は視線を逸らさなかった。それこそが死地に赴いていく妹への誠だ

と、彼女は胸の奥で言い聞かせる。

時間は1701。夜が間近に迫った事を告げる夕陽に包まれる中、旧式の駆逐艦であるアーデント艦とその乗組員達は悲壮な決意を持って、最新鋭の巡洋戦艦2隻に対して立ち向かって行った。

第四六話 「背を合わせる物／其の五」

艦首で切り裂く波音を掻き消す程に唸りを上げる自らの機関音を耳に、アーデントは引き締まった表情のまままで眼前に近づいてくる敵を睨みつける。旋回した砲塔から伸びたその砲門が逆に彼女の視線に対抗してくるが、既に臆する心を失ったアーデントはそんな敵影に表情を変えない。そして自身の機関音が先程からずっと耳に届いてくる事で、彼女は自身が極めて冷静である事を理解する。自身の分身が速度を増した事で顔の横を駆け抜けていく強い潮風に髪を靡かせながら、アーデントは瞳を向けていた先にとある変化を認めた。彼女はすぐさま右手に握っていたマイクを口元に近づけ、まるで独り言を呟くかの如く静かに声を発する。

『1703。アーデント、一番艦を二番艦が追いついた事を確認。』

言い終えるとすぐにアーデントの耳には、自分とは対照的な震えた声で叫ぶ姉の返事が響いてくる。女性らしくない豪放な性格の姉が戦においての落ち着きを保ってられない事にアーデントは憂いを抱いてしまうが、それはアカスタが妹である自分に対して人並み外れた強い想いを持ってくれているからだと彼女は悟る。そしてアーデントは瀕死の上官と共に、そんな愛しい姉をなんとしても護りたかった。

胸から込み上げる強い想いに手を握るアーデント。その瞳には、自分に対して視線を合わせた敵艦隊の主砲が一斉に火を放つ光景が映る。一番艦、二番艦揃って放つ一瞬の炎は全て彼女に向けられており、相對距離約1万メートルで対峙するアーデント艦の付近にはすぐさま水柱の群れが現れる。その高さはアーデント艦の全長よりも高いが、水柱が無数にそびえるその隙間から、アーデント艦は30ノットに迫る勢いで飛び出した。

艦橋天蓋のアーデントは降りしきる海水の滝を頭から被るものの、軍帽と額に手を当てて目に海水が垂れるのを防ぐ。水柱が発する衝撃に小さな艦体の彼女の分身はグラグラと揺れ、アーデントすらもその動揺には二本の足のみでの直立では抗えない。その内に足元を流れていく海水に足を取られるかのようにして片膝をつくアーデントであったが、闘志を纏った瞳を西の空から降り注ぐ朱色の光りで輝かせると同時に、彼女は足元から響く自身の駆逐艦長の声と同じ言葉を叫ぶ。

『面舵！！ 左舷魚雷戦！！！！』

それと同時にアーデント艦は急速に右へ回頭を始め、艦中央と艦尾よりにあった2基の魚雷発射管は乗組員達によって左舷へと向けられる。大きな鉄の筒に詰まっているのは、猛射する一番艦と二番艦の主砲を睨み返す魚雷。

艦首を敵の進行方向に向けると同時に、アーデント艦の左舷艦首すぐ手前には大音響とともに水柱がそびえ立つが、アーデントもその乗組員達もそんな光景になんの感情も湧かせない。もっともその爆風は凄まじく、露天となっている艦橋天蓋に立っていたアーデントの身体は風の前の木の葉の様に吹き飛ばされそうになる。襲ってくる豪風にうずくまって耐えるアーデントの頭と浮きかけたヘッドフォンの隙間からは、彼女の身代わりとばかりに水兵帽が飛んでいく。口や鼻に激しく飛び込もうとして来る海水に表情を険しくさせるアーデントは、声を発することも出来ない。だが彼女の分身の長たる駆逐艦長はその場を支配する轟音と爆風を掻き消す様に叫び、それに続いて今度は水雷長の声が響いた。

『雷撃始めっー！！！！』

『魚雷、全管発射！ 用意ーッ！ てえー！！！！』

足元から響くその言葉に薄っすらとアーデントは片方の瞳を開くと、そこには圧搾空気のけたたましい音を響かせながら、次々に勢い良く海中へと飛び込んでいく魚雷の姿があった。着水するや付近に残る霧になりかけた水柱を食い破りながら放たれた8本の魚雷は、白く真っ直ぐな航跡を靡かせて敵の艦隊に向かって行く。今までの戦闘における悔しさを受け継いだ魚雷が颯爽と駆けるその光景に、アーデントはうずくまった体勢をそのままに声を上げる。

『いけえー！！！』

しかし百戦錬磨のドイツ艦隊とてただ1艦で反撃してきたアーデント艦の動きは見逃しておらず、やがてアーデントの瞳には転舵を始める敵艦隊の姿が映り始めた。さしもの巡洋戦艦も直径533ミリの魚雷を撃たれては無視する訳にも行かず、横腹を見せないように急速に艦首をアーデントに向けて回避行動に出た。命中すれば起死回生の一撃であったが、その可能性を低くしたドイツ艦隊の行動にアーデントは舌打ちをする。だがアーデントが放った魚雷は例え命中せずとも決して無駄ではなく、ドイツ艦隊にしたら真横を魚雷が通り過ぎていくまで一定の方向へ走らなければならない。そしてその逃げる方向はアーデントの駆逐艦長が意図した通り、グローリアス艦とアカスタ艦から離れる方向であった。

もちろんアーデントもその事は知っており、一定の効果を得た事に彼女は拳を握る。だがそれは、自身が持つ最大の武器を失ったという現実と引き換えである。全ての魚雷を発射した事によってドイツ艦隊へ進路の変更を強制できたが、最早アーデントとその乗組員達には戦艦と渡り合える程の装備は残されていないのだ。

しかしアーデントもその乗組員達も、仲間を背にして敵艦隊へと突撃したその時から既にこうなると予想していた。故に彼等はその事実には驚愕する事も落胆する事もなく、さも当然の様にして次の行動に移る。

『主砲、砲撃用意――！――！！！！』

駆逐艦長の声が響くと同時にアーデントは立ち上がり、両手で目の前にある手摺を握る。顎を引いて上目遣いに敵艦を睨めつけながら、彼女は両脚を肩幅と同じくらいの間隔で開き、僅かに膝を曲げてその身が倒れる事の無いようにする。今から最後の望みを賭けた行動になると悟るアーデントは、胸の中に尽きる事の無い闘志を燃やす。瞳も眉も吊り上がり、食いしばった歯を唇の隙間から覗かせるその表情は、アーデントが戦の為に生きる軍艦の命である事を悲しげに証明していた。艦首と艦尾に背負い式に配置された119ミリ、4基4門の主砲が旋回を始めるのと同様を同じくして、今や乗組員とは完全にシンクロしたアーデントが天に向かって吼える。

『砲撃始め！ てええー！！』

その声を形にしたような黒煙を煙突から巻き上げ、駆逐艦の身上たる快速性を生かしたアーデント艦は退避行動中の一番艦と二番艦に向かって一気に距離を詰める。艦首と艦尾から指向した単装砲が次々と火を噴き始め、戦闘が始まって以来初めてドイツ艦隊の付近には着弾による水柱が出現した。ラムでの攻撃を企図しているのかと疑わせる程のアーデント艦の突進に、撃たれ始めたドイツ艦隊は艦中央に装備されている副砲を用いて反撃を始める。

シャルンホルスト型が装備する150ミリ55口径という長砲身の副砲は、連装砲塔式で片舷に3基。それが2隻分揃って、アーデント艦に向けられた副砲の総数は実に6基12門に及ぶ。近距離でおまけに旋回も発射速度も速い副砲の攻撃は、アーデント艦の周りをすぐさま水柱で覆ってしまう。しかしアーデント艦は左右へ激しく転舵しながらその水柱の壁を突き破り、なおもドイツ艦隊に向かって迫っていった。艦影だけなら倍ほどもある両者の違いが明確に

なる中、アーデント艦はドイツ艦隊の真正面を横切るように艦首を旋回させる。その最中にもアーデント艦砲術科の水兵達は砲の傍らから離れず、次々と敵艦へ向かって119ミリの砲弾を放った。

そしてお互いにその至近距離を水柱で支配されてすぐ、アーデントの瞳には背にする赤い夕陽とは違った赤い光を敵艦が上げる光景を映す。敵艦隊の後ろ側を駆けるその艦は戦闘が始まってから仮定した一番艦であり、艦中央の構造物での爆発をアーデントが認めると同時に付近には小規模な火災が発生する。勢い良く吹き飛んで行く鉄製の部品が宙を舞い、空中線から付近の甲板へと張り詰めていたワイヤーが意志を持っているかのように暴れていた。

その一番艦の光景は間違いなくアーデント艦の主砲弾が命中した結果であったが、乗組員達もアーデントもその成果に喜ぶ気を沸かせない。巨大なシャルンホルスト級巡洋戦艦の艦影は距離10000メートルを切った状態で見るとまるで山のようにあり、彼等が目にする力強いその艦影は119ミリの砲弾が命中してもちっとも変わっていない。それを示すかのように、被弾した一番艦は最上甲板から煙を上げながらも、少しも速度を落とす事無く前進していた。そしてその一番艦と二番艦はその身を纏う発砲炎をそのままに、艦首を左舷に向かって流し始める。それはドイツ艦隊が抑制されていた行動から解き放たれた為であり、その原因を作ったアーデントもまたその事を瞬時に理解した。

アーデント艦の乾坤一擲の攻撃である8本の魚雷は、ドイツ艦隊の横腹を食い破る事は無かったのである。

しかしそれによって自分達の行動を変える気など、アーデントにも乗組員達にも元より無い。敵艦隊の旋回など目に映っていないと言わんばかりに、アーデント艦は全速で海面を駆けながら主砲を乱れ撃つ。すると敵艦を認める左舷とは逆の右舷側のすぐその海面に、突如として大きな水柱がそびえ立った。その衝撃と轟音には、

恐れを忘れて艦橋天蓋にて咆哮していたアーデントもさすがに肩をすくめる。思わず瞳を閉じてしまったアーデントであったが水柱が生んだ轟音が鳴り止むと同時に、その耳には彼女を励ますかのような乗組員の声が響いた。

『まだまだあ！！ 撃ち返せえ！！』

恐怖を全く感じさせぬような自分の乗組員の声は、アーデントの心に生まれつつあった「怯える」という感情の芽を一瞬にして摘んだ。手摺を掴んだ両手と突っ張った両脚に力を入れ、降り注ぐ海水に眉をしかめながら、アーデントは片目だけ薄っすらと開いて敵影を視界から逃さないようにする。

だがその時、彼女の耳につけたヘッドフォンからは、今は攻撃を受けていない筈の姉が放った叫び声が響いてきた。

『グ、グローリアスさん！！ 舵を戻してください！！！！』

何か予期せぬ事により放たれたであろうアカスタの声に、アーデントはハツとして艦尾の方向に顔を向ける。

煙突からの排煙で僅かにぼやけるそこには、未だ煙幕を展開するアカスタ艦の姿があったが、同時にそこに見えてはいけないうるのグロリアス艦の姿までもあった。アカスタ艦が靡かせる黒煙の壁を突き破るようにして姿を現した上官の分身に、アーデントもアカスタも動揺を隠せない。

それは艦橋を破壊されて臨時に指揮を取るグローリアス艦の指揮所が艦橋と同じ様に甲板の上に無い事から、アカスタ艦に追従する

というシビアな操艦に対応できなかった事が原因であった。

しかし艦の主たるグロリアスと連絡が取れないアカスタとアーデントにはその事を知る術も無く、これまで敵艦に対しての行動のみに集中させてきた心を大きく揺れ動かた。そして彼女達と相対する敵は、そんな獲物達が生んだ一瞬の隙を見逃してくれるような甘い相手ではなかった。

アーデントは艦橋天蓋の手摺から身を乗り出すようにして艦尾に広がる味方の姿を眺めていたが、突如としてその視界にあった自身の第二煙突の付近には閃光が発生した。それはほんの一瞬の光りで、アーデントは瞬きをする事も無くその閃光の向こうに広がった光景を目にする。今の今まで、アカスタ艦とグロリアス艦の姿をぼやけさせていた排煙を巻き上げる、彼女の第二煙突。鬱陶しさすら覚えていたその煙突は、根元から引き裂かれてゆつくりと右舷の海面に吹き飛んでいく。音がまったく伴わないアーデントの視界は、その煙突が吹き飛ばされて海面に飛び込んでいく瞬間まで続いていた。そして右舷の海面に生まれた大きな水飛沫に煙突が飲み込まれ始めた次の瞬間、アーデントの身体からはまるでその水飛沫を再現したかように、真っ赤な血と引き裂かれた肉が飛び散った。

『あ……ああ……。』

胸元の辺りから服の切れ端と供にちぎれた肉と噴出す鮮血を視界に入れ、アーデントは呟くように小さく声を上げる。自身が被弾した事を示すその光景は、音を全く発しないゆつくりとした時間軸でアーデントの瞳に移る。そして彼女がそこに生まれた苦痛と自身の状況を悟る前に、彼女の分身であるアーデント艦の中央には2発の砲弾が命中した。中身を失った魚雷発射管が吹き飛び、左舷中央の乾舷には閃光が発生するのに伴って大穴が作られていた。これまでに無かった激しい衝撃がアーデント艦を襲い、砲を操っていた乗組

員達の何人かは大きく揺れた足場によって左舷の海面に叩きつけられていく。続けざまの被弾によりアーデント艦は艦中央を炎で包み始め、乾舷から艦内へと入り込んで爆発した砲弾はアーデント艦の缶室を完全に破壊した。それまで舳先に作っていた白波が消え、ゆっくり左舷へと最上甲板を傾けていく中、その艦橋天蓋には血の湖にうつ伏せで倒れたアーデントの姿があった。既にその四肢が動く事は無く、水兵帽を失った事であらわになった肩まで伸びた彼女の黒髪が、辺りから発せられる生暖かい風によってゆっくり揺れる。小柄なアーデントの身体を包むように血の湖が面積を広げていくが、それに反して彼女の身体が動く事は無い。そしてアーデントの頭部から少し離れた位置に転がった彼女のヘッドフォンは、眼前で浮力を失い始めた妹の姿を目にして必死に叫ぶアカスタの声を辺りに響かせていた。

『アーデント！！ アーデント！！ へ、返事をしろ、アーデント・
・・！！！！！！』

とめどなく頬を伝う涙を拭きもせず、アカスタは右手に握ったマイクへ向かって叫ぶ。だがアカスタの声に返事は返って来ず、瞳に映る妹の分身がその真相を彼女へ残酷に伝える。燃え盛る炎を身に纏ったアーデント艦は行き足が止まり、アカスタと同じく艦橋後ろで真っ直ぐにそびえたマストは角度を付け始めており、その傾いて行く速度が緩むことは無い。

艦が浮力を失う時は、そこに宿る命である艦魂も死ぬ。その事を同じく艦魂であるアカスタも知っており、彼女は妹が果てた事を自らの意識に反して思考ではなく感覚で理解してしまう。こうなるか

もしないと内心は覚悟していたつもりだったが、その光景を直接瞳に映したアカスタは溢れ出る涙を堪える事が出来ない。

彼女の脳裏を過ぎっていく、いつも呆れ顔で説教をたれるアーデントの姿。長女である自分を敬いもせず、「姉さん」とも呼んでくれない彼女であったが、常に自分の傍らにいてくれる存在であった事をアカスタは思い知る。自分と瀕死の上官を護る為に、ただ一隻で強大な敵に挑んでいった妹の最後。やがて横倒しとなり、血で染めたその上甲板を波間で洗うアーデント艦の姿に、アカスタはただひたすら泣きながらその名を呼ぶ事しか出来なかった。

『アーデント・・・！ う、ううつ・・・！ ア、アーデントーッ・・・！！』

しかしアカスタの泣き叫ぶ声が響く中、彼女の視界の外では、ドイツ艦隊がアカスタ艦とグローリアス艦の隊列の後ろを回って左舷の横腹を見せるようにして舵を切り、同じく左舷に向けたその主砲全門をもって再び彼女達を睨みつける。アーデントの決死の攻撃も、その大きな巨体が戦闘を行う事に対しては一切の障害を発生させる事も出来なかったのだ。やがて一番艦と二番艦は一斉にその身を発砲炎で包み、悲しみに暮れるアカスタと瀕死のグローリアスに対して砲弾を放つ。そして既に神から見放されたイギリス艦隊は、即座にその運命を突きつけられた。

繰り返されるアカスタの声を遮るようにして、彼女の耳には空気を切り裂く轟音が鳴り響く。その耳障りの悪さと音量に身体をビクンと大きく震わせるアカスタであったが、それが背後から襲ってきた物であった事から、すぐさま彼女は後ろを振り返る。彼女の背後には、先程より展開する煙幕からその艦体を曝し始める上官の分身があったからだ。

『ああ・・・!!!!!!』

見開いた瞳で捉えた背後のグロリアス艦に、思わずアカスタは声を放った。自身の艦尾に翻る軍艦旗の向こうでは、大きな水柱に再び挟叉されるグロリアス艦の姿がある。さらにその艦体は左右に大きく揺れており、艦中央右舷の高い乾舷からは破壊された鉄材と黒煙を伴った爆炎が弾き出されていた。

『グ・・・、グロリアスさん・・・!!　グロリアスさん!!　!!』

必死に上官の名を呼んでみるものの、彼女のヘッドフォンからは先程よりグロリアスの声は返ってきてはいない。そしてさらにグロリアスがもはや声を返せない程の状態になってしまった事を、グロリアス艦の変化を認めたアカスタは悟る。

右舷の乾舷に開いた破孔からどす黒い煙が噴出し始めると同時にグロリアス艦は舳先にて立てる白波の量を減らし、その煙突からは先程までもくもくと上がっていた排煙は、今や確認出来ない程に薄くなってしまっている。アーデント艦と同様に、グロリアス艦は右舷の乾舷を貫かれて艦内にあった缶室が破壊されていたのだ。そして速度が鈍るのと同時にグロリアス艦はついに右舷側に傾斜し始め、それに併せて艦首を正面のアカスタ艦から右舷へと向けていく。その光景はグロリアス艦が操艦不能の状態に陥った事を、目にする者の全てに示す物であった。

『ぐ・・・ぎ・・・!!』

両の手に拳を握り、強く嚙んだ歯の隙間から声を漏らして俯くアカスタ。妹のアーデント艦はすでに艦の一部が海面から出ているの

み。上官のグロリアス艦はもはや満足な航行も戦闘も不可能。せっかく自分達に策を与えてくれたグロリアスも、それを成す為に強大な敵の矢面に立っていったアーデントの犠牲も、事ここに至っては全て無駄になってしまった。

もはやイギリス艦隊は万策つき、作戦の目的を果たす事はできない。アカスタが身体を向ける方向で、ゆっくり右舷に旋回し始めるグロリアス艦。その飛行甲板に並んだ陸上機を繋止していたワイヤーは艦の傾斜によって張り詰めており、やがて一つ、また一つと機体の重さに耐えれず切れ始めて行き、それに伴って作戦の目的である大事な積荷は、艦が傾いた事によって間近に迫った右舷の海面に向かって、次々と飛行甲板を滑り落ち始めた。

アカスタは脳裏に妹と上官の顔を浮かべ、口々に彼女達が自分を責めているのではないかと思ひ始める。煙幕でグロリアス艦を隠匿する事に失敗し、その行動を成功させる為に敵艦隊への阻止行動を行ったアーデント艦を遠巻きに見ているだけだったアカスタ。

何一つ、自分は出来ていないじゃないか……。

ところが不思議な事に、そんな言葉を胸の内では呟くのと時を同じくして、アカスタの脳裏に浮かんできたのはアーデントとグロリアスの笑顔だった。まだ戦闘が始まる前、すぐ目の前で屈託の無い綺麗なその笑みを見せてくれた二人。その記憶を辿り始めると同時にアカスタは悲しみと悔いを忘れ、ふと彼女達がどんな想いを抱いて各々の行動をしていたのかと疑問を抱く。そしてそんな疑問と続けざまに脳裏を過ぎったのは、妹が常に自分に対してお説教する際に使っていた3つの言葉、「誠実・希望・慈愛」だった。

その瞬間、アカスタはハツとして顔を上げる。涙を瞳の縁に溜めたまま、呆然とした眼差しで水柱の群れに包まれるグロリアス艦を眺めるアカスタだが、彼女はその最中に先程脳裏をかすめた3つの言葉の意味に気付いた。

いつもアーデントが意識しろと言っては放つその言葉は、艦魂として生きていく上で常に持っていなければならない大事な物であるとアカスタは思っており、アーデントもまたアカスタの記憶の中ではその様な言い方をしていた。

だがその3つは胸の中でそっと抱えたままの物ではなく、他人に對して常に自分から与える事だって出来る。そしてそれこそが、その言葉が示さんとする大事な事なのではないかとアカスタは思う。

いつもアーデントが自分に呆れながらも声を掛けてくれたのは、顧み無くこんな自分を慈しみ、愛してくれたからではなかったか？

グローリアスが努めて冷静に振舞いながら勝つ為の方策とそれに伴う指示を必死に与えてくれたのは、絶望感に支配されそうになった自分に対して眩いばかりの希望を持たせようとしてくれたからではなかったか？

アーデントが敵に對して立ち向かい、グローリアスもまた傷を負いながらも先程まで懸命に声を発してくれたのは、常にあの旗に對して誠実に對面するという王室海軍における艦魂の態度を、無言で自分にも伝えようとしていたからではなかったか？

その言葉を心の奥で唱えると同時に、アカスタの脳裏からはアーデントとグローリアスの笑みが消えていく。やがて今しがた抱いた3つの言葉の各々に對する自問自答に對して、彼女は全ての答えが正解であったと確信する。そしてその先にあった、二人が想いを込めて放った言葉と、血を伴って努めた行動。そこに苦痛と恐怖があったのは事実であるが、二人はそんな感情に負ける事無く己のすべき事を果たした。今のアカスタにはその理由も明確に判断できる。

なぜなら二人は「誠実・希望・慈愛」を常にその胸に秘め、なおかつそれを周りの人々に与えようと常に行動できる、栄えある王室海軍の艦魂だから。

アカスタの足元から艦橋での乗組員達によるやりとりが響いてくるが、彼女はそれを耳にしながらも視線を艦尾のグローリアス艦から変える事は無い。否、彼女はグローリアス艦を見ているのではなく、同じ方向にある自身の艦尾旗竿にて翻るホワイト・エンサインを眺めているのだった。

妹にも上官にもあったその軍艦旗が自分にもある。

既に戦況は絶対的な結果に行き着いているが、その中でただ一つだけそこにある絶対的な事実を認めたアカスタ。ふと右腕を顔に近づけ、彼女はその袖で瞳の端に溜まっていた物を拭う。そしてその腕が下ろされて彼女の表情があらわになった時、その瞳には静かに闘志が纏われていく。

アーデント、グローリアスさん、二人はそうだった。そして私も、そうでありたい。

アカスタが決意を胸に秘めると同時に、アカスタ艦の艦橋を示す彼女の足元からは駆逐艦長の決断の号令が放たれる。既に作戦目的の達成は不可能で、おまけに彼等の眼前にはその直接の原因であるドイツ海軍の巡洋戦艦2隻がいる。彼等が今後どのような行動をとろうとも、戦況はビクともしないのは明らかである。だがアカスタが栄えある王室海軍の艦魂であるのと同様に、その乗組員たる彼らもまた栄えある王室海軍の軍人であり、そこにある大事な物をアカスタと同じ様に抱いた彼等はいとも簡単に、そしてさも当然の様に自分達の取るべきたった一つの行動を定めた。駆逐艦長の口から高

々と号令が叫ばれ、アカスタはその声に大きく頷く。

『煙幕展開止め！！！！ 右舷水雷戦用意――！！！！』

それは決して合理的な判断ではない。そしてまた、何かの計算があった訳でもない。何かを庇う為でも、何かを護る為でも、何かを得る為でも無い。

しかし敢えて理由をつけるならば、それはそこにいたホワイト・エンサインを頂く全ての者達の、自身が何者であるかを証明せんとする為であったのかもしれない。

西の空から辺りに広がる夕暮れ。その赤色を一層深くした、1729。アカスタ艦は速度を上げ、面舵を切って大転針。ドイツ艦隊の真正面へと突撃していった。

『・・・ぐう・・・、うぐっ・・・、・・・あがつ・・・。』

燃え盛る炎と、血と肉の焼ける強烈な匂いが立ち込める、グローリアス艦の艦橋。空を覆っていた天蓋も、正面や横にあった隔壁も全て引き裂かれ、そこに残るのはかろうじて林立する配管や伝声管と、血の海面に浮いた肉の塊の群れ。ゆっくりと増しつつある傾斜に床の亡骸が主の意識に関係なく動き、溜まっていた血が引き潮の様に右舷へと流れていく中、辺りにある倒れた者達の間を呻き声を

上げて這って行くグローリアスの姿があった。

顔の左側では額から頬骨の下まで大きく裂けた傷が大量の血を噴出し、そこにあった淡く蒼い瞳は既に彼女の顔からは全て流れ落ちている。唯一残った淡く緑色をした右目と、軍帽を失った事であらわになった赤と金色のまだら模様になった髪が、すっかり息吹が消え失せた吹き曝しの艦橋の中で今にも消えそうな光を放つ。しかしその身体は分身と同様に既にほとんどの感覚を得てはおらず、彼女の身体の右の胸から腰までかけて大きく裂けた黒い軍装の隙間からは顔面以上のおびただしい出血があり、彼女が這って行くと同時にその跡を示す血の道を描く。そしてその道の上をグローリアスの身体に遅れてついて来るのは、血と供に傷から溢れた彼女の臓物だけである。

しかし既に身体感覚を失い始めているグローリアスはその事に気にも留めず、倒れていたラッタルの足元から艦橋の入り口に当たる部分までその身が進んだ事を確認して隻眼を辺りに向ける。そこにあるのはやはり血と肉のみ。そこにいたであろう乗組員達の身を包んでいた軍装が放つ黒い色はそこに無く、距離感の把握できないグローリアスの視界に映るのは血と炎の赤い色だけだった。

そして彼女が辺りに流していた視線は、僅かに残っていた艦橋の隔壁に向けられた所で止まる。その壁には飛び散った赤い血と、布キレのように引きちぎられた黒い軍装と供に、原形を留めていない肉の塊がへばりついている。だがグローリアスはその主だった人物をすぐに悟った。風に揺られながらも壁に縫い付けられた黒い布の片隅には、艦内でただ一人であった大佐の身分を示す袖章が赤い夕陽を浴びて輝いていた。

『う・・・、うう・・・。』

グローリアスの残った瞳からは涙が溢れる。しかし声を上げて泣く程の力すらも、もはや彼女の身体には無い。乗組員達の亡骸に埋

もれるようにして頬を濡らすしか、グローリアスが取れる行動は残されていなかった。

するとその時、辺りには連続した爆発音が小さく木霊してきた。グローリアスも耳にしたその音は遙か遠くで発生したらしく、自身が被弾する際に耳にしたそれとは違って少し濁ったような感じの音である。またそれに伴って彼女の分身の付近には水柱は出現しておらず、グローリアスの身体にも損傷は無い。その事を理解した彼女が耳に残る爆音へと疑問を抱いた刹那、彼女は自身の視界には部下達の姿が無い事に気付く。朦朧とし始めた意識の片隅で部下達の安否を確認せんとしたグローリアスは、音が響いてくる右舷の水平線に目を向ける。吹き飛ばされた艦橋の構造物と艦の右舷への傾斜はグローリアスの視界を妨げる事無く、彼女の瞳は容易くそこにあった部下の姿を見つける。しかし、グローリアスはその姿に安堵する事は無かった。

『ア・・・カス・・・、タ・・・。』

右舷の海原にて浮かぶホワイト・エンサインを翻す小さな艦を、彼女はすぐさまアカスタであると認識する。二人の部下の分身は全く同じ艦影ながらも、良く懐いてくれた彼女達の事はその艦が放つ独特な雰囲気だけで判断できる。しかしその艦にはグローリアスが見慣れたアカスタ艦のシルエットは既に無く、往き足を止めたアカスタ艦は艦首から艦尾に至る全ての甲板から立ち昇る、紅蓮の炎に包まれていた。

刹那、瞳に映したグローリアスは、二人の部下がどんな行動を取ったのかを瞬時に悟る。彼女のもはや対となっていない視線が向けられる先では、アカスタ艦の艦尾旗竿に翻っていた軍艦旗が炎に蝕まれて焼け落ちていく。その光景こそ、アカスタとアーデントが如何にして果てたのかを如実に物語っていた。

『アカ・・・タ・・・・・・アア・・・デン・・・ト・・・』

必死に二人の名を呼ぶグローリアス。だが彼女は喉に力が入らず、既に呼吸すらも思うように出来ない。そしてかろうじて彼女の口から漏れた声を耳にすることが出来る者は、誰一人としてそこにいない。その場を駆け抜けていく潮風だけが、彼女の言葉を付近の海へと運んでいくだけであった。やがてグローリアスの視界はそこに映る全ての物の輪郭を霞ませ始め、耳に入ってくる全ての音は遠ざかっていく。

ここまでか・・・。

ゆっくりとその言葉をグローリアスは脳裏に過ぎらせる。だがその時、彼女は小さいながらも確かな轟音を耳にした。それは右舷の海面にて身を浮かべながら炎に飲み込まれたアカスタ艦の遥か向こうにある、いまこの海で最も大きい艦影を持った二隻の敵艦から響いてきた。グローリアスはその身に残った最後の力を振り絞って、光りの消え始めた己の右目に力を込める。滲むように左右にズレた輪郭が再び一つの線を結んだそこには、その巨体を遥かに上回る特大の水柱を上げた敵艦の内の一隻が映し出されていた。100メートルにも及ぼんとするその水柱を艦のすぐ真横から上らせた敵艦は、まるで岸壁に衝突でもしたかの様にして急激に速度を落とす。

その光景が示す全てが、グローリアスの最後の表情を微笑みへと変える。巨大な戦艦クラスの船に対して、一撃でその自由を奪う必殺の兵器。高々とそびえ立ったその水柱こそが何よりの証明。彼女が思った通り、それはアカスタ艦が決死の覚悟で放った魚雷が、見事に敵艦の横腹へと噛み付いた光景であった。

やがてグローリアスの視界は再び輪郭が滲み始め、段々と暗くなっていった。だがその漆黒の世界にグローリアスは恐怖を覚え、それと同時に苦しさも悲しみも消え失せた。真っ暗な闇がずっと続

く世界に、グローリアスの声が静かに響く。

アカスタ。アーデント。ヒューズ艦長。全ての乗組員達の皆さん。貴方達はまごうことなき、ホワイト・エンサインの下に集った者達でした。

そしてこれからも、常に誠実に、常に希望を持ち、常に慈愛を向ける、栄えある王室海軍の者たる私たちが在りましょう。

アーメン。

水平線の彼方へと陽が沈み、付近の空からは赤い色が失せていく。そしてその下にある波間からも、赤い色で染まった全ての存在がその姿を消し始める。

グローリアス艦に次いで、既に息絶えたアカスタ艦が艦尾を持ち上げて沈んでいく。まるで大海という母に抱かれて行くかの様なその光景を横に、シャルンホルスト艦とグナイゼナウ艦は針路を南に向けて去って行った。

シャルンホルスト艦はアカスタ艦の雷撃により、艦尾にある第3主砲真下の右舷喫水線下に大破孔が発生。第三主砲の弾火薬庫とその付近の区画はたちまち進水し、戦闘中に発生した機関の故障も相まって戦闘力が大幅に低下。グナイゼナウ艦上のマルシャル大將はその被害と弾薬の消耗に、空母アーク・ロイヤル艦が率いる兵員輸送の船団への追撃を断念。近海での作戦行動を中止してノルウェー沖から撤退した。

そしてトロンヘイムでシャルンホルスト艦の応急修理を終えた矢先の6月20日、今度はグナイゼナウ艦がイギリス海軍潜水艦のクライド艦に雷撃され被雷。両艦は6月23日にキール軍港の乾ドックへと入渠し、その年の暮れまで出撃する事は出来なかった。

アルファベット作戦におけるイギリス海軍はノルウェーで使用した航空兵力を本国まで輸送できなかったものの、ノルウェーにあった貴重な人員の大部分は撤退させる事に成功した。対してそれを阻止せんとユーノ作戦を発動したドイツ海軍は緒戦でその兵力の中核たる巡洋戦艦が使用できなくなり、それ以上ノルウェー沖での活動をする事は叶わなかった。

グローリアス艦以下、アカスタ艦、アーデント艦の3隻は不幸にして強大な敵に対し、奮戦虚しく波間に消える事となった。航空機の輸送という目的を達成する事は叶わず、一方的に撃沈されていた事は戦術的には完敗である。だが撤退作戦における護衛役という基本的な戦略の観点で語るならば、彼女達とその乗組員達は旧式な艦体と絶望的な状況を物ともせず、己が任務を微力ながらも見事に完遂したのであった。

赤い夕陽が差し込んでくる舷窓に顔を向け、神通^{じんつう}はその光りを瞳に宿す。日本刀のように鋭く釣り上がったその目で、彼女は椅子の

腰掛けて腕を組んだまま舷窓の向こうに広がる赤く染まった空を眺める。同じく指揮官という立場を頂き、これまた同じくこうして夕暮れの空を眺めたであろう人物の心の内を想い、神通は僅かに眉をひそめた。刹那、彼女の耳にはバサバサと書類の束が床に落ちる音が響いてきた。ふとその音が発せられた黒板の辺りへと神通が視線を戻すと、そこには床に四つん這いになって肩を震わせる霞の姿があった。

『う……うう、も、もう……、読めません……。ああ……。』

手にしていた資料から紡ぎ出されたその光景は、霞の瞼の裏にありありと蘇った。遠い異国の地において繰り広げられた、自分と同じ艦魂として生を受けた者の末路。その余りにも凄惨な最後と、そこに賭けられた各々の崇高な想い。

その事にとめどなく涙を流すのは霞だけではなく、雪風もまた黒板に顔を向けたまま肩を震わせていた。やがてその右手に握られて黒板に突き立てたチョークが音を立てて碎け、雪風は顔をそのままにして左手の袖を目の辺りに押し付ける。そして部屋にはそんな二人の姉妹達が次々に咽び泣き始める声が、舷窓から差し込む夕陽に包まれて静かに木霊し始めた。

その中でも霞と霰の泣き声は特に大きく響き、神通はその二人の様子を黙って見守る。彼女には二人がなぜ他の仲間達よりも大きな泣き声を上げているのかが、薄々ながらも解っている。大切なものを護る為、己が存在を証明する為、旧式の駆逐艦であるにも関わらず、自分よりも遥かに強大な敵に対して立ち向かって行ったアカスタとアーデント。そんな二人によって構成されていた部隊の名は、第18駆逐隊。なんの巡り合わせか、霞と霰が帝国海軍において所属する部隊と同じ名前であったのだ。そして雪風や後輩の陽炎、不知火等が属する陽炎型駆逐艦が登場した昨今、型遅れとなった朝潮

型駆逐艦の一員であるという自身の境遇が、霞と霰の心をアカスタやアーデントのそれへと重ねるのだった。

もちろん霞と霰を含めたその場にいる二水戦所属の駆逐艦の艦魂達は、アカスタ艦とアーデント艦の行動が決して理に適った行動では無かった事を理解している。そこに込められた崇高な想いから一歩下がって現実を見た時、その姉妹が取った行動は死に急ぐ事以外の何者でもない。だが霞達はその事を頭で理解できても指摘する気にはなれず、目から溢れ出る涙を止める事が出来なかった。そこにあっただのは成す術無く撃沈された艦隊の姿では無く、英雄的な戦いに身を投じた小さな駆逐艦の栄光でも無い。自分達と同じ様に軍艦旗を頂き、ただひたすらに生きた艦魂の在りのままの生き様であり、死に様であった。

戦闘を生業とする艦の艦魂達が一同に泣くその様子を、神通は表情を変えずにただ無言で一瞥するが、彼女はそれを咎めるつもりは毛頭無い。戦争ではないと区分される支那事変が長引き、そこにある惨い現実を認識する事に麻痺した者達は人間にも艦魂にも大勢いるという、今の日本の実情。斯く言う神通とて戦争へ参加した経験も無ければ、まともに艦隊同士での実戦に参加した事だって無い。だが死という物がそこかしこに横たわるといふそこにある現実を、彼女は美保湾沖の漆黒の海でその目に焼き付けている。神通にとってそれはただの衝突事故ではなく、死という物がどんな物であるかを、それが当たり前となる戦がどんな物であるかを、彼女に考えさせる大きなきっかけとなっているのである。そして神通はそこから得た教訓を、大事な大事な部下達になんとしても伝えたかった。

音も無く椅子から腰を上げた神通は床にすがる様にして泣く霞の傍までゆっくりと足を進め、その背中に自身の手をそっと乗せてやる。そこから伝わる霞の温もりと震え、さらに部屋全体に響く他の部下達の嗚咽から、彼女は本日の教育日課が自身の意図した通りの

結果に辿り着いた事を確信した。やがて大きく一度頷いた後、神通はゆっくりと口を開く。

『お前達、良く覚えておけ……。戦とは、そもそもが理不尽だという事を……。』

静かにそう言った後、神通は足元に散らばった資料の山に視線を落とす。

そこには見知らぬ人物の書いたであろうノルウェー沖での戦闘記録と、自身が良く知る人物が書いたであろう事を示す文字が記録よりも上回る量で綴られている事を認める。まだまだ海軍生活が経験不足な部下達は誰一人気付いていないが、元来他所の海軍の情報がここまで詳細に入ってくることは無い。事実、神通の手に渡ったときた時点では、その資料に記載されていたのは時間軸に沿った一連の戦闘の流れだけであった。

しかし今の神通には、その資料に対して斯の如く膨大な加筆を行った人物を推測する気は無い。その人物は自身が一番よく知っているし、その人物がどんな考えで鉛筆を走らせたのかも知っているからだ。

すまん。だがその生き様、無駄にはせんぞ……。

そんな言葉を脳裏で呟きながら、ペンだこが出来た右手の指を親指で擦る神通の手があった。

第四六話 「背を合わせる物／其の五」 （後書き）

◆注意事項◆

一連のノルウェー沖海戦をイギリス側の視点から描いたお話を執筆させて頂きましたが、イギリス側は僅か39人しか生存者がおらず、現在に至るもその戦闘状況は本国との通信内容とドイツ側の戦闘詳報に依る所が大であります。

また、一連の戦闘における細かな情報はイギリスのソースが明記されてあるサイトから多数の引用をさせて頂きましたが、サイトによっては時間軸が一時間も違っている等、まだまだ明確な戦闘状況が解明されていないという現実を踏まえる必要があると思います。

小生なりにも多くの考察、整合を含めての執筆をさせて頂きましたが、以上の事から読者皆様にあつては拙作での内容がノルウェー沖海戦での絶対的な真実であるとは決して安易に認識される事のない様、ご理解とご了承の程を深くお願いさせて頂きます。

そしてもし本海戦における確定的な情報を持っている方がいらっしゃいましたら、何卒無知な小生にご教授の程をよろしくお願い致します。

2009年8月25日

明石艦物語作者／工藤 傳一

第四七話 「舵をきった日」

昭和15年6月18日。

第二艦隊全艦は錨を上げ、佐伯の町と湾に別れを告げた。梅雨時にも関わらず第二艦隊が軍艦旗を進める海原に雨が降る事は無く、遙かに続く蒼天の下を彼等は颯爽と駆ける。目指すは土佐湾沖合いであり、航行中には艦隊航行序列の編成訓練が行われた。右だ左だと愛宕艦あたごからの号令が飛ぶ中、所属の各艦は大海原の中を縦横無尽に動きまわる。

いつも仮装戦艦や仮装空母の役割である明石艦あかしはこの時ばかりは付属特務艦としての立ち回りで済み、のんびりと進む明石艦の前を護衛の駆逐艦が忙しなく隊列を入れ替えながら航行していた。艦隊行動において駆逐艦は重要な艦の護衛から、隊列外郭や前方での哨戒、果ては損傷艦への横付けに溺者の救助とやる事が多く、例えば二水戦や四水戦といった水雷戦部隊所属の駆逐艦でもそれは変わらない。

『おお、絶景！』

艦首旗竿の根元にて両目の上に片手をかざしながら、明石は辺りに広がる第二艦隊の勇姿に声を上げる。細長い航行序列の真ん中に当たる位置でゆっくりと走る分身の上からは付近の海面に散った仲間達の姿が良く見えており、明石艦の艦尾のすぐ後ろには二航戦所属の蒼龍艦そうりゅうと飛龍艦ひりゅうが付き従っていた。さらにその後ろには仮装戦艦役の四戦隊が追従しており、自分の軍艦旗に続く大型戦闘艦の姿は明石の表情を明るくさせる。頭の中で軍艦行進曲を奏でながらどこまでも続く青い海に列を成す第二艦隊の姿を一望する彼女だった。

が、耳に装着していた無線電話のヘッドフォンからは友人の声が響いてきた。明石はその声に眉をしかめるような事は無いが、訓練中に響いてきた友人の怒号はやはりというべきか当然というべきか、それを耳にした彼女の部下達を今にも泣きそうな声にさせてしまう。

『16 駆、何やってる！？ 艦隊中央から離れ過ぎだ！！ もっと寄らんか、馬鹿者が！！』

艦隊先頭を駆ける神通艦であるが、その変り身たる神通は第二艦隊所属艦の全てを導くという今の栄光に浸る事無く、後ろへ視界を向けて部下達の行動へ常に目に光らせているらしい。明石は神通が言い終えると同時に、右舷の向こうにて白波を立てる3隻の駆逐艦達に顔を向けた。

艦首に大きく「16」と書いた彼女達こそが、今しがた神通が怒号を放った相手、第16 駆逐隊の面々だ。同じ様な内容である無電を神通艦に座上する二水戦司令部から受け取ったのか、第16 駆逐隊は先頭の雪風艦が転舵を始め、黒潮艦と初風艦がそれに続いている。

しかし二水戦で最も若い駆逐隊であり、同時に最も若い艦で構成されているのが第16 駆逐隊であるから、二水戦司令官である五藤少将はそれ程怒っている訳ではない。竣工と同時に就役が常の駆逐艦であるから、完熟運転はこのような航行中の訓練で補うしかないのである。

しかし自身の分身の中に宿る五藤少将に反し、この人が注意だけで終わるはずも無い。この日の夜、第二艦隊は土佐湾沖合いにて停泊するがその最中、神通艦の艦尾では雪風、黒潮、初風の3人が神通によって容赦なく叱責された挙句、思いつき尻をぶっ叩かれる事になってしまった。

6月26日。

第二艦隊は訓練海域であった土佐湾を離れ、針路を西に取った。室戸岬を左舷に眺めながら通過した後で、今度はすぐに針路を北に変更。休養の為、和歌山県の和歌の浦湾へと向かうのだ。

紀伊水道へ向かって真っ直ぐ北上する第二艦隊だが、この水道を抜けた先には淡路島^{あわじ}によって隔てられた大阪湾と播磨灘^{はりまなだ}が広がっており、それに伴って民間の船の通行が多い事から航行中の隊列編成訓練はさすがに行われなかった。特に和歌山と徳島の間を結ぶ交通船の航路は紀伊水道を真横に一刀両断するかのような航路であり、単縦陣にて紀伊水道越えを図る第二艦隊の各艦は両舷への見張りを強化する。

もともと視界の良好な晴天という天候の下での航行であった為、見張りの任につく乗組員達は往来する客船や貨物船に手を振ったりする等の余裕もあった。そして大阪、神戸と世界的にも屈指の港湾都市を持つ大阪湾方面からは、二航戦の蒼龍艦や飛龍艦にも引けを取らない大型の船舶が頻繁に紀伊水道を南下して行き、世界に誇る日本の海運事情を各艦の乗組員達によく理解させた。

一方、第二艦隊所属の艦魂達は真横をすれ違っていくそんな船舶に手を振ってやるものの、その内心では色とりどりの服で身を包む民間船の艦魂達がちょっと羨ましかった。自分達が持っている服は栄えある帝国海軍の軍装であるが、在りのままに言ってしまうと白と黒の2色でしか選べない地味な色合いの服である。赤や黄色などの鮮やかな色合いは一度もその身に纏った事は無く、口には出さないながらも民間船の艦魂達が身に付けた着物や洋服は第二艦隊の艦魂達の瞳にはどこか恨めしく映るのだった。

6月28日。

第二艦隊は紀伊水道の東側に位置する和歌の浦湾に到着。紀伊半島の西岸をえぐった形となる和歌の浦湾は湾口である西側以外は全て陸地に囲まれており、そこに広がるのはこれまた波の静かな海である。第二艦隊は、湾の北側に位置する新和歌の浦の沖合いにその錨を下ろした。

和歌の浦は万葉集にもその名が出てくる程の歴史のある土地で、奈良の時代から続くその地のあちこちには名所旧跡が数多い。皇紀2600年の今年はその中でも神巧皇后や聖武天皇（しょうむ）の所縁がある玉津島神社が全国から観光客を呼び寄せており、さらには付近にある紀州東照宮や天満宮等の神社仏閣も含めて、この地は奈良の時代から続く古き良き日ノ本の歴史を垣間見る事ができる重要な土地だ。

この新和歌の浦は和歌山市に含まれているのだが、和歌山市は徳川御三家の一つである紀州徳川家が代々その身を宿した和歌山城の城下町として栄えた土地であり、その事はこの地が時代を選ばずに常に日本史の中で輝き続けている事を物語っている。そして湾を出て少し北に行った所には雑賀崎（さいか）があり、ここはかの織田信長公をも震撼させた鈴木孫一率いる戦国最強の傭兵集団「雑賀衆」の本拠地でもあった場所だ。伝えた西洋人達が逆に腰を抜かす程だったという、彼等の卓越した鉄砲戦術は余りにも有名である。

また、この歴史のある土地は古くから神社仏閣を巡る巡礼の旅の聖地で、明治41年には既に和歌山電気軌道による路面電車が和歌山市から和歌の浦まで通っており、その4年後の大正2年には第二艦隊が停泊する和歌の浦港を有するこの新和歌の浦まで沿線が拡大

された。元々、この和歌の浦港は紀伊水道を渡って四国の徳島まで行く事が出来る交通船の出発港であった為、路面電車の開通はこの地における商業と経済の活性化に多大な貢献をしており、発達した観光客目当ての商業は第二艦隊乗組員を癒すのにはうってつけであった。

ちなみに昨年に連合艦隊司令長官として赴任した山本中将が連合艦隊旗艦の長門艦ながとに初めて将旗を掲げたのは、この新和歌の浦の波間で行なわれた出来事である。

和歌の浦港の往来を邪魔せぬように沖合いに投錨した第二艦隊の各艦だが、今から長距離のカッター漕ぎをせねばならないという状況が生まれているのにも関わらず乗組員達の表情は明るい。そしてそれは明石艦とても例外ではなかった。

見晴らしの良い艦橋天蓋にて腰を下ろした明石は暖かさが暑さへと変わり始めた和歌の浦湾の風を浴びながら、艦側から次々に港へ向かって船足を進めていく内火艇や運貨艇を眺めていた。和歌山県には海軍関係の施設が無い事から、明石艦のような生まれて間もない艦にとっては初めての寄港地である新和歌の浦はその乗組員達にとっても同様に初めて訪れる地であり、運貨艇や内火艇からは彼等の明るい声がそれはそれは賑やかに響いてくる。いつもは寄港地に投錨してすぐに明石艦には艦隊所属の各艦からの要修理品が寄せられてくるが、艦隊訓練が始まったばかりとあってさすがに今日は一件も修理依頼が無かった。普段からこういう地味なところで汗を流す自らの乗組員達が憂い無く遊びにいける事は、文字通り艦の命である明石にとっても喜ばしい事である。だが明石の表情は乗組員達と同じ様に冴える事は無く、ちよっと口を尖らせてその光景を瞳に映していた。

『つまんね……。』

ふとその唇から漏れてきた明石の声に、彼女を挟んで腰を下ろしていた神通と那珂^{なか}は僅かに視線を向ける。艦から足を離せないという艦魂の不便な所を嘆く明石はいつもの事ではあるが、神通も那珂も彼女がそれだけの理由で声を上げた訳ではない事はすぐ解った。

いつも彼女の変り身の様にして上陸しては必ずお土産を買ってきてくれた相方は、既に明石艦から去っている。即ち明石にはもう、美味しい名産品を買ってきたり、面白い上陸先での土産話を聞かせてくれる人間が誰一人としていないのだ。

元来、人間と艦魂は触れ合う事のできない存在であるから、神通と那珂にとってはそれは艦魂たる者における当たり前の事であったが、就役前から半年に及んだ人間との生活は明石の中では余りにも大きい記憶であり、神通と那珂の二人もそれを否定するつもりは微塵もない。彼女達にしても普段から自身の分身の中で生活を共にする乗組員の一人と手を取り合って一喜一憂できる事は有意義であったし、艦魂と人間という存在の仕方の違いは在れど、そんな彼等の内の一人と触れ合いながら過ごせた事はなにより楽しかった。

神通が気付かれないように横目で除いた明石の横顔には、最近は笑みを絶やさない様になった彼女の明らかに寂しげな表情がある。それは楽しかった相方との生活が恋しくてたまらない明石の素直な気持ち、極めて率直に表した物だった。だが神通と那珂にあっては、その事を口に出して明石を慰めようという気は無い。明石が欲するそんな生活はいずれ必ず戻ってくると予想しているし、残念ではありながらもこうやって別れを経験してお互いの大切さを認識した明石の姿は、十年以上も生きてきた神通や那珂ですらも体験できなかった素晴らしい経験だと考えているからだ。

ほんの少しだけ口元を緩めた神通は、ふと視線を正面の和歌の浦港へと映す。和歌の浦港は呉や神戸ほどの大きな港湾ではないが、

港の背後に広がる歴史を感じさせる建物群と色とりどりの看板は賑わい豊かなこの地の様相を目にする者に良く伝える。そしてそこに向かつてカッターや内火艇がカルガモの親子の様に列を成して走る光景を瞳に映し、神通は僅かにかすれるような小さな声で言った。

『ここには美味しい食いや酒でもあるのかな。ウチの乗組員の連中もエラくはしゃいでいたが……』

『さあ……。』

力ない返事で首を捻る明石だが、その横では那珂が常に湛える彼女らしい優しい笑みで二人のやりとりに耳を傾けていた。頭の後ろで組んだ両手を枕にしてだらしなく寝そべる姉に反し、落ち着いた柔らかな物腰が特徴の那珂は両の脚を横に流して野辺の花のように腰を下ろしている。しかしその脳裏には自身の分身たる那珂艦の艦内にて耳にした乗組員達の会話が浮かんであり、そこに彼女は姉の口にした疑問に対する答えを得ていた。

『和歌山市で歌手の公演を見学するんですって。かさぎしづこ、だったかしら……。』

『ああ、笠置シヅ子か。ウチの士官の連中も、よくガントリーで蓄音機をかけとったなあ。』

自分を挟んで右に左に飛ばされる神通と那珂の会話に、明石は耳にした歌手という言葉に反応して顔を上げた。もちろん歌の歌い手さんであるという事は解っているのだが、実は彼女は歌手が歌っているレコードを聴いたことも無ければ、それがどんな人達なのかも良く解っていない。とりあえず自身の乗組員達が話していたやりとりからすると、歌手は歌が上手いのはもちろんだがとても美人で、常に華やかな服装に身を包んでいるのだと言う。かつては相方と一緒にになって歌を歌った事は何度もある明石だが、そも人間の世界で

それを生業にするという歌手の実態を考えた途端、彼女の胸の奥からは好奇心という感情が溢れ始めた。

『ジャズとかいったかな、笠置シヅ子の曲は……。米国生まれの音楽らしいが、私は割りと好きだったぞ。そう言えばお前の声と良く似てるな、那珂。』

『笠置シヅ子と？ふふふふ、そうなの？』

姉妹の明るい会話がその場を優しく包んでいくが、尽きぬ興味を抱いてしまった明石はそんな空気なぞへとも思わない様になってしまふ。突如として神通に顔を向けた明石は、すぐさま神通の腕を掴んで声を荒げる。

『神通、蓄音機あるの！？』

『な、なんだ、おい……。』

グラグラと身体を揺すられてビックリする神通だが、猫どころか龍すらも殺せる好奇心の持ち主である明石にかかつては抵抗する事もままならない。だが先程まで浮かべていた寂しげに伏せられていた彼女の瞳は大きく見開かれて輝いており、明石がもやもやと胸に抱いていた物を一時とは言え忘れた事を神通は感じ取った。そして明石の背後から顔覗かせている妹が放つ声も、神通の明石に対する行動に拍車をかける。

『神通姉さん、私も聞いてみたいわ。』

『ざずー！かさぎずぶこー！蓄音機ー！！』

『だー、解った解った……。今は艦内に乗組員は殆どいないから、蓄音機を使っても大丈夫だろう。』

面倒臭そうに言いながら神通は立ち上がるが、その表情は決して

不機嫌そうではない。晴天に向かって顔を上げ、何度か首を左右に捻る彼女の顔には、友人や妹の希望を叶えられるという喜びが生む清しい笑みがあつた。自分に従って腰を上げた二人にその表情を隠すように背を向けると、神通は右手を方の高さに上げて人差し指を前後させながら口を開く。

『そら、ついてこい。』

こうして3人は神通艦へと向かい、人気の無い一室で蓄音機から響く笠置シヅ子の美声に耳を撫でられる時間を楽しんだ。

そしてちょうどその頃、東京では日本の進路を決定付ける重大な動きが密かに画策されていた。

霞ヶ関の赤い壁に青い屋根を頂く海軍省庁舎。

明治27年からその身を構える優雅な風格を持った庁舎の正面玄関からは、敬礼をする衛兵を背後にしてスタスタと庁舎から出て行く一人の男の姿があつた。雪のような純白の第二種軍装に金のボタンを輝かせ、その襟元には大佐の襟章を身に付けている。栄えある帝国海軍の佐官であるその男にはマストを彷彿とさせる真っ直ぐに伸びた背筋が伴っており、その歩く姿はまさに「忠勇なる陛下の赤子」という言葉をそのまま映像にしたかの様な姿であつた。

しかし男の表情は務めて不機嫌そうであり、尖らせた口を1ミリと引っ込めずに歩いていた。彼は脳裏にその原因である先程までの記憶を蘇らせ、荒く首の後ろガリガリと掻く。

『欧州の情勢をご存知でしょう！！何故に海軍はこの好機を捉えようとしないのでですか！？』

僅か数分前までその大佐の男は、優雅な造りの部屋の真ん中にある机で腰を下ろす初老の人物に向かって声を荒げていた。真紅の絨毯を敷き、部屋の横には様々な書類と美しい小物が収納された棚が列を組んでいる。その上には歴代のこの部屋の主達の肖像写真が並べられ、その人物が座る大きくて広い机の後ろには同じくらいの大さきの窓があり、そこから差し込む陽の光りはその人物が襟につける星二つの襟章を輝かせていた。

その襟章が示す彼の階級は中将。佐官の身分である者が、荒げた声を放って良い相手では決していない。だが中将の人物の机に歩み寄った大佐の男は両の手を机の端に刺す様にて突っ張り、必死の形相で叫ぶように言い放つ。彼の立場という物を無視した態度は軍隊においても世間一般の会社においても許される物ではないが、その心意気を中将の人物は複雑な心境を持ちながらも認めている。先程の彼の言葉通り、そこに響くやりとりは帝国海軍と日本の将来を案ずる物なのであった。

『アメリカは当に経済制裁を課してきたんですよ！？その理由は帝国が支那戦線で足踏みをしているからです！！』
『そんな事は君よりも長く海軍に勤めてきた私が、一番良く知ってるよ。』

中将の人物は眼前の大佐の叫びを物ともせず、手元にあった書類

に視線を下ろしてサインを綴る。背後から差し込んでくるサンサンとした日差しが良く似合う穏やかなその表情だが、大佐の男はそののんびりとした態度にさらに声を荒げる。しかしそれでも中將の人物は態度を少しも変えない。実はこの様に部下達が迫ってくるのは、最近では日常茶飯事だったからだ。

『だったらなぜ支那への支援を断つ一連の提案を却下なさるんですか！？それにこのままドイツが破竹の大進撃を行えば、降伏したフランスやオランダが宗主権を持つ仏印や蘭印に奴らが現れるかも知れませんよ！？南洋にあるわが国の領土の領有権を主張するかも知れませんか！？』

『君ねえ。だからと言って先にぶん取ったら、アメリカが黙ってる筈無いだろう？戦争になってしまったらどうする？帝国の石油や鉄鋼といった資源の備蓄、年間数百万台に及ぶアメリカにおける自動車の生産実績、そして基本的な国力の差。こんな相手に一年ぐらいは戦えるかどうかが関の山という状態で戦争するのは、暴虎馮河の愚じゃないか？』

のらりくらりとする中將の人物の物言いに、大佐の男はそれまでも同じ事を何度も訴えてきたこの場にはいないもう一人の中將の記憶を思い出す。

「女子学習院長」のあだ名で呼ばれたその人物は、海軍次官の住山徳太郎中將。すみやま とくたろう本来は大佐の男の様な組織の下の方からの意見は海軍次官の住山中將を通してから、いま彼が対峙する人物に行き渡るようになっていいる。しかしその渾名の通り、教育畑を歩んできた住山中將にはハッキリと決断をするような物言いが無く、大佐の男が何を口にしても暖簾のれんに腕押しで埒があかなかった。だから大佐の男は、こうして眼前の人物に直接意見を陳情しにきたのである。

そして彼が必死の形相で帝国海軍の将来を訴えるその人物こそ、帝国海軍の意見を国政に反映させる立場を頂きたる者。海軍大臣で

ある吉田善吾中将^{よしだ ぜんご}、その人なのであった。

『大臣！！仏印を手に出れば、支那に対する欧米の援助の殆どを遮断する事ができます！！それに地理的にも資源の豊富な蘭印への足掛かり、橋頭堡^{きょうとうぼ}にもなり得ます！！そして蘭印を制圧できれば、帝国の資源は充分ではありませんか！？さらに提案には陸軍も同調しています！！』

『君ねえ。船と大砲と火薬があれば戦争が出来ると思っとりやせんか？』

『な・・・！！』

大佐の男が口を噤んだところで、それまで手元の書類に視線を落としていた吉田中将が顔を上げた。現在の連合艦隊司令長官である山本中将^{やまもと}と同期で、日露戦争にも従軍した経験を持つ彼は、戦争という物を肌身を通して良く知っており、先程からの大佐の男の言葉に足らぬ点がある事を認めていたのだ。切れ長の目をさらに細くして、吉田中将は眼前の部下に対して静かに語りかけた。

『今の我が国には兵器の損害を補うだけの生産能力はあるかね？決戦海域とされる南洋方面のサイパンやパラオ、トラックに修理用のドックや工作部署があるかね？何も無い更地を一晩で平地に整える土木機械があるかね？蘭印や仏印、シンガポールの西方に関する海図だって、満足に用意していないんじゃないのかね？』

『・・・・・・・・』

『全体の知識が無い者が、勝手な事を言っではならんよ。海軍は陸軍に引っ張られず、帝国海軍軍備の再検討を含めた日本の将来を研究するべきだ。』

脳裏に残る吉田中将の言葉と反論できなかった自分の不甲斐なさに、大佐の男は舌打ちをしながら歩く。大股で足を進める彼の背中には、落胆と憤りが同居している。

そんな彼の背中を、吉田中将は執務室の窓からこっそり眺めていた。理想は違えども、大佐の男が口にした言葉は帝国を憂う気持ちから来る物であると理解する彼は、それをことごとく退けなければならぬ海軍大臣という自身の立場をちよつと不憫に思ってしまう。すると彼はゆっくりと自身のヘソの辺りに手を当てて、溜め息を発しながら呻く様な声で呟いた。

『ふうう……。腹が重いな……。』

しかしこの時既に、吉田中将が憂いでいた事は現実になっていた。この日、陸軍と海軍の一部の勢力は密かに打ち合わせを設けており、その結果として生まれたのは大佐の男が口にした提案その物であった。そしてその策を現実の政策として実行すべく、陸軍と海軍の一部勢力は、欧州戦線不干渉を掲げる現在の内閣、即ち米内内閣よないの打倒を画策したのであった。

時に昭和15年6月28日。梅雨の日差しが空気を蒸し返し、暖かさが暑さに変わり始めた日の事だった。

第四八話 「修行中」

昭和15年7月2日。

既に先月の6月22日に独仏休戦協定を結んでいたフランスでは、ペタン元帥を首相に頂く新政権が同国中部の都市ヴィシーへと移転。ここを新たなフランス国の首都と定めた。世に言うヴィシー政権の誕生である。

7月7日。

七夕を迎えたその日、休養を終えた第二艦隊は歴史豊かな和歌の浦の波間に別れを告げる。

往來の激しい紀伊水道を今度は南下し、沖合に出たところで針路を西へと向ける。紀伊半島を左舷に眺めて進む第二艦隊だが、半島南端付近の海域は大阪と東京を結ぶ海上交通路の大動脈であり、彼等はここでもまた沢山の民間船や貨物船とすれ違う。

台風の時期はまだまだ先である事から波はそれ程でもなく、のんびりと航海する民間船のデッキでは乗船した客人達が椅子に座ったり、コーヒーを飲んだりしながらくつろいでいた。第二艦隊の乗組員達の嫉妬も混じった帽振れが送られる中、それを受け取った客船の乗客達には第二艦隊の軍艦旗はどう映ったであろうか。

7月8日。

第二艦隊は道中、紀伊半島最南端を示す潮岬^{しおの}沖を通過。

本州の最南端でもあるその地を過ぎたそこは、「海の東海道」の異名をとる熊野灘^{くまのなだ}。沿岸に沿って流れる黒潮が運ぶ海の恵みは、この地で盛んなカツオと鯨の漁にて垣間見る事が出来る。長い銚や竿を幾重にも重ねた漁船が第二艦隊の各艦の周りを群がる姿を想像する第二艦隊の乗組員達だったが、熊野灘の端である悠々と灯台がそびえる大王崎^{だいおうざき}に至るまで、彼等の視界に漁船が表れることはついに無かった。

実はこれより遡る事3年前の、昭和12年10月。

支那事変が勃発したその年、膠着する上海戦線の状況を打破すべく、帝国陸軍は杭州湾上陸作戦を企図。その作戦用の船舶を調達する為、民間の漁船を徴用したのである。陸軍の各船舶輸送司令部が音頭を取って行った徴用は、重量12トン内外、全長15メートル内外、喫水1・5メートル内外、機関出力25馬力く35馬力の条件に当てはまる漁船を対象とした物で、くじ引きによる抽選で決められた後に船員ともども支那戦線へと狩り出すという物であった。

そして昭和13年の12月には拡大した支那戦線へ対応する為、今度は海軍が60トンく70トン級の漁船を徴用し始めた。

相次ぐ漁船の徴用は漁業を生業とする国民から文字通り生活の糧を奪い、その結果がいま第二艦隊の乗組員達が目にする光景なのであった。もっとも彼等の殆どはその真相を知らず、『海が荒れると読んで休漁してるんだろうか。』と口にして首を捻るしかない。なぜなら漁船の徴用はすべて軍極秘に行われていたのであり、それが明らかにするのはずっとずっと後年の事になるからであった。

そして現在、残されている文書記録は静岡県焼津漁港^{やいづ}の一件しか発見されていない。だがその内容は、全国どこの漁港でも似た様な物だったという。

・所有船舶総数 64隻
・被徴用船舶の喪失数 鋼鉄船16隻・木造船35隻 計4956
トン

・戦災損失 木造船2隻 計25トン

・被徴用船舶の帰還数 鋼鉄船5隻・木造船6隻 計1252トン

64隻中、実に53隻が、再び焼津の港に戻る事は無かったのであつた。

7月11日。

第二艦隊は伊勢湾の北西に当たる、三重県四日市よっかいちに到着。鈴鹿川の河口に開かれた四日市港の沖合いに錨を下ろした。

戦国時代の頃より天然の良港という地勢を發揮して栄えてきた四日市は、徳川幕府発足時には幕府直轄の領地として指定を受ける程に商業が盛んであつた土地だが、古い神社仏閣が市内に多数ある事から和歌の浦と似たように観光業も古くから大変に盛んである。古来からの日本の大動脈である東海道が通り、なおかつ良港である事から海の道も整っている四日市は昔から宿場町として賑わっているのだが、何と云ってもその最大の要因は付近に身を構える伊勢神宮いせじんぐうの存在に尽きる。

伊勢神宮は恐れ多くも大君の祖、天照大神あまてらすおおみかみが奉祀される神社であり、日章旗を頂く者にその名を知らぬ者はいない。その中には天岩戸あまのいわとで有名な三種の神器の一つ、八咫鏡やたのかがみが奉安されている。伊勢神宮は日本神話の語り部であると同時に、天皇陛下の大御稜威おおみいつを今に伝

える大変に重要な場所なのだ。言わずもがな、皇紀2600年の今年は全国からの観光客でごった返しており、その勢いはまさに「揚げや同胞、一億人」である。

歴史と神国日本の尊厳が同居するこの地にはその恵みと言わんばかりに多くの特産品があり、上陸した第二艦隊の乗組員達はすっかり財布の紐が緩くなってしまった。特に暑くなり始めた時期での寄港だった事もあり、彼等の殆どはご当地特産の団扇うちわを求めて四日市や鈴鹿の市街を散策した。

艦隊幹部に当たるお偉方もその例外ではなく、神通じんつうの相方である木村大佐は急須や土鍋で有名な萬古焼ばんこやきの湯呑を手に入れ、そのトレードマークであるカイゼル髭の先を高々とはね上げる。もっともイギリス仕込みのユニークさを大事とする帝国海軍軍人を地で行く彼は、何の冗談か相方へのお土産として夫婦茶碗を調達。

明石あかしや那珂なかが見守る中、箱を空けた瞬間に貫い手の神通が木村大佐に向かって竹刀を振り上げたのは言うまでも無い。

そして寄港地にての補給においても、帝国海軍の日常にはそれに乗じた日々が送られる物である。

寄港して数日経った頃の明石艦。

静かに伊勢湾の波に揺られる艦首甲板では、青空から差す陽の光りを浴びながら立っている明石と那珂の姿がある。しかし明石とは仲良しの那珂が隣にいるにも関わらず、明石は軽く不機嫌そうに頬を膨らませて視線を正面に投げていた。そのしかめた眉のしたにある僅かに細めた瞳には、頭に本を乗せてスタスタと歩くもう一人の

友人、神通の姿が映る。だがそれこそが明石の表情を曇らせた原因であった。

『……ふん。簡単だな。』

『ぐっ……！』

本を頭に乘せたまま、不敵に笑った神通はその顔を明石に向けて言い放つ。明石は友人のその声を受けてさらに頬を大きく膨らませ、唇の隙間から小さな呻き声をもらした。二人の表情は全く対照的であるが、那珂はその差を楽しんでいるかのようニコニコと笑みを浮かべる。やがて頭から乗せていた本を手にとった神通は、明石の前まで歩み寄ってその本で明石のおでこを軽く叩きながら口を開く。

『言っただろう、気品が大事だと。これすらも出来んという事はまだまだ子供なんだ、お前は。』

『なにおお……！！』

珍しく眉を吊り上げて怒りをあらわにする明石だが、神通はその顔に笑みを崩さない。なぜなら自分の言った事が正しかったという事を、明石は今身を持って思い知っているのだと明確に解っているからだ。怒りに任せて何事かを言わんとした明石を抑える様に、神通は口元を緩めて機嫌の良い時に出る憎まれ口を叩く。

『ふはは。怒る前に励むんだな。ほれ。』

そう神通に言われながら、視界を覆うようにして顔の前に本を掲げられる明石。本の横に映る神通のそれはそれは憎たらしい事極まりない笑みに、彼女は悔しさと衝撃が混じった複雑な思いを抱いてしまう。

コイツ、もしかして良い女なのか!?

そんな言葉を脳裏に過ぎらせる瞬間、明石はそれが友人にはあつて自分には無いという事をさらに思い知らされて、無性に腹が立つてくる。

些細な事で怒るわ、八つ当たりをするわ、いつつも不機嫌そうな表情をしているわ、無愛想だわ。普段の神通はお世辞にも褒められる様な人柄ではなく、友人として慕いながらも明石はその事を良く理解しているつもりだった。大の男である忠や木村大佐を怒号とげんこつで黙らせる事も日常茶飯事であつたから、女性らしさという点では神通よりも自身の方が優れていると思つていたのだ。

ところがどっこい、明石が師匠の朝日あさひから教わつた「一流の淑女レディ」という艦魂たる者の気品と姿を、そんな神通は見事に体现できるのである。猫背である事からその初歩である歩き方で悪戦苦闘する明石は、それをいとも簡単にこなしてしまつた神通とその人柄を考えた時、どうしても自身と比べてしまう。決して神通の事が嫌いな訳ではないのだが、大の仲良しであるというお互いの立場が、明石の胸の中に激しい悔しさを募らせるのだつた。

『むん!!』

明石は顔の前にあつた本を鷲掴みにすると、大股で肩をいからせながら全部主砲の辺りまで歩いていく。その背中に向けて那珂が優しい声色で『頑張つて。』と声を掛けるが、今の明石にはその言葉が耳に入っていない。すっかりムキになっている彼女のそんな姿に神通や那珂が笑い声を響かせる中、振り返つた明石は頭の上に本を乗せて神通を睨みつける。だがすぐにその視線を正面に戻し、本を掴んでいた手を離して足を前に踏み出し始めた。しかし先程までそこにあつた神通の流れるような歩く姿は既に無く、そこにあるのはよろよろとした足どりで腕を左右に広げて歩く明石の姿で、それを

見た神通は思わず笑い声を上げる。

『ふははは。阿波踊りをする艦魂がこの世にいるんだな。長生きはするモンだ。はーはっはは。』

実に爽やかに笑い声を上げる神通だが、その言葉を耳に入れた明石はたまった物ではない。額に脈動する血管を浮き上がらせて、ギリと神通に鋭い視線を投げつける明石。だが集中力が乱れた彼女の身体はその頭の上にあった本のバランスを失わせ、それに気付いてハツとする明石の視線に包まれながら本は甲板へと落ちていった。

『んもおおー！！』

ちつとも上手く行かない猫背矯正とそれをこれでもかと馬鹿にして大笑いする神通に、ついに明石は溜め込んでいた悔しさを爆発させて何度も地団駄を踏む。

しかしその原因としての大きな物は後者の方であり、彼女は甲板を思いっきり踏みつけてから神通を睨んだ。珍しく口を大きく開けて笑う神通には、さしもの明石も今だけは友人という関係を忘れてしまう。その隣で普段と同じ様に慈愛に満ちた笑みを湛えている那珂に負けるのであれば、明石はここまで憤慨する事は無い。いつも優しく笑ってその部下や仲間内からも評判の良い彼女は明石の師匠と同じく典型的なお嬢さん型の人柄であり、逆立ちしても自分はそうはなれないと明石は半ば諦めにも似た思いを持っているからである。だがそれに反する土方型どかたの典型である神通に女性らしさという点で劣るというのは、明石にとっては絶対に譲れない物であった。

殺気すらも漂わせて明石に睨みつけられながらも、ここぞとばかりに意地悪な笑い声を放つ神通。もっとも那珂は、意地悪をする姉の姿を決して悪い事だとは思っていない。実の姉妹として常に傍らにいた那珂は、十年以上に及ぶ生涯でこれほど爽快に笑う姉を滅多

に見た事が無かった。もちろんその理由は馬鹿を目の前に行っているからでも、嫌いな輩の失態を嘲笑あざわらっているからでもない。その相手が初めて自分を真正面から殴り飛ばし、嫌われやすい自分の性格を知りながらも常に遠慮も怖がりもせずに無邪気に慕ってくる明石だからこそなのである。

その心底楽しそうな姉の笑顔を見れた事に喜びを感じながらも、那珂は茹でダコのように怒り心頭な顔をする明石もまた姉と同じくらい好きだ。心優しい彼女はその笑みを隠すようにして口元に手を当てながら明石の傍までゆっくり歩いて、彼女の足元に落ちて潮風に撫でられる本を拾う。姉とは顔つきが良く似ているが、まるで別人のような表情で優しく肩に乗せてくれた那珂の手とその語りかけに、明石は膨らませた頬をそのままに怒りを鎮め始める。

だが愉快的な事この上ない神通は、すぐに明石の怒りが沸点を突破するような言葉を放った。

『頑張って、明石。今度は私が背中を支えててあげるから、もう一度やってみようよ。』

『………うんー。』

『ふははは。ついでに「どじょうすくい」も教えてやれ、那珂。はーははは。』

すっかり上機嫌な姉の言葉に苦笑いを返す那珂だったが、彼女はその時、すぐ近くにあった明石の頭からカチンという音が聞こえてきた事を認めた。その表情を視界に入れようと顔を正面に向けた刹那、明石は姉の部下にあたる雪風ゆきかぜと霞かすみが日常からよく放つ台詞を口にして、その矛先である神通に跳びかからんとした。

『なにお、この野郎！……！』

そう叫んだ明石は両の手に拳を握ってその場を跳びますが、普段

から同じ様に暴れる姉を抑えるのが役目である那珂はそれを認めるや、慣れた身のこなしで明石の背後から腕を回してすぐにその行動を抑制する。帝国海軍の艦魂達の中でも姉と供に屈指の柔道の腕前を持ち、まして姉よりも一回り小さい身体つきの明石を抑える事は、那珂には造作も無い事だ。完全に勢いを止められた明石は、まるでその場にいる3人が初めて対面した際の場面を再現するかの様に、両腕をブンブンと振って大声で叫ぶ。

『離せえ、那珂ああ！ちきしょー！！！！！』

『あ、明石。お、落ち着くのよ。』

その後も那珂によって羽交い絞めにされながらも、明石は目の前で指を指して大笑いする神通に向かって手や足を振り回すものの、その全てが虚しく神通の身体の直前で空を切る。完全に「一流の淑女」という言葉を脳裏から消し去って声を荒げる明石であったが、彼女はふとその場に響いてきた男性の声に気付く。同様に那珂と神通もそれに気付き、3人は声が響いてくる艦尾の方向へと顔を向けた。

『わー！ー！っ！！！！』

視線を向けると、そこには何か赤い物を小脇に抱えた水兵服を身に付けた男が、猛烈な勢いで彼女達のいる艦首甲板に向かって近づいてくる光景があった。必死の形相で最上甲板を突っ走るその人物であるが、その顔に3人は心当たりがあった。そして彼女達がふと

記憶に蘇らせた事を、その水兵の後ろから響いてくる別の人物の声が確信へと変える。

『わーーーーっ!!!!!!』

『待てーーーー!!^{もり}森ーーーー!!』

日に焼けた肌が真っ白な水兵服によってあらわになる中、どんどん近づいてくるその人物の正体を3人は理解する。明石艦どころか第二艦隊きつての大問題児、森正志二水^{もり まさし}。明石のかつての相方である忠の、実の弟である。相方と同じ様に艦魂を瞳に映すことはできないながらもその従兵として過ごしていた事から、明石にとっては割りと近い感じを覚える彼なのだが、その奇妙な光景と小脇に抱えた品物に3人は目を丸くする。

『マ、マサ君……?』

『イ、イセエビ……?』

那珂の眩きによって明石はマサが抱えるそれがこの四日市特産のイセエビである事を認めるが、それは益々その光景を謎に包ませる。しかしマサの後ろから完全にご立腹の表情で追い駆けてくる人物を認め、明石はまたもや眩くように声を上げる。

『あ、あれ……、主計長の川島^{かわしま}さんじゃ……。』

『このクソガキヤーーーー!!待てーーーー!!』

『わーーーーっ!!』

静かに波間に浮かぶ明石艦の甲板に響く彼等の大声と、それに伴った鬼ごっこ。呆けてそれを目にする3人であるが、マサも川島主計長も彼女達の姿を見る事はできない。上官に追い駆けられながら

もマサは明石達のすぐそこにある前部主砲を一周して、これまで走ってきた右舷の甲板から今度は左舷の甲板にコースを変え、艦尾へと一目散に駆けていく。その後ろを仕事着である割烹前掛けかっぱうを身に付けた川島主計長が、怒鳴りながら追い駆けていった。

『そりゃ艦長用のエビだぞー！！返せコラアーーー！！』
『わーーーっ！！！！！！』

川島主計長は27歳と明石艦幹部連中の中では最も若い幹部であり、運動神経だって良い。しかし逃げるマサはそれよりもまだ若い21歳で、おまけに帝国海軍水兵として既に4年も勤めて来た経歴があり、その海軍歴は兄の忠とそれほど変わらない。まして普段からコキ使われる水兵であるから、力も強いし声もデカイし足も速い。そのまま離陸できるかと思わせるような速さで、川島主計長にみるみる内に差をつけながら艦尾へ向かって突っ走っていった。

伊勢湾の潮風が通り過ぎる甲板の上、その余りにも豪快な光景に明石達3人はは声を放つのも忘れ、各々の髪を潮風に揺らす。

それは帝国海軍生活における銀バイの一コマであるが、世間一般的な視点から見るともはや強盗に近い。だが帝国海軍というのは世界的にも一風変わった軍隊で、現物と証拠を押さえぬ限り、犯人を組織内で告発する事は出来ないという実情がある。なぜなら栄えある陛下の赤子せきしである帝国海軍には、泥棒や殺人犯といった不届き者はいない事になっているからだ。つまり盗んだ者より、盗まれた者が悪いのである。

故に艦隊勤務において、物資の積み込みが行われる寄港地では主計科と水兵の鬼ごっこは日常茶飯事。そこにはちよつと失敬と缶詰等の小物をポッケに忍ばせる可愛い輩もいれば、先程の彼の様に実力を持って大物を調達するともない輩もいる。見事に行方を眩ますことが出来たなら、晴れてその品物は補給品から紛失品へと類別変更されるという、なんともご立派なシステムなのである。

そして伊達にマサは長いこと明石艦にて水兵をやってきた訳ではない。艦内の事なら厠かわやの位置はもちろん、乗組員達が如何わしい品々を隠している秘密の場所までなんでも知っており、それから数分後には見事に川島主計長の視界から消え失せてみせるのであった。

『ほう。あれが森の弟とやらか。』

『た、遅いと言うか、何と言うか……。あ、あはは……。』
『・・・・・・・・。』

忠を知る神通と那珂は記憶に残る彼とは大違いの弟の姿を目にし、その顔以外は全く似ていない人となりに驚く。もっともこの姉妹とて似たような物であるが、当の二人は澄ました顔でその可笑しさを笑った。

その内に神通はふと、先程から明石が一言も発せず彼等が去っていった艦尾に視線を投じている事に気付く。ついさっきまで烈火の如く怒っていた彼女であるが、その表情からは既に怒りの色が完全に引いていた。やがて彼女の顔にあるどこか寂しげに細くした瞳に、神通は明石が先程の水兵の兄に当たる人物の記憶を辿っているのだと悟る。荒げた呼吸もいまや口からは漏らさず、伊勢湾の風によって明石の一本に纏めた後ろ髪がフラフラと揺れる。神通は明石のその姿に小さく口元を緩め、彼女の肩に自身の手を柔らかく乗せた。

『明石。お前だけじゃないぞ。』

『うん……。？』

突然の神通の言葉と手の温もりに、明石は微かな声を返しながら神通に視線を流す。だが彼女の友人としては最も親しい神通は、そんな明石の心の内を完全に読み取っていた。

『私は砲術学校に行った事は無いが、その辛さは乗組員達の話から少しは知ってる。物凄く厳しいところなんだそうだ、あの若造が行った所はな。』

『・・・・・・。』

『それでも森は、ただひたすらに頑張ってると思うぞ。それはお前が一番良く解るだろう？』

神通の言葉に明石は無言のまま視線を足元に流すが、彼女は友人が何を言わんとしてしているかは理解していた。全くもって上手く行ってくれない事への腹立たしさを残しつつも、明石はちょっと口を尖らせて那珂の手に握られていた本へと手を伸ばす。そしてそのやりとりを耳にしていた那珂は、明石が本を手にとると同時にそれを掴んでいた自身の手を離し、ゆっくりと彼女の身体に回していた腕を解く。明石はしばらく握った本に視線を落としていたが、ほんの少しだけその瞳に力を込めてその本を頭の上に乗せた。

神通と那珂は明石のその姿に笑みを送り、彼女の身体の両脇に寄り添ってお互いの手をその背中や肩に添える。

『そら。教えてやる。もう少し胸を張れ。視線は遠く、でも顎が上がらんようにな。』

『明石、お尻を高く上げる事を意識するのよ。歩くのはゆっくりでいいからね。』

『・・・・うん。』

友人達の力を借り、明石は再び猫背矯正に励み始めた。日没まで

続けられた3人の試行錯誤は、翌日には猛烈な筋肉痛となって明石に襲い掛かるものの、彼女は次の日もその次の日も痛みの残る身体に鞭打って励み、神通と那珂はそれを親身になって助けてやった。

やがて休養を終えた第二艦隊は伊勢湾北西の四日市から、伊勢湾東部に位置する三河湾みかわの奥にある蒲郡がまじおりへと巡航。その泊地を変更するが、その頃には明石の背筋はちよっただけ真っ直ぐになっていた。

第四九話 「蒲郡の休日」

昭和15年7月20日。

明石艦を含む第二艦隊は、三河湾みかわの奥に当たる蒲郡港がまじおりの波間にその姿を浮かべていた。

港を含める蒲郡町には大きな城跡等といった昔を偲しのぶ史跡はないのだが、静かな湾の波間と沿岸近くに点在する竹島や三河大島は古くから観光地としてその名を天下に響かせてきた土地である。

特に竹島は海岸線長が僅かに680メートルと非常に小さな島でありながらもその面積の全てをもって八尾富神社やおとみとして崇められており、江戸時代にこの地の付近を領有した松平公はもちろんの事、なんと徳川家康公までも参拝した事があるのだという。しかも不思議な事に島の植生が陸地と全く違うという発見から、竹島は昭和5年には神社もろとも国の天然記念物として登録された。故にこの島は古くからの人々の信仰と自然界の不思議を兼ね備えた独特の魅力を持ち、支那事変が勃発する前の頃は学者や参拝者、そしてその魅力に魅せられた文化人によって界限は大変に賑やかだったという。その証拠に昭和7年に建築された島と陸地を繋ぐ竹島橋は、この地を崇める熱心な名古屋のとある繊維問屋の主が私財を投じて建造し、そのまま神社に寄付された物である。

また、この竹島は実は帝国海軍にもちよつとした所縁があり、大正4年に建立された海上にそびえる大鳥居の額を作ったのはなんと東郷元帥である。この事から第二艦隊の乗組員達が散歩上陸をするに当たっては竹島への参拝は必須とされ、彼等は古き良き竹島の歴史と独特の魅力、そして東郷元帥が遺した大鳥居に思いを馳せるのだった。

そしてさらに、この蒲郡町の東隣に位置する豊川町とよかわには昨年の1

2月15日をもって帝国海軍5番目の工廠が誕生していた事も、第二艦隊が蒲郡へと軍艦旗を進めた理由の一つである。

帝国海軍の艦艇の殆どが身に付けている機銃やその弾薬の製造を担当するこの工廠は、後年、世界に向けて花を咲かせる日本の自動車産業の原点ともなる豊川海軍工廠だ。594400坪という広大な敷地の中には、火薬の製造を行う工場も然る事ながらそこに働く工員達の宿舍まで完備しており、今年はその敷地をさらに広げる予定なのだという。

ちなみに第二艦隊が停泊した蒲郡港は、この豊川海軍工廠にて製造された各種製品を海上輸送する為の積出港でもあるのだ。

そんな事から明石艦^{あかし}では、工作部に所属する工員達の何名かが豊川海軍工廠へと出張する事になった。

豊川海軍工廠にて製造される機銃は帝国海軍の艦艇には必ずと言って良い程に装備されており、斯く言う明石艦にだって連装の機銃が二基も装備されている。だがその実は細かい部品のみで構成されるのが機銃という物であり、そもそもその殆どが露天にて装備されているから普段の整備や清掃は実は砲塔に収められている艦砲よりも大事だったりする。お手軽で扱いやすい武装と思いついては海軍軍人にも多いが、それを発揮できるのは扱う人達による普段の弛まぬ整備の賜物である。そしてそこに伴う小修理や部品交換は、戦地派遣という形で運用される明石艦の大切なお仕事である。

特に明石艦はこれまでの艦隊訓練で実際に機銃関連の整備補修を手がけてきた実績もあり、言わば明石艦の乗組員は修理補修も含めての「扱う側」の人間に当たる。だから「作る側」の人間である豊川海軍工廠の部署と連絡を取り合い、報告書や命令書等では絶対に知る事の出来ない現場の生の声を直接届けるのが出張する明石艦乗組員のお役目なのである。そしてもちろん、彼等がそこで同時に見

る事が出来る部品の製造法や管理の仕方は、修理補修を専門的に行う明石艦の実力を大いに高める事になるのだった。

一方その頃、第二艦隊に所属する艦魂達は、伊勢湾の中にある三河湾のさらに奥にて停泊しているという事から、極めて静かなその波に心から満足して羽を伸ばしていた。お船とは一蓮托生の身である彼女達だから、そのキールや肋材が異音を発するような大洋のうねりは実を言うとおんまり好きではない。その度に身体の節々には痛みが走るし、そも三角波に代表される大洋のうねりを舐めてかかった末に艦体を切断してしまった第四艦隊事件の記憶は彼女達にとっても新しい。故に艦魂達にとってはその分身である艦体に負荷の掛からない、波の静かな海面が最も過ごしやすい環境なのだ。第四艦隊事件で実際に被害を被った七戦隊の最上、五戦隊の那智や羽黒が、それはそれは嬉しそうに蒲郡での日々を過ごした事は想像に難くない。

普段は人間が休んでいる時でも汗を流している艦魂達だが、蒲郡の静かな海面は彼女達を安らかな気持ちへと誘い、纏める役の愛宕ですらもそれには逆らえなかったらしい。艦隊旗艦からの命令としてお休みが正式に発令され、彼女達は各々の思うがままにゆっくりとした蒲郡での時間を過ごすのであった。

雲一つない快晴の天気の下に揺れの少ない身を構える、第二艦隊

の各艦。

その中の一隻である神通艦じんつうの後部マストの中ほどにある探照灯台では、肩に掛けたバンドで運搬函うんぱんはこを吊り下げた霰あられがステップを昇りきって汗だくで荒く息をする姿がある。自身と上司の昼食を詰め込んだ運搬櫃を運ぶのはいつもの事だが、決してそれは軽い物ではない。小柄で人間で言えば16歳くらいの外見の通り、体力が有るとは言えない霰にとってはそれを運ぶだけでも一苦勞なのだが、何を間違ったか彼女の上司は艦でも一番の高さを誇る探照灯台まで持つて来るように指示したのだ。

『ひい・・・、ひい・・・。』

探照灯台の高さは海面からは10メートル以上もあり、彼女はその高さを重い運搬函をぶら下げて必死に昇って来た。しかもその昇る手段は、マストに備わっている鉄製のコの字型をしたステップのみ。

霰も普段から自身の乗組員達の同じ姿を目にした事はあるが、生来臆病な彼女には目も眩むような高さを命綱も無しに四肢だけでよじ登る事は綱渡りをするのに等しい。探照灯台まで昇りきった所で全身から力が抜け、汗で濡れたおかつぱ頭の横髪を両頬に貼り付けたまま四つん這いになって激しい動悸をする霰の姿も、決して無理の無い事ではあった。

そして霰に先立って既に探照灯台にその身を移していた上司は、そんな彼女の悲鳴のような声が混じった吐息をその耳に入れて顔を向けてきた。汗びっしょりになって青褪めた表情をする部下の姿に、その上司である神通は釣り上がったその瞳を左右で違う大きさにして眉をしかめる。

『お前・・・、ステップを昇って来たのか・・・？』

『ひい、ひい・・・。は、はいい・・・。ひい・・・。』

文字通り虫の息をする霰は、力なく神通に声を返す。ただ誠実に上司の質問に対して回答した彼女だったのだが、神通はそもその返事が示す霰のとった選択肢について非常に素朴な疑問を抱く。すぐに神通はその事を声に乗せた。

『・・・なんで”転移”をせん？』

『あ、あうう・・・。ひい・・・。』

『・・・。。。』

神通の口にした転移とは艦魂達が日常でよく使う瞬間的な移動の事だが、どうやら霰は探照灯台の上へと移動するのに際してそれを感じていなかったらしい。トロい性格の彼女の事は従兵という役柄で常に傍らに置いて来た事から神通は良く解っているが、さしもなくここまで酷いと呆れる以外に無い。もっともそれは霰も同じな様で神通が声を返すと同時に、彼女は自己嫌悪に襲われて上げていた顔をダランと床に垂らした。

要領の悪い自分の事が時々嫌になってしまう霰は、整い始めた吐息の中に徒労という言葉を滲ませた溜め息を混ぜる。上司の言葉に『すみません。』といつも言葉返すようにも、まだまだ静まらない肩を動かした呼吸をする霰は中々それを声に乗せる事が出来ない。しかし今日の上司はいつものように彼女の謝罪を怒号で制する事は無く、再びその顔を先程までと同じ様に艦尾の方向、即ち北の方角に向けた。航海科の倉庫から拝借してきた双眼鏡を両目にあてがい、何やらまじまじと陸地を舐め回すように眺める神通。

霰はそんな上司の不思議な姿に首を捻りながらも、彼女の大事なお仕事である午食の用意に取り掛かり始めた。運搬函の蓋を開けていつものように上司の分を先に用意しようとする霰だが、汗で濡れた彼女の手からは一番最初に用意しようと運搬櫃から取り出した盆が滑り落ちていく。思わず呻き声にも似た小さな悲鳴を上げる霰で

あつたが、床に落ちた金属製の盆は甲高い音を辺りに響かせて彼女の声を掻き消した。

『・・・はあゝ。』

けたたましい盆の音に続いて響いてきたのは、神通のちよつとおっかない声色の溜め息。もちろんそれを聞き逃さなかった霰はすぐに盆へと手を伸ばして拾い上げながらも、上司の怒号を覚悟して身体をビクビクと震わせ始める。しかし当の神通はそれに対して剥き出しの怒りを湧かせる事は無く、むしろそんな霰を氣遣うような言葉を手静かに口にする。

『食事用意はゆっくりでいい。とりあえず水でも飲め、霰。』

『あう・・・？ あ、は、はい・・・。』

神通は例え小さな失敗でも悪い物は悪いしダメな物はダメだとハッキリ諭す性格のお人で、そこに彼女の愛の鞭が伴う事は周知の事である。しかし彼女はたまにこうして優しい言葉を掛けてくる事があり、従兵として仕える霰はその理由である今という瞬間の上司の胸の内を普段の生活の経験からすぐに察した。今、神通は大変に機嫌が良いのだ。

少しだけ安堵の溜め息をした霰はせっかくの上司の言葉に甘える事を決め、運搬函の中で転がっていた水筒に手を伸ばした。実は先程まで緊張と疲労の連続であつた霰の喉はカラカラに渴いており、彼女は水筒の蓋を外すや否や、大きく喉を鳴らして中身を流し込む。その唇と水筒の金具の隙間からは多少の水がこぼれ落ちるが、霰はそれを気にも留めずに喉を鳴らし続けた。

『ふん。うるさいヤツだ。』

怖い怖い上司が背を向けたまま放った声であるものの、霰の耳に聞こえてきた神通の声には僅かに明るい感じが滲み出ており、彼女はすぐにそんな上司の口元が緩んでいる事に気付く。ようやく唇から離れた水筒に蓋をしながら、思い切って霰は神通に声を掛けてみる事にした。決してこの人を悪い人だとは思っていないし、そも部下の中では誰よりも神通を尊敬する霰にとって、神通が何をそんなに嬉しそうにしているのかは気になって仕方なかったのである。

『ど、どないんどすか？ 戦隊長。』

『ここは古くは三河の国と呼ばれた所だぞ。古戦場を巡って往時を偲んでいるんだ。』

『は、はい？』

まだまだ艦魂としては生まれたばかりである霰には、神通が嬉々とした声で言った事の内容がイマイチよく理解出来ない。全国の県名すらもまだ全部覚えきれていないし、戦場と言われてもごく普通のお船の命である霰にとっての戦場とは当然、海の上としか考える事が出来ないのだ。おまけに神通が双眼鏡を通して視線を投げるのは陸地の青い山々が連なる辺りであり、そも陸地にその足を着けた事すらも無い霰はそこにどんな戦いが在ったのか等知る由も無い。

そんな事から険しい表情で首を左右に捻る霰だったが、背後でそんな行動を取る部下の事は神通もお見通しである。両目の前に添えた双眼鏡をそのままに、神通は部下に自身の言った事を教えてやる事にした。しかしそれは未熟な部下に知識を授けてやろうという訳ではなく、ただ単に彼女の趣味が高じた物なのであった。

『いいか、霰。私がいま見てる北の山々の向こうに在る設楽ヶ原。しだらがはらのぶなが今から300年前のその地こそが、信長公率いる織田・徳川連合軍と武田の騎馬隊が激突した長篠の**ながしの**大合戦の古戦場なんだ。』

『お、おだ・・・？』

『それだけじゃないぞ。西に眺める山間の向こう。矢矧川^{やはぎ}を渡ったさらに先にあるのは、信長公が僅か3000の兵で25000の今川勢を蹴散らした伝説の古戦場。桶狭間^{おけはざま}だ。』

『あう……。』

明るく弾むような声でそう言った神通は、遙か西の陸地を指差して口元が緩んだその横顔を覗かせる。鬼の戦隊長として畏怖される神通の楽しそうな表情はその風貌からは想像も出来ぬほどに無垢な笑顔で、まるで夕陽の空に包まれてトンボを追いかける少年の様。普段から傍に控える霰ですらも、滅多にお目にかかれない姿である。しかしその稀有な光景に霰はありがたみを覚えるような事は無く、力の入らない呻き声を上げて首を垂れる。彼女は上司の趣味が高じた今の心模様は完全に読み取っているのだが、それ故に今から自身に降りかかるなんとも困った状況を容易に想像できたのである。首筋に先程までのそれとは違う意味での冷や汗を浮かべる中、霰の耳には神通のそれはそれは楽しそうな声が響き始めた。

『長篠の大合戦の兵力を考えれば、信長公率いる織田・徳川連合軍は東海道を兵力移動に使った事は間違いない。つまりいま私達が浮かぶこの蒲郡の眺めを、きっと信長公もその目で見た筈なんだ。これから始まる鉄砲を使った戦術を秘めて馬上から眺めた蒲郡の海は、信長公の御眼にはどう映ったのだろうか……。うーん……。想いが募るという物だな、霰。』

『はいい……。』

それは霰の予想通りの言葉であり、神通は彼女に背を向けたまま次から次へと信長公の足跡を偲ぶ言葉を並べていく。

怖い上司である神通の唯一の趣味が、尊崇する信長公を中心とした戦国時代の研究なのだった。もっともそれはこの人の個人的な趣向から来る物であって、そも戦国時代という言葉すらもイマイチ良

く解っていない霰には頭痛が起きる程に難解な物である。しかし上司のそれを諫める度胸も無ければ、そも上司の楽しみを奪うのは申し訳ないと考えてしまう心優しい霰には、ただひたすらに耳を傾ける以外に選択肢は無い。従兵として仕える事から神通には特に可愛がられる霰なのだが、彼女にとって不幸だったのは仕えた上司が帝国海軍艦魂の中でも随一の「オタ女」であるという事であった。気の毒という他無い。

こうして霰は日が暮れるまで、何時終わるとも知れない神通の信長公一代記に付き合わされた。

愉快的上司と哀れな従兵がそれぞれの想いを抱いて古き日ノ本の歴史に理解を深めているその頃、停泊する艦隊の端っこにて錨を下ろした明石艦では、仲間達の様に休日を過ごせない人物が一人いた。

明石艦艦内の一室にあるベッドには、艦の分身である明石がその身を横たえている。それを目にした者は彼女がのんびりお昼寝と洒落込んでいると思うかもしれないが、今日の明石にとってはそれとはとんでもないお話である。

おもむろに喉の渴きを覚えた明石はベッドのすぐ横に置かれた椅子の上にある水筒にその手を伸ばすが、その動きは酷く緩慢で腕を伸ばすだけという簡単な動作ながらもその腕には小刻みな震えが生じている。

『ぐ・・・い・・・、痛い・・・。』

『あ、明石さん、私がやりますから！』

部屋の隅っこにあった椅子からそう言って明石の元に駆け寄ってきたのは、二水戦8駆所属の朝潮だった。

二水戦では戦隊長の神通を除くと最年長者である朝潮あさしおは明石よりも一つか二つ年上の外見をもつ小柄な体格の艦魂であり、明石と仲の良い霞かすみや霰あきの実の姉に当たる。朝潮型駆逐艦10姉妹の長女である朝潮は、その細かな気配りと二水戦の誰もが認める実力を持って戦隊長の神通から全幅の信頼を置かれている艦魂である。

そんな事から朝潮は上司である神通より筋肉痛で一挙一動に不自由する明石の介護を依頼され、こうして一日中、明石の傍でお世話をしているのだ。椅子の上にあった碗と水筒に手を伸ばし、丁寧な動作で水を注ぐ朝潮に明石は感謝の念が絶えないのだが、全身から発せられる激痛はそれを表情に表そうとする事を邪魔する。首を捻る事すらも、今の明石にとっては辛いのだ。

『ぐあっ……!! ううう……、いでえ……。』

横になったまま水を飲む訳にもいかなないので明石は上半身を起すが、僅かづつ身体に力を入れる度に彼女の身体には電撃が走る。心配の言葉を発して労わってくれる朝潮の声はその耳に届いてくるものの、なんとやっているのかは明石には聞き取る事が出来ない。強く歯を噛んで治まる事の無い痛みに耐える以外に、彼女には出来る行動は無かった。

それでもやっとの事で上半身を起し、明石は震える手で朝潮の手から碗を受け取って自身の唇に添える。ところが水を飲む際に喉を動かす事にまで痛みが伴うというのだから、明石は喉の潤してもその表情を明るくする事は無かった。明石は碗の中に残る水を一気に口の中へと流し込むと、すぐさまその碗を朝潮に返してその身を再び横にする。

『あ、ありが、・・・と。ぐえ・・・。』

なんとか明石は精一杯のお礼の言葉を放つものの、言い終えて胸の支えが取れたと同時に再び身体を襲う激痛との戦いに身を投じる。それは師匠の朝日からの教えを何とか身に付けようと奮闘した結果であり、明石は今の自分の状況から如何にその教えを全うする事が大変であるかをよく理解した。

「一流の淑女」たる艦魂は、その歩き方もまた一流でなければならぬ。

明石はその言葉を痛みに耐えながら胸の中で小さく叫び、同時にまだまだそれが出来ない自分の未熟さを思い知る。実に厳しい世界であった。

するとその時、部屋の扉からは通路を歩いていく乗組員達の話し声が漏れてきた。

『え、次の行き先、知ってるのか？』

『おお、電信部のヤツが言ってたぞ。横須賀だつてさ。』

部屋に響くのは僅かな音量の声であったが、朝潮も明石もその言葉をハッキリと聞き取っていた。そしてそのやりとりの中にあった横須賀という地名に、朝潮は数ヶ月前の自身の記憶を思い出して少し動揺してしまう。その表情を読み取られないようにと口元に咄嗟に手を添える朝潮だが、つつい彼女が読み取らせまいと定めた相手である明石に向けて視線を流してしまう。

遡る事3ヶ月前、いまその場を共にする明石の下から大事な彼女

の相方を砲術学校のある横須賀まで乗せていったのは、この朝潮だったからだ。

『・・・・・・・・・・』

朝潮の黒い瞳には、虚ろな目で天井を眺める明石の姿が映る。時折頬の辺りを歪めながら瞬きもそこに天井へ向かって焦点の合っていない視線を投げる明石に、朝潮はその心の内を思うとなんと声を掛けて言いか解らず、明石とは対照的に俯いて自らの足元に向かって視線を流す。

しばらくの間、部屋の中を沈黙という言葉が支配していたが、ふと明石は苦痛に耐える呻き声を上げながら仰向けにしていたその身体を壁に向かうようにして横にした。朝潮がそれに気付いて顔を上げると、そこには170センチ近いという女性にしては長身である筈の明石の、なんとも小さな背中があった。

いたたまれなくなった朝潮は焦りながらもその脳裏に考えを巡らし、そんな明石の抱いているであろう思いを叶えられる方法を模索する。幸いにも朝潮には横須賀という所には土地勘がある為、確定的でないながらも薄っすらとその方法が頭に浮かび、彼女はそれを声に乗せてみた。

『あ、あの、明石さん。えと、砲術学校って追浜の海岸地帯に近いんです……。なので、あゝ、曳船の子達に頼めば、なんとか……。その、れ、連絡とか、つくかも……。です……。』

オドオドしながら発した朝潮の声だったが、まるでそれが聞こえていないかのように明石は黙ったままだった。なんとか考え出した方法であったものの、朝潮は変化の無い明石の背中に再びどうしていいか解らずに俯いてしまう。

しかしその声を耳にしていた明石は、決して朝潮が声を発する際

に抱いてくれた気持ちに何も感じていない訳ではない。必死さが滲み出た彼女の声は自分を元氣付けようとしてくれたからだと理解しているし、霞や霰の様に普段からよく話をする友人と比べるとちょっと関係が薄い朝潮が、こうして自分に対して心配の念を抱いて頭を捻ってくれる事はとても嬉しかった。失礼を承知しながらも明石が何も言わないのは、ただ単にかつての相方がいる横須賀へと向かう事に色々と彼女なりに考えを巡らしていたからなのである。

やがて明石は小さく溜め息を放った後、自分なりにそこに出した結論と朝潮へのお礼を口にする。

『ありがとね、朝潮。でも、いいよ……。今はたぶん、会わない方が良いと思うから……。』

『は、はあ……。ですか……。』

僅かにどこか明るさを滲ませた明石の言葉に朝潮は声を返すが、ちよつとその内容には釈然としないものがあつた。

明石が第二艦隊へと編入された際に二水戦へと編入された朝潮は、妹達程に親しく接してはこなかったものの、明石とその相方の仲の良い暮らし振りを遠巻きながらも見てきた経験がある。艦魂の姿を見る事のできる人間という稀有な存在は朝潮にしても珍しかったし、自分達と同じ艦魂の一人である明石がそんな人間といつも一緒に笑い合っていた日々は、口には出さなかったながらも内心ではとても羨ましかつたというのが正直な所である。同様にそんな二人が訳有って別れてしまうという現実には彼女にしても残念であつたし、何よりその際に耳にした明石の相方の鳴咽に苦しむ声は、朝潮に今という状況を打開するべきだと思わせてしまふのだった。

二人の抱いたお互いへの気持ちは同じ物であり、もっとよくお互いに話をしていればこんな事にはならなかった筈だ。

そんな言葉を脳裏に浮かべた彼女はお節介である事を重々承知しつつも、今まで明石に対しては口にしなかった事を伝えようと決める。朝潮はなんとしても、二人には元の様に笑い合う姿に戻って欲しかった。そしてそれは二人を知る朝潮と同じ艦魂達の、切な願いでもあった。

『あの……。こ、これは、戦隊長からは言うなと、言われていたのですが……。』

『うん……。？』

『その、森さんなんですけど……。泣いてたんです、大声で。・・・舷窓から明石さんを見ながら……。』

朝潮の声に、明石はまたしても無言で背中を向けるのみだった。

その姿に朝潮は差し出がましい自身の物言いを恥じてすまなそうに頭を掻くが、やがて彼女の耳には眼前にて背を向けたままである明石の、妙に静かな笑い声を伴った言葉が響いてきた。

『ふふふ……。神通が言うなって……。？』

『は、はあ……。その、男は泣く所を見せたがらない生き物だからって……。森さんの体面を護ってやれて……。』

『ふふ……。そっか……。』

まるで部屋の空気に溶け込むように静かな明石の声だが、朝潮はその声に僅かに悲しみの色が滲んでいる事を認める。その事に朝潮は再びお節介を焼こうと口を開きかける。だがすぐにその行動を制する様に、部屋には明石の声が木霊する。

『やっぱり……。会わない方が良いんだな……。』

舷窓から室内へと挿し込む陽の光りが、悲しげに歪めた明石の笑みを照らす。朝潮の言いたい事も自分の願いも彼女は解ってはいたが、その朝潮から教えられた別れた後の相方の様子と友人である神通の言葉に、彼女は自分がまだ相方の事をしっかりと理解してやれない子供なのだと思い知った。それはとても悔しい事でもあったが、不思議と明石はそんな自分に腹を立てることは無い。むしろ彼女は、どうすれば自分は変われるだろうと考えを巡らす。静まり返る部屋の中、しばらくしてふと明石が抱いたのは、まだまだ自身の身体には身についていない師匠の教えであった。

まだまだなんだな。

そう小さく胸の中で呟くと同時に、明石は身体のアチコチに走る痛みに自身の身の程を悟る。だが彼女はそれで落ち込むような事は無い。なぜなら自身が抱く願いに近づく為に必要な事を、明石はこの時、不思議と明確に理解したからだ。

第二艦隊の蒲郡での休日はその後もしくは続くは続いたが、明石は筋肉痛が和らぐと同時に再び猫背の矯正に励んだ。ただひたすらにその事に取り組む明石の真面目な姿勢は艦隊中に伝え広がり、明石に教えてくれる者達の中には友人の神通と那珂なかに併せて、なんと艦隊旗艦の愛宕も加わってくれた。戦艦の艦魂にすらも劣らない麗しさを誇る愛宕の協力は明石の猫背矯正に大いに貢献し、明石の背筋は呉を脱した頃とは比べ物にならない程に綺麗に伸びていた。

そして7月26日。

蒲郡の波間から抜錨して横須賀への旅路に移る明石艦艦尾の甲板には、神通と那珂に見守られて頭に乗せた本を落とさずに歩く明石

の姿があるのであった。

第五〇話 「横須賀の夜」

僅かに蒸し暑さを帯び始め、虫の声が賑やかになり始めた夏の夜。横須賀海軍工廠を望める海岸地帯の一角にある海軍砲術学校の宿舍の一室には、風呂から戻って部屋の扉を閉めた忠の姿があった。

『だあゝ、疲れたな……』

部屋に入るなり忠は誰に向けたわけでもなく声を上げる。風呂から上がったばかりで軍装の隙間から覗く彼の肌からは湯気がほのかに立ち上っているが、忠はそれでもその言葉通り、その身に溜まった疲労感を忘れる事は無い。本日も怒鳴られるわ殴られわという砲術学校の日常を過ごしたのだから無理も無い。

忠はベッドへと歩み寄りながら頭から軍帽を取り、部屋の中ほどに至った所でその軍帽を二段ベッドの下側に向かって無造作に放り投じた。そして今度は胸元に手を伸ばしてホックやボタンを外し始める。

『ふうう……。』

またしても疲労の色合いが濃い息を吐きながら、彼はベッドに腰掛けて上着の袖から腕を抜く。すると

二段ベッドの上からは、部屋を同じくする仲間がひょっこりと顔を覗かせて忠に声を掛けてきた。

『おう、森。お疲れ。』

『お疲れさんです……。あれ？まだ帰ってなかったんですか、藤平さん？』

彼の名は藤平孝三^{とうへい こうざう}。忠と同じく砲術学校普通科学生として励んでいる帝国海軍少尉であるが、兵学校は忠より一期前の65期だ。本当なら昨年に砲術学校の門を潜る予定だったらしいが、上官と喧嘩して入校取り止めを食らった男であった。しかしその理由は「艦隊勤務においてイジメを受けていた彼と同じ分隊の水兵の事で他所の分隊へと怒鳴り込んだ。」という物であり、その辺で古参風を吹かして威張り散らしてる先輩とは訳が違う。事実、僅か3ヶ月の砲術学校生活で忠はすっかり彼の事を慕っており、辛い事この上ない毎日在必死で忠が頑張れているのはこの爽やかに笑う藤平の存在が大きかった。

『夜行にでも乗れば、宇都宮ぐらいまでは行けるんじゃないんですか？』

『宇都宮からまた少し山奥に行かにならねえからな。面倒臭いから帰んねえ事にしたわ。』

盆の帰郷を含んだ忠の言葉に、藤平は首の付け根辺りを荒く掻きながら声を返す。ちょうど5日間だけの連休を与えられた事によってのやりとりであったが、帰郷しないという藤平の言葉に忠は素直に頷く。いくら実家が近くても、疲れが溜まったその身体に鞭打って出かけようという気力は、忠と同じ様に彼にも無かったのだ。せっかくの休日を過ごすなら、その言葉通り布団の上でゴロゴロとして身体を休めるのが一番なのである。

その事を即座に理解する忠は小さく笑って肯定の言葉を返し、背後に脱ぎ捨てた上着のポケットに手を突っ込んで煙草を取り出す。すると忠の顔の前には、ベッドの上に横たわる藤平の右手がおもむろにダランと垂れてきた。忠は口に挿そうとしていた一本の煙草をすぐに藤平の右手に差し出し、手渡すとすぐにまた煙草の箱に手を伸ばして中身を取り出す。忠に先駆けてその頭上からはマッチをする

音が響き、しばらくすると藤平の疲労の色が滲んだ溜め息が聞こえてきた。

『ふうう・・・。悪いな、森。ちようど”弾切れ”だよ。』

『いや、とんでもない。』

先輩風を吹かす事も無く素直に例を口にした藤平に、忠は疲れたその心を少しだけ明るくして声を返す。やがて忠はベッドに大の字になり、ベッドの脇にある小さな棚の上にあった灰皿とは名ばかりの空き缶に手を伸ばす。枕元に置いた灰皿に煙草を軽く打ちつけて灰を落とし、再び口に挿した忠。その瞳には、間近にあるベッドの底を背景にしてゆらゆらと宙を舞う煙草の煙が映る。その内に忠の口から吐かれた煙を伴った息に乱されて煙による渦潮が再現される中、ベッドの上からは藤平が顔を覗かせること無く声を掛けてきた。

『そうだ、森。すぐそこまで出歩く元気があるなら、明日は浜に艦隊を見に行ってみないか？』

『ん？艦隊・・ですか？』

『おお。夏季艦隊訓練の時期だろ。小林こばやしから聞いたんだが、第二艦隊が来てるらしいんだわ。』

『第二・・・艦隊、ですか・・・。』

忠の返す声が少し重くなる。もちろんその理由は横須賀に来ているといふ第二艦隊の名を耳にしたからであり、忠は虚ろな視線を宙に浮かぶ煙の渦に向ける。その記憶には第二艦隊付属として配属されている自身が乗組んでいた艦と、その艦の命たる存在の事が蘇った。

だが不思議な事に、僅か3ヶ月前まで一緒に過ごしてきた沢山の思い出はいくらでも忠の脳裏には浮かんでくるのに、そこには常に思い出の中心にいた人物の顔が全く浮かんでこなかった。どんな目

をしていて、どんな声をしていたか。どんなクセを持っていて、どんな考え方をしていたか。そのどれ一つとして、忠の記憶には相方の姿が蘇ってこない。そしてそれを思い出そうとすればする程に、忠の胸の中には強い想いが込み上げてくる。

会いたいなあ・・・。

そんな言葉を脳裏に過ぎらせた忠は藤平の提案に了解の意を伝えようと決心し、仰向けになっていたその身を起して顔を頭上のベッドに向けて上げる。だが彼が顔を上げた刹那、口元に刺していた煙草の先端からは灰の塊が零れ落ちた。

『あ。』

太腿の辺りに落ちた灰の塊は衝撃で四散し、布団の上に粉塵となつて散る。すぐさまそれを手の甲を使って床へと払いのける忠であったが、ふと手を動すその最中にかつての職場で同じく灰を床に落としてこつ酷く相方に怒られた出来事を思い出した。もちろん先程までと同じ様にそこにいた相方の姿は明確に蘇ってこないのだが、未だにこうして不注意から同じ過ちを繰り返している自分の事を彼は妙に意識する。そしてそんな変わらぬままの自分が顔を見せた際、とあるやりとりがそこで起きるのではないかと予測した。

砲術学校はもう終わったのか？

いや、まだだ。

では、何しに来た？

その次に返す言葉は忠には思いつかなかった。しかし自身がそこでどんな行動を取るかというのは、既に彼の表情が苦笑いになっている事から察するに難しいことは無い。会いに行ったところで、ま

た昔の様に所詮は笑って誤魔化するのが関の山なのである。

その事は一時の願いに駆られた忠に、何一つ変わっていない自分の身の程という物を思い知らせた。

ダメだ……。

放った溜め息にそんな思いを滲ませた忠は枕元にあった灰皿を手繰り寄せてその底に煙草を押し付けると、起していた上半身を再び仰向けの状態に戻す。同時に右手に持っていた灰皿も棚の上に返し、彼は少しでも寂しそうな声で藤平への返事をした。

『……遠慮しますわ。すみません……。』

退屈な連休を少しでも楽しくさせてやろうと考えて声を発した藤平であったが、それに対して返ってきた予想外の忠の言葉を受け、ベッドの上から顔だけ覗かせて忠に声をかけてくる。そしてその藤平の放った言葉の中の一言こそ、忠が考えを巡らした挙句に相方にそう思われるのではないかと恐れた事であった。忠はその言葉に自身の未熟さを改めて思い知り、そんな自分が先程の提案に乗って行動したなら藤平の言葉の通りになるだろうと考える。そしてそれを自身に対して言い聞かせるようにして、忠は藤平に声を返すのだった。

『なんだ、お前？ 明石艦では嫌われてたのか？』

『……はい。こんな馬鹿ですから……。』

『ふうーん、そっか……。』

残念そうな声を発して顔を引っ込めた藤平がその身を横たえている二段ベッドの上側の底面を、忠は焦点の合っていない視線で黙って眺めていた。やがて彼は額に左手の手首の辺りを添え、隠すよう

に覆ったその手の下にある両目の瞼を閉じる。真っ暗な視界の中で記憶に残る鉄道唱歌を心の中で歌いながら、彼は深い眠りへと落ちて行った。

昭和15年8月1日、第二艦隊は横須賀海軍工廠に到着した。

台風が多くなり始める時期であると同時に、この国では最も暑い日々が続く時期での寄港は第二艦隊の艦艇にとってはありがたいが、それは乗組員達にとっても同様である。つい先週まで彼等は蒲郡で安息の日々を過ごしていたが、横須賀に到着すると同時に第二艦隊はまたしても休養を取る。もちろんその理由はお盆の時期であるからだ。横須賀から近い関東一円出身者の大半は帰郷の為に続々と艦を降りていくが、もっとも関東出身者でなくとも窮屈な艦内での生活は乗組員達の足を陸地へと誘う物であり、所属の艦艇からは人気がぼつたりと消え失せるのだった。

だがその中でも明石艦では、本当の意味で艦を降りる人物がいた。第二代明石艦特務艦長を努めた宮里秀徳大佐である。既に7月15日付けで艦長の任を解かれていたのだが、次の職場である艦政本部への出仕の猶予期間中に海軍省のある東京に近い横須賀へと巡航する事が決まっていた為、彼はここまで明石艦と行動を共にして来たのであった。

常に部下に対しても丁寧な言葉遣いで接しながらも、戦闘訓練の

際には薩摩隼人さつまはやとの片鱗を窺わせる事で乗組員達からも信頼されていた宮里大佐。乗組員全員の帽触れにて見送られながらラッタルを降りていく彼の背中を、明石もまた決して彼には伝わらない事を承知しつつ、手を振って見送った。

そしてこの時からちょうど一年後、宮里大佐は艦政本部での実績と工作艦である明石艦にて培った修理補修作業の監督経験を買われ、人類史上世界最大の戦艦においてその初代艦長を努める事になるのであった。

同日正午過ぎ。

明石は定例の戦隊長会議に出席する為、四戦隊の高雄艦たかおの長官公室にその身を移していた。帝国海軍の歴史と伝統、未来、教育、そしてその戦力たる艦艇の誕生を一手に担う横須賀海軍工廠に來れた事は第二艦所属の艦魂達の心を明るくさせるのには充分であり、明石と近い間柄である那珂なかや霞かすみはこの付近が故郷であるからなおの事であった。もっともその場には霞はおらず、四水戦の戦隊長を務める那珂にしてもはいで室内を騒がしくするような事は無い。いつもの様に長机の一角に陣取った神通じんつうと那珂、明石の3人は明るい表情を浮かべながらも、黙って会議が始まるのを待っていた。やがて静かだった室内には扉を開ける音が響き、それに続いて長机の上座に近い所で立ち上がった摩耶まやの声が木霊する。

『艦隊旗艦に敬礼。』

そして8月度の戦隊長会議が始まった。

その最初の内容は欧州戦線にて展開された「航空戦」という聞き

慣れない戦闘形態の物であり、近代における戦闘の多様化という物を彼女達は垣間見る。特に二航戦の飛龍ひりゅうと蒼龍そうりゅうにとっては飛行機という兵器を駆使するその任務特性もある事から、非常に熱心にその戦闘の詳細に耳を傾けていた。ちなみに彼女達が議題としているこの航空戦とは英独によって展開された物で、ドイツ空軍が打ち負かしたフランス北部の海岸からドーバー海峡を挟んでイギリス本国への爆撃を企図し、それをイギリス空軍が死力を尽くして迎撃するという内容であった。世に名高い「バトル・オブ・ブリテン」である。

帝国海軍の艦魂である彼女達は戦闘を生業とする自身の事もあり、こうして異国での海戦や海に関連する作戦を研究、考察する事は日常茶飯事である。その身に纏った銃砲が火を噴く時は国家の存亡が掛かった時であり、そこに発生するであろう敵国との戦いは絶対に負ける事は許されないのだ。もちろん艦魂である彼女達は誰一人として自身の分身たる艦を操る事は出来ないが、そこに必要とされる沢山の情報を頭に入れて置く事は決して無駄ではないと考えている。命を奪うか奪われるかという現実が繰り広げられる戦場に赴く事が自身の最大の使命とされる彼女達は、せめてそこで自身がとる行動の一つ一つに意味を見出したいのだ。

だが悲しいかな、時局においては戦闘に関連する物事のみに対して関心を示すというその姿勢こそ、彼女達艦魂の限界でもあった。

というのも日本国内においてはこの時期、欧州での戦況よりも遙かに重要な政治的な動きがあったのだ。しかしそれは艦魂達が知ったところでどうなる話ではなかった。

まず先月12日には欧州戦線不干渉を絶対公約と掲げていた米内閣が陸軍大臣の畑俊六大将はた しゅんろくの辞任を受け、内閣総辞職へと追い込まれていた。これは米内内閣の行う外交、及び国防政策に好感を持っていなかった陸軍部が畑大将に辞任を指示してその後任を指名しなかった事が引き金で、その根底には「軍部大臣、及び次官たる者は内閣の人選ではなく、天皇陛下の統帥権下にある現役の軍人であればならない」という当時の日本の政治制度があった。歴史に名を残す「軍部大臣現役武官制」である。

米内内閣は陸軍部からの同意が得られなかった事によって内閣人事に欠員を生じ、その後任を陸軍部に頼もうにも天皇陛下直々の指揮監督権下にある彼等に対しては物を言う事もできず、瓦解へと追い込まれていったのであった。

やがてその7日後の7月22日には、昨年の1月15日まで内閣総理大臣を拝命していた近衛文麿このえ ふみまろが新たに内閣を組閣した。第二次近衛内閣と呼ばれるこの内閣では海軍大臣はそのまま吉田中將よしだが留任したが、後年においても有名になる東条英機とうじょう ひでき、松岡洋右まつおか ようすけが政治の舞台に出てきたのはこの頃である。もちろん東条は陸軍大臣、松岡は外務大臣を拝命したのである。

また、4日後の7月26日に行われた大本営政府連絡会議においては、6月から密かに陸海軍の事務当局が摺り合わせてきた「基本国策要領」が発表され、即日閣議決定された。それは以前の第一次近衛内閣の頃より叫ばれてきた「東亜新秩序」の構想から繋がる物であり、松岡外相は関連する談話に際してこの国策要領の目指す物を「大東亜共栄圏」と呼んだ。

そしてこの大本営政府連絡会議において、日本という国が走るレールの行き着く先は決定した。基本国策要領が示す状況の打開とは暗に支那事変の早期解決を指しているものであり、その具体案として欧州戦線にて瓦解したフランス、オランダ両国の領土、即ち軍事的空白が生じている仏印と蘭印への武力行使も考慮するという国防政策が決定されたのである。いわゆる「南進策」である。

この時、大日本帝国という国の終着駅は決定した。そしてその終着駅を降りた所にある光景を実際に彼等が目にするのは、この時からちょうど5年後の事である。

しかしそれを知る者は人間でもごく少数のみであり、明石を含めた艦魂達においてそれを知る物は誰一人としていなかった。

『では、閉会で宜しいですか？』

『それでよろし。みんな、ご苦労だった。』

『敬礼。』

戦隊長会議が無事に終了したのは、既に舷窓の外に星空が広がった夜の事であった。

軽い敬礼を返した愛宕によって解放され、室内にいる所属の艦魂全員の少し疲労が滲んだ溜め息が静かに木霊する中、明石は大きく息を吐きながら崩れるようにして椅子に腰を下ろした。

『ふうういいい……。緊張したあ……。』

『……。ふん。』

力なく椅子に腰掛けて胸を撫で下ろす明石の横では、それを目にした神通が口元を緩めている。やがて神通とは明石を挟んで反対側の席に着いていた那珂が明石の肩にそっと手を乗せて、先程明石が口にした言葉の真相を労った。

『ご苦労様、明石。初めての報告だったけど、良くできてたよ。』

姉の神通とは違い低くトーンの聞いたハスキーな声の持ち主である那珂だが、これまた姉とは大違いの優しく物腰の柔らかいお姉さんである彼女の言葉は明石の疲れきった心を撫でていく。明石是那珂に僅かに歪んだ笑みを向け、その心遣いに感謝して声を返した。

『ありがと、那珂あ。やうっと、終わったあ・・・。』

『ふふふ。やっと寝れるね。』

那珂の言葉を受けて、明石は椅子に浅く座りなおすと両手を天井に向けて伸ばした。その身に溜まった疲労と倦怠感が、明石の表情を一気にしかませる。

実は那珂の言った通り、明石は昨日から寝ていないのだ。もちろんその理由は先程まで続いていた戦隊長会議での明石による報告である。軍医少尉として第二艦隊に属する明石は、その分身が寄港地に着く度に他の艦艇からの要修理品を引き受けているのと同様に、仲間達の健康管理や怪我の対応に追われている。幸いにして骨折等といった大きな怪我は今のところ発生していないが、捻挫や筋を痛めたという軽い怪我はそこそこに多い。ただ艦魂としては絆創膏で済む怪我也、その艦体にしたら機銃やマスト、ポンプ、各種配管とその継ぎ目、時には機関の部品にも至る物であり、決して怪我の程度ほどに軽く考えて良い物ではない。修理に使う部品や資材だって大事な大事な国家の財産であり、そもそも日常から「どういう異常処理をしているか？」というのは人間の一般社会においても大変に重要視される物なのである。

そんな事から明石は横須賀に着く前に、艦隊旗艦の愛宕よりこれまでの治療履歴とそれに伴う修理補修記録を統括して報告するようにと指示を受けたのであった。膨大な量の治療記録と工作部で保管してある記録簿を片っ端から読み漁り、その内容を引用して報告書

形態に纏めるというのは根気と時間の掛かる物である。まして初めての報告書作りという物はどのような文書形態にすべきかですらも頭を捻るから、殊に時間が掛かる事については尚更である。明石も必死になって頑張ってみたがやはりそれでも時間は足りず、窮余の策として彼女は自身の睡眠時間を削ってお仕事に励んだのであった。

『くああ……。ねみい……。』

和やかな雰囲気である室内とはいえ、諸先輩方が居る前で明石は大きく口を開いてあくびをする。もっとも気合だけでお仕事を頑張ってきた彼女であるから、やっとの事で解放された事に気が緩むその姿は無理も無い事であるし、神通や那珂も含めてそんな明石を咎めようとする輩はいない。かつては自分達も同じ様な思いを味わってきたからである。それは帝国海軍だろうが普通の会社だろうが、艦魂だろうが人間だろうが、組織内において新人が必ず最初に潜らねばならない登竜門なのであった。

するとその時、目を閉じていた明石は頬に極度に冷たい物体が張り付く感覚を覚える。

『うおっ……。!?!』

『良い報告だったよ、明石。でも、かなりのお疲れみたいだね。』

咄嗟に目を開けて顔を向けた先でそう言ったのは、なんと艦隊旗艦の愛宕であった。その身体から明石の頬まで伸びた手には、キンキンに冷えたビール瓶が握られている。期待の新人の苦労を労おうとする愛宕の心遣いであったが、明石はそのビール瓶を受け取る事も忘れて即座に立ち上がった。

『す、すいません……。!』

『いいよ、いいよ。座ったままで。とりあえず、これ。』

『は、はい……。い、頂きます……。』

第二艦隊旗艦として少将の立場を頂く愛宕を前にして慌てる明石だったが、愛宕は僅かに唇の隙間から白い歯を覗かせて微笑み、そんな明石の肩に瓶を持っていない方の手を触れて再び席へと座らせた。差し出されたビール瓶を明石は頭を下げながら両手で受け取り、胸の前で大事そうに抱きかかえる。すると服の上からはなんとも嫌な感じの冷たい感触が伝わり始めるが、明石はちよつと表情を歪めながらも受け取ったその場で横にある机の上に置くのは失礼だと考えてそのまま持ち続けた。

その内に彼女の目の前では、笑みを浮かべた愛宕が口を開く。

『徹夜だったのかな？』

『は、はい……。』

『そっか。良い内容だったよ。でも指摘と修正の項目を並べる時には、反対に現状の良い項目も一緒に並べてくれると読み手としても有り難いかな。』

『はい……。！き、気をつけます……。』

愛宕の笑みを伴った指摘に、明石は首を引っ込めるようにして返事をする。明石はいつも10歳以上も年上である神通や那珂と敬語も交えず話しているのが、それはこの二人を実の姉のように慕っているからである。何よりその階級だって近い。だが愛宕は真正正銘の連合艦隊における艦魂の幹部であり、その階級は少将である。厳密には戦隊長という役柄を拝していない明石は普段からこの愛宕と話す機会はあまり無く、初めてお仕事以外で声を交えたのもつい先週の蒲郡での事であったのだ。

しかし愛宕は決して明石のそのビクビクとする姿を楽しんでいる訳ではないし、そも彼女は明石の報告内容の指摘をする為に話しか

けた訳ではなかった。

やがて愛宕は上着のポケットから何やら縦長の紙包みを取り出して、明石の前に差し出した。またしても愛宕の手より差し出された物を視界に入れた明石はビール瓶を抱いて右往左往するが、見かねた那珂がそつと手を伸ばして明石の手からビール瓶を引っこ抜く。明石はようやく自由になった両手を紙包みに伸ばし、再び頭を下げながら紙の両端に手を触れた。その刹那、愛宕の声が明石の耳に届く。

『これは長門中將からの命令書。ながとなんでも2月に編入されて6月に改装が終わった特務艦が、いま横須賀に居るらしいんだ。で、いよいよ任地である北方海域へ出発するそうなんだけど、その事前の健康診断をするようにだって。』

『あ、は、はい……。』

愛宕の手から紙包みを受け取りながら、明石はちよつと呆けた様な表情で声を返した。

特務艦と呼ばれるのは彼女も同じ事であるのだが、実の所、明石が今まで知り合った特務艦の艦魂というのは師匠の朝日以外に一人もいないのである。友人である神通や那珂の分身は軍艦であるし、霞や霰あられといった駆逐艦は軍艦ではないが特務艦でもない。そして2月に編入が終わったという愛宕の言葉を鑑みると、その世代も自分とは余り変わらないのではないかと明石は考える。疲れたところに新たなお仕事が無い込んできた今という瞬間だが、そんな事を忘れた明石は新たな出合いを予感してその表情を明るくさせた。なにより自分と同じ特務艦にして、朝日と違い歳も近そうである。愛宕が首を捻る中、命令書を眺めたままでもその口元を引きつらせるという明石の表情も決して無理の無い事であった。

やがて愛宕は不思議そうな表情をしながらも声を発し、用件を済ませた事から明石に別れの言葉を放つ。

『疲れてると思うから明日以降で良いけど、頼んだよ。明石。』

『はい。有難う御座います。』

覇氣が出始めた表情でそう言った明石が深々と頭を下げ、愛宕はそれを背にして妹達が集まる机の一角へと戻って行った。

すると明石は即座に紙包みに手を伸ばし、その中身を取り出し始める。早くその特務艦の名前が知りたかったのだ。一連の愛宕と明石のやりとりを横からそれとなく耳に入れていた神通と那珂も、明石が手元でガサガサと音を立て始めた事に気付いて顔を寄せてくる。

『特務艦か。愛宕少将は6月に改装が終わったとか言ってたが、なんか知ってるか、那珂？』

『ううん、私も知らないなあ。ねえ、明石。名前は？』

神通と那珂の声を受けた明石は、ちょうど包みの中から命令書を引っっこ抜いた所だった。二つ折りにされていた書面を開くや、明石はそこに意外な発見をしてしまう。

『字、上手かったんだ。長門さん・・・。』

『ふふ。下手だと思ってたの？』

那珂は明石の声を受けてクスクスと笑っているが、明石にとってはそれは予想だにしない発見であった。普段から公務をサボり、上着は袖を通すだけというなんともテキトーな格好でぶらつく長門は明石もよく知っており、その人柄からはお世辞にも綺麗な字が書けるとは想像できなかったのである。どうせまた妹に言われて不貞腐れながらペンを走らせたのだろうと明石は思っていたのだが、命令書の上に綴られたのはまるでタイプライターで打ち込んだかのうようにバランスが取れた美しい字の群れであった。

その光景に改めて「やればできる子・長門さん」という言葉を理解する明石。だがそんな彼女の肩を突付きながら、神通は命令書の端を揺らして声を上げる。

『おい、特務艦の名前は？』

『あつと、そうだった。え〜と・・・。』

神通の問いに明石はそう言いながら、書面の上で縦に並ぶ文字の列に目を這わせていく。やがて命令書の中程まで視線を流した所で、括弧で閉じられた漢字二文字を見つけた。そのアイヌ語独特の珍しい発音を基にした読み方に明石はなんと読むのかと首を捻るが、明石と頬をくつつける様にして書面を覗き込んだ那珂はすぐにその読み方を察して声へと変える。

『^{そうや}宗谷・・・かあ。』

第五〇話

「横須賀の夜」

（後書き）

第五一話 「理由／其の一」（前書き）

◆拝読に当たったのご注意◆

読者皆様には日頃、大変お世話になっております。

さて、作中では8月の横須賀において宗谷艦と明石艦が顔を合わせておりますが、宗谷艦は6月4日の改装終了後に直ちに横須賀へと出向いて未装備の機銃を搭載した後、すぐさま北方海域への測量任務に就いております。任務が終わると同時に横須賀鎮守府付属となりますがその任務が終わるのは9月でありますので、史実ではこの時期に宗谷艦は横須賀にはおりません。

これから始まる宗谷艦がらみのお話は、なんとしても宗谷艦と拙作の主人公である明石艦を絡めた物語にしたいという小生の勝手な我が儘で御座いますので、恐れ多い極みで御座いますが読者皆様にあつては何卒ご理解とご了承の上で拝読して頂ける様、謹んでお願い申し上げます。

2009年9月21日 明石艦物語作者／工藤傳一

第五一話 「理由／其の一」

今日もいつものように陽を失った空が青紫の闇と星々の煌きを湛えた頃、月の青白い光りが揺らぐ横須賀の波間にその身を浮かべた小さな特務艦の艦首甲板から一段下がったウエルデッキには、白い光りを纏って姿を現した明石^{あかし}がいた。

その艦に訪れるのは彼女としても初めてだったが、その正体は明石にはちゃんと解っている。

『つと。ふう、これが宗谷艦^{そうや}かあ。』

ちょうど艦首の舳先に近い辺りに立っていた明石は、そう呟きながら宗谷艦の艦体をまじまじと眺める。排水量は3000トンそこそこある宗谷艦だが、その全長は約77メートル、全幅は約13メートルと割かし小振りな艦体を持っている艦であり、艦中央にある艦幅一杯に広がった横長の艦橋と一本の煙突を含めた構造物を挟んで艦首と艦尾のやや広めの甲板にはブームが付属したデリックポストがよつきと生えていた。その大きさは明石の分身と比較すると二周りは小さい。しかし明石の瞳に移る宗谷艦の甲板や隔壁は真新しい塗装と夜空の光りによってキラキラと輝いており、艦首甲板の中央にポツンと設置された高角砲にも汚れの類は一切認められない。それはこの艦がつい最近になってこの姿を手に入れたという事を明石に伝える。

やがて明石は上着のポケットから愛宕^{あたご}より拝領した命令書を取り出し、それを胸の高さで右手に持ちながら艦橋がそびえる上部構造物へと向かっていった。

『宗谷さ〜ん・・・？』

自分の艦と同じ様に人気がない事を予想していた明石だったが、灯りすらも点いていない真っ暗な艦内通路を一人で歩くのはちよつと怖い。まして波の音すらも聞こえない中でこの艦の主を呼ぶ自身の声と甲高い靴音だけが響き渡るという感覚は、彼女が今まで一度も味わった事無い感覚であった。

『うええ・・・。ちゃ、ちゃんと昼間に来るんだったなあ・・・。』

眼前に広がる光景が放つ余りの気味の悪さに、明石はこうして夜に宗谷艦へと来る事になってしまった原因を恨む。そしてその原因とは彼女の言葉通り、明石自身に在るのであった。

明石は昨日の夜に開催された戦隊長会議における報告の為にその前日から徹夜のお仕事をしたのだが、彼女は会議が終わった後に前日の分を取り戻すかのように爆睡してしまったのである。精神的にも体力的にも疲労していた明石は艦内に響き渡るラップで目を覚ますも、どうせお仕事は終わったのだからと再び開きかけた瞼を閉じるという事を何度も繰り返してしまい、空腹を覚えてよだれが染み込んだ枕から顔を上げたのはついさっきの事なのである。そしてふと椅子に掛けた上着のポケットからはみ出ている命令書と真っ暗になった部屋の様子を瞳に入れ、やっとの事で明石は与えられたお仕事を思い出したのだった。

『ああ〜〜っ！！！！』と叫び声を上げて大急ぎで着替えた明石は自身の失態に焦る余りに空腹を忘れる事は出来たのだが、宗谷艦の真っ暗な艦内に足を踏み入れた辺りから途端にお腹が鳴り始めていた。だがいくらお腹を抑えてもそこにある空腹感が増すばかりで、先程から募る恐怖心もそろそろ限界にきつつある明石は「お仕事を明日に延期しようか」という考えに誘われ始める。

『ううう……。腹減ったあ……。』

襲い来る誘惑と空腹感によってついに明石の歩みは止まってしまい、呻くような声を口から漏らしてその場にしゃがみ込んだ。その間にも彼女のお腹からは空腹を示す音が奏でられるが、明石はその音によって耳を撫でられるような感覚を覚える事は無い。今にも泣きそうな顔をしながら、明石は右手に持った真っ白な命令書を恨み半分申し訳なさ半分という視線で眺める。

だがその刹那、明石の背後からは小さな何かが鉄とぶつかり合う衝撃音が何の前触れも無く響き、自分以外の存在がその場にいない事を知って恐怖心に駆られていた彼女は前に飛び跳ねるようにして崩れた。

『うわあああッ！！！！』

咄嗟に危険からその身を遠ざけようとした彼女の身体だったが、その動きに明石の頭脳は完全について来ない。仰天の声を発しながら受身も取れずに顔から通路の床に倒れこみ、明石は強烈な痛みと恐怖について両の目から涙を溢し始める。鼻を左手で押さえながら嗚咽の声を上げ始める明石は、ビクビクとしながら音の響いてきた背後に視線を向けていく。

するとそこには一本の親指くらいの太さのネジがポツンと落ちていた。

『お、脅かすなよ……。うんもお……。』

無造作に通路の床に転がっているネジに、明石はひとさし指をつき立てて嗚咽が混じった声を返した。小さなネジにへっぴり腰で震える指を向けるその姿は格好悪いの一言であるが、その涙と同様に溢れ出す恐怖心を抱いてしまった今の明石には無理の無い事であっ

た。ぶつけた鼻を擦りながら、まだ力が入り辛い足で何とか立ち上がろうとする明石。しかしその腰がやっと浮きかけた所で明石はある事に気付き、再び視線を床に転がるネジに流した。

『・・・・・・・・？』

そのネジはどこにでもある普通のネジで、明石も自身の分身の至る所で目にした事のある物だ。もちろんよく使われている箇所も知っていて、彼女はそれまでネジが在ったであろう通路の天井へと顔を向ける。天井には通路に沿って真っ直ぐに伸びる配管が数本ほど通っており、その配管の継ぎ目には予想通り同じ大きさのネジがたくさん備わっていた。恐らくはその内の一本が外れてしまったのだろうとすぐに察した明石だったが、彼女はその事に恐怖心を忘れても安堵する事は無かった。

この時、明石の脳裏には初めてお仕事として仲間の治療に当たった^{おおみなと}大湊での記憶が蘇る。

そこで受け持った患者は沼風艦^{ぬまかせ}であり、波浪にて艦体が骨組みからひん曲がってしまったというのがその症状。その主だった原因の内の一つは、自身の乗組員の話から食料の不足を心配する余り栄養の摂取を控えて貧弱な身体になってしまったその艦の艦魂にあった。そしてその治療に当たった際、明石も改めて艦魂の身体の具合が分身である艦に影響する事を理解したのである。

そこまで思い出した時、明石の脳裏には目の前に転がるネジに対しての非常に素朴な疑問を浮かんだ。僅かに眉をしかめながら、明石はおもむろに腕を伸ばして床に在ったそのネジを手に取り。

改装が終わったのは先々月で、まだ出動もしていない筈。古い艦な訳でもないのに、なんで落ちた？

手に取ったネジを目の前に近づけ、舷窓から僅かに差し込んでく

る月の光りを頼りに明石はそのネジをまじまじと見つめた。間近で見るそのネジにはやはり一点の錆びも無く、ネジ山が潰れている事も無い。それは明石のこの艦に対する考察が正しい事を示している。そしてそのネジに対する考察と同時に浮かんだ疑問の真相を、明石は同じく大湊での一件の記憶から瞬間的に察した。

沼風は弱っていたから艦内部への大きな損害があった。まさかこの艦もでは……？

刹那、明石の顔からは恐怖に怯える新米艦魂の表情が消え、それに代わって戦場を得た軍医の表情が浮かび出る。すると震えを伴っていたさっきまでの彼女の四肢は嘘の様に力が籠った動きを取り戻し、立ち上がると同時に明石は声を張り上げながら艦の奥へと向かって駆け出した。

『宗谷！！宗谷！！！！どこなの、宗谷！！』

煌々と空に輝く月が地平線に向かって傾き始め、一面を覆う夕闇がその色合いの濃さを増す頃。

明石艦の艦首甲板には、普通の人間には決して目にする事のできない淡く白い光りが収束し始めた。段々と光が大きくなってやがてそれが球体の形を整えるかどうかになった時、その光りは粉雪の様に細かい粒子となって碎け散る。

やがてその光りの中からは、同じ位の背格好に下士官服を身に纏った女性とその肩を抱いた明石が姿を現した。目を閉じてぐったりとした下士官服の女性の身体は微かな呼吸以外に動く事は無く、明石はその人物の名を必死に呼びかけながら自分の部屋へと彼女を運ぶ。

『はあ・・・はあ・・・！宗谷・・・！しっかり、宗谷！』

決して人には聞こえない艦魂の声であるが、明石艦の甲板にはその艦の分身である明石の声が高らかに木霊する。しかし耳元で何度も彼女が叫んでいるにも関わらず、宗谷は意識を取り戻す気配が無い。酷く弱った吐息の音を唇の隙間から漏らすばかりで、明石の首に回した宗谷の腕には一度たりとて力が込められる事は無かった。宗谷の身体は部屋へ担ぎ込もうとする明石の行動に対して何一つ抵抗する事は無いが、元々の彼女の身の丈は明石とそれ程変わらない。その為に明石は宗谷を部屋まで引きずるようにして運ぶものの、友人達のように力持ちな訳ではない彼女は額の汗を流している。まして患者を前にして忘れてはいるが、先程まで空腹でぶっ倒れそうだった彼女の身体にはそれ程体力が残っているわけでもなかった。

『ぐうつ・・・！はあ・・・はあ・・・！』

既に溢れている疲労感に耐え切れず、明石は甲板の中程で膝を着いてしまう。その胸の中には軍医としての本能に駆られた使命感だけが燃えているが、如何せん明石の身体はそれについてこれなかった。激しい動悸に襲われて膝もガクガクと震え始めた明石であるが、すぐ横にある痩せ細って頬の筋が良く目立つ宗谷の顔を視界に入れると再び身体に力を込め始める。なぜなら宗谷のその顔は、どこからどう見ても病人の顔であったからだ。顔色に赤い色合いが微塵も感じられず、頬の筋が目立つ割にはその肌が奇妙な程に浮腫んでいるという宗谷の顔。明石はその症状から宗谷がどんな状態にあるか、そしてそれを処置する為に何をすれば良いのかが既に脳裏に浮かんでいる。しかしそれを実行する為の自身の体力が底を尽きかけているという事に、彼女は激しく自分の未熟さを感じて憤りを覚えるの

だった。

『んぐうつ・・・！ち、ちくしょう・・・！』

宗谷の肩を抱いた腕を放すことは無いものの、明石の足は艦内への入り口を前にしてついに自由が利かなくなり始めた。だが明石がそれに気付いて絶望感を覚える直前になって、甲板の端からは頼もしい友人の声と駆け寄ってくる足音が聞こえてきた。

『お、おい、明石！どうした！？』

『じ、神通^{じんつう}・・・！』

普段から怖い顔をしている神通が、この時ばかりは明石には救世主に見えた。自分よりも遥かに背が高くて力持ちである神通がそこに居合わせた事に明石は安堵するものの、今はそれどころではないと考えを改めて声を発した。

『わ、私の部屋に宗谷を運んで・・・！は、速く・・・！』

『コイツの事か！？解った！明石、足を持って！』

60キロ以上はあろうかという体重を持つ木村大佐ですらも軽々と投げ飛ばす神通に掛かれば、明石とほとんど変わらない体格の宗谷の身体を運ぶのは造作も無い。宗谷の肩の付け根から腕を回した神通は明石が足を支えるのを確認すると、小走りで明石艦の艦内へと入って行った。

部屋に着くと明石はすぐに宗谷を自分のベッドに寝かせ、真っ白な第二種軍装のボタンやホックを全て外して彼女の診療を始めた。明石の首筋や頬からはまだ汗が引いていないが、彼女はそれを拭う事もせずに目の前の患者に向かって腕を伸ばす。その背後では腕を組んで神妙な面持ちでそれを見守る神通の姿があった。彼女は軍医としての明石の行動を邪魔をせぬ様、極めて静かな口調で声を放つ。

『コイツが宗谷か、明石？』

『・・・うん。』

『どんな具合なんだ？』

明石は神通が良い終えるのと同時に、服の隙間から宗谷の身体へと伸ばしていた腕を引っこ抜いた。そして手に残った感覚を確かめつつ、ゲッソリとした宗谷の顔に視線を流す。ボサボサと埃っぽい感じの前髪を指で掻き揚げ、そこに隠されていた瞼や頬を確認した明石は、宗谷の身体における診断結果にたいして明確な答えを得る。それは宗谷艦艦内の船倉にて倒れている彼女を発見した際に瞬間的に想像した内容と全く同じであった。

『栄養失調だよ・・・。腰の辺りなんか、骨と皮だけしか無い・・・。』

『・・・そうか・・・。』

顔を向けずに放った明石の声に神通は応えながらも、その視線をベッドの端にある宗谷の手に流す。細長い綺麗な指が備わった手がそこには転がっていたが、服の袖の部分から僅かに覗いた手首から上の部分は明石の言葉通りであった。そして袖口から少し肩の方に昇ったところにある肘の部分には、夏服用に緑の刺繍で施された臂章がある。臂章自体は神通も部下達の服装で毎日見ているのだが、宗谷の臂章は兵科を示す錨のマークが主計科を示す筆のマークにな

っており、その周りにある囲いと桜の装飾は、宗谷が人間で言う所の主計科所属の一等兵曹である事を示していた。艦魂社会で言えば明石と同じ特務艦の艦魂達が身に付ける物である。

明石のお仕事とその相手が特務艦である事を昨夜の内に耳にしていた神通は、視界に入ったその服装からこの人物が宗谷艦の艦魂である事を改めて理解するのだった。

『これじゃ経口摂食はちょっと無理だね……。』

『うん？ けいこう……。なんだって……。？』

いきなり専門用語を口にする明石に神通は首を捻りながらそれを問おうとするが、明石は神通の声などまるで無視して横に置いていた彼女の大きな薬箱を開ける。やがて片手を突っ込んで箱の中でガサガサと音を立て、中から何やら濃い色をした小さな瓶を取り出した。得体の知れない妖しげな瓶が何本も箱から取り出され、神通はその瓶の正体を探ろうと明石のすぐ傍まで足を進めて目を凝らす。だが明石はすぐに彼女のその行動を遮るようにして声を上げる。

『神通。なんでも良いから食べ物、持ってきて。』

またしてもいきなりな明石の言葉で神通はすっかり状況が飲み込め無くなってしまうが、明石は続けざまに神通に向かって声を発する。しかしその表情には、暫くぶりに見る軍医少尉としての迫力があつた。

『なるたけ味は薄い物。あと果物とお魚は必須。』

『……。ん。解った。』

今はとにかく軍医としての表情を浮かべる明石にこの場を任せる事を決めた神通は、返事をするや明石が向かうベッドに背を向けて

早歩きで部屋を出て行った。

遠くなっていく靴音と扉が閉まる思い金属音を背後から受けながら、明石は薬箱の中から小さな針と管を取り出してそれを繋ぎ合わせる。針とは逆側に当たる管の末端にはさらに薬箱から取り出したゴム製の手のひら大の袋を取り付け、明石は袋の中へと瓶に入った液体を注ぎ込んでいく。やがて液体で満たされた袋を持って彼女は立ち上がると、背後にあった部屋に供え付けられている椅子をベッドの脇まで引っ張ってきて、その背もたれの一番上の部分に袋のホックを引っ掛けた。

『よし・・・と。』

明石は溜め息交じりでそう呟くと治まりかけてきた汗を拭い、手近にある宗谷の左腕を服の隙間から引っ張り出す。ヒョロヒョロとした宗谷の腕は一度も服に引っかかる事無く明石の前に姿を現し、それが如何に異常であるかに明石は眉をしかめつつ自身の手を動かしていく。指の感覚を使って宗谷の肘の辺りに目標を探し当てた明石は、ゆっくりとした動きで管の繋がった針をそこに刺した。その針が思うように刺さっていることを確認し、明石は針と管を紙テープにて宗谷の腕に巻きつける。

『・・・う、う・・・。』

それは微かに部屋の中で響いた声であったが、明石は驚いてその視線を宗谷の顔に向けた。なぜならその声は、明石の口から漏れた声ではなかったからだ。僅かに見開いた明石の瞳には、頬の辺りの筋肉を小刻みに小さく動かす宗谷の顔が映る。

『宗谷・・・！宗谷！』

『・・・うう・・・。』

顔を近づけて明石は宗谷の名を呼ぶ。埃が付着した潤いを感じられない前髪の下で、宗谷は明石の呼びかけにしばらくの間は眉や唇を小さく動かすばかりであったが、その唇の隙間から微かに漏れてくる宗谷の呻き声は彼女が意識を取り戻しつつある事を明石へと伝えた。明石は宗谷の表情の変化に気を配りつつ、先程彼女の腕に刺した針に視線を流して異常が無いか確認する。

輸液処置を開始したばかりでの容態の変化。それは明石に処置における失敗、又は副作用の懸念を抱かせていたが、宗谷の腕の状態を見る限り異常は認められない。針の上に再びガーゼを覆わせた明石は、小さく安堵の息を放ちながら宗谷の顔へと視線を戻した。すると宗谷は眉や閉じた瞼を今までよりも激しく動かし始めていた。

『宗谷……』

『……うっ……』

少しだけ力が籠ったような感じの呻き声を上げた宗谷は、明石の呼びかけから少し間を空けてゆっくりと瞼を開いた。明石はすかさず宗谷の顔に迫るようにして自身の顔を近づけ、薄っすらと覗き始めた彼女の瞳に意識を集中させる。その瞳の動きは酷く緩慢で一定の大きさを維持する事は無いが、彼女の身体状況を栄養失調と判断していた明石はその事を予測済みであった。片手を宗谷の顔の前に出して部屋の照明に対する影を造りながら、明石はようやく意識を取り戻した宗谷に声を掛ける。

『大丈夫？』

明石の声を受けた宗谷はゆっくりとその視線を左右に流し、やがてすぐ傍で自分を覗き込んでくる彼女の顔に気付いた。次いで、さつきまで暗闇の中で響いていた声の主が彼女である事を察し、宗谷

は自分が居る場所が全く知らない所であるとまだ朦朧とする思考の中で理解する。

『こ、ここは・・・、どこ・・・？』

まだ擦れたような声でたどたどしく言葉を放つ宗谷であったが、明石はようやく彼女が受け答えができる様になった事に心から安堵して胸を撫で下ろした。本日初めて口元を緩めた明石はおもむろに宗谷の顔へ手を伸ばし、その左目の辺りに垂れるパサパサとした感じの髪を掻き揚げてやりながら声を返す。

『私は明石。貴方と同じ艦魂で、ここは私の艦の中。』

『あ・・・か、し？』

『船倉で倒れてたのを見つけたから、ここまで運んできたの。私は軍医だから、もう大丈夫だよ。』

明石は明るいながらも刺激を与えないように静かな口調でそう語りかけながら、自分の左腕の中央に付けられた赤十字の腕章を宗谷の顔に近づけた。それをまだ輪郭の線がハッキリとしない視界で認めた宗谷は、ふと瞼を閉じて大きく深呼吸をする。

元氣とは言えないまでも落ち着きという雰囲気を放ち始めた宗谷に明石は優しく笑みを浮かべると、床に散らばっていた瓶や医療器具に手を伸ばして片付け始めた。子気味の良い音を放って薬箱へと吸い込まれていくそれらだが、あらかた片付けた所で明石は薬箱の蓋の裏に畳まれた状態で張ってある白い戦傷衣を手取る。そして薬箱の蓋を閉めると同時に、彼女はベッドにて瞳を閉じたままにいる宗谷の身体の上へと畳まれた戦傷衣を置き、再び宗谷の顔に笑みを向けて状況の説明を続けた。

『栄養失調みたいだから輸液処置をしたんだけど、会話ができるん

ならなんとかご飯は食べれそうだね。友達に何か食べ物を持ってくるように頼んであるから、元気になる為にも頑張って食べてね。宗谷。』

『う……、うう……。』

明石の語り掛けに黙ったままの宗谷だったが、その声が終わると同時に彼女の閉じられた瞼の隙間からは涙がこぼれ始めた。溢れた涙は埃で汚れた宗谷の頬を伝って行き、彼女の頬には涙が通った航跡が幾重にも浮かび上がっていく。そして同時にあげる宗谷の泣き声にはなんとか意識を取り戻すせた事を喜んでいる感じなど無く、ただ今という状況を悲しんでいるような感じを明石は覚えた。そつと宗谷に顔を近づけると同時に自身の手で宗谷の腕に触れながら、明石は宗谷が涙する理由を静かな声で問おうとする。だがそれは宗谷の唇から漏れた言葉によって遮られた。

『そ、宗谷……。どうしー。』

『うっ、う……。もう、頑張りたく、ない……。元気に、なりたくない……。こ、このまま、死にたい……。ううう……。』

涙を溢れさせて、呻き声にも似た声でそう言った宗谷。

明石はその宗谷の言葉に艦魂として生を受けて以来、初めての衝撃を覚えて驚きを隠せなかった。今まで知り合ってきた友人や仲間、先輩に師匠。その全ての者達がそれぞれの考えや思いを持って生きている事は人間も艦魂も限らず同じであったが、いま目の前にいる宗谷は彼女の知り合ってきた命の中では初めて死を欲する者なのであった。どう生きるべきかという事を教えてくれた朝日あさひの言葉を常に脳裏に掲げて生きてきた明石にとって、『死にたい。』と口にする宗谷の言葉は予想外であり、明石はなんと声を掛けて良いのかも解らなくなってしまうた。

『ううう……、うう……。』
『…………。』

侘しい部屋の電灯による肌色の灯りで照らされる中、明石は僅かに口を開けたままの表情で止め処なく涙を流す宗谷の顔を眺め続けていた。

後年、戦後間もない時期にあって地に落ちていた日本民族一億の夢と希望と誇りを唯一身に背負い、諸外国の艦に比べての性能差やその老齢を物ともせず、南極海の荒波へと勇敢に立ち向かっていく宗谷。

このとある8月の夜こそが、明石とそんな宗谷の初めての出会いであった。

第五二話 「理由／其の二」

宗谷そうやが涙する姿を明石あかしが掛ける声を失ってただ眺めていたのと同じ頃。

友人である明石に食料の調達を頼まれた神通じんつうは、自身の分身である神通艦の甲板にその姿を現した。煌々と月と無数の星の光りで照らされる自身の分身を瞳に入れながらも、彼女はその美しさに見惚れる事はない。久々に明石が軍医の顔をして声を放っていた事がその理由であるが、甲板の中程を歩いていた神通はふとその足を止めて背後に位置する艦首甲板の方を振り返る。実は神通は以前にも先程と同じ表情をする明石を見た事があるのだが、それは彼女と初めて会った日の夜の事であった。

今と同じ様に青白い月明かりがサーチライトの様に照らしていた神通艦の艦首甲板。

そこでその表情を浮かべた明石は、荒れていた頃の神通を真正面から殴り飛ばした。その時は神通も本気で殺そうと思いつき殴り返したのに、彼女の拳はまるで明石には通じなかった。だが当の明石からは神通を殴るのに際して憎しみという物が全く伝わってこず、逆に自身の記憶や悲しみを憎しみで覆っていた神通は、そんな明石によって纏わり着いていた過去から解き放たれたのであった。

『ふん……。』

無意識にいつもの短い口癖を放つ神通は、今はもう既にお互いの中では笑い話である当時の記憶を蘇らせて口元を緩めてしまう。あの決定的な事件から十年以上に及んだ自身の生き方は、いくら悔や

んでも変えようと思っても、どうしても神通自身では曲げる事は出来なかった。とにかく二度とあんな思いはしたくないという一心で部下達の顔に拳を振り落とし、時には歯が折れるまで殴りつけた事もあった。次第に仲間達はそんな神通に愛想を尽かし始めて声すらも掛けなくなっていく、同じく5500トン級とされる二等巡洋艦の先輩達も次第に彼女とは目も合わせてくれなくなった。

だがそんなどうしようもない自分を常に傍らで支えてくれたのは妹の那珂であり、真正面から受け止めて彼女の生き方を変えてくれたのはあの明石であった。

甲板の真ん中で一人、感慨にふける神通。だがそこまで考えた所で、あの弱りきった宗谷も明石ならきつと助けてやれるのではないかと神通は思う。そしてそこに抱いた可能性に、神通はただの一つの疑問も抱かなかった。

明石なら、明石なら、きつと何とかしてくれる。

たった一言、そう脳裏で呟いた神通は顔を背後から正面に戻し、そんな明石が自分に託した役目を全うすべく歩みを再開させる。微かに艦内から漏れてくる乗組員達の歌声を耳にいった神通はすぐさまそこに宴会が催されている事を察し、歌声の発信源である艦内のある一室に向かって歩いていった。

『勝ったぞおおお！』

『『『おおおッ！！！！』』』

なんとも勇ましい雄叫びを上げている乗組員達が円を作って座り、その中心や脇には沢山の料理とお酒が山の様に用意された神通艦艦

内の大部屋。電灯が侘しく灯る通路からその様子を覗き込む神通は、そこにある料理の一部を失敬できるタイミングを窺っていた。

うるさい程に叫ぶ乗組員達は既に顔が真っ赤で、各々の周りには中身のなくなったビール瓶や一升瓶が数本ほど転がっている。その場に響く言葉を察するに、どうやら彼等の地元にある野球の球団の試合を上陸先で見物してきたらしく、しかもその試合は彼等が鼻屑にする球団側が勝ったのだという。長く生きてきた神通は野球という物を見た事がないが、乗組員達のほとんどが熱烈に応援するその球団とやらの事は前から知っているのでさしてその光景に驚く事はない。

神戸生まれの神通艦はその船籍を呉鎮守府に置くのであるが、乗組員の殆どを占める下士官や兵は呉鎮守府管轄の地域にて集められた者達である。そして人口の多さと神戸生まれという境遇の神通艦に乗組んだのは、圧倒的に近畿地方出身者の者が多かった。彼等にしたら同じ関西弁を用いて会話する仲間達には親近感を覚えるのは当然だが、その趣味という一面ではこの近畿地方に籍を置く野球団の存在がまたもや乗組員同士の連帯感に対して貢献していたのだ。

やがて神通が部屋の中にある食べ物の品定めを終えると同時に、彼等は蓄音機を掛けてそこから奏でられる歌を大声で歌い始める。手拍子や碗を箸で鳴らした男達の歌声が響く中、神通は早歩きで部屋の中に入っていく、目星をつけていた皿や果物をホイホイと拾い上げては白い光りで包んで消していく。元来の性格から彼女は乗組員達に気付かれない様にとコソコソとするような事はできなかったが、すっかりお酒が回った彼等は周りから突如として消えていく料理に全く気付かない。

『『青春の覇々気々！麗しく々！』』

まるで叫ぶように歌う乗組員達に神通は僅かに眉をしかめながらも、取り敢えずは目星をつけていた食べ物 of 全ての調達できたので、すぐさま彼等に背を向けて部屋を後にした。

再び佗しい電灯がポツンと灯る通路を歩く神通の背後からは、明らかに減った料理を気にも留めていない事を示す、男達の蓄音機から奏でられる曲に併せた歌声が木霊する。

『『オ、オ、オオ〜！！大阪〜タイガ〜ス！！フレッ！！フレ、フレ、フレ〜ッ！！！！』』』

後年、彼等が歌うその歌は一部の歌詞を変えながらも、日本で最も愛される野球団の球団歌として遺されて行くのであった。

その数分後、明石艦に戻った神通は、先程までいた自身の艦とは間逆な程に静かな明石の部屋でそこにある机に持ち帰った料理を並べていた。神通の右手から淡く白い光りが放たれると同時に、子氣味の良い音を放って机の上にはお刺身や漬物等が盛り付けられたお皿が列を作っていく。

微かながらもそれらが放つ美味しそうな匂いを認めた明石は忘れていた空腹感を再び覚えながらも、背後の机から正面のベッドへと顔を向ける。もちろん明石のその瞳に写ったのは、ベッドの上で薄っすらと目を開けて天井を眺める宗谷の姿だ。彼女の顔の色は相変わらず青い感じがするが、輸液の処置が効き始めているのか青紫だった唇は赤い色を取り戻しつつある。それは彼女における回復の兆しであるものの、明石はその事を理解しても表情を変える事はない。まだまだ宗谷は立つ事すらも出来ないし、何より先程明石が示した

決定的な回復の方法を彼女が明確に拒否したからだだった。

『宗谷……』

明石は宗谷が放った言葉にかけける言葉を失いながらも、なんとか自分が示した回復の方法を採る事をすすめる。

『ち、ちゃんと食べないと……。』

『……。』

明石の語り掛けに対し、宗谷は無言のまま小さく首を横に振ってその意志を伝えた。薄々と予想していた宗谷の返答によって明石は再び声を失ってしまう。

本当ならその口に無理やりにも食べ物詰め込んでやりたいぐらいなのだが、宗谷にその意志がない以上吐き出されて終わりである。そして単純に彼女の意志を変えようにも、宗谷は明石の言葉に耳を貸す気配がない。その状況に明石はどうした物かと必死になって頭を捻るが、その対処法は全く持って思いつかなかった。

『……。』

『どうしたんだ、お前等……。？』

いま来たばかりで状況を把握できない神通が皿を並べ終わって声を上げるが、宗谷も明石も無言のまま部屋にはどこか気まずい沈黙が溢れていく。

そんな中で、突如として明石は体を捻って料理が並べられた机に手を伸ばした。机の脇に立っていた神通は明石のその行動に、彼女が何か今という状況を解決する為の策を思いついたのではと察する。しかし神通は明石の表情が先程別れた時とは変わっている事に気付いていなかった。軍医という艦魂社会でも珍しい立場を頂く明石

だが、それが消えた彼女はもう一つの特徴を遺憾なく発揮し始める。もちろんその根底にある物は、今日は何も入っていない明石の胃袋の事情であった。

刺身を盛ったお皿を手にとって身体を宗谷に向けなおした明石は、宗谷が視線をこちらに向けてこない事を確認するとその皿の端を口につけてひと思いに傾ける。お皿の上に盛られていた刺身の群れは皿が傾けられて事によって重力に誘われると、抵抗する事無くその先にあった明石の大きく開いた口へと流れ落ちていった。

『んっ・・・んっ・・・。』

手のひらに山盛りになる程もあった刺身は一瞬で明石の口に収まり、彼女はその食感を確かめるように大きく顎や頬を動かしてその度に唇の隙間から呻き声のような声をあげる。その表情には既に軍医の色はなく、患者を前にしながらも空腹に負けた彼女は食いしん坊ないつもの自分に戻っているのだった。

そんな明石の様子を背後から眺めていた神通は、ようやくこの時になって彼女の顔から軍医の色が抜けている事を認める。刹那、神通はいつの間にか振り上げていたげんこつを明石の頭に落とした。

『馬鹿者が！』

『ふんげっ・・・！』

危うく舌を噛みそうになった明石は頭の激痛に顔をしかめながら、背後からの奇襲というなんとも卑怯な方法で攻撃してきた神通に顔を向ける。

『な、何すんのよ・・・！あいだだ・・・。』

明石は怒りを込めた視線を神通に投げるが、げんこつによるダメ

ージの耐えながら友人を睨みつけて、なおかつ口の中にある刺身を飲み込もうとしており、その身は中々に忙しい。もっともお怒りの神通はそんな明石の事情など知った事ではない。せっかく宗谷の治療の為と思って明石の言葉に従った神通なのだが、いきなりそれを患者よりも先に自分で食してしまった明石の姿は神通の怒りを沸点に到達させるのには充分な事だった。彼女は身体を折って顔をしかめる明石に自身の顔を近づけると、彼女の頭を鷲掴みするかのように右手を乗せ、左右に揺さぶりながら声を荒げる。

『お前、自分の空腹の為に私に食い物を持って来いと言ったのか？あぁ？』

『そ、そりゃ、宗谷の為だけど・・・！』

『だったら何で涼しい顔で食ってるんだ！？』

神通への怒りはまだ収まらない明石も、その言葉にはちよつとだけ後ろめたさを覚えてしまう。患者の前であるとは言え、どうしても自分の胃の状況に耐えられなかったらだ。神通によって頭を抑えられながら、明石はちよつとだけ口を尖らせながらも視線を床に落としてすまなそうに声を返した。

『だ、だって・・・、今日は朝からなんにも・・・。』

『自分の都合で言い訳をするな、馬鹿者が！』

ゴン！

『あいてっ・・・！』

二度目のげんこつが叩き落されて明石はついにその牙を折られてしまう。もちろん本気で怒った神通がこの程度で済ます事はない為げんこつ二発を含んだ明石への所業は彼女が心の底からご立腹ではない事を示していた。

しかしやはりと言うべきか当然と言うべきか、背も高くて力も強

いこの人のげんこつによるダメージは半端な物ではない。しかも手加減という言葉を知らないから尚更に質が悪い。両手で頭を抑えて悶え苦しむ明石はしばらく顔を上げることが出来ず、神通によってガミガミとお仕事に対するお説教を受けるのだった。

『・・・・・・・・。』

そんな中、騒がしい二人のそのやりとりを宗谷は黙って見守っていた。

力強さが微塵も感じられない瞬きを伴うその瞳には、帝国海軍の艦艇として生を受けた二人の姿が映る。自分に治療を施してくれた明石もそれを怒鳴りつける神通も、戦う事が運命とされた者達であり、宗谷はそんな二人に同じ船の魂でありながらも親近感等という物がちっとも湧かない。しかし不思議な事に宗谷が目にする二人の顔には、長く彼女が忘れていた感情が明確に現れているのだった。

『・・・・・・・・なん、で・・・・・・・・。』

かすれた様な宗谷の声は明石や神通の会話に比べれば小さな声であったが、突如として響いたその声に二人は会話を止めて宗谷に顔を向ける。するとそこには、すがり付くような表情で二人を目に映す宗谷の姿があった。初めて自分から声を発してきた宗谷に明石と神通はちよっと驚くものの、宗谷は二人が声を返してくる前に先程言い掛けた事を声に変える。

『なんで、そんなに、楽しそう・・・・・・・・なんですか・・・・・・・・？』

宗谷の口から発せられた問いかけに、明石と神通は表情をそのま

まに二度目の驚きを覚える。明石にしたら彼女の事で頭を捻りながら空腹と激痛に苦しめられている真っ最中であつたし、神通にしてもお仕事に取り組む姿勢という物をげんこつを用いて艦魂としての後輩である明石に叩き込んでいる所である。そこには宗谷の口にした「楽しい」等という言葉は微塵も込めていないつもりなのだ。

しかしようやく宗谷が口を利用してくれた事に明石はちよつとだけ気を緩め、ゆがめた笑みを浮かべて宗谷に対して声を返した。

『あ、あはは……。楽しそうに見える？メチャクチャ痛いんだけど……。』

タンコブができた頭を撫でて明石はそう言うと、すぐ真横に立っている神通に向かつて視線を流す。苦笑いを浮かべながらも恨みを混ぜた視線を向ける明石だったが、それに気付いた神通が顔を僅かに近づけてギリリとひと睨みするとすぐに明石は視線を逸らす。

文句があるなら、かかって来い。

そんな感じの言葉を無言で叩きつけられる明石は、悔しそうに口を尖らせて宗谷に視線を戻した。ベッドの上に横たわる宗谷は、虚ろな瞳で明石と神通を交互に眺めている。だが宗谷はその顔にまだ表情を作るだけの元氣は無いらしく、細く今にも泣きそうな瞳による視線を向けてくるばかりだった。

やがて明石は痛みが引き始めた頭を撫でながら、なぜ彼女が死を願っているのかを思い切って問いかける事にした。彼女の事情を考えた上での問い方を必死に模索していた明石なのだがその答えは一向に浮かばず、それ故に掛ける言葉も見つからない。だからその問いかけは、頭に浮かんだ言葉をそのまま声にする事で実現しようと明石は決める。

『ねえ、宗谷……』

『……』

『どうして死にたいなんて言ったの……？』

『……』

僅かに驚きの色を滲ませた表情の神通を背に、明石は宗谷の脱力しきった手を握って問いかける。そっと手をすくう様にして握った明石だが、その手の主である宗谷は握り返してくるような事はない。やがて宗谷は横になったまま首を捻り、明石の顔をじっと見つめてゆっくりと声を返した。

『人間に……、これ以上、つきあいたくない……。』

『人間……？』

『私が生きるには……。に、人間達の、都合に、従うしかない……。もうそんなの、嫌です……。』

まだまだ覇気を伴わない宗谷のかすれた声であるが、そこに感情が籠っていない訳ではない。彼女は言い終えると同時に、再びその頬に涙を伝わせる。嗚咽に苦しむ声を発する事無く、ただ静かに涙を流すだけであつた。

一方、宗谷の回答を耳にした明石と神通は、その言葉の意味がイマイチ理解できずに顔を見合わせる。同じ船の精霊である彼女の言葉は恐らくは乗組員の事かと察する二人だったが、彼女達はこれまで乗組員に不満を持つ事はあっても、それを人間という括りにして考えた事などない。一人一人を見ていけば嫌いな人も好きな人もいるが、何もそれは人間に限ったお話ではなく、現に神通は帝国海軍の艦魂達の中では圧倒的に嫌われている部類の人物である。

しかし宗谷の言葉は嫌いな者とは関わりたくないという物ではなく、人間という存在その物を嫌うかのような物であつた。そして明石は彼女の言い様から、それがこれまでの宗谷の生きてきた過程

によって生まれた物なのではないかと考える。

『ねえ宗谷……。人間達と何かあったの……。？』

明石がそう言うと、宗谷は目を閉じて明石とは逆の方向に顔を向けた。問いかけに対する回答を拒否したようなその動作だが、宗谷は明石に握られた手を退けるような事はしない。そして神通と明石から見える宗谷の頬の輪郭は、何かを言いたげにしている彼女の心の内を声もなく伝えているのだった。

その事を認めた明石は宗谷の手に自身の両手を重ね、少しだけ胸元に手繰り寄せて静かに言った。

『宗谷……。話してくれないかな……。？』
『……。』

明石の声が響き終わっても宗谷は無言のまま、しばしの間、部屋は重苦しい沈黙によって支配される。だがふと明石は手にそれまで無かった感触を覚えて視線を落とす。そこには宗谷の手を挟むようにして重ねていた明石の両手を、まだ力の入らない状態であるにも関わらず精一杯握り返す宗谷の手があった。

やがて宗谷は一度大きく息を吐くと、明石と神通とは逆の方に顔を向けたまま話し始めた。

『私が、海軍の船として、作られた訳ではない事は、ご、ご存知ですよね……。？』

『うん……。去年の11月に民間から買い上げられて編入されたんだよね……。？』

明石の返答を受けた宗谷は小さく頷くと、弱々しいながらも少しだけ力が籠った声で続けた。

『私は、2年前の2月16日に、長崎の香焼島（こうやぎしま）という所にある、小さな造船所で生まれました……。』

声を発する事はなかったが明石は宗谷の言葉に驚いた。なぜなら2年前の長崎と言え、彼女が生まれた頃の事なのである。進水した日に艦魂は物心がつくようになるのだが、昭和13年の6月29日が明石艦の進水した日であるから宗谷は彼女よりも少し年上という事になる。

明石はその事から脳裏に残る佐世保の海を辿りつつ、宗谷の話に黙って耳を傾けた。

『その造船所は、か、川南工業（かわみなみ）という会社が、買い取ったばかりで、造船のお仕事は、私の前にはまだ数件しか、請け負ってなかった……。でも会社の人達も、工員さんも、ソビエトから請け負った私達の造船を、とても喜んでた……。進水の前だからなんとなく、ですけど、槌（つち）の音と一緒に、い、いつも笑い声がしてたのを覚えてます……。』

静かに自身の事を話す宗谷だが、その話を聞きながら明石の横に来てベッドの端に腰掛けた神通は宗谷の声の大きさに合わせるかのように小さな声を放つ。その内容は明石もまたふと疑問を抱いた事であった。

『私達といったか？宗谷。』

『はい……。ソビエトから請け負ったのは、音響測深儀を装備した、耐氷型の貨物船で、隻数は3隻……。私はその、2番目、なんです……。』

『つまり、姉と妹がいるのか……。』

目を細めて宗谷の話聞く神通を、明石は横目でチラッと見る。神通はおくびにも出さないが、彼女もまた宗谷と同じく3姉妹の中の次女であり、その事は神通の宗谷に対する親近感を僅かに抱かせるのだった。やがて神通は宗谷への食事と一緒に調達してきたビール瓶を取り出し、蓋を開けると唇の添えて傾ける。

その間にも宗谷の口からは、彼女の生い立ちが語られていく。

『あ、姉は、前の年の8月に進水してて、名はボルシェビキ……。私は、ボロチャエベツと、名づけられました……。そして、10月20日に、妹のコムソモーレツも、やっと進水出来ました……。私達は、船籍を置く港も、ペトロパブロフスク・カムチャツカキーと、決まっについて、船尾にも既に、ロシア語でそれを記載してました……。だから、あの頃は、姉と妹と3人で、ロシア語や、オホーツク海の事なんかを、暇さえあれば、べ、勉強してた……。』

そこまで言ったところで宗谷は、それまで明石や神通とは逆の方に向けていた顔を天井へと向けた。やっとの事で宗谷の表情を見る事が出来た明石と神通だが、二人はそれを喜ぶことは無い。宗谷が天井を瞳に映すと同時に、彼女の両目からは再び涙が零れて行くからだった。

明石と神通が心配そうな表情で見守る中、宗谷は少しはを噛み締めながら声を上げる。

『でも、前の年に始まった支那事変で、艤装に必要な鉄材の値段が、日を追う毎に高くなってしまって、私達の竣工は、お、大幅に遅れてました……。そしてその内に、海軍が会社に、圧力を掛けてきて、私達のソビエトへの受け渡しは、出来なくなった……。あんなに頑張っって覚えた、ロシア語も、全部無駄になった……。』

『そ、そうなんだ……。』

明石はそう声を返すものの、宗谷達の苦労を水の泡とした原因が自分が所属する海軍にあると知って、なんだか宗谷と顔を合わせ辛くなった。今まで海軍の一員である事を誇りに思い、それを疑う事など一度もなかった明石だが、自分がそうして過ごしてきた裏に宗谷のような同じ船の魂の悲しみがあるという事を彼女はこの時初めて知った。そして同時にさっき宗谷が口にした人間への嫌悪が、この海軍の横槍や支那事変の事を指しているのであると明石は察する。

決して宗谷は明石や神通に対して憤りの矛先を向けてくる事はないが、その原因が自分達も籍を置く海軍にあると知った明石は宗谷に返す言葉をまたしても見失ってしまう。自身の手挟んでいた宗谷の手を擦りながら、明石はなんとか宗谷の無念を癒そうとして呟くように声を放った。

『せっかく、覚えたのにね……。ロシアの言葉……。』

『いいえ……。可哀想なのは、私達よりも、会社や造船所の、人間達でした……。』

『え……。？』

意外な宗谷の言葉に明石は驚きの声を口にする。

宗谷は人間との関係を絶ちたいが為に死をも望んでいた筈なのだが、そんな彼女は自身の苦労が無駄になった事よりも彼女の分身を建造した人間達の方こそ無念だったのだという。そして彼女の言い方は、何かその人間達に対して同情的ですらある。

どうにも宗谷が人間を嫌う理由が明石にはまだピンと来なかったが、再び宗谷が声を放つのと同時にさらに力を込めて明石の手を握ってきた事を受けて、彼女はその理由がまだ語られていない宗谷の過去にあるのだらうと悟り、今は自身の疑問を敢えて声に変えない事を決める。

そして手から伝わってくる明石の温もりに身を預けるようにして話し始める宗谷に、自分達への拒絶するような感じが薄くなっている事を確認した明石と神通は、吐息の音すらも消して耳を傾けた。

第五二話 「理由／其の二」 （後書き）

以下は所謂ネタですので本気で受け取らない様、お願い申し上げます。

また、下記内容に併せて艦魂会のサイトもご覧になって頂けると、以下のネタの内容がちよっとだけ楽しめるかと思えます。

では、ナレーションはゴノ〇ゴの声でどうぞ、（ゝー、）ノ

@傳一の独り言@

そんなことより聞いてくれ<1よ

拙作とあんまし関係ないけどさ

先日、台場の「船の科学館」行ったんです。「船の科学館」。

そしたら”海を守るコーナー”が、なんか人がめっちゃくちやいっぱいで写真とれないんです。

で、よく耳を澄ましたらなんかそこにいる奴等が口々に、「シルバークでよかった」とかホザいてるんです。

もうね、アホかと。馬鹿かと。

お前らな、5連休如きで普段来てない「船の科学館」に来てんじやねーよ、ボケが。

5連休だよ、5連休。

なんか親子連れとかもいるし。一家4人で模型背にして家族写真か。おめでてーな。

よーし大和バックに撮っちゃうぞー、とか言ってるの。もう見てらんない。

お前らな、実家の大和（1／350　タミヤ製）やるからその立ち位置空けると。

”海を守るコーナー” っていうのはな、もっと殺伐としてるべきなんだよ。

ショーケース越しの向かいに立った奴といつ喧嘩が始まってもおかしくない、

撮るか撮られるか、そんな雰囲気がいいんじゃないか。女子供は、すっこんでろ。

で、やっと写真撮れるかと思ったら、隣の奴が、『これが戦艦大和で』、とか言ってるんです。

そこでまたぶち切れですよ。

あのな、戦艦大和なんてきょうび誰でも知ってたんだよ。ボケが。

得意げな顔して何が『戦艦大和で』だ。

お前は本当に戦艦大和を好きなのかと問いたい。

問い詰めたい。

小1時間、問い詰めたい。

お前、戦艦大和って言いたいだけちゃうかと。

”海を守るコーナー”通の俺から言わせてもらえば今、”海を守るコーナー”通の間での最新流行はやっぱり

霧島艦、これだね。

霧島艦。これが通の呼び方。

〇〇艦ってのは昭和じゃなくて明治から大正初期で使ってる呼び方。そんな代わり軍事業界での使用率が少なめ。これ。

で、それに金ピカの霧島の模型。これ。最強。

しかしこれで呼ぶと昭和では海軍でもあんまり使ってなかったから海軍研究家に潜りとしてマークされるという危険も伴う、諸刃の剣。

素人にはお薦め出来ない。

まあお前らド素人は、普通に戦艦とでも呼んでなさいってこった。

第五三話 「理由／其の三」

『う、うう……。進水式の時、も、会社の人も、工員の人も、みんな、喜んでくれ、た……。私の生まれた、船台は、資材置き場に、なった所に、急遽作ったものの、でしたが……。それでも、進水の際は、満船色に、5色のテープと、紙吹雪が入った薬球……。ソ連の人まで立ち会って、日本とソ連の国旗も掲げて、ほ、本当に、嬉しかった、た……。みんな、笑ってた……。』

宗谷そうやが語る進水式の思い出とそこに纏わる彼女の気持ちは、同じく進水式を経て生まれた明石あかしと神通じんつうにも良く理解できた。二人もまた同じように国旗と薬玉によって祝福を受け、四方に広がる大海原にその身を浮かべたのである。軍艦も民間船舶も関係無い、お船としてこの世に生まれた時の記憶は皆同じで、明石も神通も宗谷の言う『嬉しかった』という言葉を理解するのには何の隔たりも無かった。

だがそこから続く宗谷のお船としての生涯に横槍を入れたのは、先程彼女の口から伝えられたように、明石や神通と同じ十六条旭日旗を艦尾に掲げる者達なのである。決してその責任を明石が負っている訳ではないのだが、彼女にはどうしても宗谷に対して言葉を掛ける事に気が引けてしまう。顔を宗谷に向けながらも、明石は視線を握っている宗谷のやつれた手に落とした。

やがて宗谷は両の瞳から涙を一筋流すと、先程口にした人間への思いを語り始める。

『ソ、ソ連への引渡しは、無くなって、私達には、新しい名前、が、与えられました……。姉は、て、天領丸てんりょうで、妹は、民領丸みんりょう……。私は、地領丸ちりょう……。な、慣れない名前を付けられて、資材不足で艀装も、進まない……。おまけに、竣工しても、貰い手が無い。

・・・。工員も、私達も、途方に暮れてました・・・。ふふ・・・。』

海軍によって捻じ曲げられた生い立ちを語る宗谷だったが、彼女の語りの最後には初めて耳にする宗谷の笑い声が確かにあった。ふとそれに気付いた明石と神通が宗谷の顔へと落としていた視線を流すと、宗谷はほんの少しだけ口元を引きつらせている。聞き手の二人が不思議そうな視線を送る中、彼女は天井を眺めたまま僅かに明るさを滲ませた声で続けた。

『で、でも、そんな中で、私達の建造を、請け負っていた造船所の、親会社である川南工業は・・・、私達の為に、こ、神戸の汽船会社と共同出資し、て、辰南商船たつみなみという会社を、わざわざ新しく、起してくれました・・・。2年前に、私達の生まれた造船所、を、買い取ったばかりで、お金も、無いのに・・・。』

宗谷はまだ力が入らない声で、しかしとてもそれを嬉しそうに口にする。事実、そこから暫くの宗谷の記憶は、自身の生涯の中では一番輝いていた記憶でもあった。宗谷は明石と神通には目もくれず、まるで天井に記憶に残る映像が映っているかの様に笑みを向けている。

『私、は、6月10日にやっと、竣工できました・・・。そ、それからすぐに、試験航海が始まって、7月に入ったら、せ、船体の塗装が始まりました・・・。まるで、春の陸地のような、綺麗な緑色で船体を・・・、秋の陸地のような薄い黄色で、マストや、吸気口を塗装して、煙突には、白地に赤抜きで、横縞模様の、ファンネルマーク・・・。じ、自分で言うのも、なんなんです、けど、とっても綺麗だったんですよ、私・・・。ふ、ふふふ・・・。』

笑みを伴う宗谷の声に明石と神通は僅かに口元を緩めた表情を返

してやるものの、生まれて以来、ねずみ色の塗装しか身に纏った事がない自身の境遇からちよつとだけ宗谷を事を羨ましいと思ってしまう。栄えある帝国海軍艦艇は軍艦色と相場が決まってはいるが、やはり自分の身を綺麗に彩ってみたいというのが二人の本心でもあるのだ。

やがて明石は呟くようにして声をあげ、胸の中に思った事を素直に言葉へと変える。

『良いなあ……。綺麗だったんだろうなあ……。』

『は、はい……。本当に、綺麗だった……。』

明石の声を受けた宗谷はさらに口元を引き上げて瞳を細め、その瞳の両縁からは電灯の黄色い光を受けて輝く涙が流れ落ちる。

『会社の人達も、工員さんも、手を叩いて、私達の姿を、祝福、してくれた……。しかも、15日には早速、お仕事が回ってきて、会社の人達は、本当に嬉しそうだった……。姉と妹とは、別々になっちゃうけど、私も、嬉しかった……。さ、最初のお仕事は、チャーター船として、支那の、大連を定繋港にして、支那沿岸での貨物の輸送……。青島のビール、上海の蟹、天津の、お洒落な街並みに、世界中から集まった船達……。次の年の、3月までの契約、でしたけ、ど、こんなに、お船って楽しいんだなって、思えた、8ヶ月でした……。』

宗谷の話した事は船舶としてのごく有り触れた生活であったが、その嬉しさは同じお船である明石や神通にもよく理解できた。海軍に籍を置く二人としてこれまでに寄港した港では当地に纏わる沢山の思い出があるし、時に涙するような事もあったがその大半は笑顔と笑い声を伴った楽しい記憶ばかりである。

思わず明石がそこにあった幸せを分かつように笑みを向け、神

通もまたほんの少しだけ口元を緩めて唇へと運んだビール瓶を傾ける中、宗谷もまた笑みを絶やさぬまま口を開く。

『け、契約が終わった私は、香焼島こうやきしまの造船所に、整備の為に、い、一度、戻りました……。久しぶりの、工員さん達も、会社の人も、神棚、に、お神酒まで供えて、くれて、私の帰りを、祝ってくれた……。すぐに、お仕事が、入っちゃったけど……。』

『そう……。ゆっくりできなかったんだ……。』

『で、でも、お仕事、は、嫌いじゃ、なっただんです……。今度の、契約は、穏やかな支那の海じゃなくて、函館を定繋港にした、北方海域……。わ、私達が、本来、駆ける筈だった、海だったし……。』

宗谷の口にした北方海域は明石も一度だけ行った事がある海で、軍医として初めての治療を行ったのもそこであった。宗谷の様にその海域へ行く事に対しての喜び等という物は、寒さによってコテンパンにされてしまった明石には湧く事は無いが、宗谷にとってはその海こそが彼女の言葉通り、本来の居場所なのであった。

『函館や小樽で、物資を積んで、向かうのは、日本の北の果て、占守むしゅという島……。蟹や鮭の、缶詰の工場があって、私はよく、乗組員さんの真似をして、一個盗んでは、食べてました……。ふ、ふふ……。』

やがて宗谷は弱々しい笑い声を放ち終わると、途端にその表情を雲らせていく。

『でも……。』
『……。？』

重い声色に変わった宗谷に明石と神通も気付き、彼女の表情を覗き込む。宗谷は僅かに眉をしかめ、脳裏に蘇る辛い記憶に緩く下唇を噛んだ。そして同時に明石の手に包まれていた手に力を込めながら続けた。

『北の波に、も、慣れた頃の、10月……。私の行動を見てた、海軍が、こ、今度は、私を海軍に差し出せと、会社に圧力を、か、掛けてきた……。』

彼女の幸せな波を駆ける生活を邪魔したのは、あろう事かまた海軍であった。しかし明石にはなぜ海軍がそのタイミングで、そしてなぜ宗谷に白羽の矢を立てたのかが解らない。今までかすれた声ながらも軽やかに話していた宗谷が無言になった事もあり、明石はその事を海軍に籍を置く者として気が引けながらも宗谷に尋ねてみる。

『どうして、宗谷だったのかな……。』

『ち、千島列島は、い、一年中、濃霧が多いんです……。島の近くでの航海は、常に、ゆっくりとした速度じゃないと、岩礁や陸地との、衝突の、き、危険があった……。でも、私は、ソビエトからの発注の際に、音響測深儀を、装備するように、言われてました……。だ、だから、視界が利かなくても、海底の形状から、岸や、岩礁が近いかがどうか、解るん、です……。で、でもそれが、海軍の目に留まった……。海軍は私を、そ、測量艦として、使う事を、決めたんです……。う……。ううっ……。』

再び宗谷が泣き始める。

海軍の横槍によって誕生直後に路頭に迷い、それでも会社の人々の尽力によって有り触れた船としての幸せを感じる事ができていた宗谷だったが、彼女の幸せな日々は僅か1年半しかなかったのだ。さらにその日々が終わる原因はまたしても海軍。明石と神通は口に

こそ出さないものの、どこか自責の念にも駆られるような感覚を覚えていた。

『と、突然、横浜に行く事に、なって、ちょうど近くにいた、姉と、妹に別れを告げて、私は横浜に、向かいました……。そ、そして、黒い、海軍の制服を着た人たちが来て、私は検査を受け、そのまま、改装の為に、ドック入り……。乗組員の人は、全部降りて、香焼島にも、戻れなく、なった……。名前も、また、変えられた……。うう、う……。』

そう言うと宗谷は明石に握られてはいない方の腕を挙げ、自身の顔の目の辺りに手を添えて嗚咽に苦しむ声を上げる。海軍という人間達の組織による都合に振り回され、それから7ヶ月もの間、ドックの中で生まれた時に与えられた姿を失っていく中でずっと叫び続けた悲しみを、宗谷は泣きながら唇の隙間から放った。

『う、うう……。ああつ……。』

『宗谷……。』

『も、もう、香焼島に、帰れない……。会社の人達の、顔が、見れない……。姉さんに、会えな、い……。妹、に、会えない……。せ、戦争なんて、できない……。う、ううつ……。』

宗谷の言葉に明石は俯いてしまう。悲痛な彼女の言葉には全ての人間を憎悪するような所は感じられなかったが、その生涯を二度にも渡って捻じ曲げたのは海軍という名の人間達。国の護りを公言する彼等の事は、同じく海軍の者である明石には良く解っている。

そして明石は海軍がこの宗谷をただひたすらに不幸な道へ誘おうと思って、彼女を海軍籍に編入したつもりは無い事は百も承知して

いた。自身と同じ特務艦と類別される艦艇の中には、工作艦、運送艦、砕氷艦、測量艦、標的艦、練習特務艦と6種類の類別があるのだが、この宗谷はその生まれた経緯から大規模な改装も必要なしに運送艦、砕氷艦、測量艦として活躍する事が出来るのであり、海軍が彼女に目をつけたのもまさにそこなのであった。人間の感覚で言えば、この宗谷は生まれながら帝国海軍特務艦艇としての非常に優秀な才能を持っていたのである。

ただ、同じ船に宿る命である彼女の意志として、「民間の船でありたかった。」という彼女の想いを明石は否定できない。船としてのありきたりな生活と幸せを願う宗谷の何が悪いのか、明石にはそれを断定する事はできなかった。

『もう、生きたく・・・ない・・・。うああ、あ・・・。』

全てを失ってしまった宗谷の言葉が部屋に響く。彼女の身の上を理解する明石は憤りにも似た感覚をおぼえるものの、どうしてやればいいのか解らずに俯くばかりだった。

明石はこれまで自分も国の護りとしての役目を背負っているのだと信じ、それに対して励むのは当たり前的事だと疑った事は無いが、それは彼女が海軍によって作られたからに他ならない。

なぜ普通のお船として生まれた宗谷が、こんな思いをせねばならないのか？

脳裏に過ぎるその言葉に明石は回答を見つける事が出来なかったが、それと同時に自分は何の為にこうして海軍に尽くそうとしているのだろうかという疑問を抱く。

陛下の為。

国民の為。

日の丸の為。

君が代の為。

ふと上げてみたそれらは響きこそ美しい言葉であるが、明石にはその言葉を用いて眼前にて涙する宗谷が説得できるとは思えなかった。おおみなとぬまかせ大湊にて沼風が教えてくれた国を護るという現実とそこにある崇高さは、決して押し付けで生み出す物であってはならないと明石は考えているからである。しかしその考えに確固たる信念があるかというところでもない。

何の為に、海軍の者として生きているのか？

その疑問を自分に投げた時、明石もまた明確な答えを出せなかったのだ。

しばらくは部屋の中には宗谷の咽び泣く声だけが木霊し、明石はそんな彼女にどう接して良いか解らずに困惑する。だがその中で静かに酒を飲みながら二人のやりとりに耳を傾けていた神通は、それまで腰掛けていたベッドからおもむろに腰を上げると、ビール瓶を床に置いて宗谷に顔を向けた。

『宗谷。』

『う、うううう……。』

神通の問いかけに宗谷は右手を目に当てて無くばかりであったが、神通は構わず語りかける。その声は神通らしいいつもの張り詰めた糸の様な緊張感のある声であったが、明石はそこに親しい者で無け

れば解らない神通の優しさが込められていると感じて顔を上げる。そして神通は下から顔を覗きこんでくる明石に僅かな笑みを見せると、その肩にそっと手を置きながら宗谷に声を放った。明石はその友人の表情に、明石もまた宗谷と同じ様に軍艦旗を背負う事への疑問を抱いているのだと、神通がしっかり悟ってくれている事を感じ取る。

『お前、姉と妹がいると言ってたな……。』

『うう……。』

『世話になった人間も、いると言ってたな……。』

『う……。は、はい……。』

泣き声とも返事とも区別のつかない声で答える宗谷に神通は小さく頷くと、小さく溜め息を放ってから話し始めた。

『そいつらも、お前がいなくなってきたと辛い思いをしてるだろうな。だがな、宗谷。そんな辛い思いをしながら生きている今という瞬間すらも、護る奴がいなければ成り立たないんだよ……。解るか……。？』

宗谷がその言葉に涙を止める事は無かったが、神通の語りかけは彼女の心を確かに揺さぶった。不規則な息遣いをしながらも宗谷は右手を僅かに顔から離し、その隙間から涙で滲む視線を神通へと向ける。神通は腕を組むと僅かに腰を折って宗谷に顔を近づけ、再びゆっくりとした口調で声を上げる。

『お前が生まれた造船所とそこにいた人達。支那の海での思い出。北方海域での仕事。それは辛い事もあったろうが、同じくらい楽しかったんじゃないのか？』

宗谷は黙って頷く。

『ん。だがそんな思いをして暮らしてるのは、何もお前だけじゃない。お前の姉、妹、世話になった人々。そいつらなりの思い出や生活ってのは、お前が泣いてる時も、笑ってる時も、同じ物がそこにちゃんとあった筈だ。そして今でもな……。』

『い、いま、でも……？』

宗谷が声を返したその刹那、神通はゆっくりと宗谷の横まで進み出ると腰を深々と折り、宗谷の枕元にあたるベッドの端に両手をつけて頭を下げた。その様子に明石と宗谷が驚きの表情を湛える中、神通の一際力の籠った声が二人の耳には響いてくる。

『頼む。それを護る為に、どうか海軍に力を借してくれないか。』

『じ、神通……。』

友人の頭を下げる姿に、明石は呆けた声で彼女の名を口にする以外に一切の行動を取れなかった。

普段から無愛想で言葉遣いも気性も荒く、その上に仕事に対しても自身の立場に対してもプライドが高い神通。その彼女がこともあろうか、新顔で自分よりも階級の低い下士官の身分である宗谷に頭を下げているのである。

『もちろん、お前が海軍に編入された事を不本意に思っているのは解ってる。その為に失った物が多いのも、私は解ってるつもりだ。でも海軍に編入されたからこそ、できる事もあるんだ。宗谷。』

『ま、護ると、いう事、ですか……。？』

宗谷がそう呟くと神通はようやく頭を挙げ、少し歪めた笑みを浮かべて左手を明石の頭にポンと乗せた。やがて明石の頭をグラグラ

とゆっくり左右に揺らしながら、神通は静かに声を返す。

『私もな、宗谷。昔、大事な人間と仲間を失った事がある……。それもこの手でこの世から消してしまつて、今はもういない……。』

『……え……。』

『ふん……。その時は仲間の連中も白い目を向けてきてな。生きてるのがこれ以上ないくらい辛いと感じた時だったよ。だから、お前の気持ちは解らんでもないんだ……。』

『……。』

『でもな。いま私の周りには、姉貴と、妹と、戦隊長なんて呼びながら後を追つて来てくれる奴らと、この明石がいる。揃いも揃つて馬鹿ばかりでちつとも気が楽になる日が無いが、今は、生きてるのが楽しい……。そしてそんな何気ない日々こそが、私の護りたい物なんだ。宗谷。』

かつての自身の過去を交えた神通の話は、一片の疑問も宗谷には抱かせることは無かった。規律を取り戻しつつある吐息の中で、宗谷は自身が大事に思つてきた者達の今を思い浮かべていく。それは神通が言うように笑顔ばかりではなく、悲しみに泣いたりしながらその日を暮らす者達の姿。そんなごく普通の日々すらも護る者がいなければ成り立たないという神通の言葉を受けた宗谷は、その愛おしさを改めて理解する。しかしその場を一緒にしたかったという彼女の願いは中々消える筈も無く、その身に掛かつてきた不条理を宗谷は震える声で口にした。

『うう、う……。なん、で、私、だけが……。』

宗谷の口にした事には神通もさすがに声を返す事が出来ず、苦笑いを返してやるのが精一杯だった。辛い思いの果てにやっと手に入

れた船としての喜びを棒に振らねばならない宗谷の身の上は、良く言えば縁があったからであり、悪く言えば運が悪かったからである。それを宗谷に伝えたとしても、絶望の果てにこんな身体になってしまった彼女が簡単にその事で納得するとは神通には思えなかったのだ。

掛ける言葉を見失った神通は首の辺りを搔きながら黙って宗谷に視線を投げる事しか出来なかったが、ふとその時、それまでベッドの端でしゃがみ込んで宗谷の手を握っていた明石が立ち上がった。握っていた宗谷の手を離し、一度宗谷の姿を瞳に入れた明石は再びちよつと俯いてから声を放つ。その声には、先程まで宗谷と同じ様に脳裏に浮かべていた疑問に友人である神通の言葉によって答えを見つけた事を示す、明石の暗さが消え失せた凛々しさがあった。

『氣付けた宗谷だから、じゃないかな……。』

明石はそう言うのと宗谷が視線を向けてくるのにも関わらず、彼女に背を向けて料理が並べられている彩り鮮やかな机へと向かって歩き出した。宗谷の問いに答えられなかった神通はそれまで黙っていた明石がいとも簡単に声を返した事に驚き、宗谷と同じ様に机へと向かっていく明石の背中に顔を向ける。

すると明石は背を向けてままで机に手を伸ばしながら、静かに声を響かせ始めた。

『私もね。宗谷や神通ほどじゃないんだけど、大事にしてた日々を失ったんだ。私が悪いんだけどね……。』

その時、神通は明石が口にした言葉が、彼女の相方の事を示しているのだと察する。自分と同じ様に明石もまた、失ってからそこにあった日々や想いの大事さに氣付いたからだ。

そしてそれは宗谷もまた同じ事であった。船としての楽しみ、喜

び、辛さを知り、不幸にもそれを失った事で宗谷もまたその大事さに気付いているのだ。

『今でも後悔はしてるんだけどね。でもね、おかげで私が護らなきゃいけない物が、よく解ったような気もするんだ。』

言い終えた明石は踵を返すと、再び宗谷の横たわるベッドに向かって歩み寄って行く。その右手には、真夏の太陽のような色をした蜜柑が一つ握られていた。宗谷と神通の視線を集めながら明石はベッドの端に座り込むと、おもむろに蜜柑に両手を添えて蜜柑の皮を剥ぎつつ口を開く。

『宗谷がお世話になった人間や、お姉さんと妹さん。そこにある何気ない日常。その大事さに気付いた宗谷じゃなきゃ、それって護れないと思うんだ。もちろん宗谷が言う様に私達海軍は戦争だってしなきゃいけないんだけど、護る物の大事さに気付いてない人だったらきつとそこで投げ出しちゃうよ。』

『ううう・・・ううう・・・』

『お姉さんでも、妹さんでも、お世話になった人間達でもできないと思う。それに気付いた宗谷だけが、護る事が出来ると思うよ。』

蜜柑の皮を丁寧剥ぎながらそう言った明石は、宗谷に顔を向けて視線を合わせる。すると宗谷は力の入らない右腕を支えにして、横たえていた上半身を起そうとし始めた。その姿を見ていた神通が寄り添って宗谷の背中に手を添えてやり、宗谷は苦しそうな表情を浮かべながらもなんとか上半身を起すと、すぐに明石に顔を向けて言った。

『お、お国の為、では、ないんです、か・・・？』

今の日本にといて最も盛んに使われる言葉を問う宗谷。

確かに明石と神通が口にした海軍の者たる理由は、国家の為というよりは自身の思う所の為と言った方が正しい。お国の為という文句が流行り言葉のように飛び交う今の日本の実情を曲がりなりにも見てきた宗谷にとっては、疑問を抱くのも無理の無い事であった。ましてそれを最も声高に叫ぶ皇軍という組織の者である二人が面と向かって「国の為だ。」といわなかった事は、宗谷には予想外の事であった。

やがてそんな宗谷がすぎる様な視線を向ける中、明石は皮を剥いた蜜柑を一切れ千切って宗谷に差し出しながら声を返す。

『うーくん、違うって訳じゃないんだけどね……。有り体に言っちゃえば、私の護りたい物は、日章旗が翻って君が代が木霊する、日本と呼ばれる国の土の上にあるから。かな。』

『……。』

『それは宗谷も同じなんじゃないかな……。？』

『うう、うっ……。』

明石の声に宗谷は再び涙を流し始める。その姿は彼女の心がまだ救われていない事を示しており、明石と神通も救う事が出来たとは思っていない。神通もまだまだ美保ヶ関みほがせきでの惨劇を夢に見る事はあるし、明石もまた相方との別れを思い出すと今でも後悔の念が胸に湧いてくる。大事な物は失った事によってその大事さがよく解るのと引き換えに、今度はその事に見切りをつけるのが難しくなってしまう物である。

だが二人は、ふと宗谷が嗚咽に苦しみながらも震える手を明石へと差し出してきた事に、彼女が頑張って心を決めてくれた事を悟った。一度神通と笑みを合わせた後、明石は手にしていた蜜柑の一切れを宗谷が伸ばしてきた手のひらにそっと置く。すると宗谷は手にした蜜柑の一切れをゆっくりと口へと運んで行き、やがて唇の隙間

から流し込んだ。口の中に広がる甘さと酸っぱさに、彼女の瞳からは一層の涙がこぼれ落ちる。

『うううう……。』

『宗谷。海軍の人たちは……。ううん、少なくとも私と神通は、護ろうとする気持ちと理由は宗谷と同じだよ。だから、一緒に頑張ろうね。』

『まあ、最近は威勢だけは良い輩もいるからな。もし民間から移籍してきたお前にフザけた事を言う奴がいたら、いつでも私の所に来い、宗谷。そいつ等を片っ端からぶん殴ってやる。』

明石と神通の応援を込めた優しい声に、宗谷はボロボロと涙を流して返事とも泣き声とも区別のつかない声を放ちながら頷いた。脳裏にありありと蘇ってくる楽しかった貨物船時代の思い出を中々手放す事が出来ない宗谷であったが、彼女は同時にその艦尾旗竿に日章旗ではなく軍艦旗を翻す事を心に決める。彼女は再び差し出された明石の手から蜜柑を受け取り、ただ泣きながらそれを頬張った。

青く輝く月が、そんな3人の姿を舷窓から覗き込んでいる。太古の昔から常に夜を照らし続けてきた月はその夜も煌々と輝きながら、帝国海軍のとある特務艦の誕生を見守っていたのだった。

第五四話 「まだまだ修行中」

昭和15年8月7日。

積乱雲の壁を水平線に浮かべた晴天に、蟬の鳴き声が木霊する横須賀海軍工廠。

部屋の中に充満する空気を退ける為に開けた明石^{あかし}の部屋にある唯一つの舷窓も、熱せられた鉄の塊である明石艦の艦内ではその用を余り成していない。じとじとと汗が滲むほどの熱気が立ち込める室内は、ベッドの端で椅子に腰掛ける神通^{じんつう}も少し煩わしさを覚えてしまう。

相方である木村大佐が四日市にて調達してくれた団扇で顔を仰ぎながら、彼女はふと自身が身に纏う帝国海軍の軍装にあれやこれやと考察を巡らす。

彼女が身に付けているのは帝国海軍の夏服とされる、純白の生地^しに金ボタンが眩しい第二種軍装。神通のそれは麻生地仕立てであるが、30度以上にも及ぶこの時期にあつてはいくらなんでも詰襟の長袖という軍装は暑い事この上ない。しかも帝国海軍においては戦闘時の服装は冬は第一種で夏はこの第二種と決められており、例えばそれがトラックやサイパンといった南洋方面であつても適用されるというのだから酷い話である。

部屋の主である明石などは暑いとすぐに胸元を開けて風を送り込んだりしているが、あまり肌を見せる事が好きでは無い神通にはそんな暑さ対策は選択肢に浮かんでこない。そうなると彼女に残された選択肢は風通しの良い日陰でじつとしているか、今の様に団扇を顔の前で左右に振るしかないのであつた。

しかし汗が滲む神通の表情はそれほどまでに不機嫌そうではなく、

いつもは三角定規の様に角ばった釣り目を丸く細めて口元を僅かに緩ませている。それは彼女が椅子に腰掛けて顔を向けているベッドの上に、新たに自分と同じ軍艦旗を背負う事になった友人の姿があるからである。

最近は顔色も良くなつて声の強弱が明確になつてきた宗谷そうやに、神通はちよつと尖った感じがしながらも明るい声色で声を返す。

『なんだ、お前のトコの特務艦長は山田中佐だったのか。』

『え、ご存知なんですか・・・？』

『ふははは。ご存知も何も、ついこの間まで私のトコで副長をしていたんだよ。』

『え、そうなんですか？』

『あの男は中々に応急指揮が上手かったし、艦内の乗組員への気配りも大したもんだった。きつとお前のトコでも上手くやってくれるさ。』

なんとも不思議な偶然を知った二人は、お互いに暑さを忘れて爽やかな笑みを交える。

宗谷は未だにベッドの上に身を横たえる日々を送っているが、最近ではその頬や腕にそれまで目にする事が無かった張りが出てきている。青紫だった唇も今は赤色を充分に帯び、上半身を起すだけなら一人でも出来る程に回復していた。相方である木村大佐に頼んで神通艦の艦長用浴室を貸し切り、艦の主である神通と明石の手助けを受けながら埃まみれだった身体も綺麗にする事が出来た宗谷には、毛先の部分で丸くならうとする綺麗な黒髪が頬や首の横に垂れている。そして垢と汚れを落とした事で鼻頭にあるそばかすをあらわにした彼女には豊かさを取り戻しつつある表情と声色が備わっており、その事を見る者に彼女の回復ぶりをよく理解させるのだった。

予期せぬ偶然を笑い合いながら神通もまた宗谷の元気な姿を喜び、同時に彼女のこれからに対して安堵を覚えてそれを遠慮なく声に乗

せる。

『その分なら、近々の出発も大丈夫そうだな。』
『・・・はい。』

ちよつとだけ宗谷は笑みを曇らせて返事をする。だが神通は彼女のその変化を不思議に思う事はなく、むしろそれは少しだけ嬉しかった。なぜなら宗谷が笑みを歪めた原因は、親しみを持ってくれている自分との別れが近いからだと察しているからである。神通はそれまで右手で握っていた団扇を左手に持ち替え、背もたれに掛けていた背中を少し折り曲げながら口を開いた。

『あと一週間くらい、だったか？』

『はい。15日に出航します・・・。』

『ん。そうか。』

病み上がりの宗谷ではあるが、元々彼女の分身は既に改装も終わっている事から出航が近い身であった。そんな大事な時期に健康管理を自ら放棄するのは帝国海軍の艦魂としては許される事ではないが、そこにあった彼女の理由と苦しみを分かち合おうと決めた神通にはその事を咎めるつもりなど毛頭無い。まして彼女が向かう任地を知った神通は迫りつつある宗谷との別れをそれほど絶望的には捉えておらず、ほんの少しも笑みを崩さぬままで彼女にその理由を教えてやった。

『大湊に錨を下ろすのは初めてかもしれんが、仕事は北方海域での測量だそうだな。あの辺の海は慣れたモンだろう？』

『はい・・・。』

『ふん。それに来月には、私達第二艦隊も函館と青森への巡航の予定なんだ。すぐに会えるさ。』

神通の言葉に宗谷はすぐに笑みを浮かべ、彼女の心遣いに対する感謝の意を表情だけで伝える。

初めての職場に単身で出向くというのは艦魂でも人間でも緊張と不安の極みであるし、まして宗谷は民間からの移籍という境遇がある。いくら神通や明石の様に心を通わせる事が出来た友人がいたとしても、帝国海軍の艦魂社会全体がそうという訳ではない。例に漏れず宗谷もまたその事に緊張と不安を胸の中に渦巻かせているのは、当然といえれば当然であった。そして神通が払拭してやったのも、まさにそこなのであった。

おっかない風貌に似合わずに優しさを向けてくれる神通。聞けば帝国海軍でも最強の異名を冠する第二水雷戦隊の旗艦であるという彼女の心遣いは、宗谷のざわつこうとする心を赤子の手を捻るように静めていく。やがて元通りの笑みを浮かべた宗谷は感謝の意を込めて『はい。』と声を返し、神通もそれを瞳に入れて頷いた。

すると神通の背後の方向に位置する部屋の扉からは重苦しい金属音が響き、宗谷と神通はその扉へと視線を流した。

『ふうう、ただいま。』

扉を開けたのは部屋の主である明石。その手に握られた取っ手の先には、彼女と宗谷の分の朝食が入った運搬函うんぱんはこがぶら下がっている。宗谷と出会った夜の翌日からこうして明石は宗谷の分の食事を用意してやっているのだが、基本的に腹に入れば何でも良いというグルメスタイルの明石は普段から調達する食料は結構適当である。しかし栄養失調からの回復を企図する宗谷の食事はそうも行かず、味が薄いながらも栄養がしっかり補給できる食事を調達しようと明石

は色々と考えを巡らせた。そして主計科の食事献立にあったカロリー等の数値と軍医らしく栄養学の知識を参考にして、宗谷の食事を用意する事にしたのだ。

海軍の食事は一日3410〜3600カロリーを摂取するように作られているのだが、これでは布団の上で安静にしている宗谷はあつという間に肥満体質になってしまう恐れがある。しかし海軍の設定しているこのカロリー摂取量は別に間違っている訳ではなく、このぐらいの食事をせねば艦隊勤務という物は決して務まらないのである。一日6合、一食に付きどんぶり2杯のご飯が食べれるという艦内での食事は、それだけ重労働である艦隊勤務の実情をよく表した物なのだ。

明石はこの事から調達する量を減らす代わりに、ビタミンや鉄分といった栄養素がバランス良く備わっている食事を用意する事に決めた。だが人間には姿が見えていないとは言え、これをバレないように烹炊室の中から拝借するのは中々に難しい物である。銀バイできそうにないからといって品目の妥協が出来ないからだ。既に皿に乗っているのが、烹炊所勤務の乗組員が調理代の周りを占領しているのが、明石はなんとしても規定の品物の銀バイを完遂しなければならなかった。

一日3度の事ではあるが、そんな事から部屋に戻ってきた明石はいつもの明るさを湛えつつも、ちよつと疲労の色を顔に滲ませていた。だがそれを受け取る立場である宗谷が声を返すにも関わらず、明石はまるで苦い物を食べたかのようにみるみるその表情を歪めて行く。

『おかえりなさい、明石さん。』
『ううええ……。』

唇の隙間から不協和音を漏らす明石だが、彼女はその声を宗谷の言葉に対して返すつもりで放った訳ではない。その理由を知る宗谷が苦笑を浮かべると同時に、彼女が横たわるベッドの脇にある椅子に腰掛けた神通が不敵に笑う。

『ふん。遅かったな。』

『ちくしょおゝ・・・。』

『グダグダ言っていないで、さっさとメシを用意しろ。』

先程の宗谷までとはうって変わって荒っぽい言葉を明石に返す神通。明らかに含みを持った不敵なその笑みに、明石は扉を閉めて宗谷の元へ歩み寄りながらも富士山のように口を尖らせる。決して不機嫌ではない神通と彼女が含んでいる事を、明石はよく知っているからだ。

床に腰を下ろして運搬函の蓋を開けながら、明石は憎たらしい事この上ない神通に向けて言った。

『神通こそ、艦に戻ってご飯食べてくればいいじゃない・・・。』

『心配いらん。もうすぐだ。』

邪険に接してくる明石の心情を小馬鹿にするように口元を緩める神通がそう言った刹那、彼女の言葉が正しかった事を示す声が部屋の扉の向こうからノックする音に続いて響く。

『明石さん、^{あられ}霰どす。戦隊長のお食事を持って来たどす。』

『ん。入れ。』

部屋の主である明石の返事を待たずに神通は声を放ち、部下である霰を部屋の中へと招き入れる。その事に不満げな表情を浮かべながら、お盆に宗谷の食事を用意する明石。時折、神通に怒りの色を

湛えた眼光を向けているが、神通はそれを鼻で笑うだけである。ちよつと陰悪になった部屋の空氣に宗谷が困つたように明石と神通に視線を配るが、ご機嫌な神通は彼女に対して笑みを向けてその心の支えを消し去ってやった。

『おし、4人でメシを食うぞ。霰、お前もここで食つて行け。』

氣心の知れた3人に宗谷を加えた食事はいかにも話の花の咲く楽しい食事になりそうであるが、明石の表情はやつぱりどこか曇りがある。その原因は、この食事が終わった後に彼女が過ぎさねばならないここ数日の生活にあるのだった。

それは宗谷が涙ながらに決意を決めた夜の翌朝の事。

まだまだ力が入らないながらも頑張つて食事する彼女の姿は、明石と神通の彼女に対する心配を大いに払拭してくれた。しかしそれによつて神通は昨夜から胸の内に引かかっていた事を思い出し、明石にその事を尋ねたのである。

『お前、なんで甲板で宗谷を抱きかかえてたんだ？』

『いやあ、病人を運ぶのつて結構大変なんだね。あはは、途中でバテちゃったんだ。』

神通ほどでは無いにせよ女性にしては長身の明石であるが、神通やその部下達の様に普段から身体を鍛えている艦魂達に比べれば非力なのは当然である。まして自身の体力を削るようにして日常から艦魂用の医薬品をちよつとづつ揃え、その上で軍医としてのお勉強もしているのだから、彼女に身体を鍛える時間が無いのは当然とい

えば当然であった。しかし仕事に対して時間の余裕が無いからといって妥協する事は、人間であっても艦魂であっても許される事ではない。頑張る姿勢だけでご飯が食べれるのなら苦勞はしないし、そこに掛かるのが日本の命運と命である帝国海軍の艦魂にあっては尚の事だった。

すると神通はいつもの口癖と供にげんこつを明石の頭に向けて振り下ろし、それを受けた明石はびっくりして彼女にその理由を問う。だが帝国海軍の艦魂として既に15年以上もお仕事をこなして来た神通の言葉に、まだまだ新米の艦魂である明石は反論できなかった。

『怪我人が自分のトコに来るまで放っておくのか、お前？もちろんその時は私も手を貸してやるつもりだが、動けない奴を自分の力で治療が出来る所に運ぶのも軍医であるお前の役目だろうが。』

『う……。』

神通の言いたい事は明石もよく解っていた。

あの時、彼女が明石の前に現れなければ、宗谷は手遅れになっていたかも知れないのだ。そしてそれは軍医として生きていく上では何度も遭遇する事になるであろう事態であり、その場に力持ちの神通という友人が常に控えている事など有り得る筈もない。宗谷を自身の艦にまで運んだ際に神通がいた事はただの偶然にしか過ぎず、それを結果良しとして顧みない事はダメだと神通は言いたかったのである。

明石は激痛の走る頭を撫でながらも、自分の不甲斐なさを思い知らされて今にも泣きそうな顔で俯く。だがそれを教えた神通とて、ただ彼女をしょんぼりとさせる為に叱ったつもりは無い。心の底から慕う友人の明石であるからこそ、神通はあえて自身の脳裏に浮かんだ言葉を極めて率直に伝えたただけなのだ。故に彼女はその事に対しての解決策、すなわち明石の体力をどうすれば鍛えられるかという懸案に対しての解答を既に導き出していた。

やがて神通は明石の肩に手を乗せて、先程のげんこつを謝るかのような笑みを浮かべながらその事を明石に伝える。しかし明石はその言葉に対して、喜びも嬉しさも湧かせる事は無かった。神通がさらっと口にしたそれは、帝国海軍艦魂社会において最も辛い身体の鍛え方に他ならなかったからである。

『今日から二水戦の訓練日課に参加しろ、明石。』

『えええええええっ！！！！！！』

『心配するな。2週間で主砲弾を担いで走り回れるようにしてやる。』

氣心が知れた仲である彼女ならと思つて誘つた神通だが、予想していた通り、明石は神通の言葉を受けて悲鳴が混じつた声で絶叫した。それもその筈。当の神通ですら帝国海軍でも最も厳しいと自負している二水戦の訓練日課は、「私立神通学校」と艦魂の仲間内でも恐れられる筋金入りのスパルタ教育が繰り広げられる場なのである。氣絶しそうになって思わず足元がふらついてしまう明石の反応も、決して無理の無い事であつた。もちろん嫌がつて逃げようとする明石は神通によって首根っこを掴まれて強制連行され、自身の不甲斐なさを身を持って叩き込まれる2週間が始まつたのであつた。唯一の救いは同窓の仲になつた者に霞や雪風、朝潮に霞といった見知った顔があつた事であり、最大の不幸はただ一人の教官がこの人である事くらいであつた。

『・・・・・・・・。』

部屋の主であるにも関わらず、明石は部屋の隅っこで口を尖らせ

ながら頬を上下させていた。既に彼女の膝元にあるお皿の上からは調達してきた料理も消えかけており、迫りつつある恐怖の一日を憂いで肩を落とす。ふと視界を床から上げると、そんな明石の気など屁とも思っていない神通と部下の霰、そしてベッドの上で明るい表情をする宗谷が笑い声を伴って食事している光景が瞳に写る。本当は明石だって3人のように弾む声で話しながらの楽しい食事と行きたいのだが、一食に付きどんぶり2杯のご飯を食べないと身が持たないという海軍生活を地で行く二水戦の訓練日課の事を思うとその気も萎えてしまう。

そしてこの時、明石はついに辛いここ数日の生活で蓄積していた衝動に駆られて、どうすれば訓練日課に参加しなくて済むか考えてしまう。やがて彼女は視線を眼前の3人から右に流し、そこにあった扉を瞳に入れて最も安易な回避術を思いつく。

そうだ、逃げてしまえば良い……。

師匠から教えられた一流の淑女という言葉も、残念ながら今の明石の脳裏には浮かんてこない。連日に及ぶ激しい訓練から逃れられるというささやかな希望だけを胸に秘めた明石は、未だに談笑しながら箸を進める3人を確認してそっと立ち上がる。やがて抜き足差し足で扉へと向かう明石だが、残念ながら彼女の最愛の友人たるこの人は既に明石がそろそろそんな行動を取るであろう事は予測済みであった。

完全に足音を消して爪先立ちで歩く明石だが、すぐに彼女の耳には神通の声が届いてきた。

『猿！ 犬！』

『『はい！』』

『げっ……！！』

背後から響いた神通の声を認めるや、明石が視線を投げていた扉は開かれる。そこにいたのは神通の部下である霞と雪風であった。二人とも銃剣術の武技教練で使う木銃を片手に持ち、その肩には参謀飾緒しよくしよと見紛うばかりの縄の束が引っさげられている。明石は眼前にて仁王立ちするそんな二人の姿を見た後に今度は背後へと振り返り、そこで水の入った碗を唇に傾けながら横目でこちらを見ってくる神通を確認する。それは彼女が成そうとしていた訓練回避の策が、既に見破られている事を意味していた。脱走失敗だ。

だが諦めの悪い彼女はすぐさま正面へと顔を戻し、ちょっと腰を屈めながらも両手を顔の前ですり合わせて呟くようにして雪風と霞に話しかける。

『み、見逃してよお……。と、友達でしょお……。？ね……。？』

その言葉通り霞と雪風は明石にとっては神通に次ぐ友人であり、当の二人にとっても明石は階級こそ違うものの大切な友人であった。そしてそんな明石と一緒に頑張る事が出来るここ数日の訓練日課は、霞と雪風にとっては私立神通学校というおっかない日常における大きな楽しみでもある。もっともそこで疲労困憊の状態に陥る明石の姿は可哀想だとも感じているし、こうして目の前で頼まれるとちょっと彼女の行動を容認してやりたくもなってしまう。やがて霞は明石から視線を外して困ったような表情を浮かべながら頬を指先で掻き始め、雪風もまた明石から視線を外して口をへの字に曲げながら後頭部を掻き始めた。しかしすぐにそこには、二人の迷いを消し去る上司のお言葉が響いてきた。

『ひつとらえろ。』

『霞い……。雪風え……。』

明石は小さな声で胸に抱く願いを訴えてくるが、絶対的なカリス

マを持つ上司の声を受けた二人はそれに誘惑される事は無かった。霞と雪風の心の中にある天秤はいとも簡単にバランスを崩し、そこで重いと判断した物もまた同じであった。

その刹那、二人は明石にその非礼を詫びながらも縄を取り出して飛び掛る。

『すいません、明石さん！ とりゃあっ！』

『うはっ！ 裏切り者くっ！！』

『申し訳無いツス！ 大人しくお縄を頂戴して下さい！』

『わあっ！ は、離せくっくッ！』

二水戦の中で行われる柔道の武技教練では常に1位を奪い合う霞と雪風にかかつては、体格の差こそあれど明石には手も足も出ない。みるみるうちに明石の身体には縄が巻きつけられて行き、腕どころか脚までも彼女は縛り上げられてしまった。なんとか明石はそれを解こうとして身体を揺らしてみるのが、きつく縛られた縄はびくともしない。

その内に明石の正面では、足元にて後片付けに精を出す霞を従えた神通が首を左右に捻りながら立ち上がった。コキコキと音を響かせてその首筋を撫でる神通は、一度明石に澄ました表情で視線を投げると、すぐにベッドの上にて上半身を起す宗谷に視線を戻して声を放つ。

『後片付けはこの霞がやるから、宗谷は早く体調を整えるんだ。』

その言葉を受けた宗谷は、神通の後ろにてカチャカチャと物音を立てながら運搬櫃に手を伸ばす霞に目を向ける。やがて霞は自身と神通の分に併せて宗谷の分の食器をもしまい込んだ運搬櫃を担ぎ上げ、宗谷の視線に笑みを返しながら立ち上がった。すると神通もまた宗谷に笑みを向ける。

『昼にはまた来る。じゃあな。』
『はい……。』

礼儀正しい宗谷は神通の優しさにお辞儀を伴って声を返した。それを認めた神通は小さく頷いてみせると、扉の前で仁王立ちする霞と雪風に視線を流す。そして彼女が顎で合図をすると同時に霞と雪風は縛り上げた明石の身体を担ぎ上げ、訓練日課の舞台である神通艦へと向かうべく部屋を出て行った。しかしこんな状態で連行される明石が大人しくしている訳もなく、彼女は二人に担がれながらも怒りの籠った声をあげる。

『神通のバカー！　アホー！』

霞や雪風は口が裂けても言えそうに無い神通を罵倒する言葉は、彼女の親友である明石ならではの。もちろん神通だってそれを理解しているので、その声が耳に入ったとて眉を吊り上げるような事は無い。

しかしそんな言葉を何の遠慮もなく余りにも連呼する明石に、担ぐ霞と雪風は神通がご機嫌斜めになる可能性を憂う。機嫌が悪い神通による教育が如何に厳しいかを身を持って知っている二人。故にどうすれば明石の声を神通に届かないように出来るかと頭を捻るが、犬猿の仲なのに思考回路が双子の姉妹の様にソックリな二人はある策を思いつく。

『雪風、歌う？』
『そうすつか。』

そんなやりとりをした二人は頭上にて放たれるうるさい声を掻き消すべく、大きな声で軍歌を歌いながら歩いた。

『『月はく隠れて海暗きく！ 二月く四日の夜の空く！』』

兵学校にても歌われるその軍歌は、霞と雪風も含めた駆逐艦の艦魂達が誇る魚雷による戦闘を歌った物で、水雷戦隊においては人間達も頻繁に歌う物。そして私立神通学校の校歌とも言える物である。ワーワーと罵声を放つ明石を担いだ二人は、通路にその歌声を響かせながら神通艦へと向かっていった。

『嫌だー！！ 離せー！！』

『『闇をくしるべに探り入るく！ 我が軍九隻の水雷艇く！』』

『私は魚雷なんか持ってないー！！』

こうして明石は二水戦へと強制連行され、今日もまた神通によってベツチンベツチンと尻を叩かれる一日を過ごすのだった。

第五五話 「誕生と買」

昭和15年8月8日、0810。

明石^{あかし}が神通^{じんつう}によってシゴかれている横須賀の波間から遙かに西、

瀬戸内は呉海軍工廠。

蟬の鳴き声が木霊するのは横須賀海軍工廠と同じではあるものの、その日の呉の町はいつもと様子が違っていた。湾内に所狭しと並んでいた在泊の艦の姿は無く、大型の艦のほとんどは昨夜の内に柱島や江田島へと泊地を変更され、駆逐艦などの小さな艦艇は全て岸壁に繋留されている。海面上の艦艇の間を縫うように忙しく駆けていた呉軍港の雑役船すらも工廠の波間には姿を見せず、陸地の工廠からは常に絶える事が無い機械音が全く発せられていない。そして工廠内の至る所には、いつもの工員達に代わって鉄帽と銃剣付きの小銃を携えた陸戦隊員達が無言で警戒の目を光らせていた。

いつも通りなのは岸壁へと寄せる波の音だけであるが、その音は呉の町から響く陸戦隊による市街戦演習の銃声で蟬達の賛歌と共に掻き消される。波間の先、呉軍港の入り口に当たる海面には陸戦隊の演習の支援を名目とした駆逐艦が数隻ほど浮かんでおり、その煙突や艦尾からは高々と黒と白の煙幕を吐き出しており、工廠を含んだ呉の町は陸は銃声、海は煙幕の壁によって完全に外界と遮断されているのだった。

そんな呉海軍工廠の潜水艦棧橋付近にある艤装棧橋には、軍艦旗と供に中将旗を翻す連合艦隊旗艦の長門艦^{ながと}の姿があった。

長門艦の艦内にある航海科の倉庫。そこは長門艦の分身である長門が寝起きをする部屋であり、彼女は部屋の中でベッドに腰掛けて目を閉じて俯いている。20代後半の外見を持ちながらもお気楽でマイペースな長門の性格は帝国海軍艦魂社会の誰しもが知っている事であるが、いつもはボタンやホックを一切留めずに羽織る様に袖を通した軍装の上着を今日は既にちゃんとボタンもホックも閉めて着ている。それどころか革製の白い手袋までも彼女は装着しており、その姿を部屋の隅に立って眺めている陸奥^{むつ}は姉の普段は見せない殺気にも似たオーラの様な物を感じてならなかった。

事実、いつもは毎朝、襦袢^{じゅばん}一枚で酷い寝相の姉を起す陸奥なのであるが、今日は部屋に入ると既に長門は起きて着替えも済ませていたのだ。日頃から長門はブーブーと陸奥の顔を見るたびに文句を言うのだが今日に限っては口数その物が少なく、既にこうして部屋の中で一緒になって一時間は経つのに陸奥は長門と二言三言ほどしか声を交えていない。

もっとも長門は決して機嫌が悪い訳ではなく、陸奥もその事は解っている。長門の背後にある舷窓の向こうに広がる、只ならぬ雰囲気を持つ今日の呉の様子。その理由こそが、長門がこの様にいつもと違う雰囲気をもたらし出している理由でもあるのだ。

『ふうふう……。』

ふいに声を伴った溜め息をすると同時に長門は俯いていた顔をあげ、それまで閉じていた瞼を上げる。その表情には明らかに緊張の色が滲んでいた。やがて陸奥は頭から軍帽を取ると姉とは大違いの右に巻く強いクセ毛である前髪を一度指先で流し、普段は決して見せる事の無い長門の様子を心配して声を掛ける。

『……姉さん、大丈夫……？』

呟くように口にした陸奥の声は艦の外から聞こえてくる陸戦隊による砲声に掻き消されそうになるが、その声を受け取る側の長門には陸奥の言葉と心遣いがハッキリと伝わっていた。長門は一度陸奥に視線を流してちよつと震えたような笑みを見せると、おもむろに膝の上においていた右手を上着のポケヘと突っ込み、そこからある紙切れを取り出して顔の前へと運ぶ。そこに書かれた内容を流し読みしつつ、長門は静かに陸奥へと声を返した。

『へへへ。やゝ、緊張するな……。初めてだから……。』

苦笑いを浮かべた長門は、眼前の紙面から視線をそらす事無くそう言った。

その言葉通り、長門はこれから生涯で初めてとなるとある行為をせねばならないのだが、それは長門を含めた艦魂達にとってはとても重要にして大変な行為であった。もっとも長門も陸奥も一度だけその行為を受ける側として経験しており、長門が視線を投げる紙に書かれている内容はその行為のやり方に関しての説明が書かれているのである。そしてその内容を紙に記して長門に与えてくれた人物と、長門が一度だけ経験したというその行為を与える側として行ってくれた人物は、実は同一人物であった。

その事を知る長門はざわつく胸の奥を鎮めようと、その人物の事を脳裏に蘇らせて呟くように口にする。

『……朝日^{あさひ}さんは、どういう気持ちでアタシを取り上げてくれたのかな……。』

長門はそう言うのとふと陸奥へと顔を向け、今しがた自らが口にした疑問を陸奥へと投げてみる。

『陸奥は確か、富士^{ふじ}さんに取り上げられて貰ったんだよね？どう？その時の事、覚えてる？』

それは長門が持つ本日成さねばならない行為に関しての唯一つの経験と同じ様に、陸奥にとってもその生涯にあっては唯一度の経験であった。しかし陸奥は長門の質問に対して明確に答える事は出来ない。なぜならその理由は、陸奥がその行為を受ける際に置かれていた独特の生い立ちにあるのだった。

『ううん……。私は未熟児だったから、取り上げて貰った時の記憶はないわ……。』

『あ、ごめん。そうだったね……。』

姉として陸奥の生い立ちを理解している長門は、彼女の言葉をすぐに理解して謝罪の言葉を返した。しかしふと妹の生い立ちに関する事を考えた長門は、それがこれから長門が企図している行為を与える者にあっても同じである事を察する。

『おんなじかもね。陸奥と。』

『え……。？』

『今日生まれる子、大き過ぎてドック内での各種工事ができないんだって。舷側のアーマーも取り付けてないみたいだよ。』

『あ、そうなの？』

剥き出しの隔壁で床も壁も天井も構成されてねずみ色一色の部屋の中に、僅かな灯火を灯すかのような姉妹の会話が響く。長門は妹とのやりとりで少しだけ緊張感を緩めながらも、壁に掛けられた時計が目的の時間に至ろうとしている事を確認する。やがて彼女は傲慢の腰まである長い黒髪を手で撫でながら立ち上がり、陸奥もまた

姉の行動に時間が来た事を悟って軍帽を再び頭に被った。

まだ緊張感の消えていない面持ちながらも、しっかりとした足どりで部屋の扉へと向かう長門が陸奥の瞳に写る。いつもは『メンディ。』という言葉をすぐに口にして仕事に対する覇気を見せてくれない長門だが、今日はそんな口癖を一言も発せず、そしていつもの様に陸奥に咎められる事も無く仕事に向かおうとする。そんな姉の姿は帝国海軍の戦艦たる誇りを強く胸に抱く陸奥には嬉しかった。屁理屈を述べて皮肉屋な物言いをする姉を時には憎く思うことさえもある陸奥も、この時ばかりは尊敬の念を持って姉の声に返事をする。

『んでは、行ってみよっか。』

『はい。姉さん。』

陸奥の返事を受けた長門は肩を上下させて深呼吸をすると、ドアノブへと手を掛けて部屋の扉を開ける。サラサラと髪を靡かせて部屋を出る長門に、陸奥も表情を引き締めて続いた。

二人は長門艦の甲板にでると白い光りを放って姿を消し、長門艦が待機する艀装栈橋から北東の方角にある造船船渠にて鎮座する艦へとその身を移した。

しかし艦といってもその甲板上には構造物の類はほとんど設置されておらず、二人がその分身に持っている日本独特の高い艦橋構造物の事を考えるとどこか寂しい艦影であった。艦首から艦尾に至るまでにあるのは、その艦独特の甲板における高低差と数メートルの

高さの中央構造物で、甲板の中程には砲塔を設備の一部が備え付けられた大穴がいくつかある。

まだその砲身すらも備え付けられていない未完の砲塔の横を長門は歩き始めるが、彼女は自分の後を妹が追って来ていない事に気付いて振り返る。すると長門の予想通り、陸奥は口を半開きにして見開いた瞳を艦のあちこちへと忙しく流していた。

『な、なんて大きさ……。』

物珍しげそうに呆然としたともとれるような表情で陸奥はそう呟くが、その理由は長門も知っている。何を隠そう二人がいる艦は建造自体が海軍内でも極秘裏に進められてきた艦であり、艦魂の中でこれまで実際に甲板へと足を着けた者は連合艦隊旗艦を頂く長門以外にはいなかったのである。陸奥もその存在自体は既に知っていたのだが、彼女は初めて目にする実物にその度肝を抜かれていた。

世界最強の戦艦である事を自負してこれまで励んできた陸奥。410ミリの主砲はもちろん、大きさだって世界的にもトップクラスである自分の分身は、見る者を圧倒するだけの力強さを持っている。当然、帝国海軍がこれまで保有した戦艦の中では最も大きいのが彼女を含めた長門型戦艦であるのだが、陸奥の視界に広がる艦は彼女の分身を遥かに凌駕する程に幅も長さも大きかった。艦橋やマスト等の突起物がまだ無いという事もあるが、陸奥にはいま自分が足を着けている所は平坦な島なのではないかと思える程。踏み慣れた甲板だけが、彼女にいま自身が立っているのは船の上であるという事を忘れさせなかった。

偽りの無い素直な驚きを身体全体から放つ陸奥に長門は口元を緩めるが、時間が差し迫っている事とこの艦の見学が目的ではない事から声を掛けて我に返してやった。

『デッカイでしょ?』

『ね、姉さん……。こ、これ、ホントに船、なの……。？』

『まあね。それより式が始まっちゃうよ？』

『あ！ご、ごめんなさい……。！』

慌てて長門の元へと駆け寄ってくる陸奥。それを認めた長門は笑みをそのままにすぐさま顔を船渠の陸地側にあたる艦首へと向け、止まっていた歩みを再び進め始めた。艦首付近には立会いの工員や工廠の検査官が数名程いるが、長門と陸奥はそれを気にする事も無く舳先の端まで歩みを進めて行き、彼等もまた艦魂という存在である二人の来訪には誰一人として気付いていない。

紅白の綱が張り巡らされた舳先へと着いた長門は、ちょっと身を屈めながら舳先より真下を眺めてみる。そこには自分達の時もそうであった様に、艦の進水を祝う為の大きな葉球がぶら下げられている。だがその更に下方にあるもう一つの球を目にして長門は声を上げ、陸奥も恐る恐る長門の背後から顔を覗かせてみた。初めてみる自分より大きな艦に驚いた陸奥は、ここでもまた初めて目にする自身の分身にはない物を見て驚いてしまう。

『な、な、なにあの艦首……。』

『ほええー、すんげ。アタシも見るのは初めてだけど、球状艦首っていう新しいタイプの艦首なんだってさ。なんか朝日さんの衝角艦首みたいだね。』

そんなやりとりをする二人が舳先の甲板から覗く下方、この艦の艦首の水線下に当たるその部分はまるで魚雷の弾頭を模したかの様に球状となっており、水線を表す赤い艦底色の塗装を施した箇所から前方に突き出す形状になっているのだ。それも3メートルも突き出しているのだから半端な物ではない。陸奥が驚きを隠せないのも無理の無い事であった。

『あ、新しい艦首、か……。あ、さ、さすが新型ね、姉さん。』
『うん、だけどー。』

先程からその巨大さ滲み出すこの艦が最新式である事を、そしてそんなこの艦が新たな自分達の仲間である事を知る陸奥は長門に顔を向け、驚きと感動の余り少し上ずった声でそう言った。

しかし長門はちょっとだけ明るさが消えた声を陸奥に返すと同時に、その視線を僅かにあげて艦首から陸地にある式典の会場に流す。そこには帝国海軍が今まさに新たに進水するこの艦を祝おうとする光景があるのだが、それは記憶にある長門の進水式とは似ても似つかぬ光景であった。

『なんか、寂しい式だね。』

『た、確かに……。』

生まれた際の記憶が無い陸奥は長門の様に自分の時の進水式を思い出す事はできないが、既にその身を浮かべて20年に及ぶ彼女はその生涯の中で自分以外の艦艇の進水式という物を何度も目にしてきた。

構造物も殆ど無い艦体だけの状態で行われるのはこの艦も同じであるが、進水式の日には艦首から甲板に至るまでのあちこちに支柱を立てて軍艦旗や日章旗を掲揚し、紅白の垂れ幕と満艦飾に彩られてその身を浮かべるといふ、お船としての晴れの日が進水式という物である。ところが陸奥と長門がいるその艦には旗など一つも翻っておらず、満艦飾も施されていない。控えめに紅白の色を湛えている綱と葉球が艦首にあるだけであり、栄えある帝国海軍の最新鋭艦の誕生としてはなんとも佻しい姿であった。

やがて陸奥はふと長門が視線をおくる艦首前の陸地にある式典会場へと顔を向けるが、彼女はそこでもまた、今まで見てきた進水式の記憶とは天と地程もある差を見つけて眉をひそめる。進水式とは

それまで艦の建造を担ってきた地にとっては不定期なお祭りのような物であり、艦の建造に携わってきた工員や海軍関係者とその家族や見物人によって式典会場は埋め尽くされているというのが陸奥も知っている進水式である。太古の昔より耐える事の無い海面と風の音にとって代わる程の、歓声と拍手。野を駆ける風に揺られる一面に咲いた花と見紛うばかりの、その場にいる人々が手に持ってしきりに振る日章旗。その横で盛大に軍楽隊が奏でる軍艦行進曲。陸奥や長門のような艦魂だけではなく、人間達にとってもまた進水式とは晴れの日であった筈だった。

だが強い巻き毛の前髪を手ぐしで掻き揚げる陸奥の瞳に写った進水式会場には、真っ白な第二種軍装に身を包んだ海軍の軍人達が100名ほどいるだけでその他にはスーツ姿の男性が数名いるのみ。国民らしさを滲ませる着物姿の者等は一人もおらず、日の丸を握って振ろうとしてくれる人間などその場には誰一人としていないのである。船渠の端っこにポツンと小さく建てられた式壇だけが、一応は祝う気が人間達にもあるのだと陸奥に伝える。

その理由が海軍内部に対しても極秘である事は彼女も承知しているのだが、これからまさに生まれようとしている自分達の仲間の事を思うと陸奥はちよつとだけ人間達が憎らしくなってしまう。故に陸奥は自然としかめていた表情をそのままにして、胸に抱いた感情を率直に呟こうとした。しかし彼女のそれは、式壇の上にて一人の海軍軍人が紙を広げたのを認めた長門の声によって遮られた。

『呉鎮長官の日比野中将だ……。』

長門が何時になく真面目な表情で放った声に、陸奥は目を凝らし、艦首の下方にある式壇を見つめる。そこには周りの人間や自分達と同じ白い軍装を身に付けた中年の男性が立っており、何やら手に持った縦折りで畳まれている紙を広げていた。もっとも長門も陸奥もその光景に驚くような素振りを見せず、彼が口にする言葉をなん

とか探ろうと必死に男の口へと眼差しを集中させる。二人とも視力が言い事が幸いであるが、人間たちの様に陸地に立って間近に迫る事ができない彼女達艦魂は、普段過からこの様にして人間達の口の動きから会話の内容を読み取ろうとしているのだ。

そして二人はその経験から日比野中将が口にするであろう言葉を予測できており、探ろうとするのは彼がこれから語る中でのたった一部分であった。やがて陸奥と長門を含めたその場にいる者達が一斉に視線を投げる中、日比野中将は口を開いて眼前に広げた紙の上に書かれている文章を読み始める。

『命名書。軍艦大和^{やまと}。昭和12年11月4日。その工を起し、今やその成るを告げ、茲^{こゝ}に命名す。昭和15年8月8日。海軍大臣、吉田善吾^{よしだ ぜんご}。』

日比野中将が言い終えても尚、その場には歓声も拍手も鳴り響かない。いつもの瀬戸内の風が波を撫でる音だけが、その場を支配する静寂を犯しているのであった。

『大和……。』

しっかりと日比野中将の口の動きからその言葉を読み取った陸奥はそう呟くと屈めていた身体を起こして立ち上がり、艦尾の方へと視線を流す。その言葉こそ、いま彼女が足を着けている艦の名前なのであった。

『戦艦……大和……。』

虚ろな表情で声を発する妹に小さく笑った長門は、立ち上がると彼女の隣まで歩み寄って一緒に艦尾の方へと視線を流す。

『あはは。八島^{やしま}さん、秋津洲^{あきつしま}さん、敷島^{しきしま}さん、扶桑^{ふそう}さんに続いて5人目だね。』

この艦の名前に色々と考えを巡らせてと呆然とする陸奥とは対照的に、長門はいつもの様に屈託のない笑みを浮かべて声を放った。もっともその名前に考えを巡らせたのは彼女も同じで、陸奥は即座に長門の言った事を理解して声を返す。

『そ、そうね。でも、こんなに大きい船だから――。』
『当然っちゃ、当然か……。』

飽くまでも笑みを浮かべて声を放つ長門だが、陸奥は自分の声を遮るようにして言った長門の声色にちよつとだけ明るさが失せている事に気付く。もちろんそれは今しがた二人で話したこの艦の名前に原因があった。長門が挙げた先輩に当たる者達の名は全て日本という国その物を指す古い国号や美称であり、まさに日本民族の全てを背負うにたる名前なのである。だがそれを鑑みた時、長門と陸奥は自分達にはその様な名前が託されなかった事をどうしても意識してしまう。もちろんその事によって海軍の人間達を恨むような事は無いが、帝国海軍最強にして連合艦隊の旗艦を頂く自分達が日本を指す名前を貰えなかった事が二人にはちよつと残念ではあった。

するとその時、突如として彼女達の耳には水の流れ落ちる音が艦全体から響き始めてきた。それはいよいよ彼女達がいるこの大和艦がその身を浮かべる瞬間への秒読みであり、その事に気付いた二人はお互いの顔から抱いている感情の色を引かせて行く。甲板の上に乗ばらにいた検査官や工員達もそれに気付き、ある者は艦内へと入って行き、ある者は甲板の端っこまで行って眼下に広がる艦庭の様子を見守っている。これまで進水式らしからぬ静寂に包まれていた大和艦であるが、ようやくここにきて進水と相成るのである。

そしてそんな光景は、長門と陸奥の本日行おうとしている行為の時間が迫っている事を示していた。長門は肩に手を添えて首を小さく回しながら、それまでにあった明るさを鎮めた声で背後に立つ陸奥に言葉を投げる。

『いよいよだよ。陸奥。』

『はい、姉さん。』

陸奥に対して振り返る長門は振り返る事無く声を掛けたが、返って来た妹の声に持ち前の凛々しさが備わっている事を彼女は感じる。それは未だに長門の心の奥底で燦っていた不安という気持ちをも、完全に拭い落としてくれた。時には憎らしく思ってしまう事もある陸奥という妹。決まりや約束事に関して口うるさい彼女を、長門は日頃から邪険に思ってしまう事もある。だがそんな彼女こそがこの世で唯一人の実の妹なのであり、こうもまた鮮やかに自分の心を綺麗にしてくれた事に長門は深い感謝の念を抱く。一度俯く様にして首を垂れる長門だが、長い黒髪の間隙から覗く彼女の口元は緩んでいた。

やがて長門は顔を上げると再び振り返る事無く陸奥へと声を掛け、企図している行為を行う場所である大和艦の最下甲板へと向かうべく、砲塔装備予定箇所の付近にポツンと口を開けているラッタルから艦内へと降りていった。

弱々しい電灯が照らす艦内を長門と陸奥は歩いて行く。静まり返った艦内には艦の外から響く海水の流れおちる音が木霊し、その中で時折検査官の様な人物が艦内の隔壁に手を触れて異常の有無を無

言で確認しているだけである。だがそこを素通りして暫く歩いた所で、突如としてグラリと長門と陸奥の足元が揺れた。思わず壁に寄り添ってその緩慢な動揺に耐える陸奥は、ふと顔を電灯と配管で埋め尽くされている艦内通路の天井へと向けて声を放つ。

『ドックへの注水が終わったのかな・・・？』

呟くように言った陸奥の先では、長門もまた右腕を壁に支えて同様に耐えている。決してその場に転んでしまう程の激しい揺れではないが、長門はその動揺に対する正体を明確に理解している為に驚く事は無い。すぐに背後にいる陸奥に顔を向けて、長門はその事を教えてやった。

『いんや、きつと艦に注水を始めたんだよ。積んでる重量物が機関関係ぐらいだから、バランスが悪いんだって。』

『そうなの、姉さん？』

『ま、工員達の立ち話を聞いただけなんだけどね。艦首側に3000トン注水させてから扉船とせんを退避させるんだってさ。』

はにかむ様な笑みを浮かべて声を返す長門は、まだ動揺が治まりきっていないながらも壁につけていた右手を離す。陸奥はそんな姉に気付ずに天井のあちこちに視線を流して動揺の具合を探っているが、すぐに長門は声を発して止まっていた歩みを再開させた。

『陸奥、いくよ。』

『あ、はい。』

陸奥が声を返ししながら前にいる姉に視線を流した時には既に長門は背を向けて通路の奥へと歩き始めており、彼女は慌てて長門の背後へと続いた。

そのまま二人は大和艦の奥へと歩みを進めて行き、やがて灯りの有難さが一層増す最下甲板へと到着した。

黄色がかった電灯の光りよりも隔壁のねずみ色を帯びた闇の方が目立つそこは、高い天井と艦内でも重厚な隔壁にて構成される缶室区画。まだ火が入られていないボイラーが並ぶ缶室区画は少しひんやりとしていながらも、逃げ場を見つけれない湿気が溜まっていてどこか居心地の悪い空気で満たされている。そしてもう既に水線下となっている缶室区画は、一際大きく鳴り響く大和艦の外側に発せられる海水の流入音によってその静寂を切り裂かれていた。

『えっとね、確かここら辺に……。』

二人がそんな缶室区画の中のある缶室へと歩みを進めた所で、長門は突如としてそう呟きながら身を屈めて床のあちらこちらに視線を投じている。不思議そうにその様子を眺める陸奥だが、彼女がそれを問おうとする前に長門はお目当ての物を床の一角に見つけて声を上げる。

『お。あつた、あつた。陸奥、こつち。』

手招きをする長門に誘われて傍らまで近寄った陸奥の瞳には、床にポツンと設置された修理補修用の点検扉が映る。もっともボルト止めによる固定もされていないそれは扉とは名ばかりの鉄板で、長門は何の遠慮も無しにその鉄板の端に指をかけると無造作に横へとズラした。そこに現れたのは一人分の胴回り程の穴で、穴の深さは陸奥や長門の背丈とそれ程変わらない。コの字型のステップが穴の側壁に数えるほど付いているのみだ。

しかし、苦勞して艦内を歩き回った果てに辿り着いた割には寂しい穴の光景にもかかわらず、長門と陸奥は正した表情を浮かび上がらせて力の入った眼差しをお互いのそれに投げつけあう。なぜならその穴の底こそ、二人が企図している行為を行おうとする場所であったからだ。

『竜骨は2本、アタシと陸奥でやるのよ……。』

静まり始めた海水の流入音と入れ替わるようにして、長門が持ち前の明るさを消した声を放つ。陸奥は僅かな間を置いて姉の声の余韻が治まってから、同じく研ぎ澄まされた集中力を滲ませた声を返した。

『はい……。』

『この子は連合艦隊の旗艦を約束されているから、生まれたばかりでも身に付けなければならない事がとっても多い。だから自然と実体を現せる様になる前に、アタシ達の力で半ば強制的に実体を出現させる。』

『私達のように、ね……。？』

陸奥の問いかけに長門は無言で頷く。すると陸奥もまた視線を投げてくる長門に対してゆっくりと頷いてみせ、その仕草は長門に対して陸奥が自身と同じ決意を抱いてくれた事を伝えた。やがて彼女は陸奥に対して声を掛けるとその身体を穴の中へと滑り込ませて行き、陸奥もまたその後から続いて行った。

『じゃあ、始めよっか。』

『はい。』

穴の底に足を着けた二人は頭上の穴から漏れてくる僅かな明かりを頼りにして、そこに広がる低い天井で構成された空間の一面に視線を流す。だが空間といっても穴を降りた左右には数メートル程の間隔で壁がそびえており、二人は暗闇に支配されるそこで迷うような事は無い。むしろその壁こそが、二人が先刻口にしたばかりの大和艦の竜骨なのであった。

陸奥も長門もその分身は海軍でももつとも巨大な艦体なのであるが、備わっている竜骨は普通のお船と同じく一本。ところが眼前にある竜骨を示す鋼鉄製の壁は明らかに左右に同じものがあり、その光景に陸奥はこの大和艦という船がそんじょそこらのお船とは一線を画した存在^{もの}なのだ^と改めて認識する。

溜め息を放って色々と考えを巡らせる陸奥だが、その背後では長門が白く淡い光りを右手に纏わせて一振りの短刀を出現させた。長門の右手から放たれた光りは真っ暗なその空間を瞬間的に照らし、それに気付いた陸奥を振り返らせる。やがて長門は頭上の穴から差し込んでくる僅かな灯りを頼りにして、鞘から抜いた短刀を自身の左手の親指へとそつと刃を立ててあてがう。それが今から行おうとする行為の準備である事は解っているのだが、実の姉が刃物という物騒な代物を自分の手に添えている姿はいささか陸奥の心を揺さぶろうとする。

『……つとお……。はい、陸奥も。』

しかし落ち着き払って親指に当たった短刀を薙ぐ姉に陸奥の心は再び平穏を取り戻し、親指から赤い流れを滴らせながら短刀を渡してくる姉に動揺する事は無かった。

『はい……。』

短く返事をして短刀を受け取ると、陸奥もまたそれを自身の左手の親指にあてがって横へ小さく動かす。すると陸奥の親指と短刀の刃の隙間からは、長門と同じ様に赤い一筋の流れが走り始め、親指の付け根辺りで滴ったそれは雫となって早くも床へと落ちて砕けた。

『朝日さんのメモには、後は左手を使って念を込めるだけって書いてたよ。』

『左手ね。解ったわ。』

決意とすべき事が明確になった陸奥は長門と同じ冷静な表情浮かべたまま姉へと背を向けて、その向こうにある大和艦の右舷側竜骨へと近づいて行った。遅れじと長門もまた同じ様に陸奥に背を向け、正面にある大和艦の左舷側竜骨に向かって歩き始める。僅かな灯り以外は何も無い竜骨が走る空間、そこにある静寂は二人の革靴によって奏でられる足音と、二人の指先から流れ落ちる真っ赤な血の雫が鋼鉄の床にて砕け散る音によって遮られる。

やがてお互いが正対した竜骨に各々の左手を当てると、二人は頭のとっぺんからつま先に至る身体全体から淡く白い光りを放ち始め、僅かに背後へとお互いの顔を覗かせた。

『始めるよ。陸奥。』

『はい、姉さん。』

声を掛け合った二人はお互いの表情を確認する事無く再び顔を正面へと戻し、竜骨という名の壁に添えた左手の甲に右手を乗せて力を込め始めた。

刹那、それまで長門と陸奥の身体全体から放たれていた淡く白い光りは、その輝きを一層増すとそれぞれの左手へと流れを集中させて行き、さらにその左手を伝って壁一面へと拡散していった。普通の人間には決して目にする事の出来ない光りが全長263メートル

の鋼鉄の骨に散り、やがてその輝きは竜骨と繋がる隔壁や艦底へと巡り、またしてもそれらと繋がった物へと伝染していく。

扉船が海上へと退避して大海原へと繋がった造船船渠より、5隻の曳船に引つ張られて艦尾から海上へとその身を移していく大和艦。軍楽隊の演奏は曳船の単調な排気音が行い、それを見守る人々の歓声と拍手は艦体の水線付近より発せられる波音に代わられている。最上甲板にて進水の様子を見守る数える程の検査官の姿だけがそこに人の気配を与える中、彼等が足を着けている大和艦の艦体は彼等には見る事のできない白い光りで眩いばかりに輝いていた。

『ぐっ・・・！』

しかし大和艦の深淵にて艦体を白い光りで包んでいる長門は、その美しい輝きからは想像もつかない程の苦痛と戦っていた。その身体から白い光りを注ぎ込んでいる彼女の左手には、これまでの生涯の中でも味わった事の無い激痛が踊っているのだ。

指先ではまるで爪の間に針を刺す様に、数ある指の関節の全てはまるで普段曲げているのとは逆の方向に力任せに曲げる様に、手のひらはまるで大きなハンマーで何度も叩かれている様。

強く噛んだ歯を唇の隙間から覗かせ、苦痛に大きく歪んだ表情を浮かべる長門。しかし彼女はその苦痛から解放される事は望まず、重い物を動かすかの如く左手を竜骨へと押し当てる。そしてそれは陸奥もまた同じであった。

『陸奥・・・ッ！は、離すなよ！』

『わ、解ってる！！かあっ・・・！！』

二人は声を掛け合うと各々の身体にさらに力を込める。堰を切ら

れて抑制されていた濁流を一挙に解放する氾濫した川の如く、二人の身体からは白い光りが輝きと流れの速さを増して大和艦へと注ぎ込まれていった。その強大な竜骨は勿論の事、長門と陸奥の手から流れ出る光りは彼女達の頭上に位置するいくつもの缶、艦内を縦横無尽に巡っている各種配管、ネジの一本に至るまで輝かせて行く。だがまだ二人の手からは激痛が退かず、その身体から流れ出る光りの海流も留まる気配すら見せない。

艦魂にとっては体力と引き換えである白い光りを伴ったその行為は、当然の様に二人の体力を激しく消耗させていた。もはや力を込めるどころか膝がガクガクと震え始めた長門は立つことすらも苦しみと化しており、手を竜骨から離す事は無いまでもついに片方の膝を床に着いてしまう。その行為を行った時に置いていた手は長門の膝が崩れると同時に下方へと流れ、そこには彼女の親指から溢れる血で持つて描かれた不規則な太さの線が姿を現す。

『ま、まだ、なのっ・・・！？』

片目を閉じて顔をしかめる長門は思わず呟く。その背後では陸奥もまた膝を着き、正対した竜骨に自身の血で描かれた線を作っていた。

しかしその時、ふと長門はその耳に微かな声を認めた。しかもその声は自身の物でもなければ、その場を供にしている陸奥の声でもない。明らかに第三者の声であるが、それはこの大和艦の艦魂の声でもない。長門は瞬時に察する。なぜならその声は、彼女が最も敬愛する先輩の声であったからだだった。

名を呼ぶのよ、長門。

『あ、あ・・・さひ、さん・・・?』

名を呼んであげなさい。今の貴方と同じ様にして、かつて私が貴方と呼んだように。

その船の名は、なんというの?

『船の、名・・・?やま・・・と・・・?』

そう長門が呟いた刹那、長門と陸奥の身体を巡っていた光りは突如として砕け散り、造船船渠から海上へと完全に姿を表した大和艦の艦体からも輝きは消え、水線にて砕ける波飛沫の様に粉となって失せていった。

『お、終わった、の・・・?』

いきなりそれまで続いていた光が消え失せ、あれほど顔を歪めていた苦痛も長門の身体からは嘘の様に消え去っていた。もっともすぐに身体中から湧き上がる猛烈な倦怠感に襲われ始める彼女は、それが嘘だったと判断する事はない。再びその場に静寂という名の平穏がたちこめる中、長門は恐る恐る壁に張り付けていた自身の手を離してみる。そして手のひらを顔に向けてみると、短刀で切りつけた左手の親指からは既に血が滴る事は無かった。薄っすらと真横に走る傷が残るのみである。

その内に長門はそこに何の変化も無い事に気付いて、視界を正面の壁から左右に流してみる。しかしやはり彼女の瞳はこれといった変化を見つける事は無く、長門は自身が行った行為の記憶を辿ってみる事にした。すると長門はその場を同じくしていた筈の妹の事を

思い出し、彼女がいたであろう背後へと視線を流す。

『陸奥・・・！あ、あれ・・・？』

『姉さん・・・！え・・・？』

二人はお互いに放心状態であったが全く同じタイミングで声を放って振り返り、すぐにお互いの安否を確かめる事が出来た。だが長門と陸奥はその事に関して特別な感情を抱く事は無い。なぜなら二人が振り返った先、すなわち長門と陸奥の間に位置する床の上には、これまで見た事も無い人物が仰向けで横たわっているからだった。

掛ける声も失って長門と陸奥はその人物へと近寄っていく。

長門と同じ様な黒くお尻をも超える程の長さの髪を持ち、一切の身に纏う物を持たずにその場に姿をあらしたその人物。服を着ていない事からあらわになるその身体つきは、胸と腰の辺りにある流線を見る限り女性であり、顔には長いまつ毛と目立つ凹凸が全く無い綺麗な顔立ちがある。弱冠大人びた顔つきではあるものの、歳の頃は人間で言えば16歳か17歳くらいの少女で、それはまるで等身大の人形の様であった。

『この子が・・・。』

彼女の顔を覗きこんだ陸奥がそう言った刹那、それまで閉じられていた少女の瞳が何の前触れも無く開かれた。突然の事に陸奥はビツクリして尻餅をつくようにして後ろへと仰け反り、長門もまた驚きを隠せずに肩を大きく一度だけ震わせる。だがその少女は瞳を空けて数回の瞬きをするや、上半身をゆっくり起して両脇にいる長門と陸奥へと澄んだ瞳を向ける。少女はその瞳に二人を映しても表情を変える事は一切無く、しばらくすると声を失う両脇の二人に向けて口を開いた。

『……長門さんと陸奥さん、……ですね？』

鈴を転がしたように高めで、その瞳をそのまま音にしたような澄んだ声を放つ少女は、言い終えると自身の右側にて仰け反ったままの陸奥へと視線を流す。陸奥は少女の視線にまたもや驚いてしまうが、その正体はなんとなく察する事が出来ていた。故にすぐに引きつる頬をなんとか緩ませ、笑みを浮かべて少女へと声を返す。

『う、うん。そうだよ……。』

陸奥の声を受けた少女は律儀にも小さく会釈をすると、今度は自身の左側にて呆けた表情を浮かべる長門へと顔を向けて声を放つ。だが長門は少女に対して予想外の声を返し、慌てて陸奥がそれを戒める。状況を考えればこの少女が何者であるかは長門や陸奥でなくとも解るのだが、朝から張りっぱなしであった緊張の糸が完全に切れてしまった長門はすっかりいつもの彼女に戻っていた。

『では、貴方が長門さんですね？』

『ち、違いますう……。』

『……。え？』

『ね、姉さん！何言ってるのよ！』

お叱りを受ける長門は、それまで眼前の少女に張り付けていた視線をその向こうにいる妹へと流す。見慣れた陸奥の顔はざわついて長門の心を彼女の意識とは関係なく鎮めていき、やっとの事で長門は冷静さを取り戻す。いきなり新たな仲間の言葉を否定してしまった自分を恥じ、長門は後頭部を荒く掻きながら苦笑を浮かべて声を返してやった。

『やゝ、あはは……。ご、ごめんね。アタシが長門だよ。』

いつもの様に眉を吊り上げる陸奥の視線と、無表情のままで不思議そうにする少女の視線を集める長門。初対面なのに印象を悪くしてしまった事を心配する彼女は、ふと少女の身なりに気付いて自身の上着を脱ぎ始める。夏真っ盛りの時期に鉄の塊の中にいるのだから寒さという物への配慮は無いが、美しい少女が布切れ一枚も身に付けずにあられの無い姿でいるのは長門の目には可哀想に写る。故に長門は袖から腕を引っこ抜いて上着を脱ぐや、すぐさまそれを少女の肩から羽織らせてあげた。

すると少女は俯いて身の丈に合わないブカブカの上着にちよつと戸惑うようにして視線を流すが、すぐにまた長門の顔へと瞳を向けて小さい会釈をお礼と言わんばかりに返す。やがて両脇に寄り添ってそれぞれの肩に手を乗せてくれた長門と陸奥を認めるや、少女は伸ばしていた両の脚を綺麗に折り畳んで正座し、膝の前に両手の指先を揃えて深々とお辞儀しながら自らの名をゆっくりとした口調で名乗るのだった。

『お初にお目にかかります。そして血を流して取り上げて頂き、有難う御座います。大和艦の艦魂の大和で御座います。不束者では御座いますが、末永く宜しくお願い致します。』

20代後半で身体つきや顔つきも大人びている長門と陸奥に比べば幼さが目立つ外見を持つ大和だが、その言葉遣いと声は落ち着きと礼儀正しさを極めた物であり、先程まで自分を見て動揺を隠せていなかった二人をどこか小馬鹿にしている様でさえある。

しかし生まれてから20年程にもなるのに何時まで経っても子供じみた発想をする実の姉を知る陸奥は、そんな大和の声と姿に手の掛からない性格を読み取って好感を持った。栄えある陛下の御船たるに相応しい厳かさと美しさが、大和のそれには溢れ出す様に籠っ

ていたからだ。

『そう、大和ね。私は陸奥。同じ帝国海軍の戦艦として、これからよろしくお願いします。』

元来、生真面目で礼儀正しい陸奥には、大和の大人びた言動がたまらないくらい素晴らしい物に思える。まるで大和の真似をするかのようにして深々と正座でのお辞儀を伴ってそう言ったのも、陸奥にとっては違和感など微塵も感じない当然の行動なのであった。

『あ、あはは……。お、お利口だなあ……。』

しかしそんな二人の、特に大和のそんな言動は、長門にはちよつと残念な思いを溢れさせてしまう。なぜなら元来の長門にとっては、真面目とか几帳面という言葉があんまり好きではなかったからだ。羽織るように軍装を着たりお仕事をサボって自分の分身から脱走するという、長門のだらしない日常の根幹にある物でもある。

そして長門はこの時、この新たな仲間に関する事を全て陸奥に一任しよう判断する。

というのも、この大和という少女は自身の分身が艤装を終えるまでに、将来の連合艦隊旗艦として、戦艦の艦魂として、帝国海軍の者として、そこに必要な叡智を養わねばならないからである。取り上げの行為を行う前に長門が陸奥に対して放った言葉の真相であり、そもそもそれが目的で二人は大和が自然と実体を伴うまでの時を待とうとはしなかったのだ。

だがしかし、こうして二人の前に姿を現した大和は長門がこの世で最も嫌いな礼儀作法の教科書をそのまま形にしたような少女であり、艦魂社会における師匠の役割を持つ者が唯一人である事を考えた長門の脳裏には、この少女の師匠たる者にはなりたくないという

本音が過ぎるのだった。

『長門さん、これから宜しくお願い致します。』

『え……。あ、は、はいはい……。ども……。』

身体の向きを変えて今度は長門へと頭を下げる大和に、長門はちよつと歪んだ笑みを浮かべて当たり障りの無い声を返す。ところがふと大和は何を思ったか膝の前にて床に添えてた両手を伸ばし、おもむろに宙に漂わせていた長門の左手を握ってきた。まだちよつと温もりが薄い大和の手の心地を認めた長門は、どうしたんだろうと思つて黒く長い髪で包まれる大和の頭へと視線を流す。すると大和は折り曲げていた腰を戻しつつ声を放ち、長門が描いていた大和の教育計画を早くも打ち砕くのだった。

『艤装が終わるまでの間、ご教授の程を宜しくお願い致します。』

顔に出さないまでも頭を捻っていた教育計画をご破算とされ、しかもご指名で大和に師匠たる者になってくれと請われた長門は仰天する。

『えっ……。！ちよ、待った！む、陸奥の方が良いよ、ね？ほらあ、頭も良いし、アタシより美人だし……。』

『名を呼んで頂きました。長門さんこそ、師として仰ぐべきお方と心得ております。』

背後にて『そっか、姉さんに教えを請うのね。』と残念そうに苦笑いを浮かべている陸奥を従え、大和は長門の目に澄んだ瞳をじつと向けてくる。突然にして想定外の出来事に驚きを隠せない長門は額に汗を浮かべて返す言葉を模索するが、その内にふと自身のポツ

ケからはみ出している紙切れに気付く。自身が同じく師として崇めた人物がくれたその紙切れを目にした瞬間、長門の頭の中では大和の言葉と紙を授けてくれた人物の言葉が線として結ばれた。彼女の予想通り、実は長門の師である人物は大和の教育係とすべく、長門にその紙切れと言葉を与えたのであった。

『あ、朝日さん……。』

涙目になって呻き声のような声でそう言った長門の手を、大和は不思議そうにして首を捻りながらも握ったまま離さない。これから始まる礼儀正しい大和との日常と、そこにあるであろう長門が嫌いな物による苦勞。それを心の底から憂慮する長門は新たな仲間である大和に冷や汗を伴った笑みを返しつつも、その胸の中では今にも泣き出しそうな自分を必死に慰める。

昭和15年8月8日。

こうして長門のメンドイ日々は幕を開けるのだった。

第五六話 「嬉しい通達」

昭和15年8月15日。

朝を迎えたばかりの横須賀海軍工廠は課業始めの号令がかかった直後であり、本日も蟬達が連呼する万歳に負けず劣らずのけたたましい機械音を辺りに木霊させる。日が昇るまで振っていた雨も止んで8月の真っ只中にしては過ぎしやすい気温であったが、横須賀の空からはどんよりとした色合いの雨雲が消えておらず、昼を過ぎる頃になるとその日は蒸し風呂の様になる事を空から読み取る人は多い。

しかし工廠の沖合いで錨を下ろす神通艦じんつうの艦上にいる明石あかしと神通は、そんな空を煩わしく感じる事も忘れて南の洋上に向けて手を振っていた。まるで千切れんばかりに両腕を大きく左右させる明石の横で、神通はいつもの尖がった目に僅かに緩んだ口元で表情を作り、明石と比べると控えめに肩の高さで小さく右手を振る。そんな二人が顔を向ける南の洋上には、いよいよ海軍所属の艦艇として初めての任地へと旅立とうとする宗谷艦そうやの姿があった。

『宗谷——！』

大きな声で彼女の名を呼んだ明石の瞳には、颯爽と東京湾の風に靡く軍艦旗を艦尾に従えた宗谷艦と、その軍艦旗の下で手を振って明石の声に応えてくれる宗谷の姿が映る。

宗谷の手の動きには弱々しさなど微塵も無く、彼女の背後にある煙突から巻き上がるわだつみの龍と一緒にになってその健康さを明石へと伝える。もちろん軍医としてその経過を見守ってきた明石も既に宗谷の身体に対しては心配などしておらず、元気に白波を掻き分

けて行く宗谷の旅立ちを心から祝福していた。

『頑張つて~~~~!!』

マストの辺りで囁くカモメ達を黙らせる程に明石は大きな声で叫び、その声はもちろん宗谷にもしっかり届いている。やがて宗谷は頭上にて振っていた右手を下ろすと、芯が通ったかのように身体を真っ直ぐに伸ばして右手の指先を額に添えてみせる。それは明石も神通も初めて目にした宗谷の敬礼であった。

『ふふふ。張り切ってるね、宗谷。』

『ふん。』

明石の笑みを伴った言葉にも神通は例に漏れずにいつもの口癖を返すのみであるが、その口元が先程よりも一層吊りあがっている事が彼女の心の内を表している。その内にふと神通は宗谷に笑みを向けたまま、おもむろに右腕の肘を指差してみせる。それはまだまだ海軍式の敬礼が身に付いていない宗谷という友人に向けた、神通なりのささやかな優しさと教えでもあった。宗谷もまた神通の仕草からすぐに彼女が言わんとしている事に気付き、肩の横に突き出していた右腕の肘を縦に傾けて再び敬礼する。すると宗谷は静かに別れの言葉を口にし、神通はまるでそれが聞えていたかのように声を放つのであった。

『行って参ります。有難う御座いました。』

『・・・じゃあな。』

神通と明石が微笑んで見守る向こう、遙かに続く大海原に宗谷艦の真新しい軍艦旗は霞んで行った。

暫くの間、二人は艦影が小さくなっていく友人の姿を眺めていたが、ふいに明石は溜め息を放つとお尻に手を当てて僅かに身を屈める。無事に患者を元気にして送り出せた彼女の身の上を考えるとちよつと疲労の色を覚えたのかとも思えるが、それは宗谷の治療に關して発生した疲労ではない。やがて神通が隣でお尻を擦る明石に氣付いて短い笑い声を放つと同時に、明石は先程までの笑みが嘘のように瞳を吊り上げて神通を睨む。すると神通はすぐさま明石の様子に心当たりを覚えるが、それに対して彼女に頭を下げようという氣は起きない。

『ふん。痛いかな?』

『あ、当たり前じゃない……。あたた……。』

つい昨日まで続いていた神通による明石の身体能力強化の特訓。それは神通が普段から部下達を鍛えている日常に明石が加わっただけの事なのであるが、今までそんなに体力勝負となるような事態を経験した事が無い明石にとってはまさに地獄の日々であった。しかも友人である事から神通は遠慮という言葉など微塵も脳裏に浮かべる事はなく、むしろここぞとばかりに面白がってベツチンベツチンと明石のお尻を竹刀で叩くというのだから、明石が腫れあがったお尻を擦るのも無理の無い事である。もちろん神通がただ自分を虐めようとしているつもりが無い事は明石も解っているから、ヒリヒリと痛むお尻の責任を真正面から彼女に求めようとは思わない。何より宗谷の治療が終わった今日という日に、その地獄の日々も終わりを迎えていたのだ。

『まあ、おかげでそこそこ体力はついたんだ。感謝して貰いたいくらいだなあ。』

『ど、どうもねっ!! あ、あいでえ〜・・・。』

神通を睨みながら荒っぽい言葉でお礼を口にする明石だったが、彼女はすぐさまお尻に走った激痛に顔を歪めて俯き、それを見た神通はどこか勝ち誇ったような声で笑い出す。明石はその笑い声を耳に響かせながら、痛みが消えるまでひたすらに自分のお尻を撫でるのだった。

ちなみにこの数日で受けた神通の愛の鞭により、明石のスリーサイズの一番下の数字は1センチ大きくなっていたりする。

『あ、戦隊長。明石さん。』

その時、ふと明石と神通に背後から声が掛けてられてきた。その声は二人にとっても聞き慣れた声で、特に神通にとっては毎日耳にしている物。故に彼女は背を向けたまま既にその主に見当をつけており、振り返りながらも彼女の名を含めて声を返す。

『どうした、霰^{あられ}。』

『お、霰え。』

おっかない顔つきで顔を向ける神通だが、その隣では対照的に持ち前の綺麗な笑みを浮かべて霰を迎えてくれる明石の顔がある。律儀で礼儀正しい霰はそんな明石の笑みに応えるようにして小さく会釈を返すと、すぐさま上司である神通に顔を戻して口を開いた。

『艦隊旗艦より、各戦隊長級の艦隊幹部に召集が掛かりはったぞす。^{たかお}高雄少将の元へ出向なさっておくれやす。』

『召集か。ん、解った。』

『なんだろう？』

明石も神通も突如としての召集が掛けられた理由は思いつかなかったが、行けば解ると考えた二人はすぐさま高雄艦に身体を向けて白い光りを放ち、伝達してくれた叢の苦勞を勞うように手を上げてやりながらその身を高雄艦へと移した。

第二艦隊に属する艦隊幹部級の艦魂達が打ち合わせの場として集う高雄艦の長官室。

常に清潔に保たれている真っ白なテーブルクロスや椅子のカバーに表情を明るくしつつ、集まった各戦隊の戦隊長達と明石は室内にて雑談しながら艦隊旗艦の愛宕あたごが来るのを待っている。非常食として積み込まれながらも大量に余剰品と化す乾パンを盛った大皿を机の中央に置き、各々がそれに手を伸ばして口に放りながら語り合うその光景は、緊急招集を受けた彼女達がそれほど緊張感を抱いていない事を示おり、そこに響く彼女達の明るく軽い感じがする声でのやりとりはそれを更に明確にする。明石とその両隣に腰を下ろした那珂なかや神通も口元を緩め、その空気を楽しむかの様にして時間を潰しているのであった。

そんな3人とは長机を挟んで向かい側に座る仲間内では、同じく明るい部屋の空気を楽しんでいる利根とねと五十鈴いすずの姿がある。しかし楽しんでいるのは五十鈴のみで、利根は艦隊の最年長者である先輩の意地悪に涙目になって声を上げているというのが実情だ。

『か、返してください、五十鈴大尉！』

『だまらっしゃいっと。おほっ、やっぱりオトコの写真だ！』

神通よりも2歳程年上である第三潜水戦隊旗艦の五十鈴は20代も後半に差し掛かった歳の頃の顔つきで、180センチにも迫るほどの大柄な身体つきと少し垂れた目尻が特徴の艦魂である。丸いおむすびの様な頬の輪郭に沿った短髪で、綺麗に尖がった顎がその整った顔立ちを一層引き立てる美人。しかしその経歴は百戦錬磨の神通すらも凌駕するほどの実戦経験を持っており、竣工から二週間で関東大震災における救難活動に従事した事を皮切りに主に支那沿岸での行動に活躍してきた帝国海軍きつてのつわものの一人である。特に華南や青島を任地とした行動はその艦生の大半を占めており、その時に造詣を深めた大陸やその沿岸の海域に関する知識は人間も顔負けする程。帝国海軍の艦魂社会においても指折りの”支那通”であった。

そしてその性格はとてもひょうきんで、階級が低い駆逐艦や敷設艦、特務艦の艦魂達からの信望も厚い。いつもムスツとしていて無愛想な後輩の神通とは仲が悪いが、明石や那珂とも気軽に話をしてくれる気さくな艦魂である。もっともその困った所に、今の様に後輩の色恋沙汰を面白がって冷やかすという癖があった。

『ほっほ。良いオトコ。』

『返してくださいっ!!』

『なぐにが返せだ、色気づきやがって。』

意地悪な五十鈴は利根が伸ばしてくる腕をかいぐりながら、写真を手にした腕を頭上に伸ばして皆に見せびらかす様にしてニヤニヤとしている。小柄な利根では五十鈴が椅子に腰掛けているにもかかわらず、その頭上にまるで旗竿の軍艦旗のように翻した写真を奪還する事が出来ない。虚しく宙を舞う利根の手を意にも返さず、五十鈴はわざとらしく大きな声で写真に写る士官服の男の事を尋ね始める。

『利根ちゃん、こらだあれ？』

『お願いです！か、返してください！！』

『あははは！教えてくれなきゃ返してあげない！』

今にも泣き出しそうな顔で必死に懇願する利根だが、五十鈴はそんな後輩の顔を見るのが面白くて面白くて仕方ない。もっともこの五十鈴はただの意地悪な女性ではなく、仲間内でも特にこの利根を可愛がっているからこのように接しているのである。次第にベソを掻き始めた利根の事はちよつと哀想に思いながらも、それを知っている第二艦隊の面々は『返してやりなよ。』と小さく呟くものの身体を張って止めるような事は無い。明石もまた世代も階級も近い利根の事を気の毒に思いながら、同時にかつてはこうして五十鈴に相手との仲を冷やかされた事を思い出して可笑しさを覚えてしまうのだった。

だがその時、意外な人物が五十鈴の背後に立った事に部屋にいた全員が笑い声押し殺す。突如として背後に感じた気配に五十鈴も気付いて振り返ろうとするが、その人物は五十鈴が顔を向けて来る前に彼女の手から写真を引き抜いた。

『ふん……。』

『……。』

『じ、神通中尉……。』

いつの間にか隣の席から立ち上がって机の向こうまで移動していた友人に明石が驚きの表情を浮かべる中、神通は無言で眉を細める五十鈴に持ち前の鋭い釣り目で睨み返すと、一度手にある写真に視線を落としてからそれを利根の手に渡してやった。

すっかり両目の縁からボロボロと涙を溢している利根は、お礼も

口に出来ずにそそくさと写真をポッケにしまいこむ。普段から口の利き方に関しては厳しい神通の前でのそれは、いつもならげんこつを伴ったお叱りの恰好の口実とされる。しかし、神通はその事で利根を咎める事は無かった。軽く利根の肩に手を乗せると、二人の横で鋭い眼光を放っている五十鈴を無視するかのようにして自らの席へと向かおうとする。

『・・・たく。つまんない奴って嫌だわなあ。』

背後から響いてきた好きになれない先輩の声を受け、神通は歩みを止める。もはやこういう姉の様子に慣れている那珂が気付かれなように椅子から腰を上げて姉の傍へと近づいていく最中、神通は何の遠慮もなく五十鈴に鋭い眼光を投げつけて口を開く。

『文句があるならかかってこい、ババア。』

他人に対しては口の利き方を説く神通は自身のそれを直そうとしない。五十鈴の意地悪の度が多少酷い事も問題だが、神通の齒に衣着せぬ物言いも問題である。既に那珂によって袖を掴まれている神通が握り拳を作って構える前で、五十鈴は背後に近づきつつある隣の席に座っていた五戦隊の那智なちを従えて椅子を蹴り飛ばしながら立ち上がる。当然彼女の顔には眉を吊り上げた鬼の形相があった。

『なにい！！このガキ、もう一度言ってみろ！！』

『おう、何遍でも言ってる。かかってこい、ババア。』

火に油という言葉を知っていながらも、持ち前の度胸の良さから大尉の襟章を身に付けている五十鈴に対してすら暴言を吐く神通。すぐさま彼女の肩口から手を滑り込ませて行動の自由を奪う那珂だが、今の神通はそんな妹の気心などただの一瞬も脳裏に過ぎらせる

事は無い。そしてそれは那智によって羽交い絞めにされながらも飛び掛かろうとする五十鈴もまた同様である。

普段から自分を敬う事も無く、艦内の通路ですれ違ってても挨拶もしない。小馬鹿にしたような態度で睨みつけるような視線を持つ神通という後輩が、五十鈴は昔から大嫌いなのであった。

『おい！何してる！』

険悪な空気と二人の荒くなり始める息遣いが支配していた室内に、ようやく会議の場へと姿を現した愛宕を従える高雄の声が響く。神通や五十鈴から見れば年下である愛宕と高雄だが、第二艦隊の旗艦を竣工時から約束されている二人の声と視線には司令官としての威厳が満ち満ちており、神通と五十鈴はお互いに舌打ちをしながら自らの席へと戻っていく。同じ5500トン型とされる艦の艦魂同士であるにも関わらず仲が悪い。それがこの第二艦隊の神通と五十鈴の長く続く関係であり、決して仲良しこよしではない帝国海軍艦魂社会における実情の一端であった。

やがて席を立っていた者達がそれぞれの椅子の前に戻るや、長机の端っこにて踵を揃えた摩耶^{まや}の声が響き、緊急の戦隊長会議が始まりを告げる。

『艦隊旗艦に敬礼。』

緊急の会議であるにも関わらず愛宕の表情に陰しさが無い事に、

明石を含めた艦魂達は議題とされる事案がそれほど深刻ではない事をすぐに察していた。そして愛宕は挨拶もそこそこにすぐさまその議題を口にし、耳にしていた者達は一様に驚きの声を上げる。どうやらそれは同じ高雄型の巡洋艦として常に落ち着いた雰囲気纏っている摩耶にとっても例外ではなかったらしく、首の後ろから左肩を通して胸の前へと流した自身の長い髪を撫でながら愛宕が放った言葉を聞き返す。

『紀元2600年記念、特別観艦式・・・？』

『うん。日時は10月11日。場所は7年前の大演習観艦式と同じ、横浜沖だそうだ。』

愛宕が口にしたそれは帝国海軍において3年おきに実施される、所属艦艇と乗組員による一大祭典「観艦式」であった。

人里離れた山奥の演習場や刈入れの終わった田圃で実施する陸軍の演習と同じく、帝国海軍の演習は一般の貨客船の運航に支障が出ないように沿岸を離れた遙か沖合いで行われる。当然それを目にする事が出来る一般人というのは殆どいないのだが、海軍では演習が終わると集結と出発の地である港湾に戻って観艦式を行うのが恒例であった。特に帝国海軍の観艦式は「移動式観艦式」という世界的にも珍しい形態の観艦式で、海上で隊列を組みながら速度差がまるつきり違う航空隊とも連動して行うという事から大変に高い錬度が求められる物なのである。また、思い通りの航跡を描く事が出来る操艦技術は勿論、戦隊や駆逐隊単位での纏まった運動に重要な現場指揮官達の指揮統率能力、独立した艦隊同士の日程から使用する港湾と付近の民間船舶の航行にまで及ぶ組織と組織の間における調整能力、航空隊との連携を図る為の通信技術など、求められるのはただの船の集団としての精強さではなく、海軍という一つの組織としての極めて高い次元で確立された総合力。それは決して5年や10

年で身に付けられる物では無く、日清戦争以来培ってきた伝統と実力を代々受け継ぐ帝国海軍だからこそ実現できる物なのだ。

そしてそんな栄えある帝国海軍の観艦式は拝謁艦の役割を担う艦艇に民間人を乗せて臨席させ、なんと天皇陛下までもご出席なされて行いう盛大な海軍のお祭り。例えその姿が人間達の目に留まることが無くとも、参加する艦艇の艦魂達にとっては首を長くして待っていた”晴れの日”なのであった。

故にどよめきと、先程までの陰悪な空気が嘘であったかの様な明るさが室内に充満するのも無理の無い事であった。

まだ一度も観艦式に参加したことも無ければそれを見た事すらも無い明石は、すぐさま隣にいる神通の袖を引っ張ってその詳細を知ろうとする。ひそひそと声を放つ割に興味を持つとついつい身体に力が入ってしまう明石は神通の身体が揺れてしまう程に袖を引っ張るが、神通はそれに対して眉を吊り上げる様な様子は見せずに小さな声で答えてやる。

『神通、神通。』

『ん、なんだ？』

『前の観艦式って何時だったの？出た事あるの？』

『前の観艦式か？前のは4年前の今頃に大阪湾でやったな。もちろん私も出たぞ。前のは例年に比べると随分と規模が小さな観艦式だったけど、まあそれでも参加艦艇は100隻もいたからな。中々に気持ち良かったぞ。』

『おお〜。』

目を爛々と輝かせて音を鳴らさないように手を叩きながら喜ぶ明石。湧き上がる好奇心の果てに目に浮かんだ勇壮な光景は、満艦飾を施した自身の分身の色鮮やかな姿。神通によると昼は満艦飾で彩った後、夜になると今度は電飾を施して夜空にも負けぬ姿で栈橋に

停泊できるのだという。普段からねずみ色の軍艦色のみしか身に纏っていない帝国海軍艦艇の端くれである明石にとって、その光景は待ちに待った自身の綺麗な姿を存分にお披露目できる事を示していた。

しかし明るい部下達に笑みを溢しながらも、ふと愛宕はその声にどこか寂しさを混ぜて口を開く。即座にその変化を感じ取った摩耶と高雄だが、その理由を知っている事から特に動揺する事無く声を返した。

『四戦隊からは高雄が先導艦として参加する。』

『私は時期的にちょうど整備入渠、残念です。でも愛宕姉さん不参加なんて・・・』

『愛宕だって私と同じ様に改装は終わってるのにね。』

『まあ、仕方が無いよ。人間達が決める事だ。』

二人のやりとりで長机の両脇に並んだ者達はそれまで発していた明るい声を押し殺し、明石もまたその表情から一瞬にして笑みを消している。

実は愛宕の言葉が示している通り、海軍最大の催し物である観艦式には海軍艦艇の全てが参加できる訳ではない。各艦隊、戦隊から選りすぐりの艦艇が人間達の基準によって選出されるのであり、そこには艦の命たる彼女達が意見できる場など無いのである。大抵は最新鋭の艦艇は優先して参加資格を得る事が出来るのだが、普段のお勤めの成績から古参の艦艇にも参加資格が与えられる場合がある。

明石も首を捻ってその事を考えていた中、長机の上座に程近い位置の席に腰掛けている那智が手を上げて愛宕に問いかける。ちょっとしたかすれた感じの声で那智が放った言葉とそれに返される愛宕の答えは、明石が首を捻っている事に対する例を示してくれるのだった。

『艦隊旗艦、既に決定済みの参加部隊や艦艇はあるのですか？』

『ああ。第二艦隊からは八戦隊と七戦隊の参加が決定してるよ。』

愛宕の声が響くや、長机の端っこにてちよこんと座っている利根が妹の筑摩ちくまと手を取り合って喜びの声を上げる。明石と同じ世代の二人は帝国海軍の中でも新顔で、仲間内での扱いはまだまだ小さい。八戦隊の戦隊長という肩書きを拝しながらも、先程の様に先輩による意地悪の餌食とされるのは日常茶飯事である。だがそんな中でも人伝に耳にしてきた観艦式への参加決定は、二人の身体の奥底から無常の喜びを沸きあがらせるのには十分。何よりこれまで彼女達は最新型巡洋艦という事で一般公開もまだされた事が無く、正式に海軍より国民へとお披露目されるのはこの度の観艦式が初めてなのだ。そしてそれは最上型もがみ二等巡洋艦で編成される七戦隊の面子にとっても同じ事であり、最上とその妹達はそれぞれの肩や腕に手を触れ合って小さな声で喜びを分かち合っていた。

『あとは恐らく二航戦も参加になると思う。』

そう言った愛宕は摩耶の隣に腰掛けている飛龍ひりゅうに顔を向ける。

『飛龍、初めてのお披露目だよ。体調を崩さないように。』

明石や利根と同じ年代であるにも関わらず口数の少ない性格の飛龍は、伏せ目がちにして愛宕の言葉に小さく会釈を返す。その静けさは部屋の中でも少し浮いた感じさえ漂わせており、愛宕はほんの僅かに笑みを歪ませながら頷いてやる。

だがその時、愛宕は自身の放った言葉によって、もう一人の観艦式参加決定者がこの場にいる事を思い出した。ハツとしながらもその事を伝える事によってその人物がどんな表情を浮かべるかを容易に想像できた愛宕はすぐさま笑みから歪みを直し、飛龍から右へと視線を流していく。何人かの仲間達の顔を通り過ぎたそこに彼女を

見つけ、ちょうど視線が合った事から愛宕は明るい声でその事を伝えてやる。

『明石。君も参加決定。』

突然の嬉しい知らせを耳にした明石は、椅子を後ろに倒しながら立ち上がる。その顔に大きく瞳を輝かせる明石の表情は予想通りで、愛宕はまるで明石とその喜びを分かち合うかのようにして自身もまた広い歯を覗かせる。

『拝謁艦にも選ばれてるから、なるべく艦体は綺麗にしておくといいよ。』

『はいえつかん・・・？』

笑みを維持しながらも愛宕の口にした言葉がよく解らない明石はそう呟くと、すぐに隣にて椅子に座っている神通の袖に手を伸ばしてその事を尋ね始める。愛宕と同じく、友人として明石のお披露目を心から祝福しようとする神通は、明石の問いかけにすぐに察しをつけてその解答を与えてやる。

『神通、神通・・・』

『拝謁艦ってのは、観艦式を見学する民間の人達を乗せて参加する艦艇の事だ。大体は特務艦艇がその役に当てられてるから、私も今までにやった事はない。でも御召艦による御親閲が終わった後は同じ経路を辿って、乗艦した民間の見学者に参列艦隊を閲覧させてやるとても重要な役だぞ。』

『おおお！』

帝国海軍艦艇として生を受けた明石にとっては満艦飾を施せるだけでも嬉しいのに、なんと今度の観艦式においては全国から帝国海

軍の勇士をその目に焼き付けようと集う国民をその身に宿せるのだという。自身も含めて普段から黒か白の服装を身に付けている者しか間近で見た事が無い明石は、これまで遠めにしか見て来れなかった国民を初めて目にする事が出来ると知って有頂天となる。無駄を一切排除した窮屈な戦闘艦ではなく、いつもは脇役である特務艦でしか出来ない役割。それはこれまで演習でもお仕事でも常に黒子役として第二艦隊で励んできた明石にとっては、多くの人々の目に映る事が出来る一生に一度の機会。まさに晴れ舞台なのである。

既に彼女の心は自身の分身のマストのてっぺんよりも高い位置にあり、隣でちよつと嫌味に拝謁艦としての助言をしてくれる友人の声にも怒る事無く、その気持ちを新たにする。

『乗るのは海軍の事を何も知らない民間の人達だ。艦が汚いと帝国海軍の名に泥を塗る事になる。今の内から掃除はしっかりとやっておけよ?』

『あつたり前! いよいよ、頑張るぞ〜!』

第二艦隊は3日後に館山沖へと一旦泊地を変更した後に、横浜沖へと移動。そこで休養と補給を済ませた後、8月25日には同地を抜錨。東京湾の波と風に帽を振り、函館方面巡航となった。

冬だった事はあるものの、以前に明石はこの北の海を訪れた際に寒さという強敵にコテンパンに叩きのめされていたが、栄えある帝国海軍の観艦式に心踊る明石はその記憶を笑い飛ばし、雑巾とモップを片手に自分の分身をせっせと磨きながら一層お仕事に励むのであった。

第五七話 「Shanghai classic」

昭和15年8月29日。

世界でも有数の国際港にしてシンガポールとならぶ東洋の秘宝、
上海市。
シャンハイ

1842年のアヘン戦争にて条約港として開港されて以来、西洋列強の思惑と資本が湯水の如く投入されたこの地は、1865年に香港に本社を構える銀行が支店を出している事もあり、極東最大の金融と貿易の都市として栄華を極めてきた地だ。イギリス資本の流れを汲む上海の金融界はすぐさまアメリカ資本を対抗馬として呼び寄せ、明治新政府の元に近代国家としての発展が著しかった日本もまた、1871年には香港と上海に敷設された海底通信ケーブルを長崎に延伸させて国際金融界の舞台に参加している。また、「東洋のパリ」の異名をとる上海市は西洋風の建物が各国租界の外にまで及び、舗装された道路を走る自動車はもちろん、夜はナイトクラブやネオンの光りが街に眠りにつく事を許さない。経済、金融、貿易、商業、社交、そのいずれの面でも東京を遥かに凌ぐ、近代的な人間の息吹が絶えない大都市であった。

しかしそんな中、満州事変を契機として日本と支那の中華民國とは関係が日増しに悪化し、1932年には租界における軍事衝突が発生。租界地の居留民保護を名目とした日本は発端となる日本人僧侶殺害事件の前から既に海軍の部隊を派遣しており、さらには陸軍の部隊も派遣。それに伴って中華民国側も国民党軍を上海へと出動させ、両軍による激烈な市街戦が繰り広げられた。戦車すらも備えた近代的な装備を誇る日本側もクリークが多い上海の地形には前進を度々阻害され、しかも国民党軍の狙撃兵による被害は皇軍の作戦遂行能力を効果的に削いで行くのであった。もつとも一部とは言え

火繩銃のような旧式装備をも担ぎ出す程だった国民党軍もまた損害は甚だしく、日本側が陸軍による上海派遣軍を編成して投入すると戦線をジリジリと後退させ、銃声と悲鳴が鳴り響いていた上海の街並みは一ヶ月ほどで元の平穏を取り戻した。しかしこの一連の出来事を租界から間近で目にしていた諸外国は自国の上海における権益の観点から日本をみつめる眼差しを冷ややかな物とし、その胸の奥には強い警戒の念を抱いて支那に対する日本の影響力の肥大化を抑えようという認識をそれぞれが持つのであった。

そして当の日本は、諸外国の態度が意外にも軟らかい物であった事と、まだまだ建国したばかりで一枚岩として纏まっていけない中国の内情から支那への侵出を更に顕著にしていき、1937年の支那事変勃発に際しては二度目となる上海での軍事衝突が発生。日本は海外権益への配慮をしつつも中国側との戦闘は優勢に展開し、その軍靴を沿岸から大陸の奥地へと進めて行った。

戦闘その物は前回の軍事衝突と同じく熾烈を極めたが、戦線が街並みから遠ざかると上海の町はいつもの賑やかさと近代的な人間達の息吹をすぐに取り戻す。港で荷を担ぐ支那人達の横では綺麗な服を身に纏った西洋人が談笑し、街中では軍服姿のいかつい日本人の男達と入れ替わりに着物を纏った日本人女性が歩く姿もちらほらと見られるようになる。

立ち込めていた硝煙と血の匂いは海から吹く風によって既に拭い去られ、そこに漂うのは芳しい花の香り。西洋風の建物の群れが一同に顔を向ける海上には各国の国旗を翻した船達が所狭しとその身を浮かべ、絢爛な街並みと供に色鮮やかな景色を波間に映すという昭和15年8月の上海。

そんな上海港の一角には、高々と軍艦旗を翻した朝日艦あさひが錨を下ろしていた。

明石艦あかしと同じ工作艦である朝日艦からは今日もまた工作機械の唸り声が放たれており、甲板ではそれに負けじと真っ白な軍装の乗組員達が物資の搬送搬入作業に汗を流している。後部主砲塔を撤去している事から広くなっている艦尾甲板には、彼等の額から流れ落ちる汗が輝きをそのままに滲んでいく。そしてその甲板の真下に位置する朝日艦の長官室では、銀縁のメガネを掛けた朝日が机に向かって鉛筆を走らせていた。

分厚い書類の束の1ページにその青い瞳を向ける朝日は、書かれている内容を一読して頷くと慣れた手つきで書面の下の欄にサインを記す。英国生まれの彼女は誕生してすぐに日本へとやってきた為に、書面に記した漢字はそこらの日本人の若者が書くそれに比べると遥かに綺麗に書かれている。もっともそんな事が既に当たり前となっている朝日は自身の字の美しさなど気にも留めず、小さく肩を上下させて呼吸を整えたとすぐさま次のページをめくって再びその書面へと青い瞳を向けた。

明石はこのように書類と格闘するようなお仕事など滅多にやらないが、上海方面根拠地隊の旗艦である朝日はその限りではない。なぜなら彼女が旗艦として束ねている根拠地隊の隷下には、世界でも屈指の大きさを持つ上海港の帝国海軍艦艇を管理する上海港務部が置かれているからである。その事から朝日は港内のどこでどの艦がどんな状態にあるかを艦魂におけるお仕事としてしっかり把握していなければならない。こうして各艦艇から上げられる報告書を毎日目に入れるなければならないのだ。軍医として仲間の健康状態を管理する事は元より、一端の指揮官としてのお仕事もこなさねばならない朝日の身の上は、教え子である明石や長門ながとよりも更に大変である。

しかし既にこのような毎日にも慣れている朝日は、疲労感を覚え
てもそれに対する嫌悪感を胸に抱く事は無い。そしてこの時、彼女
を癒すような部下達の息遣いが、朝日の居る部屋には静かに木霊し
ていた。

鉛筆を握った手を肩に乗せて僅かに首を回す朝日の琥珀色の髪に
隠れた耳には、天井に当たる艦尾甲板の上から部下達の元気な歌声
が響いてくる。それは人間達と同じ軍歌演習と呼ばれる訓練に励む
物で、歌声の伴奏として彼女達が足踏みする音が伴われていた。

『ふふふ・・・。』

天井に視線を投げて口元を緩ませる朝日はやがて手に握っていた
鉛筆を机に置き、背もたれに身体を預けながらその歌声に耳を澄ま
す。部下の第一掃海隊の艦魂達による明るい歌声はいつもの事だが、
朝日の耳に響いてくる歌は軍歌演習の際に歌う海軍の歌ではない。

『『くくくを出てから幾月ぞくく！とくくもに死ぬ気でこの馬とくく！』』

響いてくる歌声は掃海隊の4名の隊員の物よりも更に多いが、朝
日はその事に驚く事は無い。内地を遠く離れた上海にあっては規則
でガチガチに縛られた日常を送る事は無く、まして上海という国際
港にはたくさんの船達がいる。当然そこには海軍と共に皇軍を成す
陸軍に籍を置いた船もいて、第一掃海隊の部下達は陸軍の輸送船の
艦魂達と親交を深める事が間々あった。もちろんお仕事をごさな
ければならない昼間に遊ぶような事は出来ないが、軍歌演習の時は
こうして一緒の時間を過ごしているのである。まさにいま歌ってい
る歌が、そんな上海における艦魂事情をよく表していた。その歌は
最近になって陸軍が作った物で「愛馬進軍歌」という。内地での帝
国海軍の日常では、歌うどころか聞く事すらも無い陸軍の歌。それ

は帝国海軍艦魂社会の一員である掃海隊の者達にとって、これ以上無いくらいに新鮮な物であった。

そして朝日もまた、陸軍の物だからといってその事を止めさせようという気はさらさら無い。むしろ彼女はこの歌に、兵だけでなく馬に対しても感謝や愛情を示すという日本人らしい価値観の様な物を感じてならず、無意識に歌声に合わせてゆっくりと身体を揺らしているのだった。

『『うゝまよぐつすり眠れたかゝ！明日のゝ戦は手強いぞゝ！』』

顔見知りである陸軍の輸送船の艦魂達の声も混じった歌と、彼女達の足踏み。それは朝日のいる部屋の空気を乱す事無く、まるでスタンウオークへと続くドアから室内を通り抜けていく風が奏でているようだった。

するとそんな部屋の中には通路へと通じるドアから甲高いノックの音に続き、部屋の主である朝日とは旧知の間柄である者の声が響いてくる。帝国海軍に嫁いで41年の朝日は、その海軍生活においてずっと供に励んできた彼女の低くトーンの聞いた声を聞き間違える事は無い。すぐさまそれに応えて彼女を室内へと招き入れた。

『朝日ゝ、いるかい？』

『ああ、出雲^{いずも}。入って。』

朝日の声が静まる前に部屋のドアは開かれ、その向こうからは朝日と同じく白い第二種軍装を身に纏った女性が部屋へと足を進めてくる。ちよつと艶の滲みかけた黒髪を前髪も含めて全て後ろに流し、

肩を超えたくらいの長さで切り揃えられたその髪には幾筋かの白いラインが見え始めている。口元や目尻には朝日と同じ様に小さなしわが刻まれ、高い鼻と彫りの深い顔立ちはこれまた朝日と同じ少し老いが滲んだ40代の西洋人の顔つき。流暢に話す日本語と身に付けている軍装だけが、彼女を帝国海軍の者であると示していた。

『お、良かった。じゃあ早速ティーを入れてもらって良いかな。』

『ふふふ。ええ、いいわよ。』

『なんだかんだで里帰りから帰ってきて会う機会がなかったねえ、朝日。』

帝国海軍の総大将である長門がさん付けで呼ぶ程の人物である朝日だが、そんな彼女にこの出雲と呼ばれた女性は敬語を使わずに紅茶を欲してみせる。艦魂も人間もなく世間一般的な社会で言えば失礼に値する彼女の言動であるが、朝日は出雲に笑みを伴って二言返事で了解の意を示すやすぐに椅子から腰を上げ、部屋の片隅でアルクールランプの炎に炙られて蓋をカタカタと揺らしながらその隙間から湯気を発するやかんへと歩み寄っていく。それはこの出雲という女性が、朝日にとってはかけがえの無い生死を共にした仲間であったからだだった。

洋風の装飾と綺麗な木目で彩られた棚からティーカップや茶葉の詰まった缶を取り出す朝日を、テーブルを前にしたソファに腰掛けて微笑みながら見守る出雲。

彼女は帝国海軍が明治の時代に建造した出雲級装甲巡洋艦の一番艦、出雲艦の艦魂である。朝日とは同じく明治32年に身を浮かべた仲で、彼女は朝日より半年遅く生まれた。初期の所属鎮守府は朝日が呉鎮守府だったのに対して出雲は佐世保鎮守府であったが、まだまだ艦艇数が揃っていなかった当時の帝国海軍において二人は供

に日本を支えてきた無二の親友であった。当時の艦魂社会においては戦艦だの巡洋艦だのといった身分の差は無く、階級にもそれ程まで氣を使わなかった事から、彼女達は出会ってすぐに同じ英国生まれの艦魂として大の仲良しとなったのである。もちろん朝日が参加した日本海海戦を含む日露戦役にもこの出雲は第二艦隊旗艦として参加しており、特に蔚山沖海戦でロシア海軍のウラジオ艦隊を第二艦隊のみで撃破した際には戦艦の艦魂すらも凌ぐほどの高い指揮統率能力を発揮した優秀な指揮官である。

しかしこのような栄光の日々がこれだけで終りではないという所が、現代の帝国海軍艦魂社会にあっても一目置かれているという出雲の凄い所であった。

まず日露戦争が終わった直後の明治42年、この出雲は帝国海軍代表としてアメリカで行われたサンフランシスコ到達140周年記念ポートランド祭に参加。世界最強のロシア海軍を打ち破った海軍の艦として、当地から熱烈な歓迎を受けた。そしてポートランド祭には西洋列強6カ国の軍艦も参加しており、その艦の艦魂達に栄えある十六条旭日旗を堂々と披露してやったのだ。元々が英国生まれなだけに出雲は西洋列強の軍艦の艦魂達に対しても英語での応対をしてみせ、艦魂社会における帝国海軍の誇りを社交という観点からも良く伝えてみせたのである。

次いでその数年後に発生した第一次世界大戦時には、かつての敵であったロシア海軍の戦艦レトウィザン艦改め肥前艦ひぜんとコンビを組んで遣米支隊を編成。その軍艦旗を太平洋の果てまでどころか、当時まだ完成したばかりのパナマ運河を通過して大西洋にまで進めたのだ。この当時はアメリカ国内で排日運動が激化しており、艦魂社会においても現地にて協同するアメリカやオーストラリアの艦隊とはイザコザが何度か起こった事もあったが、アメリカ生まれの肥前と完璧な英語を駆使した出雲の二人はそんな中でも見事に一介の海軍艦艇として任務を遂行し、少なくとも艦魂達の間では日本海軍を

見る目を変えてみせたのだった。そして遣米支隊の解散後には特務艦隊の旗艦として、今度はインド洋と地中海にも派遣。衰えぬ指揮官としての才を存分に発揮し、帝国海軍の勇姿をヨーロッパ全土へと示した。

既にこの時で出雲の艦齢は15年を上回っており、戦時で無いならば軍港の片隅でのんびりと錨を下ろしているのが普通である。ところがこの人の国際色豊かで花のある生涯はまだ終わらない。

地球の反対側でのお勤めが終わるや、大正8年には横須賀沖で行われた第11回観艦式で大正天皇の御召艦を担当。その経歴を飾る花をまた一つ増やし、2年後には兵学校の生徒達を乗せて世界中を旅する練習艦隊の旗艦としてご奉公に励んだのだ。世界を一周する練習航海においても彼女はその才を発揮し、外国での行動に関しての豊かな経験を生かして世界各国からの船が集まったブラジル独立100周年記念式典に参加。その途中で艦隊旗艦の立場を実の妹の磐手^{いわて}へと譲りながらも、10年近くにも渡る練習艦としての任務を良く全うした。

この頃になると日本はワシントン海軍軍縮条約による決定から主力艦の整理が始まり、朝日もこの時に武装を撤去されて特務艦艇とされ、出雲と共にアメリカ西海岸の波間を駆けた肥前もまた標的艦とされて処分された。この時既に出雲の艦齢は25年近くに及んでおり、当然のように彼女もまたなんらかの処置が施されるか標的艦として処分されると覚悟した。新鋭戦艦の土佐艦^{とさ}すらも標的艦とされていたのだから、決して無理の無い話である。

しかしこの人は違った。もはや悪運とすらも言えそうな程の彼女の生涯はまだまだ終わらない。

しばらくの間は海防艦という艦魂の老兵としてのお役目に就いていた彼女は昭和7年の第一次上海事変勃発に際し、なんと支那方面を担当する第三艦隊の旗艦に抜擢されたのだ。既にその身を水に浮かべて30年だった出雲艦だが、艦隊旗艦設備として作戦室を新たに設置すると直ちに華北方面に出動。当地における警備の任務を行

いながら、2年後にはなんと当時では戦艦ですらも未装備であった航空機搭載設備を増設。その後はしばらく内地での任務を遂行しながらも、昭和12年の支那事変勃発に際してはまたまた第三艦隊旗艦として上海を拠点として行動した。その後、出雲が属する第三艦隊は所属部隊がネズミ算式に増えた事から支那方面艦隊へと改称。その立場も軍令部指揮下とされ、なんと連合艦隊と同格となったのだ。その戦力も一時は本家である連合艦隊を上回る程で、そこにいた部下達を今も指揮し続けているのがこの出雲なのである。

こんな経歴を見るだけでもそこの人間の海軍軍人よりも遥かに凄いというのに、この人はさらにこれに加えて武勇伝も数多い。中でも圧巻なのは上海に進出したばかりの昭和12年8月の出来事。

この月の14日、上海上空には中国空軍の爆撃機が10数機も飛来して来たのだが、これを認めた出雲艦と神通じんつうの姉せんだいの川内艦からは九五式水偵が発艦。上空での迎撃戦に参加し、進入高度や飛行航路効果的な対空弾幕という条件に支えられながらも、なんと2機の撃墜を記録したのである。そしてこの二日後の16日には上海港内に中国軍の魚雷艇が出現し、停泊していた出雲艦へと雷撃をしかけて来た。誰もがその時、栄えある出雲艦の生涯もさすがに終わりだと思った。しかし帝国海軍の艦魂の中でも超がつく程の天才である彼女は、その悪運の良さも手伝ってか発射された2本の魚雷を回避。それどころか日本海海戦以来30年以上も経っているにも関わらず、彼女の分身に供えられた備砲が火を吹くやなんと魚雷艇を返り討ちにしてしまい、未だ衰えぬ戦闘艦艇としてのその実力を港内にいた仲間達の目にしっかりと焼き付けさせたのだった。

鼻歌交じりでソファにて組んだ足を動かす出雲は、朝日に比べれば歳の割に落ち着きが無い感じがある。白髪も混じっているブルネ

ツトの髪としわが消えない出雲の顔には40代という年齢に相応しい老いという物が滲み出ているが、それに反して明るく碎けた若々しい性格をもつのがこの出雲という艦魂であった。朝日と同じく西洋人独特の肩幅の広い身体つきを持つ彼女だが、朝日がテーブルへと差し出したカップに目を輝かせて手を伸ばす出雲の仕草には子供っぽさすらもある。朝日は自分の分のカップを持ちながら彼女とはテーブルを挟んで向かい側に位置するソファへと腰を下ろすが、その傍から出雲は友人の様に余韻を楽しむかのような飲み方をせずにグビグビと紅茶を喉に流し込んだ。

『んゝ、んまい。』

『少しは味わいを楽しみなさいよ。これでも味と香気を調えるのに苦勞してるのよ?』

出雲の行動に対して注意を促す朝日だが、その口元が一層緩んでいる事から彼女が不機嫌では無い事は明白だった。同じ英国生まれの船の命として日本の海で出会った頃と今の出雲には容姿以外の変化点がまるで無く、その事は無上の可笑しさを朝日の心へと与えるからだ。そして朝日に対して返って来た出雲の言葉は、相変わらずである出雲の様子を朝日に更によく伝えてくれる。

『かあてえ事言うなよ、朝日ゝ。ホントんまいわ、んゝ。』

元来より真面目な性格の朝日にとっては、緩さ全開の言葉遣いと性格の持ち主である出雲との会話は正直ちょっと疲れを生んでしまう。だが決して朝日は出雲が嫌いなわけではない。日本海海戦を始めたとする数々の任務において、この出雲がどれほどに優れた能力を持つ艦魂なのかを彼女はその碧眼に何度も映してきたからである。

戦場での的確な指示は勿論の事、今は滅多に身体を動かさなくなったのは朝日も同じであるが、若い頃の出雲は運動神経がとても良

く、その上でしっかりとした道德観も持っていておまけに朝日をはるかに凌ぐ博識さも持つ。

カップを上から鷲掴みにして口に近づけつつお尻の辺りをガリガリと搔いている今の出雲の姿からは想像できないが、彼女は国際色豊かな経歴が示すように語学においては人間も顔負けなほどに秀でているのだ。もっともそれは出雲の経歴もさることながら、彼女達を含む当時の帝国海軍の艦艇の事情にも因る所が大きい。

英国出身である彼女は英語はもちろん完璧に話す事が出来るのであるが、他の異国生まれの艦艇達と同様に日本生まれの艦艇達から日本語を学び、さらにはフランス出身の同期である吾妻艦あづまの艦魂からフランス語を、ドイツ生まれで朝日と同じく明治32年生まれ同期である八雲艦やくもの艦魂からドイツ語を、日清戦争が終わってから帝国海軍へと編入された先輩である鎮遠艦ちんえんの艦魂から支那語を、イタリヤ生まれの後輩である日進艦にっしんの艦魂からイタリヤ語を、そして激闘を繰り広げつつも後には供にアメリカへと出張した肥前艦ひぜんの艦魂からロシア語を、といった具合に実に7ヶ国にも及ぶ言葉を身に付け、しかもそれを分け隔てなく流暢に操る事が出来るのである。もちろんそこには大変に熱心に勉強へと打ち込んだ出雲の不断の努力があり、ただの歳の割に弾けた女性なのではない。

この才能は国際港として世界中の船が集まる上海にあっても有効で、出雲は世界中から集まる船の艦魂達と直接声を交える事ができる。故に上海における艦魂の社交界では、この出雲を知らぬ者はいない。そして冗談好きでひょうきんな彼女はすぐにどんな国の艦魂とも仲良しになってしまい、まさに上海における艦魂達の生き字引的な存在であった。これは朝日ですらも成し得ない事である。

やがて出雲は笑みを絶やさぬ友人に応えるかのように笑うと、すぐにその低い声で朝日の近況を尋ねてきた。

『どうだった、呉？ 知ってる範囲で良いんだけど、みんな元気だ

った？』

帝国海軍の艦艇は大小含めて数百隻にも登るが、朝日は出雲が口にした「みんな」という言葉が挿す者達をすぐに察する。もちろんそれは、時に笑いながら、喧嘩しながらも、同じ軍艦旗を砲弾が飛び交う空に高々と掲げた日露戦争時の仲間達の事である。朝日は両手で持ったカップを手の中でゆっくりと回しながら、笑みを変えぬ事は無いながらもちよつとだけ瞳を細めて口を開く。二人の昔を懐かしむ会話には、当然の様に大輪の花が咲いた。

『磐手も八雲も元気よ。二人ともまだ兵学校の練習艦として頑張ってるわ。浅間^{あさま}は5年前の座礁で竜骨を痛めてからは、ずっと呉で繋留されてるわ。まあ元気そうだったけどね。』

『へへ。磐手達、まだ練習艦やってたのかあ。』

『ふふふ。常盤^{とぎわ}なんかもつと元気よ。3年も掛かった近代化改装が春頃に終わってからには特にね。その証拠に、今は南洋のトラックまで出向いて任務に就いてるんだから。』

『はっはっは。そういや10年前に映画に出演した時も張り切ってたね。金剛達^{こんごう}がドン引きしてたなあ。』

『ふふふ。後は聞いた話だと、舞鶴の吾妻や、横須賀の春日^{かすが}と対馬^{つしま}それから富士^{ふじ}先輩も元気だそうよ。』

『そうか……。はは……。みんな、元気か……。』

この数年の間は一度も本国に帰っていない出雲は、朝日の言葉に苦楽を供にした仲間と妹の健在を確認してちよつとだけ明るさが消えた声でそう言った。いつも元気に任務へと当たる出雲を40余年間ずっと見てきた朝日だが、昔は絶対に人前で見せる事はなかった出雲の寂しそうな表情がすぐに解った事から、彼女の身体の中から

滲む老いの欠片を明確に感じ取った。舌の上を流れていく紅茶の苦さが際立つ出雲は、僅かに顔を歪めて遠い瞳をテーブルの上に投げている。

歳をとったなあ・・・。

瞳に写った友人の姿を目に入れて感傷に浸ると同時に朝日は自身の姉妹の事を思い出しており、やがてそんな自分に気付いて眼前の友人と同じく老いという物を実感する。すると朝日もまた突如として紅茶の苦さが妙に気になりだし、彼女は珍しくテーブルの中央に置いていた砂糖の瓶に手を伸ばしてカップの縁で僅かに傾けた。

朝日の手の中でカップと瓶が触れる音が放たれ、部屋の中にあつた寂しげな沈黙をかううじて払われる中、出雲は脚を組みなおすところかわざとらしく表情を明るくさせて朝日に話しかける。もちろん出雲のそれは昔話が生む寂しさを嫌い、最近になって生まれたであろう自分達の後輩のことを尋ねたというのが真相であった。

『どうだい朝日、新参の奴らは？ この数年でかなり増えたんだろ？』

低いながらも弾むような声で話題を振ってくれる出雲。朝日の中では出会った頃とちつとも変わらぬ友人のクセであったが、今の朝日はその声に深く感謝して笑みを浮かべる。その40余年に及ぶ生涯の中、常に精一杯の心配りを仲間達に与え続けてきた出雲の健在ぶりを改めて理解できたからである。それは常に先頭に立って帝国海軍にご奉公してきた出雲の強さであり、朝日を含めた同年代の艦魂達の誇りでもあった。

肩に掛かる栗毛を後ろへと流しつつ、朝日は寂しさが完全に消えた笑みで出雲の問いに答える。

『ええ。ずいぶんと増えたわよ。特に駆逐艦と敷設艦の子達がね。』

『ほお。最近は補助艦艇の類が多いんだな。』

『そうね、私達が戦場を駆けてた頃は……。あー。』

突如として朝日はそれまで軽快に放っていた声を打ち切った。出雲はその事に目を丸くして友人の顔を覗き込むが、朝日はその表情を曇らせてはいなかった。すぐにまた口元をしわを伴って引きつらせると、ちよっただけ腰を折って出雲に顔を近づけながら声を発する。

『出雲。明石を覚えてる？』

『あかし……。？』

朝日の問い掛けを受けた出雲は頬を掻きながら天井に視線を流して記憶を漁り、朝日がなにか含んだ笑い声をあげると同時に、出雲は彼女が口にした名を持つかつての仲間を思い出した。

『あーあー、二特（※第二特務艦隊）の明石か。ほら、須磨^{すま}の妹の。』

『ふふふ、そう。その明石よ。』

ようやく名を思い出した出雲だが、彼女は名前だけでなくその顔もハッキリと記憶の奥から蘇らせる事が出来た。なぜなら第一次大戦時の海外派遣時代、出雲が艦隊旗艦を交代するべく地中海へと向かった先で合流した第二特務艦隊の先代の艦隊旗艦が明石だったのである。だが出雲の持つ明石という名の艦魂の記憶は、決して先任の艦隊旗艦という物だけではない。

というのも、実は彼女達の世代の帝国海軍艦艇において、出雲の知る明石は数少ない日本生まれの艦艇であった。まだまだ国産

の軍艦が作れなかった当時の日本において、艦魂社会もまたその殆どが朝日や出雲のような外国生まれの者達によって率いられており、日本生まれの艦魂達はどちらかというと彼女達に近代海軍の何たるかを学ぶ教え子のような扱いであった。ところが出雲と朝日が知る明石という艦魂は明るく天真爛漫な性格とは裏腹に強い信念を持ち、時には外国生まれで立場も上の朝日や出雲に対して堂々と意見をする所があったのだ。朝日の実の姉にして帝国海軍の艦魂の中でも有名な土方型の性格であった敷島しきしまとは衝突する事が日常茶飯事で、時には殴り合いにまで発展した事だってある。

故に色んな意味で出雲は明石の名を覚えていたのだった。

しかし朝日がその名を出した事に含んでいる根本は、出雲が知る明石の事とはちよつとだけ違う。もちろんそれはかつて共に戦った仲間としてではなく、現在教え子として彼女の弟子となっている者の事である。それが解らない出雲はふと何故に朝日が明石の名を出したのかと不思議そうに聞いてくるが、朝日はそのなんとも奇妙なこの世の縁という物に可笑しさを覚えて笑いながら答えた。

『あれ？ でも明石は10年前に、標的艦任務に就いたんじゃないかな？』

『ふふふ。それがね、新しく生まれた私と同じ工作艦の子、明石って名前を付けられたんだけど、もう本当にソックリなのよ。昔の明石と。』

『へへへ。金剛や比叡ひえいは似てなかったけど、明石は似てるのかあ。こらまた変な話だねえ。ははは。』

朝日の笑い声に触発されたかのようにして出雲も笑い出し、同時に二人は昔話で盛り上がる事の無い今という瞬間を心の底から喜ぶ。日本から遠く離れた地のご奉公において、二人は目覚しい発展を遂げていく日本を目にする事が出来ないことから、口には出さな

いながらも何か時代に取り残されていく感をこもごもの胸の中に常に抱いてるのだ。もちろんすっかり古くなった自身の分身では、大砲で撃ち合うどころか艦隊行動すらも満足にできない事は良く解っている。だがそれでも上海の波に揺られている日常の最中、ふと軍艦旗と将旗を高々と掲げて国民の万歳に応えていた頃の記憶を思い出す事が多々あった。近代になって生まれた艦魂達と話してもちょっと話題が合わないというのはしよっちゅうだし、棧橋や泊地に停泊していても子供達がこぞって見に来る事などここ数年は皆無に等しい。

だがそんな中でかつての仲間と同じ名前を持つ最新鋭の艦艇の事を語れる事は、二人を心を少しの間だけ現在^{いま}という時の流れに浮かべてくれる。

開け放たれたスタンウオークへと通じるドアからゆっくりと流れ込んでくる上海の潮風に髪を揺らし、柔らかに漏れて来る陽の光にお互いの青い瞳を輝かせて再び会話に花を咲かせる朝日と出雲。

そしてそんな二人の姿と声からは、それまで滲み出ていた老いという物がちよつとだけ消えていた。

『しゃべり方までそっくりなのよ。ふふふ。』

『ははは。そうなのか、一度会ってみたいなあ。上海にこないかねえ。』

第五八話 「Tokyo classic」

昭和15年8月30日。

東京は霞ヶ関かすみがせきに今日も高貴にたたずむ海軍省の庁舎。

赤いレンガの壁にてその身を包んでいる庁舎の中の一室では、背負った窓から午後の日光を受けてその木目を輝かせる机がある。黒光りするいかにも高価な万年筆や机の端っこで折り重なる書類は、その机の主が社会的にもかなり上の立場にいる事を見る者に無言で教えてくれる。だがそこに二人の男の会話が響いているにも関わらず、机と窓の間に置かれた椅子には誰も座っていない。

部屋の隅にある小さなテーブルを真ん中に向かい合ったソファ、そこにこの部屋の主である吉田よしだ中将は腰を下ろしていた。ちよつと疲れたようなどこか力の無い笑みで声を放つ吉田中将だが、彼に正対している同じ真っ白な第二種軍装を身に付けた人物はそんな吉田中将を氣遣うようにして優しい笑みで応える。そしてお互いに掛け合う言葉には、組織の中においては日常茶飯事である遠慮や含みという物が一切混じっていない。なぜなら吉田中将の目の前にいる人物は彼と同じく初老の外見を持っている事からも示されている様に、海軍を牽引する者達を育てる海軍兵学校の同期生であったのだ。

『海軍大臣はどうだい、吉田？そろそろ足元が揺れる生活が恋しくなってきたんじゃないか？』

『ははは。まあ、思ってたよりは楽ではないな。GF長官、俺と変わってくれないか、山本。やまもと』

『何言ってるんだ。俺の前のGF長官はお前だろうが。あははは。』

笑い合ってテーブルに置かれるコーヒーを湛えたカップを手に取る吉田中将と、山本と呼ばれた初老の男。海軍大臣である吉田中将

と同じく二つの金色の星が連なる襟章を身に付けた彼は、帝国海軍の中核である実戦部隊を指揮する総大将。先程の吉田中将の言葉に出てきた役職を戴く人物である。すなわち大日本帝国海軍第二十六代連合艦隊司令長官、山本五十六中将やまもと いそろくその人である。

吉田とは兵学校で同じ釜の飯を食った仲間であり、卒業したその年に勃発した日露戦争以来、共に海軍にて陛下の赤子として国の為に励んできた無二の親友だった。もっとも海軍内でのこの二人が周囲から抱かれる感情はそれぞれでちよつと違って、艦船勤務一筋で海軍に勤めて来た吉田とは対照的に、山本は海外での駐在武官や留学の経験を多く持つ国際色豊かな経歴を辿っており、元来から物事をハッキリと口にしてしまうその性格も手伝って同期や部下からは相応の信頼があるのと同時に一部の者達にとっては相当の嫌われ者でもあった。ついこの間まで首相であつた米内光政よない みつまさが海軍大臣を務めていた頃には、海軍次官としてドイツやイタリアとの提携に断固として反対した事でも有名である。おまけに長いアメリカでの海外出張時にその目で見てきた事からアメリカの国力を良く知っていた彼は、『テキサスの油田とデトロイトの工場を見たなら、米国の戦争は考えない方が良い。』と常に周りの者に言つて憚らなかつた。また、砲術学校出身の鉄砲屋であるにも関わらず彼は発展著しい航空畑の道を歩んできた事から航空機の可能性を特に重要視しており、今月になって進水したばかりの大和艦を含む新型戦艦の建造にも一貫して反対してきたなど、世間一般の普通の帝国海軍軍人の中にあつてはちよつとその考え方は一風変わつていた。

だが吉田はだからといって彼を邪険に思うような事も無ければ、その考え方も別段間違いだとは思つてはいない。事実、日露戦争の終わった頃より帝国海軍が仮想敵国としてきた米国に対して、海軍軍人としての吉田はこの山本と基本的な所では全く同じ考え方を持っていたのだ。

そんな事からウマの合う山本との会話に、最近は毎日の様に起こる腹の痛みを和らげる事が出来た吉田。ゆっくりと服の上からお腹

を擦りつつも、そこに温もりを得て痛みを失った事から彼の表情は明るい。

そしてそんな友人である吉田の様子には山本も既に気付いており、海軍大臣のお仕事の辛さをなんとなくだが理解する。あまり他人に身の上の相談をせず、悩み事を溜め込んでしまう吉田の性格を、山本は同期として良く知っているからだ。さらに自身もお世話になった米内による内閣がつい先月に倒された事も、吉田のちょっとやつれて頬骨が目立つ様な顔立ちの原因ではないかと山本は考える。山本は笑みをそのままに吉田に刺激を与えぬようにと気遣い、静かにゆっくりと声を掛けた。

『米内さんの内閣が倒れたのは、陸軍だけじゃないだろう。やっぱり若いのがうるさいのか？』

『ああ・・・。』

返事をした吉田の笑みが歪み、色々と頭を悩める事が多かったこれまでのいきさつを思い出して苦笑いへと変わってしまう。山本はそんな友人の変化を見逃さず、表情を変えないながらもその真相とそこにあった彼の苦勞を察してみせる。

『だろうなあ。俺も時々、若い奴らの考えてる事が解らなくなる。』

コーヒーの入ったカップを唇に近づけてそう言った山本。吉田がふと視線を落とした山本の左膝の上には、人差し指と中指が根元から消えている不揃いの左手がある。それは海軍が真価を発揮する戦場においての現実その物であり、山本が口にした事への説得力を一際強く湧かせる。なぜなら山本の左手の惨状は、彼が若い頃に日本海海戦という本物の戦場にて負った負傷の痕だからである。それは惨たらしい戦争という物の側面を文字通り体現しているのであり、国力の一つである武力を背景にして積極的な海外進出策を訴える二

人よりも下の世代の者達の意見を受けてきた吉田にとってはどこか救いですらもあった。

『本当だよ……。それが日本の進む道などと言ってはいるが、ただ実際に大砲をぶっ放してみたいだけの様にしか思えん……。』

海軍の最上級職にあたる海軍大臣である吉田だが、ここ最近の状況の変化と憂い、そして友人の労いを受けて、つついその口から海軍批判とすらもとれる言葉を放ってしまう。溜め息混じりで床に視線を落として声を放った吉田の姿は、その言葉に込めた彼の落胆の色を山本にもハッキリと伝えた。

そしてそんな友人の姿に山本もまた視線を床に投げ、ふと吉田と自分の現在の立場とそこにある責任を比較してみる。ただ海軍の中核たる実施部隊の訓練や日程、戦備状況を調べて意見を上申する連合艦隊司令長官と、そんな海軍事情の全てを鑑みて日本という国の舵取りに参画する海軍大臣。船乗りとしては後者の方が似合っているのかもしれないが、その実情は踏み外してはならない航路を見つけ出し、なおかつ海軍という大きな組織の中での意思統一もせねばならないという物。そこに掛かる責任と重圧は、連合艦隊司令長官という自身の職とは比べ物にならないだろうと山本は考える。自分よりも一年遅く生まれている筈の吉田の顔が、今はどこか一世代前の先輩の様に山本には老けて見えるのだった。

『大変だなあ、吉田……。大臣ってのは……。』

『んん……。まあな……。』

山本の静かな声に、吉田は相変わらず腹を擦りながら声を返した。もっとも他人からの同情という物は嫌われる物であるが、今の吉田に限ってはその限りではなかった。栄えある軍艦とどこまでも続く波間を見る事も無く、色んな者達の考え方の中で結論を出してい

なければならぬ霞ヶ関での海軍生活。大事な国政の一端を担っているそれは、山本の様に長い海外での出張経験も持たずに常に軍艦の上で励んできた吉田にとっては辛いもの以外の何物でもなかった。もちろんそこには吉田個人の、良い意味でも悪い意味でも何事も人任せにしないという性格も絡んでいた。

しかし、そんな事から友人の心遣いを喜んで笑みを浮かべる吉田に反し、山本は笑みで応える事は無かった。唇に傾けたカップで口元を隠し、黒い湖面から香氣と共にたちのぼる湯気の壁越しに吉田を見る山本。その表情から明るさが消えているのは顔が隠れていてもすぐに吉田は気付く事が出来たようで、僅かに眉をしかめて笑みを消す。すると彼のお腹にはこれまで消え失せていた痛みが再び蘇ってくる。だが山本はそんな彼の事を理解しながらも、敢えて感情を込めずに声を放った。

『吉田。内閣はドイツやイタリアとの提携を狙ってるな？来月の作戦も、大方、ドイツやフランスとは交渉済みだろう？』

『んん・・・。』

吉田は呻き声のような声で返事をしたが、山本は語気を弱くするような事は無い。吉田にその責を求めるつもりはさらさらないので、先ほど放った自身の言葉に示される最近の国際情勢とそれに対する日本の対応。それらを国政とは少し距離を置きながらも独自の経験と理論でつぶさに観察してきた山本は、その行き着く先にかねてから事ある毎に放言してきた事が現実となってしまうという憂いを覚えていたのだ。

やがて一際舌に襲ってくるコーヒーの苦さに口元を歪ませる吉田に対し、山本はその事を極めて率直に言った。

『アメリカと・・・、ドンパチになるぞ・・・？』

山本の声の余韻が消えると、部屋の中にはある種の重さを伴った沈黙がたちこめる。

そして吉田が返す声をしばしの間失っている事こそ、彼もまた山本と同じ懸念を抱いている事を物語っていた。しかしこの吉田とて白い物を黒いと安直に言う様な男ではない。これまでもその懸念に直結する部下の声には頑なに拒否の意を明確に口にしてきたし、海軍内でも彼は良識と判断力のある人物として知れ渡っていた。

だが吉田は山本の言葉を即座に否定する事は出来ない。

前内閣である米内内閣が倒れた際、吉田は荻窪おぎくぼにある内閣総理大臣の近衛文麿このえ ふみまろの私邸へと招かれ、そこで陸軍大臣、外務大臣と今後の日本のとるべき国策に対して議論した。そしてそこで出された懸案にして山本の口にした事。すなわちドイツとイタリアとの提携と仏印や蘭印に対する進出という国策案に、吉田は昨今の海軍内の突き上げと国内世論を鑑みて海軍の長として了解の意を示したのである。

もっともそんな事態に陥る事の無いようにと現在の内閣の主要な者達には確約をとつての事だったし、吉田や山本が憂う事を荻窪で会った彼らとて考えていなかった訳ではない。吉田はその事を思い出し、腹を擦る手に力を込めながら重苦しい口調で声を返した。

『・・・対米非戦では纏まとまつてるんだ・・・近衛さんも、東条とうじょうさんも、松岡まつおかさんも、基本的にはアメリカとの戦争は避けるつもりではある・・・それに陸軍の東条さんは、ドイツとの提携に関しては色々と含みを持っているみたいだった・・・』

『そんな内輪の事情を話した所でアメリカは態度を変えてくれると思うか、吉田？』

『ん・・・ん・・・』

山本の少し冷たさすらも感じる物言いを受けて、吉田は再び口を閉ざしてコーヒーのカップを口に近づける。もちろんこの山本とい

う男がただ自分を責めようとしているつもりではない事は吉田も承知しているのだが、在米経験も豊富で帝国海軍では最もアメリカという国を熟知していると言っても過言ではない山本の言葉には、同じくらいの時間を海軍に費やしてきた吉田ですらも黙ってしまう程の強い説得力があった。まして吉田も基本的には彼と同じく、アメリカとの戦争は国力の全てにおいて勝ち目がないと考えており、日露戦争という本物の戦争だってその目で見てきた経験もある。アメリカと戦争になった末に日本がどうなってしまうか、その光景を吉田はありありと脳裏に浮かべる事ができるのであった。

『ふう……。』

するとふいに山本はにわかに感情が籠った声を伴って溜め息を放ち、背もたれに身体を大きく預けて右手で頭を掻き始めた。実は吉田の理解する通り、彼は友人を糾弾する為にこうして霞ヶ関の海軍省に足を運んだ訳ではない。既に決定された国政に関して山本が口を出すことは出来ないし、立場上での彼は国政の方策に順ずる考え方で海軍の実戦部隊を導かねばならないのだ。やがて山本はカップをテーブルの上に音を立てずに置くと、ちよつと元気が無くなった吉田を視界に入れながらポツケかある紙切れをより出した。

『ま、事ここに至っては仕方ない。それにな、算段も少しは考えてあるんだよ。』

『うん……。？』

思いがけない友人の言葉に吉田が瞳を小さくして顔を上げる中、山本は紙切れに書かれた内容が見えるように広げると、おもむろに吉田へと紙を持った手を伸ばしてきた。当の山本はどこか自身の反応を心待ちにしているのか、年の割りに幼い少年のような表情で笑っている。吉田はそんな友人の顔に首を捻りながらも彼の口にした

事の意味がさっぱり解らないので、ひとまず差し出された紙を受け取ってそこに書かれている内容を読んでみる。

『・・・・・・・・・・』

『はは……。まあ、まだ研究段階だがね。ただ目処はそこそこについてるよ。4月の艦隊訓練の時から研究はしてきたからな。』

山本はそう言うのと再びテーブルの上に置かれたカップを手に取り、ニヤニヤとしながら口へと運ぶ。そこに書かれた内容に対してそこそ自信を持っている事が、彼の態度からは誰もが読み取る事が出来る。しかしそんな山本とは対照的に、吉田は紙切れの内容の半分ほども読んだ所で表情を凍りつかせていた。左右に振る彼の瞳は次第に動きの規律を失っていき、首筋には冷や汗が滲み出してくる。山本はそんな吉田の姿を認めてもなお表情を変えないが、その内に吉田は震える声で紙に書かれた内容の事を問いたです。それは長く海軍に勤めて来た吉田にとっては予想だにできなかった事であり、その内容が示す光景を40余年に及ぶ海軍生活では見た事の無い物であった。

『ハワイ・・・？』

『うむ、それも開戦劈頭にな。』

『空母の集中運用・・・？』

『ああ。まあ、まだ運用の細かい所は研究中だが、給油艦を随伴すればなんとかなるだろうと踏んでる。』

どこか無邪気な感じすら見受けられる表情で山本は声を返すが、吉田はそのあまりにも突飛な考え方に驚きを隠せない。その内容は航空畑を主に歩いてきた山本らしい発想と言えなくも無い事であったが、一般の帝国海軍軍人の頭で考えられている現在の海軍の作戦

や戦備とはあまりにもかけ離れていた。現代戦の様相を呈する欧州戦線ですらもその内容に沿った事は実現されていないのだから無理も無い。

やがて吉田は腹の奥底に抱いていた痛みが一際酷くなった事を受け、大きく身体を折り曲げてうずくまる。それを氣遣って山本は声を掛けてくるが、それに対して彼は屈めた身をそのままにしてちょっと怒ったような感じの声を返した。

『お、おい、吉田……。大丈夫か……。？』
『勘弁してくれよ、山本……。これじゃおけはさま桶狭間と一ノ谷と川越夜いちのたに戦を一緒にやるようなモンじゃないか……。』
かわこえ

山本はそんな吉田の言葉に『悪い、悪い。』と極めて明るい口調で謝罪の意を示してみせるが、それに対して吉田の腹の鈍痛が和らぐ事は無い。

吉田にとっては供に兵学校では同じ釜の飯を食い、供に同じ認識でこれまで海軍に尽くしてきた旧知の仲である山本。博打好きで酒を好み、女性に関しても沢山の武勇伝を持つ豪放な彼だが、屈託の無い人柄と豊かな国際経験を持つ事からその認識は時代を常に見越しており、当の吉田もその事を理解して彼を友人として尊敬してきた。齒に衣着せぬ物言いで敵が多い事も事実ではあったが、昔から対米戦争に関しての考察では吉田も山本も同じく「非戦」の認識を持ってきた。

だがそんな山本が立場上の事があるとしても、対米戦争における作戦を考えている事、示してきたその具体策自体が吉田をして今まで見た事も聞いた事も無い代物である事、しかも帝国海軍が日本海海戦を模範と位置づけて金科玉条としてきた要撃構想を廃してこちらから敵の重要拠点に攻め入るというその内容に、吉田はその人生でも指折りの強い衝撃を受けた事は否めなかった。

それから数日経ったある日の事。

吉田の家のサンサンと日光を浴びる縁側では、ゆったりとした着物を身に付けて庭を眺める吉田の姿があった。山本と会った時よりもさらに顔はやつれており、精気の感じられない瞳で彼はぼんやりと陽の光に照らされる庭に視線を投げる。

そしてそんな吉田の背中を、彼の妻である恒子^{つねこ}は家の中から黙って見つめていた。海軍大臣という重い立場を戴いている夫に気遣いはさせぬようにと彼女は平静を装っているが、ここ数日の間はろくに睡眠がとれていない夫の事を知っている恒子は内心では彼の事をとても心配していた。せめて家の中では仕事の事を忘れさせてやりたいと願う恒子はその事を夫に問う事は無いが、この所すっきり元気が無くなって日を負う毎に老いを増していく彼の様子には既に気付いている。それをどうやって聞き出そうかと頭を捻りつつ、恒子は居間の小さなちゃぶ台の上で夫に勧めるお茶を用意していた。しかしそこに突如として、聞き慣れた夫の呟くような声が流れてきた。

『恒子……。俺が大事にしてたあの軍刀……。どこにしまったっけ……。?』

『え、兵学校卒業の時に貰ったっていうあれですか……。?さ、さあ……。どこでしたでしょうかねえ……。』

恒子は夫に返す言葉を濁したが、彼の問う軍刀が押入れの奥の木箱の中で保管されている事を知っている。しかし恒子は身体の向きをそのままにして声を放つ夫の姿に、彼が何か只ならぬ事を考えており、その為に軍刀が必要だったのではないかと考える。やつれて

腰の曲がりが目立ち始めた夫の後姿は、彼女のそんな考えをより一層確かな物にしていくな。故に恒子は軍刀のありかを彼に教えなかったものであった。

そしてその日の夕方頃、吉田は縁側にて朱色に輝く陽の光りを浴びながら、またしても恒子に背を向けたまままで呟くような声を放つ。

『恒子……。軍刀はいいよ……。それよりハサミはないか……。？』

これはおかしい。

長年連れ添った夫の様子をそう判断した恒子は曖昧な返事をしつつも、すぐに居間を後にして玄関付近にある電話機へと走った。僅かに震えを伴った手で受話器を耳に添え、夫に気付かれないよう小さな声で交換手との応答をする。夫の事を相談できる人が幸いにもすぐに頭に浮かんだ恒子は交換手の対応に少しの間だけ苛立ちつつも、繋がれた相手にすぐさま目的の人物を出してくれる様に頼む。恒子のその声には今にも泣きそうな感じが滲みつつも、夫を救わねばという強い意志が生んでいる鬼気迫る覇氣の様な物があつた。

『海軍省ですか……。？人事局の伊藤さんをお願いします……。・。・。いえ、人事局長の伊藤整一少将です……。私、海軍大臣の吉田の妻です……。急いで繋いでください……。』

その後、すぐに海軍省の者達が吉田宅に急行。吉田は彼等に言われるがまま、築地の海軍病院へと入院させられた。現役の大臣の入院に霞ヶ関はにわか騒がしくなるが、伊藤少将の根回しで吉田海相は過労で倒れたという事にされる。

終始一貫して海軍内の強硬論を抑え、対米開戦の可能性をなんとか摘み取ろうと尽力してきた吉田善吾^{よしだ ぜんご}海軍大臣はこうして国政の場から身を引いた。

昭和15年9月3日の事だった。

第五八話 「Tokyo classic」(後書き)

◆本話においてのご注意◆

本話では山本長官と吉田大臣が後の真珠湾攻撃に関する意見のやりとりを行っておりますが、現在これを証明する資料は発見されておられません。ただ小生の稚拙な考察の結果として、この当時における残された他の資料と情勢、二人の優秀な陸軍軍人を過労死に追い込む程だった日露戦争での戦争準備の例を鑑み、この時期に二人の間にこのようなやりとりがあったのではないかと考えておる次第です。しかしエビデンスは全く無く、飽くまでも小生一人の考えた可能性の一つである事をご理解くださいます様お願い致します。

色々ありましてお給料が36000円もうpしました、(ー、)

ノ

高いテンションのまま帰宅してすぐさま資料漁り開始!!

日本特務艦艇物語と海軍割烹術参考書(復刻版)、海軍糧食史など、計10冊程を大人買いw

特に海軍割烹術参考書は素晴らしいです。これで念願のマミヤーさんが書けるZE(*、D、*)

第五九話 「函館の味／前編」

昭和15年9月8日。

第二艦隊は青森巡航を経た後、北海道の玄関である函館港^{はこだて}へと向かい、そこに錨を下ろした。

本州から離れた北海道は東北地方の北側と同じくアイヌ民族が代々住む土地であり、明治の時代に本格的な開拓が始まったと認識する国民は多いが、古くは室町時代の中期に現在の青森県津軽^{つがる}地方にあった豪族がこの地へと流れてきて拠点^{つち}を構えた歴史がある。そして彼等が流れ着いた北海道で拠点とした地というのが、古くは宇須^{うす}岸^{けし}とも呼ばれたこの函館という地なのである。

太平洋にも日本海にも近く、さらに函館の眼前には函館湾と津軽海峡という国内屈指の好漁場が広がっており、独特の深い入り江は天然の良港として古くから全国に知られてきた。その為に黒船来寇を契機とする日米和親条約で函館はアメリカの捕鯨船の補給港とされ、近代日本史のかなり初期において国際港としての道を歩み始めた歴史を持つ。それから5年後の日米修好通商条約締結では晴れて函館は国際的に開かれた港とされ、海洋国家である日本では史上初の国際貿易港と認定されたのだった。それに伴って外国人居留地区が設定されると函館の街並みには西洋風の建物が姿を現し始め、函館は当時の近代的な文化が色濃く反映された地として栄えていく。

だが本州より離れているという土地柄が時として災いの元凶となることもまた事実であり、函館が活気付き始めた頃には幕末という激動の時代の波がここに押し寄せていた。明治新政府と旧幕府軍が激烈な国内内戦を展開したこの時代、函館には榎本武揚^{えのもと たけあき}率いる旧幕府抗戦派が落ち延び、幕府が国際港である函館の防衛と治安維持を目的として築城^{こりようかく}していた五稜郭へと入城。同時に蝦夷^{えぞ}共和国の樹立を宣言したのだ。もちろんこれに対して明治新政府が黙っている筈も無く、西洋の色合いを持つ函館の街並みは両軍の銃火によって燃

え盛り、その炎を映す函館湾の波間では明治新政府軍艦隊と蝦夷共和国軍残存艦隊によって激烈な海戦が繰り広げられる。しかし既に自軍兵士の逃亡も始まっていた蝦夷共和国軍は次第に劣勢となり、新撰組の鬼の副長として勇名を馳せた土方歳三もこの時に函館の大地へと散った。ひじかたとしぞう

その後、戦火も治まった函館はそれまでの「箱館」という名称を「函館」へと改め、新政府の下に開拓団の受入港としても機能する事によってなんとか元の活気を取り戻していく。街には軍靴の跡を埋めるようにして路面電車が走り、郊外には惨劇と涙を拭い去ろうとするような競馬場という娯楽地も建てられ、函館山には防人の館であった五稜郭に代わるようにして函館要塞が建造された。

政治、経済、外交、そして戦争。近代日本が産声を上げた時代のそれらを全て備え、同時に現代に向けて語り継ぐ地。それがこの函館市であった。

第二艦隊は函館港の沖合いに錨を下ろし、乗組員達は北国である函館の過ごしやすい夏の気候に心を弾ませて市街へと上陸していく。北の荒波に育まれた魚介類は乗組員達の舌を楽しませるのは勿論の事であったが、大正3年に公園として解放されて今は文字通り「つわものどもの夢の跡」となっている五稜郭も彼等は散策。錦の御旗に抗った今は亡き男達の遺功に想いを馳せた。

そしてそれは艦魂達も同じだった。

殆どの乗組員が艦内から姿を消した第二艦隊の各艦だが、艦の命である艦魂達は艦隊旗艦である愛宕艦あたごの艦首甲板へと集合していた。水雷戦隊や航空戦隊隷下の駆逐隊の艦魂達までも集まって各戦隊の戦隊長を先頭にして整列する中、彼女達の前では第二艦隊の艦魂達を統べる愛宕が深い青色をした函館の波間に酒の入った一升瓶を傾けている。チョロチョロと間拔けな音を発しながら海面へと流れ落ちていく酒の滝だが、その光景を笑う者などこの場には一人もない。やがて一升瓶の中の酒を全て波間に飲み込ませた愛宕は自身の足元へと瓶を置くと、遥かに続く函館湾の水平線に律した表情の顔を向ける。すると即座に彼女の後ろに控えていた高雄たかおが号令を掛け、続いて一斉に頭から帽子をとる部下達を背後に愛宕もまた頭から軍帽を取って静かに声を発した。

『脱帽！』

『箱館湾海戦で散った先人達に対し、黙祷。』

愛宕の張り詰めていながらも透き通った声が響き、その場に整列した艦魂達は一斉に腰を折って頭を下げる。彼女達は一樣に瞼を閉じ、吐息の音すらも唇の隙間から漏らす事は無い。なぜなら彼女達は今、この函館湾の波間に散った同じ船の命達の安らかな眠りをただひたすらに願っているからだ。もちろんその先人達とは愛宕が口にしたとある海戦での犠牲者の事である。

箱館湾海戦。

明治2年の春の終わり頃、この函館の波間では9隻の軍艦が入り乱れての大海戦が展開された。互いに損害を出しながらも戦ったその9隻は同じ日本の船の命として、第二艦隊の艦魂達を始めとする現代の艦魂達からすると先輩方に当たる。

栄えある陛下の御船である第二艦隊の艦魂達は、錦の御旗を戴きながら今も函館の海底に眠る新政府側の朝陽丸ちやうようまるの眠りを祈ってはい

るが、だからといって80発もの被弾を受けながらも戦い続け、最後は函館の浅瀬を枕にその身を業火に包んで果てた蝦夷共和国側の回天丸の事も忘れてはいない。日の丸と君が代を戴く日本という国を生む為に、時代という波に翻弄されてお互いに殺し合った二人。どちらも生まれたのは日本から遥かに遠い欧州であるが、二人は共に日本の船としての誇りを胸に、日の丸と君が代を伴った大日本帝国という国を生む為にその命を捧げていった偉大な先輩達なのである。

第二艦隊の艦魂達が分け隔て無くその分身に掲げる軍艦旗と日章旗。どちらも日が昇る光景を模した物だと言われているが、今の愛宕達にはその旗にある赤い色が血の赤のように思えてくる。

いつも目になっているこの旗を掲げて日本という国を表そうとする時、そこにかつてどれ程の同胞の血と犠牲があったか？

そんな言葉を脳裏に過ぎらせた彼女達は、決してその旗をふざけ半分で掲げてはいけなさと決意を新たにする。より一層深々と腰を折り、僅かに眉をしかめる第二艦隊の艦魂達。軍帽を失った事であらわになった彼女達の頭を函館湾の潮風が撫で、一人一人の髪を順番に揺らしていく。呉と変わらぬ波の音が彼女達に気付かせる事は無かったが、あたかもその風の感じと温もりは、彼女達がいま身を浮かべている波間の下で眠る二人の先輩の手のようにであった。

第二艦隊は休養も兼ねてしばらくはこの函館湾にて羽を伸ばす事になり、ほど良い涼しさとおいしい魚介類が連日並ぶ艦内での食事に艦魂達も喜ぶ。そして函館に到着してからの第二艦隊では連合艦

隊司令部からの命令もあり、国民の軍事知識普及の一環を目的に所属艦の開放見学会が催される事になった。

元来函館は青函連絡船に代表される洋上交通の要の地である事から整備された港湾設備を持っており、第二艦隊の中核である巡洋艦クラスの艦艇なら充分に接岸できる岸壁も既にある。さらには津軽海峡防備を担当する津軽要塞の一部とされている函館には帝国海軍の出張所もある為、港湾側との折衝はすんなりと話が纏まった。

残念ながら利根型及び最上型は帝国海軍でも最新鋭の艦艇に当たる為に開放予定の候補から除外されてしまったが、それでも改装が終わったばかりの高雄型の一等巡洋艦が開放予定艦とされると函館の人々はこぞって見学の応募に殺到する。大きな艦橋構造物と巡洋艦らしいスマートな艦影を持つ高雄艦はそこに民間からの人気もあるようで、高雄艦が繋留された栈橋は開放日を迎えると函館どころか北海道全域や東北3県からも集まった見学者で長蛇の列を作り、中には弁当持参で順番を待ってくれる人々も出る有様だった。

一方、艦の命である高雄は見学者の中に母親に抱かれた赤ん坊を見つけ、その可愛さに舞い上がって赤ん坊の頬を触れようと手を伸ばしてみたのだが残念ながら泣かれてしまった。どうやら世にも珍しい艦魂が見える人間だったらしく、真っ白な第二種軍装を身に付けた得体の知れないお姉さんに驚いてしまったらしい。いきなり号泣しだした赤ん坊を母親があやし、その光景を乗組員の水兵達が笑顔で見守る中、高雄は触れるのを諦めて赤ん坊が泣かないように物陰からこっそりと、しかしそれはそれは残念そうな表情を浮かべて眺めているのであった。

同じ頃、高雄以外の各艦はいつもの様に港の沖合いで錨を下ろし、

人間の気配が希薄になった艦では艦魂達がそれぞれの時間を送っていた。

しかしそんな中でもこの人とその部下達はのんびり休日を送る事は無い。

ちよつと雲が多い晴れ空の下、神通艦じんつうの広々とした艦尾甲板には彼女達の声が響く。

『だらあ!』

『うわっ!!!』

『一本! それまでえ!』

柔道着を身に付けた少女達が円陣を組む中、中心に置かれたマトの上では雪風ゆきかぜが先輩である荒潮あらしおを豪快に投げ飛ばしていた。審判である朝潮あさしおの右手と判定の声が響き、雪風と荒潮はそれぞれの胴着を直しながら立ち上がるとお互いに礼をする。回りの少女達からはどよめきに続いて歓声と落胆の声が同時に上がり、その中を雪風は胸を張って歩いた。

すると雪風の耳には周囲の声に比べると一際鋭い上司の声が届く。

『犬。』

『はあっ、はあっ……。は、はい!』

次の試合を執り行おうとする朝潮の声を背後に、返事をした雪風は円陣から少し離れた所で試合を眺めている神通の下へと小走りで行かう。同じく柔道着で身を包む神通はいつものように鋭い眼光で視線を流しており、竹刀を抱えながら腕組みをして砲塔に寄りかかっているその姿はまさに鬼教官その物。雪風は神通の前で気をつけをし、頬を流れる汗を拭おうともせずにとだじつと上司のお声を待つ。

『奥襟おくえりを狙いすぎだ。荒潮がもう少し背が高かったら、お前は負けてたぞ。』

『う、は・・・はい。』

雪風は決してこの神通という上司を嫌いな訳ではないのだが、やっぱりこの人の声と表情から放たれるおっかなさは尋常ではない。鋭く釣り上がった目で神通は雪風の背後にて行われている試合を瞳に映しているのだが、そのぶつきらぼうにしてハッキリと指摘をする声は雪風の胸の中にみるみる内に恐怖心を湧かせていく。もし至らぬ所があったり不備があったならいま神通が肩に乗せている竹刀でおもいきりお尻をぶっ叩かれてしまうという日常を、雪風は良く知っているからだ。そしてこうやって励んでいる際に呼び出されたら最後、ただでは帰して貰えないであろう事も雪風は既に脳裏に過ぎらせている。

顔を下に向けながらもチラチラと神通の表情を窺う雪風だったが、そんな彼女にはやっぱり上司の厳しいお声が返って来た。

『相手を選んで勝つような輩は二水戦にはいらん。だから今の勝負での勝ち認めん。』

『は、はいっ・・・。』

厳しい上司である神通はそう言うとき雪風に僅かに視線を流し、自身の顎を足元の床に向かってゆっくりと動かす。その意味を知っている雪風はせっかくの勝利を喜ぶ事も無く、すぐに神通にお辞儀をするとその足元にうつ伏せになってペナルティの腕立て伏せを始めた。

『・・・50回だ。』

『は、はい・・・！』

ついさっきまで自分よりも体格の大きい荒潮と柔道の試合をしていた雪風。腕立て伏せの体勢になっただけでも彼女の頬からは大粒の汗が滴り落ち、口から漏れる荒い呼吸はまったく静まっていなかった。腕を床に突き立てただけにも関わらず、雪風の両肘は早くもガクガクと震え出す。しかしそんな部下の様子を視界に入れても神通は眉一つ動かさず、むしろ腕立て伏せの体勢になったまま中々始めない事に苛立ちを覚える。すぐさま神通はその視線に鋭く鈍い光を走らせ、雪風を睨んだまま声を発した。

『犬。100回にしてもらいたいかな？』

『うぐう……！いい、いえ……！』

凍りつくような声に雪風は慌て、上司に否定の声を放った勢い腕立て伏せを始めた。すぐに雪風の両腕は張り始めて肘に力が入らなくなり始めるが、途中で止めたらもっと怒られるのを知っている雪風は歯を食いしばって両腕を動かす。それを認めた神通はいつもの短い口癖を放つと雪風から眼前の部下達の試合へと視線を戻すが、その間に放った言葉に雪風は思わず泣きそうになってしまう。

『ふん。よし、70回にまけてやる。』

『う……！はいいい……！』

なんとも理不尽な上司の指示であるが、雪風はその胸に抗うという意志を抱く事はない。なぜならこの神通という上司は常日頃から『私が思う通りの戦をする。反抗は許さん。』と口にしており、これにちよつとでも触れる事があるう物なら故意だろうが過失だろうがすぐさま竹刀の餌食とされてしまうからだ。もちろんそれは教育の一環ではあるのだが、背も高くて力も強いこの人の竹刀によってぶっ叩かれた際の激痛は半端な物ではなく、鼻っ柱の強い雪風です

らもそれを事の他恐れている。初めて食らった日はこの雪風も余りの痛さに朝まで眠れなかったくらいだった。

そんな事から必死の形相で雪風は腕立て伏せに励み、仲間達も横目でそれを見て柔道の武技教練により一層の意気込みをもって打ち込む。過ぎしやすい函館の潮風に涼しい顔をしているのは神通くらいで、彼女達がいる甲板には気温や湿度等とは関係ない重苦しい空気と緊張感が常に張り詰めている。

こんな光景が帝国海軍の艦魂社会でも恐れられる私立神通学校の日常であり、神通が「鬼の戦隊長」との異名をとって恐れられる所以であった。

するとその時、二水戦の面々が汗を輝かせる艦尾甲板には柔らかな感じの声が響いた。

『あ、神通さん。ここでしたか。』

背を預けている砲塔の更に背後から響いてきたその声に神通は鋭い眼光を保ったまま視線を流すが、そこにいた友人の姿を認めるやすぐにその角ばった釣り目には丸みが帯びられていく。

『おお、宗谷^{そご}か。函館に来てたのか。』

『はい。横須賀ではお世話になりました。』

神通の瞳には、鼻の頭の辺りにあるそばかすと毛先が丸くなった長い黒髪が特徴的な友人、宗谷の姿が映った。真っ白な下士官用の第二種軍装に身を包んだ宗谷は、横須賀で見た時よりもどこか軍装姿が似合うようになったと神通には思える。栄養失調で担ぎ込まれ

る事で出会った宗谷も元気になったもので、白い肌に桜色の唇が小さく浮かんでいる宗谷の表情に神通は安堵の感を覚えて笑みを溢してしまう。なにやら背中に背負った大きな木箱が、宗谷の健康さをさらに神通へと伝えた。

神通の隣まで歩み寄ってきた宗谷は背筋を伸ばし、わざとらしさが少し薄くなった敬礼をしてみせる。もともと神通はその敬礼の仕方に関してあれやこれやと言うつもりは無く、すぐに右手を額に添えて宗谷を開放してやる。雪風やその仲間達が教練を続けつつ笑顔を浮かべた上司と宗谷のやりとりを不思議そうに見守る中、神通は宗谷の肩に手を乗せて言った。

『千島^{ちしま}か樺太^{からふと}に行ってると思ってた。奇遇だな。』

『はい。測量のお仕事は大体終わって、今は幌筵^{ほろむしろ}向けの運送任務に就いてます。』

ニコニコと笑みを浮かべる宗谷はそう言うと、それまで背中に背負っていた木箱を甲板に下ろし始める。そこそこに重いのか声を伴って木箱を下ろす宗谷だが、神通も先程から160センチ半ば程の身長を持つ宗谷の身体に比しても大きいその木箱が気になっていた。やがて甲板にしゃがみ込んで木箱の封を開け始める宗谷に、神通は身を屈めて顔を近づけるとさっそくその事を尋ねる。

『なんだそれは？』

長い海軍生活ですらあまり見た事の無い木箱に神通は正体を探りかねて眉をしかめているが、宗谷は至って笑顔で神通に向けて声を返した。

『これは海軍が北海道の業者から買った食料品です。幌筵に届ける予定だったんですけど、伝票の誤記でちょっと余ったらしいんです。』

」

そこまで言った宗谷は木箱を開けると、そこにはおが屑がびつしりと敷き詰められており、甲板と同じ色をした木箱の中には所々に鈍い銀色が放たれている。すぐさまそれを缶詰だと認識する神通だった。やはりその缶詰のラベルはこれまでの彼女の海軍生活では見た事が無い物だった。そして宗谷は物珍しそうに瞳を小さくしている神通の表情に、これ以上ないくらいの無上の喜びを覚える。なぜならそれは北海道でしか手に入らない名産品であったからだ。

『ローストビーフの缶詰です。北海道では美味しくて質の良い牛がたくさん飼育されてて、運送費がかからないので本州よりも安く手に入るんですよ。差し入れに持つてきました。』

それを目にした神通は『おお。』と声を上げるとすぐさま宗谷の手にあった缶詰に自身の腕を伸ばし、さっきまで部下達に見せていた無愛想な表情が嘘だったかのように目を輝かせて缶詰に無邪気な笑みを向ける。

ローストビーフの缶詰は明治の頃から既に海軍でも食料品として出回っているのだが、その姿は食器の上以外では中々お目にかかれない代物である。味付きで缶を開けるとすぐ食べれる事から水兵さんの銀バイの格好の餌食である事も理由ではあるが、まだまだ生産がそれほど盛んではない上に産地からの運賃も勘定するとお値段が少々高くなってしまい、西日本である呉鎮守府や佐世保鎮守府籍の艦艇ではあまり調達されないという実態があるのだ。

イギリス海軍を模範とした帝国海軍では伝統的に日曜日の昼食としてローストビーフを食すというイギリスの食文化も取り入れており、艦隊司令部クラスが在艦している際の日曜の昼食ではこのローストビーフが食べられている。しかしお値段が少々張る事から兵や

下士官ではまず口にする事ができない物で、神通ですらも15年以上の海軍生活において食べた事は数える程しかない。大和煮の牛缶と違って生に近いローストビーフはあっさりとした食べ心地が特徴で、食感もボロボロと堅い物ではなくしっとりとした柔らかな物。ましてそも洋食という物がまだ一般的に普及していない日本において、ローストビーフは一般的な日本人の舌を持つ水兵さん達の憧れの的であった。

もちろん神通の部下である艦魂達は、食べたいなあと願いつつも一度も食べた事が無い。故に彼女達は一斉に身体の動きを止めて上司の方向に視線を流し、無意識に口の中へと湧いてくる唾液を飲み込んでいた。

そんな中、神通と宗谷の足元で腕立て伏せをしていた雪風もまた例に漏れずに腕を止めてその輝く瞳を宗谷が持ってきた木箱に投げる。宗谷の胴回りよりもまだ大きい木箱の大きさを鑑みるに、その中にはローストビーフの缶詰が山ほど入っているのは明白。そしてヘトヘトに疲れている彼女の身体と心は、瞬時に胸の奥に湧き上がってきた衝動に抵抗する事が出来なかった。

『ろ、ローストビーフ!!』

怖い上司に指示された罰直などどこ吹く風。雪風はそう叫ぶなり立ち上がると木箱の横でしゃがんでいる宗谷の隣まで駆け寄り、木箱の中でおが屑に埋もれる銀色の缶詰を手取る。ラベルにデカデカと旭日を背景に描かれた牛の絵は、雪風の唇からよだれをもらすには充分だった。ほど良い缶詰の重さと冷たさも彼女の疲れきった心を更に癒し、雪風は汗でほっぺにへばり付いたその波打ったクセ毛を直そうともせずに大きな釣り目を輝かせる。

宗谷はそんな雪風のめまぐるしい行動と表情の変化に最初の内はビクビクしていたが、それが自身のちょっとした心遣いに対する極

めて率直な反応であった事を知って再びニツコリと笑った。余り物の処分とはいえこれだけ大きな木箱を担いできた宗谷だってそれなりに苦労はしているし、そもお世話になった神通という友人に対する宗谷の感謝の気持ちはこんな缶詰の山で表せるほど薄い物ではない。しかしこうして自身の気持ちに笑顔で応えてもらえる事は誰しも嬉しい物である。何より「物を運んだ先に笑顔がある」という事に、民間の商船の出身である宗谷は無意識に喜びを感じてしまうのだった。

もっともそんな宗谷の心は別として、缶詰に感激の涙も混じった笑みを向ける雪風の行動が容認される事はない。なぜなら彼女のいる場所は上司に当たるこの人の分身の甲板上で、過ごしている時間はほんの少しも勝手が許されない私立神通学校の授業時間中であつたからだ。

仲間達が思わず目にした上司の動作に顔を両手で覆う中、ただ一人それに気付いていない雪風の頭上からは神通のお叱りとげんこつが襲い掛かる。

『この馬鹿がああ!!!!!!』

無防備な頭を思いつきりぶっ叩かれた雪風。

『ギャッ!!!!!!』

手に持っていた缶詰を放す事は無かったものの、雪風は激痛が走った頭を両手で抑えてうずくまった。神通のげんこつはいつもの事ながらもそのダメージは半端な物ではなく、目を開ける事すらもままならない雪風は頭の天辺を両手で抑えながら歯を強く噛んで痛みに耐える。顔に比しても大きい雪風の大きな釣り目の縁からは、感激の余りに溜まっていた涙が苦痛に耐える涙と意味を変えて零れていく。やがて頭を抑えていた雪風の手から缶詰が引っこ抜かれると

同時に、入れ替わりに缶詰を片手にした神通の声が轟いた。

『誰が腕立てをやめろと言った、犬!?!』

『す、すいやせえん……。』

稀有にして貴重な食べ物を目にしてすっかり上司の事を忘れていた雪風は、神通のお叱りに涙になって頭を下げる。それを横から見ている宗谷はちよつと困ったように苦笑いしつつ、神通に雪風の事を許してやるように頼んでみる。だが完全にご立腹の神通は友人の言葉にもその首を縦に振ることは無い。まして私立神通学校の授業時間という物には、雪風を始めとする二水戦の少女達以上に神通は自身の色々な思いを詰め込んでいる。荒い口調で宗谷に返した神通の言葉は、それを聞く者に有無を言わせずにその事を納得させるのだった。

『じ、神通さん……。そ、そんなに怒らないでくだー。』

『黙れえ! 二水戦の事には口を出すな、宗谷!!』

『う……。』

剥き出しの怒りをすぐに表情に出してしまう神通の悪い癖を宗谷も知ってはいるのだが、やはりこの人の怒鳴り声を伴ったご立腹の表情の怖さはそんじょそこの物とは桁違い。友人として慕う心は変わらぬものの、宗谷は眉を吊り上げた神通の表情に言い掛けた言葉の喉に詰まらせてしまう。そして宗谷を黙らせた神通はすぐさまその視線を宗谷から正面でうずくまっている雪風へと流した。頭の痛みが薄くなり始めてやつと視界を得る事が出来た雪風も、向けられてきた上司の怖い顔に身体をビクンと震わせる。

『私の命令無しに勝手にメシを食えるとも思ったか、犬!!』

『ぐひっ……。すいやせえん……。』

『腕立て200回だ!! さっさと始めろ!!』
『うう……。はい……。』

二水戦の艦魂達の中でも指折りの強い鼻っ柱を持つ雪風も、神通にかかつては手も足も出ない。流れ出る涙と鼻水を袖で拭きながら、雪風は神通の足元で再び罰直の腕立てへと挑み始める。柔道の武技教練の試合で勝ったにも関わらず難癖の様な指摘をされ、与えられた最初の腕立ての回数は50回だったのに僅か10分程の間に些細な失態で一挙に4倍へと増やされてしまう。泣く子も黙る私立神通学校の桁外れの厳しさだ。

懸命に腕立てに励む雪風の正面では、脈動する血管を額に走らせ日本刀の様な瞳をギラギラと光らせる神通が腕組みをして仁王立ちしている。その横で悪い事をしたなと申し訳なさそうな笑みを浮かべている宗谷と供に見守られる中、雪風は自分の行動を深く後悔しながらガクガクと揺れる肘に力を込めて動かすのであった。

『お、さすが二水戦だ。今日も訓練日課か。』

晴れ空である事を忘れさせる程に重苦しい空気に包まれていた甲板に、函館の過ごしやすい潮風を模したような澄んだ声が響く。その声が響いたのは神通と宗谷がいる砲塔付近よりもさらに後ろの甲板で、雪風以外の少女達はそこに顔を向けるやすぐに気をつけて一斉にお辞儀をする。次いで宗谷もまたそこにいた人物の階級章を瞳に入れると、すぐに立ち上がって直立不動の敬礼をした。

『精が出るね、神通中尉。』
『これは、艦隊旗艦。』

神通はそこにいた人物に声を返すと、部下や宗谷と同じく腰を折り曲げて無帽の敬礼をした。

そこにいたのは那珂^{なか}を従えた第二艦隊の長、愛宕^{あたご}であった。涼しげな潮風が乗り移ったかのような澄んだ声と清々しい笑みを輝かせ、まだ怒りのオーラが治まりきっていない神通に歩み寄る愛宕。自分よりも遥かに上の階級である事はもちろんだが、愛宕の持つ独特な清涼感のある物腰は神通の怒りを急速に冷やしていった。

故にそれまで角ばっていた神通の瞳が次第に曲線を帯び始め、愛宕はそれを確認すると涼しげな笑みを崩さぬまま大きく頷く。宗谷もまた足元で腕立てに汗を流す雪風をちよっと可哀想に思いつつも、ようやく刺々しさが消えた口調で声を発する神通に安堵して胸を撫で下ろした。那珂に至っては神通と姉妹を組んで十数年であるから、そんな姉の変化と足元で必死に腕立てをする雪風の事情をすぐに察する。そこに込めた想いは決して間違いではないのであるが、部下達にとってはどうしても恐怖の代名詞的な存在となってしまう姉の性格をその場に微かに残っている雰囲気から那珂はいとも簡単に感じ取り、宗谷と同じ事を思っちょつと笑みを歪ませた。

もともと愛宕も那珂も神通の教育に関して口を挟むつもりは微塵もない。少々理不尽で強引な所もある彼女の教育が間違いではない事を、二人ともこれまでの海軍生活で目の当たりにしてきたからである。事実、艦隊訓練や戦技訓練においてこの神通と率いられた部下達は、戦艦すらも随伴した艦隊を何度もコテンパンに叩きのめした事があるのだ。

『今日はどうしたんですか？』

やがて神通の問い掛けが僅かの間だけそこにあった沈黙を切り裂き、愛宕は一呼吸置いてからそれに対して声を返す。

『うん、例の観艦式の事だ。あゝ、君は宗谷だよね?』

唐突に愛宕の声を受けた宗谷は驚きながら返事をするが、神通の怒りをも鎮める愛宕の爽やかな笑みは宗谷の胸の中にある緊張をすぐに和らげて行く。ただ愛宕は宗谷の心の内を開放する為に笑みを向けた訳ではない。

すると愛宕はすぐさま宗谷に笑みを向けたもう一つの理由を自身の口から放つ。それは宗谷にとっては予想だにしなかった、帝国海軍からのなんとも嬉しい通達であった。

『10月の観艦式、宗谷も選ばれたそうだよ。おめでとう。』

第六〇話 「函館の味／後編」

涼しげな潮風の流れに混じった、初めて対面した将官クラスの愛宕の突然の言葉。それはとても緩やかに、だがしっかりと宗谷の耳に入っていた。しかし宗谷は呆けた表情を崩す事無く、力の入っていない声で愛宕に今しがた放たれた言葉を確認する。もちろんそれは宗谷に向けて放たれた愛宕の声の中に、栄えある帝国海軍における一大祭典を指す「観艦式」の言葉が含まれていたからだ。

『か、観艦式・・・？わ、私が・・・ですか？』

『うん、民間から転籍した者としては初めての事だよ。測量任務での良い成績もあって二言返事で決まったらしいよ。』

宗谷は愛宕の微笑みと綺麗な声を受けてもまだ表情を変える事は出来ないが、交えた会話のやりとりを段々と落ち着き始めた頭で理解して行く。やがて高鳴りを始めた自身の胸に宗谷は右手を押し当てながら、友人である神通へとふと顔を向ける。先程までの怒りも上官である愛宕の声に和らげられ、さらに宗谷という友人の記念すべき晴れの日への参加を知った神通はすぐに口元を緩めて声を放ち、観艦式参加決定の報を受けた宗谷を心から祝福してやった。

『良かったな、宗谷。』

それは彼女らしい短い言葉であったが、宗谷には神通の心の内がしっかりと伝わっていた。そして友人のそんな心遣いを理解すると同時に、それまで硬直していた宗谷の表情は緩み、彼女は満面の笑みを作る。

まだまだ民間の商船だった頃の記憶に未練がある宗谷。自身の分身の艦首と艦尾に備え付けられた機銃を見るとどこかその心に小さ

な恐怖心を抱いてしまう彼女は、北方海域に来て現役の民間の商船を目にする度に羨ましく思っていた。函館^{はこだて}や室蘭^{むろらん}、小樽^{おたる}といった港でのそれは特に顕著で、まして姉の天領丸^{てんりやうまる}と妹の民領丸^{みんりやうまる}もこの海域で運行されていたから尚の事だった。同じ造船所で生まれて供にソビエト行きをキャンセルされ、工員や会社の人々の想いになんとか応えてやりたいと懸命に励んだ二人。もちろん姉も妹も宗谷との再会を手を取り合って喜んでくれたが、宗谷は既に姉妹とは一度聞いただけでは判断できない自身の名にちよつとだけ悲しみを覚えてしまったのもまた事実であった。

なんで私だけ、こんな思いをしなければならないの・・・？

そんな言葉を宗谷はどうしても脳裏に過ぎらせてしまう。まして宗谷艦における海軍の船としての証は艦尾に翻った軍艦旗のみで、その舳先には天皇陛下の御船である事を示す菊花紋章もない。横須賀や舞鶴の鎮守府からも遠く離れた北の果ての波間で働く自分。その事に宗谷は、自分は海軍に良い様に使われているだけなのではないか、と考えた事も正直に言えば何度かある。

しかしそんな中で舞い込んできた観艦式への参加の報は、宗谷の心の端っこでくすぶっていた海軍への不信を完全に鎮火する。一般の国民や艦魂では決してその御姿を見る事のできない天皇陛下の御隣席の下、満艦飾で彩った自身の綺麗な姿を波間に映すことが出来る観艦式。それは日本の船として生まれた宗谷にとっては、決して届かない高嶺の花のような物だった。もちろん民間の小さな運送船として過ごしていたなら、宗谷にはその機会は間違いなく訪れていない。それは彼女が海軍の船として今を生きる事になったからこそ実現できたのであり、その事は同時に海軍が自身を決して小さく扱っていないのだと宗谷に教える。

『か、観艦式……。私が……。』

胸の中から湧き上がる喜びを抑えるようにして胸の前に置いた右手に拳を作る宗谷。神通と愛宕が笑みを浮かべて無言のまままで宗谷を祝福する中、宗谷は次第に口元を引きつらせていきながら、以前に国際港である天津^{テンシン}にて聞いたとある童話を思い出す。惨めな境遇から一夜にしてその人生を華麗な物に変えるというその内容は、どこか今の自分と似ていると彼女は思った。そしてこの時、友人である神通も同じ事を考えており、ふと彼女が放った半笑い気味の声で宗谷はそれを知る。刹那、宗谷はやつとその笑みを浮かべた顔を上げ、周りの者達にその無垢な笑顔を見せてやるのだった。

『ふん、まるでシンデレラだな。』

『ふふふ。はい。』

宗谷が良い終わると同時に、二人はお互いに顔を合わせて声を漏らして笑う。甲板上に響くその笑い声は次第に愛宕や那珂^{なか}の口からも笑い声を放たせ、やがては4人から少し離れた位置にてそれを見ている二水戦の少女達にも同様の効果をもたらしていく。唯一その場で険しい表情を堅持しているのは、神通の足元にて200回の腕立てに必死の形相で励む雪風^{ゆきかぜ}だけであった。

その後、愛宕は宗谷に観艦式の説明やその際の諸注意を那珂から学ぶように指示し、宗谷は那珂に連れられてその場を後にした。初めて目にした神通の妹という那珂に宗谷は最初の内は接し方を考えていたが、姉とは大違いの朗らかで知的な那珂の人当たりに宗谷はすぐに彼女とも仲良しとなる。『困った人でしょう？』という那珂による自身の姉の人物評に宗谷は大笑いしてしまい、その短気で傍迷惑な性格を話しのタネにして二人は親睦を深めるのだった。

一方、宗谷と那珂が去った後の甲板では、愛宕と神通の会話がしばらく続いていた。

友人がいなくなってしまった事から、神通の顔は少しだけ笑みの色を失っている。もつともそれは彼女の機嫌が斜めに傾いた事を示している訳ではない。むしろ神通は愛宕に対して深々と頭を下げ、丁寧にお礼の言葉を口にしていた。

『我が儘にも関わらず、本当に有難う御座いました。艦隊旗艦。』
『なに、二水戦戦隊長のお願いだからね。長門中将もその意を汲んでくれたんだよ、きつと。』

二人の会話には穏やかな函館の潮風をそのまま模したかのような雰囲気滲み出ているが、神通の部下達はそれぞれが今しがた耳にした事の顛末に驚きを隠せない。それは先程まで甲板に響いていた宗谷の観艦式参加に関しての事であった。

というのも、観艦式は実施部隊である艦艇を参加させることから、当然その参加艦艇の選定に当たっては連合艦隊司令部の事情が反映される。現にこの愛宕が率いている第四戦隊から愛宕とその妹の摩耶が参加できないのは、整備入渠という日程を連合艦隊から指示されているからである。海軍の実施部隊である連合艦隊は、戦力である艦艇や部隊の管理運営を常日頃から行わなければならないのだ。

そして海軍の船の命として長年励んできた神通はその事をよく知っており、なんとか連合艦隊司令部への介入を行えないかと上司の愛宕を通して連合艦隊司令部をその身に宿す長門へと問い合わせをしたのだ。もちろんその内容は、海軍の船としてようやく頑張ろうと決意してくれた友人、宗谷の観艦式への参加である。粗野で乱暴者の神通だが長門は日頃から彼女を高く評価しており、妹分である

明石^{あかし}の友人という事もあってなんとか神通の企図している事が実現できるように骨を折ってくれた。偶然にも司令長官である山本中將^{やまもと}はその時期に呉から東京の海軍省へと出かけており、彼女はすぐさま長官室に忍び込んで観艦式関連の書類を見つけて加筆修正するという荒業を発動。幸いにもその内容に気付かれる事無く書類は無事に判が押され、宗谷の参加が正式に認可されるに至ったのである。

『宗谷は嬉しそうだったね、神通中尉。』
『はい。』

ふいに空を見上げながら語りかけてきた愛宕に、神通は声を返すとさらに深々と頭を下げる。だがそんな神通の姿を視界にいった愛宕は、普段から立場の上下を無視して暴言を吐く神通の隠れた優しさに触れる事が出来てどこか嬉しかった。

口の利き方が悪いと言っては下の立場の者を蹴り、気合が足りないと言っては部下を殴り、些細な失態でも容赦なく会議で指摘しては上官と取っ組み合いをするという神通。何より愛宕も生まれて初めて他人より罵倒された際の相手はこの神通であった。年上なのに階級は下というのは艦魂である彼女達だけではなく、その乗組員たる人間の社会でも往々にしてある事だが、それに加えてこの人の苛烈な性格はその関係をさらに複雑にしてしまう。明石という友人を得た最近ではその性格からもトゲがなくなり始めているのだが、横須賀^{いすず}での五十鈴との一件のように先輩との喧嘩を屁とも思っていない彼女を部下として扱う事には、実は愛宕も多大な努力をしている。巡洋艦の艦魂の仲間内でもこの神通は、『何を考えているのか解らない。』と囁かれて嫌われる問題児であったのだ。

しかし愛宕はこの神通を決して嫌っている訳でもなければ、そも五十鈴の様に彼女を悪い艦魂^{ひと}だとは考えている訳ではない。同じく

指揮官という立場を頂く愛宕は、最近になってその実力をメキメキとつけて来た神通率いる第二水雷戦隊の評価の裏として、この神通が胸の内に秘める想いが功を奏しているのではないかと思っている。なぜならただの気性の激しい嫌われ者を指揮官として迎えた集団が高い評価を得る事など絶対に不可能であり、まず指揮官と属する部下がしっかりとまとまる事すらも無理であるという事を、愛宕は同じ指揮官の立場を頂く者として肌身を通してよく知っていたからである。

普段はおくびにも出さない神通なりの優しさや思いり。それは傍から見ている者には滅多にお目にかかれないうし、当の神通もそれを口に出す事は無い。だが確かにその胸と釣り上がった目の奥には、常に強く抱いている筈だ。

そこまで考えた愛宕は神通の顔を無意識に眺めてしまうが、神通はそれに気付くと汗を拭うふりをして口元に手を当てて表情を隠す。やがてその手をどかして足元で懸命に腕立てに励む雪風に視線を流す神通の顔からは、ついさっきまであった優しい笑みが嘘の様に消えている。ギラリと鋭い眼光を伴って鬼教官の顔を浮かべる彼女に、愛宕は以前に那珂から聞いた神通の人物評を思い出す。

針に糸を通すどころか、針を摘む事すらも出来ない不器用な艦魂^{ひた}。

その言葉を愛宕はここに至ってよく理解するのだった。

一方、それまでのやりとりを神通の足元という特等席で小耳に挟んでいた雪風は、一挙に四倍にまで増やされてしまった腕立ての罰直もあり、口にこそ出さないがちよっと神通に対して不信の念を抱

いてしまう。

いつもお尻を竹刀でぶっ叩かれ、今日はげんこつまで頂戴した雪風。激しい訓練に疲れているのは雪風だけではなく霞や霰かすみ あられといった仲間達も同じで、正直に言えば偶たまの差し入れくらい食わせてくれたって良いじゃないかと彼女は思っていた。おまけにいつもこんな調子でシゴかれているというのに、この神通という上司は機嫌が悪いとすぐに彼女達に過酷な訓練を課して八つ当たりまでかましてくる始末。怒鳴られて怒られて叩かれる、ついでに規定した以外の休息も与えてくれない。そんな私立神通学校の毎日を過ごしてきた雪風にとって、いくら友人とはいえども神通が宗谷の観艦式参加における斡旋を行っていた事はちよつと理不尽であり、残念でもあった。

部下として頑張ってる自分達には何もしてくれないのか？

やがてそんな言葉を脳裏に過ぎらせた雪風は、連続する腕立てによって既に感覚を失い始めている肘に力を込め、甲板に両腕を突っ張るとチラつと首を捻ってすぐそこにあった上司の足から視線を上へと流してみる。するとやっぱりと言うべきか当然と言うべきか、そこにはげんこつを振り下ろした時と同じ鋭い眼光を伴った上司の顔があった。それはまさに自身の乗組員達が持っていた本に描かれていた仁王様その物で、雪風はすぐさま視線を逸らして再び腕立てに励む。もつとも雪風は物事をハッキリと口にするその性格の通り、胸の中に抱いた上司への不信から汗まみれの表情の中で口をツンと尖らせていた。

だがその時、雪風は自身のすぐ隣まで上司の物とは違う靴音が迫って来ている事にふと気付いた。といつてもその靴音の主を雪風は自分の回りの状況からすぐに察する。そして雪風の考察を証明するかのように、頭上からは神通と愛宕の会話が響いてきた。

『それとね、ちよつと困った話があるんだよ。』

『は？』

『実はね、長門中將が宗谷の参加を工面してた時に、二水戦の観艦式への参加も決定してるのを見つけたらしいんだけど、どうやら連合艦隊司令部の手違いで参加艦艇の枠が11隻になってるらしいんだよ。』

『11隻……』

ちょっと澄んだ感じの薄くなった愛宕のすまなそうな声に、神通はまゆを僅かにひそめて腕組みをする。それが何かを考えている様子なのは明白で、愛宕の放った言葉に雪風を含めた神通の部下達は、上司が何に対して考えをめぐらせているのかをなんとなく悟った。

彼女達二水戦は旗艦の神通艦を筆頭に、隸下には第8駆逐隊、第16駆逐隊、第18駆逐隊の3個駆逐隊がある。8駆と18駆は共に4隻編成で、16駆はまだ編成途中の3隻編成。これに旗艦の神通艦を足すと二水戦の全艦艇は12隻となり、参加枠の11隻と比較すると単純に1隻余る事になる。つまりこのままでは、二水戦の中から晴れの日を味わう事ができない可哀想な者が一人だけ誕生してしまうのだ。

そんな中で雪風は今の自分の状況を鑑みて、外されるのは自分かもしれないと憂いでしまう。それもその筈。11人の部下達の中でもこの雪風は、普段から上司である神通による鉄拳制裁でダントツの被弾率を誇るからである。

『まあ、珍しい事じゃないけどね。五十鈴大尉の三潜戦（第三潜水戦隊）も枠が足りないし、最上^{もがみ}中尉の七戦隊でも枠が足りないんだ。七戦隊はまだ決まってるけど、三潜戦では旗艦の五十鈴大尉と各潜水隊から選抜した艦艇に参加させるそうだ。』

『ふむ、そうですかあ……』

腕組みをしたまま、ふと神通はその視線を頭上の青空へと向ける。

その姿は傍から見ても彼女が愛宕の言葉を受けて何かを考えている事を示しており、仲間達と同様にそれを認めた雪風は胸の中に抱いた憂いの波をより一層高くする。雪風にしても3年に一度の観艦式は綺麗に彩った自身の姿を、恐れ多くも天皇陛下に御覧覧して頂く絶好の機会。海軍の者としてねずみ色一色で塗装されたその身を飾れる事は、身も心も一応は人間と同じ少女である雪風には晴れ姿である事に違いは無いのだ。だがそんな機会が文字通り風前の灯火となってしまうている事を、雪風は空を見上げたまま沈黙する上司の姿に明確に悟る。

そしてやっと二百回目の腕の伸縮が終わった事もあり、雪風は溜まった疲労に抗えず突っ張った両腕を折り曲げてその場にうつ伏せで倒れこんだ。

『ぐへえ……。』

今にも泣きそうな声も混じった声を放ちながら荒い息をする雪風。その脳裏には上司への恨み等はなく、せっかくの機会を失うのではないかという憂いと恐れだけが渦巻いている。まして同じく梓が足りない三潜戦では旗艦と選抜された部下が参加するらしいとの愛宕の声は、曖昧な輪郭を持つ雪風の憂いをさらに顕著に形作っていくのだった。

やがて函館の潮風が神通の前髪を上空で流れる雲と同じ方向に揺らすや、神通は上げていた顔をゆっくり元の位置へと戻す。相も変わらず三角定規を彷彿とさせる彼女の両目は、愛宕ですらも神通の考えている事を読み取らせようとはしない。しかし神通の心の中では、先程より考えていた事に既に明確の答えを打ち出している。それは愛宕の神通に対する理解を正しかったと証明すると共に、規律を取り戻せぬ呼吸で甲板に突っ伏す雪風の憂いを根本から取り除く。もっともそれはこの人を良く知る明石や那珂、霰などから言わせる。とさも当然の事でもあった。

『それ以上に梓が減る事は無いですよ、艦隊旗艦？』

『ああ、残念ながら増える事もないけどね。』

『なら私が参加しない事にします。その代わり、部下は全員参加させます。』

言い終えた神通はプイッと洋上にそっぽを向くが、その言葉と神通の様子を認めた愛宕は小さく頷きながら微笑んだ。小さな声で『やった、やった。』と手を取り合って喜んでいる部下達を背後に、神通は眼前に広がった遥かに続く水平線からその視線を逸らそうとはしない。だが愛宕はそんな神通の凛々しい横顔に、先程脳裏をかすめた那珂の言葉をよく理解する。

面と向かって部下達を褒めてやるような事は無い神通。

それは友人である宗谷よりも、ずっとずっと自分の部下達を可愛がっており、溢れるほどの愛情を注ぎ込んでいるからだ。そしてそんな大事な者達だからこそ、不器用な彼女は自身の思う所を率直に表してやらない。

頑張ってきて。

良かったな。

そんな言葉すらもかけない神通であるが、その胸の中では心の底から部下達への祝福の声を叫んでいるのである。ただそれをいつも顔を合わせている部下達に面と向かって言うだけの、いつもの自分らしくない姿を見せるだけの勇気が無いのだ。常にぶっきらぼうで喧嘩騒ぎを起す神通の、繊細にして弱い部分なのである。

するとその内に神通の足の裾を、力無い手で掴んできた雪風が声を上げる。鼻水と汗と胸いっぱい感謝の涙でずぶ濡れの雪風は、牛の鳴き声のような声で上司を呼んだ。もちろん彼女の心の中には、自分を見捨てる事無く観艦式への手配を決めた神通への感謝の気持

ちが溢れている。

『え、えぐ……。せ、戦隊長お……。』

神通はズボンの裾を引っ張られた事でやっとその視線を足元へと向け、そこにあつた雪風のそれはもう酷い顔に思わず口元を緩めてしまう。神通は雪風のその顔に彼女が何を考えていたかを、そして同時にそれを見事に払拭できた事を察し、その表情に笑みを浮かべたのだった。

まったく、見くびられた物だ。

そんな言葉を脳裏で放つ神通だが、彼女の機嫌はそれによって斜めに傾く事はない。続けて足元から放たれる雪風の言葉が、自分が部下の考えを完全に読み取れていた事を明確に示していたからだ。それに対して神通はすぐさまいつもの厳しい言葉を返したが、その表情から笑みが消えない事に愛宕と部下達もまたその心を晴れやかにする。

『……。馬鹿者が。恐れ多くも天皇陛下のご拝謁を賜るという時に、そんなツラで臨むつもりか、犬。』

『は、はいいゝ……。』

『お前らも観艦式の参加がきまったからといって、はしゃぐような大間違いだ。帝国海軍のあっちこっちから選りすぐりの艦艇達が集まるんだぞ。こんな場所で失態をかまして、私達二水戦の名に泥を塗る事は絶対に許さん。だから明日からは各自の艦の清掃状況も点検する。ちよつとでも汚れておったら承知せんから、覚悟しておけ。』

それは私立神通学校における、鬼教官のいつもの声。だが愛宕の

耳に届いたその声には心なしか神通の嬉々とした心の音色が混じっているようであり、それに対して返された部下達の返事もまた明るく元気な物であった。やがて神通は足元で頬を濡らす雪風を立たせると、愛宕に一度小さな会釈をした後に他の部下達が集まるマツトの付近へと戻っていく。罰直の腕立て伏せでヘトヘトに疲れておぼつかない足取りで歩く雪風と、そんな部下の肩を抱いて歩く神通の後姿が愛宕の澄んだ瞳に写る。

その光景に愛宕は、この神通という艦魂が帝国海軍の中では誰よりも厳しいと同時に、誰よりも部下を思う指揮官である事をよく理解し、自分の方が上官の立場でありながらも同じ指揮官として深く彼女を尊敬するのだった。

その日の夜、神通は相方である木村大佐に頼んで大量のお菓子を用意し、部下全員を呼び寄せて観艦式への壮行会を催してやった。若い女の子と一緒に酒が飲めるとあって木村大佐は二言返事で了承し、宴会好きで陽気な彼を混じえた宴は大いに盛り上がる。もっともお酒が進んで行き過ぎた彼は宴会に同席していた宗谷にちよっかいを出し、同じく酒を飲んで手を振り上げやすくなっていた神通の逆鱗に触れてしまう。

『このクソジジイがああ!!!』

そんな咆哮が響いた後、竹刀を振り回す神通によって、木村大佐は宴の終了を待たずに強制退場処分となる。鼻息の荒い姉を抑える那珂はいつもの事とは言え一苦勞であったが、そんな中にあっても霞や霰、雪風といった部下達は上司に対しての不満を沸かせない。昼間の一件で彼女達は皆、この神通という上司がどれ程までに自分達を大事にしてくれているかを改めて理解したからだ。

そしてたくさんのお菓子や飲み物に混じってそこにあるローストビーフに、雪風は昼間の上司が垣間見せてくれた自分達に対する想いを深く頂戴する。その生涯で初めて食べたちよつと塩味の効いたローストビーフの味は、やつと頬が乾いた雪風の頬を再び濡らそうとする。大嫌いな霞にそれを気付かれぬようにと部屋の間で食べたローストビーフは、ちよつとしゃばいが何故だかとても美味しくて、缶詰と口の間を交互する雪風の手が止まる事は無い。

彼女の舌に広がったそれはほんのりと温かくて身体全体に染み渡るような味で、まるで昼間に少しだけ見せてくれた神通の笑みと心遣いの様であった。

第六〇話

「函館の味／後編」

（後書き）

第六一話 「迫る足音」

昭和15年9月20日。

第二艦隊が錨を下ろす函館の地よりもずっと南、宮城県石巻市いしまきの金華山きんかざん沖合い。

辺り一面に広がる視界が僅かに数十メートル程しかない濃霧の隙間に覗く波間は、地元の漁師達の船すらも港から出る事を躊躇わせる。ぼんやりとした白い光りで包まれる海上はかろうじて陽が昇っている事を教えてくれるが、そこにある白一色の空は太陽が今どこにいるのかを見る者に教えてくれる事は無い。時間も方位も文字通り喪失した、この世の物とは思えない海原と化している金華山沖合いの波間。

その波間を見下ろしながら野生の本能を頼りに飛んでいく一羽のカモメが、ふとそこに現れた絶好の足場に降り立って翼を休める。足場は踏み慣れた木ではなく堅い鋼鉄で出来ていたが、疲れたカモメはそんな事を気に留める様子も無く文字通り翼を休め、自身の羽をくちばしでつついて手入れし始める。眼下に薄っすらと見える十六条旭日旗を視界の端に入れ、カモメは小刻みに首を捻りながら束の間の休息を取る事にした。

そしてカモメから見える十六条旭日旗が翻った旗竿の下、断崖絶壁のように一直線に波間へと続く鋼鉄の壁の一角には、白い文字で「あかし」と書かれていた。

僅かな波間と真っ白な空を映す舷窓。そこから漏れてくる灯りによってぼんやりと照らされる明石艦艦内あかしの明石の部屋。

そこでは卓上スタンドの灯りで顔の半分ほどを照らしている明石が、薄っすらとクマが出来た両目を擦りながら机に向かっていた。えんぴつを握ったまま目を擦る明石は僅かに充血した目を何度かパチパチと瞬きさせると、疲労の色が混じった声を伴って溜め息を吐く。しかし机上にある書類の束を認めるや、彼女はすぐさまそれに覆い被さるようにして顔を近づけ、再び右手に握った鉛筆を走らせしていく。

それは彼女のお仕事である患者のカルテと報告書。だが明石がこうして眠気や疲労と戦いながら一生懸命に書類仕事に励んでいる事には、それが自身のお仕事であるという事以外にもちよつと別な理由があった。そしてその理由とは、彼女が第二艦隊の仲間達と行動を共にしていない事の原因でもある。

時は遡る事、1ヶ月ほど前の8月25日。

明石艦を含めた第二艦隊が横須賀を出港したその日。明石とは同じ第二艦隊の仲間である五十鈴^{いすず}率いる第三潜水戦隊は、南鳥島沖^{みなみとり}の海域で行われている第一潜水戦隊との合同訓練に向かう為に第二艦隊本隊とは別行動となっていた。仲の悪い神通^{じんつう}は姿を見せる事は無かったものの、明石や那珂^{なか}も含めた第二艦隊の幹部クラスの艦魂達に手を振って見送られた三潜戦。戦隊長の五十鈴も帽子を振ってくれ、友人とは違ってそんなに彼女の事を嫌っていない明石もまた笑みを伴って三潜戦の仲間達に帽子を振る。それは何気ない仲間との一時の別れの光景で、艦隊勤務においては珍しい事ではない。

しかしこの4日後、彼女達を含めた帝国海軍を揺るがすような事件が起こった。

三潜戦に先駆けて南鳥島沖に集結していた一潜戦において、なんと訓練中に急速潜行をおこなった隷下の第30潜水隊所属である伊ー67潜水艦が潜行の際の艦の不仰角操作を誤り、そのまま沈没し

てしまったのである。もちろん艦長を含めた約70名にも及ぶ乗組員達は、誰一人として救助される事は無かった。

この事故を受けて海軍の潜水艦を隷下に持つ各艦隊には緊急の点検と運用の一時停止が通達され、当然それは明石の仲間である三潜戦でも同じだった。すぐさま三潜戦は出発地である横須賀へと回航され、所属の潜水艦はすべて棧橋に繋留されての徹底的な点検と整備補修が行う必要が出てきた。しかしこの当時の横須賀海軍工廠は最新鋭の艦艇の建造でその能力に余裕が無く、横鎮隷下の潜水艦に対しても同様の処置をせねばならないとあって、三潜戦の全艦艇に及ぶ点検や整備補修は人員の面でも設備の面でも対応が難しかった。そこで最新鋭工作艦である明石艦に白羽の矢が立った。

第二艦隊司令部を通して明石艦には三潜戦の点検と整備補修任務が言い渡され、それまで第二艦隊と行動を共にして来た明石艦は津軽海峡の入り口を目前にして反転、南下。良好な棧橋といった港湾設備を持つ石巻港を拠点に設定し、三潜戦と合流するやすぐさま所属の潜水艦への点検を始めたのだ。

もちろん艦魂である明石も同様に彼女達への念入りの健康診断を実施したが、沈んだのは同じ海大型の潜水艦であったと知った三潜戦の潜水艦の艦魂達は、身体はなんとも無くとも精神面での大きなダメージを受けていた。

『潜るのが、怖い……。』

そんな言葉を漏らして泣き出す者も出る始末で、9人の潜水艦の艦魂を元氣付ける為に明石は戦隊長の五十鈴と美味しい食べ物を調達してやったり、夜遅くまでかけて一隻一隻の潜水艦に対しての点検を彼女達自身で行ったりと多忙な日々を過ごした。幸いにして全員の身体、及び分身に異常を認められず、なんとか元氣を取り戻した三潜戦の者達はい今日の朝になってようやく訓練に戻っていつ

たのである。

連日夜遅くまで続いた点検に加え、仲間を失ったショックで眠れなくなった者の傍に一晚中付き添ってやった事もある明石。やつの事で取り戻した笑顔を伴って旅立っていった三潜戦の艦魂達を思い出すと安堵の温もりが胸の中に広がっていくが、それに反して彼女の身体は全身綿の様に疲れきっている。僅か一時間だけの睡眠で朝を迎えた日もあったし、おにぎり二つと一皿のおしんこだけで一日の食を終わった時もあったし、お風呂は最長で3日間も入れなかった事もあった。明石にとっては文字通り激動の日々だった。もともとその時は仲間の死という現実とそれに伴う恐怖に怯える仲間達を救う為に必死であったからか、明石はそんな日々を過ごす中で疲労を覚える事はあっても辛いとか苦しい等と感じた事は無い。

だが彼女はこの時、身体に残った膨大な疲労感にその記憶を思い出すと、それまでの苦労を少しずつ感じ取り始めた。

『ううううんんん・・・』

身体の節々の叫びを代弁するかの様に声を上げた明石は右手に持っていた鉛筆を机の上に転がすと、椅子に座ったまま大きく身体を仰け反らせて再び両手で目をぐりぐりと擦る。感覚の薄い瞼に刺激を与えるも瞼の重さは変わる事は無く、改めて触れた今日のお肌はろくに洗面もしていないからかどこかぬるぬるとした感触。お腹の中から骨を伝って響いてくる空腹の音も、今だけは明石の瞼を軽くしてくれる事は無い。目を擦る両手を額に当てるとさらにその欲求は高まり、明石は額の上に手を乗せたまま瞼を閉じて深い眠りへと落ちていった。

顔も洗わず歯も磨かず、服も脱がずに真昼間から眠る明石。

決してそれを嫌だと思ふ事は無かったが、この石巻での数週間では明石は帝国海軍における艦魂のお仕事の辛さを身を持って思い知ったのであった。

その後、明石艦は第二艦隊司令部から函館方面にいる艦隊への合流中止を命ぜられ、10月の観艦式の日程が差し迫っている事もあるが、単艦で出発地である横須賀へと帰る事になった。

北方海域にて新たな友人である宗谷と会う事が適わなかったのは残念であったが、それでも明石艦の到着に遅れて3日後には第二艦隊の仲間達が横須賀へと戻り、明石はさっそく友人である神通から宗谷が元気に頑張っていた事を伝えられて喜ぶ。まして宗谷の観艦式への参加が決まったとの知らせは彼女とのそう遠くない再会を明石に伝えるのには充分で、神通や那珂の不参加を残念そうにしながらも観艦式への期待を大きく膨らませる。もともとその話しの最中に霰が^{あられ}つつい口を滑らせて、明石には黙っておこうと二水戦の中で決めていた宗谷から貰ったローストビーフの缶詰の事を話題に出してしまい、神通はせがんでくる明石を宥めるのに一苦労してしまう。舌打ちを放って霰を睨みつける神通に明石は腕を引っ張って自分の分の缶詰を問うが、やがて観念した神通が全て食べてしまったと言うと明石は眉を吊り上げて怒り出す。

『それでも友達かあ!?!』

食べ物に関してはずぐに怒る明石。元より彼女は神通を怖がるような事は無い為にその怒り方も半端な物ではなく、二水戦の艦魂達は明石に対して総力を挙げたご機嫌取りを行うハメになってし

まうのであった。

そして月も変わった10月1日。

第二艦隊の艦魂達の中では、四戦隊の高雄艦^{たかお}の長官公室を用いて毎月恒例の戦隊長会議が行われた。整備入渠の予定を入れられた四戦隊の摩耶^{まや}や七戦隊^{みくま}の三隈、まだ訓練から戻っていない五十鈴を含めた三潜戦の面々など、ちよつと所属する仲間の顔が少ない中での会議であったが、そこで艦隊旗艦の愛宕^{あたご}から伝えられた議題に彼女達は仲間の欠員を忘れて顔色を険しい物にする。なぜならそれは支那事変という有事の下、日本が国際社会における新たな一步を踏み出した事を示す物だからであった。

まず9月23日をもって日本は、欧州での情勢に伴って軍事的、政治的な権力の空白を生じていたフランス領インドシナ、いわゆる仏印への進駐を行った。といってもこの仏印への進駐に関しては、いづれ軍を向ける事になるだろうという認識を持っていたのは一般人どころか艦魂達も同じであった。

なぜなら仏印への進駐は昨年の9月から始まった欧州戦線でのドイツによる破竹の進撃でヨーロッパ屈指の大国であるフランス国が降伏した事がそもそもの契機で、欧州から遠く離れている事から宗主国であるフランスの仏印に対する影響力が弱体化する事を見越していた日本は以前からここに軍事的、政治的橋頭堡^{きようとうぼ}を築こうと画策していたのである。6月にフランスが降伏して以来、日本は仏印に対して熱い眼差しを送り続けており、降伏した翌日に駐日フランス

大使が「自発的に中国との国境線を封鎖した。」という通達を行ったにも関わらず、西原一策にしはらこうさく陸軍少将を团长とした総勢40名の監視団を派遣して国境線の封鎖状況を監視すると共に、仏印内での日本軍の通過や航空基地の使用、軍事物資の集積貯蔵、仏印経済の日本経済への統合といった協定の交渉に当たらせていた。

もちろんその理由は一向に終わりが見えない支那での情勢だ。

国共内戦に代表されるように国としてはまだ纏まっていなかった中国の事情を良い事に勇んで海を渡ってみた日本軍であったが、広大な大陸の中程まで攻めてみてそこに白旗が翻る事は無かった。各戦場での状況はいずれも日本軍の圧倒的な勝利が目立ってはいるが、支那の軍は負けても負けても決して諦める事無く、どこまでも続く支那の地平線を背に装備の新旧や老若男女をも問わずに敢然と立ち向かってくる。自分の国が他国に蹂躪されているのだから当然だった。

そして自分達の未来と国の存亡を賭けた支那人達の飽くなき抵抗に、そもそもが貧乏な島国である日本は次第に息切れを始めた。国内の経済はみるみる内に疲弊し、支那事変の解決を口実に行った物品の流通に対する統制はそれに対して一層の拍車をかけた。主食の米や調味料どころか、果ては炊事や暖を取る為に用いる木炭まで規制しているという銃後の実情。国民はそれに対して声を大にして叫びを上げるような事は少なかったが、陸軍と海軍を含んだ政府首脳はそんな国内の事情に一抹の不安を覚えていた事も事実であった。

このままではせっかく手に入れた近代国家たる体裁と繁栄をむぎむぎと失うかもしれないし、南方にて顕著な列強による植民地化という現実も日本にとっては決して絵空事ではない。

そこまで考えた政府首脳は、早急にして、何一つ捨てる事無く日本が生き残る事ができるという方策を考えねばならなかった。

既に国連を脱退して国際社会の中でも孤立していた日本。まして戦う相手であった中華民国には西洋列強の強力な支援が行われており、間接的に日本は列強との戦いに挑んでいる状態である。そんな中で日本が何一つ失う事無くこの情勢を乗り切る為には、支那事変の早期解決を是が非でも果たさねばならなかった。その切り札が仏印への進駐である。

仏印は地形的にも支那南部へと陸続きであり、中華民国に対する列強の支援ルートの一つである雲南鉄道はこの仏印の首都であるハノイが発源地であった。その為にここに橋頭堡を構える事が出来れば支那への強力な支援を絶つ事が可能で、それはそのまま支那での膠着した戦線に影響を与える事は必至。故に仏印は何が何でも日本にとつては抑えておきたい地域であったのだ。

しかし当の仏印の統治を本国より任され、さらにフランス海軍極東艦隊司令長官をも兼ねていたドクー総督はそんな日本の真意を見抜いており、窮余の策として日本との交渉に関しては時間をかけて引き伸ばしを行なう事に決めた。故に彼は交渉にあっては幼児が描いた水彩画の様に滲んだ回答を返すばかりで、本国が降伏したというのに二ヶ月ほどが経っても、正式に進駐する事を約束した松岡・アフリ協定が8月30日に成立しても、進駐の実現に関しては一向に目処が立たず埒が明かない状態であった。

これに業を煮やした軍部の強硬派である陸軍参謀本部作戦部長の富永恭次少将や南支那方面軍参謀副長の佐藤賢了大佐らは、進駐における交渉と部隊の現地指導を名目に仏印に入り、9月22日を期日とした武力進駐をチラつかせての強談判を行う。もはやそれは脅迫であった。

そして9月23日の午前零時、南支那の鎮南関ちなんかんを発った陸軍第五師団は仏印との国境を越境。現地軍との銃撃戦を展開しながら目標であるドンダン、次いでラーソンへと進撃した。軍事衝突という既成事実が起こってしまった以上、日本軍は自衛処置と位置づけて退

く事はせずに一挙に敵の殲滅を目的とした行動を起す。満州事変、支那事変の勃発の際にも用いたお得意の作戦である。

こうして仏印への進駐は武力進駐の様相と化し、2日後の9月25日になって仏印は降伏。日本軍は北部仏印への進駐を完了させたのだった。

しかしこの仏印への進駐には支那の政府以外に、もう一つ別な国の政府へもメッセージを送る意味を含んでいた。それは日本がこの仏印への対処をしつつも、蘭印に対しても13品目に及ぶ原料資源の買い付け要求を突きつけていた事からも明白だった。日本とは広大な太平洋を挟んで対峙する国にして、最大の資源輸入国でもあるアメリカ合衆国である。支那事変の終息が近い事と資源が豊富な南方への足がかりを得た事を悟らせ、これまで引き出せなかった外交上での譲歩を引き出すというのがその狙いである。アメリカとの関係は満州事変の時より火種を抱えており、これに対して如何なる手段を用いても明るい前途を示すという事が、近代日本における軍部も含めた政府首脳達の悲願であった。

だがその効果は、日本が思い描いていた物とは全く逆の物であった。

実は日本が南方進出を企図していた時期、米政府の中ではモーゲンソー財務長官、スチムソン陸軍長官などの高官が『直ちに日本への経済制裁として石油、くず鉄、鋼鉄の資源における対日全面禁輸を行うべき。』と鼻息を荒くしていたのだが、これに対してハル国務長官は『悪戯に日本を刺激して南方進出に駆り立てかねない。』と応じていた。日本と同じ様に、米政府の中もまた決して一枚岩ではなかったのである。しかし程なくしてそんな慎重な姿勢であった彼の元には日本軍による仏印進駐の報が寄せられ、ついにハル国務長官もくず鉄と鉄鋼に限った対日禁輸処置に同調する事になる。

そしてその決定が紙面に大きく報ぜられた翌日の9月27日。日

本はドイツ、イタリアと供に世界に新秩序を打ち立てる事を目的として、お互いに同盟を結ぶ。日独伊三国同盟の誕生であった。

もつとも政治のお話には疎い艦魂達にとって、ドイツやイタリアとの同盟の事が良い事なのか悪い事なのか良く解らない。とりあえず仏印という地域が新たに日の丸を掲げたという事ぐらいしか彼女達には理解できず、興味を示す事も無かった。その代わりに仏印での進駐に関しては、会議室の中にいる一部の者達が熱心に耳を傾けて声を荒げる。

『じゃあ、武力進駐に関しての協議もしないまま、陸軍の部隊は勝手に上陸を行ったという事ですか？』

不機嫌な心の音色を声に乗せて奏でるのは五戦隊の戦隊長、那智なちであった。彼女と妹の羽黒はぐろは愛宕よりも歳上ながらも、上司に当たる愛宕に対してはしっかりと敬語を用いて会話する。神通や那珂に比べると僅かに歳下である二入だが、20代半ばのその外見に似合わない冷静沈着で落ち着き払った性格は仲間内でも評判は良い。しかしあからさまに怒りを込めている彼女の声は会議室の空気を一刀両断するかの如く切り裂き、明石を含めた室内の者達は思わずその迫力に息を飲む。明石にとっては普段から怒りんぼの神通の怒号よりもさらにおっかない声であった。

やがて静まり返る部屋の中に那智の声と険しい表情の余韻が広がりかけるが、艦隊旗艦である愛宕はそんな室内の空気にも表情を変えずに口を開く。

『うん、鳥海ちようかいからの報告ではそうらしい。護衛していた隊への相談もなく、明け方の午前4時に上陸用舟艇を発進させたんだそうだ。』
『これだから陸助は……。』

愛宕のいつもと変わらぬ声を受けても、那智はその身体全体から発せられる怒りの色を静めることは無い。呟くようにして陸軍に対しての愚痴を吐きながら頭に乗せていた軍帽を取ると、彼女は机の上に投げつけるようにしてその軍帽を放り、腕を組んでしかめた眉と視線を机の上へと投げる。第二艦隊の艦魂達の中でも大の陸軍嫌いで有名な彼女だけに、仏印進駐の際に起きた陸海軍のとあるすれ違いにはかなりご立腹の状態になったらしい。

明石にとっては大人しくて経験も豊富で、それでいて落ち着いた物言いを常に変える事無く接してくれる優しいお姉さんである那智。そんな彼女がこうも怒りの色を明確に放つ事に、那智とは長机を挟んで向かい側の席に座っている明石は驚きの表情を隠せなかった。そんな中、愛宕は小さく溜め息を放つと、仏印進駐に際して陸軍の上陸を支援する役目にあった実の妹から上がってきた報告をさらに皆へと教える。連合艦隊とは完全に指揮権が違う支那方面艦隊の出来事は普通なら一介の艦隊の旗艦である愛宕の元まで来る事はないのだが、愛宕は直接その出来事を体験する事になった当事者から情報を得ていた。実は仏印進駐に際しての陸軍部隊の支援を行っていたのは、明石も廈門アモイで一度だけ目にした事のある鳥海率いる第二遣支艦隊の隷下部隊だったのだ。

『出雲中將いずもも苦勞しておられるだろうな。さすがの鳥海も、鳥海の中に居る2CFの艦隊幹部も怒ったらしくて、陸軍の部隊を放り出した後、護衛の隊をさっさとドーソン沖からハイフォン港に戻しちゃったんだそうだ。』

『私でもそうしますよ、艦隊旗艦……。』

『まあ、そう怒るな、那智大尉。この件はすぐさま出雲中將のCS

F司令部を通して、東京の軍令部に伝えられたそうだ。そしたら軍令部の人間達どころか、天皇陛下においてもお怒りになったらしい。すぐに大海令が出て、今回の仏印進駐に関する海軍としての協力は、今後一切しない事になった。』

『それは・・・、仏印に近い海南島や広州の海軍管轄の基地が、陸軍にとっては使用でなくなったという事ですか・・・？』

『うん。仏印における陸軍の物資の調達やらなんやらは陸路でやるか、独自に港と船を手配してやって貰う事になるだろうな。』

『・・・ざまあみろ。』

愛宕の微笑を伴った説明を受けた那智は吐き捨てるように言った。まだまだ艦魂としても海軍のお船としても新参である明石は何故に那智がこのように陸軍を毛嫌いしているのか解らなかったが、恐れ多くも天皇陛下の御裁可を受けて伝達される大海令が出たという事に、今の那智と同様に海軍を統べる偉い肩書きの人間達が余程怒ったのだろうと考えを巡らす。それは健軍以来長きに渡って繰り広げられてきた、同じ皇軍を成す陸軍と海軍のすれ違いの一端。帝国海軍と帝国陸軍の間に存在するマリアナ海溝よりも深い溝なのであった。

また、明石は愛宕が口にしたアルファベットの羅列を記憶の中かなんとか引っ張り出し、彼女が言った事の内容を解読しようとする。それは人間も用いる帝国海軍の中の名称符号であり、以前に廈門で鳥海と会った事から明石はアルファベットの羅列の意味を片方だけはふと思い当てた。すると明石はちょっと身を屈めて隣の席にて会議のやりとりに耳を傾けている神通の腕に手を伸ばし、服の袖を小さく引っ張って思い当てた符号の意味を確認する。

『神通、神通・・・。』

『ん、なんだ？』

『2CFって鳥海さんが旗艦やってる第二遣支艦隊で合ってる？』

まだまだ海軍の者としてはひよっこである明石らしい質問。神通は笑みを浮かべると、会議の邪魔にならぬよう静かな声でその問いに答える。

『うむ、正解だ。CSFは解ってるか？』

『うーんと……。しいえすえふ……。』

『支那方面艦隊だ。第二遣支艦隊の上級部隊。』

『支那方面艦隊かあ、ありがと。』

明石はお礼を言うときすぐさまポッケに忍ばせていた小さなメモ帳を取り出し、神通より教えてもらった名称符号の意味を書き記していく。すっかり今日の日付も書いてから内容を書く辺りに、神通は明石の頑張り屋な性格を察して小さく笑った。まだまだ自分は青二才であると、明石は十分に身の程を理解しているのである。その為に生まれた明石の学ぶ事に対する貪欲さと謙虚な姿勢は、普段から夜遅くまでもくもくと二水戦の戦隊長として勉学に励んでいる神通にとっては何か親近感が湧くのであった。

私立神通学校の小さな課外授業が行われている一方、会議室の中ではそれまで響いていた愛宕と那智の物とは違う声が響き始めた。

『今頃は陸軍の偉いさんが陛下の前でベソを掻いてるさ、きっと。だから怒るなよ、那智。』

『……良い気味です。』

まだちょっと怒りが治まっていない那智に、愛宕のすぐ横の席に着いていた高雄が声を掛ける。愛宕とは違って陽気で冗談好きな彼女の明るい声は硬直していた部屋の空気を柔らかい物にし、次第に那智の吊り上がっていた眉もだんだんとその傾斜角を浅くしていく。

やがて高雄は那智のそんな変化に笑みを湛えて頷くと、得意の冗談を飛ばしてそれまでの会議室の雰囲気ガラリと変えてみせる。

『そうかい？わたしは陛下に何度かご乗艦して頂いた事があるから解るけど、陛下のお説教は結構長いから陸さんのお偉いさんが可哀想に思えるなあ。軍医中将与良い勝負だよ、ありやあ。』

高雄の声が響くと同時に、長机の両脇に並んで座った者達から一斉に笑い声上がる。日頃からムスツとしている神通も顎を引きながら小刻みに肩を動かしているくらいで、それは那智も例外ではない。さっきまでの静かな怒りを滲ませていた顔が嘘かと思えるほどに、那智は口に手を当てて笑っていた。

もちろんそれは明石も同じで、まして高雄が冗談として口にした「軍医中將」とは彼女も良く知る自分の師匠であつたのだから無理も無なかった。その説教癖の根本にある心遣いは有難い物ながらも決して叫ぶ訳でも頭ごなしに怒る訳でも無いその人のお説教の持つ迫力と怖さは尋常ではない。連合艦隊の全ての艦艇を統率する長門ながとが尻尾を巻いて逃げ出し、師匠として心の底から彼女を尊敬している明石ですら辛さを覚えてしまう程のそれは、帝国海軍の艦魂社会においてもかなり有名だった。無論、それは朝日あさひの事であり、経験豊富で日露戦争での華々しい活躍を持つ彼女に抗う事など、明石を含めた現代の艦魂達には逆立ちしても出来ない。今この場にはいないが、声を上げて笑う明石の横に座っている神通の師匠で、帝国海軍の中でも最も顕著なドカタ型の性格を持つ金剛艦こんごうの艦魂が、朝日の説教を前にして泣いて詫びを入れたという伝説もある。

そんな朝日のお説教は第二艦隊の戦隊長級の艦魂達にとっては身近にある恐怖の代名詞のような物であり、目を閉じるとありありと瞼の裏にその光景を蘇らせる事が出来る代物。仏印では勝手な行動をしたとは言え、それと同じ様なお説教を陸軍が受けるという高雄の冗談は、会議室にいる面々には容易に想像できて可笑しい事この

上なかった。言った本人である高雄もつられて笑い、愛宕もそんな室内を一瞥した後に静かに笑い声を上げる。そしてふと高雄が放った陸軍を氣遣う言葉にも那智は機嫌を悪くする事無く、むしろ何度も頷きながら表情の笑みの色を増していくのだった。

『はははは、氣の毒にねえ。』

『『『ははははは。』』』

『あっ！明石、軍医中將にチクンないでよ！？わたしまで陸軍と同じ目に会う事になるんだからね！解ってる！？』

高雄は朝日と親しい明石の存在を思い出して急に声を張り上げるが、彼女の声により会議室内の声は更に音量と音階を上げてしまう。なぜなら高雄が放った言葉の最後の辺りは件の朝日の口癖を模した物で、しかも高雄はまるで朝日の話す際の癖を模すかのように両手を大きく動かして明石に声を放ってみせたからだ。もちろん高雄のそれが朝日のモノマネである事は明石を含めたその場にいる全員が知っており、皆一様に痛みを帯び始めたお腹を抑えて笑い声を上げた。

こうしてその日の戦隊長会議は明るい雰囲気を持続したまま閉会し、彼女達は会議終了後に愛宕と高雄が調達してくれたお菓子を頬張って抱腹した戦隊長会議の余韻を楽しむのであった。

ちなみにこの日の事は何故だか上海方面行動中の朝日の耳に入っており、高雄を含めた第二艦隊の艦魂達は二ヵ月後の11月になって整備の為に戻ってきた朝日により、穏やかながらもとてつもない恐怖と迫力を兼ね備えたそのお説教を十二分に味わう事になる。帝國海軍に嫁いで41年。その経歴で培ってきた先輩の地獄耳の程に、彼女達は軽々しい先輩への言を大いに反省する事になるのであった。

第六二話 「窓より来る風」

10月度の戦隊長会議を終えた明石^{あかし}は自分の艦へと戻り、舷窓から招かれる麗らかな秋の陽の光と潮風を浴びながらベッドに横になって、話の弾んだ会議の思い出とその余韻にほんのりと浸っていた。もちろん彼女の閉じた瞼の裏に蘇る真新しい戦隊長会議の記憶はただ楽しいばかりでなく、眼前に迫った紀元2600年記念特別観艦式に関する大事な案件もそこには含まれている。

今回の観艦式は特別観艦式と呼ばれる物で、恒例の大演習観艦式のように大規模な演習を伴わない観艦式なのだそうであり、今回は移動式ではなく普通の停泊式の観艦式という事であった。普段から己の力と技に磨きをかけてきた戦闘艦の艦魂達にとってはちよつと残念らしいが、そもそも海軍生活の中で戦闘を生業としていない明石にとっては特に憂いを抱くような事ではない。

明石はやがて閉じていた瞳をゆっくりと開けると、ベッドの上で大の字になったまま上着のポケットから一枚の紙切れを取り出す。四つ折りで明石の手のひら大の大きさのその紙はちよつとくすんだ様なベージュ色をしているが、白抜きで描かれた波頭と赤抜きで描かれた鳳凰がなんとも勇壮で高貴な威厳をもかもし出している。そして鳳凰と波頭をバックに、大きな十六条旭日旗と共にそこに大きく書かれた黒抜きの文字が明石の心を跳躍させた。

「紀元二千六百年記念特別観艦式 御式次第・式場図」

明石の手にしたそれは今回の観艦式の式次第であり、その表紙を目にした明石は待ちに待った観艦式がいよいよ迫ってきたのだなと改めて実感し、自然と緩んでしまう口元を抑えることが出来ない。やがて彼女は四つ折りの式次第の左右見開きを広げてそこに紙面一杯に描かれた鳳凰をしばし眺めると、今度は上下の折り返しをゆっ

くりとめくってみる。するとそこには先程までの鳳凰に変わり、颯爽と波間を駆けるとある艦艇の写真が印刷されていた。

まだまだ帝国海軍歴の浅い明石は如何に帝国海軍艦魂社会の一員と言えども、まだ一度も会った事のない艦艇の方が断然に多い。母港の呉の中ですらもまだお話した事の無い者だっている。しかし明石はそこに印刷された写真の艦艇を、即座に記憶の名から検索する事に成功する。なぜならその艦艇の命である者は、以前に明石の治療を受けた事がある者であったからだ。明石はその艦艇の名前を脳裏に浮かべるや、ふと口を開いてそこに写る写真の感想を漏らしてしまう。

『比叡^{ひえい}さん、かつくいゝ。』

それは以前、呉で朝日の修行を受けていた際に包帯の除去をした比叡艦^{あさひ}。朝日と同じ明治生まれという事を初見では絶対に認める事が出来ない艦影を持つ比叡艦は、最新の設備を持って今回の観艦式においては通算3度目の御召艦を担当する事が決まった。帝国海軍では浅間艦^{あさま}の4度に続いて歴代2位の成績だが、比叡艦が御召艦を努めた経歴は今年で7年目。年数だけなら先輩を上回っている。

明石はその事に呉での比叡の思い出を蘇らせ、改めて彼女の凄さを思い知る。しかしそこに尊敬の念が沸く前に、明石は記憶の中にハッキリと残る比叡の整形美人っぷりを思い出してしまう。

朝日の容姿を鑑みた計算では30代半ばの容姿を持っている筈の比叡なのだが、艦橋の改装を機に彼女の顔は明石とドッコイの20代になるかならないかのうら若い乙女の顔つきに大変身。陽気な彼女は澄ました顔で仲間達の元へ赴き、嫌味を込めて自身が手に入れた若さを見せびらかすのだった。

『ふふふ。』

つつい声漏らして脳裏に残る陽気な先輩の姿を笑う明石は、今度は紙面の表裏を反転させて裏面に目を通す。上側の方には式次第として細かな観艦式の情報が記載されており、下側には式場図と題されて観艦式の際の各艦艇の配置が記されている。一辺が数キロにも及ぶ線で囲まれた海域に各艦艇は6列横隊となつて整列するらしく、明石は特務艦艇が属する番外列の5番目が定位置とされていた。"番外"という言葉にはちよつと抵抗を覚えるが、それでも明石の心は落ち込んでしまう事はない。それは式場図の中に一際太い黒線で御召艦の航路が書かれているからで、それこそが明石が拝謁艦として通る事が出来る航路なのであった。明石がずいぶんとお世話になつてゐる長門ながとや、艦魂社会の大親分として名を聞かされた金剛こうなど、そうそうたる顔ぶれが停泊する式場を、明石は招待客を乗せて航行する事が許されている。これは戦闘艦にはできない、特務艦だけに許された特権でもあった。

この時ばかりは明石も「特務艦で良かった。」と自身の身の上を大いに喜ぶ。いつも行動を供にしている第二艦隊では特務艦と類別されるのは自分だけであるし、今まで顔を合わせたことのある特務艦といえは患者として出会つた宗谷そうやと師匠の朝日しかない。役割も戦う組織たる帝国海軍の中では地味な後方支援であるから、神通じんつうや那珂なか、愛宕あたごといった仲間達のように見物人の視線を集めるような事もこれまではほとんど無かつた明石。しかし今回は違う。98隻にも及ぶ参加艦艇が並ぶ中を、明石艦を含めた特務艦達は堂々と行進する事が出来るのだ。

そこまで考えた明石は胸の奥で踊る心を抑えきれずに、ふと上半身を起して笑みを舷窓に向ける。相変わらず開け放つた舷窓が招き入れる横須賀の潮風と陽の光りは、ほんのりとした暖かさを滲ませていて明石にはどこか気持ち良かった。

するとその時、舷窓の向こうからは遠い信号警笛が響いてきた。

今回の観艦式の会場である横浜沖に近い事から集結地として機能

する横須賀は、第二艦隊の艦艇どころか連合艦隊の隷下の艦艇のほとんどが集まっている。その為に横須賀の波間は軍艦旗を背負った艦艇が所狭しと錨を下ろしており、港内の交通は実はちよつと危険度を増している。故に信号警笛が飛び交うのは、最近の横須賀の波間では決して珍しい事ではなかった。

しかし明石はその警笛を耳に入れると、戦隊長会議で神通より教えてもらった事を思い出す。

『一応は初めて会う艦魂ひともいるんだろう？私もそうだが、同じ艦種の奴には顔を見せておいた方がいいぞ。』

それは人間の世界でも見られる社会という物の一端。特に日本のように上下関係に謙虚さと礼儀を尽くすのが筋とされる社会体系では日常茶飯事である、挨拶回りという物だ。元来、他人との出会いに臆病になる事がない明石は、友人の言葉を思い出すやすぐさま式次第に視線を投げて挨拶回りの相手を探し出す。楽しみな事この上ない観艦式の事で落ち着きを失っている明石の心は、そこにズラッと書かれた98隻にも及ぶ艦艇の名前を瞳に入れても静けさを取り戻す事は無い。

『いよいよし、片っ端からいっちゃえ！』

そんな言葉を放った明石はベッドから飛び跳ねると、小走りで部屋を飛び出していった。

一方その頃、明石の友人である神通もまた、挨拶回りとしてと横

須賀在泊のとある艦へと足を運んでいた。

ぶつきらばうな物言いで、気に入らない相手には例え先輩だろうがなんだろうが絶対に敬意を払おうとしないという神通が、挨拶をする為に他人の所へわざわざ赴くというのは非常に珍しい。だがこのとある艦の艦魂に対して挨拶をするのは、神通にとってはさも当然の事であった。

随分と使い込まれた感のある艦内通路を甲高い足音を立てて歩く神通。通路の一角の壁は経年劣化からかへこんでいる所もあれば、何の痕跡なのか黒いシミが出来ている所もある。そしてそんな通路の壁にポツンと張られていた紙切れに気付いた神通は、歩みを止めて紙面の内容を読んでみた。達筆にして豪快な筆跡で書かれたその内容は、帝国海軍の中でも最も厳しいというこの艦の風紀を神通へと良く伝える。

「艦内各部、真水ノ無断使用ヲ働イタ者ハ、断固死刑トスル事ヲ得。」

上は元帥から下は四等水兵まで、海軍の者はすべて栄えある天皇陛下の赤子というのが建前の帝国海軍において、こうもまた明確に死の制裁を謳う艦内規則は珍しい。もっとも神通にとってそれは以前から知っているこの艦の最大の特徴であったので、紙上の文面を見てもさして表情の色を変えることは無い。ただそこに笑みを浮かべる事も彼女は無かった。

『・・・・・・・・』

真一文字に結んだ唇と鋭さを失わない瞳のまま、神通はただ無言で艦内の通路を再び歩き出す。彼女の姿はいつも通りと言えはいつも通りであるのだが、夏でもないのに首筋に僅かな汗を輝かせている。それは今から挨拶に向かう相手が、神通にとっては色んな意味

で特別にして、唯一恐れるお方であるからというのが真相であった。やがて通路の闇中に浮かび始めた扉を瞳に入れ、神通の胸の鼓動はそのテンポを早くする。その扉の向こうにいるであろう相手は彼女にとっては長い付き合いなのであるが、それだけに彼女は胸騒ぎを一段と増す。その内に扉の前まで来て扉と正対した神通は、肩から下の服装を直してそこにあっただしわを消し始めた。もちろんそれが存在していたらどうなってしまうかを彼女は嫌と言う程に身体で知っており、袖や帽子の被り具合まで直す有様だった。

『……ふう……。』

服装の隅から隅まで修正した神通は、安堵と共に弱冠の恐怖心も混じった溜め息を静かに吐くと、いよいよ覚悟を決めて扉の向こうに居るであろう人物へと声を上げようとする。だが彼女の口から息が吐き出される前に、突如として彼女の後ろからは予想だにしない人物の声が発せられた。

『……なにやってんの、神通？』

『わっ！あ、あ、明石……！』

すっかり扉の向こうへと意識を集中していた神通は思わず声をあげ、声がした背後に驚きの表情を向けた。そこにいたのは友人である明石であり、彼女はちよつと青ざめている感じの神通の顔をキョトンとした顔で覗きこんでいた。

しかし神通はいきなり無警戒であった背後から響いてきた彼女の声ばかりではなく、そもそもこの艦に友人である明石がいるという今の事態その物にも驚いていた。なぜなら帝国海軍の艦魂社会において、この艦を好き好んで訪れる者が滅多にいないことを知っているからである。

すぐさま神通はその事を明石に聞いたさすが、傍から見ても完全

に取り乱している神通の言動に明石は首を捻りながら声を返す。友人としてこれまで付き合ってきた中で、いつも冷静な神通がこうも慌てふためいている理由が明石にはトンとよく解らなかった。

『おま、お前、なんでここにいるんだ・・・！？』

『挨拶回り・・・。神通がやれって言ったんじゃん・・・。』

『お前・・・、ここがどこか解ってるのか・・・！？』

『どこって・・・。』

眉をしかめた明石は神通の問いを受けて、手にしていた観艦式の式次第を顔の前に持ってきて視線を流す。

まだ参加艦艇が全部揃っていない横須賀の海だが、明石は甲板から一望した海原で最も目立った艦影を目にしてまずはそこに行ってみようと決めた。港の交通船や曳船の艦魂にその艦の名を尋ねた彼女は、その艦が自身と同じ観艦式への参加艦艇である事を知って挨拶の為にやってきたのだが、艦の名前を教えるや突如として怯えて逃げ出した曳船の艦魂と、向かった先にいた友人である神通の稀有な言動に、明石は自分が来る艦を間違えたのかと思って式場図に書かれた艦名を確認する。

『ここって、観艦式参加予定の金剛艦だよね・・・？ほらここ、第三列の一番目・・・。』

式次第を近づけて指差してみる明石だが、神通はそんな明石に呆れて額に手を当てて溜め息を吐く。実は彼女が明石に教えた挨拶回りとは、明石とは同じ特務艦同士でのお話であった。人間で言えば職場を同じくする者達なのだから、顔を覚えておいて貰ってこれか、らのお仕事をし易くしろという意味合いである。ところがどっこい、怖いもの知らずの明石はそんな神通の心遣いを取り違え、どうやら参加が決まっている艦艇の全てに挨拶をする气らしい。目を閉じて

絶句している神通の横で、明石は大きな目をパチクリとさせて神通の声を待っていた。

するとその時、二人の正面からは重苦しい金属音が突如として鳴り響き、二人はハッとしてそこにあった扉に顔を向ける。そして神通にとっては久々に、明石にとっては早速にして極めて単純明快にその性格が読み取る事のできるという、金剛艦の命である者の出迎えを受ける事になった。

『お前等ゴチャゴチャうるさいんじゃ、こんのたわけが。』

刹那、横須賀の波間に浮かぶ金剛艦の中からは、除夜の鐘を彷彿とさせる重い衝撃音が二回なり響き、それに続いて明石と神通の短い悲鳴が発せられた。その音は人間達には聞える事は無かったが金剛艦の周りを忙しく動いていた交通船や曳船の艦魂達にはハッキリと聞えており、彼女達は音が発せられたのが金剛艦だと解るや一目散に自身の分身の中へと姿を消す。そして彼女達の乗組員は、突然にしてエンジンの調子が良くなり始めた船の様子に驚くのだった。もちろん彼女達は皆一様にして、この金剛艦の半径30メートルの範囲から逃げようと必死に願っていたのである。

一方、頭から発せられる激痛に尋ねたお人が神通のお師匠様である事を十二分に納得した明石は、同じく頭に大きなたんこぶを作っている神通を隣にして室内へと招かれていた。神通のげんこつを曲がりなりにも何度か受けてた事のある明石だが、この度初めて食らう事になったげんこつのダメージはこれまでの友人のそれとは比較にならないほど強力な物。僅かに表情を歪めている神通とは対照的

に、涙目の明石は緩く齒を噛んで激痛の震源地である頭のとっぺんを撫でていた。そしてもちろん部屋の中央で立ち尽くす二人が顔を向ける先には、この部屋の主にして艦の命でもある金剛がどつかと椅子に腰を下ろしていた。

『最近の若いモンはやかましくてあかんわ。挨拶もせんと、いつまでも部屋の前で馬鹿面晒してギャーギャー騒ぎおってからに。』

ドスの効いた関西訛りの声が明石と神通の威勢を完全に奪う。

しかし何とも日本らしい言葉遣いを放つ金剛だが、その顔は明石の師匠である朝日と同じ様に英国生まれの艦魂らしい彫りが深くて高い鼻をもつ西洋人の顔立ち。神通よりも更に一回り身長も肩幅も広い身体つきで、軍帽から垂れた艶のある金色の髪は滝の様に真っ直ぐに重力に誘われている。顔を動かす度に遅れてサラサラと流れるその髪は、彼女が身に付けている真っ白な第二種軍装と舷窓から漏れて来る陽の光によって屏風のような輝きを放ち、その美しさは30代半ばの彼女の顔立ちを若くするには十分な程。その姿は帝国海軍の艦魂の中でも最も淑女らしい女性像を持つ明石の師よりもさらに美しさを極めた物であるが、そんな全身を光り輝せる金剛の顔には、明石の横で冷や汗を流す神通以上に鋭く尖った目が長いまつ毛を伴って別な輝きを放っていた。もちろんその輝きは明石と神通をこれ以上無い位に震え上がらせる。

『吉法師。ワレ、それでよお一端の指揮官ヅラできるもんやな。』

『は……。も、申し訳ありません……。』

『師匠であるワシのツラに泥塗るんやないで。もしそのつもりであるんなら、今すぐワレの弾薬庫に火つけてこの横須賀の漁礁にしたるさかいな。』

『は、はい……。』

電動機のような低くゆっくりとした口調の金剛の語りに、神通は僅かに肩を上げて頭を下げる。薄っすらと半笑いの声色で声を放つ金剛にはそれほど怒っている様子はなさそうだが、それに反して声を受け取った側はそれに安堵するような事は無い。いつもは尊大な態度を取っている神通がこれ程までに怯えきっている姿を明石は始めて目にしたが、それもお相手がこの人であるのなら別段変な事であるとは思わなかった。

吉法師という聞き慣れない名前でも神通を呼び、直立する彼女を前にしてまるでいつもの神通の様にふてぶてしく脚を組んで椅子に座る金剛。

先程の彼女の言葉通り、実は神通にとってのお師匠様はこの人なのであった。しばらくそこに響いた久方ぶりの師弟の会話を耳にするに、どうやら神通が美保ヶ関事件で大怪我を負った際に現場から最寄の舞鶴軍港まで彼女を牽引したのがこの金剛であるらしく、仲間をその手で殺めた事で発狂寸前だった神通は牽引される最中に自分を氣遣ってくれたこの金剛を艦魂としての唯一絶対の師として崇め、以来ずっと帝国海軍の者としての教えを請いで来たのだという。もっとも鬼の戦隊長として恐れられる神通の師匠というだけあって、この人の教育方針は帝国海軍艦魂社会ではもはや刑罰に値するとも言われる程の厳しさで昔から非常に有名だった。

日本に回航された際は横須賀鎮守府籍であったにもかかわらず乗組員の言葉から関西弁を日本語として学んでしまったという変わった経歴が示す通り、金剛は神通の様に夜遅くまで勉強する様な努力家ではなく、常に現場で生の知識を吸収してその実力を伸ばす叩き上げタイプ。箸の持ち方から大砲の射撃理論に至るまで、その全てを自身の分身の中で学んできた現場主義の艦魂なのだ。そして明石の師匠である朝日の姉で、これまた有名な土方型の性格であった敷島しまの薫陶を受けて育った金剛は泣く子も黙る鬼教官として名を馳せ、明石もこれまでの生活で何度かその名を耳にした事はある。その教

育姿勢は「鳴かぬなら殺してしまえホトトギス」を地で行く典型的なスパルタ教育で、全員女性という艦魂社会にあっても禪とサラシのみで鍛錬に励んでいたという伝説を持つ「敷島”男子”中等学校」、注意だろうが助言だろうが第三者の介入を一切認めない「私立神通学校」と並び、その別名を「海軍砲術学校金剛艦分校」と囁かれて恐れられる筋金入りであった。

ましてこの金剛の分身である金剛艦は現代の帝国海軍の主戦力とされる戦闘艦艇の中にあつては最も古参な艦艇であり、日本人同様に明確な上下関係を持つ帝国海軍の艦魂社会にあつてはこの人に意見を申せる者などほとんどいない。艦隊旗艦としての運用が考慮されていない為にその階級章は少将どまりとされているが、それを差し引いても神通以上に苛烈でおっかない性格のこの金剛は、現代の艦魂社会における長老にして大親分の様な存在であった。

そんな金剛を前にしてはさしもの神通もまだまだハナを垂らした子供同然。金剛はもはや宗教かとも思える程に織田信長を崇拝する神通の趣味はもちろん、下着の色の好みまで知っているという有様で、織田信長の幼名である「吉法師」の名を神通に与えた張本人でもある。故に会話の中で金剛が神通に向けて放つ声には遠慮という物が微塵も無く、神通は伏せ目がちにしながらちよつと困ったような感じで表情を曇らせていた。

『最近の艦隊訓練の成績は上等やそうやな、吉法師。あっちこっちから聞いたとるで。ワシの下でヒイヒイ言つとったあのガキが、立派になったモンやな。』

『は、はい……。』

大先輩にして畏敬する師匠の声に神通はなんとも齒切れの悪い声で小さな返事で応えようと、チラっと視線を横にいた友人の顔に向けてみる。

そもそもがただの鬼教官ではなく、それはそれは厳しい「海軍砲術学校金剛艦分校」を歴代最優秀の成績で卒業した教え子がわざわざ自分を訪ねてきてくれた事を素直に喜ぶ金剛の声は、相変わらずおっかなさを秘めていながらも常に半笑い気味であり、そこに滲んでいるほのかな明るさは明石の心を自然と緊張の硬直から開放していた。

故にそこにあっただのは口に手を当てて赤裸々に語られる神通の過去に噴出しそうになっている明石の姿で、神通は金剛にへこへこ小さく頭を下げながらも明石に対して憎しみを募らせていく。だが短気な彼女は心の中に溜まったものを師匠の前だからといって我慢する事などできない。やがて神通は金剛の語りかけが止んだのを認めると、すぐさま明石に向かって声を放ちながら彼女の足を小さく蹴飛ばした。

『何が可笑しい・・・!』

神通の蹴りに明石はちょっとだけバランスを崩してよろけるものの、脛の辺りに走り痛みとその表情へと苦悶の色を浮かべる事は無かった。

第二艦隊の仲間内では那珂と並んで大人の人柄で通っている神通なのだが、これまで明石の耳に響いていた金剛のお話はどれもこれもそんな神通の人物像を根本から打ち壊す物ばかり。なまじお仕事も出来て頭も良い神通の事を友人として良く知っている明石は、それまで耳にした事も無い神通の若い頃のお話に込み上げてくる笑いを抑えるので必死だった。そしてそれはちょっとだけ明石の中の神通に対する距離感のような物を縮めてくれ、同時に手に取る事ができるかのように身近に感じられるようになった神通が明石にはなんだかとても可愛い艦魂に思えてならない。その感じは師匠譲りの釣り上がった鋭い目とおっかない性格を持つ神通にはとても不釣り合いで、明石は目の前にいる大先輩の身体から絶えず発せられる恐怖も

忘れ、湧き上がる可笑しさを堪える事が出来なかった。

『ぷくぷくぷく……！』

もつとも口に手を当てて笑う明石の姿は、神通にとっては面白くない。もちろん本気でやったつもりはないが、それでも革靴のつま先で蹴ったというのに明石は蹴られた脚を痛そうにする素振りを微塵も見せずに笑っている。正面にて薄ら笑いの表情を浮かべている金剛にチラチラと視線を流しながらも、神通は口を大きく尖らせて舌打ちを伴って明石に鋭い眼光を向けた。

だが金剛はこの時ふと、珍しく神通が仲間によって大笑いされているという眼前の光景を認めると同時に、こうもまた綺麗な笑みで笑っている事を神通が不機嫌そうにしながらも許している事に気付く。教え子の無愛想で短気な性格を師匠として良く理解している金剛は、これまでの神通との会話ではずっとカヤの外であった明石に顔を向けて話しかけた。

『ほんで？こん若いんは誰や？赤線入った襟章なんて、エライ珍しいモンぶら下げとるやないか。』

ようやく自分に向けられた金剛の声に明石は笑みを僅かに消し、腕を組んだまま腰を折って顔を迫らせてくる金剛に気をつけをする。

『はい。私は帝国海軍工作艦の――。』

部屋の前でげんこつを頂戴した時より金剛から発せられていたおっかない雰囲気もだいぶ和らいだ明石。持ち前のハキハキとした物言いで金剛の声に応える彼女だったが、金剛は明石が言い終える前にふと椅子から立ち上がると明石の前に歩み寄り、ゆっくりと顔を近づけてくる。

お互いの鼻が触れそうになる程まで迫ってきた金剛の顔。そこには友人である神通よりもさらに角度を鋭角にした切れ長の目があり、明石の心は薄らいでいた恐怖心を再び湧き上がらせた。まして日本人と同じ顔の作りをしている日本生まれの艦魂である明石にとって、西洋人の作りをしている金剛の顔のおっかなさはちよつと桁違いの代物だ。故に明石はその迫力に押されるようにして僅かに背を逸らし、その口調も段々と規律を失い始めていく。

『・・・・・・・・。』

『こ、工作艦の、あ、あか、明石ですう……。』

やっと自分の名を名乗った明石にも、金剛はその表情を変えない。ただ金剛は彼女の声を完全に無視してそんな態度を取っていた訳ではなく、耳に入れた彼女の言葉を頭の中で認識するや、すぐにその表情を微笑へと変えて明石の肩に手を置きながら声を返してきた。

『なんや、お前が明石か。』

『う、は、はい・・・・・・・・。』

『比叡から聞いたとるで、吉法師をいてこましてもうたそうやな。』

口元を緩めた金剛はそう言うと、明石の隣で聞き耳を立てていた神通へと顔を向ける。彼女の耳に入っていた話は明石と初めて出会った際の強烈な事件の事で、その顛末に関して理由はどうあれ負けてしまった事を思い出す神通。決して仕返しをしてやろうとも思っていないし、むしろ彼女の中では今ではもう良き思い出となりつつある事であったが、教えを授けてくれた金剛の言葉に神通はどうにも素直になれずにそっぽを向く。人前で負けを認めるだけの勇気が無いのだ。

一方、神通がこの世でただ一人恐れている金剛の語りを受けた明石は、眼前の金剛が比叡の名を口に出した事で、自分の事が艦魂社

会でも有名人である彼女の耳にも入っているという事が確認できて嬉しかった。

金剛の妹である比叡は、明石も以前に呉の波間で顔を合わせた事がある。記憶に残る日本生まれで完全な日本人の顔つきを持つ比叡は姉の金剛と全然似ていないのだが、そも明石が知る比叡の顔は改装による包帯を除去した後の物だ。この金剛のすぐ下の妹に当たる比叡は艦齡から計算するに金剛と同じ30代半ばの女性の顔でなければならぬが、艦橋構造物の抜本的な改装によってその顔つきは明石と同じ20歳くらいの若々しい事この上ない代物。その事からどうにも金剛と比叡を姉妹として脳裏の中で線で結ぶ事が出来なかった明石だが、先程の金剛の言葉を受けてやっとその線は実体を帯びる。

そして気さくで階級に物を言わせるような物言いをしない比叡の人柄を思い出した明石は、その姉である金剛もまた同様に根は良い人なのではないかと考える。しかし第二艦隊きつての問題児である神通の師匠というだけあって、金剛はそんな明石のささやかな考察を見事に打ち砕く行動に出た。

『は、はい。でも神通は・・・ううええっ！』

声を返そうと明石が口を開いた矢先、金剛はおもむろに明石の顔を挟むようにして両手を伸ばすと、明石の両頬を親指と人差し指で摘んで上下左右に動かし始めた。

『それにしても、どんなごっつい奴かと思ったら、まだ生まれたばかりの”やあこ”やないか。』

『う~~~~い~~~~・・・。』

そんな事を言いながら金剛は明石の頬を三次元の動きで引っ張りまわす。奇妙な呻き声を放ってちよつと痛む頬の動きに絶える明石

だが金剛は彼女の頬の感触が気に入ったらしく、面白がって明石の頬をグイグイと引っ張った。神通よりも更に一回り大きい体格を持つ金剛の力は半端なものでは無く、明石はヒリヒリと鈍痛を帯び始めた頬に涙目になり始める。

やがて金剛は歯を見せて笑い出すと、今度はちよつとだけ腰を折ってそれまで明石の頬を摘んでいた右手を離れた。相変わらず金剛の左手は哀れな明石の頬の感触を楽しんでいるが、彼女は右手をそのまま下に降ろしていくと明石の起伏の乏しい胸の辺りをバンバンと音を立てて叩き出す。

『はゝ、こら酷いモンやな。ワシがバルジを着ける前の乾舷かて、こないにペタペタやなかつたでえ。』

『ういで・・・！うえ・・・！あだ・・・！』

金剛の動作を見る限りそれは決して力が込められた動きではなかったが、叩かれる側の明石は胸に受ける強い衝撃に唸り声での悲鳴を上げる。段々と呼吸が苦しくなり始めた明石は、意を決して抵抗しようとしてそれまで体の真横に這わせていた両腕を上げる。しかし腕を上げた刹那、金剛はやつと左手から力を抜いて明石の頬を鈍痛から開放するが、すぐに左の腕を明石の背中に回すと小脇に抱えるようにして持ち上げる。女性にしては大きい160センチ後半を持つ明石だが、神通以上に力持ちの金剛にかかつては赤子の手を捻るも同然。金剛はバランスを微塵も崩す事無く軽々と明石を抱えると、視線を落とした先にある明石のお尻に向かって再び右手をベツチンベツチンと打ちつけ始める。もちろんその衝撃は受ける側の明石にとっては強烈で、明石は地に付いていない足をバタバタとさせながら悲鳴を上げ出した。

『なんやこの尻はあ。ぜんぜん身体あ鍛えてへん尻やぞ、これえ。』
『だ・・・！い、いだい・・・！』

『吉法師、こん若いんはワレのツレなんやろ？ちびつと鍛えてやった方がエエんとちゃうんか。』

『は、同感です。』

明石のお尻をぶつ叩きながら放った金剛の言葉に、神通はさつき笑われた事に対するお返しも含めて即座に肯定の声を返した。

ドスが聞いた低い物ながらも半笑い気味の金剛の声。お尻を叩かれながらもそれを耳にいれる明石は決してこの金剛が機嫌を悪くして折檻に走っている訳ではない事を察するが、連続してお尻を襲う強い衝撃に心を休める事ができない。足と手を空中でバタつかせるのが関の山だった。

『若い内しかできひん事やさかいな。そおらっ。』

『わあああゝっ・・・！』

金剛はまるで力の入っていない掛け声を放つと、小脇に抱えていた明石をそのまま背後に放り投げた。その動きはゆっくりとした物で掛け声の度とも相違は無いが、明石はまるで最大仰角に射撃した大砲の弾の様に放物線を描いて宙へ舞い上がり、先程まで金剛が腰を下ろしていた椅子を飛び越して更にその向こうにあったベッドの上までその身を運ぶ。

『ぶべえっ！』

頬を引っ張られ、胸を叩かれ、お尻を弾かれ。文字通り踏んだり蹴ったり思いをした明石は、ベッドの上に敷かれた布団によって落ちた衝撃をそのままダメージとする事は無かったが、身体のあちこちに残る鈍痛と宙を舞った事によって布団の上で目を回していた。破天荒にして手厳しい師匠の歓迎に神通は部屋に入ってから以来、初めての笑みを浮かべて布団の上の明石を眺める。その横では金剛が腰

に手を当て、教え子と同じ様にその鋭く角ばった目に僅かに丸みを帯びさせながら笑いの色が滲んだ声を上げた。

『同じ帝国海軍、人間も艦魂もあらへん。こん商売は身体が資本やさかいな。なんぼワシらが女やからちゅうても、お上品にやつとつたら埒があかんで。覚えときいや、明石。』
『ういい・・・、は、はいいい・・・。』

神通と金剛に笑われる中、明石はもはや抵抗する気も完全に削がれ、布団の上で目を回しながら声を返す。

帝国海軍艦魂社会における親分の恐ろしさを、彼女はこの日身を持って知った。

なんとも酷い事になってしまった明石の挨拶回りの一日目はこうして終わり、明石は改めて色々な性格のお人がいる艦魂社会の奥深さを実感する。もっともその日の夜に明石を尋ねてきた神通によると金剛は大変に明石を気に入ってくれたらしく、『悩み事や困り事があつたら遠慮のう相談に来いや。』との伝言にヘトヘトに疲れた心をちよつとだけ撫でる事が出来た。神通以上に怖いがあれ程に豪快で度量の良い金剛の言葉を明石は素直に嬉しく受け止めるが、やがてそんな金剛がかつて自分の師匠である朝日に対しては泣いて詫びを入れたという伝説を思い出し、改めて師匠の偉大さを実感する。

やっぱ朝日さんは凄いなあ。

そんな言葉を脳裏に流して師匠の偉大さを再認識する明石だった

が、ふとその時に部屋の扉の向こうから響いてきた乗組員達の言葉でちよつとその表情に寂しさを滲ませてしまう。

『あゝ、あの浜の連中って砲術学校の奴らだったのか。』

『ああ、測的班の連中じゃねえかな。そういうや機銃の森の兄貴はどうしてんのかなあ。』

『・・・・・・・・・・』

無意識の内に視線を床へと落とす明石は、今しがた響いてきた乗組員の声と同じ言葉を胸の中で呟く。かつては今、彼女がいる部屋で供に暮らしていた相方。強烈に脳裏に残る彼との別れの記憶は、明石にとっては自分の馬鹿さ加減の象徴。ふとその光景をもう一度見れない物かと部屋のあちこちへと投げてみた視界は、奇妙な程に部屋の広さを明石の心に伝えてくる。

そして明石は布団の枕元に置いていた観艦式の式次第へと視線を投げ、とめどなく胸の中に湧きあがって来る感情をなんとか抑えようとした。彼女の瞳に写るのは98隻に及ぶ参加艦艇の位置を示した式場図で、明石はすぐさま明日もまた挨拶回りに励もうと決意を固める。彼女の中では本日の金剛の様な破天荒な先輩に弄ばれるよりも、相方との記憶を手繰り寄せる事で生まれる寂寥感の方が辛かった。

ベッドにて横たわって式場図を眺める明石の頭上では、閉め忘れられた舷窓が横須賀の夜風を招き入れている。

すっかり秋の心地を纏い始めた10月の潮風は、明石には何となく冷たく感じるのだった。

第六三話 「お付き合い」

昭和15年10月3日。

ずっと緑色だった陸地もすっかり茶色や黄色の色合いが増し始めてきたこの日、横須賀の波間には観艦式への参加が決定している艦隊が続々と集結し始めていた。民間商船の航路も通っている事からただでさえ狭い東京湾の入り口には、帝国海軍選りすぐりの艦艇達が全国津々浦々から馳せ参じ、その自慢の軍艦旗を横須賀の秋風に翻す。その中には明石と親しい長門ながとに率いられた呉の第一艦隊はもちろん、第二艦隊の仲間である五十鈴いすずの三潜戦、南洋方面を担任している第四艦隊の面々に、明石とは同じ艦種である特務艦の者達も何人かいる。

故に明石はその日の朝から同じ特務艦とされる艦艇へと足を運び、挨拶周りの第二日目を送り始めた。

艦首甲板から白い光りを伴って意気揚々と自身の身体を包み消した明石だが、彼女の背後に位置していた明石艦の艦橋では乗組員達によるちよつと珍しいやりとりが行われていた。

羅針儀や伝声管がによつきと床から生えた艦橋内では、艦内各科の科長連中が一同に会してなにやら話し合いをしている。そこにいるのは紛れも無く明石艦という一隻の艦の幹部連中であるが、彼等の周囲には重役同士の話し合いにしては奇妙な程に明るい声が響いている。

『いやあ、悪いなあ。川島。かわしま』

縦に細長い顔に口髭をヒョコヒョコと動かしてそう言ったのは、

明石艦の砲術長である青木大尉。^{あおき}野太く間延びした声を放って笑顔を輝かせる彼の右手には、今しがた貰ったばかりの菓子折りの箱が乗っている。ご丁寧に包装紙で彩られたその菓子折りは艦内の酒保にて扱われる代物ではなく、明らかに横須賀の街並みにある一端の菓子屋で調達された物であった。

そしてそれを渡したのは、青木の前で後頭部を搔きながらへこへこと頭を下げている主計長の川島大尉だ。同じ帝国海軍の軍人として、川島にとっては先輩に当たる青木。故に彼に対する言葉遣いは普段から敬語を用いた物であるのだが、川島の口から漏れて来る言葉はちよつと猫なで声になっている。

『いやいや、いつも世話になってますんで。へへへ。』

それはごく普通の職場における先輩後輩のやりとりと見れば決して変な光景ではない。しかし寄港地においては補給物資の銀バイをする水兵さん達と毎日の様に鬼ごっこしている主計科の事情を考えれば、横須賀での寄航中にこの川島が水兵さんの元締めの人である青木に対して文句も言わずに腰を低くして接しているのはちよつと妙な光景である。何せ艦内で最も目に余るような態度で銀バイを働く者は、この青木が率いる砲術科に配属された森^{もり}二水だからだ。何時ぞやの四日市^{よっかいち}での一件の様な強盗まがいの銀バイを行うというのだから、川島の立場を考えれば青木に対して部下の監督不行き届きを指摘しても良い筈である。

だが川島は時折こうして寄港地に着くと、自らのお給料にてお菓子やお酒を調達して他の科長のご機嫌を取る事があった。その理由は川島が率いる主計科とその他の科との、明石艦艦内での暮らしにおけるちよつとした事情があったからだ。

やがて菓子折りの中から饅頭を一個、手にとって口に運ぶ青木に對し、川島は両手を顎の下の辺りで擦り合わせながら声を放つ。

『頼んますねえ、青木大尉。電気がなきゃメシが作れないんでえ・
・・。』

『ん・・・ん、むお、わがっだ。まがせどけ。』

口髭と供に頬を上下に動かしながら、青木大尉は片手を上げて川島の声に応えてみせる。そのなんともあどけない幸せそうな青木の笑みに、川島はホッと安堵の溜め息を放つ。

それは先程の川島の言葉通り、艦内における電気を管理しているのが、青木が率いる砲術科である事に理由があった。

これは明石艦に限ったお話ではないのだが、艦という物は艦長を頂点とした一つの組織であり、その組織内での役割は大まかに科というグループで括られている。その中でも川島が所属する主計科は明石艦での生活に関わる部分が職域であり、特に食料品の調達計画から毎日の献立にまで及ぶ食に関する部分はそのお仕事の大半を占める物である。

だがそれが主計科という集団のみで完結できるお仕事であるか、と言えばそうではない。そもそも戦闘を生業としている海軍の艦船では生活に関する部分が必要最小限に削られている物で、それは艦艇の乗組員の構成であっても例外ではない。故に主計科とは艦の規模に比して少ない人数でしか設定されず、食料品の積み込みや艦内倉庫への搬入をやる場合は人手が多い航海科や砲術科、機関科に応援を頼んでのお仕事をせねばならないのだ。また主計科の最も大事な仕事場である烹炊所を例にとっても、そこにある電熱調理器具の稼動に必要な電気は砲術科に頼んで配電盤にて分電して貰わなければならないし、お水ですらも担当である機関科に頼んで真水タンクや造水機を操作して供給して貰わねばならない。

そしてもしここで主計科が艦内において嫌われ者として認知されていたならば、彼等は普段のお仕事に励む上で「水が出ない。調理器具が動かない」等といった”不慮の事故”に遭遇するハメになっ

てしまうのである。もちろん主計科とてそれは可能で、気に入らない奴に麦だけのご飯や具の入っていない味噌汁を配膳する川島の普段のお仕事振りはその最たる例だ。

栄えある陛下の赤子である海軍の実情としては子供じみていて陰湿な気もするが、これを正す為に『そんな事は止めるよ。』などと思いつく者など、そこには誰一人としていない。もちろんその理由は「栄えある陛下の赤子である帝国海軍に、まるで陰湿ないじめっ子のような大馬鹿者はいない。」という建前が存在しているからだ。つまり銀バイと同じ様に、「水や電気を止めた方ではなく、止められた方が悪い。」という論法である。

それは国を護るといふ崇高な使命を持つ海軍にあっては、なんとも虎の威を借りた様などんでもないお話ではある。しかし少なくとも帝国海軍という大組織の末端では、この理論を基にして組織内における均衡を明治の頃よりずっと保ってきた。明石艦の艦橋にて展開される青木と川島のやりとりはまさにその一端で、海軍軍人の間ではこれを「付け届け」と呼んでいる。

それは現代の社会の中にも往々にして存在している立派な文化で、世界的にも一風変わった帝国海軍の、しかしなんとも日本人らしい習慣であった。

そしてこの付け届け、実は艦魂達においても似たような物が実践されていたりする。

横須賀の波間に浮かぶ艦艇の群れの中、明石は挨拶の為にとある

艦艇を訪れていた。

その艦はまるで友人の宗谷の分身をそのまま大きくしたような、帝国海軍では珍しい商船タイプの艦影を持つ。艦の大きさは幅もトン数も明石艦とほぼ同じくらいで、艦の真ん中にポツンと高めの煙突が生えており、兵装に関しては艦首と艦尾に備え付けられた大きな台座に小さな高角砲が乗っかっているだけだ。周りに浮かぶ艦艇達と同じく十六条旭日旗を艦尾に翻している事で、かろうじてこの艦が帝国海軍に籍を置くお船であることが解る。

なんとも海軍のお船としては貧相な艦影であるこの艦。しかし艦首の甲板にある砲塔台座の辺りでは小豆やパン焼きにて発せられる香ばしく美味しそうな匂いと共に、横須賀の波間のあちこちから集まってきた艦魂達があげる明るい声が充満しており、その艦影の寂しさをしみじみと感じる者は空を舞いながらそれを見下ろしているカモメくらいであった。

挨拶回りの為にそこにやってきた明石は早速その艦の主挨拶しよう隣まで歩み寄るが、彼女は足元に山のように積んだ底の浅い木製の箱に向かって忙しく手を動かしている。そして彼女と小さな机を挟んだ向かい側には、横須賀在泊の艦魂達がそれはそれは明るい表情で列を作っていた。

『そっか、明石っていうの。これからは同じ特務艦として、よろしくね。』

忙しそうな事から明石は名を名乗っただけでちょっと声を掛けるのを躊躇っていたが、額に汗を輝かせる眼前の女性は笑みを浮かべてそう言いながら、足元の木箱より何かを取って机の前にいた列の先頭の者へと差し出す。甘い物を匂いで嗅ぎつけるという変わった特技を持つ明石の予想通り、美味しそうな匂いが立ち込める中で机の上に出された物は羊羹とモナカであった。

『これからもよろしく願います。ささ、どぞ。』

浅く何度も頭を下げながら彼女はそう言うと、両手を広げて机に置いたお菓子を受け取るように促す。その相手はなんと明石もよく知る第二艦隊における上司の高雄たかおで、彼女は明石に一瞬視線を送って片手を挙げて挨拶するとすぐに机の上の羊羹やモナカに手を伸ばした。既にその魅力に捕まっているのか、高雄は僅かに覗かせた舌で唇を嘗める。陽気な彼女は手に取ったお菓子の感触にさらに機嫌を良くし、えくぼを作って微笑むと眼前の女性に礼を口にした。

『あいよ。いつも悪いね、マミヤーさん。』

『とんでもない。ホント、これからもよろしく願います。』

大事そうに抱えたお菓子を撫でながら、高雄は踵を返して去っていく。艦隊旗艦をも勤める高雄は少将の階級を頂いている為、それに対して大尉の襟章をつけた明石の眼前の女性が再度お辞儀するという光景は辺ではない。だが朗らかな人当たりを持つとは言え、高雄が彼女をあだ名のさん付けで呼んだ事は明石には意外だった。

あれでお仕事の時間と私的な時間をキッチリと区別する高雄の性格を、明石は第二艦隊の構成員として良く知っている。その公私の区別は現艦隊旗艦の愛宕あたごよりもしつかりしていて、怒る時に怒れる高雄の人物像は彼女より年上である神通じんつうですらも一目置いている程なのだ。しかしその神通ですらも高雄はさん付けで呼ぶ事は普段から無く、おまけにこの女性は明石と同じ特務艦の艦魂。その階級だって将校相当官で、人間と同じ階級を用いている艦魂社会では厳密には高雄の様な将校とは分類されない立場である。そんな中での高雄の態度に明石はその驚きをつい声にして放ち、眼前にいるこの艦の主の凄さに感心した。

『間宮^{まみや}さん、すっごいい。高雄さんにさん付けで呼ばれてるんですねえ。』

間宮と呼ばれた女性は明石の声を受けると、ちょっと疲れた様な感じの溜め息を放って腰に両手を当てる。決して太っているという訳ではないが、軽くぽっちゃりした体型である間宮のその姿は、先程の高雄を初めとした戦闘艦の艦魂にも劣らない力強さがあった。

『あはは。まあ高雄さんとは艦隊旗艦になる前からの付き合いだからね。海軍に編入された頃から知ってるのよ。あ、それとマミヤーでいいよ、明石。』

丸い目を細めて笑いながらそう言ってくれた間宮に、明石は帝国海軍の数ある特務艦の中でも艦魂社会所か人間達の世界においても最も有名な艦である彼女の境遇を改めて理解する。それはこの人が明石と同じく、ある特務の為に専用の艦艇として建造された経緯も少しだけ関係していた。

明石が考えを巡らす間にもすぐにまた手を忙しく動かして列に並んだ仲間達にお菓子を差し出す彼女は、帝国海軍の中でも工作艦の明石以上に特徴的な任務を帯びる給糧艦の間宮艦の艦魂である。

大正12年にその身を浮かべた間宮は20代半ばの外見が示す通り、その分身は明石のような最新鋭の艦艇という訳ではないのだが、今日まで続く17年の海軍生活において一度たりとも連合艦隊から外された事が無いという大変に働き者のお船であった。それは彼女の分身が持つ独自の性能に因る所が大きい。

というのも、ただ単に食料品を届けるだけのお仕事であれば、民間に沢山ある船舶を用いればそれは決して難しい事ではない。まして海軍には物資を運ぶ為のお船として運送艦という艦種が間宮艦誕

生の以前から既に設定されており、食料の輸送という観点だけでわざわざ新しい艦種を設定する理由など無い筈である。だがここにこそ、間宮艦の独自の性能が物を言う余地があったのだ。

実はこの間宮艦、どこからどう見ても民間の貨物船と同じ様な見えてくれを持っているにも関わらず、その艦体の中には貨物を搭載する為の船倉とされる中空の大きな区画を殆ど持っていない。基準排水量15820トンと明石艦にも負けず劣らずのその艦体の大きさは一等巡洋艦にも匹敵する程の大型艦で、このサイズの運送艦であればかなりの量の食料品を運ぶ事ができる。世界各国の大型輸送船を見ればそれは明らかな事だ。しかしこの間宮艦はそんじよそこの運送艦ではなく、その大きな艦体の中には加工食品の生産工場が所狭しと並んでいるのである。それは明石艦の中に多種多様な工作室が設置されているのと全く同じで、間宮艦の中には羊羹、モナカ、饅頭、アイスクリームといったお菓子の製造室に始まり、お吸い物の具として必須である豆腐やこんにゃくの製造設備、魚や野菜や肉を新鮮なまま送り届ける為の冷凍庫などの設備がぎっしりと詰まっているのだ。もちろんそれを動かしているのは軍属である民間の職人さんで、これまた明石艦の乗組員事情とよく似ている。

そしてその加工食料品の生産能力は大変に優秀で、間宮艦一隻で日本人の食生活のいっさいがっさいを調達する事が可能だった。しかもその味に関してもこの間宮艦に抜かりはなく、中でも間宮艦内で生産される羊羹は東京の赤坂に本店を置く名門の和菓子屋「虎屋」の羊羹よりもまだ上手いと好評を得ており、「間宮羊羹」という名で下士官兵も含めた全ての海軍軍人から愛される程の代物である。

また、艦隊への随伴を念頭に置かれたこの間宮艦には普通の海軍艦艇に比しても飛び抜けて優秀な通信設備と負傷兵への治療を行う医療設備が建艦当初から設置されており、敵地に進出した際にはまだ陸上設備が復旧していない僻地であっても基地としての能力を負う事が出来る万能補助艦艇である。さらには艦首と艦尾の甲板上には水上機を搭載する設備も供えられており、艦隊で使用する水上機

が故障した際の予備機として提供する役割も持っている程だった。もちろん平時においてもこの能力は存分に発揮され、間宮艦は本業である糧秣輸送が無い時は曳航標的と持ち前の通信能力を用いての艦隊訓練の支援、まだまだ戦火が止んでいない支那の沿岸に進出し、の負傷兵への対処、南洋方面からの無電の中継に水上機の輸送など、地味で目立たないながらも常に海軍に対してのご奉公に励んできた経歴を持つ。定期的な整備の時以外は常にスクリューを回転させていると言っても過言ではなく、その海軍への貢献の程は改装などで栈橋にのんびりと錨を下ろしている戦艦や巡洋艦とは比べるべくも無い。故に彼女の名は人間や艦魂を問わず、帝国海軍の中では金剛艦以上に有名であった。

そして艦魂達は朗らかで一言半句の文句も言わず、常に笑みを伴って糧秣を運んでくれる間宮の人望を慕い、彼女自身が気に入って勧めている事もあって「マミヤー」という敬称を用いて彼女を呼んでいる。彼女は今の様に艦魂達の為にお菓子を用意してくれる事でもその人気と株を上げており、人間達にバレないように原材料の段階で銀バイしてこっそりと調理器具用いて作る間宮手作りのお菓子は、帝国海軍に属する全ての艦魂達がこぞって欲しがる物の内の一つだった。

そんな間宮は頬に滲んだ汗を手の甲で拭きながらも、眼前の机と足元にある食品が入った箱の間を行き来させる手の動きを休めようとしなない。客人である明石が横に居る事からするとちょっと失礼に値する間宮の行動だが、別に間宮は礼節を知らない訳でも明石を嫌っている訳でもなかった。もはや何度目になるか解らないお菓子配りをする最中、一瞬だけ間宮は明石に笑みを向けるとしっかり接してやる事の出来ない自分の非礼を詫げる。

『悪いね、明石。あとで明石にもあげるから、もうちょっとだけ待

つててね。』

『あ、はい。なんか、すいません……。』
『ごめんねえ。』

忙しい時に訪れてしまった明石もちょっと悪いなと思って声を返すが、間宮はその笑みを少しも歪める事無く応じてくれた。そしてそんな彼女を明石はとても羨ましく思う。

ついこの間に石巻で体験した工作艦として、軍医としての明石の仕事。それはこの間宮と同じ様に他人から感謝される代物であるが、その分だけの苦勞をせねばならないという実情を、明石は石巻での三潜戦に対する修理補修で骨身に染みて知っている。決して自身の身の上を疎ましく思う様な事は無いが、ご飯も食べれずお風呂にも入れず、ただひたすらに汗を流さねばならない石巻での日々は明石にしたら軍医さんとしての当然のお仕事。その激務の程を考えると、さしもの明石もその心をちょっと後ずさりさせてしまうというのが正直な所である。

だが同じ特務艦として汗でその笑みをさらに輝かせる間宮の顔には、お仕事へ励むという行為に彼女が確かな喜びを噛み締めている事が示されていた。間宮は足元の箱へと手を伸ばしてお菓子を握る度に、ちよっとぼっちゃりしたその顔に汗で輝いた笑みを湛える。それは彼女が三度のメシよりもお仕事が好きであるという事を良く表しており、明石はそんな彼女のお仕事に対しての向き合い方を微笑ましく思う反面、同時に自分もそうならねばと深い感銘を受けていた。

『あら、明石。』

ふとそこに響いた声に明石は気付くと、声がした宗谷が立つ机の向こうへと視線を投げる。低く僅かにかすれたようなハスキーなそ

の声に明石はすぐさま声の主である者の名を脳裏に浮かべており、流した視線の先にその人物を認めて声を返す。

『あ、那珂あ。』

肩の上で切り揃えられた黒髪を潮風に揺らしてそこにいたのは、明石と同じ第二艦隊の仲間にして友人の那珂。寒くなり始めた時期にあわせて濃紺の第一種軍装で身を包んだ那珂は、方の高さに右手を上げて小さく振ってみせる。落ち着きのある大人の女性像とそれ見合った聡明さを持つ彼女は尋ねた間宮艦の明石を目に映した事で、すぐさま明石が挨拶回りを目的としてここにいる事を察する。

『挨拶回りね。マミヤーとは仲良くしておいた方がいいわよ。』

そんな声を放って明石に笑みを見せる那珂。その手元にあたる机の上に高雄の時と同じ様に『これからもよろしく。』という声を伴って羊羹やロールケーキを差し出した間宮は、特務艦の後輩として挨拶に訪れてくれた明石に一瞬だけ笑みを向けてお礼とすると、すぐさま正面にいる那珂に向き直って声を上げる。その口調は至って軽いものであるが、間宮と那珂は同じような歳頃であるその顔つきが示す通り、実は同じ年代に生まれた同期のような関係なのだ。そしてそれは那珂の姉であり、明石とは大の仲良しである者にあっては特に顕著なのであった。

『明石とは随分と親しいの、那珂？』

『ふふふ、呼び捨てでビックリした？』

『一応は明石も第二艦隊所属なんですよ？よく神通に矯正されなかったねえ。』

『ふふふふ。明石は、神通姉さんとは私よりも仲が良いのよ。』

『へえええ。まあ、止める役が増えてよかったねえ、那珂。神通

のあの性格は変わってないでしょ。あははは。』

突如として間宮の口から神通の名が出てきた事に、明石は少しだけ驚いた。すぐに手を上げる短気な所はあるものの、とても友達思いで優しい神通の性格を明石も友人である事から解ってはいるが、先輩だろうが上官だろうが睨みつけて罵声を浴びせる事を屁とも思っていない神通が仲間内の間ではかなりの嫌われ者である事も知っている。もちろんそれは苛烈で立場をわきまえない彼女の言動にも問題はあるのだが、そんな神通を笑い声を伴って語れる間宮の言動が明石には意外だった。まして間宮が神通と同じ戦闘艦艇ではなく特務艦である事も、明石の脳裏にちょっと引かかる物を生んでしまう。

少しの間だけ那珂と間宮の明るい声でのやりとりを耳に入れた後、明石は思い切ってその疑問を間宮に問う事にした。

『あの、ま、間宮さー。』

『あはは、マミヤーで良いって。なに、明石？』

気さくな間宮の返事と笑みは明石の中の間宮との距離を縮めてくれる。故に明石もまた笑みを浮かべて、問いの続きを声に変えた。

『はい。神通とは親しいんですか。』

『あゝ、神通とは幼馴染なんだ。私と神通はちょうど同じ時期に神戸川崎造船所で建造されてたの。だから神通とは、お互いまだハナを垂らしてた頃からの仲だよ。』

昨日の金剛こんごうに続き、またも神通の過去を知る者に出会えた事に明石は口元を大きく吊り上げる。まして『ハナを垂らしていた。』という間宮の言葉で想像してみた神通の姿は明石にとっては可笑しいの一言で、金剛による赤裸々な暴露劇の記憶も新しい彼女は神通の

不釣り合いな可愛さに込み上がる笑い声を抑えるので必死となる。

『あれ？　そういや神通は並んでないみたいね、那珂。』

『神通姉さんは武技教練の訓練をするって言ってたわ。だから神通姉さんの分は私が運ぶわ、マミヤー。』

両手で口を抑える明石の耳にそんな二人のやりとりが流れ込んできくが、その内容が明石の心に湧いてくる笑いの水位を低くしてくれる事は無い。尖がった目で常に不機嫌そうな表情を浮かべている神通が、かつてはハナを垂らしていた事もあった。その言葉と供に脳裏に浮かんでくる友人の想像図は、明石の笑いを今にも防波堤を突破せんとする程に活気づけてしまう。なまじ普段からよく顔を合わせているだけに、彼女は友人の姿をありありと瞼の裏に描く事が出来るのだった。

『ぷくくくくつ・・・！』

その一方、間宮は先程耳にした那珂の言葉で、自身が請け負っていたとあるお仕事をお願い出した。そのお仕事とはある大先輩から請け負った物で既にその用意も終えているのだが、彼女の瞳に写る那珂の背後の行列を鑑みるにその先輩の下に運ぶ事がしばらくはできないのは明白だ。故に間宮はふと笑顔を消すと袖を捲くつた両腕を組み、僅かに首を捻ってそのお仕事を如何にして完遂するか考えを巡らす。一応は人間と同じ食べ物を摂取しないと体力を回復する事が出来ない仲間達に食べ物を与え、それに乗じて同じ帝国海軍を成す仲間達にお菓子を配って戦地での安全保障をお願いするのは間宮にとっても大事な事ではある。だが彼女が脳裏にてその事と天秤にかけた先輩とは現代の帝国海軍においても生き字引と目されている人物で、間宮の心の天秤は中々その釣り合ったバランスを崩す事が出来なかった。

しかしここで間宮は、先程から背後にて不自然な吐息を漏らして方を上下させている明石に気付く。わざわざ自分への挨拶の為に尋ねてきてくれた、清々しい感じの性格を持つ後輩を瞳に入れた間宮。そんな先輩の視線にも気付かず明石は相変わらず噴出す寸前の様相を呈していたが、しばらくそれを眺めていた間宮は自身が請け負っていたお仕事の最後を彼女に頼む事を思いつく。まだまだ新米の特務艦として売込み中である明石の境遇も、間宮にとってはそのお仕事を頼む口実の一つであった。

やがて手を叩いて声を上げた間宮に明石は笑いを堪えながら顔を向けるが、先輩の口から出てきたある人物の名に明石の笑いの水位は一気に下がる。なぜならそれは現代を生きる艦魂達所か、彼女の師匠の朝日あさひですら先輩と頂いている者の名であったからだ。

『明石、富士ふじさんにはもう挨拶した？』

『え・・・？』

『紅茶と一緒に食べれるお菓子を頼まれてたんだけど、ちょっと今は手が離せそうに無いんだ。挨拶がてら、富士さんにこのマフィンを届けてくれないかな。』

突然の事に思考回路が停滞する明石の手に、間宮はお菓子を詰め込んだ紙袋を乗せる。師匠以上に長く海軍にご奉公してきた大先輩の名に、明石は規律を失った視線を自分の両手に乗せられた紙袋と間宮の間で交互させる。しかし間宮は彼女が声を返す前に、ふとその視線を明石から舷側の向こうに広がる波間の一角に向けた。

間宮が顎を小さく動かして指し示す横須賀の海原。彼女の姿につられて視線を流した明石の瞳には、勝力岬の辺りでその身を波間に浮かべて、明石の師匠と同じく古き英国の伝統を具現化したような艦影を持つ富士艦の姿が写るのであった。

第六四話 「伝えられる物／其の一」

間宮^{まみや}のおつかいを勢いで引き受けてしまった明石^{あかし}は、横須賀の海岸の一角にて繫留^{ふじ}される富士艦のちょうど中央に位置する甲板へと白い光を伴ってやってきた。

マフィンの入った紙袋を抱いた明石は甲板に足をつけるや、ちょっと色褪せた感じのある灰色の木甲板の感触に意識を惹かれる。革靴を履いた明石の足は木甲板と擦れる度にどこか心地良い楽器のような音を奏で、決して柔らかい物ではないにも関わらずその感触はふかふかとした感覚さえある。所々にあるひび割れや無数の小さな傷は、その木甲板と持ち主であるこの艦の年季という物を一段と良く明石に伝えた。

『ひよええく……。』

木甲板から読み取った自身の師匠以上であるこの艦の老齢さに、明石は思わず声を放ってしまう。そして彼女は足元の甲板から視線を上げ、視界に広がる上部構造物と煙突、マストとその視線を段々と空に向けて流していった。

何の跡なのか少し歪んでいる鉄製の壁に、長年の潮風によって塗装が僅かに剥がれかけている扉、擦り傷によって陽の光の通過を遮っている舷窓のガラス、ちょっと赤錆を散らせた鉄板同士の継ぎ目やリベットの周り。その光景は明石に、師匠と同じ年代に活躍していた筈のこの艦が、実は数十年前も年代が違うのではないかといった疑問さえ抱かせる。掃除こそしっかりされてはいるものの、甲板のあちこちにはマストにて翼を休めていたであろうカモメ達の”爆撃”の跡が僅かに残っており、艦尾に翻っている軍艦旗もどこか明石の分身に掲げられるそれと比べると覇氣の様な物が無い。

この艦が自分からみれば大先輩に当たる事は解ってはいるが、どうしても明石にはそのくたびれた様子が意識の中で激しく自己主張する。それもその筈。何を隠そうこの富士艦、現存する軍艦旗を掲げた戦艦という艦種の中では最古の艦艇なのであった。

『・・・・・・・・。』

明石は腕の中に抱いた紙袋を一度持ち直すと、その視界のあらゆる角度から訴えられてくる古めかしさに息を飲んで辺りをゆっくりと見回す。その刹那、彼女の耳には微かな歌声が響いてきた。

『^{おぼろ}朧げながらも^{ほしかげ}星影に、見ゆるゝは確かに^{ていえん}定遠号・・・・・・・・。』

それは小声で奏でられる歌であったが、その歌声は古めかしい眼前の光景とはかけ離れた若々しさがある。そしてその歌は、明石の友人達が日頃からよく歌っている物であった。

すぐに明石は歌声が流れてくる富士艦の艦首に向かって歩き出す。まるで木管楽器のような音を放つ木甲板の音がはからずも伴奏と化し、次第に大きくなり始めていく明石の耳に届く歌声を彩って行く。やがて明石の瞳に写る僅かに広がった艦首甲板には、黒い水兵服姿の小柄な女性がデッキブラシで甲板を掃いている姿があった。そしてその女性を明石は知っており、すぐさま脳裏で検索した彼女の名を声に放つ。

『^{あさしお}朝潮・・・・・・・・！』
『あれえ・・・・・・・・、明石さん・・・・・・・・。』

その女性は明石の友人である神通^{じんつう}の部下、二水戦8駆所属の朝潮だった。

未だ会った事の無い大先輩の分身に朝潮がいた事に明石は驚きを

隠せないが、当の朝潮もまた横須賀の一角でひっそりと余生を送っているこの艦の甲板上で明石と会えた事は驚きだった。お互いに偶然の会合を得て目を丸くして顔を合わせる中、明石は朝潮のデッキブラシと足元にある海水を湛えたバケツに気付く。よく見ると朝潮は靴と靴下を脱ぎ、裾を捲くって裸足になっていた。それは明石の分身でも日頃から乗組員達によって行われる甲板掃除と同じ格好であるが、10月にもなって裸足になって冷たい海水を撒いた甲板を歩くのというは寒い事この上ない。それまで身体を動かしていた為に身体は温まっているのか、まるで寒さに対して警戒する様子の無い朝潮は近づいてくる明石に丸くした目をずっと向けていたが、すぐ傍まで明石が来た途端にふとそこを通り過ぎた潮風でちよつと寒さを感じてしまったらしい。『寒っ！』と小さく叫んでデッキブラシを抱くようにしてうずくまると、身体の中でも一際寒さを主張する自身の素足を両手で擦り始めた。

一方、明石はちよつと寒さに挫けそうになっている朝潮を心配して、彼女の前にしゃがみ込んでその顔を覗きこんでみる。だが明石の心配を他所に、意外にも朝潮は白い歯を僅かに覗かせて苦笑いしていた。さすがに二水戦の一員である。寒さよりもそこから来る自身のちよつと格好悪い所を明石に見せてしまった事に、朝潮は残念そうに苦笑を浮かべているのであった。

『あ、あはは……。さ、寒いです……。』

そんな事を言いながら歪んだ笑みを向けてくる朝潮に、明石は胸に抱いた彼女への憂いを和らげて笑みを返す。

『ふふ、もう10月だもん。そりゃ、寒いよお。』

『す、水兵さんは辛いですう……。』

朝潮のそんな台詞も、明石は自身の分身で同じく水兵さん達のお

仕事とされる甲板掃除にて何度か耳にした事がある。雪の降る真冬だろうが灼熱の日差しで甲板が熱を帯びる甲板だろうが、裸足で甲板を掃除するのは水兵さんの主要なお仕事の一つなのだ。艦魂とは言えその左肘に一等水兵の臂章ひしやうを身に付けている朝潮の身の上を鑑みれば、ちよつと可哀想だが彼女にとつても今の様な甲板でのお掃除は大事な大事なお仕事なのである。

しかしちよつとここで明石には素朴な疑問が湧いた。それはこの朝潮が直属の上司である神通の分身ではなく、「何故に艦隊にも属していないこの艦の甲板掃除をしているのか？」という物である。水兵の身の上を考えたとしても、二水戦所属の艦魂達の中では神通に次いで偉い朝潮。その艦齢も神通を除けば、戦隊の中でも彼女は最年長者である。新入りの雪風ゆきかぜでも、実の妹の霰あられや霞かすみでも、コキ使える人員を朝潮はそこそこ持っている筈なのだ。

そんな疑問を脳裏に過ぎらせた明石はついつい首を捻り、ようやく素足に温もりを得た事で立ち上がった朝潮にその事を尋ねた。

『ねえねえ、朝潮。なんで富士さんの甲板でお掃除してるの？』

気の良い朝潮はちよつと寒い横須賀の潮風にその短い髪を揺らすと、歪みの消えた笑みを浮かべて再びデッキブラシを握った手を動かし始める。彼女は海水の入ったバケツにブラシを突っ込んで十分に湿らせ、すぐにまた甲板に向かってデッキブラシを擦りつけながら声を返してくれた。

『はい。横鎮所属の艦魂達の間では、持ち回りでこの横須賀で余生を送っている先輩方のお世話をするのが慣例なんです。私は去年の11月の艦隊編成で佐鎮から横鎮に転籍して来たんですけど、その時に那珂さんとこの先輩達から教えてもらいました。』

それは一応は士官の階級章を身に付けている明石にとって、これ

まで知らなかった水兵さんの階級を頂く者達の伝統。すなわち横須賀鎮守府籍を示す1〜10の部隊番号を持つ駆逐隊の者達によって受け継がれる古いしきたりで、明石の知る所ではこの朝潮が司令駆逐艦を務める二水戦の第8駆逐隊、那珂なかが率いる四水戦隷下の第6駆逐隊や以前に大湊おおみなとにて治療を行った第1駆逐隊の面々を指す。

鎮守府によつてはこのような文化を仲間達が持っているという事を明石はこの時初めて知り、狭いようでもまだまだ知らない事が多い艦魂社会の一端を垣間見て関心の吐息を漏らす。

『へええ……。鎮守府ごとにそんなのがあるなんて、全然知らなかったあ。』

またまた目を丸くして感心している自分を曝け出す明石。元来立場や階級の有無などを気にしない性分である彼女のそれは、逆にそういう事柄にはトコトンうるさい上司を持つ朝潮を意図せずともおだてた。

二水戦において常日頃から容赦の無い指摘を受けてお尻をぶっ叩かれるのは年長者である朝潮でも例外ではなく、最近は雪風という文字通りの被害担当艦ができて幾分は少なくなつてはいるものの、上官である神通のおっかなさを彼女もまた身を持って知っている。だがそんな上官と同じ下級将校の襟章を身に付けている明石がこうもまた自分の知識に興味を抱いてくれている事が、朝潮にとつてはとても新鮮な喜びであった。気の良いおしゃべり好きな性格もある彼女は、得意げに小さく咳払いを放つと自身が知る他の鎮守府での慣習を明石に語り始める。

『んっん……。呉はちよつと解らないんですけど、仲間内から聞いた話だと、舞鎮では海兵団練習艦になつてる吾妻あずまさんを教官に迎えて、帝国海戦史のお勉強会をやつてるそうですよ。あと私が前に籍を置いていた佐世保では、三戦隊の金剛こんごうさんとその師匠の敷島しきしまさ

んによる体力強化訓練ですね。あれは辛かったな……。それに比べれば横須賀は平和ですよお。」

『へえええ。』

今まで知らなかった仲間達の事に明石は目を輝かせて朝潮の声に頷く。特に佐世保にて繰り広げられたという体力強化の訓練は、つい先日とその教官の一人である金剛と会っていた事から明石には容易に想像できた。もう一人の教官である敷島とは会った事は無いが、明石にはその顔が何となく想像できる。なぜならその敷島という先輩は、明石の師匠にして母の様に慕っているという朝日あさひの実の姉であるからだ。おまけに先日に身を持って知った金剛とその教え子である神通のお人柄を勘定すれば、金剛の師匠であったという敷島の性格もまた明石にはなんとなく想像できる。

きつと「あの親にしてこの娘あり」に違いない。

そんな言葉が至って意識せずとも明石の脳裏を過ぎる。脈々と受け継がれる艦魂としての、良くもあり困り物でもある人物像の系譜なのだった。

しばらくはそんな事を考えながらも、新たな仲間達の日常を知って嬉しがる明石。そしてそんな明石の様子に朝潮の口が閉じる事もなく、二人は次第にその場での立ち話に花を咲かせ始めていく。どちらも気の良い社交的な性格であるから、二人はすっかりお互いの初期の目的を忘れて鎮守府別の日常談義を話し込んでいった。

そして二人はお互いの話し声に、その場へと近づいてくる鉄が軋む連続音に気付かなかった。

『こら。栄えある帝国海軍の者が、怠けてはいけないわ。』

突如として二人の傍から放たれた、まるで弦楽器を思わせるほ程に優雅な雰囲気を持ちながらも、しゃがれた感のあるとてもゆつくりとした穏やかな流れの声。それは明石には師匠である朝日のそれと同じ様に威厳をひしひしと伝え、朝潮には大先輩からのお叱りを受けてしまう可能性を強く抱かせる。

『あ、ふ、富士さん……。すいませえん……。』

振り返りながら朝潮は声を放った人物に詫びの言葉を放って深く頭を下げる。咄嗟に背後にデッキブラシを握ったままの手を回し、ちよっと俯き加減で朝潮はその人物の顔色を窺う。つられて振り返った明石もそこにいた人物の姿を瞳に映した。

明石の視界のに入るのは、友人である神通をも凌ぐ程の身長と肩幅を持つこの艦の主の顔。だがその眼鏡越しの眼差しを、明石は見上げるようにして認める事は無い。口元や目の縁、頬に刻まれたしわと、地の色の一切を失った白く長い髪を伴った西洋人の女性の顔つきを持つそのお人は、なんと車椅子に腰を下ろしているのだ。朝潮がこの人物を呼ぶ際に放った言葉と、先程から目になっているこの艦のちよっと色褪せた感じを持つ雰囲気が、明石の瞳に写る老いた女性の姿と見事に合っている。故に明石はすぐさま彼女を、この富士艦の艦魂である富士だと認識した。

明石のような黒い第一種軍装ではなく白い着物の形態を模した傷病衣を身に着け、その上から淡いクリーム色のストールを巻いている富士。しかしその姿を飾り付けている色は富士の服装には微塵も無く、彼女が覇気という言葉がどこにも無い病人と大差が無い脆弱な身体となっている事は明白だった。冷たさが増した10月の秋風

に揺られる富士の肩から垂れたストールを、彼女が乗った車椅子を押してきたであろう水兵服の少女が咄嗟に手を伸ばして直す。

その少女は明石とは知人にして、富士の眼前で俯いている朝潮の実の妹に当たる者だった。

『富士さん、失礼します。』

『ありがとう、荒潮^{あらしお}。』

自身で直そうとゆっくりと手を動かしていた富士は、風に揺られてしわができたストールを撫でる荒潮にお礼を口にする。肩口にて丁寧なストールを直してくれる荒潮の手を富士はゆっくりとした手つき撫で、細やかな荒潮の心配りに感謝の意を示した。

そして富士の手の動きとシンクロしているかのようなゆっくりとした口調は、彼女の心の内が激しい起伏を持つてはいない事を明石に十分に悟らせる。その顔つきはずっと富士の方が老いてはいるが、どこことなく師匠の朝日にも似ている感じだった。

同様に銀縁の丸眼鏡の奥にある富士の大きな緑色の瞳も、先程の言葉とは裏腹に怒りの色を滲ませてはいない。しかし朝潮は僅かに富士の顔を見ると、再びその視線を足元に落とす。なぜなら富士の顔には老いと供に神々しいまでの艦魂としての威厳を持っており、朝潮は逃げるようにして目を背けたのだった。

やがて富士の唇から漏れてその場に響く声に、朝潮はなんとも気まずそうな歪んだ表情を浮かべて耳を傾ける。

『朝潮。貴女の先代は、今の貴女のように立派な分身を持っていなかったけど、いつもどうすれば物事を上手にこなせるかを考える優秀な艦魂^{ひと}だったわ。私と同じ英国生まれとしての誇りを胸に、あの子は従兵として私に仕えながら、型落ちの外国生まれの艦とされながらも、日本の海を護る者として普段から勉強に励んでいたわ。そしてあの子は日露戦役、その後は初代”二水戦”の一員として、立派

に自身の責務を果たしたわよ。』

『あ、う……。は、はい……。』

現代の帝国海軍の艦魂達が一様に偉大な先輩と崇める富士の言葉。それは決して頭ごなしに叱り付ける様な代物ではないが、自身へと繋がる系譜を上手く絡めたその語りは朝潮の心を優しく、だがしっかりと明確な輪郭を示して直していく。まして人間達の間でも語られる事の無い、帝国海軍にかつて所属していた一隻のとある駆逐艦の話は朝潮にしても初耳であり、しかもそれは彼女がいま所属している二水戦の先輩にして自分の先代の事。教えてくれた富士以上に、朝潮が色んな思いを胸の中に抱くのも決して無理の無い事である。

実はこの富士、朝潮は初めとした過去を知らない現代の艦魂社会の若者達に、自身へと繋がる系譜を伝える事を今の自身の使命だと心に決めているのだった。

『貴女はただの駆逐艦の艦魂ではないわ。栄えある「朝潮」の名を受け継いだ者。それは戦艦の艦魂どころか、人間達にも成しえない素晴らしい事よ。だから貴女は特別なもの。』

『は、はい……。！』

富士の語りを受け、朝潮の心からは暗い色が引いていく。数多い駆逐艦にして艦魂社会では水兵という下っ端の立場とされる朝潮だが、そんな自分を人間にも負けない程に特別だと言ってくれた富士の言葉は彼女にとってはとても嬉しかった。

すると富士は笑み浮かべておもむろに右手を伸ばし、その動作に気付いた荒潮は富士が腰掛けた車椅子を少しだけ前に押し出して朝潮に近づける。自身が普段から望まねばならない心構えの根本を悟り始めていた朝潮の頬には、心地良い温もりを伴った富士の右手が触れ、裸足での甲板掃除で身に染みた10月の寒さを忘れさせてくれる。

『自分には常に厳しく、でも常に自分を大事にするのよ、朝潮。かつて貴女の先代が、生きる上でそうしていた様にね。』

『は、はい！』

『うん。頑張るのよ。』

持ち前の元気の良い返事をやっとの事で放つ朝潮。不思議と彼女の中では、会った事も無く顔も知らない自身と同じ名を持った人が、空から優しく見守ってくれているような感覚を覚えていた。

頑張らねば。先代が今に遺す栄光の為にも。

そんな言葉を放って気持ちを新たにした朝潮。そしてそんな彼女を祝福してやるかのように微笑んだ富士は、朝潮に触れていた右手を戻すと自身の首の周りに巻いていたストールを解き、正面にて明るさを取り戻した表情を浮かべる朝潮の首にストールを巻きつけてやった。

『寒い中の甲板掃除、有難う。特別な身体、大事にしてください。』

なんとも心優しい富士の言葉は、それまでずっと休んでいた朝潮の手を無意識に就労させる。彼女は元気の良い返事を再び富士に返すとデタラメな巻き方でストールを身に付け、両手で強く握ったデッキブラシを再び甲板に走らせた。

一方、富士と友人である朝潮のやりとりをそれまで黙って見ていた明石は、決意を新たにして甲板掃除に励む朝潮の姿に、最初にそれを目にした時よりも力強さのような物が宿っているのを感じてな

らなかった。木甲板を薙ぐ朝潮の手にするデッキブラシの音も、心なしか明石には心地良さすらも伴ったように聞える。それは紛れも無くこの富士が朝潮の気の持ち方を変えたからに他ならず、明石は同じ様なやり方で自分に艦魂としての、軍医としての道標を与えてくれた師匠である朝日の事をふと思い出した。

それは帝国の存亡を賭けた戦争を経験した者が持つ独特の教育姿勢で、富士は早速それを眼前にて励む朝潮から明石へと向ける。

『貴方が、明石ね・・・』

その場を流れる風の音を思わせるような富士の声が明石の意識を誘い、二人はその視線を交えた。ストールを失っても師匠の朝日以上に艦魂としての気品を身に纏った富士の姿は、老いという物が時には立派な人物の魅力となるという事を明石に無言で教える。目を合わせたまま富士に言葉を返せずに立ち尽くす明石の姿は、見惚れると言うよりも、気圧されて視線を動かせないと言った方が正しいくらいであった。

そんな中、富士は屈託の無い、しかしどこか不敵な感じも漂わせる笑みで小さく笑うと、背後にいる荒潮に顔を向けて口を開く。

『荒潮。お姉さんと一緒に、お掃除をお願いできるかしら？』

『はい。解りました。』

二言返事で富士のお願いに頷いた荒潮はすぐさま富士の背後から実の姉である朝潮の下へと駆け寄って行き、白い光りを伴ってデッキブラシを出現させると朝潮の隣で甲板掃除を手伝い始める。それを笑顔のまま見届けた富士は未だに口を僅かに開いて呆けたままの明石に向き直り、まるで幼児の様に彼女の袖を掴んで身体を揺さぶりながら再び声を掛けた。

『ここはちよつと冷えるわ。部屋でお話をしましょう。』

『あ、は、はい……。』

富士のゆつたりとした声とそこにある勢いに飲まれる明石。

すぐさま車椅子に向かつて手を伸ばそうとするが、明石はこの時になってようやく両腕の中にマフィンを入れた紙袋を抱いていた事に気付く。それはもちろんこの富士へと渡す為の代物であり、明石がこの偉大な先輩の下にやってきたそもその理由でもある。先程までの朝潮と同じように自分も目的を忘れていた事に、明石はその胸の中に小さく自己嫌悪を抱くが、同時に富士を早く部屋の中へと運んでやらねばという使命感のような物も明石の中には湧いてくる。故に明石は富士の背後に立ったまま紙袋をどうすべきかと頭を捻ってしまいが、富士はそんな明石に振り返って笑みを見せるとゆつくりと両手を伸ばして言った。

『それは私が持つわ。』

『あ、す、すいません……。！』

『いいのよ。私が頼んだ物だから。』

傷病衣を身に纏う富士の姿は、軍医として艦魂社会で励む明石にとってはどうしても患者の様に見えてしまう。師匠以上に老いが目立つその外見もまた、富士の健康に対しての憂いを大いに誇張した。そしてそんな富士に物持ちをさせてしまう事に、明石はちよつと自分の事を申し訳なく思う。

寒い秋風が通り抜けていくその甲板の寒さは、まだ若い自分よりも富士の方が身に堪える筈。

そんな事を考えながら明石は車椅子の背後にて突き出したステアーを握り、自身の足を前へと運んで車椅子の車輪を回転させ始める。

明石に押される事によってようやく進み始めた車椅子がキコキコと鉄の軋む音を放ち、甲板の微細な起伏によって小刻みに揺れる中、明石は僅かに腰を折って富士の顔を覗きこむ様にしながら謝罪の言葉を放った。

『すいません・・・、富士さん・・・。お菓子を運ぶだけだったのに、遅くなってしまって・・・。』

すると富士は肩を小刻みに動かして、静かな笑い声を放ち始めた。それはとても穏やかにして軽快な声で、明石が憂う事に対して富士が全くその胸の中に怒りの色を滲ませていない事を示す。

『ふふふふ。きっとそう言うと思ったわ、明石。』

富士はそう言いながら指をゆっくりと立てて、彼女の分身の中へと続く道を明石に教える。

車椅子を背後から押す明石は富士の表情を瞳に映すことは出来ないが、しゃがれていながらも高貴にして優雅さを一時も失わない富士の声の流れは明石の口元を自然と緩くさせる。初対面にも関わらず、自身の名前を慣れた口調で呼んでくれる事も明石には嬉しかった。

もっとも明石は富士の態度の裏として、この富士がその長い生涯でかつて同じ名前を呼んでいた事があるからであらうと予測する。明石の師匠である朝日と同じ時期に帝国海軍の中核として戦場に赴いたというその経歴は、明石も詳しくは無くとも人伝に耳にした事がある。そしてそこには先程の朝潮と同じ様に、明石の先代もいた筈なのだ。

そこまで考えた明石は、まだまだ知らない事が多い自身の先代の事をこの富士に聞いてみようと思ふと決める。人柄と簡単な性格については以前に朝日より教えてもらった事はあるが、実は自身の先代がど

んなお仕事をしてどんな風に生きてたのかを、明石は詳しく教えてもらった事は無い。これまでにあった数少ない師匠とのお時間は、軍医としてのお勉強に必死に励む事であつたという間に流れてしまったのだ。時に休憩の時に雑談をする事もあつたが、四方山なお話を花咲かせるだけの余裕は残念ながらそこには無かつた。

しかし観艦式への参加の為に横須賀を訪れた今は違う。式の予行ですらもまだ一週間以上先であるし、参加艦艇だってまだまだ全部集まつていない。そんな中でのかんぴりと横須賀の波間に身を浮かべる明石にとって、最近の日々は長いお休みを戴いている様な物なのだ。ましてもし観艦式が企画されていなければ、今頃は艦隊訓練と称して忙しい日々をどこぞの作業地で過ごしている事は明白。軍医として励む事に気後れなぞ無いが、たまには休みも欲しいというのが明石の正直な所であつた。

そんな事から明石はこの際、富士に自身の知らない事を存分に教えてもらおうと考えたのだ。

『貴女とは是非一度、一緒にティーを飲みたいと思っていたのよ。』

『はい、喜んで。』

『ふふふ。』

富士の言葉に、美味しい紅茶をご馳走になれる事を察する明石。

同じイギリスの生まれである朝日がいつも飲ませてくれた紅茶の記憶を鮮明に持っている事もあり、彼女は浮き立つような足どりで富士の腰掛ける車椅子を押していく。侘しい艦内通路のベージュ色の電灯も、明石の小躍りを始めた心を休める事は無い。おまけに間宮お手製のマフィンを抱える富士の姿に、食いしん坊の明石はこれから始まる美味しい一時が待ち遠しくて仕方なかつた。

やがて明石は軽くなつた心に急かされて今だ目的の部屋まで着いていないにも関わらず、さっそく富士に自身の先代の事を聞いてみる。

『富士さん。私の先代ってどんな人だったんですか？』

甲板の上で会った時から富士が終始自分に好感を抱いてくれているような態度で接してくれている事もあり、明石はきつとこの優しい先輩と自身の先代は仲が良かったのだと考えた。彼女が慣れた感じで自分の事を呼んでくれる事からも、明石はその考えに疑いを抱く事は無い。

だがそんな明石の問いに返ってきた富士の声は、明石にとってはちよつと意外な物であった。

『ふふふ、先代の事が知りたいのね？少ししかお話した事は無いけど、聡明で明るい艦魂^{ひと}だったわよ。でも、貴女の先代の事を教える前に、私は貴女の事でもつとお話したいわ。明石。』

『わ、私の事、ですかあ？』

明石はちよつと目を丸くして富士に声を返す。

まだまだ新米である自身の事は良く解っている明石は、それ故に帝国海軍の長老である富士が先代ではなく自身の事に興味を示している事が不思議でならない。第二艦隊に配備されたとは言え、その所属した期間はまだ一年そこそこだし、本来のお仕事である仲間の治療だって実は数える程しかした事は無い。神通と殴り合いの喧嘩をした事で一時は有名になった事もあるが、そんなお話にこの富士が興味を示すようにも思えない。

思わず首を捻って富士の言葉の裏を考え込む明石だが、富士は背後に立つそんな明石の表情に笑みを見せると何の前触れも無く、ある言葉をゆつくりと言いつつ。そして明石は富士の放った声に、その思考回路を停止させてしまう。

『森、^{もり}忠少尉^{ただし}。知っているわね、明石？』

『え……。な、なんで富士さんが……。！』
『ふふふ……。』

片時も忘れた事の無いかつての相方の名。

それが突如として自身の耳に響いた事と、それを口にしたのが帝國海軍艦魂社会の重鎮である富士であった事に、明石は驚きを隠せない。思わず歩みを止めて富士の顔を驚きの表情で見つめる明石だが、富士はそんな明石の変化を楽しんでいるかのように微笑むだけであった。

第六五話 「伝えられる物／其の二」

横須賀の海岸の一角にて繫留される富士艦^{ふじ}。

類別の上では一応は特務艦である事からその艦尾には軍艦旗が翻っているが、航海学校の練習艦とされている今の富士艦の艦影にはかつて対馬沖で世界最強の海軍と戦った当時の面影は既に無い。撤去された主砲塔跡には木造の簡易な校舎が増築され、波間の下にて牡蠣やフジツボの集合住宅と化している艦底にはスクリーすらも見る事が出来ない。この横須賀の波間にて余生を過ごす事が決定された際、富士艦からはスクリーが撤去されたのである。もちろんそれは艦魂である富士の身体に対しても影響を与え、足の自由を奪われて車椅子生活を送っている彼女の姿の理由ともなっている。

そして軍艦旗と同じ様に彼女の分身には一応の艦長と乗組員も配属されてはいるが、その数もお仕事も富士艦が波間を駆ける事には一切の関係を持っていない。つまり名ばかりなのである。

故に明石^{あかし}が富士の腰掛けた車椅子を押して進んだ富士艦の中は掃除こそされてはいるが、人間達の息遣いも生活の音も何一つ感じる事が出来なかった。もともと富士はそんな自身の分身の状況を有効活用しているらしく、彼女は明石の師匠にしてかつての戦友でもある朝日と同じ様に艦尾の長官室を自分の暮らす空間としていた。

『さあ、入って。』

富士はゆっくりとした口調で長官室のプレートが張られたドアの向こうへと明石を誘う。その奥には真っ赤な絨毯と茶色の輝きを放つ椅子やテーブルが並んでおり、スタンウオークへと繋がっている扉の窓から漏れて来る陽の光りで照らされていた。

明石にとってはそんなお部屋の光景は朝日との一時で幾分は慣れてはいたが、すぐに彼女はそこに明確な違いを認める。だがそれは

室内にてノスタルジックな雰囲気を放っている家具の形が違うとか、舷窓に施されているレースのカーテンが朝日の物よりも高級そう、等といった目に訴えてくるような代物では無い。その証拠に、明石は僅かに顎を上げて鼻を鳴らし始める。

『んん？ スンスン・・・。』

後ろ手に扉を閉めながら、明石は部屋に充満する甘い香りに鼻の穴を大きくする。そのなんとも格好悪い自身の姿を恥じらいもせず、延々と扉の前で続ける明石に、車椅子を手で進めて部屋の中へと進んでいた富士は可笑しくて笑みを溢した。その姿はまるで何も無い寒村から大都会へと初めてやってきた田舎娘を彷彿とさせ、富士は口に手を当てて思う存分に明石を笑う。やがて当の明石がそれに気付いて後頭部を撫でながら赤面する中、富士は部屋の最奥に位置する机の上にて室内に香りを充満させている大元を指差して声を放った。

『御香よ、明石。初めて見たの？』

『あ、えへへ・・・。はい・・・。』

苦笑を浮かべつつ明石は富士が指差す机の上を見てみる。するとそこには木製の反った板に斜めに挿されて、静かに煙を上げている黒い棒状の物があった。火気厳禁である艦内生活であるから明石はこれまで自身の分身の中でそれを見た事は無かったが、ちょうど自分の元へと流れてきたその煙を吸い込んでみて、それが御香という代物である事をよく理解する。その香りはとても甘くしつとりとした感じで、いつぞや相方にお土産として貰った花に良く似た香りがした。そして明石の連想とした香りの正体は実は当たっており、富士はその事を明石へと教えてやる。

『ラベンダーっていうお花の香りなのよ。日本では手に入らないけど、国際港である上海にいる私の友人が、時々商船や運送艦の艦魂に頼んで送ってくれるのよ。』

にこにこ笑みを浮かべてそう言った富士に明石は最初の内は笑みを返していたが、今しがた富士が放った言葉が彼女の脳裏に少しだけ引かかる。それはラベンダーという花の名。富士と同じく英国生まれの代物であるその花は、当然の事ながら明石は目にした事は無い。そもそも花自体も彼女は間近で見た事はこれまで一度きりしかないのだ。しかしなぜか明石はそのラベンダーという言葉が先程から耳に残っており、首を捻ってその花に纏わる記憶をなんとか辿ろうとする。

『ふふふ、どうしたの？』

『うーん……。あ。』

明石の様子を不思議に思っただけで声を掛けてきた富士。しかし明石は返事もそこそこの所でやっと頭の中で引かかっていた事を思い出し、すぐさま上着のポケットに常に忍ばせている小さなメモ帳を取り出す。

それは明石が日常から知識を書き留めておく物で、師匠とのお勉強の際には常に使っている知識の書。そして明石はパラパラとめくって行くメモ帳の中の1ページに、目的の「ラベンダー」の文字を見つけた。だがもちろんそこに花の名が単独で記載されている訳が無い。明石の予想通り、花の名が書かれた行の下にはラベンダーが持つ独特の効能が併記されていた。

『鎮痛と沈静作用、なるほど。』

ついついメモ帳に見つけた効能を口に出した明石。実は明石は富

士の部屋へと足を踏み入れた時から、そのなんとも落ち着いた感じが妙にすんなりと自身の身体に馴染んでいる事がちよつ不思議だった。

というのも、かつて師匠の朝日あさひのお部屋にて初めて勉学に励んだ頃、一度だけ彼女はその高貴さと落ち着きを伴った見事な部屋の家具に舞い上がり、朝日が不在となった一時を良い事に跳ぶ様にしてソファに腰掛けて遊んでいた事がある。まるで宝石のような輝きを放つソファの木目が、彼女の無垢な心を無条件に躍らせてしまったのだ。しかし一流の淑女レディという艦魂たる者の理想像を体言する朝日がそんな教え子の姿を許す筈は無く、明石は部屋へと戻ってきた朝日によって笑顔のままなのにとっても怖いというそのお説教を長々と受ける事になったのである。

そんな事から富士の部屋へと訪れた明石は、偉大な先輩にして朝日と同じ様な分身を持っているであろう富士の部屋を視界に入れて平静を保てるか、と一人で自身の事を憂いでいたのだが、部屋について明石の心の大半を閉めているまだまだ子供と変わりない心は浮き立つような事は無かった。別に部屋の内装がイメージしていた物と違っていた訳ではないし、むしろ朝日の部屋と比べても富士の部屋の豪勢さはずっと上である。故に明石は凄さを実感しても湧き上がるような好奇心が一向に襲ってこない事を不思議に思っていたのだが、富士が教えてくれたラベンダーの香りを放つ御香と師匠より授かった知識の融合によって、彼女のその疑問には終止符が打たれる。ラベンダーの持つ鎮静作用が効いていたのだ。

その一方で富士は、なにやらポケットから取り出したメモ帳を片手に一人頷いている明石に、先程の彼女の真似をするかのように首を傾けていた。しかしすぐにその表情は笑みと変わる。富士が明石の様子を考察する際に辿った記憶の中で、明石はラベンダーの花が持つ医学的な言葉を放っており、その事が富士に明石が考えている事を悟らせる。

病気とは無縁である筈の艦魂の事は富士も長い生涯で知っている

が、明石はそんな艦魂の中にあつて医学の用語を用いた。そして富士はもう一人だけ、この明石と同じ様に医学の知識を持ち合わせる艦魂を知っているのだ。富士の記憶の中で一際光り輝く時代の思い出の住人にして、共に波高しの日本海で戦った戦友。彼女の予想通り、その人物はもちろん明石に医学の知識を授けた張本人であつた。

『あゝあゝ。そう。貴女、朝日に教えを請いだのね？』

『あ、は、はい！そうです！』

富士の口から自慢の師匠の名前が出てきた事に、明石は表情を明るくさせる。もちろん朝日とこの富士がかつての戦友の一人であつた事は明石も知っていた。すると富士は明石に向かって笑いながら大きく頷くと、部屋の右舷側の壁にたたずむ大きな棚へと顔を向ける。明石の立っている位置からはソファや机と同じ様に木目を輝かせている棚にしか見えないが、やがて富士の手招きを受けて明石は彼女の元へと歩み寄って行つた。

『あの子は仲間内の中でも、最も博識な艦魂^{ひと}だったわ。軍医になる前から、ハーブやティーの効能を趣味で勉強してたのよ。』

そんな言葉を放つ富士は銀縁の丸眼鏡に手をかざして舷窓より漏れて来る陽の光りを反射させると、ふとすぐ横にあつた明石の腰に腕を回す。微かに力を込めてそっと明石を抱き寄せる富士は、先輩の次の言葉をちよつと驚いた表情で待っている明石に対して、顎を棚の方に向かって動かしてみせる。

そして富士の行動で棚を真横からではなく正面から見た明石は、棚の中段に飾られるセピア色の写真の中で、写真と同じくほんのりと黄色がかったセピア色の肌を浮かべる自身と同じくらいの年代の女性達を瞳に映した。

『あ、こ、これ……。』

すぐさまその写真に写る女性達の正体を察する明石に、富士はゆつくりとした口調で声を返す。

『そう、貴女の先輩達。もう36年も前になるわ。』

『うわあああゝ……。』

その写真に写っていたのは背後に共に写る軍艦旗が似つかわしくない西洋人の顔をした女性達ばかりであったが、朝日や富士で見慣れている明石はそんな事を気にも留めずに写真に顔を近づけて大きな瞳を右往左往させる。まさに今、明石が身に付けているのと全く同じ第一種軍装を身に付けた女性達の格好が、無言で彼女達が帝国海軍の艦魂である事を物語っていた。

どうやら集合写真であつたらしく、セピア色の肌の女性達は前後2段の横列に並んでいる。その列を端から順番に焦点を流して明石だが、ふと彼女の視線はとある人物の前で止まった。どこかで見覚えのある、乗組員達が持ち込んだ雑誌で見た貴族の婦人の様なカールの掛かった長い髪と、じっと目を凝らす事で見て取れた口元のホクロ。一緒にあつたしわがその顔には微塵もないが、明石はすぐさまその人物の名を思い当てた。

『こ、これ、朝日さんですか!?!』

『ふふふ。すぐ解つたって事は、朝日は変わってないのね。』

『ひよええ、若い……。!』

セピア色に染まっても解る艶のある肌の朝日に、明石は驚きを隠せずに素直な感想を放ってしまう。爛々と輝く明石の瞳に写る36年前の師匠は西洋人独特の広い肩幅も手伝ってか、その華麗な

姿は別人にも思える程で、明石の記憶にある第二艦隊の仲間内にだって太刀打ちできる人物は一人も見当たらないくらいだった。

もはや凄さを実感するというよりは感動すらも覚えている明石。

そんな自分を富士が優しげな緑色の瞳で視界に入れている事を意識しようともせず、彼女は今度は写真の中で師匠の隣に座る人物に気付く。同じく西洋人の顔つきをしているその顔に見覚えは無いのだが、その人物が足を揃えて座っている周りの女性達と違って大股で椅子にどっかと腰掛けているその姿にはなんだか見覚えがある。

開いた両足の間で甲板に突き刺すように立てた日本刀の柄に両手を乗せ、何がそんなに気に入らないのかと思わず聞きたくなる程に不機嫌そうな表情の、鋭い釣り目を持つ女性。『はて？』と明石は首を捻ってその人物の名を探していたが、その女性が顎を引いて上目遣いで睨むような視線を向けている事に気付くや察しがついた。その女性から受け継がれる物を先日こんじょうの金剛の一件から思い出してしまった明石には、そのおっかない風貌の女性がまるで友人とそっくりに見える。それはもう瓜二つという言葉その物。そして明石の考察は当たっていた。

小さくその女性を指差した明石は富士に顔を向けると、思いついたその女性の名を尋ねてみる。

『これ、もしかして敷島しきしまさんて方ですか・・・？』

『ええ、そうよ。ご覧の通り無愛想で粗暴な所もあったけど、私達の中ではあの子が一番の戦上手だったわ。日露戦役の半分くらいは、私と一緒に一戦隊の二小隊を組んでたのよ。』

見事に当たっていた。やはり「あの親にしてこの娘あり」だったという艦魂社会の伝統を明石は確信する。良く見ると西洋人の顔つきを持つ敷島の顔は直接の教え子である金剛よりも、明石には何だか友人である神通じんつうの方に似ているような気がしてきた。微笑ましくもあり、同時に困った事でもある。もっともその事は明石にこれ以

上無い可笑しさを与えるのであった。

『にしししっ！そっくりい！』

かつての戦役においては華々しい活躍をした大先輩。だが友人との共通点が奇妙な程に多い敷島の姿に、明石はなんだか先輩への親近感が沸いて噴出してしまふ。彼女の心の中での湧き上がる親しみやすさは、師匠と仰いでいる朝日よりも上だった。

『そのまま、もうちょっと待っててね。ティーを用意するわ。』

すっかり一枚の写真にいくつもの発見をして有頂天の明石に、机の上に置かれていたティーセット一式に手を伸ばした富士が声を掛ける。明石はようやくここにくる間に富士の口から出た相手の名の真相を聞けると気持ちを切り替え、新参である自分の為に先輩の手を煩わせる手持ち無沙汰な感覚もあり富士に手伝いを申し込んだが、ティーの入れ方に拘りたいという富士の声でその申し出をやんわりと断られた。悪いなあを思いつつも明石はティーを用意する富士を背にして、再び写真に目を写してみる。

抽出が始まったのか、コポコポと子気味の良い音が部屋に静かに響くと同時に、明石の花を薄っすらと室内に漂い始めた茶葉の香りがくすぐった。

正直に言えば相手の話を早く聞きたい明石だったが、大先輩である富士の心遣いを無駄にする事は明石なりの道義に反する。故にはやる気持ちを抑えつつ、彼女は写真の向こうに並ぶ先輩達に目をやった。

『ん？』

と、その時、明石はふと朝日の後ろに立った一人の女性に視線を止めた。周りの者達と同じ様に西洋人の顔つきと広い肩幅、高い身長を持つその女性は敷島ほどではないにせよ、どこか冷たい視線を放って写真に写っている。その眼差しはその人が怖くて厳しい性格を持っているというよりも、何か写真越しに視線を交えた者を蔑んでいるような感覚すらある。色の感覚的にその顔の両脇を流れる艶の美しい金髪も、明石にはなんだか人形の髪の様に見えるのだ。

そして明石はその人物にも僅かにだが見覚えがあった。だが記憶をいくら辿ってもその女性の名は頭に浮かんでこない。最初は朝日の姉妹に当たる者なのかと思ったが、並んだ者達の中には敷島を含めた顔立ちの良く似た先輩を既に彼女は見つけており、彼女達に比べると明石が気になった女性は顔立ちが全然似ていない。それにその顔には朝日よりさらに大人びた感じの面持ちがある。あの朝日と正反対の性格であろう敷島ですら顔立ちは似ているのだから、どうしても明石にはその女性に対して何故に見覚えがあるのかが解らなかった。

『。。。』

首を捻ってなんとか記憶の山の発掘に挑む明石は、もっとよく見てみようと棚に置かれている写真に手を伸ばそうとする。しかし彼女のその手は、咄嗟にかけてきた富士の声によって動きを封じられた。

『あ、明石、ごめんね。それは古い写真だから、あんまり触って欲しくないの。』

『あ、す、すいません。。。』

背後から響いてきた先輩の声は決して怒鳴るような代物ではなかったが、まるで弦楽器のような音である富士の声に備わる気品は明

石の身体を硬直させる。富士の声はしゃがれているゆつたりとした口調であるのに、耳から入るとなんだかとても高級で威厳があるような声。どこぞの国の女王様のような雰囲気さえある。そのせいか明石の瞳に映されていた写真は、それまでの古ぼけた写真から宮廷画家が書いた王室一家の家族写真にも見え、明石はふと自分みたいな未熟者が触れてはいけな様な代物に思えてくるのだった。

そんな明石の背後にて富士は机のあちこちに手を伸ばして用意したティーセットをトレイに乗せ、明石が運んできてくれた紙袋の中からマフィンを取り出してお皿に盛り付ける。真っ白な下地に上菓で花の模様があしらわれたカップや皿は富士の手に触れられる度にカチャカチャと子気味良い音を放ち、小さな妖精達の会話のようにそれまで静かだった室内を賑やかにする。その音に耳を撫でられたのは、写真の向こうの女性が放つ霞んだ見覚えで首を捻っていた明石も例外ではない。どうやら朝日と同じ様にこの富士も紅茶を愛する習慣を持っているようで、明石は振り向いた先に笑顔で琥珀色の小さな滝をカップへと注いでいる富士の姿を瞳に入れる。

しかしその時に視界に入った富士の斜め横から見た顔に、明石は何かを感じ取った。

深いしわと銀縁の眼鏡に崩されながらも、かつては美しさを極めていたであろう事を見る者に良く伝える富士の輪郭。緩やかに小鼻の辺りからそびえる高い鼻。僅かに垂れるしわを伴った緑色の目。それらは優しげな富士の顔立ちを構成しているパーツの一つ一つであるが、明石はそれをついさっき背後にある写真の向こうに見つけていた事に気付く。

『ええ・・・！』

ついつい声を漏らして写真に顔を戻した明石の瞳に、それまでよりも更にハッキリとした見覚えを放っている人形の髪を持った女性が写った。流麗な輪郭と鼻のライン。蔑むような冷たい眼差しを放

つ、僅かに垂れたその目の縁。その顔のパーツが背後にいる大先輩と共通している事が、明石の思考をちよつとした混乱状態に陥れた。

『こ、これ・・・、も、もしかし、し・・・。』

『うん?』

震えも混じる明石の声に富士は澄ました顔で笑みを向けるが、明石が目丸くしながら指差している写真の女性を見ると、少し歪んだような笑みを浮かべて声を放つ。なぜならその人物は36年前の写真に写る仲間達以上に、その生涯を通じて富士が最も良く知っている人物であったからだ。

『あらあ、良く解ったわね。それは私よ。』

『わ、わたしって・・・。』

快くかつての自分を教えてやった富士に他意は全く無い。むしろ今はもう足の不自由も利かぬ程に衰えてしまった自分を、明石がずっと昔の写真の中で見つけてくれた事が富士には嬉しかった。だが明石はそんな富士の態度にすらも、その表情に現れる驚きの度を増してしまう。共通点があると言っても、眼前にいる富士と写真の中でセピア色の肌を持つかつての富士とは、その身体の節々から発せられている雰囲気全然違うからだ。蔑むような視線なぞ、今の富士の緑色の瞳には微塵も宿っていないのだから無理も無い。

『な、なんて言うか、その・・・。富士さん、こ、怖い顔してませんか・・・?』

まだちょっと静けさを取り戻していない心で呟くように声を放つ明石だが、富士は頬に手を添えて小さく笑うのみ。返って来た言葉も、明石にとってはなんだか知らないフリをしてはぐらかされた様

な感じさえする。

『さあて……。何か面白くない事でもあったかしら……。』

瞳を細めて笑う富士はそれ以上は何も言わず、明石はかつての富士が今とはちよつと違ったお人柄を持っていたらしいという事だけを理解する。写真越しでさえも伝わってくる36年前の彼女の迫力を明石は瞳に入れる度にヒシヒシと感じてしまうが、その真相を聞こうとする明石の好奇心は続けざまに背後から響いて来る富士の声によって抑制された。

『明石、これをそのテーブルに運んでちょうだい。私は手が塞がると移動ができないから。』

『あ、はい。』

富士が差し出すトレイの上には先程の御香の残り香も混じった香りを放つ2つのカップと、お皿に装飾の様に並べられたマフィンや乾パン、陽の光を受けて鮮やかに光るジャムの詰まった小さな瓶が並んでおり、元来が食いしん坊である明石は富士の過去にちよつと後ろ髪を引かれつつもトレイへと手を伸ばした。ちよつとだけ重いトレイは激しく動かすとカップの紅茶が溢れてしまいそうで、明石はトレイの両脇を握って持ち上げるや、ゆっくりとした足どりで部屋中央にて向かい合うソファに挟まれたテーブルに歩み寄って行った。

足の自由が利かない富士がソファへと腰を下ろすのを明石は手伝

い終え、彼女とはテーブルを挟んだ向かいのソファに明石は座る。
白いテーブルクロスを敷かれたテーブルの上には待ちに待った甘い
香りも香ばしいマフィンが備えられており、明石は口の中に沸く唾
液を押し消すように富士が淹れてくれた紅茶を口にした。朝日が淹
れてくれた物と違い、重みのある紅色が滲み出た湖面を明石はゆっ
くりと口の中へ導いていく。

『おお。おいしい。』

『ふふふ。朝日はカンヤム・カンニヤムっていうティーが好きだか
ら、きつと明石もご馳走になった事があるわよね？ 私のはニルギ
リというティーで香りも味も大分違うんだけど、口に合って良かつ
たわ。』

富士の茶葉談義に頷きつつ、明石は鼻を小さく鳴らして湖面より
舞い上がる芳醇な香りを楽しむ。記憶に残る朝日の紅茶はどこか甘
い果物を彷彿とさせる香りだったが、富士が淹れてくれた紅茶の鼻
腔の中でゆっくりと広がる様な香りもまた格別だった。やがて富士
の真似をする様にして手を伸ばしてみたいつもは素っ気無い味の乾
パンも、ジャムをつけると紅茶の味わいを一層引き立てるお菓子へ
と早代わりし、口の中に散る乾パンの粉を紅茶で洗い流すという事
に楽しみまで覚えてしまう明石。美味しい物を胃袋に入れる事が人
生最大の喜びである彼女は、先程の富士の過去への疑問も脳裏から
消し去り、満面の笑みでティータイムを楽しむ。

一方、富士は最初の内は微笑みながら明石の姿を瞳に入れていた
が、何度目かになる紅茶の香り鑑賞をした際に呟くようにある事を
明石に質問する。

『明石。』

『んむう。はい、なんですか？』

『朝日から、あの子の姉妹の話を聞いたことはある？』

突然の富士の質問に明石は朝日との思い出を辿ってみるが、すぐにその答えを得て富士に首を振る。師弟として過ごした日々の中、その存在以外では明石は朝日の姉妹に当たる者達の話は一切聞いた事が無いのだった。

『いいえ……。無いです……。』

『ん、そうなの……。』

富士の心根が全く変わっていない事を示す、優しさの籠ったゆっくりとした流れの声が明石に返って来る。しかしその声はわずかにだが歯切れの悪いよどみのような物があり、富士が何かを含んでそう言ったのは明確だった。もっともそんな事に気付いて色々と内心で考えを巡らす明石を他所に、富士は眼前の後輩に内緒事をつくろうとしたつもりは無い。彼女はただ、これから話す明石にとっての大事な人に関する話題を、どうやって切り出そうかと整理しているのである。唇に触れる僅か手前で宙に掲げたカップに口元を隠し、真紅の湖面から立ち上る香りを楽しみつつ、やがて富士は考えをまとめて明石へと語りかけ始めた。

『……。知ってるかもしれないけど、私は今は横須賀に繋留されて、この近くにある航海学校の分校舎として使われてるの。』

『は、はあ……。』

突如として始まった先輩の身の上話に呆けた返事を返す明石だが、続いて富士の口から出てきた言葉に身体を瞬時に硬直させる。

『この近くは航海学校の他にも色んな軍学校があるわ。すぐ近くには水雷学校、一年前に久里浜に移っちゃった通信学校、東京にまで足を伸ばせば経理学校もある。そしてそれらの生徒達はたまに実艦

実習として、私の所にやってくるの。つい先月には砲術学校の生徒もきたわ。』

『砲術がっこ……。』

富士が口にしたそれは海軍砲術学校。帝国海軍随一の修羅場と恐れられる教育機関にして、明石にとってはかつての相方が自分の元を去って向かった地でもある。何故だか小さな胸騒ぎが渦巻く明石はそれを抑えるようにして胸に手を当てながら、『砲術学校の生徒が来た。』という富士の言葉に、その生徒の中にきつと忠の姿があらたに違いないと察する。部屋に向かう際に彼女の口から思いがけず彼の名が出た事も、そんな明石の考察をより鮮明にしていた。

無意識に足元に目を落としていた明石が視線を上げると、富士は明石の表情を笑うようにして口元を緩める。解りやすい反応をする後輩を目にし、富士は色々感慨にふけりながら彼女が待ちわびる相方のお話を始めた。

『ふふふ。森少尉と貴女の事は以前から、もう耳が痛くなるくらいあさしおに朝潮達から聞かされてたのよ。』

半笑いで楽しそうに言葉を放つ富士だが、明石は自身に関しての噂話をしていたという朝潮の事を知らされてちよっと口を尖らせる。別に怒りという感情は湧いては来ないのだが、自分の事を知らない所で噂していた朝潮がなんだか面白くなかった。富士の部屋を訪れる前の甲板にて、既にそのおしゃべりな朝潮の性格も明石は理解している。

後で牛ころし（※海軍用語・デコピンの事）でも食らわしてやる。
。。。

富士に対する笑みをそのままに、そう朝潮へのお仕置きを刑を決

める明石。

もっともそれに反して富士は、明石の噂話を本人の前で暴露して笑ってやろうというつもりでは無い。富士はただ単に、小耳に挟んでいた艦魂が見えるという人間に実際に会えた事がとても新鮮であり、そこで目にした忠という人間の人物評を、かつての彼の相方である明石に伝えてやろうとしただけなのだ。

それを示すように音階の上がった富士の声は、明石のまだ落ち着きが定着していない心を撫でて行く。

『艦魂が見える人って珍しいじゃない？ だから砲術学校の生徒達が来た時に、どのような方なのかと思って見に行ったのよ。それはもう本当に、美男な人だったわねえ。』

口と鼻に残る紅茶の余韻を楽しむように、富士は目を閉じて小さく頷きながら言う。その口から出てきた言葉は、明石にとっては師匠以上の大先輩である彼女から見たかつての相方の姿とその印象。だが元氣そうで安心した等というありきたりな感情は明石の胸の中には沸いてこない。正直に言えば思い出を辿っても、明石の脳裏には相方の顔が明確に浮かんでこないのだ。

ただ何故だか不思議と、富士の言葉に明石は湧き上がる笑みを抑える事が出来なかった。もうずっと会っていないその人なのに、明石の心にはなんだか自分が褒められたような感覚がじわじわと滲んでくる。それも伴っているのは喜びではなく、照れくさい感じを帯びた嬉しさ。どうにもその感情が何なのか当の明石には解らなかったが、湧き出るようなその感情は明石の顔をはにかんだ笑みへと変えていく。

『そ、そうなんですか・・・？ えへへ・・・。』

『ええ。若いだけじゃない、良い目を持った方だったわ。その上で銃剣術の腕前も、あの砲術学校の中で随一の代物なんですってねえ。』

』

富士の大きく手を動かして話す独特の語りが響く中、明石は後頭部を掻いてちょっと崩れたような感もある笑みを浮かべる。だが自身の表情に反し、明石は内心、そんな自分がとっても不思議だった。

たまに相方の思い出を辿るその都度、明石は自分の馬鹿さ加減に肩を落とす日々を送ってきたからだ。素直に自分の言葉で気持ちを伝える事が出来ず、言わば自分から手放した大事な相方。それを脳裏に浮かべる際、明石はとにかく過去の自分が情けない事極まりない者だと思える事が今でもある。申し訳なさでも、怒りでも、寂しさでもない。言葉に尽くせぬ程の駄目な自分が、明石にはただ悔しくて仕方なかった。

でも何故だか富士の口から伝えられる相方の近況を耳にしても、明石の胸の中にはいつもの悔しさと悲しみが微塵も湧いてこない。かといって、とりあえず元氣そうだと相方の近況を安堵している訳でもない。しかし富士が相方の人物評を良い物だった言ってくれる事、ただそれだけが、明石の心にくすぐったいような嬉しさを募らせて行く。

『私も人間とお話するのは久しぶりだったわ。つつい口が軽くなっちゃって、砲術学校の教員になって、この年寄りの話し相手になって欲しいって頼んだんだけど……。』

ニヤニヤが止まらない明石であったが富士の思いがけない言葉に動揺を隠せず、それまでヒクヒクと吊り上がっていた頬の動きを止める。富士の言葉通りに相方が砲術学校に残ってしまったなら、それはつまりもう明石艦には戻ってこないという事態になるのだ。それは明石が考えないようにしていた、最も憂慮している事。しかし富士はすぐさま自身の願いが適わなかった事を声に変え、明石の瞬間的な憂いは解決される。そして富士のその声は、再び明石の機嫌

を謎の高揚状態へと変えるのだった。

『・・・自分には、戻る艦がある。って、きっぱりとお断りされたわ。ふふふ。まあその断り方も凛々しくて、今でも口惜しく思ってるのよ。』

『えへ・・・、えへへ・・・。』

またしても崩れた笑みを浮かべる明石。どうにも良く解らないその表情を隠すように、彼女は手にしていたカップを口に添える。流れ込んでくる極上の香りと味わいに浸る明石だが、残念ながら彼女の試みは成功しない。カップを口から放すや、明石の口元は胸の奥から湧き出る治まらない感情によって再び吊り上げられて行くのだった。

ところがその最中、明石はついさっき富士が口にした言葉に気付いてその表情を硬直させる。つつい口が軽くなって忠に砲術学校に残ってくれと頼んだという富士だが、その口が軽くなったという理由というのは、明石もその生涯で未だ二人しか見た事が無い自分達の事を瞳に映せる人間達と、この富士が以前にも声を交えた経験が有るという事を意味していた。

当の富士は澄ました表情で深みのある紅色の湖面に視線を落としている。立ち上る湯気と香りにその高い鼻を近づける富士の姿は、英国生まれの者が大事にしている至福の瞬間。明石はそれを師匠の朝日との一時から良く理解していたが、脳裏に浮かんだ疑問を構わず富士に投げてみた。あの朝日ですらも艦魂が見える人間とは関わりをもった事が無いというのに、同じ時の流れに揺られていた富士がその経験を持っているという事が明石には気になったのである。

『ふ、富士さん、艦魂が見える人間と前にも有った事が・・・？』
『・・・・・・・・ええ。』

明石の声の余韻が静まって暫くした後、富士は小さく返事を放った。

そして声を唇から漏らしたその瞬間、富士の緑色の瞳はどこか遠い物を見つめているような雰囲気を放ち始める。細めた富士の瞳はカップに向けられている為にほのかな紅色を反射していたが、段々とそこにちよつと褪せた黄色が滲んでいくのを明石は認める。そしてその色が先程まで見ていた写真と同じ色合いである事に気付いた明石は、かつて富士が声を交えたという人間が今から36年前の時代を生きていたという事を察した。

やがて富士は微かにセピア色を帯びた瞳を明石へと向け、これまでに秘密にしてきたとあるお話を語り始める。

『明石。今から話す事を良く聞いておくのよ。』

そう言った富士の表情には、それまで明石が目にしていた優しい老婆とはうって変わった荘厳さが纏われていく。恐怖こそ湧かないものの、語り始める富士の表情は明石も写真で見た36年前の彼女に良く似ていた。

第六六話 「伝えられる物／其の三」

御香の残り香と紅茶の香りが混ざり合う部屋の中、富士^{ふじ}の語りが静かに響く。まるで部屋に伴われている音楽のように奏でられる富士の声色は、それを聞く側である明石^{あかし}の心に不思議と静けさを与えてくれた。

『かつての私の友人に、貴女と同じ様に、艦魂^{ひと}である私達を見る事のできる人間を乗組員に持った艦魂^{ひと}がいたわ。』

『・・・・・・・・』

『その友人はとっても硬い性格でね。私達のお話によく首を突っ込んでくる気さくなその人間を、とっても邪険にした。元来、私達と人間は声も視線も交わる事が無いでしょう？ 私達は両親を持つて生まれてくる事もないし、お葬式の末にお墓に葬られて死ぬ事も無い。生き方という物がそもそも違うから仕方ないわ。それに友人や私も含めて当時の私達の中には、直接声を交えたり、手を取り合える人間と関わった事のある艦魂^{ひと}なんて一人もいなかった。だから友人は気味悪がったの。』

富士はそこまで言うと言ったカップをテーブルに置き、今度は近くにあったポットに手を伸ばしてカップとの間に紅い滝を静かに作る。明石が声を放つのも忘れる程の荘厳さを放つ富士のその姿だが、ふと明石のカップを見て紅茶を注いでくれる辺りに心優しい彼女の根本が揺らいでいないことが示されていた。

小さく頭を下げて御礼とする明石。富士は微笑みでそれに応え、ポットを元の位置に戻すと語りを再開させた。

『でもその人間は面白い性格でね。私達が持ってた独特の考え方や価値観に、人間としての率直な意見をぶつけてくる事が間々あった

の。明石も知つての通り、私達は遠い欧州からやって来た身。ただでさえ帝国海軍独自の戦術や情勢、海の特徴なんかも勉強しなければならなかったのに、そこに今度は生身の人間の主義主張が入ってきたのだから、もちろんその時は私達の中にそこその混乱を生んだわ。そして友人はその人間と、もう毎日の様に言い争いをしてたわ。ふふふ、日本刀を振り回してた時もあったわね。』

富士の言つた事を総合すると、どうやらその人間は当時の艦魂社会にかなりの騒ぎを起したらしい。決して富士が人間の事を悪く言っているつもりが無い事は明石も解っているし、仮にいつも仲間内でやってる戦隊長会議にかつての相方が首を突っ込んだらと考えると、明石にもその人間の傍迷惑振りは多少は理解する事が出来た。

故に明石は富士の言葉に何度か頷いてみせる。同じこの世を生きる者同士とは言え、艦魂には艦魂の、人間には人間の、それぞれ独自の領域という物があるのだ。

もっとも富士は、眼前の後輩に人間と艦魂の不可侵を訴えようと企図している訳ではない。彼女の語りはさらに続けられる。

『ただそんな二人には、お互いに遠慮しない物言いができるという共通の性格があったわ。それはいつ喧嘩になってもおかしくないという事と紙一重だったけど、偽りや勘違いの無い意思疎通にはとっても有効だった。理詰めで物事を考える艦魂ひとだった友人は、そんなやりとりにもいつも真正面から挑んでたわ。まあ、あの子にとっては、その人間を完全論破してやろうと躍起になってた、というのが正直な所でしょうけどね。』

『へええ……。』

声を返しながらも明石は富士が「あの子」と発言した事に、彼女が語る友人というのが彼女にとっての後輩に当たる者なのだろうと予測する。しかしそんな予測は、富士の友人である人物の名を示す

手掛りとはならない。現代に残る戦艦という艦種の中では最古参である富士から見れば、明石だろうが師匠の朝日あさひだろうが全て後輩になってしまふ。観艦式が近い事から多くの艦艇で圧せられるという今の横須賀の中でさえ、あの艦もこの艦も全部ひっくるめて富士にとっては「あの子」になってしまふのだ。

『その人間は森少尉もりと同じ様に、兵学校、砲術学校と進んだ砲術士官だったわ。頭も良かったから、友人とは艦艇の構造はもちろん、砲術理論、水雷理論、哲学から歯の磨き方に至るまで討論してた。いつも夜遅くまで、艦内の一室で論戦してたわ。お互いに勝ったり負けたりの日がずっと続いてたけど、友人はそんな中で出た結論を、意地を張らずに自分の生活に取り入れようともしていたの。あの子は私達の中でもちよつと偉い立場だったから、自分のお仕事にそれは顕著に出ていたのが解ったわ。もっともあの子は負けた事を意味するからって、その真相は私以外には自分の姉妹にも話してなかったけどね。』

楽しそうに語る富士は肩を小さく上下させて笑う。さっきの話では超絶な喧嘩もしていたらしいその二人だが、第三者としてそれを見ていたという富士の態度とその言葉に、明石は富士が語る友人とその人間が案外仲が良かったのではないかと考えた。

やがて明石はふとそれを富士に問うが、返って来た声は明石の考察が正しかった事を意味していた。

『その二人、結構相性が良かったんですね。』

『ふふふ。それはもう、毎日勝負してるのよ。お酒で勝負した時なんかは決着がつかなくて、次は歌の上手さで勝負。その次はダンスに楽器。最後は唱歌の歌詞を作って、私にその優劣をつけてくれるって言って来たわ。夜も遅いのお酒臭い息を二人して放って、私が嫌々ながらも目を通したら、今度は二人揃って目を回してその場

にひっくり返ったのよ。』

『あははは。』

『ふふふ。本当に迷惑な人達だったわ。』

屈託の無い綺麗な笑顔を見せる富士につられ、明石も口元を緩めて富士によって語られるその思い出を笑う。音階の上がった二人の笑い声が、舷窓からもれてくる陽の光と紅茶の香りに包まれて部屋に響いていく。しかし笑いが治まり始めると富士は笑みをそのままに大きく溜め息を放ち、明石はなんとなくその富士の溜め息の音色に悲しみが混じっているように感じた。

他人の心の変化に敏感な明石が富士の顔を覗き込もうとする中、富士はその顔を隠すようにカップを口元に近づけながら話し始める。

『傍から見ているだけなら、あの頃は楽しかったわ。でも、同時にその頃はロシアとの関係が日に日に悪くなってた時期でもあった。元々は私も友人もその為に生まれたんだから、私達は来るロシアとの戦いを念頭にしながら日々を過ごしていたわ。そして予想通り、日本とロシアは国交断絶、開戦になった……。』

『……白露戦役、ですね……。？』

『そう、当時世界最強とも謳われた軍隊を持つロシアとの戦い。私達なりにも必死になって日々の務めに励んで、……。そして戦った。旅順沖での1年にもなる戦いに明け暮れ、仲間も何人も死んだわ。その中には朝日のすぐ下の妹だった初瀬^{はつせ}、私の妹の八島^{やしま}も含まれている……。』

言い終えて紅茶を喉に流し込む富士はその表情を少しだけ歪める。ふと気になりだした紅茶の渋みがそうさせたのであろうが、突如として渋みに敏感になった富士の味覚の原因は、先程彼女が口にした仲間の死に纏わる記憶だと明石は察する。

明石は以前に朝日と話をした際、かつて彼女もまた仲間を失った

という事をちよつとだけ聞いた事があつた。初瀬という妹が亡くなつたという事もその時に教えてもらった。だがその際の犠牲には、この富士の實の妹も含まれているらしい。富士は朝日のように悲しみを充満させた表情を浮かべはしないが、その細めた緑色の瞳には36年前の記憶に伴う彼女の感情が十分に込められている。

やがて富士は唇を撫でて渋さによつて歪んでいた表情を整え、中断していた語りを続けた。

『私達と同じ様に、人間達もたくさん死んでいたわ。旅順港の入り口を望む海域はもちろん、そこと旅順を挟んだ陸地の方でもね。そんな中で友人は、悲しみの連鎖を自身の務めで忘れようとしていたわ。何事にも正面から、飽くまでも理詰めで。それを座右の銘としていた友人にしたら、自身の感情と関係の無い戦術や艦隊運動に向き合う方が楽だったのよ。あんなに相性の良かった人間とも、それからは口も訊かなくなつたわ。』

富士の語る彼女の友人の変貌に明石は表情をそのままにしながらも、海軍の船たる自身ももしかしたらそんな感じの変貌を遂げねばならないのかと思いを巡らす。優しかった者が怖い者に、仲良くしていた者同士がいがみ合う者同士にもなり兼ねないという、富士が語る戦争の実情。その根源は、あんなに元氣にしていた者が一瞬にして物言わぬ骸と化してしまうという、戦という物の当然の在り方。そこに自身と親しい神通じんつうや朝日、そして先程その近況を耳にしたばかりの相方を当て嵌めてみた時、明石は途端にかつてない程の恐怖心を胸の中に抱く。

もつとも富士の変わらない声が明石の心をそれ以上に騒ぎ立てないようにしてくれ、彼女はなんだか重くなるような感覚を覚え始めるお腹を擦りながら富士に笑みを向けてみせる。だが同時に明石はその内心で、自身が抱いた今の感情こそが戦争という物の実情なのだろうと理解した。

やっぱり嫌だなあ・・・。

思わず脳裏に響いたその言葉も、明石としては戦争という物に対しての偽りの無い素直な感想。悲しいとか憎いとか、そんな感情は欠片も湧いてこない。明石にはただ嫌な物だとは思えなかった。

『嫌な物よね、戦というのは・・・。』

溜め息混じりで放たれた富士の言葉。その内容が自身が今しがた考えていた事と全く同じであった事に明石はちよつと驚いて、足元に落としていた視線を富士に向ける。

『不思議よね。私達と人間達はそもそもの生き方が違うというのに、戦争という物に持つ感情は同じなのよ。友人もそう思ったからこそ、艦魂たる者のお仕事に逃げたんだと思う。でもそんなあの子も、いま明石が思った事を否応無く味わう事になったわ。』

そう言うとう富士はそれまで握っていたカップをテーブルに置き、代わりに皿の上で横たわるマフィンへと手を伸ばす。上品に口に合う大きさに千切ってから食べる富士の姿は、彼女が明石に語り始めた時の姿と何一つ変化は無い。富士はゆっくりと頬を動かしてマフィンを味わい、現代の帝国海軍艦魂社会の者達と同じ様に彼女もまた間宮お手製のお菓子の味に表情を綻ばせた。

眼前のそんな先輩の姿は明石にとって微笑ましい限りの物であったが、彼女はちよつと身を乗り出して話の続きを富士へと催促する。自身と同じく戦争への恐怖心と嫌悪感を抱きながら、艦魂が見える乗組員を抱えて戦場へと実際に赴いたという富士の友人。いくつもの共通点を持ちその艦魂がどの様に戦場を駆けて行ったのか。明石はそれをこれから自身が生きる上での参考に、是非とも聞いて

おきたかったのだ。

『その富士さんのお友達って、日露戦役を生き残った方なんですか・
・・?』

『ええ・・・。でもそれがあの子を苦しめたわ・・・。』

『え・・・?』

幸運にも富士や師匠の朝日の様に、その人物は日露戦役で命を散らす事は無かったらしい。実の妹を戦時中に失ったという富士にすればそれは喜ばしい事である筈だが、明石の問いに返した富士の声の音色はこれまでに無く悲しみに満ち満ちている。伏せ目がちに再びカップを手にとって口元に近づけ、富士は口の中に残るマフィンの小さな欠片を紅茶で洗い流すと、小さく溜め息を放ってから自身の友人についてのお話を続けた。

『あの子は仲間が散っていく過程でも平静を保ち、どのような形でも勝利を収め続ける事に全精力を注いでいたわ。仲間内からは物狂いと言われる事もあったし、あんなに親しかった人間が話しかけても無視し続けてた。あの頃は私達の間でもちよっと気まずい雰囲気の流れで、些細な事での喧嘩なんかもしょっちゅうだったわ。でも、やがてそんな日々もついに終わる可能性が出てきた。遠く欧州よりやってきたロシア海軍の精鋭と、私達、帝国海軍が雌雄を決するという大海戦を展開する事態が迫ってたの。』

富士が口にした大海戦という言葉に、明石はすぐさまその海戦の名を記憶より引っ張りだす。戦闘を主目的としない工作艦の艦魂である明石は、友人である神通や那珂なかに比べれば戦史という部分での知識は乏しいが、それでも富士が口にした海戦の名を間違えることは無い。なぜならそれは帝国海軍が金科玉条とする海戦の見本にして、帝国海軍が世界屈指の海軍として認知されるに及んだ晴れの舞

台だったからだ。

『日本海海戦・・・』

『そう。その日は幾分の強風と高い波がうねっていたけど、晴朗な天気はまさに絶好の撃ち合い日和だったわ。でもそれはロシア海軍も同じ。私達に先駆けて発砲炎を次々と灯らせていたあの時は、今でもハッキリと覚えてるわ。まして相手は長旅の強行軍とはいえ、世界最強とも言われた海軍の主力艦隊。艦隊運動としては時間のかかる正面転換を実施中だった私達の被弾は凄まじい物だったわ。マストは碎かれ、煙突は貫かれ、張り巡らせていた鋼索は鞭の様に甲板の上を暴れていた。私の友人はその時、僅か7分間で大小併せて16発もの直撃弾を浴びてたわ。』

『じゅ、16発・・・！』

歴史的勝利と伝えられる日本海海戦を現代を生きる者として認識してきた明石は、その知られざる激闘の実情を初めて知って驚いた。自身の乗組員達が毎週月曜の午前に行っている教育日課においても、日本海海戦は帝国海軍の圧倒的勝利と公言されているし、それは明石を含めた艦魂達においても例外ではない。明石の姉貴分にあたる長門ながとですら、それとは大差無い認識を持っているくらいだ。明石も師匠の朝日より少しだけ聞いた事はあったが、具体的な被弾数を伴った富士の言葉を受けて今まで持ってきたその認識を改める。明石の中にあった「一方的な帝国海軍の勝利」等という甘い幻想の真の姿は、日露双方、お互いにその艦体を切り裂きながら行った激烈な海上砲撃戦なのであった。

これまでの日本海海戦に対する認識を明石が改める一方、富士はその記憶によって発生する腹部の不快感を覚え、戦傷衣の上から自身の腹をカップを握っていない手でゆっくりと擦る。勝利で終わった海戦に浮き立つ一方で、彼女はそこにとある悲しい現実を目にしていたのであった。

『あの海戦は10回に及ぶ合戦に分類されてる様に長丁場な戦いだっただけ、最初の第一合戦での二戦隊の活躍もあって勝負は決まったわ。でも第一合戦自体はそれはもう激しい戦闘で、友人は目の前のロシア海軍をなんとしても倒そうと、自分の被害の確認もせずに指揮を取り続けた。まさに物狂い。喉が潰れて声が出なくなる程に、あの子はずっと号令を叫んでいたの。でも・・・、それがあの子にとって使命を果たした結果であると同時に、最大の失敗でもあった・・・。』

その語りの最後の部分で、富士の声はこれまでに無く曇る。富士はやがて目を閉じながらその続きを話し始め、明石はその内容に言葉を失った。

それはもしかしたらそうなるかも知れないと、明石もふと考えた事のある最悪の事態。富士が声にして伝えた36年前の出来事は、明石が心の奥底で希に抱く事のあった憂い、まさにその物なのであった。

『散り散りになっていくロシアの艦隊を横目に、戦闘も一段落した友人は我に帰って、初めて自分の分身の損害に気付いたわ。傷だらけの分身と同様に、あの子自身も身体中に無数の傷を作っていた。でもそれだけじゃない。さっき言った16発の直撃弾に始まる被害は、友人の乗組員にも及んでいたのよ。顔が半分しかない遺体、臓物を腹から漏らしながらうごめいている負傷者、千切れた自分の腕を持って甲板を歩く水兵。そしてそんな中であの子は・・・、かつては自分とよく論争してたあの人間を見つけてしまった・・・。』
『そ・・・、そんな・・・。』

『その人間は胸から下を吹き飛ばされ、爆風で隔壁に縫い付けられていたわ。どうみても即死よ。ちょうどその時に私はあの子の元へと赴いていて、その人間の亡骸を前にして泣き叫んでた友人を目に

したわ。・・・潰れた喉で空に向かって上げたあの子の叫び声は、まるで怪物の鳴き声の様だったのを今でも覚えてるわ・・・。』

言い終えた富士の瞳がゆっくりと開かれてその奥で光る緑色の瞳を除かせると同時に、少し垂れた彼女の目尻からは一筋の雫が頬を伝って流れ落ちていった。そして呼吸も乱す事無くただ頬を静かに濡らす先輩の姿とその語りにも、自身と同じく艦魂が見える乗組員を持ったという富士の友人の悲しさが、明石にはまるでそのまま富士の記憶の中から流れ込んでくるかのように明確に感じることが出来た。

だがそれ故に、明石は富士に対して返す言葉を失う。もうずっと明石は会ってはいないが、かつて一緒に過ごした相方との思い出は、常に明るい声と笑顔を伴った微笑ましい代物。自分の馬鹿な性格が原因で別れてしまったが、明石は相方を恨んだ事などこれまで一度も無い。それぐらい明石には、艦魂が見える人間であった相方が大事な人なのである。ところがそんな大事な人が自身が歩む海軍艦艇の道の途上で倒れるという可能性、否、そんな現実が実際に起こったという過去を耳にして、明石は否応無くそれが自分だったらと考える。

すると途端に彼女は、父のように慕っていた人物を失ってしまったという自分の友人、神通の事が無性に気になりだしてきた。決して可哀想だという認識を前よりも増して、神通に深く同情する気持ち明石に湧いてきた訳ではない。ただ友人がどんな事を考え、どんな思いを持ってその後を生きてきたのだろうと、明石には気になって仕方ないのだった。

ところがそんな明石を他所に、富士の友人についての記憶はまだ途切れてはいない。脳裏に巡る想いを整理していた段階の明石だったが、富士は構わずその続きを話し始める。それは明石と同じく艦魂が見える人間を乗組員として持ってしまった者の、悲しげな末路であった。

『・・・あの子は後悔したわ。戦勝の観艦式の話も、海軍記念日としての認定の噂も、私の慰めの言葉も、あの子の涙を止める事は出来なかったわ・・・。そしてあの子は悲しみの淵に捕らわれ・・・、自ら命を絶とうとした・・・。』
『ええっ・・・!!』

富士の言葉に明石は思わず驚きの声を上げてしまうが、富士は湿った頬を手の甲で軽く拭いた後、そんな明石にちよつと元気の無い小さな笑みを向けてみせた。

『大丈夫、友人は奇跡的に死にはしなかったわ。ただ、乗組員が大勢乗艦したままで火薬庫に放火したから、あの子の自決に巻き込まれた犠牲者は相当の数に上った。その時はさすがの私も友人に手を上げたわよ。あの子の悲しくて辛い気持ちを抑えつける様な真似だったけど、帝国海軍の船の命たる者としては決して許される事では無かったから。』

気の良い老婆の外見を持つ富士が手を上げたという言葉が明石には信じられなかったが、自分以上に安堵の感を湛えた富士の表情を瞳に入れ、明石は彼女の言葉通り、富士の友人が結果として死ななかった事を悟る。明石としても大事な人を失った富士の友人の気持ちは痛い程に良く解るが、自分で自分の命を絶とうというのは軍医の彼女には絶対に容認できない。相方への想いは明石だって大事だが、師匠の朝日から教えられた命に対する明石の倫理観はそれと同じくらい大事な物だった。故に決して言葉に出す事は無いが、富士の友人が自身の乗組員も巻き添えにして自決しようとした事は悪い事だと、明石は心の中でハッキリと断言する。

もっともその事を声を大にして言えないのは、富士やその友人であったという人物が自分にとって先輩に当たる者である事に起因す

る気後れからではない。「もし自分が相方を目の前で失ったら？」と考えた時、明石には自分が平静を保てるだけの自信が持てなかったのだ。

『大事な人が死んだからという理由を私と友人以外は誰も知らなかったから、仲間内では人間達の認識と同じ様に”不幸な事故”という事になったわ。それからはあの子も幾分は普通な暮らしをしたけれど、私は仲間内に対して常にあの子の周りに誰かが付いている様にお願ひしたのよ。もちろん監視の意味でね・・・。』

色々考える事が多くて富士の語りにも声を返す暇が無い明石。呆けた表情でテーブルの上に視線を落とし、そこで静かに揺れている紅茶の波間を瞳に映しながら、明石は自分の事について必死に考えていた。

富士が教えてくれた戦場の真の姿と、そこにあるであろう当然の犠牲。それは艦魂や人間等といった区別無く、どちらにも平等に襲い掛かってくる現実の結果。だが明石は自分が死ぬ事以上に、相方が死ぬ事に対してその思いを深く巡らす。

師匠の朝日以外には自分しかない工作艦という艦種。先日の石巻での激務に代表されるように、明石のお仕事は普通の戦闘艦艇である仲間達に比べても楽な物ではない。むしろ支那での戦火が全く及んでいない内地であったからこそあの程度で済んだが、いざ戦地へと派遣された際の自身の役割を考えれば、石巻での日々は毎日の物となってしまう事は想像に難くない。

しかしそんな日々で相方に気をかけてやれる余裕あるかどうか、明石は疑問に思う。以前に明石は朝日より『人間と艦魂が同時に傷ついた場合どうするか？』と聞かれた際、『どちらも助ける。』と明確に答えた事がある。もちろんその言葉を発した際の精神を間違いだとは今でも思っていないが、先程富士より教えてもらった海戦

の実情に、明石は自身の決意やその時の答えが現実を考慮していない甘い物だったのではないかと思えてくる。伝え聞いた富士の友人という人物が己の傷も顧みずに海戦に奮闘していたのは、船の命たる艦魂の在り方としては決して間違いではないが、それが大事な物を失う事への鈍感さを生んでしまうという点が明石には他人事には思えなかった。

だがそんな結末に対して「こうしていれば良かった。」という明確な対策は、明石の脳裏に浮かんでくる事は無い。そもそもが富士の友人という人物がとった行動は、艦魂としての己が任務を全うする為の物。ましてロシア海軍の主力を相手にしたという中であって、この富士やその友人、明石の師匠の朝日といった艦魂達とその分身はロシア海軍と戦う為にこの世に生まれたのだから、戦いの際に自身の務めを投げ出す事などあってはならない。明石にしたならそれは、傷ついている仲間を放り出す事と同義なのである。

故に彼女は迷った。脳裏に過ぎる以前に朝日が放った「仲間と人間のどちらを助ける？」という言葉が、明石の中では今はとても重い言葉に思える。

『……』

ただ無言で明石は自分と向き合う。まだまだ未熟な自分をここ最近は痛感する事も多い彼女は、それ故に自身が以前に朝日に示した意気込みの実現性を憂う。かつての先輩が自分と同じ事を憂い、そして大事な者を犠牲にしてしまったという前例も、明石の迷いに一層の拍車を掛けた。

一方、富士は自分の語りに声を返さずに俯いて難しい顔をしている明石に気付くも、彼女の意識を自分へと向けようなどとは微塵も思わない。必死に自分の疑問と戦う明石を邪魔せぬようにと、富士は静かに紅茶を口へと流し込む。その味はそれまで妙に際立っていた渋みが消え、ほんのりと甘いいつもの味が戻っている。

それは富士が明石に伝えようとしていた事が、既に明石には十分に伝わっていると察する事ができたからだ。実は富士は、今も頭上に位置する甲板にてお掃除に励んでいる朝潮を含めた後輩達より、艦魂が見える人間と仲良く暮らしていたという明石の事を聞いた時から、この明石にいつか会って往年の仲間達にも秘密にしていた自分の友人の事を伝えようと決めていた。そしてその結果として明石がこうして答えに迷う状態に陥る事も、富士にとっては以前から願っていた事でもあった。

『よいしょ・・・。』

するとそれまで静かにしていた富士は小さく気張った声を放つと同時に、ソファに沿うように身体を流してソファの隣に控えさせていた車椅子へと手を伸ばす。足の自由が利かない富士はその全身から滲み出る高貴さとは反する様に、ソファの上を手で這って移動しようとした。

そして何気ない富士の声を聞いて我に帰った明石は、ソファの上で腹這いになる富士を目にしてすぐに彼女が車椅子へと身を移そうとしている事を察し、脳裏で未解決となっている憂いをそのままにしてすぐさまソファから腰を上げ、富士の元へと近寄って彼女が車椅子へと腰掛けるのを手伝った。

『あ、富士さん！す、すいません！』

先輩の行動に早く気付いてやれなかった申し訳なさから咄嗟に明石は詫びの言葉を放つが、当の富士は満面の笑みを浮かべて後輩の氣遣いに答えてやる。それどころか謝罪の言葉を発する明石を慰めてやるかのように、富士は車椅子へと腰を下ろしながらちよつと笑みを歪めて自嘲してみせた。

『歳を取るの嫌ね……。身体が言う事を聞かなくなる一方だわ……。』

そんな言葉を放って自分を笑う富士だが、それを耳にした明石はふと手を添えていた富士の腕の細さを妙に意識してしまう。常に座っている富士だがその身長は明石よりも高く、西洋人独特の広い肩幅は日本人の身体つきを持つ明石とは比べるべくも無い。仮に隣に座ってみれば二人の身体の大きさは一目瞭然である程に、富士は大柄な身体を持つ艦魂である。だがそれに反し、今しがた明石の手に残った富士の身体感覚は「細くて軽い」という物。

明石はその時、師匠の朝日では容姿以外に感じる事の出来なかった老いという物を、この富士には明確に感じ取る。かつては帝国海軍のシンボルとして波間を駆けた大戦艦と、その分身である富士。それを鑑みると何時にも増して老いという物が寂しい物でもあるという事を、明石は一際意識するのだった。

『大丈夫、ですか……。？』

傷病衣を身に付ける富士の格好もまた、明石の富士に対する気遣いを増す。なんと声を掛ければ良いか解らない明石が悩んだ末に放ったのはそんな言葉であったが、富士は軽く手を上げて明石に何事も無かった事を示すと、そのまま上げていた手の人差し指を部屋の艦尾側に位置している扉へと向けて声を放つ。

『スタンウォークに出てちょうだい。』

ただ一言そう言う富士。明石は寒い中で彼女が外へ出ようとする理由がわからなかったが、絶えず自分に向けられる富士の微笑みに背中を押されるようにして富士の乗った車椅子を押し始める。キコキコと小気味の良い金属の軋む音を放ってゆっくりと前に進む車椅子

子の上にて、ふと富士は背後にいる明石に僅かに顔を向けて話しかけた。

『明石。自分のしなければならぬ事に務めた私の友人は、間違っていたと思う？』

『……え……。』

『それとも、それは艦魂として当然の事で、正しい事であったと思う？』

『うーん……。』

足を止めないながらも、明石は富士の質問に対して表情を曇らせてどもったような声を返す。先程もそれを考えていた彼女だが、一向に答えが出なかったのだからその返答は当然だった。

工作艦の命として、軍医の役目を負う艦魂の一人として、明石はこれから自分の役目を懸命に励んで行きたいと願っているし、自分の使命として励んでいかねばならない事だとも認識している。だが記憶の奥で輝いている相方との日常をその犠牲としなければならぬいかもと考えた時、明石はそれを明確に嫌だと判断した。故に彼女はかつて、朝日に対して『どっちも助ける。』と明確に答えを告げている。

しかしそれは自分の一方的な願いであり、現実を知らないままでの勝手な理想論だという事を、明石は富士の友人についての話によって思い知った様にも感じていた。艦魂が見える人間と供に過ごしていたという自身との共通点があったから、それは尚更だった。でもその反面、富士の友人が泣いたという事実を明石は別段変だとは思わなかった。それを自身に当て嵌めてみた場合、明石もまた自分は泣くだろうと容易に想像できたからである。

艦魂としてお仕事に励む事は正しいのか、それとも間違っているのか。

相方と生きる事を大事にする事は正しいのか、それとも間違っているのか。

その疑問に対する答えがどちらなのか、明石はかつて無い程の迷いに捕らわれる。だからこそ、富士の質問に対し、明石には明確に答えを出す事が出来ない。歪んだ表情で富士から視線を逸らすのが、明石としては関の山である。

ただ富士はそんな明石の姿を咎める事も無ければ、変に思う事も無い。なぜなら富士の記憶に残る友人もまた、今の明石の様にして迷いながら生きていた事を知っているからだった。

やがて扉を開けた先に広がる横須賀の波間と少し冷たい風に髪を揺らし、富士と明石はスタンウオークへと足を進める。いっどこであつても絶える事の無い波の音が響き、じわじわと身体を温めてくれる水平線に傾きかけた朱色の陽の光で包まれる、富士艦のスタンウオーク。ふと富士はそこにあつた手摺に右手を置き、大きくゆっくりと息を吸い込んでから言った。

『明石、それで良いのよ。』

『え・・・？』

『貴女は迷った。答えが出せなかった。でもそれで良い。私達は、艦魂と呼ばれる私達は、この世の理に通じた超越者ことうりなんかではないの。生きる上では解らない事の方が圧倒的に多いし、間違いを犯す事も圧倒的に多い。人間達と同じ様にね。私達と人間は、命の入れ物が船か肉体かという事以外では、何も変わりなんか無いのよ。そしてあの子には不幸にも、それを悟るだけの、迷いながら答えを探す事のできるだけの時間が無かった。もたれ掛れる物なのか、信じて良い物なのかも解らぬまま、唯一明確だった自分の船の命としての役目へと走り、・・・そして失ってしまったわ。・・・だから泣いた。ゆっくり考えられる時間を得たのは、全てが後の祭りとなっ

た頃だった。……可哀想に……。』

そう語る富士はふと手摺に乗せていた右手を、顔を向けている方向へと伸ばす。まるでそこにある空気を撫でるかのようにして指を小さく動かす富士だが、その視線はすぐそこにある空間に焦点を合わせていない。車椅子を押し終えて富士の隣へと立っていた明石はその事に気付き、富士が視線を投げている波間の向こうへと瞳を移す。

『貴女の話は何度か聞いていたけど、森少尉と貴女が訳あって離れる事になったと聞いた時、私は貴女にあの子の事を話そうと決めたの。でなければ、36年前のあの子の想いや願い、そしてあの子と親しかった人間のそれらと犠牲は、全部無駄になってしまう。そうなったら、今もこうして生きている私は、きっとあの子が起きたら怒られちゃうわ。ふふふ。敷島に似ていたから、怒ると怖い子だったのよ。ふふふ……。』

富士は楽しそうに笑って言った。明石は富士と同じく横須賀の波間の一角に瞳を向けたまま、富士が言った彼女の友人の事を尋ねてみる。

そしてこの時、二人の瞳には横須賀の海岸の一角にて周りを土で埋められた一隻の船が写っていた。

『起きたら……。？』

『ふふふ。』Sleeping Beauty”って知ってる？』

『え……。す、すりーぴん、びゅう……。？』

英語の発音がまるでできていない明石の声に、富士は自身が英国生まれである事から流暢に英語を話せる身であるのを忘れてつい笑い笑ってしまう。富士の口にした言葉を全く理解できなかった明石

が困ったような表情で見つめてくる中、まだまだ生まれたばかりの新米である明石の身の上を富士はよく理解しながらも、その下手糞にして酷い発音に笑いが止まらない。この分では発音を教えた所でその意味も理解出来ないだろうと彼女は考え、胸に手を当てて笑いを抑えながら自身が放った言葉とそこに込めた意味を教えてやる。

『童話の題名よ。この国では「眠り姫」という題名で通っているわね。生まれてすぐに”針が刺さって死ぬ”という呪いの魔法をかけられたお姫様がいて、その後他の魔法使いが”針が刺さっても100年間眠るだけ”という呪いに修正するんだけど、結局はお姫様は大きくなってから、糸を作る為の道具に備わっていた針で手を刺して眠ってしまうのよ。その内にお姫様が住んでたお城にも呪いが蔓延して、お城は茨の大きな柵で閉じられてしまったの。お姫様を助ける為に幾人もの戦士が茨の柵に挑んでいったけど、誰も突破できる人はいなかった。でも100年後、ある国の王子様がやって来て、見事に茨の柵を突破。城の中で眠っているお姫様に王子様がキスをすると、お姫様は目を覚まし、その後二人は結ばれて仲良く暮らしたというお話。』

初めて耳にした物語に耳を澄ましていた明石は、富士がその物語のお姫様を眼前にて陸地に上げられている一隻の船に例えているのだとすぐに察した。そして遠目からでも解る2本の高いマストに代表される古めかしいその艦影が、自身の師匠の朝日と良く似ている事に明石は気付く。刹那、明石はこれまで富士から聞いてきた彼女の友人というのは、眼前にあるあの船の命だという事を確信した。

『も、もしかして、富士さんのお友達って……。』

そう富士に話しかける明石の表情は驚きの色で満ちている。なぜ

なら眼前にあるその船の名は、まだまだ新米の艦魂である明石ですらも知っているからだ。それは36年前のロシアとの戦争において、この富士や明石の師匠である朝日を含む十六条旭日旗を翻した全ての帝国海軍艦艇が続いた艦。波高しの日本海で帝国海軍の、否、大日本帝国の生き残る海の道を隊列の先頭として明確に示してみせた希代の戦士。

『・・・あの子が記念艦となる時、人間達に反して私達は別れの挨拶をせねばならなかった。陸地に艦底を着ける事は、私達にとって死ぬ事に等しいからよ。・・・ふふ。でもあの子は、ずっと眠る事が出来る時間が得られたと笑ってたわ。考えながら待つつもりだったのよ、きつと。いつかあの人間と会える事をね・・・。』

明石は富士の言葉を聞きながら、彼女がずっと見つめているかつての友人の分身へと再び視線を流す。帝国海軍の艦魂社会のみならず、日本国民一億の誰もが知っている有名なその艦の命は、今の自分と似たような境遇の中で生きてらしい。答えが見つけれぬまま自身の役目と理想の間で葛藤した者の末路は、悲しみと戦う毎日の果てに永い年月をただひたすら眠り続ける姿。明石はそれを横須賀の海岸の一角にて記念艦として現存する、富士の友人たる者が宿った艦体に認めた。

やがて少し冷たい秋風が朱色の光りの届ける暖かさを通りがけに盗んでいく中、揺れる髪を片手で抑える富士は友人と同じ境遇を持つ後輩に伝えようとした事の総括を告げる。

『明石。辛いかもしれないけど、森少尉と離れた貴女には、あの子が持つ事ができなかった時間がある。その時間を不幸と考えず、貴女には答えを見つけて欲しいの。優しかったあの子は、自分のように後悔する日々を送った末に、声にも出せずにただ夢見るだけだった幸せを眠りながら待つような事は、後輩にはさせたくないと願っ

ている筈よ。私はそう信じてるわ。』

『……はい……。』

『迷う事のできる時間があるのなら、ゆっくり道を探すべきよ。私達が舳先で切り裂く海原には、そもそも道なんてものは無いわ。あの子の様にならない様に、貴女は貴女の道を自分で切り開いていくしかないの。』

富士の言葉に返事もするのを忘れて、明石はふと朱色に染まった横須賀の空に顔を上げた。やや急ぎ足で陽の傾く方角とは反対に流れていく雲の遥か向こう、明石はそこから自分の事を見守ってくれている誰かの視線を感じたのだった。それはこの富士と同じ時を駆けた自分の先代の物だったのか、それとも眼前にて永い眠りに付く偉大にして悲劇を味わった先輩の物だったのか。だがその正体について明石は考えを巡らせる事は無く、代わりに自身がどうすればその視線に應える事ができるかという事を考えた。

正直な所、自分が後悔の無いようにこの先を生きる事ができるか、明石には自信がない。その中心である相方の事にしても、優秀な者は次々に大型の戦闘艦や偉い肩書きを持たされて出世していくという帝国海軍の士官事情を、例え艦魂であつても明石は海軍の者として気付き始めている。考えると胸が苦しくなるが、もしかしたら二度と彼に会う事は無いのかもしれない。むしろ再会した果てにあの先輩のような経験をするのであれば、もう会わない方が遥かに幸せとも思える。

もっとも明石はそこまで考えても尚、かつての相方といつか再会する事を望んだ。でなければ、絶対に自分は後悔すると確信したからだ。

するとそんな明石の確信を、今度はかつての先輩が味わったという艦魂としての自分の役目と、そこに生まれた葛藤が揺さぶってくる。あれ程に有名にして自分とは比べ物にならないくらいに優秀だった先輩ですらも、望んだ訳でもないのに味わう事になってしまっ

たという、富士の口から語られた36年前の悲劇。その先輩と良く似た境遇を持つ明石にとって、それは言わば前例である。そしてその前例に対して、『自分はそうはならない。』と明石は断言できなかった。

断言なんて出来ない。自分もそうなるかもしれない。先輩に比べて、私はまだまだ未熟だから・・・。

第二艦隊の仲間達に比べて海軍の者としての知識も劣り、友人である神通や那珂程の体力も無く、軍医としても師匠の朝日には到底その実力が及ばないという自分を、明石はこの時強く意識した。しかし明石はそれと同時に、これまで意識すらもしてこなかった自身の励む事に対する姿勢にふと気付く。

石巻での日々で味わった苦労でどこか自分も一端の艦魂になれたのかと、声には出さずとも内心では実感していた明石。それはいつの間にか彼女に安堵の感をもたらし、自分の能力を向上させる貪欲さを明石から失わせていた。そも石巻での連続する徹夜の日々を過ごしていた際、明石はそれが自分のお仕事だと言い聞かせるようにして仲間の治療に当たっていた事を思い出す。そこにはもっと自分を鍛えようとか、軍医としての経験を積もう等という意識は無い。それ以前の神通の体力強化訓練を受けた時だって同じだった。

体力が無いと、お仕事ができないから。

その一言で彼女はそれを、自分がこなさねばならない物だと決めつけていた。もちろんその際に彼女としても汗は流したし、苦労だった。しかし今の明石には、当時の自分のそんな姿勢がなんだからとっても楽をしていた様に思えてくる。

役目だから。仕事だから。

そう言っ て励むつゝこの間までの自分の姿が、この時、明石の中では富士が伝えてくれた彼女の友人と重なってくる。それが悪い事なのか、良い事なのかは解らない。ただ明石はそんな姿勢で生きた先に待っている物が、先輩と同じ航路を歩んだ先に在る物が、伝えられた悲劇なのではないだろうかと考えるのだった。

やがて空の朱色に紫が混じりだし、スタンウォークにて沈黙を交わす二人の間に吹く風が冷たさを増し始める中、無言で相方と別れてからのこれまでの自分を見つめなおす明石に富士は小さく頷いて声を掛ける。

『私の問いの答えは出た？』

すると明石はゆっくりと首を左右に振る。

『・・・いいえ。・・・でも・・・』

『でも？』

『ちよつとだけ、私は自分をサボってたのになって、思えました・・・』

明石の声に富士は満面の笑みを浮かべて大きく頷いた。

マフィンを運ぶついでに挨拶にやってきた明石という後輩に富士はこれまで長話をずっと続けてきたが、それは彼女を話し相手としたいからでもなければ、眼前にて陸地にその身を移した彼女の友人の身の上に同情して欲しいからでもない。ただ一言、生まれたばかりのこの若者に『だからと生きるな。』と伝えたかったのだ。

ラッタルの一段一段を踏みしめる如く、夜空の星を数えるが如く、日常に対して常に意味を持って生きる事の大事さと厳しさ。それは甲板にて朝潮に向けて彼女が言った言葉と同じであり、富士はその

言葉を今度は明石に向けて放つ。

『それで良いのよ、明石。常に自分には厳しく、でも常に自分を大事に、そして常に見失わない様にね。』

『はい……。』

明石は少しだけしかめた眉で眼前にて暮れていく先輩の艦影を眺め、力の込められていると同時に極めて静かな口調で返事をした。そしてそれは富士が伝えんとした事を、この明石がしっかりと受け取っていた事を意味していた。

艦魂も人間も、優れているも劣っているも無く、自分をサボった者がどうなるか。

二人が目映す、陸地にて記念艦とされている船の艦影が、それを良く示していたのだった。

やがて自分を見つめなおせた明石を隣に、富士は今もそこで眠り続ける友人に語りかける。西洋人らしいユーモアと若干の寂しさも混じったその声は、二人の間に流れ込む秋風によって運ばれ、青紫一色に染まった横須賀の波間へと吸い込まれていった。

『たまには寝言ぐらいは言いなさいよ……。三笠^{みかさ}……。』

第六七話 「男の修行」

昭和15年10月4日。

空気の持つ寒さが冷たさへと変わり始める最中の横須賀。その波間には、間近に迫った観艦式へと参加する為に全国から馳せ参じた帝国海軍の艦艇達がその威容を集わしている。カモメ達もその壮大にして賑やかな横須賀の波間を気に入ったのか、マストという豊富にある足場の上で翼を休め、野生の感が溢れる鳴き声で万歳を合唱した。

もちろんそれは横須賀の街並みとそこに住む人々にとっても例外ではない。

待ちに待った今回の観艦式は一同に会した帝国海軍の艦艇達が波間に浮かぶ姿を存分に見る事のできる特別観艦式で、横須賀に住む人々にとっては遠く沖合いにて展開される艦隊運動や戦技展示を眺めるだけの普通の大演習観艦式とはその魅力が一味違う。恐れ多くも天皇陛下の御臨席の下、帝国海軍の艦艇の威容を手取るように間近で見る事のできる絶好の機会なのだ。

そしてその事に心浮かれるのは海軍に好意を抱いている人々にあつては当然の事で、この機会を逃すまいと全国から集まった人々によつて横須賀の街並みは希に見る観光客の活気に沸く。駅の前の広場では市街移動用の馬車乗り場に長蛇の列ができ、いつもは海軍軍人で占領される土産物屋や食い物屋は観光客で大繁盛。寝床となる横須賀近隣の旅館や旅籠もこの頃には既に満室となっており、支那事変に疲弊しきった国内にあつて横須賀の街はちょっとした特需景気に賑わっていた。足を伸ばせば帝都に横浜、鎌倉といった歴史豊かな大都市がたくさんある事も、それを後押しするのに十分であつた。

しかしそんな横須賀であっても、工廠が存在する楠ヶ浦地区はいつもの静けさを保っていた。何もそれは、この一帯が帝国海軍の技術の粋を結集している工廠が存在しているから一般人の出入りが規制されているとか、発展した街並みに反してまだ緑が多く残る地区だからという訳ではない。何よりこの一帯に存在するとあるトンネルの付近は、当の海軍軍人すらも内心は近づきたくないと思う場所である。

そしてそのトンネルの入り口右側には、彼等が恐れおののいた物の名が表札として掲げられていた。

「海軍砲術学校」

トンネルを抜けた”軍紀風紀の風”にその身を洗う、海軍砲術学校校舎。

鬼の住処と海軍内では恐れられるその校舎の裏側に位置する錬兵場には、砲術学校の鬼達によって鍛えられる生徒達が集まっている。卒業を間近に控えた青年達の中、忠は仲間達と同じく銃剣道の胴着を身に付けて列に加わっていた。また、そんな彼らの列の前に正対する砲術学校の鬼、即ち教官もまた銃剣道の胴着を着ており、その鋭い眼光に青年達はちよつと肩をすくませる。頭上に立ち込めるとす黒い曇り空も相まって、その教官の顔はいつにも増して怖い代物なのであった。

『よおし、集まったな。前から言っておった様に、今日は銃剣道の昇段試験を受けてもらう。成績優秀な奴は考課表の方にも一筆入れてやるし卒業成績にも響くから、テメエら気合入れていけよ。解ったな?』

『『はい!!』』

まるで殴りこみでもするヤクザの様な口調で教官は言った。

青年達はハキハキとした威勢の良い返事で彼の言葉に答えたが、それは教官が口にした成績優秀者への得点について彼等が胸を躍らせたからではない。帝国海軍でも最も厳しいここにおいては、いかなる場合であろうともこんな返事を返さねば罰せられるのであり、忠を含めた青年達はそれをこの半年間で嫌という程に身体に叩き込まれてきたからなのだ。だから彼等は先程放った返事とは裏腹に、失態が許されないこれから始まる砲術学校の授業に胸を騒がせていた。

そんな中で当の忠は、仲間達とはちよつと違う気持ちでこれから始まる銃剣道の授業に望んでいた。いつにも増して精悍な面持ちを浮かべる彼の表情にもそれは示されており、忠の隣でそれを認めた藤平とうへいは不思議に思つて小さく声を掛ける。

『おい、森もり。お前、随分気合入つてねえか？』

『え。そうですか？』

教官に聞えないようにと小さなヒソヒソ声で二人は声を交える。基本的には大人しくて寡黙な忠は藤平に声を返しつつ、いつもと変わらない小さな笑みを見せてやった。だが藤平は最近は見ることが少なくなっていた忠のギラギラと輝く瞳に、何やら彼が今から始まる授業に関して静かに闘志を燃やしている事を感じてならない。

やがてその藤平の感覚が当たっていた事を示すように、忠は口元を僅かに緩めて小さな声で言った。

『銃剣道には自信があるんですよ、オレ。』

『ふう〜ん……。』

あんまり会話を続けると教官に睨まれる事を予想し、藤平はそんな言葉を放って会話を止めるが、忠とは砲術学校入校以来の付き合いである彼は忠の様子を未だ内心では不思議に思っている。しかし実はその藤平の考察は当たっていて、忠は自身の銃剣道の腕前の他にも、これから挑む授業に対しての意気込みを増させる物を胸の中に抱いていた。

それは先月の事。

忠を含んだ一部の生徒達は、実艦実習と称して付近にて繋留されている練習特務艦、富士艦^{ふじ}へと足を運んだ。仲間達と同じく久々に波間に合わせて揺れる足元の感覚に浸った彼は、そこで久しぶりに彼しか見る事のできない者達の一人と出会ったのだ。もちろんそれは富士艦の命である、富士という名の艦魂である。

彫りの深い顔立ちの車椅子に乗った老婆という富士の風体はかつての相方とは似ても似つかない人物像であったが、ゆっくりとした口調と外国人の顔を持った富士の姿に、忠は既に鬼籍に入っている自身の母方の祖母を思い出していた。幼少の頃、遊びに行けば必ず美味しい食べ物を用意して迎えてくれていた彼の祖母は実はアイヌ人であり、日本人離れした祖母の顔を忠は鮮明に覚えていた。故に忠は突然目の前に現れた富士に、今はもう見る事のできない自分の祖母の姿を重ね、初対面にも関わらず富士とは明るく楽しい会話をする事が出来たのである。

実習を上手くこなしながら仲間達に気付かれないように富士と話すのは大変であったが、久方ぶりの艦魂との会話で忠は最近忘れがちであった相方との日々を思い出していた。そしてそこから生まれた強い想いが、今の忠の面持ちへと繋がっている。

卒業も迫ってきた砲術学校の日々。海軍軍人の誰もが恐れおののくその場所での苦しい生活を良く耐えれた物だと忠は考えるが、同

時にその日々をなんとしても優秀な成績で終わらねばならないと彼は心に決めていた。それは自身が偉くなりたいが為でも、海軍軍人としての自身の経歴にハクを付けたいからでもない。

意地を張って波間の上に置いて来てしまったかつての相方と、海軍軍人として、同じくこの世を生きる者として、釣り合いのとれた立派で良い男になる為。

ただひたすらなその思いだけが、忠の瞳の奥に静かに燃える闘志を生んだのであった。

やがて教官の指示の声が辺りに響き始め、生徒である青年達は一一人前に出されて教官達を相手とした勝ち抜き戦を行い始める。人相も軍人というよりはヤクザ者に近いという教官達は銃剣道の腕前だって半端な物ではなく、初めの内は威勢の良かった青年達の声も1試合が終わるとその声には覇気と入れ替わりに疲労の色が滲み出し始めた。一人も倒せなかった生徒などは仲間達が見ている前で教官から散々に罵倒され、面を取った後におもいきりぶん殴られてとぼとぼと列に戻る。どんどん自分へと迫ってくる順番に青年達は恐怖と動揺が混じった気持ちを増していくが、そんな中にあるのも忠の表情は全く持って変化は無かった。

『よお、森。お前、本当に自信があるのかよ？ あの佐々木まで五人抜きした所でやられたぞ。』

どうにも忠の目面しい表情の裏が読めない藤平は、彼自身も胸に抱いている恐怖と動揺をはぐらかす意味合いも含んで隣に腰を下ろしている忠に声を掛けた。すると忠は先程と同じ様に、目の輝きを

そのままにまた小さく笑って応えた。

『あはは。まあ、やるだけやってみます。』

控えめで紳士的な忠の人柄と良く合っているその言葉だが、それが彼の心の音とまったく違う代物である事を藤平が察するのに時間はかからなかった。

なぜなら忠が声を返してくれた直後に、そこには教官の声で忠を呼ぶ声が響いたからである。

『次！森、お前だ！』

『はい。』

荒げた口調の教官の指示に忠はいつもと変わらない自然な返事を発して立ち上がると、小脇に抱えていた面を被りながら仲間達の前へと歩き出した。

しかしそもそもこの忠という男は身長が高い訳でもなければ、細身のその身体つきが示すように筋骨隆々とした怪力の持ち主でもない。涼しげな声での返事も相まって、この時の忠の背中には藤平を含んだ仲間達からはとても小さなものに見えた。『大丈夫かな、アイツ……。』等といった言葉が青年達の間で囁かれるのも決して無理の無い事であった。

『準備はできたか？』

『はい。』

『よし、どこからでもかかって来い！』

いよいよ教官と忠がそれぞれの顔を面で覆い、お互いの剣先を相手の胸目掛けて構える。他の教官連中や仲間達は忠の静けさに彼の昇段の可能性を否定的に見ていたが、次の瞬間、忠の面の奥から放

たれた猛々しい咆哮に全員が凍りついた。

『オオオオオオーーーーーッ!!!!!!!!!!』

当の忠ですらも全身の毛が逆立つような感覚を伴って放ったその叫びは、普段は大人しい彼の姿からは想像も出来ない程に力強く気合の入った物で、まるで野生の獣が縄張りを侵した敵を打ち倒した時に上げる勝利の鳴き声の様でもあった。藤平を含めた仲間達はもちろん、それは彼と対峙していた教官にあっても同じであり、その教官は面の奥で隠れた忠の顔の部分に一際ギラギラと野生の輝きを放つ瞳を認めて思わず首筋に冷や汗を流す。

兵学校では典型的なお嬢さんクラスの卒業生にして、その性格もまた男らしいといった所が少しばかり影を潜めている忠。そんな彼が見せた本気であった。

そしてその最中、忠はずっと心の中である言葉をずっと叫んでいるのだった。

絶対、絶対帰るからな。

帰ってあの頃の事、絶対に謝るからな。明石^{あかし}。

その日、曇天の空の下で木銃を片手にした忠は並みいる砲術学校の教官達を相手に大立ち回りを演じ、18人抜きという前代未聞の大記録を打ち立てる。中には彼におもいきり突かれてぶっ飛ばされた拍子に脳震盪^{のうしんどう}を起す教官も出る有様で、仲間達は胴着と面を身に付けて大暴れするその姿を忠だとは認識しがたい感覚に襲われる程であった。

言うまでも無く彼の銃剣道の成績は文句無しの1位とされ、併せ

て仲間達の中ではただ一人、銃剣道四段の免状を与えられる事になった。また授業前の教官の言葉の通り、忠のそれ以外の学科等の成績にも見直しが行われる。10番台だった忠の砲術学校における総合成績は一挙に3位と格付けされ、彼は見事にその成績を卒業成績とする事に成功するのであった。

それから数日経った、その週の土曜日の事。

観艦式参加を名目に集まった帝国海軍の艦艇に併せて兵学校同期の者が集まっていた横須賀の事情もあり、艦隊勤務において上陸を始めるその日は兵学校卒業生による同窓会があちこちで開かれる事になっていた。それは忠の66期も例外ではなく、艦隊勤務に就いている者に加えて忠の様に術科学校での日々を過ごす一部の者達で行うという同窓会の案内状が、彼の元には送られてくる。

外出の許可すらも行き先を入念に調べられるという砲術学校においては一見許可されないかもと忠は考えたが、そもそも帝国海軍というのは上司との飲み会や同期生との同窓会は準公務と認識されているから、外出の許可は意外にすなりと下りた。つまりお酒の席であっても、帝国海軍でのそれは立派なお仕事なのである。

ただ残念な事に同窓会の幹事を務めた仲間の話によると、寝床である旅館や会場にする為の施設の提供を行う水交社は先輩方の同窓会の予約で一杯であり、田浦地区たうらの料亭を貸し切って行うので少々会費が高くつくという事であった。年上に気を使うのは別に海軍に限った事ではないが、こういう所で忠の様な新米士官にはシワ寄せがくる。ただでさえ忠は艦隊勤務から離れている為に航海手当てに

代表される手当てが少ないので、明石艦に乗組んでいた頃に比べてると結構彼のお財布の事情は寂しいのだ。

もっともだからと言って、それを理由にして同窓会を不参加とする様な選択肢は彼の脳裏に浮かんでこない。既に兵学校を卒業してから2年になるが、同じ66期の者達は彼とは3年間以上、文字通り同じ釜の飯を食い、離れていても共に頑張ろうと誓いながら「ラングサイン」を歌って別れた大切な仲間達であるからだ。

故に忠は同じく砲術学校にて励んでいる同期の仲間達と校舎の玄関で合流するや、意気揚揚とした足どりで同窓会へと向かった。

砲術学校のある楠ヶ浦から田浦までは汽車で一駅程度の距離であり、長浦港を望んだ田浦地区の海岸には、砲術学校卒業後に入校する事になる海軍水雷学校がある。故に忠とその仲間達は下見の意味も込めて、汽車の窓辺に移る景色を眺めながら明るい会話をしていた。

ぽつぽつと降り始めた雨とどす黒い雨雲によって、いつもよりも暗い感じになった横須賀の街並みと波間が忠の瞳に映る。暖房も入り始めた汽車の中は暖かく、その場に響く仲間達の声も明るかったが、忠は汽車の窓の向こうに広がっている光景を目にしてちよつとその表情を暗くしてしまう。ガラスにへばりついた雨で滲む横須賀の波間には、所狭しと港に並んだ軍艦旗を掲げた艦艇の群れが見えていた。大きな艦橋が目立つ戦艦に、スマートな流線で構成された巡洋艦、まるで羊羹の箱を思わせる航空母艦、遠目からだとかさ過ぎてはや全部同じ艦に見えてしまう駆逐艦。観艦式の為に集まっているそれらは帝国海軍の栄光を見る者にひしひしと伝えてくれるのだろうが、忠は例外だった。

もちろん彼は、そこにある大小様々な艦艇達の命たる者達の事を考えている。

怒りんぼの神通はどうしてるのだろうか？

那珂や霰あられは変わりなくニコニコと笑っているのだろうか？

霞かすみと雪風ゆきかせは喧嘩しなくなっただろうか？

長門ながとはまた仕事をサボって自分の艦から脱走しているのだろうか？

明石は、元気にやっているのだろうか？

ふと思い出してしまう彼女達の記憶によって、忠は無意識の内にかつての相方の分身を求めて視線を流していた。だが無情にも彼が視線を動かして少し経つと、窓の向こうに広がっていた景色はトネルの闇によって幕を下ろされる。仲間達へ適当に声を返しながら、忠は僅かの間だけ続く窓の向こうのトネルの闇をずっと眺めながら物思いにふける。

でも彼の脳裏には悩みや憂い等という暗い物はない。もちろんその考えの中心には別れてしまっただけ今ももう顔も声も思い出せない相方がいるが、そんな彼女と再会できるという希望を忠は最近になって抱くようになってきた。天下にその名を轟かせる砲術学校での日々を耐え抜き、優秀な成績で卒業できるという事がそれだ。まだ一年の内の半分しか終わっていないが、着実にここまでできた自分の事に忠は自信を持つ。

やがて汽車がトンネルから抜けた事で彼の瞳には再び滲んだ横須賀の波間が写るが、忠はふと口元を緩めると窓に背を向けて仲間達との会話に加わっていった。

その後、駅を降りて田浦の街並みをちょっと歩いた所にある日本料亭に忠達は歩を進める。入り口もまた豪華な料亭のロビーには

既に66期の仲間達の何人かが待っており、久しぶりの同期の再会を互いに喜んだ。

『おおお、徳井^{とくい}！　しばらくだなあ！』

『おい、お前、小林^{こばやし}か？　随分痩せたなあ。』

『野口^{のぐち}く、久しぶりく。』

『森！　元気だったか！』

料亭に勤める人の視線も忘れてお互いの息災を確認する青年達。目に映る仲間を変える度、彼等は相手の肩や背に手を触れて元気な仲間の姿を確認する。200人以上の卒業生の中では目立たなかった忠も久方ぶりに見る良き仲間達に代わる代わる声を掛けられながら、大広間へと続く廊下をはいで歩いていった。

ちようと忠達が集まった頃はまだ横須賀のあちこちに在る同期の仲間が集まりだした頃で、旬の魚の刺身や鍋料理が用意される中、彼等は大広間の廊下にあるソファに腰掛けて他の仲間の話に花を咲かせる。

『なにい！？　あの野郎、マリったのか！？』

『ひひひ、そうらしいぜ。ダメヘルのくせに、よくウーを捕まえたモンだ。』

『サセに嫁さんとのハウを建てたらしいな。今頃ビーシープレーの真っ最中じゃねえか？』

『おーおー、ナイスだな。今度サセで集合したら木銃持って、野郎のハウに銃剣突撃でもかけるか。』

『『はっはっはっはっは！』』

今日は不幸にも一緒に顔を合わすことの出来ない同期の者のお話も、こんな時は何故だかひがみ全開の物言いになってしまふのは彼

らの若さの裏返し。もちろん話題の人物を忠達は嫌っている訳では無く、既に2年も前の記憶に中にあるその仲間をこもごもが懐かしんでいるのだ。せっせと広間に食膳を並べる料亭の従業員さんを尻目に、彼等はそこに和やかながらも力強い笑い声を響かせる。

忠も含めて血気盛んな20代前半の年の頃の彼等の事。まだ酒も入っていないのに、早くもお互いの女事情に探りを入れ始めた。『その顔は女がいるな!』等という因縁にも近い物言い話す彼等だが、年の頃の青年達のこういう感覚は以外にも研ぎ澄まされている物で、おもむろに肩を組んで『言え!』と迫られた輩は大抵は本当に恋人持ちだったりする。もちろんそうなたら散々に頭を叩かれたり首を絞められた挙句、本人の気持ちを無視して恋人との馴れ初めを洗いざらい吐かされる事になるのだ。

そんな中で忠は幸運にも標的にされる事無く宴会の時間を迎え、自身が得体の知れない艦魂という女性が見えるという事を隠し通せてホッと一安心。だが同時に、いつも心にあるかつての相方の事を堂々と仲間達に言えない事がちょっと残念でもあった。

やがて100人を超える兵学校第66期の卒業生が集まって騒がしい乾杯を経た後に、まるで底なし沼のようにビールや日本酒を胃袋に流し込んだ青年達の楽しい夜が始まった。

顔を赤くした者をからかい、それに対して自分が酔っていない事を示す為に一気飲みをする者が現れ、今度はそれに対抗してビール瓶を口元に傾けて喉を大きく鳴らす輩が出始める。まだまだ少年の心を色濃く残している彼等であるから、その勢いたるや相当な物。目立ちたがり屋な奴が上座の辺りで歌を披露すると、すぐに後に続く者達が続出する。例え冷やかしが混じっていても、湧き上がる歓声は彼等にとっての応援歌。膳や碗を箸で叩き、時には手拍子や合いの手を入れて盛り上がる青年達の歌声が響く中、気の合う者同士はいつの間にか席を隣にしてお互いの近況を語り合う。

忠も最初の内は親しい連中の一角に腰を下ろして静かに皆の近況

を語り、その内に集団で固まっていた所を歌っていた者に咎められて、仲間達と供に一曲披露する事になってしまう。

『えええ。オレ、やだよお。』

『ははは！良いから来いよ！』

『行け、森！砲術学校の銃剣道で一等だったんだろ！？』

『いやいや、カンケーねえから！』

『わはは！おーし、みんなで歌おうぜ！』

恥ずかしがって渋る忠は仲間達に背中を押されて前へと進み出るが、花が咲く話にお酒も進んだ彼は満更でもなかったりする。親しかった仲間達と肩を組んでの歌だったが、忠は恥ずかしさをいつの間にか失って一際大声で歌う。彼のその歌声には、厳しかった砲術学校での暮らしで溜まった鬱憤を晴らそうという気概が満ち溢れていた。

だがそんな彼の歌声に込める想いは、そこにいる全ての者達も同じである。まだまだ士官になりたてで俸給も少なく、上官にヘコヘコと頭を下げながら辛い海軍の生活を潜り抜けてきた彼等。江田島という閉鎖された空間で同じ釜の飯を食った仲間達と過ごす、上官にも命令にも規則にも縛られない今という時間は彼等に友の変わらない無病息災の姿とそれに伴う喜びを伝えてくれる。その事に彼等は一様に感謝の念を抱き、同時に心の底から楽しんだのだった。

後年、彼等が学び舎とした海軍兵学校の在り方はしばしば問題があったと評価される事もあるが、そこにあった同期生の結束は、英国の王室海軍兵学校、米国の合衆国海軍兵学校にも決して劣らない大変に強固な物であった。そしてこの強い結束は、荒廃を極めた戦

後の日本の焼け野原を生きる上で、彼等にとっては非常に有効な武器となっていく。

しかし悲しいかな、その事を後に実感できる者は、この場にいる者達の半分にも満たないのであった。

楽しかった二時間に及ぶ宴も『縁もたけなわ。』の一言で幕を引き、最後はクラスヘッドだった者が音頭を取っての一本締めで終わりを迎えた。さっきまで続いていた楽しく賑やかだった一時の余韻に浸り、煙草の煙を所々から昇らせて他愛ない会話を交える彼等。

まだまだお給料の少ない青年達だから、二次会等といった豪華な物は予定されない。だがそこに響く青年達の声は、さっきまでとはちょっと違う色合いの明るさが込められている。その声は部屋のあちこちから響き、忠もその気が無くとも耳にしてみよう。

『おい、このあとはどうすんだ・・・？』

『解ってんだろうが。どうせお前も、艦に戻るのは明日なんだろう？』

『駅前の通りを右に行った所。あの辺が多いらしいぞ。』

『よし、ナイスなエスなんだろうな。』

妙に気合の入った静かな声だが、それを放った者に流す忠の瞳にはだらしなく鼻の下を伸ばした仲間の表情が映る。もちろんその会話と仲間達の純情な若さが色濃い表情の意味は、同じ世代である忠にもなんとなく解っていた。寢床として遊郭外へと足を伸ばし、ご苦勞な事にそこでまた”射撃訓練”に挑むらしい。古くから海軍の街として栄える横須賀は、繁華街に程近いところにはその手の店が割りと多く、彼等で無くとも溜まった鬱憤と欲望を爆発させる者は数多いのだった。

だがそんな欲求と甘い一時を想像して楽しげな声を放つ仲間達とは裏腹に、忠はあまり気乗りがしなかった。周囲で囁かれる芸者置屋の物色話に、彼は困ったような表情で頬を掻き、その視線を仲間達と合わせないように部屋の天井へと投げる。

これから女遊びと洒落込もうという彼等の勢いを考えた矢先、忠はふと今も波間の上にて揺られながら頑張っている相方の事を思い出した。

どんな顔なのかと思い出せないのに、彼の脳裏には綺麗な笑顔を絶やさなかった彼女の事が思い浮かび、どんな音色の声で自分に語りかけてきたのかも思い出せないのに、彼の記憶にはいつもそこにあった明るく楽しそうな笑い後が蘇ってくる。半年以上も前に馬鹿な自分のせいで別れてしまい、後戻りできなくなってから忠は彼女への気持ちを鮮明に察していた。そしてその時に大声を上げて泣きながら相方の名を呼んだ自分の事も、忠は今になって思えばその理由を明確に悟る事が出来る。

好きだったから・・・。

どうしようも無いくらいに、彼女が好きだったから・・・。

何故それを彼女と暮らしていた時に気付けなかったのか、彼にも解らない。そんな事を真剣に考えた事も無かったし、その考えからくる素振りも微塵も見せた事は無い。いざ離れるという時になって、胸の苦しさや涙と供に初めて自覚したその気持ち。だがそんな自分への考察を理解する事は、忠にとって不思議と難しい事では無かった。むしろなんでこんな簡単な事に気付けなかったのかと、忠はかつての自分に憎しみさえ募らせていく。不意に握った右手の拳で、彼は昔の自分を殴りたくなった。

お前が馬鹿だったから。

自己嫌悪を通り越した、自分への激しい憤り。それを堪える忠の顔は急激に曇っていく。

だがそんな忠の表情に気づいた一部の仲間達は、きっと彼が普段から猛烈に苦しい海軍生活を送っているのだろうと推測して声を掛けた。

『おい、森。なんかあったのか？』

『……え……』

半笑い気味の仲間の声で忠はそれまで脳裏に浮かんでいた相方に纏わる映像を消し、やっとの事で我に帰る。ロクな返事も返せない忠はいま仲間から掛けられた言葉を全く覚えていなかったが、そんなやりとりを耳にしていた忠と同じく砲術学校に籍を置く仲間の一人が、神妙な面持ちで俯いていた忠の事情を勝手に考察して説明しだした。

『コイツ、砲術学校の銃剣道で目立ってさ。おかげで教官に目を付けられてて大変なんだよ。なあ、森？』

自分の考えを微塵も勘定していない仲間の言葉だったが、忠はそこに怒りや憎しみを湧かせる事は無い。

同期が何やら難しい顔をしているなら、同じ同期の者で助けてやろう。

兵学校66期の仲間達が一樣に持つそんな決意と心配りを、忠は

同じくそれを抱く者としてよく知っているからだ。ちょっと冷やかしたりする事もあるが、仲間の困っている事態を放ってはおけないのである。

故に忠は僅かに歪んだ笑みで仲間達の声に応えると、溜め息を放ちながら立ち上がって彼等との再会を願う言葉を発する。それは仲間達が企図しているこの後の遊びの旅に、自分は同行しないという事を意味していた。

『悪いな、みんな。オレ、帰るわ。』

手にしていた軍帽の埃を手で払い、頭に被りながらそう言った忠。自分というかつての大馬鹿野郎を思い出していた辺りから彼の身体を支配していた酔いは冷め、見知らぬお姉さん方をはべらせての飲み直しも気が進まない。何よりその先に男としての快楽を垣間見るという事が、忠には何だか思い出の中で微笑む彼女を裏切るような感じがする。そしてそんな自分を見たらきっと相方が泣くであろうと思った時、忠は再び砲術学校にある自分の寢床へと帰ろうと考えたのだ。地獄の一丁目とされるその地での生活は厳しさと激しさばかりが闊歩する日々であるが、忠の中ではそこにある辛さよりも相方の泣く姿を憂う方が嫌だった。

『え、帰るのか？』

『うん。まだ汽車はあるしね。じゃあな。』

部屋のあちこちにたむろする仲間達の群れに手を上げながら、忠は大広間の廊下へと向かって歩み寄っていく。

だがその刹那、彼の背や方を仲間達の手が触れてきた。

気付いた忠が声も無く振り返ると、そこには同期の中でも特に親しい3人の青年達が酒臭い息を放ちながら笑みを湛えていた。きつとこれから飲み直そうと誘いに来たとはいえないと忠は察し、苦笑い

しながら穩便にその誘いを断ろうとする。

『森く。いこうぜえく。』

『せや、森。ワイ、この辺のナイスなエスハウ知ってんねや。』

ちよつとフラフラとしながらもそう声を発した二人。その言葉は忠の予想通りの代物で、酔いの冷めた忠はその心遣いに感謝しつつ、やんわりと断ろうと冷静に考えて応じる。

しかし彼は気付いていない。その場に合わせた笑みを浮かべ、受け取る側の事を考えて言葉を選ぶ彼のその姿こそ、忠がさっきまで憎しみを抱いていた、かつての自分と同じ姿であった事を。

やがて忠の良くもあり悪くもある癖によって放たれた言葉は、酒の勢いに流されて本心を剥き出しにする仲間に遮られる。

『有難うな、浜田、^{はまだ}瀬尾、^{せお}小林。でも今日はこれでー。』

『どうせ外泊許可とってんのやろお？ ほな、行こうで！』

『どわ！ お、おい、待ってって、小林！』

酔いがほどよく冷めた状態で酔っ払いを相手にする事ほど難しい物は無い。まして親しい者に対しては心象を悪くせぬようにと笑って誤魔化す癖のある忠には、強引に腕を引っ張って行く仲間達の手を振り払う事が出来ない。砲術学校に同窓会への参加の許可を求め、際、仲間とは違う事を不審に思われないようにと”外出”許可ではなく”外泊”許可を取った事も、残念ながら今の忠の状況を悪くしてしまう。

僅かに荒げた声を放ちつつ、忠は仲間達によって雨の降る横須賀の夕闇へと消えていった。

その後、雨に濡れながら横須賀の妖艶な雰囲気を持つ街通りを彷徨った忠達は、一見の芸者置屋へと上がっていく。赤い色を滲ませる照明を灯した階段や廊下を歩く最中にも聞える、タガが外れたような男女の笑い声や鳴り物の音。瀬尾も浜田も小林も、耳に響いてくるその笑い声や、眼前でお尻を振りながら座敷へと案内する芸者の歩く姿に、これから始まる楽しい一時を確信して気持ち逸らせて行く。彼等とて長い禁欲生活を日常としている海軍の士官であるから、芸者置屋のあちこちより放たれる色気の混じった空氣に浮かれるのは無理も無い。むしろ仲間3人の後ろを、僅かに口を尖らせて困ったように眉をしかめてとぼとぼと続いていく忠の方が少々場違いな感じであった。

やがて通された部屋にて傍らに2人の芸者を擦り寄せながら、忠達は日本酒や焼酎のグラスを片手に場を気にしない話しに花を咲かせ始める。

忠以外の3人は僅かに冷めた酔いに再び熱を帯びる為、出された酒や食い物をホイホイと口へと運び、次第に顔の色に赤い色合いを増していく。久々に間近で耳にする若い女性の声もまた、彼等の酒へと伸ばす手に勢いを授け、普段は寡黙なその口を柔らかくしてしまふ。

若い盛りの3人が酒の勢いに任せて口にする話は、鍛えた身体と男が持つ度胸自慢の優越感に包まれた武勇伝、それに女の話。酒を注ぎながら歓声のような声を上げる芸者に気を良くし、その内に仲間の誰かの話が終わると、今度は自分の方が優れているかのように声を張り上げる、という循環を3人は繰り返していた。

その話を座敷の隅っこで耳に入れている忠は、チビチビと口に運ぶ酒にも酔いを増させる事は無い。そも一次会で帰ろうとしていた彼は強引な仲間達の誘いでここへ来てしまったのであり、ふと見た

部屋に備え付けられている時計から既に砲術学校へ戻る為の最後の汽車が発車してしまった事を察すると、仲間達の様に酒と芸者の合いの手に踊らされて声を張り上げる様な気分にはなれなかった。もっとも、仲間達の話の間隙を埋める為に芸者が奏でてみせる三味線の音に、忠はちよつと故郷の津軽三味線を思い出したりもしており、今の自分の状況を不本意ではあると解っていながらも決して不機嫌な訳ではなかった。

『せやからな、もうこれまでや言うて、その女とは別れたんや。悪い女やなかったんやけどなあ。』

その時、これまで耳に入れていても頭には入っていなかった仲間達と芸者の声に、忠はふと意識を傾ける。どうやら自分達がその生涯で付き合った女性の話題で盛り上がっているらしく、なけなしの女性歴をひけらかして自身が良い男であるという様な感じに声を発していた。だが自分と同じく彼等だって兵学校にて10代後半を過ごした者達である事から、その話にはお酒によって積み上げられたそこそこのホラが含まれている忠は考える。

その事を口に出してその場をシラけさせてしまうのを望まなかった彼は何も言わなかったが、別れ話ですらも自分の優越感を得る為のネタにするような真似を忠は極端に嫌った。もちろんそんな忠の胸の中にある物は、好きだった女に背を向けて泣いた昔の自分の記憶だった。

『へえ。おにいさん、ヒドイねえ。』

『男はなりふり構ってらんねえんだよ。』

溜め息混じりで焼酎を流し込む忠の耳には、いつ終わるとも知れない仲間達の明るい声が流れてくる。その話題にはちっとも魅力を

感じないのだが、忠はそんな彼等のやりとりにも否応無く相方の事を思い出していた。

得体の知れない艦魂などという存在で生きていた相方を、顔や声がい出しせなくとも忘れる事は無い。それぐらい忠には特別な者であり、特別な女性であった。だがそれを眼前の仲間達の様に、声を大にして言葉にする事は彼にはできない。この中で彼女達の姿を見る事のできる者はおそらく自分だけであり、もしそれを暴露したなら変人扱いされるのが目に見えているからだ。

そして忠はこの時、そんな相方との思い出や気持ちをを秘めながら今の様に仲間達の自慢話を耳に入れる事に、無性に腹が立ってくる。その矛先がかつての馬鹿だった自分なのか、ヒドイと芸者に煽てられて笑っている仲間なのか、忠自身にも解らない。ただ着実に胸の中を侵食していく文字通りの行き場の無い怒りを忠は抱き、無意識に口先を尖らせてしまう。

『おい。森。どしたあ？』

そんな中、芸者との話で盛り上がっていた仲間の一人である浜田は、座敷の隅で無言のまま険しい表情をしている忠に気付き、声をかけてきた。男性である自身の身体には無い女性独特の流線が余程恋しいのか、浜田は笑い声を上げる芸者の肩に手を回している。後は布団さえ有ればそのまま一戦交えるような勢いを覗かせつつ、彼はニヤニヤとしながら忠の顔を覗きこむように眺めていた。

静かに積もる腹立たしさを忠は器用に隠し、その場を崩さぬように小さく苦笑いしながら声を返す。

『腹でも痛いのか？』

『うんにゃ……。なんでもねえよ……。』

忠は乾杯でもするかの様に、グラスを握った手を僅かに上げて浜

田に応えた。だが窓の外にて降りしきる雨と同じく、彼の胸の中にはその間にも鬱憤にも似た憤りがしとと溜まり始めていた。それは忠の意識に反して彼の身体から放たれる雰囲気の影響を与えており、浜田を含めた仲間達には先程から話の輪に入ってこない忠が一人泣いている様に見える。ちよつとだけ歪んだ笑みを浮かべてグラスを傾ける忠だったが、初対面である事からそんな彼の雰囲気に気付かなかった芸者の一人が、酒の瓶を手に彼の元へと擦り寄って行った。

『どうぞ。おにいさんの話もきかせてよ。』

『いやあ……。オレの話なんかつまらないよ……。』

グラスに酒を次いで貰いながらも、忠はそう言つてゆつくりと首を左右に振る。その間、彼はずつと視線を眼前にある芸者の顔には流さず、やがてグラスが酒で充たされるとすぐさま顔を正面に向けてちびちびと飲み始めた。

しかし先程からずつとこうして一人で酒を飲んでいる忠を芸者は気遣い、なんとか楽しい時間を作つてやろうと彼の腕に手を伸ばして言った。

『聞いてみなきゃわかんないよ、おにいさん。』

壁に寄りかかる様にして腰を下ろす忠の腕に、芸者はゆつくりと手を触れて顔を近づける。猫撫で声にも近い声を上げる芸者の雰囲気はとても妖艶で、先程まで彼女を傍らに置いて武勇伝を自慢していた小林の顔を少し曇らせた。間近に迫る芸者の顔と息遣いは酒の勢いも手伝つて仲間達の心を躍らせるだけの魅力が十分に溢れた代物で、この後に気が合えば布団の中までお供する事も有り得るといふ芸者置場の事情も考えれば、正常にして若い盛りの男性である彼等にとっては中々に抗えない甘い誘惑である。

だが忠は耳元で聞える芸者の声に再び小さな苦笑を浮かべると、そつと芸者の手を握って自身の身体から離れた。

『オレはいいんだ。それよりアイツ等の相手してやってくれないか。』

顎で仲間達の方向を指しながら放った忠の声は、大人しくて優しい男性像を持つ彼を良く示した物で、その姿は仲間達にしたら兵学校の頃より見てきた友人のいつもの姿。ちつとも変わっていない忠という男の人柄である。

だがそんな中で手酌酒でグラスを口に運んでいた瀬尾は、忠のその言動にとある考察を巡らす。

男なら誰しも勇み足で来るという色町にあつて、こうもまた忠はいつもの平静を保っている。その原因は、女性との触れ合いに飢えることが常である海軍生活において、彼が真心を傾ける異性が居るからなのではないか？

そこまで考えた瀬尾は、すぐさまその事を忠に問いたです。普段から他人の色恋沙汰などに関心を持つ事は少ない瀬尾なのだが、辛い兵学校生活にて同じ釜の飯飯を食ってきた忠の事だからこそ彼は気になって仕方なかった。

『森、お前もしかしてハートインチでもいるのか！？』

『ぶ。いやいや・・・。』

それは忠にとっては凶星とも言えたが、咄嗟に「その真相を悟られてはいけない。」と判断した彼は、小さな驚きの声を上げてすぐに瀬尾の言葉を否定しようとする。しかし忠が声を返す最中、瀬尾の言葉を耳にした小林と浜田は忠の否定を真に受けずに仰天の声を上げた。いつも大人しくて何事にあっても前面に立とうとしない忠の人柄をよく知る二人からすれば、恋愛にもそんな当たり方をする

であろう事が想像に難くない忠が、心に決めた女性を持っているという事は予想外だった。だが部屋に入ってから以来、自分達とは距離をおいて部屋の隅っこで黙って酒を飲んでいる忠の様子を不審に思っていた二人は、あながち瀬尾の言った事が的外れではないと考えてしまうのだった。

『なんだよ、お前、女いるのか! ?』

『ははは・・・。ちげーよ・・・。』

腕に芸者を巻きつかせながら上げた浜田の声に、忠は小さく驚きの声を放った際に胸元に飛び散ってしまった酒の雫を振り払いつつ、偽りの苦笑を浮かべた表情でさらに否定する。

しかし彼等に否定の言葉を返す度に、首を左右に振る度に、忠は小さな苛立ちを募らせていた。妙に脳裏を過ぎっていく相方との思ひ出も、それを仲間達のように酒の勢いに任せて吐こうとしなかった自分も、部屋にいる者全員から浴びる視線も、一張羅である軍装を酒で汚してしまった事も、目に入る事や何気ない自身の動作の全てが、何故か忠の胸の中を憤りの感情で埋めていく。それは苦笑を絶やさなかった忠の表情にもついに現れ始め、彼は無意識に口を尖らせて眉をしかめた。

一方、忠の表情の変化を認めた小林は、浜田や瀬尾とはちょっと違った真相を考察していた。見るからに不機嫌な顔をしている忠だが決して自分以外の者に責を求めているような様子は無く、再びグラスを口元に近づけて表情を整えようとしている。元来が優男である彼のそれは、今ここにはいないどこかの誰かに対する憤りだと小林は酔った頭で考えた。そして恋愛経験豊富な彼は、きっと忠が自分と同じ様に過去に交際していた異性があり、今はもう思ひ出の中にしかないその相手を思い出しているのだろうという考察に辿り着く。

それは大人しい忠の人柄を鑑みるととても意外な事であると同時

に、忠の少年のような純情さを明確に示す代物で、女性とはそこそこ縁のある小林はそこに可笑しさを覚えてしまう。ケラケラと笑いながら小林は焼酎の瓶を片手に忠の隣まで寄って行くと、憤りをなんとか鎮めようとしている忠のグラスに酒を注いでやりながら語りかける。

『さやかあ、森。別れたんがおるんやな。』

『いやあ・・・、そんなんじゃない。』

突如として声を掛けてきた小林に、忠は弱々しい笑顔を作って応じる。グラスの握った手を僅かに上げ、忠は酒を注いでくれた小林への礼としながら声を放っていたのだが、それを遮るようにして響いた小林の言葉を受けるや、その表情からは全ての感情が波の様にして一斉に引いていった。

『そんなん気にしとったらあかんて。ちゃっちゃんと次を見つけたらええねん。別れてやったぐらいに考えな、男なんてやってられへんやろ。別れたんはお前やのうて、ウーの方に落ち度があったと思わなな。』

『なんだって・・・？』

『お前はええ男や。せやから悪い女とは合わへんねん。別れたんは女のせいやで。そやろ？』

小林の口にする事は、忠にとってはかつての相方との思い出の中でももっとも大きく辛い物を見事に言い当てた物だったが、それがこれ以上ないくらい良く当たっていたからこそ忠の思考の全ては一斉に停止した。頭の中が空っぽの真っ白になり、すぐそこで友人の過去を見事に見透かせてみせた事に優越感を得てニヤニヤしている小林の顔が、忠の僅かに湿り出した瞳に映る。それに伴って静寂を保つ忠の脳裏には、いま小林が放った言葉が何度も響いた。

それはほんの数秒の間だけ続いていたが、空っぽになった忠の胸の中には、窓の外に認める雨とは比較にならぬほどの勢いで怒りが注ぎ込まれていく。

悪い女？ 明石が悪いから、オレは今こうしているのか？

真っ白な思考回路の中でそう呟いた刹那、忠の胸に流れ込んでいた怒りはついに平静を保つ為の一線を越えた。同じ兵学校で頑張ってきた小林という友人の顔が、途端に忠には憎悪の対象として見えてくる。

さっきまで自分の別れ話を自身の経歴に付いたハクとして語っていた彼に、同じ目線で思い出の中にいる相方を見られた事。ただそれだけの事が、忠には絶対に許せなかった。

『男を磨かなあかで、森々。ははは。』

笑いながらそう言った小林が忠の肩を軽く叩く。彼にしたら心を引きずる友人に対する励ましであったが、今の忠にはそんな小林の心遣いなぞどうでも良かった。むしろそこに伴われる小林の笑い声は忠にしたら、何か相方と出会えた奇跡を持つ自分が笑われているように聞こえ、その怒りをさらに増幅させていく。

そんなに艦魂が見えるオレが可笑しいか・・・？

そんなに別れた女の数誇る奴が良い男か・・・？

そんなにアイツが悪い女に見えるか・・・？

胸の中でそう強く叫んだ所で、忠の理性は失われた。

彼はグラスを部屋の壁へと投げつけると、これまで自分以外の者に抱いていた想いを初めて声に変えて、いつの間にか右手に作っていた拳を小林の顔に叩き込んだ。

『うるせえ!! お前に何が解んだよ!!!!』

腹の底からの叫びを上げながら放った忠の鉄拳を受け、小林は仰け反るようにして倒れる。だがすっかり酔った状態で続けざまに襲ってくる忠の二発目の拳を受けた小林は、襟を掴んでくる忠の腕を左手で掴むと彼の顔に拳を返した。

『なんや、ワレ!! 人が下手に出てやっとなのに、ナメてんやないど!!!!』

小林の拳に忠の唇が切れて赤い流れが滴る。しかしそんな自分の顔も、兵学校の同期である小林の腫れ始めた顔も、忠にはどうでも良かった。浜田と瀬尾が止めに入る中、忠は小林に馬乗りになって左右の拳を打ち下ろす。

彼の釣り上がった眉に伴われた瞳に映るのは、相方を、彼女と出会えた自分を笑う、憎き敵。その敵を滅せなければならないと、忠の本能が言葉を伴わずに命じていた。理由なんかいらなかった。

『何してんだよ、森!!』

『何が男を磨くだ!! この野郎!!!!』

『森を抑えてろ、浜田!! 小林、落ち着け!!』

『ゴンタ顔でビビってんか、オラ!! 上等や、かかってこんかい!!!!』

浜田と瀬尾に後ろから抑えられる、忠と小林。芸者達が悲鳴を上げて廊下へと逃げて騒ぐ中、怒りの色で染めた表情と瞳で忠は小林を睨みつけて叫ぶ。

それは他人を気遣い、その場の雰囲気や乱さぬ為に笑って誤魔化

す事が常である忠が見せた、己の胸の中にある想いに忠実に従った姿であった。

『見下して笑ってんじゃねえよ!!! お前にオレの何が解るってんだ!!!』

その後、忠は瀬尾に後ろから抑えられたまま、芸者置屋の外へと連れ出された。浜田に抑えられながら暴れる小林を背にして部屋を出るのは忠には不本意であったが、やがて置屋の廊下を歩いている内に忠の身体は静けさを取り戻していく。未だに胸の中にははらわたが煮えくり返る想いで充満していたが、背後から忠の心を撫でるように響いてくる瀬尾の語り掛けで、彼はその手に拳を作って振り回す事はなかった。

『わ、悪いな、森……。小林の言った事に怒ったんだろ？ あいつに代わって謝るからさ。』

激しい剣幕で暴れる忠を初めて目にした瀬尾は、なんとか忠の怒りを鎮めようと懸命だった。本当ならいきなり殴りかかった忠に非が有るのにも関わらず、敢えて瀬尾は謝罪の言葉を口にしてみせる。自分を上回るお嬢さん型の性格である瀬尾という仲間の事は、兵学校で共に頑張ってきた事から忠も良く解っており、小林の罵声が聞えなくなった事で平静を取り戻しつつある忠は、彼にまで迷惑をかけるない為にも大人しくこのまま退散する事にした。ただ怒りの水位がまだまだ下がらない為に、置屋を出て雨の降る軒下まで来てその身を自由にされても、忠はまだ怒りを表情に滲ませており、瀬尾に対して礼を口にする事もなかった。

その後ろで瀬尾は忠から手を離すと彼が暴れようとしないう事を確認して安堵し、底抜けの優しさを持ち味とするその性格がよく示された言葉を残して置屋の中へと戻って行った。

『小林には言っておくから、許してやってくれよ。』

『・・・・・・・・・・』

『ハートインチ、大事にしてやれよ……。じゃな……。』

顔も向けずにいた忠の背後から、瀬尾の言葉に続いて戸が閉められる音が鳴った。だがそこに深夜という時間帯に似つかわしい静寂は無く、置屋の軒下に立ち尽くす忠の耳には、降りしきる雨の音と、辺りにあるあちこちの芸者置屋から響く男女の笑い声が静かに響いてくる。それはまるで先程の小林の笑い声と同じ様に、「相方を含んだ艦魂が見える」という境遇を持つ自分を笑っているように感じた。

再び苛立ちが募り始める忠は雨の中を歩き出すが、軍装が濡れる事を微塵も憂う事はない。絶える事無く木霊する耳障りな笑い声から、彼はとにかく一步でも離れたかった。もっとも遠くなっていくその笑い声によって、忠の胸の中に湧き上がる怒りが治まってはくれない事はない。彼にとっては嫌だと思っただけ、怒りを募らせる物であるのに、木霊する笑い声はとても愉快で楽しそうな代物。そしてそんな笑い声に背を向けているという今の自分が、忠にはなんだか憎らしくて仕方なかった。

みんな、あんなに楽しそうなのに、なんでオレだけこうして怒りを我慢せねばならないんだ……。

強く唇を噛み締めながらその言葉を脳裏で呟くと同時に、忠の身体には雨の冷たさが一層滲みた。もう既に靴下までも濡れ出しており、10月の夜の寒さは忠の身体のあちこちから攻め入ってくる。そしてその寒さにまでもすらも我慢をしなければならぬ事も、忠にはなんだか腹が立って仕方がない。

もはや怒りの色しか帯びていない顔で歩く忠。だがその時、彼は俯いて足元を視界に入れて歩いていた事から、正面から向かってくる着物を着た4人の荒っぽい外見の男達に気付かなかった。

ドン

『・・・ってーな、おい。』

『あん？ 海軍さんじゃねえかよ。』

『ロクに道も歩けねえ海軍さんかよ。笑わせらあ。』

『それでよく海に出れんな？ 船に乗る資格ねえよ、テメエ。』

番傘を差して鋭い眼光を忠に向ける男達は、こんな時間に色町の近辺をウロついている事からやくざ者である事は明白だった。凍えるような冷たさの夜にずぶ濡れで歩く海軍士官を目にした彼等は、小林との殴り合いで僅かに傷を負っている忠の顔にさらに因縁をつける。だが忠はそんな彼等の言葉を既に聞いていない。彼等が口にした最後の言葉で、既に限界線まで満たされていた忠の怒りはとくに溢れ出ていたのだ。

船に乗る資格が自分には無い。

その言葉は忠の耳から脳裏へと運ばれる際、彼の身体を支配する酔いの流れに揉まれて『船の命たる者と会う資格が、お前には無い。』と変換されていた。そして船の命たる者という言葉の意味を考え、忠はその者がかつての相方を指しているように思ってしまう。

そこまで考えた忠の右手に拳が握られるが、先程の小林の時と同じ様にそこには理由はない。忠の瞳に映るのは、自分や相方を笑う憎き敵。僅かに身体に残る酒の勢いも手伝い、忠は躊躇無く一番近い位置にいた男に拳を突き刺した。

『おらあああ！！！！』

『ぐはっ！！』

『コイツ・・・！！』

『テメエ・・・、良い度胸じゃねえかよ・・・。』

殴られた男が尻餅をつき、喧嘩慣れした他の男達が瞬時に身構える中、忠は怯える事も忘れて叫び、男達に殴りかかって行った。

『何が資格がねえだ！！ 馬鹿野郎！！』

その日の横須賀は朝からずっと雨が降り、ただでさえ肌寒い空気をさらに冷たい物とする。夜になると特にそれは顕著で、忠はそんな今日という日の横須賀の寒さを、人通りも少ない街角の一角に倒れながら感じていた。

青く腫れた右目の瞼が視界を圧迫し、流れ出る鼻血でただでさえ疲労と苦痛に歪む呼吸を遮られながら、忠は路地の塀に寄りかかって倒れている。ぼんやりと眺める漆黒の曇天からは変わる事なく雨がしとしと滴り、あちこちに激痛の震源地を持つ忠の身体を容赦なく打っていた。小さな水滴であるから決して痛みを伴う訳ではないが、肌着まで濡れている忠に雨は凍えるような冷たさを与える。

『ぐう……、う……。』

激痛に自由を幾分束縛された身体に鞭打ち、忠は壁に腕をかけてなんとか立ち上がる。ガクガクと今にも折れ曲がりそうになる膝に力を込め、ようやく二本の足のみで立った所で、彼は口の中に苦痛と共に溜まる何かを地面に吐いた。

それは腫れあがった頬の内側が切れている事を示す、唾液と砂が混じった赤い粘液。道端に吐き捨てても暫くの間は形を保っていたそれは、雨に打たれて騒ぎ立てる地面の飛沫に抗いきれず、やがてその赤い色を薄くしながら地面に溶けていった。

『はあ……。はあ……。ぐ、ちくしょう……。』

そう呟いた忠はまだ足取りがおぼつかない状態で道端に落ちていた軍帽を拾うと、ヨロヨロとしながら帰る道を歩み始める。散々に痛めつけられてしばらく雨に打たれたからか、忠の身体や脳裏からは酔いという物が完全に失せている。入れ替わりに強烈な苦痛が身体の内側に残っているが、ようやく酒の勢いが消えた忠の思考は、その苦痛の原因を自分以外には伏せておかねばならないと判断した。

4人の喧嘩慣れた男に、まだまだ新米の士官である忠が敵う筈も無かった。雨の降りしきる中、良い様に顔を殴られ、腹を蹴られ、路地の一角にぶっ飛ばされて唾を吐きかけられた忠。そのままさっきまで倒れていたのだ。

栄えある帝国海軍軍人に対しての暴行はもちろん重罪であり、彼が訴えさえすれば先程の男達は間違はなく裁かれる。だがそれを解っている、忠は自分の変形した顔に始まる怪我の真相を秘密にしようとする。

答えは簡単だ。栄えある陛下の赤子が負けたという事実は、忠で

無くとも海軍軍人の全てが隠蔽するであろう事だからだ。あわよくば4人の男達が刑務所送りになったとて、忠はもちろんその上司や同期生は皆、一様に陛下の御稜威に傷をつけた者として馬鹿にされる海軍生活を送る事になる。だから結局は喧嘩沙汰というのは負けても我慢するしかないのだ。

冷たい雨が勢いを増す中、忠はフラフラとした足取りで砲術学校への道を歩く。雨を吸って重くなった軍帽によって首を垂れ、足元に視線を落としながら、彼はなぜこんな思いを自分がせねばならないのかと考えた。

どうしてこんな苦痛を我慢しなければならないのか・・・？

どうして仲間達と同じ様に酒を飲み、笑い合う事ができなかったのだろうか・・・？

そもそもどうして横須賀の一角で、自分は生きてるのだろうか・・・？

尽きる事の無い自分への問いかけが、忠の脳裏を過ぎっていく。自分だけがこんな境遇を過ごすという現実。それは決してこれまで生きる上では高望みなどしてこなかった忠にとって、なんだかとても理不尽に思えた。

『ちくしょう・・・、ちくしょう・・・。』

思考を支配していく己への理不尽に、忠は思わずその言葉を吐く。同時に彼の胸の中にはそんな理不尽に対する憎しみが再び積もり、忠は自分の何が悪かったのかをぼんやり考え始める。すると真っ先に上がってきたのは、相方を始めとした者達を見る事が出来るとい

う、彼にのみ与えられた稀有な能力だった。

艦魂が見えるからだ……。きつとそうだ……。

頭の中で響かせるその言葉には行き場の無い恨みが込められ、やがてそれは艦魂という存在に対しての憤りへと変わっていく。彼女達が見えなければ、いなければ自分はどうして辛い生き方をする必要などない筈。そもそも万人には見えないというその存在の仕方もある。また、忠にはとっても理不尽に思えるのだった。

だがその艦魂という言葉を脳裏で語る都度、彼の記憶から検索される艦魂はかつての相手だった。顔も声も仕草も思い出せない思い出の中の彼女には、かつてそこで一緒に生きたという滲んだ感覚があるだけ。恨むのなら容易い筈だった。

『ち……。ちくしょう……。』

しかし忠は恨む事は出来なかった。

一緒にいて居心地が良かったから、声を交えていて楽しかったから、触れた手が温かかったから、そしてそんな彼女がとても愛しかったから、忠は恨みなどという頭上の雨雲のような色合いの感情を抱けなかった。すると今更ながらに、自分が彼女に対して抱いていた気持ちを忠は理解する。ずっと前から解ってたその気持ち、でも声に変えるだけの勇気が無かったその気持ち。

オレは明石が好きだったから……。

それを凍えるような冷たい身体の中で呟いた刹那、忠の胸に積もった怒りは量をそのままに別な気持ちへと切り替わる。

いつも格好良い所を見せようとした事、理想などという言葉にすがって相方に背を向けた事、別れるまで自分の気持ちを微塵も疑わ

なかった事、存在の仕方が違うという現実に億劫になった事、拳句の果てには仲間と同じ様に彼女を悪い者だと考えようとした事。その全てが忠は悔しかった。

砲術学校の優等生になっても、銃剣道の腕を認められても、未だにそんな事で悩む自分は、明石と会う資格があるのだろうか・・・？

少し前に男から浴びたその言葉が、忠の身体に染み渡る。

その答えは否だった。

未だに彼女へ抱く気持ちに知らないフリをしている自分に、そこに生まれる都合の悪い事を他人のせいにする自分に忠は気付く。それはあんなに憎らしく思った昔の自分の姿と、何一つ変わっていない物だった。鬼と呼ばれる砲術学校で半年も頑張って良い成績も納めたというのに、自分は人間として、男として何も変わっていない。やっとの事で自分の未熟さを察する忠だが、彼はその事に喜びを覚える事は無かった。

『う・・・、うう・・・。うつ・・・。』

上空から落ちて忠の顔を這って行く大粒の雨に紛れているが、彼の口から声が漏れるのと同時にその頬には光る雫が流れ落ちていく。身体 of 末端より襲い掛かってくる寒さと苦痛。大馬鹿野郎と蔑んだ昔の自分が今でも心のどこかにいる事。その果てにこうして雨の中をボロボロになって歩く事。

そんな惨めな自分の全てが悔しくて、悔しくて悔しくて、忠は泣いた。

血の混じった鼻水を流し、雨の中を歩きながら泣いた。それしか出来なかった。

深夜の雨の中、田浦の街並みの路地を、忠はひたすらに泣きなが

ら歩く。降りしきる雨と横須賀の寒い風にただ自身の未熟さを痛感する彼の背中では、やがて雨音に包まれる横須賀の闇の中へと消えていった。

自分で察した通り、まだまだ忠は修行不足な男であり、相方と釣り合うには程遠い身の程なのであった。

この当時、忠を含めた海軍という組織の中で、実施部隊を率いる者に山本五十六やまもと いそくという人物がいた。後年になって彼は懸命に励む若者達へ向けてこんな言葉を放つのであるが、忠はその何一つとして実践できていない未熟な男なのであった。

苦しいこともあるだろう。

言い度いこともあるだろう。

不満なこともあるだろう。

腹の立つこともあるだろう。

泣き度いこともあるだろう。

これらをじっとこらえてゆくのが男の修行である。

第六七話 「男の修行」 (後書き)

海軍略語補足

マリン ⇒ 結婚する
ダマヘル ⇒ むつつりスケベ
ウー ⇒ 女性
サセ ⇒ 佐世保
ハウ ⇒ 家
ビーシー ⇒ 無料、タダ
プレー ⇒ 行為を行う、遊ぶ
エス ⇒ 芸者さん
エスハウ ⇒ 芸者置屋
ハートインチ ⇒ 心に決めた女性

◆本話拝読に当たって◆

忠が小林と喧嘩する辺りから、長渕剛の名曲「とんぼ」をかけて
拝読して頂けると雰囲気が増すかと思えます。

男は頑張らねばいかんですね・・・。

死にたいくらいに憧れた 海軍のバカヤローが!!! (つд)

第六八話 「繋がり／前編」

昭和15年10月5日。

観艦式を前に横須賀在泊の艦艇達では乗組員の殆どが上陸を許され、見物客で賑やかな横須賀の街へと足を運んでいた。最近はやれ訓練だと言っても甲板を走り回って用具の出し入れをするくらいが関の山である乗組員達は、身体に残る元気を横須賀での娯楽にうんとつぎ込む。いつもは銭湯に行つて溜まった垢を落とすだけの者も、今回はついでに食い物屋や映画館、本屋、鎌倉への小旅行と、それぞれの気が向くままの上陸生活を送る。第二艦隊司令長官の古賀中将も、最近では艦隊旗艦の愛宕艦あたごよりも陸上の横須賀鎮守府庁舎に出向いてお偉方同士で語り合う事が多い。階級が高かろうが低かろうが、やっぱり抑制の多い艦艇での生活よりもきままに行動できる陸上の方が彼等にとっては気が楽だった。

しかし自身の分身から人の気配が薄くなった事を、艦の命である艦魂達はちつとも残念に思うことはない。乗組員が少ないと人目を気にせずに艦内の設備を使えるし、倉庫に忍び込んで缶詰をちよつと失敬と銀バイする事も簡単だからだ。文字通り自分の身体である艦内であっても、これらを人目を忍ばずに実施するとたちまちその艦艇は幽霊船と認識されてしまう。前例こそ無いがそれを理由に廃艦処分とされたくない彼女達は、これでも結構普段の生活では人間達に影響の無いようにあれやこれやと気を使っているのだ。

そんな事から彼女達は、賑やかな街並みにて羽を伸ばす自身の乗組員達と同じ様に、のんびりと自身の分身の中で自由気ままな生活を送っていた。普段は士官室で鎮座している蓄音機をかけてみる者もいれば、乗組員が持ち込んだ雑誌に目を通して俗世の知識を吸収する者、間宮艦まみやに代表される糧秣運送を行う特務艦の艦魂に頼んで

お菓子を調達する者、人間達の中でも滅多に食べれないパイ缶（※パイナップルの缶詰）を拝借する者など、その過ごし方は雨が多くて憂鬱な最近の横須賀のお天気を忘れるのに十分なほど明るいものであった。

そしてその日の夕方。

観艦式への参加の為に呉からやって来た一戦隊の陸奥艦^{むつ}の長官公室において、観艦式の祝賀の宴が催される事になった。発案者はもちろん長門^{ながと}と陸奥で、普段のお勤めに励む部下達への労いと交流の場を設ける為である。

北は千島から南はトラックまでと、あちこちにてそれぞれのお仕事に励んでいる帝国海軍の艦魂達であるが、普段から艦隊で分けられたり個別に整備入渠をしていたりと、一堂に会する機会というのは実は少ない。既に誕生から20年以上経ている長門ですらも、まだ一度しか会った事がない仲間というのはそこそこにいるのだ。なまじ連合艦隊の旗艦として妹の陸奥と共に励んできた長門は、大演習の時以外は日本近海から離れた事が無い。支那沿岸や南洋方面にて常に頑張っている者達とは中々会えない日々を送ってきたのである。

故に長門や陸奥にとっての今回の宴は、普段から自分達から見えない所で頑張っている者達への慰労の意味も含んでいるのだった。

長門艦の長官室は一応は連合艦隊司令部であり、常駐の人間達もいる為に宴の会場は陸奥艦の長官室とされたのだが、横須賀在泊の全ての艦魂達を詰め込むにはいくら陸奥艦の長官室といえど狭すぎる。だから招待者は戦隊長級の者とされ、駆逐艦や潜水艦、中型の特務艦等の艦魂には祝賀のお菓子を間宮に頼んで作ってもらい、それを下賜する事でせめてもの労いとする様になった。

意外にもこういう所には細かい気配りが利く長門は、間宮がせっせと作ってくれた紅白の饅頭が収まった箱に一枚一枚普段の勤労を

労うメモを忍ばせ、水兵の階級にあたる艦魂達の疲れた心を癒してやる。いつも朝の起床する所から長門には手を焼いている妹の陸奥も、姉のこういう細かな気配りだけは深く尊敬する。もっともこれをお仕事にはびた一文発揮してくれない姉の性格に、陸奥は苦笑いしながら溜め息を吐くのだった。

やがて冬も迫る横須賀の波間は一瞬の夕焼けに染まったかと思うと、すぐに冷たい空気漆黒の闇に包まれる。折から頭上を占領するどす黒い雨雲も相まって、まだ夕飯時だというのに横須賀の波間は深夜を思わせる程に真っ暗だった。

しかしそんな波間に浮かぶ陸奥艦からは、人間達が耳にする事の出来ない極めて明るい笑い声が絶えず響いている。その中には姉の様に慕っている長門あかしより、戦隊長の職を抱いていないにも関わらず招待して貰えた明石あかしの声もあった。

一応は階級により職域や身分を表す艦魂社会における社交の場。例えその場に仲が良い長門がいるとしても、いつもの様に気軽に声を交えるのは少しばかり遠慮する明石。彼女は部屋の壁際に那珂や神通と並んで、手に持ったお皿から美味しい料理を口に放り込む。いつもなら素手で掴んでポいと投げ込む明石も、社交の場においてはそんなみつももない真似は出来ない。真っ白な手袋までの正装姿は、神通や那珂に言われずとも明石の気持ちを律した。もっとも美味しい料理を胃袋に流し込む事が最大の喜びである彼女の事、その心根は別に不機嫌な訳ではない。

しかもこのお料理は、全国津々浦々から集まってきた運送艦の艦魂達が銀バイしてきた本物の食材を、つい先日明石も会った富士ふじと同じく横須賀にて練習特務艦として余生を過ごす春日艦の艦魂である春日かすがと、帝国海軍艦魂社会一の料理人である間宮が調理した立派

で豪華な洋食。給糧艦である間宮は先日明石が訪ねた際のお菓子だけではなく和食も洋食も作れるだけのお勉強を積んでいる艦魂で、最近では支那料理もお勉強中と普段の努力には余念が無い。そしてそんな間宮に洋食の手解きをしてあげたのが、この春日であった。

春日は春日型装甲巡洋艦の一番艦で、誕生したのは明治36年。春日自身は既に小じわの混じる顔をしているのだが、明石の師匠である朝日あさひより若干歳は下になる。帝国海軍にあっては非常に珍しいイタリア生まれの艦艇であり、元々はアルゼンチン海軍の艦艇として建造が始まるも、その最中に日露戦役を控えていた日本海軍に転売されて渡ってきたという変わった経歴を持っている。日露戦役当時は濃霧の中で先輩である吉野艦を衝突事故で沈没させてしまうなど、華々しい活躍一辺倒とは行かなかったが、その後は世界各国の海域に派遣されてよくその任務に励んだ。

色々と苦勞の多い艦歴であるがその命たる春日は陽気な人柄で、横須賀に練習特務艦として繋留されてからは趣味でもある料理を朝から晩まで楽しむ日々を過ごしている。そんな中で帝国海軍で食されるマカロニの料理に始まる洋食を彼女は間宮に教え、特にイタリア出身の彼女は主計科が用いる参考書や献立には記されていないパスタ料理を惜しげもなく間宮に教えてやった。

そしてそんな二人の力作であるにその場にある料理は、明石がこれまで見た事も無いような洋食の群れ。長机に敷かれた真っ白なテーブルクロス的大海原に、色鮮やかに料理が盛られた大皿と小皿がそれぞれに単縦陣で並び、ほのかに上がる香りはまさに石炭いわきの煙。満艦飾を施しての艦隊航行とはこういう物かと思える程の、料理の大艦隊であった。

笑顔で頬を大きく上下させながら、明石は隣で静かに酒の入ったグラスを唇に添える那珂と神通に声を発する。

『すてゝき、んまいゝ。』

『そう、明石は初めて食べたのね。ステーキ。』

『んまいゝゝ。』

式場入り口近くの壁に沿って並べられた長机の上。たくさん豪華な料理が並べられたそこから持ってきた明石の手にあるお皿には、山の様に盛られたこんがり焼けた牛肉。人間達が希に艦隊外からの客人をもてなす際と同じ「饗応」と呼ばれる立食形式の宴に合わせ、そこに用意されていたのはサイコロステーキであるが、生来食いしん坊の明石はお皿にてんこ盛りにして食べていた。塩胡椒の効いたステーキの味はいつもの質素な海軍のお食事とは別格で、それでなくとも普段から膳に整えられた食事を食べる事など滅多に無い明石にとって、その日のサイコロステーキの味は忘れられない味だ。香ばしく肉汁たっぷりの牛肉は、噛み心地も舌触りも最高。もはやそれは「幸福」という言葉すらをも明石の脳裏に浮かばせ、明石はあまりの美味しさで無意識に涙まで流す始末だった。

式場の中の一部の者達はそんな明石の姿を見て失笑している者もいる。だが美味しい一時をこよなく愛する明石には、自分に対する他人の視線など微塵も気にならない。そこに美味しい食い物がある。それだけが明石の生き甲斐と言え、生き甲斐なのであった。

『ん・・・、ん・・・。んめえゝゝ。』

そうこう言って忙しくフォークを行き来させる明石に、那珂と

神通は思わず笑みを溢す。だがそれは、普段から親しく付き合っている明石の幸せそうな表情に触発されての物ではない。

それはこの宴が始まった際の事。

明石は談笑が始まるやすぐさま料理が並べられている机へと突貫したのだが、お皿に料理を盛って帰る際に室内にいる全ての者達から一斉に笑われてしまう。静かに酒をグラスに注いでいた神通と那珂は突如として起こった笑いの渦に顔を見合わせて首を捻っていたが、やがて泣きながら二人の下へと走り寄ってきた明石にその答えを察する。まだまだ生まれたばかりで尻の青い新米艦魂の明石は、その場に沢山並べられている食器を適当に手にとって料理にありつこうとしたらしい。背を追いかけてくる視線と笑い声から逃れるようにして泣きついてきた明石の手には、なんと魚フォークを添えて肉料理をてんこ盛りにしたスープ皿が握られていた。これには思わず神通も笑ってしまい、仲の良い明石に対してついつい意地悪な物言いをしてしまう。

『ふははは。なんという田舎娘だ、テーブルマナーも知らんのか。はーっはははは。』

ただでさえ先輩方の笑い声にも耐え切れない明石なのに、神通はこれでもかと馬鹿にして大笑いしてしまう。決して神通が明石を本気で馬鹿にしている訳ではない事はその隣で苦笑を浮かべている那珂も良く解っていたが、意地悪全開の姉の物言いは明石の心の乾舷

に見事な水柱を上げる。もちろんその刹那、明石の心は轟沈した。

『うえええん・・・！』

待ちに待った料理を食べれず、先輩達に笑われ、泣きついた親友に田舎娘と蔑まれてしまった明石は、那珂の胸に頬を埋めてビービーと泣き出す。恥ずかしさ半分、悔しさ半分で涙する明石だが残念ながら神通の言葉通り、彼女はテーブルマナーのテの字も知らなかったのだ。

社交界にて用いられる礼儀作法の一つとして知られるテーブルマナーと海軍軍人は一見接点が無い様に思えるが、海軍に限らずそもそも船乗りというのは広大な波間の果てで異国の文化と交流する事は日常茶飯事である。

その際に自分の国の文化のみで相手と渡り合おうとするのは時には傲慢と受け取られる事もあるし、当地における円滑な意思疎通を阻害する事も度々ある。まして沢山の言語や文化が点在するこの世界において、相手がいつも必ず自分達への理解を示して受け入れてくれる事など有り得ない。時には相手に合わせ、例えばちよつと首を捻るような物であったとしてもそれを口や態度に出さずに履行する柔軟性がないと、お船に乗る者達はやっていけない。それは人類が培ってきた叡智の一つであり、お船と海に生きる者の常識である。

帝国海軍が練習艦隊で若者達を世界中へ旅立たせるのも、今では少しばかり関係が悪くなってしまった米国や英国の公用語である英語を教えるのも、西洋の社交場にて必ず用いられるテーブルマナーを時折艦内にて士官達に練習させているのも、全て海に生活する者として身に付けなければならない大事な事であるのだ。特に海軍というのは国旗を背負った者達によって運営される組織であるのだから、行く先々での評価はそのまま国家への評価と繋がりがやすい。海軍が士官の者達に対して一流の紳士としての教育に重きを置くのは

その為であり、何も帝国海軍に限ったお話ではない。

そしてそれは艦魂達においても同様で、その場にいる明石以外の艦魂達は一応はテーブルマナーを身に付けている者達ばかり。神通や那珂とて例外ではない。まだまだ駆け出しの艦魂である自身の身の程を、明石はこの時まざまざと思い知らされる。慰めようと咄嗟に声を掛けてくれた長門の言葉も、その事を明石によく理解させた。

『泣かない、泣かない。これから覚えれば良いのよ。割と簡単だし、すぐに一流の士官らしくなれるって、明石。』

未だに笑い声が静まらない中での長門の声と方に乗せてくれた手に、明石は泣きながら頷いて応える。長門が放った「一流」という言葉は、明石の脳裏で常に目標として掲げられる師匠の言葉を思い出させる。

「艦魂たる者は、一流の淑女^{レディ}でなければならない。」

その一流っぷりは例え食事であっても適用されるのだ。それを何一つ知らない自分はまだまだ未熟者なのだと、明石は鼻水と涙で湿った顔で肝に銘じる。

人間には決して知られる事の無い、艦魂独自の厳しい世界だった。

やがてようやく涙を飲み込んだ明石は周りに沢山いる先輩方の助けも貰い、なんとか多様なお皿やスプーン、フォークの名前と用途を知識として取り込む事に成功する。もちろん心優しい長門と那珂は彼女の肩を抱いて、一つ一つの食器を手に取りらせて懇切丁寧に教えてくれた。たかがカップですらもコーヒー用と紅茶用で別れているという食器の種類は覚えるのに一苦勞であったが、明石は必死にその場で教えられるテーブルマナーの知識を拾い上げていく。早く美味しそうな料理を食べたいのはもちろんだが、まだまだ先輩達の

足元にも及ばない自分の身の程をなんとかしても周りの者に追いつかせたかった。

自分の至らぬ点をどうすれば克服できるかを察する明石は生来の頑張り屋な性格も手伝って、未だに自分への嘲笑の余韻が残る室内で懸命に長門と那珂の声に耳を傾ける。僅かに顎を引いて唇を噛み締めるその表情は、師匠である朝日とのお勉強の際にも発揮した明石の励む姿。

テーブルナプキンの使い方に始まり、フォークとナイフの使い方と選び方、手前からすくって音を立てずに溜飲するというスプーの食し方と、明石は持ち前の根性で那珂や長門の手ほどきを受けていく。一応はお偉方のトップである長門はその途中で先輩方に御呼ばれされてしまったが、心優しい那珂と笑いが治まった神通という友人によって明石の教育は続けられる。神通とて明石を馬鹿にするつもりなど微塵も無い。何の触媒も介さずに胸の中に浮かぶ言葉を発する先程の神通の姿も、彼女が明石を心の底から友人と慕っているからに他ならず、10年以上の付き合いである金剛にも見せる事が無い姿なのだ。

『馬鹿者。ムニエルは皮と骨を取ってから食うもんだ。』

『ええ、鮭は皮だって美味しいのに……』

『グダグダ言うな。それすらも世界で通用するとは限らんという事だ。』

『うんもお……』

いつの間にかそこに展開されているのは「私立神通学校」の課外授業。それも竹刀と怒号が響く普段の授業とは違い、今日は礼儀作法のお勉強と来た物だ。率先して明石に厳しい教え方で知識を与える神通の横顔に、那珂は可笑しさ覚えて笑ってしまう。駆逐艦の艦魂達からとはかく一番に恐れられている「私立神通学校」も、今やテーブルマナーを教える女学院になっているのだから無理もない。

『魚は食べ終わったら、左から頭、背骨、尻尾と並べるんだ。位置は皿の上半分。』

『なによお、食べ終わり方なんてあるのお？』

『それを怠るという事は食い散らかしてるのと同義なんだぞ、馬鹿者が。』

そんなこんなで厳しい教育もあって明石はなんとかテーブルマナーを習得し、今はこうして那珂と神通を隣に置いてサイコロステーキをがつついている。しっかり肉用の皿とフォークで食を進める明石には泣き顔も既にどこ吹く風で、遠慮なくたらふく肉を食べる。そもそもが大食いである明石の食指は休む気配が微塵もなく、那珂の心配と神通の嫌味を受けてもそれは止まらなかった。

『あんまりお肉を食べ過ぎると太るわよ、明石。』

『ほっとけ、ほっとけ。デブになったら二水戦でしこたまシゴいてやる。』

『太らないも〜ん。んまい〜ん。』

短い口癖を放って溜め息を放つ神通と共に、那珂は慈愛芯溢れる笑みで明石を見守る。もちろん彼女が放った先程の言葉も、そこに込められている明石の体型に関する心配は対して濃い物ではない。

既に神通や那珂とは知り合って一年ほどになる明石は、いつも3人前はあるかという料理をペロリとたいらげる。しかし彼女はそのスラリと痩せ型の体型を、これまでほんの少しも崩した事が無い

のだ。人間の世界にも往々にしている、「痩せの大食い」という奴である。その上でその場に神通や那珂以外にも友人の顔がある事が、明石の心を高揚させて食欲をさらに増させる。

『戦隊長、何かお飲み物はいかがですか？』

壁に寄りかかってグラスを空にした神通に横から、あられ霰が小さなお辞儀をしながら声を掛けてくる。その背後ではかすみ霞やゆきかぜ雪風、あさしお朝潮といった神通率いる二水戦の艦魂達が、料理の載った台車やトレイを持って忙しく室内を動き回っている。もちろん彼女達は今回の宴にて給仕のお仕事を任されているのであり、それは彼女達全員の分身にて乗組んでいる士官が食事をする際に水兵さんが給仕をするのと全く一緒である。

軍装がまるで違うお偉方の邪魔にならぬように次々と料理やお酒を長机に運ぶというのは大変だが、この様な場で給仕に就く事は彼女達にとってもそこそこの役得がある。それはもちろん、普段から用いている銀バイという手段をもってしても食べれない豪華な料理を、休憩用に用意された別の部屋でだが彼女達も存分に味わう事が出来るのだ。明石と同じく彼女達だってステーキに始まる豪華な洋食を食べた事など、これまで一度たりとて無い。焼立てのお肉など高嶺の花も同然なのだ。

さらに、そもそもが優秀な水兵さんであるからこそこうして給仕と任命されて働いている彼女達は、その場を共にする直属の上官である神通を始めとするお偉いさん達に顔を覚えてもらう絶好の機会にもなる。

これまた人間達と同じ様に、清潔感を出す為に季節に関係なく給仕の際は真っ白な夏服、第二種軍装を身に付けてのお仕事であるが、寒さも空腹も忘れて霰達は忙しく働いていた。

そんな中、早速その場にいるお偉いさんの一人に目を付けられた者が出現した。それは賑やかな声が木霊する中で響いた、ドスの効いた関西弁によって神通や明石に示される。

『吉法師きっぽうじ。こんガキはワレん所の若いのやろ？』

特徴的な呼び名で神通に向かって声を上げたのは、彼女の師匠である金剛こんごう。

黒髪が目立つ中で今日も美しい滝の流れの様な輝きを放つ金髪を揺らし、彼女は部屋の真ん中の辺りでちょっと身を屈めながら神通に向かって顔を向けていた。鋭い菱形の瞳は金剛独自のおっかない雰囲気の色褪せさせる事は無いが、その表情には不機嫌な心の音色を微塵も潜ませていない事を示す笑みが浮かべられている。そして僅かに腰を折って身を屈めた金剛の小脇には、真っ白な水兵の服に身に付けた少女が一人抱えられていた。それはついこの間、明石が挨拶しに行った際に食らってしまった”金剛式”の歓迎の姿で、少女はこれまた明石と同じく完全に身体を宙に抱え上げられて足をバタバタと振っていた。

『これは、親方。』

そう言っって神通は寄りかかっていた壁から背を離し、那珂や明石を残して金剛の下へと歩み寄っていく。明石と那珂はその場で遠目に金剛と神通のやりとりを目に映していたが、金剛の小脇に抱えられた水兵の顔に見覚えがあった事でその状況を察する。

『はっはっは。はあ、この目や、この目。こんガキ、ワシン所で修行し始めた頃のワレにソックリやないか。』

『せ、戦隊長……！』

『犬……。』

金剛に抱えられたのは神通率いる二水戦の大問題児、雪風であった。どうやらお酒をお偉方に届けている際、その大きな釣り目の特徴とする顔を認めた金剛によって捕獲されてしまったらしい。

そして金剛の言葉通り、雪風の顔は今から10年以上前の神通の顔と大変に似ているのであった。当の雪風と明石は初めて耳にした事であったが、それを確認する前に金剛はふとに振り上げた平手を、抱きかかえた事で目の前に位置している雪風のお尻に連続して叩き込み始める。するとベツチンベツチンと乾いた音が室内に響き始め、金剛はその音を大変に気に入って嬉しそうな声を上げた。

『おお。若いくせに中々ええ尻しとるやないか。よお身体、鍛えてる証拠や。吉法師の普段の教えの賜物やな。』

『は、有難う御座います。』

大きな身体を持つ金剛は力も強いらしく、雪風を左腕一本で抱えて右手で尻を叩きながらも顔色を微塵も変えずに声を上げた。尻を叩かれる事で放たれる景気の良い音で室内の者達が視線を釘付けにする中、金剛は楽しそうに笑いながら教え子である神通の普段の勤労を讃える。

帝国海軍の艦魂の中でもっともおっかない性格を持っている金剛だが、神通にしてみればこの世で唯一人だけ教えを請いだ人物。加えて明治生まれながらも未だに戦艦籍を頂くこの金剛は、戦艦の艦魂としては大変に優秀な者であるのは周知の事で、そんな偉大な師匠に皆が見ている前で褒められた事は神通にとっては大変に名誉な事であった。冷静な顔色を変える事は無いが、その胸の内では神通の鼻は自身の分身のマスクの様に高く伸びている。唇から漏らした師匠への返事も、那珂や明石には神通なりの嬉しそうな心の色を滲ませているのがすぐに解った。

もともと雪風にしたら修羅場以外の何物でもない。肩幅も身長も上司の神通を遥かに凌ぐ金剛はその力も神通以上で、お尻に走る鈍痛は生半可な物ではなかった。

『ぎゃっ・・・！　いてっ、いたいっ・・・！！』

『はっはっは！　ホンマにええ尻しとるで。こらええ兵隊になるさかい大事にしいや、吉法師。』

『はっ。』

『あああゝっ・・・！』

全くもって雪風という少女の気持ちなど無視して会話する神通と金剛。二人のその傍迷惑な所も師弟として共有しているらしい。

ただ決して金剛が虐めようとしている訳ではない事は皆知っている為、部屋の中にいる者達はその光景を面白がって眺めていた。何より今から10年前、こうして金剛に散々に尻を叩かれて可愛がられたのは、今はこうして一人前の指揮官となっている神通も同じであり、長門を始めとしたお偉方の殆どはその時の光景を実際に見てきたのである。

やがて散々にお尻を叩かれた雪風の身体から金剛は腕を引き抜くが、すっかりお尻の感覚が無くなる程に鈍痛を覚えていた雪風は受身も取れずにその場にうつ伏せで倒れてしまう。否、倒れたというより、金剛の脇の辺りから落とされたという表現が正しい。

『ぐっへええ・・・！』

『はっはっは。男は顔や、女は尻や。ワレ、犬やら言うたな。吉法師はワシが教えたモンの中でも一等優秀な奴や。親や思うて、しっかり言う事きかなアカンでえ。』

腰に手を当てて高笑いをする金剛の足元、雪風は腫れあがったお尻を擦って呻き声のような返事を返す。その場を共にする霞や霰などはその光景に鬼や蛇とあだ名される金剛という艦魂の恐ろしさを垣間見て震え上がっているが、つい先日同じ様に歓迎された明石は今にも泣き出しそうな雪風の顔を目にしても微笑を絶やす事は無かった。それは明石の隣で静かに口元にグラスを傾けている那珂も承知しているらしく、二人を笑みを交えて静かに笑い声を上げる。まるで他人を見下しているかの如く、それはそれは厳しい教育を後輩に課す事で恐れられる金剛であるが、彼女は大変にこの雪風という若者を気に入ったのだった。

『あゝあ、雪風は今度から金剛さんに可愛がられる日々ね。』

『金剛さん、力が強いからなあ。あはは。』

相も変わらずステーキを口に運ぶ明石と静かにお酒を楽しむ那珂はそう言って、眼前にて騒ぐ3人の釣り目の女子を笑う。不思議な物で、明石の瞳には3人が何か血の繋がった一系の一族の様に映る。子供を生む事は無い艦魂事情なのであるが、なんだか明石には金剛がお祖母さんで神通がお母さん、雪風は生まれたばかりの末娘の様に見える。なまじ鋭い釣り目という顔の一部の特徴も、そのまま3人それぞれの顔に反映されているのだから無理も無い。口にこそ出せないが、その鉄砲玉のような性格も良く似ている様に明石には思えた。

しかしそんな金剛一族に対する考察を巡らせた刹那、ふと明石は自分にはそんな事を感じる事の出来る人が一人もいない事に気付く。姉妹艦が自身にはいない事はもうずっと前から解っていたし、言っ

てもどうしようもない事だとこれまで生きてきた中で十分に悟っている。だが信頼や友情をさらに超えた親類的な繋がりを眼前の3人の姿で意識すると、そんな繋がりが自分には無い事が明石にはちょっとしただけ辛かった。隣で立って笑っている那珂も、金剛と笑みを交えている神通も、その足元で目を回して倒れている雪風も、長机の周りで空になったお皿を台車に運んでいる霞や霰も、明石にとっては大らかな友人で彼女達の心を疑うつもりも微塵もないが、悪く言うとは仲良し止まり。自身に命の輪を繋いでくれたお母さんと呼べるような間柄ではなかった。

『いいなあ・・・』

『ん？ 明石、どうしたの？』

『あ、ごめん。なんでもないよ、那珂。』

ついつい漏らしてしまった、金剛達の姿に対する素直な感想。

明るく賑やかな先輩達の声が響く宴の最中にいらぬ心配を那珂にかけても悪いと思い、明石は彼女に小さな笑みを向けてそれ以上の言葉を覆う。それに母のような存在が欲しいというのは、別段明石が工作艦の艦魂として過ごす中で必要な物と言う訳ではない。先に同じ身として生き、叡智を蓄えてきた存在というのであれば、明石にはこれ以上無いくらいに大きな存在がある。今は上海にて励んでいる師匠の朝日だ。

でも明石はそれが自身の一方的な願望である事を知りながら、敢えて朝日が師匠ではなく自身の母だったらと考える。尽きる事が無い知識に心構え、全身が染まる程に浴びせてくれる愛情。それらをいつも明石に向けてくれた朝日が、この時、明石には無性に恋しくなった。

朝日さん、いつ帰ってくるのかな・・・？

そんな言葉も脳裏に過ぎり始めた明石は、朝日を含む帝国海軍における全ての艦艇の動向を知っている親しいお人がこの場にいたいことを思い出して視線を流す。だが明石の瞳はすぐに動きを止めた。なぜならお目当ての人物はそれまでいたお偉方の集団から腰を低くして忍び足で抜け出し、なんと明石の方へと歩み寄ってきたからだ。後ろを何度も振り返るその人物は明石を視線が合うや、歩みをそのままに何故か口元に右手を添えて小さな声で声を発してくる。

『明石、明石……。』

『長門さん……？』

どうにもよく解らない長門の行動に明石は首を捻って声を返すが、ふと上げた明石の声に長門は慌てふためき、相変わらず後ろを警戒しながら右手の人差指を口の前に立てる。

『し……！ 隣の部屋行こ、早く早く……。』

『な、長門さ……。』

『し……！ バレちゃう……。！』

明石のすぐ近くまで来た長門はすぐさま明石の袖を掴み、グイグイと引っ張って長官室の出口へと向かう。何やらさっきまでいたお偉方に見つかりたくない理由があるらしい事を明石は察し、長門と供に那珂に一言放って挨拶とすると長門に従い部屋を後にした。

第六八話 「繋がり／前編」 (後書き)

第六九話 「繋がり／後編」

スチームの暖房も入って暖かかった長官公室を抜けた通路は10月の寒さを帯びた空気で支配されており、前を歩く長門ながとの様子にお酒で身体が温まっていけない明石あかしは少し肩を上げて寒さを堪える。通路ではシャンペンやウイスキーといったお酒の瓶が列を作って封を明けられる順番を待っており、賑やかな宴がまだまだ続くであろう事を明石に教えてくれた。

そして長門がちよつと部屋を抜け出した理由もまさにそこで、彼女は別にこのまま宴会から完全離脱しようとしている訳ではなかった。長官公室の扉を閉めて10メートル程も歩いた所にある扉は、その上の隔壁に参謀長公室のプレートが輝いている。長官公室に比べてこじんまりとしている参謀長公室だが、内装は長官公室と同じく皮製品の家具が置かれて絨毯も敷かれた豪華な部屋だ。暖房もしっかり完備されているそのお部屋も、本日は艦魂達の宴に伴い、給仕の役目を負う二水戦所属の駆逐艦の艦魂達の休憩室として使用されている。

『ふいふい、寒い寒い。早く入ろ、明石。』

長門は顔の前に運んだ自らの手に息を吹きかけながら言った。肩幅も広く、女性にしては身長が高い明石よりもさらに大きな体格を持つ長門だが、今は寒さに背を丸めてその身体の大きさを余り明石は感じることが出来ない。当の明石もまた寒さに背を僅かに丸めているのだから無理も無いが、そも何故暖かかった宴会場を長門は抜け出してこの部屋に来たのかが明石には疑問だった。故に明石はドアノブに手を掛けた長門に、背後から顔を近づける様に迫って声を放つ。

『長門さん。どうして会場を抜け出してこっちのお部屋に来たんですか？』

脳裏に浮かんだ素朴な疑問を問う明石に、長門は部屋の扉を開けながら返答。その内容は長門の持つ特徴的な性格が微塵も変わっていない事を明石に教える。

『やゝ、一八戦隊の常盤ときわさんとか付属の摂津せつづさんとかいるじゃん？
飲むと説教くさくなるから一緒に話すのメンドイのよお。愛宕あたごも
高雄たかおも陸奥むつもカタイしさあ。つまんないの。』

ちよつと崩した笑みを浮かべてそう言い放つ長門の表情は、口に出した仲間や先輩を決して彼女が嫌っている訳ではない事を示している。ただその理由が、先輩に氣を使って話すのがメンドイとか、仲間や妹の話し方がカタイ等というなんとも呆れ果てた代物である事に、明石は寒さも忘れて笑ってしまう。どうやら長門は先輩方や仲間達とのツマラナイ会話を避ける為、別の部屋にて幾分の時間を潰そうとしているらしい。

明石とは違って流線の触れ幅が大きい女性らしい身体のラインを持ち、20代後半の大人びた顔立ちである長門だが、その考え方や物言いとその根本にある彼女の性格はなんとも愛嬌がある。一応はこれでも長門は帝国海軍連合艦隊の全ての艦艇を率いる身であるのに、その人柄は自由奔放な少女が心をそのままに身体だけ大人になった感じだ。

またそんな彼女の奔放ぶりは、お互いに大笑いしながら入った室内においても続けられる。

長門が部屋の扉を開けて足を踏み入れると、そこには宴会場で下働きしている仲間達と交代で休んでいる少女達がいた。その中には明石とはそこそこの仲の良い朝潮あさしほの姿もあり、彼女達は自身の分身の中では絶対に見ることの出来ない豪勢な家具に目を輝かせながら、

宴会場でも出されている料理と同じ物を見繕って盛ったお皿を囲んでいた。

ちゃんとクッションが敷かれた椅子やソファに腰掛け、皿の上に横たわる料理の初めての味に舌鼓を打ち、小さな気泡がふつふつと踊るコクテールグラスの茶色い波間にほろ酔いの彼女達。長門が扉を開けた際は仲間が休憩に来たと思ったのか振り向きもしなかったが、やがて扉に向かい合う位置にあるソファに腰掛けていた少女がそれに気付いて仰天の音色も混じった声を上げる。

『あっ！　な、長門中将・・・！！』

艦魂社会では水兵さんの階級を頂く彼女達にすれば、長門の襟章にも示されているように自分達とはその立場が天と地ほども離れている。咄嗟に声を放った少女がソファから腰を上げて直立不動の姿勢を取り、それに気付いて扉の方を振り返った者達が一斉に同様の行動を取るのも当然の事だった。まるで木霊でもしているかのように『あ！』、『あ！』と続けざまに声を発しながら、室内で休んでいた朝潮を始めとする少女達は伸ばした右手を額に添えようとする。だが長門は持ち前の気さくな物言いで声を張り上げ、朝潮達のとうとうとする行動を制した。

『だあゝゝ、敬礼はいいいよお！　返すのメンドイからさ。それに勝手にアタシが押しかけて来たんだし、みんな座ったままで良いよ。ほおら、楽にして休みの続き、とってちょーだい。』

両手の手のひらを下に向けた状態で大きく何度も上下させた長門は、すぐそばにいた少女の肩に手を乗せて再び椅子に座らせようとする。例え敬礼ですらあっても、お気楽な彼女にはメンドイ物以外の何物でもないのだ。朝潮達は少し申し訳なさそうにしながら半端に上げていた右手をゆっくりと下ろすが、それを認めた長門はニッ

コリと微笑んで、部屋の奥にて誰にも腰掛けられていない大きなソファへと歩み始める。その背後を未だに状況がよく把握できていない朝潮達の視線が追い駆けて行くが、答礼の勤めをせずに済んだ事の上機嫌な長門はステップを踏むように歩き、やがてソファの上に覆い被さるようにして横になった。

『どはあゝゝ。疲れたゝゝゝ。』

ソファにうつ伏せとなり、長門は腕枕の上に顎を乗せる。そもそもがマイペースを貫く彼女は、普段の姿勢においても気をつけ等しようにとはしない。常にどちらかの脚に体重をかけて立っているし、椅子に座るときも肘掛けに上半身を預けるようにして腰から上をダランと流している。その姿は明石も長門と付き合ってきた中で何度も見てきており、いきなり登場してくつろぎ始めたお偉いさんに目を丸くしている朝潮達を隣に明石は口元に手を当てて笑いだす。

もちろんそれは常に自然体である彼女の行動を可笑しく思うと同時に、年代も階級も自分とはまるで違うのにも関わらず、親しく付き合ってきた長門が何一つとして自身の記憶の中にあつた姿を変えていない事に喜びを覚えたからだだった。そしてその最中に呼び慣れた感を滲ませる声で自身を呼んでくれた事も、明石にはとっても嬉しかった。

『明石い。お願い、肩揉んでよく。も、アタシ疲れた。』

気の抜けた声を上げた長門は脚を軽く振って靴を脱ぎ、腰まであるその長くて綺麗な黒髪を掻き分けながら握った拳でしきりに肩を叩いている。疲労を訴える彼女の言葉もあり、明石は長門の身体に余程に疲れが溜まっているのだろうと考えてすぐさま長門の元へと足を運び、ソファの横に膝をつくと彼女の肩へと手を伸ばした。

『じゃあ、力抜いてくださいね、長門さん。』
『あいよん。つかれたあ……。』

大きな身体に似合わず、末端の部下に当たる朝潮達が未だに視線を向けている中でも、長門は遠慮や体面という言葉を微塵も感じさせる事無く『疲れた。』を連呼する。呉にて師匠と一緒に過ごしていた際でも長門は疲労を訴える事は皆無であったが、ゆっくりと彼女の肩へと伸ばした指先の感触は、明石に彼女の態度や放っている言葉が嘘ではない事を示していた。独特の良い匂いを放つ長い髪を掻き分けて触れた長門の肩は、いつものしなやかな彼女の姿からは想像もできない程に硬い物だったのである。

『およ？ 長門さん、ホントに疲れてるんですね？』

これまでの長門の言葉を疑うような言葉であったが、ついつい率直な感想を明石は口に出してしまう。それは明石に対する神通じんつうの物言いと同一物で、常に飾らない人柄で自分に優しくしてくれる長門だからこそ、明石は敢えて言葉を発するのに心の中で障害物を設ける事はなかったのである。

もっともそれは長門にとっても同じで、彼女にしたら明石はちょっと歳の離れた妹のような存在。その時間は違えど、二人揃って同じ師匠に教えを請いだ仲である事もまた、長門の心を明石へ一歩も二歩も近づける。何より元来が明石は天真爛漫で同じ様にマイペースな性格であるのだから、長門にとって明石と一緒にいる時間はとても居心地が良い物なのであった。

『ほんつとに疲れたあ。まあ先輩方のお話もメンドイんだけど、こんとこそれが毎日なのよ。メンドイなあ……。』

眉を大きくしかませて口を尖がらせる長門だが、彼女の本心を察

する前に明石はその表情の移り変わりがとても素早くてハッキリとしている事にまたまた笑ってしまふ。もう既に30代の面影だつて漂い始めている顔つきなのに、長門の表情の動きはまるでわがまな子供その物。明石の伸ばした手の先にある幅の広い肩も含めて、容姿としては長門には子供っぽさを感じる事なぞできないというのに、そんな外観なぞクソ食らえと言わんばかりに長門の声と表情には幼さが溢れている。

もつともクスクスと笑う明石に対して長門は意識を傾けず、何やら残念そうな顔で腕枕の上に顎を乗せたままだった。実は長門はここ暫くの間で随分とその身体に疲労が溜まっており、軍医の上に親しい仲でもあるという明石が傍にいる事でそれまで律してきた自分を敢えて解放しているのだ。段々と不満げに頬を膨らませつつ、長門はそんな疲労が溜まる日常を明石に聞いて貰おうとする。

『笑い事じゃないよ、もお。』

『あはは。一体どうしたんですか？』

『夏頃からさあ、新しく生まれた子の教育をアタシがやってるんだけど、もうその子がさあ……。』

そこまで言った長門は記憶の中にある今しがた話題に上げた者の顔を思い出し、彼女に纏わる記憶を蘇らせて首を垂れた。

それは8月に新たに帝国海軍の船として生を受けた若い艦魂の事で、その名を大和^{やまと}という。長門が生まれて以来、約20年ぶりに誕生した栄えある帝国海軍の戦艦の艦魂だ。まだまだその分身には主砲も艦橋を含めた上部構造物も設置されていないが、その艦体の大きさは既にこの長門の分身をありとあらゆる項目で上回っており、将来が非常に有望なお船であつた。その命たる大和という艦魂はまだまだ幼い16歳くらいの少女の姿をしてはいるものの、大変に大人しくて落ち着きのあるという文字通りの大和撫子で、長門と供に彼女の出生を助けた陸奥はその人柄を大変に褒めている。現に生ま

れてから数ヶ月が経ち、やっと分身である艦体へのアーマー取り付け作業の目処がついた頃になると、この大和は非常に難解な艦砲の射撃理論を完璧に身に付けてしまい、長門と同じく一戦隊を組んでいる山城や伊勢いせを驚かせてみせる程だった。その上で非常に礼儀正しく、言葉遣いも常に崩す事が無い大和は、陸奥を始めとする長門の同僚達にはすこぶる好評をえていた。

もっともその教育を受けた側の長門は、お利口で落ち着きがよく備わった後輩になんだか上手く馴染めない日々を送っていた。決して大和の事が嫌いな訳ではないし、可愛い後輩という彼女への認識を改めている訳でもないのだが、妙に理屈詰めの物言いをする後輩に生来が自由奔放な性格である長門はいつも言い負かされてしまうのだ。

ただその一方で当の大和は長門の事を事の他崇めており、陸奥や仲間達に頭を撫でられていても長門が姿を見せるとすぐに長門の下へと歩み寄ってきて後ろをチョコチョコとついてくる。横長で長いまつ毛に包まれたその瞳を細め、優しく綺麗な笑みを向けてくれる後輩はどこからどうみても自身に一番懐いているし、長門してもそれは嬉しい。でもどうにも自分から目を背けずじっと瞳を見つめ何か上からゆっくり抱きついてくるかのような感じを供えたしゃべり方は、長門にあってはちょっと苦手な感覚を覚えてしまうのだ。

そしてそんな感覚を与える物言いをするお人を、長門は実は大和以外にももう一人だけ知っている。以前からそうではないかと思っていたが、大和と離れて横須賀にこうして来てくつろぐ事によって長門はその自分の大和に対する考察が良局的を得ていた事を確信した。

暫く長門が黙って難しい顔をしている事に手を休めないながらも首を捻っていた明石だが、やがて僅かに垂れた首を持ち上げた長門が声を発する。

『ありゃあ、朝日あさひさんに似たんだ……。間違いない……。』

何やら泣きそうな声色で放たれる長門の声だが、明石は彼女の言葉に敬愛する師匠の名が出た事で少し驚く。つい先程、宴会場で目にした一族を思わせる友人達の姿も記憶に新しい明石は、長門が口にした新しく生まれたという艦魂が敬愛する師匠に似ていると聞いて僅かに胸の中をざわつかせる。

明石にとっての朝日は軍医としての師匠であると同時に、艦魂という存在としても偉大な先駆者であり教えを授けてくれる者。かつてはこの長門もまた戦艦の艦魂として、帝国海軍の者として朝日に教えを請いだ事は知ってはいるが、明石は朝日の教えを受け継いでいる事に関してはこの長門に対しても自身は負けていないと思っている。なまじ長門は大変にアバウトなその性格もある為、昔話として耳にした朝日先生と長門生徒の教育の日々は明石にとってはちょっと現実味に欠けるのが正直な所だった。故に尊敬する朝日から受け継いだ物は、この世で最も自分が顕著に持っていると思ってきた。ところがそんな中で、敬愛する師匠の持つ物を同じく受け継ぎ、しかもそれが朝日とは長い付き合いをしてきた長門にとって大変によく似ていると認識された事は、明石にとってはちよつと悔しかった。

『に、似たって・・・、その子ですか・・・？』

『うん、あれはきつと朝日さんの血だよ。あの説教くさい感じのしゃべり方なんてもう・・・。たはく、メンドイなあ・・・。』

長い髪を一度手で流してから頭をガリガリと搔いて放った長門の言葉によると、朝日の特徴として名高い説教癖もその新人さんは受け継いでいるらしい。

明石もまた朝日のお説教には正直な所は苦しめられた事が多々あるが、今は何だかそんな特徴を勞せず受け継げたという話題の少女に小さな嫉妬心さえ湧いてくる。故に明石は長門の身体を揉む手に

ちよつとだけ力を込め、長門の放った言葉を否定するような事を口に出してしまう。

『で、でも長門さん。私達艦魂って、子供を生んだりなんかしないですよ。だから朝日さんの血って……。』

断じて明石は長門を不機嫌にさせようという気は微塵もないが、心の奥底に芽生えた小さな嫉妬心は明石の口から否定的な言葉を放たせずにはいられない。そしてその内心では、長門に自分の言った事を肯定してくれる一言を期待してしまう。師匠と同時に、それだけ明石にとってはこの長門という先輩の存在が大きいものだったのだ。

一方、長門は明石の力の箆った手の動きに合わせ、少し辛そうな感じのする溜め息を吐いて僅かに身体を捻る。ガチガチに凝った肩や背中が解されていくとそこには最初の内は鈍痛が走るが、それが過ぎ去ると残るのはほんのり暖かくて尖がりの無い快感。普段から真面目な陸奥にお仕事の進捗を管理され、それでなくともそもそもがお仕事嫌いである長門の身体は、困った事に一日を過ごすだけで疲れが溜まってしまう。

『くうあああゝゝ……。』

何か動物の鳴き声にも似た声を放って身体を伸ばす長門。明石の胸の中に秘められる小さな嫉妬心に全くもって気付いていない長門のそれは、今しがた明石の放った言葉に耳を傾けていないようではあるが、彼女は別に意識して明石を無視しようとしているつもりは微塵もない。手や足の指先までもピンと伸ばして全身の疲労感を掃う長門は、すぐさま自分の言った事の意味を明石に教えてやった。

それは今からちょうど2ヶ月前の8月8日に長門が行ったという、

さつき話題に上がった新たな仲間との初めての出会いにして、長門や明石、そしてその後ろでお皿の料理やジンジャーエールコクテールに舌鼓を打っている朝潮達を含めた艦魂と呼ばれる者達の誕生に纏わる体験談。20年近く艦魂として生きた長門ですらも初めて行った行為の詳細に始まり、陸奥と供にそれを行った事、そこに自分の血と艦魂達が往々にして持つ白い光りの力を用いた事、名を呼んだ為に誕生した仲間が自分をとにかく慕ってくれている事、そしてかつては自分もその様にしてこの世に生を受け、しかもそれを行った人物がお互いに師と仰ぐ朝日であった事を、長門は快感で力が抜けかけた声ながらも順序良く明石に教えてやった。

しかし静かにそれを耳にしていた明石は長門の懇切丁寧なお話に対して感謝の念を抱く事は無く、むしろ少し人間とは違うが艦魂にもまた血の繋がりを伴う誕生がある事を知って、心の中で小さく燃えていた嫉妬心という名の炎の色合いをさらに鮮明にしてしまう。軍医としてお勉強をしてきた明石は一応はあれをこうして子供が出来るという人間達の命の繋がりを理解していたが、艦魂独自の世界にもそれと似た血統の流れがあるというのは初耳だった。しかし長門が自分にそれを語るのに際して嘘をつく理由が見つけられないのと同時に、明石はこの時、それが間違いの無い真実である事を目の前のソファアの上でうつ伏せになった長門の身体に見つける。

純日本生まれの戦艦の命である長門の顔は明石と同じく日本人の女性の顔のつくりを持ち、金剛こんごうや朝日、そしてつい先日会った富士ふじのような鼻の高い奥まった目という西洋人の特徴は何一つない。しかし首から下の身体つきは明石のそれとは大違いだ。

明石は女性にしては背の高い部類に入るが、その身体つきは日本人の女性が持つ体格と同じく肩幅の狭い縦に細長い物。それは明石だけではなく、彼女の友人である神通しんつうや那珂なかとて似たような物であるのだが、この長門は明石達とは違って肩幅の広いどっしりとした感じの身体つきをしているのである。長い髪も手伝ってか長門は顔

が身体の幅に比して小さく見え、さらには並以下の明石とは比べ物にならないくらいに大きな胸を持っているというその姿は、日本人の女性の体格ではなく完全な西洋人の体格であった。それは日本生まれである筈の長門艦の経歴を見る限りでは不自然な話であるが、艦魂としての長門の経歴を含めればその真相を察するのは難しい事ではない。言葉を放たずに明石が理解する通り、長門の小顔で力強さを放つ大きな身体つきは、イギリス生まれの純西洋人である朝日の血をもって受け継いだ物なのであった。

『困ったなあ。朝日さんに似るなんて思ってもみなかったもん。ちょおメンドイ。』

『・・・・・・・・』

その言動の根本にあたる人柄の中身の部分はどうかやら微塵も受け継いでいないようだが、血の繋がりとしてこの長門が師匠の血をその身に宿している現実には、知識だけしか貰えていない明石はついに長門の肩に伸ばしていた手の動きを止めてしまった。

長門も、8月に生を受けたという新たな仲間も、意図せずとも受け継ぐ事が出来た師匠の血筋。その事に対して憎い等という感情こそわいてこないものの、朝日を心の底から尊敬している明石には二人が羨ましくて羨ましくて仕方が無かった。

『あ、明石。背中の中辺りもいいかな？　なんか最近、背を曲げるのちょっと痛かったりしてさあ。』

『あ・・・・、は、はい・・・・』

背中を擦りながら放った長門の言葉に明石は返事をする、すぐさま休んでいた手を長門の背中の中央部分に流して再び力の入れた指先で揉み始める。相当に疲れているらしく、肩と同じ様に長門は背中もまた柔らかさを欠いた感触となっていた。明石は指先の感覚

に意識を集中させつつ、手の動きを背中にあちこちに流して長門の背中の中の硬直に解散を促す。

すると長門は明石の処置によってすぐさま背中に快感を覚えたらしく、大きな溜め息に続けて話題に上がっていた人物の名を出しつつ明石の手腕を褒めた。

『むはー……。さっすが、明石い。朝日さん譲りだなあ。』

『は、はい……。有難う御座い、ます……。』

いつも可愛がっている明石だからこそ、長門は言葉を口から発する際に一切の触媒を設けない。生来がそんな性格であるという事もあるのだが、それを知っている筈の明石は長門の言葉を受けても返す声に嬉々とした感じを与える事は出来なかった。

長門が褒めてくれた言葉は師匠より自分が受け継いでいる物がちゃんとある事を示しており、明石としてもそれをしっかり身に付けようと常に一生懸命に勉強してきた。ただ明石の胸の中でくすぶる嫉妬の炎はまだ鎮火しておらず、その感情は尽きる事の無い妬みを眼前の長門の姿に抱かせる。

決して太っている訳でもないのに力強く、顔を小さく見せる効果を持つ長門の広い肩幅。うつ伏せになっている為に今は明石の視界には入らないが、長門の身体とソファの間にはこれまた日本人離れした大ききの柔らかな地肌を持つ双等の起伏がある。日本にて建造された艦体を分身とする長門が持つその身体つきは、彼女の中に英国土生まれの朝日の血が間違いないで流れている事を証明していた。ただそれが目に見える朝日との繋がりであった事が、明石にはとても残念でならない。宴の場で目にした金剛一族の様に、傍から見ても一目瞭然であるような朝日との繋がりがある明石は欲しかったのだ。

その一方、長門は身体の節々から溜まった疲労感が消えていく快感にすっかりご満悦で、腕枕の上で笑みを溢して両脚を子供の様に

パタパタと小さく振っている。久々に可愛い後輩と会った上に宴会場で少しだけ飲んだお酒も効き出して来た長門は、それまで耳にしてこなかった明石とその相方のお話をせがんだ。

『ねね、明石。森クンとは会った？ 砲術学校ってすぐそこだよ？』

長門は明石と忠とはかねてより親しい付き合いをしてきた仲であり、別れてしまつて泣き腫らした顔で呉に帰ってきた際の明石も目にした事がある。極めて仲の良かった二人が別れた事は長門としても非常に残念であつたし、今でも彼女は明石と忠がよりを戻して欲しいと願っている。本なら会つた際にすぐにでもその話を明石にしようと思いつつ、明石なりの思う所を勘定して彼女はどうかやってその話を切り出そうか悩んでいたが、ここにきて酔いにも助けられた長門はついにその言葉を放つてみたのだった。

思いがけない自分の話題を投げられた側の明石は、それまでの嫉妬心をふと忘れて長門の問いに声を返す。つい今しがたまで長門に対して尽きる事の無い妬みを抱いていた明石だが、別に彼女は長門という人物を嫌いになつた訳でもないし、憎しみを募らせるなどとは微塵も意図していない。たまにしか会えない先輩であるが、いつも色々と世話をしてくれる長門は姉妹のいない明石にとっては姉のような存在だとも思っている。また、かつての相方と同じ様に、生まれ故郷の長崎から呉に回航されて以来ずっと面倒を見てもらってきた恩もある。

明石は手の動きを止めるとその表情をちよつと歪んだ笑みへと変え、同時に胸の中でくすぶる暗い色合いの感情を自ら鎮火させる。ふと長門が顔を明石に向けて捻つた事もあり、明石は苦笑いしながら首を左右に振つて長門に声を返した。

『いえ・・・、会ってないですよ・・・。』

『ええ？ なんでえ？』

長門は明石に対してすぐに声を返し、相方との再会を履行しなかった明石を問いたです。例えそれが明石なりに色々と思いを巡らせた結果であるとしても、大泣きしていた明石の姿を鮮明に覚えている長門にとっては、もう既に10日以上も横須賀にいる明石が相方と会おうとしなかった事が不思議でならない。だからそれがお節介である事を十二分に承知しながらも、長門は明石への問いかけを引っ込める事は無かった。

『森クン、砲術学校が終わっても、その次は水雷学校にまた入校しなきゃいけないんだよ？ どっちとも同じ横須賀だけど、まだ半年もかかるんだし、一回くらい会えばいいじゃん。』
『あはは・・・。』

ちょっとだけ歯切れの悪い笑い声を返事とした明石は、相方と会おうという考えを自ら却下した理由を長門に教えようと決める。もちろんそれは宴の最初でやらかしたテーブルマナーでの失態をも含んだ、艦魂としても女性としてもまだまだ未熟な自分の身の程。そしてそれを時間をかけてでも身に付けようと決心するに及んだ、富士という先輩との出会いの事も明石は併せて長門に語った。

しかし生来が回り道を嫌う性格の長門は苦笑いしながら明石が語る自身の身の程の事を聞いても、それをありのまま受け止めてあげようという気には中々なれない。もちろん明石なりにあれこれと考え、悩んだ末に出した答えを否定するつもりはさらさら無いのだが、5月に会って以来どうにも明石が相方との距離を近づけられていない事に、長門は頭を荒く搔いて抱いた見解を率直に明石にぶつけてみる。

『難しく考え過ぎじゃないのお？ 抱きついちゃえば良いじゃん。』

それはなんとも長門らしい、明石の陥っている状況の打開策。これ以上ないくらいの近道かもしれない。だが明石は長門の心遣いには深く感謝しつつも、再び首を左右に振って長門の提案を退ける。

『あはは。でもごめんなさい、長門さん。私は自分を誤魔化したり、その場にただ居合わせるだけになんかなりたくないんです。しっかり意味を見つけて自分を保たないと、また昔と同じになっちゃうような気がして……。』

苦笑を浮かべたまま、明石は長門に言った。

それは相方と別れて以来、先輩方の教えと明石なりの迷いを含めて出している答えであり、つい先日、富士より教えられた「時間があるのなら慎重に行くべき。」という教えもまたそこには影響を与えている。己の一方的な感情を敢えて抑える明石の決めた事であり、艦魂としての励む姿勢をしっかりと表す物であった。

するとこの時、明石の言葉を耳にした長門は、近道をせずに一步一步を踏みしめるような姿を求める明石にさっき何気なく掛けた一言がやはり良く当て嵌まっていると確信する。なぜなら長門は生まれてすぐに艦魂としての物事を学んだ際に、似たような事を師匠から散々に教え込まれた経験があるからだった。

「大切なのは試行錯誤の過程と結果。評価なぞ二の次で良い。」

その言葉を今でも常々口にしてる人物は長門の師匠にして、明石がさつき察したようにその血を長門にもしっかりと残した艦魂^{ひと}。その割に全く自身の性格や思考回路に反映されていないのは不思議なのだが、長門はそんな自分への考察をすぐに忘却し、その言葉に込められた意味と想いをしっかりと受け継いでいる人物を見つけたのだった。

やがて長門は笑顔のまま小さく溜め息を漏らすと、今しがた実感した明石への考察を声に変える。それは奇しくも明石が願った朝日との関係、その物であった。

『あゝあ、明石も朝日さんに似たきたなあ……。おかしいなあ、アタシは全然似れてないぞお……。』
『え……。？』

ふと放った長門の言葉で、明石はさっき抱いた長門と彼女の教え子に対する嫉妬心を完全に忘れて目を丸くする。朝日譲りの大きな身体をゴロゴロとソファの上で転がす長門は、明石が敬愛する朝日に似てきたのだと言う。しかし明石にはその意味が少ばかり現実性が薄いように思えた。その理由はもちろん、眼前にある長門の大きな身体の根源となる、長門が朝日の血をその身体の中に流しており自分にはそれが無いという現実。

『ああ……。』と年寄りくさい呻き声を上げながら上着のホックやボタンを外し始める長門は、いつもの様に上着の前を開いて羽織るような格好になり、シャツの下にある一際大きな胸の形をあらわにする。ペツタンコの明石とは比べ物にならないその胸に加え、うつ伏せから左腕を枕にして横たわる姿勢になった事で明確化される広い肩幅もまた明石とは大違いだ。

明石はその差に対する考察を声に出し、「朝日と自分が似ている。」と表現した長門の言葉を問いただしてみる。だが返ってきた長門の言葉は、明石の師匠との繋がりに関する考察にちょっとした変化を与える。

『な、長門さん。私は朝日さんの血、受け継いでないですよ。だから”似てる”って……。』

『な〜に言ってるんのよ。どっからどう見たって朝日さんは明石を一番可愛がってるじゃない。こないだの歩き方を見せた時だってそう

だったじゃん。あの時、アタシから見たら、明石と朝日さんは親子その物だったよ。』

『おやこ・・・？』

『うん。きつと朝日さんもそう思ってるから、明石には手取り足取りで色々教えてるのよ。でもさあ、もうちょつとアタシには愛と優しさをくれないかなあ。末娘の明石ばかり可愛がってるんだもん。そしたら見事に明石だけが似ちゃってるしい。』

その言葉に明石はそれまで抱いていた血の繋がりの意識を捨て、母のような存在であつたら良いなと願っていた朝日が自分の事をどう思っていたのかを考える。

軍医としての知識を授けてくれた時、先代の明石の事を話してくれた時、艦魂としての立ち振る舞いを教えてくれた時、朝日は自分の事をどう思っていたのだろうか？

今までの記憶の中から明石は朝日と過ごしていた際の記憶を蘇らせ、真心と愛情を浴びせてくれた師匠の胸の内に思いを巡らせるが、その答えは脳裏に浮かべた教育を受けている際の自分と朝日の姿で一目瞭然だった。大きく手を動かして教える授けてくれた時、長門の歩く姿を寄り添うようにして一緒に眺めてくれた時、相方と別れた辛さからその胸に顔を埋めて泣いた時、琥珀色に輝く髪と供にいつもそこにあつたのは、宴の場で金剛一族を目にしてから欲するようになった存在の顔だったように明石には思える。例えば血の繋がりが無くかつとしても、朝日が自分に注いでくれた感情は、時に優しく時に厳しい物。

それを自分に掛けてくれたのは何故か？

そんな疑問が明石の脳裏を過ぎっていくが、今の明石はその疑問

に対する答えを探すのに時間を要しない。宴の場からずっと抱いてきた朝日と自分における関係を、明石が羨むずっと前から既に朝日は持ってくれていたのだ。そしてそれは師匠として敬愛する朝日だけではなく、艦魂としても帝国海軍の者としても先輩であり上司である長門もまた同じく抱いてくれており、長門はそれを証明するよう明石に対して声を掛けてくる。

『同じお母さんを持つてるのに、妹の方が可愛いのかなあ。お姉ちゃんはやんは辛いモンなのねえ。』

何も考えずに自身の身の上を半ば自虐的に憂う長門だが、明石は彼女の放った声で胸の支えを完全に消し去る。その瞬間、明石は自分だけが長門と朝日の真心を勘定できていなかった事を理解して反省するものの、それに反して胸の奥からこみ上げてくる可笑しさに耐え切れずにクスクスと笑い始めてしまう。その可笑しさは紛れもなく自分に対する嘲笑であったが、明石はいつもの様に自身の至らぬ所を顧みる気には不思議となれない。

もつとも突如として口元に手を当てて笑い出す明石の行動に、長門は自身が放った言葉に何かの原因があると思い、すぐ傍で笑う明石に顔を近づけて声を上げる。

『なによお、アタシだって色々と苦労してるのよ、明石。』

『あははは。』

ついさっきまで大人しかった明石が笑う事で長門は僅かに眉をしかめているが、それでも明石の笑い声が絶える事は無い。羨ましい事この上ない血の繋がりを示す長門の大きな身体も、明石の瞳にはもう既に気の良いお姉さんの姿以外の何者にも映らなかった。そこにさっきまで妬みを抱いていた明石だが、彼女は自分も欲した物を既に持っていたし、当事者である朝日や長門もまた自分の事をどう

いう風に捉えているかがようやく解つたのである。

それは同じ者に教えを仰いだだけの間柄ではなく、宴の場にて目にした金剛一族の姿と全く変わらない代物。それを目にした時にそうであつたら良いなと願つた自分が、明石にはなんだか馬鹿らしく思えて仕方なかった。なぜなら既に明石は願ひ通りの身の上になつていたからだ。

心の底から生まれ来る自分への嘲笑にはやがて嬉しさも混じり、明石の笑い声は段々とその音階を上げていく。長門は自分が笑われたと思ひ込んでちよつと不満そうな顔をしてさらに語りかけてくるが、それに応じた明石に再び返ってくる長門の声は、明石が長門と同じ朝日の娘に当たる事を明確に示していた。そして明石はまたまた笑うのだった。

『あゝあ、朝日さんはアタシにはここ最近、厳しすぎると思わない？ アタシだって少しは遊びたいのにさあ。』

『あははは。長門さんは連合艦隊の旗艦なんだし、もう大人なんですから遊んでばかりじゃダメですよ。あははは。』

『うっは。朝日さんと同じこと言わないでよ、明石い。もおゝ、なんでそんなに似てるのよお・・・。』

『あはははは。』

第六九話 「繋がり／後編」 （後書き）

拙作の中では今回の長門や出雲のような奇妙なくらいにユーモアを意識している人物が登場しますが、この二人はイギリスという共通点を持つ者として小生の勝手なイギリス人観を色濃く反映している次第です。

また下記の動画はそんなジョンブル魂の一端をよく理解できる動画だと思っております、拙作での長門と出雲の人柄における原点であつたりします。ふざけているようでもアンチブラストポジションをちゃんととっている辺りに、ユーモアを大事にしながらお仕事もこなすというイギリス人の一面が覗けます。

自身の分身にある射出機の前で動画の様に踊っている二人を想像しつつ、これからの長門や出雲のお話を楽しんで頂ければ幸いです
ww
ww

わーい、えむ、し、え！ 、（ー！、）ノ

◆<http://www.nicovideo.jp/watch/sm4737248>◆

第七〇話 「北の海の仲間達」

昭和15年10月6日。

それまでの雨模様が嘘だったかのような青空が広がる朝の横須賀では、明石艦あかしを含む観艦式に参加する艦艇達が続々と抜錨、久方ぶりに力強い真っ黒な煙を靡かせて横須賀を出港した。行き先はもちろん、観艦式の会場となる横浜港の沖合い。不参加となっている艦艇の艦魂達に見送られ、彼女達はいよいよお披露目の舞台へと登る事になるのだ。

ただ、狭い東京湾の事情もあり、出港といっても一隻づつがチビチビと港外に歩みを進めなければならぬのが実情で、大艦隊が一斉に隊列を組んで波間を駆ける様な勇壮な光景は微塵も無い。これより天皇陛下のご尊顔を拝するという栄誉を頂ける彼女達にあっては、その旅立ちの姿はちょっとこじんまりしていて迫力が伴わない物だった。

もったもそんな出発だからこそ出来る事もあり、錨を下ろしたままでの神通艦じんつうの艦尾甲板でそれを見ることが出来る。

函館巡航の際、部下全員を陛下の御眼に映して頂く為に自ら観艦式への参加を取り下げた神通は、今まさにその栄誉を掴みに行かんとする部下達を眼前に整列させて最後の訓辞を行っていた。

雲一つ無い見事な快晴の下、凜としていると供におっかなさが抜け切れない神通の声が辺りに響く。

『いいか、お前等。観艦式というのは式当日に頑張れば良いなんて甘ったれたモンじゃない。会場に行ったなら、そこは港や岸壁から

いつも丸見えだ。つまり、式が始まるまでの一分一秒、お前達は常に国民の目に触れている状態なんだ。その上で他の艦の連中にも四六時中見られているし、当日は恐れ多くも天皇陛下のご拝謁を賜る事になる。舷窓の開け閉め、不要な電灯の消し忘れ、甲板上の手拭いや雑巾の片付け忘れ。どれか一つでもあったなら、それは私達二水戦の名に泥を塗る事になる。そしてそんなフザけた輩は二水戦にはいらん。もしこの中に今言ったような不始末を起こす馬鹿がいたら、戻ってきた時に私が魚雷をぶち込んでその馬鹿者の艦体を真っ二つに叩き割ってくれる。・・・解ったな!』

まるでその日の天気の影響を微塵も受けていないような物言いをする神通。元来が口下手で不器用な人柄である彼女は『失態の無い様、みんな常に気をつけろよ。』と言いたいだけなのだが、どうしてもこの人の脳裏から紡ぎ出される言葉は殺伐としていて乱暴な物になってしまふ。おまけにその表情も常に眉毛が吊り上がり、鋭い鋭角で構成される目尻は丸みを帯びる事が滅多に無いというのだから、それを聞いた少女達がいつもの事であったとしても、その心の内を恐怖のどん底に叩き落されてしまふというのは無理も無い事である。もはや数ミリ程に潰されかけている肝を震わせ、身体が浮き上がりそうな不気味な感覚に襲われながら彼女達は上司に声を返した。

『『『 は、はい・・・!!
『『『

微妙に裏返った声での返事は気合の籠る物だったが、少女達は上司の訓示にて心の奥底に決心をした訳ではない。単純に叫ぶように声を発しないと、目の前で鬼の化身のようにして仁王立ちしている神通の迫力で尻餅をつきそうになってしまふからだ。ダラダラと首筋を垂れていく冷たい汗も、今の少女達の意識を惑わせる事は無い。たった一本の指を曲げる事すらも許されないかと思える恐怖。

それが神通という上司によって放たれる物なのだ。

だから彼女達は、さっき上司が口にした「失態をした者に対する
刑罰」を冗談だと捉える事ができない。もちろん神通は本気で部下
を天に召すつもりは微塵も無いし、そもそもが自分達の為に神通が
自ら犠牲となってくれた函館の一件は少女達も知っているのだが、
もはや彼女達の中での今回の観艦式の認識は「私立神通学校」の命
を掛けた現場実習となっていた。気の毒という他ない。

やがて神通は左から右に視線をゆっくりと流して部下達の強張つ
た顔の列を一瞥するや、今度は流れるような動きで頭に被っていた
軍帽に手を伸ばして脱帽する。するとそれを合図として少女達はコ
チコチとすっかり柔らかさを失った動きで頭に乗せた軍帽を脱ぎ、
神通と同じく軍帽の底を握った右手を腿の横にぴったりと添える。
同時に一斉に少女達は両脚の踵をくっつけ、大きく胸を張って直立
不動の体勢をとった。厳しい神通の教育でその体勢を綺麗に保つ事
が出来る筈の彼女達も、怖い上司のおかげで今は奇妙に背を反らし
顎を上げたような感じの不恰好な姿勢となる。

だが神通はそれに構わずに一際響きの良い声で辺りの空気を切り
裂き、「私立神通学校」の一日の始まりとして行っている唱和を始
めた。

『御勅諭、唱和！』

上司の声に続いてすぐに少女達はお腹とお尻に力を込め、大きな
声で神通に続いて同じ言葉を放つ。

『ひとおつ！ 軍人は忠節うを尽くすを本分とおすべし！』

『『ひとつ！！ 軍人は忠節を尽くすを本分とすべし！！』』

『ひとおつ！ 軍人は礼儀いを正しくうすべし！』

『『』 ひとつ!! 軍人は礼儀を正しくすべし!!』』』

『ひとつ! 軍人は武勇^{たつと}を尚ぶうべし!』

『『』 ひとつ!! 軍人は武勇を尚ぶべし!!』』』

『ひとつ! 軍人は信義^{しんぎ}いを重んずうべし!』

『『』 ひとつ!! 軍人は信義を重んずべし!!』』』

『ひとつ! 軍人は質素^{しつそ}おを旨とおすべし!』

『『』 ひとつ!! 軍人は質素を旨とすべし!!』』』

明治の頃より皇軍の精神や道德観の拠り所とされてきた軍人勅諭を叫び、今日という一日と晴れ舞台の始まりを迎える二水戦の艦魂達。古き良き帝国軍人の在り方を今日も肝に銘じるや、神通はまるで砂浜から引いてゆく波の様に静かな動作で軍帽を被り、少女達もまたそれを見て一斉に軍帽を頭の上に乗せた。

すると神通はそれまでの硬直した身体を解し、僅かに体重を右足にかけて腰に手を添え、陸地に囲まれた横須賀の波間が水平線へと繋がっている方角を眺める。東京湾へと続くその海上では単縦陣で旅立っていく艦艇達の行進する光景が出来上がっており、穏やかな波風と秋晴れに包まれる軍艦旗も静かに列を作ってゆっくりと宙を舞っていた。そして団列の最後尾が自身の分身とその付近にて煙を靡かせている部下達の分身の辺りに来ている事を確認し、彼女は部下達と一時の別れをする事にする。

『横浜沖での引率は七戦隊の最上^{もがみ}に頼んである。戦隊長代理は18駆の陽炎^{かげろう}。』

『はい!』

一時の間の二水戦指揮官として上司から名を呼ばれた陽炎だが、

身に掛かる責任をよく心得た彼女はちよつと上ずった声で返事をする。二水戦の中でもかなり小柄な体格をもつ陽炎は外見こそ少し頼りない感じもするが、帝国海軍最新鋭である陽炎型駆逐艦の一番艦であり長女。雪風ゆきかぜのような問題児を含めた妹達からの信頼は厚く、今回の観艦式において神通の分身に宿る二水戦の幹部達が戦隊旗艦と決定した事に併せ、神通は陽炎に部下達の統率を任せてみる事にした。本来なら最先任である朝潮あさしおを抜擢するところだが、そこそこに実力を身につけてきた陽炎を神通はこの機会に試す事にしたのだ。そしてもちろん神通は、観艦式という晴れ舞台にて行き当たりばったりで陽炎の試験を行う等という危険な賭けはするつもりはない。ゆるく唇を噛んで両肩にかかる重圧に耐える陽炎には、やがて上官のちよつとだけ温もりが込められた声が掛けられる。

『解らない事があれば最上や明石あかし、それと三戦隊の金剛こんごうさんに指示を仰げ。悪いようにはせん筈だ。』

『は、はい！』

飽くまでも神通は陽炎に対して逃げ道を残してやり、自らの信頼がおける者の名を上げてどうにもならないような事態への対処方法を教えてやる。部下を鍛えるに当たっては鬼の様に厳しい事で知られる彼女が崖から突き落とすような試練を与えないのは、神通の部下に対する真心の裏返し。大事に育ててきた部下がこんな程度の試練で失敗でもして潰れて貰っては困るのである。

神通は陽炎の返事を耳にするや表情をそのままに小さく頷き、今度は周りの者達に視線を流して陽炎が試練を乗り切れるように結束を促す。集団での指揮官という物が決して一人の能力で務まらない事を、長く水雷戦隊の旗艦として励んできた神通は肌身を通してよく知っているからだった。

『お前達も陽炎の言う事はしっかり聞くんぞ。陽炎に恥を掻かせ

るんじゃない。解ったな？』

『『『 はい！！』』』

彼女の放った言葉に返って来たのは、陽炎という大事な仲間、姉妹を全力で支えてやろうという意気込みが籠った少女達の声。そこにはさっきまで滲んでいた恐怖心が無く、この瞬間を二水戦の全員が心を一つにして迎えている事を示していた。その立派な姿に神通は口元が緩みかけたが、すぐに自身の吊り上がろうとする口元に氣付いて表情を正す。今しがた観艦式へ望む態度を律したばかりである彼女は、例え部下の為とは言えどもこのまま横須賀に残る身である自分だけが安堵しては駄目だと考えたのだ。少し俯いて咳払いをするフリをして丸くなりかけた瞳を尖らせ、やがて顔を上げた神通は部下達へ別れを告げる。

『ふん。よし、解散。別れ。しっかりやれよ、お前達。』

『『『 はいっ！！』』』

胸の鼓動すらも同調させたかのような返事を発した少女達は、各駆逐隊の司令駆逐艦である艦魂の号令によってその場から白い光を伴って姿を消していく。

風に飛ばされて甲板を転がる帽子を追い駆ける霰あられにより、部下達の出発におけるどん尻は第18駆逐隊。『馬鹿者が。』と呟くように放った神通の言葉に霰が頭を下げると、時を置かずして彼女達も霞かすみに率いられてその場を後に行行った。

いつもの賑やかな部下達の声も静まり、遠く聞える波の音や機関音が風と共に流れていく甲板に神通は無言で腕組みをしながら立っている。しばらくすると出航を知らせるラッパが辺りから響き、神通の瞳にはいつも自身の後ろに続いて駆けていた部下達がその艦首に白波を立て始める光景が映る。頭上を飛ぶカモメの影が一瞬だけ

視界から明るさを削ろうとも、日課の為に背後を通る乗組員達の声が心地良い並音を遮ろうとも、神通は黙ってその場に立ち尽くして旅立つ部下達の後姿を眺めるのだった。

ちょうど同じ頃、明石艦はすでに横須賀の波間を立っていて、横浜への海の道をゆっくりとひた走っていた。といっても民間のお船の航路や漁船も多い東京湾の事情もあり、艦首に低めの白波を立てる明石艦はそれほど速度を出している訳ではない。いつもとは違う第一艦隊や第四艦隊の面々もいる中での単縦陣航行でもあるから、追突の可能性も考慮して10ノット程のゆっくりとした船足で横浜に向かっているのである。

が、心地良い潮風を甲板上に発生させるのはちょうどこのくらいの速度の航行で、乗組員や艦魂達は皆一様に甲板に出て三々五々の休憩を楽しんでいた。

彼らと同じ様に明石もまた艦橋上にある測距儀の天蓋に出て、ぽかぽかと降り注ぐ陽の光りと柔らかな潮風に包まれる一時を味わう。相方との初めての出会いの場所ともなったここは明石が自分の分身の中でも特にお気に入りの中で、そこに腰を下ろして艦首の方を望むとあたり一面の絶景をよく堪能する事ができる場所だ。手摺が無い為に風の強い日や雨の日こそ近寄るのも億劫になってしまう所が残念だが、天気の良い穏やかな日はこの測距儀天蓋上は明石にとって最高の癒しの場となる。

今日は朝から元気に輝くお天道様の恩恵もあって、鉄の塊である測距儀は良い感じに熱を保って何か床に暖房が敷かれているようで

もあり、明石は10月だというのに外気に触れるその場所にいても苦痛を一切覚えなかった。明石はずっと膝を抱くようにして座っていたが簡易暖房と化している測距儀天蓋の恩恵を最大限に発揮しようと考え、ふと膝を抱く腕を解くと身体を横に伸ばしてそのまま艦首を正面に捉えて横に寝転がってみる。するとどうだ、天蓋につけた明石の身体の右側全体はほのかに天蓋の持つ熱で暖められ始め、明石は自身の頭を捻りようを脳裏の中で自画自賛してニッコリと笑った。

『へへ〜ん、あったけ〜。』

今日の天気を持つ温もりに包まれる明石。艦首を向いた彼女の目には、明石艦のすぐ前を航行する長門艦ながとの力強い勇姿が映る。艦尾旗竿に翻る大軍艦旗も勇ましい長門艦はまさに世界最強を自負する帝国海軍の総大将に相応しく、後楼の頂上で潮風と踊る中将旗もまたその艦影を一際莊嚴に飾る。

だが明石はそんな長門艦を眺めても感動する事は無く、むしろその姿にこれ以上無いくらいの可笑しさを覚えて声を上げて笑ってしまう。もちろんそれは同じ艦魂の先輩として慕いつつ、いつも自分の事を可愛がってくれる姉である長門艦の命たる者の記憶を蘇らせてしまったからだ。

昨夜、二人で給仕の休憩室にて久々の語り合いをした後に、明石と長門は再び宴の場へと戻った。しかし長門がいない間、彼女の実の妹である陸奥むつは宴の場に同席していた常盤艦とこわの艦魂に姉のお仕事振りに関する相談を持ちかけていたらしく、長門は宴会場に戻るなり常盤に拉致されて酒の勢いも混じったお説教をこっ酷く浴びせられてしまう。

南洋方面を担当する第四艦隊の隷下部隊である第十八戦隊に所属する常盤艦は、長門や明石の師匠と同じく明治の時代に英国で生まれ、かの日露戦役をも戦い抜いたという大先輩。日本型組織特有の

先任序列が根付いている艦魂社会にあつてはその発言力は強く、長門は今にも泣きそうな表情で常盤のお説教を頂戴してしまった。

今年の春に2年にも及んだ近代化改装を受けたからか、常盤は帝國海軍に嫁いで42年に及ぶにも関わらず大変に元気な艦魂で、朝日や富士のような存命の日露戦役当時の戦友達の中でも唯一今回の観艦式にも招待されている事から、さすがの長門もこれ以上のお説教を食らいたくない為に今日は陸奥に従つてお仕事に励んでいる。絶好の日向ぼっこ日和であつても今日は明石の傍には長門がいないという事の真相だ。

『にししし。』

颯爽と眼前を駆ける長門艦を明石は悪戯っぽく笑う。山の様に詰まれた書類の中で舷窓から僅かに覗く快晴の空に思いを募らせる長門の姿を想像すると、どうしても明石は唇から漏れる笑い声を堪える事が出来ない。こよなく愛する「メンドイ」の一言を連発するお仕事振りだつて難なく想像できる。明石は脳裏にありありと浮かぶ長門の姿を大いに笑い、同時に今日もまた身体に溜まつたであろう彼女の疲労を癒しに行つてあげようと決めるのだった。

『ああー！　いたあ！』

そよそよとその場を流れていく風と共に身体を包む温もり、そしてぶっ飛んだ性格のお姉さんの境遇を楽しんでいた明石だが、そこには突如として元気の良い声が響き渡る。しかもその声には明石も聞き覚えがあり、すぐに彼女は上半身を起して辺りを見回す。もつとも艦橋上にポツンとある測距儀の天蓋に明石はいるのだから、右

に左にと流してみる明石の視界には一面に広がる東京湾の静かな海原以外が映る事は無い。

『あれえ？』

声の主を発見できなかった事で明石は後頭部を書きながら僅かに首を捻るが、彼女の耳には再び同じ声が流れてくる。それは明石がいる測距儀から真下の当たる、艦橋脇の甲板の上から響いた物だった。

『明石さんだ！』

『あ、いたいた！ 明石さ〜ん！』

やっとの事で声の出所を察した明石は測距儀の上で四つん這いになり、それ程広くも無い天蓋の上から落ちない様にして真下を覗いてみる。

そこにいたのは明石にとってなんとも懐かしい顔の4人の女性達。濃紺の水兵さんの格好をした小柄な体格を一樣に持つ彼女達の中にワーワーと声を上げて手を振る者が2人いるが、そのよく似た顔つきを目にしても明石は二人の招待を明確に悟る。まるで万歳でもするかのように高く上げた両手を左右させる女性は、水兵帽からはみ出た短い髪がピヨンと外側に向かってハネ上がっており、一見すると男の子のような印象を放つ。その飾らない素朴で元気な人柄で明石に帝国海軍の艦艇としての自覚を教えてくれた彼女は、野風のかぜという駆逐艦の艦魂。その隣で短い後ろ髪と額でハの字になった長い前髪が印象的な女性は、野風の妹に当たる波風なみかぜだった。

『あ！』

その顔ぶれを瞳に映すのは明石にとって一年振り。

明石の分身がやっと就役して軍艦旗を翻し、艦艇としての初めてのお仕事に励んだ際の患者達である。小柄な体格に反して大湊要港部にて単独での北方海域警備を20年以上も担当し、なおかつ数ある帝国海軍駆逐隊の中でも栄えあるトップトナンバーを頂く部隊。即ち大湊要港部付属、第1駆逐隊の艦魂達だった。

久方ぶりにして全く企図していなかった出会いに明石は驚いてしまい、短く声を発した後に続ける言葉をついつい失ってしまう。脳裏ではその場にいる4人の内の3人は明確に名前を断定しているのだが、中々それを声に変えて発することが出来なかった。すると波風と野風の間から輪郭に沿った短くて丸いおむすびのような髪型をした女性が、一歩進み出て小さく方の高さで右手を振りながら明石に声をかけてきた。それは帝国海軍の艦艇とは何の為にあるのかを、自分の軍艦旗を掲げたばかりだった頃の明石に諭してくれた、沼風ぬまかせという名の艦魂だった。

『明石さん、ご無沙汰です。お元気そうで何よりです。』

『ぬ、沼風……』

実の姉妹である波風や野風とはうって変わって落ち着いた口調の沼風の声は、久しぶりの対面で混乱に陥る明石の思考を柔らかない物に変化させる。

その格好の通り、沼風は駆逐艦の艦魂らしく二等兵曹という水兵さんの臂章を身に付け、軍医とはいえ一応は少尉の襟章をつけている明石とはその階級がかなり離れている。その経歴だって実は30代目の容姿を持つ長門とは同世代の人物で、昨年にと就役したばかりである明石とは比べるのもおこがましいくらいなのだが、童顔である事から明石の心の中ではこの沼風は距離の近い感じがあった。

だが長い海軍生活とその間に浴びた潮気を滲ませる沼風の雰囲気は、想定外の再会に浮き足立つ明石の心を静めてくれる。心優しい

先輩である沼風の不思議な力だ。

するとその脇でふと野風が艦尾の方へと顔を向け、そこへ何かを発見したのか再び手を振って声を上げる。野風のそれは彼女の周辺にいる仲間達とは違う者の名を呼ぶ声であったが、なんと不意に放たれたその名前もまた明石には覚えのある名前であった。

『んあ、宗谷そごさ〜ん！ 明石さんいましたよお〜！』

『あ、明石さん。お久しぶりです。』

野風に続いて声を掛けてきたのは、縦に連なった金ボタンも眩しい濃紺の第一種軍装に、丸くならうとする毛先を持つ眺めの髪を持ち主。その鼻の辺りに薄っすらと確認できるそばかすも明石には見覚えがある。そしてそんな彼女をかつて患者として受け持った事もまた、奇しくも沼風達とは同じであった。

ようやく身体の意図しない硬直も解けた明石は、測距儀から身を乗り出すようにして彼女の名を呼ぶ。もちろんその顔には、久しぶりの再会を喜ぶ満面の笑みがあった。

『ああ、宗谷〜！』

すっかり元気になっている沼風と宗谷の姿を瞳に入れ、なおかつ一年振りの再会を果たした野風や波風の来訪に心浮かれる明石は、すぐに彼女達を艦内にある自身の部屋へと案内した。大湊での初めてのお仕事をした際には会う機会を得られなかった1駆の最年少者かみかぜ神風を沼風達に紹介してもらい、宗谷がお土産に持ってきてくれた北海道名産の鮭の干物や粉末コーヒーをおやつ代わりにしてお互い

の息災ぶりに明るい声を上げる。

宗谷と沼風達の1駆は同じ北方海域を仕事場とする艦としてその友情を培ってきたらしく、幌筵ほろむしろに分派されて励む1駆の小隊に食料や物資を届けている艦が宗谷艦との事で、彼女達の仲は傍から見てもすこぶる良い。明石が宗谷の勤労を讃える言葉を放つや、あぐらをかいて床に座っていた野風が帽子からはみ出ている跳ね上がった髪を揺らしながら声を発してその事を教えてくれる。

『へええ。宗谷は大活躍なんだね。』

『凄いですよ、宗谷さんは。こないだも足元が見えないような霧の中で、宗谷さんは占守しむしゅって島まで行って急病人を乗せて帰ってきたんですよ。慣れた私達だってあの辺の濃霧の海はご免被りたいのに、その後も宗谷さんはちゃんと無事に網走あはしりまで送ったんですもん。』

そばかすが散った鼻の辺りを指先で掻く宗谷を横に、野風はまるで自分の事のようにして友人の快拳を自慢する。大きく胸を張ってしゃべる野風はその表情もまた今日のお日様の様に眩しくて熱が籠っており、宗谷が自身から見ればずっと年下であっても心の底から慕っているという事を明石にも伝えた。

『おお。宗谷、すごいじゃん。』

『あはは……。私なんてまだまだですよ……。』

話の部隊であまり持ち上げられる事が慣れていないのか、宗谷はちよつと困ったように歪んだ表情で笑っている。野風が話してくれた快拳は宗谷艦が独自に持つ音響探深儀を生かした行動であり、いわばお船の命たる者である宗谷の才能が遺憾無く発揮された逸話。胸を張って自慢しても良いような物なのだが、宗谷はそんな姿を野風へと譲って恥じらいも混じった照れ笑いを続けるばかり。明石と

は同じくらしい歳であるのに、良く分別を守った大人しい人柄の持ち主である宗谷らしい姿だった。

だから彼女は決して明石との再会について落胆している訳ではない。そもそもが宗谷の分身は海軍の船として建造されてはいないのだから、神通や金剛のような気性の荒い性格を持つ船の命との交流は海軍籍となるまで皆無であり、自身が運ぶ荷物を待っている人々の笑顔を期待して穏やかな海原を駆ける事を生業としていた彼女は、そんな運送船のお仕事に見合う静かで心優しい艦魂なのだ。明石と初めて会った際は自ら死を選ぼうとする心の苦しみで食事も取らず、骨の形が見て解るほどに痩せこけていた宗谷も、今はふっくらとした白い餅肌を頬に覗かせて微笑み、血の気が失せていた唇は紅でもつけているかのように鮮やかな桜色を保っている。

その姿には元氣の一言がよく滲んでおり、彼女を診療した軍医として明石は嬉しさを隠せない。口に挿し込んでいた鮭の乾物を勢い良く引き千切り、噛む事によって旨みを滲み出すその食べ応えに満足しながら明石は言った。

『ん・・・、ん・・・。元氣になって良かったね、宗谷。こんなに美味しいもの食べれてるんだから、そりゃ元氣か。ん・・・、んん・・・。うめえ。』

ご満悦の明石は友人らと語り合う為に部屋の主にも関わらず敢えて椅子ではなく床に腰を下ろしているが、足元に山と積まれた鮭や鰯の干物、蒸焼牛肉や味付き鱒の缶詰も、満面の笑みの根本であったりする。もちろん全て自身と同じ特務艦である宗谷が調達してきた品々で、明石は当分の酒の肴を工面する苦勞が発生しない事を喜んでいるのだった。

この後も5人揃って花咲くおしゃべりにのめり込み、美味しい一時とかつての患者が見せる元氣な姿で明石の笑みは尽きる事が無い。

沼風達は前回に会った際に明石と一緒にいた相方の事を宗谷から少し聞いているらしく、飽くまで明石の心から明るさを失わせないように『元気をだして。』と心配の声を掛けてくれる。相方の話題を出されるとさしもの明石も乾物を囁むテンポをちよつと遅くして明るかった声が静まりかけてしまうが、すぐにわざわざ自分を氣遣って声を掛けてくれた沼風達の心遣いを察して消えかける笑みを表情に戻し札を口にする。それからお互いに明石の相方の話題をそれ以上触れようとせず、離れている間にそれぞれが得た思い出話の応酬を始める。

意外な事に沼風達の1駆の面々は竣工からの年月の殆どを北方海域でのお仕事に費やしている事もあり、支那沿岸を含む海外へと軍艦旗を進めた経験が無いのだという。だから宗谷と知り合った際、彼女達は国外でのお仕事の経験がある宗谷に色々と日本の外の海の話聞いたらしいのだが、宗谷が国外にて活動していたのは民間の商船の頃の事であり、自分達と同じ軍艦旗を背負った者達がどんな風に外国で活躍しているのか知る事が出来ないでいた。しかしそれに反して明石は春頃に艦隊訓練で台湾や廈門アモイを訪れており、廈門では上司に当たる愛宕あたごや高雄たかおの妹である鳥海率ちようかいいる第二遣支艦隊の歓迎を受けた経験があった為、彼女は沼風達が長年知りたがっていた海外に派遣されている艦艇の事を教えてやった。

これには1駆の面々も大いに喜び、自分達がいつも挑んでいる北の海とは一味違った南の海でのお話に目を輝かせる。なまじ彼女達は20年以上も大湊要港部に腰を据え、流水混じりの海原での漁船の救助や吹雪の中での遭難船舶の搜索、領海侵犯対処などを僅か一個駆逐隊の単独で遂行して来たというのだから、まだ一度も見た事が無い日の丸と違う国旗が翻る海に並々ならぬ思いを馳せるだった。

ちなみにそんな1駆の境遇は当然の様に辛く大変な物であるが、それ故に彼女達は栄えあるこの度の特別大観艦式に参加できている。即ち彼女達のその普段の勤労と苦勞を汲んだのは、艦魂として帝国

海軍を率いている立場の長門だけではなく、連合艦隊司令部も含めた海軍上層部の人間達も同じであったのだ。沼風達は誰一人としてその事を鼻にかけるような言動を見せないが、貧乏な島国の海軍の船として鑑の如き働きを地味ながらも長く続けてきた彼女達は、帝国海軍においてはまさに万人に認められた殊勲の部隊なのであった。

横須賀から横浜沖へと続く帝国海軍艦艇の大名行列は足取りも遅く、明石艦が僅かな旅路にも関わらず横浜の泊地へと到着した日が暮れてからとなる。しかし艦の分身である明石にとっては久々に会った友人達との会話でそれもあつという間の出来事であり、夜は夜で宗谷から貰った缶詰や干物を肴にしてのお酒を伴った語り合いを行う。次の日からは観艦式を前にしての最後の大掃除の日々が始まる為、明石達はいつになくお酒を進めてその友情を深い物とするのだった。

第七一話 「晴れ舞台へ」

昭和15年10月9日。

12年ぶりとなる特別観艦式をいよいよ明後日に控えたその日、既に横浜港沖合いに特設された横約4キロメートル、縦約3キロメートルの式場に錨を下ろしている参加艦艇では、明日の予行を控えて最後の掃除と艦隊の化粧直しが例外なく行われていた。

6列の横隊を組んで波間に浮かぶ艦艇の中には、東京高等商船学校たいせいまるの練習船である大成丸、中央気象台の気象観測船である凌風丸りょうふうまるという軍艦旗を掲げていない船舶も混じっているが、栄えある帝国海軍の観艦式に呼んでもらえた誉れと責任はこの船舶においても同様だからこの二隻の乗組員達は、周りにたくさんいる水兵さんと変わらぬくらいに忙しく船体のあちこちを磨いている。

もちろんそれは帝国海軍艦艇にあっては言わずもがな。何を隠そう明後日の式本番では、その場にいる全ての海軍軍人を束ねる大元帥陛下がかたじけな忝くもその帯刀をここにお進めあそばされるのだ。その際、例え塵の一つと言えども汚れている艦を陛下の恩眼に映してはいけない。栄えある陛下の赤子は常に美しくなければならぬのだ。

いつもは威張り散らしている古参の兵や下士官もこの時ばかりは皆一様にソーフやデッキブラシを持って甲板の上を右往左往し、普段から彼等の理不尽な指示や制裁に鬱憤を募らせる水兵さん達も今日の重労働は苦にならない。これから明後日までずっと停泊である事からお仕事が無い機関科や航海科の乗組員も総出で手伝い、98隻の参加艦艇はついさつき船台から滑り落ちたばかりかと思わせる程にその艦体を磨き上げていった。

しかしそんな中、観艦式の式場となる波間に浮かぶ横隊の内でも南側にある番外列では、他の第一列から第五列に順ずるような軍

艦旗の整列は見受けられなかった。列の一番右端に海軍籍ではない二隻の船が錨を下ろすばかりで、そこにいる筈の帝国海軍艦艇の姿はひとつも見当たらないのである。

ただそれは計画通りの事であり、その場にいる乗組員も艦魂達も番外列に並ぶ艦がどこに行ったかを知っているので取り乱す様子は無い。僅かに陸地の方に目をやれば、そこに並ぶ筈の艦影がちゃんとあるのだ。

実は番外列の艦艇達には他の列の参加艦艇とは違い、ある特別な役割が与えられている。それは番外列に名を連ねる殆どの艦艇が、帝国海軍の中では重要な補助艦艇とされる特務艦という艦種に類別されている事が大きな理由である。戦闘艦艇のように窮屈な構造をしていない艦体を持つ彼女達特務艦、実は今回の観艦式においては一般市民を乗せての見学をさせてあげる拝謁艦に選ばれているのだった。

そして、明石艦あかしはこの番外列に配置されている艦艇であった。

明石艦は式場を見渡せる山下公園近くの本牧地区ほんもくにある繋留棧橋じんげいにて、同じく番外列を構成し、整列位置が割と近い潜水母艦の迅鯨艦と供にその艦影を浮かべていた。例に漏れずに乗組員総出での化粧治しで大忙しの明石艦は、艦首から艦尾に至る甲板のあちこちから賑やかな声が発せられている。

『甲板洗え、解れ！』

『『はい！』』

『回れー！ 回れー！』

甲板下士官の号令に従い、半袖の裸足という10月とは思えぬ格

好をした水兵がソーフ片手に四つん這いになって甲板を磨き、その中でも少し偉い水兵はデッキブラシで甲板をこする。膝をつけずに中腰の姿勢で甲板を拭く下っ端の水兵はすぐに疲労との戦いに陥り、涼しい顔で横浜の潮風を浴びるお偉方の横で歯を食い縛りながらの労働となる。もちろん彼等が見ていないからといって手抜きをする事は海軍独特の精神注入棒を伴った罰直の格好の口実になる為、下っ端の若い水兵達は身体から湯気を昇らせる程に汗だくになってお掃除に励む。

もつともそのお掃除は艦長を始めとする乗組み士官にもちゃんと割り振られてあり、各分隊や部署の持ち場では乗組員の全てが階級の上下に関係なく清掃活動に汗を流していた。

それは艦魂にあっても同様で、明石もまた自身の分身へのお掃除に文字通り人知れず励んでいた。

乗組員の人達が大概の部分は綺麗にしてくれるので、明石は艦内の小さめの船倉の整理整頓と拭き掃除を行う事に決める。1万トン近い明石の分身は海軍艦艇の中ではそこそこに大きな艦で、いくら艦魂といえども一人で掃除するは結構大変な物だ。こういう時は幾分窮屈ながらもすぐに掃除が終わりそうかすみ あられ ゆきかぜな小さい艦体を分身とする霞や霰、雪風といった友人達の事を明石は羨ましく思う。もちろん狭いから自身の住まう部屋を倉庫や物置とせねばならず、日常から神通じんつうという恐怖の鬼教官にシゴかれている彼女達の境遇も勘定する。と一概に羨む事のできる代物ではないのかも知れないが、一蓮托生である自身の乗組員と同じ分量でお掃除に励める事を明石は素直に望む。その根底には乗組員の一人であった相方との思い出があるのは言うまでも無く、明石は同じ綺麗好きな性格を持っていた相方の事をちよっと思ひ出しながらソーフを握った手を船倉の隔壁に押し付ける。

やっぱ、会っつけば良かったかな・・・？

決して口にこ出そうとは考えなかったが、脳裏に過ぎるその言葉で明石は緩く唇を噛む。すると今までも微塵も感じなかった肩の凝りがなんだか無性に気になりだし、明石は隔壁から腕を戻すと大きく息を吐いて、ソーフを持ち替えながら拳を肩の上で弾ませた。

『ふう〜〜ん〜〜・・・。』

艦内に静かに木霊する聞き慣れた機関音と同じテンポで肩を叩き、それに併せて明石の首の後ろで纏めた髪がブラブラと揺れる。明石はこの時に生まれて初めて肩が凝るという感覚を覚えたが、思っていたような清々しさも無ければ僅かに曇る心の空色も晴れるような事は無くてちよつとがっかりする。横須賀を離れた事で胸の中に渦巻く小さな後悔の念も後押しし、口をへの字にして首を捻る明石。

だが彼女はすぐに脱力していた首を据えると、小さく溜め息をして再び灰色の隔壁をソーフで拭き始める。既に相方がすぐ近くにいた横須賀を旅立ち、いま明石の分身が錨を下ろしているのは、数年に一度の海軍のお祭りである観艦式の会場となっている横浜の波間。今更になって会おうとしたって連絡の取り様がないし、マストに登って両目の前に添えた双眼鏡を振り回してみても砲術学校の校舎を見る事は出来ないのだ。

いよいよに迫った観艦式を前にジタバタするのは止めようと明石は心に決めるが、それはただ単に自身の今という瞬間の境遇を鑑みて相方への恋慕の念に諦めをつけただけの事ではない。観艦式に際して一同に会した事を祝った明石を含む艦魂達の宴にて、彼女はこの観艦式では海軍艦艇としての立派な姿を何としても保とうと決心するに及んだ出来事があったからだ。

疲労感という声の無い悲鳴を静かに放つ肩や腕にぐっと力を込め、身体全体を屈伸させるようにして隔壁のお掃除をしながら、明石は

その時の記憶をぼんやりと脳裏のキャンバスに描き始める。

数日前の宴。

それは明石にとっては、知識の面でも絆の面でも色んな事を学べた場所。とても有意義な時間で、初めて顔を合わすその場に同席した艦魂達に挨拶をして回るのも、生来が人見知り等とは無縁の明石にとっては楽しい物だった。

以前に包帯の除去処置をしてあげた整形美人にして今回の観艦式では御召艦の大役を仰せつかった比叡ひえいは、丸坊主だった頭もそこそこに髪が伸びて機嫌も良いのか笑顔が眩しい。艦齡20年以上とは思えぬ若々しい容姿は宴の場でも注目の的で、実の姉妹である金剛こんごうや榛名はるなは『隣に立つな!』と邪険にして彼女を追い回す。もっともその理由は、若々しい比叡に並ばれると実の姉妹である自分達の老け具合が目立つからという物で、当の比叡にしても若干の嫌味を込めて隣に立とうとしていた。明石や神通の世代の艦魂から見れば恐怖の代名詞である金剛も、比叡にとっては顔は似ていなくとも同じ金剛型戦艦という姉妹。からかうのも慣れた物で、金剛が腕を伸ばしてくる前にひらりと身を返して姉との距離を置く。決して口にこそ出せないが比叡と金剛の様子は幼い姉妹のじゃれあいその物で、既に30代も半ばを過ぎた金剛と明石とドッコイの20代になったばかりのような顔の比叡はまさにデコボココンビ。その身長差も比叡の小柄な体格で一層引き立てられており、第一種軍装を着ているのが不釣り合いな程に滑稽に見えるのだった。

そしてこんな二人のやりとりで大笑いになるのは明石も含めた室内にいる全員で、宴の場にはまるで照射灯に照らされたかのような

明るさが宿る。あるのは笑顔と笑い声ばかりだ。

明石はこの和やかな間隙を生かして諸先輩方の脇に歩み寄り、新たに海軍に加わった者としての挨拶をしてまわる。大変に珍しい工作艦である彼女の事を仲間達も快く受け入れてくれ、中でも先程まで長門ながとをお説教にて血祭りに上げていた常盤とぎわは明石を見て驚きも混じった声を掛けてくれた。

『わー、久々にこの顔を見たなあ。なははは、先代にそっくりだ。』

朝日あさひや富士ふじと同じ世代の常盤はそう言うと言白髪混じりの赤毛の髪を揺らして明石に顔を近づけ、透き通るような青い瞳に後輩の顔を映して微笑む。

聞けば明石の先代とは日露戦役の際には同じ第二艦隊を組んだ仲で、蔚山沖ウルサンや日本海海戦はもちろん、なんと第一次世界大戦の際には同じ戦隊に所属して共に青島攻略作戦にも参加したのだという。

常盤は40代の外見に相応しい落ち着きを伴った風貌を持つが、それでも先程の長門へのお説教の様にダメな事はダメだとハッキリ叱る等、分別と態度をしっかりと弁えた人物。言葉遣いには多少碎けた所もあって明石にとっては話しやすい先輩であった。師匠と同じく英国生まれである事からその顔つきもまた彫りの深い西洋人の顔で、この点もまた明石にとっては師匠との付き合いから慣れていた部分だった。

ただ顔つきが自身の記憶にある物だから話しやすいというのは、明石だけではなく常盤にとっても同じだ。まして常盤の場合、記憶に残る同僚の顔はいま目の前にある新米艦魂の顔とまったく同じであった為、明石の持つ感覚よりも常盤のそれは更に鮮明で大きい物である。

故に常盤は慣れた手つきで明石の肩に手を乗せ、共に実弾の飛び交う日本海を駆けた仲間を懐かしみながら声を掛けた。

『テールマナーが上手く出来ない所は、あんたの先代も苦労してねえ。あの頃の帝国海軍は脚気防止の為に一日一食は決まって麵^{めん}が出ただけど、日本生まれだった先代は米が食べれないのをつも愚痴^ぼってたんだよ。なははは。私達、欧米生まれの艦魂にはテールマナーは当たり前の物だったけど、明石はいつも覚えるのに難しい顔をしていたなあ。』

常盤が語ったのは思い出に残る友人のお話。しかしどうも先代は明石と同じく色々と至らぬ部分を持っていたらしく、宴の開幕でテールマナーの無知さ加減を曝け出して笑い者になってしまった明石にはなんだか他人事の様には聞えない。優しい眼差しを伴う常盤の笑みには眼前の後輩を馬鹿にするような腹づもりは感じられないが、明石は再び思い起こす自分の失態で赤面した顔を僅かに足元へと向ける。

『いつだったかなあ。確か日露戦役が始まる前だったと思うけど、おやつ代わりに明石がハードビスケットを食べようとした事があったんだよ。でもさっきも言った通り明石はあんまり麵^{めん}を食べたがらない艦魂^{ひと}だったから、きつと食べる前に叩くっていうハードビスケットの食べ方が解^とれなかつたんだね。口に入れる寸前にビスケットからコクゾウムシが出てきて泡吹いて倒れてたっけねえ。懐かしいなあ、なははは！』

嬉しそうな常盤が何度も口にする自分の名は先代の事を示しているのは解^とっているが、これまた同じように先代が無知故の失敗談を持っていたという常盤の言葉に明石は恥^はずかしさの余り顔の赤い色合いを更に増す。周りにてそれとなく明石と常盤の会話を耳に入れていた者達もどつと笑い出し、二代揃^{ぞろ}っての不甲斐^{ふがい}なさを明石は大いに思い知らされてしまった。関西弁で言うところの「あほぼん」

という奴だ。

もつとも常盤とて長く生きてきた身ゆえに、一方的にまだまだ若い後輩を嘲り笑うつもりは無い。少し荒い感じの言葉遣いながらも優しげな丸い目にもそれは表されており、常盤は音も無く明石の肩に手を乗せると口を開く。それは地に落ちかけた宴の場の中での明石の立場を、一気に引き上げてくれる物だった。

『なはは。でも、明石はよく似たね。あんたの先代も自分の足りない所を常に直そうとしてたし、おまけにまだまだ日本生まれの艦魂ひとが少ない中でよく頑張ってたんだよ。浅間あさまや浪速なにわの姉さんも含んで、私ら巡洋艦の艦魂の間では一目も二目も置かれてたんだよ。あんたの先代はね。』

観艦式参加艦艇の中でも最も古参な分身を持つ常盤の声が響くや、明石は赤い色合いをみるみる内に消し始めた顔を上げる。かつて同じ名前を頂いた者と自分は随分と似ているらしいが、それ故にこの常盤という大先輩が長門や金剛がいる前で先代の事を褒めてくれるのは明石にとっては嬉しかった。

『一目も二目も・・・？』

『ああ。特に地中海派遣で艦隊旗艦を務めた時の活躍は語り草になってね。しばらくしてから出雲いずもがあんたの先代の後任で地中海に派遣されたんだけど、日本から遠く離れて海の特性も全然違うのになどうやったらあんなに駆逐隊の連中を纏ひめれるんだ、って、あの出雲が舌を巻いてたくらいに優秀な艦魂ひとだった。部隊としてだけど、私の生まれ故郷である英国の国王陛下から勲章まで貰ってるんだよ。』

『『『おおお・・・。』』』

常盤の口から語られる初代明石艦の功績に、宴の場のあちこちか

らは一斉にどよめきが発せられる。長門や陸奥といったお偉方の殆どは当時の事を知っているらしく、常盤の言葉を噛み締めるようにして小さく何度も頷いており、静かに騒いでいるのは愛宕あたこや那珂なこ、そして普段から驚きの表情というのを滅多に顔に出さない神通と、まだ誕生していなかった為に当時の事を知らない艦魂達であった。

もちろん大先輩である常盤が語ったという事にもそのどよめきの理由は幾分はあるのだが、神通や愛宕達の中では常盤が放った声の中に「出雲」という艦魂の名があった事が理由としてはちょっと大きい。

日露戦役にて蔚山沖、対馬沖と縦横無尽の活躍をした第二艦隊の旗艦を務めていた事で名を馳せる出雲は、現代においては連合艦隊と共に帝国海軍の双璧を成す支那方面艦隊を率いる艦魂社会の大御所で、艦齢40年以上にも関わらずに立場としても連合艦隊旗艦の長門とは同格という人物。湧くが如き智謀と屈指の戦上手ぶりでの名にして、明石や神通の上司に当たる四戦隊の高雄たかおが艦魂としての教えを請いだお師匠様がこの出雲であった。

蛇足ながら高雄の冗談好きで陽気な人柄はここに源流がある。

さらに神通にとってもまた、出雲という先輩は畏敬の念を人並み以上に傾けている人物である。なぜなら実はこの出雲、神通が率いる帝国海軍最強の部隊、第二水雷戦隊において、第二代戦隊長として務めた経歴を持っているのである。

まさに文武両道を地で行き、その実績もまた他の追随を許さぬ希代の天才艦魂。それが出雲なのだ。

そんな誰にも認められている出雲が評価したとくれば、誇り高い名を受け継いだ第二代明石にもハクがつくという物。佐官、将官の襟章をつけている艦魂だってそこそこに多いこの場でそれが示されたとくれば尚更で、明石は既にさっきの恥じらいも完全に忘れて表情を明るくさせる。わざわざ自分を氣遣って常盤が差し出してくれたコクテールの味もいっになく美味い。すっかりいつもの笑みを取

り戻した明石は無意識に胸を張り、背後や周囲から得られる尊敬の眼差しに酔いしれる。

再び発せられる大先輩の言葉もまた、明石の浮上した心を天に浮き上がらせた。

『あんたの先代は私ら巡洋艦の誇りだったなあ。敷島さんしきしまと本気で殴り合いまでするようなトコもあって、仕えてた駆逐艦の子らからも特に信頼されてたよ。だからこそ朝日さんもあれだけ慕ってたんだらうね。』

『あ、はい！ 私、朝日さんに教えを請いなんです！』

『おお。なんだ、そうなのかあ。朝日さんと先代は仲が良かったから喜んでたろうなあ。なはは。』

二代揃って明石と朝日が仲睦まじい間柄である事は、明石だけでなく常盤の心をも明るくさせる。常盤の思い出の中にしかない明石の先代は十年前に標的艦として処分されているのだが、見てくれも物言いいも、そして朝日との縁を持っている点でもそっくりな明石に、常盤は未だに往年の友人が存命であるかのような錯覚を起こす。それくらい眼前の若者、明石は先代とよく似ていたのだ。

そして些か老いも見てと取れるも極めて元氣な身体を持つ常盤は、明石の肩を何度か叩いて笑みを合わすと手近にて給仕に励んでいた霞に向かって声を放つ。

『給仕ちゃん。ウイスキーのグラスを持ってきてちょうだい。明石はどう？ コクテールは止めてワインでも飲んでみるかい？』

相当に機嫌が良いのか、常盤は容姿に滲み出る老いを微塵も感じさせぬような声色で言った。もっとも機嫌が良いのは今しがた大先輩に褒められたばかりの明石も同じで、そこそこにお酒には自信もあった彼女は常盤の声色に合わせるようにして声を放つ。

『よし、私もウィスキー!』

『お、話せるねえ、明石。やっぱお酒はウィスキーよ!』

師匠とは違って陽気で活発な常盤とは、勢いの波長も明石とは良く合う。お互いに何気ない動作や息遣いに大声で笑い出し、やがて霞がトレイに乗せて運んできたグラスをそれぞれが手に取るや、歳の差も顔つきもまるで違う奇妙なコンビは乾杯を始める。

『『かゝんぱゝい!』』

二人の笑い上戸な所もまたお酒の勢いをよく引き立て、明石と常盤はわーわーと子供のように声を上げながら琥珀色のグラスを唇に添えて傾けた。その角度はすっかり二人のはしゃぐ心に火が着いている事もあって、喉を一度鳴らした程で既に鋭角となっている。

だが二人がグラスの中身を飲み干して大きく息を吐いた刹那、宴の場には少しかすれた感のある声が響き、騒がしかった二人の心は瞬時に鎮められた。

『常盤。その飲み方はやめなさいと何度も言ってるでしょう。』

ゆっくりとした口調のその声は今まで宴の場では発せられていない声色であったが、明石はすぐさまその声の主を明確に断定する。伝わりの良い弦楽器のような音色と共に荘厳さを伴ったその声を、彼女はつい先日に関近で耳にしていたからだった。

室内にいた者が一斉に直立不動の姿勢を取って視線を集める声の発信地。それは通路から部屋へと繋がるドアの前で、そこにはこの宴に出された数々の料理を作ってくれた春日かすがを従える富士がいた。真っ白な長い髪を肩口から流し、部屋の電灯の光りを時折反射して

輝く銀縁のめがねに右手をかざした富士は、ちょっとだけ細めた若草色の瞳を明石と常盤の方に向けてじっと見つめてくる。白い傷病衣を身に纏って車椅子に腰掛けている彼女のその姿は明石が先日会った際と全く同じであるのだが、再び彼女が唇から漏らした声には僅かに憤りの色合いが滲んでいる。

『貴女は今でもご奉公に励んでいる身で、ついこの間まで南洋に赴いていたのでしょうか？ いわば貴女にとっては戦地の筈よ。そして私達がかつて戦地にいた頃、そんなお酒の飲み方が許されていた事はないわよ。』

語りながら富士は左手を僅かに上げて背後の春日へ合図を送り、春日に押された富士の乗る車椅子は鉄の軋む音を放って常盤の下へと近寄ってくる。先程までは室内においても最年長者だった常盤も、この富士の前では彼女の言う「あの子」どまりの立場。おまけに自身への指摘の言葉を口にして車椅子の動揺にも従う事無くまじまじと視線を向けてくる富士にかかつては、さしもの常盤も表情から完全に笑みを消してしまう。

『ぐあ・・・、ふ、富士先輩・・・。』

『ぐあ、じゃないわよ。まったく、もう。』

呆れた物言いをする富士と、彼女が腰掛ける車椅子を押して近寄ってくる春日。富士と同様に春日もまた常盤とは年代的に近く、供に波高しの日本海にて敵弾を潜り抜けた戦友である事は周知の事。こうして顔を合わせるのは数年ぶりであったりもするが、そんな貴重な出会いにあっても至らぬ所を容赦なく指摘してくる先輩が、常盤にとっての富士という艦魂。決して頭ごなしに怒鳴りつける様子は持たないが、富士の声が持つ怒りの色合いと恐怖は30数年以上前とは少しも違ってはいなかった。

『明石。』

『あ、は、はい。』

『古来よりこの日本という国で戦う事を生業とした武士と呼ばれる人達は、戦の前にお酒を含む事を習慣としていたわ。もちろん今でもね。でも、このあいだ話した日本海海戦の時もそうだったけど、実際に戦場に立つ際、彼等は口の中に指を突っ込み、舌の奥を強く押してお酒を吐いてから戦った物よ。何故かは解るわね？』

『うう・・・、は、はい・・・。』

常盤に続いてすっかり酔いが冷めた明石は、富士の問いかけを受けて無尽蔵にお酒を飲まんとする勢いであつたさっきまでの自分の姿を恥じる。

訓練始めや新年を迎えた際など、帝国海軍では必ずお酒が振舞われる物でそれは実際の戦場においても例外ではない。ある種の神事にも通ずる物としてお酒を捕らえている日本独特の文化もあり、実際に春日や常盤、富士が激烈な戦闘を体験した日本海海戦時には合戦用意の号令と供に一杯のお酒が乗組員達に振舞われ、それを持ち場にある艦砲等の設備にも注いで願掛けをした程であつた。

だがそれは決して「酔って恐怖を忘れた状態で命のやりとりをしろ。」という意味合いではなく、ただ単に明るい前途を期待してげんを担いでいるだけに過ぎない。まして酔いという物は正常な判断、行動を遮る事は往々にしてある物であるから、戦場に赴く事を生業とする者達は戦の直前に酒を吐き出す事を常識としていたのである。それは富士が戦場へと赴いた明治の末期は元より、古くは室町時代にまでも遡る日本人の叡智の一つで、彼女は自身を含めた帝国海軍の艦魂にとつてもそれは他人事ではないと考えている。

そして身体に酔いを残させないそもその策として、富士は常日頃からお酒を気の向くままに飲まない様にするべきだと考えており、常盤と明石に掛けた言葉はここから来た物であつた。

『私は別にお酒を飲むなどと言ってないし、酔って楽しむ事を悪い事だと思っている訳でもないの。私だって友人と思う存分お酒を楽しんだ事はあるわ。でも私達が戦場に赴く時というのは、この国の舵取りにも関わる重要な時。そこでは無駄な勢いとか算の無い勇猛さは全くの無用、冷静にして理論的裏打ちがなされた判断と行動のみが必要とされるのよ。』

戦の根本的原則を語る富士だが、真珠色の生地で出来た着物を模した傷病衣に車椅子という特徴的なその姿で軍装を身に纏った後輩達に教えを授ける光景はちょっと変な感じもある。真っ白な長い御髪に幾重にも刻まれたしわを伴う彼女の顔からは既に若さという言葉の欠片も見つけることが出来ず、金剛や神通のような荒々しい性格を持っていない事もあって、この時に初めて富士を目にした者にとってはその言葉には些か説得力を感じれないのが正直な所である。しかし明石や常盤を含めたその場を同じくする大部分の者達は皆この富士という艦魂とその分身の経歴を程度の差こそあれどおのが必ず耳にしており、彼女が放った言葉に一切の疑いを抱かずにしっかりと肝に銘じていた。

36年前に栄えある連合艦隊第一戦隊に属していた彼女の分身は戦艦としては最も大事な主砲に旧式な構造を持っていたにも関わらず、金剛が師匠と仰ぐ敷島を筆頭とした当時最新鋭の敷島型戦艦に劣らない実績を挙げたという殊勲の艦。正面転換や一斉回頭という複雑な艦隊運用の面でも一時として隊列より落伍した事など無く、その上で黄海海戦や日本海海戦では射撃性能が違う三笠艦、朝日艦、敷島艦とも見事に協同しての攻撃を行ってみせている。そしてそんな現実には、艦の命たる富士のそもその優秀さもかなり大きく寄与していた。

故に彼女は病弱な感も伴う落ち着いた老婆というその風貌とは似ても似つかない、戦闘艦の艦魂としては帝国海軍でも屈指の戦士と

して後輩達には名を覚えられており、鬼と渾名を頂く程に気性の激しい金剛や敷島、未だに連合艦隊旗艦と同格の立場を頂いて励んでいる出雲、艦魂としても軍医としても常に明石に道を教えてくれる朝日などが一様に平伏する程の大人物なのである。

『明日、いや1秒後に出撃がかかるかもしれない。それに供えているのが、今の常盤と明石よ。貴女達は常にそんな戦場と紙一重で日常を送っているの。だからいつでも余裕という物を持っていなければならぬ。例えそれがお酒でもよ。』

『『はい……。』』

そんな富士が口にする戒めには、さしもの常盤と明石も素直に返事を返す他無い。特に先日初めて会ったばかりの明石と違い、常盤はまだ富士が現役バリバリの帝国海軍一等戦艦として励んでいた頃からの付き合いである。当然、大先輩のおっかなさはよく知っており、これ以上のお叱りを受けたくない常盤はペコペコと頭を下げて自身の失態を詫びた。

ただ、富士は久々に会った古い付き合いの常盤を決して嫌っている訳では無い。無作為に酒を喉へと流し込むのを戒めたのは、富士が戦艦の艦魂として生きてきた長い年月の中で身に付けた叡智の余韻。その矛先は富士にとっては新参の明石だろうが、かつて自分がまだ菊の御紋をつけていた頃の仲間だろうが関係ない。

悪い物は悪いし、良い物は良い。

そんな当たり前の事を一貫して自身の価値観とするのが、富士という年老いた艦魂の持つ性格のなのである。

だから彼女は常盤と明石が自身の言葉に反省の念を抱いている様子を緑色の瞳に映すと、すぐにそれまで滲ませていた怒りを声色から消し去る。

『昔から貴女はお酒を飲みすぎなのよ、常盤。まあ、変わってないそんな所が見れて、私としても嬉しいけどね。ふふふ。でももう少し自重という言葉を意識なさい。』

『うひ……。富士先輩も変わってないですねえ……。』

頬を掻きながら苦笑いする常盤の前で、富士は後輩の元気をよく理解して頷きながら笑った。もはや二本の脚で自在に甲板の上を歩く事も出来ぬ姿を富士が持っていたようにも、常盤にとっては彼女という艦魂（ひた）が持つおっかなさは些かも衰えていない様に思え、ちょっと富士の顔色を窺う事に意識を傾けながらそれに応える。明石や長門といった遥かに年代が下の者達が緊張した面持ちで視線を集中させる中、常盤は富士の車椅子を押してきた春日にも挨拶し、3人はこうして無事に合う事が出来た今日という日を祝った。

『みんな、私達の事は気にしなくて良いから、思うように楽しんでちょうだい。』

それまで静かだった室内と視線を一樣に向けてくる後輩達に気付いた富士は、室内にいる者達の顔をゆっくりと一瞥しながらそう言った。一応は皆その言葉に従って仲の良い仲間内と声を交え始めてみるも、やはり帝国海軍艦魂社会の長老である富士の存在は大きく騒ぎ立てるような声は出さずに常盤や春日、富士に対してチラチラと視線を送る。

一方、明石は富士に挨拶こそしたものの、久々に同じ年代の仲間と顔を合わせた先輩方の邪魔をしてはいけな思考え、部屋の隅っこにてまた静かにお酒を飲み始めている神通や那珂のいる方に戻ろうとする。だがさつき常盤も言っていた様に明石は富士達と同じ時代に戦った先代によく似た容姿を持っていた為、富士達は明石さえ良ければ一緒に話に混じって欲しいと願い出てきた。

自身の師匠である朝日以上に威厳と気品を備える富士の願いを断

る事など明石にはできない。もっとも富士を始めとした先輩方とても自分を可愛がってくれている事は明石も理解しており、特に普段から顔を見る機会が得られない練習特務艦である富士や春日との一時はとっても貴重な時間であると考えた明石は喜んで富士達の会話に参加する。

『うーん、ほんとにそっくり。なんだか私らだけが老けたみたいだ。』

『おいおい春日、私はまだ老けたとは思ってないよ。これでも昔と同じ20ノットからの速度が出せるんだからね。』

『ふふふ。常盤は日本に來た時から船足と同じように足も速かったのよ、明石。いつだったか、朝日が持った敷島のティーカップを壊しちゃって、この子は敷島に散々に追い駆けられてたんだけど、結局はなんとか逃げ切ったのよね。懐かしいわねえ。』

『あはは。』

『なはは。あの時はヤバかったですよ。何されるか解った物じゃなかったからなあ。ゴメンと言っても聞く耳持たずだし。』

お互いの近況も話さずに富士達が笑み伴って声に変えるのは、今から30数年以上昔の思い出。話の輪に混じる明石はその思い出を共有していないが、それは楽しそうに笑い合う3人の先輩達と一緒に明石も笑う。可笑しかった記憶が強く印象に残るのは誰しも同じで、常盤や春日が次々に話す昔話を、富士は明石に注釈を与えてやりながら楽しんだ。

特に常盤はもう既にそこそこのお酒を飲んでいる為か、尊敬する先輩と苦楽を共にした仲間との会話にご満悦となり、たまたま近くにいた給仕の者に対してお酒と食べ物を見繕ってくるように頼む。明石はそんな常盤にまたもや富士の静かなお叱りが飛ぶかと心配するが、同じ時代の同じ波間を共に駆けた仲間との久方ぶりの触れ合いを楽しく過ごしたいという誘惑には、今だけは富士もさすがに勝

てなかったらしい。『給仕ちゃん。』と声を放って、手旗信号の真似でもするかのように大手を振って給仕を呼ぶ常盤を目にしても、彼女は笑みを崩さず戒めの言葉も漏らさなかった。

しかし常盤の下へと給仕の者がやって来て注文を受ける際、突如として富士は口を開き、先に常盤が申し付けていた注文の内容を修正する。

『給仕ちゃん。ジガーを2つ。富士先輩と春日はワインが好きだね。白ワインのグラスも2つだ。あと適当に料理も4人分持ってくださいよ。』

『いいえ、5人分よ。お酒も白ワインのグラスをもう一つお願いね。』

富士の言葉を受けて注文を了解した給仕が早速用意の為に戻っていく中、思いもしなかった富士の声に彼女以外の3人は顔を見合わせる。多くの仲間達がいる宴の場であっても、いま語り合いの輪を構成しているのは4人。なまじ30数年前の昔話をしていたというのだから、例え近くに誰かがいたとしてもその輪に勘定するのは少し無理がある。参加させてもらっている明石だって、富士の注釈が無いと先輩方のお話についていけないのだ。

すると富士は首を捻る3人を横目に見ながら小さく笑い、車椅子から少し身を乗り出すようにして宴の場を見回す。そしてゆっくりとした視線の流れを止めるや、彼女はその視界の中心に捉えた可愛い愛弟子の名を呼んだ。

『陸奥。』

『あ、はい。富士様。』

同じ戦隊を組む山城や伊勢いせと談笑していた陸奥は、富士の声を受けると嬉しそうに張り上げた声で返事をして小走りで富士の下まで

近寄ってくる。常盤のように同じ英国生まれでもなければ、お船としてこの世に誕生した年代すらにも共通点が無い陸奥と富士だが、歩み寄るなり深々と腰を折ってお辞儀する陸奥の姿には、彼女が富士を心の底から深く尊敬している事が示されていた。

『富士様、ご無沙汰しております。先輩方との積もるお話の邪魔にならないようにと思ったのですが、挨拶が遅れました事をお詫び致します。』

姉とは大違いで礼儀正しく丁寧な言葉遣いの陸奥は、強い巻き癖の前髪を一度手で直してから更に深く頭を下げる。宴の場に居る全ての者達にも一目瞭然な謝罪の姿勢だ。

だが富士は頭を下げた事ですぐそこにあつた陸奥の顔に手を伸ばし、その頬を優しく撫でてやりながら優しい言葉掛けて頭を上げさせる。度が過ぎた礼儀正しさを持つ陸奥の性格もあるのだが、富士は彼女の言葉に反して謝罪を求めるつもりなど微塵も無かった。

『陸奥。元気なようね。最近は一戦隊の艦隊訓練の成績も良いらしいじゃない。』

『有難う御座います。富士様。』

富士の厳かにして気品ある声色と、「様」という敬称を用いて富士を呼ぶ陸奥の言動もあり、二人の様子は玉座にて腰掛ける女王陛下を前にして平伏す忠実な臣の様。陸奥は富士の暖かい手の感触と言葉を受けても中々頭を上げず、どれほどまでにこの富士を彼女が尊敬しているのかを明石によく理解させた。

それもその筈。実は二人の関係は部屋の一角にてその光景を眺めている姉の長門とその師匠にして今は上海にいる朝日の事情と全く同じで、陸奥にとっての富士は教えを請いだ師匠にして自身の身体に誇り高い英国の血を残してくれた偉大な母。すなわち横須賀海軍

工廠にて陸奥の分身が進水する際、艦の命である陸奥を取り上げてくれたのは当時横須賀に在泊していたこの富士であった。

故に陸奥は富士を一辺のよどもも抱かずに崇拜し、例え軍艦旗を翻す仲間達の全てを敵に回そうとも師匠に従おうと強く心に決めている。胸の中に秘めたその決心から滲み出しているのが、今のような富士に対する陸奥の態度なのである。

そしてそれに対して富士もまた、麗しく礼節を重んじる陸奥を大変に可愛がり、東洋人の顔つきながらも古き良き英国淑女の姿を垣間見せる彼女を自身の誇りとさえ思っている。まさにそれは、富士の祖国の言葉で王女を示す「Her Royal Highness」その物であった。

やがて富士は愛娘である陸奥との語らいを少しの間続けると、僅かに瞳が持つ緑の色合いから鮮やかさを消して陸奥に声を掛ける。刹那、常盤や春日、そして明石は富士の声の音色に、それまでの明るさとは真逆の感情が込められている事を察した。

『陸奥。あの人は連れて来れたのかしら・・・？』
『・・・はい。』

陸奥は富士と同じ様に表情から笑みを消すと、胸の内ポケットに手を突っ込んで何やら真っ白な和紙で出来ている包みを取り出す。余程大事な物らしく、ポケットから取り出すや軽く手の甲で擦って目に付く埃を払い落とし、手の平に収まりそうな大きさであるにも関わらず揃えた両手の上に置いて富士の前にゆっくりと差し出した。

『昨年に民間に売却されたので少し時間が掛かりまして、交通船や漁船の艦魂にも声を掛けてやっと行方を捜せました。呉軍港のすぐ近くの吉浦海岸にある栈橋にて解体されたとの事でした。もう少し大きい物を拾って差し上げたかったです・・・。』

『いいえ、陸奥。大小はいいのよ。今も生きてる私達に残されている事が大事なの……。』

陸奥から手渡された小さな紙包みを手に取った富士は、声を返しながらゆつくりと包みを開けて行く。幾重にも折り畳まれた紙包みだが命令書の封筒よりもまだ小さい物であり、富士がそれを開けて中身を皆の前に曝け出すのに時間は掛からなかった。

『……。』

再び宴の場にいる者達が声を失って視線を注ぐ中、富士の手の平で開かれた紙包みの上には、赤錆も浮いた一本のボルトネジが照明の灯りを受けて鈍く輝いていた。見るからに古めかしく、艦の構造材に用いるのには小さ過ぎるそのボルトを、艦の命である彼女達はすぐさま配管といった小さな物に使われる物であると察する。しかしそれはただの古びたボルトではなく、富士にとってはかけがえの無い戦友の成れの果てであった。

『……いちゆくしゅま。ふ、ふふ……。』

悲哀の色も混じった瞳を細くして呟く富士。

彼女が放つ言葉が何を指しているのか明石には解からなかったが、常盤と春日は富士の放った言葉の意味が解かったらしく、富士の隣に寄り添って彼女の手の平にて輝く古びたボルトを見つめる。すると常盤はその表情を瞬時に驚きとは入れ替わりに悲しみの色に染め、僅かに震え出した声で富士にそのボルトの持ち主であった者の名を問う。

『富士先輩……。ま、まさか^{いっへん}厳島さんは……。？』

『……。ええ。厳島さん、解体されたの……。』

富士の返答を受けた常盤は無言のままで俯き、ふと右手を前髪で隠れた目の辺りに押し付けて乱れ始めた呼吸を整えようとする。二人のやりとりを黙って聞いていた春日もまた、静かに目を閉じて言い掛けた言葉を飲み込んだ。それに反して富士は極めて優しそうな笑みを手の平のボルトに向けているが、その細めて湿り気を帯び始めた瞳にはやはり悲しみの色が抜けていない。

そんな3人の様子をすぐ近くでこれまで目にしてきた明石は、富士が手にするボルトが誰の物なのかを陸奥に問おうとするが、どうやらそんな明石の心の内を陸奥は視線が合っただけで悟ったらしい。ほんの僅かな溜め息を放つと、陸奥は静かに声を響かせてボルトの持ち主の名を宴の場にいる全員に示す。

『清国との戦の頃より帝国海軍の船として励んでこられた大先輩。三景艦の一翼を担われた松島型防護巡洋艦の二番艦、^{まつしま}厳島さん。昨年の11月末から呉の吉浦地区にある栈橋にて解体作業に入り、今年7月、……無事に解体なされました。』

『うう……、うううっ……！』

ただ静かに陸奥が語ったかつての仲間の最後を耳にし、常盤は両膝を折り、富士の車椅子の肘掛けにすがる様にして泣き出した。そのすぐ背後では春日もまた、閉じた瞼の隙間から涙を静かに流している。この二人と富士を含めた三人にとって、陸奥が語った厳島という艦魂は帝国海軍の船としての先輩でもあり、同じ波高しの日本海を駆けた大切な仲間であった。これまでも当時の戦友の何人かが役目を終えていくのは3人とも目にしてきたが、仲間がまた一人、この世から消えてしまったという現実を受け止めるのは老練な彼女達でも決して容易な事ではない。お説教を長門に浴びせてお叱りを与えた常盤も今はさっきまでの陽気さが嘘かと思える程に嗚咽の声をあげ、富士が乗った車椅子の肘掛けに埋めている額を上げようと

はしない。春日も頬をつたう涙を拭おうとはせず、僅かに顎を上げて鼻をすするばかりであった。

やがて誰と言う事も無く、陸奥が持ってきたボルトの正体を知った宴の場にいる者達が一斉に無言で右手を額に添える中、富士は肘掛けにて泣きじゃくる常盤の肩に手を乗せて呟くように言った。

『・・・フランス語の訛りが酷くて、話をするのは大変だったわね。自分の名前も厳島って発音できたのは、貴女が日本に来てしばらく経った頃の事だったわね。常盤・・・』
『う、ううつ・・・！』

富士の思い出話を耳にした常盤が一際嗚咽に苦しむ声を大きくしてそれに応える。すると富士はすぐ近くにあった常盤の頭を幾度と無く撫でてやり、悲しみと戦う後輩の苦痛を和らげてやった。一向に泣き声の音階を下げない常盤の頭に手を乗せた富士は少しの間だけ沈黙すると、僅かに顔を春日の方に向けて再び声を上げる。

『凱旋観艦式の時だったかしら。ふふふ、魚料理に出すワインは白ワインに決まってる、って随分怒られてたわね。春日・・・』
『はい・・・。あの時も料理を作ったのは私でして、フランス生まれの、い、厳島さんには、ワインの選び方をしこたま・・・、お、教えられ、ました・・・。』

春日の声が返ってくると富士は深く頷き、やがて彼女の頬を電灯に照らされて輝く一筋の流れが伝っていく。思い出の中に蘇るとても小柄だった厳島という名の艦魂を彼女は懐かしみ、同時にそんな厳島が今はもう手に平に収まる程度の大きさのボルト一本にまでなってしまった事に強い寂寥感を覚えた。

しかし富士は厳島がこの世を去らなければならなかった事に対して、不条理や疑念を覚えた訳ではない。現代においては旧式とされ

る自分達よりも、まだ古かった厳島艦。ただそれだけの事が船の解体の理由としては十分であると、富士は同じく一つの船の命として考えているからだ。

春日が富士に対して声を返した後、しばらくの沈黙の時間を持つてから富士はおもむろに自身の胸へ左手を添え、右手の手の平に乗るボルトをじっと見つめて言った。

『・・・これで良いのよ。八島やしまや初瀬はつせの様に、志半ばで沈んだ訳ではない。傷だらけになってもなんとか生き残り、大正、昭和と、時代の流れを彼女はその目で見える事が出来た。そして・・・、新しい時代に波間を駆るのは新しい時代に誕生した者の役目だと、聡明だった厳島さんはきつと理解していた筈よ。本当はもう少しだけお話したかったけど、船として厳島さんが生きる時代も、役目も、もう終わったのよ。・・・ふふふ。きつと今頃はインド洋辺りにいて、ワインでも飲みながらのんびりと故郷のトゥーロンを目指してるのよ。私達は厳島さんの航海の安全を祈ってあげなくてはいけないわ。』

『うううつ・・・！』

言い終えた富士は右手に持っていたボルトを左手に持ち替え、先輩との別れを惜しむ常盤の頭を再び撫でてやる。本当なら富士とて厳島との別れは不本意であるのが正直な所であるが、同じく異国からこの日本という国の海軍艦艇として渡ってきた彼女は、やつとお勤めが終わって故郷へと帰る事ができる厳島の旅立ちを邪魔してはいけないと考え、敢えて自身を律する。日清戦争時は栄えある帝国海軍の主力として戦場に立った厳島という先輩に、未熟な後輩で成り立つ帝国海軍艦魂社会という後顧の憂いを残してはいけないと思った。

偉大な先輩だったからこそ、心配を抱かせないでやろう。

そんな気持ちを胸に秘める富士は、常盤や春日とは別にすぐ近くに立っていた明石に視線を送り、手にしたボルトを差し出して口を開く。

『明石。』

『は、はい！』

『そこにある机の上に、このボルトを置いてちょうだい。それからさっき注文した5人目の白ワインと料理を、ボルトの前に並べてあげて。』

『はい。解かりました。』

先輩達が一様に涙を飲んで別れの苦痛と戦う様を見ていた明石。

富士の言葉に二言返事で了解の意を示し、その手から今は無き偉大な先輩の亡骸を両手で授かった。そのまま明石は部屋の片隅にてポツンと佇んでいた小さな机へと向かい、まずボルトを机の中心にそっと置いてから、机の前縁の部分に後ろをついてきた給仕が持つ料理や白ワインの入ったグラスを並べる。思いがけない幸運として給仕が用意してきたのはお魚の料理で、明石は春日のようにフランス生まれだったという先輩からワインの選び方でお叱りを受ける事はないと察して安堵した。

『富士さん、終わりました。』

『ああ、有難う。さあ、常盤。』

『うう、ううう……。』

明石が振り向いて指示を全うした事を伝えようと、そこでは車椅子の方向を机へと向けた富士が泣き崩れる常盤の肩を触れて起そうとしている光景があった。厳島という先輩には余程にお世話になったのか、常盤は春日に抱かれるようにして立ち上がるものの、春日が

手を離そうものならすぐに崩れ落ちそうな状態。富士はそんな常盤を励ましてなんとか立たせようとしており、彼女が今から亡き戦友の為に何事かをしようと企図しているのが明石にも解かった。ただその企図している詳細は明石どころか、富士の教えを授かってきた陸奥にも解かっていないらしく、常盤を立たせようとする春日や富士の手伝いもせずにちよつと首を捻って富士の魂胆に思考を巡らす。だがその時、宴の場にいた者の中から意外な人物が声をあげるや常盤の隣へと歩み寄り、180センチを超えるその大きな身体に見合う腕力を駆使して春日と一緒に常盤を立たせながら口を開いた。

『富士さん、ワシも参加させてもらいますわ。厳島さんにはガキン頃に世話になりましたんやけど、ワシの先代もよお世話になったと聞いとりますさかい。』

『有難う、金剛。あの人もきつと喜ぶわ。』

抱き寄せるようにして常盤を抱え上げる金剛に、富士は綺麗な笑みを見せて金剛の申し出に大きく頷く。富士と同じ英国生まれの金剛にとって、富士が企図している事はなんとなく想像できた。それはこの富士という艦魂が軍艦旗や菊の御紋を背負いつつも、常に大事にしてきた英国との所縁に関わる所が大きい。

やがて常盤を金剛に任せた春日が給仕が用意した4人分のグラスを手にして戻ってくると、それぞれがグラスを手にして肩の高さにグラスを持った右手をあげる。止め処なく涙を頬に流す常盤はグラスを握った手もブルブルと震えていたが、後輩である金剛が耳元で呟く言葉に唇を噛み締めながら頷いた。

『常盤の姉さん。今はこん歌を歌えるモンも殆どおらんようになってしもたけど、富士さんや常盤の姉さん達が大事にしてきたこん歌フランス生まれの厳島さんも好きやったゆうて敷島の親方から聞いてますさかい、頑張って歌うてやろうやないですか。厳島さん、き

つと喜んでくれるさかい。』
『う……、うう……。』

大きな身体と愛弟子の神通以上に峻烈な気性を持つ金剛。関西訛りの荒い言葉遣いと強面の風貌もあって弟子を含んだ艦魂達からは恐れられるが、彼女は決して神通の様に仲間内から嫌われている訳ではない。教育にはげんこつを伴うのが当たり前とする姿勢は弟子と変わらないが、その実は他人を思いやり、励ましの言葉を器用に扱う事の出来る繊細な人物である。伊達に長く戦艦の艦魂をやつて来た訳ではなく、この辺りがまだまだ未熟な教え子とは一味違う。むしろこんな金剛の一面に仲間を殺めてしまった苦しみを助けられたからこそ、荒くれ者の神通はこの人に教えを請いだのだった。

その内に金剛は常盤がグラスを握った手を肩の高さで正面に伸ばしたのを確認すると、富士の方に視線を投げて準備が整った事を無言で知らせる。富士は金剛の気遣いと協力にグラスを僅かにかざしてお礼とし、ゆっくりと顔を正面にあるボルトが置かれた机へと向ける。

すると富士は車椅子の背もたれから背中を離し、大きく胸を張って息を吸い込むとそれを歌声として桜色の唇から漏らし始め、金剛と常盤、春日もそれに続いて歌声を奏で始めた。

Should auld acquaintance be
forgot,
and never brought to mind?
Should auld acquaintance be
forgot,
and auld lang syne?

For auld lang syne, my dear,
for auld lang syne,
we'll tak a cup o' kindness
yet,
for auld lang syne.

(旧友は忘れていくものなのだろうか、古き昔も心から消え果てるものなのだろうか。友よ、古き昔のために、親愛のこの一杯を飲み干そうではないか。)

And surely ye'll be your pint
—stoup!

And surely I'll be mine!

And we'll tak a cup o' kindness
syet,

for auld lang syne.

For auld lang syne, my dear,

for auld lang syne,

we'll tak a cup o' kindness
yet,

for auld lang syne.

(我らは互いに杯を手にし、いままさに、古き昔のため、親愛のこの一杯を飲まんとしている。友よ、古き昔のために、親愛のこの一杯を飲み干そうではないか。)

We twa hae run about the brae

s,

and pou'd the gowan s fine ;

But we've wander'd mony a wea

ry fit,

sin' auld lang syne.

For auld lang syne, my dear,

for auld lang syne,

we'll tak a cup o' kindness y

et,

for auld lang syne.

(我ら二人は丘を駆け、可憐な雛菊を折ったものだ。だが古き昔より時は去り、我らはよろめくばかりの距離を隔て彷徨っていた。友よ、古き昔のために、親愛のこの一杯を飲み干そうではないか。)

We twa hae paidl'd in the bur

n, frae morn'ing sun till d'ine ;

But seas between us braid hae

roar'd

sin' auld lang syne.

For auld lang syne, my dear,

for auld lang syne,

we'll tak a cup o' kindness y

et,

for auld lang syne.

(我ら二人は日がら瀬に遊んだものだ。だが古き昔より二人を隔てた荒海は広かった。友よ、古き昔のために、親愛のこの一杯を飲み干そうではないか。)

And there's a hand my trusty
fiere !

And gies a hand o' thine !

And we'll tak a right guide—wi
llie waught,

for auld lang syne.

For auld lang syne, my dear,

for auld lang syne,

we'll tak a cup o' kindness
et,

for auld lang syne.

(いまここに、我が親友の手がある。いまここに、我らは手をとる。いま我らは、良き友情の杯を飲み干すのだ。古き昔のために。友よ、古き昔のために、親愛のこの一杯を飲み干そうではないか。)

富士の美しい英国訛りの英語に率いられ、常盤を始めとした後輩達がそれに続く。旅順沖で機械水雷にかかった時、濃霧の中で不慮の事故を起した時、敵弾に艦体を貫かれた時、大時化の荒波で座礁した時、標的艦として水漬く屍となる事を最後の役目とした時と、仲間を失うその都度、英国生まれの者達が多かった事から歌われてきた富士の祖国の民謡「Auld Lang Syne」。帝国海

軍でも兵学校において独自の日本語の歌詞を設けて歌われる事で有名なその歌を歌い終えようと、富士達はそれまでずっと肩の高さにて前に伸ばしていた腕を折り曲げて握られていたグラスを傾けながら口に運ぶ。他の3人もそれに従ってグラスの酒を飲み始めるが、常盤は富士や春日とは違い、一気にグラスの中身を全部飲んでしまう。しかしそんな常盤の飲み方を富士は視界に入れても咎めはしなかった。本来なら常盤の様な飲み方こそが、この歌を歌った際の飲み方に相応しいからである。

もつとも常盤は中々気持ちに踏ん切りがつけられない様で、グラスを春日に預けると金剛の腕に顔を埋めて再び泣き出した。その姿から義理人情を誰よりも重んじる常盤が昔とちつとも変わっていない事を富士は確認し、同時に往年の仲間がまた一人減った事と今も変わらずに生きている者もちゃんという事を理解して小さく笑う。30数年前と同じ様に、大事にしてきた英国流の別れを今もできたという事もまた嬉しかった。

そして別れを惜しんでいたにも関わらず何故だかとても晴れやかな胸の内を持つ富士は、自身の勝手な願いである事を重々承知しつつ、現代を生きる若い世代の者達にかつての先輩への対応をして欲しいと願う。

『比叡。』

『はっ。』

富士が呼んだのは金剛の妹にして、帝国海軍一の若作り艦魂である比叡。面識はそこそこあるにしても、二人は陸奥の様に特別に親しい間柄でもなければ、金剛の様に同じ異国をルーツに持つという共通性もないのだが、その経歴を方々から耳にしてきた比叡も例に漏れずに富士の事は深く尊敬している。富士にとっても現役時代から帝国海軍の先輩として、戦艦の艦魂の先輩として面倒を見てきた可愛い後輩が比叡だ。

だが富士が比叡を呼んだのは後輩としての可愛さを愛でる為だけではなく、この比叡が今回の観艦式にてある重要な役目を仰せつかっている船だったからでもある。

小走りで近づいてきて軍帽を取り、深々と頭を下げて尊敬の念を示す比叡に、富士は満面の笑みを浮かべてやりながら自身の願いを話した。

『今回も貴女が御召艦だそうね。立派だわ。』

『はい。有難う御座います。』

『それでお願いがあるのだけれど、厳島に貴女達の晴れ姿を見せてあげて欲しいの。貴女のポッケにでも忍ばせてもらえれば良いのだけれど……。』

既に一線を退き、推進器も撤去されてもはや波間を駆ける事も出来ない富士は、現代の帝国海軍艦魂社会に入口を出来るほどの立場はない。常盤の様に遠い南洋にて励んでいる実績もないし、艦魂としても既に自由に自由が利かなくて満足に歩く事だって出来ない。一様に尊敬されてはいても、実情としてはいつも決まった岸壁にて海を眺めている老婆以外の何者でもない。故に富士は現役の帝国海軍艦艇である比叡にどういう言い方で伝えようかと言葉を選びながら声を発したが、比叡は富士の言わんとしている事を即座に読み取り、ぱつと明るい笑みを向けると彼女らしい極めて調子の良い言葉でそれを快諾した。

『お任せください。陸奥さんから分捕ってでもそうしようかと思っております。ポッケとは言わず、見晴らしの良い私の檣楼頂上にある測距儀の上にて安置させて頂き、満艦飾で飾った皆の晴れ姿を天皇陛下と供に存分にご閲覧して頂こうと思います。』

『ふふふ。有難う。でも風で飛ばされて落としちゃうと、かんかんになった厳島さんにいつかあの大きな主砲でお痛されるわよ。気を

つけなさい。』

富士が返した言葉には英国人独特の冗談が混じっており、常盤の嗚咽が静かに響く宴の場に何人かの笑い声が木霊し始める。するとその場に立ち込めていたある種の荘厳で緊張感のある空気が一斉に晴れ上がり、宴の場はまた元の明るさを取り戻した。金剛や春日に混じって仲間の何人かが常盤の傍に寄り添って慰めの言葉を掛け、先程の富士達の真似をするかの様にボルトが置かれた机に向かって乾杯する者達も出始める中、比叡の決意を求める声が響く事により明石を含めた全員が今回の観艦式に望む気持ちをしっかりと抱いた。

『みんな、今回の観艦式は厳島さんに私達の晴れ姿を見せる大事な機会だ！ もし失態でもしたら陛下のご立腹よりも、厳島さんの32センチ砲の心配をしなきゃだめだ！ あんなの食らったら一撃で廃艦だぞお！ 大掃除も含めて、手抜かりのない様にしっかりやろう！』

こうして今回の観艦式は艦魂達にとっては特別な催し物となった。式本番に限らず、予行や停泊の状態といった式に関する一連の行動にて失敗する事は、栄えある帝国海軍をこれまで支えてきた先人達の苦勞や想い、犠牲といった物の全てに泥を掛ける事になる。先人達は決して薄汚れたみすばらしい艦体を常とはしていなかったし、そんな生き方をした者は誰一人としていない。軍艦旗を旗竿に掲げ、

艦首に菊の御紋を輝かせて波間を掛ける艦艇は、いつの時代も何事においても美しく立派でなければならない。

そんな事を数日前の宴の場で感じたからこそ、明石は多少の疲れを意にも介さずに隔壁を擦るソーフを握った手の動きを止める事はなかった。もちろんその想いの発端は厳島という大先輩の事もあるのだが、明石の中では同じ時に耳にした自分の先代の事もそこそこに大きい物だった。明石自身は先代とは会った事もなければ、声を交えた事だってただの一度もない。師匠より話してもらうまで、「明石」という名の艦艇は帝国海軍において自分一人だとすら思っていたくらいだ。

ただそんな先代と時を同じくして生きた富士や常盤という先輩方の見せた、かつての仲間を想って涙を流した姿に、明石はなんだか自分が先代を知らないのを良い事にその気持ちを持たないのは悪い事のように感じていた。

もし3代目の明石艦がいつか誕生して彼女が先代に当たる自分を想う時、『会った事ないからな。』と言われて終わりとされてしまったら？

そう脳裏で呟くと、ソーフを握った明石の手には何時にも増して力が籠る。明石は別に自分の事を凄く奴だ等とは微塵も思っていないし、現に宴の開幕ではテーブルマナーに対する無知という自身の未熟者っぷりを嫌という程に思い知らされている。ただ以前の師匠や宴の場で常盤が語ってくれた初代明石艦の命に対しては、明石は口にくそ出さないが只者ではなかったと考えていた。そして顔も声も性格もそっくりで、同じ様に至らぬ所を見つけるや必死に励んでいたという常盤の話を総合するに、先代は常に物事に対して一生懸命に取り組み、怠けもせずひたすらに頑張った末に常盤や朝日が口にした人物評に繋がっているのではないかと明石は思う。

そうなると明石だって疲れた等とは言っていない。自分がサ

ボる事によって、周りの者達からくる視線が自分どころか先代にまで及ぶ事になるからだ。

だからこそ明石はこの日、日が暮れるまで自分の分身のお掃除をとにかく頑張って続行した。一等巡洋艦程もある明石艦をいくら艦魂と言えども一人でお掃除するのは大変であったが、明石は持ち前の一点集中型の頑張り屋な性格に火をつけて励む。

先人達の歩みが無駄にしてはいけない。

自分達へと繋がる何か。それが何なのかを言葉にするのは難しかったが、湧き上がるその気持ちを大切にしなければと心を新たにする明石であった。

第七二話 「紀元二六〇〇年記念特別觀艦式／前編」

昭和15年10月11日、0900。

果ての無い青空は絶景の秋晴れで、少しひんやりした横浜の空気を水平線からまだいぶ上がった太陽の光りが切り裂いていく。雲ひとつすらも見えぬ空にこの世に生きる全ての物が目覚めの挨拶をするのが、太古の昔より続く悠久の時の流れで繰り返されてきた常。それは人間も、鳥も、草花や木々であっても同じだ。

しかしその日の横浜は随分と静かな物で、波間が揺らぐ事で起きる小さな波の音が辺りに木霊するだけだった。

毎朝、自然界における起床ラッパを担当してきたカモメ達にとってもそれは同じで、彼等は岸壁に囲まれる横浜港の沖合いで錨を下ろす比叡艦のマストや色鮮やかな満艦飾索を足場として翼を休めている。小刻みな間隔で首を捻り、おもむろに翼を広げてくちばしでのお手入れに勤しむカモメ達。足場とする比叡艦やその乗組員達と同じく彼等にとっても今日という日は記念すべき日であり、羽毛に覆われたその身体のおめかしにも余念が無い。格好悪い姿を今日は見せてはいけないのである。

するとその刹那、比叡艦^{ひえい}からも近い陸地の一角からは甲高い鉄の軋む音が大きく響き渡り、カモメ達はそれを合図として一斉に宙へと舞い上がる。野性味溢れる彼等の鳴き声は人間達からするとうるさく感じるかもしれないが、彼等にとっては他意は無い。なぜなら脈絡無く響くカモメ達の声は、彼等なりの万歳の声なのだ。

そしてその声が向けられるのは緊張の面持ちを浮かべる比叡艦乗組員とこれまた同じく、今まさに「よこはまみなと」駅に滑り込んだ列車に対して放たれていた。

真つ黒な生地に金色の刺繍で作られた袖章や肩章、胸の辺りに散らせるように掲げた数多の勲章、広い間隔で離れた複列の金ボタン、まるで人形が被っている物がそのまま大きくなったような二角帽子という、いわゆる正装と呼ばれる服装で身を包んだ男達が見守る中、数両編成の列車はそれまで鳴らしていた甲高い鉄の軋むような音を段々と小さくしつつその動きを完全に止める。車窓から覗く車内に施された白いカーテンも眩い車両だが、その一両一両の車体の真ん中には大きな菊の御紋が描かれており、この列車が皇族ご用達の御召列車である事を示していた。

やがてとある客車のドアが開かれると、正装姿の初老の男達がドアの前に進み出る。見ればその顔ぶれも海軍軍人としては豪華で、9月に海軍大臣になったばかりの及川^{おいかわ}海軍大臣を始め、伏見^{ふしみぐんれいぶぞう}軍令部総長^{ちようのみや}宮^{やまもと}、山本連合艦隊司令長官、塩沢^{しおざわ}横須賀鎮守府司令長官など層々たる者ばかり。だがそれも不自然ではない。

なぜなら一様に彼等が深々と頭を下げる中で客車から降りてきた人物は、彼等海軍軍人の全てを統率するただ一人の人物であり、本日今より挙行される観艦式において最上級の御親閲者なのであった。

一方、駅から見える波間の遙か沖合いでは、満艦飾でその身を飾った参加艦艇が万全の準備を整えて肅々と式が始まるのを待っていた。

> i 4 1 7 3 — 2 0 8 <

数キロ四方に及ぶ式場海域に集った総数98隻の陛下の御船達、その整列する様は堂々たる物であった。東西に少しばかり長い式場海域には横隊を組んだ6列の艦列があり、陸地側に当たる西方の端

を艦列の先頭艦とする。その内訳は北側より、

・第五列

日向艦、沖島艦、天龍艦、八重山艦、蒼鷹艦、神風艦、沼風艦、波風艦、野風艦、伊号第十五潜水艦、呂号第五七潜水艦、呂号第五八潜水艦、第三号掃海艇、第一号掃海艇、第四号掃海艇、第二号掃海艇、第五号掃海艇、第六号掃海艇

・第四列

千歳艦、神威艦、多摩艦、常盤艦、千代田艦、伊号第十六潜水艦、伊号第一二四潜水艦、伊号一二三潜水艦、呂号第三四潜水艦、呂号第三三潜水艦、伊号第一二一潜水艦、如月艦、弥生艦、望月艦、睦月艦

・第三列

金剛艦、榛名艦、熊野艦、鈴谷艦、最上艦、利根艦、筑摩艦、陽炎艦、大潮艦、朝潮艦、荒潮艦、満潮艦、霞艦、霞艦、不知火艦、黒潮艦、雪風艦、初風艦

・第二列

長門艦、陸奥艦、伊勢艦、山城艦、摂津艦、涼風艦、江風艦、村雨艦、春雨艦、夕立艦、五月雨艦、漣艦、綾波艦、浦波艦、初雪艦、白雪艦、吹雪艦

・第一列

赤城艦、飛龍艦、蒼龍艦、瑞穂艦、五十鈴艦、伊号第六八潜水艦、伊号第七一潜水艦、伊号第七五潜水艦、伊号第七四潜水艦、伊号第八潜水艦、伊号第七潜水艦、伊号第五三潜水艦、伊号第五五潜水艦、伊号第六六潜水艦、沖風艦、峯風艦、矢風艦

・番外列

長鯨艦、迅鯨艦、勝力艦、駒橋艦、明石艦、間宮艦、早鞆艦、尻矢艦、宗谷艦、朝光丸、金龍丸、大成丸、凌風丸

となっている。

>i4223—208<

最南端に当たる部分にて番外列を構成する明石艦は、他の番外列艦と同様に朝7時に見学の民間人を乗せて本牧地区の棧橋を出発し、既に受閲地点に錨を下ろしている。艦橋から艦尾にある後楼に至るまでの甲板に天幕を張り、さらにその上には艦首旗竿から軍艦旗の翻る艦尾旗竿にまで及ぶ満艦飾索を展張した明石艦だが、色鮮やかなその艦影全体には同じくらいの緊張感で張り詰めた静寂が纏われている。

だが艦の命である明石に関してはその限りではなかった。

人気の多い甲板には居場所が無い明石はお気に入りの場所である艦橋頂上に設置された測距儀天蓋にて、肌寒い横浜の潮風に僅かに肩を震わせながら波間の仲間達を見つめている。艦内幹部達のように正装を持っていない事が残念だったが、それが自分を含めた艦魂という存在における限界であったにしても彼女は失念などそれ程していない。外套と手袋を身に付ける下にはいつもの第一種軍装であるが、実は長門を始めとした偉い艦魂達も正装など持つてはいないのだ。

ただ、せっかくのおめかしをした分身に比して、いつも通りの格好という自分の姿にはちよつとだけ物足りなさを感じた明石。7時の出港に先駆けての乗組員全員による早起きに併せて目を覚ました明石は洗面の際に時間をかけ、いつもは首の後ろで一本に縛っている長めの髪を今日は全て後ろに流してみた。そんなに髪型に詳しく

ない明石なりのちよつとしたオシャレで、横髪も耳に掛けて後ろに流す。既に同じ髪型で一年も過ごしてきた事に気付きながらの髪型変更だったが、少しでも大人っぽい雰囲気滲み出る鏡に映った自分の姿を明石は大変気に入った。

『おおお！』

つい感激の声を上げていつもの自分の印象が変わった事を喜んだ明石は、お風呂上りにいつも使っている髪留めを後頭部に施して髪型を整えて今日という日に望む。黒と白の軍装しかもっていない明石を含んだ帝国海軍艦魂の、ささやかながらも精一杯のオシャレだった。

おかげで人間の女性の様に多種多様な飾りつけが出来ない事を、明石は海軍軍人ではない見学者達の格好を目にしても憂う事は無いよいよ迎えた晴れの日に赴く意気で自身の心と表情を律する。それは自分と仲間達の晴れ姿を一望できる測距儀天蓋の上に出ても変わらず、日常では旗旒甲板や航海科の倉庫で眠っている各種の信号旗が一斉に連なる満艦飾索を瞳に映しても、いつもの様に無邪気に声を上げてはしゃぐような事は無かった。

『礼砲員、礼砲用意！』

『礼砲員、砲に就け！』

するとその内に彼女の足元に位置する艦橋がにわかに騒がしくなり、それに併せて艦首甲板にある第一主砲、そして艦尾甲板にある第二主砲には待機していた配置の兵員達が走り寄って礼砲火薬の準

備を始める。

転じて横浜港内では大元帥陛下と従う者達が乗った御召艇が棧橋を離れ、御召艦である比叡艦に向かって白波を立て始める。そしてこの瞬間を持って、栄えある紀元二六〇〇年を祝う特別観艦式の挙行とされた。

御召艇が棧橋を離れたのを確認した比叡艦からは電波が発信され、式場海域にて整列する参加艦艇の全てに式の始まりを告げる。各艦では艦長の号令に従い発砲の指示が出され、凌風丸と大成丸を除いた全艦艇によって皇礼砲が実施された。見学者が乗艦している明石艦では発砲と同時に彼等の歓声が響き、自分達が乗った艦を含む眼前の海軍艦艇の勇壮な姿に大喜び。皆一様に艦側の手摺から身を乗り出し、艦首方向に広がる九六隻の一斉発砲に心を躍らせる。

もつとも明石艦で主砲を操作する兵員達にあっては、21発に及ぶこの皇礼砲の実施は結構大変な物であった。というのも皇礼砲は5秒間隔での発砲にて規定数回をこなすのが慣例で、廃莢や装填の手順も考えると2基4門しかない明石艦ではかなり急いで操砲せねばならないのだ。観艦式という晴れの日ではいつもの訓練の様に空莢をその辺に無造作に置いておく事など出来ないし、その上で秒刻みの正確なタイミングで引き金を引かねばならない。距離により発砲音が連続してしまう事は致し方ないが、観艦式における皇礼砲は全艦艇が揃って発砲炎を灯さないとさも統率が取れていないように見えてしまい、極めて格好が悪い礼砲となってしまうのである。無論、そんな皇礼砲を他ならぬ大元帥陛下に対して行って良い訳が無い。故に明石艦の主砲を掌る青木砲術長の声にも気合が入り、兵員達もまた訓練とは違った色合いの汗を光らせた操砲となる。

やがて21発の発砲を終え、明石艦も錨を下ろす式場海域は真っ白な発砲の残煙によって僅かに視界が遮られるが、横浜の潮風も今日という日を祝ってくれているのか、ふいに強めに沖合いへ向かって風を起して式場を覆う煙のカーテンを追いやってくれた。

『へっへん。』

再び開けた視界に仲間達の変わらぬ勇姿を入れ、なおかつ皇礼砲を仲間達と供に見事にこなせた事を明石は喜び、両手を腰に当てて胸を張りながら声を漏らす。もちろん主砲配置の兵員達における普段の訓練の成果であるが、我ながら会心の礼砲ができた事に彼女は口元を緩めた。

そして時を同じくして横浜港では先導艦の高雄艦たかおと供奉艦ぐぼうの加古艦かこ、古鷹艦ふるたかが微速で港外まで進み、いよいよ陛下に御乗艦して頂いた比叡艦が動き出すのを待つ。既に御召艇も艦を離れて錨も上げた比叡艦は、それほど時をおかずして小さな白波を艦首に起しながら浮標から離れ、式場海域へと向かってゆつくりと動き出し、それを見計らって式場海域の艦艇が2度目の皇礼砲を実施して岸壁や棧橋も含めた横浜の波間を轟音と煙のカーテンで飾り付ける。

雷の声と謳われる砲声が木霊する中、艦首と艦尾の甲板に天幕を張った比叡艦は横浜港の防波堤をすぎた所で高雄艦らと合流し、ゆつくりとした速度で進みながら隊列を整える。先導艦の高雄艦が先頭、御召艦の比叡艦はその後ろを進み、供奉艦たる加古艦と古鷹艦が続いた。

『登舷礼式用意！ 登れ！ 艦首に向け！』

明石艦内に号令が響き、それまで艦内にて待機していた主砲配置以外の乗組員達が一斉に最上甲板に集合。服の折り目も美しく整えた第一種軍装を身に纏う彼等は甲板に出るや艦首を中心とする舷側に一列になって整列し、号令の通りに艦首方向に身体を向けて直立

不動の姿勢を示す。動くのは風に靡く水兵さんの帽子のペンネントだけで、礼砲の残り香である火薬臭い潮風を吸っても彼等は眉一つ動かさない。いよいよお大元帥陛下の御親閲が始まるのだ。

測距儀の上からその様子を眺めていた明石だが、彼女が立っている測距儀の付け根に当たる艦橋天蓋にはそれまで艦橋の中にいた艦内幹部の者達が登ってきた。特務艦長を先頭にしてその後ろに艦内各科の科長達が整列し、さらにその後ろには士官らが並ぶ。その数およそ10数名の男達は明石とは違って陽の光を浴びて輝く金色の刺繍が眩しい正装姿で、いつも通り黒一色の明石はちよつとだけ人間達を羨ましく思う。ただこの期に及んで彼女は指を咥えて正装姿の彼らをまじまじと眺める事は無い。艦内のお偉方である彼等が艦橋天蓋に登ったという事は、自身の艦影を陛下の目に入れる時間がすぐそこまで迫っている事を示しているからだ。

ふと明石は正面の乗組員達から、左舷に広がる横浜港に向ける。既に親閲艦隊は横浜港からもだいぶ離れ、御召艦である比叡艦の大きな艦橋が特徴的な艦影もかなり大きくなってきた。どうやら最初は明石が並ぶ番外列の前にある第一列と、少し隔てて北側に並ぶ第二列の間を通過して親閲に及ぶらしい。よく見ると明石と同じ様に、これより親閲を受ける列の艦魂達は皆一様に艦橋の天蓋に出て、肌寒い横浜の潮風にも表情を崩す事無く気をつけている。明石はそんな仲間達の様子と、第一列と第二列の先頭艦の間に艦首を向けて進み行く親閲艦隊の姿を瞳に入れ、軽く袖や胴回りの服装を手で直してから背筋を伸ばして揃えた指先を足の横につける。

しばらくすると明石の耳には、列先頭付近の艦艇達から奏でられる君が代のラッパが遠く聞えてくる。各艦の航海科員達がゆっくり慎重に吹くラッパの調はいよいよ始まった陛下による御親閲に荘厳な雰囲気纏わせ、明石とその足元にて順番を待つ乗組員一同は固唾を呑んで見守った。

明石艦の受閲位置は先頭艦の長鯨艦から4番目の位置で、微速で進む親閲艦隊が艦首方向にまで来るのは少し経ってからとなったが、

その間遠めに御親閲の様子を眺めるのには乗組員も見学者も飽きる事はない。艦の命である明石もまた同じで、前列に並んでいる赤城艦や飛龍艦の向こうに見え隠れする親閲艦隊の様子をじっと眺める。明石艦とは同じ第二艦隊所属の艦艇である飛龍艦は今回が始めての民間に対するお披露目であり、明石の背後下方に位置する艦中央部の甲板から聞えてくる見学者達も親閲艦隊と重なる際に飛龍艦の姿を目に入れて物珍しそうに声を上げる。

『お、なんだあの空母。新しい奴か？』

『式次第に書いてあるぞ。一番左の大きいのが赤城で、真ん中の小さいのが飛龍、その隣が蒼龍だってさ。』

『飛龍艦は去年竣工したばかりの最新鋭艦だな。俺も初めて見たぜ。』

スーツ姿の男達の声を耳に入れ、明石は同じ艦隊の仲間である飛龍と蒼龍も緊張の色合いを表情に浮かべて頑張っているのだろうと思っけて口元を緩める。

特に飛龍は明石とほぼ同年代の艦魂で、第二艦隊での戦隊長会議の際には利根と並んで明石とは頻繁におしゃべりをする同期のような間柄。落ち着きのある大人しい性格を持つが、今まさにその飛龍艦の艦首の前を陛下の座上する比叡艦が横切る光景を目にしても明石は彼女に対して心配を抱くような事は無い。まだまだ半人前の自分や泣き虫の利根とは違って口数が少なくとも腹が据わっている飛龍の事は良く解かっているし、何より飛龍艦の隣にはさらに大きな艦影を持つ赤城艦という先輩が浮かんでいるのだから尚更だった。

数日前の宴会にても新米空母の艦魂として飛龍と蒼龍は赤城の下に真っ先に向かって挨拶を行っており、明石もまた挨拶回りをしつつもそんな3人の様子をしっかりと目撃していた。元々は巡洋戦艦としてこの世に誕生した赤城艦の艦魂、赤城は神通と同じく「海軍砲

術学校金剛艦分校」の卒業生で、大正生まれのベテランとして飛龍と蒼龍の挨拶を快く受け取ると同時に、『同じ空母として頑張ろうじゃないか。』と二人の後輩を歓迎してやる。

師匠譲りの荒い気性とげんこつ必須のスパルタ教育もまた神通と同じで、帝国海軍の艦魂社会でも指折りの嫌われ者である彼女だが、その実は不幸にも関東大震災とワシントン海軍軍縮条約の影響でまだ顔を合わせた事すらも無い3人の姉妹全員を失ってしまい、やっとな艦艇として竣工した頃には既に天涯孤独の身だったという悲しい過去を持つ。だがそんな彼女は、まだまだ軍装姿も似合わない雰囲気を持つ飛龍と蒼龍が同じ空母としてわざわざ挨拶に来てくれた事を大変に喜び、初対面にも関わらず二人を実の妹の様に可愛がって宴の場にいる荒っぽい赤城の性格を知る者達を驚かせたのだった。

その光景を記憶に蘇らせる事ができた明石は、綺麗な笑みを伴って眼前にて御親閲を受ける飛龍艦と蒼龍艦の姿を見守る。さしものに明石が立つ測距儀の天蓋からは艦の命である飛龍や蒼龍の姿をみつける事が出来ないが、隣に赤城という先輩にして姉貴分がいるのなら心配の火種はない。

そしてゆっくりと比叡艦を含む親閲艦隊が進んでいく最中、明石の足元に位置する艦橋天蓋にてその光景を目にしていた特務艦長より声が発せられる。

『皇紀2600年の節と大元帥陛下を遥拝し、万歳三唱！』

その声に明石はいつの間にか抜けていた手足に力を込め、乗組員達と同じ直立不動の姿勢をとる。そして特務艦長が再び放った声に続き、乗組員達と一緒に声を上げた。

『天皇陛下！ ばんざーい！』

『『ばんざーい！！』』

お腹とお尻に力を込め、両腕を天に向かって伸ばして万歳を絶叫する明石と乗組達。ちょうど五十鈴艦の辺りを横切っていく比叡艦は上部構造物を挟んで艦首と艦尾の全ての甲板に天幕を張っており、明石も含めて乗組員達にはどこで天皇陛下が御親閲しているのか解からなかったがそんな疑問を微塵も声に出そうとせずに彼等は万歳を続けた。

その頃、両舷から起こる万歳の声で包まれる比叡艦の艦橋頂上。海面からかなりの高さがある防空指揮所に設置された主砲射撃所の天蓋にて、艦の命である比叡は眼下に広がる仲間達の姿を眺めていた。それ程ただっ広い訳でもない主砲射撃所の天蓋はちゃんと手摺があっても、目も眩むような高さには落ちてしまう事を憂慮せずにはいられない。だが比叡はそよぐ潮風に少し伸びた髪を揺らし、澄ました顔で仲間達の整列振りを一瞥する。その手には漆塗りの小さな黒い盆が握られており、盆の中では真っ白な織物の上にいつぞや富士から託された大先輩の亡骸、即ち旧^{いつくしま}厳島艦のボルトがぽつんと置かれていた。絶好の秋晴れである空から降り注ぐ陽の光を浴びて鈍い輝きを放つボルトは赤錆も目立つような古ぼけた代物だが、比叡はふと盆を握った両手を胸の高さで前に伸ばし、身体の向きを右舷から左舷にゆっくりと向けて呟くように声を放つ。

『厳島先輩、陛下と供にご覧下さい。厳島先輩が黄海や日本海で命を賭して戦い、その末に生まれたのがここにいる者達です。皆が艦尾に掲げるのは、厳島先輩が掲げたのと全く同じ十六条旭日旗ですよ。』

伸ばした両肘にぐっと力を込めて口にした比叡の声は呟くような

口調でもあった為にとても小さな声で、不意に幾分か強めの風が吹くとすぐにその声は風によって波の彼方へと運ばれてしまう。隣に立っていたとしても聞き取りづらい程だったが、盆の中で鈍い光を放って輝くボルトには声などいらない。手にしている比叡すらも気付かぬ中、旧厳島艦のボルトはほんの少しだけ淡く白い光を混ぜて輝き、横浜に集った堂々98隻の後輩達の姿に応えたのだった。

やがて高雄艦に率いられた親閲艦隊は隊列最東端まで来ると取舵を切ってゆっくりと回頭し、僅かに列単を北上すると今度は第三列と第四列の間を通して親閲を続行した。

もう既に明石のいる番外列の親閲は終わり、乗組員達も姿勢をそのまま堅持しながらも安堵の溜め息を放って胸を撫で下ろしている。気張って万歳を叫んだ明石も固まっていた身体を柔らかい物にし、おもむろに軍帽を取って荒く頭を搔く。もちろんまだ観艦式は終わっていないし、大元帥陛下が未だ御親閲を続けている中で座るような事はしないが、これまでにない緊張感を伴って眼前の比叡艦に姿勢を正した明石はちよつとだけ疲労を覚えたのもまた事実だった。

揃えていた足を開いて幾分は楽な姿勢をとり、明石は首を左右に軽く捻って身体に残る淡い疲労感を緩和する。『ふうう。』と声も混じった息を漏らしての親閲艦隊を目で追う明石は、比叡艦第三列と第四列の間に艦首を向けてゆっくりと通る様を認めて微笑む。

なぜなら第三列は第二艦隊の所属艦で主に編成されており、そこにいるのは明石とはいっても同じ艦隊の構成員として頑張っている仲間であったからだ。また、列最後尾の初風艦から先頭より三番目の熊野艦に至るまでの艦艇達は全て帝国海軍最新鋭という第三列は人間達からも割と注目されており、比叡艦左舷に人だかりができているのが遠目からでも明石には見てとれた。特に艦首甲板に主砲塔4基、艦尾側甲板には広大な航空機搭載設備を備えるという利根艦と

筑摩艦はその珍しい艦影もある為か、海軍軍人らもこぞって比叡艦左舷に並んで両艦の姿をまじまじと眺めている。

同じ年代である筑摩と利根の目立ちっぷりをちよっと妬みながら瞳に映していた明石だが、その内に親閲艦隊は列先頭の艦を通過すると再び取舵を切って回頭。明石を含む受閲艦隊とは直交する形で船足を止め、高雄艦を先頭とした隊列のままで投錨した。

>i4174—208<

そして親閲艦隊の各艦の錨が静かな横浜の波間を突き破った刹那、式場海域全体には轟々と唸る航空機のエンジン音が木霊してくる。

『あ、あれだ!』

『おお、航空隊だ!』

見学者や観艦式の詳細を知らない水兵達が一同に顔を向けて指をさす東の空。東京湾まで続く事から水平線が広がるだけの方角だが、乗組員や見学者の声につられて明石も顔を向けるとその空には横列を幾重にも重ねた黒い粒が迫ってきていた。どんどん音量を上げる轟音の震源地であるその粒の群れは、全国から集まって横須賀や館山の基地にて待機していた海軍航空隊の精鋭達。真っ青な天気の中でその銀翼に日の丸を輝かせ、一糸乱れぬ編隊を組むその様はまさに日の丸を背負った海の荒鷲だ。

『おおお、でっけ〜!』

思わず声を上げてしまう明石の頭上に迫って来るのは帝国海軍において運用される航空機の中でも非常に珍しい4発機で、一見するとお船のような機体と横長の大きな翼を持っている事が特徴の九七式飛行艇。上から見ると三角形の編隊を12機で組んでおり、式場東南寄りから侵入して西北の方角に抜けるコースで飛行するらしい。

まるで越冬の為に飛来してくる白鳥の様に等間隔の編隊を維持し、編隊より突出した一機の九七式飛行艇に後続の編隊がピッタリと追尾していく。見事な空中分列飛行だった。

どよめきと歓声が起こりつつある背後も、今まで目にした事の無い航空機の大編隊を瞳に入れた明石には全く気にならない。大きくした瞳を爛々と輝かせ、頭上を通り過ぎていく銀翼の日の丸の群れを明石は脳裏に焼き付ける。また、ちょうど時を同じくして艦橋の付け根辺りから見学者向けに放った下士官の声は、突如飛来した大編隊の詳細を明石にも教えてくれた。

『えー、ただいま上空を飛行中の大編隊は、本観艦式の為に全国各地の海軍航空隊基地より集結した部隊になりました、参加総数は527機！ 指揮は前列で先頭艦となっておりまず赤城艦座上、小澤第一航空戦隊司令官！』

『ご、527機・・・！』

『うおー、すげえ！』

大空を颯爽と駆け抜けていく大編隊の空中分列行進には、波間に浮き続けるだけの98隻の光景とはまた違った迫力がある。見学者にあってもそれを感じる事が出来たようで、疾走感溢れる航空機の編隊飛行に喝采を浴びせた。

銀翼の大編隊に感動している明石も乗組員の言葉に驚きつつ、次々と頭上を飛んでいく大編隊を飽きもせずに見つめる。帝国海軍観艦式史上最大の527機という参加航空機の中には第二艦隊の仲間である飛龍や蒼龍が搭載していない機体もたくさん混じっており、特に主翼の端から端までの長さが40メートルもある九七式飛行艇の飛ぶ様は圧巻。その4発の発動機から轟く爆音も巨大な怪鳥の鳴き声を思わせ、腹の底を揺さぶるかのような迫力に明石は叫ばずにいられなかった。

『わ~~~~！　ばんざ~~~~い！』

自身の分身の中でも最も高い所に測距儀の上にてはしゃぐ明石。視界を波間に下げれば数キロ四方の波間を圧する仲間達の勇壮な姿が広がり、上に向ければ雲一つない秋晴れの空を埋め尽くす航空機の大編隊。波間は軍艦旗で、空は銀翼に描かれた日の丸で彩られ、自身を含めた帝国海軍の持つ壮大さを明石はこの時よく理解する。例え戦争という巨大にして凄惨な事業を遂行せねばならなくても、例えその中で自身が花形である戦艦には類別されていなくても、明石は自分の分身の旗竿に軍艦旗が翻っている事をとて誇らしげに思った。故に彼女は万歳を連呼する。

『帝国海軍、はんざ~~~~い！　わ~~~~！』

この4年後、明石はこの観艦式の際に見た様な航空機の大編隊をもう一度目にする事になるのだが、今の彼女はそんな自分の4年後などを意識する事もなければ、それが自身の生涯で最後に見た空になる等とは夢にも思っていない。

この後も続く観艦式で味わえる喜びに思う存分浸るのが、明石にとっても乗組員達にとっても精一杯の事だった。

第七三話 「紀元二六〇〇年記念特別觀艦式／後編」

明石艦と同じ番外列の各艦はそれぞれが見学者を乗せており、頭上を駆け抜けていく壮大な空の大艦隊を瞳に映して大喝采となる。拍手と万歳の声に混じる声は栄えある帝国海軍が海だけでなく空をも制するだけの実力を絶賛する物ばかりで、特務艦長以下の明石艦乗組員達も鼻を高くする。

艦橋頂上にある測距儀天蓋の上に立って心踊る明石も、見上げ続ける事で首にちよつと痛みを覚えても顔を下げる事は一向に無い。

527機の航空機が10数機ほどの編隊を幾重にも連ねて東から西へと向かっていくその様は、まるで巨大な龍が青空という我が家の庭を悠々と散歩している様。空のあちこちにて輝く銀翼に描かれた日の丸は身体を覆う鱗。波間を揺らすほどに轟々と鳴り響くエンジン音は大きな口から放たれる鳴き声。波間にて浮かぶ長門艦や赤城艦すらも、この大空の龍の前では木の葉のような大きさでしかなかった。

『すんげー・・・！』

大きくした黒い瞳を輝かせて呟く明石。初めて見た航空機の一大空中分列飛行は圧巻の一言で、友人達の様にとだの一機の水上機すらも持っていない明石には見飽きるといふ感覚が一向に湧いてこない。何種類もの機体が混じった上空の光景の中でどの飛行機がなんという名前なのかすらも解かっている明石なのだが、今はそんな疑問をも抱かずにただ海軍航空隊の勇姿を瞳に焼きつかせる。一機一機が等間隔をとって組む編隊の姿その物も明石には美しく見え、普段の艦隊訓練で航行序列を組んでいる時は空から見ると自分達もあんな感じなのかと考える明石。大空の色をそのまま写す海原に龍を描ける自分を嬉しく思うが、同時にそれを見るには今とは逆に空

から見下ろさねばならない事を察して彼女はちよっぴり残念だった。やがて龍の尻尾、すなわち空を駆ける大集団の末端に当たる編隊が頭上を通り過ぎて行き、式場海域上空を埋め尽くしていた一大航空劇も終わりを迎えてしまう。楽しい事や夢中な事を体感している際には時間の流れが早く感じるのは人間も艦魂も変わらない物で、明石は西の空へと小さくなっていく末端の編隊をしばらく目で追った。

するとその時、明石艦の甲板には号令の声が続けざまに飛んだ。

『一番内火艇用意！』

『一番内火艇員整列！』

号令の声が終わるや明石艦内からは整列を命じられた兵員達が駆ける音が響き、何事かと思った明石が測距儀の上で艦尾の方を振り向くと、後部マスト近くの甲板にて駆け足で集合する兵員達の姿があった。天幕が張られていないそこは本日乗艦している見学者達がない場所であるが、水平甲板で甲板上に大きな突起物が無い明石艦であるから兵員達の動きは見学者からは丸見えだ。しかし明石の分身が一応は海軍艦艇であるなら、彼らもれっきとした「月月火水木金金」の日常を送っている帝国海軍軍人。普段の訓練で鍛えたキビキビとした動作は不意にかかった整列の号令にもすっかり適応されており、一列に並んで点呼をとるその様子を見学者達は溜め息混じりの声を放ちながら眺める。

『おおー……。』

『さっすが海軍さんだなあ……。』

内火艇やカッターに始まる装載艇の用意は明石艦に限らず海軍という組織においては日頃から頻繁に出くわすお仕事で、銃砲を扱う

訳でもないこのお仕事は栄えある海軍の物としてはかなり地味な物。なまじ今日の様に皇礼砲や航空隊の空中分列飛行が実施される最中に、揚艇用デリックを用いて11メートルの内火艇一艘を海面へと降ろすという作業は逆に華やかさが欠落していて目立ってしまう。

そしてそんな作業をまじまじと見つめる見学者の視線の中、整列した兵員達は内火艇の用意をテキパキとこなさねばならない。仮にここでどんな小さな事象でも失態として犯してしまったなら、言うまでも無く海軍の事を何も知らない民間人である見学者達からの視線はちよつと冷ややかな物になる。海軍軍人にとっての観艦式における怖い所だ。

だがせつせと励む乗組員達とて、伊達に精神注入棒という名の櫓の棒で理不尽な理由を元に尻を叩かれる日常を送って来た訳ではない。嫌だ嫌だと思いながら我慢強く耐えて来た彼等の身体は、無意識の内にでも各々の作業をこなしてくれる。とびぬけた海軍生活における厳しさの御利益とも言った所か。無駄な会話も作業手順の抜き飛ばしもする事無く、いつも通りに内火艇はデリックで吊り上げられて危なっかしい雰囲気など微塵も発せず海面へと下りていくのだった。

ただ突然の内火艇の用意に首を捻る明石は不意に視界を仲間達の分身に向け、そこに自分と同じ様にそれぞれの艦が内火艇を海面に降ろす光景を認める。駆逐艦のような小さな艦艇に限らず赤城艦等の大型艦までもが一艘の内火艇の用意をしている事と、ついさっき明石が立つ測距儀の根元に位置する艦橋天蓋にて艦内幹部に何事かを告げて一人そそくさと艦内に戻っていった特務艦長の事も考えるに、どうやら各艦の艦長格の人物達が艦を離れてどこかへ移動するらしい。

再度明石が後ろを振り返ると、内火艇の運行を指揮する艇指揮官チャージに任命された士官が赤い縁ふちの付いた小さな毛布を内火艇に持ち込もうとしている。日常から頻繁に使用される内火艇の事情は明石もよ

く知っており、彼が大事そうに手にした毛布の縁の色からそれが艦長用の敷物である事を察した。と言ってもこれは明石の分身の責任者である特務艦長の私物ではなく、れっきとした海軍における規則によって用意が決められている物である。敷物の縁の色が黄色なら将官で赤は艦長、みどり色なら士官という具合であつた。

余りにも海軍生活の日常では見慣れ過ぎていて、そも内火艇に乗る事は無い艦魂には割りと知らない者も多いが、それに反して明石は新米艦魂ながらもその事をよく心得ている。それはかつての彼女の相方が、チャージのお仕事をこなす機会が多かつた事にその理由があつた。なにしろこの艇指揮のお仕事は艦内の若手士官がお船を操る事の実務実習として帝国海軍では捉えられており、自身と同じく新米士官だつた相方は頻繁にこのチャージに任命されていた事があるのだ。

遠目から一端の指揮官として励む相方を眺めているのは明石にしても面白く、特務艦長が乗艇する際に敷物の用意を相方がうっかり忘れてしまった時の事で彼女は内火艇の敷物事情を学んだ。当時の特務艦長であつた宮里大佐は『みやざと氣をつけなさい。』と気さくに笑つてくれていたが、その日の夜に相方には直属の上司である青木砲術長から大きなカミナリが落とされてしまい、今にも泣き出しそうな顔で落ち込む相方をあの手で元氣付けてやろうとしたのも楽しい思い出である。

『ふふふ・・・。』

全く意図していなかったのに唇から漏れた笑い声。記憶に纏わる感情は楽しい一辺倒とは行かないが、明石はほんの少しだけ笑みを歪めながら特務艦長が内火艇に乗艇する様子を見守る。

やがて軽快な機関音の間隔を短くして打楽器を思わせる様な音を残し、内火艇は明石艦の左舷を離れ始める。小さな航跡を引きずる

内火艇は艦尾方向に向かって進み、式場海域の南端の端っこを列先頭に向かって駆けて行った。同時に明石艦以外の参加艦艇各艦からもそれぞれの艦長を宿した内火艇が発進し、一様に列先頭にて受閲艦艇と直交する形で錨を下ろした比叡艦へと白波を立てて行く。

御召艦である比叡艦ひえいに向かっていているのであるから艦長連中は皆、陛下のご拝謁を賜るのだろうと明石は察するがその予想は正しく、内火艇が比叡艦の両舷に列を作ってしばらく経つと電信が参加艦艇の各艦に発信され、『複雑微妙な国際情勢の下、太平洋の波しばらく高まらんとして帝国の使命重大を加える時、皇軍将兵の益々奮励努力すべし。』なる陛下の御勅語が乗組員達の一人一人に示された。その時間はちょうど1145。もう既にお日様は真上に昇り、明石のお腹も絶え間無く鳴り始めた頃で、式場海域の至る所において午食のお時間となる。

『これよりお弁当とお茶を提供させていただきますので、拝観券を持って並んで下さるようお願いします。喫食は艦内大部屋に食卓を用意しておりますので、お弁当を受け取りましたら案内員の指示に従ってください。』

天幕の下にいる見学者達に乗組員の声が届くや、見学者達は僅かに気になりだした寒さで身体を縮こまらせながらも笑みを浮かべて声に従う。海軍艦艇の中でお昼ごはんを食べるといふ珍しい機会も去ることながら、栄えある帝国海軍が提供してくれるお弁当その物も彼等の笑みには貢献している。横浜の市街に点在する仕出屋さんに頼んで用意した海軍のお弁当は、鮮やかな朱色で塗られたわりごのお弁当で、白いご飯にお刺身まで盛り付けられた高級弁当。艦内に装備された湯沸し器による暖かいお茶もつき、支那事変下の日本の事情を忘れてしまう程に贅沢な食事である。

当然の事ながら食いしん坊の明石は測距儀の上からじっと自身の

分身中央にある甲板を眺め、一つ一つ手渡されていくお弁当の行く末を見守る。先程の乗組員の声にもある通りお弁当は拝謁艦に乗る為の拝観券と引き換えらしく、一人一枚とされている券の事情もあって100人近い見学者の人々全てににお弁当が行き渡るのは少々時間がかかった。山と積まれているわりごの弁当箱が崩れていくのも待ち遠しい明石は測距儀の上に腰を下ろし、冷たい感覚が敏感になり始めた指先に息を吹きかけながら銀バイの機会を待っているが、どうも思いの他お弁当の消費が激しい事にここで気付く。

『あれえ・・・？』

首を捻って漏らした言葉が潮風に乗って流れていく最中、明石はお弁当の引渡し場所にできた見学者の列を目で追って数えてみた。お弁当を貰った人々はそのまま甲板にいる乗組員に案内されて艦内へと消えており、既に列を成している見学者の数は少ない。しかもお弁当の数も残り僅かだ。

『も、もしかしてえ・・・。』

脳裏を過ぎった空腹の明石にとっての非常に憂慮すべき事態が、今日はこれまで一時たりとて薄まる事は無かった表情の明るさを彼女の顔から奪っていく。拝観券と引き換えというお弁当の提供の仕方を目にした時点で気付いておけば良かったものの、見た目からして美味な雰囲気を漂わせるお弁当を見て有頂天だった明石は、この時になってやっとお弁当が見学者の人数分しか用意されていない事に気付く。

やがて見学者の最後の一人が笑顔で唯一つだけ残っていたお弁当を受け取り、美味しい一時を期待して見守っていた明石の願いを無情にも粉微塵に砕いた。

『あゝゝ！ お・・・、お弁当・・・・・・・・。』

背を向けて美味しい一時に望まんと去っていく見学者を目にし、測距儀の上で膝を抱いて腰を下ろしていた明石は苦しみと悲しみが入り混じった声を放ってそのまま横倒しになる。朝から緊張感を保って陛下による御親閲を受けた事もあり、まだお昼だというのに多少の疲れも覚えていた明石だが、おいしい食べ物があれば彼女は大概の事は我慢できる性分。その根本は単に、海軍のお祭りのような本日食卓に並べられるお昼ご飯にあった。しかし残念ながら目をつけていた高級弁当は一つ残らず見学者の人々へと渡されてしまい、いつもの様に銀バイを敢行するだけの元気ももはや無い明石は膝を抱いて横になったまま起き上がることが出来ない。何時にも増して寒さを覚える横浜の潮風を浴びながら、お腹から発せられる空腹の信号ラッパを耳にする。

『腹減った・・・・・・・・。』

せつかくのめでたい観艦式であつても食欲においては打ち勝つ事が出来ない。この世で最も辛い物は相方との別れを懺悔するのと空腹に耐える時、という明石にとっては無理も無い事であつた。

だがこの時、測距儀の上にて横になった明石の背後で淡く白い光が弾けたのに彼女は気付いていない。明石自身も普段の生活で用いているその光はほんの一瞬だけ眩いばかりに輝きを増すと、粉雪の様に散って明石の背後にゆっくりと降っていく。そして光の輝きがすぐに弱まり始めると、その中には明石と同じ艦の命たる者の姿があつた。

『あはは。どうしたんだい、明石？』
『う？』

軽快な笑い声と明るい語り掛けを受けた明石は、膝を抱いたまま背後に顔を向ける。そこにあったのは、いつもその笑みを絶やさぬ事と運んで来てくれる独自の品物で艦魂達から人気がある人物の影。ほんの少しぼっちゃりとした身体つきに袖を捲くった白い作業衣を身に付け、その上から肌身離さず常に装備している白い前垂を着ている。これまた白い作業帽も被った女性で、資格だけを見るとどこぞの工場で働く女性工員さんにも見えるが、それでも彼女はれっきとした帝国海軍の艦魂。

つい先日初めて出会った事から明石はすぐに眼前にてにこにことう女性の名を思い出し、相手が20代半ばも過ぎた外見にも関わらず彼女の渾名を呼ぶ。もっとも気さくなこの女性自身が渾名で呼ぶ事を勧めているのであり、明石が声を放つと彼女は緩んでいた頬をさらに吊り上げた。

『あ、マミヤーさん。』

『ぶっ倒れてるのが見えたから来てみたんだけど、腹減ったくて顔してるねえ。あはは。』

ケラケラと笑う彼女はマミヤー、もとい間宮まみやという名の艦魂で、その分身は明石の分身の右舷側すぐ横にて同じく御親閲を受けていた給糧艦の間宮艦。明石と同じ特務艦の艦魂だ。どうやら測距儀の上で力なく倒れている後輩を心配して来てくれたらしく、間宮は見事に明石の空腹っぷりを言い当てみせる。

帝国海軍艦魂社会において腕の立つ料理人として名を馳せる間宮の事もあり、明石はすぐさま見学者に振舞われたお弁当の始末を語った。

『マミヤーさん、私もお弁当食べたい！ お刺身〜！ あっついお茶〜！』

『なんだい、見学者のお弁当を狙ってたのかい？』

上半身を起すや両手の握り拳を上下させて、明石はお弁当が自身まで行き渡らなかった不遇の身の上を訴える。人間達が食べる物を普段から簡単に調達できない事は明石だって解かっているのだが、せっかくのめでたい観艦式で自分だけ侘しいお昼ご飯を食べねばならないのは我慢ならない。明石は些かの我が儘も混じった不条理に對する憤りを隠さずに放つのだった。

しかし間宮はそんな明石の心なぞ底に至るまでお見通しであり、眉を吊り上げて頬を膨らませていく明石を前にしても笑みから明るさを失せさせる事は無い。実は間宮はただ後輩の心配をしてここに來た訳でも、腹をすかせて涙目で怒りの表情を浮かべているという明石の顔を笑いに來た訳でも無く、むしろ空腹の明石にあっては極めて嬉しい朗報を届けに來たのだった。それは間宮が明石の分身の中にもある烹水所で勤務する乗組員と同じ様な格好をしている事にも現れており、ほんのりと湯気を放つ湿った両手を前垂の裾で拭いながら間宮は明石に声を掛ける。

『あははは！　ちゃあんと午食は有るよ明石。なんで私がこんな力ツコしてると思ってるのよ？』

間宮の言葉を耳にした明石は頬を膨らませながらも、チラッと横目で間宮の姿を捉えてみる。観艦式がまだ終わっていない中で第一種軍装を身に付けていない事に言われてみれば変だと思った途端、明石は表情をコロリと変えて間宮の足元へ跳び付く様にして近寄る。だらんと長い間宮の前垂は白い生地所々にシミのような物があって使い古し感が目立つが、明石はそんな前垂の色合いを微塵も気にする事無く顔を埋めて鼻を鳴らす。刹那、明石は鼻腔をくすぐるほのかな香りを認めて叫んだ。

『あっ！　ソースとお肉を焼いた匂い！』

僅かな香りだけでそう判断した明石だが、間宮は明石の放った言葉が見事に正鵠を射ていた事に笑い、そのきっかけとなった鼻の力に苦言を漏らしながらも自身がここにきた理由を教えてやった。

『どういう鼻してるのよ、明石。あはは、大当たり。みんなの分のお昼は長門中将に頼まれて作ってあるよ。お刺身とはいかないけど、余り物の牛肉をミキサーにかけてハンバーグにしたんだ。ま、98人全員分を作るのは大変だったけどね。』

『は、ハンバーグ!!!』

艦内におけるお食事でごく希に見た事のあるハンバーグの名が間宮より出て、明石はすっかり空腹で挫けていた心を再び上向きにさせる。食べ物の中でも明石が最も好きな物はやはりお肉で、間宮が調理してくれたとあらばその味も保障済みだ。

『なんでも長門中将達みたいなきい艦は後で陛下が御召しになされるらしいから、私のトコの大部屋で食べる事になるよ。あとお米が炊けなかったから余り物の生^{せいめんぼう}麴が主食になっちゃうけど、それでもいいかい?』

『やった! ハンバーグ!』

余り物という言葉が何度も出てきたように、艦魂たる者が食べ物調達する事は結構大変だ。間宮は一言もその大変さを言葉に変えず、他人にそれを話すつもりも毛頭無いが、自身の分身の中にある調理設備を使用するのは実はいつでも可能という訳ではない。そも電熱機器や蒸気機器が主流である艦内のそれらは乗組員達が使用する場合のみ電気や蒸気を分配するもので、常日頃からスイッチを入れれば動くなどという事は無いのだ。その上で調理器具がひとりで動き出すという幽霊騒ぎを起したくない艦魂事情も勘定すると、

毎日バレないように調理器具をコソコソと使っている間宮はなかなか豪胆でもあり、伊達に10年以上も船の命として励んできた訳ではないベテラン艦魂の片鱗をよく見せてくれる。本当ならこんな華やかな日にはもう少し良い食べ物を用意してやりたかったのが正直な所だが、自身の分身の中にある糧秣倉庫から発掘したパンも余り物のお肉も、艦魂である間宮にとっては精一杯の代物なのである。

もっとも腹に入ればなんでも良いというグルメスタイルの明石は、余り物だろうがなんだろうがお腹に入るのならば関係ない。数日前の艦魂達の宴の場にて豪華な料理を腹十二分に楽しんだ事もあり、間宮が作ってくれたハンバーグを想像して大はしゃぎする。急かすようにして間宮の腕を引っ張り、当の彼女の分身である間宮艦へと向かった。

水兵さんと士官は一緒に食事をしないのが帝国海軍だが、艦魂達の中ではみんな仲良く同じ部屋にて和気藹々とした雰囲気でのお食事とするのが常。お皿の数が違うという差はあるが、今日は間宮が作ってくれたハンバーグとパン、紅茶やコーヒーといった洋食を一緒に食す。もちろんそこには賑やかな笑い声が響き、美味しい一時に瞳を輝かせる明石に表情を更に一層明るくする。

すると明石の耳には、彼女とは違う食卓にてハンバーグに舌鼓を打っている長門達の声が響いてきた。どうやら一戦隊の仲間が集まっているの食事やましうをしているらしく、長門が腰を下ろしている食卓には陸奥や山城の姿もある。

『そういや昔、香港に行った時なんだけど、租界警備してたアメリカ海軍の奴らもハンバーグと生麴麩を食ってたなあ。』

『あゝあゝ。みんなで一緒に行ったねえ。アタシもあの時に初めて知ったんだけど、アメリカの海軍って毎週水曜日にはパンとハンバーグ食べてるんだって。陸奥も見た事あったでしょ?』

『うん。それも一緒にして食べるのよね。アメリカの人達は”はんぶうがー”って呼んでたわ。』

『なにそれ、ハンブルグから来てるのかな? ドイツ生まれの食べ物? ま、アタシらが毎週食べてるカレーだって日本生まれじゃないけど。』

『ふう〜ん。でも結構イケるじゃないか。食器も一つで済むし、洗い物も少なくて済むぞ、これ。』

長門や陸奥よりさらに年上の山城はそう言いながら、早速ハンバーグを上下からパンで挟んで口に運んでみる。頬骨がちよつと目立つ細長い顔の山城は30代半ばの容姿を持ちながらも、ちよつと男っぽい言葉遣いと時折見せる無邪気な一面は帝国海軍の艦魂の中にあっても好かれている。頬を大きく上下に動かして微笑を浮かべ、口の周りに薄っすらとハンバーグのソースを着けた山城はアメリカ式の食べ方を気に入ったらしく、二枚のパンにサラダの生野菜とハンバーグを添えて今度は口に運んだ。

『ん〜。うまい、うまい。さすがアメリカ海軍、馬鹿にできないな。これなら野菜の摂取も同時に出来るし、味噌汁やら魚やら米やらで烹水設備をあれこれ一緒に使わなくても作れるじゃないか。持ち運びも便利だし。』

その分身に供える立派な艦橋を思わせる長身の山城は、大きな体格に見合ってアメリカ式の食べ方を絶賛するその声も大きい。だがそのおかげでハンバーグに関する耳寄りな情報を得た明石。すぐさま半分に切ったハンバーグを上下からパンで挟み、大きく開けた口へ詰め込んでみる。

『むお、んめえ!』

初めて食べ心地と味に明石は大満足。お肉とパンの連係はさも洋食という感じが滲み出ており、珍しい食感と味が明石の噛む動きを加速させる。隣に座った霞かすみや霰あられも初めてのハンバーグの味に表情を明るくし、お互いに笑みと浮き立つような声を交えた。

ちなみに彼女達が頬を緩めるこの食べ物ハンバーガーという名で米国では親しまれており、ちょうどこの年には米国カリフォルニア州パサデナ市のあるドライブインにて看板メニューとなり大変な好評を得ていた。そしてこのドライブインを経営していた二人の兄弟の名は、世界最大にして最も有名なファーストフードチェーン店の名前として後年に至るも残されて行く事になる。

その兄弟は兄がモーリス・マック・マクドナルド。弟はリチャード・ディック・ジェイ・マクドナルドといった。

1330。

お昼の休憩も終えて英気を養った艦魂達と人間達。お昼にもなると横浜の空気にもだいぶ暖かさが帯び始め、観艦式の式場海域である波間の色合いもその蒼さをより一層深く濃い物としている。そしてその波間は98隻の艦艇が放つ皇礼砲の音と同時に海面をざわつかせ、ポカポカと陽気を伴う横浜の潮風は式場海域に薄っすらとかかる残煙のカーテンを拭い去って行く。

本日4度目の皇礼砲が盛大に鳴り響くが、皇礼砲の相手は式場海域に艦尾を向けてゆっくりと横浜港へと戻っていく。その相手とは

21発に及ぶ皇礼砲が示す通り、天皇陛下に御乗艦して頂いた御召艦の比叡艦である。式場海域にてそれを見送る全艦艇の艦首や舷側には再び登舷礼式整列した乗組員達が立ち並び、明石も含めた各々の艦魂達もまた艦橋天蓋にて直立不動の姿勢をもって比叡艦の後姿を無言で眺めた。

その後、横浜港内へと軍艦旗を進めた比叡艦は観艦式が始まった際と同じ位置に錨を下ろし、ラッタルの準備も完了して陛下が比叡艦から御召艇へと御乗艇なされたのは1420。駅のすぐ近くである御召栈橋へとお戻りになり、1430には御召列車が汽笛一斉、車輪を回して東京へと向かい始める。及川海軍大臣や山本連合艦隊司令長官らが深々とお辞儀するのを車窓越しに流れる景色として認め、全帝国海軍将兵を統率する大元帥陛下は皇居への帰途へと御つきになった。

まさにこの瞬間をもって本日の式典は終了の時を向かえ、歴史に名を残す帝国海軍最後の大祭典、紀元二六〇〇年記念特別観艦式は閉会となった。御召列車の汽笛と蒸気の音の余韻が残る駅の構内ではさしもの及川海軍大臣も安堵の溜め息を下ろし、比叡艦からの電波送信によって無事に観艦式が終わった事を知った式場海域にいる者達が一斉に緊張の束縛から解放される。

御召艦である比叡艦の命である比叡も『ぷは〜っ。』と盛大に息を吹いて測距儀の上に腰を下ろし、7年間にも及ぶ経験を持つてしてもちつとも慣れる事のない御召艦の役目から開放されて胸を撫で下ろした。港の外にて待機している先導艦の高雄艦や、供奉艦の加古艦、古鷹も時を同じくして役目を追え、安堵の息を漏らして心と身体を楽にする。

しかしそれは御親閲艦隊を成している4人だけで、式場海域では幾分は緊張感が和らいだものの、まだ全部の艦艇の艦魂達は自由気ままに仲良しの下へと赴いてお話しするような様子は見せない。特

に明石を含めた番外列の艦にあっては尚更で、ここからが本日最後にして唯一となる彼女達のお仕事が始まるのだった。

『航海当番配置に就けー！』

『当直甲板員、錨鎖縮め方！　かかれー！』

明石艦の甲板上にも号令の声が響き渡る。艦内にて待機していた乗組員達が甲高い靴音を上げて颯爽と持ち場に掛けていき、見学者達はそれを目にして普段の海軍軍人の勤労を偲ぶ。

測距儀天蓋に戻ってきた明石もいよいよ自信のお仕事が始まる事に気を高ぶらせ、頭から軍帽を取るや後ろに流した髪を両手で撫でて整えた。艦首にて錨鎖巻揚げの作業に就いている乗組員達を眺めつつ、明石は瞳にキツと力を入れて足元から響く特務艦長より発せられた号令を耳にする。

『明石艦出港用意！』

明石の足を着ける測距儀の下に位置する艦橋からその声が放たれ、それに続いて信号員の信号ラッパがけたたましく鳴り響く。艦尾側の煙突より黒い煙の塊がもくもくと上がって風に靡き、艦全体を静かに回転を上げ始めた機関の鼓動が包んだ。

明石は少しだけ笑みを殺して表情を律すると列先頭方向である左舷へと視線を長し、そこに自身に先駆けて微速前進でゆっくりと動き出す迅鯨艦じんけいの姿を認めた。左舷すぐ隣に位置する駒橋艦こまはしは錨鎖巻揚げこそしてはいるがまだ出港の信号ラッパを甲板の上に鳴らしてはおらず、艦首に小さな白波を起し始めた明石艦は駒橋艦とそのさらに左舷にいる勝力艦かつりきを横目に迅鯨艦の後ろへと進み出ていった。その理由は観艦式が既に終わっている事と、艦首にてゆっくり回頭

しつつ前方の第一列先頭艦である赤城艦を右舷に眺めて半周する迅鯨艦の後ろを明石艦が追従する事、そして迅鯨艦や明石艦を含んだ番外列を成した各艦が拝謁艦という役目を観艦式で担っている事にある。つまり同じ山下公園近くの栈橋から出発した明石艦と迅鯨艦は、これより陛下が御乗艦なされた比叡艦と同じ航路を辿って式場海域を航行し、その身に乘せた見学者のお歴々に帝国海軍の栄えある艦艇達の姿を間近で見せてやりながら出発港への帰途に着くのだった。

海軍関係者ではない一般人の見学者にとっては観艦式最大のお楽しみであり、明石艦の艦中央部では彼等が一斉に舷側へと歩み寄る。天幕が無くて僅かに西に傾きかけた日差しが眩しかりうが、防諜の目的にカメラの類を持参できなかった事も彼等には関係ない。そのはしゃぎたてる声は測距儀の上で真面目な表情を浮かべる明石の耳にも届き、民間の人々の笑顔に貢献できた自分を彼女はちよつと誇らしげに思った。

だが明石の分身が右舷90度に赤城艦を捉えるようにして艦首の方角を整えた刹那、左舷から突如として明石を呼ぶ人間には聞えない声が発せられる。

『明石くく！ お疲れちゃくん！』

『あ、長門さん。』

赤城艦とは明石の分身を挟んだ所に艦尾を見せて浮かぶ大きな艦は、明石が姉の様に慕っている長門の分身。満艦飾と第一、第四砲塔を隠すように展張された天幕が見慣れた長門艦のシルエットを僅かに変えているが、大きな軍艦旗がヒラヒラと宙を舞っている艦尾旗竿の根元に艦の命たる者がいた事で明石はその艦を長門艦だと正確に判別する。既に天皇陛下よりご拝謁を受け賜る機会も無事に終えたからか、長門は昼食の時にはちゃんと着ていた筈の軍装をいつもの様に崩して着ており、ボタンやフックを全て外した上着の裾と

彼女の長い髪が軍艦旗と同じテンポで風に靡いていた。

このまま明石達が港に戻ってしまう事から夜の晚餐を共に出来ないのを知る長門は、律儀にも艦尾に出て目の前を通っていく番外列における各艦の艦魂達に労いの言葉をかけているらしい。普段は些細な事でも面倒臭がる長門にしては珍しいと思いつつ明石は手を振ったが、彼女はそれが栄えある帝国海軍の艦艇達を統べる連合艦隊旗艦たる者の役目として精を出しているという長門の心の内を知らない。陸奥や山城などの仲間達にはできない、仲間達へ向けた上級階級を頂く者としての細かな気配り。それが艦魂としての長門の優れた所で、サボリの常習犯であっても帝国海軍の艦魂達から一様に尊敬されるという彼女の優れた部分でもあった。

『お疲れさまですー！』

口の前に手を添えて応えた明石は、右手を頭上に高々と上げて左右に流す。長門は旗竿に寄りかかって肩の高さで手を振り、柔らかな笑みを伴って眼前を横切る明石を見送った。この場を供にする全艦艇を率いる身として、長門も本日の観艦式が何事も無くフィナーレを迎えた事を喜んでいるらしい。どこか満足そうな表情を浮かべる長門に明石も気持ちを良くし、両舷に並ぶ大小の仲間達の分身が成す列の間を胸を張って進んだ。

その合間にも見学者達の興奮した声が明石艦の甲板には絶え間なく木霊し、乗組員や明石も一樣に本日の空の様に晴れやかな表情を浮かべる。特に観閲も終盤となる第三列の先頭付近には帝国海軍最新鋭にして、民間へのお披露目は今回が初めてとなる最上型、利根型の二等巡洋艦が揃って錨を下ろしており、間近で見た見学者達からは絶賛の声が絶えない。

一応は利根型とは同じ年代に当たる明石の分身だって帝国海軍最新鋭で、民間へのお披露目も同じく今回が初めてなのだが、やはり花形である戦闘艦と地味な特務艦では認知度に気温差があるらしい。

ちょっと明石には残念であり口を尖らせかけたが、こんな日に不機嫌な姿を仲間達の前で曝してシラけさせる気にも彼女はなれない。

仕方ないか。

そう脳裏で一言呟いて明石は表情を律し、第三列の先頭艦である金剛艦を左舷に眺めつつ式場から南の方角へと艦首を向ける。ずつと先には横浜の街と山並みが広がり水平線は全く無いが、明石艦の艦首が向いた方角のその陸地こそ出発地でもある本牧地区だった。

背後にて絶景となっている式場海域に弱冠の名残惜しさを感じながら、明石の分身は僅かに陽も暮れ始めた頃になって栈橋に接岸。見学者達は艦を降り、明石艦には潮臭さが滲んだ顔を持つ者ばかりの日常に戻る。戻ったら戻ったで艦のお掃除に、見学者達が腰を下ろしていた無数の椅子の片付け、展張していた天幕と満艦飾索の格納などやる事が多い。

乗組員達が清掃作業に励む姿を明石は変わらず測距儀の上から眺めていたが、水平線に沈まんとする太陽と入れ替わりに10月の寒さが再び横浜の空気を支配して行き、肩を小さく震わせた彼女は外套の襟をキュッと閉めた。

『うゝ、寒いゝ・・・。』

どうにも寒さという物に弱い明石は呟くと同時にその場にしゃがみ込み、街灯もつき始めた横浜の街並みをしばし眺める。弱点でもある寒さを感じても艦内へ入ろうとしない明石だが、低下した気温を鑑みて暖かい場所へ退こうとしないのは彼女だけではない。それは乗組員もさる事ながら、ついさつき栈橋へと下艦していった見学

者達もまた同じであつた。明石と同じく寒い寒いと口々に声を放つ彼等だが、それを推してでもその場に留まらんと皆一様に決めている。その理由は実は見学者達も明石も同じ物であり、やがて明石艦の艦内に木霊したとある号令によってそれは実現される運びとなる。

『艦橋より分電室。電飾索へ電流送れ。』

その瞬間、明石の頭上高くからはバチバチという火花が散るような音がにわかに鳴り出し、やがて艦首旗竿から前楼頂上、後楼頂上、艦尾旗竿と、満艦飾と入れ替わりに張り巡らされた電飾索には無数の電灯が輝き始めて辺りを照らし出す。辺りはもうだいぶ薄暗くなってきたが、明石が立つ測距儀の天蓋を含め、明石艦の周りの波間や棧橋は煌々と電灯の輝きによって明るくなった。すると棧橋に留まっていた見学者達からは一斉に歓声と拍手が湧き上がり、それまで静寂に包まれていた棧橋を一気に賑やかな雰囲気へと変えた。

『おおお！ 電飾だ！』

『わあゝ、綺麗だなあ。』

『すげえや！ まるで昼間みたいだ！』

暗い波間に電飾の明かりで浮き上がる明石艦の姿には見学者達も息を飲み、生まれて初めての電飾を施した明石も測距儀の上から目を輝かせて眺めてみる。だが艦からちよつと離れた棧橋にて明石艦の電飾姿を愛でる見学者の人々とは違い、あまりにもすぐ近くで自身の分身の姿を眺める明石にはその全体像が上手く把握できない。頭上にあるのは空を一刀両断するように展張された電飾索が灯る光景だけで、激しいとも形容できる程に輝く青白い光の列は何かイカ釣り漁船のようだ。

『うゝゝん……。』

昼間の満艦飾に代わって夜のおめかしをした自身の分身の姿をなんとか見てみたい明石。顎の辺りに手を添えて首を捻ってみるものの、陸地に足を着けられない艦魂である彼女にはそれを実現する策が全く思いつかない。その最中、明石艦の艦尾側すぐ後ろに錨を下ろしている迅鯨艦も電飾を灯し始めて栈橋からの歓声の音量がさらに上がる。明石は栈橋から木霊する拍手と嬉々とした声につられる様にして艦尾方向へと視線を流し、迅鯨艦へと見る位置を移してみてもどうかと考えるが瞳に映る迅鯨艦の姿は自身とあまり変わらず、艦首から上部構造物を唐竹割りにしたような電飾の有様に早くも考えを却下した。

だが不意に響いてきた栈橋からの声を明石は認識するや、その声が表示していた北側の海上へと視線を向ける。自身の分身に関しては栈橋にいる見学者達と同じ様に鑑賞できない明石であったが、瞳に映った光景は今度は見学者達と全く同じ代物であった。

『おおお！ 式場の艦にも点灯したぞ！ 見ろよ！』

『ん？ おおお！』

明石艦が接岸する栈橋の北方に広がる沖合い。昼間は式場海域として皇礼砲の轟音と残煙で圧せられた波間には、在泊各艦が電飾によってその艦影を止みに浮かび上がらせている。特に長門艦に始まる戦艦群はその高い前檣楼をくつきりと光の索で形作り、暗い波間にそびえた光の山の様相を呈していた。中型の艦艇に関しては残念ながら小さ過ぎてよく解からないが、空母はそのまま長方形の輝きを持ってその存在を見る者達に示す。電飾を施しているのは駆逐艦や潜水艦、小さな掃海艇にあっても同様に、明石の瞳に移る仲間達の姿はまるで夏の夜空に輝く天の川だった。

やがて式場海域の波間では、大型艦に搭載された探照灯が起動されて光の帯を夜空に向かって放つ。外套を着けていても肌寒さが拭え

ない夜であったが、見学者や乗組員達、そして明石は海上で交差する探照灯の光線の下、星空を反射する漆黒の海面に浮かび上がった電飾の山々をしばらく眺め続けるのだった。

それはまごう事無き帝国海軍の栄光の日々。

この勇壮な姿を色褪せる事無く爛々と輝かせて人々の目に映る艦艇達が、僅かこの5年後にその9割以上を海底に横たえる事になるうとはこの時だれが予想し得たであろうか。見学者達も、乗組員達も、明石を含めた艦魂達も皆、自分達こそ世界で最も精強にして栄華を極めた海軍だと信じて疑わなかった。

しかし明石艦が身を湛える栈橋から僅かに内陸へと目を移すと、彼女達帝国海軍を支える日本という国家には微塵も余裕が無いという現実が無造作に転がっている。明治33年の日本初の観艦式より恒例であった市井の記念絵葉書もその対象で、毎度観艦式が行われる度に稼ぎ時を迎える事が出来る印刷所や出版業者には国家総動員法の名で統制が掛けられ、既にこの年の正月には『不急の物は排除されねばならない。』との世論もあって年賀状の流通すらも当面の間は中止となっているのだった。

皇紀二六〇〇年祝奉とは言うものの、その余韻すらも残す事が出来ない程に日本は疲弊していた。もはや国家としての余裕なぞどこにも無い状態であった。

それが波間に輝く光景に見て取れなかった事が、この時代の最大の不幸であり、同時に最大の罪であった。

第七三話 「紀元二六〇〇年記念特別観艦式／後編」 （後書き）

◆拝読に当たって◆

読者皆様、いつもご拝読くださり有難う御座います。

さて拙作を拝読している最中、同じ物を違う言い方で表している部分が御座いますが、ここにはちよつとした意図が御座います。

前々回のお話辺りから「パン」と「めんぼう麵麩」という言葉が出てきてありますが、この二つの言葉は放つキャラの年代によって使い分けられておりまして指し示す物は全く同じです。基本的に昭和生まれの艦魂には昭和11年の献立簿洋式という海軍正式書類にて「パン」という語句が含まれている事から「パン」と呼ばせておりまして、それ以前の大正、明治の頃に生まれたキャラには「めんぼう麵麩」と呼ばせております。昭和5年の海軍における献立にはまだ「めんぼう麵麩」の語句があります。小生自身が混乱するリスクも考えて昭和とそれ以前という区分で分ける事に致しました。

また拙作では海軍献立にしっかり記載されている料理を登場させておりますので、食の面からも当時の帝国海軍の生活を楽しんで頂ければ幸いです。

では今後とも明石艦物語をどうか宜しくお願い致します。

2010年 2月15日 明石艦物語作者／工藤 傳一

第七四話 「名前をくれた地」

昭和15年10月12日。

横浜沖にて整列していた観艦式参加艦艇の全てでは、寥々たる課業始めのラッパと共に乗組員達総出での電飾索納め作業が始まっていた。数年に一度しか施す事ができないであろう電飾策は乗組員にとっても艦魂達にとっても名残惜しく、甲板に輪にして積み上げた索が艦内の倉庫へと向かう光景を無言で見送る。各艦の電飾索はこれから艦内奥深くの倉庫へと運ばれ、そこでまた数年後の空で輝きを放つ事を夢見ながら長い眠りへとつくのだ。

昨夜の間は美しさに溢れていた自身の姿を見学者と共に楽しんだ^{あかし}明石も、乗組員に担がれて艦内へと運ばれていく電飾索を見守る。艦魂の明石にしたらそれはただのお船の備品程度の代物ではなく、自身の外見を綺麗に飾り付けてくれる大切な装飾品。満艦飾に使用した各種信号旗ならば信号所甲板にいつでも目にする事が出来るが、電飾索はそれに反して日常では全く使用されないので艦内でも出入りの最も少ない備品倉庫に納められる。艦の命である明石でさえも、そう簡単には目にする事が出来なくなるのだ。

普段からねずみ色のみの色合いしか持てない明石には残念な事この上ないが、これも帝国海軍艦艇である自身のさだめと思って電飾索を見送る。観艦式の終わった横浜は国際港らしくすぐ様民間の商船や客船の往来が始まり、明石は式場海域を迂回して航行していく白い船体の船舶を横目に、中々残り香となって消えない残念な気持ち拭うのだった。

そしてこの日を持って連合艦隊所属の各艦隊では、11月の艦隊

再編も近い事からこれまで続けてきた艦隊訓練が終了。明石艦が随伴してきた第二艦隊でも所属の各艦は母港へと帰り、新編成と来年に備えての整備を受ける事になった。もう既に一年以上も波間に浮いている明石艦にも呉での入渠整備が計画され、艦底に溜まった垢落としと化粧直しの予定が組まれる。それは連合艦隊司令部を宿す長門艦^{ながと}とて例外では無く、姉妹艦の陸奥艦^{むつ}と供に所属鎮守府である横須賀へと戻る事になった。

長門がいよいよ呉に戻るのは明石としても初めての事で、艦尾に遠くへ行くと長門の分身に彼女はちょっと寂しそうな表情を浮かべる。大らかで底抜けにテキトーな性格の長門には明石ですらも手を焼く時もあるが、姉と慕ってきたその気持ちは決して嘘偽りな訳ではない。常に自然体である長門の人柄と笑みには何度も助けられているし、同じ師匠に教えを請いだ者として明石が抱いている彼女への親しみは、仲良しの神通や那珂にすらだって無い物だ。

故にほんの少しだけ不安を抱く明石であったが、頼れる姉はそんな彼女に自身の整備が終わったらすぐに呉へと回航する予定となっている事、そしてお互いに母と慕う朝日^{あさひ}が11月には現在の支那方面艦隊隷下の任務を解かれて内地帰還となり、さらには明石や長門と同じ連合艦隊に付属艦艇として名を連ねる予定である事を教え、明石の表情を明るくさせてくれた。長門にとっての横須賀での日々は久々に与えられた帰省休暇のような物で、彼女は呉へと帰る明石に数日前の宴会の際に話した大和^{やまと}という名の新米艦魂と仲良くしてあげて欲しいとお願ひし、心の不安を払拭された明石は二言返事でそれを了承。別れをお互いに笑顔で済ませたのだった。

こうして呉への帰途へとついた明石。横浜の波間を発ってしばらくすると、今度は右舷の向こうに横須賀の軍港を認める。お世話になった富士^{ふじ}に直接別れの挨拶をする事ができないのは残念であった

が、明石は甲板の上から深々と腰を折って大先輩への感謝と敬意を示す。

彼女はしばらく無言のまま頭を上げなかったが、それは富士と供にもう一人、横須賀の波間に今も暮らしているであろう人物への想いを彼女なりに募らせているからだった。

『森さん……』

呟いた声は東京湾の潮風に運ばれ、太平洋へと続く水平線の遙か向こうへと流されていく。もう既に呉への帰途についているという事実を胸の内で連呼して明石は諦めをつけようとするが、同時に彼女は会わない方が良く考えた自分をちよっとだけ憎らしく思うのだった。

翌、10月13日。時間はお天道様も真上に位置する1120。

明石艦は紀伊水道を経て大阪湾を北上していた。

8駆を除いた神通率^{じんつう}いる二水戦や七戦隊の仲間達と昨日までは一緒に航行していたのだが、民間の船舶の往来も盛んな大阪湾の波間を掻き分けていくのは今は明石艦ただ一隻のみである。そもそものが前線に出たのドンパチを想定していない特務艦である明石艦は艦影に見合う大きな砲塔などは持っておらず、軍艦旗を翻す艦としては些か迫力に欠けるというのが誰にとっても正直な所。故にすれ違っていく民間船の乗組員達は甲板に出て、ゆっくりと波間を駆けて行く奇妙な海軍艦艇に首をかしげていた。

当の明石艦の乗組員、そして艦の命である明石にとってはなんとも失敬な態度であるが、今日の明石はそんな自分への視線に気付い

ても頬を膨らませるような事はない。

艦首旗竿の根元に立って水平にした右手をおでこにつけ、艦首の向かう方向に視線をキョロキョロと動かす明石。元より今の彼女にとっては、右舷から浴びせられる不思議そうな視線なぞ眼中に無かった。身体をくねらせたり背伸びをしたりして探索の視界を確保しつつ、彼女はふと口を開く。

『うゝん、うゝん。・・・どこかなあ？』

しきりに何かを探すようにして明石が顔を向けるのは、明石艦艦首の先に広がる見渡す限りの陸地。以前の艦隊訓練では神戸に來た事もある明石だが、淡路島を左舷に迫る程に望んでいる今の状態からも解る通り、明石の分身の艦首は正確には神戸よりもだいぶ西の方に向かっており、当の彼女もまたそんな事は百も承知である。呉への帰り道としても瀬戸内とは海峡で隔てられ、民間船の通航量も多い大阪湾を航行するのはどこか変ではあるが、実は明石の分身は呉への帰り道においてとある地に立ち寄るようにとの命令を連合艦隊司令部より受けていた。彼女はその目指す地を艦首から望もうと試みているのである。

やがて旗竿に腕を巻きつけて艦首から身を乗り出していた明石の耳には、いよいよ目的の地が視界に広がった事を示す艦橋配置の乗組員の声が響いてくる。そしてその声に含まれていた言葉に、明石は思わずにっこりと微笑んで眼前に広がる海岸地帯を眺めた。

『方位330度。』明石”港が見えます。』

『よし。当直甲板員、右舷錨用意。』

『おお！ あそこかあ！』

つま先立ちになって艦首を望む明石が叫ぶように声を上げる。そこその大きなサイズの棧橋を持つものの明石艦が向かう港は呉や横須賀のような大きな軍港ではなく、そも海軍関係の施設だって何一つ無い中規模の港湾である。しかし明石はそんな港の光景に肩を落とす事無く、むしろやつと目にした辺りの景色に子供の様にはしゃぐ。もちろんその理由は乗組員の声にあった、自身と同じ名を持つ眼前の港にこそある。

やがて明石は胸の中で怒濤の洪水の如くうねる嬉しい気持ちに耐え切れず、相方と過ごしていた時によく歌っていた鉄道唱歌の一節を大きな声で歌い始めた。

舞子まいこの松の木の間より

間近く見ゆる淡路島

夜は岩屋の灯台も

手に取る如く影あかし

明石の浦の風景を

歌に読ひとまろみたる人麿ひとまろの

社はこれか島がくれ

漕はりまぎゆく舟もおもしろや

ゆっくりとした速度で棧橋へと進む明石艦が目指したこの地、その名を兵庫県明石市明石港。古くはその周辺を指して「明石の浦」と呼ばれ、二代に渡って明石の名を持つ帝国海軍艦艇の命名由来地がここなのであった。

旧播磨国であるこの地は日本史の上でも大変にその名が知られて

おり、歴史の授業でも必ず教えられる645年の大化の改新以前は明石国とも呼ばれていた過去を持つ。京や奈良といった古き日ノ本の中心だった地からは幾分離れてこそいるものの、鎮西こと九州まで続く山陽道と淡路島への海上交通路が交差するこの地は昔から交通の要衝であり、源平合戦の舞台としても大変に有名である。

また、この明石という地を語る上で外せないのは、なんといってもこの地から生まれて日本史にその名を残した同名の氏族、明石氏の存在に尽きる。戦国時代後期において特に名を馳せ、竹丸に桐の紋所を掲げたその家柄の系譜はそのままこの地の歴史と捉えても決して過信ではない。

その最たる人物はやはり、群雄割拠の戦国時代にあってもその名を残した明石全登^{あかし たけのり}であろう。

豊臣恩顧の大名としてこの地を治めた宇喜多家^{うきただ}に仕えた彼は熱心なキリシタンであると供に謀略と武勇に優れた屈指の武将で、仕えていた宇喜多家においても軍師格とも目された大人物。主君に従っての関ヶ原、主家滅亡後の大阪の陣という大合戦に一族を率いて参戦しており、百戦錬磨の上に十字架を引っさげて死を恐れずに襲い掛かってくるその勇猛振りは相対した徳川方を戦慄させたとも言われる。この恐ろしさは後年に至り徳川の世となつてからも永く人々に記憶されたりしく、天下泰平となつた頃に起きた島原の乱にて国内のキリシタン勢力が一掃されるまで、「明石狩り」と呼ばれる幕府による明石一族殲滅作戦が何度か実施された程であった。

しかし戦国の世にあつて実力をもってここまで勇名を馳せた明石氏の名が消える事はついになく、希代のいくさ人の血筋は脈々と後の時代にも流れ続けていく。そしてその流れの中で、またしても明石氏の名を輝かせる者が近代になつても現れた。

日露戦争時に欧州での諜報活動、及びロシア本国での革命勢力支援工作にて有名な元陸軍大将の明石元二郎^{あかし もとしろう}である。

彼の出身は福岡県であり一見すると彼個人の出自に明石と呼ばれる地の系譜は見つける事は出来ないのだが、その家柄は豊臣秀吉公

の軍師として名高い黒田くろだ考高よしたか公を祖とする黒田藩で庇護を受けてきた明石一族の末裔である。官兵衛かんべえの通称で知られる黒田考高公は播磨の国で頭角を現した過去を持ち、彼の妻はその頃に娶った竹丸に桐の家紋を持つ正統派明石氏の出身で、その縁が明石一族を300年も続いた徳川の世にあっても残し続けていたのだ。

故に直接の血統ではないものの、明石元陸軍大將は明石全登とは親戚筋に当たる事になる。

ちなみに本人の遺言によって台湾に作られた明石元陸軍大將のお墓はキリスト教墓地に有り、日露戦役時の権謀術数の面も併せて図らずも歴史は彼とご先祖様の共通点を現代に残しているのだった。

しばらくしてから明石艦は明石港に入り、明石市の市街地を鼻の先に望める栈橋に接岸する。さすがに古くから瀬戸内や淡路島四国に大阪湾と多岐に渡る海上交通路の玄関口として栄えたばかり、6メートルと一等巡洋艦並の喫水を持つ明石艦でも悠々と接岸できるだけの栈橋であった。そして観艦式にて初めての民間へのお披露目を果たせたからか、明石艦がホーサーを張る栈橋には黒山の人だかりが出来ている。彼等は皆この明石市やその近辺に住む民間の方々に、自分達が住む地の名を冠した艦における建艦以来初的一般公開にこぞって応募してきた人達だ。

観艦式では帝国海軍の花形である戦闘艦の仲間達に見学者の視線を独占してしまった明石は、今日は間違い無く自分が主役である事を確信してご機嫌である。一般公開の予定を組んでくれた山本長官を始めとする連合艦隊司令部に深く感謝しつつ、彼女は自身と同じ名を持つ地でそこに暮らす人々との出会いを存分に楽しもうと胸を鳴らした。

舷門が設置されるや甲板にまず登ってきたのは明石市の市長や市議会議員のお歴々で、整列する乗組員達の前に進み出た特務艦長に

労いの言葉をかけてくれる。彼等にとってもこの度の海軍さんのお船が来訪してくれた事は大変に嬉しいらしく、満面の笑みを一同に甲板に咲かせて自分達が住む地と同じ名前を持つ明石艦の寄港を大いに祝う。棧橋の根元に当たる小さな広場で乗組員達を相手とした宴まで催してくれ、ご当地名産の鯛や穴子、イイダコを使ったたくさんのお料理で水兵さん達はおもてなしを受けた。特にこの地のタコは大変に美味な事で全国にその名が知られており、大八車数台分にも及んだ大量のタコは明石艦に食料品として贈られた事から、乗組員達と明石はしばらく美味しいタコ料理が艦内での食事としてだされるであろう事を予想して笑みの明るさを増すのだった。

ちようどお昼時だった事もあり明石艦の乗組員達は歓迎会にての美味しい一時に洒落込み、明石は烹炊所から失敬してきたパンやリソゴ、パイ缶、小さな魔法瓶一杯に作ってきたカルピスを引っさげて測距儀の上で昼食を取る。艦から足を離せない艦魂である彼女は眼前にてわーわーと声をあげて楽しんでいる乗組員達の姿が羨ましかったが、今日だけはそれに伴う嫉妬心や自分だけが仲間はずれにされているような孤独感を感じる事は無く、辺り一面を圧する自分と同じ名を持つ地の景色を眺めながら笑顔での食事とする。

陸地側に艦首を向けて接岸する明石艦の測距儀の上。

まずその目に飛び込んでくるのは市街地の中によっきと生えた丘陵地帯で、その頂上にはかの剣豪、宮本武蔵との関わりも持つというお城がその威容を誇っており、その名もなんと明石城。自身の分身を浮かべる波間は明石港で、そこから少し西側で海に注いでいる清らかな河川は明石川。軍艦旗が翻る艦尾の方向に広がる淡路島までの波間は明石海峡と呼ばれ、特務艦長が市長さんより手渡されたお土産はこの地独特の卵料理で、その別名はなんと明石焼き。終いには明石の分身の中にて神棚に祭られている艦内神社は、眼前にそびえる明石城や東側に位置する明石神社を総本社としているの

だった。

見る物、聞く物、食べる物、その全てが”明石”づくしである。

もうここまで来ると明石にはこの地が自分の名前の大元とは思えず、何やら自分だけの国を持てたような感覚すら湧き上がってくる。カルピスが甘さを残して喉を通る間際に一望すると、彼女の心は民人に慕われる一国一城の主になった気分にも誘われる。実に清々しくて心根が晴れる一時で、日本という国を治める天皇陛下の気分とはこういう物だろうか、とバチ当たりの事まで考える始末。輪切りにされたパイナップルを缶詰から手で摘んで口に運び、自分の国での至れり尽くせりの食事を明石は存分に楽しんだ。

やがて歓迎式も終わったのか乗組員の半分くらいが棧橋の上を明石艦に向かって歩き、その背後にぞろぞろと拝観券を握った人々が列を成す光景を瞳に入れ、明石はいよいよ自身の分身が自分の国の住人達に見せる瞬間がやってきたと察する。

すっかり和気藹々な雰囲気だ。明石市の人々とも親しんだのか、軍人さんというちょっと怖い存在であるにも関わらず水兵さん達の周りには目を輝かせた少年達が輪を作っている。栄えある軍艦旗を引っさげた艦艇は、少年達にとってはまさに憧れの象徴。元気の良い歓声を高々と上げながら舷門を駆け、我が子の聞かん見っぷりを恥じて水兵さんに詫びる両親を背に艦首甲板にて空を睨む主砲へと集まる。

『なんや、この砲て結構デカイんやない！』

『あほ！　これ12センチからあんなぞ。陸軍やったら野戦重砲並や！』

大砲談義に声を張り上げて主砲塔のあちこちに忙しなく視線を送る少年達。見栄も体面も気にせずにはしゃがんだり跳んだりして主砲

の周りをうろつき、明石も乗組員達と同じく笑顔でその光景を見守る。最初の内は彼らの元気さと自身の分身への褒め言葉に嬉しくて笑っていた明石なのだが、ふと目を輝かせる少年達の顔がいつも記憶の片隅に残る相方の顔とそっくりな事に気付く。

いつだったか柱島の泊地にて長門艦と陸奥艦が揃って錨を下ろす姿を間近で見た際、子供の頃からの憧れだったと言って相方は飽きもせず両艦の浮かぶ波間を一時間程もニヤニヤと眺めていた事があった。『大きいな。』の一言を5回は口にして突っ立ったままの相方の頭の中がどうなっているのか明石にはちっとも理解できなかったが、眼前にて乗組員達の厚意により座席やハンドルに直接触れて表情を明るくする少年達の姿が今更ながらそれを教えてくれる。男の中の男を自負して兵学校の日々を終え、海軍生活もそこそこ板についた相方も、その根本たる心の芯は少年とちっとも変わらないのである。違いといえば着ている服がちよっぴり値が張るくらいで、成長した身体を持つ為に大人になった”つもり”でいるのだ。

『ぷっ。あははは。』

大きくした目を爛々と輝かせる少年達の顔に相方を重ね、明石はそれによって生まれる可笑しさに耐え切れず声を上げて笑った。何の事は無い。お仕事にせつせと励む横顔も凛々しいかった相方は、どちらかといえはお仕事が上手にもこなせる優秀さと乗組員の仲間からも慕われた器用な人物であったが、その根本は幼心の塊なのである。いまその顔を間近でじっくり見れないのは残念ながらも、これまで謎であった相方という人物をちよっただけ理解できた事は明石にとっては嬉しかった。

その一方で子供達の親に当たる見学者の方々は、明石がいる測距儀からは背後にあたる艦橋裏の甲板にて披露されている工作設備の様子に目を留める。彼等が住む明石市は元々が海上交通路が発達し、

しかもすぐ東側には世界5大海運都市の誉れも高い神戸市を望む地勢もあり、近代では重工業にて発展を遂げてきた地。大きな物では神戸川崎造船所の明石工場がその代表例であり、他にもこの地に点在する各工場では海軍向けの工業製品を製造、次いで納入している業者も多い。それに伴って明石市の雇用事情は工員さんの割合が高く、住人である見学者のほとんどは工業に何かしらの関わりを生活の中で持つ者達であった。故に最新鋭工作艦である明石艦の設備は機械という物を見慣れた彼らの視線を釘付けにし、呉や横須賀の海軍工廠にすらも設置されていない代物も含んだ最先端の工作機械に溜め息を漏らす。

『おお、こらまた立派な旋盤やな。』

『見てみいや、この刻印。これ英語やないで、ドイツ語や。』

『ドイツ製の機械かあ。ワイらが働いとるトコの本社工場かて、こないに高価な代物あらへんで。さすがは海軍さんや。』

『こっちの穿孔器も精度がエライでそんな機械やな。設備公差はどんなもんなんやろか？』

工作設備に対する見学者達の思わぬ食いつきは乗組員達も予想外で、急遽工作部の下士官が甲板上に呼び出されて見学者達からの質問に応じる事となった。一応は防諜の観点から甲板に並べたのは比較的小型で幾分は市場に出回っている機械ばかりであるのだが、普段からお目にかかる事はまず無い海軍の工作機械の品々に見学者達の興味が尽きる事は無い。そして彼等は声を張り上げて対応してくれた工作部の下士官によってその理解を深い物とし、自分達が住む地と同じ名前を持った海軍艦艇が極めて優秀な工作能力を持っている事に表情を明るくする。

甲板には彼らによる絶賛と感心の声があちこちから木霊し、艦橋の上でそれを認めていた明石は益々機嫌が良くなった。なまじ軍医さんという艦魂社会での珍しい立場にある彼女は、その分身もまた

帝国海軍では珍妙な存在の工作艦。観艦式の時に見学者の視線を集めれなかったのは記憶に新しく、乗組員を含めた海軍の人間達の中にも艦首に菊の御紋をつけていない特務艦を少しばかり軽く見る風潮もあるのだが、こうして今の様に自分を褒めてくれる人間達をその瞳に移せた事は彼女にとってはとても嬉しい事だった。おまけに彼等が住むこの地の名前が自分と同じだとくれば感慨も一入で、明石は眼下に並ぶ人間達の一人一人に深い感謝と親しみを抱く。

ただ艦中央に位置する甲板から中々離れない親達に反し、子供達は力の権化とも言うべき火器が無い事で退屈そうな表情を浮かべており、その内の一組の親子が放つ会話に明石は表情を一瞬で暗くしてしまった。

『父ちゃん、もう行こうで。父ちゃん働いとる工場にも、こんな機械ぎょうさん有るやん。』

『あゝ、ほんなら艦の後ろにある主砲、見てきたらどうや？』

『舳先にある奴と同じやん、あれ。この船、大砲も小さいし、魚雷もないからつままないねん。ワイ、はよ棧橋の入り口にあった出店に行きたいんや。』

幼心にはやはり解かりやすい代物が人気を得るようで、用途が戦闘と関係の無い工作機械などを見るべき物であると意識するには残念ながら及ばない。艦自体の大きさだってカルタにも謳われる程に知名度のある長門艦や陸奥艦に比べれば明石の分身はこじんまりとしているし、そもそもが高角砲である明石艦の主砲は外観上でも特に目を引けるほどの大きな砲塔に代わるには無理がる。海での戦を生業とする海軍の船としてそれは幾分魅力が欠ける事と同義であり、致し方ない事であっても艦の命である明石には辛い現実であるのが正直な所だった。

もちろんその装備や艦の大きさも含んだ艦としての性能は、海軍

における造船を担う者達が多く、試行錯誤の末に決めた事であり、主砲や工作機械の一つ一つに至るまでしっかりとした意味が込められている。むしろ計画設計から実際に竜骨を据え付けて建造の第一歩とするまで明石艦は実に4年の歳月を注ぎ込んでおり、帝国海軍としての持てる知識と技術を全て投入して建造された艦である。決して『こんな感じいいや。』というような一言を用いて決めた要目など、明石の分身の中には一つとして無いのだ。

もっともそんな長い能書きをくどくどと子供に説明して理解を得ようとする気にならないのは、その親子のやりとりを苦笑して見守る乗組員も明石も変わらない。やはり戦闘の際に文字通りの力と化す巨大な砲や魚雷は、子供でも解かる一目瞭然の強さの象徴。別にその認識は間違っていないし、動かしようの無い事実である。乗組員にも明石にも言いたい事はあるのが率直な所だが、仕方の無い現実という物だった。

しかしその子供の父親は小さく笑い声を出すと至って端的な言葉を放って、眼前にある工作機械の用途と自分達が現在乗っている艦の役目を繋げてみせる。その言葉は彼らには決して見ることでできない筈の明石の身の上を正確に示しており、少しでも落ち込み気味であった胸の内を明石は再び明るい物とするのだった。

『ええか。この明石っちゅう船はな、ここにある機械を使って他のお船を修理してあげるんや。お前もよく学校から走って帰ってくる時、転んで泣いて家に帰ってくる事あるやろ？ なんぼ大きな大砲積んでる船かて、膝すりむいて泣いたままやったらまともに戦えへんがな。転んだらすぐにお薬塗ってくれるようなお医者さんがいつもおったら、安心してお前も学校から走って帰って来れるんやし、帰って来てすぐに友達とも遊びにいけるやないか。このお船はそうやって他のお船が思う存分動けるように働くお医者さんなんや。海軍さんにもまだ何隻もあらへんお船なんやから、今の内にしっかり見とかなアカンで。』

自分の境遇も織り交ぜた父親の言葉に少年は返す言葉が無く、『ふうん……』とちよつとふて腐れた感のある声を放つ。どうにもまだ自分がいま乗っているお船の希少さと退屈が均衡をとれていない様で、少しだけ口を尖らせたその表情は彼が不本意である事を如実に物語っている。

しかしその父親の言葉こそ、明石の表情を笑みへと変えてくれる原動力になった。極めてつまらなそうに父親の背後で控えている子供の姿は残念であるが、だからといって先程の様に明石の心が暗くなるような事は無い。退屈と戦うその少年がいつか大きくなった時、きっとお医者さんの有難さをよく理解してくれるであろう事を察したからだ。本当は今だってその事を薄々理解はしているのであろうが、それを湧き上がる強さへの憧れや好奇心によってどうしても優先度を低くしてしまう。なぜならまだまだ彼は幼心を当然とする子供であるからなのだ。

今日という日に初めて目にした人間の子供に理解が及んだ明石だが、同時に実はそんな考察だけで笑みを浮べているのでもない。それはかつてはこの少年であった者達の一人に、いつも心の片隅に映している相方もまたいるのだと思ったからだ。そもそものが人間にして男性である相方であったのだから、艦魂にして女性である明石には首を捻る部分が今までも一杯あったし、もう既に半年以上も顔を合わせる事が出来ていない現状の根本もそこにあったのではと今更ながらに思う。

しかし彼女は、今しがた眼前に見た少年の心模様が相方にもあった事を責めるつもりは微塵も無い。

きっとこうして一人で眺めなければ、別れた頃よりもそれなりに励んできた自負がある今でなければ、そして横須賀にて富士より諭された今という時間を大事にしようと思える自分でなければ、触れ

合う事すらも出来ない者達を理解する事など不可能だったろう。

そこまで考えた所でふと明石は夕暮れも近い瀬戸内の潮風が運ぶ寒さを妙に意識したが、同時に胸の奥から湧き上がる新たな発見に對する喜びを染みるように実感した。

朱色も混じり始めた横殴りの陽の光に細める証の瞳に、同じ名を持つ地の風景が静かに映る。そこに住む人々、そびえる山、せせらぐ川、育まれた文化、揺れる波間と、それらが教えてくれた自身の一番大切な者への理解。彼女はその全てに感謝し、そこにいる誰一人として応えてくれない事を知りつつも大きく手を振ってその地に別れを告げた。

その地の名前は明石の浦。素晴らしい場所であった。

第七五話 「最強を目指せ！／其の一」

昭和15年10月14日。

明石海峡を通過して瀬戸内の海を横切る明石艦は母港である呉軍港へと到着。呉工廠電気部庁舎群前の潜水艦棧橋脇に位置する、製鋼部と砲煩部間に至る棧橋へと接岸した。

11月の艦隊再編成を前にしての整備で呉海軍工廠は夏真っ盛りの時期における蟬の鳴き声を思える程の機械音が鳴り響いており、港内の棧橋という棧橋には所属の艦艇が連なるようにして所狭しと錨を下ろしている。故に工廠の波間には開けた空間が少なく、それにあわせて明石艦も^{あかし}棧橋への接岸は曳船の微妙なさじ加減に頼らざるを得ない。常日頃から明石艦の三倍はあろうかという空母や戦艦を押す事をお仕事にしている曳船の乗組員達にも今日のお仕事は中々に大変なようで、何度も船位の修正をしながら時間をかけて明石艦は棧橋に繫留された。おかげで航海当番や当直甲板員の乗組員や艦橋配置の者達には気が抜けない時間が続き、艦中央の甲板に舷門が備え付けられた頃になって、やっと彼らの表情にも明るさが満ちる。

改装中の艦艇もそこそこにある呉海軍工廠はどの船渠もてんやわんやの日々であるらしく、明石艦の整備入渠は11月の新艦隊編成公布後と決定。乗組員達には半舷上陸、しかも帰省の許可もついた長期休暇が通達され、偶数日である本日によって上陸が適った右舷直の乗組員達は皆一様に笑みを浮べて艦を降りていった。

艦隊訓練中は常に稼動していた艦内工作部署用の発電機も運転を止め、煙の流れが消えた明石艦の第一煙突にはさっそくカモメ達が舞い降りて一休みをする。麗らかな秋晴れの下、長い長い艦隊訓練と大観艦式を終えた事もあり、在艦の乗組員達もまた緊張の糸を幾分緩めた雰囲気ですぐの一時を過ごし始めていた。

その一端は明石艦の甲板に早くも表れており、艦首や艦尾、最も広い艦中央の甲板に張られた洗濯索には乗組員達が身に付ける白い禪が列を成して瀬戸内の潮風と舞っている。

遠目から見ると織物産地で見かけるような綺麗な光景なのだが、それらの一つ一つが常に包んでいる代物が何であるかを知っている者にあつては特に感動を得るような事は無い。むしろ逆でさえある。その内の一人にして、ましてや女性である明石にとってはそれが自分の分身を包むように干されているのが不快な事この上なく、例え洗濯済みの物であつたとしても瞳に映す事にはいつも抵抗を抱いてしまう。その不快感を昔は相方への八つ当たりとして発散していた事すらもあつたくらいだ。

しかし今日の明石は、自身の分身に列を成す禪群を目の仇にして機嫌の方位を傾ける事は無かつた。ひらひらと宙を舞う禪により満艦飾を施される自身の分身よりもさらに視線を吸引するとてもない代物が、久々に戻った呉の波間には出現していたからである。

『な、ななななな・・・、なんじゃありゃーっ・・・！？』

両目の前に添えた双眼鏡から目玉がとび出るかという勢いで彼女は驚き、叫んだ後も口を大きく開けて双眼鏡が映す工廠中央の波間から視線を逸らさない。その隣では先に呉へと戻っていた仲良しの神通が腕を組んで控えているがやはり彼女の視線もまた明石と同じ物に向けられており、明石ほどに表情に表してはいないもののその顔には驚きの色が浮かび出ている。

周りをぐるっと陸地に囲まれた呉工廠のど真ん中。

そこには大きな浮き栈橋ボンソーに挟まれる超大型の艦体が浮かんでいた。

ポンツーンの上には高さ50メートルはあろうかという巨大なクレーンが備え付けられ、その艦体の全体がそのまま明石達には見えている訳ではないのだが、クレーンの根元より大きくはみ出した艦体の端の部分だけでも二人がこれ程までに驚くだけの内容を含んでいる。上部構造物もまだろくに組み立てられていないがその艦が持つ艦首と艦尾に至る長さは悠に250メートルもあり、明石の分身が二隻縦に並んでやっと同等となるくらいだ。また、横から見ている事からよく解かる高低差のついた艦首甲板とは逆、すなわち艦尾付近の平坦な甲板上には一軒家にも相当する程の大きな作業小屋が建てられており、眼前の艦が長さだけでなく幅にあってもかなりの数値を有している事を明石と神通に教えてくれる。

二人はしばらく啞然として無言のままその艦を眺めていたが、明石に先んじて呉へ帰っていた神通がおもむろに口を開いて明石に眼前の艦の事を告げた。

『伊勢さんから最上もがみが聞いてきたんだが、あれは帝国海軍最新鋭の戦艦らしい。8月に進水したんだそうだが、今まであんな艦を造船船渠で造ったとはな。新型の艦の建造とは聞いていたが、まさかこれ程大きい艦だったとは……。』

『うへええ、でっか……。』

神通によって破られた沈黙により、明石もつられる様にして脳裏に浮かんだ言葉をそのまま口から漏らす。月並みな言葉ではあるが、それ以上の言葉が見つからなかった。ポンツーンへの資材輸送を行う交通船や運貨艇と比較するとその様はまさに鯨と蟻で、明石達が見ている所とはその艦を挟んで反対舷側のすぐそばに15820トンの巨体を持つ給糧艦の間宮艦が停泊している事が全く意識できないほどである。

明石は呆氣にとられつつもふと長門より横須賀にて教えてもらっ

た事を思い出し、ゆっくりと双眼鏡を降ろすと溜め息混じりの声で眼前の艦の正体を語った。

『・・・大和やまとって言うんだって。』

『やまと？ ああ艦の名か？』

『うん、長門ながとさんが言ってた。将来は長門さんに代わって連合艦隊旗艦が約束されてるから、今の内に色々な事を教えてあげてるんだって。』

『ほうう。・・・お？ あれは間宮まみやか・・・？』

声を受けた明石は右隣に立つ神通の視線を辿る様にして眼前の巨艦を瞳に映し、先程まで巨大さをよく伝えてくれていた艦尾甲板の作業小屋付近にアルミ製の配食器を片手にテクテクと歩く間宮の姿を認める。彼女はそこから左舷に広がる波間より二人の視線を浴びている事に気付いていないらしく、文字通り脇目も振らずに上部構造物の土台の部分から大和艦艦内へと降りていった。

『ふん。間宮め、メシの世話であの艦に入れるのか。』

『いいなあ、間宮さん・・・。』

二人揃って漏らした言葉は、今しがたみつけた友人への妬み。明石とは観艦式の際に同じ特務艦の艦魂として親交を深めた間宮は、神通にとっては生まれた時期も故郷も同じ幼馴染。それ故に二人が放つ言葉は一樣に近い感じを伴う物であったが、妬みというちょっと暗い色合いの感情を込めた声としたのには理由が有る。

実は呉に入港してすぐ、明石や神通といった所属艦艇の艦魂達には、呉在泊の艦艇の中では最も高い階級を頂く伊勢艦の艦魂より、この大和艦の甲板に足を着ける事はしばらく遠慮して欲しいとの通達が出されていた。なんでも大和艦は一般国民はもちろんの事、どうやら海軍軍人にあってもその正体を機密にしている存在らしく、

事実、明石や神通の分身に乘組む兵員達には嚴重な緘口令が敷かれていた。明石や神通はまだ知らないが、彼女達の分身を始めとする多くの艦艇が柱島や江田島の泊地に身をおかず、狭い呉の波間に密集して錨を下ろしている事自体、その艦体をもって大和艦を呉工廠の波間が望める場所から直接見る事が出来ないようにとの配慮から実施されているのである。その嚴重な機密処理は艦魂にあってても例外ではなく、新たに帝国海軍の象徴となる新鋭戦艦の扱いには一戦隊所属の伊勢が非常に気を使っている。その一端が大和という新米艦魂との面会謝絶実施であり、明石や神通がこうして大和艦を眺めるだけで終わっている事の真相なのだ。直に会えるのは伊勢と、彼女の妹にして現在はこの呉にて練習艦任務に就いている日向^{ひゅうが}、そして整備入渠というお休みを貰って母港へと帰り、その料理人っぷりから食事調達係を拝命した間宮の三人のみにしか許されていなかった。

『うーん、長門さんから仲良くしてあげてって言われてるのに・・
』

是非とも明石は眼前の艦を分身とする者に会って見たかったが、それが適わない残念な気持ちを声に変える。長門に頼まれた事を実現できそうにない事もまた、少しだけ尖がり始めた明石の口の原因でもあった。また神通にあってても、幼い頃より勝手したる仲である間宮が大和艦の艦内へと入っていった事に、自分と間宮との間にある種の不均衡が存在しているように思えて不満げである。短い口癖を放ちつつ流し目で大和艦を眺め、神通はそんな自身の心模様を表して見せた。

すると突如として明石は顎に手を当てて首を捻り、何か考え事をするかのように呻き声を響かせ始める。

『むゝゝ・・・。』

どうにかして大和艦の艦魂と会えないかと考えを巡らす明石。ふと視線を流した方向には禪の群れがあり、不浄にして不快極まりないそれらに一瞬だけ憎しみを募らせた明石は、今度は逆の方に顔を向けて2、3歩ほど歩きながら頭を捻ってみる。そしてちょうどそこにいた仲良しの姿を瞳に映し、彼女が荒い気性とげんこつ必須の教育姿勢の持ち主である事を思い出して一つの策をおぼろげながら脳裏に浮かべた。

『おお、教育中なら行けるかもお。』

『ん？　なんだ明石？』

何やら閃いたのか僅かに見開いた瞳を輝かせる明石に神通はその言葉の意味を問うが、返って来た明石の声に神通がさらに声を返してやる事は無い。否、正確にはお叱りの言葉が口から漏れてくるのに先んじて、明石には神通の緩く握ったげんこつが向かって行くのだった。

『教育中に怪我しちゃったら軍医の私の出番だ！　神通なら怪我の一つや二つー。』

『馬鹿者が。』

ゴン！

『ふんげえっ・・・！』

どうにも手が速い神通の拳は何の躊躇も無く明石の脳天に真上から振り下ろされる。これでも軽い方だというのは殴り合った事もある明石にはよく解かっているのだが、それでもこうして食らった後

に残る鈍痛と余韻は半端な物ではない。160センチ台の身長を持つ明石は女性にしては背が高く、170センチ台の神通とはみてくれの上ではそれ程までに身長差がある訳ではないのに、いつもながら明石は自分とはうって変わって力持ちで他人を叩き慣れている友人を心底不思議に思う。これで冗談を解かってくれればと人柄に対する願望を抱きつつ、明石は頭のとっぺんを右手で擦りながら目の端に薄っすらと涙を溜めた表情で神通に弁明した。

『ほ、本気で言ってる訳ないでしょ……。あいだだ……。』

『自分の罰当たりな物言いを冗談とすりかえるな、馬鹿者が。ついでこの間やっとな進水した最新鋭の戦艦に怪我なぞもっての他だろうが。』

『う……。』

生真面目で生来が理論的な思考回路を持つ神通。物言いは荒っぽいだがその言葉の意味には、明石が反論できるだけの余地が無い。艦魂社会での健康管理、怪我への処置を役目とする者が、自ら患者の出現を願うなど言語道断である。それに反論しろというのは当の軍医さんである明石にはどだい無理な話だった。結局はギロリと神通に睨まれて明石はすっかりはしゃぐ気持ちを律されてしまい、鐘の音の様に響く鈍痛に歪めた表情で自身の言動を反省するしかなかった。

厳しいお人だった。

その後もしばらくの間、明石は隣に立つ神通の鋭い眼光に時折怯えながら眼前の大和艦の姿を眺めていたが、その内にふと背後に友

人とは別な人物の気配を感じて振り向く。するとそこには自身も日常でよく用いている淡く白い光が収束していく様子があった。やがて神通もそれに気付いて明石と同じく背後へと視線を向けるが、ちよつと珍しいのはその光の収束の基点が二つ並んで存在するという事。

『う？　なんだろう？』

つい明石は不思議な眼前の様子に疑問の声を漏らしてしまうが、それに反して神通は現状を極めて正確に認識している。なぜなら神通はそんな二つの基点を伴って光が収束する様を日頃から見ており、その光が輝きを失せる前にそこへと姿を現す者らを既に名前すらも明確に予測していたのだ。

『ふん。あいつ等か。』

神通がそう呟くように言うと同時に光は輝きを鎮め、入れ替わりにそこには黒い水兵の軍装に身を包んだ二人の少女が現れる。明石、神通供にどちらの顔もよく知っている物の顔だったが、彼女達が声を掛ける前に二人の少女はふと隣に出現したお互いの顔に視線を向ける。刹那、二人は瞬間的に怒りの色を表情に浮べて怒号を交わした。

『あ！　テメエ、猿！』

『雪風！　何しにきたのよ！』

明石と神通の前に現れたのは、神通の部下に当たる霞と雪風。供に二水戦の元気印として日夜励み、大正生まれで20台も後半に差し掛かった上司とは逆に、昨年に生まれたばかりの10代後半の容姿を持った少女の姿をした艦魂であった。その外見と同様にまだま

だ落ち着きという物が備わっていない人柄と、同じ瞬間に隣り合わせて明石の背後付近に現れた天敵への怒りを剥き出しにし、二人は大きな声を張り上げて口論を始める。

『アタイがどこで何しようが関係ねえだろうが！！ さっさとボロの分身に帰れよ！！』

『私は戦隊長に用があつてきたんだよ！ アンタこそ邪魔だからさっさと帰れえ！』

『邪魔はテメエだ、バカ！ 猿は猿同士で話してろや、エテ公め！！』
『なにを、この野郎！！』

毎度毎度の事ながら、二人は用が有る人物を前にしても挨拶もせず罵声を投げ合う。麗らかな秋晴れの呉に怒りの声を響かせて霞は雪風に跳びかかり、肩まで伸びた雪風の巻きグセのある髪の毛を引っ張って頬を張る。雪風もまた負けじと左手を霞の褐色の肌で成る頬に伸ばし、思いつきり爪を立てて引っ掻きながら逆の頬に平手打ちを叩き込んだ。

『でりゃあ！ 死ねえ！！』
『この猿！！ おるああ！！』

明石と神通が先程まで瞳に映していた建造中の大和艦より響く重機の音をも掻き消すほどに、二人はボカスカと殴打する音をけたたましく放って取っ組み合いとなった。お互いの襟や髪を掴んだまま甲板の上に倒れこみ、交互に馬乗りになって相手の腹に膝を突き刺し、驚愕みにした頭を甲板へと打ちつける。いつもの事とは言え、その喧嘩っぷりは双方ともとても派手だ。

文字通りの犬猿の仲である霞と雪風だが明石にとってはどちらも供に大事な友達であり、彼女は甲板の上でのたうち回る様に殴り合

いに興じる二人を止めようとする。しかしそれよりも速く、明石の横を神通の肩が通り過ぎていく。スッと伸ばした背筋を少しも曲げずに胸を張って歩く神通の背中にはさも海軍軍人らしくスマートな雰囲気を持つが、明石はそんな麗しい歩き方を持つ友人が僅かに肩をいからせて歩いている様子に、当の彼女が事の他ご立腹である事をすぐに察した。

ツカツカと甲高い靴音が耳元に迫っても、霞と雪風はお互いの顔を目掛けて振り下ろす拳を止める事は無い。日頃から明石もさつき頂戴したげんこつの痛さを肌身を通してよく知っているのに、どうしても憎き天敵を懲らしめる衝動に霞と雪風は我を忘れてしまう。やがて眩しい程に天にて輝く陽の光がふとそこに無くなる事に二人は気付くが、お互いの顔を覆う影を形作っている者に目を向けるやその表情は凍りつく。そこにはやっぱり、額にて脈動する筋を浮べたおっかない上司の顔があった。

『こんの馬鹿が!!』

咄嗟に霞と雪風はもはや何度目かも覚えていない拳の打ち合いをどちらからという事も無く止め、素早く立ち上がって直立不動の姿勢を取って詫びの言葉を放とうとする。だが毎度の事ながら既に手遅れだった。神通の怒号というカミナリの迫力に目を瞑った刹那、二人の頭には神通のげんこつが振り下ろされる。

『ぎゃっ・・・!』

『ぐあっ・・・!』

二人の頭のとっぺんを同時に襲ったのは神通の両手の拳。右利きである神通の事は霞も雪風も、そして大の仲良しである明石も知ってはいるのだが、同時にそんな利き手の差異がげんこつのダメージに反映されない事もよく知っている。細身でスラっとした長身の体

型ながら、その実は大変に力持ちで足も速い神通。同じ体型の明石とは大違いであるが、いつも昼間の部下達への教練が終わった後に一人黙々と自室にて腹筋や懸垂をこなしているというのだから無理も無い。その上で昔からその荒っぽい性格と度胸で先輩方との喧嘩沙汰を繰り返してきた神通は、喧嘩慣れしている事もあって拳を振る行為の正確さは正鵠を極める。いつぞや起こった、同じ第二艦隊の一員にして三潜戦の戦隊長である五十鈴との一件もその一端だ。おまけに彼女は他人への判断が極めて短絡的であり過ぎ、過去に今の自分と同じ二水戦の戦隊長を務めた経歴を五十鈴が持っていたとしてもその人当たりを変えよう等とは微塵も考えていない。嫌いな奴はトコトンまで嫌う。神通の悪い癖でもあった。

そしてこんな人柄の彼女が事もあろうに自身の前で大喧嘩する部下をげんこつ一撃で終わらせる筈も無く、彼女はその場にうずくまり頭を抑えて悶える霞と雪風の奥襟をむんずと掴むと、軽々と腕を上げて二人をその場に吊り上げる。

明石から見るとそれはまるでデリックにて吊り上げられる鋼材の様で、例え霞と雪風が小柄な体格の持ち主であったとしても片手で各々を持ち上げてしまう神通の腕力に驚いてしまう。

『貴様等、戦隊部外者の明石のところで騒ぎおって！ そんなに私のツラに泥を塗るのが面白いか！ ああん！？』

声を向けられている訳ではないのに、明石をも思わずビクンと肩を震わせてしまう程の神通の怒号。それを真正面から浴びる霞と雪風はボロボロと涙を流して詫びの言葉を放とうとするが、怒り心頭の上司に二人の心模様を察しようとする気は微塵も無い。お叱りの言葉を言い終えるや、神通は部下二人を吊るし上げた手を交差させるように振り、霞と雪風はお互いの額に全く企図せぬ頭突きを放たされてしまう。

『『ぐっへ・・・！』』

重苦しく鈍い衝撃音が木霊し、二人はまったく同じ悲鳴を上げて苦悶の表情を浮かべる。神通は二人のぶつかった額が離れるとすぐさま両手から力を抜いて部下達を解放してやるが、力持ちの上司によるお仕置きで相当量のダメージを負っている霞と雪風は足を甲板に着けると同時に膝から崩れ落ちて折り重なるようにぶっ倒れた。

久々に見せる神通の鬼教官ぶりにさしもの明石も息を飲む。昔の様に顔を殴りつける様な事は無くなったのは大きな進歩かもしれないが、もはや憎しみさえも感じれる程に部下を叱り付けるつける友人の姿は、元来が心根の優しい明石にとっては少し度が過ぎているように思えた。まして明石が立場として頂き艦魂として日夜励んでいるのは、他人の怪我を癒す事を生業とする軍医さんである。常日頃からこんな調子で部下を虐め鍛える二水戦の日常はやっぱり生傷が耐える事は無く、例えお仕事であったとしても怪我を負う者を毎週欠かさず発生させる神通のやり方には疑問を抱く事がままあった。故に神通とて神通なりの考えが有るのはよく理解しつつも、明石は思い切って声を掛けてそれ以上のお仕置きを控えるように促してみる。だが明石に帰ってくる友人の言葉はこれまたいつも通りの代物であった。

『じ、神通・・・！ あんまり手荒にー。』

『黙れええ！！ 二水戦の事には口を出すな、明石！！』

癪癪持ちの神通はその怒りの温度が冷めるのに時間を要する。振り向いてきた彼女の表情は鋭く釣り上がった瞳がさらに鋭利さを増しており、いつもは遠慮無しに物が言える明石も恐怖と迫力に気圧されて言葉を失ってしまった。こういう所が帝国海軍艦魂社会において指折りの嫌われ者とされるそもその原因だった。

もっとも神通はそれ以上部下に拳を振り下ろす気は無く、拒否の

姿勢を示したものの仲の良い明石が懇願してきたという現実には沸点を突破していた心を鎮め始める。その人柄における放熱の効率是非常に悪い為に彼女の風貌からは恐ろしさという雰囲気の中々消えないが、神通は腕組みをしながらギリリと甲板に突っ伏す部下達を睨むだけであった。

それからしばらくした後、明石とお仕置きに悶絶する二人の部下を従えた神通は明石艦艦内の一角にある明石の部屋へと赴き、全員床に腰を下ろしてなんとか居心地の良い空気を部屋に作ろうと考えた明石が銀バイしてきた御菓子を囲んでようやく声を交える事に成功する。そもそものが艦隊訓練も終わって帰省休暇状態である今の艦隊事情において、何ゆえに霞と雪風が上司の下へと姿を現したのか。それを二人に問う神通の眉や瞳はだいぶ角度を浅くしつつあり、霞と雪風はそれを認めて胸を撫で下ろす。既に涙も鈍痛も消え失せている事から、二人はいつもの口調で上司の問いかけに答えた。

『11月の艦隊編成のせいだと思うんですけど、今の呉には所属の駆逐隊が全部戻ってるみたいなんです。それと戦隊長と明石さんが見てたあのおっきい艦の事もあるみたいですけど、いま軍港内には各駆逐隊の艦魂達ひとが全部集まってるじゃないですか？』

最初に口を開いたのは霞で、雪風によって引つかかれた赤い爪痕を浮かび上がらせた麻色の頬を撫でながら言った。ついさっきカミナリを派手に落とされた為に頬の責任を求めるような行動には出ないが、胸の中ではまだ天敵への憎悪が燐くすぶっているらしい。上司を挟んで反対側にて胡坐をかいている雪風に時折視線を流し、眉間にシ

ワを作って瞳の中に炎を纏わせている。

一方、神通はそんな二人の様子に気付きつつも、自身がその真ん中に陣取っている事から再戦の危機は無いであろう事を予測し、首をゆっくり捻ってコキコキと鳴らしながら声を放つ。

『ん、そうだ。11駆から20駆の全艦が集結してる。私達二水戦と同じ様に、各戦隊の旗艦も含めての整備補修が組まれてるからな。それがどうした?』

『せっかく呉鎮所属の駆逐艦が揃ってんスから、その中で一番強い奴が誰かを柔道の試合で決めようって話があるんスよ。11駆の吹雪^{ふぶき}上曹が言いだしっぺらしいッス。』

神通のさらなる問いに今度は雪風が答える。霞に引っ張られて乱れた髪を右手で撫で、赤く腫れた頬を左手で擦っているが、これまた天敵と同じ様に彼女もまた神通の横顔の向こうにある霞に憎悪の視線をチラチラと投げる。相も変わらずの仲の悪さを示す二人と、その板挟みとなる上司の神通。その光景を明石は正面から瞳に映しており、なかなか解かり合う事の出来ない霞と雪風の関係が未だに続いている事に落胆して小さく溜め息をした。

一方、神通は両側から迫ってくる険悪な空気いつもの冷めた感じの表情を変える事は無く、さっきの様に拳を握って振り上げる気配も放っていない。むしろここに至って知った部下達が訪ねてきた理由は彼女の心を少しだけ明るくしているくらいで、神通は左右の部下達に流し目を送りながら会話を続ける。

『ほお、吹雪がか。大方、各鎮守府別の最強を決めるつもりだな。アイツらしいなあ。』

『あ、そっか。吹雪上曹、前に二水戦にいたんですね?』

『うむ。アイツは中々筋の良い奴^{なか}だな。那珂^なの四水戦^{いかづち}にいる雷と供に、奴は柔道の腕前は相当なモンだった。おそらく去年の艦隊編成

で時雨^{しぐれ}が佐鎮に転籍したから、この際各鎮守府最強を決めようとも思っただらう。』

突如として神通の口が出てきた名には、霞と雪風どころか明石にも聞き覚えが無い。3人で首を捻るが、その中でも声色の弾む上司に恐怖を拭い去った雪風はすぐにその事を問う。

『しぐれ？ 誰スカ、戦隊長？』

『白露型^{しらつゆ}の二番艦、時雨。去年の艦隊編成までは姉貴が率いてた一水戦9駆に所属してた。お前達に比べればだいぶ艦体は小さいが、吹雪や雷とも互角に渡り合えるくらいの柔道の腕前を持ってたんだ。姉貴がよく自慢しててな。今は27駆に移ったから、横須賀は6駆の雷、佐世保は27駆の時雨で決まりだな。舞鶴は駆逐隊がそんなに無いから、実質残りは呉だな。』

長く水雷戦隊旗艦として励んできた神通だけに、帝国海軍の駆逐艦事情は結構詳しい。自分を遥かに凌ぐ軍歴を垣間見て明石は感心の吐息を漏らす。霞と雪風にあつては上司のお言葉にちよつと違う感情を抱いていた。それは今しがた上司が挙げた名を持つ者達と自分達が同じ駆逐艦として類別される艦を分身としている事に根本があり、例えそれが先輩方であろうとも胸に沸かせた逸る気持ちを抑える事が出来ない。やがて二人は僅かに腰を浮かせると二人として上司に膝を詰め、それぞれが抱いた気持ちとそれに伴うある考えを声に変え始めた。

『戦隊長！ 呉は何が何でも私達、二水戦の駆逐隊が相当するべきだと思っんです！』

『6駆は四水戦で、27駆は一水戦っス！ アタイら”花の二水戦”の駆逐隊は、帝国海軍の全駆逐隊中最強じゃなきゃダメッスよね！?』

何時に無く表情に力を込めて声を張る霞と雪風。普段は神通にヘコヘコと頭を下げて忠実に従う二人だが、この日は敢えて神通に正面から意見をするような姿を明石に見せる。

その理由はさっき神通が話した帝国海軍における駆逐艦の艦魂事情その物で、昨年に生まれたばかりの二人は帝国海軍の中で一目置かれていた駆逐艦の艦魂が皆、自身から見れば先輩に当たる者達ばかりである事に強い不満を持っていた。といっても二人は決して先輩方の存在を疎ましく思っている訳ではなく、そこに帝国海軍の最精鋭部隊である二水戦に属している者が名を連ねていない事が我慢ならないのである。怖くて厳しい二水戦の日々で鍛えられつつも、その日々は同時に彼女達に確固たる二水戦所属の駆逐艦としての責務と覚悟を実らせており、二水戦という名に込める想いは戦隊長である神通とほぼ同じくらいまでの認識にまで上り詰めているのだ。

神通は何時に無く覇気を伴った表情で顔を近づけてくる霞と雪風にその心中を察し、僅かに口元を緩めて胸に湧いた嬉しさを滲み出す。そのとっても小さな笑みに明石もつられて表情をほころばせ、室内は幾分朗らかで明るい空気が漂い始める。だが神通は霞と雪風が口にした事を実現する為にはとある大きな障害がある事を思い出し、表情を再び律して口を開いた。

『お前達、その柔道の試合とやらでそれを証明したいのか？』

『そっす！ 各駆逐隊から選抜した奴での勝ち抜き戦をやるらしいんで、これで優勝できれば間違いなく呉最強の駆逐隊はアタイ達になるっすよ！』

『二水戦の名を上げる絶好の機会です！』

『だが楽ではないぞ？ 特に吹雪は私が見てきた駆逐艦の奴らの中でも柔道の実力は屈指の代物だ。正直な所、お前達で相手になるか

どうかは私には疑問だ。』

少し厳しい感じの物言いをする神通だが、その言葉は嘘ではない。吹雪という艦魂の分身は帝国海軍が世界に誇る特型駆逐艦の一番艦であり、既に建艦から10年以上も経っている古い艦だ。しかし登場した当時、彼女を始めとする特型駆逐艦は列強の海軍をその超高性能ぶりで驚愕させ、ロンドン軍縮会議でアメリカ代表団の一員に『特型駆逐艦50隻となら、我が軍の全駆逐艦300隻と喜んで交換する。』とまで言わしめた傑作駆逐艦。その艦魂にして長女たる吹雪は駆逐艦の艦魂として分身にも違わぬ大変に優れた実力を持つており、彼女とは過去に二水戦における部下として接した事が有る神通は、現在の部下である霞や雪風では吹雪にはまだ及ばないと考えているのだ。

しかし神通の声を受けても、霞と雪風には引き下がろうという選択肢は微塵も浮かんでこない。むしろ当の二人もまた、自分達はまだまだ大先輩には太刀打ちできないと自己評価はしており、それ故に上司の下へと足を進めたのだ。出向いた先で天敵と鉢合わせしてしまった事は間が悪いの一言であるが、上司も含めた二水戦の名を輝かせる事に意欲を燃やした霞と雪風は、床に手を着いて現状を打破する為の協力を懇願した。

『解かってます、戦隊長！ だから試合が行われるまでの間、私に柔道の教練をつけてください！』

『絶対に勝ちたいんす！ お願いっす、戦隊長！』

一様に頭を下げてお願いする霞と雪風。いつもならお互いに『すっこんでろ！』の一言を叫んで喧嘩になる二人だが、今日は必死の懇願に専念して神通の目をじっと見つめてくる。極めて真摯なその姿は霞と雪風がこれまでに無い強固な気持ちを抱いている事を示しており、明石は初めて目にした彼女達の姿に目を丸くして声を失っ

た。もちろんそれは神通も同じであつたが、彼女は両脇にて深く頭を下げてくる二人に交互に視線を配ると口元を大きく吊り上げる。

仲間がいる隊の為、姉妹がいる隊の為に頑張りたい。

その為には如何に強敵であっても戦いに挑んでみたい。

彼女達の面倒を見始めてはぼ一年。その中で並々ならぬ決意を上
司である自身に隠さずに部下達が示してくれた事が、神通に嬉しく
て嬉しくて仕方なかった。やがて彼女は軽く握った拳を足に打ち付
けてパチンと音を鳴らすと、珍しく感情の色合いが濃く滲んだ声色
で叫ぶように声を返す。放たれた言葉は短い物だったがそこには彼
女なりの部下への気持ち溢れており、普段はまず見せる事の無い
稀有な言動をとった事も併せて、明石は神通の顔にに笑みを送るの
だった。

『よし、わかった！ お前達二人を呉最強の駆逐艦にしてやる！』

第七六話 「最強を目指せ！／其の二」

霞と雪風かすみ ゆきかぜがそれぞれの決意を示し、それに上司が笑みを伴って了解の返事を与えた翌日より、神通艦じんつうの甲板上では「私立神通学校」の柔道大会準備合宿が開始された。

参加者は特訓を受ける霞と雪風に、上司の神通、それぞれを共通の知人とする明石あかしの4人で、港に集結した呉鎮守府所属艦艇の層々たる姿を勘定すると少しだけ侘わびしい感もある。しかし12名の要員を数える二水戦においてすらもしばらくは非常に珍しい休暇とされている為に、それ以上の人員がそこに集まらないのも無理の無い事であった。

いつも規則正しい生活を送りつつ昼間は上司の恐怖に怯え、散々にコキ使われてやっと夕方を迎えるのが二水戦の日々。そんな中で出されたしばしの休暇は霞や雪風の仲間達にとっては至上の幸福である。半舷長期休暇を命ぜられつつも一応は無人にはなっていないそれぞれの分身の事情により、毎朝いつも通りに発せられる「総員起し5分前」の号令を耳にしても乗組員達と同じ様に彼女達は慌てて飛び起きるような事は無い。普段から人間達と同じその号令に彼女達も従って生活しているが、ほとんどの者は少しだけ夢の世界から連れ戻される意識をすぐに同じ所へと誘われるのを良しとする。

『うーん・・・』と小さく唸り声を上げて寝返りを打つのが関の山で、彼女達にとっては気の向くままに睡眠をとるのが休暇の日々における生活の基本であった。起きたら起きたで一日の生活に緊張感を抱く事も無く、主計科の倉庫から目ぼしい食品を失敬してきたり、海軍では人間達がよく興じる輪投げの用具を持ち出して仲間や姉妹で遊んだりと極めてのんびりとした日常を送っている。

霞と雪風はそんな仲間や姉妹達の日常を横目にしながら柔道の特訓に励むが、別にそれを羨むような事も無ければ、嫉妬心を抱いて初期の目標を忘れる事もない。それ程に二人の決意は固いのであり、教える側の神通もそれに全身全霊を込めて応える。甲板を走らされるのは序の口で、1回につき5秒もかけて行われる腕立て伏せを100回もこなしてやっと乱取りといった実戦的な内容になり、みっちり柔道の技術を習得させるという猛特訓。もちろんそこには怖い怖い上司、神通の竹刀と怒号が必ず傍らにて控えており、教えられた事が中々身に付かないようなら振り下ろされる竹刀によって尻から文字通り叩き込まれる事になる。その熾烈さは二水戦所属の艦魂として一年近くも励んできた霞と雪風ですらも初めての経験で、余りに身体を酷使し過ぎた代償として甲板の脇から嘔吐するのが日課になりつつある程だった。

師匠譲りである神通のスパルタ教育。

傍から見ている明石にとっては受ける側の霞と雪風がとても可哀想に見えてしまうが、止め処なく流れる汗に湿る中で表情を歪めながらも必死に頑張る二人の姿と、教えを与えている神通が片時もその眼差しを部下から離さない事に、敢えて口を挟むような事はしなかった。

部下達が必死のように神通もまた必死なのである。手加減が出来ないのは彼女という人物を語る上では悪い癖と捉えられる事も多いが、同時に自身に相談を持ちかけて懇願する部下には一切の遠慮や躊躇を廃して応えてやる。口にこそ出さないものの、それは彼女にとって霞と雪風が可愛くて可愛くて仕方ない部下だからであり、明石はその神通の想いを例え少し瞳に映すのは酷な光景がそこにあったとしても否定したくはなかった。仲良しの自分にすらも見せてくれない、神通なりの本気の姿だからである。

そしてこの神通達の姿は呉海軍工廠に在泊の艦魂達にも伝え広が

り、その原因となる出来事を企図した吹雪ふゆきも含めて、今度の大会に
対する自分達の認識に大きな波紋を投げかけていた。

鬼の神通が率いる二水戦が本気を出すらしい。

自身の分身に乗組む人間達が「花の二水戦」という言葉を用いる
事からも読み取れるように、第二水雷戦隊とは栄えある帝国海軍の
中でも最精鋭にして最強の部隊。最近までは神通の荒くれた気性と
過去を引きずった生き方によって隊としてはまとまりが無かったの
が艦魂社会における二水戦の認識だったが、そもそものが非常に優秀
な指揮官である神通の実力だけは本物であり、尊敬を得ずとも彼女は
戦闘艦の艦魂としてはそこそこに認められた存在でもあった。そ
してそんな神通がここ最近では部下達とも上手くやっている事は過去
を知る艦魂達の間でも噂の種となっており、二水戦という一つの部
隊が呉鎮最強の栄冠をその総力を挙げて狙いに來るのだという事に
主催した吹雪を含む呉に投錨する艦魂達の中でもその注目度は日に
日に高まっていた。

つい昨日には現在の呉では最も高い階級を頂く伊勢いせが神通艦の甲
板に來訪したくらいで、火の出るような猛特訓に彼女は感心の吐息
を連発する。終いには優勝候補筆頭の吹雪までもが昔の上司に対し
ての挨拶とかこつけて偵察に來る始末で、相変わらずのおっかなさを
秘めつつも顔つきがどこことなく明るさを纏う神通の表情に驚く。
また、今回の試合で自分達に挑んでくる霞と雪風という若者も希に
見る柔道の腕を持っている事を吹雪は一目で察し、かつてない程に
今回の試合に楽しみを募らせて不敵に笑うのだった。

そんなある日の事。

艦内に響き渡る『総員起し5分前』の号令に意識を揺さぶれ、霞は自身の部屋で合宿4日目の朝を迎える。毎日に渡るシゴキで彼女の細い身体からは疲労がまだ完全に消え去ってはいないが、今日という日は部屋でさつきまで続いていた安眠の余韻に浸れない事を思い出して布団から抜け出る。暖房も無い倉庫を自分の寝床とする霞は10月の寒さを全く緩和していない部屋の気温に少し身体を震わせつつ、枕元にて軍帽を一番上にして折り重ねていた軍装に手を伸ばして着替える。寝巻きをヒョイっと布団の上に投げ捨てて手早く軍装の上下に手足を通し、跳ね上がった髪を手で寝かしつけてすぐ手元にあった軍帽を頭に乘せると、彼女は布団の近くに散らばっている寝巻きやシャツを拾い集める。少しだけ散らかし癖がある霞は連日の特訓での疲れもあり、風呂上りに部屋へと戻るや服をその辺に脱ぎ捨てて布団に潜り込む日々を送っていたりする。どんなに疲れてても真面目に整理整頓を心がける妹の霞とは大違いで、拾い上げた衣服を畳みもせず丸めて抱くと大きなあくびを放ちながら部屋を後にした。

まだ麻色の頬に布団の跡がくっきりと残っている中で人前に出るには少々億劫になってしまふ状態の霞であるが、今日という日の今の時間だけはちょっと自分の身嗜みを顧みずに艦内を駆けなければならぬ理由がある。それは霞の分身の乗組員達と全く同じ理由で、霞の前後には同じく衣服を手にして最上甲板へと駆けて行く水兵さんの姿がチラホラとあった。

彼等と供に霞が向かった先は、自身の分身の艦橋付け根の辺りの左舷最上甲板にある洗い場。艦橋と第一煙突のちょうど真ん中くらいに位置するそこは一段高くなった艦首甲板を降りてすぐの所で、乗組員達の身長よりも少し高い壁の向こうは兵員用烹炊室。朝ご飯の調理による美味しそうな匂いが立ち込める場所で、早くも霞と水兵さん達は口の中に唾液を充滿させる。

だが彼等は皆、わざわざ朝食を受け取る為にそこに集まった訳ではない。烹炊室の稼動に併せ、艦内にて貴重な真水が供給される時間が迫っているからだ。もちろん霞と彼等が腕に抱く衣類にこそ、風呂と同じく週に二回くらいの割合で供給されるその真水は使用される事になっている。帝国海軍におけるお洗濯のお時間なのだ。

ただ、艦魂である霞にとってはいくら乗組員達とその場を同じくしているとは言っても、普段と同じ様にその存在を悟られぬように過ごさねばならない。ひとりでにオスタップと呼ばれる桶から杓が水を掬ったり、洗濯板がフラフラと宙を舞うという心霊現象でその場を騒然とさせたなら、彼女の分身には幽霊船というレッテルが張られてしまう。前例こそ無いがそれを理由に廃艦処分となりたくもない。故にいつも通り、彼女には人間達に対して細心の注意を払いながら行動する事が求められる。艦魂なりの苦勞という物で、霞はキヨロキヨロと辺りの甲板を見回して気兼ね無くお洗濯できる場所を探した。しかし小型の駆逐艦である霞の分身には甲板が僅かしかなく、何事も無くお水を調達して各々の衣服を洗い始める乗組員達によって目ぼしい場所はほとんど占領されていた。

するとその時、左右に必死に振っていた霞の視界は左舷すぐ傍に隣り合わせて錨を下ろす妹の分身の甲板を捉え、そこに艦の主である霞の姿を認める。
あられ

『おお。霞。』

霞は自身の分身の右舷甲板にてしゃがみ込んで膝くらいまでの高さに積んだ衣服を甲板に並べており、その横には水を湛えた洗面器と洗濯板が見て取れる。どうやら無事に洗濯用のお水を調達できたようで、寒空に指し始めた陽の光の僅かな温もりを楽しみながら洗濯する衣服を整理していた。やがて姉の声が耳に届いたのか、霞はふと顔を上げるとすぐに笑みを作って手を振って応える。

『あ、霞姉さんやないか。』

声を放ち終えるや霞の瞳からは霞の姿が白い光に包まれて消え、瞬きをする間に彼女の眼前へと霞は姿を現す。陽に焼けたような浅黒い肌に白い歯を輝かせてにっこりと笑う霞は、妹への朝の挨拶もそこそこに霞が積み上げていた洗濯物の上に持参した衣服の塊をポイッと放る。

『助かったよ、霞。場所がなくてさ。』

『あはは。かまへんよ、ついでやさかい。』

倍加した洗い物にも霞は柔らかな笑みを絶やさない。なぜなら彼女の前では、霞が腕捲りを初めて自分も洗濯を手伝う事を示していたからだ。同じ戦隊に属する仲間の雪風とは毎日の用に喧嘩する霞だが、心根は朗らかで元氣な笑顔が目印。妹の霞に限らず、仲間内でも困っている者には顧みを期待せずに力を借してくれる心の優しい頼りがいのある人物である。現に霞は霞がニコニコと微笑を向けている間に水を張った洗面器に歩み寄り、粉末石鹼を溶かして石鹼水作りに勤しみ始めた。

『うひい、冷たいなあ……。』

ただでさえ気温の低い朝に水と格闘するのは二水戦の元氣印である霞であっても辛い物で、彼女は顔を歪めつつ洗面器の湖面を泡立てていく。霞はその光景に一度大きく口元を吊り上げて笑うと、すぐさま視線を洗濯物の山に戻して形を整え始めた。彼女達の洗濯にあつてはこの洗濯物の山の形が重要で、冷水に小さな悲鳴を上げている霞と比べても決してどうでも良いお仕事ではない。それは常日頃から真水の使用を徹底して規制される、帝国海軍独自のお洗濯方

法なのだ。

『うし、できた。霰、こっちは良いよ。』

やがて洗面器を両腕に抱えた霞が振り返りながらそう言うのと、ちょうど意図した通りの形に洗濯物の山の形を仕上げる事が出来た霰がそれに声を返す。

『こっちも終わったわあ。霞姉さん、やってしもてええで。』

『あいよっと。』

性格の全然違う二人だが同じ朝潮型駆逐艦の姉妹というだけあり、その連繋は中々の代物。霰が洗濯物の山の傍でしゃがみ込む中、霞は両手に抱えた洗面器を僅かに傾けて十分に泡立った石鹼水を降り注いでいく。だが洗面器の中身を全部一辺にかけてしまうのでは無く、さながら餅つきをするかのように少し水をかけては霰が手を伸ばして洗濯物によく石鹼水が馴染むように修正を加えるのだ。神通の従兵という役割を拝命する霰の事情もあり、彼女が手を伸ばす洗濯物の山は自分と姉と上司の物を含めて三人分の量。貴重なお水が足りなくなってもまた汲んで来る事等はできないから、少しのお水で完璧に洗える様に石鹼水を有効的に使用しているのである。

ちなみに帝国海軍の総本山である呉に入港している為、彼女達を含めた港内在泊の各艦は本当は艦内の真水は全て港に設置された給水管によって供給されており、いつもよりは過剰に水を使用できる環境にあるのだが、二人を含めて乗組員に至るもその事には気付いていない。洗面器3杯のお湯で髪から足の指の間まで洗うというお風呂の入り方と同じく、普段から厳しい節水活動を心がけている艦隊勤務者のその身に染み付いた癖のような物であった。

『これで最後っと……。どう、霰？ 全部いけた？』

『うん。ちゃんと全部、染みたようや。』

二人が視線を降ろす床には所々に泡がついた洗濯物の山。霞の水
量調整と供に霞の衣類分配もしっかり功を奏したようで、湿り気の
足りない感じのする衣服は一つも無かった。これで洗濯の準備はや
つと終わりで、霞は洗面器をすぐそばにあった隔壁に立てかけると
今度は靴や靴下を脱いでズボンの裾を捲り上げる。それは霞も同様
で、時折その場を流れていく瀬戸内の潮風に肩を小さく震わせなが
ら二人は裸足になった。

『うゝ、寒いなあ……。』

『そうやなあ……。やて、辛抱やで。霞姉さん』

霞と霞はそんなやりとりをして石鹸水が滴る洗濯物へと歩み寄り、
二人揃って洗濯物の上に乗って足踏みによる大まかな汚れ落としを
始める。寒い朝の空気の中で冷たいお水で濡れた衣服を素足で踏む
のだから寒いという感覚は一人で、霞と霞は緩く唇を噛み締めなが
ら足踏みを繰り返した。

それに続いて二人の足と衣服の隙間から石鹸水が染み出し、耳障
りの些か悪い音が木霊する。念入りに踏んでの汚れ落としだが、サ
ボるとせっかくのお洗濯の機会をフイにしてしまふし、何より怖い
怖い上司の洗濯物に汚れが残ったままだと霞には大きなカミナリが
落とされる事は想像に難くない。10人姉妹の中で唯一人だけの妹
をそんな目にも合わせる訳にいかないから、霞は寒さと必死に戦い
ながらお洗濯に汗を流す。ちよつと足の裏の感覚も麻痺しつつある
ものの、輝きを段々と増してきた陽の光は二人が足を着ける霞艦に
暖かさを募らせている。そもそもが鉄の塊である彼女達の分身は熱
を持ちやすく、先程より身体を動かし続けている事もあって次第に
彼女達の身体も温まってきた。

『おっし。霰、先にやってよ。』

『わかったわあ。』

そう言うとき霰は床にてペツタンコになった洗濯物から少し離れ、近くの隔壁に立て掛けていた洗濯板を持ち出す。同時に崩れた洗濯物の山から衣服を適当に一枚取り、洗濯板に擦り付けて細かい汚れ落としを始めた。コツがいる洗濯板を用いてのお洗濯は大変な物であるが、洗濯板が霰の手にする一枚しかない事と一枚づつやらねばならない霰の事情を考慮し、霞は上手く二人の洗濯での役目を分割するよう提案する。

『しばらく私はこれ踏むよ。半分くらい終わったら交換ね。』

『うん。霞姉さん、おおきに。』

同じ駆逐隊に所属する二人は姉妹仲の良い艦魂で、大概の提案はお互い今の様にして二言返事で了承する事が多い。霞は麻色の肌と短い髪、ハキハキした物言いと丸く大きな目、霰はちよつと伸びたおかつぱ頭に縦に潰れた横に長い糸目、鼻から息を抜くような感じで放つ京訛りの言葉遣い、と姉妹と言うにしては随分とその人柄には差異があるのだが、お互いの考えを無意識に察する事ができるので意思疎通に関しては障害をほとんど持たないのだ。

空から降り注ぐ陽の光もポカポカと陽気を帯び始め、霞と霰は表情から歪みを少しずつ消しながらお互いの洗濯仕事に精を出す。そこそこ暖かくなってきた瀬戸内の潮風に髪を揺らし、ほのかな石鹼の香りに鼻をくすぐられた二人の心は、頭上に広がる澄み渡る青空と同じ色合いとなって行く。自然と弾むような声色となり、霞と霰はお洗濯に励みながら各々の近況を話題にして姉妹の会話を始めた。ただ霞にとっても霰にとっても身の回りの大きな話題といえば、やはり今回の呉鎮最強を決める駆逐艦の艦魂達による柔道の試合の事しかない。霞自身、当の参加者の一人でもある事から、おのずと二

人の口から漏れる言葉はそれに関する物になった。

『霞姉さん。柔道の特訓は、あんじょういつてはるん？』

『ほっ・・・と、まあね。毎日シゴかれてるよ。』

まさに地獄の特訓を味わう日々を送っている霞だが、その身体には恐怖と苦しみがみっちり叩き込まれているらしい。妹の言葉によって脳裏に蘇らせた特訓の記憶によって、霞の表情は少々曇り気味になっていく。足元に落とした視線は洗濯物を正確に踏む為に向けられている物だが、彼女の姿は少しばかり辛い日々を落としているかのように霞には見えた。そこで霞は上司の傍らにて常にお世話をしている自分だけが見る事が出来る、ここ最近の上司の様子を霞に話してみる事にする。

『戦隊長は最近、部屋に戻ってもすこぶるご機嫌なんや。霞姉さんと雪風が頑張ってるんが嬉しくてしゃあないみたい。それに戦隊長はいつも二人の事を、ウチらの中でも一番気にかけてくれはってるようやで。ふふふ。ついこの間も、”犬と猿は私が目の前にいても、まだ喧嘩ばかりしおって・・・”なんて、嬉しそうに愚痴を言うてはったわ。』

霞のように普段はお仕事の時間にしか顔を合わす事が無い者にとって、従兵として仕える霞が伝える上司の様子は中々知る事が出来ない神通のもう一つの顔のような物。故に霞は『へええゝ・・・。』と溜め息混じりの声を漏らして妹の声に耳を傾ける。

また、霞としても気落ちしたように見えた霞を元氣付けようとして話題を切り出したのだが、彼女は決して嘘を言った訳ではない。二水戦の構成員は二人も含めて11人だが、話題に挙がった霞と雪風は頭も良く、柔道も入れた武技教練は何をやらせても必ず一位をお互いに奪い合う程の実力を持っている。その実力は神通が長年見

てきた駆逐艦の艦魂達の中でも屈指の物で、二水戦内どころか第二艦隊の中でも大きな話題となっていた。最近はその名を艦魂社会全体にも轟かせており、事実、霰や霞、雪風等が給仕のお仕事に就いた観艦式前の宴において、霰はその事をお偉方のやりとりから確認する事ができていた。

『鬼の神通に過ぎたるもの二つあり。猿の霞に、野犬のいぬの雪風。』

それは霰がお酒の入ったグラスをトレイに幾つも載せてお偉方に届けようとしていた際、ふいに彼女の耳に流れてきたヒソヒソ話で、艦魂社会においては超が付くほどの嫌われ者である上司の人柄を揶揄する意味合いも含んでいる。ただそれを差し引いてもお偉方の口から霞と雪風の名が出てきた事実は、二人がその優秀さを艦魂達の広範に渡って認められている事の裏返しでもあるのだ。

しかしこの時、霞にあつては霰が語る上司のお話にちょっと違う考えを抱いていた。理由は自分の名と一緒に挙がるもう一人の人物にして、今まさに柔道の特訓にても切磋琢磨している雪風の存在がそこにあるからだ。先輩である自分を敬いもせず、満足な敬語も使わずに崩したような言葉遣いで他人と話す雪風は、生来が鼻っ柱が強くてその物言いには他人への遠慮がない。礼儀正しい霞にはそんな雪風の態度がとても生意気に思えてしまうのであり、憎き天敵として彼女をボカスカと殴り合う対象とする事の根本である。

ところが霞の意向に反して雪風は仲間内からも評判が良く、言葉遣いに至るまで厳しく教育する神通もなんだかんだで雪風の態度を容認している。またこれに併せて、霞は以前の観艦式を控えた際の宴にて雪風と神通、そして神通のお師匠様に当たる金剛という艦魂の3人による一悶着を見ており、上司の幼い頃に瓜二つであるという雪風の人物評を知った。ただそれ故に上司が雪風を特別扱いしているように霞には思えてしまい、そもそものが雪風が大嫌いである霞

には沸々と苛立ちが募ってしまふ。すると霞の頬は段々膨らんで行き、胸に降り積もる苛立ち彼女の口から不満げな音色の声を奏でさせた。

『雪風のどこが良いってんのよ……。それに戦隊長も戦隊長だよ。あんなバカに肩入れするなんて……。』

人当たりの涼しい霞が尊敬する上司を批判するのは珍しい。実の妹である霞はすぐに霞が上司への不満を漏らした原因を察するが、とりたてて霞の胸の内を心配するような衝動を抱きはしなかった。霞としては実の姉と仲の良い友人、雪風が極めて不仲である事を非常に残念に思っているが、それ以上に彼女は自分も含めてそれぞれが上司と頂く人物が霞の思うような事を微塵も心に抱いていない事をよく知っている。正直な所、姉が僅かに眉をしかめてブツブツと文句を言う姿はお門違いであり、霞は従兵として神通に従ってきた経験上から、姉はむしろ上司の胸の内を正反対に取り違えているのだと明確に悟った。

すると霞は勘違いの末に一人表情の雲行きを怪しくしている姉の姿を小さく声を上げて笑い、知られざる神通の思う所を教えてやる事にした。

『ふふふ。霞姉さん、戦隊長は二水戦のみんなが可愛くて仕方ないんや。やて、その中でも一番期待してはるんは霞姉さんなんよ?』
『え……。?』

思いもしなかった言葉に霞は足元から目線を上げる。その先では霞が微笑を浮べて洗濯板に添えた手を忙しく動かしており、彼女は姉に視線を送る事無く自身の言葉の意味を述べた。

『ウチらが前に観艦式前の宴会で給仕をやった時、雪風が戦隊

長と三戦隊の金剛^{こんごう}さんに可愛がられてたんを見たから霞姉さんそんな事考えてはるんやろ？ やて戦隊長は言うてはったわ。雪風は頭も良いし運動もできるけど、それだけやって。』

『それだけ・・・？』

『うん。やて霞姉さんはそれに加えてみんなを纏める統率力があるて言うてはった。霞姉さんがずっとウチら18駆の司令駆逐艦^{かぜろく}やってるんも、戦隊長はいつも褒めて下さつとるんやで。”陽炎^{かげろう}や不知火^{ぬい}みたいに型式も違う子らを、曲がりなりにも新兵ながら纏めてみせたのは私にも出来ん。猿は間違^{あさしお}いなく朝潮以上の指揮官の才能がある。もしかしたら将来、私よりも優秀になるかも知れん。” って、横須賀にいた時に那珂^{なか}中尉とお酒飲みながら嬉しそうに話しておられたわあ。』

霞の話す知られざる上司の言動を鑑みるに、どうやら神通は霞に對して大きな期待をかけてくれているらしい。決して嘘を言わない妹の性分はその事にしつかりとした現実感を伴わせ、次いで霞は話の中で名が上がった上官、即ち上司である神通の実の妹にして四水戦隊長を頂く那珂の名で、霞が教えてくれた上司の自分に対する期待をとて鮮明な物にする。

それは今から半年以上前の事。

まだ雪風が二水戦に合流する前であるが、霞や霞、そして上司を含んだ二水戦は、那珂が率いていた四水戦と柔道の對抗試合を行った事があった。戦績自体は二水戦の負けとなってしまう二水戦の中では不名誉な思い出と位置づけられて普段の会話でも話題には進んで挙げられる様な記憶では無いのであるが、霞がふと思ひ出したのはそんな二水戦のほろ苦い思ひ出の部分ではない。彼女がふと脳裏に描いた光景とは、上司である神通が実の妹とガチンコで対決した

時の物であった。

するとこの時、霞の記憶より蘇った神通と那珂の行う柔道の様子は、奇しくも普段から二水戦の中で行われている柔道の武技教練で1位を奪い合う自分と雪風の姿にピッタリと重なっていく。実は霞と雪風は互いに柔道の実力は高い次元で伯仲しているのだが、その戦い方は先の神通と那珂のように全く違っている。雪風は肩の高さで腕を前に伸ばし、腰の位置を低くしてどっしりと構え、常に相手を自分の正面に捉えようとするのに対し、側宙やバク宙すらも普段から簡単にこなす程に身軽な霞は柔道の際には両肩から力を抜いて腕はだらりと下げ、上半身を大きくくねらせて一步踏み出してみたり左右に跳ぶ様にステップを踏んでみたりと、いわゆる脚を使った戦い方を得意とする。いつぞやの戦隊長同士の戦い方もこれと全く同じで、腰を落として静かに構える那珂に対して神通は小刻みに常に動くという物だった。

ここまで思い出した霞は、そんな柔道の戦い方の差異が何故に雪風が神通と同じ物になっていないのか疑問に思う。霞が話したように雪風という後輩は幼い頃の上司によく似ているとの事から仲間内でも特に目をかけられており、霞としてもその事に不満を抱いたのはほんの数分前の事である。

『あ、あかん！ 戦隊長に今の事、言うたらアカンって言われとったんや・・・！ 霞姉さん、いまウチが言うた事は聞かなかった事にしてなあ・・・。』

ふとした上司と柔道の疑問によって足踏みをやめていた霞の耳に、突如として霞の悲鳴混じりの声が響き渡ってくる。どうやら神通によって口止めされていた事を思わず話してしまったらしい。トロい思考回路の持ち主である霞は他人に言葉を返す際、それに纏わる記憶を検索する前に放ってしまうのであり、いつもの様にまたしても

その記憶を共有する者との秘密の約束を忘却してしまっていた。まして共有する者とは怖い怖い唯一人の上司、神通であるから、霰は後難を恐れて洗濯板を手を持ったまま、霞に向かって今にも泣きそうな表情で他言無用を懇願してくる。

『せ、戦隊長に怒られるわあ……。霞姉さん言わんといてえ……。』

『え。あ、あはは……。大丈夫、言わないよ。霰。』

考え事の最中であつた手前、霞は霰に空返事にも近いような声で応じるが、そんな姉の事情なぞ今の霰にとっては眼中に無い。生来が気の小さい霰は襲いかかって来る憂いへの心配と恐怖に、霞の右手を両手で握って必死のお願いを続ける。ぼんやりとした表情で霞が放つ声が頼りなく感じてしまった事もあって彼女の懇願はなかなか途切れず、その後のお洗濯で霞はひとまず上司への考察を心の脇へと追いやり、洗濯と霰への対応を同時にこなさねばならなくなつた。

困った妹であつた。

結局、霞は上司への素朴な疑問を抱いたまままでその日の特訓に入。

いつもの様にヘトヘトになるまで神通艦の甲板上を走らされた後、同じく柔道着を身に纏つた上司より実戦的な柔道の教練を受ける。だが神通が霞に教えてくれる戦い方は朝に霰の話で気付いた物とやっぱり同じ物で、霞はしっかりと上司の教えに耳を傾けつつも、神通の顔をじつと見つめてその胸の内に関する考察を巡らす。

『踏み込む時は自分の足が相手に対してどの位の距離になるか気をつける、猿。大きく踏み込みすぎると足払いの恰好の標的になるし、足りないとおから掴まれて不利な体勢になる。特にお前は身体も小さいし軽いから、下手な体勢で掴まれたらすぐに投げられてしまうぞ。』

『はい。』

『お前の得意な速度重視の小内刈こうちがりや小外刈こそとがりは私もよく使う技だが、動きの速さに任せてただ突っ込んでも結局は組み合いになるんだから腕力勝負で返されるのオチだ。だから左右前後に忙しく動き、色んな技を出すフリをして相手に選択肢を多く持たせる事を意識するんだ。お前は動きの速さならズバ抜けてるから、中々捕まえられない上にいきなり突っ込んできたりするお前に相手は必ず対策を練ろうとして頭を使う。そうなると頭の中での攻勢的には必ず相手が後手になる。するとお前の得意な素早い柔道に、あれこれと考えを巡らす相手は対応できなくなるんだ。自分の長所を生かす為の布石だと思え。』

そこにある上司の顔はいつもの様に角ばった菱形の瞳が目立つちよっとおっかない表情。実際に試合をした場合を想定して組み合っている状態であるから、霞の視界いっぱいには神通の顔は見えている。もう一年以上もこの顔を見ているというのに未だに霞の心からは恐怖の印象が消えないのだが、そんな上司がこうして自分に実際の組み合いを持ってあれこれと教えてくれる姿勢には、ほのかな神通なりの優しさが込められているからなのだろうかとふと思った。

やがて背後にて腕立てに汗を流している雪風の稽古も請け負う神通は霞の襟や袖から手を離し、霞もまた上司の柔道着から掴んでいた手を離す。お互いに少し後ろに下がって胴着の乱れを直す中、神

通はさらに声を続けて霞への教えを締めくくった。

『いつも言っているが、”兵ハ詭道ナリ”という言葉^{まこと}を忘れるな。魚雷戦でも砲撃戦でも柔道でも、戦^{いくさ}という物の本質は相手との騙し合いであって一概に膂力^{りよりよく}に頼ったモンじゃない。”攻撃は最大の防御”等という言葉も、私に言わせれば素人の考えだ。攻撃も防御も相手との駆け引きという流れの中で生ずる一時的な攻防の比率の状態を指しているのに過ぎん。戦の中では両方とも常に同時に存在するという事をよく覚えておけ、猿。』

『はい!』

言い終えるや神通はクルッと回れ右をして霞に背を向け、腕立て中の雪風の下へと歩み寄っていく。霰の言葉通りに自分の期待しているのかと考えると上司のその姿はどこかあっさりしているようにも見えるのだが、教えてくれたのはいつぞや見せてくれた神通自らが使う戦い方以外の何物でもない。そして立ち上がった雪風に教えている戦い方は、やはり霞に教えた物とは違う物であった。

『犬、投げてくれとでも言ってるようなモンだぞ。ケツに力を入れて腰を落とせ。』

『あ、はい!』

『猿なんかは私以上に素早いんだからな。気を抜いてるとすぐに投げられるぞ。』

『う、うっス・・・!』

霞の存在をダシにして神通は雪風を叱咤した。もちろんそれは天敵に負けるのが大嫌いである雪風の性格をしつかりと読み取っている神通の作戦でもあるのだろうが、それでも眼前にて上司が自身よりも優れている点を自分が持っていると言ってくれた事が霞にはなんだか嬉しかった。その事は霞の心を晴れやかにしてくれ、霰より

聞いた上司における自分への期待が本物である事を彼女はこの時になつてようやく確信する。ただ神通はそれを面と向かつて言ってくれる人柄ではないし、まして教育中の彼女は鬼との誉れも高い怖いお人。一人微笑みを浮べていた霞には、すぐさま上司よりお叱りが跳んでくる。

『猿、何してる！ さっさと腕立てを始めんか、馬鹿者が！』

『あ！ す、すみません・・・！』

櫓を飛ばされた霞はすぐにその場に突っ伏して、先程までの天敵と同じ様に腕立てに汗を流す。お叱りを貰った事で雪風が横目ではくそえんでいるのが気に入らなかったが、口を尖らせつつも霞は一回に時間をかける辛い腕立てへと取り組んだ。

そしてその最中、彼女は期待を掛けてくれている上司になんとか花を持たせてやれないかと考え始める。だがそれは霞にとって別に難しい事ではない。この柔道の特訓を始めるに当たって上司に稽古の懇願をしに行った時、神通は霞の企図する事への重大なヒントを言葉に変えているからだった。

『姉貴が自慢しててな。』

一年に及ぶ二水戦での生活で、上司である神通の性格はそこそこに解かっている霞。癪癪持ちで私的な事から霞を含めた部下達に八つ当たりをかます等、困った所も多いお人なのであるが、同時にそれは神通の飛び抜けた負けず嫌いを端的に示す好例でもある。いっぞやの四水戦との対抗試合で負けた事が話題に挙がった時、三水戦戦隊長であり実の姉でもある川内（せんだい）に部下の自慢話をされた時、この人が『ふーん。』の一言で終わる訳が無い。本当なら自分だってそこで自身が率いる二水戦の自慢話をしたかった筈なのだ。

そこまで考えれば霞が企図する上司への花は、今回の柔道の大会

で見事に優勝する事以外には何も無い。今回の大会は呉鎮所屬の全駆逐隊が参加するのだから、優勝した者は帝国海軍にその人ありと言われる程の柔道の使い手と認知されるのは間違いなく、所屬の駆逐隊、果ては戦隊とその名が知れ渡る事になる。例えば帝国海軍の艦魂社会というちっぽけな世界でのお話であったとしても、そこで堂々と”二水戦の駆逐隊”が強豪の一角となれば、戦隊を率いる神通にあっても鼻を天狗の様にする事が出来るのだ。

熱血な性格の霞は考察が結果を見た事に合わせ、腕立てへの動きをより機敏にする。仲間達の為、姉妹達の為、彼女達と供にする隊の為、そして期待してくれている上司の為に、霞は今回の柔道の大いに注ぐ情熱の炎を更に一層激しく燃やすのだった。

第七七話 「最強を目指せ！／其の三」

昭和15年10月20日。

温暖な瀬戸内の空は雲の量の大小こそあれど、気持ちの良い秋晴れの天気が続いていた。呉軍港内にて休暇中の艦魂達にも、その乗組員達にあってもものんびりとした一日を与えてくれ、毎日の甲板掃除のお仕事であつても水兵さんの内の何人かはあくびを放つ始末。「月月火水木金金」の言葉を常套句にしている当事者が彼等である事を嘘かとも思わせる程で、呉軍港内にポンツーンと供に浮かぶ新型戦艦が朝から晩まで放つあんなにうるさい機械音もそんな日々でのお飾り程度になつてしまつている。給水船や交通船のような工廠の雑役船舶すらも軍港内の片隅でのんびりと波間に浮かぶ揺り籠と化しており、波間に映るお空でいつもの空中哨戒任務に励むカモメ達の方がよっぽど働き者であつた。

極めて暢気^{のんき}な10月の呉。

大した重労働も無く海軍では三食の内でもっともボリュームがあるお昼ご飯への期待感も薄まるこの頃、神通は同じく呉鎮守府所属である後輩^{もがみ}、最上^{もがみ}を伴つて、彼女の妹にして同じく七戦隊を組んでいる鈴谷艦^{すずや}へと来訪していた。

普段から鋭い眼光とそれに伴うおっかない雰囲気を少しも色褪せさせない神通の来訪には、一応は彼女とは話もした事がある鈴谷もどこかおどおどとして視線をあちこちに泳がせてしまう。平気なのは神通を姉と慕つて憚らない最上くらいで、珍しく自分が戦隊長を

勤める七戦隊の所属艦に足を運んでくれた神通を笑みを伴って歓迎した。

『ごくろうさます、神通中尉！ ほら鈴谷、ちゃんと挨拶！』

『ご、ごくろう様です……。あ、あの、よ、ようこそ……。』

『ん。二人ともすまん、せつかくの休み中に。』

神通はその強面な人相に反して決して不機嫌な訳ではなく、鈴谷艦の最上甲板で出迎えてくれた最上と鈴谷に軽く手を上げて挨拶する。元氣一杯の最上はすぐさま神通の隣に寄り添うようにして立ち、右肩の上から前に流した綺麗な黒髪を振り回すようにして何度も頭を下げながら明るい声で対応してくれるが、艦の分身である鈴谷はその声色にかなりの震えがこめられていた事にも示されている通り、硬直した身体を小刻みに震わせて神通の怖い顔を長時間直視できずに視線を右往左往させていた。白く綺麗な鈴谷の頬には冷や汗も浮かんでおり、陽が昇っているとはいえ肌寒い感もあるというのに頬の途中で切り揃えた横髪が汗で両頬にペツタリとくっついていて有様だった。

その理由は鈴谷を含めた七戦隊が神通率いる二水戦と同じ第二艦隊に属する中で、しかも二水戦とは第二艦隊内で第二夜戦隊という戦闘グループを構成している七戦隊の事情にある。

最上も鈴谷も二等巡として類別される艦体を分身としているが、その実情は高雄型や妙高型といった一等巡と似通った性能を持った立派な中型戦闘艦。特に主砲は中口径艦載砲では最強クラスの「五〇口径三年式二号二〇センチ砲」を今年の春までに掛けて同型艦全てに装備しており、砲門数の面でも一等巡とはほぼ同じと非常に強力な砲撃力が彼女達の持ち味であった。その事から七戦隊は、二水戦が敵艦隊への突撃躍進を実施する際に遠距離からの砲撃で支援するという役割で運用されるのだ。

故に両戦隊の艦魂達は戦隊同士での打ち合わせを普段からそこその頻度で行っており、鈴谷にとっても最上にとっても神通はお仕事の上では割りと近い関係にある。人間の社会で例えるなら、同じプロジェクトに参加する部署違いの仕事仲間といった感じだ。もつともそこに笑みを伴ってお仕事に励む光景が無い事など、この人の苛烈な性格を考えれば察するのに難しい事は無い。最上型は最新鋭故にその艦魂達は皆若く、神通とは大の仲良しである明石^{あかし}よりもちょっとだけ歳を重ねた20代前半の容姿を持つ。当然のようにまだ経験不足な感は否めず、それは艦隊訓練の成績に如実に現れる。そして彼女達の未熟っぷりは、「鬼」の渾名を頂く神通によって激しいお叱りの恰好の標的とされてしまうのだった。その上で『この馬鹿が！』と頭ごなしに怒鳴り散らす神通の態度は、慣れていないとインパクトが余りにも大き過ぎる物だった。

そんな事から長女の最上を除いて妹達はすっかり彼女に怯えきつてしまい、加減のできないその人柄を嫌って普段から進んで話しかけるような事も無くなってしまう。正直な所、鈴谷にとっては付き合うのも嫌なお人が神通という艦魂なのだった。

しかし幸いな事に澄ました顔の神通は、今日はお仕事の事で鈴谷の分身にやってきた訳ではなかった。もちろん鈴谷に怒号を浴びせるつもりなど元より無く、緊張の渦中にいる後輩に彼女としては優しさの籠る声を放つ。ただそこにはとある者達への弱冠の揶揄もあり、鈴谷はそれが自分達と同じ海軍軍人である事を知って強張った表情をほんの少しも柔らかくする事が出来なかった。

『鈴谷、休んでる所で悪いな。こんな時に人事異動なんぞ発令しておって、海軍省の馬鹿供はこれだから困る。』

嫌いな物はトコトンまで嫌いになってしまう神通。帝国海軍の運営を司る者達であってもその矛先は緩和される事は無く、吐き捨て

るようにそう言った彼女にはさすがの最上も幾分強張った苦笑を浮べる。僅かに苛立ちが募ったのか神通は片手を添えた首を小さく左右に捻って鳴らし、眼前にておっかない雰囲気の高度を上げた彼女に鈴谷は縮こまる胸の中をさらに一層小さくしてしまった。

そこで神通の人柄に幾分は慣れている最上は彼女が鈴谷の下へと訪れたそもそもの目的を声に変え、どうすれば良いのか解からなくなつて今にも泣きそうな表情で俯く鈴谷の心を恐怖の束縛から解放してやる。

『あゝっと・・・、少し風が冷たくなって来ましたね、神通中尉。

甲板の上で立ち話もなんですから、早速ご案内しますよ。ほら鈴谷。』

前髪を左右に揺らしながら笑みを作る最上の声はいつも柔らかかで、神通の表情から不機嫌の色を引かせるのと同時に、鈴谷身体をも恐怖と緊張の束縛より開放してくれる。『ふん。』いつもの様に鼻を鳴らす神通の顔を覗きこむようにして鈴谷は声をかけ、最上の言葉も示している神通の用事を早速実現させる事にした。

『い、今は午食のお時間ですので、か、艦長室にてお食事をしておられます・・・。あ、案内しますね・・・。』

『ん、頼む。鈴谷。』

まだまだ怯えきっている鈴谷に声を返した神通は再び眉間にしわを寄せている。鈴谷はそんな彼女から視線を逸らすようにして背を向け、自身の分身の艦長室へと向かい始める。神通と最上もそれに続いて鈴谷艦の中へと足を踏み入れていくのだが、神通は決して鈴谷の案内の不手際や自身への人当たりに腹を立てている訳でもなければ、さっきの彼女自身の言葉にあるような海軍省の者達への不満を募らせて怒ったような顔をしていない。彼女の不機嫌そ

うな表情の曇り具合は、今から向かう鈴谷の分身の中にある艦長室にその理由があるのだ。

その後しばらくして神通の一行は鈴谷艦内艦長室へと到着し、重苦しい金属音を放ちながら艦長室の扉を開ける。帝国海軍の最新鋭艦艇の内の一つである鈴谷艦の艦内は通路も含めて綺麗な物でそれはこの艦長室においても例外ではなく、3人の瞳に映る扉の向こうは隔壁や天井、備え付けの木製の机や椅子、舷窓の縁の輝き具合までよく清掃が行き届いた美しい一室が広がっていた。

だが神通はそんな室内の様子など眼中には無い。扉を開けた正面、部屋の一番奥にある机の辺りに向けた視線は、彼女がよく知る困ったお人を正確に捉えていたからだ。鈴谷が言ったとおりその人物は午食の真っ最中で、机の上には長方形の盆に乗った碗や皿が並べられている。ほのかにのぼる湯気と同時に煮魚の香ばしい香りが3人の鼻をくすぐるのだが、それでも神通の表情が晴れる気配は無い。するとその内、扉の辺りで立ち尽くす3人には食事その人物より声が放たれる。

『お、神通じゃないか。なんだ、オジサンが恋しくなって来たのか？』

『何が恋しいだ、ジジイ。』

神通と始めとする3人は人間には姿を見る事すらもできない艦魂なのだが、彼女達に放たれた言葉は少し低めの男性の声。最上と鈴谷はまだ若い事もありその生涯では初めて声を交える事の出来た男性になるが、既に誕生して15年以上も経ている神通にあってはそ

の限りでは無く、しかもつい先日まで自身の分身の中で一年近く目にしてきた人物であるからその言葉には初対面の雰囲気などは含まれてはいない。即ち、彼女がいま目きむらにしている男性とは、10月15日まで神通艦艦長の役職に就いていた木村昌福大佐であり、この度の人事異動でこの鈴谷艦艦長へと転勤となっていたのだった。しかし転勤といっても同じ呉鎮所屬にして、同じ第二艦隊所屬どころか同じ第二夜戦隊を組んでいる鈴谷の分身が転勤先である事から、神通にあっては一時の別れなどという感覚はちっとも湧いてこない。やがて神通はツカツカと室内へと足を進めて行き、机に腰掛けてゆつくりと端を勧めている木村の正面まで近づく。今時珍しいカイゼル髭を生やしている木村は右手の指で片方の髭をつまみ、立派な髭が汁に浸らない様に注意しながら味噌汁を啜っており、見慣れた上に彼と対面すると表情が自然と曇ってしまう神通は別として、その愛嬌ある可笑しな姿に最上と鈴谷は小さな笑い声を漏らしている始末だ。

そんな中で神通はすぐさま自分が鈴谷艦へとやってきた用件を声に変える。それは決してお仕事に関係がある物ではなく、ただ単に神通がこのお人を艦長として迎えてしまった不幸な後輩、鈴谷を心配しただけの物であった。そして声を放つ相手に慣れているのは木村にしても同じ事で、神通が眉をしかめて睨みつけてくる事に対しても彼は澄ました顔で箸を進めていた。

『ジジイ。鈴谷や最上といった七戦隊の奴らは私達二水戦と組んでいる大事な仲間だ。だから変な気苦労を持って鈴谷に倒れられでもしたら私が困る。もし鈴谷に何かあるようなら、私が黙っておらんからよく覚えておけ。』

『お前なあ、そんな事を言う為にわざわざここに来たのか？』

自分への戒めの言葉に些か呆れた声色で木村は声を返す。だが神通は言い終えてすぐに木村と目を合わせるの拒絶するような仕草で

背後に振り返り、扉の辺りで二人のやりとりを見ていた鈴谷に向かって口を開いた。

『おい、鈴谷。このクソジジイはケツは触ろうとするは、風呂を覗こうとするは、油断も隙もあつたモンじゃない。だからもし何かあつたら泣き寝入りせずに私に言つて来るんだ。戦隊運動の教練の時に掃海具に巻き付けて海中を引きずり回してやる。』

『おゝ、怖い怖い……。』

まるで歌に合いの手を入れるかのようなタイミングで声を放つ木村。最上は愛嬌のある彼を気に入ったのか口に手を当てて笑いを抑えているが、真面目に鈴谷という後輩の心配をしてやった神通にあっては面白くも何とも無い。小さく舌打ちを放って背後を睨み、それ以上の軽口を木村が叩けないようにした。

どうにもこういうひょうきんな木村の物言いが神通には自分を馬鹿にしている様に思えてしまい、決して当人がその気が無い事を知りつつも生来が真面目な性格の彼女には看過できない物である。だがここで竹刀を振り回して時代劇さながらの大退治劇を展開すると昼休み後に控えている部下達の特訓に間に合わないと神通は考えて冷静さを取り戻し、再び顔を鈴谷や最上のいる扉の方に戻して歩き始める。

『お帰りでしょうか。神通中尉。』

『ああ、もう用は済んだ。最上ももう戻っていいぞ。』

神通は足早に扉の前に進みながら最上と声を交える。『用件は済んだ。』の一言で緊張の渦中にあつた鈴谷は胸を撫で下ろし、いつも怒ってばかりである事から苦手なこの人がやっと自身の分身から去ってくれる事を声に変えずに喜んだ。不満げなのは言いたい放題言われてしまった木村だけである。咄嗟に放つ彼の声にはどこか焦

る様な所もあるが、神通はそんな彼の気心なぞ屁とも思わずに背を向けたまま声を返した。

『お、おい、もう帰るのか・・・!?』

『ふん、用は済んだ。それに中年の髭ヅラなんか、何が楽しくてこれ以上見なきゃならんのだ。帰る。』

なんとも辛辣な物言いを吐いて捨て台詞にしようとする神通。一言で髭ヅラと言われてしまえば元も子もないが、持ち主である木村なりにこの立派なお髭の手入れは結構気を使っている。毎朝ちゃんとメーカー物の油を使って固めるのもそうだし、濡らさないようにお髭の片方を摘んで汁を飲むのも彼なりの苦勞という物だ。

もつとも木村は自身の最大のトレードマークであるお髭の事を酷評された事にはほとんど意識を傾けておらず、わざわざ自分を訪ねてきてくれた神通が会って数分もしない内に帰ろうとする事に声を上げた。その理由を聞かれもしないのに木村は口にするが、それに帰ってくるかつての相方の声はやっぱり荒々しい事この上ない代物だった。

『せめてメシが終わるぐらいまでいろよ、神通。一人で食わにゃならんメシはつまんだろ。ほらオジサンと半分こー。』

『なんで私がジジイのメシの相手をしなきゃならんのだ！一人で食うのが嫌なら兵卒にでもなれば良いだろうが！』

いともやたやすく怒りが沸点を突破してしまう困った性格の神通は、一度は背を向けて去ろうとしたにも関わらず木村に振り返ってそう叫ぶ。やはりその怒号の迫力は凄まじく、胸を撫で下ろしていた鈴谷は肩を大きく震わせて険悪な部屋の空気に涙目となる。神通を実の姉と公言して慕っている最上もさしにも神通の怖さにたじろいでしまい、甲板での立ち話をしていた時の様にその場を取り繕う

言葉を放つのが億劫になってしまった。

ただ木村にしては別に神通を怒らせるつもり等は毛頭無い。

彼自身の言葉にも示されている通り、帝国海軍の艦長さんを頂く者は乗組みの士官や兵下士官などの様に一同に顔を合わせて食事をする事が出来ない役職で、潜水艦や駆逐艦といった艦内容積に余裕の無い艦艇でもなければ一人で食事を摂る事が原則であった。時に他の艦艇から来たお客さんや転勤に伴う部下の労い等を目的として軽い晚餐を催したりもするのだが、何百人ともなる部下の中で気に入った者を頻繁に食事誘ったりすると乗組員達の統率に支障がでてしまう。だから艦長さんの普段の食事とはいまの木村の様に一人で静かに食べるのが一般的で、それ故に烹水ほうすいの任に就く者であっても艦長専用の者が艦内に配置されているのだ。

そんな中での木村の言葉は、例えば艦魂であっても自身とは面識のある者に侘しい食事をちよつとでも賑やかにして貰いたいとのささやかな彼なりの願いが込められている。それにむさ苦しい男所帯で生きる一般的な普通の男性諸君において、何をしてくれるという訳でなくとも食事の際に綺麗なお姉さん方が3人も傍らに居るとやはりその食事は楽しく明るい物になるという物。眼前にてこちらを睨みつける約一名の問題児がその中にいるとしてもだ。

そして木村はこの時、つい数日前まで一年近くも艦長さんとして勤めて来た神通艦を分身とする彼女に、つい最近目にしてきた彼女達の生活において少しだけ離れた事があった。それは神通艦が栄えある帝国海軍二水戦に戦隊旗艦であるのと同時に、その命たる神通が部下の艦魂達を従える役職を艦魂として頂いているのと同関係する。幸いにもその話題の一端を神通は自ら声に変えてくれ、例えばそれが木村の願いを遮るような物であっても彼はその言葉に自慢の髭をピンと立てて微笑むのだった。

『それにのんびりメシを食う暇なんか私には無い！ 今日もこれから猿と犬に教練をつけねばならんのだ！』

『おお、それぞれ。あの二人だよ、神通。』

『ああん・・・？』

自身が率いる二水戦の事に口を出される事を極端に嫌う神通は、既に二水戦から離れた木村が自身の部下達に対しての話題を切り出そうとしている事で眉間に一層深いしわを作る。唇の間より漏れてきた声にも怒りの色合いが濃く滲んでいるが、木村にあってはその事で彼女に対する態度を改める事は無い。空になった碗や皿が目立つ中、大きめの皿の一角にて残っていた漬物をチビチビと齧りつつ、木村は自身が思う神通の部下に当たる者達の事、すなわち柔道の特訓に最近精を出している霞と雪風の二人について率直な意見を放つ。

『あいつらには休暇をやった方が良いぞ、神通。今は根性で頑張ってるが、逆にそれが心身ともに足枷になってるようにオジサンには見えるなあ。』

木村の声色にはどこことなく明るさが込められ、その表情も微笑と、彼の人柄を鑑みても極めて彼らしい言動であった。だがそんな軽やかな声に、扉を背にして突っ立っていた最上と鈴谷はいよいよ震えていた肝を潰してしまふ。それはもちろん、彼の言葉が放たれた相手にとって、艦魂達の間では禁句とされてきた二水戦に対する第三者からの意見に他ならなかったからだ。

すると神通は肩をいからせて大股で木村の下へと歩み寄りながら、これまでに無い砲声にも聞えるかのような怒号を彼に向けて放つ。

『黙れえ！！ 二水戦の事には口を出すな、ジジイ！！』

そのまま机ごと蹴り上げでもしそうな勢いで迫る神通。鋭く研ぎ

澄まされた瞳を吊り上げるその表情は、長い前髪が揺れて遮られていてもすぐ解かる。彼女を知る人物でなくとも、すっかり彼女がご立腹になっている事は一目瞭然であった。

ところが彼女が向かっていく先から帰ってきた木村の言葉に、神通はふと歩みを止めて荒々しい息遣いに規律を戻らせ始める。彼と供に分身の中で過ごしてきた中でこれまでも何度かあった思いも寄らぬその言葉を耳にし、神通は声を静めて考えを巡らすのだった。

『二人とも最初の気合と自分達から懇願したって事実で、今の辛さを耐えてるんじゃないのか？ 別に悪い事じゃないのかも知れんが、肝心の目標でもある大会に対しての二人それぞれの意気込みや重要性を忘れてるように見える。そんな状態で二人を大会に出して良いのか、神通よ。オジサンの見たトコじゃ、大会当日になっていざ相手と立ち会った時に闘争心が湧かないで呆気なく負けると思うぞ。』

『むう……。』

短気ながらも理論的な考え方をする神通は木村の放った部下達への考察を声には出さずに頭の中で分析し始めるが、どうにも彼の言葉には説得力が不思議と備わっている。ここ数日の記憶の中にある部下達の言動は自身の教えに元氣と気合が混じった返事をする物ばかりであるが、汗びっしょりになってそんな返事をする部下達の心底にある物は確かにいわゆる「根性」の二文字であった。特に霞は何にでも情熱を注ぐ熱血な性格で、彼女に負けるのが大嫌いな雪風もそれと張り合う形で神通の教練に耐えている。もちろん二人がただ言われた事をやれば良い程度の認識でダラダラとやっているとは微塵も思わない神通だが、はたしてガムシヤラに励むだけの姿勢が最強という栄冠こんこうに繋がるのか神通はここに来てふと疑問に思った。

師匠である金剛こんこうの教えや普段から部下達に言い聞かせてきた戦闘艦の艦魂としての教育内容はどれもこれも詳細な数値、過去の実戦

を例にした状況と過程の分析に、色眼鏡越しには捉えない在りのままの結果と、生来が理詰めで物事を考える神通らしい物で、それが今の帝国海軍艦魂社会を束ねている長門ながとをして『天才』とまで言わしめた所以でもあった。

何事も頑張るだけで結果が出るなら苦労はしない。

木村の言葉はふと自身の脳裏を過ぎったそんな声と奇妙な一致を見る。まして一年程にも及んだ彼との付き合いの中で意外にも艦内で課す訓練を激しい物としていた木村を知る神通は、ここまでの考察とそのきっかけとなった彼の言葉に偽りや誤りなどを見つける事は出来なかった。

しばし考え込む神通は、二人の可愛い部下がなんとか頑張る一辺倒の今の状況を打開できるような策を練る。しかしそのまま『頑張るのはダメだ。』と否定してしまうのは二人の心を無下にする非道な行いのように思えるし、『ほどほどにしろ。』と言っても身も心もまだまだ少女の域を出ない二人にはその加減が解からないに決まっている。変に頭を使って曲がりなりにもせっかく集中できている今の霞と雪風の調子を狂わせるのは、上司である神通としてはとても看過できる物ではない。なんとか二人の励む事に対する現状を維持しつつも、その内面的な姿勢を正してやらねばならない。

まさに無理難題であった。

『さあて。どうする、神通よ。』

『ん、むう……。』

そんな中で木霊した木村の声に、神通は再び眉間にしわを寄せる。だがそれはさっきまでのような怒りによって作り出された物ではなく、二兎を追って得るかの如き難しい問題に彼女が必死に取り組んでいるからだった。もはやそこには第三者の口出しに意地を張る神

通の姿は無く、何としてでも部下達に良い結果に繋がるような日々を送らせてやりたい悩める一人の上司の顔がある。やがて彼女は一向に纏まりを見ない考えに行き詰まりを覚え、怖いお人と自身を認識する鈴谷、最上という後輩が後ろに控えているにも関わらず、思い切って木村にその答えを問う事にしてみた。

『・・・休日を与えればそれは万事治まると思つか、ジジイ？』

『うーん、どうだろうなあ。羽を伸ばせるのは勿論なんだが、肝心なのはあの二人が柔道や今度の大会に向けて気持ちを新たに持つか、改める事だとオジサンは思うぞ。まあ、これ以上の具体的な策はオジサンも艦長なんてお仕事をやってる中ではよく頭を捻る事だからなあ。なかなか上手くいかんモンだ、わっはっは！』

『むうう・・・。』

敢えて自分の立場を話して大変さを伝える木村であったが、同時に自分と同じく一端の上司として頭を捻る神通に彼は笑いの声を上げる。それは彼の投げ掛けた疑問に神通が答えられないのを嘲笑った訳でもなく、柄にも無く他人の前で難しい表情を浮かべながら頭を捻るその姿が可笑しかった訳でもない。木村は神通の友人である明石のかつての相方と同じ様に人間の世界には大変に珍しい艦魂の見える人物で、海軍軍人として励んできたこれまでの生涯で何人もの船の命運を見てきたのだが、その中でもこの神通はその破天荒で気性の荒い性格が目立つ印象深い艦魂。なまじ水雷畑をずっと歩んできた木村としては、帝国海軍水雷戦力の申し子とも言える程に水雷の知識、経験を持つ神通は、同じ水雷の世界に生きる大事な仲間でもあり、40代にも差し掛かった中年の自分とは少し離れた20代後半の外見を彼女が持つ事から早くに生まれた娘のようにも思える。そしてそんな彼女が自分と同じ境遇、懸案で頭を捻る今と言う

瞬間が、どこか彼には嬉しかったのだった。

結局そのまま神通は木村の示してくれた部下達への懸案に対して回答を見つける事が出来ず、『むう……。』と電動機の稼動音にも似た唸り声を連発して鈴谷艦を後にした。やっとの事で怖い怖い彼女が居なくなってくれた事を鈴谷は喜び、最上が苦笑いして見守ってくれる中で徒労の溜め息を放って甲板にへたり込む。波間の向こう、鈴谷艦からはちよつと離れた所に錨を降ろしている特徴的な4本煙突の艦影を横目にしつつ、最上と鈴谷はお互いに労いの言葉を掛けて何事もなく終わった今日という一日に安堵した。

そしてそれに併せて、「鬼の戦隊長」との異名を誇るあの神通を声色も表情も変えずに自然体のままで落ち着かせ、自分との話し合いのペースに引き込んでしまった木村という人間に深く感心するのだった。

第七八話 「最強を目指せ！／其の四」

神通^{じんつう}がかつての相方の言葉で、『むう……。』という鳴き声を放つ迷える子羊になってしまった翌日。

呉軍港の波間のご真ん中で着々と艤装作業を進める帝国海軍最新鋭戦艦の右舷側隣。そこには基準排水量15820トンという大きな艦体を海岸からの遮蔽物とすべく、帝国海軍唯一の給糧艦である間宮艦^{まみや}が錨を下ろしていた。乾舷もそこその高さを誇る間宮艦は新鋭艦の目隠しとしてはうってつけで、これまで忙しくあちこちの海にその軍艦旗を進めた経歴を持つ間宮艦はしばらくはこのまま呉での停泊が予定されている。明石艦と同じく軍属の職人さんが乗組員の過半数を占める間宮艦では、厳密には民間人である彼等に最新鋭戦艦を目に触れさせぬよう墓参休暇という名目を与えて艦を離れさせており、帝国海軍の数ある職場の中でも指折りの忙しさを持つ間宮艦も最近では艦内から人間の気配がだいぶ薄れていた。

しかし艦の命である間宮はその限りではない。

何を隠そう彼女はすぐ隣にて浮き桟橋に挟まれている巨大戦艦の艦魂に食事を調達するお役目を頂いていて、今の呉軍港内にて停泊している数十隻の海軍艦艇の艦魂達の中でも3人しかいない、新型戦艦の艦魂と直接会う事の出来る人物の一人なのだ。自身の分身の中の人気が少ない事から食事の調達自体は普段より随分と楽にはなっていたりするが、この新型戦艦の艦魂こそ時代の帝国海軍実施部隊を率いる立場である者と考えると包丁やお鍋を握る間宮の手にも力が入る。帝国海軍艦魂社会一の料理人を自負する彼女は己が実力の全てを注いでここ最近のお勤めに励んでおり、のんびりと桟橋や軍港内の一角でお昼寝している仲間達とは全く正反対の日々を送っていたのだった。

ただ彼女も人の子ならぬ、生命力という物がちゃんと在る艦魂と

呼ばれる者の内の一人。額を流れ落ちていく汗と供に体力も消耗するし、精魂込めて作った食事の味が新たな仲間の口に合うかどうかと緊張の糸を張って精神的に疲労する事もあるし、疲れた心身を回復する為に自身も美味しい物を食べてしっかり睡眠を摂ったりもする。人間の世界から見ると幽霊やもののけの類にも見られてしまう艦魂だって、地球という大きなお船に乗ってこの世を生きている無数に在る生命達の一員なのだ。

そしてここ最近のお勤めの毎日ですっかり身体に疲労感が詰まってしまった間宮は、帝国海軍艦魂社会でも自身と同じくそう何人もいないとある業界の第一人者が同じ呉の波間に浮いている事を思い出し、彼女へ身体に溜まった疲労を和らげる処置をしてくれないかと願い出る。

もちろんその人物とは、帝国海軍初の専門工作艦として建造された明石艦^{あかし}の艦魂、明石であった。

『ああああ……癒されるう……』

間宮艦の艦内にある一室にて、ベッドの上でうつ伏せになった間宮が半開きの目で溜め息混じりの声を上げる。組んだ両手の上に顎を寄せ、今にも眠りそうな目で微笑む間宮は、ゆらゆらと身体を揺らされている今の状態であっても不快感なぞ微塵も抱いていないらしい。間延びした猫撫で声を放って全身から疲労感が開放されてい

く快樂にどっぷりと浸っている。20代後半の容姿を持ち、自身とはちよつと違って少しぼつちやりとした感のある頬を下にした自身の手の甲に擦り付けている間宮の表情に、うつ伏せになった彼女の右側に座り込んで背中^の辺りに手を当てて身体を揺らしてやっている明石は声を漏らして笑った。

『あはは。マミヤーさん、お疲れですねえ。肩なんかカチカチですもん。』

親指を立てた手を間宮の背中に押し付けていく明石。柔らかそうな間宮の頬からは予想外な事に彼女の背中は随分と硬い感触となっており、間宮の最近の激務^{あさひ}っぷりを明石へと教えてくれる。師匠である朝日^{あさひ}よりほんの少しだけ教えてもらった明石の整胎術^{せいたいじゆ}はまだまだ師匠から見れば拙^なくて程度は低い代物である事は否めないのだが、長い艦隊訓練の中で長門^{ながと}を始めとしたお偉方の身体を懸命に癒してきた事は良き実習の場となっており、少々凝った肩を楽にしてやるくらいは今の明石にとっては造作も無い事。その効能は間宮の寝顔と紙一重な笑みがしつかりと証明し、一端^{いっぽう}の軍医としてまた一歩踏み出せた自分を明石に無言で意識させた。

『よつと、ほつ。』

『ふにいいいゝ……。ねみいいいゝ……。』

張り切る明石を背にした間宮は早くも睡眠欲の標的となり始め、重くなる瞼を必死に持ち上げようと左右の頬を組んだ手の甲に交互に乗せる。時間は既に昼をだいぶ回っている為、もう少ししたら夕ご飯の準備を始めなければならない間宮。ここで眠ったが最後、間違はなく舷窓のすぐ向こうに浮かんでいる新鋭戦艦の艦魂への食事用意が遅れてしまう。だから彼女は身体の疲れを取るのは結構だが、ここで眠る訳には行かなかった。

そこで間宮は明石に一度手を休めてくれるようお願いするや、自身のお仕事に大いに関係する物を目に入れる事で睡眠欲の誘惑を断ち切る事にした。

『そうだ……。明石、ちょおつとタンマね。』

『およ？ どうしました？』

そんな声を放って明石が手の動きを休めると間宮は背を反る様にして上半身を浮かせ、僅かに体を捻って顔を覗かせつつ明石の背後にある備え付けの机を指差して口を開く。

『机の右端に乗ってる参考書と紙切れ、持ってきてくんないかな。献立考えないと。』

『あ、はい。』

同じ特務艦で朗らかな人当たりの間宮は明石からは10歳程も離れた外見を持つのだが、気さくに声を掛けてくれる彼女は艦魂社会の先輩と言うよりは良き友人として明石には意識できる。観艦式の時より顔見知りになった間宮も明石を慕ってくれているらしく、物言いいも丁寧で先輩風を吹かす様な所が無い。故にすぐそこにある机までのおつかいを明石は二言返事で了承し、静かに立ち上がって間宮が普段お勉強や事務仕事に励んでいる机へと近づいた。

見れば壁に向かって備え付けられた間宮の机は奥側にびっしりと本が並んでいて、その題名が全て小難しい漢字のみで構成されている事からお仕事の為の本である事は疑いようが無い。しかも料理人の彼女らしく、「割烹」や「炊事」、「栄養学」といった文字がよく目立つ。静かに読書するように見えなくとも夜遅くまでしつかりお勉強に励む真面目さを持つのが間宮であり、まだまだこういうお勉強への貪欲な姿勢が自分は拙いと思い知る明石。同じ特務艦を分身とする艦魂の先輩として、明石は尊敬の念を静かに募らせた。

『これですよね？』

小さく間宮の人柄を微笑みつつ、明石は机の右端にて斜めに置かれていた本とその下敷きにされていた一枚の紙を手にして声を放つ。間宮は先程まで体を流れていた快楽の余韻が気に入っているらしく、うつ伏せになったまま足を軽くパタパタと振ってまたぞろ猫撫で声を放っていたが、明石の声が木霊するやすぐに振り向いて声を返してきた。

『おう、それだよお。』

そう言った間宮は明石が再び自身の身体の右側に戻ってくるのを待たずに上半身を起こし、手渡された本と紙切れに視線を向けながらすぐさまうつ伏せに体勢を戻して明石の処置を待っている。自分と年齢が10歳以上も離れているとは思えぬ程になんとも無邪気な一面で、明石は笑い声を漏らしながら間宮がお待ち兼ねである疲労除去の続き始めた。

するとさすがにこの道10余年のベテラン艦魂である間宮。再び身体が揺らされて心地良い明石の手の感触に浸りつつも、今度は瞼の重さと睡眠への誘惑には完全に打ち勝ってしまう。呻き声のような声を小さく漏らしてはいても睡眠欲の強敵さをさっきの様に訴える事は無い。明石の耳に木霊してくるのは、いつもの調子でお仕事に向き合う良き先輩の声であった。

『昨日は秋刀魚だったから、今日はお肉がいいかな？ あ、でも牛肉はあんまりないのよねえ。豚の肩の肉がちよつとあるから・・・、野菜で水澄ましした煮物でも良いかなあ。・・・お、なんだ馬鈴薯ばれいしょと味噌も余ってるじゃない。うん、それが良い。煮物で行こうつと。

』

しきりに紙切れと無造作にページを捲って行く本に目を通す間宮は、なにやら考え事をそのまま声に出して緩く頭を左右に捻っている。海軍軍人の一張羅である濃紺の第一種軍装を身に着けている割には出てきた言葉はどこか家庭的に過ぎるが、艦魂社会の主計科員のような存在である間宮にとってのそれは大切なお仕事。明石が衛生科を示す赤線の入った襟章を身に着けているように、主計科を示す白線の入った襟章を間宮が着けているのも伊達ではない。間宮が手にする紙切れは箇条書きの文の羅列が記されているが実はこれは自身の分身の中にある各食料品の倉庫の状況をメモした物で、彼女は常にそれぞれの食品が、どこで、どのくらい、どのような状態で保管されているかを自身の仕事の一環として管理しているのだ。なまじ間宮がお料理を作る際、それらの原材料はこの食料品倉庫からの銀バイになるのであるから、彼女は人間達が原因不明の食料品の紛失によって困らない程度の銀バイっぷりが求められる。だから数の面においても、艦内での食品生産計画から鑑みての消費量においても、間宮はいつも細心の注意を払いつつ調達の目処が付いた食品類を総合して献立を考えている。きっちりとした計画性が無いと絶対に遂行できないお仕事だった。

しかしこんな先輩のお仕事の裏側を明石は察する事は無く、彼女はようやくお仕事の道筋を付けて喜ぶ間宮の背中を揉みながら間宮が放った『煮物』の二文字に口を半開きにして薄ら笑いを浮べていた。その脳裏にはもちろん、碗の中で湯気と香ばしい香りを立ち上らせて箸につつかれるのを待っている煮物料理の絵が浮かんでいる。まして間宮はお料理に関しては専門家であり、その腕前が非常に良い事は観艦式のあった横浜沖での日々で明石はよく知っている。間違はなく絶品の料理に違い無いと確信し、生来が食いしん坊な明石は次第に力が抜けた舌を口から垂らして脳裏に浮かぶお料理に思いを募らせるのだった。

呆れた奴である。

するとその時、間宮の部屋には隔壁の一角にある金属の扉をノックする音に続き、間宮と明石が共通の友人とする者の声が木霊してきた。

『間宮、いるか？』

女性にしては平均的な高さの声色だったが、そこには幾分の緊張感が張り詰めた様な感じがあり、静かな部屋の中では色んな意味で響きの良い声だ。そしてこの特徴を間宮と明石は耳にした瞬間から意識し始め、すぐに記憶の中から声の持ち主である者の名を検索してみせる。

『あ、神通^{じんつう}だ。』

『こら珍しいなあ。・・・はいよう。入りなよ、神通。』

間宮の上げた声を合図にして金属音を放ちながら扉は開かれ、スラッ^{スラッ}と長身の神通は大きく扉を動かさずに静かに部屋へと入ってきた。いつもどおり角ばった瞳をキツと鋭利にしつつ眉間にはしわも作らずに冷めた表情であるその顔は、神通が間宮の下へと訪ねて来るのに憤りの感情を伴ってはいない事を明石と間宮に教えてくれる。部屋に足を踏み入れる際の足の運び方も肩をいからせるような所は見受けられず、胸を張った堂々たる歩き方は彼女の床^{ゆか}しい武人の一面を綺麗に明石と間宮の瞳に写していた。

その一方で神通は部屋へと入って僅かに歩いた所で視界を上げ、そこにお目当てのこの艦の主以外にもう一人の友人がいる事に小さな驚きを抱く。もちろんそれは明石の事だ。

『なんだ、お前もいたのか、明石。間宮に身体を揉んでくれと頼まれたか？』

うつ伏せのままの間宮とその横で彼女の身体に手を伸ばしている明石の姿を認め、神通はほんの少しだけ片方の口元を吊り上げて声を放つ。喜怒哀楽の怒の部分が極端に表面に出やすい性格の神通だが、例え二人が仲の良い数少ない艦魂とは言えこうも易々と笑みを覗かせるのは珍しい。

その事から彼女が間違いなく上機嫌であろう事を明石は察し、間宮へと伸ばした手を動かしながら自然と作られた笑みと跳ねるような声を返す。同時に部屋には和やかな空気が瞬時にたちこめ、3人はそれぞれに遠慮などという物を微塵も込めない言葉を口々に放ち始めた。

『うん。マミヤーさん、結構お疲れなんだよ。肩なんかガツチガチ。』

『ほう。間宮が疲れたなんて言うとは、珍しい事もあるもんだ。例の新鋭艦の世話はそんなに大変なのか？』

『私だって疲れるさ、神通。それにアンタが私の所に来るなんて方が珍しいわよ。』

『ふん。そうだな。』

弾む会話に今日は積極的に参加する神通。その表情も落ち着いた物で、小さく微笑を浮かべながら間宮と明石のいるベッド脇まで足を進め、手近にあった机から椅子を引き抜いて枕元の辺りに運んだ所で腰を下ろす。同じ時期に同じ造船所で建造された神通と間宮の間柄は勝手知ったる仲その物で、椅子を無断で使用する神通は部屋の主である間宮に断りを入れる事は無く、間宮にしても友人のそんな行為を咎める声を上げない。

以前からこの二人がいわゆる幼馴染である事を知っていた明石だ

が、実際に神通と間宮が声を交えているのを見たのは実は今回が初めてだ。間宮と神通は観艦式前の横須賀で少しだけ会っていたらしく、その際に出来なかったお互いの近況報告と積もる話を声に変えている。

『私は去年の艦隊編成前まで改装に入ってたな。ま、戻り先がまた二水戦だから文句は無いんだが、おかげでしばらく会えなかったな。でも元気そうじゃないか。』

『いやあ、こっちも南洋と支那方面でのお仕事で忙しくてね。呉に戻るのも一年ぶりくらいなのよ。』

ベッドの上にてうつ伏せになったまま顔だけを神通のいる方に捻って間宮は笑みを送る。対して神通は椅子に浅く腰を掛け、いつもの様に胸の前で腕組みをしつつ長い脚をふてしく上下に折り重ねているが、その表情と声色の明るさは部屋に入ってきた時とは少しも違っていいない。その事に二人の仲が極めて良い事を明石は確認でき、仲良し同士で和やかな一時を過ごせる今という瞬間を心から喜ぶ。すると明石の感情によって間宮の背中へと伸ばされた手の動きも無意識に軽やかさを持ち始め、それは間宮の疲労除去の効果をもさらに引き立てていく。さらには間宮の声と表情が弾む事によって神通にもその効果は伝わって行き、3人が声を交える事に際して楽しさの色合いを含んだ空気をよく循環させてくれるのだった。

やがてお互いの話も出しくした間宮と神通は小さな笑い声を唇から漏らしつつも、どちらからという事も無く一息ついてお互いに良い意味で乱れていた息遣いを整える。そしてその間隙を間宮は逃さず、友人であってもあまり自分の分身へは足を運んでくれない神通が何故に今日はこうして来てくれたのか、その理由を問う事にした。ただ陽気な性格の持ち主の間宮はその言葉の中にちよつとした冗談を込め、生来が真面目な神通も今日は珍しく間宮の声に乗かって応じてみせる。

『んで、今日はどうしたのよ？ こないだ那珂^{なか}に渡しといたモナカがアンタの嫌いな”こし餡”^{あん}だったからって文句でもつけに来たの？』

『解かってたなら”つぶ餡”にしてくれ。ま、食い物の事であるのは当たってるな。頼みが有るんだよ、間宮。』

半笑い気味でそう言った神通は折り重ねていた左右の脚を組み変えると、少し間宮から視線を逸らして頬を右手の指先で軽く搔きながら続ける。

『ウチの戦隊で柔道の教練をやってるのは知ってるだろう？ ここ一週間ばかりはみっちり鍛えてたんだが・・・。』

火の出るような猛特訓となっていた二水戦の中での柔道教練は、明石は勿論だが間宮にあってもその話自体は仲間内から聞いていた。教育の激しさには定評のある神通が友人である事もあり、きつとそこに怒号と竹刀による教育的指導が備わっている事を見もせずに察していた間宮は、神通の声に驚く様子も無くさらに含んでいる事を聞き出そうとする。それに普段から自身が率いる戦隊の事に口出しされるのを極端に嫌う神通が、いくら親しい友人が二人もいるとは言えこうして二水戦の事で相談を持ちかけてくるのは非常に珍しい。だから明石もちょっとだけ間宮の背中に伸ばしている手の動きを抑え、自身の左側すぐ隣にいる神通に顔を向けて耳を傾けた。

『うん、知ってるよ。なんだい、勝った時のご褒美にあげるお菓子が欲しいの？』

『いや、そうじゃない。実は明日、教練を受けてる私の部下には休みをやるうと思ってるんだが、夜にはそいつらに何か上手いモンでも食わせてやりたいんだ。いつもの缶詰のフルコースじゃなくて、

何か寒い今の時期に合わせた暖かい食い物が良いんだが・・・。』

『うゝゝん・・・、神通のトコの戦隊って駆逐艦の子達だけで10人近くいなかったっけ？ 全員の分が欲しい？』

『うむ。今は8駆が横須賀に帰ってるが、まあそれでも私を入れて8人もいるからな。なんとかならんか、間宮・・・？』

部下を気遣う心優しい上司像を見せる神通なのだが、どうにもそれを真正面から自分の持ち味として表現する事に抵抗を抱くらしい。彼女は言い終えた後も視線を間宮に顔に戻す事は無く、隣にいる明石とも合わせたくないのか壁があるだけの室内の一角へと視線を投じている。それは他人にお願いをするだけの態度として相応ではないのかもしれないが、間宮と明石は神通が視線を逸らしている間に笑みを合わせていた。親しい友人にお願いをするという簡単な事でさえ、神通にとっては自分らしくない一面を発揮せねばならない一瞬であり、普段から鬼教官っぷりを遺憾無く発揮している自分には似合わない物だと彼女は思っているのである。たった一言、『頼む。』とすらも言えない程の不器用さを持つのが神通という艦魂の性格であり、間宮と明石はそんな彼女の子供っぽい困った所を嘲りこそしないが可笑しく思えて笑ったのだった。

もちろん二人の心は不貞腐れるような横顔で椅子に腰を下ろしている神通に指を挿して大笑いするつもり等無く、お願いをされた当人でもある間宮は笑みを正面に向けて、先程まで今日の夕食の献立を練る為に目を通していた紙切れと料理の参考書に再び視線を戻す。神通が訪ねてくる少し前に間宮の献立構想をちよつとだけ耳にしていた明石も声を上げ、本当は心優しい神通のお願いをなんとか実現できないかと間宮の考察に参加し始めた。

『さあゝて、どうしたモンかなあ。』

『ねえねえ、マミヤーさん。さっき言ってた煮物って暖かい食べ物になるんじゃないですか？』

『ふう〜ん、鍋料理かあ。うん、悪くはないね。材料はつと……。』

明石の提案が神通のお願いした料理の条件を満たしていた事もある。間宮は鍋料理をキーワードにし、紙切れにメモした自身の分身の中に倉庫の中身の品々に検索をかけていく。友人達の声に神通もようやく顔を彼女達の方角に向け、部下達への美味しいお料理がなんとか調達できそうな可能性に胸の内をほんの少し明るくさせた。

そして神通のお願いであるお料理の詳細を詰めていた間宮は、手にしていた書類に書かれていない品目を思い出す事によって、まず材料の面での一応の目処をつけてみせる。

少し前の観艦式の準備で横須賀に集結していた際、間宮は同じ特務艦艇に分類されるとある運送艦の艦魂から挨拶を受けると同時に、手土産として塩漬けにされた鮭を一匹まるまる譲り受けていたのだ。そのままでは塩の塊を噛むような味でとても食べれた物ではないのだが、お鍋にぶち込んで煮るのであれば味は汁で薄くなるのでそんなに塩味が際立つ事はない。おまけに強い塩味がこびり付いているのだから、味噌や醤油といった調味料を使用する事無く汁の味も調えられる。できるだけ乗組んでいる人間達にその所業を知られたくない艦魂の間宮にとって、調味料と倉庫の在庫数に響かないその鮭は非常に都合が良かった。

『おお、ナイスだな。なんてったつけ、あの子。・・・あ、宗谷^{そごうや}だ。宗谷に感謝だなあ。』

間宮はついつい嬉しくなって鮭を持って挨拶に来てくれた者への感謝の言葉を並べ、明石と神通は全く意図していなかった共通の知人の名がここで出てきた事に驚いた。すぐさま二人は宗谷と自分達との間柄の事を間宮に教えてやり、間宮も含めた3人は新たに共通の知人の輪が広がった事をそれぞれが祝って喜んだ。

その後も10人分近い量を作る事から大きな鍋の調達をどうするかという懸案がでも、友人の為に協力する3人の考察の流れは懸案という障害で堰き止められる事などない。

間宮の分身では軍属の職人さん達がほとんど艦を離れているのに併せて、調理器具も清掃の上で取り外されたり修理に出されたりして艦内にある物が少なくなっており、不幸にも使用できそうな設備の全てからはお鍋に当たる部分が取り外されている状態だった。一人分くらいのお料理なら訳も無いのだが、神通を入れて大人数となってしまう二水戦へのお料理は蒸気釜や電熱釜のような大きな設備の稼動が不可欠である。そこでどうしようかと間宮は頭を捻るが、その横から意外な事に明石が解決策を示してみせる。

『お鍋ならあるよ、マミヤーさん！ 私の艦の鋳物工場で、扶桑さんとか日向さん達に使う為のお鍋を作ってたんですよ！ 納品は確か艦隊編成直前の来月ですから、一個くらいなら持ってこれると思います！』

これは全くの偶然で、思いも寄らぬ所で友人達の企図する所に貢献できそうな自分の分身の事情を明石は嬉しく思ってて声を張り上げて二人に話す。

幸いにも工作艦である明石の分身では横浜から呉まで来る途中、艦内工作部にては呉工廠で改装工事中である扶桑型戦艦一番艦の扶桑艦、今は練習艦となっているも今度の艦隊編成では艦隊復帰が決まっまっている伊勢型戦艦二番艦の日向艦、そしてそれ以外にも陽炎や雪風の妹にして今度の艦隊編成で晴れて艦隊に編入されるたくさんのの駆逐艦達で使用されるお鍋を作っていた。特に扶桑艦と日向艦は乗組員が1千名以上もある大艦であるから製造するお鍋の数も1個や2個の話ではなく、明石の分身の中にある倉庫の中では納品待ちのお鍋がそこその数で眠っていたのである。有事は前線基地に進出しての修理作業に就くのと同時に、平時は各海軍工廠の作業量負

担を軽くする事を目的に運用されるという明石艦の境遇が、思わぬ形で友人達への貢献に至ったのだった。

ここまで来ると神通の企図した部下達へのお料理はついに現実味を帯び、間宮が放つ決定の一言で神通はやっと明確な笑みを浮べる。

『よし、なら鮭を使った鍋料理でいこう。この参考書にも書いてある石狩鍋ってやつね。これで良いかい、神通？』

『ああ。有難うな、間宮。恩に着る。』

『あははは。任しときなさいよ、神通。部下の子達にあんたの顔が立つように、とびきり美味しい鍋にしたげるよ。』

『やったあ！ いしかりなべく！』

角ばった瞳を流線で構成させた神通のお礼に、幼馴染の間宮が返してくれる頼もしい一言。帝国海軍艦魂社会一の料理人である彼女の腕前なら、その一言に込められる力強さの色合いは生半可な物ではない。故に神通はまずは部下達が舌を唸らせて笑みを溢す機会を保障できると確信し、前日にかつての相方である鈴谷艦艦長すずやの木村より言われた事へのある程度の道筋をつけた事を声には変えずに喜んだ。なんとか今度の大会で部下達に良い想いをさせてやりたいと願う、神通なりの苦勞的一幕であった。

ただここで神通はさつきから右横で両手を挙げてはしゃいでいる明石の言動に違和感を覚え、無邪気な笑みで声を弾ませる彼女に素朴な疑問を投げてみる事にする。それはこれまで3人で頭を捻ったお料理の調達という懸案が、神通が率いる二水戦という一つの部隊にて企図されていた物であり、その上で明石はその二水戦においては全くの部外者である事に理由があった。

『おい、明石。』

『うん？ なあに！？』

『お前、もしかして私達が間宮の料理を食べる時、一緒に食べようと思ってるか・・・？』

『もちろん！ みんなで食べれば美味しいよね！』

『・・・・・・・・・・』

どうやら神通が言わんとしている事をまるで明石は考えの中に巡らせていないらしい。手を叩いて美味しい一時が来る事を祝っている明石は神通が口を閉ざしている間も間宮の手元に顔を近づけて、間宮が左手に持つ参考書の1ページに描かれている”石狩鍋”の項目を見て上機嫌となっている。もちろん嬉しい偶然として明石が自分の分身の中にあるお鍋を提供してくれ、そのおかげで今回の二水戦で鍋料理を食する機会が成り立っている事は神通だって百も承知しているのだが、それを差し引いても神通は敢えて明日の夕食の時には明石をその場に伴わせない事にすると決めていた。なぜならこの明石という友人は細身の長身というその身体つきに反して口に物を運ぶ際、その量が人並み外れたとてつもない数量になってしまうからで、神通はその事も伴わせて明石に否の回答を示す。当然、明石にとって神通の放つ言葉は晴天の霹靂だった事は言うまでも無い。

『明石、すまんが今回は例の柔道の大会に向けた猿や犬達の壮行の意味を含んでいるから、私達二水戦だけでのメシにしたい。それにお前が来るとみんなが食べる前に鍋の半分以上が無くなる。鍋の事は有難いと思ってるし恩も絶対忘れんから、今回は遠慮してくれ。』
『ええええーっ・・・・・・・・！！！！』

無邪気な笑みは一瞬にして凍り、口を大きく開けて全身の動きが固まる明石。きつと美味しいんだろうなと間宮の鍋料理に想いを馳せていたのも束の間、神通より帰って来た「自分の参加はならん」の一言で大きく見開いた瞳を始めとして思考までも動きがピタッと止まってしまう。

一方、神通は明石が凍り付いてしまったこの瞬間を逃すまいと間宮に向かって再度のお礼を口にしながら立ち上がり、そそくさと部屋を後にする事にした。

『世話をかけるな、間宮。今日の夜には段取りの打ち合わせもしておきたいんだが、時間は開けれそうか？』

『お任せっと。』

そう言うの間宮はそれまでベッドの上でうつ伏せになっていた身体を起し、床に揃えていた靴を左右の足に履かせながら自分の胸に親指を突立てて頼もしい声を返す。その言動には幼馴染である神通に対する、間宮の友情がよく示されていた。

『うん、いいよ。明日、準備とかしたりする時間と明石んトコからお鍋を持ってくる時の事だけだし、そんなに難しい事は無いよ。場所も私の艦内で行けると思うから心配なんかないさ。ご飯にお酒、漬物も用意したげるよ。』

『ふん……。すまん、間宮。』

とても器量が良くて帝国海軍ではかなりの人気者である間宮は、この笑顔と料理人っぷりで神通とほぼ同じ時間だけ励んできた人物。小さな雑役船舶から戦艦に至るまでの艦魂達が一様に慕うその人柄は、彼女と同じ時間を嫌われ者として過ごしてきた神通にとって羨ましいの一言に尽きる。しかしそんな間宮がお互いに幼馴染だと認識して親交を結んだ10余年前より、自身に対して他の連中と同じ様に忌み嫌う態度をもって接してこない事を久方ぶりの再会で確認し、神通は終始笑みを伴ったまま間宮との一時を過ごせた。それは「鬼の戦隊長」との異名を自他共に認めて艦隊勤務に励んできた神通の生活の中で、とても稀有な嬉しい時間だった。

『じゃ、後でな。』

『うん。そろそろ私も例の新人さんの夕ご飯つくるかな。』

ベッドから立ち上がった間宮は主計科の乗組員が調理をする際に着用するのと同じ白い前垂をベッドの下に入れてあった籠から取り出し、慣れた手つきで身に纏いながら神通と供に部屋を出ようとしている。だが神通のように食べ物の事で目の色を変える明石の人柄が間宮にはまだ付き合いが浅い事から察し切れておらず、軽い流れで声を掛けてしまうその物言いも手伝って彼女は神通が止める前に明石の肩に手を乗せて口を開く。

『明石い、身体も随分軽くなったよお。有難うね。』

『あっ……。』

間宮の行動を制止しようとしていた神通が放てたのはその一言だけで、間宮は明石の肩に手を乗せたまま突如として神通が声を上げた事を疑問に思っただけ視線を彼女の顔に送る。すると間宮の瞳に移る神通は額に手を当てて大きく溜め息をしており、幼馴染である間宮であっても友人の様子理由がよく解からなかった。

しかし間宮が神通のそんな態度の真相を知るのに時間は掛からない。

それまで見も心も文字通り固まっていた明石は、肩から伝わってくる間宮の手の温もりと柔らかな衝撃、そして耳元で木霊した彼女の声で我へと帰る。刹那、明石は釣り上がった目でギラリと背後を睨むと、そこにいた標的を捉えて跳びかかるようにしながら神通の袖に手を伸ばした。

『ふんがーっ！』

こうなると予想していた神通は明石が跳びかかってきても微動だ

にしない。右手を額に添えて大きく溜め息をしつつ、身体を揺さぶって理不尽を訴える明石に応じるだけだ。

『なんつで私が食べれないの！？ お鍋！！ いしかりなべーっ！』

『揺らすな……。まったく……。』

『タダ働きなんかまっぴらだあ！ 私も食べるう！』

『はああ……。』

食べ物に関しては一桁違う明石の猛攻は熾烈を極め、神通は身体を揺らされながら空返事にも近い言葉を返す。そもようやく目処がついた二水戦での明日の晩餐には明石からお鍋の提供を受けねばならない事は先刻話題に挙げたばかりであるから、神通にとっては手荒く彼女を振り払ってその訴えを正面から却下する事などできない。ヘソを曲げられて協力を拒まれたらせつかく計画できた木村からの指摘、すなわち部下達に羽を伸ばさせてやり大会への心の姿勢を改める機会をご破算としてしまう事になる。明石の訴えを断るに断れぬ、止むに止まれぬ神通の事情なのであった。

その事からどうすればこのうるさいお人を静めてやれるかと考え巡らせ始める神通の耳には、ちっとも声色に込めた色合いと音階を弱らせていない明石の絶叫が木霊する。

『むきいいいい！ いしかりなべ！』

困った事に、先日鈴谷といった後輩や部下達の様に神通の事を怖がる所が明石には全く無い。心をよく通わせる事の出来る友人の証明もあり、神通としてその事はよく理解しているのだが、食べ物の事になってしまうと友人の事情をも察してくれない程に憤る明石を宥めるのはとても大変である。

結局その後、なんとか鍋料理を明石と間宮の晩御飯の分として大目に作り、二水戦の者達とは別室で食する事で神通は明石の了解を取り付ける事に成功。やっとの事でブチ切れ状態の明石を宥める。

神通が二水戦の事で第三者に相談しに来る事に始まった珍しい事ばかりのこの日、憤る友人を宥めるという構図が神通と明石の間では普段とは逆の形で展開される事になった。なんとも珍しい日だった。

第七八話 「最強を目指せ!／其の四」 (後書き)

◆作中用語捕捉◆

本話にて馬鈴薯なる言葉が出て参りましたがこれは現代で言うところのジャガイモの旧名でして、帝国海軍に限らず日本では戦後すぐくらいまではジャガイモの事を馬鈴薯と呼んでおりました。故に今後、作中で馬鈴薯の言葉が出て参りましたら、読者皆様にあつてはジャガイモを想像して頂ける様、ご理解とご了承の程をよろしくお願い致します。

第七九話 「最強を目指せ！／其の五」

気温が低いながらも気持ちの良い秋晴れの天気の中、間宮艦^{まみや}から戻った神通^{しんつう}は自身の分身の甲板上に白い光を伴って現れる。

約一名のうるさい奴を宥めるのに真昼間から一苦労してしまった彼女はちよっとお疲れで、清々しいお空や瀬戸内の潮風に口元を緩ませる事はない。足取りからも若干力が抜けており、溜め息混じりで足元に視線を落としながら艦首甲板に向かう。それはもちろん、彼女が教練をつけてやっている部下達が今日もそこにいるからで、間宮艦へと赴いている間は自主練習の名目を与えて励ませていた。

ただ、部下達がちゃんと真面目に練習に取り組んでいるかどうかは神通としても大いに疑問である。なんといってもその部下とは犬猿の仲である霞^{かすみ}と雪風^{ゆきかぜ}だからで、戦隊内の武技教練で行う柔道の試合では必ずなんでも有りの乱闘になってしまう程である。この二人はとても優秀な部下ではあるのだが、大きな欠点としてお互いに一致団結する事が出来ない。未だにその根本が上司である神通にもよく解かっていないのだが、とにかく霞と雪風は顔を合わせる事すらも内心は嫌だと思っているらしい。仲良しになれとまでは神通だっ
て言わないものの、せめて同じ戦隊に所属する仲間として上手くやってくれない物かと願うのがここ最近の彼女の日課であった。

しかし残念ながら今日もまた彼女のささやかな上司としてのお願いは、足を進める先である艦首甲板より響いた二人の怒号で粉微塵に碎かれる。

『テメエ、いまアタイの足踏んだだろうが！ 卑怯だぞ！』

『アンタが勝手に転んだだけでしょ！ さっすが犬！ 負け犬の遠吠えは上手だよな！』

『なにを、猿めえ！！！！』

もはや日常茶飯事のやりとりを耳に入れて大きく溜め息をしながら足元より視界を上げる神通。やはりそこには既に取っ組み合いの大喧嘩をしている霞と雪風の姿があり、少しも自分の願いを察しようとしていない二人に彼女は小さく舌打ちをする。一応はこうはならないようにと、間宮艦へと赴く前に従兵として仕えるもう一人の部下、あられ霞をこの場に派遣していたのだが、大人しい霞を二人の間に置いた所で残念ながら何の効果もない。彼女なりになんとかしようと頑張っているのは、霞と雪風の間割って入って仲裁を試みている霞の姿に認めることが出来るが、すっかり頭に血が昇った二人にかかつては身体も小さく華奢な彼女では何の障害にもならない。必死に両脇の仲間に戒めの言葉を放ちつつ、霞と雪風がそれぞれに天敵へと伸ばす手で両頬を圧迫されて酷い顔になっているのが関の山であつた。

『でえい！ この猿が！』

『負け犬め！ おりゃあ！』

『け、喧嘩はあかんや・・・！ 喧嘩はあかんやつ・・・！』

姉と友人の双方によってもみくちゃにされている霞の無力さは声のトーンにも現れており、野性味も混じった怒号の中に混じる霞の鼻から息が抜けたような声はとても頼りない。例えば霞や雪風と同じ淡い真珠色の柔道着を身に着けていても、心優しく市松人形のような容姿の霞には腕力で相手をなんとかする事なども到底不可能だった。

神通はそんな光景を吊り上がる瞳に映して大股で近寄っていく。なんとか争いを収束させようと一生懸命な霞は除外するにしても、目の前の天敵をやっつける事を望む今の霞と雪風にはいつもの事とは言え迫る上司の影が見えていない。彼女達が気付くのは決まって後の祭りとなつてからの事で、今日も今日とて突如としてその場に現れたご立腹の上司の怒号とげんこつによって終止符を打たされる

事になる。

『こんの馬鹿がああ！！』

二水戦名物の大乱闘もこの人のげんこつに抗う事は不可能である。まして生来が気性の荒いこの神通のご立腹は喧嘩の当事者である霞と雪風どころかその場を供にしている霞の脳天をも標的にしてしまい、なんとか止めようとしていた不幸な彼女もまたげんこつによって涙を飲む事になった。

こんな勢いのままその日の柔道の教練は日が暮れるまで続けられ、1645の『別科止め。甲板諸掃除。』の号令が神通艦全体に木霊するに至ってやっと終了となる。本日も良い様に神通による竹刀でお尻を叩かれて特訓を耐え抜いた霞と雪風は、協力者でもある霞と供に教練に使用したマット等の用具納めを行い始める。

ただその瞬間も神通は艦側に立って遠くの波間の見るフリをしつつ部下達の様子をそれとなく視界の端に認め、かつての相方である木村より言われた事を脳裏に巡らせながら各々の表情を窺っていた。

二人の根本にあるのは気合と既成事実を基にした根性だけで、大会に挑む事への重要性を忘れている。

それが木村の指摘した霞と雪風の状態で、二人の直属の上司に当たる自身の立場、ましてや自分とは違う人間の彼に言われたのは正直な所では神通としては腹が立つ事でもある。彼女達と付き合ってきた時間も、交えてきた声も、絶対に木村よりは自分の方が多いと考えている神通は、そんな自分をさしおいて直属の部下達の事を寸評されるのが心底嫌いであった。その矛先が例えば普段から仲良くしている明石の様な友人であつても除外されないのは周知の事である。^{あかし}ただちよつとその憤りを飲み込み、木村の言葉を脳裏で唱えなが

ら眺めてみた部下達の表情はどこか足元に視線を落とす機会が多く、なおかつやっと激烈な一日が終わった事に安堵する力の抜けた顔。もちろんそれは霞と雪風が今日の特訓において手抜きをしていた事を示している訳ではない。教えた側の神通としてその事を重々承知しているが、大事な何かを忘れているという木村の言葉がどうにも部下達の安堵の表情に符合しているように彼女には思える。

気付いてやれなかったか・・・？

声には変えずに胸の中で放った神通の声は、自分の不甲斐なさを探して迷いながらも容赦無く責める代物。逃れるようにして神通は視線を瀬戸内の海原へと戻し、西の空より包んでくる朱色の陽の光に瞳を細めながらふつつつと湧き上がる自己嫌悪の念と戦う。緩く囁んだ唇が、彼女の感情を如実に物語っていた。

『戦隊長。武技用具納め、終わりました。』

『む・・・。』

孤独な戦いを人知れず繰り広げていた神通の耳に、背後に集まって横一列に並んだ部下達の声が響く。すっかり汗も引いて潮風の冷たさを一際意識できる状態の霞と雪風に、今日は特訓の手伝いを買って出てくれた心優しい霞。皆それぞれが自分の命令を待っている姿をふと振り返った事で神通は認め、彼女達、特に霞と雪風に先程まで巡らせていた考察をついつい忘れて安堵の気持ちを抱く。まだまだ未熟な身の上である自分に対しても後をついて来てくれる3人の姿は、常に戒めや指摘を欠かさない神通にそれを忘れさせるだけの無情の喜びを与えてくれた。

しかしすぐに神通は無意識に緩みがかった口元を右手の手の平で覆い、表情をいつもの自分の物に保とうとする。「上司とは怖いぐらいが調度良い。」という理想を強く意識の中に唱え、釣り上

がった瞳の端々をキツと鋭利な角度にしているものの様に部下達に無言のまま緊張感を与えた。

もちろん受け取る側の霞や雪風、霰は上司の怖さを身を持って知っている為、神通が向けてきた視線に身体を硬直させて直立不動の体勢を取る。それは普段から気をつけている、上司の命令を授かる際の姿勢だ。やがて神通も口元から覆っていた右手を下ろし、彼女達に正対して腕組みを伴った仁王立ちになり口を開く。

『よし、ご苦勞。猿も犬もだいぶ様になって来たな。二人とも自分の長所と短所を解かって来たと思うが、どんな規模でも戦という物の基礎の部分はまず自分の身の程を知る事だ。相手より劣っている選択肢は通用しないし、勝っている選択肢は勝ちを得る為に重要な武器になってくる。その為には敵を知り、かつ己をしっかりと知る事だ。どっちが欠けてもいかん。』

粗野で荒くれた気性の持ち主である上司から放たれた今日の総括は、その人柄に反して精神的な物に頼らない極めて理論的な言葉。だがそれ故に上司の言葉の中に疑問を抱く事は霞を始めとした部下達には皆無で、3人ともごもつともな事だとその理解を深い物にする。

『知る為には姿勢が重要だ。常に相手から一步距離を取り、先入観に囚われずじっくり観察し、認める事のできた物事に対して必ず頭を使う事。考える事無く物事が成就するようなら誰も苦勞はせん。』

そこまで言う神通は組んでいた腕を解き、右手の先で人差指を立てると自分のこめかみの辺りに添えて軽く叩いてみせる。

『いつも言ってるが、戦はここでやるモンだという事を忘れるんじゃないぞ。』

『『『はい！』』』

私立神通学校の授業の終わりは必ずこの言葉で締めくくられるのが常で、一年近くも学んできた霞や雪風、霰は大きな声で返事を返し、今日も無事に、そして有意義に教練の時間を得られた事を確信する。3人の胸には今日という一日の充実感とやり遂げた達成感が満ち満ちており、誰という事も無く返事を放った後に笑みを作り始めた。帝国海軍の艦魂社会でも特に厳しい事で知られる二水戦の日々であるが、押し付けでは無く納得させた形で教えを授けるという教育姿勢を心がけている神通の成せる技の一つが、彼女達のこの笑みである。

やがて西陽の朱色を湛えた空が紫に変わり、甲板の上を流れていく潮風の肌寒さも段々と増した認めた神通は長居も無用と彼女達に解散を命じようと口を開きかけるが、自分なりに懸命に頭を捻りつつ仲間にも声を掛けて了解を取り付けた明日の予定を思い出し、再び腕を胸の前で組むと部下達に明日の予定を伝える。だが受け取る側の霞や雪風、霰は上司の口から出てきた言葉に一様に驚き、僅かに視線を左右に流してお互いに見合わせるのだった。

『おっと、言い忘れてた。明日は一日まるっと休みにする事にした。犬も猿も真面目にやってるのは解かってるが、下手に教練を積んで怪我でもしたら大会に響く。だから明日はのんびり休んで疲れを取れ。夕飯も間宮に頼んで美味しいモンを作ってもらう事にしたから、夕方になったら私の所に来い。』

『え・・・？ は、はあ・・・。』

鬼の上司の意外な指示には唯一雪風だけが呆けたような声で返事をするのみで、霞と霰はお互いに顔を見合わせて首を捻ったりして無言の意思相通を行っている。3人とも大いに昼間に神通の鬼っぷりを体感する事ができていたので、突然に休みを取れと言われたの

は予想だにしていなかった。

また、神通は先程に続けてさらに指示の声を放つ。

『霰。明日の夕飯は二水戦の全員で食うから、今から18駆と16駆の全員の所に行つて連絡してこい。場所は間宮の所の大部屋だ。解かったな。』

『は、はい。』

熾烈極まる特訓の日々の中、神通が突如として部下に当たる自分の身を労わりだした事にどうにも疑問を募らせてしまう霰だが、指示という形で声を掛けられた以上はその場でボヤボヤしている事など出来ない。返事を放つやすぐに霰はその身を白く淡い光で包み消し、呉軍港のあちこちの栈橋で繋留されている二水戦の仲間達の元へと向かつて行く。その場に未だ留まる霞と雪風も中々上司の胸の内の把握できていないのだが、神通はそれに対して理解を求める為の方便の言葉を掛けてはやらずにいつもの鋭い眼光で波間を眺めるのみだ。

もつともその理由は難しい物ではない。

明日の休みを企図するそもそものきっかけになったのが戦隊部外者である木村の一言だったという事実を、普段からよそ者の口出しを事その他嫌っている自分が入れた事は、彼女にとっては口が裂けても声には出せない話だった。先日もがみの木村の言葉を耳に入れた事は既にその日の内に同席していた最上もがみと鈴谷すすやに他言無用をお願いしており、先程部下達に伝えたばかりの夕食の件で準備を担当してくれる間宮や明石にも彼の名前は一切出していない。そしてそれは彼女が木村というかつての相方を嫌っている事とは実の所はほとんど関係が無く、神通はただ単に戦隊部外者の意見を聞いた自分を部下達に知られたくなかっただけの事。つまり所、部下達からも抱かれる鬼の戦隊長の対面が成り立たないのだ。神通なりの理想の上司像であり、同時にそんな理想像を頑なに守りつつすがらなければ部下

を始めとした他人と接する事が出来ない彼女の弱さでもある。

霞と雪風を前にする神通は彼女達と自分との間に流れるしばしの沈黙に不思議とそんな自分の胸の内を悟られるような気がし、ふと視線を部下達にまた戻すと彼女達が自分への考察を巡らせる事ができないように声をかける。

『猿、犬。何か欲しいモンはあるか？ 羊羹やモナカみたいなお菓子くらいなら間宮が用意してくれると言ってる。』

『ほ、欲しいもの、ですか・・・？』

『え、えっと、ソッスねえ……。な、何かあるかなあ……。』

またまた上司の口から出てきた意外な言葉は、明日の夕飯時に望む物があるかという質問。神通のちよつと変わった言動に軽い混乱状態にある霞と雪風にとっては即答する事など出来ず、二人して足元や空に視線を向けて歯切れの悪い声を返す。ただ怖い上司の表情は別に笑みを伴っている訳ではないし、釣り上がったその瞳はやはりいつもと同じ角張った鋭角で構成されている事から、霞と雪風は呻き声にも似た声を放って上司の質問に対する回答を考え始め、神通の企図した通りに彼女達は上司の胸の内に関する考察を完全に脳裏から除外したのであった。

当の神通も眼前の二人が頭を捻っている様子にそれ認めて胸を撫で下ろす。安堵の念は軽い溜め息として表れ、同時に少し意地悪な物言いを彼女にさせる原動力となる。見ればもう既に空には星がチラホラと輝き始めており、甲板上から艦内に戻っていく乗組員と同じく太陽もまた今日のお仕事を終えて既に水平線の向こうへと去っていた。朱色の陽の光の余韻は遠く西の空の一角にあるのみで、甲板の上で立ち話をする残り時間はもう殆どない事を示している。その事から神通は部下達に回答を急ぐよう促したのだが、完全に安堵の念に駆られていた神通にはそんな部下の一人より意図せぬ返事となされた。

『そら、早くせんか。このままじゃ今日の晩メシの調達ができんぞ。』

『は、はい……。え〜と……。』

『そ、そうだ戦隊長……。！ 何でも良いんすよね？』

『ん？』

何やらその大きな釣り目を輝かせて口を開いた雪風。さっきまで困ったような表情で視線を右往左往させていたのが嘘だったかの様に白い歯を見せてニヤニヤと笑っているが、今度は逆に神通が彼女の胸の内が解からずに困惑してしまう。まして二水戦きつての大問題児である雪風が望む物の限度を訪ねてくるのであるから、すぐさま神通は声を返して先程いった言葉の外郭を示してやる。

『私に出来る事ならな。それと艦隊司令部の人間達が食べるような洋食のフルコースなんてのも無理だぞ、犬。』

『いえ、そんなじゃないッスよ。しかも戦隊長の胸三寸で決まるッス。』

『ほう……。』

僅かに覗こうとする心の動揺を抑え付けながら神通は平然とした顔で雪風に応じたが、次の瞬間、部下から放たれた意図せぬお願いに神通は声を荒げた。

『戦隊長は確か、三戦隊の金剛少将こんごうの下で修行してたんすよね。アタイ、その時の事が聞きたいッス！』

『な、なに……。！？ 黙れ、馬鹿者！ ダメだ、そんな話は！』

雪風の口から出てきた金剛とは第一艦隊所属の戦艦である金剛艦の艦魂で、雪風や霞が教えを請う上司にとってのお師匠様。先月に

行われた観艦式において二人はその関係を初めて知り、しかも雪風は金剛に捕獲されて散々に尻を叩かれて可愛がられてしまった経験を持つ。その時は踏んだり蹴ったりの想いで泣く一步手前だった雪風なのだが、それと同時に彼女は金剛の言葉として、上司にあたる神通がかつては自分とよく似た顔つきをしていたという事実を耳にしていた。雪風の隣にいる霞もそれは同じで、金剛と直接声を交えた事は無いにしても神通の過去を少しでも垣間見る事の出来た稀有な出来事である。ついさっき望む物があるなら言えと神通より言われた事もあり、声を荒げだしている上司に怯えつつ彼女もまた望む物として神通の過去のお話を所望する。

『せ、戦隊長。わ、私もそれ聞きたいです。え、えへへ……。』
『だ……。黙れ、猿！　ダメだと言ってるだろうが！』

自分から望む物を尋ねておいて、いざ部下達が望む物を口にしたら怒って却下をくれる神通。なんとも理不尽かつ自分勝手なお話であるが、神通としてその事は十二分に承知している。顔を真っ赤にしてご立腹の表情を瞬時に浮かべた彼女の様子こそその証明で、いつもなら言い終えた後に二人の脳天に向かっていくげんこつも今はなりを潜めている。私立神通学校の日常では身勝手な振る舞いを犯した者を標的とするのが神通のげんこつなのだから、これまでの部下達とのやりとりを鑑みると責められるのは神通の方であるのは一目瞭然だ。

だがそれでも神通が頑なに二人の願いを却下するのには訳がある。霞はその事を少しだけ知っているのだが、神通の過去を示す経歴という物の中では、「美保ヶ関事件^{みほがせき}」という名の余りにも大き過ぎる惨事がかなりの幅を占めている。神通という艦魂の人柄、能力、信条、想いの全てがそこに起因しており、霞や雪風らに見せる彼女の教育姿勢ですら例外ではない。話題に挙がった金剛という師匠との出会いだってその惨事が事の始まりでもあったし、しかも具合の悪

い事に、多くの乗組員、そして同じ艦魂の仲間をその手で殺してしまった「美保ヶ関事件」の当事者、否、加害者であるのがこの神通なのである。大事な部下達に対する教育の一環で話す事は希にありたりはするが、それはこの惨事から学ぶ事の出来る知識を可愛い部下達に授ける為であり、楽しい晩餐会の一端で話題に出せるような物ではないのだ。

また、「部下から尊敬されなくなったら終わり。」、「上司とは怖いぐらいがちょうど良い。」といった師匠からの教えを金科玉条として励む神通に、まだまだ未熟で鼻っ柱の強かった事から帝国海軍艦魂社会において最も怖い者として知られるお師匠様に毎日の様にケチヨンケチヨンにされていた、という自身の修行時代の思い出話を話す事は到底できない。霞と雪風の人柄を否定するつもりは微塵もないが、「鬼の戦隊長だって自分らと同じだ。」と見くびられてしまう事態は何としても避けねばならなかった。

ただそれらを踏まえても今の神通には部下達の申し出は都合が悪い。抑えつけ様と声を荒げて彼女達はすっかり上司の胸の内を推し量ろうという気が無くなっており、これまた神通自身が企図してそういう風にさせてしまったのである。やがて部下達より放たれた矛盾を指摘する当然の言葉は、神通の拒否の姿勢から明確さを段々と薄めさせて行く。反論できるだけの道理を不覚にも神通は持ち合わせていないのだから無理も無い。

『でも、戦隊長。私に出来る事ならって言ったじゃないスカあ。』
『む……』

『柔道とかも金剛少将から教えてもらったんですよね？ 戦隊長がどうやって覚えたのか、前から聞いてみたかったです。』
『むむう……。』

霞にも雪風にも上司を困らせるつもりなどは微塵もない。夕闇が

辺りを包み始めている中、お互いに大きな瞳を輝かせて迫ってくる二人にあるのは、純粹な神通という一人の艦魂に対する好奇心である。如何せん形勢が不利な上に霞の一言により、神通は何故にそもそもうして二人に矛盾を指摘される憂き目に会っているのかと考え、そのきっかけであるつい先日木村より受けた助言を思い出した。眼前にいる霞と雪風は元氣こそ今はあるが、厳しいここ最近の特訓を根性だけで過ごしている様だと彼は言う。もちろんそれは悪い事だとは木村は思っていなかったし、神通とて二人の頑張る姿を見ていた上では問題はないと思っていた。だが最近行っている柔道の教練は霞と雪風に修羅の道の如き厳しい日常を与えるのがそもその目的ではないし、それを願い出てきた際の二人の言葉も厳しい特訓を課してくれという物ではなかった。

『戦隊長！ 呉は何が何でも私達、二水戦の駆逐隊が相当するべきだと思っんです！』

『6駆は四水戦で、27駆は一水戦っス！ アタイら”花の二水戦”の駆逐隊は、帝国海軍の全駆逐隊中最強じゃなきゃダメッスよね！？』

『だから試合が行われるまでの間、私に柔道の教練をつけてください！』

『絶対に勝ちたいんす！ お願いします、戦隊長！』

記憶の中で木霊する霞と雪風の言葉。それは自分達が属する二水戦という隊の名誉の為に、二人が決意して懇願してくれた事を明確に物語っている。彼女達は別に仲間や姉妹の誰かから頼まれた訳でも、良い所を見せて上司に覚えを良くして貰おうと考えている訳でもない。自分がいる、姉妹がいる、仲間がいる、上司がいる、まさにみんなの居場所である二水戦の為、苦行も辞さずに更なる力が欲しいと願い出たのだ。その上で今、神通の眼前にいて好奇心を溢

れさせている霞と雪風はほんの少しだけ本来の航路から逸脱しかけているが、それは彼女達の若さと人並み外れた熱血な性格の副産物であり、別に意図した上でそうだったのではない。大事なここ最近の日々を重要と思うばかりに、言うなれば「艦首の向こうの目的地から足元の甲板に視線を逸らしている」だけなのだ。だから二人がそれぞれに考えている事は、お叱りの声を上げて否定できる様な変な代物ではない。むしろその姿勢を正してやるのは、二人に教えるを与える神通のお仕事である。

そしてそんな神通は大会へ抱く部下達の意気込みや姿勢を改めさせる為、わざわざ友人達に頭を下げて明日の晩餐会を催した。そこで美味しい物を食べさせてやるだけで事足りるかは神通にも解からないが、結局無駄に終わったとして大会当日に散々な結果を残してしまう部下を、神通は見たくは無いと素直に願う。二水戦の名に泥を塗るからではない。若い二人が彼女達なりに抱いた想いや意地が、大勢の者達によって見られている前で無残に打ち碎かれてしまう事になるからだ。

しばらくして神通は逃げるように逸らしていた視界を、大きく見開いた目を輝かせて上司の了解の言葉を待つ霞と雪風の顔にゆっくりと流し、その表情が涙としわで歪んでしまうのは望まない、許せないと自身の胸の奥に湧いた危機感にも似た気持ちを素直に認識する。刹那、神通の脳裏からは、二人から発せられた願いを断る気など毛頭なくなっていた。

『アタイも戦隊長がどうやってあんなに柔道やら銃剣術やら覚えたのか聞きたいッスよ。全部金剛少将から教わったんスか？』

『金剛少将って怖いので有名じゃないですか？ 先月の横須賀にいた時なんですけど、曳船や交通船の艦魂達^{ひと}ってみんな名前出しただけで震え上がってましたよ。金剛少将は今佐鎮ですけど、昔、横鎮だったからですか？ 戦隊長が修行してたのもその頃なんですか？』

？
』

考えを改めている上司の気など意に介さずに二人は揃って質問を投げる。しかし神通は二人に対して『黙れ！』とさっきの様に一喝する事はなく、わずかに口元を緩ませて苦笑にも似た歪んだ笑みを浮べる。もはやそれは誰から見ても神通の了解の意。続けざまに彼女の唇から漏れてくる言葉は歯切れが悪くともそれを明確な物とし、耳に届いた上司の言葉に雪風と霞はお互いにはしゃいで明日の休日に前向きな望みを募らせる。

『ふん……。解かった、解かった……。明日の夕飯の時に聞かせてやる。親方の下で勉強してた頃の事をな……。』

『マジっスか！？ やった！！』

『すごい楽しみです！ 戦隊長、忘れないでくださいね！』

大喜びの部下を前にしても神通の笑みは増す事は無い。その歪んだ具合は半分はついさっきまで改める前の自身の保身にも似た考えを嘲笑う物であり、もう半分は自分の様な嫌われ者にも関わらず上司と慕って後をついてきてくれる部下の有難さに感謝した物。正直な所、未熟っぷりが目立つ恥辱にまみれた過去の自分を曝け出さねばならない事に神通の心は後ずさりしようとするが、そんな彼女の心の背中を押すのは部下達の笑みを守らねばならないという一つの小さな願望。その為に身体を張れるのは自身しかないのだと神通は悟り、わーわーと声を上げて上司の昔話を聞く権利を勝ち取った事を祝う霞と雪風を、流線で構成されたその瞳に映すのだった。

翌日、ゆっくり昼まで寝た霞と雪風は勇んで晚餐の場である間宮艦の中甲板の一角にある大部屋へと集合。配膳や目玉である大鍋を烹水所から台車を用いて運んだり仲間全員でお手伝いに励む。やがて上司が姿を現して軽い挨拶と供に晚餐が始められると、霞と雪風は神通がお酒を口に運んだ頃合を見計らって上司の下積み時代のお話をせがむ。

『はあゝ・・・、やれやれ・・・。しょうがないな・・・。』

その言葉を皮切りにして語られるのは、今よりももう少し背が低くて肩幅も狭い代わりに、今よりもっとその鋭い日本刀の様な目が顔に比して大きかった頃の上司の昔話。現代において霞や雪風を含んだその場を供にしている少女達が学び舎とする「私立神通学校」ではなく、今から10年ほど前に繰り広げられたいわゆる「海軍砲術学校金剛艦分校」の日常だ。

『たわけ！』の一言に続いて鉄材をへこませる程の威力を持つげんこつを貰い、戦艦の艦魂である金剛が得意とする砲術のお勉強ではお尻にアザができるまで木刀で叩かれ、武技教練などでは疲労の末に倒れでもしたら顔を横から踏んづけられて罵声を浴びさせられるという毎日。神通の他にもこの人を師匠として仰いだ艦魂は何人かいたらしいが、余りの厳しさに今は上海に派遣されている朝日^{あさひ}や出雲^{いづず}、そして当時から横須賀在泊であった富士^{ふじ}に泣き寝入りする”生徒”もでたという有様で、その場にいた少女達はただただ啞然として開いた口が塞がらない。一年余りも神通と付き合ってきた彼女達は上司の激しい気性の事はよく知っているが、上には上がいるという言葉をこの時初めて思い知る。「鬼の戦隊長」との異名をとる神通をも上回る峻烈な性格の持ち主。それが、彼女達が観艦式前の宴にて給仕として励んだ際に見た帝国海軍金剛型戦艦一番艦の艦魂、金剛なのであった。

鼻っ柱の強い雪風ですらも思わず生唾を飲み込み、気の弱い霞が震える自分の肩を両手で抑える中、手酌で碗に酒を注いでいる神通が放った言葉は恐怖の鬼教官の怖さを如実に示す。

『親方は、・・・とにかく怒ったら何をするか解からん艦魂ひとでなあ。あの頃の親方は横須賀で改装に入ってたから艦隊に属してなかった分まだマシだったんだろうが、おかげで横須賀巡航の言葉に艦隊勤務の連中はみんなビびってたモンだ。でも比叡さんとかの姉妹とは仲が良かったから、艦隊から外れてても艦隊訓練の成績なんかは逐一耳に入れてたらしい。演習が終わって横須賀に入港した瞬間、いきなり親方が現れてぶん殴られた事なんか何回もあったモンだ。』

普段は真っ直ぐに伸ばした神通の背筋が、お酒が回ったのか真っ直ぐに維持するのが難しくなる。背にしていた壁に寄りかかって彼女は軽く首を捻って見せるが、その際に視界に映ったのは戦慄の表情で凍り付いている部下達の姿。怖さという点では彼女達にとっては代名詞的な存在である筈の上司が語るのだから、話題に上がる金剛という上官が持つおっかなさとその現実味、迫力は生半可な物ではない。当の神通だって当時はベソを掻き、自身の分身にある自室に戻って青く腫れた頬を擦りながら独り泣いたりもして励んでいたくらいだ。

もつともこれでは柔道の大会への気持ちの切り替えも何もあった物ではないと神通は察し、そんな中で自身がどうやって成長してきたのかを語り出す。そして大事な事として、そんな鬼教官であった金剛という艦魂だけが美保ヶ関事件の名と共に仲間殺しと陰口を叩かれて蔑まれていた自分の面倒を見てくれた人物である事をしっかりと教え、部下達がこれから金剛に接するに当たって偏見などを持たないように企図した。

それは、怖い怖い「海軍砲術学校金剛艦分校」の日常においても

ちゃんと示されている事だった。神通が部下を教育するに当たってはこのような事はしないのだが、金剛は神通と師弟関係を結んでからという物、同じ泊地や軍港などで居場所を共にする都度、毎度必ず神通を自分の傍らに置き、課業の終始や神通の私的な時間などの一切を考慮せずに風呂や自室、何気ない甲板での散歩、時には仲間内での打ち合わせの場にすらも同行させたのだという。なまじ帝国海軍の戦闘艦艇の中でも最後の異国生まれの艦艇である金剛は金髪碧眼にして奥まった目と高い鼻を持つ完全な西洋人の顔立ちであるから、まだまだ幼い東洋人の顔立ちを持つ神通を身の回りの世話役に行っているその光景はまさに貴族の婦人と雑用をこなす下々の者。奴隷と言っても差し支えないくらいで、入浴の際には背中を流させ、洗濯物は全部押し付けて落ち難い油污れであっても真っ白にする事を命じて朝まで甲板で洗濯をやらせ、比叡ひえいや榛名はるなといった姉妹との会話や戦隊同士の打ち合わせ等では椅子に腰掛けて悠々と話をするその足元で靴磨きまでさせていた。

まるで家畜同然のその扱いは先輩方から非難的になるも、金剛は頑として聞く耳を持たずに神通をコキ使う日々を続ける。神通もまた師匠の恐怖に怯え、絶対服従の勢いで『はい。』の一言のみで師匠との一日の会話を終える事も少なくなかった。

しかしそんなある日、横須賀軍港在泊の折に金剛がいつもの如く神通に靴磨きをさせて姉妹同士でのティータイムに浸っている際、金剛とは同年代の者である河内型戦艦二番艦の艦魂、摂津せつがその場に来訪し、普段から同期という事で遠慮しない会話ができる仲であった事から金剛による神通の処遇に異議を唱えてきた事があった。ただ英国生まれの割りに無神論者である金剛に対し、摂津は日本生まれで信心深い性格を持つ為に二人の仲は極めて悪く、仏教の因果論を持ち出して神通と美保ヶ関事件がある種の罪として断じた摂津の言葉に、その場にいた神通は忘れかけていた記憶に残る惨事を思い出して震え出してしまふ。

だがそんな若き日の神通の様子こそが、触れてはならぬ金剛の逆げき

鱗に触れた。

『ワレエ！！ もっぺん言うてみいや、オラアア！！！！』

同席していた比叡や榛名、霧島といった姉妹達が一瞬にして青褪める程に激怒した金剛は、椅子を蹴り飛ばして立ち上がるや摂津と取っ組み合いの大喧嘩を始める。妹達が強張った表情の中で必死に抑えようと伸ばす腕も体格の良い金剛の憤激に制動を掛ける事は出来ず、騒ぎを耳にして駆けつけてきた朝日や出雲らの先輩達によって力ずくで彼女は摂津から引き離されるのだった。

『こ、金剛さん・・・、そ、そんなに怒っちゃったんスカ・・・？』

ここまで話を黙って聞いていた少女達の中、ちょうど語り部たる神通の隣で聞き入っていた雪風が恐る恐る声を放つ。ただ上司である神通に責を求めようとした先輩の言葉は癪に触ったらしく、雪風は軽く拳を握って神通の返事を待っている。少しだけ先程の硬直した雰囲気や和らいだようで、霞や霰といった他の者達も鍋料理をよそったり漬物を一切れ口に運んでお話の続きを期待して耳を傾けていた。神通はちょっとだけ後頭部を荒く搔いて自分の若い頃を恥じつつも、皆が望む続きを語り始める。

その後はさしもの金剛も先輩方に強制連行されて別部屋へと身を移し、平手打ちまで含まれた説教をされてしまうのを付き添った神通も目にしていた。

特にお叱りの先鋒となる朝日は金剛自身が師匠と仰いだ敷島型戦艦一番艦の艦魂、敷島の実の妹で、その昔、日本に来てすぐの頃の暴れん坊で調子に乗っていた金剛を、柔道の教練の最中に伝説の大技「山嵐」で投げ飛ばしてみせた事があるという人物。その際に土下座の格好で泣いて詫びを入れると同時に、金剛はその言葉の響きから当の朝日が嫌がるのにも構わず「朝日の伯母御」という敬称を用いて強い尊敬の念を表す様になっていた。

ところがそんな先輩を前にしても、この時の金剛は鉄拳こそ用いなかったものの舌での攻撃を休める事は無く、奥歯の一本をへし折ってしまった摂津への詫びにも絶対に応じなかった。

それどころか騒ぎを聞きつけて集まった名だたる艦魂達が見る前で、彼女は自身の分身の中にあつた艦内神社をいつも教育で使用している木刀で粉々に破壊し、仲間達に再び羽交い絞めにされながらも床に落ちた御神体を蹴り飛ばして出雲のお叱りの言葉にドスを利かせたその声を荒げる。

『やめないか、金剛！ 神仏に罪はないだろ！』

『罪ならあるわい！！』 吉法師きっぽうしのようなガキに試練与えておいて、

苦悩してるんも知らんと誰も構ってやらんはどういうつもりや！

そのくせ艦魂殺しの嫌われモンに仕立てて仲間うちゆう吉法師の逃げ場まで奪いおってからに！ 手え合わせて拝んでもろうとるんに何も見抜けず何もせんは、仏の怠慢じゃー！！！！』

もはや先輩への言葉遣いにすらも見境をつけなくなる程に怒る金剛はこの後も30人近く集まっていた仲間とたった一人で押し問答を繰り返して、最後は朝日と富士の監視の下に同じ横須賀在泊である富士艦最下層の船倉に縄で縛られて謹慎処分を受ける事になった。

ただ、幼少時からこの金剛を見てきた富士と朝日は縛られる際も四肢を振り回して叫んだ彼女の言葉にある程度の理解を示してくれ、摂津を始めとした艦魂達に金剛が彼女なりに神通という若者を救うべくこれまで懸命になってきた事を解かってくれと伝える。

『たわけが、離さんかい！！ 吉法師の何が悪いんじゃー！ 吉法師が何をしたちゅうんじゃー！！』

その大きな身体と荒い気性で神通をどつき回す金剛の日常は、不慮の事故で心の傷を負ってしまった神通の再起を賭けた教育。暴力まで用いて一点の目標のみに専念させるのは未だ神通自身の胸の中に燦る惨劇の記憶と罪悪感を意識させない為であり、奴隷の様に自分の傍らに置いたのは自分という強面な存在を身近にさせる事で神通の耳にそんな風評が入る事態その物を防ぐ為だった。それ故に金剛は持ち前の度胸と人柄を生かして残虐な鬼教官として振る舞い、それを真っ向から否定しようとした仲間や先輩、そして神仏にあって公然と怒りを示して反抗する挙に出た。先輩後輩という社会的な立場や神仏の持つ神聖さすらも言い訳にせず、たった一人であっても考えを曲げない。その真相は神通の非を理解者として一切認めず、可哀想な少女を身命を賭して守ろうとする金剛の信念であり、神通の苦悩をも知らずに襲い掛かってくる誹謗中傷の矢面に自ら立って行った結果なのであった。

それからしばらくして艦魂社会の長老である富士が働きかけてくれた事により摂津と金剛の一件は神通の再起が適うまで水に流すという事で収まりがつき、金剛も神通への余計な雑音を抑えるよう尽力すると約束してくれた富士の言葉にようやく納得。迷惑をかけた先輩方に対してという前置きをした後に詫びの言葉を放ち、2週間ぶりに甲板の上で陽の光を浴びる事になった。

この一悶着の当事者の一人である神通は今回見せてくれた師匠の戦ぶりに大変感謝し、金剛艦の甲板上で富士艦最下層より”出所”

してきた金剛の出迎えをする。ところがどっこい、怖いお師匠様は彼女の顔を見るなりさっそくその脳天にげんこつを叩き落してこう言った。

『ワレ、なんで戦おうとせんのか！！　ワシら艦魂は何も考えへん機械ちゃうやろが！！　ワレが悪い思ふた事は悪い、間違うてる思ふた事は間違うてる言わんかい！！　新人や女や言うてお上品にやとったら埒が明かんのじゃ！！　こんの、たわけが！』

この一言で自分に自信を持てた神通。同時にこの一言が彼女の性格の根本を形成していく事にさほどの時間は掛からず、言い終えてすぐに再開された厳しい教育を皮切りにして神通はその実力をぐんぐんと伸ばしていく。そして数年後、師匠の愛情と教えをしこたまその身に叩き込んだ彼女は、歴代最優秀の成績で「海軍砲術学校金剛艦分校」を卒業するのだった。

お鍋のお料理も3分の1程が既に無くなっている中、知られざる上司の若りし頃の奮闘の様子は霞や雪風といった少女達の脳裏にありと蘇る。まさにいつもの自分達が叩かれて怒られて教えられるのと同じ様に、上司もまたそうやって過ごしてきたのだ。それに加えて怖いながらも道をしっかり諭してくれる師匠の在り方もまた、彼女達にはいつもの日々と重なる部分がある。もちろんそれは眼前で語り部となっている神通の事である。

だいぶ酒も回ってきたのか神通は自身の昔話を話す事に伴う恥ずかしさを忘れ、記憶に残る金髪碧眼の師の言動を思い出して唐突に笑い出した。隣で耳を傾ける雪風もつられて笑みを作り、上司が笑

い声を上げた理由を尋ねる。

『へへ。どうしたんスカ、戦隊長？』

『ふははは。親方の破天荒な所は思い出してみると面白くてならん。艦内神社を叩き壊した艦魂ひとなぞ聞いた事も無い。戦艦の艦魂ひと達が総出で自分の所にある木具工場で直しとったなあ。ふはははは。』

嬉しそうに声を上げて神通は笑い、雪風に続いて他の少女達も一斉にどっと笑う。今でも会う度に神通にとっては怖いお人の代名詞であるお師匠様だが、神仏ですらも屁とも思わずに制裁の対象と見なす峻烈な所は、寄しくも神通が尊敬する織田おだ信長公とぴったりと重なっていく。当時の世相も無関係と、天下布武を合言葉に比叡山の神社仏閣を丸焼きにしまったその所業は当時としても物議を醸かもしたが、熱心な信長公崇拝者である神通にはただ一人だけ自分を信じてくれた師匠が信長公と重なるのが嬉しくて嬉しくて仕方ない。雪風とは自分を挟んで反対側に腰を下ろしている霞が面白がって放つ言葉も、神通の笑い声トーンを一段高めていく。

『いやあ、金剛少将ってスゴイんですね。仏の怠慢じゃー、なんて人間でも言える人はいないんじゃないですか？ あははは。』

『ふははは。傍から見れるんなら面白い艦魂ひとさ。でもその後、親方は佐世保で師匠である敷島さんにこっ酷く怒られたらしい。さすがの親方も敷島さんにだけは絶対に勝てんからな。親方が横鎮から佐鎮に転籍したのも、余りにも問題を起すから富士さんと当時から一戦隊であった陸奥むつさんが仕組んで、わざと敷島さんの下に置いておく様にした、なんて噂もあったくらいだ。ふははは。』

金剛の人物評を面白おかしく話している神通。別に本人が目の前にいないからと言って馬鹿にするつもりは微塵もない。大変に厳しかった教育は今では一端の指揮官を頂いている神通の大事な基礎を

作ってくれた物で、最近の柔道の特訓においてもその効果は遺憾無く発揮されている。部下達が一樣に目を爛々と輝かせて向けてくる事に上機嫌の神通は、今度はその後の数年に及ぶ金剛との武技教練について語り出す。酒の勢いを借りての思い出話ではあったが、霞や雪風を始めとした少女達は常に自分達に柔道を教えてくれる上司のルーツが聞けるとあって誰という事も無く神通の周りに集まりだし、膝を詰める程に迫って上司のお言葉に耳を澄ますのだった。

いつもはおっかなくて近寄りがたい雰囲気の上司が、部下に当たる少女達には今日はとても近い存在に思える。神通が鋭い釣り目を少しだけ細めて語ってくれる事もその理由であったし、その声によってそれぞれの脳裏に描かれる10年ほど前の彼女の姿もまたその理由の一つであった。

毎日の様に激しく怒鳴りたてて竹刀をお尻に振り下ろす上司は、如何にして今の自分達が味わうような道を歩んできたのか。

神通以外の全員が胸の中で唱えるその疑問は、この日、上司のお言葉によって一つずつ紡ぎ出されてこもごもの心に縫い付けられていく。そしてその縫い付けられた想いは、自分達が今を生きる場所、即ち二水戦という部隊の名が持つ誇りを装飾する刺繍の一つとなつて行く。

いとおいしい姉妹、苦楽を共にした仲間、厳しくもあり優しくもあった上司とそこに纏わる楽しい思い出。

それは神通や木村が意図した霞や雪風の心への波及に留まらず、そこにいる少女達の全員に連鎖して行った。

こうして二水戦の纏まりは数ある帝国海軍水雷戦隊の中でも指折りの物となり、彼女達は大会の朝を迎える。皆が愛する「花の二水戦」に属する者達として。

第八〇話 「最強を目指せ！／其の六」

昭和15年10月24日。

かねてより支那事変の影響で疲弊していた日本国内において、この日、米穀管理規則が閣議決定された。国家が国内に流通、備蓄される穀物の管理統制を行う事となり、全国の市町村別に穀物の割り当てと供出の義務が与えられる事になる。いわゆる年貢を納めていた300年以上も昔の事と同じで、前時代的な国家運営もせねばならない程の疲弊ぶりは明治の建国以来、近代国家として目覚しい発展を遂げてきたこの国にとってもはやその面影すらも窺えない代物であった。併せて既に10月4日には砂糖とマッチも配給統制となる事が閣議決定されており、この両国家運営法案は来月の一日から正式に施行と決定。紙幣に代わり配給切符が導入される事になったのもこれと同じ時期であった。

しかしこんな国内の日常も軍艦旗を翻す艦艇が多く集う呉の波間に顔を覗かせる事は無く、ぽかぽかと陽気すらも帯びた絶好の秋晴れである本日、艦魂達は心待ちにしていた。何といっても今日という日は、退屈な休暇の日々の中で企画された艦魂達の一大体育祭。呉鎮守府所属の駆逐艦の中で最も強健な艦魂を柔道の試合で決めるという、柔道の大会が催される日なのであった。

試合会場となる所は呉にて錨を下ろす様々な艦艇の中でも最も広い甲板を持つ艦艇と定められ、その役を今回担当するのは呉鎮守府で現在は特別役務艦とされている航空母艦の龍驤艦りゅうじょうだった。もちろん

んその艦影の大部分を占める広い飛行甲板の上が会場である。

空母としてはベテランの域に当たる龍驤艦は最新型の蒼龍型よりもずっと小さい小型の空母で、今でこそ艦隊勤務からは外れているが来月の艦隊編成では帝国海軍初の航空母艦である鳳翔艦とコンビを組み、これまた帝国海軍初となる3つ目の航空戦隊である第三航空戦隊を編成する事になっている。5年前の第四艦隊事件で艦橋が一部圧壊する憂き目に会って以来の艦隊復帰で、艦魂である龍驤は長いリハビリ生活の終焉が近づいている事と、久々に集った同じ帝国海軍の艦魂達を数多く瞳に映せた事に心底喜んでいた。

おかげで張り切る龍驤は広大な飛行甲板の真ん中に、本来は露天繋止した航空機を風から守る為に用いる遮風柵を展開し、そこに艦内倉庫から持ち出した天幕を張って記念すべき今日の大会の大会本部を一人設けていた。これには現在の呉軍港内では最も偉い立場に当たる伊勢も喜び、せっかく用意してくれたのだからと各艦艇常備の折り畳み椅子や小さなテーブルを運んできて大会本部の体裁を整えてやる。立派な大会本部はすぐに伊勢や日向、最上を始めとする七戦隊等の巡洋艦の艦魂達、艦の主である龍驤、今は棧橋にて余生を過ごしている大先輩の浅間、等といったお偉方が集まり、一応は本大会での医務全般を担当する明石もここに詰めて見守る事となる。

左腕につけた赤十字の腕章を輝かせる明石は同じ軍装を着ていてもよく目立ち、参加者である駆逐艦の艦魂達は憂いなく全力を試合に出せると安堵の息を漏らす。今回の大会の発起人である吹雪もそれは同じで、本部へとやって来て龍驤や伊勢に挨拶するのと同時に明石にも深々と頭を下げていく。明石も怪我人が出た場合の全力での対応を約束し、吹雪は喜び勇んで大会本部を背にすると号令を放った。

『全駆逐隊員、整列！』

11駆に属する彼女には所属も違うその他の駆逐隊への指揮命令

権など無いが、帝国海軍の駆逐艦の中でも数人しかない下士官に当たる上等兵曹の階級を頂く彼女の声に、飛行甲板のあちこちにて小さな集団を作っていた駆逐艦の艦魂達は一斉に走り寄って、大会本部と吹雪に正対する形で整列を始めた。各々が司令駆逐艦を勤める者を先頭にして各駆逐隊毎に横列で並ぶ姿は中々壮観で、無数の足音と共に木霊する木甲板特有の打楽器の様な音色が見物人達の耳を撫でる。すっかり寒くなった時期に合わせて黒い第一種軍装を身に付ける者が多い中、列の中にチラホラと見える柔道着を着た者の淡い真珠色もまた、明石を含めた見物人達の瞳に映る色合いに花を添える。

綺麗に整列し終えた8個駆逐隊28名に登る駆逐艦の艦魂達が視線を集める先で吹雪は姿勢を正すと短い訓示を行い、続いて再び眼前の仲間達へと口を開いて号令の言葉を投げる。

『艦種歌！ 歌い方用意！』

響きの良い緊張感も幾分籠った吹雪の声を受け、その場に整列した駆逐艦の艦魂達は左手にこれから歌う艦種歌の歌詞が記された紙を持つと左腕の肘を伸ばして肩の高さに掲げる。吹雪にあっても同じ様に紙を手にした左腕を肩の高さで前に伸ばした。

それは彼女達の分身で励む乗組員達が行う軍歌演習の際の歌い方用意と全く同じで、今から歌おうとする彼女達の言う所の「艦種歌」も、元は乗組員達が歌う数ある軍歌の中の一つ。やがて高らかに響いた吹雪の号令に併せて、駆逐艦の艦魂達は一斉に左手をそのままにその場で足踏みを始め、各々が踏み鳴らす木甲板の音を伴奏として歌声を奏でる。

29名の艦魂達が一糸乱れぬ足踏みとテンポで歌うその歌は、世界に誇る重雷装を特徴とする現代の帝国海軍駆逐艦事情を由縁とする。今から45年前に艦砲ではなく雷装を主な武器として戦った、自分達へと繋がる先人達の軌跡を歌にした物であり、現代の駆逐艦

の艦魂達が自分達を示す歌として一様に決めていた歌であった。

月は隠れて海暗き

二月四日の夜の空

闇をしるべに探り入る

我が軍九隻の水雷艇

目指す敵艦沈めずば

生きて帰らじ退かじ

手足は弾に砕くとも

指は氷に千切るとも

臆おぼろげながらも星影ほしかげに

見ゆるは確かに定遠号ていえん

いざ一うちと勇み立つ

将士の心ぞ勇ましき

忽たちまち下る号令もとの

下に射出いだす水雷は

天地も震う心地して

目指す旗艦に当たりたり

走る稲妻打つ霰あられ

襲わば襲え我が艦を

神はいかでか義に背く

敵の勝利を護るべき

見よ定遠ていえんは沈みたり

見よ来遠は沈みたり
音に響きし威海衛
早や我が物ぞ我が土地ぞ

ああ我が水雷艇隊よ
汝の誉は我が軍の
光と共に輝かん
かかる愉快は又やある

普段の教練でも歌う機会を設けているこの歌は、明石も何度か耳にした事がある。何故だか艦魂の世界で歌われるようになって最後の8番は欠落するようになってしまったのだが、水雷を主な武器として戦う者達を褒め称える終わり方は駆逐艦の艦魂達の気分を一気に高揚させてくれる物だ。まして28人の仲間が斉唱するその様子はとても迫力があり、大会本部に詰めてそれを見守る明石達は一様にどよめきを放つ。長く帝国海軍に属して励んできた大先輩である浅間も、昨今の後輩達の勇壮な姿を目にして大変に喜んだ。

やがて大会の開会を宣言する伊勢の言葉を受けて一時的にその場は解散となり、さっそく駆逐艦の艦魂達の中でも今回の大会に参加しない者達は自ら進んで、大会本部の目の前に当たる部分にこれから仲間達が死闘を繰り広げる事になる試合場を作っていく。試合場と言っても各艦より持ち寄ったマットを敷いて繋ぎ合わせてそこその大きさに仕立てただけの質素な物であったが、いつも狭い甲板の上で教練に励んできた駆逐艦の艦魂達にあってはとても立派な柔道場として見栄え良く瞳に映る。おかげで彼女達が今大会に賭ける意気込みは更に漲り、飛行甲板左右に陣取った各駆逐隊の集団の中には自作ののぼりを立てて自隊の選手を鼓舞する姿もチラホラと出る有様だった。

しばらくして試合場の準備が終わり頃には呉軍港にて雑役船として働いている曳船や交通船、給水船等といった小型船舶の艦魂達も大挙して龍驤艦の飛行甲板に集まり、大会見学者は悠に100名を越える数に登る。伊勢が持つてきてくれたパイ缶を頬張りながら明石達も談笑し、今大会へと参加する各駆逐隊と選抜された選手達の名が書かれた一覧表に目を通した。

それと時を同じくして二水戦所属の駆逐隊は神通^{じんつう}の周りに集まり、上司が教えてくれる各駆逐隊と選手達の特徴に耳を傾けている。まだまだ若い霞^{かすみ}や雪風^{ゆきかぜ}を始めとする部下達であるから、呉鎮所属の各駆逐隊の面々を始めて目にした者も少なくない。故に長く呉鎮所属の艦艇として勤めて来た神通に、これから自分達が相對する事になる先輩方の事を訪ねたのだ。

『そうだなあ。まずは、あそこ。飛行甲板の向こう側で一番右端にいるのがー。』

囲むようにして腰を下ろした10名近い部下達の前で、神通は説明する駆逐隊の方に都度顔を向けながら声を放つ。それは小さな「私立神通学校」の授業の様相を呈し、部下達は自分達以外の駆逐隊に対する理解を深めて行くのだった。

まず呉鎮所属の駆逐隊の中でもトップナンバーを頂くのは、大会発起人の吹雪が属する第11駆逐隊。吹雪とその姉妹の三隻編成の部隊で、所属は明石や二水戦と同じ第二艦隊の第二航空戦隊だ。彼女達のような航空戦隊所属の駆逐隊は所属の空母の運用における補助を担当し、「とんぼ釣り」とも呼ばれる墜落機の搭乗員救助など地味な任務に励む物で、水雷戦隊に所属する駆逐隊に比べれば普段

のお仕事に派手さや迫力が伴わない事は否めない。だがそんな吹雪達とて世界に誇った特型駆逐艦の一員にある事に代わりは無く、一昔前までは花の二水戦に所属していた経歴を持つ立派な小型戦闘艦である。現代の艦隊型駆逐艦の艦魂である霞や雪風からすると正統な先輩方に当たり、その中でも吹雪は今大会の優勝候補筆頭と目される艦魂だ。

12駆も同じく吹雪の姉妹に当たる者達で構成され、4隻編成。こちらは第一艦隊の三水戦所属であり、三水戦は神通の姉である川内だが率いる戦隊。口にこそ出さないものの、上司が姉に対して負い目を抱かせないようにと企図する霞や雪風にあつては、今回負けではならぬと心に強く決めている部隊の一つである。

続いて13駆は型式の古い若竹型わかたけの駆逐艦によって編成されている部隊で、長女の若竹を始めとして、呉竹くれたけ、早苗さなえの三隻編成。上司と同じく大正生まれの彼女達は植物の名前を冠している事からも解かる通り、これまでの所では帝国海軍で建造された最後の二等駆逐艦であり、霞や雪風達と比べてもその分身は1000トン以上小さい。現在は呉防備隊という港湾の防御を担当する部隊に所属していて、旧式小型である事から大海原を走り回って艦砲や魚雷を撃ちまくるような激しいお仕事からは身を引いている隊であった。今回の柔道大会でも参加はしつつも選抜の選手は出しておらず、もっぱら試合での審判を担当する事になっている。

お次の14駆は昨年に解隊され、現在は欠。

15駆は陽炎型かげろうの姉妹で今年の8月末に編成された最新鋭の駆逐隊で、親潮艦おやしお、夏潮艦なつしお、早潮艦はやしおの三隻編成。現在は部隊としては未所属であるが、嬉しい事に来月には雪風の隊から黒潮くろしおを転出させた上で正式に二水戦に加わる事が決まっている。15駆の面々は既に

新編成に供えて呉で待機している事から、今回は陽炎を始めとする姉達や霞や霰あられといった先輩達との顔合わせも兼ねての見学となっていた。新たな仲間や姉妹、そして来月から上司として頂く事になる神通の姿は、まだまだ幼心の彼女達の瞳にはどう映ったであろうか。

16駆は言わずと知れた二水戦の駆逐隊で、選拔選手は雪風。現状の二水戦では最も若い部隊であり、来月からは15駆に転籍となる黒潮に代わって、つい明後日に竣工を予定している天津風あまつかぜという妹を加える事になっている。まだ天津風は呉に来ていないが、雪風はまだ見ぬ妹を胸を張って迎えられるようにと大会に向けての意気込みをさらに重ねているのだった。

次いで17駆は現在は欠番であるが、12月には陽炎姉妹の最新鋭艦をあてがって編成される予定である。ただし所属予定の艦はまだ就役にも至っていないので、呉にはその姿はまだ無い状態であった。

そして18駆は二水戦所属で、言わずと知れた霞を選抜選手とした駆逐隊。基本的に同型艦で構成される駆逐隊事情にあって、朝潮あさしお型2隻、陽炎型2隻で編成されているという非常に珍しい部隊である。しかし8駆を除いている今の二水戦では彼女達18駆が最も経験を積んだ駆逐隊であり、神通が褒める程の指揮官の才能を有する霞の能力も手伝って結束も硬い。俗っぽく言えば、今の呉で一番に活きの良い駆逐隊こそ彼女達である。

続いて19駆はこれまた吹雪の姉妹4隻で編成されており、所属は第一艦隊の第一航空戦隊。

最後の20駆も吹雪の姉妹で編成されており、12駆と同じく第一艦隊三水戦の所屬部隊だ。

さすがに15年以上も帝国海軍の艦魂として励んできた神通。部下の少女達はその説明によって普段は余り会う事も無かった諸先輩方の状況をよく知る事ができた。神通の周りを囲むようにして座る彼女達はまだまだ10代後半の容姿を持ち、これまで余り意識して来なかった先輩に当たる駆逐艦の艦魂達の存在をこの時強く意識し、同時にまだまだ若輩な自分達の身の程を思い知るのだった。

ただ、大会に参加する霞だけは周りの仲間や姉妹とは違い、説明してくれる上司の表情にどこかサッパリとしない顔色が滲んでいるのを見逃していない。やはりちよっぴり冴えないその胸の内は、自身の部下を持って自慢話をせずに他の水雷戦隊の者の話題を自らの口からだすもどかしさがあるのだろう、と霞は一人察する。特に三水戦の駆逐隊は上司の実の姉が率いる部隊であり、その実力や経験果ては今大会の下馬評に至るまで自分達とは段違いであるのだ。

『この中ではお前達はまだ若輩に当たるが、戦の場面において年齢なんか気にする事は無い。猿も犬もアイツ等の胸を借りるつもりではなく、倒す事をしっかり目標に掲げて励むんだぞ。』

横目に認めていた吹雪を始めとする先輩達の姿に対抗心を募らせる霞には、その正面に正対する形で仁王立ちしている上司の訓示が言い渡される。その言葉は遠慮など気にする必要も無いという許可のような物で、生来が勝負事を前にして闘争心を燃え上がらせる性分の霞は、隣に立つもう一人の二水戦選抜選手である雪風と供に大きく張り上げた返事をした。

『はい！』

元氣の良い返事は、二人の若さがこれから挑むであろう相手達に
対して武器へと変貌した事を神通に示してくれる。かつては自分も
このようにしてお師匠様に声を返していた事を少し思い出し、彼女
は僅かに口元を吊り上げて大きく一度頷くと、今度は周りに腰を下
ろしている霞と雪風以外の部下達に向けて声を放つ。

『よし。お前達も猿と犬の応援にはしっかり声を出すんだぞ。例え
個人戦であっても選手の所属駆逐隊、その上級部隊である各戦隊の
評判は応援の可否でよく見られてるモンだ。私達二水戦には仲間が
戦ってる時に知らんぷりをかます様な大馬鹿者は一人もない。戦
ってる猿や犬の評判だって掛かってるんだ。みんなの代表である二
人に恥を掻かせるんじゃないぞ。解かったな。』
『『『はい！』』』

一糸乱れぬ調子で放たれる少女達の声は龍驤艦の飛行甲板の上に
木霊し、他の駆逐隊や大会本部に詰めていた明石達の視線を集める。
神通の仁王立ちを囲むその姿は怖い上司と怯える部下の構図と紙一
重ではあるが、彼女達が放つある種の雰囲気というものがそこに恐
怖を伴っていない事を示しており、その場に居る二水戦以外の者達
は見事に一致団結した手強い若者達にこもごもの想いを巡らせるの
だった。

それから十分ほど経った頃、審判を勤める13駆の呉竹が大会本
部前のマツトに進み出て勝ち抜き戦の一回戦を始める旨の声を上げ
る。

『傾注ー！ これより一回戦を始めます！』

少し騒がしかった飛行甲板も呉竹の一声で静けさを取り戻し、天幕を張った遮風柵の下で他愛無い雑談や大会の下馬評について声を飛び交わせていた明石を含むお偉方も声を静めて眼前に敷かれたマツトに視線を集めた。

そしてまだ一回戦にも関わらず、明石の瞳に移った第一試合の選手の一人は早くも知り合いの者であった。思わず彼女が呟くような声でその者の名を口に出す前に、呉竹の選手を呼び出す声が響き渡る。

『右舷側、第19駆逐隊、綾波二曹！^{あやなみ} 左舷側、第18駆逐隊、霞一水！』

『はい。』

『はい！』

呼ばれた者が各々の部隊から上がる声援を背にマツトへと歩み出る。その内の一人は明石の友人である霞だった。白い柔道着と反する陽に焼けたような麻色の肌の持ち主である霞は見間違えようもなく、早速の友人の出番に明石は超の手に軽く拳を握ってはしゃぐ。

大会本部の中でも伊勢や日向といった古参の者達が声を弾ませ、ここ最近では部隊としての雰囲気もガラリと変わった事で噂の種である二水戦の登場に期待を示した。

『あら、いきなり二水戦じゃない。』

『まだ若いけど、去年からまた戦隊長に戻った神通のトコの部隊は最近すこぶる成績が良いらしいな。』

『さっそくメインな感じの試合だなあ。どれどれっと。』

お偉方の一部はそんな言葉を放ちながら腰掛ける椅子を少し前に運び、今まさに始まろうとしている第一試合を間近で見ようとする。

明石も邪魔にならぬように隅っこに椅子を運びつつ、凜々しい表情で仲間達からの声援と上司の視線を背中で受け止める霞の姿に目を凝らした。

『正面に礼。』

呉竹の指示に従い、霞と綾波はまず審判である呉竹とその背後にある大会本部に正対して一礼する。その最中、霞はふと腰を折りつつも、呉竹の右手に魚雷や艦砲の使用時に人間達が使用する懐中時計に似た形の団着時計が握られているのを認める。どうやらその時計をもって試合時間を正確に測るらしく、試合中の一挙手一投足、特に攻める事に億劫になった場合の指導判定に気を付けようとそつと胸の中で呟く。上司譲りの素早い動きの戦い方を用いる霞であるが、その反面、試合ではそもそもの彼女の体格が小柄である事からあまり組み合いに挑んでゆく様な事が無い為に「勝負から逃げていく。」という判断を見る者に与えてしまう事と隣り合わせなのである。

そんな事からこれから挑む試合の戦う計画を少し見直していた霞の耳には、続けざまに放たれた呉竹の声は響いてきた。

『お互いに礼。』

少し慌てて霞はこれから挑む先輩、綾波に身体を向けて頭を下げる。霞にとっては初めて目にした綾波は、試合を前にしても顔色一つ乱していない大人しい感じの艦魂で、頬が隠れるくらいの長さの髪を小さく後頭部で結っている。10歳近くも歳が離れている為か顔立ちは霞と違って完全な成人女性のおつくりをしており、その胸もお尻もペツタンコの霞とは歴然の差がある。随分と静かで落ち着い

た様子で、綾波は少し細くした黒い瞳を瞬きも数える程にしてじつと眼前の後輩の目に向けていた。

先輩にじつと見られるのは霞でなくとも少し気が乱れてしまう物で、彼女は少々動揺が滲んだ声を放って先輩への挨拶とする。

『ね・・・、願います・・・！』

『願います。』

不気味な程に落ち着いた先輩の姿は、ただでさえ150センチメートル台の身長である霞との体格差もあってとても大きく見える。霞は礼を終えて少し後ろに足を進めつつ、軽く拳を握った両手を口の前に近づけて暖を取るように息を吹きかけた。それは彼女が緊張の糸を胸の中に張っている時に見られる独特の癖で、陽に焼けた様な麻色の肌が持つ元気の雰囲気は傍から見ても少し色褪せていた。

だがそこですかさず上司の神通はマットに向かって響きの良い甲高い声を放って、教え子の身体に纏わり付こうとする緊張を自ら解す事が出来るようにしてやる。それは普段から二水戦の教育日課で教えて来た事の復習であり、問い掛ける形の神通の言葉に霞は我に戻って振り返る。

『猿。一分の兵法とはなんだ？』

『いちぶんのへいほう・・・。』

突如として背後から響いた声であったがその周りにいる仲間達と同じ様に、霞は瞬間的に上司が放った言葉に関連する記憶を脳裏から検索してみせる。そして声に出す事無く、胸の中で上司の示そうとしてくれた文言を唱えた。

「一分の兵法も、敵になりておもふべし。兵法よく心得て、道理つよく、其道達者なるものにあひては、必ずまくなと思ふ所也。能

々吟味すべし。」

それは人間達と同じく月曜日の午前に行われる教育日課で上司より教えてもらった一節。武技教練や水雷、砲術のお勉強ともまた違った教育内容は時に小難しい物でもあったが、かの有名な剣豪、宮本武蔵の綴った一節であった事から霞も興味を示して覚えようとした言葉で「五輪書・火の巻」と呼ばれる本に記載された一文である。織田信長公の熱烈な崇拜に始まる帝国海軍艦魂社会一の「歴女」っぷりを示す上司は、この古い文書の中から霞を含めた部下達へと教育を授ける事が間々有り、その内容と箴められた意味合い、そして生かし方までもしっかりと教えていた。

その内に霞は一呼吸置いて表情を正すと、自分に向けられたままであった上司の鋭い鋭角で構成された瞳に眼差しを返す。

『敵になる事……。負ける可能性を必ず頭に入れて工夫を凝らす事……。』

『そうだ。』

呟くように放った霞の言葉に、間髪を入れずに上司の返事が木霊する。普段から部下の前で悩んだりするような所を殆ど見せない神通の返事は、何かを含んでいる様な様子も無くサッパリとした物であった。だがこの引きずるような物言いが無い彼女の返事だからこそ、霞はいつの間にか息を吹きかけていた両手を下ろしていた。

やがて上司より肯定してもらった自分の答えを、霞は視線を正面に戻して相対する綾波へと脳裏の中で当て嵌めていく。刹那、麻色の肌で成る霞の顔からは緊張の色が完全に消えた。

そうだ。きっと綾波さんも負けるかとも思いつながらそこに立っている筈。感情が滲んでいない様な物言いや表情は、それをなんとか悟られまいとしているからだ。

そこまで考えた霞はようやく腕を胸の高さに掲げ、戦いに挑む姿勢を取る。肩の広さよりも少し狭いくらいの間隔で脚を開き、半身にした上半身をやや前屈みにしたその姿は、神通や仲間達には一目瞭然の霞なりの臨戦態勢であった。

やがてそれを認めた呉竹が右手を挙げると同時に、霞の眼前では綾波が前髪を邪魔にならぬように掻き分けつつゆっくりと腰を落として身構える。伊達に長く駆逐艦の艦魂として生きてきた訳ではないらしく、顎を引いて上目遣いで放つ眼光の鋭さに神通の周りにいる少女達はほのかに恐怖心を抱いてしまうが、霞にあってはその限りではない。元来、自分の窮地に陥った状態を知ると逆に闘争心を燃やす性格の霞は、先輩であっても負けじと睨み返して呉竹の合図を待っていた。もちろんその根本にある負ける事を彼女に意識させたいきっかけは上司のお言葉で、霞という部下の性格を曇りなく読み取っていた神通の成せる業でもある。

やがて呉竹の声が甲板に響き渡り、それを合図として本日の大会の最初の試合の幕が切って落とされた。

『始め!』

試合の開幕と同時に霞はそれまで狭くしていた両脚をいきなり大きく開いたかと思うと、綾波の腰の位置よりも低くした上半身を潜らせて距離を詰める。対して綾波は小柄な霞の体格からすばっこそうな所を幾分は予想していた為、即座に後ろに跳び退いて霞の接近を一時的に封殺した。霞にあっては素早さを生かす為の布石として動きを見せておく事を意識しただけでこの接近は飽くまで牽制であり、綾波が跳び退くやすぐさま脚を元の間隔に戻して最初の立会いを同じ姿勢へと戻る。

ただこの小さな攻防で見せた霞の動きに、早くも龍驤艦の甲板にはどよめきが起こった。

『おおお！ 速い！』

『ひゃー。あの小っちゃいの、なんちゅーすばしっこさ。』

『すごい。こういう足腰してんのよ、あの子。』

それは一様に霞の動きの速さにこもごもが驚いた事を示した物で、明石が詰める大会本部の中も例外ではない。思わず口を押さえて目を丸くする伊勢の横から、妹である日向がそっと顔を寄せて声を掛ける。

『ね、姉さん。今の見ましたか・・・？』

『あはは・・・。いやあ、これは驚いた・・・。金剛さんの柔道もあんな感じだったけど、動きの速さだけは手荒くあの霞って子の方が上だよ・・・。』

お偉方のひそひそ声は明石の耳までしっかりと流れており、友人である霞の評価が早速上がった事を喜んで思わず笑みを溢す。第二艦隊の一員として一年近く励んできた中で、あの霞が怖い怖い上司の下で頑張ってきたのは何度も明石は見てきた。ここ最近の特訓だって目にしており、余りの激しさに彼女をちょっと可哀想に思う事だって何度もあった。でも今やその修練の結果をして将官クラスの艦魂達を唸らせている霞の姿は、明石なりに見えてきた彼女の汗と努力が報われたかの様に見えてならない。当の霞が抱く目標はもっと上、即ち決勝にまで至る全ての戦いに勝利し、呉鎮最強と称される駆逐艦の艦魂となる事であるのは良く解かっているが、ずっと近し

い間柄で見てきた友人の姿は明石の胸の中を安堵にも似た嬉しさと満ちて行く。

そしてどうやらそんな心根を抱く人物は、明石以外にももう一人いるらしい。明石はそれを、マットの上で戦う仲間に必死で声援を送る二水戦の少女達のちよつと後ろ側に立っている親友の姿に認める。勝負事を目にしてからか腕組みをしてじっと視線を向けているその瞳は日本刀の切っ先の様な鋭い釣り目であるが、そんな神通の口元は正面にて展開される接戦に集中している部下達に見られる憂いが無い為に大きく緩んでいるのだった。

一方、得意の脚を使った柔道が好評の霞はその熱血な性格を発揮して極めて高い集中力で綾波との試合に挑んでおり、周りの自分に対する評価や感心の声なぞちつとも耳には入っていなかった。どうやら綾波という先輩は組み合いに持ち込んでの勝負を企図しているらしく、霞が懷に飛び込もうとすると彼女は上から覆い被さる様にして襟や袖に手を伸ばしてくる。決して無我夢中で攻めている訳ではない霞はそんな綾波の動きを着実に見切り始め、組み合いの始めとして先に伸ばしてくる手が右手ではなく左手である事、そして袖を掴んでも霞が反撃とばかりに腕を絡めようとしたら必ず右足を残して後ろに跳び退こうする事を癖として読み取っていた。ついさっき一度だけ組み合いの形になってみたのも功を奏しているのか、綾波は重心をやや後ろ寄りにして手を前に伸ばすような姿勢で霞の動きに備えている。

ここに至って霞は今度こそ本気で相手を投げに行く事を企図し、綾波の不意の反撃に注意しつつも跳ねるような脚さばきで少しだけ前に踏み出してみた。

『ぬん！』

『む・・・！』

霞は踏み出すやすぐに上半身を後ろに戻し、牽制の為に手を胸の前で小さく振り回して袖を取るふりをする。しかしその最中に彼女は、綾波が後ろに跳び退こうと重心を後ろに傾けながら、それでも組み合いに持ち込もうとして手を伸ばしてきた一連の動作を見逃していない。先輩の事であるから甚だ失礼とも思いつつも、綾波のそれはなんとも中途半端にして柔道の戦いでは極めて危険な身のこなしであった。故に霞は自身の企図が成功する事を確信し、綾波の胸の辺りに視線の焦点を併せてタイミングを窺う。

お互いの呼吸のテンポ、脚や腕の位置、重心のかかり具合、そして神通よりしこたま教えられた戦という物に必ず存在する”流れ”という概念。

それら全ての点が霞の意識の中の一角で線として繋がった瞬間、彼女は意を決してそれまで肩の幅くらいの間隔で開いていた脚を大きく開いて踏み込み、綾波の腰の帯を目掛けるように突進した。

『でりゃああ！』

『むうつ！』

全身の毛を逆立てる程に叫んで飛び掛る霞は、動きのキレも速さも試合開始の時より少しも劣化がない。ここ最近、毎日の様に教練の最中に甲板の脇から嘔吐を繰り返し、アザが出来る程にお尻に浴びてきた神通の愛の鞭が、霞の土壇場での精神力と体力を支える。まるでその突進の様子は彼女と綾波の分身を含めた帝国海軍の駆逐艦が誇る魚雷の駛走その物で、綾波は腰の辺りから突き上げてくる霞の顔を胸で受け止めるようにしながらその奥襟と袖に手を伸ばす。しかし既にこの時、霞の柔道を知る二水戦の艦魂達からは勝負が決まった事を示す歓声が上がっていた。

『あ！ 霞姉さん、行きはったわ！』

『でたー！ 霞さんの大内狩りだあ！』

試合中に技の名前を口に出してしまう事は手の内を教えるのと同義なのかも知れないが、この状態で綾波がそんな歓声を耳に入れても手の施しようは無かった。突進してきた霞を受け止めた綾波は後ろに上半身が倒されていくのに気付いて即座に左足で踏ん張ろうとするも、残る脚は右足で踏ん張るのはその逆である事を先刻お見通しであった霞はまさにそこを狙う。

『うわっ・・・！！』

左足の感覚を研ぎ澄ませようとした矢先、綾波の左足は膝の裏から貫通するような衝撃を受けてカクンと折れ曲がる。もちろんそこには綾波の股の下を潜り、器用に曲げて正確に彼女の膝の裏に埋め込むようにあてがわれた霞の右足があった。次いで突進の力を身体全体に帯びた霞の身体は支えを失った綾波の身体を大きく後ろに傾け、背中から仰向けでマットの上に崩れる綾波に正面から霞が抱きつく形で倒れていく。

刹那、呉竹の判定の声は寥々と響き渡り、晴天に向かって右手が真っ直ぐに伸ばされた。

『一本！ それまでえ！！』

『『『 おおおおー！！』』』

この瞬間に先輩相手の大金星が確定し、龍驤艦の飛行甲板上は落胆と歓喜の声が混じった喧騒に飲み込まれる。大会本部に詰める明石達も驚愕の声を上げたまま開いた口が塞がらず、眼前の試合場に起きた快拳に瞬きも忘れた視線を送るのみ。その中心にいるのは立

ち上がって拳を強く握った右手を高々と空に伸ばす霞で、彼女の口から放たれた勝鬨の声は瀬戸内の穏やかな潮風を物ともせず果てしない空へと一直線に昇って行く。

『おっしやーっ！！！』

仲間の殊勲にハラハラしながら応援していた二水戦の少女達はやんややんやの大騒ぎとなり、天敵のめでたい事を『ケツ！』と鼻で吹き飛ばす不機嫌そうな雪風を例外として、皆一様に隣の者同士で抱合ったりして喜びに打ちひしがれる。その背後にいる神通は腕組みをしたまま表情を微塵も変える事は無かったが、その胸の内が目の前にいる少女達と何一つ変わっていない事を、その場を流れていく瀬戸内の潮風だけが緩んだ彼女の口元で聞いていた。

『ふん。あの猿め・・・、やりやがったぞお・・・。』

こうして呉鎮最強の栄冠を目指す本日の大会で、早くも二水戦には勝ち星が一つ付く。だが戦はまだまだこれから。鬼の上司と少女達の奮闘はまだしばらく続くのである。

第八一話 「最強を目指せ！／其の七」

「つい昨年に生まれたばかりの艦魂が、支那事変という舞台で実戦経験も積んだ同じ艦種の先輩を破る。」

長く帝国海軍にて励んできた伊勢^{いせ}や日向^{ひゅうが}にあってもこれは前代未聞の出来事で、日差しを遮る天幕の下で一緒になって感心の溜め息を放っている。それは二人を含めた大会本部に集っている艦魂達の中でも、最も長く生きてきた浅間^{あさま}にあっても例外ではないらしく、独特の力みを感じられない声色で霞の戦いぶりを絶賛。お偉方^{おすみ}に友人が認められた事を確信した明石^{あかし}も、胸の前で小さく拍手して霞の勝利を讃えた。

一方、どよめきがまだ静まりきらない中でも試合は順次行われ、大会本部前のマットの上には勝利の歓声と敗北の涙が交差して行く。各駆逐隊選抜の選手で競われる本日の試合はどれもこれも目が離せない内容の物ばかりで、明石はまだ話した事も無い者がそこに居たとしても一緒になって一喜一憂する。

やがて何試合かが進んだ頃、龍驤艦^{りゅうじょうかん}の飛行甲板の上にはまたしても明石の知る人物の名前が木霊する。それを声に変えているのは審判^{くれたけ}の呉竹^{くれたけ}だ。

『右舷側、第12駆逐隊、東雲二曹^{しののめ}！ 左舷側、第16駆逐隊、雪風^{ゆきかぜ}二水！』

『はい！』
『うすっ！』

何事も型に嵌る事を嫌う鼻っ柱の強い雪風は、型通りの挨拶をせずにつくとその場に立ち上がる。大会本部からそれを見ていた明石にとって、それは雪風という少女の大きな特徴であり微笑ましさすらも抱いてしまう物なのだが、第三者に対してはあまり受け取られ方が良くないのが実情である。そしてそれを、普段から口の利き方に至るまでけんこつを伴って教えている当の雪風の上司が許す筈も無い。彼女が立ち上がるや否や、雪風のお尻には後ろから神通しんつうの右足が叩き込まれる。

『返事は”はい”だ、馬鹿者が。』
『ぎゃっ・・・！』

不意打ちにも近いお叱りで前のめりに2、3歩ほどよろめく雪風。その光景は怖いお師匠様より教えを受ける艦魂の有り触れた姿なのかもしれないが、皆が見ている前で私立神通学校の教育風景は龍驤艦の甲板を失笑の渦に巻き込んでしまう。どうにも雪風はその身に攻撃を受けると今の様に虫の悲鳴にも似た断末魔を口から漏らしてしまうらしく、そのなんとも間拔けな悲鳴はその場にいる二水戦以外の者に笑い声を発せずにはいられなくしてしまう。故にたちまちの内に飛行甲板の上には、心底面白いと言わんばかりの笑い声が幾重にも響き渡った。

『『『 あははははは！ 』』』

大会本部のお偉方も含めての爆笑は気持ちの良いくらいの代物であつたが、雪風や二水戦の者達にとっては恥ずべき失笑以外の何物でもない。お尻を擦って口をへの字に曲げている雪風とそんな彼女を睨みつける神通を除き、所属の駆逐隊の少女達は周囲から浴びせられる声に赤面しながら恥を忍ぶしかなかった。

やがて審判である呉竹に促されて雪風は再びマットの上を歩き始

めるが、その先で対戦相手を待っていった先輩も口に手を当てて笑っている。自分の不注意も棚に上げて今の自分を笑う声に、鼻っ柱の強い雪風はどんと口の先っぽを尖らせていく。すると定位置に着いた所で徐に対戦相手の先輩、東雲が長い髪を後頭部で結いながら声を掛けてきた。

『ははは。大丈夫？　いきなりダメージ食らっちゃってるじゃない。』

嘲笑の混じる先輩からの一言もまた雪風の心を逆撫でる。ただこれ以上の失笑を買いたくないのも、口先を山の形にしつつも彼女は先輩の声に波風の立てない内容で返事をする。

しかし東雲はただ眼前の後輩を嘲り笑うつもりはなかったらしく、雪風の返事に大きく頷いて優しげに言った。

『へ、平気っスよ。いちち・・・』

『うん、その意気だ。じゃじゃ馬なくらいが駆逐艦の艦魂にはちょうど良いのよ。』

まだまだ嘲笑の余韻が残る中で耳に届いた言葉は、自分の失態を否定するのではなく受け止めてくれた物。鼻つまみ者としての自己理解も多少は意識している雪風だったが、先輩の笑みにそれまで尖っていた口を戻す。恐らくこの先輩はその昔、自分と同じ様なやんちゃな時代を過ごしていたに違いないと想像し、込み上げてきた親近感に鼻の頭を親指で掻きながら白い歯を覗かせて口元を僅かに吊り上げる。

『ひひ、どもっス。』

『よし。じゃあ、始めようか。』

そう言った東雲は呉竹に視線を流すと、呉竹は自身と彼女の視線が交わった事を合図と捉えて試合の進捗を再開させた。

『正面に礼!』

規律という物が纏われたその言葉は少し賑やかになりつつあった龍驤艦の飛行甲板上を一瞬にして静寂に包み、それまで嘲笑を放っていた者達は小さな咳払い一つで笑い声を静めた。その真ん中で大会本部に静かに礼をするや、雪風と東雲は向かい合って今度はお互いに礼をする。二人とも歳の差を除外してそれぞれが相手に好感を抱き、再び小さな笑みを交えるとはほとんど同時に腰を落として身構える。

『始め!』

続けて放たれた合図を耳に、雪風と東雲の試合が始まった。

一悶着の末にようやく行われる事で二水戦の少女達は溜め息混じりで雪風の応援に入るが、神通だけは顔色を変えずに黙ってマットの上の教え子を眺めている。大会本部からお偉方に混じって友人の戦う様を見る明石も心配の色を隠せないが、170センチは有ろうかという高い身長を持つ東雲に比して、雪風は霞と同じく150センチ台の小柄な体格なのだから無理も無い。おまけに先程のお叱り劇に見て取れるように、雪風は艦魂としてまだまだ生まれたばかりの幼い者であり、すっかり大人びた顔つきで常に余裕がありそうな雰囲気を持つ東雲と相対する様は相当にミスマッチの感がある。霞の時は開幕一番でその只者ではない所を垣間見せる事ができたので心配する事は無かったが、性格に反して意外にも慎重な袖や襟の取り合いを演じる雪風にはどうしても対戦相手との不利が存在しているように見えてしまうのだ。

ただその上で、上司である神通は眉一つ動かさずにじっと雪風の

戦う様を見守っている。腕組みをして体重を片方に寄せたその立ち姿はまるで第三者の視点とも言えそうであり、たまたま近くで見学していた最上^{もがみ}は神通のその様子を不思議に思っ^て声を掛けてきた。

『神通中尉。随分と落ち着いておりますね？』

神通の事を姉と慕う最上は飽くまでも彼女の邪魔にならぬように神通の隣まで静かに足を進めると、ほんの少しだけ顔を寄せてそつと呟くような声で言った。肩口からサラサラ垂れる美しい黒髪を耳に掛けながら最上は回答を待つが、神通より返ってくる言葉はやはり彼女が眼前の試合に対して憂いを抱いていない事を示している。

『ふん。犬の試合なら別に心配する事もないからな。』

『へええ。そんなに強いんですか？ あの子。』

『ふん。まあな。』

寡黙な彼女はそれ以上は語ってはくれなかったが、じつと向けている優しげな神通の眼差し

にその言葉が嘘ではない事を確信する。どうやらついさっきまで笑われていた雪風という若者は、自分より背も高くて経験が豊富な先輩を柔道の相手としてもさほど苦にはならないらしい。最上は『へええ。』と唸り小さく頷きつつ、神通から眼前の試合場へと視線を戻す。

すると早くもそこには神通の言葉を現す光景が広がっていた。

見れば雪風と東雲はお互いの襟や袖を握り、お互いに頭をあてがう様にして体勢の崩し合いを行っている。柔道の攻防においては良く見られる姿であるが、20センチ程も身長差がある二人の事情を考慮すると、小さい方の雪風がその体勢で攻防を展開できている事自体が軌跡にも近い代物である。柔道に造詣の深い艦魂達はすぐに

その事に気付いて雪風の姿を目で追い始め、その中で雪風と東雲は足を大きく左右に開いて上半身や腕を振って互いの姿勢を崩そうとする。

『くぬっ！　でえい！』

『やるなあ・・・、さすが神通さんこの若いだよ・・・！　よく練習してるな・・・！　てやつ！』

『と、当然ッスよ・・・！　おりゃ！』

両者ともども、しかめっ面で作る笑みと会話も交えつつの攻防を繰り広げ、取っ組みう二人の足元には汗が次々に弾ける様にして滴る。だが身体の大きい東雲がいくら上半身を捻ったり掴んだ雪風の襟や袖を引っ張っても、雪風は腰を低くしてしっかりと両脚を踏ん張って姿勢を崩す事は無い。それもマットへと着けた雪風の足は一度たりとて浮き上がったたりせず、足の裏をピタッとくっつけて逆に東雲の姿勢を崩そうと攻める程である。

これには大会本部も含めた会場全体からも喝采が起こった。

『おお、あのちっちゃいのも凄いや！』

『信じられない・・・、あの身長差で互角に乱取りしてる・・・。』

体格の不利を物ともしないその戦いぶりはさっきまでの雪風への嘲笑とは一転し、彼女の小さな身体に備わった実力に驚きと感心を抱く。恐らくはこうなるだろうと予測していた神通はほくそえむように少しだけ口元を釣り上げ、教え子の優秀さを示せた事をそれを教えた者として喜ぶのだった。

一方、ほど良い集中力で相手との駆け引きに浸る中、小柄な体格からは想像もつかない程に腕力が強くてバランス感覚も良い後輩を目の当たりにした東雲は、いつの間にかその表情から余裕の色を消

し去っていた。正直な所、さっきから本気で後輩を組み伏せてやるべく攻めているのだが、足を払おうとしても雪風は上手く両脚の位置と重心を移動していなし、袖を掴んだ腕の動きは同じ様にして自身の袖を掴んでいる雪風の腕の力によって自由に使用させてもらえないのだ。柔道の腕前にはそこその自信もあった東雲なのだが、初戦、まして相手が生まれたばかりの少女なのに、ここまで苦戦するとは思ってもいなかった。頭に描く戦いも試合が始まってからというものの、雪風の巧みな防御によって一度も成し遂げる事ができていない。その事から少しずつ東雲は焦りと共に苛立ちを胸の中に募らせていく。

もっとも勝負事において何事も自分の思う通りに行かないというのはどこにでも有る事であり、相對している雪風だって自分の狙いを東雲には上手く封殺されている状態である。鼻っ柱の強く物言いも脳裏に浮かんだ言葉をはっきりと述べてしまう性格の雪風も決して気が乱れていない訳ではないのだが、まさに駆け引きの真っ最中である東雲と比して雪風は苛立ちを募らせる状態には至っていない。なぜならこの時、雪風はこの柔道の大会に向けた特訓の中で上司より授かった教えを、心の奥で言い聞かせるように何度も唱えているからである。

「攻撃も防御も、戦の中での駆け引きという流れの中で生ずる一時的な状況を比率の観点から指しているに過ぎない。どちらも戦の中にあっては常に必ず同時に存在している。」

今また再び雪風の身体は東雲の上半身の捻りに傾けられるが、雪風は払われないように注意しながら足をマットに突立てて東雲の崩しに対抗する。既に呼吸は心拍数と同期して間隔が短くなっており、顔のあちこちから噴出す汗は滝の様に雪風の顔面を伝って行く。袖

を掴みっぱなしの指もできれば今すぐ伸ばしたいという衝動を雪風の意識に訴えてくるが、彼女は齒を食い縛って両手の指にさらに力を込めて今度は東雲の姿勢を崩そうと揺さぶり始めた。

『でえりゃ・・・!!』

唯でさえ身体の高い東雲にはやはり効果は薄く、雪風の一声も伴った揺さぶりは東雲の腕力ですぐに封殺される。

まさに一進一退の攻防で試合の成り行きを見ている者達は手に汗を握り、瞬きする瞬間すらも惜しんで二人の戦う様を食い入るように眺める。東雲と雪風が属する駆逐隊からは必死の応援が叫ばれ、本日これまでの所では最も白熱した試合の様相を呈した。

その最中にも、雪風はひたすらに上司から教えてもらった事を胸の中で唱える。それは自分で掴み取った物ではなく他人より与えられた物であったが、与えてくれた人物が他ならぬ神通であるという事だけで、雪風は疑う事も無く上司よりの教えを声も無く連呼する。

「攻撃も防御も常にそこにある物。その比率が変わるだけで、どちらかが欠ける等という事は無い。だから攻撃は最大の防御には絶対に成り得ない。」

するとその刹那、戦の在り方に対する上司よりの言葉を意識していた雪風に反して、ふつふつと溜まっていた苛立ちに駆られた東雲は雪風の身体を薙ぐ様に強引に腕と上半身を真横に捻り、同時に薙こうとする方の足を雪風の足にあてがった。

それは明らかに足を引っ掛けて雪風を真横に投げ飛ばそうとする様子に他ならず、瞬時に会場中の歓声は鳴りを潜める。もちろん東

雲の仲間達の表情は笑みの寸前であり、雪風の仲間達は今にも悲鳴を上げそうな表情で凍り付いていた。

ところが当の雪風だけはまさに自分の足首に東雲の足が触れようとするまさにその瞬間、それまで胸の中で唱えていた神通の教えが自分なりの解釈へと変化する事を認める。既に雪風の身体は体格に優れる東雲の力任せの構成で流れ始めているが、雪風の得た彼女なりの解釈はまさに今という瞬間こそが勝負を決める絶好の機会であると示している。

「攻撃は防御には成り得ない。攻撃する際は同時に敵が常に持つ反撃の選択肢も想定して防御を企図し、防御の際は敵に攻撃一辺倒という楽な選択肢を与えない様に攻撃もしっかり意識する事。」

ここに至ってそう悟った時、雪風のゆっくりとした視界に映った東雲の足は無理を押して出てきた代物で、ある程度の姿勢の規律を失った状態での強引な東雲の攻めは今しがた得た解釈の後者を欠いていた。雪風のこの瞬間的な察知は正鵠せいこくを得ており、これまで思う通りの試合運びが出来なかった事から強引に攻めに転じた東雲からは防御の意識が完全に抜けていた。それどころかやっとの事で雪風の片足がマットから浮き、その小さな身体が真横に流れ始めた事に、思わず『よしっ!』と頭の中で声を上げている有様である。

何時の時代、どこにでもある失敗の根本に存在する物の内で特に多い物。それは気の緩みから来る油断である。例え一瞬たりとは言え、まさに東雲はこの時に油断をしていた。そして雪風が死中に活を見出したのは、まさしくこの一瞬である。

『くうお・・・!』

『ふおっ・・・!?!』

浮き上がった身体が流される最中、雪風は東雲の足絡み合った自身の足を器用に折り曲げ、外側から東雲の足に真似をするかのようにしてあてがう。するとそもその姿勢が強引な攻めによって不安定だった東雲の身体は雪風の足を支点として傾き始め、雪風と同じ方向に崩れ落ち始めた。雪風の見事な返し技が発動された瞬間であり、二人揃って絡み合うようにマットに倒れる中、固唾を飲んで試合を見守っていた全ての者達から驚愕の声が上がる。

『おおおおお！』

『上手い！ 返した！』

やがて雪風と東雲は全くの同時にマットへと崩れ、お互いが最後の氣力を振り絞って腕に力を入れたのか二人とも背中からマットに倒れた。重苦しい衝撃音を伴って倒れるもほぼ同じ体勢、同じタイミングで倒れた事から、雪風と東雲はすぐさま上半身を起して勝敗の行方を決定する呉竹の顔に視線を向ける。お互いに汗だくで大きく方で息をしながら裁定を待つのだが、この勝負は最後の最後で雪風の返し技によって東雲の身体が崩れた事、そしてその結末が同じタイミングで二人とも背中より落ちた事で結果は誰の目にも明らかなる物であった。

すなわち、攻める方に対して繰り出した返し技が成功しているのであり、試合場であるマットの隅で副審を務めている若竹や早苗は左舷側に手を上げて主審である呉竹の裁定を補助する。やがて二人の姉妹と同じ判断を持っていた呉竹は左手を天に伸ばし、勝者の名を声に変えて寥々と辺りに響かせた。

『返し技、一本！ 雪風二水の勝ち！』

呉竹がそう言った刹那、雪風はその場に立ち上がって弓を引くような格好で拳を引いて叫ぶ。足元では悔しさで唇を噛んでいる東雲

が表情を苦くしているが、そんな先輩への気遣いも忘れて雪風は喜びを声に乗せた。

『しゃああーっ!!』

この大一番と再びの番狂わせで会場中からは大きな歓声が沸き上がり、霞を除いた二水戦の少女達はまたしても仲間の躍進が適った事に抱合って喜ぶ。大会本部にてそれを見守る明石の耳には近くにいるお偉方の会話が響き、その内容がこれまた友人達を褒める物であった事から胸を躍らせた。一進一退の末に返し技で勝負が決まるという試合その物の展開も面白かったし、20センチ以上も体が離れている中で小柄な雪風が成し遂げた事もまた、先程の試合の内容の良さを引き立ててくれる。

マットの上では東雲が悔しそうに顔をしかめながらも笑みを溢しており、呉竹の合図で礼をした後、すぐに後輩の肩に手を置いてその勝利を湛えていた。

『くっそお、強いなあ。』

『ひひ、あざッス。』

『やっぱ無理はダメか。良い試合だった。こっから先も頑張るんだよ。』

『うッス!』

『ははは。返事は”はい”な。』

『あ、はい!』

気さくな先輩との会話が雪風の勝利に沸いた胸の内を一層盛り上げ、つつい試合前に上司より尻から叩き込まれた返事の仕方を忘れてしまう。東雲の優しいげな注意ですぐに返事は訂正し、深々とお

辞儀をすると二人は試合場であるマットの上をそれぞれの仲間が待つ方へと歩き去っていく。

当然の様に二水戦の少女達は大騒ぎで、雪風は戻ってくるなり姉達から歓喜の印として頭を何度も引つ叩かれ、大人しい霰や妹達からは次々に抱きつかれてその場に崩れ落ちそうになってしまう。

『こらあ・・・！ お、重いって・・・！』

激戦を終えたばかりの雪風には実力をもって仲間達の祝福を回避する事は難しかったが、ふと正面にゆっくりとした足取りで進み出てきた上司の声が響くや、雪風に群がる少女達は表情を正してそれまでの行為に終止符を打つ。

『馬鹿者が。まだ一回戦だぞ。初戦で浮かれるようではいかん。犬に油断させて負けさせるつもりか、お前等。』

いつものおっかない声と表情は、二水戦の少女達が例外なくその恐ろしさを身をもって知っている物。声が響き終わると同時に雪風に伸びた幾重もの仲間達の手は引き潮の如一斉に持ち主の身体へと戻っていき、やっとの事で開放された雪風は乱れた柔道着を直して直立不動の体勢をとると神通に試合の報告をし始める。

もちろんその結果は神通とてさっき実際に目に行っているのだが、大変に見事な勝利を得た部下の言葉として聞くのが上司である彼女なりの楽しみの一つでもあったりするのだ。まして勝利という良い結果は表情に現れておらずとも神通の胸の内をご満悦としており、普段の生活では滅多に聞く事の出来ないお褒めの言葉が雪風には返ってくる。

『戦隊長。なんとか勝ったッス。』

『ん。最後まで諦めずに、東雲の強引な攻勢を逆に自分の攻勢へと転じたのは見事だったぞ。犬。お前達も今の犬の試合を良く覚えておけ。攻撃と防御は常に同時に存在する事の良い例だ。』

スパルタ教育で名高い神通だが教えを授ける者としても彼女は一流で、雪風を褒めると同時に今の試合の要点を他の部下達に教えることも忘れていない。霞だけはやや不満げであったが、さっきまで雪風への応援と祝福で有頂天だった少女達は上司の言葉をしっかりと肝に銘じ、今しがた目にした試合を上司の教えの好例として脳裏に刻むのだった。

その後の試合は順調に進み、勝ち抜き戦である本日の試合において、徐々に柔道の腕前に定評がある者達がある名を対戦表の次の欄へと進めていく。大会本部の伊勢や日向、大先輩の浅間らは極めて平均値が高い試合が連続する事で笑みが絶えず、明石も友人達の頑張り与此れまでの所では怪我人が一人も出ていない事に表情を綻ばせる。『せっかくみんなが集まったのだから。』と言って師匠と同じく英国生まれの浅間が淹れてくれた紅茶も、絶品なその味は明石の心から怪我人への憂いを消してくれた。視界の端に映る、飛行甲板の一角で集まって時折笑い声をも上げている神通とその部下達の姿も微笑ましい。龍驤艦の飛行甲板上に木霊するたくさんの応援の声もヤジが混ざるような下品さは皆無で、競技会形式とは言えど艦魂達の良き催し物が続けられている事を素直に喜んで見守るのだった。

そして明石の友人の中でも今回の大会参加者である霞と雪風の躍進もまた留まる所を知らず、なんとなんと二回戦においても各々が持ち前の能力を存分に発揮して勝利をもぎ取る。なまじまだまだ10代後半が関の山という幼い容姿を持ち、揃って小柄な体格である

霞と雪風が、20代で身長もそこそこにある先輩方から一本判定を取っていくその様子は、次世代型駆逐艦である彼女達の分身を鑑みると帝国海軍の将来に一筋の光を与えてくれる。それになんと言つても「元より不利な負け戦を勝ち戦にする」という物事の展開には、艦魂に限らずとも何やら燃えてしまう物である。故に霞や雪風が二回戦に望む際、駆逐艦の部下を持たない明石を含んだ大会本部の偉方や呉軍港の雑役船舶の艦魂達からは二人を応援する声が大歓声となつて上がるようになっていた。

それは彼女達が属する駆逐隊、次いで上級部隊の評判とすぐさま結実して行き、明石の耳にはそれを示す伊勢と浅間の会話が響いて来る。

『あの若い二人、とてもよく鍛えられてて感心するわね。敷島さんしきしまでもあそこまで鍛えられる物ではないわよ。一体どこの隊に所属してるの、伊勢?』

『はい、浅間さん。あの子達はどっちも二水戦所属です。戦隊長は神通ですよ。左舷側のアそこで腕組みしてる奴です。』

『まあ、そうなの。それにしても、神通はああやって見てみると敷島さんの若い頃にそっくりね。私達が日本に來た頃の敷島さんも、ああやって腕組みをしてムスツとした表情で仁王立ちしてたものよ。ふふふふ。さっきあの雪風って子のお尻を蹴飛ばしたのも、むかし金剛を教育してた時の敷島さんと全く同じじゃない。でもきつと敷島さんと同じ様に、怖いけどとても優秀な教官となってるのね。あういう子達を育てられてるのなら間違いないわ。』

どうやら霞や雪風の師匠筋に当たる神通は好評を得ているらしい。そも艦魂社会でもその短気で峻烈な性格からかなりの嫌われ者である神通。彼女と大の仲良しとして付き合う明石も頻繁に困らされ

たりするのだが、部下達の奮闘によって神通の人物としての株が認められたのは仲良しとしては嬉しい限り。しかもその事を声に変えたのは明石の師匠と同年代の者である浅間だったという事もあって尚更だ。

その事から明石は神通への第三者達の眼差しが少しだけその色合いを変えた事を喜ぶと同時に、そのきっかけでもある霞と雪風の奮闘を心の底から感謝するのだった。

だがちょうどこの時、明石が優しげな笑みを送っている二水戦の面々とはマットを挟んで逆側の甲板端に陣取るとある駆逐隊では、大会での注目を集めている霞と雪風にとって最大の障害となる者が数人の仲間に囲まれて試合に臨む為の準備運動を行っていた。腰を深く落として屈伸運動をするその背中を仲間が押し、緊張の度合いを確かめようと声を掛ける。それに対して返って来るのは半笑い気味の落ち着いた返答であったが、背中を押す女性は今より試合に挑むその人物が緊張感を抱いていない事を別段不思議な事だとは思わなかった。なぜなら彼女こそ、これまでずっと呉鎮所属の駆逐艦の艦魂達の間で最も柔道の腕前が秀でた人物であったからだ。

『綾波^{あやなみ}も東雲も負けちゃったけど、落ち着いて行けば大丈夫だよ。』
『ほっ、と・・・。へへへ。なあに、久々に面白い試合ができそうだからワクワクしてるだけだよ、初雪^{はつゆき}。今回の大会を企画した甲斐があったってモンだ。』

その言葉に初雪と呼ばれた女性がフツと口元を緩めて笑みを作る中、それまで屈伸運動をしていた女性は音も発せず立ち上がった首を左右に捻る。響きの良い乾いた音を放って首を回し、彼女は試合場であるマットの向こう側へと視線を送った。そしてその瞳に映

るのは、自身と同じ真珠色の柔道着を身に付け、陽に焼けた麻色の肌を顔に覗かせる少女。その背後にはかつて自身が上司と仰いだ鋭い釣り目を持つ人物と、艦魂としては生まれたばかりである10代後半の容姿を持つ少女達が拳を握って見守る姿。麻色の肌の少女も含め、彼女達は緊張感を滲み出す幾分強張った顔をしている。

だが無理もない。なぜなら今から彼女達が挑む相手は、本日の大会において掛け値無しに最強の敵であるからだ。

やがて審判の呉竹がマットの中心に進み出てこれから始まる試合における二人の選手の名乗りを上げ、名を呼ばれた者がマットへと足を進めて行く。

『右舷側、第11駆逐隊、吹雪上曹！
左舷側、第18駆逐隊、霞一水！』

『来たー！ 吹雪姉さん！』
『吹雪姉さん！ 頼んだよお！』

瞬時に龍驤艦の飛行甲板の上には歓声が沸く。もちろんそれは下馬評で文句なしの一位と目され、今回の大会での優勝候補筆頭がマトに上がったからである。

緩く唇を噛んで渦巻く緊張を飲み込んでいる霞の眼前に現れた相手は吹雪。決勝戦前の3回戦目にして、呉鎮最強の栄冠を目指す霞は今大会最大の試練へと挑む事になったのだった。

第八二話 「最強を目指せ！／其の八」

大歓声を背にして僅かに両手を広げながらゆっくりとマットの中心に歩みを進める吹雪^{ふゆき}。首の後ろで小さく結った髪は彼女の輪郭に精悍^{せいぱん}さを与え、人懐っこい顔立ちの大元である丸い目を細めてじつと霞^{かすみ}に向けたまま、彼女は少し前屈みの姿勢で近づいてくる。見透かした様な瞳を細めて作るその不敵な笑みも手伝い、霞は生まれて初めて柔道の相手に対して不気味さとそれに伴う恐怖を抱いた。それも上司より竹刀を打ち込まれるのを尻を突き出して待つ際に抱く高鳴るような恐怖ではなく、内海である瀬戸内の岸にうちよせる静かな波を思わせる恐怖だ。

一筋の冷や汗が額を流れていく中で霞は思わず生唾を飲み込み、ざわざわと胸を中を駆け巡っていく気味の悪さに声もなく抗う。何もそれは吹雪の身長が小柄な自分より比して大きいからでも、一回戦で攻守において極めて高次元で両立している柔道の腕前を見て臆病になっているからでもない。それだけ吹雪という先輩の全身から立ち昇る猛者の雰囲気^{きふう}が、まだまだ生まれたばかりの艦魂である霞の心を握りつぶさんとしているのだった。

だがその時、吹雪に対する声援があちこちより響く中で霞の背後より怖い上司である神通^{じんつう}の声が遠く聞えるや、すぐにそれに続いて彼女の仲間である少女達による必死の応援する声が放たれてきた。

『戦場に足を踏み入れた時から戦は始まるんだぞ、お前達。猿はもう戦ってるんだ。そら、ちゃんと応援せんか。』

『あ……。か、霞さん！ 頑張ってください！』

『霞姉さん！ 落ち着いて行くんや！』

『霞先輩、勝てますから！ しっかり！』

『猿ー！ テメエ無様な試合すんじゃねーぞ、オラァ！』

ゆっくりと振り返った先にて霞の瞳に映るのは、相変わらず腕組みをして睨むように眼差しを向けてくる上司と仲間達の姿。8 駆を欠いている今の二水戦では最年長者たる霞には、後輩達の必死の応援に、唯一人の妹である霞の励まし、そして大嫌いな雪風の怒号にも似た声が矢継ぎ早に放たれてくる。霞は眼前の強大な相手に胸が高鳴っていたが、ふとそこに認めた一人一人の仲間達の顔が彼女の心に規律を与えていった。

怖いけど頼りになる上司に自分と違って何をやってもトロい妹、恥も外聞も無く大きな声を上げて声援を送る陽炎型かげろうの後輩達、これまでの大会の進捗で気持ちが騒いでいるのか、『負けちまえ！』等と自分の躍進を阻害する言葉を珍しく放たなかった雪風。それら全てが霞にとつての家であり、いつも居る場所、二水戦である。当たり前の物として過ぎて行くおっかない日常と、腹の底から大嫌いな雪風との喧嘩に明け暮れて苦労ばかりの日々であるが、そんな日々と伴われる思い出こそが霞にとつての二水戦であり、何物にも変えがたい彼女の大切な居場所であった。

マットの上で相対している敵は身の丈も積んだ経験も全て自分より上回っている強大な敵だが、霞はこの時になぜ自分がこうして強敵と戦おうとしているのか、その理由を改めて思い出す。雪風と一緒に言い出す事になったのは不本意であったが、上司の下へ赴いて頭を下げた時、いつぞやのお洗濯をした時にその場を同じくしていた霞からこれまで耳に出来なかった上司の本心を聞いた時、彼女は神通を始めとする二水戦という居場所の為にその身を捧げようと強く願った。全ては二水戦という名の居場所の為に、と。

刹那、霞は深い深呼吸を放ちながら、ゆっくりと視線を背後の仲間達から眼前にて不敵に笑っている吹雪へと戻していく。その瞳には自らの願いを適える為に心の隅で静かに燃え上がらせた闘志の色が帯びており、それを認めた吹雪は見透かすような目を向けながら

もほくそえむのをやめる。これまでになく霞の身体から放たれる、殺気にも似た静かな雰囲気を感じ覚的に認めたからだ。

『ほほ。良いツラ構えになったな。』

嬉しそうにそう言うのと吹雪は胸の前に両手を持ち上げて指を鳴らし始める。乾いた感じの響きの良い音は片手になっても放てるらしく、吹雪が持つ片方の手では親指が人差指や中指を上から抑え付ける度にパキパキと耳通りの良い音が木霊した。

『いかにも隊を背負ってるって感じだね。ま、こっちも特型姉妹のメンツが懸かってるんだ。手加減無しの本気で行かせて貰うよ、ちっちゃいの。』

『はい。願います。』

吹雪の迫力も伴った言葉にも霞は静かに燃える心を揺るがす事はなく、強く結んだ唇と少しだけ尖がった眼差しで声を返す。その顔には既に恐れはなく、少女ながらに戦に挑む事を心に決めた事を示す霞の表情は、吹雪に彼女が精神的な面において自分と同じ立ち位置に居る事をよく教えてくれる。久々に目にする事のできた、仲間や姉妹への想いを背負って立ち向かってくる駆逐艦の艦魂の顔だった。

やがて審判である呉竹くれたけの放つ合図の声に従い、マットの上に相対した吹雪と霞は大会本部、そしてこれから戦うお互いへと向けて礼をする。吹雪はさしもに今回の試合に参加している特型駆逐艦のネームシップである為か、彼女を応援する声は礼を交歓する間も常に甲板のあちこちから矢継ぎ早に放たれており、その内容も勝利を期待している物が大半であった事から、いかに吹雪がその強さを広く認められているが良く示されていた。

おかげで霞を応援する少女達の声は次第に掻き消されて行くもの

の、受け取る側の霞はその事に不安を抱く様子は無い。互いに礼を終えて目を合わせるや、吹雪とほぼ同時に霞は右足をやや後ろに下げて半身になり、緩く曲げた指で構成される両手を胸の前で伸ばす。審判の呉竹も二人の準備が終わった事を確認し、声を張り上げて本日注目の対戦の火蓋を気って落とした。

『おし、はじめ！』

熱が籠る両選手への応援が龍驤艦りょうじょうかんの甲板を染める中で、共にそれぞれの想いを背負って戦いに挑む霞と吹雪は周囲の喧騒とはうって変わって落ち着いていた。霞は得意の飛び跳ねるような足さばきで距離を詰めたり離したり、右から左へと身体を素早く流してみたりと小さな身体を目一杯動かし、対する吹雪はすばしっこい霞の動きを追う形になりながらも苛立ちを募らせずにじっと相手の動きに目を凝らす。時折、霞が半歩ほど踏み出して吹雪との袖の取り合いを演じる事はあるが、双方とも目にも留まらぬ速さで相手の襟や袖を握る手を牽制し、どちらも両手で相手に組むまでの体勢には至らない。ましてこの吹雪は霞に比して頭一つも違う程に身長が高く、それに伴って腕や脚も霞よりずっと長い為、霞としてはとても攻め難い相手であった。

するとその時、それまで上半身を起してほぼ直立の形で構えていた吹雪が突如として腰を落とす。小柄な霞が前屈みで構えているにも関わらず、吹雪の視線の高さは霞と同じくらいの高さまでになる程だ。

『む。』

突如として構えを変えた吹雪に、霞は何かの攻撃の兆しとみて吊

られるように足に力を込める。霞自身も得意の突進の際にこのような姿勢をとるので、吹雪が低く構えた意図は瞬間的に察知できたのだ。そして吹雪は霞の予想通りに長い足を前後に大きく開き、霞を目掛けて跳びかかるように前進して腕を伸ばしてきた。もとより体格と腕力に差が有ると心得ている霞は身構えながらも持ち前の素早い足さばきで吹雪の攻撃をかわそうと企図していたが、吹雪の腕は予想外の速度で霞の腕へと伸びてくる。

『せいや!』

『むお・・・!?!』

これまで対戦してきた先輩方とは一味違う吹雪の突進は、自慢の足を駆使した霞の回避を許さず、残像すらも見えない吹雪の右手は霞の前に伸ばしていた左手の袖を瞬時に掴む。

は、速い・・・!

そう霞が脳裏で呟く間も吹雪の流れるような身のこなしは停滞せず、霞が咄嗟に吹雪の袖を取るのも構わずに胸を合わせるような格好で身体を寄せてきた。

体格にて劣る霞にとっては危険な状態である。霞はすぐさま吹雪の袖と襟を掴んで腕を伸ばして身体を添わせている吹雪へ抵抗するが、腕力も去ることながら柔道の経験が段違いである吹雪はそんな霞の動きなぞ手に取るように解かっていた。突っ込んだ勢いをそのままに吹雪は自身の右足を霞の前に出ている左足に外側から引っかけ、両腕をぐんと振って霞の身体を左側に傾けようとする。

素早いその攻防に目を釘付けにしていた見学者達の中、ふと誰かが叫んだ。

『小外刈だ!』
いそとがり

霞を応援していた二水戦の少女達はその声に驚く。その技は彼女達が知る中で、いま眼前にて技を仕掛けられている霞が最も得意とする物なのだ。普段の武技教練では何度仕掛けても霞には通じず、逆に何度も彼女の小外刈によって倒されてきた。きっと一級品に違いないであろうその技を、いとも簡単に霞が目の前で仕掛けられつつあるのは彼女達にとっては驚愕の一瞬。阿鼻叫喚の様相を呈するのも忘れ、少女達は霞の今にも投げられそうな姿を声を失って眺めるだけだった。

しかし、霞も得意の小外刈が吹雪の攻める手段であった事で、無意識の内に彼女の細い左足は動いていた。それは二水戦の中でも彼女と伯仲した柔道の腕前を持つ雪風の存在があったからで、雪風の最初の試合と同様に霞は武技教練の試合で雪風より何度か返し技でこの技を封殺された事があるのだ。「猿」の渾名に違わない身軽さと器用さを持つ霞は、吹雪の右足が絡んだ自身の左足を引っっこ抜くようにして振り解き、逆に吹雪の右足の外側から左足を巻きつけた。

『お・・・！』

霞の咄嗟の返し技は吹雪にも意外だったらしく、足の掛かり具合も良い事から彼女はそれ以上霞の身体を腕力で傾けようとはせずにすぐさま右足をマットの上に下ろした。ただ踏み込んだ勢いがそのままである事から吹雪はつんのめるような姿勢となり、霞はその一瞬を見逃さずにすぐさま横へと回って吹雪の身体に覆い被さる。いかに体格が違えども横から攻められるのは柔道ではかなり不利だ。背の低い霞が吹雪の背中に乗って押さえつける体勢になり、それまで吹雪を応援していた歓声に悲鳴の色が滲んでいく。

だが吹雪は上から押さえつけられながらもすかさず片手を霞の胸座辺りへと伸ばし、バランスを欠いた霞を道連れにしてマットの上に突っ伏してみせる。もちろん経験豊富な吹雪は一緒に倒れる事で

霞の攻めが成立していない事を示したのであり、審判の呉竹やマトの隅で副審として試合を見守っている若竹わかたけと早苗さなえは判定の声を上げなかった。そして自分より体格が小さく軽量である霞は、続く寝技の攻防ではうつ伏せに丸くなる吹雪をちつとも攻める事が出来ない。これもまた吹雪には計算済みであった。

『くぬっ・・・！』

なんとかうつ伏せになった吹雪を押さえ込もうとする霞だが、小さい身体の彼女は吹雪を満足な体勢で抑え込む事は出来ず、上になっている吹雪の帯と奥襟を掴んで仰向けにしようとして試みるも自分より体重が重い吹雪はビクともしない。次第に焦りの色合いが表情に出始める霞は大粒の汗を掻いており、彼女が寝技で吹雪を攻める事にかんがりの労力を注いでいるのは傍から見ても一目瞭然であった。

『霞姉さん！ 頑張るんや！』

『ちつくしよ、やっぱダメか。猿は寝技は苦手だからなあ。』

霞の必死の応援の横から雪風の冷静な寝技評が響いてくる。これまで何度も霞と対戦する機会のあった雪風であるから、霞が寝技で吹雪相手に苦戦するのは先刻お見通しであったのだ。

霞も懸命に腕を取ったり身体を揺すったりしていくが、吹雪はうつ伏せで丸くなった姿勢をほんの少しも崩さずにただ時間のみが過ぎていく。その内に審判の呉竹の声が放たれ、吹雪は計算通り技の掛け損なった事で生まれた危機を帳消しにしてみせた。

『待て！ 両者、中央へ！』

それは寝技状態で一向に決着がつきそうに無い事からお互いに立ち上がって試合開始の時と同じく定位置からの再開を促す物で、寝

技とは言え霞による一方的な攻勢が遮られたのと同時に、吹雪としては不利な状態を脱した意味合いを含む。故に唇を噛んで眉間にしわを寄せる表情の霞が立ち上がるのに対し、吹雪は汗を拭いながらも不敵に笑ってゆつくりと立ち上がった。

もつとも判定として霞と吹雪の双方に有利な判断が授けられた訳ではないから、試合としては未だにどちらとも優劣が得られていない五分の状態である。霞も、彼女を応援する仲間達もすぐに頭を切り替え、再開される袖の取り合いに意識を集中させて呉竹の合図を待った。

やがて胴着の乱れを直し終えた吹雪が身構えた事で呉竹は再開を命じ、再び二人は足を使ってお互いの袖や襟に手を伸ばす駆け引きを始める。

その一方、部下の戦いぶりを腕組みをしたまま一言も発せず眺めている神通の横では、彼女を姉と慕う最上もがみが霞の戦いぶりをハラハラしながら見守っていた。神通と親しい最上は義理もあって神通の部下の霞を応援しているのだが、体格的にも先程の寝技の攻防でも相手より優れた所を見せる事が出来ない霞を瞳に映すと、どうしても最上の脳裏には「負け」の二文字が過ぎってしまう。目の前で応援している少女達の気持ちを考えるととても口には出せない言葉ではあるものの、最上の中に渦巻く霞への心配は刻一刻とその色を濃い物にして行った。

そんな事から思わず最上は隣にいる神通に対し、視線を送る事も無く霞の戦いぶりを案ずる言葉を放つ。しかしいかにも動揺している感のある最上の声とは裏腹に、返されてきた神通の声はいつもの冷静さが籠った彼女らしい声色であった。

『か、霞ちゃんは大丈夫でしょうか、神通中尉・・・？ 吹雪を相

手にしては上手く攻めれてないみたいですよ……。』
『ふん。戦という物はそもそも片方の思惑通りに進む物じゃないさ、最上。それに見ろ。さっき吹雪に捕まった事を警戒してか、猿の動きがより機敏になった。あれだけ汗を掻いててもあのくらいに動ける所を見ると、猿の体力にはまだまだ余裕はある。ま、そういう風に鍛えてきたんだがな。』

あまりにも落ち着き払った神通の声は、歓声に埋め尽くされる龍驤艦の飛行甲板の上ではある意味で場違いな感じさえ漂う。ちよつと驚いて声の主に向ける最上の瞳には、表情どころか釣り上がったその瞳の大きさすらも全く変えていない神通の横顔が映る。瀬戸内の穏やかな潮風に揺られる長い前髪の狭間、神通の目は涼しげな晴天をそのまま投影したかのように澄み切っていた。

最上はそんな神通の横顔に、彼女が部下の心配をちつともしていないのかと思い、つい今しがた放った神通の言葉もそんな内容であった事を改めて思い出して試合場に目を向ける。

マットの上では相変わらず霞と吹雪の双方が素早い足さばきでお互いの距離を詰めたり、横に回り込んだりとしており、時折二人が互いの袖を取り合おうとする腕の動きもまた燕が空中を突っ切るかのような速さで行われていた。しかしさっきのように吹雪の突進に今度の霞は捕まるような事は無く、ひらりひらりと横に回りこんで側面から攻めようとする。どうやら背も高く力の強い吹雪を相手に正面からの組み合いは危険と判断したらしく、寝技に移行する前の時と同じ様に、霞は吹雪の軸線を逸らした上で身体の側面から組む事を狙い始めていた。吹雪にとってもこの霞の攻め方の変化は少し予想外だったのか、常に半笑い気味であったその顔には大粒の汗と供に死地に赴いたかのような真剣な表情が浮かび上がっている。その内に何度目かの突進をまたしても霞に回避された吹雪は吐き捨てるような呼吸と供に声を放ち、無意識の内に試合を見守る者達に自身が焦り始めている事を示すのだった。

『ハア、ハア、クソ……。すばしっこいな、ハア、ハア……。』

肩で息をしている吹雪は既に腰もだいぶ浮き上がり、前に伸ばす両腕も腰と胸の間の辺りまで下がっている。汗びっしょりなのは霞も同じで、麻色の頬をだらだらと流れていく雫を胴着の袖で拭うが、霞の構えは試合開始とほとんど変わっていない。少しかだけ前屈みの姿勢で半身になり、顎の高さまで挙げた両腕を相手の方向に伸ばす。それは彼女の上司である神通の言葉が示す通り、体格の大きな吹雪を相手に戦いつつも霞は体力の消耗においてほぼ互角かそれ以上である事を物語っていた。

その差に気付いたのは吹雪を良く知る彼女の妹達も例外ではなかったらしく、たまたま付近にいた吹雪の妹達の会話が最上の耳へと届いてくる。

『いやあ、あの霞って子にはたまげた。もう3試合目だっていうのに、全然姿勢が乱れないや。』

『吹雪姉さん、段々と攻めあぐねて来てるね。側面を取られるのが怖いから、突っ込むのも躊躇し始めてる。ほら、踏み込みの足がもう半歩くらいしか出て行かないもの。』

吹雪の実際の妹達までもが、段々と吹雪有利の形勢が変わって来ている事を声に変えていた。最上の瞳に映るのは依然として体格の違う選手達の試合であるも、神通や吹雪の妹達の言葉を勘定すると思っただけ以上に霞は善戦しているらしい。もはや最上の胸の内からも心配の色は消えかけており、入れ替わりに芽生え始める安堵の念につられるようにして彼女は笑みを神通に向ける。

『神通中尉！　もしかすると・・・！』

『騒ぐな、最上。まあ、猿はよくやってるように見えるのなら正解だ。』

『す、すごい、霞ちゃん。あんなにちっちゃいのに・・・。』

奮闘著しい霞を確認できた最上は感動し、無意識の内に胸の前で拍手を送りながら霞の戦いぶりを褒める。生来が神通と違って明るい性格を持つ彼女はさっきまでのはらはらした展開が緩和できた事で素の気持ちを浮かび上がらせ、艦魂としての世代や実力、体格に経験までもまるで違う吹雪を相手に形勢変更を強要しつつある霞を讃える言葉を放つ。

『霞ちゃん、天才ですね・・・。あの小さくて細い身体に、こんな才能があるなんて・・・』

最上の呟くような声に、それまでずっと正面だけを見てきた神通の瞳が僅かに隣の最上の方向へと傾く。二水戦旗艦として、艦魂社会における上司の役割を頂いている者として、戦隊部外者である最上より手塩にかけて育てた部下が褒められる事は本来なら彼女の無上の喜びであるのだが、この時の神通は含みを持たせた声色で最上が放ったとある言葉を復唱した。

『ふん。天才・・・か。』

言い終えるやすぐに神通は視線を眼前の霞と吹雪の試合へと戻す。怒りの感情が籠っていなかったその声は最上に何か失言があったのかと意識させるような事は無かったが、どこか自嘲気味な半笑いで口にした事が最上には気になって仕方ない。首を傾げてその言葉の裏に考えを巡らすも普段から寡黙である神通の考えは最上には読む

事が出来ず、彼女は教え子の試合を静かに見守っている神通の邪魔をせぬようにそつとその事を問うてみた。

『どうしたんですか、神通中尉？』

『・・・・・・・・・・』

最上の問いかけを受けて少しの間、神通は返事をしなかった。

鋭い釣り上がったその瞳はおっかない雰囲気を感じているが、神通に慣れている最上から見るとそれは彼女の機嫌が最上の声を受けて斜めに傾いている訳ではない事を示している。それにこのお人はミリ単位程しか気の長さを持っていないので、もし仮に怒ったとすれば当に最上には怒号が返ってきている。数日前の鈴谷^{すずや}という妹の分身にて最上が見た、かつて艦長として神通が迎えていた木村大佐との一悶着はその最たる例だ。

すると神通の気の短さを考慮している最中の最上に、当の神通はふいに組んでいた腕を解すと首に片手を添え、響きの言い音を放って首を鳴らしながら言った。

『猿の体力は別に才能なんかじゃない。いかに吹雪みたいな強敵と相対していても体力が維持できてるのは、こんな私の下でも歯を食い縛ってついてきて、普段から手抜きをせずにひたすらに頑張った猿が得た当然の代物だ。最上。』

『え・・・・・・・・？』

短い言葉を返すのみで最上は声を失ってしまう。それは神通の言った事に目の前で必死に吹雪と戦っている霞を褒めるような内容であつたからでは無く、『こんな私』とどこか自分を蔑むような物言いをしていたからだつた。

ただ、最上としてその一言に込められた意味合いを理解できない訳ではない。げんこつ必須のスパルタ教育と共に金剛^{こんごう}という師匠より

受け継いだ、峻烈で非常に短気な性格の神通。同じ第二艦隊に属して彼女と親しい最上は、普段から『私の思う通りの戦をする。反抗は絶対に許さん。』と口にして部下達や戦隊部外者に厳しく当たる神通を常に目にしてきた。その矛先の主目標はもちろん、いま眼前で死闘を繰り広げている霞を始めた少女達で、まだ生まれたばかりの艦魂であるという事も一切考慮せずに神通は竹刀片手に部下である少女達の教育に勤しみ、それに異議を唱える者には喧嘩沙汰に発展するまでに怒りを示す。それどころか二水戦という戦隊の障害になるものなら第二艦隊の艦魂達を束ねる愛宕あたごや高雄たかおに対してでも平然と牙を剥く程であり、持ち前の度胸から五十鈴いすずのような直接の先輩に対しても遠慮せずにかかっていく。こんな性格であるから二水戦と供に同じ第二夜戦隊を組んでいる七戦隊の最上を始めとした姉妹達は神通の困った性格の火の粉を浴びてしまう事も間々あり、先日の鈴谷を含んだ妹達は他の艦魂達と同様にこの神通を毛嫌いしていた。最上としては頼りになる姉と見る事が出来るのだが、余りにも我が強すぎる上に意志の強要を暴力で成す事を屁とも思っていない神通に、誰しもがそんな接し方をする事ができないのは無理も無い話である。

もっともそれに起因する言動を本人の前で取る事は彼女の持つ鉄拳の恰好の標的となってしまう為に、先日の鈴谷の様に当たり障りの無い態度で接する事が当たり前である。だから最上は、この神通が「周りの者達に自身がどう思われているか」など知りもしないのだろうと思っていた。

だがそれは違う。

既に15年以上もこの世を生きてきた先輩である神通は、自分の性格も、それによって周囲に抱かれる感情も百も承知しているのだ。その事を思い知る最上の前で、霞とそれを応援する少女達を瞳に入れながら神通はさらに声を放ち、知って知らずか最上の神通に対する理解が間違いではない事を確認させてくれた。

『ふん。・・・私がこんな性格なのは知ってるだろう？ 私は猿も入れたあいつ等に両手を上げて好かれる様な教育なんかしてはいないし、嫌われるのも承知で厳しく鍛えてきたつもりだ。嫌な事もあっただろうし、辛いと思った事も何回もあっただろうさ。でもそれを耐えれたのは才能なんかじゃない。あいつ等の若さと崇高なガムシヤラさ、そして私みたいな奴でも上司と仰いでくれた全員の気の良さだけなんだよ。最上。もちろん一人一人の個性や長所みたいな物は有るし、それを上手く使った生き方を与えるのも他の戦隊長の奴等にはできるんだろうな。だが私が求めた・・・いや、こんな私に許された唯一の二水戦の在り方はこれだけなんだよ。ただひたむきに励む気の持ちようと、血の滲むような努力の積み重ねだけだ。二水戦所属として生きるだけなら、才能なんかいらぬ。私はそれでも帝国海軍最強の部隊、花の二水戦を作ってみせる。』

『神通中尉・・・』

どこか自分に言い聞かせるように声を放つ神通を、最上は静かにみつめる。部下の奮闘を目の当たりにして彼女なりに何かを決意したのだろうか、長い前髪の奥で光る釣り上がった瞳が一瞬鋭くなるも、そこにはこれまで最上も見た事の無かったほのかな優しい色合いが滲んでいた。先輩方からは「呉鎮の大うつけ」と蔑まれ、かつての部下達からは「部下をも殺す鬼」と忌み嫌われ、同年代の仲間達からは「解体候補の残りカス」と揶揄されながら生きてきた神通なりの二水戦に懸ける想いを、最上はこの時に初めて知ったのだった。

やがて試合場での声援が大きくなるのに合わせて、神通は声援の真ん中で戦う霞や、応援する部下達と同じ色合いに瞳を輝かせて口を開く。

『私達二水戦に天才はいないし、必要も無い。だが二水戦こそが帝

わたしたち

国海軍最強の戦隊だ。』

歓声に掻き消される神通の声。正面に位置するマットの端に並んで声を張り上げる少女達に聞えぬように小さめの声で言ったのだろうが、間近にいた最上にはしっかりとその声と込められた力強さが伝わっていた。

そして上司の神通が彼女なりに決意を改めていたその眼前にて、神通と同じ色合いに瞳を輝かせた霞は、疲労の激しく足さばきが停滞した吹雪に一足飛びに間合いを詰めていた。これまでにない歓声が霞の動作によって放たれ、吹雪がハッとして霞の姿を疲れた視界の中で探す刹那、吹雪の袖と胸座には陽に焼けた麻色の肌を持つ手が襲い掛かり、次いで吹雪の視界一杯に霞の顔が広がる。

『うあ！！ クソッ・・・！』

『どおりやああ！』

電光石火の勢いを持つ霞の身体が吹雪に寄せられる。まさにこの時、霞は最強の相手に対し、自身の思う通りの体勢で捉える事に成功したのだった。間髪を入れずに霞の細い左脚は吹雪の前に出ていた右足に外側より巻きついて裏から払い、吹雪の身体は後ろへと傾いていく。試合開始時には吹雪によって逆に仕掛けられたその技を、試合を見守る見学者の全員が瞬時に思い当てる。その中でも最も霞を知る実の妹の霞は一番最初に意識の中にその技の名を浮かび上がらせ、息を飲む展開が続いていたこの試合の最大の局面を目にして真っ先にその名を声に変えるのだった。

『小外刈！ 霞姉さんの小外刈や！』

第三話 「最強を目指せ！／其の九」

それはほんの一瞬だった。

吹雪ふぶきの顎の輪郭の最も下側から伝う汗の雫が落ちた瞬間、見学者の中の何人かが瞬きをした瞬間、腹から声を出す為に目をつむっていた霰あられが瞼を上げた瞬間、そして獲物の動きと霞かすみの静かに打つ心臓の鼓動が重なったまさにその瞬間、猫科の動物の様に足をしならせた霞は銃口から飛び出す銃弾と化して吹雪の胸を目掛けて詰め寄り、踏み出した足が地面に着く前には早くも彼女の両手は吹雪の袖と胸むな座を握っていた。

『うあ！！ クソツ・・・！』

身体全体どころか呼吸ですら疲労に支配されつつあった吹雪は完全に反応が遅れてしまい、霞の顔が視界一杯に広がる頃になって自身の袖や胸座に伸びる霞の腕を取りに行く。だが既に時は遅く、霞の腕を掴む前に吹雪の身体は袖と胸座に伸びた両腕に押される形で後ろへと退き始めた。試合開始の頃は疲労も無かった事から霞と同じくらいの目線で戦う吹雪の姿勢は強力な霞の突進を受け止める為に重心を低くした物だったが、滴る汗と規律が乱れた吐息は吹雪の意識からそんな対策を滲ませており、吹雪の上半身は甲板とほぼ垂直の状態となり腰の位置も浮き上がってしまった。吹雪と霞の分身である駆逐艦の事情では人間達の間で盛んに用いられる「トップヘビー」の状態その物で、重心が高い事から波の動揺に負けて転覆という事態になる事は帝国海軍の駆逐艦の中では人間も艦魂も最も気を使っていた事。それをこの時、霞のすばしっこさと豊富なスタミナに集中力を乱していた吹雪は完全に思考の中から欠落させていた。そも体格に差がある事で吹雪の重心は何もしなくても霞より高いのであり、全身バネの如き勢いで突進する霞を相手にする際

は絶対に必要な対策だったのである。

今更ながらにその事を脳裏に過ぎらせる吹雪であるが、既にそれを履行する時期は完全に逸している。

吹雪を始めとした特型駆逐艦の姉妹達には悪夢として記憶される5年前の第四艦隊事件。

波浪で参加艦艇が軒並み重傷を負ったその惨劇を彷彿とさせる、霞という大波が既に彼女の身体を屠ろうとしていたのだった。

ガクンと勢いに負けて仰け反る身体に吹雪は必死で力を込めるが、次いで前に残っていた右足が何かに密着されて払われていく事に気付く。もちろんそれは、麻色に輝く肌で成る霞の左足だ。

『どおりやああ！』

『ぐ・・・！』

突き飛ばすような勢いで倒れ始める吹雪は左足一本での姿勢維持を試みるが、霞の渾身の押しは勢いが激しすぎた。全体重を預ける様な突進が受け止められる筈も無く、すぐに吹雪の左足の膝はカクンと曲がって支えの役目を終えてしまう。その一瞬は吹雪の妹達を地獄に引きずり込むには十分であり、逆に霞を応援する仲間達や見学者の一部の連中は悲鳴とも歓声ともつかない叫び声を上げ、龍驤りゅうじょうの飛行甲板は興奮と歓喜と慟哭が入り混じったるつぼと化した。

『あぐ！？』

だがその時、これまで吹雪の身体を全力で押す霞の力を支えていた右足が突如として支点を失い、マットに食い込んでいる筈の霞の右足は滑る様に流れて霞の身体から力を急速に失わせた。ほんの一瞬の出来事だが吹雪と霞はその事にハッとして、お互いの姿勢において唯一の変化点である霞の右足に視線を向ける。するとなんたる

事か、不幸にも霞がつま先を食い込ませた部分は試合場を成す繋ぎ合わせたマットの繋ぎ目に程近い場所であり、飛行甲板の上に敷いているだけであった事から霞の踏ん張りに耐え切れずにマット自身が横滑りしてしまっていたのである。

唯でさえ体重の軽い霞の身体は突進の力を失うのもまた早く、それまで一貫して吹雪の身体を後方に押していた霞の突進力は前後の方向から下方向に逸れ始めていく。霞としてはまさに予想だになかった不幸で、吹雪の右足に巻きつけた自身の左足を添えるのがやっとの状態である。そして後輩のこの一瞬の乱れを、絶体絶命の危機に瀕して遅まきながら再び集中力を研ぎ澄ませていた吹雪が逃す事は無い。既に膝も曲がってしまっている左足をしっかりとした支えにする事こそできないが、元来が体格の面で霞を凌ぐ吹雪には左足のほんの僅かな支え具合でも、身体を支持していたただ一本の右足を失って宙に浮いているに等しい状態の霞を操る事など造作も無い。

『けえい！』

『うあ・・・！』

砲声の如き一声は放って吹雪が腕を曲げると霞の身体はいとも簡単に、お互いの足が絡みつく方向へと流れて行く。試合開始時にも見せた吹雪の巻き込む様な腕の動きがまたも発動された。しかも完全に姿勢の維持を失っている軽量の霞であるから分が悪い。背を向けてマットへと崩れ落ちる吹雪の真横へと霞の身体は流れ、それに合わせて吹雪は身体を腰の力でぐると捻って背中ではなく側面よりマットへと落ちる体勢になろうとする。またしてもミスをかバ―できる能力に秀でた吹雪の奇策であった。

『おおー！！』

『ナイスだ、吹雪姉さん！』

『あかん！ 霞姉さん！』

『さすがに上手いや、吹雪姉さん！ 寝技勝負なら有利だ！』
『猿・・・！ クソ、なんだってこんな時にマットが動くんだよ！』

お互いの陣営から批評も混じる声上がる中で、段々と流れていく身体に危機を募らせる霞。その脳裏にはこのまま推移しても悪くてまた五分の判定が下されるだろうとの予測と併に、その後続く寝技の攻防では開幕時と同じく自分は今術が無いだろうという前途がありと描く事が出来る。同じ内容は既に歓声の中にも混じっていたが、実際にここまで吹雪と相対してきた霞はその事を肌身を通して思い知っているのだ。足も腕も吹雪は長いし、その太さも自分とは違う。脚力を生かした速度的な戦いが出来ない以上、霞にとっての寝技の攻防は万に一つの勝ち目も無い。そこまで察しが着けば、この試合の決着すら火を見るより明らかであった。

ま、負ける・・・！

一回戦ではそう思って試合に挑む事を大事であると認識した霞であるが、この瞬間だけは意識の中に木霊するその言葉が何にも増して怖い。恐怖に抗わなければと意識の片隅で願うも、神経を介して動かそうとする霞の腕は吹雪の腕の力に勝てる事は出来ない。もはやビクともしなくなった腕を呪いつつ、霞はこれで自分が目指した呉鎮最強への道が立たれてしまうのだろうかと悲観し始める。だがそれと同時に脳裏の暗闇に照らし出されていく幾重もの場面が、霞の挫ける一歩手前の心に疑問を投げ掛けていった。

過ぎっていく場面は、今は横須賀に帰っているもいつも自分や霞を可愛がってくれる8駆の姉達、先輩と慕って頭を下げてくれる陽炎型の後輩達、トロい性格で手を焼きながらも憎めない唯一人の妹である霞、いつも遠慮なしに喧嘩ばかりしている大嫌いな雪風、そしておっかないながらも期待を掛けてくれ、常に自分達を導いてくれる尊敬すべき艦魂としての上司であり、師匠でもある神通。それ

らは何としても笑顔を与えてやりたいと霞が願った、心の拠り所たる二水戦であり、皆の顔が一樣に浮かんでいく最中に全員の声で霞への質問が放たれる。

負けてもいいのか？

その刹那、食いしばった歯を唇の隙間から覗かせ、しかめた眉の下で片目を薄っすらと開く霞。考えるまでも無く、その質問には霞の胸の奥に潜む意志が否の答えを返していた。

負ける訳には行かない。

みんなの為、全てはみんなの為。全ては愛する二水戦の為。

『ぬおおお!!』

『なに・・・!？』

やっと吹雪の腕によって霞の身体の側面がマットに対して現れようとしたその時、霞は滑ったマットから離れて宙に浮いていた右足を瞬時に折り曲げたかと思うと、すぐにまたバネのような動きで伸ばしてマットに突き刺す。ほんの一瞬の空中の感覚では右足がどのような角度でどのくらいの高さからマットを噛む事が出来るか解からなかったが、とにかく速く動かす事だけを再び燃え始めた闘志の中で叫んで踏み出した。

そこからは音も無く、目から認める視界からも色が褪せていく。電気が走ったような感覚が右足に走ると共に霞の右足には少し柔らかいマットの感触が伝わり、霞の身体には後追いの形で再び前へと向かう推力が与えられる。間近に位置している吹雪は戻りつつあった姿勢がまたしても後ろへと傾く事に仰天し、見開いた瞳には戦慄と衝撃の色合いが滲んでいる。綺麗に片方だけの背中を先としてマ

ットに倒れる事は無かったが、霞は吹雪と雖もみ状態でマットの上に打ち付けられる瞬間まで、ゆっくりとしたその視界の中で吹雪の背中がマットへと設置する様を瞬きもせずに見ていた。

『ぐお・・・！』

『どあ・・・！』

半身より伝わる強い衝撃が二人の口から意図せぬ内に短い苦悶の声を上げる。それと同時に霞が得ていた色褪せた音の無い視界は元に戻り、彼女の耳は驚愕の結末を目にして静まり返った試合会場の中で響く自分と吹雪の荒い息遣いをだけを拾っていた。どこか心地が良い静寂に気付きながら霞はふと倒れたまままで視線を横に流し、青く澄み渡った空を瞳に映す。穏やかな瀬戸内の潮風に曳航されていく白い雲の動きを少しの間だけ目で追った霞だが、その横でけたたましい物音が放たれた事で我に変える。

試合・・・、吹雪上曹・・・、結果・・・！

もはや単語を繋ぎ合せただけの言葉であつたが、霞を少しの間の呆然とした状態から連れ戻すには十分。片腕をついて上半身を起すと、物音の主である吹雪は立ち膝状態で審判の呉竹くれたけに見開いたままの瞳を向けている。その視線を追うようにして呉竹へと霞も目をやったその瞬間、呉竹は右手を左舷側に伸ばして声を張り上げた。

『いっぽーん、霞一水！！　それまでえ！！』

『『『　おおおー！！！！』』』

割れんばかりの歓声が龍驤艦の上に木霊する。その音量たるやは相当な物で、ブイに繋がれたままの龍驤艦は航行中を思わせる微細

な左右へのロールを発生させる。辺りの海面は一陣の強めの潮風が撫でて行き、気ままに空を待っていたカモメ達は意図せぬ突風で描いていた飛行航路から弾かれる様に青空へと舞い上がっていった。

龍驤艦飛行甲板上の中心でそれを耳にする吹雪と霞はその音量に意識を誘われる事は無く、吹雪は立ち膝状態で判定を耳にするや後ろにパタリと倒れて大の字となる。焦点を失った両目を空の一角に投げ、力が籠らない指先で天を仰ぐ彼女であるが、その隣では上半身を起してマットの上に座る形になった霞が同じく天を仰ぐ。だがそこに籠っている二人の胸の内は正反対であり、霞は爪が手の平に食い込む程に強く握った両手の拳を空へと突き刺し、しわが出来るくらいに目をつむって、大きく開いたその口からは歓喜の絶叫を放った。

『しゃあああー！！！』

その小さな身体に詰める事のできる息を全部使って放つ声は、今大会最大の山場を見事に制してみせた自分への声援。甲板上のあちこちから放たれる歓声を押し退け、むしろ我こそがその歓声の中心なのだと示すような声であった。

無論、それは間違いではない。

霞は勝ったのだ。下馬評でもダントツの一位、自分が生まれる10年以上も前から長く負けた事が無かった吹雪という大先輩を相手に、まだまだ10代後半の容姿を持つ新米艦魂の霞は見事に勝利してみせたのだった。

『やったー！！』

『猿め、やりやがった！』

『霞さん！』

『や、やったわぁ・・・！ 霞姉さん、勝ちだったわぁ・・・！』

『よっしやー！ 霞先輩！！』

またしても仲間が勝利した事に二水戦の少女達は完全に我を忘れる。誰という事も無くその場に立ち上がり、マットの上で天を仰ぐ霞の元へと全員が走り出した。雪風が試合を終えた時は勝利に浮かれる事をきつく戒めた神通もこの時は声を発せず、部下達が思い思いの方法で感動を表現する事を良しとしてやる。長い間、柔道の試合においては土が着いていなかった吹雪を負かしたのだから少女達の喜び様は半端な物では無かったし、神通も期待を懸ける教え子が強敵を打ち破った事に嬉しさが抑えきれない。他人に見られないように波間へと顔を向け、引きつった口元に規律を戻そうとするのが関に山であった。

わーわーと鳴り止まぬ事を知らぬ歓声の中心では未だ立ち上がっていない霞に、駆け出した10人近い少女達が折り重なるようにして抱きつく。下敷きになる者は身体にかかる重さに苦言を呈する事も無く、霞が打ち立てた殊勲と一緒にあって歓喜の声を上げた。霞などは実の姉の大記録にて胸の中に打ちひしぐ感動の波が収まりきらなかったかったのか、ぼろぼろと涙を両頬に伝わせて気味の悪い震えた声で霞の名を呼ぶ。

『か、霞姉さん・・・！ や、やった・・・。やったわぁ・・・！』

『泣くなよ、もお。』

『泣いてんじゃねえよ、霞！ ははは！』

しわくちゃで酷い顔の霞を叩きながら雪風が笑い、つられて霞の身体に纏わりついた仲間達へと笑みが連鎖していく。並み居る先輩方を相手に勝ちをさらい、遮風柵に天幕を張った大会本部に詰める伊勢等のお偉方の前で証明して見せた自分達の底力。戦の主は霞と雪風であるのは事実だが、四方八方から送られてくる拍手と歓声の余韻は間違いなく彼女達を含めた二水戦へと向けられていたのだっ

た。

『はいはい、そこまでだよ、おチビちゃん達。喜びの抱擁は礼の後。柔道は礼に始まり礼に終わるんだからね。』

霞に群がって騒ぎ立てていた二水戦の少女達に声を掛けたのは審判を務めていた呉竹。その言葉通り本来ならお互いへの礼を終えていないのでまだ試合は終わっておらず、その上で勝手に試合場たるマットに足を踏み入れるのは良い事ではない。少女達はすぐにその事に気付いて再びマットの端へと戻るも、その表情からは霞に与えられた笑みが消える事は最後まで無かった。ただ呉竹はそんな二水戦の少女達が自分の言った事を理解していないと憤る事は無く、静まる事の無い笑い声にも緩んだ口元を律しはしない。かつては自分達もこうして仲間の勝敗に一喜一憂していた事を思い出し、今ではすっかり歳を取って試合に挑む元氣すらも無くなった事を寂しく思うのと同時に彼女なりの懐かしさを覚えたのだった。

やがてゆっくりと霞が震える足取りで立ち上がるのと時を同じくして、呉竹に立つ様に促された吹雪も起き上がる。お互いにフラフラとした立ち姿でどちらも全身全霊を込めた戦いだった事を見学者達に示し、呉竹の放つ合図によって礼を交える。その最中に、霞は眼前に立つ大先輩が涼しげな表情の中で瞳の両端に光る物を輝かせていた事を見逃さなかった。

『お互いに礼!』

『・・・有難う御座いました。』

『良い試合だったよ、ちっちゃいの……。軍艦旗を背負う駆逐艦の艦魂に相応しい、立派な水兵だ……。ありがとさん……。』

深々とお辞儀をしてそう言った吹雪は一瞬だけ笑みを除かせると

すぐに霞に背を向け、拍手で迎える霞より幾分歳を重ねた姉妹達の下へと戻っていく。

頭一つも大きい身長を持つ吹雪をついさっきまで相手にして戦った事から霞は彼女の身体の大きさを肌身を通して思い知らされていたが、振り返る事無く綺麗な歩みで去っていく彼女の背中はどこか物寂しく、苦戦した事が嘘だったかのようにどこか小さく霞には見える。

その時、ふと霞は二水戦を背負って戦った自分に対し、あれほどの腕前を持つ吹雪は何を背負っていたのかと考える。奇しくも一回戦の時の様に敵になって考察を巡らす霞の瞳に映るのは、姉妹達の労いと優しい笑みを受けた瞬間、その場に崩れて口元を抑えながら大粒の涙を声も無く流す吹雪の姿。昭和という新たな時代に沿うようにして生を受け、全世界の海軍が驚愕した特型駆逐艦の系譜をこれまでずっと引っ張ってきた者の涙だった。彼女から始まる世界最強の駆逐艦の血筋はめぐり巡って当の霞にも流れ、今では霞の属する朝潮型の次期型である陽炎型へと引き継がれている。だがその身を浮べて早や10余年の月日を数える今、耐える事の無いその血統が後輩にもしっかりと確認できた事を喜ぶと共に、その中で今ではもう古い型と成り下がってしまった自分達特型姉妹の事情に、吹雪はネームシップとしてなんとか抗おうとしていたのではないだろうかと霞は思った。見れば吹雪の周りに集まった姉妹達は優しい笑みと柔らかな手を彼女の肩に連なる様にして乗せ、細くした各々の瞳からは晴天から注ぐ陽の光によって輝く一筋の流れが様に溢れている。

霞はその光景に、吹雪が口にした言葉の意味とその心の内を明確に悟った。『軍艦旗を背負う駆逐艦。』という吹雪の言い回しは霞を始めとする二水戦の者達を現代の駆逐艦の代表と認めたからであり、その上で既に現代においては例え艦魂社会で偉い立場を頂いていたとしても、帝国海軍の駆逐艦の主力として大手を振る事はもう自分達には出来ないのだと、吹雪とその姉妹達は霞との試合で深く

理解してしまったのだった。

これまでの艦齡の中で見てきた思い出を瞼の裏に描き、悔しさと寂しさが入り混じった心で止め処なく涙を流れ落とす吹雪。

それはまだまだ若い霞には味わえない、艦魂独自の厳しい現実を受け止めんとしている大先輩達の姿であった。

吹雪上曹。さすがに特型駆逐艦の長女です。

誇り高い特型の血筋を継げた事を、これからは大事にします。

意識の中でそう呟くや、霞は再び吹雪へと頭を下げる。尊敬すべき先輩達を目の当たりに出来た事を誇らしい事として胸に刻み、彼女達の涙の輝く様を目に焼き付けておく事こそが、いつかは自分もそうなるであろうと考える霞なりの誠のような気がした。

やがて霞は試合場を後にして、もはや狂気じみた喜び様を見せる仲間達の元へと戻る。勢い良く抱きついてくる陽炎や不知火といった後輩達を困ったような笑みで退け、まだ泣き止んでおらず般若のお面のような顔になっている霞に少し声を掛けた後、奥側に当たる飛行甲板の一番端にて腕組みする上司に勝利の報告を始めた。

『ぜえ、ぜえ……。か、勝ちました……。戦隊長……。』

『うむ。素晴らしい内容だ、猿。最後までお前らしい素早い柔道で勝負できたな。』

『は、はい……。！ ぜえ、ぜえ……。』

ついさっきまで波間に顔を向けて笑みを静めようと懸命になって

いた神通だが、残念ながら効果は無かった様だ。彼女は数日前の宴の時と同じく釣り上がった目の角度を緩くさせ、白い歯がもう少しで覗けそうな程に唇の端が頬へと食い込んでおり、周りの部下達と同化するように微笑を浮べる。

その一方、さっきの絶叫が堪えたのか、緊張の糸が緩んだのか、それとも狂喜乱舞する仲間達の歓迎ぶりが効いたのか、霞は試合中の彼女とはうって変わって大きく肩で息をしており、なんとも聞えの悪い声を伴って乱れた呼吸をしている。汗の量も試合中のそれとほとんど大差は無く、霞にしては珍しく眉間には薄っすらとしわがよせられていた。

随分と疲れてるな。やはり体格の違いが辛かったのか？

どうにも疲労の色が激しい教え子に神通は軽く首を捻る。そもそもがさっきの試合のきっかけになったのは、最上も絶賛した小さい霞の身体からは想像もつかない程の持久力である。吹雪との試合ですら最後の最後まで続いていた筈の霞の体力なのに、試合が終わってここまで歩いてくるだけで消費し尽くしてしまうとはとても思えなかったのだ。

そんな中、霞の背後からは仲間達の祝福の言葉が掛けられてくる。

『霞さん、本当に良い試合でしたね！ マットが動いちゃった時はビックリしましたが、最後の突進なんて発射管から飛び出す魚雷みたいでしたよ！』

『あはは・・・、ありがとね・・・。ぜえ、ぜえ・・・。』

飽くまで笑みを作って仲間の声に応えてみせた霞であるが、神通はふい霞へとかけられた声の内容である試合の終盤の局面を思い出した。

バテ始めた吹雪にタイミングを見計らって飛び掛った霞は完璧な

姿勢で吹雪に小外刈を仕掛けたのだが、その際に軸足であった霞の右足が置かれたマットが滑るようにズレてしまった。おかげで霞の姿勢と突進力が失せて危うく吹雪と道連れに倒れる所であったが、霞は最後の氣力を振り絞って宙に浮きかけた右足を再びマットに突き立てて吹雪を押し返す。

今でも瞼の裏に鮮やかに蘇る教え子の奮闘ぶりを神通は記憶から再生していたが、この時、神通はある事に気付いく。当の霞ですらも負けると思いつつも、こうして上司を含めた二水戦のみんなに笑顔を与えてやりたいと願いながら無我夢中で再度マットに立てていたその右足。神通はその右足を注視して何度も記憶の中に残る試合の映像を脳裏に投影すると、完全に笑みが消えた顔ですぐ目の前にいる霞を見る。仲間達に汗に埋もれた笑みを送る彼女だが、いつもは綺麗な立ち姿を維持する霞が今は左足に体重を掛けて立っている。すると神通の中では霞に対するとある考察が生まれ、それは仲間達からの抱擁を困ったような微笑で一貫して拒否していた霞の帰ってきた際の態度と接点を築く。

刹那、それ以上考える事をやめた神通は霞の肩を抱くようにして手を伸ばし、驚いて顔を覗きこんでくる霞に目もくれずに傍にいた最上へと声を掛けた。

『最上。明石^{あかし}に艦尾甲板に来るように伝えてきてくれ。』

姉と慕う神通とその部下達が笑みを交える様子を嬉しそうに眺めていた最上は、何やら血相を変えている神通の声に面食らう。何時の間にかやら神通の顔からはさっきまであった笑みが無くなっており、部下の勝利の報告を受けて嬉しい筈の今の状況で向けてきたいつもの鋭い眼光に思わず口にした事を聞き返す。

しかし返されてきたのは、何か急な用件を頼もうとする神通の焦りの色も滲んだ声だった。

『え？ 艦尾甲板、ですか？』

『ん。飛行甲板の艦尾側じゃないぞ。艦尾甲板に来るようにと明石に伝えてきてくれ。それとここを頼む。』

霞を連れた神通は、龍驤艦の艦尾甲板へと白い光を放ってやってくる。

試合会場である飛行甲板はサンサンと陽の光を浴びれて居心地も良く、眩しい程の太陽に照らされて10月末なりの暖かさという物も感じる事が出来たが、数段は下がった艦尾甲板は湿った潮風が吹き抜けるだけの肌寒い所であつた。飛行甲板の上一面に広がる青空も、艦尾甲板にあつてはその飛行甲板で蓋をされた格好になつていて望む事はできない。艦体より伸びる大きな二本の支柱は霞や神通の居る甲板からによつきと天に向かつて傾斜してそびえ、頭上に広がる飛行甲板の裏側へと延びている。おかげで二人が現れた甲板はとても薄暗い。夏真っ盛りの時期なれば避暑地としては最高の居場所なのであるが、この時期はただ寒さを必要以上に訴える閉塞感の激しい所であつた。

ただ、小さな艦体に大きな上部構造物を載せる形で建造された龍驤艦は普通のお船の乾舷がそのまま飛行甲板まで延長されているような構造をしている事もあり、狭くて暗くて肌寒いというなんとも立地条件の悪いこの艦尾甲板は、龍驤艦で唯一の舷門設置甲板として艦の玄関ともなっている。舷門当番の水兵はのんびりとした呉の日々によって往来が殆ど無い事を良い事に艦内へと行っているらしく、舷門も含んで艦尾甲板には神通や霞のような艦魂はおろか、人間の乗組員唯一人すらもいなかった。

そんな場所へ突然に連れてこられた霞は、上司の意図が読めずに声を掛けるのを躊躇っていた。もっとも飛行甲板にて『行くぞ。』と声を掛けられた辺りからずっと自身の肩に抱くようにして手を乗せている上司には、ご立腹の際に見せる殺気にも似た雰囲気を感じられない。その事もまた霞が神通の考えている事を悟れないようにしているのだが、当の神通は霞の肩に手を触れたまま正面にある艦尾旗竿にて潮風と戯れている軍艦旗を無言で眺めるのみだった。するとしばらくして霞と雪風の正面には白く淡い光が収束し始め、一瞬の輝きを放って弾けるのと同時に明石が姿を現す。

『よっと。お、いたいたあ。』

試合中は神通や二水戦の近くには居なかった明石だが、大会医務担当として大会本部に詰めながら霞の奮闘を目にしており、自分を呼びつけた神通には目もくれずにさっそく霞へと労いと祝福の声を掛ける。

『霞、頑張ったね。もうとっても感動しちゃったよ、私。』

『ど、どうもです、明石さん……。ぜえ、ぜえ……。』

何やら唇と眉をしかめて息苦しい中での吐息を漏らす霞に、明石は余程さっきの試合が大変だったのだろうと察する。吹雪という猛者を相手にしたのだから無理も無いと彼女は思い、疲労の色に染まる霞にせめてもの救いとばかりに笑みを向けたてやった。

しかしそんな明石とは正反対の胸の内を抱いていたのが、この場に居る明石のもう一人の友人たる神通で、彼女は霞の顔を覗きこむようにして目をやると不意に口を開く。

『明石。』

『ん、なあに？』

名を呼ばれた明石は霞に寄り添うようにして立っている神通の顔に視線を向けるが、そこに何やら神妙な面持ちを浮べている友人の表情を目にして笑みを薄くして行く。すると神通は明石が表情から笑みを消したのを認めるや、今度は肩を触れている霞に眼をやった。

『・・・痛いのか？』

『んくっ・・・。な、何の事ですか・・・？』

いきなりの神通の問いかけが明石には全く理解不能の代物であるが、霞は上司の声を耳にした瞬間、一瞬だけ顔を歪めるとまたすぐに疲労感で満ちた表情になって聞き返すような声を返す。だが霞のそんな顔色の一瞬の変化は神通が彼女に抱いていたとある憂いが現実である事を示し、同時にそれは霞が上司に対して嘘をついた事を物語る。

間髪おらずに神通はそれまで霞の肩に置いていた手を離すと霞の首根っこを掴み、自分と対面する形で立っている明石の間へと霞の身体を腕一本の力に任せて押し出し始めた。

『う・・・！』

神通の顔に力みが無かった事と腕の振りがそれほど早くなかった事から、彼女が本気で霞を投げ飛ばそうとしている事はないのは明白であったが、霞は身体が流れた拍子に踏み出した足で自身の身体を支えきれずにその場に崩れ落ち始める。しかし床に倒れる前に霞の身体は屈みこんで伸ばした神通の腕によって宙で受け止められ、霞は神通の両腕で抱かれるような格好となった。

『うっぐ・・・！』

神通の突飛な行動に苦悶の声を上げる霞。明石はすぐに神通に向かって部下を手荒に扱おうとする事を糾弾しようとしたが、その最中に神通が霞の右足を覆う柔道着の裾を捲った事で声を失う。

『じ、神通――！ あ、ああ……！』

『やはりさっきの試合の最後に……。馬鹿者が、何故言わんのだ、猿――！』

『あっ……。ぎ……。！』

明石と神通の声に、霞はただ歯を強く噛んで顔を歪めるばかり。そして明石と神通が一緒に視線を向けている霞の右足は、足首のくるぶしの辺りの皮膚が濃い青紫色で染まっていた。

人間の女性と同じ身体をつくりを持つ艦魂であるから、人体としての組成も彼女達は見限りは人間達と同じであるのだが、霞の右足首はこれが人体が持てる肌の色合いかと思える程の毒々しい色で埋まっている。今の今まで真珠色の柔道着の裾で隠れていたが、霞の持つ特徴的な陽に焼けた麻色の肌がそこには微塵も無い。くるぶしの起伏が腫れあがった皮膚でなだらかになっており、明石にも神通にも霞の右足首の間接がどこに有るのか解からなくらいであった。

既に決勝進出を決め、呉鎮最強の栄冠まで後一步の所で、霞には今大会最大の試練が突きつけられたのだった。

第八四話 「最強を目指せ！／其の十」

大切な仲間が傷ついて苦しむ光景は、根が天真爛漫で無邪気な女性である明石^{あかし}の顔を瞬時に一人の軍医としての顔へと変貌させる。

明石はその場に片膝をつくや無意識の内に右手に白い光を収束させ、自前の赤十字が蓋に描かれた大きな薬箱を出現させた。一度だけ神通^{つう}の腕に抱かれる霞^{かすみ}の顔に視線を向けてそこに苦悶の表情がある事を確認すると、すぐさま明石は霞の右足に手を伸ばしつつ顔を思いっきり近づけて患部の状態を確認する。

何かの化学薬品を混ぜたかのような気味の悪い青紫色で包まれた霞の右足は外側に向けて大きく腫れあがっており、触れた途端に明石の手には患部が放つ高い熱が伝わってきた。明石はすぐさま患部の状態を脳裏に有る医学知識と照らし合わせ始めるが、ほとんど時間を置かずに彼女の脳裏にはその症状を示す言葉がはじき出される。

『足首の靭帯^{じんたい}損傷・・・、捻挫^{ねんざ}だ・・・。』

霞が負った負傷の状態を判断する明石。一口に捻挫と言っても程度の差は広いのだが、霞の右足首の容体は割合としては完全に重度の代物であった。

神通も日頃の教練では部下の捻挫を目の当たりにした事は何度かあるものの、こんな皮膚の色が変色しきってしまう程の捻挫は初めて目にする。いつもは『明石の所で治療してもらえ。』と言って付き添いの者を付けて軍医である明石の元へと向かわせる程度だったから、霞の捻挫に対する処置法を神通は全く持ち合わせていない。故に血相を変えた神通はしゃがみ込んで霞を抱きかかえた姿勢のまま、怒号にも似た声で帝国海軍艦魂社会では数少ない軍医の一人である明石に自分ができる処置の方法を問い掛けた。

『おい、明石！ 猿をどうすれば良い！？ 私は何をすれば良い！？』

『あぐうつ・・・！』

間近で発せられる上司の叫びが触ったのか、霞は短い呻き声を放って強く噛んだ歯を唇の隙間より覗かせる。眉間によったしわもその深さと長さと数を増しており、霞が今どれ程の苦痛に襲われているのかを如実に表す。その悲痛な声と神通の鬼気迫る様子を目にした明石は、これから行う処置に医薬品の他で使用できる物がないか考えながら自分達のいる龍驤艦艦尾甲板のあちこちに顔を向ける。もちろんゆっくりと探している暇は無い事を明石は承知しており、迅速な処置を施す必要性を認識しているから延々と薄暗い甲板を見渡そうとせず、目に映して即座に脳裏で処置との接点を設ける事が出来た物を神通に用意するよう頼んだ。

『神通、そのまま霞を寝かせて！ それから、すぐその舷門で海水をバケツに入れて持ってきて！ あと手の平くらいの本って持っていない！？』

『よし、解かった！ それと本ならこれを使え、そら！』

了解の意を示しながら神通はそれまで両手に抱きかかえていた霞を甲板の上に仰向けで寝かせ、淡く白い光を収束させた右手から出現させた本を明石へと投げるとすぐに艦尾甲板左舷にて展開された舷門へと駆け出していく。明石は神通より受け取った本を一旦脇に置くと、処置に使用する医薬品を取り出した薬箱の蓋を閉め、霞の右足を持ち上げて薬箱を足と甲板の間に滑り込ませる。さらに薬箱の上にはガーゼを敷いてから、持ち上げていた霞の足をゆっくりと薬箱の上に乗せた。

『よしと・・・。』

『う、ぐ・・・、あ、明石さ・・・。』

『あ、ダメ、霞！ 上半身を起しちゃダメだよ！』
『くう・・・。』

何事かを言おうとした霞だが軍医としての自分を覚醒させた状態の明石の声には不思議と上司に似た迫力の様な物が備わっており、視線を遮るようにかざされた手の動きに起しかけた上半身をまた元に戻す。明石は霞が元の姿勢に戻るのを見てから処置を続け、今度は薬箱の上に乗せた霞の右足首側面に神通から受け取った本を縦にして添える。足首を包むように半円柱の形にしてあてがい、さらにその上から包帯を巻きつけ始めた。

『ちょっと痛いけど我慢してね、霞。患部の血流を圧迫しないと怪我が酷くなっちゃうの。足を薬箱の上に乗せてるのも、心臓より高い位置に持ってきて血流が少しでも弱くなるようにしてるんだよ。だから起きちゃダメ。』

『うう・・・、はい・・・。』

『まだ痛いと思うけど、辛抱してね。固定してとにかく足首が動かないようにしないと。』

声を掛けて霞の気を静めると明石は包帯の端っこを口に咥え、片方の手で霞の右足首にあてがった本を抑えながら、もう片方の手に持った包帯の束を念入りに巻きつけていく。その言葉通り患部がこれ以上可動できないようにする為で、1周ほど巻きつけると包帯の持つ手をぐいっと明石は引っ張り、巻きつけた包帯が緩んだりする事が無いように処置していく。明石の腕に力が入る度に霞は苦痛による小さく短い悲鳴を上げるが、自分の処置に間違いがない事を知識として身に付けている明石は構うこと無く処置を続けた。

するとちょうどその時、明石に要請されて海水を湛えたバケツを

手にした神通が舷門より急ぎ足で戻ってくる。

『持って来たぞ、明石。次は？』

『うん。この手拭いを海水に浸したら絞って。雑巾を絞るのと同じで良いから。』

『ん。解かった。』

包帯の巻きつけも終盤に差し掛かり、足首に添えた本が滑り落ちる事も無くなっていた為、明石は口に咥えていた包帯の端を手にし、巻きつけの最後として結び目を作りながら隣にまで来ていた神通に指示を出す。神通は濃紺の第一種軍装の袖を捲くるとバケツに手を突っ込み、海水に浸した手拭いを持ち前の腕力を駆使してきつく絞った。幾重にも巻かれて絞られた手拭いを握る神通の手からは海水の雫がしばらく滴る。だが包帯を巻きつけ終えていた明石は振り向きざまに神通の手より手拭いを抜き取り、間髪入れずに包帯で覆われた霞の右足へと巻きつけていく。

『よしっ……。本当なら氷が良いんだけど、冷やすのならこれでも効果がある筈……。』

いつの間にやら額に滲んでいた汗を袖で拭いながらそう言った明石。緊迫で張り詰めていたその表情からは少し力が抜け、疲労の感じられる溜め息には安堵の感すらも漂っている。どうやら応急的な処置が終わったらしく、明石は霞の苦悶の顔を覗きこんでは『もう、大丈夫。』と優しく語り掛けていた。やがて神通も海水で濡れた手を服の端で拭い、しゃがみ込む明石の背後から部下の様子を見てみる。まだまだ激しい苦痛が右足の足首では治まりきっていないのか、眉間にしわをよせて目を閉じ、強く歯を噛む彼女の表情は上司である神通にとっては一安心に至るまでにはいかない。なにより今この瞬間も彼女達の頭上にある飛行甲板で続いている柔道の大会が佳境

を迎えている事は、その理由として大きな物だった。

『猿。大丈夫か？』

『ぐ……ぎ……！』

身を案じてくれた上司に対して返事をしようとした霞であつたが、襲い来る苦痛はそれを許してくれない。ただそんな霞の姿は神通に自分の状態を示すのには十分であり、彼女は部下の怪我の具合がかなり重い物である事をよく理解する。

しかしそれでも、神通はそれ以上の言葉を声に変える事が出来ない。霞がまさに吹雪フクユキと死闘を繰り広げている際に最上にも話した通り、怖い怖い上司である自分の元で齒を食いしばって頑張ってきた霞の事、そして並々ならぬ決意を秘めて本日の大会に備えてきた部下の事を、最も身近で目にしてきたのが他ならぬ神通であるからだ。隊の為にと心を奮い立たせ、己の実力を存分に発揮してやっ

と決勝にまで進んだというのに、怪我による棄権という現実が今まさに霞には突きつけられている。それが神通には無念でならない。

そしてどうやらそれは霞にあつても同じらしい。

苦痛に歪んだ表情の中、僅かに片目を開いて眼前の明石の顔を認めるや、霞は重苦しい声で言う。

『あ、明石さん……、し、試合に出させてください……！ 足なら大丈夫です……！』

その声色に襲い来る激痛の影響を残しながらも、霞は試合の続行を願ひ出る。ここ数日の教練で何度も甲板の脇から嘔吐し、上司の竹刀による制裁を受け、時には怖い上司の昔話を賜って英気を養つたりもした大会に備えた日々が、今の霞の意識の片隅でぼんやりと描かれている。それら全てが水泡に帰してしまうのかと思うと霞には居ても立ってもいられなかった。

しかしそんな霞に明石はすぐに明確な却下の意を示す。先程の彼女の言葉にもあった通り、霞が負った捻挫は安静にする事が最も大事な処置の方法だからであり、まだまだ駆け出しながらも軍医として彼女はその事をよく心得ているからだった。

『ダメだよ、霞。変に動かしたら関節だけじゃなくて、骨にまで傷が広がっちゃうよ。柔道の試合なんてとても無理だよ。』

『う……、ぐ……！』

明石が声を返す間にも、足から来る電気が走るかのような苦痛に襲われて霞は顔を歪める。その首筋や頬、額には大粒の汗が滲んでおり、傍から見ても足の状態が大丈夫などで無い事は一目瞭然だ。だがそれでも霞は更に試合への参加の許可を求め、軍医として許可を与えない明石は頑なに拒否する。

『ひ、飛行甲板からここまで、あ、歩いてこれました……！ し、試合も行けます……！』

『ダメ。捻挫はこれで済んでるぐらいに思わないと。下手に患部を動かしたら治る物も治らなくなっちゃうよ。』

『ひ、左足だけで戦いますから……！ うぐうつ……！ お、お願いします……！』

『霞、解かってよ。これ以上動かしたらどうなるか私にも解からない。11月の艦隊編成までしばらくお休みだし、この機会に治さないと霞の艦にも影響がでるかもしれないよ。』

明石は霞の肩に手を触れて、自分の言葉を聞き分ける様に促す。明石だって当の霞が並々ならぬ決意を示した際、神通と供にそれを目にしていたし、毎日の様に続けられた特訓もずっと見てきたから、霞が襲い来る無念と戦うのに伴って負傷を理由に棄権したくないと言いつつその気持ちも解からなくは無いのだ。

もっとも霞は尚も引き下がらない。仰向けの状態から僅かに上半身を明石のしゃがみ込む方に捻り、唇の隙間から強く噛んだ歯を覗かせながら改めて懇願する。

だがいまや軍医としての立場に身も心も置いている明石には、霞が何を言おうともこんな状態での試合参加の大義名分にならない事は明白だった。逆に自分の言う事に中々首を縦に振ってくれない霞に対し、明石は次第に苛立ちが募っていく。誰の為でもない霞の為を思っただけの判断であるのに、当の霞がそれを解ってくれないからだ。刹那、霞の苦痛に震える声を遮るようにして明石は声を荒げる。

『これ以上動かさないように、ひ、左足だけで戦います・・・！
だ、だから試合に・・・』

『馬鹿にしないでよ！ 左足だけで柔道なんか出来る訳がないのは私にだって解かるよ！』

『う・・・！』

『絶対にダメだからね、霞！ こんな状態での試合なんて軍医として許可できない！』

さしもの霞も、軍医としての鬼気迫る表情で放たれた明石の言葉は堪える。明石は艦魂社会での立場として軍医という役職を頂いているのみならず、本日の大会での医務全般を担当する責任者でもあるからだ。その明石が許可できないと明確に口にした事は、燃えるような霞の情熱に真上から蓋をする。そして隙間から漏れる情熱の残り香により、霞はゆっくりと項垂れると両手に拳を握って涙を流し始めた。

『うう・・・、う・・・。』

静かに嗚咽の声を漏らし、受け止めねばならない無念が口惜しい余り、霞の拳が握られた手は小刻みに震える。この日の為にと火の

出る様な日々を送ったというのに、目前に迫った呉鎮最強を決める決勝戦を手放さねばならない事が、霞には悔しくて悔しくて仕方なかった。

だがここに来て明石の背後にて二人のやりとりを黙ってみていた神通が閉ざしていた口を開き、明石は友人にして霞の身を案じる上司でもある神通の放った言葉に仰天する。それは今しがた霞に念を押して説明したばかりの、試合への参加を適えて欲しいという物だったからだ。

『明石、なんとか猿を試合に出してやれないか・・・？』

『な、何言ってるのよ、神通！』

色々と神通なりに思いをめぐらせての言葉だったのか、その声色には含みも混じって彼女にしては歯切れの悪い言い方だ。

ただ明石にとってそんな事は問題ではない。部下の身体に異常があり、その状態を悪化させると散々に説明したのにも関わらず、なお神通は霞と同じく試合への参加の許可を願い出てきたのである。まして生まれたばかりの10代後半の外見を持ち、先程の様に湧き上がる情熱によって中々聞き分ける事が出来なかった霞とは違い、神通は既にこの世に誕生して15年以上も経た立派な大人の艦魂。湧き上がる想いを抑え付けるだけの理性をしっかりと身に付けた者の筈だ。

そんな神通が事もあろうに部下の怪我の具合が悪化する道を選ぶうとしている事に、霞とやりとりで苛立ちが募っていた明石はついに眉を吊り上げて怒り出す。すくとその場に立ち上がると自分より10センチ近く身長が離れている神通に怯まず、普段から彼女にげんこつで物事を教えられたり質の悪い冗談を戒められているのも嘘かと思えるほどに迫って声を張り上げた。

『まだ解かんないの！？ 霞は運動なんてこれ以上やったら足がどうなるか私にも解かんないんだよ！ 霞が心配じゃないの！？ 下手したら歩けなくなるかもしれない部下を何で悪い方に行かせようとするのよ！ 神通は霞の上司なんでしょ！？』

『そんな事は解かつてる、明石……。その上でなんとか試合にだしてやりたいんだよ……。足の負担や痛みを和らげる処置とか、何か無いのか……。？』

鋭く釣り上がった目つきに代表される怖い神通の顔も、今の明石にあつては恐れを抱く事など無い。それどころか全く医療への知識を持ち合わせていない彼女が都合の良い処置の可能性を求めてきた事に、明石は怒りの余り神通の胸座に両手を伸ばす。神通はその勢いに押されて半歩ほど後ろに退くが、明石は構わず神通の顔に自分の顔を近づけて声を返した。

『なによ！ いつも二水戦に口出しするなとか言ってるクセに、自分は解かりもしない医務の事にズケズケと口出しするなんて都合が良すぎるよ！ 私は軍医なの！ 怪我に対する専門家なの！ 何にも解かんないクセに口出しなんかしないでよ！！』

普段から峻烈で短気な性格より来る自分の態度を持ち出されて責める明石の言葉に、神通は即座に言葉を返す事ができない。明石が言う通り神通に怪我の処置に関する知識は殆ど無い事は、艦尾甲板にて明石と落ち合った際にすぐに霞の処置に関して指示を仰いだ事でも証明されている。その上で霞が試合に出れてなおかつ怪我の具合の進行を抑える様な処置など、明石の指摘通り、素人が思いつく都合が良過ぎる代物に他ならなかった。

ただ、霞の怪我の具合を知っていても試合に出させようと企図した事は、神通にとってはそんなに簡単に諦めをつける事の出来るものでも無かった。胸座を掴まれて迫る明石に他意が無い事も解かつ

ている神通は明石の声を受けて少しの間俯くと、ゆっくりと顔を上げて明石へと声を返す。その声には足元で倒れたままの霞にも似た苦痛による歪みがあり、怒り心頭である明石に神通の心の内をじわじわと伝えていく。

『明石……。お前……。私がこいつらの苦しむ顔を好き好んで見ようと思うか……。？』

『な、なによ……。？』

『私だって猿にこれ以上の苦痛を味合わせるのは不本意なんだよ……。だがここで身を引いたら猿は長い間、後悔する事になるんだ……。お前も海軍艦艇の事情なら解かるだろう……。？　ただでさえ支那の戦線が長引いていて鎮守府所属の駆逐隊が揃う事なんてここ数年無かったし、これから先もあるかどうか解からん……。欧州での戦争の影響だっていつ日本にくるか解からない……。そんな中でこいつらの想いや気持ち^{ゆきかぜ}が注がれてるのが今回の大会なんだ……。』

歯切れの悪い神通の珍しい物言いはちよっとどもった感じもあって聞き取りづらい物だったが、文字通りの目と鼻の先でそれを耳にした明石は彼女の声に怒りを段々と静めていく。神通の語った今回の大会は、艦魂達が楽しみにしていた祭典でもあり、同時に昭和12年より始まった支那事变下の海軍事情にあつては稀有な集いの場でもある。特に一戦隊を除いた第一艦隊の部隊は頻繁に支那戦線での海上警備や港湾封鎖、上陸作戦の支援等に出張っており、鎮守府所属の部隊が一同に集う事はここ数年の内では皆無であったのだ。そしてそれに伴う呉鎮最強の駆逐艦を決める大会は、その言葉通りこれから先の開催も約束できない代物である。故に霞や雪風^{ゆきかぜ}に限らず、今回の大会に色んな想い、気持ちを抱いて挑んでいる者達は大

勢いるのであり、せつかく巡ってきた千載一遇の機会を無下にしたくないのは誰でも同じなのである。

平たく言ってしまうえば『気持ちを解かってくれ』程度の事なのかもしれないが、艦から足を離せず、長引く戦時状態によって一同に会する事も出来ない帝国海軍の艦魂達にとつてはほんの一握りの楽しみにしていた場でもあるのだった。

明石もその事を理解するの併せて、実際に試合にこれまで臨んで来た霞と見守っていた神通の無念の度合いをひしひしと感じる。もちろんそれは自身の身体管理など無視して良い事には直結しないので軍医の立場である明石は納得しきれずに顔を歪めるが、そんな霞達の心情を汲むのが自身よりも友人の方が遥かに上手く、そしてより濃い色合いで受け止める事が出来る事を、眼前より返されてきた神通の言葉によって知った。

『で、でも、それじゃ霞の足が・・・！』

『ああ、その通りだ……。私は下手をしたら怪我の具合の予測がつかんというお前の言葉を疑ってる訳じゃないんだ……。ただ、それでも猿をなんとか試合に出してやりたい……。別に言い返すつもりじゃないが、私も部下を持つ者としては専門家のつもりだ、明石……。頼む……。』

まじまじと目を見てそう言った神通に今度は明石が気圧される様な格好となり、それまで神通の胸座を掴んでいた両手を明石は離す。明石としても友人達の願いは適えてやりたい。春頃に南支方面を行動した際に支那戦線の一端も彼女は見ており、毎月初日に行っていた第二艦隊内の戦隊長会議によって世界の情勢変化を少なからず耳にもしている。秋頃には北部仏印への武力進駐も日本はやつてのけたし、昨年の夏には大陸の北の奥地でソ連との国境紛争まで起こっている事も人伝に聞いた。故に明石にだって、どんな形かは解からないが戦争という物の余波が海を伝って日本に来る事は容易に想

像できる。

そんな中で自分と艦魂達、まして友人である霞や神通の想いが詰まった今回の大会の重さを明石は改めて実感した。

『あ、明石、さん・・・！ あぐっ・・・！』

ふとその時、霞は上司のお願いに乗ずる形で涙を湛えた顔を明石に向けながら、再び試合の続行の懇願をしようとする。だがその最中に襲ってきた激痛に霞の顔は歪み、強く噛んだ歯の隙間から続く言葉が漏れてくる事は無い。まだまだ痛みが引いていない事がよく示されており、逆に明石はそんな霞の様子により軍医としての判断がやはり適当であると考えてしまう。今しがた意識した海軍艦艇の艦魂たる自分達の事も含んで、明石は再度神通に顔を向けて自身の考えを示した。

『やっぱりダメだよ、神通・・・。私達は帝国海軍の艦魂なんだよ・・・？ いつ私達に出動がかかっても良い様に、自分達の身体をしっかり管理しなきゃ・・・。それを疎かにするなんて、海軍艦艇の艦魂としては間違ってると思う・・・。』

今度は明石の声の歯切れが悪くなる。彼女が口にした事は心の中に浮かんた言葉を率直に示した物なのだが、それをぶつける相手が神通であった事が大きな理由だった。なにしろ生まれて2年程しか経っていない明石に対し、神通は年号も今とは違う時代に生まれた者。艦魂としては明石の完全な先輩格に当たり、海軍艦艇の艦魂がどういう物かなど、明石よりもずっとずっと良く解かっている人物なのである。そんな神通にさも正論という風にして海軍艦艇の艦魂の在り方を語るのは、少しだけ明石には気が引けるのだった。

しかし神通はちよっと視線を泳がせながらそう言った明石に対して眉を吊り上げる事は無く、むしろほんの少しだけ口元を緩めて小

さく溜め息をしてみせる。やがて少し沈黙の後に返ってきた神通の言葉には、予想外にも海軍艦艇のなんたるかを示すような物は含まれていなかった。

『明石、違うんだ。海軍艦艇云々じゃない。・・・上手く言えないんだが、これは日々を各々の意志を持って生きてる奴の小さな願いなんだよ。我が儘なのは百も承知だが、なんとかやらせてやってくれないか?』

彼女の口から出てきたのは、これまで友人として付き合ってきた中で初めて耳にした神通なりの命に対する考察。常に不機嫌そうな表情を浮かべる普段の神通を知る明石は彼女が命に対する独自の考えを持っている事に面食らうが、直後にそんな命の在り方を明石にも考えさせるきっかけを作ってくれた師匠、朝日あさひとの記憶を脳裏に蘇らせる。

こうでありたい、こういう風にして行きたい、というささやかな理想を持つ事。朝日自身が今の明石くらいの時、その明石の先代によって教えられた物で、仲間の命を救う者である軍医の心構えとしては根本に当たる物だと師匠より授かったある種の倫理観だ。

もちろん今の自分にそれを当て嵌めると、霞と神通は願う大会続行を適えてやる事が今の自分の理想である事に明石は難無く気付く。まして朝日より授かったその教えにすがってその日その日を懸命に生きている事は、自分の未熟さから相方と別れる事態となつて以来、明石の心の拠り所でもあった。内火艇に乗って去っていく忠の背中を見て涙し、独りになって呉に戻り朝日の胸に涙で濡れた顔を埋めた時、心に抱いた理想を大事にしろと言ってくれた朝日。その時ほど明石は、素直に自分と向き合わずに相方を手放した事を激しく後悔した事は無かった。

そして今、明石の眼前では過去の自分と同じ様にして、我が儘と知りつつも敢えてこもこもが抱く理想が描く道を進みたいと口にす

る師弟の姿がある。それはただ単に明石に自分達の理想をとくくと語っているのでは無く、自分達が願う物を適える為に軍医である明石の力を貸してくれと懇願する姿だった。

明石とて昔の自分のような後悔を友人である霞には味あわせたくは無い。尽きる事の無い懺悔の念に駆られるのは明石もしょっちゅうだし、いかに後悔という感情が惨い物であるかは観艦式前の横須賀にて富士という大先輩からも伝え聞いている。決して霞と神通が願う物は自分や富士から聞かせてもらった三笠の様に愛する者を掴み損ねたという代物ではないが、それでも明石は彼女達の願いを打ち砕き、後悔を代わりに与えるというのはここに来て嫌だと思ひ始める。

『ぐっ・・・！ あ、明石さ、ん・・・！』

『明石、頼む。猿を試合にださせてやってくれ。』

やがて明石のズボンの裾を握って霞が涙ながらに訴え、一步迫って瞳をじっと見つめてくる神通に、ついに明石はさっき自分で口にした軍医としての判断を覆す事に決めた。その最中にも苦痛に悶える声を上げる霞によって中々踏み切り良くとまでは行かなかったが、明石は自分の軍医としての判断を押さえつけるようにして強く歯を噛みながら霞の包帯が巻かれた足へと手を伸ばすのだった。

それから10分程も経った頃になって神通と霞、明石の3人は、柔道の大会会場である龍驤艦の甲板へと戻ってくる。怪我の影響を隠そうとする霞はキツとその丸い目に力を入れ、真一文字に結んだ唇によって表情の歪みを律するが、麻色の頬や額を滝の様に伝って

行く大粒の汗が怪我の事を知っている神通と明石に霞の身体を走る苦痛がどれ程の物であるかをひしひしと伝えていた。

『猿、大丈夫か？』

『ゼハア、ゼハア……。だ、大丈夫です、戦隊長……。』

荒い呼吸も治まる事を知らず、彼女の両脇に立った明石と神通は霞の表情を覗きこむ様にして視線を送る。すると霞の瞳が正面を向いたまま僅かに見開くと同時に、飛行甲板の上には大きなどよめきが走った。

『『『 おおおお！！！！』』』

何事かと思つて霞の目が向けられる方に明石と神通は顔を向ける。すると3人の視線の先にあったマットの上では、起き上がりながらも青空に向かって咆哮を上げる少女の姿がある。波打った肩を隠すくらいの黒髪を振り払い、神通と良く似た鋭く釣り上がった瞳を細くして叫んでいたその少女。3人にとっては身間違えようも無い。二水戦の大問題児にして霞と同じく本日の大会に参加している雪風であった。

『おっしやあああー！！！！』

『雪風！ やったー！！』

『雪風姉さんも決勝だよ！ これで呉鎮最強の駆逐隊は二水戦だ！！』

『雪風ー！！』

マットに対して飛行甲板左舷側に陣取った少女達からは、霞の試合が終わった時と同じ様に歓声を上げる。見れば弓を引くように拳

を腰の辺りで握り締める雪風の足元には、唇を強く噛んで顔を歪めている20あさぎり駆所属の朝霧の姿があり、準決勝の試合においてまたしても雪風が先輩を破った事という明白だった。霞に続いてこちらも余程の名勝負となったのか、二水戦の少女達の中には霰の他にもぼろぼろと涙を溢しながら笑みを作る者もチラホラと見受けられる。

『へ、へへ……。犬っころめ、勝ったのか……。ゼハア、ゼハア……。』

今にも途切れそうな言葉で呟いた霞は足を引きずる素振りも見せずに、喝采を送る仲間達の元へと独り進んで行く。その背中は激しく上下する肩と首筋に光る汗によって疲労感が拭えない代物で、飛行甲板にきてか此の方、一向に晴れる事の無い顔色を浮べている明石は思わず歩くのをやめさせようかと思ってしまうが、そんな明石の前にはゆっくりと動作で隣に立っていた神通の腕が伸ばされる。

『明石……。』

遮るようにして腕を宙に伸ばした神通は明石の名を呼ぶとそれ以上声を発しなかったが、じっと目を見つめて僅かに首を左右に振る事で彼女の意志は明石に示された。

頼むからこのまま続けさせてやってくれ……。

そんな言葉を無言で自分に投げてくるのが明石には良く解かる。艦尾甲板で察した後悔にも直結する事を再び思い出し、明石は何も言わずに神通と共に霞の後を追って行った。

一方、霞が戻ろうとする仲間達は雪風の勝利によってやんやんやの大騒ぎで、自分達の代表が二人揃って決勝まで勝ち進んだその

大躍進振りに心の底から酔っていた。皆一様に尻の青い新米艦魂だ
てら、この機会に帝国海軍に自分達の名を轟かせてやろうと意気込
んだ本日の大会で、彼女達は夢にまで見た呉鎮最強の栄冠をついに
手に入れたのだ。決勝は霞と雪風でいわゆる二水戦の身内戦であり、
どちらが勝っても呉鎮最強を冠するのは二水戦の駆逐隊である事は
必定。お偉方が見守る前で艦魂社会では水兵さんの階級を頂く少女
達が有頂天になるのも無理は無く、身近に居た者と抱合ったり、手
を取って飛び跳ねたりと思いいの動作で湧き上がる喜びを発散し
ていた。明石と神通の心配が滲んだ視線を背にしながら霞のその輪
の中へと入って行き、皆からの祝福と賛辞をちよつとだけ引きつっ
た笑みで受け取る。

その内に少女達の近くまで来た神通と明石の前には、マットの上
で礼を終えて戻ってきた雪風が元気良く小走りで歩み寄ってきた。

『はあ・・・、はあ・・・！ 戦隊長、勝ったツスよ！』

今しがた死闘を制した上に走ってきた為か雪風は肩で息をしなが
らそう言ったが、彼女の大きな釣り目は上司よりのお褒めの言葉を
待っている事を示してキラキラと輝いている。頭上に輝く太陽の光
も宿るその目に、神通は口元を緩めて雪風の肩に手を置きながら労
いの言葉を掛けた。

『ん。勝ったか。これで私達が呉鎮最強である事が決まったな。よ
くやったぞ、犬。』

『うッス！ 決勝では猿をブツ飛ばしてやるツスよ！』

『ふん、そうか。油断はするなよ、犬。』

待ちに待った上司のお褒めの言葉は雪風の心から疲労の色を一気
に拭い、白い歯を唇の隙間から輝かせてみせる。仲の悪い霞との決
勝である事にもその闘志はより一層火の勢いを強くしているらしく、

雪風は両手に握った拳を胸の前で掲げて気合を入れなおした。

対して雪風の意気込みによって放たれた言葉で霞の怪我の事を神通は頭に瞬間的に過ぎらせてしまいが、それを口にしてしまう事はせつかくこの場に戻してやれた霞の胸の内を踏みにじる事になると考え、雪風からふと顔を逸らして波間を眺める。もちろんそれはフリだけで、彼女は自身の表情の変化によって雪風がその事に気付かぬ様に企図したのだった。

しかしそんな二人を瞳に映す明石は神通が企図したような行動を取る事も無ければ、その表情はこの場にいる事が不釣り合いにも思えるほどにどんよりと曇っている。霞の怪我が思いの他酷く、そも安静という処置の基本を軍医である自分が放棄した事が、明石の意識の中では激しく叱責するような声色に変わって疑問を投げつけていた。

本当にこれで良いのか？　本当に自分がした事は間違っていないのか？

今まさに試合を行う為の会場へと戻ってきた霞の横顔を遠めに眺めながら、明石はこの時、声無き自問自答を何度も繰り返す。

だが悩める明石が答えを出せぬまま、その隣に立つ神通が部下達の躍進にほんの僅かだけ口元を緩めた刹那、早くも飛行甲板の上には本日最後の試合となる決勝戦の開始を促す呉竹くれたけの声が響く。

『傾注ー！　これより決勝戦を始めます！』

その声に龍驤艦の飛行甲板上からはざわめきが消え、いよいよ呉鎮にて最も強い駆逐艦を決める試合に見合う心地の良い静寂を与えていく。甲板のあちこちにたむろする軍港の雑役船の艦魂達が拍手を始め、残念ながら今回の大会では全姉妹が次代を担う若者に負けてしまった吹雪を始めとする特型駆逐艦の者達が優しげな面持ちを

浮かべ、供に大躍進をしてみせた者同士の戦いに胸を躍らせる大会本部の伊勢^{いせ}らが好奇心に支配された視線を集中させる中、マットの中央では呉竹が声を張り上げて二人の選手の名乗りを上げる。

『右舷側、第16駆逐隊、雪風二水！ 左舷側、第18駆逐隊、霞一水！』

『はい・・・！』

『はい！』

呼ばれた二人が元氣良く返事をしてマットの上へと歩き出していく。明石はついに霞が怪我を押して試合へと向かおうとするその背中に無意識の内に手を伸ばして彼女の名前を呼ぼうとするが、さつきと同じ様にまたしてもそんな明石の胸の辺りには隣に立つ神通の腕がゆっくりと持ち上げられた。動揺を隠せない表情での明石は腕の主に視線を向けて自身の胸の中に湧き上がる疑問の答えを無言で問おうとするが、神通は横目で一度目を合わせると何事も無かったかのようにして正面に視線を戻し、マットの上へと足を踏み出し始めた二人の教え子に声を掛ける。

『犬、猿、お互いに油断せずに全力をぶつけて相手を倒せ。獅子^{ししは}搏^く兔、常に頭と全ての力を使って戦に赴くんだぞ。』

『『はい！』』

上司の声が放たれるや二人はその場に一旦立ち止まり、獅子は兔を捕まえる際でも常に力の出し惜しみはしない事を、引いてはいかに単純な物事であっても持てる能力を全て投入する事を意味する言葉を受けて二人一緒に声を返す。ましてこの二人は普段から二水戦内の武技教練においては常に一位を奪い合って張り合っている者同士であり、慣れた相手だから相手の手の内は知っているのと油断して

はならない事をそれぞれが肝に銘じた。

ただ、全力で倒せという神通の言葉を雪風当て嵌めるとその矛先は当然の様に右足首に重度の捻挫を負っている霞になってしまふ為、明石は神通の言葉に霞への心配を一層深い物としてしまふ。ざわめきにも似た胸の高鳴りを抑えるように胸の前で握った両手を掲げ、明石はやはり声を発しています。すぐこの試合をやめさせるべきなのは一瞬思った。

だが心優しい明石の事を解かっている神通は明石の唇が動く前にその肩に手を触れ、耳元に自身の口を近づけて呟くように声を放つ。

『明石。怪我をしてるからって加減して試合をして欲しいなんて当の猿は思っていない。見ろ、猿の顔を。痛かろうがなんだろうが、最後まで戦に赴く事が猿をあんなにまで良い顔にしてるんだ。それに相手も相手だからな。手加減するつもりもアイツにはないさ。犬にもな。』

神通の囁きを耳に入れながら明石の瞳に映るのは、マットの中心で審判の呉竹を挟む形で対峙している霞と雪風の姿。それが降り注ぐ陽の光によるものなのか、心地良い瀬戸内の秋風によって作られた物なのか解からないが、二人は頬に浮かぶ汗をキラキラと輝かせて僅かに口元を緩めている。涼しげな表情で互いの視線をぶつけ、辺り一面から木霊するそれぞれへの歓声も耳には入っていないかの様な静けさすらも彼女達の間には立ち込めていた。

不思議なその雰囲気は何故か邪魔してはいけないと明石は感じ、今しがた起そうとした行動をやめる。

『う、うん……。解かった……。』

『ん。すまん、明石……。』

ちよっとだけ不貞腐れるようにしかめた顔で了解の意を示す明石

に神通は感謝の念が色濃く滲んだ謝罪の言葉で応じ、足元に視線を落として未だ自問自答に襲われている明石の横顔へ彼女は包み込むように優しい微笑を向けるのだった。

しかし上司と友人のそんな心温まる瞬間を、今まさにその雌雄を決せんとマットの上にて相對している霞と雪風の威勢の良い声が粉微塵に碎く。それぞれ猿や犬と上司より呼ばれ、文字通りの犬猿の仲であるのがそもそのこの二人の在り方であり、しかも具合が悪い事に二水戦の武技教練の試合においては接戦を展開した末に乱闘に及んで試合の体裁を維持できなくなる事から、未だにこの二人の間ではお互いの優劣が着いていなかった事にその応酬の理由があった。

『こんのエテ公め!!　ここで会ったが百年目だ!　今日こそ決着をつけてやらあ!!』

『上等だ、この野郎!　犬に似合った四つん這いの格好で吠え面搔けるようにしてやる!!』

お互いに大股になって互いの顔にピンと立てた人差し指を向けながら、激しい剣幕で怒号をぶつけ合う霞と雪風。絶える事のない明石の心配や上司の想い、仲間達の応援、周囲からの期待も、非常に仲が悪いこの二人にあっては時折思考より抜け落ちてしまう。即座に神通が『馬鹿者が!!』と叫んだ事で二人は我に帰るが、もうその頃にはそれまで二人を包んでいた歓声は失笑へと移り変わっていた。

『んもう、またやりはったわぁ・・・。』

『あゝもう、せっかく二水戦を見る目が良くなったのに・・・。』

龍驤艦の飛行甲板上をうねる失笑の波が、張り切って応援してい

た二水戦の少女達を瞬時に赤面させていく。一日に何度恥を掻かせるのかと彼女達は少し二人を呪い、その代弁として怖い怖い上司である神通のギラついた視線がマットの上の霞と雪風を刺し貫いた。対してさすがの霞と雪風も神通のお叱りだけには天地がひっくり返っても勝てると思っておらず、後に受けるかも知れないげんこつの可能性を脳裏に過ぎらせてそれ以上の口論をやめる。なまじ自分達を取り巻く失笑が、大事な大事な二水戦の名前に泥を塗っている事を示しているのだから無理もない。もちろんその主犯格は呉鎮最強の駆逐艦を賭ける神聖な場において猿と犬になった、他ならぬ霞と雪風だ。

もっともようやく無駄口を叩くのを二人が止めた事により、審判の呉竹としては試合の続行をこなす事がやっと出来る状態になった。どうやらこの二人の若者は仲が悪いらしいと察しつつ血氣盛んなその様子を懐かしむようにして微笑むと、降ろしていた両手を持ち上げて試合の進行を開始していく。

『では、正面に礼!』

未だ嘲笑の余韻が冷めやらぬ中での合図に従い、雪風と霞は大会本部に向けてお辞儀をする。霞の右足首はたすき掛けの様にして幾重にも巻いた包帯で簡易に固定してあるのだが、明石や神通がみつめる先での霞は至って普通に身体の向きを変え、深々と腰を折っていたりしている。今の所は足首の痛みをそこそこに抑えられているようで、艦尾甲板では苦悶によって歪んでいた表情も今はたまに顔をしかめるくらいであった。

やがてお互いに向き合つての礼を終えるや、霞と雪風は目の色を瞬時に変えてお互いに軽く腰を落とす。両腕をゆっくりと前に伸ばし、顎を僅かに引いて身構えたその様子を認め、呉竹は本日最後の試合にしていよいよ最強の座を賭けた大一番の開幕を示した。

『始め!』

決勝戦ともなると注目の度合いも大きく、呉竹の合図が放たれると飛行甲板のあちこちから短い歓声と拍手が巻き起こる。大会本部のお偉方も椅子から身を乗り出すようにして試合場に熱い視線を注ぎ、マット端っこに当たる部分には吹雪の姉妹達や軍港雑役船の艦魂達が押し寄せてこの一戦を見逃すまいとしていた。

そんな中での霞と雪風は神通のお叱りを受けた事も功を奏し、お互いに妙に高ぶる事のない静かな緊張感を抱きながら試合を始める。一回戦にも示されている通り雪風はその性格に似合わず慎重に相手の体勢を崩しに掛かる戦い方で、強靱な足腰と腕力を懐の辺りで器用に使う守備型の柔道とも言え、悟られぬようにしていながらも右足首を負傷している今の霞にとっては吹雪の様に速度的な咄嗟の攻防とはなり得ぬ相手で少しありがたい。

踏み込む手前程の遠い間合いから霞は雪風の袖へと手を伸ばし、腕力に自身のある雪風はあわよくば逆に霞の袖を取って自分の間合いに強引に引き込んでやろうと霞の腕を捕まえようとする。しかしながら霞の怪我の事を知らない雪風は大きく腕を伸ばして懐が空いた瞬間に瞬発力に優れた霞による得意の突進も警戒せねばならず、憂い無く霞の腕へと対応出来る物ではなかった。故にお互いが相手の腹を探りつつ袖の掴み合うという小競り合いがそこには繰り広げられ、双方共に一筋縄では決着をつけさせてくれる様な相手ではない事を見学する者達も無言で納得する。

でもやはりいつも常日頃より二人に教えを授けている神通には、霞の動きに持ち前の俊敏さが欠けているのはすぐ解かった。前後に開く左右の足の幅も狭く、左右前後へと忙しなく飛跳ねる様な仕草も殆ど無い。その上で揺さぶりをかけ様として上半身を大きくくねらせたり反らしてみたりする霞の柔道は、口にこそ出さないが神通自身が柔道の際に用いる戦い方でもある。単に脚力と素早い身のこ

なしを特徴とする霞に上手く合う為に授けた戦い方でもあったのだが、やはり自分と同じ姿勢で相手に挑んでいく若者の姿はそれに見合った親近感とも親心ともとれる様な感情を神通に与えてくれる。だがそれ故に神通は、愛弟子が本来の自分を右足首から襲って来ているであろう苦痛によって発揮できていない事をすぐに気付いてしまふのだった。

するとすぐさま神通の感じた物が、試合場たるマットの上では現れる。

お互いに袖の取り合いの応酬の最中、霞は掴まれた袖を振り払おうとする雪風が振り払った直後に一旦距離を取ろうとする癖を見つけ、重心が軽く浮き上がったその一瞬を捉えて一足飛びに雪風の懐目掛けて飛込もうとする。

『ぐ・・・！』

しかし霞の身体が前へと進み始めた途端、彼女の右足には雷鳴の如き激痛は瞬間的に放たれてその推力を根こそぎ奪って行った。すぐに失速を始める霞の突進は雪風に回避の猶予を与えるには十分である。

『いよっと！』

体を捻りつつも真後ろに飛び退いてみせる雪風。元より彼女は霞に読まれているとは知らずに後ろに退くつもりであったのだからその動きは軽快であり、雪風の前には片足が進まずにその場へとつんのめる様にして崩れていく霞の姿があった。

『あぐっ・・・！』

なんとか二本の腕で受身をとる霞であったが、満足に利き足が動かせないのでは思い描くような身のこなしを発揮できない。顎をマツトに打ちつけてうつ伏せに転ぶ霞は、倒れこむを同時に悲鳴と苦痛が入り混じった痛々しい声を放った。

すると彼女の頭上からは、自身の攻撃を難なく避けてみせた大機嫌いな雪風の声が浴びせられてくる。

『ケッ！ トロい猿だな！』

『ゼハ、ゼハ・・・！ な、なにを・・・！』

見下した視線と嘲笑を笑みを浮べた雪風の憎まれ口が霞の心を怒りで満たすが、即座に立ち上がってやろうと企図しても霞の右足は中々動いてくれない。所詮は包帯でグルグル巻きにしただけの処置であるから霞の右足首は完全に固定されているとは言い難く、立っているだけでも彼女の右足首は雪風との駆け引きにより微細な動きが求められる。当然、動かす度に霞の意識の大半を痛みと苦しみが支配し、さつき試合が始まったばかりだというのに規律を失った呼吸をしている事の真相ともなっている。強く唇を噛んで歪んだ表情を浮べながらゆっくりと立ち上がるのも、疲労では無く右足首の激痛に理由があった。

『霞先輩！ しっかり！』

『霞姉さん！ 頑張るんや！』

二水戦の少女達も戦っている二人がどちらも自分達の代表である事からこれまでの応援は両者に公平に送ってきたが、フラフラと覚束ない足取りで立ち上がる霞を目にして叱咤の声を放つ。

もちろん彼女達は霞が怪我をしていること等知りもしないのだが、そこから少し離れた背後の方ですっと試合を見ていた明石と神通は

その限りではない。鬼気迫るような覇気が籠った顔で食いしばった歯を唇より覗かせる霞は、今しがた雪風より放たれた憎まれ口に立腹したように見える。試合を始める直前にその犬猿の仲を示して見せたのだから明石と神通以外の見学者は一樣にそう捉えて疑う事は無いが、霞の怪我を知る明石と神通から見れば、それはどんどんと増してくる痛みに懸命に耐えながら尚も戦おうとする霞の姿に他ならない。

『か、霞・・・！』

友人に対する心配の念は怪我の事実によって油を注がれ、瞳に映る痛々しい患者の姿は明石の意識を試合場へと誘う。もう既に満身創痍である事は明白であるし、太陽にも負けぬ元気な笑顔がいつも眩しい筈の霞の顔は苦悶の色のみで染まっている。そんな霞にこれ以上試合を続けさせる事は、友人の想う心優しい明石には出来なかった。

咄嗟に明石は霞の名を呼ぶと試合場に駆け出そうとする。後悔なんかしたくないという当の霞とそれを理解してやれた神通の願いも、もはや明石の脳裏には浮かび上がってこない。目の前で苦しむ霞を、軍医としても友人としても放ってはおけなかった。

しかし明石がまさに足を一步踏み出した所で、明石の身体は神通が肩を組むように巻きつけてきた腕で制動される。同じ細身の長身な体格ながら、明石より背も高く力も強い神通の腕は明石の身体をそれ以上前へと進ませる事は無いが、今すぐ霞へと駆け寄って救いの手を差し伸べねばと叫ぶその心までは止めることは出来ない。

『じ、神通・・・！　こ、これ以上は私、見てられないよ・・・！』

既に友人達の願いを胸の中では退けた明石は、付近の者達が自分の声を聞いてそれまで口外してこなかった霞の状態を知ってしまう

事も承知で叫ぶ。それでも尚、神通は明石の肩の辺りに巻き付けた腕より力を抜かず、明石は叫び終えるや神通の腕から逃れようと真横に寄り添う形で立っている神通に顔を向ける。

その時、一年以上も彼女とは親友として付き合ってきた中で僅かに一度しか見た事が無かった一筋の輝きを、明石は神通の鋭く釣り上がった瞳の端に見つけてしまった。

『・・・なぜ、あんなに頑張るんだろうな・・・。猿は・・・。』

ただただ静かに、神通は声を放つ。

呼吸を乱す事も無く、飛行甲板に戻ってきた時と何一つ変わらぬ声色でそう言いながら、神通は眼前にて再び雪風との乱取りを再開させている霞の姿を濡れた瞳に映していた。初めて明石と出会った時に一度だけ見せたその涙は、明石の心に声も無く沈静を命じていく。

『・・・一言、足が治ったらって言えば良い物を・・・。・・・何故にああやって頑張るんだろうな・・・、アイツは・・・。』

飛行甲板の上に木霊する歓声に掻き消されてしまう程の声であるが、明石は耳元で放たれる友人の言葉と彼女の涙の重さが胸に堪える。

常に怖い上司として霞や雪風を始めとした部下達を虐め鍛え、先輩や目上の者と喧嘩してでも絶対に己の信念を曲げようとする神通。その体裁を頑なに守り続け、口出したなら例え友人の明石であつても公然と怒りに向けて来る彼女が、振り返ればすぐに部下達によって認められてしまう今の状況にも関わらず涙を流している。生来がいつもの怖い上司という姿以外の自分进行他人に見せたがらない筈だった神通の涙は、それだけ眼前にて何度も転んだりしながら、苦痛に顔を歪めながらも諦めずに必死に立ち向かうとする部下に、

胸に抱く部下への想いを大きく揺さぶられているからこそ流れた物だった。

その意味を親友と自負する明石はすぐに察すると同時に、陽の光を浴びて輝く神通の涙を否定する事はいけないと声を発せずに悟り、霞の元へ向かおうとする心と身体を自ら抑制した。

すると神通と明石の正面より一際大きな歓声が上がリ、静観しようとうと声を交えずにお互いに決めたばかりの二人が目を見張った先では、お互いにおでこがぶつかってくるくらいの距離にまで詰め寄ってそれぞれの袖や襟へと手を伸ばしている霞と雪風の姿がある。大きく肩で息をしてどこか表情も虚ろになってきた霞の状態を認め、それまでじっくりと機会を窺っていた雪風がついに自分から霞の懐へと潜り込んだ瞬間であった。

『こんのお！』

『うぎ・・・！　ち、ちくしょう・・・！』

背は同じくらいでも自分より腕力で優れている雪風という相手を知る霞は、全く自分の調子で組み合った状態ではない事から一旦逃れるべく足を動かそうとするが、激痛を通り越してもはや足の裏の感覚すらも無くなってしまう彼女の右足は霞の意識に従う事は無い。真正面より雪風の腕に捕まってしまい、その勢いのままに投げられないようにと雪風の袖や襟を握り返すのが精一杯だった。すると体力に勝る雪風は最初に襟を掴んできた右手をパツと放し、下から突き上げるようにして今度は霞の柔道着の帯へと伸ばしていく。霞は瞬時に雪風が自分を下から抱え上げる様な体勢で投げようとしているのだと判断してそれまで雪風の袖を掴んでいた左手を離し、正面下方より襲ってくる雪風の袖を握ってその自由を奪おうと試みる。

だがこれは罠だった。

『ふんが!』

『ぐあ・・・!』

自分の胸の前くらいでの手の動きは雪風の最も得意とする所。霞が左手で応戦しようとする様子を確認するや、雪風は下側から伸ばす右手を霞の頬をかすめるようにして引き抜き、横から殴りつけるような軌道を描いて霞の首真後ろに当たる奥襟へと右手を伸ばしたのだった。

そして奥襟を取られた事を察した瞬間、満身創痍の霞の右足には衝撃が走る。これまでにない苦痛に襲われる霞の右足には半身の体勢へととなった雪風の右足の踵が添えられており、霞の身体はそのまま雪風の右足を軸にしてその外周を回る様に円運動で流れていく。少々強引に巻き込むような形で発動された、雪風による変則の大外狩りであった。

『『『 おおおお!!! 』』』

小競り合いがずっと続いていたこの試合において、ついに片方の技が出た事に会場が湧く。その割れんばかりの喧騒に霞の悲鳴にも似た呻き声は掻き消され、身体を支える事など到底不可能な彼女の右足はいとも簡単に膝から折れ曲がる。対して雪風は足の掛かり具合に抜群の手応えを得ており、このまま引き倒してやろうと自分の肩に霞の顎を乗せるようにして身体を密着させ、渾身の力を振り絞って霞の背中をマットに向かって降下させた。

次の瞬間、持てる力と自分の体重の全てを預けるようにして雪風はマットへと急降下。鈍くどもった様なマット独特の衝撃音が響き、叩きつけられた霞の身体は勢い余ってマットに背をつけてから僅かに浮き上がる。その上に雪風は腹這いの格好で折り重なるようにして倒れ込み、技を仕掛けてから最後の瞬間まで霞の身体が背中を下

にして崩れるように維持した。その理由は柔道において勝負を決める判定の基準が背中を背にして倒れる事と決まっているからであり、雪風はその基準を見事に成してみせる。

信号ラッパの様に寥々と鳴り響く呉竹の声が、その事を物語っていた。

『いっぱーん！！ 雪風二水！！ それまでえ！！』

空気を切り裂くように放たれた判定だが、声を聞くまでも無い。一緒になって倒れたとは言え、思いつきり背中から叩きつけられた霞への弁解など不可能だった。幾重にも重なり合って渦巻く歓声にも雪風を湛える言葉が混じっている事でそれは表されており、マツトに突っ伏したままの霞と雪風も自分達の試合の結果を確信する。その刹那、雪風は跳び起きる様にして立ち上がるや、一年近くにも及んだ宿敵との抗争について終止符を打てた喜びを爆発させる。

『おっしゃああああ！！ 見たか、コラアア！！』

拳を握って腰を落としながら天に向かって咆哮する雪風。余程嬉しいのかその場を彼女はピョンピョンと跳びはね、マットの周辺にいる者達に向かって自身の強さを誇示するように右腕を向けていく。二水戦の日々の中では武技様錬や勉強においてもずっとずっと決着がついてこなかった、犬猿の中である霞をようやく完全粉碎できたのだから無理も無い。奇声にも近い叫び声を上げ、彼女はマットの上を汗で輝く笑みを浮かべながら走り回った。

『アタイが最強だ！ ひゃっほー！！』

これまでにない雪風の喜び様を瞳に映していた少女達が祝福の声

援を送る中、その後ろで同じ光景を目にしていた明石の身体からは、それまでまわり着いていた神通の腕がゆっくりと離れていく。さつきまで霞の激しい闘志を目の当たりにしていた明石と神通も、ろくに返し技で反撃する間もなくあっけなくマットに叩きつけられてしまった霞の姿を半ば呆然としたような表情で眺めていた。

『か、霞……。ああ……。負けちゃった……。』
『……。』

力なくそう呟く明石を隣に、神通は無言のままで目尻に溜まっていた物を指先で拭い去る。怪我をした部下の最後は確かに可哀想ではあったが、そんな霞を相手に見事な一本勝ちを納めた雪風だって大事な部下の一人。上司としては悲しみ半分、喜び半分といった所で、明石に対しても当の部下達に対してもなんと声を掛けて良いのか神通には解からなかった。

すると二人が顔を向けるマットの上では、自分に向けられる歓声と天誅達成の事実で我を忘れて酔いしれていた雪風に、試合の進行を掌っている呉竹が声を掛ける。

『いえーい！ アタイの勝ちだーい！』

『おーい。そろそろ礼に戻って来いよ、おチビちゃん。』

『あ。うーッス！』

笑いながら礼を促した呉竹に従い、マットを走り回っていた雪風がようやく定位置へと戻った。すっかり上機嫌で胸に収まりきらない喜びが雪風の疲れ切った身体と心を羽根の様に軽くし、彼女はダンスのステップを踏む様な足取りで歩く。

一方、呉竹は素直に指示に従う雪風に笑みを送ると、今度は足元にて投げつけられたまま仰向けになっている霞にも立って礼に応じる様に促す。礼に始まり礼に終わる柔道の在り方を最後まで貫こう

と考えているからだ、見事に優勝を決めてご機嫌な雪風に反し、足元に倒れる霞には声を掛けるのが呉竹にあっては少し億劫になった。なぜならこの時、呉竹が足元に向けた視界には、頭を抱えるように両手を額の辺りに這わせてすすり泣く若者の姿があったからだ。

『……残念だったね、ちっちゃいの。もうちょっとだったのにね・
・・。』

『う・・・、ううう、ううつ・・・。』

勝者がいれば同じ場所に敗者もいるのが試合という物の常。それもあと一步で本日の柔道大会にて頂点に立つ事ができた決勝の場において、果敢に挑戦を続けてきた霞は力及ばず負けてしまった。甲板の脇から嘔吐しながらも身体を鍛え、お尻を何度も竹刀で叩かれながら上司の教えを受け賜り、所望した昔話を洩りながらも神通の口より聞かせてもらい、死闘の末に吹雪という大先輩を打ち破った、今日という日の霞の戦い。自身の右足首が負傷しようがなんだろうが、仲間の為にと頑張った霞の願いだったが、非情にも実る事は適わなかった。投げつけられた後に雪風が歓喜の声を上げるのを聞いた瞬間、霞はその事を誰に教えられるでも無く知ってしまい、瞬間的に吹き消されてしまった燃え滾る闘志と入れ替わりに彼女の胸には悔しさと無念が滝の様に募る。それは霞の瞳より溢れ出る幾筋もの輝く流れへと形を変え、滲みいく視界で目にした青い空に霞の泣き声は吸い込まれていった。

呉竹はそんな霞にそれ以上の声を賭けてやる事が出来ない。無念の想いと打ち碎かれた呉鎮最強への道、その胸の内は推し量るのに余りある。呉竹自身も昔はこうして涙を飲んだ経験を持ち合わせているが、長く生きてきた彼女であっても一向にこういう場面に慣れる事は出来なかった。

その内に呉竹の指示を受けた雪風は試合開始の礼をした位置へと戻り、マットの一角にて未だ倒れたままである一年近くも争ってき

た天敵の末路を一目見てやろうと意気込む。喧嘩でもお勉強でも運動でも、これまでに優劣をはっきりさせた事が無かった彼女は、霞の歪んだ泣きっ面を見ても呉竹の様に彼女の気持ちを察してやる気など微塵も無い。『ざまーみろ!!』と思いつき馬鹿にしてやろうと思い、彼女は少し歩いた所ですすり泣く霞へと進んで行った。だが2、3歩進んだ所で、それまでニヤついていた雪風の表情はその色合いを驚愕へと変える。霞は足を雪風に向ける格好で倒れていた為、雪風は近づく際にその右足に特徴的な麻色の肌に代わってグルグル巻きの包帯がある事を認めたのだ。

『さ、猿・・・!?!』

咄嗟に声を上げた雪風は倒れた霞へと駆け寄り、彼女の足の辺りでしゃがみ込んで僅かにはだけたその裾を捲り上げてみる。すると霞の右足の足首は全て包帯によって包まれており、腫れあがっている上に包帯を巻いている為か、霞の右足首は左のそれと大きさが異なるような状態で雪風の瞳に映る。切り傷や打撲などとは程度が違う負傷を霞が伴っていた事は疑いようは無かった。

『テ、テメエ・・・!　　なんで言わねーんだよ!』

『ううう・・・、うう・・・。』

『こんな足でアタイに勝てると思ってたのかよ、馬鹿野郎!　　なんで怪我してっからって言わねーんだよ!』

さっきまでの笑みが嘘だったかのように雪風は眉を吊り上げ、怪我をした状態で挑んできた霞を糾弾する。試合の最中、お得意の突進に失敗して何度も何度も無様に転ぶ彼女を雪風は鼻で笑っていたが、この時になってようやくその真相を理解する。天敵たる霞は既に試合をする前から怪我を負った状態であり、逆に万全であった雪風とは試合を始める前の段階で既に有利不利が存在していたのだっ

た。何事も型に嵌るのが嫌いな鼻っ柱の強い雪風にとって、結果が見えている勝負事ほど嫌いな物は無い。それもお互いの実力が拮抗している事をいつもの二水戦の日々で不本意ながらも十分に知っていた雪風は、勝って当たり前という状態で霞との間に優劣の差をつけた事が腹の底から氣に入らなかった。

故に雪風は大きな釣り目を更に尖らせ、大勢の艦魂達に見られている事も忘れて剥き出しの怒りを顔に表す。怒号にも近い声ですすり泣く霞を叱責するが、ふと自身の仲間達がいるマットの端より響いてきた高めの声に雪風は放ちかけた声を飲み込んだ。

『犬、よくやった。』

『あ……。戦隊長……。』

語りかけに雪風が目を移すと、明石や二水戦の仲間達を背にしてマットの上に足を踏み入れてくる上司、神通の姿がある。既に試合が終わった段階で熱くなった目頭も沈静させ、雪風と霞の元へと近づいてくる彼女は、いつもの神通らしい落ち着いた表情を浮かべている。どこか不機嫌そうに口を横一文字に結び、日本刀の切っ先を思わせる鋭く尖った目は雪風がしる神通の普段通りの姿だった。

やがて神通はスタスタと雪風の前まで歩み寄るとその肩に手を乗せ、ほんの少しだけ瞳の角度を緩やかにして教え子が成し遂げた勝利を褒め称える。

『決して無理をせずにじっくり猿を観察し、しっかり猿の動きに目安をつけて終盤に自分の思うとおりの戦いに持ち込んだお前の勝ちだ。頭と自分の得意な物、優れてる物を組み合わせた良い勝ち方だったな。』

上司による労いとお褒めの言葉はいつもなら雪風の心を躍らせ、氣力を一気に漲らせるだけの力が有るのだが、この時だけは雪風は

神通の言葉を真に受けるような事はない。なぜなら神通が讃えてくれた勝利その物が、最初から決まっていたに等しい茶番劇の様に雪風には思えたからである。

すぐさま雪風はその事を伝えるべく、怒りの色合いが滲んだ声で口を開く。

『戦隊長、見てください！ この馬鹿、怪我してるんすよ！ こんな勝ちなんてアタイは嬉しくもなんとも無いッス！ 勝って当然じゃないスか、こんなの！』

『ふん、馬鹿者が。お前は教育日課で何を学んできたんだ。』
『え……。』

すると返ってきたのは上司によるお叱りの一言。いつもならこれにげんこつのおまけが付いて来るが、雪風の前で目の形をまた菱形に戻す神通は腕を振り上げる素振りを見せない。神通は腰に手を当てて僅かに首を捻り、黒い瞳に頭上の空の色を宿して雪風の言葉の間違いを論していく。

『戦という物はいつ何時であっても、自分と相手の条件が同じになる事などあり得ない。』兵ハ詭道ナリ”。戦という物の本質は相手との騙し合いだ。むしろ戦をするに当たっては自分には有利で相手には不利な条件を与えるように、どう転んでも勝って当然な条件を得て臨めるように、常に頭を使えと教えた筈だぞ、犬。』

『……。』

『さっきの試合では良く頭を使い、例えその原因が怪我だったとしても踏み込んだ直後の霞の動きが酷く緩慢になる事を見抜いて仕掛けたお前は正しい。よくやった。』

上司の言葉は雪風が口にした事を真っ向から否定する物だったが、試合における自身への評価はさすがに正鵠を得ている。この一年間の間、仲間達と同じく必死に「私立神通学校」の中で己を磨き、怖いお師匠様の教えを時には竹刀の一撃を経てその身に叩き込んで来た雪風。そんな彼女であるからこそ、試合の中では上司の教えをひたすらに履行しようとして頭脳も駆使した戦いを意識せずとも展開できたのである。腕力や体力だけではなく、戦い方や戦その物に対する向き合い方、概念、理論。雪風が持つそれら全ては、神通より愛の鞭と供に授かり、自身もよく理解した上でその小さな身体に宿した大切な教えなのだった。

だがそれでも尚、雪風の胸の中はスッキリしない。姉妹の為、友人の為、上司の為、二水戦の為と決心し、何が何でも手にしてやろうと懸命に挑んだ呉鎮最強の栄冠を賭けた本日の大会において、長き因縁の決着も含んだ霞を相手に迎えての決勝戦が、実力の優劣を無視して最初から勝敗の天秤が自身に傾いていたという事が雪風にはどうしても許せなかった。

『な、なんで・・・！　せつかくの決勝だったのに・・・！　ア、アタイが最強の駆逐艦になれる試合だったのに・・・！』

齒を強く噛んで降ろした両手に拳を握り、雪風は公平な条件の下に戦う事が出来なかった事への怒りに打ち震える。齒の隙間から漏らす声は身体に従って震えるも、籠められた怒りの色合いはさつきよりも更に激しくなっていた。

もっとも雪風が自身の言葉を受けて理解を示していない今の姿を、神通はいつもの様に怒るような事は無かった。彼女は腰に手を当てたまま、俯いて足元を睨みつけている雪風をじっと眺め、少しの間だけ沈黙の間を持った後に小さく口元を緩ませた。雪風が全身に示すその怒りこそ、いつぞやイギリス海軍の戦闘で彼女が教えようとした、神通が独自に抱く戦への観念その物だったからである。

それまで雪風の肩に触れていた片手を降ろし、神通は静かにそれを雪風に問う。

『犬、戦とはどういう物だ・・・？』

これまで神通の元で励んできた雪風の脳裏には、すぐさまその問いに対する答えが浮かび上がってくる。

まさにこの時、雪風は以前に上司から教えてもらった言葉の真の意味を身を持って理解した。

『い、戦とは・・・、そ、そもそもが・・・、理不尽・・・！』

『・・・ん、よく覚えていたな。その通りだ。』

かつて美保ヶ関事件で不幸にも仲間を殺めてしまった神通が導き出したモノ。それをようやく雪風という教え子が完全に受け継いだ事を神通は確認し、当の雪風が噛み締めるようにして怒りを溜め込むのとは反対に彼女は笑みを浮べて頷く。

一貫して神通が抱いてきた考え方にして、海軍艦艇の命たる自分達に義務付けられた事への捉え方。例えば戦への見識が豊富であろうとも、例えば魚雷や砲術、艦隊運動に関する知識に精通していても、例えばその短気な性格から殺伐とした言葉を普段から用いていようと、神通は好き好んで戦に相對する者などではない。彼女は腹の底から、全てが理不尽である戦という物が大嫌いであった。

雪風が声を失って自分と同じ目の色を宿したのを確認した神通は、音も無くその場にしゃがみ込んで未だに涙と鳴咽に苦しむ声が静まっていない霞の身体に手を伸ばす。片腕を霞の背中とマットの間に滑り入れてゆっくりと抱き起こし、自身の胸の辺りに霞の顔が位置するくらいまで上半身を起してやる神通。怪我を言い訳にせず最後まで戦ったもう一人の教え子に神通は間近で笑みを見せてやるが、この時、彼女自身が今しがた雪風に教えた事を改めて思い知る事に

なった。

『えい、ごめんなさい、戦隊長……。うううつ……。ごめんなさい……。あ、うああ……。』

既に汗も引いた麻色の頬にぼろぼろと涙を流して泣きじゃくる中で、霞は何度も何度も上司に向けて詫びの言葉を放つ。神通は、きっと彼女が自分から最強への道を歩むと示し、その上でここ数日の特訓を受けて来たにも関わらず結果を出せなかった責任を感じ、これまで今日の大会に備えて教えを授けてくれた自分に罪悪感の様な物を感じてしまったのだらうと思った。まして試合の最中は右足首を負傷していたとは言え何度も躓くように転び、その様子はお世辞にも立派な戦い方だったと評するには無理のある無様で格好の悪い物。その不甲斐無さをも根が素直な霞は自分の罪だと認識したのだらうと神通は考え、部下が自分を責めるのを止めさせるべく静かに声を掛けた。

『謝る事は無い、猿。怪我をした中であそこまで戦えた事は並大抵の事じゃない。それに吹雪にも勝った準決勝の試合は素晴らしい内容だった。誰にも文句は言わせん。お前は立派に戦った。』

『あうう……。ゆ、優勝、できなかった……。わ、私せ、戦隊長と、同じ戦い方なのに……。』

『うん……。？』

返ってきた霞の途切れ途切れの声にはこれまでの教育や、今回の大会への参加を自分から言い出した事に対する責任などは無く、代わりにそこにあっただのは神通と同じ戦い方という言葉だった。確かに霞が言う通り、神通が彼女に与えた柔道の戦い方は神通自身も用いている足を使った速度的な戦法なのだが、単にそれは霞が小柄ながらも脚力と瞬発力に優れているというその身体能力によく合って

いると判断して与えただけに過ぎない。その上で霞が言う戦い方と優勝できなかった事に神通は上手く接点を見つける事が出来なかったが、大きく歪めた泣き顔で口を開いた霞の声によってその意味を知った。

『うう……。せ、戦隊長の戦い方で、優勝できな、かった……。せ、戦隊長は、ま……。間違ってなんかいないって……。しよ、証明できなかった……。あ、あああ……。』

言い終えるや霞は声を上げて号泣し、自身の願った事が適わなかった事への悔しさを飛行甲板にいる全ての者達に示す。

姉妹の為、仲間の為、所属部隊の為に頑張った霞が懸けた想いは、自分の師匠でもあり上司でもある神通へも向けられていた。いつもげんこつと竹刀を振り回し、雷鳴の様な声でお叱りの声を浴びせつつも教育に関しては決して投げ出したりせず、解からない事には理解できるまで夜遅くまでになっても教えを授け、時には渋々であっても自分の修行時代を話してくれた上司。そんな神通を尊敬する霞は、今回の大会で優勝する事で呉鎮最強の駆逐艦の栄冠を手に入れると同時に、自分を育ててくれた神通が二水戦以外の艦魂達に認められる事を企図していた。

帝国海軍の艦魂社会ではその性格によって大いに嫌われ者である神通の事を、観艦式前に行われた宴の場にて霞は知ってしまう。無理も無い事だとは霞自身も思いながらも給仕のお仕事をしている最中に小耳に挟んだお偉方の言葉は、実体とはかけ離れた神通に対する誹謗中傷が大半だった。当の上司は屁とも思っていないようだったが、決して嫌われ者という一言で終わる人物ではないと信じる霞は、なんとか上司に花を持たせて周囲からの視線を良い物にしてやろうと考えたのである。その考えを行動に移したのが本日の大会で優勝を目指す事であり、呉鎮最強の駆逐艦として自身が認知される事であった。そうすればそもそもの戦い方が全く同じである事から

神通への教育姿勢とその内容に間違いが無いという事に繋がり、時雨ぐれという柔道の名手を部下として持てた川内せんだいのように上司もまた部下をあちこちに我が物顔で自慢出来ると思ったのだ。

そしてそんな霞の願いと残念ながらそれが実る事が無かった現実を、神通はこの時に全て理解してしまった。

刹那、神通は霞の額に片側の頬を乗せるようにして抱き寄せる。すぐ近くに立つ雪風を始めとする部下達は10人近くもあり、本来なら一人の部下を特別扱いするような事があってはならないと承知しつつも、部下の秘められた自分への想いが嬉しくて、嬉しくて嬉しくて神通の身体は無意識の内に霞を包んでいた。肌を通して伝わる霞の呼吸と鼓動を感じながら、神通は胸の中で雪風と同じく戦の持つ理不尽さに静かに怒りを燃やす。

なぜ・・・。

なぜこんなに純粹で、素直で、可愛い奴に、唯の一瞬すらの笑みをも持たせてやれないんだ・・・。

霞の身体を抱える神通の手は強く拳を握り、彼女の怒りが普段の二水戦の日々で発揮される物とはその度合いが違う事を表す。だが不思議な物で、部下を抱いた神通の心の炎は間近から発せられる霞の泣く声と吐息によって急速に火勢を弱めていく。入れ替わりに霞が自分の為にと抱いてくれた想いの崇高さを感じる取ると同時に、神通の胸の奥は部下に対する綺麗な慈しみの感情で満たされていた。

明石や他のマットの上にいる3人以外の二水戦の者達、そして伊勢や浅間あさまといったお偉方を含んだ見学者達が一樣に目に映した美しい師弟の姿に熱くなった目頭を押さえる中、神通は霞の背中と膝の後ろに腕を添えて抱きかかえたとその場に立ち上がる。まだ腕の中で止め処なく頬を伝う涙で顔を湿らせる霞に笑みを見せると、僅かに顔を呉竹へと向けて言った。

『すまないが、こいつは右足首を捻挫してる。礼は勘弁してやってくれ。』

『はい。解かりました。すぐに治療させてやってください。』

呉竹も眼前で見た神通と霞のなんとも美しい姿に何かを感じたのか、礼に始まり礼で終わるという柔道の試合の最後を実施する事をやめた。神通は呉竹に一度小さく頭を下げてお礼とすると、雪風に背を向けながら再び声を放つ。

『犬。猿の気持ちがお前にも解かるか？』

『うッス！ 良く解かるッス！』

先程まで公平な勝負ができなかった事に怒りを飲んでいた雪風は、霞と上司のやりとりを目にしてその心に吹く風の方角を変えていた。今しがた神通に返した言葉は嘘ではない。雪風とて上司への想いを彼女なりに募らせ、霞と同じく今回の大会で優勝する事で自分を鍛えてくれた師匠が嫌われ者一辺倒である事をなんとか変えようと企図していたからだ。霞の様に柔道の戦い方が同じ事からより率直にという訳には行かないが、それでも雪風はこの先、呉鎮最強の柔道の腕前を尋ねられた時の回答を定める事によって自身の願いを実現しようと決めている。

誰に教えてもらったものだ？

それは第二水雷戦隊の戦隊長にして帝国海軍屈指の名教育者たる艦魂、神通である。

もう既に誰に聞かれてもこの答えで行こうと決めた雪風。その決心の中には自身の師匠に対する想いと一緒に、大嫌いなながらも同じ物を掛けて戦った霞の想いも含まれている。10年近く無敗であっ

た吹雪という大先輩を倒し、怪我を負いながらも決して諦めずに最後まで立ち向かってきた霞を、いま雪風は自分にとって唯一人しかいない最強の挑戦者だと認めた。その気持ちを胸に刻み、雪風は神通に対して続けざまに言う。

『仲間の想いも懸かった勝負の結果を無下にする奴は二水戦にいらねッス！ もしいたらアタイが魚雷でそいつの艦体を真っ二つにしてやるッスよ！』

『ふん。』

短く声を返すだけの神通であったが、その声色は半笑い気味だった。これまで犬猿の仲であった霞の事を仲間と口にした雪風の事が嬉しかったのか、それとも自分が幼い時に瓜二つの容姿を持つ彼女の物言いがこれまた自分と似ていたからだだったのか。いずれにしても神通は雪風の言葉を耳にするや笑みを作り、そのまま明石と他の部下達が待つマットの左舷側端へと戻って行く。次いでマットを後にするその師弟の背中には、飛行甲板にいる全ての者達から惜しめない拍手が送られるのだった。

その後、雪風はマットの上に留まり、続く表彰式では伊勢より本大会の優勝者として、人間達が感状に使う厚手の紙に達筆な日向ひゅうがが綴った賞状を貰う。誰もが認める呉鎮守府最強の駆逐艦の艦魂としてその名は記され、若輩者の多い二水戦の駆逐隊が現代の艦魂社会においては猛者の集う屈指の部隊である事を雪風は晴れて証明してみせたのであった。

奇しくも後年、彼女の分身はその武勲を讃えられて、「呉の雪風、佐世保の時雨しぐれ」と人間達にも崇められる事になる。

一方、中々泣き止む事の出来ない霞は仲間達の輪に戻るや、すぐに明石より事後処置を受ける事になる。幸いにも彼女の右足首は艦尾甲板で処置した時と状態は変わっておらず、明石がその事を伝えたと神通は珍しく大きく溜め息を放って胸を撫で下ろしていた。

神通の心優しく部下想いである所を目にした明石。心配していた試合が終わり、霞の足の具合もとりあえず悪い方向に進行している事を確認できてようやく笑みを浮べ、鼻水も混じる湿った顔の霞に慰めと労いの言葉を掛けながら処置を行った。

するとその場に表彰式を終えた雪風が戻り、みんなの視線が集中すると丸めていた賞状を両手に広げてみせる。だがすぐにそれを片手で持つと彼女は仲間の輪の中を足早に進み、艦尾甲板での処置の際と同じく仰向けに寝て右足を薬箱の上に乗せた霞に賞状を突き出しながらこう言った。

『どうだ、猿！ テメエよりアタイの方が強いって事の証明だ！ この呉で一番強いのがアタイだかな！ 悔しかったら次の艦隊編成で待機してる時に奪いに来い！』

マツトの上での神通への言葉を聞く限りでは霞への認識を幾分かえた様にも思えていたのだが、やはりそう簡単に人当たりを変える事など中々出来る物ではない。喧嘩した後の仲直りだって難しいのは人間も艦魂も無く、そも一年以上も殴る蹴るの喧嘩を当たり前としていたこの二人である。ただ、最後の『奪いに来い。』の一言には明らかに霞のみに向けた雪風なりの想いが滲んでおり、さらに続けられた彼女の声が二人の間に芽生えた新たな感情を、神通や明石、その他の二水戦の仲間達にもしっかりと確認させた。

『来年だろうが再来年だろうが、それまで吹雪上曹や他の奴らには絶対に譲んねーでやるよ！ だからテメエ、絶対に足治せよな！』

処置の手を休めないながらも明石は雪風の言葉に微笑み、泣きじやくる霞に励ましの言葉を何度も掛けてやった。

ようやく一歩進んだ雪風と霞の仲は、まだまだ草原から石が無くなった程度の物で道と呼べる物など何一つ無い。しかし明らかにこれまでの様なただの喧嘩の相手では無くなっている。そして本月初めて目にする事が出来た神通の部下を抱擁する姿と、そこに纏わるそれぞれの想い。それらは霞の怪我を理由に試合続行を止めさせていたなら絶対に見れなかった物であり、間違っていないかと迷いながら出した明石の判断から誕生した物である。いま考えてももしかしたら軍医としては間違いないんじゃないかと明石は思ったりもするが、例えそれを師匠の朝日より咎められても変える事は無いだろうなともこの時ふと思った。明石が誕生させた物は艦魂なりの絆であり、思いやりであり、夢であり、そして艦魂達の持つささやかな青春だった。命に対する理想という言葉考えた時、これらが放棄される様ではないかと明石は信じる。

その一端に軍医として関わり、見出せる物は何であるのか。

言葉にできぬそんな事を知識として知るのではなく、心の中で強く感じ得る事ができたような気がする明石であった。

しかしこの柔道の大会において神通達が改めて思い知った戦の持つ理不尽さは、その牙をさらに尖らせて彼女達に襲い掛かろうとしている。艦魂達が汗と青春の全てを懸ける事のできるこの柔道の大会は、翌年の12月8日を持って不幸にも無期限の延期が決定。上

司と同じ柔道の戦い方を持つ霞による神通の教えが正しい事を証明する機会は、これ以降ついに実現する事は無かったのだった。

どこまでもどこまでも、戦とは理不尽であつた。

第八五話 「帝国海軍を信じた男」

昭和15年10月31日。

既に秋が暮れかけている時期にあつての寒空のキャンパスに、冷たい風によって流されていく雲が幾重にも連なる横須賀。

来月の艦隊編成を控えて横鎮籍の艦が海上を埋め尽くし、長門艦ながとや陸奥艦むつに代表される巨艦がブイと供に緩やかな波と戯れる光景が広がるこの地で、忠は無為の日々を過ごしていた。

晴れて彼は半年にも渡った地獄の日々たる砲術学校を卒業となり、明日からはもう半年の期間を水雷学校で過ごす事に決まっている。それはそれは厳しい砲術学校に比べると水雷学校は幾分校風が緩めで、忠のような普通科学生 of 者達は士官の待遇として近隣に下宿を得て生活する事になっており、敷地内の宿舍という牢獄で寝起きする生活はめでたく終わりとなっていた。当の忠も水雷学校がある田浦町の一角に居を構えるとある家具屋の家に水交社の斡旋で部屋を借り、私的な時間を艦隊勤務と同じ号令にて振り回される事が無くなって肩の荷も軽くなった。普段は滅多に食べれない家庭的なお料理も下宿先では味わえるし、忠と同じ普通科学生 of 内の何人かは気の合う女性を当地で見つけて一夜を過ごしている者までいる。

しかしそんな横須賀の生活にあつても忠は仲間達のように水雷学校までの僅かなお休みの日々を楽しむ事は無く、横須賀の寒空を眺めて力無く溜め息を漏らすばかりであった。どうせこんなデコボコの顔で出かけた所で同じ海軍軍人が多い横須賀では『どうしたんだ、その顔?』と連続で質問されるのは目に見えているし、ヤクザ者との喧嘩に負けた等と正直に言う事だつてできやしない。ただそれでも何もせずに下宿部屋に引き籠もりつ放しでいると、下宿先の家人の方々より向けられる視線も忠には辛い物である。

天下の帝国海軍軍人が、飯時以外に部屋から出てこないとは如何な物か？

声には変わらずとも視線が代弁するそんな言葉を読み取る忠。決してお世話になってる下宿先の家族は悪い人達ではなく、いつも忠の姿を見ると普段の勤労を心から労ってくれるのだが、その胸の内を思うと忠としても家に居っ放しである事が億劫になってくる。故に彼は『同期と会って来る。』とか『親戚が近くに来ていたので会って来る。』等といったもつともらしい理由を告げて、なるだけ顔を見られないように軍帽を目深に被って横須賀の市街地へと足を伸ばす事もあった。

もちろんそれは全部嘘である。

同期の連中は確かにそこその数がこの横須賀には滞在しているが、各々が休みを満喫している最中に酷い顔の自分が訪ねるのはなんだか変に気を使わせるようで忠には申し訳ない。親戚に限っては関東一円には一人もいなかった。

ここ数日はそうやって下宿を後にし、なるだけ波間の見える場所には行かずに横須賀の市街の中を徘徊していた忠。今日も今日とて一張羅である濃紺の軍装に身を包み、どこ行くという訳も無くブラブラと街中を歩く。

横須賀は古くから帝国海軍の軍港の街として栄えたいわゆる軍都で、市街地における帝国海軍の軍服を身に付けた者の往来は日本で一番多い。ぼんやりとした表情でただただ歩く忠の姿は街の中で異彩を放つような事はなく、時折、海軍のおかげで飯が食えているのであろうと思われるすれ違う街の住民が頭を下げてくる。少し困ったような笑みを浮べて忠は軽く頭を下げ、長話に巻き込まれない様にそそくさとその場を後にする。その姿は至って普通の横須賀の街

の風景であり、彼とすれ違う人々はこの若者に特別意識を誘われるような事は無かった。

そんな市街の中を忠は呼び止められないように早足でスタスタと歩き、目的地の無い横須賀巡りをしながら力ない吐息を漏らす。観艦式の直前くらいに思い知った自分の未熟さがその胸の内の中心にはあり、波間の上に置いてきた相方と釣り合える男に未だなれていない事は、忠の身体から放たれる彼なりの元気の空気を一際薄くしてしまう。

帝国海軍の中でも筋金入りとされる砲術学校の半年間で、自分は何をして来たんだろう。

日々その実力を磨いていた相方の姿を見て自身もその能力に磨きをかけようとした忠だったが、先日仲間達との酒の席とその後の喧嘩で彼は自分という男が全然変わっていないのだと思い知った。すると忠の意識の中では、思い出の中にいる相方との距離がどんどん離れていくように思える。

そして彼はそんな思い出の中の相方を追いかけようと思える事も無かった。

縁が無かったのかも知れない・・・。

歩きながら自分の身の程を考える忠の脳裏には、そんな言葉も浮かび上がってくる。

元来、艦魂が見える人間というのはそうそう存在しないらしい事は忠も知っている。実際、忠が海軍軍人としての道を歩んできた中で艦魂の存在を耳にした事はあっても、こんな奴らだよと教えられる様な人には接した事が無い。明石艦乗組みの最中だって相方に始まる艦魂を瞳に映した者は彼の他は木村大佐以外に誰一人としてお

らず、実の弟ですらも見えてはいないのだ。

なんでオレなんだよ……。

この世に生きる人が一人として同じではない事を指す言葉に「十人十色」という物がある。

姿勢好も含めて極めて普通の青年である彼もそれは同じであり、言うなれば艦魂を瞳に映す事ができたのは彼が持つ人間としての色合いの一つなのかもしれない。だが忠はそんな自分の色合いをこの頃嫌い始めていた。他の誰もが持てない物を持てたなら独占欲にも似た気持ちの高揚感が得られるのだろうが、それが時として他の人々と共に生きる事に障害を設置する事もあり、まさに今の忠がそうである。何度目かの溜め息を放った後、彼は自身の境遇を呪った。

刹那、忠は人通りの少ない道にいる事を辺りに視線を配って確認し、道端にある板塀に背を預ける。あても無く歩き続けた彼の身体は若干の疲労を訴えており、無意識にその感が集中する腰へ片手を添えた。するとその手にはポッケよりはみ出した白い封筒が当たり、忠はふとその封筒に包まれて送られてきた実家からの手紙の内容を思い出す。

そしてそれは忠の意識を更に海軍から遠ざける物だった。

つい数日前に届いたその手紙には、見間違う事の無い母の筆跡。懐かしさとすがりたい心持で目を通す忠だったが、手紙の文面は彼に笑みを持たせてくれる物ではなかった。

母の手紙によると、どうやら忠の母方の祖父が脳溢血で倒れたらしいとの事であった。幸いにも命に別状は無く寝たきりの生活になった訳でも無いとの事だったが左手と左足に麻痺が残っており、忠も幼い頃にその目で見ていた漁師としての仕事はもう二度と出来ないといと医師より言われたらしい。

青森県の山奥である弘前市ひろ前市の実家に反して、忠の母方の祖父は家

の裏が陸奥湾である青森市の一角に地主として住んでおり、民間の飛行場もそこからは程近い事から忠も幼い時は母にせがんでよく遊びに行った事もある。母を始めとした女の子にしか恵まれなかった母方の祖父は、初孫にして”長女が生んだ長男”でもある忠を大変に可愛がり、忠が遊びに行くといつも張り切ってその手で獲った海の幸を食卓に並べてくれた物だった。

若い頃より荒海で鍛えた逞しい身体と小波を思わせるかのような笑みが、忠の脳裏にはありありと蘇る。一緒に実家で暮らしていた父方の祖父と同様に、「じっちゃ」と呼んで幼心に慕った。

そんな母方の祖父が高齢とは言え、ついに身体に支障をきたしたのかと考える忠は無意識の内に眉をひそめる。手紙の中では「忠も身体を大切に」と書かれていたが、筆をとった母がどんな気持ちであるのか、文面に変えられぬ言葉で何を言いたかったのかを、長男である彼は敏感に察してしまうのだった。

忠の実家は長男である彼を始めとして、息子がいま家の中には誰もいない状態である。忠は何も無い田舎を嫌って飛び出すように海軍兵学校に入学してしまったし、弟の正志まさしことマサは弘前の実家を継ぐ事はできない。同じ森姓ではあるがマサは同じく男の子が居なかった岡山県の親戚の家に15歳で養子に行っている身なのであり、水兵さんである彼が青森県を管轄区とする横須賀鎮守府籍の艦艇ではなく、呉鎮守府籍の明石艦あかしに乗組んでいる理由もここにある。

そうなる弘前の実家を継げるのはもはや忠しかないが、転勤も多く殆どの時間を船の上で過ごす海軍軍人という職業は跡取りの人間には向いていない職業であった。

『・・・はあ・・・』

力なく息を放って忠は板塀より背を離すと、またあても無く寒空の下を歩き始める。殴られたアザが残る頬を擦り、まだ痛みが微妙に伴う脇腹を押さえながら、忠はゆっくりと流れていく景色を見入

る事も無く物思いにふける。

その脳裏には実家の農家を継ごうかなという、彼の人生としての選択肢が既にあった。

花の海軍軍人から地味な野良着の百姓へ。その変り身は随分と落差も激しい物であるが、農家といっても彼の実家は近隣では名の知れた代々続く大地主であり、朝から晩まで鋤を振り下ろす小作人とは訳が違う。もちろん自分達で芋や大根、米等に汗水を流すのは変わらないが、土地の賃貸料としての収入も大きい為に社会的な収入の多さは決して悪い訳では無く、片田舎であっても忠自身が中学校へと通えた事がその証明でもある。生きる上で海軍から身を引いたとて、忠にあっては困る事など一つも無いのであった。

どう転んでも安泰な将来に家族の事情、そして相方への道程が霞むほどに遠い事に、やがて忠はいっそ海軍を辞めようかとすらも力ない思考の中で口走る。きっと自分にはそこに在るあらゆる物に縁が無かったのだろうと思い、足元をただボーッと眺めて忠はゆっくりと歩いていくのだった。

しかしこの時、忠の耳にはその音量をどんどん増してくるの甲高い金属の摩擦音が響き、咄嗟に音のする方に眼をやってそれまで力む事が一切無かった彼の表情が凍りつく。なんと忠の目の前には黒塗りの自動車が一台、土煙を舞い上がらせながら迫っていた。

『う、うわっ・・・！』

さしものに脱力した忠もこれには驚き、戦慄して強張った表情を隠すように素早く腕を顔の前で交差させる。こんな程度で向かってくる自動車の衝撃から身を守る筈も無いが、何しろ今の今まで自分はどこを歩いているのかも深く考えていなかった忠には瞬間的な危

機に対応するだけの余裕が無い。僅かに仰け反るような格好で忠は思わず目を閉じるだけだった。

だが幸いな事に忠の身体にバンパーが触れる直前で自動車は停止し、舞い上がる土煙と付近でそれを目にしていた何人かの人々の視線に包まれながら忠はゆっくりと瞼を上げて眼前に迫った自動車を見てみる。するとガラス越しに見えた運転席には濃紺の海軍下士官の軍装に身を包んだ男が凍りついた表情でハンドルを握っており、忠の前に止まった自動車が一般人の所有ではなく帝国海軍所有の車両である事を忠は一瞬にして悟る。運転席にいる下士官は道のど真ん中に突っ立っていた忠を目にして方で息をしているが、彼もまた窓ガラス越しに眼前にいる男が上官に当たる海軍士官である事を認めたのか、文句を飛ばす訳でも無く心配そうな視線をガラス越しに投げるだけであった。

『あ、あぶねえ……。』

忠はようやく安堵の声を放って顔の前で掲げていた腕を降ろす。辺りにいる民間の人々のどよめきと未だ宙を舞う土煙が治まらぬ中、彼はすぐに道の真ん中に足を踏み入れていた自身の非を謝ろうと思つて声を上げようとするが、それよりも早く忠の眼前の自動車の後部ドアが開き、同時に甲高い男の声で怒号が放たれてくる。

『おい！　なにやってんだ、バカヤロー！』

男にしては随分と音階の高いその声は、忠とは違って少ししゃがれた老いの滲むような声だった。開いたドアから捻った上半身を覗かせ、声の主は自動車の目と鼻の先に立つ忠に釣り上がった眉で睨みつけてくるが、忠はその後部ドアから鋭い眼光を向けてくる人物に驚いて声を失ってしまう。

その男は忠と同じくスラリと痩せた身体に忠と同じ濃紺の第一種

軍装を身に付けているのだが、鼻の下に生やした僅かな髭と軍帽から覗く薄っすらとした髪には幾分の白い筋も入っており、容姿から察する事の出来る年齢が忠とはまるで違う。50代にも至りそうな初老の海軍軍人で、しかもその軍装の左胸に当たる部分には積み上げられた徽章の山、そして襟には金色の野に咲く二輪の桜花。なんという事であろうか、忠にご立腹の表情で声を荒げたその人物は帝国海軍中将の立場を頂く者であった。

さっきまでの脱力っぷりもどこへやら、さしもの忠も一個艦隊の司令長官クラスの人物に対してはその姿勢を律さない訳にも行かず、即座に身体に鉄棒を打ち込んだように直立不動の姿勢を取る。寒い10月末にも関わらず忠の首筋には冷や汗がダラダラと流れ、上ずった声で詫びの言葉を放った。

『も、申し訳ありません・・・!!』

『何が申し訳ないだ!! 海軍軍人が往来を邪魔するんじゃない!』

忠による必死の謝罪の姿勢も海軍中将であるその男にあってはお叱りの対象でしかない。忠が言い終えるや凄まじい剣幕で怒号が放たれ、忠は生唾を飲み込みながら視線すらも硬直させて海軍中将の男の視線にただただ肩を震わせるしかない。すると矢継ぎ早に海軍中将の男からは怒号が発せられ、忠はその言葉に従って彼の元へと走り出した。

『言われてる事が解からんのか!! 道の通りを何時まで邪魔するつもりなんだ!! さっさと車に乗れ!!』

『は、はい・・・!!!!』

忠はこうして海軍中将の男が乗る車に、彼とは籍を隣にする形で

後部座席へと乗り、やがて車は忠を乗せると海岸地帯へと向かって再び走り出す。

だが忠の心胆は未だ氷の如く凍てつき、安堵の感を覚えて胸を撫で下ろすような事は無い。白いカバーが掛けられた後部座席の端っこで揃えた両足の膝の上に軽く握った拳を置き、足元に視線を下ろして時折忠はチラチラと視線を隣にてどっかと座席に腰掛ける海軍中将の男へと向ける。するとやはりそこには未だにはらわたが煮えくり返っている事を示す面持ちを浮べた男の姿があり、これから始まるであろう自分へのお叱り劇を予想して忠は頭が真っ白になってしまう。例え帝国海軍軍人同士であるにしても、公衆の面前でお叱りを飛ばすのはやはり格好悪い。有無を言わさず車に乗せられたという事は、車内という密閉された空間を存分に使ったのお叱りの時間になる事は言われなくとも忠には理解する事が出来た。

しばらくすると忠の耳には海軍中将の男より発せられる言葉が響き始め、甲高く僅かにしゃがれたその声の口調が強くなる度に忠はビクンと身体を震わせる。

『まったくけしからん。中央の連中と言い、お前と言い、きょうびの若い奴はどうなってるんだ!! お前、所属はどこだ!?!』

なんとも迫力のある声が忠の肝を鷲掴みにし、返す声から冷静さを急速に奪っていく。たださっきの様に恐怖に慄いて返答が無いとさらにおっかない怒号を浴びされると忠は思い、上ずった声が震えたまま隣に隣に身体を向けて額に右手を添えながら口を開いた。

『は、はい! 水雷学校普通科学生……! 森忠少尉です……!』

忠がそう言うのと海軍中将の男はそれまで忠とは逆側にある車の窓から外へと投げていた鋭い眼光を瞬時に忠へと向け、再び大きな声

でお叱りの言葉を叫ぶ。その声の持つ恐怖は生半可な物では無く、矛先とはなっていない車を運転している下士官の男ですらもその口調に思わず肩を上下に震わせる程だった。

『普通科学生か？ お前、じゃあ砲術学校を終わってる筈だな？』

なんで軍装に修業の徽章を付けておらんのだ！』

『あ……。』

『その格好で街を歩いてるクセに短剣も不携帯だな！！ おまけに帽子も汚いし、顔も悪い！ 一体、兵学校で何を学んできたんだ！』

『も、申し訳ありません……。！！』

服装身嗜みについてのお叱りは忠としても兵学校以来の久しい物だが、この状態では懐かしむような事など彼には不可能である。詫びの言葉を放つやすぐに忠は頭から軍帽を取るとポケットに忍ばせていた白いハンカチを取り出し、汚いと指摘された軍帽を隅から隅まで丁寧に磨き始める。

海軍中将の男は相変わらずの剣幕で忠の横顔を睨んでいたが、軍帽を取った事であらわになった忠の顔のデコボコ具合を眺めて表情をそのままに僅かに思考を巡らせる。せつせと軍帽磨きに精を出す忠を隣にしばらく沈黙を得た後、彼は徐に身に付けていた腕時計を一度確認し、自身の正面にある運転席に手を触れて車を運転している下士官へと少しだけ落ち着きが伴った声をかけた。

『おい、時間はまだありそうだ。これから会いに行く奴は来月で転勤らしいから、今日は菓子の一つでも持っていてやりたい。もう少し行った所で道の右側に菓子屋があるから、悪いが一つ買ってきてくれないか。そいつは私の同期なんだ。』

運転手の下士官は短く返事をし、しばらくすると海軍中将の男が

言った通りに車が走る道の右側に看板を掲げた菓子屋が姿を現す。やがて車が停止するや海軍中将の男が下士官にお金を手渡し、依頼する菓子 の程度を二言三言で伝える。車内に満ち満ちていた恐怖の空気から逃れられる事に安堵したのか、下士官は返事を放つと意気揚々と道端の菓子屋へと入って行った。

怒られた張本人の忠にあってはそのやりとりを耳にしつつもまじまじと眺める事は出来ず、一心不乱に軍帽の汚れ落としに精を出す。指摘された通り確かに忠の軍帽は汚れが酷く、白いハンカチで軍帽の紋章を吹くと黒い色合いがハンカチの一面にこびり付いてきた。ここ最近の墮落した生活から軍帽や軍装の手入れを怠っていたのだから無理も無い。黒ずんだハンカチは忠にとっては隣に座る海軍中将による更なるお叱りが跳ぶ事を証明する物であり、怯える心を益々動揺させながら忠は軍帽を磨き続けた。

だがそんな中で不意に掛けられてきた海軍中将の男の甲高い声は先程までのそれと同じ様に怒鳴りつけるような物では無く、弦楽器の音色を思わせるかのような落ち着いたその響きを耳にして忠は思わず顔を上げて上官に視線を向ける。

『お前、どうしたんだ？　なんであんな風体で道を歩いていた？　その顔も酷く殴られた物だろう？　何かあったのか？』

海軍中将の男は鼻の下の髭を左右に揺らして窓の外を眺めている。忠はその横顔を目にして彼の怒りが一応は収まったらしいと捉えながらも、未だ動揺が治まらない胸の内は上官に向けて返す言葉を選ぶのに随分と時間をかけてしまう。だが自分の身の上と無為の日々の日課である市街の徘徊についてその理由を尋ねてくれた所を見るに、どうやら眼前の海軍中将の男は自身の話を聞こうとしているらしいと忠は認める。最初の内は何から話せば良いのか忠には解からずあたふたと慌てて言葉にならぬ声を紡ぎ出すが、ついさっきまで続いていたお叱りが強烈に印象に残る彼は、もはや海軍軍人として

の自分は限界を迎えたのだらうと諦めにも似た気持ちを抱いて上官に声を返す事にする。艦長や科長格どころか、艦隊司令長官やひよっとしたら国政に参加する海軍省の役人にもなれる海軍中將の襟章を、いま彼が目映す初老の男は襟に輝かせているのだから無理も無い。この車を止めてしまった事自体、過失とは言え一般的な会社で例えるなら新人の社員が専務や常務に粗相を犯してしまったのと同義なのである。

もうダメだ・・・。

ここ最近は自分の不甲斐無さを呪う日々を続けてきた忠に、この上で海軍における重役に失態を演じた事で生じる自責の念に抗う事はできよう筈も無い。彼は磨き終えた軍帽を頭に乗せてハンカチをポケットにしまうと、今度は逆側のポケットから僅かにはみ出していた封筒を入れ替わりに手にとって海軍中將の男に差し出す。僅かに海軍中將の男が窓より視線を逸らしてこちらに向けてくる中、忠は伏せ目がちになって手紙を受け取って目を通す上官に事の仔細を話し始めた。

『じ、実は・・・。』

さすがに艦魂が見える自分の突飛な境遇の事は口にはしなかったが、忠は砲術学校を終えたにも関わらず自分が何も変わっていない事と仲間達との諍い、自身の家の事情に長男である身の上を力無い声で上官に説明する。

いつの間にか両親を始めとする家族達も歳を取り、それに併せて身体健康にも障害が出始めつつある。老いという物の在り方その物であり、この世を生きる残り時間が少なくなってきた事を示している。故に誰しもが残り少ない将来を案じ、特に田舎でそこそこの

家を持つ自身の家族は森の家柄の将来を安泰にしたいと願っているのだ。その為の最も現実的で確かな方法は、その家の長男が終始家に居る事。ましてその長男であるのは自分しかおらず、代わりの身となる弟も既に実家にはいない。その上で海軍軍人としての成長の見込みも無く、海軍に対する想いがここ最近では完全に薄らいでしまった。

母からの手紙に目を通している海軍中将の男に注釈をする様に、忠は静かにそんな自身の悩みを打ち明けていく。やがて隣にて腰を下ろす上官が静かに声を放ったのに続き、忠は漠然と考えていた海軍軍人としての自身の身の振り方を端的に声に変えた。

『そうか……。』

『海軍は……。私には縁が無かったのかも知れないです……。同期の仲間みたいに上手くできそうにないし……。もう……。辞めようかなと……。』

『……。』

覇気など微塵も込められていない忠の声が車の中に静かに響き渡る。

先輩や教官から厳しく辛い教育を受けた兵学校に入った時でさえ、忠は正直な所では防人への憧れ等を持って入校した訳ではない。何も無い山奥の田舎を嫌って飛び出すに当たり、官費で生活できる事から憂い無く選べたのが海軍兵学校だったのであり、叔父に当たる人が海軍軍人であったからそれを知っていただけである。もとより国防に携わる事への強い意志があった訳では無く、仲間が頑張っているからという理由で流れに任せて励んできたのが忠の海軍軍人としてのこれまでの経歴であった。そこで自分が艦魂を目にする事が出

来るのを知ったのは計算外な事であったが、そんな艦魂の一人である相方への距離感が絶望的なまでに離れた今ではもう、忠の心を繋ぎとめようとする魅力が帝国海軍には感じられない。そうなる根が海軍に対しての思い入れが希薄な忠にとって、この先海軍に身を寄せる事には長所も無い事から億劫になってしまうのだった。

だがそれでもこうして歯切れが悪い忠の物言いは、やはりその中心に相方への未練が据えられている。今しがた縁が無かったと言い聞かせるように言い放ちつつ退職の願いを行動に出そうとしないのは、かつての相方へと続く恋慕の錨鎖を中々断ち切ることができないからに他ならない。彼としてもそんな自分に嫌気がさしていた事から、忠はこの時、鉄拳も覚悟の上で「いっその事これで眼前の海軍中将に取り計らってもらってクビにしてもらおうか。」とすらも脳裏の片隅で淡く期待しているのだった。

あれだけお叱りの迫力があるこのお方ならば是非も無いだろうと考え、うつろな視線を足元に落とす彼は続けざまに襲ってくるであろう罵声と鉄拳を待つ。しかし驚く事にそんな忠の耳に響いて来た海軍中将の男の声は期待していた罵声等ではなく、逆に自身を褒めるかのような言葉であり、耳を疑う忠は目を点にして隣に座る海軍中将の男へと顔を向ける。

『・・・お前、若いのにしっかりしとるな。私は男兄弟の中では末っ子だったから、家を継ぐとかそういうのをお前くらいの歳で考えた事なんか無い。だがしかし、なんでそんなお前が迷うような顔をしている？』

驚く頃に初対面にも関わらず、忠が諦めの心の中でその色合いを決定的に変え切れていない事を海軍中将の男は言い当ててみせる。免職に繋がる言葉を内心ではほのかに期待していた忠には予想だにせず、後に続いて返そうとする言葉が見つからずに僅かに唇を開いたままで隣の上官の顔をじっと見つめた。海軍中将の男は腕組みを

してずっと忠とは逆の方にある車の窓から外に視線を投げているが、彼は構わず隣にて呆けた顔を向けてくる若者に特徴的な甲高い声で語りかけを続ける。

そしてまたしても忠は予想外の言葉を耳にして思考を停止し、声を失ってしまったのだった。

『私もな、何年か前に海軍を辞めようと思った事がある。』

『・・・！』

『当時は私は海軍省で仕事をしとったんだが、職場で一緒になる上官や後輩の連中とどうしてもソリが合わなくてな。自分で正しいと思った事をあっちこちから否定されたんだ。私は今でも間違っていないと思っているが、あの頃から中央の連中つてのはどうもこいつも偉い奴の顔色ばかり窺っててな。平気な顔で他人に節操を捨てるのと同じ事を言うもんだから、もうこんな海軍いたくないと思って辞表を出してすぐに家に帰った事がある。その勢いで家族にももう海軍なんか辞めてやると言ったモンだよ。』

なんとさっきはその迫力あるお叱りで忠の海軍軍人としてのだらしなさを容赦無く指摘したこの人物は、今の忠と同じ様にかつて海軍に対する想いを完全に失う所まで行つたのだと言う。その上で上官の語る自分が正しいと思った事をよってたかつて否定されたという過去は、先日仲間達との諍いを起した忠とはなんだか重なっていく。その理由は忠の場合、自分だけが艦魂を目にする事が出来るという事象だが、憤りの混じった酔いの中で仲間に言われた言葉に拳を振り上げ、同時に相方への距離が程遠い事を知って海軍への情熱を失った自分の身の上は、不思議と落ち着いた潮風を思わせる声で紡ぎ出される隣の上官の過去へと同化していくのだった。

そしてその最中も語りを続ける海軍中将の男。いつの間にか彼の

男性にしては高めの声からは立腹の感が消えており、とくとくと静かに紡ぎ出す自身の過去の話は忠の意識を深く誘っていく。

『でもね、私は辞めなかった。・・・いや、大見得切って辞めるとまで言ったのに、きつと内心では辞めるのが嫌だったんだろうね。私は・・・左遷もされて干された身ではあったけども、いまさら無職になるのも家族には悪いとか、身体の弱い娘の為とか当時は言い聞かせてた。でも結局は私は海軍が好きだったんだと思う。未練がましいのかも知れないが、おかげで今はこうして将官の身となって中央に戻ってこれた。また昔通りに海軍の舵取りに少し意見ができる身にもなったよ。』

海軍中將の男の語りは、諦めという感情に舵取りを委ねていた忠の胸の内の針路を僅かずつ変えていく。一人の海軍軍人として望んだ道に聳えた障害に憤り、もう挑む気も無いと自ら投げ出した道。それを忠の目の前にて腰掛けて窓の外を眺めながら語ってくれた上官も、かつては同じく持ったのである。その理由は上官の放った言葉によればただ海軍が好きだったからだとの事であったが、漠然としたその物言いに忠は理解を示せない訳ではなかった。忠にとっての海軍とは帝国の海を守る組織である以上に、いつも記憶の片隅から姿を消さない海軍艦艇の艦魂という存在で生きる相方と共有できるたった一つの居場所。例え身の程を鑑みた相方との距離がどんなに離れていようと、海軍艦艇の命である彼女と普通の人間である忠が一緒に過ごす事の許された一つしかない世界なのだ。

そして忠はそんな海軍を今、眼前にて口髭を揺らす上官と同じ様に家族や家の事を理由にして投げ出そうとしている。もちろんそれらが長男たる彼にあって無視して良い物等では無かったが、忠はこの時、自分は本当に海軍に対してどういう想いを抱いてるのか、否、どういう想いを抱いていきたいのかを声も無く黙って見つめなおす。

仲間と諍いを起した事で否定せねばならない物なのか？

身を持って思い知らされた自分の身の程の程度で尻込みし、放棄する様な物であって良いのか？

もつともらしい理由を設けて諦めねばならない物なのか？

そんな疑問を意識の中に問う忠。彼の耳には隣でようやく忠に顔を向けた海軍中将の男の、切り裂く様でもあり包み込む様でもある優しげな声が届く。放たれた言葉も忠の背中をそつと押してくれるような物だった。

『・・・若いんだからもう少しだけ頑張ってみたらどうだ？ 勝手な言い分かもしれないが、親御さんの身と家を案じる事が出来る君には、有り触れていながらも見落としがちな物事の正しい面がきつと見える筈だ。その力は今の海軍には一番必要だと私は思うんだよ。』

そう語りかけた海軍中将は忠と一瞬だけ瞳を合わせると、僅かに眉をひそめて再び忠とは反対側にある窓の向こうへと顔を向ける。ほのかに燃え上がる苛立ちを腕組みの中で跳ねる指先に示し、海軍中将の男は声の旋律をそのままに吐き捨てるような口調で口を開く。その矛先は忠にも語った、かつての自分へと向けられた意見に対する否定の嵐だった。

『最近の中央の奴らはダメだ。私はついこの間までこの目で見てきたから解かるんだが、支那があんな状態なのに今度は米英といがみ合う事も辞さずくらいに思ってる。そんな力は我が国には無いのは誰でも解かる事だが、あいつらはそれを主上や陸軍の連中の顔色をおかみ気にして見ていないフリをしてる。』

刹那、海軍中将がの男が先程から窓の外をしきりに眺めている事に忠は気付き、彼もまた僅かに身体を伸ばして上官の頬をかすめる形で視線を窓の向こうに投げてみる。

そこには運転手である下士官が入って行った菓子屋とは道を挟んで反対側にある一軒のお店。軒先に掲げた看板を見るに文具店である事が解かるそのお店からは、丸眼鏡を掛ける少し太った背広姿の中年の男性が肩を落として出てくる。明日でもう11月と寒さが増すこの頃であるにも関わらず彼は汗だくで、何枚かの絵葉書を握った右手の甲で汗を拭うとトボトボとした足取りで通りを去っていく。

国家総動員法が施行されて久しいこのご時世。古くから当然の様に伝わるこの国の文化でもある年賀状すらも、「不急」の二文字で流通が規制されてしまっている今の日本である。きつとあの中年の男は印刷の仕事を生業とする国民の一人で、需要の厳しい中でなんとか家族の食い扶持を得る為に営業活動に汗水を流しているのであろうと、車中より眺める忠が察するのに時間は掛からなかった。

力なく首を垂れ、汗を拭きながらその場を後にする中年の男の背中は、忠の瞳にはとても寂しく映る。

家で待っているであろう家族、職場で待っているであろう社員に、あの足取りのまま帰る彼は何と声を発するつもりなのだろうか？

そう思うと去っていくその背中なんとも可哀想に見え、忠は無意識の内に右手に拳を握る。それは忠の隣で腕組みをしつつ同じ背中を眺めていた海軍中将の男も同じであった。

『・・・あれを見捨てる海軍ではいけない。あんな人達を助けるのは、国政にも参加する組織たる海軍の最大の目的の筈だ。国民だ陸軍だと言いついて怖気づいて逃げるのは、帝国海軍の軍人なんかじゃない。まだ若いお前はそうなるんじゃないぞ。格好悪くても大

変でも信じた物を曲げず、むしろそういう奴らを片っ端から海に突き落としてやれ。』

海軍中将の言葉がここ最近の忠の心模様を如実に表す。

相方への想いの遠さや家族の事を言い訳にして海軍を辞めようかというこれまでの忠の考えは、目の前の障害に怖気づいて逃げているだけに他ならない。周りの視線や自身の境遇を盾にして相方へと通ずる道に背を向けるのは、酒の席と言えど「悪い女」と言われてあんなに憎らしく思った仲間達と何一つ変わらない。知りもせず見た事も無い中で思い出の相方を悪いと断じ、別れた女性の数を誇らしげに武勇伝とするその態度に拳までも振り上げた忠。その理由は単に忠の心が明確に示した否定のサインの筈だった。

そして今、忠はそんな否定しようとした者達と同じ立ち位置へ自ら足を進めようとしている。確かに現実的な判断かもしれないし、家族や家の事を長男として心配する事は間違いでは無いであろう。だが例えそれが世に言う普通なのであったとしても、例え格好の悪い物だったとしても、忠はそれこそが真の海軍軍人の姿にして、男女の片方として相方と釣り合える者の理想像なのだろうと確信する。正しい事を信じて相対する者を駆逐し、左遷や辞職の見得を背負いつつも自分を誤魔化さなかった眼前の海軍中将の男がそうである様に、と。

その瞬間、ここ最近はずっと忘れていた決意が忠の胸に宿り、彼の瞳には若さと込み上げる気持ちによって炎が灯る。噛み締めるようにようやく放ったただ一言の返事にもそれは現れており、海軍中将の男もそれを感じたのか出会って以来初めての笑みを向けてくれるのだった。

『・・・はい。』

『おっ。なんだ、お前。軍帽も綺麗になったし、ようやく顔も良くなったな。』

それから数分もした頃になって菓子屋から戻った下士官と入れ替わりに、お叱りの時間も終わった忠は車から降りる。

後部座席を望む車の側面にて直立不動の姿勢をとる忠の目と鼻の先。

ドア越しに開いた窓より顔を覗かせる上官は朗らかに笑い、あれほどにおっかなかった服装に対する甲高く僅かにしゃがれた指摘の声も、今は何か波間の上空にて賛歌を高らかに歌うカモメの鳴き声を思わせる。50代の風貌に見合うしわも伴った笑顔もまた、忠には優しげで父親にも似た親近感を抱かせる程だった。

やがて貴重な教えを諭してくれた事に感謝しつつ、いつまでも上官をこの場に留め続けてはいけないと忠は思っ別れの挨拶をする。

『本当に今日は有難う御座います。もう少し海軍を頑張ってみます。』

』

彼の口にした海軍とは彼が独自に持つ相方への想いを多分に含んでいたが、それを知らないながらも一人の若者が気持ちを改めた事を喜ぶ海軍中将の男。大きく頷いて笑いながら声を返す。

『うん。でも張り切りすぎるな。何事も余裕が無く、ソフトネスに欠けるというのは良くない。まだ若いんだから視界は広く、やり方を絞るんじゃないぞ。』

『はい！・・・あー。』

久々に腹の底から声を出す返事をした忠であったが、ここで彼は重要な事に気付く。彼との出会いに関して、ぼーっとしていた事から車を止めてしまいお叱りを受けたというその流れにも問題はある

が、未だに彼は眼前の海軍中将の男の名を耳にしていなかったのだ。みれば忠の目の前では既に海軍中将の男がドアに手を掛け、今にもドアを閉めんとしている。咄嗟に忠は声を放ち、本当に短い時間ながらもお世話になった恩人に問い掛ける。

『あ、あの・・・！ 失礼ながらお名前を・・・！』
『うん？ ああ、まだ名乗ってなかったか。』

閉めかけたドアの窓がちょうど後部座席に腰掛ける海軍中将の男の顔に当たり、青空から降り注ぐ陽の光を反射して口髭を湛えたその細長い顔つきを隠してしまう中、忠の耳には恩人の男にしては甲高い声が潮風に乗って流れてくる。

『私は海軍省で航空本部長つてのをやってるから、よく空母の艦載機の件で横須賀の航空戦隊の連中と会議をやってる。今日もそうだから何か困ったら遠慮せず声を掛けて来きなさい。私の名は井上だ。』

『はい！ 井上中将、有難う御座いました！』

『うん。頑張れ。』

井上の言葉を受けてすぐに忠は額に右手を添え、その前を軽く答礼する井上を乗せた車が再び砂煙をにわかには巻き上げて走り去っていく。忠は少しの間その場で車を目で追い、後部の小さな窓ガラス越しに肩の辺りだけが見える井上の後姿を眺め続ける。次いで大きく深呼吸をした後、長い曇り模様を終えて晴れ上がった顔を一度そらに向けると、クルッとその場で踵を返してその場を後にした。

軽い足取りでグングン進んでいく彼だが、ここ最近の日課とは違ってその脳裏にはちゃんと目的地が設定されている。行き先は水雷

学校の日々を過ごす為に得た下宿であり、そこでやるべき事も既に彼は決めていた。

砲術学校は幸い三番の成績。続く水雷学校では一番を取って、配転先希望を叶えやすくするんだ。

そして戻るんだ、明石の所に。

アザと若干の腫れが残る顔で笑みを作り、同時に胸の中で大きく叫んだ忠。

小走りにも近い速さで下宿へと戻ると彼はその速度をそのまま手持ちの数学の参考書へと投入し、明日から始まる水雷学校での日々に備えての予習へと励む。この日、自分が望む道への好例を目にした忠は難解な数字と方程式の羅列にも怯む事は無く、夜遅くまで覇気を伴った表情で勉学へと打ち込む。

そしてその好例となる役割を企図せず担った、井上と名乗った海軍中将。

彼はその名を井上成美いのうえ しげよしといい、後年、帝国海軍最後の大将として3年8ヶ月に及んだ惨劇を終える事に尽力。さらにその後には海軍という組織の中に在った責任を省みる場において主導的な立ち回りを演じ、帝国海軍の持っていた問題を白日の下に曝け出してみせる事になる。

世に言う海軍善玉論という悪辣な論調が蔓延はびこる中、海軍に注ぐその人並み外れた信念が生む熾烈極まる弁に対し、後世の人々はこもごもの”真実”を見るのであった。

第八六話 「start on a voyage」

昭和15年11月1日。

東の空に登る太陽も水平線より顔を覗かせた頃に比べ、その輝きから朱色の光を完全に失った午前9時ちょうど。

長崎県長崎市にある国分地区は、南西から北東へと斜めに走る湾状の長崎港にて港の入り口にも近い所に位置し、南西約600メートルの地点に長崎港における天然の表札たる神崎鼻を望む漁師の町。浜辺に有る漁師小屋を点在させた砂浜には木造の漁船が乗り上げ、その周囲では幾重にも折り重ねられた魚網が休暇を過ごしている。雲が多いながらも青い空を仰ぐ今日は昼寝時には最高で、波が静かに打ち寄せる音以外に砂浜に響くのは潮風の音くらい。活気あふれる漁師達の荒々しい声も今日は鳴りを潜めていた。

だがそんな中、段々と砂浜には台風に伴う暴風を思わせるかのような轟音が迫り、砂浜に寄せては返すを繰り返す小波も轟音がその音量を大きくしていくのに併せて震え出していく。傍から見たら奇妙にして壮大な天変地異ともとれるその光景は、付近にてその日を生きているあらゆる命達にあっても敏感に察したらしく、ざわめく木々や舞い上がるカモメ達と共に浜を家の裏に望むとある家の外では一匹の犬が何かに向かってしきりに吼えていた。

茶色の毛並みと丸くなる尻尾を逆立て、犬小屋から首輪まで伸びる鎖を物ともせず、犬は時折張った鎖に身体の動きを抑えられながらも浜の北側を睨みつけて威嚇の鳴き声を投げる。凄絶で激しい叫びを規律無く繰り返し、合間に喉を鳴らす所を鑑みるとどうやらこの犬はその黒く丸い目で捉えている物を敵と判断しているらしい。背後にある主人の家に危害を及ぼす可能性を危惧し、何とか追い払うべく威嚇を続けていた。

そしてこの余りにも激しく猛り狂うその犬の様子は、主人である家の中にいる人間にもちゃんと伝わっている。普段は大人しく尻尾を振って身体を寄せてくるこの犬を良く知る家の住人の一人が、徐に家の裏にある勝手口の扉を開けて対敵行動の真つ最中である犬に歩み寄り声を掛けた。

『どがんとお、太郎お。』

かすれ気味で酷くしゃがれたゆっくりとしたその声色にも示される通り、犬の隣へと歩み寄ってしゃがむのは幾筋もの深いしわが刻まれた顔の老人。すっかり髪の毛も無くなった頭に、まるでその犬の尻尾の様に曲がった腰。右手を乗せた杖が細くなった2本の足と供に老人の不安定な体重を支える。相当の高齢な身であるらしく、足元で激しく吠え立てる飼い犬の叫びも遠い耳にはちょうど良いくらいのようなのだ。

もっとも自然体の彼に反して長年連れ添った飼い犬が明らかに血相を変えて吼えているのは、間近にまで近寄ってその目で見た事で老人はすっかり認めている。大きく口を開いて叫ぶ犬の頭に手を乗せ、返答が日本語どころか言葉にすらもなり得ない犬の鳴き声であると知りつつ、老人は独特の語尾が延びる声でその理由を飼い犬に問うてみた。

『なんでそんなげん吼ゆう？ 何かいるとかあ？』

老人の問いかけに犬は僅かにピンと立った耳を左右別々に動かしてみせるが、主人に対する応答はそんな耳の僅かな動きだけ。キツと向けた視線を微動だにせず、主人の声が止むまで喉を低い音階で鳴らした後、再びこれまで通りの凄絶な鳴き声を眼前へと繰り返して投げつける。

どうにもそんな飼い犬の様子が老人には不自然であり、先程から

この犬が睨んでいる浜の北側にきつとその元凶があるのだろうと察して彼も見つめる事にした。

海軍陸戦隊の市街演習により外出禁止が通達されている本日は、市街地や波間は至って静かで人々の往来が陸地にも波間の上にも全く無い。カモメがずいぶんと飛んでいるのも港湾として国内屈指の規模を持つ長崎港においてはいつもの事だし、長くこの地にて生きてきた老人は最初の内は変化点を見つける事は出来なかった。だが長くこの漁師町で漁師として生きてきたからこそ、老人は今日の波間に静かな喧騒が満ち満ちているのを認める。長崎湾の奥に当たるこの辺りの海面は常に静かで、長崎港の入り口に当たる南西から吹く潮風に弄ばれてゆらゆらと揺れているのが日課の筈だが、今日は波間を伝って行く揺らぎが潮風とは逆の北東の方角より連鎖しているのである。

やがてその波間の揺らぎの発生地を求めようと目で追った老人は、いま自分が立つ所から北側にある長崎港のちょうど真ん中辺りまで視線を流した。刹那、老人は大きく後ろに仰け反って尻餅をつく。

『ひゃあああああー・・・!!』

『あ！ おかあちゃん！ おじいちゃん、おったとばい！』

『まあ、お義父さん！ 大丈夫ですか!？』

老人がその細い瞳を大きく見開いて驚愕の声を上げる背後で、勝手口より出てきた小さな男の子とその母が慌てて近寄っていく。尻餅をついた老人の横では相変わらず犬が激しく吠え立てているが、母と男の子は老人の傍まで寄るや抱きかかえるようにして彼の身体を勝手口の方に引き戻していく。

『お義父さん、今日はお外には出てはいけません！ さあさ、早く家の中へ!』

『な……。なんばい、あいはっ……。』

呟くようにしてかすれ声を漏らす老人だったがそれに構わず彼は母子によって家の中へと連れ戻され、3人が吸い込まれた家の勝手口は硬く閉ざされると中から鍵の作動を示す独特の金属音が放たれる。吠え立てる犬も含め、浜を望めるこの家の周りはまた再び数分前と同じ光景へと戻った。

だが犬が吼える先にある北の波間。長崎港のちょうど真ん中に当たる海面上には、これまでには存在し得なかった大きな鉄の塊が姿を現していた。何本もの滝のすぐ近くにでも居るような轟音が次第に治まっていく中で現れたその箱型の物体は、海面と並行に走る上面に構造物が全く無いながらも、遠目にも舳先と艦尾を一応は備えているのが見てとれる事から巨大な船であるのは明白。それもなんと長さ263メートルにも及ぶ鉄の船であった。

重りとして海底に横たわるアンカーより艦首まで延びた鎖は張り詰め、未だ辺りの海面が振動している最中にあっても巨艦の動きを完全に静める。

その位置は艦尾に臨む海岸より220メートルの地点で、艦首に望む三菱長崎造船所の船台に設置された進水式場よりほのかな歓声があがる。声の主は式場の中にいる多くの濃紺の軍装に袖を通した海軍軍人ではなく、背広姿である三菱長崎造船所の人々であるがそれもその筈。眼前にてようやく波間に浮いた巨艦が静止した地点は、進水作業を担当した造船所職員達の事前の計算結果と比べると、なんと誤差僅かに1メートル。35737トンにも及ぶ眼前の巨艦を進水させるに当たった結果としては、海洋国家たる日本の企業の底力を示せた物に等しい物である。

たかがお船の進水と侮る無かれ、歓声を上げている造船所の職員達はこの日の為に様々な努力をつぎ込んで来た。これまで自社で建造してきた分も含め、彼等は帝国海軍の軍艦51隻と商船121隻、次いで諸外国の軍艦27隻と商船34隻と、総計233隻にも及ぶ

船舶の進水に関連した文献を収集して徹底的に研究し、過去30年分にまで遡るこの地の気温、潮位を記した測候所の記録を念入りに調査して、2年以上も前から本日の満潮時に当たる午前8時55分を進水日時と設定していた。加えて艦体を船台上から海面へと運ぶ進水台を構成する滑り台や固定台は一年半も前から準備を始め、進水台が船台の上を滑走する際の潤滑剤である獣脂も大阪の岡田油脂化学工業に依頼して値が張る事も承知で特注品を調達するまでに至ったのである。

それらは民間企業である造船所の職員達にとっては時に涙を呑み、絶える事の無い汗の中でひたすらに頑張った努力の足跡。その足跡は今、眼前にて静かに浮かぶ巨艦にまで海面を伝って確かに繋がっており、目に映る光景は彼等が一流の造船技術集団であるこれ以上ないくらいに体言している。その事に湧きあがる喜びを噛み締め、背広姿の男達は丸眼鏡を僅かに外して目頭を押さえながら互いに抱擁を交わすのであった。

そしてこの巨艦の名は今より時間を遡ること約10分程前に、艦が舳先を向けている船台の式場にて放たれた声で高らかに宣言されていた。

『進水命名書。軍艦武蔵^{むすし}。昭和13年3月、工を起し、今や船体成るを告げ、ここに命名の式を挙げ進水せしめらる。昭和15年11月1日。海軍大臣、及川古志郎^{おいかわ こしろう}。』

未だ宙にてそよぐ潮風と踊り続ける5色の紙吹雪や紙テープに彩られ、それらと供に空へと舞い上がった7羽の鳩に上空直援を受ける中、静寂を取り戻そうとしている波間の上に浮かぶその巨艦こそ、帝国海軍最新鋭にして最後の戦艦として茨の運命を科せられる事となる大和型戦艦二番艦。

戦艦武蔵こと、武蔵艦の誕生であった。

昭和15年11月6日。

極東有数の国際港として花咲く東洋の秘宝、上海市。

大陸独特の黄土色の水面で形成される黄浦江の北岸沿いに欧州文化を滲ませた洋風の建物が数多く建ち並ぶ共同租界は、いつもの如く賑やかな人々と水運の往来で活気を維持している。大陸の奥へと続く道を辿った先では未だ中国と日本による殺戮の応酬が止んでいないながらも、日本を含めた列強各国の資本と思惑が渦巻くこの地は各国が本音と建前を使い分けた腹の探りあいをする場所でもある。時には虚勢を張り、時には紳士的に振る舞い、時には進んで慈悲の手を差し伸べたりと、常に周囲の視線を気にしながらも自身の意志を相手へと強要しなければならないそれらは、決して力任せの選択肢では実施できない難しい物である。それは誰にとっても同じであり、過去に二度もこの地でドンパチを繰り広げた日本や中国とて例外ではない。例えば租界を持つ多くの国々がこのアジアの東の端から遠く離れた西欧の国であったとしても、自分の都合のみで繕った大義名分が認められる程に国際社会は甘くないのだ。

故にこの地においてはそれぞれの国がある意味では良く共存しており、狡猾にお互いのつけ入る隙を探しながらも握手と談笑を交えるのがこの街で頻繁に目にする国旗を掲げる者達の光景である。だがおかげで上海の街は花の香りと黄土色の水面が放つせせらぎによって染まり、殺す殺されるを当たり前とする戦争の日々からは一歩距離を置いた時間が流れていた。

往來の激しい黄浦江の支流である蘇州河を跨いだガーデンブリッジ。近代的な鋼鉄のアーチが連なるその外觀を自慢とするこの橋も、日本とイギリスの海軍陸戦隊が警備に当たってはいるが、身分証の提示を課す以外に特に人々の往來を遮るような事は無い。縦横無尽に街の中を駆ける事を日課とする路面電車や馬車も同じで、ガーデンブリッジから南の金陵東路まで続く1500メートルのバンドには時計台の鐘の音が鳥達の鳴き声を従えて木霊する。特定も許さぬ程の多様な国旗を翻す商船が集う港はひっきりなしにトラックが入りし、世界中から集まる物資の数々を今日も市街地へと流通させて行く。根が逞しい支那人達も積荷の上げ下ろしや車の運転といったお仕事に汗水を流し、時には現地で商店を営む者が流暢に西洋の言葉を操って荷主との交渉も行っている。

多種多様な言語での喧騒も、自動車の放つクラクションも、その全てが近代的な文明の息遣いと化す上海。

そんな上海の街並みの中、日本領事館を目にする事も出来る蘇州河と黄浦江の合流地点付近には、辺りにて錨を下ろしている沢山の船達に混じって後部マストに大軍艦旗を掲げた朝日艦あさひの姿もあった。

黄浦江の岸にある日本領事館と日本郵船上海支社の庁舎の向こうには、子供が積み木で組んだお城の様な外見を持つブロードウェイマンション。蘇州河をガーデンブリッジで跨いだすぐそこには、河口の形状を上手く利用した緑も残るパブリックガーデン。共同租界の中心であるその光景は至って近代的で、それに混じる朝日艦とそのすぐ背後に当たる位置にて同じく黄土色の水面に錨を下ろしている出雲艦いずもが持つ古き良き時代の船達の影は、40年来の時の流れをこの街並みの空氣に程良く滲ませていた。

もっとも出雲艦と朝日艦の命たる者の二人は既にこの地に赴いて3年にもなる為に、この素晴らしい街並みの眺めも今ではすっかり

見慣れてしまった。忙しくその場を駆け抜けていく大小の船舶の汽笛もこの二人にあっては少々煩わしく感じてしまう事も最近は多く、汽笛に伴われる人間には聞えない喧騒を避ける様にして二人は分身の中で静かな時を過ごす。

そして40余年前に軍艦旗を背負う船として励んだ頃より極めて仲の良かった二人は、今日もいつもの様に朝日艦の艦尾にある長官室へと集って憩いの一時に浸っていた。

『んゝ・・・んまいねえ。やっぱ朝日のティーが一番だよ。』

『何言ってるのよ。どうせ自分で淹れるのが面倒なだけでしょ、出雲。』

室内のスタンウオークを控えた艦尾側にある茶色の木目が輝く机と、艦首側にあるこれまたニスによって鈍く輝くドアのちょうど真ん中。小さなテーブルを挟んで向き合う形で置かれたソファに、艦の主である朝日と出雲は深く腰を掛けてティータイムを楽しんでいる。

背筋をマストの様に垂直に伸ばして両脚を揃える朝日は、顔にサラサラと流れ落ちてくるその琥珀色の髪を耳元に掛けなおしてティーを含んだ口元を緩ませる。今日も自分で淹れたティーの味わいと香りは目指した物と同じで、少しだけ自画自賛の感情を得て胸の内を明るくしてみせた。対して出雲はソファに身体を斜めに流すようにして腰掛け、前髪も含めて全て後ろに流したブルネットの長髪を片手でサッと払いながら、もう片方の手に持ったカップの中にある深いオレンジ色の湖面に笑みを向けている。濃紺の第一種軍装を身に付けているのは朝日も出雲も一緒だが、軍装と色合いが良く似た髪の色を持つ出雲は赤みがかかった琥珀色の髪を持つ朝日に比べるとその姿はちよつと派手さに掛ける。

だが性格はその限りではなく、歳相応に落ち着いた朝日とはうって変わって出雲はその言葉遣いや動作に未だ残る若さの片鱗を覗か

せてみせる。小さく薄っすらとしたしわを口元や目尻に浮べるという40代くらいの女性の外見は朝日と同じなのに、この出雲はその碎けた明るい性格からその姿を見る者に年齢を感じさせない事ができるのが大きな特徴だ。さすがに40年以上もそんな出雲をその青い瞳に映してきた朝日は、友人である出雲のそんな所が微笑ましくもあり、羨ましくもある。人それぞれだからと言えはその理由としては十分なのかも知れないが、生来が大人しかった自分が出雲と場を共にする都度、ちょっぴり残念に思える事もしばしばであった。

ただ出雲にとっても眼前の朝日は、自分に無い物を昔から持てている羨ましい人物でもある。特にいま口に含んでいるそれはそれは美味しい紅茶を用意できるのは、40余年にも及ぶ出雲の生涯でもこの朝日しかない。故に出雲は笑みを朝日に向けて友人の紅茶の入れ方を讃えると同時に、この美味しい一時がしばしの間はお預けになってしまう事への憂いを率直に伝える。

『いやあ、やっぱり朝日のティーは格別。あたしは正直、富士先輩よりも上だと思ってるよ。』

『ふふふ。ありがとう。』

『あゝあ、でも明日からは飲めなくなるのかあ。困ったモンだな。』

出雲はそう言うと言に眉をハの字にし、名残惜しそうにカップの中にあるオレンジ色の湖面に視線を落とす。同時に朝日も口元を緩めたまま、少しだけ表情を歪めて出雲の顔を眺めた。お互いを長く慕い、一緒に励んできた仲の二人なのだが、先程の出雲の言葉にもある通り、実は二人がこうして朗らかなティータイムを楽しむ事ができる3年にも渡った上海での日々は、本日をもって一旦終わりとなくなってしまうのである。

なぜなら明日、すなわち11月7日に朝日の分身である朝日艦は艦隊編成に備えて内地帰還の予定となっており、その後はこれまで

籍を置いてきた支那方面艦隊から連合艦隊への転籍が決まっているのだった。加えて連合艦隊旗艦の長門艦ながとを始めとする第一艦隊や、朝日の教え子である明石あかしも属する第二艦隊など、戦闘を生業とする実施部隊は希に海上での警備や封鎖に助太刀する格好でこの上海に足を伸ばす事もあるのだが、そうではない特務艦艇である朝日艦になるとその可能性もかなり薄い。つまり明日の内地帰還となったら最後、これからも支那方面艦隊旗艦の任務をこなす事が決まっている出雲は、40年来の親友である朝日としばらくの間は会う事でもきなくなってしまうのである。その上で所属の鎮守府も出雲は佐世保で朝日は呉となっており、内地における整備補修の機会の面でもまた朝日と会う事は難しい。朝日の紅茶を心底好きな出雲にとって、その言葉通りなんとも困った事であった。

『どうしてまた、こう、時間つてのは二人の愛を別つのかねえ。あたし発狂するかもよ、朝日い。』

『うふふ、あははは。』

表情豊かな出雲が堀の深い西洋人の顔つきを大きく歪めて言う。富士山の様に唇をすばませ、左と右の目の大きさを変えて眉の角度も器用に別々の角度にして放った言葉は、出雲らしい冗談めいた言葉で表す友人との別れへの惜しい気持ち。これ以上にないくらいに不満だという顔で出雲はカップを口に近づけるが、朝日はそれに対してこの人にあつては珍しく口に手をかざして大笑いする。もうずっと昔になるが朝日が出雲と出会ってしばらく経った頃に、今と同じく「愛」という言葉を使って出雲は朝日の紅茶を欲してみせた事があるからだ。

日露戦役も始まっていなかったあの頃から、眼前の出雲は口元と目尻にしわがちょっと浮かび、陽の光を浴びると第一種軍装と同じ色である濃紺の川の様だった髪に幾筋かの白いラインが混じった以外に何も変わっていない。掴み所の無い雲を思わせる言動と陽気さ

は、まだ朝日が今の教え子の明石くらいの歳に目に映した時と寸分も違わぬ物。成長という言葉が全く当て嵌まらないその可笑しさに、あらゆる物事に豊富な経験を持つ朝日もさすがに抗う事は出来なかった。

出雲なりの別れの惜しみ方であるが上手く彼女自身が企図してみた通り、そこにはお互いの遠慮の無い笑い声が木霊する。長い付き合いである友人、朝日の悲しむような表情は出雲の最も嫌う所で、ようやく室内に灯った明るい空気に身を任せるようにして出雲は続ける。

『カンヤム・カンニヤムの茶葉は、富士先輩のニルギリと同じ様になんとか商船の子達から手に入れるからさ。せめてあたしが帰った時は淹れてよ。それまで断食だ。』

『あはは。解かったわ、出雲。私も六甲の水を用意しておくわよ。』

どこまでも紅茶の心配をする出雲に朝日がカップを掲げて笑みを向ける。それに続いてどちらからという事も無くお互いの口から出てくるのは、3年に及んだ上海での生活での思い出話。多くの国が権益を持つ上海港は世界各国からの船舶がたむろする国際港でもあるのだから、何もそこにいるのは商船ばかりではない。朝日や出雲と同じように、この地における自国の権益を守る任務を帯びた国家の船は何隻もいるのであり、そんな上海港の事情で最も付き合いがある者達の名を挙げ、出雲は朝日に別れを惜しんでいるのが自分だけではない事を伝えた。

『オーガスタ達とペトレルも会いたがってたんだけどね。残念だ。』

『ふふふ、そう。ペトレルは確か、黄浦江の上流よね？』

『ああ。警備任務だそうだ。ま、イギリス海軍は今は欧州戦線で手

一杯だからねえ。租界を留守にする訳にもいかない筈だから、常駐のあの子はすぐに戻ってくると思うよ。それとオーガスタ達はフィリピンさ。整備補修だってこの間言ってたな。ははは、事を起さないでくれて釘刺されちまいたい。』

静かにオレンジ色の流れを口に運びながら放つ出雲の言葉を、朝日は優しく微笑みながらもその青い瞳を細くして耳にし、出雲が口にした者達の名に纏われる思い出を懐かしむ。

『あの子』という呼び方で指す所を鑑みると出雲や朝日からすれば後輩格にあたる艦魂である事は明白だったが、話題に挙げた二人は漢字に変換するには無理のあるその名前が示すとおり、決して十六条旭日旗を掲げる帝国海軍の軍艦ではない。

まず現在はフィリピンに滞在しているというオーガスタとは、アメリカ海軍アジア艦隊旗艦の重巡洋艦オーガスタ艦の艦魂である。

1930年生まれで朝日や出雲に比べれば船の命としてはかなり若い人物だが、就役して訓練航海を終えた直後に合衆国艦隊隷下の偵察艦隊に艦隊旗艦として在籍し、3年後の1933年にこの極東アジア方面を担当するアジア艦隊の艦隊旗艦として赴任してきたという、輝かしい経歴を持ったアメリカ海軍艦魂社会の期待の新人だった。進水から僅か3年の若さ溢れるオーガスタは出雲や朝日が来る4年も前からこの上海にて行動し、翌年には東郷元帥の国葬に参列する為に日本の横浜港にも来訪した事がある。故に彼女は若いながらも中々のアジア通で、元来がイギリス人である事から英語を流暢に話す事が出来る出雲や朝日の事情も功を奏し、初めて出会った際は有らん限りの礼を持って朝日と出雲を歓迎してくれた女性であった。ただし、若いながらもお仕事にはメリハリを設けるオーガスタは、艦魂における先輩だとか、国葬にも参加した東郷元帥と同じ時に同じ場で戦っていたという経歴も持つ事、などで朝日や出雲を

前にしても臆する様な所は無く、支那事変が勃発した今から3年程前にはパナイという名の仲間が日の丸を翼に描いた航空機によって経緯はどうあれ撃沈されてしまった事態に際し、当時から支那方面に展開する帝国海軍の艦艇を旗艦として束ねていた出雲の所に怒鳴り込んできた事もあった。世に言うパナイ号事件である。

『オーガスタは真っ直ぐな情熱を持つ良い子だったわね。』

『いやあ、しかしあの声のデカさは参ったよお。落ち着かせるのは大変だったんだかね、朝日い。』

肩を上下させて笑う出雲。声を放つや彼女はカップを握っていない左手で顔に掛かろうとする髪を払い、小さく溜め息をして当時の心労を再現してみせる。だが当時を知る朝日はそんな友人の仕草にもただ笑うばかりで、手近に置いていたポットに手を伸ばして空になった出雲のカップにオレンジ色の滝を作り始めた。

実は出雲も自身のオーバーな仕草に反して、それ程話題に挙がったオーガスタを嫌っている訳ではない。第一次大戦の頃にはアメリカへの出張も経験し、その後の兵学校練習艦時代にも何度と無くアメリカへと足を運んだ経験のある彼女であるから、遠く故郷より離れた僻地たる上海で頑張る事になったオーガスタは、自分が生まれる前のアメリカを知る出雲とは基本的に話が合う者同士であった。

『カリフォルニアはもっかいくらい行きたいなあ。改装すりゃ太平洋横断もまだできると思うんだけどね、あたしは。』

明治生まれの古参の分身ながらもその命たる出雲にあっては、自身の経歴を顧みて年齢的な面で身の程を思い知る事など屁とも思っていない。日露戦役でのドンパチの以前より特徴だったユニークで根無し草のようなその物言いはオーガスタも気に入ってくれ、年齢差が30歳近くもあるにも関わらず片や帝国海軍の艦隊旗艦、片や

合衆国海軍の艦隊旗艦として時に衝突しながらも友情を育んだ間柄だった。

それをよく知る朝日は出雲の言葉に何度も頷きつつ、そんなオーガスタと供にこの地で親交を深めたもう一人の友人、ペトレルの話題を切り出していく。

『ふふふ、そうだったわね。でも、来月であの子は交代なんでしょう？ また寂しくなるわね。オーガスタが怒鳴り込んで来た時は大変だったけど、ペトレルが上手く間に入ってくれたのはさすがだと思っただわ。』

『ああ、ペトレルは本当は芯が強いんだよ。”イズモさんの話も聞いてあげましょうよ”、なんつってさあ。ははは。』
『あははは。そ、そうだったわねえ……。あはははは。』

出雲はそう言いながら何か海中の海草の真似をするかのように身体を揺らし、テーブルにカップをおいてから肩より少し高い位置に両手を挙げて身体と一緒に左右にくねらせてみせる。部分的に発した裏声での音階の高い声も含め、それはお互いが話題に出したペトレルという同じ船の命たる者の真似。それがとても似ているのか、それとも余りに滑稽だったのか、朝日は出雲の言動を目に映して口元を抑えてまたも高笑いを始めてしまう。極めて愉快的気分に戻る兩人だが、その真相は出雲の物真似も然る事ながら話題のペトレルという艦魂の人物像が本当に愉快の一言である事に理由があった。

ペトレルは1927年に生まれたイギリス海軍の河川用砲艦であるペトレル艦の艦魂で、朝日や出雲と同じ正真正銘のイギリス生まれ。排水量僅か310トンで全長およそ54メートルという、出雲や朝日の分身と比べると豆粒のように小さな艦体の持ち主であったが、栄えある王室海軍の伝統を重んじて礼儀も正しく、ただひたむきに頑張るその姿勢と持ち前の甲高い裏声のようなオクターブの声、

140センチ台の小さな体軀、既に20代後半にも差し掛かる年齢の筈なのに丸い大きな目を持つ童顔、そして何事にも一生懸命だったというその人柄は、上海の艦魂界限の中ではとても人気があった。故郷より遠く離れたこの上海で一言半句の文句も言わずに常に全力投球の彼女はいつも額に汗を掻いていて、シンガポールやインド洋に展開するイギリス海軍東洋艦隊や同インド洋艦隊の艦魂達に比べれば階級も低いが、上海港一の働き者として朝日や出雲も一目置いていた人物であった。

ただ生来のおちよこしいな性格が災いし、健気に頑張る本人に反してお仕事の成果はいつも今一つ。可哀想な事にペトレルという彼女の名前のスペルまでも、海鳥の一種であるミズナギドリを示す「P e t r e l」をイギリス海軍の造船官が「P e t e r e l」と間違えて登録してしまったという筋金入りで、就役した後に気付いてしまった為に修正も加えられなかったという経歴を持つ。

なんとも酷い話である。

だがそんな境遇もなんのそのと僅か55人の乗組員と共に日夜上海における祖国の權益を守ろうとするペトレルだからこそ、出雲や朝日は懐かしい生まれ故郷の良き空気を彼女に感じずにはいられなかった。ずっと昔、出雲や朝日も日本海軍へと嫁入りする前にどこかで耳にした、伝統あるイギリスの艦魂社会に伝わる「常に誠実に、常に希望を、常に慈愛を」という教え。その言葉は愚痴の一つも溢さずに黄土色の黄浦江の波間を忙しなく駆け、『次は必ず上手くやるぞお!』等と言って失敗にもめげず、港内で立ち往生してしまつた漁船ほどの大きさしかない現地の小さな貨物船の艦魂に自身の分身の倉庫から持参したパンとミルクを差し入れてあげるといふ、ペトレルの普段の励む姿と見事に一致するのであった。

そしてそんなペトレルの汗が絶えない上海での奮闘劇を青い瞳に入れ、出雲も朝日も最初は静かに涙を流した物である。もうずっと忘れていた栄えある大英帝国の船の命の在り方。いつの間にか旭日の旗を掲げた海軍の者である自分を当たり前と思い、何やら子供っ

ばい艦魂もいるくらいに捉えていた自分を各々が恥じた。決して自分達を含めた帝国海軍の艦魂という物自体をダメだ等とは微塵も思っていないが、純血のイギリス人である朝日と出雲が思い描く艦魂の理想像は、理屈や境遇を飛び越えてペトレルの汗が輝く横顔に無意識の内に重なって行くのであった。

故に二人は3年に及ぶ上海の日々で、このペトレルを非常に可愛がる。

『まあ、グラスゴー？ ふふふ、近いわね。私はクライドバンクの生まれなのよ。』

『なんだよ、二人ともスコットランドかあ。はは、あたしはイングランド。ニューカッスルの出身だよ、ペトレル。』

『おお！ イズモさんもアサヒさんも英国生まれなのですかあ！』

久々の英国訛りが利いた英語での会話は3人の舌を弾ませるのに十分であった。3人で集った日は朝日が淹れる極上のティーを片手に、遠い生まれ故郷の風景や思い出話へと大輪の花を咲かせる。仕事もそっちのけで同郷の仲を互いに暖めあい、軍艦旗も降ろされる夕方になってもまだ会話を終わらせる事も無く、すっかり真夜中になっっていた事に気付いて締めくくりに日本では「埴生の宿」という名で知られる歌の原曲、「Home, Sweet Home」を歌って別れるのが3人の間での恒例だった。

世界地図の東の外れで巡り会えた幸運を、3人は心の底から祝福したのだった。

それは実弾も飛び交う戦地へと派遣された事で得た思い出。もちろん今から36年前に見た血の赤さを改めて目にする機会だって幾度と無くあったが、その狭間に有した朝日と出雲の記憶は内地で余

生を過ごすだけでは絶対に得る事などできなかった物だ。

朝日はやがて出雲と供に放つ笑い声を静めて行き、一度静かにカップを口に運んで喉を動かすと溜め息を放つ。微笑こそ欠けてはいなかったが、出雲はこの時に朝日の碧眼から僅かに寂しさの色が放たれているのを察する。それと同時に朝日は呟くように声を放ち、瞳の奥からあふれ出す感情を言葉に滲ませる。

『楽しかったわ・・・、上海は・・・。』

『ははは・・・。そうだね、楽しかった・・・。』

弦楽器の音色を思えわせる朝日の声が響き、出雲もそれまで放っていた笑い声を急に静めて感慨深そうに小さく頷く。これから先も出雲はこの多忙ながらも楽しい上海で日々を過ごす事が確約されているが、3年の間いつも傍らにいて一緒に笑った親友がそうは行かないという事情はやはり口惜しい。お互いまだ日本語すらも覚えていなかった頃からの仲だし、喧嘩だって一回こっきりしかした事が無いくらいにウマも合うのがこの二人なのである。これまで帝国海軍の艦艇として励んできた中でも一時の別れを何度か経験しているのだが、出雲も朝日もお互いに離れ辛い胸の内を吐息の流れのみで言葉無く伝え合った。

やがてしばらく部屋の中を満たしていた沈黙を、朝日がまた笑みを整えながら口を開いて破る。それは彼女としても心残りを拭えない上海とそこに残る友人に、別れと同時に再会を約束しようと思つての言葉だった。

『海岸線も南支から仏印まで延びたし海南島の基地の設営もあるから、工作艦の私はきつとすぐに呼び戻されると思うわ。その時にはまた上海に来たいわね。それまで留守番をお願いよ、出雲。ふふふ。』

『ははは。結局あたしは朝日のお使いかあ。ま、ティーが飲めるな』

ら文句はないけどね。』

カップを持った手を肩の高さに掲げて出雲も笑みを返す。どんな時も元気で朗らかな彼女らしい言動は朝日の笑みを一層明るくさせ、お互いに口元や目尻のしわが深くなるのもお構い無しに顔を綻ばせる。同時に朝日もまたカップを手にして肩の高さまで掲げ、眼前の友人と合わせる様にしてカップを唇へと添えて傾けた。

二人の間にはオレンジ色のせせらぎが響き、湖面から舞い上がる茶葉の芳香がお互いの高い鼻をくすぐって行く。その香りの清々しさと落ち着いた奥深さを愛でる朝日は、ゆっくりとした動作で傾けていたカップを唇より離す。至福の一時を手放す練習がてらととれる程に鼻腔に残る香りの余韻が恋しかったが、深い深呼吸を放ちながらカップの重さに任せて握った手を揃えた両脚の膝の上に置いた。

しかしこの時、朝日はふと青い瞳に映した友人の表情に、本人も意図していないであろう曇り模様がある事を認める。

視線をカップの中にある湖面に落としたままの出雲。前髪も含めてその濃紺の長い髪を全て後頭部に向かって流している彼女は、おでこは元より表情の変化で最も重要な眉の動きが正面に座している朝日には良く伝わってしまう。眉間にほんの僅かに発生したクラックもその例外ではない。難しい事を考えている時でも常に陽気な出雲の人柄を鑑みると、その表情は朝日に友人の胸の内がただならぬ状態に瀕している事を示す物だった。

朝日は不思議に思っ浅く上半身を折り、眼前の出雲に顔を近づけて友人が巡らす思考の内容を問おうとしたが、それよりも早く手に持ったカップの湖面へ碧眼を映りこませたままで出雲が声を放つ。

『なあ朝日・・・、どうして帰るんだ？』

突拍子の無い言葉に朝日はちよつとだけ面食らうが、すぐに消えていた笑みを作りなおして出雲に応じる。

『ふふふ……。どうしてって、私は古いから整備補修に新しい機材の調達なんかが必要なのよ。それに今、帝国海軍では新たに進水した空母や戦艦が結構多いから、自ずと工廠の作業配分はそっちに取られてしまうわ。でも他の艦艇の整備補修や改装工事中の艦艇を投げ出す訳にも行かないでしょ。だからそのお手伝いをしてくるの。まだまだ明石だけじゃ役不足だし、こんな年寄りの工作艦でも居ないよりはマシなのよ、きつと。』

舷窓から漏れてくる優しい陽の光を代弁するような笑みを湛え、朝日は自身の工作艦としての役割と現代の帝国海軍の事情を合わせた内地帰還の理由を述べてみせた。

事実、現代の帝国海軍は新型の大型艦艇を何隻もここ数年で進水させており、長門艦以来20年ぶりとなる最新鋭の戦艦や翔鶴しょうかく型航空母艦2隻がその代表例であった。その上で軍縮条約と相次いだ艦艇構造の欠陥から発生した事故により、改装工事中の艦艇は巡洋艦等も含めるとかなりの数に登る。おまけに帝国海軍の巡洋艦や戦艦の類は既に艦齢15年以上という艦がそこそこに多く、羅針儀や通信設備といった軍艦としての有り触れた装備への対応も相当数を控えている。そこに掛かる工数は決して低い値ではなく、そも船渠の数だって海軍艦艇の全てを賄える程に足りている訳ではない。棧橋に繋いだままで工事を終える事ができるならそれだけで儲け物なのであり、その際に力を発揮するのは接舷して停泊したまま工作能力を発揮できる朝日や愛弟子の明石の様な工作艦と呼ばれる艦艇なのであった。

それを笑みを交えてとくとくと説いてみせる朝日だが、その意識の中では友人の問いが抱く本当の意味を薄々ながら気付いている。眼前にいたのは40余年の間、公私に渡って互いに切磋琢磨しな

がら友情を育んできた親友だがそれだけではない。少しだけ青い瞳を尖らせて眉間のしわを深くするこの出雲は、実は朝日以上に頭の良く洞察力に優れた人物。いつもは陽気な人柄で海面を浮遊する根無し草のような言動を持ち味としているが、その裏では物事の変化とその真相に対して常に冷徹に考察の刃を突き立てている。残忍な程に理論というメスでもって事の真相を切り開く頭脳の持ち主でもあり、誕生から40余年も経ても尚、「天才」の渾名をもって現代の帝国海軍の艦魂社会では一目置かれる所以なのである。

そんな出雲が今更になって朝日の分身が内地帰還となった理由に欲した答えは、朝日自身が今しがた声に変えた工作艦たる彼女の必要性などではない。朝日はその事に気付きながらも敢えて工作艦としての理由を口にして応じてみせたのだが、長い付き合いである出雲には通用しなかった。

『誤魔化すなよ、朝日。工廠の支援だけなら何も所属の艦隊を変え
る必要なんかないだろ。何より少し前に朝日の中から陸上に移った
工作部には、転籍の話なんか及んでないよ。』

『・・・・・・・・・・』

返す言葉を失う朝日だったが、出雲の放った言葉には反論するだけの余地が無い。彼女の言葉通り、支那に展開する全ての海軍艦艇を率いる支那方面艦隊の旗艦として励んでいる出雲なのであるから、隷下の部隊や組織がどこでどのような活動をしていて如何なる活動予定を汲んでいるかなどは全て頭に叩き込んでいる。上海の街並みに場を移し、今も職場としている工作部においても抜かりは無い。鋭い考察が生む出雲の低くトーンが利いた声は切れ味を増し、朝日が包もうとしていた出雲への回答からボールを次々と塗り取って行く。

『こないだ内地から来た運送艦の子に聞いたけど、なんで御召艦や

ってた比叡が戦艦籍に復帰したんだい？ 新型の戦艦が進水したってさっき言ったけど、金剛達の代艦じゃない事は比叡の復帰で明らかじゃないか。でなきゃ、誰がわざわざ代わりの船が出来たつうのに艦橋まで付け替えて復帰させるんだよ。連合艦隊は増勢している。松島さんや厳島さんらで第三艦隊を作ってたあの頃と同じようにさ。違うかな、朝日？』

そう語りかけながらやっと青い瞳を向けてきた出雲だが、入れ替わりに今度は朝日が視線を下へと向ける。膝の上で両手に握ったカップの中、涼しげなオレンジ色の水面を伝う波紋が映りこむ朝日の顔を歪めていく。秘めた想いの核心を突かれた事は、波紋が治まっても未だにカップの湖面に映ったままの朝日の僅かに歪んだ顔に表われていた。

出雲が例として言った「あの頃」という言葉も、当時を知る朝日は瞬時に察する事ができる。日清戦争を戦った10年落ちの艦体を分身とする先輩達で新たな艦隊を編成し、僅か数年で揃えられた朝日や出雲の分身を含む当時最新鋭の軍艦旗を掲げた艦艇達が数多く集った日々。多くの仲間と出会う事ができた当時は艦魂である彼女達にとっては毎日が発見の連続であったが、それは気の合う者達が極東の島国に集った程度の出来事ではない。まだまだ生まれて間もない日本が強力な海軍力の中核を得ようとしていたのが、出雲と朝日が記憶に蘇らせた「あの頃」。すなわち日露戦役を目と鼻の先に控えた時代なのであった。

その上で出雲がこの重苦しい影がついて回る日常を友人である朝日の内地帰還へと結びつけたのは、現代の日本が新たな敵と刃を交える為の準備をしているという可能性への示唆以外に捉えようが無い。すると朝日の脳裏には、36年前に耳にした荒波の叫びと悲鳴、自分を目掛けて放たれるロシア海軍艦艇の備砲による咆哮、過熱による腔発事故で根元よりもげた自身の分身の主砲とその激痛がありありと浮かんでくる。同時にじわじわと不快感を覚え始めた腹部に

片手を当て、腰を折り曲げえう角度をそれまでより深くした朝日は緩く唇を嚙んで襲い来る記憶の波頭に耐える。

出雲はそんな朝日を細めた瞳に映しながら再び語り始めた。

『朝日みたいな工作艦の利点は場所を選ばない所。確かにそれは朝日が言いたかった様に船渠に入らないままでの整備補修が行える事に繋がるけど、内地から遠く離れた海域での整備補修にも対応できるって事だろう？ 離島への基地設営も、海南島だけじゃなくて南洋の島々だって同じな筈だ。連合艦隊その物の増勢。そして長期に渡る遠隔地での艦隊行動を支援する、朝日みたいな工作艦の隷属化。・・・まるで、内地から離れた所でどつかと戦をおっ始めようとしてる勢いにも見えるんだけどね、あたしには。』

『出雲・・・。』

言うか言うまいかと悩んでいた朝日の一抹の憂いは、出雲にはお見通しであった。これまでの上海での日々では一度たりとてこんな大それた話題で語り合った事も無いのに、出雲は朝日が自身の内地帰還となる事情の裏に一人巡らせていた考察を全て言葉へと変えてしまう。内容もまた正鵠を得ていて、出雲らしく狭い視界では構築しないその理論は、彼女が遠い南洋や内地から離れた海域での艦隊行動に言及した事にも示されている。朝日はそんな彼女に対して胸の内にアーマーを設置する事も出ず、見事に見透かされたその憂いは現実味を帯び始めた。

『戦は・・・、ご免被りたいわね・・・。』

ずっと手にしていたカップを朝日はテーブルの上に音も無く置き、腹部をゆっくりと擦りながらも片方の手で自身の肩を抱く。師走も目前の11月の寒気とはまた違う何かにより僅かに震え出す朝日の肩は、力なく乗せてみた片手のみではその動揺を抑えきれない。

対して出雲は眼前のそんな朝日の様子を目にし、彼女が抑える肩の辺りに日本海海戦で負った古い裂傷の跡があるのも知っている故に、これ以上の語りかけはやめる事にした。

『ああ、朝日……、ごめんよ……。悪かった……。』

珍しく表情を曇らせて朝日の気持ちを代弁するように声を放ってきた出雲は、当初から大切な友人たる朝日を苦しめるつもりで声を放っていた訳ではない。長い付き合いである上に洞察力に優れた出雲にとって朝日という友人の想いが持つ透過率は余りにも希薄過ぎるのであり、常に笑みを持たせてやろうと企図するが故に意識せずとも読み取れてしまうのである。憂いがあるなら自分が取り除いてやろうという、40余年の間ずっと注いできた出雲なりの友人への心配りの一端であった。

ただ今回は少し行き過ぎて空回りしたのは、朝日の苦悶にも似た表情がこれ以上無いくらいに物語っている。出雲はすぐにカップをテーブルの上に置いて立ち上がり、うずくまるような姿勢であった事から近い所にあった朝日の肩にそっと手を当てて温もりを送る。

もっともお互いの胸の内を長い付き合いで良く知るのは朝日だった程度之差はあれど同じであり、鋭く切り込むような言葉を放って自身の身体に不快感を与えた出雲を憎い等とは決して思わなかった。肩に伸ばされた友人の腕を軽く叩いて自身の健全を伝え、朝日は折り曲げていた背筋をゆっくりと再び垂直に戻していく。それに伴って見上げた所には心配そうにして覗き込んでくる出雲の顔があり、朝日はちよつと奥歯を噛んで幾分強引に口元を吊り上げて呟くように声を放つ。

『ふふ……。いいえ、大丈夫よ……。』

ようやく姿勢を戻して弱々しいながらも笑みを浮べた朝日がテー

ブルの上に置かれていたカップに再び手を伸ばす仕草を認め、出雲は謝罪と心配の念が入り混じった表情のままソファに腰を下ろす。次いでどちらからという事も無くお互いに少しの間の沈黙を利用してティーの味わいに浸り、眼差しも語りかけも伴わない会話で自身の友人に向ける真心を交感した。

その事で出雲は胸を撫で下ろして小さく溜め息を放つが、続けざまにもう一度謝罪の言葉を述べようするの先に朝日の語りかけが響いてくる。その内容は地獄の日々と化した日露戦役に纏わる記憶にあつて、唯一輝きを放つ物だと信じる思い出を友人もまた抱いている事を示していた。

『あの頃・・・、日露戦役が始まろうとしていたあの頃・・・。初瀬達をその後の戦で失った事を思えばとても不条理なんだけど・・・、あの頃は本当に楽しかったわ・・・。』

力がまだまだ籠らないその声は震えも混じっていきそうな物。だが緩やかに端が吊り上がる唇より発せれた朝日の声はどこか半笑い気味で、出雲もまたそんな色合いの声を持ち前の低くトーンが利いた自身の声に感染させて応じる。その言葉も眼前の友人が口にした当時の事を補完して行き、朝日は弱々しいながらも優しげな笑みを出雲の顔になぞらせて耳を澄ませた。

『ああ・・・。楽しかったなあ、あの頃は。美味いティーを淹れてくれる朝日がいって、怒りんぼの敷島しきしまがいって、厳しかった八島先輩やしまや高飛車な富士先輩がいって、いつもニヤニヤしながら本を持って走り回ってた初瀬や常盤とこわがいって、ブーブー言ってたあたしらにも熱心に説教垂れてくれた松島さんや鎮遠ちんえんさんらがいて・・・。ははは、そしてなんてったって三笠みかさがいたからなあ・・・。毎日うるさくて寝れやしなかったモンさ。』

出雲の口から紡ぎ出されて行く記憶とその光景は、そこにいたかつての仲間達の名で二人の脳裏に昨日の事の様に浮かび上がってくる。備えるという意識の下に励んでいたのであるから決して毎日を笑って過ごせた訳ではなかったが、海軍艦艇の命としてこの世に生を受けて故郷より遠く離れた貧乏島国の海軍へと嫁入りした出雲と朝日にとって、良くも悪くも波乱づくめであったその当時を思い出してみると、二人の顔は意識せずとも微笑を形成していく。

憤りを隠せずに怒った事だってある。憎しみにまで昇華させた心に任せて殴り合いの喧嘩をした事だってある。どうにもならぬ事態に頭を抱えて落ち込んだ事もある。悔しさや悲しみといった感情を昂ぶらせて涙を流した事だってある。迫り来る恐怖に慄いて逃げ出したいと思った事すらもある。

喜怒哀楽の全てが遺憾無く詰め込まれた時間であったのに、出雲も朝日も笑みを持って当時を振り返ってみせる。その中心に居たのは出雲が口に出した者達に始まる、それぞれが各々の考え、心情、経歴を持ちながらも世界地図の東の端で巡り合い、そこで同じ軍艦旗をその身に翻したかけがえの無い仲間達であった。

そこまで二人が同時に想いを巡らせるや、出雲は荒い手つきで首筋を搔きながら口を開く。

『なんである時、気付けなかったのかねえ。あたしらは……。失ってからなんて、もうまっぴらご免だ。』

少し断片的な物言いだ短く語った出雲。主語が抜けたその言葉は第三者がもしその場に居たなら理解できないであろうが、ほぼ同じ40余年に至る時間、同じ場所で一緒に頑張ってきた朝日は出雲の言わんとしている事をよく理解している。ゆっくりと息を吸い込みながら、朝日は首の両側辺りでカーブを描く琥珀色の髪を手ぐしで整え、やがて手を膝の上に戻すと大きく胸を張って少し強めの口調で言った。

『私は、初瀬達が犠牲になったのは艦魂として当たり前的事だなんて思っていないわ。私達はただの剣や盾程度の物なんかじゃない、剣や盾として”生きる者”。そしてそれに対して邪魔だてする存在^{もの}には、実力を持って事に当たるのが私達。それをもう一度、内地に帰ったら長門達に伝えてみるわ。』

『ああ。あの地獄の中で、陛下への万歳や君が代を叫んだ程度で死を受け入れる様なオメでてー奴は、あたしらの中には一人もいなかった。大事な物、護る物をはき違えた末路を知るのはあたしらだけで十分だ。それを長門みたいな若い子等には是非とも伝えてやんなきゃね。帰れなかった初瀬達の分もさ。』

声を返した出雲は首筋を掻いていた手をそのまま残し、首を鳴らして朝日と同じく力の籠った笑顔を浮べてみせる。ニヤリと歯を覗かせた唇を鋭角に折り曲げ、不意にその場に立ち上がって半分ほどにまで減ったティーを湛えるカップを握る右手を正面にいる朝日の方へと伸ばした。すると朝日もテーブルの上に置いていたカップを右手に取り、その場に立ち上がって眼前の出雲へと伸ばしてみせる。するとお互いが伸ばしたカップを持つ右上では僅かに肘を視点にして折れ曲がり、出雲と朝日の胸の高さで斜め十字に交差する形で接した。カップから伝わってくる暖かさ、手首と肘のちょうど真ん中の辺りで密着した部分に感じるお互いに温もり。その二つの温度こそ、40余年の間ずっと変わらなかったお互いへの親愛の熱だと改めて感じ、二人はそれぞれの顔に深いしわが出来るのも厭わずにニッコリと笑って静かに声を交えた。

『軍艦というのは死を積荷とする船。でも私はそんな軍艦として生まれた自分を不幸だとは思っていないわ。妹も仲間も何人も死んだけど、私は帝国海軍の艦艇としてこうして今も生きていられる事を

心底良かったと思ってるわよ。出雲。』

『ははは、あたしもだよ。なんたって朝日と会えたからな。ホワイ
ト・エンサインが羨ましかった時もあったけど、もう頼まれてもマ
ストに掲げる気なんかこれっぽっちも無いよ。』

『ふふふ。誰も頼まないわよ、もう歳なんだから。』

『そりゃお互い様だ。内地に行ってもあんまり無理し過ぎるなよ、
オバハン。あははは。』

お互いの年齢に関する応酬に笑い合う、出雲と朝日。目元にも口
元にもクラックが消えない顔立ちに、変わらないのは高い鼻と奥ま
った目という西洋人の顔つきのみ。白い航跡も混じった琥珀色のカ
ールが掛かった海流とブルネットの真っ直ぐな滝もまた、二人は同
時に瞳に入れて笑い声の根本として行く。言葉を伴わずにしばらく
く笑った後、彼女達は全く同じタイミングで口を開き、それぞれが
イギリスという同じルーツを持つ事から別れの時に口ずさむ歌を歌
い始める。

だがこの時、別れという物に伴われる二人の感情は負の代物とは
ならず、それは出雲と朝日が交差した形で絡める右手をそのままに、
身体を歌のテンポに合わせて左右に揺らしながら歌声の音量を叫ぶ
様な大きさにまで次第に上げていくという、それぞれの歌い方にも
示されているのだった。

Should auld acquaintance be
forgot,
and never brought to mind?
Should auld acquaintance be

o r g o t,
a n d a u l d l a n g s y n e ?

F o r a u l d l a n g s y n e, m y d e a r,
f o r a u l d l a n g s y n e,
w e ' l l t a k a c u p o ' k i n d n e s s
e t,
f o r a u l d l a n g s y n e.

(旧友は忘れていくものなのだろうか、古き昔も心から消え果てるものなのだろうか。友よ、古き昔のために、親愛のこの一杯を飲み干そうではないか。)

A n d s u r e l y y e ' l l b e y o u r p i n t
— s t o u p !

A n d s u r e l y I ' l l b e m i n e !
A n d w e ' l l t a k a c u p o ' k i n d n e
s s y e t,
f o r a u l d l a n g s y n e.

F o r a u l d l a n g s y n e, m y d e a r,
f o r a u l d l a n g s y n e,
w e ' l l t a k a c u p o ' k i n d n e s s
e t,
f o r a u l d l a n g s y n e.

(我らは互いに杯を手にし、いままさに、古き昔のため、親愛のこの一杯を飲まんとしている。友よ、古き昔のために、親愛のこの一杯を飲み干そうではないか。)

s,
 We t wa ha e run a bout the brae
 and pou'd the gowan's fine ;
 But we've wander'd mony a wea
 ry fit,
 sin' auld lang syne.
 For auld lang syne, my dear,
 for auld lang syne,
 we'll tak a cup o' kindnes
 e t,
 for auld lang syne.
 (我ら二人は丘を駆け、可憐な雛菊を折ったものだ。だが古き昔
 より時は去り、我らはよろめくばかりの距離を隔て彷徨っていた。
 友よ、古き昔のために、親愛のこの一杯を飲み干そうではないか。)
 n,
 We t wa ha e paidl'd in the bur
 frae morning sun till dine ;
 But seas between us braid ha e
 roar'd
 sin' auld lang syne.
 For auld lang syne, my dear,
 for auld lang syne,
 we'll tak a cup o' kindnes
 y

e t,
for auld lang syne.

(我ら二人は日がら瀬に遊んだものだ。だが古き昔より二人を隔てた荒海は広がった。友よ、古き昔のために、親愛のこの一杯を飲み干そうではないか。)

And there's a hand my trusty
fieri e !

And gies a hand o' thine !
And we'll tak a right guide—wi
llie waugh t,

for auld lang syne.

For auld lang syne, my dear,

for auld lang syne,

we'll tak a cup o' kindness
e t,

for auld lang syne.

(いまここに、我が親友の手がある。いまここに、我らは手をとる。いま我らは、良き友情の杯を飲み干すのだ。古き昔のために。友よ、古き昔のために、親愛のこの一杯を飲み干そうではないか。)

もうすっかり落ち着いた40代の女性の外見を持つ二人。その身

体だって老いが蝕んでいる状態で、ここ最近の生活で腹の底から声を振り絞って叫んだ事など皆無である。生来が大人しい性格の朝日には特にそれが顕著なのであるから、歌い終ると彼女は友人に反して肩で大きく息をしている始末であった。ましてその歌も40余年の生涯で使い慣れた日本語では無く、同じ時間だけ封印していた遠き故郷で使われる言葉である。

規律を失った吐息と軽い動悸に苦しみながら、朝日はその辛さを出雲の笑みに投げた。

『はあ、はあ……。久しぶりにQueen's Englishで歌ったけど、舌が疲れちゃったわ……。はあ、はあ……。』

若干の汗も浮べてそう言った朝日を出雲はケラケラと笑う。支那方面艦隊としてお仕事に励んだここ数年、オーガスタやペトレルといった英語圏の艦魂達との会話で英語を用いている事から彼女は多少の免疫を持っていたのであり、友人のように疲労の色を全開にするような事は無い。胸の前に拳を握って僅かに背を丸める朝日の背中を擦りつつ、出雲は友人のそんな英語への苦勞を独特の言い回しでちゃかした。

『おいおい、forgotの”t”の発音が無かったぞお、朝日い。スコットランド訛りだとしても、朝日は”t”には人一倍拘ってる筈だろう?』

そう言いながら出雲は片手に握ったカップを顔の横まで持ち上げ、左右に小刻みに傾けて朝日の視線を誘う。昔から陽気で頭の回転の速い出雲らしい、アルファベットの発音とカップの中にあるオレンジ色の湖面をかけた冗談だ。

してやられたと朝日はまだまだ静まらない胸の鼓動に耐えつつ半笑い気味の声を返し、対して出雲は友人が笑みの中で悔しい気持ち

を示した事に高笑いしてみせるのだった。

『はあ、はあ……。んもう……。』

『あくはっはっは！ いやあ、朝日のティーはやっぱんまいよお！
もいっばい！』

こうして朝日と出雲は変わらぬ友情と互いが抱く現代への想いを示しあい、翌日の朝に再会を約束して上海の波間で別れる事となる。もうすぐ雪を運んでくるであろう冷たい風が勢いを増す、昭和15年の11月7日の出来事であった。

第八七話 「教え子」

昭和15年11月12日。

雨の降る気配はない薄っすらとした曇り空の呉海軍工廠で静かに岸壁に繋がれる明石艦^{あかし}には、呉海兵団での初等教育を終えた新兵が20名ほど乗艦。志願兵も多い海軍らしくまだまだほっぺの赤い10代後半の少年達の姿もそこにはチラホラとあり、いよいよこれから始まる四六時中足場が揺れる艦船勤務に物怖じしてその表情もどこかオドオドとしている。今日は伊藤^{いとう}特務艦長が終日不在とあって当直将校と各分隊の班長各の下士官が甲板で彼らを出迎え、挨拶と短い訓示の後に各自の配属先と艦内配置を通達。泳ぐ視線と潮気の薄い雰囲気拭えない新兵達は元氣一杯の返事のみしか出来ず、艦橋頂上の測距儀の上からそれを見ていた明石はその初々しさに思わず笑みを溢してしまう。各々の分隊下士官たる先輩の前へと衣囊片手に進み出て直立不動の姿勢を取り、全員の配属通達が終わると解散が言い渡される。

そしてここから帝国海軍の新兵さんの長い長い艦隊勤務が幕を明けるのだ。

『これから配置先と居住区関連を案内する！ 第一分隊第2班、続け！』

『『『は、はい・・・！』』』

『声が小せえぞ、お前等！！ 海兵団で何を勉強してきたんだ！！』
『『『は・・・、はい！！！！』』』

いきなり怒鳴られてしまう新兵さん達だが、その衝撃に面食らって尻込みする暇は帝国海軍には無い。「人も嫌がる海軍に、志願で

入る馬鹿もいる。」という言葉が海軍にはあるが、まさに彼等はその馬鹿さをこれから叩き込まれる事になる。

寝起きをするお部屋では一番最初に目を覚ましてすぐ上の先輩方の寝具納めを手伝い、古参の先輩方が洗面に行く間はさらにその寝具の片付けに部屋の掃除。帰ってきたら今度は部屋全員分の朝食の準備も担当し、休み時間や「酒保開け」の号令がかかる夜になってもどこかの整理整頓に汗を流しながら立ち食いでお菓子を頬張る。もちろん内火艇やカッターといった装載艇の揚げ降ろし作業では一番キツイ所をやらされ、毎週決まった日の夜には甲板に並べられて櫂の棒を持った先輩方による閤裁判も受けねばならない。艦隊勤務の唯一の息抜きである入港先での上陸とて初めて艦艇乗組みとなった年は滅多に許可される事は無く、一年ほどの勤務を終えた頃になつてようやく週に一日の割合で許されるか否かである。

曲がりなりにも艦の命としてそれを見てきた明石には、キビキビとした動作で各々の班長の後ろに従つて艦内に散つていく彼らの背中が少し可哀想に思えてしまうが、なんとかその新兵さん達が理不尽な境遇の中でひたすらに心を磨いていくのを願つてそれを見送る。

海軍艦艇は辛い。

漁船の様に時化で海に出るのを見合わせる事も無ければ、その役目も大まかに言えば相手の船の抵抗を掻い潜つて沈める事が主な役割である。その最中に襲ってくる抵抗だつてこちらの船を沈めようと企図して放たれる大砲や魚雷であり、お船の死に方としては最も忌諱される沈没という事態を常に強要する、またはされる運命にあるのが海軍艦艇という存在。そこで尚舳先で波を駆けようとするのなら、船を操る者達に要求される技術、体力、精神力は並大抵の物では済まされない。人それぞれの長短があるとは言え、各人があらゆる面において秀で、同時に強くなければならないのであり、先輩方が鬼になりきつて新兵さんを追いまわすのもここに大きな理由がある。

帝国陸軍と同じ様に帝国海軍もまた後輩の指導はすぐ上の先輩格の者が当たるのが暗黙の了解である事から、時にはその教育指導の方法を叱責されて新兵さん達が見ている目の前で先輩方が古参兵にぶん殴られる事もあり、申し訳ない気持ち一杯でそのお叱り劇を目に焼き付けた後には『お前等のせいだ!』ととてん式に新兵さん達は散々に鉄拳と怒号を浴びせられる事となる。しかも階級社会の頂点たる軍事組織では底辺に当たる彼等である故に、それを発散する矛先はどこにも無い。

ただひたすら奥歯を噛んでグツと堪えてその日その日を過ごした末に、彼等はいつの間にか潮の香りが染み込み、少々の荒波など意にも介さずに目的へと邁進できる胆力を育んでいくのである。本人達には辛さの方が色濃い事は確かであるが、先輩方も決して憎い一心で今にも泣き出しそうな新兵さん達のお尻に精神注入棒を叩き落している訳ではないのだ。

そしてそんな水兵さん達の厳しいながらも励む現実を、明石は親友である神通が率いる二水戦の日常を見ている事からなんとなく理解する事が出来た。むしろまだ顔を殴られないだけ、艦魂の世界はマシですらあるようにも明石には思えてくる。

きっと艦内の隅っこや厠の中で辛さに涙するであろう新兵さん達の遠くない未来を明石は予想し、後でこっそり銀バイしたお菓子や缶詰とそつと傍に置いてやろうと企図しながら、明石は小さく声を放って艦内へと足を踏み入れていく新兵さん達の背中をずっと見守っていた。

『みんな、頑張ってね……。』

同日、1329。

午後の就業を告げる号令が在泊の艦艇から折り重なるようにして発せられる中、呉軍港の海の玄関に当たる西側の海面上。江田島を背後に移す小さな海峡状の波間には、ラム状艦首による独特の水切りと天を貫かんとする程に高く伸びた2本のマストが目を引き古めかしい艦が単艦でゆっくり港内に向かっていく姿があった。真っ白な塗装も長い外地でのお勤めと帰り道で随分黒ずんだ所も見取れ、そこそこの大きな艦体を持つ割に至って低速な船足ですすむその艦艇であるが、ずんぐりと幅広の形状を持つ為か静かな瀬戸内の波の恩恵か、出迎えの曳船がヨタヨタと港より出てくる中にあるもほとんど動揺せずに浮べる城の体裁を維持している。スタンウオークが残る艦尾に掲げた軍艦旗と僅かに残る備砲のみが海軍艦艇である事を目にする者に理解させる事が出来るが、当の艦の命たる者にあるのはその限りではない。

やがて曳船を従えて減速しつつ慣性のみの前進で軍港内へと舳先を進めていく最中、両舷に停泊する大小様々な艦艇からは人間には見る事のできない女性達の敬礼する姿が立ち並び、割かし大きな艦体を持つ艦艇からは港内への進入を労う声も発せられる。その内に軍港の岸壁より少し離れた波間に浮かんでいた伊勢艦のすぐ横を通過する際、明治生まれの面影を色濃く残した艦影には伊勢艦の命たる者である伊勢の元氣の良い声かけられた。

『軍医中将！ お帰りなされませ！』

艦首旗を翻す艦首旗竿の真下でそう叫んだ伊勢はすぐさま踵を揃え、目に映る大先輩が自分の放った声に気付いて振り返ってくるのを確認して額に右手を添える。艦艇としてはもう既に一線から退いた先輩の分身が伊勢の黒い瞳に移るが、伊勢は強い尊敬の念を抱いて直立不動の体勢を崩さない。

そして伊勢が力の籠った直線的な敬礼の姿勢で眼差しを向ける方向には、艦尾のスタンウオークに出て日の光に琥珀色の髪を輝かせながら柔らかな敬礼をもって応える先輩の姿。伊勢を含めた帝国海軍の艦魂社会においてただ一人だけ、軍医中将の階級を頂いてる者である朝日あさひの姿があるのだった。

その後、曳船によって港内北側に位置する軍需部前の岸壁に接岸した朝日艦。沖合いに停泊する艦艇からやってくる内火艇や短艇が列を成した第一上陸場、堺川を挟んで対岸にある第二上陸場を東側に見るそこは、西に港務部、上陸場の向こうに当たるさらに東には赤レンガと御影石の色調が一際輝く呉鎮守府庁舎が居を構える場所。岸壁に繋留された朝日艦からは美しい呉鎮守府庁舎は背面からでしか見ることが出来ないのだが、何時見てもその美しさを色褪せない庁舎を久しぶりに瞳に入れた朝日はすこぶる機嫌が良い。自身の分身の中では最もお気に入りであるスタンウオークが設けられた艦尾が、鎮守府のある東に向けられた形で繋留された事もその心を明るくさせる。

やがてその場にはさつき軍港内の波間ですれ違った伊勢と上海で別れてきた出雲いずもと同じ旧友の浅間あひまが足を運び、久々に再会した朝日と共に軍港内の光景を一望しながら近況を報告しあう。

『浅間、背中や腰の痛みは大丈夫？ 元氣そうに見えるけど。』

『あんまり良く無いわねえ。同じ海防艦なのに、練習艦隊の任務はもうずっと八雲やくもと磐手いわてに任せっきりだった。ま、二人とも今年から御役御免。専門の練習艦として香取かとりと鹿島かしまっていう新しい艦艇がその役に当たる事になって、二人とも今は横須賀と佐世保に帰っているわ。それでも兵学校での訓練でたまに呉には来るのだけだね。・・

・うふふ。伊勢の前では言わないでよね、朝日。年寄りになったのを思い知るのもう十分だわ。』

『ふふふ。出雲もそんな事を言ってたわ。歳はお互い様だ、なんて。』

檜を思わせる白さが目立つ金髪を靡かせる浅間は腰にそっと手を当てて状態が芳しくない事を伝えるが、朝日より出雲の息災を耳にしてブラウンの瞳を細める。ついこの間上海で会った朝日に比べ、ただでさえ佐世保鎮守府所属にして3年前からは支那方面に出向している出雲とは浅間はしばらく会っていない。日露戦役では同じ第二艦隊、それ以降の遣米支隊や遠洋航海でもずっと一緒だった出雲は、この浅間も朝日以上に慕っている大事な友達。同期にも等しくまして出雲とは同じイングランド、ニューカッスル生まれの仲でもあった。

『変わらないわねえ。』と口にして浅間は笑い、朝日も苦言を呈すような形で笑みを浮かべながら応じてみせる。

また、その場には今の呉でも軍令承行上でも最も偉い立場を頂く伊勢もいたが、彼女は敢えてこの二人の大先輩のお話に声を挟んで行く様な事はしない。その理由は普段は病人と見まごう程に元気の無い浅間が心の底から笑っている様子を瞳に入れているからで、古くは日本海海戦にて僅か6分間の間に戦線離脱を強いられる程の深手を負い、アメリカでの出張では海図に載っていない暗礁に乗り上げて艦中央にあたる船底に15メートルにも及ぶ重度の裂傷を設け、つい5年程にはいま彼女達がいる所からもほど近いの倉橋島南端にて再び座礁し、しかもその際に竜骨損傷というお船としては致命的な傷を負ってしまったのがこの浅間の分身なのである。まさに満身創痍の身体なのであり、誰も口には出さないが艦の命である浅間の軍装の下には至る所に大小無数の裂傷の痕が残っていた。

そんな事から浅間はいつもはブラウンに輝くその瞳もどこか虚ろ

な感じを滲ませ、大きく表情を変えて笑ったり怒ったりする事も殆ど無いのだが、それを友人として知っているとさえ言えこうもまた二言三言の会話で笑みを持たせてやる事のできる朝日は、伊勢の瞳にはやっぱり偉大な先輩として強く焼き付けられる。今も波間を駆けてお仕事に励んでいる点でも、伊勢の胸の内に尊敬の念を募らせるのには十分だった。おまけに日露戦役において今では伊勢自身が所属している第一戦隊の主力を成していた者の一人がこの朝日であり、実弾を敵に目掛けて撃つ、または撃たれるという世界を潜り抜けて来たというのだから、そもそもが大正生まれの伊勢とはその根性の質からして違う。

故に伊勢は手持ち無沙汰に思うような事も無く、飽きもせずに気をつけをしたまま、スタンウオークの手摺に片腕を乗せて笑う朝日の横顔をじつと眺めていた。しかし嬉しい事にやがて浅間との会話も終え、後輩がその場にいる事もちゃんと承知している朝日は、すぐさま伊勢に細くした碧眼を向けて少し低い感じを持つ響きの良い声をかけてくる。もう既に30代にも入った大人の女性としての外見を持つ伊勢も、この大先輩にかかつては待ち侘びた贈り物を受け取る子供と同じ心持を抱かされてしまう。真っ直ぐに伸びた身体を不自然に肩に力の入った姿勢の気をつけに直し、弾むような声色で朝日に声を返した。

『伊勢。ご苦労様。特に大きな事故も無く、連合艦隊は過ごせてる様ね。』

『は、はいっ！ GF旗艦の長門始め、皆よく訓練に励み、潜水艦部隊以外は無事故で過ごす事が出来ました！ それと新しい仲間も増えそうなので、みんな頑張っております！』

意気揚揚と答えてみせた伊勢は眼前の朝日を喜ばせる意味も含め、今いるスタンウオークから右舷に望む呉軍港の波間のご真ん中へと手の平を流す。それを合図として朝日も浅間も伊勢が示す方向に視

線を流すが、3人ともその方向に対して見るべき者を探したりするような素振りは無い。今日帰ってきたばかりの朝日とて、軍港に進入していくのに併せて既に軍港のど真ん中でデンと構えるその巨艦を認めているからだ。両舷を大きな起重機が設置された浮き栈橋ポンツーンによって挟まれ、中央甲板上に着々と上部構造物を積み重ねているその巨艦の正体は朝日としては初見ではあるが知っている。何より眼前のその巨艦の命を取り上げるべく策を授けてやったのは朝日自身なのだ。

伊勢もまたその事は知っているが艤装作業の進捗も嬉しいその巨艦は伊勢と同じ現代型の戦艦である事から、彼女は自分の言葉で朝日にその大型艦を紹介しようとして決めて張り切った口調で声を響かせる。

『あれが帝国海軍最新鋭戦艦、大和艦やまとです。全長263メートル、全幅38.9メートルで、予定している排水量は聞いた所ではなんと7万トン近くにもなるそうです。まだ主砲塔も搭載していない今の状態ですら4万トン近いらしいですから、既に私よりも排水量の点では優ってるくらいです。いやあ、初めて見た時はたまげましたあ。』

『大和。そう、良い名前を貰ったわね。それにしても美しい艦体だわ。ケースメイトが無くてスツキリしているのも今風ね。』

期待通りの朝日の反応を得た伊勢が笑う前で、朝日は大和艦の舳先から艦尾へと視線を流してその美しさを楽しむ。緩やかな曲線で整えられた艦首は艦体中央過ぎの当たりからスロープにて高低差を作り、大きな割りにはその見た目に随分とスマートな印象を伴わせる。帝国海軍では約20年ぶりとなる新型の戦艦の姿は、まだまだ大型の軍艦が作れずにいた時代に遠く英国より日本へとやってきた朝日にはとても感慨深く、40余年の間にその実力を伸ばした帝

国海軍の造船技術を良く理解させてくれた。すると自然に朝日の細くなった眼や口は更にその度合いを増し、瀬戸内の潮風がかき上げる琥珀色の流れの向こうにそれを認めた伊勢の心は益々踊る。

浅間を隣に迎えて一緒に眺める朝日の邪魔をせぬように気をつけつつ、伊勢はさらに先輩の抱く大和艦への理解をより深くして貰おうと企図。呉鎮隸下の艦魂達には面会謝絶としている大和艦の命たる者に会う事を朝日に進言してみた。

『お会いになってみませんか、軍医中将？ 長門の師匠である軍医中将なら、きっと大和も喜ぶかと思います。それにこう言ったらなんですけど、大和は軍医中将の血を長門を経てしっかり受け継いだようでして、礼儀正しい性格や勉強も抜群にできる所は軍医中将によく似ておりますよ。』

『ふふふ。そんなに大した艦魂ひとじゃないわよ、私は。』

伊勢に返す朝日の謙遜の言葉を放ち朝日は一瞬だけ伊勢に流し目を送ると、すぐさま眼前の大和艦へと戻して再びその美しさを愛でる。40余年前は世界最強との呼び声もあつた自分の事も鑑みる朝日には、時代の流れとそれに沿った海軍艦艇の頂点である戦艦が持つ姿の移り変わりが見て取れて思う所が山のようにある。もっとも自身の分身の老朽さを殊更に意識するような暗い気持ちは彼女の胸には微塵も無く、長い海軍生活において久々に目にした近代戦艦の誕生を朝日は心から祝福していた。

『やはり美しさは大事ね……。例えば戦に赴く事を生業にする軍艦であつても……。』

感心を通り越して感動の吐息も混じる声が唇から漏れ、伊勢はちやうど朝日を挟んだ所で一緒にその声をを耳にした浅間と笑みを交える。どうやらこの大先輩は帝国海軍艦艇としての新たな仲間を事

の他気に入ってくれたらしいと確信し、『では、ご案内を。』と言いながらエスコートするべく朝日の手摺に乗った手の近くに自身の手の平を近づけていく。

だが朝日は伊勢に向き直って小さく笑い声を放つと、ゆっくりと首を左右に振って言った。

『ふふふ。．．．いいえ、長門が居ない状態では会わない方が良いと思うわ。学ぶ場所に余計な人がいるというのは、長門を見ればよく解かるから。』

後輩の好意に満ちた申し出を断るのはややもすれば辛い事であるのだが、朝日の返答を受けた伊勢はその言葉に笑い始め、朝日に寄り添うような格好で一緒に耳にしていた浅間も再び口到手を当てて元気な笑い声を上げ始める。その原因は朝日が口にした彼女自身の教え子の名と、それに纏わる思い出を伊勢も浅間も実際に目にして知っているからであった。

『あははは。出雲さんの事ですね？確かに長門は出雲さんの影響を強く受け過ぎましたね。はははは。』

『まあ、悪い子には育たなかったから良いじゃない、朝日。うふふふ、でも性格は別として、言葉遣いは完全に長門は出雲譲りよねえ。』

『まったくあの二人には困った物よ。でも大和が伊勢の言った通りの子なら、長門が師匠筋になってもきっとこの先似る事はないでしょう？なら大丈夫よ。』

まだまだ生まれたばかりで将来性と期待に満ち溢れる大和艦を眼に写しながら、朝日達3人はお互いに共有するずっと昔の記憶を脳

裏から検索して一様に微笑む。

未だ艤装工事中である大和艦であるが、その命たる大和の教育は現連合艦隊旗艦の長門によって始められている。生まれたばかりの若い命に長く生きてきた者が教えを授けるのは艦魂社会の伝統で、今から20年ほど前にはその長門も朝日によって同じく教育を授けられていたのだが、その際に朝日の言葉にもあった様に師弟の教育の場に第三者がいると、時として不協和音となる事がある。そして3人の記憶の中でそれを担当したのは、つい先日朝日が別れを告げたばかりの親友、出雲だった。

明治の頃より朝日とは仲の良かった出雲は当時は兵学校練習艦として内地におり、朝日先生と長門生徒の教育風景にも頻繁に顔を覗かせていたのだが、真面目な朝日に対して出雲は冗談混じりの陽気さが売りなのは周知の事。教科書や参考資料の文言を一言一句間違えずに述べる朝日に、まだまだ幼かった長門が眉間にしわを寄せて首を捻ると、横から上機嫌に出雲が口を挟む。

『朝日 い、んな難しい言葉解かる訳ないだろお。長門、含有率^{がんゆう}や割合ってのは朝日が淹れてくれるティーの味わいや香りに例えてみれば簡単だよ。味や香りが薄けりゃ茶葉の量が抽出の時間が短いって事だし、そもその味や香りが朝日とあたしが淹れるティーで違うのは茶葉の銘柄が違うから。つまり茶葉が含んでいる味や香りの基が違うのさ。艦砲の発射薬も同じだよ。』

なんとも強引な出雲の教えであるがその内容はごもっともであり、幼かった長門はこの出雲の横槍によって朝日先生の教えを深く理解したのもまた事実ではあった。だが偶に教室に遊びに来る陽気なお姉さんで終わってれば良い物を、生来が明るい性格で生まれた

長門は出雲を師匠の次に慕うようになってしまい、その独特なしやべり方と教え方は長門の人柄に少なく無い影響を与えてしまう。

何時だったか出雲は帆船時代の名残りとして知っていたロープの多様な結び方を長門に教え、朝日もそれを教育の合間の休憩として間近で眺めていた事があるのだが、その際に不意に教え子が放った質問の回答として口に出される出雲の言葉を耳に入れて、ちょうど口に流し入っていた紅茶の流れを噴出した息と共に逆流させてしまう。

『出雲さん。アタシたちの分身にはロープなんてほとんど使ってませんし、信号旗を扱う索以外は全て鋼索ですよ？ 覚えても使いどころが思い当たらないんですけど……。』

『な〜に言ってるんだい、道を確保する為だよ。あたし達の転移は便利だけどころにかく疲れるだろ？ だから甲板の上だけを道にしないうようにするのさ、艦橋から逃げたり烹炊所に銀バイしに行く時ってのはね〜。』

長い付き合いであるが出雲のこういう所に頭を抱える朝日。酷く咳き込んで呼吸に苦しむ横で、友人のその姿を内心笑いながら出雲はちよつとした悪事への使用法を次々に長門に授けていく。

『長門にもスタンウォーク、あんだろ？ そこは長官室があるってのがあたしらの時代からの相場なんだけど、会議や接待で使うのは艦首寄りにある長官公室っていう別の部屋だから、そんな時に長官室忍び込むんなら艦尾の旗竿からロープ垂らしゃ良いのさ。艦隊の日程なんざイジリ放題できるっかな。』

『おおお！ 出雲さん、あったま良いーっ！』

眼を離すと大事な教え子にこんな事ばかり教えているのだから、朝日としては堪った物ではない。古き良き時代のお船の命として物を教える点では賛同するのだが、如何せん不真面目でおもしろ可笑しく日常を過ごす事を大事にする出雲という人柄の余波が余りにも出過ぎるのが悪い所。さしもの朝日もこんな日々の中で、何度声を大にして怒った事があつたか数知れずであつた。

そして時代は流れ、現代。長門は二人の師匠より授かった物を遺憾なく発揮し、栄えある帝国海軍連合艦隊旗艦としてその職務に励んでいる。ロープを駆使した自分の分身からの脱走を繰り返しながら。

なんともご立派な事である。

本来ならそんな前例を顧みて長門の教育に一抹の不安を抱かねばならないのだろうが、確かに怒りはしたけども朝日は出雲が教育の現場にいた事をそれほど疎ましく思っていた訳ではない。

なんだかんだで幼い長門に叡智を授ける役としては出雲の言葉は功績も大きく、そのおかげか長門は教養も豊かで運動も出来るし、不真面目なのは残念ながらも捻じ曲がって扱いに困る様な性格にはならなかった。かなり過分な所もあるが心を余裕の湖面で常に潤わせ、おかげで人当たりも良く誰からでも慕われる。他人を見る目もとても大らかであり、変に勘ぐって先入観を抱く事も無い。その上で長門は朝日が与えた真心に深く感謝してくれ、師匠が追い求めていた艦の命たる者の理想像をよく体言するに至る美しい容姿も持っている。武技教練も朝日には最後まで勝てなかったが腕前は相当な物で、あれで実は英語も堪能であつたりするのだ。

そんな長門を弟子として巣立たせれた朝日は過去の教え子と友人の3人で過ごした日々を懐かしみ、どこか嘲笑にも似た笑みを浮かべて眼前の大和艦を瞳に映す。やはり自分の中では出雲の存在が大き

く、むしろ友人の存在なくして如何に自分は未熟なのだろうかと朝日は考える。つい先日上海で別れた友人が持つ独特の陽気な言動が、かろうじて朝日の口元を緩ませてくれていたが、その笑みの下で朝日は教え子の長門がそんな出雲の良い所をも受け継いだ事を喜び、同時に少しだけ悔しさを募らせた。

故に彼女は長門という教え子に対して抱く全幅の信頼を大きな物とし、今やかつての自分と同じようにして後輩に教えを諭す役目を負っている長門の邪魔をしてはならないと考えたのだった。

『長門が来た時に会えば良いわ。年寄りはお後ろに居て、黙ってテイーを楽しんでるくらいがちょうど良いのよ。』

僅かに元気が無いようなその声色に浅間も伊勢も気付かず、すぐに肯定の意を示して朝日が向けてきた偽りの笑みに応じる。そのまま大和艦には再び視線を戻す事は無く、朝日はスタンウオークの開きっぱなしにしているドアを潜り抜けて艦内へと足を踏み入れている。

その間もじわじわと胸の中を圧迫してくる穏やかな自己嫌悪の波が、浅間と伊勢を背にした形になった事で朝日の笑みを急速に薄れさせていく。朝日自身も口元感覚がかなり薄らいだ事にそれを察し、こんなにも自分は弱く惨めな者なのかと静かに溜め息を放つ。久々の美味しいティータイムがいよいよ始まるのかと楽しそうな笑みを浮べる伊勢や浅間に、自分から背を向けて歩き始めた事自体、朝日には本当は周りの者達から向けられる自分への期待に尻込みして逃げ出したようにすら思えた。

しかし朝日がそんな自己嫌悪の念に苛まれながら視線を落として歩いている最中、朝日の前には彼女達の仲間が現れる事を示す淡く

白い光が収束し始める。いつの間にか視線を伏せ目がちになって足元に視界を得ていた朝日は最初の内はそれに気付かなかったが、背後から響いて来た伊勢の声を受けて眼前の光に目を向ける。

『あれ、誰だ？』

呉鎮守府の所属艦艇が揃っているとは言え、戦艦や空母といった大型艦の艦は横須賀や佐世保へと今は帰っている状態。その中で帝国海軍の重鎮たる朝日の元へと気軽に足を運ぶ艦魂は実は滅多に居ない。帝国海軍の艦魂社会で将官クラスの階級を頂く自分と、艦の主である朝日とは旧友の仲になる浅間を除けば、伊勢には今まさにこの朝日艦に足を着けようとしている艦魂の名がすぐには思いつかなかった。

やがて白い光は球状の形になるかと判別できそうな所で弾け、粉雪のような細かい粒子となって宙を降って行く。そして輝きを失っていく光の集合の中、3人の前には少し高い所からヒョイッと跳び下りて来るような格好で、首の後ろで一本に纏めた黒髪を振り回す若者が現れる。艶のある髪と頬に、スラリと細長い四肢。朝日と同じくらいの女性にしては割りと高めの背丈。整った綺麗な東洋人の顔立ちも朝日や浅間と比べて光を受けて反射する色合いが一層明るい照り具合を持つ女性であったが、その姿を目にした瞬間、伊勢や浅間は彼女の名と朝日の下へと訪れる事の出来る正当な理由を即座に悟る。

なぜなら眼前に現れた若い女性は、先程まで話題に上がっていた長門と同じく朝日に直接の教授を受けた者だからだった。

『ほっと。あ、朝日さん！ お帰りなさい！』

若さ溢れる大きな声で現れるなりそう言ったのは明石。
心底慕う師匠のお帰りを耳にし、先日行われた柔道の試合にて捻

挫した霞の治療を終えるや一目散に朝日艦をやってきたのである。少し前の観艦式を控えた時に師匠へと抱いた母に対する物にも似た慕う心も利いてか、明石はまるで子犬の様に丸く黒い瞳を輝かせて朝日へと駆け寄ってくる。まだまだ生まれてから二年の歳月しか得ていない明石の若さが駆け寄るその足の運びと屈託の無い綺麗な笑顔には存分に表現されているが、同時に彼女は人間の世界での海軍軍人の立ち振る舞いを重んじる艦魂社会でやってはいけない行動を平気で行っており、その未熟っぷりをすぐに察した朝日は込み上げてくる無上の可笑しさに抗えず笑った。

『ふふ・・・、ふふふ。あははは。』

大人しい朝日にしては珍しい高笑いを耳にして伊勢や浅間はちょっと驚いたような顔を見合わせていたが、朝日の笑い声には今度は一切の偽りが混じってはいない。上海で出雲と別れる際と同じ様に朝日は心の底から楽しく明るい心の音色を謳歌していた。

もつとも、久々の再会なのに顔を見るなり師匠に笑われたしまった明石としてはちょっと合点がいかない。朝日の前で歩みを止め、何か顔に変な物でも付いているのだろうかと片手を顔になぞらせたり、何も無いと解かるや今度は視線を自分の胴回りに巡らせて身嗜みを焦点とした探索の目を光らせてみる。

『うよ・・・、いっと・・・。あれ、な、何もない・・・。』

その言葉にも示されている通り、朝日に大笑いされる理由を自分の資格好に何も見つける事が出来なかった明石。師匠の笑い声の真相は本当の所、師匠自身の胸の中にしかなかったのだから無理もない。

まだ笑いが治まらぬ中で、朝日は早速愛弟子に対する久々の教授を始めてみせる。

『ふふふ。明石、室内礼は教えたでしょう？　こういう時は誰に敬礼するんだったかしら？』

『あ、け、けーれー・・・！』

かつて一度教わった事もある内容だとの師匠の言葉を受け、明石は僅かに表情を凍りつかせた後に慌ててその場に気をつけをし、頭から取った軍帽の底^{ひたし}を右手で持って足の横にピッタリ添えると軽い角度で頭を下げる。だがそれこそが間違いであった。

『まったくもう、違うわよ、明石。私は軍医中将で将校相当官。この場で将校なのは一人しかないのよ？　ふふふ。』

明るく穏やかな物言いでの朝日の指摘は、明石にとってはお叱りの雷にも等しい。誰に何をしろと言わないながらも明石の行動が間違いである事、その理由は艦魂社会で頂く階級の厳密な差異である事を伝えられ、ようやく明石も自分の行動の至らぬ部分を理解する。大事な大事な礼式、すなわち挨拶の仕方^{しほう}も決められている帝国海軍にあって、明石の敬礼する相手は礼式上は間違っているのであり、この場合は最も目上の将校に対して敬礼するのが決まりなのである。人間の世界ではさらに部屋や艦における主か客人かもここに付随してくるのだから結構複雑であったりするが、艦魂社会ではその場を供にした事は区分を設ける物ではない。ただそんな中でも軍医中将の朝日に比し、兵科将校の少将の階級を頂いている者が師匠の背後には居たのだった。

二度の失態でもう来訪直後の笑顔もへったくれも無い明石。大慌てでその身体を朝日の前から少し横にずらし、腰に手を当てて失笑の声を向けてくる伊勢へと向けて再び僅かに腰を折って頭を下げる。

『うげ・・・！、す、すいません、伊勢さん・・・！』

『わはは。敬礼の順序には気をつけるんだよ、明石。朝日さんの顔に泥を塗る事になるぞ。』

『うう……、はい……。』

気さくに笑ってくれる伊勢は苦言も軽めに発したつもりで、それを横から見守る注意を促してくれた師匠もまた優しげに微笑んでいるが、明石としたら完全な大失敗。眉を大きくハの字に傾けて肩をすくめ、自身の尻の青さを恥じる。

そんな愛弟子の落ち込む表情がまた、朝日の笑い声を生む胸の内を一層明るくさせた。だがもちろん、彼女は教え子の無様な姿を嘲笑う気は微塵も無く、唇を噛んで恥を忍ぶ明石の肩に上から覆い被さるようにして腕を回して語りかける。

『大丈夫よ、明石。明石の気持ちはちゃんと私にも伝わっているわよ。逆にこういう決まりをいくら守っても気持ちを込められない礼式は、相手の受け取る様もまるで正反対なのよ。その意味では明石は次から気をつければ良いだけじゃない。それに私達の礼式は、階級という過程を考えてその結果を元に判断すればそんなに難しくないわ。現に今、明石はちゃんと自分で判断して伊勢に敬礼してみせたでしょう？ もう少しの努力だけだから、元気を出しなさい。』

未熟さを指摘されるが久々なら、その思いやりのあって過程と結果を大事とする一貫した論し方も久々。柔らかに抱きつく形で耳元で放たれる静かな声も、高い鼻と奥まった目が特徴的な西洋人の顔立ちも、その横をカーブを描いて流れ落ちる琥珀色の髪とほのかに香る良い匂いも、しばらく振りに五感で感じた明石は落ち込みかけた心からビルジの如くそれを吐き出してしまう。彼女の返す言葉にも、既に恥じらい等という感情は少しも滲んでいなかった。

『は、はあい！』

『ふふふ。ただいま、明石。』

教え子の心遣いも嬉しい朝日が声を放つと、まるで魔法が掛かったように明石の顔には笑みが戻る。そのまま朝日は片腕を巻きつける明石を部屋の中央にあるソファへと誘い、後ろ手にもう片方の手をかざして伊勢や浅間も招き入れて行く。

『さあ、ティーを淹れるわ。オレンジ・ペコーの上級品を、出雲からたくさん貰ってきたのよ。』

その言葉が響くや伊勢も浅間も手を叩いて喜び、明石もまたはいやいで朝日による紅茶の準備を手伝い始める。その最中も浅間が聞きたがる出雲の話を朝日は声に変え、愛嬌と冗談が溢れた出雲のお話を皆で笑いながら紅茶への一時を楽しんだ。

語り部となる朝日は手を動かしながらも常に笑みを浮かべ、口元にいつも以上にしわが目立つ事も顧みずに惜しげも無く3人が笑うような話を紡ぎ出すが、彼女の優しい笑顔は出雲のお話を持つ面白さから来る物でも、部屋に絶えず響く自分以外の者の笑い声に後押しされて生まれた物でもない。

人知れず悩み事や困り事を背負うのは朝日だって同じであるが、生来の性格と何でも出来てしまうその有能さが仇となって、朝日のそんな苦しい胸の内を推し量ってくれる人物は昔から皆無だった。大和艦を眺めながら抱いた自己嫌悪もそこに理由があり、彼女は出雲という親友が気転を利かせてくれる事で自分のこなす物事が上手く行っているのがちょっと辛かった。言うなれば自己完結という物だが、どうにも昔から彼女は自分の胸の内に抱いた悩み等をそのまま相手に伝えるのを悪い事だと無意識に捉えてしまう癖があり、結果として一人で抱え込んでしまう所があった。その際に彼女の本心を無言で読み取って手を回してくれる友人らも、この世に生まれて40余年経つ今では、白露戦役の頃のように振り向けばすぐそこにい

るという状態で存在してはいない。往年と変わらず大洋の荒波を舐先にて切り裂きながら励んでいるのは朝日を入れても既に片手で数えられる程にしか残っていないし、海軍艦艇として働く先も散り散りとなってしまっている。10年前には朝日がこの日本という国へとやって来た頃から師として仰いだ者も、最後のご奉公として標的艦任務に就いて永久の別れをする事になった。

そんな中でこれまで頑張ってきた朝日なのだが、積み重ねてきた多様な物事に他する知識と経験でケアしつつも、やはりその心の奥底では色んな懸案に対して頭を抱えるもう一人の彼女が居る。その人柄と博識さから仲間達は一様に朝日の事を偉大だと捉えるのに対して、真実の朝日はそれを読み取ってくれる人物が常に傍らに居なければ晴れやかな気持ちを維持できない程に弱い人物なのであった。

だが親友とも別れてまた再び本当の自分を察する事が出来る者がいないであろう内地へと帰ってきた今、朝日の前に現れたのは、そんな自分に企図せずとも笑みを与えてくれる人物の二代目。首の後ろで一本に纏めた黒くクセの無い髪に綺麗な顔立ち、背丈、物言い、失敗の事例、最初の一口は口を大きくすぼめてありつこうとするティーの飲み方と、まるで時代を超えて自分を救いに戻ってきてくれたのかと思える程に先代に似た明石である。今や師弟の関係が逆転し、当時は1歳程の年齢さしかなかったのに今では片や小じわも混じる40代の顔立ちで、片や若さ溢れる20代になるかならないかの顔立ちを持つというその関係は往時とは違うが、朝日はこの時、まだまだ未熟なこの明石に師として接する事が出来る今という瞬間を心の底から有難いと思った。

あと数日もすれば15日となり、その日は来年度を見据えて帝国海軍艦艇の殆どを対象とした大規模な艦隊編成が実施される。既に連合艦隊司令長官直属である付属艦艇として名を連ねる事も決定している朝日であるが、それ以降の彼女には出雲の様な本当の自分を察してくれる者がいない中での海軍生活が待っているであろう事は想像に難く無い。だがそんな中でも、教え子とは言え自分を救って

くれる者がちゃんと存在する事を、朝日は確認できたのである。
すると琥珀色の前髪をかき上げた向こうにある青い瞳の中に灯るのは、これ以上無い安堵の念。決して若くも無い今の彼女であっても遠慮せずもたれかかる事のできる、大事な大事な心の揺り籠であった。

『明石。ティーの礼式は客人が先よ。まずは伊勢と浅間の分のカップを用意してあげなさい。』

『おっと……。はい。』

優しげに指示を与える朝日の前、師匠のそんな心の巡りを知って知らずか、明石は銀色のトレイに乗せたカップにナイフ、そして砂糖の入った小さなガラス瓶を朝日の下から少しはなれたテーブルへと運んでいく。大切に扱おうと一生懸命な明石はその表情も足の運びも慎重を極め、ちょっと緩く唇を噛んでテーブルを前にしたソファに座る浅間や伊勢の前にカップを置く。するとその場では何やら伊勢の言葉が放たれるのと同時に、明石が赤面して後頭部を掻きながらちよつと歪んだ笑みを浮べている光景が作られる。

『テーブルマナーは覚えたのかい、明石？ また魚や肉用のナイフ持って来てないだろうねえ、はっはっは。』

『うっ……。あはは……。だ、大丈夫、のハズですう……。』

『まあ、なあに？ 魚用のフォークでサイドメニューを食べようとしたの？』

どうやらテーブルマナーに関わる所でも失敗しているらしい教える子は、朝日の碧眼の中でペコペコと頭を下げながら苦しい応答を行っていた。

すると再び朝日は可笑しくて笑い出す。なぜならこの明石に瓜二つの外見を持つ師匠が、かつてテーブルマナーにおいて悪戦苦闘を

繰り広げていた事を記憶に留めていたからだった。

どこまで似るといふのか。

そう脳裏で呟いた言葉は苦言にも近い代物であったが朝日は釣り上がった口元を一切戻す事無く、頃合を迎えたティーポットを抱えて教え子と仲間達の待つテーブルへと歩みを進めて行った。

その後は観艦式での教え子の大失敗を大いに笑いの種としながら、4人は心行くまでティータイムを楽しむ。明石は自分の未熟っぷりに恥を忍ぶばかりで何度も眉をハの字の形にして気を落とし掛けるが、その度に朝日は隣に座る彼女の肩をそっと抱き寄せて挽回の道を授け、終始教え子が笑い声を静める事の無いように尽力する。

朝日のその胸の内には、明石に対する底抜けの優しさ、果ての無い感謝の気持ちが入められているのだった。

第八八話 「かぶき者の血統／前編」

昭和15年11月12日、朝。

明石^{あかし}と朝日^{あさひ}は呉軍港の一角にて繋留される駆逐艦群の内の一隻へと足を運ぶ。小さな艦体を持つ故に駆逐艦は同じ駆逐隊や同型艦らの間で隣り合う形で連繋され、それぞれの甲板の上を渡した1メートル程の木の板を渡り廊下として両隣に位置する艦へと行き来できるようになっている。故に朝日艦にて会合した師弟はそこから一番近い駆逐艦の甲板へとまずは転移し、その後は各々の艦が両舷に持つ狭い甲板と渡し板を伝って目的の艦へと歩を進めていった。

駆逐艦は同型艦が多い事からどの艦が何という名前なのかを傍から見分けるのは大変で、明石は朝日の後ろをついて行きながらも隣の艦へと渡された板の上から乾舷に大きく書かれたカタカナを確認していく。やがてその内に明石はお目当ての艦名が書かれた駆逐艦へと辿り着き、すぐ前を進む師匠に連絡。二人はそのまま歩みを止めた艦の艦内へと降りていった。

人間達には決して聞えぬ靴音が薄れていく中、隣り合う駆逐艦の隙間にある狭い波間、陽の光すらも僅かしが入っていないその波間にある乾舷には、白い塗料で大きくこう書かれていた。

「カスミ」

そのまま明石と朝日は艦内の艦首付近にある倉庫へと足を運び、その部屋を寢床とするこの艦の主、霞^{かすみ}へと挨拶する。

先日、柔道大会で重度の捻挫を負ってしまった彼女は痛みもだいぶ引いたのか来訪した上官2名に笑みを向けてくるが、甚だ失礼とは彼女自身承知しつつも立ち上がったの直立不動の姿勢で応じる事はまだ出来ない。包帯が念入りに巻きつけられた霞の右足は艦内にて余っていた木製の椅子を利用して宙に吊り下げられており、枕元には厠や食事の調達に向かう際の松葉杖が立てかけられている。どちらとも艦魂の世界では滅多にお目にかかれない物であったが、軍医である明石の分身にある木具工場にて霞の上司の神通じんつうと明石が一生懸命作ってくれた物であった。

その事から霞は、友人であり適切な治療をしてくれる上官でもある明石の顔を見るや、陽に焼けたような麻色の顔に白い歯を輝かせて元気の良い挨拶を試みる。ただその上で今日はつい先日帰ってきたばかりの明石の師匠、朝日までも駆けつけてくれたのだから霞としては嬉しさ半分、寝ているのが少し申し訳ない気持ち半分であった。

対して朝日はこの霞の処置が非常に的を得た正確な代物である事を一目で見抜き、明石を褒めながら霞の右足を確認すべく自身の手で包帯を巻き取っていく。

『安静にするのは勿論だけど、冷却と圧迫、それと固定の上での挙上が上手く出来たようね。怪我の処置は負傷後の応急処置における成否がその後の治療にも響いてくる物よ。その意味ではとても的確で効果的な対応ができてるわ。よくやったわ、明石。』

『は、はい!』

尊敬する師匠に霞という第三者が見ている前で褒められた事は、明石にとっては大きい物だ。つい昨日の室内礼での柔らかなお叱りの件でも明白となった明石の未熟さはこれまでの艦隊訓練の中でも常に思い知る機会が多くあった物で、霞は明石の友人の一人としてそれを間近で目にしてきた経緯もある。おまけにその思い知らされ

る機会というのは明石の親友にして霞の上司である神通がいつも一緒にその場におり、この人の苛烈な性格を考えれば尻を叩かれ、げんこつを頂戴して味わった思い出である事は想像に難くない。観艦式前の晩餐会の時などは皆が見ている前で「田舎娘」と大笑いされる程の始末である。

その度に自身の至らぬ点を克服しようと時に涙しながら頑張ってきた明石であるから、朝日の声を受けてやっとその苦勞が報われるという物。そもその頑張る際に必死に胸の中で叫んだ『艦魂たる者は一流の淑女でなければならぬ。』という言葉を与えたのが、舷窓から帯となって降り注ぐ陽の光によって今日もまた琥珀色の髪を美しく輝かせている師匠、朝日なのである。緩く握った拳を肩の高さで掲げ、噛み締めるように笑みに力を込める明石の仕草も無理の無い事であった。

その後ほどなくして、包帯の取れた霞の右足に青く透き通った瞳を向ける朝日。明石も師匠の背後から覗き込む様にして視線を向け、師匠と供に霞の右足の状態を診断する。さしにも患部を動かすともだ残る痛みがその度合いを一举に発散し、霞はちよつとだけ奥歯を噛んで屈託の無い元気なその微笑を歪める。

『あ、ごめんなさいね。』

『んぎっ……。だ、大丈夫です……。』

患者の表情も大事な診断材料としている朝日は霞に流し目で詫びの言葉を放つが、霞としては初めて間近に接した朝日という艦魂としての大先輩の姿に気圧されてそれ以上の言葉が出てこない。それは決して朝日が怖そうだとかそういう類の物では無く、唇の動きやちよつとした髪の流れ具合がこれまでに見た事も無いくらいに綺麗な物であったからで、美しさという言葉が体言された朝日の外見に良い意味での威圧を感じてしまったのである。なまじ見慣れない西

洋人の顔立ちを持つ朝日の姿は、同じ第一種軍装を身に付けている弟子の明石、そして常に霞が教えを請いで来た神通とは並列に置いて比べるのもおこがましい程に霞には思えた。

すると突如としてそんな朝日は手でそっと掲げた右足首より霞の顔へと両目を向け、片側にホクロを控える口元を柔らかく緩めながら声を掛けてくる。

『ふふふ。これはお友達なの？』

涼やかながらも優しさという温もりで満ちる声でそう言った朝日は、声が続いて先程霞の右足首から巻き取ったばかりの包帯をもう片方で持って霞へと示す。清潔感の溢れる真っ白な包帯は随分と所々に黒ずんだシミのような物があり、一筋の帯状になった今では一見すると触るのも億劫になってしまいそうな代物だったが、そのシミが残った包帯こそ朝日が尋ねた事を示している。

『は、はい、軍医中將。そ、その・・・、お、同じ戦隊の仲間が、か、書いて行きました・・・。』

『まあ、そうなの。良い仲間を持てているのね。大事にするのよ、霞。』

『は・・・、はいっ！』

以前よりも毒々しい紫色となった肌が面積を少なくした霞の右足首。その上に巻かれていた包帯の状態は包帯の至る所に縦横無尽に流れるシミの流れを一つの形として維持しており、巻き取る前に明石も朝日もその事には気付いていた。部屋に入った直後、霞の右足首を包む分厚く巻かれた包帯の上には、「全快祈願」とか「二水戦魂」等と墨汁による走り書きがなされていたのである。ただの落書きにしている霞の心根を鼓舞するかのような言葉が並ぶその様は、霞の仲間である二水戦に属する少女達が彼女の怪我の完治を祈って書

いたであろう事は疑う余地も無く、朝日と明石は口元と同様に目も細くしてその包帯をまじまじと眺める。

霞はちよつと恥ずかしそうに照れ笑いを浮べるのみであつたが、朝日が笑みを崩さぬまままで大事そうに巻き取った包帯を畳んでいくのを認めてようやく持ち前の元氣を表情へと取り戻していく。何より怪我をも押して戦った先日の柔道大会で霞が懸けた物は、ここ最近は氣さくに訪ねて来て筆を振り回していた仲間達と上司への想い。そしてそんな仲間達を、朝日という艦齡も階級も人柄も自分とは天と地ほども上である大先輩によつて褒められた事は素直に嬉しかつた。

するとその刹那、朝日と明石が背を向けていた霞の部屋の扉からは、外側より叩かれて発せられる少し重い感じの金属音が二度響いてくる。『あ、はゝい！』と部屋の主である霞が横になったままで応じるが、彼女の応答の声が鳴り止む前にその扉は開かれる。

『おお・・・、これは軍医中將。』

その場に現れたのは霞の上司である神通で、霞と同じ駆逐隊の構成員でもある霞あられ、そして霞とは未だに少しばかり仲の悪い雪風ゆきかぜを背後に控えていた。

同じ呉在籍の艦艇でもある神通と朝日は明石が生まれる前から既にお互いの顔は知っている仲であり、明石はその事を知らないが神通はその師匠である金剛の一件でも幾分の関わりを持った間柄だ。もつとも友人などという親しみに溢れた仲ではないのは当然で、大概の艦魂達と同じ様にして神通はすぐさま軍帽を取って朝日の前で浅くお辞儀する。

『敬礼。そら、お前らもだ。』

『あうっ・・・！ け、敬礼っ。』

『あっ、ど、どもッス・・・。』

いつもはふてぶてしい態度をとる暴れん坊の彼女も、この朝日の前ではその姿勢を正さねばならない。音も無く頭を下げるや神通は背後に立つ二人の部下にも敬礼を促し、霰も扉の向こうの姉の部屋にやたらと高貴な雰囲気放つ女性を目に移すや、隣に立っていた雪風と供に慌ててお辞儀をする。

『まあ、神通。久しぶりね。』

『はっ。部下の治療に当たって頂き、有難う御座います。』

軽い挨拶の言葉と手の動きで応じる朝日と、頭を上げた後にすぐさま部下の治療に対する感謝を示して見せた神通。それは生きてきた時間の長い者を目上と位置づけ、礼の限りを尽くして接するとう当たり前の光景なのかもしれないが、この二人をどちらも親しい知人とする明石はこの時に初めて朝日と神通が相對する光景を目に映した。朝日はそのたおやか見目麗しい人柄を全ての艦魂達から尊敬されるのは周知の事なのだが、その一方で神通は師匠譲りの荒々しい気性と罵声よりも速いげんこつが特徴的な人柄であるのも周知の事で、言わばそれぞれが海軍内で使われるドカタ型とお嬢さん型という人柄の典型でもある存在だ。西洋人と東洋人の顔立ちも去ることながら、穏やかな波間の流線を模した朝日の目と日本刀の刃先を模した神通の目の形もまたとても対称的で、明石にはお互いが相容れない境界線をお互いの間に引いた別な生き物のようにもふと思える。ただ何事も外見だけで判断できないのが命という存在の常で、それは鳥だろうが虫だろうが人間だろうが変わらない。艦魂も例外ではなく、僅かに身体を捻って向ける朝日の青い瞳には若干の緊張を表情に滲ませた神通の顔が映る。明石もまたその神通の腰の低さ

を見て取り、二人がいがみ合い等とは距離を置いた仲である事を悟った。

また当の神通にしても、この朝日には他の艦魂達と同様に大先輩としての強い尊敬の念を抱いている。明石も含めたこの場にいる者達にとつては既知の事だが、神通が師匠として教えを請いだ金剛こんごうの師に当たる艦魂は、この朝日の実の姉である敷島しきしまという名の大先輩なのであった。故に朝日にあってもドカタ型の典型である神通のよきな人物と場を同じくするのは相当の慣れがあり、むしろ彼女は神通を目にして久々に感じるその雰囲気を楽しむようにして明るい音色の声を放つ。

『あらあら。ふふふ、神通。なんだかしばらく見ない内に、随分と敷島姉さんに似てきたわねえ。』

『いや、恐れ多い事です。改装に入っていた事もあって敷島の大親方にはこの2年ほどお目にかかつてはいないのですが、観艦式の際に金剛の親方からは息災であると伺っております。』

霰と雪風が邪魔をせぬようにと静かな足取りで、朝日や明石がいる所とは横たわった霞の身体を挟んだ向こう側へとそそくさと移動するのを背に、しゃがみ込んでいる朝日の隣まで歩みを進めた神通は再び朝日に対して頭を下げ、僅かに上目遣いでの視線を向けながら声を返す。どうやら神通も自分と同じ様に師匠への畏敬を抱いているのだなと明石は察し、まさに万人に認められるお師匠様の凄さを改めて実感。珍しい取り合わせだとその会話を暖かく見守る。また、以前に明石は横須賀在泊の折に富士ふじという大先輩と会話した際に話題の敷島なる人物を写真越しにはあるが目にしており、その際に感じた友人の神通と敷島がやたらと似た雰囲気を持っている所を、同じく師匠もまた認めたようだと思って嬉しくなった。

一方、朝日は荒くれ者ながらも真心と誠意をふんだんにその胸に

秘めて接する神通の声を楽しむように何度か頷き、今しがた自らの口から漏らした姉の事を神通に問う。ただでさえ所属鎮守府が違姉、敷島は今ももう佐世保の棧橋で海兵団練習艦として余生を過ごしており、支那戦線派遣の任にも当たっていた朝日はこの神通以上に長く顔を合わせていない。故に彼女は食い入るようにして、神通の言葉に琥珀色の髪を掻き分けてあらわにしたその耳を傾ける。

『敷島の大親方、最近は少しお酒を召される量が増えたと聞いております。金剛の親方が観艦式への参加の為に佐世保を出発する際も、軍医中將が佐世保においてならん物かと愚痴っておったとの事です。あと、この頃は随分涙もろくなった、とも……』

『そう……、あの敷島姉さんがねえ……』

この世でただ一人の姉の近況を耳に入れ、朝日はどこか寂しさを漂わせて呟く。

話題に挙げた敷島と呼ばれる艦魂の顔を知るのは今この部屋の中では神通と朝日のみであるが、連合艦隊への編入と供にたくさん仲間達と交流してきた過程で明石や霞達もその名前だけは聞いた事がある。

帝国海軍艦艇でもわずか2隻しかない分身固有の行進曲を持ち、朝日と供に日露戦役を戦った艦魂達の中でも出雲と並んで屈指の戦上手でもあった敷島。日本海海戦の時には比較的大人しくて人望の厚い朝日や富士に指示を与え、まだまだ日本語の会話にすらも不自由があった日進や春日をなんとか励まし、隊列最先頭の末妹であり艦隊旗艦でもあった三笠に対しては全艦隊規模、全戦闘海域規模での視野を常に持たせようと企図して戦隊旗艦を頂く日進を補佐していた、という彼女を、朝日は今でもその瞼の裏にはっきりと蘇らせる事が出来る。対馬沖での戦闘では二人の妹と供に腔発事故にて主

砲1門を根元からもぎ取られながらも、流れ出る血に尻餅をつきそうになる朝日や富士を鼓舞し、ややもすれば一人真正面ばかりを向いてしまう三笠をよく抑え、林立する水柱と轟音の中で一戦隊のまとまりを維持してみせたのがこの敷島だった。

『全員、隊列を崩すな！！　日進^{にっしん}、二戦隊との策応距離に注意しつつ戦隊針路を維持！！　人間達の企図してる通り、私達一戦隊を割り込ませて浅間^{あさま}の退避を援護！！　三笠は後方の二戦隊旗艦の磐手^{いわて}と艦隊旗艦の出雲の動きを見逃すな！！　針路は私の航跡を辿れば良い！　追突しても構わん！！　急げー！！　急がなかああ！！！！』

猛々しいその声と朝日とは姉妹という接点を築けないほどに鋭い眼光を持った彼女。戦の際には鬼神の権化とも取れる程に眉も目も髪も逆立ち、その言動や表情もまた半狂乱にも等しいくらいで、飛び散って顔に掛かった乗組員の血肉を怒りの表情を変えずに口から一息に吐き捨てた時にはさしもの朝日も思わず卒倒しそうになる程だった。当時の帝国海軍艦魂社会でも特に知られた寡黙ながらも短気で怖い人柄を持つ艦魂で、金剛を介して今や神通などに引き継がれたドカタ型の性格を持つ海軍艦艇の命達の始祖とも位置づけられる存在でもある。教え子達とは違って普段の言葉遣いには静けさと一定の品を滲ませる人物でもあったが、そんな姉が今ではもう容易に後輩の前で涙を見せるようになったのかと思う朝日の心には、寂寥感にも似た冷たい風がそよそよと吹き込んでくる。『指揮官たる者はー。』等と始める帝王学にも似た長女としての教育の言葉、容赦なくげんこつを叩き落して叱り飛ばす姿勢、それらを他の妹達や仲間達と一緒にあって散々に教え込まれた朝日の思い出には、間違っても他人の前で泣くような姉の姿は無かった筈だった。

そんな事から姉もまた自分と同じ様に老いという厄介な物に蝕ま

れてきたのだなと朝日は感じつつ、しばらくぶりの姉の様子を耳にして小さく笑う。確かに怖い性格と激情な所にはほとほと手を焼き、戦の際の猛り狂った姿には気が動転しそうになった事だつてあるが、それでも朝日はこの時、最愛の姉という敷島への認識を確かな物とした。

『ふふ・・・。今度の艦隊編成で私は連合艦隊付属になるから、工廠の支援で佐世保にもきつと行くと思うわ。だから艦隊訓練で寄る事があつたら伝えてあげて、神通。一緒にティーを飲むのを楽しみにしてると。』

他人がなんと言おうとも、朝日はすぐ下の妹として敷島なりの優しさを知っている。彼女は決して「戦闘狂」の一言で終わるような人柄ではなく、自ら進んで汚れ役や嫌われ役を演じてみせて仲間達が懸案を解決して喜ぶ様を物陰から独り眺めて僅かに口元を緩ませているという、いわば黒子役のような艦魂^{ひつこ}だった。同じ戦隊を組む思慮深い富士や、深い思いやりを持つ朝日も内心や理想を思い描く時には自分だつて汚れ役で良いくらいに思う事はあつたが、良くも悪くも二人は潔癖に過ぎて実際に行動として移す際には迷いや尻込みをしてしまう。そして唯一、敷島だけがそこで四の五の言わずに行動を起せる強く堅牢な精神力を持っていたのであり、妹達や仲間達に一切の汚濁を与えないと企図した姉の根幹を今更ながらに朝日は強く感じた。

その内に今にも零れ落ちそうな目尻に光る雫を手の中で拭いつつ、朝日はただ静かに笑って記憶の向こうにある姉の背を追い駆ける。そのちよつと寂しそうな微笑に神通も気付き、眼前の先輩の笑みが持つ明るさを更に一層増させるべく、さらに朝日を慕う者の名を声に出してみた。

『はっ。それと金剛の親方から、”叔母御^{おふい}によろしく”との言伝を

預かっております。』

『ふふ、ふふふ。金剛はまだそんなのね。まったくもう、誰が叔母御よ。』

一応は人間の女性を心身供に模しているのが艦魂である。尊敬の念を込めているのは解かるにしても金剛による朝日への呼び方においては、最初の二文字の響きが朝日でなくても鼻に掛かってしまうという物。当の朝日自身もその事からはっきりと拒否の姿勢をかつて示してみせたのだが、神通の師匠はそんな朝日に対して呼び名を変える事は無かった。もっとも金剛にしても決して朝日への嫌味を抱いての事ではなく、初めて自分をコテンパンにしてみせた偉大な先輩への人並み外れた尊崇を前面に出しているに過ぎない。その深い尊崇の度合いを教え子として神通もよく知っていた手前、彼女は朝日が不満げな声を漏らすもの承知で敢えて師匠の言葉をそのまま伝えたのだった。

そのおかげか朝日は唇の隙間から寂しさと入れ替わりに懐かしさが滲んだ笑い声が漏れるのを止める事ができなくなり、小刻みに上下する肩の動きが傍から見ている明石や神通に止め処なく湧く可笑しさを示す。先日 of 浅間やそれ以前の出雲に続き、記憶を辿る道端にある楽しさは落ち着きを纏った朝日の胸の内をいとも簡単に動かし、中々鳴り止む事の無いその笑い声に明石と神通もつられて静かに笑みを合わせた。

その後、朝日は神通より聞かされた懐かしい顔ぶれを懐かしみつつ霞への診断を続行。部下の足首に自らの手で包帯を巻きつけていく朝日に神通は何度もお礼を言い、横たわった霞の身体を挟んで向こう側にいる雪風と霰もまた同じ様にしてヘコヘコと頭を下げる。部下を持つ上官の姿とはこういう物なのかと明石は感心し、つい先

日の柔道の大会で神通が口にした『部下を持つ者としては専門家のつもり。』という言葉を納得した。

だがこの時、明石は神通とその部下達を順番に眺めていた事で、親友と供に部屋を訪ねてきた雪風と霰が霞の傍にて腰を下ろしながらもその足元に何やら黒光りする箱状の物体を目にする。よく目を凝らして見てみると雪風の胡坐の前に置かれたそれは墨汁を湛えた硯で、その隣にて崩した正座している霰の前には細い筆が一本あった。どちらも艦魂である彼女達の生活に大きく関わりのあるような代物ではないが、明石はすぐになぜ二人が硯と筆を用意しているのかを察してみせる。もちろんそれは、朝日がついさっき霞の足首から巻き取った包帯と同じ理屈、すなわち雪風と霰は今まさに目の前で朝日が巻いている新しい包帯の上に早速霞への応援の言葉を綴ってやろうとしているのだった。

『おい、お前等。軍医中將の見ている前ではやめんか、馬鹿者が。』

明石とちょうど同じタイミングでそれに気付いた神通は、すぐさまいつもの研ぎ澄ました刃物を思わせるおっかない声で雪風と霰に注意を促す。師匠以上に目上の立場である朝日であるから、せっかくわざわざ真新しい包帯を巻いてもらった直後に落書きにも等しい行為を部下が行うのは到底神通には見過ごす事は出来なかった。ただいつもの如く雷鳴を思わせるお叱りとげんこつがすぐさま神通の身体より飛ばないのは、そんな神通も雪風と霰が決して大先輩の前で粗相を犯そうと試みた訳ではない事を知っているからで、朝日が霞への処置を終えてこ部屋を後にしたなら黙って二人の包帯の上への書道を見ているつもりだった。

一方、朝日としても自身の手で巻いた包帯が目の前で墨汁まみれになってしまふのに対し、別段嫌悪感のような物を抱いたりはない。もう小じわも隠せない相応の老いが明確な顔の自分と違い、神通によって静かにお叱りを受けるや気まずそうな表情で押し黙る

雪風と霰は、背も小さく顔に比してその目が大きめと若々しさが目立つ顔立ち。その人柄も全てにおいてまだまだ理性で感情を抑えきれぬ面が少ないようで、早く包帯が巻き終わらない物かと二人がウズウズしているのが朝日にはすぐ解かった。

『良いのよ、神通。みんな待っててね。すぐに包帯は巻き終わるから。』

そんな言葉を朝日が放って神通が申し訳なさそうに頭を下げる横で、雪風と霰は声を押し殺しながらも白い歯を輝かせて笑みを合わせている。少し前まではこの二人の片方である雪風がこうして霞の元を訪れて笑みを見せるなどとは極めて珍しい事ではあったが、先日柔道の大会にて犬猿の仲であるこの二人はそれとなくお互いの存在が良くも悪くも自分の意識の中で大きい事に気付いたらしい。まだまだ笑い合ってお互いの健闘を称え合うというまでには行かないものの、包帯を巻き終えた朝日が笑顔で『さあ、友達に応援の言葉を書いてあげなさい。』と言って墨汁の流れが幾重にも走った包帯を持った手をかざしてみせると、雪風と霰はそら来たと言わんばかりの勢いで硯に筆を運ぶ。

『ウチが最初に書くわあ。雪風の書く字は大き過ぎて、いつつもウチが字を書く場所が無くなるんやもん。』

『うるせーなあ。わーったよ、ちっちゃく書きゃ良いんだろ。』

霰からの苦言もなんのそのと悪態をつきながら声を返すと、雪風は緩く噛んだ唇から舌を覗かせて早速霞の右足首に巻かれた真新しい包帯へと筆を走らせた。現在、この部屋の中にいる者達の中では最年少である雪風なのだが、鼻っ柱の強い彼女は先輩にあたる霰の文句や上司から放たれるギラリと鋭い視線にちよっと頬を膨らませながらも動じる事無く、霞の右足首に顔を思いっきり近づけてなに

やら字を書いていく。

取り敢えずは二人がようやく楽しみにしていた光景であるから、朝日は笑みを伴ってそれを黙って見守る。明石も師匠が行った処置をその目で見れた事で色々と学べた事が嬉しく、上機嫌で朝日の隣にしゃがみ込んで医薬品を薬箱へと戻し始めた。

するとその刹那、部屋の中には元気の良い猿と犬の鳴き声が木霊し始める。

『うあ！ くそ！ なに書いてんだよ、雪風！』

『ひやはは！ ざまーみやがれ、猿め！』

床に仰向けで寝たままの霞が声を荒げて腕を振り回す横で、雪風は未だ右足の自由が利かずに起き上がるのもままならない霞の腕を掻い潜りながら嘲笑の音色も混じった高笑いを放つ。どうにも簡単に仲良しになれないのがこの二人の関係であり、神通や朝日、明石の3人はきつと雪風が今しがた霞の右足首を包む包帯の上に書いた文字にその原因があるのだろうと即座に察して3人一斉に霞の右足首を覗き込む。するとそこにはミミズがヘソを曲げたような字でこう書かれていた。

「木から落ちた猿」

『ちくしょー！ 霞、こんなの消しちゃってよ！』

『霞え、消すんじゃねーぞ！ 治るまでこのままにしてやらあ！』

ひやははは！』

『うんもー、こないに大きゅう書きはってー。ウチが書く所、やっぱりあらへんようになつとるやないかあ。』

まだ起き上がれない霞は荒げた声の怒りの度合いはいつも通りだが今日はその勢いをそのままに天敵へと拳を叩き込む事はできず、

それを知る雪風も霞が伸ばしてくる腕が届かない所まで退いてこれでもかと大笑いしてやる。霞はあだ名を書かれた事が余程悔しいらしく、雪風に次いで筆を右足首の包帯の上に走らせている霞へと先に書かれている文字の塗りつぶしを命令するが一足遅かった。霞が叫ぶ前に霞は一言「ガンバレ」と小さく書いた後で、すぐさまその手からは雪風によって筆が抜き取られてしまう。おかげで雪風は勝ち誇った高笑いとは嘲る言葉を思う存分に吐き、霞は激怒して腕を振り回し続ける。

ただこの3人の若さの成せる業とはいえ、一気に騒がしくなってしまった部屋の空気を楽しむのは朝日と明石だけであり、3人の直属の上司である神通は朝日という大先輩の前で自分達の失態を見せぬ事に懸命になる。覇気の籠った彼女の怒鳴り声がそれを物語っていた。

『こら、静かにせんか、馬鹿者が！ 軍医中将の前だぞ！』

度の過ぎた賑わいは時と場所を選ばなければならない。艦魂としてそれは同じであり、ましてこの朝日は現代の帝国海軍の艦魂社会では現役で海を駆けている重鎮でもある。そんなお偉方の前での無作法は神通の最も嫌う所で、朝日や明石が宥める前に一連の喧騒の主犯格で高々と笑い声を上げていた雪風の頭には神通によるげんこつが急降下。『ぎゃ！』と持ち前の虫の悲鳴の様な声を放って雪風はようやく大人しくなり、良い気味だとにやける霞の前でお説教を食らう事になってしまった。

『戦隊部外者の前では気をつけろと何度も言ってるだろうが！』

『ぐひ・・・、すいやせえん・・・。』

『それを軍医中将の前で騒ぎおって！ そんなにみんなのいる二水戦の名を辱めたいのか！ 馬鹿者が！』

『ぎゃっ・・・！』

ぽこぽことげんこつを落とされる雪風はすっかり涙目で、ついさっきまでの鼻っ柱の強さからくる霞へ向けていた嘲笑はその表情のどこにも無い。ただでさえ癩癩持ちの上司の前での失態でもあるのだから具合が悪く、神通もまた朝日の視線がその背に向けられている事を完全に忘れて部下へのカミナリ落としをしばらく続けた。

その一方、明石にとってそれはいつもの光景と言えそうであったが、おっとりとして暴力的な雰囲気や微塵も持たない師匠が見ている前での光景としては少し戸惑いもあるのが正直な所という物だ。ましてその立場も仲間に対する医務の道を極めた軍医中將であるから、このまま神通がお叱りを続けると、今度は親友である神通に朝日によるお叱りが飛んでしまうのではないかと一抹の憂いを抱く。しかしその最中、眼前にて繰り広げられるとても厳しい教育的指導を碧眼に移していた朝日は、明石に覗き込まれているその横顔の口元を緩ませて静かに笑い声を上げる。ちょっと明石としては意外な事であったが、笑い声に続いて僅かに顔を彼女のいる方へと向けながら放った師匠の言葉に、明石は師匠がそんなおっかない教育にすらも懐かしさを滲ませているのだと理解する事が出来た。

『ふふふふ。本当に神通は敷島姉さんに似てきたわねえ。明石も金剛とは観艦式の時に会ったのよね？ 金剛もあういう性格だから、あの子が来た頃はもう毎日あややって敷島姉さんに怒られていたものよ。不思議な物ねえ、明石といい、神通といい・・・。』

『えへへ・・・。』

朝日が最後に言おうとした事を察し、明石は先代に良く似た容姿と人柄を持つ自分もまた尊敬する師匠の笑みへと貢献できた 것처럼照れ笑いを浮べる。もちろん笑いにされたというような気は微塵も湧かず、明石には母の様に慕う朝日がそれは嬉しそうに笑って

くれる事がそれだけ嬉しい事だった。朝日もまた教え子の明石の笑みを見るのが好きなのか、明石の笑い声が響いてくると顔を明石に向けてニコニコと慈愛に満ちた笑顔を見せてやった。

高い鼻と青く透き通った青い瞳、そしてまるでいつも口にいれる紅茶の流れと見まごう程の独特の琥珀色の輝きを持つカールのかかった髪。部屋に一つしかない舷窓から漏れてくる陽の光が一層その美しさを際立たせ、神々しいまでの綺麗な姿を朝日の身体全体へと纏わせる。明石はその美しさが眩しく感じるほどで、笑みを掻き消さないながらも思わず逃げるようにして、手元にある医薬品を納めかけていた薬箱へと顔を向けてしまう。「一流の淑女^{レディ}」とはかくあるべしといったその様には、部屋の中では一番に朝日に慣れている筈の明石ですらも抗う事は出来なかった。

しかしこの時、教え子の俯く様子を見ていた朝日はそのまま明石が手を動かし始めた薬箱へと視線を落とし、そこに何か妙な部分を目にしてその表情から笑みの色合いを薄くする。ただそれは決して怒りとかそういうハッキリした気持ちが込められている物ではなく、一瞬見ただけでは真相を把握できない変化点がその薬箱にあった為にちよつと驚いたに過ぎない。

師弟として関係を結んでから相応の時間を過ごしている事もあり、すぐさま朝日はそんな驚きを自分へと与えた薬箱の事を教え子に問い始めた。

『明石。』

『はあい。なんですか？』

『その薬箱なんだけど、ほら、そこ。ヨードチンキの瓶のすぐ脇の所。ちよつと変色してるけど、どうかしたの？』

第八九話 「かぶき者の血統／後編」

不意な師匠の質問を受けた明石^{あかし}は、手元に下げていた視線を上げて朝日^{あさひ}の顔を目に映す。朝日はその青い瞳をつぶらにして明石の手元をじっと眺めており、師匠による突然の質問の対象が瞬時に把握できなかった明石も同様に自身の手がある薬箱の中を見てみた。

いつも見慣れた自身の薬箱はチーク材のような明るい黄色が目立つ木製の大きな箱で、開け閉めの為に取り手が蓋に付いた物。艦魂社会では軍医の立場を頂く明石としては商売道具でもあり、結構大事に使っている事から目立つような傷もなくニスの光沢も眩しい綺麗な箱だ。蓋の裏に付いたポケットには常に在中のお薬やガーゼといった医薬品の数を正確に記しているメモが挟まれ、長方形の箱の方に沿って平行、または垂直に並べられた薬の瓶の列に折り畳んだ包帯、医療用のハサミ等が整然と収納されて明石の綺麗好きな性分を代弁している。

そんな薬箱は明石にしたらいつも通りと言えはいつも通りなのだが、弦楽器の様な響きの良い声を静かに放ちながら師匠は人差指で薬箱の隅っこを示す。

『ここ変色してるけど、何か薬品を溢したの、明石？』

『あ、はい。これは――』

ともすれば薬箱の不衛生を指摘しようとしている様にも予想できるお師匠様の声であったが、明石は尋ねられた薬箱の変色に関しては大きく動揺する事もなく応じてみせる。もちろん規律正しい木目の流れで包まれる薬箱の中にあって白く変色した部分があるのは見えてくれが悪いものの、既に変色が薬箱の中に見た目以外の影響を残していない事を知っているのと同時に、変色したそもその理由を朝日が正確に見抜いている事から、明石はその卓見にただただ安堵

にも似た静かな感心を得て声を返す。同時に薬箱の中から明石の手によって引き抜かれた一つの瓶が、朝日に対する明石の返答の内容を物語っていた。

『霞かすみの治療をする時、消毒の為にこれを薄めて使ったんですけど、朝日さんが言う通りちよつと溢しちやったんです。えへへ・・・。』
『あら。それ、過酸化水素水じゃない。珍しい物を持ってるのね、明石。』

何やら小難しい薬品名を言い当てる朝日が声を放ち、明石はそれを受けて両端が吊り上がった唇の隙間より白い歯を覗かせる。明石の手に握られた無色透明の液体が入った瓶がそれらしいのだが、医薬品の知識にはさっぱりな霞と霰あられはその薬品と明石の薬箱の変色具合に何の関係があるのかトンと良く解からない。ようやくお叱りとお仕置きの時間を終えた神通じんつうと、涙目でタンコブが連なった頭を両手で抑えた雪風ゆきかぜもまた、自分達の知識が追いつかない医薬品のアレコレにて語り合う師弟の会話へと耳を傾ける。
するとちよつと明石が事の仔細を朝日へと説明し始めた。

『えへへ。これ、消毒で使ったんです。私の艦の軍医長さんが医療物品の点検やってる時、少しだけこの瓶に移してきたんですよ。それで霞の捻挫の処置にも使ったんですけど、薄める時にちよつと溢しちやって・・・。』

『ああ、腐食性がとても強いよね、それ。』
『はい。あ、でも、真水で薄めれば消毒の効果はやっぱり高いみたいです。』

会話の途中で徐に朝日は明石へと右手を伸ばし、明石はそれに気付くや過酸化水素水の入った瓶をそつと手渡す。木の表面を変色させる程の効果を持つ液体を溢してしまったという明石の不注意はそ

ここに危険と背中合わせな感じもあるが、師匠としてそれを耳にする朝日は青い瞳を細くして笑顔で頷くだけで、明石から大きめのコップと同じくらいの大きさのガラス瓶を手渡されるやまじまじとそれを眺める。瓶の側面に張られたラベルには鉛筆で書かれた教え子の文字で、「過酸化水素水 昭十五、一〇、七」と銘打たれている。後半の文字は調達した日時であるらしく、続けて正面より木霊してくる教え子の言葉も手伝って、天真爛漫で無邪気ながらも割と管理事には細かったりするという明石の性格が朝日にはよく理解できた。

『目分量も測って、だいたい濃度を3パーセントくらいにして使ってるんです。看護科で保管してる参考書を見て知りました。』

『まあ、よく勉強してるじゃない。感心ね。お勉強とティーの味にはより良い物を目指す食欲さが一番必要なのよ。』

『は、はい!』

今日はお師匠様から褒められっぱなしの明石は、何時にも増してその声に元気がある。コツコツ日々のお勉強に励み、未熟さを思い知りながらもいつもその後には挽回の努力を注いできた彼女の苦勞も、事ここに至ってやっと良い評価が貰えたのだから無理も無い。いつも喉を通す度に暖かな潤いを楽しめる朝日の紅茶に例えられたのもまた嬉しい事だった。その内にお師匠様は手にしている瓶に詰まった薬品が持つ背中合わせの危険を一応の注意という形で明石に促すが、軍医である自分をサボらぬようにと頑張ってきた明石にあってはその点においても抜かりはない。

『明石。確かに消毒には効くけど、この過酸化水素水はさつきも言った通り腐食性がとても強いわ。濃度が高い状態で使うと皮膚が炎症を起こすし、可燃性でもあるから取り扱いと保管には気をつけなくてはダメよ。』

『はい、あとは眼球にも厳禁ですよ。保管もなるべく風通しが良くて涼しい所でやって、分解が進んでるようなら甲板で蓋を開けてから海に投棄するようにしてます。』

軍医としてのお勉強を、例え短い時間であっても師匠より明石はみっちり与えられている。霞の右足首の捻挫に代表される処置の仕方はもちろんの事、そもそもの症状と千差万別である負傷の状態、基本的な人体の構造、各種医療器具の使い方、そして使用する薬品類にあってもそれは同じである。鉄や木といった堅牢な物質を組成とする分身を持つ艦魂であるから、人間の様に病気に掛かったりする事は無いのだが、いわゆる怪我に対してはその限りではない。切り傷を負えば血が流れるし、思いつき強い衝撃を受ければその部位の骨が折れるし、変な捻り方をすれば霞の様に捻挫という負傷を負う。そしてその際の治療にあっては、ただ包帯を巻けば治る等と生易しい物ではない。処置の仕方もある様にあり、使用する薬品類も塗って終わりというような簡単さは無く、多様な科学知識にしっかりと裏づけされた対処が必要なのである。二人が話題に上げている過酸化水素水にしても、その素性がどんな物でどんな物質であるのかを明石はちゃんと学んだ上で使っているのであり、ただ人間の真似をしている訳ではないのだ。

「良い悪いの評価は二の次、試行錯誤の過程と結果が大切」という朝日の教育姿勢の賜物であり、過酸化水素水が高い温度で保管されると分解が進み、さらにその結果として酸素が出るという特性への対処は明石の述べた普段の取り扱いで見事に解決されていた。故にその結果が良く教え子に反映されている事を確認できた朝日の顔もまた、これ以上無いくらいの満面の笑みとなる。艦魂としてはもう既に老練な年代に入る朝日であるから教えを諭した後輩の成長は嬉しくてならず、思わず大きく頷いて声を放ってしまう。

『うん。・・・よし。』

『は、はあい!』

すっかり上機嫌になっているお師匠様の姿に明石は鼻が高くなってしまう。先程の神通の態度にもあるように、明石の師匠である朝日とは現代の艦魂達が一様にその姿勢を正す人物なのであり、直接の教えを請いだ者である明石や長門にしたら罰当たりなのかもしれないが陛下と同じ現人神にも等しい。そんな朝日に気心知れた神通を始めとする仲間達の前で褒められた事は、明石としては無情の喜びでもある。その為に明石の返事には信号汽笛をも思わせるトーンが宿り、神通とその部下達はいつも見慣れている明石なりの凄さを知って目を点にしてしまう。無論、神通達のその視線もまた明石の胸に高揚感を募らせていくのだった。

『あ、あの、明石さん。軍医中将。ちょっと良いスか?』

ふと声を放って朝日と明石の間にひょっこり顔を覗かせてきたのは、怖い怖い上司のげんこつによる鈍痛がまだ残るのか頭のとっぺんを軍帽の上から擦っている雪風だ。涙目だった顔からも湿っぽさは消え、その背後にて腕を組んでいる神通が声を掛けるもやんわりそれを制してくれた朝日に促される事によって雪風の大きな釣り目は輝きだす。

『おい、犬、失礼だろうが。滅多な事で話しかけるもんじゃない。』

『ふふふ。良いのよ、神通。雪風、なにかしら?』

『はい。あの、よく解かんないスけど、消毒に使うその葉って色が変わるんスか?』

ついさっきまで耳にしていた朝日と明石の会話から、その発起点でもある葉箱の変色の事を簡単に掻い摘んで雪風は尋ねてくる。ただ明石や朝日の様に過酸化水素水の持つ特性をしつかり理解できていない彼女の疑問はちよつとその内容に間違いがあり、まだまだ未熟な10代後半の少女の容姿を持ついかにも雪風らしい疑問である。部屋の中にいる霞や霰等と共に励んでいる私立神通学校でも中々学ぶ機会の無い化学薬品の知識であるから無理も無い事で、朝日と明石はその間違いを正すと同時に、懇切丁寧に朝日の手にあるガラス瓶の中に入った液体について教えてあげた。

『色が変わるんじゃないよ、雪風。敢えて言えば、脱色とか漂白って言う方が近いかな。』

『明石の言う通りよ、雪風。酸化還元反応っていう化学反応で、物質が持つ色合いの基である色素が分解されるの。染物の色が水洗いで落ちるのと感覚的には同じで、色が変わるんじゃなくて抜けると言った方が正しいわ。』

『はーん、そういう事ッスかあ。』

心優しい朝日と明石に声を返しつつ、雪風は胡坐を掻くや腕組みをして何度か深く頷いてみせる。本当にいま言われた事が理解できているのかと神通や霞、霰が疑いの眼差しを向ける中で、何やら片方の口元を吊り上げてどこか意地悪な少年の笑みにも似た表情を浮かべる。実の所、二水戦でも指折りの秀才である雪風は柔軟なその思考で朝日と明石が述べた過酸化水素水の特性を相応に把握できているのだが、生来がやんちゃで上司のお仕置き被弾率も戦隊トップの成績を納める彼女であるから、その背中に指を向けながら霞や霰がヒソヒソ声で怪しむのも無理のない事である。

すると雪風は天井の一角に瞳を向けながら何度目かの頷きを終え

た後、輝きが失せていないその大きな釣り目を再び眼前の朝日と明石に向けて声を放つ。

『てえ事はツスね。服の汚れ落としか、そういうのには向いてるって事なんスか？ その薬。』

10代後半の容姿を持ち、事実この今現在この部屋の中にいる者達の中では最年少に当たる雪風。胡坐を掻いて胸の前で腕を組むという年寄り臭い格好ながら、上半身を前へと倒して近づけてくる顔には、今か今かと答えを待つ彼女の猫どころか虎をも殺しかねない程の好奇心が良く表われていた。その上で尋ねてきた内容もまた朝日と明石が説明した事を良く理解されている事を示しており、現実には雪風が口にした汚れ落としに対して過酸化水素水は使用されているのだった。

『ええ、その通り。過酸化水素水の持つ酸化還元反応を利用した良い例はお洗濯よ。落ち難い汚れを落とす漂白剤として用いるの。雪風のような駆逐艦では配属されていないのだけれど、巡洋艦以上の軍艦や私や明石の様な特務艦、それと艦隊や戦隊の司令部が置かれている艦艇にはお洗濯を専門にする軍属の乗組員が配属されてて、たまにその人達が使っていたりしてるわ。』

『へえええ。アタイ、知らなかったツス。』

朝日は雪風の考察を正しいとしてくれるのに併せ、捕捉として実際に自分達の身近にて使用されている事とそれがどんな場所で使われているのかを解かりやすく説明してくれた。

お洗濯に使っていたのはそれを目の前で耳にしていた明石も知っていたが、彼女は今の今までお洗濯を担当する乗組員が自身の分身の中に常にいた事から、帝国海軍艦艇ならどの艦艇にも必ずいる存在なのだと思っていた。だがそれは特務艦と類別される分身を持つ

明石にあつては運が良かっただけに過ぎず、現実には朝日の言葉にあった様に艦艇としてそこその規模を持っている、いわゆる狭義の軍艦に当たる艦艇と特務艦、次いで艦隊や戦隊の司令部をその身に宿している艦艇に限定されている物なのである。

まず日本近海で活動しているそれらの艦艇では、基本的に理髪を担当する剃夫ていふと呼ばれる人員が艦固有の乗組員200名に1人の割合で配属され、さらにその中の剃夫1名に代わって洗濯に従事する洗濯夫が1名配属されるようになっている。また、先頃まで上海に派遣されていた朝日の分身等は外国航路にて従事中の艦艇として識別される事から剃夫の人員枠で代用する事無く無条件で1名の洗濯夫の配属が許可され、神通のように部隊の司令部を宿していれば洗濯夫の補助を担当する従僕じゅうぼくと呼ばれる人員をさらに1名追加できる。これらは全て海軍内に適用される法令や規則にてちゃんと決められているのだ。

瞬きも忘れて知識を吸収する雪風の表情に誘われ、朝日はその事を後追いの形で説明していく。感心の溜め息を連発する雪風の背後では霞と霞も同じ表情で耳を傾けており、同じ帝国海軍なのに見た事すらも無い軍属の乗組員さんの事情を3人の少女達は深く理解する事が出来た。彼女らに教える授けるのは自分の仕事として自負している神通も、この時ばかりは懇切丁寧にして解かりやすい授業時間を展開してみせた大先輩、朝日の態度に感服する。教育者として日々精進を忘れない神通にしたら今日の朝日は私立神通学校に来訪した特別講師の様な存在で、なまじこの朝日は今しがた教えてくれた軍属の人員に関する法令が帝国海軍の中で時代に沿って整備されていく過程をその目で見てきた生き字引たる者である。本や書類で得た知識を教える事も多い神通にとってその声は説得力に満ち満ちた物であり、教える授ける者としての非常に良い例を目と鼻の先で見れた事は彼女の中では大きい収穫だった。

むう……。さすが軍医中将。恐れ入った。

声には出さずに飲み込んだそんな言葉は、神通の中で朝日に対する尊敬の念を一層深い物にしていく。顔色一つ変えずに鋭い瞳の形をそのままにしていた事から誰も神通の胸の内には気付かなかったが、第二艦隊での日常では上官相手でも食って掛かる彼女がこれ程までに感服する様子は非常に希である。やっぱり朝日は凄い人物だ。明石もまた朝日の博識さを改めて実感し、本当に自分は良い師匠を得たと感動。教え子なりの喜びが胸いっぱいになり、輝きが増した熱いまなざしを師匠の横顔へと向け続けていた。

そんな中、後輩達に反して自身の凄さを見せ付けるつもりは微塵も無かった朝日は、食い入るようにして何度も頷く雪風が自分の言葉をしっかり理解してくれたのだとは理解しつつも、そもこの少女が何故に医薬品である過酸化水素水に興味を抱いたのかをふと疑問に思った。艦魂社会では軍医の立場を頂く自分や教え子の明石なら商売道具の一つと言えるのかも知れないが、第一線で派手に戦場を駆け巡る戦闘艦の艦魂である雪風の立場を鑑みると使用頻度は決して高い物ではない。ましてその前の明石とのやりとりでも示されている通り、この薬品を扱う事に関してはそれ相応の専門知識がそこそこに必要であるし、間違えたなら怪我を負う事だって考えられる危険も含んでいるのだ。

しかし朝日がそんな疑問を脳裏に抱く最中も、雪風は波打った前髪の下にあるその大きな三角形の目を爛々と輝かせて朝日の手に握られたガラス瓶に向けており、どうにもその魂胆が理解できなかった事から朝日は直接本人に尋ねてみる事にした。

『ねえ、雪風。これはさっきも言ったように、使い方も管理の仕方
も手間の掛かる代物よ。どうして雪風はこの薬品の事を聞いてきた

の？
』

至極ごもつともにして非常に素朴な疑問。

声を放つ側の朝日と受け取る側の雪風は別として、朝日という大先輩の凄さを各々が噛み締めていた手前、明石も神通もそれまで雪風がどうして突如として過酸化水素水なる小難しい名前の薬品に興味をもったかなぞちっとも思考を巡らせる事は無かった。特に神通は上司として、またかつての自分と容姿が瓜二つな事から特に目を掛けた部下として接してきた中で、雪風と医薬品との間に接点を見出す事が出来ない。確かに勉強も出来る方ではあるものの、別に雪風は看護術や医学を志しているような素振りも無ければ、神通の分身に搭載されている航空機用の揮発油の匂いを嗅ぐのが好きであったりしてもそれが高じた化学薬品オタクな訳でもないのだ。

今更ながらにその事に気付き、部屋にいる者達は雪風から放たれる朝日への回答に耳を澄ます。

『はい。実はこの間、牛缶の汁を服に溢しちゃったんスけど、これが中々落とすの大変なもんで、なんか手早く落とせる方法をちょうど探してたんスよ。』

『ああ、それでこの過酸化水素水が使えるのかって考えたのね。』

普段の生活での失態を隠す事も無く雪風は声に変えて、朝日の問いに対する回答とする。ちよつとした手違いは朝日だって未だに犯す事はあるのだから、彼女は雪風の言葉を受けるや優しく笑って賛同するように頷いてみせた。流麗な線のみで作られるその表情と西洋人独特の美しい琥珀色の髪の毛の輝きが更に映え、雪風もまた偉大な先輩に理解を得て貰えた様子を喜ぶように笑う。

だがそんな雪風のなごやかな時間はすぐに終わった。

『馬鹿者が！ 何が手早く落とせる方法だ！ そんな物は手揉みの

洗濯でなんとかせんか!』

『うぎゃっ!』

全くの無防備となっている彼女の頭には、背後よりツカツカと近づいてきた怖い怖い上司の怒号とげんこつが叩き落された。雪風としては便利で効率的にも優れた過酸化水素水での汚れ落としを否とされたのはちよつと意外で、頭の中でぐわんぐわんと鳴り響くような鈍痛に奥歯を噛み締めながら漂白剤の導入を上司に願ひ出してみる。だがそれに返されてきたのは、上司自身がかつて、今の雪風と同じ状況で洗濯という事態に対処せねばならなかった頃のお話であった。

『せ、戦隊長。一応アタイも洗濯はしたんスけど落ちないんスよお。あんなんじゃ日が暮れるどころか、次の日の朝までかかるッスう・・・。あいでで・・・。』

『だったら朝までやればいいだろうが! 私だって親方の下にいた時は朝まで洗濯したんだ! 自分で出来る事を最後までせんで最初から便利な方法なんか探すな! この馬鹿が!』

『ぎゃ!』

本日4度目のげんこつを貰った雪風の頭にはみるみるタンコブが重なっていく。ポカリポカリと叩かれるその様は明石と朝日にとつてはなんだか微笑ましい光景であったが、当の本人達、特に叩かれる側の雪風にしたらとんでもないお話である。今日は朝日という大先輩の前という建前もあるからか、上司から振り下ろされるげんこつの鋭さは一回り増している。おまけに短時間の内にそれを4発も脳天に食らっているのだから、頭のとっぺんに走る激痛も生半可な物ではない。その痛みは雪風に、眼前にて笑っている明石と朝日という師弟の姿に向けられるちよつとした羨望を与え、同時にそれに反して何故に自分の師匠はこうもまたおっかなくて暴力的なお方な

のかという不条理を少し募らせた。

ただそれでも雪風はさっきの様に弁明の言葉を返したりする事は無く、思った事を極めて率直に口に出す性格に背を押されて上司への不平を真正面からぶつけるような事も無い。もちろん反抗したならどうなるかをこれまでの私立神通学校の日々でしこたま身体で教え込まれた手前もあるのだが、お叱りの言葉の中にあつた師匠自身の過去を述べた短いお言葉の意味を察する事ができた為でもあつた。

先日の柔道大会に備える際に霞と供にせがんで本人の口から聞かせて貰つた神通の下積み時代。背も高く力も強く、教える物事に一点の間違ひも無いと雪風達が信じる神通は、現代よりももっと怖くてもっと厳しい金剛こんごうという名の師匠を得て育てられたのであり、神通は召使いの様にコキ使われながら師匠との日々を過ごしていた苦勞の記憶を教え子達に聞かせてくれた。そしてその中で、落ち難い汚れだろうがなんだろうが『白くしろ。』の一言で朝まで甲板で独り洗濯に励んだお話を、雪風もしっかりと耳に刻んでいたのである。だから今しがた雪風が受け取つたのは理想や精神論を柱にした姿勢の押し付けではなく、師匠自身が汗と涙と血の滲むような努力を注ぎ込んで得た生の経験であり、辛く面倒な物事に対しても樂をせず手も抜かずに相対するという励み方の一つなのである。生まれたばかりで未熟な雪風には、それを否定できるだけの理屈も度胸も、そして声を染める説得力も無いのであつた。

『ぐひんっ……。』

こうなると鼻っ柱の強い雪風とて抗う事は出来ず、頭に残る鈍痛の重みが一段と増してくる。持ち前の大きな釣り目の端っこに涙を浮かべ、両手で頭のタンコブを抑えながら歯を食い縛って耐えるのみである。ちよつとでも失言や教え子の未熟っぷりを目にするのがさまじくやってビシバシとげんこつを飛ばしてシゴくのが、彼女を始めとする二水戦の少女達が教えを請う神通という艦魂。やっぱ

り厳しい師匠だった。

朝日と明石も迫力ある神通の上司っぷりにちよっと苦笑いしつつ、厳しいながらも言ってる事は正しいその教育風景を察して静かに笑みを合わせる。次いで経験豊富な朝日はタンコブを擦って僅かに俯く雪風に語りかけ、彼女が企図した汚れ落としに対する薬品類の使用に関して、叱られたばかりの雪風の心を折らぬ様に注意しながら意見を述べ始めた。

『ふふふ、雪風。さっきも言ったように過酸化水素水は取り扱いが難しいから、ただ洗濯水に混ぜるだけではとても使える様な物ではないわ。他に身近な物で漂白や脱色できる物にはビールがあるのだけど・・・。』

『お!?! び、ビールも使えるんスカ!?!』

『ふっふふふ。でもビールで洗っても服は水が染み込むでしょう? だから乾かした後は物凄く臭いわよ。念入りに石鹼水で洗えばもちろん臭気はとれるんだけど、でもそれだったら最初から念入りに手揉みで洗濯する方が早いわよね。』

『あちゃ・・・。そ、そッスねえ・・・。』

他人への思いやりを常に忘れない朝日の語りは雪風に賛同するかのように他の案を提示しつつも、最終的には神通の言う様に時間をかけて頑張るという方向へ誘う。西洋人独特の両手を胸の前で大きく動かし、絶える事の無い優しい笑みで話す朝日に声は雪風のベソを掻く寸前だった心をも救い、雪風はようやく服の汚れ落としへの対処法を心に決める事ができた。

『しょうが無いッスよね。なんとか朝まで頑張ってみるッス。』

『あ、雪風。ウチも手伝うてあげるわぁ。二人でやれば朝まで時間

もかからへんやろし。』

ようやく腹をくくった雪風の声に重なるようにして、横たる霞の隣で座っていた霞の声が発せられる。二水戦の中でも一番のお人好しである霞の鼻から息が抜けたような声は力強さこそ無いのだが、怒られたばかりの脆い心で成した雪風の決心に外側から堅固さを与えていくのには十分で、二人はお互いに笑みを合わせてその友情を確認し合う。この時、神通は本当なら雪風の放った『しょうが無い。』の一言に本日5度目のげんこつを放とうとしていたのだが、雪風の声が響くと即座に霞が声を掛け、なおかつ二人が笑い合うや先輩が再び笑って声を放った事に際してお叱りの機を逃してしまう。そしてもう一つ、その大先輩が放った言葉はこの神通ですらも耳にした事の無い彼女自身の師匠にあたる者の過去を含んでおり、初めて耳にして得た驚きを曇りなく表情に浮べるのだった。

『あははは。雪風はなにか金剛に似てるわね。あの子、まだ私達が現役で艦隊に所属してた頃なんだけど、髪の色を私と同じにしたいから変色する薬品を知らないかって私に尋ねてきた事があったの。』

『は・・・？ お、親方が、ですか・・・？』

『ええ。神通と出会った頃はもうだいぶ大人になってたけど、日本に来た頃の金剛はとにかく言う事を聞かない子でもう大変だったのよ。』

天井に向けた手の平を肩の高さで掲げ、朝日は記憶に残る金剛が手に余る者であった事を示してみせる。その後が続いて朝日が語ってくれた内容を、雪風を始めとする少女達や明石、そしてその金剛に艦魂としてのありとあらゆる教育を施された神通は目を丸くして耳を傾けるが、聞く所に依ると金剛は朝日と柔道の試合をしてコテ

ンパンに負けた後、朝日を慕う余り持ち前の美しいサンディブロン
ドを黒めに染めて朝日と同じ少し赤みがかった琥珀色に変えようと
したのだという。甚だ激しいその気性に反し、金剛の白とも黄色と
もつかない美しい金髪は当時から朝日や教育係の敷島しきしまを始めとする
艦魂達からは羨望の目で見られた物で、特に金髪碧眼という西洋人
らしい、もとい英国人らしい身体的な特徴に内心で抱く理想の面
執着があつた富士ふじなどは大層気に入っていたらしい。しかし当の金
剛は憧れる物を目にするのと全力突進というそのイノシシばりな性格
に火を灯し、煙突に登るやそこから出てくる煤煙を頭に浴びせて自
身の髪に黒の色合いを与えようとしていたのだという。

『うはははは！ おもしれー！ 金剛少将もあつたんすね、そうい
う所！』

『あははは！ そんな事してたんだ、金剛さん！ あゝはっはっは
！』

間近でそれを聞いた明石と雪風は大爆笑で、ただでさえ怖い怖い
人柄が今では前面に出ている金剛の印象がそれぞれの胸の中では大
きかった事から、その激しい落差が面白くて面白くて仕方なかった。
少し離れた位置では霞と霰も口に手を当ててクスクスと笑っている。
話した朝日もまた当時の記憶を辿って在りのままの可笑しさが紡ぐ
笑い声を唇の間から漏らしており、唯一神通だけが今まで知る事の
なかった畏敬する師匠への思いを募らせて沈んだ声を放つ。

『親方……。』

溜め息と一緒に流れた声を放ちながら、神通は額に片手を
添えて疲れたような表情で目を閉じる。元来神通は突飛な行動や考
えを好む人柄ではなく、極めて打算的、合理的に物事を捉えるとい
ういわゆる理系肌の人物であり、些か気が短くて度胸がある点の他

は割りと普通なお人である。もっともその二つの点が余りにも傑出し過ぎているが為に帝国艦魂の艦魂社会では超がつく程の嫌われ者になっている事もまた事実ではあるが、他人と同じ物を嫌うという雪風のへそ曲がりっぷりとそこから生まれる突飛な行動には何度もげんこつを落としてきた。ところがどっこい、直の教え子どころかなんと自身の師匠もまたそういう血を持っていたという事に、この時、神通は落胆とも呆れともとれる思いが募って文字通り頭を抱えたのだった。

『ふふふふ。まあ、さすがにそれはやりすぎね。金剛はすぐに敷島姉さんに引きずり降ろされて、富士先輩と敷島姉さんからもう散々に怒られたのよ。懐かしいわねえ。髪はそんなに簡単に色が染みる事はないから結局金剛の髪は黒くならずじ済んだんだけど、口を尖らせながら涙目だった金剛の顔は今でも思い出せるわ。ふふふふ。』

約一名以外にとっては腹の底から笑える時間をそれぞれが楽しみ、お叱りの怒号とげんこつでちょっと重苦しかった部屋は舷窓から注がれてくる陽の光が強くなった事もあって瞬時に明るくなる。もちろんそれは部屋中に木霊する笑い声の音階にも反映されていき、下は艦齡2年から上は41年に及ぶ者達の笑い声はしばらく霞艦の一室を占領する。神通だけがただ一人、胸の中にあった師匠への尊敬の山がガラガラと崩れ掛ける様を憂いでいたのであった。

それからしばらくした後、霞の治療も終わっていつもの教育を行う為もあり、明石と朝日の二人は別れの挨拶を済ますと二水戦の者達を残して朝日艦へと帰っていく。

霞や霰、そしてお叱りと教えを両方貰えた雪風らは今日が朝日とは初めての対面であったが、麗しく高貴なその人とナリを十分に知

って元気な挨拶を返して見送った。だが何やら片方の口元を吊り上げてニヤニヤしている雪風の顔に気づいた神通は、朝日達が扉を閉めた後に雪風頭を上から驚掴みするようにして手を乗せて切れ味の鋭い声をかける。

『犬……、お前まだ何かロクでもない事を考えてるんじゃないだろうな……？』

どうにもヘソ曲がりな雪風の胸の内が気になってしまう神通は、ついさっきまで自身の師匠にあたる金剛の過去を聞いていた事から、また雪風がお洗濯への決心を変えて楽な手段を取ろうとしているのではないかと怪しんだのである。一応神通に対して反抗はしてこないが、とにかくやる事なす事が他人と同じというのを極端に嫌うこの雪風は、艦魂に限らず世間一般の当たり前の事である先輩への口の利き方ですらも満足に守れない二水戦きつての大問題児なのだ。しかし本人にあってはそんな上司の疑いも屁とも思っていないらしく、そもそも彼女は疑われたお洗濯に関しては決心を全く変えてはいない。雪風はすぐさま大きな声で声を返し、上司の心配を暗に否定してみせる。

『あ、大丈夫ッスよ、戦隊長。洗濯は霞も手伝ってくれるそうスカら、なんとか頑張ってやってみるッス。それに戦隊長も昔は実際にやったんスよね？ んなら教え子のアタイもやるだけやってみるッスよ。』

『む……。そ、そうか。』

最近には神通という気難しい上司には慣れてきた雪風は、自分達二水戦所属の駆逐艦の艦魂達が自ら「教え子」という言葉で自身を示すと、神通のお叱りの矛先が幾分丸くなるのを知っている。雪風もまたその事から言葉を選んで声を変えし、神通は彼女の意図した通

りに何か教育者たる者の優越感とも似た気持ち湧いてきて機嫌の角度を斜めから少し垂直に戻す。

こうしてお叱りも5発めのげんこつも無く霞の見舞いは終わり、4人はその場で別れる事になるのだが、この時、雪風のニヤニヤとした顔と『フヒヒ・・・』という奇妙な笑い声に気付く者は誰一人としていなかった。

そして数日経った、昭和15年11月15日。

ついにこの日、連合艦隊所属の全艦艇を対象とした大規模編成見直しが発令となり、呉在泊の各艦の艦長さんや戦隊の司令官らは各々が隸下とする人員や艦艇の把握と調整にてんやわんやの一日を送り始める。連合艦隊としても南洋方面を担当していた独立艦隊の第四艦隊、そして今まではその主戦力を潜水艦によって成されていた第六艦隊が戦闘序列に加わる事になり、帝国海軍史上希に見る大所帯となった。

艦魂達も人間達も以前より増してさらに強大になった連合艦隊の精強ぶりに胸を躍らせるが、朝日はこれを知った時、上海で友人の出雲が示した憂いが早くも現実味を帯びたのでは思えて、しばらく自室で押し黙っての懊悩の時間を過ごすのだった。

その一方、今日から新たな仲間も加わる二水戦の艦魂達は全員が戦隊旗艦である神通艦の艦尾甲板へと集合の上で整列し、艦の主にして「鬼の戦隊長」との異名をとる上司が来るのを待つ。雪風が司令駆逐艦を勤める16駆には黒潮くろしおに代わって天津風あまつかぜという妹が配属

となり、その黒潮を転属した上で編成を完了した15駆も今日から晴れて二水戦の所属部隊である。

『返事は大きくだぞ。』

『呼ぶ時は戦隊長と呼べば大丈夫。』

『まあ、怖い艦魂^{ひと}だけどとても良い艦魂^{ひと}でもあるからさ、早く名前覚えて貰うと良いよ。』

新たな仲間達はみんな陽炎^{かげろう}型駆逐艦の姉妹艦であり、霞と同じ18駆を組んでいる陽炎の実の妹達。二水戦所属の艦艇の中では半数以上を占めるのが彼女達であるから、皆は何事も初めての妹達に励ましの声を掛ける。その光景を微笑を浮べて眺めるのは朝潮^{あさしお}型駆逐艦である霞や、まだ松葉杖を伴っている霞も同じであった。だが霞はその視線をすぐ隣の列に向けて少し動かすや、微笑はすぐさま消え失せて目を点にしてしまう。

『なあ、霞……。アイツの方がなんか猿っぽくないか……。？』

『あゝ、そ、そやな……。あはは……。や、やて、戦隊長が見はったらなんて言いはるやろか……。』

姉の囁くような声色での声を受けた霞は霞と同じ方に視線を向けるが、彼女は額に若干の汗を浮かべながら困ったような苦笑いをする。姉に返した言葉にも滲んでいたように、彼女は目に映している代物が神通のお叱りに標的になるのではと内心では大いに心配しているのだった。

だがその刹那、霞の心配を他所に、各駆逐隊の司令駆逐艦である者を先頭にして少女達が3列で整列した甲板には、甲高い靴音と供に一際長身の上司が姿を現す。潮風に揺れる長い前髪の奥に日本刀を模したような鋭い目を鈍く輝かせ、今日もまたどこか不機嫌そうな表情で胸を張って歩いてくるのは、彼女達がただ一人の上司と仰

ぐ人物である神通であつた。

『氣をつけ〜!』

神通が歩いてくる側に陣取つた第18駆逐隊。その司令駆逐艦を今日から担当する霰が精一杯に叫んで号令を掛ける。少女達はすぐさま踵を揃え、胸を張りながらも僅かに顎を引いて凛々しい表情を一斉に浮かべた。新編成での第一日を、そして今日から始まるお仕事の日々を立派に迎えんとする少女達は微動だにしない直立不動の姿勢を維持し、神通は横目でそれを見ながら彼女達が身体を向ける隊列先頭前、中央の位置へと静かに足を運んでいく。

しかしこの時、左から順番に視線を流していた神通は、一番右側に整列している少女達の先頭に立つ者へと目を奪われる。

『ん・・・!?!』

そこは今期の編成でも3隻編成のままである16駆の列であり、先頭に立つ者は16駆の司令駆逐艦である雪風なのだが、神通の瞳に映った少女は軍帽からはみ出すその特徴的な波打つクセ毛が色合いを今までとは、否、つい数日前のそれとは別になっているのである。神通を含めこの場に居るのは純日本生まれの艦艇を分身とする者達であり、その容姿は黒い髪を基調とする日本人の女性の特徴を持つ者ばかりなのが当然の事であるのに、なんと雪風の頭に乗った軍帽から流れ落ちる髪の色はまるで甲板に貼ったりノリウムのような明るめの茶色なのであった。

『い、犬……。お前、その髪……。』

『うッス。呉鎮最強の座も取ってみせたッスし、今期からはアタイも頑張るッスよ。その為に髪の色を変えてみたッス。軍医中将っぽくなってるッスかね?』

僅かに開いた唇を閉めるのも忘れて啞然とする上司を前に、雪風は早速顔を僅かに左右に振って肩に掛かるくらいの髪を宙に靡かせてみせる。瀬戸内の緩やかな潮風がその靡く様を優雅にし、降り注ぐ太陽の光は雪風の髪が持つ茶色の色合いを一層鮮やかにしてくれた。

『酒保倉庫から銀バイしてきたビールを洗面器に注いで、頭突っ込んでたら見事に脱色成功ッス。ずーっと四つん這いの格好で頭下げてるのは大変だったッスし、臭いもキツくて酷いモンだったッスけど、髪って簡単に染み込むような事は無いって軍医中將が言ってたッスから念入りに頭洗ったら臭いは取れたッス。』

大変にお勉強の出来る雪風は先日霞の部屋でのやりとりをよく覚えていたらしい。その上でご立派にもそこで得た知識を実戦すべく行動し、その結果は今の彼女の髪の色に表れたのだという。雪風はニツと口元を吊り上げ、歯茎まで見えそうなくらいの笑みを輝かせていた。

だがその刹那、雪風の瞳に映る上司の長い前髪の奥には、対称的にギラリと危険な輝きを発する上司の瞳があった。瞬間的に雪風は笑みを凍りつかせるが既に時は遅い。いつもの如く、彼女の頭には振りかぶった上司のげんこつとお叱りの言葉が降下爆撃として降り注ぐ。

『こ、ここ、こんの馬鹿がああ！！！！』
『ぎゃあ！！！！』

全力での正拳突きにも等しい軌道のげんこつは周りの少女達を仰け反らせ、雪風もまた余りのダメージに思考回路が一瞬停止。痛い等と感じる間もなく彼女の身体はその場に崩れ落ち掛けるが、その

頭から軍帽がポトリと落ちてそれ以上はご立腹の上司が許さない。その乱心ぶりにも等しい物凄い剣幕に今日から二水戦所屬となる少女達が震え上がる中、烈火の如く怒った神通は小脇に抱えた雪風の頭を目掛けてげんこつを連発で叩き込んだ。

『貴様ああ！ 天下の帝国海軍軍人が髪の色なぞ変えおって！！良いと思ってるのかあ！！』

『ギャー！ だ、だって軍医中将だって髪の色がー！』

『アレは地毛だ、この馬鹿が！！！！』

二水戦にとっては新たな仲間を加えた上での良き旅立ちの日だというのに、完全にご立腹の神通がこうなっては最早誰も止める事は出来ない。むしろ止めるだけの勇気を振り絞れる者がいないと言った方が正しく、少女達はただ啞然として雪風の染物のように鮮やかな髪と上司のご乱心を眺めるだけである。

古き良き海軍軍人を標榜する神通であるからそのお叱りの声は久々に迫力のある者で、その内に突如として放たれた叫び声に霰は聞き返す事も抗う事も出来ずに従うしかなかった。

『霰え！！ 私の艦の中から石炭一つ持って来い！ カラスより黒く染めてやる！！』

『ぎゃあ！ か、勘弁してくださいよお！ こ、金剛少将だって髪の色を・・・、ぐえ！！』

『馬鹿者が！！ 親方がどうだろうと私は許さん！！ おらああ！！』

みるみる内に雪風の頭には長門艦の艦橋を彷彿とさせるタンコブの山がそびえ始め、霰は神通の余りの剣幕に逃げるように神通艦の艦内へと走っていく。

その後、雪風は散々に頭をぶっ叩かれた挙句、石炭をこれでもか

と押し付けられて髪を黒く染められてしまうが、翌日には頭を洗った事ですぐに黒い色は落ちてしまいまたまた叱られるハメになる。もっとも石炭を使つての染色は行方の方の神通の手をも真つ黒にしてしまい掃除も大変な為、神通はお馬鹿な部下を引き連れて朝日の下へと赴いて雪風の髪の手を相談してみた。

大きなタンコブを頭のあちこちに作つて泣きじゃくる雪風は朝日の目にはどう映つたのかは解からないが、朝日によると髪を染色する為の薬品というのは皆無なのだという。ただ髪は伸びればまた黒い毛が出現してくるとのお声を頂き、神通は問答無用で雪風の頭を丸刈りにでもしてやろうとバリカンまで持ち出す始末だったが、さしもにそれでは可哀想だという朝日のお言葉を聞き入れて取り止めとなる。

ただ帝国海軍随一の癩癩持ちであつた神通の怒りは簡単に沸点を下回る事無く、雪風はみんなが見ている前でこつ酷く竹刀でお尻を叩かれた末に、ある程度髪が伸びたら散髪するという事で許しを得る。雪風のお尻は青く腫れ上がるのは序の口で、それ以上の竹刀の一撃は腫れたお尻の皮が裂けるまでに及び、雪風は夜も眠れない程の激痛に歯を食いしばりながらの睡眠時間を過ごすハメとなる。しかし消灯した自分の部屋で布団にうつ伏せの格好で横たわる雪風は、あの金剛ですらも持てなかったという自分の欲する色合いの髪を涙で曇る視界に僅かに入れ、それでもなお苦痛に歪んだ笑みを浮べてみせるのだった。

意図してかせずか、直接の師匠を跨いで受け継いだ艦魂社会のかぶき者の血統を、彼女はこうして発揮したのであつた。

第九〇話 「新たな日々の始まり」

昭和15年11月15日。

この日、帝国海軍の全部隊を対象とした昭和16年度編成が発令となり、長く続いた休暇で静かだった呉工廠の艦艇達はそれぞれがにわかに騒がしくなり始める。明石艦^{あかし}においてはこれまでの第二艦隊付属が解かれて連合艦隊付属となり、指揮権限上での明石艦^{やまもと}は山本連合艦隊司令長官直属の海軍艦艇となった。ただ第二艦隊の艦隊訓練は前期に続いて今期も所属全艦艇参加での熾烈極まる予定とされている事もあり、明石艦はなんと昨年に引き続き第二艦隊に追従しての任務を行うという通達を受ける。

母港の呉には同じ所属の師匠がいて、さらに勤務先には友人達がいるという事に明石は喜び、今期は自身の能力にさらに磨きを掛けようと企図する。それに春もたけなわの4月には長く離れていたかつての相方が水雷学校普通科学生を終えて戻ってくる筈で、今日から始まる新たな海軍生活に彼女は並々ならぬやる気を漲らせるのだった。

また、明石には馴染み深い第二艦隊でも、今期よりその編成がかなり変わる事になった。

まず第二艦隊内でも最も年長の艦魂であった五十鈴^{いすず}率いる三潜戦が、今期より新たに連合艦隊に加わった第六艦隊へと戦隊ごと転出。彼女とは非常に仲が悪かった神通^{じんつう}が『ざまーみろ。』とでも呟く勢いで不敵に笑っていたのは言うまでも無い。

しかし転出した戦隊はこの三潜戦だけで、代わりに艦隊司令部が直卒する四戦隊には以前に明石も廈門^{アモイ}巡航の折に出会った第二遣支艦隊の艦隊旗艦、鳥海艦^{ちようかい}が配属。高雄^{たかお}型の姉妹全員が四戦隊として一同に会すのは昭和10年度編成以来、実に5年ぶりの事であり、国民からの人気が非常に高い高雄型一等巡4隻で作り出されるであ

ろう壮观な光景は艦魂達にも乗組員達にも今から見るのが待ち遠しい気分を与えてくれるのだった。

次いで第二艦隊の戦力は指揮部隊もさる事ながら尖兵の水雷戦隊にあっても大幅増強となり、神通が率いる二水戦には15駆が、そして神通の妹の那珂なかが率いる四水戦には昨年までの吹雪型ふぶきに代わつてより新しい駆逐艦である白露型しらつゆで編成された2駆と24駆が加わり、さらには霞かすみと霰あられの父の姉達に当たる朝潮型の駆逐艦で編成された9駆までもが配属となった。9駆は司令駆逐艦である朝雲艦あさぐもを筆頭に山雲艦やまぐも、夏雲艦なつぐも、峯雲艦みねぐもの4隻編成であり、長女である朝潮あさしおが率いる二水戦の8駆、18駆の霞と霰を含めて、めでたく朝潮型姉妹の全員が帝国海軍最精鋭の第二艦隊所属と相成ったのである。

さらにさらに、今期より第二艦隊には航空母艦かがの加賀艦と2隻編成の駆逐隊である3駆で構成された一航戦が配属となり、以前から所属している蒼龍艦そうりゅう、飛龍艦ひりゅうを始めとする二航戦と足してその空母戦力は3隻にまで拡大された。

しかもその上で第二艦隊には、艦隊が進出した先での港湾や泊地といった前進根拠地の防衛、及び周辺海域の測量や通信に代表される管理任務を担当する第一根拠地隊も新しく配属。

帝国海軍の中でも最も戦線を暴れまわる艦隊に相応しい姿となった。

他に明石と近しい所では姉と慕う長門ながとのいる第一艦隊であろうが、この第一艦隊では今期より歴史的な編成が実施されていた。日露戦役時よりその勇名を馳せた帝国海軍の至宝「第二戦隊」が、解隊となった大正12年度編成よりなんと18年に及ぶ長きに渡った欠番の時を超えて復活したのである。編成はこれまで第一戦隊1小隊を組んできた長門艦いせと陸奥艦むつがそのまま居座り、2小隊を成していた伊勢艦いせと日向艦ひゅうがが転属する形で実施された。

呉鎮守府所属の伊勢と日向が大喜びする様は明石もその目で見る事ができたのだが、もう30代にもなる大人な女性の外見を持ちながらも栄えある二戦隊に選ばれた二人は有頂天となり、すぐさま呉軍港の棧橋の一角にてひっそりと繋留されている大先輩、浅間あさまの下へと向かう。もう元気に波間を駆ける事も出来ぬ身体あたまの浅間であるが、かつての彼女は押しも押されぬ初代二戦隊の一員。伊勢と日向にしたら直接の先輩への挨拶と良き報告であり、浅間はブラウンの瞳を細めながら一言、『その名に負けぬよう、頑張りなさい。』と声を掛けて栄えある二戦隊の名の下に励む事になった後輩達を激励してやった。

翌日の朝。

課業始めの号令が折り重なって響く呉海軍工廠の波間では、師走も迫った寒い空気もなんのそのと静かに浮かぶ各艦艇が来月より始まる艦隊訓練や新たな配属先に属す為の準備を始める。それぞれの乗組員達による活気と賑やかさは今月始め頃より久しく聞えていなかった帝国海軍の鼓動その物で、そこそこの長さに渡った休暇の日々が彼らの心身を良く癒してくれた事を如実に物語っている。棧橋よりも僅かに内陸側を沿うように走る工廠従業員用の通勤列車も満員なら、鎮守府庁舎付近にて停車する「廠内定期」と呼ばれる大型バスもまた乗客たる将校や高等文官らで満席御礼状態。港内の雑役船舶せんぱくらも忙しくなく軍港の波間を駆け抜け、人間達も艦魂達も全力での仕事始めを開始した。

そんな呉軍港の南側に当たる砲煩部施設前の栈橋では今日も優雅に気高くその身を浮かべる朝日艦の姿があり、長きに渡る支那方面行動の任を解かれた事からそれまで艦全体に施していた雪の様に白い塗装をねずみ色の軍艦色に塗り変える作業が始まっていた。野球帽にも似た略帽と事業服に身を包んだ乗組員達がかじかむ手に息を吐きかけつつ、支給された塗料を乾舷は勿論、艦橋やマストといった構造物に塗りたくって行く。

そしてそんな朝日艦の甲板上の喧騒を横目に眺めながら、明石は邪魔をせぬように甲板の一角をテクテクと歩いていた。ついさっきタンコブだらけの頭に鳶トシビのような色の髪を靡かせるという変わり果てた姿の雪風ゆきかぜと、そんな部下のせいであろうやたらと不機嫌な神通の二人に明石はすれ違い、事の仔細を耳にして生まれたその可笑しさを表情から薄める事ができない。歯を覗かせるまでには至らないまでも口元を緩く吊り上げ、彼女は新たな仕事始めにも関わらずいつもと変わらぬ二水戦の日々を笑った。相当に雪風は怒られたのか神通が明石の笑みを見て鼻息を荒くすると肩をビクンと震わせ、上司とはその形が良く似た大きな釣り目からはじわじわと涙を湧かせる始末。明石から見ると雪風の髪の色は中々にお洒落で格好良いなとも素直に思えたのだが、いざそれを口に出したらご立腹の友人の機嫌が完全に横倒しになってしまふと容易に想像ができた為、彼女は多くを語らずに二人と別れたのであった。

うんもう、初日からアレかあ。

そんな言葉を脳裏で呟きながら明石は怖い上司とお馬鹿な部下を少し憂い、ちやうど手近な所で開いていた扉から朝日艦の艦内へと足を進めていった。

朝日艦艦尾にある長官室は、長官たるべき人員が配備されていない事から朝日が日々を過ごす場所。その室内の中央にテーブルを挟んで向かい合った2つのソファこそ明石と朝日が時間を共にする定位置であり、教え子の明石は扉を背にする方のソファに腰掛け、部屋の主たる朝日は艦尾側にある執務用の机を背にした方のソファに腰を下ろす。師匠による教育を目前に控える今、テーブルの上にノートや鉛筆を並べていく明石の胸の内にはワクワクする感情が募っていく、テーブルの一角に用意してもらったティーカップより流れてくる香気は明石の好奇心に一片の優雅さと静けさを与えてくれた。

『えへへ、いただきます。』

『ふふふ。どうぞ。』

勉強の用意を終えた明石はティーカップに指を纏わせながら眼前の師匠に声を放つ。返って来るのはいつも優しく、重みと奥行きが備わったバイオリンの音色のような師匠の声。片側に小さなホクロを控える口元には薄いしわを浮かべ、若さもちよつと陰りが見え始める容姿の朝日なのだが、明石はその美しい姿にいつも見惚れてしまう。透き通った青い瞳は快晴の空を映したかのように涼やかで、明石とは違って白さが目立つその肌は照り具合こそ目立たなくても無風の陽の雪原のように厳かで、顔の両脇を半円の軌道を描きながら流れ落ちる琥珀色の髪はその名の通り水平線から登り始めた朝日のような暖かさを持つ。この髪だけでも模してみたという雪風の髪が明石の記憶には新しいが、こうしてオリジナルを見るとやはり勝負にはならないなと明石は改めて思った。

もつとも当の朝日は教え子から抱かれるそんな印象を鼻に掛ける素振りも見せず、伏せ目がちにして唇に添えたカップより流れ込んでくる琥珀色の水面とその香りをいつものように楽しんでいる。こ

れを一日7回、しかもこれまでの40余年の生涯において毎日繰り返し返して来たというのに、彼女は紅茶に関しては飽きるという感情を微塵も抱かないらしい。

さらに今日はおまけがついて、明石の瞳に映りこむ今日の師匠はすこぶるご機嫌だった。

『今日はジャンピングが上手く行ったのね。我ながら良い味になっているわ。』

珍しく自分で自分を褒める朝日の言動。

愛弟子として接してきた明石も良く知る、師匠のご機嫌な胸の内を示す様子である。明石はすぐさまその理由がさっき甲板ですれ違った友人達にあるのだと察した。

もちろんそれはビールによる髪の色という前代未聞の行為を行った雪風の事で、上司の神通はご立腹であったにしろ、雪風が髪の色を自分に似せようとした事は朝日にはとても嬉しかったのである。表立ってそれを声に変えると師匠の立場を頂く者の面目が立たない故に敢えて朝日は褒めるような真似はしなかったが、頭をツルツルピカピカの丸坊主にされかけた雪風を可哀想の一言で救ってあげたのもその嬉しさがあったからに他ならない。

明石もそれを悟り、一緒になって笑みを溢しながら残り僅かとなったカップの中身を一思いに喉に流し込む。

『はー。美味しかったあ。』

『ふう。本当に良い味だったわ。お昼もこうして淹れれば良いけど。』

この頃は後味で残る紅茶の渋みも中々美味しいなと感じるようになった明石と供に、朝日は空になったカップの底を見つめながら余韻を楽しむ。残り香と供にほのかに漂う湯気にかすかに鼻を鳴らし、

朝日は深呼吸をしながら手にしたカップをテーブルの上に置いた。するとカップと受け皿が戯れて奏でられるなんとも心地の良い調べが短く放たれ、同時に朝日と明石の本日の教育を開始させるチャイムと化すのであった。

『さあ、始めようかしら。』

『はい。』

朝日の紅茶のおかげか、大人しくて決して声をは荒げたりしない人柄を持つ朝日の授業は明石でなくとも眠気を誘いやすい物なのだが、これまで明石は授業中の居眠りに陥った事など一度も無い。今日も今日とて尊敬する師匠から薬学や医術の知識を丁寧に与えられ、聞き落とさぬように耳を澄ましながら右手に持った鉛筆でノートに記していく。おかげさまで明石のノートはこれにて三代目であり、初代に綴られていた頃よりもその字はだいぶ達筆になっていた。これもまた心に染み込む様に深い味わいを持つ朝日の紅茶のおかげで、生来が明るくて浮ついた雰囲気波に乗りやすい明石の心に一時の沈静を与えてくれているのだ。すると字も上手くなるし教えられる叡智への理解も捗るといふ物で、明石のお勉強に関しての朝日の紅茶の貢献は計り知れない物がある。これで味もまた美味しいのだから文句のつけようが無い。

そしてこの素晴らしい紅茶と供に誰からも慕われる朝日の人柄が功を奏し、40余年のその生涯で朝日は常に仲間達の間では人気者であった。その様子を示す話として、朝日とティータイムを過ごす為にはウン十倍とも称される競争率を制して予め朝日に予約を取らねばならないという四方山話が、帝国海軍の艦魂社会には実しやかに囁かれている。教え子として近しい間柄にある明石にはそんな噂

話の真相は不明ではあったが、決してそこに仲間達による師匠への嫌悪の感情が微塵も含まれていない事だけは確信する。なぜなら午前の分の授業を終えてお昼休みを迎えた際、朝日の部屋に現れた彼女の旧友が企図せず明石に師匠が持つ人気の度合いを教えてくれたからだった。

『ああ、やっと朝日のティーが飲めるわ。』

『またまた。ふふふ、この間飲んだばかりじゃない、浅間。』

『出雲から貰った茶葉、GFOPなんでしょう？ それに朝日は抽出も上手だし、3日も待った甲斐があるわあ。』

どうやら浅間はこの朝日のティーを飲む為に3日も前から予約していたらしく、濃紺の軍装の胸の辺りのホックを一つ外して首元の感覚を緩くしながら笑っている。地の色が金色である為に目立たないものの、幾分の白い筋が走ったクセの無い髪を肩口から流す浅間は怪我だらけの生涯のせいなのかその声に籠る勢いや髪に通す手櫛の仕草がどこか弱々しい艦魂で、彼女とは同じソファにて隣同士に腰掛ける事になった明石は師匠と同じ頃合の年頃にして病弱な女性像を持つこの浅間を少しだけ心配してしまう。

もっとも当の浅間は明石の心配を鼻で笑うようにご機嫌の音色を唇の隙間より漏らして、友人がせつせと淹れてくれる紅茶が出来上がるのを心待ちにしていた。師走が迫った呉の空気が肌寒いのか、それとも待ち遠しさが与える手の感覚の寂しさなのか、彼女は膝の上で両手を擦りあわせながら深い茶色の瞳を朝日へと投げ、時折朝日もまたそんな浅間の視線に笑みを覗かせてやりながら自慢のティーポットへとお湯を注ぐ。

ずっと昔より変わらぬ朝日の紅茶を淹れる動作が、浅間にあってはすこぶる優雅で美しく見えるらしい。熱し終えたケトルから流れ出る熱湯の勢いと量、舞い上がる湯煙は勿論の事、片手で抱えたケトルの口からティーポットの口に至る空間の間隔までにも朝日は拘

っている程で、浅間はその動作の一つ一つを昔懐かしい大海原を駆けていた頃の彼女の姿と重ねて眺めていた。

『少し抽出は長めにするわね。浅間は味がちょっと濃いのが好きでしょう？』

奥深い朝日の気遣いが、笑みによって浮かぶ浅間の口元や目尻のしわをさらに深くする。

『ええ、ありがたいわ。ストレートはまったりと味わいを楽しむのが好きなの。』

40余年の旧知の間柄は朝日と浅間の間にある隔たりを殆ど無くすには十分な物。普段は自分の分身からでてこないのに、疲れるのを覚悟してでも朝日の下へとやって来るという浅間の胸にあるのは単に極上の紅茶への楽しみであり、長年一緒に頑張ってきた朝日もそれをちゃんと解かっている。故に彼女は自分が用意する事のできる中で、友人の口にも合う最高の紅茶を用意しようとしているのだった。

やがて朝日の手に抱えられたトレイによって運ばれてくるティーカップは、浅間と明石の前に出されるやオレンジ色の小さな湖面にそれぞれの顔を薄っすらと映してくれる。そして映りこむ自分の笑みに誘われ、浅間は朝日にお礼の言葉を投げぬままでカップを唇に添え始めた。まだ朝日自身も席にも着いていないというのに、待ち侘びた紅茶の出現に抗えない浅間。喉を通り抜ける紅茶の流れを噛み締めながら、早くも次の機会を友人へと問い合わせる。

『んん、良い味ねえ。朝日、次はいつ空いてるの？』

『ふふふ。明石の教育時間と一緒に良いなら別に明日でも大丈夫なのよ。あ、でも明石の教育にはちょうど良いかもしれないわね、浅

間なら。』

『あら、なあに？』

前途の明るい予約状況を耳にして一瞬顔を綻ばせる浅間だったが、ようやく対面する形でソファに腰を下ろした朝日の声を受けてほんの少しの驚きを表情に混ぜる。なぜならたった今、朝日は浅間の隣に座る教え子の明石との教育時間と重なっても良いのならと口にしたが、朝日が呉へと到着した日に浅間は『教育の現場に第三者はいない方が良い。』という朝日自身が放った言葉を直接耳にしていたからである。ところがそんな朝日は胸の前で両手を合わせながら『ちょうど良い。』と口にし、浅間の隣にいる明石もまた持ち前の明るい笑みを浮べて師匠の提案を絶賛している。どうにも要領を得られない浅間は手にしたカップをまた口へと運びつつその理由を二人に尋ねるが、返って来た二人の言葉に彼女は先程の朝日の申し出をすぐさま納得する。それは明石に艦魂としての多様な叡智を授ける朝日と、この浅間が共に同じ英国生まれの艦魂である事、そして呉へと朝日が戻ってきた日より始まっている教育の日々の中、明石がさらなる己のステップアップを企図して新たな学問の分野に挑戦し始めた事に理由が有るのだった。

「艦の命たる者は、何事にも秀でた一流の淑女^{レディ}でなければなら
ない。」

お師匠様からのそんな教えを起爆剤にして常に上を目指す明石は、軍医さんとしてのお勉強もそここにこなして来た自分の身の程に満足する事無く、数日前の朝日に対してある物の知識を教えてくれと願い出た。それは朝日が生を受けた地にて用いられ、彼女自身が

初めて他人と意志を通わせる為に得た術。すなわち、明石は英語を教えてくれと言いつ出したのである。

『観艦式の前に富士^{ふじ}さんと少しお話した事があつたんですけど、その時に英語の発音を笑われちゃんだんです。あはは・・・、それに英語って私、全然解かんなくて・・・。だから教えて欲しいんです！』

『まあ、そうだったの。外国語を学ぶ事はとても有意義な事よ、明石。特に私達のように、河川ではなく海を生きる場とする船にとつてはね。』

頑張り屋の教え子の申し出を朝日は褒める言葉も混ぜて受け止め、意を決した事で力みかけた明石の顔からは笑みの硬さが消えていく。ましてや明石が教えてくれと頼んできた英語とは、朝日にとっては得意とか不得意の次元で身に付けている物ではない。その40余年の生涯では日本語の方を使っている期間が抜群に長いものの、朝日が生まれた遠き異国こそ話題に上がった英語の発祥の地なのである。それに朝日としてもやはり自分が生まれた地の文化にどんな形であつても他人から興味を示してもらえするという事は嬉しくもあり、特にそれがその地の文化の根本を成す物の一つである言語であれば尚更だった。

『英語なら任せておきなさい。現代の世界において、人間の間でも艦魂の間でも最も使用される頻度が高いのが英語なのよ。国際港の上海なんかでもいろんな国の人達がいたけど、やっぱり一番使われているのは英語ね。決してイギリス人が多い訳じゃなくて、支那の人達や他の国の人達が学んでいる言語では一番比率が多いのよ。だから明石が英語を学んでおけばきっと損はないわ。それにどこの国の海軍でも、母国語しか話せない海軍軍人というのはいないものよ。よく決めたわね、明石。』

教える側の朝日は快諾すると同時に、教え子が英語を学ぼうとする姿勢を正しいものだと言ってくれる。その言葉通り、海原の上の国境を超えて任務に就く海軍軍人たる者にとって、外国語はお仕事に励む上で必要とされる重要なスキルの一つであり、士官に当たる者達の登竜門である海軍兵学校の入試科目として英語が設定されているのもここに大きな理由がある。とりわけ英語は世界的にも経済、及び政治の面で大きな影響力を持つ英国や米国の公用語である為に国際的な社交の場でも使用頻度は多く、上海や天津^{テンシン}に代表される支那沿岸に点在した各国の租界が設けられている地区ではそれが更に顕著であった。

そんな英語の必要性と使用状況をとくとくと説いてくれる師匠の声に、明石は大きくした瞳を輝かせて耳を傾ける。これまでの明石からすれば未知の領域に近い語学の世界ではあるのだが、素直に褒めてもらえた向上心とまだ見ぬ世界への好奇心が彼女の胸の中から物怖じするような気持ちを完全に掻き消していた。

『は、はい！ 頑張りまあす！』

すぐにそんな感情は明石の声へと滲み出し、朝日もまた明石の極めて前向きな姿勢に後押しされて即座に教育を始める事になった。

だがしかし、何事も精神論でまかり通るような甘さを備えていないのがこの世にある万物の事象という物である。それはお勉強においても例外ではない。

朝日による本場の英語の教育が始まって既に数日経つにも関わらず、紅茶をゆっくりと飲む浅間の眼前にて今まさに発せられる明石の声にこそ、それはよく示されていた。

『だ、だざうあと、じ、のおまる・・・』

どこの地域の方言なのかと訊きたくなる様な奇怪な声を放つ明石。一応は彼女なりに頑張つて英語の文章を声に出そうとしているその試み自体は優しい笑みを浮べて見守つて耳を傾けている朝日や浅間にも伝わってくるのだが、英語に対して耳が肥えた二人にとっては明石の放つ声が底知れぬ可笑しさを誘発して仕方が無い。その内に浅間は小じわを控える口に添えていた手の隙間から盛大に息を噴出し、その率直な感想を思わず声にしてしまうのだった。

『ぷっ・・・あはははっ。これはヒドイっ。』
『がっん・・・』

この状況下であれば明石にも浅間が放った言葉の矛先が自身の英語にあるだろうと容易に察しがつく。瞬間、明石の心には鉄材が降つて来たような思い衝撃が与えられ、ハの字に傾けた眉の下にある両目の端っこに小粒の涙が浮かび上がってしまう。これまでも自身の至らぬ所を思い知らされる事が多かった明石だが、その際に受ける衝撃はやっぱりどうして慣れる物ではない。緩く唇を噛んで首をすぼめ、目の前に掲げていた自身のノートに顔を隠して彼女は恥を忍ぶ。

決して教育を諦めようかという気は起きないものの、残念ながら明石は英語の発音が物凄く下手だった。

『A s a m a . J a p a n e s e i s n ' t g o o d . 』

そして具合が悪い事に、明石が頼るお師匠様は教え子に対して教育時間中は日本語では一切接してくれない。「授業時間中は日本語は一切禁止」と初めての英語の教育を受ける際に朝日と明石の間で

取り決められた規則であり、授業の始まりや終わりの挨拶は当然として、落とした鉛筆を拾う際の許可も、厠に行こうとしてその場を一旦離れるのも、全て英語で受け答えせねばならない。朝日独自の英語教育法であった。

『Sorry. Please continue.』

まだ笑い声が収まらない中であつたが浅間も友人からの声によってその決まりを思い出し、流れるような美しい発音の英語で声を返してみせる。朝日も浅間も共に英国生まれの艦魂で、外見もまた日本人女性に通ずる特徴は一つとして持っていない。髪の色も瞳の色も、身体つきすらも明石とは違ふのであり、同じ帝国海軍の艦魂だと認める事が出来るのは身に付けている服装が明石と同じ濃紺の第一種軍装である事くらいだった。

こうなると明石はなんだか自分だけが立ち位置を異にしているような疎外感を覚え、心から慕う朝日の表情すらも真正面から目に映すのはなんだか億劫になってしまう。しかもまだまだ始めたばかりの英語のお勉強であるから単語に関しても明石にはまだ覚えていない物が多く、今しがた眼前にて交わされた朝日と浅間のやりとりに関してもそれぞれが放った声に含まれる語句を聞き取れずにいた。

だが四苦八苦する明石に対して救いが与えられる事は無い。先輩方のやりとりに対してなんとか意味を知ろうと貧弱な自身の英語の知識から読み取れた単語を検索している最中にも関わらず、明石にはお師匠様より美しい英語による指示が与えられる。

『Now continue to read the note.
Akasi.』

『あ、あい、すいい……。』

『Sui? : Ah. It is see. Ok, It understood.』

なけなしの読解力でもなんとか朝日の言葉を理解した明石は、指示された通りに自身のノートに書いてある文章を英語に変換して読み上げる事続けた。書いてある内容は明石自身が朝日との医学の教育において記した知識の羅列で文章が持つ本来の意味は書いた本人である明石が一番良く解かっているのだが、如何せんそれを英語に訳すというのは彼女にとっては至難の業である。師匠より貰った和英辞典、そして浅間からエールと共に頂いたコンサイスの英英辞典をパラパラと捲り、自分が意図する言葉の英単語を繋ぎ併せてなんとか文章を組み立てようと明石は必死だ。その最中にも早く朝日の指示通りに声を返さねばならない焦りと、自分の意志を上手くお師匠様へと返せないもどかしさが、明石の首筋に冷や汗を浮かび上がらせてその顔を泣く一歩手前の状況へと変えていく。

『うい……。えと、えっと、温度、温度って何て言うのお・・・？』

今にも泣きそうな声でそう漏らしながら辞書とノートに視線を往復させ、それが出来たとしても再び彼女の口から出てくるのは酷い発音である出来損ないの英語。意地悪をするつもりはないのだが浅間はまた明石の英語が始まるや込み上げてくる笑いを抑え、朝日も変わらずに優しい笑みだけを浮べて黙って教え子を見守った。

朝日は明石が彼女なりにとても頑張っている事は理解しているが、それでもなお日本語の使用を解禁してやろう等とは微塵も考えようとはしない。もちろんそれは朝日自身が歩んだ40余年の生涯にて培った経験から来る物に他ならず、初めて英国から日本に来た当時、彼女もまたこうして懸命に日本語を覚えようと勉学に励んだという自負があったのである。言わば自分が知る限りでは最も確実にして間違いの無い勉強方法だと朝日は信じているのであり、その結果は日本生まれの艦魂である明石と同等に日本語で会話する事が出来る

現代の彼女の姿を見れば一目瞭然であった。

『え〜ん・・・、解かないよお・・・。』

やがてにっちもさっちも行かなくなった明石が涙ながらに自分の状況を表現し始める。まだまだ若い明石はさすがに誰からの理解も得られない状態に長い時間浸るにはまだ無理があり、朝日と浅間が微笑みを向ける中でぼろぼろと涙を流して泣き始めてしまった。事ここに至って仕方なしで、朝日はちよっと早いとは承知しつつも日本語を解禁できる時間を設けてやる。

『h e h e . A k a s i . L e t ' s t a k e a r e s t . 』

『え〜ん・・・。』

じわじわと効くプレッシャーに弱い教え子の姿は朝日には可愛く見えるかも知れないが、当の明石にしたらもどかしさと疎外感と悔しさが入り混じるといふ、これまで体験した事も無いような重圧が授業時間中はずっと圧し掛かっていた。堰を切ったように両頬に輝く流れを設け、般若のお面のような顔で泣く明石の横に、向かい合いい形で座っていた朝日はゆっくりとやってきて座るとその腰に静かに腕を回して声を掛ける。

『明石、泣かないの。みんなこうやって覚えた物なのよ。長門もこうやって私から英語を教わったし、貴女の先代も私に日本語を教える代わりに英語を学んだ時はこんな感じだったわ。二人とも何十日も掛かったんだし、明石はまだ始めて一週間くらいでしょう。挫けるにはまだ早いわ。』

『うえ〜ん・・・。』

生来が頑張り屋の明石がここまで心を折られる事は珍しく、朝日は教え子の胸の内にとどめを刺さぬよう労わりながら語りけた。その内に紅茶を用意してくれた浅間も加わり、中々泣き止む事が出来ない明石を励ましながら休憩時間のティーの味わいを楽しむ。また休憩時間中は日本語に使用も許可される事から、背中から伝わる朝日の手の温もりと一緒に明石の心からはとりあえず疎外感だけは薄れていく。手の甲で涙を拭いながら明石は頷き、二人の心優しき先輩と一緒に紅茶を飲み始めた。

みんなこうして頑張ったのかと思うと確かに明石も負けてられないとは思うものの、中々どうして語学という物は簡単には身に付かない。休憩時間中、朝日はその事実として自分の師匠筋に当たり、なおかつ紅茶の渋みが一層身体に染み渡る今の明石の先代、すなわち初代明石艦の艦魂が英語のお勉強に励んでいた頃の姿を教えてください、愛する愛弟子に自身へと繋がる者達がどうやって課題を克服したのかを教えてあげた。聞けば明石の先代は同じく日本生まれだった事もあった。英語の発音は大変に下手だったそうであるが、時間を見つけては朝日の所に赴き、日露戦役の時などは同じ第二艦隊所属の浅間の下にも現れて英語のお勉強を頼んだのだという。そして猛勉強の甲斐もあった。朝日や浅間とも対等に話せるほどに先代は英語を身に付けたらしく、その結果は前大戦の頃に先代が経験した欧州派遣にて真価を發揮したらしい。明石も観艦式の際に浅間の妹に当たる常盤とぎわより教えてもらった帝国海軍第二特務艦隊による地中海派遣の事であり、帝国海軍艦魂社会でも有名人である出雲いづみが舌を巻き、艦隊に対してではあったが英国の国王陛下から勲章まで貰う程の功績を残したという先代のお話である。その苦労の下、日本より遠く離れ、護衛する船舶も全て欧州生まれの艦魂達で構成されていた事を容易に想像できる時、明石はきつと先代が頑張って身に付けた英語を駆使して護衛対象であった現地の船舶の艦魂達と意思疎通を図ったのだらうと悟った。

『貴女の先代はよく頑張って結果も残したのよ、明石。でもその頑張りは華やかな物ではなかったわ。今の貴女と同じ様に、発音の段階で泣きそうになりながらそれでも一生懸命に、夜遅くまで地道にお勉強したからこそなの。そしてそれは、きっと明石の名を継ぐ者にしかできない事よ。だから頑張るなさい、明石。大丈夫、私が付いているわ。』

『は、はいいゝ……。』

お師匠様の暖かい応援の言葉もさる事ながら、先代の成し遂げた欧州派遣のお話は英語の重要性を改めて明石に認識させるのには十分である。遙か彼方にまで続くわだつみの向こうにある地は、自分達が生まれ育った地の言語や文化がまた違う形で存在する異国の数々。そこで励む事を生業とする海に生きる者達なれば、乗組員の人間だろうが船の命である艦魂だろうがその地で用いられる文化に対して予め知識を得ていなければ円滑に接する事ができない。その基礎中の基礎が言葉なのだ。

ようやく涙が収まり、背中からは師匠の腕が持つ温もりで、身体の内からは浅間が用意してくれた紅茶によって温められた明石。そんな異国の言葉の大切さを噛み締め、同時に崩れかけた英語のお勉強への熱意を再び組み立て直しながら決意を述べる。

『が、頑張りますう……。』

『うん。その意気よ、明石。』

朝日の注いでくれる真心の暖かさはこうして教え子の心を立て直す。ただその教育姿勢を微塵もかえようとしらない所もまた朝日なりの英語教育に対する拘りだ。と言うのも、明石の先代より日本語の教育を受けた際に自身が使ったノートの存在を彼女は教え子に教えてくれ、現物を部屋の一角にある戸棚の中から出して見せてくれたのだが、日本語と英語の両方が記載されているそのノートを自分の

教育に利用したいと申し出た明石の言葉に朝日はにべもなく否の回答を返したのである。その際にちよっぴり気落ちする教え子に放った声が、朝日なりの教育者たる者の体面を如実に物語っていた。

『ふふふ、明石。これは飽くまでも私が学ぶ際に見つけた勉学の道。その道を辿る事は確かに楽かもしれないけど、それだと貴女は私以上の道を探す手段を失ってしまうわ。工作艦としてもお船としても、明石は私なんかよりもっともつと上を目指せる筈よ。だから明石の道は明石自身で見つけなさい。例えそれが英語のお勉強であったとしてもね。前にも言ったけど、明石の戦線は明石一人の力でなんとかするしかないのよ。』

師匠たる立場を頂く朝日による、教え子に限界を設けさせないという信念。その言葉通り、明石の分身は工作艦としても現代に生きるお船としても、潜在的な能力は朝日の分身とは比べ物にならないくらいの値を秘めている。現実には明石の分身である明石艦はその計画設計の頃より当時最新鋭の工作艦であった米国海軍のメデューサ級工作艦を比較対照として設計され、同じ特務艦でありながらもオリジナルの艦体が明治生まれの朝日艦、そして当時帝国海軍に在籍していた工作艦である関東艦等はその手本にすらもなっていないのである。故にお船としても朝日と明石の分身は秘められた能力が根本的に違っているのであり、お船の命である艦魂にあってはまた師匠格の者を目指すのではなく、それを遥かに超えた立ち位置に到達せねばならないというのが朝日の教えなのであった。

それは底知れぬ朝日という師匠の教え子に対する愛の形なのかも知れないが、明石にあっては感謝の念を持ちつつもその後再開される英語のお勉強でまたまた四苦八苦する時間を味わうという事に等しかった。

軍医としても艦魂としてもこの朝日を唯一絶対の存在として尊敬

する明石。声を荒げたりは絶対にせず、間違った知識を与えたり、他人を嘲り笑うことも絶対にない朝日を、観艦式前の宴で長門と話した時より明石は師匠以上の存在と慕ってきたが、今この瞬間にも自身へと浴びせられる愛情とそれに釣り合う厳しさもまた、確かに師弟の次元で与えられる物ではなかった。

『Now the rest ends. The class is restarted. Akasii.』

やがてティータイムを終えて発せられるのは、またしても規律の整った流れを備える朝日の英語。最初の挨拶ですら既に日本語は封印されているというその有様に、明石は解からないからと言って一切の甘えも妥協も許されない授業で自分は励むしかないのだと腹を括る。その後も彼女は例に漏れず何度と無く回答に詰まり、涙と鼻水で顔を湿らせながら懸命に英語を学ぶ時間を過ごす事になった。その姿はまだまだ「一流の淑女^{レディ}」には程遠い。明石もまた直接声で諭されなくとも、そんな自分の身の程を朝日によって思い知らされたのだった。

厳しい母だった。

第九一話 「入渠と艦魂の不思議」

昭和15年11月18日。

この日、これまで予定としては耳にしてきた明石艦^{あかし}の整備入渠がいよいよ工廠側より明石艦の艦首脳部へと指示されてきた。これは定期的に行うお船としてのメンテナンスの為で、明石艦としてはこれまでの艦隊勤務の間に艦底に少しずつへばり付いてきた汚れを綺麗サッパリ洗浄する機会である。艦の命である明石は一応毎日お風呂に入ってはいるが、この度の分身の洗浄もようやく迎えた垢落としに等しく、生来が綺麗好きな明石は首を長くしてこの入渠の機会を待っていた。

もつとも乗組員達にとっての入渠とは忙しい時間を与える厄介な予定であり、その日の内に彼等は入渠準備の為のお仕事へと取り掛かる事になる。11月も後半に差し掛かった呉の空はどんよりと銀色の雲で覆われ、冷たい風が強弱を混ぜて駆け抜ける波間には今にも雪が降り出しそうであったが、甲板上で作業する乗組員達は白い息を一樣に口から巻上げながら汗まで掻いて励んでいる始末だった。船の命である明石にとっては初めての入渠とあり、彼女はそもそも一体全体お船が入渠するのにどんな準備があるのだろうと持ち前の好奇心に火をつけ、寒がりながらも外套を頭から被って甲板や艦橋の中から乗組員達の日を追ってみるのだった。

まず最初に行われたのは徹底的な艦内全ての部署におけるお掃除で、艦内の水兵さんを総動員して毎朝の甲板掃除とは比べ物にならないくらいに細かい物品の一つ一つにまでも手を伸ばす。年末の大掃除よりもさらに細かいくらいで、掃除が終わったら終わったで机

や椅子、寝具の整理に、格納してあるオスタップや掃除用具の一切に至るまで所定の位置にしっかりあるかどうか確認していく。烹水所や艦内の工作区間においてもそれは同じで、お鍋の蓋からスパナの一本一本に至るまでそこを持ち場とする兵員達が全部整理していた。

何もこれはお偉いさんが来るからとか、伊藤特務艦長が神経質な程に清潔にうるさいからという訳ではなく、乗組んでいる艦が入渠するに当たっての大事な大事な下準備なのである。部屋備え付けの家具の裏までソーフを忍び込ませる程の念入りなお掃除は、入渠した後に艦体に対して実施する状態確認を簡易化する為の処置に他ならず、ほんの少しの塗料の剥げ落ち、錆びの発生箇所、不意な場所での漏水や油漏れ等の痕跡の発見を容易にする為なのである。

また、多様な物品が所定の位置に決められた数で収納されているように実施する整理整頓も、明石艦の重心バランスがどんな状態であるかを艦長以下の艦首脳部が完璧に把握する為である。もしもこの重心状態の把握がいかげんであったなら、船渠へと進入する際に艦底やスクリュウを船渠の底に擦り付けてしまったり、あわよくば船渠に上手く入ったとしても排水した際に崩れた姿勢で艦が着座したりする危険性があり、最悪の場合は船渠の中で艦が横転するという事態だって有り得るのだ。

故に明石艦はまだ栈橋に接岸したままにも関わらず、その艦内の一室では特務艦長と副長、付随する人員が艦内各部の状態を把握しつつ工廠側より指定された船渠の深さ等も勘案し、或いは計算の上ではじき出した位置にバラストを搭載したり、或いは動かそうな艦内の重量物を移動させたりして艦の均衡を調整する等といった対応策を検討していた。

言うまでも無くそれは数字との格闘である。

とりわけ明石艦はそれなりの重量を持つ工作機械が艦内のあちこちに設置されている1万トン級のお船なのであるから、その繊細さは戦艦や空母よりもシビアであったりする。よって艦内のお掃除や

整理整頓が終わり、辺りが真っ暗となった夜遅い時間になってもまだ、ポツリと電灯が灯る明石艦の艦内の一室では副長と附きの士官を筆頭として数名の乗組員達が複雑にして失敗の許されない重量計算の残業に精を出していたのであった。

その甲斐もあって翌日は朝から早速入渠の作業へと移行し、明石艦は工廠側の人々と連絡を取り合いながら栈橋を離れる。呉海軍工廠は所属の艦艇の殆どが密集して停泊する有様で、しかも軍港ど真ん中には鋭意艤装中の大和艦がその巨大な艦影をデンと浮べている事もあり、もっぱら船渠へと向かう明石艦は自力での移動ではなく曳船達の助けを借りる事になる。

『おはよあります。』

『おはようありますう。』

曳船の艦魂達はずっとこの呉軍港にて励む働きの者の皆様で、呉鎮所属の明石もこれまでに何度と無く軍港で身体を休める際はお世話になっている。緩衝材や防舷材越しとは言え直接舳先を押し当てて励む彼女達は結構生傷が耐えない日々を送っており、おかげで軍医の明石は彼女達に治療を施す機会を得ていた故に大体は顔見知りの仲。白の作業衣の上下を身に付け、四六時中浴びた陽の光によってかちよつと真珠色ぎみに変色した作業帽を被り、比較的小柄な体格の者が多い一族である。知り合った頃から皆、広島訛りの言葉遣いで、明石の分身の甲板上に現れるや二人は艦の主にもいつもと変わらぬ広島弁での挨拶をしてきた。明石が声を返すと少し角度の度が過ぎるお辞儀をし、すぐさまそれぞれの分身へと転移してお仕事へと取り掛かり始める。

『そいや、そいや!』

『どっせー、どっせー!』

それぞれが分身から明石艦へと伸びるロープに直に手を触れ、奇妙な掛け声を小気味良いエンジン音と共に二人は響かせる。下手をしたら漁船よりもまだ小さい二人の分身は1万トン級の明石艦と比べるとケシ粒程なのだが、掛け声が2、3回くらいも繰り返されると明石の分身はゆらゆらと揺れながら波の上を動き出した。

『うおっとと……。あはは、すんごいなあ。』

何度もこの様を見てきた明石なのだが、対比するのも気が引けるくらいの小ささを誇る曳船達が自分より何十倍もある巨艦を動かすというのは見ていて飽きない。明石の分身の3倍はあろうかという戦艦や空母ですら、彼女達はこのお祭り調子を武器に狭い軍港内の波間の上で自在に操ってみせる。彼女達はロープでの牽引が終わると今度は反対舷から舳先で押し始め、その際もまた自身の分身にある舳先の狭い平面部分にて両脚を突っ張り、直にその手を明石艦の乾舷に添えてエンジン音と同じテンポで声を上げていく。

『らっせらー、らっせらー!』

『らっせらっせらっせらー!』

二人は努めて真面目な顔でのお仕事に汗を流しているのだが、どうにもその可愛げ溢れる姿が乾舷の上から見下ろしている明石には可笑しくて可笑しくて仕方ない。ただこの掛け声ですらも彼女達にとっては号令にも似た重要な物で、何十種類もあるその一つ一つにちゃんと意味が含まれている事は明石も知っている。小さな分身で巨艦を押したり引いたりする彼女達は、牽引や押し込み、それらを実施している対象の艦に対して艦首側や艦尾側といった自分の立ち

位置等に応じて掛け声を決めており、狭い上に巨艦の影に隠れてしまいやすい軍港内の自分達の存在を他の曳船、及び港内交通船の仲間達に声で示し、衝突等の事故を回避しようと企図しているのだ。

やがてそんな二人の活躍によって明石艦は扉船とせんが外された船渠を正面に捉える形で移動し、甲板の上からお礼を口にして艦の命である明石が手を振る。働き者の二人は新艦隊編成公布後の軍港内では引っ張りだこで、明石に気付くとはほぼ同じタイミングでまたまた度の過ぎたお辞儀を返し、喧騒が静まる気配が微塵も無い呉の波間に散っていった。

一方、明石艦の乗組員は彼女の様にのんびりと過ごす時間は一秒たりとて無い有様で、曳船による艦位保持が終わると艦首へと集まり、船渠の一番奥の部分から伸長して運ばれてくる太いロープを艦首付近に固定し始める。鍛え抜かれた水兵さん達の腕の太さにも匹敵する何本ものロープは船渠内へと艦を進入させる為の物であり、陸地にある巻揚げ機の作動によって対象の艦艇を真っ直ぐにゆっくりと進めていく役割を担うのだ。

もともとこの作業もまた、担当する者達、特に巻揚げ機を操作する工廠側の人員には大変に気を使う作業である。巻揚げの速度は艦が持つ艦体形状やそれ自体の重量、明石艦側から連絡された重心バランスを勘定して行う為に一律で設定する事は出来ず、牽引する艦に合わせた繊細な操作が要求される。例えば巻揚げの速度が速すぎたり、停止するタイミングが遅かった場合、水に浮かんだ艦はしばらく残る慣性に従って牽引される力が無くなっても前進を続けてしまうので、船渠内に進入した後もそのまま進んで船渠の最奥部に派手な頭突きをかます事になる。修理補修の目的で入渠したのに損傷したとなれば笑う者は必至だ。

故にジトジトと首筋に滲む汗を袖で拭いながら工廠側の作業者達は明石艦が少しずつ船渠内に進入してくる様子を瞳に映しているのだが、彼等とてその一人一人が年号が変わる以前よりこの呉海軍工

廠にて長く励んできた職人達である。3万トン以上の艦艇だって扱
う事もある彼等にしたらせいぜい1万トン程の大きさしかない明石
艦の入渠作業など造作も無い事で、明石艦はスイツと船渠の中央ま
で進みつつ減速を終え、やり直しや微調整も無しに船足を完全に止
める。

すると明石艦の両舷の乾舷には支え棒が当てられて船渠内で艦が
微妙に動かないように支持され、軍港の波間へと続く占拠の入り口
には扉船がゆっくりと進んできて船渠に蓋をする形で停止。それら
を入渠作業の監督官が確認するや号令が掛けられ、明石艦が進入し
た船渠からは海水の排出が始まるのだった。

時を同じくしてその明石艦の艦内にある明石のお部屋では、白い
着物を模した寝巻き姿となった明石がベッドの上で布団を被ってい
た。ただ掛け布団から首だけ出したような状態にも関わらず彼女の
大きな目はパツチリと開いており、その光景に比してちっとも眠気
に襲われている気配は無い。そして彼女自身もまた、快適な安眠に
陥る事を信じている訳ではなかった。

『ほ、ホントに寝ちゃうのかなあ・・・。』

胸の中にわだかまる小さな不安を乗せ、僅かに震えた声で明石は
呟く。その言葉にもあったように、明石は別に自分の意志で眠ろう
としている訳でも、姉と慕う長門ながとの様に決して真昼間からお仕事を
サボろうとしている訳でもない。それでもこうしてお布団の中に身
体を入れているのは、尊敬する師匠より自分も含めた艦の命は例外
なく入渠の際はこうなるのだと前もって教えられていたからだった。
佐世保で艦が完成して呉へと回航される当たりでようやく物覚え
が付き始めた明石は、今日という日が人生初の入渠である。その事
をここ最近毎日顔を会わせている師匠の朝日あさひに告げてみた所、な
んと「艦が陸地にその艦底を着けた際は、艦の命である自分達は意

図せずに通常のそれとは少し違った睡眠状態へと陥る。」というお話をしてくれたのである。色んな知識に精通している朝日に言わせればそれは動物の冬眠に非常に似た物らしく、艦魂の身体の代謝活動も大幅に低下して食事の摂取も排便もせずにとだひたすら眠り続け、やがて出渠に際して艦体の周りを水が包んで浮力を得た時に覚醒するのだという。

『うーん・・・、なんでだあ・・・？』

一応は人間の女性の身体を模した姿を持つ艦の命。その一人である明石は冬眠などという行動を自分の乗組員達が取っている所なぞ見た事が無いし、軍医のお勉強の一環として学んだ人間の人体についての知識の中にもそんな言葉を見つける事ができない。だがそれを教えてくれたお師匠様が、自分に対して艦魂に纏わる嘘を教える理由は皆無でもある。

そしてこの時、ふと明石はいつぞや富士^{ふじ}が教えてくれた？Sleeping Beauty?、すなわち三笠^{みかさ}艦の命たる者のお話を思い出す。その際に富士は『陸地に艦底を着ける事は、私達にとつては死ぬ事に等しいからよ。』と言ってはいたが、それに反して彼女は現代ではもう会えぬ友人の状態を一貫して「眠る」という言葉で表現していた。明石は単純に富士が友人の状態を率直な言葉に変えるのを控えたのだろうと考えてこれまででは至って気にはしていなかったのだが、今になって思うとあながち富士の言葉は偽りや比喩の類ではないような気もしてくる。

『眠る、かあ・・・。』

艦魂による冬眠がなんとなく理解できたような、でもできないような状態の明石は呟く様に声を放ち、排水の物であろう静かな水流の音色に耳を撫でられる中で天井をぼんやりと眺める。鉄材の持つ

灰色の色合いは舷窓から漏れてくる僅かな光でユラユラと揺れ、どうにも理解が捗らない艦魂の冬眠に対する明石の思考を描いて見せたようだった。

『ぬうゝ、解かない事ばかりい……。』

自分を含めた艦の命たる者達の事柄であるのに謎だらけ。ただでさえここ最近では師匠による英語のお勉強で奮闘中の明石であるから、ここに来てまたまた考えても考えても解からない懸案が出てきたのはなんだかとても残念である。やがて無意識の内にしおれた胸の内から溢れてきた溜め息を静かに明石は吐き、暖房などといった高価な物が装備されていない明石のお部屋には師走を控える空気によって白い吐息の流れが現れる。ついで舷窓から漏れてくる僅かな陽光とも一緒に遊んだその流れが輝きを失って四散していく最中、部屋の中にはそれはそれは低い音色の重苦しい金属音が木霊し、少し遅れて上げた状態の舷窓の蓋や室内に備え付けた椅子や机が短い間、カタカタと震えた。

だが部屋の主である明石は、突如として襲ってきたその物音や衝撃に対して驚きの声を上げる様子は無い。なぜならベッドの上で布団に身を包んだ彼女は既に瞼を閉じ、波の満ち引きよりもさらに遅い間隔で寝息を立てて深い眠りへと落ちていたからだった。

不思議な不思議な艦魂の生態。

その謎を探究する道はしばしの間、こうして沈黙と静寂の中に消える。

だがこの時、沈黙とか静寂という状態が適用されたのは艦の命である明石だけで、明石艦の乗組員、及び船渠の脇にて艦の無事な着

座を見守っていた作業員達にあっては正反対であった。船渠の周りでは作業員達による掛け声の大合唱が始まり、明石艦の艦内でも所定の位置にて待機していた乗組員達がそれぞれの仕事場所へと駆け出し始める。

入渠整備作業の本格的な始まりなのだ。

まずは船渠内の排水が完全に終わった事を確認した後、船渠内壁と明石艦の乾舷の間に竹や丸太で作られたサイド・ショアーとも呼ばれる大きな棒をつつかえさせる様に渡して艦を固定する。完全に浮力を失った状態の艦体は盤木の上に乗った状態で、艦底の盤木に接していない殆どの面積は地上から浮き上がっている。ましてそもそもお船の底という物は地上にどっしり足をつける等という機能性は皆無なのであるから、船渠の中での艦はとても不安定なのであり、不意な地震や衝撃、重量物の積載を受けて転倒するのを防止する為につつかえ棒を幹舷と船渠内壁の間に渡すのだ。

また、これと同時に船渠の平地面から明石艦の最上甲板に掛けてラッタルが渡され、晴れて明石艦の艦内は？陸続き？となる。すぐさま工廠側の作業員の何名かがその上を渡って行き、甲板上にて明石艦の乗組員と落ち合って作業の進捗や計画を確認。

一部の者達はその隣で陸地から伸びてくる電線を明石艦の最上甲板へと引き上げ始める。電線と言っても彼等の手にした物は市中の電信柱に張り巡らせている電線に比べると何倍も太い代物で、先端に結わえたロープを引っ張って甲板にあげるのもデリックを用い、使用する場所へ引きずっていくのも10人近い水兵さん達が力を合わせて運ばねばならない、という程にその扱いは大変である。しかもまたなるたけ速くこのデカイ電線の処置は終えねばならない。これから明石艦の主電源を艦内発電より陸上供給へと切り替え、整備補修の為に四六時中稼働しっぱなしの艦内発電機を停止するからだ。

ただ電線を担ぐのは力作業であるものの、帝国海軍最新鋭の艦艇

である明石艦は艦内の電源が交流とされており、電線を所定の箇所に接続してしまえばそれでお終いと言っても過言ではない。少し前までの帝国海軍の艦艇はその電源を直流としている事から交流の陸上電源に接続するのは一苦勞で、整流器コンバータを介しての供給だった為に手間も掛かれれば設備の分のスペースも毎度毎度確保せねばならず、定期的な入渠整備であつても船渠の周りは色んな機械が点在して作業の上でもその効率をかなり落とすような側面があつたのである。それが回避できている分、明石艦は整備作業に従事する者達にとつては割とお仕事が多まるお船であつた。

『電線接続良しです。』

『よし。機関長より分電室、艦内供給電源の切り替えにかかれ。』

『はい、電源切り替えます。』

『おし次。機関長より発電機室、発電機の運転停止準備にかかれ。』

『はい。発電機の運転停止準備、掛かります。』

明石艦の艦内奥深くにある艦の外観よりも黒さと機械油の臭いが一段と増した機関室には、機関長のテキパキとした指示の音が飛んで彼に従う機関科員達の背中を押していく。明石艦の発電機は一般的なお船の設備を動かす為の物に加えて多種多様な工作設備の稼動も担う為、操作手順は少し複雑で扱い自体も慎重でなければならぬ。機関長自らが出向いての陣頭指揮の理由だ。

やがて明石艦の艦内に木霊していた発電機の低い唸り声はなりを潜め、艦中央にある煙突からはそれまでもくもくと上がっていた一条の煙の帯が消えていく。ちょうどその頃には船渠内の排水も終わってベトンが剥き出しの船渠の底が顕わになり、明石艦の整備前の状態をその目で検査すべく工廠側の作業員達は小魚が何匹か飛び跳

ねる船渠の底面へと降り始めた。

だが当然の事ながら彼等が降りた船渠の底で見た物は、水線下くらいまでアオサやフジツボの集合住宅へと変わった自然溢れる明石艦の乾舷。二年近く海の中にあったお船の底とはこんな具合で、力強い自然の力は国家の強さを象徴する海軍艦艇であっても遠慮せずに群がってくるという事に、作業員の内の何人かはなにやら色々と感心したのか緩めた口から溜め息を漏らしていた。もっとも国民の尊い血税によって生まれた帝国海軍の艦艇に乗組員以外の入居を認める事は出来ないので、申し訳ないがここまで明石艦に従って生きて来た彼等には作業員達の握るヘラや、ポンプから噴出す海水によって強制立ち退きして頂く事になる。

幸いにも艦艇から引っぺがし難いフジツボ、牡蠣等の量はそれ程多くは無かった為、お昼も過ぎた頃には水線下に当たる幹舷のお掃除は終了。すっかり冬の気配が色濃い呉の寒空は既にやや明るさが薄れ始めており、作業員達は残り少ない自然の照明が灯り続ける時間を大事に使いながら明石艦の乾舷に視線を這わせていった。

左舷右舷も含めた全ての外板に盤木の上となった艦底は勿論、升目状に整列したりベットの一本一本、鋼板と鋼板の継ぎ目、スクリューと舵、艦首旗竿の真下の舳先を艦底に向か縦に真っ直ぐ走る艦首材、そして二年ぶりの入渠に合わせてアンカーも船渠の底へと降りろし、連なる錨鎖もまた船渠の底に綺麗に並べて検査を行う。しかもその検査の方法は目視検査が大半であり、時折片手にした小さなハンマーで叩いて音により判別したりするという職人技。工廠作業員の顔ぶれの多くが中年の男達なのも彼等が良く経験を積んだ職人さんだからであり、明石艦の艦内でも長年乗組んでいる兵下士官の者達が総出で設備や艦内構造の異常に対して目を光らせていた。

特務艦である明石艦は前線に出て派手な撃ち合いをするような事はないし、これまでの艦隊訓練でも急旋回や急加速を頻繁に行うような戦闘運動等はほとんど実施してはいないのだが、乗組員が海軍軍人ならば？武人の蛮用？という物がやっぱり大なり小なり有るら

しい。艦の外でも中でも、錆が浮かんだ鉄材の継ぎ目、頭が無くなったりベット、緩やかに凹凸を設けた鋼板、円周の具合が隣に並んだ物と不揃いになっているフレーム等がそこそこに見つけられていく。そして発見されたこれらの異常箇所はすぐに工廠側の検査官の元締めに当たる人物へと集められ、明石艦の総責任者たる伊藤特務艦長も混じっての整備補修計画が作成される。

取り替えられる物は取り替えるし曲がった物は直す訳であるが、それに掛かる日程や人員の割り振り等は伊藤特務艦長もしっかり把握せねばならない。明石艦は既に機関を停止しているので自分の艦の中での造水はできないし、そうなるとお風呂や蒸気烹水設備、お洗濯もまた不可能である。おまけに現在の艦の周りには海水が一滴も無いので水洗式である厠までも使えない。しかし乗組員達に何日にも及ぶであろう修理補修の期間中、飯も与えず風呂にも入らせず便宜も我慢させるという生活を送らせる訳にも行かないので、伊藤特務艦長は工廠内のどの厠を使って良いのかとか、食事の場所やその人員分の量が何日必要であるのか、入浴の為に上陸させる順番や人数はどのくらいにするか、どうせなら近隣の出身である兵下士官にはこの際帰郷させようか、等と艦の責任者として運営においての目処をつけ、必要なら工廠のお偉方とも折衝しなければならないのである。お船としての行動を書類で見た時、整備入渠と書かれていればお船にとっては休憩中と思う事も多いが、その実は艦長以下の乗組員達にとっては結構多忙な日々であつたりもするのだ。

『じゃあ、機関科の人員は工作設備の出し入れに当てましょうか。』
『あゝ、特務艦長。烹水所勤務の兵員はどうします？ 電熱調理器具は動きますけど、どうせチームが来ないんなら仕事にならないですし。』

『工作機械は割りと重くてデカイのが多いらしいから人は多い方が

良いだろう。・・・あ、川島主計長。一応、人力での重量物の出し入れになるよな？ ほらあ、載炭作業の時に出る非常労働食、もしかして適用になるんじゃないか？』

『ありゃ、忘れてたあ・・・。はい、こら適用ですね。明日の朝までに要求の書類には記載しておきますよ。』

『うん。頼む。』

士官室での艦内幹部による打ち合わせは夜遅くにまで及ぶ。いつもなら定時で切り上げて晩酌としけこむ彼等もこういう時は仕事が長引く物で、鉛筆や何枚にも及ぶ書類を片手に懸案と対応を声に出し、伊藤特務艦長の決済を仰いでいった。魔法瓶に入れた紅茶やコーヒーを何度も自分のカップに注ぎ足し、全員が詰めるテーブルの上に置かれた灰皿には吸殻の山が時間の経つのに合わせてどんどん重なっていく。帝国海軍の大部分を占める水兵さんから見れば士官連中は待遇の良い割に夜遅くまで重労働するような人々ではなく、普段からそんな姿を見る事も無い為に恨みつらみを募らせるような者もいたりはあるが、士官も士官でこうして既に水兵さん達が寝静まった頃になっても尚働くような場面もあるのだ。

やがて疲労の音色が隠せぬ溜め息を漏らしながら、士官室に詰めていた者達がゾロゾロと寢床へと戻ったのは既に日付も変わった頃であった。

おかげで次の日の朝から明石艦では本格的な各種工事関係の作業も始まり、艦は瀬戸内の潮風に撫でられる波の声に代わって幾重もの機械音にて包まれる。その甲板の上はもちろん、船渠脇の陸地にも作業員と乗組みの水兵達が事業服姿で汗を流し、艦内より不調のあった大小の工作機械を出し入れする光景が広がる。船渠の底では早速ドリル等の機械が唸りを上げ、前日に異常が見られた鋼板等を

剥がしとって交換したり、リベットを何本も外して新しいリベットを打ち込む等といった工事が始まっていた。

その一方、昨日より深い眠りに落ちている明石は自分の分身の變化に目を覚ます事は無く、唇から漏れる寢息を高らかに上げて布団の中で寝返りを打つ。彼女の存在を知る者なれば、「大勢の男達に身体をイジられる」というある意味では大変にアブないその状態を危惧してしまいそうになるであろうが、幸いにも明石艦には彼女の姿をその目に写せる人間は誰もいない。それに布団に包まった明石の身体には分身とは違ってこれといった変化が現れる様子も無く、時折その身体の所々に痒さやチクリとした痛みが一瞬だけ生じる程度であった。

よって明石の安心の睡眠は妨げられず、やがて彼女は『うゝん・・。』と寢言を漏らしながら布団の上で再び寝返りを打ち、無意識の内でお尻をガリガリと掻きながら眠り続ける。

さて、船の命たる明石がこんな暢気な状態であれば、その分身である明石艦の整備補修もまた特に問題なく滞り無く進んでおり、大きな事故や追加の工事も発生せずに極めて順調な進捗具合であった。重い工作機材の出し入れも乗組員達の掛け声と供にある担ぐ姿が崩れたりはずせず、工廠側の作業員達にあっては工事の作業手順を間違えたり、僅か3ミリの位置ズレすらも許されないリベット打ちも失敗無く実施されて行く。

ただ工事作業とは危険がそこかしこに潜むのが常という物で、携わる人々が十分に気をつけていても多様な形で襲い掛かってくる。当然、帝国海軍においてもこれまでに色んな事故が起こり、中には死人が出てしまった事態だってあるのだ。

そして明石艦が入渠して2日目の朝、そんな事故が起こってしまう。

今日も一日頑張るぞと艦の乗組員や作業員達が船渠の中の明石艦へと群がり、口から白い息を漏らしながらの点呼が終わった後に本日 of 整備補修作業へと汗を流し始める。明石艦の外板交換やその下にあるフレーム修正が行われている船渠の底は特に忙しく、無造作にその辺で散らばる各種工事用の機械の隙間を縫うようにして、ヘルメットや作業帽を被った作業員達が動き回っている。本日は艦左舷中央部、艦艇に近い外板の新品を付け替える日で、船の骨組みが露わになった作業現場には20名近い男達が船渠の底へと降ろされてくる光沢も輝かしい新たな鋼板を見上げていた。

そんな中、盤木に乗って浮き上がった艦底の下から這い出すように出てきた若い作業員が工具を取ろうとして腕を伸ばした刹那、艦の真上から見るとちょうど乾舷より突き出た格好の彼の頭には小さな衝撃と共に甲高い金属音が鳴り響く。

『いてっ・・・！』

ヘルメット越しにでも十分伝わる振動が作業員の首を強引に垂らさせ、カーンという甲高い衝撃音は船渠の壁に木霊して辺り一面に伝わる。だがこの光景を振り向き様に目にした作業員は一斉に驚き、鋼板の釣り降ろしが完了するのも待たずに一目散になって船渠の壁にある階段を登り始める。

『うあ！ 落下だ！』

『逃げろお！』

作業員達の蜘蛛の子が散るような遁走劇を目にする明石艦の乗組員達は何が起きたのか、何を恐れて彼等が逃げ出したのか解らず、船渠の上や艦の上から見下ろして目を丸くする。突然の喧騒は明石

艦の周囲全体にまで広がり、全然関係ない隣の船渠や工場施設からも『何だ、何だ。』と作業員達が駆け寄ってくる始末だ。

やがて船渠の底より一目散で階段を駆け上がった作業員達の中から40歳くらいの顔立ちをした髭を蓄えた作業員が船渠の端っこまで進み出るや、口の前に両手を添えて未だ船渠の底、艦底付近で頭を抱えて悶えている若い作業員に声を掛ける。叫んだ中年の作業員はその上司であった。

『中岸^{ちゆうがん}ー！ 大丈夫かー！？』

『おあ、だ、大丈夫ですー！ あいつてゝ・・・！』

明石艦の浮き上がった艦底の下。陽の光も上手く届かない場所にいた若い作業員は頭を抑えながらも片手を挙げて応えてみせ、船渠の端にいる上司を始めとした作業員達は一斉に胸を撫で下ろす。ただ一連の騒ぎは明石艦の艦橋までも届いていたらしく、先程の中年の作業員の叫び声も合わせて何事かと驚いた伊藤特務艦長が甲板へと姿を現した。するとちょうど手近な位置にて明石艦の隔壁の異常を調べていた作業員が駆け寄り、事の仔細と何故に作業員達が一斉に逃げたのかを説明する。

作業に当たっていた男達が恐れたのは、船渠の底面から10メートル近くもある所より重い鉄材が落下した事態であり、乾舷のちょうど境目付近にて若い作業員が頭を抑え、しかも不気味なほどに甲高い金属音が鳴り響いた事によって、即座に彼等は何かの資材が落下した事態を脳裏に過ぎらせて一目散にその場を逃げたのだった。これはお船の入渠整備では最も忌諱される事故で、時にはボルト一本が落ちたのに続いて数メートル近い鉄板が降り注ぐ事だである。作業員達は若い作業員を心配しながらも、二次災害の恐れを一瞬の内に懸念したのだ。

『なんだって！？ そら大変だ！』

自分の艦に起因する事故とその概要を耳にした伊藤特務艦長もさすがに狼狽し、大急ぎで甲板の端まで駆け寄って10メートル程もある乾舷の下に目を移す。幸いにもそこから見た限りでは目に付くような落下物は無く、それを確認したのか船渠の上にいた他の作業員達もドカドカと重い靴音を連ならせて駆け寄っていく。若い作業員は駆け寄ってくる彼等に手を上げてみせ、とりあえず自分の身に異常が無い事を繼げて安堵の溜め息を先輩方に放たせる。怪我も無く受け答えもハッキリしており、伊藤特務艦長も大勢の部下と共に甲板よりそれを認めて胸を撫で下ろした。良かった、良かった。

『ふう。しかし何が落ちたんだ？ リベットか？ それともネジか？』

心配の吐息も瀬戸内の潮風に拭い去られた後、ふと上がった作業員の言葉に他の作業員達も頷いて早速落下物の搜索を行ってみる。若い作業員のヘルメットには何かが擦れた様な傷が確かに出来ていて、彼は船渠の端、排水の為の溝が掘られている部分まで退いて脱いだヘルメットを見回しながら一休みし、先輩方の全員はその前で四つん這いの格好になりながら船渠の底へとしらみつぶしに視線を投げていた。

ところがこれまた一向に落下したような物体が見当たらない。無造作ながらもその辺に散らばってる工具は元のままだし、その場に控えさせてあるリベットの類もケースに入れて保管されている。故にリベットやネジの類なれば無造作にその場に一本転がっている筈なのだが、何故かしらその場には不自然に落ちている物は一つとしてなかった。

『はあて？』

そんな言葉を誰かが放って首を捻る最中、若い作業員の上司が先程事故に遭遇した際に彼がいた艦底の部分を調べてみる。外板が剥ぎ取られた箇所真下にあたるそこは鉄製のフレームが剥き出しで、明石艦の骨組み構造がよく見て取れる場所。しかしそれ故に彼は、一番外側のフレームに引っ掛けられた工具の一部を見逃さなかった。

『ん？』

その工具は先っぽが鉤状になった特殊な形態の物で、明石艦のフレームにしっかりと引っかかるように固定されている。普通に柄の部分を持って引っ張っても外れるような代物ではなく、円の動きを書くように柄を捻る事で外れるような構造なのだが、彼はその長い柄の部分に何かに擦れたような傷がある事、そしてそんな柄の傷がある先端部分がちょうど艦の乾舷の真下の位置にある事に気付く。すると振り返った先にて座り込んでいる若い部下とこの工具、そして一連の一悶着が、彼の頭の中で一つの線で結ばれるのだった。

『おい、中岸。ちょっとこっち来いや。』

即座に彼はその工具を外して片手に持ち替えながら部下を呼び、若い作業員はヘルメットを被り直しながら駆け寄ってくる。刹那、彼の上司は軽く柄とは反対の部分を持った工具を振り上げ、驚く表情のまま固まる部下に構わずにその頭へと工具を振り下ろしてみせる。

それに続いて響いてくるのは、一悶着の最初的一幕を切り開いた音色であった。

カーン！

『あいて・・・！』

『なんだよ！ 工具に頭ぶつただけじゃねえか、お前！』

ここに至ってようやく事故の真相を得た二人。上司の男は大きな声で怒鳴りつけて若い部下の頭にあるヘルメットを小突き、周りの作業員達はなんとも間拔けな事の仔細を知って安堵を越えた感情が溢れ、さらにそれを笑い声へと昇華させていった。

『なんだよ、脅かしやがって。ははは。』

『かあり、またヘマやったのか、アイツ。わははは。』

『あははは。人騒がせだな、まったくよお。』

笑い声の渦は船渠の底にいた作業員の全てへと連鎖していき、その鎖は錨鎖の如くそこから10メートル以上もある明石艦の甲板へと登っていく。伊藤特務艦長以下、明石艦の乗組員達も目にした様子から落下が落下して作業員に直撃したのでは無く、とある間拔けな作業員一名の自打球に近い事故であった事を理解。たちまち彼等もまた微笑みの鎖を構成する一つとなり、明石艦の船渠は笑いの渦で包まれていく。

こうして明石艦の整備補修中に起きた一悶着は、『ビックリしたなあ、もお。』の一言で済んだのだった。

その2日後。

明石艦はめでたく出渠となり、整備補修を完全に終えてピカピカに輝く艦体を4日ぶりに仲間達へと示す事になった。久方ぶりの海面にもその艦体の輝きは映りこみ、清々しい11月の澄み渡った晴れ空の下にカモメ達の上空直援を受けて海原を進む明石艦。その前

途を伊藤特務艦長以下の乗組員達はきつと明るい物であろうと確信し、各々の職務にさらに励まんと心を新たにす。

ところがどっこい、船渠に注水されて4日に渡る睡眠から覚醒した明石はそうではなかった。

『ぐええええ・・・、お、お腹が痛い・・・』

教育の再開だと意気込んで朝日の下に姿を現すも、彼女は目覚めた時から原因不明の物凄い腹痛に襲われてその表情を明るくすることができない。見れば明石の顔は血の気が少し失せて青褪めた色合いを滲ませており、いつものように朝日と向かい合う形で腰を下ろしたソファの上でついにダウンしてしまう。歪んだ表情の病める明石は、その身体もまた酷い倦怠感に襲われて鉛筆を握るのすらも一苦労という有様だった。

だが朝日はそんな教え子の横になった姿を見ても心配するような素振りは見せず、いつものように優しいげな笑みを輝かせて紅茶を唇から流し込んでいる。実は明石のこの原因不明の身体状態、朝日もまた経験している物であり、二人を始めとする艦魂達においては整備入渠の度に味わう苦痛なのであった。

朝日はそんな整備入渠がお船としては定期的に行わなければならない事、そしてお互いに人体の構造を学んだ者故に、人間の女性が同じく定期的にこういう状態に陥らねばならない事を併せ、その事を極めて端的に明石に教えてあげた。

『ふふふ。艦魂にも？女性の日？みたいな物があるのよ、明石。苦痛の度合いも様々で、艦齡が募ってくると和らぐ傾向にあるかしらね。私も昔はそうだった物よ。』

『ひぎいい・・・、し、死ぬるう・・・。』

『ふふふ。別に死にはしないわよ。明日か明後日くらいには自然と

治まるわ。今日はもう良いから、自分の艦に戻って休みなさい、明石。』

今日だけは朝日が用意してくれた紅茶を一口も飲む事が出来ない明石。余りの苦痛に耐えかねて朝日のお言葉に従ってまだ朝も始まったばかりというのに部屋へと戻り、出てきたばかりの布団に舞い戻ってひたすらに苦痛に耐える時間を過ごす。痛みというより苦しいの度合いがやたらと濃いその容体は相当な物で、しかもまた黙って横になっている方が苦しみが増すという困った物であった。

新たな命をその身に宿すという人間の女性が持つ大きな特徴を、何故に艦魂もまた持っているのだろうか？

共通点として模しているにも関わらず、その必要性が全くない艦魂独自の事情を考えると、明石には身体の奥底から放たれる苦痛が物凄く理不尽に思えた。しかし長く思考を巡らせるのもまた不快になる今の明石は、そんな自分を含めた艦魂の不思議を追求しようという気は微塵も起きない。

『ぬううう……く、苦しい……。』

結局この日、明石は一日中ずっと布団に包まり、黙っていられない衝動から枕をガジガジと齧^{かじ}りながら耐える日を過ごしたのだった。自分を含めた艦魂という存在の不思議は深く、そしてとても不条理であった。

第二話 「45年の月日／其の一」

昭和15年11月24日。

昨日の新嘗祭にいなめさいの余韻も新しい呉海軍工廠は、工員達もそれによつて操られる各種機械も元氣一杯の声を上げてお仕事に邁進する。工廠のお仕事をお手伝いする工作艦あさひの朝日艦、明石艦あかしにあつても賑わいぶりは同じであり、艦体に設置された大小の起重機を栈橋と甲板に往復させて資材の搬入や物品の整備補修が行われていた。寒い中で露天作業場でも工作科の乗組員達が汗を流し、寒空を舞いながら足場を探すカモメ達もその喧噪に物怖じして今日は両工作艦のラストや鋼索には近づく事すら無い。

ただ明石艦にあつては新しく搬入した工作機械の調子思ったより悪いようで、工員達は工作機械関連を担当する近隣ひろの広海軍工廠へと連絡。次いですぐさま自動車に乗ってやって来た担当の部署の技術官と共に、機械の調整と稼動試験を何度も試みてみる。

昭和16年度編成としての明石艦におけるお仕事始めは、残念ながら順風満帆とは言い難かった。

『うーん、おかしいな。電流は定格で出てるぞ。』

『潤滑油さも注してみましたが、あんまり動作は変わらないですね。』

そんな言葉を放って首を捻る乗組員達。

技術官も先日発送したばかりの工作機械の不調の原因が良く解らず、呉工廠に頼んで広工廠の上司や専門の人員と電話連絡をしながらの対応となる。結局、彼等はその日一杯かかっても満足な運転まで持っていく事が出来ず、その原因が明石艦の命である者が艦内にて猛烈な腹痛、次いで倦怠感と戦っているから等とは夢にも思わな

かった。

もちろん艦魂独自の事情を目にする事のできない彼等に理解しろという方が無理なのであり、その足元に位置する艦内から響く彼女の呻き声は瀬戸内の潮風によって波間へと溶け込んでいった。

『ぐあああ・・・、し、死ぬうう・・・。』

さてさて、そんな呉軍港の北側。

軍需部倉庫群の背後に呉駅を控えるその区域は、港務部施設も近い東西へと伸びた岸壁が続く。岸壁には呉鎮所属の駆逐艦達が隣り合う形で数多く舳先を並べ、来月より始まる艦隊訓練に備えて艦の整備に乗組員達が汗を流す。ただ明石艦や朝日艦、舳先の向こうにて艤装中の大和艦に比べると喧騒は随分と静かな物で、各々の甲板に見てとれる乗組員の数はそれ程大勢という訳でもない。故に狭い駆逐艦の甲板は船渠や工場内の工場区画から発せられる機械音もどこか遠い音色で、雪を運んできそうな強めの潮風によってすぐにその場を流されていく。

そしてその潮風が流れたとある駆逐艦の舳先。艦首旗竿の下には肩を覆うくらいの茶髪を軍帽から垂らした少女が一人、黒い外套を被って胡坐を掻いている。細い竹の棒から海面に糸を垂らし、その棒を外套越しに手で持って小刻みに肩を震わせているのは、この艦の命にして二水戦きつての大問題児である雪風^{ゆきかぜ}だった。

『へっきしっ・・・！』

吹き抜ける風によって外套越しに体温を奪われ、思わず頬杖から崩れ落ちる顔を静止させてくしゃみを放つ。外套越しの手の中から滑り落ちそうになる釣竿を持ち直し、雪風はくしゃみに続いて鼻から垂れそうになる雫をグシグシと音を立てながらすすった。強い鼻っ柱も寒さの前ではやや赤くなり、彼女はその大きな釣り目を左右で異なる大きさにして鼻頭を片手で抑えながら、胸の内より込み上がる愚痴を率直に声に変える。

『ちつきしよ……、今日はさみーなあ……。』

そう声を溢す間も冷たい潮風は絶える事は無く、軍帽からはみ出る新品のリノリウムのような色合いの髪が靡く度に雪風は肩をすくめる。自慢のこの髪が宙に舞うと輝きを一層鮮やかにするのは彼女にとって嬉しい事なのだが、この髪のせいもあって本日このように一人でお外に居なければならぬというのはやはり辛い。髪を話題にしてもてはやしてくれる仲間や姉妹がその場にいないばかりか、彼女の手にする釣竿にすらも今日は朝から反応がないのだ。

その内に雪風の寒さに色褪せる唇はみるみる尖り出していくが、彼女は胸の中にある不満の音色を口に出そうとはせず、寒い寒い艦首旗竿の下から暖かい艦内へと避難しようとする選択肢を履行する事も無い。なぜなら雪風がこの場にて待機しているのは恐怖のお師匠様による指示なのであり、その茶髪を睨まれたが故に誰もやりたがらないこの申しつけを処罰として与えられたからなのである。

ビールによる脱色に成功して師匠にカミナリを落とされた数日前。呉鎮どころか現代に生きる帝国海軍の艦魂達の間では生き字引でもある朝日の声で丸坊主にはならず済んだのだが、古き良き帝国海軍軍人を常に標榜する上司は部下である雪風の髪の色によって持ち前の癪癪を大いに発揮する事になり、最近はずこぶるそのご機嫌

が悪い。聞いた所に依ると雪風の友人にして上司の従兵を勤めている霰あられが毎日のお仕事として朝に上司の下へと出向いた際、起きて部屋の扉を開けた時から既に神通はその鋭い眼を鋭角にしてしまっているらしい。そして課業始めだと雪風や霰を含めた二水戦の駆逐艦の艦魂達が修練の場である神通艦じんつうの甲板に整列すると、上司である神通はのっけから雪風の髪に『ガルル！』と唸り声を漏らしてしまう始末。今日も今日とて一日の教練予定を通達し終えるや、『犬ー！！』と物凄い剣幕で呼びつけられて雪風は一人こうして励む命令を受けたのだった。

ただ、神通の指示は確かに罰直の側面はあるが別に雪風で無くとも戦隊内の誰かが当番制で行っている役回りでもあり、我が家にも等しいこの呉軍港の治安と安全を守る為の立派な艦魂としてのお仕事でもある。それは彼女達呉鎮所属の駆逐艦達が軍港北側の岸壁、すなわち呉駅をほぼ背後に映す格好で横一列になって整列するように待機している事、次いで呉軍港と艦魂の世界での独特の事情が深く混ざり合った結果だった。

実はこの呉軍港、その大きな港湾区画の賜物故なのか、それとも余程造成の計画が急であったのか、海軍が軍港と画定している区画の中になんと川原石港かわらいしという名の民間の港が設置されているのである。決して横浜や神戸のように大きな国際港などではないものの、帝国海軍の最新鋭艦艇が生まれる地でもある呉軍港にとって軍機と関係の無い民間の交通が近いという事はその運営においてかなりの影響が有る。現に今まさに軍港のど真ん中では機密中の機密である大和艦の艤装の真っ最中であるが故、川原石港は防諜の観点から普段は閉鎖されている。ただ、呉鎮守府納入の食料品を始めとした民製品の調達を絶つ事はできないし、船舶から列車等での輸送に切り替えるとなると輸送量に対しての経費が割高となってしまう。だから一応は民間の船舶の往来が可とされてはいるのだが、それにしてもし事前に軍港側に連絡を入れて許可を貰い、さらに実際に川原石港

に向かう際は呉軍港の入り口の島、場所にとすると呉駅の海岸沿い一帯の軍港区画から川原石港を挟んでさらに西側に位置する火工部や海軍潜水学校を設けた海岸の沖合いに浮かぶ大麗女島おおむるめの検問所で厳重な検問を受け、そこでもまた許可を受けてからではないと軍港内にある川原石港には近づく事も許されてはいないのだ。

またこれに併せ、呉鎮所属の海軍艦艇の艦魂達は民間のそんな呉軍港の事情に際し、川原石港に出入りする民間の貨客船の艦魂達に常に一定の警戒の目を向けている。

海軍艦艇がその真価を発揮するのは何でも有りの殺し合いの場。いくら国の守りだの国防だのと高尚な言葉で表しても、そこにあるのは妥協も容赦も一切無い命の奪い合いでしかない。使える手段は何でも使うし、それが最も合理的で効率が良いなら綺麗さだって無視して行動せねばならない。

それは殊に情報のやりとりであっても同様で、日露戦役の頃には旅順港りょじゅんに立て籠もったロシア艦隊の動向をなんとか探ろうと艦魂達も現地の漁船やジャンク船の命を利用し、お互いに情報を掴もうと探り合いをしていた歴史もある。何気なく通りかかってチラッと横目で見た光景すら旅順港を遠くから眺めるだけだった海軍艦艇の艦魂達には重要な情報源で、大連だいいんや仁川インチョンでの待機中はひっきり無しに現地のお船を使った情報合戦は行われていたという過去が有るのだ。

その当時の事は帝国海軍の艦魂社会でも知識として蓄積され、時代を遙かに下った頃に生まれたこの雪風も他の姉妹や仲間達と同様に上司から教えてもらっている。例え同じ日の丸を掲げるお船であったとしても、機密事項である最新鋭戦艦の情報を早々易々と与えてはならない。だからこうして川原石港を目に映せる舳先に陣取り、大麗女島での人間達による検問を通った後であってもその艦魂が不審な行動を取らぬか見張っているのであった。

だが寒い。とにかく寒い。

もう11月も下旬。県北の山間には雪が降ったらしいという乗組員達のお話を立ち聞きしたのも記憶に新しい雪風は、外套の襟をギョツと締めて容赦無い瀬戸内の潮風に耐える。せめてこれが煙突の近くであつたならどれだけ救いがあつただろうと思いつつ、雪風は釣竿を持つ手を静かに上げて糸が穿つ波間に眼をやる。すると海面上には空き缶の蓋を丸めて作った重りに続き、以前に明石に頼んで作ってもらった釣り針が姿を現す。烹炊所より銀バイしてきた魚の切り身の欠片は針に通した時と形は変わっておらず、雪風の今日の夕食を飾ってあげようとする奇特なお魚が未だ登場していない事を物語っていた。

『くっそー……。』

意図せずとも彼女の唇から漏れた愚痴は白く濁る息と供にその場にふわりと舞い上がり、先程より雪風の茶色い髪を靡かせている風に運ばれて波間へと流れていく。すると雪風の小さな身体には僅かに度合いの増した寒さが与えられ、彼女は再び釣竿を握った手を下ろして違和感の生まれた鼻をすするのであった。

その時、雪風が瞳に映す静かな波間は、軍港入り口の方より伝わってくる小波によって歪み始める。現在の帝国海軍の艦艇は所属鎮守府にて艦隊訓練に備えている事から呉軍港にあって構お船の出入りは少ない筈で、雪風は波の変化の元を辿って江田島を背後に控える軍港入り口にあたる海面へと顔を向けてみる。

『はぁん、珍しいな。民間船じゃん。』

雪風の瞳に移ったのは僅か50メートル程の船体を黒、船体中央に構築された船橋等の構造物を白に塗り分け、艦橋すぐ後ろにそびえた細長い一本の煙突に二重線のファンネルマークを描いた小振りな船。艦橋と舳先のちょうど真ん中辺りに据えつけたデリックを備えるマストを見るに、どうやら客船ではなく貨物船であるらしい。波を切り裂く船首は海面に対してほぼ垂直で、ノロノロとした速度の割りに高い白波が一際目立つ。その狭い甲板には乗組んでいる船員さんと見られる男が数名ほど立っており、やがて彼等が乗る貨物船はその船首を雪風の方から左舷に向ける。川原石港へ入港しようとしている事は一目瞭然だった。

しかし監視対象を遠めにしつつも雪風は胡坐の頬杖という格好を変える事は無く、未だ音沙汰が無い竿を持つ手をゆっくりと上下させながら横目で眺めるのみ。監視などと大層な言葉で示す彼女のお仕事の実情はただ貨物船の艦魂を見張っていれば良いだけであり、そもそもが今の日本、ましてや帝国海軍の総本山である呉に諜報行為を働こうとする艦魂が現れるような事態は今も昔も聞いた事が無かった。また、雪風の眼前の小さな貨物船は実は瀬戸内航路を販路としているお船で、直接その艦魂と顔を合わせた事は無くともその船体を見たのは一度や二度ではない。

そんな事から雪風は緊張の糸を張り詰めるような様子も無く、猫の様に大きく口を開けてあくびまで放つ始末。次いで彼女は口から白い息を盛大に放って溜め息をつき、退屈にして寒さに耐えなければならぬ現状への不満に口先をまた富士山のように尖らせた。

するとやがて彼女の背後には白く淡い光が浮かび上がるのに続いて、これまでに耳にした事が無い程にひどくしゃがれ、空を流れる雲と同じくらいのゆっくりとした老婆の声が響いてくる。

『おやあ、珍しいねええ。まだ駆逐艦には外国生まれがいるのお。』

かすれ気味で音程のブレ幅もそこそこに大きいその声は老いの塊で、生まれてまだ2年も経っていない雪風はこんなに年老いた女性の声を初めて耳にする。ちよつとした発見にも等しい物で、雪風は少しだけ募った好奇心によって頬杖をしたまま顔を背後に向けた。

『あれえ、外国人じゃないねえ。最近の帝国海軍の艦魂は髪の色も黒じゃないのかねえ。』

雪風が振り返った先に居たのは焦げ茶色の外套を被り、僅かに前屈みの姿勢に腰を曲げた白髪のお婆で、その顔もまた声に違わぬシワと幾分のシミが目立つお年寄りの女性の顔。毛糸で編んだ被り物を白い眉毛の上まで被り、その隙間より流れる白い髪は艶も無く、真っ直ぐになろうとする癖も既に失っているらしい。無造作な曲がり具合のまま瀬戸内の潮風に揺られ、シワだらけの唇から舞い上がる白い息と一緒に宙を踊る。目の輝きも若さ溢れる雪風と比べれば勢いは薄く、目尻が既に深い幾重ものシワに引き摺られるように垂れて何もしないままでも笑みを構成させていた。着ている服が地味な色合いなのは如何にも民間の貨物船の艦魂らしい服装で、人間で言えば工廠の隅っこで働いている労働者の姿その物である。

ただどうにもさつきから放つその言葉を耳にするに、このお婆は雪風を始めとした駆逐艦の艦魂達をそこそこに見てきた経歴があるらしい。まだまだ幼い日本人女性の顔つきの横顔を覗かせた雪風をつぶらな瞳に映し、ビールで脱色した明るめの茶色の髪と掛け合わせて雪風の生まれに考察を投げてくる。

すると最近はこの髪のおかげで散々な目に会っている雪風であるから、珍しげに見てくる老婆の視線に段々と煩わしさを覚えてきた。今日も今日とて寒い中のお仕事を申し付けられた原因である彼女の髪は他ならぬ彼女自身にその責があるのだが、戦隊の部外者どころ

か帝国海軍の艦魂ではない者にまでそれを見通されるのは、鼻っ柱の強い雪風にあつては相当に不満である。

やがて雪風は横顔を向けたままその大きな釣り目に角度を与え、ツンと尖らせた口を開いて老婆の正体を確認し始めた。

『あんだよ、アタイの髪なんかどーだって良いだろ。それよりあの貨物船は？ばっちゃん？のかい？』

不満げ一杯に歪めた表情でぶっきらぼうな物言いをしつつ、雪風は右手の親指を今まさに川原石港へとゆっくり進入していく貨物船に向けてみせる。すると老婆は屈託の無いシワくちやの笑みを浮べて答えた。

『んふふふう。そう、あれは？ばっちゃん？の分身よお。』

まるでトンボが止まりそうな程にゆっくりとした声で応じる老婆。初対面にも関わらず？ばっちゃん？という呼称を用いる雪風の失礼に眉を吊り上げる素振りは無く、むしろそんな自身への呼称を楽しむようにして老婆は雪風のすぐ隣まで歩いてくる。その足取りもまた靴の裏を終始甲板に擦るような感じで、彼女が既に膝を高く上げての歩行もできないご老体である事を無言で雪風に教えた。

ただこれほどまでの高齢の艦魂であればこそ、帝国海軍の駆逐艦の事を自分が生まれる前よりこの老婆は知っているのだらうと雪風は考える。いざ隣まで歩いてくると老婆の方からは独特の香りが漂い始め、ガソリンの匂いが好きという奇妙な嗜好を持つ雪風はその独特の香りに鼻を鳴らしながら竿を握った手を上下に動かした。

『なにか釣れたのお？』

すると老婆はしゃがみ込み、無垢な笑みを近づけて雪風の釣果を

問う。雪風は鼻水をすすりつつ尖らせた口を開き、老婆とは雪風を挟んで反対側にあった空のバケツを手にとって声を返した。

『ぜーんぜん釣れねえよ、ちきしょう。あゝあ・・・、アイナメ食いたいなあ・・・。カレイ食いたいなあ・・・。』

旬のお魚の名を連ねる雪風の表情は寒さと空腹で歪んだ。胡坐に頬杖、一日中座りっぱなしという楽な姿勢であっても、師走が迫る寒さに耐えるのだけでも一苦勞であるから、朝ご飯をちゃんと食べたとしても腹が空くのは無理もない。おまけに雪風の平均的ディナーメニューは缶詰がほとんどで、取れたてのお魚というのは結構豪華なおかずである。それ故に罰直の上でのお仕事の合間をこうして釣りに勤しんでいる訳だが、残念ながらこれまでの釣果は竿の持ち主を嘲笑うかのように無しである。その上でなんだか暢気なお婆さんの相手もしてやらねばならない。決してサボるなどという選択肢は浮かんでこないものの、雪風で無くとも退屈にして面白みの無い時間に熱意を込められる物ではなかった。

あゝあ、なんでアタイがこんな目に・・・。

口を尖らせて脳裏で呟く雪風。横目でチラッと隣を見ると老婆はしゃがみ込んで微笑んだまま、雪風の竿から波目へと垂れる糸をじっと眺めている。ほのかに流れる潮風が老いを滲ませる香りを雪風へと運び、再び風の音に混じって雪風の鼻を鳴らす音が静かに響いた。

その内に隣同士に座った形での沈黙を嫌った雪風が物は試しだと釣竿を上げてみたが、そこには見事に餌の切り身だけを取られた針が水面より姿を現す。

『あ。くっそく。。。』

『んふふふう。魚は賢いねえ。』

いつの間にやら餌だけ盗られていたらしく、雪風が顔をしかめる横で老婆は相も変わらずニコニコと微笑んでいる。お船の命として雪風という若者を嘲り笑おうとする様子が無いのは傍から見ても一目瞭然であったが、先程より空腹と退屈で集中できない雪風にはその声は心地良い物ではない。なんだか魚達の嘲笑の声をこの老婆さんに代弁されているような気がし、年配の者である事も忘れて思わずその大きな釣り目を鋭くして視線を投げる。するとその視界一杯に老婆の手に握られた饅頭一個が映る。

『ぬお。。。』

『お腹空いてるなら食べなさい。差し入れて持ってきた物だからねえ。』

真珠色の餅肌は老婆のシワだらけの指との対比でより一層目立ち、雪風の瞬間的な苛立ちはその火勢を一挙に沈静させる。するとそれまでと同じ老婆の微笑みがそれは優しさに溢れた物に感じ、雪風はゆっくりと彼女の手から饅頭を受け取りつつ声を放った。

『ばっちゃん、ホントに良いのか？』

『ええ。たとえ食べなさい。何個もあるからねえ。』

快く勧められた饅頭の誘惑に抗うだけの気力は今の雪風には無い。白い歯を見せて笑うと雪風は大きく口を開けて饅頭に齧り付き、最初の一口で既に手の平より一回り大きな饅頭の半分を喰いちぎってしまう有様だった。その間にも雪風は垂れ落ちてくる鼻水をすすりながら饅頭を口に押し込み、隣に腰を下ろして微笑を湛える老婆の吐息よりも速い勢いで寒さにより赤く染まりつつある頬を上下に

動かす。

やがて雪風が老婆が持ってきた紙袋の中にある2つ目の饅頭に手を伸ばした頃、老婆はふと視線をお互いが座る正面、すなわち雪風の艦首向こうにある波間へと向けてその瞳をさらに細くする。もちろん老婆の瞳に映るのは銀色の雲が目立ち空を映した呉軍港の間ではなく、むしろその波間を一刀両断するかのように身を浮べている艀装作業中の巨艦、大和艦であった。

『秋津洲あきつしまからもう50年……。大きな船だねえ。』

『あん？　どーした、ばっちゃん？』

早くも3つ目の饅頭を咥えたままで雪風が目をやると、隣に座った老婆は何か感慨深げな瞳を輝かせてじつと正面にある大和艦を眺めていた。なんとと言っても帝国海軍最新鋭の戦艦であるというのだからこの老婆で無くとも視線を集めるのは理解できる事だが、老婆の表情には不思議と物珍しいといった雰囲気は微塵も籠められていない。大和艦の巨大さは帝国海軍の一員である雪風やその仲間達も含め、初めて目にした時は腰が抜ける程にビクリして意図せず絶叫してしまったものだ。

しかしこの老婆、驚きの感情が殆どその姿からは見て取れず、なにやら大和艦を見て考えを巡らせている風でもある。するとその内に老婆は視線を眼前の大和艦に向けたまま、再びそのゆっくりとした言葉遣いで雪風に質問をいくつか投げてくる。

『本当にあの船は大きいねえ。艦首から艦尾までのくらいあるのお？　砲郭はまだ艀装中なのお？　備砲が一つも見当たらないねえ。』

どうやら大和艦に興味を抱いたらしく、老婆の口より出てきた質問は全て眼前の艦に対しての物だ。雪風は声を耳にした瞬間に年寄

りの好奇心なのかと思ってその場の話題にしてみようかと思ったが、老婆の言葉の中に「砲郭」という言葉があった事に思考を一旦停止する。なぜならごく普通のお船にとって砲郭等という言葉が出てくる機会は少なく、そも軍艦の構造としての用語であるその言葉を、人生経験豊富な高齢とは言え何故に民間の貨物船の艦魂であるこの老婆が知っているのか、と雪風はふと疑問に思ったのである。併せてつい今しがた、この老婆は艦載砲を世間一般的な「大砲」ではなく、「備砲」というちょっと小難しい言葉で示してもいる。どちらも海原の上で砲火を交える事を生業とする海軍艦艇の世界でしか用いられない言葉であり、そうなると貨物船の命であるこの老婆が何故にそんな海軍艦艇への知識を得ているのか益々怪しい。

雪風はそんな考えを募らせて僅かに首を捻りつつ老婆の横顔を覗き込む。すると老婆は再び妙に詳しい帝国海軍の事情も声に乗せ始め、雪風はここに至ってこの老婆を自身が警戒すべき対象の範疇であると判断した。

『昔はまだ横須賀とか神戸でしか海軍のお船は造れなかったのにねえ。今はもう呉でこんなに大きな船を造れるようになったんだねえ。あんなに畑や漁師小屋ばかりだったのにねえ。』

そのシワに包まれた目で見たのであろうか、ずっと昔の呉の様子と帝国海軍の造船事情を漏らした老婆。

怪しい。非常に怪しい。

饅頭の味はとても美味しい物でこの老婆の御恵みには感謝の念もあるのだが、どうもその言動が先程から引っかかる雪風はスツとその場に腰を上げる。もしかしたらさっきまで食べてた美味しいお饅頭は自分を安心させる為の物で、本当の所は油断した若輩から眼前の最新鋭戦艦の情報を引き出そうとしているのかとも思える。

また、上司の神通よりもあの大和艦という名の巨艦が大変に厳重な機密として扱われている事を雪風は耳にしており、事実、眼前で艀装中の大和艦の艦内では工員の迷子がほぼ毎日のように発生している事も耳にしている。厳重な機密の程度は艀装工事に直接関わる作業員が使用する図面にすらも及び、個人個人が担当する作業区域以外の図面は決して手渡されたりしないのだという。あれほどに大きな艦であればその内部も相当に複雑で広く、例え専門の工員さん達であっても図面が無い事から自分達の艦内での位置を見失って迷子になってしまうのだ。

人間の世界でもこれ程までに氣を使っているのが大和艦の存在である。それを幾分専門的な用語、知識まで用いて嗅ぎ回するような様子の老婆を、雪風は帝国海軍の秘密に手を伸ばそうとする諜報員、船の命の世界によるスパイの類なのではないかと考える。よって雪風はこの老婆を、信賴を置いて相応の判断ができる立場を持つ者の下へと連れて行く事に決めた。もっとも人の良さそうな風貌と歩き方すらも既に若々しさが漂っていないこの老婆に、背後から銃剣を突きつけて連行しようという選択肢は雪風には沸いてこない。幸いにも老婆はまだ大和艦を眺めたままで雪風の疑惑の目には気づいていない事から、雪風は変に波風を立てて逃げ出す意識を持たせぬようにそれとなく連行を試みてみた。

すぐさま雪風は両頬を手で揉んで自身の表情を柔らかくし、殺氣や敵意の類が自分に無いという雰囲気を整えた後に声を掛ける。

『あ、ばっちゃん。ちょっと良いか?』

『んん? どうしたのお?』

雪風の声を受けると、それまで大和艦を眺めていた老婆は雪風に顔を向けてくる。同じ小柄な体格の持ち主である為に老婆の微笑は雪風の視界の大半を埋め、悪氣や企みとは無縁な感じもする朗らかなその表情は逆に策を胸に秘めている雪風をギクリとさせる程であ

った。だが咄嗟に雪風は口の中で舌を動かして齒の隙間に残っていた饅頭の餡を探り当て、その甘さによって口元をなんとか緩ませながら話を続ける。

『あ、うん。残ってる饅頭を仲間に分けてやりてーんだ。それにアタイ、あの艦の事、ホントはまだよく知らねーんだ。んでも仲間なら知ってると思う。アタイがみんなにばっちゃんを紹介してやるよ。』

『あれえ。良いのかい？』

あまり上手ではない作り笑いを浮べる雪風だったが老婆はその申し出に瞳を糸の様に細め、自ら饅頭の入った紙袋を抱えて雪風の後ろを歩き始める。二人が居る雪風の分身の甲板は両舷に渡した板で舳先を並べる駆逐艦の列の端まで繋がっており、雪風と老婆は転移の為に目標の艦に対して最寄の駆逐艦までを歩いた。その間にも屈託の無いシワだらけの笑みが振り返る雪風の視界に入り、なんだか嘘をついてこうして連れまわしている事にちよつとだけ罪悪感にも似た感情を募らせる雪風。その都度、さっきの妙に専門的だった老婆の言葉とそれに対する疑惑を思い起こし、彼女は背後に続く老婆を自身の直属の上司、神通の下へと連れて行くのだった。

第九三話 「45年の月日／其の二」

呉軍港北側の棧橋に連なる駆逐艦の群れと、それを右舷に眺める形で一隻の小さな民間の貨物船がノロノロと川原石港かわらいしへと舳先を進めて行く中、軍港南西側の砲塔組立工場や水雷発射場に程近い海上には、めでたく来年度も二水戦の旗艦を務める事になった神通艦じんつうが静かに浮かんでいる。

4本煙突に代表される大正生まれの古い艦影は相次ぐ近代化改装を経ている中々真新しさを目立たせる事はできないが、帝国海軍最精鋭部隊の旗艦らしく威厳と気品を備えた独特の雰囲気を辺りの海面に映す。二等巡洋艦らしい流麗でスマートな艦体も艦橋や構造物が設置された前檣の周りとはとても重厚で、線の細さを補うだけの力強さを兼ね備えたその風貌は海軍艦艇の象徴である戦艦にだって負けていない。そしてその力強い風貌を見事に引き継いでいるのは、この神通艦の命である神通にも当て嵌まる事だった。

『どらああッ!!』

今にも雪を放たんとするかのような分厚い銀色の雲も多い空を、力任せに一気に切り裂く怒号。その音量と迫力によって水面が潮風に催促される事無くざわざわと揺れる中、神通艦の艦尾甲板からは間髪入れずに甲高く震える竹刀の音が発せられる。もちろんその音色を奏でた竹刀が握られた手の先には、鬼の戦隊長である神通のご立腹のお顔。対して竹刀の剣先がビュンと空気を引き裂く音と残像を伴って叩き込まれた先には、神通の部下である柔道着を身に付け

た少女の小さいお尻があった。

『ぐああっ……!!』

二水戦においてはいつもの光景であっても、この上司によるお仕置きお仕の辛さは生半可な物ではない。衝撃と電流が走ると供に少女のお尻からは一瞬感覚が失せ、戻る頃には津波のようにヒリヒリとした鈍痛が打ち寄せてくる。余りの痛さに少女は思わずその場にしゃがみ込み、涙目になりながら背中あ中に回した両手でお尻を擦り出す。だが即座にその少女はその場を同じくして同じ柔道着姿である他の少女により腕を掴まれ、否応無く強引に立たされて上司に向けて身体を正対させられた。

『ほら、ちゃんと立って、天津風。^{あまつかぜ}』

『う……ぎい……。』

痛みを堪える天津風と呼ばれた少女は強く噛んだ歯を唇の隙間から僅かに覗かせ、立ち上がらせてくれた少女へ満足に返事を返す事もできない。しかもやつとの事で相対した二人の上司は、例えその様子が姉妹による助け合いの場面であっても容赦の無いお叱りを飛ばしてくる。

『どかんか、初風!^{はつかぜ} 妹だろうが新兵だろうが私の命令無く助ける事は許さん!!』

『は、はいいっ……。!』

鋭く吊り上がった神通の眼光とお怒りの声に慄いて即座に返事をし、未だに苦悶に歪んだ泣き顔の少女を気遣いながら腕から手を離れたのは、二水戦所属の第16駆逐隊の一員である初風。今年の半ばぐらいから二水戦に配属になった駆逐艦の一隻、初風艦の艦魂であ

る。姉の雪風ゆきかぜよりもまだ持っている経験は浅く、16歳か17歳くらいの少女像という点では先程まで腕を抱えて立ち上がらせていた天津風と呼ばれた少女と何も変わらないのだが、天津風と違って曲がりなりにも二水戦に属する多くの艦魂の一員として頑張ってきた経歴を彼女は持つ。先月の観艦式にも二水戦の者として参加しているから怖い怖い神通という上司に対する免疫も多少は持てているのだが、如何せんこの神通の存在が恐怖の代名詞として大き過ぎる故にその指示には反論できない。今しがた放たれたその言葉にあった様に、例えば目の前で涙目となっている天津風がつい1週間程前に同じ駆逐隊へと編入された実の妹であったとしてもだ。

やがて初風が切り揃えた前髪の奥で心配の眼差しを浮べながら数歩下がると、お尻の鈍痛に上半身が幾分傾いた天津風の前に上司がツカツカと歩み寄ってくる。次いで眼前の神通の顔をまともに見れない天津風に浴びせられた声は、彼女の生涯では初めてのお仕置きに続く初めてのお叱りの言葉であった。

『お前、新兵の分際で初風達の教練の最中によそ見してるとはどういう了見だ!!』

『う、す、すみませえんっ……。』

『同じ戦隊、それも同じ16駆なら目を向ける先も同じにせんか! お前一人が隊列を乱しでもしたら戦隊全員が戦死になるんだぞ!』

小さな声で天津風が詫びの言葉を放つも見事に神通の大きな声に掻き消され、それと同時に天津風は華奢な肩をビクンと震わせてロボロと涙を溢す。こうして彼女が怒られる事のそもその発端は、甲板にて繰り広げられる柔道の教練にておぼつかない自分の乱取りの番が終わった事に気を緩め、初風を始めとする先輩らが入れ替わりに乱取りを始める最中に波間の一角に短い休息として視線を投げていただけの事なのだが、先輩達を指導しながらも神通はそんな新兵の様子を見逃してくれなかった。即座に『この馬鹿がー!!』と

叫ばれてハツとした天津風だが時は既に遅く、むんずと奥襟を鷺掴みにされてみんなの前に連行された末に今しがたのお仕置きへと繋がっているのだ。

しかもまた最近の上司は、天津風にとっては初風と同じ実の姉にして同じ16 駆を組んでいる雪風の問題児っぷりに、その機嫌を大いに損ねてしまっているのです。天津風はすぐさま手加減無しのお叱りの咆哮を頭から浴びせられ、げんこつに続いて上司よりお尻を竹刀で思いっきりぶっ叩かれてしまった。そして彼女の生涯における初めてのお仕置きは、激痛と恐怖の言葉以外を天津風の意識に現す事は無い。神通の唇から砲声のような声が漏れる度に彼女は肩をすくめ、完全に気圧されて謝罪の言葉を発するのも次第に出来なくなってくる。

初風を始めとする天津風の仲間達は天津風をとて可哀想に思っ
て眺めていたが、その心配が上司である神通に抗える度胸へと昇華するまでには至らない。それぐらい二水戦の少女達が恐れているのが、二水戦旗艦の命たる者である神通なのだ。

ただこの場に居る10人近い少女達の中で、18 駆所属にして未だ捻挫が完治していない故に松葉杖を伴う霞と神通の傍らに常に控える従兵の霰は、お互いに現在の二水戦における最古参の者として、本気で怒った神通がこんな物ではない事を肌身を通して知っている。神通がその人柄を幾分変えた明石との出会いに次いで、ちょうどその時に今の天津風のように新兵として二水戦へ配属されてきた霞と霰。思い出せば既に1年以上前の事であるが、その出来事よりも以前の神通は怒ったら最後、躊躇無しに顔を殴るわ鼻や歯が折れるまで踏みつけるわと、その凶暴さは尋常な程度ではなかった。もちろん今でも怒ると非常に怖い人柄だし、身体で教える事を自身の持つ一番の教育姿勢としている所はちっとも変わっていないのだが、初風に対しては終始げんこつと怒号とお尻への一撃以上の制裁を科そうとはしない。それは鬼の戦隊長っぷりを前面に押し出して部下

への怒りを示しながらも、神通自身がそれでも尚自分の言動に理性という枠を当て嵌めて意識的に自分を抑制しているからに他ならず、霰と霞はそんな上司の胸の内をなんとなくだが察する事が出来ていた。

やがて神通はご立腹の色合いの濃い表情をそのままにしつつ竹刀を肩に乗せて腕を組み、先程よりは遥かに静けさの纏われた声で眼前にて泣きじゃくる天津風に語りかける。その姿には「これ以上もう部下に体罰を与えるつもりがない。」という神通の意志が示されているように、霞と霰には思えてならなかった。

『良いか、天津風。二水戦には仲間に合わせてる事ができない奴も、合わせるつもりが無い奴もいらん。私達二水戦は所属する全員が意識を一致させた上で、私の思う通りの戦をする部隊だ。例えどんな事であっても反抗する事、怠ける事、甘く見る事は絶対に許さん。教練中であつたなら、私が？教練終わり？と言うまでは休憩など無いと思え。二水戦での信号ラッパは私の声、お前達が見るのは私の指が向く先、そして私が掟だ。解つたな？』

『ひぐつ・・・、ふ、ふあい・・・。』

神通の声色から怖さをそのままに勢いだけが薄れて行くも、天津風は頬を伝う涙を止める事が出来ずに俯いて弱々しい返事を返すのみ。小さな手で抑えたお尻もまだ熱さと鈍痛に支配されて感覚は無く、やや曲がった背筋を直して上司から教えを請う事などは彼女には到底できない。その上で姉を始めとする仲間達による助けも得られないとなれば、まだまだ未熟な天津風には泣く以外の選択肢が無かった。

その前面にて仁王立ちする神通は慰めの言葉の一つもかけてやらず、鋭角のみで構成されたひし形の瞳が流線へと変化する事も無い。そんな上司の姿は怒られた当事者の天津風で無くとも部下に当たる少女達には渾名に違わぬ鬼の様に思えてしまが、それと同時に、つ

いさつきまでの激しい剣幕、振り下ろされる竹刀に始まるお仕置き
の時間が突然として収束した事の裏側を悟る者は、霞や霰を始めと
してそこそこにその場にはいたりもする。叱る側の神通の胸の中は
あたら新兵を虐めようという気だけで染まっている訳ではないので
あり、むしろこの天津風という若者に相応の期待を掛けているが故
により厳しく当たっているに過ぎない。

まだまだ生まれたばかりの泣きじゃくる天津風だが、彼女の分身
である天津風艦には試作型の高温高压ボイラーが艦の心臓として搭
載されており、帝国海軍の全艦艇における将来に大いに貢献できる
可能性が秘められているのである。そんな天津風艦が仮に戦に赴い
たとして簡単に水漬く屍になってしまふ様ではいけないのであり、
その為に神通は心を鬼にして些細な失態にも関わらず彼女を叱り飛
ばしたのだ。決して態度が気に入らないとか、新兵のくせに生意気
だ、等と自分の基準でその場限りの憎悪を抱いた訳ではない。11
月15日の艦隊編成で二水戦所属とされた時より、この天津風は神
通にとって可愛い可愛い部下に他ならないのだ。

故に神通は例え最近の雪風の髪の色にご機嫌が斜めであっても、
湧き上がる怒りとほんの少しの八つ当たりの感情をグッと堪えて竹
刀とげんこつを控える。同時に天津風が恐怖と激痛によって自分に
顔を向けてこれない状態にも関わらず、縮み上がったその小さな心
で返事をした事をもってお叱りの時間を正式に終える。その終了の
合図は先程の神通の言葉にもあった通り、彼女自身の指示の声であ
ったのは言わずもがなだ。

『・・・よし。もう戻って良い。それと初風。お前もちゃんと妹を
気遣ってやれ。犬が居ないなら16駆の最先任はお前なんだからな。

』

そう言う神通は肩に竹刀を乗せたままで踵を返し、背後より初
風のちよつと怯えた音色の返事を受けながら甲板の端っこにポツン

と置かれた椅子へと歩を進めていく。怒る時にはしっかりと怒るが、それが教育であればメリハリを設けるのが神通という艦魂で、10代後半の容姿を持つ周りの少女達よりも10歳以上歳を重ねた彼女はピタリとお叱りを終えてしまう。神通は怒るととても怖いがその教育の実情とは大概いつもこんな感じであり、厳しさが随分と目立ちますものものあくまでもダメな事をダメだと伝えるだけで終わりなのである。

しばらくするとまだお尻を擦りながら涙で頬を濡らす天津風を励ましつつ少女達は再び柔道の教練に励み始め、それを細くした瞳に映しながら神通は静かに椅子へと腰掛ける。怒るのも疲れるのか、それとも叱責で忘れていた寒さを再確認したのか、神通は短く疲労感の滲んだ溜め息を放って椅子の背もたれに背を大きく預けた。するとすかさずどこからか葉缶を手にしてきた霞が神通の傍へと歩み寄り、乗組員が食事に使う金物の碗をポッケから取り出して上司へと差し出す。

『戦隊長。お茶、飲みはるどすか？』

『む？　おお、すまん。』

すっかり12月も目前となった最近の呉は海辺の地であってもやはり空気が乾燥しており、そんな中で大声で怒鳴っていた神通は喉の渇きを声に出さずに覚えていたが、もう従兵として傍らに置いて1年以上の時を得た霞はそんな上司の事などお見通し。霞や雪風に比べれば何事にもトロい性格であるが故に運動もお勉強もそれほど優秀な成績は納めていない霞なのだが、その市松人形のような黒いおかつぱ頭の中には大変に他人への気遣いを意識できる優しさを備えているのが彼女の良い所である。最近はこの霞による身の回りのお世話によって神通もだいぶ癒しを得ていて、差し出された碗を早速手にしながら霞が手にする葉缶の事を何気なく尋ねてみる。すると返って来た霞の声は、どこまでも上司への気遣いを忘れない彼女

の真心が良く示されている内容であった。

『霰、その葉缶はどこから出した？ この寒い甲板になぜこんなにも湯気が出るぐらいに暖められた葉缶がある？』

『はい。教練の準備の時から用意しとったんです。戦隊長の4番煙突の根元に置いて暖めておいたです。』

独特の京訛りにして鼻から息を抜きながら放ったような高めの声で言い終えるや、霰は艦首方向やや上方へと顔を向け、神通も碗に注がれたお茶の温もりで手を温めつつ顔を霰と同じ方向へと向けてみる。見れば神通や霰を始めとした艦魂達がいる艦尾甲板より最も近い煙突からは薄っすらと黒煙が一条だけ靡^{なび}いており、その煙突の下に位置するボイラーが運転中である事を二人に伝える。同時にボイラーの中より発せられる熱気がその煤煙に伴われている為に4番煙突の周りは相応の熱を発しており、霰は保温を目的に煙突の熱遮蔽板の無い部分に上手く葉缶を置いていたのである。夏の酷暑の際は汗を掻きながら眠る程に蒸し暑い環境に陥らせる大きな原因でもあったりするが、寒い冬においてはこうして暖を取らせてくれるお役目も兼ねているのが神通艦における煙突の在り方だった。

無論、この艦の命である神通はそんな自分の分身における煙突の事情は百も承知であり、霰が用意してくれたお茶の温もりの真相を難なく理解してみせる。天津風へのお叱りと同じキツと力の籠った瞳を柔らかくする事は無かったが、それでも神通はお茶の入った碗を唇に添えて喉を静かに鳴らしながら部下の心遣いに深く感謝した。まして織田信長公を深く尊敬する神通には霰のお茶の用意が、なんだか主君の草履を懷に秘めて温めていたという逸話で有名な信長公に仕えていた頃の豊臣秀吉公と重なって見えてしまう。言うまでも無く温もりの根本は霰の身体による物ではないから完全に一致するとは行かないが、寒いこの季節に妥協して冷えたお茶を自分に出そうとはしない霰の姿勢は神通を喜ばせるのに十分である。ちょ

っとお茶の熱さを我慢しつつ神通は唇に添えた碗を大きく傾け、すぐ傍で菓缶を手に視線を向けてくる霰から口元が隠れたのを一瞬の流し目で確認した後、胸の中から込み上げてくる感情を開放してほんの小さく微笑むのだった。

だがその微笑は一瞬にして終わりとなってしまう。

神通としては元より長く微笑を浮べるつもりは無かったのだが、ここ最近の所業から意識せずともそのお顔に怒りの色を与えてしまう声が彼女の耳へと流れてきたのである。

もちろんその声は二水戦の大問題児の物だ。

『あ、戦隊長〜。』

刹那、神通はまたまた鋭角のみで構成されたその吊り上がった目に鈍い輝きを宿し、声に対してその方角を見ようともしせずに空の一角を睨みつけて舌打ちをする。同時に些か乱暴な感じで空になった碗を持つ手を傍らに控える霰の前に伸ばし、霰は間近で感じとれる上司のご機嫌にすぐに反応して恐る恐る菓缶を添えた。やがて菓缶の口から漏れる小さな滝の音が響き、自身への気遣いが籠ったお茶の温もりが神通の手を温めていくが、それに反して神通の表情はちっとも柔らかくはならない。小走りで近寄ってきた雪風もそのご機嫌の斜めっぷりがすぐ解いたらしく、かなり気まずそうに唇を歪ませながら上司の真正面へとやって来て気をつける。

『・・・なんの用だ。犬。』

不機嫌な事この上ないといった表情で声を発する神通の前で、雪風は直立不動の姿勢を取りながら敏感に伝わってくる恐怖によって

生唾を飲み込んだ。やはり相当に雪風の髪の色がご立腹なようで、潮風によって僅かに舞い上がる雪風の髪を一瞬だけ見ると神通は眉間に小さくしわを寄せる。だが雪風としてもお仕事としてこの場に來た訳であり、上司の下へと連れてきて甲板の端っこの辺りに待たせている老婆はひよつとすると帝国海軍の敵の疑いもある者。いくら神通が怖くてもそれに乗じて放っておける懸案では無いと考え、少しオドオドしながらも雪風は神通の元へと來た理由を話し始めた。

『せ、戦隊長。じ、実は川原石港に來た奴で、なんかおかしなばっちゃんが來たんすよ。』

『ふん。お前の髪の方がおかしいわ。馬鹿者が。』

『ぐひ……。』

取り付く島も無い上司の返答に雪風は思わず小さな悲鳴を漏らす。まだげんこつが飛んでこないだけマシではあったが、何も失態を晒していないにも関わらずこうしてお叱り一步手前の雰囲気に含まれるのはやはり辛い物である。根がスラリと長身の美人のお姉さんという容姿を持つ上司であつてもその怖い顔の迫力が薄れる事は無く、雪風は次の言葉を放つのが億劫になつてしまった。

ただそんな上司や自分も含めた帝国海軍に対しての不屈き者を見つけたとなれば、失つた上司の信頼も取り戻せるかも知れないと雪風は考え直し、怖気づく胸の中に鞭打つて早速ここに來た理由を告げてみる。

『あ、あの、それがツスね。なんか民間船の艦魂のクセにやたらと海軍の言葉使う奴なんすよ。例の機装中の大和艦をずうっと見てたツスし、ちよつと怪しいんすよお。』

『ああん……。？』

どうやら部下が不審な輩を見つけたらしい事をようやく神通も聞

き入れ、生来が嘘をついたりはしない雪風の性格を見抜いていた手前もあって神通は部下の報告を疑うような事は無かった。それに神通としても怒りに任せてこういう大事な報告を蹴飛ばしてしまうのは上司としての怠慢でもあると考え、傍らにいる霰に無言で手を伸ばして3杯目のお茶を催促しつつ話題の不審者の事を訊いてみる。

『で、ソイツは今どこに居る？ 川原石港か？』

『いや、気の良さそうなばっちゃんなんで、上手く言ってココに連れてきたッスよ。呼んで来りゃ良いッスか？』

『む、連れてきたのか。よし、なら呼べ。』

ようやくマトモな会話の体裁を築き、その上で早速上司より指示を受けた雪風。とりあえずはこれ以上にお叱りの雰囲気味わう事もないと一人胸を撫で下ろし、『うッス。』と独特の返事を元氣良く放つとすぐにそれまで上司を正面に捕らえていた身体を甲板の一角へと向けて口を開く。

『おい、ばっちゃん！ こっち来いよ！』

口元に片手を添え、もう片方の手を頭上で振ってそう叫ぶ雪風の声に、付近の甲板で柔道の教練が続けていた少女達は何事かと思っ
て神通と雪風へと視線を集める。『何だ、何だ？』と小さなどよめきも起こるその中で神通は相変わらず椅子に腰掛け、3杯目のお茶が注がれた碗を唇に添えて静かにお茶を流し込みつつ、ゆっくりと眼前の雪風が声を張り上げている方向へと視線を流した。

するとそこにはあるのは、僅かに曲がった腰を起す事無く、足の裏を引き摺るような感じで歩く老婆の姿。地味な焦げ茶色の色合いを持つ外套を身に纏い、ほつれも目に付く毛糸の被り物で頭を包んだいでたちで、しわに包まれたつぶらな瞳を細くして甲板にいる少女達をゆっくりと一瞥しながら歩みを進めてくる。背の高さも14

0センチ台の雪風と大差は無く、些かみすばらしいその格好も含めて、いかにも小さな民間の貨物船の艦魂という風体であった。

しかしこの時、興味本位の視線が雪風や霰といった少女達から一斉に放たれる中、神通はその瞳を大きく見開くと同時に、その老婆の顔が自身の記憶の中に存在している事に気付く。刹那、神通は咄嗟にその老婆が歩み寄ってくる方向とは反対の方へと顔を向け、たまたまそこに立っていた霰にまだ口に含んでいたお茶を圧搾空気の噴出の様にして盛大に吹き付けた。

『わあああゝっ・・・！』

『げへっ・・・！　ごぼっ・・・！』

突如として上司の口よりお茶を吹き掛けられた霰。咄嗟に顔の前に手を掲げてお茶の噴出から身を守るところか、驚きという感情を覚える間も無くびしょ濡れになってしまい、もう既に神通の口からお茶の噴出が止んだ頃合になってようやく頭を抱えながらしゃがみ込む始末。舞い上がる吐息が白くなるこの季節に頭からびしょ濡れとなった故に、間髪居れずに霰は冬の潮風が持つ寒さによって襲われ始める。『っ、冷たい・・・。さ、寒い・・・。』等と呻き声を上げて甲板にうずくまり、唾然とした彼女の仲間達は何が起こったのか理解できずに呆然とその光景を瞳に映すだけだった。

また、霰の横では椅子に腰掛けつつも腰を大きく折り曲げた神通が酷く咳き込んでおり、規律が完全に乱れた吐息が荒々しい咳と化す都度、丸くなったその背中や肩を大きく上下動させていた。

対して雪風は老婆を呼んだのと同時に上司が咳き込み始めたその原因が良く解らなかったが、きっとお茶に咽ただけだろうと思い、とりあえず上司の咳き込みが納まるまでの繋ぎとして間近まで歩み寄ってきた老婆に声を掛ける。

『おい、ばっちゃん。いきなりだけどさ、ばっちゃんはナニモンだ？　なんで砲郭とか備砲なんて言葉を知ってんだよ。それにさっき、昔は海軍の船は神戸と横須賀でしか造れないとか又かしてただろ？　なんで民間船のばっちゃんがんばる難しい言葉とか、昔の海軍の造船なんて知ってんだよ？』

『んん？　んふふふう。』

出会った際の気の良い会話からちよつと雰囲気を変えた雪風の声を受けても老婆は微笑を崩さず、ゆつくりとしていて語尾が間延びする独特の声で笑うばかり。その笑い声に少し小馬鹿にされたような感覚を雪風は覚え、頼みの上司が度合いを薄めつつも未だ酷く咳き込んだままだである事を勘定して、この場は自分一人でこの怪しい艦魂を問い質して見せるしかないと意気込みを新たにす。大きな釣り目に力を込めて師匠と同じ様な形にし、まるで神通の雰囲気だけを真似るかのようにやや大股で足を開くと腕組みをして老婆の前に構えてみせた。

すると老婆は口元に手を当てて笑い声を押さえ込み、師匠のような鬼にはまだまだなりきれない眼前の雪風の姿を愛でながら声を返す。

『んふふう。そうだったねえ。ばっちゃん、自己紹介もまだだったねえ。ばっちゃんは昔ねえー。』

『こっ・・・、こんの馬鹿がああ！！！！』

老婆のゆつくりとした口調はようやく雪風が呈した疑問の回答になろうとしていたが、それはやっとの事で吐息に規律を取り戻した神通の咆哮によって遮られる。雪風は驚いてすぐ真横の椅子にあった上司に目を向けるが、そこに上司の姿を捉えきる前に彼女の頭には強い衝撃が真上から降り注いできた。もちろんそれは上司のカミナリ、怖い怖い鬼教官である神通の鋼の如きげんこつだ。

『ぎにやつ・・・!!』

突然にしていともより数段は勝った腕力で放たれた神通のげんこつは雪風の頭を押し込み、一瞬気が遠くなつた後に雪風はげんこつに押し切られる様にしてその場にうつ伏せに倒れこんでしまう。？被害担当艦？などと二水戦の仲間内からは呼ばれている程に雪風は頻繁に上司のげんこつを受けている身で、神通によるお仕置き被弾率は戦隊内でもダントツの一位に輝く。しかし上司が半端な度合いでのお仕置きをしない事は雪風がこの場に現れる前に繰り広げられた天津風への教育風景を鑑みれば言うまでも無く、ちつとも慣れない上司の愛の鞭が続けざまに甲板に横たわつた雪風の尻に叩き落される。

『貴様あ！ 誰がばっちゃんだ、この馬鹿が！！ 誰に向かって口を利いてると思つてんだ、おらああ！！』

『ぎゃ！ いてっ！ 痛いーっ！』

つい最近にも茶髪を咎められて散々に尻をぶつ叩かれた雪風。ただでさえかさぶたがまだ残っている彼女の尻の皮はまだまだ脆く、烈火の如く怒つたお師匠様の竹刀の激痛は全く緩和されずに全身を伝わってくる。服越しにベツチンベツチンと乾いた音が雷鳴のように轟き、発信元たる雪風は一瞬にして涙目になって甲板に突つ伏したまま泣き叫ぶ有様だった。

だが持ち前の気の短さからすっかりご乱心となっている神通は、不意に足を引き摺つたような独特足音が近づいてくるのを認めて咄嗟に眼をやる。そこにいるのはお馬鹿な部下が連れてきた怪しげな老婆、もとい現在川原石港にて荷降ろしを行っている民間の古く小さな貨物船の艦魂であるが、そのみすばらしく覇気が微塵も無さそうな雰囲気に対して神通は表情を強張らせる。どうやら上司とこの

老婆が顔見知りらしい事は雪風への怒号によっても示されているが、雪風を含めたその場に在る少女達は普段から尊大にして横柄な上司がこれほど前に態度を整えてしまうこの老婆の正体を一向に把握できなない。

ましてや神通は僅かに声を詰まらせるとなんとその場に平伏し、土下座するような格好で甲板に両手を着いてみせる。間違っても部下の前で卑屈な姿勢を見せないこの人の事を考えれば、今の神通の姿は珍しいとかそんな次元の姿ではない。夢でも見ているのだろうか霰が頬をつねり、まだまだ捻挫が治っていない霞が手にした松葉杖を思わず甲板に倒してしまう中、鬼気迫る緊張の表情で唾を飲み込んだ神通が慌てた口調で声を上げる。

『し、失礼しました・・・、？赤城^{あかぎ}様・・・！こ、この馬鹿者はアンカーに巻きつけてすぐに沈めますので・・・！』

『あらあ、よくばっちゃんの名前を知ってるねえ。んふふふう。でもそんな事したらダメよお、中尉さん。』

涙と鼻水に濡れた顔で目を回す雪風の頭を鷲掴みにして信じられない程に低姿勢を示す神通に、もはや幾重ものしわによって微笑みしか構成できぬ顔の老婆は過剰なほどに頷いて声を返す。どうもこの老婆を上司は相当に偉い人物だと捉えているようだった。

ただこの時、ようやく激しいお尻の痛みによって歪んだ視界に輪郭を戻し始めた雪風とその仲間達は、神通が今しがた呼んだこの老婆の名前を耳にして一斉に目に見えぬ疑問符を頭の上に掲げる。

関東地方の北部に聳^{そび}える霊峰「赤城山」より頂いたであろう、その船の名。

その名を冠している船を思い浮かべる時、神通の部下である少女達が記憶より検索できる者は、先月の観艦式直前の宴でそれぞれが給仕の任に励んだ際に目にした帝国海軍でも最も大きな航空母艦の

一つである赤城艦の艦魂だ。上司の神通とは同じ金剛こんごうという名の艦魂に教えを請いだ仲で、巡洋戦艦として金剛の後継となる者だったが故に赤城は妹分として大変に可愛がられ、帝国海軍艦魂社会にその名を轟かす「海軍砲術学校金剛艦分校」の栄えある一期生でもある。厳密には赤城は神通よりも2歳ほど年下に当たるが、そんな事情から神通にしたら兄弟子ならぬ姉弟子に当たる上に師匠譲りのスパルタ教育と荒々しいお互いの気性は二人のウマを合わせてくれた為に、現代では神通が尊敬と信頼を寄せる数少ない先輩艦魂となっているのがその赤城という名を持つ艦魂であった。

そう考えるとこれ程までに神通が畏かしこまる様子も解らないでもないが、雪風を含めた少女達が実際に瞳に映した赤城という名の艦魂は、上司とそれほど見た目の歳が変わらない20代後半の容姿を持つ女性せいの筈。しかしいま現在、彼女達の目の前にいるのは、僅かに腰が曲がって深い亀裂を思わせるしわだらけの顔をした老婆。どう見ても彼女達の知る赤城という名を持つ艦魂などでは無かった。

『う、い、いででえ……。』

緩く歯を噛んでやっとの事で顔を上げる雪風は、突っ伏したまま僅かに腰を折って上げた尻へ後ろ手に両手を当てる。黒い軍装の下で真っ赤に腫れたお尻はジンジンと鈍痛を発し、雪風の手が触れた感覚も神経を介する事は無い。立ち上がる事はおろか、軍帽が落ちて露わになった頭の上に乗せられる上司の手を振り払う事すらも出来なかった。

もっとも彼女にしたら上司の指示通りに行動したにも関わらず、いきなりげんこつと竹刀の速射を叩き込まれてしまった不条理の原因が納得できない。やがて奥歯を噛んだまま歯の隙間より漏らすようにして声を放ち、雪風はすぐ隣で平伏して奇しくも同じ高さに位置していた上司の顔にその理由を問うてみた。

『す、すえんたいちよおゝ……。ど、どうしたんスカあ……。？
そ、それに？赤城？さんて……。こ、この間の新しい艦隊編成
で艦隊から外れて、い、今は本籍の横鎮なんじゃ……。？』

企図せず背後にて立ち尽くす仲間達も抱いていた疑問を代弁する
雪風に、神通は驚掴みにしたままの雪風の頭を甲板に埋め込むよう
にして下げさせ、彼女達の疑問が勘違いである事を即座に伝える。
その最中にも老婆は相変わらず寒い潮風の流れの中に優しげで暖か
な微笑を灯し、自身の正体をようやく知って驚愕する少女達全員の
顔を嘲笑うように眺めて楽しんでいた。

『馬鹿者が、そりゃ？二代目？だ！ この艦魂^{ひと}は？初代？の赤城さ
んだ！』

『え……。しよ、しよだいい……。？』

『んゝふふう。初代って言っても、海軍に所属してたのはもう30
年くらい前の事だけどねえ。』

『『『 ええええー！！』』』

寒空を覆う銀色の雲を切り裂くような少女達の叫びが木霊し、次
いで神通に促されて少女達は神通と雪風のお尻を拝むような形で整
列すると一斉にその場に平伏。帝国海軍の礼式ではこんな礼式なぞ
規定されておらず、彼女達の師を勤める神通も教えた事なぞ無かつ
たが、全員一様に老婆への正体を察すると同時に尊崇と威厳を抱い
た為、打ち合わせもせずに来るで中世の武士がとる臣下の礼の如き
光景を作り出したのだった。

なぜならその自称を？ばっちゃん？とするこの老婆。かつては彼
女達を含めた帝国海軍所属だった艦艇の命であり、その芳名は軍歌
としても歌われた程の経歴を持っているのである。

老婆の名は、赤城。

今年で創立68年に及ぶ帝国海軍が初めて戦の海へと軍艦旗を進めた際に、連合艦隊の名の下に属していた立派な帝国海軍艦艇の内の一隻。

すなわち彼女は摩耶^{まや}型砲艦4番艦、赤城艦の艦魂なのであった。

第九四話 「45年の月日／其の三」

砲艦、赤城艦。あかぎ

時代はようやく呉鎮守府が開庁となった翌年にして、世界にその名を轟かす帝国海軍の浮べる城の群れがまだ「常備小艦隊」と呼ばれていた明治21年。

神戸の小野浜造船所にて摩耶まや型砲艦の末の妹として、そして帝国海軍初の鋼で出来た軍艦として彼女は生まれた。有名な三景艦等とはほぼ同年代にして、その常備排水量は1000トンを下回るというまことに小さな艦体ながら、舳先で掻き分けてきた白波は常にこの日本の針路を決める重要な海原にあり、誕生から数年後には帝国として初の対外戦争となった「明治27、8年の役」、次いで西洋列強の国旗が連なる中での任務となった「北清事変」、さらには当時世界最強とも呼び声の高かった軍事力を持つロシアと衝突した「明治37、8年の役」と、まさに明治の日本が直面した修羅場に海軍艦艇として真正面から挑んできた経歴の持ち主である。

その戦ぶりもまた海軍艦艇としては壮烈無比にして勇名を馳せ、日清戦争では大破しつつも優勢な清国艦隊と渡り合って僚艦を守りきり、その活躍は軍歌「赤城の奮戦」として海軍軍人どころか国民からも大変な賞賛を得ている。

ただ、続く日露戦争時は既に小型旧式な身の上によって第二艦隊付属の特務艦として参加したのだが、開戦から三ヶ月ほども経った頃に同じ第二艦隊付属を構成し、尚且つ同じ小野浜造船所で生まれた海軍艦艇としての先輩である大島艦おおしまと衝突事故を起して、不運にも大島艦は沈没。その数日後の南山攻略戦にてロシア軍が退却するきっかけとなる艦砲射撃を担当して武功を立てたが、先の戦争の様に輝かしい武勲と多くの犠牲の両方をその経歴の上でさらに増やす事になる。

だから戦後の彼女は自身の武功を誇る真似は一切する事は無かったが、既に日露戦役の始まる前から旧式艦とされていた手前もあって、戦における得る物と失う物の両方を知る艦魂として戦後は帝国海軍艦魂社会での良き教育者として余生を過ごし、意図せずその点でもまた後輩達にその名を轟かすのだった。

もともと戦後しばらくすると帝国海軍は戦力の更新を推し進める為に旧式艦の処分を相当の数で行い、この際に赤城艦は『解体してクズ鉄の再利用にでも。』という形で民間に売却される事になった。なまじその艦体は鉄ではなく鋼であるが故に良質な資源に転化するのだろうと当の赤城自身も思っていたりしていたのだが、そんな赤城艦に値と売却済みの札を付けた人間はそのさらに先へと考えを進めていた。なんとなんと鋼製の丈夫な身体が功を奏し、赤城艦とはある汽船会社へと買い取られて民間の貨物船として生きる道を与えられたのである。「武人の蛮用」も甚だしい海軍艦艇として過ごした末に民間へと転籍するのは非常に珍しく、赤城艦は転職の為に人生初のお船としての大改装も経験。貨物を扱う為のデリックポストを新設し、永く甲板に備えられていた大砲に始まる物騒な代物を全て撤去し、見違える程に変わった艦影の中で昔日と共通しているのは艦首の衝角のみであった。

また、お船としての名前も旧来の名に日本の船らしさを滲ませる一字を付け加えただけで、その新たな名前はそれから約30年も経った現代においても尚、川原石港にて岸壁に接岸する彼女の分身の舳先の辺りに白い塗料で大きく記されているのだった。

『あ、あ、赤城丸・・・！？』

『んふふう。そうよお。もうとづくに海軍からは引退してる身だから、赤城じゃなくて赤城丸だねえ。赤城って呼ぶのは、その二代目さんだけにした方が良いんじゃないかねえ。』

寒空の下の神通艦^{じんつう}。

それまで神通を始めとする二水戦の少女達が教練に励んでいた艦尾甲板は、四方八方より流れてくる冷たい風が目立つ為に立ち話には向かない。おまけにその話し相手が帝国海軍艦艇の先輩にして、大変に有名な砲艦、赤城艦の艦魂とくれば尚更である。故に神通はすぐさま教練を中止して武技用具納めを指示し、もう一つの椅子を自身の分身の中から引っぱり出して煙が靡く4番煙突の根元へと移動。霰^{あられ}に命じて淹れ直したお茶が入った菓缶を準備しつつ、煙突より放たれる熱気にて暖を得ながらの会話の場を設ける。

『中尉さん、よくばっちゃんの名前が解ったねえ。見たところ、ばっちゃんが引退してから生まれたみたいだけどお・・・。』

『はっ。赤城丸様の事は敷島^{しきしま}の大親方から何度か聞いた事がありまして、私はずっと呉鎮に籍を置いていたので、実はこれまでも何度か瀬戸内の中ですれ違った事もありました。しかし、こうして話すのは恐縮です。』

煙突をすぐ傍にしてお互いに向かい合う形で椅子に腰掛けた神通と赤城丸。滲んだような色合いの茶色の外套に身を包んだ地味な服装の老婆である赤城丸は、もう垂直に起こす事も出来ない腰が椅子に腰掛けても変わる事が無く、咄嗟に神通が差し出した竹刀を杖代わりにしてやや前傾した姿勢で座っている。対して尊敬するお師匠様がこの世に誕生する以前より帝国海軍にて励んできたという大先輩を前にした神通にあっても、いつもの様にふてぶてしく脚を組んでふんぞり返るような座り方は出来ない。くつつけた両膝の上に両手を乗せるという慣れない姿勢で椅子にちょこんと座り、意図せず

老婆と同じ様にやや前に腰を折って緊張感の籠る声を上げる。その姿は部下の少女達にとしては初めて目にした上司のビビる様であり、神通と赤城丸を中心に扇状になって甲板上に座り込んだ少女達は、赤城丸より差し入れてもらった饅頭を頬張りながら神通の様子を物珍しげに眺めていた。

その一方、かつての職場である呉軍港の波間へ客人として来訪するも密偵の疑いをかけられた赤城丸は、知らない者ばかりだから仕方ないといった感じで至って気にもしていない様子。それどころかかつては自分も袖を通していた軍装が形を変えずに後輩達にも身に付けられ、しかも既に引退して30年近く経た現代においても自分の来歴を知っていた者がいた事が嬉しくてならないらしく、細くした瞳と深さを増す口元のしわは彼女の顔にご機嫌の笑みを浮かび上がらせる。

『んふふう。ああ、そおう。中尉さんは敷島に教えを請いだのねえ。まあ、民間船になってからの航路は瀬戸内が多かったらねえ。赤ちゃんもたまに海軍の艦艇は見てたのよお。』

老いが陰ろうとも曇りの無い笑みで深く頷きながら老婆は声を返すが、神通は緊張と間延びするその独特の語りに対して応じるタイミングが中々掴めず、些か困ったような表情で首筋の辺りを指先で掻いている。大先輩を前にして沈黙の間を持たせるのは申し訳ないと頭では解っているのに、生来が口下手な神通は上手く言葉を紡ぎ出せない。唯一の救いはその間に霰が気を利かせ、赤城丸の手にした碗に煙突の熱で程よく温まったお茶を注いで沈黙を制してくれた事だった。

『有難うねえ。』

『あ、はい。少し熱いどすさかい、気を付けてお飲みください。』

裏声の様な高さでゆっくりな口調の霰の声は赤城丸のそれと似たような雰囲気を持ち、中々ぶっきらぼうな物言いを修正できない神通よりはずつと会話が自然である。赤城丸としても話しやすい印象で気分が楽だったのか、無理の無い動きでお茶の入った碗を唇に添えてゆっくりと傾け始めた。

『んん。若いのに美味しいお茶を淹れるねえ。』

溜飲した後に入れ替わりで出てきた赤城丸の声に霰は軽く頭を下げてお礼を述べ、必死に脳裏の中で応じる為の言葉を選ぶ上司の繋ぎ役を意図せず担う。神通から見れば霰は艦齡の面でも、艦魂としての外見の面でも10歳以上は年下なのだが、普段の生活の中でそんな上司を始めとする目上の人物という者を見る事が多い霰にとつて、現代に生きる偉大な先達である赤城松の話相手となるのはさほど苦でもない事だった。それに決して口には出せないが、些細な事で怒りの沸点がいとも簡単に限界を超え、自身の意志と教えの伝達に肉体言語を躊躇無く常套手段とするような神通に比べたら、まるで春先ののどかで柔和な潮風がそのまま人格となったような赤城丸は仕える側の者としては大変に接するのが楽な人物である。そもそもがこの霰は同じ二水戦の仲間でもある雪風^{ゆきかぜ}などとは違って乱暴な物言いとは無縁な事もあり、彼女は声を発するのに際していつもの様に言葉を選ぶ必要がない赤城丸との会話を一切の力みを抱かずにこなしてみせるのだった。

赤城丸もまた、どこか間が抜けた声変わりも終わっていない霰の声とその10代後半の幼い容姿にも関わらず礼儀正しく失態も無い応接を終始行う事に大変感心し、その評価は本人だけでなくその上司にも波及して行く。傍らにてお地蔵様の様にニコニコと控える霰、そして自身と神通を中心にして半円状になって辺りの甲板の上に座っている少女達を一瞥し、そこに目立つ輝かんばかりの若さと、あ

どけなさが残る顔ばかりながらもすっかり駆逐隊毎に列を成して並んで座るといふ^{しつけ}の良さを褒め称えた。

『みんな若いのに行儀も良くて立派ねえ。中尉さんが教えてる子達なのお?』

『はっ。こいつらは全員、私が戦隊旗艦を務めている第二水雷戦隊の隷下の駆逐艦の者達です。この2年ほどの間に生まれた最新鋭の駆逐艦なのですが、ご覧の通りで青二才ばかりです。』

教育者として側面を尋ねてくる赤城丸よりの視線が、それまで考えが纏まらなかった神通の意識に芯を持たせる。神通は美保関事件^{みほがせき}を契機として積み重ねてきた経歴と独自の想いが良くも悪くも非常に強いが故に、多少荒っぽい姿勢であっても部下を鍛えるに際して注ぎ込む信念は傍目から見ても生半可な代物にはなっていない。赤城丸と雪風が現れる直前にまだまだ先輩方の名前も覚えて切れていない天津風という新人を手加減無しに叱っていたのもそうだし、その歓声と勝利が記憶に新しい柔道の大会にて霞の健気な心に涙し、大勢の視線が集中する中で恥も外聞も無く抱きしめてやったのもまた同じ事である。そんな事からちよつと辛辣な部下達の評価を伝え、彼女の声は先程まで思考の中で言葉を選んでいた時とは全然違い、どこか水を得た魚のようにハキハキとしたいつもの調子で赤城丸に応じてみせた。

『そうなのお。みんな顔つきも凛々しいし、こうやってばっちゃんとか中尉さんとか話をしてる間もおしゃべりしない所なんて感心するわあ。よく物事を教えてもらってるのねえ。』

『はっ。恐縮です。』

帝国海軍の者としても艦魂としても大先輩である赤城丸より頂い

たお褒めの言葉は、神通の鼻をみるみる高くさせていく。辺りでその会話の様子を見守る部下達もすぐに上司の顔色が明るくなっているのに気付き、とりあえずは自分達の未熟さを咎めて怒られる心配は無いのだろうと一安心。前列で饅頭を頬張る雪風もまたようやく先程上司から受けた折檻に纏わる怯えを取り除く事ができ、ホッと胸を撫で下ろして餡子の甘さが一際奥歯に染みらせる。

それに伴って雪風で無くともこの赤城丸の経歴を知る者なれば、やはり軍歌にも謳われた程の彼女の戦ぶりを直に聞いてみたいのが率直な所で、胸の奥から起こる高揚感に抗えず早速雪風はその事を尋ねてみる。

『あの、あ、赤城丸さん。アタイ、日清戦争の時の赤城丸さんの事を教えてもらいたッス。』

『こら、犬……。』

以前に朝日とその場を供にした際も神通は部下の不用意な発言を戒めていたが、今日は声こそ放ったもののそれ以上のお叱りの言葉がすぐに出てくる事は無い。なぜなら当のこの神通もまた、やはり赤城丸の経歴を知っているが故にその事を聞いてみたいと願う者の一人なのである。彼女自身は実際に銃弾が飛び交う支那戦線に派遣された過去もあるのだが、如何せん支那戦線での海軍艦艇の任務は陸戦隊や陸軍部隊を運んでの上陸の支援、港湾や航路を封鎖する等といった海上警備が殆どで、艦艇同士が決戦に等しい戦闘を行うような事態は皆無であった。

だがしかし、神通としてはそもそもが二水戦という海上戦闘部隊を率いる手前もあり、出来るならば参考の意味でも実際に軍艦同士でのドンパチの事情をその耳に入れておきたい。その気持ちが少ないからあるが為に、神通はやっぱりと雪風の発言を制しつつも、いつもの様に短い導火線に任せてお叱りの形で戒めるような対処ができなかったのだ。

すると柔和な老婆、赤城丸は眼前の釣り目を共通点とする師弟の様子に幾度も頷き、彼女達が欲する話題を快く語ってくれる事を示した。

『ああ、清国との戦の話ねえ。構わないよお、何でもばっちゃんに聞きなさいい。』

その言葉にちょっと驚きの表情を浮かべてみせる神通だがそれは偽りで、内心は赤城丸のこの返事を待っていた。なにせ神通の師匠筋を辿った先にいるのは佐世保にて存命の敷島までであり、日本海戦に代表される日露戦役のお話は何度か聞いた事はあっても日清戦争までに遡るお話は初めて耳にする機会なのであるから無理もない。ちょうど部下の申し出と赤城丸の快諾も重なったのなら、この際に当時の事を己が知識としても取り込みたいというのが神通としても率直な所だった。

また、尊敬の念を示す目上の人物には結構礼儀を守り、謙虚な姿勢を貫く彼女であるから、話題をスラスラと投げて赤城丸からの答えを導き出す役も今日は部下の雪風をもってして事に当たれる。そういう意味では本日のこの赤城丸の来訪は神通を含めた全ての二水戦の艦魂達にとってとても都合が良く、唯一絶対の鬼教官である神通も含めたお勉強会がその場に展開されるのにさして時間は掛からなかった。さしずめ「私立神通学校」ならぬ、「初代赤城塾」の始まりである。

煙突のほのかな温もりに暖を取り、寒空の潮風と曇天の昼下がりの下での青空教室。少し天気には恵まれていない所がちょっと残念ながらも、雪や雨の降る気配はまだ無い上に風もまた荒れ狂う程の流れは得られていないから甲板の居心地はそれほど悪くは無い。霰

の用意してくれたお茶で赤城丸は喉の渇きを満たし、一息ついてい
る間に雪風や霞といった割と積極的に声を上げれる少女達が質問を
投げ、崩れぬしわだらけの笑みをその都度向けながら赤城丸は自身
の記憶を惜しげもなく語っていく。

まず最初に出されたのは声を放つに当たって他人に遠慮しない性
分の雪風からの質問で、当然の様に初代赤城艦の名を日本中に轟か
せた際のお話。すなわち日清戦争時の海の天王山である、黄海海戦
の際のお話であった。

『赤城丸さんが海戦中に付属の特務船を守ったって話はよく聞くん
スけど、赤城丸さんはなんで単艦で護衛任務をしてたんスか？』

『んふふう。あの頃はまだ連合艦隊なんて勇ましい名前もお飾りが
本当の所でねえ。大きな艦隊は松島まつしまさんが率いてた常備艦隊と、ス
ループっていう艦種かづらぎの葛城かつらぎが率いていた西海艦隊の2個艦隊しか無
かったのよお。満足な戦隊も吉野よしのが率いてた戦隊くらいで、水雷艇
隊もまだ艦隊の付属程度でしか無くてねえ。その時のぼっちゃんは
西海艦隊に所属してて、民間から徴傭された西京丸さいきやうまるに海軍の偉い人
間さん達が乗って現地指導するっていう話があったから、その護衛
の役にたまたまぼっちゃんが選ばれたのよお。』

戦のお話一辺倒ではなく当時の仲間達のお話をする事ができた為
か、赤城丸の笑みと声の明るさの度合いが少しその濃度を増す。友
人のように話題に挙げた名前の数々は神通や雪風達にしたら古ぼけ
た写真でしか見た事が無い者達の名前ばかりで、聞けばこの当時に
赤城丸と同じ西海艦隊に属していた者の中には、現代ではその大き
な艦橋と流麗な艦体で浮かび上がらせる美しい艦影、そして進水の
様子がラジオで実況中継たかおされた事によって最も国民からの人気を得
る巡洋艦である高雄たかおの先代、神通を始めた偵察巡洋艦と呼ばれ
る二等巡洋艦の始祖である天龍てんりゅうの先代、そして雪風を始めとした少

女達もよく知る怖い怖い上司のお師匠様である金剛こんじょうの先代など、実にそうそうたる顔ぶれであつたらしい。

またこの時、神通はちょうど名前が挙がった者達を耳にした中で現代においても継がれたもう一隻の名がある事に気付き、そこから見える呉の波間のご真ん中を指差して赤城丸にその事を伝える。もちろんそれは今から3ヶ月前に進水したばかりで、ただいま鋭意艤装中の帝国海軍最新鋭戦艦である大和艦やまとの事だ。

『あらあ、そうなのかい。あのおっきな艦は大和っていうのねえ。んふふふう。随分とまあ、大きくなつてしまつたねえ。』

さすがに神通はもう既に民間の船舶である赤城丸の事情を考慮して艦名以上の情報を口に出さなかったが、それでも赤城丸にとつてはかつて生死を共にした仲間の名前がしつかり受け継がれた喜びが胸の中を満たすのに十分であつた。それもこの場にいる者の中で最も長く生きて来た赤城丸とて見た事も無いような巨艦がそうなのだと言われると、彼女としてもなんだか時代の移り変わりを感ずると共に、かつての仲間との差が余りにも開いている事に可笑しさを覚えてしまう。次いで感心も混じつた音色で溜め息を放ちつつ口にした赤城丸の率直な感想は、辺りにいる少女達や滅多に笑わない神通にも笑みを与えてくれた。

その勢いに乗って雪風は単刀直入に、有名な初代赤城艦の活躍ぶりを直接本人に訊いてみる事にする。

『赤城丸さん！ 清国の艦隊と戦つた黄海海戦って、やっぱり激戦だったんスか？ あの頃の高戦つて砲戦距離も短くて至近距離の打ち合いだつて聞いたんスけど、赤城丸さんはそんな中で特務艦を守りきつたんスか？』

『さてねえ。ばっちゃんはその時は無我夢中だったからねえ。』

中々にのほほんとした赤城丸は雪風の輝く大きな釣り目に対してもそう言うだけで、出会った時とちっとも変わらぬ朗らかな笑みを浮べている。しかしそのつぶらな瞳が眼前の雪風を始めとした武勇伝を待ち侘びる少女達の他に何かを眺めている素振りはなく、いわゆる遠い目という状態をせずに若者達の顔を端から順番に一瞥していくだけだった。

すると大先輩の武勇伝にあやかる機会を得て、170センチを超える体躯と10歳以上も歳を重ねているにも関わらず今や辺りの少女達と同じ童心になっている神通が、椅子に座ったままやや腰を折って赤城丸に少し顔を近づけるようにして口を開く。

『し、しかし、赤城丸様。私は敷島の大親方より、赤城丸様が黄海海戦の際に優勢な敵の艦隊に包囲を受けた中で、赤城丸様と西京丸様が思い切って最寄の敵艦の懷に飛び込み、渾身の一発を浴びせて敵が怯んだ隙に包囲から見事に脱出したのだと聞いた事があります。大変な傷を負われても尚、あのような判断をできたのは見事だと、敷島の大親方は赤城丸様のお話をする都度、大層感心しておられました。』

突如として自身に教えを与えてくれた恩師の源流である敷島の名を出して神通は赤城丸の記憶を聞き出そうとするが、赤城丸にあっては敷島という名の艦魂はよく知っている間柄である。敷島の分身は既にここ10年以上も佐世保軍港のとある栈橋で海兵団練習艦として余生を過ごしている身だが、日露戦役を控えてこの日本へとやって来た当時は世界最強の呼び声も高く、貧乏島国の海軍が装備できた事自体が奇跡とも受け取られるようなワールドクラスの戦艦で、ちょうど赤城丸はそんな現役バリバリの頃の敷島を帝国海軍艦艇の先輩格としてその目で見てきたのだ。

大正時代の末頃に生を受けた神通は大親方の尊称で奉る敷島の現役時代などは一度も見た事が無い為、それを知る上でもこの赤城丸

には尊敬の念が募るという物。赤城丸の眼前には年甲斐も無く、まるでちょうど赤城丸の足元で胡坐をかく雪風と同じ様に吊り上がった目を輝かせる神通の姿があったのだった。

『んふふふう。そうかい、そうかい。敷島がそう言ってたのお。変わらないねえ、あの子はあ。』

鬼の渾名を頂く神通をして「帝国海軍艦魂社会の鬼の総大将」とまで言わしめる敷島を微塵の憂いも無く呼び捨てる赤城丸の言動は、その経歴の中で彼女が敷島に遠慮するような気遣いをいなくても接する事の出来た者であったというその過去をよく物語っている。

部下の少女達にあっててもその驚きはそれぞれに伝わっており、その理由は今は呉にはいない横鎮所属の二水戦隷下駆逐隊である8駆の面々が昨年まで佐鎮所属であった事である。嘘か本当か「目を合わせたら死ぬ」等という訳の解らない人物評と噂が実しやかに囁かれる程の恐怖は折り紙つきで、180センチを超える長身に西洋人独特の広い肩幅というなんとも立派な体躯のあの金剛を、時には倒れこんだままの状態で踏みつけるくらいに苛烈な教育でもって育てたのだという。おかげさまで大変に厄介な性格となった教え子の血が巡り巡って今や少女達が頂く上司に引き継がれているのは少々困り物だが、そんな怖い艦魂の源流もこの赤城丸にかかつては後輩の一人の思い出にしか過ぎないという事に、雪風を始めとする少女達はその凄さを良く知るのだった。

もっとも当の赤城丸はそんな艦魂社会の鬼の系譜も、そして神通が語ったかつての自身の戦ぶりも気を乱すような事は無い。特徴的な裏声の高笑いを漏らしつつ語るのは、またしても辺りの若者達を焦らすような口ぶりのお言葉であった。

『でもねえ、ばっちゃんは無我夢中だっただけで、活躍なんて大層な物は何もしてないのよお。あの時は艦長さんも死んでしまつて、

代わりに指揮を取った乗組員の人が冷静な判断をしただけ。ばっちゃんには怪我したのも気付かなかったぐらいだったわあ。』

なんだか拍子抜けした感もある少女達が緊張の糸を緩めて溜め息を漏らし、神通もまた師匠伝いに耳にしていた事の真相を聞けずに戸惑いの表情を薄く浮かべる。

するとそれまで聞かれてから答えるだけだった赤城丸が初めて自ら声を発し、神通とその部下達に質問を投げた。

『ねえねえ、まだ駆逐隊では艦種歌は歌っているの？』

赤城丸が口にした艦種歌とは、先日の柔道大会においても歌われた現代の駆逐艦達の持ち歌。いつの頃からか水雷を主武装とする艦艇の艦魂達によって歌い継がれて来た歌である。かつては砲艦という艦種であった赤城丸であるから彼女は水雷にて戦をする者等ではないのだが、どうやらその歌の事はご存知らしい。

神通は既に50年近い年月を生きている身なれば当然だろうと考え、大先輩の問いに答えた。

『はっ。軍歌演習にて必ず歌っております。』

『そうかい。是非、聞かせてくれないかねえ？』

客人にして他ならぬ帝国海軍の艦魂としての先輩の所望とあれば二水戦の艦魂達を預かる身である神通に断る選択肢は湧かず、『はっ。』と神通は僅かに口元を緩ませて返事を返すと辺りにて扇状に座り込んでいる部下達にすぐさま号令を飛ばした。

『おい、軍歌演習だ。霞、お前が音頭番だ。』

『はい。・・・軍歌演習！ 艦種歌、歌い方用意っ！』

それまで手にしていた薬缶を甲板に置くや霰が声を放ち、仲間の少女達は一斉にその場に立ち上がって気をつけ。次いで各々がポケットに常に忍ばせている歌詞が書かれた手の平に収まるくらいの厚紙を取り出して左手に持つと、その腕を肩の高さでピン前に伸ばした。その直線的な動作によって袖が空気を切る音、続いて起こる踵を揃える音が、静かだった神通艦の甲板上に短く木霊していく。赤城丸はそんな少女達の動きの一つ一つに「規律」や「統率」といった言葉を連想するが、それによって驚きの声を漏らす前に少女達はその場での足踏みと供に彼女の所望する歌を高らかに歌い始め、首尾良く軍歌演習を始めた部下にちょっと安堵する神通を横に赤城丸は瞳を線のように細くしてその光景を黙って眺めるのだった。

月は隠れて海暗き

二月四日の夜の空

闇をしるべに探り入る

我が軍九隻の水雷艇

目指す敵艦沈めずば

生きて歸らじ退かじ

手足は弾に砕くとも

指は氷に千切るとも

朧おぼろげながらも星影ほしかげに

見ゆるは確かに定遠号ていえん

いざ一うちと勇み立つ

将士の心ぞ勇ましき

忽ち^{たちま}下る号令の
下^{もと}に射出^{いだ}す水雷は
天地も震う心地して
目指す旗艦に当たりたり

走る稲妻打つ霰^{あられ}
襲わば襲え我が艦を
神はいかでか義に背く
敵の勝利を護るべき

見よ定遠^{ていえん}は沈みたり
見よ来遠^{らいえん}は沈みたり
音に響きし威海衛^{いかいえい}
早や我が物ぞ我が土地ぞ

ああ我が水雷艇隊よ
汝^{なんじ}の誉^{ほまれ}は我が軍の
光と共に輝かん
かかる愉快は又やある

師走も目前の寒さも忘れ、歌声と共に視界へと舞い上がってくる
白い息を意に返す事も無く歌う少女達の姿は、これまで朗らかな微笑
み一辺倒であった赤城丸の表情に本日初めての变化を与える。歌
い終えるや雪風を始めとする少女達は喉に障る冷たく乾燥した空気に
少し表情を歪め、『ふう……。』と小さく溜め息を吐きつつ客
人が座る椅子へとそれぞれが視界を移したのだが、その場にいた老

婆は震えも混じる右手の甲でしわだらけの両頬を伝う涙を静かに拭いていたのである。弱く甲板上を流れていく瀬戸内の潮風には僅かに赤城丸の涙声が混じり、慌てた神通が思わず椅子を立つや赤城丸の傍らへと駆け寄って声を掛ける。

『あ、赤城丸様・・・！　いかがなされました・・・！？』
『ううう・・・、ううう・・・。』

ほろほろと滴る涙の理由が解らないのは上司だけではなく少女達にあっても同じで、何か自分達に粗相があったのだろうかと思つて誰という事も無く『赤城丸さん！』と声を上げながら赤城丸の椅子の周りに群がった。

すると赤城丸は涙で震える声で、幾度にも及ぶ神通の心配の言動に応える。

『・・・み、みんな、本当にそっくりだねえ・・・。う、ううう・・・、あの子らもみんな、こんな可愛い顔ばかりでねえ・・・。』
『あの子、ら・・・？』

神通が思わず聞き返すまでもなく、赤城丸の言葉に示された者達はまだ幼さが残る艦魂達の事ではあつても、今まさに彼女の眼前にて歌を歌つた雪風らを指してはいない。涙で歪む赤城丸の視界の向こうに映るのは二水戦の幼い顔に重なる数十年前の記憶の住人達で、今しがた歌われた歌の原点ともなっている者達。それを難なく察する二水戦の者達に囲まれる中で、赤城丸はまだ乱れも目立つ息遣いのままながら、自身の涙の訳をゆっくりと語りだした。

第九五話 「45年の月日／其の四」

赤城丸^{あかぎ}の突然の涙によって彼女の周りに集まった二水戦の者達が心配の表情を集める中、初対面から怪しみながらもその朗らかさに親しみを込めて「ばっちゃん」の呼称を用いた雪風^{ゆきかぜ}は上司を含めて最も赤城丸と一緒に時間を過ごしている為に、赤城丸の元に駆け寄ると遠慮や失礼等を気にせずとその袖を握って涙の訳を問う。

『あ、赤城丸さん！？ どうしたんスカ！？』

赤城丸はまだ溢れ来る涙と規律を失った吐息が元に戻っておらず、握られた袖を通して伝わってくる雪風の心配の心にすぐに応じる事ができない。雪風や神通^{じんつう}、他の仲間と同じく群がった二水戦の者達の中で最も気の利く霰^{あられ}がポケからハンカチを出し、腰を更に折って項垂れる赤城丸に労わりの声を静かに掛けながらハンカチを差し出す。赤城丸はお礼の言葉もろくに返せずにハンカチを受け取り、両頬を伝う自らの体温を宿した雫をふき取っていった。

『ううう・・・、ごめんねえ・・・。みんな、ごめんねえ・・・。』

突然の涙に続いて放たれる謝罪の言葉は二水戦の艦魂達をより困惑の渦中に投げ込み、二水戦の艦魂達を統率する神通は両手を宙に掲げたままで視線を泳がせてしまう。だがそれほど時間が立たない内に赤城丸は決して眼前の若者達に悪い感情を得たりして涙した訳ではない事を、思わずその朗らかな笑みを崩してしまう程になった理由を、涙を拭った事でようやく規律の戻り始めた声にて教え始めた。

『あの頃はさっきも言った通り、連合艦隊なんて名前だけでねえ・

・。フランスから来た松島^{まつしま}さんは、清国との戦から5年も前の平時編成の時に浪速^{なにわ}から旗艦を引き継いでおられて、ろくに近代海軍の戦策もまだ手探りの帝国海軍に、西洋で考えられてる海軍の知識を色々と教えてくださったのお・・・。

神通や雪風を始めとする二水戦の艦魂達がようやく元の位置へと戻って腰を下ろして視線を集める先で、赤城丸は霰より借りたハンカチを右手に握り締めながら語り始める。毛編みの被り物より垂れた白く褪せた髪を潮風に揺らしつつ、しわだらけの小さい顔の中で唇より紡ぎ出されるのは、雪風や神通が聞きたがった日清戦争の頃のお話。戦勝の誉れも名高い45年前の奇跡の裏にあった、艦魂達の知られざる物語であった。

赤城丸が言うように、当時、つまり明治20年の後半頃の帝国海軍は赤城丸自身を含めた帝国海軍の艦艇がようやく数を揃え始めた頃で、それに伴って海軍艦艇の艦魂社会もまた組織の体裁をようやく成し始めた時代であった。フランスより隣国の甲鉄艦に備える為に渡ってきた松島とその姉妹が率先して近代海軍のなんたるかを教え、赤城丸の姉妹等は当時は日本生まれの同期生としてその教えを最初に受けた者達となる。慣れないフランス語から日本語へと翻訳する所から始まる授業の日々はとても大変で、その上で赤城丸達と同じ日本生まれの先輩方や後輩達に学んだ多様な知識を横展開する重要な役目を負っており、そもまだ外国人の存在が組織の中に同居する事自体が珍しかった当時は苦勞の連続なのであったらしい。

『何事も始めという物はあるのだけど、あの頃もやっぱり？今回が初めて？っていう事が多くてねえ……。なかなか要領が得られなくて上手く行かなかった事も多くて、たくさんの問題や仲間内での軋

轢なんかにはっちゃんらはとっても悩まされたのよお……。』

老いに染まった瞳をぼんやりと手元に向けて静かに赤城丸は語り、今では既に当たり前である事も多い普段の艦魂達の生活が如何にして成り立って行ったのかを二水戦の若者達に教える。

何事も最初は上手く行かないというのは神通は勿論、その部下である少女達にも良く理解できる物で、全員の記憶に新しい天津風のお叱りなんかも二水戦の日々における彼女の経験としての最初の一幕だ。アレをしてはいけない、こういう時はあんな風にする、といった要領を身に付けていくのに際し、そこにいる誰もが長い時間と失敗を繰り返して身に付けてきたのである。そして赤城丸が声に変えている物事は、自分達の居場所である帝国海軍その物の最初。どれだけの懸案と課題がどんな規模でそこに転がっていたのか、神通を始めとする二水戦の艦魂達には推して計りきれない代物だった。

それに加えて帝国海軍の近代化が目覚しい当時は、教えを与える側だった松島達もまた日本の海の事情に精通していた訳でもないらしく、師弟揃ってのお勉強が日夜繰り広げられていたのが実情。故に開戦を控えて民間より徴傭した貨客船ちやうきゆうせんに対して海軍艦艇としてのイロハを教える教官の存在も満足に用意できなかった当時、そもそものが世界の海を股に掛けて日々を過ごす民間船舶の艦魂達が持つ優れた教養によって、帝国海軍艦艇の艦魂達が議論等で打ち負かされてしまう事も何度もあったのだという。

現代では考えられない帝国海軍の黎明期の記憶に触れた二水戦の艦魂達が大変に驚く中、赤城丸は懐かしむとも寂しげに眺めているともとれる細めた瞳を僅かに潤ませ、そんな中で自身もまた勉学に励みながらの教官として立ち振る舞った過去を語った。

『ぼっちゃんはその頃、ようやくそこその数を揃えたばかりの水雷艇の子達の面倒を見る事になったのお……。その子達の分身は

とても小さかったけどその分だけ一気に何隻も生まれてて、ほっぺも赤い顔に大きな目を並べてばっちゃんの事をよく慕ってくれてねえ……。みんな名前も番号でしか貰えてなくて、あの子達が武器として持つ魚雷の使い方もまだ良く解ってなかった上に、ばっちゃんも生まれて数年くらいしか経ってない身だったから、何を教えるかをばっちゃんが最初に学ばなければならなくてとても大変だったわぁ……。』

教育者としても未熟者ばかりだった当時において、その一人を担っていたかつての自分の事を話す赤城丸。実際に毎日夜遅くまで人間達が自身の分身に持ち込んだ多くの教本や参考書等を読み漁り、時には姉妹が持つ教本を貸してもらったりして彼女は知識を蓄え、若さ故の底抜けな好奇心と冒険心も色濃い水雷艇の艦魂達に物事を教えた。その事は同じ教育を与える側の者として日々励む神通には良く理解でき、彼女は眼前にて静かに語り部となっている老婆、赤城丸の往時の苦勞を小さな溜め息を放ちながら偲ぶ。その間にも口を開く赤城丸より出た言葉は、神通がお師匠様より教えられた上司たる者、指揮官たる者としての在り方と偶然にも一致する物であった。

『あの子達にしたらばっちゃんは艦種も艦齡も違う上司でしょお……。だからばっちゃんはあるあの子達が無邪気に聞いてくる色んな質問に、？知らない？とか？解らない？なんて答えを返したくはなくてねえ……。一日が終わって寝る前は必ずお勉強をして、覚えた事は次の日にあの子達にそのまま教えてあげるような毎日だったのよお……。その時のあの子達の目、今のみんなと良く似てるわねえ……。』

そう言うなり持ち上げられた赤城丸の顔は、辺りに座る雪風を始めとした二水戦の艦魂達を左から右へと流れつつその一つ一つを捉

えていく。約一名のやんちゃ娘を除けばそこにあるのは全て黒髪と黒い第一種軍装を身に纏った水兵の格好をした少女達の姿で、霰かすみと霞を除いた陽炎型姉妹がその大半を占めているにも関わらずその顔は多少の程度で似ていてもそれぞれに違う。身体つきも140センチ台の小柄な身長で文字通りのどんぐりの背比べ状態とし、顔に比してもやや大きな目等といったまだまだ幼さが目立つその有様は、赤城丸が今静かに話した水雷艇の艦魂達とまさに瓜二つであった。

そして赤城丸がただ己の苦勞話を後輩達に伝える程度で昔を語った訳ではない事は、二水戦の者達へと向けた顔に少し弱々しいながらも確かな笑みが湛えられていた事で示されている。ただその日を一緒に過ごすだけで苦勞の連続という毎日はもちろん辛さの方が割合としては多かったのは赤城丸自身も承知しているが、思い出としてそれを振り返る時、彼女の胸には何もかもが笑みへと繋がっていく楽しさの雫が音も無く募って行き、まだ目尻に刻まれたしわに涙を浮べつつも赤城丸は柔らかに笑って言った。

『みんな資格好も同じだけど、顔と同じで性格は千差万別。優しくて美味しいお茶を淹れてくれる貴女みたいな子もいたし……』

言い終える前に赤城丸は徐に手を伸ばして間近で薬缶を手にとって控える霰の頭に手を乗せ、かつて自分が面倒を見たという少女の容姿を持つ艦魂達の中に霰ととても良く似た者がいた事を伝える。もちろんその多様な在り方は霰の様な大人しい性格の艦魂のみではなく、やがて赤城丸は霰の頭に乗せていた手をすぐ近くで胡坐を掻いている事からちやうど自分が座る椅子の肘掛けの辺りにあった雪風の頭に今度は乗せ、その間逆に当たる彼女のような者もいた事を声に変える。

『んふふう……。貴女みたいな元氣の良い子もいたねえ……。』
『ぬおっ……。あ、アタイみたいなノツスカ?』

いつも頭に触れる他人の手は怖い怖い上司のげんこつである雪風は赤城丸のしわだらけの手に少しビクリしつつも、じんわりと伝わってくるその温もりによって瞬間的に閉じていた両目を薄っすらと開けて行く。赤城丸はちよつと寂しそうに目を細めながらも口元を小さく吊り上げ、懐かしさで溢れる楽しき過去を再び語り始める。

『まだまだ人間の間でも水雷なんて珍しい時分だったから、艦魂である水雷艇の子達なんかにとっては解らない事だらけでねえ。いつも？なんだこれえ！？なんて元氣の良い声を上げては、みんな揃ってばっちゃんに訊きに來てたのよお。ばっちゃんはそんなあの子達の期待を裏切りたくない一心で、あの子達が抱いた疑問は何でも教えてあげるつもりで、寝ても覚めてももう毎日がお勉強ばかりだったねえ。』

赤城丸の静かな声を受けて神通は人知れず何度も深く頷く。同じ上司の立場を頂いた者としての共感を得ているのであり、彼女が口にした「教えを授けるに当たって解らないとか知らない等という返答をしたくない」というその考えは神通もまた現代にて同じく抱いている上司としての心構えだ。赤城丸はそれを持ち前の優しい人柄と経験を通して抱き、神通の場合はおっかないお師匠様より木刀でも気を使っている神通にあっては赤城丸の胸の内がこの場にいる者の中で誰よりも理解できるのである。その上で赤城丸が続けて放つ言葉は、決して口には出さない神通の日々の感情を端的に言い当っていた。

『みんなみんな解らない事ばかりでねえ。松島さん達も忙しくてばっちゃんの相談なんか聞いてられなかったぐらいだったわあ。でもあの頃は本当に毎日が楽しくてねえ。んふふう……。』

まだ目尻のしわに薄っすらと溜まっているであろうついさっきの涙が乾かぬ内に赤城丸の表情はついに笑みへと変わり、二水戦の者達はその思い出が赤城丸にとって本当に楽しいの一言で尽きる日々であった事を察する。神通は辺りに座り込む部下達を横目でチラチラと見つ、自分もまた雪風のお馬鹿さに毎度毎度血圧を上げ、未熟さから来る失敗に癪癪を起しながらの日々を過ごす中で同じ感情を抱いている事を改めて確認する。だが神通の頷きの動作が完全に終える前に赤城丸は意味深な声を放ち、それまで神通艦の甲板に纏われていた僅かに明るい雰囲気^{いんきふき}を薄めていった。

『おかげでねえ……ばっちゃんはその頃は、あの子達が戦場^{いくさば}に赴く時に想定されてる事なんてあんまり考えてなくてねえ……。』
『想定されている事……。？ それは水雷艇隊の運用方法という事ですか……。？』

再び声のトーンに曇りが滲む赤城丸と供に僅かに眉をひそめた神通は、椅子に腰掛けたままやや腰を折って赤城丸に顔を近づけながら眼前の大先輩が口にした言葉の意味を問う。赤城丸は黙ってゆっくりと首を縦に振る仕草をもって返答とし、現代にて同じ魚雷を主とした戦い方を大きな特徴とする駆逐艦の艦魂達の面倒を見ている立場の神通は赤城丸の言葉を理解した。

それは艦艇毎に決められた、もといそれを目的として生まれたといった方が正しい、艦の種類における運用形態。別段難しいお話ではなく、例えば戦艦であれば敵の艦艇を沈める為の最大の駒として真正面からの殴り合いを演じ、空母であれば搭載する飛行機を飛ばして敵の基地や艦船を攻撃する、等といった類の物である。もちろん神通とその部下に当たる駆逐艦の艦魂達の場合、それはこれまでの艦隊訓練で常に磨きを掛けてきた敵艦隊に対する強襲雷撃で、特に昭和9年の海戦要務令第4改正にて初めて帝国海軍の戦い方とし

て企図された「大部隊による夜間戦闘」の先鋒としての役には並々ならぬ量の教練の時間を割いて来たのだが、奇しくも赤城丸が無言の頷きに込めていた水雷艇の運用法は二水戦の者達のそれと「夜」、「強襲」、そして「魚雷」という点で偶然にも一致しているのであった。

『・・・水雷艇であるあの子達の運用は、発見されにくい夜陰に紛れて敵勢力の物と想定される港や湾へ集団で侵入し、停泊中の艦や港湾設備を破壊する事だったわぁ・・・。人間達がやる教練もそれに即しててねぇ・・・。あの頃はまだ無線電信なんて物も海軍艦艇にはまだまだ無かった頃でしょう・・・？ お互いの位置を確認するだけでも一苦勞で、教練はいつも懸案が山積みで出る有様。あの子達もどうすれば上手く出来るのか頭を抱えたり、たまに喧嘩したりもしてねぇ・・・。ばっちゃんはその都度、仲裁に入ってあげたけど、まだまだ魚雷のお勉強が足りなかったばっちゃんには解決させてあげる事ができなくてねぇ・・・。結局そのまま、あの清国との戦になってしまったのよぉ・・・。』

段々と声に悲しみの音色が混じりながらも赤城丸は続け、息を飲みつつ黙って耳を傾ける海軍艦艇としての後輩達にその後に発生した戦、すなわち日清戦争のより詳細な話を声に変え始めた。

先程は雪風に黄海海戦での武勇伝を問われても詳細は覚えていないような口ぶりであった赤城丸だが、戦全般としての当時の記憶だけは、何もかもが初めてであった戦であった事からその脳裏に今でもハッキリと蘇らせる事ができる。

彼女が紡ぎ出す声によると、雪風や神通が話題として欲した黄海海戦は中小艦艇の多かった当時の帝国海軍としては極めて上出来の結果だったらしい。陸軍部隊への兵站路を築く為に黄海の制海権を賭けたこの海戦では連合艦隊旗艦であった松島艦を始めとして沈没

に至らずとも軒並み大損害を被り、当の赤城丸もまたこの時に大怪我を負うなどして帝国海軍の艦隊戦力は即時に行動を起すことが難しい状態となる程であったが、対する清国の北洋艦隊でも損害は甚だ激しく、その上で海戦の最中に撃沈された巡洋艦が何隻か出ている。そもその帝国海軍の目的は遥かに優勢な戦力を抱えた北洋艦隊が持つ黄海の制海権を奪取する事が目的なのであるから、その制海権を構築する重要な要素の一つであった北洋艦隊の艦艇を相応の規模で修理を施しての再戦力化が不可能な撃沈という事態に誘引できた事は、そのまま北洋艦隊による黄海の制海権の一角が相応の規模で崩れた事を意味する。連合艦隊が海戦直後に再起するまでの時間を必要とした事態は事実ではあるがそれは北洋艦隊とて同じ事で、その上で修理補修が成った頃の両軍の戦力事情が優劣差の薄れたイーブンの状態へと近づいた事を鑑みれば、この黄海海戦は戦略的にも戦術的にも日本側がなんとか勝利を得たという事は疑い様の無い事であった。

『あの頃の連合艦隊は人間の海軍軍人達も生え拔きが多くてねえ・・・。当時の艦隊司令部は日露戦役で軍令部長を務めた伊東中将、参謀には日露戦役で連合艦隊の参謀長を務めた島村大尉・・・。遊撃隊の面々はもつとすごくて、坪井少将の下、遊撃隊旗艦の吉野の艦長は川原大佐、浪速の艦長はあの東郷大佐。高千穂には野村大佐で、八重山には平山大佐。秋津洲なんかは当時まだ少佐だった上村さんが艦長心得で乗っておられてねえ・・・。』

赤城丸の力ない声で語られる日清戦争時の話は明るい感情は全く込められていないのだが、当時の知識を殆ど持ち合わせていない雪風を始めとする少女達はどよめきを放つ。軍神の渾名で尊崇される東郷元帥、目立たない海軍軍人として過ごしながらも国民からの人

気を絶大に集めた島村元帥など、そうそうたる名前の人物がまだ一介の艦長さんとして励んでいたという赤城丸が語った当時の話に驚きを隠せなかったのである。

『す、すげええ……。』

『東郷元帥って艦長さんなんかやってたんだあ……。』

『ねえねえ……。上村少佐ってさ、もしかして白露戦役の時、出雲中將が率いてた第二艦隊の司令長官だった上村彦之丞大将の事じゃない……。？』

手近にいる仲間や姉妹と顔を合わせ、少女達は素直な驚きを表情と声に示す。すると辺りの甲板からは極めて微小の喧騒が折り重なる事によって静けさが失せ、小さく笑って少女達に眼をやる赤城丸の前で思わず神通が釣り目を鋭い角度で吊り上げてドスの効いた声を放つ。

『こら、貴様ら！　ちゃんと静かに赤城丸様のお話を聞かんか、馬鹿者が！』

若さ故の他愛ない事での賑わいは艦魂に限らず人間にもまた往々にしてある物だが、一つだけ彼女達が違っているのはその賑わいとして恐怖の二文字で一瞬にして静めてしまう怖い怖い上司が身近な存在として常に生活の中に居る事である。神通は腕を組み脚を揃えて行儀良く椅子に座っており、いつも手にしている竹刀も今は腰が曲がった赤城丸に杖の代わりとして貸し出している状態だが、怒号と供に右足で強く甲板を踏み鳴らすと少女達はすぐに表情を律してひそひそ声を放つのを止める。神通はそんな部下達に鋭い眼光を一巡りさせて黙らせ、赤城丸が再び口を開いてくれる為の静寂を作り出した。

ただ、おっかなさで部下を黙らせるという強引な手段にも関わら

ず、赤城丸はその光景を瞳に入れると軽く頷きながら口元を緩め、眼前の神通に視線のみでお礼を示すと何事も無かったかのようにして話を続ける。

話の続きは黄海海戦でのギリギリの勝利の事。その場にいた人間達も艦魂達も己が使命を果たさんと懸命に波を駆け、鮮血に塗れながらそれでも尚、砲火を敵艦に目掛けて灯して何とか勝利をもぎ取ったというお話である。

だがしかし、この黄海海戦の結果こそ、重傷を負って床に伏した当時の赤城丸にとって一大事へと繋がってしまう。

黄海のど真ん中で戦った海戦後、清国北洋艦隊は旅順に、次いで旅順が帝国陸軍によって攻め立てられると威海衛へと場所を移して立て籠もり、当時の帝国陸海軍は敵艦ひしめくこの威海衛を攻略する山東作戦を企図する事態へと進展したのである。これは先の黄海海戦で崩した清国が持つ制海権が完全に崩せた訳ではなかった為であり、帝国海軍が最も恐れた北洋艦隊の定遠艦、鎮遠艦が損傷を被りながらも未だに健在である事、さらには黄海海戦での被撃沈艦があったとしても北洋艦隊は未だに巡洋艦戦力は完全喪失していない事などに実施の理由があった。

もちろん黄海海戦の趨勢と結果は定遠艦に匹敵する艦艇をまだまだ揃えるだけの国力が無かった日本としては上出来の部類であったが、赤城丸は自身もいた黄海海戦にて圧倒的な決着をつける事が出来なかったが為にこんな事になってしまったのだと大いに悔やむ。なぜならこの山東作戦にて海軍側で企図された作戦とは、威海衛にて陸軍と共同しての陸戦隊の展開と同時に、海上からも威海衛へと攻撃するべく赤城丸が面倒を見てきた水雷艇の者達が投入される事になったからである。

『ぼっちゃん達がすっかりしてればねえ……。体当たりでもして
もつと清国の船をやっつけてればねえ……。ううう……。あ、
あんな幼い子達に出番なんか、なかったのに……。う、うう……。』

再び涙を流し始めた赤城丸だが自身の声の音色が震え出しても尚、
赤城丸は声を放ってその後起こった事を話し続ける。あんなに穏
やかで朗らかだった赤城丸が口にする激しい後悔の念に雪風や神通
が声を掛けようとするも、赤城丸はそれを涙ながらに遮るようにし
て45年前の過去を声に変えた。

黄海海戦で重傷を負った当時、彼女は病床に伏しながら教え子達
の出番が訪れてしまった事を悔やみ、足取りも覚束ない状態である
事から仲間の艦魂達に制止されたりしながらも、自身が教えを授け
た水雷艇の艦魂達の下に向かった。だが向かった先のとある水雷艇
の甲板にて、赤城丸は意外な光景と声を耳にしてしまう。

『突撃の時は大声を出そう。混乱すればする程、わたしらにしたら
好都合だ。』

『みんな一緒で行くんだ。怖い事なんか叫んで忘れられるよ。』
『あ、赤城さんだ！ 赤城さん、木銃と銃剣って手に入らないです
か？ 敵の本拠地だし、至近距離での戦闘だから、武技教練で習っ
た銃剣術で接舷戦闘に備えたいんです。』

『ばか！ 先に言う事があるだろ！ 赤城さん、お怪我は大丈夫で
すか？ 次の作戦ではわたしたちが赤城さんに代わって戦ってきま

す！ 定遠艦と鎮遠艦には必ずやわたしたちの魚雷を突き刺してやります！』

円陣を組んで小さく狭い甲板に集まった10代後半の少女像の容姿を持つ水雷艇の艦魂達は、赤城丸の後悔や心配の心とは裏腹にいいよ迫った自分達の出番に闘志を燃やしていた。

黄海海戦という実際の戦を味わい、今も脇腹に残った裂傷と包帯にまで染み出した血によって跳び来る敵弾の恐ろしさを知り、傷口が出来ると同時に自身の甲板に飛び散った血飛沫、持ち主を失った手足や臓物で戦場の実情を目にした赤城丸。その恐ろしさを彼女は海戦が終わってからじわじわと感じ始め、救いの無い惨劇に後追いの形で戦慄しながら病床についていたというのに、水雷艇の艦魂達はまるで晴れ舞台が待ち遠しいかのように意気揚々と来る威海衛攻略戦の教練に励んでいた。声変わりもしない幼い声で『みんな一緒に行くんだ。』を合言葉の様に振りかざし、赤城丸が渡すのを断った銃剣の代わりにどこからか手に入れた先端を斜めに切った竹の棒を教練用の藁人形へと突き刺し、示し合わせた大声、否、もはや既に奇声に近い咆哮を放って彼女達は備えとしていた。

当然、当時の赤城丸は未だ傷口が塞がらぬ脇腹を押さえ、ふくらはぎの一部を削がれて力の入らない膝下を支えるべく隔壁に寄りかかりながら、教え子達に自分がついこのあいだ実際に目にした戦はそんな物ではないと訴えるが、少女達の若さを糧にして激しく燃やす純粋な闘志を消す事はできず、その内に仲間の艦魂に見つかって重傷の身を理由に強引に床に伏せられてしまう日々が続く。

誕生して間もない水雷艇の艦魂である少女達は、若い故に一点のみをただひたすら目指して容易く燃える使命感だけで戦に目を向けていた。まだまだ姉妹を除いた他の艦魂達との面識を十分に持っていなかった故に、自分と同じ船を分身とする者を翻す軍艦旗が違うというだけでいとも簡単に敵と割り切って憎み、銃剣術の教練で用

いる藁人形と同じだと思う事が出来た。実際の戦を知らなかったが故に、戦を教練の延長であるとしか認識できなかった。それぐらい彼女達は幼く、またそれ故に自分達に教えを授けようとする赤城丸の声に耳を傾ける事が出来なかった。

目の前にある障害を避けるだけの器用さも持てずに当たって砕き、道が無い海原はみんな一緒に進んで道を作れば良いくらいにしか考える事が出来ない。

それらは全て若さ故の純粹にして真っ直ぐな狂気であり、一点の淀みや曇りも無い暴走。

当時、病床に伏していた赤城丸はそれを止める事が出来なかった。

そして運命の明治28年2月4日の夜。

正確には日付も変わった午前3時30分頃に、雪降る威海衛の波間へと赴いていた水雷艇の少女達はついに行動を起す。

既に威海衛の陸戦状況では湾内に潜む北洋艦隊艦艇と付近の砲台が数える程残るのみで、陸側の付近の要衝は殆ど日章旗が翻っている状態。しかし孤立していても北洋艦隊、特に定遠艦と鎮遠艦は黄海戦やその後を負った損傷などで傷ついているようにも未だ健在で、前進しようとする陸軍部隊等をその主砲で激しく牽制した。つい一週間前には占領した砲台から望遠鏡で偵察していた帝国陸軍歩兵第11旅団の旅団長、大寺少将おおでらがその砲撃によって戦死するなど、依然としてその精強さを日の丸を掲げる者達に見せ付けている有様だった。

この情勢の中で陸軍より協力要請があった事も影響し、いよいよ帝国海軍水雷艇隊による威海衛湾への強襲突撃が発令。黄海海戦の傷が癒えた鳥海艦ちゅうかい、愛宕艦あたごによる支援の下、閉塞用の防材で固めら

れた湾口に先日見つけて突入路としていた隙間を見失う等の障害を得つつもやがて入り口を見つけて湾内へと進み入り、精一杯の白波をそびえさせた頼りない小さな舳先の上にてそれぞれの水雷艇の命達は咆哮した。

『よし、蹂躪^{じゅうりゅん}！ 蹂躪だ！ 突っ込めー！』

『みんな一緒だ！ 叫べー！』

『『『ワアアアア！！！！』』』

兼ねてより示し合わせていた奇声を上げ、乗組員達の決死の覚悟と共に水雷艇隊は湾内を駆ける。未熟な声帯で奏でられる水雷艇の艦魂達の怪鳥音を思わせる声が凍える暗闇を切り裂き、彼女達の唯一の師匠であった赤城丸の声をも耳に入れなかった程の狂気と暴走は少女達の目を瞳が失われる程に、そしてまるでその若さ来る汚濁のない狂気を示すかのように真っ白に輝かせた。

しかし北洋艦隊が本拠地としていた威海衛が易々と水雷艇を自由にさせる筈もない。曇天に星の輝きも月光も遮られた冷たい闇の中、全身の毛が奮い立たつような叫び声を上げて飛び込んだ水雷艇の艦魂達を出迎えたのは、彼女達の咆哮をかき消すほどの砲声と、四方八方から幾重にも連なってくる大小の弾丸と探照灯の帯、予定していた進入路からの突入が出来ない中で強引に飛び込んだ為に解りづらくなっていた僚艦や自分の位置、そして複雑な威海衛の湾の海底だった。

ある者は防材に乗り上げ、ある者は魚雷を放つ暇もなく座礁し、迫り来る弾丸の螺旋に驚いた拍子に仲間内で衝突事故を起し、隊の先頭を駆けていた者は猛烈な敵艦の集中砲火によって乗組員の人間達に混じって血飛沫を吹き上げながら薙ぎ倒されていく。若さゆえの勢いのみでここまで来た少女達の努力も救いのない戦場^{いくさば}には効力はなく、そこには統率も纏まりも維持できずに水雷艇から無残な姿

の漂流物へと成り果てていく光景があるだけだった。

『ひゃあ・・・は、ははは・・・！ あっははははっ・・・！』

暗闇にやっと北洋艦隊の艦艇らしき艦影を前にしつつ、機関部を打ち抜かれて蜂の巣状態になった一隻の水雷艇の舳先。既に船体が前のめりに傾いて艦中央部から乗組員達の真っ赤な血と不気味な黄色い肉の欠片が流れてくる甲板にて、機関銃の斜線によってへその辺りから脇腹を食い破られた少女が一人、仰向けに倒れて星明りも月明かりも無い空を仰ぎながら自分の血がその半分に吹き付けられた顔で全く場違いな大きな笑い声を放つ。大きな丸い目は瞳孔も開き、声の大きさに反して流れ来る血と臓物が纏わりついた彼女の腕は持ち上がる事は無く、ただその場で小刻みに^{けいれん}痙攣するのみ。激しい砲声が辺りの空気を切り裂いていく最中、笑い声に誘われるように彼女の赤く染まって傾きかけた分身には再び弾丸の群れが集まる。まるで数え切れない程の鳥の群れが路上にポツンと転がっている弱った小動物をくちばしで突くかの如く、その水雷艇には大小の傷が数秒の内に増えて行き、弾丸の群れが去った後には舳先の辺りを切断された船のカタチを成していたモノが沈んでいく光景が残る。そして傾きを増した甲板の上を、幼さで溢れた顔の半分を失った少女の亡骸が、飛び出した虚ろな彼女の眼球と共に血と肉の流れに誘われて滑り落ちていった。

そこにあるのは死。

救いも勘弁も無い命の剥奪劇。

若さに任せた狂気を奮い立たせ、歯止めを失った勢いに乗じてやってきた果てに、水雷艇の乗組員と艦魂達に用意されていた戦の現実だった。

だがその中でも幸運を得た者が、文字通り死中に活を見出した者

が確かに存在し、彼女達は敵艦に肉薄して必殺の魚雷を打ち込む後に、手を切ったりしながらも自前で作った竹槍を片手に目標の艦へと襲い掛かっていった。

赤城丸がその事を知ったのは日清戦争が終わってからで、戦後に日本へと戦利艦として渡ってきた鎮遠艦や、日露戦役では一緒に南山攻略戦にて艦砲射撃を行う事になる平遠艦へいえんの艦魂より話してもらったのである。両者はこの威海衛にて水雷艇が襲ってくるのをその目で見ており、二度に及んだあの威海衛の水雷戦の最初の攻撃で被雷して海岸に擱坐させられた北洋艦隊旗艦の定遠は鎮遠の実の姉であった。

二人によれば2月5日の第一回夜襲の際、無数の砲弾の斜線と探照灯から発せられる灯りの帯が何度も交差する波間を猛然と潜り抜け、夜陰の中に軍艦旗の色合いもハッキリと見えるくらいの距離にまで近づいてきた小さな水雷艇を定遠が確認した刹那、定遠の目の前には瞳を失った水兵の格好をする少女が竹槍を持って転移してきたらしく、少女が放つ奇怪な咆哮と不意の出来事に驚く定遠は肩の辺りを挟まれながらも、咄嗟に腰に挿していたサーベルを出会い頭に少女の顔へと伸ばしたとの事であった。少女は真一文字に横一線で切り裂かれた首から鮮血を吹き上げ、手の跡が残るほどに強く握った竹槍を持ったまま後ろに仰け反って仰向けに倒れた。鎮遠が轟音を耳にして駆けつけた時、定遠が肩を抑えて激痛に悶える前で、その少女はバツクリと裂傷が開いた首から止め処なく血を流し、白目を剥いたまままで中々事切れずに四肢を細かく震わせていたという。

その凄まじい戦闘の様子を耳にして神通以下の二水戦の面々が口

を抑えて押し黙る中、赤城丸はこれまでになく嗚咽の声を漏らし、堰を切ったようにしわで囲まれたその両目からは幾筋もの流れが湧き出る。

『ううう、ううう・・・！　ま、まだほっぺも赤かったあの子達を・・・、ば、ばっちゃんは殺してのうのと生き残った・・・。　ううう・・・。　そ、それでも生きて返って来た、あ、あの子達の何人かは、赤城さん、赤城さんって、ば、ばっちゃんを慕ってくれてねえ・・・。　戦争が終わって、あの子達は台湾とかに、は、配属されたのだけど・・・、うう、ばっちゃんは、もうそれから、あ、あの子達の顔を見れなくてねえ・・・。　ううう・・・！』

赤城丸は言い終えるとさらに深く腰を折り曲げ、右手で口を覆いながら二水戦の者達の前で泣き崩れた。現代より45年前の寒空と夜陰に包まれ、威海衛の波の上で惨い亡骸とその身を化していった教え子達の顔が彼女の脳裏に次々と浮かんでいく。あんな顔だった、こんな声だったと一人一人を遠い昔の記憶より蘇らせると、その顔は現代において今、赤城丸のすぐ傍にて声を失ったままで見守る二水戦の駆逐艦の艦魂達と見事に重なり、赤城丸はそれ故に目を背けようと深く腰を折り曲げていた。すぐそこにいる雪風を始めとした少女達を瞳に映す度に、無意識の内に赤城丸に訴えられてくる若さ。そして45年前にその若さ故に生まれ、赤城丸自身が止める事が出来ず、ただ心意気と勢いに任せるしか手段を持たなかったという純粹で淀みも曇りも無い狂気が、赤城丸には余りにも残酷過ぎるように思えた。

やがて神通が『赤城丸様・・・。』と声を漏らして椅子から立ち上がり、赤城丸の下へと駆け寄ってその深く沈んだ肩に手を掛けようとするや、この場に来てまず始めに欲して見せた二水戦の駆逐艦の艦魂達による歌の事を話し始める。

『せ、戦争が終わって、しばらくしてから、あ、あの子達の戦ぶりが歌になってねえ……。その歌詞が、本当に、本当に、あ、あの子達に重なる物だったわぁ……。ば、ばっちゃんはだから、わざと八番を削ったのお……。う、うう……。あの子達が、死に物狂いで成した、あの威海衛の戦いを伝える為に……。』

『な……。！　じゃ、じゃあ、艦魂である私達が歌う水雷艇の夜襲が七番までで終わっているのは……。！？』

『ううう……。そ、そう……。ばっちゃんがその昔、あの子達の事である、す、？水雷艇隊？の歌詞がある所で、け、削ったからなの……。』

これまで謎であった、現代の駆逐艦の艦魂達が自分達を示す艦首の歌として歌う「水雷艇の夜襲」。物心ついた時より周りの者達が歌い継いで来た事から雪風を始めとした二水戦の駆逐艦の艦魂達は覚え、それは彼女達やその先輩方をこれまで率いてきた神通にあって同じである。いつの頃からか現代の駆逐艦の系譜の源流として赤城丸も語った日清戦争時の水雷艇を捉え、その勇ましい血統を身体に宿した者として当然のように、人間達が歌う物と比べて七番までしか歌詞がない事を疑う事も無く、その歌詞に籠められた物語を知る事もなく、45年前より代々受け継がれてきた十六条旭日旗を翻す駆逐艦の歌である。

だがその歌詞に秘められた当時の有様を、神通を含めた二水戦の艦魂達はこの時初めて知った。別にその歌の勇ましい歌詞が当時の海戦の有様を正確に表していないとか、必要以上に水雷艇隊の活躍を賛美しているなどという汚点がある訳ではない。むしろ歌詞の通り、当時の水雷艇の艦魂達はただひたすら敵を求めて白波を舐先に作り、その身が碎ける事も恐れずに威海衛の波間へと突入して行ったのである。全てを若さからくる剥き出しの狂気の風に任せ、『みんな一緒だ』と仲間内で催眠術をかけるかの如く恐れを互いに誤魔化し合って成し遂げた結果。それが赤城丸の語った、そして

雪風達が毎日の日課として歌っている、今から45年前の威海衛湾にて起きた水雷艇による夜襲作戦であった。

全てが未熟過ぎた故の惨劇と誉れであり、現代ではかつての赤城丸の様に魚雷を主として戦う部下達に師匠として接している神通はその恐ろしさを改めて確認する。？青二才？と赤城丸に紹介したように彼女の部下達はまだまだ生まれただばかりで、魚雷による戦を専行してこの道10年の経歴を持つ神通から見れば今の部下達はまだまだハナタレで尻も青い新米艦魂。とてもとても戦場に出せるような実力ではないと彼女はいつも考えているが、実際にこんな状態で戦場に赴く事になった際の実例が赤城丸の語ってくれたかつての奇跡にはあった。

しかしただ一つだけ、眉をひそめて若さ故の恐ろしさを思い知る神通には疑問が湧く。それはあの威海衛での闇に打ち立てられた戦果が、そんな少女達によってこそ成し遂げられたという現実である。水雷艇隊による夜襲は現実に当時の清国北洋艦隊には決定打となり、当時の連合艦隊のほぼ全力が束になっても沈める事が出来なかった定遠艦を航行不能にし、転覆した来遠らいえんを始めとする残余の巡洋艦もまた大損害を被り、ここに至って極東の海に精強を誇った北洋艦隊は戦力をほぼ喪失。黄海の制海権を固持する清国の力は水泡に帰したのである。

それは紛れも無い大戦果であり、戦に赴く船どころか、世間一般の客船や人間達ですらも最も尊ぶ「目的の達成」という物。あどけなさに塗れたままで死地へと赴いての惨たらしい死に様は神通としても大いに恐れ、そしてまた大いに嫌う所ではあるが、では果たしてこの動かしようの無い成し遂げた戦果は無い方が良かったのかと考えるとそうとも言えない。そもそもがやっと近代国家の体裁を整え始めたのは当時の日本も帝国海軍も、そして艦魂社会も同じであり、当時の清国に対して長期に渡る戦を行えるだけの国力がまだまだ無かった事は中学生でも分かる事である。できるだけ短期で戦という途方も無い浪費の競い合いが済むのであればそれに越した事は

無いし、使える手段を全て使って勝ちをさらに行くのは戦争に限らずとも当たり前前で、神通自身もまたそういう風に部下達に教えてきた。

しかしまた可愛い部下として得た者達に赤城丸が語ったような未熟に任せた暴走を与える事は神通にはとてもとても考える事も出来ず、故に彼女は余りにも惨い過程で成し遂げた赤城丸のかつての部下達の結果を、良い事なのか悪い事なのか判断する事が出来ない。

同時にそれは当の赤城丸にあっても同じ事であった。

『ば、ばっちゃんには解らない……。あの子達には……。ばっちゃんが面倒を見た、あ、あの子達には、し、死んで欲しくなんかなかった……。で、でも、あの子達が作った結果を、否定する事なんて出来ない……。み、みんな……。みんな、ただ……。ただ必死だっただけ、なのにい……。ううう……。』

腰を折り曲げたままで涙ながらにそう言った赤城丸はついに椅子から腰を離し、杖代わりにしていた神通の竹刀と一緒に甲板に突っ伏す。赤城丸の鳴咽に苦しむ声と瀬戸内の風の音色だけが響くという静寂の甲板に竹刀の発するけたたましい物音が木霊し、神通とその部下達は寒さを改めて肌に覚えると同時に眼前の赤城丸の様子に驚く。

『ば、ばっちゃん……。！』

『赤城丸様……。！』

すると最も赤城丸と同じ場を過ごしている雪風が立ち上がって赤城丸へと駆け寄り、加えて最もこの場で赤城丸に畏敬の念を籠めている神通が椅子から立ち上がり、二人揃って四つん這いの格好で大粒の涙を流す赤城丸の震える背や肩に手を触れた。それに続いて霰や霞といった他の少女達も甲板から腰を上げ、赤城丸の周りへと心

配の表情を浮かべながら走り寄ってくる。その輪の中で一番最初に掛けられた雪風の言葉を受けつつも、赤城丸は顔を上げぬままで記憶の中に埋もれ、45年前のわだつみの向こうへと消えていった教え子達の背中に声を掛けていた。

『みんな・・・、ああ・・・、みんな・・・。ば、ばっちゃんは、どうすれば良いのお・・・？　こうして話すのも、く、供養になると思ってるけど・・・、ううう・・・、ば、ばっちゃんは、正しいのお・・・？』

この場では赤城丸に継ぐ年長者である神通は、赤城丸の放つ声に慰めや同情の言葉を掛ける事は出来ない。自分と同じく教える側の者として多くの若い部下達を抱え、最も嫌うような未熟な状態で戦場で送り出さねばならなかったという過去を吐露する赤城丸の気持ち之余りにも彼女には解る為、解り過ぎたが為に名を呼ぶ意外に赤城丸に対してかける言葉が脳裏には見つからなかった。もちろんそんな若さの渦中を謳歌する神通の部下にあってもそれは同じで、霰がオドオドしながらハンカチを再び差し出そうとするぐらいが関の山という状態。赤城丸が語り掛ける背中の中の持ち主達の血を受け継いだ者として、満足な答えを示してやる事も出来なかった。

だがそんな中、赤城丸の傍らに身を寄せて背を擦る雪風が上手く定まらない口調で語りかけ始め、その声を耳に入れる赤城丸は次第に顔を上げてすぐ近くにあった大きな釣り目の特徴とする雪風の顔へとゆっくりと滲んだ視界を流していく。

『あ、あのさ、ばっちゃん・・・。な、生意気かしんねーけどさ、そのおかげで勝ったんだろ？　んなら悪い事じゃねーよ、たぶん・・・。』

『犬・・・。』

自分の言いたい事を割とそのまま口に出してしまう雪風の言葉はいつも神通のお仕置きのかっかけとなるが、神通もまた涙で顔を湿らす赤城丸と同じ事に迷いを抱いていた手前、さしものにこの時は拳を振り上げる事も無く部下の名を呼んだだけで次に発せられる言葉を待つ間隙を設ける。仲間の少女達や赤城丸の視線が集まる中、雪風は上手く言えないもどかしさによって口元を指先で掻きながら続ける。

『でもさ、そうしなきゃなんなかったアタイ達の先輩達とか、面倒見てたばっちゃんにしたら全然良くねー事だよな……。ばっちゃんも先輩達も、ずっとずっといつまでも、勉強が大変だけどのんびりしてたっていう毎日を過ごしたかったんじゃないかと思うよ……。アタイだってそうだしさ。だから良くもあって悪くもあるんじゃないかねーのかな、先輩達の戦ぶりはさ。でもそれが戦だって、アタイ達は戦隊長から教わったんだ。良くも悪くもあるなんてフザケた、そんな在り方こそがスゲー理不尽なのが戦なんだってさ……。』
『お、おい、犬……。』

雪風が赤城丸の語る過去と混ぜて口にした見解は、事ある毎に神通が教えている戦という物のそもそもの在り方。記憶に新しい月初めの柔道の大会にて深く思い知ったその理不尽を、雪風は少し言葉を選んだような素振りをしながらも平然と赤城丸へと言い放ったのだ。それを教えた側の神通も決して自分が常々言っている事を間違いだとは思っていないが、実際に戦へと赴いた赤城丸の前で教え子の言として披露されるのは気が引ける。雪風を含めた部下達からみれば経験豊富な上司として奉られる彼女も、この赤城丸から見れば実戦経験も無い青二才に過ぎないと立場を弁えているからだ。

故にすぐさま教え子の頭にいつもの様にげんこつを落とすし、ベラベラと容易く物事をしゃべる口を塞ごうと思った神通であるが、ま

たしても彼女の声は雪風を呼びつけた段階で終わってしまう。それは単純に雪風の放った言葉に怒りを示す場所が無いからで、そもその在り方が理不尽であるという雪風の言葉はよくよく考えてみれば神通が常に向ける戦という物事への一貫した視線。間違い等は何一つ無いように思え、むしろ教え子の言いたかった事は怒りの水位が限界を突破しかけた中でも神通には妙に納得できてしまう。

『むぐ……。』

僅かに肩に力を入れた程度で腕の動きを中断させ、部下に対するお叱りの声を詰まらせてしまう神通。まさかこの期に及んで『私が教えたと言うな！』等と言って叱るのはいくらなんでも都合が良過ぎるし、自分の身を可愛がるような理由で戒めとしたなら、『部下に尊敬されなくなったら終わり。』というお師匠様伝来の上司像を自ら放棄してしまう事になる。吊り上げた眉も角度を変えぬままヒクヒクと動かしつつ、神通は今をお叱りの機会ではないと悟って表情をそのままに飲み込んだ。

そして雪風の言葉に間違いを見つけなかったのは、神通だけではなく赤城丸もまた同じであった。ただ惨状だけが転がる戦場に実際にいた為に、余りにも失った物が大き過ぎた故にしっかりと正対してみた事が無かった戦という概念に、赤城丸はこの時初めてどういう物なのかと考えを巡らせ、その思考の果てに自身の経験と供に見た真実が眼前の少女が放つ言葉と見事に一致する。清国との戦、露国との戦の果て、自分を慕った多くの部下を死地へと赴かせた上に自分だけが現代もこうして生き残り、せめてもの供養と今は知られる事の無いかつての自分と教え子達の物語を伝える自分が、正しいのか、それとも間違っているのか。その答えがどちらでもあってもどちらでもないという雪風の声は、掴み所の無いような話であっても赤城丸にはなんとなく納得できる。

『それが・・・、戦なのかねえ・・・。』

輪郭の定まらない少しぼんやりとした理解を脳裏に浮かべ、すぐそばにある雪風の顔に45年前の教え子の顔を重ねながら赤城丸は自身の答えを求める。次いで雪風は自分の言っている事に自信を持つのと同時に話題に上がっている物事に対しての強い怒りも手伝つて、頷いた後に赤城丸へと返す言葉にこれまでに無い程の力を込めた。必死に水雷艇として生きようとした先輩達と犠牲の上に成った栄光、それによって苦しみと心の傷を45年もの間負わされてきた眼前の老婆、赤城丸。それは全て、これ以上無い理不尽の連鎖が生んだ産物であり、許すことの出来ない憎き理不尽の余波によった犠牲者なのであった。

『そうだよ、ばっちゃん・・・！ 戦とはそもそもが理不尽なんだ・・・！』

まるでその言葉は45年前の威海衛の闇から木霊してきたかの如く赤城丸の耳へと響き、永く続いてきた彼女の苦しみを癒していく。若さに任せて狂わなければ赴けなかった事。どう戒めてもどう導いても救えやしなかった事。大声を上げて恐怖に抗いながら竹槍を突き出して行った事。そうでもしなければ当時は勝てなかった、もとい目的を達成できなかった事。それらは全て、戦が持つ理不尽その物であった。

『戦は・・・、嫌な物だねえ・・・。』

何も考えぬ中でしわが刻まれた唇より漏れた赤城丸の声はか細い物であったが、顔をすぐ傍に近づけていた雪風の耳には途切れる事無く届く。朗らかさとのどかさを取り戻し始めたその声は雪風の戦に対する怒りを自然と宥め、雪風は表情から無意識に力を抜くと小

さく溜め息を放って雪風にいち早く笑みを覗かせて言った。

『あ、いや、ばっちゃん。言ったそばからアレなんだけど、アタイはまだ全然戦に出た事なんてねーから、ばっちゃんから見れば調子の良い理想論かもしれないねえよな。でも、アタイは間違った事は言っていないって思ってる。それとさ、アタイらは先輩達みたいに、言葉はわりーけど自分を誤魔化して戦になんか行かねーよ。アタイらにはべらぼうに魚雷に詳しくて、さっきのアタイみたいに理不尽な戦に怒ってくれて、同じ意識持つてついていける戦隊長が居んだ。ばっちゃんは心配するかもしれないけど、アタイらは先輩達みたいな失敗はぜってー繰り返さねえよ。』

『こ、この馬鹿……！ なに言ってるんだ……！』

声を放つ際に他人に遠慮しない雪風の言葉を失礼だと捉えて罵声を投げる神通は、赤城丸に間近で笑みを送っている雪風の奥襟をむんずと掴むと早速その茶色い髪で埋まった頭にげんこつを振り下ろす。しかもまた雪風は最初に出会って親しみも人一倍に赤城丸へと抱いていた為に、赤城丸に対する呼び名と言葉遣いも無意識の内に丁寧さが欠けてしまっていたから具合が悪い。これはさすがに上司としてはお叱りの対象であり、神通は遠慮なしに鉄拳を垂直にお馬鹿な部下の頭へと叩き落す。

『なんだその口の利き方は……！ 赤城丸様と呼ばんか、この馬鹿があ……！』

『ギャ……！ だ、だって……、あだっ……！』

静かだった神通艦の甲板がいつもの喧騒を取り戻し、赤城丸という客人がいる前でのみっともない光景に霰が恐る恐る声を掛けて諫めようとするも、短気な神通のお仕置きがこんな程度で治まる筈も無い。先程の赤城丸と入れ替わりに今度は雪風が涙目となって詫び

の言葉を放ち、中々許してくれない彼女の上司が自慢のげんこつを小脇に抱えた雪風の茶色い頭にこれでもかと叩き込んだ。

しかしこんな師弟による怒号と悲鳴が入り混じった光景をまだ涙も残る瞳で認めた赤城丸は、奇しくも雪風と泣くのが入れ替わった様に、今度は彼女に変わって久方ぶりの微笑を浮べる。45年前のかつての自分も立場としては眼前にて騒動を起している者達と同じであつたのに、赤城丸はその当時においてこうして部下を叱った記憶が無い。あるのはいつも素朴な疑問を抱いてやってくる部下達に笑みと供に解答を与え、懸案を解決して喜ぶ部下達の様子をそっと眺めて笑う日々ばかりだった。そしてむしろこんな風に力づくで理解をさせる強引さこそ、若さを起爆剤に狂い始めて暴走しかけていた部下達を止める時に必要だったのではと今更ながらに思えてくる。だが不思議と後悔の念は湧いてこず、彼女の笑みの根本として胸を染めていくのは、あれから何十年も経った現代においてそれがしつかり出来ている者達を確認できた事への安堵の念だった。併せて先程の雪風の声を放つ姿を再び思い起こし、戦という物事に対してこんなにも考えをまとめられている少女を自身が教え子として接していた水雷艇の艦魂達の中にはみつけれられない事にも気付く。雪風はそれをいま過激なお仕置きを与えてくる怖い上司より授かった教えであると言ったが、赤城丸が持つ何もかもが過度期であつたあの頃の継ぎ接ぎだらけの教育の日々で、彼女にはそれを悟るだけの余裕も無ければ、部下であつた少女達に教えてやった事も無い。

だが時代はあの頃より既に45年の月日が流れ、あたかもその流れは海に潜む潮の流れのように留まる事が無い。大海原のど真ん中でスクリーを止めても潮の流れに乗って船が流されていくのと同じで、かつての自分と教え子達が出来なかつた事が45年も経ったら今やそのどちらも出来るようになってしまっている。その瞬間、それまで赤城丸の意識の中で雪風を始めとする少女達を目にする度に重なっていたかつての部下達の顔が、木霊する笑い声と供に霧の様に四散して消えていった。やがて赤城丸は笑みを一層濃い物とし

ながら、目に映す二水戦の艦魂達が自分の知る少女達とは全く違う者達であるのだと、そして自分もまた眼前でけんこつと怒号を上げている神通とは全く違う者なのだと思ひ知る。

『も、申し訳ありません、赤城丸様……！　こ、この馬鹿は生まれつき学も教養も無い奴でして……。　お前も謝らんか！！』
『ぐひん……。　す、すいやせえん……。』

粗相を犯した部下を成敗し終え、やや慌てふためきながら頭を下げてくる神通の右手がタンコブを連ねた雪風の頭をグイっと下げる光景が、赤城丸の笑みの前にある。未だご立腹の胸中を手を介して部下へと伝える神通も、その恐怖と鈍痛によってその大きな釣り目に見合う大粒の涙を流して詫びてくる雪風も、明治の中頃に生まれて明治の海に海軍艦艇として生きた艦の命である赤城丸とその部下達とは違い、昭和の海に生まれて昭和の帝国海軍を成す艦艇の命。彼女達はまごう事なき現代の船にして、一方の赤城丸はまごう事なき過去の船であった。

赤城丸はその事を噛み締めるように胸に刻み、ふと湧き出た心の声を唇の隙間から漏らす。

『んふふう……。　ばっちゃんは……。　30年前に海軍を辞められて本当に良かったあ……。　もう帝国海軍に、ばっちゃんみたいな古いお船はいらないねえ……。』

寂しさなぞ微塵も籠めず、まるで小春日和の潮風を思わせる清々しさでそう言った赤城丸はすぐそこに転がっていた神通の竹刀を手にするやゆつくりと立ち上がり、眼前にて頭をペコペコと下げる雪風と神通の肩に左右の手を乗せて微笑んだ。45年前の自分達が出来なかった事を手の温もりに変え、かつて軍艦旗を翻した者としての精一杯の労いの心を、頼りがいのある後輩達の双肩に託すように。

すると神通による雪風の退治劇でいつもの二水戦の空気を吸えた少女達が、緊張で固まっていた唇を一斉に開く。放たれてくる言葉は今しがた赤城丸が放った言葉を否定するような内容ばかりであったが、彼女にとってはその一つ一つの言葉は全て無情の嬉しさと喜びを与えてくれる物であった。

『あ、赤城丸様！ そんな事無いですよ！』

『赤城丸様がこうして話してくれたから、私達も考えと心構えを改める事が出来ました！』

『あ、あの！ 私、つい先日二水戦に加わったばかりなんですけど、赤城丸様のおかげでみんなと同じ教訓を得れました！』

『どう生きてどう死んだか、それを私達は省みて生かす事が出来ます！ だ、だから赤城丸様が教えていらした先輩達の死は、絶対に無駄にはなりませんよ！』

『赤城丸様！ わたし達は赤城丸様と先輩達の残した教えを無駄にしない義務があるんです！』

『また来て下さい！ もっと教えてください、赤城丸様！』

矢継ぎ早にあちこちから放たれてくる少女達の声は赤城丸が得たかつての現役の頃と同じような物であったが、赤城丸はそんな少女達の声を受けても過去を思い出して重ねる事はもう無かった。ただ持ち前の優しい笑みを一人一人の顔へと順番に向け、自分を囲むようにして寄ってくる後輩達の肩に手を触れてお礼の言葉を返す。

『こら、騒ぐんじゃない！ 赤城丸様に迷惑がかかるだろうが！』

やがて神通が騒がしくなった甲板に声を放って静め、赤城丸に身体を向けると彼女もまた本日の赤城丸の語り部に対してお礼の言葉を述べる。

『赤城丸様。私も今日は随分と勉強をさせて頂きました。私は長く水雷戦隊の旗艦、もとい駆逐艦の艦魂達を教える立場を頂いてきまして、赤城丸様が当時抱いたお気持ちは良く解っておるつもりです。決して赤城丸様が教えてくださった事は粗末にしないと誓いますので、今日はこの馬鹿供の非礼を何卒許してやってください。』

古き良き海軍軍人を標榜する神通は顔は怖いが節度にはうるさく、客人としてやってきている赤城丸に対して深く頭を下げる。細身ながらも170センチを超える体躯の彼女のお辞儀は、小柄な体格で今や腰も曲がってしまっている赤城丸にはとても真似できない美しさが満ち満ちており、赤城丸はこれもまた当時の自分には無かった物だと愛でながら、同時に自分が持つ記憶の中でただ一人だけ同じ様なお辞儀をこなす事が出来た者の事を思い出しつつ、多くの部下に教えを与える現代の後輩を褒めた。

『んふふふう。中尉さんは良い教育者だねえ。敷島しきしま譲りでお辞儀も綺麗だわあ。』

それからしばらくの間、私立神通学校の特別講師である赤城丸と二水戦の艦魂達が授業を終えてのお茶会を過ごしていた際、神通はふとこの赤城丸がまだ現役であった際に共に励んでいた朝日あさひや浅間あさまがこの呉に居る事を思い出し、霰を伝令としてすぐさま二人をここへお連れするように命じようとしたのだが、赤城丸は甲板から波間の一角をつぶらな瞳で眺めたままでそれを取り止めさせる。彼女の視線に沿って神通や雪風達がその先に眼をやると、そこには川原石かわらいし港よりノロノロとした船足で出てくる赤城丸の分身の姿があった。

『荷降ろしと荷揚げは終わったみたいねえ。ばっちゃんは今日はお帰らなくちゃダメねえ。でもばっちゃんは瀬戸内航路でのお仕事がおぼろげだから、きつとその内にまたこうして呉にお邪魔するわあ。朝日や浅間にはその時に会おうかねえ。今日はみんなと話せて本当に、本当に良かったねえ。』

そう言って赤城丸はしばらくの間座っていた椅子から曲がった腰を持ち上げ、杖代わりに借りていた竹刀を神通へと返却する。次いで一斉に立ち上がって直立不動の姿勢をとる少女達の前で二水戦を率いる神通と赤城丸が最後の挨拶を交わすのだが、ペコペコと頭を下げる神通には大先輩からのささやかなお灸が据えられた。

『中尉さん。良い教育者だけど、あんまり部下の子達を叩いて怒るのはダメよ。短気は損気って言うでしょお？ イライラしやすいのはカルシウムっていう成分が不足してるからだって、ばっちゃんのお分身の船医さんが言ってたわあ。アジとか小魚を食べるようにしないとねえ。』

『は、はあ……。き、気をつけます……。』

いつもだったら『黙れえ!!』と開口一番で叫んだ後に自身が率いる二水戦への干渉を拒否する神通も、さしものに赤城丸に対してはそんな口を利ける筈が無い。困ったような表情で緩く口をへの字に曲げ、短いお説教に後頭部を掻きながら善処する意を示す。だが普段からそんな神通の短気さにげんこつと竹刀の餌食とされている少女達にはおもしろ可笑しくて仕方なく、正面きって大笑いすると後が怖いのでぎゅっと噛んだ奥歯に力を込めながら込み上げてくる笑いに耐えていた。

もっともおかげで赤城丸が去る際の神通艦の甲板は容易く笑顔で溢れ、少女達がわーわーと声を上げて手を振る中で赤城丸は白い光を帯びて自分の分身へと戻っていった。

やがて白と黒に船体を塗り分け、二重線のファンネルマークを描いた赤城丸の小さな分身は、ついに師走も前にして凍える空気に触発されてしんと降り始めてきた雪の中、呉を後にして波間の向こうへと遠ざかっていく。小さな波飛沫を上げる「赤城丸」と書かれた舳先の甲板では船の命である老婆の風体の赤城丸が手を振り、彼女が笑みを向ける軍港の一角には登舷礼の形で二水戦の艦魂達が整列し、頭に乗せた軍帽を振って見送るという神通艦が浮かぶ。赤城丸は小さく手を振っていたがその内に両手を脇に揃えて深々と頭を下げ、目下に当たる者達へも礼を失しないというその礼儀正しい人柄を見る者に伝えてみせた。

『赤城丸様、礼儀正しい艦魂ひとやんなあ。ウチにはホンマに話し易いお艦魂ひとやったわあ。』

『本当だよな、霞。口の利き方で怒られてるどっかの馬鹿犬もあれは見習うべきだよ。』

『うるせー、猿！』

『二人とも喧嘩はあかんや。』

いつもの如く口論になりかける犬と猿に、一度も成功した例が無いのに毎度毎度それを止めようとする霞。しかしこの時は雪風が叫んだだけの為に霞に出番は無く、礼によって隣同士に整列していた霞と雪風の間割って入るも拍子抜けしてしまう。雪風は舷側の手摺を握って何事かを考えていたようで、霞に叫んだ後も去り行く赤城丸の分身を黙って眺め続けるのみだった。

しかしすぐさま雪風は『おし！』と大きな声を上げると、すぐ近くに上司がいるにも関わらずそのかぶき者な人柄を存分に発揮するような行動をとり始めた。

『戦隊長、すみませんス！ 後でげんこつでもケツバットでも食ら

いますから今は許して欲しいッス！』

『む？』

突如として帽子を振る神通にそう言った雪風に神通は要領をサツパリ得られず左右の釣り目を別々の大きさに歪めて首を捻るが、雪風はそんな上司のお許しの声を待たずに勝手に号令を飛ばし始めた。

『軍歌演習ー！ 艦種歌、歌い方用意ー！』

突然の雪風の号令は奇行にも等しく、本来は神通の指示が無ければ号令は発せられないのが二水戦のしきたりであった。まして神通を長とする二水戦では彼女以外の独断専行は最も重罰を科せられる罪であり、その場にいる雪風を含む少女達はそれでもかというくらいに身体で教え込まれている。その為に雪風の突飛な行動に仲間達は上司の顔色を伺ってチラチラと視線を送り、最初の内は雪風の号令に誰も従わなかった。

だが当の神通は一度眼前の雪風から波間の向こうに遠ざかっていく赤城丸の分身へと視線を送り、無言のままですぐさま雪風へと再び視線を戻す。そして雪風がこれまでにない程の強い決意を秘めている事をその気張った顔から察し、彼女は珍しく鋭く尖った目をそのままに口元を緩めて不敵に笑って言った。

『・・・ふん。よおし、犬。これまでで最も上手な歌い方であれば、連帯責任で全員罰直にする。それでも良いなら続ける。』

降りしきる雪にも負けぬ冷たい言い方で声を放つや、神通はそっぽを向くようにプイッと顔を赤城丸へと戻した。しかし雪風はそんな上司の冷淡な言動に臆する事は無く、むしろ任せろとも言わんばかりに胸を張って再度の号令を発する。すると少女達は駆け足で雪風を先頭にしてその背後に各駆逐隊毎に整列し、いつもポツケに

忍ばせている自分達を示す歌の歌詞が書かれたカードを左手に握った。その歌詞は今まで見てきた単なる字の羅列ではなく、自分達へと繋がる今は亡き先輩達の生き様を、そして同時にそこにあった理不尽に覆われる死に様を、彼女達一人一人の脳裏に蘇らせる。

当てもこんな雪が降っていたのだろうか？

誰という事も無くそんな言葉を胸の中で過ぎらせ、今まさに波の果てに去っていく赤城丸が語ってくれた事でありありと頭の中に描かれるその光景を現代に紡ぎ出すべく、彼女達は雪風の号令に併せて左手を前に突き出し、その場での足踏みの音を伴奏として雪降る呉の波間にその歌声を木霊させ始めた。

『艦種歌、歌い方ー！ 始め！』

月は隠れて海暗き

二月四日の夜の空

闇をしるべに探り入る

我が軍九隻くせきの水雷艇

目指す敵艦沈めずば

生きて帰らじ退かじ

手足は弾に砕くとも

指は氷に千切るとも

朧おぼろげながらも星影ほしかげに
見ゆるは確かに定遠号ていえん
いざ一うちと勇み立つ
将士の心ぞ勇ましき

忽ちたちま下る号令の

下に射出いす水雷は

天地も震う心地して

目指す旗艦に当たりたり

走る稲妻打つ霰あられ

襲わば襲え我が艦を

神はいかでか義に背く

敵の勝利を護るべき

見よ定遠ていえんは沈みたり

見よ来遠らいえんは沈みたり

音に響きし威海衛いかいえい

早や我が物ぞ我が土地ぞ

ああ我が水雷艇隊よ

汝なんじの誉は我が軍の

光と共に輝かん

かかる愉快は又やある

既に神通艦より相応の距離をとって呉軍港に背を向けていた赤城

丸の分身の舳先。船の命である赤城丸はふらふらとゆっくり舞い落ちる雪を追うように空を眺め、舳先が立てる波の音を聞きながら物思いにふけっていたが、その甲板には微かに45年前の彼女の記憶を呼び覚まそうとする歌声が潮風に乗って流れてきた。思わず赤城丸は舳先の向く方向から振り向き、歌声が木霊してくる艦尾の波間の向こうへと視界を投げる。雪による途切れ途切れの幕のずっと向こう、ほんの僅かに特徴的な4本煙突の艦影がぼんやりと浮かぶ波間から、かつて赤城丸が教え子とした者達の意志を継いだ事を確信させる決意の色も濃い少女達の歌声が赤城丸を追いかけてきていた。

『ああ、みんな……。んふふう、みんなの想い、ばっちゃんは上手く伝えれたみたいだねえ……。これでばっちゃん、みんなにやっと、顔を向けられるねえ……。』

ただただ笑って一人囁くようにそう言った赤城丸の耳には歌声と供に、歌声を奏でる者達とは別な少女達の元気な笑い声が幾重にも重なって聞えてくる。その声に応じるように赤城丸は曲がった腰を少し起して気をつけの姿勢をとると、指先まで伸ばした右手をゆっくりと自身の額の辺りに添えるのだった。

そこにみすばらしい茶色の外套とほつれも目立つ毛編みの被り物を召した老婆の姿は無く、神通が着ているのと全く同じ濃紺の第一種軍装を身に付けた一人の帝国海軍艦艇の命の姿が在った事を、空高くから放たれて海面へと宙を舞いながら小旅行していく雪だけが見守っていた。

第九六話 「縁に集った艦魂達」

昭和15年12月5日。

9月の日本による北部仏印進駐も記憶に新しい南方にて、日本とは比較的友好関係を築いているタイ王国と仏印の間に武力衝突したとの報が国内に波及するも、帝国政府は進駐した北部仏印の目と鼻の先にあるこの紛争に対して静観を決め、極東アジアでの新たな火種にも国内が騒然となるような事は無かった。

その証拠に呉海軍工廠では相も変わらずの多様な重機の音色が響き、工員や海軍軍人達の前期艦隊訓練に備える姿が冬空の下に繰り広げられ、佐世保や横須賀、舞鶴といった各鎮守府においてもその例外ではない。12月に入ってすぐに帝国海軍は新編成での艦隊訓練を企図し、今期より第二艦隊旗艦とされた横鎮に籍を置く高雄艦の長官室では第二艦隊司令長官の古賀長官が柱島泊地を目標地とする集結命令を発令。今期も明石^{あかし}が従う事になっている第二艦隊がようやく勢揃いするのであり、明石艦を含めた呉鎮籍である第二艦隊の各艦は来る出動に万全の備えを実施するのであった。

その一方、明石艦の命である明石。

入渠整備を終えた直後より悩まされた猛烈な腹痛と倦怠感も最近はずっと消え失せ、ようやく彼女にも普段通りの笑みとお勉強に集中できる時間が取り戻される。つい昨夜は久しぶりに大の仲良しである神通^{じんつう}と一緒にお酒も添えられた夕飯を食べ、柱島泊地にて集結する第二艦隊の事や軍歌でも有名な「赤城^{あかぎ}」という旧名を持つ大

先輩が来訪した事などを話のタネにして笑顔のみでの楽しい食事を過ごす。明石や神通が在泊する呉軍港から程近い柱島泊地での集結であるから自分達の移動の予定は少し先であるらしく、お互いに残り少ない呉での休日を用意にしようと友人との談笑を交えた明石は早速その翌日である今日、勉学の間である師匠の下に赴いて自身の仕事始めも近い事を伝えた。

『まあ、そうなの。私の方はしばらくは各工廠の支援になると思うから、艦隊訓練が始まったとしてもしかしたら会うかもしれないわね。』
『はい。沖繩の中城湾とか南支方面に行動するみたいだって聞いてます。佐世保に行けたら良いなあなんて思ってるんですけど・・・、そのお・・・。』

『ふふふ。佐世保にいる敷島姉ししまさんの事を気にしてるのね？ 大丈夫よ、敷島姉さんはとても優しくて品のある艦魂ひとよ。ふふふ、・・・ちよーっとだけ怖いけど。』

可愛い教え子である明石の胸の内を察する朝日あさひは少し意地悪っぽく教え子の憂いを逆撫でする言葉を漏らし、『えええ・・・。』と静かな悲鳴を上げて縮み上がる明石の様子を見て口元を緩める。朝日艦艦尾の長官室を間借りしている部屋の中、琥珀色の湾曲が目立つ髪をティーカップを持った方とは逆の手で撫でつつ、褪せる事の無い蒼色に映す教え子の姿は怖さに震えていながらも出会った頃よりかなり凛々しさが増しているのもまた朝日には嬉しい。

18歳か19歳くらいのおどけなさがギリギリ残っていた明石の顔はそれぞれのパーツこそ変わっていないが、目鼻筋もしっかりとして今やもう20代にも入ったような雰囲気を持ち、猫背が幾分矯正されて胸を張るような上半身の見栄えはそれとなくだが力強さも滲んできた。軍医さんとしての腕前も先月始めの頃かすみに一緒に霞とい

う駆逐艦の艦魂を診療した事でよく確認できたし、薬学関連のお勉強は朝日に学ぶというよりも既に一緒にその造詣を深めようとする状態である。最近学び始めた英語に関しては残念ながら不得意街道まっしぐらの酷い成績であるが、それでも毎日一生懸命に朝日先生の授業に参加しようとする意欲は明石から消える事も無い。朝日としてはその成長ぶりは中々の物で、一流の淑女^{レディ}としてはまだまだ及ばずとも工作艦の艦魂としては今にも自分に追いつかんとする勢いであり、偶にこうして意地悪をして胸にポツリと灯るささやかな嫉妬を晴らしているのである。

もっともそんな朝日の意地悪に籠められているのは悪意などではない。可愛い可愛い教え子の困った顔が朝日は心底好きなだけであり、自身の姉の怖さに戦慄しっぱなしの明石をすぐさま解放してやった。

『大丈夫よ、明石。妹の私がこう言ってはなんだけど、正直な所は金剛^{こんごう}なんかよりも余程お話ができる艦魂^{ひと}よ。貴女の先代とも仲はそこそこ良かったし、きっと佐世保では歓迎してくれるわ。』

『ううう・・・、はいい・・・。』

お師匠様の言葉を受けた明石は未だ妄想の果てに見た敷島の姿に眉毛をハの字にしたままで、ちょっとだけ朝日も意地悪が過ぎた事を反省するがこれ以降は控えようなどと微塵も彼女は思っていない。まだまだ悩む表情を浮かべて己の憂いを自分にぶつけて欲しいという朝日の素朴な願いが、唇に添えられたカップの水面に映る朝日の碧眼に込められているのだった。

しかしここでお師匠様の意地悪と気付かずに抱く明石の艦隊勤務への憂いは、朝日の部屋へと響いたノックに続くドアの向こうから

の声で一挙に忘れさられる事になる。それは明石も朝日もお互いに最も親しい部類に位置づける者の声にして、久方ぶりに耳にした朝日に所縁を持つ人物の物であった。

『軍医中将！　なぐがつと、でくつす！』

赤い絨毯にワイン色のカーテン、そして琥珀色である部屋の主の髪の色が溶け込んだかのような木目も美しい家具は朝日の部屋に常に小波の如き静けさを与えているのだが、底抜けに明るいその高らかな声はそんな朝日のお部屋の素晴らしさの一つをいつも台無しにしてしまう。ただそれでも朝日は自分の領域を乱されている事に眉を吊り上げる事は無く、むしろ明石と会話の中でも見せていた満面の笑みをドアの向こうに対して投げるのだった。

『まあ、長門^{ながと}。入りなさい。』

『え！？　長門さん！？』

観艦式以来しばらくぶりの長門の声、そして彼女がいつこの呉に来る等という予定を全く耳にしていなかった明石が嬉しさよりも驚きの色合いが濃い表情で声を上げ、朝日が細めた碧眼をドアに向けて今か今かと向ける先で、重みのある木の軋む音が漂うと同時にドアの向こうからは自慢の腰まである長い黒髪を靡かせて長門が登場した。

『じゃじゃーん！』

相も変わらぬ明るさを振りまく長門は自前で効果音を奏でて部屋へと一歩足を踏み入れると、もはやこういう格好が正式だとも言わんばかりに羽織るように袖を通した第一種軍装の上着を靡かせて両腕を肩の高さで左右に伸ばす。朝日譲りの広い肩幅とうねりの大

きい体のラインをあらわにし、明石と朝日の視線を釘付けにしながら面白がって腰を振るその姿はまさに、大人の姿を持った少女。もう既に幼さなど微塵も無い三十路を迎える直前の顔つきも大きな身体も、彼女にとってには心の赴くままに振舞う事への如何なる障害ともならない。生誕この方変わらない明石以上である長門の天真爛漫さは健在だった。

もっともそんな長門を実の姉の様に慕う明石は大はしゃぎで、飛び跳ねるように椅子から腰を上げると歩み寄ってくる長門の下へと駆け寄っていく。

『長門さん、いつこっちに!?!』

『やゝ、ついさっきだよお。第一艦隊もしばらくはこっちで艦隊訓練らしくてさあ。朝日さん、ご無沙汰でゝす。』

『いらっしやい、長門。元気そうね。』

可愛い可愛い妹分である明石と手を取り合いながら長門は朝日へも笑みを向けて挨拶し、ただ一人だけティーカップを片手に部屋の静けさを維持している朝日もまた満面の笑みを両脇を伝う琥珀色の輝きの中に浮べる。明石としても心許せて尚且つ一緒に騒げる長門との再会を心から喜び、お互いの体へと伸ばす手を宙で払ったりなどして無邪気にふざけ合う。二人とも朝日の教えを受けて育った愛弟子であるから、まさにその光景は仲の良い姉妹の姿であった。

しかしこの時、この朝日の部屋には明石と朝日には初対面となる、もう一人の朝日の所縁を得た人物が居た。

『・・・・・・。』

『うわあっ・・・・!』

『あら・・・・?』

明石よりも少しだけ大きく背と朝日譲りの広い肩幅に手伝わられて力強さを持つ長門の背後に、明石と朝日はそれまで気配すらも感じていなかった幼い顔つきの少女が居るのをみて驚きの声を上げる。細身で長門との比較が華奢な様がよく目立ってしまうその身体には、濃紺の第一種軍装が間違いない今この部屋の中に居る者の中でも最も似合わないという雰囲気以身に付けられ、横に切れ長で長いまつ毛に挟まれた顔に比しても大きい両目は僅かに怯えも混じった心根を遮られる事無く明石と朝日に伝える。だがまるでガラス細工の様に繊細な綺麗さを持つそのいでたちは、長門と良く似たその艶も輝く長い黒髪にも引き立てられて神々しいほどの存在感を少女の体全体に纏わせ、明石と朝日は少女の正体を探る思考も停止させて口を半開きにしたまましばしの沈黙に陥っていた。

対して長門はそんな二人を嘲笑うかのように口元を緩めるや、自分の体の背後から顔を半分くらい覗かせたまままで同じく声を失っている少女の肩に手を置いて前へと押し出す。

『さあ、挨拶。アタシの顔に泥を塗らないでよ。』

そう長門に声を掛けられると少女はどうして良いか解らずに少々視線を泳がせるが、その内にその場で程良く脱力できた直立不動の姿勢を取ると、頭に乗せていたブカブカの軍帽を手にとって深々とお辞儀する。容姿は16歳か17歳くらいで明石よりも確実に年齢は下であったが、お辞儀に次いで彼女から放たれる鈴を転がしたような声とその言葉遣いはとても大人びた物であった。

『お初にお目にかかります。帝国海軍、大和型戦艦一番艦、大和で御座います。この度はお二人のご尊顔を拝する事ができ、恐悦至極です。』

なにやら小難しい言葉を並べて声を放った少女は、その名を大和

と名乗る。明石も朝日も全くの初対面である艦魂だが二人ともこれまでにその名前は何度か耳にしている上に、お互いが親しみを抱く長門が連れて来たという今の状況を考慮するとその正体を勘繰るような事は無かった。すぐさま二人は同じ艦魂としての新たな仲間への好奇心と歓迎の心を笑みと細くしたそれぞれの瞳に浮かべ、お師匠様とは大違いで礼節をよく身に付けた少女に優しく声を掛ける。

『おお、貴女が大和かあ！』

『・・・そう。ふふふ。大和、初めまして。』

それは今の呉軍港の波間を圧する巨大な艦の命との初めての出会い。観艦式の時より長門からその存在を教えられていた明石はようやく仲良くできる機会を得て大喜びで、興味津々の子犬の様な目を輝かせてゆつくりと折っていた腰を戻す大和へと駆け寄っていく。明石の分身はまだまだ生まれて2年そこで艦の命である彼女の容姿もまたようやく20代に手が届いたかどうかの若々しい物だが、師匠と仰いで尊敬する朝日は既にも見え始めてきた40代の顔つきで、姉と慕う長門もまたその分身は生誕から20年近くも経っており艦魂としての容姿も明石とは10歳近く歳の離れた人物。明らかに年上の者ばかりであったこれまで明石の仲良し事情だったが、大和は年齢の上でもこの部屋の中では明石が一番近い。不思議と彼女は第一種軍装に襟章を着けていない事から立場の上でも遠慮する気持ちはだいたい薄らぐし、かける声もまた先輩に対する丁寧な言葉遣いで濾過する必要も無い為、明石はさっそくその華奢な肩に手を伸ばして笑みを送る。

『えへへ、私は明石い。長門さんから大和の事は聞いてるよお。』

『はい、明石さん。わたくしも明石さんの事は長門さんより伺っております。』

敵意など微塵も無い幼い顔つきと失せる事の無い丁寧な感じの言葉遣いが特徴的であったが、どうやらそんな大和は明石の事を少し知っているらしい。先程よりも僅かに浅いお辞儀を明石に対してしつつ、長門を経て受け継いだ朝日譲りの静かで綺麗な笑みを浮べて大和は続けた。

『陸奥^{むつ}さんを除けばもう一人の妹であらせられると、長門さんより常々聞いておりました。軍医として大変に勉強にも打ち込んでおられるあの姿勢は是非とも見習うべきだ、と。不束者では御座います、これから宜しくお願い致します。』

『お、あはは。嬉しいなあ。』

年下の容姿と艦歴を持つ艦魂は霞^{あられ}や霰^{ゆきかぜ}、雪風などが周りに居る明石であるが、同じ朝日に所縁を持つ艦魂としてこの大和には少々特別な感情が無意識の内に湧いてくる。明るく楽しく頼れるお姉さんである長門の手によって誕生した子なら姪っ子に当たるのが筋であろうが、姉妹艦の存在が無い明石には大和がなんだかすぐ下の妹の様に思えた。以前に長門より聞いた所では、この大和という少女はいずれ自分に代わって帝国海軍の全艦艇を率いる身と成り、そうなると明石よりもこの大和は艦魂としても高い階級を頂くであろう事も容易に想像できるのだが、全く偉ぶるような態度を示さずただひたすらに目上の者に対する視線を傾けてくる大和はそれだけ明石には可愛く思えてならない。無意識に漏れる笑い声も高らかに弾ませながら、明石は大和へと伸ばした手で軍装の下に隠れる大和の腕や腰周りの細さを確かめ続ける。痩せ型の体型である明石だって他人の事をとやかく言えるような触れ幅の大きい流線を自分の身体には持っていないのだが、兎にも角にも大和の幼さがとても愛くるしくてベタベタと新たな仲間に触れる手を止める事が出来なかった。

もちろんそんなご機嫌の明石に悪気などは一切無いのだが、大和は生来の丁寧な人当たりが災いしてか明石による阿修羅の如きボデ

イタツチに少し困ったように少しだけ表情を歪めている。伏せ目にちにした黒い瞳を泳がせて新たに姉と仰ぐ事になる明石の笑みにチラチラと視線を送っているが、この大和の精一杯の抗いを彼女達に等しく所縁を与えた側の朝日は見逃していない。緩めた唇にカップを添えて本日も香りの芳しい紅茶を一口飲むと、柔らかで弦楽器のようなその声を放って明石の言動をやんわりと諫めた。

『明石、嬉しいのは解るけど大和が困ってるわよ。ふふふ、それにも挨拶をさせて欲しいわ。』

『あ、えへへ。すいません、朝日さん。』

決して怒鳴り散らすような素振りも見せずに笑顔での注意を受けた明石は、怒られたと思う事無く朝日の注意に同じく笑みで頷いてみせる。自分の手で僅かに乱れた大和の服を少し罪滅ぼしも籠めて再び触り、小奇麗で汚れの無い濃紺の生地からしわの類を消してあげた。大和もようやく明石の親しみのみで構成された攻撃が終わり一呼吸を置いて休むや、そこからソファに腰掛ける朝日の前へと数歩ほど歩みを進めて再び畏まった挨拶を始めた。

『・・・大和です。お会いできて光栄です、朝日さん。』

『ふふふ。その様子だと、私の事も長門から聞いているみたいね。私が朝日よ、大和。』

この部屋に居る者達の中で最も年齢を重ねた朝日の前で、最も若い大和が深々と腰を折ってお辞儀をする。しかしながらお互いにゆっくりと深みのある物言いをする所は長門や明石には無い二人だけの共通点であり、体格が朝日や長門に比べれば随分と日本人女性らしい華奢である他はその身体から放たれる人物としての雰囲気もこの二人は良く似ていた。朝日の高い鼻と奥まった目に始まる西洋人の顔の作りも大和にあっては鼻も低く目も頬の高さとそれほど段差

を設けていないし、瞳の色も朝日は透き通る青で大和は白い輝きも目立つ黒い瞳。髪の毛もカールの掛かった琥珀色の朝日の髪に反し、大和の髪は一切の歪みもクセも無い少し青みがかった黒。容姿の上での彩りは歴然としているのだが、何気ない瞬きや声を放ち終えた後の小波のような息遣いが、この大和の小さく細い身体に朝日の血が間違いないように流れている事を良く物語っている。

明石と長門はそんな大和の後姿と対面する朝日の表情を同時に目に入れ、邪魔をせぬように小さな声でその事を伝え合った。

『ねね、明石、どう？ 大和は朝日さんソックリだと思わない？』
『うん。すごく似てます。あははは、なんか首の辺りなんか朝日さんそのまんまあ。』

そんな教え子達の声が耳に流しつ朝日もまた、眼前の少女のその雰囲気が他の誰でも無い自分にそのルーツを持っているのだと声も無く感じ取り始める。それは決して雰囲気だけではなく、ある種の縁としてもこの大和は自分との繋がりを持って生まれたのではないのかと朝日は考え、その発祥でもある人間が詠んだとある詩をついつい唇の隙間から漏らすのであった。

？敷島？の？大和？心を人間はば　？朝日？に匂ふ　山桜花

やまぎくらはな

その詩は朝日が日本へとやってくる100年ほど前に詠まれた物で、可憐な花と日本を掛け合わせた美しい言葉の並びは彼女の「朝日」という名前の原点でもあるとされている詩である。朝日の実の姉もまたここからその名を貰ったとも言われる中、朝日が日本へと

やってきた当時は既に使われていた大和の名前が、今こうして自分の血をその身に流す眼前の少女に受け継がれたのかと思うと、なんだか花という言葉で飾られるこの詩が自分の一族の為だけに存在しているような錯覚を朝日に与えてくる。

もしかしたら本当なら自分は太和という名を貰う筈だったのか？

40余年の長い思い出の中でも一度たりとて考えた事も無かった自分の名前に今更ながらに考察を巡らす朝日だが、彼女は解決できない自分の名の謎に氣落ちする事は無い。何かの繋がりが面白可笑しく巡るこの世の中で、もしかしたら自分が名乗っていたのかもしれない名を与えられたおなじ船の命が、よりにもよって自分の血を受け継ぐ者へと与えられた現実。それを思う時、朝日の胸には言葉にならぬ嬉しさがじわじわと込み上げて来るのだった。

『やまと・・・、なんて良い響きの名前なのかしら・・・。まさに次代を担う、いえ、この国の礎となる船に相応しい名前だわ。』

静かにそう言う朝日は珍しく飲みかけたままで、まだその髪の色とも似ている深いオレンジ色の湖面が残るカップをテーブルの上へと置き、ソファから立ち上がって太和のすぐ目の前へと近寄り始める。さすがに長門よりのその偉大さを事ある毎によく聞かされていた太和は少し驚いてそのか細い肩をすくめるも、朝日は碧眼を細めて綺麗な笑みをずっと向けたままで、そんな太和の力の入った両肩に左右の手をまるで羽衣を羽織らせるかのようにゆっくり、そして滑らかな動きで乗せた。

『・・・私はもう戦艦という艦種から引退して長い身だけど、かつてその一人だった者として、貴女とこうして出会えた事がとても嬉しいわ。貴女の教育に当たる役目は長門が引き受けるし、貴女にと

つては私はただの口うるさい年寄りの船かもしれないけど、これからよろしくね。大和。』

色々と運命的な物を感じる朝日の優しい語りかけは些か自身の身を蔑むような語句が入ってはいたが、小さなしわを控えるその唇より奏でられた声にはなんとも言えない暖かさが溢れている。それは数多い帝国海軍の艦魂達が日々を生きる中で、長門や明石といった愛しさを抱いて接する直の教え子に対する朝日独自の愛情であり、だれが一番という事なく別け隔てなく注いでくれる母が与える物にも似た慈愛の心その物。明石も長門もそれを直の教え子としてこれまで肌身を通して浴びてきただけに、本日よりこの大和もまた自分達と同じ朝日一家の屋根の下に暮らす家族となれたのだと確信できた。

艦魂なりに感じる事が出来る絆にして、それは人間達が抱く家族愛であった。

人間でも艦魂でも初対面という物は中々どうして気を遣う機会は多い物だが、家族と成れば互いに抱くそれぞれの気持ちに遠慮がなくなる物である。おかげさまで大人しくて口数もあまり多い性格ではない大和は家長にも等しい朝日より歓迎を受け、ようやく緊張の面持ちが消え失せた本来の笑みを浮べてくれる。朝日はすぐさま全員にソファへと腰掛けるように促すと、自慢の紅茶を振舞うべく部屋に備え付けられた戸棚より4人分のティーセットを取り出し始めた。

『祝いと憩いにはティーが一番よ。みんな少しだけ待っててね。』

そんな朝日の声によって始まるのは、新しい家族を歓迎する為の

ささやかなお茶会。

よって大和と長門が現れるまで続いていた明石の教育のお時間は問答無用で中止と相成ってしまったが、明石はそんな事を気にも留めずにソファに腰掛け、紅茶の準備に勤しむ朝日の後姿、そして隣や向かいへと腰を下ろしてくつろぎ始める長門や大和へと瞳を流す。いつぞや観艦式の際に目にした金剛や神通、雪風らで作られた一系の家族の様な光景は当時から少し羨ましくも思った明石だったが、今やそんな光景を自分も含めて作り出せている事が彼女には無情の喜び以外の何物でもなかった。

ようやく初めて目にした新たな家族の為にとジャム付きの乾パンまで用意してくれる師匠の朝日は、誰が何と言おうとお母さん。明石の隣でその大きな身体を斜めに流して肘掛けに上半身を預けるようにし、だらしの無い姿勢で座りながらも明るく冗談混じりの声を次から次へと発する長門は、明石とはちよつと歳が離れたお姉さん。そして明石とはテーブルを挟んで向かい合う形となり、4人分の紅茶やお菓子の類を乗せたトレイを運んできた朝日の隣にちょこんと座るあどけない大和は、頼れる姉が産んだ姪っ子にして自分とは年頃も近い妹のような存在である。

『えへへへ。朝日さんの紅茶は美味しいんだよ、大和。呉に居る艦魂達^とがみんな欲しがるんだから。』

何気なく放った明石の言葉には無意識に笑い声が滲み、その音色もまた長門に負けない明るさがふんだんに籠められる。明石が味わう初めての妹分との楽しい一時にして、初めての一家団欒でもあった。

こうして一家水入らずの楽しいお茶会となった師走のとある日であったが、残念ながらこの4人の中で楽しい時間を過ごせるのが開始から半ばまでであった者が一人だけ現れてしまう。それは朝日一

家随一のはねっ返り娘にして栄えある長女でもある長門であり、きっかけは本日の主役である彼女の教え子が朝日の用意してくれた極上の紅茶をご馳走になって思わず放ってしまった何気ない一言と、それに応じた朝日による会話の中にあった。

『おいしい……。わたくし、こんなに香りと味が奥深い紅茶は初めてで御座います。』

『ふふふ、口に合って良かったわ、大和。きっと長門が淹れてくれる紅茶は口に合わないのね。ふふふ。』

その40余年の生涯において常に絶賛されてきた紅茶の腕前を持つ朝日は、長いまつ毛を上下にパチクリと動かして感動している大和がその日常で得ているであろう飲み物の味を察してみせる。朝日が疑ったのは彼女がいつも教え子達にご馳走するが如く長門が大和へとご馳走しているであろう紅茶の味で、底抜けに明るくて他人に好かれる性分ながらもとび抜けた面倒臭がり屋である長門の紅茶の味はそれに見合う奇抜な代物なのではと微笑のまままで考えを巡らせた。

そしてそんな長門に対する朝日のこのお考えは大当たりである事を示したのは、その愛くるしく清楚ないでたちに反して結構毒舌な面を持つ大和の返した一声であった。

『はい、あれは残念過ぎで御座いました。長門さんには恐れ多いのですが、とても不味い紅茶で御座いました。』

『まあ。うふふ。』

『あははは！ マズイだって！』

なんとも率直な物言いにしてそれでいて丁寧な言葉遣いを崩さずに言ってみせた大和に、明石と朝日は思わず声を上げて笑い出してしまう。どうも大和にしたら冗談や悪戯のつもりでこんな言葉を放

ったつもりはさらさら無いらしく、面白可笑しく笑い転げている二人をその長いまつげに挟まれた瞳に映しながらも何食わぬ澄ました顔でカップを唇に添えていた。やがて笑い声が中々治まらぬ明石と朝日を横目に映しながら僅かに首を捻り、そんな自分の放った言葉が笑いのツボを刺激したのかとちよつと困ったような表情を浮かべる大和。そのちよつとはす向かいの位置にて斜めにソファに腰掛けた長門は全く怒る訳でもなく、明石が大笑いしながら上げた言葉にも一緒に笑って笑い出すとその大きな身体をくねらせて教え子の発言に対する短い感想を述べる。

『あはは！ 長門さんの紅茶はマズイ！ あゝはっはっは！』

『いやゝん！ あははは！』

直のお師匠様である朝日とはうって変わって冗談好きでひょうきんな長門は満面の笑みでそう漏らし、すぐ隣に座っている明石に負けないくらいの高笑いを始めた。それでも長門は大和と師弟関係となつてこの方、他の艦魂達が面会謝絶状態とされる丁重な養育の日々の中で最も一緒にいる時間の長い者であり、まさしく十人十色である艦魂個人の性格としてこの大和が時折こういう物言いをするのをよく知っているのである。もちろん可愛い教え子に他人を小馬鹿にしよう等という悪気に満ちた腹積もりがない事は百も承知。それにそもそも長門は朝日の様に紅茶に対して極端なこだわりを持っている訳でも無く、教育の合間にちよつと休憩を取ろうとして自身が幼い時より目にしてきたお師匠様の紅茶の入れ方を見よう見まねでやってみただけの事。その上で紅茶の味がすこぶる不評であっても長門としては別に落ち込む事も無ければ、その腕に磨きを掛けようと一念発起する気も全く湧いてこない。むしろ『こうして笑いのタネになるならこのままでも良いや。』等と、そのなんともアバウトにして能天気な思考の中で呟いているくらいであった。

だがしかし現状に甘んじる事を良しとする長門のそんな意識は、

知り合ってもう既に20年来のお付き合いであるお師匠様が許してはくれない。『艦魂は一流の淑女^{レディ}でなければならぬ。』という教えは明石に対する教育でもしばしば用いられる物であるのだが、朝日のその基準において紅茶の腕前が些か問題有りとされた長門は、今や自分より身体も大きく成長して栄えある帝国海軍艦艇の全てを率いる身であったとしても、この時をもってまだ未熟であると断定される。

美味しい紅茶を淹れる事ができる。

幸か不幸かそれが人並み以上に紅茶への執着を持って生きる朝日独自の、一流の艦魂たる者の第一条件であったのだ。

その一方、最も朝日と付き合い長い長門はお師匠様の紅茶好きとその教え子である自信の腕前が悪いと断定されてしまった事に、隣の明石らと一緒に笑い出してしばらく経った頃に瞬間的に脳裏へと過ぎらせて悪寒を覚えるが、残念ながら彼女の危機を察知する機会は既に遅きに失していた。

その内にふと正面から放たれてくるお師匠様の笑い声にただ一人だけ不気味さを胸に滲ませた刹那、長門がこの世で最も恐れるお師匠様の癖が彼女には襲い掛かってくるのだった。

『ふふふふ、長門。ティーの味が悪いのは真心が足りないからよ。米？という字は八と十と八の漢数字が組み合わされているのと同じで、ティーの準備には多くの過程とその具合という物があるわ。それら一つ一つは技術なんかでは無く、誠実な真心からくる注意力によって成されている物なのよ。茶葉を湛えたスプーンの角度やお湯の温度、ジャンピングの様子、抽出される成分の増減。それらは飲んでくれる相手がどんな味わいや香りを望むのだろうと考えてあげれば、自ずと相手の口に合う物に仕上がってくるようになってる

の。明石もこの間、私が浅間あさまにティーを淹れてあげた時の事は覚えてるでしょう？ あの時の浅間も美味しいって言ってくれたけど、それは浅間が濃い目の味わいをいつもティーに求めているのを頭の中に入れて、注意深く過程を積んだティーを準備した結果なの。過程と結果が最も大事だとも言ってるでしょう、長門？ 美味しいとか不味いという評価は後から付いて来るおまけみたいな物よ。常にしっかりと、過程と結果に注意しながらティー淹れなさい。解ってる、長門？』

『は、は〜い〜・・・。』

明石と長門が思わず『出た〜。』と脳裏で口にしてしまう、常になんて教える根本とその際のしゃべり方がブレる事の無い朝日のお説教。叫ぶ訳でも怒鳴る訳でも、嘲笑う訳でも睨みつける訳でも無い、ただただ持ち前の優しい微笑と包み込んでくるが如き暖かい声色で奏でられる言葉の羅列は、長門も明石も抱く尊敬するお師匠様の唯一の困った所である。きつと大好きな紅茶と自分の教え子の事が混ざり合ったが故にこうして語る姿勢にお師匠様なりの情熱が籠っているのであろうと二人は良く解っているのだが、一切の反論も許さずに理詰めで攻め立ててくる朝日の声は二人の引きつった笑みの側面に冷や汗を浮べていく。特にその矛先とされた長門にあっては久しぶりの反省のお時間が至って優しげながらも強要されてしまい、大和がじつとその黒く大きい瞳を向ける中でコツテリ朝日に紅茶のなんたるかを聞かされる事になってしまった。

明石にとってもこのお師匠様によるお説教は随分と久々に目にした代物であったが、隣にてその座る姿勢にまで飛び火したお説教を受けて項垂れる長門を心底可哀想に思いながらも、そんな長門を見つめて大和が小さく微笑んでいる事に敢えて助け舟をだそうかという選択肢を捨てた。

姉と慕う明るい長門の笑みが完全に歪みを帯びた苦笑であった事

は残念であったが、自分とお師匠様と新たな家族の一員が微笑みのみで過ごせるこの時間をいつまでも楽しみたいと願う。

それはそれは楽しいの一言に尽きる、新たな家族を加えた朝日一家のとある昼下がりであった。

第九七話 「母が得た覚悟／前編」

昭和15年12月8日。

ようやく明石艦^{あかし}も含めた呉鎮守府籍の第二艦隊所属艦には泊地移動の命令が出され、呉軍港のあちこちにて長い休日浸っていた対象の艦は続々と拔錨。海軍兵学校もある江田島を左舷に眺めつつ瀬戸内を僅かに南下し、柱島南西沖へと移動した。

帝国海軍ご用達の泊地であるここは四方の海面に大小の島々が浮かぶちよつと閉塞感のある波間であるが、潮の流れは比較的穏やかで辺りに散在する多くの島々は何も無い海原では視覚的な意味での障害物ともなってくれる故に防諜の面でも良好であり、明石艦や八戦隊の利根型^{とね}二等巡洋艦、二航戦の蒼龍艦^{そうりゅう}や飛龍艦^{ひりゅう}といった最新鋭艦艇の多い第二艦隊には大変に好都合な場所であった。

そして艦の命である明石にとっては、この泊地移動の為の拔錨こそがまさに昭和16年度の海への出発でもある。自分と入れ替わりに栈橋や岸壁をこれから使うのであろう長門艦^{ながと}率いる一戦隊、まだ主砲も煙突も搭載されていない艤装中の大和艦^{やまと}、そして自身の分身にあるスタンウオークで手を振ってくれる尊敬するお師匠様に見送られる中、明石は大きく帽子を握った右手を宙に掲げ、遙かに空を舞うカモメ達の航跡を辿るようにグルグルと巡回させて別れの帽振れで応える。

『行ってきました！』

寒がりな事から二枚も外套を重ね着した明石だが、艦尾の向こうに自分の出立を見送ってくれる面々を瞳に映すと白い息が恒常化する師走の寒さなど忘れてすぐに元気一杯の声を放つ。尊敬するお師

匠様の分身である朝日艦の今ではもう珍しいスタンウオークには、師匠にして母とも慕う朝日と供に明石と違ってもう少しだけ呉軍港に滞在するという長門の姿もあり、肩の高さで上品に手を振る朝日の隣にて彼女は対となるように高々と頭上に掲げた片手を大きく左右に振っている。肩幅の広い体格以外は中々その二人の資格好に共通点を見つける事ができないのだが、先日のお茶会にて一緒の時間を過ごせた明石はここに至って長門と朝日を他人同士などと思う事もない。姉に負けじ、母にも負けじと、お仕事へと赴く為に我が家を出発するかの如き気分が明石の中ではとても強いのであり、先程放った意気揚々とした別れの声はまさにそんな彼女の心境を代弁した物であった。

こうして明石は家族たる者達に見送られて薄っすらと雪化粧もした呉軍港を後にし、新たなお仕事の場合とその軍艦旗を進めていくのだった。

『明石く！　じゃあねく！』

一方、陽気な長門もまたほんの少しだけ逞しくなった雰囲気を持つ明石に声を上げ、妹分と可愛がる者が昭和16年の海へと旅立つのを晴れやかな気分で見送る。隣では大人しい朝日が終始微笑んで小さく手を振るだけではあったが、その胸の中で発している言葉は長門と全く同じであり、やがて二人は笑み一瞬だけ合わせると再び遠ざかる明石の分身へとその瞳を向ける。艦尾旗竿に翻る軍艦旗も勇ましい中で無邪気に手を振る明石の姿は、朝日にとっても長門にとっても「成長」の二文字を強く意識させる光景であった。特に長

門は今現在の自身の教え子である大和とこの明石を意識の中で比べてしまい易く、ついこの間までテーブルマナーが解らずに泣いていた明石の顔を思い出しながらも、既に彼女が教え子より艦魂としても船の命としても数歩くらいは前を歩いているという事をその艦影からひしひしと感じ取っていた。

『明石は大丈夫ですね、朝日さん。第二艦隊のみんなとも上手くやれてるみたいですし、愛宕^{あたご}や高雄^{たかお}も明石の事は褒めてましたから。』

ついつい漏らした長門のそんな言葉も、妹分である明石の成長ぶりに胸を明るくした印。もちろんまだまだ未熟者である所は沢山あるのだが、その声を耳にした朝日も長門が放ったその言葉を別段疑ったりするような事は無く、やがて肩の高さで左右に揺らしていた手をスタンウオークの手摺の上に乗せつつ小さく頷き、おもむろに長門を少し責める様な物言いで賛同の意を示すのだった。

『ふふふ、あの子は先代に本当にそっくりだわ。例え一步でも日進月歩。亀みたいな足取りでも前に進む事への貪欲さを常に失わない所は私も見習うべきね。それにあの子の、面倒臭がる様な所が無い事もね。ふふふ、誰かさんとは違うわね。』

『あははは……。き、気をつけますう……。』

さしもの長門も朝日のお言葉には一挙にそのひょうきんさを失わせてしまう。

自身の為に血を流してその誕生を手助けしてくれた唯一人の者としても、教えを授けてくれたお師匠様としても、朝日なりに持つ怖さを帝国海軍艦魂社会で一番知っているのが他ならぬ長門自身だからである。絵に描いたような西洋の貴婦人らしいカールの掛かった琥珀色の髪と、どこまでも透き通るような濁りの無い碧眼に代表される朝日のお顔はいつも穏やかで美しさを失わず、目にした者に怖

いという感情を抱かせる事は殆ど無いのだが、それでも朝日は長門ですら経験した事の無い大口徑の砲弾が飛び交う戦の海原をその身一つで駆け、武技教練の柔道の腕前だけなら過去に喧嘩沙汰を何度も起した事で有名な敷島しきしまや金剛こんごうですらもついには勝てなかったという一流の猛者でもあった艦魂。その上で大変に博識で頭も良く、他人への気配りは彼女の専売特許である美味しい紅茶がそのまま体現しており、体格以外のあらゆる面で長門はまだまだ朝日の足元にも及ばない者なのであった。

そして当の長門自身がその事を直接の教えを受けた者として肌身を通してよく知っていたが為、このように朝日の口から漏れてきた苦言を耳にして彼女は後頭部を荒く掻きながら冷や汗も浮かんだ苦笑いを浮べているのだが、本日のお師匠様は例え機嫌が良さそうであつてもこんな程度で教え子の未熟さを許してあげる気は残念ながら毛頭無かつた。

朝日は相変わらず微笑んだままでふと隣に立つ長門へと視線を流し、ちよつと引きつった教え子の苦笑いに青い瞳をより細めて口を開く。

『ふふふ。長門。今日は大和は？』

『あ、大和は今日は陸奥むつと砲術のお勉強です……。あはは……。砲術は陸奥の方が詳しいので……。でへへ……。』

先日初めて顔を合わせた新たな仲間が教えを授ける者たる長門がいるにも関わらず、先日のお茶会の時とは違って今日は不在であるという事の原因を尋ねた朝日であるが、返って来たのはより専門性に長けた者に教育者の役を譲ったのだという長門の言葉。朝日を師と仰いだ頃の長門や現代の明石のように、艦魂社会での師弟の日々という物は常に一緒に過ごす時間をもって教育の時とする場合が多く、その教え自体もほとんどは師と仰いだ者が全て与えるのが慣例である。だが別に長門としても面倒だからという意味で、大和の教

育を新たな一戦隊構成艦として先日一緒に呉へと来た陸奥に預けた訳ではない。

長門の妹である陸奥は姉とは大違いで品行方正。朝日と同じ時代に同じ戦艦として役目を全うし、同時にこれまた教養豊かでもあった富士^{ふじ}という大先輩より教えを授けられた者であり、たまたま長門よりも砲術の項目に関しては造詣が深かった故に、以前に伊勢^{いせ}や山城^{やまし}も在籍していた頃の一戦隊の中の話し合いで大和に対する砲術教育役として就任したというのが真実なのである。元来、何にでも詳しいという人物は艦魂でなくとも人間の世界でも希な存在であり、より専門性に特化して普段のお仕事に励むという事は別に珍しい物ではなく、艦魂である彼女達にとって最も近いその実例は、彼女達の分身に乗組む多くの乗組員達が砲術科や航海科などに分かれて編成されている事であった。

もちろん朝日もその事は知っており、別に教え子が砲術に誰よりも精通していない事に眉を吊り上げるような気は起きないのだが、この場に大和という新米艦魂が居ない今という瞬間の真相を得た朝日の考えは、不幸にもその教え子である長門にとっては久方ぶりにして最も恐れている「お師匠様とのマンツーマンでの教育のお時間」という事態へと発展してしまうのだった。

すると朝日は些か長めの溜め息を放つや何の前触れもなく長門の黒く長い髪に隠れた耳へと手を伸ばし、笑みに包まれながらも長門にとってはやたらと怖く感じる音色が混じった声を放つ。

『そう、それならゆっくりと話す時間はあるわねえ。』

『えっ、えっ、え……？』

久方ぶりに耳にした怖さ満点の声に続いて次に長門の耳へと伝わってくるのは、少しだけひび割れたような肌に包まれた朝日の指先が伝える感触。綺麗に切り揃えられた爪によって耳を這うだけならば苦痛はない筈なのだが、すぐさま長門の耳に触れた朝日の二本の

指はそこにあつた長門の肌を摘み上げると同時に、冬の潮風によって冷たくなった彼女の耳たぶに熱と鈍痛を与え始める。そして長門がその感触に悲鳴をあげる前に、朝日は教え子の耳を摘んだままクルッと踵を返して自身の艦内へと歩みを進めていった。その流れるような身のこなしに始まる朝日の歩く姿はまさに貴婦人の姿その物であるが、それに続いて耳を掴まれた長門の大きな身体は斜めに傾き、ようやく上がった彼女の悲鳴を残して無様に引き摺られ始める。

『ふふふふ、明石はあんなに頑張り屋。大和だつてこれからドンドン叡智を養うんだから、年長の貴女ももう少し品と知識を身に付けなければならぬわ。さあ、こっちにいらっしやい。』

『わ……、わあ……！ イタイ……！ ま、待ってえ、朝日は……！』

至って笑顔の朝日は白い息を残しながら暖かい部屋へと戻ろうとするも、その笑顔こそが今や最も恐れ慄く対象である長門はグイグイと身体を引っ張られながら必死に解放を懇願する。ただ脳裏の中で既にそんな抵抗の策が時期を逸していると長門自身が察する通り、朝日は教え子の耳に伸ばした指先から力を抜いてやろう等とは微塵も思っていない。その笑みの下にて静かに燃え上がっているのは、明石や大和といった現代生まれの教え子達を目にした事で芽生えた、20年近く前に得た自身の最初の教え子に対する再度の教育の情熱。むしろこの長門という教え子は艦魂達の中で的事とは言え、現代の帝国海軍海上部隊のほぼ全力を指揮下に収める立場、すなわち連合艦隊旗艦という役職を頂いているのだから、朝日の教育の熱も明石に注いでいた物とは色合いがさらに一層濃くなるという物である。

その内にスタンウォークから朝日の自室である朝日艦長官室へと続くドアより長門が半身だけ除かせて最後の悲鳴を放つが、彼女の耳を摘む手とは逆側のお師匠様の腕が首の辺りに絡みつくと同時に、長門の身体は吸い込まれるようにしてドアの向こうへと消えて行く。

『ああっ・・・！ いやあ・・・！ タ、タスケテ・・・！！！！』

『別に取って食いやしないわよ。さあ、速く入りな・・・さい！』
『あゝれゝ！』

語尾に僅かに力が込められた朝日の優しげな声が木霊し終えると、朝日艦のスタンウォークにあるドアはバタンと大きな音を立てて閉ざされる。その付近の波間でお仕事に励む大小の曳船や給水船の艦魂達は奇妙な悲鳴に気付いて朝日艦のスタンウォークへ一瞬だけ視線を流すが、既に振り向いた視線の先には固く閉ざされたドアと潮風が通り抜けるだけのスタンウォークしか無く、そのドアの向こうで涙ながらに勘弁を願い出る連合艦隊旗艦の声には気付かずにも今日もまたお仕事へと精を出す時間を続けるのだった。

それから一時間程も経った朝日艦の朝日のお部屋では、ようやくお師匠様による再教育を終えたばかりの長門と朝日が優雅なお茶の一時を迎える。

一日7回もティータイムを設ける朝日にとっては毎日の日課の中の一瞬であり、そもそもが教え子を虐める気なぞ彼女には毛頭ない事から今日もまた朗らかな笑みでカップより立ち昇る香りに夢うつつの状態となっているのだが、残念ながら朝日なりの情熱が強く籠った教育をさつきまで受けていた長門にあっては正反対である。

常に明るくひょうきんに振舞い、その顔は既に三十路も目前とした大人の女性の容姿を持ちながらも、歳相応の落ち着きという物にはてんで無関心な長門。今から20年ほど前に誕生してこの朝日よ

り教えを受けた最初の頃から彼女はお勉強も運動も出来る秀才であったが、努力という物を煩わしく捉える辺りはその少女時代とちっとも変わっていない。『メンドイ』という言葉を何かにつけては連発し、実際にお仕事として自分の目の前に障害が現れるとすぐに逃げ回るといふ、彼女の普段の生き方の根本である。その面白可笑しい人柄は大多数の艦魂達からは好意的な目で見られ、おかげで彼女自身も割りと仲間内からの人望は厚いのだが、如何せんそんな長門に血と叡智の流れを導いた朝日は教え子の怠慢をとっくに見抜いており、真面目にしてひたむきにこれまで生きて来た自分の経歴に誇りを持っているが故に、眉を吊り上げた憤怒の感情を表す事は無くとも簡単には許してくれなかった。

おかげさまで長門は息継ぎも確認できないほどの独特のお説教を浴びる事になってしまい、しかもまた怒鳴る訳でも無くとくとくと道理を結びつけて語る師匠の声には反論も出来ない有様。冷や汗を浮べた苦笑のままで後頭部を掻きながら省みの態度を表す以外に選択肢は無く、時折放たれる『解ってる？』の一言に空返事と悟られないような応答もこなし、散々に至らぬ点を指摘されて精根尽き果てた長門。僅かに青白くなった顔を疲労感に歪め、朝日と向かい合う形で置かれたソファの上にもまるで横になるようにして身体を傾けている。肘掛けに置いた片腕に首をもたげながら僅かに引きつった口元を動かし、恐れ多いとは思いながらも対面するご機嫌なお師匠様に自身の受けた精神的な負荷が生半可な度合いではなかった事を無言で伝えているのだが、実弾も飛び交う戦闘海域を潜り抜けた末にこうして生きている朝日は、とても上品な人柄ながらも根性の据わり方においては長門が足元にも及ばない人物。口元に近づけたカップより漂う薄い湯気の壁越しに教え子と視線を合わせても、朝日は至って平然としながらいつもの暖かさが籠る微笑みでもって次の一杯へと洒落込む。

『ぐっへえ……。』

『ふふふ。だらしないわよ、長門。しゃきつとなさい。』

長門が完璧に自分のお説教に参っているのを承知で意地悪っぽくそう言った朝日は、残り少なくなったカップの中身を一思いに溜飲して溜め息を吐く。その息遣いには至福の一時を満喫できた喜びとそれが終わってしまう一瞬の寂しさが混ざり、明るい長門が自慢の物言いで辺りの空気を賑やかにしてくれる事も今だけは無い為に、朝日の部屋には彼女の分身にぶつかるとした小波の音色も聞き取れるほどの静寂が立ち込める。そしてそんな中、全ての役目を終えた白いカップが朝日の手によってテーブルに置かれ、柔らかな衝撃に弄ばれてスプーンと共に踊る音がひっそりと部屋に響くや、ふと朝日はそれまで湛えていた笑みと比べると少し重みが濃くなった声を放った。

『長門……。今日は貴女と折り入ってお話があるわ……。』

『むええ……。まだあるんですか……。？』

『……。』

相も変わらずやる気が微塵も纏われていない顔で、大きく口を開かず長門は声を返す。今日は朝からお師匠様のお説教を受けて大らかな性格の彼女は既に心の余裕も無くなってしまっており、声を返した相手がその優しさと怖さの両方を知っている朝日である事も忘れて些か礼を失したような態度であったが、それ以降に続いているつももの柔らかな物言いによる苦言やお叱りの言葉が一向に木霊せず、ただただ波の音がほのかに支配するだけの室内の静寂にしばらくすると長門はほんの少しだけ不審を抱き、ふと顔を上げて半開きの視界を正面へと流す。するとそこにはさっきまでの笑みが嘘の様に眉間にしわを寄せ、透き通るような青い瞳の色をより濃くしたお師匠様のお顔があった。

『……朝日、さん？』

一番弟子である長門ですらもその記憶の中で検索する事は至難の業である朝日の表情は、何か悩み事があるかの様に唇を噛みつつも、膝の辺りに向けたその瞳に宿す黒さの目立つ濃い青には歪みやブレ等が一切無い芯の通りさえ感じられた。長く一緒に過ごしてきた中でもこのようなお師匠様の表情を見た事が無い長門は驚きの余り、それまでだらしなくソファの上に傾けていた身体を起して小さく目を見開くが、それに続いて師匠の変わり様を訊こうとした彼女の声は朝日が放った言葉によって掻き消される。

『あ、朝日さ……。』

『私、上海でね……。出雲と少しだけ話をしてきたんだけど、その事について貴女とお話がしたいのよ……。帝国海軍連合艦隊の現旗艦である、貴女とね……。今日は師匠筋に当たる者としてではなく、かつて現代の貴女と同じ役職を頂いた事もある者として、腹を割った所でお話したいわ……。』

どこか含みを持った声色で朝日はそう言うと、長門も認めた深みの増した色合いの碧眼をようやく教え子へと向けてくる。いつも長いまつ毛に包まれて暖かさと慈愛を浴びせてくる朝日のその視線は、今日はまるで凍てつく厳冬の海を思わせるほどに冷たさを帯び、鋭利に尖り始める目尻は常に笑みを絶やさぬ彼女に実の姉である敷島という者と同じ顔つきを漂わせ始めていく。もう生誕から20年を数える長門をして初めて目にしたその顔は、朝日においても生涯でただ一度だけ成した事のある戦を知る者の顔。そしてその表情を成した時とは、彼女自身が多く仲間と供に死だけが転がる日本海を必死に駆けた、現代から30数年前の事。世界最強の呼び声も高かったロシア海軍と真正面から対峙した、日本海海戦の時に浮べていた表情であった。

一方、長門もまたようやくお師匠様がその表情の中に込める只ならぬ胸の内を察し、持ち前の「気の良いおフザケ」が今は必要ではないと自分の中で区切りをつける。もはや彼女のトレードマークになっている羽織ったような着方で身に付けた第一種軍装の上着を直し、無言のままソファに深く腰を掛け直して朝日と同じく背筋を垂直にしてみせた。すると朝日より少しばかり背の高い長門の大きな身体つきはこれまでに無く部屋の中でも目立ち始め、いつも必ず左右のどちらかに傾けている首も真っ直ぐにするや体軀の比較では完全に長門が朝日へ威圧を与えるような格好となる。

その内に胸の前のホックを全て駆け終えて長門はしばしの間下に向けていた顔をゆっくりと持ち上げ、琥珀色の朝日とは違う漆黒の前髪の奥に控えた顔を師匠へと向けた。その顔つきは今現在の朝日の血が彼女のものにも確実に流れている事が如実に示される、落ち着きと威厳とを兼ね備えた表情で、いつもは丸い瞳を僅かに尖らせたその目つきもまた朝日とは瓜二つ。瞳に宿した色が闇を連想させる漆黒か、凍てつく夜の海を連想させる濃い青であるかぐらいにしか違いは無く、片や西洋人で片や日本人の顔立ちを特徴する二人の表情と、その身体全体に纏われる雰囲気はまごう事無き同じ代物であった。

『連合艦隊、旗艦として、ですか……。』

『ふふふ、ええ……。私はこうやって教え子と話せる時を、どれほどまでに待ち望んだ事か……。』

少したどたどしい感じで言葉を紡いだ長門に、朝日は鋭くした目つきをそのままに笑い声を放って応じる。その声の内容も今や榮えある連合艦隊の旗艦を拝命しているという長門の成長を喜ぶかのよな物であったが、長門はその応答の始めにあった短い笑い声に朗らかさが一切無く、むしろ不敵に嘲笑うような感じすら含まれてい

た事を敏感に察知していた。

それと同時に、長門は今から始まるであろう師匠との会話が？ただの師弟関係を築いた艦魂どうしの意見交換？等では無く、？時代は違えど帝国海軍の全てを統率した経験を持つ者同士で想いを衝突させる戦？になるのだろうか？と声も無く悟り、大きくゆっくりとした吐息を一度だけ行って恐怖も高揚感も湧かない胸の内に彼女なりの堅固な覚悟を秘めるのだった。

その後しばらくして、絨毯やカーテンの持つ深い赤が舷窓から漏れてくる陽の光によって音も無く朝日の部屋を散歩する中、お互いに帝国海軍を率いる船としての使命をその分身に宿した経歴を持つ者達の声が室内の静寂を切り裂いていく。赤みを帯びた舷窓から差し込む光の帯が宙に舞い上がる埃や塵の粒子を粉雪の如く輝かせ、時折遠めに木霊する呉軍港内で活動する艦艇の警笛や重機の音が虚しさを漂わせるといふ朝日の部屋の空気は張り詰めた緊張感によって吐息の糧とするには余りにも硬い代物であるが、それでも尚、朝日と長門はそれぞれの瞳と同じように鋭く尖らせた感もある、戦を生業とする船の命として上げる声を静める事は無い。

その声の交錯する様は、朝日の問い掛けに長門が答える体裁で進められていた。

『私と出雲が気にしたのは、連合艦隊の艦艇の数と一緒に増している、米英仏蘭との緊張。支那事変がもはや戦の形態になり始めているのは、昭和12年の勃発からずっと上海で見てきた私は良く解っているつもりよ、長門。その上で今年、仏印への進駐に踏み切ったおかげで、米英仏蘭の4カ国とはこれまでに無く緊張が高まっている。そしてそんな中で増勢するのは、この4カ国とは戦争状態も辞さず、

という意なのかしら？』

『欧州戦線ですよ、朝日さん。どこまで朝日さんがご存知かは解りませんが、独国の躍進が欧州では凄まじいんです。そのせいでこれまで世界各国に植民地を持つ西洋列強の構図が崩れつつありまして、既に降伏したフランスやオランダは宗主国としての地位が揺らいで来てるんです。でもそうになると、実際に植民地としてゐる地では治安が乱れたり、それまで平穏だった隣国との間に力の差が生じて摩擦を生む公算が大きいですよ。現に今月の初め、泰と仏印では領土問題を巡って紛争が発生してます。それに欧州戦線での火がそのままアジアに飛び火してくる可能性もありますよ。アタシが生まれる前ですけど、前大戦の際にもドイツの巡洋艦が跳梁して南洋やインド洋の安全は乱れました。』

師弟としての仲も良い朝日と長門であるが、お互いに鋭くして突きつけあったそれぞれの瞳に緩みを与える事は無く、決して相手に対しての親近感も信頼も薄れていないにも関わらず笑みを浮かべる事もまた無い。ただひたすらにどちらかが挙げる質問に答えるという構図を頑なに守り、ソファの背もたれからも離れて真っ直ぐ伸ばした背筋を維持しながら偶に折り重ねた脚を組み替えたり、胸の下の辺りで腕を組んだりする以上の動作をとろうとはしなかった。

やがて長門は一息の間を置いてから、先程と同じ様に実例も兼ね合わせた上での朝日の質問に対する答えを述べていく。

『ましてこの日本は四方を海に囲まれた海洋国家。その海洋国家たる日本の通商路に飛び火でもしたら一大事です。去年の今頃ですけど、ロンドン航路に着いていた日本郵船の照国丸てるくにって民間船が、英国の沿岸で触雷して沈没する事件もありました。しかもその時、爆発した機雷は英国と独国のどちらが仕掛けたのか解らないもんで、結局損害の請求先が無くて日本だけが泣きを見る事態になっちゃっ

たんです。でもそんなのが日常茶飯事じゃ、誰だって困りますよ。そんな中でも日本が欧州各国の海軍力によるとばっちりに自分の力で対応するのであれば、出雲さんの支那方面艦隊も含めて海軍力を相応に増勢するのは時流の上でも必至だと思います。』

長門が語るのとはここ最近の帝国海軍における増勢の状況。それを尋ねた朝日の質問は、ついこの間まで出向していた上海にてもう40年来の付き合いになる親友の出雲と会話した際に得た、朝日なりの現代の帝国海軍に対する理解が及ばない部分。旧式艦であるが為に現代の帝国海軍の中枢からはすっかり離れてしまった朝日には、例えば帝国海軍の艦魂社会における生き字引のような存在であっても中々伝わってこない情報の事である。対して直の教え子の長門は帝国海軍実戦部隊の司令中枢をその分身に宿しており、朝日は自分が思った疑問に対して彼女なら答えられると思ってこの語り合いの場を企図したのであった。

だが、教え子の回答は朝日が親友との会話で抱いた疑問を満足に解決してくれるまでの内容ではなく、朝日はおもむろに部屋にたちこめる柔らかな陽の光を受けて輝く琥珀色の髪を首の辺りで撫でながら、少しだけより鋭さが増した声を対面する教え子へと投げる。

『長門。それはこの二年くらいの間に、特務艦も含めた艦隊を南洋方面に展開させている事とも同義なの？ 私の艦に乗組んでいた工部部長の人間が言っていたの聞いたんだけど、あの方面はもう20年近く帝国の委任統治領なのに、なぜここ数年であの方面への港湾や航空基地といった施設工事が増えているの？ それに去年から編成された第四艦隊も、これまでの様な演習での対抗専門部隊じゃないわ。常盤とぎわのいる十八戦隊なんかは、あの方面に張り付いて何をしているの？』

最近まで支那方面艦隊隷下であった朝日が口にした南洋と呼ばれ

る地域の事情に、その地域にこれまで朝日自身がその生涯において深く関係してこなかった事を知る長門は僅かに驚きを表情の中に見え隠れさせる。

そもそも南洋とは日本から見ると太平洋側の遙かに南、小笠原諸島以南のマリアナ諸島やカロリン諸島、マーシャル諸島と3つの大規模な諸島から成る海域一帯を漠然と示した呼び名であり、大正3年の第一次大戦の際に敵対するドイツ領であったという事から帝国海軍によって占領された時より初めて日章旗と所縁を築いた地域である。広大な太平洋のど真ん中に珊瑚礁を伴って点在する陸地は雀の涙ほどで、そこに住む島民達もそれぞれの住む島によって大同小異の違いはあるが裸足に薄い衣を纏うのが基本的な服装。若干のボーキサイトや燐等の鉱物資源を含む地もあったりするが、ごく少量なので大企業による事業化へと結実する事は無く、周りを囲む太平洋の海原はこの地への先進性の流入を遮る役目を果たした故に、積み出しや多様な資材の搬入に対応できるだけの港湾施設もほとんど無いと、近代文明が幾分足踏みした格好のある辺境の地であった。

しかし面積的に西太平洋の殆どを占め、西洋列強の一つであるアメリカ合衆国とその植民地であるフィリピンを地理的にも分断する格好というその在り方は、広大な海洋に国家としての荒廃の全てが掛かっている日本にとっては国防上、大変に重要な意味合いを持つていた。

言わずもがな、その理由は帝国海軍、否、大日本帝国という国家その物が、このアメリカ合衆国を長く仮想敵国と捉えて現代にまで至っているからである。

日本は日露戦役が終わった翌年には既に自国に対する脅威の査定、次いでそれに応じるだけの国防方針を模索し始め、明治40年2月1日に時の天皇陛下である明治天皇へと上奏された「日本帝国ノ国防方針」にて仮想敵国の第二位として、同じ太平洋という海を挟ん

で本国を構えているアメリカ合衆国を定めている。当時の第一位は
ようやく矛を収めつつも国力においては未だに圧倒的に優位であっ
たロシアであったが、その後の情勢から当時可能性として最も危険
視されていたロシアによる復讐戦の脅威が無くなった為、そう時を
おかずに脅威度としては西欧諸国より本国間の距離も近く、フィリ
ピンやグアム、ハワイといった権益の及んでいる地域も日本の近隣
に抱えているというアメリカ合衆国の方を強く認識したのだった。

もちろん国力の面でもアメリカはロシアと同じく日本を遥かに凌
ぐ実力を持ち、それに比例して太平洋に持つ権益を実力で護る際に
の剣先と化すアメリカ海軍もまた、まだまだ絹と缶詰ぐらいしか主
要な輸出品とはできなかった日本のそれとは比べ物にならない物で
あった。その証拠に明治40年、アメリカは早速大西洋に展開して
いた戦艦16隻を筆頭とする大艦隊で、往年のバルチック艦隊を全
ての面で上回る規模での世界周航を実施してみせ、加えて大正3年
に開通したパナマ運河の権益を握った事もあって、大西洋と太平洋
に分かれた戦力配置の転換に対して海軍としての実績と経験を得て
いたという点では先の日露戦役で帝国海軍が打ち倒したロシア海軍
とは正反対の事情である。倍以上の海軍を相手に善戦したとは言え、
日露戦役での海の戦いは額面上は？2対1？であつても有名なバル
チック艦隊や旅順艦隊の実情を鑑みれば？1対1の戦を2回行った
？と言った方が正しく、むしろ帝国海軍と日本はそれを狙って政治
を含めた全ての舵取りを行いながらあの戦役を戦い抜いたと言つて
も過言ではない。その点では仮にアメリカを相手にしたとなれば、
今度こそ間違いなくその強大な海軍力の全力を一度に相手にして戦
わねばならない事になる。

その為に帝国海軍は常にそんな仮想敵国の海軍と肩を並べた戦が
できるように使える手段はなんでも用い、他の国の海軍ではやらな
いような事も積極的に取り入れて独自の海軍力を養ってきたのだが、
その対米国海軍力の重要な要素となったのが先に触れた南洋の島々
なのである。

南洋の一部の諸島は珊瑚礁や近くの島々と連なる故に波が静かで、潜水艦の跳梁を阻止できる浅い海底が伴われる事から艦隊を待機させる泊地としては最高の条件を備え、しかもまたアメリカ本土より見ると權益を握る外地を取り囲む形で点在しているのだから何もしない内から包囲を受けたような状態なのである。だからアメリカは日本が南洋諸島の受任国とされた第一次大戦直後、すぐに日米ヤップ条約を打診し、ウェーク島やグアム島等といった自分達の領土を防衛する為の権限すらも捧げてお互いの太平洋における領域には軍備の影をこれ以上落とさない事をお互いに確約。その状態は両者のみならず世界各国の海軍事情の骨子となったワシントン海軍軍縮条約にても堅持され、財政的にも苦しかった日本の「現状維持」という提言にアメリカも賛同して条約の中に双方合意の上で明文化する事ができたのだが、後に对中国政策における相違に端を発する日本の国際連盟脱退、次いでワシントン海軍軍縮条約の破棄を決定した日本の行動が、互いの海軍軍備に極めて重い一石を投じるだけの潜在能力を有するという南洋諸島の在り方の転機となった。

昭和11年にワシントン海軍軍縮条約の効力が正式に日本から消え失せると同時に、日本は自らアメリカに提案した南洋軍備に関する相互現状維持の義務をも負わない事となり、国際政治の中で深まり始めた孤立からくる脅威に対処できるだけの軍備増強を開始。これまでずっと日本とは遥かに続く海原を隔てた南洋の施政を担当していた南洋庁は元々海軍とは縁の深い機関であるが、この南洋庁をもつてしても対応が追いつかない程の膨大な工事が翌年の昭和12年から企画され、それと並行して南洋の各地域に軍事行動するに当たってどのような長短があるのかを調べる兵要地誌調査も行われる。起伏が少なく平坦な土地を相応の面積で持つ島には飛行場が置かれ、水深が十分で入り江状の波間がある島には大型の艦が接岸できるだけの港湾設備を建造し、入植者等の存在によって賑わいも認められる繁華があれば兵員が居住できる施設を建てるという類のお話で、

青い海と緑色の珊瑚礁も美しい南洋はたちまちの内に軍事色の色合いによって染められていくのだった。

だがしかし、それから朝日と長門が語り合っている今現在までの僅か2、3年の辺りにこの膨大な量の調査や各種設備の工事が実施されているという事に、帝国海軍の半生に伴ってきたとも言える経歴を持つ朝日は首を傾げているのであった。

対してその正面にて真っ直ぐに伸ばした上半身の真ん中に腕を組んでいる長門は、朝日の気に掛ける南洋の事は長く連合艦隊旗艦として人間達による司令部の情報を最も耳に入れやすい立場であっただけによく知っている。同時に朝日が現代の南洋の推移の果てに米国との衝突を危惧している事もまた彼女はすぐさま察してみせ、笑みの無い表情の中で一度だけ目尻にキツと力を入れて鋭さを際立てせると、自身が知る南洋の実情を語り出す。その言葉は朝日を持つ憂いの滲んだ瞳の向く先が間違いとまで言わずとも、僅かに朝日の考えが飛躍しているとして正すような内容であった。

第九八話 「母が得た覚悟／後編」

『それはですね、朝日^{あさひ}さん。近年の米国海軍による太平洋方面への展開と、時代に沿って変化する帝国海軍の戦策を調査する為なんです。今年の5月には日本とハワイの間にある米国領のミッドウェー諸島に、防御部隊として海兵隊が配置されたらしいって話も有るんです。どうやらアメリカさんも太平洋方面の軍備に本腰を入れ始めたみたいで、燃料貯蔵施設や艦艇の停泊施設を作ろうとしてるってのは9月には新聞にまで載ったんですよ。』

長門^{ながと}はそう言うとか払いを一度行って朝日から一瞬だけ視線を逸らす、決して彼女はお師匠様の鋭く瞬きの回数も数えるほどではない視線をずっと向けられている事に臆した訳ではない。帝国海軍の歴史の中でも陸奥^{むつ}と供に最も長く旗艦という重い役を頂いていた長門は近代帝国海軍の情勢だけなら朝日よりずっと身近にしてきた身なのであり、なまじ人事異動という形式で励む先を変える事が無い艦魂独自のお仕事事情は、彼女に自身の艦内にある長官室等で豊富な帝国海軍の知識に触れる機会を非常に多く設けてくれたのである。

やがて濃紺の第一種軍装の中でも目立つ朝日の青い眼差しに同じ雰囲気の瞳を幾分凛々しく尖らせて向けるや、同じく第一種軍装を身に纏う長門は再び堂々と張った胸の下にて腕を組みながら朝日へと返した言葉の詳細を述べ始めた。

『それにそもそもがアタシら帝国海軍は、仮に米国と戦争になったとしても米本土西海岸まで攻めていけるだけの戦力はありません。それどころか、来寇した米海軍の艦隊とそのまま正面からの殴り合いをする事すら出来ないんです。』

単刀直入に自分達の居場所である帝国海軍を米国海軍に及ばないと断じる長門だが、朝日はその言葉を受けても眉一つ動かさずに瞬きを忘れた青い眼差しで次の言葉を待っている。40余年も帝国海軍の名の下に奉公して来た彼女の経歴なれば幾分の抗う心が湧いても良さそうな物だが、朝日が全く驚かずに吐息の音色すらも変わらないその理由は、単にこの朝日もまた帝国海軍という存在は米国の海軍に対してまず勝ち目を見出せない存在である事を知っているからに他ならない。

日露戦役も終わって少し時間を経た明治40年4月4日。

この日に裁可を得た「帝国軍ノ用兵綱領」にて既に対米作戦の骨子として「海上兵力ヲ撃滅スルヲ主眼トス。」と記されていた時、朝日は現代の長門と同じく現役の戦艦として帝国海軍と歩みを共にしていたのであり、翌年の11月初旬から早速、九州東方の太平洋上で始められた米国を想定しての2日間に及ぶ大演習には仮想アメリカ海軍を勤める第一艦隊所属艦として参加した事もある。

同時にこの演習のちょうど一ヶ月前に旗艦コネチカット艦に率いられた戦艦16隻を主軸とするアメリカ海軍の世界周航艦隊、通称「大白色艦隊」が横浜港へと寄港しており、この際に出迎えとして参列した帝国海軍の艦隊の中にも朝日はいた。当時、旗艦のコネチカット艦を含めてアメリカ海軍の主力戦艦部隊は朝日の世代よりも数年ほど若い艦で構成されていた為、横浜周辺の国民やその場に居合わせる事になった海軍軍人のような人間達と同じく、朝日を含めた帝国海軍の艦魂達もまたその武功を奉ってくれるアメリカ海軍の若い艦魂達とは笑顔で友好の輪を深める事ができたのだが、その裏で朝日はこの時、遙かに続く太平洋の向こうにとんでもない海軍力を持つ国がある事を身を持って思い知る。

現実には目の前へと最新鋭故の若々しい顔を寄港先の国よりも多く連ねてみせた星条旗を頂く海軍艦艇の群れに、朝日は同じ海軍艦艇として、そして実際に戦の場へと赴いた一人の艦魂として、この頃

からまともに自分達が彼女達に対して勝負できるかどうか甚だ疑問を持っていたのだった。

もちろん教え子たる長門もその認識は同じで、なにもこれとはある艦魂師弟の間で流布される悲観論ではなく、帝国海軍を支える人間達においても大半の認識は同じであった。

日露戦役で日本に与えた外債の回収も待たずに、僅か3年で11隻の戦艦の建造計画に認可のサインを綴れるほどの米国の経済力。全ての国家の基本であるこの経済力に裏打ちされたのが彼女達が見た強大なアメリカ海軍の姿に表れているのであり、それだけの経済力どころか、産業革命以降の近代国家の経済においては根本となる国家としての工業力、科学力、技術力がまだまだ整っていなかった一方の大日本帝国には、アメリカ海軍に追隨できる程の軍備増強はどだい無理な話であった。

日本初の国防方針である「日本帝国ノ国防方針」と共に明治天皇へと上奏された「国防ニ要スル兵力」にて、帝国海軍は艦齢8年以内の戦艦と装甲巡洋艦で一線部隊を形成するという大目標を掲げていたが、陛下の裁可を受けて国政の場まで進めてみると貧乏島国の懷事情では一向に実現の目処が立たず、案の定同じく「常設25個師団」と銘打った軍備増強に励む帝国陸軍との間で国家の財源を賭けた喧嘩になってしまい、結局アメリカ海軍との間には年を追う毎に軍備の差が生まれていく事になる。帝国海軍は其中で戦力比としては対米7割という数字を堅持し、8隻の戦艦と8隻の装甲巡洋艦という7割の中身の構成は多少修正しながら現代へと至っているのである。

そしてこの修正案が大正の時代によりやく議会を通過して建造と相成った8隻の戦艦の栄えある一番艦こそ、朝日が長女として得て育て上げた長門の分身なのであり、曲がりなりにも帝国海軍一の博識さを持つお師匠様を得ている事もあって長門はそんな自分と帝国海軍の生い立ちをよく理解している。

朝日の問いに返って来る回答としての言葉が、そんな長門が普段から異様に目立つお気楽さに伴って知識もちゃんと得ている事を示していた。

『朝日さんもご存知でしょう？ 帝国海軍の対米作戦は、朝日さんが仮想アメリカ艦隊の役で演習やってた明治41年から基本的には防御と迎撃を骨子にして、それは航空機や潜水艦が発達した今では漸減要撃という独自の進化で飾られて随分と形態は変わりましたが、根本は一緒です。』

『それが南洋にまで及んでるの？』

『そうです。一昔前はこの漸減要撃を行う為の決戦海域は小笠原諸島の辺りでしたけど、現代の艦艇や航空機の航続力なんかを勘定して人間達はそれよりも南のマリアナ諸島の近辺を決戦海域に考えてるんです。日本本土やフィリピンを軸にすればあそこは西海岸やハワイなんかからは最短の航路になりますし、南洋の航空兵力や哨戒能力、艦隊保全能力が高まれば豪州方面からの迂回を強要する事もできるんじゃないかと考えてるみたいです。朝日さんが心配してる南洋の軍備はその調査や実地研究の為に増勢されているだけで、まだまだ満足に活用できるまでには時間が必要です。常盤さんみたいな特務艦が何隻もあの方面に配置されてるのは、その支援と維持の為に回されてるに過ぎません。去年からアタシの艦に乗ってる山本長官なんかも、米国とのドンパチは避けるべきだと幕僚の人達にはよく言っていましたよ。』

現在の帝国海軍の一線部隊たる連合艦隊を纏める人間の名も出して長門は朝日の憂いを心配の域でしかないと主張し、ふと胸の辺りで組んでいた腕を解すと片方の手を首に添えて響きの良い音を鳴らす。無意識の内に姿勢を崩して再び正面から来る朝日の視線より目

を逸らす長門だが、決して彼女は明確な嘘をついたが故にそんな行動をとった訳ではない。

米国への駐在も経験した山本長官は多くの帝国海軍軍人の中でも米国への知識はとりわけ深い男であり、忙しさから解放される暇が少しでもあれば英文で書かれた「ナショナルジオグラフィック」という米国発の雑誌を面白がって読んでいたりする為に米国の地理や動物にもそれなりに教養を得ている等、菊の御紋を艦首に奉って20年近く生きてきた長門にとってはとても興味を引く人間であった。それ故に長門は昨年わかのうちに和歌ノ浦でこの山本長官を示す中将旗を翻した時より、艦魂である自分を見る事ができないのを良い事に会議中の長官室に忍び込んだりしながら山本長官の言動をつぶさに観察していたのだが、アメリカを知るが為にその倒し方を明示してくれるのだろうかという彼女の期待はこの男にとっては言語道断の考えであった。

『いや、そりゃ是非やれと言われたら半年から1年くらいは随分暴れてご覧にいきます。しかしながら2年、3年となるようでしたら全く自信は有りません。』

前海軍大臣を務めていた吉田よしだ中将が倒れた事で国政の場も少し騒がしくなった今年の9月。首相である近衛このえ ふみまろ文麿より対米戦の憂慮として質問を受けた際、山本は帝国海軍実戦部隊の長という立場にも関わらずそんな言葉を放ってみせた。仕事場たる長門艦艦内にいる時も同じ様な声を心に秘めているのは明白で、その認識は彼と供にお仕事に励む参謀達といった幕僚の面々、そして彼らと同じ年代の海軍軍人達にあっては立場の上で声には出し辛い本音でもあった。小難しい専門用語が中年の海軍軍人達が持つ渋い声によって放たれるという長官公室での会議等にこっそり潜入したりしていた長門はその事を知っており、『対米戦なんて無理なんじゃねえの?』とい

う彼等の心の中に木霊する言葉をやがて察するようになる。決して日本と帝国海軍が弱いという事ではなく、それ以上に米国とアメリカ海軍が途方も無く強過ぎるのだ、と。

その上で長門は欧州戦線に端を発する現在の情勢を立て続けに述べ、師匠が向けてくる鋭さの際立つ瞳に再びいつもの柔らかさを取り戻させようとする。

『今は欧州戦線の影響もあって、アメリカ海軍も去年には大西洋戦隊を常設部隊として太平洋方面から戦力を引き抜いてます。まあ、おかげで日本も不完全な南洋の軍備を整える時間が得られたんですから、それを破って不利な状態でドンパチをしかけるなんて事はありませんよ。』

あくまで備えながらも米国と戦おう等とは考えていない長門が述べた意思。その備えの中核にして中枢を担う人間達や長門がこんな弱腰ともとれる言動をするのに対しも、やはり朝日は動じる事が無い。交差した腕の両肘を下から抱えるようにして腕を組んだまま、眼前の長門が相も変わらず首を鳴らす様子をまじまじと青い瞳に映すだけだ。

その理由は、長門や彼女の口から語られた現連合艦隊司令長官の山本中将を始めとする人間達の認識が、そも朝日がまだ連合艦隊に戦艦籍で在籍していた際と全く同じ物だったからである。特に山本長官のように、現役で海軍を統べる役職を頂く者が首相や陸軍といったいわゆる第三者に『仮想敵たる国家とは満足に戦えない。』という意志を公然と示す人間に関し、実は何度かそれ以前にも前例があったのである。

中でもワシントン海軍軍縮条約締結の功で名を馳せる加藤友三郎かとうともみちろう海軍元帥がその好例であり、彼は海軍大臣を務めていた大正8年2月5日、衆議院予算委員会第四分科会の席上にて質問に対する答弁として次の様に答えている。

『殊に彼の強大国大金持ちがその無限の資力をもって拡張していこうという事に、大体において競争致そうという意思は持っていない。また、仮に持った所が及ばないという事は解りきった話である。』

もちろんだからといって国威の維持を投げ出そうという事ではない。当時の加藤大臣は同じ場にて『日本の力が及ぶ範囲において自衛上相当と思う程度の軍備を整える事が肝要。』と述べているのだが、ようやく長門が生を受けた頃でもある現代より20年程も前から既に帝国海軍を主導する錨のマークを身に付けた者達の殆どは、米国海軍に対してまず勢力の規模においてすら対等に振舞う事も出来ないという認識を持っていたのであった。

しかしながらそんな帝国海軍の実情を知る筈の朝日は、長門の明確な物言いに対して再び言葉を返してくる。それは米国へと仕掛けるつもりが無いという長門が語る連合艦隊司令部の人間達が抱く思惑を嘘だと断じる物ではなく、その上で彼等がその身に帯びた使命として遂行しなければならないお仕事に関しての状況の事。山本長官を始めとする彼等からその存在を意識されないながらも、普段から長門が注意深く見守ってきた長官室の中で交わされたであろう多くの考察に関して、もうずっと昔の事になるが同じく連合艦隊司令部をその身に宿した事もある朝日は一通りの事を教え子が敢えて言わずとも大体予想済みである。

その証拠に朝日が張り詰めた声で放った言葉を受けると、長門は

ここに至ってついに応答の自由を失い始めていく。

『長門。連合艦隊司令部は帝国海軍の思惑を実施する現場その物よ。その中でなんとか米国と応戦できるだけの算を、現場側の立場としてより現実に近い物として見出すのがあの人達の役目でもある筈でしょう？ 常に高く維持しようとした錬度^{やまと}に、大和や明石^{あかし}みたいな最新鋭で有力な艦艇。支那で私も目にした、渡要爆撃で名を馳せた陸攻みたいな優秀な装備。漸減要撃に代表される周到な戦略計画なんかも含んで、その力量差を埋めようと常に頭を捻るのが連合艦隊司令部勤務の人間達。長官室で悲観論を漏らし、無理だ無理だと愚痴るだけの無能な人間達では無い筈よ。』

『・・・・・・・・』

鋭く細められた青い瞳に映される長門の顔は、朝日の声を受けるや眉をひそめて緩く唇を噛んだ表情へと変わっていく。朝日が開口一番で欧米との戦となる事への憂いを声に変えた当初より、長門の意識の中にはお師匠様に対してのとある含みがあった。

長い横須賀での休暇を終えた長門艦が昭和16年度艦隊訓練の為に呉へとやってくる直前の、11月26日から28日に及ぶまでの3日間。山本中将率いる連合艦隊司令部の男達は横須賀からも近い東京の海軍大学校にて、従来の開催にあっては異例な程に参加者を制限した状態での図上演習を行っていた。艦魂である長門はもちろん横須賀の岸のずっと奥にある東京の海軍大学校へと足を運ぶ事は出来ないのです、そこで行われた図上演習がどんな内容だったかは全く知らなかったものの、誰もいない事を良い事に豪華な内装を施す長官室にて悠悠自適な生活を楽しんでいる最中に顔を揃えて帰って来た山本長官以下の司令部の面々が、疲れきった顔でひそひそと静かに話す声によってその内容のおおよそを把握する事に成功していた。

それは進展の見られない石油資源を主に据えた対蘭印外交の、武力による可能性を探る物である。

昨年より受けてきた米国の経済制裁への対策として今年の8月から始まった蘭印総督と日本との間の買油交渉であるが、それまでの日本への輸出量の5倍近い量を確約したい日本側と、急激な輸出量の増減に対応が難しい上に米国寄りの外交姿勢を終始貫いている蘭印側とでは意見の隔たりが余りにも大きかった。大体が蘭印側にしたらテーブル越しに相對した日の丸を国旗とする国は自分の本国を蹂躪したドイツと同盟を結んでいる国であり、決して表ざたに敵対的な姿勢を出さずとも感情的な面でも好感を持つてくれる訳が無い。彼等にしたら祖国の復興はドイツと交戦しているイギリスや、その支援国であるアメリカ等に祖国の地からドイツ軍を退けて貰わねば絶対に実現できないのであり、間違ってもそのドイツとの友好国である日本に力を与えるような取引には進んで応じる気などあろう筈も無かった。

しかも当地で産出する原油、及び石油製品はその90パーセントがオランダ本国も含めた外地輸出品であったのだから、日本だけに對してこれまでの実績とは大きく異なる量の割り当てを行う事は当然ながら他の地への割り当てを減らす事が必要となる。それは畑で採れた野菜が店先へと並ぶ量において店主に客が注文をつけるような物で、あくまでも民間折衝の形での交渉に拘る日本側はそのような国家としての非礼を犯す事は無かったが、そのおかげで蘭印との買油交渉は半年が過ぎても一向に日本側が必要としていた購買量にサインを貰えず、2ヶ月ほど前の10月22日には派遣してた現職こばやしの商工大臣である小林大臣を呼び戻す事態に陥っていた。

もっとも交渉その物は早期決裂となれば日本側の武力権行使の可

能性を憂慮する蘭印側の思惑もあつて継続の形で維持されていたのだが、一刻も早くこの買油交渉を成立させてもらいたい海軍としてはその実現に対して実力をもって対応に当たる事も考えており、山本長官らが実施した海軍大学校での図上演習はその一端であつた。

なにしろ軍艦という物は四六時中ボイラーを焚いているのだから、ずっと港内に繋留されたままの状態であつても貴重な石油資源をどんどん消費するという側面がある。加えてただでさえ劣勢な米国海軍に対してはいわゆる鍊度の面でもある程度の差を常に着けていたというのが日露戦役以降の海軍としての本音でもあるのに、肝心の艦艇や航空機を動かす為の燃料が無くては満足な訓練も行えない。故に是が非でも石油資源の供給に目処をつけたい海軍は、海軍大学校における図上演習において対蘭印戦の検討を行ったのである。

だがしかし、この図上演習の主眼は蘭印に対してどのような方策で事を構えるかよりも、蘭印に向けて刃を向けた際に帝国はどのような事態へと陥るかという展望とその対応策を研究する側面の方がより強かった。言うまでも無くそれは蘭印への実力行使に対して、帝国海軍が仮想敵の大本命としている米国が加勢するのではという可能性の事である。よつてこの図上演習では構想として米国との戦闘状態になった事を念頭に置き、日本にもほど近いマリアナ諸島に存在するアメリカ権益の地であるウェークやグアムの攻略は勿論、米軍による反撃でトラックが陥落しつつもこれを帝国海軍で奪回するという推移で、マリアナ東方海域において艦隊決戦を強いる辺りまで話は及んでいたのであつた。

まさにそれは長門の眼前にて厳しい顔を向けてくる朝日が最も憂う、米国との戦争状態その物。そして長門が言葉に詰まって次第に強く唇を噛んでいく中、朝日が漏らした言葉は先程告げたばかりの

長門の見解を真っ向から否定し、じわじわと胸の奥に渦巻いていくその現実味は長門の顔から血の気を引かせ始めて行く。

『・・・戦力の面で優勢である米国の艦隊を決戦海域へとやって来るまでに消耗させ、海上戦力としての差をなんとか互角に近づけた状態でようやくこちらの全力をもって迎え撃つのが、私が現役で一線に立ってた頃から人間達が見出してみせたこれまでのやり方ね。でももう一つの算だつて有るわ。・・・これ以上の差が着かない内に、こちらから勝負に打って出ると言うやり方よ・・・。日露戦役がそうであつたように・・・。』

『う・・・。』

『・・・それをやろうとしているんじゃないの、・・・長門？』

短い長門の呻き声に覆い被さる朝日の問いが、現役の連合艦隊旗艦である長門の胸の内を容赦なく揺さぶっていく。決して朝日が抱く憂いとその心当たりは長門個人には責任は無く、そも長門は山本長官を始めとした連合艦隊司令部の海軍軍人達を悪い人間であると考えている訳ではない。連合艦隊旗艦に相応しい艦として何の必然も無く分身を持っただけなのが長門であり、山本長官らとて世界情勢が乱れるこのご時世に海軍軍人として備えの算を見出す役職を頂いたという事に必然性がある訳ではない。ただひたすらに運が悪かっただけのお話なのかもしれず、段々と長門にはそんな自分の今の境遇に憤りすら覚えてきてしまう。例え師匠と同じ年代の者達を持つ戦艦という艦種が光り輝いた日本海海戦での武勇伝に憧れを抱いた事があるうとも、例えこれまで朝日に語ってみせたように帝国海軍の情勢に詳しくとも、長門は決して対米戦を代表とする戦の危機を望んだりした事なぞただの一度も無い。むしろアメリカとの戦という物がどんな様相となるかの認識は、少し前に彼女自身が言葉で示した通りである。長門は万に一つも、米国と日本が戦となれば勝てる等とは考えてはいなかった。

そして教え子がそんな考えを持つ故に声を失って眉をしかめたのを知る朝日は決して長門を責めるつもりはないものの、それまでと変わらず深い青で輝く瞳を細めてそこに長門を映し、やがて緊張が続いた事によって得た疲労感を滲ませる溜め息に続けて、これまで余り後輩達に語る事の無かった国同士の戦いに対する独自の考えを述べ始める。だが定まらぬ視点の長門の耳へと木霊するのは一介の老いた艦魂の自論ではなく、まさにいま長門自身が憂いとして持った自分達よりも遥かに強い国と戦った際の経験談であり、朝日の教え子としては余り耳にした事が無い内容であつてもその声に籠められる迫力、現実感、説得力は生半可な代物とはなっていないかった。なぜなら朝日が持ち前の弦楽器の様な優雅な声を引き締めて述べ始めた物は、朝日自身がその身に傷を負ったり、逆に傷を負わせようとしたという日露戦役に纏わる記憶だからである。

『・・・身の程を忘れた戦いほど危険な物は無く、戦いほど身の程を忘れさせる物もまた他に無いわ。かつて私が戦艦として戦った日露戦役は、日本にも近い支那や朝鮮への進出が激しかったロシアの脅威を、この日本に及ぶ前の段階でなんとか防ごうとした防衛戦争。決して領土が欲しい訳でも、それ以前の三国干渉で失った権益を取り戻そうなどとも思っていなかったわ。・・・でもその実はどうだった、長門?』

今日既に何回目となるかの問いかけを放つと朝日は音も無くゆっくりと深い真紅のソファから腰を上げ、その位置から最も近い所にて銀色の空から薄っすらと漏れる師走の陽光を室内へと導いている舷窓へと歩を進めて行く。ゆっくりとした足取りと共に朝日の足元からは革靴が赤い絨毯に沈む音が小波の音色に混じって放たれる。対して師匠の問いかけに対する答えが割と早く浮かんだにも関わら

ず、その内容が余り良い感情を与えてくれない代物であった事から眉をしかめたままの長門は顔をそっと上げ、小さなテーブルを挟んだだけのそれまでの隔たりをドンドン引き離し始める朝日の背を追った。すると長門の細くなった瞳に飛び込んできたのは西洋人独特の鼻の高さや奥まった目の度合いが一段と増す朝日の横顔で、舷窓に近い事から陽の光を受けて宝石のように輝くその碧眼に長門は目が合う。だがその朝日の青い瞳の輝きの綺麗さこそが、長門に自身はまだ声には出していない胸の中の答えを看破されているのだろ
うと思ひ知らせてしまう。

朝日の第一の教え子としてこれまで過ごしてきた長門の生涯にて日露戦役の実情は、その日露戦役を最初から最後まで戦い抜いた朝日によって教えられているのだから当然長門にあっては周知の事で、その上でこのお師匠様は日露戦役を勸善懲惡の如きお粗末な物語として伝えてはいない。そのおさらいをするかのような言葉が朝日から発せられ、長門はすがりたい気持ちで朝日の瞳へと向けていた視線をまた自分の膝の辺りに落とし、黙って耳を澄ました。

『ウルサン 黄海や蔚山、対馬沖での海軍の戦勝、旅順や奉天での陸軍による奇跡に浮かれて、戦争が終わるや軍人や国民の梓に留まらずに多くの人間達、そして私達艦魂ですらもその多くが開戦となった時の初志を忘れ、欧米列強にも自分達は勝てるなんていう根拠の無い驕りおごに酔った。そして戦争が終わって講和の会議が開かれると、あれほど念願にしていた国威の安泰に満足せず、さも当然の様に海外領土と權益を要求したわ。・・・その姿は、私の生まれた英国も含めた一昔前の欧米列強と何の違いがあるというの・・・？』

まるで蔑むように自身の艦首にも翻る日章旗を国旗とする国の當時を断じる朝日の声は、紛れも無い日本の船としてこの世に生を得た長門には少しだけ嫌悪感と悔しさを滲ませていく。そもそものがその完全な西洋人の顔つきと体格から連想される通り、朝日の分身は

この国で作られた物ではなく、彼女は日本から見れば地球の反対側にある遠い異国よりこの国の海軍へと渡ってきた経歴の持ち主。故に自分と師匠では日本という国に対する想いに温度差があるのかと長門は一瞬だけ考えるも、20年来も一緒に過ごしてきた記憶が長門の思考からそんな朝日と自分に差異が無い事をすぐに実感させていく。

実際に日本海で多くの傷を負いながら戦い続け、自分を含めた後輩達に常に慈愛の心と共に叡智を授け、生誕から40余年が過ぎた現代でも尚、艦種を変えながらも帝国海軍艦艇として励んでいるという朝日の背中を、長門は物心ついた時からずっと見てきたのだ。記憶にあるそんな朝日の後姿に、彼女がこの国をどれほど大切に思っているのかなどと疑う余地はどこにも見出せなかった。

やがて長門が朝日の胸の内を何とか掴み取ろうと思いを巡らせる中、ほんの少しの沈黙が支配していた室内に朝日の声が再び響きだす。その言葉は物事に対する評価を嫌う性分の朝日にしては全く正反對な言葉であり、それ故に朝日の人柄と性格をよく知る長門にとってはこれ以上無く重苦しい一言であった。

『・・・結局はこの国は、良くも悪くも黄色いヨーロッパになっただけよ・・・』

朝日は舷窓の向こうに広がる呉軍港の景色を見たままで、教え子が自身の放った一言で僅かに奥歯を噛みながら我慢するように歪めた表情を俯かせている事に気付いていない。寂しさも纏う細くした碧眼には呉軍港のどまんなかの海上で起重機を備えたポンツーンに挟まれて艀装作業中の大和艦の巨大な艦体、長門を始めとする第一艦隊所属の戦艦が連ねる山の様な艦影、そしてそんな波間を忙しなく駆けずり回る曳船らの雑役船舶が映りこむのみで、意識の中でも教え子の様子を窺おうという選択肢は朝日の脳裏には浮かんではない。かつて黄海や日本海で死に物狂いで戦い、実の妹を戦火に蝕ま

れて奪われた末に在った物に朝日は激しさを伴わない、だがそれ
いて非常に強力な火勢の憤りを覚えているのであり、教え子への気
配りを彼女から失わせる程の憤りの度合いはさらに続けて発せられ
るその声色にも示されていた。

『でも産業革命以来、経済力となって現れる近代国家としての国力
を支えるのは工業力に技術力、科学力。それに大きく立ち遅れ、そ
もそもが近代工業における資源が確保できない立場も忘れ、自分達
も栄えある帝国主義、近代国家の仲間だと背伸びして走ってみたら
この有様。その上で？大家？と勝算の少ない戦をするの、長門？』

朝日はそう言うとうとうやく顔を長門へとゆっくり向け、細めた瞳
や息遣いもそのまま教え子より返答がくるのを待つ。

一方の長門は先程から続く師匠の問いかけに自分でも納得できる
だけの回答をする事が出来ず、加えて朝日も何やら自分のそんな言
葉に詰まっている状況を見透かして質問を投げ掛けて来ているよう
な感じも覚え、先程から悶々と脳裏で渦を巻く不安と苛立ちをつい
伴わせた声で朝日に応える。だが勢いと感情に幾分任せて放った長
門の言葉は、実際にこれまでの生涯で体験した事実でもって語って
いる朝日に対してはやはり満足な度合いの回答とはならなかった。

『で、でも、日露戦役だってその大家との戦だったじゃないですか・
・・！確かに後味が悪かったかも知れないですけど、少ない戦力
で頭を使いながら奇跡の勝利を残せたじゃないですか・・・！』

『あの戦争は最初から相手と同じ大家である英国や米国との友好を
武器とし、幾重もの背景を張り巡らせた故の賜物よ。戦争に必要な
外債も米英に引き受けてもらったし、当時の海洋交通の便宜も図っ
てもらったし、あの戦争を終わらせる為の講和の仲介にすらも入っ
てもらったわ。でも今はそんな張り巡らせるだけの背景が有るの？

有るのは我らが日の丸と、大洋を3つも隔ててる上に、欧州の殆

どを敵に回して戦っている戦争中の国だけじゃない。』

どうしても崩す事の出来ない朝日の言わんとする物。米国との戦いの憂い。

それを長門も解っているだけに、そして朝日と同じ様に嫌だと思っているが為になんとか応じようと試みているのだが、長門にはまたしても師匠の言を伏せるだけの言い分を用意する事が出来なかった。

『ぐ・・・！』

膝の上に置いていた両手を握る手に無意識の内に力が入り、行き場の無い鬱憤が昂ぶって思わず噛んだ歯の隙間より短い呻き声が漏れる。

いかに艦魂としてのお師匠様とは言え、連合艦隊司令部の人間達の思惑に触れる事の出来る連合艦隊旗艦の役職から朝日が退いたのはもう30年近く前のお話である。その事から決して口には出さなかったものの、本人が既に自分の事を年寄りだと公言している事もあって、長門はこれまで朝日をどこか浮世離れという言葉も当て嵌まるかのように現代の帝国海軍の中枢から距離を置き、その分知識も興味も薄らいだ感覚を持っているのだろうと思ってきたのだが現実は違う。実際にその役目を経験し、実際に戦場で傷つくと同時に傷つけ、実際にこれまでの帝国海軍の歩みを自分以上にその目に映し続けた人物が、他ならぬ長門が唯一人だけ師匠を仰いだ艦魂、朝日なのであった。

まさにその存在は戦を知る者としての雰囲気を備え、逆に現代の連合艦隊旗艦たる長門には絶対的に足りない物。その事を深く思い知れば知る程に、長門はどうしても心の中で自分と朝日の距離が離れていくような感覚を覚える。年齢を重ねたと同時に積んだ経歴だって相手が多いと思えばそれまでかも知れないが、今すぐには埋ま

らない自力の差のような物がそこに存在しているかのように長門には見え、連合艦隊旗艦という大役を頂く自分が未だに師匠から見ればこんな程度の身の程であるのを大いに悔しく思えてくる。もちろんそんな胸の内であっても長門の朝日に対して人一倍抱いている尊敬の念が失せる事はないのだが、再びこちらへと近づいてくる足音にすがる想いで上げた長門の視界には、まるでその分身の喫水線の下に隠れている衝角をも彷彿とさせる程に鋭利な形を研ぎ澄ませた瞳でもって突き刺そうとする朝日の表情が映った。

次いで弦楽器を思わせる朝日の声が絨毯に沈むその革靴の音を伴奏にして木霊し始め、まだ彼女としても教え子への問いかけを消費し尽くしていない事を、そして長門がより一層の苦悩に陥るのも覚悟の上で言おうとしている言葉がある事をゆっくりと示していく。

『・・・戦という物は最も凄惨で、最も単純で、最も浪費の大きい国家事業であり、国家運営の手段の一つでしかないのよ。そしてその手段は勝敗の結果のみならず、その末にどんな国を築いて、どんな未来をもたらすかという、最終的な理想の絵を目的にしなければならぬ。ただ単に勝たねばと念仏のように唱えて挑むのは、敵と呼ばれる変わらぬ命に一方的に殺戮劇を押し付ける事を望む、血に飢えた狼の言い分よ。』

朝日はそう言いながらゆっくりと長門へと歩を進めて行き、僅かずつながらも圧し掛かってくるようなその雰囲気はソファに腰掛けて汗も浮かんだ厳しい表情で動揺する長門に恐怖すらも募らせていった。そして今しがた放った朝日の声に向けられた先が自分であるのと同時に、長門はその内容にて血に飢えた狼という示し方を用いた存在が他ならぬ自分の事だろうと規律が乱れ始めた息遣いの中で察する。なぜなら先程から朝日の対米戦の憂いに対し、長門が応じる為に返答とした言葉は全て『米国に勝てるかどうか?』のただ一点のみにしか無かったからであり、今日の朝日はそんな教え子の

姿勢を今こうして容赦なく指摘してきたからでもある。

いつも優しく微笑んで希にその説教癖によって困らされるくらいの老いた艦魂の姿はその指摘に際して微塵も現さず、きつと数十年前の日本海で見たであろう戦に望まんとする者の言葉の無い迫力と気迫に剥き出しにして静かに迫ってくる朝日。長門はそんな朝日が足を一歩ずつ自分の座るソファへと踏み出してくる度に、もはや動悸にも等しい弱々しくなった呼吸を荒げ、最も親しんだ者である朝日の顔にだけは向くことが出来ない視線を自分の足元で右往左往させるが、やがて足元にて泳ぐ長門の視界に師匠の二本の足が映るや、その頭上からはこれまでに無く瞳の形を刃の切っ先の様に尖らせて独特の声にも重みを聞かせた朝日の言葉が容赦なく襲い掛かってきた。

『そんな戦をこの状況で仮にするなら、日の丸とその下に暮らす全ての命が失われる憂いを賭けて抱く、貴女の理想はなに・・・？』

『り、りそうって・・・』

『大和を犠牲に、日の丸だけを唯一の国旗とする世界・・・？』

なんとか朝日の声に応じようと腹の底に力を入れてみた刹那、長門の応答を待たずに朝日の口から出てきたのは、大事な大事な教え子を生贄とするなどという長門としては一瞬たりとも考えた事もない言葉だった。ついこの間、この朝日や明石に初めて顔を会わせ、当の朝日も大変に可愛がつてあげる素振りを見せていた筈なのに、朝日はいとも簡単にまだまだ頬も赤く身体つきも華奢という生まれたばかり故の特徴を持つあの大和の命から灯火が失せる事態を口にしたのである。

だがそんな大和に師匠として接し、その身に流した血筋に心底感謝して誰よりも自分に懐いてくれるというその人柄をこの世で最もよく知る者がこの長門。故に彼女は瞬時にして胸に湧き出た想いと勢いに任せ、一瞬だけ意識から失せた朝日より受ける戦慄と苦悩の

間隙を縫って口を開く。

『や、やめてください、朝日さん・・・！ 大和は・・・！』

『明石の亡骸^{なきがら}を海に投げ入れて、天皇陛下を地球の王にでもする・・・？』

即座に長門の放つ声に被せて、朝日は普段とはまるで違う温もりのない声色で今度はその冷徹な物言いの槍玉に明石の名を挙げる。長門にとっての明石は気心の知れた妹分で、不思議と血筋に繋がりは無くとも朝日一家の渦中において一緒に騒ぐ事ができる唯一の存在。そして今やかつての長門に代わってこの朝日に直に教えを請う者である筈だが、この時の朝日はそんな自分の教え子の命がまたしても失せる可能性をその言葉に纏わせていた。

すると次第に長門も朝日の幾分度が過ぎた物言いに怒り覚えてくるも、同時にいつも優しく微笑を湛えて自分達へ道を示してくれた師匠がこんな物言いを放った事がこれまでに無いくらいの悲しみをも長門の心に渦巻いていく。故に長門はほとんど朝日の声へと反射的に拒否の意を示そうとするが、再びそんな長門の言動を朝日の冷徹な問いかけが覆う。

『やめて・・・！ やめてよ、朝日さん・・・！』

『私を殺して、日本人だけが繁栄を約束された地を創る・・・？』

『嫌だ・・・！ 朝日さんからそんなの聞きたくない・・・！』

ついに叫ぶようにして声を放った長門はソファから前のめりに崩れるようにして腰を浮かせ、すぐ眼前にて立ち尽くす朝日の胴回りの辺りを掴んでそれ以上は声で示せない拒否の心を朝日とぶつける。朝日が続けて放った問い掛けは明らかに長門の周りに存在する最も親しい者達が死ぬ事を滲ませており、黒一色の瞳の端に光る雫を浮べながら長門はそれ以上の発言をなんとか止めようとしていた。

しかしその間際に遠慮も容赦もせずに朝日が放った言葉は、これまでずっと師匠と仰いできた者から責め立てられてもはや土台が揺らいでいる長門の心を完全に薙ぎ倒した。

『・・・それとも貴女に従う全ての艦魂を捧げて、？光あれ？とも言える世界が欲しい・・・？』

『やめて・・・！！　う、ううう・・・！　もうやめてよお・・・！！』

堰を切ったように頬に幾筋もの流れを作りながら長門は叫び、朝日の胴回りを掴んでいた手を離して長い黒髪の奥に隠れている両耳に押し当てる。次いで膝から朝日譲りの肩幅の広い大きなその身体が膝から崩れ、長門は朝日の革靴の前の赤い絨毯に額を擦りつける様にして、嗚咽に苦しむ声を溢れ出る涙の勢いに任せて張り上げる。

『うううああ・・・！　アタシは・・・、アタシは・・・、い、今が続けばそれで良い・・・！　いつも一緒に騒いでくれる明石がいればそれで良い・・・！　あーだこーだ文句言いながらついて来てくれる陸奥がいればそれで良い・・・！』

朝日は足元で突っ伏す長門を見下ろしたままであったが、先程の様にその声を自分の声で遮ろうとはしなかった。そして同時に長門の咽び泣く姿を映す彼女の瞳からは、それまで輝きとして纏われていた濃い青色と目尻の鋭さが少しずつ消え始めていく。

『理屈ばかりのしゃべり方で困らせてくる大和がいればそれで良い・・・！　いつも紅茶とお説教ばかりくれる朝日さんがいればそれで良い・・・！　ああ・・・！　みんなで笑い合っているのなら、アタシは道化師で良いよお・・・！　ああ・・・、ああ・・・』

・・・！
』

言い終えるや長門はまるで子供のように大声を上げて泣き出し、おもむろに文字通り目と鼻の先にあった朝日の足へと震える両手の指先を伸ばしてくる。対して長門が気付かぬ内にその表情を普段通りの優しさと温もりに包まれた物へと戻した朝日は、長門が突っ伏して泣いたままで伸ばしてくる手に答えるようにその場にしゃがみ込んだ。その表情の変化はようやく教え子の心の中に自分が憂いだ物事への答えの一端を見出した為であったのだが、頬を伝う涙と押し寄せる悲しみに抗いきれない長門は朝日の足に抱きつくように腕を回しながら再び嗚咽に苦しむ声を上げる。

『あああ・・・！　な、なんで・・・、なんでそんな事言うんですか・・・、朝日さん・・・！？　いつもみたいにあれを直せて言っ
てよお・・・！　いつもみたいにこれを正せて言っ
てよお・・・！
！
』

そんな咽び泣く中で叫んだ声と同時に朝日の足へとまとわりついた長門の腕にも思わず力が籠り、少しだけ体勢を揺さぶられながらも朝日は眼前の長門の背中にそっと右手を乗せる。いつも朝日が絶やさない温もりと労わりの心がその手を通じて長門の身体に伝わっていく中、朝日は教え子が泣きながら放った問い掛けに答えを返す。

『・・・かつて、今言っ
たように勝ちをひたすら唱えて戦に赴いた者が・・・、他ならぬ私の実の妹だったからよ・・・。長門・・・。
』

独特の重さと同時に柔らかさが戻った朝日の声を耳に入れ、長門は未だに涙と乱れた呼吸が元通りへとならない中でゆっくりと顔を上げる。だがそれは朝日の声色の変化を敏感に感じ取ったからでは

ない。

それは師匠が口にした実の妹という存在。40余年の生涯で散りとなり現代ではもう生きてはいない者もいるのだが、本来ならこの朝日には血を分けた姉妹が他に3人いた。その内の一人は現在でも佐世保にて存命である敷島しきしまであるが、彼女は朝日から見ると唯一人の姉。故に4人姉妹の次女である朝日の下には2人の妹がいる事になるのだが、その内のどちらなのかという事に長門は瞬時にして心当たりを見つけたのである。これまでこの朝日を師匠と仰いで20余年の歳月を数える中、思い出話として語る自分の姉妹の話の中でも一人だけ含みを色々と持たせた言葉で示した人物。決して朝日自身は彼女を嫌っていた訳では無く、むしろ何事にも身体一つでぶつかって行く勇ましき、強引さは、姉妹最年少であるにも拘らず最も頼りと出来た人柄にして、多くの懸案を解決しながら激動の日露戦役の海を導くのには不可欠であったと何度も朝日は長門の前で絶賛した物であった。

だがその絶賛に当初からなにやら含みを持たせていた事を長門はこの時初めて悟り、まだ涙も乾かず息も継接ぎな状態である内に思わずその名を声に漏らそうとする。しかしその声を朝日はまたも独白の形で遮り、一瞬だけ認めた寂しさと虚しさの青で染まった瞳を瞼の裏に隠して朝日は言った。

『み、みか―。』

『戦の時にしか役に立たない艦魂……。戦の時にしか鬼にも仏にもなれず……。戦の時にしか真価を発揮できない人柄……。そんなあの子に率いられて戦った末は、降り掛かる火の粉を払っただけで新たな家の土台どころか古い家の焼け跡が残る有様だったわ……。そしてその焼け跡を戦勝という垂れ幕で飾り付けて、両手放しに伝統だの誉れだのと有難がるおめでたい価値観が蔓延するだけ……。長門……。貴女にはそれを繰り返して欲しくないの……。』

顎の先から頬を伝う雫が滴る長門が僅かに目を見開いき、半開きにしたままの口を閉じるのも忘れて呆然と見詰める先で、朝日は閉じていた両目をゆっくりと開けながら記憶の向こうに投げていた焦点を眼前の長門の顔へと流す。その吸い込まれそうな碧眼と背後より浴びる陽の光にて琥珀色の輝きを鮮やかにする長めの髪に彩られて長門の瞳に映りこむ師匠の顔には、長門もこれまでに何度も注いでもらった教えを授ける際に朝日が放つ独特の暖かい表情がある。長門の心の中では誰よりも博識で、誰よりも常識を持ち、誰よりも綺麗で誰よりも気高い人柄を持ったお師匠様は、この時も尚、教える子に対してまた一つ叡智を授けようとしていた。

『良い、長門？ 戦の時にしか役に立たない艦魂など、まるで兵器の心という安っぽい在り方そのままよ。でも私達艦魂は、間違っても兵器の心なんかじゃない。世界中の海や川で生きる船の命であり、人間も含めたこの世に生きる無数の命の一員なの。悲しいかな、戦をする為の資格好をしてはいるけど、一介の命として生きる意志を放棄して勝ち負けだけに拘りながら戦に相對するような在り方は、全てを失うのと紙一重でありとても危険なの。・・・でも、貴女は貴女なりの理想を持てているのがいま解ったわ。』

艦魂社会でも屈指の教育者として名を馳せる朝日が示す独自の教え。それは自分達艦魂とはどういう者であるか、否、自分達のような艦魂と呼ばれる命はどのようなにして生きるべきかという物。20余年前に長門自身の分身の中にて血を伴いながら取り上げられ、初めて出会った時から一貫して教わったその信念は、今やすっかり一人立ちして帝国海軍艦艇の全てを統率する立場を頂き、同時に耐えぬ憂いに極限の恐れを抱きながらその日を生きる長門に教えるに当たっては少しも芯がブレてはいなかった。

やがておもむろに長門の涙で濡れた頬に右手を伸ばして朝日は小じわとホクロが控える口元を小さくゆっくりと緩め、日々を気楽に

過ぎながらもその実は自分の分身の中で目にする大きな憂いに苦しんでいるという教え子の境遇に自分はいつでも力を貸す事を伝える。

『生きるという戦の目的が、その理想にある事を忘れてはならないわ。その為に避けて通れないのがこの状況での米国との戦争なら、私は喜んで生贄になるわよ。・・・ふふ、きっと私の命はあと10年・・・、20年は絶対に無いわ・・・。でも、私もまた願う貴女の抱いた理想に役立てるのなら、私もそれで良いわ・・・。』

まるでさつき長門が泣き叫びながら放った言葉を真似るかのような語尾で放った朝日の声に、長門の両目には再び輝きを増す波間が湧き始める。次いで続けざまにすぐそこにある朝日の微笑から漏れてきた一言が、長門の両目に設けられた堰を切るのだった。

『私はいつでも味方よ・・・、長門・・・。ふふふ・・・、師匠である前に、私は貴女の母なのだから・・・。』

『ああ・・・、あ、あああ・・・。』

その刹那、長門の胸の中には言葉に変える事ができない激しい感謝の念と、これまで朝日という艦魂へ抱いた事の無い激しく強い親しみが渦巻き、濁流と化したその感情に抗えずに長門は眼前の朝日の胸へと顔を埋める。そしてこれまでの生涯で意識的にそう思った事はあっても一度たりとて声に変えた事の無い呼称で、彼女は再び子供の様に大きな声で涙を流しなら朝日を呼ぶのだった。

『おかあ、さん・・・！　お、おかあさん・・・！　あ、ああ・・・！　お母さん・・・！』

自分と全く違う完璧な西洋人の顔つきに、日本人ではまず有り得

ないであろう琥珀色の髪。そのいでたちから示されるように出生の地は長門と同じ日本の土の上ではなく、遙かな大洋を幾つも隔てた遠き異国の地である朝日だが、長門はこの時そんな朝日をまさに自分の実の母なのだと脳裏の中で何度も叫んだ。きつとこの先に辛い事があるうとも、苦しい事があるうとも、いつも絶対に自分の傍らにいて応援と愛情を顧み無く与えてくれる唯一の存在であると、恥も外聞も無く泣き叫びながら長門は自分に言い聞かせていた。

その一方、朝日もまた胸の中で自分より受け継いだ大きな身体を丸くして大泣きする長門を、自身が得た最も優秀にして最も自分という命の特徴を受け継いだ実の子供であると確かに認め、同時に生まれ出る実の娘への情に身を委ねて黒く長い髪で覆われたその頭のてっぺんの辺りに頬を添える。

朝日は最初からこの長門の心の内は全て解っていた。

全てを吐露して同じ懸案と憂いを共有するのを長門が選択しなかったのは、ただひたすらもう既に一線から身を引いている朝日に心配を掛けぬ為。現代の日本に対する憂いを話題に出す度に詳細な知識を疲労して心配は無いと反論したのは、全く偽りの無い中で師匠の憂いを除外しようとした為。当事者による些か厳しい物言いであっても日露戦役の事情と現代を重ねて声を荒げたのは、母と慕う朝日がかつて味わった地獄の可能性をなんとか排除して安心させてあげたいという一心なのであった。

朝日にしたら20余年も面倒を見て可愛がってきた長門である。こうして溢れ出る涙を躊躇せず朝日の胸の中で流し続けるその姿が示す、長門の底知れぬ優しさと余りにも清廉な心。それはきつと自分に似たんだなあ朝日はしみじみと感じて笑みを深くし、長門の肩や頭を抱き寄せる手にそつと力を入れてやる。

だがこの時、朝日はその細く弓なりの形にした碧眼の奥で、間違はなく自身より受け継いだであろう余りにも綺麗で優しすぎる性格

を持つ故に、この実の娘である長門は自身が憂う対米戦の鹵車を絶
対に止める事は出来ないだろうと確信した。

これは、死ぬわ……。

確実に死ぬ……。

決して声にも手から伝える長門への愛情にも現さないように心の
奥で小さく灯った眩きは、後10年と先程口にしたばかりの朝日に
自分の死期がそう遠い代物ではない事を如実に伝える。だが抗う気
持ちは彼女には全く抱かれる事は無かった。

舷窓から注がれる陽の光がいつの間にか朱色を帯びて室内の絨毯
やカーテンの赤色を鮮やかにする中、朝日はただひたすら自分の屍
の向こうに実の娘が抱く理想がある事を願い、笑いのままで愛娘を
抱いてやるだけであった。

第九九話 「期待と供に」

昭和15年12月11日。

冬真っ只中な師走の頃合にも関わらず、この季節には付き物の雪に変わって陽の光が晴天より降り注ぐ柱島泊地。浅い海底が作り出すその波穏やかな海面には中将旗を翻した高雄艦たかおを始めとする第二艦隊所属の全艦艇が集結し、すぐその呉軍港よりやってきた明石艦の姿もその艦影の群れの中には混じっていた。

第二艦隊司令長官である古賀長官こがはすぐに各艦の艦長級の立場の部下達を一同に集めて昭和16年度の意気込みを皆で確認し合っていたが、その会場となっている高雄艦のすぐ隣の海面に錨を下ろした愛宕艦あたごの長官公室ではこれと同じ様な顔合わせの場が第二艦隊の艦魂達によって作り出されている。

白いテーブルクロスで覆われた長机の両端に席を設け、列になった状態で腰掛けている明石あかしや神通じんつうを含めた第二艦隊の面々。各々の帽子を自分の前に位置する机の上に置き、これまた白いシートで覆われたふかふかの椅子に背筋を伸ばして座っている中、長机の上座に当たる部分で列の末端としてそれまで椅子に腰掛けていた摩耶まやが、持ち前の片方の肩口から胸の前へと流す黒髪を靡かせて立ち上がる。次いで長官公室と通路を繋ぐドアへと視線を向けつつ放った彼女の言葉は、その場に居る第二艦隊所属の各戦隊長級の艦魂達には久々に耳にした仕事場での声であった。

『艦隊旗艦に敬礼。』

静かながらも通りの良い唳々たる摩耶の声が室内に木霊するや全員が椅子から腰を上げ、時を置かずして重苦しい金属の軋む音を漏

らしながら口を開け始める摩耶が注目するドアへと全員が瞳を投げる。絨毯のほのかな赤色が天井の照明によって空気と混ざり、一瞬にして押し黙った艦魂達が期待とやる気に満ちた視線を集中させる室内は緊張感も張り詰めて若干の息苦しさもたちこめるが、そんな室内にドアの隙間から流れ込むようにしてスツと入ってきたのは、摩耶の姉にして今期より第二艦隊旗艦を頂く事になった高雄だった。

『ご苦労様。』

身に纏った皆と同じ濃紺の第一種軍装はヤマがくつきりと目立ってしわは微塵も見当たらず、軍帽の両脇から頬を伝って流れ落ちるウェーブの掛かった肩を覆うくらいの高雄の黒髪は、まるで太平洋の波が持つ鮮やかなうねりの様。胸を張った姿勢と一本の線の上に置くかのような足の運びで作られその歩く様は、帝国海軍一等巡洋艦の最新鋭型の一員にして、そのネームシップでもあるという分身を持つ高雄には良く似合う姿である。摩耶と感じの似た透き通る声で短い労いの言葉を放ちながら、彼女は長官公室の扉を閉めると室内にある長机の上座にポツンと一つだけ置かれた自分の椅子へと歩み始めた。

その様子を隣に立つ神通や那珂なかと同じように少しだけ腰を折ってお辞儀の姿勢とする明石も上目遣いのようになりながら瞳に映しているのだが、彼女は別段その美しい高雄の歩く姿に感動して魅入っている訳ではない。

絶対、なんかやるな。

抑止が効かない薄ら笑いの表情の奥でそう呟いた明石。瞳に映す高雄は至って真面目な麗しく精悍な顔立ちを維持したままで椅子へと歩いているだけなのだが、それでも明石はそんな普通という状況の中でこの上司に当たるお人が何事かをおっぱじめるとなんとなく

予想する。

20代前半と若々しくも完全に大人の雰囲気を身に纏う高雄は見た目の上では明石とも歳が近いが、その実は今年で生誕から10年を数える分身の持ち主にして、お仕事に関しても誕生以来ずっと第二艦隊の司令中枢を時に愛宕らと交代しつつも担ってきた優秀な人物である。年下どころか年上の部下を何人も従えて、おまけにその中には神通という問題児まで含まれている始末だが、そんな第二艦隊の面々が声を揃えて高評するのが彼女を含める高雄型姉妹であった。

ただ、昨年よりこの第二艦隊に名を連ねている故にその事を良く解っているにも関わらず、それでも明石の顔からはワクワクとした期待感により生まれる笑みの予兆が消える事は無い。そしてその期待感と連動する彼女の先程の予想は見事に当たっているのだった。

明石を含めた長官公室に居る者達の目の焦点を幾重にも浴びながら椅子へと近寄る高雄は、椅子にもう少しで手が届きそうなまでに近づいた所で椅子の足に片足の爪先をぶつけ、その刹那になんともわざとらしい声で短い悲鳴を上げる。

『うーぷす!』

『ぷぷっ・・・。』

『あは、やっぱりやったなあ。』

『くくく・・・!』

それまでの麗しい歩く姿が嘘の様にガクンと姿勢を乱した高雄は、咄嗟に椅子に手を伸ばして転ぶのを耐えてみせる。だがそれを心配するような他の者達の素振りや声が室内に響く事は無く、むしろ明石を含めた室内の艦魂達はその姿に可笑しさを得て一様に手で抑えた口の隙間から笑い声を漏らす有様だった。

この高雄がこんな形で笑いを提供してくれるだろうという予想は、明石と同様にこれまで第二艦隊に属した事がある者にとっては常識。だからこそこうして一気に室内の空気を明るくし、大事な大事な昭和16年度の仕事始めの場であっても面白可笑しい感情を抱く事が出来るという物で、折り重なるヒソヒソとした笑い声の中で何事も無かったかのように答礼する当の高雄もまたそれを狙っていた。

第二艦隊旗艦の前任者で真面目な人柄の愛宕が溜め息混じりにすぐ傍の席にて呆れていても気にしないこの陽気さと冗談は、高雄自身が出雲いずもというお師匠様より授かった大事な大事な教え。何事も柔軟性と余裕を重視した物の見方、接し方を意識する故の叡智であり、常に笑いを伴う事から人気者である彼女の人の源流でもある。

『はい。みんなご苦勞様。』

やがてしてやっつかりの薄ら笑いで小さなお辞儀を終えるや高雄はそんな言葉を放ち、笑いと明るさが十分に充満した室内の空気をそのままに早速お仕事の時間を続け始める。お師匠様と同じで冗談を常に口に出しつつもお仕事ぶりは至って真面目なのが彼女。年上の者も少なくない第二艦隊を愛宕と一緒に纏めてきたその実力は伊達ではなく、その場の雰囲気をつざけたりして僅かに逸らしてもすぐに元の軌道へと自ら戻してしまうのもまた彼女という人物の特徴であった。

もったもおかげさまで明石を含めた第二艦隊の艦魂達は良い意味で緊張を解す事ができ、その内に『なおいれ。』の号令を放つ摩耶が会議を取り仕切り始めると、すんなりと頭をお仕事に切り替える事ができたのだった。

それに今日の戦隊長会議という第二艦隊所属の艦魂達の集いは、先月の11月15日に発布された昭和16年度艦隊編成によって第二艦隊へと加わった新たな仲間達との顔合わせの意味が強く、重苦

しい艦隊訓練の結果と懸案に頭を悩めて厳しい表情を浮かべる必要もないのだから高雄が起したちよつとした笑いは具合が良かった。

そんな良い空気の中でまず新たに第二艦隊に加わった顔として紹介されたのは、高雄と愛宕、摩耶の実の妹である鳥海艦ちようかいの艦魂、鳥海であった。

その分身である鳥海艦は摩耶と同じく高雄と愛宕が受けた近代化改装こそ受けてはいないものの、乗組員も含めて長く支那方面艦隊の一個艦隊の旗艦として励んできた精強な艦で、所属先の艦隊が主に南支方面を担当していた事から記憶に新しい北部仏印進駐にも彼女の率いた艦隊は海軍部隊の主力として参加している。艦の命である鳥海もまた高雄らと同じ20代前半の容姿を持つ女性ながら、実弾飛び交う支那戦線で艦隊旗艦としての経験を数多く積んだベテラン。もちろん第二艦隊にての所属先は同じ姉妹の高雄らが所属する四戦隊であり、良い補佐役が増えたと高雄らも大きな喜びを言葉に滲ませる。

次いで紹介されたのは170センチ半ばもあろうかという大柄の体格の女性で、後頭部で縛ったその黒髪のは腰まで届くかとも思えるほどに長い。鋭さが目立つその眼光は神通とも良い勝負な程にギリリとした輝きを宿し、この場で初めてその顔を拝む事になった明石はちよつと声を失って生唾を飲み込むほどだった。この女性が決して悪人な訳ではないような人柄であるのは、新たな仲間に期待と親しみで染まった微笑みを送っている神通らの横顔を見てなんとなく明石にも解るのだが、如何せん強面というのは最初の見てくれで相手方に衝撃を色濃く残してしまう。顔つきも明石に比べたらすつかり大人びた20代後半の物で、明石とは艦の命として同期の様な間柄である利根とねや飛龍ひりゅうらも少し面食らって肩に力を込めながら伏せ目がちに視線を送っていた。

『……一航戦旗艦、加賀かがです。……願います。』

女性の割りに随分と野太く、些かかすれたような声色で名乗るその女性は、どうやら新たに第二艦隊に加わった第一航空戦隊旗艦とされる空母、加賀艦の艦魂らしい。まるで今にも沈んでしまいそうなその重い声には感情も希薄で、サラサラと流れるとても綺麗なその長い黒髪に反してどこか話しかけ難い雰囲気漂わせる。神通のように中々にクセを持つ人物なのだろうと明石は思うも、実のところ彼女はこのお人の名前と噂をこれまでも何度か耳にした事があり、そのおっかなそうな風貌に完全に震え上がっている利根や飛龍らに先んじて第一印象を早くも払拭する事が出来ていた。

なにせこの加賀という艦魂。何を隠そう明石が実の姉と慕う長門ながとの分身から連なった系譜の果てに誕生し、実際に長門からは明石と同じ様に大変に仲の良い妹分として可愛がられた者なのである。加賀が艶も輝くサラサラと流れる真っ直ぐな黒髪を腰まで届くぐらいに伸ばしているのはその為で、根が暗いような性格は相反するような感じもあるものの彼女は長門の事を大変に尊敬してやまない艦魂の一人であり、髪型まで真似ている程にその慕う心は強いのであった。

また、その分身の上でも加賀は長門のれっきとした妹分で、長門型戦艦を改良した「加賀型戦艦の一番艦」というのが帝国海軍艦艇の命としての彼女の正式な出自である。もっともその通りに完成していれば長門型を攻走守の全ての面で上回るといってもない戦艦となる予定であったのだが、ちょうど加賀の分身たる加賀艦が建艦された頃はワシントン海軍軍縮条約にて大規模な軍縮が叫ばれた時期。残念ながら貧乏島国の薄いお財布では彼女の様な一級の戦艦を作っても予想される維持費を賄う事が出来ず、同時にそれを国家の財源を管理する大蔵省より指摘された経緯も手伝って、多くの海軍人や建造に携わった工員達が泣く中、進水から僅か3ヶ月しか経っていなかった加賀艦はその将来に対してなんと廃艦を予定され

てしまった事がある。

だが「捨てる神在れば拾う神在り」というこの世の因果が、長門の様に師匠となるべき先輩艦魂に取り上げられる事も無く実体を得ていた加賀に、実に2年以上も閉ざされていた生きる道という物を与える事になる。加賀艦が乗組員も殆ど居ないまま棧橋に繋留されて2年も過ぎた頃、帝都近郊を襲った関東大震災にて空母へと改装する予定であった艦艇に欠が生じる事態となり、加賀艦はなんとその代艦に抜擢されたのである。残念ながら加賀艦の姉妹艦に当たる土佐艦とさにあつては廃艦予定が覆る事が無く、顔も会わせぬままに土佐艦は加賀艦が改装工事を受ける横須賀鎮守府にもほど近い館山沖で標的艦として没してしまつたが、一方の加賀艦は5年に及ぶ大改装によって帝国海軍最大の航空母艦として大変身。

そしてその最中、空母への改装を受ける為に生まれ故郷の神戸川崎造船所から横須賀まで彼女の分身を曳航してくれた富士艦ふじの艦魂に、加賀はその間ずっと面倒を見てもらう事になった。しかも富士は加賀の妹である土佐の艦体を死の海へと曳航した数隻に及ぶ特務艦の内の一隻であり、その点でもお師匠様は生まれながらに妹を失う運命を科せられてしまつた加賀の心をととても労り、同時に深く通い合わせる事が出来たのだった。

その結果、3つの甲板を持つ大型空母としてその艦首に輝かす菊花紋章を波間へと映した頃には、加賀は一級の知識と品格を身に付けた立派な艦魂へと成長。多少口数が少なくてやや暗さも目立つ人柄ながらも、空母という艦種の運用方法が色々と手探りであつた帝国海軍の中にあつて彼女はその実力を磨いて良く励み、昭和7年の第一次上海事変にて帝国海軍はおろかその艦魂社会であつても足りない、人類史上初めて実戦に投入された航空母艦となつて、その名を世界の海軍筋の間に轟かせたのだった。

まさにこの場に居る飛龍や蒼龍そうつりゅうなんかも含めた帝国海軍空母部隊の輝ける金字塔を建てた者が、この加賀なのである。

しかもまた彼女の分身は本来が戦艦として建造された事から速力は若干遅い点があるものの航洋性は満点の出来で、幅広でズングリとした艦体は少々の荒波でも動揺が少なく、近代化改装にて手に入れた幅の広い全通型の飛行甲板や形状と構造を変更した煙突、元来が戦艦であった事からそもそもが広く大きく作られていた艦内容積など、いわゆる設備面では着艦する航空機の搭乗員や乗組員からも極めて高評を得る事ができており、一隻の海軍艦艇としてはかなり完成度の高い艦となっていたのであった。ついでにその艦載機搭乗員達も支那戦線で実戦を経験した猛者ばかり、というのだから非の打ちようが無い。

そしてこのような分身の評判と加賀の人柄はきつと同じなんだろうと、興味津々の瞳を加賀の大きな身体に向けたままで明石は考える。ちよつととつき難いような雰囲気はあるが、仮にその人柄に問題ばかりなのであれば、わざわざ長門が明石にその名と話題を楽しそうにしながら語ってくれる訳が無いからだ。その証拠にこれまで加賀と顔を合わせた事がある艦魂達の中では口数も少なく寡黙な彼女の人物評は神通などと比べたら遥かに良く、中でも前連合艦隊旗艦にして愛想の良い陸奥^{むつ}とは同じ師匠に教えを請いだ同窓の仲である事から友人も比較的多い。笑顔は僅か数ミリほど口元を吊り上げるだけで、その笑い声も『ふ。』となんとも感情表現が貧相なお人であるが、無言のまままで面倒を見てくれたりお仕事に勤しんだりするその背中では目標としている艦魂も少なくないという大人物であった。

『加賀さんにゃ、飛龍と蒼龍を含めた二航戦の面倒も見てもらいたいんですよ。見たとおり、まだまだこの二人は若いですからねえ。海軍航空戦力のなんたるかを是非にも教えてやってくださいな。』

『・・・はっ。』

自分より10歳も年下の高雄にそう言われた加賀だが特にその表情には変化は無く、やがて目元の辺りがどんよりと暗い顔を音も無く流し、そこにある鷺の様に精悍で鋭い瞳を、明石とはちょうど長机を挟んで向かい合う形で椅子に座っていた飛龍と蒼龍に向ける。明石と同じ建艦計画にて生まれたこの二人は艦齡の面でも、20代になったかならないかという容姿の面でも近い間柄で、特に飛龍は昨年より明石が第二艦隊所属となった時に一緒に配属されてきたという大の仲良しでもあるのだが、あいにく飛龍は明石と違って加賀の人物評をこれまで耳にしてきた事が無かったらしい。華奢な身体つきで物静かながらも肝が据わっている筈の飛龍だが、挨拶を終えて自分の隣の席へと腰掛ける事になった加賀の怖そうな雰囲気ですっかり気圧されてしまったようで、その顔色を悟られないようにチラチラと流し目で窺っている有様だった。しかもまた不幸にもその視線は何気なく後輩へと眼をやった加賀の瞳と交錯してしまい、その様子を面白がって眺める第二艦隊の艦魂達がクスクスと笑い声を静かに漏らす中で飛龍は咄嗟に挨拶をしてみる。

『に・・・、二航戦旗艦のひ、ひりう、です・・・。ね、願い、ます・・・。』

『・・・楽にして良い。・・・願います。』

『くくく・・・!』

『ひ、ひりうだって・・・。ぷくくく・・・!』

極度の緊張と戦慄の余り自分の名の発音まで狂った飛龍の言葉で、またまた笑いの渦がその暴風圏を拡大し始め、仲間達の笑いと供に全く笑みを浮べていない隣の席の先輩の様子に飛龍は困惑してしまう。室内の明るい雰囲気に乗っかって良い物かどうか迷いつつ、とりあえず彼女は加賀が自身の緊張をすぐに察してみせた言葉にお礼

の弁を述べてみたが、返って来たのは全くもって短い加賀なりの笑い声。

『あ、は、はい……。あ、有難う御座います。あ、あはは……。』

『……ふ。』

『ふふふ……！』

心許せる同期の星のそんな様子を真正面から見ていた明石も大笑いを必死に堪え、口元に手を添えた顔を膝の辺りに向けて些かお腹に抱える苦しみの度合いも混じる笑い声を漏らしていた。

だがしかしこの雰囲気の中でこうして顔合わせを送る事を企図していた高雄はすぐに次の話題へと進む事に決め、軽い咳払いの後に両肩を覆ったうねりの効く黒髪を交互に払うと口を開き始める。そしてなんとその澄み渡った清涼な声で紡がれたとある者の名は、未だに同期生への嘲笑に浸っている明石の名前であった。

『それと今期から明石は正式に第二艦隊付属を離れて、連合艦隊付属としてこの第二艦隊に随伴する事になったから。ま、仕事は去年と同じ様に、私達第二艦隊の奴らの健康管理が主になるだろねえ。指揮権の上でも余程の事態じゃない限りは、あたしの所に乗ってる古賀長官が指揮を執る事になると思うよ。だから今年もよろしく頼むよ、明石。』

『あ、はい。みなさん、願います！』

高雄に名を呼ばれたのに気付くやすぐに明石は元氣一杯の声をあげ、本年もまた艦魂社会での軍医さんとして励む先である第二艦隊の面々への挨拶とする。観艦式も終わって2ヶ月近く続いた休暇の日々で師匠である朝日にみっちりと教えを請いだ明石は、教育の日

々の中で尊敬する師匠より褒められた事もあったりして自分の実力に確かな手応えを感じているのであり、怪我人が早く出ないか等とは微塵も思っていないが自分の出番が来たなら是非にも満点の出来となる成果を残そうと意気揚々としていた。残念ながら英語だけは中々その成績を伸ばせずに最後まで師匠との満足な英会話を行う事が出来なかったが、それでも勉強への熱意だけは冷めていない。家族の様に思える朝日あさひや長門やまとに加えて、大和という新たな一員がその場に加わった事がその理由で、明石は言わば大和から見たら艦魂としての教養や品格においてはもう既に追われる立場でもある。家族4人揃ってのお茶会の席でも大和が大変に教養の吸収が速い若者である事は明石も耳に入れていて、「いつまでも自身は未熟者であってはならない。」と、焦りとは紙一重の使命感に燃えているのであった。

『ふん。なんだ、やけに気合が入ってるな、明石?』

そんな中でふと明石の隣の席で腕組みをしていた神通が声を上げ、日本刀の切っ先を模した目の中に点となった瞳を浮べて明石のやる気が漲る言動を尋ねてくる。対して明石は親友である神通に満面の笑みを向け、室内の仲間達が何事かと注意を向けてくる中でも構わず、両手に握った拳と腹に力を込めて今年の抱負を言い放ってみせる。

『私、今年は頑張る! 一流の? れでい? になってやるんだから!』

『あん? れでい? なんだそら?』

相変わらぬ英語の発音で早速友人との意思疎通を失敗する明石だが、彼女はそれでも落ち込む様子も無く、昨年までの物とは違ったお仕事への意欲を激しく燃やす。その隣で良く解らない明石のそんな様子に首を捻る神通と那珂が左右の目を違う大きさにして顔を

合わせるが、明石のこのやる気の源になっている最大の理由は二人とも知っている事でもある。

それはもう既に終わりにかけている今年、すなわち昭和15年の4月に起こった明石の身の周りでの最大の変化。自分の未熟さと子供っぽさを痛いほどに思い知らされ、同時に有明湾で明石の両手から零れ落ちて行った相方の存在。大泣きして自己嫌悪の念を募らせた果て酷く落ち込みながらも、なんとかその未熟さを克服せねばと考えを至らせて懸命に己を磨いてきた明石だが、早い物で既にあの別れから半年以上の時間が経っている。

海軍軍人としての未熟さを払拭せんと、砲術学校という帝国海軍でも1、2位を争う厳しい場所へと自ら足を運んでいった相方のその背中を、明石は元氣一杯の笑みを両隣の友人達を始めたとした仲間達に振りまきつつ心の端っこでぼんやりと思い出していた。別れの前に意地を張って大喧嘩した挙句、手を振って見送ってやる事もできずに小さな舷窓越しでみたその背中。ほんの一瞬だけしか捉えていなかったのに、あの頃の明石はもうそれだけで溢れる悲しみと涙を止める事ができなかったのだが、あれほどに強烈な記憶が今となってはなんだか明石には恥ずかしくて笑えてしまう。たった一言だけでも自分の気持ちを声に放つだけで変えれた筈の出来事だと知っているからだ。

ほぼ一年越しの自分の馬鹿さ加減にこそばゆい様な照れを覚えつつ、明石は無意識に手を握ると同時にあの別れとそれに伴う孤独がいよいよあと半年も経たずに終わりを迎える筈だと脳裏の中で呟く。砲術学校や水雷学校が間近に在る横鎮籍にして、かつてはその砲術学校の練習艦としても勤めた艦を分身とする那珂から聞いた所に寄れば、相方のような新米士官対象のその勉学の期間は砲術学校、水雷学校共に半年づつ。つまり相方は砲術学校での日々を終えて既に後期の水雷学校にて頑張っている筈で、あと4ヶ月とちよつとの時間さえ過ぎれば晴れて戻ってくる事が出来る筈なのである。

どんな風になつてゐるのかなあ・・・？

艦魂の仲間内では最もその人柄を知る筈の明石だが、そう思つて記憶を辿ると不思議とあの朗らかで波風を立てる事を嫌うような温和な相方の言動が浮かんでこない。思い出せるのは自分と同じぐらいたつた背丈に怒つてもちつとも怖くない優しい顔、煙草を唇の左端に咥えて吸う癖、綺麗好きな割りにしょっちゅう灰皿を引つ繰り返す困つた所、何か言おうとしても先に誰かが声を放つと自らの声を静めて話を聞いてくれる小さな思いやりと、なんとも断片的な物ばかりであつた。

『ちよつと、・・・ふふふ。どうしたの、明石？』

『気持ち悪い奴だな。なにを一人でニヤニヤしとるんだ？』

ちよつと相方の特徴が薄れてしまった記憶は明石にとっては少し物寂しかつたが、どうにも今しがた脳裏を過ぎつた思い出は明石の顔に変化を与えていたらしい。神通のなんともぶっきらぼうな物言いで指摘を受けるや、明石も自分で口元が妙に力が籠つていて、唇の隙間から覗いた前歯がちよつと乾燥している事に気付く。

『んひっ。ふふん、ナンでも無い。』

なんとも気味の悪い笑い声の断片に続けて明石は声を返し、軽く平手打ちをするように自身の両頬や唇を叩いて真顔に戻ろうとする。次いで底知れぬ期待感がじわじわと湧き上がる胸の奥にそつと彼女は蓋を閉め、待ち遠しい反面、残りも少ない一人つきりでの修行の時間を有効に使おうと決意を改める。相方と別れた頃は何も知らない身の程知らずでも、今の彼女は後輩もいて師匠にもお褒めの言葉を貰つて、テーブルマナーも身に付けたし軍医の腕もうんと向上し、

勢いに乗じて今や英会話にも挑戦しようとしているという、まさに多くの修行を経て結果も残してきた立派な帝国海軍の艦魂。まだまだ師匠の授けてくれた教えにある一流では無いかもしれないが、それでもやっそここ1・5流くらいにはなれたのかなと明石自身は思っている。

昔の私じゃないんだからね・・・。

なにか久しぶりに相対した仇敵にも投げるかのような言葉を心の中で一度だけ呟き、明石は再びその意識を今だ和気藹藹とした雰囲気包まれて続けられている会議へと戻していくのだった。

そんな明石の背後にてちょうど変わり始めた銀色の空を映す舷窓の向こうでは、師走も半ばに入らんとするにつれて増して来た冷たい瀬戸内の潮風が雪を運んできていた。ちょっと黒めに染まった波間が第二艦隊の各艦の乾舷を洗い、通り過ぎる風の音によって拉致されていく波音が木霊する柱島泊地に、その存在を音では主張しない大粒の冬の申し子達が白い輝きを伴って天空から海面までの舞踏会を静かに催す。だがこの舞踏会の舞台が静寂に尽きるモノトーンから鳥達の鳴き声も響く桜色へと変わるのは、季節の上では時間も余裕も無い次の幕。

明石はそんな有明湾の海岸を埋めた散り際の桜の色を思い出しつつ、それが別れから再開へと転化するであろう事を信じてこの一日を過ごすのだった。

第一〇〇話 「励み方、始め」

昭和15年12月13日。

寒さも身を刺す柱島泊地の第二艦隊では、目前に迫った艦隊訓練に備えて新たに配備されてきた艦艇と戦隊運動に必要な打ち合わせをしたり、今年度の艦隊訓練その物で重要視されている訓練内容の協議など、艦艇は揃えども未だ準備という観点でのお仕事を主にしてその乗組員達は汗を流していた。それは第二艦隊の長である古賀^{こが}長官から最も下の立場であるついこの間乗組んだ水兵さんにあっても同じであり、新たな年度の目標を各々が見据えながらのお仕事は海軍も民間企業も問わず、まずこれまでとの変化点をしっかりと把握する事から始まる物である。そしてそれは各々の乗組員達と一蓮托生の身である、第二艦隊の艦魂達にあっても同じ事であった。

昨日の雪模様も嘘かと思えるほどに晴れ渡った快晴の空の下、冬特有のツンとした寒さと乾燥した空気がもたらす見晴らしの良い柱島泊地。まるで鏡が縫いこまれたように陽の光を不規則に反射する波間には大小様々な艦艇がその身を浮べているが、その中でも一番目立つのはつい数日前に第二艦隊へと合流したばかりの加賀艦^{かが}である。

そも前進部隊とも呼称される第二艦隊は軽快に前線を走り回るが故に機動性に優れた巡洋艦を主戦力として編成されており、山の様に高い艦橋を備えた戦艦などは一隻もない。空母は一昨年より加わった蒼龍艦^{そうりゅう}を始めとする二航戦の面々がいるが、そこにいる蒼龍艦と飛龍艦^{ひりゅう}は満載でも排水量が2万トンを超える程度の大きさしか

無い艦艇であり、公試状態ですら4万トンを超え加賀艦は昨年まで第二艦隊中最大の艦であった飛龍艦のまさに倍以上の大きさである。艦しての幅と全長も一回りは大きく、今からちょうど5年前の近代化改装によって手に入れた加賀艦の全通飛行甲板は、なんとなんと海面から約21メートルもの高さに敷かれている。真横から見ると物凄く大きい羊羹の箱が浮かんでいるようで、存在感は抜群。人類史上初の栄誉を独占した空母に違わぬ、堂々とした立派な艦体であった。

するとそんな加賀艦の上空を、柱島泊地近辺の島々で暮らすカモメ達の一団が通過して行く。寒空の中の哨戒飛行は彼等にとっても重労働なのか、カモメ達はいき最近この柱島泊地の波間に現れた加賀艦のマストや空中線を絶好の休憩場所としていたのだが、本日は上空より一瞥するだけで加賀艦へと降りて行く気配は無い。なぜならそこには、カモメ達にとっては騒がしくて何をしているのかも怪しい存在である人間達が、ただっ広い長方形の飛行甲板上にて一枚の銀翼を中心に数多く密集しているからであった。

『へえええ、これが新型かあ。』

『おい、見てみるよ、この翼の中の機銃。これ親指ぐらいの弾が出るみたいだぞ。』

『おお、やっと密閉風防が装備になったか。これで艦爆隊や艦攻隊の連中にも同情されずに済むねえ。』

『うあ、すげー！ OPLだ！ いやあ、見たのは練習飛行隊以来だ。手荒くナイスだなあ。』

飛行服や事業服、軍装などと多様な服装にて身を包む男達は、襟や肘に見られる階級章を見る限り士官と兵下士官が一緒になっているようで、中には40代を超えるようないわゆるオジサンと呼ばれ

てしまう者もいるのだが、その全員が年甲斐も無く少年のように瞳を輝かせて眼前にある僅かに飴色を帯びた銀の肌を持つ飛行機を眺めている。単発機で一人乗りのその飛行機は既存の空母搭載機と比べても別にそれほど大きな機体でも無いが、その場に群がる男どもにとっては新しく手に入れたおもちゃにも等しい期待感と新鮮さが満ち満ちている。

それもその筈で、彼らの瞳に輝いて映るこの飛行機。実はようやく先月に工場から出荷されたばかりの帝国海軍最新鋭機にして、その初回製造ロット分である16機中の1機なのであった。

もつともこの新型飛行機を珍しげに眺めているのは、何も大きな少年達ばかりとは限らない。残念ながら彼等乗組員達にその姿を見る事ができない艦魂達であっても同じで、一機の飛行機を円陣の様に取り囲む乗組員達から少し距離を置いた甲板の一角では、艦の主である加賀の説明を受けながら興味津々の視線を投げる若い艦魂2名の姿が在った。

『九七艦攻の一号と同じ引き込み脚。面倒な洋上航法を単座でこなさなくても良い、無線帰投方位測定器付き。こら、すごいや。』

『あの機銃なんか、私達の艦体に装備されてる機銃と同じくらい大きい。これなら小型艦艇みたいな軟目標への制圧なんかにも対応できそうね。』

この機体の説明を粗方してくれた加賀の横でそんな絶賛を送るのは、いよいよ加賀の下で空母の艦魂としてのお勉強に精を出す事になった飛龍と蒼龍。明石^{あかし}よりもまだ背の低い二人は170センチ半ばもある大柄の背丈を持つ加賀とは随分と対比が目立ち、傍から見るとその様子はまさに先生と生徒の構図。基本的に口数と感情表現

が並以下の人柄である加賀にあっても教えを授ける為には声を発する必要があるので、今日はこの間とは違ってその重低音が聞いた声を率先して放ち、周囲で乗組員達が上げるわいわいと楽しそうな声も授業の雰囲気明るくするのに一役買ってくれる。おかげで加賀先生の指導による飛龍達の修行の第一日は、まさに彼女達の分身が進水した際の如く、順調な滑り出しを迎えたのであった。

『・・・宇佐^{うさ}辺りの航空隊で使^うらしい。・・・新型機はまず教練体勢を整える為に使う物だ。・・・でも遠くない内に私達にも配備されると思う。・・・この機体も基本教練用に貸与された物らしくて、艦隊訓練で瀬戸内西部に行ったら陸上基地に引き渡すんだそうだ。』

潮風に靡かせる後頭部で縛られた長い黒髪を押さえつつ、長く空母として励んできた加賀は新型の飛行機の予想される動向を教え子達に教えてやる。対して生まれてこの方、自分の分身に搭載している機体を新型へと更新した経験が無い飛龍と蒼龍は、初めて耳にする帝国海軍航空機事情の一端へとその理解を深めていく。

別に艦魂である彼女達は飛行機に乗って戦う事は無いのだが、飛龍と蒼龍はそんな疑問をただの一瞬も脳裏に過ぎらせる事無く加賀が放つ言葉に真剣に耳を傾け、さらには与えられるその知識を手持ちのノートに書き込んでいく程であった。

これは海軍艦艇としての自分がどのような役目を持っているかをしっかり解っているが故の行動で、加賀も含めた彼女達の分身は「飛行機を飛ばす船」では無く、「飛行機を用いて戦う船」だという事にその理由がある。空母に搭載される多くの航空機はただ格納庫の容積を食う物資の類等ではなく、まさにその艦にとっての盾であり矛。戦艦が大砲と重装甲を主にし、駆逐艦が軽快さと雷装を主にすると全く同じであり、いわば飛龍や蒼龍にとってはその手に持つ事ができる唯一の太刀。そしてそんな自分の太刀を駆使して戦う

事を想定した際、その重さによってどんな振り方があるか、一体剣先までの距離はどのくらいの長さか、どんな構えをして敵と対峙するのが適切なのか、等を普段から知っておく事は何も艦魂だけにとって重要なお話では無い。

対峙した敵の得物より僅かに長い木刀を作って戦いに挑み、額に巻いた鉢巻が切り落とされるという寸前の危機を犯しつつも見事に敵の脳天に唐竹割りの一撃を打ち込んで倒してみせた、剣豪で名高い宮本武蔵みやもとむさしの逸話はその最たる例である。まして彼女達が戦う相手とは軍事知識に無知な民間船ではなく、同じ様に一国の海軍艦艇としてその誇りと知識を十分に蓄えた船ばかりなのであるから、僅かの差で勝負の境目が出現するのは否応も無く想像できる当然の事態。故に帝国海軍のみならず、戦う船として自身が持つ各種の性能に精通する事は、世界の海軍艦艇の命達にとっては大変重要な意義を持っているのであった。

『・・・この新型、とにかく航続距離が従来の艦戦よりもやたらと改善されてるらしい。・・・上空直衛には有効だ。・・・9月には支那で戦闘に参加したって聞いているが、おかげで奥地への陸攻隊の護衛もできたらしい。・・・良い飛行機だ。』

『あ・・・あの、加賀さん。こ、この新型の飛行機、発動機も新規なのですか？』

大柄で無口にして、感情表現が些か欠落している上に切れ味鋭い輪郭の目を持つ加賀は、その場の明るい雰囲気馴染みきらないおっかなさを常に漂わせている。寒い飛行甲板が授業の場という事で加賀が身に付けた黒い外套はバサバサと潮風に靡き、さらに加賀の頭部では後頭部できつく縛った長い長い黒髪がうねりの具合を一段と増してさながら軍艦旗のように翻る。ほぼ黒一色のこの色合いに風を切る音を伴わせ、微動だにしない口元や目元を表情を浮かべて立っている加賀の姿は、何か時代劇に登場する凶暴にして冷徹な殺

し屋のようだ。

そのおかげ飛龍の発したさらなる叡智を請う言葉も動揺とほのかな恐怖を隠せない声色であったが、こんな風貌は加賀にとっては元来の姿。別に加賀は不機嫌な訳でも何でもない。その証拠に加賀は飛龍へとその鷺の如き瞳を流すや、飛行機の外観のみならず中身にもちゃんと勉強の食指を伸ばそうとしている若者の姿勢を褒めてくれた。

『・・・発動機は最近出た九七艦攻の三号と同じ？さかえ栄？』という名の発動機だけど、おそらくこの新型機と艦攻では発動機調整の仕方が少し違うと思う。』

『あゝ、九七艦攻の3号ですかあ。まだちょっと不具合が多い奴ですよね？』

『・・・ああ。・・・だからたぶん、整備担当の乗組員にも新しい整備技術の教育か、どこか陸上の施設に出向しての研修が組まれるだろう。・・・艦隊訓練の合間を縫ってやる事になるだろうから、二人ともよく覚えておくと良い。』

飛龍とは違って加賀に声を掛ける事に物怖じしない蒼龍の声にも応じながら、加賀は眼前の新型機の発動機における自分達への影響を見事に教えてくれる。さすがに空母の艦魂としてはベテランに相応しい知識を持つ加賀は、この後もピカピカに輝く銀翼の事について二人の教え子の質問に懇切丁寧に答えてくれ、飛龍と蒼龍は早速昭和16年度の海にてその教養を深める事に成功するのであった。

そして加賀の分身が輸送の為に偶然積んでいたこの新たな翼は、彼女が口にした通りにこの年の末にかけて蒼龍や飛龍の分身にも配備されて行くのだが、乗組員達がベタ褒めする多くの機能に裏打ちされたその性能は、一時とは言え対峙する事になった多くの敵性戦闘機にとって雷と同等の鬼門とまで認識される事になる。精悍なフ

オルムに描かれた日の丸が頭上の晴天に連なったその時、この新型機はまさに太平洋の空に王者として君臨する機体であり、後年に至るも大日本帝国海軍の名と共に永く伝えられる名機中の名機と呼ばれていく存在でもあった。

『は、早く装備されると良いですね、この飛行機。』

『名前も格好良いですしねえ。』

『・・・ふ。』

どうやら蒼龍の放った何気ない一言に、加賀は同感の意を得たのか特徴的な短い笑い声を放つ。こうして加賀達はその翼との出会いを終始明るく迎え、普通は無しを意味する番号を用いているというその正式名称を深く脳裏に刻むのであった。

『・・・零式艦上戦闘機。・・・零式というところがナイスだ。』

こうして加賀による後輩の教育が始まっている一方、他の第二艦隊所属の艦魂達にあって同じ様に新たな年度の最初の勉強が行われている。刻々と変わる海軍情勢に対応する為なのは人間も艦魂も変わらない訳だが、艦魂達による勉強という物を第二艦隊の中で見た時、この部隊ほどその激しさと内容が濃い色合いで現れる場所は二つと無い。竹刀片手にげんこつと怒号が日常茶飯事なのだから言わずもがな。もちろんそれは帝国海軍の全海上部隊中最精鋭を自負する、神通率^{じんつう}いる第二水雷戦隊であった。

ただ、今日の第二水雷戦隊における鬼教官による授業は、普段の様に神通艦の甲板上では繰り広げられてはいない。それは今日の私立神通学校の教材が神通艦には無い為で、怖い怖い教官を含めた二水戦の全員は自隊所属である多くの駆逐艦の一隻、雪風艦ゆきかぜの狭い甲板にて青空教室を開いていた。

『これが九三式魚雷。私も含めて朝潮達あさしおにもまだ装備されてはいないが、今まで陽炎かげろうや不知火しらぬい辺りの艦体に在る物を見た奴も多いだろう。外見の寸法はほとんど同じだが、その性能はこれまでの魚雷よりも格段に上がってる。』

今日も張り詰めた糸のような高めの声を上げ、片手にした竹刀の剣先をすぐ傍に立てかけた小さめの黒板へと向ける神通。その隣には実の妹にして第二艦隊隷下であるもう一つの水雷戦隊、すなわち四水戦の戦隊長である那珂なかが、姉とは甲乙の差が激しい朗らかな笑みを輝かせている。

一応、顔は似ているこの姉妹。髪型も肩の辺りで切ったくらいの短い代物であるが、首の付け根辺りで綺麗に毛先を切り揃えた那珂に対し、神通は首の後ろ辺りで毛先も不揃いな後ろ髪を短く束ねているのが特徴だ。

もっともおかげさまで見てくれから滲み出る上品さは妹の那珂が格段に上で、神通はまるで野武士の風格を漂わせるちよつと粗暴な感じが見る者にとっては強く印象付けられ、当の神通とて己のそういう雰囲気を実は大事にしている。神通と那珂の眼前にて低い背丈と水兵さんの軍装で勢揃いした両水雷戦隊の艦魂達の中、そんな神通の容姿に対する企図を知っているのは彼女の従兵である霰あられのみだ

が、霰にとってはだからこそ、ただ単に上司が怖さという物を身に纏おうとしている訳ではない事は百も承知であった。

意外にも憧れに対して近づこうとする心が強い神通と、些か粗野な感じも含むこの髪型。実は彼女が尊崇する織田信長公のトレードマークとも言える鬘まげ、いわゆる「茶筌鬘ちやせんまげ」を意識した物なのである。帝国海軍艦魂社会随一の「歴女」っぷりを誇る神通は15年以上に及ぶ生涯の中で、民間船の艦魂にちよくちよく声を掛けては信長公に関連する書籍を収集するのがほぼ唯一の趣味。本好きで有名な常盤きわという大先輩にも時には頼んで多くの戦国時代関連の本を読み漁っており、信長公の肖像画も紙面越しに見た事があるというお熱の入れ様である。そして霰だけが知っているそんな神通の側面には意外や意外、若干の妄想癖という物まであったりする。何を隠そう自室にて静かに信長公の書籍を読んでいる彼女の鋭い刃の如き瞳の裏では、肖像画とは似ても似つかない驚の様な目と精悍な顔立ちを持ち、髭の類は一切無い若さ溢れる信長公のお顔が描かれている、というのだからその方面では割と？重傷？なお人である。

ところがそんな理想を追い求める自分の一端をお仕事には一切ださないというのが、怖いと思いつつも霰が信賴して仕える上司。雪風艦中央やや艦尾寄りにある二番発射管の周りに集まった部下達の前に、神通は黒板に記した文字と発射管を交互に示しながら新たな魚雷の知識を述べていく。ついさっき彼女自身が口にした通り二水戦旗艦である神通の分身にすらもまだこの魚雷は装備されていないのだが、まるで使い慣れた得物の如く次から次へと説明してみせるその姿はやはり凄い。

『霰、もう良いぞ。今日は上がれ。』

従兵としての霰のお仕事を終わらせようとそんな言葉を放つ際、上司はいつも既に消灯時間も迫った頃合にも関わらず机に向かって

おり、霰が一日最後の挨拶をして部屋を去る間際も一向に就寝する気配を見せない。きっとお勉強しているのだろうと霰はなんとなく解っていたが、その不断の努力は今まさに霰を含めた部下達が眼差しを向ける上司の言動に良く現れていた。

『これまでと違うのは、この魚雷は第二空気と呼ばれる特殊な気体を用いる事にある。だからこれまでの魚雷とは別にして、装備する艦にはこの第二空気を取り扱う艦内設備、それから取り扱いの為の専門教育を受けた水雷科の人間が必要となる。この魚雷が制式化されたのは名前の通り今から7年も前だが、その間に建造された朝潮達の駆逐艦、それから私や那珂のような従来の巡洋艦なんかにもまだ装備されていないのは、その艦内設備を揃えるのにそこそこの規模での改装が必要であるからなんだ。まあ、今年の春頃からはその改装がようやく始まるらしい。もちろん装備するのは私達、第二艦隊の水雷戦隊だ。』

神通が言い終えると二水戦のみならず、那珂が率いる四水戦の駆逐艦の艦魂達にあっても静かに感心の吐息を折り重ね、今日という日まで知る事が無かった新式魚雷への理解を一樣に深めていく。毎日夜遅くまで頑張る神通の独学とそれに伴う言葉は、一本の魚雷のみに留まらない艦全体を見据えた上での事情。「何がどうなっているか」という基本的な部分から始まるその語りは、霰以外は誰も知らないものの、とても理想のみで信長公の顔を勝手に妄想する夢見る輩のお言葉とは思えない。

『詳しいなあ、神通う……。』

発射管を隣にして神通と那珂を半円状に囲んだ二人に従う駆逐艦

の艦魂達の中、感心を通り越してどこか気が抜けたような声をあげたのは明石。水雷戦隊の一員ではない明石がこの場に居るのは少し不自然であるが、これも明石艦の艦魂である自分に必要な知識の一つと思っている彼女は、身に纏った軍装が自分だけが士官で周りみんな水兵さんという違いを気にする様子も無く、自前のノートに早速鉛筆を走らせていく。

その理由はそんな明石の分身が、眼前の新式魚雷よりもさらに最新鋭である工作艦であつたからだ。

厳密に言えばそれは明石艦の持つ多様な工作設備の一部に兵器工場という名の区画が設置されているからで、この区画ではその名の如く実際に敵に対して使う武装関連の取り扱いを行うのである。もっとも原材料を加工して魚雷や弾丸を一から作るという訳ではなく、例えば艦砲の尾栓付近に存在する多くの小部品の整備補修、常日頃からの調整と動作管理が必要な魚雷の整備等がその主目的。製造といったこの世に？生み出す？為の観点ではなく、飽くまでも整備補修といった？維持管理？の観点が強いのである。

さしにも明石もそんな自分の分身の事は良く解っていたのだが、如何せん戦闘艦艇ではない明石には大砲や魚雷などの知識が決定的に欠けている。かつては艦砲を扱う砲術科の士官として励んでいた相方に教えてもらう機会もあつたのだが、周知の通りで明石の分身の中には今はそんな人間はいない。そこで親友でもある神通がそんな戦闘艦艇の艦魂としては大変に優秀であつた事をこれ幸いと考え、明石は本日の第二艦隊内の水雷戦隊共催である新式魚雷のお勉強会に自ら申し出て参加したのである。

そしてその先に見た親友の姿には、やはり自分とは違って戦う船の命としての叡智が豊富に身に付けられていた。

『はい。質問よろしいですか？』

するとその時、前列で座っていた少女達の中、真っ黒の外套より
も少し色が褪せた肌の手を上げつつ一緒に声も上げたのは、最近よ
うやく右足首の捻挫も治って元氣印の笑顔も戻った霞。かすみ自分の分身
にある砲塔の上からバク宙をかませる程に右足は完治しており、渾
名に違わぬ身軽さを既に仲間達にも見せ付けた彼女。

だが残念ながら、先月の柔道大会でちょっと進捗したかに見えた
天敵との仲までも元通りになってしまった。

『キャツキヤとうるせーなあ。黙ってろよ。』

『アンタに言っていないわよ！ ウンコみたいな髪しやがって！』

『テメーに言われたかねーよ！ このババ色猿が！』

『なにを、この野郎！！』

久々な様で二水戦では日常茶飯事なこのやりとり。ふと明石もそ
の怒号に気付いて二人を見るや、これまたどうした理屈なのか二人
が座る位置は例によって隣同士。もう1年くらいこうして短い口論
の末に大喧嘩する仲なのに、どうした事かこの二人はいつも同じ場
に存在してしまうという奇妙なコンビである。元氣になった霞に思
いっきり自慢の茶髪を引っ張られるも、お返しとばかりに麻色の肌
を引っ搔いて応じてみせる雪風、という在り方も相変わらずらしい。
次いですぐに付近にいた霞を始めとする二水戦の仲間達がそれを止
めようとするが、憎き天敵をやっつける事で思考が支配されている
霞と雪風を問答無用で黙らせる方法もまた相変わらずであった。

『この馬鹿がああ！！』

『ぎゃ！』

『ぐへ！』

お互いに2、3発小突いた辺りでそれぞれの脳天へと急降下した爆撃は神通のげんこつ。毎度毎度怒られる時と同じく霞と雪風は鈍痛とタンコブと涙でもって天敵対峙を一時休戦とし、しかも今日はまた自分達を含めた二水戦だけではなく、上司の妹が率いる四水戦もその場にいたのだから具合が悪い。二人は大いにお叱りを受けて終いにもう一発げんこつを頂き、早速四水戦の者達によって二水戦は大笑いされてしまう。もっとも普段から見ても珍しい四水戦との合同の授業を大事に考えている神通はこのげんこつ2発によってお仕置きの時間を終え、余りにも相変わらず過ぎるその光景に明石も心配などせずに一緒になってクスクスと笑ってしまう始末だった。

やがてそんな笑い声が木霊する中で二人の部下の所から、その真正面である那珂の控える黒板の傍へと戻って踵を返した神通。ただでさえ鋭い瞳がその切れ味をさらに一層増しているのは完全なご立腹の胸の内を如実に示しているが、そんな顔で放つ語気を緩めた神通の声は早くも言う事を聞かない配下の者を成敗するのではなく、教えを授ける者としての言動へと変わっている。

『で、なんだ、猿？ 質問があったんだろう？ さっさと答え。』

まだ少しご機嫌が斜めな神通の物言いはやはりと言うべきか当然と言うべきか、ぶっきらぼうの一言。なまじ美人ながらも顔が物凄くおっかない上司の凄みは相当な物で、霞は直接指名されて質問の続きを問い掛ける権利を与えられたものの、まだ脳天より響いてくる鈍痛と恐怖によってすぐには言葉が出てこない。ただそんな神通が声を掛けてくれた後、沈黙が続いてしまうとさらにその恐怖と申し訳ない気持ち膨らんでしまう為、霞は思い切ってまだちよつと痛みに歪む声を返してみた。

『あ、あの、あいてて……。この魚雷が凄いの解りましたけど、や、やっぱりその分だけ高価だったり、す、するんですか……。？』

『あん、値段か？・・・なんでそんな物を気にする、猿？』

基本的に通貨という物の概念が余り用いられない艦魂社会にあつて霞の質問は神通の言う通り些か場違いな内容であり、転じてこの霞という少女が何故に今の様な質問を放ったのが雪風や霰を含む二水戦の者達には理解が出来ない。それは一様に10代後半の容姿を持つ二水戦どころか、20代の容姿を持つ者もそこそこに多い四水戦の面々も同じであり、直属の上司である神通ですらもその質問の真意を見抜けずにいたくらいである。だが次いで霞が口にした言葉は、長く駆逐艦の艦魂達を教えてきた経歴を持つ神通をして、「指揮官としての才能では自分をも上回る」と言わしめる霞の特徴が良く滲み出ていた。

『だ、だって、そんなに凄いい性能の魚雷なら、その分中身の構造や部品も、い、今までより良い物を使ってるって事ですよね？　が、額面上の性能は良いとしても、高価なら高価なほど調達が難しい筈ですから、例えば撃った後の補充とか、さっき戦隊長も言ってた改装による装備なんかでも手間取ったりするんじゃないんですか？　もし雷装の違いが生じたら発射計画も複雑になりますし、隊として戦隊長の指示一つで雷撃するのも難しくなるじゃないですかあ。あいて・・・。』

頭に出来た大きなタンコブを擦りながら、涙目のままでそう言ってみせた霞。だがその言葉は一つの集団での行動をちゃんと意識する内容で、高性能とだけ説明した神通の言葉を受けて霞なりに独自に発展させた新式魚雷への素直な考察。その一端を確認する為に敢えて彼女は自分を含めた艦魂社会では余り用いられないコストという物に着目したのであり、運動だけでなくおつむの出来も中々である事を上司である神通や那珂へと示してみせたのだった。

残念ながら霞と同じ水兵さんの格好をする艦魂達にはそこまで霞

への理解を及ばせる者は皆無であったが、神通だけは持ち前の連帯感を意識したそんな部下の思考を即座に理解する。

陽に焼けた様な麻色の肌に元氣と熱血な心を秘めた霞は、雪風という天敵と我を忘れて大喧嘩したりする未熟さはまだまだあるものの、二水戦の多くの駆逐艦の艦魂達の中でも最も利口で、何事も皆で何かを成すという粋からその思考が逸脱する事はない少女なのである。共にそのやんちゃな性格に反してお勉強の成績は良いにしても、この辺りが良きライバルである雪風との大きな違いであった。

そしてそれは自分にもまた無い霞なりの長所であると神通はしみじみ感じつつ、胸の下で腕を組むと早速そんな部下の質問に答えてやる事にする。

『ふうむ。そうさなあ……。』

『……。』

ここに至ってようやくご機嫌が元通りとなった神通は少し呆けた表情で空の一角に視線を投げ、自身が蓄えてきた知識の中から部下への回答となる物を検索し始める。

その様子を周りの者に混じって明石もじっと瞳に映し、実際に自分の分身の中で修理や調整を行う事になるであろう魚雷とはそもそもいくらなのか、という疑問に答えを欲していた。明石の場合はかつての相方が酒保にて大量のお菓子を調達してくれたり、寄港先にてご当地名物の食べ物を買ってきてくれた記憶が有る為、通貨の価値がいまいちピンとこない霞達よりも幾分は金銭感覚が備わっているのだが、やがて神通がさらりと放った金額にはそんな明石ですらもビックリ仰天してしまう。

『うーん。諸々の設備に、人員の分の手当てや俸給も勘定すればもっと高いんだがな。ま、とりあえずこの犬の発射管に詰まってる魚雷4本で、ざっと20万円といったところか。』

『ええええー・・・！』

神通と那珂の周りを埋める30名近い人数の艦魂達の中、唯一人だけ驚きの絶叫を上げた明石。その右手からは握られていた鉛筆がポロリと落ちて行き、見開いた両目と大きく開いた口をそのままにただただ驚くばかりである。

一方、明石のような驚愕の表情に至れない霞達は明石の反応とその真相が良く解らず、おもむろに隣にいる仲間等とひそひそと声を交えて事態を飲み込もうと試みるが、生憎と金銭感覚に疎い駆逐艦の艦魂達には一向に理解が出来ない状態であった。

『お、おい、猿……。に、20万円て高いのか……。？　そ、それとも安いのか……。？』

『あ、アレはアンタの魚雷でしょ、雪風……。だ、大体なんで自分で解ってないのよ……。な、なあ、霞。』

『うーん……。ウチの酒保は、郵便ハガキが1銭5厘、歯磨き粉が2銭、洗濯の石鹼が10銭やからあ……。うーん……。』

どうやら神通が教えてあげた魚雷4本のお値段が持つ価値は、駆逐艦の艦魂達にはちーとも伝わらなかったらしい。殆どの者はお互いに顔を見合わせたまま首を捻り、霞や雪風のような意地っ張りには理解できなかった自分を悟られぬように振る舞い、トロい思考回路の持ち主である霞などは両手の指を総動員してもはや円という単位にすらもならない金額を一生懸命勘定する、という有様である。まだまだ若い故にお金という物の価値の有無は別としてその度合いがよく解っていない上に、そも艦魂社会ではそうそう目にする事の無い額のお値段は霞達にとっては難解な方程式のような物で、さすがの神通もそんな上手く理解に至れない部下達の様子を目にするや、大きく溜め息を漏らして項垂れてしまう。

ダメだ、こりゃ・・・。

そんな言葉を思わず脳裏で呟く神通であったが、それまで神通の隣でクスクスと眼前の光景を笑っていた那珂がここで解り易い対比を声に変えてくれ、女性ながら低くハスキーな声色で語られるその内容によりやく霞達は明石と同じ表情になり始める。

『ふふふ。そうねえ・・・、例えば、5千円も有れば人間達が住む立派な家が1軒建つわよ。』

『ご、5千円で・・・！？　ま、待てよ・・・、てえことは1万円の家が2軒・・・。その20倍だと、い、家40軒分・・・！？』

『あははは。ついでに私や神通姉さんが積んでる水上偵察機は、発動機や搭載する無線機、計器、機銃、爆弾なんかも合わせて、・・・全部で10万円くらいかな。』

『『『　えええええ！　』』』

『こ、この発射管に詰まってる4本だけで・・・、ひ、飛行機が2機買えるの・・・！？』

ようやくその場にいる者達の全員が同じ金銭感覚へと到達した事は喜ぶべき事でも在るのだが、おかげさまで神通と那珂以外の艦魂達は今まで当たり前のようにその分身に積んでいた自慢の槍のお値段に目玉が飛び出る程の驚きを覚えてしまう。特にまさに神通が示した発射管の持ち主である雪風は大きく開いた口は勿論、寒さの為に鼻からツーと垂れてくる鼻水もそのままに声を失い、周囲の騒々しさから隔離された真っ白な脳裏の中で、自身が備える予備も含めた16本の魚雷が如何に高価である代物なのかを思い知る。

高性能を売りにして上司が紹介してくれた、この九三式魚雷。べらぼうに値の張る兵器であった。

一概に物の価値という物を金額で表す事は難しいが、このように世間一般的な中で重要な指針である事は人間でも艦魂でも同じである。特に本日の駆逐艦の艦魂達にとっては普段から余り意識した事の無い自分の価値という物に対して、まず誕生した時より今しがた学んだばかりの魚雷を始めする高額な財力が投入されている事を身を持って思い知り、現代兵器の代表格である飛行機すらも凌ぐという額が与えたその衝撃は生半可な物ではない。だがこんな一幕をも自分の身の程を知る事に繋げる器用さを上手く用いるのも艦魂の特徴で、神通と那珂は水雷戦隊所属の艦魂にとっては当たり前の存在である魚雷の価値の重さを改めて認識させ、各々が得たその強い衝撃をよく心得て今年は訓練に励むようにと本日の教育を纏めてみせる。

翌日より二水戦、及び四水戦の駆逐艦の艦魂達が誰と言う訳でもなく、毎朝の魚雷磨きを己の日課として組み込んだのは言わずもなであった。

こうして第二艦隊の艦魂達は各々が頂く師匠に導かれ、昭和16年度の最初の一步を踏み出したのであった。

第一〇〇話 「励み方、始め」（後書き）

◆作中捕捉◆

読者皆様、いつも明石艦物語をご拝読くださり有難う御座います。さて、作中にて乗組員達の台詞の中に「OPL」という言葉が出て参りましたが、恐らくご存知の方も多いと思われますがこれは光像式照準機の当時の俗称で御座います。これが現代ではヘッドマウントディスプレイへと繋がり、情報量も偏差や見越しの目安程度だった物が、現代では自機敵機の相対情報はおろか、火器官制にアラート機能までも付いているのだと考えると中々に面白いですね。

ご存じ無い読者の方もあるかと思いますが、実物の映像をご参考にごうぞ。

【<http://www.nicovideo.jp/watch/sm5412885>】

それと作中で加賀艦に輸送品として零戦の初回生産ロット分の一機が搭載されておりましたが、これは作者の創作で御座います事をここに明記させて頂きますが、いわゆる日本海軍機Ⅱ零戦のイメージが強い現代ですがその登場は実は正に開戦の年であり、70年以上の生涯であった帝国海軍にあっては割りと最近であった事を意識して頂ければ作者としては幸いで御座います。また台詞の中だけにしておきましたが、その心臓たる栄エンジンもまた、この頃はまだ後の誉エンジンと似た様に加熱関連での不具合に悩まされていた事は史実で御座います。

第一〇一話 「男だったら意地を通せ／其の一」

明石^{あかし}とその仲間達がいよいよ新たな年のお仕事へと臨み始めた頃、呉よりも師走の寒さが一際増す横須賀では、彼女の相方もまた自身の励み方に「始め」の号令をかけていた。

何もそれは勉学の間である水雷学校の校舎の中だけで過ごす時間だけではなく、忠^{ただし}は下宿先とする家具屋の大きな家の二階に間借りした部屋へと戻っても気を緩める事は無い。先月の辺りに井上^{いのうえ}と名乗った海軍中将与会話してからという物、彼の中にはしばらくの間静まり返っていた想いが揮発油を浴びせられたかの如く燃え盛り、まさに昼夜を問わずに行うそのお勉強は水雷学校での成績にも大きく寄与してくれている。おかげ様で水雷学校では優等の判定を教官より貰う程に勉学が捗っており、今日も今日とて帝国海軍の学校では割と多い試験を前にしても、忠は紙面の上の問題を解くのに際して頭を捻ったのは僅かに1回のみであった。まして砲術学校では得意とする銃剣道の腕を発揮できた事もあって3位の好成績を残している忠であるから、水雷学校の教官達から彼は優等生としてすこぶる高評を得ている。

すると当事者たる忠も心に余裕が出来て気が楽になるという物で、ここ最近では勉強こそ絶えないが別に自分の不出来に焦って追い込むような感情を抱くような事が無い。ほぼ無意識の内に参考書に手を伸ばして、時間が経つのも気に留めずに勉強へと打ち込む事の出来る日々が続いている状態で、下から数えた方が早かった成績順で過ごした兵学校の頃とは違う、とても充実した毎日を送っているのだった。

『ふう……。よつ、とお。』

昔懐かしい、というより明治の匂いも漂う、忠の下宿の部屋。壁際に丸く寄せられた布団は順序良く畳まれているもちよつと色褪せ、忠と背丈が同じくらいの小さな箆笥は窓から来る木漏れ日を浴びすぎて真ん中ぐらいから斜めに色が段差を設けている。他に目に付くのは卓上スタンドと数冊の本が乗ったちゃぶ台にも近い小さな机で、その傍らには継接ぎも目に付く座布団が一枚。4畳半も無い部屋にこれだけの家具があるだけで、下の畳を見れる面積は僅かな物だ。唯一良い点は部屋に一つだけある南向きの窓で、ちよつと連なった周辺の家々の屋根の向こうには遥かに続く横須賀の水平線を景色に望む事が出来る。窓の真下に位置する庭から生えた柳の木も一緒に揃って、天気の良い日はまるで花札の絵柄にでもなりそうな、こじんまりとした絶景を映してくれるのだ。

そんな部屋で寝起きをする現在の忠。艦艇乗組みや兵学校等の寮での生活は規則正しく息抜く暇も中々無い物だが、足元が揺れずに海の青よりも植物の緑の方が多く目に付く環境でのんびりと出来る今の生活を、彼は結構気に入っている。『煙草盆出せ。』の号令を気にする必要も無く好きな時に思うがままの姿勢で煙草も吸えるし、横須賀の街で買って来たお菓子なんかをヒョイっと頬張りながら寝転がっても文句を言われる事も無い。先輩や上司といった立場の者もないから、日がな一日中気を使わずに済むのも大きい。とかく忠は生来が大人しい方の性格であるから余り言葉には出したいくないと思いつつも、他人に余計な気を働かせないで済むという環境はなんとも居心地が良かった。

窓の向こうを通り過ぎる北風の音が木霊するそんな部屋の中、忠は上着を脱ぎながら窓のカーテンを閉めると、今度は脱いだ上着のポケットから煙草とマッチを取り出して早速一服としけこむ。最近はこちらと喫煙の量が増えたのか、忠はふと灰皿が吸殻によって占拠されている事に気付く。

あれ？　こないだ捨てたのに。

そんな言葉を脳裏で放ちつつ忠はくず入れへと灰皿を傾け、綺麗になった灰皿を畳みの上に無造作に置きながら寝転がる。複雑難解な水雷のお勉強は例に漏れず数字との格闘で、やる気はあっても頭脳が中々追いつかない代物であるのは忠も同じ。学校から帰るところしてゴロンと横になるのが日課になるほどに疲労も溜まり、下宿へと戻ってやっと一日の息抜きができるという毎日である。

しかし煙草を吸い終える10分間程の時間で忠の息抜きは早くも終了であり、軍装の胸元のホックを外して2、3回首を捻ると、すぐさま今日の授業で学んだ学科に関する参考書を机に求める有様である。何しろその漲る勉強意欲は忠の食欲までも蝕む程で、赤鉛筆での印も目立つ参考書をパラパラとめくりながら伸ばした彼の片手には、今日の夕飯である食パンが2枚。男にしては胴回りが痩せ型であるその体型の通り、彼は余り食事の量が多い方ではないのだが、さしにも夕飯がパン2枚とは清貧生活も極まれりと言った所。

確かに明石艦を降りて以来、忠には航海手当や危険作業手当といった上乘せ賃金が与えられていない。そもそものが帝国海軍の士官という立場の者は、例え艦艇乗組みであろうとも兵下士官とは違って服も食事も給料から差っ引いて調達するのが規則であり、余程の事が無い限りは官給されない軍刀や拳銃といった類の物は全部自腹での購入が必要となる。日本男児の体面と帝国海軍軍人の誇りを注ぐ一振りは忠だって本当なら欲しい所だが、士官としては最下級の立場である少尉の彼には残念ながらそんな買い物を支えるお給料がそもそも与えられていない。その上で上司や同僚との交流と称して偶には料亭での食事にも付き合わねばならないし、日々のお洗濯や日用品なんかのちょっとした調達は一般人と同じ様にする事情も考えると、新米士官というのは中々寂しい懷事情での生活を強いら

れる苦しいお仕事でもあるのだ。

もっとも別に忠は食費を切り詰めねばならない程にお財布が空っぽな訳ではなく、ただ摂食という行為に何某かの願望を抱かないだけである。学校よりの帰り道に道端にある適当な店屋で夕飯を買うのに際し、偶然にも今日はパンが一番最初に目についただけの話で、別に腹に入るのなら果物でもおにぎりでも何でも良かった。

その証拠に忠はジャムも白砂糖も付けない素っ気無い味のパンを齧り始めても至って表情を変える事は無く、もぐもぐと口を動かしながら視線を参考書に走らせる。熱し過ぎず冷め過ぎない程よい集中力。優等生の印象を持たれる今の忠の最大の武器だ。

『あの、森さん。』

『ん・・・？ あ、はい。』

時折師走の風が窓を叩く音がカタカタと木霊する忠の部屋に、下宿先である家具屋の奥さんが放つ高い声が木霊してくる。しがた新米士官である忠にいつも朗らかに接してくれるその人柄に随分お世話になっている故、忠は疲れと勉強の意欲を少しでも弱めて戸越しに応じてみせた。年季の入った木造家屋の廊下は体格が小さい奥さんであってもその存在をギシギシという音を奏でて教えてくれ、戸を空けた先にある階段の登りきる辺りで腰掛けながら奥さんが声を返してくる。

『お客様ですよ、海軍さんの。』

『お？』

『海軍の街といえばここ。』とも言われる程に古くから帝国海軍

との所縁も豊かなこの横須賀であるが、知り合いの海軍軍人といえ
ば兵学校の同期か、同じ普通科教育過程の道を歩んでいる新米士官
仲間が関の山である忠。今は宿泊を別にする砲術学校での友人、藤
平へいだろうかと思ひ、忠は上着のホックを再び掛けなおしつつ奥さん
の声に従つて部屋を出ていった。

動きも躓つまずきが多い戸を後にして、日本家屋によくある角度が急に
して肩幅くらいしかない階段を降り、手摺も付いていない圧迫感の
ある階段を抜けるとそこはもう玄関。家具屋の主人の趣味だという
小さな山水画を乗せた下駄箱が傍らに控え、裸電球の肌色の灯りが
ポツンと天井で光を放つ下に、濃紺というよりは完全な漆黒とも化
している第一種軍装を身に纏つた男が一人立っている。皮製で腿の
中程まで覆うくらいのポンチョの様なコートを身に付け、白髪も僅
かに混じつた短い髪と鼻の下に髭を生やした中年の海軍軍人だ。

『おう。』

階段を下りてきた忠に、男は軽く右手を上げて気兼ねの無い挨拶
をしてみせる。帝国海軍軍人たる者は紳士であるという不文律から
見れば些か礼儀を欠いた態度であるが、そんなこの男を忠は知つて
いた為にすぐさまお辞儀をして声を返す。

同期くらいしか知人のいない横須賀において、こうしてわざわざ
お仕事の間でない時に忠を訪ねて来たこの男。実は優等生の評価
と供にお褒めの言葉も掛けてくれたという、水雷学校の教官の内の
一人であつた。

『あ。これは、渡辺教官。わたなべ』

それからしばらくすると、忠と渡辺は日中より寒さも増した夜の横須賀へと繰り出していた。覚えもめでたい教え子を随分と気に掛けてくれているらしい渡辺は、自分もまた若い頃に経験した清貧な生活を送る現代の忠に『夕飯のオゴリ』というまことに有難いお言葉を伴ってお出かけを誘ってくれ、忠もまたいつもの味気ないパンに変わって味も暖かさも格別なお料理にありつけると考えて快諾。それに静かな水面と似ている穏やかな人柄の忠には、お世話になっている教官からのご好意を無下にする事もできない。挨拶も交えて5分としない内に渡辺の後に続く形で下宿を出て、よく教官の仲間内でも行く事のあるという小さな料亭へと向かう事になった。

『パンばかり食ってたら力はずかんぞ、森^{もり}。ただでさえ貴様は痩せてるんだ。もっと肉を食え、肉を。』

『あはは。はい、今日は食わせてもらいます。』

海軍の街たる横須賀は師走の夜を迎えてもすぐには眠りにはつかず、酒が飲めるお店が列を構えている通りの辺りは店先の提灯が放つ朱色の灯火が夕闇をほのかに圧している。支那事変の始まった昭和12年以來のご時世とは言え、海軍軍人、次いで横須賀にて海軍とのお仕事によって生計を立てる人々にあつては、仕事終わりや時期の節目に際して酒を飲む余裕もまだあるらしい。渡辺と忠が歩く飲み屋街は相応の人通りと酒の勢いに乗って放たれる明るい声がそこかしこにあり、海に向こうで未だ支那との戦闘が続いている事への現実感をみるみる内に喪失させていく。それは忠と渡辺にあつても例に漏れず、二人は顔を合わせる度に笑みでの会話をする。

『それになあ、寢床に帰ったら勉強はしないで寝ろよ。今日も勉強しようとしてただろ？ 頑張るのは良いが、そのおかげで病気にでもなったら船には乗れんぞお。』

『あはは、はい。』

鼻の下の髭を少し傾けてそう言った渡辺。屈託の無い笑みではあるもその声には少し呆れたような感じも含まれるが、別に彼は忠を蔑んだりするつもりは一切無いし、当の忠もまた渡辺の物言いの半分が冗談混じりである事を良く解っている。こういう気さくな所が忠も慕う渡辺の人柄で、恐怖と戦慄しかない砲術学校とはうって変わった水雷学校の授業も教育者の一人である彼の陽気さと親しみ易さにより、忠は大変に楽な気持ちで励む事ができている。

だから忠はさらに続けようとしていたお勉強の時間が今日はどうして中断されてしまったても、この渡辺を嫌うような気持ちなどは微塵も湧いてこない。既に容姿の段階で年齢は自分の倍以上もあるという中にあっても、まだまだ海軍軍人として知り合いも少ない彼は渡辺というこの教官に人一倍の親しみを抱き、料亭までの道程にて何気ない会話を続けていくのだった。

そんな明るいやりとりをしつつ着いた先は、横須賀でもよく見かける一軒家に看板を掲げたような小さな料亭。木造の壁は肌色の照明でその柔らかな感じを一層引き立て、お店の玄関に入ってすぐに出迎えた和服姿の女性達が忠と渡辺の疲れた心を癒してくれる。中へと案内される間際、料亭内の庭が良く見えるガラス張りの廊下には他の客の物であろう笑い声も木霊し、部屋へと着いた頃にはすっかりお酒を飲む気に満ち満ちた二人。『最初の一口は。』とお互いに確認し合って注文したビールが来るや、まだ料亭の人が小料理の小鉢や箸などを卓の上に並べている最中にも関わらず、互いのコッ

プへと手にしたビールの瓶を傾けていく。

もちろん最初にお酒を注いだのは、渡辺より立場の面でも年齢の面でも格下である忠だ。

『どれどれっと。』

『あ、渡辺教官。私が。』

『お。はは、悪いな。』

目上の人への気配りを欠かさない礼儀正しい忠にお酒を注がれて渡辺は早くもご機嫌となり、軍帽を取った事であらわになった坊主頭を掻きながらコップを握る。次いでなみなみと黄色いビールの水面が一杯に注がれたコップを卓の上に一度置き、今度は忠のコップへと自ら瓶を傾けてビールを注ぎ始めた。

『あ。いやあ、恐縮です。』

『はいよ。まあ、一献。』

『あはは。有難う御座います。』

酒の場でよく用いられる言葉をちよつとわざとらしく言うのも渡辺の陽気な人柄の延長で、僅かに残っていた彼への遠慮の気持ちも忠はようやく払拭される。相当に気に入って貰えたようだと言には出さずに確認し、その上でこうして気さくに酒の場で接してくれる渡辺は、その壮年の容姿も手伝って忠にはどこか意識的に親父の印象を与えてくれた。

その内に『お疲れ様。』とお互いに掛け合つての乾杯に続き、喉を鳴らしてコップの半分ほどでも飲んだ忠と渡辺は爽快感に溢れる溜め息を汽笛の様に上げる。まさに何物にも変えがたい仕事終わりの一杯という奴だ。

『つつあゝ。・・・よ、どうだ。水雷学校にはもう慣れたか?』

『は〜っ。・・・いやあ、まだ全然ですよ。』

最初の一杯に浸った後の二人のやりとりは、帝国海軍のみならずどの会社でも聞かれるような、とある上司と部下の会話。お互いの仕事の近況はもちろん水雷学校の日々となり、既に2ヶ月目くらいになった忠の様子を渡辺はそれとなく尋ねていく。もっともその明るいついに現れているように、渡辺は眼前の教え子に対して緊迫した心配の念を抱いてなぞいない。砲術学校に続いて、水雷学校でも上から数えて3番以内に入る優等生が忠であり、気性が穏やかでとても誠実に勉学に励む彼の様子は教えを与える側の渡辺にしたら実に接し易い人物だった。おまけに満足できる成績を納めているのだから、むしろ逆に渡辺には忠ほど安心して教育を施せる若者はいない。決して煽って木の上に登らせるつもりはないが、渡辺は忠の返す声にニコニコと笑って頷き、最小限に留めようと意図しながら放つお褒めの言葉をかけてやる。

忠もまた5年以上前に兵学校へと進んでこの方、懸命に頑張ってきた海軍生活中で上司から褒められた事はそれ程多かった訳ではないから、ようやくお料理が卓へと運ばれてきた頃になってもまだまだ続く渡辺の嘘偽りを感じさせない物言いは、彼の胸の中に静かながらもハッキリと明確な嬉しさという物を募らせていった。

『あゝ、じゃあ爆雷を使った対潜攻撃方法って、まだそんなに構築されてはいないんですか？』

『うゝん、まあ、正直に言うそうだな。何より目視出来ないからな、潜航中の潜水艦ってのは。貴様は砲術士だったから、射撃計画に必要な多くの要素の重要性はよく解るだろ？ どのくらいの速度でどの方角にどのくらいの大きさの目標が存在するかってのが、水中では肉眼で思うように認める事が出来ない。聴音器や探信儀越しになるし、誤差も大きいからなあ。』

些か物騒な水雷のアレコレのお話を繰り広げるのも、忠と渡辺にとっては大事な大事なお仕事のお話だ。酒の勢いという物は時には普段は中々口には出しづらい本音を立場や礼式を乗り越えて話題に出してくれる不思議な力があり、忠も自身の青二才ぶりを理由とはせずに率直にお仕事の上での不平や不満を口にして行く。そしてこんな若輩者の愚痴や言いたい事をこのような酒宴の場で聞いてあげるのは、忠よりも年上で階級も上である渡辺の役目でもある。ただ、愚痴ばかりの物言いい辺倒には決してならない忠が相手であるし、何よりも忠は不平不満の責を目上の渡辺に求めるような気持ちは無い。酒による軽い気持ちが漏らしてくれる彼の声は、本当に希にか接する事のできない忠なりの本音なのだ。

『それに被害の確認も難しいですよね？ 損傷を与えても標的はそのままま沈むだけですからねえ。』

『うむ、そうだ。呉の潜水学校の教官に同期がおるんだがな、それいつも同じ事を言っとった。浮上するだけの余力があれば海面に浮上する事もあるが、まあ大体は沈むだけだそうさ。潜水艦っちゅうモンはな。浮かんでくるのは甲板の板か重油くらいのモンらしい。まったく、叩いたっていう手応えがせんなあ。』

『あはは。おまけに見えもしないんですからねえ。勘弁して欲しいですよ。』

上機嫌な渡辺はいつの間にかやら3杯目となるビールを忠に注いで貰い、手に持ったコップが泡と黄色い水面で一杯になると今度は手近にあったビール瓶を手にして忠のコップへと傾けてくる。さすがに海軍軍人を長くやってきた渡辺の飲酒ペースは忠よりも全然早く、未だ3分の1くらいの量が残っている教え子のコップを見て僅かに声を荒げる。

『おい、森。貴様、飲みが足りんぞ。若いんだからグツと行けよ、

グツと。』

『あはは。恐れ入ります。』

鼻と唇の間にある髭にビールの泡を付けてそういった渡辺の顔は、若輩者への喝にも等しいその言葉に一層の可笑しさを与えるには十分だ。見れば渡辺の顔は首も含めてほのかに赤くなっており、教えずに酒を進めつつも自身は酒の回りが速い体質である事を忠に無言で教えてくれる。だがそんな意外性もまた酒の場では楽しい一時に貢献してくれるという物で、冗談混じりで放った忠の言葉に渡辺は些か大袈裟に首を左右に振って声を返した。

『渡辺教官、大丈夫ですか？ お顔が真っ赤ですよ。』

『ばかこのお、こんなんで酔うと思ってるのかあ？ はっはっは、赤くなるだけでオレは簡単には酔わねえんだよ。他人の心配せんで良いから、ほら、まあ飲め。』

『ははは。はい、頂きます。』

あくまでも忠の心配を否定して笑ってみせる渡辺だが、大体こう言う物言いでは心配を拭う人間は宴会中盤にもなるといつの間にかやらかし？ 出来上がった？ 状態になってしまっている物である。だがしかし年寄りの酒酔いという状態に説教やダメ出しが割と多かったりする世間一般にあって、渡辺はほろ酔い加減に陥り始めていても一向にその様にはならない。酒を勧めつつ忠がまたぞろお仕事上での話題を口にすると一緒に頭を捻ってくれたりするし、大人しい忠が酒の勢いを借りて放つ言葉を遮るようにして口を挟む事も無く、変わらぬ笑みを酔いによる赤面に浮べて時折頷いたりしながら教えずに話を最後まで聞こうとしてくれている。なんとも有難い上官であり、本人の機嫌の良さは忠に返される言葉にも可笑しさと優しさ、そしてほのかな暖かさを滲ませていた。

おかげで忠は上司とのマンツーマンの飲み会という状況にあって

もそれはそれは楽な気分で酒を飲み、次第に上半身と腕の捻り具合が大袈裟になってきた渡辺の様子を面白がって、酒の匂いも立ち込める自分の息を声へと変えていく。渡辺は決してベロンベロンの泥酔にはなっていないようで、たまに料亭の人を呼んではお酒とお料理のおかわりを何食わぬ顔で注文するなど、まだまだ理性は残っているご様子。しかしその勢いにさらに拍車を掛けるつもりなのか、いよいよ日本酒を所望し出した言動に忠も十分彼が酔いに足を取られてきた事を認めた。

渡辺曰く、『ビールは最初だけだな。オレあ日本酒が一番好きだ。』、だそうである。

どっちかと言えば忠は日本酒はちよつと苦手なのだが、さしものそんな本音を酒の勢いに乗せて口にしたならせっかくの上司の上機嫌をぶち壊しにしてしまう事は必定であるから、仕方なしと割り切って渡辺に続く形で日本酒をかつ食らう事に決めた。

『けええく……。日本酒はやっぱキツイですねえ。』

どうしても独特の喉越しと胃に染み渡るような感覚に耐え切れずに漏らした、日本酒への感想。片目をつぶった苦笑いにも等しい表情で声を放つ忠に対し、渡辺は大きな笑い声を上げて再び冗談混じりの楽しいお言葉を返してくれた。

『はっはっは。これが解らんでこたあな、なんぼ優等生って言ってもまだまだ若いんだよ、貴様はあ。もっともって頑張っただけが美味いと思えるようになったら、そんな時は貴様、一人前の海軍士官になったってこった。はっはっは！』

『あはは。恐れ入りますう。……。くうえ……。』

旬の魚の刺身を頬張りながら言った渡辺の声に笑いつつ、忠はまだ喉に残る日本酒の風味に渋い声をあげる。どうやら渡辺教官にし

たら自分はまだまだ未熟であるらしい。日本酒に対する味覚をその基準とするというのはなんとも理屈が欠けるが、長年励んできた海軍軍人の先輩の仰る事は肝に命じようと考え、忠は了解と肯定の意を必死に表してみせる。

すると忠のその謙虚な姿勢故か、それとも酔いがようやく思考回路を侵し始めてきたのか、渡辺は胡坐を崩して手酌の形でもう何杯目になるかも解らない日本酒をお猪口にを注ぎつつ、ふわふわと浮かび上がるような声色で忠を褒める言葉を述べ始める。

だが忠はそんな渡辺の言葉に僅かに眉をピクリと動かし、渡辺へと僅かに見開いた目を向けた。なぜなら渡辺が口にしたのは、忠が心に既に決めている水雷学校卒業後の身の振り方に言及する内容であつたからだつた。

『いや、いやあ。しつかしなあ。・・・なんだ、砲術学校も3番、水雷学校もこの分だと最低でも3番は確実だな、貴様は。よく居るんだよな、貴様みたいに応学校では目立たなくても、一端の海軍士官として働き始めてから芽を出す奴つてのはよ。こういうの見抜けないで特務艦乗組みにしちまうんだから、人事局もちつとは考えモンだよなあ。』

『え・・・？』

『いやな、煽てるつもりは無いんだが、貴様は考課表の上でも人事局の目から見ても、次は立派な軍艦が適任だと思うぞ。』

突然の渡辺の言葉に忠は酔いが瞬時に引き、驚きとも放心ともとれるぼんやりとした表情で渡辺の顔に眼差しを向け続ける。だがその間にも渡辺は赤い顔でにんまりとしながら、水雷学校教官としての自分が考える教え子の今後をゆつくりと声に変えていく。ちよつと困った様に忠が謙遜という形で自身の言葉を否定しても、渡辺は全く聞く耳を貸さずに忠の今後に本人が望まぬ鮮やかさを与えようとした。

もちろん渡辺はそんな教え子たる忠が砲術学校と水雷学校でひたすら頑張ってきた根本に、今しがた自ら口に出した特務艦の存在が在る等という事は知る由も無かった。

『いやあ、渡辺教官。私はただ普通科教育課程を終えた程度ですし、そんな大した男では・・・。』

『ばかこのお、んなこたあ無い。水雷と砲術ってのは結構勝手が違うモンだが、そんな中で貴様みたいにどっちも優等で通る奴はそんなにいるモンじゃないぞ。そうだな、砲術と水雷のどっちでも花形にして食っていける船ったら・・・、新型の巡洋艦か。・・・うん、どうだ貴様、舞鶴まいづる所属の花の利根型巡洋艦とねなんか行ってみないか？

ん？』

ひよんな所で出てきた利根型巡洋艦の名前は、渡辺の突如の申し出を声として受けた直後より抱いてきた一抹の憂いへと意図せず結ばれてしまう。この水雷学校をあと4ヶ月で終えた後に必ず帰ると誓った、元の職場にして大事な相方の待つ場所、明石艦あかし。当時まだ忠がそこに居た頃、相方と共に頑張っていた波間に、今しがた渡辺が口にした利根型巡洋艦もいた。相方の分身たる明石艦と全く同年代に建造され、共に第二艦隊の構成艦として配属されたのも同じ昭和14年11月15日の艦隊編成時である。

艦の命である相方はその事からかつて一緒に頑張っていた日々の中で、忠にそんな利根型の2隻は自分の同期に当たる間柄だと語った事があり、忠はぼんやりとした絵で脳裏にその時の記憶を思い出す。

『利根と筑摩ちくまはね、歳も同じで艦の大きさも同じ。竣工も大体同じで、ホントの意味で同期なんだよ。』

『へえ。艦魂にもそういうのあるんだあ。明石とは階級も同じなのかい？』

『うん。でも私は軍医少尉で、利根と筑摩はそのまんま兵科の少尉さんだよ。でも新型でも単独の戦隊を組むって言ってたから、戦隊旗艦をやるどっちかは中尉に格上げされるって言ってたつけ。』

『ははは、若いのに中尉なら神通^{じんつう}辺りは怒りそうだな。』

『あはは。もう怒っちゃってるよ。神通はただでさえ目がこゝんなんなってるんだもん、こないだ利根なんか会議中に目が合っちゃったみたいで泣きだしちゃったよお。』

『ははははは。』

忠の脳裏に浮かんでくるのは相方とのそんなやりとりと、ハッキリと顔が浮かんでこないのに神通の鋭い目つきを真似ようとして目尻に指を添えて吊り上げてた相方の言動のみ。戦艦や空母の様に大きく無いあの明石艦の中、どの場所で何時頃の時間帯に会話したかさえも思い出せず、お互いに笑い合ったのに相方の声の音色すらも記憶から検索できなかった。

だがそれでも帰ると心に誓い、未だその誓いに対して諦めの気持ちちなぞ毛頭抱いていない忠。その雲を掴もうとするかの様な決意こそ、彼が砲術学校と水雷学校で優等を貫き通せた源である。

それ故に忠はなんとか渡辺の提案を否定したいと無意識の内に思考を巡らせ、そも人事局という別な組織の管轄である忠の身の上に、水雷学校の教官の一人でしかない渡辺が何故か意見できるかの様な物言いをしている事に、その攻め口を見つける。加えてよくよく考えれば、配転先の希望も激しい新型の巡洋艦に鶴の一声で配属できるなど、どうにも話が上手過ぎると今更ながらに忠は思った。

『利根型は搭載機も多いし雷装もしっかりしてるし、砲撃力も今までの重巡辺りとはほぼドッコイだ。これからの帝国海軍の一線部隊では必ず主役として立ち振る舞う艦だぞお、森い。』

『あの、渡辺教官……。な、なんか話が上手過ぎませんか？ 私は唯でさえハンモックナンバーは低い方ですし、同期の連中は先月の11月15日付けで中尉に進級した奴だっています。考課表だけでそこまで行けるモンなんですかぁ……。？』

『おほ。さすがに鋭いなあ、貴様。はっはっは！』

独り言のような格好で利根型巡洋艦の長所を述べていた渡辺を遮るが如く、忠はあくまでも自分が利根型に行くに当たって適当な要素があるかどうかを疑う形で声を放ってみる。決して好きな女性、しかも人外が存在が待ってます等とは言わなかったが、別に忠が並べた疑いの点は間違っている物ではない。

忠を含めて220人もいた兵学校6期は、全国津々浦々から「男の中の男」を自負し、世間一般の未婚女性が羨望の眼差しを向ける海軍士官としてその身を立てようと、並々ならぬ決意で一念発起した少年達の集団。そも海軍兵学校は陸軍士官学校の様に朝鮮や台湾といった生粋の日本人以外の者には一切門戸を開いておらず、まさに日本男児の模範たる存在を標榜して育てる格式有る学び舎であり、忠達6期の220人は我こそはと勇んでそこに集った者達である。忠は田舎の中学では学年一位を取れるだけの秀才であったが、そんな輩を4千人近くも集めてふるいに掛けた生き残りが忠を含めた220人で、当然学力を始めとする平均的なその他一切の学業成績は飛び抜けて高い。おかげで忠も彼なりに必死に頑張ってみたものの、その言葉通り彼の卒業成績は決して高い方ではなく、むしろ下から数えた方が早いという有様であった。

同時に帝国海軍の士官の実情はこの兵学校における卒業成績、いわゆるハンモックナンバーが非常に有力視される傾向にあり、言わ

ずもがなその差は昇進に対して顕著に響いてくる物である。「貴様と俺」という常套句はそんな同期にも関わらず年月によって如実に開いていく階級差という現実の裏返しでもあり、司令長官や海軍大臣にまで上り詰める者がいる後ろでは、一介のお船の艦長さん程度で現役を終える海軍軍人というのも現実存在する。そしてその後者に当たる者達に共通する海軍軍人としての要素として、ハンモックナンバーが下位であったという事が非常に多いのが栄えある大日本帝国海軍という組織の実情であった。

それ程までに重視されるハンモックナンバーの重さを下位とは言え実際に付与されている忠が知らぬ筈も無く、それ故に忠は同じく普通科教育課程を供にしている仲間達を差し置いて憧れの的である新型巡洋艦に配置される事が有るのか甚だ疑問に思えたのであった。それくらい兵学校の卒業成績とは士官にとって重い意味合いも持っているのだ。

ところがそんな忠の否定を滲ませた心配の言葉を耳にしても、渡辺は手酌で注ぐ日本酒に喉を鳴らすばかり。『くうっ！ んまい！』等と些か忠の声を無視しているかのような態度まで見て取れるが、渡辺は決して教え子の心配を間違いだとは思っておらず、『うん、そうだな。』とあっさりとその言葉を認めてしまう。これにはさしにも忠も拍子抜けして思わず胡坐の上に聳えた上半身がガクンと傾いてしまうが、その上で渡辺は自身の申し出が絵に描いた餅ではない事を忠へと伝え始める。

『そ、そうだなんて・・・。』

『わっはっは！ まあ、間違っちゃおらんよ、貴様の言いたい事はな。・・・でもな、ちゃんと算もあるんだが、まあ、ここまで話すんなら最後まで話さないとフェアじゃないなあ。』

『は・・・？ ふえ、ふえあ・・・？』

『んん．．．いや、実はな．．．』

その言葉に続く忠の今後のお話は大いに彼を迷わせる事になるのだが、世の中というのはまったくもって面白い。まさにこの渡辺教官との会話が、忠の一年近くも胸に秘めた、顔も声も思い出せない相方への恋慕の想いを決死の決意へと変えていく事になる。

同時に忠が持つ幾分薄い一介の男としての自我が、ようやく花咲き始めて行く事になる。

もちろんその花の色と形は、「良い男」としての彼その物であった。

もつともそんな自分の事なぞ露と知らず、忠は渡辺の赤くなった笑みに動揺する心でもって眼差しを向け、また耳を傾けるのだった。

第一〇二話 「男だったら意地を通せ／其の二」

全く企図していなかった申し出に驚く忠。ただし

ついさつき喉に宿った日本酒の辛い風味に顔を歪めるのも忘れ、否定を希望した言葉に実現の目処があると告げる渡辺わたなべの赤い顔をまじまじと見つめる。

帝国海軍という極めて国家的にして巨大な組織において、その人事に思惑を見出すという事がどれ程に凄い事か。

すっかりほろ酔いになっている為もあるのか、どうも渡辺にあつてはそれが大それた事だと思つてはいないらしい。忠の真相を求める声を褒めて『さすがだ。』等と笑いながら呟く有様で、水雷学校卒業後の針路に切なる願いを抱いてる忠にとつてはますます上司の言葉に現実性が感じれなくなってくる。

しかしそんな忠の疑いの視線にそれとなく気付いた渡辺は、ここに至つてようやく先程の言葉の裏に算を披露する事にした。

『はっはっは。いや、実はな。確かに人事局にも一人いるんだが、他に舞鶴まいづるの利根艦とねの水雷長もオレの兵学校の同期だよ。オレは海軍大学校出だからこの歳でまだ教官やつてるんだが、そいつは兵学校を出てから殆ど艦船乗組みで去年からは利根艦に乗ってるんだ。ほら、先々月の観艦式。あの時に同期で集まった時にそいつと会つてよ。そしたら、どうやら腕の良い砲術士がいなくてな。一応代わりは着任して砲術学校の高等科に行っちゃったらしくてな。一応代わりは着任してるらしいんだが、もう少し腕の良い奴が欲しいみたいなんだよ。』

胸に秘めていたからくりを話す渡辺はそこまで言うと、忠と自身を挟むように形で横に置かれた卓の上の大きな皿から焼き鳥の串を

一本手にとって頬張り、鼻の下に生やしたお髭をフリフリと左右に振ってその美味に頬を緩める。ついでに渡辺は呆ける忠に右手をかざして皿の料理を食べるように促し、酒酔いの赤面にあっても失われないちよつとしたその氣遣いに、忠もとりあえず感謝の意を示して皿へと手を伸ばした。

『ほら、さあ、食べ。』

『あ……、あ、はい。……どうも。』

『肉食えって言っただろう。はっはっは！』

料亭に向かう際も同じ事を言った渡辺は、随分と忠の痩せ型の体型を氣にかけているらしい。忠本人には別に細めの自分の身体が不健康だ等といった自覚は微塵も無く、もう24年も付き合ってきた自分という人間の特徴の一つなのだが、やはり日本男児たる者、背丈も胸周りも堂々とした体格が好まれるのが世間一般という物なのか。高笑いしながら渡辺は焼き鳥の盛り合わせが乗った皿を忠の方へと寄せてくれ、1本で終えずももっとと食すように勧めてくれる。同時に彼は自分で口にした『フェアではない。』という一言を一回りも年齢が下である忠が相手であっても律儀に守ろうとすべく、利根艦配属を勧めるさらなる真相を声へと変えてくれた。

だがしかし次の瞬間語られた渡辺の言葉を受けて忠は仰天してしまい、二人のいる座敷からは戸で隔てられた廊下では、偶然その場を通りかかった料亭の従業員が突如として戸の向こうより上がった青年の絶叫を耳にして、思わず手にしていた食膳を落としてしまうのだった。

『えええええー！！　こ、こ、婚約う！？』

全くもってこれまでの人生の中で出てきた事のない「婚約」の二文字は、雑念を払ってひたすら想いを巡らせる存在に向かつて頑張っている今の忠にはまさに雷鳴の如しである。同じ年代で誰それが結婚したと話題を盛り上げた同期達との宴会も記憶に新しい彼であるが、それが自分の身に及ぶ等とは露ほども思っただけであった。大体が海軍軍人として道を歩き出してから忠はまだまだ日が浅いし、長男として実家への心配を抱いたとしても彼は家庭の意味で安泰を願った事は余り無い。

なぜなら家の大黒柱として長男が居座るという構図を兵学校に入るまでの十数年間、忠は自身の家族によって実際に目にして来たからだ。忠の実父も10人兄弟の長男だったし、祖父もまた長男であったし、しかもまた地主同士、豪農同士でしか付き合いが無いという地方のそこそこ裕福な農家による家柄事情は、実家どころか忠の母方の家系にあっても家長たる者は全て男兄弟の一番上と相場が決まっていた。加えて幼き頃より『兄たる者は――』という帝王学にも似た溺愛を両親に限らず親戚筋からも一身に受けてきた忠には、そこに当たり前に在る筈の家庭という感覚で自身の家を見る機会が世間一般の人よりも些か少ないのであった。

そのおかげで彼は人生の伴侶を得る等という考えをこれまでの生涯でちっとも考えた事が無いし、これまた自身の両親や祖父母らがそうであるように、嫁という存在は名のある豪農同士の付き合いの中で二つの家柄の友好を結ぶ際、本人の心持と関係無しに得るのだという認識が当たり前となっている。

戦国時代によく見られた政略結婚とは少し違うが、忠を含めた人間達が生きた戦前とはそういう時代であった。

しかし巡り巡ってこんな場所でこんな時に婚礼の話が出てくると

は、忠にあつては予想外も良い所である。その眼前では渡辺が赤面の笑みを絶やしておらず、まるで後輩の驚いた表情を嘲り笑うかの如くケラケラと笑い声を放っている。しかもまたその合間に漏らす無邪気な言葉は、相応に老いも出てきた中年が放つ言葉とはとても思えない。

『わはは！　どうだ、驚いたか！？　どうだ！？』

忠はそんな渡辺の声を受けても半開きにした口をそのままにして、自分が伴侶を得るかもしれないという事態を騒がしい思考の中で整頓しようとするが、彼なりの嫁という存在の認識と一緒に、そこには遙か波間の向こうに待っている筈の相方の事も紛れ込んでくるのだから具合が悪い。まさに晴天の霹靂であり、そも忠がここ最近頑張れているのは、そんな人生の伴侶とは両立できない相方の存在が胸の中に在るからこそだった。

『あ・・・、あう、あ・・・。』

『なんだ、あんまり急過ぎたか？　はっはっは。』

なんとか目と鼻の先に居る上司へと応じようと放つ声もたどたどしい忠に対し、渡辺は大きく顎を仰け反らせて手にしたお猪口の中のお酒を一思いに飲み干すや、ようやく教え子の様子を氣遣うような声を掛けてくれる。確かに驚かそうと企図してこれまで一言も婚礼の話題を出さなかったのが渡辺にとっては正直な所ではあるのだが、彼は別段忠の驚愕ぶりを笑って自ら出したこのお話を終わりとするつもりは毛頭無い。それどころか本日こうして学業成績が優秀でその将来性も大いに期待できる若者をわざわざ酒宴の席に連れ出したのは、本当はこの婚礼のお話を進める為でもあるのだった。

その証拠に忠への婚礼のお話と、先程の利根型巡洋艦を忠へと勧めたお話は実はちゃんと接点も結ばれていて、渡辺は自分で口にし

た「フェア」の精神に則ってその真相をお披露目し始める。奇しくもその理由は忠と同じ様な渡辺のちょっとした家庭の事情と、彼の出身地が舞鶴鎮守府を抱える京都だった事に在るのだった。

『オレの実家は四条河原の近くで先祖代々続く呉服屋でな。ま、このご時世だ。大して儲かる商売じゃないし、オレは三男坊だったからとりあえず学費のかからねえ兵学校に入って、そのまま海軍でメシを食ってく事にしたんだがな。それでも昔から手広くあの辺で商売できたおかげで、オレの実家は今でもお得意先に結構な資産家が多いんだ。で、その縁でオレの実家から祖母さんの世代で嫁を貰ってる金持ちの家があるんだけどよ。その親戚と令嬢がこれまた、是非にも海軍さんを婿に欲しいって探してるんだよ。』

渡辺の親戚からのご要望という言葉は白羽の矢を立てられた忠にあつて、今している婚礼のお話に確かな現実感を持たせていく。不自由無い生活を送れるだけの資財が有って、下手をしたら戦場で命を落とすかもしれない海軍士官をその資財の跡取と迎えるのは合理性の面からは多少外れた話なのかもしれないが、迎える側の家にとつてはそれ以上に魅力が有る存在が帝国海軍の士官という存在であり、その端くれである忠もまたそこに纏わる感覚的な真相はなんとなくだが理解はしている。

そもそも帝国海軍とは遙かな海の向こうで励む事が究極な言い方をすればお仕事であり、それは当然の様に世間一般の国民にとって距離を置いた神秘的なイメージを抱かせる。祖国日本を示す国旗の下、天皇陛下の股肱の臣として励む彼等。その中でも特に士官の身分を頂く者は世界に通用する紳士像を仕込まれて品行方正にして、その上で遠く海の向こうで他国との親善もこなす機会が多い一流の社交人でもある。登竜門である海軍兵学校の入試科目の時点で既に英語の科目が「和訳」、「作文」と2つも設けられている程である

から二ヶ国語を操るのは当たり前で、近代技術の結晶たる軍艦を操る為の豊かな教養は常に時代の最先端学識によって構築され、しかもまた街中では中々お目にかかる機会が少ない希少さもその価値を高める。おまけに基本的な戦力の数が兵員の数となる陸軍に比し、海軍は基本的にお船の数が戦力であるから人員数の規模にあってもこれまた陸軍の士官よりは断然に少ない。

そしてこの神秘さと希少性、日清戦争より続く日本を護りし矛と盾である栄誉は、男性と同じく良き伴侶を求める世の女性にあっては花の如き美しさとして瞳に映るのである。山の様に大きな艦影を持つ鉄の城より颯爽と波止場へ現れ、淀みの無い清廉潔白な第二種軍装に黒と黄金の輝きを垣間見せる短刀を佩き、ブーツではなく短靴によって描かれる足の運びはまさに海原を貫く船の航跡。実際はその足取りで行きつけの料亭等で芸者と遊んだりもしているのだが、時折目に触れるこの海軍士官の姿は大多数の日本人女性が胸を鳴らす男性の理想像の様な物で、お婿さんに迎えたい職業のトップ3に入る花形職業。

若い海軍士官はとにかくモテたのだ。

そんな帝国海軍士官の好感度を勘定すれば、資産家のご令嬢との婚姻話を持ち掛ける渡辺の申し出は世間的にもそれほど変ではない縁結び的一幕。現実にはこの渡辺に限らず、自身と同じ海軍士官としての道程に励む若者の中から気に入った者をみつけ、誰もが頷く良い縁談をお世話してあげるベテランという構図は、帝国海軍では結構よく有るお話である。優秀な者ほどそれに釣り合う家柄の娘を貰い受ける傾向が強く、明治の頃にそうした道を歩んだ者らは現代において次の世代へとまたその馴れ初めのきっかけを与えていく。渡辺による忠への申し出も些か急ではあったが、そんな帝国海軍の士官界隈にある婚礼話という側面から見れば決して枠から外れている代物ではないのだ。

これまで忠も仲間内より耳にする世間話や組織としての雰囲気

解つてはいた事にして、それでもどこか自分に適用するには現実感が伴わなかった事。まさかこんな横須賀の一角で、それも恋慕の情を募らせる存在へと向かうべく頑張っている最中に耳にする等とは夢にも思っていなかった。当然その驚きは大きな物で彼は瞬きも忘れて見開いた瞳を向けたままだが、その最中にも渡辺は構わず酒の匂いが増した息を声へと変えて話題に上っている婚礼話のメリットを上げていく。

『さっきも言った通りその資産家の家はオレの実家のお得意様で、屋敷は京都の街中の一等地に有るんだ。てこたあ、舞鎮籍の船乗ればちよつとした上陸でもハウには帰れるし、まだまだ先の事だが予備役になった頃でも安泰で過ごせるってモンだ。いやあ、偶然とは言え具合が良かった。』

『いや、あの、わ、渡辺教官。まだ私には、嫁なんて早い・・・、ですよお・・・。』

咄嗟に忠は渡辺の言葉が終わるやそれまで凍り付いていた口を懸命に動かし、渡辺が持ち出した婚姻話をやんわりと断ろうとする。確かに渡辺が言うように海軍軍人としてはその将来も含めて悪い話ではないし、先月の同期の仲間内でも実際に忠の年代で嫁を貰った者の話題が有った事は記憶にも新しい。だが忠が砲術学校とそれに続く水雷学校の日々で懸命に頑張った末に優等の成績を修めた理由は、良い男になりたいという目論見自体はあったものの別に嫁が欲しかった訳ではないし、偉くなりたい為でも良い船に乗りたいが為でもない。もちろん彼独自の艦魂が見えるという特異な体験が基として在るのだから例え気の良い渡辺であつても忠はその事を口に出さなかったが、それ故に忠は渡辺から迫られる婚礼話を断るだけの言い分が無かった。

よって出てきた断りの文句はなんとも弱い自分の若さのアピール程度であり、もちろん当の渡辺にあってはそれで了承して話を引

込める気は起きない。既に冷や汗も首筋に浮べた忠が卓の上に身を乗り出すようにして言ってみても、渡辺は特徴的な一言をまた口にして眼前の若者の考えを直そうとする。

『ばかこのお、貴様の様な事を言っておったら一生ワイフなんか持てんぞ。格好付けて主砲の一斉射だけが男じゃないだろう。目の前に標的がおるんなら貴様、迷わず舐先から体当たりするのが一番良いつてモンだ。はっはっは！』

いかにも海の男らしい中々に豪快な物言いは忠も嫌いではないが、こうして自分の身の上に障害となって現れると厄介な物だ。しかもまた酒の勢いが多分に混じってしまっているが為に渡辺の声には押し強さがあって、忠は困るばかりで抗うという行動に至る事が出来ない。どもったような言葉遣いでしどろもどろの返答が続くだけである。

一方、渡辺は即座に明快な返答を返せない忠の様子を酔いの中でもちゃんと見ており、さしもしに若い身では急すぎるかと思って婚約の形をやや崩して伝えてみせた。だがしかしそんな渡辺の気遣いはさらに一層忠が巡らせる論法の逃げ場を奪ってしまい、彼はついに返す言葉を失ってしまうのだった。

『はっはっは。よし解ったぞ、森^{もり}。いきなり見合いをせいとは言わん。とりあえず紹介するまでにしよう。それでも親戚連中にはオレの顔は十分立つからな。でもその前に、さっき言ったちゃんとした軍艦乗組みっていう体裁は整えておきてえな。でな、近い内に配転先希望の用紙を配って受付するから、貴様それに利根艦^{きね}って書け。後はオレがなんとかしてやるからよ！』

その後、結局最後まで『はい。』とは口にしなかったものの明確に『いいえ。』とも言えずじまいのままで忠は渡辺との酒宴を続け、一時間ほどもした頃には泥酔状態での夜半の帰宅によって奥さんに怒られる事を危惧し始めた渡辺の一声でお開きとなった。もつとも渡辺の住いは横須賀の市内で帰る道程にさほどの時間も掛からないので、『良い頃合まで良い酒が飲めた。』と彼は帰る為に料亭内の廊下を歩く間際でもすこぶるご機嫌。その勢いのまま景気良く酒宴の費用の全額を自分の財布から出してくれ、忠が礼を言いながら頭を下げると、濃紺の軍帽の下に覗く赤い顔に白い歯を垣間見せて満面の笑みを向けてくる。

『良いんだよ、若いんだから。それに貴様が偉くなった頃には、オレは引退の老いぼれになってるからな。そんな時にはたんまり一升瓶でも買って貰うからよ。はっはっは!』

終始こんな状態のままの上司とお酒を飲めた事は、忠のような若い人間にあつては一安心を与えてくれる。特にお叱りお説教を頂戴する事も無く、容赦の無い指摘を受ける訳でも無く一時の酒の場を過ぎ、ふらつく千鳥足に忠が心配の声をかけても渡辺は『大丈夫だ!』と豪快に笑い飛ばしてくれる。料亭の玄関を出て寒い横須賀の夜空の下に身を移してもそのご機嫌は変わる事は無く、何度もお礼を述べてペコペコと頭を下げる忠を背後に片手を頭の上で振って別れの挨拶とした。

『おう、じゃ、明日な。』

『あ、はい。今日のご馳走さまでした。』

そう言って去り行く渡辺は振り返る事も無く、深い青色の闇夜の中に白い息を巻上げなら片手をひらひらと宙にかざす。豪放磊落なその人柄はどこか気持ちの良いくらいに痛快な感じが有り、夕飯を

オゴってくれたその氣遣いも手伝って忠には率直に感謝の念が絶えない。ありきたりな言葉であるがこの上も無く「良い人」であった。

だがそんな渡辺の人柄が有難いからこそ、忠はついに彼からあった婚姻話の申し出に明確な否の解答を下せなかった。そしてその事がずつと酒宴の間も胸にわだかまっていた手前、彼は凍えるような寒さの中を動揺の激しい足取りで帰っていく渡辺の後姿に、しばらくの間じつと眼差しを向けていた。

渡辺とて別に教え子を困らせようとしている訳であんな事を言つた訳ではないのは、忠としても百も承知である。ただただ後輩に向けた好感が成したのが今日の夕飯であり、その中で上がった主な話題も例に漏れない。それが十分に解っていた上に、生来が他人の好意を無下にできない性分であった忠であるから、彼は渡辺の申し出に明確な自分の意思を表明するのは悪いと思つてしまったのだ。

『はああ・・・。』

なんとも困つた事になつてしまつたと改めて認識するや、忠の細い身体からは白く大きな溜め息が漏れる。せつかく最近は頑張れてると当の忠ですらも意識出来るほどに充実していた日々。時に砲術学校の窓から覗いた夜空に想いを巡らせ、時に憤りの酒に任せて喧嘩の末に涙を流したりもしたが、挫けそうになつたその障害の果てに描いていたのは、もうかれこれ一年近く前になるぶつ飛んだ明石あかし艦での生活。それなのに有難い上官のご好意が、今またそれを遮ろうとしてきたのだ。

なんだってんだよ、もう・・・。

既に夜陰に包まれた道の奥へと消え去つた背を持つ渡辺を決して責めるつもりは無かったが、忠の脳裏にはいつぞや同期の仲間達と

喧嘩した時にも覚えた行き先の無い苛立ちが募り始める。加えてまたしてもこの苛立ちを覚えたのは酒の場である。

『くっそお・・・。』

星の瞬きも綺麗な師走の空だが、身を刺す寒さに肩を少し震わせる忠。背後に位置する料亭の玄関より漏れてくる暖かい灯りを背にしつつ両手に息を吹き掛けながら、僅かに下を向いたその表情はやはり苛立ちを隠せていない。悪態をつくかのような声が思わず口から漏れたのも同じ理由であった。

次いで募る苛立ちが忠の手についつい煙草をポッケから探させ、海軍士官たる体面では歩き煙草は嫌われるという事も忘れて一旒の煙を昇らせる。そのまま一度大きく煙を舞上がらせると同時に軍帽を深く被りなおし、やがて彼は下宿ではなく横須賀の海岸の方へと物思いにふけながら歩いていった。

なんでオレの思い通りにいかないんだ・・・。

そんな言葉を何度も何度も脳裏で呟きながら歩く忠。あても無く横須賀の街をブラつくのはこれまでも何度かあったものだが、今夜もまたその際と同じく目的地も決めずに気の向くままに歩みを進める。ふと気付くと忠は横須賀にはよくある海原を望んだ岸壁を歩いており、月明かりと無数の星の輝きを逆さに映す波間とそこに浮かぶ幾ばくかの海軍艦艇のシルエットを無言で眺めた。

新年度の前期艦隊訓練も始まった帝国海軍連合艦隊の事情は忠も一応は耳にしており、横須賀の波間で錨を下ろしている艦艇は数える程でしか認められない。働く者達が出て行った物寂しい一件の家

のような感覚すらあり、港の一角でもはや御役御免となって繋留されている富士艦^{ふじ}、春日艦^{かすが}の古めかしい艦影が忠の目に留まるのにさほどの時間はかからない。さながら一丁前になった子供達が出勤した後に家に残っている年寄りと言った所か。加えてその内の1艦である富士艦の命とも面識のある忠は、とても清楚で綺麗だった老婆の風体を持つ富士の事をちょっと記憶から検索した事もあって、そんな船達の家という場面を夜の横須賀軍港に重ねる。

もつとも軍港内でも一番目立つのは富士艦の2回り以上も大きい航空母艦の艦影で、しかもまたその大きな艦影はなんとなんと2つも在る。水雷学校での仲間内の話で聞いた所によると、片方は整備補修の名目で少しの間艦隊から外れている赤城艦^{あかぎ}で、もう片方は来年の夏頃に正式に就役する予定の新型空母らしく、その名を翔鶴艦^{しょうかく}というらしい。

実際に目にした富士艦の老いた命を思い起こす忠は、ふと現在は鋭意艤装中の翔鶴艦の生まれたばかりであろう若い命の姿を全くの想像で脳裏に描き、老いも若きも、背丈の高低も、各々の性格もまた千差万別であろう帝国海軍の船達の事情を意識し始めていく。現実に明石艦乗組みだった頃に見た者達は神通^{じんつう}の様な気難しい奴もいれば、霞^{かすみ}と雪風^{ゆきかぜ}の様に四六時中喧嘩ばかりの奴もいて、霞^{あられ}や那珂^{なか}といった女性としての好感も持てる奴らもいる。まるでその在り方は人間の世界と何の違いも無いというのに、師走の星空を瞳に宿す忠が最も会いたいと願った者はそんな艦魂と呼ばれる者達の一人。船の甲板から足を離せず、へこんだりする鋼鉄の構造材がそのまま傷となって身体に現れ、日の丸以外の国旗を掲げる同じ船を殺す為にこの世に生み出されたという存在。

忠はそんな相方を含めた帝国海軍の命達の在り方をとて不便で不条理に感じる反面、一端の人間である自分と変わりが無い点が多く、その上でこうして想いを寄せる存在がそんな艦魂と呼ばれる人外の者達に生まれてしまった事を、この時酷く憎いと思った。

なんでオレは艦魂なんていう奴らが見えるんだ……。

なんでそんな奴らの一人にこうやって苦しまねばならないんだ……。

なんでそれでも頑張ろうとするオレを、何もかもが邪魔してくるんだ……。

忠には自負があった。ここ最近の砲術学校、それに続く水雷学校での成績も、ほぼ毎日質素な夕飯で済ましながらさらに自習に励んでいるのも、全ては相方の下へと戻る為。きつと最新鋭工作艦の命として、艦魂社会の軍医の立場として成長しているであろう明石と、釣り合いの取れた立派で良い男になる為。その考えを7割くらいは達成できていると忠は自分でも思ってたのだが、またも世間一般という物事が忠のそんな理想に影を落とす。

『……』

力の籠めて噛み締めた唇の奥に、声に昇華しきれない渦の様な憤りを巡らせる忠。その足元では星影と青白い月の光を映す小波が、静かな喧騒として岸壁へとぶつかる音を木霊させる。だがまるでその波音は行き詰まりにも似た感情を抱く忠の耳には、どこか人間の物ではない嘲笑の如く響き、あたかもそれはまるで月夜の海の果てにて励んでいるであろう相方を含めた知人達による嘲りにも思えた。海も笑い、僅かに岸壁に近い陸地に残った林も笑い、空に輝く月や星、そしてふと流し目で認めた横須賀の街の灯りが指を向けてくる。挙句の果てにはこの季節の関東特有の冷たい北風が悪戯でも働くかのように忠の身を瞬間的に殴って行き、思わず外套を抑えて寒さに耐えている彼の頭からハラリと軍帽を落としてみせた。

『くっ……』

ただ寒さを堪えようと思っただけの自分を、またしても小馬鹿にするような自分以外の何か。寒さを我慢する為に噛み締めた唇の間より漏れた声は、何かにつけて自分を邪魔していく全てに対しての憎しみが籠っている。帝国海軍士官の大事な軍装の一角が乱れた事に反応し、忠は無意識の内に足元へと転がった軍帽へと手を伸ばすが、軍帽に指先が触れると同時に青白い月明かりを金色に混ぜて輝く軍帽前章がなんだかやけ目を引いた。帝国海軍を示す金色の桜と錨は、忠の瞳にはなんだかちっとも上手く物事が運ばない海軍という居場所の権化の様に写る。相方を含めた海軍艦艇の艦魂達がいる、結束を叫びながらも喧嘩したりもした仲間達が励んでいて、しがない自分にすらも目を掛けてくれる渡辺のような上司がいて、全ての国民から一目置かれる素晴らしい職場という体裁もあって、栄えある天皇陛下の覚えもめでたい国家的組織である、大日本帝国海軍。今の忠にはそれらが全て、恨み、妬み、重圧、理不尽といった暗い色合いの物ばかりに思え、同時にそんな考えは帝国海軍に対しての矛先が定まらない憎しみへと変わっていく。

刹那、忠はようやく手にして持ち上げたばかりの軍帽を、漠然としたその憎悪と怒りに任せておもいきり地面へと投げつけた。

『……馬鹿野郎っ!!』

月明かりが横須賀の波間の音によって木霊する栈橋の上。渾身の力を込めて腕を振り下ろした忠が僅かに息を切らせるその足元に、青白い月光を金色と混ぜて転がる彼の軍帽が在る。自分の思い通りに行かない事への憤怒によって射出され、まるでそんな持ち主に見切りをつけて去って行くと言わんばかりでコロコロと転がる軍帽だったが、転がる事に適した形ではない軍帽は勢いをすぐに失うや均衡を崩し、忠の足元から波間とは逆側の方に1メートル程もいった所で忠の頭を覆っていたついききまでと同じ形で地に座った。

『あ、あの……。』

『ああ、ええよ。同じ海軍やからワイが。どうかされたんですか？』

その時、眉間にしわを寄せて細くなっていた忠の視界の端で、転げ終わって若干の砂埃にも塗れた軍帽の傍に足が現れるや声が放たれてくる。一人葛藤していた忠はようやくここで付近の月光のみが照らす師走の横須賀の光景に意識を戻し、彼が投げ捨てた軍帽を手にとって近寄ってくる者達の影を認めた。

空は快晴なのだがさすがに夜も更けた物寂しい岸壁は、到底月と星の明りだけでは人影以上の判別を許さない。忠の目は艦魂が見えなくても別段視力が優れている訳でも無ければ、凡人よりも特に夜目が冴える等という能力は有しておらず、ちょうど一旒の雲が靡いた事によって希薄になった月光に近寄ってくる者の顔を見るまでには至らなかった。

もっとも明らかに先程耳にした声は、おそらく年代だけなら自分とそれ程変わらないであろう男と女の物であった事を忠も即座に把握できていた。加えて男が発したであろう言葉にも示されているように、近寄ってくる二人連れの片方の人物の影は、頭部に見慣れた角張った被り物が召されている事から同じ帝国海軍の士官である事が忠にはすぐに解った。

変な奴だと思われてるだろうか・・・？

ついつい他人に見られていた事を察する忠は、ついさっきまでの怒りに任せた自分の行動がなんとも恥ずかしくなってくる。寒いながらも見晴らしの良い海原が望める岸壁で、独り何事かを叫んで軍帽に八つ当たりをかましているのでは無理も無い事だ。だがそんな恥によって忠は一時の間だけ自己葛藤の沼から足を引き抜く事がで

き、軍帽を拾って声を掛けてくれる同じ帝国海軍の者にとりあえず応じてみせる。

『あ、あはは……。こ、これはお恥ずかしい所を……。』

軍装の上から外套を重ね着しても肌寒い中、焦りからくる冷や汗を首筋に浮べて苦笑しながら、忠はまだ輪郭しか判然としない眼前の男より軍帽を受け取るべく手を差し伸べる。あれだけ衝動に駆られて強く投げつけた軍帽も、別になにかそれ自体に罪がある訳ではない事は彼も解っている。それ故に『もうそんな物じゃない。』とは微塵も口に出そうとはせず、ただただ他人からの目を気にする忠の手の動きはどこかそわそわしい。

何でもないと言い張って挨拶を終え、さっさとこの場を退散しよう。

脳裏で放つその考えを今は実行すべしと一心に考える忠。ようやくそんな彼の指先が眼前の男の手に握られる軍帽へと触れたと同時に、寒いながらも絶好の月夜を邪魔していた一旒の雲が北風によってお月様より拭われていく。するとそれまで遮られていた青白い月の灯りが日の出の如く辺りを照らし始め、影と輪郭のみであった忠の視界により詳細な実像を認識させていく。もちろんそれは忠のみならず彼に軍帽を渡そうとしていた海軍軍人と思われる男にあって同じで、闇が払われてしだいに目や鼻、口といった顔の特徴が露わになっていく視界の向こうに、やがてお互いの顔をハッキリと認める。

だがその刹那、二人は今まさに手渡そうとしていた軍帽を驚きの余り、どちらも手にする事が出来ずに宙に落としてしまう。彼等はお互いに目に映した同じ第一種軍装を身の纏う相手に、それぞれが帝国海軍という大きな組織の中でも顔見知りの者である事を瞬時に

察し、そして驚く。

なぜなら忠にとってもその眼前の若い帝国海軍の男にあって、目に映した顔は海軍兵学校という試練の場において同じ釜の飯を食った同期の顔にして、先々月の辺りに衝撃的な事件を起こした相手であったからだった。

『わ、ワレえ・・・、森・・・！』

『こはやし小林い・・・！』

『あら、なに？ この海軍さん、お知り合いの方・・・？』

忠が思わず眉間にしわを寄せて細めた瞳に写るのは、着物姿の芸者らしき女性を背に控える兵学校66期の仲間、小林。忠とは観艦式も記憶に新しい頃、横須賀の一角に設けた酒の場で派手な殴り合いを演じた男だった。

第一〇三話 「男だったら意地を通せ／其の三」

横須賀の冷たい波間に映る月と星々の光が瞬きを一層煌びやかにする。師走の乾燥した空気による光の透過には遮りが少なく、岸壁にゆっくりとぶつかって飛沫と共に四散していく間際にあっても波間越しのその輝きは失せない。まるで雪の様に粉状になった青白い光が岸壁の辺りにほのかな明るさを与え、闇夜の中に映る景色に悲しげながらもどこか幻想的な雰囲気の有無を言わず纏わせていく。

ただ、それは岸壁の一角の上にてお互いのつま先の前に軍帽を一つ置いた状態で細めた瞳を向け合っている忠と小林ただしこばやしにおいては例外だった。

『……』
『……』

『ど、どうしたんですか、トシさん……？』

月光と星空とそれを反射する波間が照らすのは、酒の場とは言え喧嘩沙汰での一悶着を起した相手である。そこには悲しいとか幻想的といった雰囲気は無く、半ば当然のように険悪な空気が立ち込め、小林の背にてその空気に驚く芸者の女性が困ったような声を上げる。恐らく先刻までは小林と供にお座敷にて楽しくお酒を飲み、軍艦の中では蓄音機でも無ければ絶対に聞く事の出来ない女性特有の流麗で甲高い声に、普段の鬱憤と息抜きを笑顔で行っていたのである。帝国海軍の士官は兵下士官のようなその辺の遊郭に出入りする真似は公然の禁忌とされ、横須賀や佐世保等といった海軍の街によ

く在る「海軍ご用達として一流のお店」と誰もが認めるお店でないと入る事はできない。逆に芸者さんやお座敷を抱える所はそうやって帝国海軍によって日々の糧を稼ぎ、女性に飢えがちな帝国海軍軍人を常連客とする「海軍芸者」という者達も存在する。

故に小林の後ろで視線を泳がせている女性はそんな「海軍芸者」の一人にして、多数の海軍軍人と日常的に接する機会があるにも関わらず小林の事を名前と呼んだ事から、きっと小林とは深い付き合いをしている女性なのだろうと忠は察した。

もっともそんな事で忠は小林のこれまで続いていた楽しい時間を戻すべく、そそくさと軍帽を拾って逃げるようにこの場を退散する気なぞはちっとも起きなかった。目の前にいる20代前半の顔立ちが同じなら兵学校も同じ66期という小林だが、忠にとって彼は大事な大事な相方を「悪い女」と蔑んだ憎悪の対象。酒の場で口が軽くなった事もあるし、小林とて忠を元気づけようとそんな言葉を掛けてくれたのは忠にも解っていたが、実際にそう言い切った彼を「知らないから」という理由で許すつもりは、この時に至っても忠には露ほども無かった。

『・・・はん。』

そしてどうやらそれは小林にあっても同じらしい。楽しい芸者さん達、同期達との酒の場でいきなり殴りかかれたのが彼の認識であるのだから無理も無く、僅かに拳を作りつつ身構えて小林は忠を睨みつける。キラキラと美しい波間が反射する星空にも小林は細めた瞳を微動だにせず、一瞬の隙も見せない気迫を漲らせながら、眼前の忠との間に先程から流れていた沈黙の時間を破った。

『・・・なんや、ワレ。軍帽なんか投げつけて、ろくに女も作れんのにイジけて海軍辞めるんか？』

『なにい・・・!』

小林にあっても女性関係の話をした故に忠に殴られた事を解っていたのか、声を掛ける前の忠が取っていた行動にこじつけてその真相を挑発気味な声で問い掛けてくる。今の忠にしたら当たらずも遠からずといった所で、会ったばかりの同期にも関わらず早くもその胸には怒りが込み上げてくる。兵学校卒業者同士で使う「貴様と俺」という常套句も、この小林に限っては忠も用いようとは思わなかった。

忠もまた顎を僅かに引いて身構え、剥き出しの闘争心を視線に変えて眼前の相手に突き刺す。

対して小林もまた忠に気負いする事無く睨み返し、まさにいつ取っ組み合いの喧嘩が起こってもおかしくない空気が辺りに充満して行く。足元から木霊する横須賀の波音も、粉となって散っていく海面からの月光の反射も、忠と小林の視界と意識には何一つ影響を与えず、幸か不幸かそれを傍から見守るだけしかできない小林の連れる芸者は困惑の極みに達してしまう。

『と、トシさん、ど、どうしてそんなに・・・。』

『だあつとれや、澄^{すみ}！　こんがしんたれ、ワイは見とるだけでけつた糞悪いんや!』

大声で怒鳴る小林だがその間際も鋭い視線は忠のそれと交差したままで、右手に作った拳もお互いに解く事は無い。独特の濃い関西訛りのしゃべり方は口に出す度に語気を更に強め、関西の言葉に知識が無い忠にも声に込められる小林の立腹加減がよく伝わってくる。怯む様な気持ちは起こらなかったが兵学校の頃より陽気で口数が多く人気者であった小林は、忠が色んな感情を沸々と湧く怒りに変えながら黙って睨みつける間に早くも次の言葉を放つ。

『・・・ワレ、どうせフラれた女に会う意気地ものうて、軍帽に八つ当たりでもかましてたんちゃうんかい？　せやったらさっさと海軍辞めて青森に戻れや！　女一人でビビり上がつとる男なんやろが！？』

小林は以前に忠と殴り合いをした際の記憶を引き合いに出し、確証も無く忠が胸にしまっている想いを攻め立ててくる。厳密には小林の思うような恋焦がれる人間の女性が忠に居る訳ではないのだが、意気地が無いと断じて来るその言葉は妙に忠には自分の核心を突かれているように感じた。棧橋までぶらぶらと歩いて辿り着く前、渡^{わた}辺^{なべ}という教官との酒の席で出た婚姻のお話に対し、明確に否と言えなかった事がまるで小林によって糾弾されているようだった。

ただ、小林をはつきりと憎む感情がまだある忠はそんな事を認めまいと意識の中で叫び、勝って気ままに己をこき下ろす小林に荒げた声を返す。

『てめえこそエス連れて一丁前の海軍士官気取りかよ！　寄港先でエスプレーしてるのと何が違うってんだ！』

負けじと怒鳴るようにして放ったのは、小林が当たり前の様にその場に芸者姿の女性を連れてきた事。些か親しい関係である事は芸者が終始、小林の事を苗字ではなく名前で呼んでいた事で察しがついているが、それ故に忠はこうして今自分の女性に対するしがらみを指摘してくる小林に憤りが募る。

忠も含めた海軍士官が隠語で示す芸者は、横須賀のような海軍によって財力を賄っている都市には規模の大小こそあれその存在は多く、長い海上生活で飢えに飢えた男心を相手にして糧を得るという者達。貧乏から抜け出す為、その身一つで親すらも当てにせずに世を生きる為、とにかく金が欲しい為、と理由は様々だが、比較的若い身でその世界へと身を進めて長く働く女性は昔からそこそこに多

い。お座敷で披露する三味線や歌、踊りといった芸のお勉強に励み、大らかな心持で気の合わない男とも席を供にし、お天道様もまだ空に居る頃から寄り添って交際相手を務める事もあれば、時にはそのまま夜に布団の中まで供にする事もある。

そうやって一日三食のご飯を食べている女性達の内の一人を従え、しかも互いに名前を呼び合って親密な仲を曝け出すという小林の姿が、忠にはなんだかあてつけがましく感じるのだった。

しかし小林が応じる形で帰してきた怒号は、忠の小林と彼が連れた芸者へのそんな安い姿を否定する。

『は！ アホが！ 前に言うとした別れた女いうんは、こん澄や！ 芸者連れてこんな事言うん思うてんか！？ ワレと一緒にすなや！』

『・・・！』

小林に言い包められるつもりは微塵も無い忠であったが、思わずその言葉を受けて口を噤つぐんでしまう。まさに小林と派手な殴り合いをしたあの時、直前まで同期の仲間達が盛り上がっていた女の話において、この小林は誇るような言い方で自分がかつてとある女性に別れを告げた事を話していた。その際は小林のそんな話に男として何を誇れるものかと感情的に抗い、酒の勢いと相方への悪評も混ざって大喧嘩となってしまったが、今になってよりを戻している小林の姿を目にすると自分だけがあの時から、相方への気持ちに散々に殴られて目を向けたあの時から、何も変わっていないように忠には思えた。

あかし 明石艦に背を向けて横須賀へと割ったあの時から、結局自分は逃げ回って来ただけではないのか？

喧嘩したまま最後まで顔を合わせようとしなかったあの時から、結局自分は今でも顔を合わせる事に怖気づいているだけではないの

か？

そう意識の中で問い掛けると同時に、『女一人にビビリ上がってる。』と揶揄した小林の言葉と、ついさっきまで続いていた渡辺からの婚姻話に否の返事を出来なかった自分が、忠の中ではさほど障害も無く結びついていく。

自分を護る為にもっともな理由を見つけて意志を隠し、さも平気な顔で嘘をつき、酒の力に背を押してもらってヤケを起し、誤魔化すという行為に少しも後ろめたさを感じない自分。

有明湾で舷窓の向こうに見た明石艦に涙した際、あれほど嫌った自分の姿が眼前の小林との対比によって鮮明になっていく忠だが、いつの間にか小林から視線を逸らして自分の姿に疑問を抱いていた彼の思考は、突如として頬から伝わってくる重い衝撃とその刹那に伴われた小林の怒号によって一時麻痺する。

『こら、こないだのお返しや！ このアホが！！』
『がっ……！！』

奥歯がグラグラと揺れ、顎の感覚が鈍痛によって覆われていく間際、振りぬかれた小林の右の拳に僅かに遅れるようにして忠の顔が流れ、鍛え抜かれた身体を持つ海軍士官による至近距離の一撃に忠の身体は大きく後ろに仰け反る。グラリと揺れて真横に流れる視界は青白く輝く波間や星々に帯を引き、忠はそのまま片方の頬を地面に擦りつける様にして倒れた。

『うぐっ……！！』

『凶星やろうが、ワレ！ ろくに女に会わす顔も無いボケが、偉そうに帝国海軍軍人ヅラしてんやないど！ おらあっ！』
『ぐはっ！』

一瞬の隙を見せた忠を殴り飛ばすや、小林は倒れてすぐ上半身を起し始めた忠の腹部を勢い良く蹴り上げる。ほんの少しだけ浮き上がる忠の身体はその蹴りの衝撃を物語り、苦痛に喘ぐ声を放つ忠の顔は激しく歪んでいた。

だがさすがに二人の海軍軍人が目の前で喧嘩しているのを見かねたのか、それまで小林の後ろで困った顔で右往左往していた澄という名の芸者が忠と小林の間に割って入り、まるで天敵に味方でもする様なその行動に小林が声を荒げる。

『や、やめてください、トシさん！ おんなじ海軍さんじゃないですか・・・！？』

『何が同じ海軍や！！ こないな腰抜けと同じにされとうないわい！ どけや、澄！！』

鞘に納まる気配すらも感じさせない小林の怒りが怒号となって芸者に浴びせられ、腰の辺りに正面から抱き付いて来るその顔に手を当てて彼は振り解こうとする。お互いに名前呼び合う程の親しい間柄も今の小林の思考からは完全に欠落し、しだいに彼女を足蹴にするようにして地に伏せさせるのが苦痛に歪んだ忠の視界にも入った。

『じゃかあしいわ！ こんだあほ！』

『きやあ・・・！！』

一際力の籠った唸り声と同時に小林の片足が大きく流れ、澄という名の芸者はもんどりうって薙ぎ倒される。自分の感情を押し殺す性格の忠とは対称的な、怒りの感情をあらわにして親密な異性にもその道を遮らせない小林の姿。忠はこんな行動をかつて相方にくるうとも思わなかったし、今にして思えば取れなかった自分がいたのかとも思えた。

明石に手を上げた事も無ければ眉を吊り上げて怒った事もないし、別れの間際になっても自分の喜怒哀楽を隠そうとしたし、渡辺教官より貰った婚姻話で彼女と離れる事態に身が陥ろうとも一向に否と明確に返せなかった、惨めな自分。

その間逆がこの小林の姿なのかと眼前の光景に考えを巡らしていた忠だったが、ふとこの時、そんな小林が未だ手を伸ばしてくる芸者に怒号と荒い手つきで応じる姿に対し、一向に憧れや嫉妬のような心を沸かせない自身の心持に彼は気付く。刹那に脳裏に蘇らせた相も変わらず顔の浮かんでこない相方との思い出もその原因なのか、惨めで情けなくて憎いとすら思った自分の好対照として小林を認める気は、不思議と微塵も浮かんでこないのだ。

『なんや、森！！　ワレ今すぐその目潰したる！　くそ！　ええ加減離さんかい、澄！！』

『やめて、トシさん・・・！　同じ海軍さんでしょう・・・！？』

さすがに横須賀で芸者として生活している澄という名の女性は、忠や小林と年頃は変わらない若い顔つきであっても鍛え抜かれた身体と心を持つ海軍軍人に臆する事無く、身を挺するようにして同僚への暴行を止めさせようとする。小林を嫌う忠からすれば、なんとも彼にはもったなくらいに優しい心の持ち主なのだろうと察するも、そんな彼女の忠を庇うような行動がまた小林の怒りをさらに一層激しく燃やす。

自分の気持ちと感情を渦巻かせ、男女という性差の中で相方と認めた者へとそれを曝け出す事が、忠の中で出来なかった明石への在り方だが、眼前にて繰り広げられる小林と澄の姿に彼はそれを微塵も見出す事が出来ない。忠が描くこの横須賀の日々の果てに描く明石との再会と、それに次ぐかつてのような艦魂と人間という間柄で起きる珍妙奇天烈な海軍生活。そしてその中で今度は互いに遠慮せ

ず笑い合う、そのままの姿の自分と相方。それらは決して、今の彼の眼前にて押し問答を犯すような者達の光景には当て嵌まらない。忠の目に映るのは、ただ単に男たる者が持ち前の特徴を生かして感情を押し付けるだけの代物でしかなかったからだ。

『ワイとこんなアホンだら一緒にすな言うとるやろが！ 邪魔や！』

『きゃ・・・！ と、トシさんがマズイ事になりますよ・・・！』
『。。。』

青くアザになった頬の痛みもだいぶ和らぎ、まだちょっと苦しさが残る腹を擦りながら、忠はゆっくりと立ち上がる中で二人の姿を黙ってみつめる。24年も生きてきた中でこれまで自分に出来なかった男としての姿勢と、その姿勢をもって応えるべき女性を従えている小林。そんな彼を殴られた辺りには自分が最後までなれずじまいであった男なのだろうかと疑問を抱いていたのに、今の忠には不思議とこの男がとても哀れに見えてくる。あの日、明石と別れて以来、忠自身が意識の中でいつも描いてきた、否、願ってきた『こうで在りたい。』という相方との在り方が、小林と澄の様子と比べて酷く下等な在り方のように見えたからだった。

こんな程度が、小林の望む「二人」という奴なのか・・・？

小林が心底嫌うであろう忠が眼前に居る事もあるだろうが、邪魔だと大声で怒鳴りつけ、遮る手を腕力をもって退け、自分の身を心配してくれる言葉に黙れの一言を返す、眼前の小林。同時に忠の思考の中には、いつぞや殴り合いに発展する直前、忠を含めた4人の仲間内で最も色恋沙汰の修羅場を潜り抜けてきたかのような物言いをし、加えて兵学校時代の時まで遡っても尚、恋愛上手な一面を手柄話の様にしてよく仲間に語っていた彼の姿が蘇ってくる。220

人の66期生の中にあっても一番の女泣かせと仲間内で格付けされていた彼が、その果てに実際に今、自分へと見せている女性との在り方がこんな程度なのかと思えた刹那、いつの間にか両端が吊り上がっていた忠の唇からは静かな笑い声が漏れ始めた。

『ふ．．．は、はは．．．ははは．．．』

そもそもこの小林と殴り合いを演じた際のきっかけとして、忠の記憶に残る小林の言葉に『男を磨け。』という一言がある。当時はその一言を嘲りの感情を混せて放たれ、直後のヤクザ風の男達との喧嘩で雨の街角に倒れた時には、なんて姑息でいい加減で駄目な男なんだろうと自分を呪った忠。

だが今は小林の姿を瞳に入れても、自分を蔑むような感情は微塵も湧いてこなかった。逆に忠はこの時、それまでの人生の中で初めて明確な軽蔑の意識を他人に対して持つ。一瞬とは言え、小林の姿は自分に足りない物の総合体なのかと思ったついさっきとはまるで正反対で、その落差の激しい事が忠にはなんとも可笑しかった。

もっともこんな忠の思考なぞ、完全に頭に血が昇った小林には知った事ではない。文字通り怒髪天を衝く状態の小林は、忠が向けてくる嘲笑とその視線を受けてついに澄の手を強引に振りきり、まだまだ鈍痛で身を屈める状態であった忠の顔目掛けて再び拳を打ち込んだ。

『何がおかしいんや、おらああ！！　ろくに喧嘩もできんしくさって！！』

踏み込んだ小林が放った怒号と一緒に、忠のアザができた頬にはまたしても凄絶な一発が鈍い音を放って突き刺さる。澄という名の女性は地べたに座り込んだまま、好意を寄せている小林による再度

の暴力に悲鳴とも化した声を上げる。

しかし先程と同じ光景であつたのはまさにこの瞬間までであつた。なぜなら小林の拳が忠の頬に衝突して耳障りの悪い衝撃音を奏でた直後、小林と澄という名の女性の瞳には、遙か横須賀の水平線にも近くなつた月の光を不気味に反射して輝く忠の目と、痩せ型で大人しそうな外見の忠からは想像も出来ない勢いの拳が反撃として返つて来たからである。

『どらああ!!』

『ぐあつ・・・!』

背も普通で体格も普通、優男で感情の波高にそれ程大きな差が無い忠を同期として知る小林もこの一撃には面食らい、その前の忠を殴つた際に怒りに任せて大きく踏み込んでいた事もあつて、彼は忠の正拳をまともに顎へと食らつてしまう。顔面の当たり所としてはかなり悪い所で、揺さぶられた奥歯とその根元から染み出る赤い筋を唇から流しながら、小林は後ろに仰け反つて大きく尻餅を着く格好で倒れた。

そして小林と澄という付き添いの女性が驚いている間際、忠はこれまで無いくらいに激しい怒りを伴わせた表情で叫ぶ。

『・・・まったくめでてー奴だな、テメエはよ!! 何が別れた女だ!! 芸者連れて歩くぐれーなら幫間ほうかんだつてできらあ!!』

この場においては火に油を注ぐ一言を放つ忠。彼が予想済みの通り小林は今の一言によって驚きを忘れて憤りの色を表情の前面に押し出し、それでも尚言動を改めない忠に小林は大きな咆哮を上げて立ち上がるや飛び掛つた。

『なんやとお・・・？　ワレ、もっぺん言うてみいやあ・・・！』

『何遍でも言つてやる！！　そんな芸者の女連れるのが好きなんだったらな、オメーこそ海軍辞めて幫間にでもなれ！』

『上等や、ワレエ！！』

怒りが殺気にも等しい雰囲気へと変わった小林の顔を見ても忠は一步も引かぬ態度で輕蔑の声を浴びせ、もとよりその形相とそれに続く鉄拳に慄くつもりもまたちっとも無かった。澄という名の女性在必死に止めようとした心遣いももはや忠の眼中には無く、3発目の拳を振りかぶってきた小林と彼は取っ組み合つて岸壁の上を転がるようにしながら派手な殴り合いを始める。

傍らで彼女の悲鳴が叫ばれても、お互いに一張羅とする第一種軍装が破けても、片目が潰れるほどに頬が腫れあがつても、やがてその喧騒を聞きつけて真夜中にも関わらず多くの人々がその場に集まつて来ようとも、そしてその人々の大半を占める同じ海軍軍人の者達に力づくで引き離される間際になつても、忠と小林は相手を殺そうとする勢いで放つ拳と憤怒の刃を納める事は無かった。

既に消灯した民家や海軍艦艇も多い横須賀軍港のとある岸壁の上。青白い月光と星達の輝きが包む中、荒い息遣いでの肩を上下させた呼吸をしながらも、二人が投げ合う怒号は他の海軍軍人達によって各々が連れ去られていく最後の瞬間まで、岸壁と波間が奏でる小波の音を切り裂いていたのだった。

『な、何がロクに女に会わす顔も無えだ！　ハア、ハア・・・！！
そのひん曲がつた鼻でエスに笑われてお山の大将でもやってろ！
』

『ハア、ハア・・・！　言うたな、ワレエ！！　左目も潰して二度と女に会えへんおたふくヅラにしたるわい・・・！　かかってんかい、オラア！』

それから数日経った、ある日。

横須賀市街の中心部にも近い田浦地区の海岸にある、海軍水雷学校庁舎。ひんやりとした潮風も肌寒い師走とは言え、お日様が雲の隙間から顔を覗かせる事もある今日の天気のおかげで今日はやや暖かい一日で、水雷学校の学生や教官達は庁舎からも近い栈橋や広場といったお外にて集まり、白い吐息を各々が放ちながらも輪投げやデッキビリヤード等の屋外での遊びを行って午食の後の昼休みを楽しんでいる。

音にも聞こえし砲術学校に比べて水雷学校は厳しさの点では少々緩い風紀であり、教室以外で行動する際は号令を用いる等というなんでしょうもおカタイ雰囲気は学生にあっても教官にあってもそれ程濃密に纏われてはいない。その証拠に庁舎の真裏にある日光も清々しい広場では、教官と学生がチームに分かれてデッキビリヤードの団体対抗戦を行っており、選手の一挙手一投足に一喜一憂する朗らかな歓声が上がっているくらいだ。

だがそんな笑顔ばかりの彼等がいる広場とは違い、デんと大きく構える水雷学校の庁舎のとある一室では、一人の学生が海軍軍人としての将来を、同じく一人の教官へと神妙な面持ちで伝える一幕が繰り広げられていた。無論、それは忠と渡辺教官の事である。

『ばかこのお！ 貴様、どういふつもりだ！？』
『ぐっ……。』

絆創膏や包帯を派手に巻いた顔の忠は、先日夕飯もご馳走してもらった渡辺という教官の待機する部屋に入出するや、一喝の下に鉄拳制裁を受ける。これまでの人生の中で最も派手な喧嘩を同期と繰り広げた忠の顔は、まだ片方の目が腫れた頬によって圧迫されている有様で、力も上手く入らない顎と併せて渡辺の拳に耐え切れるだけの抗性は無い。思いつき殴られるや忠の頭から軍帽が落ち、彼自身の身体も背にしていたドアに勢い良く打ち付けられる。

もつとも忠はこの鉄拳に驚く事も無ければ、鼻の下に生やした髭による迫力有る渡辺の怒った顔にも動じる気配は無い。なぜならこの小さな部屋に入る前、もとい授業の終わりに渡辺から一人であるようにと促されたその時から、忠はこうなると予想済みであったからだ。

そして何故に入室して挨拶もせぬ内からこうして自分は殴られねばならないのか、その理由についても忠は良く解っている。それは数日前に渡辺より申し出て示し合わせていたとある行動を、あろう事か忠が反故にしたからである。

その上で忠は悪びれる様子も許しを請う様子も全く見せず、足元の辺りに落ちた軍帽を拾って埃を払い落とすや、新調した第二種軍装の輝きも美しい自身の身体に沿わせて傷だらけの頭部を深々と下げた。

『むう……、森い……。』

忠の敬礼を受けて渡辺の表情が曇る。せっかく示し合わせていた約束を破られてしまったのだからご立腹となったのは確かであるが、同時に渡辺は優等生として可愛がっている忠をあたらし憎く思っただけのつもりは毛頭無かった。そも海軍軍人の部下として目を見せたからこそ、渡辺は忠に対して鉄拳のきっかけである申し出を出したのである。やがて渡辺は鼻の下の髭を左右に振って吐息を整

えると、忠が部屋へと訪ねて来るまで腰を下ろしていた椅子を手繰り寄せて座る。椅子は部屋備え付けの小さい机とセットになっていて、同じ木目が描かれる机の上には渡辺が使う教材や水雷関連の書籍が所狭しと積まれている状態だ。

だがしかし、そんな鬱蒼とした渡辺の机の上に、一枚の真新しい紙が鎮座している。

参考書やノートですらも物資困窮する現在の日本では代用資材で作られた物が多く、支那事変が始まる前の頃と比べると随分と質が悪くなった物が目立つこの御時世なのだが、その紙切れ一枚だけは発色の良い白を輝かせて渡辺だけではなく忠の目をも向けさせていた。

すると渡辺はその紙を片手で払うようにしながら手に取り、何やら字の羅列が書かれている面に視界を移しながら忠に対して声を放った。

『……貴様、頭だけじゃなく根性も良いな。こんな希望を回答で返した奴は貴様が初めてだぞ。』

『……はい。』

先程よりも語気を緩めて漏らす愚痴にも似た感じの渡辺の物言い。それに対して忠はまだ痛む頬に少し遮られながらも返事を放ってみせ、渡辺はその声を耳にするや肩を落として大きな溜め息をする。落胆と疲労が混じった吐息は忠としてもちょっと耳に入れるのが酷であったが、その反面、彼はきつと続けて放たれるであろう渡辺の声に、明確に否の答えを返そうとこの時既に脳裏で決めていた。

渡辺は溜め息の後、しばらく紙面を眺めながら沈黙を守っていたが、不意に放った彼の声は忠の予想通りであり、次いでそれに対する試みを早くも実行に移させてしまう。

『・・・砲術学校でも優等。水雷学校でも優等。・・・あのな、森オレの親戚への話は別としてもな。そんな貴様はこんな特務艦じゃなく、もっと大きな艦に行つてその腕を生かすべきだ。最新鋭巡洋艦への配属なんて、なりたくたつてなれない奴の方が多いいんだぞ？

提出は明日だ。今からでも書き直さんか？』

『・・・お断りします。私の配転先希望はその用紙の通りです。』
『むう・・・。』

お辞儀しっぱなしで頭を下げたまま、忠はその傷だらけの顔とはうって変わった精悍な声でにべもなく渡辺の申し出を断る。先日の方飯と一緒にした際には一瞬たりと目になかった忠のそんな態度は、例え申し出を断られた方であろうとも渡辺の目にはとても立派で力強い姿として映る。渡辺自身が兵学校をやつと終えてこれから海軍士官として頑張つていこうと一念発起していた頃、若さに任せた期待感溢れる夢の果てに描いていた帝国海軍の士官たる者の理想像が、眼前の忠のお辞儀する姿に不思議と重なっていた。すると渡辺の髭に隠れ気味な唇はフッと吊り上がり、完全に怒りの色合いが消えた声が部屋の中に静かに木霊する。

『・・・いいか、貴様。海軍軍人の人事ってモンはな、建前上は海軍大臣の所管になる。脅すつもりは無えがな、オレが持つてる人事局のツテを当てにしないなら、考課表辺りの書類に一筆書いてやるくらいしかできんぞ？』

約束を反故にされた腹いせでは無かったが、渡辺は手にした紙に記された忠の願う今後について協力できないという姿勢を明確に告げる。良い教官、良い先輩、良い人と慕った心は嘘ではない忠にあつてもそんな渡辺の言葉はちよつと辛かったが、それでも尚、忠は自分の願いを引っ込める気はついに起きなかった。転じて忠は若輩ながらも一人の海軍軍人として、男としての覚悟をその刹那に昂ぶ

らせ、胸の中から込み上げてくる勢いに乗じて大きな声でその覚悟を示してみせる。

『それで結構です。願います！』

『ふう……。うん、そうか……。良し、戻って良い……。』

もう何度目になるかも解らない小さめの溜め息を放ちながら渡辺がそう言うと、忠はようやく頭を上げるや再び深々とお辞儀をし、兵学校で教えられるそのままの厳格な礼式でもって渡辺の部屋を後にする。ドアの向こうから響いてくる靴音もまた凛々しく、まさに自分の行動に尋常ならぬ信念を込めた行動なのだろうと渡辺は思いつつ、手にした用紙の文面を再び読んで思わず苦笑いしてしまう。

『……。面白い若造なんだがな。ふつ、弱ったなあ……。』

そう呟きながら渡辺が視界に映す用紙。縦書きで統率された何やら難しげでいかつい文字列の一番右には、大きく「配転先希望」の文字。次いでその左にある枠で囲まれた3つの項目には、折れと撥ねも一際分別がついた忠の文字が綴られている。そしてそんな忠の筆跡によって綴られた内容は、長く水雷学校教官、否、長く帝国海軍に勤めて来た渡辺にとってはまさに前代未聞の代物。だがこうもまた徹底的、そして熱意溢れる文面はなんと爽やかであろうと渡辺は率直に思い、苦笑いの表情を一層歪ませて頭の後ろを荒く搔く。

奇しくもその文面に込められた忠の姿勢は、数日前に忠に夕飯をオゴった際に渡辺が教えた「格好つけない男の姿勢」その物。身を包む多くの大砲に頼らず、舳先のラムを頼りに身体一つでぶつかって行くが如き内容であった。

配転先希望

海軍少尉 森忠

兵学校66期卒

第一希望 明石艦熱望

第二希望 明石艦熱望

第三希望 明石艦熱望

第一〇三話 「男だったら意地を通せ／其の三」 （後書き）

加藤隼戦闘隊のDVDゲット!!

戦時中作られた映画にして、陸軍省全面協力という事で楽しく鑑賞できました、（、ー、）ノ

てか藤田進わけーーww

そしてなんと言っても本作品の凄い所は空戦シーン。なんたって本物の隼や鹵獲したP-40を使ってるもので、その迫力がハンパじゃない。横隊からブレイクしていく際の隼のカッコ良さは白眉ですね。

それと個人的には悪天候、夜間の飛行の描写や、不時着して行方が掴めない隊員の安否のお話などが興味を引きました。兵器の性能覚えてるだけで、さもオレは知識があるといった感じで戦記書く輩ではまず無理な表現だと思います。こういう時間、環境の中、こういう人間が飛行機に乗って戦いながら生きていたか。こんな当たり前前の事を忘れた戦記作品にはクソ程も興味も無ければ価値も見出せない小生の根本ですが、多くの手記と同じ様にそれをあの戦時中に表現されていた事はなんとも言えない嬉しい発見でした。

あと物凄く驚いたのが陸軍省全面協力にも関わらず、ガソリンとか普通に横文字を使ってたのに始まり、

「隊長、チャンスって言ってたでしょ？ 敵性語ですよww」

「（ノ、＼、）アチャー」

というやりとりがあった所ですね。公開が確か昭和19年なのでかなり余裕の無く、「個人主義の鬼畜米英」等と新聞にも大々的に

載ってた時期にも関わらず、一般国民にも大人気だったこの映画にこんな部分があったのはとっても意外でした。女性のふとももが写ってるという理由で雑誌を発禁処分にしてる検閲があった反面、割と英語は使ってたんでしょかね？

「エンジンの音」って歌い始めに、当時の缶詰や企業広告も鑑みると、当時の日本の社会には結構現代ばりに英語の存在はあったんじゃないだろうかと考えてみたり。

まだまだ謎も多い、大日本帝国です。

第一〇四話 「仲間達を知ろう」（前書き）

◆お詫び◆

読者皆様、いつも拙作をご拝読下さり誠に有難う御座います。

さて、前回掲載しました一〇四話「お仕事の使者」において、防府沖合い在泊の第二艦隊に対し第三戦隊旗艦として金剛艦が来訪しておりますが、金剛艦は作中でも記載した11月15日付けの昭和16年度艦隊編成で三戦隊配備とされた10日後の11月25日、整備補修と改装の為に特別役務艦とされて艦隊から外れておりました。それに伴い明石艦が所属の呉鎮に戻ったのと同じ様に、観艦式が終わった後は金剛艦も所属の佐世保鎮守府に戻っております。そのまま佐世保で改装作業に入っております。

ですので作中の12月下旬も近い頃に、金剛艦が第三戦隊旗艦として海上に在る事はありません。

拙作の執筆において過去最大のミスで御座います・・・（つぐ）
大変申し訳御座いませんでした。

これに伴いまして104話の後半から内容の改定を行わせて頂きます。

次話更新が遅れるのと同時に既存のお話も変更致します事、大変に申し訳ない限りですが、ご理解とご了承の程をお願い致します。

ただ蛇足ながら、前回のお話にて盛り込んでいた金剛と神通、そして未だ作中には名前だけの登場である敷島に関しての人物関係は小生の設定からは少しもブレていないお話でして、今回勇み足で記載しました内容は現在は修正してしまいましたが、今後変更する事

は絶対にありません。

前回の内容に関して覚えている部分が御座いましたら、何卒裏話的に垣間見れたと思っていただければ幸いです。

2010年12月10日 明石艦物語作者／ 工藤 傳一

第一〇四話 「仲間達を知ろう」

昭和15年12月22日。

第二艦隊は雪もちらつく柱島泊地で未だ錨を下ろしている状態にあり、その日を置かずに予定されている艦隊訓練への出動準備に乗組員達は汗を流していた。もう残り一週間で大晦日、次いでお正月であるが正月明けにはすぐさま昭和16年度の第一回応用教練、続いて第一回基本演習の予定が入れられており、艦長さんから兵下士官も含んだ乗組員達と同じく艦魂達にあってまた予習に余念が無い。

時代と供に進歩する帝国海軍の諸事情を追いかけるのが艦魂達の勉強の主な物で、そも最先端技術の結晶たる物が兵器であるのだから、その難解さは結構馬鹿にならない物でもある。微分積分に始まる数学の知識は勿論の事、兵学校を終えて励む士官の乗組員達にも負けぬくらいの語学力も必要だし、歴史の意味ではこれまでの帝国海戦史も学ぶし、地理のお勉強だって海に共通する部分が必要である。その上で果てしない座学を楽しみと感じる事のできる存在が稀有な人間達と同じ感覚を持つ艦魂達であるのだから、やっぱりそこに在るのはついつい呻き声を上げて頭を捻りながら机に齧りつく女性達の姿であった。

しかしそんな中、お勉強ですっかり頭脳を酷使しきって疲弊していた彼女達にも一時の救いがあった。

柱島泊地にて所属の全艦艇が集結している状態の第二艦隊では、なんと寒さも派手になり始めた時期にも関わらず、新年度の艦隊訓

練の一環として短艇競技会が催されたのである。

帝国海軍の短艇競技会は明治の海軍創設期より行われてきた伝統有る催しで、各艦対抗の形式をとっている為に出場する選抜の者にあっても応援する者にあっても、一際熱が込められる場。各々が所属とする艦の名と名誉を掛けた戦が繰り広げられ、戦国時代ほどに顕著ではないものの家柄や血統等を重んじる気質が強い日本人にとっては何んとも胸踊る一大イベントでもある。『あの艦に負けるな。』とか、『この艦には絶対に勝て。』といった艦長さんからの指示も時には出る始末で、まさに選抜された短艇乗組員達は自分の艦の全てを背負う事になる。

だがそんな艦長さん達みたいなお偉方と同じように自身のメンツを懸けているのは、この場にあつては何も一部の人間だけのお話ではない。一応は階級や役職を模倣している艦魂達にとつてもそれは同じで、普段は絶対に逆らえない目上の者を見返す、或いはその逆に圧倒的な実力の差を見せ付ける絶好の機会ともなるのだ。

別に艦魂達が浮標で区切られた洋上の競争区間で競い合うそれぞれの短艇に対し、とりたてて何をするという訳でもないのだが、それでもカタカナで自分の名前が舳先の辺りに記された短艇が優秀な成績を納めてくれるのは彼女達にとつては何んとも嬉しい結果である。

『おっしゃ！ 連覇〜！』

『ははは。残念だ、今年も高雄たかおの短艇が一着か。』

『あら。二位は五戦隊の那智なちじゃない。これじゃまた私のトコの艦長、今晚みぐま辺りは怒りそうだなあ。』

『うげ。三隈みくまの短艇、速いなあ。てっきり私が七戦隊じゃ一番だと思つてたのにさあ。』

第二艦隊内の巡洋艦戦隊である第四戦隊、第五戦隊、第七戦隊、第八戦隊による合同競争は、参加する短艇の数が最も多い本日の短艇競技会のメインイベント。スタート地点にて横一列に総勢12艘の短艇が並ぶ様は圧巻で、短艇に乗組んだ水兵さん達が握る幾重ものオールはさながら戦国時代の槍袈やりやすまの様だ。

もちろんそんな勇壮な姿に第二艦隊各艦の甲板からは士官と兵下士官が入り混じった乗組員達の応援の声が放たれ、見晴らしが良いと艦魂達が一同に集まった加賀艦かがの甲板でも歓声の度合いは同じである。

明石あかしも当然のその場にて仲間達と同じ時間を過ごしており、例に漏れずここ最近のお勉強で疲弊気味の心身を眼前の短艇競技会で得る一喜一憂で癒す。

どうも周りの歓声を耳にするに、第二艦隊での短艇競技において艦隊旗艦である高雄の短艇とそのクルー達は毎度毎度の好成績を叩き出す常勝チームらしく、年上で艦隊旗艦の艦魂を務める者としては先輩格である那智や羽黒はぐろに対しても一位の座をここ数年は譲っていないらしい。おかげで高雄は出雲いずもというお師匠様から与えられたその陽気な人柄に上機嫌という油で火をつけ、真面目な性格の愛宕あたごや寡黙で強面の加賀らがいる甲板の上で一人小躍りを始める始末。

ほとんどの者はその様子を見て笑っていたが、今期より第二艦隊へと加わった高雄の妹の鳥海ちようかいだけは悔しそうに唇を噛みながらそれを眺めている。高雄型一等巡洋艦4姉妹の末っ子ながらも、姉達と離れて長く単身で支那方面艦隊で励んできた意地が相当に有るらしい。明石よりも年齢を重ねた20代前半くらいのその容姿は艦魂の世界では一人前の物だが、大人びていても隠し切れない負けん気の強さを辺りに放っていた。

その一方、巡洋艦同士での短艇競争が有れば駆逐艦同士、または空母同士といった間でも競技会が行われており、先程の巡洋艦で構成される戦隊での競技大会に出て目立たない成績で終わってしまった明石は、特に気落ちする事も無く仲間達における短艇競技会を楽しく見物する。

するとやがて行われた水雷戦隊の部では、明石のすぐ隣に集まっていた二水戦の艦魂達から予想通りと言うべきやりとりが聞えてくきた。

『うっへえ。戦隊長の短艇、速いですねえ。』

『すげー、ぶっちぎりで一位だあ。』

『ふん、当たり前だ。私の乗組員はな、お前達のキールがまだやつと船台の上に据えられた頃には、もう既に支那で私と供に作戦に就いてた者ばかりなんだ。根性が違うんだ。』

一個戦隊としては結構な大所帯である二水戦は戦隊内対抗という形式で競技会が生まれ、彼女達の眼前では今しがたそんな自分達の短艇による競技が終わった所なのであるが、10艘以上の短艇による競技会が舳先に「ジンツウ」と記された短艇の圧勝で終わった事に驚きの声を上げている。もちろんそんな短艇と乗組員の持ち主である神通は平然とした表情で部下達の声に応じ、絶対的な上司像をこんな時であっても崩さない事に成功する。

そしてその神通と仲良しという事からちようど隣に座っていた明石も素直にその功績を褒め、自分とは違って乗組員も含めて経験豊富である神通に拍手を送りながら感心の声を漏らす。

『あはは、神通、すごいじゃん。』

『ん。まあ乗組員の奴ら、最近の教練ではよく頑張っていたからな。大した連中だ。でもお前のトコの短艇も、今回が初参加にしては上出来だったじゃないか。明石。』

『えへへ。ありがと。』

彼女達が居並ぶ加賀艦の飛行甲板は師走の潮風が吹き放題で、外套を着ていても寒いの一言に尽きる環境であるが、今日はみんな機嫌の良さとささやかな娯楽が有るためか不平不満の類は口に出ず、普段はとても不機嫌そうな表情を絶やさない神通にあってそれもそれは同じらしい。加えて親友にして第二艦隊でも一番の年長者である彼女に自分の短艇の成績を褒められた事は、明石にとっても素直に嬉しい事であった。やがて二人は白い息を小刻みに上げながら笑みを合わせ、ここ最近はお互いにお勉強漬けで疲れた心を解し合う。

だがしかし、こんな神通と明石の二人に対し、のどかな一時なぞ全くもって共有できないあの二人が、加賀艦の飛行甲板上の一角にまたぞろ騒動を巻き起こし始めた。

『アンタの短艇のオールが当たったから私の短艇が遅れたじゃない！』

『あんだと！ テメエのボートクルーどもが木の枝みたいにオール振り回してっからアタイの短艇にからまったんじゃねーか！ 木の枝とオールの区別もつかねえのか！』

『歩いて棒に当たるような犬が艦なら、乗組員もワン公揃いか！
口で啗えてオール使えよ、バカヤロー！』

『なにを、猿め！！』

ちょうど明石と神通の背後の辺りで喧嘩をしているのは霞と雪風。
どうやら先程の短艇競技会にて不幸にも両艦の短艇の間でオールが絡み合ってしまった事への責を求めているらしく、周知の通り犬猿の仲である事からお互いに自分の非を認めずに罵り合いとなってしまうている。次いで時間を置かずに二人は蹴る殴るの取っ組み合いとなり、甲板の上をゴロゴロと転がりながら交互に馬乗りになって

相手の顔に鉄拳をお見舞いし始めた。

『バカ犬め！ てえりゃあ！』

『この猿！ おるあ！』

若さを喧嘩に爆発させるのは別に珍しい事ではないが、毎度毎度こうして飽きもせずに喧嘩できる二人の姿は明石にはちょっと微笑ましく思える。何故なのか理屈は解らないがこうして喧嘩するのが日常茶飯事の二人は、いつも居場所や喧嘩の発端が同じ時間や場所に共有されるのが通例で、あれほど参加した短艇が多かった先程の競技会でも二人の短艇が隣同士であった事はもはや偶然とは思えない。本当はその相性は抜群に良いのではと思わず笑いながら考えてしまうのは明石だけではなく、第二艦隊中にも知れ渡る問題児2名に高雄らは朗らかに笑っている有様だった。

『馬鹿者があー！』

そしてそんな二人の大喧嘩を止めるのは、その場に居る高雄ら第二艦隊のお偉いさん達による自分達への嘲笑でも、持ち前の低くハスキーな声で『こちら。』と宥める那珂^{なか}による抑止の心遣いでもない。ただ一人の上司である神通の烈火の如き怒号とげんこつが加賀艦の飛行甲板上の空気を切り裂くや、頭に乗せた軍帽がベッコリとへこんだ霞と雪風が苦悶の表情で甲板の上に大の字となった。

『あーあ、またやった。』

艦隊旗艦の高雄が居る前ですらもいつもと変わらぬ二水戦の騒動を繰り広げた事に、明石はケラケラと笑いながらそう言った。もっともその笑い声を耳にした刹那、神通は持ち前の刃先のような形の目を研ぎ澄まして明石の顔を睨みつけ、親友と慕いながらも一向に

慣れる事の出来ないその怖い顔に明石は笑い声を封殺される。こうなっては「鬼の戦隊長」との異名をとる神通を止める事は出来ず、『お偉方が居る前だから……。』と霞や雪風を止める際と同じ様にそれとなく宥めてみた実の妹の那珂に対してもその怒りは矛先として向けられる。ある意味では非常に公平な神通独特のご立腹ぶりは、そんな中で妹に返した憤怒の勢いも凄まじいその言葉に如実に表れていた。

『黙れえ！ 二水戦の事には口を出すな、那珂あ！！』

やれやれとその怒号に苦笑いする明石。今年もどうやら親友達にあっては在り方に変わりが無いようで、みんなが見ている前でお尻をぶっ叩かれる霞と雪風を可哀想に思いながらも彼女はどこか安堵してしまふ。新年度という区切りを迎えた時間に至っても尚、自身を知るままの者達がそこに在る事に安らぎを覚えたからだった。

『何回言わせれば気が済む！ 艦隊旗艦が居られる前で騒ぎおって、馬鹿者が！！』

『ぎゃあ！！』

『ぐああ！！』

辺りに起こる失笑の渦に参加してクスクスと明石が笑っている間に早くも加賀艦の飛行甲板で繰り広げられているのは、鬼教官たる神通の前にうつ伏せとなり、その小さなお尻に竹刀を何度も振り下ろされてベツチンベツチンと響きの良い音を悲鳴と供に放っている霞と雪風の姿。まさに何時もの二水戦の日常である。

『あははは！！』

本来なら今日の様な短艇競技会というイベントでなくとも見れる

筈のその光景が、明石にはこれまでに無いくらい暖かで楽しく見えて仕方が無い。足元では霞と雪風がまだまだ顔に比して大きいその両目に大粒の涙を流してビービーと泣いているが、もはや見慣れている上にどんなに怒っていてもすっかり体罰はお仕置きの範疇に収めようとしている神通の事を知っている手前もあって、明石は憂う事無く湧き上がる可笑しさを笑い声へと変えていく。

それはここ最近のお勉強尽くしの日々では久しぶりとなる、楽しくて嬉しくて可笑しいとなんとも明るい感情を昂ぶらせる事のできた一日の一幕であった。

昭和15年12月30日。

大晦日も控えた世間一般では、如何に繁盛するお店でもお休みとされるのが普通であろうこの日。柱島泊地にて来たる新年度艦隊訓練の準備を全く完了した第二艦隊は、中将旗を翻した高雄艦上の古賀^が長官の号令一下、続々と抜錨を開始。栄えある帝国海軍に土日が無いのは「月月火水木金金」の語句で周知の事であり、大小の各艦は雪もちらほらと舞い散る空の下で一際黒い煤煙を煙突から巻き上げ、冷たい師走の潮風にも巻けずに颯爽と靡くそれぞれの軍艦旗を柱島西方の海域へと進めて行った。

昨年よりも遥かにその数を増した第二艦隊は「指揮官先頭」の伝統に則り、高雄艦を先頭にして狭い瀬戸内を長く連ねた単縦陣で静かに進む。例えば内海と言えども冬の海の表情を垣間見せる瀬戸内は

やや荒れた波が満ちており、ただでさえ交通量も多く漁船等の往来も盛んなこの海を進むのは帝国海軍艦艇にとっても中々に気を使う物でもある。速度に任せて突破したりするのは衝突事故を誘引する為にももちろん出来ないし、海軍艦艇としては小型快速が身上の駆逐艦とて漁船や一般的な民間船から見れば大型艦艇となるから、小回りの面でも段違いに分が悪い。だから事故を起したくないのならゆっくりノロノロと波を掻き分けるしか手段は無く、栄えある第二艦隊のお仕事始めの姿はなんとも勇壮さが掛けた大名行列と化してしまふ。

しかもまたそんな状態で第二艦隊が移動したのは、柱島泊地を出て瀬戸内を僅かに西進した所に在る山口県の防府市沖^{ほうふ}で、南国のそよ風と陽射しも懐かしい沖縄行きを期待していた明石はちよつとがっかりしてしまふ。

もっとも防府近海は随分と艦艇の数も増えた近代帝国海軍にとっては結構重要な地で、北九州の航空基地と密接に連繋した艦隊訓練を行うに当たって艦隊を待機させる場所に度々選ばれているのがこの海域である。豊後水道が瀬戸内海の玄関^{すおうなだ}なら、周防灘とも呼ばれる海である防府市沖合いの海域はさしずめ瀬戸内の土間といった所。本州西端と四国と九州の間を縫うようにやや広くなった海で、古くから本州と四国、九州を繋ぐ海の道の中継点としても栄えており、文明開化も著しい明治の頃から近辺の港湾に相応の規模での発達が見られた。しかもこの防府の特色として「東洋工業」なる有名な製造企業が居を構え、次いで製造した工業製品の積出港として機能している点がある事から、その港湾設備は本格的な起重機や栈橋、岸壁などを備えてもいる。おかげさまで帝国海軍の使用頻度もそこそこ多いのがこの地なのであり、瀬戸内の眺めが変わらず沖縄の常夏な気候が味わえずに残念がる明石の様子に反して、愛宕や神通といった比較のお仕事に真面目な艦魂達は久々の防府沖合いでの停泊となって自らの心持を改めている程だった。

ちなみに後年、この東洋工業という企業は、世界でも唯一のロータリーエンジンを用いた自動車を量産する自動車メーカーへと成長していく事になるのだった。

さてさてそんな中。

呉より多少は気温も暖かいような感じもある防府市沖合いに投錨する第二艦隊。

その中の四戦隊所属の愛宕艦の長官室では、大晦日を控えても尚お仕事から距離を取らない艦魂達の打ち合わせが催されていた。毎月の月初めにいつも行っている様に各戦隊長級の艦魂達が集まるのは同じであったが、その日に行われたのは小難しい議題に対してみんなで頭を捻る会議ではなく、明石のような新米や神通のようなベテランも含めた中で一緒に新たな知識を探求するお勉強会であった。しかもお勉強の対象は先日の魚雷や大砲、飛行機といった小さな物ではなく、自分達を含めた「とある海軍艦艇と、帝国海軍としてのその運用方法。」との事で、何やらこれまでに無くスケールの大きなお話に明石は持ち前の好奇心を沸き上がらせる。大変に珍しい事に明石の親友にして、第二艦隊では那珂と供に古参の顔でもある神通ですらも、このお勉強会で学ぶ題目に関してはまだ理解が及んでいないらしく、これまでに何度もあった周りにはみんな知ってるのに自分だけが知らないという教養の格差が、本日のお勉強会では適用されていない事に明石はちょっとだけ喜んだ。

『そうか、那珂もやはり詳しい事はよく解らんか。』

『ええ。私が第一艦隊にいた時は、まだ手探り状態の運用だったの。逆に第二艦隊所属の神通姉さんの方が、その事に関しては知ってるんだと思ってたわ。』

『えへへへ。みんな同じだねえ。』

『ふん。何を嬉しそうに。』

愛宕艦長官室に向かうべく、愛宕艦の甲板へと転移してきた後に艦内通路を歩く仲良し3人。それぞれが自前のノートと筆記用具を片手にし、歩きながら交える声の中で各々がこれから始まる勉学のお題目において見識が浅い事を確認し合っている。これも艦魂達におけるお仕事の一環でもある故か、神通と那珂は至って真面目な表情で早速今日のお勉強はこういう物になるのかとお互いに考えを述べているが、寄り添って歩くそんな姉妹の後ろをついて行く明石は、ようやくこの二人とスタートラインが同じになった事が嬉しくてならず一人ニヤニヤとしながら歩いていた。

気心知れた神通と那珂は明石と知り合ってもう1年以上の付き合いで、艦魂としては同期の間柄である二航戦の飛龍や八戦隊の利根と比べてもずっとずっと明石とは親しい者達である。ただ一つだけ明石がこれまで残念であったのは、そんな神通と那珂は既に帝国海軍艦艇の命として15年以上も励んできた年長者であった事で、まだまだ艦の命としては駆け出しである自分とはその容姿においても教養においても雲泥の差が有るという事であった。決して自分の知識の無さ、教養の浅さに僻みを持って憎む等という気持ちは微塵も無いが、自分だけが出来ないという境遇を明石は内心ではとても嫌う傾向にある。親しい友人である二人が自分の理解が全く及ばない会話をしている場を目にするだけでも、まだまだ自分がお師匠様より教わった艦魂たる者の理想像とはかけ離れているのだと思えてしまい、決して涙を流したり落ち込んだりする素振りは見せずとも心の中ではそんな自分が残念で残念でならないのである。

ダメだなあ……。もっともっと立派になんなくちゃ……。

その度に脳裏を駆け抜けていくのはそんな言葉。もちろんその根底と想いの果てには、帝国海軍でも屈指の厳しさと耳にした砲術学校や水雷学校での日々を終えて戻ってくるであろう、大事な大事なかつての相手の存在があるのは言うまでも無い事である。

そんな事からまだ理解が及んでいない物事が神通と那珂にあっても同じであるという本日は、第二艦隊の戦隊長級の艦魂達の中でも最も若輩な自分をさほど気にせずに過ごせる為に明石の心はなんと軽やかであった。自分の部屋で勉強会の為にとノートと鉛筆を準備する段階から笑みがこぼれていたくらいで、愛宕艦の甲板でこの二人と落ち合った際も明石は元気一杯の挨拶を投げてみせる有様。那珂は相も変わらず慈愛心溢れる笑みでもって応じてくれたが、神通は逆になんとも上機嫌の明石を気味悪がっている程だった。

『……お前なあ、今日の勉強会は私や那珂ですらもまだよく解っていない事を学んだぞ。下手すれば帝国海軍の戦策だって出てきかねない話だ。そんなヘラヘラした顔で大丈夫なのか？』

『あはは、みんな解んないから勉強会やるんじゃない。それに笑ってたってムスツとしてたって、解んない事には変わりなんかないよ。それとも神通みたいに気張ってれば解るの？』

『いや、そういう事じゃなくてだな……。』

『ふふっ、ふふふ。』

すっかり仲の良い神通と明石。最近ではこうして明石が10歳以上も年長の神通をしてちょっと困らせる様な物言いを頻繁に放ち、他の仲間内からは顔を見るのも嫌だとまで嫌われている姉のそんな

困った顔が那珂には可笑しくてならず、ちょっと顔を逸らして気取られないように静かに笑ってしまふ。那珂自身もその場にいたあのみ保ヶ関の惨劇以来、10年以上も見ること出来なかった神通の豊かな表情。当の本人は年下で天真爛漫、無垢な人柄である明石の声を受けて少しムツとしている様だったが、湧き上がる怒りに任せて手を振り上げる真似をする訳でもない。二言三言の文句をブツブツと口にし、せいぜいそんな自分の姿を笑っている那珂と明石をギリと睨んでやるくらいだった。

そうこうしている内に3人は愛宕艦長官室へと到着し、いつも戦隊長会議の際に陣取る席へとそれぞれ腰を下ろす。隔壁にある舷窓を背にしてテーブルクロスの上の白さも際立つ長机のちょうど真ん中辺りで自身の軍帽を机上に置き、上座の位置から神通、明石、那珂と順に座るのが彼女達のお決まりの席順である。嫌われ者の神通の隣に誰も座りたがらない中でも明石は仲良しであるからさも当然の様に席を隣にし、その鋭角によって構成された眼光鋭いお顔に臆する事無く彼女は解らない事があればすぐに隣の神通へと自分の疑問を投げれるので、色んな意味でも都合が良いのだ。

そして明石達が既に何名かの同僚が待機していた長官室へと入って数分もした頃になると、ようやくこの艦の主の愛宕と艦隊旗艦の高雄が集う顔ぶれの最後として長官室に足を踏み入れ、長机の上座側の端っこで小さめの黒板などの教材を準備していた摩耶^{まや}がいつもの声を上げる。

『艦隊旗艦に、敬礼。』

『ほおい、ご苦労さま。』

摩耶に続いて立ち上がった明石達が一斉に右手を額に添える中、

やや緊張感も欠けたゆるい声色で答礼と挨拶を返す高雄。柔軟性を重視する彼女の人柄はどこかヘナヘナとした印象が常に消えない感じもするが、連合艦隊旗艦を都度経験している第一艦隊所属の戦艦の艦魂達が一様に褒める仕事ぶりはちゃんと健在で、席に着くなり早速高雄は本日のお勉強会の趣旨を説明し始める。

むしろこの切り替えの早さには逆に傍から見ている立場の明石が追従しきれない事が多く、この時もまた突如としてスイッチが入ったかのような高雄の声と表情の移り変わりを受けて慌ててノートをめくり、ポッケに忍ばせたままであった鉛筆を手取る有様だった。

『大晦日前だったのに悪いね。ま、休み前、それと実地訓練前の最後の機会だから、今日はちょっと無理を承知で集まってもらったんだ。逆にそれだけ価値のある勉強会になると思ってるから、みんな一つよろしく頼むよ。』

朗らかで明るい高雄の声は開幕から長官室の空気を声と同じ雰囲気に沿わせてくれる。明石や飛龍、利根といった若年の面で底辺を充当する艦魂達はまずここで安堵と張り詰めた緊張感が解れた事による溜め息を漏らし、毎度の事ながら至って楽な気分と面持ちで10歳以上も歳が離れている先輩達がいる中での話し合いに参加することが出来る。上官としての高雄のとっても有難い一面であり、明石などは思わず小さく短い笑い声を放って指の上で鉛筆を回す余裕をも与えてもらった。

もっとも高雄もどうやらそういう効果を狙って声を放っているらしく、長官室に集った10名近い部下達が老若の差異無く肩から力を抜いた事を確認した後、本日のお勉強のお題目を述べる。

『一昨年からうちの第二艦隊は蒼龍を基幹として二航戦が配備されて、いよいよ帝国海軍の前進部隊にも航空戦力の投入が本格化してきたってのは、みんなも感じてるだろう。なんたってこれまでずっ

と第一艦隊専属だった加賀さんとこの一航戦が、先月にはついに第二艦隊に來たんだからね。でもね、私達第二艦隊の在り方は普通、快速を生かして敵艦隊に対する接触、捕捉、先制攻撃、夜間奇襲が主軸なんだ。じゃあなんでここに加賀さんや、蒼龍と飛龍みたいな空母って呼ばれる艦種が関わってくるか。・・・この辺は昨今の帝国海軍の戦策の変化も絡んでくるんだけど、どうやらこの昭和16年度からは本腰をいれて航空戦力の運用を明確にしていくらしい。これは柱島を出発する時に、長門中將からの連絡で知ってね。今のうちにある程度の理解を深めておこうって話になったんだよ。ましてやあたしら第二艦隊は、帝国海軍最新鋭の部隊だからね。』

高雄の語りを聞くに、本日のお勉強の対象はどうやら空母の事らしい。

大正の末頃に研究の側面で姿を現し、昭和に入った頃によく部隊としての配備もされ始めてきたこの艦種は、明治の建国と同時に誕生して伝統も培ってきた帝国海軍にあっては割りと新しい艦種である。その艦影もまた既存の軍艦事情から見ればなんとも風変わりで、艦体の上に乗っているのは箱型の構造物と飛行甲板という名の大屋根。見る者の視線を釘付けにする大きな砲塔も無ければ、天を衝く勢いのマストも見られない。艦影の不思議さを言うのなら林立する起重機が目立つ明石は他人の事を言えた義理ではないが、明石も初めて空母というお船を目にした際、『あれはなんぞや?』と素直に思ったのが率直な所であった。

そもそも明石の分身がそうである様に、荷揚げ荷降ろしの為の装置として起重機を沢山持っているのは海軍艦艇では珍しくても、世間一般のお船の間ではさほど変な在り方ではない。そんな事を言っただけで回ったら、海に生きる船舶の中では最も多い種族でもある貨物船の艦魂達に石を投げられてしまう。明石の分身が時に人間の海軍軍人にすらも奇妙な目で見られるのは、戦うお船が集う海軍艦艇の中にあつては珍しいというだけの事であり、そもそも波頭の果てに舳

先を進めて積み荷を運ぶという本来のお船の在り方に対しては、むしろ明石の分身の方がより近い存在でもあるのだ。

失礼しちゃうな！

その事をよく考えると思わず自分の周りに対して一言申したくなる明石であったが、同時にでは空母はどちらに近いのだろうと考えると皆目その答えが思いつかない。一応物資積み込み用の起重機は持っているがその艦影にある数本のマストよりは小さいし、そのマストもまた戦艦や巡洋艦に比べると心細い太さと大きさしか無い。海軍艦艇の間では侍が刀を腰に差すのと同じ感覚でもある大砲の類も特に目立つような姿ではないし、駆逐艦が持つ大きな魚雷発射管はそもそも装備もされていない。とにかく四方八方のどこから見ても空母とは大きな屋根を持った箱型のお船で、食いしん坊の明石にとっては決して口には出さないが大きな鉄製の羊羹の箱が水に浮いているようにしか思えなかった。

『うーん、くうば・・・？ 飛龍とか蒼龍とか、かあ・・・。』

あんまり容姿にケチをつけるのは良くないと思いつつも、外見からは全く差異が認められない空母という艦種。よくよく考えてみればこれまで一緒に頑張ってきた二航戦の飛龍、蒼龍と、先月から加わった一航戦の加賀の分身に対し、明石は艦としての大きさや年代は別として全く差異を見つける事が出来なかった。同じ巡洋艦とは言え、今しがた声を放った高雄と隣に座って何か考え事をしている神通の分身が海軍艦艇としてまったく運用方法が異なる事は明石もなんとなく解っているのだが、その反面、これまで第二艦隊の端くれとして励んできた1年半くらいの時間の中、艦魂どころか人間達の間ですら飛龍や加賀らの分身を「重航空母艦」とか「二等空母」等と呼んだりしない事に、彼女はこの時初めて気付いた。

『ぬう……、やっぱ……ひこうき……？』

なけなしの空母というお船の知識を漁ってみると、出てくるのはそんな空母最大の特徴でもある飛行機の事。とりあえず飛龍であっても加賀であっても海軍艦艇として行う事は、その大きな飛行甲板から何十機にも及ぶ飛行機を次から次へと飛ばし、次いで着艦させて艦内奥深くの格納庫に収容するという物である。もちろん細かく言うのなら何という型式の飛行機にどんな武装を施し、何機飛ばしてどの目標を攻撃するか等、明石がまだまだ知らない空母なりの考えられた使い方、運用方法という物があるのだろう。だがしかし、今しがた思ったそんな空母の事情が、同期にしてこれまで同じ第二艦隊の仲間として頑張ってきた飛龍と、10年以上も第一艦隊専属であったという加賀との間で何が違うというのか、明石には全然解らなかった。

『あゝらら。みんな難しい顔になっちゃったなあ。いやあ、まあ、あたしも良く解ってないんだけどね。……ってことで、加賀さん。教示を願います。』

『……はっ。』

相変わらず考え事とは無縁そうな気の抜けた物言いの高雄の声と加賀の短く重い返事が響き、明石はちよつと答えが出そうに無い思考の迷宮から一時的に我に返って周りを見る。どうも高雄が述べた空母関連のお話に対して頭を捻ったのは室内のほぼ全員のように、先程長官室へと向かう際にお互いによく解らないと述べていた神通と那珂は勿論、前艦隊旗艦の愛宕や、その先輩格でもある五戦隊の那智や羽黒にあって同様に、眉間にしわを寄せた顔を斜めに傾けていた。

そっかあ。やっぱりみんな解らないんだあ。

室内の一瞥して改めて自分と同僚達がこの話題に対しては同じスタートラインに立っている事を改めて確認し、明石は胸を撫で下ろしつつちょっとだけ口元を緩ませる。先程の高雄の申し出と加賀の言動を見るに、さすがにもう十年以上も帝国海軍の空母としてメシを食ってきた加賀は室内の全員に対する答えを既に持っているように、首の後ろで一本に纏めた長い黒髪を一度縛りなおしてから音も無くその場に立ち上がる。当然、それはこれから加賀がその重苦しく低い声とどんよりとした物言いでもって空母のアレコレを説明せんとしている為で、明石はいよいよ加賀を教官に迎えてのお勉強会が動き出す事を察知して加賀の真似をするかのように自分の首を後ろに手を伸ばし、髪を結う紐をギュッと縛りなおしてみた。自慢のクセの無い髪にちよつと跡が残るので普段はこうしてきつめに縛る事は無い明石なのだが、不思議となんだかお勉強に対する意欲と気概が髪の変化が研ぎ澄まされるのと同時にグンと高まる。

『いよっし……。』

その勢いと同じスタートラインである先輩方、友人に一気に差をつけるべく、明石は加賀の口が開くと同時にノートの上へと鉛筆を走らせる。

いつか工作艦の自分の分身が修理補修に当たるかも知れない、艦魂における軍医としての自分が治療に当たるかも知れない、空母という艦艇に対してのお勉強がこうして始まったのであった。

第一〇四話 「仲間達を知ろう」（後書き）

坂の上の雲、色々と面白くてみてます。

一応は原作も読んでおるのですが個人的に司馬遼太郎に関しては多少歴史に対する色眼鏡が滲んでる人間であると思っっているので、あくまで歴史題材の作品としてしか見ておりません。が、確かによく調べられておりまして、ドラマは本当に楽しく見させてもらい、色々とニヤニヤしております。

米問屋先生辺りはマカロフの海軍戦術論とか、ウィツテさんのくだりで『フヒヒ……。』とか言ってるんジャマイカと思って見てましたW

あと、今日のは何気に朝日さんが大活躍WWW

ついでに拙作の朝日は赤毛で碧眼なので、アリアズナ役の役者さんに軍装着せたら、あゝら不思議、朝日艦の艦魂になりそう等と思っって見てましたWWW

第一〇五話 「空母を知ろう／前編」

肌寒い気温の中でも陽光も眩しい防府市沖の波間。^{ほうふ}

雲も少ない青空を映し、穏やかな風はゆらゆらと揺れる小波を周^す防灘^{おうなだ}一帯に広げる。時折この海域を通り過ぎていく大小の船舶による曳き波の方が今日は目立つくらいで、防府市沖合いにて群れを成しながら錨を下ろしている帝国海軍第二艦隊配下の艦艇達にあって、今日の足元の揺れ具合はすこぶる少なくて快適であった。その上で風も少ないのだから各艦の煙突より上げる煙もほぼ垂直にゆっくりと天へ昇り、艦尾旗竿やマストに掲げられる軍艦旗は旭日の丸が殆ど見えぬくらいの元気が無い靡き方で陽光に照らされている。加えて第二艦隊の一部の艦では年越しの為にと乗組員達によって餅つきが行われていたり、長閑な風景はねずみ色の軍艦色のみで染まった海軍艦艇の甲板であつても繰り広げられていた。

『おお、みんなやってるか。』

『あ、艦長！ どうです、艦長も餅つきされませんか？』

『ははは。いやあ、オレはあ……。』

『艦長！ ここは一つお願いします！』

『そうですよ！ 艦長、是非に！』

『ははは。よしよし、解った。どれ、杵を貸せ。』

去年までは将旗を翻していた四戦隊の愛宕艦^{あたご}の甲板上でもそんなやりとりと供に、白い歯も見せた笑みを並べる多くの水兵さん達に見守られつつ、肌寒い師走の暮れにも関わらず袖を巻くって杵を手取る艦長さんの姿がある。初老の艦長さんはもう既に若い青年士官だった頃のように甲板を走り回るような仕事からは距離を置いた身で、まだまだ20代の若い盛りの者が多い水兵さん達の如く何度

も連続で杵を振れるだけの体力が無いらしい。5、6回も大上段に構えた杵を振り落とすや大きく肩で息をしてヒイヒイ言い出す始末で、気の良い彼の人柄を知る水兵さん達の中の古参の者はちよつと意地悪な感じの笑い声を上げる。

『いやあ、艦長殿にはいつも厳しく鍛えて頂いております。きっと艦長殿は私達以上に多く餅をつけるに違いない。』

『わははは。あたりめーだ、我らが艦長殿だぞお。』

『む、貴様等オレをバカにしてるなあ。はは、よし見てろお。そおら！ ほっ！』

大晦日も目の前となれば、さしもの帝国海軍も日本の家庭によく在る様な温かい雰囲気と光景に満たされる。日本の正月に不可欠なお餅はもちろんお雑煮として下級の立場の者達にも振舞われ、ちよつと偉い海軍軍人達ならおかしら付きの盛り皿が希にだが艦内での食事に出てくる事もある。お正月くらいは美味しい物を食べ、号令やラッパの音色に追い回されずにのんびりと過ごす事が、帝国海軍の生活にもちゃんと組み込まれているのだった。

その一方、長閑で笑い声も響く愛宕艦の甲板の下にある長官室では、第二艦隊の艦隊旗艦である高雄たかおと供に、長机の両脇で明石あかしや神通つうといった第二艦隊の戦隊長級の艦魂達が至って真面目な面持ちで席に着いている。今日はみんな揃っての一からのお勉強とあって明石でなくともその表情には真剣さが見て取れ、年長も若輩も関係なく加賀かがが述べる帝国海軍の航空母艦についての知識へと耳を傾けていた。

だがしかし明石が先程思ったように、空母という艦種はそも大同小異なお船であって、傍から見るとそれぞれの艦に対する違いという物が良く解らないのは皆同じである。明石や神通のような呉鎮籍の艦魂達には記憶に新しい柔道大会の会場となった龍驤艦りゆうじょう、現段階では帝国海軍最新鋭の空母である蒼龍艦そうりゅうや飛龍艦ひりゅう、逆に最古参にして人類史上初めて実戦に投入された加賀艦等々、世界的に見ても帝国海軍はその新旧大小を含めてよりどりみどりの状態で空母を保有している海軍でもあるが、その一隻一隻に対してどのような責務を負ったお船であるのかは明石達には皆目見当がつかない。

車輪の付いた飛行機を飛ばす以外の特徴とは何なのか。

一体、第二艦隊に対して、空母とはどう関わってくる艦種なのか。

誰と言わずにそんな疑問を浮べつつ加賀の語りに学び始める第二艦隊の面々であったが、この時代に飛躍的な発達を遂げている飛行機に関わるお船はやはり奥が深い。加賀先生の授業が始まって数分もせぬ内に、長官室の中は大きなどよめきが渦巻き始めた。

『ええ!?!』

『3種類……? 空母って3種類あるんですか?』

『うそ……。だ、だって形なんて全部同じじゃないか……。』

たちまち湧き上がる本日一番のどよめき。

加賀と、彼女に現在弟子入りしている二航戦の飛龍と蒼龍以外の者達は、手近な者達を顔を見合わせて今しがた耳にした空母のお話に驚いていた。それは明石を挟んだ神通と那珂にあっても同様で、第二艦隊の艦魂達の中では互いに古参であるにも関わらず、艦艇としての大小は別としてその艦影が殆ど同じな筈の船が、なんと3種類に類別できるという加賀の言葉に目を丸くしている。

だがやがて加賀は室内の喧騒が僅かに弱まったタイミングを上手

く見計らって説明を再開し、後輩達の驚きを解消してやるべく今しがた話したばかりの知識についてその詳細な理由を述べ始めた。

『・・・正確には運用の形態から3種類であって、別に艦艇類別標準で明確に重空母とか二等空母と定義されてる訳ではありません。・ ・ ・ たまに私の所に乗っている一航戦司令部の中では、他艦種から改装した空母を改装空母等と呼んだりもするんですが、これもまた便宜的に呼んでいるだけです。 ・ ・ ・ ただ、諸外国の海軍はどうかは解りませんが、帝国海軍は私が空母として竣工した頃、 ・ ・ ・ つまりワシントン海軍軍縮条約に参加した頃より研究した海軍軍備の延長として、現在の空母という艦艇の運用方法を大きく3種類に分けて考えています。』

そこまで言うとな加賀は席から離れて高雄が座る上座の方へと歩いて行き、高雄の隣の椅子に座っている摩耶まやが勉強会の前に用意していた小さな黒板へと手を伸ばす。ちょうど人の肩幅くらいの黒板は三脚イーゼルによって胸の高さ程に固定され、長机の両脇に列を作って視線を向ける第二艦隊の艦魂達は遮蔽される事無く黒板を見る事ができる。おかげで170センチも後半に迫る身長を持つ大柄な加賀がチョークを黒板へと走らせる様子を全員が目映し、何が書かれるのだろうかと思石も座ったままでちよつと背伸びをする様にして注目した。

すると加賀は何やら枠で囲った中に聞き慣れた艦艇の名前がいくつか書いた黒板を皆に見えるように高雄の真横辺りへと進め、一度小さく咳払いをすると黒板のあちこちを指差しながら皆が驚いた空母のお話を続ける。

『・・・まずはみんなが解り易い種類としては、飛龍や蒼龍みたいな快速で相応の艦載機を積んでる新鋭空母群。 ・ ・ ・ これは主力部隊による決戦に先立って前進部隊たる第二艦隊と共に、果敢に前線

を走り回って敵艦隊の搜索、次いで攻撃を敢行し、敵水上艦艇、特に敵性空母の制圧を主目標にして行動する空母です。・・・便宜的に、機動攻撃型空母・・・、とでも言いましょうか。・・・この種の空母が最近はかなり重要視されている様で、現在横須賀と神戸川崎造船所で建造されている新型空母2隻、それから今年より空母改装に取り掛かっている一部の潜水母艦なんかも、既にこの機動攻撃型空母として配備される予定になっています。』

『機動攻撃型・・・。』

ゆっくりとした低いトーンに加賀の声は普段は何かノロノロとした物言い、声を交えるのがちよつと一苦労でもあったりするが、本日のお勉強に際しては理解が遅れている者を置き去りにして話が進む事は無い為に都合が良い。おかげで第二艦隊の中では最も戦闘艦艇の知識が貧弱である明石も今しがた加賀の述べた事をひとまず理解できたが、そのお話にあった飛龍や蒼龍等の分身には随分とまた大層にして無茶気味にも思えるお役目が課せられている物だとちよつと驚く。自分達の事であっても元々明石はあんまり海軍艦艇の運用にはこれまで接した事が無い為にその驚きは当然の感情で、その分だけ誰も聞かないような素朴な疑問が色々と彼女の脳裏には浮かんでくる。

そこで明石は思い切って片手を高々と上げ、室内にいる仲間達に理解が遅れない様に質問してみる事にした。

『あ、あの。か、加賀さん。今のせ、せいあつてどういう意味なんでしょうか？ どうしてその、撃沈とか言わないんですか？』

『・・・ほう。』

多くの先輩方、お偉方も居る前での発言という事もあり、ちよつとおっかなびっくりで声を上げた明石であったが、それに対して何やら加賀は前髪で隠れて影に浮かんでいるような鋭い瞳を怪しく光

らせ、至って短い感心の声を上げる。どうも人柄としてどんよりとしていてクセのある加賀の言動は明石にはとっつき難い感じがあるも、そんな加賀は少しだけ怯んだ明石に対してなんとお褒めの言葉を投げてきた。

『・・・ふむ、良い質問だ、明石。・・・そう、さっき果敢に攻撃すると言ったけど、この機動攻撃型空母というのはただ敵の艦艇の撃沈を狙ってやみくもに攻撃する訳じゃない。』

『え・・・？』

些か詭弁めいた加賀の返答に明石は目を丸くしてしまい、両隣に座っている神通や那珂^{なか}を始めとした他の艦魂達も加賀の言葉の意味がさっぱり解らなかった。

撃沈を企図せずに攻撃を行うというなら、一体その目的はどこにあるというのか。

明石達は思考の迷宮に囚われた頭をカクンと傾げるが、加賀はそれ自体が帝国海軍の戦策と密接に関わってくるプロセスの一環にして、本日のお勉強における空母の運用方法の特徴だという事をささず教えてやる。

『・・・飛行機という物は、最近では400マイルも遠くまで飛んで帰る事ができる。・・・戦艦の主砲に比べても抜群に攻撃圏が長い上、せいぜい4門程度の斉射でもって敵と長時間の殴り合いをする必要も無い。・・・相応の編隊で攻撃隊を出せば、短時間での飽和攻撃を仕掛ける事も出来るし、実際に魚雷や爆弾を放つ直前まで人間が誘導するから命中率の上でも中々の物だ。・・・ただ、戦艦の主砲の威力はやはり絶大で、発射された砲弾の貫通力は分厚い装甲を貫く最も効果的な攻撃手段でもある。・・・富士山と同等か少

し高いくらいの高度から爆弾を放る飛行機では、戦艦のような主力艦には艦の内部まで到達するような攻撃は不可能だろう。・・・それと最近の戦艦の射程は16マイル、3万メートルでの射撃も可能なくらいに引き上げられていて、当然こうなると艦自体からの照準や観測は困難を極める。・・・誤差も大きい。・・・だから観測機として常時艦隊の上に常駐させ、戦艦による射撃面での精度向上に寄与する任務も与えられているのが飛行機。・・・そしてそんな多様な飛行機を扱うのが空母なんだが、敵もまたそうやって空母を使ってくる。・・・特にアメリカ海軍は、我が帝国海軍と同等かそれ以上の空母戦力を持つ油断ならない相手だ。』

普段はから言葉数の少ない朴訥とした人柄の加賀は、無口な自分を意識せずに仲間達へと空母のお話をした為か、ちよつとしゃべり疲れたように溜め息を小さく吐いてふと上げた手の甲で頬を一度撫でる。いつも使わない分お口周りの筋肉に疲労を溜めたらしく、仲間達が視線を集中させている面前でその内に手を添えた顎を動かし始めた。

『だ、大丈夫ですか、加賀さん？』
『・・・・・・・・』

歯の噛み合わせを確かめるように加賀は何度も顎を上下させ、長い沈黙に我慢しきれ無くなった高雄の問いかけにも僅かに頷くばかり。短くても良いので一言ぐらいの返事を返しもせず、ここに来て加賀独特の間の悪い無口ぶりが現れてしまった。

そこで高雄は加賀の回復を待ちつつ誰も発言しない今の瞬間を何とか取り持とうと企図し、先程質問を投げた明石と目を合わせるや

自分もまた率直に感じた疑問を声へと変えてみる。

『い、いやあ、しかしアレだね。観測機のお役目まで空母が担うつてのは驚きだ。これじゃあたしらが積んでる水上機の搭乗員は商売あがったりだねえ。一回ポンと飛びゃあ6円も手当てが付くの。』

『『『はははは。』』』

『いえ、あ、あの、それが懸案の部分なんです。』

持ち前の冗談と面白おかしく物事を話題に挙げる高雄の声で、長官室の室内には緊張の糸も随分緩んだ笑い声が木霊する。しかし立て続けに皆の笑い声を制したのは、明石と同じくちよつと戸惑いながらも若さが溢れる声。見れば高雄や加賀がいる上座とは逆側である長机の端で、先輩方の視線が集まってきた事に少し顔色を変えている飛龍が席から立ち上がっていた。

『ん？ どういう事だい、飛龍？』

意を決して上げたであろう先程の飛龍の発言について、皆の一瞬の笑い声と供に氣を楽にした高雄が尋ねてくる。大人しくて人当たりも柔らかい飛龍の事を同期として知っている明石は、今の今まで長机の端っこにちよこんと座っていたそんな彼女がいきなり声を上げたのでちよつとビックリしつつも、焦りと緊張の色合いも濃い表情の中で飛龍が加賀へと何度も視線を配っている事にふと気付く。先月の艦隊編成以来良き師弟の間柄として接している故か、飛龍は人前であんまりベラベラと話す事になっていないお師匠様の様子を心配し、ちよつと話題が中断した部分を自身が知識として蓄えていた事もあって発言したようだ。

すると明石が視線を流した長官室の上座では、加賀がそつと喉を擦りながら飛龍の視線に無言で頷く姿がある。前髪に隠れ気味の鷲

を思わせる鋭い瞳は声には変わらぬ言葉を教え子へと運んだようで、飛龍は思い切って並居る先輩方の前でお仕事における発表をする事に決める。弟子入りから僅かに2ヶ月だがどれ程の成長をしたのかを、加賀は高雄の様なお偉方や自分や神通等といったベテランもいるこの場で見極めようとしたのだった。

『そ、それでは。え、えと、艦艇搭載の水上機は確かに観測や偵察を最初から狙って作られた飛行機なんですが、飛行性能の面ではやはりフロートの無い空母艦載機の方が優れています。同じ二座以上でしたら九七艦攻なんかの方が速度も早いですし、航続距離も長いです。それと一番の欠点は、水上機は運用に対しての制約が艦上機よりも多い事です。高雄少将を始めとした巡洋艦の皆さんも経験があると思うのですが、艦艇搭載の水上機は基本的に露天繫止で維持と整備の点は天候の影響も大きく、その上で搭載したままだと主砲の発砲で損傷する事も割と頻繁にあります。また、実際に飛ばすに当たっての連続発艦では単艦辺りだと2機が限界ですし、任務を終えて収容する時なんかは艦を停止する必要があります。さっき加賀さんが仰ったように艦砲の撃ち合いを十分な時間で実施するにあたって、連続使用においては余り向いていないのが水上機なんです。ある程度の設備を備える艦なら海上でも使える点では確かに便利なのですが、まさか撃ち合いの最中に艦を停止したり、陣形を崩した事もできませんし・・・。』

明石と同じやっと20代になったくらいの若い容姿を持つ飛龍も、さすがに1年以上の時間を最新鋭空母として励んで来ただけはある。先輩方の前で語ったその内容は、中型以上の海軍艦艇の間では当然のように搭載されている水上機の現実を懇切丁寧に説いた物で、水上機を見た事はあっても自身の分身の装備品として所有はしていない明石は、知られざる飛行機事情を学べて感心してしまう。加えて加賀のお話の補足の役目を飛龍はちゃんとまっとうできた様で、明

石の隣では神通が飛龍の言った事を肯定する声を放ち始め、その後にこの場では最も立場的に偉い艦魂である高雄と愛宕も続く。

『むう。確かにずっと以前から水上機の運用による懸案は出ていた。艦砲の衝撃波による損傷は空中に回避させたりして何とかする事もあるが、収容の時は穏やかな海面でほぼ停止状態にならないと起重機による揚収はまず不可能だ。・・・私は特に水雷戦隊の旗艦でもあるから、その間に子隊ねたいの奴らを単独で前進させる訳にも行かなくてな。演習でも困った事が何度も有ったモンだ。』

『あゝ、そう言えば、あたしとか愛宕も水上機の回収に手間取って艦隊の前進を遅らせちゃった事、何回かあるよね？』

『ああ。特に前進部隊たる私達、第二艦隊の持ち味はとにかく快速でとび抜けた機動性を有する事。それなのに途中で何度も休憩になつてるぞと、少し前には随分と問題になっていたね。当時の艦隊司令部の人間達も、随分と夜遅くまで頭を捻っていたりしたな。』

室内に木霊するお偉方の会話は、今まで明石がなかなか触れる事のできなかった単なる飛行機の知識である以上に、実際の経験も加味された水上機のお話。おかげさまで明石は水上機という代物の側面に理解を深くし、早速自前のノートに今しがた耳にした内容を記していく。時折重要だと明石が思った所には下線を引いたりして平坦な箇条書きにはなっていない文字の羅列がノートの紙面を埋めていくが、どうもその内容を要約するに海軍における飛行機という代物は、水上機よりも陸上機の延長である空母艦載機の方が現場に当たる艦隊での運用にはあっては色々都合らしい。もちろん板を渡した栈橋一つあれば砂浜が飛行場に早変わりする水上機独自の魅力も有るが、お船の集団たる艦隊にあっては性能、運用供に空母艦載機は段違いに使い勝手が良いとの事だ。

『ほう、ほう……。』

そもそも飛行機についての知識が皆無に等しい明石。おかげで変に先入観を持たない彼女の思考は、仲間達が声に乗せる飛行機のアレコレを至ってスムーズに知識へと変換して蓄えていく。同時に空母の存在価値という物が艦隊の中でそれほど小さくない事を段々と解ってきた矢先に、突如としてそれまで酷使した喉を休めていた加賀が先程よりも幾分暗さが増した声を上げ、なんとも重苦しい彼女の語りに思わず明石の鉛筆を握った手が止まる。

『……。艦艇搭載の水上機を使って行う物よりも、更に優れた航空作戦能力を艦隊行動に組み込むに当たっては、いま飛龍が言った様に空母という艦の価値は少なくは無い……。そもそも水上機に円滑な観測をやらせるには、せめて艦隊周辺空域の制空権を戦闘機でもって確保しなければならぬですからね……。だが、それは私達が戦うかもしれない敵だって同じです……。特にその面で最も私達のような空母の艦魂、そして人間の海軍軍人達が目を光らせているのは、太平洋を挟んで居を構えているアメリカ、そしてその海軍である米国海軍です……。飛龍、もういいぞ。』

いつの間にか腕組みをして鋭い瞳を細める加賀はそう言って手で合図して飛龍を座らせた後に、簡単に米国海軍がなぜに今の話題である空母のお話において重要なのかを説明し始める。

彼女の言葉によれば昨年よりの欧州戦線の情勢により、アメリカは躍進凄まじいドイツがフランスを制圧した事によって大西洋の覇権を維持する海軍力の必要性を見出したらしく、今年の7月に「両洋艦隊法」なる対予算成立を目した国内法律を制定して海軍艦艇の

大增産に乗り出しているらしい。もちろんさすがの大金持ちであるアメリカも金食い虫である海軍艦艇を増やす事に議会は紛糾し、その情報は太平洋を越えて日本にも届いていた。

だがその内容がとんでもない代物だった。

なんとたった一つの増備計画に綴られている数字は、戦艦2隻、大型空母7隻、駆逐艦100隻以上を始めとする総トン数およそ130万トンにも及ぶ大勢力で、これは今現在の帝国海軍の正面戦力とほぼ同等の数である。必死に食いがたつてやつと対米7割を確保できるかどうか関の山の貧乏島国に対し、このアメリカという国はそんな島国の一個海軍に相当する艦艇を作るに際して、とにかくにもその計画書に認可のサインを現実綴ってみせたのだった。

そしてそんな大增勢計画の中にある空母7隻という数字は、多少は空母と海軍艦艇としての知識が身に付いている中堅の艦魂達に、すぐさま先程までの空母のお話とこの米国海軍の増勢との間に存在する繋がりという物を直感させる。今しがたの加賀が放った『敵も同じ。』の一言も、まさにここを示していた。

『・・・米国は途方も無く国力が豊かで、その上で欧州戦線に加勢していない事から軍備の整備がやりやすい環境に一応はあります。・
・恐らく米国海軍も我々と同じように海軍軍備としての方向性の重要な部分に、艦隊での航空作戦という物を置いているのでしょう。
・・・この空母7隻建造という数字はその表れだと思います。・・・
それだけ空母という艦種は、現代では注目されているのです。』

日本だけに留まらない現代海軍軍備の風潮を語る加賀。日米供に

まだ運用し始めて10年そこそこのこの艦種が注目される理由はこれだけでは無く、彼女は咳払いを放って声色を整えなおすや、今度はいよいよ先月に欧州戦線のタラントという軍港を英国の空母艦載機隊が攻撃し、停泊中の戦艦も含めたイタリア海軍が大損害を被ったという話を持ち出して、艦隊としての航空兵力が示す戦闘事例を皆に教えてやる。

ましてタラント軍港での戦闘は、現代海軍事情の艦隊航空作戦における動かしようの無い現実その物。それだけ日米に関わらず世界各国の海軍の中で敵としても味方としても最も注目されているのが、艦隊航空戦力のプラットフォームたる空母という艦種なのであり、明石を含めた第二艦隊の艦魂達が空母の重要性を改めて思い知るには十分なお話であった。

だがしかし、ここまでの空母のお話は加賀や飛龍、蒼龍らにとっては初歩のお話で、彼女達3人はそんな空母の将来を予測して既に優秀な帝国海軍の男達が対抗策を見出している事をも知っている。

大正の頃よりよちよち歩きの中で空母を扱ってきた経験があったればこそ、帝国海軍は空母の運用に関して世界的にも一歩リードするだけのノウハウを持っており、もちろんそれらは自分達における空母の使い方と供に、敵の空母に対しての有効打を研究する為の大事な土台となっているのだ。その結果、空母や飛行機の発達と米国という大洋を挟んだ大国家の事情を総合して編み出した物が、ついさっき加賀が皆に説明した飛龍と蒼龍の分身の事である。

加賀は再び喉を擦りながら持ち前の野太く低い声でもってその事を教え、よく将来も見越した上で帝国海軍の人間達が編み出した空母の運用を仲間達に説明するが、ここまで彼女の話を目に耳にしてきた第二艦隊の艦魂達はここに至ってようやく、ついさっき話題に上った飛龍や蒼龍の分身が「機動攻撃型」等と呼ばれ、随分と無茶気味にも思える役目を課せられている事の真相を悟る。

明治の頃より帝国海軍は仮想敵として米国海軍を対象としてきたのは周知の通りだが、当時より大金持ちの裕福な国であった米国の海軍はその保有する戦力が帝国海軍とは比べ物にならない。良質な鉄資源、飛行機や魚雷も含んだ近代工業製品には不可欠な高級潤滑油、様々な機関の燃料となる為に最先端技術で精製された優れた発燃用の油資源、正確に物を作る為に一級の精度が求められる工作機械等、その殆どを未だに日本は他のどの国でもないアメリカから買っており、自動車に代表される工業力の凄さはそのまま海軍艦艇の世界にあっても適用されている。余談ながら飛龍達や加賀の分身に搭載されている降下爆撃隊の戦法、すなわち飛行機による急降下爆撃も、そのルーツはアメリカで実用化された急降下爆撃を帝国海軍が取り入れた事に始まるのである。

そんな米国の海軍なればこそ、仮に戦争となったなら帝国海軍がいくら背伸びしても届かない規模でもって来寇する事は明白であり、彼等の様な大国の海軍は帝国海軍の総力と真正面から殴り合いを演じてでも打ち負かせるだけの兵力でもって太平洋を進撃してくる。逆に帝国海軍はいくら頑張ったってそんな大国級の海軍を持ってないお財布事情なのだから、負けると解っている足を止めての殴り合いはせず、ボクシングで言う所の足と細かいパンチを使った精巧な戦いをせねばならない。

国家を人間と見た際、資源という名の体力を持たないお国柄なのだから、仕方の無い事である。

故に帝国海軍は明治の頃より、秋山参謀の名でも名高い「七段構えの戦策」がそうであるように防御と迎撃に特化した戦策を研究し、正面からストレートを打ってくる敵に対して一撃ダウンには繋がらないボディーへの攻撃や遠目からのジャブでもって体力を消耗させ、ようやく条件が同じになった頃合を見計らって強烈なカウンターを打ち返して一挙に形勢を逆転させる戦略を採用し続けてきた。

それこそが現代の帝国海軍の必勝戦法たる、「漸減要撃」構想な

のである。

その観点で見た際、まず一番に気をつけなければならない長距離から飛んでくる敵の最初のパンチが、いわゆる飛行機であった。

先程加賀が言った通り、飛行機は視界や戦艦の主砲の射程距離よりも遙か向こうまで活動できる能力が有るのだから、優勢な航空戦力を保持する側は姿も見えない長距離から完全なアウトレンジでの攻撃を仕掛ける事が出来る。そうなるに米海軍の優勢な艦隊航空戦力は待ち構える側の帝国海軍には非常に脅威で、下手をしたら帝国海軍が漸減される側になってしまう危険性が相応にある。唯でさえ規模の面では既に劣勢なのに、開幕一番でいきなりハードパンチャーの一撃を受けたら規模の小さな帝国海軍にはもはや勝機は絶対に無い。

そこで栄えある帝国海軍の優秀な人間達が考え出したのが「まずはそんな厄介なパンチを打てない様にしてしまおう。」という作戦であり、決戦の初動として敵性空母を先制攻撃して制圧する事に特化した飛龍艦や蒼龍艦の様な空母は、まさにこの事情から生まれた存在なのだった。

『・・・二航戦の二人は快速を生かして機先を制し、貫通力は低く威力がそこそこであつても命中率の良い降下爆撃を主にして空母を攻撃します。・・・それに対してさっき明石は、何故に撃沈とは言わずに制圧と言ったのかと質問したな？』

『あ、は、はい。』

『・・・その質問が関わってくるのは、まさにここ。・・・重要なのは敵の艦隊航空戦力が活動できない状況にする事だ。・・・もちろん撃沈できれば儲け物だが、・・・艦首から艦尾まで広がってい

るあの大きな飛行甲板に大穴を開けてやったり、普通の船に比べて飛び抜けて多く積んでる航空機用の揮発油に火をつけてやればそれで十分だ。・・・飛行機の発着が出来ない空母なぞ、棺桶か自走の重油タンクでしかない。・・・その後の夜に予定されている夜戦では、神通中尉達のような水雷戦隊の恰好の標的になるだろう。』

加賀のそんな語りによってようやく明石の質問が完全な解答を得、彼女は思わず『おお。』等と感心の吐息を漏らしてしまう。今までは艦魂として同期だからと割と親しく交流してきた飛龍と蒼龍に、まさかこれ程までに深く考えられた上での運用が考えられているとは思ってもみなかった。

このお勉強会が始まる前に挨拶した高雄の言葉から察するに、これらの空母の運用はまだ計画とか予定の側面が強い様で、いよいよ今年から本格的な訓練の実施がされていくという事であったが、艦魂として年頃も近い蒼龍や飛龍がそんな構想によって生まれたならば、今しがた脳裏に刻み込んだばかりの空母の運用は実に5年以上も前から考えられていた事になる。

昭和一桁にして、まだまだ明石の分身が凶面の上でようやく生まれていたかどうかの時期だ。

『すんごいなあ。』

なんともありきたりな言葉でちよとした感動を示す明石。純真無垢なその感動は明石の思わず放った声の音量を殆ど抑制せず、長官室の中には彼女の目を輝かす表情を目にした仲間達の笑い声によって僅かに明るくなった雰囲気が始めていく。

するとその最中、明石とは長机を挟んで反対側へと座っている五戦隊の那智^{なち}が、明石と同じ考えの下に質問の声を上げた。

『加賀さん。飛龍達のような空母の事はよく解りました。ただ、艦

隊旗艦のようなお偉方も含め、それって人間の海軍軍人達の間でもまだちゃんと把握しきれていないんですね？ 今年から本格的な訓練を始めるって話ですけど、準備は進んでるんですか？』

『・・・もちろん。・・・この話は軍令部や海軍省の人間達も含め、下準備自体は既に今から3年ほど前より始まっています。』

ちよつと心配するような物言いの那智の質問に対して加賀は大きく頷くと即座にそう答え、すぐ傍にあるイーゼルに掛けられた黒板に再びチョークを走らせ始める。乾いた小気味の良い音を放って記されていくのは2桁の数字の羅列で、飛龍や蒼龍の分身における空母としての特徴を説明する際に書いていた二人の名前の横には各々3段づつに分かれて数字が記され、それを書き終えて振り向きながら加賀は那智への回答の詳細を述べた。

『・・・これは昭和12年に作られた？艦船飛行機搭載標準？という名の軍令部の書類に書かれていた数字でして、蒼龍がようやく就役間近であった頃に搭載を予定していた艦載機の編成です。・・・上から戦闘機9機、爆撃機33機、攻撃機8機の順です。・・・言うまでも無く、降下爆撃を行う爆撃機が最も多く搭載されています。・・・もちろん専門では無かったでしょうが、この8機の艦攻隊も、攻撃よりは偵察や哨戒を主任務にしていたと思います。・・・ここ最近では、飛行機搭載の照準器や対艦攻撃方法が発達したので艦攻隊による編隊水平爆撃の精度も上がってきましたし、戦闘機が少ない事による攻撃隊の損害が支那戦線で問題となった事もあって、搭載機の編成はもっとバランスの良い物になっています。・・・ただそれでも戦闘機12機、爆撃機27機、攻撃機18機という構成で、飛龍と蒼龍が帯びている、敵性空母に対する先制攻撃による制圧、という役目は今でも確定しています。』

『なるほど。既に刀の準備は出来てて、あとは剣術の腕前を磨くだ

けって事か。』

予期できぬ第三者からの疑問を受けても動じぬ加賀は、人間達が
用いる資料の名前と内容を記憶から示して那智の理解を得てみせる。
これでもう少し愛想と愛嬌があれば素晴らしいのだが、どんよりと
曇ったような人柄と物言いにも関わらずちゃんと根拠となる資料を
明示し、しかもまたその内容をしっかり記憶しているという加賀の
姿は、やはりさすがはベテランと言った所。

既に30代も控えたくらい的女性像を容姿としている事もあり、
愛弟子の飛龍や蒼龍に限らず明石もまたその立派な仕事振りに溜め
息を漏らした。

『ぬううう……。加賀さん、よく勉強してるんだなあ……。』
『……。ふん。ま、あの人は確かに凄いな。さすがに横須賀で富士
さんの英才教育を5年間も受けてただけの事はある。』

『ふふふ。加賀さんは努力家なのよ、明石。恐らく帝国海軍の中で、
最も艦艇の運用に精通している艦魂ひとが加賀さんよ。私も見習わなく
ちやね。』

小さな声で感心の言葉を呟く明石の両脇から、神通と那珂が同調
する声を重ねてくる。この二人はお互いに20代後半の女性の容姿
を持っている事からも解る通り加賀とはほぼ同世代の生まれなのだ
が、僅かに1年ほど加賀が艦齡の面で上回っている事と階級の差も
あって加賀の事を語る際はかならず「さん」と付け、なおかつ加賀
の寡黙ながらも仕事が出来るところを素直に尊敬している。気軽に相談
できる姉妹もおらず、空母という海の物とも山の物とも解らない艦
艇を分身とする中で、それだけ加賀は何事にも頑張ってきて仲間内
にも認められている人物なのであった。

その上で姉妹の有無と分身における艦艇としての珍しさという二
点は、明石にも共通する所でもある。むしろ工作艦として朝日とい

う大先輩が手取り足取り教えてくれる自分と比べ、生まれた頃は運用の面で謎だらけだった加賀はもっともっと辛く厳しい環境の中で生きて来たのだらうと明石には思えた。

『ぬうう……。勉強だあ。』

何か自分に言い聞かせるようにして明石はそう呟くと、ついさっきの那智と加賀のやりとりを忘れぬ内にノートへと記していく。まだ自分は新米である事を加賀の姿に見せつけられた様でちよつと悔しいとも思ったが、同時に皆の前で腕組みしたまま黒板の脇に立ち、那智に続いてチラホラと上がってくる質問に『知らない。』とか『解らない。』等と言も発せずに応じてみせる姿は、これまで朝日ばかりを目標だとしてきた明石の瞳には中々新鮮な艦魂としての理想像の样にも映った。

そしてその為に今の自分に必要なのは一にも二にも勉強なのであると明石は察し、加賀の姿に見惚れもせず、落込みもせずひたすら鉛筆をノートの上に走らせる。

大体が今日の空母に関する勉強会は、まだ終わっていないのである。

『よし、みんな質問は無いようだね。じゃ、ここで10分の休憩いれようか。加賀さん、この後も引き続きよろしくお願いしますよ。』

『……。はっ。』

『よし。ちょうど廁行きたかったんだ。』

あらかた加賀への質問が終わったと見るや高雄は休憩を宣言し、いの一番で椅子から腰を上げると長官室のドアを勢いよく開けて走り出す。ふと室内の隔壁にて絶えず時を刻んでいる時計を見た明石は、夢中になって勉強していた長官室での時間が既に2時間も経っている事に驚きつつ、ドアの向こうの通路から木霊する高雄の悲鳴

のような声に頬を緩めた。

どうやら高雄はかなり我慢していたらしい。

『漏れる、漏れる〜！』

『『はははは。』』』

真面目なお勉強会のお時間は、こうして和やかな空気を残した上で休憩を迎える。

艦の主である愛宕はすぐさま摩耶と一緒にお茶と保存期限間近で余り物となっていた乾パンを長机の上に用意してくれ、厠や喫煙の用が無い者達は長官室にて疲労した頭脳を休め始めた。明石も大きな溜め息を一度放って椅子に浅く座りなおし、用意してもらったお茶を飲みながらこれまで記してきたノートの記述を読み直してみる。

飛行機にも水上機と艦載機という物があり、空母にも考えられたお役目があり、その為にこうして集う第二艦隊の編成もまた、それはそれは上手に考えられて作られている。例え艦魂達の顔ぶれであっても実に多くの知識と研究がそこには反映されており、こんな複雑にして巧妙な物事を編み出した人間達は本当に凄い存在なんだなと明石は改めて感心し、この後に再び加賀が説明してくれるであろう空母のお話を心待ちにしながら、明石は僅かな休憩時間を仲間達と過ごすのだった。

第一〇六話 「空母を知ろう／後編」

愛宕艦長官室では、第二艦隊所属の艦魂達による勉強会の休憩が宣言されてからまだ数分しか経っていない。

厠や喫煙の為にと部屋を一時後に行っている者もまだ戻ってはおらず、空いた席もチラホラと目に付く部屋の中ではちよつと疲労の吐息も混じった艦魂達の休む姿がある。真水の節水が厳しく守られる帝国海軍艦艇では、こんな時にホツと一息つく為に飲める物は個人で作っておく魔法瓶に入れたお茶くらいで、彼女達は少しぬるくなつたお茶にささやかな暖と憩いの一時を得ていた。

その中には隣同士の席に腰掛けて仲良しぶりを不変とする明石と神通、那珂の姿もあるが、その内に小さな声で談笑しているこの3人の顔にはぬつと大きな影が覆われていく。

『・・・明石。』

『およ？ あ、加賀さん・・・。』

神通以上にのっぼさんである加賀。どんよりと沈んだような低い声と感情が希薄な彼女の表情は、話しかけ辛い人柄であるのと同時に話しかけられても応え難いという会話の特徴を第三者へと与えてしまう。決して心当たりこそ無いがどこか怒られそうな雰囲気も過分にあつて、明石は返事をするとそれ以上の言葉が口から出てこなくなる。おまけに加賀の間の悪い無口ぶりがここでも威力を発揮し、自ら話しかけて来たにも関わらず何も言わずにしばし明石の顔をじーっと眺めている。

なんとも困った人だ。

『・・・さっきの質問、・・・おかげで皆、飛行機とは何かという所から理解が出来た。』

いつも通りのノロノロした物言いながらようやく放ったその言葉を耳にするに、どうやら先程の勉強会の中で明石がした質問の事を褒めてくれているらしい。長い沈黙の末に出た割りにはなんとも拍子抜けだ。

『あ、あはは……。ど、どうもですう。』

『……。うん……。解らない事を解らないと口にするのは悪い事じゃない……。むしろ解らないままその場を過ごし、勝手な解釈の末に誤った判断をする方が始末が悪い……。特に私ら海軍艦艇は、命のやりとりを行うのが真の生業……。血を流したくないなら、代わりに汗を流しておくんだ。』

苦労人の果ての悟りか、それとも艦齢15年以上の成せる業か。

中々に良い台詞を放ってみせた加賀はちょっとした感動を覚えた明石が目輝かせると同時に踵を返し、教え子の蒼龍そうりゅうや飛龍ひりゅうがくつろいでいる姿を隣とする自分の席へ戻っていく。口数が少ない中で、一言であったのも大きい故か、離れていく加賀の背中に反して、『血を流したくないなら汗を流せ。』の言葉は物凄く素晴らしい格言として明石の脳裏に残された。

『加賀さん、かっくいい……。』

少し呆けた感じの表情の中に爛々と輝く目を浮かべ、スタスタと何事も無かったかのように去り行く加賀の後姿に明石は見惚れる。ちょうど明石の瞳に映る、首の後ろで強く縛った腰まである加賀の長い黒髪は艶も美しく、痩せ型で女性にしては大柄なその姿は髪型も含めて明石との間に容姿における共通点が偶然にもたくさん有る。

も、もしかしたら、10年くらいしたら私もあんな風になるのか

な!?

ちよつとはしゃぎ気味でそう思うと、寡黙な所は別としても加賀の先輩っぷりが段々明石には根柢の無い自分の将来像へと重なりだしていく。完全な願望と憧れだけが先行した妄想であつたが、それぐらい今の加賀は明石にとっては格好良かつた。

そして目の前にこうだったら良いなと願う理想が体現されていれば、憧れへの距離を身近に感じる事が出来てもう一頑張りと己を奮い立たせる事が出来るという物。明石もその例に漏れず、随分とお人柄の点では自分とは違う型の人物である事を承知しつつも、幾年か経って自分がベテランと呼ばれる頃には今しがたの加賀の様に格言の一つでも口に出来る姿でありたいと強く願う。

今日はなんとも加賀の姿に発見の多い日だ。

『お、大体揃ってるかな? よおし、じゃあ後半を始めよっか。』

明石が一人十年後の自分像に迫らんとしていた長官室に、そんな声を上げつつ高雄たかおが入ってくる。喫煙者である彼女は廁の後に冬の寒さも少し和らぐ本日の晴天の下、防府の波間を横目に上甲板で一服してきたようで、首に巻いた黒いマフラーを解く彼女の後ろからは他に那智等なちの喫煙者達数名が続くようにして長官室へと戻ってくる。思い思いの休憩は僅か10分の時間であつてもそれぞれに気持ちの区切りを設けてくれ、座学ばかりの本日のお勉強会の後半が始まるに当たって各々がお勉強の意欲を改めて臨む。

もちろん明石もしばしの休息と、容姿の共通点が多い加賀の格好良い姿に憧れた事でやる気が漲っており、高雄にお願いされて再び上座にある黒板の横へと足を進めて行く加賀を瞳に映しながらノートと鉛筆の準備を始めた。

そんなこんなで始まった第二艦隊所属の艦魂達による勉強会は、前半で教わった空母のお話の続きが早速加賀によって説明されていく。すなわち3種類に類別される空母における、2種類目の空母のお話であった。

『・・・では・・・二航戦に続く空母ですが、・・・これはこれまで長く第一艦隊で一航戦を成していた私や、ペアを組んでいた赤城あの様な空母を指します。・・・便宜的な言い方をすれば、主力部隊随伴の攻撃型空母、と言った所でしょうか。・・・敵性艦艇への攻撃の面では先程の飛龍や蒼龍らと同じですが、空母を標的として前線を行動する二航戦に対し、私の一航戦は長門ながとさん率いる第一艦隊の主力戦艦部隊と一緒に行動します。』

今度の空母は加賀自身も含めた一航戦に属する空母の事らしく、菊の御紋を舳先に頂いた空母の中で最も大型にして、古参格でもあるが故に国民からの認知度も抜群に高いという加賀らが、一体どんなお役目をその大きな艦体に忍ばせているのだろうと明石達は耳を澄ます。とりあえず今しがたの語りを聞く限りではどうも加賀や赤城はその堂々たる分身の姿に反し、前出の二航戦の空母らよりも防御にそこそこの比重を置いているらしい。

加賀は続けて自身を含めた一航戦の空母の事を、より詳細に仲間達へと説明してくれた。

『・・・攻撃の主な目標は敵の主力戦艦部隊で、戦艦同士の砲撃戦となる前に味方の着弾観測機の支援、そして逆に敵性着弾観測機の排除を目的として戦闘機隊で制空権を構築しつつ、敵戦艦部隊に対して事前の航空攻撃を行います。・・・但し、これは先程の二航戦

とは違った艦艇の機能を奪う制圧攻撃ではなく、完全に敵艦艇の数を削減する事を念頭にした撃沈想定 of 攻撃です。・・・故に攻撃方法も、甲板上の構造物に損害を与える降下爆撃よりも、浸水の危険を常に控える水線下への損傷を企図した雷撃を重視しております。・
・戦艦は傾斜によつては、大重量の砲弾や装薬を扱う揚弾、揚薬の設備に支障が出易いのです。・・・加えて多量の浸水で速度が落ちた艦が一隻でも存在すれば、その艦を有する敵戦隊では落伍して集中射をうける僚艦を出さないようにと、所属の全艦が一斉に速度を落とす事にも繋がります。』

『なるほど、あわよくば撃沈。例え損傷を与えるにしても、砲撃戦の最中の速度を遅くしてやろうって魂胆かあ。』

加賀の説明に頷きつつそう言った高雄はすぐ傍にある黒板を見る。そこには3つの枠に分けて帝国海軍の空母の名前が何隻か書かれており、休憩前に説明した二航戦の空母に搭載が予定されていたという搭載機の編成もまだ消されずに残っていた。

『じゃあ、加賀さん。やっぱ加賀さんや赤城さんの搭載機も、この飛龍や蒼龍の搭載機とは編成が違うんですか？』

『・・・そうです。・・・一応、書いておきましょうか。』

説明に付随して何某かの根拠があれば解り易いのは、人間であっても艦魂であっても変わらない。前回の飛龍と蒼龍らのお話の際と同じように、加賀は自分達の様な空母の特徴を示す一例として再び黒板の片隅に3段に分かれた数字を記しつつ、その数字が意味する自分達にかつて予定された搭載機の編成を同時に声にも変えていく。

『・・・これは休憩前に飛龍と蒼龍の搭載機を説明した時にも使った、昭和12年の？艦船飛行機搭載標準？という書類に書かれてる

赤城と私の分の搭載機編成です。・・・上から戦闘機が12機、爆撃機が18機、攻撃機が48機でして、これもまた攻撃機を抜群に多く搭載しているのは一目瞭然です。・・・しかもご丁寧に、この搭載機編成の備考欄には攻撃機の内、6機を偵察に当てると明記されています。・・・つまり、残りの42機は完全に雷装攻撃専門の機で、私と赤城には当時の蒼龍に予定していた攻撃機の4倍近くも単艦で積む事が予定されていました。・・・もっとも、昨年にはこれまた飛龍や蒼龍と同じ様に、私と赤城の搭載機の編成にも見直しが入っておりますね。・・・現在は赤城も私ももっと戦闘機を増やして、搭載機種間での均衡を重視した物になっております。・・・まあそれでも赤城ともども攻撃機を多めに積んでいる事は変わっており、・・・格納庫容積に余裕が有る私は、攻撃機を未だに40機以上は積んでいますからね。』

明確な根拠と数字を出した加賀の言葉を受けて明石を含めた第二艦隊の仲間達はそれぞれ大きく頷き、二航戦の物とはまた違った空母の知識に触れる。雷装の艦攻隊による強力な対艦攻撃と、戦艦部隊と随伴して戦闘機隊での制空権の確保も兼ねているというその姿は、どこか現代の帝国海軍水上部隊の切り札の様な存在。連合艦隊司令長官が直卒する戦艦部隊の在り方を鑑みると、まさに加賀と赤城のような空母は戦国時代の軍勢における大将の親衛部隊、いわゆる旗本衆のような物である。

だがしかしそんな在り方を皆が難なく想像できたからこそ、親衛部隊の一員たる加賀がなんでこの第二艦隊にいるのかという疑問が、至極当然のように各々の脳裏にこの時浮かんでくる。日本海海戦以来の誉れも高い戦艦部隊を抱える第一艦隊と違い、第二艦隊は果敢に大海原を駆け回って敵を見つけ、次いで先制強襲を仕掛ける前衛部隊であり、隻数の上での主力たる水雷戦隊はさながら足軽で、部隊数の上で主力となる一等巡洋艦戦隊は足軽隊の前進を支援する弓隊や鉄砲隊といった所。

そこに後衛配備でしかもまた懐刀にも近い一航戦が加わったとなれば、本隊たる戦艦部隊の支援はどうするのか。

誰しも抱く当然の疑問であり、同時に加賀の一航戦が第二艦隊へと転属した事の重大さを、明石を含めた第二艦隊の面々はここで改めて認知する。

ただ単に防御戦闘に比重をおいた部隊が、攻撃に偏重した第二艦隊へと転属したというだけのお話ではない。加賀と赤城で構成される一航戦がこれまで属してきた第一艦隊とは、日露戦役の時のように日本へと大挙して来寇してくるであろう敵艦隊と雌雄を決するべく艦隊砲撃戦を担任する部隊。艦艇を沈めるための最大の駒たる戦艦を主力として構成され、帝国海軍最後の壁として立ちはだかる艦隊にして、絶対に負けが許されない者達でもある。だからこそ一航戦の空母とその艦載機には、戦艦部隊が誇る壮絶な砲撃力を十二分に発揮させる為に敵味方双方の観測機に対処するお役目と共に、少しでも砲撃戦時の味方の戦力を優勢にすべく雷装の艦攻隊という強力な対艦攻撃部隊が備えられているのであり、負けてはならない艦隊戦の最終局面として帝国海軍が描いている戦策においては非常に大事な歯車の一つである。その歯車を帝国海軍の上層部は自ら外した事を示すのが、先月に実施された昭和16年度の艦隊編成だったのだ。

『あれれ、本家本元の第一艦隊はどうすんだ？』

『うーん。艦隊決戦のシメ、第一艦隊の戦艦部隊じゃなくなるのかな？』

『いやいや、休憩の前に加賀さんも言っただろ。あのドデカイ主砲はやっぱり敵の戦艦を沈めるには一番効果があるよ。』

『でもさ、これも加賀さんが言っただけで、戦艦の着弾観測とか、事前の敵主力艦の削減とか、これは空母の飛行機じゃなきゃまず無

理な任務だぞ？ それ外しちゃったら他の何が代わりを務めるんだよ？』

お勉強会の成果として空母というお船の知識が備わってきた事で、長官室の中にいる第二艦隊の艦魂達はすぐに加賀が第二艦隊へと来た事への率直な疑問に気付く。数十年もの間ずっと不動であった海戦の最終局面にて主役となる戦艦部隊の存在に對し、何故にその力を引き伸ばそうとする大事な戦力を引き抜いてしまったのが、彼女達には上手く理解に至らないのだ。

すると本来は極めて無口な加賀の人柄も災いし、何も彼女が言わなくなった事に便乗して長官室の中は誰と言わずに胸の中に浮かんだ疑問を投げ合いを始めてちよつとした騒ぎの様相と化して行く。明石もまた『ねえねえ、神通……。』等と隣の仲良しに切り出し、神通もまた明石の質問を受けて腕組みをしながら難しい顔を捻る始末であった。

しかしそんな仲間達の自由な喧騒を上手く静めるのは、やはり曲がりなりにも彼女達を統率する立場である高雄の一声である。

『おい、みんな。この場で帝国海軍の戦策を論議したって、いくら時間が経っても解りやしないよ。空母だけで成り立つ簡単な話なら人間達だって苦労しないんだからさ。まずは一個づつ理解する為に、ここは加賀さんの話をちゃんと聞こうよ。』

怒った様子も無いいつもの軽い感じもする物言いであった高雄の声は、特に大きな音量で放たれた訳でも鬼気迫る迫力があつた訳でもない。だが極めて普通の女性の声ながらその一声が響き良く木霊するや、不思議と辺りに居る者達は楽しかろうが悲しかろうが落ち着きを取り戻して声を静めてしまう。艦隊旗艦を生まれた時より約束された身であるからか、それとも帝国海軍歴代の艦魂達の中で最も優秀な者と目される出雲いずもという師より学んだ才能なのか、軽くウ

エーブのかかった肩を覆うくらいの黒髪を指先で巻き上げながら微笑んでいる高雄の姿に、彼女の部下たる明石を含めた第二艦隊の艦魂達はまるでスイッチが入ったかのように押し黙るのだった。

『おっしや。加賀さん続きを願います。』

『・・・は、では・・・。』

常に明るい高雄の声に続く、加賀のどんよりと暗い声。自分を無視して仲間達が静かな騒動を眼前で起した事に色々と言いたい事があるのかどうか、前髪の影で曇り空の下における水溜りのようにひっそりと浮かぶその瞳に、明石を含めた仲間達は本心を察する事が出来ない。

ちよ、ちよつと騒ぎ過ぎたかなあ？

怖そうな先輩だと内心思っている明石でなくとも、そんな声が室内の者達の何人かには過ぎった。もつとも加賀は何を言うでも無く高雄の声を受けると全員に背を向け、またぞろイーゼル上の黒板へと右手に握ったチョークを走らせていく。まだ『ちゃんと聞け！』とお叱りの一言があった方が救いがあったという物で、吐息の音色すらも感じさせずに黙々と黒板に何かを書いていく加賀の背中には、言葉は悪いが不気味さだけが異様に目立つ。

なんとも接し方に困る先輩であったが、当の加賀は黒板にある程度の文字を書き終えると何事も無かったかのように再び全員に正対し、本日のお勉強会のお題目たる「帝国海軍の空母のアレコレ」の説明を再開して仲間達が無言で覚えていた恐怖を空振りさせるのだった。

なんとも変なお人であった。

『・・・一航戦の転籍による帝国海軍の戦策への影響は少し置いておき、・・・とりあえず3種類目、最後の類別となる空母の事を説明します。・・・3種類目の空母は先月より三航戦を新編した、龍驤りゅうしょうや鳳翔ほうしょうといった小型でちよつと旧式である空母が類別されます。・ ・ ・ただ、旧式といっても空母という艦艇の設備面での話でして、鳳翔は私と4日しか進水日時が違いますし、龍驤なんかは私よりも若いですがね。 ・ ・ ・まあ、鳳翔は私よりも先任ですが。』

加賀の暗さ全開の物言いは些か愚痴めいたようにも聞えてしまうが、別に彼女は今しがた口にした鳳翔という名の艦魂を嫌っている訳でもなんでもない。むしろこの二人と赤城の3人は、空母運用においては世界最先端のノウハウを帝国海軍が身に付けるのに際して中心的な役割を担ってきた経歴があり、何もかもが手探りだった空母の黎明期を人間達と共に励んできた草分的な存在である。3人とも分身の建造がほぼ同じ頃合だったにも関わらず、大小は勿論、初期の頃は鳳翔艦と赤城艦と加賀艦では艦橋の設置部位や煙突の出し方、飛行甲板の形状だって違ったくらいで、その在り方は如何に短い期間で試行錯誤の連続を帝国海軍が繰り返していたのかを如実に物語っている。

故にこの3人は空母というお船としての下積み時代とその苦勞を供にし、ワシントン会議の時に既に米国のレキシントン級巡洋戦艦が基準排水量3万トンを超える世界最大の空母として竣工すると発表されて世界各国の海軍に衝撃を与えていた中、帝国海軍も負けじと必死に海軍軍人達と共に頑張ってきた無二の盟友同士。おまけに3人とも姉妹がいないというお船としては珍しい身の上だっただけに、実の姉妹の様にその仲は良いのであった。

だから加賀は今しがた自分で口にした「旧式小型」という語句が海軍艦艇としては悪評になってしまいう事を大いに嫌い、動かしよう

の無い事実ではあっても聞き手である仲間達に格下だと捉えられないようにと、鳳翔が類別される空母群のお話には少し力を込めて詳細を述べていく。

『・・・この種の空母は航行性能、搭載機数、及び取り扱い可能な飛行機が旧式機が主な物という面から、一個艦隊の攻撃の主軸となるだけの攻撃隊を編成できません。・・・その為、運用にあっては搭載する飛行機の機種とその役目を減らして特化させています。・・・これも昭和12年の艦船飛行機搭載標準という書類に書いてあった数字ですが、鳳翔にあっては新型機の離着艦ができないので、専用に保管してある旧式の戦闘機9機に爆撃機が6機。・・・龍驤もまた戦闘機と爆撃機のみという編成ですが、龍驤だけは昭和16年度より爆撃機に代えて攻撃機を搭載し、なおかつその搭載機の編成は戦闘機24機、攻撃機12機と、戦闘機を重視する事に決まっています。・・・まあ、龍驤の艦攻隊は、基本的に雷装ではなく爆装での運用を予定しているようですがね。・・・次に、この二人のもう少し詳しい役目を説明します。』

しゃべり疲れてお勉強会の最初の頃は途中で持ち前の寡黙っぷりを発揮してしまった加賀だが、姉妹と慕って親交を得てきた鳳翔と、すぐ下の後輩に当たる龍驤への想いが彼女の人柄に頑張りを与えてくれるのか、咳払いを一つ置いて呼吸を整えると喉を少し擦りつつも自ら説明の続きを放つ。強面で妙に口数が少ないお方ながらも加賀なりの思いやりという物が垣間見えた瞬間で、傍目にも彼女が無理をして声を放とうとしている様子が見て取れた手前もあり、皆と同様に明石も少し意外な感じを覚えつつその一生懸命な説明に耳を傾けた。

『・・・んんっ。・・・先月に新編された三航戦、次いでそれ以前までの二人の配属先が第一艦隊である事からも解るとおり、彼女達

の主な役目は戦艦部隊に対する直衛でして、艦隊上空の制空権確保をする一航戦の戦闘機隊、もしくは敵主力艦の漸減を狙っての攻撃隊に加勢したり、決戦場に赴くまでの道程で行う上空直援や空中からの対潜哨戒、それから戦艦部隊には最も大事な着弾観測なんかに、時には支援として参加するでしょう。・・・哨戒用とはいってもこの数字の通りちゃんと爆撃機を搭載しているので、艦隊補助空母というよりも実質は遊撃型空母と言った方が正しいです。・・・また、海軍艦艇としては中型の為に整備補修、及び補給を行う待機地点等において、港湾設備の融通が現有の空母の中では最も利きます。・・・私や赤城なんかは艦体が現有の戦艦よりも大型で、仮に入渠整備となれば実施可能な港湾設備は片手で数えるくらいしかありません。・・・その上で新造の大型艦艇も作っている訳ですし、もしも戦艦と同時期の整備補修が必要となったら一大事です。・・・船渠の前で空きを待つ、役立たずの行列が出来てしまいますからね。・・・そして支援の側面が強い任務性は運用に幅があるという事でもあり、必要であればこの種の空母は他の艦隊に一時的に配備したり、単艦の性能を勘定した上で軍隊区分での分派をして運用する事も考えられています。・・・今年の6月頃になりますが、主力部隊に専属で随伴する空母の必要性が、当時の連合艦隊司令長官より上申されたようでしてね。・・・事実、第二艦隊が夜間強襲をする際、軍隊区分で第一艦隊から派遣される予定になっている金剛こんごうさん以下の三戦隊は、後方の本隊から前衛の第二艦隊へとやって来る間、速度の速い龍譲を上空直衛専門艦として従えて来る予定になっているのです。・・・こふっ、ごほっ。・・・』

いつも真一文字に結んで閉じている口が今日ほど開いた日は無いであろう加賀。酷使した舌と喉は唯でさえ乾燥している師走の空気によって水分不足に陥ったらしく、唾を飲み込んで潤いを取り戻そうとしているのか、彼女は喉を大きく動かす素振りを見せながら全ての空母の説明を終えた。

その直後、高雄と供に上座の辺りにて席に着いている愛宕が真面目で良く気が付く性格を生かし、声も無くお茶を用意して加賀の前に位置する長机の上にそっと進める。

『・・・あ、すみません・・・』

『いいえ。お疲れ様でした。』

『・・・。。』

短くぼそつとした声でお礼を述べるや加賀はようやくいつもの彼女に戻り、愛宕の返礼に浅い会釈でもって応える。ようやく今日の語り手としての主要なお仕事を終えた事に安堵したのか、驚の様な尖った目を前髪の影で常に浮かべるといふ強面が自慢の加賀が、お茶をすすめる間際に周囲の席に着いている者にしか聞えぬ程に小さな音量で長く溜め息を吐いていた。

その一方、加賀先生の講釈が一段落した長官室には、早速その仲間達による自由な発言の時間が訪れる。その中でも最初に声を放ったのは、加賀の語りの最後の部分で自身の師匠の名が出てきた事に反応した神通であった。

『おお、確かに親方が前に言っていたな。快速の龍驤は足の速い親方達に随伴できて、第二艦隊と合流した際には龍驤も第二艦隊の空母部隊に加勢するんだとな。・・・む、そうか。龍驤が今年から爆撃機に代えて、雷装では無く爆装を主眼とした攻撃機の搭載を予定しているというのは、降下爆撃を多用する二航戦との協同体勢も考えての事なのか・・・』

『なるほど。私と飛龍の分を合わせた数と同じだけの24機の戦闘機は、二航戦の戦闘機が攻撃隊の護衛として全力出撃しても上空直衛を十分に賄う為で、二航戦が対艦攻撃として艦攻隊を使うようになったから、龍驤さんの艦攻隊はさしずめ偵察の分を補填してくれ

るって事ですね。』

『うーん、よく考えられてるねえ。』

神通に続く形で第二艦隊の艦魂達の声が飛び交う。最初の二航戦に所属するような空母のお話の時にもみんな感じていたが、この空母という艦艇は戦艦や巡洋艦に比べれば誕生して日が浅いものの、頭の良い人間の海軍軍人達によってとにかくよく研究された末に現代へと至っており、各々が知る帝国海軍の戦策の断片にちゃんと関わる事が想定されていた。神通が師匠である金剛の言葉を思い出して理解を深めたのは、まさにその好例であった。

『ぬあるほどおー……。龍驤さんなんかは単艦でのお役目まで有るんだあ……。』

第二艦隊でも最も尻の青い新米艦魂の明石も、今日は仲間達と供にこれまで知らなかった空母の知識に思わず息を飲む。もはやお勉強会の直前にこの道10数年のベテランにして、仲良しでもある神通や那珂とやっと同じスタートラインに立てたと喜ぶ様子も、次いで休憩中に加賀が垣間見せたつつい自身将来を夢見てしまう格好良い姿への憧れも今は無く、記憶から薄れてしまわない内に学んだ事を文字として一心不乱にノートに記していくだけである。

今日という日まで飛行甲板があれば全部同じ空母という艦艇なんだと思っていた明石だが、その中にもこうして多様に、しかもまた実によく練り込まれた各々の特徴と使命が込められていた。もちろんそれを考えて編み出したのは明石の分身にも乗組んでいる人々を含む帝国海軍の人間達で、艦魂達が後追いの形で理解した知識を今からずっと以前から練りに練って考え出していた事に明石はちょっとした感動すらも覚えた。

『だが、こうなるとますます加賀さんの一航戦が第二艦隊へとやって来た意図が解らん。』

『まさか鳳翔さん一隻で一航戦の代わりをやるかな？』

『いやいや、そりゃいくらなんでも……。』

『すごいなあ……。艦隊単独なんじゃなくて、第一艦隊ともちやんと連動してるんだなんて……。』

周りでは未だに個々の思った事、考えた事を述べ合う仲間達の声が交錯しているが、その中で明石もまた脳裏を過ぎった言葉を素直に呟く。帝国海軍は明石を含めた特務艦も入れて100隻以上の艦艇が集う世界にして、新旧大小も鑑みてその一隻一隻にちゃんと存在の意味とお役目が用意されている場であり、同じような姿で複数隻で存在していても手抜き無く深い深い知恵が盛り込まれている事に、明石は見てくれの表情だけは軽く呆然とした感じながらも胸の中では尊敬の念をどしゃ降り模様で募らせていた。

また一つ賢くなったぞ！

やがて明石はそんな言葉を心の中で叫んで、本日のお勉強会が大変に自身にとって有意義な物となっていると実感。お師匠様の朝日による教育の日々以外ではほとんど味わった事の無い、学ぶという行為への感謝と欲求が一段と増してくる。それに彼女は生来が頑張り屋さんであり、休憩前に加賀より放たれた言葉も記憶に新しい事も背中を押して、この際解らない事はトコトンまで質問してみようと思い立つ。何より今日はいつも色々な事を仲良しとして教えてくれる神通や那珂以外に、第二艦隊を纏める高雄や博識さを存分に披

露した加賀も場を同じくしている。唯でさえ今現在の長官室の中の面子が揃う事は艦隊訓練の中であつても月に一度だし、打ち合わせや会議の体裁となつていない今日は素朴な質問であつても声に変え易い環境なのだ。

『あ、あのお！ 教えてくださあい！』

猫どころか虎をも殺せる勢いの好奇心の持ち主である明石。そこまで考えると既に半分無意識の状態で、彼女の片手は弾むような声と共にまるでマストの如く高らかと上がっていた。

するとなにか楽しみを控えているように笑みがこぼれている明石の表情とその明るく大きな声は、全くの無秩序状態で各々の考えを率直に述べている仲間達の意識を根こそぎ奪い取ってしまう。刹那、ピタリと室内には静寂が漂い、第二艦隊の艦魂達の視線は一斉に明石へと集中する。

もはや先輩方ばかりの中であつてもお構い無し。明石は湧き上がる学びへの好奇心を失せさせる事無く、例え素朴な疑問であつても解らない事を解らないままにせぬようにと響の良い声で新たな知識を得ようと試みるのだった。

『あの！ さっき加賀さんが言った、ぐ、軍隊区分って何ですか？』

第一〇七話 「自分を知ろう」

白い塗装の隔壁に緑色のカーペット、そしてテーブルクロスやカパーの隙間より輝きを放つ椅子や長机の木目模様。愛宕艦あたごの長官室はさしにも最新鋭にして、艦隊旗艦を約束された艦艇である事を有無を言わずに理解させるのに十分な色彩を豊かに持ち、濃紺一色という地味な色合いの第一種軍装を着た艦魂達が集まっていようと、高級感溢れる室内の色は褪せる事が無い。

次いでようやく加賀かがによる空母の授業も一段落して室内に居る第二艦隊の艦魂達は活発な意見を飛び交わせた事で、その雰囲気もまた暗いとか静か等といった制動的な感覚を持っていなかった。もちろん今しがた覚えたばかりの知識に色々と考察をしての意見のやりとりであるから、決して彼女たちは笑い声の類を放っていた訳ではなかったが、誰に遠慮するでも無く各々の考えた事、思った事を述べ合っているその様子は新米の明石あかしであっても声を上げ易い環境にも繋がる。

おまけに明石は今には十分にやる気が漲っている状態でもあったので、大きく手を上げて張り上げた声は室内の仲間達にも決して音量の面では劣っていなかった。

『ぐ、軍隊区分ってなんですか？』

『そっかあ。まだ明石は軍隊区分って良く解んなかったんだね。じやあ今度はあたしが説明したげようか。』

明石の声に応じてくれた高雄たかおは調子の良さそうな声でそう言うとか賀に手で合図し、先程まで空母のアレコレを熱弁してくれていた彼女を自身の席へと戻るように促す。自分が代わって教えるというその姿勢は加賀への労わりでもあり、生来が無口な事から今日はすっかり舌と顎の感覚が薄くなってしまった加賀は浅く一礼すると席

へと戻っていく。高雄は少しの間そんな加賀の後姿を目で追うもすぐに明石の方へとその朗らかな笑みを向けて、明石が思わず釣られて笑顔を作る前に持ち前の明るく気さくな声で教示を始めた。

『おっしゃ。明石、じゃあ始めるよ。』

『あ、は、はい！』

『うーんとね、どう言うのが良いかな。とりあえず軍隊区分つてのは別に海軍だけじゃなくて陸軍にもある物なんだけど、まあ艦隊に例えた方が解り易いか。有り体に言っちゃえば、艦隊編成のさらに上に位置する部隊編成ってトコなんだけど、明石、解るかな？』

『う？　ぶ、ぶたいへんせい？』

なんだか良く解らない二つの編成という言葉が、明石の頭の中にある貧弱な知識の棚をひっくり返す。艦隊編成のさらに上にある編成とは言われても、そもそもが特務艦で戦隊や駆逐隊といった部隊に所属しない分身を持つ明石には意味がサッパリ解らない。一応は神通じんつうの様に艦隊隷下に旗艦として戦隊を束ね、その下に複数の駆逐隊を置くという者達の姿も見てきたが、明石を含む第二艦隊の上に位置する部隊名など余りにも有名な一つを除いてはちつとも出てこなかった。

『うーん・・・、それって、連合艦隊って事ですかあ？』

『んー、ちよつと違うんだよねえ。ほらあ、あたし達みたいな第二艦隊の事を？前進部隊？とか、第一艦隊を？主力部隊？って呼んだりするだろ？　それこそが軍隊区分だよ。んーと、そうだなあ・・・。』

次第に質問の声色がおっかなびつくりになり始める明石を、高雄はまるで元気づけようとするかの如く笑みと弾む声でもって応えてあげている。ピンと伸ばした指を頬に添えて首を捻り、自慢の餅肌 に浮べた大きめな黒い瞳を天井へと向けて明石への言葉を選んで いるその様は少しだけ大袈裟な素振りにも見えるが、明るく騒ぐ事が好きな高雄はいつもこんな感じのお人である。その内に肩にかかるウェーブの軽く入った黒髪をなびかせると、軽く手を叩いて弾みの度合いがより一層顕著になった声色で明石に向けて口を開く。

どうやら良い教え方が思いついたらしい。

『艦隊編成よりも、もう少し部隊としての役目が強調されてるのが軍隊区分さ。例えば、第二艦隊が南洋方面の島々の防備を仰せつかったとしよう。明石はまだ南洋方面に行動した事は無いと思うんだけど、いくら天下の第二艦隊って言っても、さすがに南洋の島全部を面倒見きれ程に戦力は持っていない。日本列島が真横になってもまだ足りないくらい、南洋の海ってのは東西南北に広いんだからね。』

まだまだ駆け出しである明石が未だ南洋に行った事の無い事情を気遣い、高雄はまず簡単に南洋の地理を説明しつつ軍隊区分を教える上での例題も示す。高雄の言った通り明石は南洋に行った事はこれまで一度も無いが、とりあえず四方八方に広がる海面に要衝たる島嶼がポツポツ点在しているという姿だけは人伝に聞く事もあったのでなんとなく理解はしており、自らも属する第二艦隊がその守備をするとの仮想をさっそく脳裏にて描いてみた。

『広い海域・・・、やっぱり本拠を中央に置いて構える・・・？』

『お、さっすが軍医中将の教え子。うん、もしやるなら活動拠点は中央。どの島嶼にも一番近い所が便利だね。そこに艦隊旗艦のあたしと四戦隊がデンと腰を据えて、あっちこっちの島の守備や奪還の

為の攻略、それから敵の跳梁がある様なら、海域を通過する輸送船や味方への護衛といった具合に、その時々で出る色んな任務を配下の戦隊に命じて行くんだよ。ここまでは解るかな?』

『は、はあい!』

尊敬する師匠と重ねられて褒められるのは、明石にとっては大きな喜び。特徴的な間延びした返事は嬉しい時の彼女のクセで、手にした鉛筆を折ってしまいそうな勢いで無意識の内に強く握る。もちろん自分の気持ちにお顔の筋肉が極めて正直な彼女であるから、高雄の瞳には元氣一杯の笑みに大きくした丸い目を爛々と輝かせる明石の顔が映った。

すると高雄の声の明るさもさらに相乗し、仲間達が見守る二人の姿は上司と部下というよりも姉妹の様な感じすら漂わせていく。

『はは、よおし。じゃあ、ここで問題。これから南洋の端っこに浮かぶとある島の攻略を行うんで、あたしの艦に乗ってる艦隊司令部の人間達は、明石とも仲が良い神通中尉の二水戦に攻略部隊という名の軍隊区分とお役目を与える事にした。ところがどっこい、ちょうど行き先の島付近を哨戒してた飛行機から、一等巡洋艦を主力とした3個戦隊くらいの敵艦隊がうろついてるって情報が舞い込んだ。でも敵の妨害も予想されるくらいで攻略任務を諦めるくらいなら、最初からこんな島の攻略が命令として発せられる事も無い。つまり敵の反撃も想定した上で、二水戦はなんとかこの攻略部隊たる任をこなして貰う必要がある。さて明石くん、果たして二水戦はこのお役目を無事にこなす事ができるでしょうか?』

高雄が例え話として掲示したのは、なんと明石のすぐ隣に座っている神通の事。年齢の面でも容姿の面でも明石とは10歳以上は離れているものの大の仲良しである神通は、明石が知人の中でも最も遠慮無く物を言える間柄であり、高雄の声を受けるやふと明石はそ

んなお隣さんに視線を流す。神通は相も変わらず不機嫌そうな表情に鋭い釣り目を浮かべ、思いもかけぬ所で自分の名を話題に混ぜられた事とそれ故の明石の視線に、人知れず湧いた僅かな戸惑いを誤魔化そうといったものの短い口癖を放っている。

『うーん……。いくら神通でもお、一等巡洋艦の戦隊が一杯だったら分が悪い、よねえ……。？』

『ふん。』

明石が呟いた考察を耳にして神通は怒る様な素振りは見せないが、仮想とは言え格が下がると批評される事に彼女の短い導火線はすぐさま反応してしまう。ちよっとだけムカッと来たのか明石と視線を一瞬だけ合わすと、神通は明石とは逆の方へとプイッとそっぽを向ける。全く気の強いお人だなあと今更ながらに明石は思うが、そうであっても今しがた高雄より出された問題における明石の解答が覆る事は無かった。

実際にそのような状況になったら神通であれば、『上等だ！』の一声で手塩に掛けて育てた手勢を引き連れて自慢の水雷戦で派手な突貫を実施しちゃうかも知れないが、やはりどう足掻いても戦力の差は如何ともし難い筈。記憶に新しい呉での柔道大会でも垣間見せた、常に厳しく鍛えつつも誰よりも部下思いである彼女の人柄を勘定すれば、その意気込みは別にしてもとても不本意な状況でのお仕事になってしまふのは明白だ。

では、そんな状況でどうやったらこの友人が無事にお役目をまっとう出来るかを考える明石だが、そう時を置かずして彼女の思考には最も基本的にして一般的な答えが浮かんでくる。そしてそれは正解だった。

『……。誰かに手伝ってもらえれば、大丈夫ですよ？ 高雄さんとか那智さんなちみたいな、一等巡の人達に。』

『おお。ナイスだよ、明石。その通りだ。単独の戦隊で無理があるなら、攻略部隊という括りで任務に当たる戦力を増強すれば良いのさ。それに一つの戦隊は平時から運用目的別に特化して編成しておく事で、より限定的だけどより専門的に各々の運用に専念して錬度を維持、向上できるし、逆にいくらかお助けが必要だって言っても普段から組んでない味方を同じ戦隊と一緒にしたら、いつもの勝手が利かなくなってしまう。結局は中途半端にしか部隊の力を発揮できないで終わっちゃうからさ。指揮の勝手だって違う訳だしね。例えばあたしは小回りの利く水雷戦隊の動きなんて殆ど解らないし、神通中尉や那珂中尉が加賀さんや飛龍、蒼龍みたいな航空戦隊を指揮するなんてのも想像がつかないだろ。戦隊の司令官を務める人間も同じさ。だからその時々々の情勢と任務の内容に応じて、適当な部隊を上手く組み合わせて任務に当てるんだ。一個戦隊をまるっとくつつけちゃう方が解り易いけど、時には戦隊の中の小隊単位で分派したりもするんだよ。そしてその違う部隊同士を繋ぐ大きな括りが、明石が知りたかった軍隊区分って奴だよお』

『おおお〜。』

普段から顔も知る者達を例とした高雄の教え方は、すっかり明石に自分で考えさせた上で答えを導いてみせる優しい教え方。げんこつとお叱りを大いに用いて行う神通とは大違いで、どこかおふざけ気味な物言いながらも垣間見せた高雄の姿は中々に良い先生像である。明石から見れば神通や加賀よりもずっと容姿の上での年頃は近い存在であるが、伊達に艦隊旗艦としてこの道10年近いキャリアを持っている訳ではないらしい。

やがて、今しがたようやく得た知識を応用しての明石の素朴な質問が再び高雄に向けて放たれるが、高雄は唯の一瞬も後輩の質問に悩む素振りを見せずに即座にその回答を述べてくれた。

『ぬううゝ……。あのお、これもさつき加賀さんが言っていましたけど……。えと、金剛少将^{こんごう}の三戦隊が第二艦隊に、その、ぐ、軍隊区分で派遣されて来るんですよね？ でもどおして今から派遣が決まってるのに、恒久的な艦隊編成で加賀さんみたいに来ないんですかあ？ 軍隊区分だと臨時の意味合いが強いみたいですし、一緒に行動するのが解かってるなら今から同じ艦隊に居た方が連繋もとりに易いんじゃないか？』

『お。良いねえ、明石。その通りだよ。三戦隊が第二艦隊に来る事だけを考えれば、明石の疑問は間違いじゃないよ。ただ金剛さんの三戦隊は、第二艦隊への出張だけがお仕事じゃないのさ。詳しく言うとな、金剛さんの三戦隊はなんつってもあの戦艦特有の主砲を武器に第二艦隊を支援してくれるんだけど、それが終わったら終わってたで三戦隊はすぐに主力部隊に戻って決戦兵力に合流しなきゃいけないんだよ。長門中将率いる戦艦部隊によるドンパチは負けが許されない上に、帝国海軍の戦艦は言っちゃ悪いけど旧式ばかりで数も多いとは言えないからね。だからこそ三戦隊は第一艦隊配備での運用を本業としつつ、その上で快速を生かして先に戦闘行動をとる前進部隊のあたしらを援護してくれるのさ。言わば副業ってトコかな。ついでに言うなら、金剛さんが姉妹揃って新造工事にも近い内容で大改装を受けながら戦列に加えられてるのは、今言った軍隊区分で行う第二艦隊支援の任務に最も必要な速力が出せる艦型だからなんだ。金剛さん達の分身は、今は類別から無くなってるけど元々は巡洋戦艦って言ってね。どっちかって言えば長門さん達みたいな戦艦よりも、あたしらみたいな巡洋艦に近いんだよ。』

さすがに第二艦隊を率いるだけある高雄の、教養豊かな詳しい説明。こういう部分に全く知識を持っていない明石とは極めて対称的で、明石は軍隊区分という物への理解と疑問を全て解決。相も変わ

らず愛想良く微笑んでいる高雄と仲間達が見つめる中で、一人思わず拍手を打って声を上げる。

『なるほどお。そういう事かあ。』

空母に続く軍隊区分という制度も良く学べた明石は、鉛筆を握る手の動きを更に一層軽やかにする。本日に限らずお勉強の際は必ず学んだ事を記すノートは、文字の羅列が並んで既に数ページ目。先が丸くなった鉛筆を取り替えるのもほぼ無意識状態で、それだけ明石が今日のお勉強会に集中している事を物語っている。時折ノートに書いた文をちよっと読んでは何度か頷いている様子も、彼女が理解をすっかり得ている事の証明だ。

するとそんな明石の頑張る表情に仲間達と供に笑みを向けていた愛宕が声を掛け、今しがた高雄が教えてくれたばかりの軍隊区分がなんと明石にも大いに関わりのある事なのだと告げた。

『うん。軍隊区分、ちゃんと解かって来たようだね、明石。でもこれは、ちゃんと明石にも適用されてる事だよ。』

『え？ わ、私、ですかあ？』

『そうだよ。ほら、明石の分身の正式な所属は第二艦隊付属じゃなくて、連合艦隊付属の艦艇だろ？ 指揮権限上なら連合艦隊司令長官直卒なのに、今は第二艦隊司令長官の指示を受けて一緒に行動してるじゃないか。その理由は軍隊区分。つまり前進部隊って括りで、第二艦隊と明石は一緒になってるんだ。』

『おお！ そうだったのかあ！』

明石はどこかはしゃぐような声色を上げながら、去年より第二艦隊へと付随してきた自身の分身の事情を知る。とにかく好奇心が旺盛な彼女特有の姿で、黙ってお勉強に勤しむ事が少ないのはいつも

の事。師匠である朝日より教えを授かる時もこんな感じが多く、まだまだ未熟な身の程を知って落ち込む事はあっても学んでいる最中は結構楽しそうにしているのだ。

『ふんふん、私もなのかあ・・・』

そう呟きながら早速メモを取っていく。隣の席の友人がまたぞろ意地悪な物言いをして来ても意にも介さない。

『お前なあ、自分の事だろう？　ちゃんと勉強しておかんか。』
『うるさいなあ、もお。今書いてるんだからあ。』

帝国海軍の艦魂社会では指折りの嫌われ者であると同時に気性の激しさを恐れられる神通にも、仲良しである明石は一步も退かずに抗う言葉を放ってみせる。第二艦隊の艦魂の中でもこんな物言いを神通に返せるのは明石ぐらいで、滅多に見れない神通が言い返される様子を目にして二人以外の仲間達は静かに笑い声を上げ始めた。おかげさまで神通は舌打ちをしながら眼光一閃すると明石とは逆の方へとそっぽを向いてしまい、ちょうどその方向で笑っていた何名かの仲間がすっかり転覆したご機嫌の神通におっかなびっくりとなる中、明石は筆記を終えたノートを読み返して我関せずの勢いで復習へと勤しむのだが、ここでまたまたふとした疑問が明石の中には湧き出てくる。

それは単純にとある目的の為に編成されるという軍隊区分の観点でアレコレと見た時、自分の分身に一体どのようなお役目が期待されているかという事で、その大元は明石の分身たる明石艦が帝国海軍艦艇の中でも数少ない工作艦という類別をされている所にある。戦艦の様に巨大な主砲を持つ訳でもなければ、巡洋艦や駆逐艦の様に快速と魚雷を武器としている訳でもないし、空母の専売特許であ

る飛行機なんかは一機も明石の分身には装備されていない。損傷を被った艦艇を修理するという漠然としたお役目なら明石にも解かるが、その観点だけならばこうして高雄以下が一同に会している第二艦隊の者達だけに適用されるお話ではない筈で、第一艦隊や第四艦隊、果ては連合艦隊と双壁を成すもう一つの帝国海軍大海上部隊である支那方面艦隊だって同じ事である。そこに帝国海軍艦艇の艦影がある限り、明石の分身である明石艦の出番はどの艦隊でも必ずある筈なのだ。

仲間を助けるのがお仕事だけど、それでは何故に第二艦隊に軍隊区分で配属となっているのか？

高雄の例え話で出てきた神通、加賀が教えてくれた龍驤りゅうじょうや金剛といった者達のように、自分もまたより詳細で練りこまれた運用方法を根拠に軍隊区分の対象となっているかが、自分の事ながら明石には全く解からなかった。

『うーん……。別に怪我した艦魂ひとって、第二艦隊だけに出る訳じゃないしなあ……。』

『おやあ、明石くん。まだ解からない事があるみたいだねえ。』

つつい難しい顔で疑問を呟いてしまう明石に、長机の上座の部分で席に着いている高雄が何やら悪戯っぽい口調でそう言った。軍隊区分の説明を自らしてあげた手前もあるのか、どうやら彼女は明石という後輩が自分の教えに対して抱いた疑問を放置するつもりが無いようで、頬杖について送るその笑みには明石に解答を与えてやろうという高雄の心意気が傍から見ても一目瞭然であった。

『あ、はい。あの高雄さん。私にも第二艦隊のお手伝いの為に来る金剛さんの三戦隊とか、その三戦隊の出張を直衛する龍驤さんみた

いな詳しい役目って、その、やっぱりあるんでしょか・・・？
『もっちゃんだよ。』

ついさっきは邪険に遮った神通の指摘を思い出し、少し明石は声の勢いを抑えて高雄に質問する。他の誰でもない自分の事を他人に聞くというのだから無理も無かったが、意地悪な友人とは大違いの優しい先生である高雄は、そんな明石のちよっぴり恥ずかしさを滲ませた上での質問に懇切丁寧に答えを示してくれる。

軍隊区分の件で明石に教えてあげたように多種多様な役目を担う艦艇、及び戦隊を取り纏める艦隊旗艦という役目を、高雄は20代前半の容姿を持ちながらも生まれて此の方ずっとこなして来た一端のベテラン艦魂。個々の詳しい運用に精通するまでの知識が無くとも、艦隊内のどの艦艇がどういう理屈で第二艦隊という大所帯に係してくるのかを彼女は常にお勉強しており、当然それは昨年から部下であると同時に後輩として可愛がってきた明石の分身の事にもしっかり及んでいる。

この辺が愛宕と共に仲間内からも一目置かれる高雄の凄い所であった。

『そうだなあ。こう言ったらアレなんだけど、明石の艦には前線を高速で暴れまわる第二艦隊に対して追従できる程の速力はさすがに無いから、三戦隊や龍驤さんみたいな戦闘行動の面でのお役目はちよつと難しいだろうね。でも、それは明石も望んでないと思うし、あたしらもドンパチやる海域に明石が居て欲しいなんて、正直考えてないよ。ただね、それは戦術の意味での戦闘海域であって、もっと大きな戦略の意味での戦闘海域では全然違う。むしろあたしはそういう観点なら、長門中将と喧嘩してでも明石は欲しいって言うつもりだよ。』

高雄の語りの最初の辺りはちよつと明石の必要性を否定するかの

ような物言いであったが、その後続けた部分では逆に彼女は絶対に明石が必要だという言葉を放つ。その基準は戦術の観点、戦略の観点などというなんとも小難しい考え方で線引きされているようで、明石は高雄の言いたい事が良く解からずにくしかめた顔をカクンと捻つてしまう。ふと隣を見ると神通や那珂も高雄が述べる明石の事に上手く理解が及んでいないようで、二人とも明石と目が合うや同じ様にして首を傾げる始末。そしてこのようによく解かっている思考をジェスチャーへと変えているのは、この仲良し3人だけでなく長官室の中に集った殆どの仲間達にあっても同様だった。唯一、この10年近い経歴を高雄と共にしてきた愛宕だけは深く頷いているくらいで、高雄と二人で室内の部下達の様子を静かに笑っている。

だがそう時を置かずして高雄は再び解かり易さを重視した例題を語り始め、明石だけではない第二艦隊の仲間達全員に向けて、この明石という仲間がどういう風にして我々が第二艦隊に関わってくれるのかを説いてくれるのだった。

『例えばだ。米海軍のような特大規模の敵性艦隊が太平洋方面から日本に来寇してきたとして、あたしら第二艦隊は前衛として事態に対処する為に、恐らく内地から遠い南洋や小笠原諸島なんかを集結地として待機する事になるんだ。もしも待機地点が内地だと、そもそもあたしら第二艦隊の各艦は燃料搭載量に戦艦並の余裕なんか無い艦艇ばかりなんだから、前進部隊として第一艦隊よりも進出するとなると、敵と接触する頃には燃料を使い尽くしちゃって満足に作戦行動できない恐れがある。それに燃料をケチつての進出だと、接敵する頃には第一艦隊が待ち受ける海域と重なっちゃって、主力部隊が接敵する前に漸減するっていう根本的なお役目が果たせない。だから例え機動力のある第二艦隊であっても、艦隊を留める拠点が暴れる海域と近い事に越した事は無いのさ。ここまでは、みんな解かるかな？』

しっかり段取りを踏んでお話を進めようとする高雄の言葉が響くと、明石を含めた仲間達は一様に首を縦に振る。次いで高雄は室内を一瞥して各々が理解を得られずに難しい表情となっていない事を確認し、得意の例題の続きを述べ始めた。

『だけどね、そんな第二艦隊の待機地点特性を勘案して、仮にどこかの環礁や離島に平時から目処をつけたとしても、内地から物資を輸送してまず港湾設備を設営する所から始まるんだから、いつ始まるか解からない戦いに対してこれだけの大艦隊の艦隊保全を喫緊にできるって訳じゃあ無いんだ。それに平時からの事前の準備が必要になると、当然の如く敵に目をつけられる。ただでさえ南洋の島は内地から見れば発展が遅れてるんだ。そんな所でとある一箇所の島にモリモリ資材を送って立派な港湾が出来たとしたら、アソコは艦隊の根拠地になって、その周りの海域ではきつと何か仕掛けてくるんじゃないか、ってな具合で敵に気取られる公算が大きい。そして、例えば米国みたいな規模で優勢な海軍から見れば、こういうヤバそうな地点は避けちゃえば事足りる。そもその戦力で既に勝ってる米海軍は、帝国海軍と一戦交えるにあたって正攻法の横綱相撲ができるから、あたしらみたいに漸減要撃なんて小細工をする必要がないのさ。もしあたしらが暴れる海域を迂回されたりでもしたら、これまた前進部隊たる役目を第二艦隊は果たせなくなる。つまり、あたしらが出番を控えて進出を予定する待機地点ってのは、下手したら電気すら通っていない僻地かも知れないし、ほぼ船を浮かべる波間が有るだけだと思うんだ。各艦の整備補修なんて、現地の陸上設備では到底不可能な物ばかり。内火艇やカッターに開いた穴を塞ぐくらいか関の山だろうねえ。』

随分と先行き不安な物言いだ。南洋を語った高雄だが、彼女の言葉が正しい事はこれまで大演習に参加して南洋方面に行動した経歴を

現実を持つ那智らが、一切の異議を唱えずに黙って頷いている事で証明されている。

南洋方面は色々な国際事情、国内事情もあって棧橋や飛行場の整備が本格的になり始めたのはここ二年程のお話で、空路による定期便も陸攻のような双発の飛行機ではなく飛行艇によって成り立っている航路が多い。トラック諸島やサイパン、パラオといった海上交通で要となる場所ではそこその発展こそあるものの、南洋全体で言えばそこに在る殆どの島嶼は満足な曳船どころか、繋留の為のブイや浮標すらも無い地域が大部分を占める。もちろん呉や横須賀といった海軍工廠などは影も形も無く、帝国海軍最新鋭の艦艇で構成される第二艦隊が根拠地とするにしては、なんとも設備面で貧弱な地域が南洋と呼ばれる島々の実情なのだ。

だがこの事情こそ、例えば上官にして帝国海軍の現総大将たる長門と喧嘩してでも明石を欲すると口にした、高雄の心意気の源であった。

『だからあたし達第二艦隊は、例えそんな僻地であっても戦闘前には在泊の艦艇に十分な整備補修を施して、戦闘後には満身創痍の身で岸壁すらない波間であっても、そこに帰るしか道は無い。そして這々の体で帰って来た損傷艦に対して、ろくに陸上設備も整ってないそんな僻地の波間でさらにそこから内地へと帰れるだけの応急的な修理をしてあげられるのは、帝国海軍最新鋭の工作艦である明石艦以外には存在しないんだ。これは上海の陸上設備ジャンハイの補助を得て任務に励んだ軍医中將とかじゃ、絶対に不可能。帝国海軍の全艦艇の中でも、明石だけにしか実現できないお役目なんだよ。』

『ほえええ……。そ、そうだったのかあ……。』

さしにも自身の知られざる運用方法の実態を聞き、明石は先程の

様にはしゃぐ様な口調ではなく心底驚いたようにして高雄の説明を受け止める。明石にとって耳にするのは初めてであった我々が第二艦隊という部隊の事情が、自身のお役目の詳細には非常に深く関与しているらしい。

そしてこの時、工作艦としての陸上設備への依存度が同じ工作艦でもある師匠の朝日^{あさひ}とは違うのだという言葉に明石はふと、毎日見慣れている明石艦の一角にある倉庫に収納されたサイズの大小も様々な錨やバラスト、鋼索、次いでいつもはシートに包まれている13基に及ぶ移動排水ポンプの事を思い出す。どちらも明石艦単独で見た場合、その運用にあっては使用する機会がほぼ皆無で、排水ポンプに至っては定期的な可動試験の時以外は使用されている所を明石はこれまで一度たりとて見た事が無い。錨もまた艦首に装備している艦固有の主錨2つと艦尾にある小錨1つでこれまでの運行に支障を来たした事は無く、一体何の為に積載されているのか常々疑問に思ってきたのだが、高雄の説明を受けてようやく明石はこれらの設備が本領発揮する時を理解し、同時にその時こそが自分の本来の役目を果たす時なのだと確信した。

今しがた教えてもらった南洋のお話にもあった通り、第二艦隊が戦の際に赴かねばならない所は科学技術の最先端に行く内地の工廠など影も形も無い波頭の果て。ロクに曳船や繋留の為のブイすらも整備されておらず、下手をしたら電気や水道といったごく当たり前の陸上設備すらも存在しない地。上手く環礁に囲まれて波が静かな自然の泊地があるだけであろうそんな僻地で戦に臨む第二艦隊の仲間達は、同期の飛龍が属する二航戦も然り、大の仲良しが率いる二水戦も然り、反撃されるのを覚悟で強襲という強引な戦法でもって戦った結果が、実際に戦が始まればその艦体に必ずや反映されているだろうと否応無く予想される。

これまでの艦隊訓練でも希に発生していた鋼索が切れただけの、砲の閉鎖器が壊れただのといった程度の被害ではなく、よくもこれで

沈まなかったなと思える程の大損害の筈。機関は水に浸かり、艦体は中程からもげ、煙突は引き裂かれ、隔壁は焼け爛れ、発電機も止まって艦内の照明すら維持できていないかもしれないその姿は、もはや艦艇としては完全な死に体だ。

しかしそんな死に体の仲間達を陸上設備の支援を満足に受けられない中でも治療してやるのが、工作艦としての、そして艦魂における軍医としての明石の戦なのである。

甲板の傾きすらも復元できない中でもしっかり洋上で船位保持させてやる為の多くの錨やバラスト、鋼索なんかは、さしずめ四肢を伸ばしてもがき苦しむ患者を治療の為にベッドの上で安静にさせる拘束具。13基全てが全力稼動すれば1時間で3000トンもの海水を排水できるポンプは、まさに患部に溢れ出る血と膿を治療の為に除去するスポイト。加えて明石艦の艦内を占める多くの工作設備は、火傷であっても裂傷であっても打撲であっても、満足に対処できるだけの医療技術その物なのであった。

『・・・・・・・・』

そこまで考えた明石だが、彼女はようやく明確になった自分のお役目の詳細に喜びを覚える事は無い。そんな感情が胸の奥から湧き出る前に、明石の脳裏にはいつか師匠が口にした言葉が過ぎっていった。

『明石が受け持つ戦線は、帝国海軍工作艦である明石艦の艦魂という名の戦線。そこは明石独りの力でなんとかするしかない。みんな一生懸命に生きている事を忘れず、明石にしかできない戦いをしなくてはダメよ。』

自分にしか出来ない戦い。自分の戦線。

決して師である自分では代わる事の出来ない戦いなのだと言口にしてた朝日の言葉は、南洋のような僻地であってもその最新鋭艦内設備を駆使して任務に当たるといふ、明石の分身だけが実現できる運用方法の知識とピタリと符合していく。

それは決して明石の思考が飛躍した訳ではない。工作艦たる明石艦は、まさにこの為に建造されたのだった。

やがて今までは漠然と怪我した仲間を治療するだけだった明石のそんな戦の意識には、遙かな大洋の果てに望む僻地と、そこで今にも命の灯火が消えかけている血塗れとなった仲間達という輪郭が備えられていく。脳裏に浮かぶその光景に立ち向かえるのは、相應の工作設備を持ちながらも旧式で全力わずか10ノットにも及ばない低速と、多様なポンプや繋留艀装品を明石と同等にまで搭載できない分身の持ち主である師匠ではない。現代帝国海軍の一隻にして、最新鋭工作艦である明石しかできない戦だった。

『工作艦としてもお船としても、明石は私なんかよりもっともつと上を目指せる筈よ。』

そんな言葉を放った際の師匠は既にあの時、教え子たる自分の事情をここまで見抜いていたのだろうか？

思い出してみれば、英語を教えてくれと懇願した時に受け取った朝日の言葉もまた、今の明石には妙に今しがた教えてもらったばかりの自分の知識に上手く重なっているような気がする。さすがにその真相と答えは当の朝日に聞かねば解らないであろうと思いつつも、明石はようやく自分が担うべき戦場の絵を脳裏の向こうにだが垣間見る事ができた。

それは戦闘艦艇たる仲間達にも決して劣らない、自分の全てが試

される戦。もっともつと現実的に、そして明確に考えようとして、そんな自分の戦に今この長官室にいる仲間達の顔を当てはめるのは辛かったが、それこそがいつか聞かされた逃れられない自分の戦なんだと、明石は一人俯いて声も自分に無く言い聞かせる。

これが、私の戦なんだ。乗組員の人達も含んだ、明石艦の戦なんだ。

『おい、明石い？　・・・なんだか自分の世界に入っちゃったぞお。』

『おい、明石。どうした？』

『あ、うん、ごめん。何でもないよ。高雄さん、有難う御座います。おかげで私、今年はもつと頑張ろうと思いました。本当に有難う御座いました。』

『お、そうか。そりゃ良かった。』

すっかり元気な声が聞こえなくなった明石を心配して高雄や神通が彼女の横顔を覗きこんでくるが、明石は愛想笑いにも近い笑みをちよつとだけ見せて応じつつ、ついに全容を掴んだ自分だけの戦に向けて静かに、そして激しく改めた意気込みを募らせていくのだった。

既に明日で終わる昭和15年。

でもこのお勉強会は明石に、あさってより始まる昭和16年の海における明確な目標をちゃんと提示してくれた。なんと有意義だったと思う反面、より一層の軍医としてのお勉強に励もうと早速心を改める明石だった。

その後、お勉強会は空母の話の最中に出た戦策としての主力艦隊の位置づけ、次いで抜けた方である加賀ら一航戦は今後どうなるのかといった話に及んで行き、帝国海軍が日本海海戦の様な白昼での艦砲戦ではなく戦艦部隊も巻き込んだ一大夜戦を主に据え、その前座たる昼間はなんと空母を一個艦隊の編成で集中運用した航空攻撃を行うという、二本槍での戦策が最近では考えられている事が話題に上った。

長年夜戦の主役と位置づけられてきた水雷戦隊を率いる神通と那珂は大いに驚き、他の艦魂達も空母を主とした戦隊ではなく艦隊を創設するという前代未聞のお話に仰天してしまう。

『馬鹿な……。親方の三戦隊を支援につけた上で行う第二艦隊総出での夜戦は、帝国海軍の戦策の大元である海戦要務令に盛り込まれてまだ5年かそこらだ。それ以前は、そもそも夜戦という物は視界も悪く相互連絡も難しい事から、基本的に大部隊での夜戦は極力回避する方針だった筈だぞ。それを戦艦部隊も巻き込むとは……。おい、那珂。お前は思う？』

『そうねえ……。実施するとなれば、私達みたいな水雷戦隊は主力部隊の露払いとして、敵の警戒部隊の進出を阻止する役か、逆に主力部隊に支援をさせての強襲雷撃をする役になると思うけど、・でもそれだと、これまで以上に主力部隊と近接した行動になるわよね。・・・美保^{みほがせき}ケ関みたいにな。・・・。』

『うむ……。よほど連絡と各部隊の状況把握を確立せんと、とて

もじやないが実現は無理だ。下手したらあの時の繰り返しになる・・・
軍令部の連中はどうするつもりなんだろうか・・・ふうむ・・・
』

さすがにこの二人は夜戦のお話には敏感で、何も水雷戦隊旗艦を長く務めた経歴だけの事ではなく、戦艦もひっくるめた夜戦の実例を悲劇として各々がこれ以上無くよく知っている身の上である事にも大きな理由が有るようだ。もちろんその内容を知っている明石も含めて、仲間達は誰も那珂が口にした美保ヶ関の言葉を追求しよう等とはしなかったが、残念ながら神通と那珂の首を傾げる事案に対して答えを授けれる者もその場には誰一人としていない。

故に神通は艦隊旗艦として長門や陸奥といった艦魂社会のお偉方とも割りと話す機会の多い高雄と愛宕に、この懸案ばかり夜戦に対してどのような推移で話が進められているのか問い合わせて欲しいとお願いし、高雄もそれを了承。連合艦隊司令部を分身に宿している長門なら何か知っているだろうと高雄は告げ、本年度の演習にて合同した際に打診する事を確約してくれた。

その一方、空母を主力とした艦隊という前代未聞の艦隊編成も長官室の一角では大変な盛り上がりを見せており、幸いにも空母に関しては専門家にも等しい艦魂がこの場に居る事もあって、その詳細を明石を含めた第二艦隊の仲間達は即座に耳にする事ができた。

言うまでも無く、語り手は相も変わらずのどんよりとした声色でゆっくりと話す加賀である。

『・・・なんでも、何百機にも及ぶ航空機で編成された攻撃隊を指揮するのは、軍隊区分による臨時的な指揮系統では不足があるのだそう、仮に飛行機の大集団で攻撃するのなら、計画作成時に普段から指揮下に入っていない各隊の錬度や余剰部品、欠乏部品等の事情を把握し難いらしいんです・・・故に空母を平時より一個艦隊に集約して運用し、所属の攻撃隊事情を完璧に指揮官が把握した上

で、より高精度の航空戦を展開するという意見具申が以前から上がってしましてね。・・・私も驚きましたが、つい最近にはなんと山本連合艦隊司令長官をすっ飛ばして、直接軍令部や海軍省に上がったとの事です。』

空母に關してのお話は人間達の間でも推移しているらしく、加賀が語った直属の上司を跨いでの意見具申という話題に愛宕が思わず声を上げる。艦隊司令部を去年まで分身に宿していた彼女にとって、どうやら切羽詰ったように職制を通り越す意見具申というのは随分と珍しく思えたようだった。

『そんな意見具申とは珍しいな。しかもまた、上司を無視して上層部に意見をぶつけるとは。その豪傑はなんという人間なんですか、加賀さん。』

『お？ 強いオトコに興味があるの、愛宕？』

『うるさい。』

愛宕の質問に茶々を入れたのは、すぐ近くの席に座っている高雄。陽気でひょうきんな高雄らしい台詞はどこかどう見ても妹をからかう冗談の類であったが、姉と大違いで真面目な愛宕はちよつと怒ったようにそれを一蹴する。中々実の姉に向かってこんな邪険にするような文句を吐く輩は艦魂社会でも割と少ないのだが、愛宕の方がほんの僅かに高雄よりも歳を重ねているような感もある容姿を持ち、加えてその人柄の差もある故か、高雄はわざとらしく『ぐえ。』等と短く悲鳴を放つと黙ってしまう。神通の部下である霞と霰と同じく、この二人は姉妹の上での関係と艦が誕生した時である進水日の前後が逆であり、その事も少しは関係しているようだ。

だがやがて、そんな高雄と愛宕のやりとりには笑い声がそこかしこで舞上がっている長官室の中には、いつの間にか朱色を帯び始めてきた舷窓より注し込んで来る陽の光と共に、対称的な加賀の沈むよ

うな音色の声が木霊して愛宕への回答となる。

それは加賀が属する一航戦をついこの間まで指揮し、現在は三戦隊司令官へと転勤した小沢治三郎少将おざわ じさぶろうというらしく、聞く所によると先々月の観艦式にて明石も含めてこの場にいる者達の多くが見た527機に及ぶ海軍航空隊による航空機の大編隊はその小沢司令官が指揮しており、この際に各空母や陸上基地所属の飛行隊で編成したあの大集団の統一指揮はとんでもなく懸案だらけだったとの事で、その経験とこれまでの空母部隊運用の実績を元に海軍省の航空本部等とも意見を調整した上で意見具申に至ったのだという。

『・・・恐らく私と一航戦が第二艦隊に來たのは、この辺の事情もあるんじゃないかと考えているんですが・・・。まあ、それ以上の情報は今の所は無いですかね。』

『なるほどねえ。さしずめ航空艦隊ってトコかあ。』

『本当に空母だけで編成すんのかな？ 戦艦クラスじゃないと赤城あかぎさんや加賀さんなんて、もしもの時に曳航できなさそうだけど・・・。』

『うーうーん。どうだろうなあ。』

進み行く帝国海軍の思惑に加賀も含めた多くの仲間達が首を捻る。前代未聞の空母による艦隊の姿はそれだけ彼女達の思考には中々イメージとして浮かんでこない代物で、加賀と愛宕との間でのやりとりから聞き取れた断片的な情報では到底全容を掴む事は出来ない。

艦隊旗艦たる高雄にとっても残念ながらそんな空母艦隊の構想の詳細は謎に包まれたままであったが、同時に自らが率いる第二艦隊がそれに付随する形で大きな変化を迎える事は無いだろうと告げる。もし仮に第二艦隊にも関連するお話であれば、古賀長官こがを始めとする第二艦隊司令部を宿した彼女の耳にも必ず入ってくる筈なのだ。

故に突然明日から第二艦隊が白昼堂々の水上戦闘を行うとか、全艦艇をもって空母護衛を専門にした運用になる訳でもないので、こ

れまで通りで頑張りつつ今後の航空部隊の戦策には十分に気をつけて行こうという指針を仲間達に示し、明石を始めとして新年に向けた目標を各々が見出す事が出来た本日の有意義な勉強会はお開きとなるのであった。

そしてこの勉強会で出た空母による艦隊の影響が後に神通を主とする一波瀾へと発展する事は、この時まだ誰も知らなかった。

第一〇八話 「形と友情／前編」

昭和16年1月1日。

紀元2600年のお祝いに沸いた1年が終わり、新たな1年がまた始まるこの元旦を、明石艦^{あかし}含む第二艦隊は相変わらず防府市^{ほうふ}沖合の待機地で投錨しながら迎えた。

第二艦隊司令長官である古賀^{こが}中将も含めて、乗組員達にとっては各々が家族と共に一家団欒でのお正月を味わえないのは残念であるのが率直な所だが、同じ日本人によって運営される帝国海軍も末端の者達のこの気持ちを無視する事はない。一家団欒を実現してやる事は確かにできないものの、せめて美味しい物でも食べて新たな年の始まりを気持ち良く過ごしてもらおうと、普段の日々とは全然違う程に豪華な昼食が全ての艦で乗組員に振舞われる事になっているのだ。

辛い海軍生活を日々耐え抜く水兵さん達にとってはまさに至福の時で、先月3日の明治節に続く本日のお食事は屈託の無い笑みが弾ける貴重な時間。豪華な昼食を帝国海軍が定めている祝祭日は1年の内全部で5日有り、いわゆる四大節と5月27日の海軍記念日がそれに当たる。前もって士官食堂では祝祭日当日の献立が表示され、豪華な食事に欠かせない食材はわざわざ運送艦が艦隊の下へ届け、士官の者達も兵下士官と揃って今か今かと楽しみにしてきた日だ。

もちろんそんな美味しいお正月事情に明石艦の命である明石が大人身しくしている訳も無く、お昼御飯が作られている烹炊所へと迷う事無く突撃。焼いた鯛を始めとした盛り皿と五目飯をどんぶり一杯に調達する事に成功し、新年一発目からたらふく食う一日を過ごす。明石艦乗組員達も翌日の昼食前後で行った半舷上陸にて防府天満宮へと初詣を行い、いよいよ明けた昭和16年に気持ちを新たにすのだった。

1月4日。

まだ世間ではお正月気分が蔓延する中、第二艦隊はそれまでいた防府沖から泊地を出立。つい先月来た瀬戸内を僅かに東進、つまり逆戻りする方向へと針路を取り、2ヶ月前に町名が変わったばかりの光町を望む室積沖へとその日の内に移動してここを作業地と定めた。

防府と近いこの海域も発展した港湾を古くから備える為に帝国海軍艦艇部隊ご用達の泊地の一つで、土地柄の面でもこの周辺は随分と帝国海軍とは所縁がある。

その中でもまず有名なのは光町と防府市までの海岸線にてちょうど真ん中に位置する徳山市の存在で、日露戦役の真っ最中であつた明治37年にこの地は海軍燃料製造を行う地と定められて「煉炭製造所」を設置され、以来今日に至るまで帝国海軍燃料事情の重要な部分を担ってきた輝かしい功績を持っている。現代では「第3燃料廠」という名で市街地と港湾の辺りに広範な敷地を持ち、帝国海軍艦艇の腹を満たす重油や石炭を貯蔵、及び精鍊する大切な場所の一つ。そもそものが湾状になった波間に港を構えている事情も重なり、帝国海軍の作業地としては柱島泊地を凌ぐ程に大変に便利な地である。

なぜならここを拠点とすれば、一切の燃料残量を気にせず思う存分艦を動かせるからである。

第二艦隊がわざわざ室積沖へとやってきたのも当然そこに狙いが在り、いよいよ海面を疾走しながら大砲をぶっ放すという派手な訓練も迫っているのだと、乗組員や艦魂も含めた第二艦隊の面々は僅かな緊張感を抱く。

そしてさらにもう一つ、この地と帝国海軍を繋ぐ要素がこの周辺

の陸地にはあるのだが、それは室積海岸沖に陣取った第二艦隊における各艦の甲板から、造成された地に色々な建造物が建てられている形で直接目で見る事ができる。何か工場でも作っているのか、家屋とは全然違う鉄筋製の建造物が何棟も連なる光景に艦魂達も興味の視線を向ける中、着々と工事が進められているのは光町の名前を取った帝国海軍7番目の海軍工廠である「光海軍工廠」であった。観艦式でも湧いた昨年10月に開庁したばかりで現在は本格稼働前の準備活動に追われているらしく、正月期間でも有無を言わずに建築作業を続行しているその様は、どこか帝国海軍の人使いの荒さを象徴しているようでもある。

『なんだ、陸も大變おかだな。』

『海軍って付くなら、どこでも月月火水木金金か。艦隊勤務だけじゃないんだなあ。』

第二艦隊のとある艦の甲板上で三々五々の休憩を取っている中年の下士官らが、煙草を吹かしながらそんなやりとりをして、実に多忙な自分達への嘲笑も含む笑い声を上げていた。

そして第二艦隊の多くの艦の中で彼ら乗組員達の自嘲がすぐに現れたのが、他ならぬ明石艦であった。

もちろんその理由は明石艦が最新鋭工作艦だからで、第二艦隊全艦が艦隊訓練前の万全の整備を実施するに当たってその負担が集中するのである。まして忘れてはならない訓練その物の支援だって明石艦はこなさねばならず、特に本日は射爆撃訓練で使用する曳航標的や静止標的の現地準備で明石艦の艦首から艦尾に至る甲板は多忙を極めている。

どうせ壊されるのだからと言えば多少は作り甲斐に欠ける感もあ

る標的類は、高価な鉄材などでは無く木や竹を使って筏状に組み上げた物だが、だからと言って手抜きで作って良いようないい加減な代物ではない。最新鋭工作艦の性能からみれば構造の簡単さが目立つ対象ではあるも、標的類は相応の速力での曳航に耐えられる強度が必要だし、至近弾の爆風などで簡単に壊れると命中の可否が判断できずに訓練その物の正確性が下がってしまう。故に出来上がった標的の数々に工作部の士官達が目を念入りに光らせるのは当然であり、中々奥の深い訓練標的作りで甲板上は工具の音と工作部員達の声で賑やかさも感じれる様相となっていた。

おかげさまで今日の明石艦の艦内には久々に工作機械の稼動音が木霊し、年が暮れる直前に覚えた勉強熱に駆られている明石を大いに邪魔する。明石は集中力が強く一心不乱に勉強に打ち込む事も珍しくは無いが、やはり大きな音量の物音が連続しては明石でなくとも集中が遮られてしまうという物。砲術科の主砲操砲員達が使う耳栓をかつぱらってこようかとも思ったが、元日より勉強を続けてきた手前もあって今日は息抜きでもしようと考えを改める。

『標的づくりかぁ。どんな風にして作るのかな？』

大繁盛の工作部の事情はもちろん明石も知っている。艦隊訓練で使用する標的は明石にとって初見という訳ではなかったが、さっきまではうるさいと感じていた小気味の良い木を打つ音に次第に好奇心を誘われ、その組み立てをのんびり見学しようと明石は上甲板へと足を運ぶのだった。

しかし明石の軽やかな足の運びは、部屋を出てしばらくすると早くも止まる。まだ上甲板に通じるラッタルも昇っていない中甲板のそこは工作部の板金工場区画に程近い艦内通路の一角で、今日は上甲板での標的作りが明石艦工作部の大きなお仕事の為か、のこぎりや金槌といった工具が工具箱に入った状態で通路脇に列を成して待機している。その列の中でちょうど明石の止まった爪先の前には、痩せ型ながらも160センチ台と女性にしては大柄である明石が横になってすっぽり入れるくらいの大きな木箱が置かれていた。

『う？』

やたらと大きな長方形の木箱は蓋が外されており、明石は容易に見る事のできる中身を目にして首を捻っている。次いで背後を乗組員達が忙しそうに右へ左へと通り過ぎていくのが一段落するのを見計らい、明石は持ち前の好奇心に任せて木箱の中へと手を伸ばしてみる。するとそこその重さにちよつと力を入れつつ持ち上げた彼女の手には、随分と濁ったような白みが目立ち、断面が長方形となっている細長い棒状の鉄材が握られていた。

『な、なんじゃこりゃ？』

一応は明石艦の中で生きてきた明石にとって、いつも工作部で扱っている資材関連は大体は目にした事があるものばかり。お船の中に無数にある配管だったり、隔壁を直す為の鉄板だったり、支える為のステーやフレームだったりを上手く工作し、仲間達の分身を簡易的に修理してやるのが最大のお役目である明石艦であるから、その為の資材は結構頻繁に艦内倉庫から出し入れしているのを明石も見てきた。ところが今、彼女の手握られた鉄の棒はその白い色合いが随分と目を引く奇妙な資材で、これまで明石は一度たりと見たことの無い代物。物指しの一種である金尺と似たような形で、明

石の手の手首から人差指の付け根くらいまでの太さしかなく、しかもまたその厚さは明石の細い指よりもまだ小さい。全くもって奇妙な形で、明石は手にした資材の用途が皆目解からなかった。

『佐世保の陸戦隊用の荷物なんですがね、呉で引渡しの際に余ってる分を少し貰ってきたんですよ。』

『おお、そうなのか。じゃあ佐世保の造兵部辺りで加工するんですか？』

『あ。』

しばらく手にした奇妙な鉄材をあちこちから眺めてその用途を思案していた明石の耳に、ちょうど灰色の通路の向こうから乗組員の者であろう男性達の声が聞こえてくる。明石はその男達が誰なのかを確認する前にすぐさま手にした鉄材を木箱の中に戻し、明石の方へと歩いてくる彼等がフワフワと空中浮遊する鉄材を見て驚かないようにした。どうやら乗組員の男達は明石の咄嗟の企図のおかげか鉄材の異常には気付かなかったようだが、通路の隔壁に背をつけて男達をやり過ぎそうとする明石の前で彼らの足取りはピタリと止まってしまう。

今の今まで明石が調べていたあの鉄材が目的だったようだが、間近に來た事で確認できた彼等の顔ぶれに明石はちよつと驚く。なぜなら資材に用があるなら工作部の下っ端に当たる者達が妥当な筈なのに、なんと明石の前で鉄材を見ながらやりとりをしているのは、彼女の分身の総責任者たる人間達であつたからだ。

『あれ。特務艦長さんと工作部長さんだあ。』

そんな明石の眩きを耳にする事の出来ないまま木箱の前で何やら笑みでの会話を始めたのは、明石艦特務艦長たる伊藤大佐と、先月付けで赴任して工作部長の役職を頂いている西田機関大佐。

艦長さんと同じ階級の人がもう一人乗組んでいるとは帝国海軍艦艇の中でも珍しい在り方だが、西田機関大佐は厳密には将校ではない将校相当官という奴で、兵学校出身の伊藤大佐とは違って海軍機関学校の出身である。その名の通り元々はボイラーやタービン、発電機といった機関関連の設備を扱う専門の技術士官で、現代では一口に機関と言っても石炭焚きからディーゼルといった多様な種類が有るのに付随してその職域は非常に広く、しかも工作関連のお仕事は明石艦に限らず全て彼等の様な機関科配属の人員で宛がわれている。もちろんこの意味で西田機関大佐は伊藤特務艦長と一応は同じ大佐という階級を頂いているのであり、工作艦たる明石艦の工作部署の総責任者は伊藤大佐ではなく彼であった。

先程から二人は明石の眼前で背を向けてしゃがみ込み、前にした木箱の中からあの奇妙な白い鉄材を手にとって何やら楽しそうに話をしている。明石はそんな中年の男二人の賑やかなやりとりにとちよっと興味を持ってしばし耳を傾けてみた。

『呉鎮付きの奴が同期でしてね。2本か3本くらい余計に積めないか相談したんですよ。』

『おお、そうですか。後はこの艦の工作機械で作れるかどうかですな。一応佐世保への寄港は艦隊司令部では予定してるみたいですが、まだ日程は出てませんかねえ。』

『う？ これで何か作れるのかな？』

どうやらこのオジサン二人。わざわざ示し合わせた海軍内でのツテを駆使してこの資材を調達したようで、意図的に発生させたお余

りを明石艦の工作機械で加工する腹積もりらしい。まさか鉄材に異常な執着を共に抱くアブない方々なのかと明石は疑ったが違うようで、二人で木箱の中から例の白みが目立つ鉄材を何本か引き抜くと意気揚々と通路の向こうへと歩いていく。その方向は工作部の板金工場区画の奥側に回り、硬い鉄材を加工する厳つい機械が列を成している区画。その事は伊藤特務艦長と西田工作部長が早速手にした鉄材を加工しようとしている考えを明石に示し、たまたま通路へと出てきた板金区画の工員さんに声を掛けて工作の詳細とお願いをしている様子にも証明されている。しかも西田工作部長は工作における参考書なのか、懷から何やら冊子を取り出して『こうしろ、ああしろ。』と工員さんに熱弁を振るう有様だ。

そして明石はそんな彼らの背中を見ている内に持ち前の好奇心がさらに一層湧き出てきてしまい、謎の資材が一体全体彼等の企みで何に変化するのか確かめるべく、伊藤特務艦長らの後ろをトコトコとついて行くのであった。

『なに作るんだろ？ よおし！』

こうして明石は決して顔を知らない訳ではないものの通りすがりのオジサン二人について行き、彼等が工作機械の唸り声もけたたましい中での白い鉄の棒がどうなるのか、文字通り人知れず観察し始める。彼女の眼前では研削盤や切断機でもって鉄材はちよつとづつ形を変え、その最中に飛び散る鉄粉によって鼻の付くような臭いと耳障りの悪い金属の摩擦音に顔をちよつとだけしかめる明石であったが、30分程も経つ頃になると伊藤特務艦長と西田工作部長が何やら小さな歓声を上げ始める。

『焼入れは終わってるから仕上げ研ぎだけだ。よし、形になったぞ。』

』
『どれどれ。お、それっぽいじゃないか。』

工作室の隅っこでしゃがみ込んでそれまで見守っていた明石もその声に気付き、オジサン方が年甲斐も無く何に歓声を上げているのか、そっと近寄って二人の肩の間から背伸びして確保した視界を彼らの手元に向けてみた。

刹那、意外な物がそこに出来上がっていた事に驚き、明石は思わず彼等の耳元にも関わらず大声を上げてしまった。

『おおお！ 軍刀だあ！』

なんとビックリ、明石が通路で見つけたあの白くて細長い鉄材は、舷窓から漏れてくる陽の光によって白刃の輝きを煌びやかにする一振り。片側だけに独特の紋様と鋭さを得たその姿は、まさに日本刀その物である。30分程前に西田工作部長が口に使っていた「陸戦隊」の言葉も鑑みて、明石はあの白みがかった鉄材は官給品である軍刀の素材だった事を確信した。同時に驚きと感動を覚えて明石は丸い目を爛々と輝かせているが、当の伊藤特務艦長、西田工作部長は大はしゃぎの明石に反して余り表情に明るさが滲んでいない。ようやく楽しみにしていた形になったのをついさっきは喜んでいたのに、舷窓から射し込む陽光で輝く白刃を眺めながら二人とも首をかしげている。その内に伊藤特務艦長が口を開き、ようやく誕生した軍刀に残念な評価を溢し始める。

『んー、グラインダーで砥いだけだとやはり波紋が汚いな。元々が腰も伸びてるし。』

呼び止めて工作してもらった工員を気遣うように伊藤特務艦長がそう言うと、西田工作部長はちよつと苦笑いを浮べてながらその辺

にあった紙切れを取り出し、加工し終わったばかりの刃を手に触れぬように注意して紙切れを薙ぐ。すると紙はギザギザな切り口で半分となり、彼はがっかり気味の声色で不満を口にする。

『むう、切れ味も最悪だ。やはりダメだなあ』

『およ？ これだめなのお？』

なんだかさつきから軍刀の出来栄えに不満だらけの二人の声を受け、思わず明石は答えてもらえないと知っていながらも問いかけを放ってしまう。そもそも明石はこれまで軍刀も含んだ刀剣の類はほとんど見た事が無く、とりあえず刃が付いて腕の長さよりも長めな大きさであれば立派な刀剣としか彼女には見えないのだが、どうにも自身の分身の最高幹部である眼前のオジサン二人は出来上がった軍刀の仕上がりがすこぶるご不満らしい。何が悪いのか確かめるべく明石が丸い目をかっぱじってじーっと軍刀に視線を向ける最中も、手にした時のバランスが悪いだの反りが足りないだのとブーブー文句を言う始末。先程の工作の様子を見る限りあの白い鉄棒1本でちようど軍刀1振りに相当するようだが、最初の1本で上手く理想の形にする事が出来ないと悟ったのか、他にも持ってきていた2本の鉄棒を引き続いて加工するつもりは既に両名には無いようであった。

『ふう。やっぱり水交社で買うのが一番ですかね。』

『ははは。安く済まそうと思いましたが、ダメですなあ。おい、ご苦労だったな。ついでにこの参考書、工作部の資料庫に入れといってくるか？』

『は、はいっ！』

ここに至ってようやくオジサン2名による道楽のお時間は終了。お仕事中に捕まえてしまった工員に労いの言葉を掛けるや、標的作

りで大繁盛している最上甲板の様子を見にその場を去る。同時に上司よりの言伝を守るべく、工員も西田工作部長より手渡された参考書を持って少し遅れて工作室を出て行った。

後に残るのは鼻の内側を突くような鉄粉の残り香と、屑鉄入れとされる鉄製の箱に捨てられてしまった軍刀を黙って眺める明石だけである。他の有象無象の鉄の欠片と共にゴミとされ、しかもまた屑鉄入れの箱に入らない長さを持っていた為にハンマーで真っ二つに折られてしまった落第軍刀の成れの果ては、明石のいる工作室に唯一ある舷窓より漏れてくる陽の光を受けて、あの特徴的な白い輝きをほのかに帯びて明石の瞳に映っていた。

やがて明石は屑鉄入れの箱に近づいて泣き別れとなった軍刀の剣先を撫でてみるが、鉄特有のひんやりとした冷たさと僅かにザラザラとした荒い研磨の感触を覚えるも、明石の指先には刃物ならば当然持っている切り裂くような刃の鋭さは伝わってこない。

『ふう〜ん……。難しいんだなあ。』

眼前の無残な軍刀の姿をちょっと可哀想と思いつつ、ふいに出た彼女の言葉は先程までの伊藤特務艦長と西田工作部長の不評を理解した故の声。見てくれだけなら確かに片側に刃を見せる為に刀剣の体を成しているのだが、物を切るといふ大事な大事な刃物としての機能が烹炊所で使っている包丁よりも酷いというその仕上がりは、刀剣に関してズブの素人である明石にも十分に解かった。

だがこの時、屑鉄入れの中で物寂しげに輝いている軍刀を眺めていた明石は、廃却の為に真っ二つに折られたというその姿にもう一年以上前の記憶にある親友との出会いを思い出す。もちろんそれは容姿の上でも艦齡の上でも自分より10歳以上も歳が離れているにも関わらず、最も親しい友人として慕う神通じんつうとの出会いで、双方

供に顔が腫れ、血を流すほどに殴り合った末に理解しあえたという
なんとも衝撃的な記憶である。その際、持ち前の度胸と強面、そし
えて暴力でもって己の悲しみを誤魔化そうとする神通に、明石も怒
りの感情を昂ぶらせて一步も退かぬ殴打を披露したのであるが、明
石にとっては友人との出会いという良い思い出の一言ではちよつと
済ませる事の出来ない行動を、実はこの時とっていた。

神通が美保みほがせきケ関事件で悲劇を目にする以前より大事にし、しかも
一連の事件の最後に自ら命を断つという形でこの世から去ったとあ
る人間の形見とも言える刀を、明石は神通との殴り合いの最中に怒
りに任せて折ってしまったのである。

『こんな物!!』

その時は何かその刀が神通という艦の命における悲しみ故の悪さ、
惨劇を知る故の間違いといった悪評の権化にも思え、明石は躊躇す
る事も無く抜き身の刀身を月光の下で隔壁に叩きつけてやった。気
味の悪いほどに綺麗な音色で泣き別れとなった親友の刀の末路で、
その後しばらく声を交えて和解した際、自ら折れたその刀と鞘を月
明かりの波間へと投げ捨てた親友のあの表情を、明石は今でもハッ
キリと覚えている。

『もういらん・・・、いらんさ・・・。』

片方の頬と瞼の辺りが青く腫れ、切れた唇から血の流れを滲ませ
ながら、その鋭い釣り目の両端に光る雫を湛えて薄っすらと笑って
いた神通。仲間を殺し、恩人たる人間までも自殺に追い込んでしま
ったという呪いの呪縛より、彼女はまさにあの瞬間解放されたので
あり、思い出すと今でも明石は親友を心底祝福してやりたい気持ち
になる。

だがその頃から今に至るまで、明石と友人として接していく中で

神通はおくびにも出さなかったが、やはり彼女は指揮の為、部下を戦場で従える為の象徴として刀という物に思い入れがあるようで、何気ない日常の中でも明石と話をしている際、希に呆けた視線で人間の士官連中が持っている軍刀をじっと眺めている事がある。金剛こんごうという名の師匠より授かった教えもあるのだろうが、部下達の教育の際にも必ずと言って良いほど神通が竹刀を手に行っているのも、今更ながらに彼女が刀剣の類をその心の中で非常に大きな存在として位置づけている現れなのではないかと明石には思えてくる。

そして経緯はどうあれ、そんな親友の刀を明石はその眼前で破壊してしまっただ。

『神通……』

大の仲良しと慕う神通の名を漏らし、これまでの2年近い付き合いの中で唯の一回もあの軍刀の事を話題には出さなかった親友の胸の内を想う明石。いつも冷ややか目線で周りの者達を押し黙らせ、上官であっても部下であっても怒りの声の覇気と音量を一切変えず、尊大で短気ですぐにげんこつを相手に飛ばすという、良くも悪くも極めて軍人らしいとも言える神通の人柄には明石であっても困ってしまう事も多いが、そんな人柄だからこそ余計に明石には、これまでの時間で神通の本音に考えを巡らせて応えてやれなかった事が辛かった。

『ホントは欲しいんだよね、軍刀……。私と違って、神通は指揮官さんだもんね……。』

屑鉄入れより真ん中から叩き折られた軍刀の片割れを手に取り、舷窓からの陽光を宿した白刃に眉を細めながら明石は呟く。考えてみれば軍刀という、ともすれば大変に物騒でもある軍人の持ち物を佩用した姿が、明石の知る多くの船の命の中で最も似合うのは他の

誰でもない神通である。そもそも艦魂社会では軍刀を調達する仕組みが無くなじみも薄い代物であり、自身の分身の中で人間達が紛失した物を個人所有としたり、民間船の艦魂を上手く使って入手する以外に手は無く、明石が実際に目にした軍刀を持った艦魂とはお偉方の長門や比叡、そして昨年の観艦式前の横須賀にて富士という先輩より見せてもらった、今から36年前の古い写真における敷島だけである。

もっともこの3人も含めてだが、決して軍刀がある日突然に自分の所持品として出現させた訳ではない。明石もそうであるが、艦魂特有の淡く白い光を用いた能力であつても無から有を生む事は実は不可能なのであつて、せいぜいできる事と言えば全く同じ物質を相当の体力を消費して複製するくらいが関の山でもあつたりするのだ。

おまけにそも白兵戦を組織としての想定にちゃんと組み込んでいる帝国陸軍と違い、お船同士が敵味方に分かれて撃ち合いを演ずるのが主である帝国海軍では、軍刀を手にした人員というのは大変に希少である。上海事変や支那事変で陸戦隊の活動が目立つここ最近では多くなつた方ではあるが、それでも帝国陸軍のように一兵卒に銃剣を官給する必要は無い事から、帝国海軍では士官以上の者でないと軍刀は着用してはいけない事になっている。大体が銃剣や軍刀を立派な兵器として捉えている帝国陸軍に比し、帝国海軍での刀剣類は服装の一部として定義されているのに過ぎないのだった。

そんな幾重もの事情により、明石を含めた帝国海軍艦魂社会では大変に珍しい軍刀という存在。もちろん一振りを個人用として手にしていたいという気持ちは艦魂は勿論、人間の海軍軍人でも抱く者は多く、上手く職場と知り合いのツテを利用して軍刀を作り出そうとした伊藤特務艦長、西田工作部長の行動には、このような事情も多分にきつかけとして含まれていたりもする。

だがそんな自身の乗組員による先程の軍刀製作は、なんとか友人

に欲しているであろう一振りを調達してやりたいと思い始めていた明石に非常に参考になる実例となる。今までなんだかんだで世話になってきた神通の為と思えばやりがいも湧くし、なにしろ多くの部下を抱える指揮官たる体面とにかく強いこだわりを持っている彼女である。機能性は多少犠牲になっていても形として刀剣の姿になった物を贈呈されたなら、指揮の象徴を手に入れたと大いに喜んでくれる様子が明石の脳裏には難なく浮べる事が出来た。

『んもう、折っちゃわなくても良いのになあ。ま、でもまた作ればいいかあ。』

本当なら先程作られた軍刀をそのまま進呈できれば楽だが、実際に作られる様を最初から最後まで見ていた明石には自分の手で工作する事への億劫が発生しない。具合が良い事に西田工作部長らは3本も素材を持ってきたにも関わらず最初の工作で早々と見切りをつけて退散しており、残りの2本は屑鉄入れを前にして立ち尽くす明石のすぐ傍で無造作に壁に立てかけられている。通路で明石に気付かないまま話していた内容では元々の搬入数量に細工しているとの事であったから、仮にこの2本に及ぶ軍刀の素材が紛失したって全く問題にもならない筈。加えて今は艦内奥深くの資料庫に収納されてしまったが、西田工作部長が所持していた参考書を見れば作り方だって明石にも解かる筈で、全く意図せずにお偉方に付き合わされた工員さんが一応は軍刀を仕上げてみせたのはその証明でもある。

今の明石には大変に都合の良い事ばかりで、すでに明石には出会った頃の事を思い出すのと同時に蓄積していた友人への懺悔の感情は微塵も無い。むしろきつと喜んでもらえると期待感が入れ替わるようにして渦を巻き、やりがいと工作艦たる自身でしか実現し得ない使命感が彼女の胸の中で激しく燃え始める。

『いっよおし！　頑張っちゃうぞお！』

横溢した明るい感情に付随して明石の顔には満面の笑みが花咲き、叫ぶようにして放った声色は出航の際の信号ラッパの如く意気揚々としていた。次いで人並み以上に集中力を単一目標に注げる性格の彼女は、善は急げとばかりに工作室を飛び出し、まずは汚れ易い工作作業に従事する為の作業衣調達へと向かう。

こうして友人である神通への友情を懸けた、明石による軍刀作りが開幕するのであった。

第二〇九話 「形と友情／後編」

第二艦隊の各艦が大小の内火艇やカッターを周囲に群がらせて浮かぶ、陸地の茶色と海の青さが際立つ室積沖の泊地。

近場である呉鎮守府よりやってきた運送艦から補給資材を受け取り、訓練弾頭の魚雷や砲弾といった訓練の為の物資も各艦には揃いつつある。明石艦^{あかし}も出来上がった標的類を左右の乾舷下に幾重にも渡って繋ぎ止め、「両手に花」ならぬ「両舷に的」というその様はなんとも奇妙な光景である。

その場にいる艦魂達の何人かは標的まみれの明石艦を見てクスクスと笑っていたが、その甲板上で汗水流して標的の組立てに勤しんでいる明石艦乗組員一同と、軍刀作りに一念発起した艦の命たる明石にあっては、決しておふぎけではない至って大真面目な一日を過ごしていた。

『うーん、と……。ぬあ、これもダメかあ……。』

ねずみ色一色の明石艦艦内にはトンカントンカンと小気味良い木材を打つ音と共に、兵下士官が寝泊りするいくつもの兵員室の一室へと来て、室内に並べられた衣囊^{いのう}から服の類を出しては引っ込めるを繰り返している明石の弦きが木霊する。兵員一人当たり一つを与えられているこの衣囊の中身はそれぞれの日用品で、一種二種の違い問わない軍装や軍帽、靴下にタオル、果ては陸戦隊として行動する際に着用する脚絆^{きゃはん}なんかも入っている。

友への想いを昂ぶらせて工作室を出た明石はまさにそんな衣囊を

漁っているのだが、決して散らかしっぱなしにして後で上級の立場の人に衣囊の持ち主達が怒られれば良いとか、毎日の御飯の様に銀バイを働こう等と思っている訳でもない。取り出した服を戻すにあたってはちゃんと折り畳み、入っていた順番にも気を使ってあくまでも衣囊の中を元通りとするように意識して明石は戻しているのだ。

『これはっとお・・・。お、ぴったしい。』

やがて漁り始めてから数個目である衣囊の中から取り出した服を身体に合わせ、それが自身の背丈と身体の幅にちょうど良い大きさであった事に明石は嬉しそうに声を上げる。

明石が手にしているのは白い木綿で出来た事業服で、お船に乗っている兵下士官にあっては制服よりもこつちを着ている方が多かったりする服。一般的な呼び名で言う所の作業衣という奴で、艦上での多様な作業に従事する時は勿論、この時期は霜焼けに悩まされる毎朝の甲板掃除なんかでもこの服が着用されている。もっともおかげさまで事業服は帝国海軍内で最も汚れやすい服装の一つとなっており、サイズがちょうど良い事を喜びながら明石が手にする事業服もまた、例に漏れず膝や肘のあたりに黒い汚れが薄っすらと見て取れた。

『うーっん、ま、でもしょうがないよね。』

明石もそんな事業服の汚れを目にしてちよっとだけ残念そうな声を上げるのだが、すぐにさしたる問題は無しと判断して表情を明るくする。次いで彼女はその場にしゃがみ込み、取り出した事業服の上下を両膝の前辺りに並べるようにして床に置いた。

『ふう、よしっ・・・。』

何事か気合の込める声を放つ明石は、言い終えると同時に目を閉じて両手をそっと眼前の事業服に重ねる。すると明石の両腕には肩の辺りから淡く白い光が、まるで風に舞い上げられる粉雪の様にふわりと立ち昇り始める。一つ一つの細かな粒子が輝き、ふわふわと短時間の浮遊をした後にやがて光を失っていくその光は、明石を含めた船の命達が一様に持つ独自の能力。輝きはやがて明石の腕を伝ってゆっくりゆっくりと流れを形成し、砂時計の砂の様にサラサラと流動しながら明石が手を置いている事業服へと注ぎ込まれていく。

『くぬうう・・・！』

その間の明石は眉間にしわを作りながら強く目を閉じて唇を噛み、淡い光が段々とその流れ、輝きの勢いを上げていくのに比例して襲ってくる苦痛に耐えていた。何か重い物を抱えている訳でも激しい運動をしている訳でもないのに、明石の両腕の感覚には何度も殴打され、全ての筋肉がひとりでに膨れ上がってパンパンとなって行くような、痛みよりも苦しみの方が色濃いという奇妙な感覚が押し掛かってくる。艦魂にとってのこの淡く白い光は仲間達の元への移動だったり、自分達が使おうと意図した物体を人間達に見えないようにする時など、相応の頻度で使用している物でもあるのだが便利さにかこつけて生活の中で何にでも用いようとしなのは、まさに今の様な苦痛が常に伴うからでもある。これらを緩和する方法はどうも無いようで、輝きの度合いがピークに達してきた両腕の苦しみに耐えるだけで明石の身体には疲労がみるみる蓄積していった。

だが同時にドンドン削られていく彼女の体力の代償は、その眼前にて既に形を成して始めている。やがて明石の手から伝わった淡い光は彼女の手が置かれた事業服を覆っていき、事業服の生地の色合いが全く輝きで隠れてしまうようになった頃に、明石は白い光に目を眩ませながらも片目だけを薄っすらと開けて白く輝く事業服をじっと凝視する。そしてその光の中に彼女は自身の企図した光景があ

るのを確認し、両腕の苦しみに耐える険しい表情の中で口元をちょっとだけ吊り上げた。

『くう・・・！ よ、よっし・・・！』

そう呟くと明石はそれまでずっと事業服の上に置いていた手に渾身の力を込め、ぎゅっと強く握った両手で事業服を持ち上げるように両腕を上を持ち上げる。すると明石の身体からも事業服からも淡く白いあの光が嘘だったかのようにパッと消え失せ、その瞬間に明石の両腕からはこうして光を使う毎に常に伴う独特の苦痛も瞬時にして吹き飛ぶのだった。

しかし腕を上げた反動とようやく苦痛の支配から解放された拍子に、明石は思わず後ろに仰け反って尻餅をついてしまう。

『うわ、わ・・・！ ぐえ・・・！』

ろくに受身も取れぬ中で鋼鉄の床へと打ち付けたお尻は激しい鈍痛に襲われ、明石は笑みから降下一転の涙目でお尻を擦る。加えて淡く白い光を用いた能力を今しがた使い終えたばかりの彼女の身体は、肩でするような息遣いを伴ってはおらずとも多大な疲労感に満たされていて、その感覚はまるで主砲の砲弾が背中に押し掛かっているかの如く重い。身体の節々に筋肉痛にも似た張りが展開されていて、ちよっと腕を上げるだけでも苦悶の表情を浮かべている明石の顔と声が、その疲労の程を物語っていた。

『ぐへええ・・・。ちよっと張り切りすぎたあ・・・。』

普段、仲間の下へと赴く際の転移でもここまで疲れる事は希な明石。その言葉にもある通り、一連の明石の行動は艦魂としては多大な労力を消費するのが実情で、とかく便利さが魅力となってい

うとも、立つ事すらもままならなくなる程の代償を支払わねばならない大変な行為である。故に明石は今しがた終えたばかりのような能力の使い方を減多に実施しないのだが、もちろん彼女とてただ疲れを己の身体に蓄積させようと思った訳ではない。

その証拠にしばらくお尻を擦って痛みも和らいでくると、明石は疲労感一杯の中で緩く両端を吊り上げた唇の隙間より白い歯を覗かせて笑みを作ってみせる。そして彼女の細めた瞳の中には、なんとさきほど衣囊より取り出した事業服とは丈や幅どころか小さな油污れの位置までも全く同じである、もう一着の事業服が映っていたのだ。

『うし……。じよ、上手にできたぁ……。』

この兵員室へとやってきた時よりずっと彼女が狙っていた代物がコレである。触れている物と全く同じ物体を相当の体力を代償として出現させる事は、明石に限らず船の命達が共通して持っている最大の特徴であり、明石とて新米艦魂であってもそんな自分達能力の事はよく知っている。拳銃や時計といった複雑な構造の物は出来ず、しかもまた実際に手で触れないと形にできないなど、色々と能力における限界こそ有るが、この能力を使えるが為に艦魂達は、その分身が豪華客船ならば船員さんが着る船会社の服、帝国海軍所属の艦艇であれば帝国海軍の軍服といった具合に、それぞれの分身に乗組んでいる人間達と同じ服装をしているのだ。

おかげで人間の女性と比べるとそのファッションは圧倒的に男装が多い船の命達であるが、多少の不満はあったりしても彼女達は一様にその在り方を至極当然と割り切って生活している。だから明石も自身の艦に乗組んでいる男の内一人が実際に着たであろうこの事業服を、ちよっと汗臭いとか油污れが目立つ等という点で嫌悪するような意識は無い。

『ぬううゝ、とりあえずお洗濯してから使うかあ。』

頬に搔いていた汗を拭いつつ、自ら複製した事業服のアチコチを見ながら明石はそう呟くのみ。言うまでも無くこの事業服は親友の為の軍刀作りで着る事を予定しているのであり、普段着でもあり立派な制服でもある軍装を工作作業で汚さないようにと企図して彼女は調達したのだ。

『よっし！ 後は工作部の資料庫に行って、工作部長さんがしまった参考書を探せば大丈夫だ！』

まだお昼を過ぎて少ししか経っていない時間帯ながら疲労の色も濃い明石であったが、神通^{じんつう}へのプレゼントを用意するという大目標とそれに付随する友人の喜ぶ様を見たいが為、彼女は元気を振り絞ってそう言うした後片付けを開始した。

その後は一度自分の部屋へと戻って手に入れたばかりの事業服をしまい、次いで今度は中甲板の一角にある工作部の資料庫へと移動。明石艦工作部における多様な工作関連資料が幾重にも並んだ本棚に納められているという資料庫は、明石艦の中でも1、2位を争うほどに埃っぽい空気が充満するなんとも居心地に難有りなお部屋で、疲労困憊な上に咳で呼吸を圧される中での探し物に明石の体力は一層の消耗を被った。

『うえへ、げほ……。 ういゝ、や、やっと見つけたあ……。』

ようやく大量の本棚の中より、西田工作部長が所持していた参考書を発掘し終えた明石。そんな声を上げる頃には既に夕闇も迫った時刻で、だるさと重さで溢れる視界でふと通路の舷窓から望んだ空は、既に朱色を通り越して濃紺の色合いを濃くしていた。その上で

帝国海軍として本日の業務終了も近い事が、上甲板にて乗組員達に
対して放たれたであろう遠い声によって明石に示される。

『課業止めー。甲板諸掃除ー。』

些か厳つい響きを常に持つ号令だが、今の号令は世間一般で言う
所の後片付けを意味する物。昼間はコキ使われまくった新兵さんも
明石艦の責任者である特務艦長さんも、本日の業務は一応これにて
終了であり、一日の中で残す物と言えば後は入浴と夕飯ぐらいだっ
た。

そして今日の明石は既にもうヘトヘトの状態で、普段から食事調
達の為に兵員烹炊所へと赴いている事も、今日だけは面倒だと思え
てしまう程に心身共に疲弊している。ほっとけば3人前の御飯をペ
ろりとたいらげる彼女の食欲を考えれば、これは相当に珍しい事だ。

『つ、疲れたぁ……。もう夕飯は缶詰で良いやぁ……。』

だらんと両肩を下げて、歩く足取りもちょっとフラフラとする中、
明石は疲れた声でそう呟いて自身の部屋へと向かう。特に淡く白い
光を使った事業服の調達において、体力の消耗が非常に激しい物と
なる事は最初から解かっていたが、友人の為に覚悟を決めても疲労
という感覚にはやはりどうして中々勝てる物ではない。

だから明石はそのまま部屋へと戻ると、一直線にベッドへと倒れ
込みたい衝動を抑えて埃だらけになった服を着替え、その日は風呂
に入って部屋に備蓄していた鯨の缶詰を食べて、まだ消灯の号令も
掛かっていない時間にも関わらず早々に眠りにつくのであった。

明けて翌日。

室積沖の第二艦隊各艦は、未だ訓練海域で行う戦技訓練の為の準備作業に追われている中であつたが、高雄艦たかおにて古賀長官こがが率いている艦隊司令部よりの連絡で、なんと明後日にはこの室積沖の泊地に、呉で待機中の第一艦隊、そして任地である南洋方面よりわざわざ出張してきた第四艦隊の艦艇達が軍艦旗を並べる予定にある事を知らされる。合同での訓練であるのと同時に、艦隊司令部のお偉方による新年最初の打ち合わせも兼ねているらしいが、もちろんそれは人間の海軍軍人だけでは無く艦魂達にとっても同じである。

第一艦隊には明石が姉と慕う長門ながとがいるし、第四艦隊には観艦式前の宴で知己を得た常盤とこわという大先輩もいるのであり、ここ最近は上昇志向であるご機嫌の良さを彼女は更に上へと向けた。

そのおかげか、疲労困憊から一夜明けた明石はお昼頃になると元の元気も取り戻し、昨日手に入れて本日の午前中を使ってお洗濯も済ませた真っ白な事業服を身に付け、颯爽と昨日軍刀製作が行われた工作室へと現れる。

『へっへん！』

今日も標的類作りが盛んな明石艦では艦内の狭い工作区画で作業している工員さん達が少なく、工作室は甲板での物音が遠めに聞えてくるだけの至って静かな空気が満ちている。しかし明石の明るい表情と声、そして彼女の身体に身に付けられた真っ白な綿の輝きも眩しい事業服が、そんな幾分寂しい感もあつた工作室の空気に明るさを与えていくのに時間はかからない。折り目も正しい長袖長ズボンと、胸座にある両脇の襟を繋ぐ紐が目印の事業服は、濃紺か純白の二種類しかない軍装が唯一の所持している服装である明石にとって、例えば人間の乗組員達が汚れても良い服装として着ている代物で

あってもようやく手に入れた装飾品にも等しい。その上で事業服の着心地は軍装と違って動き易く作られており、明石は思わず体操でもするかのようにな腕を上下させながら工作室へと足を踏み入れていく。

加えて多様な工作機械が並ぶ中での安全も考慮して、今日の明石は髪形も変えた。普段は首の後ろで一本に纏めている自慢のクセの無い黒髪も、下手をすると機械に巻き込まれて危ない事態となるので今日は額の辺りからタオルを巻いて後頭部で結び、長い後ろ髪は全て頭に巻いたタオルの中に押し込んで万全の態勢を取る。するとどうだ、髪型を変える事で明石の気分は一転し、昨日の疲れ具合や工作室内にたちこめる鉄臭さなぞ微塵も疎ましく感じてこなくなる。

『よし！ 頑張るぞお！』

さっそく昨日の内に確保しておいた軍刀の素材たる白みを帯びた鉄棒を手に取り、白い歯を覗かせた笑みで明石は声を張り上げて軍刀作りを始めるのだった。

しばらくすると機械油と鉄粉の臭いが満ちる工作室には、研削盤の耳を突くような唸り声と共に、研削盤へと向かってあの白さが目立つ鉄材を加工する明石の姿が在る。初めての機械工作にて刀剣を製作するという大兆戦に明石は早くも頬に汗を滲ませており、軍手越しに拭った所には黒ずんだ汚れ一条が薄っすらと走る。工作艦の命である故に幾分は見慣れている筈の研削盤から放たれる大量の花火も、こうして間近にしてみると中々怖いもので、ちょっと腰が引けた格好でチビチビと鉄材を削るその光景は、初心者とは言えどんなとも格好のつかない絵となっていた。

だがしかし、当の明石は緩く嚙んだ唇と僅かに見開いた瞳で真面

目な表情を作り、時折火花の散り具合にちよつとビツクリしながらも鉄材の加工を続けていく。

大事な大事な友の為と心をたぎらせた彼女は本日朝の起床時から今着ている事業服のお洗濯を始め、一月の寒空に干して乾燥させている間に工作部の資料庫から拝借してきた参考書を読み、軍刀作りのイロハにちゃんと目を通してからこの工作室へと足を運んでいるのであり、それだけにちよつと研削盤の迫力に面食らった感があった。でも決して途中で投げ出そうという気にはならないのだ。それに昨日の伊藤特務艦長と西田工作部長が行った工作模様にも示されていた通り、別に一端の刀匠の如く槌を振り回す所から始まるような軍刀作りでは無い事を明石は知っており、そこも含めて色々と言われている参考書を読んだおかげで随分と気は楽になっている。

『へえええ。軍刀って、海軍だと？長剣？って呼ぶんだあ。』

今から約一時間ほど前。

明石は事業服が乾く間に目を通した参考書についていそう漏らし、同時にかつての相方が常に身に付けていた小振りな刀剣が？短剣？と呼ばれている事をふと思い出して、呼称にまで及ぶ詳細な軍刀の知識に勉学の食指を伸ばす事が出来ていた。一口に軍刀と言ってもその材質、精錬の方法は皇軍が発足した明治の頃より実に多岐多様な在り方となっており、明石が目にした人間達による機械を用いた軍刀作りはその中でも既に日露戦役の頃には実用化されていたらしい。素材を研削するだけでとりあえずの機能と体裁を備えられる点は戦の事情に最も良く適合し、調達も含めて全てが簡便な所が長所。欠点としてはグライNDERで刃をつけただけでは特に斬撃に対しての効果が不十分らしく、日露戦役の頃よりその使用に際してはもっぱら刺突専門とされていたとの事であった。

例え海軍艦艇の命とは言え、生来が直接的に戦と関わらない身の上事情を持つ明石にとって、参考書に記されるそんな物騒な知識は随分と意識の上での衝撃が強い側面があったが、友人の為だと言い聞かせて必死に先を読み進む末になんとか内容を一通り頭に入れる。それぐらい明石は、今は友である神通が狂った鬼として美保関以来の時を過ごす中、ずっと大事にしていたという軍刀をへし折ってしまったかつての自分に罪悪感を覚えていた。だからなんとか今回の軍刀作りを成功させようと目論んでいるのだが、これがどうして上手く行かない。

『あれえ？　な、なんか変な形になっちゃったぞお。』

明石は努めて真面目な面持ちで工作に励み、親指くらいになる研削盤の幅で一生懸命に軍刀の素材を研磨していたが、素材の一箇所の部分の研磨に集中していたのが災いした。明石がその異変に気付いて研削機から離れた鉄材には、まるでのこぎりのようなまだら模様の刃が付いてしまっていたのだ。

『ぬうう……。全体をちゃんと見ながらやないとダメかあ……。』

最初の工作具合はものの見事に失敗だと悟る明石はそう漏らしながら研削した素材の表面を指先で撫でてみるが、圧さも不均等なデコボコ模様は指一本による触感だけですぐに解かる。一点集中型である明石の人柄を考えれば彼女らしい結果と言えなくも無かったが、機能性は別としても刀剣らしからぬ形となってしまうのはさすがに「駄目」と判断せざるを得ない。完成した暁には贈呈しようと企図している友人、神通は自分よりももっとと刀剣には詳しい筈であり、ド素人の自分にすらも解かるような駄作なぞ渡したら喜んで貰える訳が無いからだ。

中々難度も高い軍刀作りはこうしてのっけから躓く事となったが、明石とてこんな程度の失敗で心が折れてしまうことは無い。まだまだ始めたばかりだし、研削盤を上手く使えば刃の部分のデコボコは修正できると考え、小さく溜め息を放って心機一転。ペダル式となっている研削盤のスイッチを踏み込み、さっそく駄作軍刀の修正へと移行する。

しかしここでまたしても、明石による軍刀作りは障害を得てしまうのであった。

それは研削盤の唸りが高らかとなり回転数も上がってきた頃、突如として明石の手元より響いた不気味なほどに綺麗な金属音と、明石の手元より軍刀の素材たる鉄棒の半分ほどが転げ落ちていく光景によって示されており、明石は驚愕の表情となって思わず叫んでしまう。

『あああー！！ お、折れちゃったあ……。』

研削盤に押し当てる明石の力が強すぎたのか、それとも明石の折れない心を研削盤が嘲笑ったのか、なんとなんと明石が工作していた鉄材は突如として真っ二つに折れてしまったのである。しかもまた具合が悪い事に鉄材は中程から泣き別れとなり、そもその長さ自体が明石の身長より若干短いくらいである事から、折れた方のどちらかを引き続き工作しても、もはや軍刀としては極端に短さが目立つ代物になってしまいう事を声もなく示しているのだった。

『うんもお……。上手くないなあ……。』

これまで自分の事を手先が特別不器用だと意識した事は無いが、

ものすごく工作や細工に才能が無い事をひしひしと感じてしまう明石。昨日以来の疲労と立ったままでの作業により足の負担が気になりだしていた彼女は、どうにも上手くいかない工作作業に少々の落込みを覚え、ここでちょっと休憩を取る事に決める。

『なんか、ダメだあ。最近、ボロが出てばかりい……。』

工作室に一つだけある舷窓から射し込む陽光に当たって僅かな暖を取りつつ、明石はその場に脚を伸ばして座る。その表情はどうにも上手く進捗しない自身の身の周りを憂いだ為、眉もハの字になり頬の緩みもかなり薄くなっている。

先日の仲間内におけるお勉強会では加賀^{かが}という先輩からのお褒めの言葉も頂けたが、やっぱりそれでも仲間達に比べて彼女が色々な知識が欠けているのは周知の事で、お師匠様より手ほどきを受けた英語も中々上達しない身の上が明石の意識にふと浮かんでくる始末。落ち込んでしまうのも無理は無かった。

『はああゝ……。困ったなあ……。』

そんな台詞を吐きながら、どうしようと思って明石は一時の休憩をとる。

だがその時、明石が居る工作室とはドア一枚を挟んだ通路の方から、乗組員達のも物であろう会話がふと彼女の耳に聞こえてきた。

『どうだい、これ。研磨の機械とかで出来そうか？』

『おう、いけるぞ。工具の補修なんかでよく使う砥石があるんだ。』

『ん？』

段々近づいてくる彼等のやりとりに気付いた明石は、ひとりでに開いたドアに乗組員達が驚かないように慎重にドアを開け、僅かなドアの隙間より通路で立ち話している下士官2名を認める。明石と同じ薄汚れた事業服を着て腰に手拭いを差してある所を見るに、どうやら二人とも何某かの作業途中で抜け出してその場に居るようであった。次いで明石はその二人の内の片方が片手に包丁を手にして、いる事から、とりあえず彼は主計科の兵員さんなのだろうと察し、その光景と先程聞いた会話の内容から「主計科の兵が包丁の刃こぼれを直すので、工作部の兵員さんに砥石を貸して欲しいとお願いしている」のだろうと推察する。

すると明石のそんな推理は大当たりで、彼等二人は明石の潜伏する工作室の扉を開けて室内の工具置場より砥石を取り出し、水を流しながらの研ぎ作業となる事から烹炊所の流し場へと足早に向かっていくのだった。

『なるほどお。手で研ぐのかあ。』

再び明石以外の存在が居なくなった工作室の中、明石は先程2人の兵員さん達が砥石を取り出していた工具置場へと足を進め、自らもまた灰色でザラザラとした触り心地が特徴的な砥石を一つ手にとってみる。一日三度の食事に合わせて都度烹炊所へと赴く明石にとって、もちろん包丁を研ぐ砥石というのはこれが初見な訳ではない。黒板にチョークを走らせる音が湿ったような音色を奏でて包丁を研ぐ乗組員達の姿はこれまでも何度か見た事があるし、艦魂社会における軍医として時折医務室へと薬品の調達をしに行った際には、素手で行う包丁研ぎの作業で指を切ってしまった主計科の水兵さんが治療されている光景だって目にした事があった。

そして砥石に関する記憶を脳裏で漁っていた明石はこの時、研削

盤のような機械による研ぎ作業に対し、この砥石ならば手の力のみで加減ができるのではと閃く。確かにペダルを踏んで鉄棒を押し当てるだけの研削盤はその分作業は楽でもあるが、大事な大事な素材がさっきのように折れてしまっただけは何の意味もないし、それが手作業による少々の疲労で回避できるのなら安い物だと彼女には思えたのだ。

『そっかあ、同じ刃物だもんね。上手く慎重にやれば大丈夫だね！』

難儀していた工作作業の懸案が見事に解決された明石はそう呟き、些か大変でも折れたりするのを防げる研ぎ石戦法で軍刀づくりを続行する事に決めた。

それに刀剣類その物をあんまり見た事の無い明石にとって、包丁は同じ刃物として工作の良い実物参考にもなる。片面にしか刃が付いていないのもまた刀と同じであり、明石はさっそく烹炊所へと赴いて使用されていない多くの包丁の中から最も長くて刀剣に形が似た物を持ち出し、併せて真水タンクに収められている清水とは名ばかりの濁った真水をバケツ一杯に汲んで工作室へと運んでいった。

こうして手際よく準備を整えた後、明石は中断していた軍刀製作を再開。お水で濡らした鉄棒はひんやりと冷たく、軍手を脱いで作業する指先の感覚はすぐに薄れ、生来が寒がりな明石は一月真っ只中の寒さが体の芯にまで堪えたが、砥石による刃の造形は僅かずつの進捗ではあっても明石がイメージした形にちゃんと近づいていく様子が目に見える。作業に伴う感覚にあっても素材が折れる気配は全く無く、明石は時折烹炊所より持ち出した包丁を見たりして、どこか楽しそうな表情すらも浮かべて軍刀の形へと近づけていった。

『んしょっ、と……。おほ、軍刀っぽくなってきたぞお。最後は切っ先の所か、よし！』

かじかむ手と汗だくの顔の明石による軍刀製作は順調に進捗し、夕飯も迫る時間となるといよいよ最終工程たる剣先部の研ぎ作業にまで辿り着く。

神通が普段から話していたお話と参考書の内容も含めて明石も知ったのだが、刀剣類というのは剣先が重要らしく、その形と波紋の美しさはもちろんの事、ここには刀本来の「物を切る」という機能が最も備わっていないければならぬらしい。

『うぬうう、さすがに難しいなあ……。』

明石も念入りにやってみるも、複雑な剣先の形を研磨という手段で具現化するのは大変だった。余りにそこばかりに集中してやると剣の腹の部分とのバランスが悪くなってしまいう上、刃の流線は滑らかに腹の部分と繋がらなくなったりして、いかにも格好の悪い軍刀となってしまうのだ。

『ういちっ……。！ あう……。指が切れたあ……。』

しかも掴みにくい箇所に対して素手を接しているので手も切る。瞬時に走った激痛に思わず軍刀から離れた手を見ると、明石の白い指先からは赤い一条の流れが既に滲み出していた。幸いにも傷は深い物では無く冷たいお水にずっと触れていた手前もあり、切った指先をしばらく自分で舐めているとすぐに血は止まって、明石は10分程もするとすぐさま研ぎ作業を再開する。

しかしどうにも工作に才能が無い故か、その後も何度か彼女は指を切っては舐めて止血する事を繰り返す。

おかげで剣先がなんとか彼女が手本とした包丁と瓜二つの姿となったものの、相当に苦勞しながらの軍刀づくりになってしまった。

その翌日。

まだ起床ラッパもなる前の朝早い時間に明石は起きて、標的作りで大盛況となっている木工工場区画で余っていた木材を適当に漁り、それを切った張ったして長方形の鞘と軍刀の柄を作る。有難い事に参考書には軍刀の刀身だけではなく付属品の解説と製作方法も記載されており、『できたあ!』と叫んで柄のついた軍刀を鞘に収めてみるや、明石の瞳には感慨と思った以上に出来映えの凛々しい、立派な軍刀が映った。

『えへへ。我ながら良い出来〜!』

両目を輝かせてそう明石は叫び、すぐさまこの感動と友人への想いを伝えるべく、意気揚々と友人の分身たる神通艦へと向かう。波紋を整えたり、切っ先の造形に苦戦したり、指を切ったりと、軍刀作りに費やした2日間の苦勞は尋常ではなかったが、まさか自分で作った物がこれ程まで立派な軍刀に化けるなど、明石は夢にも思っていなかった。まさに彼女にとっては会心の出来で、鞘と柄を作っていた事で朝ご飯を食べ逃した事も忘れて神通の下へと向かうのであった。

しかし明石の軽やかな足取りは、神通艦の甲板へと白い光を伴って現れた瞬間に止まる。その理由は明石の瞳に、目的の人物である神通と供に彼女の妹である那珂が、あろう事かなんと本物の軍刀を手にして談笑している光景が映ったからだ。

『あ、あれ・・・？』

『むう。これは海軍製作の長剣にしては業物だな。反りも厚みも十分だ。』

『やっぱりそうなの？ 私、刀剣の価値って良く解からないから、神通姉さんに見てもらおうと思って。』

『ふうむ、柄の皮も鮫皮とは本格的だな。良い物を手に入れたな、那珂。・・・お、なんだお前も来たのか、明石。』

『あ、じ、神通。おはよ・・・。』

『あら。明石、おはよう。』

突如として軍刀を手をしている友人らの姿を目の当たりにして驚愕していた明石に、神通と那珂はすぐに気付いて愛想良く朝の挨拶を投げてくる。明石は咄嗟に手にしていた自作の軍刀を背に隠し、遠めから見ても既に刀剣としての輝きと形の程度が自分の物とは段違いであった那珂の持つ軍刀をチラチラと見ながら近寄っていった。見れば那珂が神通の前で宙に掲げている軍刀は、波紋の美しさも刀身全体の形もまさにこれぞ日本刀と言えるが如き姿となっており、柄紐で覆われた柄は木を張り合わせただけの明石の軍刀は比べ物にならず、鞘に至っては漆塗りによって放たれる漆黒の光沢がまるで宝石のようですらある。神々しいその姿はいつもの明石なれば『わあ。』等と声を上げて好奇心を働かせる所だが、生憎本日の彼女には昨日以来の自信を粉微塵に打ち砕く物以外の何物でもない。

その為になんとも伏せ目がちに困った表情を浮べて明石はゆっく

りと歩み寄っていき、その間際にも聞こえてくる神通と那珂のやりとりが、突如那珂が持ってきた本物の軍刀における仔細を明石へと教えてくれた。

なんでも先日はこの室積沖へと資材補給の為にやって来た運送艦は横鎮籍で、その運送艦の艦魂が横須賀在泊の那珂の師匠から彼女への贈り物として預かってきたのだという。乗組の士官が酔っ払った末に艦内にて失くしたのを海に落としたと勘違いしたらしく、なんと艦底の区画で2年近く放置されて錆だらけだったのを那珂の師匠が偶然見つけ、仲間内に頼んで時間をかけて丁寧に研ぎ直した物らしい。

『ふう〜ん。そ、そうなんだあ。』

相手に合わせた中身の無い返事を返しつつ明石が間近で見る軍刀は、幾分小ぶりの日本刀だが真新しい柄紐と美しい波紋は折り紙つきで、輝き方もやっぱり明石の軍刀とは全然違う。その立派さはこれまた明石の想像以上で、自分が作った物は偽者にすらも列せられないほどの出来である事を彼女は感じずにいられない。そのくらい見てくれの差が歴然としていたのだった。

こ、こんなの見せられないよお・・・。

脳裏に響くそんな言葉も合わさり、ここに至って明石は自作の軍刀を贈呈する事は相当の恥を覚悟せねばならず、そも喜んでもらえる程度の品にすらもなっていない事を明確に悟ってしまう。幾分の苦勞だって自分なりにしたのだが、残念ながら考えが甘かった。那珂と神通のやりとりに一応の返事を返しながら、明石はそう思って無意識の内に深い溜め息を吐く。

ところがここで明石にとって一つの誤算が働く。それは彼女自身の人柄が大変に表情豊かで己の気持ちがすぐに表情に出てしまう事、そしてそんな彼女の特徴がこの場でなんとも元気の無い表情として顔に浮かんでおり、なおかつ最も親しい友人と慕う神通がすぐに明石の落ち込む様に気付いてしまった事である。

『・・・おい、明石。どうした？』

『えっ・・・。』

『私に用があつて来たんだらう？ 朝から何をそんな浮かない顔をしている。それとさっきから後ろに持つてる物はなんだ？』

『うひ・・・！』

思わず軍刀を後ろ手に持って隠していた背筋が凍りつく明石の眼前で、神通は僅かに眉をひそめながらゆっくりと明石の方に歩み寄ってきた。同時に姉の声によって明石の様子に気付いた那珂もまた振りかざしていた立派な刀身を鞘に収めて神通の後ろとなりながら明石の正面へと迫ってくる。二人とも明石が驚かせてやろうと願った対象であるが、那珂が手にする鞘まで美しい軍刀と明石が背中に隠し続けている軍刀？もどき？との差が、今や彼女の初期の企図と願いを完全にご破算としていた。それぐらい那珂が手にする本物の軍刀は、作りも姿も雰囲気も立派過ぎる代物であった。

そんな事から既に明石の慌てふためく思考は、背に隠した軍刀をお披露目する事で否応無く予想できる恥辱を如何に回避するかの一歩のみしか考えてはいない。一向に纏まりきらない言い訳を必死に考え、神通の何気ない問いかけに対しても明石はまともに言葉を返す事が出来なかった。

『なんだそれは？ 見せろ。』

『な、なんでもないよ！』

『ああん？ いいから、見せろ。』

仲間内では周知の事である非常に短気な性格の神通は、明石のな
んともハッキリせず、自分に対して隠し事をしているような態度が
次第に腹立たしくなってくる。すぐに持ち前の釣り上がった目と口
調を尖らせ、明石の肩を掴んで後ろに隠している物を眼前に晒すべ
く、明石の細い身体を反転させようと腕に力を込めてきた。

『わ、わああ！ は、離してよお！』

明石は体の向きを変えられたが最後、そこには大いに恥ずかしい
思いをする事態が待ち構えているだけに必死に神通の腕に抗うが、
そも腕力においてこの人に抗おう等という彼女の選択肢は大間違
いである。40キロもあろうかという重さの物体を片手で難なく持ち
上げる神通の身体能力は、明石もまた友人の霞や雪風が怒られる際、
まるで親猫の様に二人の襟首を掴んで片手で引き摺る神通の姿によ
って何度も何度も見てきた物だからだ。

『見せろと言ってるだろうが！ お前何を隠してる！？』

『神通姉さん、そんなに怒らなくても……。』

『か、隠してなんか……！ うぎぎ……！』

だんだんと神通の声の覇気が籠り出してくると、明石の抗いは逆
に神通の腕力によって制されていく。そして時を置かずして神通の
腕は明石の背へと回りこみ、彼女が握り締めていた軍刀を半ば強引
に手に取る。

『あああ！ 返せえ！』

『黙れ！ ……ん、なんだこれは？ 軍刀か？』

『え？ あら、ホント。明石、これどうしたの？』

一応は明石が手にしていた装飾など微塵もなく木製の棒状の物体を、神通と那珂は軍刀だと判断してくれる。もともと明石は神通の突っ張った片手に頬を圧されながら四肢を振り回し、相変わらず手から離れた軍刀を取り返すべく今にも泣きそうな顔で声を荒げているが、今の今まで武具という物に全く接点を持たない明石が突如として軍刀らしき物を所持していた、事に神通と那珂は明石の意図しないところで驚いていた。

もちろんこうなっては明石の一切の抗いは無駄の一句に尽き、悲鳴にも似た明石の絶叫が放たれる傍で神通は、まるで木刀の如き木肌があらわとなった柄に手を掛けて鞘から引き抜いてみた。

『ああああああ……！』

『……あ？』

『え？ な、なにこの刀身……。』

明石の絶叫に全く意識を誘われぬまま神通と那珂が呆けた表情を向ける先、チーク材にも似た白みも強い茶色の鞘より抜かれた刀身が彼女達三人における視線の焦点となる。だがそこに現れたのは日本刀特有の反りが無く真っ直ぐで、刃渡り全域に至る波紋の波打ちも不規則で、剣先までの間に一切の湾曲が無く、刀身のほとんどが直線2辺のみで構成された奇妙な軍刀であった。

ついに隠し通せなかった自作の軍刀がこうして二人の目に触れてしまい、明石はまるで物凄く苦い薬を飲んだかのような険しい表情となりながら神通と那珂に視線をチラチラと送る。すると早くも明石の羨びた心を大いに揺さぶる言葉が、この二人からは放たれてきた。

『なんだこれは？ 鯨の解体にでも使う包丁か？』
『ぐえ……。』

『刀、なのかなあ……。？　なんだかこれじゃ、刺身に使う柳刃包丁のオバケみたい……。』
『ぐええ……。』

至って率直にして全く悪気の無い二人の感想も、明石にしたら辛辣の一言に尽きる批評である。

もっとも一貫して包丁と断じるその批評は別段間違ではない。そもそも明石は刀剣をよく知らない中、参考書片手に軍刀製作を行い、しかもその最中に参考とした物は主計科で使われる包丁だったのであり、刀剣と包丁の違いがいまいち理解できていない彼女は軍刀作りにあってはほぼその包丁を真似ていただけだったのだ。

『うえええ……。だから嫌だったのに……。』

『嫌もクソも……。一体コイツをどうするつもりで持ってたんだ、お前……。？』

ついに明石の丸い目からボロボロと涙が零れ落ち、彼女は親友2名の前で大恥を搔いた事に嗚咽し始める。神通と那珂にとってはいきなり泣かれてしまったような物で、この場に來た時から何やら様子が妙だった事も含めて明石の心境と考えがまるで解からず、怒りも既に静まった神通は明石が持っていた特大の柳葉包丁をジロジロと見ながらその事を問い質し始める。

明石もようやくここに至って観念し、何故に今日こうして包丁の体裁となった軍刀もどきを手にしてこの場に來たのかを、姉とは大違いで心優しい那珂がそっと背に添えてくれた手の温もりに誘われて泣きじゃくりながら説明するのだった。

出会った際に神通が10年近く大事にしていた軍刀をへし折り、それを明石もまたずっと悪いなと思っていた事。

ちやうど自身の分身において軍刀が作れそうな事情があった事。

多くの部下を率いる指揮官の手前を持つ神通へ、その指揮の象徴として是非とも軍刀を贈りたいと思った事。

その為に今日も朝早くから艦内の工作部署を走り回り、アチコチ手を切ったりしながら鞘と柄まで揃えていた事。

そしてその最後に不幸にも那珂が本物の軍刀を手にしていて、その差が歴然であった事。

ヒンヒンと鼻水も垂れた鼻から息を漏らし、那珂の相打ちと静かな返事に任せて、その洗いざらいを明石は声に変えていく。神通はその間一言も発せず、相変わらずしかめた顔で振りかざした明石手製の軍刀を宙に掲げて刀身の歪な輝きをジロジロと眺め、虫の息となりながら明石が軍刀の仔細を語り終えるや、途端に小さな溜め息を一度放った後に口を開く。

『ふん……。前にいらんと言っただろうが、馬鹿者が……。』
『うい。い……。』

散々に大恥を搔いた後の明石に返って来たのは、如何にも神通の言葉とも言うべき愛想の無い物。軍刀作りに掛けた自身の想いを耳にした今ならせめて『有難う。』の一言でも欲しかった所ではあるが、赤くなった鼻で鼻水をすすする明石は神通を責める気にはならない。まともに礼を要求できる程の結果が、神通が眺めている自作の軍刀には欠片も見出せないからだ。

おまけに長く神通を直視できずに視線を下ろすと、偶然にも自身の脚の傍には那珂が手にしている見事な作りの立派な軍刀が視界に入ってくる。よく見れば那珂が手にする軍刀は金色の金属によって随分と凝った装飾が施されており、柄の部分はもちろん、漆の黒光りが麗しい鞘にあってもどこが手を触れて良い部分なのか解らない程である。

これが本物の軍刀、なのかぁ・・・。

冬空の乾燥具合とはうって変わった湿っぽい顔で唇を噛み、明石は耳にする事も多い軍刀という得物の実態を思い知る。そしてその余りにも歴然とした差が次第に明石には見るのも辛くなり始め、目尻に溜まった涙が頬を伝うのと同時に神通の袖へと咄嗟に両手を伸ばす。

『ちょ、ちよつと明石・・・。』

『もう良いでしょ、神通・・・！　もお返してよぉ・・・！』

『ああ？　なんだ？』

『こんなの折って海に捨てちゃうよ・・・！　返してよぉ！』

『ふん・・・。』

神通の腕にしがみ付いて大きく揺さぶりながら明石は叫ぶ。比較対象が延々と自身の眼前にあるのが我慢ならず、上下の下の方と明確に格付けできる自作の軍刀を彼女はすぐにでも葬り去りたかった。そうすればとりあえず友人への想いだけが残る訳で、次はもっとちゃんとした代物を贈ると弁明するつもりであった。

ところが先程からずっと明石の軍刀を眺めていた神通には、そんな明石の恥辱にまみれた心と思考が出した選択肢に同調するつもりなど微塵も無い。それは耳元で喚く友人を静める為か、それとも明確に明石の心に応えようとしたのか、僅かに吊り上がった神通の口元より放たれた一喝によって示される。

『返して・・・！　ねえ、返しー！』

『黙れええ！！』

『ひう・・・！』

再び腹の底から怒号を放って明石を黙らせる神通。なんとも出来の悪い軍刀を贈られようとしていた事と再三の懇願が煩わしかったのか、友人の短い怒りの導火線にまたしても火を灯してしまったと明石は慄く。部下だろうが上官だろうがこの一喝で神通が黙らせてきたのを、明石はこれまでの彼女との付き合いで何度も何度も目にしてきたのだ。加えて怒った際の神通のクセも知っている明石は、手にした軍刀を眺める神通の様子が僅かに顎を引いて、上目遣いとなっている事にもすぐに気付いてしまう。それはこれまで何度も目にした友人の、ご立腹の姿その物であった。

しかしそんな明石の友人に対する考察が間違いである事を、この時、那珂だけは神通の僅かに緩んだ唇を目にして悟る。神通は決して、明石の態度や軍刀を捨てると泣き叫ぶ行動に腹を立てた訳ではない。それどころか彼女は事の真相を耳にし、自身の想いが形となった軍刀が余りにも理想と現実から離れ過ぎていた事を詫びようとする明石の姿に、怒りとは間逆の感情を抱いていたのだった。

『・・・ふん、馬鹿者が。また他人の軍刀を勝手に壊す気か、お前は。』

やがて尖った声色を変えずに放ってきた神通の言葉に、鼻水を垂らしたままの明石は小さく驚いて顔を上げる。対して神通は明石と目が合うや、酷い有様である明石の顔を笑うかのように大きく口元を吊り上げ、少しだけ体の向きを変えて誰も居ない甲板の宙に手にした明石の軍刀を片手で勢いよく振り回してみせる。

『じ、じんつう・・・。』

『軍刀だろうが何だろうが、刀という物は本質的に人斬り包丁でし

かない。そういう意味ではお前が包丁を真似たのは別に間違っていないさ。』

一月の乾いた冷気を切り裂く鋭い音が木霊する中、明石に横顔を覗かせてそう言った神通はブンブンと振り回す白刃が陽の光を受けて輝く様を確かめながら、腕だけで振っていた軍刀の舞に次第に力を込め始めていく。そして明石や那珂の下から数える程の歩を進めて離れていくや、突如として身体を大きく捻ったかと思うと大声を放って眼前の空気を横に一閃した。

『・・・ずえやあああっ!!!』

『うつ・・・!』

『ふぁ・・・!』

刹那、まるで神通の渾身の斬撃によって切り倒された風が倒れるかの如く、神通艦の甲板を冷たさと勢いが一際増した潮風が吹きぬけていく。那珂や明石の黒髪を大きく舞い上げ、甲板上空にあるマストに繋がれた空中線が鞭打ち、艦尾旗竿にて萎びていた軍艦旗も千切れるそうに見える程にバタバタと音を立てて翻る。まさに神通の一撃が空気を倒したかのようで、轟々たる風の勢いが治まっても尚、風に撫でられた乾舷下の水面だけはしばらくの間ざわめきを抱えていた。

そしてようやく髪の毛の揺れも静まった明石と那珂が瞳を向ける先に、居合いのような構えで身構えていた神通は、長い時間をかけて息を吐きながら姿勢を元に戻した後に静かに呟く。次いで那珂が問い掛けた事への返答として返された言葉は、明石が精魂込めて作ったその刀を神通は立派な刀剣として認め、自身の物として受け取ってくれた事を意味していた。

『……一度だけ見た事があるが、これは朝鮮刀と似た形をしている。ま、本来の朝鮮刀は片手で使うように短い柄になってるモンだが、艦橋の上で振り回す私達艦魂にはこれで十分だ。』

『ちょ、朝鮮刀……？』

『そうだ。だが長さも刀身のバランスも、これが私には調度良い。所詮、軍刀も含めた指揮刀というのは人斬り包丁の出来損ないではない。どうせ海の上でなら日本刀の作りをしていようが朝鮮刀の作りをしていようが、錆や塩害といった劣化現象からは逃れられん。その意味では刀剣としての価値よりも使い易さで如何に優れているかが重要だと私は思うが、これはその点では良く要点を抑えた業物と言っても良いだろう。だからこれは私が使う。私はこれが良い。おい明石、文句は無いな？』

鋭い釣り目を白刃と同じ様に輝かせながらも、神通は小さな笑みを明石へと向けてそう言った。那珂以上に刀剣の知識が深い筈の彼女は明石の作った軍刀を大層気に入ったらしく、すぐに明石から笑みを戻すと今度は軍刀の波紋を確かめるようにしてまじまじと眺め始める。もちろんそこにある波打ちの荒々しさ、粗雑さが目立つ波紋に神通は笑みを崩さず、それは挫折しかけていた心を救われた明石が感激の余り再び涙と鼻水で顔を湿らせ、思わず神通の元へと走り寄ってきて袖を掴んできても尚、変わる事はなかった。

『馬鹿者が、何故最初から素直にくれてやると言わんのだ？』

『うえええ……だ、だってえ……。』

唯一変わらないのは、短い罵倒の言葉を口癖とする神通の厳しさが滲む物言い。もっともそれすらも今の明石にとっては、一番の仲良しが一切の気を使わずに極めて率直に友情に応えてくれた事の証明のようにも思えてくる。故に明石は神通の袖で鼻水を拭う格好と

なるのも構わずに友人の腕に顔を埋め、那珂が今また朗らかな笑みを浮べてそっと見守る前で、神通は明石の苦労を労う言葉を掛けてやるのだった。

『ふん。まったく見縊られた物だ。一生懸命作ったからやるとお前が言って、私が不恰好を理由にいらんと放り出すとも思ってたのか？ ああ？』

『う、ごめんく……。』

こうして明石が多く之苦労と想いを織り交ぜて作った軍刀？もどき？は、晴れて神通所有の指揮刀として日の目を見る事になる。翌日より始まった二水戦単独での戦隊教練において早速彼女はこの刀を振り回し、右だ左だと号令を掛けて新年一発目から大いに気合の入った戦隊教練となった事を、明石は神通の部下である霞やあられ霞、雪風からささやかな愚痴として耳にする事が出来た。

特に従兵役として仕えている霞より聞いた所によると神通は毎夜毎夜寝る前に必ず、以前に軍刀を持っていた時より所持していた手入れ道具を引っ張り出しては、明石の作ってくれた朝鮮刀の手入れを念入りに行っているのだそうである。しかもまた質の悪い事に唯でさえ帝国海軍随一の？歴女？っぷりを人柄として彼女は持つ事から、これまで霞が些か困りながらも戦国時代のお話に耳を傾けなければいけなかったのに加えて、ここ最近は何れも刀剣愛好家のお熱も盛んになってきたみたいで、『古来は打刀と言って、日本刀とは明治の頃から生まれた呼び名。』とか、『峰打ちとは芝居の成せる技で、真剣でやったら折れる。』とか、『私が生まれる僅か3ヶ月前の関東大震災で、新撰組局長として有名な近藤勇所有の刀が燃えてしまった。一目見てみたかったなあ。』等々、相も変わらず濃すぎる趣

向と知識が盛り沢山の有難いお話を霰は夜遅くまで聞かされるハメになっているらしい。

細い糸目の下にクマを薄っすらと作った霰が、相次ぐ周防灘で続けられる戦隊教練とそんな従兵事情を教えてくれた際は、さすがに明石も気の毒だと少し思ったが、それだけ神通が自分が作った軍刀を大事に扱っているんだなと思うと素直に嬉しかった。

そして戦隊教練の合間を縫って室積沖に二水戦が戻ってくるや、神通は明石が軍刀を作る際に折ってしまった素材を集めて明石のお手伝いを受けながら研削盤を動かし、脇差や短刀を自分で監修しながら作り始める。

またぞろ『戦国時代の主従は脇差を渡す事で関係を築いた。』等と明石にはよく解からない刀剣のアレコレを語られてちよつと困ってしまうが、以前にも増してお互いによく心を通い合わせた二人によって作られた何本にも及ぶ刀剣類は、ともすれば傷付ける事を即座に連想させるその白刃に、不思議となんとも温かで優しげな輝きを浮かび上がらせて出来上がるのであった。

第二〇九話 「形と友情／後編」 (後書き)

出張の予定が随分変わってようやく更新となりました。

本来であれば同時に掲載していた110話もついに出来上がらないままとなっておりますが、とにかく急いで次回の更新ができるよう頑張ります。

第二一〇話 「変化の兆し／前編」

昭和16年1月10日。

室積沖と周防灘むろつみ すおうなだ一帯の海域では、第二艦隊隷下における各戦隊や単艦単位での小規模な訓練が実施されていた。それは年始めに相応しく艦艇による準備運動のような内容で、戦闘教練の様な激しい操艦は一切伴わず、左右への回頭や後進前進、各種信号の実技等々、帝国海軍艦艇に限らないお船を運行するにあつての基本部分のおさらいとも言える。

おかげで室積一帯の海岸には沖合いで立てられた幾重もの曳き波が打ち寄せ、今日も泊地で投錨したまま各種工作任務に励んでいる明石艦あかしでも僅かな艦の動揺が絶える事は無い。

細波の音と時折舞い落ちる雪により、冬という季節なりの賑やかさが一応は有るかのような室積沖。天を覆う銀色の雲と寒い潮風は乗組員や艦魂達にとって元気が出る天候とはい難かったが、本日の第二艦隊にては水兵さんから古賀司令長官こがに至るまでその表情に暗さは無い。

なぜなら彼らがいる室積泊地やまもじには、山本連合艦隊司令長官直卒の第一艦隊、及び南洋方面担当の第四艦隊の一部が来訪したからである。

『凄いなあ、戦艦部隊が勢揃いだあ。』

他の艦隊が寄港する予定を事前に耳にし、今日は朝から艦橋上の測距儀の中より海上を見張っていた明石。山の如き艦橋とマストを目印とする第一艦隊の戦艦部隊が連なって停泊する様はいつ見ても

圧巻で、旗艦である長門艦ながとのマスト頂上に掲げられた中将旗は、多くの艦艇が集いし室積泊地の中でも一際目を引く。そして長門艦の周りには、早速他の艦艇から司令官や艦隊司令長官クラスのお偉方を乗せた内火艇が群がり始め、山本連合艦隊司令長官への新年最初の挨拶をしようとする人々によって長門艦周囲の波間とその甲板上に行列を作り始めるのだった。

もつとも新年最初の挨拶とは人間だけでなく艦魂達にとっても重要な行事で、明石が測距儀の中から双眼鏡で覗いた限りでは、長門艦上甲板に人間に混じって高雄たかおや愛宕あたご、それに第四艦隊のお偉方であろう仲間達の姿が見て取れる。どうも第四艦隊は艦隊旗艦として新鋭艦が配属されたらしく、そこに居合わせた高雄にペコペコと頭を下げながら話をしている女性は、明石よりもまだ年下の外見を持つ少女であった。

『確か、鹿島かしまとか言ってたっけ。』

仲間内よりも最近耳にしていたその名。

なんでもこの鹿島の分身たる鹿島艦とその姉妹艦は、兵学校卒業者による世界各地への練習航海を担当する？練習巡洋艦？という練習任務専門の艦艇として誕生しながら、欧州での騒乱や長引く支那事変の影響で練習艦隊の結成自体が実現も難しくなってきた為に、昨年誕生したばかりにも関わらずたった一度の支那方面への練習航海を最後にその用途を見直されてしまったという、随分とまた可哀相な経歴の艦との事であった。そんな鹿島の分身とちょうど艦の大きさが同じくらいの明石や利根とねの間では、何気ない日常の会話にて名前が挙がる度に随分と同情の気持ちが湧いた物である。

だがこの世の因果とは不思議な物で、ちゃんと艦隊司令長官座上の体裁をとって編成される練習艦隊の専門艦というお船としての特

徴が功を奏し、客人のもてなしに効果的な豪華な内装の長官室や、大人数での会議なんかにちょうど良い教育用の講堂等を建造当初から艦内に備えている鹿島艦は、大規模な改装をせずとも艦隊旗艦の任に十分に応じる事ができる艦艇として価値を見出されたのである。おかげさまで香取型二番艦の鹿島は若さと幼さが同居した10代後半の少女の姿をしており、同様に艦魂としてのお勉強がまだまだ足りない中にあっても、ちゃんと将旗を掲げた第四艦隊の艦隊旗艦としてここ最近は何夜も勉強に励んでいるらしい。まだ明石は面と向かって話をした事は無いが鹿島の分身たる鹿島艦は明石と同じ呉鎮守府籍で、大きな箱型の艦橋に前後に離れた直立マスト等、どこか自分とも似たその艦影を遠目にだが目にした事が何度かあったのだ。

そして鹿島が旗艦として配された第四艦隊にて、彼女は「若輩な者を上司として頂きつつも知らんぷりをしない。」という良き先輩方に幸いにも恵まれる。そも南洋方面での警備や哨戒を担当する第四艦隊では所属艦が概ね旧式な艦艇が多いのであり、お仕事の面においても常に傍らで先輩方よりの補佐と手解きを受けながら励む事ができる環境にあるのだ。

その証拠に明石の双眼鏡越しの瞳には、高雄の前で緊張した顔を何度も上げ下げする少女に対し、そっとその肩に手を置いて優しい表情で高雄との間を取り持とうとしている先輩格の艦魂の姿が写る。しかも堀の深く高い鼻筋で示される西洋人の顔つきと、一度だけ間近で目にした事のある特徴的な赤毛を持つその先輩格の艦魂は、明石もまた昨年に知己を得たばかりの知人であった。

『おお、常盤^{とぎわ}さん。そっかあ、常盤さんが鹿島を教えるのかあ。』

意外な人物が双眼鏡の向こうに見る長門艦の甲板上に現れた事にちょっと驚きつつも、明石はすぐさまその師弟関係の事情を納得する事ができた。

なんと言っても常盤は明石の師匠である朝日あさひと同年代の者にして、あの日本海海戦にも参加して真正面からロシア艦隊と戦っている大ベテラン。昨年末に呉で明石が英語のお勉強をした際に協力してくれた浅間の実の妹に当たり、現在は敷設艦という類別をされて往時の主砲も前部の一基しか残されていない分身の持ち主である。だが元来の艦としての彼女の出自は鹿島と同じ巡洋艦であり、前大戦の有った大正年間には太平洋の遙か向こうにまで赴いて任務に励んだ経歴を持つ。師匠や浅間と同じ真正銘のイギリス生まれで英語はもちろん完璧に操れるし、相応に国際色豊かなお仕事をこなしている上に、改装が終わった昨年5月よりずっと南洋方面での活動をしてきた手前もある。故にその経験と知識は、これから南洋にて部隊を束ねる艦隊旗艦として励まねばならない鹿島には最も必要な叡智だった。

加えて海軍艦艇としては未だに現役で同じ第四艦隊配属であり、教え子たる鹿島とその場を共にする時間、及び機会は明石と朝日の間で持つ物よりも遥かに長く頻度も高い。

そんな常盤はまさに、鹿島にとってこれ以上無い程に理想的な教育者だと位置づける事が出来るのである。

見れば常盤は鹿島の傍らに立って高雄と鹿島が話す様子を笑って見守りつつ、時折何事かを鹿島に耳打ちして高雄との会話を保たせている様である。間違はなく会話の最中にも常盤なりの教育を行っているのだらうと明石は予測し、同時に艦隊旗艦として既にこの道10年のキャリアを持つ高雄に対しても、弟子が声を詰まらせる事が無いようにと親身になっている常盤の姿勢に、ついつい彼女は微笑んでしまうのだった。

『えへへへ。良かったねえ、鹿島。』

そう囁きながら明石は心の中で新たな仲間へエールを送り、しばしの間、常盤と鹿島の師弟ぶりを双眼鏡越しに眺めていた。

その後、常盤に付き添われた鹿島、次いで高雄が長門艦の甲板上から艦内へと降りていくのを見届けるや、明石は一度自分の部屋へと戻って2時間ほど英語の自主勉強に精を出した後、その身を淡く白い光で包んで長門艦へと赴く。頼れる姉と慕う長門と会うのは明石の楽しみの一つにもなっており、是非とも新年明けての最初の挨拶をしたいと願って彼女は長門艦の甲板へとやってきたのだ。

『長門さん、どうしてるかなあ。また陸奥^{むつ}さんから逃げようとかしてないかなあ。』

とにかく陽気でお気楽な長門の人柄を考えると、今日もまたそんな日常を送っているのかと明石には思えてくる。つついっ軽やかになる口が声を放ち終えるや、彼女は甲板のアチコチを見回して脱走を企てている姉の姿が無いかと確認してしまう程であった。

ところがこの時、視界を長門艦の広い甲板に投げた事により、明石の瞳はお目当ての長門ではないものの同じ船の命である仲間が一人、長門艦左舷中央付近の甲板上に立っているのを見つける。

波打った髪を周防灘の潮風に靡かせ、吐息とはまた違った間隔で口から煙を巻き上げているその女性は、先ほど望遠鏡越しにこの長門艦甲板上を眺めた際にも姿を認めていた、現在の明石の上司に当

たる高雄であつた。

『あ、高雄さん。』

『ん？ おお、明石じゃないか。なんだい、長門さんに会いに来たの？』

『はい、そうです。』

寒い中での喫煙に僅かに顔をしかめていた高雄だが、同じく白い息を上げながら声を掛けて来た明石に対しては、すぐさま笑みを浮かべて応じてくる。第二艦隊でも一番愛想の良い艦魂で、新人の明石にとっては誠に話し易く有難い上官であつた。

しかしながらおかげでこの高雄より、早くも明石は長門艦へとやってきた目的が今は実現できないという事を知らされてしまう。

『あ、そうなんですか。会議やってるんですか、今。』

『そ。艦隊旗艦や一部の戦隊長召集のなかなか重い会議でさあ。あの調子じゃあ、もちっと掛かりそうかな。』

どうやら長門艦では現在、艦魂におけるお偉方を招集した会議を実施しているらしく、高雄は第二艦隊旗艦の立場として出席しつつ休憩の為に甲板で一服していた所なのだという。朝早くに望遠鏡越しに何人かの仲間達の姿を長門艦に認めた明石だが、その真相は挨拶回りではなくお偉方での会議だったのかと彼女は納得し、同時にせっかくこうして訪ねて来たにも関わらず今すぐに頼れる姉と会うのは不可能だという事に思わず苦笑いしてしまう。

自分と違って一応は艦魂社会のお偉いさんを肩書きとしている長門の身の上は、これまでの付き合いで明石もよく知っている。それに一ヶ月ぶりの再会が適わぬ事を少し残念と思いつつも、別に長門が自分と顔を合わせるのを嫌だと思っっている等とは到底思えない。自惚れではないがむしろ長門だって自分に会いに来たい筈で、だか

らこそこれまで何度も「自分の分身から脱走する」といった荒業を発動して、長門は明石の元に現れて来たのだ。

ふん。きつと陸奥さんに捕まってるんだな。

仕方ないよね。邪魔しないでおこう。

そんな言葉を胸の内では放ちながら、今は精々苦笑いを浮べるだけでその場を過ごそうと明石は決めるのだった。

だがこの時ふと明石は、眼前の高雄が珍しく僅かに眉間にしわを寄せながら煙草の煙を吐き出している事に気付く。若いながらも第二艦隊でも最も偉い高雄は、その肩書きや役職からは全くイメージが結びつかない程にとにかく陽気でひょうきんな性格が最大の特徴。いつ何時であっても悩み等とは無縁な様に見えるその人柄は、どこか長門とも共通する所でもある。第二艦隊ではそんな高雄に、公私共に常に笑みを貰いながら明石はお世話になってきたのだが、今日の彼女は随分と浮かない表情であった。

さっき言ってた今日の会議ってそんなに堪えたのかな？　そう言えは重いつて言ってたなあ。

溜め息にも近い息遣いでまた喫煙ののろしを上げる高雄の横顔を目にしつつ、無言のまま明石はそんな言葉を脳裏で呟く。例え艦魂と言えども偉いなら偉いなりの苦労があるのだろうと高雄の心中をちよつと心配するが、ふいに高雄は苦笑を変えずに短くなった煙草を海へと投げ捨てるや、意外な問いかけを明石へと放ってきた。

『・・・そうだ。明石はさあ、長門さんと仲が良いよね？　あのさ、最近長門さんで何かあったのかな？』

『ほえ？　い、いえ、先々月に会った時はいつも通りでしたけど・・・』

・？
』

なんと実のお姉さんのように慕う長門の事を高雄は口にし、明石は少し困りながらも自身を知る限りでは特に心当たりが無い事を伝える。その人柄には合わない高雄の元気の無い表情に対し、原因として長門の存在があるのかと瞬時に察した明石は、少し心をざわつかせて咄嗟に高雄が感じた長門の詳細を尋ねた。

『あ、あの、長門さん、どうかしたんですか？　どこか具合悪いとか？』

『あ、いや。そんなんじゃないよ。とっても元気だよ、長門さんは。……たださあー。』

とりあえず身体に異常がある訳ではない事を否定しつつも、妙な所で声を途切れさせた高雄の声に明石は黙って耳を傾ける。すると高雄は上手く言葉を選べないのか明石の目から僅かに視線を逸らし、片手で後頭部を掻きながら低く唸り声を上げた後に続けた。

『んゝ……。その、なんて言うかさあ……。今日の長門さんは、なんか怖いんだよね……。』

『こわい、ですかあ？』

『うん……。いや、別に神通中尉じんつうみたいに会議で怒鳴り散らしてるとか、そういう訳じゃないんだけどねえ……。』

どうにも抽象的な表現による高雄の声により、明石は彼女が認めた長門の変化なる物がますます解からなくなる。決して軍医である自分が駆けつけなければならぬほどの異常事態が発生している訳ではないようだが、それに反して冗談と明るい笑みを常に浮べる上司、高雄が苦い表情で困っている様子は明石の心配の心を上手く静めてはくれない。そもそも怒っている訳でもないのに怖い等という高雄

の言葉では、明石の記憶に在るあのお気楽でマイペースな長門のイメージが微塵も崩れやしないのだ。

うーん……。もしかして今日の会議の重い内容とか、その辺も絡んでるのかな？

考える限りでの原因はそんな所であろうかと明石は思ったが、それを確かめるべく再び高雄に声を掛けようとした刹那、明石よりも先に高雄は声を放って長門艦艦内へと続く通路に向かって歩み始めていた。

『や、なんだか変な話して悪いね。そろそろ会議の後半戦だからもう行くけど、長門さんには明石が会いたがってたって伝えとくよ。』
『あ、は、はい。どうも……。』

幾分の早歩きでスタスタと足を運んで行く高雄にそう言われ、会議の再開が迫っているとの言葉も影響してか、明石は高雄を呼び止める機を逸してしまう。眼前を横切っていく最中に見せた高雄の終始変わらなかった苦笑は気がかりだが、まるで逃げるように背を向けて去っていく高雄に、明石は応じる声を呟きながら小さくお辞儀をするしかない。

そしてそのまま明石は会議を邪魔するわけにも行かないと考え、間近に聳える長門艦の山の様な艦橋をしばらくの間見上げた後、淡く白い光に身を包んで自分の分身へと帰っていく。

こうして明石による長門への新年最初の挨拶の機会は残念ながら今は叶わぬ事になり、寒い寒い周防灘の潮風が吹きぬける長門艦甲板上には元の静寂が戻っていった。明石が長門艦の甲板上から消え

るのを見届けた後、苦笑から完全に笑みの部分が消えた表情でボソツと呟いた高雄の一言を最後として……。

『はぁ……。まさか今から4年以上も前に、あんな作戦が考案されてたとはねえ……。今日の会議は胃が重いよ、もう……。』

部下に当たる明石の前では職務に関わる事を、曲がりなりにも艦隊旗艦という役職を頂く者として一言も口にしなかった高雄。居なくなってから独り言として愚痴るのは、普段は冗談と陽気な物言いので雰囲気を飾りつつも、その実は結構苦悩している事も多いという彼女の隠された姿でもある。

もちろんこの瞬間の高雄の苦悩とは、今しがた溢した本日の会議の重さその物だった。

何を隠そう高雄が長門ら一部のお偉方で行っているその会議とは、同じ長門艦艦内の長官公室にて山本司令長官を始めとした人間のお偉方で行われている物と全く同じ内容で実施されており、昨年に人間達が海軍大学校にて行った対蘭印作戦の図上演習における研究会にして、その結果として対米国戦争に対する詳細計画案が練られ、次いでその詳細計画の原案として太平洋方面におけるアメリカ海軍の本拠地を開戦劈頭に急襲する案などが検討されていたのである。

まさにそれは艦魂達にとっても人間達にとっても、戦争という代物の重圧が激しく圧し掛かってくる内容であり、高雄という上司の心の内を全く見抜けなかった明石には知る由も無かった。

それから5分もした頃。

甲板での喫煙と部下とのお話を終えた高雄は、長門艦艦首付近にある天幕を格納する為の倉庫の扉を開けていた。日除けの為に使う艦艇の天幕とは高雄の分身でももちろん用いている物で、大小の差はあれどちゃんと専用の倉庫に保管して使用する大事な備品の一つでもある。だから艦の命である高雄にとっては珍しくもなんとも無い天幕倉庫の存在であるが、扉を開けると同時に室内から漏れ出す緊張した空気によってその心と表情は瞬時にして凍てつき、滅多に見せない真剣な眼差しを浮べた顔が高雄には出来上がる。

『お。煙草は終わった？ 高雄。』

『あ、はい。少し遅れましたか？』

侘しい感もある真珠色も混じった電灯が灯る倉庫の中、高雄は歩みを室内へと進めて後ろ手に扉を閉める。

その最中に高雄へと声を掛けたのは、室内最奥にて天幕が入った木箱を椅子代わりにし、身体を斜めに傾けて腰を落としている肩幅の目立つ女性。お尻のラインまで達しようかという勢いの長い黒髪を片手で撫で、室内に満ちる緊張した空気を楽しむかのように微笑を浮べていた彼女は、言うまでも無く高雄と同じ帝国海軍艦艇の命の一人にして、今まさに高雄が居る艦の艦魂、すなわち長門である。

黒髪と振れ幅の大きい身体の線、そして高雄と同じ濃紺の第一種軍装を身につけているにも関わらず、上着のホックは締めずに袖を通して羽織るように着たその格好を相も変わらずトレードマークとし、すっかり大人びた30代にも及ぼうとする年頃の女性の顔は、まさに立場の上でも第二艦隊旗艦たる高雄のさらに上に立った一人の者の大きな特徴。加えて極めて気さくな人柄から放たれる高雄への返事は、生来が冗談と陽気さを売りとしてきた性分の高雄にあっては馴染み易い物でもある。

『いんや。陸奥と加賀^{かが}、それから常盤さんと鹿島も今戻ってきたばかりだ。ちょうど良かったよ。』

『そうですか、それはなにより。』

扉を開けた正面で腰を下ろす長門はそう言う肩の高さまで両手を掲げてみせ、今しがた口にした名の者達が準備万端である事を高雄に示す。

見れば長門からちよつと距離を置いて部屋の壁を背にする、長門と高雄以外の仲間達の姿がその場には在る。長門の実の姉妹にして、この20年近い間、長門と交代しながら連合艦隊旗艦を頂いてきた陸奥は、姉とは大違いの強いクセがかかった前髪を指で直しつつ、室内中央にて横たわった木箱の上にある大きな地図を眺めている。いつもの様に無人の長官室を使えない本日の会議の場がこの倉庫なら、さしずめ室内中央にあるその木箱は長机の代替品であり、陸奥はそんな仮想長机の上の地図に対し、今現在は高雄の部下に当たる加賀と供に視線を投げていた。

元々加賀は長く長門や陸奥と第一艦隊を組んできた間柄で、出自の上でも随分とこの二人とは縁がある艦魂。しかも陸奥とは師匠と仰いだ者が同一である事から、持ち前のどんよりと暗い感じの人柄と雰囲気、極めて愛想の良い人柄の陸奥とは大変に対照的であっても非常に仲は良い。その上で加賀の首の後ろで一本に縛った長い黒髪は長門を深く尊敬する証であったりもするので、久々に長門姉妹と場を供にしている今日はどこことなく嬉しそうですらある。

『じゃあ、始めようかね、長門。・・・さあ、鹿島。解からなくてもちやんと後で教えてあげるから、しっかり今から皆で話す事を聞いておくんだよ。』

『は、は、はいっ。よ、よよ、よろしくお願いしますっ。』

そして陸奥と加賀とは長門や長机を挟んで反対側に位置する所で、老若の差が明確な声でのやりとりを放つ二人。高雄も長門もその声に反応して視線をそこに投げると、瞳に映るのは容姿の上でも背丈の上でも、そして欧米人と日本人という顔つきの上でも差が顕著なとある師弟の姿。

それは明石が朝に高雄と供に長門艦甲板上で認めた、常盤と鹿島だった。昨年より連合艦隊に組み込まれた南洋方面担当の第四艦隊に所属で、明石の予想通り常盤は、新米艦魂にして艦隊旗艦としても新米である鹿島の養育係兼補佐役。おむすびのようなまん丸の形をした短い髪で包まれる鹿島の頭に手を乗せ、幼さが目立つ、否、幼さしか認めれない10代半ばの少女の顔を持つ鹿島に声を掛けていた。

すると放つ言葉の一言一句、その素振りや表情の変化の全てが初々しい鹿島を安心させる為、長門が持ち前の明るい声を放って室内に満ちていた緊張感を一時の間打ち消してみせる。

『はい、よろしく。あはは、そおんなに緊張しなくても大丈夫だよ、鹿島。アタシも初めて艦隊旗艦になった時はそんな感じだったしさ。アタシなんか最悪だったんだよ？ あ頃の第一艦隊旗艦は新人のアタシなのに、第二艦隊旗艦はあの金剛こんごう。しかも第三艦隊ではまだ三笠みかささんが現役で戦隊長やってたんだもん。初めての顔合わせの会議でのっけからドカーンって怒鳴られるわで、もお何回泣かされた事かあ……。』

自分の経験を笑い話として提供する長門に、室内には一挙に笑いの渦が巻き起こる。特に鹿島の傍らで控える常盤は実際にそんな長門の泣きっ面を目にしており、加えて今ではもう会えない三笠という懐かしい名を耳にして笑いを堪える事がどうしても出来ない。日本海海戦時の連合艦隊旗艦としてその名を轟かす三笠は、この長門

の師匠である朝日に、帝国海軍艦魂社会の有名人たる金剛の師匠、敷島の実の妹で、対照的な性格のこの二人の良いところ取りをした人柄だったと現代では思われているが、当時を知る常盤にあってはそれが完全に、後の後輩達による憧れが先行した偶像だという事を知っている。そしてそれ故に、新米艦魂ながらも颯爽と当時の艦隊編成に旗艦として迎えられた長門は泣かされたのだった。

もちろん長門の実の師匠にして、実の姉にもあたる朝日に三笠が似ていれば、長門が涙を飲む事は無い。日露戦役以来の間に勇名を馳せた後、現代では記念艦としてその分身のみをこの世に残す三笠とは、残念ながら長女の敷島と非常に共通点が多い怖い人柄の持ち主。

すなわち帝国海軍風に言う所の、ドカタ型の性格だったのである。

『なははは！ 私もあん時の艦隊編成はさすがに悪すぎたって今でも思うよ、長門。どこの艦隊の所属艦もみんな私らの後輩に当たる奴らばかりでね。誰も三笠を怒れる奴がいらないモンだから、そりゃこっ酷く説教されてたねえ。朝日さんや敷島しきしまさんとは行かなくても、せめてレトウイザ・・・、あ、いや、肥前ひぜんあたりが居ればまだ制止できたと思うんだけどね。ホント運が悪かったねえ、なははは！』

苦労話も二人にかかれれば楽しい思い出となり、お互いの口から漏れる笑い声はすぐに陸奥や加賀、次いで高雄へと伝染し、最後にはカチカチに凍てついていた鹿島の胸の内に暖かな風となってそよぎ始める。すると時を置かずして鹿島の幼い顔には笑みが満ち、前途への心配が薄くなった胸の奥からは居並ぶ先輩方と同じような笑い声が放たれてきた。

高雄をして胃が重いと言わしめた艦魂達の会議における、そんな束の間の一時。誰も彼もが老若の垣根を設けずに笑い合うこの瞬間

を見ると、甲板上で明石へと告げた高雄の言葉には符合する所が一つも無い。当人である彼女もまたこの瞬間は、長門と常盤が語った知られざる秘話によって笑い声を高らかに上げているのだ。

だがしかし、この笑い合う時間は10秒ほども経つと、事のきっかけを提示した張本人である長門によって制される事になる。

『ははは。よし、いっぱい笑ったね。・・・じゃ、そろそろ続きを始めようか。正直、会議が終わるまではもう笑えないと思うから。』

僅かに尖った感覚も混ぜた声で長門はそう言うと、一度木箱の上から腰を持ち上げるような素振りを見せて、それまでの斜めに身体を流していた座り方を背筋を伸ばした真っ直ぐな姿勢へと変える。あんなに明るく笑っていた顔も既に笑みは消えて、長い髪に包まれる長門の表情はやけに瞳の鋭さが目立つ真剣な物。シルエットだけ見ると肩幅が広い体躯だからか、長門の姿はどこか男性っぽく高雄の目に映る程である。

有り体に言えば立派で凛々しいそのいでたちに陸奥や加賀、そして常盤と鹿島が釣られるようにして周囲の木箱に腰を下ろし、大きなアジア近辺の地図を広げた仮想長机を囲むような形となりながら高雄も席に着いた。

『よし・・・。じゃ、会議を始めよつか。あ、それと今から検討する事は部外秘。例え姉妹であっても、絶対にこの場に居ない者には話さないようにね。』

長机を挟んで真向かいに一人陣取る長門から聞えた言葉は、完全にお仕事の為の時間を過ごそうと決心しているその決心を高雄に伝えてくる。高雄自身は既に艦隊旗艦として相応の経験も積んだだけに、こうして気を引き締めた状態の長門を見たのは何も初めてな訳ではない。年がら年中お気楽な長門であってもこれまでに希にこう

して大真面目となる事は確かに何度かあったのだが、今日の長門の身体に纏われる雰囲気、或いは覇気の様な物はなんだかやたらと威圧的な具合に高雄は感じた。

うゝゝゝん……。長門さん、やっぱ変だよな……。
別に怒ってるわけじゃ無さそうなんだけどなあ……。

明石にも伝えた長門の変化を改めて認め、高雄は小さな驚きと供に慄きもまた覚えながら、再開された本日の会議の内容へと耳を傾けていくのであった。

第二一一話 「変化の兆し／後編」

山本連合艦隊司令長官が乗る長門艦は、その乗組員達にとって課業の真っ只中にある時間帯を迎えているにも関わらず、艦首から艦尾に至る全ての甲板が極めて静かだった。それはもちろん山本長官の将旗を掲げるこの艦に今日はその他のお偉方が参集しているからで、特に艦尾側の甲板はその直下に長官室区画が設けられている為に、兵下士官の乗組員には立ち入り制限まで課されている程である。艦内もまた士官が居住する区画とされる艦尾側と同様、兵下士官の居住区画とされる艦首側の上甲板、中甲板は人の往来もそれ程多くは見られなかった。

そしてそんな静寂に包まれる長門艦艦首中甲板に、艦の命である長門を始めとした艦魂達が詰める天幕倉庫がある。灰色の隔壁によって構成される狭い通路には、発電機と機関の低い唸りが艦の外より聞えてくる波の音に混じりながら木霊するが、そこには人間達には聞く事の出来ない彼女達の声も、僅かにだが天幕倉庫の扉の奥より漏れていたのだった。

『・・・これがアタシのトコに乗ってる連合艦隊司令部が持ってた、人間達による蘭印攻略作戦の図上演習結果。今頃は山本長官も参加して同じ話を長官公室でやってる筈だけど、この通り蘭印の油資源に手を出すと、横腹から米国の攻撃をくらう公算が非常に高いらしいんだ。航路の面でも蘭印からの海上交通路は仏印や台湾、もしくは南洋経由であっても必ず比島の近海を通過する事になるけど、この比島こそがアジア最大の米国植民地。必ず障害になるから蘭印攻略に付随して制圧しなきゃなんないんだけど、そうなると米国との

戦争は不可避な訳だね。』

海図と供にその上に無造作に置かれている複数の紙切れを指差し、僅かに細くした瞳を海図の左右にいる仲間に送りながら長門は声を放つ。仕事真面目な陸奥^{むつ}やちよつと怖い感じの加賀^{かが}とは大違いの碎けた口調もいつもの通りで、ほんの少しだけ声色に張り詰めた感じがあるのが今日の変化といった所。

もっともその一点こそが、普段からお気楽でマイペースな言動を連発する長門にしては極めて珍しい変化であり、高雄^{たかお}が若干の怖さを覚えたのもまさにここである。その上で本日長門が朝から語る内容は、帝国海軍をして最も周到に対策を練りつつも、最も恐れる事態とされる対米戦争におけるお話で、高雄は言わば二重の衝撃を覚えながら本日の会議に参加していた。

その一方、驚きからくる無言をしばらく続ける高雄に反し、その隣にて肩を寄り添うようにして控えている常盤^{とぎわ}と鹿島^{かしま}が一步前へと進み出る。それは長門が今しがた言い終えた言葉へ自分達の意見を披露する為であり、これから行う発言に対して何某かの考えがあるらしい常盤が、幼い上司、鹿島の耳元で何事かを告げている。次いで鹿島が緊張の面持ちで常盤の囁きに数回首肯するや、常盤は鹿島を僅かに下がらせて声を放った。

『じゃ、まだ鹿島は上手く話せないんで、私が艦隊旗艦代理で述べさせてもらいます。』

『はい。お願いします、常盤さん。』

頼りがいのある先輩像を否応無く見せ付ける言葉を常盤が告げ、長門は快く代理での意見発言というその申し出を許可してやる。対して一応は長門がこの場で最も立場的に偉い艦魂であるので、常盤はいつもの様に日露戦役以来の先輩艦魂としてではなく連合艦隊隷

下の艦隊旗艦としての立ち振る舞いを考えて、艦齢と容姿における年齢差がほぼ倍以上であるにも関わらず、長門に対してはちゃんと敬語を用いて話し始める。もちろんそれは艦魂におけるお偉方の前で自分の立場に即した物言いをする実例を鹿島にちゃんと見せてやる為で、同時に長門らが欲する今しがたの話題への意見を、その声へと変えていく常盤はさすがに帝国海軍に嫁いで40余年のベテラン。長門に対してその眼前に迫るように常盤は近づいて行き、その横で皆の前に広がる大きな地図のアチコチに指をさしながら堂々とした口調で述べた。

『では、南洋担当としての見解ですが。長門中將がさっき教えて下さった、山本長官以下の連合艦隊司令部みたいな人間達の考え通り、フィリピンと供にウェーキ、それからグアムも占拠し、南洋の防衛線の明確化と、ハワイも含んだ米本土方面への連絡線を遮断するのが良いと思います。上手く在アジア艦隊を撃破し、時間差で米本土からくる本隊を南洋に誘い込めれば、勝機は有る。・・・日露戦役の旅順艦隊と太平洋艦隊に少し似ていますね。それにグアム、ウェーキ、フィリピンを落とせば、南洋方面の情報は殆ど米国には解らなくなりますし、加えて米海軍による蘭印、及びフィリピン救援の観点から見れば、南洋通過はその一番の近道。だから誘い込みの可能性もあながち低くは無く、帝国海軍はここに総力で網を張って米海軍本隊と一大海上決戦を行う。ま、日露戦役に範を取ったこれまでのやり方ですね。ただし、潜水艦も飛行機も無かった当時とは違う事情を、現代では勘案しなくてはならないのでは？』

実際に日本海海戦にも参加した常盤の語りには説得力も力強さも十分で、そのすぐそばにいる鹿島や長門らが思わず小さく息を飲む。陸奥や加賀、高雄なんかも含め、今しがた常盤が口にした内容は各々が今ここで初めて耳にした事なんかでは無いのだが、やはり実際に艦砲の撃ち合いを経験したその声には相応の迫力が満ち満ちてい

る。現代の艦魂社会においては決して雲上の如き階級ではない事や、いつも明るくて人並み以上に読書の時間を愛し、それでいて酒豪の側面を持つという常盤の、滅多にお目に掛かれない戦うお船の命としての芯の様な物だった。

そしてその語った内容もまた正鵠を得ていて、普段はニコニコとして実に親しみ易いながらも戦に対する見識の深さにはある種の老練さをも窺わせる常盤に、長門と一瞬だけ目を合わせて小さく頷いた陸奥が声を返す。

『何を言いたいのかは解ります、常盤さん。実は常盤さんも仰った事に対する図上演習の結果が芳しくないんです。これまでも何回か図上演習は行われて来たようですが特にグアム攻略が相当に苦戦し、連合艦隊司令部の方々が言っていたのを立ち聞きましたのですが、過去には失敗した事例もあるらしいんです。言うまでも無く帝国海軍の作戦行動としては初歩の初歩での躓きでして、こんな状態では仮に艦隊決戦に持ち込んでも、本当に勝てるかどうかは状況次第といった所です。その原因でもあり、そして逆に頼みの綱でもあるのは、潜水艦と不沈空母たる南洋の島々の航空隊なんです。』

艦隊旗艦クラスの艦魂達による会話に含まれるのは、決して明石や神通じんつうといった下っ端の艦魂達には聞かされる事の無い帝国海軍の实情。ほぼ長門のような連合艦隊旗艦の役目を負う船の命だけが、艦隊司令部を成す人間達の持つ資料によって窺い知れるのみの知識で、艦魂達にとっては各々が使命を帯びて行動する事になる盤上にも等しい物である。

もともと陸奥の言葉にも垣間見れるように、それはどこそこにも何があるというだけの地図の如き代物ではなく、間違いなく日本でも最高レベルの頭脳によって考えられた多くの思惑と計算、狙い、理論、科学知識等が深く混ざり合って構成されている。そしてそれは常に時代の進捗を追いかけてながら、その相手も含んだ様々な事情に

よって変化が絶える事は無く、帝国海軍に限らず懸案もまた実に多く存在するのであり、陸奥が語ったのは氷山のほんの一角でしかない。

ただ、ちょうど彼女が放った言葉は、常盤と鹿島にしたら自分達が最も精通している南洋と呼ばれる地域の事情に関連しており、陸奥もそれを知っているが為に敢えて話題に出した。もちろんその理由は、常盤と鹿島の二人が南洋方面担当という第四艦隊に所属しているからに他ならず、その証拠に陸奥の企図はすぐさま常葉の返答という形で示された。

『しかしですよ。私が去年から見てきた所じゃ、南洋の基地化はまだまだ途中過ぎますよ。それこそ昨年から私が出張ったりもして、急速設営訓練なんかをあちこちの島の兵要地誌調査と並行して実施してますけど、滑走路だけで航空隊を運用できるなんて簡単さは皆無です。あの辺の島は環礁に囲まれてるだけなんですから、防波堤も作り、栈橋も作り、道路も作らねばなりません。私は飛行機という物はよく解ってないので、第四艦隊配属の水上機母艦とかの連中にも聞いてみましたが、最近の新型機にはそれに見合った滑走路が必要だって言うじゃないですか。ただ草を刈り取るだけじゃない。地面を平坦にする作業の丁寧さは相応に時間を食うし、その為の人員と設備もまた必要なんだと聞いてます。加えて航空燃料や兵装の倉庫関連も揃えて、やっと飛行機を運用する為の施設として使える筈です。おまけに南洋の海域は台風の発生地帯で、優秀な気象観測の結果を各基地や部隊に展開する部署が必須です。・・・空母があれば適宜進出して作戦行動と行けますが、午前中の話じゃそれも実現できないんですよ？』

話している最中に地図が敷かれた長机の上に手を着いて、常盤は身を乗り出すような格好となる。次いでその青い瞳を彼女は室内でも唯一の空母と呼ばれる艦を分身とする加賀に向け、最後に言った

空母の話題に関する意見を当事者から聞こうと試みる。

そしてその試みは高雄が明石と別れた直後に呟いた悩みと同じ事柄で、今現在は加賀も含めた空母の艦魂の上司となっている高雄は、常盤の試みに乗じてその詳しい話を聞けないかと考えていた。何しろ余りにもその空母のお話が突拍子の無いお話で、ついこの間第二艦隊のみんなで加賀より学んだばかりの空母の知識を根底から覆す代物にして、しかもまたその発端が今から4年も遡った頃に生まれていた事を、高雄は休憩前の会議前半で耳にしていたのだ。

『海軍大学校で研究されてたっていう、この？対A国作戦用兵？・・。開戦前の段階で敵艦艇、特に航空母艦がハワイの真珠湾に在泊する場合、大型と中型の飛行艇に空母の飛行機を足して、不意に乗じて急襲し、これを以って開戦する・・。加賀さん、あんたこれ、知ってたんですか・・？』

『・・・・・。』

長机に敷かれた地図の上に無造作に置かれた何枚かの紙切れを僅かに苦い表情で眺めつつ、高雄は常盤への返答を加賀が放つ前に新たな問いかけを放つ。対して高雄や常盤と同様に加賀は険しい表情を浮かべ、上司よりの幾分怒りも混じったかのような問いかけに対して声を詰まらせていた。

だが決して加賀はその強面な風貌に反して年下の高雄の薄い怒りに臆した訳でもなければ、そも怒りを向けられる後ろめたい事をその心に隠していた訳でもない。ただ単にこの期に及んで彼女独自の間の悪い無口ぶりが現れてしまっただけで、すぐにその隣に居た陸奥、そして高雄が目になっている紙切れを入手してきた張本人である長門が、高雄に対して加賀はこの話題にまだ触れたばかりであるという事を伝える。

『違うわ、高雄。加賀はこの書類を読んだのは今日が最初。本当よ。』

『陸奥の言うとおりでよ、高雄。こいつは見ての通り、陸^{オカ}にある海軍大学校に普通なら眠ってる資料さ。アタシのトコに乗ってる連合艦隊司令部の参謀がたまたま持ってたのを、アタシが一晩掛けて写し書きした物だよ。ま、確かに内容にびつくらこいたのはあるけどね。』

高雄の疑心を逆撫でしないように柔らかい物言いと言った陸奥と長門の言葉に、高雄はしばし加賀を険しい表情のままじっと見つめた。今は部下でも艦魂としての先輩である加賀が隠し事をしていてと決め付けるつもりは無いが、そんな加賀が幼少時から仲が良かったという陸奥や長門による弁護が、世代的には幾分離れている高雄の心に猜疑心を些か生じさせるのだ。

同世代同士、なにか後輩の自分に隠してるのではないのか？

そんな言葉を静まり返る室内にて脳裏に響かせる高雄。

小難しい障害にあっても常に笑って明るく挑むというお師匠様伝来の独特の接し方が、今日の彼女には明石とのやりとりも含めて随分と希薄であったが、それだけ本日の午前中の会議にても触れられた空母のお話が、高雄にとっては衝撃的だったという事の裏返しでもあった。

『・・・艦隊旗艦。』

そんな中で特徴的な女性にしては野太く、それでいてボソボソとした歯切れの悪い声を放ったのは、当の加賀である。170センチ台のスラッとした長身の腕を組み、前髪に隠れた切れ長の目を一層鋭くする強面は、変化の著しい本日の高雄や長門に比べるとその独特の人柄を至っていつも通りに維持している。長門や陸奥に比べると

と些か愛想の良さや柔らかさが欠けた口調もそのまま、むしろそんないつも通りの加賀の言動はその落ち着き具合も相まって、加賀の意図しない所で高雄の抱く警戒と猜疑を取り去っていくのだった。

『・・・私も先日の会議の事もあった手前、この話を聞いた時は相
当に驚きました。・・・ただ、先日述べさせて頂いた空母の話とは、
随分と違う物となっている考えが、こうして艦隊旗艦の目に触れら
れて混乱を呼びました事。・・・全て私の無知と不徳による物です。
・・・申し訳ありません。』

極めてゆっくりとしたしゃべり方で詫びの言葉を放ち、容姿の上
でも艦齡の上でも10歳近く年下の高雄に加賀は小さく頭を下げる。
寡黙で言動が些か読めない人柄ながらも礼儀正しく、一時の感情に
流されずに如何なる時も立場の上下を墨守するというその姿には、
真摯な加賀の気持ちが良く現れている。ここに至ってようやく高雄
も少し自分の感情を尖らせ過ぎたと気付き、一切の必要性が無いな
がらも自分の責だと頭を下げる先輩に慌てて声を掛けた。

『あ、す、すいません、加賀さん・・・。』

『・・・はっ。・・・一応、艦隊旗艦にはこの件は改めて機会を設
け、しっかりとお話させて頂きます。・・・取り急ぎですが私が見
た所ですと、なにぶんまだ構想の段階がこれでは強いようでして、
・・・この間お話しました小澤^{おざわ}少将の考えとも同じ空母の集中運用と
は言え、少し違いがあるようです。』

高雄の慌てたような謝罪の返礼に対して加賀は素直に応じて見せ
つつ、その声に会議の案件におけるお話をも盛り込んでみせる。一
見すれば仕事真面目な加賀の人柄が滲んだようでもあるが、上司に
当たる高雄の謝罪がそれ以上続かない様にと彼女は敢えて議題たる
話を持ち出していた。

そんな心優しき加賀をよく知っている陸奥もまた、高雄の幾分失敬だった態度を糾弾する素振りも見せず加賀の言葉に応えて行く。

『加賀、それは空母の艦魂としての意見？ 確かにまだ新型の空母は竣工してはいないけど、赤城や二航戦あかぎの子達は乗組みの人間達も含めて相応に経験も積んでるでしょ？ 艦の錬度が育ってるのなら、後は艦隊や戦隊といった司令部、つまり頭脳の部分がこの作戦を理解すれば大丈夫だと思うんだけど？』

『・・・それは違います、陸奥さん。・・・そもそも錬度とは、何をするかの目的に向かって向上させる物です。』

そのやりとりは高雄という後輩の乱れる心を平常にしようとお互いに企図した物だったが、加賀も陸奥も既に30代にも迫る女性の容姿を持つとおり、船の命としては教養豊かな大人の艦魂。お互いにしっかり道理に基づいた言葉を交えており、同門にしてすぐ上の先輩でもある陸奥の楽観に対して加賀は否定に続けて反論の意を示した。

『・・・空母が武器とする飛行機は、実際に艦に相對する為の攻撃方法や対地攻撃の方法、それに攻撃隊として行動する上での方法も無数に有り、・・・標的に対して照準をつける為の訓練だけで事が済むような単純な代物ではありません。・・・その意味でこの様な戦策の実施が検討されているなら、早くその詳細を末端部隊に展開せねばなりません。・・・それを受けて初めて戦隊司令部の人間達も、ようやく日々の訓練を検討できるのですから。』

『ふう〜ん。』

極めて現実的な見地から意見を述べる加賀の声に、それまで静か

に長机を前にして座っていた長門が少し間の抜けた声で唸る。持ち前のお気楽な性格がこんな真面目な空気の下にあっても発揮されたのかと、加賀や陸奥、そして黙って二人のやりとりを耳にしていた高雄や常盤、鹿島が視線を長門に向けるが、そこには大らかな性格で常に陽気な彼女の表情は無い。

腰まで掛かる長く真っ直ぐな黒髪に包まれた長門の顔はその眉間に深いしわを刻み、夜空の星の如く輝きをいつも宿している丸い瞳も、鋭利な刃物を思わせる形となって眼前の大きな地図に投げられていた。加えてその肩幅の広い特徴的な体型と濃紺の第一種軍装も相まって、どこか長門は人間の海軍軍人のようにも仲間達の瞳に映る。本日何度目かのこうした長門の姿は高雄が気にしていた点でもあり、現在の室内では最も年長である常盤ですらも声を掛け難いという雰囲気とその身体全体に纏っていた。

もちろんこんな姉は陸奥にしても目にするのが随分と稀有で、日常では微塵も感じさせる事の無いある種の威圧感に彼女は摺り足で僅かに後ずさりしてしまう程である。催促せねば一向に真面目なお仕事へと向き合わず、苦言の一つも呈すと『へへへへ。』等となんともやる気の無い返事をする長門が、日々の中で大いに悩まされたにも関わらず陸奥の中では姉としての大きな在り方だった。

『ね、姉さん……。あ、いえ。GF旗艦、何か……。？』

やがて意味深な声を漏らした長門に陸奥が静かに問い掛けるも、別に拘っている訳でもない長門への呼称を無意識の内にわざわざ言い直したりと、僅かでは無い動揺が言動に滲み出ている。陸奥と親しい加賀にはそれが、連合艦隊旗艦たる者のお言葉を賜ろうというより、何か怖がりながらも姉の様子を窺おうとしているようにすらも見えた。

そんな中、ふと長門は首を左右に捻りながら口を開いたのだが、その声は陸奥の問い掛けに対する反応では無く、仲の良い陸奥への

考察に少し浸っていた当の加賀が対象であった。しかもまた長門の声は鋭さが一段と増し、その上で先程高雄が加賀に表す直前に呟いた中にあったとある国の名を声に変えた事で、加賀は人並み以下に表情の変化が少ない顔の裏で僅かに肝を握られた感覚を覚える。

『じゃあ、なに？ 加賀は空母部隊の一員として、この構想に見られる作戦はできないという見解？ それはつまり、この資料の中のA国、すなわちアメリカとは戦えないって考えなんだね？』
『……い、今は、……できないかと……。』

首の後ろで縛った長い黒髪に隠れる加賀の首筋に冷や汗が流れ、長門の口より漏れた国の規模が天と地ほどの差もあるアメリカの名に反応して、鹿島と常盤、そして陸奥らが瞬時に表情を凍りつかせる。長門が尋ねた内容は、彼女達が本今朝より会議の体裁で話し合ってきた議題の結論にも等しい物であり、帝国海軍が最も備える反面、もっとも恐れてきたアメリカという大国家との戦争の可能性であった事はもはや言うまでも無い。

奇しくも彼女達が居る長門艦艦首の中甲板とは位置的に間逆となる長門艦艦尾の上甲板では、連合艦隊という大組織の頂点に立つ者を筆頭としたお偉方により全く同じ討議が行われており、お互いに知らずとも艦魂と人間達は奇妙な程に同じ場、同じ話を同じ時間の流れの中で実施しているのであった。

その内に長門より向けられる鋭い視線について耐えかね、加賀が押し黙ったまま顔を下に向ける。供に腰まで伸ばした長い黒髪はお互いの仲の良さの証であるが、別に加賀の言葉に対して何か長門は強い不快感を示した訳でもないのに、加賀は今日の会議における自身の結論をそれ以上明確に声に変える事が出来なかった。

この20年近い間、二人の仲の良さをすぐ近くで見てきた陸奥が

その様子に声を失い、長門の声と身体より放たれる威圧感に幼心を押し潰された鹿島が常盤の背に次第に隠れる恰好となっていく中、沈黙した加賀に見切りをつけたかのように長門は視線を流すと、今度は高雄をその鋭い瞳に捉えて声を発する。

『じゃあ、高雄。第二艦隊旗艦として、午前中から話してるこの作戦構想はどう考える？ 率直に言ってみてよ。』

手にした何枚かの紙切れを揺らして問い掛けた長門に、高雄は奥歯を緩く噛んで加賀すらも慄く威圧感に耐える。部下の明石に思わす怖いと漏らした感覚が今まさに高雄の身体を縛り始め、寡黙ながらも腹の据わった加賀からその人柄とは別にさらに声を失わせる程の今日の長門の覇気を、高雄は今更ながらに敏感に感じ取った。

ひえええ・・・、怒った時の軍医中將と同じだよ・・・。

縮み上がる胸の中で涙声を呟きながら、高雄はその生涯で一度だけ目にした事のある長門の師に当たる艦魂、朝日あさひの姿を思い出す。

弟子の長門とは大違いで麗しくも高貴な人柄を持つ朝日いずもは、高雄がまだ幼少の頃に師と仰いだ出雲と大の仲良しだった。だから教えを乞う日々の中で何度も顔を合わせる機会があり、あの仏様の権化の如き朝日が本気で怒った際の顔を一度だけ拝んだ事があるのだが、まさにその表情が朝日とは似ても似つかない日本人の顔立ちを持つ長門の顔には現れている。

せめてものの救いは師弟共に怒っても感情に任せた怒鳴り声を上げたりはしないという所で、極めて静かな吐息をしながら細くした目をじっと向けてくるだけの長門に対し、高雄は幾分たじろぎながらも完全に声を失うような事は無い。

故に短い深呼吸を放った後に高雄は真正面にて座る長門、そしてお互いを遮るようにして置かれた長机の上の地図に続けて視線を長

し、長門や陸奥に比べれば10年近く若輩な中でも艦隊旗艦を拝する自身の意見を、長門に催促されたように正直に声へと変えていく。

もつとも今から話す事に高雄は相当に不安を抱えており、それは休憩中に明石が去った後で溢した『胃が重い。』の一言、次いで先程の加賀の否定的見解と密接に繋がっていた。

『で、では前進部隊としての見解ですが……。連合艦隊の艦隊戦力は一昨年辺りよりかなり増強されていますが、それでもまだ再編の途中です。あたしの所属する四戦隊なんかをとつても、鳥海や摩耶は昨年^{まや}に合流したばかりで、前進部隊の基幹戦隊としてはまだ鍊度は完全ではありません。水雷戦隊も春頃からは旗艦も含めて改装に入る予定がありますし、二水戦も四水戦も所属の駆逐隊がやつと今年で揃った所です。・・・おまけに本日提示してもらった空母の運用が予定されてるなら、前進部隊である第二艦隊では、これまでに備えてきた艦隊決戦時の行動要領を空母抜きでこれから見直す必要があります。加賀さんの意見と同じになりますが、当然、鍊度の面での満足なんかは先の話になります……。』

加賀と同じく否定的な意見を高雄は述べる。その間の長門はあの人の良いまるとい目を相も変わらず細く尖らせ、僅かに顎を引いて高雄の臆する気持ちを多少は浮べた目をじっと見つめてくる。高雄が怖いと感じた本日の長門の一番の特徴がこの視線であるのだが、今もまた怖いと思いつつも彼女は意見の続き述べる事をなんとか続けようと一人心に鞭打つ。20代前半か半ばくらいの女性の容姿を持つ高雄は、人間の社会で言えばまだまだ若輩にして、現にこの会議を催す室内においても重ねてきた年齢は下から二番めである。だがそんな彼女の細い肩には艦隊旗艦の役目と共に、20名以上に及ぶ第二艦隊の部下達の運命が全て掛かっており、いつも陽気で冗談を飛ばしまくる裏で責任感が非常に強い高雄はそんな自身の肩の重さ

を例え長門を前にしても忘れはしない。

やがて長門が先程の高雄の意見に応じて声を漏らしてくるが、臆する心をぎゅっと握った両の拳で律して高雄は明確に、そしてこれ以上無いくらいに率直な物言いでもって自身の見解の結果を示すのだった。

『んじゃ、高雄も加賀とは大筋で同じ考えを持ってるって事ね？

この資料に示されてる対米国戦争は不可能、って？』

『・・・はい。せっかく資料を写してあたし達に見せてくれた長門さんには悪いんですが、腹を割った所・・・。今の状況では、三分の勝ち目もありません・・・。』

加賀にも負けぬ明確な高雄の否定を受け、長門は短く応じると大きく溜め息を吐く。落胆とも疲労ともとれるその息遣いは高雄や加賀、そして艦隊旗艦代理として常盤が次々に述べた意見に原因がある事は言うまでも無く、長門以外の者達もその事に気付いてちよつと長門を直視するのはなんだか悪いようにも思えた。副官的な存在で常に傍らで控える陸奥は別としても、3人の部下が3人揃って否の意志を示すのだから無理も無い。

そして長門が企図している事を同じ一戦隊所属にして、同じく連合艦隊旗艦をかつては頂いた事もあり、なによりも長門とは実の姉妹である陸奥は、姉に返されてきた部下達の声が芳しくなかった事を受けて姉の様子を再び窺うように声を掛ける。先輩の常盤、後輩の高雄、同世代の加賀が揃って否定的な意見を述べるのはそれだけ珍しかったのであり、長門と交代でこの20年近く連合艦隊旗艦を勤めて来た陸奥も今日が初めてであつたくらいなのだ。

だがしかし、心配する陸奥を横にしながらも、長門は別に困ったような顔色を浮べてなどいない。それどころか陸奥の声を受けるや、

長門は幾分その瞳と声からそれまで維持してきた尖ったような感じを薄めて口を開くのだった。

『ね、姉さん……。』

『……。まあ、そんな所だろうね。それぐらい米国との戦とは大変な事態だ。そんな顔しないでよ、みんな。前から解かった事じゃん。』

感覚的に変化が認めれた長門の言動を受けて加賀や高雄らがふとその顔を見ると、そこには常にお気楽で常に明るい長門のいつもの微笑がある。余裕たっぷりで屈託が無いその表情はすぐさま高雄や加賀の顔から強張りを和らげ、室内の空気を敏感に察して常盤の後ろに隠れていた鹿島もようやく、それまでは半分だけだった覗かせの顔を身体ごと常盤の横へと曝け出した。

長門はそんな室内の者達を順に見回して一人一人に自身の明るい微笑を振り向け、誰という事も無くホッと胸を撫で下ろしたかのような気持ち顔に表れているのを確認した後、音も無くその場に立ち上がって皆に語りかけるような口調で続ける。

『大丈夫だ。山本長官も含めて、連合艦隊司令部のオジサン達も大体は同じ認識だよ。もちろん昔からの海軍軍備の面や、あたしらが知らない外交面での建前で、最近は具体策の研究も俄かに盛り上がってるみたいだけど、今日明日で始めましょうなんて気はさらさら無いと思うよ。』

そこまで言うとき長門は手にしていた書類を机に軽く打ち付けて揃え、半ば放り投げるようにして眼前の地図の上に置いた。いつもであれば長門は陸奥から押し付けられたお仕事の書類をこうした後、『難しくて解かんない。』等とホザいて駆け足でその場を逃げ出すのであるが、一瞬その事を思い出す陸奥が咄嗟に姉を視界に捕ら

えるも、長門は全く逃げる素振りは見せては居ない。今の今まで緊張しきっていた室内の空気を攪拌するかの如く手を乗せた片方の肩を腕ごとグルグルと回し、疲労を乗せた溜め息を再び放ちながら本日 of 会議のシメとなる言葉を長門は口にする。

今日の長門は陸奥にしては随分と手の掛からない姉となっており、いつも急かさねば一向に行わないお仕事 of 発言を今日は自ら部下達に示し、なんとも気が楽で感心する反面、とても奇妙なその姿を、陸奥は巻きグセ of 強い前髪を撫でながらしばらく黙って見つめているのだった

『それに相手が相手だしね。・・・船が何隻有るから勝てる、なんてドンブリ勘定の道理は通用しない。せめて南洋だけでも陸海空 of 設備、それから戦力を完璧にしなきゃ、アタシが言ったらマズイかもしれないけど、まともな艦隊決戦もできないと思う。戦艦だろうが飛行機だろうが潜水艦だろうが、陸海空 of 強力な支援があって初めてその実力を十二分に発揮できるんだ。人間達はそれをアタシら以上によく解ってる筈だから、アタシ達はアタシ達で彼らが考える戦術、戦略を思うとおり実現してやれるよう、今年 is 各隊 of 錬度と進捗状況、それから各々の艦隊 of 業務進捗なんかも細かく見ながら頑張っ てこう。』

その後、高雄が胃を重く感じながら過ごしてきた苦痛 of 会議は結論が出た事によって閉幕となり、召集した者達には解散 of 言葉がかけられる。緊張 of 面持ちと空気に満ちていた彼女達もようやくやうく笑みを覗かせ、まるで会議 of 内容を忘れるかの如く談笑を交えた後、陽

も水平線に既に沈んでいる事を舷窓から確認して帰る事となった。

『加賀。これから晩御飯だけど、姉さんと一緒に3人で食べない？
久しぶりに会ったんだし。』

『・・・ありがたいです。・・・是非に。』

常盤と鹿島の師弟コンビが既に去った室内に、陸奥と加賀のそんなやりとりが木霊する。

愛想の良い陸奥は特徴的な強いクセ毛の短い黒髪を左右に揺らし、極めて明るい声と面持ちで声を掛けているのに反し、加賀は相も変わらずどんよりと暗い声でもって陸奥の申し出に首肯している。知らない人であれば本当に嬉しいのかと疑ってしまいそうになる加賀の言動だが、どうにも空気に合わせて変化させるだけの豊かな感情を持っていないのはなんとも加賀らしい。悪い言い方になってしまいうが加賀はとにかく「感情貧乏」なお人で、決して同じ師匠に教えを乞いだ同門の友である陸奥のお誘いを迷惑だとは思ってはおらず、その証拠に陸奥が加賀の了承の返事を受けてニツコリと笑うや加賀の口からはなんとも短い彼女の笑い声が漏れてくる。

『・・・ふ。』

どうやら加賀は喜んでいようだ。陸奥もそれを長い付き合いで解かっているのかただただ微笑むばかりで何も言わず、会議で提示された資料を少しの間復習として読んでいる事から残っていた高雄にその仲の良さを見せつける。加えて一応は高雄もこの二人に長門を加えた3人は同世代にして本物の姉妹の様に仲の良い先輩方である事を知っている為、自分が残っていてはこの二人がついでに長門を誘うに際して気遣いを与えると考えて、短く挨拶を済ませた後に

さつさとその場を後にする事に決めた。

『んでは、戻ります。お疲れ様でした。』

『・・・あ、お疲れ様です。・・・艦隊旗艦。』

『お疲れ様。』

それまで目を通していた書類を長机の端に揃えつつ声を放った高雄に、加賀と陸奥が即座に挨拶を返してくる。ただ長門は高雄の声に全く気付いていないようで、一人だけ挨拶が返ってこない事から3人がふと長門を見ると、彼女はまだ長机の上に散らばっている何枚かの用紙にその丸い目を釘付けにしている状態だった。しかもその手に握られているのは本日の会議の目玉となった、あの「対A国作戦用兵の研究」という書類とは別な代物で、何やら数字も織り交ざった箇条書きの文面であるのが少しだけだが高雄にも見る事が出来る。

随分と仕事熱心だな、今日の長門さんは・・・。

特に眉間にしわを寄せるでもなく、どこか今にも鼻歌を歌いだしそうな長門の顔には会議中の怖さは微塵も無くなっているのだが、お仕事をサボる常習犯たる彼女を知る高雄はそんな言葉を脳裏で呟いて小さく驚く。その内に今日は姉が至って真面目に働く事で上機嫌の陸奥が長門の肩をそっと擦って集中を遮り、高雄の方へと軽く手を差し出しながら部下がこれより帰る事を長門へと伝えた。

『姉さん。高雄が帰るって言ってるわよ。・・・もお、姉さん。』

『おおっと・・・、あつ。やゝ、ゴメンゴメン。高雄、お疲れちゃん。』

『はい、お疲れ様でした。』

長門は陸奥の手によってちょっと驚くもその拍子に紙面の横より覗いた彼女の顔は、やっぱり会議中に湛えていた鋭い瞳を始めとする怖い表情がどこにも無い。続いて高雄の帰る様子を察して投げってきた挨拶も極めて彼女らしい軽い口調で、いよいよ高雄は本日の長門の変化を勘繰るのをここで止め、浅いお辞儀をした後に通路へと繋がるドアへと手を伸ばした。

『・・・あ！ 高雄っち！ 待ったあゝ！』

『おえ？』

もう既にドアノブに手を掛けてドアを開きかけていた高雄だったが、突如として長門は大きな声を上げて彼女を呼び止め、同時にそれまでずっと腰掛けていた椅子代わりの木箱から腰を上げて高雄の下へと駆け寄ってくる。何事かと思っただけで呼び止められた当人である高雄の他に、陸奥や加賀も僅かに見開いた瞳を長門へと送る中、長門は椅子から立ち上がる前より手にしていた紙を高雄の目の前に突き出して口を開く。

『な、なんですか、長門さん？』

『あのさ、コレ。ここんトコなんだけど、高雄から明石に言ってある？』

『へ？ なんですか、コレ。言うも何も、あたしも今初めて知りましたよお。そう言えば、明石が休憩中に長門さん訪ねて来てましたけど、もしかしてこのお話ですか？』

『お、そっかあ。明石、来てたの。じゃ、アタシから明石に言っとくよ。悪いね。』

短いやりとりの中で話の骨子を確認した長門は高雄の肩をポンと叩き、次いで腰まである長い黒髪に一際映える白い歯を見せた笑み

を高雄に送るや、競歩でもするかのような速い足取りで高雄が開けたドアから通路へと出て行く。

『・・・あ、な、長門さん・・・。』

『ちょ、ちょっと姉さん！ 夕食は！？』

『やゝ、明石にコレ話とかなきゃさ。すぐ戻るよ、陸奥ゝ！』

背後より聞えてくる陸奥や加賀の言葉にそんな声で応じるや、長門は高雄に見せた笑みを浮べたまま足早に通路の奥へと消えて行った。容姿の上でも艦齡の上でも10歳以上離れつつ、同じ朝日という大先輩を師匠と仰いだ明石と会うのを、とても長門が楽しみにしている様子は一目瞭然。だがその直前に明石の上司たる高雄に対してまたぞろお仕事の話題を振り、しかもそれが未完了と知るや自身で達成させると口にする長門の言動は、本日から時間と場を供にしてきた高雄や陸奥、そして加賀にはやっぱり気に掛かる。大体が超が付くほどの面倒臭がり屋である彼女が、わざわざお仕事の話をする為に夕食までの短い時間を使う事自体、これまで長門と付き合ってきた3人には非常に稀有な事柄であった。

『・・・今日の長門さん、・・・何か気合が入ってますね。』

『そ、そうね、加賀。いつもあれくらいなら助かるんだけど・・・。』

『うゝん。でもぶっちゃけ、なんか気味が悪いですねぇ・・・。』

室内に残された3人は時折顔を見合わせながら今日の長門の様子を訝しみ、長門が足早に飛び出して半開きのままとっているドアを、苦笑と困惑が入り混じった表情でしばし眺めているのであった。

第二一二話 「新たな目的地」 (前書き)

大変遅くなりまして、読者皆様には申し訳ありません。

PCダウンと震災より復帰になりましたので、今日より更新を再開致します。

第一一二話 「新たな目的地」

昭和16年1月17日。

未だ多くの艦艇が連なってその身を浮かべる室積泊地むろづみの中、一旒の軍艦旗が鉛色の空の下をゆっくりと泊地より進み出て行く。

まだ水も滴る大きな錨を艦首に据付け、多様な信号旗を次々にマストに翻しながら潮風を切り始めるのは、第二艦隊所属にして大きな起重機が幾重にも甲板上に林立するという独特の艦影を持つ明石艦あかし。その艦橋には伊藤特務艦長いとう以下、明石艦幹部の号令とそれに答える乗組員達の声が木霊している。

『りよーげん、前進原そーく。』

『アチコチに停泊してる艦があるから気をつけろ。取舵10度。』

『はい！ とーりかーじ！』

長くこの室積沖合いにて錨を下ろし、工作艦としての能力を存分に発揮して他艦の訓練支援に当たってきた明石艦。久々の航海は乗組員達の声に機関の唸りの如き力強さを与え、どんよりと色合いが悪く空であっても潮風に撫でられる軍艦旗は颯爽とした雰囲気をも無く醸し出す。

なにせ今日の明石艦は、これまでのように第二艦隊という名の大名行列に混じる形ではなく単艦で泊地を出発しているのだから、明石艦艦尾の軍艦旗の輝かしさは一際目立つ物であった。

『あ。アレは明石だ。おーい、明石ー！』

『明石ー！ 気をつけてねー！』

『明石さーん！ 行ってらっしゃーい！』

『わー！ 行ってきましたーす！』

明石艦が泊地を出て行くに当たって掛けられるそんな声は、人間達には決して聞こえぬ船の命達の物。もちろん応える側の明石だってその一人で、軍艦旗はためく艦尾旗竿の下で大きく手を振りながら仲間達に別れを告げていた。

もったもこうして寂しさを漂わせず元気一杯に別れの一時を迎えている明石は、これまでがそうであるように今回の旅立ちに対しては並々ならぬやる気を漲らせている。ここ最近は帝国海軍艦魂社会の軍医さんとしてのお勉強に励んでいると共に、自身の役目やお仕事の将来像なども見えてきた明石。まだまだ艦魂としては未熟者であるも、20代も迎えたようなその顔立ちには段々と大人びた面影が色濃くなって来たし、無邪気で天真爛漫な性格はちっとも変わっていないが、仲間内や彼女より若い者達からは信頼と尊敬も次第に集まるようになってきている。

姉の様に慕う長門ながとの教え子である大和やまとなんかはその最たる例で、帝国海軍最新鋭戦艦を分身とする大和はそう遠くない未来において、師匠の後を継いで明石も含めた全ての帝国海軍艦艇の命達を統率するというお役目、いわゆる連合艦隊旗艦を拝命する事が既に約束された身。いずれは年上の明石に対してすら指示を出す立場を頂くのであるが、そんな大和はその事を鼻にも掛けずに明石に対してさぶる興味と親しみを抱いているという話を、明石はつい先日ひよっこの夜にひよっこり訪ねて来た長門より聞いたのだ。

これまで幾度と無く自分の未熟さを思い知らされてきた明石だが、なんだかそんな自分が今や追われる身にもなりつつあるという事はとても新鮮な感じがある。加えてこの日の長門はなんとも珍しい事に明石との会話に際してお仕事の話を話題へと上らせ、明石はちよつとビックリしながらもその内容が自身に関わる事だったので耳を澄ました。

すると長門が述べたお話の仔細は、明石のお仕事への意欲に火を灯す事になる嬉しい通達でもあった。

『と、特設艦船・・・？』

『そ。今年から増える事になる民間徴傭の海軍艦艇でさ。結構な数になると思うんだけど、その中には特設工作艦っていう類別の艦も含まれてんのよ。もっろん名前のとおり、これは明石と同じ工作艦の子達だよ。アタシン所の連合艦隊司令部にちよつと前に海軍省の人間が来て会議しててさ。その時に特設艦船の一覧表が出てたから、ちよつとだけ写してきたのよん。』

『おおお、やった！ 工作艦の仲間が増える！』

師匠と自分以外には存在しない帝国海軍の工作艦という艦種。希少性や独自性が殊更目立つ事は、ともすれば「自分にしかできない」といったある種の優越感にも似た気持ちを抱けるのかもしれないが、その反面、船の命たる艦魂達の中においては、お仕事も含めた相談事をする適当な人物が見当たらない現実と背中合わせであったりもする。普段の第二艦隊の中での日常やいつぞやのお勉強会がそうである様に、戦闘艦艇ではない分身を持つ故に明石が何度となく頭を捻った専門性が強い海軍艦艇の事情は、その逆として仲良しの神通じんつうや那珂なからにも適用されるのである。すなわち旧式の二等巡洋艦を分身として帝国海軍水雷戦隊の中核を長く担ってきた二人には、明石の様な特務艦、しかも帝国海軍に僅か2隻しか存在しない工作艦の

事情なぞ殆ど解らないのであり、明石もそれを知っているからこれまでの付き合いで自分からそんな話題を振った事は一度も無かった。

だが長門の口にする工作艦の増強というお話は、例えお船としての出自が違ふ特設艦艇と言えども、明石の孤独な状況を打破するには十分な内容である。当然の様に表情を明るくした明石はすぐさま長門に詳細を尋ねるが、なんでも特設艦船は本来が工作艦としての能力をその身に宿すように設計、次いで建造された訳ではないから、木工、鉄工を始めとする各種の工作能力では明石艦に匹敵する程までにはならないらしい。さしずめ明石の分身が「重工作艦」なら特設工作艦は「軽工作艦」と言った所で、艦の命である艦魂達の身の上においてもその差は適用されるらしい。長門によると軍医少尉と一応は士官の立場とされる明石と違い、特設工作艦の者達はどうやら看護科の兵下士官とされるとの事であった。

言わずもがな、明石はそんな特設工作艦の者達からは、先任でもある事に加えて上司として捉えられるという事でもある。

『じよ、上司・・・！ わ、私が上司い・・・！？』

『あははは。やゝ、ゴメンね。高雄たかおに教えてあげてって年末に頼んだと思ってただけど、アタシの思い過ぎだったみたいでさあ。でも大丈夫だよ、明石。今の所、特設工作艦の候補に上がってる子達はだいたい明石と同じくらいの艦齡の子ばかりだし、金剛こんごうみたいな氣の荒い艦魂ひとってそうそういないしさ。まだちよつと先になると思うけど、朝日あさひさんと一緒にここは一面倒見てあげてよ。』

まだ少し先だと前置きした上での長門の言葉だったが、明石は嬉しさを遙かに凌ぐ驚きの感情によって応じる声を失ってしまう。仲良しの神通の姿に圧倒的な上司像を何度も見てきたが、若輩な自分がまさかこんなにも早い段階で他人の上に立つ立場になるとは夢にも思っていなかった。まして『艦魂レディたる者は一流の淑女でなければならぬ。』というお師匠様の教えをまだまだ体言できていない自

分の身の程も勘定すると、身分相応という言葉からは全く正反對のお役目を言い渡されたような物である。

やがて長門が写し書きしてきたという特設艦船の候補となっている船舶の名が記された一覧を、僅かに震える手で持って明石は大きく見開いたまん丸な目で眺め、部下を監督せねばならないという人生初の重圧に早くも口元が軽く引きつり始める。霞や霞、かすみ あられ ゆきかぜ雪風といった階級の低い者達と付き合う中でも、そこにあった相手に対する明石の意識は友達か可愛い後輩といった観点が強く、指示や命令を与えたりした事はこれまで一度も無いのだ。

ただその上で極めてニコニコと朗らかに笑っている長門の語りかけにより、明石は動揺と驚愕をそれ以上激しい具合とする事は無く、自分もまた生まれてすぐに連合艦隊旗艦という大役を任されたという長門の言葉に次第に元氣付けられていく。

『アタシも最初は解んない事の方が断然多くてさあ。こっ恥ずかしい話だけど、あの頃はしょっちゅう怒られたりもしててね。も、何っ回も朝日さんトコに行ってどうすれば良いのか聞いてたんだよ。でもま、なんとかなるモンだよ、明石。そんなに肩に力入れなくて大丈夫だよ。』

『あははは……。う、上手くできるかなあ……。』

『な〜に、最初から楽にできるんならアタシだって苦労しなかったよ。がんばるのなんて当たり前だし、ほらあ、朝日さんもいつも言ってるじゃん。大切なのは恥ずべき失敗でも輝かしい栄光でもなく、そこに来るまでに有った試行錯誤の過程と結果だって。いっぱい悩んでいっぱい頭を捻るのは悪い事じゃないと思うよ、アタシは。もっと楽に構えていつもどおり頑張れば、明石ならできるって。』

お気楽で普段はちよつとだらしの無い人柄ながらも頼りがいのある長門。自身の体験談も交えて明石の不安をすぐさま払拭してみせ、

続けて話題の中心である特設艦船のもう少し詳しいお話を教えてくれた。

それによると特設艦船の子らは先程長門が述べた艦船としての能力にての程度と同じように、艦魂における知識の面でもやはり明石や朝日とは甲乙の差が存在するらしく、なんとその教育の面でも朝日と共に明石にも担当となって欲しいとの事であった。

それを聞いた明石はせっかく静まった気持ちしが再びざわついたが、特設工作艦の艦魂とは上司と部下の関係となるという話を耳にした時よりもその激しさは極めて薄い。なぜなら専門的な知識に日常から触れていないが為に乏しいという在り方を、明石は年明け前の第二艦隊内における勉強会にて自分の事として経験していたからである。

なまじ海軍艦艇とは「働くお船」ではなく「戦うお船」で、彼女達はそれぞれの国家において海軍という名の唯一無二の集団として運用されるのが常とされる存在。その身に宿した積荷を波頭の彼方まで赴いて届ける古来よりのお船の在り方から見れば異端な存在で、その数もまた一つの国家に属する船舶としては少数でしかない。加えてその時代の最先端の科学技術をふんだんに使って建造された手前、防諜的な観点でも民間船舶とその場を共にする場所は少ない物である。言うまでもなく海軍がその分閉鎖的な雰囲気だと民間から捉えられるのは至極当然であり、海軍独自の知識に例え艦魂であろうともすぐに精通できない事の真相でもある。

民間船舶の命達にとってはまさに、お船事情における畑が違いうだ。

故に特設艦船の艦魂達には海軍艦艇としての教官の存在が必要不可欠で、明石艦と朝日艦のたった2隻しか存在しない工作艦という枠組みの中では明石もまたそれに応じなければならない。いくらお師匠様が知勇兼備で麗人を極めたお方であっても、その負担がただ

一人に集中しないようにとの長門の配慮を、この時明石は察する事ができたのだ。

『うーん、私も先生になるんだもんね。うっし、頑張らないとお！』

先日 of 記憶を思い起こす明石は、艦尾の向こうに遠くなっていく仲間に手を振りながら決意を改める。今日より始まる明石艦単独での行動は神通や那珂を含んだ第二艦隊の仲間達とは完全に離れての行動で、戦隊のような部隊に配備されていない事から、当然行く先では明石艦一隻、次いで明石一人の力で引き抜けなければならない。例えば困った事があっても相談できる相手はいないし、指示を与えてくれる上官もない。まさに明石艦の全ての実力が試される機会なのだ。

だから明石は逆にこのようなタイミングでの単艦行動を修練の場と捉え、先日に長門より教えてもらったはずれ部下を得るという自分の見極めを行う良い機会だと、その考えを改めている。

工作艦の艦魂として、艦魂社会における軍医さんとして、決して長いとは言えないこれまでの時間で得た己の実力は、正直な所では明石本人にとっても未知数と言った所だが、敬愛する師匠に教える乞いながらも頑張ってきた自負はそれなりに有る。

加えて舳先が進む先に有るであろう試行錯誤を当然だと諭し、むしろその中での過程と結果こそが最も大事なんだと元氣付けてくれた長門の言葉が、明石の胸に宿る挑む気持ちを極めて平穩な形で燃焼させてくれていた。

そうなれば生来が頑張り屋な一面を持つ明石は漲るやる気によって、これより始まる単独での行動に億劫となる事はない。彼女は軍艦旗の向こうに霞み始めていく仲間達の艦影から早々に視線を逸らし、一縷の陽の光が鉛色の雲の隙間より漏れている周防灘の沖合いへと顔を向ける。快晴の青空なればもつと清々しい旅立ちともなつたろうが、明石はそんな眼前の海原に自慢の笑みを浮かべてみせ、頬を撫で始めていく冷たい1月の潮風に決意の声を織り交ぜるのであった。

『いよっし！ 明石先生の第一歩〜！』

まるで汽笛の様に声を張り上げ、明石は寒い甲板の上から艦内へと戻っていく。自分で自分の名に先生なる敬称を設けてみるや明石のお仕事に対する意欲は更に一層の燃え上がりを見せ、彼女はそのまま自室へと戻ると早速英語と薬学関連のお勉強へと精を出し始めた。

これまでは「一流の淑女^{レディ}」という師匠からのお言葉を胸に、ただひたすら自身の実力を伸ばさんが為に頑張ってきた明石だが、その日から来る特設工作艦が配備される頃も見越した新たな気概でのお勉強が始まったのである。

こうして艦の命に当たる明石の新たな旅立ちと共に、彼女の分身もまた長く錨を下ろしていた周防灘の海を東へと駆けて行く。目指すは瀬戸内を東進し、我が家の如き呉や、名前を貰った明石市をも通り過ぎた先。紀伊水道は四国沿岸の地、小松島市^{こまつしま}であった。

1月19日。

第二艦隊より分離した明石艦は、徳島県小松島港へと到着。ほぼ隣接する形で北に位置する徳島港よりも水深に余裕が有るというのがこの小松島は、昨年に明石艦も含めた第二艦隊が寄港した事のある和歌山県和歌ノ浦とは紀伊水道を挟んだほぼ対岸に位置する地。四国と本州を繋ぐ旅客航路の点では徳島港に分が有るが、貨物関連の船舶は比較的大型の為に水深に憂いの薄い本港を使用する事が多く、人の流通に代わって物の流通に重きを置く港湾が明石艦のやってきた小松島港である。加えて大正年間から整備された小松島港は岸壁や灯台、浮標、防波堤といった港湾設備を相応に持っており、明石艦のような1万トンクラスの海軍艦艇が悠々と接岸できる中々に立派な港であった。

ただ明石艦がわざわざ仲間達と別れてこの小松島港に現れた理由は、この港自体に有るという訳ではない。その証拠に明石艦が投錨したのは小松島港の棧橋では無く、港や市街地の喧騒が僅かに聞えるくらいの少し離れた海上であり、甲板上に出てきた乗組員の者達も港を望める左舷ではなく右舷へと集まっていた。

『お。あれだ、あれ。あれが小松島海軍航空隊の飛行場だ。』

『へえ、港の真向かいに半島みたい突き出た所が有るのか。』

『建屋なんかもまだ作ってる途中みたいだな。あそこにヤツルハシ振り回してる奴も居るぞ。』

白い事業服姿の乗組員が甲板上から指を向けたりしてそんな声を上げる。伊藤特務艦長や西田工作部長といった明石艦首脳も艦橋からそれを一望しており、その艦橋のさらに上にある見晴らしの良い測距儀天蓋上では明石が双眼鏡片手に、やはり彼らと同じ方角へと

視線を投げている。

それもその筈で明石艦がここに来た最大の理由は、昨年より造成が始まったこの小松島海軍航空隊飛行場に有るのだ。

なんでも今年から開隊となる新たな航空部隊なのだそうで、地理的にもここは帝国海軍の訓練海域として名高い土佐沖に近い事から、艦隊と協同しての訓練に際しては中々の適地でもあるし、戦略的な面で見ても紀伊水道の入り口を守る門番のような役目も期待できる。潜水艦のような隠密性の高い艦艇が仮にこの紀伊水道を通過でもすれば、その先に有るのは大阪や神戸といった国内屈指の大都市に、近畿地方の海岸一帯に広がる工業地帯、次いで帝国海軍の要衝たる呉軍港も含んだ瀬戸内海であり、言わば帝国海上防御点の中でもその重要度は決して低くは無いのである。

それ故かこの小松島飛行場の工事は今年の部隊受け入れを目指してその進捗に一層の加速が必要とされ、その手助けとして帝国海軍屈指の工作能力を誇る明石艦に白羽の矢が立った。つまり海軍工廠にも匹敵する程の工作能力を機動させて運用できる明石艦は、動けぬ陸地の海軍工廠に代わって小松島に進出し、或いは工作部の人員を応援として派遣したり、或いは現地で使用する部品や資材を艦内で加工して引き渡したり等、臨時併設の工場のような役割を命令として仰せつかったのだ。

これまで経験した事の無い、一つの基地の造成に関わるくらいの規模でのお仕事。まさに工作艦の全ての能力が問われるお役目である。

もちろんこの事を知っている明石が張り切らない訳が無く、久々に艦内工作部の総員を投入するお仕事に、一人測距儀の上で力こぶを作るように両腕を掲げながら乗組員達を鼓舞するかの如き声を張り上げているのだった。

『よし！ みんな頑張ろうね！』

艦魂である明石はそうは言ってみても、とりたてて艦内工作部に對して何かできるという訳ではない。

だが来る特設工作艦という部下を持つ時の事も考え、これから始まるという工作部の會議にこっそり潜入してみる事に決める。明石艦の乗組員はその半分以上が工作部所属で、普通の艦艇に比してもその工作能力の扱いが大きい事から工作部専用の會議室までちゃんと設けている。場所は明石艦艦尾側の中甲板で、ぞろぞろと上甲板を歩いて向っていく乗組員の後を明石もまた追って行った。

それからしばらくして明石は工作部會議室へと乗組員達に紛れて入り、いつも同じ艦の命の仲間内で使う長官公室等とは随分と内装の安っぽさが目立つ會議室の作りにはんの少しだけ肩を落としてつつも、時を置かずしてすぐに始まった乗組員達による會議の様子を、部屋の隅っこに座りながらしばし眺める。決して彼等の目に見えぬ彼女の手には、これまたその場に居る者達の目には決して触れること無いノートと鉛筆が握られ、普段から中々お目にはかかれぬ工作部の會議の実態をちゃんと把握すべく紙面に向って鉛筆を走らせていく。

そしてそんな明石の眼前では、早速伊藤特務艦長と西田工作部長を始めとしたお偉方の意見交換が始まっていた。

『えー、手元の資料の二枚目。その一覧に書いている項目全部が、来月までに工作する物品です。ざっと見積もっても組立と鉄工、それから上甲板の起重機関連の部署は終日稼働なんで、そこには艦内の電気は常に供給の方向でお願いします。』

『ふう〜む。泊地移動の予定は無いが、昼間に電気の余力は有るか

な？ 毎日とは言わんが、砲術科の訓練もそこそやっておきたいんだが……。おい、砲術長。』

『はい。砲術科としては、測距儀と主砲関連に通電させて貰えば有難いですかね。それとできるのなら、その時間も今の内に決めときたいです。時間帯が絞られれば訓練内容も絞れると思うので。』

帝国海軍最新鋭の工作艦であっても明石艦は一隻のお船である事に変わりは無く、現場到着に続いて即座に工作作業へと勤しめる訳ではない。多くの科とそれに応じた専門知識を身につけている人員が協力して動かすのがお船であり、工作作業だから工作部所属の人員だけが頑張れば良い等という道理は断じて通用しない。何事もそうであるが多くの仲間達と整合を取った形での準備、次いでその周到性がこの場においても非常に大事なのであり、工作部会議室に木霊する乗組員達のやりとりもまた、明石艦の各部署における工作任務へのこもこもの取り組みについてであった。

艦内での電気はどの様に分配するのか。

搬入搬出に必要な人員は何時、何処に、何名必要なのか。

現地たる小松島飛行場との行き来はどのような方法を用い、どのくらいの頻度で実施するのか。

それらの為にはどれ程の量の燃料が必要で、その補充の目処は何処につけるのか。

挙げれば限が無いそれらの懸案に一つ一つ見通しをつけ、今回の工作任務における詳細な計画を立てるのが本日の会議の趣旨である。何もこれは明石艦に限ったお話ではない。言わばお仕事における初歩の初歩であり、会議室の壁に張り出された大きな紙面には各科の対応とその日程等が少しずつ記されていく。

そしてその様子を、普段からこのように大人数でのお仕事に関わ

る事が無い明石は、実に興味深く観察していた。持ち前の猫どころか虎をも殺す好奇心を全開にする彼女は、爛々と輝かせた子犬のよな目を計画表に向け、工作艦が真価を発揮するに必要な段取りに對して理解を深めていく。

『ほうほう……。なるほどお。電気だって発電機を動かさないと生まれないし、発電機を回すって事は燃料も使うんだよね。そうすると機関科とも意見を合わせないとダメだし、電気関連は砲術科とか運用科の了解も必要になるもんね。大変なんだなあ。』

お船の運用としては極めて当たり前の事ながらも、こうして各部署からの様々な要望や意見を勘定してそれを全員が了解した上で統括していく様子に、明石は改めて新鮮さを覚える。早速ノートに眼前の計画表から読み取れる要点を記し始め、後に特設工作艦の部下を得た際に教えてあげる知識の一つにしようと思いつきながら鉛筆を走らせた。

結局その日の会議は3時間にも及ぶ長丁場となり、椅子に座りっぱなしでも大変に頭を捻る話し合いは、解散となる頃には伊藤特務艦長以下の明石艦幹部の顔に疲労の色を滲ませる。明石も延々とその間筆記に集中していたた為か、ようやく終わったと思った瞬間に鉛筆とずっと擦れ合っていた右手の中指が痛み出す有様だ。

『……。とお、中指が痛い……。うあ、真つ黒だあ。』

いつぞやの第二艦隊の仲間達で開いた勉強会に続き、今日もまた自身の教養をより深くする為と張り切った明石だが、疲労感と共に苦勞の跡もまた彼女の体には残っている。よく見ると明石の右手の

小指の側面から手のひらの側面に至るまでの肌には、鉛筆の芯から少しずつ削れて出たであろう黒色の粉がびっしりと塗りつけられていた。

『ぬうゝ……。手洗ってからお部屋に戻ろっとお。』

自慢の首の後ろで束にした黒髪と違い、艶の無い鉛筆の黒色はまるで煙突周りの炭を拭ったような色合いである。余りの汚さに自分の手であるにも関わらず目を背けそうになりながら、明石はノートと鉛筆を小脇に抱えると会議室を出て行く。字を書く際に小指と手のひらの側面をずっと紙面に宛がうのは、明石の字の書き方における癖のような物で、それが災いした格好となるも、それはまごう事無き苦勞の跡。

おかげさまで明石のノートはこの3時間で5ページ近くもビッシリと文字が記されており、洗面所で手を洗った後に自室へと戻った彼女は早速ノートを再読して、本日得る事のできた「工作艦がその能力を発揮する際の段取り」に関する知識を復習し始めるのだった。

『む、そっかあ。夜に工作区画を動かすなら、工作部だけじゃなくて他の部署の人にも了解とるのかあ。そうだよね、航海科の見張り員さんとかもいるし、舷灯も点けなきゃならないから電気も通電させないといけないもんね。あ、それに就業の時間と内容が変わると俸給にも確か関わるんだっけ。じゃあ、主計科とも調整しておかないとダメなんだ。……。うゝん、あっちこっちと意見合わせるのって大変なんだなあゝ。』

いつも見慣れてる筈の自身の乗組員によるお仕事ぶり。ノートに

記した文字をきっかけとして記憶を手繰り寄せ、工作艦たる自分の分身が活動する上で、その最初の段階の準備より如何に人間達が大変な過程を積んでいるのかを改めて知る事ができた。

もちろんそれを艦魂である明石が知った所で何かが成せる訳ではないのだが、工作艦というお船の命としてその実情は、艦魂の仲間内では一番精通していなければならない。

どんな過程を積んで、どんな結果に至るのか。

それを口頃からちゃんと理解しておく事により、想定される僚艦が傷ついた事態に際しても明石は自分の状況をより正確に、そして即座に仲間へと伝達する事ができるからだ。

先日の勉強会で学んだ明石艦の本来の姿は、満足な陸上支援も得られぬ中で這々の体で帰って来る味方艦を修理してあげる事。まさに艦魂にあっては命の灯火が消えかける寸前であり、一刻を争う事態である。患者を前に医務に携わる者がまごまごしてはいけないのだ。

その事を自分の胸に言い聞かせ、なおかつそんな工作艦を右も左も解らぬ中で分身とする事になる民間船舶の艦魂達に教えてやるべく、明石はその日夜遅くまでブツブツと独り言を漏らしながら復習に励むのであった。

第一二三話 「明石艦乗組員の一戦／其の一」

小松島港に明石艦^{あかし}が到着して翌日の朝。

深夜に降った雪で銀世界へとなりかけている小松島一帯は降雪こそ止んではいたものの、港内の波間は雲によって濾過された薄暗い陽の光のおかげで黒ずんだ色合いを浮かべ、港の周りそこから波間を挟んで向い側に突き出た半島状の陸地は白銀の色合いが目立っている。命の息吹が随分と薄れたモノトーンの世界が明石艦の全周に広がり、その場で色彩の豊かさを得ているのは明石艦の甲板に敷かれたリノリウムの朱色と、艦尾旗竿に掲揚された軍艦旗だけであった。

1月の冷たい潮風も今日はちよつと強めで、やや物寂しい明石艦の甲板上にて白い吐息を漏らしている乗組員達から、通りがけに体温を奪っていく。だが天下の帝国海軍軍人が寒さ程度で活動を鈍らせる事はなく、外套姿の水兵さん達が内火艇を海面へと降ろしていく様子は至って普段のお仕事ぶりである。

また、頑張っているのは下級の立場の兵下士官だけではなく、明石艦幹部の皆々様も昨日の会議で得た見通しを基にさっそくお仕事を開始。明石艦右舷の海面へと降ろされた内火艇に乗り移る西田^{にしだ}工作部長以下、工作部所属の士官達もその例に漏れず、彼らはこれより明石艦右舷向こうに一望できる小松島飛行場へと赴いて、現場の人間達との打ち合わせへと臨むのである。

昨日に引き続くお勉強に精を出す明石もその様子を目にしており、お昼ご飯を控えた時間になってようやく戻ってきた西田工作部長が、終えてきた打ち合わせの説明を伊藤^{いとう}特務艦長へと報告する際にもその場に紛れ、こっそりと聞き耳を立てていた。

それによると、やはり設備が整った明石艦艦内での活動に留まら

ず、現地に直接赴いての支援もまた必要であるらしく、工作部の工員さん何名か内火艇にて毎日送り届ける予定を組まねばならないらしい。伊藤特務艦長はすぐさまこの報告を耳にして幹部を集めた打ち合わせを開くが、幸いにも明石艦保有の装載艇に必要な燃料は十分な量が確保されており、食事に関しても出発時に主計科が特別に作ったお弁当を持たせる事で解決とされる。

甲板より足を離すことができない艦魂の明石は工作部員の出張に同行する事はできないので、せっかく工作艦としての任務の実情を学ぼうと意欲を燃やしていたのにちよつと残念だと思いつつも、一応は毎日明石艦へと出張組みが帰ってきてから行うという報告には、例えば夜になろうともちゃんと接しておこうと心に決めるのだった。

こうして明石艦による小松島での飛行場造成応援の任が始まり、明石もまたノートと鉛筆片手に日々刻々と進捗していく工作任務に勉強を重ねていたのだが、明石艦の奮闘が始まって1週間もした頃、予想だにしない事件が起こった。

その日は朝から天気が荒れ模様で、お天道様の恵みは間断無く続く猛吹雪によって一日中遮られていた。

朝の日課である甲板掃除も今日はソーフ掛けが出来ない程で、甲板上で行うような課業はほとんど艦内で行える内容の物へと変更。

僅かに実施されたのは内火艇の降ろし方と雪かきぐらいであり、いつも甲板上で汗びっしょりになるまでコキ使われる水兵さん達にとっては随分と楽な思いが出来る一日であった。

ただ、猛烈な吹雪に伴われる波間の揺れ具合は酷い物で、なまじ錨を下ろしている現在の明石艦はその動揺がとても大きい。早くも兵員用烹炊所ではぐらぐらと安定しない足元と手先により、誤って手を包丁で切ってしまう水兵さんが出る始末で、船酔いに強い者以外は課業に追い回される事の無い本日を楽しめていないのが実情でもあった。

さてそんな中、艦の命である明石は幸運にも船酔いに悩まされずに済んでいたが、荒れ狂う雪の嵐という天候は艦の動揺以外にも別な形で、そこにいる命に対して攻勢を強めている。それはもちろん1月の季節に付き物の極寒な気温であり、次いでそれこそが明石にとっては最大の天敵と言っても過言ではない代物でもある。

『うひい……。さ、寒いなあ、もお……。』

とにかく寒さに対する耐性が無い明石。

重ね着した外套にすらりと痩せ型な彼女の体型は覆い隠され、軍手の上に施した防寒手袋は彼女の指の短さと太さをやたらと強調させている。おかげさまで寒さに耐えながらのお勉強において、触感が伝わりにくい明石の手はノートの次のページをめくり難い状況となっていて、本日のお勉強の進捗具合はすこぶる悪い物になっている。その事を明石も解っている上に、一日中全身に伝わってくる寒さという感覚によって、彼女の集中力はもはや散逸状態であった。

やがて明石は眼前にある机の上にノートと鉛筆を放り投げるよう

にして置き、腰掛けていた椅子に浅く座りなおしながら両肩と腕の辺りを手で擦り始める。

『さむい……。うんもお、これじゃおちおちお勉強もできないよお……。』

先日までいた室積沖^{むろづみ}にくらべて寒さが際立つ小松島の空気に、唇を小刻みに震わせながら明石は愚痴を漏らす。せっかく漲っていた勉強意欲も寒さだけには台無しにされ、その事に彼女はほのかな怒りさえ覚える始末。それだけ明石は寒さには弱いのだ。

『ぬうう……。』

そんな呻き声にも似た声を放って明石は足元に置いてある小さ目の魔法瓶に手を伸ばし、暖房のない自室の中で唯一暖と憩いが得られるお茶を飲もうと蓋を開け始める。緑色の塗装がされた金属製の魔法瓶は、明石が烹炊所^{ほうすいじょ}にあった物にお湯とお茶の葉を適量加えた上で持ち出してきた物で、安らぎを与えてくれると共に寒さを幾分忘れさせてくれる一品。手袋越しに触った感じでは鉄の地肌独特の硬さだけしかないが、やがてお椀状の蓋を逆さにおいて魔法瓶を傾けるとそこには湯気も香る若草色の滝が姿を現し、険しいばかりの明石の表情も一瞬だけ和らいだ。

『にひひ……。お、あったかい。』

まるで誘われる様な手つきでお椀を唇へと運び、溜飲した温もりに浸りながら挫け気味の心を癒す。辛さばかりの本日における数少ない笑みのお時間をこうして明石は迎え、一時お勉強から離れて休憩を取るのだった。

だがその刹那。

ふと明石は、自室の扉の向こうより響いてくるテンポの速い足音に気付く。

もちろん扉を開けた先には狭い艦内通路があるだけで、時には兵員同士がすれ違う事だってどちらかの譲歩が必要というその場所をわざわざ駆け足で通っていくのだから、明石の耳には余り聞き慣れない珍しい物音として聞こえた。

同時にそれは船の命たる明石だけがそう感じた訳ではないようで、偶然にも付近にいたのであろう乗組員達による反応もまた、明石の抱いた感覚とは大差が無い物であった。

『ありゃ？　おい、機関長だぞ。』

『な、なんだ？　・・・あつと、とりあえず、おい、敬礼だぜ。』

『おおー！　すまん！　どいてくれ！』

きつと同じように疑問符ばかりの思考で表情を浮かべたであろう乗組員2名のやりとりにつき、明石の耳に流れてきたのはなんともけたたましい機関長の叫び声。どうも艦内の通路を突っ走っているのは彼らしく、扉の向こうより聞こえる荒い息遣いも混ぜた大声は、足音と共に段々と小さくなっていく。

『う？　なんだろ？　血相変えて・・・。』

思わずそう呟いた明石は残りのお茶を一気に飲み干し、お椀をまた逆さにして魔法瓶の蓋とすると、部屋の扉をそーっと静かに開けてみる。扉の隙間より除く縦長の視界には、通路の奥に目をやって

呆然と立ち尽くす水兵さんの背中があり、なにやら騒がしく機関長が向かっていったのがその方向であろう事を明石はすぐに察した。

次いで機関長という立派な明石艦の幹部たる者が血相を変えてその場を駆けていったという事に、明石は何か自分の分身全体に関わる緊急事態が起きたのだろうかと考えを巡らせ、自室を出て機関長の後を追ってみる事にするのだった。

小さな胸騒ぎも覚えながら明石が機関長を追って着いた先は、明石艦の頭脳であり中枢でもある艦橋。

夕飯の時間も迫った艦橋は既に外側を夕闇に包まれ、艦内よりも一層際立つ寒い空気で支配されているも、不思議と艦橋の周りの上甲板には人だかりもチラホラと見て取れる。艦内から一度上甲板へと抜け出した明石もその人だかりの後列に位置する所に最初はやって来たが、その場にいる乗組員達の視線が頭上の羅針艦橋に集められていて、なおかつ機関長という幹部がいる場所も大体はそこである事から、人混みの中を押されたりもしながら彼女は羅針艦橋へと向かう事にする。

『ういっと、ごめんなさあ〜い。ちよつと通りますう。・・・うあいてっ！ あ、足踏まないで〜っ・・・！』

やや神妙な面持ちで羅針艦橋に注目する多くの乗組員は、狭い艦橋周りの甲板に密集している事も手伝ってか、目に見えぬ明石の身体がぶつかったり押したりしても全然意識を向けてくる事は無い。おかげで強引に人混みを縫うようにして明石は羅針艦橋への道を切り開いていくが、声すらも彼らには聞こえていないが為に道を譲っ

てくれる人間は皆無である。一步進む毎にその細い身体を圧され、次の一步を進み出すと唐突に挙げられた乗組員の腕に後頭部をはたかれ、もはや根性だと強引に出したさらなる一步は、彼女の存在を目や耳を通して知る事の出来ないその場の誰かによって踏まれる始末。首の後ろで一本に束ねた黒髪も通路の隔壁に何度か引つかかったりして、明石は一步一步進んで行く度に悲鳴と苦悶の声を漏らす。それでも着実に艦橋の下の階から上へ上へと進み、羅針艦橋に近くなった所ようやくおしくらまんじゅう状態から開放された。だが、その開放は混雑具合が羅針艦橋入り口辺りで緩和されての事ではない。羅針艦橋に至る入り口まで乗組員による大混雑は続いており、その中より唐突に尻を蹴飛ばされるような格好で、明石は羅針艦橋内へと弾き出されたのであった。

『うわわっ・・・！　ぶべえ！！』

乗組員達の無数の脚の間よりつんのめりながら出てきた明石は、ろくに受身も取れずに顔から羅針艦橋の床へと倒れ込む。その拍子に思いつきり鼻を打ちつけ、うつすらと涙を目尻に溜めながら片手で鼻を押さえて鈍痛に悶えていた。

『ぐええ、いだいい・・・。』

ふんだりけつたりの思いをした挙句、物凄く格好悪い姿での目的地到着を迎えて明石は泣く一步手前まで気持ち縮み上がってしまった。唯一の救いは自分の姿を見る事ができない者達ばかりが今の彼女の周りに集まっていた事で、歪んだ表情でそれとなく辺りを見回すと、明石の姿に視線の焦点を合わせている者は誰一人としていない。おかげで嘲笑の一斉射を浴びる事態は発生しなかったが、明石は苦労の末に羅針艦橋へと辿り着けた事を忘れて、しばしその場で鼻の鈍痛が引いていくの待つ。

だがそんな中、明石が追いかけてきた機関長はやはり羅針艦橋の中にちゃんと居り、その周囲には伊藤特務艦長を筆頭に西田工作部長、航海長、砲術長など、明石艦の科長格の人員が全て顔を揃えている。本来は艦の運行に使用する羅針艦橋はおかげですし詰め状態で、明石がぶっ飛ばされた所は入り口近くのちょうど開けていた所。お偉方はそこから数歩ほど歩いた先にある転輪羅針儀の周りにて、何やら強張った表情を浮かべて緊張感が滲む声を交えていた。

『連絡はそれが最後ですか・・・？　その後は？』

『いや、無いです。おそらく発動機が停止して発電できなくなったんじゃないか。』

『位置もよく解りません。あちらの棧橋を離れる時に無電が放たれてるんで、たぶん本艦と棧橋の間の位置じゃないかとは思ってるんですが・・・。』

ひどく緊張した面持ちと声で行われるやりとりは、今来たばかりの明石の目から見ても、ただ事ではない状況に直面している故である事がすぐに読み取れる。まだズキズキと痛む鼻を押さえながら明石は羅針艦橋の隅の方へと移動し、しばしの間、伊藤特務艦長らのお話を耳にして状況の把握を試みる。

発動機だの棧橋だのと言っている所を鑑みるにどうやらお船に関わるお話らしいが、この小松島港の沖合いには明石の分身たる明石艦以外に軍艦旗を掲げている船舶は一隻もない筈である。そもそもが第二艦隊と行動を供にする中で、工作艦としてのお仕事の為に分派されたのであるから、神通艦じんつうや那珂艦なかといった戦闘艦艇が軍港ですらないこの海域にいる理由が無いのだ。

はて、どうしたのかな？

思わずそんな言葉を脳裏で呟く明石だったが、お偉方のやりとり
に10分程も耳を傾けるや、伊藤特務艦長達と同じように彼女の顔
色からも血の気がみるみる失せ始める。

なんと明石艦より小松島海軍飛行場に毎日応援として出張させて
いた工作部員達が乗る内火艇が、本日のお仕事を終えて帰艦の為
にと棧橋を離れた後、この猛吹雪の中で機関故障を誘発して立ち往生
する事態に陥っていたのだ。

『ええええ！　ちょ、ちょっとウソでしょ・・・！？』

大事な自分の乗組員が遭難した事を受けて大声を上げてしまう明
石。艦魂であるその声を耳に出来る人間がこの場にいない為、誰も
明石の驚愕に対して反応を返してくる人はいないものの、明石は
そんな事に構わずすぐ傍にある羅針艦橋のほぼ全周に渡って広がっ
ている窓の向こうに視界を投げる。

長方形のガラスと鉄枠が幾重にも並んだ窓はその四方の隅に雪が
溜まり、その形に反して窓の向こうに広がる視界は円形で、しかも
また陽の光が完全に無くなった上に斜めに降下していく猛吹雪によ
って殆ど何も見る事が出来ない。唯一そこから認める事が出来たの
は強風によって荒れ狂う黒い波のうねりと、時折そんな波が這い上
がっている艦橋真下の甲板のみであった。

『えええ・・・。こ、こんな海で漂流ってえ・・・。』

まるで地獄絵図の如き大荒れ模様の海を瞳に入れ、明石は慄きの
感情も覚えながら僅かに後退りをする。お船の命としてこれまで生
きてきた中で荒れた海面を見た事は何度か有るが、明石の大嫌いな

寒さも混じった吹雪という天候の下にある波の溪谷は、彼女とその乗組員達をしても希に見る荒れに荒れた天気であった。

だがあろう事かそんな海面状況、気象状況の真っ只中で、明石艦の乗組員を乗せた小さな内火艇が漂流しているのである。

事の重大性は深刻であり、明石が戦慄する横で伊藤特務艦長らは事態の把握と併に対応策の検討も進めていくが、部下の生命にも関わる極限の状態はお偉方にあっても動揺と混乱を与えていた。

『湾状の地形なので、流されたとしても内火艇は湾内の何処かには居る筈です。もともと潮流の影響も少ないですし……』

『いや、そうは言ってもこの波じゃ、内火艇がひっくり返ってもおかしくないぞ。早いところ救助に行かないと。』

『いやしかし、この海ですよ……？ 救助で出した兵員にもしもって事が有るのも考えなければ……。』

『なにい！？ 貴様、見捨てろって言ってるのか！？』

羅針艦橋の入り口に群がった多くの部下が見守る中、張り詰めた緊張感と生死が懸かった猶予の許されない事態に抗うように、お偉方の一人が突如として怒声を放つ。

明石もその迫力にびっくりして彼等の方をみると、叫んだ時の表情のままであろう眉の釣り上がった表情を浮かべているのは、西田工作部長。件の内火艇に乗っている者達の多くが工作部の人員で、直接の部下が関わっているこの非常時に際して人一倍の心配と憂いを抱いているようだ。普段は温厚な人ながらも今はやや我を忘れ、同じく部下を心配しての声を上げた運用長に食って掛かっている。

ただ、さすがに見かねた他の科長達がすぐに二人を宥め、彼らの上司にして明石艦の責任者でもある伊藤特務艦長もまた、一刻の猶予も無いその場の話し合いが喧騒となってしまうのを抑えるべく声を放つ。

『まあまあ、工作部長。内火艇の短艇員は運用科からも出てます。運用長も心配はあるんです。』

『懸案は懸案ですよ。ちゃんと一つ一つ解決しましょうよ。』

『喧嘩するな。落ち着け。』

さすがに明石艦最年長の特務艦長が短い言葉を放つや、西田工作部長はまだちょっと不満そうな顔をしながらも口を噤む。部下思いから来る心配の念が彼は昂ぶただけで、冷静な判断を迫られるこの場をただの騒動の渦中に投じるつもりは元より無い。それを皆も知っている為に、詰め寄られた内務長も含めて西田工作部長の言をそれ以上責める事は無かった。

もっとも一刻を争う事態に変わりはなく、各々の心配も加味した上で伊藤特務艦長は決断を下す。

それは明石艦全ての乗組員達が抱いていた想いを代弁したかの如き言葉で、明石艦という一隻のお船が、艦外に広がっている超が付く程の悪天候と戦う事を決めた瞬間でもあった。

『・・・艦内哨戒第一配備。特別救難短艇員を集める。それから通信機と蓄電池を準備するんだ。助けに行くぞ。』

『『『はい！』』』

僅かに黙ったかと思った後、意を決した声を伊藤特務艦長が放つや、その周りにてそれまで黙っていた科長格のお偉方が背筋を律して一葉に声を返し、羅針艦橋入り口にたむろしていた乗組員達からも小さなどよめきが起こる。しかしすぐさま羅針艦橋より散らばるようにして出て行くお偉方に押されるようにして、乗組員達もまた

艦のアチコチへと走り出して行き、未だ羅針艦橋内にて窓の向こうの地獄の海をチラチラと見ていた明石の耳には、そんな彼らの声が幾重にも重なって響いてきた。

『機関科！ 機関科は配置に就け！ 科員の配置が終わったら、一旦各部指揮官は缶室横の予備倉庫に集合しろ！ 全員だ！』

『航海科、艦橋配置は集まれー！ 信号灯と見張り増やすぞ！ 艦内哨戒第一配備だ！』

『主計科も一回集合しろ！ 場所は兵員用烹炊所だ！ 戦闘食の用意だ！』

『砲術科も戦闘配置！ 甲板は波がすごいぞ、落とされるな！ それと掌砲長にオレの所に来るように伝えろ！ 急げー！』

滅多に掛からない「艦内哨戒第一配備」の通達により、明石艦は艦首から艦尾、次いで最上甲板から艦底に至る全ての甲板上で、乗組員達が右へ左へと駆け抜ける状況となる。

「艦内哨戒第一配備」とは一隻の海軍艦艇としては戦闘状態になった事と同義の指示であり、別に海軍艦艇ではなくとも当たり前である交代勤務の枠が全て取り払われるという事。総員戦闘配置とほぼ同等の内容で、それまで寝ていた者達は全員叩き起こされて各々の持ち場へと急いで就き、勝手にその場を離れる事は固く禁じられるという状態になる。厠もその配置場所において一人一人交代で行か行けなくなるし、いつもは下っ端の水兵さんが烹炊所に取りに行ったら、居住区にてみんなで揃って食べるご飯にあっても、持ち場に着いたまま主計科の兵員が配りに来るのを待って食べるという風になる。

加えて「艦内哨戒配備」自体は日頃頻繁にかかる物であっても、三直の形での交代を示す「第三配備」が精々といった所だから、明石艦に乗組んで日も浅い新兵さんの殆どは、今回初めて耳にしたという者が大半なくらいであった。

それほどに稀有な上に、各自が所定の配置に就いているという事が重んじられるのが、伊藤特務艦長より発せられた「艦内哨戒第一配備」の通達であり、如何に明石艦として今回の内火艇の遭難という事態を重く受け止めているかの証明でもあった。

まさに明石艦は戦に突入したのだ。

明石もここに至って分身の外に広がる猛烈な吹雪に臆する事を止め、大事な大事な自分の乗組員の危機に瀕したこの瞬間を、艦魂である自分なりに協力して行こうと決意を秘める。すぐさま明石はそれまでい羅針艦橋を飛び出し、その直上に設置されている搭状の形をした射撃指揮所へと移動。まだ配置の人員が到着していない隙を見計らって指揮所内から外に通じる扉を開け、瞬時にして室内へと雪崩込んでくる雪混じりの寒気に抗いながら、先程まで居た羅針艦橋の天蓋に足を進めてみる。

だが重々承知しつつも進み出た羅針艦橋の天蓋上は、一切の遮蔽物が無い風通しの良さが災いして猛烈の吹雪の真っ只中に位置しているような状態であった。

『どひい・・・！ さ、寒い・・・！！』

もともと人並み以下にしか寒さへの耐性を持っていない明石。自分もまた乗組員の危機に立ち向かうんだと激しく燃やした気持ちのみで出た艦のお外は、豪風と荒波がぶつかり合う音が混じった大音響が四方八方より轟き、100メートル先の視界をも遮るほどの大量の雪の壁が真横より殴りかかって来るような有様である。もちろ

ん肌に粘着してくる雪と風は極寒の申し子として明石の体温を奪い、彼女は本日の大荒れの天候を目と耳と肌より味わう事が出来る。

その中でも特に横殴りの雪は非常に厄介で、外套のフードを被った明石の顔を狙っているかの如く衝突し、しばし明石は目も開けられないくらいであった。

しかしそんな中にも決して負けぬのが、栄えある帝国海軍軍人。

天蓋上に出たものの猛吹雪の攻撃によって測距儀の影に隠れながら耐えていた明石の耳には、彼女に続くようにして艦橋の周囲の甲板に出てきた逞しい男達の声が聞こえてくる。

『おい！ あんまり舷側には近づくなよ！ 波にさらわれるぞ！』

『一番機銃員はこのまま右舷を見張るぞ！』

『航海科の水兵3人、だれかついて来い！ 今日^{そつびようはく}は双錨泊だ！ 艦

尾の小錨の確認をしにいくぞ！』

日々の厳しい海軍生活で鍛えた兵下士官の強さは、こういう極めて危険な天候の時に際立つ物である。

朝起きて釣り床を収める所から『遅い！』と怒鳴り散らされ、古参格の者から散々にコキ使われ、夜な夜な月下の甲板にて繰り広げる「整列」と呼ばれる閹裁判では僅かな失態を理由に殴られ、声が小さいと言っては殴られ、気合が足りないと言っては殴られる中、それでも歯を食いしばって頑張ってきた二等水兵、一等水兵辺りの男達にとって、天気の大荒れ具合など可愛い物にすら思えると言っても過言ではない。明石が慄く豪風と波飛沫の衝突がもたらす轟音を掻き消すように、凄絶な声の返事はやがて明石艦の最上甲板のアチコチから上がり始め、同時にそれが艦の命である明石の挫けそうな気持ちを元氣付けて行く。

『おい、高島！ 矢野！ こっち来てくれ！ 機銃の覆いの縛り具

合が緩いみたいだ！ 縛りなおすぞ！』

『『はいっ！』』

『おし！ 気をつけろ！ 風も波も強えぞ！ 足にちゃんと力こめろよ！』

ちょうど明石がいる羅針艦橋天蓋の右舷真下。艦首側にカッターを吊り下げたダビッドを隣にして、1番機銃と呼ばれる対空用の機銃座がそこにはある。露天に野晒しで設置している為にいつも保護シートを被せ、それをロープで縛ってあるのだが、四つん這いの格好で明石が艦橋の真下を見下ろすと、そこには艦内きっての怖い下士官として知られる半田二等兵曹と、若年の水兵さん2人が協力して作業している光景がある。

30代半ばの半田二曹は水兵さんから始めて既に帝国海軍軍人歴は十数年。いわゆる叩き上げの軍人さんで、明石艦艦内でも潮氣の染み具合が一際色濃いベテラン下士官なのだが、海軍なりのおっかなさも人一倍に身に付いているようで、水兵さん達からの畏怖もこれまた一際色濃く集めている。何を隠そう「整列」の儀式で、最も数多くバットやホーサーを振り回しているのが彼なのだ。

ところが非常時を迎えると、その猛き人柄が頼り甲斐という言葉の権化として瞳に映る。それは明石と同様にいつもいつもぶっ叩かれてる2名の水兵さん達にあっても例外ではないらしく、舷側のすぐ傍に広がる悪天候が見えていないかのような元氣の良い返事を返すや、3人で必死に声を掛け合いながら荒波洗うデッキの上で奮闘していた。

『み、みんな頑張ってるなあ……。わ、私も見張りくらいはやらないとお……。』

本当なら今すぐにでも艦内へと駆け込んで暖をとりたい明石であ

るが、滅多に見れぬそんな下士官兵の姿を薄っすら開けた瞳で認め、例え艦魂であっても自分もまたあのように頑張らねばと今また己に言い聞かせる。明石の眼下にあるのは普段その間に恐怖の感情が存在しようとも、仲間の命の危機に際して一致団結、一生懸命に自分の役目を果たそうとこれまで培ってきた身体と心を駆使している立派な乗組員達の姿。決して明石とは一度も声を交える事が出来ず、この先もまた自分の姿を瞳に映す事は無いであろう人間達であるが、そんな彼等と共にここは頑張らねばと明石は思った。

やがて明石は艦橋天蓋にその細い二本の脚を突き立てて立ち上がり、外套のフードの襟元をギュッと強く握って、猛吹雪と夕闇と荒波の山谷に遮られがちな海原の向こうに視線を向ける。3秒も目を開けていると雪が入ってくるような状態だが、ただひたすら自分も身体を張らねばと彼女は強い使命感をいつしか胸の内に灯していた。

『うし・・・！　な、何か見つけたら、音を立てて艦橋の人に気付いてもらおう・・・！　さ、寒いといっ・・・！』

直接声をかけて応答が得られぬ中であっても、それでもなんとか貢献できる自分なりの方法をしかめっ面で呟きながら、明石は四方の荒波の彼方に視線を配っていく。

時折、大波が甲板に乗り上げてくると同時に大きく艦体が傾き、何度かその場にうずくまって動揺に耐えつつの見張り。

大変だとか苦しいとか通り越し、まさに壮絶という言葉を身を持って思い知る明石は、せめて自分と直接声を交える事が出来る、そして自分を見る事が出来る人物がこの場に居てくれたらと、ちよっぴり別れて久しい相方の事を思い出しながら、吹雪と夕闇の波間に必死にまなざしを向けるのだった。

そしてこの時、彼女の足元に当たる羅針艦橋の更に下方。先程明石が一部の乗組員達による奮闘ぶりを認めていた一番機銃の辺りでは、今まさに彼女が思い出していたとある人物とは縁のある人間が、決死隊と銘打った列に加わって短艇の準備に勤しんでいた。

『森！　おい、森！　無線機、積み込むぞ！　落とすなよ！』
『おうよ！　良いぞ、離しても！』

明石が想う人物の面影を残した若い顔立ちながらも、上陸先で他の艦の乗組員としょっちゅう喧嘩沙汰を起こす明石艦きつての問題児。兄とは大違いで乱暴な物言いと血の気の多い性格が際立つ彼は、明石がこの場に居てくれと今しがた願った忠^{ただし}の実の弟、森^{もり}正志海軍二等水兵である。

次いで本日発生した明石艦の危機において、これより彼はその先鋒となって戦場に赴くのであった。

『よし、森！　早く来い！　整列だってよ！』
『おう、わーった！　今行く！』

『特別救難短艇員、整列ー！』

第二一四話 「明石艦乗組員の二戦／其の二」 (前書き)

二部編成の予定でしたが、また長くなってしまいましたので三部編成と致します。

第一一四話 「明石艦乗組員の一戦／其の二」

夕闇と横殴りの降雪が空から群がり、波間からは鋭い角度で跳ね上がってきた荒い波が明石艦^{あかし}の甲板へと這い上がってくる。多くの海軍艦艇の中にあつて明石艦は割と乾舷が高めの艦であるが、周囲に広がる荒れ狂う小松島の海はそんな明石艦の最上甲板に至るまで手を伸ばし、蜂の巣をつついたような大騒ぎとなっている甲板上の乗組員達の足に、時折まるで意思を持っているかの如く纏わり付いてくる。

加えて大荒れの天候は艦の動揺の具合に拍車を掛け、艦首の主錨と艦尾の小錨を両方降ろした双錨泊という停泊態勢となっているにも関わらず、明石艦を左右にグラグラと揺さぶっていた。

おかげさまで明石艦の最上甲板は非常に足場が不安定な事この上無く、甲板上で作業に励んでいる若い下っ端の水兵さんの中には、足をとられて派手に転倒する者も既に何名か出ている。

そして甲板上で転んだ際、まかり間違つて甲板より海面へと戻っていく引き波に捕まったりでもしたら一巻の終わりだ。そのまま舷側へと引き摺られた後、1万トン以上の鉄の塊である明石艦すらも揺さぶる波に、生身で飲み込まれてしまう事になるのだ。

いつも体操の後、『回れー！』の掛け声で急かされてはヒイコラ言いながら磨く、朝の最上甲板。昼には各種訓練に作業、教育なんかでも使われ、夜にはその一角で「整列」というシゴキの光景が繰り広げられるその場所は、明石艦乗組員達にとっては良くも悪くも最も過ごした時間が長い場所でもある。

だがそんな最上甲板がこの時、まさに一寸先が死の淵となる修羅

場へと早変わりしているのであった。

明石艦としてもこの海の中では、下手に流されて岸に近づいたり等の不慮の事故に気を使わねばならないのだが、本日只今の状況はこれに加えて、明石艦装備の内火艇がその乗員もろとも海の向こうにて遭難しかかっているという事態も発生している。その対策の為に明石艦乗組員達は艦内を右へ左へと走り回り、艦の命である明石も根性のみで寒さに抗いながら、文字通り人知れず羅針艦橋天蓋にて周囲の荒れ狂う波間を見張っている。

同時にそんな明石の足元にある羅針艦橋内では、伊藤特務艦長らを始めとしたお偉方が再び参集。これより始める内火艇の搜索、次いで救助の為の作戦を話し合っており、羅針艦橋入り口の辺りにて待機している十数名の水兵さん達も、その様子を固唾を吞んで見守っていた。

総員が配置に就いた状態である「艦内哨戒第一配備」が発令されている中、このように持ち場を離れた水兵さん達が存在する事は、本来ならば命令無視として厳罰に処される状況である。

だが彼らは明石艦艦内にて、とある特務の為に以前より選抜されていた特別な人員。加えて特務艦長直々の指示を貰ってその場に集まっている事もあり、羅針艦橋内のお偉方や艦橋勤務の人員より、彼らに対してお叱りの言葉が飛ぶような事は無い。

彼等こそ、昨年によく編成された艦固有の特別救助短艇員。ボートクルー

いつか発生するであろうと予測される艦外での救助活動に従事する専門の兵員達で、達人と称される程の水泳の腕前を持った者ばかりを集めて構成されている精鋭である。

普通の水兵さん達と違って定期的に早起きをした後、カッター操

法の猛訓練を課され、艦隊や戦隊といった部隊内で定期的に催される短艇競技会に出場するのも、実は全て彼等のような艦固有の特別救助短艇員の者達だ。

そしてそんな鍛え抜かれた逞しい身体と精悍な顔ぶれの中に、今は横須賀の地で奮闘している忠と顔立ちの似た、マサこと森正志もりまさし二水が混じっていた。

『おい、どうだ？ なんつつてんだ？』

『いや、まだ話し始めたばかりだよ、森。だけど、なんかオレ達だけで行くようじゃないみたいだぜ。』

明石艦の水兵さんの一人にして、特別救助短艇員の一人でもあるマサ。

近くにいた仲間とそんな声を交え、年中甲板でコキ使われる事を得たその陽に焼けた顔を羅針艦橋の中へと向けてみる。度重なる喧嘩の勲章として片側の目尻に作った薄い傷跡を擦りつつ、マサが人混みの隙間より覗かせた視界には、先程より若干名多くなったお偉方の話し合う姿がある。次いでその中に伊藤特務艦長や西田工作部長らに比べてずっと若い顔立ちの士官が一名混じっている事に彼は気づき、同時に羅針艦橋内より聞こえてくるお偉方の声に耳を澄ましてみた。

『機関科と通信科からも人員を出す。一人は電池で動かす軽便無線電信機の取り扱い、もう一人は内火艇を見つけた時の機関確認と修繕要員だ。いいな、航海士。』

『この海だ。ボートクルーの連中でも気を抜いたらひとたまりもない。十分に気をつけて指揮を取ってくれよ。それと使える信号は手旗でも火箭かせんでも、なんでも良いからとにかく使え。』

『はい！』

上司たる伊藤特務艦長や航海長よりの指示に対し、鬼気迫るような表情で大きな返事を返しているのは、航海科所属にして航海長の補佐をお仕事としている野津航海士。以前の忠と同じく少尉に任官して早々の若手士官で、22歳になったばかりのマサともそれ程年齢は変わらない人物である。

だが、明石艦就役以来の緊急事態に直面してその闘志に火が着いた様で、救出の為に出す装載艇の指揮官をどうするかとお偉方が話題に出した刹那、ちょうど艦橋内に居た彼はこの危険な指揮官の懸案に対して自ら志願していた。

本当ならその任は航海長が自ら行いたいと言い出していたのだが、大荒れの天候で動揺の激しい明石艦その物の保持にも従事せねばならない航海長の申し出は、すぐに伊藤特務艦長によって却下とされてしまった。

だから航海長は苦渋の決断となりながらも、直属の部下である野津航海士にその任務を託したのである。

『いいか、野津。この天気じゃ天測もできなけりや、300メートルも離れたら母艦だって見えたモンじゃない。指揮にあつては艇の位置には必ず目処をつけて進むんだぞ。何も解らん中でしゃにむに動くなよ。』

『はい！ ただでさえ波で艇は流されますから、船位には十分に気をつけて行って参ります！』

『うん。頼むぞ。』

自らが行けない悔しさと部下への心配が混じってか、些か震える感もある航海長の言葉だったが、野津航海士はまるでそんな上司を黙らせるかのような大きな返事で答えた。

やがて一同に『気をつけろよ。』と方々から掛けられる声に、彼はまた大きな返事をしつつ敬礼でもって応じるや、踵を返して羅針

艦橋の入り口付近より自分を見ているマサ達に声を張り上げる。

これまでのやりとりをずっとその場で聞いていたマサ達、特別救助短艇員もすぐさま返事を返し、今より指揮官となる野津航海長の後に続いて甲板へと降りていった。

『よし、みんな行こう！ 助けに行くぞ！』

『『『 はい！ 』』』

こうして明石艦では航海士を指揮官、特別救難短艇員を主力とした決死隊が編成。ほんの僅かにだが風雪の勢いが弱まっていた時間をこれ幸いと捉え、甲板上の所属が多い砲術科の人員によって、彼等が乗組んだ短艇は甲板から海面へと降ろされていく。

ダビッドより吊り下げられた短艇はいつもより風で揺られ、しかもまた艇の腹をつける海面も相当の荒れ模様。1万トンの鉄の塊である明石艦が左右に揺らされる程の力であるから、僅か9メートルの木製である短艇が食らう衝撃は凄まじい物である。乾舷のすぐ傍を降りていく間にも、時折下から波が盛り上がってきて艇を持ち上げる始末で、まだ海面にすらも到着していないにも関わらず、マサも含めた15名に及ぶ乗組みの者達はほのかな恐怖を覚える程だった。

『おい、みんな！ しっかり捕まってる！ 戸山、無線機を濡らすなよ！』

しかしそんな状況にあっても、舳先の辺りにて中腰の姿勢で立っている若き指揮官、野津航海士は、カッターに乗組んでいる部下達に懸命に声を投じている。マサと大して年齢が変わらない彼は、マサ以外の乗員達と比べるとその年の順番は下から数えた方が拔群に

早い。加えていつもカッターに乗組んでいる水兵さん達が怖気づく程の状態の中にあっても、それでもこうして下の立場の者達への声を失わないのは、やはりさすがは指揮官の初級教育を行う海軍兵学校出身者と言った所か。

航海科所属の士官である野津航海士は、マサも含めた他の科に属する水兵さん達から見れば話すらもした事の無い関係であったりするが、そんな野津航海士は僅か10分程前に聞いたばかりである、20名近い短艇に乗組んだ兵員達の名と顔を既にちゃんと把握しきれているらしい。その証拠に事業服を身に着けて蹲る様な格好となっているマサに対し、その左胸の辺りに書かれた官姓名が見えない中にあっても、彼はマサの名を見事に呼んでみせた。

『おい、森二水！ 喧嘩屋の腕の見せ所だ！ 波になんか負けんなよ！』

『は、はいっ！』

上陸しての喧嘩沙汰を繰り返す者を帝国海軍では「芋堀り」と呼ぶが、どうもその点で野津航海士はマサの事を多少ご存知らしい。その問題児っぷりを声に出されるのは気分としては余り良い物では無かったが、決して野津航海士が自分を小馬鹿にすべくそう言った訳ではない事を、マサはその声色と覇気に溢れた同じ年頃の顔つきより瞬時に読み取る。

出発からして危機的な状況である今だからこそ、野津航海士は荒っぽい気性で成したマサの芋堀っぷりを頼りにしているのである。相手の数が多かろうと少なかろうと、乗組んだ艦の格式が有ろうと無かろうと、いつも鉄拳と怒号のみで大立ち回りを演じているという、マサの乱暴で猛々しい人柄。

常に問題だと睨まれて抑圧されてしまう事が多いそんな自分の特徴を、野津航海士はその場で認めてくれたのだ。

『へっ！ おもしれえ！』

優男の兄とは大違いで鼻っ柱の強いマサ。それを察するや無意識の内に片方の口元を吊り上げ、つい先日 of 喧嘩にて作った頬のアザを覆っている絆創膏を一思いに引っぺがす。同時に彼らの乗った短艇がようやくうねりの激しい海面へと船底を浮かべるや否や、気持ち勇躍してきたマサは、豪風と波がぶつかり合う轟音に負けぬくらしい大声で突如として叫びだす。

『しゃあ！ みんなビビってんじゃねーぞ！ こんな吹雪はなあ！
八甲田の地吹雪に比べりゃそよ風みてーなモンだい！ タマ縮こまらせんじゃねーぞ！』

『バカヤロー、森！ テメー、号令掛けるって時に勝手に大声上げんな！』

今は遠き故郷の冬の厳しさを引き合いに出して威勢の良い言葉を放ったマサだったが、ちょうどそのタイミングで号令を掛ける筈だった艇長の前島三等兵曹がお叱りの怒号をぶちまける。いくら喧嘩騒ぎの常習犯たるマサであっても、その階級は水兵さんでしかないから、いつもなら間違いなくここでビンタか鉄拳での制裁を頂戴してしまう場面だ。

しかし、そんな前島三曹と共に艇後部の腰掛に座って二人のやりとりを見ていた野津航海士は、一時の緊張と恐怖が薄らいだのか大笑いを始める。次いでマサと同じく櫂を手にしていた水兵達もまた、怖い怖い前島三曹のご立腹に冷や汗を浮かべながらもやがてクスクスと笑い始め、轟々とした大自然の咆哮が唸る海面には、場違いな感のある男達の笑い声が短く折り重なった。

『はっはっは！ この天気も田舎モンにゃそよ風か！ そういや貴様、前に居た森砲術士の弟だったな！？ てことは、出身は青森か

!?』

『はい！ 青森の弘前です！』

『よし、艇長！ コイツのこの海を怖がらんトコは艇の士気にも良い。だからこの場はこれ以上怒ってやるな。・・・ただし、森二水！ 艇長の指示が無い行動は今後すんな！ 恐れ知らずでも上官の言う事を聞かないのはダメだ！ いいな!?』

『はい！』

若いながらもさすがに海軍士官。野津航海士の声はマサの飛躍するような気合の漲りを褒めつつも、部下の勝手を叱る前島三曹の顔も立ててやる内容だった。よってマサも前島三曹もその短気な性格に火を灯す事は無く、動揺激しい彼等の短艇がいよいよ出発するに当たって、鉄拳制裁という水兵さん達にとっての修羅場を迎える事態は回避された。

これぞ海軍兵学校で培った、海軍士官の片鱗。

カッター内にいる誰もがそう思い、転じてそれは彼等が乗る艇の指揮官となる野津航海士への、上司としての尊敬へと変わって行く。

『おし、ボヤボヤしてないで出発だ！ 艇長！』

やがて外套の襟と略帽の顎紐をキュツと音を立てて締めた野津航海長が、荒れ狂う漆黒の大波を睨みつけて指揮の第一声を放つ。それに続いて前島三曹も中断していた号令を掛け、仲間を救うべく集った明石艦決死隊はついにその母艦の乾舷より離れていくのだった。

『はい！ 櫂備えー！ 前へー！』

その一方、尖兵たる救助の短艇を送り出した明石艦艦内では、短艇の男達が繰り広げるのとはまた違った形での戦が艦内のアチコチにて展開されている。遭難した内火艇に辿り着かんとする短艇は、現在の状況下の明石艦を一つの戦線と例えるなら、言わば最前線。そして先遣部隊を送り出した後にあるのはその少し後方に設置された第二線であり、古来より戦という存在の中で決して重要度を失った例が無い、いわゆる後方支援の場でもある。

暢気に波浪の山谷へと分け入って行く短艇を眺めている乗組員などは一人も居らず、在艦の立場なりに本日の猛吹雪、次いで荒波の揺さぶりと戦っているのだ。

『おい、石井と東^{あずま}!』

『あ、分隊士!』

『お前等な、医務室行って軍医科の連中を手伝って来い! 機関長からの命令だ! 救助者の為に毛布やら何やら出すんだとよ!』

『はい! 石井二等機関兵! 中甲板医務室に行ってください!』

『東二等機関兵も行きます!』

『よし! 行け!』

艦内奥深い下甲板は、発電機やディーゼルエンジン等の堅牢な機械類が居並ぶ区画。艦の外から聞こえる突風と波の音よりも重苦しい機械の唸り声が際立ち、油の匂いが染みる汚れた空気が常に充満しているという、なんとも居心地の悪い所である。

だがそんな区画内であっても、乗組員達の喧騒が今はそこかしこに存在している。何処からとも無く聞こえたそんな機関科の兵員達の声が響くや、勢い良く開け放たれた水密扉より若年の機関兵2名

が飛び出していった。

事業服や帽子、次いで顔の所々に黒い油污れを滲ませた彼等だが、清潔な身なりなど今は完全にその意識より消し去られており、乗組んで以来始めて味わう事になった明石艦の緊急事態に、その若さ溢れる心を激しく燃やしている。

動揺が激しい艦内通路では時折壁に肩や腕をぶつけながら強引に走り抜け、幾重にも渡って通路を遮る敷居状の隔壁は、さながら障害物競走のように跳び越す。すれ違う兵下士官の乗組員には、規定通りだがもはや敬礼すらも省略。通路脇にて照明によりひっそりと照らされているラツタルも、何の躊躇も無く2段飛ばしで駆け上がっていくという状態であり、そんな2人の急ぐ足が通り過ぎて行く合間にも、四方八方より男達の叫びが絶えず放たれていた。

2人の機関兵が偶然通り過ぎて行った兵員用烹炊所でも、その一端たるやりとりが入り口より漏れている。

『第三戦闘烹炊だぞ！ 配食器と配食札を今の内から用意しとけ！』

『おい！ その牛缶、全部飯桶に開けちまえ！』

『魔法瓶もありったけ集めろ！ 救助隊も救助者も寒い中で戻って来るんだ！ 握り飯だけじゃ暖まらんから、せめて茶ぐらい飲ませてやるんだ！』

どこもかしこも明石艦始まって以来の大騒ぎ状態で、工作部の軍属の工員さんも各科での作業応援へと順次振り分けられ、それらによって特に目立つようになった中甲板から上甲板での人の往来は、まるで帝都における朝の通勤ラッシュの様相を呈している。これほど明石艦には乗組員がいたのかと思わず感じてしまう兵員も決して

少なくとも無く、いつもこの時間は静かな艦内通路も、ここに至ってはその往来の激しさが一段と際立っていた。

次いでそれは、未だ猛吹雪と荒波によって殴打されている明石艦の最上甲板とて例外ではない。

艦首から艦尾に至る最上甲板のアチコチでは、多くの索を引っ張り出して甲板上にある物品を固定して回る作業員が目につくが、艦橋のすぐ後ろにある前部マストには、マスト支柱の表面に連なったコの字状のステップをよじ登っていく兵員2名の姿もある。

耳をつんざく様な豪風の音と、ステップを一つ一つ握る手に容赦なく吹き付けてくる大粒の雪の攻撃は、海面から20メートル近い高さまで命綱も無い状態で上っていく彼等にとっては、まるで殺意を持って襲い掛かってくる死神の魔の手にすらも思えると言っても過言ではない。

『うわ、クソっ・・・！ て、手が滑る・・・！』

『慌てんな、新井三水！ ゆっくり登ってこい！ 探照灯は逃げたりしねえからな！』

『ハア、ハア・・・！ は、はい・・・！』

『よし！ がんばれ！』

そんな声が放たれているのは、高々と垂直に聳え立つ明石艦前部マストの真ん中辺り。

先を行く形で登っていた下士官が、すぐ下で地獄のステップ登りに悪戦苦闘している部下の水兵さんを励ましている。払っても払っても僅か1秒の猶予も無く雪が付着してくる状況の真っ只中で、部下に当たる水兵さんに限らず先に行く下士官の手袋にも、雪が姿を変えた冷たい水がだいぶ浸透してきている。段々と指先の感覚が薄

まり、ステップを握る指の力が知らず知らずの内に弱くなって行くのは二人とも同じであったが、彼等のような下っ端の海軍軍人たる者が日々培ってきたのは、一にも二にも堪^{こら}える事、耐える事、我慢する事である。

まだまだ新兵と評される身分の新井三水は当然ながら、その先で部下を鼓舞しながら歯を食い縛ってステップを登る下士官もまた、若き頃は水兵としてとにかくぶん殴られ、怒られての日々を送った末に、激浪激風に大いに揉まれる本日のこの瞬間を迎えている。加えて波浪を受けての艦の動揺がより顕著に感じる事が出来る高所に近づいているのだから、彼等は張り付いたマスト支柱共々、右へ左へと大きく揺さぶられているが、それでも尚、根を上げずに上へ上へと登っていく彼等の精神的強さは、辛い辛い海軍生活でこもこもが鍛えた忍耐の一言に尽きる。

甲板整列の儀式よりはよっぽど楽だ！

風雪に登る動作を遮られる都度、二人は胸の中で大きく叫びながらマスト支柱を這い上がっていった。

そんな逞しく力強い乗組員らが奮闘している横の遙か向こうの海面に、決死隊となって遭難した内火艇を救助するべく、明石艦より離れて行く短艇が小さく霞んで見える。

荒波の飛沫を頭より被りながらの前進で、櫂を握って身体を前後に倒す艇員も、その指揮をとる野津航海士と前島三曹も、既に一樣に全身ズブ濡れに近い状態となっていた。

もちろん夕闇によって支配される1月のこの時間は、冬特有の寒さもまた雪と風と波に乗じて、彼等の進撃を阻止すべく襲い掛かってくる。海に慣れた漁師であっても、間違いない絶対を引き返そう

とする最悪の状態での航海だ。

だがしかし、今この短艇に乗組んで頑張っている、否、戦っている男達の脳裏には、「後退」の二文字など微塵も浮かんでこない。遭難した内火艇とそれに乗っている明石艦乗組みの仲間達の運命が、他の誰でもない自分達の双肩に掛かっている事を各々が知っているからだ。

『漕ぎながら聞け！　まずは艦の右舷から陸地に至るまでを搜索範囲とする！　内火艇がそんなに流されてなければ、交通路からそんなに離れてないはずだ！』

『航海士！　風と波の方向が少し面倒です！　舳先を斜めに向けて進みますから、進行方向に対してジグザグの進み方で前進させます！』

『よし、解った！　波浪が相当に強いから、艇の速度を一定に保つようにしよう！　速度が変わると位置を見失いかねない！　いいな！？』

『はい！』

懸命に櫂を操る短艇員を望める艇の一番後ろの席に腰掛け、艇長の前島三曹と共に艇指揮に当たる野津航海士も、逆巻くような波と豪風雪の天候の中で挫けてなどいない。上司である航海長より預かった小松島の即席海図に目を凝らし、救助に当たる短艇には必ず積み込まれる事になっている短艇羅針儀を片手に、そしてもう片方の手には鉛筆を握りしめて、複雑な計算でもとめた短艇の位置を記している。

ただでさえ夜となると視界が十分ではないのに、今日は吹雪のカーテンによって僅か100メートル先すらも見る事の出来ない悪条件である。いつもなら海面上に浮かぶ明石艦や陸地の適当な建物を

目印として、乗っている短艇の大体の位置は把握できる物だが、既に短艇の四方に広がっているのは荒々しい波の壁と夕闇を背景にした横殴りの雪ばかり。目印になる物など何一つ有りはしなかった。

故にこの短艇とそれ乗組んだ男達を指揮する野津航海士は、天測すらも不可能な状況の中で羅針儀が示す方位と腕時計の秒針を頼りに、迅速にして失敗の許されない計算を用いて自分達の居場所を知るしかない。唯一の救いと言えば航海士という仕事柄、普段からそんな航路や座標の計算をしている為に幾分の慣れが彼には有った事だが、それを差し引いても理数学に精通した明晰な頭脳を持っていないと決して勤まらない、超絶な難易度の艇指揮となっていた。

『・・・でえい、クソ・・・。艇の動揺で羅針儀が安定しづらい・・・。』

揃いも揃った悪条件の中での位置の割り出しに、野津航海士の顔にも思わず苦い表情が浮かぶ。もう何度目になるか解らない頭から被る波飛沫も気に留めず、震えも段々と出始めた手を懸命に濡れた紙面上に走らせている。いつになく鉛筆が記す文字が薄い事に少々の苛立ち始め、冷たさと激しい動揺に耐えていたその苦い表情は、やがては焦りの色も色濃くなってくる。

マサを含めた櫂を振り回す者達もそれを見て取れたが故、艇長の前島三曹の声に従って懸命に身体を前後に倒しながらも、彼らは敢えて荒れ狂う波と波の狭間に覗く溪谷の向こうに視線を走らせていた。せめて集中して短艇の位置割り出しに勤しんで貰い、肝心の遭難している内火艇の搜索は自分達の目でやってやろうと、櫂を漕ぐ水兵達は無言の内に意識を統一していたのだ。

『てい！　うりゃ！　くそ・・・！　おい、寺井！　なんか見えつか！？』

『くっ・・・！ いや、海水と雪が目に染みやがる！ くっそお、目が開けらんねえ！』

大嵐の中で必死にあげる掛け声の間際に、マサはちょうど隣にて同じく櫂を握っている仲間へと声を掛けてみる。全身びしょ濡れで禪まで水が染みこんでいるのはどうやら皆同じらしく、頬を止め処なく伝う水の流れは、汗なのか海水なのか雪なのか当人にすらも解らない。おまけに豪風に撫でられて生まれる激浪は、気を抜けば彼等の手から櫂を奪おうとするかの如き物凄い力を持っており、明石艦乗組員中では間違いない一番に鍛えられている筈のボートクルーの面々に、早くも疲労という名の内なる妨害を与え始めていた。

『ハア、ハア・・・！ くそつたれ、負けてたまつかよ・・・！』

悪態をつくかのように辺りを睨みつけて奮起するマサだが、いかんせん彼もまた人の子であり生身の人間。相手の人数もお構いなしに喧嘩をふっかけ、例え負けても最低2人は自力で起き上がれないまでにやつつける暴れん坊の彼であっても、人智を超えた自然の猛威に抗うという事は並大抵の苦勞ではない。一向に止まぬ豪風雪と波浪の連続により体温も体力も元氣も限界に近く、まるで自分に言い聞かせるように乱暴な言葉を吐き散らし、言い終えるその都度、奥歯を強く噛んで櫂を握る両腕に渾身の力を込める。

大自然の申し子たる波と風に、人力で逆らつての航行。

要約してしまうとなんとも無謀にも思える彼等の奮闘であるが、決してのその戦ぶりは手も足も出ていない状態ではなかった。

その証拠にやがて風が強くなって一際大きい波が押し寄せ、彼等の乗る短艇が木の葉の様に波の表面を滑り落ちていく際に、大きく左右にローリングする短艇の上にはとある水兵の叫び声が響き渡る。

『お、おい！ アレなんだ！？ いま何か光ったぞ！？』

『なに・・・！？』

『本当か、福山二水！？ どこだ、どこが光った！？』

不意に上がった部下達の声を聞き逃さなかった指揮官、野津航海士が声を張り上げる。

既に午後7時を示した腕時計を身につけた彼は、これまでに無く大きな波に短艇が乗り上げた事で僅かに腰掛から身体を崩れ落としていたが、すぐに腰掛に手を置いて中腰の体勢ながらも二本の足でその場に立ってみせる。続けて短艇の艇首、舳先の辺りにて櫂を握ったままの福山二水が指差す波の山谷の向こうへと、他の艇員達と一緒に目を見失った。

『えい、くそ・・・！ 波が邪魔です！ あの向こうなんです・・・！』

『艇が波に乗って偶然見えたのか！？ おし、次に来るあの波に乗った時に見えるかもしれない！ みんな捕まって、あの方向を見張るんだ！』

男達がそんなやりとりをして束の間、一陣の強風がその場を駆け抜け、またしても局所的に盛り上がった海面が短艇を高く持ち上げる。艇長の指示により短艇が波を滑り降りる際に転覆せぬ様、数名の水兵さん達に櫂を漕がせて上手く短艇のバランスを保つ中、立ち上がった野津航海士はその僅かに開いた細い瞳に一縷の灯りを見つける。

波が連峰状になって交錯する海面の向こう。極めて間近な距離で鋭く波打つ水平線ギリギリの所で、浮き沈みする淡い真珠色の灯りが確かにそこには認められた。

『あ！ あれは上空灯じゃないか！？』

『随分と弱々しいが、こんな天気の中、しかもこんな海のだ真ん中で灯りなんかある訳ない！ 尾灯は確認できないが、きっと内火艇だ！ 艇長！』

『はい！ 左前へ！ ……よし、櫓流せ！ それ、前へー！』

眼前にあった灯りは彼等の奮闘の旅の5合目にして、ようやく見つけた救助者達への道標。行けども行けども荒れ狂う波と真っ暗闇の豪風雪ばかりの船旅だったが、途中といえども目的地にちゃんと自分達が近づいていた事が実証され、短艇の男達の疲れ切った顔にもほのかな覇気が舞い戻ってきた。

『おい、もう少しだぞ！』

その内に櫓を操る水兵さんの誰かがそんな言葉を放ち、短艇の進む勢いと掛け声が比例する形で力強い物へと変わって行く。ここに至って野津航海士も顔や肩、略帽の上などにこびり付いていた雪を軽く手で払い落とし、助けを待っている仲間達への救助作業に取り掛かると同時に、母艦で待っている仲間達にもこの状況を伝えるべく声を上げた。

『そうだ、戸山！ 艦に連絡できるか！？』

『はい！ とりあえずこちらの状況を伝えます！』

『よし！ 頼む！』

軽便無線機の操作の為に決死隊へと加えられた水兵は野津航海士の指示に従い、それまで懸命に水に濡れないように覆いを被せて守ってきた無線機を取り出す。軽便と名が付いても持ち上げるのに一苦労なくらいに重い代物で、風呂敷から中身を取り出すような軽い動作とは行かないが、蓄電池と接続するや無線機の前面にある目盛

りが反応した事に、水兵は安堵の笑みを薄く浮かべた。

次いですぐさま彼は海水に塗れて金属のように冷たさが際立つその手を擦り合わせ、僅かな温もりを覚えると同時に指先の感覚が少し鮮明にもなったその手で電鍵を握った。

そして短艇からは、決して耳には聞こえぬ彼等の声が放たれる。

ただでさえ豪風雪と波浪のみが入り乱れる今宵の海は、大の男が腹の底から力いっぱい叫んだ声でも、100メートル程の距離を飛ぶ間に掻き消してしまう程の凄まじい轟音に支配されているが、現代文明が生み出した電波という名の声は、荒れ狂う今日の波間を稲妻の如く駆け抜けて散らばっていく。行き着く先は散っていく各々の方位によって様々であるが、その中の一つは短艇乗組みの男達が意図したとおり、短艇からずっと離れた海面上で波に揺らされている明石艦の空中線へと辿り着いていた。

『あ、電信だ！　きっと救助艇の連中だぞ！　艦隊や他の艦との交信用とは違う電波帯だ！』

『おい！　羅針艦橋へ伝令！　急げ！』

『ん、これは、連送か・・・？』

明石艦艦尾最上甲板にある隔壁に囲まれた電信室の中、ヘッドフォンを頭から被った兵員達が騒ぎ始める。電信室指揮官の士官が駆けつけ、室内に居た他の兵員達も顔色を変えて集まった所。そこでは、壁一面に広がるような大きな無線機を前にして椅子に腰を下ろし、遠い海面上で奮闘する仲間達の声の受信を担当している一名の水兵さんが、明石艦に届いた電波の声を聞き逃すまいとヘッドフォンを耳に押し当てている。

やがてそこから察した電波の意味を彼は電信室指揮官に告げ、その内容はすぐさま荒天下の甲板上を突っ走ってきた伝令員により、羅針艦橋内で指揮を執っている伊藤特務艦長らへと伝えられた。

明石艦の最前線がいよいよ攻略目標を捉えた瞬間であった。

第二一四話 「明石艦乗組員の二戦／其の二」 (後書き)

活動報告にも書きましたが『第一艦隊法令』の現物を古書店でゲト！、（ゝー、）ノ

主に教練の方法や、帝国海軍のいわゆる業務規定が記されております。フォーマット類もちゃんと収蔵されており、横書きの書式の物ではやはり左横書きの用紙がちゃんとありました。昭和4年の11回改訂版ですので、そんな頃から左横書きだったんですね。

他にも当時書かれたのか、鉛筆にて追記された文のキャプションに「キ関長」なる加筆の跡がありまして、しかも関の字は現代でもよく使われる略式の書き方でした。

よく戦記作品では「大日本帝？國？」といった具合にわざと昔の表記をしたりする物も多い中、当時の現場の人間が書いたであろうこの書き方は物凄く新鮮な発見で御座いました。

第二一五話 「明石艦乗組員の二戦／其の三」 (前書き)

またまた長くなりましたので4部編成になります。
どうも纏まらないです(；´Д´ A 、、、

第一一五話 「明石艦乗組員の一戦／其の三」

雪を四方に抱えた窓が周囲を囲む、明石艦羅針艦橋。あかし

帝国海軍艦艇としては比較的近代的な箱型の艦橋構造物を持つ明石艦にあって、その羅針艦橋は艦の指揮を執る為の機能と余裕が十分に確保されている。一昔前までは巡洋艦であっても野晒しの露天甲板が標準的だった上、近代化改装で艦橋がぶくぶく太って行く傾向も強い昨今、明石艦の羅針艦橋は羅針儀や海図台といった設備の周りが広々としており、伊藤特務艦長を始めとする艦橋配置の人員にとっては、閉鎖された鉄の塊の中に居る事で得る圧迫感という物が無い。

それに明石艦は、例え海軍艦艇としては第一線で活躍しない特務艦艇であろうとも、まごう事無き帝国海軍最新鋭艦艇である。これまでの特務艦では装備されていなかったジャイロコンパス転輪羅針儀だって竣工時より設置されているし、艦内通話における艤装なんかでも伝声管より電話の方が設置数は多い。

そんな最新設備に囲まれて励める明石艦艦橋配置の乗組員は、10数年落ちの旧式艦艇が大半でもある帝国海軍の中にあつては、割と職場環境には恵まれていると言えなくも無い。

もっとも朝から続く猛吹雪と大時化の海、そして夕方過ぎの時間帯に発生した所属内火艇の遭難事件に対処中の今は、さしにも羅針艦橋内で新品ピカピカの設備に見惚れている者なぞ誰一人いない。

明石艦最高責任者たる伊藤いとう特務艦長も同じで、彼は各々の配下部署に指示を出している各科の科長達を背に、遭難した内火艇を救助

すべく明石艦を離れていった救助艇の事を考えていた。

野津航海士を指揮官に特別救助短艇員を主力として編成された彼等は、伊藤特務艦長自ら命令を下し、決死隊と銘打って送り出した精鋭部隊、と言えば聞こえは良い。だが生身の人間である事に変わりは無く、しかもまた立派な中型艦艇である明石艦すらも身動きできない程のこの大荒れの海面を、あろう事か手漕ぎの短艇で突破するといふのだから、伊藤特務艦長でなくともそこに生まれる憂いは決して規模の小さな物ではない。

せめてまだ艦に残っている物の内、ちゃんと内燃機関を搭載した他の装載艇を救助艇として出してやりたいのが彼としても本当の所であったが、色々な事情があってそれは残念ながら適わなかった。

内火艇は遭難した工作部用の他にも、同じ全長11メートルの物が工作部以外の部署用として装備されているのだが、元来、近代帝国海軍の内火艇とはそれなりの身分を持つ士官や将官の移動を主として使用される物で、物にもよるが立派な乗員用の収容区画や真鍮製の煙突を持っていたりするのは、その乗員も含んだ格式という物を誇示する為に作られているからだ。これは勿論、自国外の海域で外国の船舶へと訪問する事も多い海軍の事情も深く関係しているのだが、とにかく小さな船体に立派な見てくれを整えたその構造は、積荷を運ぶというそもそものお船の機能性に余り融通の幅を持たせてくれない。

すなわち内火艇は収容できる人員数が少なめな船舶であり、多くの救助に当たる兵員を乗せて、その上でさらに救助者も乗せるだけの収容能力が無い事から、本日の救助隊の乗組む艇としては見送られたのである。

他に明石艦に装備されている装載艇では、櫂ではなく櫓で進む通

船と呼ばれる船舶が有り、こちらは物資や人員の搬送により重きをおいた船舶である。駆逐艦以上の大きさになる艦艇には大体装備されている船舶で、明石艦にあってはこの通船が全長6メートルの物が艦用で1隻、12メートルの物が工作部に1隻搭載されていた。ただ櫓は櫓での操船に比べて高い技量が必要とされる上、軍港内での交通船の曳き波程度でもその取り扱いが不安定になりやすい側面があり、本日のような猛吹雪と大時化の海では到底実施できる物ではない。故にこれも却下である。

次いで装載艇の中には、内火艇のように内燃機関を搭載しつつ、それでいて通船の如く物資、及び人員運送用に特化した構造を持つ船舶が有り、ちょうど内火艇の足と通船の積載能力を両立したような代物と言える。内火ランチと呼ばれるこの装載艇は、積荷を運ぶ為に舳先から船尾までの間に相当のスペースを持っており、精々縦席が船尾の端っこにポツンと置かれているだけである。

特に工作艦たる明石艦では資材の搬入出でこの種の装載艇が多く使用される事から、就役時よりこれらは同じくらいの大きさの海軍艦艇に比べても多めに装備されており、全長12メートルの物が艦用に1隻、工作部に2隻。更には極めて特殊な例として、明石艦には内火艇や内火ランチよりも一回り以上大型で、30トンの資材の積載が可能な運貨船という船舶まで、一隻だけではあるが装備されていた。

しかし残念ながら、これら人員運送に最も適した内燃機関搭載の装載艇もまた、本日の救助隊乗組みに適さないと判断されている。なぜなら運送用に特化した船舶は、その船体形状が自然と横幅の広い物になる傾向があり、操船の容易さや大きな波浪なんかへの耐性が極めて低い値となっているからだった。

明石艦始まって以来の危急の事態に際し、伊藤特務艦長が思い出しているそんな救助艇決定の裏側は、帝国海軍という組織の運用にあつては極めて小さな事案かもしれない。しかしそこに帝国海軍軍人としての己が責務と部下の命が掛かっている以上、思慮に思慮を重ね、十分な計算の下に打ち出した理論的な妥当性がちゃんと積み上げられている。もちろんこの大荒れ模様の天気の中、大事な大事な部下にして、将来有る若人達に決死隊の如き体裁の命令を出し、手漕ぎのカッターで搜索と救助に向かわせる事に不安が全く無い訳ではないが、彼としても大いに熟慮した上で最も見込みがあるのだと結論付けたのが、カッターを救助艇として派遣する事だった。

頼むぞ……。なんとか頼むぞ……。

厳しい表情で羅針艦橋より艦外の光景を眺める伊藤特務艦長の脳裏に、何度目になるかもう解らないそんな言葉が過ぎる。明石艦の最高責任者たる立場ではおくびにも出せないし、指揮官としての体面上は部下に絶対見せていけないと解っているながらも、既に彼には祈るより他に事の成り行きを変化させる方法は無かった。

だが、そんな伊藤特務艦長の積もりに積もった心配と憂いを一挙に拭い去る事態が、ここに至ってようやく訪れる事になる。

『うん……。うん!? なに、それは本当か!? 間違い無いか!?』

それは時間にして、既に救助艇が明石艦を出発してから1時間近くも経過した頃。科長格のお偉方による指示の声が未だ止まぬ羅針艦橋に、艦内電話の受話器を手にした通信長の声が響いた。何やら裏返った声色を途中で漏らし、受話器に向かって何度も確認を取るその様子は、最初の内はその場に居る他の者達による喧騒に埋もれ

ていたものの、途中で通信長が一旦受話器を耳から放して『おい！』と声を上げて注意を引いた事により、艦橋内の視線と意識を瞬時に釘付けにする。伊藤特務艦長も眼前の艦首が望める窓から視線を逸らし、小走りで通信長の近くへと詰め寄る中、受話器を置かぬままに通信長は部下からの報告を声に変えた。

『電信室より！　ウ連送受信！』

『よし！』

通信長に続き、伊藤特務艦長が短く叫ぶ。その表情は救助の手応えを確信して力むのと同時に若干の安堵も見られ、彼の周囲に集まっていた羅針艦橋内に居た者達も同じ表情となっていた。もちろんその理由は、電信室より受けた受話器越しの報告を耳にし、即座に放った通信長の言葉以外には無い。

「ウ連送」

これは無線電信にて用いる多くの符号の中で、「ウ」の符号のみを連続で発信する事である。

もっとも電報がそうであるように、単一の符号のみでは文章を形成できる訳は無いのだが、無線電信の中には緊急時においては単一の符号、または複数の符号の組み合わせを何度も発信する事で一定の意味を指す信号とする場合があり、特に遠距離で緊急事態に直面しやすい船舶の業界にあっては、50年以上も前から各種の信号は用いられている。

明治45年に起きた人類史上最悪の海難事故、「タイタニック号遭難事件」にても有名である、「SOS」もまたその一つだ。

ただ、「SOS」は万国共通で用いる遭難信号であるから、平時より極めて機密性の高い海軍という組織でこれをそのまま用いる事

は出来ない。それに符号における和文、欧文の違い等も考慮し、帝国海軍では独自に各種信号を制定して用いている。

そして帝国海軍で用いる連送系の信号は、大体は語句の頭文字を取って設定されている事から、伊藤特務艦長らは即座に「ウ」の符号が示す物が何であるかを察する事ができた。

『ウ連送・・・。』

『敵発見のテ連送は、テキのテ・・・、敵潜水艦発見のセ連送はセンスイカンのセ・・・。と、特務艦長！　じゃ、きつとウは！？』

『ああ、ウチビテイのウ・・・！　救助艇の奴らやりやがった！
内火艇を発見したんだ！』

その一方、明石艦に羅針艦橋に朗報をもたらした救助艇たる短艇では、未だ短艇員達が頭上より来る雪と波飛沫でずぶ濡れとなり、1月の寒さにかじかむ手に時折息を吹きかけたりしながらも、必死の形相で櫂を操る男達の姿がある。四方より襲い掛かる自然の魔の手は、時に突風という形に変化して頭上をかすめて行く事も多く、顎紐が外れた瞬間を見計らって何人かの水兵達の頭から軍帽を奪い去り、当人が慌てて手を伸ばすも虚しく海へと放り投げてしまう。

国民の尊い血税によって賄われ、形式上でも恐れ多くも天皇陛下より頂いた被服をこんな形で失くしてしまうのは、末端の水兵さんであっても大変な失態であるが、危急の状況たる今の瞬間を論し、ようやく捉えた目標に前進するように彼等の意識を操るのも、海軍軍人の中で指揮官という立場を頂く者の重要な役目。

短艇の後端にて腰掛けに座りつつ指揮を執る若き指揮官、野津航

海士はそれをよく実践していた。

『ああっ！　ぐ、軍帽が・・・！』

『寺井二水！　構うな！　艦に戻ったら俺が特務艦長にちゃんと話してやる！　紛失で怒られたりなんかしないから、今は櫓漕とうそうに専念しろ！』

『あ、はい！』

部下を励ましつつ野津航海士はその視線を、短艇の舳先の向こうから逸らさない。発見した時は頼りないぼんやりとしたあの灯りが、その方向にはあるからだ。次いで波の溪谷によって見え隠れしていたのも、だいぶ内火艇も前進できた事もあって、今や大荒れの海面上であつても見失う事は全く無い所まで来ている。横から流れる吹雪のカーテンこそ未だ健在であるが、彼等の短艇は着実に内火艇の物らしき灯りへと前進していた。

するとやがて、短艇の舳先に陣取つて櫓は漕がずにその他の作業に従事する役目の福山二水が、懸命に漕ぐ仲間達を幾列も挟んで反対側に位置する艇後端の野津航海士、そしてその隣に居る前島二曹へと何事か叫ぶ。

『指揮官！　艇長！　間違いないです！　アレ、工作部の内火艇ですよ！』

『お！　見えたか！？』

その声に思わず野津航海士と前島二曹が中腰で立ち上がり、櫓を操る10数名の水兵達も一斉に顔を舳先へと向けた。見ればなんと内火艇は距離にして前方約50メートルの距離に在り、艇のアチコチに多くの雪が付着しながらも特徴的なマストやヤードが、そこに

掲げられた淡く黄色い灯りによってぼんやりとだが闇夜の海面に浮かび上がっている。

内火艇の艇首に書かれた所属艦名までは見て取れないが、そもこの小松島港こまつじまにおいては彼等が乗組む艦以外に海軍艦艇は存在しない筈なので、やがてこもごもの視界に全体が見え始めてきた内火艇は、遭難中である明石艦工作部所属の艇である事は疑いようは無かった。

『おお……。あれか……。！』

思わずそう呟いたのは、短艇中央あたりで櫂を握りながらも、上半身を捻って艇の舳先へと視界を投げていたマサ。周りで同じく櫂を手にしている仲間に混じり、四肢のアチコチに溜まり始めた疲労感に緩く唇を噛んで見つめる先には、いつも明石艦の甲板上で見慣れた筈の内火艇がユラユラと波に揉まれていた。

『よし、とりあえず近づいてみよう！ 艇長！』

『はい！ 防舷物用意！』

その刹那、マサ達の頭上には前島二曹より新たな号令の声が響く。その声にしぼしぼーっとした感の視線を投げていた水兵達は我に返り、艇の舷側が何か硬い物に当たった際にその衝撃を吸収する防舷物の準備を始めた。

その間、艇は残留する慣性と荒れ狂う波によって上手い具合に内火艇へと接近して行き、内火艇に最も近い艇首に居る福山二水が前島二曹よりの指示で爪竿を手にし始める。

この爪竿とは櫂よりもやや長い木製の棒の片端に、真鍮で出来た鉤状の爪を複数取り付けた物で、装載艇が海上にて艦の周りを活動

する際に使用する短艇用具である。艦や岸壁の至近距離で発着する際、短艇乗組みの人員が艦に押し当てて艦と短艇の距離を調整したり、海面上を浮遊するロープ類に爪を引っ掛けて拾い上げたりするのが用途だ。

言うまでも無く、福山二水が爪竿を手にしたのもその用途の域を出ない。一向に回復の兆しが見えない大時化の海上であるから、内火艇も短艇もお互いに近づいた後、一定の距離を保って留まる事は不可能であり、下手をしたら波に流された拍子に不意の衝突を引き起こしかねない。衝突に備えての防舷物を準備し、それに続いて福山二水が爪竿を準備したのはこの為であった。

やがて彼等の乗る短艇は、内火艇の佗しい灯りを見上げる事で目にできるくらいの距離まで接近。一向に足場が定まらない短艇上での視界では不明確だが、距離およそ5メートルといった所か。舳先にて福山二水が伸ばしている爪竿も、あともう少しで内火艇の舷側に接触できそうである。

『うし・・・！ もうちょいだ・・・！』

『気をつける福山！ 身体や腕を伸ばしきると波の衝撃で爪竿落とすぞ！ 焦んなよ！』

『はいっ・・・！』

よく見れば内火艇の舳先に近い乾舷には、ねずみ色の下地に白抜き文字で「アカシ」と書かれており、操舵室の真上に複数の航海灯とセットになって設けられた艦名標にもまた、黒字に白抜きの「アカシ」の文字がある。眼前の内火艇は間違いなく遭難した明石艦の内火艇であった。

それに伴いようやく救助対象を目前にした事により、短艇上には一挙に沈黙と緊張が張り詰める。せめてもの救いは、内火艇への接触を試みる福山二水に対して掛けられた、短艇後部に居る前島二曹

の怒号の様な叫び声。出発時にいきなりそのお叱りを受ける事になったマサも含め、短艇上の者達は覇気も怖さも相変わらずのそのお声に、無意識の内に安堵する。狭い短艇上はまさに一步踏み外せば、そこには大自然の脅威も猛々しい光景が広がっているというのに、前島二曹の強面より放たれる言葉は至っていつも通りだったからだ。

『……ふうう……。』

鼻っ柱の強いマサも、一時間以上に渡る極限の海での櫂操作に四肢は疲弊し、禪や靴下まで濡れたその衣服では頬を伝う汗や波飛沫を拭う事も出来ない。出発の際に見せた、吹雪という天候への慣れを誇張してみせた威勢の良さも、正直な所では衰えが見えてきている。だがそんな中での前島二曹の声に、彼は水兵として明石艦で生きる上でいつもそこに在った物の一つを垣間見る事ができ、意図せず小さな安堵の溜め息を放ったのであった。

そしてようやく福山二水の持つ爪竿が、まさに内火艇の舷側へと触れようとする時、いつの間にかマサの隣まで進み出ていた野津航海士が彼に話しかけてきた。

『よお、森二水！　まだ元気はあるか！？』

同じ櫂を手にした水兵達と供にずっと舳先ばかりを注視していたマサは、突如として耳元で起こる野津航海士の声に慌てて身を翻す。四つん這いの格好で略帽の顎紐を締めなおしつつ声を放った野津航海士の顔は、ちょうどマサと同じくらいの目線でそこに在った。だが指揮官として必死に対処しようと決心しながらも、これから行う救助作業に予想される多くの憂いを、まだまだマサと同じくらいの年頃のその顔つきに彼は隠し切れておらず、僅かに唇が震えているのをマサは声も無く察する。

おつかねえんだな・・・、たぶん・・・。
そうだよな・・・。

自分自身もきつと心のどこかで抱えているであろう、そんな野津航海士の胸の内を垣間見た後、マサは辺りの波と風のもたらす轟音に負けぬ声で、再び持ち前の威勢の良い言葉を放ってみせる。すると野津航海士は小さく口元を緩め、すぐさま声を返してきた。

『はい！　こんな海、津軽海峡じゃ毎度の事ですよ！』

『よし・・・！　じゃ、この索を身体に巻き付けろ！　貴様、接舷したら内火艇に移って、まず向こうの状況を探ってきてくれ！　さつきから内火艇に人の影が見えないんだが、あのマストの灯りは備え付けの航海灯じゃない！　よく見ろ！　あれは誰かがマストに括り付けた懐中電灯だ！』

『お・・・！？』

そう言って野津航海士が内火艇のマストの灯りを指差す。彼の言葉により今更ながら内火艇に人の影が見当たらない事に気づくと同時に、マサは野津航海士が指し示すマストに、確かに懐中電灯が荒い縛り方によって括り付けられている事を認める。

『機関故障だって話だから、たぶん艇の電気が生きてないんだろう。備え付けの尾灯や舷灯が点いてないのも、おそらくそのせいだ。』

腰の辺りにロープを巻きつけつるマサの横で、野津航海士が呟いた。それはこれから救助せんとしている内火艇の状況を手短に述べた物で、夜間航行の規則にて決められている艇備え付けの光源類が機能していない事の真相である。

もともと天候の程度に関係なく船舶が夜の航行にて点灯するのは、街灯や道標の無い海原で衝突等の事故を回避する観点から言えば至

極当然の事で、言うまでも無く自己の存在を光によって遠くからでも視認して貰おうという狙いが有る。転じて海上で遭難という事態に陥ったならば、自己の位置を示すために進んで舷灯等を点灯するのが船乗りとしては当たり前の選択となる。

それを考えた時、眼前の内火艇のマスト上に弱々しく光を灯す懐中電灯は、艇の発電が無い中でもないとかそれを実施すべく、内火艇の乗員が生きる為に必死に行った努力の足跡にも等しい物であった。

『よ、しつ・・・！ て、艇長！ 指揮官！ 爪竿が届きました！』

その内に福山二水の声が木霊し、文字通りいよいよマサ達が乗る救助艇が内火艇を捉えた事を艇上の全員に知らせる。するとそれまで艇の後ろを定位置としてきた前島二曹、野津航海士が艇前方へと移動し、少し遅れてロープを結び終えたマサもそれに続く。

その際、艇の中央を這う様にしながら艇首へと進んでいく中で、マサは両舷に並んで未だ櫂を手に行っている仲間達の顔を横目で見ていくが、その顔は極寒と疲労に憔悴しかかっている物ばかりであった。特別救助短艇員として猛訓練に次ぐ猛訓練を重ね、明石艦艦内では最も壮健な身体を持つ筈なのに、言わば実戦に当たる本日の出動は皆相当に応えているらしい。

ただそれでも彼らはやや虚ろにもなっている表情で、隣を這って進んでいくマサに声を掛けてくれる。彼自身の言葉通り、やはり現在の短艇上で一番元氣そうな水兵は、誰の目から見ても北国出身者であるマサであり、それ故に命綱として胴回りにロープを括ったの任務にこれから当たるという事を、皆知っているからだ。

『おい、森……。気をつけろよ……。』

『マサよお……。落ちてでも焦んじゃねーぜ……。索を伝ってくりゃ大丈夫だかんよ……。』

『お、おうよ！ 任せとけい！』

生来が鼻っ柱の強いマサは、いつもだったらこんな言葉を仲間に掛けられると悪態が滲んだ一言で返答する所であるが、極限の状況であつた事が彼の意識を僅かに変えていた。まるで自分達が出来な事を託すかのような声を四方より貰い、その芯のある想いに応えようという意識が不思議とマサの中では強くなっていく。だがしみじみとそんな気持ちの変化に思考を巡らせる猶予はもちろん無く、彼は短く叫ぶと福山二水と前島二曹、そして野津航海士が控えている艇首甲板へと向かう。

次いで野津航海士から確認してくる事項を何点か聞かされた後、彼は内火艇と乗組む短艇が波によって近づいたり離れたりするタイミングを見極めようと目を凝らし始めた。飛び移る機会を窺っているのである。

『おい、森！ 内火艇の上は雪があるから滑るぞ！ それにカッタ―と内火艇がいつまでもくっ付いてる訳じゃない！ 踏み出す時は気をつけろ！』

『はい！ おし・・・、次の波でいきます！』

『よし！ 落ちる事は気にせんで良い！ 索がちゃんと巻かれてるからな！・・・おい！ テメーらも索と森から目を離すんじゃないぞ！ 解つたな！』

冷や汗が首筋を伝い、生唾を飲み込んで内火艇が近寄ってくるのを待つマサの背後で、前島二曹が持ち前の援護射撃の如き声を上げる。頼れる上官と仲間を背にして一步を踏み出す格好となり、マサは自分の肩にここまでやって来た短艇と、その乗組んだ者達の全てが掛かっているのだと感じつつ、荒い波に足場たる短艇が乗り上げた事を示す大きな動揺を覚える。すると短艇はマサが読んだとおり内火艇の方へとグンと押される様に近づき始め、咄嗟に伸ばした手

が内火艇の冷たい船体へと触れた。

『じゃあ！ 今だ！』

そう叫ぶや否や、マサは短艇よりも僅かに高い位置にある内火艇の甲板へと這い上がる。グラグラと揺れる短艇の上では中腰でないと立てない事から、内火艇の甲板の高さはおよそ彼の胸の高さぐらいにもなるが、塀を乗り越えるように足を引っ掛けて一息に内火艇の甲板上に転がり込む。幸いにも滑る事が無く、それが転じて海中に落ちる事も無かったが、雪が幾分積もっている内火艇の甲板に身体を横転させた為、一際肌を突き刺す冷たさにマサは思わず顔をしかめた。

しかし荒っぽい乗組みとなったものの、彼は怪我を負う事はしなかった。恐らくそれを短艇上でも確認していたのであろう。まだ身体を甲板上に横たえているマサに構わず、短艇上から野津航海士の声が聞こえてくる。

『よし！ いいぞ、森二水！ さっき言った通り、まずはカノピーを見て来い！』

『ずおっ！？ は、はい！ 索を伸ばしてください！』

その声に急かされる様にマサは応じ、短艇より胴回りへと伸びているロープの締め具合を一度確認。これから内火艇に対して搜索の足を伸ばすに当たり、胴から短艇へと伸びるロープがある程度の緩さを得ている事を自分で確かめた後、彼は這い上がった内火艇中央の甲板にて、すぐ傍にあった操舵室を瞳に入れる。

天井と四方を隔壁でしっかり囲みつつも大きな窓を前方左右に備えている操舵室は、文字通り内火艇の操縦を行う所で、人が一人入ればスペース的な余裕は皆無になるという狭い場所である。だがその大きな窓、そして狭い空間しか備えていない事が功を奏し、暗闇

の中であつてもマサの視界は操舵室の中が無事となっている事を瞬時に認める事が出来た。

次いですぐさまマサは這うような格好のまま、今度は艇中央より艇後部へと視線を流す。そこには真上から見ると長方形の形を成し、天幕で覆われる形で人の腰の高さまで盛り上がった物体がある。その大きさは内火艇の後ろ半分を占める程もあるが、これは決して荷物などではない。もちろん2年近く明石艦にて勤務してきたマサはそれを知っており、野津航海士より指示された目的の場所だった事もあつて、匍匐前進の要領で傍まで近寄っていく。

つまりこれこそ野津航海士が口にしたカノピーであり、内火艇の上甲板をくり抜くようにして設けられた客室区画である。加えて炎天下や雨天の際には天幕を展開して屋根と隔壁とする為、マサの眼前にこんもりとそびえる天幕の丘陵は、内火艇の外観としては別段妙な光景という訳ではない。それに「内火艇用意」の号令で甲板上を駆け回り、明石艦の上甲板から海面へと降ろしていく作業を日常的に行うのは、当のマサも含めた水兵さん達が行うお仕事である。

だからマサはカノピーを目にするや迷う事無く、操舵室背後にあるカノピーの入り口へと進み、閉じられている入り口の部分の天幕をめくり挙げた。

『おい！ 誰か！ 誰かいなか！』

『うお！ だ、誰だ！？ 重量物の均衡とる為に移動すんって・・！ あれ・・・？』

不意に内火艇側面より這い上がってきた波を頭上から被りつつ、天幕をめくり挙げて叫んだマサ。すると入り口より続く短いラッタルのすぐ傍で椅子に腰掛けていた下士官が、マサの方に目をやって何やら怒号を放ってくる。しかしすぐさまその下士官はマサの顔を見て表情より怒りの色を失い、入れ替わりに見開いた目で狐につままれた様な顔を作りながら、マサに声を返してきた。

『お、お前、第一分隊の森、か・・・！？　な、なんでここに居んだ！？』

どうやらこの下士官はマサの事を知っていると同時に、自分達が乗る内火艇に突如として彼が現れた事に驚いているらしい。次いで彼に続く形で照明の無い真っ暗なカノピーの奥より、供に乗組んでいたのであろう者達が顔を覗かせてくる。

その表情はやはり海上での遭難による絶望、疲労、寒さに蝕まれる苦しみが皆一様に浮かべられており、ここまで大時化の大海原を進んできたマサ達、すなわち救助艇の者達よりも一層色濃い具合となっていた。故に彼等をその呪縛より解き放つべく、すぐにマサは返答してやった。

『オレ達は救助隊です！　艦から出動して今来しました！』

『な、なに！？　きゅ、救助隊・・・！？』

『ほ、ほんとかよ！？　救助艇は！？』

『はい、すぐそこに！』

どれほど待ち望んでいたであろう、「救助」の言葉。それはマサの瞳に映るカノピー内の男達の顔色を、瞬時の内に一変させていく。第一報を指揮官に報告すべく入り口から一旦離れるマサに続き、カノピーからさっきの下士官の他、2名ほどの男達が甲板上へと這い出してくる。そして相も変わらず暗闇と吹雪、強風と波浪が混在する地獄の如き海面上のすぐ近くに、マサの言葉を受けて力強い声を返してくる仲間達の姿を見るのであった。

『指揮官ー！　居ましたー！　カノピー内に数名！』

『よし！　よくやったぞ、森三水！　次は先任の人を探せ！　艇指^{チャ}揮官はいないか！？』

『おお！ こ、航海士！』

『本当に救助隊だ・・・！ お、おい、金石！』

既に時間は救助隊が明石艦を出発してから2時間を越えた頃だが、ようやく遭難した内火艇に辿り着き、なおかつその乗組員と連絡をつけた事は、本日の荒波と寒さが身に染みているその場に居る者達に、幾分の落ち着きと安堵を与えてくれる。

それに伴い引き続いて内火艇の状況を、マサと内火艇乗組みの工部部所属の者達が野津航海士に報告するが、その中でだいぶ遭難の状況が明確になって来た。

野津航海士らが明石艦羅針艦橋で耳にしていた通り、内火艇は小松島飛行場近くの棧橋を離れてしばらくした頃、突然機関が何故か停まってしまったらしく、やはりその時に艇内の発電も止まって電力が回復しなかったらしい。備え付けの軽便無線機は電池によって使用できていたが、運が悪い事にこれもまたしばらく打電を行った頃に電力を失ったとの事である。

次いで推力を失った事で内火艇は本日の大波による動揺をまともに受けてしまい、艇指揮に当たっていた向井機関兵曹長が操舵室の隔壁に顔を酷く打ちつけたのを筆頭に、乗組みの者達の何名かが打撲などの怪我を負う事態となってしまうていた。

『も、申し訳ありません・・・。こ、航海士・・・。』

『おお、向井機曹長。いいぞ、無理に話すな。もう大丈夫だ。』

そんなやり取りが行われているのは、救助隊が乗る短艇の上。カノピーより担がれて出てきた後、最初に横付けした短艇へと数人が

かりで移した向井機曹長と、野津航海士の間に関わされた応答であった。包帯も無い中であらわとなつてゐる向井機曹長の顔は、右目が青く腫れあがつた瞼によつて完全に潰されておゐり、打ちつけた際の原因である波の激しさと、それによる内火艇の動揺具合を如実に物語つてゐる。

また、カノピーとは操舵室を挟んで反対側に位置する内火艇前方の甲板より、ハッチを開けて出てきた兵下士官の乗員達もまた、向井機曹長程では無いにしろ軽度の打撲や切り傷を負つてゐた。

艇後部のカノピーと同じく乗員を収容する区画が実はここにも有つて、カノピーは主に士官や准士官といった階級の高い者用。対して艇前部の船倉に等しい区画は、兵下士官といった階級の低い者達が主に乗組む部分である。

向井機曹長によると内火艇が完全に往き足を止めてしまつた後、幾度も大波を被る事によつて艇が転覆しそうになる事が何度かあつた為に、艇の重量バランスを崩さぬようにカノピー部との行き来をしない様にしてゐたらしい。

『おい！ 寺井！ 一人降ろすぞ！ 腕が痛いっつてゐるから、氣をつけろよ！』

『おう！・・・よし！ いいぞ、森！』

未だ内火艇上で腰縄姿で声を張り上げるマサに短艇上の仲間が応え、肩を貸すようにして降ろすのは、そんな内火艇前部に居た水兵及び軍属の工員達である。工作部よりの出張者という事で内火艇の乗組員は全て機関科、もしくは工作部所属の者ばかりで、艦自体の運用に関わるマサ達とは普段からあまり面識の無い者達ばかりだが、同じ明石艦の軍艦旗の下で日々を過ごす仲間に変わりは無い。マサも含めた救助隊の水兵達は、救助者を乗せて短艇の重量バランスが

随分と変化している事に細心の注意をしつつも、内火艇から続々と降りてくる救助者に肩を貸して短艇へと導いていった。

その一方、そんな救助者と入れ替わりに内火艇へと這い上がっていった一人の機関兵が、救助者もおおよそ短艇へと移乗し終えていた内火艇の甲板へと姿を現す。彼はマサ達と供に、救助隊の一人として短艇に乗ってここまで来た者達の中の一人で、現場にて内火艇の故障した機関を修繕する事を目的に、特別救助短艇員とは別の枠で救助隊に加えられていた男である。

まだまだ大揺れ状態である内火艇の甲板上でおぼつかない足元に苦戦しながら、その機関兵はマサの横まで来ると短艇上の野津航海士に向かって言った。

『くお、お・・・！ し、指揮官！ 機関の修理は手持ちの工具だと無理です！ 艦まで戻らないと！ そ、それに燃料に海水が結構かかってます！ これも艦に戻って交換しないと使えません！』

『よし、解った！ 予想はしてたが仕方が無い！ 森二水と一緒に戻れ！ この状態じゃ内火艇の曳航も無理だから、カッターだけで戻る！』

『わ、解りましたっ・・・！』

機関兵は普段から配備が艦内奥深くであるからか、荒波激しい荒天下の甲板にて長時間行動するのに慣れていないらしく、常に甲板上の何かに捕まって焦りの色合いも甚だしい表情を浮かべている。もちろんその隣に居るマサだって怖いのは同じだが、明石艦乾舷に隣接する機銃座を配置とする彼は波に対しての恐怖はそれ程無く、北国の豪雪地帯にて生まれた事から吹雪に対して臆する事も無い上、寒さにも常人よりは遥かに強い。だからマサはやや震える声で吐息を漏らしている機関兵に声をかけ、自身に先んじてその止まった足を短艇まで進める事を促した。

『佐藤！ そら、行け！ 一緒に行くと索が絡まるからな！ 早く行け！』

『わ、解りましたあ・・・！ う、うお・・・！』

一向に安定しない足場に四苦八苦する中、マサの声を受けた機関兵は声を上げると、内火艇の甲板から僅かに下方にある短艇の上へと思い切って飛び降りる。だが臆した心と疲労に蝕まれる身体が災いしたか、彼の脚は短艇へと着く際に上手く力が入らず、すぐ傍にいた仲間の方へと崩れるようにして倒れてしまう。

『うお！ 佐藤二機水！ 大丈夫か！？』

『お、おい！ 佐藤！』

『い、いって・・・！ す、すみません！ 大丈夫です！』

短艇へ着地した時に放たれた音もあってか、機関兵が倒れた音は酷く鈍い感じが滲んだ物で、短艇上の者達は驚いて彼の周囲に駆け寄っていく。幸いにも怪我は無いようで一安心し、それを内火艇上に最後まで残っていたマサも確認。早々に内火艇を去って帰途へと着きたい心理も手伝い、一度手に息を吹きかけて暖を取ると彼もまた内火艇の甲板を蹴って跳び下りた。

『ぬお！ ……あ！？』

しかしその刹那、マサの足が甲板から離れた直後に、あろう事か彼の足は何かに掴まれる感覚を覚える。同時に甲板を蹴って生んだ身体を宙に浮かべる力が突然に失われ、マサの身体はつんのめった様に前へと倒れ始めた。

な、なんだ！？

瞬時に脳裏でそう叫んだマサ。

前のめりに倒れていく事で見えた彼の視界に、命綱とする腰から伸びたロープがなんと右足の足首に絡まっているのが見えた。

そしてその事に気づいたのと同時に、マサの身体は内火艇と短艇の間に生じていた僅かな隙間を通り抜け、漆黒と極寒のみで充滿する海中へと投げられるのだった。

『ああっ！ 森が落ちたー！！』

『な、なにぃ！？』

『も、森二水ー！』

『うあ・・・！ ま、マサー・・・！』

豪風、吹雪、暗闇、強烈な波浪、低い気温。それらが寄り集まって出来た大自然という名の悪魔の口が、短艇と内火艇の間にある海面上に小さな水柱となって姿を現す。さながら波に飲み込まれた音はその息遣いか、間近で見ていた男達の耳に不気味に響いた。

それに続いて盛り上がった黒い水飛沫が飛び散り、再びそこいら中に在る鋭利な波の壁と区別がつかなくなった海面には、マサが被っていた水兵の軍帽と供にそこに巻かれていたペンネントが、「大日本特務艦明石」の金色の文字を僅かに輝かせて浮かんでいるばかりだった。

第二一六話 「明石艦乗組員の一戦／其の四」

大きくうねる波が海面に落差の激しい溪谷を作り出し、豪風とそれに導かれる猛吹雪が凍てつく空気を尖らせて刃とする。月の灯りも星々の瞬きも一切遮られた空の下、暗闇と戯れるそれは激しさを緩める気配が微塵も無く、海面上を傍若無人に暴れまわっていた。

そしてそんな地獄の海面の下。冷徹のみを抱いて逆巻く潮の流れが死の舞踏を繰り広げる中、内火艇より海中に落ちたマサはそれに翻弄されてもがき苦しんでいる。

く、くそ・・・！ やべー・・・！

激しい潮の流れによって海中を転がされ、目を開けようと開けまいたと視界が得られぬ状況下では、もはや上下左右の感覚は解らない。落ちた瞬間にすぐさま海面の方向だけでも把握しようとは思っていたが、遊泳や水泳訓練をする静かな海中とは余りにも様相が違い過ぎる。おまけに海中での潮の流れは時折鼻からの浸入を試みてきて、その度にマサは咄嗟に口に溜め込んだ空気を僅かずつ鼻から漏らし、海水を押し返すのだが、当然それは水中では非常に貴重となる空気の消費を迫る物である。

このままだとヤバイ！ とにかく海面に浮き上がらねーと・・・！

大きく息を吸い込んだり等の準備なぞ何一つ無い状態で、一桁台の水温である海中に投じられてしまったマサ。落ちてどれだけの時間が経ったのか解らないが、身体中を襲う耐え難い冷たさと息苦しさからすぐに逃れるべく、とにかく四肢を振り回して浮かび上がる考えた。

だがマサの身体は上手く動かない。既に身体が凍てついて動かなくなってしまうのかと彼は一瞬思うも、それに反して振り回す両腕が額に当たったり、左足の靴が右足のふくらはぎに接触するのを、暗闇の中でも触覚として彼は捉えていた。

腕も、脚も動いてる・・・！？　なんでー、あ・・・！！

四肢の自由が利かない事に疑問を浮かべた刹那、マサは自身が海中に落ちる直前に見た光景を思い出し、その理由を瞬時に察した。彼の右足の足首には未だ、命綱として救助艇より彼自身の腰へと繋がれたロープが絡まっているのである。

その事に気付いたマサはすぐさま身体を腰を支点に折り曲げ、同時に振り回していた両腕を右足首へと伸ばす。見えてはいなくても自分の身体の間を頼りに操るマサの手は、そう時間をかけずに右足を捉える事ができた。

ぐうう・・・！　く、苦しい・・・！　も、もう息が・・・！

心身共に緊張が漲る中での我慢は、思った以上に辛い。マサもまた例外ではなく、呼吸が出来ない苦しさが僅か数秒ばかりの間にとんだん強くなってくる。とにかく身体の間を自由を得て浮上する事を急ぎたい一心で、マサは右足の足首へと這わせていった手でそこに絡まったロープを解き始めた。

だがしかし、唯でさえ凍てつく冷たさに文字通り浸かっているマサの指先は、思うとおりに力が込められない上、右足に縛りついたロープは水を吸った為かその固さが尋常ではない。満足な呼吸もできず視界も得られぬ中、触感のみを頼りに操るマサの指は縛りついたロープを解くどころか、足とロープの間に指を割り込ませる事すらも出来なかった。

く、クソ・・・！ し、死ぬ・・・！

遅々として進まぬロープからの解放に焦り、それに伴って一層の苦しさが増すと脳裏を過ぎる、そんな言葉。どんなに派手な喧嘩をしても今まで一度たりとて思った事の無い「死」の一字は、今やマサの身体を完全に飲み込もうとしている。抗おうにも自由にならない身体と無呼吸での苦しみの下ではかなわず、締め付けられている右足首と共にロープに伸ばす指先の感覚が薄くなってきた。

するとやがてマサの意識はとにかく息の苦しさのみが際立ち始め、決してこれまで開くまいとしていた口を途端に大きく開けたいと思えてくる。それは死の淵に際して生じた誘惑にも近く、例えば口を開けたら最後、止め処なく注ぎ込んでくる海水によって溺れてしまう事を解っていたとしても、思考ではなく意識の面でそこに一切の苦痛が無い安楽が存在する事を訴えてくるのだった。

どうせ海面がどこかも解らない・・・。

瞳を大きく見開いたって、月明かりも無い海中では見る事も出来ない・・・。

抗おうとしたって苦しさが増すだけ・・・。

早く・・・、早く楽になりたい・・・。

真っ暗ながらも段々と視界が狭くなり、漆黒の濃さが四方より増していくのをマサは虚ろな意識の中で認める。不思議とそれに伴って呼吸の苦しさも薄れて行き、水を吸った服によってあんなに重かった身体も、今ではやけに軽くなったような気がしたマサは、同時に自身の心より死という文字が持つ恐怖が消えていくのを感じる。

ただそんな中、一箇所だけ海中のマサの安楽を邪魔するのは、彼自身の左手より伝わってくる一際目だった冷たさだった。

なんだよ……。人が楽にしてるときに……。

まるで安眠を邪魔されたかのような気持ちとなり、思わずマサは愚痴めいた言葉で左手よりくる冷たさを憎む。

くそ……。っんだよ……。

まるで濡れた手のまま、家の外に出されたみたー。

もはや目を閉じ呼吸を我慢する事もやめかけていたマサが、真っ暗な意識の中でそう呟いた刹那、彼の額にて一筋の脈が僅かに震え、同時にその身体の節々には耐え難い苦しみが舞い戻り始める。そして脳裏を過ぎった言葉に疑問を投げかけるや、マサは自分の身体の一部が海面を探り当てた事を直感し、失いかけていた自我の意識を完全に取り戻す。

そうだ……。これ、ガキの頃……。

兄貴と一緒に夜中まで遊びまわって、親父に散々怒鳴られて蔵に閉じ込められた時と同じだ……。

あん時、兄貴と一緒に大泣きして、湿った手に冬の蔵の寒さ辛くてまた泣いたあの時と……！

あ！　そ、そうか……。！

脳裏の内での呟きが叫びへと変わった瞬間、呼吸の苦しみが押し掛かる中でマサの閉じられた瞳が開く。そしてその瞳を開いた先に、彼はほんの僅かに白い蛇行する帯状の線が走っている事を見逃さなかった。

同時にマサは両腕を大きく振り回して、そんな帯状の物が見える所へと向かい始める。なぜなら彼にはその帯状の船こそ、海面でぶつかり合う荒波が作った戦の跡、すなわち白波である事を確信した

からだ。

『・・・うぐはあっ！ あふっ・・・！ ゼハア、ゼハア・・・！
ゲエホ・・・！』

彼の極限の中での思考は正しかった。しきりに振り回した腕に続き、マサの上半身は豪風雪と波浪による大宴会場、小松島の海面の一角へと浮き出たのである。海中と変わらぬ暗闇はそのまま、未だに頭上より降り注ぐ波飛沫が大きく開けた彼の口へと入り込んで来るも、当に限界を通り越していた呼吸がようやく確保されたマサは、それに構わずにそこにあった極寒の空気を口いっぱいに取り込む。だが、その吸入量が余りにも急過ぎたのか、それともまた口に入った海水で咽たか、マサの回復した呼吸は乱れに乱れ、もはや悲鳴にも似た息遣いと連続する咳込みによって非常に断続的な物であった。

もっともようやく呼吸を取り戻した事は大きく、ロープが絡まっている事から未だに右足の自由は利かないながらも、マサは両腕を必死に動かして海面上に顔を覗かせる。それによって彼の視界は吹雪が急降下してくる黒い空のみしか見る事は出来ないが、次第にマサは辺りを埋め尽くす波と風の喧騒の中に、聞きなれた仲間達の声が混じっている事に気付いた。

『マサー！！ マサー！！』

『森二水だ！！ おい、艇長！！ 近寄ってくれ！！ 福山二水、救命浮標を投げろ！』

『はい！ 微速で進むぞ！ 寺井、山下、お前達二人でどうぞ權操しろ！
他の奴らは救助索を引け！』

解放されたばかりの呼吸は息苦しさに滲み、我慢に我慢を重ねた体内の酸素は未だに薄いのか、マサの思考の全てをぼんやりと輪郭

が判別しない代物へと変えている。断片的に『仲間、救助索、短艇。』と言葉を並べつつ、マサは僅かに声のする方へと顔を傾け、つい20分ほど前まで自分が乗っていた短艇が舳先を向けて近寄ってくるのを確認した。

一方その頃、時を同じくして彼等救助隊の我が家たる明石艦では、艦尾から艦首、最下層から最上まで至る全の甲板にて起きていた救助者収容の準備も一段落しており、内火艇発見の第一報に続く続報を伊藤特務艦長以下、全ての待機人員が待っている状態となっていた。

もつとも決して乗組員達は暇を潰している訳ではなく、手空きとなった最上甲板配置の者達は猛吹雪の中での見張りへと当てられ、艦内配置の者達は治療所へと続く通路で担架を手にして座り込んだり、烹炊所付近で戦闘応急配食をいつでも開始できるように集まり終えていたり等、各々のやるべき事に即応できる態勢を微塵も崩さずに堅持しているのである。

もちろんそれは艦魂である明石も例外ではない。

もはや既に雪がびっしりと表面を覆い、生地の色が見えない程に真っ白となった外套を被りながら、彼女は艦橋天蓋に設置されている射撃指揮所の辺りで、双眼鏡越しの視線を全周に渡って流していた。

『ひざいい・・・！ さ、寒うい・・・！』

しかし超が付く程に寒がりである明石は、二時間以上も猛吹雪の

中で耐えていた事でその体力が既に限界近い程度となっている。見えも体面も捨てて途中から拭う事をやめた鼻水も真っ赤に染まった鼻の下で氷柱状となり、横殴りの雪がこびり付いたフードももはや明石の頭部に暖を与えてくれる機能を失いつつある。その証拠にフードに隠されている明石の耳は、フードより露出している鼻や頬と同じように赤くなり、まるで引きちぎられそうな痛みまで伴っていた。

『ひうう・・・！ 耳が痛い・・・！』

悲鳴混じりの声でそう言うや、明石はそれまで胸の前で抱えていた双眼鏡から手を離し、首から下げたバンドによって双眼鏡の重みに頭をもたげながらも、フード越しに手を当てて冷気の攻撃に怯む耳を揉み始める。

人一倍寒さに弱い事をちょっと恨みながらも、人知が及ばぬ自然の猛威には例え艦魂である明石だって抗える訳ではない。どうにもならぬ嫌な物に対してただ耐えるのみであり、もはや流す涙も尽きた。

しかしそれでも脳裏に浮かぶ艦内へと戻る選択肢だけは、何が何でも明石は取るまいと今は心に決めている。猛吹雪の直撃を受ける現在の場所で見張りを行うのは非常に苦痛であるが、今日の明石艦のアチコチにはそんな明石と同じように頑張っている乗組員達の姿があるからだ。

『おーい！ そっち側も一応見とけ！ 流されて反対舷からでも来るかも知れねーぞ！』

『くそ、もう雪が・・・！ おい、増淵！ 雪が積もつてると危ないから、これ全部片付けちまおう！』

『は、はい！ 解りました！』

明石と同じように黒い外套に身を包み、まるで蒸気機関車のように白い息を口から巻き上げて、男達は明石艦の最上甲板を駆けていく。ある者は明石と同じく双眼鏡を片手に、震える肩を律しながら荒れ模様の波間に視界を投げ、ある者は僅か1時間程もすると甲板上に薄く積もってしまう雪を甲板掃除用具であるブラシでもって除去し、ある者は時折乾舷を這い上がってくる波に足を取られたりしながらも、手にした物品を離さずにその場を走り去っていく。

各々が各々の役割に沿う形で、寒さにも荒い波にも吹雪にも負けまいと懸命になっていた。

次いでそれは明石の足の下、すなわち羅針艦橋の中にあっても同じようで、そこに居る伊藤特務艦長以下の男達の一際大きな声が、時折猛吹雪と波浪の衝突音で掻き消されたりしながらも明石の耳へと伝わってくる。

『で、……室より！……れ、そう！』

『タテ……！？……ん送か！？』

『探照……、せの信ご……！ 救助で……奴……るぞ！
すぐに管制、を……！』

『も……、しだぞ！ 甲板上の、みは……、厳にし……！』

崩壊した天候下の中で響いてくるそのやりとりは、なんだか感度の悪い無線電話を聞いているようである。それに明石の耳は目深に被った外套のフードに包まれ、音を拾う方向を極度に制限している状態でもあるから、その後にくどくどとした足も勘定すると、何やら羅針艦橋にて新たな事態に直面したらしい事が解る程度の内容でしかない。

ましてや少し前に厠へと行く為に艦内へと降りた所で偶然耳にしていた、救助艇よりの無線連絡が今しがたの男達のやりとりなのであれば、明石にとっては物理的に協力できる事は皆無である。

艦の命とは言え彼女がいくら気張った所で、無線の感度が良くなったり、明石の分身に向かって短艇を誘導できる等の、都合の良い奇跡が起こせる訳ではないからだ。

その事を意識すると艦魂という身の上である自分の無能ぶりが恨めしくもあったが、それでも尚、荒天より生まれる雑音の中で救助艇の単語と無線電信の用語らしき物が聞き取れた事に、明石はほんの僅かにだが安堵を覚える事ができた。

『うぎいい・・・！　で、でも無事なんだ、ね・・・！　も、もう少しで、きっと帰ってこれるんだよね・・・！』

誰に語る訳でもない彼女の言葉だが、ほんの薄く見え始めた希望の光と、寒さという苦痛に必死に抗うその心が、明石の声に弱々しいながらもそれなりの強さを滲ませる。口から漏れるや、横殴りの雪に捕捉されて真横へと流れていく白い自分の吐息。それが猛吹雪の脅威をやたらと強調させるように感じたのも、最早さっきまでの話で、首から垂れた双眼鏡を手にして強く握りながら明石は再び見張りへと精を出す。

みんな頑張ってるんだ！　私も頑張らないと！

そう胸の中で何度も繰り返し叫びながら、明石は暗闇と吹雪の向こうに見え隠れする荒い波間を再び注視しはじめた。

しかし双眼鏡を両目に添えて数秒もしない内、明石はすぐに双眼鏡を下ろしてしまう。

『う・・・？　あれ・・・？』

呆けた表情でそう呟き、僅かに首を捻っている明石の様子は、そこにある何かに変化を認めたからに他ならない。だが彼女が変化を認めたのは、ほんの一瞬だけ双眼鏡越しに得た光景では無く、その対象は彼女自身の記憶と思考の中にあるのであった。

『電信・・・？ タテ・・・？ そうえばさつき、探照灯って言ううとしてたような・・・。』

彼女が思い出しているのは、ついさつき足元の羅針艦橋より響いてきた伊藤特務艦長らによるやりとり。野晒しの艦橋天蓋にいる明石には、強風と波浪の轟音によって途切れがちな声ではあったが、なんとなくその中でも聞き取れた単語を列挙してみるや、彼女にはちよつとした心当たりが記憶の中より検索される。

それはこれまで明石が第二艦隊と一緒に行動してくる中で、艦隊訓練の支援で時折、明石の分身たる明石艦が仮想戦艦や仮想空母として振舞った際の出来事だった。

今に始まった話ではないが、明石がこれまで行動を供にしてきた第二艦隊は、基本的に快速中型の巡洋艦を主に構成されている艦隊であり、その特徴的な艦隊戦術として夜間での隠密運動や砲雷撃戦の訓練を頻繁に実施してきた。その中で訓練支援に当たる明石艦はもっぱら標的役を務めてきたのだが、その際に明石艦では、他の第二艦隊各艦では滅多に受け取らないとある無電信号を度々艦隊旗艦より受信しており、艦の命である明石は仲間達とは違って自分だけに頻繁に来る事から記憶に強く残っていた。

そしてその信号こそが、先ほどから思考の中で引っかかっている断片的な単語と接点を設けていたのだった。

『探照灯・・・。タテ・・・。あああ・・・！ そ、そうか！ タテ連送だあっ！』

一度や二度程度の頻度で耳にしたものではなかったその言葉は、時を置かずして明石の思考の中で明確な形となる。それは「タテ」の和文無線符号を繰り返し放つ無電信号であり、救助艇から第一報である「ウ連送」と意味は違えども、信号の意味に関連付けした在り方は同じなのである。

すなわち対象物の頭文字を連送して対象発見の信号とする物に対し、タテ連送とは「タンショウトウ、テラセ。」の意味であり、明石はそれを第二艦隊における艦隊訓練にて既に知っていたのだ。

『そ、そか！ 真っ暗でも吹雪でも、探照灯なら光で居場所を教えられるんだ！』

ちょうど明石がいる羅針艦橋天蓋にて舳先を正面として捉えたなら、明石艦の探照灯はそこから回れ右をして大きく見上げた所にある。場所になると艦橋背後に聳えた前部マストの上部辺りで、小さく簡単な足場で作られた台座状の所に直径90センチメートルの探照灯1基が据え付けられていた。

明石はすぐさま頭上のマストを見上げ、まさに救助隊にとっての命の灯火となるそんな探照灯の様子を窺ってみる。すると、目に入り込んでくる雪を我慢しながら薄っすらと開く彼女の瞳には、予想通り探照灯の稼働の準備の為に探照灯台にて覆いを外す2名の兵員達の姿が映った。

彼等は明石と同様に猛吹雪と豪風に顔を歪め、しかもまた海上10メートル以上もある小さな足場での作業に悪戦苦闘しているようだったが、やがて探照灯を包んでいた覆いを取り外すや、すぐにマストを降りていく。もっともこれはあまりの作業環境に慄いて逃げ出したのではないし、彼等にしてもこれより探照灯を動かす為だからこそ、その場を離れていたのだった。

それと同時に明石は、まるで吹雪の中に溶け込むようにして自分の身体を白い光で包み、まだマストのステップを降りている2名の兵員達と入れ替わるように探照灯台へと転移する。もちろん明石は探照灯の動作とそれに伴う兵員さん達の退いていく理由は知っており、探照灯台の手すりから見下ろす兵員達に対して『臆病者ー!!』等と叫ぶつもりは微塵も無い。

実は明石艦の探照灯は、その操作にあたって機銃や艦砲のようにすぐ傍で人員が就く必要が無い代物で、この探照灯は艦橋構造物内に別に設けられている探照灯管制器にて遠隔操作される物なのである。巡洋艦や戦艦にても同様の操作方式が主流であるが、特務艦艇にあっても珍しく装備されているのは、言うまでも無く明石艦が帝国海軍最新鋭艦艇にして、その運用に各種工作とは別に救難作業に従事する事が予定されているからである。同じ世代の特務艦としてかしの樫野艦、そつや宗谷艦といった艦があらうとも、それらに対して探照灯管制器が装備されていないのはその証明でもあった。

『ひい、ひい・・・！ あ、危ないけど、見晴らしが良いもんね・・・！ それにこの雪だもん・・・！ 探照灯の表面に雪がついちやったら、私が払ってあげなくちゃ・・・！』

そして、兵員達が残らない事は危険からの退避だと明石は知りつつ、本日の非常に機嫌が悪いお天気による影響を彼女は考慮し、敢えて疲労を伴う転移を用いても探照灯台へと来たのであった。

次いで明石が小さく深呼吸してやや乱れていた呼吸を取り戻そうとしていると、明石の頭以上に高さもある探照灯から低い唸り声のような駆動音が鳴り始める。同時に直流電源が艦内より供給された為か、探照灯の中から一瞬だけバチバチと火花が散るような音が聞こえてきたが、明石が驚く前にその音は消え、探照灯表面にはゆっ

くりと輝きが募り出して来た。

『いよっし・・・！ う、動いたあ！』

探照灯の鏡面を覗き込んで随分と久しぶりの笑みを見せた明石。鏡面の奥で急速に増していく輝きは留まる所を知らず、動き出して20秒も経っていないのに、既に明石は鏡面を直視する事もできないくらいに白く強烈な閃光を得ていた。

だが明石の視界は探照灯から顔を背けると同時に、暗闇と吹雪が織り成す地獄の波間に一条の太い光線が突き刺さっているのを確認。まさに救助艇へと差し伸べられた救いの手のように、光線は真っ直ぐに闇夜の小松島の海へと伸びていた。

一方、明石艦艦橋構造物の中にある管制器の側でも、闇夜を照らし出す探照灯の輝きを認め、さっそく管制器の望遠鏡を配置の兵員が覗き込んで操作に当たり始める。

最先端科学技術の結晶たる海軍艦艇の装備品は大した物で、管制器と大層な名称であっても、その外観は俯仰角等の調整に使うハンドルが数個ほど付いて、単装機銃のような台座上に備え付けられた双眼望遠鏡、と要約しても差し支えは無い。専門的な操作術を身に着けなければ動かせないのは勿論だが、有り体に言ってしまうえば双眼望遠鏡を越しに認める方向に、離れた位置にある探照灯が管制器からの電気信号によって追従してくれるという優れ物である。最近では機銃座にもこの構造が取り入れられており、たった一人の兵員が双眼鏡越しに目標を捉えるだけで自動的に付随の兵器類が指向してくれるのは、まさに後年の自動化、いわゆるオートメーションの先祖の一つに当たる物でもあった。

故に操作に当たる兵員は非常に少なく、探照灯操作を指揮する下士官の姿を入れても5名を下回る。至ってこじんまりとした部署だ。しかしこの僅かな人数しかない静かな部署にもまた、下士官からの指示が発せられて少し経った頃に緊張が走る。その発端は管制器の座席について操作に当たっている、水兵さんの言葉であった。

『あ、あれ・・・！？　し、指揮官！　探照灯の追従が止まってます・・・！』

『なに！？　おい、一度戻してみろ！　どうだ！？』

どうやら予期していた動作とまらない事態に陥っているらしく、管制器操作の水兵の背後に居た指揮官は詰め寄り、部下の肩に手を置いて正常な動作の回復を行うよう指示する。だが、水兵が覗く双眼鏡遠鏡の向こうは全く光量の足りない波間が見えるだけであった。もっとも探照灯の発光自体は正常なのか、高さ1メートル程にも至る波頭の輪郭はぼんやりとだが浮かび上がっており、探照灯自体の旋回機構に何か不具合が発生している事に彼等は気づいた。

『おい、探照灯はどうなってる！？　早く右舷に指向せい！』

その内に羅針艦橋へと繋がっている伝声管からは幹部の声も響き、下士官はその状況を折り返して羅針艦橋に報告。するとすぐさま砲術科の兵員2名が艦橋から飛び出してきて、探照灯台が浮かぶ前部マストの根元へと駆けつけて来た。

『クソ！　さっき覆いを外した時、あらかた氷は除去したんだが・・・！』

『この天気ですまた付着したんでしょうか・・・！？』
『ああ、そうに違いねえ！　おい！　二回目だが、落ちねえように』

しっかり昇るんだぞ!』

明石も目にしていた探照灯の覆い外しに従事していた彼等は、手袋や外套の裾を引っ張って再びのマスト登頂に意気込みを改める。大荒れの天気と艦の動揺が一際目立つ中、命綱も無しにステップに登るのだから、その緊張と試される度胸の度合いは決して馬鹿にならない。見上げればマスト上の探照灯台からは、直径90センチの一条の光線が艦首やや右舷よりの海面上空へと突き刺さっているが、やはりその光線の指向方位は全く動いていない。

次いでその原因が、探照灯駆動部に相当の氷が付着してしまっている為だと二人は推定し、一刻も早くこの事態を打開すべく早速ストップへと手足を掛ける。頭上の太い光線は、この暗闇の波間で奮闘する同じ明石艦乗組みの仲間達を探し出すのと同時に、彼等に帰るべき場所の在り処を教えてやれる大事な大事な標識。もしこの探照灯の輝きを救助隊に届けてやれなかったなら、同じ釜の飯を食い、同じ軍艦旗の下で寝食を共にしてきた同僚の命が奪われてしまうのだ。

そんな事から使命感を漲らせ、入れ違いに臆する心を完全に捨てた二人は、ステップに手を掛けるや一瞬の物怖じも無く昇り始める。だが意外にもその足取りは、僅か3つか4つのステップを昇った所で止まった。

『うあ・・・!? な、なんか今落ちませんでした!?』

『お、お前も見えたか!? 俺も顔になんか当たったんだ!』

まだ10個ほどのステップも昇っていない内に何か異変を捉え、二人の兵員は昇降の危険を感じて一度甲板へと降りた。すると彼等が足を下ろしたマストの付け根部分には、大きい物では拳くらいいなる氷の塊が散乱しており、昇っている最中に各々の視界の端を

通り過ぎていった物体が、確かに有った事を確認する。

『な、なんだ？ 空中線の氷が落ちてるのか？』

『で、でも変ですよ！ ここだけ落ちた氷が集まってるなんて・・・、うあっ！ まだだ・・・！』

話している最中にも落ちてくる氷塊に驚き、その場に留まると危険である事から、兵員達はマストから僅かに距離をとる。一体何故に氷塊が次々に落ちてくるのか解らず、二人は行く予定だった筈のマスト上の探照灯台を見上げてみた。

案の定、吹雪で見え隠れするそこには何も無く、艦首方向へと微動だにせず放たれている光線があるだけであるが、彼等の目には探照灯台にて光線から僅かに放射される輝きによって浮かび上がる、もう一つの物体は見えていなかった。

そしてその物体こそ、彼等の頭上に意図せず氷塊を散らしている者の姿である。

もちろんそれは先程、彼等と入れ替わりに探照灯台へとやってきていた明石であり、彼女は奇妙な駆動音を発してその基部よりガリという摩擦音も聞こえてくる探照灯の前で跪き、ハンマーを握った手を幾度も眼前に振り下ろしていた。

『くぬ・・・！ この、このお・・・！』

奇妙な音を発して動きが止まった探照灯は、まったく探照灯の操作や構造に知識が及んでいない明石から見ても、明らかに不調模様。すぐにその原因を旋回基部へと付着した氷にあると彼女は確認し、立っているのも辛く感じる程に体力が消耗しているにも関わらず、艦内工作部へと転移してハンマーを持ち出してきたのだ。

『ういっち・・・！　こんのお・・・！』

何度も何度も掛け声を放って振る明石のハンマーは、言うまでも無く探照灯基部に付いた氷へと叩きつけられている。決して力持ちではない明石は乗組員の男達から見ればかなり非力であるも、ハンマーでの殴打をもってすれば氷の粉砕など容易い。ただ、短い時間で3度も転移した故に息も絶え絶えの明石には、再び極寒と猛吹雪の中で耐えながら行わねばならない氷砕きは、疲労を通り越した苦痛に塗れての作業となっていた。

だがしかし、明石の苦労は決して無駄などではなく、氷砕きを初めて5分程もするや、それまで奇妙な駆動音を上げて止まっていた探照灯が旋回をし始めたのだった。

『う！？　おお、やった！　今度こそ動いたあ・・・！』

ゆっくりとだが動き出した探照灯をしかめた表情で認め、直径90センチの光線が右方向に闇夜を薙いで行く光景に、嬉々とした声を上げる。

同時にそんな明石のいる探照灯台の下でもまた、光線が旋回していく様子を確認した2名の兵員が、明石と同じような声を漏らしていた。

『ああ！　動きましたよ、探照灯！　ほらあ！』

『おお！　・・・そうか！　きっと探照灯が基部の氷で止まっていたんだ！　たぶん探照灯の旋回力で氷を捻じ切ったんだ！』

『落ちてきた氷はそれですか・・・！　あ、取りあえず砲術長に報告してきます！』

『うん、よし行こう！』

決して探照灯の動作が回復した原因を見た訳ではないが、停止していた探照灯が再び動き出した事だけは、見上げた艦上の光線によって察する事ができる。すぐに二人は艦橋へと戻っていき、探照灯が再び動いた事を上官へと報告。次いで探照灯の管制器にてもようやく探照灯本体が追隨し始めた事を確認し、救助艇へ帰る方位を知らせる光の命綱が、文字通り明石による人知れずの頑張りによって機能し始めたのだった。

そして一時間後、明石艦から照射された探照灯の明かりに導かれ、決死隊となって波間を駆けていた救助艇は、明石艦からも視認できるくらいの距離まで接近する事に成功。見張り員からの報告を受けた伊藤特務艦長らも甲板へと飛び出し、まだ救助艇が乾舷から100メートル程も離れているにも関わらず、端艇揚収の陣頭指揮を執り始めた。

『右舷の一番カッターの所まで誘導しろ！ 縄梯子と舷側の1トンダビッドも使うんだ！』

『おい、担架も用意しておけ！ カッターごと引き上げるのはこの天候じゃ無理だ！ 先に人員を上げるぞ！ 急げー！』

間違いなく今日一番の喧騒が明石艦甲板上に渦を巻き、作業の為にと甲板上のあちこちに設けられる照明器具が、それまで真っ暗であった上甲板を照らし出していく。吹雪と荒波による天候は未だ衰えていないが、待ちに待った救助艇の到着は乗組員達の活気を漲ら

せるのには十分である。

見ればヨタヨタと櫂を操って近づいてくる救助艇は、出発時には明石艦右舷から真横に離れていったのが、今は明石艦艦尾方向から接近してくる有様。指揮官たる野津航海士も航路計算を必死に頑張っ
て行ったのだが、相当に潮と風で流されいた事は明白であり、探照灯による方位誘導の効果があつたればこそその帰還であつた。

やがて救助艇は明石艦右舷、艦橋付近の乾舷真下へと横付けし、舷側の手すりより身を乗り出した航海長との間での応答が行われる。

『航海士ー！　よくやったぞ！　そっちは大丈夫かー！？』

『ハア、ハア・・・！　なんとか！　内火艇は全員救助しました！　ただちよつと体調が崩してる奴が・・・！』

強風、波浪、豪雪の下での指揮は、若手の士官である野津航海士にあつては相当に堪えたのか、航海長に返す彼の声は疲労の色合いがとても濃い。

その最中、探照灯台よりマストのステップをビクビクしながら降りてきた明石も、周りに居る多くの乗組員と一緒に見下ろしてその様子を目にする。冷たい海水を頭から被って体温を失い、長時間の櫓漕で体力を消耗した救助艇の者達は、顔面蒼白にして口から漏らす白い息も見ることから弱々しかった。

その上で体調不良者が出たとのやりとりに伴って、一番最初に明石艦甲板上にデリックで吊り上げられた人員の顔に、他の乗組員と同様に明石は仰天してしまう。なぜならその人物は、明石艦で最も元気にしてやんちゃな乗組員と、艦内の誰もが認めていた男だったからだ。

『うあ！　こらたまげた、森二水だぞ！』

『おお、マサー！　だ、大丈夫か！？』

『おい、さっさと毛布持って来い！　現場で海に落ちらしい！　身体暖めながら早く治療所につれてけ！』

『わ、わ・・・！　マ、マサ君・・・！』

なんとデリックに吊るされた担架で甲板上に運ばれてきたのは、明石もよく知るマサ。未だ続いている航海長と航海士によるやりとりによれば、救助作業中に海中に落ちて溺れる寸前だったらしく、大量に海水を飲んだ上に身体が凍えて意識が朦朧としている状態なのだと言う。常日頃は銀バイの常習犯として甲板上を逃げ回るその姿が印象強い彼だが、今この瞬間はまさに担ぎ込まれる形で甲板上を運ばれていき、喧嘩を日常茶飯事とする元気な所は何処にも見る事ができない。

明石もその姿にいても立ってもいられず、担架に乗せられて運ばれていくマサの傍まで走り寄って、返されないと解ってはいながらも声を掛ける。

『マサ君・・・！　マサ君・・・！』

『ううう・・・。うう・・・。』

呻き声を漏らして苦痛に歪んだ表情を浮かべているマサ。

目の前を通り過ぎていく間際に見たその顔が実の兄弟という事もあった、明石の中ではどうしてもかつての相方の物と重なってしまう。聞けば呉鎮守府籍の水兵さんでは珍しい北国出身者であった手前、救助現場で他の追隨を許さぬほどに奮闘した末の海中転落となり、無事に引き上げて貰えども低体温症の症状が見て取れるその容態は、詳しく診断しないと断言できないが決して樂觀できる物ではない。それは曲がりなりにも軍医さんとしてお勉強に励んでいる明石だからこそ、すぐに解った。

そしてマサに続き、明石の眼前を救助艇から引き上げられてきた者達が列となって運ばれていくが、地獄の如き海で波を被りながら奮闘した代償は彼以外にもやはり現れていた。

自分の足のみで甲板を歩ける人員はほぼ皆無の状態で、高熱を出して足取りがおぼつかない下士官も居れば、マサと同じく櫂を操っていた人員の中には手の一部の皮が破けてしまっている者もあり、果ては救助の指揮に終始当たり、指揮官の対面を重んじて一番最後に救助艇より引き上げられた野津航海士にあっても、出発時の元気な様子は失われていた。

『こ、航海長……。と、特務艦長……。人員のみの救助、です……。う、内火艇は投錨した後、放棄しま、た……。ううう……。！！』

『おお！ 航海士！！ しっかりしろ！』

『野津！？ うあ、すごい熱だ……。！ おい、野津も一緒に治療所だ！ 早くしろ！』

甲板に上がるやすぐに上司へと報告をしようとした刹那、若い心に鞭打ってこれまで指揮を執ってきた疲れが津波の様に押し寄せ、野津航海士は甲板上に膝から崩れ落ちた。伊藤特務艦長と航海長は大慌てで彼を抱き起こし、担架を催促して他の者達と一緒に治療所へと運ぶよう指示するのだった。

おかげで甲板上は一時、傷病者がそこかしこに点在する様相となり、明石の目にはまさに戦場の光景として焼きつく。例えば実弾の飛び交わない人命救助の場と言えども、生死という命の究極的な分かれ道がすぐそこにある状態だった。むしろ艦魂社会での軍医さんと

いう立場を頂く明石にとっては、眼前の光景がより戦場としての現実性を増した物であるような感覚さえ覚える。

命を救うには、命を掛けて戦わねばならない。

やや呆然としながら甲板上で立ち尽くし、ふと胸の内に湧いたそんな言葉を明石は意識の中で呟くが、その刹那、彼女はずっと以前に尊敬する師匠より掛けて貰った、とある言葉を思い出した。

『艦魂も人間も無く、生きるという事はこの世との戦いなの。私たちは生きる為に人と戦い、海と戦い、時代と戦い、この世という存在から生きる為の糧を奪うしかない。それはふいに水面に浮いている事も無ければ、気まぐれに空から降ってくる事だって無い。戦いに勝って奪う以外、方法は無いのよ。』

もう既に1年近くも昔。朝日の教えを受けるようになった頃に、お師匠様手製の赤十字の腕章と供に貰った一つの考え方。たおやかで麗しく、非常に高貴な朝日あさひの人柄から見れば、ちょっと肌に合わないような戦いに絡めたその台詞だが、今しがたまで目にしていた乗組員の男達と、明石自身による本日の奮闘を端的に表しているかの様であった。

マサや野津航海士を始めとして、壮絶な悪天候下にて荒波を突破してみせた救助艇。

行動と連絡が不能な中でも、助けが来るまでなんとか耐え忍んだ内火艇の乗員。

波に足を捕られながらも、明石艦最上甲板での作業に懸命になった乗組員。

部下の命まで含んだ全ての判断を極限の状態での確に行った、伊藤特務艦長ら幹部の人々。

そして大の苦手である寒空の中、鼻水すらも凍る極寒に挫けそうになりながらも、見張りと探照灯の砕氷に自らの手で当たった明石。

自分も含めてこれらは全て、ただ事の成り行きを座して見守り、偶然に転がり込んだ幸運の上で成り立った姿などではない。明石も全ての乗組員達も皆、各々が各々の戦線で全力で戦ったのである。

甲板上で明石が見る光景は、搬送されていくマサも含めてその戦跡であり、同時にまごう事無き本日の明石艦の一戦に対する勝敗判定でもあった。無論、人的損害を出さぬように皆が頑張った末に、死者や行方不明者をついに一人も出さなかった本日の一戦は、誰がなんと言おうと明石の、否、明石艦の勝利であった。

その翌朝。

強風がようやく無くなった小松島沖合は、銀色の空より雪が静かに舞い降りるだけのなんとも静かな天気となっていた。おかげで色彩の貧相なモノトーンの海は相変わらずであったが、波は極めて静かで明石艦の動揺も殆ど無い。

そして明石艦を含め、辺りは非常に静かであった。

なにせ昨夜の大騒ぎは深夜まで続き、救助艇の引き上げやら救助者の看病やらで艦内はどこもかしこも大忙しだった。特に治療所では軍医長自らも診断に当たり、その合間にすっかりずぶ濡れになった服を取り替えたり、食欲がある者には食事を運んだり、動けない

傷病者を特設の寝台へと運んだり、やる事が非常に多い。その上で伊藤特務艦長らは本日の一件を事後経過も含めて統括せねばならないので、救助が終わったからと言って寝る事ができたのは艦内では誰一人としていなかった。

故に本日の明石艦は朝から当直士官を立てて、配置に就いている乗組みの兵員も普段から見ると数がとても少ない。もちろん大半は遅くなった睡眠の真っ最中である。

しかしこれでも幸いな事に、昨夜の内に担ぎ込まれた救助艇の乗員達には、その容態が全て軽度の低体温症であるとの診断が下されており、艦を降りて陸地に有る海軍病院へと搬送する必要を有する者は誰も居なかった。一番最初に担ぎ込まれたマサや、特務艦長らの眼前で倒れた野津航海士を含め、とりあえずはしばらく安静にすれば回復するという事である。

不幸中の幸いであったが、しかしそんな容態となったのは何も人間だけではなかった。

『うゝん……。うゝん……。く、苦しい……。』

明石艦艦内の一角にある部屋より漏れてくるその声は、高熱に悩まされて布団に包まった明石の物。鼻や頬が真っ赤に染まり、虚ろな目で天井へと視界を投げる彼女は、どうやら昨夜の極寒での奮闘で身体の調子を崩したらしい。その口からマストのように生やした体温計は、赤い線が40の目盛りの所まで来ている。

『うゝん……。さ、寒いのは嫌だあ……。』

蒼白となった顔で悶える中、寝言の様にして呻き声を上げる明石。昨夜の頑張りの代償が自分にも適用されたようで、人間と違って丈

夫な筈の艦魂の身体が今日は完全に言う事を聞かない。廁に行くのすらも、夢遊病者が徘徊するような歩き方での移動となっていた。

名誉の戦傷。

昨夜の明石艦の一戦を勘定するとそう言えるのかも知れないが、如何せん高熱と倦怠感で苦しめられる中での彼女の意識は、そんな言葉を過ぎらせた所で気分を高揚させてなぞくれない。

明石は一日中そんな状態で布団に横になるしかなく、命を掛けた一戦とは如何に壮絶である物かを身をもって知った。

さすがにあの日露戦役を、主力艦として戦い抜いたお師匠様の言葉。朝日が言わんとしていた戦とは、実に壮絶にして容赦の無く、そしてまた例え勝利を収めても辛い物であった。

こうして小松島の一角で生起した明石艦の一戦は、乗組員の人間達にあっても艦魂にあっても、多くの教訓と貴重な経験、そして大きな爪痕を残して終わったのだった。

生きるという戦は実に厳しい戦いであった。

第二一七話 「北洋日誌」 (前書き)

色々と調べるのに半端無く時間が取られてしまいました・・・。
なんたる鬼門だ、この海は！！

第一一七話 「北洋日誌」

昭和16年2月1日。

北海道の更に北に位置する、千島列島得撫島ウトウシマの北西側沖合い。

一般にオホーツク海と呼ばれるこの海は、寒冷な気候とその僕たしもべる荒波が集う極限の海である。一応は函館発でカムチャツカ半島へと向かう定期航路の通る海域ではあるも、冬も夏も一貫して寒さしか存在しないこの海は、大小の貨客船による往来で賑わうような場所ではなかった。

しかしそんな寂しい辺境の波間を、突如として白波を立てた鉄の舳先が切り裂いていく。高々と舳先に蹴散らされた波飛沫は、艦首甲板へと舞い落ちるや滴る前には既に氷結してしまい、その場を駆けるねずみ色の船の表面は水の白い色が半分程も埋めている。加えて氷の付着は船舶にとっては重心バランスを崩す要因となる厄介な物で、波間を高速で走るねずみ色の艦は激しい動揺を抜きにしても、やや最上甲板が前のめりに傾いている状態であった。

そしてそんなねずみ色の艦からは、傾いた状態の艦体とは裏腹に、なんとも元気な女性の怒鳴り声が響く。

『待てー、コノヤロー!!』

ウェルデツキより一段高くなっている艦首甲板にてそう言い放ったのは、黒い帝国海軍の外套に身を包んだ小柄な女性。時折艦首から剥げ落ちて顔面の横を通り過ぎていく氷の欠片や、波を蹴散らす事によって生まれる轟音も、彼女にあっては至って気にはなっていないらしい。吊り上げた眉の下、鋭い瞳を艦首やや右舷へと投げ、時を置かずに再びその猛々しい声を荒げる。

『ロスケめー！！ 勝手にひとんちの魚獲りやがって！！ 返せ、バカヤロー！！』

大変なご立腹で叫ぶ彼女。

そのずっと背後にある艦尾にはバタバタと勇壮に翻る軍艦旗があり、この艦が誉れ高い大日本帝国海軍の艦である事を示している。同時にその艦首右舷の方向にて疾走するロシア語の表記が船尾に書かれた漁船もまた、帝国海軍艦艇による追尾を受けているこの状況により、なにやら領海内で悪さをしたソ連船籍の漁船である事が示されていた。

『この信号旗が見えねーのか、くそつたれ！！ これでもくらえー！！』

そう叫んで足元に集めてあった石を投げる際、外套のフードが外れて女性の顔がオホーツクの波間にあらわとなる。もちろん帝国海軍艦艇に女性の兵員が存在する筈も無く、20代後半の大人の顔つきを覗かせたのは言うまでも無く艦の命たる者。そしてその顔は、^{あかし}明石が初めての患者さんを得た際に知己を得た友人、^{なみかぜ}波風^{しまかせ}の物であった。

波風は帝国海軍に存在する数多い駆逐隊の中、この20数年近い間トップナンバーを頂く殊勲の部隊、第一駆逐隊の所属艦である波風艦の艦魂であり、長く北方海域での漁業権益保護に当たってきた大ベテラン。その分身は現有の戦艦と同等に旧式であるが、一族に当たる同型艦の中には帝国海軍最速艦艇として名高い島風艦^{しまかせ}もいたりして、旧式ながらも決して性能が悪い艦艇ではない。艦艇類別上でも未だに彼女達は一等駆逐艦として在籍しており、強力な武装と快速性を生かした北方海域での活躍は、海軍を問わず民間であつても非常に有名である。

本日もまた自身の老骨ぶりを忘れて海上を邁進し、マスト上に掲げた信号旗による国際信号を無視して逃走している、眼前のソ連船籍の漁船を追尾しているのだ。

世界的にも有数の好漁場である北方海域独特の任務であり、特に国境の殆どを海上で接しているソ連に船籍を置く船とは、今日のようには鬼ごっこ状態となるのは日常茶飯事。ほぼ毎日、領海内に入っただけでモメている有様であった。

ただ、乗組みの人間達も含めて日本側はこれまでのように派手な行動はせず、追い駆けまわして領海外へと放り出す腹積もりである。故に現在の様に停船命令に従わない中であっても発砲するつもりは微塵も無く、波風艦艦上に装備されたいくつかの単装砲塔には覆いも掛けられたままだ。

もっとも先ほどの波風の怒号が証明しているとおり、彼女を含めた帝国海軍艦艇の命である艦魂達にとっては、対領海侵犯船舶に対する姿勢が完全に喧嘩の様相となっていた。なにせいくら警告して追い出しても、しばらくしてから再び領海内へと現れては違法に操業する船舶が昔から後を絶たず、その度にこうして極寒の海を走り回らねばならない事に、艦の命である彼女達はもうウンザリしているのである。いくら国際紛争へと拡大するのを憂慮した対処が求められるとは言え、乗組員の人間達にとっても大半が同じ嫌気がさしているという認識であり、言わば波風の怒りっぷりは乗組員達の素直な心が具現化したような代物であった。

それに加えて生来が血の多い性格の波風は、寄港先で漁船の艦魂達に頼んでは綱にかかった石や流木なんかを普段から集め、領海侵犯を繰り返す船舶に対して自らの手で行う攻撃の手段として用いている。今日もまた自身の分身がソ連船籍の漁船の真横まで接近するや否や、用意しておいた石を思いっきり漁船めがけて投げつけてやった。

『でえーい！！　くたばれ、白熊めー！』

『П о ш е л н а х у й , д о о б е з я н ы !』

波風が投げた石が漁船の甲板へと落ちると同時に、漁船からはロシア語による女性の叫び声上がり、同時に今度は漁船の側からもバケツや鉄材なんか投げ返されてくる。布製の被り物の下から美しい赤毛を頬に垂らし、波風とは違って高い鼻と奥まった目を持つその女性は、間違いなく波風艦に追われているソ連船籍の漁船の艦魂。相当に肝が据わっているのか、帝国海軍艦艇の証である軍艦旗や、魚雷までも装備した波風艦の立派な駆逐艦としての艦影にも臆する様子は無く、傍から見ても一目瞭然な反抗的な姿勢で波風艦に怒号と物を投げ返していた。

『やったな、コノヤロー！　死ねえー！』

『У й д и , д у р а к ! Н е с м е р т ь !』

荒波洗う漁船と波風艦のデッキの上には、轟く怒号と飛び来る多様な投擲物。大人しく帰って頂こうという駆逐艦長らの思いなぞ、波風にとってはもはや糞食らえ。対してソ連船籍の漁船も譲らず、銃砲を用いない艦魂達による射撃戦がその後もしばらくオホーツクの凍てつく波間にて繰り広げられた。

それは北方海域独特の任務である漁業権益保護の、まさに最前線の瞬間。地球上の何処においても存在しつつ、同種の懸案は諍いを孕む側面が多分に在るといふ厄介な代物である。その理由は諍いの第一の根拠となる領海という名の区分けが、現場たる海上では一切見えず、地図の上でしか目にする事が出来ない物だからかも知れな

い。

何か雲を掴むかのように現実味が欠ける中でのこうした活動が、波風を含めた帝国海軍第一駆逐隊の励むお役目である。

今日も今日とてその役目を全うし、しばらくした頃には領海侵犯船を領海外へと見事に追いつめてみせた波風艦であるが、仲間の待つ幌筵島ほろむしろへの帰途に着いたにも関わらず、その表情は本日の天気のように曇り模様。ありったけの石をぶん投げてやった故に疲労も溜まっているのと同時に、その帰る先にもう一つの憂いが控えている事を彼女は知っているからだ。

『つたくよお……。本当なら撃沈してやりてートコなんだけど、こっちの漁船連中もやってっからなあ……。あゝあ。今頃は、野風かぜあたりも困ってるだろうなあ。よりによって相手があの艦魂ひとだしなあ……。』

先程までソ連船籍の漁船に向けていたご立腹の表情も消えうせ、波風は頭を抱えながらそう呟いて眉をしかめる。やがて大きな溜息を吐いて波風はその場に座り込み、艦首の向こうに広がる自身の心の様に澄み渡らない空模様を、しばしばんやりと眺め続けるのだった。

そしてそんな波風の視線の果てに、まさに彼女がこれから帰ろうとしている地、幌筵島があった。

千島列島北端部に位置するこの幌筵島は、天気によってはカムチャツカ半島も望める程に国境に近い所にありつつ、周辺の海域では

最も大きな島である。面白い事に島の形が日本列島の本土部分に似ていて、すぐ北にある帝国最北端の領土、占守島しむしうを北海道と例えれば、まさに超ミニサイズの日本列島にも見えなくもない。しかも南北に伸びた島の中央には縦に走る形で高山が連なっており、島内地形の面でも日本本土にそっくりであった。

そして大きな島の敷地と良好な湾状の海岸が幾つか存在している事が功を奏し、幌筵島はこの方面にて操業する多くの漁船の補給を請け負う港灣が作られ、次いで民間の缶詰工場などが進出したりして、お隣の占守島と共に北方海域の漁業における一大根拠地として明治の頃より栄えてきた土地である。おかげで無線による航路誘導なんかを行う無線電信局が私設の物も合わせると島内に4箇所もあり、蛇足ながら占守島には水産会社経営の貯蔵量10000トンを誇る重油タンクも作られているくらいだ。

また、国境に程近い上に相応の面積の土地を有するこの幌筵島は、漁業だけではなく軍事の面でも包容力を発揮し、島内には全長1000メートル、幅50メートルの滑走路を主とした飛行場がつい3年ほど前に設置されている。これは小型機どころか、渡洋爆撃で名を馳せた九六式陸上攻撃機だって運用できるだけの規模であり、転じて緊急の際には空中輸送にも対応できるという事である。同時に水上部隊が待機する泊地として良好な湾も、島の東南部に乙前湾おつまえ、南端に武蔵湾むさし、島の西部一帯を占める加熊別湾かぐまべつと、3つも存在するので不足無し。

南洋の多くの島と違って真水の調達も可能な上に、気温の変化も海流の影響からそれほど激しく無く、年間を通すと最高気温こそ15度前後と低い、冬季の最低温度は零下6度といった所。遥かに南の北海道よりも実は暖かいのである。

官民共に海洋根拠地としては素晴らしい地であった。

もっとも欠点はちゃんと有って、付近の海上を含めてお天気に濃霧が非常に多く、山に遮られない事から威力をそのままに直撃する

風雪が長く続き、せつかくの飛行場も6月から10月初旬までの僅かに4ヶ月程しか使用できない所が泣き所である。

故に飛行場が出来てから3年は経つが、北方海域はまだまだ飛行機よりもお船の姿が断然に多い場所だった。

さて、そんな幌筵島の西岸にある、加熊別湾。

2月初日の本日は霧こそ発生してないが例に漏れずの大雪で、湾内に停泊する多くの船舶はすっかり雪化粧となっている。気温は零下3度ほどだが風は非常に弱く、甲板上で作業している漁船の乗組員は白い息を巻き上げながらも至って元氣そうである。

『おい、網をしまおう。そっち持ってくれよ。』

『おいしょ、っと。おし、いいぞ。』

雪もだいぶ残ったとある漁船の甲板の上、鉢巻の下にぶしょう髭を生やした男達が漁に使う網の整理を始める。

漁船と言っても彼等が乗る物はいわゆる遠洋漁業に使われる漁船で、ちゃんと内燃機関も搭載されて立派な煙突も持っているし、荒い外洋の波にも耐えられる相応の高さの乾舷も備わっているという、そこそこに立派なお船である。彼等の四方に広がる湾内の波間にはそんな見てくれの良い漁船が30隻以上も停泊しており、遠方からでもよく目立つマストや煙突の類によってさながら一端の軍港のような光景にも見える。陸地にある小さな集落が工廠だったら、なお現実性が有ったのが残念な点だ。

だがしかし、お船が集うという根本的な状態では軍港と同じで、船の命達においては多くの仲間と顔を合わせる事の出来る社交の場

に変わりはない。特にこの北方海域では漁船が何隻かの集団を組んだ形で漁を行うのが一般的な事もあって、同じ集団に属する漁船の艦魂達の仲の良さは、帝国海軍艦魂社会での同じ部隊に所属する仲と共通する部分でもある。出港を控えてお休みとなっている事に合わせて仲間内で集まり、お酒を飲んだり美味しい物を口にしながら他愛無い話に花を咲かせたり等、その姿は泊地で待機している帝国海軍の艦魂達とまさにそっくりであった。

さてそんな中、加熊別湾内に停泊する多くの漁船に混じり、そこには辺りの銀世界にあっては赤の色合いが一際目立つ軍艦旗を掲げた艦艇が、2隻並んで停泊していた。

双方共に艦首の側面に大きく書かれた白抜きの「1」の文字に、鋼鉄製のカバーが付いた単装砲と大きな魚雷をも抱えた流麗なその細長い艦体は、両艦揃って帝国海軍第一駆逐隊所属の駆逐艦であるという事の証。次いで艦中央部の乾舷に記されたカタカナの艦名表記は、両艦が明石の友人である野風のかぜ、沼風ぬまかせの分身である事を示していた。

するとそんな中、並んで停泊する2隻の内の野風艦の甲板上に、艦の命である野風の何やら困り果てたような口調での声が響く。

『困りますよお、もっと領海線には気を付けてもらわないとお。下手したらロスケに撃たれちゃいますよお?』

真ん中で分けた長い前髪を軍帽の隙間から垂らし、大きく歪めた眉の下で口を僅かに尖らせる野風。大正10年生まれの艦体を分身とする彼女は明石が姉のように慕う長門ながとと同世代の艦魂であり、その容姿は本来ならば30代手前のかなり大人の女性像を持つ筈なの

だが、背も小さく大きな丸い目を持つ故かその困った顔には明石と同じくらいの年頃をも思わせる若さが目立つ。

女性にしたら実年齢に比べて容姿が若く見えるのは歓迎すべき事で、明石の知人である整形美人、比叡^{ひえい}なんかはそのご利益を大いに謳歌してたりする。

だが、今の野風にあっては少し都合が悪い。

なぜなら彼女の眼前には、その野風の持つ若さをネタにして先程彼女が放った言葉に反論をしてくるという、なんとも困った人物が居たからであった。

『ハハ、お嬢ちゃんさあ。あたしゃもう40年から艦魂やってんだ、解るかい？ アンタらがおしめしてる頃から、あたしゃシアトルまでの定期航路で働いてたんだい。領海線どころか、回歸線や日付変更線だって何処にあんのかちゃ〜んと頭に入ってるの。』

悪態混じりでそう言ったのは、もう老いも滲んでいる40代も迎えたような顔つきを持つ女性で、魚油の匂いも染みる薄汚れた作業着を身に着けている。さらに作業着の上に被る様にして着たゴム製の黒い前垂には魚の鱗がこびり付き、外套も含めて濃紺の軍装を着た野風達とは身の上が違うのは一目瞭然。その証拠にこの女性は加熊別湾にてその分身を休めているとある工船の艦魂さんで、奥まつた目と高い鼻、次いでやや朱色も目立つ波打った長い髪を鑑みるに、どうやらその生まれは日本を含めたアジア地域ではないようだ。

もっとも外国人の容姿というのはこの日本のお船事情、ついでの命達によって構成される艦魂事情にあっては、決して珍しい事ではない。つい40年程前までは野風達が属する帝国海軍ですら外国生まれの艦艇が主役であったのだし、金剛艦^{こんごうかん}のように現役で第一線の兵力として未だに頑張っている外国生まれの艦艇は非常に多い。

民間船舶でも特に長距離航路に就役している大型貨客船にあっては、外国生まれの船がついこの間まで主役であった。

そしてどうやらこの女性の分身もまた、遠く欧州で生まれた後に日本に渡り、その昔は遠くアメリカ西海岸までの定期航路にて活躍していた経歴を持っているらしく、老朽化により今は工船となってこの北方海域に糧を得ているお船であるようだった。

ただ、年寄りだからといってなんでも許されて良い筈が無い。

野風の語りかけにあったように、実はこの女性が分身とする工船にはソ連側の領海へと侵入した疑惑が持ち上がっており、乗組員達が持っていた資料を目にした野風は事の仔細の聴取と注意を促すべく、こうして甲板上で話をしているのである。それに実はこの工船の艦魂、北方海域の艦魂界限ではちょっとした有名人で、領海侵犯を疑われたのはこれが初めてではない。20年近くこの方面で励んできた野風と沼風にとっても、この女性にこうして注意を促しては悪態をつかれてしまうのは今日で4回目となり、二人とも既にこの工船による領海侵犯に関しては、疑いではなく完全に犯しているだろうと声には出さずとも確信している始末であった。

だから野風と沼風はお互いに困った表情ながらも、なんとかこれ以上の越境行為を行わせないように説こうとしているのだが、眼前の工船の艦魂は全くもって野風の声に取り合おうとしてくれない。しかも具合が悪い事に、その工船の艦魂の背後には彼女の態度を応援してくれる別な命達が控えていて、野風が声をつぐんでしまった刹那を見逃さずに次々と声を上げてくるのだった。

『そくだそくだ！ かーちゃん言っただれ〜！』

『ウチらのかーちゃんは、大西洋だって行った事あるんだぞ〜！』

『ロスケの船だって真夜中に見つけたの知ってるだろ〜！ 簡単に捕まるかってんだ〜い！』

わーわーと歓声にも似た声は、眼前の工船の艦魂と集団を組む漁船の艦魂達。彼女等は皆工船の艦魂に比べると年頃はずっと下で、野風達とくらべても断然に若い。150センチを境にばらつく小さな身の丈に反して警告汽笛の如き大きな声を放ち、僅かに老いた女性像を持つ工船の艦魂の背から、連ねるような形で顔を覗かせている。

加えてそんな漁船の艦魂達が「かーちゃん」という呼称を用いる事も手伝い、まるで彼女達は工船の艦魂を長とする一家のように野風達には見えてくるが、あながちその認識は間違っている訳ではない。

それは集団を組んで行う漁船の運用方法に深い関係がある。

そもそも工船とは、獲ったばかりの魚介類を新鮮な内に現地にて缶詰等へと加工してしまう事を専門としたお船であり、自らの甲板から網を海中に投げ入れたりして漁労に参加する事は無い。もっぱら朝から晩まで水産物の加工にのみ専念し、加工資源である魚介類の確保は配下の複数の漁船群に一任しているのである。

加えて工船は食品加工用の設備を持つのに合わせて比較的大型の船体を備える事から、ずっと小型で航洋能力にも居住性にも劣る漁船に対し、食料や燃料を始めとした物資を補給したり、荒天下での牽引や連結しての停泊なんか実施させてやったり、乗組員の休養や治療の為に船内の比較的整った居住区設備を使わせてやったり等、一つの集団に属した漁船群に対するいわゆる母船としての運用が行われているのだ。

まさにそれは、明石の親友である神通や那珂が率いる水雷戦隊の如き在り方。集団内で一際大きなその船体を駆使し、多くの小さな船達にたくさんの恵みと生きる糧を与える様は、戦闘艦と民間船の違いはあれど本当にそっくりなのであった。

その上で野風達と相對するこの工船の艦魂は、外国人女性とは言

え相応に年齢を重ねた外見を持ち、しかもまた天下の帝国海軍艦艇の艦魂に対して全く遠慮せずに物を言う態度も手伝って、その姿は人間達の世界でも往々にして見る事の出来る「肝っ玉母さん」その物である。

年下の者では扱いに非常に難儀する事になってしまふのは艦魂社会でも同じで、この道20年のキャリアを誇る野風と沼風も中々声を返す事が出来ない。

しかもまた、二人にとって非常に都合が悪い事情が、実はもう一つ有る。

彼女達が相対するこの僅かに老いた工船の艦魂。なんと今から30数年前に、野風達が持つのと全く同じ十六条旭日旗をその艦尾旗竿に掲げた経歴を有し、しかもまた実際に戦の場へと舳先を進めた上に、そこで帝国海軍どころか国民の間にも語り継がれる程の大殊勲を打ち立てているのだ。

『今時分の若いモンは変に心配性だねえ、ハッハッハ！ そんなんじゃロスケどころか、クジラの一頭も捕まえられないよお。』

『『『 きやははははっ！ 』』』

『ううう……。』

『あ、あはは……。お、恐れ入りますう……。』

工船の艦魂の歯に衣着せぬ物言いは、現役の戦闘艦艇の命である野風達の励む姿勢を揶揄した形での冗談。清々しい程にズバっと切り込んだ言葉は、長く北方海域で頑張って来た野風と沼風にとって、は自負とプライドをひっくり返された様な感覚すら与えるが、それでも尚、二人は各々の怒りを沸点まで昇らせて真っ向から反論する事は出来ない。いつも元気で快活な野風はもはや無念の呻き声を上げるのみで、その背後に控えた沼風は冷や汗も浮かび、僅かに引き

つる頬で作った困ったような笑みでもって、ひたすら愛想笑いをするばかりであった。

長門と同世代の艦魂であるこの二人がここまで困り果てる相手。その名はかの日露戦役において三笠艦みかさと共に勇名を馳せた船の名であり、野風も沼風もそれを知っているが故に、眼前から来る幾重もの嘲笑にただただ塗まみれているのみ。

やがて耐え切れなくなった野風がやや涙声となりながら声を発し、その名を呼んで再度の注意喚起を行うと共に、これ以上の恥辱に対する勘弁を申し出た。

『か・・・、勘弁してくださいよお、信濃丸しなのまるさうん。満蒙じゃ陸軍とロスケが国境紛争やらかしてんですよお。これで海でもやらかしたら、下手したら戦争になっちゃいますよお。』

民間船舶の命に対する海軍艦艇の命の接し方としては、非常に格好が悪くなってしまっている野風。30代直前の女性像を持つその心と表情は、傍目から見ても今にも泣き出しそうな勢いであったが、そんな野風の様子が信濃丸と愉快な仲間達にとっては面白くて面白くて仕方ないらしい。本気で心配している野風の声が響くや、彼女達は抱腹して大笑いした後、信濃丸の一声に続いて勝手気ままな冗談を連発していく。

『『『 あははははは！ 』』』

『おい、聞いたかチビ供！ ロスケと戦だとさ！ ハッハッハ！』
『よくしっ！ じゃ、今度ロスケの船見つけた地点は、二百三地点にしよう！』

『時間は午前4時45分ですね、わかります。』

『わははは！　今から無電の電鍵磨いておかないとね！』

歓声のようにして湧き上がる漁船の艦魂達の声は、全て彼女等が母と慕う信濃丸の功績を意識した物。一向に明るさと激しさが色褪せないその音量には野風も沼風も完全に降参で、二人して額に手を当てて大きな落胆の溜息をつく。

すると野風の肩にすっかりご満悦の信濃丸が手を乗せ、全くもって野風の注意喚起が成功しなかった事を示す声をかけてくるのだった。

『ハッハッハ、そういう事だ！　そんな時はアンタら、横須賀の三笠さんまでしっかり中継してちょうだいよ！　ほんじゃ帰るぞー、チビ供！　ほい、日の丸船隊歌！　歌い方用意！』

『こ、これはもうダメだね……。あ、あはは……。』

『ううう……。もう勝手にしてよ……。』

完全に打つ手を失って目尻に涙を浮かべる野風に、沼風が励ますように手を触れて收拾不能の事態を悟る。

これまでと同じように彼女達、第一駆逐隊の面々による注意喚起と啓発は残念ながら成果が実らず、今日もまた日本側による越境の芽を完全に摘む事は叶わないのであった。

やがて野風艦の甲板上には、信濃丸を先頭にして漁船の艦魂達が一列に並んだ姿が現れ、元気良く放った信濃丸の言葉に続いて一斉に行進しながら歌を歌い始める。

『『きくみとくくにとにつくすべく！　しちにつかん
ところいねごう！』』

まるで勝ち鬨どきを上げるかのように大声で歌い出すや、彼女等は野風と沼風が未だ頭を抱えているその真横を通って、行進しながら各々の身体を淡く白い光で包んで去って行く。

野風も沼風も盛大なる徒労に終わった本日 of 努力にすっかり心が折れ、怒りに任せて怒鳴り声を上げるには余りにも相手が悪すぎた事を少しだけ呪った。

相手の名は、信濃丸。

かつての日露戦役での最終決戦たる、あの日本海海戦にて、敵艦隊発見の功で名を馳せた信濃丸の艦魂である。

既に帝国海軍艦艇として励んで20年も迫る中、凍てつく千島の潮風にうつすらと涙する野風と沼風の姿は、実に気の毒という他に無かった。

豊富な水産資源と複雑に国権の線が入り組んだ海、北方海域。

若い命も老いた命もいて、翻す国旗も様々な船の集うこの海域は、海軍艦艇であつても苦労に苦労が重なる厄介な所である。

しかし同時にそこに居るそれぞれが色んな経歴を持ち、官民も問わずに全ての船の命が日々を謳歌する場所でもあった。

そして翌日。

雪降る加熊別湾の薄くもやが掛かった波間にはその一員として、信濃丸とそれに従う多くの漁船群が隊伍を組んで出発して行く光景が在るのだった。

第一一八話 「沖繩たより」

既に2月も迎えた昭和16年であるが、2年前より始まった欧州での戦乱に始まる国際情勢は、この日本にも怒濤の波となって押し寄せ始めている。明石^{あかし}が室積沖、次いで小松島へと赴いて頑張っている合間もその動きは止まっておらず、僅か1ヶ月しか経ていない本年にあっても多くの動きがあった。

まず年が明けて間もない1月8日。

現内閣の陸軍大臣である東条陸軍大臣^{とうじょう}より、帝国陸軍に対してとある通達^{つうたう}がなされた。

それは帝国陸軍という大組織の末端にまで独自の組織精神^{ちよくゆ}を行き渡らせる為の通達で、明治の頃に天皇陛下より承った「軍人勅諭^{ちよくゆ}」の意味をより徹底させるかの如き内容となっているが、別に軍人勅諭の内容に不備があったとか、明治の頃に起草された内容が昭和の帝国陸軍には合わない、等という理由があった訳ではない。事実、明治に次ぐ大正年間、そして昭和と元号が改められて16年も経ったこれまでも含め、長く帝国陸軍は精神の柱としてこの軍人勅諭を唯一の経典としてきたのである。

そんな中で出されたこの通達は、その背景に大きな要因として支那事変を抱えていた。既に支那で中国軍と全面戦争状態となって4年目を迎える中、帝国陸軍が大陸上に展開する兵力は100万にも及ぶ勢いであるが、長年に渡ってしかも尚終わりが見えない情勢は、栄えある帝国と皇軍に大きな疲弊を強いている。

その一端として帝国陸軍内で非常に目立つのが、軍紀風紀の緩みであった。

壮絶な疲労の下に送る実弾飛び交う戦場での時間は兵士達の体力と精神を消耗させていき、一部の兵による現地民への略奪や強盗、強姦行為に、兵士同士の間にあった怨恨に端を発する殺人や傷害等の事件。慣れない戦地での生活に絶望し、現地での演習や行軍の際に手にした手榴弾や小銃を使つての自殺。兵営からの脱走。そして軍事組織において最も在ってはならない事態である命令違反や上官への反抗など、決して内地の一般人には聞こえてこない帝国陸軍の一面が、海を隔てた支那ではあらわとなっていたのである。

そこで再度の軍紀徹底を全軍規模にて立て直すべく、かつて陛下より賜った御勅諭と連動する訓示を帝国陸軍上層部は発布するに至ったのだが、これこそが後年に至って帝国陸軍その物に未曾有の悲劇を誘発する一つの引き金ともなる。

「生きて虜囚りよしめうの辱はづかしめを受けず、死して罪禍ざいかの汚名を残すこと勿なかれ。」

とりわけその中に有ったこの一文が果たした役割は大きく、前述の軍人勅諭に有る次の文言と目論見どおりにセットとなつて、この後の帝国陸軍の軍人が持つ精神の拠り所となつていった。

「只々一途に己が本分の忠節を守り、義は山岳よりも重く、死は鴻毛こうもうよりも軽しと覚悟せよ。其操そのみさおを破りて不覚を取り、汚名を受くるなかれ。」

体面と大儀の尊さを第一とし、命は鴻の羽毛おとつうよりも全く軽い物であるとの教え。何故なのかという観点から理論と合理性を全く排除し、人の持つ倫理を日本人という概念で縛る形で与えた末に、彼ら自身がその目で見える結果は、電話線で足を木々に縛り付けての死守法、「砲側墳墓」という言葉に従う戦死法、玉碎という呼称で示された全滅法、そして捕虜という身分への敵味方問わない蔑視等となつて、後に具現化する事になる。

世に有名な「戦陣訓」が發布されたのであった。

次いで1月23日。

昨年より日本への経済制裁を始めた米国との関係改善を模索する為、元海軍軍人にして外務大臣の経験も有る野村吉三郎のむら きちさぶろうが駐米大使に抜擢され、太平洋の向こうにあるアメリカ合衆国へと渡った。かのワシントン軍縮条約に全権団の一員として参加した事も有る彼は現在の米国大統領であるローズベルト大統領と過去に親交も持っており、国際政治の場にてなんとか米国の間に良好な関係を築こうとする日本の想いが、その双肩に掛けられていた。

すなわち対米戦争という最悪のシナリオを止めるべく、ここに日米両国政府による外交交渉が始まったのだった。

そして最も大きな出来事であるのが、昨年末より続いている泰たいと仏印における戦争の推移である。

そもこの両国に対しての大日本帝国の対処は、日本が考える対南方政策に対してどちらの国も立地条件が良かった事から、泰には先年6月に日泰友好親条約を結び、仏印に対しては北部仏印進駐という方策でもってこれまで対応してきた。しかし逼迫する時局の中、すでに4年目へと突入してしまった支那との抗争も早期に終わらせたい事情も有り、日本は同じ極東アジアで起こるこの紛争に介入して状況打破を試みる事にした。

すなわちこれまでの静観をやめて泰と仏印に対して積極的に調停役を申し出た訳ではあるが、蚊帳の外から傍観の末に外野の声を上げてくる日本と違い、泰と仏印の両国は実際に血を流しての戦の真っ只中においてその鼻息は荒く、昨年に打診した一回目の調停は両国より拒否されていた。

もちろん両国政府が完全に冷静さを見失っている事のみが理由ではない。仏印は言うまでも無く、長くイギリス領と国境を接してきた泰ですら国内には親英の空気が非常に強かったのであり、支那との大戦争を口実に仏印に武力進駐した日本に対してはあまり好感を持たず、調停役を買って出て仏印と泰国における旨みを確保しておこうというその真意を警戒していたのだ。

ただ、陸海空での戦闘も発生した末の両国間の戦況は、陸上戦闘における緒戦の痛手から立ち直って反撃を開始した仏印側が優勢で、1月17日に生じたシャム湾西部での海戦、すなわちコーチャン島沖海戦では、泰国海軍艦隊がフランス海軍極東艦隊によって完膚なきまでに叩きのめされている。

このまま静観してれば仏印が勝つであろう事は、誰の目にも明らかであった。

しかし、そんな状況を両国に思うとおりの姿勢をとらせる事ができる好機と捉えた日本は、ここに至ってよりムチの側面が強い方策を打ち出した。その骨子は北部仏印に進駐している陸軍部隊の交代に合わせて、交代する側とされる側の部隊を現地にて重複する形で配備させ、北部仏印における陸軍戦力を一時的に倍加させる事。次いで大規模な海軍部隊を仏印の沿岸の海域へと展開させる事であった。

さらにはこれと同時に再び外交ルートを通じて再度調停を仲介し、間近に迫った形の陸海軍の戦力を背にして成功させるのである。

戦を止めさせる為と銘打った自国の意思に理解を求めようと、皮肉にも日本は戦の道具である剣と盾を用いたのだった。

一方その頃、その剣と盾として帝国海軍は内地にて訓練中の一線部隊を派遣し、第一艦隊からは一水戦と七航戦、第二艦隊からは七戦隊と二航戦が抽出された。さらに一昨年に確保した海南島にて、支那方面艦隊隷下の第二遣支艦隊もこれに合流し、これをもって対仏印威力示威戦力を構成。同時にこの作戦はS作戦の呼称を与えられ、1月29日には作戦兵力の全てが海南島の三亚に集結したのであった。

おかげで少し現有の戦力が落ちた第二艦隊だが、気落ちする事もなく周防灘から別府湾、有明湾へと訓練地を変えて猛訓練を続けていた。周防灘では第一艦隊との合同による応用教練、基本演習も既に何度か実施しており、前期訓練の内容は早くも濃い物となっている。

さて、そんな第二艦隊は2月も半ばに迫ると有明湾を発つ。既に第一艦隊とも分かれた第二艦隊は一路その針路を南へと向け、2月であろうとも雪とは無縁で早くも田植え作業が始まっているという南国の地、沖縄県は中城湾なかくさぐへと軍艦旗を進めた。もちろん巡航の最中も航行序列の転換等で訓練は続き、数日に渡る航海を経て中城湾へと錨を下ろした各艦の乗組員には、士官も下士官も含めて皆疲労の色が隠せない。

1400頃に中城湾に到着した第二艦隊各艦は湾内の泊地に指定の隊列で整列し、ようやく錨を下ろして艦首旗を掲げる頃には、入れ替わりに太陽が水平線の下へと降りて行く時間帯となっている。水平線から来る朱色の光線が波間と甲板を照らし、暖かい沖縄の

潮風はその光景をまるで夏の夕暮れのように感じさせる。見れば第二艦隊各艦の甲板から望める湾岸は、季節特有の白銀どころか新緑の彩りがそこかしこに有り、南国らしい赤い花もぼつぼつと目にする事が出来た。

色鮮やかなその光景は夕食前の乗組員達に一息の心の休憩を与えてくれ、各艦の甲板ではタバコを吸いながら陸地をしばし眺め、僅かに疲労を忘れる事が出来た男達の姿が相応にあった。

そしてそれは艦魂にあっては全く同じで、特に航行序列の最外郭の位置を担当する水雷戦隊の者達は、疲労困憊の極みにも達した状況である。

まして戦隊旗艦を努める艦の艦魂が底無しに厳しい事で名を馳せる第二水雷戦隊では、散々に大海原を駆けずり回った事もあって所属の艦魂達がすっかりヘトヘトの状態となっている。さしもの神通じんつうも本日は相当に疲れているらしく、部下達を集めて一日の終わりを告げる際には、珍しく疲れたような表情を浮かべていた。

『訓練は明後日から。明日は乗組員の休養と上陸にあたるだろう。予定は午前が教育日課。午後は休養にしようというが、こないだ渡した提出物は必ず午前中に出すようにしろ。いいな。それと喫緊の艦隊訓練の予定は、一航戦の航空機の支援を受けての乙種戦技だ。各自、訓練要領の復習をしておくように。では、解散。別れ。』

てっきり航行序列の転換でモタついた本日の訓練内容にお叱りがあると思っていた、神通の部下である二水戦の駆逐艦の艦魂達。しかし、意外にすんなりと解散の儀式が終わった事に、彼女達は声も無く上司のお疲れぶりを察する。

次いでその一人にして、いつもなら上司の夕飯の準備を始めとする身の回りのお世話を、この後もこなさねばならない従兵役の霰あられもまた、今日は神通の後ろをついて行こうとするや制止の声をかけられた。

『お前も今日は疲れただろう、霰。構わん、今日はこれであがつてゆっくり休め。』

日本刀の切っ先を思わせる鋭い目つきに朱色の空の輝きを帯び、140センチメートル台の身の丈を持つ霰からは30センチも見上げる形になる程に背の高い上司は、その独特の短気で怖い性格も手伝って、何もしてなくてもおっかない雰囲気とその体に常に纏われているお人である。実際に目を合わせて声を交えようと、今でも霰は怖いという感情が一番最初に意識の中に湧き出てくる有様だが、優しい言葉をかけて自身のお役目を解いてくれた辺りは、彼女なりの部下の疲労を考えての処置であろうと無言のまま理解。

それ故に遠慮なく霰はその言葉に従い、上司の分身の甲板から自身の分身である霰艦へと戻っていった。

それから30分ほどした頃。

霰艦の艦首付近にある倉庫の扉を、艦の命である彼女は配食器を片手に開けていた。その倉庫は艦内での軽度の工作作業の為に資材を格納してる倉庫であるが、小さな駆逐艦の艦体では満足な工作機械も置けない事から余程の事が無い限り使用される頻度は少なく、人の出入りもそれに伴って少なめな故に霰が自室として使っているお部屋だ。

人間達には見えないが霰が寝る為のお布団と、木箱に板を敷いた

ちやぶ台状の机が置かれ、とても質素で殺風景ながらも霰が唯一自分だけの時間を過ごせるれっきとした私室。彼女が趣味として艦内で出た古紙を折って作った折鶴が数羽、糸に連ねられて、たった一つしかない部屋の舷窓の脇にぶらさがっている点が、まだまだ10代後半の少女像を持つ霰という艦魂の寢床である事を示す。

『ひい、ひい……。ふう、今日はほんまに疲れたわあ……。さ、はよご飯や。』

市松人形の如き僅かに伸びた感じのおかっぱ頭から軍帽を取り、横長で細い目に疲労の色を滲ませる中、霰の口からは持ち前の濃い京訛りのある声が響いてくる。鼻から息が抜けたような強弱の薄さと、二水戦の仲間内でも目立つ程に甲高い彼女の声は、どこか溜息も混じっているまいち元気が欠けている感があるも、当人である霰は久々に出来たての温かい食事をゆっくり食べれるとあって機嫌は良い。

仕草も考察の巡りも非常にトロい彼女は、食事だって人並み以上に時間をかける傾向が本来あるのだが、怖い怖い上司の従兵として仕えるその日常では常に無理をした食べ方をしている。いつも上司の分も含めて食事の準備からこなす上、後片付けをも霰は担当せねばならない為、ノロノロと食べる彼女では上司が箸を置く頃にはまだ半分も食べ終わっていない状況となってしまうのだ。もちろん従兵のお仕事を言い訳に厳しい二水戦の日常に遅れる事はご法度だから、霰はいつも素早く食べれるようにわざと自分の食事を猫飯状態ねこまんまにして口に流し込んでいるのだった。

だが、そのお人形さんのような容姿にそぐわない食べ方は、もちろん人たる霰としても不本意なのが本音である。

本当ならゆっくりとした時間的余裕の中、雲の流れのようにゆっ

くりとした自分のペースで食事をしたいと、内心で霰はこれまで何度も願った事があるのだ。

だから疲れきった中であっても、本日の夕飯は霰が待ちに待った至福の時間その物なのであり、崩した正座で床に置いた配食器から金属製のお椀を取り出していく彼女の表情は極めて明るい。

今晚のディナーはマグロの肉と多くの野菜を使った具沢山のけんちん汁に、どんぶり一杯のご飯と雷干し。点数は少ないがけんちん汁の椀はどんぶりどっこの大きさが有り、小柄な体に見合う程しか量を食べない霰にあっては十分なボリュームである。

『たとえ食べれるわあ。ふふ。やて明石さんやったら、これでも少ない言いはあるんやろなあ。』

思わずその量に笑みを浮かべる霰は、殊に食事という言葉で最も連想しやすい知人、明石の事をふと思い出す。霰の上司と同じく痩せ型でスラっとした長身の体躯ながらも、大皿に山盛りにしたステーキを3皿はペロリと平らげてしまう明石の姿は、去年の観艦式直前の宴で給仕をしていた際に霰も見ている。一体あのスリムなお腹の何処にそんな胃袋があるのか非常に不思議に思った物だが、それはそれは嬉しそうに箸を進める明石の食う様は、小食気味な霰にとってはとても爽快な食事として瞳に移った。

あのぐらゐ明るく食べれるようになりたい、と若干の羨望も抱けるくらいに霰には清々しい人物像に思えたのだが、きっとそうはなれないなと半ば諦めている彼女の気持ちには、世間一般の常識の観点から言えば別段間違っていない。大体が明石の食う量がもはや変人の域に達しているだけなのだ。

やがて全ての椀と皿を机代わりの木箱の上に乗せ終え、霰は準備の最後として菓缶に汲んできたお水を湯吞へと注ぎ始める。楽しい

楽しい晩御飯がいよいよ始まる訳で、湯呑の中より響いてくる心地よい水の音は霰の疲れた心を一気に高揚させてくれた。

ところがその小さく透明な滝が湯呑を満たしてしまう直前になって、突如として霰の背後に位置していた金属製の扉が立て続けに音を放ってくる。同時に扉の向こうからは、霰も良く知る仲間の声が聞こえてきた。

『おーい、霰えー。アタイ、雪風ゆきかぜだよ。』

『あ、雪風。はーい。開いてはるさかい、入ってもええよー。』
『おーッス。』

霰の応答を耳にするや男っぽい挨拶を返して扉を開けてきたのは、霰とは後輩先輩の関係ながらも仲良しとなり、次いで二水戦きつての大問題児と誰もが認めているやんちゃ娘、雪風であった。

軍帽を取って自慢の茶髪を片手で撫でつけ、霰と同じ140センチ台の小柄な身体に大きな目のサイズの軍装を着た彼女。もう片方の手は胸元から肩、そして背に至るジョンベラを僅かに整えるとポツケに突っ込み、裾を引き摺りながら歩くその様は、人間の海軍軍人にも希にいる不良水兵さんの姿その物。クセの有る摺り足での足の運びと肩をいからせた歩き方、そして持ち前の大きな釣り目を鋭く足元に流す顔の特徴なんかも、もはやわざとらしいとも捉えられるくらいにそれっぽい。

ただ、別に雪風は霰に喧嘩を売りに来た訳ではなく、食卓にいたまま振り返る霰と視線が合うや、八重歯を覗かせた悪戯小僧の如き笑顔をパツと浮かべてくる。

『お、けんちん汁かよ、いいなあ。アタイんところはマカロニシチューだったよ。』

『なんや、シチューおいしいやないか。』

『そーだけどさあ。パンってなんか食った気しねーんだよな。』

どうやら夕飯は既に食べ終えたらしい雪風。扉を閉めながら霰と会話を交え、綺麗に卓上に並べられた霰の夕食を彼女は羨ましがった。決して舌に合わない味だった訳ではない様だが、普段から思ってた事を遠慮なく声に変えてしまう性格の雪風は、いつもの如くふて腐れた表情を浮かべてぶーぶーと不平を口にする。霰はそれに持ち前の糸目でもって作る笑顔で応え、未練がましく『良いなあ。』を連発している雪風を前に食事へ箸をつけ始めた。

汁椀の中でよく味噌味が染みたマグロがやはり一番最初に箸が向かう所で、噛んだだけで口の中に香ばしさが広がるマグロの味に霰は満面の笑みである。その分身が舞鶴生まれの為なのか味覚まで京都人の霰だが、薄味派な彼女にあっても塩気の多いけんちん汁を美味と感じる事が出来るのは、やはり彼女の身体が相当に体力を消耗しているからに他ならない。

『おいしいわあ。ゆっくり味わって食べれるしい。』

『ケッ。食うのもトロいんだな、霰は。もったいつけねーで早く食っちゃえ。』

『ふふふ。おいしいわあ。』

ただただ素直に夕食に舌鼓を打っている霰なのだが、その口から漏れてくる感想が雪風の口をだんだんと尖らせていく。雪風とて付き合いの長い霰の性格は知っているから、霰のそんな態度が自分に対するあてつけ等とは微塵も思っていないが、良くも悪くも感情が一切の濾過を受けずに顔と声に出してしまうのが、師匠譲りの彼女の性格である。

『ケッ!』っと鼻息を荒くしながら雪風は霰に背を向けると、部屋の奥に一つだけある舷窓の下へと歩みを進めていく。次いでその金具に手を伸ばして僅かに舷窓を開き、部屋の中にはやや肌寒い潮

風が文字通りの隙間風となって流れ込んだ。

霰はそれに気づきつつも美味しい一時が優先な事も有り、ゆっくりながらも箸の進みは止めない。けんちん汁もご飯も半分どころかまだ9割は残っている状態で、過剰なほどによく噛んで食べる霰の食べ方の遅さをよく証明している。舷窓から漏れてくるちよつと寒い風も、ホカホカのけんちん汁とご飯を食べる霰には至って気にはならず、霰はしばし雪風を放っておいて夕飯吟味に専念する事にした。

ところがここで腕に向かっていた霰の意識が、ふと耳に聞こえてきた極めて短い摩擦音のような物音によって誘われてしまう。

『うん？ あっ・・・！』

余りにも聞き慣れない音だったが為に思わず顔を上げた刹那、霰は驚きの声を上げてしまう。なんとそこには口に白いタバコを咥えて、中々火がつかないマッチを何度も擦っている雪風の姿があったのだ。

やんちゃな不良娘である雪風の人物像は霰もよく知っているが、人間の海軍軍人を見て覚えたのか、未成年の内に喫煙まで始めてしまうとは予想外。箸を宙に浮かべたまままで思わず霰が声をかける。

『んもう、雪風え……。タバコなんか吸いはって、ほんまにへんねしやなあ。てんごはほどほどにせなあかんや。』

『……るせーなあ、別に死にゃあしねーよ。あ、親方には言うなよ。まゝたケツぶっ叩かれちまう。』

一応は雪風よりも一年先輩の霰。

少しお姉さんぶった言い方でもって雪風の喫煙を諫めようとするも、生来が鼻っ柱が強く小生意気な性格の雪風は、そんな彼女の言

葉など屁とも思っていない。またぞろ悪態をつくような物言いで応じ、その上で自身の喫煙における非を一切無視して、怖い怖いお互いの上司である神通にこの場の状況をバラすなどお願いしてきた。

言うまでも無くそれは未成年の容姿を持つ雪風がタバコを吸う事に対し、神通が間違いなく眉を吊り上げるのが火を見るより明らかだったからである。日露戦役が始まる以前より、彼女達の祖国である大日本帝国では未成年の喫煙は法律によって禁じられており、例え人間達による決め事ではあっても国家としての法令という観点から、艦魂達もそれを範とし、次いでよく遵守して日々を生きるようにしているのだ。

有り体に言えば帝国海軍艦魂社会では法律を守るようにしているというだけの事なのだが、真面目にそれを守って暮らす奴もいれば、抜け道を見つけて上手い具合に自分なりの道を歩む奴もまた、人間にも艦魂にも往々にして存在する物である。だからこそ、この世には刑罰という名の抑止の制度が法律に寄り添う様にして整えられているのであり、自分だけはちょっと規則のタガから外れても良いだろう、という類の甘い考えはまかり通らない仕組みとなっている。

そして雪風や霰達の場合、その仕組みは閻魔大王相手ですら喧嘩を売りかねない性格の上司による、鉄拳制裁の他は無い。二人を含めた二水戦の駆逐艦の艦魂達がこの世で最も恐れるのは、軍帽を被る度に苦痛に耐えねばなくなるげんこつ、皮がむける程に尻に振り落される竹刀、を代表格とする神通による過激なお仕置き。

ツッパった性格の雪風ですら、一瞬で泣き出してしまう程に恐れ慄くその恐怖は筋金入りであった。

『ふが・・・！ けほっ、げほっ！ くっそお、思い出したらケツが痛くなってきやがった・・・！』

そのやんちゃな性格からつい昨日、竹刀の餌食となったばかりの自身のお尻を擦る雪風。食事中の霰の前という事に一切の遠慮を持たず、未だうつすらと残っている鈍痛に顔をしかめている。対して相変わらずゆっくりと夕飯を食べる霰は、やや雪風の行動を不快に思いながらも止めろとは言わず、むしろ昨日受けた上司からのお仕置きに関して全く反省をしていない友人に苦言を漏らした。

『雪風が髪イジってはるからやろ。こないだもぎょうさんビール使
うて、髪の色変えてたやないか。戦隊長から何遍も黒くしろ言われ
てはるのに。』

『髪の色くらい良いじゃねーかよ、ちつきしょう……。』

いつぞやのビールによる脱色で手に入れた茶髪を非常に気に入っ
てる雪風であるが、髪の色を変える事で大いに神通に怒られた彼女は、
これまで何度も上司より色を元に戻すように勧告を受けている。
しかしさすがは二水戦随一の鼻っ柱の強さを持つ彼女は、髪の根元
に生え変わった黒髪が目立つ頃合になると再び髪を脱色し、『なか
なか生え変わらないツスねえ。』等とのたまってげんこつを貰いな
がらも誤魔化し続けていた。

とんでもない奴である。

『ほんまにもう……。んぐ、んぐ。』

半ば友人に対する呆れも出てきた霰は箸を口に運びながら、そう
遠くない内にまた眼前の友が上司のお叱りを受ける事になるだろう
など、声には出さずに予測する。霰とは同じ18軀を組む同僚にし
て、雪風の実の姉でもある陽炎かげろうの注意すら、雪風は嫌な物は嫌だと
言い張って一向に聞く耳を持たないへそ曲がりだからだ。

さらにここ最近始めたらしいタバコも、どうやら雪風にあつては
止めるつもりが無いらしい。霰の部屋を汚すまいと一応は考えたの

か、自前で用意した缶詰の空き缶を灰皿にしている所は感心するが、規律や約束事にどこか積極的に抗うようにすらも見えるその行動と思考の数々は、やはり彼女が仲間内きっての大問題児であるという事の確固たる認識を、霰の中に構築していく。

人間の世界では10代後半の年齢に付き物である、反抗期という物の権化か。とにかく反骨精神旺盛なのが雪風という艦魂であった。

そしてこの時、雪風の反骨精神が生む小生意気な所を仲間内では最も嫌っている者が、毎度の事ながら幸か不幸か同じ場に集ってしまふ。呆れ顔で夕飯を食べている霰の背後では、今晚二度目となる扉を叩く音が鳴り始めた。

『おー、霰ー。またリンゴ持ってきたよー。』

『あ、霞姉さんかすみや。開いとるさかい、入ったってえ。』

『あ？』

扉越しに聞いた声のみで人物を特定できたのは、彼女が霰と同じ18駆を組む仲間であると同時に実の姉でもあったから。同時に雪風もまた、即座に扉の向こうに立つ仲間の正体を声のみで察したが、笑みを一層明るくした霰に反して彼女は僅かに眉間にしわを作り、やがて重苦しく長い金属音を伴って開かれる扉を睨みつけている。

もちろんその理由は、扉を開けて部屋へと入ってきた霰の姉と雪風が、帝国海軍艦魂史上希に見る犬猿の仲であるからに他ならない。

『ケッ！ んっだよ、猿まで来やがってよ。』

『うあ、犬臭いと思った。こんな奴放り出せよな、霰。』

部屋に入って視線を合わせたが最後、快く姉を迎え入れようとした霰を無視して二人は早速喧嘩腰の声を投げ合う。

陽に焼けたような小麦色の肌に人懐っこい丸い目を持つ霞だが、性格も考え方も活発な彼女は雪風の喧嘩屋っぽい態度に対して臆する事は無く、そもそものが後輩に当たる身分にも関わらず自分をあだ名で呼んでくるという、礼儀も敬意も備わっていない不屈者の雪風が彼女は大嫌いである。やがてリングを持ったままの手で頭から軍帽をとる霞は、首の付け根にも至らないその短い黒髪を覗かせるが、それは霰の部屋にお邪魔したが故に最低限の礼として被り物を脱いだのと同時に、いつでも眼前の山犬と取っ組み合いを演じれるようにと無意識の内に身構えたからでもある。

転じてその姿勢は雪風にも通じて現れており、険悪な空気が一挙に部屋の中に充満。またぞろ大喧嘩しそうな匂いが、双方の身体からはプンプンと匂って来る始末だ。

おかげさまで霰の食事はまたしても微妙な空気の下に食べねばならなくなってしまうが、幸運な事に全身綿の如く疲れている点では霰と彼女達は同じであった。

呉鎮所属の駆逐艦の中でも柔道の實力は1、2位を争う程の霞と雪風は、当然の如く自身の体力自慢ぶりには相応の自負を持っているが、今年、すなわち昭和16年度の艦隊訓練の猛烈さは熾烈を極め、上司の神通ですらも疲れを顔に出していたくらいの激しい物であった。特に戦隊が一丸となって行う水雷戦隊特有の戦隊運動教練は、損傷艦が出なかった事が不思議だとの声もあった程。

そんな艦隊訓練を二水戦は第二艦隊に従いながら、周防灘、有明湾でこなしてきたのであり、一時の休憩として中城湾へとやって来たのはまさに今日のお昼。つい数時間前まで続いていたのである。

故に霞と雪風は鋭い視線で互いを睨みつけながらも、いつものようにどちらからともなく飛び掛っての大喧嘩に発展しそうな言葉は、

双方供に感づかない所で意識して控えていたりもする。それぐらい第二艦隊の艦魂達は、ここ最近の日々において疲れているのだ。

『喧嘩はあかんや、二人とも。さ、霞姉さんここ座ってええよ。それに、リンゴおおきに。』

『え。あ、う、うん。ほら。』

そんな事情も功を奏し、霞がなんとか喧嘩とならぬようにと企図して霞を呼び止めると、意外にすんなりと霞は霞の言葉に従ってその場に腰を下ろす。雪風も相変わらず口を尖らせてその大きな釣り目を鋭い物としていたが、『ケツ。』と短い言葉を吐き捨てるや視線を霞達から逸らし、再び舷窓に向かってタバコの煙を昇らせ始めた。

もちろんその姿に、先程の霞と同じように今度は霞が目丸くする。

『なんだよ、雪風。アンタ、タバコなんか吸ってんの？』

『るせーなあ、そーだよ。親方には言うなよ、猿。』

『チクるなってんならバレるなよ。とばっちり来たらこっちまで大変なんだかね。』

『わーったよ、・・・ったく。』

真っ向から雪風の喫煙を責めたりしない霞の声が響くや、またしても雪風はめんどくさそうな表情で悪態混じりの返事を返した。仲の悪さを考えれば霞は怖い怖い上司に後輩の悪行を報告してもおかしくは無いが、今しがたのやりとりで見れるように霞はそのお肌に反して腹黒い選択肢を選びはしない。確かに神通にチクった末に雪風が目の前でベツチンベツチンとお尻を叩かれたなら、霞は腹の底からいい気味だと思って散々に笑ってやろうと思っているのであるが、生憎と天敵の醜態を笑ってやる程の余裕がきつとその場には無

いであろう事を霞は知っている。

その大きな要因は当然、短すぎる導火線に火をつけてすっかりカンとなった神通のご乱心ぶりである。

『こんの馬鹿がああ！　うがああーっ！』

もう完全に耳と脳裏にこびりついたそんな上司の怒号が響き、さしものやんちゃ娘である雪風も泣いて詫びを入れる事間違いなしの状況。だが同時に雪風の成敗を終えても神通のお怒りが静められる事無く、目を回してノビてしまった雪風から今度はそれを眺めている霞達へと矛先が向けられてしまうのが、帝国海軍艦魂社会にて恐れられる「私立神通学校」のなんとも困ったしきりである。

『キサマら、いつまで馬鹿ヅラ揃えてる！　さっさと甲板走らんか、おらーっ！』

既に九割方は八つ当たりにも近い感情で放たれるその言葉に、先刻見たばかりのお仕置きを食らいたくない霞達は従うしかない。それも即座にだ。

『50周だ、行かんかあ！　オラオラー！』

『『わ、わあああーっ……！』』

まるで時代劇の主人公のように竹刀を振り回す神通に追われ、逃げるようにして霞達は甲板上を全力疾走せねばならない。しかも左舷から艦首旗竿を経由して右舷へと回り、艦尾旗竿の下でターンしてまた左舷へと出るという形で行う持久走が、いつもの10周から

一挙に50周にまで拡大されてしまうのだから不幸である。

とにかく怒ったら手が付けられない上司、神通。

そこに伴われる恐怖と苦痛の存在が例えとばかりの形であろうとも予想できるのなら、些か気分は悪いが天敵をしばし泳がせる方がマシだと、ここ最近の霞は考えるようになった。対して雪風もタバコや茶髪の事であんまり派手な大喧嘩をしてしまうと、これまた未だ腫れが残っているお尻を上司より再びぶっ叩かれてしまうと思って、敢えて下手に出ている霞に食って掛かって行くような言動はとらない。

より突っ込んだきっかけが有れば、やはりいつも通りの大喧嘩となるであろうが、この二人にしては中々の進歩である。

『すうー……。ぐひ、けほ、けほっ……。！』

『咳き込むくらいなら止めれば？ タバコ。……。ほい、霞もリンゴ食べる？』

『ウチ、まだご飯が途中や。後で貰うわあ。』

『うるせーな。こういうのも社会勉強つつーんだよ。』

そこにあるのは同年代の仲間らしい会話。

ごく有触れたこんな声の交差が霞と雪風にあっては中々成立しない日常なのであるが、奇しくも鬼の上司と今年の火の出るような艦隊訓練による一連のシゴキにより、今日は喧嘩の体裁とはならず霞の目に映る。お互いに目も合わせずに、片や霞は霞の横で座ってリンゴを切り、片や雪風は僅かに開いた舷窓の真下で相変わらず咳込みながらの喫煙が続けている中、もぐもぐと口を動かしつつ霞が放った言葉にちゃんと二人は各々の声を返して、一つの話題に拳ではなく声を用いてのふれあいとなる。

『ん、ん。むあ、そうや。雪風、提出物もう書いてもうたん？ 有明湾で戦隊教練終わってから、戦隊長が出しはったの。』

『うええ、けほ・・・！ やっぱ、そういや明日じゃねーかよ、提出。乙種戦技んとこまだ書いてねーや。おい猿、オメーやったか？』
『ハッ、のんきだなあ、アンタ。アタシは昨日のウチに半分は書いてちゃったよ。』

『なに言うてはるんや。霞姉さんの、ウチの写しただけやん。』

「私立神通学校」の別名を持つ二水戦における艦魂達の生活では、割と頻繁に駆逐艦の艦魂達に出される宿題の存在。人間の世間一般にもよくある家に帰ってからのお勉強であるが、これをめんどくさいと感じて中々手がつかない者が艦魂にもいるのも、これまた人間の世界にも共通する物である。

おまけにまだ殆ど終わっていない雪風も然り、ズルをした霞も然り、宿題の残りが明日提出にも関わらず終わっていない状況は同じで、既になんとか自力で片付けていた霞に答案を見せてくれと頼んでくる始末。犬猿の仲の筈なのにこういう所は何故かこの二人は似ていて、一度意気投合して協力し合うとその行動力は並大抵の物ではない。

霞がようやく半分以上を食べ終えた碗を一度机に置き、頼まれて取り出したノートを見せてやるや、なんと霞が食卓代わりにしていた木箱まで勉強机として取り上げられてしまった。

『あ。う、ウチまだ食べ終わってへんのにい・・・。』

『うつせー！ こちとら親方にまた怒られちまうかしんねーんだ！』

『どうせ碗3つしか無いんだから良いじゃん、霞。とりあえず残りやっちゃわないとマズイの。ほらどけ！』

3人揃って喧嘩にならない今宵は、自分のペースでゆっくりと食べれる夕飯と供に、霰が普段心の内で抱く願望が現実となった夜。とてもささやかな願いながらも、それが叶った今夜は霰にとっては笑顔が多い時間となる筈であったが、例に漏れずに霞と雪風の行動によっていつもの通りご破算となる。

おかげで霰はしばしの間、自分の部屋にも関わらず部屋の隅っこにて勉強の邪魔にならぬよう箸を進め、宿題の記入を行う霞と雪風を見守る事となった。

『くっそー。乙種戦技って苦手なんだよなあ。大体、飛行機になんて弾当たるのかあ？』

『雪風、対空戦闘苦手やもんなあ。周防灘の訓練の時も、散々戦隊長に怒られてはったしなあ。』

『目で追っかけてばっかだから当たらないんだよ。的速的針を把握して未来位置に撃つ分には魚雷と同じじゃん。匂い嗅いで撃つ訳でもなし。』

『ケッ！ ああ、そうかよ。猿は器用で良いな。』

『喧嘩はあかんや。んぐ、んぐ……。』

一応は疲労のご利益で喧嘩に発展しそうな雰囲気は無いが、どちらかが放つ一言が火種になるのは日常茶飯事。故に霰はご飯を食べながらも二人から目を離す事が出来ず、僅かにハラハラとする胸の内を一向に解消できないまままで食べた夕飯の味は、残念ながら後の霰の記憶に殆ど残らないのであった。

まったく困り者の二人であった。

第二一九話 「合流」

昭和16年2月15日。

見える陸地はほとんど全てが真っ白な小松島の波間を、これまで設営応援に当たっていた明石艦^{あかし}が後にする。艦尾旗竿に掲げた軍艦旗も久々に見る紀伊水道にご満悦なのか、まだまだ寒さも強い潮風によって靡く様子は一際映える。

今日は天気も良く、流れる雲は遙か洋上の空に僅かに見えるばかりで、甲板上から見上げる分には澄み渡った青い空が一面に広がっている。第二艦隊の仲間と合流すべく沖縄県中城湾^{なかぐすく}へと向かう明石艦の旅立ちを、まるで快く迎えているようでもあった。

まして一路南へと針路をとる明石艦では、時間が経てば経つ程に甲板上の気温が上昇していく。それに伴い、ついこの間の遭難騒ぎの時のような猛吹雪なぞまるで嘘だったかの様に、明石艦の中にも外にも暖かさという物が満ちていた。

そんな過ごしやすい気温の中での船旅は3日間であるが、小松島にてこれでもかと寒さに襲われていた乗組員達にとっては、もちろん大好評の旅路である。

天候に恵まれる海原を駆けるのは明石艦としても約一ヶ月ぶり。頬を撫でていく潮風はまるで絹の如き心地良さも感じれるくらいで、課業の合間を縫って甲板上で休憩を楽しむ乗組員は非常に多い。

そしてその中には乗組員の男達と供に、先日の吹雪の夜を戦い抜いた彼女の姿もある。

『うっっん・・・くあぁっ！ やっぱ寒いより暖かい方が良いよ

ねえ。』

明石艦中央の最上甲板にて大きく頭上に両手を伸ばし、女性にしては長身ながらも細身であるその身体を弓のようにしならせつつ、明石は嬉々とした表情で明るい声を放つ。あの遭難事件の翌日から高熱に悩まされた彼女だが今では全快し、猛烈な頭痛と吐き気、倦怠感に襲撃され続ける日々は、もはや彼女にとっては10日以上も前の思い出でしかない。

それに極度な寒がり体質である明石は、陽光もポカポカと暖かい快晴が特に大好きなお天気である。向かう先はそんな温暖が更に増した海域にある沖縄で、いつぞやその地で食べた「さーたーあんだあぎい」なるお菓子の甘さも、立て続けに明石の記憶にはよみがえってくる始末。

中々に希望溢れる航海となつて、彼女の両頬は緩みっぱなしとなつた。

そしてもちろん明石の抱くそんな希望には、暖かい潮風と甘いお菓子以上に重要な物が含まれている。

忘れもしない昨年四月、桜舞い散る有明湾で喧嘩別れにも等しい形で相方と離れてしまった彼女だが、早い物で今月で既にあれから10ヶ月以上の時間が経過した。順当に行っていれば明石のかつての相方、すなわち忠は新米の海軍士官としての教育課程の8割近くを踏破している筈で、1年に及ぶ修業期間は残り2ヶ月程である。

行くと言いつ出した際には最後まで自分に黙っていた相方に腹を立てた末、謝る事も制する事も出来ずに去って行ってしまったその背は、明石の瞳に焼きついた光景としては文句無しで最も見るのが辛い絵でもある。その上で最後にお互いの顔を見て、最後にそれぞれの声を聞いて、最後に言葉のやりとりをしたのは、明石にとっても忠にとっても別れる直前にした言い争いの時。お互いに頑張つてと励ましあつた末に再会を誓った訳ではなく、言いたい事も自分の気

持ちも全く伝えられないままであった。

あと2ヶ月かぁ・・・。

いつの間にか甲板の上で一人となって立ち尽くし、首の後ろで束ねた髪を暖かい潮風に靡かせながら押し黙っていた明石の脳裏に、まるで静かな水面に前触れ無く浮かんでくる泡のようにポツリと出てきた言葉。その言葉に込められる自分の気持ちは焦りなのか、それとも待ち遠しいのか、当の本人である明石自身にもよく解らない感じであった。

ただ、待ち遠しいのはそのまま良いとしても、焦りが有るという事は、相方との再会に対して明石の中の何かが憂いを抱いているからに他ならない。次いでそれは、きっと自分がまだまだお師匠様からの教えを体現できていない身の上だから、という部分に問題があるのだろうと明石は声も出さずに一人納得。

すると自分の至らぬ点を胸の内側で感じたにも関わらずその顔には微笑が浮かんでおり、やがて顔を上げて甲板上を歩いていく彼女の足取りもまた、何がしかの自分の短所を思い知った直後にしては極めて軽やかな物となっていた。

『中城湾まではあと2日か。じゅーぶん！ 英語と看護術のお勉強やろっと！』

目標と自分の位置が解れば、目の前の階段を上る事に頑張れる明石。ある意味では極めて短絡的な思考と言えなくも無いが、明石が誇る最大の武器とも言えるのがこの頑張り屋さん気質。「一流の淑女」に近づかんが為、甲板でのひなたぼっこを早々に切り上げて自室へと戻り、苦手な英語を始めとするお勉強に打ち込むのであった。

2月18日。

明石艦は南国の地、沖縄県は中城湾に到着。空と海のどちらにも広がる澄み渡った清涼な青色と、まだ冬である2月にも関わらず陸地一面に望める沖縄の新緑が、ここまで旅してきた明石艦の乗組員達を出迎える。鮮やかな花も相応に沿岸の緑に混じっており、海岸から見える田園では既に田植えは終わっている等、すっかり春の様相を呈していた。

『あ、アレは明石だよ。おーい、明石ー！』

『お、戻ったんだね。明石ー、おかえりー。』

やがてそんな中城湾の一角には、艦の命達の元気な声が上がる。広大な中城湾の中央部は昨年の艦隊訓練でも使用した艦隊の錨泊地で、少し前より第二艦隊の各艦が来航してその身を休めている波間である。連合艦隊に数ある艦隊の中でも比較的所属艦艇数が多い第二艦隊であるから、湾に並んだ艦影と軍艦旗の連なる様は中々に格好の良い光景となっており、今からその一角に参加する事になる明石艦では、乗組員にあっても艦魂にあっても士気が自然と向上するという物だ。

『ただいまー！ 今日からまたお世話になります！』

久々に見た中城湾の光景と仲間達の姿。艦隊訓練の合間の休暇中なのか、在泊の艦艇の中には洗濯物を甲板上に翻している艦もチラホラと見え、停泊艦と陸地の合間の海上には上陸の兵員を乗せた短艇も確認できる。次いで艦隊各艦の甲板から望む湾内の砂浜でも、地元の子供達が元気な声を上げて走り回り、風に揺れるソテツの木

々の隙間からは、民家の屋根にて今日も破邪の視線を周囲に投げているシーサーの勇姿を覗く事が出来る。

訪問した第二艦隊も沖縄の人々も、極めてのんびりとした一時を送っているようだ。

やがて明石艦が指定の位置へと錨を降ろすと、艦尾旗竿の軍艦旗と共に艦首旗竿には日章旗一旒が翻される。艦首旗とも呼ばれるこの旗は停泊中の艦艇のみに掲げる一種の信号旗のような物で、これまた軍艦旗と同様に午前8時に掲揚し、日没時に降ろすように規則で決められている物である。

おかげでまだ主錨の諸作業で忙しい艦首甲板は、そんな艦首旗を掲げる作業に携わる乗組員も合流して活気に溢れるが、艦橋を挟んだ艦中央部、そして艦尾側でも賑やかさが段々と増していく。

その理由は明石艦の左右両舷へと群がってくる数多くの短艇に有った。

『おいおい、有明湾で随分派手に訓練したんだな。修理部品の山だ。』

『うあ、なんだこりゃ？ 舷窓の覆い？ 波浪で割れたのかな？』

『いや、特務艦長が話してるの聞いたんだけどよ。何でも偏弾射撃で夾叉判定が出ちまったらしい。』

『おう、俺も聞いたぜ。よほどスレスレの至近弾だったみたいだ。水柱の衝撃で長官室の舷窓がぶっ飛んじまったんだと。確か四戦隊の烏海艦ちようかいだったかな。』

大小様々な大きさの短艇がまるでカルガモの親子の様に連なっている明石艦の乾舷を、甲板上の手摺より乗組員達が見下ろしながら声を交える。

その会話の中にあつたように第二艦隊中から集まつてきた多くの短艇は、明石艦への客人を乗せて集まつて来た訳ではない。しばらくお留守にしていた間に艦隊内で溜まつた要修理部品を、ここぞとばかりに運び込んだのであり、室積沖で明石艦と別れて以来行つてきたという訓練が如何に激しい物だったかを、声も無く明石艦の乗組員達に物語る。だが同時に、ようやく沖縄へとやって来て合流したというのに、しばらくは明石艦では満足な休養に浸る事が出来ないのである事もまた示していた。

羅針艦橋内でも錨を降ろして間もない内に群がる修理部品の山を受け、ちょうど艦橋内に居た工作部長と主計長が思わず残念そうな声を漏らしている。

『やゝれやれ。こりゃ工作部はしばらく上陸は無しだな。せめてウマイメシくらいは世話してやらんとな、主計長。』

『はっはっは。ごもつともです。沖縄菓子か黒砂糖でも買つてきますかね。』

いくら整備補修任務を専門にこなす明石艦ではあつても、ついこの前までの小松島での設営応援に引き続き形での工作任務に直面した事は、この明石艦幹部兩名にあつてもちよつと面食らうような感も有る状況であつた。

もっとも彼らが些か面倒そうに呟いた言葉の裏は、何も乗組んだお船が工作任務専門のお仕事を引き受ける艦艇だった事を呪い、休む間も無い中でお仕事に励まねばならない事に憂鬱を覚えた、という事では決して無い。

そもそも海軍艦艇に限らずお船という物は、その船体の中にある

程度の修理や補修を行う為の工作力を有しているのが一般的であり、それは船体の大きさに比例してより顕著になって行く傾向にある。漁船の様な小さな船舶では望むべくも無いが、人智を超越した大自然的の猛威を常に孕む海洋を生きる場とするお船は、それ相応に波浪や強風、予測不能な潮流に流されたり、暗礁に乗り上げての座礁等で、古来より普通に航行してても損害を被る事が非常に多い代物だ。しかも超長距離の旅路の最中にそんな事故と遭遇してしまうのだから、母港に戻るどころか満足な修理補修を行うだけの陸上設備が無い海域で窮地に陥る事が、至極当然の様に予想される。

それ故に特に海で活躍するお船に対しては自己完結能力の大きな部分として、ある程度の工作力が必ず付与されるようになっており、なまじそんな海を駆けてさらに銃砲での撃ち合いを演じるという海軍艦艇にあつては、別に帝国海軍に限らずに民間船とは比べ物にならない程の高い工作力が与えられている。艦搭載の短艇の一部分が壊れたり等した場合でも、いちいち工廠に戻ったりしてはともドンパチなぞ実施できないし、ほんの僅かな損傷ぐらいで戦力としてカウントできない状態となる艦艇など、戦うお船としてはハッキリ言つて致命的な欠陥を抱えていると断しても過言ではない。

とにかく損傷や故障に対して堅牢な事、すなわちお船としてのタフさが、一隻の海軍艦艇にとっては非常に重要な能力の一つである。人間に例えれば、自己治癒能力に優れている点が特徴なのだ。

そしてそんな海軍艦艇事情を栄えある帝国海軍が知らない筈は無く、組織内で用いる規則の上でもなるべく各艦固有の工作力を發揮して対処する事が、日常的な運用の上でもちゃんと定められていた。仮に一隻の艦艇で故障、または損傷が発生した場合、具合の程度にもよるが一番最初に想定する事になっている工作力は、当該艦艇の持つ個艦工作力なのである。ただ、一隻のお船の工作力と言つても設備も人数も限られているから、より大きな規模での工作力が必要な時には当該艦艇の所属する戦隊司令部に上申し、同戦隊内の僚

艦に協力を仰いでの連合工作力でもって対処するのだ。

だがしかし、厄介な事に海軍艦艇は時代の最先端の技術を結集して作った科学力、技術力の塊であり、鉄板を切った張ったするくらいで修理補修を完了できる側面は、殊に現代であつては非常に希である。転輪羅針儀、機械式計算機を埋め込んだ管制装置、特殊な工法で製作した金属部品、そして魚雷や艦砲に付属する精密機器なんかは、グラインダーや鑄造釜程度の工作設備ではどだい修理なぞ不可能な物ばかり。気合と根性でハンマーを振り回して何とかなるほど、近代の科学力は甘くは無いのだ。

そしてここに求められる高精度の工作力を提供するべく活動するのが、明石艦を含めた帝国海軍の工作艦という艦艇なのである。

工作力発揮の選択肢において優先順位は3番目に当たり、連合工作でも手に負えない規模の修理補修、もしくは精密機械や特殊構造の物品の修理補修にその真価を発揮するのであり、「壊れたから工作艦で修理」等という単純な理論でお仕事が回って来る事は無い。損傷や故障の具合をちゃんと査定し、その度合いの深刻さを判断した上で工作艦の工作力が用いられる様に、ちゃんと帝国海軍では法令に則って決められているのである。

ついでに蛇足ながら工作艦の能力でもって不足がある場合は、最後の手段として工廠の工作力を頼む形になる。竜骨^{キール}まで及んだ大損傷や武装にまで渡る改装など、大きな起重機や重量物の取り扱いを含んだ工作力は、やはり陸上設備として備えている工廠が最も優秀なのだ。

さて、そんな艦隊における工作力の事情を知る工作部長であるから、デリックで明石艦の甲板上へと次々に運ばれてくる要修理部品

の山に、些か疑うような色合いもある目で視線を這わせていく。先程まで居た羅針艦橋は風の通りが些か悪く暑さが目立つ所であったが、甲板上へと足を運ぶとそこには涼しげな南国の潮風が緩やかに流れており、僅かに靡く鼻下の髭に彼は心地良さを覚える。おかげで疑いの眼差しといっても彼は寄せられた修理品に対し、工作艦たる明石艦の利用に相当しない物を粗探した末に、送り返してやろう等と考えたりはしない。せいぜい目に留まった多様な修理品に愚痴を吐き、これから始まる多忙な日々で溜まるであろう鬱憤を事前に発散してやるのが関の山であった。

『むう。こりゃ、内火艇の煙突か。ははぁん。取り外すの忘れて、艦砲の爆風でぶっ壊れたんだな。まったく、最近だらしねえな。』

こうして明石艦の激務は小松島から延長される形で実施される事となり、ここ3日間に渡って静かだった艦内には、再び工作機械による合唱が響き渡る事になった。

一方その頃、艦の命である明石もまた、白い砂浜と空色の海、そして待ちに待った温暖な気候に浸る間もなく、到着早々に第二艦隊旗艦である四戦隊の高雄艦^{たかお}へ来るようにと指示を受けていた。

もっとも彼女は何がしかの失態によって、怒られる為に呼びつけられた訳ではない。およそ一ヶ月の間、艦隊を離れていた明石の事を、優しく心配りも細やかな上官である高雄が気遣ってくれ、明石のいない間に起こった艦隊内での情勢を個人教授してくれる為であった。まして根っからの冗談好きで非常に陽気な人柄を持つ高雄は、賑やかな空気が好きである明石が非常に好感を持っている先輩艦魂

の一人。

ゆっくりと暖かい沖縄の気候に癒される時間も良いが、それに代わって話す時間を設ける価値があると明石が思えるのが、天下の第二艦隊旗艦の命である高雄という艦魂であった。

『あ、高雄さん！ ご苦労様です、本日戻りましたあ。』

『おう、明石。おかえり。呼んだのに待たせちゃってゴメンね。』

高雄艦艦橋の艦長休憩室へと通されていた明石は、ドアを開けるや手を振りながら近づいてくる高雄に笑みを見せる。

司令長官や艦長も揃って愛宕艦へと出向いている間、大きな高雄艦の艦橋構造部の中は非常に静かな物で、人の気配が無い高価な内装を施したお部屋は艦魂達が憩いを得る最高の空間。艦橋の中層艦首側に位置する艦長休憩室は士官室なんかと比べると非常に狭い一室だが、艦長さん用に豪華な調度品が揃えられており、清潔な純白を基調とした舷窓のカーテンやテーブルクロス、椅子のカバーの色合いが、床一面にしわも無く敷かれた緑色のカーペットに良く映える。

そんな艦長休憩室にて顔を合わせた二人は、腰が沈むような感覚すらもあるふかふかの椅子に腰掛けての会話を弾ませた。

話す内容の大きな物は、南支方面行動となって第二艦隊から分派されていた二航戦、七戦隊の事で、まったく知らなかった明石は同期の仲であった飛龍ひりゅうが居なくなっただ事にちよっぴり驚く。しかしすぐに高雄はそんな明石の僅かな心の変化を読み取り、仲間との一時の別れを明石自身のお勉強熱へと上手く結び付けてみせた。

『二航戦も七戦隊も所属は第二艦隊のまま。他に第一艦隊からも部隊は派遣されて、あの辺を作戦海域にしてる第二遣支艦隊あしがらの足柄少将指揮下に今は入ってるんだ。向こうも所属はそのままだから、

さしずめ連合艦隊と支那方面艦隊との合同編成ってとこさ。さて、この部隊編成がどういう事か解るかな、明石クン？」

『あ！　こ、これ、前に習った軍隊区分での編成って事ですか！？』
『そう、ご名答。第二遣支艦隊は艦隊編成の立場の上ではあたしら第二艦隊とドッコイだけど、持ってる戦力は外戦部隊の連合艦隊に比べればずっと少ないし、艦隊航空戦力なんて艦搭載の水上機くらいが関の山。水雷戦隊も駆逐隊が2個あるくらいなんだ。そこで増強の為にあたしから部隊が抽出されたって寸法さ。作戦期間が終わればまた原隊復帰するよ。』

容姿の上では明石より5歳くらい年上の女性像を持つ高雄。艦魂社会でも断然に若い方に分類される彼女だが、竣工以来ずっと第二艦隊旗艦をこなして来た経験のせいかな、それとも持ってる生まれた人柄がそうなのか、常に明るい口調で極めて解り易く物事を語ってくれるその様は、まだまだ尻の青い新米艦魂である明石にとっては大変に有難い部分である。軽くウェーブの掛かった肩を覆うくらいの長さの黒髪を靡かせ、ニコニコと笑みを浮かべながら先生ぶった様な言い方をする高雄のおかげで、そも勉強熱心な一面を持つ明石は心の欲求を意図せずとも晴らしてもらえたような物だった。

『ぬあるほどお。こういう風に部隊って編成されるんですね。』
『そうだよ。ま、そうは言っても寄せ集めた分には変わりはないから、艦長打ち合わせ、補給打ち合わせ、通信打ち合わせ、航海打ち合わせ、錨泊地打ち合わせってな具合に、事前整合の為に会議はかなり重点的にやるモンなんだ。だから足柄さんトコの長官室は人間達の会議ですし詰め状態だし、七戦隊の戦隊旗艦やってる熊野^{くまの}辺りでも、たぶん艦魂^{みんな}達で会議をやってるだろね。もう一部の部隊は仏印沿岸に出てるって話だけど。』

さすがに経験豊富な高雄が言った内容は、実際に軍隊区分での編成が成された後に生じる初歩的な業務の事。小松島到着初日に明石も実際にその目と耳で知った、職域が違ふ多くの部署と同じ目標に向かつて進む為に意見を合わせる話し合いで、整合という名のお仕事である。明石の分身の中ですらあれだけ発見の有った打ち合わせだったのに、それが部隊規模にまで発展するといふのだから、仲間達の大変さを明石はひしひしと感じた。

ただ、それは今現在の明石や高雄にとっても他人事ではない。高雄は些か大げさな感じもする動作で組んでいた足を組み直すと、自身のノートに何やら書き込んでいる明石に再び声を放ってそれを教えてやった。

『第二艦隊も最近は同じさ。ほら、七戦隊は二水戦と組んで夜戦隊を編成してたし、二航戦もしばらく第二艦隊専属の航空部隊みたいなモンだっただろ？　それが欠けちゃってるんだから、水雷戦隊の襲撃教練や対空戦闘教練に結構影響があってねえ。』

『あ、なるほど。残ってる一等巡の戦隊って那智^{なち}さんと羽黒^{はぐろ}さんの五戦隊ですもんね。攻撃側と防御側に別れてもたった一隻づつじゃ、支援役にはならないんですね？』

『ああ、その通り。一応あたしんとこの二小隊を付けてあげたんだけど、あたしら四戦隊は司令部持ちの基幹戦隊だから、今まで夜戦隊に入った事なんかなくてさ。打ち合わせはしたんだけど成績がボロボロで、神通中尉^{じんつう}が怒って怒ってもうたゝいへんだったよお。ははは。』

どうやら第二艦隊でも有ったらしい部隊規模での打ち合わせだが、実施したからといって必ずしも成功の結果に終わるとは限らない。十分に気をつけて行った最近の訓練だったが残念ながら成績不良と

なり、艦隊主力の水雷戦隊においての訓練では短気な神通の爆弾が大爆発。上官でも怒ると食ってかかる彼女の言は熾烈を極め、階級の上下なぞ無視して『このガキが！』と発言するなど、教練終了後の反省会は一触即発の空気が支配する大混乱の様相となってしまうらしい。

今に解った事ではないが、20代後半の完全な成人女性の容姿ながらも、大変な癪癪持ちの神通は第二艦隊きつての大問題児。殊に彼女のお仕事の最重要項目である水雷戦に関しては非常に強い自尊心を剥き出しにし、相手の面目や体面など屁とも思わずに暴言を吐いてしまう。それが部下に向く分には「怖い上司の勘気」で済むものであろうが、短過ぎる導火線に火をつけたら最後、艦隊旗艦である高雄や愛宕にだって突っかかってくるのであるから質が悪い。

もし彼女が艦魂ではなく人間の海軍軍人なら、間違いなく謹慎か譴責処分を食らっている代物だ。

『あゝもお。神通はすぐ怒っちゃうんですよねえ。ホント、なんかすいませえん・・・。』

『あっはっは。那珂中尉もそうやって必死こいて頭下げてきたよ。ま、神通中尉が言ってた砲撃成績の不良は別に間違いではなかったからねえ。その辺を上手く加賀^{かが}さんが纏めてくれて、とりあえずは殴り合いにはならなかったよ。いやあ、しかし参った参ったあ。あはは。』

『あははは。』

自分が居ない間にまたぞろ諍いを起こしていた親友だったが、明石は高雄の言葉についつい笑ってしまう。真っ向から神通の毒舌を受けた方々の苦労は察しつつも、まるで人物として成長しない彼女の姿は、明石にとってはおちゃってだけ同じ艦魂として、同じ女性として、自分との距離を縮める事ができたかのように思えたのだ。

そして高雄もまた、神通という年齢の上では先輩にあたる艦魂の困った所を明石と一緒に笑うだけで、別段責めるような台詞も吐かなければ、そんな気持ちも微塵も無い。

しばらくぶりの第二艦隊の近況を伝えると同時に明石の勉強意欲に応え、さらには笑みをも浮かべさせる事に彼女は終始し、久々である明石の第二艦隊勤務を気持ち良く再開させてやったのだ。

おかげでその翌日より、さっそく明石は仲間達の健康診断、次いで勉強へと元気に励めたのであった。

第一二〇話 「荒れ模様」

昭和16年2月21日。

常夏の沖縄は透き通った青い海と白い砂浜、そして陸地の緑と鮮やかな花々の色に溢れ、猛訓練の合間のささやかな休暇を楽しむ第二艦隊の面々は、豊かな色彩で描かれる景色に心を和ませている。しばらく停泊したままの各艦でたまに行われる訓練は、配置訓練や銃砲等の念入りな手入れ、或いは訓練というよりも競技の形に近い武技教練が殆どであり、颯爽と波を蹴って派手に銃砲をぶっ放す艦隊訓練からは少しだけ距離を置いていた。

おかげでここ数日の第二艦隊各艦では、軍艦旗よりも洗濯物が靡く光景の方が一層目立つ。航海中は海上のうねり具合やお天気によって中々洗濯物を干す事ができないからで、多くの乗組員達の服は勿論、各艦で航海科が頻繁に使う信号旗ですら、今日は虫干しの為に縦に伸びた索に連なって陽光を浴びている始末だ。

そんな第二艦隊の各艦の中、賑やかに工作機械のざわめきを放っているのは明石艦^{あかし}である。

しばらく留守にしていた第二艦隊における要修理部品の山はまだ片付いておらず、今日も午前8時に軍艦旗と艦首旗が掲揚されるや、明石艦の甲板上は工作業務で大賑わいの状態となった。過ぎやすい沖縄とは言っても直射日光を一日中浴びた明石艦は、そもそものが鉄の塊である事から艦内温度が高くなってしまうので、朝一番の乗組員達によるお仕事は甲板上の至る所に張り巡らす天幕の展開作業であり、当然これは工作部の人員だけではなく兵科の乗組員

達も含んだ大仕事。もちろん一日の終わりにはこの天幕の収納もこなす必要がある為、明石艦では工作部、艦固有の乗組員に区別無く、朝から晩まで文字通り総出での忙しい日常となっていた。

『あれ？ これ板金終わってねえぞ。搬出品に混じっちゃうから、右舷の甲板に寄せとけよ。』

『おいおいおい！ まだ起重機上げんなよ！ もう一本、索を縛ってからだ！』

『班長、留め金ってこの径で合ってますか？ 工作室の連中に訊いたら、種類が一杯有り過ぎてちよつと解んないって言ってるんですけど。』

『ええ？ 伝票、コレ誤記なの？ いやいや勘弁してくれよお。よし、工作部長から愛宕艦あたごに話をつけてもらおう。こんな明日じゃ終わらないもん。』

各々が上げる声は同じ明石艦としてのお仕事に接しての物であるが、その内容は艦側の向こうに望める沖縄の風景の如く、それぞれが違った色合いを持っている。艦隊における整備補修任務に専念するという極めて明快なお役目を明石艦は与えられている筈だが、その業務形態は工作内容によって細分化され、乗組員達が各々で行うお仕事は総じて多岐に及ぶ物であった。

艦隊訓練の合間の休養を狙うようにこうして忙しいのが、帝国海軍最新鋭工作艦である明石艦の泣き所と言えるかも知れない。

そしてそのご利益で今日も騒音によってお勉強を邪魔されてしまった明石は、ちよつと気分転換でもしようと思って大繁盛の競り市の如き様相を呈している自身の分身を散歩していた。

艦首から艦尾に至るまで段差が無い平甲板型と呼ばれる船体形式を持つ明石艦。その最上甲板は最大20メートルという一等巡洋艦並みの艦幅を持つ事も手伝って割と歩きやすい場所なのだが、あちこちに散らばるようにして置かれた多くの資材、設備、工具、そしてそれに寄り添う乗組員達の姿によって、本日はとても真っ直ぐ歩ける状態には無い。

だから明石はゆっくりと小さな歩幅で障害物を縫うように歩みを進め、同時にそこらで見かける工作作業や修理部品なんかにキョロキョロと視線を配っている。次いで顎の辺りに指を添えながら彼女は何かを呟き、小松島で見たのとはまた違った物品や作業に興味を示していた。

『へええ、これは配管かなあ。両端にネジ切ってるもんね。あ、これは鋼索の留め金だ。そういえば艦砲射撃の衝撃でぶっちりんて切れちゃったって、那智^{なち}さんが昨日辺り言ってたっけ。あは、やっぱり伝票に那智^{なち}って書いてあるう。』

行く先々で楽しそうに声を上げ、時にはその場にしゃがみこんで実際に物品を手にとってみたりする明石。

周囲の乗組員達からは彼女の姿は決して見えてはいないものの、160センチ半ばと女性にしては大柄な身体を持ち、しかも温暖な沖縄へとやってきてから衣替えした真っ白な第二種軍装は、そんな明石の姿を艦体のねずみ色とリノリウムの朱色の上で一際目立たせる。甲板端の手すりから向こうに広がる透き通った青色の波間も、明石の纏う純白の第二種軍装の清らかさとその笑みの明るさを一層引き立てていた。

また、当の明石も海軍軍人の一張羅として国民からの人気が高い第二種軍装を着るのを楽しみにしていた為、お勉強を中断しての散歩中であっても決して不機嫌な心は微塵も無い。

綺麗な沖縄の風景の中を、綺麗に着飾った自分が歩く。

ただそれだけの事ながらも、一応は女性である明石は胸を躍らせているのだった。

しかし明石が乗組員達に囲まれながらご機嫌となっている最中、せっかくの天然のスポットライトたりえた陽の光が何の前触れもなく突如としてその明度を落として行き、明石や周囲の乗組員達が身につける白い服装は影を受けて、やや灰色がかった色合いへと瞬時にして変わりはじめる。

明石はちようどしゃがみこんで修理部品の伝票にまじまじと視線を這わせていた所で、急に文字が読みにくくなった事に僅かに首を捻っていたが、同時にザワザワと奇妙な風の音が聞こえてきた事でふと顔を上げた。

『およ？ な、なになな・・・？』

見上げたお空はいつの間にやら分厚い雲で覆われた曇天となっており、ついさっきまで背中を受けていたポカポカした陽光も殆ど遮られている。ちょうど明石が居た場所は天幕を張っていない所だったが、近い所にある天幕の下となった甲板は真っ暗な状態となり、そこに居た乗組員達もまた驚いてぞろぞろと這い出してきた。

『なんだあ？ なんも見えねーぞ、おい。』

『妙な空模様だな。これ沖縄独特の風か？ 気持ち悪いモワっとした潮風だ。』

『いんやあ。去年も同じ時期にここに來たが、こんな天気なんて初

めてだぞ。』

明石も感じた異変に彼等も同様に首を傾げ、そんな声を漏らしながらそれぞれが曇天の頭上を仰いだ。別に雲の流れ自体はいつにも増して高速な訳でも無いし、海面の揺らぎも荒いという表現をするには全然物足りない具合でしかない。とにかく突然に明石艦周辺の直上に分厚い雲が出現したという感じであり、甲板上の乗組員達は一斉に業務の手を止めてしまう。羅針艦橋でも窓やあちこちの扉から多くの男達が身を乗り出し、その中には特務艦長や機関長らの顔もあった。

やがて明石艦の周囲では潮風の奇妙な音色がその音量を段々と上げ始め、何処と無くただならぬ雰囲気や艦全体を包み始めていく。乗組員達も明石もその空気を敏感に察し、自分達を取り巻く状況の安危を窺うべく艦の全周に視線を投げる。明石艦の両舷の向こうで停泊している艦の艦上でもちよつとした騒ぎになっており、すぐ近くの巡洋艦では砲塔上にまで乗組員達が登って、キョロキョロと辺りの様子を眺めていた。

その刹那、潮風のざわめきで溢れる明石艦の艦上に、乗組員の誰かの物であろう声が響いた。

『うあー！！　な、なんだありゃ！？』

押し黙って周囲の状況を窺っていた者達にとっては、不意に轟く雷鳴のようにも感じたその声。明石も一瞬びっくりして思わず両肩をビクンと大きく震わせるが、声のした方へと目をやるのと同時に周りの乗組員達が皆、大きく見開いた瞳を強張らせた表情に得て、とある方角の波間の辺りに視線を釘付けにしていることに気付く。次いでつられる様に明石も彼等と同じ方角に視界を流すや、そこにあった信じられない光景に明石もまた驚愕の表情を浮かべて絶叫し

た。

『ひよええーっ！ な、なんじゃありゃーっ！？』

先程の男の声にも決して引けをとらない叫びを上げる明石。

彼女が顔を向けた明石艦右舷の遙か沖合いは、方角的には中城湾なかぐすくが大洋に口を広げる部分であり、言わずもがなその先には遙かな太平洋が広がっている。

そこには見渡す限りの水平線が延々と続いている筈なのだが、低く分厚い雲によって上から圧迫された感も強い本日只今、なんとそこには海上から曇天を穿つ様にして縦に生える、細くて白い滝の様な物体が姿を現していた。しかもまた一般的な滝とは違って、なんと下から上に昇るといふ異形を沖縄の海に映し出しており、泡だった故か白くなった海水がみるみる内に上空へと昇っていく。それも一直線に天に向かって伸びるのではなく、まるで真上から眺めた蛇の如く空中をくねくねと蛇行していくのだから、目にした者達が受ける気味の悪さと衝撃は生半可な物ではない。

辺りの水平線や僅かに海上に頭を出す島々を鑑みるに、その白い流れが発生する場所の目測での距離は大体明石艦からおよそ10キロメートルも向こうだが、それを把握すると同時に滝の巨大さが明石と乗組員達の意識に強く植えつけられる。目に映る限りでは親指くらいの太さであるも、距離を勘定すると滝の直径は優に明石艦の全長をも遙かに凌駕すると確信できる代物。

乗組員達も明石も皆、両目が飛び出るくらいに驚く表情を浮かべるのも無理は無かったが、やがてその光景を何度か見た事があるらしい者達が口々に戦慄の音色も混じった声を上げ始め、彼等の眼前に姿を現した存在の正体を示した。

それは明石も含めて、殆どの乗組員達が生涯で初めて目にした天変地異の一つだった。

『わー！ た、竜巻だー！』

『くっそ！ 航海科の見張りは何やってんだ！ 積乱雲見逃しやがって！』

『おい、みんな！ 艦の中に入れー！ 突風がくるぞー！』

陽光が遮られて辺りの風景が薄暗いのも手伝い、その白さが只ならぬ不気味さを纏って輝く。ふと気付けば彼等の耳には、あのざわざわと鳴っていた風の音色が、いつの間にやらその音階を非常に重厚な物として響き始めており、いよいよ各々の心の中に抗いような無い恐怖と危機の観念が急速に芽生え始めてくる。刹那、誰という事もなく甲板上の乗組員達は右に左にと駆け出し、啞然とするばかりだった明石も血相を変えて手近な扉へと走って逃げた。

『やべーぞ！ 走れー！』

『山口、走れ！ 短艇縛るの間に合わねーよ！ 急げ！』

『た、たつまき・・・！ わあああゝ！ た、大変だあゝ！』

船の命である明石にとっても、生まれて初めて目にした竜巻。いきなり眼前に姿を現す自然現象に明石の恐怖は容易く沸点を突破してしまい、乗組員達の後を追うように一目散で甲板を走る。その最中にも、全力疾走しているにも関わらず頬に横殴りの形で生ぬるい潮風が当たるのを明石は認め、逃げるように促した乗組員の声に有った、「突風がくる」との言葉が決して嘘ではないのだと確信した。もちろんちょっと強い風くらいの代物であれば、明石は軍帽を押さえるくらいで甲板に残ったであろうが、目の前で海水を遙か上空に巻き上げている竜巻の姿を見た手前、明石は襲ってくるらしい突風が生半可な強さでは無い事を瞬時に予測できたのである。

そして明石が飛び込むように中甲板へと続く階段のハッチを駆け下り、多くの乗組員達が右往左往している通路の一角で呼吸を整えるや、明石と彼等が足をつける甲板は突如としてグラグラと揺れ始める。例の竜巻に伴われる突風が襲ってきたのだ。

『う、うお!? こいつが突風か!?』

『結構強いぞ! どあっ・・・! み、みんな何かにつかまれ!』

『わわわー! こ、怖いよー!』

明石と10数名に及ぶ乗組員達が中腰になって隔壁にしがみつく中、艦内通路に響き渡るのは強烈さのみが誇張された豪風の音色に、激しい波を突如として受けた事で軋む艦体の悲鳴、そして彼等自身の慄くばかりの声だ。艦幅も広く喫水も深く、重さだって1万トンからある明石艦が、前触れ無く激しい動揺に襲われる事は極めて希な事態であり、艦の命も乗組員達もまったく慣れが無い艦の状況に率直な恐怖を抱く。無意識の内に頭を抑え、見える筈も無いのに頭上に目をやって、通り過ぎる突風の旋律と艦体の軋む音に息を呑んだ。

『ひいうう・・・! お、沖縄の海も怖いよー!』

小松島にてこれでもかというくらいに冬の海の恐怖を叩き込まれた明石は、こうして例え寒さなど一切無い南国の海域であっても尚、海という物は牙を覗かせてくる事を思い知る。突風と荒波の轟音に続き、竜巻によって舞い上げられた後に天空から降り注ぐ、大滝の如き海水によって。

『わあー! な、なんだこの土砂降りは!?』

『ハッチや扉は全部閉めろ! 巻き上げられた海水だ!』

『おい、艦長と運用長に連絡して来い！ 工作部の搬入出口から手荒く水が入っちまった！ 排水装置動かしてもらうんだ！』

それから30分もした頃、中城湾に出現した大竜巻はまるで暴れる楽しみを急に失ったかのように突然その威力を弱め、ハラハラとした面持ちで各艦の乗組員が舷窓越しに見守る中、波紋上に広がる小波とそよ風、そしてソテツの木々のざわめきと今にも止みそうな小雨を残して、湾の沖合いから消えた。気付けば竜巻の消えた空は、あんなに分厚くなって漂っていた雲が散り散りに引き裂かれ、やや朱色も帯びた感じのある陽光が雲の隙間から射している。さながら緑色の混ざっていない木漏れ日のようで、波間の向こうのとある一角には色鮮やかな虹までかかり、その場に居る者達が持つ恐怖と緊張に満ちたさっきまでの記憶から、些か現実感という物を奪い取って行く。

明石も含めて多くの乗組員達も祈るばかりで過ごす時間であったが、波と風の轟音もだいぶ和らいだのを見計らって彼等はやがて甲板へと顔を覗かせ始め、明石もまたおっかなびっくりの引け腰となつて、甲板へと通ずる扉より身体を半分だけ出し周囲を窺う。

『うひいゝ。も、もう大丈夫、なのかなあ・・・？』

そう呟きながら彼女はキョロキョロと左右を見渡し、まるで海中から浮上したかのように全面水浸しとなっている甲板に憂う物が存在しないか探している。幸いにも甲板上に放置せざるを得なかった要修理物品に関しては飛ばされた物は無いようで、酷く海水を被ってしまった為に念入りな洗浄をせねばならないくらいの被害らしい。その内に明石は靴底に水が滴るような状態の甲板をゆっくりと歩い

てみたが、自身の分身において損傷は全く見て取れず、恐怖に押し掛かられっぱなしの中で無事だった事にひとまず安堵。力なく垂れた肩を上下させつつ、大きく長い溜息を吐くのだった。

その一方、乗組員達による総出での艦体検査も行われていたが、その結果はやはり艦の命である明石がたどり着いた物と同じであり、伊藤特務艦長らも不意の天変地異に遭遇しながら何事も無かった事に胸を撫で下ろす。艦内では多くの工作機械が稼動していたにも関わらず怪我人も皆無で、お仕事として実施している要修理物品に余計な手間がかかる羽目になってしまったのが、数少ない被害といった所か。

まさに不幸中の幸いであった。

沖縄の第二艦隊はこうして海の脅威に瀕し、古賀長官すらも顔色を変えるほどの大騒ぎとなった訳だが、もともと太平洋に対し口を開けた形である開湾とはこのように海洋独特の気候が生起しやすい側面が有り、だからこそ良港とされる港湾は陸地の半島形状等によって囲まれた海域に設定されている。入出港に多少の手間と時間は掛かるが、年がら年中今回の第二艦隊のように大荒れ模様に翻弄されては、お船にとってはもちろん宜しくない。

栄えある帝国海軍だってお船を運用する分には変わらないからそれは同じで、横須賀や佐世保のような立派な軍港もその例からは漏れてはいないのだ。

そしてそんな静かな海、穏やかな海を軍港としての最大の自慢と

しているのが、明石や神通^{じんつう}の所属鎮守府でもあり、我が家の如き感覚を抱いている呉軍港である。本州の山陽地方を背後にして四国という大きな蓋を持ち、その狭間にある瀬戸内海には大小多くの島々もまた軒を連ね、玄関口たる豊後水道や紀伊水道からでは直線航行する事が絶対に不可能な地形。まさに太平洋から迫る波に対して天然の防波堤となっており、お船の種族の中で最も精強な海軍艦艇に憩いと安らぎの場を与えてやれる素晴らしい場所だった。

おかげさまで呉軍港は本日も昔日とかわらぬ大繁盛の日々を謳歌し、各種船渠や棧橋の眼前にあたる軍港のど真ん中では、昨年8月の進水以来鋭意艤装^{やまじ}中の大和艦がその艦影をより完成形へと近づけていた。銀色の雲と所々に残る雪がやや寂寥感を滲ませるも、大和艦は既に煙突やマスト、そして背筋の通った美しい女性の立ち姿の如き艦橋構造物も整え始めており、後年に至って多くの人間達を魅了する事になるその姿をだいぶ備えつつあった。

ただそんな大和艦の艤装事情。ここ最近、実はちょっとした問題にもなっていて、大和艦艦内に響く多様な工作機械の音には、それについてのやり取りの声が混じっていた。

『ハア？ 今頃んなって司令部設備の要領出てきたんですか？』

『ホント困るよなあ。計画繰上げしろつつって早く終わらせたのに、出来上がってからノコノコ見に来て不足だとかね。』

『自分らで繰上げしろって言ったの忘れてるだろ、あいつ等……。これ絶対無理だよなあ。』

声を上げているのは大和艦の艤装に携わる3名の技術士官の者達で、濃紺の第一種軍装を身に纏い、それぞれが携わっている物件の物であろう丸めた図面を小脇に抱えながら、まだまだ整頓なぞちっともされていない大和艦の艦内通路を歩いている。それぞれ30代

も半ばを迎えたベテランながらもふくれっ面で愚痴を上げている辺り、どうもそのご機嫌は鋭い角度で傾いているらしい。

理由は彼等の声に有った様に、大和艦の建造計画に関するここ最近の動向に有る。

およそ20年ぶりに建造される帝国海軍最新鋭の戦艦である大和艦は、次代の帝国海軍の輝ける象徴として、そしてまごう事無き世界最強の戦闘艦艇として君臨する事が期待されており、まだ海軍内部ですら軍機に包まれた存在ながらも上層部での期待感は相当の物となっている。ただでさえ帝国海軍の戦艦は大正生まれの旧式艦が多いのだから、海軍軍備の面と言う装備の更新として早く戦列には加わって欲しいし、欧州戦線と支那事変、次いで米国や英国との緊張が増しつつあるここ数年来の事情を鑑みても、大和艦の就役は1秒でも速くなる事が切望されていた。

故に帝国海軍の作戦行動全般を職務として掌る軍令部からは、この大和艦の建造計画の繰上げがこれまで何度か打診され、大和艦では工員達の交代制勤務等も実施して昼夜兼行での艤装工事が展開されている。しかしこれは、実際に建造に携わる呉工廠側にあつて大変な労力を注ぐ業務へと繋がり、帝国海軍内での組織としての指示故に従えども率直な所では不本意な業務命令であつた。なぜなら呉海軍工廠は新型艦の建造は元より、既存の艦艇の改装、入渠整備、各種新規兵器類の試験等も行っているものであり、いくら帝国海軍最新鋭戦艦と言えどもそのみに能力を集中させる訳には行かない事情を有していたからである。

規模の大きい工廠であろうとも設備も人員も無限ではない。

各々の業務項目の内容を精査し、完了期日をちゃんと明確にした上で設備と人員を割り振り、停滞も無く能率に優れた物へと昇華させてお仕事は進めていく物である。至極当然の事だが大和艦の完成を急ぐからと言って、改装作業中の艦艇や整備補修の必要な艦艇を放置して良い訳が無いのだ。

そして呉海軍工廠のこうした業務計画を見事にひっくり返して見せたのが、通達として回ってきた大和艦艤装工事における工期繰上げと、実際に艦を現場で使う事になる連合艦隊司令部からの艤装に対する注文であった。

この工事はいつまでに終わらせるから、必要な人員と設備はこれくらい。

今日はこの設備とこの人員に余裕があるから、工事内容はこれを行う。

必要な部材がまだ揃っていないから、今日はこの工事ではなくこっちの工事を行う。

などと言った様に工事の進捗は多くの要因からいつ何時、どこで何をするかが全て計画上で決められていて、工事実施日当日となつて意図せぬ停滞が起らない様に管理されている。呉海軍工廠の艤装工事管理をする部署にても、部屋の一部に大きくこの計画表が張り出され、常に遅れが無いように、そして遅れがあったなら何処で挽回できるかを、常に見定めれるようになっていた。

ところがどっこい、まず実際に大和艦を駒として使う事になる軍司令部や連合艦隊司令部から工期繰上げを打診された事で、呉工廠側が思い描いていた計画は全体の幅がグンと狭められてしまった。おかげで当初予定していた部材の調達なんかは、同じ工廠内の製造部署、及び納入する業者に納期の繰上げを打診しなければならないし、設備と人員の使用予定なんかは元々の計画がすっかり解らなくなるくらい的大幅な改定が必要となる。おまけに各工程における時間的な余裕も削られてしまうから、工事終了後の検査の予定だって前に詰めないとダメである。

当然の如く大和艦の艤装工事計画は、呉工廠内を走る朝の通勤電車を思わせる程のギューギュー詰めの状態へとなってしまいう訳であ

るが、さらにさらに質の悪い事にここに来て湧いた艤装内容への注文が、大和艦における工事の混乱に拍車をかける。声を上げてきたのは完成した暁には大和艦に将旗を翻し、その立派な性能を現場で独占する事になる連合艦隊司令部の面々で、主に長官室関連の内装に対する要望が殆どであった。

ここで会議するから、ここに本棚が欲しい。

艦隊司令部での機密書類保管の為、ここに新しく鍵付きの倉庫が欲しい。

最近の司令部運用ではこれじゃ机が足りない。だからもっと増やして欲しい。

掻い摘んで挙げるとそんな所であるが、ただでさえ苦しい艤装計画の隙間に強引に割り込んでくる格好となるこのような要望は、当たり前前の事ではあるが工事関係者からの相当な反発を生んだ。大体が大和艦の早期就役を切望して来た者達の中には、他の誰でもないこの連合艦隊司令部も含まれているのである。

自分で早くしろと言っておいて、自分で工期を遅らせる内容を注文してくる。

なんと自分勝手な奴等だ！

工廠で日夜工事に汗を流す男達に、そんな認識と蔑視の心を与えてしまうのも無理は無かった。

おかげでこの後しばらくしてから、大和艦艤装工事の時期を巡って工廠側と海軍省側での会議が持たれた際、そこに生じたのは文官による話し合いとは思えぬ程の荒れに荒れた空気であった。

『司令部設備拡充は現行計画どおりで行きます。本来は来年6月の引渡しだったんです。それを繰り上げてる上じゃ、絶対工期の面で遅れます。無理、いや、不可能です。』

『やや、まあまあ。解った。この際、就役時期が若干遅れても良いと、連合艦隊でも軍令部でも言ってる。最後の方に回してくれても構わんから、なんとか出来ないか？』

『ハア？ 遅れても構わないのに、繰上げなんて言ってたんですか？ こちとら他の艦艇の面倒だって見てるんですし、はっきり言って迷惑ですよ。』

『なにを、貴様！ なんだその言い方は！！』

『いや、繰上げの工期でもう艤装計画組んでますし、部材供給も無理言ってお願ひしてますから。メンツにかけても繰上げされた時期で、この艦は完成させますよ。ただし今回の司令部設備の件は一切応じれませんので。』

緊張した空気の中、第一種軍装に身を包んだ男達の尖った声が投げ交わされる。ここ最近忙しい工廠側にあっては幾分感情的に応答する場面も繰り返され、海軍省から出張してきた者達と一触即発の状態になる事もしばしばの会議となっていました。

全く意図せぬ所での大荒れ模様はこうして沖縄と呉の波間の両方に出現したのであるが、事後の影響の有無という点では沖縄よりも呉の方が具合が悪い。大竜巻に遭遇した第二艦隊は海水を被った機

器の整備に少々の労力を割く必要が生じた程度で、別段以降の艦隊訓練の日程が狂うような状態とはならなかったのだが、呉工廠の艤装工事関係者が持つ憤怒が巻き起こした業務に対する大嵐は、この数年後になって連合艦隊が自らの旗艦を設定するのに際し、決して小さくない要因を生んでしまう事になる。

すなわち後年、大和型戦艦が帝国海軍に編入されてその雄姿を海上に現した時、一番艦の大和艦ではなく二番艦の武蔵艦^{むさし}が長く旗艦とされた理由には、現状の最新艦艇である事以外に、連合艦隊司令部を収容する旗艦設備の微細な差が存在した、という点も含まれる事になるのである。なぜなら呉工廠で突っぱねられた今回の艤装工事に関する一件は、工事進捗がより遅い状態にある武蔵艦に反映される事になったからだった。

まさかこんな場所で天変地異なぞ起きないだろう。

中城湾の白浜も呉の白銀も、その光景を目にする者には無意識の内にそんな概念を抱かせてしまうが、それらは全て息を潜めているだけでその場に存在しないという事では決してない。安息の日々が送れる中にあっても常に注意を怠ってはいけない部分は、奇しくも自然もお仕事も同じである。

もっともそんな共通する大荒れ模様を目にする事ができたのは、太古の昔より変わらずに、ただただ寄せては返すを繰り返す海だけであつた。

第二二話 「呉の我が家も忙中閑あり」

昭和16年2月25日。

いよいよ3月も目前に迫り始め、春という季節の足音も聞こえてきそうな時期を日本は迎えるも、今年はやや寒さが尾を引く感じである。さすがに氷点下とまでは至っていないが、気温は5度もあるかどうかの肌寒い値で、日本列島の大部分では海岸から内陸部の方角に望める山並みがまだまだ雪化粧しているのも、別段不思議とは思えない。

おかげさまでそんな気候の真っ只中に置かれる呉軍港は日の出を迎えつつも、張り詰めた寒気に身の引き締まるような感覚を覚える朝を迎えていた。特にその寒さに朝一番から顔をしかめ、身体を小さく震わせるのは出勤して呉工廠で働く工員さん達で、道を埋め尽くすような密集した行列で工廠の営門を潜る彼等は、高く立てた外套の襟や襟巻きで隠れ気味なその口より白い息を一樣に巻き上げている。

『ううゝ……。はようございますー。』

『あ、おざーす。』

『おはよありますー。……。うう、さみい。』

挨拶を交える中にも声の端々に寒さに狂わされた旋律を混ぜ、足早に歩いていく途上でそれ以上の声を上げる者は少ない。皆、とにかく口をなるとけ開けず、この寒冷な朝の空気を出来る限り口に含むまいと願っているのだ。

次いでそれは人間だけの感覚ではないようで、やがて工員達が各々の職場へと赴くべく工廠内を走る鉄道乗り場に列を作り始めるや、その上空をゆっくりと飛んでいく数羽のカモメにあって今日は口数が少ない。いつもはうるさいと思わず言ってしまう程に賑やかな彼等は、工廠のアチコチから放たれる多様な機械の音を除けば、間違いなく呉工廠というバンドにてメインボーカルを務める者達である。

しかし野生の歌い手たる彼等にしても本日の寒さが身に染みているのか、短い飛行の後に工廠内の屋根や電線等の高い所を足場として止まってしまう。寒気の籠った潮風に羽をついばむ仕草も小さく、もはやカモメ達に毎朝のコーラスを催す事は全く期待できそうにはない。

ただただ張り詰めた冷氣に満ちる呉軍港の波間を瞳に移し、まだ若干の朱色も滲んだ水面の揺らぎを黙って見つめるだけであった。

極めて静かな、とある日の呉軍港の朝である。

やがて工員達の通勤に用いられる7両編成の列車が乗客をぎっしりと乗せて動き出し、ガタンゴトンとゆっくりとしたリズムで奏でられる鉄の鼓動を、朝もやもかかる工廠の建物の合間を縫って木霊させて行く。岸壁に打ち寄せる小波はそんな人工の鼓動に調子を合わせようというのか、不意に響いてきた一声の汽笛を合図に僅かにその揺らぎを大きくした。

もっとも波の揺らぎが大きくなった原因は、決して人智の及ばぬ大自然の意思等ではない。それは大きな揺らぎを持って岸壁へと寄せてくる波を辿る事で、誰もが知る事が出来る。

大小の船渠や船台が横一列に並ぶ呉工廠東南側の陸地から、僅か

に沖合いを眺めた所。ちょうど軍港の中枢海域のご真ん中に当たるそこには、ここ最近になっていよいよその山のような艦影を整え始めてきた大和艦が浮かんでいるのであった。

そして大和艦の巨体が非常に重い金属音を低く唸らせて生む振動により、巨大な起重機を載せて両舷を挟む浮き栈橋を伝って、ややうなりの大きな波紋が呉工廠の海面へと放たれていく。

建造工期繰上げを打診された大和艦の艤装工事は夜勤も動員しての急ピッチで進められており、ウン時間の残業なぞここ最近の工員達にとってはほぼ常識になりつつある程である。おまけに浮き栈橋に挟まれる格好で波間に浮いている大和艦であるから、お船は作っても乗る事を生業としない工員さん達には何か陸地から完全に隔離された監獄の様にも思え、日々の勤労意欲を維持する事も結構大変な物。体調を崩す者も既に何名か発生している有様で、いくらこの巨艦が帝国海軍最新鋭戦艦の体面を備えていると言えども、その実は中々に辛い職場環境と化していたりする。ましてや四六時中、非常に音量の大きい機械音に包まれながらのお仕事だから、その疲労の度合いはたった1日の業務であっても極限に瀕する程の代物であった。

しかし本日の大和艦は、そんな辛い艤装工事の日々にあっては至って静かである。相変わらず工廠の中は廠内通勤用の鉄道が奏でる鉄の律動音が木霊しており、時折汽笛の短くも甲高い息吹が鳴り響く程度。工事用の設備や道具が散在する大和艦の艦内でもそれを耳にする事が出来るくらいで、昼夜兼行の工事を毎日行っているのが嘘の様な静寂が存在している。それどころか、大和艦艦内のほぼ全区画には工員の姿がまるで見当たらなかった。

するとやがて大和艦の真つ暗な艦内には、さながら大地震に伴われる地鳴りをも思わせる轟音が響き渡る。とても金属音とは思えぬ程に低くて長く、しかもまたその音量はまるで巨砲の発砲を間近で耳にしたかのようなものである。同時に大和艦の艦内は大きくゆっくりと上下に動揺を始め、仮に何も知らずに艦内に誰かが居たなら、間違はなく天変地異に見舞われたと錯覚してもおかしくない状況であった。

だがそんな奇妙にして不気味な艦内より最上甲板へと上がれば、大和艦に起こっている状況とあの低い轟音の正体は案外簡単に察する事が出来る。なぜなら大和艦の艦体を持つシルエットには、遠目からでも解る程のとある大きな変化が生じていたからだ。

その最中、大和艦の舳先に位置し、まだ一度も艦首旗が翻った事の無い旗竿の支柱に寄り添うようにして、背丈が異なりながらも同じ黒い外套を身に纏った二人の女性が、その場から艦尾の方を静かに見つめている。2月も暮れに差し掛かったというのにまだまだ寒い潮風は、早朝の時間帯特有の冷え込みによってよりその鋭利な具合を増しているようで、二人の女性は首に巻いたマフラーにそれぞれの唇を僅かに隠した。

『・・・ふう。まだちょっと冷えるわね。』

すると二人の内、背丈の高い方の女性が、マフラーの奥から白い息と共に声を漏らす。白みも目立つ長い金髪を首の辺りにて撫で、口元や目尻の辺りにうっすらとしわも刻まれたその顔は、若さよりも老いの方が見て取れてしまう40代の女性の物。僅かに色褪せた感じも滲むブラウンの瞳に、高い鼻と奥まった目は完璧に西洋人の顔立ちであるが、彼女の口から漏れた言葉は発音に一切のよどみが

無い綺麗な日本語であつた。

一方、そのおかげで彼女の傍らにいた背丈の低い方の女性は、全く自分とは正反対な容姿を持つ隣人に対してすぐに応じる事が出来た。

『浅間さん、御身体に障りは御座いませんか？』

まだまだ顔に比して大きな目と低い鼻を持った若い、否、幼い日本人女性の顔立ちに、長いまつ毛を伴った切れ長の大きな目を僅かに細めながら、その少女は外見の割りにやや大人びた感も有る音色の声を放つ。140センチ台の小柄で細い体軀には寒さも堪えるのか、震える感じも濃く滲んだ声色であつたが、問いかけられた浅間は、そのブラウンの瞳を細く弓なりにして笑みを浮かべてみせた。

『ええ、大丈夫よ。大和こそ平氣？』

『はい。それに、何よりわたくしの事ですから。』

浅間の笑みにお礼を述べるかの如く、大和と呼ばれた少女は黒い外套に包んだその身体をゆっくりと折り、深く一礼しながら答える。まさに今、二人が足をつけている甲板を含んだ大和艦の命である彼女は、流麗な分身のシルエットを連想させるように物腰が柔らかで、とても丁寧な言葉遣いを用いる少女。あの長門ながとに教えを乞いでいるとは思えない人柄で、明治生まれの年長者故にそんな彼女の師匠を知る浅間は、大きく頷いて大和の言葉を肯定する意思を示し、二人揃って再び視線を前方へと投げる。

端的に言えば朱色の寒空の下に大和艦を眺めているだけの二人だが、今しがたの大和の言葉は本日の大和艦の外観に生じている変化に関連する物で、二人が顔を向ける方向にはその変化の主となる物体が既に存在していた。

『1基に対して横並びに3門。凄い砲塔ね。』

眼前の光景に溜息混じりでそう呟く浅間。

数年ほど前にこの呉付近で座礁し、ただでさえ老骨と化している上に竜骨を損傷するという極めて致命的なダメージを受けた彼女の分身は、この大和艦の右舷に望める上陸場近くの岸壁にて係留されている。老朽化と相次ぐ損傷により恐らくは二度と航行する事は無いであろう艦艇であるが、栄えある帝国海軍艦艇として生きた40余年に及ぶその生涯の中、船の命たる彼女が確かに見てきた物は、紛れも無く時代に沿って生まれてきた多くの仲間達、後輩達の姿である。

石炭焚きから重油専焼へと切り替わった船が生まれた時、初めて飛行機を積んだ船が生まれた時、初めて海に潜る船が帝国海軍にやってきた時など、海軍艦艇が時代の最先端の科学によって変遷していく様を、彼女はそのブラウンの瞳に実際に映してきた。そして今またここに、浅間はまたしても帝国海軍艦艇としての初の試みを目にする機会に恵まれた。

親子ほども年齢差がある大和と並んで見守るそれは、明け方より平坦にして広大な甲板のご真ん中に設置が始まった、大和艦の主砲塔である。

帝国海軍最新鋭の戦艦たる大和艦の主砲はこれまでの戦艦の例に漏れず、その時代が持つ最先端科学力の結晶として生み出された物で、如何なる装甲をもぶち抜く事を企図して作られるという、まさに地球上最強の物理兵器。この脅威より逃れる方法は、その射程圏内より逃げ出すか白旗を掲げる以外に無く、敵艦船を海の藻屑と化するのに際して戦艦こそが最大の駒と誰もが認めるのは、ここに大きな理由が有る。およそ20年前に長門艦が410ミリの主砲を持つて建造された時も然り、その更に昔に金剛艦こんごうが356ミリの主砲を携えて英国より嫁入りしてきた時も然りで、仮に船舶において食物

連鎖という概念が有るとするならば、他を圧倒する威力の大砲をもってその頂点に君臨するのが、戦艦という類別を持つお船なのだ。

そして言うまでも無く大和艦はその主役とすべく設計されており、浅間のブラウンの瞳に映る横に3門並べられた砲門、すなわち3連装型式の砲塔は、今現在の全世界規模で見たお船の業界において、最も強力な牙その物であった。

しかしそんな大和艦の命たる者はまだまだあどけない顔つきで、浅間にしても隣に立つ少女が船舶界における百獣の王の如き存在だとは、なかなかすんなりと理解は出来ないのが正直な所だ。

ここ最近はずっと呉に繋留されている身ゆえに、年寄りの暇つぶしも多少は兼ねてこの大和の教育に当たっている彼女だが、その日常で目にするのは礼儀正しく大人しい教え子の姿ばかり。いつそ旧知の友人である敷島しきしまや後輩の金剛の様に、荒々しい性格だった方がその分身にはお似合いだとまで思う程だった。

一方、浅間の隣に居る当の大和は至って静かな物で、自身の分身に起重機で吊り下げられていく主砲をじっと見つめ、やがて1門の砲が砲塔基部に鎮座するのに併せて艦が動揺する中でも、その美しい姿勢と冷静な表情を微動だにしない。浅間をして初見となる戦艦における3連装砲塔を、他の誰でもない自分が持つという事に対しても、大和はまったくその胸の内に不安や恐れを抱いている節は見られなかった。

『・・・ふふ、大和はいつも静かね。』

大和の表情を窺いながら、浅間は邪魔にならない様に小さな声で語りかけてみる。すると大和はやはり驚いたりするような素振りは見せず、浅間の方へと僅かに顔を向けると小さく頭を下げ、自分が落ち着いていられる所以を声に変え始めた。

『はい。わたくしの主砲の構造は、先だって朝日^{あさひ}さんと一緒に目にしております。3連装型式な上に、扶桑^{ふそう}さんや山城^{やましろ}さんの主砲と同じ様に弾薬は固定装填方式でして、加えてこれまでの様に揚弾^{きようだん}薬筐を用いない弾薬供給構造には、朝日さんも大変驚かれておりました。』

10代半ばの容姿を持つ大和だが、その言葉には一隻の戦艦としての知識を相応に身につけたらしい部分が随所に含まれている。

それを受けた浅間はちよつと意地悪かと思いつながらもその度合いを確かめてみようと考え、主砲構造に関するちよつと難しい質問を大和へ投げかけてみた。元は装甲巡洋艦という呼称であった分身の持ち主である浅間は、日露戦役の開戦戦とも言える仁川^{インチョン}沖海戦を始めとして実際に艦砲による射撃戦を何度も体験しており、現代では病弱そうな初老の女性という人物像を持っていたも、培ってきた海軍艦艇としての知識は尻の青い新米艦魂である大和とは月とスッポン。艦砲に関する知識だってそこの古参の海軍士官に負けない程に持ち合わせており、大和のような生まれただばかりの艦魂では絶対に太刀打ちできそうにない程の叡智の差が存在する。

浅間もそれを十分に承知しているが故に、自ら質問をしたにも関わらず大和が声を詰まらせるかもしれない事をちよつと心配したのだが、彼女を含めた大先輩からの薫陶をそこそこ受けてきた大和の知識は、しっかりとした理解を土台にしてその頭脳に根付いているようだった。

『そうなの。でも、揚弾薬筐を使わないって事は、換装機も無いのかしら？ 装薬も砲弾もどうやって砲塔まで持ち上げるの？』

『はい。正確には装薬だけは揚弾薬筐で供給し、砲弾は給弾室から砲塔まで一直線に伸びた筒状の揚弾構造にて直接供給致します。これまでの戦艦の様に中甲板付近に有った換装室は無くなっております』

が、揚弾筒を経た主砲弾は砲塔内に縦向きで出てきますので、砲尾に有る装填機の部分に砲弾を横向きに倒す為の換装台が設置されております。』

主砲の砲身を搭載しているのはまさに今だというのに、まるで大和は完成した砲塔の構造がどんな物か既に見てきたかの如く、浅間に対して声を返してみせた。実際に彼女は数日前、浅間と同年代の艦魂して、呉鎮守府に属する艦魂達にとっては生き字引のような存在である朝日と共に、艤装工事中の自身の分身を見学してきたそうであるが、それにしてもまだまだ砲身も備わっていない未完成の砲塔と一緒に見て来ただけの事である。当たり前ではあるが大和の分身にはまだ一発の砲弾も積み込まれてはいないし、揚弾、揚薬に関わる機械類が稼動している筈も無い。

にも関わらずここまで自身の分身の事を把握している大和という艦魂は、浅間にとっては末恐ろしいと感じるのと同時に、極めて勉強に精力を注ぐ彼女の素質を垣間見ることができる。本来は大和の師匠筋にあたる艦魂は彼女をその手で取り上げた長門で、連合艦隊旗艦、及び第一艦隊と第一戦隊の旗艦も兼ねている分身の持ち主故に、呉を留守にするのにあたって在泊の最年長者たる浅間と朝日が大和の先生役を引き受けているのだが、その先生の一人として過去に類を見ないほどに頭脳明晰な教え子を持てた事は、浅間にとっては素直に嬉しい事であった。

紛れも無くこの大和という艦魂は帝国海軍艦魂史上希に見る秀才で、更なる浅間の質問を受けても全く言葉を詰まらせる事は無い。微笑を浮かべた浅間の視線を受けながら、大和は眼前の組立て中の主砲塔のアチコチを時折指差したりして、持ち前のやや年寄りじみた言葉遣いで声を紡いで行く。

『あらあら、大和。それだと給弾室では、あの重い砲弾を縦にしなければ供給は出来ないんじゃない？　だって艦底に近い区画から砲

塔の有る最上甲板まで繋がった、筒状の構造物が揚弾薬の機械なんでしょ？ どう考えても縦の筒に横向きの砲弾は入らないと思うんだけど。』

『はい、浅間さん。砲弾は弾庫での保管状態において、最初から縦置きにしているので御座います。朝日さんはそれをお知りになられ、上海でご覧になられた米国海軍艦艇の物と同じだと仰られておりました。それと一等巡洋艦の皆様の主砲も、最近の物では同方式だと伺っております。人間の方々が防御構造により重点を置いて作って頂けた故の事で御座います。』

老いた浅間とうら若い大和の姿に反し、まるで今は大和が先生役となっているかの様な光景が現れる中だが、浅間は全くそんな事を気にせずに大和の語りにただただ笑みを頷かせる。

生まれたばかりでまだ分身が完成していない大和の博識さは、決して持って生まれた才能なんかではない。二人も含めた艦魂とは人間達から見れば極めて奇妙な存在であるが、始めから叡智を備えている訳でもなければ、底無しの体力を持って生まれて来る訳でもない。人間と同じく全ては日々の修練を積み重ねた末に身に着けていく物であり、既に40余年も生きてきた浅間もまた、英国で生まれた後に日本へと嫁入りしてきた頃は、今の太和と同じ様に全てにおいて未熟な若人であった。

そしてそんな艦魂の誕生した頃の事情を鑑みるに、先程の様に砲塔に関する知識を披露してみせた太和は、長門によって取り上げられた昨年8月よりの僅かな時間で、まさに火の出る様とでも形容できる程の猛烈な勉強を積んできた事は疑いようがない。直接のお師匠様である長門を飛ばしてしまうも、師匠筋の長たる朝日や同門の明石^{あかし}が持つ類希な努力家という一面を、彼女がその幼い顔立ちと細く小さな身体の中にしっかりと持っている事の証明でもあった。

だが浅間が教え子の人柄を愛でている最中に、ふと大和は長いまつ毛を持つ目を眼前の砲塔から浅間へと流し、再び腰を浅く折って軽いお辞儀をしながら口を開く。

『浅間さん。わたくしはもう十分に砲塔は見ましたので、そろそろ浅間さんの所に戻りたいと思います。浅間さんのお身体に障りがあるってはありませんし……。』

普段からやけに落ち着きを払って物を言う大和だが、その澄んだ感も強い綺麗な声が終わり際に幾分のよどみを持った事に、浅間はすぐに気付く。大きな切れ長の目をやや伏せて浅間の顔色を窺う大和の顔を見るに、どうやら老体ぶりも甚だしい浅間の事をちよつと心配しているようだ。

もちろん大和には、老齡をタネにして浅間を疎んじたり、小馬鹿にする気なぞ毛頭無い。数年前の座礁事故でもう航行不能、つまりただ浮かぶ事しかできないお船となった浅間艦とその命たる浅間を、無垢で心優しい大和は心の底から労わっているだけなのだ。

浅間もそれを解っていたから、大和が放った心配の声に対して笑みを横に振って応じてみせる。だが、早朝より始まった自身の分身における主砲塔積載作業の見学を、途中にも関わらず自ら打ち切ろうとした大和の申し出は、どうやら浅間の身体への憂いだけがその理由では無いらしい。

やがて浅間が言うのに続いて大和が口を開き、それは示される。

『うふふ。良いのよ、大和。腰も背中も今日は朝から何とも無いわ。ましてや砲塔の積載は滅多に見れる物じゃ無いし、新式の砲なら尚更よ。もう少し見ていた方が、お勉強にもなるんじゃない？』

『有難いお言葉です、浅間さん。ただ、わたくしはまだまだ砲術の基礎のお勉強が不足しております。この様な立派な主砲をせっかく人間の方々が据え付けて下さるのですから、無駄にせぬ様に今の内に射法関連の知識を身に着けたく思っております。声を返す形で恐れ多いのですが、できましたら本日この後も引き続き、浅間さんの教示にあやかりたいので御座いますが・・・。』

自分の分身の事だからか新型の主砲の構造には詳しかった大和だが、その身の程は浅間や朝日、そして本来の師匠である長門と比べれば、やはりまだまだ未熟者である。生まれてまだ半年にも至らない大和は秀才の片鱗を十分に覗かせていても、その言葉通り複雑にして多岐に渡る叡智の積み重ねはまだ7合目にすらも及んではない。大和自身が口にした砲術の知識はもちろんまだまだ初歩の初歩しか身に着けておらず、他にも英語や数学といった一般教養は勿論手旗、旗旒、無線電信を始めとした信号術、六分儀や氣象学を用いての航海術、石炭焚きの頃からの変遷も理解した上での機関に関する知識、乗組員達が日頃より用いている号令のアレコレ等々、殊に戦うお船の命が知らなければならぬ知識とは結構多い物である。むしろ機関兵、造船士官と言った具合に職域として完全に縦割りになっている人間達の方が幾分は楽にも思えるくらいで、意外に学力が求められるという艦魂社会の実情の一端でもあった。

言うまでも無く、大和はその点を鑑みて更なるお勉強に精を出そうと考えている。特にその重点科目と捉えたのは眼前にて組立てが進む主砲に関する砲術のお勉強で、周囲にて寒空の下に汗を流す人間達の横顔を目にしてその意気込みは一層強くなっている。元々幼い容姿の中にどこか肝が据わった一面も持つ彼女はその表情も凛々しく、ゆっくりと瞬きしながら浅間の目をじっと見つめて嘆願の意思を伝えてきた。

転じてこうなつては最早、老いた浅間には断る等という選択肢が浮かんで来ない。

とうに一線を退いて、後は解体か標的艦任務を帯びて除籍されるのを待つばかりの余生の中、たまたま師匠筋に当たる者が不在な事から、半ば年寄りの暇潰しにも近い格好で行っている若人への個人教授。その相手が恐らくは世界最強の海軍艦艇となる分身の持ち主にして、そう遠くない未来において帝国海軍の全ての艦艇を統率する旗艦を約束された者と来れば、浅間と同年代の引退した艦魂達には非常に光栄でやりがいも湧くお役目である。だが幸運にも教え子となった大和はその境遇や身の上に加えて、二度と舳先に白波を立てる事の無い分身を持つ浅間であっても、深い労りと慈しみ、そして謙虚さと礼節を満たした態度で相對するという、生まれながらに持った人物としての素晴らしさもまた備わっていたのだ。

人間の世界であっても、やはり出来の良い子供というのは可愛がられる。

その意味において浅間が和人形の如き大和の姿に同じ感情を抱いてしまうのも至極当然であり、直接の師匠である長門や朝日を差し置く格好となろうとも、教え子のお願いはなんでも叶えてあげようという気持ちがどんどん強くなってきてしまう。年老いて往年の身体能力を失うのと交換に浅間が身に着けた老練さも、大和の前では過保護に近い親心を誘発するのにより一層の加速を与えるだけであった。

『うふふふ……。解ったわ。大和はお利口さんね。それなら今日は、弾道学のおさらいにしましょうね。まだちよつと難しいでしょう?』

『はい、有難う御座います。是非、ご指導願います。』

浅間が大和の肩に手を触れて再び笑みを頷かせると、大和もまた再びお辞儀をしてお礼を述べる。その眼前で汗を輝かせながら主砲塔の組立作業を慎重にこなしている工員の者達には、そんな二人の姿が誰一人として見えてはいないが、人の外見を持つ浅間と大和の姿はまさに親子の姿その物であった。

そして時を置かずに大和艦の艦首旗竿の辺りの甲板からは、彼女達が去っていく際に放った白く淡い光が放たれる。誰の目にも触れる事の出来ないその光は、始業の時間を迎えて騒がしくなり始めた呉工廠の喧騒に紛れる様にして消え失せ、粉雪の如き光の粒子が数える程甲板の一角で舞い落ちるのみ。完成もそこそこ近づいてきた大和艦檣楼上にて休憩し、超特大の主砲が据え付けられるのを終始見守っていたカモメ達ですら、二人がその場から消えた事に気付いてはいなかった。

やがて、そうして人知れず姿を消した二人は、真新しい鉄の輝きも眩いばかりの大和艦から、いくらブラシをかけた雑巾で拭ったりしても落ちない汚れが目立ち、足元に敷き詰めたチーク材も相当に色褪せて白みがかった、浅間艦の甲板へと転移してくる。

ほぼ呉海兵団の練習艦代わりとされて岸壁に繋がれる浅間艦は、まだまだほっぺも赤く大和と同じくらいの年頃の者も多い四等水兵の少年達によってこれでも毎朝ちゃんと清掃されているのだが、艦上に視線を流せばそこかしこにくたびれた部分が目に付いてしまうというのも、艦齢40余年では無理も無い。当たり前だが海防艦という後方勤務な艦の上、二度と海を駆ける事の無い浅間艦は、一線勤務たる戦闘艦艇、特務艦艇に比べて整備補修の頻度、優先順位は大きく格下げされており、入渠しての艦底にまで及ぶ本格的な整備などは数年に一度の割合でしか行われない。この呉工廠には大和艦

を建造した造船専門の船渠以外に、整備補修の為の船渠が第1から第4までと4つも備えられているのだが、そも近代化改装を何度も繰り返す戦艦を代表としてその使用予定はずっと先まで埋まっている有様である。

おかげさまでやや小汚い感じがどうしても消えない浅間艦なのだが、浅間に肩を抱かれる格好で共にその場へとやってきた大和は、そんな自分の分身とはうって変わった艦容を目の当たりにしても一切意識を誘われる事は無い。むしろくたびれた感が満ち、鉄製の隔壁や構造物、木甲板等のありとあらゆる物が色褪せてしまっているそんな艦上の光景に、大和は柔らかなで暖かい浅間の人柄が持つ温もりという物を多分に感じる事ができる。

それは肩に触れている浅間の手の温もりと全く違いは無く、自然と彼女のあどけない顔は笑みを作ってしまう程だ。

『今日は冷えるわ。私の部屋でお勉強にするけど、その前にティーで一息入れましょうね。』

『はい。お手伝いさせていただきます。朝日さんの様に上手くはできませんが……。』

『うふふふ。朝日のティーは、私の世代の艦魂^{ひつこ}達でもそうは淹れられた物ではないわ。だからみんな欲しがるとよ、昔から。』

一緒に甲板を歩きながらお勉強前の段取りをちよつと話す二人。早朝からの起床と大和艦での見学でやや疲れも溜まり、紅茶でそれを拭おうという話に至るも、彼女達が紅茶の事を脳裏に描くとそこに必ず一緒に紡ぎだされる存在が有る。

それはもちろん、呉鎮守府所属にしてその昔はこの大和艦と同じく、3人の姉妹と供に一時とは言え世界最強の戦闘艦艇として洋上に君臨していた、という経歴を持つ朝日艦の艦魂だ。浅間とほぼ同

世代の朝日は、外見の上でも同じ40代半ばの白人女性の顔つきを持ち、大和にとって師匠である長門のそのまた師匠に当たる艦魂。

「取り上げ」という艦魂独自の誕生の仕方を踏まえれば大和の祖母としても捉える事ができ、帝国海軍艦魂社会に根付く師匠系譜の一派の長とされる人物でもある。

麗人を極めたその人柄は帝国海軍の艦魂達の間でも大変な人望を集め、教養豊かで若りし頃はあれで柔道なんかの武技も強かったらしい。

そんな朝日は直接の師匠である長門を除けば、大和にとっては最も信頼できる先生役に当たるのだが、終始今日はその名が話題に上るだけである事からも解るとおり、実はこの呉工廠にその姿は今は無いのである。太く短いすんぐりとした艦体に時代も偲べる衝角艦首を持ち、艦中央に聳えた高く細い煙突とその前後にて天を衝く2本のマストを始めとした、古風にして立派な朝日艦の艦影。大和艦建造中の呉工廠の中にあっても断然に目立つその姿は、付近の江田島や柱島泊地にすらも無い。

なぜならほんの2日ほど前。

朝日艦は艦尾に軍艦旗を颯爽と翻すや、教え子の大和を教育する日々を一時中断して、この呉軍港を旅立って行ったからだ。

『朝日さん、どこかの要港の支援なのでしょか？ 急な任務だったようで、わたくしとはあまりお話しする事が出来ないままで御座いました。』

大和はこれまで長門に代わって教えを授けてくれていた朝日の旅立ちを一応は知っており、その際に十分な声を交えずに一時の別れを迎えねばならなかったのを残念そうに語る。幼いながらどこか肝が据わっている彼女だが、やはりその切れ長の瞳にほんのり浮かび上がっているのは、実の祖母のように慕ってこれた朝日が突然居な

くなつた事に対する寂しさの気持ち。伏目がちになつたその顔はちよつと笑みが薄れており、それに気付いた浅間はすぐに大和が知る事の出来なかつた朝日の旅に関する事を教えてやった。

『まあ、そうだったの。昨日、曳船の子達から少し聞いたんだけど、朝日は別に遠くに行つた訳ではないのよ。海軍の要地で言つたら呉とは隣くらいの所だし、留守にするのも1週間くらいらしいって話だったわ。それに、朝日にとつてもしばらくぶりの再会だから・・・』

『え？　なんで御座いますか、浅間さん？』

どうやらまた上海といった外地出向になつた訳ではないらしい朝日なのだが、浅間の言葉の最後の一言に引っかけりを覚えて大和は思わず声を返す。「しばらくぶりの再会」と浅間は口にしたが、朝日の直接の教え子である長門、そして明石は共に所属の艦隊に伴つて艦隊訓練に励んでいる筈であり、常に作業地を移動して回っている故に艦隊随伴していない艦が特定の場所で会合する事は非常に希であるし、そも明石も長門も艦隊訓練に出動して一ヶ月くらいしか経っていないから、久しぶりという言葉を用いて再会を喜ぶのも些か大げさである。

きつと明治の頃から生きてきた身ゆえに知り合いが多いのであるうと大和は察しつつも、先生としても先輩としても、そして自らの身体に流れる血の源流たる存在としても慕っている、という朝日の事をもっと知りたく思い、彼女が向かつたという地名を浅間にさらに問い掛ける。

対してどこか浅間は懐かしむような感も漂う笑みを浮かべ、甲板から大和艦が浮かぶ工廠の波間に視線を流しながら、彼女に朝日艦が向かつた地の名を教えた。

『朝日はね、佐世保工廠に応援で少し行く事になつたの。今の佐世

保は支那事變の影響で、支那方面艦隊所属の艦艇の整備補修に、軍需物資の生産なんかでとても大変なの。その上で新造艦艇も作ってるから、きつと人手が足りないのね。工作艦である朝日が呼ばれたのはその為なのよ。』

それは帝国海軍に設けられた四つの鎮守府の内でも西に位置し、日清、日露の両戦争の時から最前線の鎮守府として機能してきた地である。そしてそこに向かう朝日を待つのは、既にこの世でたった一人しか存在せぬ唯一の血の繋がった姉妹。

大和はそれをすぐさま理解し、出かける事を彼女に伝えた後に足早に去る際、何時に無く朝日が嬉しそうな顔をしている事の真相を理解するのだった。

第二二話 「呉の我が家も忙中閑あり」 (後書き)

最近執筆が進まない・・・

なんか書いても書いても納得できず消す日々です・・・ (; ω ;

、)

第一二三話 「再会と憂慮／其の一」 （前書き）

◆拝読に当たって◆

読者皆様、いつもご拝読を有難う御座います。

さて今回より佐世保における朝日艦のお話を書かせて頂きますが、朝日艦はどうもこの時期、第一艦隊付随の工作艦として行動していたとの情報もありまして、史実のこの時期に佐世保に居る事は今回のお話では完全に創作であります。

また、同様にこの時期の敷島艦と金剛艦の繋留位置も、海兵団や設備の位置も考えて恐らくこの辺だったのではないかと設定した次第ですが、こちらにも上記と同じく創作である事をお知らせさせていただきます。

2011／8／22 明石艦物語作者・工藤傳一

第一二三話 「再会と憂慮／其の一」

昭和16年2月26日。

九州は西北端に位置する、長崎県の佐世保湾。

「琴の海」なる美しい別名を頂く大村湾の入り口に位置し、リアス式海岸特有のもみじの葉っぱを思わせる入り組んだ入り江を持つこの湾は、大海へと通じる水道が非常に狭隘な上に、海岸から僅かに陸地に進むだけで連なった山々に包囲される格好となっており、良港としての地理的要因を相当に高い次元で備えた場所である。

加えて古くは鎮西と呼称された頃より連なる九州の歴史も合わせ、この辺一帯は日本史の上ではとりわけ異国との関係が深い所でもある。

それはもちろん戦国時代より盛況となった南蛮貿易、つまり西洋との会合がその主役と一般的に見られる物であるが、もともと日本の中では最も大陸に近い場所ゆえに支那、そして朝鮮との関りは、そのさらに昔より続いてきた歴史がある。日本人なれば誰しもが歴史の授業で習い、一般に九州の物を指す太宰府なんかも、その設置の大きな要因には大陸との交通の玄関口として九州が非常に大きな役割を果たしていたからで、日本書紀にも記される遣隋使なんかもこの九州北岸を経由して大陸へと渡っていた、と言われるくらいである。

だが他国とのお付き合いに付き物の諍い、争いもまたこの地は日本では最も多く、そして激しく経験しており、日本史にその名を轟かせ続けて明治の頃には軍歌としても詠われた元寇もまた、その舞台は九州北岸だ。

まだお馬に乗ってパッパカパッパカと駆ける騎馬武者が花形であった当時の日本軍と、なんと既に火薬を用いた爆破兵器を装備して

いたという元と高麗の連合軍が、それぞれ数万の兵力でもって九州北岸の浜辺にて激突したこの戦。明治の終わり頃ですらこの日本は人口4000万ほどであったのだから、1000万もいるかどうか怪しい当時においては、まさに史上希に見る大戦争である。隠岐、対馬では辛酸を嘗めた当時の日本であったが、自分の国が他国に蹂躪されるという危機に立ち上がった彼等は、ついに敵軍の九州上陸を機として兵装の差や対外戦争の経験の薄さも跳ね除けての反撃を開始し、必死に奮闘する日本男児の姿が九州の海岸に一斉に花咲くのであった。

その際の物として、矢を受けて血まみれになる馬を駆りながらそれでも尚、馬上にて弓を片手に元軍に向かって突進せんとする竹崎すえなが季長の絵巻物は、つとに有名である。

皮肉にもそんな祖国防衛の姿が現代では支那における支那人達によって再現されている訳であるが、とにかくにも古よりの国防の最前線の地であったのが九州なのだ。

それは現代においても、そして海を守るという観点においても変わっておらず、明治19年に呉と同じ時期にこの佐世保湾に軍港を設置する事が決定されたのも、ここに大きな理由がある。日本地図のスケールで見ると、大陸方面の海域に対する前線基地と言っても過言ではなく、事実、日清、日露の戦役、そして昭和に入ってからの上海事変、支那事変においては、この佐世保軍港は前線に最も近い物資生産と整備補修の根拠地として真価を発揮してきたのだ。

さてそんな佐世保軍港であるが、呉や横須賀と同じでその境域というのは佐世保湾の全ての入り江を含む非常に広大な物である。一般に軍港という言葉で連想される光景は、軍艦が何隻も連なるのと

同時に大きな起重機や倉庫も並ぶ棧橋や岸壁、そしてその付近の波間、という具合になり易い物だが、厳密に軍港と帝国海軍が定める区域は民家もある集落や山林、所によっては沖合いの島なんかにも及んでいた。

この佐世保にあっては佐世保湾とそこに浮かぶ針尾島全部は勿論、大崎半島周辺に当たる大村湾の北側僅かと、西彼杵半島にしそぎの中部付近までを南端とし、佐世保市を包囲する山々が北端。次いで東側は大村湾に注ぐ川棚川かわだなの河口辺りまで広がり、西の境界線に至っては佐世保湾から五島灘に抜けて10キロ近くも沖合いにある黒島にまで伸びているのだ。

ちなみにこの黒島から南東側にある大島と寺島もまた佐世保軍港境域の南端を構成しており、なおかつこの大島の南東、寺島の南側に位置する海域は、三方を陸地に囲まれた地形を見込まれて最寄の艦隊泊地、または錨地として機能している。言うなれば佐世保の柱島泊地だ。

そして佐世保軍港の中枢となるのが帝国海軍の太宰府たる佐世保鎮守府と、明石あかしや雪風ゆきかぜなんかの生まれ故郷でもある佐世保海軍工廠である。

佐世保湾の北側に伸びた入り江の最奥部にして、ちょうど佐世保川の河口がある付近に位置する佐世保工廠は、北岸一体は綺麗に整備された大きな岸壁が3本も伸び、その岸壁に囲まれた2箇所の大きな波間は係船池と呼ばれる艦船の待機場所として機能し、なおかつ呉に負けないくらいの船台や船渠も周囲に複数完備する等、帝国海軍の拠点としての威容が山々に囲まれる中にあっても一際目立つ姿である。

その造船、及び補修施設群の中には、つい先月に完成したばかりの第7ドックと呼ばれる特大の船渠も含まれるが、これは今現在、ここから遥かに南に位置する三菱長崎造船所で艤装むいせい工事中の、武蔵

艦の為に作られた船渠であつた。

このように佐世保工廠はその施設においても常に時代の最先端を捉えて設定されており、帝国海軍の数ある要港の中でも指折りの存在である事は論ずるに及ばない。艦隊訓練が始まって本籍を置く艦の殆どは皆出払っている状態であるが、工廠の係船池や艀装栈橋に繋がる少数の艦船が、西海の城郭たる佐世保の威容をまだまだ保たせていた。

その主な艦影はやはり艦船の待機場所たる2箇所に係船池に多く、特に平瀬地区の係船池などは海上側からの玄関口である第一上陸場と第二上陸場にも程近い上、僅かに陸地を歩けば鎮守府庁舎や佐世保海兵団の施設に行く事ができる等、非常に立地条件が良い事から係船を求める艦船からはそこそこに人気の係船ポイントである。面白い事に係船池東端を構成する岸壁のさらに東は海ではなく、そこにあるのは佐世保北側に連なる山々より注ぐ佐世保川であり、工廠内に居ながら打ち寄せる波の囁きと川のせせらぎが一緒に堪能できってしまうお得な地帯。

釣り好きな者には中々に魅力的な所である。

今日もそんな2つの調べを耳にしながら平瀬地区の係船池には数隻の大小艦艇が浮かんでいるのだが、最東端に位置する右埠頭の第一上陸場近くに、一際大きな割に見た目の古風さもまた一際、とい

う奇妙なお船が岸壁に繋留されている。

喫水はそこそ深そうでケースメイトを持つ故にやたらと舷側の高さが目立つその艦だが、全長は一等巡洋艦より2回りは小さく、それでいて艦幅は20メートル以上は有りそうと、さながら真上から見るとどんぐりの実を髣髴とさせる形の艦体。転じて真横から見ると角ばったラインが多い艦体は箱型に見えるが、それに変わって今度は甲板から一直線に空へと伸びた2本のマスト、次いでマストの間にてこれまた一直線に聳える3本の煙突が目を引き。マストも煙突も艦首方向より見れば艦体首尾船に沿って綺麗な縦並びで、その高さもマスト同士、煙突同士で揃えられている所は、何か見る者に整然や規律といった言葉を連想させる不思議な魅力を持っており、木甲板や隔壁の一部にやや汚れが目立つ古いお船であっても決して失われない、その艦独自の雰囲気という物が滲み出ていた。

もちろんこの艦は、佐世保軍港の最重要区画たる第一区内の係船地に在泊している事からも解るとおり、帝国海軍の艦艇である事は一目瞭然で、錆びも僅かに浮いたスタンウオークを備える艦尾にては旗竿にしっかり十六条旭日旗が掲げられている。ただし第一線からは完全に身を引いたお船である事には変わりなく、もう何年も岸壁に繋がれているのであろうその経歴が、岸壁と艦を繋ぐホーサーの色褪せ具合によって物語られていた。

まさに海軍軍人と言う所の予備役が適用された艦であり、往時はその身に帯びていたであろう多くの砲門も既に全部取り去られている。ケースメイトもかつて砲が備えられていた所に窓だけが残るのみで、艦首と艦尾の甲板に有った砲塔に至っては一階建てでやや横広な形の小屋へと取って変わられているが、かつてこの日本周辺の世界にその名を轟かせた本艦の名は、今も艦尾のスタンウオークに掲げられた4文字の平仮名によって明確に示されている。

「しきしま」

この艦こそ明治37、8年の役と呼ばれる日露戦役において、四方の海を護るべく遠き英国より渡って来た4隻に及ぶ大戦艦のネームシップ。貧乏島国が臥薪嘗胆を合言葉にして耐えに耐えた末に調達し、その歓喜を原動力に個艦ながら特有の行進曲まで作られ、後の戦ではその巨大さを以って敵国海軍の艦隊に、世界水路史上屈指の難所たるローリングフォーターズをも含めた3万キロにも及ぶ旅路を強要させてみせた殊勲艦であり、当時の日本の運命をその舳先の菊花紋章にて照らし出してくれるようただひたすらに願われ、そして見事に叶えてみせたという、神の如きお船。

まさに明治の大和艦やまとたる、敷島艦しきしまであった。

するとそんな敷島艦の艦首甲板にある小屋の真ん前。ちょうど屋根の軒下にできる影が色褪せた木甲板の上に境界線を敷く辺りに、折り畳みの椅子に腰掛けた非常に大柄な女性が何やら本を読んでいる姿がある。

『・・・・・・・・。』

熱心に読んでいる彼女は吐息以外の声を漏らさず、時折頬や視界にかかるその白浜の砂の如き色をした髪を手で跳ね上げる。1ページが二の腕程もあり写真も併載された大きな紙面に青い瞳を這わせ、高い鼻と奥まった目で構成された30代半ばくらいの顔でうつすらと笑みを浮かべている所を見るに、ずいぶんとこの古ぼけた老艦の上にてくつろいでいるようだ。

帝国海軍に属する者における一張羅にも等しい、濃紺の第一種軍

装を身につけている手前もあり、この女性が帝国海軍艦艇の艦魂である事は疑いようもないが、実は彼女はこの敷島艦の命ではない。

その分身は甲板上で椅子に浅く腰掛けて読書している彼女の横顔の向こう、つまり位置にすると係船地のある工廠東側の逆側に在り、工廠西側の船渠や船台が密集している地区の艤装岸壁に繋がれている。一際高い山のような艦橋と、天蓋を外して露天に晒されてる356ミリの主砲を持つそのお船は、昨年11月に発布された昭和16年度艦隊編成で改装の為に艦隊から除かれた金剛艦こんごうであった。

もっともおかげさまで改装の真っ最中である金剛艦は、重機械の駆動する音が四六時中鳴り響く状況に陥っており、4月の工事完了を目指してその作業は日を追う毎に激しい様相になりつつある。工事を担当する人間達はお仕事に一生懸命に励んでくれているのだが、如何せんお船の命たる艦魂にあっては騒音に包まれる中での生活が続く事になってしまう。おちおち本も読めない程にうるさいのは勘弁と皆一様に思ってしまうのも無理は無く、その例に漏れなかった金剛はたまたまそこから程近く、なおかつ自身の分身とは違って工事とは無縁の敷島艦の艦上へとやって来て日々を過ごしているのだ。それに今現在、椅子に座って読書続ける金剛の周りに姿こそ無いものの、敷島艦の命である敷島は金剛にとっての唯一の師匠である事は周知の事である。金剛が英国から渡って来て以来、もう20数年来の付き合いで、戦艦としての先輩格とかの理由で過剰に遠慮を必要とする仲でもないから、彼女は特に断りもせずに来てきて、腰をかけている折り畳みの椅子も勝手に敷島艦の艦内より引っ張り出して使っている有様であった。

『んゝゝゝゝ・・・、くあつ・・・。』

その内に長時間の同じ姿勢にやや疲れを覚えた金剛は、おもむろに頭上を見上げて本を持ったままの両手を上方に伸ばし、肩や首の

辺りに溜まった凝りの解消を図る。女性ながら身の丈180センチ以上と非常に恵まれた体格でのその姿は、ともすればまるでヒグマが立ち上がって威嚇するような格好となり得なくも無いのだが、長身ながらも痩せ型で西洋人独特の非常に脚が長い体つきを持つ故か、それともクセが無くサラサラとした流れが途絶えないサンディブロンドの髪が資格好に相当の補正を加える故か、金剛が大きな伸びをするに当たっては長身の美しい女性像が崩れる事は最後まで無かった。

多少は老いも意識し始めてくる30代半ばの容姿を持つ金剛だが、音に聞こえしその豪放磊落で気性の激しい人柄に反し、外見だけを見れば実はスラリと長身で髪も顔立ちも非常に美しい艦魂である。美人の形容に付き物の言葉で「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」という物があるが、遙か遠くであっても軍艦旗と同等に目立つ髪も含めて極めて容姿端麗な金剛は、かつて第一次大戦の頃、持ち前の美貌で東洋に派遣されていた英国海軍艦艇の艦魂達の度肝を抜かせた事も有る程で、『ライムジュースの飲みすぎか？ それとも足りなくて壊血病ぎみなのか？ 我が王室海軍はドイツ海軍との戦で錯覚が随分激しくなっている。あれほどの艦魂を女王陛下の下の方海軍でなく、東洋の方海軍へと嫁に出す余裕なんか無いだろう。』とは、当時エムデン艦を始めとするドイツ艦隊を追っていた英国東洋艦隊における、艦魂達のささやかな母国への愚痴であった。

もちろんそれは天から金剛に与えられた、つまり生まれながらに持てた固有の特徴で、日本にやってきた当時もその美貌は他を圧倒。おまけに体格も恵まれていて分身は当時の世界最強の艦艇とくれば、これを放っておける先輩艦魂は存在しない。特に生きる術を教えるべく師弟の間柄を結ぶという艦魂社会であるからその傾向は非常に顕著で、今は横須賀にて分身を係留されている富士^{ふじ}などは、この金剛を自分の弟子にしたいと珍しく駄々をこねた過去だってあるのだ。

帝国海軍、否、世界の海軍艦艇の艦魂社会において、希に見る超

絶な美人艦魂。そんな金剛の羨ましい限りの容姿の特徴は年齢相応の老いを重ねつつも、生誕から20数年以上経た今でも全く変わってはいないのであった。

ただし、それは「黙っていれば」との注釈付きでのお話だ。

『だあああゝっ……。毎度の事やが、改装っちゅうんは暇やあ。』

そうこうしない内に金剛は再び先ほどと同じく腰掛けたままでの伸びを行うも、大きく開いたその唇の隙間より漏れてくる関西訛りの荒い言葉遣いが、再び現れようとしていた彼女の姿の美しさを木っ端微塵に砕いてしまう。帝国海軍で言う所のドカタ型と呼ばれる人柄の中にあって、現代の帝国海軍艦魂社会ではその典型とみなされる彼女の性格は、金剛の数少ない、そして致命的な欠点である。

これでもおっかない師匠の教えと年齢を重ねた事で随分と人柄は丸くなった方で、若りし頃は面白がって火気厳禁とされる甲板上で火酒を口に含んで火を吹いたりするわ、改装の為に人間達が手にしたドリルに凄絶な跳び蹴りをかまして何本もへし折ってみせるわ、元々の荒っぽい性格故に肌が合わなかった富士を始めとする大人しめの先輩達に対し、暴言と唾を吐いた上に突き飛ばしてみせるわと、無礼千万にして傍若無人な所業は枚挙に暇が無いくらいの、筋金入りの問題児であった。

もちろん根っからそんな暴れん坊だった性格が完全に矯正される筈も無く、語気の荒さは昔とちっとも変わっていない。読書は別に嫌いではない金剛だがじっとしている事に不思議と苛立ちが募ってしまい、その内に肩や首を捻って身体の奥から響いてくる鈍い音にささやかな鬱憤を晴らすのだった。

『くああくあつ……。』

大きく丈夫な身体には2月も暮れる頃の寒さなぞ染みないのか、やがて僅かに白い色を浮かべて四散していく息も伴っての大あくびを金剛は放つ。自分の事を羨望も激しい美貌の持ち主だと自惚れる事も無ければ、むしろ艦魂の容姿における評判なんか糞食らえくらいに思っている彼女だから、恥や外聞も忍ばずに大きく口を開ける様はまるで獲物に噛み付かんとする虎の如く。歯茎や犬歯が覗くのもまったく気にせず、身体の奥から起こる衝動をホイホイと行動や仕草に表していた。

しかしあくびを終えて涙も溜まった鋭角の目を金剛が擦っている、ふと彼女の背後、すなわち主砲塔跡に建てられている小屋状の建築物の方向から、なにやらこの艦を訪ねて来たらしい者の声が聞こえてきた。

『ごめんください。』

まるで弦楽器の音色を思わせるかのような優雅さと重みを持ち、金剛にしては最近ではちよつと聞きなれない声だった。ただ、明らかに女性の声であるのと同時に、背中越しとは言え完全にそれは金剛に対して話し掛けられた物である事から、声の主はきつと自分と同じどこぞの海軍艦艇の命たる者であろうと察するも、面倒くさそうに歪めた顔を背後へと向ける事は無い。

その理由はつい先日^{ながと}に第一艦隊の面々がこの佐世保へとやってきており、長門^{むつ}や陸奥^{むつ}を始めとする艦魂達がこの敷島艦へと挨拶に来た記憶が新しいからで、艦隊訓練や巡航には珍しくない時間差を置いての回航により、再び誰かが現代帝国海軍における長老格の敷島

へと挨拶回りに来たのだろうと考えた故である。もつともどうせ自分宛の挨拶じゃないと思うとちよつと不貞腐れたくなる気持ちが湧いてしまい、彼女は振り向きもせずに右手を顔の横でヒラヒラと翻し、師匠でもあるこの艦の主が現在取り込み中である事を教えてやった。

『あゝあゝ。帰りや。親方は今、身体鍛えとる最中や。ほれ、一番煙突見てみい。』

『一番煙突?』

金剛の後ろでは応答に疑問を呈す一言が放たれる。どうも何かその声には心当たりがあるような気もするが、暇で暇で仕方ない倦怠感と僅かに瞼に残っている眠気が、金剛の脳裏にて行われる記憶の検索を阻害する。声質からするに若い艦魂では無いようだが、どうせ艦隊の補給に携わってる古い運送艦とかの艦魂だろうと深く詮索はせず、またしても顔と視線を手中の本に向けたまままで今度は頭上の空を指差しながら言った。

『せや。真っ黒い煙がぎょうさん昇つとるやろ。今日は海兵団の四等水兵供が機関の実習やつてるさかい、親方はスチム使て名物の一汗かきや。・・・あの歳でよおやるでホンマ。まったく、何食うとんのや、あのオバハン。』

話題の張本人がいま甲板に居ないのを良い事に、金剛はちよつとした愚痴を溢す。もうとつくの昔に引退した敷島艦の命、敷島は、金剛と比べて容姿の上でも艦齡の上でも10年以上も時を重ねた艦魂で、ハッキリ言つて若いとは言い難い。後は余生を穏やかに過ごすだけという、人間の世界でも往々にしてある年寄りの日々を過ごせば良い筈なのだが、さすがは帝国海軍艦魂史上でも超が付く程の大問題児であつた金剛を育てただけの事はある。

なんと敷島は40余年の生涯を経た今でもなお、その健全な身体と運動能力を鍛えており、それどころか愛弟子の金剛と武技教練を行って勝ってしまう程の強健さをも備えているのだ。

おかげさまで未だに師匠に面と向かって抗えず、喧嘩自慢、度胸自慢が売りの笥の自分にとって超えられない壁であり続ける敷島が、時に金剛にとっては小さな悔しさの矛先になる。弟子入りして20数年、現代の帝国海軍艦魂社会では第一線組みの親分として君臨するのに反し、敷島にだけは金剛の頭が上がらないのだった。

それが転じてか、負けず嫌いで鼻っ柱の強い金剛が僅かに不機嫌そうな表情となって本のページをめくる中、彼女のサラサラと流れる金髪の隙間より来訪してきた者の応じる声が通り抜けて来るのだが、その声の中にあつた言葉を耳に入れるや、金剛のページをめくろうとしていた指が止まる。

『そう。敷島姉さん、相変わらずなのね。元気そうで何よりだわ。』
『ね・・・、ねえ、さ、ん・・・!?』

その瞬間、金剛の身体に纏わり付いていた暇が生む倦怠感と眠気は引き波の如く去って行き、変わって脳裏の奥底にあつたとある大きな存在の記憶が、寄せ波となって金剛の意識の中に押し寄せてくる。

金剛は知っている。

長い時の流れの中で一人、また一人と失われてきたという、師匠の敷島を姉さんと呼べる者が、今もこの世にたった一人だけ生きている事を。師が全幅の信頼を置いていた故に幼い頃より世話を焼いてもらい、鬼の様に厳しい修行の日々においてその慈愛心が溢れた人柄にどれだけ救われただろうか。まだまだ荒んでいた心をあの美しい微笑と忘れ得ぬ紅茶の味で癒し、それでも道を踏み外した自分

を柔道をもって再び歩かせてくれた恩人。

かつては4名居た内、敷島のすぐ下の妹に当たる者。

そこまで記憶が蘇るや、金剛は持てる素早さの全てを用いて身体を捻り、背後にて往時のあの微笑を浮かべている人物へと視線を流す。そしてそこに在ったのは、決して見間違う事無き琥珀色のカールのかかった髪を持つ女性。

刹那、金剛は僅かに瞳の端を光らせて、その名を叫ぶのだった。

『叔母御・・・！ あ、朝日の叔母御やないですか！！』

『ふふふ。貴女も相変わらず元気そうね、金剛。』

『叔母御ー！！』

砲声の如き絶叫を上げた後、金剛は椅子を蹴り、手にしていた本を放り投げて朝日の傍へ駆け寄ると、その大きな身体と両腕を広げて朝日へと抱きついてくる。160センチ台の身の丈しか持たず、しかも老いが目立ち始めた40代の女性像を持つ朝日にとって、そんな金剛の抱擁は勢いの点でも強さの点でも相当に過激な代物であり、朝日はもんどりうって後ろに倒れそうになるのを堪えながら、自身の肩に顔を乗せる様にして抱きついてきた後輩に声をかけた。

『ふ、ふふ・・・久しぶりね。うぐ・・・。ちょ、ちよつと・・・、く、苦しいわよ、金剛・・・！』

『叔母御ー！ ハーハッハハ！ ひっくさしぶりやないですか！
いつコッチ来とったんですか！ ハハハ！』

もはや一種の絞め技にも等しい金剛の抱擁。当の金剛は数年ぶりとなる朝日との再会を心底喜んでいただけなのだが、180センチ以上もあるその身体と四肢に込められる力は生半可な物ではない。

朝日も決して後輩に攻撃の意思があるとは思っていないし、日本へとやってきた頃から彼女を見てきた故に手に取る様に理解できたその歓喜の心を否定するつもりなぞ毛頭無いのだが、老体にはちと苦しすぎる行為である。

無理も無い。金剛は朝日の温もりを感じる今、その胸の内を完全に童心へと返らせてしまっているのであり、年甲斐も体面も忘れて朝日の左右の頬に何度も唇を押し当ててばかりであった。

『わ、わかったから・・・！　もう離してよ、金剛・・・！　く、くるしいってば・・・！』

『おおお、っと。こらあ堪忍やで、叔母御。はっはっは、ホンマ、えろう久しぶりやったさかい。たはあゝっ、叔母御はいつ見てもべっぴんやなあゝ。』

後輩の激しい歓迎に朝日が困って手を振り回し始めると、ようやく金剛は理性を取り戻して朝日の身体に巻きつけていた四肢を畳む。全く加減が無い抱擁により朝日の美しい髪は外側に飛び跳ねる毛が何本も生まれ、ヤマが揃っていた濃紺の軍装も一瞬にしてしわだらけとなり、ろくに近況も話さない内から身嗜みの再構築を行わねばならなくなってしまった。

『んもう。ああ・・・、服がシワだらけになっちゃったじゃない。』

僅かに腰を折って胴回り、袖周りの辺りを白い肌も輝かしい手で払う朝日からは、ちょっと声色に怖さを滲ませた上での愚痴が漏れて来る。もともと非常に社交や礼節という物を大切に考える彼女であるから、例え付き合いの長い後輩と言えどもそこにあった無作法はささやかな怒りの矛先へと変化しやすい。同時にその気持ちは早速朝日のちょっと鋭角ぎみになった青い瞳に浮かんでいるのだが、金剛はそれに対して臆する様な様子は無く、常夏の南国の海を思わ

せる鮮やかなブルーの瞳を輝かせながら、その人柄に合う些か下品な感じもする賛辞を朝日に対して投げてきた。

『やゝ、ホンマに堪忍やで、叔母御お。5年ぶりくらいに会うたんやから、嬉しくてつい、・・・おほ！　ワハハ！　叔母御ゝ、相変わらずええ尻してまんなあゝ！』

嬉々とした表情で平謝りするかと思えば、次いでその口から出てくるのは朝日の流麗な身体しんたいの輪郭に対しての絶賛。二人とも同じ艦魂かんこん、そして同じ女性である中で、出会って間もない内にお尻に視線を投げているという金剛は、艦魂も人間も共通にして持っている世間一般の常識から見ればちょっとその気がありそうな人物に見える。だが、この言動には金剛なりの独自に視点がある事を朝日もよく知っている手前、声を大にしてより一層眉を吊り上げるような気は微塵も起きていない。

現代の帝国海軍艦魂社会でも指折りの鬼教官、徹底的に弟子を虐め鍛える師匠筋として名が通った金剛は、特に体力練成や武技習得においては専門家にも等しい教育理論と着眼点を会得した艦魂であり、その観点から他人の程度を見定める際に最も注視する部分が彼女にとってはお尻なのである。今しがた褒めちぎった朝日も然り、いつぞや散々に尻を引っ叩いてみせた朝日の弟子の明石や雪風も然り、自らが行った教育の日々において歴代最優秀の成績を収めた弟子という神通しんつうも然りで、金剛は軍袴越しに認める相手の尻の具合によつて、その持ち主が持つ体力や武技の強さをほぼ正確に把握できてしまうのだ。

『そういう言い方はみつともないわよ、金剛。それに私はもう、昔みたいに柔道なんて出来るほど若くないのよ。』

『なあに言うてんか。きょうびの若いモンらはブリキ缶と違わん尻

ばっかで嘆かわしいモンですわ。あないなクソ垂らすだけの尻、見とるだけでけったくそ悪い。やっぱし叔母御みたいに立派で綺麗な、テーパーアーマーみたいな尻持たななあ。はっはっは！』

ここに至って、金剛と朝日はようやくともに声のやり取りを交える。

5年ぶりに目にした尊敬する先輩の姿か、それともその尻の見事さが発端だったのか、強面の親分と明石や神通の世代の艦魂達から見られる金剛は極めて爽快な高笑いを伴って、朝日の一挙手一投足や微細な表情の変化を見て笑みを浮かべっぱなしである。濃紺の服と琥珀色の髪の毛の乱れを撫で終えた後、生来が大人しい人柄の朝日は金剛の話にただただ微笑を頷かせて耳を傾けているだけなのだが、両足でその場に立つ中で片足に体重を掛けたり、不意な潮風に髪を掻き揚げたりする彼女の何気ない動作が、金剛に楽しさを連続で生んでくれる起爆剤となっていた。

『おーおー。そういう観艦式の時、明石に会いましたで。なんや、叔母御が教えてやっとするそうやないですか。羨ましい限りやで。せやけどあんまり身体は丈夫そうにや見えへんかったさかい、叔母御、柔道の初歩ぐらいでも教えてやった方がええんとちゃいますか？ガタイも叔母御と同じくらいやし、吉法師きっぽうじ・・・あ、いや、神通どついてんも相当に度胸が有るいう証拠や。あないな薄っぺらい尻にしとくんはもったいないやないですかあ。』

『ふふふ。あの子はまだまだ勉強中の身だけど、先代と同じであれでとっても聡明な子よ。自分に足りないと感じいた時、きっと自分で考えての自分の力でちゃんと励める子よ。まあでも、もしその時に傍に居たなら貴女も手伝ってあげて、金剛。』

『おっほ！ 叔母後のお墨付きなら喜んで任されたっちゅーもんや。はははは。おうし、そんな時は徹底的にシバいたろうやないですか。』

こら楽しみが増えたでえ。』

『ふふふ。でもほどほどにね。あの子はまだまだ未熟で泣き虫なんだから。』

人柄とその品格の差異が非常に目立つ二人であるも、金剛が持つ朝日への絶対的な信頼と親しみ、そして逆に多くの後輩達を持つ中にある特別な愛情と真心を金剛へと傾ける朝日の心により、そこに現れるのは極めてほのぼのとしている、とある艦魂の談笑する自然な光景だ。

お互いに今現在の弟子の名を話題に上らせるや、もともと親分肌で年下の者を鍛える事に楽しみを覚えている金剛にとっては柵からボタ餅的な内容へと話が変わり、朝日からすれば20センチも見上げた所にあるその顔に白い歯を輝かせて金剛は笑みをまた一段階明るくするのだった。

おかげで金剛の脳裏には朝日との会話をもっともっと続けたいという意思が大滝の如く注いでくるのだが、やがて朝日が静かで優しい笑顔で二人が居る甲板のアチコチに流れている事に気づくや、彼女の思考の中にあつた大滝は一瞬にしてその流れを止める。

それは勿論、いま自分達が居る敷島艦の艦上にて朝日が視界に捉えようとしている存在が、金剛にあつてはすぐに察しがついたからであり、金剛は朝日にその内容を確認する事無くその場を駆け出すのだった。

『おわ！ アカン、こないな立ち話しとる場合ちゃうわ！ 叔母御

！ すぐに連れて来るよってに、ちょい待ってってやあ！』

『あははは。お願いね、金剛。』

金剛はその大きな体躯の中に抜群の運動神経を秘める。

生誕から30年にも迫る程の時間を艦齢として重ねた今でも尚、金剛は全力疾走すれば100メートルを11秒台で突っ走る事も出

来るほどで、朝日の真横を通り過ぎて上部構造物の有る艦中央へと走っていく最中、帝国海軍中最速の戦艦という分身に相応しいその俊足ぶりを披露してみせた。

その後に残るのは極めて健康で元気な後輩にただただ微笑む朝日と、遠くなっていく革靴が木甲板を蹴る小気味の良い音。そして駆け抜ける途上で艦のアチコチに放る、金剛の特徴的な叫び声だけだ。

『親方あー！ 親方ー！ どえらいこっちゃ！ 親方ー！！』

砲声をも思わせる音量で叫ぶ金剛の背中にはお淑やかさなぞ微塵も無く、あの長くて綺麗な脚線をがに股にして走る様子にも、女性の観点から持つ恥じらいという物がまるで感じる事が出来ない。粗野で乱暴でちよつと下品な上に、そんな自分を変える事には傲慢とも取れる程に拒絶の意思を抱く金剛の人柄は、至極当然の如く朝日が教え子を育てるに当たって金科玉条とする「一流の淑女^{レディ}」という在り方からは大いに逸脱する代物だが、それは朝日において金剛を嫌悪する理由にはちつともならない。10代後半の少女の顔を持って英国よりこの日本へとやってきた当時より、最後の外国製、しかも朝日と同じ英国生まれの戦艦という出自を持つ金剛は、同じ英国生まれ、同じ戦艦、そして同じように帝国海軍に嫁いで来た、という共通の境遇を持つ事で、朝日にすれば人間で言うところの血族の如き特別な親愛を注げる艦魂であった。

艦魂独自の師弟の壁も越え、個人の人柄や相性なんかも通り越した愛娘のような存在であり、時には大事件を巻き起こしてしまうそのやんちゃさも問題児っぷりも、無意識に抱く親愛の情と可愛がる気持ちりが全て覆いつくしてしまうのである。

『ふふふ。あの子は本当に変わらないわね。走り方も昔のままだわ。』

昔日と変わらぬそんな金剛の後姿に朝日はそう呟くと、ゆっくりとした足取りで金剛が突っ走っていく後を追いつける。姉妹艦である故に当たり前の事だが、自身の分身と同じように現代では特別広い訳でもない敷島艦の艦上では、いくら金剛の脚力が抜きん出ていても歩くだけで簡単に追いつける事が出来るし、あれだけ大きい声で呼ばればお目当ての人物がそろそろ姿を現すだろうと朝日は考えていたのだが、それはやはり正しかった。

『親方ー！ おやかー！』

『えーい、騒々しいな。何をギャーギャー騒いでいるんだ、キサマ。』

『イテツ・・・！』

朝日の眼前で艦橋構造物のウイングデッキの下を潜り抜け、ケースメイトへの入り口も近くなった所まで足を進めていた金剛であったが、突如として金剛のすぐ傍にあった鉄製の防水扉が開いたかと思われた刹那、その扉からは白いズボンに包まれた一本の脚が真横に伸びてくる。くるぶしから先に軍艦乗組みの水兵さんが今でも使用する事もある地下足袋を履いたその脚は、なんとも綺麗な直線で宙を突き進むや朝日のみぞおちの高さくらいにもなる金剛のお尻を弾き、その際の鈍い音ともんどりうって倒れる金剛の悲鳴が、やや遠くから目にしていった朝日の耳にもハッキリと聞こえてくる。

それと同時に朝日の足が進むのを止めて顔の笑みを深くするや、倒れこんだ金剛の傍の扉からは、真っ白な長袖の服を身に纏った人物が姿を現した。

よく見ればそれは粉塵や機械油の臭気も強い環境で働く機関兵が着る煙管服であり、目深に被ったフードによってその人物の肌が見えるのは顔の一部のみ。朝日の視界はその人物をちょうど真横から捉えており、認める事が出来るのはフードの下側に覗く顎と唇くら

いであるが、その懐かしいやや高めな音域を持つ女性の声と自分より僅かに大きいだけの身の丈が、突如として現れてあの金剛をぶっ飛ばしたという人物の正体を朝日に対して明確に教えてくれる。

やがて朝日は胸に深い感慨の念と嬉々とした気持ちを一杯にし、その気持ちが作り出したであろう薄っすらと涙も滲ませた笑みを浮かべながら、眼前の煙管服姿の人物と金剛の下へと再び歩みだすのであった。

第一二三話 「再会と憂慮／其の二」

『さあ、叔母御。おばいここや。入ってください。』

『ええ。・・・まあ。久しぶりな雰囲気だわ、このお部屋。』

へこんだり擦れたりした隔壁に包まれる敷島艦しきしまの艦内には、艦内奥深くよりボイラーの駆動音が小さく鳴り響き、それに伴って靴越しにも感じる事が出来る微細な振動が走っている。海兵団の若き新兵さん達による一部の缶のみでの実習運転との事で、その具合は力強い艦の心臓の鼓動というよりも、何か汽車が持つ眠気を誘うあの独特の心地にも近い。希に聞こえてくる若々しい声による号令もまた、相応に歳を重ねた金剛こんごうと朝日あさひには初々しい事この上ない感じに聞こえ、敷島の部屋へと入るに当たって既にどちらの顔にも笑みが浮かべられている状態だった。

そして数年ぶりに目にした実の姉の部屋に対し、朝日は部屋の至る所によく知る姉の特徴を次々に見つけてしまい、細く弓なりにした青い目をさらに細くする。敷島は先程甲板で会った後、その煙管服の下は汗だらけである事から再会の感動に浸る間もそこそこに、一旦お風呂へと行ってしまった為、金剛と朝日は主の居ない部屋で待たせてもらう事にした。

だがすっかりこの部屋を見慣れた金剛とは違って、朝日は部屋の持つ独特の光景と雰囲気にはばしの間五感を釘付けとする。

『ちっとも変わってないのね、敷島姉さん。ふふふ、この額入れなんか掲げてる場所も同じじゃない。』

二人が訪れた敷島艦中甲板の艦首側右舷の一角にある小さな一室は、敷島艦がまだ戦艦だった時代に艦で最も活気の有った砲術科に

おける倉庫とされていた所で、舷窓は部屋の中央の舷側側の壁にたった一つあるのみのちょっと暗いお部屋である。ワシントン海軍軍縮条約にて戦線復帰不可能な状態での練習特務艦となる事を決められ、搭載する装甲帯と砲門を全て撤去した時より空いたこのお部屋だが、ねずみ色一色で塗られた隔壁が全周を囲むという殺風景な往時の在り方も、敷島が自室としたその頃より色々と私物を持ち込んだおかげで結構様変わりしている。

士官室や艦長室の如くマットも敷かれていない、鉄の地肌が剥き出しの部屋にてまず目に飛び込んでくるのは、壁の天井も近い部分に掲げられる書道の額入れ。まるで刀が踊って作り出す斬撃の如きトメやハネが用いられた書体で、「堅忍不拔」なる文字がなんとも堂々とした威容を室内の一角にて放っている。どこぞの書道家の作品にも思えるが、この部屋に入る人間達には決して見えないこの額入れは、もちろん部屋の主である敷島が自ら筆を取って綴った立派な作品。まだ朝日や三笠みかさといった妹達に囲まれて第一線に属していた頃にしたためた一品で、すっかり老いを意識する妙齡となった現代の朝日にはとても懐かしかった。

『堅忍不拔……。どんな物事にも堅く抱いて忍び、その抜く事は決して叶わぬ程の不動の意思。敷島姉さんにいつも言われてたわねえ。』

細めた青い瞳を額入れに向け、口元の小さなホクロを弾ませながら呟いたのは、今はもう数十年の時を経てしまった朝日の若りし頃の記憶。

英国ゆかりとも言える紅茶の嗜みを大事にする朝日を始め、彼女の世代の艦魂達はその容姿に似合うように、遠い西洋の文化を大なり小なり己の生活に彩らせているのが常であり、それは言わば故郷への馳せる想いでもある。いずこかの地で生きる命として身を立てていかねばならない事は彼女達自身もよく解っているのだが、人間

であつても艦魂であつてもそんな中で簡単に捨て去る事ができないのが、いわゆる望郷の念という物だった。

それ故に朝日も含めて最初日本に來た頃はそれなりの戸惑いなんかも有った物なのだが、そんな姉妹内、或いは仲間内にあって、不思議と敷島だけは東洋の島国に故郷ではお目にかかれない面白い物をたくさん見つけ、郷里への想いなどは一切抱かない人物であつた。

特に敷島が強く興味を示したのは、この日本や支那における文字の文化で、絵画や造形品ではなく文字だけをもつて成す芸術がある事に、彼女は大変に大きな感動を覚えていた。

『考えてもみろ、朝日。私達が生まれたブリテンの地に、文字だけで体现される芸術が有ったかな？ ロンドンタイムスも聖書も、そこに綴られる情報にしか価値が無い。文面の美しさを論評した奴なぞ、意味の解釈を二の次とする愚者と捉えられるくらいじゃないか。だがこの漢字なる文字と、それが使われるこの地の感性は素晴らしい。それ単体に意味を持ち、綴る強弱や流れが一つの芸術として認知されている。いやあ、良い所に來れた物だ。』

往時において、お酒を飲んで朝日や三笠といった妹達にこう熱弁していた彼女。極東アジアの一角における文字の文化を大層気に入ったらしく、妹達が若干困った表情で相槌を繰り返す中でもその弁舌が勢いを失う事は希であつた。おかげで書道なんかは三度の飯よりも好きになった敷島は、ワシントン条約の頃に戦艦艦艇の舞台より引退してからというもの、もう毎日の様に筆を走らせる日々を続けており、漢字を代表格とする東洋的文字文化に飽く事無き探究心をずっと胸に抱いてきた艦魂なのだった。

『ふふふふ……』

朝日はそんな姉の昔と変わらぬ趣味の特徴を思い出し、無意識の内に唇の隙間から小さな笑い声を漏らす。少し趣味に熱を走らせやすい姉の人柄が変わっていない事に嬉しさが満ち、涙の如くひとりで湧いてくる可笑しさに胸がいっぱいになった。

そして朝日の一人クスクスと笑い出す姿に加わる様にして傍に寄り添い、一緒に額入れを見ながら金剛が述べた姉の近況もまた、朝日の笑みをより明るくしてくれた。

『あゝ、相変わらずでっせ。それにこん？忍？^{しのぶ}の字が好きなんも。刀にトメを打ってこそ刃たり。ほんでそれを成す心を書けば忍ぶとなる。威力ひけらかして振り回すんはなまぐらの証やて、今でもワシに説教して来るんですわ。』

ちよつとだけ口をへの字にしながらの笑みを浮かべる金剛。艦魂としては完全に大人、立派に一人立ちした者の筈なのに、どうも敷島の前だけではいつまで経ってもお説教とお叱りばかり、と子供の様な扱いを受けてしまう。もう慣れたとは言え、先刻甲板で頂戴したばかりの一撃で鈍痛が残っているお尻を擦りつつ、年月を得てもちつとも衰えない元気なお師匠様に、若干の目の上のたんこぶと捉える気持ちとほのかな尊敬の念を抱くのだった。

また、敷島のご健在ぶりを悟らせる物品は額入れだけではない。

部屋の隅にて一人しか座れぬ程にしか敷かれていない筵と、その筵に正対するように敷かれた1メートル四方のマットは、今しがたの額入れに始まる敷島の書道作品を生む非常に小さなアトリエで、鉄の地肌のなんとも冷めた感も満ちる部屋の床にポツンと置かれたその光景は、凜とした表情と真っ直ぐな背筋を常に崩さない敷島の、

人物としての落ち着きが具現化した様でもある。傍らにはビールか何かの空き瓶に活けた何枚かの葉も付く小枝が飾られているが、地味な静寂の中に僅かな緑の彩りを備えるというその在り方もまた、寡黙な中の姿勢や仕草が朝日以上に美しかったりする敷島の特徴を代弁しているかのようだった。

更には舷窓の真下の辺りに、対局の途中だったのか、駒が定位置通りに並んでいない将棋盤なんかも置かれている。これもまた、「戦とはココでやる物。」という言葉をこめかみに人差し指を突き立てて放つ、という敷島独自の言動と繋がる代物でもある。

ただ朝日にあってはそんな将棋盤よりも、筵とマットでこじんまりと設けられたアトリエに懐かしさを覚えた様だった。

『布団は畳んでもこの座敷だけはしまわないのよね、敷島姉さんは。硯も筆もそのままなのね。』

『ええ。教えるガキ供も艦隊訓練で出払うとる最近は、酒飲みながら書道三昧の毎日ですわ。ワシには何が面白いんかよう解らんけど。』

朝日と違いこの部屋を完全に見慣れている金剛は、朝日の様に敷島という人柄が残す余韻を探ろうという意識が元よりなく、東洋独特の芸術である書道とかには全く魅力を感じていなかった。既に部屋への案内も終えて後は怖いお師匠様の風呂上りを待つのみであり、やがて金剛は室内の壁に2、3個立てかけられていた折り畳み椅子を引っ張り出すや、少し退屈そうな表情を浮かべて腰を下ろす。朝日との再会に有頂天だった心も今は静まり、姉の近況を求めて室内

を眺めるばかりの朝日を邪魔する訳にもいかないとくれば、再び金剛の苦手なじつとして過ごさねばならない時間がやってくるのだった。

故に金剛はその長い四肢を椅子の上で伸ばし、込み上げて来る退屈に伴われる眠気に大あくびを放って、まだ部屋のそこかしこに姉の残像を追いかけている朝日の姿を目で追うばかりである。

逆に言えば敷島の部屋はそれほどまでに質素であり、他には畳まれた布団と机代わりに用いている腰掛くらいの大きさの木箱が一つ有るだけと、この辺もなにか東洋に「清貧」という言葉に表される文化的な理想感、または美学なんかと繋がりそうであると言えなくもない。見た目は完全に西欧における白人女性で、透き通った青い瞳と僅かに黒みが目立つ金色の髪、奥まった目と高い鼻なんかは、東洋という言葉とは一切の繋がりを持たせないのが相場であるが、それに反して非常に東洋的文化に魅了され、精通している敷島。

質素な部屋の中にもその色濃い影は結構残っていて、やや埃もかぶって壁に立掛けられているのは、まだまだ10代半ばの少女の容姿であった頃に朝日も餌食になり、金剛にとっては汗と血と恐怖に覆われた修行時代の権化ですらもある、たった一本の古ぼけた竹刀。竹の地肌はあちこちでひび割れを生じ、刀身部分を縛る紐に走った横縞模様は全て継ぎ接ぎの跡で、柄の部分に黒く染みで描かれた持ち主の指の形なんかも含めて、その年季と使い込まれた様を物語っている。その証拠に朝日と金剛の記憶に残るこの竹刀は、いつも必ず鬼の如き形相で修練を課してくる敷島の右手の中に在り、これまたこの東洋の島国が持つ独自の概念、「侍」を連想させるのに十分な姿であった。

『とにかく強い……。ふふふ。そう、そんな艦魂^{ひと}だったわねえ。』
『なんや叔母御、今更になって。はっはっは。そう言うたら、三笠』

の姐御もたまに同じ事言うてはったなあ。』

甲板上では挨拶もそこその再会だった手前、朝日は姉の近況や人柄を直接本人から感じ取れてはいない。だからなのか、部屋から読み取る姉の後姿は、どうにも朝日には懐かしさに満ち溢れた物となってしまう。再び椅子の上で伸びをする金剛を背後に、朝日はその思い出深い竹刀に手を触れようとするのだが、その刹那、前触れ鳴く響く金属音と共に部屋の扉が開かれた。

朝日も待ちに待っていた、敷島のお風呂からのお帰りだった。

『おお。待たせてすまないな、朝日。』

甲板上で身に着けていた白い煙管服も取り替えたのか、同じ白でも丈の短い運動着の上衣とズボン姿で現れた敷島。朝日より僅かに高い所にある頭をタオルで拭い、湿った金色の髪の毛の束が棘の形となってタオルの狭間より覗く。やや朱色も混じるその金髪は朝日と同じ強めのカールを持つが、その長さは肩を覆う程もある朝日とは違って変わって短めだ。ちょうど顎のラインに至る辺りが最長部なのだが、独特の巻きグセのかかった髪は規律無く跳ね上がって、朝日と比べてもどこか野生的な風貌を伴わせている。顔立ちもよく似てはいるが朝日よりもひし形の度合いが増した彼女の目つきは、弟子達にも通ずる怒ると非常に怖そうなお顔の主演となっており、男のような言葉遣いがその猛々しさに一層の拍車をかけていた。

もつとも金剛を始め、赤城^{あかぎ}、神通^{じんつう}といった乱暴な艦魂達の系譜に頂点として君臨するのに反し、背筋も伸びて非常に立ち姿も凛々しい敷島の全体的な人物像は、女性らしさが幾分薄い物であってもある種の品格が備わっている様に見える事ができる。怒鳴ったり殴ったりを平気で行うのは同じだが、平素は意外にもその人柄に弟子達の

如き荒々しさが無いのだ。

もちろんおっかない面構えをしていても、今の彼女には実の妹の朝日に対してげんこつや罵声を放つ気は微塵も無く、やがて頭を覆っていたタオルを脱いで素顔を露にするや、敷島は僅かに青い瞳を弓なりにして朝日に向かい両腕を開いてみせた。

『久しぶりだなあ、朝日。ははは。さあ、もっとよく顔を見せてくれ。』

朝日にとっての敷島は、この世にたった一人だけしか存在しない最愛の姉。逆に敷島にとっても朝日は、今現在では自身を姉さんと呼んでくれるこの世でたった一人の存在に他ならず、弟子の系譜に連なる神通によって彼女が再会を所望していたのは朝日も知る所である。応じる声など無用の物で、朝日は笑みを深くして敷島と熱い抱擁を交わすのだった。

『・・・うむ。相変わらず綺麗だな、朝日は。』

『敷島姉さん・・・、いつ見ても本当に若いわ。ふふふ、私の方が老けてる。』

お互いに胸と胸を合わせ、交互に相手の頬に口づけする交わりは、日本人には馴染みが薄くても本来が西欧人であるこの二人にあっては至って普通の事である。まるで紅茶の水面を模したかの如き色合いの朝日の髪を撫でながら敷島は妹の美しさを称え、対して朝日が口にしたのは自身よりも年上の筈の姉が持つ異様な若さ。既に艦齢40余年を迎えた朝日は、目尻にも口元にも消え去らないしわが常に控えているというのに、不思議と敷島の顔の中には全くしわは存在せず、その顔立ちには傍から見ると30代半ばの金剛の顔と殆ど同じくらいの年頃にも見えるのだった。

人間から見れば摩訶不思議な艦魂達の在り方だが、こんな敷島の年齢不相応な若さは艦魂達の中にあっても摩訶不思議な事で、今更ながらに朝日は敷島の持つそんな特徴に大いに感動を覚える。しかし実の所は敷島にとっても朝日にとっても、そして二人の抱擁を少しはにかんだような笑みでもって見守っている金剛にあっても、決して原因不明の謎などではない。

なぜなら外見の面でもその身体に秘める体力の面でも若さの水準を保つ為、敷島は結構昔から色々と試行錯誤を重ねており、その結果として鬼教官ぶりが様になる人柄に相応しい荒行の数々を自身の修練として毎日課している事を、朝日も金剛も知っていたからだ。

『フン。お前は昔から、身体の鍛錬を少し疎かにしていたからなあ。しわは顔の脂肪を老化した皮膚が支えられなくなっている。だから私は今でもああやってスチームを使って削ぎ落としているのさ。』

お互いの高い鼻が触れ合うくらいの距離で顔を認め合いながら、微笑を絶やさぬままで敷島が言う。

言葉の最後の方にも有った通り、朝日が甲板上で出会った煙管服姿の彼女は、まさに若さを保つ為の荒行の真っ最中であった。これは朝日や金剛に限らず、帝国海軍艦魂社会では敷島艦名物として囁かれている物で、その詳細は機関室に程近い密閉した部屋に意図的に蒸気を濛々とたちこめさせ、尋常ではない高温多湿の環境の中でひたすらに運動を続けて大量の汗を流すという代物。一片の脂肪すらも許さない覚悟でもって行う我流の体重操作術とでも言った所で、敷島の痩せ型な体型と若さが目立つ外見の基礎を成す修練でもある。しかもその度合いは昔よりも一層激しい物になっているらしい事が、不意に金剛と敷島の間で行われたやりとりによって朝日へと示される。

『ワシもたまにやけどやってるんやで、叔母御。ただ汗掻くだけや

からちよい退屈やけど。』

『このバカタレ。お前より10年も歳をとってる私でもシャドーボクシングをやってるんだぞ。籠るばかりではなく、運動をせんか。』

『お、親方・・・！　そ、そないな事しとったんですか・・・！？』

『まったく、コレだ。きょうびの若いモンはなつとらん。朝日、お前も今からでもやったらどうだ？』

相も変わらずの体力練成通ぶりをもって再会の会話をするなどなるとも敷島らしいと朝日は感じ、ちよつと自分への指摘に近い言葉を放たれた中にあつても機嫌は決して傾かない。肩や首筋に触れ合ってお互いの健在ぶりを確認しあうばかりで、ようやく椅子を取り出してゆつくりと積もる話をするのは、それから30分程も経つてからになる。

ただ、姉妹愛に溢れる抱擁ばかりが時間の経過の理由ではない。久々の再会となった敷島と金剛は、本来は客人である朝日の事を十分に承知しつつも、その代名詞である美味で好評な紅茶を共に所望したのであり、同時に朝日は嫌がる素振りも見せずに二言返事でそんなお願いを承諾したからだった。

『たはゝ。叔母御のティーは久しぶりや。親方も嬉しいですよ？』

『フン、当たり前だ。ここ数年も飲まされ続けて来た、お前の淹れるマズいティーなぞもうウンザリだ。ようやくこれで舌が癒される。』

『うへ・・・。　お、叔母御の前でそれ言わんでもええや無いですかあ・・・。』

敷島の質素な部屋の隅っこにて、一度朝日艦に戻って取ってきた

紅茶の道具を扱っている朝日の背後では、昔懐かしい厳しいお師匠様とその弟子によるちょっとしたお叱り芸が展開されている。

現代では完全に第一線から引退し、佐世保という帝国海軍艦艇の家にて留守を預かるような形で在籍している敷島艦にあって、その命たる敷島の身の回りのお世話が一番世話を焼いた弟子である金剛が担っているのだが、何事にも荒々しくて粗暴さが目立つ彼女が氣を利かせるそんなお役目を平坦にこなせる訳が無い。椅子に深く腰掛けてまだちょっと湿り氣が混じるクセ毛を撫でながら、敷島はそんな弟子の至らぬ部分に嫌味な言い方でもってご指摘を投げる。

するとこのお師匠様に散々に蹴られ、殴られ、怒鳴られて育った金剛では、持ち前の氣性の荒さを前面に出した応対は不可能な話。敷島よりもまだ10センチ以上も大きな身の丈の身体を萎縮させ、おっかなさ満点の敷島の横顔に恐れ慄く色合いが混じった視線を向けるばかりであった。

『ふふふふ。きっと金剛のティーの淹れ方はまだ荒いのね。』

転じてそんな二人に背中を向けたままの朝日は、久しぶりに耳にしたこんな師弟の様子が面白くてならず、持ち前のお説教屋さんぶりを垣間見せながら笑い声を上げる。それと同時に彼女の手下では、その琥珀色の髪と同じ色合いを持つティーの流れが滝を作り、傾けたケトルより湯気を昇らせながら3つのカップに注がれていた。

『ふむ。久々に聞く佐世保川に劣らないせせらぎだな。良い音色だ。気持ちに無用な波打ちが無い証拠だよ、朝日。』

やがて柔らかで清楚な物腰をもって紅茶を淹れる朝日の後姿に、髪を掻き揚げながら敷島が溜息混じりの声を放つ。他人の事を滅多に褒めないその人柄を勘定すれば、金剛にとっても朝日にとってもちよっと思いがけない言葉であったが、それだけ敷島が何もかもが

久しぶりな今を楽しんでいるかだろうと二人は察する。

先ほど嫌味を言われたばかりの金剛が早速それを確かめるべく、僅かに上半身を傾けて隣の椅子に腰掛けている師匠の表情を覗き込むと、やはりそこには口元が緩んだ敷島の表情があった。

朝日と顔つき自体はよく似ているものの、骨格の隆起が朝日に比べてやや顕著な彼女の顔は、ふくよかさが目立つ輪郭を持つ朝日より表情の変化が出やすい。それにそも日々の鍛錬で極限まで贅肉を削ぎ落とそうとしている故か、昔から寡黙でおっかない顔をしているのに反して、意外にもその表情の変化を隠す事ができないのが敷島の顔である。

その内によく紅茶が全てのカップに注がれ、それらをトレイに移して踵を返した朝日の瞳には、そんな姉の嬉しそうな顔がやけに輝かしく見える。おかげで数年ぶりにこの3人で催すお茶会は、まだそれぞれが香りすらも楽しんでいない中であっても、非常に会話の明るさが際立つ代物となった。

『さあ、できたわ。』

『おお。待ちかねたよ、朝日。』

『おほ！ 待ってましたでえ。あ、叔母御。ワシが並べますよってに、ささ、はよ座ってください。』

まだまだ肌寒い2月下旬。

ただでさえ採光に携わる舷窓が一つしかない敷島の部屋は薄暗く、人間達のように暖房としてストーブを用いる事もできない艦魂達の集いであるから、憩いのある場である室内はそれ相応の華やかさという物に関してちょっと物足りなさが生じている。地味な色合いの黒髪と

濃紺の軍装を纏う、すなわち帝国海軍艦魂社会らしい日本人女性の容姿を持つ艦魂達なれば、言っては悪いが例えこんな環境でのお茶会であってもそれなりに似合うのかもしれないが、金色や琥珀色といった非常に自己主張の激しい色をそれぞれ髪に持ち、目鼻筋が通った上に空色を滲ませる碧眼を顔の特徴とする朝日達では、どうしても何かみすばらしい様な雰囲気がその姿を包んでいるようだ。

ただ、実際に憩いのお茶会を催している3人にあってはそんな事はちっとも気にはなっていない様で、持ち上げたカップを指差しながら早くも談笑を始めている。

『なんと懐かしいカップだなあ。こいつは私や朝日がこの国に渡って来た時に、一緒に持ってきた物だぞ。金剛。』

『ええ、知つとりますがな。ワシのはきつと三笠の姉御のやつचना。カップの逆側の縁んトコの模様だけが薄くなつとる。あん人は左利きやったさかいな。』

『うむ。では私のは初瀬^{はつせ}のか。朝日は自分のカップを他人に使わせないだろう?』

『ふふふ。正解よ、二人とも。本当は敷島姉さんのカップも有ったんだけど……。』

お互いに白い歯も覗かせて笑い合う最中、朝日が濁るような物言いで声を放つのと同時に、カールのかかった前髪の奥に有る敷島の細い眉が僅かに脈動する。何やら朝日の言いかけた事により敷島の機嫌が少しだけ傾きかけた様で、弟子として過ごした故に誰よりもその斜めぶりに敏感となってしまった金剛は、すぐにお師匠様の瞬間的に疼いた眉に気づいた。

だが帝国海軍艦魂社会でも一番の鬼と格付けされる敷島のご立腹としては、その程度の具合は明らかに低い物であり、それをよく知る金剛はそれ程までにお師匠様のお怒りをそれほど憂慮する事は無く、笑みを浮かべたまままで敢えて今しがた敷島が抱いた思考を尋ね

てみる事にする。

『おっとお？ どないしたんですか、親方？ もしかして、こんカ
ップになんか曰くでも有るんですか？』

『ああ、そうだったわね。金剛がまだ来る前のお話だったわね。』
『フン。』

明治の終わり頃に生まれた金剛とその分身は艦齡30年にも迫り、
現代の帝国海軍艦艇としては相当に古参な部類に入る艦の内の一隻
なのだが、敷島と朝日が悟ったカップに纏わる一悶着はそれよりも
更に時間を遡った頃の記憶らしい。全く世辞抜きにして親のように
この二人を慕う金剛は、当然の如くその真相を聞かせてくれとねだ
り、昔懐かしさ混じりの微笑を湛えるばかりの朝日の前で、敷島は
愛弟子に憤怒の念籠る昔話をやや語気を荒くして話してやった。

『ロシアとの戦の前の頃、常盤とわの奴だ。あのバカタレめ、欲しがっ
てた本を太平洋航路に就役してた客船から手に入れた、と有頂天に
なつててな。その時にちょうど私や初瀬、三笠は朝日がティーを淹
れると聞いて集まってたんだが、お前は知らんだろうが常盤は初瀬
と仲が良くてな。凄い物を手に入れたとやんやんやし始めたのが
ケチの付け始めだ。フン。ふざけ合ってる内に常盤の尻が朝日の尻
にぶつかって、その拍子に朝日が用意してた私のカップを粉々にぶ
ち壊したのさ。』

『ふふふ。正確にはテーブルから落ちて割れちゃったんだけどね。
ふふふ・・・、あはははっ。お、可笑しいわ・・・！ あはははっ。
』

カップの中にて揺らぐ柔らかな茶色の水面を眺めながら話す敷島
は、大事にしていたであろうカップが第三者の過失で失われた事を

快く思っていないようで、持ち前の男性的な口調にはかなりの鋭さが滲んでいた。薄っすらと眉間に寄せたしわも合わさってその表情は不機嫌な事この上なく、年齢相応の落ち着きの中にも割と感情表現が豊かである面が見て取れるが、それ故に朝日は敷島の言葉に昔を思い出して大笑いしてしまう。

清楚、静寂、丁寧といった言葉が非常に似合う人柄で慕われる朝日が、口に蓋をする様に手を添え、身体全体を伝う可笑しさが生んだ震動に思わずカップを置いて抱腹する、というのは非常に珍しい。自然と金剛も隣にいるお師匠様の不機嫌なご様子を忘れ、つられて笑みを浮かべて笑い声を漏らし始めた。

その最中にも朝日と敷島の脳裏に蘇って来るのは、まだようやく20代の女性の容姿も迎えた頃の自分達の姿。時の流れに沿って失われていった仲間、姉妹もまだ揃っていて、笑うのも喧嘩するのもその全てにおいて自分達が中心になっていた頃であり、それは朝日や敷島といった船の命達の青春時代と言っても過言ではなかった。

『こんのバカタレー!! キサマ、今すぐイングランドに帰って買ってきて来い!』

『わー! わ、悪かったって言ってるだろ! あ! ふ、富士先輩タスケー!』

こんな大声を上げて甲板上を走り回り、せっかくのお茶会が大騒動へと発展してしまう事も日常茶飯事であったあの頃が、朝日にとってはとても懐かしい。よくまああれだけ騒いでばかりいた物だと今更ながらに思えると同時に、脳裏に描かれる自分達の姿がこれ以上無いくらいの傑作喜劇のように見えた。

『ハッハッハ。常盤の姉さんは足が速かったてよお聞きますわ。さすがの親方も捕まえられへんかったんっちゃいますか?』

『フン。おかげであれから私のカップはいつも借り物だ。忌々しい。

』
『あつはははつ。』

弟子の詮索にも仏頂面のままで、敷島は紅茶の溜飲を静かに続ける。それは沸々と湧くかつての怒りをティーの味わいで拭おうとしているかの様でもあるが、隣でこれ以上無いくらいに抱腹している妹の姿がその怒りを一掃させてくれない。別に自分を嘲り笑うつもりがない事は敷島も承知であるも、弟子同様に中々憤怒の感情が治まらないのもまた、鋭い鷲の如き青い瞳を始めとする彼女の怖いお人柄が持つ大きな特徴だ。

『腹立たしい奴だ。遣米支隊の時にもアメリカで手に入れて来いと言ったんだ、私は。それなのに忘れて本ばかり持ってきておって。』

首を捻って短い髪を揺らしながらねちねちと常盤をこき下ろす様は、少し敷島に口うるさい老婆の風格を伴わせる。終いには手にしたカップを投げてしまいそうにも思えるほどに不機嫌さを顔に出しているが、金剛も朝日も大してそれを憂う事無く笑い続けていられるのは、敷島と常盤は別段仲が悪い間柄ではない事を知っているからだ。

常盤の分身は敷島や金剛のそれと同じ佐鎮所属で、数年来支那戦線に派遣されていた呉鎮所属の朝日なんかよりも一緒に居た時間は抜群に長いし、40余年を迎えた艦齡をもって現代を生きる同期の輪の中、最も功名を立てた働き者として敷島は常盤の実力を普段から高く評価している。現に日本へとやってきて敷島を師と仰いだ金剛は、共にあの日本海海戦にて奮闘した仲間であるとお師匠様に紹介してもらった際、出雲と並んでこの常盤を文武両道に優れた大先輩として崇める様にと、かつては念押しされたものであった。

あくまで一時の怒りであり、その攻撃的な物言いに反して仲間に

憎いという感情を抱いている訳ではない。それ故にカップを持ったままで腕と脚を組んだ格好の敷島に、笑いがやや収まってきた朝日が他の同期に当たる物達の名を出して話しかけるや、それまで尖りっぱなしであった彼女の目は再び細く弓なりになり、その唇からも愚痴めいたそれまでの物とは異なる、明るい声が漏れてくるのだった。

『あははは。浅間あいまも常盤の元気さには今でも半分呆れてるのよ。同じ姉妹でどうしてこんなにも違うのかしらって。』

『おお、浅間か。練習艦隊所属の頃はよく佐世保にも来てたんだが、少し前の座礁事故からは会っていないな。どうだ、元気なのか、あいつは？』

声を交えるや朝日と敷島はそれぞれのカップを口に添え、奥深い香りと味を緩んだ頬の奥に染み渡らせる。お茶会の最初の話題は金剛も含めた3人が手にするカップの事だったのに、いつの間にか彼女らの話題は同期に等しい仲間達の近況へと移り変わっており、それに伴って談笑の時間はさらに続いていく事が約束される。

工廠のど真ん中で繋留された敷島艦。

その艦体を包む寒さも騒々しい機械音も、もはやこの3人の弾む会話を止めさせるところか、ただの一瞬でも遮る事にすらも用を成さなくなっていたのであった。

第一二四話 「再会と憂慮／其の三」

かつては「潮に浮かぶ城郭」とも謳われた敷島艦^{しきしま}。

甲板上に天高く真っ直ぐに聳えた2本のマストは望楼の様相を呈し、甲板上に鎮座する2基の巨砲とケースメイトが含まれた舷側より突き出す無数の小さな砲門は、文字通りの鉄壁にして近づく者には容赦無く死を与える城塞の権化。煤煙を立ち昇らせる3本の煙突はさながら狼煙台の如しであり、彼女の為だけに作られたという「敷島艦行進曲」の詩は、その姿を非常に正確に捉え、次いで表現した物である事は論を待たない。

おまけにその威容に違わぬ戦艦としての能力は、誕生した頃にあつては7つの大洋を見渡しても見つける事ができなかった程の優秀ぶりで、真正面から戦って勝てる艦が当時存在しなかった事は決して世辞で終わるお話などではない。十六条に及ぶ日輪の光線が描かれた軍艦旗を高らかに掲げ、走攻守の三拍子を揃えて波頭を蹴散らすこの敷島艦は、生まれた当時にあつてはまさに「バケモノ」と形容しても差し支えない、とんでもない戦艦艦艇であつた。

しかしこの世の理として絶対が無いのと同様に、敷島艦の立派な艦体はいつしか年月という名の強敵が蝕み始め、かつてのその勇姿を称えた詩も現代にあつては当て嵌まっていなくなっているのが本当の所である。

堅固なる甲鉄艦の体面は錆びや汚れ、変形、欠損もだいぶ目立ち、凱歌揚る旗も今や信号旗や将旗は無く、軍艦旗のただ一旒のみ。艦

の美事を成した乗組の丈夫もその数はまばらであり、城塞の要であった大砲速射砲は大小に関わらず全くその艦体には見つける事ができない。長く岸壁に留め置かれて既に懐かしさが滲むのは、かつては上甲板より望めた鳥も帆影も灘の上の光景。大洋を自在に旅する日々を知る者も少なくなり、横須賀港の深緑も今は佐世保の入り江の雪化粧にとって代わられている。

ただただ時代の流れに流されるまま老いた敷島艦であり、一時とは言え世界最強の名を冠した精強さは、もう忘れ去られていくのも時間の問題である。

やがて、運が良ければお船の一生を終えるのには最も穏やかな解体が施行されるのであろうが、自身の帝国海軍艦艇としての嫡流に相当する後輩達の手によって標的艦として葬られる運命も相当に高い可能性で考えられるという結末も予想しつつの、残り少ない余生に浸っている状態と言っても過言ではなかった。

ところがそんな余生を悲しむでもなく、寂しく思う訳でもないのが、この敷島艦の命である敷島であった。

艦齢もだいぶ重ねて老齢な事を理由に佐世保の棧橋に繋留される中であって、敷島は多趣味な性格を存分に謳歌しての充実した日々を過ごしており、たまに新参の艦魂や同じ鎮守府所属の金剛こんごうのような教え子をこれでもかと虐め鍛えるのが、実の所ではブランドンなんかの洋酒に、妹の淹れる紅茶をかくらうのと同等なくらいの大好物である。作業地を点々とする現役ではどだい味わえないのんびりとした時間は、かつては帝国海軍艦魂社会でも指折りの戦上手であった敷島であっても、なんの苦勞もいらない非常に充実した時間として捉えていた。

おまけにそんな中で実の妹と愛弟子でその場を同じくし、昔懐かしいティーの紅色と香りに存分に浸れるのであれば、不機嫌とか退屈といった気持ちは自然と鳴りを潜める物である。そしてそれに代わって巻き上がるのは敷島自身も含めた皆の笑い声ばかりで、非常に質素で地味な見てくれの敷島の部屋には、それを打ち消すような笑みが満ち溢れていた。

『まあ。これ出雲の手紙なの？』

『そうです。出雲姉さんは、あれで筆まめなお艦魂やさかいな。親方んトコには上海から佐世保に来る運送艦の連中に頼む形で、月に2通くらいは来るんですわ。』

『出雲の奴、頑張っている様だな。支那戦線はこの所は内陸の重慶方面、それから海南島や仏印沿岸といった南支方面での活発な動きが目立つそうだが、あれだけ広大な作戦地域を艦隊旗艦として捌ける奴は出雲ぐらいだろう。その証拠に、大きな作戦行動上での混乱も聞こえては来ないからな。』

テーブル代わりの木箱の上にティーカップと一緒にあって、やや散らばるようにして置かれた何枚かの紙切れ。横に綴られるタイプ打ちではない字による文面はそれが便箋である事を示し、笑みを向ける3人が口にするのはその手紙を書いた張本人の名前である。

何通にも渡るこの手紙は全て敷島宛に届いた物だが、髪の色や顔立ちの面で日本人離れた3人の内で最もその雰囲気明るくしていたのは、今日は客人としてその場に訪れている朝日だった。答えは簡単でお手紙の作成者である出雲は、朝日にとってはもう40年以上にも渡って親友の間柄を維持している艦魂だからで、完全に見慣れた文面にただただ微笑むばかりである。冗談好きで非常にひよ

うきんな友人はその文面もまた明るくて、日本語で書かれているにも関わらず時折混じっている筆記体で書かれた英単語に、自由奔放でいつも陽気なその人柄が満ち満ちているように朝日には感じる事ができた。

加えて文語体とか口語体とかは完全無視のこのお手紙は、のっけから出雲という艦魂の楽しい性格が爆発していてなんとも愉快である。

Dear Sikisima.

出雲ちゃんだお！

『あのバカタレめ、いい加減にトシを考えろ。もう自分の名前にちやんなぞ付けた顔じゃないだろう、まったく。』

『ワハハハ！ さっすが出雲姉やんや！ この調子やさかい、きつとバンド沿いでも人気者ですやろ、叔母御？』

『ふふふ。出雲はいつだって出雲よねえ。去年まで上海で一緒だったけど、本当に昔と変わってないのよ。』

皆が知る出雲という艦魂はとにかく四六時中周囲に笑いを与えてくれる人物で、大の仲良しである朝日や、出雲を実の姉の様に慕う金剛に次いで、呆れたような感想を述べた敷島すらも口元を緩めている。先程まで話題に挙がっていた常盤ときわと同じく、出雲の分身は敷島艦と同じ佐世保鎮守府籍の艦艇であり、旧知の仲にして熱い友情で結ばれているのは朝日と一緒にであった。

それ故に相も変わらずという朝日の言葉を受けるや、敷島の微笑はちよつとだけ不敵な感じも漂う代物となり、円曲線の効いた金色

の前髪を掻き揚げながらため息混じりで声を放つ。

『フン。奴だけは逆に元気でいて貰わないとな。手加減無しで殴れる友は残念ながらもう出雲だけなんだ。』

『まあ、それ褒めてるの？ ふふふふ。』

『わ、ワシどつくんかて手加減してへんやないか……。』

『何か言ったか、金剛？』

『いえ……。！ な、なんでもあらへんですさかい……。！』

共に親友として慕う出雲の話に朝日は笑い、その隣ではこれまでの20数年間、この敷島に散々に殴られ、罵倒されて育てられてきた金剛が、積もり積もったであろう僅かな理不尽をついつい口に漏らして敷島より一喝を受けている。もっともそれでも僅かに端が吊り上った唇で表される敷島の笑みは消える事は無く、友と呼んだ出雲が息災である事に喜びを覚えているのが示されていた。

やがて敷島は半分以上も飲み終えたカップをおもむろにテーブルの上に置き、入れ替わりに手近な所にあつた手紙の一部を手にとつて、その文面に青い瞳を這わせる。ちょうどそれは卓上に並べた何通もの手紙の中で最も日付が新しい物で、いかにも楽しそうな文面で綴られるその内容を読むや、早くもまた別の仲間の名を声に変えるのだった。

『ああ、そうだったな。なんでも去年の艦隊編成で、^{いわて}磐手が第三遣支艦隊の旗艦で派遣されてるらしい。上級艦隊の括りとは言え、姉妹揃って同じ部隊に配属なんて何時以来だ？』

『まあ、磐手が？ 呉にしか居なかったから知らなかったわ……。あ、でもそう言えば浅間^{あさま}が、新しい練習艦隊専門の艦が出来たからお役御免になったって言ってたわね。』

『なんと珍しいでんな。第三遣支艦隊言うたら、^{チンタオ}青島を本拠にしと

る華北方面担当の部隊や。あの辺は最近では静かな所やけど、沿岸にはどデカイ港もぎょうさん有るさかい、警備が主任務でも結構仕事は多い所や。ご苦労な事やで。』

話題に挙げられる仲間達の名は入れ替わりが激しいが、敷島の言葉に有った様に磐手と出雲は朝日と敷島の関係と同じ実の姉妹であるから、全く無関係な中に突如として名前が挙がったという感覚は3人には無い。長く練習艦隊の任を頂きつつ、姉の出雲と並んで頭脳明晰で知られる磐手は、これまた出雲と並んで現代の帝国海軍艦魂社会でも1、2位を争う程にお弟子さんが多い艦魂であり、後進の育成という観点では大変に功績の大きい人物。徹底したスパルタ教育で名を馳せる敷島、品格と教養の極みを教え込む朝日以上にその先生ぶりは有名であり、第一線にてかつての愛弟子が励んでいる現代では、出雲姉妹の名は必ずセットの形となって語られるのが相場なのだ。

『あの二人、なんだかんだ言っても仲は良いのよね。ふふふ。』

口元のホクロを隠すように手を添えて朝日が言った言葉もまさにそれで、時代に流されずに昔日と変わらぬ二人の在り方を喜ぶ様でもある。その感覚はやはり敷島と金剛にあっても同じであり、朝日と違うのはそれぞれの物言いに各々のしゃべり方の特徴が混じる箇所だけ。痩せ型で頬骨や眉間の辺りの隆起がやや目立つ顔の中に、細めた青い目と両端を吊り上げた口でもって笑みを作り、敷島と金剛は朝日に続いて明るい声を上げ始めた。

『あゝ、磐手の姉さんは真面目ですさかいな。出雲姉やんの冗談も流してまう事も多かったモンで、たまに空気が重うなって大変でしたわ。ワシがこの国来た時にはもうああなっとった様です。』

『あれは昔からだよ、金剛。だが、いがみ合ってるようでもさすがは姉妹。日本海海戦でも出雲が艦隊旗艦、磐手は二戦隊旗艦で拔群の艦隊運動を行ってた。フン、おかしな奴らだ。』

そんな言葉でお互いに半笑い気味の声色を滲ませながら知人を語り、しばらく会っていない敷島は特に出雲の方に再会の淡い願いを抱く。陽気で活発、次いで頭も良く運動もできた出雲は、かつては敷島と衝突する事も多く、お互いに激昂した挙句に取っ組み合いの蹴り合い殴り合いを繰り広げた事も有った数少ない人物。多分に両者の性格のせいもあるが、朝日や富士の様な者達を相手に殴りつけてもただ罪悪感だけが残って終わるのに反し、互いに怒号の中に腹を割っての言いたい所を織り込み、硬く握った拳に込めて強引に相手に伝えるその手段を用いれる相手は、殊に怒りの度合いがいつも必ず凄まじい物となる敷島にとっては大変に貴重な存在である。

だがきつとそれ故だったのだろう。皆でクスクスと笑う中で、カップに口元を隠した敷島からは不意に寂しげな声が放たれてきた。

『出雲とは一度、二人で酒を飲みたいな。いつ帰ってくるのだろうか、奴は。まあ、支那での戦況が落ち着くどころか、磐手まで引っぱり出すような今の情勢では、しばらくは叶わんのだろうなあ。』

ともすれば憎まれ口に近い物言いが持ち味の敷島にしては、その独り言は随分と湿っぽさで塗れた代物であった。朝日と金剛はもちろんその感覚を敏感に察し、笑みを潜めて敷島のカップに隠れがちな表情に目をやる。すると伏目がちに薄っすらと覗かせるその青い瞳からはいつの間にか鋭利さも消え、そこに伴われる僅かに鼻をすする様な息遣いはどこか泣いている様でもあり、ひたすらに身体全

体から寂しさの感情が放たれるばかりである。帝国海軍艦魂社会でも強健な心と身体では象徴的存在である筈の人柄が、ここに至ってはまるで嘘の様に思える程だった。

そしてそんな敷島の姿に一番胸の奥を揺さぶられたのが、本日久々の再会を果たし、実の妹として昔日より心底慕い続けていた朝日である。恐らくはもう二度と海を駆ける事の無いであろう分身を持ち、弟子も友人も実の姉妹も全て自らの所に赴いて貰わねば会えない境遇となってしまった現代で、まるで無力にただ待つばかりの姉の姿が、今の朝日にはなんだか可哀想に思えた。

故に朝日はせめてもの救いを与えようと思い、姉のささやかな願望が決して一方通行のような形ではない事を諭してやるのだが、それに応じる敷島の台詞には思いがけない者の名前が含まれていた。

『ふふふ。敷島姉さん。出雲もきつと、敷島姉さんにだけは絶対に会いたいと思っているわ。だからこうやって敷島姉さんの所に手紙を書いてくるのよ。』

『フン……。一応は返信はしてやってるさ。お、そう言えば昨日だ。長門達ながとにお願いしたばかりだったな。』

長門とは、本日話題に挙がる事も多い敷島や朝日と40余年の付き合いをしてきた仲間達ではなく、現連合艦隊旗艦にして朝日自身を取り上げた末に愛弟子とした者の名であるのは周知の事。今現在は艦隊訓練で遠くは沖縄や台湾方面にも足を伸ばしていたりする筈なのだが、まさか佐世保に来ているとは老練な朝日にあっても予想外であり、両目を僅かに見開いた表情で驚きを表してみせる。

『まあ、あの子。昨日来ていたの？ この佐世保に？』

『うむ。一応、第一艦隊としての寄港だったが、整備補修なんかとは別件で来た様だったな。ま、それでも長門と陸奥はちゃんと私の

所に挨拶しに来てな。金剛も会っただろう?』

どうやら朝日とは入れ違いの形で来ていたらしい、長門が率いる第一艦隊の面々。挨拶に来たのは長門と陸奥むつの二人だった様で、共に帝国海軍を率いる大戦艦としては敷島や朝日の正當な後輩に当る。まして長門は実の妹の朝日の教え子、陸奥もまた敷島が大変畏敬している富士ふじの教え子と来れば、彼女達の訪問を敷島が喜ばぬ筈も無い。

深々と頭を下げて来る後輩達の姿に頬を緩ませた様であったが、長門達の来訪は改装作業中という事で退屈な時間を過ごしている金剛にあってもまた、喜ばしい事であつたらしい。敷島にそれを確かめられるや、金剛は白い歯を覗かせて嬉しそうに声を放った。

『あゝ、せやつたですな。なんや、連合艦隊で近々陸さんと共同での作戦を予定してるらいしんですが、その件で佐鎮も一枚噛むさかい、司令部間での打ち合わせやるんやと言うとりました。ま、人間の話はほんでも、ワシ等にしたら良い休暇みたいなモンですからのう。久しぶりに長門とは晩酌できましたわ。ハッハッハ。』

10歳以上も歳が離れていて、しかもおちやらけた性格も目立つ長門とは、なんだかソリが合わなそうにも見える金剛。だが意外にもその仲は、まるで後輩の明石あかしと神通じんつうを彷彿とさせる程に親しい物となっており、お酒も伴った夕食を共にしたという彼女の言葉にもそれは表れている。実に意外な金剛の交友関係の一端だが、おかげで金剛は度重なる改装を受けねばならない旧式戦艦を分身としながらも、連合艦隊司令部で考えられる最前線での戦策や動向なんかを常に把握する事ができていたりもする。

実に有益な親交で結構な事だが、身体つきから相手の体力や武技の腕前の程度を探る金剛は、そんな昨日の長門との時間でもっとも意識した物もやはりそれだったらしい。

『長門の奴は、会う度にチチが大きゅうなつとるなあ。あんだけ顔も違うっちゅーに、よおもああまで叔母御に似たモンや。』

『そういう言い方はみつともないって言ってるでしよ、金剛。んもう。』

『だうはっはは。怒らんといて下さいや、叔母御。ええ女やて言うとるだけやないですかあ。』

ご機嫌な金剛の言葉はお師匠様と違って少々下品な傾向があり、その語りに弟子ともども名前を挙げられた朝日は、やや呆れた声を放った末に顔をしかめる。困った事に金剛はそも悪気を持っていない事から反省の色なぞまるで皆無で、倒れ掛かるように椅子に背をもたれた朝日になんとも軽薄な勘弁を願っている。

その様子を尖った瞳で眺める敷島も弟子の物言いに品格の欠如を認めているが、それ以上に朝日の困った表情が面白くて面白くて仕方なく、カップを口の前にかざして抑えられぬ笑みの表情を隠す。ただそれでも眼前で繰り広げられる昔からの妹と愛弟子の掛け合いに、彼女達からは見えない敷島の唇からはついに小さな笑い声が漏れてくるのだった。

『叔母御う。堪忍、堪忍やでえう。』

『胸やお尻で決まるほど私達艦魂は安い物じゃないでしょう。どうしてそういう言い方ばかり……。』

『フッフッフ……。』

今から十数年前の頃も朝日と金剛はこんな会話を時折する中で、物腰柔らかでいつも麗しい朝日はその度にこうして頭を抱えていた。時にはお叱りなんかも与えてそれを制止した事もあった物だが、そんな光景が今でも見れる事が敷島には無性に嬉しい。実の妹も愛弟

子も何故にこうも昔のままなのかと、人知れず心の中で口走った。

しかしその刹那、敷島はそんな変わらぬ身近な者達の姿を意識したが故に、つい昨日に会ったとある人物の変わり様にふと引っかかりを覚える。

『ム・・・？』

何かに気づいて立ち止まった思考が短い声を放たせ、その青い瞳は天井の一角へと流れて真新しい記憶を掴もうとする。金剛と朝日は相も変わらずじゃれ合いの様相も強い勘弁の問答を続けていたが、敷島の不意な声によりやく双方ともにそれを止め、明らかに何がしかの疑問に意識を傾けている敷島の顔に視線を向ける。

するとやがて敷島は持ち前の尖ったひし形の目を閉じ、突如として朝日に向けて疑問の真相を問い質し始めた。なぜなら敷島が疑問に思ったのは、昨日挨拶に來た朝日の教え子、すなわち長門に関する事だったからだ。

『・・・朝日。長門と最近何か話したのかな？』

『え・・・？ 長門？』

思いがけない問い掛けに思わず質問を問い直したのに対し、敷島はゆっくりと頷くと目の辺りに流れ落ちてきた金髪を掻き揚げて、ちよつと溜め息を混ぜた声色を滲ませながら再び口を開いた。

『いや、会うのは久々だったんだが、最近の長門の事は金剛からもよく聞いていてな。相変わらずナヨナヨしているようだから、ちよつと脅かしてやろうなんて思ってたんだよ。そしたら随分と礼儀正しい上に、連合艦隊の動向なんかもよく理解している様だった。あんなに仕事真面目な奴だとは思っていなかったがなあ。』

艦魂とは言え責任ある立場の長門にあって、そのお仕事ぶりの良い面を敢えて不思議と捉えた敷島の言葉だが、彼女は別に長門を馬鹿にしている訳ではない。朝日から見た金剛がそうであるように、長門は敷島から見れば姪にも等しい感覚を抱ける数少ない艦魂で、明るく陽気な人柄は敷島とは少し距離の隔たりを感じさせる中にある。それでも、これまで海軍艦艇の命としては非常に目をかけて可愛がって来た後輩の一人。敷島にしたら、彼女がまだまだ10代後半の少女の姿であった頃から朝日と共に面倒を見てきた自負も有るし、幼いままに連合艦隊旗艦として励んで挫折を味わっていた頃に慰めてやった記憶も懐かしい。

『ハハハ、そうかそうか。だがな、長門よ。実の姉の私には解るが、朝日も三笠もお前が可愛くて可愛くて仕方ないんだ。朝日はあの通り、自分の事を立派な奴だと自惚れる所が無いし、理由はよく解らんが三笠も日露戦役が終わった直後から随分と後悔する気持ちを持つようになった。二人とも、お前が自分なんかよりもっともっと優秀になって欲しいから、敢えて言葉をきつくするのさ。だからそう泣くな。』

今から20年ほど前の頃、新参の艦魂ながらも最新鋭戦艦として連合艦隊旗艦を拝命し、初めての先輩達との顔合わせの会議で大いに怒鳴られた長門。

生まれつき楽しい事、騒ぐ事が好きだった性格も災いしたのであるが、それを当時まだ現役の艦隊所属艦艇として励んでいた三笠に咎められ、教えを授けて貰おうとした朝日にもささやかなお叱りを受けてしまった彼女は、艦隊訓練で佐世保に巡航してきた際に文字通りの泣きつく格好となって、当時からそこに居た敷島の所に駆

け込んできたのである。帝国海軍艦魂社会でも唯一、朝日や三笠といった日露戦役での栄光も眩しい者達を怒れる人物として頼り、訳を聞く内に幼心の脆さを露呈して泣き出してしまった長門を、その頃の敷島はそう言って慰めてやった物であった。

そして時は流れ、その懐かしい記憶も持つ後輩には、次第にあの飛び抜けて面倒くさがり屋でテキトーぶりが目立つ人柄も残念ながら肉付けされていった訳だが、つい先日挨拶に訪れた彼女の姿にはなんとそれが無かったのである。

『お久しぶりです、敷島さん。お元気そうで何よりです。』

『おお。長門、それに陸奥よ。よく来たな。朝日と富士先輩は息災かな？』

『はい。昨年末に支那方面出向を解かれて朝日さんは戻ってきてますけど、とても元気です。』

その際に長門と交えたそんな会話は、艦魂も人間も無く先輩と後輩の立場の者同士による至って自然な挨拶の姿かもしれない。ただ敷島自身も長年見てきた長門のお気楽で陽気な性格を鑑みると、開口一番で礼儀を重んじた挨拶をしつつもその後には重度の説教癖を持つ朝日の愚痴を言ってこない所は、今更ながらに何か変だと思えたのだ。

次いで敷島の疑問を耳にした金剛もまた、彼女なりに話題への心当たりを何か抱いたらしい。長身の身体つきが際立つ大きな動作で椅子に座ったまま長い脚を組み替え、長いまつ毛に囲まれた碧眼をちよっとだけ鋭くしながら口を開く。

『ああ、そう言うたら長門の奴、えらい用兵やら作戦やらの事を聞いてきよったな。なんや、駆逐艦やら巡洋艦やら戦艦やら全部混ぜた艦隊組んで、太平洋のど真ん中で作戦行動できるんか、とかなんとか……』

『太平洋……』

ずっと座りっぱなしのお茶会で身体が疼くのか、金剛はしきりに腕や首を回し、背中に垂れる真っ直ぐな金髪の大滝が左右にうねり始める。しかし非常に美しい金剛のその姿を目にしても、朝日の表情には一切の明るさも彩られる事は無く、今しがたボソッと呟いた「太平洋」という言葉を無理に飲み込もうと必死になっているようだった。

もちろん彼女は、その単語が示す物が解らなくて声を詰まらせた訳ではない。むしろ今現在この部屋に居る3人の中で、長門が口にしていたという点においてもその意味を最も深く察する事が出来ていたのは、当の朝日である。いつぞや長門と二人きりで膝を詰め、現連合艦隊旗艦と旧連合艦隊旗艦としての身の上を主に据えて話した際の話題が、今しがた金剛が口にした言葉と敷島が告げた教え子の変化に繋がっていると、朝日はこの時直感したのであった。

『確かに酒飲んでずっと仕事の話するんは、長門にしては珍しいでんな。叔母御、何か知っとりまっか？』

『え……。う、うーん……。』

歯切れの悪い応答となるのは、記憶に残る長門との会話の内容が世間話程度の軽い物ではなかったからで、自身が上海に出向してい

た昨年までの頃にひしひしと感じた、まごう事無き戦の足音の事である。その際に朝日は悩みぬく長門に決して答えを示さず、敢えて問い詰める形でその本音を引き出してみせたが、一緒に憂いだアメリカという名の超大国と戦になる事態に解決策をなんら見つけられてはいない。むしろ子供の様に自身の胸の中で号泣する長門を抱きながら、実際に命のやり取りを経験した事もある朝日は、本能的とも言える程の感覚でその戦の中に自身の命が尽きる事を明確に悟っていた。

しかしその末に長門の様子が少し変わったという姉と後輩の言葉を受け、朝日はその時に明確な回答を師匠として与えられなかった自分に、今更ながらに後悔と自責の気持ちが生じてくる。帝国海軍に収まらない大日本帝国という一つの国家の方針にも関わる事を、あの時はひたすら教え子の責任にも等しい形で問い質していたが、所詮は一隻のお船の命にそれを求めた所で得れる物なぞ何も無い。ただ苦悩を与えたのみだったのではないかと思え始め、同時に朝日は無性に長門の顔が見たくなってくる。

『長門……』

呆けた様な声で名前を呼び、自分と違って明るく楽天家である教え子の顔を脳裏に思い出す朝日。いつの間にか琥珀色の髪の隙間から覗くその青い瞳を足元に向け、自身の美学の体言でもある紅茶の溜飲すらも止まってしまった彼女だが、それに気づいた金剛はやや椅子から腰を浮かせて朝日に対して心配の声をかけてくる。

『どないしたんや、叔母御？ 気分でも悪うなりましたかいな？』

直接の師匠である敷島と同等に朝日を奉っている金剛は、その長い四肢の内から右腕をゆっくりと朝日の背に回し、椅子の上でうず

くまる様な格好となっている朝日の身体の温もりをそつと確かめる。強く気高き女性の象徴とも言える敷島を良く知る手前もあるし、今でも腕っ節の強さと度胸なら他の誰にも負けない事を自負する金剛から見れば、大人しくて清楚可憐、次いで大変に落ち着きの有る女性像を持つ朝日はどうしてもか弱い感じが漂う人物として見えてしまうから仕方ない。

久々の再会となった本日においてもそれは変わらず、金剛は朝日の背中を擦りながら心配そうに名を呼ぶばかりである。だが声もなく悩みの底に足を運んでいた朝日の胸の内は、彼女の金剛に対する返答を待たずしてその場に示された。

『フン。なるほど……。対米戦が現実味を帯びてきたか、朝日・・。』

『ね、姉さん・・。』

僅かに背筋を背もたれから起こしながらも組んだ両足を崩さず、口元にかざすカップも下ろしていなかった敷島は、腹部を抱えるようにして身体を萎縮させていた朝日を目にするや、これまでとは違った張り詰めたような感もある声で突如として言った。

ここ数年は目にしていなくとも彼女は実の妹の苦悩する心なぞ一目で看破できたらしく、ようやく湿り気も無くなった短い金髪を指で掻き分けながら向けてきたその瞳は、朝日と似た形で同じ青色を持っていながらも何か不気味に輝く眼光を奥深くに宿らせている。振り返ってそれを認めた金剛が声を一瞬失い、顔をなんとか持ち上げた朝日が30数年前の対馬沖での姉の顔を蘇らせて重ねる中、カップをテーブルの上に置いた敷島はゆっくりとした動作で胸の下に腕を組むと続ける。

その言葉はまさに、朝日が自責の念に駆られた長門との談義の一件における核心に対し、正鵠を得た代物となっていた。

第一二五話 「再会と憂慮／其の四」

それまで柔らかな笑い声ばかりであった敷島しきしまの部屋。

その中へと室内の鉄の隔壁に見合う重厚で重苦しい空気が少しずつ注がれ始め、含んだ憂慮で体勢を小さくする朝日あさひはその圧力に早くも背の辺りへ圧し掛かれるような感覚を覚える。

僅かに白みが増した顔を腹部の苦しさによって歪め、肩を覆う程の長さを持つ琥珀色の髪によって遮られているのは、首筋に滲む冷たい汗。以前に上海で出雲いずもと話した時にこのような状態になった事のある朝日だが、それは40余年の時間で磨いた老練さの中にあっただけで変わらぬ、心配事に非常に気を巡らせてしまいすぐに身体にまで影響が出るという、精神的にちよつと弱い側面を持つ朝日の特徴の一つである。

加えて分身の艦齡と同様の歳を重ね、容姿もまたそれに追隨している朝日であるから、「病弱」という言葉をつい連想した金剛こんごうが傍まで来て、背を擦りながら彼女を案じるのも無理のない事であった。

だがそんな二人の青き眼はお互いに交わる事は無く、お互いのちやうど正面に位置する椅子にて座ったままの敷島に向けられている。その姿は実の妹の異変を文字通り目の当たりとしても先程までのそれと変わる所はなく、垂直に伸ばした背筋と細く長い四肢が敷島の背の高さをやたらと目立たせる。弟子の金剛よりは10センチ以上も低い身の丈な筈だが、今だけは室内にて最も大きな存在となっていた。

『もう恐らくは自力の航行もしないだろうがな。私とてただ老いを重ねているばかりではないぞ、朝日。海南島や仏印の領土欲しさにあの方面に部隊を展開している訳でもないだろう。私達のように石炭で走る船ばかりだった頃には考えられなかったが、さらにその南

方に行った地こそが目的地の筈だ。』

やや鋭利な雰囲気を伴わせた声で放った敷島の言葉は、愛弟子の長門ながとと語り合ってから朝日が憂う米国相手の戦争において、その遠因と予想される事柄を端的に言い当てた物である。飛行機や車両、そして彼女達を指す船舶の殆どが石炭ではなく石油を燃料とするようになった昨今、国家の軍備にまで大きな影響を持つ燃料における両国の政策の違いを、もう何年も佐世保にて隠遁生活を続けていた彼女は極めて正確に見抜いていた。

『米国の自活できる程の原油算出が無いこの国だ。他の国から買うしかない中で、ドイツやイタリアとの親密化、それから長年に及ぶ支那での問題を巡って、最大の輸入先である米国との緊張が随分と高まっている。おまけにその支那での騒動で、陸海の兵力をあれだけ展開しているのに伴って石油の消費は尋常ではない値になってる筈だ。その上で米国との一戦にも望めるほどの石油資源を確保するのなら、他に売ってくれる国を探すか、さもなくば算出する土地に日章旗を掲げるしかない。だがそうになると、必ず米国とは戦う事になるぞ、朝日。』

そう語り終えた所でそれまで伏目がちであった敷島の青い瞳が、どこか冷たい感じを漂わせながら金剛と朝日の姿を捉える。普段は朝日と全く同じ鮮やかな蒼色を宿しているのに、今の敷島の瞳はまるで凍てつく氷塊を削って作り出した代物の様であり、弟子や妹という関係で彼女の顔を見慣れた金剛と朝日すらもその冷酷な雰囲気には肝を握られたような感覚を抱いていた。

ただ、朝日と金剛の二人は、敷島のそんな様子を目にするのは決

して初めてな訳ではない。

帝国海軍艦魂史上の中でも極めて現実的、合理的な考え方を持ち、人並み以上の度胸と寡黙さが手伝って非常に戦に対しては冷静に向き合える彼女を、二人はよく知っているからだ。まして朝日は日露戦役の黄海と対馬沖の戦場でそれを直に目にしており、もはや息も絶え絶えとなって助けを求めてきたロシア海軍の艦魂の頭部目掛けて汽笛に劣らぬ程の咆哮を上げながら、武器代わりとして持っていた十能を振り下ろして粉碎したという敷島の凄惨な姿を、今でもその青い瞳の裏に焼き付けている。

『国の防りだ？ 菊の紋の戦じゃないだ？ このバカタレがあ！

戦に夢を重ねるのもいい加減にしろ！ これが戦だ！ 栄えある陛下の御船などという身の上と言葉に酔って、そんなに清らかな処女でも気取りたいか！？ 私達、海軍艦艇が成す役目とは、反吐が出る程の理不尽と不条理に塗れた、人も艦魂の区別も無い殺しの集大成だ！ 誇れる殺人なぞこの世には絶対に無い！ ……在ってはならんのだぁー！！！』

今からおよそ30数年の昔。

金色の髪が絡まる碎けた頭を前にして返り血に顔の半分を染めた敷島が、その目に余る惨殺ぶりを制止しようとした三笠^{みかさ}に対して怒鳴った言葉。富士や朝日、三笠といった現代では名だたる艦魂達も一斉に声を失い、当時その場に居合わせていた駆逐艦や巡洋艦の艦魂達の何人かが目を背け、嘔吐する者までもが周囲に点在する中、狂乱や乱心の度合いを越した鬼の如き表情と叫びを見せた敷島は、

ある意味では仲間内で最も戦に精通し、理解を至らせていた艦魂であつた。

不機嫌そうな表情と飾りの一切無い言葉、そしてそこに伴われる冷たそうな雰囲気は、そんな過去の戦争において垣間見せていた敷島の人柄の証の様な物である。

実の妹に当たる初瀬艦が沈んだ時ですらその態度を変えず、血も涙も無いのでは艦魂として生きる意味も無しとまで揶揄された物だが、一貫して自分達の役目も大いに絡む戦を敷島は一度たりとて肯定した事なぞ無い。むしろこれ以上無いくらいに最低な代物だと見下していたその真意を、すぐ下の妹の朝日は慄きながらも感じ取っていた。

初瀬艦轟沈の報によつて騒がしさがまだ残る月下の甲板上にて、一人酒をかつくりながら肩を震わせていた姉の背を見た時からである。

『……すまない、初瀬……。すまない……。』

嗚咽も乱れる息遣いも無く、頬の輪郭の上に月光の輝きを宿す雫を伝わせて微かに呟くだけだった敷島。分身の上でも容姿の上でも、自らとシルエットが姉妹の中で最も近かったという妹の死を受けて月夜の黄海に放ったその短い言葉に、普段から尊大で自信家で、冷酷無比に戦に相対し、げんこつを用いて鬼のように修練に厳しく向き合っていた姉の心の内を、朝日は触れる事ができたようだった。

硝煙香る海原にて凜々しくも猛々しい顔立ちを常に浮かべるのに反し、腹の底から戦という物を恐れ、平時より常に身近な危機として最も心配を積もらせ、そして実際に対した時にそこにあつた悲しみを自分の落ち度として責めつつ独り泣いていたのが、他の誰でも

ない朝日の姉、敷島であつたのだ。

凍てつく青い眼差しを真正面から見るとそれを感じる事は少ないが、その奥には誰よりも戦の持つ恐ろしさを知る彼女なりの信念が在る。すぐ下の妹としてそれをずっと感じていた朝日は、腹部の倦怠感に塗れる中であつてそれをふと思ひ出すのと同時に、自身の心の内に秘めていた憂いを眼前の姉は理解してくれるのではないかと思ひ始める。もちろん精神的な強さがやや欠ける彼女であるから、その心の半分は姉にすがりたい気持ちが占めているのだが、幸いな事に本日数年ぶりの再会を果たした姉の人柄は朝日が記憶していた通りであつた。

『・・・フツ。朝日、そう気を重くするな。ずっと昔から危惧されてきた対米戦が予想される時勢だが、私は別にお前を責めるつもりは無いし、金剛や長門といった若い奴等のせいだとも思つてはいない。所詮、私達艦魂ではどうにもならん話だ。ただ海軍艦艇の命の端くれとして、何が起きようとしているのかを知っておきたいだけだよ。』

断じて最悪のシナリオを責めるつもりはない敷島が、小さく笑みを浮かべてそう言った。女性ながら普段からおっかなさ満点の表情、次いで人柄を持っている故か、敷島のやや不敵な感も漂わせる微笑は不思議と非常に落ち着いていて綺麗な物で、姉妹揃つて顔立ちが整う中にあつてもその美しさは群を抜く。朝日と同じく透き通るかの如き白い肌に蒼海を思わせる色の瞳を細めて浮かび上がるその笑みは、ざわつく心を一瞬にして魅了してしまう程の美しさを持ち、そのせいか頼りがいもあつてとても安心感を与えてくれる代物でも

ある。

弟子の系譜ではその粗野で乱暴な性格が引き継がれた末に、神通じんつうを始めとする嫌われ者となる艦魂を排出してしまっただけのもの、それでもこの敷島が現代においても慕われるのはこの笑みに大きな理由が有るのだ。

『お互いに老いた現代になって尚、何かを背負う必要なぞ無いだろう。ただ結果を見るままだ。』

そこまで言うとな敷島は小さな溜息を漏らしながら椅子より腰を上げ、正対する朝日との間に置かれたテーブル代わりの木箱へと進み出る。「対米戦」という言葉に敏感に反応して体調を崩してしまう朝日とは対照的に、敷島の様子は場違いな程に至って上機嫌な感じであり、妹へと向けた笑みをそのままにテーブル上のケトルに対してその綺麗な指先を伸ばす。

『たかが船の命一つでこの国がどうなるという事なんかない。もつと楽に生きるんだ、朝日。』

朝日とそれに寄り添う金剛の前でそう語りながら、敷島は片手でケトルを傾ける。その下に置いた自分のカップにやや荒れた模様の滝でもって半分くらいも注ぐや、彼女はカップを上から鷲掴みするように持って口へと運んだ。

『ふう……。フン、同じだけ歳をとってもやはり上手くはいかないな。』

やや眉をしかめながら、自分でカップに注いだ紅茶を不味いと評する勢いの敷島。ついさっきまで美味いと連呼して味わっていた朝日の紅茶なのに、ケトルからカップに移すだけという僅かな工程を

変えただけでもその味わいは崩れており、転じてそれが自身も及ばぬ妹の圧倒的に優れた点である事に彼女は少し悔しさを抱いた様だった。おかげでせっかくの綺麗な敷島の笑みは段々と普段どおりの不機嫌そうな表情へと戻りつつあるのだが、立ち上がって以来のそんな何気ない敷島の言動は朝日の心をほのかに暖かくしてくれる。

同じだけ老いても上手く行かないとの先程の言葉も含め、それはまるで歳を重ねたのと同時に同じだけの責務をも背負うような今の自分を深く理解し、そして励ましてくれている様で、思う様に物事が進まない事への杞憂に悩むのは同じなんだと姉が語ってくれた様に朝日には思えた。

『敷島姉さん……』

『お前は美味いティーを淹れる事ができる艦魂。たったそれだけで良いじゃないか。年長だ師だと崇められる事にお前は気を張り過ぎなんだ、朝日よ。長門も金剛も、そして私も、何でもかんでもお前になんとかして貰おうとは思っていない。もう私もお前も、口うるさい老いぼれた一隻の船の命なんだ。心配なぞ無用だよ。若い奴等は若い奴等なりに道を見つけるさ。』

現代の帝国海軍艦魂社会では生き字引、重鎮として捉えられる朝日にあって、こうも指摘を投げた上でさらに諭してみせる人物は、富士の他はこの敷島ぐらいである。さすがは実姉と言った所で、心の奥深くで意識していた事を明確に言葉へと変換された朝日は、少しだけ目を見開いて驚きの表情を浮かべながら姉の顔を見る。すると再び椅子へと腰掛けるべく背を向けていた敷島は、そんな妹の視線を待っていたかの様に口元を吊り上げ、次いでその青い瞳を細く弓なりとしながら深くゆっくりと頷いた。

僅かな発言や説明なぞ無くとも自分の全てを解ってくれ、どうす

れば良いかを極めて簡潔に論してくれる人物。

頼れる朝日の姉はそんな在り方をずっと変えておらず、教え子や後輩を持って責も重い身の上となっても尚、十二分に安心して心身ともに寄り掛かる事のできる者だった。

そして非常におっかない仮面の裏に見え隠れするその温もりは、しばらくの間朝日を蝕んでいた腹部の倦怠感を完全に取り除く。精神的な弱さから来る身体の不調だったから安堵の心に伴って回復はすぐに始まり、やや青色がまだ微かに残る唇を吊り上げながらも、やっとの事で朝日は微笑を作ってみせた。

するとそれを傍らに寄添っていた事から間近で見る事のできた金剛も溜息まじりの笑顔を浮かべ、母親同然に深く慕う朝日が元気をちよつとずつ取り戻していく事を喜んで声を放つ。

『おお、叔母御。やゝつとよおなりましたかいな。いやゝ、久々に会うたんに、担架でも持ってこなアカンかて心配しましたで。』
『ふふふ……。ごめんなさいね、金剛。もう大丈夫……。』

やや弱弱しさがまだ残る声ながらも、朝日が屈めていた上半身を起こして言う。元々が白人女性の外見ゆえに顔面蒼白の様子が比較的分かり易い朝日だが、同じく顔色に赤の色合いがほんのりと滲んで回復していく様子もまた分かり易い。しばらくの間腹部に重ねていた手を椅子の肘掛に戻し、テーブルへとゆっくり伸ばした右手には再びカップが握られ、既に温もりが失せている冷たい紅茶を朝日は一口に飲み干してみせた。

もちろんその味は紅茶についての知識、心構え、こだわりが人一倍である朝日にとっては最悪の評価であるが、今しがた姉より諭さ

れた自らの心配性が原因であると解っている朝日は、ただただ苦笑いで空になったカップを眺めるだけである。

姉からはお見通しの自分の短所に振り回された挙句、得た物は冷え切った不味いティーのみ。母親のつもりで必死に頭を使ってみても結局は自分が泥を被っただけで、普段から意識している筈の老いなど忘れてしゃかりきになっていた自分の姿が、今は何か滑稽に思う事ができた。

やがてその苦笑を見た敷島もまた再び小さな笑顔を作って語りかけてくれ、その場には再会を果たした際と同様の笑い声が渦巻く。

『別に心配する事を悪いと言ってるんじゃないぞ、朝日。度の問題なのさ。フン。ま、お前の隣にいるバカタレが後輩じゃ、その心配も解らんでもないがなあ。』

『か、堪忍してくださいな、親方。わ、ワシかてもう先任格の戦隊長……。』

『なにが先任格だ、バカタレが。昨日、陸奥と長門が言ってた。お前がギャーギャー吼えるもんで、第一艦隊の駆逐艦の連中が震え上がってるって困っておったぞ？』

『長門に陸奥……。！ あ、あんの、ガキ共があ……。！ いらん事親方にチクリくさってえ……。！！』

『ふふふふ。あははっは。』

時間的にはそうでも無い筈だが、感覚の上では何か随分と久しぶりに感じる眼前の師弟のお叱り劇を受けて朝日は大笑いした。もう30年近く目にしてきたこの師弟は教える方も教えられる方も性格が非常に特殊で、帝国海軍艦魂社会でも今のようなやりとりを長年繰り返しているのはこの二人くらいである。だがだからこそ第三者

の記憶に強烈に残るその姿は、間近で見えてきた朝日にあつては尚更に強く脳裏に縫い付けられており、実際の光景として瞳に映してしまふとそのおかしさを抑える事ができなかった。

その内に彼女達3人の居る部屋には、いつの間にやら一つだけ有る舷窓より朱色の陽光がぼんやりと差し込んで来る。昼間に得ていたほんの僅かな空気の暖かさも失せ始め、冬の潮風が持つ張り詰めたような冷たさが段々とその緊張の度合いを増していく。東の空も既に深い紺色の夕闇で染まりかけ、薄っすらと銀色もまばらな佐世保湾は寒さも厳しい夜を迎えつつあった。

しかし日が暮れても久しぶりに集った3人の、まして実姉の優しさと人物としての格を垣間見て喜ぶ朝日を主に据える艦魂達の懇談は、未だ終わる気配を微塵も見せてはいない。空になったそれぞれのカップにケトルより現れる琥珀色の淹を注ぎ込むや、彼女達は疲れも飽きも一切感じずに声を上げる事ができ、ここ数ヶ月もの間大変に気がかりであった憂慮も軽くなった朝日も、普段の大人しさとはややかけ離れたかの様に豊かな表情を浮かべて会話に参加している。例えその話題の主な物が、敷島の凍てつく感もある声によって語られた対米戦への予想にあつてもだ。

『石油資源の方策に国家としての武力権を行使するとなれば、周辺を海に囲まれている南方には相当の規模で私達、帝国海軍の艦艇部隊が展開する事になる。ましてシンガポールの目の前だ。王室海軍の東洋艦隊とて黙ってはいないし、フランスの極東艦隊、オランダの在蘭印艦隊も障害となる。そこへ飛び込むんだ。連合艦隊の主力艦隊の内、二個艦隊は間違いなくあの方面に行かねばならん事になるだろうが、それが問題だな。』

『ええ。仏印の一件なんかもあって、残念だけどオランダやフランスが好意的に接してくれる可能性は皆無よ。支那の租界や海上權益が複雑に絡んでる英国は、もっと望みが少ないわ。だから対米戦も視野に入っているのね、きっと。』

『え？　　どういう事でっか、親方？　　なんであの方面の情勢が、そ
ないにアメ公との戦と繋がるんでっか？』

決して満面の笑みで語れる代物ではない対米戦の序章を、年老いた敷島と朝日はやや他人事の様な感覚で話す。二人としてはお互いの持つ情報と年長者としての意見の交換に重きを置き、客観的という姿勢を堅持して冷静にその真相を探ろうとしているだけなのだが、この二人とは10年以上も歳が離れている金剛は其中でちよつと置いてけぼりを食らっていた。現代の帝国海軍艦魂社会では大親分、主力艦艇部隊の最先任ともなる立場の彼女は、容姿の上でも30代も半ばの白人女性と、明石や弟子の神通なんかに比べるとずっと年上なのだが、金剛が二人の先輩の会話について行けなかったのは何も年齢のせいではない。

3人の中でもその白とも黄色ともつかない長い金髪で一際美しさが目立つ金剛だが、その反面、敷島と朝日にあっては持ち得て、金剛だけが持っていない物が存在する。話題に置いていかれた真相でもあるそれは、一隻の海軍艦艇として実弾飛び交う戦争を経験したか否かである。厳密に言えば金剛の分身たる金剛艦は誕生して間もない頃、第一次世界大戦という名の地球規模での大戦争に最新鋭主力艦として戦列に加わっていた過去もあるのだが、もっぱら西太平洋方面を遊弋するのが大半であった金剛の経験に対し、実の妹を含む多くの仲間を、そして人間を失い、血とはらわたと悲鳴と轟音に囲まれた中で何度も実弾の下を潜り抜けたという敷島と朝日の経験には、やはり明らかな差があった。

敷島はその点を論しつつ愛弟子の疑問に回答を返し、腹部の倦怠

感も今は感じなくなった朝日がそれに続いた。

『実際に海戦を経験した事もないお前には、すぐには解らないか。まあ、私や朝日もあのロシアとの戦役でやっと理解できたんだがな。言っただろう、艦艇部隊の展開、と。・・・所要の兵力を要所に配備すると言えば確かにそうなんだが、手で将棋の駒を並べるのとは少し訳が違うぞ。』

『軍艦が任地に赴けば戦ができる訳ではないわ、金剛。配備先での食料、水、燃料の調達と補給の態勢も確立しなきゃいけないし、損傷したりした私達の分身の修理、それに伴って不足する兵力の補強手段も用意しておかなくてはいけないし、怪我や病気に侵された人間達の後送、収容手段だって段取りをつけておかないとダメなの。つまり準備と態勢を抜かりなく、それも事前に設定しておかなくては、満足な作戦行動なんかできない物よ。艦砲での撃ち合いはその末端の一場面にしかな過ぎないの。万全な準備と態勢作りはとっても大事な事よ。』

二人が述べたのは海軍艦艇が行動する舞台裏の話である。

およそ一カ年に渡った日露戦役で朝日と敷島はそれを最前線で目にしており、地味で目立たなくとも決して疎かにはできない戦の裏側にこそ重きを置かねばならないのだという。金剛も師の敷島より授かったかつての勉学の日々で習ってはいるが、実際に体験した敷島や朝日の声としてそれを聞かされるとやっぱり説得力が備わっている様に彼女は感じた。

加えてそんな戦における準備と態勢作りに関して、敷島と朝日の両名は実はこれ以上無いくらいの最悪の状況を潜り抜けた者でもある。日露戦役におけるいくつもの戦闘の中、一、二位を争う程に戦勝の誉れも高いあの戦いすら、否、むしろあの対馬沖での海戦その物こそ、敷島や朝日が今の話題を最も明確に重ねている体験なのである。

『あの戦で欧州のロシア本国艦隊が来る事は当初から予想されていたんだ。だから奴等が来る前に在満州のロシア陸海軍兵力を殲滅し、憂い無く万全の策でもって戦う腹積もりだったが、・・・向こうも馬鹿ではなかった。特に旅順に立て籠もった連中の健在ぶりは影響が大きくてな。あまりの堅強な様子に、先に本国艦隊が来寇してしまうんじゃないかと気ではなかった。ウラジオ艦隊の跳梁も甚だしいから、旅順の海上包围をしてる頃は出雲率いる第二艦隊とも別行動でな。今考えても鳥肌が立ちそうだ。』

『航路も最後まで解らないままで、修理の所要日数を確保できるの
かの見極めがとても厳しかったわね。結果的には陸軍さんの頑張り
でなんとか改装もできるくらいに時間は確保できたんだけど、本
当に首の皮一枚で繋がれてた余裕とも言えるわ。日本海海戦を奇跡
と呼ぶ人は私達帝国海軍の艦魂にも多いけど、準備の面ではもう綱
渡りと言っても過言ではなかったのよ。』

帝国海軍がこれまでの歴史上で最も誇り、そして輝かしい栄光と
自負する日本海海戦の、その裏事情を語る敷島と朝日。今ではすっ
かり二人とも帝国海軍艦魂社会の長老各となって落ち着いてしまっ
ているが、当時はまだ建造されて4年程しか経っていない頃で、よ
うやく20代を迎えたぐらいの若々しい容姿を持ちながら得た体験
だった。現代の金剛よりもまだ若かった訳であり、しかも相手は当
時、掛け値無しに世界最強と目されていた海軍の主力。それを破っ
たのだから直の教え子として鼻も高い気分を心の奥に抱く金剛だっ
たが、その大勝利が実は紙一重の準備の差を経て成された事に一瞬
声を詰まらせる。

もちろん親のように慕うこの二人が楽をして勝ったとは思ってい
なかったが、激烈な艦砲の撃ち合いではなく、それ以前の経過にこ
そ危機があったというのはなんだか意外であった。同時にこれまで

の話題の中心にあった対米戦にもそれが当て嵌まる事を彼女はぼんやりと察し、顎に右手の指先を添えながら己の思考に浮かび上がる可能性を言葉にしてみる。

すると敷島はすぐさま教え子の言葉に頷いてみせ、彼女の考えが正しい事を示してやった。

『兵力の展開、そして準備……。はは、そういう事かいな。親方と叔母御達ん時は朝鮮海峡と黄海で終わってたモンが、今度は南方全域に部隊を配備するんや。その間に大艦隊がどっか遠くから進撃してきでもしたら、迎え撃つ準備が整わん事態になるいうこつてすな？』

『その通りだ、金剛。シンガポールの英軍を始末した所でインド洋には王室海軍のインド洋艦隊がまだいるだろうし、英国の便宜と西洋列強の思惑が重なれば豪州にも背後勢力が出来上がる事になる。南と西にそうやって目を向けてる間、東から大白色艦隊が救援に来るとなれば……。王手だ。各戦線から抽出した兵力を揃えるのに半月。暫時整備補修を行い、戦訓からの改装も施し、欠員や物資の補給の為の場所、手段、日時といった段取りを完結するのに2ヶ月はかかるだろう。もちろんその間、他の戦線では我慢に我慢をさせる事になる。ジリ貧になって負けるのは火を見るより明らかだ。』

唇にてカップを傾けながら敷島が言う。金剛への語りにあった東から攻め寄せる大白色艦隊とは、日露戦争の記憶もまだ生々しい約30年程前に実際に世界周航していたアメリカ海軍の主力艦隊の事であり、敷島と朝日の言う日本海海戦の裏事情と対米戦の繋がりはようやくその形を現した。

すなわち現在の国家資源において最も需要の高い石油資源を巡って、俄かに騒擾となってる仏印を始めとした東南アジア方面に日本

が武力権を行使した場合、該当方面の在分遣艦隊を相手に事を構えるのは当然ながら、それに伴って超特大規模の国力とそれに裏打ちされた海軍力を要するアメリカが介入してくる可能性を、必ず考慮しなければならぬのである。もちろん米国が日本の対南方政策に対して武力権をもって応じるかは断定こそできないが、今しがた敷島が言った様に仮にそんな状況となってしまうたら、日本は応戦どころか長年培ってきた漸減邀撃作戦における兵力の準備すらも怪しくなってしまうのだ。息の根を止めれる作戦をアメリカが選択肢とするのは至極当たり前の事で、特に太平洋上という世界最大の海洋で戦う事になる帝国海軍にあつては、その当事者として想定したくなくともせざるを得ない理由が有る。

以前に長門艦で開かれた事のある対蘭印作戦の図上演習もまたこの事情の為で、艦魂達が知らぬ間に国家としての最悪の危機がひたひたと近づいていた。朝日や敷島が感づいたのはまさにそれで、その上で対米戦には準備と同等に重大な懸案がある。それは世界地図で日本とアメリカを比べてもすぐに解る、国家としての規模の大きさ。領土だけではなく経済力だって地図から受ける印象の如くその差は歴然としており、彼女達を含めた海軍という組織においても大きな隔たりが有る。つまり所、数の上での優位性が米国からみて大幅に劣っているのである。

『金剛。お前、ちょっと前に米国で大きな建艦計画があると言ってたな？』

『へえ。加賀が言うところの聞いただけやけど。』

『その内容も鑑みるとな、ワシントン軍縮条約の頃の対米7割なんぞの話ではないぞ。もちろん昨日の明日で計画の艦船が全て戦列に加わる事は無いが、今でさえ10対6の戦力比なのに5年くらい先には下手したら10対5にもなりかねん。いや、対南方進出などと

いう大規模作戦となれば、事前の軍備を隠すことなんか不可能だ。そうなればあれだけ金持ちの米国だ。より一層の軍備充実を図って、10対4にすらなるかもしれないな。』

そこまで言って敷島はカップに残った紅茶を一口に飲み干し、『つああゝ……。』などと年寄りくさい溜息を漏らしながら椅子から立ち上がる。表情も口調も至って軽そうな感じを滲ませて座っていた彼女が立ち上がるのは金剛や朝日にあっては唐突に思え、凝った肩を荒く揉みながら部屋の中を歩き始める敷島の背を二人は目で追う。だが小さな敷島の部屋であるから、敷島の足は数歩進んだ所で早くも止まった。

『親方、どないしりました？』

『なに。良い例だ。よつと……。』

『な、なんやあ？』

立ち上がるのも唐突なら、しゃがみこんだ後に小さく力む声を上げて立ち上がるのも唐突な敷島。なまじ感情の変化が普段は殆ど無く、ただただ不機嫌そうな顔を浮かべているばかり故に、おもむろな彼女の行動はどうしても突発性が高い様に思われてしまうのも無理は無い。愛弟子の金剛と実の妹の朝日ですらもその例外ではなく、一体どうしたのだと敷島の様子に目を見張る。

すると立ち上がった末に踵を返して朝日や金剛の方へと正対した敷島の両手には、それまで部屋の一角で鮮やかな木目を輝かせていた将棋盤が握られていた。どうやら今しがた口走った話題の良い例とはこの事らしく、顎をしゃくって金剛に卓上のカップを片付けさせると、早速テーブルの上に将棋盤を置いて声を上げ始める。

『ただでさえ10対5。フン、倍以上の駒を持つとる相手と将棋をするような物だ。まして南方での作戦行動中となると飛車角落ちど

ころか、満足に歩も並べ終わらん内に攻撃を食らう事になる。これでは対局には・・・、いや、戦争にも勝負にもならんなあ。』

再び椅子に座るや長い手足を組んでふんぞり返り、敷島は差の激しい状態で駒を並べた盤にやや難しそうな顔を向けている。愛弟子を始め40余年の生涯で多くの対局を行ってきた敷島にさえ、駒の数が倍も違う状態の対局なぞ初めて目にする光景で、帝国海軍艦魂史上随一の戦上手と評された事もあるその明晰な頭脳と経験をもって挽回する方策を考えてみるが、とても戦況をひっくり返すほどの作戦なぞ浮かんではこない。むしろ考える事すらも馬鹿馬鹿しいとさえ思え、戦況云々の前に将棋盤その物をひっくり返してやろうかなどと苛立ちが積もるだけであった。

おかげで元々が朝日と違っておっかない顔つきをしている手前、頬骨を始めとした輪郭の波打ちも目立つ敷島の表情はみるみる厳しい物へと変わっていく、その青い瞳は早速剣先の如き形と輝きを得始める。次いで師匠が回答を出せぬ程の難局に愛弟子の金剛も一緒に頭を捻ってみるのだが、文武の両面で未だに教わる事も多い敷島が悩む程の問題である。短気で粗暴さが売りの金剛が瞬時に答えを出せる筈も無く、完全なお手上げとなつてその大きな身体を投げ出す様に椅子へと腰を下ろしながら、しかめた顔で声を上げる。

『こんなん無理や、ムリい。奇襲かけたかて銀の手前で包囲されてボカチンや。絶対勝てへんで、親方。』

『・・・・・・・・』

30代半ばの女性の容姿を持つ金剛は完全な大人の外見なのだが、持ち前の度胸で誰にも遠慮しない性分から思った事をすぐに言動へと出してしまふ。にっちもさっちも行かなくなつた事態にさじを投げてしまふ辺りはまるで子供で、サラサラと音も聞こえてきそうな

程に美しい金髪におもむろにかざした指は、下品にも耳をほじくっていた。

だが金剛にして悔しさと苛立ちの念に押される形で吐いた言葉は、今の将棋盤の上での話が対米戦という危機の様相を示す物だという事を忘れていない朝日にとって、決して他人事の様に聞き流せる物ではない。少し前の時間帯の様に腹部に具合の悪さを覚える事は無かったが、弟子たる長門ですら答えを見つけれず、胸の中で泣かせてやりながら自身の死期を明確に悟った記憶が、朝日のうつろな表情の裏側ではありありと蘇っているからだ。同時にその際、長門との会話の中で出た対米戦への勝敗のみに的を絞った話が今また自分の眼前で繰り返されている事に、彼女は極めて強い現実感を卓上の将棋盤に見出してしまふのだった。

『このバカタレ。勝つ負ける以前に、そんな相手と戦って何を得たい？』

しかしそんな中、朝日の前では力が籠った頼り甲斐のある姉の声で、なんといつぞやの長門との会話で朝日自身が論してみせた事が語られ始める。第一声が続いてげんこつを食らうのが日常茶飯事だったが為に金剛が僅かに身体を退かせ、同時にいつの間にか下を向いていた顔を朝日が上げるや、凜とした面持ちを浮かべて敷島は言った。

『戦という物ではな、勝つのも負けるのも手段の一つだ。勝って何を成す、負けて何を拾いあげるといふ目的が無ければ、それはただの殺戮劇でしかない。それを見出せない内に勝つ方策を考えるなど、無意味にも等しい。湯を沸かす訳でもないのに火と鍋を用意しているような物だ。』

金剛の勝敗に限った見解にお叱りを与える腹積もりも有ったのか、

吐いて捨てるような勢いの口調だった敷島。ひし形の目の形がより一層の鋭さを持ち、流した視線が焦点を合わせた金剛を僅かに震え上がらせる。ただその言は戦うお船、すなわち軍艦としての最も大事な役目である戦という物を一つの過程と捉え、その先にこそ真に見据えねばならない物が有るのだとの内容である。

いくら実の姉妹とは言え、朝日のそれは40余年に渡る彼女独自の生涯において身に着けたのであり、性格も違えば艦艇としての来歴だって違う敷島との間で、戦に対して同じ認識を持つに至っていた事は大変な驚きを生む。思わず朝日はその驚きからくる衝撃に押されて姉の名を呼んでしまうのだが、当の敷島は朝日に向けて視線を流すと僅かに口元を吊り上げてみせた。まるで今しがたの驚きの感情を無言のままに了解したかの様で、再び朝日の憂いに脆弱な心へ安堵を与えてくれる。

『敷島姉さん・・・』

『フン。私とて日露戦役にシベリアの紛争、そして一次大戦に特務艦としてだが参加してた身だぞ、朝日。こいつら若いモンに比べれば、戦を良く知っているつもりだよ。それ以上に、お前が考えてる事もな。』

すっかり朝日の考えを読みきっている敷島が不敵に笑う。どうしたと言も朝日の様子を探る訳でもないのにその心を看破し、弟子が持とうとした対米戦への見解と妹の憂いを見事に払拭してみせる辺りはさすがは朝日の実姉と言った所で、僅かな間の笑みを消すや早速隣にいた教え子の頭を揺さぶって厳しい教えを授け始めた。

『そこが解らんからお前は半人前なんだ、金剛。戦に負けない為の最善の策はなんだ、ああ？ 戦はここでやるモンだ。20年以上も聞いてきてまだ解らんか、この頭は。』

『どわわ！ わ、解ってますよってに・・・！ い、戦にならん内

に物事を有利にせいってこつてすやる・・・!? か、堪忍してくださいやっ・・・！ イテテっ！』

両者共に座っている状態ながら10センチ以上も身長差がある金剛の頭を、敷島は手馴れた手つきで激しく動かしてちよつと低い声でのお叱りを飛ばす。非常に気性の激しい親分肌の金剛も彼女にかかつては形無しで、困った顔で勘弁を願うその脳裏にはこの十数年たつぷりと仕込まれてきた、それはそれは恐ろしいお師匠様の姿がハッキリと描き出されていた。本日は竹刀もげんこつも無い分大いにマシであり、やがて敷島の手から開放されるや乱れた金髪を撫で付けて一安心の溜息を漏らす。続いて金剛はこれ以上のお叱りを受けない様に卓上の将棋盤へと顔を向けて、今しがた受け取ったばかりの教えの再確認をする姿勢を示し、紅茶の香る湯気越しにそれを見る朝日に再び笑顔を作らせてくれた。

『戦にならん内になんとか、か・・・。ふくん、せやかてのう・・・。この差では恫喝も効き目あらへんしなあ。』

『こんのバカタレ。強要するだけの手段ばかり、力押ししか思いつかんのか、お前は。』

『ふふふ・・・。』

朝日が見る師弟の姿はやっぱり十数年前とちつとも変わっていない。へそ曲がりも甚だしい金剛は口を開く度に敷島に一喝を受け、悔しさと苛立ちが半分、おっかなさ半分が混じるしかめっ面を浮かべて頭を捻る連続であり、その合間にも飛ぶのは朝日にも劣らぬ敷島のお説教。決して金剛は勉学の成績が悪い艦魂ではない事は朝日も良く知っている所だが、如何せん所持する駒の数が倍も差の有る将棋では一向に良策なぞ出てはこない。

おかげで金剛の『うくん、うくん・・・。』と唸り声を漏らしながらの悩む姿は、そもそものが180センチ以上と非常に大柄な体格

を持つが故に室内でも一際目立つ物となるのだが、まだ幼少だった頃より見てきた事からそんな悩める金剛がとても可愛く見えてしまう朝日は、微笑を抑える事ができない。そうなるとクスクスと笑いに弾む呼吸で溜飲する紅茶も自身で淹れた事も忘れてしまう程に美味で、一時とは言え重苦しい対米戦への可能性の話をしている事が嘘の様に思う事までできた。

ただ、比較的頭の回転が速かった金剛は僅かばかり時間を得ると眼前の将棋の攻略法を脳裏に描けたらしく、大きく目を見開いた笑みを咲かせて喜々とした声をあげながら敷島の腕を引っ張り始める。次いで言い放った金剛の言葉にはまたしても敷島のお叱りが轟いてしまうのだが、再び笑みを深くすると思われた朝日の表情は変わる事は無く、カップを握った手もその動きを止めてしまう。

『そや、親方！ 南方での駒揃えに時間かかるんなら、先にそれを相手に返したたらええねん。まだろくに対局始めの声もかからん内に駒が並び終わったらん敵陣に飛車角突っ込ませて、銀も金も根こそぎひっくり返しちゃうんや。ほんで並べ直してる隙に、南方ちゅう他の盤で終局まで打ってまえば……。ワハハ！ どや、親方！？ どや！？』

『お前は人の話を聞いとるのか！ 勝ち負けが目的なんじゃないと言ってるだろ！』

『イテ！』

金剛としては大変な名案として自信を持って師匠に披露してみたのだが、どうも生来の喧嘩っばいやい性格が災いしてか、その考えはどう喧嘩に勝つかにしか要点を置いていない。教えて貰ったばかりの師匠独自の戦に対する考え方は全然加味されておらず、妙計だと自慢せんばかりの無邪気な笑顔を浮かべてお褒めの言葉を待つ金剛だったが、それに対して師匠より返って来たのは怒鳴り声とげんこ

つであつた。

もちろんそれを受けた金剛からは笑みなぞ一瞬ですっ飛んでしまい、両手でたんこぶができた頭を抱えながら椅子の上で蹲ってしまふ。その横からはやや怒りの度合いが増してしまつた敷島が再度のお説教を行い始めるのだが、それを目にしても朝日の意識は往年の師弟像ではなく、金剛が無邪気な声で言つた先程の言葉のみに縫い付けられていた。なぜならそれはいつぞやの長門と連合艦隊旗艦経験者同士として話した際、長門が話した対米戦における帝国海軍の作戦概要を彷彿とさせる物だったからであり、朝日が知らない所で長門が艦隊旗艦役職者を参集して行つた打ち合わせにおいてもまた、議題として上がっていた内容と酷似しているのだ。

二つの盤は、すなわち米国の海上戦力の影響力が大きい太平洋と、石油を始めとする資源が豊富な南洋に例える事ができ、両方の盤で同時に対局する事態がこの日本の最悪のシナリオ。それを金剛は優先度を設けて区切つた訳であり、頭痛の種であるアメリカ海軍を一時的な行動不能状態に陥れようという物であつた。言わずもがな、それが成功したなら日本の対南方行動は多くの制約から解放されて軍事、外交の両面でも高い自由度を獲得できる寸法であるが、当然そうなると対南方行動を発動するのと同時に米国に対してはこちらから戦争を仕掛けねばなくなる。

しかし日露戦役終結以来、仮想敵国の上位に位置づけて対抗策を練つてきたというこの日本の国防指針の経緯も、言い換えればそれだけ米国との戦争状態を恐れてきた動かぬ証拠に他ならず、その芯の部分には戦えば必ず負けるという確信的な憂慮と恐怖が有つたからこそである。端的に言えばアメリカは日本が絶対に戦つてはいけない国であつた。

ところが眼前の将棋盤の戦況を打破すべく放つた金剛の言葉は、煮詰めていけばその道理はなんとこちら側から打つて出るという事

と同義なのであり、朝日はその事に瞬時に気づいていたのだった。

そう……。もしそうになったら、やっぱりこちらから……。

この日本から、仕掛けるしかないのね……。

脳裏に過ぎるそんな言葉が、朝日のおぼろげに予想していた対米戦の経緯が極めて現実的である事を示す。ましてやこの佐世保にて十数年も練習艦として繋留されている敷島と違い、支那方面を主に後方支援役としてだが第一線部隊に加わっていた彼女であるからその具合は小さい物とはならず、目の前で未だにお説教劇を繰り広げている師弟を他所に沈黙して紅茶の紅い水面を眺めるばかり。その思考には再び弟子の長門と語り合った際の記憶が蘇っており、今しがた察した「自ら歩み出す形で対米戦」という構図により一層の外郭線を引いていくのだった。

『これ以上の差が付かない内に、こちらから勝負に打って出るというやり方よ。日露戦役がそうであった様に……。』

他の誰でもない朝日自身が語ったその言葉は、ついさつき金剛が僅かに話していた米国海軍における大規模建艦計画と大いに重なる。かつて来航した大白色艦隊でも主力戦艦の大部分を含め、僅か3年で11隻の戦艦の建艦を成立させてみせたアメリカという国であるから、きっと金剛の口にした現代の建艦計画も決して見栄や虚言の類ではないだろうと思うと、まだお説教で騒がしい下での卓上の将棋盤にはほのかな戦慄を覚えずにはいられない。

もっともせっかくの姉との再会を無駄にしたくなかった故に、やがて朝日は『まあまあ……。』と過激な折檻と怒号を繰り返す敷島を宥め、全員のカップにケトルを運んでティーを楽しみながらの談笑を続行させるのだが、その日はずっと笑みの裏に杞憂を隠したままでの時間を過ごした。

そしてこの数ヵ月後、朝日のおぼろげに抱いた対米戦はまさに的中する事になるのだった。

第一二六話 「答えは自身の中に有り」

師匠が最愛の姉と佐世保にて再会を果たしていたその日、すなわち昭和16年2月26日。

明石^{あかし}の分身たる明石艦を含めた第二艦隊は、南国の潮風と陽光も暖かい沖縄県の中城湾より拔錨。各々の艦尾旗竿に軍艦旗を高らかに掲げて航跡を描き出し、舳先の菊花紋章にて南の海上を照らし出す。作業地を巡航しての艦隊訓練の幕が再び上がったのであり、温暖な気候で十分な憩いと癒しを得た乗組員達の士気は高い。

加えて第二艦隊所属の艦魂達にあっては皆覇気は十分で、久々に艦隊旗艦として航行序列の監督を行う高雄^{たかお}も今日は持ち前の陽気さが鳴りを潜め、自ら左翼や右翼に配する戦隊に指示を飛ばすほどである。もっとも彼女達のそれは沖縄の気候に過度な休息を得た事のみが理由ではない。

実は去る23日。1月末頃より仏印方面へと派遣されていた、第二艦隊の中核戦隊である七戦隊、及び二航戦がようやく現地での任を解かれ、久方ぶりに原隊である第二艦隊へと合流していたのである。最上型^{もがみ}の一等巡洋艦と蒼龍艦^{そうりゅう}、そして飛龍艦^{ひりゅう}は揃いも揃って帝国海軍最新鋭の艦艇で、その艦魂達はやはりどうしても戦の場における経験が総じて少ない物だが、別に海戦を経験せずとも本物の戦闘海域を体験するというのは中々有意義であつたらしい。出航前夜に愛宕艦^{あたご}で開かれた第二艦隊の戦隊長級艦魂達による打ち合わせでは最上、飛龍による活動報告が行われ、つぶさに観察してきたフランス極東艦隊の動向、サイゴンやカムラン湾といった要地の状況、そして泰と仏印間で行われたコーチャン沖海戦の詳細等、内地で訓練漬けの者達では解らない貴重な知識を数多く披露していた。

『うん。所見の欄に有る偵察機の運用は、さすがに航空関係の艤装が充実してる最上や飛龍達らしい考察だね。太平洋なんかに比べればずっと狭い湾上の海域であつても、やはり飛行機による追跡と失探はこれだけの差が出るんだ。確実な策敵行動の大切さがよく解るよ。』

『愛宕の言う通りだよ、みんな。泰の海軍だって別に弱くはないよ。トンブリ艦もスリ・アユタヤ艦もだけど、あたしらと同じ日本生まれの軍艦が多かったんだ。トンブリさんは横浜で一回だけ会った事があるけど、砲術にも航海術にもよく勉強した艦魂^{ひと}だったもん。可哀想だけど、トンブリさん達じゃどうしようもないくらいの戦況になっちゃったんだ。飛行機のおかげでね。』

『……ふむ。……良い報告だ。……これは生かさねばならん。……同郷ながらもタイ王国海軍艦艇として死んだ、トンブリさん達の為にも。……いや、ご苦労だった。』

まだまだ若い最上らの発表だったが、愛宕の声に始まって高雄と加賀^{かが}といったお偉方による高評がその場に連なり、発表者であった最上と飛龍は照れ笑いを滲ませて頬や後頭部を掻く。もちろんその場には明石も居て、普段から誕生時期が近い事から同期生の様な交友を結んでいる飛龍の姿に拍手を送った。

もつとも仲も良い同期生なればこそ素直にその功績を讃えてやったのだが、これもまた同期生として負けたくないという意地が芽生えてしまうのも、別に明石に限った訳ではない。同じ20代を迎え

たぐらゐの女性の容姿を持つ中であつて明石が勝っているのは身長
くらいな物で、おつむの出来はまあ同点としながらも海軍艦艇とし
ての経験の差が仏印派遣で大いに追い抜かれてしまった事は間違ひ
無い。その証拠に発表を終えてようやく近くの席へと戻つてきた飛
龍の横顔は、艦隊配属もされた頃から知る物よりもずっとずっと大
人びた様に明石には見えたのだった。

『ぬううう、負けられないなあ。私だって小松島で単艦派遣のお
仕事こなしてるんだもん。せめてお勉強だけでも上じゃないとね！』

南国の暖かい潮風を甲板で浴びながら、腕組みをした明石はそう
独り言を呟く。ちよつとだけ頬を膨らませて眉の間にしわを作り、
難しそうな表情で甲板上から望む辺りの海原には、久方ぶりにそれ
ぞれの舳先で豪快に波を蹴散らしていく第二艦隊各艦の勇姿が在る。
沖縄よりもさらに南の地に巡航する最中であっても艦隊は航行序列
の猛訓練を実施しており、今日もそんな艦隊の中心部分で仮想戦艦
役を仰せつかっている彼女の分身なのだが、おかげさまでそのすぐ
後方には第二艦隊でも重要な部隊と位置づけられる空母部隊が続い
ている。しかも空母部隊の先頭艦として明石艦の軍艦旗に従つて追
従するのはあの飛龍の分身たる飛龍艦であり、明石は無意識にほと
ばしった闘志が染まる瞳でついついその艦影を眺めてしまう。

排水量の面でも艦体の大きさの面でも自身との差が非常に目立つ
が、明石は決して今しがた抱いた気持ちを萎縮させる事は無い。少
し前に姉と慕う長門ながとより特設工作艦の増強に伴つてその先達として
励むようにと発破を掛けられた事もあつてか、ここ最近の明石は一

丁前に競争心の様な物が芽生えているのだ。

『お船の命は一流。工作艦と空母じゃ同じ物差で計れないかも知れないけど、一般教養とかなら同じだもんね。うっし！』

久々に見た第二艦隊の躍進する光景と、仲良しの同期生にして好敵手と定めた飛龍の存在を意識するや、明石はそう言い残して踵を返した。その歩みだす歩幅はいつに無く大きくて首の後ろで縛った彼女の髪は振り子の様に左右へ流れ、表情もまた曇り空の如き代物から眉をやや吊り上げた覇気も漲る顔つきへと変わっている。

とにかく勉強だけでも優位に立っていなければ！

焦りとも使命感ともつかない念の様な感情を抱き、脇目もくれずに甲板を歩いていく明石が向かうのは、日夜の個人勉強にてこれ以上無く集中できる彼女自身のお部屋。元来がここぞと思い立つと同時に猛烈な集中力を発揮できる明石は、今日もまたこうして真昼間から自室へ閉じこもり、手持ちのせんべいやアンコ玉といったおやつをチビチビと食べながら英語や数学等のお勉強に打ち込む。艦の外からは高速で蹴散らす白波の凱歌が響き、艦の内からはフル回転状態にも近い機関の唸り声が微細な振動と共に伝わる中だが、なんとしても同じ年頃の飛龍には勝たねばと一念発起した明石の猛勉強を止めるには至らない。

師匠や友人らから諭してもらった末に頑張るのは結構多い明石だが、この日は珍しく競うという心理状態でもって励むのであった。

それから2日後の2月28日。

勢揃いした威容で臨む洋上訓練を続けながらも、第二艦隊は南支沿岸に位置する福州市へ移動。上海や天津の様な大規模国際港ではない福州は、訓練というよりも物資の補給の為に寄港したような物で、在泊日程は僅かに3日間のみ。水兵さん達のお楽しみである上陸も行われず、各々の艦は岸壁や栈橋に繋がれるやすぐさま物資の積み込みを行ってさっさと離岸。まだ物資積み込みが終わっていない他の艦艇へとその場所を空けてやる事を繰り返すばかりだった。

せつかくの支那の陸地を拝めても踏む事は適わず、日常と同じく忙しい艦内作業に追われて終了。

言葉にしてしまうと艦魂達にとっても乗組員達にとってもなんとも寂しく落胆しそうになるお話であったが、福州の街並みを遠く望んで支那の沿岸を旅立った第二艦隊では最高指揮官である古賀司令長官も含めて、艦の命はともかくそんな乗組員達の心模様をちゃんと理解している。末端の水兵さんも含めれば何千人にも及ぶ部下達を統率するに辺り、そのお仕事にて結構大きな部分を占める士気の維持に効果を発揮するのが休養という物で、栄えある菊花紋章と軍艦旗の下に励むという体面のみではハッキリ言って維持できる訳が無い。誰だって疲れるし、誰だって遊びたいし、誰だって余裕が無ければまともに日々を過ごす事なんか不可能なのだ。

もちろんそれを実際に言葉に変えてしまうと組織の建前上は大問題となってしまうが、部下をきちんと休めてあげるのも上司上官らの大切な義務と言っても差し支えないのであった。

そして当初から指揮官となる人材としてそんな帝国海軍の門をく

ぐり、兵学校卒業以来士官としてこの道ウン十年も働いてきた古賀長官はそれを知らぬ筈が無い。艦隊の運行計画で福州における忙しい時間が設定された時よりその穴埋めを設ける様に参謀連中と協議していた彼の言葉は、まだ恨めしそうに遠ざかる支那の陸地を眺めている水兵さんもいる中、各艦の幹部連中から全ての水兵さん達にしっかりと伝達された。

『よし、みんな聞け。明日の予定は午前整備作業。午後は入港、及び上陸準備。艦隊はこれから馬公まこうに向かう。台湾に行くのは初めての奴も居るだろう。諸注意が有るから、上陸前に一度全員甲板に集合する事。いいな?』

忘れられていなかった待ち遠しい上陸の一言。

福州の街並みも既に望遠鏡でしか望めないくらいになった頃に響いたそんな言葉に、乗組みの水兵さん達の顔が一斉に綻ぶ。

その地は福州から海に出るやすぐに南下、そのまま台湾海峡を南に下り、明治の建国以来つい最近まで大日本帝国の最南端の領土として名を馳せていた、台湾西部にある島嶼郡ほうしよ。澎湖諸島と呼ばれる所であった。

距離も僅かなら旅路も僅か。

翌日の3月3日には第二艦隊の軍艦旗は既に澎湖諸島最大の島である澎湖島の馬公湾に在り、一段と暖かい台湾の潮風を浴びながら各艦はそれぞれの舳先にて続々と投錨を開始する。一般の港湾なれ

ばこうも無警戒、次いで一斉に投錨するなんて事はそうそうできる物ではないが、この馬公湾どころか諸島全体が帝国海軍における一つの基地を成しているのなら話しは早い。実はこの澎湖諸島、帝国海軍においては一般に馬公要港部と呼ばれ、70年近い帝国海軍の歴史の中においても結構古参格な遠隔基地なのである。

設置されたのはかの日露大戦争を僅かに遡った明治34年で、現代の帝国海軍艦魂社会では師匠、または長老格とされる富士や朝日あさひらとはほぼ同年齡。年中通して20度以上と非常に過ごしやすい温暖な氣候と、蒼海に散らばるサンゴの群れが南国の心地良さをいつも絶やさない素晴らしい場所にして、海事事情では台湾海峡という極東アジアでも指折りの海上交通路を睨む位置に存在する等、結構重要な立ち位置にありたりもする。なにせこの台湾海峡を挟んだ支那沿岸には上海を始めとする一大国際港が何箇所も点在しており、古くは16世紀頃より西欧の船舶による往来も盛んであったのだから、極東アジア海運界の大動脈と例えても過言ではない。故に明治の帝国海軍もそんな事情を考慮してこの台湾の僻地に支所を設けたのであり、台湾海峡を行き交う船舶の監視や動向調査には多大な貢献をしている基地であった。特に支那事変、それ以前の上海事変なんかでもその働きは大きく、戦線よりすぐ背後に構える休養と補給の要として目下大活躍中である。

もともと戦に関する組織である帝国海軍の基地なのだから、やっぱりどうしてそこに在るのは楽しいとか嬉しいの一言で終わる様な単純な物事ばかりではない。

そしてそれを知るのは人間達同様、艦魂達もまた同じであった。

『艦隊旗艦。総員整列、終わりました。』

『うん。』

第二艦隊中最大の大きさを誇る第一航空戦隊旗艦の加賀艦の飛行甲板上に、穏やかな音色で彼女達の声が響く。暖かい南支方面行動を受けてその服装は純白の第二種軍装で、体の正面を縦に走る金ボタンはさながら舳先の菊花紋章の如く輝きを放ち、晴れた青い空にて今日もまた陽光を放出する太陽にも劣らない。風になびく黒髪も艶を一層明確にし、一人一人の姿は凛々しさと美しさが同居する大変に綺麗な代物となっていた。

ただ、本日この場に集っている彼女達はそんな自分の美しさ、綺麗さに喜びを感じる素振りは見せず、他の者達のそれに意識を向ける事もまた皆無。横一列に並んだ各戦隊の戦隊長級の者達を先頭にその部下達が縦に並んで沈黙を守り、最前列にて皆を牽引するように一歩だけ進み出ている高雄すらも、先程の愛宕との会話の様に今日は持ち前の陽気な人柄を押し殺しているのである。

おおう、今日の高雄さんはマジメだあ。

戦隊長列の一番端っこに立ってそれを認める明石も、そんな高雄の普段とはうって変わった姿に思わずそう脳裏で呟いた。会議中にわざと大きくしゃみをしたたり躓いてみせたり、いつも冗談交じりの口調であったりと、普段の高雄は随分とひょうきんで笑みが周囲に絶えないお人であるのだが、今日は笑い声を誘う言動は一切封印。姉妹仲の良い愛宕の声にも落ち着き払った横顔を縦に振るのみで、その人柄の著しい高低差に明石は本日ただいま過ごしている馬公要港部での時間がいかに彼女にとって大事に捉えられているのかを垣間見た思いだった。

やがて軽いウェーブがかかった黒髪を潮風にはためかせつつ、短く吐息を漏らして呼吸を整えた高雄がふとまなざしを甲板より望む

馬公湾の海面へと向ける。明石よりもやや背は低い高雄であるからその仕草は大変に小さくて僅かな物ながら、それを合図として認めたかのように愛宕は間髪入れずに号令を掛ける。姉妹、それもずつと第二艦隊の基幹部隊である四戦隊を組んできたという相棒の如き仲故か、そのタイミングは優良で知られる彼女達の主砲射撃の成績なんか問題にならないくらいに正確で、明石達が一斉に姿勢を律したのを振り向いて確認する事も無いままに高雄が声を上げる。まるで愛宕の号令から何秒後にはその内容が履行されるという事を、感覚のみで合わせたようであった。

『休め。気をつけー。』

『・・・初代連合艦隊旗艦の任を背負って黄海の戦場を駆け、続く日露の戦にても第三艦隊配属艦。さらにその末には練習艦隊隷下として務め続けるも、不運にしてこの海に果てた先輩、松島^{まつしま}さんに対し、敬礼。』

その瞬間、加賀艦の飛行甲板上に並んだ艦魂達は一斉に右手を額に運び、静かな湾内には彼女達の袖が打ち鳴らすざわめきにも似た音が響き渡っていく。それに続いて高雄もまたゆっくりとした動作で敬礼を行い、しばしの間挙手をそのままに艦魂達は湾の波間にまなざしを投げるのだった。

高雄を始めとして明石達がこうして敬礼をする相手は、今しがたの高雄の口上にも有った松島という名の先輩艦魂。古い国名でもなければ有名な山岳の名称でもないという、海軍艦艇としてはちよつと変わった趣向のお名前だが、それはこの松島の分身が艦艇としての命名基準を現代とは異にしていた頃の帝国海軍艦艇だからである。建国以来初の対外戦争となった日清戦争において、海の天王山であった黄海海戦にて主力として戦い、当時極東最強の戦艦艦艇として君臨していた清国^{ていけん}の定遠艦、鎮遠艦^{ちんえん}に対抗すべくフランスより渡

って来たという、かの三景艦の内の一隻であった彼女。現代では長老格とされる敷島しきしまや朝日、富士といった名だたる艦魂達のそのまた師匠筋であった年代の人物であり、日清、日露と二度の大戦争を経験したその経歴は、高雄の言の中にも有った「初代連合艦隊旗艦」の榮譽を得ていた点も含んで帝国海軍艦魂社会では非常に有名である。

おまけに現代の世界の海軍でその主力の筆頭とされる戦艦ではなく、もっと小さな巡洋艦としての分身を持っていた松島だから、巡洋艦戦力で主力を成す第二艦隊の者達の殆どはほぼその嫡流に相当する故に畏敬の念も一際強い。艦隊旗艦として皆を束ねる高雄も然り、そのすぐ後ろで控えている物静かな愛宕も然り、存命であるならば是非にも教えを授かりたいと願うほどに人気の有るお人なのだが、残念ながら彼女達が生を得る頃には既にその艦影と船籍が帝国海軍からは抹消されていた。なぜなら日露戦役の残り香もまだ漂う明治41年4月30日、栄えある松島艦はここ馬公の波間にて不運にも火薬庫の爆発事故に遭遇し、乗組んでいた多くの士官候補生と共に水漬く屍となってしまったからだ。

『・・・甲板から足が離せるなら、行って直に触ってみたいね。あの馬公の街の海岸。遠めに眺めるだけしかできないけど、縦に置かれたあの白い砲身が松島さんの墓標も兼ねた碑だよ。市街地の中心には記念館もあるんだってさ。』

同じ巡洋艦にして、艦隊旗艦のお役目を担う高雄も、きっとその思考の鏡には今は亡き松島の背中が移っているのだろう。誰に向けた訳でもなく呟くように放った言葉は、その全てが大先輩に対する畏敬の念で満ちた物である。言葉通りに湾内の海岸線の一角には天

を睨んだ形で設置された一門の巨砲が聳え、皆と同じく明石もまたその墓標を眺めた。

年代的には自分の先代と同じ海に生きていたであろう者の亡骸は長く風雨に晒されてか汚れも少々目に付くのだが、歪みも無く傾きも無く緑に囲まれてただ一直線に天を衝くその姿が明石にはなんだから強く感じる。海岸とは言え付近が緩やかな勾配を持つ草原となっている事もあってか、記念碑の直立具合は非常に際立っていてお船にとっては大切な道標たる灯台の様にも見えてくる。何もそれは外見だけではなく、帝国海軍艦艇の命なれば斯く有るべしといった生きる上での標識を、目にする第二艦隊の艦魂達に声も無く語りかけているような感じがする点もあって、死してなお先駆者としての彼女の姿を垣間見れたような感覚が皆に湧くのであった。

そして色んな思いを巡らせる事で沈黙を続けてしまっている高雄の事を読みきったように、その背後にて控えていた愛宕は踵を返して皆に正対すると、栄えある松島艦の最後に絡めたお話をしてやや間延びしていたその場を締めくくった。

『支那の言葉に、？河は時に船を運び、時に船を覆す？』というのが有る。どんなに分厚い外皮構造を持っても、船舶というのは河、もっと還元すればその水と文字通り紙一重で存在しているんだ。でも私達海軍艦艇は、それに加えて火薬や石油、石炭といった爆発物や可燃物も持っている。不慮の事故なんて二乗されてるような物で、松島さんの爆沈事故はこう言っては酷だけど、海軍艦艇としては決して珍しい物じゃない。もしかしたら明日にはこの中の誰かが遭遇したっておかしくは無いんだけど、実際に起こったその悲惨な様を私達は松島さんから学べる筈だ。こうして馬公要港部に来れた今日この時間を機会に、みんな人間頼みにはせずに各自でもう一度、火薬や燃料の保管と管理が普段からどう行われているのかを確認してみて欲しい。知る事もまた、きっと松島さんの供養になるよ。では

解散。別れ。』

思いに耽る姉の邪魔をせぬようにと努めたのか、艦隊旗艦たる立場の高雄の指示が無いままに解散を命じてしまった愛宕だが、常に涼しげである彼女の表情はこの瞬間もちっとも変わる事は無い。頬にかかるくらいで揃えた短い髪を風に揺らし、大丈夫だと今にも言い出しそうな微笑でもって皆を一瞥するのみである。だが未だに背後へと顔を向けない高雄も、愛宕という妹のそんな行動に己の立場を生かした物言いをするつもりなぞ持っていない。むしろ自身がある程度の個人的な行動、または思考に浸れる猶予を稼いでくれているのは、時に艦隊旗艦をバトンタッチし、時に頼れる補佐役として振舞ってくれる今のような愛宕の氣遣いに他ならず、実の姉妹ながらも彼女に対しては感謝の念が絶えなかった。

『サンキュ、愛宕。悪いね。』

『はいはい。毎度の事だ。』

ちよつと照れくさそうにな笑みを浮かべてようやく振り向く高雄と、変わらぬ涼しげな表情で頷く愛宕によってそんな言葉が交わされたのは、既に加賀艦上に整列していた部下達の大半が姿を消した頃であった。

一方その頃、良き先輩の最後と絡んだ為になる訓示を授かった明石は、早速自身の分身へと戻ってきて実践を開始。愛宕の言葉の通り火薬や燃料は爆発炎上という極めて破壊的な化学現象を引き起こす危険物その物で、今更ながらによくこんな物を逃げ場の無い艦内

に置いている物だと明石は思った。

『主砲に機銃の弾庫、それから燃料のタンクか。そう言えば弾庫っていつも衛兵の人が立ってて、鍵も持ってる人は殆ど居なかったなあ。森さんもいつもは持ってたし、出入り記録の台帳まで有るんだもんね。やっぱりそれだけ嚴重にされてるのか。』

日本では春が近づきつつも肌寒い時期ながら、一足飛びすれば南洋にも程近い台湾は20数度のポカポカとした陽光に包まれていて、明石艦の上甲板に敷かれたリノリウムの朱色が今日はなんとも鮮やか。同時にその朱色の上をテクテクと歩きながら一人呟いている明石も、今日は第二種軍装の純白が映えて付近の乗組員共々にその姿は美しい。今まで当たり前のような感覚で目にしていた弾火薬、燃料の保管に考えを巡らせ、その重要さが窺い知れる実情を思い出しながら頷いたりする彼女の表情は決して綺麗な笑みを浮かべている訳でもないのだが、そこを意図せずに輝かしくみせてくれるのが金ボタンも眩いこの第二種軍装の魅力。

痩せ型でスラリと長身な体躯と今でも練習を重ねている姿勢の良い歩き方が手伝っているのも有るが、背後より見ると明石の歩く様は背筋も伸びて一端の海軍士官らしさがなんとなく滲み出ており、歩みに合わせて馬の尻尾の様に左右に揺れる後ろ髪を除けば周囲にて各種の作業を行っている乗組員との区別がつかない程であった。

ただ、一点集中型な思考回路を持つ明石は例によって今の自分の美しさなんかちっとも意識しておらず、艦橋へと向かいながら危険物に関するアレコレを記憶より検索するばかりである。

やがて要港部停泊の状況から人影もまばらな羅針艦橋へと到着した彼女は、さっそくその一角にて壁に設置されたとある小さな扉の前に進み出る。

『これが鍵の保管場所だよね。それとこっちが持ち出しの履歴用紙。ふーん、ちゃんと言付と時間、開閉状態、それから係官氏名に目的も込みで記録されてるんだなあ。あ、立会人の人の名前もかあ。』

興味津々の子犬の様な目でもってまじまじと明石が眺める先には、頑丈そうに金属でできたそんな扉と、そのすぐ横にて紐を通して壁のフックから吊り下げられている一冊の台帳がある。扉と言っても片手分の取っ手が付いて明石の頭より一回りくらい大きい代物で、艦内通路の要所に設置されている水密扉とかに比べると断然に小さい。その上付近の隔壁と同じく白一色で塗装されたその姿は、羅針艦橋を端から端まで一望するだけだと見逃してしまいそうな在り方だ。

ただこの明石の分身である明石艦を平素動かすに当たって、その存在価値はこんな物理的な点での存在感なぞ問題にならないくらいの差が有った。

この金属の扉の向こうに控えている多くの鍵は明石が睨んだ通り、全て機械室や燃料貯蔵設備、そして最も火気厳禁が徹底される弾庫など、艦で一番大事にして一番危険を孕んでいる区画へと入る為の物ばかりなのであり、持ち出す際は許可が有ったとしても個人が勝手に手を伸ばしてはならない事になっている。普段の操砲訓練なんかでもそれは同じで、水兵さんなんかはそれこそ手も触れてはならないに等しい。

そもそもがこの鍵を収めた金属製の扉自体、取っ手の下に付随されている鍵穴を操作しないと開閉できず、しかもこの鍵箱の鍵はなんと乗組員総勢700余名に及ぶ明石艦艦内でもたったの2つしか存在しないのである。1つはいわゆる予備鍵でこれはもちろん普段の生活で使用する事は滅多に無く、いつもは艦長室の鍵箱の中でこれまた厳重に保管され、もう一つの方がいわゆる常用鍵となる。ところがこの常用鍵だって、別れて久しいかつての相方の忠なんかも

含めた、乗組みの下級士官であてがわれる副直将校が昼夜変わらず常に腰に帯びている革鞆で保管しており、それこそ副直将校をぶん殴ってふんだくるくらいの暴挙でも働かねば調達は不可能であった。ましてや百歩譲って副直将校が明石が眺める羅針艦橋の鍵箱を開けたとしても、例えば主砲なんかの砲弾を保管する弾庫の鍵などは保管責任者が各科長級の士官を持って当てられる当直将校となっているのだから、副直将校の権限だけでは持ち出す事は許されていない。つまり例え日々の訓練とは言えども、この羅針艦橋の鍵箱から弾庫の鍵を持ち出す際は、当直将校と副直将校の許可に立会いまでもしてもらわねばならないのだった。

だがこれだけではない。

『この中の鍵は確か、分隊士の人を経由して前任下士官の人が貰って、その後に今度は弾庫の係りの下士官の人がその鍵使って開けるんだっけ。衛兵の役員さんも立会いしてたし、持ち出しする物の個数も申請分以外は絶対にダメとかだったよね。ぬく、それだけやつぱり慎重に扱われてるって事なのかあ。』

一応はこれまで艦の命として生きてきた中で、明石は今しがた口に出した弾庫入出の一場面を何度も何度も目にしてきた。世間一般の人間の観点から見れば家という感覚では余りにも容積が大き過ぎる明石艦も、完全に生息場としてしまっている艦魂の明石にしたら自分の身体の一部であるのと同時に我が家でもある。飼犬が玄関を通る度に吼えるが如く、軒下に巣を作った小鳥が付近の窓を開けた音に驚いて飛び立つが如く、日常的に目にしてきた艦内での乗組員達の様子は彼女達艦魂にとっては余りにも身近過ぎて、弾庫入出に始まる光景なんかは素通りする事も全く珍しくないのだが、本日

の様に意識してそれを見てもと非常に多くの工夫がなされていた事に改めて気付く。

鍵などという、ともすれば紛失しやすい物のベストスリーに入ってしまったような小さな物品も、その保管体制は万全の上に万全を期して一介の水兵さん程度では指一本触れる事さえも適わぬように設定されている。艦の命である明石だって手にした事が無いのは、何も今までそれほどまでに興味を持たなかったからという単純な理由だけではないのだった。

『ふんふん……。なるほどお。危険物の管理、確かに愛宕さんが言ったとおり、今までは人間の人達に任せっきりだったな。よし、あとは燃料の重油はどうなって……。あ！　そう言えば工作部で溶接なんかに使う酸素のボンベってどうなんだろう？　アレも爆発したら危ないよねえ……。』

ようやくその精巧な管理状態を理解して弾庫からお次は燃料の設備へとその勉強の目を向けようとした矢先、明石がふと気づいたのは彼女の分身が類別される工作艦ならではの危険物。最新鋭工作機器を引っさげて第二艦隊に追従する明石艦は実に多様な機械を積んでいるも、その動力は電動であったり空気圧であったりと千差万別で、彼女の眩きが示すようにボンベに詰まった燃焼性の強い気体を用いる物だつて忘れてはならない。加えて部品の洗浄や加工の際に用いる科学薬品だつて、爆発する物ならまだしも中には有毒なガスを発生させる物まで存在し、その一つ一つが取り扱いに非常に敏感にならねばいけない代物ばかり。それら全てを勘定すると意外にも自身の分身の中には気が抜けない要注意物品が数多く点在し、今日まで殆ど知らなかった非常に身近な危険源に彼女は驚く。

『うううう、こ、こんなに有るのかあ。ど、どうりで台帳も分厚い訳だあ……。』

自前のノートに気づいた事、考察した事を日頃と同じく今日もまた記していた明石だが、鉛筆を持った手の動きが止まると同時に漏れるそんな声。鉛筆で先程まで綴られた項目はページの上段から下段にまで達し、それぞれに保管と管理の形態を調べて足していくと間違いなく4ページは使ってしまったようなボリュームであり、勉強熱心な明石もちょっとだけ尻込みするような気持ちを抱いてしまう。

ただ、彼女は決して諦めるふんぎりを着けた訳ではない。

温暖な潮風が人気もまばらな羅針艦橋に柔らかく吹き込み、僅かに汗を滲ませた頬を拭って再び出て行くのを感じて明石が目を向けるのは、羅針艦橋横に有る開かれた窓の向こう。青空と海中のサンゴが織り成す淡い色使いの風景に混じり、馬公の岸辺で不動の姿勢を律しているあの松島艦の記念碑が彼女の瞳に映る。

『・・・もし私が知らない所で事故が有って不幸の一言で済ましたら、きっと松島さんに怒られちゃうよね。』

艦魂としてのその姿を一度も見た事は無いものの、馬公の浜辺にて佇む彼女の亡骸に無言のままを感じられた人柄に、明石は今の自身の未熟ぶりが咎められるのではと思った。真っ直ぐに天へと砲口を向ける白い記念碑は、剛直にして逸脱を許さぬ毅然とした態度を表現しているようにも見えて、不思議とそれは本日お勉強している艦内での危険物管理方法における在り方を具現化した物のようである。

ほんの僅かな見落としや手抜きも有ってはいけないし、それが許容される体制であってもならない。もしも有った場合の末路は、まさしく明石の目が向く先にこそ有るのだった。

『うーん。事故でも爆沈なんてイヤだなあ。いっぱいあるけど、やつぱりちゃんと調べておこうっと。』

決して当時の松島艦艦内で爆発原因に起因する部分が疎かになったと明石は断定している訳ではないが、末路の一端として現物を目にしながら懸案を考えれる点は、ここ最近のお勉強の日々の中でも大きな収穫である。ノートに記した確認項目の余りの多さにちよつとやる気が下がりがけた彼女も、亡き大先輩が現代に残すその身の一部と教訓に触れて持ち前の勉強熱を再燃させ、この後にその日一日とさらに翌日も使ってお勉強に精を出す。

調べれば調べるほど細分化されているという点で四苦八苦の連続であったが、彼女の最大の武器であるここ一番の集中力と師より授けられた理想に向かう向上心で、なんとか頑張るのであった。

『あう。燃料って言っても発電機用と機関用でも違うのかあ。それに塗粧材も引火物が含まれてるのも有るんだなあ。』

最も身近に有りながら、最もその身に及ぼす影響が大きい物。

時に人間の世界でも意識されるそんな懸案に一生懸命になった明石の姿は、「一流の淑女^{レディ}」に至る道をまた一歩進んでいたようであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2882g/>

わだつみの向こう ―明石艦物語―

2011年12月2日18時57分発行